勇者一行の料理人

ドゥナシオン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもダイの大冒険の大魔王が強すぎて神々の手におえず、世界が崩壊の危機に陥り、

解決策として異世界の人間を頼り、転生をさせてーダイの妹ーが生まれたら・・・。

初めまして。小説初投稿です。筆者の妄想、贔屓で原作のキャラクターとかけ離れて代物です。

―ダイの妹ーのオリ主がいろいろやらかし，原作にはないハッピーエンドをお届けできればと思います。

話のストーリー上原作との違いが大いにあります。それでも良い方のみお読みください。

―原作―が始まるまえから―原作キャラクター―をちょくちょく出していきます。

物語の完結に当たり、初期投稿の大半を直していきたいと思います。

追いかけや後感想頂けましたら幸いです。

目　次

原作前
転生先は・・ダイの世界!? ―― 1
かくして転生の幕は開いた ―― 4
赤ん坊は無力です ―― 8
開幕ベルは罪と嵐とともに ―― 10
デルムリン島をＰＲしよう ―― 14
活動開始!! ―― 17
デルムリン島良いとこ～一度は～おいで～ ―― 19
じいちゃんもダイ兄も素晴らしい人達です ―― 23
そして交流が始まるのだ ―― 29
ゴメちゃんお友達になる ―― 34
修行の前に自己チェック ―― 37
洞窟出現　武器とアイテムゲットだぜ～ ―― 40
使用方法は正しく身に着けよう ―― 45
休憩と・・お話合い ―― 49
お出かけ前の確認 ―― 53
初めてのお出掛けｉｎロモスの港町 ―― 56
色々と気を付けないと・・。 ―― 62
一年目は・・うまくいってるのかな・・ ―― 67
落とし物・・でも使おう。 ―― 71
会ったらまずいでしょ!! ―― 75
藪をつついて父が出た!!! ―― 82
変わった人の子と子守唄 ―― 88
それが私の生きる道 ―― 93

縁は異なものひょんなもの？ 100
人間にも色々います。 106
・・行けません・・。 111
リンガイアでの出会い 117
変わった人の子パートｔｗｏ 122
超年上の共同研究者 127
強くなる!!・勇者になる!! 134
星空の下の誓い 140
前に進もう 148
大戦初日は大忙し!! 153
原作開始
一人多いですね～ 160
ポップ、兄になる 168
生じる違和感 174
勇者一行の料理人に！ 183
三流魔王が来ました 188
ーアバンーの全てを預かります。 200
放て勇者の閃光を!! 208
旅立ち 212
ー幕間ー勇者サイド 219
ー幕間ー魔王軍サイド 223
ーロモス編ー　ネイル村 227
初陣 235
獣王クロコダイン 245
料理人の仕事 255

マァムの決意 261
再戦前夜 267
王城決戦 272
戦う理由 281
決着よりもその後が大切 285
奇妙な出会い 299
ーパプニカ編ー上陸 308
正義の使徒も大変です 312
復讐？八つ当たりです！ 320
捕まりました 327
自分は戦士だ！ 332
ドタバタな再会 337
魔王倒します宣言 345
決戦の舞台裏 357
悲しみの結末 362
バルジ島編
姫君人質 374
魔法使いの弟子に！ 379
再び島へ 386
驚きの再会 394
～回想・過去から今への道～ 404
～回想・幸せへの道を～ 412
～回想・料理人の不在～ 419
因縁の決着 424
つつがなくになって無い!! 429

洞窟のお茶会 433
超竜軍団編
ー幕間・魔王軍ー① 441
ー幕間・魔王軍ー? 446
ー幕間・勇者一行サイドー 451
つかの間の休息 458
マアムの旅立ち 461
戦いの序幕 466
竜の親子の対面 472
間に合ったーっ! 481
それぞれの決意 489
再会の仕方がが予想と違う件 495
妨げられた思い 498
死神の執着の始まり 506
消された想い出 511
伝説への反逆 515
ずれている感覚 520
黒き疑念 523
渡せねえ! 530
やっぱり俺は・・ 535
いつだって希望はある! 542
親子大決戦① 腹括ります 547
親子決戦?愛があれば・・ 553
親子決戦?父さん 560
親子決戦④決着 565

ー幕間ー魔王軍サイド 573
料理人の休暇願 576
真夜中の招かざる客たち①プロローグ 583
真夜中の招かざる客たち？因縁の二人 586
真夜中の招かざる客たち？一流魔王 590
真夜中の招かざる客たち④ハドラーの決意 595
まいた種が芽吹きし時 598
親って奴は 603
鬼岩城編
勇者一行の楽しき休日 607
再始動 614
変わり者の仲間が入りました 621
ランカークスにて鍛冶屋を発見（超俺様） 626
剣が誕生します 631
鬼岩城・・ですが恐れない 636
鬼岩城・・ですが・・ 643
泥はいい 646
勇者一行の料理人対魔王軍の料理人 650
影と変態に氷の雨を 658
嘆きの大地にて 666
死の大地には雷が降る 672
それぞれの思惑 677
打倒魔王軍！ 683
やらかした 685
お友達が増えた 689

争奪戦⁉ 695
薬 703
秘密部屋の秘密① 709
秘密部屋の秘密？ 715
秘密部屋の秘密③ 719
秘密部屋の秘密④ 725
秘密部屋の秘密？ 728
一行の料理人の到着 736
兄妹 743
躓き 747
王城決戦⁉① 754
王城決戦⁉？ 761
王城決戦⁉③ 767
王城決戦⁉④ 776
王城決戦⁉最終章① 781
王城決戦⁉最終章？ 785
王城決戦⁉最終章③ 790
王城決戦⁉最終章④ 793
戦いという沼に① 799
戦いという沼に② 804
ふざけるな 807
出来ることと言えば・・ 812
寝ます 817
大魔王の篩編
真夜中の使者たち①プロローグ 821

真夜中の使者たち？昼前 824
真夜中の使者たち？愉快な昼 831
真夜中の使者たち④到着 835
真夜中の使者たち⑤昼食会の始まり 841
真夜中の使者たち⑥昼食会の大賑わい 847
真夜中の使者たち⑦夕暮れ前の問答 852
真夜中の使者た⑧黄金の黄昏時 861
真夜中の使者たち⑨大魔王バーンより 868
真夜中の使者たち⑨蛇（くちなわ）の妄執 874
真夜中の使者たち⑩嘆き 880
大魔王の篩① 888
大魔王の篩② 891
大魔王の篩③ 895
大魔王の篩④ 898
大魔王の篩？ 901
大魔王の篩⑥ 905
大魔王の篩⑦ 913
大魔王の篩⑧ 919
大魔王の篩？ 924
大魔王の篩⑩ 931
ハドラーの篩早く始まってほしい 936
味方は守らないといけないでしょう 943
おじさん 950
大魔導士の怒り 959
それは呪いか祝福か 966

見舞客は死神⁉ ―― 973
良い子に免じてお見舞いだけで帰るよ ―― 977
それぞれの・・ ―― 986
お休み貰いました ―― 996
料理人の休暇編
メドローア ―― 1003
優しいが故に ―― 1010
予期せぬ客はいつもの事だけど・・・・ ―― 1018
料理人と大魔王の邂逅は・・ ―― 1023
精霊がイメージと違いすぎる ―― 1032
夕食会へのご招待 ―― 1040
ベンガーナデパート① ―― 1048
ベンガーナデパート② ―― 1054
料理人の預かり者達 ―― 1062
宝石箱の様な中に・・・・ ―― 1075
約束が果たされし時 ―― 1081
勝つ為の算段をつけておく ―― 1086
逃亡者 ―― 1089
成されし賭け ―― 1095
幕間―魔王軍― ―― 1106
勇者同士の邂逅 ―― 1112
心繋がり ―― 1117
決戦は近い ―― 1127
ノヴァ ―― 1138
パプニカ王に願いを ―― 1146

太陽の温もり ―― 155
気に掛ける理由 ―― 161
お守り ―― 165
最後の授業① ―― 173
最後の授業？ ―― 176
最後の授業③ ―― 181
真夜中の語らい ―― 187
死の大地決戦編
新たなる戦いへの序曲 ―― 192
いざ戦場へ ―― 197
親衛騎団揃い踏みと初遭遇です ―― 203
三匹のモグラと氷が北に行く ―― 210
繕うのやめます!! ―― 217
勝利の為に ―― 225
だいっきらい!!! ―― 231
敵は信じるか信じないか ―― 236
氷の勇者 ―― 245
幕間―ノヴァ― ―― 252
サババフラグなんて滅べ！ ―― 260
再会は嵐の予感 ―― 265
歩いてきた道が繋がる時① ―― 269
歩いてきた道が繋がる時？ ―― 276
歩いてきた道が繋がる時③ ―― 285
歩いてきた道が繋がる時・エピローグ ―― 295
決戦行かずに突然の休日① ―― 307

決戦行かずに突然の休日②　311
決戦行かずに突然の休日③　319
決戦行かずに突然の休日④　330
決戦行かずに突然の休日？　338
決戦行かずに突然の休日⑥　341
決戦行かずに突然の休日⑦　349
決戦行かずに突然の休日⑧　358
決戦行かずに突然の休日？　366
決戦行かずに突然の休日⑩　369
決戦行かずに突然の休日⑪　375
決戦行かずに突然の休日⑫　379
決戦行かずに突然の休日⑬　386
決戦行かずに突然の休日⑭　393
決戦前の夜の過ごし方・前編　403
決戦前の夜の過ごし方・後編　414
いざ決戦へ　425
頼むから常識・良識を！　430
―愛刀・雪白―　439
獣の喰らい合い　443
これはまるで・・・・　456
必殺の技　464
潰えし夢・・・・　472
苦い決着　477
―心―の変化　484
破滅への序曲か・・・滅びの道か・・　492

死神 ―― 503
死神と影 ―― 507
その愛は狂気につき ―― 515
それは生かすか殺すか・・・ ―― 520
拒絶 ―― 528
双子の竜の騎士 ―― 535
選定？剪定・・・ ―― 541
彼我の戦力さとはかくもありし ―― 547
苦戦 ―― 553
覚醒 ―― 560
折れる物　折れない者 ―― 568
光は・・・・ ―― 576
リャナンシー ―― 582
箱の底には・・ ―― 587
照らし出される道 ―― 597
再戦への道編
交錯し絡まり合う運命 ―― 610
落日 ―― 616
夜明け前の暗闇 ―― 625
頼まれごと ―― 630
怒りと立ち上がりと ―― 636
未来の為に ―― 648
幕間―とあるベホイミスライムの悩み事― ―― 655
魔王の思い ―― 661
料理人が遺したものたち ―― 666

毒を食らわば・・・ 1672
子供の如き思いで助ける者 1676
雨降って地固まるも・・・・ 1682
新たなる希望と光 1689
祈り 1692
大仕掛けの呪文を用いる意味 1694
希望の光は・・・ 1699
自責の念 1704
―母― 1711
戦いたいと思った理由 1717
思いは誰をも強くする 1724
悪夢 1729
夢現の中にて―前編― 1734
夢現の中にて―後編― 1741
最後の戦いに・・ 1747
奇妙な生活の始まり 1750
奇妙な日常 1756
黒炎とその配下達 1764
豪魔軍師・ガルヴァス 1773
見落とし 1776
仮初の果ては 1784
駆け抜けろチウ① 1791
駆け抜けろチウ？ 1798
駆け抜けろチウ③ 1806
幕間―拳聖師弟― 1815

駆け抜けろチウ④ ―――――――――――――――――――――――――――――――― 1822
駆け抜けろチウ？ ―――――――――――――――――――――――――――――――― 1827
近況 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――― 1835
たとえどんな姿になろうとも ―――――――――――――――――――――――――― 1840
歌 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――― 1844
歌の余韻　あるいは余波―大魔王と死神― ―――――――――――――――――― 1850
歌の余韻　あるいは余波―影と料理人とその周辺と― ―――――――――――― 1858
歌の余韻　あるいは余波―勇者達とその周辺― ―――――――――――――――― 1866
最終決戦への序曲―魔王軍・ミスト― ―――――――――――――――――――― 1874
最終決戦への序曲―新生六大将軍とその周辺― ―――――――――――――――― 1879
最終決戦への序曲―魔王軍の料理人と勇者一行の料理人の騒動記 ―――――― 1885
最終決戦への序曲ー勇者ダイと頼もしき船長ー前編 ―――――――――――――― 1894
最終決戦への序曲―竜の騎士と海の男と村の子供達― ―――――――――――― 1900
最終決戦への序曲―竜騎衆とリュート村の子供達― ―――――――――――――― 1906
最終決戦への序曲―エピローグー前編 ―――――――――――――――――――― 1918
最終決戦の序曲ーエピローグー中編 ―――――――――――――――――――― 1925
最終決戦への序曲―エピローグー後編 ―――――――――――――――――――― 1932
幕間―魂となりても・・― ―――――――――――――――――――――――― 1941
最終決戦編
最終決戦プロローグ ―――――――――――――――――――――――――――― 1949
何事も準備は大切に ―――――――――――――――――――――――――――― 1954
質問です ―――――――――――――――――――――――――――――――― 1962
結果は・・・・ ―――――――――――――――――――――――――――――― 1967
世の中広いのだ！ ―――――――――――――――――――――――――――――― 1972

蠢動する策謀 …… 1
処刑演目の行方 …… 19
希代の奇術師あるいはペテン師 …… 97
帰還 …… 119
戦いへの道筋 …… 200
思惑だらけの戦場 …… 202
戦場の庭にて …… 202
脈打つ疑惑の萌芽 …… 203
策 …… 204
謀 …… 204
策謀成れり …… 205
ただいまという言葉は良いものです …… 206
死神の宣告 …… 207
アバンの言葉・前編 …… 208
アバン先生の言葉・後編 …… 208
ティファの言葉・前編 …… 209
ティファの言葉・後編 …… 210
ラック＝バイ＝ラック …… 211
訣別 …… 211
とっておきをくれてやる …… 212
生きて行く …… 213
守り抜いて・・・・ …… 214
魔王と料理人の再会前編 …… 214
魔王と料理人の再会　後編 …… 215
奇妙な戦場故に、憐れな道化は窮地に陥る …… 216

道化の意地 ―― 164
道化の意地と料理人の思い ―― 169
料理人のティファパレスに到着す ―― 180
勇者一行の料理人の必須能力はブレイク力か？ ―― 184
料理人の真価 ―― 191
次の世代の為に次の次の世代の為に ―― 194
勇者一行のいつもの日常回・前編 ―― 203
勇者一行のいつもの日常回・中編 ―― 208
勇者一行のいつもの日常回・後編 ―― 214
明日という日が ―― 220
思いと記憶と転移魔法陣 ―― 222
最後の悪意 ―― 226
悪意の最後 ―― 231
―ｉｆ―みんなで仲良く倒してこい ―― 240
いざ大魔王との決戦に ―― 247
最終決戦の幕開け ―― 256
戦いの出だし ―― 263
黒き影の思い ―― 267
最終決戦終焉の一歩手前 ―― 271
竜の道 ―― 276
放て勇者よ ―― 279
世界中の明日の為に① ―― 285
世界中の明日の為に② ―― 292
世界中の明日の為？ ―― 296
世界中の明日の為に？ ―― 301
―― 308
―― 308

世界中の明日の為に⑤ ―― 314
世界中の明日の為に？ ―― 319
世界中の明日の為に⑦ ―― 323
世界中の明日の為に⑧ ―― 327
世界中の明日の為に⑨ ―― 334
世界中の明日の為に？ ―― 341
三千世界の空をも超えて ―― 347
未来を目指して ―― 351
四神の願い ―― 357
水晶体にヒビ入る時・・・ ―― 361
明日が欲しい ―― 366
嘆きの叫びに応える者達 ―― 371
取り払われた壁の向こうに願う事 ―― 379
それぞれの覚悟と・・・・・ ―― 386
幾夜の苦しみを癒してくれるものの為なら・・ ―― 392
憎しみの連鎖を・・・・ ―― 396
助ける手を弾いた報い・・・ ―― 404
攫われた太陽 ―― 409
世界中が祈る時 ―― 412
助けが来た ―― 420
大魔王と勇者の共闘戦線 ―― 425
化生の者、或いは魔性の者 ―― 431
数万年越しの罠 ―― 436
竜王から贈られしもの ―― 439
幕間―竜王の望み― ―― 445

夜明け ―――――――――――――――― 454
下された裁定 ―――――――――――――― 466
平和への一歩とその代償 ―――――――――― 472
冥竜王と生命の神 ―――――――――――― 477
対価の行く末 ―――――――――――――― 482
―明日―への道を歩く者達 ―――――――― 494
勇者一行の料理人 ―――――――――――― 508
後日談編
後日談① 女子会 ―――――――――――― 522
後日談② とある戦士に幸せを ―――――― 525
後日談③ 終の棲家 ―――――――――― 535
後日談④ かつての小悪党は・・ ―――― 547
後日談? かつての料理人の日常その一 ―― 559
後日談 IF ティファのお相手① ―――― 570
後日談 IFキル編続き ダブルデート ―― 577
後日談⑥ 銀の髪のティファは・・・ ―― 587
後日談⑦ 帰りたいな 前編 ―――――― 597
後日談⑧ 帰りたいな 中編 ―――――― 606
後日談⑨ 帰りましょう 後半 ―――――― 617
勇者一行の結婚狂騒曲
先代勇者の結婚 ―――――――――――― 626
元魔剣戦士の苦悩 ―――――――――― 652
求婚の行方 ―――――――――――――― 657
元魔剣戦士の幸せなる結婚式 ―――――― 682
元魔剣戦士の結婚：後日談前編 ―――― 666

元魔剣戦士の結婚：後日談後編 ―― 675
元魔剣戦士の結婚：番外編・前編 ―― 685
元魔剣戦士の結婚：番外編・中編① ―― 689
元魔剣戦士の結婚：番外編・中編② ―― 694
元魔剣戦士の結婚：番外編・中編③ ―― 701
元魔剣戦士の結婚：番外編中編④ ―― 708
元魔剣戦士の結婚：番外編・後編① ―― 719
元魔剣戦士の結婚：番外編・後編② ―― 724
元魔剣戦士の結婚：番外編・後編③ ―― 730
可憐な少女と獣王様：前編 ―― 740
可憐な少女と獣王様：中編 ―― 744
可憐な少女と獣王様：後編1 ―― 749
可憐な少女―達―と獣王様―達―後編2 ―― 755
勇者達の大結婚式：プロローグ・彼女達の胸の内 ―― 769
勇者達の大結婚式：プロローグ・ポップの胸の内 ―― 774
勇者達の大結婚式：プロローグ・槍使いと勇者の想い ―― 782
勇者達の大結婚式：プロローグ・周りの準備 ―― 789
勇者達の大結婚式：幕間・未来の疑問と苦い思い ―― 797
勇者達の大結婚式：結婚式前夜・前編 ―― 804
勇者達の大結婚式：結婚式前夜・中編 ―― 811
勇者達の大結婚式：結婚式前夜・後篇 ―― 815
勇者達の大結婚式：幸せなる結婚式・姫君達編 ―― 824
勇者達の大結婚式：：幸せなる結婚式・王子達編 ―― 828
勇者達の大結婚式：結婚式・前編 ―― 834
勇者達の大結婚式：結婚式・中編 ―― 841

勇者達の大結婚式：結婚式・後篇 ―― 2846
小石の投げられし世界へ
小石の波紋：プロローグ・前編 ―― 2854
小石の波紋：プロローグ・後篇 ―― 2860
小石の投げられた世界・初遭遇 ―― 2868
小石の投げられた世界・他界にての初陣（口合戦 ―― 2876
小石の投げられた世界：原因と首謀者と ―― 2884
小石の投げられた世界・・・・原因やっぱり私・・ ―― 2895
小石の投げられた世界：違う！ ―― 2901
小石の投げられた世界：天秤の傾きの行方 ―― 2910
小石の投げられた世界：小石を投げられた者達 ―― 2923
小石の投げられた世界：幕間・真に怖ろしき者・・ ―― 2936
小石の投げられた世界：保護者一同 ―― 2945
小石の投げられた世界：安全確保完了！ ―― 2954
小石の投げられた世界：料理人の真価・前編 ―― 2965
小石の投げられた世界：料理人の真価・後編 ―― 2974
小石の投げられた世界：料理人の真価・真相 ―― 2986
小石の投げられた世界：料理人の真価・本領発揮！ ―― 2996
小石の投げられた世界：幕間・お姫様と勇者様 ―― 3010
小石の投げられた世界：それぞれ・・・ ―― 3019
小石の投げられた世界：代価と代償・・・ ―― 3029
小石の投げられた世界：イシが積まれていく世界 ―― 3039
小石の投げられた世界：エピローグ・今後の為に ―― 3046
いしの積まれる世界：頑張る事もほどほどに・・・ ―― 3062
いしの積まれる世界：出陣 ―― 3069

いしの積まれる世界：それが幸いだと知った時・・前編 ―― 74
いしの積まれる世界：それが幸いだと知った時・・後篇 ―― 85
いしの積まれる世界：矜恃 ―― 30
意志の積まれる世界・・・・・・きた・・・・きた？ ―― 95
いしの積まれる世界・・、、捕まった ―― 53
いしの積まれる世界・・・・解き放った ―― 105
いしの積まれる世界：掴まえた・・・ ―― 118
いしの積まれる世界：幕間・死神の涙 ―― 127
いしの積まれる世界：あれが向こうの・・・・ ―― 136
いしの積まれる世界：糖度を広めよう！これ必須!! ―― 147
いしの積まれる世界：現状説明 ―― 153
いしの積まれる世界：最終決戦前夜① ―― 161
いしの積まれる世界：最終決戦前夜② ―― 173
いしの積まれる世界：最終決戦前夜③ ―― 181
いしの積まれる世界：最終決戦前夜④ ―― 189
いしの積まれる世界：夜は明けそして・・・・ ―― 194
いしの積まれる世界：罠 ―― 201
いしの積まれる世界：炎の鳥を撃ちしは・・ ―― 203
いしの積まれる世界：大魔王バーン ―― 214
いしの積まれる世界：遡った其々の事情 ―― 223
いしの積まれる世界：生命の輝き・・・ ―― 232
いしの積まれる世界：悪魔の囁き・・ ―― 236
いしの積まれる世界・・・・神様？ ―― 244
いしの積まれる世界：魔界の神・大魔王バーン ―― 252
いしの積まれる世界：ドラゴンクエスト ―― 258
いしの積まれる世界：ドラゴンクエスト ―― 265
いしの積まれる世界：ドラゴンクエスト ―― 269
いしの積まれる世界：ドラゴンクエスト ―― 326

いしの積まれる世界：老大魔王ＶＳ若き大魔王 ―― 3280
いしの積まれる世界：想いの重い ―― 3288
いしの積まれる世界：最大の殺し文句 ―― 3294
意思の積まれる世界：大層な者ではありませんよ私は ―― 3303
いしの積まれる世界：異界の大魔王とはどいつもこいつも!!
3313
いしの積まれる世界：このくらいは・・・ ―― 3320
いしの積まれる世界：悩み苦しむ君に救いを・・ ―― 3331
いしの積まれる世界： ―― 3339
いしの積まれる世界：真竜の戦い ―― 3347
いしの積まれる世界：ぶつかり合いそして・・ ―― 3353
いしの積まれる世界：大好きなんだよ!!!! ―― 3359
いしの積まれる世界：竜の嵐 ―― 3365
いしの積まれる世界：最後の選択 ―― 3372
いしの積まれる世界：切り札 ―― 3378
いしの積まれる世界：空に昇る竜の奇蹟 ―― 3382
暖かいいしの下に：石化したバーンを如何にすべきか・・ ―― 3390
暖かいいしの下に：影の慟哭・死神の献身 ―― 3394
暖かいいしの下に：何が一番大事か思い知り・・ ―― 3400
暖かいいしの下に：異端にして異常 ―― 3406
暖かいいしの下に・・・・・終われなかった・・・・ ―― 3410
暖かいいしの下に：頭が痛い・・・ ―― 3416
暖かいいしの下に：女王陛下の決意 ―― 3420
暖かいいしの下に：温かい世界を目指す為に・・前編 ――
暖かいいしの下に：温かい世界を目指す為に・・中編 ――

暖かいいしの下に：温かい世界を目指す為に・・後篇 ―― 426
暖かいいしの下に：帰路に・・・① ―― 433
暖かいいしの下に：帰路に・・・② ―― 443
暖かいいしの下に：帰路に・・・③ ―― 450
暖かいいしの下に：帰路に・・・④ ―― 455
世界に散らばるいし達：エピローグ① ―― 460
世界に散らばるいし達：エピローグ② ―― 463
世界に散らばるいし達：エピローグ③ ―― 467
世界に散らばるいし達：エピローグ④ ―― 472
世界に散らばるいし達：エピローグ⑤ ―― 476
世界に散らばるいし達：エピローグ⑥ ―― 480
世界に散らばるいし達：エピローグ⑦ ―― 485
世界に散らばるいし達：エピローグ⑧ ―― 490
世界に散らばるいし達：エピローグ⑨ ―― 494
世界に散らばるいし達：エピローグ⑩ ―― 497
世界に散らばるいし達：エピローグ⑪ ―― 503
世界に散らばるいし達：エピローグ⑫ ―― 508
世界に散らばるいし達：エピローグ⑬ ―― 512
いしの散らばる世界：エピローグ⑭ ―― 516
世界に散らばるいし達：エピローグ⑮ ―― 521
世界に散らばるいし達：⑯ ―― 524
世界に散らばるいし達：エピローグ⑰ ―― 527
世界に散らばるいし達：エピローグ⑱ ―― 530
世界に散らばるいし達：エピローグ⑲ ―― 534
世界に散らばるいし達：エピローグ⑳ ―― 538

原作前

転生先は・ダイの世界!?

目が覚めたら浮いていたんだ。正しくは上下左右何もなくどこまでも白一色の場所。

―私―は先ほどまで病院のベッドで寝ていたはずなのにここは何処だ?。

ああそうだ・・心臓が止まったのを、息が出来なくなる感覚を思い出した。

そうか、私・・死んじゃったのか。

そうすると、ここは死後の世なのかと思う。それにしては簡素だ。

私も仏教徒のはしくれで、死んだ者は善人も悪人も等しく三途の川渡って地獄の入り口で裁判受けて地獄か極楽浄土行くかの審判と、某小説に出てくる―冷徹補佐官―と愉快な仲間たちが本当に居るのかの実際検証する事を物凄く楽しみにしていたのにいないとは残念極まりないな。

「どちらにも行かん。・・とゆうより・・死後の審判を楽しみにしていただと?

変わった娘だな・・」

む?・・死んだから感傷に浸ってしんみりしようとしたら邪魔者が・・

「うっさいですよ‼どこの誰かは知りませんが死んだ人間にケチつけるなんて最低ですよ!人の趣味に口さしはさむな‼」

・・あれ?とっさに怒鳴ったけれども私誰と話してるの?

「こやつ中々の短気者のようじゃぞ?・・大丈夫かの?」

「今更言っても仕方があるまい。もう他の者は呼べんぞ。」

「そうだよ!―時間―が無いんだから‼多少の事には目をつむろうって決めたでしょう」

・・人の事を勝手にペチャクチャ話してる失礼な人達発見!話し方聞いていると・・

「そこのお三方！」
「「我等が見えるのか！」」
　オッシャビンゴ。私の考え大当たり～。ふっふっふ、見えないはずの自分達の人数をドンピシャに当てられて焦っているな。
　本当は見えているのかと。私はいい子だから早々に種明かししてあげる心優しい娘だからサクサク教えて上げよう。
「まったくもって見えませんよ。」
「ならば何故我らが三人いると分かった？」
「偶然かの・・」
「古いな―竜の―は。今時はまぐれ当たりっていうんだよ」
「偶然でもまぐれ当たりでもありませんよ。貴方方三人供喋り方がそれぞれ違うでしょう。最初はおじさん、次がおじいちゃん、最後の人は少し若者っぽいから分かったんですよ。」
　この人達がここの責任者かなんかかな？だとしたら少し話すか。死んで時間はたっぷりとあるだろうし。
「すみませんがここは何処で、貴方達は誰ですか？私は死んだんですよね。」
「ふむ、思ったよりも良いカンをしている」
「カンて、単に人数当てたからですか？」
「これならば大丈夫そうじゃな」
「あのですね、自分達の中だけで話完結しようとしているのやめてくれませんか？コミニケション取ってください。何が大丈夫なんですか？」
「早く質問に答えないと彼女また怒りそうだよ？」
「そうです！そこな若者の言う通り！早く答えて下さいよ!!此処は何処で貴方達誰ですか。」
「コホン、では娘よ、代表として儂が話をしよう。」
　あっ、やっぱり三人組の一人はおじいちゃんだ。儂っていう人初めて見たよ。
「お主は病で死んだ‼そしてここはお主の次の転生先へのいわゆるスタート地点じゃ。」

「展開早過!!閻魔様の審判⁉」
「無い。急を要する事でお主にこの世界に来てもらった。」
「・・この世界?」
どんな世界?急を?・・・分からん事だらけだが・・とりあえず新しい人生のようだ・・願わくば、健康体にの一般人に生まれ変わりた・・・・
「お主達が―ダイの大冒険―と呼んでいる世界で、お主はダイの妹としての第二の人生を歩んで欲しいのじゃ!!」
・・・嫌だ・・それって滅茶苦茶な人生決定じゃないのよ!!!!

かくして転生の幕は開いた

なんじゃそりゃ案件だよこれって!!
普通異世界転生者って、神様の手違いで〈トラックにはねられて死亡させてごめんなさい〉
とかのパターンでしょう?
今まで病院生活歴しか送ってこなかった私が何の因果で―ダイの大冒険―に転生する羽目になったってのよ!!
「・・困ったの～。驚いて固まってしまったぞ?」
「無理もなかろう」
「この子にリラックスしてもらう為に、僕たちの自己紹介をしてあげようよ。」
「それは妙案じゃの人の。これ娘よ、儂は神の一人、竜の神じゃ。」
・・・おじいちゃんが・・竜神様・・
「私は精霊と天族の神をしている。」
おじさんが・・・天の神様・・
「僕は人族の神様。この三人で天・地・魔界を切り盛りしているんだよ」
・・若いのが人の神様・・
自己紹介聞いて少しは頭冷えた・・・・冷えたけど頭痛いのには変わんないけどね。
「三人の神様で三神様でいいですよね。ものすごく偉い様な人達が、何故に平凡人間の私に声をかけにきたんですか?」
「・・お主はダイの大冒険をすべて読んだかの～」
「一番のお気に入りで全巻コンプリートしました。」
「この世界は漫画とやらと違うのじゃ」
「はぁ～、違いますか?」
おそるおそる話し出す竜神様から詳しく話を聞いてみた。
私達が読んでいる書籍全般は、―誰か―が物語を書くと、世界として―原作―とは違う複数の世界を伴って生まれるらしい。
そしてこの世界の大魔王バーンは、本体と融合してない老人姿で

あっても出鱈目なくらい強いらしい。
いやいや、それってほぼ反則じゃないのよ！
魔法使いポップの本気メラゾーマをメラでかき消していたバーンなんて、出る作品間違っていませんかと思ったくらいなのに、ここのバーンは若い肉体に戻れば一人で天界をも制圧できてしまえるくらいの強さだって・・・。
「この世界終わってる気が・・・」
なんでそんな原作開始前から詰んでる世界に私呼ばれちゃったの!?何かの罰ゲームじゃないよね！
「じゃからこそ―ダイの大冒険―の知識を持ち、我らと接触できるタイミングで寿命を終えたお主の力を借りたいのじゃ!!」
はい～⁉
「バランとソアラの子として、ダイの双子の妹としてともに世界を救ってほしい!!」
・・え～・・・・・
「頼むよ！ほかにもう手立てがないんだよ!!」
これは何か、相当切羽詰まった状況っぽい・・・。
なんで私？世界どころか人助けを一度もせずに人生終わったのに・・・
でも、あれって思いながらも私の心は嫌だって言ってない。ダイの妹になって他の世界を変える事を嫌だって心が言ってない。
なら・・・・いいかなやってみても。一度は死んだ身だ。
「やってもいいですけれども責任持てませんよ？」
やれるところまっで突っ走ってみたい！
「元々何もしなければ滅ぶ可能性が高いのじゃ。止むを得まい。」
ああそんなにしょげた声出さなくていいよ竜神様。投げやりでは決してないんだよ。
「やれることは全部やりつくします！」
やるからには知識総動員してやりつくすから！
「この世界は私の知っている知識で概ねあっていますか？」
「そうじゃ。大魔王バーンの強さ以外はほぼあっておる。」

「成る程、その規格外のバーンをクリアできればいいんですね。分かりました！」
「頼んだぞ、我等もできうる限りの支援を惜しまん！」
「一緒に頑張ろう!!」
　少し話しただけでも三神様達の必死さが分かる。私からすれば三人はこの上なく怪しい人だけど、きっとそれは向こうも同じくだろうに死んだ頼りない娘相手でも、誠心誠意をもって話そうとしているのが分かる良い神様達だ。
「頑張りますので、行ってきます！」
「うむ、気をつけよ。儂等とはいつでも念話で話ができる。」
「何かあればすぐに頼るがよい。」
「気をつけて生きるんだよ!!!」
　それぞれにエールを送られて直後、―ほぎゃ～おんぎゃ～!!―
　産声を上げながら赤ん坊として生まれ変わった。
「ソアラ！男の子の次は女の子だ!!」
「そう・・元気な声・男の子かと・・」
「いや！そなたに似た可愛い子だ!!名は・・そう！ティファだ!!兄はディーノ。妹はティファとしよう。」
　ディーノは―古アルキード語―で強き竜、ティファは美しい竜であると、―バラン―は双子の誕生に感極まり、叫びながら名付けをし、双子を産湯に付け産着を着せこの日の為に用意していたベッドに双子を寝かせつける。
　双子は先程の元気な声が嘘のようにすやすやの寝入り始める。二人共に親指をしゃぶりながら・・・その様があどけなく、愛おしさが付き上げるままに、出産で疲れている妻の―ソアラ―を、労り乍ら可愛い子を産んでくれた事を感謝する。
「ソアラよ、素晴らしき宝物を生んでくれて・・。」
「貴方、私も、こんなにいい子たちを授けてくれた貴方に感謝します。」
　双子の誕生に、夫婦は互いに喜び合い感謝をしあい幸せの笑みを浮かべる。
　こうして転生者は―ダイの大冒険―の世界に無事生まれ、この世界

を一変させる舞台の幕が上がった瞬間であった。

赤ん坊は無力です

こうして私は―ダイの大冒険―の世界に転生を果たした・・ってもまだ無力な赤ん坊だけれども、意識ははっきりしているから、父さん・母さんの事をバッチリ見ています。

ソアラ母さんは温かく優しい人。バラン父さんがいつも言っている。

ーソアラは太陽のようだーと・・その通りのような人だ。

バラン父さんも優しいけれどちょっと武骨で・・何故かダイ兄は父さんが抱くと大泣きしてしまい、その度に父さんがしょげてしまう。

・・父さんってあの冥竜王ヴェルザーに一人で勝った伝説の竜の騎士なのに、お父さんとしては新米パパか。いっつもその事でソアラ母さんに怒られてる。

なので、「キャ～ア、キャアキャア」「ソアラ!ティファは私が抱いても笑ってくれるぞ!」

赤ん坊スマイルの大盤振る舞いだ。温かくて大きな手をした父さん大好きです。

「良かった。これでディーノも笑ってくれればいいんだけれども。」

「む、それをいわれると・・」

もう絵に描いたような幸せな家族なのだ。

ここは緑豊かなテランの領地。時々ダイ兄ともども父さんに抱っこされて散歩に連れて来てもらってる。

人が少なく見かけたことがない・・追われる者達が隠れて暮らすにはもってこいの場所だ。

でも・・私は知っている。私達が生まれてそろそろ半年が経ち、直にアルキードの人達に見つかるだろう事を。

気の毒だけど一国の・・それもその国唯一の跡継ぎ王女が出奔したんだから仕方が無い。血眼になって探すのは当たり前だ。

はたから見たら、この二人のしている事は浅慮な気もする。

宮廷追い出される時、母さんが妊娠しているのを知ったとき、腹くくって人間ではありませんをカミングアウトして、竜の騎士の事をテ

ラン王に問い合わせてもらえば・・あるいはどうにかなったかもしれないのに・・今更言っても詮無いことか・・。
なってしまったものは仕方がない。こうなった以上は原作通りにいってもらうしかない。
流されてデルムリン島に行って、ブラスさんをーじいちゃんーにして、そこから先は少しずつ原作を改編して・・如何・・中身ともかくこの身は赤ん坊。さっき母乳をソアラ母さんから貰って眠くなってきた。
「う～じゅ～」
「あらあら、ティファはおねむさんね。」
「ゆっくり寝なさい。」
母さんと父さんの優しい声・・それに、
「おやすみね～夢を見ましょう～・・・」
母さんの歌・・子守唄がする・・もう・・眠いよ～。
やりたい事、考える事は沢山あるのに・・赤ん坊は無力です。
眠気に負けて・・夢の中に落ちていきました。

開幕ベルは罪と嵐とともに

・・赤ん坊というのは寝るのが仕事だ・・。
食事しては寝て、少し動いては寝て・・とにかく睡眠は大切なはずだ！
たとえグースカ寝ている間に知らない人たちに囲まれていても私は悪くない‼
それが大半筋肉むくつけきの鎧を着こんだおっさん達であっても、寝ていた私はなんも悪くない‼・・はずだ・・はずよね！私何日寝こけてたの⁉父さんは？母さんどこ⁉
つうか私攫われたの⁉・・一体どうやって・・。
言っちゃあなんだけど、うちの父さん地上最強の戦士様よ？その父さんの手から、娘の私を攫うってないわ～。やろうとしたら瞬殺もんよね～・・なのになぜにこの状況？
「おっ、女の子のほうやっと目～覚めたぞ‼」
「よくまあ三日間寝こけてられたよな～。」
「テラン越えでアルキード領内に入っても全然起きなかったよな・・。」
「・・よくあの状況で目～覚まさなかったよな・・」
「兄貴のほうはほとんどなきっぱなしだったのに。」
・・うん、状況分かった・・。この人達アルキードの兵士さんたちで、父さんと母さんの事連れ戻して・・私とダイ兄を護送中なんだ・・。でも変‼　何で私三日間も寝てた⁉
「すまぬ・・」
・・この声・・竜じいちゃん⁉
「起きてお主がなにかしても困るだけじゃから」
・・・だから強制睡眠した？
「うむ・・・母親はどうあっても助けてはやれぬ・・」
だから・・私を寝かせて・・精神負担減らしてくれたんだ・・。
いくら知識あっても私はまだ赤ん坊・・見ているだけで・・何も出来ない無力感を私に感じさせないように・・。
ありがとう三神様達。

「ティファ・・」
「すまん・・・・」
「お母さんの魂はすぐに回収する！次の人生はもっと生きやすい人生を送れるように加護つけるからね!!」
・・・・・優しいな。
原作通りじゃないと不測の事態が起きすぎて私じゃ対処できない・・そうならない様に・・父さんと母さんの幸せを壊れるのを見逃さないといけなくて・・三神様達泣きそうな声・・
世界を天秤にかけたらそちらの方が正しいのに・・私たち親子の事で心を痛めてくれてる・・。
その気持ちだけで十分だ。世界、頑張って助けよう。死にゆく母さんの為にも‼
「おい！この子も泣きそうだぞ‼」
・・気持ちどん底が顔にでたせいで、髭もじゃおじさんの慌てた顔おかしくて思わず笑った
「ああ笑った。」
「坊主のほうは腹いっぱいにして寝かせてようやくだったのにな～。」
・・ダイ兄は泣き虫か・・。だからテラン編で記憶を失くしたときビィービィー泣いてたのか・・今から兄の事鍛える算段しておくか
それにしても・・
「ロモスの夫妻には話ついてるのか・」
「ああ、将来的には王族には戻さないけれど、ソアラ様とこの子達を対面させるって・・。」
「その事大臣たちは」
「知られない様にって騎士団長に王が直々に託してたぞ。」
なるほどね～。話聞いてると、どうやら父さんを追い出したかったのって大臣たちか。自分たちの息子を母さんと・・ってところか・・。
兵士さんたち赤ん坊の前だから裏話満載会話中。
「明日・・この子達の・・」
「建前裁判で・・茶番だ・・」ここにいる兵士さんたち・・
ほとんど私達と父さんに同情してくれてる・・いい人達・・この人

達の家族は・・皆明日になったら・・
「嵐に突っ込んだぞ‼」
「見張り何してた⁉」
　これから起きる悲劇を考えてたらこちらの運命も動き出した。
　どうやら急速成長した嵐に捕まったらしい。
「ヤ～アッ!!ア～ア!!」
　この泣き声ダイ兄!!泣いてる・・・・嵐が怖いのかこの後に起こる自分の運命を泣いてるのか・・・
「急げ‼この子達を早くボートに!」
「「早くしろ!俺達は木片に捕まれても赤ん坊にゃ無理だ‼」放り出されないように籠をロープ巻きにしろ!!」
「おいお前!!」
「はい!」
「この子達とボートに乗れ!!放り出されないようにしろよ!!!」
　・・ここにいる人達も、皆いい人達だ。他人の、それも罪人の子供を守ろうとしてくれてる。
　神様達!!願おう、この人達の無事を・・話に関わらない事の望みは大抵叶うらしい。ならこの人達の無事を!!
「良かろう。」
「大～丈夫!任せてよ!」
「程良き陸地に漂着させる故任せよ。」
　・・良かった受けてくれた!!それと・・
「駄目だ駄目だ!!行っちゃ駄目だ!待ってくれ!!!」
　私達のいる小舟に一緒に乗ってくれたお兄さんを、突風で降ろしてもらった。お兄さんは耐えようとしてくれたけど・・大丈夫・・この嵐は三神様達が私達をデルムリン島に連れていくためのもの。私と打ち合わせ済み・・だから、大丈夫。
　泣かないでお兄さん。無事でね・・。
　次の日、私とダイ兄は無事にどこかに辿り着いたのが分かった。波に揺られてない。
　でもここが何処だか本当に分からない私の不安を、嵐で浜辺に漂着

した船を覗き込んだ――鬼面道士――の顔と声で直ぐに分かった！
「赤ん坊・・何故こんな所に。」
温かい・・テレビとおなじブラス時ちゃんの声だ‼
「フ・・ウ・ワァ～ア‼」
声聞いたらホッとして・・大泣きしてしまった。起こってしまった事・・これから起こる事・・すべてに対して・・。
「あ～・・よしよし・・先ずはロープをとって・・」
鬼面導士の太くて短い腕で抱き上げてくれて・・泣いた私をすぐにあやしてくれた。
今回はダイ兄の方が眠ってる。
爺ちゃんの温もりに包まれて私はしばらく泣いた。
これでもう引き返せない、母さんを犠牲にした罪を背負って私はこの世界を変えていくんだ・・・

デルムリン島をＰＲしよう

島に流れ着いてから三年が過ぎた。外情報は随時三神様が知らせてくれている。

私達が船に乗った次の日・・アルキードは滅んだ・・原作通りに。

『そなたの祖父はな・・』

三神様が、父さんの処刑時の事を詳しく教えてくれた。

父さんの処刑宣言の時、母さんが父さん庇って死んでしまった時・どちらも泣くのをこらえてったって・・。

アルキード王は悪い人ではなく・・良い王としてあろうとしていたのかもしれない。

家族よりも国を守ろうとして、娘の愛した男を処刑せねばならず、罪人を庇って死んだ者を・・愛娘であっても誹らねばならず・・結果・・父さんにはその機微が伝わらず・・か。

その半年後に父さんは魔王軍入りをしたって・・そこも原作通りに・・。

私達兄妹は優しいじいちゃんと、島の皆に見守られながら順調にのびのびと育って

今や島の端から端まで走って遊びまくってる。

「待ってよ～、ティファ～。」

「遅いよダイ兄～、モグちゃん！今日こそ負けないわよ！」

「モグ～（今日も勝つ～）」

大モグラ獣人のモグちゃんとダイ兄の三人で競争中。

今は島の皆に名前を付けまくっている。皆は嫌がらずに受けてくれる・・家族には名前を付けて呼び合いたい。

破邪結界をして来るべき大戦に備えたいけれども、大魔王たちの目に引っかかるのは避けたい。まあ私がしなくても家庭教師に来る人がやるからそこは任せちゃう。

その代わり、世界中に細工をしに行く。

ー破魔の石ーこれには邪を封じる効力があり、水に沈めると大地にその効果が溶け出すという優れもの。三神様が天界で大量に作って

用意してくれた。
大戦始まる前に自然結界になるよう頑張る。
いきなり聖結界が出来るわけではなく、少しずつ力を発揮するものだから魔王軍にはばれない・・らしいって言ってたからそこは信じてやってみよう。
その前にデルムリン島の周辺環境を何とかしたい！
今からこの島のモンスター達は悪くないぞのＰＲをしたい！
ダイ兄に人間の良さを早めに知っておいてほしい・・将来出会う父さんの人間憎さに引きずられない強さを持ってほしい。
でもやりすぎると偽勇者一行が来なくなる可能性も出てくる。そうするとダイ兄はロモス王に会えずは不味い！原作ブレイク行きになりかねない。
それとこれ重要。まぞっほさんとポップが出会えなくなるかもしれないのは嫌だ‼
勇者の家庭教師はレオナ姫が来ることで大丈夫だとしても、ポップとまぞっほさんの件が潰れかねないのはとっても困る！
あれで魔法使いの才あれど、弱虫だったポップが勇気の使徒に目覚めるきっかけになった
重要エピソードは大事にしたい。
そんで結論は、ここの近海を通ったお船の人達にだけに小規模ＰＲをしてみる事にした。
考えながら走ってたせいか大モグラのモグちゃんどころか
「やっとティファに勝った。」
ダイ兄にも負けちゃった。
「やったー！やったよモグちゃん‼」
まぁダイ兄嬉しそうだしいいか。その内、力も兄が上になる日も来るんだし。
しみじみ感慨に耽っていたら
「こりゃ～！二人共‼」
「げっ‼」
「あ～・・じいちゃん」

あちゃ～、勉強さぼって遊んでるの見つかった・・ここはひとつ！
「ごめんなさい‼」
「今から勉強するね」
「すぐやるね」
謝るタイミング息ぴったし。そこは双子の兄妹だ。

「まったくしょがないの～。ダイは呪文、ティファは語学勉強じゃぞ。」
「はーい」
優しいじいちゃんすんなり許してくれた。
ダイ兄と私の勉強が別なのには訳がある。
私が呪文のエキスパ―トになれたわけではなく・・私がまったく呪文と契約できなかったからだ‼・・おかしい‼よくネットで見かけた転生者特典どこ行ったって神様達に文句言ったら・・
「こっちがびっくりだよ～」
「才のかけらもない」
「珍しいの～」
とか・・反対に驚かれて落ち込んだ。
じいちゃん鬼面導士だから・・魔法使えない私にガッカリしたかなって・・でも違った。
―「ティファには他の才があるのじゃよ。それを一緒に探せばよい。」―
優しく頭を撫でて・・・温かい声で言ってくれた・・本当に優しいじいちゃんだ・・。
そのじいちゃんの良さも知ってもらうべく！頑張ろうＰＲ作戦!!

活動開始!!

ダイ兄の原作での勉強嫌いはここではそうでもない。
少しでもできればすぐ褒める。
「すごいよダイ兄。」
「かっこいい！。」
「お兄ちゃん素敵。」等々
褒め言葉満載の応援の雨あられでやる気度上昇している。
大体この言葉は古今東西万国共通らしいけど、素直な心のダイ兄には効果絶大のようだ。
調味料と食材あればお菓子を作ってもっと励ましてあげられる。
島の外に出るのはあと三年待たないといけない。せめて五歳にならないと・・その前に
外に行ける移動手段として船がないといけない。
それもあってＰＲ活動しないといけない。
将来交流した船の人にロモスまで乗っけてもらわないとたどり着けない・・つうか死ぬ。
「はあ～。」
あれこれ考えながら―ジャガイモ畑―の草むしって手入れしています。
前世に仕入れてた知識の一つに畑作りがあったので絶賛活用中で、成功しています。
畑作ったらじいちゃんに驚かれた。
「ティファにはモノづくりの才があるのじゃな。」
ついで大喜びしてもらえたけれども・・この芋はまだ水っぽくって味がいまいち・・とは
前世持ちの私の感想。
外出て本格的な畑作りを習いに行っておいしいご飯を二人に出してあげたい。
島の皆にも振る舞って、お茶会をしてと・・夢一杯です。
さて、そろそろ計画実行しにいきますか。

計画は簡単。
―ダイ兄と遠泳競争してたら沖に流されて、そこを人に助けられました！―作戦
この海域を通る船も、三神様がリサーチ済み。そろそろ通る予定なので早くいかないと。
天気よし、勉強も終わった。「じいちゃん。ダイ兄と遠泳してきていい？」
「勉強も終わったのじゃからいいじゃろう。その代わり、あまり沖まで行ってはいかんぞ
二人とも。」
「はーい。」
「行ってきまーす。」
いい子のお返事をして心の中で先に謝るまっておく。ごめんなさいじいちゃん！
良い子の兄も騙すの気がひけるけど！この島と皆んなの未来のためにもやり通すのだ！
「じゃあダイ兄、位置について・・よーいドン！」
ダイ兄は普通に真っ直ぐに泳ぎ始めてもう見えなくなった・・速いな～。
さて私は・・この潮流に乗って・・うん、流されてこの辺か～。
少し待っていたら中型の帆船が見えてきた。クルーはざっと十五、六人ってとこかな。
マストの上の人が望遠鏡持ちながら叫んでる・・私の事を見つけてくれたらしい。
こっちに近づきながら小型ボート降ろしてくれて、急いでボートにひきあげてくれた。
「もう大丈夫だぞ。」
どっしりとした野太いけれど優しい声・・親切なひとのようだ。
では頑張ってＰＲ活動始めましょう‼ファイトよ私～‼

デルムリン島良いとこ～一度は～おいで～

「お嬢ちゃんどうしてあんな所にいたんだい？」
「親はどうした」
「・・そもそもこんな海の上に子供一人って・・」
「・・もしかしてこの子魔物か⁉」
・・最後の人失礼だけど半ばあたってら。私は竜の騎士のハーフだし。
ボートから無事に船の上に救出されてからずっと質問攻めの嵐。
海の男らしい筋骨隆々のおじさん連中にアップで迫られての質問は・・正直ゆうと怖いっ！
本気で泣きそうになる・でもそれも無理なし・・。
魔王が倒れてやっと四年。いまだにモンスター達は恐怖の対象になっていることも多い。
海の男たちが警戒するのもうなずけるけるけどもＰＲ活動、スマイル零円行ってみよう！
「たすけてくれて・・ありがとう・・。」
・・少したどたどしく弱々しい笑みで・・。
「おっ、中々礼儀正しい子だな。どっから来たんだ。」
よし！掴みはオッケー。
「あのね・近くの島に住んでるんだけど・お兄ちゃんと泳いでたら・私だけここに来ちゃったの・」
幼児言葉ってこんなもんかな～。
「・・お前さんよく溺れなかったな・・」
「んとね、じいちゃんが言ってた。流されても浮いてれば何とかなるって・・そしたらおじさん達がきてくれた！ありがとね‼」
満面笑みでお礼したら、おじさんたち赤くなって照れてる。
「ちっこいのに偉えーぞ。」
「うちのガキに見習わして～。」
頑張って話す私の頭を、厳ついおじさん達が満面の笑みを浮かべながらあたまガシガシ撫でられた。

爺ちゃんとは違う荒っぽさだけど嫌じゃないや。今も前世でも、こんなに大勢の人達から頭撫でられたの初めてで嬉しい。良かった。拾ってくれた人達皆いい人達みたいだ。
「・・でもよ・・この辺の島って・・。」
おっ、そろそろ本題かな。
「あそこのモンスター島しかねえよな・・」
「でもこの子どう見ても人間のこにしか・・」
「けどよ、地図見ても・・」
さっき迄笑ってた船員さん達がこっちをチラチラ見ても、幼女の私は分からない振りをして、樽に腰を掛けてニコニコしている事にした。
私の事どうすればいいのか相談中かな。
「こんにちはお嬢さん。」
船の船長帽を被った年嵩のおじさんが代表できた。
「こんにちはおじさん。私ティファだよ。」
「ティファちゃんか。聞いてもいいかい？」
「なあに？」
「君の住んでいる島の名前はわかるかな？」
低くても優しい声が心地よく聞こえるけど、目は真剣だ。
私の言う事に？が無いかどうかを見ようとしてる。
「ティファね、お兄ちゃんとじいちゃんと島のモンスターさん達と住んでるの。」
「「デルムリン島かよ!!!」」
お船のおじさん達皆が青ざめたので幼児言葉を駆使して島の皆の事を一生懸命説明した。
デルムリン島での生活や、モンスター達とお友達で毎日お兄ちゃんと皆で楽しく遊んで
暮らしている事を。優しいじいちゃんに育ててもらっている事を。
じいちゃんが鬼面導士なのはこの時点では内緒。
言ったら混乱の元にしかなならないし、下手したら私が魔物扱いで放り出されても困る。

私の説明で半信半疑の船長さんはとにかく行ってみることにしてくれた。
先の大戦から四年が経ち、モンスターが狂暴化が解けたのが割と知られていたのが功を奏してくれたようだ。
計画は半分順調って・・あれ・・船の横泳いでくるの
「おーい!マー君!!」
半魚人のマー君が来た。
「ぎゅう～（ティファさがしたよ～）」
・・あっちゃ～。マー君がここまで来たって事はじいちゃん指示だ。帰ったらじいちゃんからのお説教の嵐覚悟しとこ・・・
「ごめん心配かけたね。今から島に帰るってじいちゃんとダイ兄に伝えて～。」
「ぎゃい（分かった～）」
あっという間に行っちゃった。これで出迎えてくれる・・って
後ろから視線感じる。
「あのよお嬢さん・・」
「ティファだってば～」
「じゃあティファちゃん・・今の何だ?」
「お友達の半魚人のマー君だよ。」ニッコリ。
「・・へ～」
「・・本当に友達かよ・・」
「どうなってんだ?」
半魚人が来たときはクルー全員で警戒をした。
一頭ではなく群れが来て攻撃されるかもしれないと・・そしたら少女がいきなり舟端から身を乗り出して名前呼んでおしゃべりしはじめた!!
「島のお友達には皆名前があるんだよ。ティファとお兄ちゃんでつけたの。」
「「・・そうなんだ・・」」
何か呆れられた気がするけど気にしない。世のモンスター達の為島の為ファイトー!!

島が見えてきたらキメラ達の群れが出迎えてくれた。
「(ティファ～お帰り～)」
「(ブラス様カンカンに怒ってたよ～)」
よっぽど流された私を心配してくれたのか、普段は滅多に島の外に出ないキメラの群れが飛んで来てくれてるとは。心配かけて申し訳ない。
船員さんたち驚いてる。キメラ達は翼狙われてるから人前には姿見せないもんね。
「心配かけてご免ね～。後で一緒に美味しい木の実たべよう。」
「(分かった～)」
「(先に島に行ってるね～)」
「あの子本当に・・」
「不思議な事があるもんだ・・」
私とモンスター達が仲良く話しているのを見て、大人たちの態度が少しだけ和らいだ気がする。頑張ろう私!!目指せデルムリン島親善大使。
「ティファちゃんモンスター達の言ってる事分かるのか?」
「うん。だってずっと一緒にいるんだもん。」
「そうか～すごいな～。」
船員さん達と話が弾んでいるうちに島が見えてきた。
「砂浜が見えたぞ～」
「男の子がモンスター達の中にいるぞ。」
「この子の言ってたお兄ちゃんか?」
「その隣いるのって・・」
「ひょっとしたら・・」その通りです。
「ダイ兄～、じいちゃんただいま～」
「「鬼面導士がおじいちゃん!?」」
んふふ～やっぱり驚いたか。でもここまで来たら逃がしません!!
上陸してもらってデルムリン島の良さをバッチリ教えて差し上げます!!

じいちゃんもダイ兄も素晴らしい人達です

「おーい、ティファ～」

浜辺迄まだ距離あるのに私の事見つけたダイ兄元気よく手を振ってくれてるけれど、隣のじいちゃんの顔が怖い！

じいちゃんメッチャ怒り顔してる!!後で説教の嵐決定だけど私に悔いは・・あとで考えよう。

何より、じいちゃんの顔は怒ってるのよりも不安そうな方が強く見える。

そりゃそうか・・ここに流れて来た理由は、人間の迫害から逃げるためで、四年目にして初めて私たち以外の、それも大勢の大人の男達が来たんだもん・・。

でもここまで来たからにはもう引き返す道などないのだ!!

「ダイ兄、じいちゃんただいま～。」

船から飛び降りて二人に思いっきり飛びついて押し倒す。

「あ～・・ティファ～。」

「こりゃティファ・・。」

「ごめんなさい・・心配かけて・・。あのおじちゃん達が助けてくれたの。」

うる目で謝りつつ、さり気なく船員さん達を紹介したら、ダイ兄はあっさりと許してくれた。

「もういいよ～。ティファ無事に帰ってきたんだもん。」

「こりゃティファ。」

「なにじいちゃん。」こっから勝負か。

「あの方たちに助けてもらったのか？」

「うん、そうだよ。」

「きちんとお礼をしなければ駄目じゃろうが!!」

大勢の人間が急に来た不安よりも、私の事助けてくれた事に感謝してお礼を言いに行ってくれるじいちゃんは本当にいい人だ。

こんなに素晴らしいじいちゃんの孫娘であることが誇らしい（´∀｀）

並みに流された孫娘がモンスターの祖父との感動の再会と、大勢のモンスターの群れに囲まれても無事でいる自分達の現状と、どちらに反応していいのか微妙な感じの船員さん達に、じいちゃんは短い足で出来得る限りの速さで走って直ぐにお礼を言いに行って、船員さん達が面食らう。

「初めてお目にかかりますじゃ。儂はティファの育ての親でブラスといいますじゃ。

この度はティファを助けてくださり、お礼のいいようもありませんじゃ。何とお礼をすればよいのやら・・。」

面食らっている船員さん達よ、じいちゃんの礼儀正しさは折り紙つきだ。そこらの人よりも出来たじいちゃんなのよ。

「あのね・・ティファ助けてくれて・・ありがとう・・。」

ダイ兄もじいちゃんの背中に隠れるように顔を出してお礼を言ってくれている。

照れ笑いしながらっていうのが超かわい～い!!

じいちゃんに驚いていたおじさん達の顔も、ダイ兄の可愛さにやられて緩んでる。

「お嬢さんを助けたのは当然の事です。名乗るのが遅くなりましたが、私がこの船の船長をしているウォーリアといいます。」

あり私とした事が、船長さんの名前聞くの忘れてた。

年の頃は五十代っぽい。

よく日に焼けていて、赤い船長帽子と上着が似合う伊達男さんで、帽子脱いだら短髪の青い髪が素敵なおじさんだ。

もうじいちゃんに驚いておらず、普通に話してる。大海原を腕一本で渡る海の男らしい胆の太さがかっこいい!!

ティファが感じたように、ウォーリアー船長から胆力とそして誠実さを感じ、悪い人では無かろうと判断し、島に招き入れてきちんとお礼をする事にした。

「ひとまずわしらの家にお越しくだされ。」

「いやそんな・・。」

「大丈夫ですじゃ。ここには船に悪さをする者はおりませんぞ。」

「いえ、そんなことは思っておりませんが、大勢で押しかけては・・。」
「ティファを助けてくれたお礼をゆっくりとさせてくだされ。」
「そうですか。ではお言葉に甘えて代表で私と若いのを二人・・カイとラック、付いてこい。
お邪魔させていただきます。」
一連の遣り取りをじっと見ていたティファは、ウォーリアーがブラスの提案を受け入れたのを見てほっとする。
爺ちゃんだったら、船員さん達をきっと気に入ってくれると思っていたが、きちんと招き入れられるかはまた別の話だから、ＰＲ活動がうまくいきそうで内心とってもほくほくしている。
ようやく話しがまとまりウォーリアーと船員と若い船員二人が、家に招かれる事決まった。

「残りは船の点検を。それとモンスター達に失礼の無いようにしろ。」
「「へい、船長!!」」
船長さんすごくテキパキと指示出してる。
船員さん達もビシッと返事をしてみていて気持ちのいい人達だ。後で美味しい果物持ってこよう。
この時期ならオレンの実とパパイヤがいいかな?南海の島は南国の果物に困らない。
家に着いたら、船長さん達中を珍しそうに見回してる。そりゃそうだ。
いかに礼儀正しいとは言え、そこはモンスターの鬼面導士のおうち。
もっと散らかってるのをイメージしたんだろうな～。
家の中が清潔に保たれているのに驚いたんだろう。
この家はダイ兄と私とじいちゃんの三人暮らしなので、原作の家よりも広く作られてる。
家具も漂着してきた物をじいちゃんが修理して使ってる。
さすがに全員が入るとやっぱり狭いので、外にテーブル出してココナッツの殻で作ったコップを出して、今朝作っておいたオレンの実の

ジュースを船員さん達にお出しする。
ちゃんと準備は抜かりなくバッチリです。
「・・お構いなく・・。」 出された船長さん達は当然驚いてる。
「いやいや、大したものは出せませぬが・・。」
「いえいえ・・」
大人の面倒挨拶がまた始まったなと、ティファはダイとジュースを飲みながら挨拶合戦が一段落するのをしばし待ち、ウォーリアーの言葉で程の良いところで切り上げられた。
「おや、あれは・・。」
挨拶合戦をしていたウォーリアの目に、戸口からちょうど見える棚に置いてあった二つの揺り篭が見えた。
「あ～・・、あれはですの～」
ウォーリアが見ているのが揺り篭だと分かったブラスはおもむろに立ち上がり、懐かし顔をしながら揺り籠二つを取り出し、昔語りをする事にした。
何故このモンスターの島に人間の子供二人がいるのか、そしてその二人は島の皆の宝物であり、ティファを助けてもらってどれほど感謝しているのかを伝えるために。
大嵐の二日後に浜に打ち上げられた私たちを見つけて、以来育ててくれた事。
そして・・、いつか両親が私達を探し当てて迎えに来るのを待っている事も・・。
「ただ・・ダイの名前だけが気がかりですのじゃ。」
「・・ダイ?」
「このティファの兄ですじゃ。ティファの揺り篭には名前がしっかりと着いておったのですが。」
ブラスは一端言葉を切り、家に入って揺り篭をひとつ持って出てきた。
「これですじゃ。」
持ってきた揺り篭のネームプレートにはＩＤしか書かれておらず、後は何かでこすれた跡がある。

「本当はご両親がつけた名前がわかれば一番いいのですがの～。」
分からないので勝手に名前をつけてしまったのが、ブラスの心の中で一番の気がかりとなっている。
両親が必死に考えていたであろう名前と全く違うかもしれない事を気に病んで。
名前とはその子供の幸を願ってつけるものだというのを知っているブラスだからこその悩みであった。
「本当の両親が現れた時、謝らないといけませんの。」
今まで胸に秘めていたブラスの悩みを聞いたティファは、胸を打たれる。
本当になんていいじちゃんなの!!
よく覚えてる、名前がこすれちゃったのは、嵐の中に赤ん坊の私達が篭から放り出されないようにアルキードの船員さん達がロープをぐるぐる巻きにしたあとだ。そのおかげでダイ兄と私は無事だった。
こんな縁も所縁もどころか種族が全く違う・・自分達を迫害した人間の赤ん坊を育ててくれているのに・・、
迎えに来た親が名前でグダスカ抜かしたら、私が力の限りぶん殴る!!
・・バラン父さん来ないけど・・再会した時抜かしたら全力でそうしよう。
自分が話した後静かになったので、ブラスが周り見回したら船長達ぼろしてる泣きしてるのを見てしまった。
ダイは不思議そうに急に泣き出した船長達を心配して撫ぜはじめる。
「どうしたの?どこか痛いの?」
怪我して泣いた時にブラスが自分達にしてくれているのと同じ事を、ダイは小さな手で懸命にウォーリアー達の背中を撫で始める。
痛いの痛いのどっか行けと言いながら背を撫でてくれる幼く小さな手の温かさに、ウォーリアー達の胸が様々な温かい思いでいっぱいになる。
この子供達は何といい子に育っているのだろう!!この鬼面導士・・

いや！ブラスさんが素晴らしい人物だから、こんなにも素晴らしい子になったのか。
船長のウォーリアは様々なことでボロボロと泣きながら胸の中に誓う。
これで、名前の事をがたがた言う親なら、俺がぶっ飛ばすと心の中でティファと似たような事を叫び上げる。
・・船長さん達・・じいちゃん達の良さ分かってくれたのかな？
じいちゃんもダイ兄も、とっても素晴らしいんだから！

そして交流が始まるのだ

皆に泣かれてじいちゃんが困ってしまった。
別に泣かすつもりで話したのではなく、なぜここに私達兄妹が住んでいるのかを説明し、ついでに日頃から考えている事を言ったに過ぎないからだ。
私からすれば泣くか泣かないかは相手の受け取り方次第・・・って・・格好つけたいけど!!
うっかりと私もぼろ泣きしそう・・気を付けよう・・じいちゃん話し・・・。
「それでブラス殿。」
おっ、ウォーリアさんじいちゃんにもう―殿―って付けてる。
何聞くつもりかな?顔がすんごく真剣だ。
「この子供達の両親が迎えに来たら本当に二人を返すのですか?」
・・核心に迫る事ズバッと来たな・・あり得ないけどね。
「むろんそうしますじゃ。子は親といるべきかと・・」
「ではダイ君達はどうおもうでしょう?」
ウォーリアさん痛い所突いてくるな~。
じいちゃんの考えは正しい。でもウォーリアさんの言わんとしている事も分かる。
生みの親か、育ての親か。これが人間同士ならまたいつでも会いましょうが出来ても、ここはデルムリン島でモンスターだらけだで絶対とは言わないけど往来するなんてほぼ不可能だ。
そもそもモンスターが人を助けるだなんて夢にも思っていなだろうし、仮に人助けの事知られても、黙って連れて帰ってそれで終わりだろうし、子供が助けてくれたモンスターに懐いてまた会いたいって言った日には大問題だろうしな。
それでも私とダイ兄はじいちゃんも皆も大好きで、二度と会えなくなるの辛くて嫌だ。
その時は引き離した親を恨んでしまうかもしれない。
そんな親子関係が果たして私達兄妹にとって本当の幸せかどうか

を、ウォーリアさんは瞬時に考えてくれたのかな？
「どうしたのじいちゃん？」
急に名前を呼ばれたダイ兄が怪訝そうな顔でこちらを向いた。
「ん・・まだ分からん事じゃ、何でもない・・。」
じいちゃんナイスフォロー!!
今のダイ兄に本当の親だのなんだの言っても分かる訳もなく、ただ不安にしてしまうだけだ。・・一応私も分からない振りして、二人の事をきょろきょろ見ている。
「あっと・・申し訳ない!!見ず知らずの私が立ち入った事を聞いてしまって・・。」
「いやいや、ウォーリア殿もこの二人を案じてくだされたのでしょう？
その時が来れば、自然となんとかなると儂は思っておりますじゃ。
今はこの子達が健やかに育ってくれれば、儂は幸せですのじゃ。」
己の意図を正確にくみ取ってくれるブラスの言葉に、ウォーリアーは益々ブラスに惚れ込んだ。
こんなに素晴らしい方が・・鬼面導士・・モンスターとは・・ひょっとして、俺達が知っているのとは全く違うのか？
しかしハドラーが攻めてきた時のモンスター達は凶暴だった・・一体どうなっているんだ？
さっぱり分からん。
ウォーリアは本気で悩み始めた。先の大戦時、実際に自分も凶暴化したモンスターの群れに襲われて死にかけもした。
しかし目の前のブラスには全くそれが無い。島のモンスター達からもだ。
皆穏やかな顔つきをして・・挨拶する素振りさえ見せてきたのだ・・どうしてこうも違う
の分からず・・首を捻るしかない。
その様子にティファはすぐさまピンときた。
はっは～ん、ウォーリアさん悩んでるわね？昔と今のモンスター達の違いについて。

種を明かせば全部邪悪な意思をまき散らしたハドラーが悪い。
今からその対策をしたいけど・・早く大きくなりたいな～。
「ウォーリア殿。儂等モンスター達も、平和に暮らすのを望むものが多いのですじゃよ。」
ブラスもウォーリアの悩みを察し、きちんと説明を始めた。
魔王の邪悪な意思に逆らえず、自我が乗っ取られていたことを。
「じゃからと言うて・・儂等が人にした事は簡単に許されるとは思っておりませぬ。
今はひっそりとこの子達と暮らしてゆくのがこの島全てのモンスター達の望みですじゃ。」
うう～っ・・じいちゃん・・それ以上は私が泣いちゃうよ～。
気が付いたらダイ兄じいちゃんに甘えてる・・私もひっつく!!・・・すりすり・・。
「こりゃ～!二人共‼お客様方の前での失礼じゃぞ‼」
「ブラス殿!!」
二人を叱りつけている時、突如ウォーリアはブラスの手をがっちりと掴んだ当然ブラスは何事かと慌てふためく。
「なな・・急にどうしたのですじゃ、ウォーリア殿・・」
「よろしければ我等と交流をしませんか?」
「はあ⁉」
だが次の言葉のほうにこそ更に驚いた。人間とモンスターが交流とは聞いたことも無い。
「驚かれるのは無理もありません。私自身こんな考えが浮んだこと自体驚いています。
しかし私はティファ嬢を助け、貴方とダイ君を知り、この島のモンスター達が世間で言われているような魔物の住まう地ではないと知ったのです!
それを知り貴方達の力になりたいと思ったのです‼そうだろお前達!!」
「船長の言う通りっす!こんないい人達放っておくのはいけませんっす!」

「そんな事したら海の男の意地が廃ります。」
海の男三人の魂が燃えた‼
「いやしかし・・。」
急に言われたブラスがついていけなかったが、ウォーリアーはブラスを逃がすかとブラスの小さな手をがっちりと握りしめ直して自分の提案を断られないように、怒涛の勢いでプレゼンを始め出した。
「良いですかなブラス殿、我らが海の男一致団結をせねば大海原は渡っていけません。誰かが少しでも困っていれば助けるのが当然な事なのです。」
ブラスの手を握りしめたまま、ウォーリアは熱く語る。手助けをしたいと。
「今の所困っては・・」
手助けを心苦しく思いウォーリアに断ろうとしたが押しの一手を言われた。
「ではティファ嬢は何故着替えをしていないのですか？服はあの一着だけなのではありませんか？子供はあっという間に大きくなります。
衣服も食料も、子育てにはなにかと入用のものが多いのですぞ。」
断ろうとするブラスをウォーリアは子育ての大変さを使って説得をする。
やはり人間とモンスターの子とは違うの事を説明して。
「ブラス殿私達にもお手伝いをさせてください。
この素晴らしい子供達がこのまま健やかに育つように。」
その熱い熱意に、ブラスの心は決まった。
「分かりましたじゃ・・よろしくお願いしますじゃ。」
確かにウォーリアの言う通り・・大きくなっていく二人には足りない物が増えてこよう。
服もその一つ。幸いウォーリアの船員達は幾人か家庭持ちがいるという。
ダイとティファの為にも交流を受けることにし頭を下げる。
「交流をお願いしますじゃ。」
ウォーリア達は必要物資を、こちらは海のモンスター達の住処とい

ざこざをしなくていい方法と島に自生している薬草や食料等を交換のものとして。

・・じいちゃんと船長さん達が話し合っている間ダイ兄飽きて私のお膝で寝ちゃってる。

まぁいいや。計画コンプリートだ。そして交流が始まった。

ゴメちゃんお友達になる

交流が始まって早十日。二日目で私とダイ兄のお洋服が届いた。
お礼にじいちゃんはモンスター達に関する情報をウォーリアさん達に伝授する。
船員のカイさんが元来モンスターに興味があるので大喜び・・お話の間私とダイ兄はお船にお邪魔してる事にした。
「これ何？」
「船の帆ってどうやって張るの？」
「ご飯どうしてるの？」
等々をダイ兄と一緒になって聞きまくっている。
船員さん達は嫌な顔一つせずに丁寧に教えてくれて、お菓子もくれた。
見たところ小麦粉に少量の砂糖とバターを入れた簡易焼き菓子のようだけど・・
「これな～に？」
ダイ兄は初めて目にしたもので、貰ってもどうしていいのか戸惑ってる。
「こいつはな、お菓子って言って甘くて美味しいもんだ。坊主食ってみろよ。」
「・・うん、いただきます・・」―サクッー
「おいしい‼こんなに甘いの初めて食べた」
「そうかそうかきにいってくれたか～。もう一ついるか？」
「うん!!食べる！」
・・あ～・・お菓子の虜に・・。無理ないか。お菓子を嫌う子供はいない。
そんな感じでダイ兄はどんどん船員さん達に懐いて、交流の目的を果たしている。
服だの何だのは私のとってはほんのオマケで、大きくなった時に乗せてもらえる船ができたし島の周辺状況もどうにかなった。
そろそろー神の涙ーイベント行きましょうと、三神様達と打ち合わ

せた。
―ゴールデンメタルスライム―の噂無しで、偽勇者一行が来てくれないのはとっても困る。
天気のいい日にダイ兄が一人で遊んでいるところに落とすことになった。
純粋なダイ兄が―僕の友達になってよ―と願ったからゴメちゃんが誕生できた訳だから、私は関わらないのが無難だ。
ダイ兄は結構一人で遊んでいる。
私が畑の手入れやじいちゃんの家事手伝いをしていても、島の皆と楽しそうにしている。
今日は天気で、お勉強が終わって早速外に遊びに行き、私は洋服のお手入れしてたらじいちゃんに外行くように言われた。
「これティファ、ここはよいからお前もダイと外で遊んできなさい。」
じいちゃんの考えでは子供は風の子か。
でもせっかく可愛いお洋服貰えたんだからお洒落もしたいのも本音なのよ。
「お洋服見てるの楽しいからいいの。」
「そうなのか？」
「うん。楽しいよ。」
女の子とはそういうもんです。
それとこれも楽しみの一つ。
「じいちゃん、また料理教えて～。」
前の人生では体が弱くて野菜の皮むきすらしたことが無い。
「一杯教えてよ～。」
すりすりしながら甘えて頼んじゃう。
「分かった分かった。教えるからひっつくんじゃない。これでは教えられんじゃろう。」
「やったじいちゃん大好き!!」
「あ～これ、分かったか分かった。」
こうしてじいちゃんに沢山の事を教わって将来絶対に役立てようと将来の遠謀を描いていると、表から地響きとダイ兄の元気な声が聞

こえて来た。
「じいちゃ～んティファ～」
皆げんきだな～。呼んでるし出迎えよう。
「じいちゃん、ティファ、早くこっち来てよ。」
ダイ兄手を後ろにして何か隠してる。もしかして!!
「じゃん!!」
ダイ兄の両の掌に乗っていたのは、つるプニのゴールデンメタルスライムの生ゴメちゃんだ!!!
私と爺ちゃんにじっと見つめられてるのが恥ずかしいのか赤くなって照れているのがまた可愛いよ!!!!
「キュ？ピ～。」
・・鳴き声もかわいい・・マジ感動もんです。尊いです。
「じいちゃん、この子なんてこ？」
「うむ・・儂も初めて見るの・・」
結局じいちゃんも分からず、ゴールデンのメタルスライムぽっいので、ダイ兄が―ゴメちゃん―と名付けました。
名付けました。
家族が増えて嬉しいな～。

修行の前に自己チェック

周辺状況クリアー。ゴメちゃんイベントオールオッケー。
私も今年で三歳、立って歩いて走って泳ぎよし。
そろそろ来るべき日に備えての猛特訓・・の前に、私のポテンシャルチェックが先。
何せ私は魔法が一切使えない。
竜の騎士の子の筈なのに・・何故に？
ダイ兄は契約呪文片っ端から出来たのに・・。
落ち込んでいても仕方がない。三神様が私のスキルをチェックしてくれた。
さすがは神様達です。
チェック後に分かった事はどうやら私の中にもきちんと竜の紋章はあるらしい。
ただし、歴代の騎士やダイ兄のように体内にではなく、何故か魂の表層を覆うようにしていて通常魔法の魔力を生み出せないでいる状態であるようだ・・よく分からん。
とにかくメラだ、ヒャドだ、ライデインだー‼の夢は儚く散ったのが分かった・・おっ。
その代わり、歴代の騎士とは違う能力があるのも分かった。
一つ目は―聖炎―人族の能力で、魔を焼き払う聖なる炎が使える。
具体的な有効相手は邪悪な意思を持ったものやシャドー、暗黒闘気の生命体位だ。
・・初期の小物邪気キャラのハドラーか、ザボエラか・そのあたりにしか使えない。
次行ってみよう‼
二つ目は―式神―天族の能力で私の闘気が込められた物は、好きな物に作り替えることができる。
これはとても便利だ。
例えばその辺の石を闘気で覆えばモンスター入れ筒に作り替えることも可能。

ただし、条件がある。
一つは非生物の物ならば作れるが、生命体は生み出せない。外見や人型、思考のトレース等は修業を積めば可能らしいけれども、あくまでもどき・・ナルトの影分身みたいなものだけれども、できれば便利だ。
神聖の強いものを依り代にすればもっと生命に近づけて、固有能力も使用可能だそうだが薬草や食材の類は出来ない。
もう一つは質量やアイテムの能力に比例して私の闘気量が担保になる。
つまり木をベッドにしたり鍋窯にするのはさほどいらなくても、筒やアイテムを入れるマジックリング等はそこそこ消費をする。
これは問題無い。
私はあくまでも魔法が使えないだけであって、竜の騎士が使える―竜闘気―は使用可能。
魔法が使えなくとも闘気の量を上げていく修業をすればいい。
闘気の使い方を覚えて戦い方をマスターする方向で頑張る‼
そこはクリアーできたけど・・問題がもう二つ・・アイテムは作れるけれども衝撃に
弱い。
つまり武具の類は作っても意味がない。作っても張子の虎・・どころか紙の虎。
後は作るアイテムの正確な設計図を浮かべないといけないらしいのだが・・出来るか、そんな事‼
けれどもそこも解決。出来ないとやさぐれた私に、三神様からのプレゼント。
転生する際、転生者特典を二つつくれると言われた時、
「竜の騎士の子供ってところがもうチートでしょう。」といってお断りしたのを、四年目にしてギフトとしてくれた。
教わった事、体験した事を―保存―と私が唱えれば私が生きている限り覚えておける能力
これは直像記憶のようなものではなく任意でできる事がいい。

生きている限り、覚えていたい事よりも忘れたい事もある！
これでアイテム問題解決だ。
もう一つの方は少し保留にしてもらった。
次は修業だ修業～。
蛇足だけれでも、この程手鏡が手に入り、自分の顔を見てびっくりした。
・・なんと私の顔は・・ソアラ母さんの生き写し‼・・本当に驚いた。
黒目黒髪は川や池に写っていたのを見て知っていたけれどさ～。
・・ここまで母さんに似ているとは思わなかった。
でも今は見た目よりも中身を磨くのを頑張ろう！

洞窟出現　武器とアイテムゲットだぜ～

能力の理解はオッケー。
三歳までダイ兄と皆で島で遊びまくったので体力底なし脚力・腕力ぶっちぎりー‼
自然児特典満載。世間一般の大人になら素手でも勝てる‼・・かな？
基礎体力はこれで大丈夫になったので、いよいよ本格的な修行の開始になった。
三神様達が修行場を用意してくれた。
何とドラゴンボールの精神と時の部屋みたいな洞窟だ。
私にしか見えず、当然入れるのも私一人。
中でどれほどの時間が経っていようとも、外では五分しか流れていないという超便利さ。
神様達としては、あと一年はやらせないつもりだったらしいけど、
「神様達～、早く修行して強くなりたいんです。」
早く強くなって、単身世界を回れるようになりたいというティファの願いを、三神はくみ取りすぐさま修行場をデルムリン島に出現させた。
本当はティファの体がもう少し育ってからを考えていたのだが、ティファの熱意に押される形となって。
修行場の出現した速さに、ティファを目を丸くしながらぽつりと言ってしまった。
「こんなに凄い力を出せるなら、世界中を助ける支援もう少し増やせば・・・」
ティファにとっては何気ない一言を言ったつもりであった。これ程の凄い御業を奇跡だからと抑えるのではなくという思いを多分に乗せた。
その一言で、ティファは天神に言葉の雷を降らされた。
「よいか!!これが出来たのは転生者のお主が、天の加護を与えやすき地・デルムリン島にいるからだ!!我等とてこの技を地上に出せるので

あれば・・・」
雷と共に嘆きも降ってきた。
説明聞くと、どうやら天界は長らく強制鎖国中らしい。
天界全土が不可視結界に覆われていて現神の三神様でも容易には取り払えず、やむを得ず現状に甘んじるしかなく、巨大結界の一部の隙を利用して今まで地上の支援をしていたと・・マザードラゴンと竜の騎士や神の涙・オリハルコンの武具やらを。
カールの破邪の洞窟は百年かけて少しずつ作って、完成してから出現をさせた。
他の試しの儀の洞窟・洞穴も地上にいる精霊たちに命じて同じように時間を掛けて作った苦労の末ものだって。
この洞窟が短時間でハイスペックにできた理由は転生者の私をツールにしたから結界の効力を受けずに送り込めたようだ。
天界と地上のミニ歴史授業を受けられた。
念願かなって修行場!その中は‼・・十畳ほどのごつごつ岩壁・・はて?
「三神様～説明プリーズ。」
「やれやれ、せっかちじゃの。きちんと説明するから慌てるでない。」
代表で竜じいちゃんが機能説明してくれた。
私のやりたいことに合わせて、洞窟の機能がかわるらしい。
瞑想、闘気練りの修行なら今の部屋で。
実践をしたい場合は下の階層に降りてくダンジョン版に。
その際は一つの階層攻略ごとにご褒美アイテムあり。当然階層ボスありで。
・・でも・・
「竜じいちゃん、実践でも・・罪の無いモンスター殺すのは・・・・」
ゲームのようには割り切れない・・だって私の友達大半モンスターだし・・。
「大丈～夫～!」
・・この緊迫感の欠片も無い声はたった一人。
「人の神様?」

「この洞窟内に出てくるモンスターは全部疑似生命体。
・・でも、喰らったダメージは本物だから注意してね。」
なるほど、そんならいいや！私が気をつければいいだけだもん!!
「頑張ります!!」
洞窟内一週間は闘気の修行。
内にある闘気を感じて、掌に出すのを一週間でやろうとしたら・・
三日で出来た・・。
一週間分の食料貰ったので残りの四日は式の練習する事にしたら・・二日で会得。
・・見てた神様達も出鱈目を見たみたいに言われた・・気持ちはとっても分かります。
別に無双チート貰ったわけじゃ無いのに会得時間が早すぎでしょう・・。
この体のスペックどうなってんの？
余った二日でダンジョンしてみることにしたら、そっちはぼろ負け。
モンスターの中で一番弱いスライムの群れに。
・・なんかほっとした。一般常識内で収まってくれた気がして。
力あっても使い方がなっていないとそんなものだ。
自分決め期限が過ぎたので洞窟を出て、何事もなく我が家に帰る。
「じいちゃん、ご飯つくろ～う。」
「うむ、今日は・・。」
お外では料理の修行だ。
朝起きていつもの一日過ごしたら、また洞窟へ。
今回は船員さん達に貰った武術の事が書かれた本。
この世界では本は貴重品で、専門書となればさらに貴重品なのをくれた。
本当はダイ兄が貰ったんだけど、ちょいと借りた・・ていうか・・無断借りだけど。
とにかく基礎的な動きと攻撃と防御の基本を読んで反復練習の末に、スライム全部、ボコって制圧してクリアー認定。

ご褒美アイテムは銅の剣。
持った瞬間ずっしりとした感触が・・体と心に伝わった。・・そして武器特有の怖さも。
テラン編で、記憶失くしたダイ兄が、パプニカナイフを持っただけで青ざめた理由が
分かった気がする。
・・これは命を懸ける重み・・会得して戦おう。私の守りたい者の為に。
その日はそこで終了。
それから三日間は洞窟には行かずに日常生活しっかりと過ごし、いつも以上に
じいちゃんとダイ兄に甘えまくり
「ティファは仕方がないの～。」
「ティファ大好きだよ～。」
「ティファもみんな大好き～」
自分の守りたいものを心に刻み込むように過ごした。
この大好きな人達の笑顔を守るために戦う事を。
二階層は吸血コウモリの群れ。
銅の剣で斬って斬って・・洞窟の天井崩落させて数を減らしてまた斬って・・
最後の一羽を切り終わったとき、私は吐いた。
肉を・・骨を斬る感触・・生々しく感じる・・命を奪った感触を‼
吐いて・・暫くうずくまって泣いてたら竜じいちゃんが達申し訳なさそうな声で話かけてくれた。
・・きっと・・すまないと思ってくれてる。
優しい三神様・・だからこそ私は三神様と世界助ける為に強くなるんだ!!!
「大丈夫!!私は強くなる。」
へこたれてられない。
だってこれが私の進むべき道のスタート台に立ったに過ぎない。
こんな所で弱音は言ってられない。厳しい戦いが待っているんだ

から。
ご褒美アイテムは薬草セットと薬学に関する書物。
勇者一行は常に大怪我がつきもの。―みんな特攻精神の持ち主ですか―と言う位に、我が身を省みない人達だらけになる予定だから、この本は本当に大助かりする。
主にヒュンケルとクロコダインだ。
特にヒュンケルなんて・・原作で負ったあの骨のヒビなんて一生治んない気がする。
・・この書物は本当に宝物だ。ものにしよう。
とりあえず薬草で自分の傷を治しとこ。
日常生活を送りつつ外時間半年、洞窟時間五年で洞窟すべてを制覇した。
全五十階層で、二十五階で空飛ぶ靴を手に入れた。
五十階層では・・オリハルコンに勝るとも劣らない武器を手に出来た。

使用方法は正しく身に着けよう

実践を積んだ私は・・強くなったのかな～。
マグマの大地、極寒のフロアー、重力のきつい階層などをくぐり抜け、
手足の骨折、打ち身打撲などには慣れました。
怪我で体動かない間は回復するまで洞窟内でお勉強。
お外の洞窟でお宝書物の内容が魔族語や神族語などの場合に備えてしっかりと取り組みました‼
・・ほとんど怪我したときに教わっていたので、教えてくれた三神様は半泣きしてたけど。
五十階層では大ボスは雷の竜だった。
流石に冥竜王が相手にした、ボリクスの強さを三分の一に抑えてくれた疑似生命ではあったけど強かった・・何度雷浴びせられて死にかけたことか・・。
攻略するのに三十五回トライして、弱点・戦いの癖を研究して、
―龍巻閃―を闘気最大で口の中に突っ込んで脳天ぶち抜いてようやく勝てた。
―るろ剣―の剣心の技はみんな大好き。
全部に竜の名が冠せられていて、竜の騎士の子の私にピッタリ‼・・とか考えて、技を真似させていただいています。
闘気が沢山ある私にはマッチングした技だと思う。使っていてもしっくりとする。
そんなこんなで五十階層を制覇して手に入れたアイテムは・・刀だった・・ちょっと待て‼
ダイ大の世界で刀って見たことも聞いたことも無い‼
さすがに神様達にちょっと待ったコールをかけたら・・数千年前に一部地域で作られていたのを教えてくれた。
白柄に白い鞘、早速刀身を見ようと抜いてみたら・・真っ赤な刀だった。
「その刀の材質はオリハルコンとはちょっと違うんだよ」

人の神様が説明をしてくれた。
オリハルコンよりも粘りの強い素材でないと、刀は同じ材質同士の剣にすぐ折られてしまうので、オリハルコンと同質の硬さがあり、かつ粘りの強いヒヒイロカネを使って打たれた
この世界でただ一本の刀だと。
作ったのは・・なんと人の刀鍛冶が打ったのだとも。
「竜の騎士の誕生と同時期でね、偶然竜の騎士の剣―真魔剛竜剣―を目にして、生涯をかけて作ったんだよ。」
・・それって、ロン・ベルクの人間版かな・・世の中凄い人多し・・。
ヒヒイロカネの入手経路は―神の涙―だそうだ。
その人は弱い人達を守れる刀を打ちたいと一心に願い、その純粋な心が―神の涙―を
引き寄せたって・・本当にすごくて素晴らしい人だったんだ。
そんな人が打った刀だ!!頑張って使いこなそう!!!!
すごい刀なのはよく分かったけれども・・普段どうしたものか・・。
えっと・・アイテムチェックしていいの見っけ。十階層で手に入れた鋼の剣があった。
普段はそっちをを使おう・・手に入れた経緯を聞かれたら・・海岸で拾ったでいこう。
武器のほかにこの修行ではもう一つすごいものが手に入った。
私には魔法センスゼロだけど・・なんと―古代呪文―ハイ・エントという能力を有していて、このほとんどと契約できました!!
魔法が使えないとどん底に落ち込んでいた私を見兼ねた人の神様が持ち掛けてくれて、
古代呪文を司るハイ・ティーンという太古の精霊に引き合わせてくれた。
銀の長髪を金のイカールでまとめていた、耳の尖った青い色の綺麗な精霊で、緑の瞳も印象的で、理知を深く感じさせる目にも引き込まれそうになる程美しかった。
最初会った時は、人の子には絶対無理と突っ撥ねられたけども神様達のとりなしもあって契約呪文をしてくれたら・・出来ました!!

やった嬉しい‼よっしゃ～と一人お祭り騒ぎをその場でしましたとも‼

契約できたのは、

シュガー＝アンド＝スパイス　術者の指先から赤い火花が出て、相手から放たれた、

魔法・闘気に触れた時、煙幕が発生する

ラック＝バイ＝ラック　対象者もしくは対象物を魔力でマーキングをして場所を強制的に移動させる。

長距離飛ばすときには専用の出口陣を事前に描いておくする必要があるが、自分の目視できる範囲では陣は不要。

マーキングしたものを取り寄せることも可能で物でも者でも両方できる。

ジ＝アザーズ　防御結界。ハイ・エントにはいくつか結界があり、ジ＝アザーズはトップクラスの結界で、闘気・魔法はもちろん、術者の力量次第で視覚・熱・空気の遮断もできてしまえる・・半面リスクも高い。

結界が破られた時、術者の体内にダイレクトダメージを食らってしまう代物だ。

後は贄の扉　これは命を生贄にすればどんな結果も通り抜けて移動できる術。

これは性質と能力はラックと同じだけれども、三点の違いがある。

一つは長距離移動でも陣を必要とせずに術者が思い描いたところならどこでも行ける。

二つ目は術者も移動できる事。ラックは術者自身が移動できない。

三つ目は・・呪力尽きても術者の命を捧げれば使用できる事。

バーン戦でどうにもこうにもならなくなった時に使用しよう。

最後はガン＝フレア　どんな物質でも塵にしてしまう・・それこそ―黒のコア―でも暴発させることなく塵にしてしまう・・ちょっと怖い能力。

使用できるのは生涯で一度きりで、撃った後は暫く動けなくなってしまう・・って・・

なんかどこの禁呪だかなチート技だけど、使用相手は決まってる。
言わずと知れたミストバーンだ‼もっと言えばミストの守ってるバーンの本体。
若い肉体がなくなって、ようやく原作の若いバーン並になってくれるって神様達が
教えてくれたからそれで使い道決まった。
このハイ・エントで敵を翻弄しまくってやる‼
って・・意気込んでたら・・神様達に強制ストップを掛けられた‼
何故に⁉
使用条件は―ミストバーンをガン・フレアで消した後―大っぴらに使ってよしって・・
なんで！どうして⁉練習はしていい、デルムリン島の外でも完全に一人の時には使ってもいいって・・でも・・他者、兎角敵の前では使用できないようにされた‼
いくら取り消しを申し立てても駄目だの一点張りで・・
そういえば・・神様達・・ううん・・精霊さんも、私がハイ・エントを契約できた時驚いてた・・後の思い出す。あれは驚愕だったのだと。
「・・何故じゃ!!」
「そんな・・君が・・出来るなんて・・」
「なんという事だ・・」
三神様達は力が増えたって喜んではくれなかった。
でもいいか。神様達には何か深い考えがあるんだろうし、練習はできる!!
正しい使用方法を身につけよ～。

この時の私は知りもしなかった。
ハイ・エントを―使える種族―が限られているのを・・
何故神様達があれほどにまで取り乱したのかを・・
力を手に入れて浮かれた私は知ろうともしなかった。
―何者―がハイ・エントを使えるのかを・・。

休憩と・・お話合い

今日は私は何もしていない。
普段ならば洞窟にて技の練習、新技開発に余念がないのに・・ドクターストップならぬ、神様ストップ入りました。
「君は修行のし過ぎ、オーバーワークだよ」
「近頃の若いもんは健康管理がなっとらん」
「無理をして体を壊してしまえば元も子もなかろうに・・。」
三神様達にそろって嘆かれました・・。
だって・・前世の私はほぼ病院住まいで、健康管理なんてみ～んな病院の人達任せ
健康的な日常なんて初めてで、さじ加減なんてしたことが無いので分かりません！
・・言ってて悲しくなってきた・・でも近頃疲れが取れない理由は分かりました。
今日はそんな私を見兼ねた三神様達が修行休むようにとのお達しで、洞窟の真ん中に
テーブルと椅子が一つある。
テーブルの上にはクッキーと焼き菓子、果物と紅茶が用意をされていた。
―五日に一度は休むこと―を言い渡された。
三神様達は本当に優しい。
世界の危機が迫っているのに、私の体も気遣ってくれる。
神様達の行為を受けとる事にして、早速お茶をいただく。
ダージリンとは違う・・もっと素朴な優しい味がする。
一人お茶はつまらないので三神様達とたくさんのお話もした。
この世界の昔話、伝承の元になったお話、伝説の真実と後日談。
話が面白くてついつい食べるのを忘れて夢中で聞き入った。
特に魔界が十万年前は地上にあったことを聞いた後は・・・私はなぜか泣いていた。
事の発端は地上に住んでいた魔族と魔族よりの竜族が、モンスター

よりも脆弱な人間なぞ存在する価値が無いのではないかとの過激な思想が生まれたことから発したようだ。
当時の人間は魔法契約できる者は稀であり、闘気も身体能力も、何もかもが弱かった。
そんな輩と地上の物を分配するんは勿体ないという選民思想が当時の魔族社会に
野火の如く広まり、あわや人間絶滅まで行きそうになったのを当時の神が許さず、
天界と地上の力を総動員して魔界を地下空間に押し込めたと・・。
・・当時の人達はもう誰もいない・・なのに・・子孫たちには覚えのない罪の罰だけが残って・・今も地下にて住むことを強要されている。
―魔界に太陽を・・それが余の戦う理由よ―
原作ではバーンがそう話していた。太陽が欲しいと・・・。
もしも当時の魔族たちがそんなことを考えなければ・・今も魔界は地上に・・。
それでも戦は無数に起こる事は容易に想像できる。
他種族どころか同族同士でも争うのが生き物の背負いし業だから・・・。
バーンだって同族の為という綺麗ごとではなく、魔界の神にこそ太陽がふさわしいという
自己顕示欲で言ったのかもしれない・・そう分かっていても・・涙が止まらない。
なんでなんだろう・・まだあったことも無い敵の事で悲しくなるなんておかしいい・・。
気持ちを持て余していると、ポツリと声が聞こえた。
「・・まことに・・」
「・・あの者たちも・・」
「うん・・幸せになってほしい・・」
「神様達・・あの人達って誰の事?」
涙をぬぐって聞いた三神様達は・・悩みながらもとてつもない事を

打ち明けてくれた。
長い長いお話で壮大で、はっきり言ってしまえば夢物語だ。
まっとうな人なら―そんなバカげたことを考えていないで、魔王軍を倒すことを考えろ―
とか一蹴されてしまうお話だよ。
話し終えた後には長い沈黙が洞窟内を支配した。
話した三神様は私の反応を静かに見守っている。。
聞いた私は情報処理で手いっぱいで反応できないのを、急かさずに待っていてくれている

「・・可能性がわずかでもあるのならば同時進行でやってみましょう・・。」
様々な事を考えて、一時間近く悩み倒して、三神様達の―本当にやりたい事―も聞くことにした。
バーンを倒して世界を救ってほしいと願ったのも三神様達の本心からの願いでも、
心の奥に閉じ込めていた願いも本当の願いだ。
先代の神様が魔界を地下に押し込めた後、力をつけた魔族たちが天界に復讐しに来る事を恐れて、天界全土を覆って強制鎖国になって・・今にいたってしまって。
「ティファ、・・ごめんね・・でもね・・ありがとう・・」
「すまぬ・・険しき道を・・」
「感謝の念に堪えぬ・・すまぬ・・すまぬ・・」
力が足りず、私を頼る事を・・涙声で何度も謝って・・願いを実行する方法に話が
移り・・その日は終わりになった。
「じいちゃん、ダイ兄～、ただいま～。」
休めたんだか分らない休日になったけれども、大好きな二人の顔を見れば疲れは吹き飛ぶ
みんな・・こんな風に単純な幸せを感じてほしい・・世界中の皆が・・。
後日洞窟内にて、三神様達の引き合わせで―とんでもない方々―に

引き合わせられた。
こっちも驚いたが、向こうも壮大な・荒唐無稽な夢物語に近い神々の悲願を、
こんな小さな子供に託したのかと驚愕をしていた。
けれども私もその人たちも神様達を心の底から敬愛しているのが分かり、協力をしあうことにした。
・・こんな凄い人達が地上で活動できるなら、この人達と眷属だけでどうにか出来そうだと、またもや思った事を言ってみれば無理だと即答された。
―この者達と眷属は、世界に干渉する出来事を始めることはできない―と。
種族問わず、誰かが行動を起こし、努力をしてはじめて力を貸す事で発揮できると。
この世界では天界の他にも神やそれに類する者たちが存在をして、力の発揮のルールは別の神々の管轄で、お互いに不可侵がさだめられている・・。
三神様達は天界・魔界・地上界の土地とそこに住まう種族の管理と、加護を授ける事が範囲内で他は出来ない事も教えてくれた。
神とは決して万能ではなく悩み苦しみもすることがよく分かった。
私は・・当初の予定通り突っ走る!!
―助ける人達―が増えたとしても!

お出かけ前の確認

一人修業はとりあえず目途がついた。
出来る技も増えたのが一番嬉しい。
一つ目　御剣流の最終奥義まで出来るようになりました・・が・・
これって室内・洞窟には向かない。
下手したら技の威力で周囲崩壊して自分も巻き込まれ死にする危険技。
九頭竜閃も会得したのでそっちがメインの方が無難かな。
二つ目　聖炎を地面にて点と点で結んで結界ぽく四角い面で中の物を覆えるようになった事。
今は覆うだけのもんでもいずれは攻撃の技に昇華させたい。
対ミストには有効な技が出来るはずだ。
私も今年で四つ半。そろそろ『お出掛け』を考えよう。
日程としてはお出かけ一年目は日帰り出来るロモス周辺。
日帰りって言っても船で往復一日を考えて一日半か・・。
船はウォーリア船長が引き受けてくれた。
五歳になったら世界を見たいと頼んでみたら、じいちゃんが出掛けてもいいって言ったら乗せてくれると約束をしてくれた。
ティファちゃんは外の世界を見て育つべきだと、頭をぐしゃぐしゃに撫ぜてくれながら頼もしい海の男の満面の笑みで力強く、指切りげんまんをして言ってくれた。
最大難関はじいちゃんだったか。
じいちゃんが許してくれる前に、ウォーリア船長に乗せてくださいの説得を頑張るつもりが、一発でオッケー出して貰えたのには驚いたけど、じいちゃんの方を頑張ろう。
それがクリアー出来たとして、二年目は二、三日で行けるカール・パプニカ周辺。
そこから少しずつ外出できる環境を整えてリンガイア、テラン・ベンガーナっと・・。
オーザムまで手が回るといいんだけれど・・最悪も考えないといけ

ないか・・。
カール周辺とロモスの迷いの森一帯は注意して行かないといけない。
―勇者アバン御一行―と鉢合わせなんて心臓が持たん‼
特にマトリフさんて勘が鋭そうで一番怖い。会って面倒ごとになりそうなのでパス!!
・・大戦始まってレオナ姫が攫われた時はマトリフさんの注意ひかないようにしよう。
遠い未来の事は後で考えとくついて、現状―破魔の石―を落とすのは首都よりも周辺の村辺りが重要だ。
普段モンスター達が住んでいるのはそちらだろうし、ひょっとしたら本当に草深い山奥ではお互い持ちつ持たれつで共生している可能性もある。
例えば人が強いモンスターから守る代わりに、ホイミスライムが人にホイミをしてあげるとか・・可能性はあるわけだ。
魔王軍が攻めて来て大戦が始まってもその仔達が凶暴化しないようにしてあげて、それまでのように人を助けてくれたら・大戦後、人とモンスター達の共生の可能性が高くなってくれるかもしれない。
そんな夢を見る。
モンスター達と育った私にとってはぜひ叶えたい夢の一つ。
その為にも―破魔の石―をばら撒きに行こう‼
じいちゃん説得ファイヤー!!
・・と・・それ頑張るにしても他のやる事チェック手数料チェックだ・・。
・・特に・・会ったらやばい人リスト作成は必須だ!
無論トップは魔王軍入りしちゃった父さんだね。
・・母さん激似に成長した私を見て―もしかして!!―なんて本気で勘弁・・。
後はさっき上げた先代勇者様御一行と魔王軍関係者、そんなところか。
世界回って元アルキードの回復の泉の水とほかの回復アイテム混

ぜたら新薬出来るかの実験もしたい。ドラクエには錬金があるからここでも出来るか自己実験してみようっと。
それともう一つ！この世界にはもう一種類の回復の泉があったのだ！
場所はリンガイアで効能は魔力が回復できる優れもの‼
でも人にはあまり知られていないらしい・・とゆうか知られていない。
理由はそこを精霊たちが守っていて人が近づけない結界が施されていて、辿り着けるのは神様かそれに類する者に許可を与えられるものか、精霊たちの祝福を与えられし者のみ
なので私は行けるようなので活用させていただきます。
将来仲間になる人たち守るためなら出来ることは何でもしましょう。
後はベンガーナに行ってデパートで道具買おう。
お金はお宝ありそうな洞窟を制覇して稼ぐのが目標だ。
でも・・あの国ってあんまりお近づきにはなりたくない。
原作読んでるといい人達の登場が少ない気も・・でもこっちはどうだか分からない。
何事も自分で見て経験すべし!!
その為にも出かけよう。

初めてのお出掛けｉｎロモスの港町

今日で五歳・・やっとの五歳だ～‼
長かった～色々計画している事練って、修行していても長く感じた・・。
これでお外に行っても世間の人達からは、近所の子供のお使い位に見えるはずだ。
行く場所決めて、ウォーリア船長さんの約束貰って半年間じいちゃんの説得の方が苦労した。
じいちゃんからは猛反対の嵐きた!!
「何を考えておるのじゃティファ!!!」
「でもじいちゃん・・。」
「でもじゃない！お前の様な子供がそんなに遠い外に行ってどうするのじゃ!!」
「世界勉強したい。」
「危険じゃ!!」
「島の皆より強い人滅多にいないってウォーリアさん言ってた。」
「・・移動は！」
「ウォーリアさん達が船乗せてくれるって言ってくれた。」
「外の世界にはゴールドというお金が・・」
「島の薬草とキメラの翼を少しずつ売る。」
「・・何のためにそこまで・・」
半年間粘って粘り倒してようやくじいちゃんの心がほぐれてくれた瞬間きた～!!
「世の中を知りたいの、世界は広い！自分の目で見て体験して知りたいの！」
知識で知っているだけの積りの世界なんて本気で守りたいという気概にかけてしまう!!
知識だけじゃダメだ。
それだけでは最後の最後でのポップのような踏ん張りがきかず、何度も力尽きるたびに心折れそうになった『ダイ』の方になりかねない。

私が目指すのはあのポップの諦めないしぶとさだ。
普段はお調子者で逃げ癖あって・・実際何度か逃げようとしたけれど、状況の困難と、自分自身の弱い心を克服していき、一行の心の支えとまでなった人。
バランを改心させる一助となり、暗殺者・死神キルバーンに目を付けられて、ハドラーやあの大魔王バーンにまで一目置かれた一般人代表のポップが私の目標だ。
私の考えでは彼は一般家庭で愛情あふれる家族の中で育ち、
血脈や因縁だのの己ではどうする事もできない苦悩が無く、
しがらみに囚われ事が無かったからこそ、あそこまで突っ走る事が出来たと考えている。
私はその反対をする。しがらみの根を世界中に植えに行きたい。
その根が深くなり、『守り抜きたい』気持ちが、最後の瞬間まで踏ん張れるように。
そんな気迫満載のティファの気持ちに、とうとうブラスが折れる日が来た。
ティファの気持ちは本気のようじゃ・・
行きたい理由がよく分からんが、後になってみればどんな理由があったのが分かるのがティファじゃしな。
芋畑作りの時もそうじゃった。
芋を食べずに芽が生えてきたのをそのまま大事そうに取っておいて、料理にしようとしたら怒り、ある日二つに切って掘って柔らかくした土の中に入れていた時は何をしているのかがさっぱり分からなかった。
植えた場所に水をかけ、周りの草をとっているうちに芽が伸び、
二月後には芋が十数個も採れた。
芋を採り終えた後、あれは畑って言うんだよと、ようやくティファが笑いながら説明をしてくれた。
流れ着いた本の断片を読み解き、畑を作ってみたのだと。
・・最初に出来た芋は水っぽくグシュグシュとしていて、さほど美味しくなかったが、その後ティファが土や枯葉を混ぜて弛まず改良し

て、今は美味しくなっている。
何よりも食糧事情が安定してくれた。
自分たちモンスターだけならば島の自然の物だけでもいいが、ダイとティファには
栄養のあるものを沢山食べて育ってほしいと思っていた矢先の出来事だった。
今では芋の他に、ウォーリア殿から頂いた野菜類、ハーブ類を育てて食卓を賑わせている
・・芋畑を見た時、ウォーリア殿は驚いておったの・・。
―まさか畑の知識がお有りとは・・本当にブラス殿はすごい。―
―いえ、これはティファが作りましたのじゃ。―
―なんとあのお嬢さんに教えて作らせたのですか！―
―いやいや、流れ着いた本に書かれていたのを真似たそうですじゃ。
その本はもろくなっていて、今はもう手元にないと・・―
―ブラス殿‼―
説明をしていたら、急にウォーリア殿が手を握りしめてきてびっくりしたが・・
―ティファ嬢はひょっとしたら天才児かもしれませんぞ‼―
その言葉の方がもっと驚いたが・・理由を聞いて納得もした。
―畑とは古来より人が考えて今に至る技術で、英知の結晶なのです。
それを断片的な情報から、畑を知らないで作ってしまえたティファ嬢は天才としか
言いようがありません。
よろしければロモス国の学舎に話を通して、私達の誰かの娘として勉学を習わせてみてはいかがですか？
ダイ君もあの年であそこまで読み書きが出来れば世間の子供よりも並外れています。二人一緒にどうでしょう？―
二人の将来を、ウォーリア殿は真剣に考えてくれた言葉じゃったが・・二人が嫌がった。

―俺ずっとじいちゃんの側にいたい！島の皆と離れるなんて嫌だよ!!―

―先生はじいちゃんだけなの！他はいらないもん。―

ウォーリア殿はガッカリとしておったが・・儂は嬉しかった。

二人があそこまで儂と島の者たちを愛してくれている事が分かって・・二人の将来の芽を一つ潰してしもうたが、喜んでしまったの・・。

あの子らを浜辺で拾ってもう五年が経つのか。

両親が現れる気配は全くなく、ウォーリア殿達もできる限り探して下されているが

手掛かりはひとつとしてない。・・ひょっとしたらご両親はもう・・。

それならばなおの事、あの子等の育ての親としてしっかりと育て上げ、生きる世界を広げてやらねば‼

もしかしたら・・何かの奇跡が起こり、両親と巡り合えるかもしん。

微かな望みと共に、許可をしよう。

あの子はダイとは違いとてもしっかりとしておる。

「ティファや。」

「なにじいちゃん。」

「外に出て様々な事を見て聞いて学んでくるがよい。」

「・・本当にいいの・・」

「うむ、行っておいで。」

「・・っう～・・じいちゃん大好き!!!愛してる～‼」

「あ～！これティファ‼」

許可が下りた時、あんまり嬉しくなってじいちゃんを押し倒してしまった。

そして初めてのお外、ロモス王国ｉｎ港町に上陸だ！

・・あんまりにも嬉しすぎて前日眠れなくて船旅は爆睡で過ごしたので覚えていない。

船長さん達にはしょうがない子と苦笑されました。

船を降りる時、仕事があって船員が同行できないので遠くに行きすぎない事、

買い食いはほどほどに、知らない人とあまり話さないようついていかない様を約束した。
島を出る時じいちゃんとウォーリアさんが真剣に話し合ってたし、約束はしないとだ。
「全部きちんと守ります。行ってきま～す。」
げんまんもしてお出掛けだ。
タラップを嬉しそうに降り、人ごみに紛れてティファが見えなくなったところで一人の船員がポツリと漏らす。
「・・行っちまいましたね船長。」
「口動かしてねえで手の方動かせ！そしたら早くティファちゃんに同行してあげられんだろ‼きびきび動け野郎ども!!!」
「「「へイ船長!!!」」」
ティファを一人にして、船長以下野郎どもは気が気でなかったりする。
誘拐やらなんやらの心配はしていない。
野生の暮らしで身に着けた俊敏力、腕力はよーっく知っている。
そっちではなく変な輩が目をつけて変態的な言葉をかけられたらと思うと、
・・言った奴は間違いなく魚の餌行きだ‼
ふわふわの艶やかな黒髪、生命力溢れた煌めく黒目、ふっくらとした唇、匂うような頬　。ティファはもの凄い美少女ではないが人を惹きつけてやまない魅了する何かがある。
元気いっぱいで眩しいくらいの笑顔が、他者を癒してしてくれる。
船の旅は常に危険と隣り合わせ。
近頃はブラスに海のモンスターの習性・行動範囲・縄張りを教わり、そちらは回避できるようになり万々歳だが、海の脅威は他にも沢山ある。
デルムリン島で休ませてもらい、可愛い兄妹に癒されまくっている。
二人共無邪気でこましゃくれたところは微塵もなく、本当にいい子達なのだ！

そんな天使の片割れを守るぞと、ウォーリア達は燃えまくっている。
『絶対死守だ!!』
「フええ・・フェックション!・・・何急に・・・」
「大丈夫かいお嬢ちゃん、薬草のお値段五ゴールドと、おまけにこれ付けとくね。」
「・・これって風よけマントですか?」
「そう。カール産で古びているけど丈夫で長持ち。
端が破けているからオマケであげるよ。」
「ありがとうございます。大事にしますね。」
「まいどあり~。」
ウォリア達の心配をよそに、ティファはルンルン気分で港町を満喫しまくっていた。
早々に馴染みになれそうな良い店を見つけられたと心が浮き立つ。
あそこの道具屋さんいい人だったし、店内清潔で品物の置き方も良かった。あそこで物の売り買いしよう。
他にも馴染みの店を作るべく動きくべく、あっちこっちをフラフラと覗き込み、気に入ったら商品を実際に買ってみる。
「リンゴください、んと・・・　十個で・・・」
「お使いかい、小さいのに偉いね~。一個オマケ入れとくよ。」
「ありがとうございます。いただきます。」
ティファの天真爛漫な笑顔に、行く先々で大人たちに可愛がられてニコニコしている。
今日は初日だ、ゆっくり見物を決め込もう。
それにしても風強いな・・フード被っとこう。
カール産マントか、端に紅い糸の刺繍がかっこいい。いいもの貰えた~。
お土産のリンゴも一個多く貰えたからかじって見物だ。
このすぐ後にえっらい目にあうとも知らずに。

色々と気を付けないと・・・。

ティファが初めての港町散策を満喫しているのと時と場所を同じくして、黒縁の眼鏡をかけ、銀色を混ぜたような青い髪を三段横ロールにした男が暗い顔つきで港町を彷徨うように歩いていた。

表情は暗く、其の胸中も同じくらいに暗くどん底であった。

ヒュンケル・・あなたは今どこにいるのですか?ひょっとして・・あの川でもう・・

先の大戦の勇者アバンは今日も必死に教え子のヒュンケルを捜している。

ハドラーを倒す前に戦ったバルトスの大切な忘れ形見・・騎士道精神に溢れた立派な敵から

託されたというのに・・・。

ヒュンケルは自分の事を父の敵と攻撃をしてきた。

ハドラーを倒せばハドラーから生まれた禁呪生命体のバルトスも死んでしまうので、

間接的には敵と言えよう。

自分を敵と思い、ヒュンケルの生きる気力になるのならばそれでいいと思っていた。

世界を巡り素晴らしいものを見ることで、いつの日にかは心が光で満たされると思って。

しかしそれは甘かった・・長い事共に過ごしても心の闇は無くならず、卒業記念で輝聖石を渡した時にそれは起こった。

剣の腕前は天性の物だが、殺気がありすぎると教え諭そうとしたときに、

―父の敵!!―

斬り付けられ・・とっさのことで手加減が出来ずに川に落としてしまった!!

・・何と言う事をしてしまったのだろう・・

幼い子の心を闇から救えずに・・挙句があのざま・・なにが勇者なものか・・。

それでも・・ヒュンケルを捜すのを諦めるつもりはない‼
必ず見つけて、今度こそは光の道をともに歩いてゆこう。
今日は港町に来てみた。こういう町は人の出入りも多く、うわさ話に事を欠かない。
あの子はとても目立つ容姿をしている。銀髪の紫の瞳の少年が一人で居たら、噂になろう。
(酒場は何処でしょう)噂の多い所といえば酒場が一番と探している。
町をを歩いていると目の前にとてつもなく見覚えのあるマントを着て歩いている人がいた!
あれは・カールの風よけマント!!・・まさか!!!
「ヒュンケル!!!」
以前ヒュンケルに上げたものと同じ柄!もしやヒュンケルかもしれない!!
ひょっとしたら譲り受けたのかもしれないが・・背格好がよく似てる。
「ヒュンケル!」
追いついて肩をつかみ振り向かせてみれば・・黒い瞳の女の子だった・
・・違った・・ガッカリとしたがとりあえず、謝らねば・・
「うっく・・」
「ん?」
「ひ・・う・・」
「・・お嬢さん?」
「うわーん!!!」・・しまった‼
振り向かせた女の子が驚いて大泣きする。それも当然だと思うが、女の子を泣かせてしまったと慌ててしまうアバンであるが、ティファの方がより驚き大泣きした。
何なのよ急に!のんびり歩いていたらヒュンケルなんて超あり得ない名前聞こえたと思って心臓がはねてビックリしたら目の前にすんごい形相のアバン先生の顔あるし!!
二重三重の意味で超怖いよー!!!

いきなり、会うとまずい人リストのトップスリーの一人に、鬼も裸足で逃げそうな形相で迫られたティファは本気でビビッて大泣きをしてしまい、反対にアバンを驚かせたが知った事ではない。
いきなり驚かせるほうが悪いのだから。
泣き止まない女の子に、アバンは本気で手を焼く。
どうしましょう！私としたことが・・ヒュンケルの事で焦っていたとはいえ、こんな小さな子を泣かせてしまって・・可哀そうに・・本当に驚いてしまったでしょうし・・・
「申し訳ないお嬢さん・・そうだ!!」
妙案を思い付いたアバンは、早速自分のズボンの中を物色しだす。
ポケットの中にはいつもあの子の為にと・・ありました!!
「お嬢さん、口の中にちょっと失礼しますね。美味しいですよ。」―パクー
どうか効いてください。
「うぇぇ～・・ヒック・・あ・・まい。あま・・いの・・ひっく・・これなに？」
良かった、効いてくれましたか。本当に申し訳ないことをしましたね。
心の中で冷や汗をかきつつ、少女が落ち着いてくれてホッとする。
落ち着いたらきちんと謝罪をせねば。いかに相手が小さくとも礼を尽くすのが筋である。
これ飴だ・・少しごつごつしてるけど・・美味しい・・この世界に来て初めて食べた。
飴は貴重品で中々手に入らないってウォーリアさん言ってた・・この人何でも持ってるのかな？
考え事をしながら飴をなめているティファの姿は、傍から見れば無心に飴を味わっている幼子の姿と映り、ティファの泣き声に集まってきた者たちと、アバンもホッとした。
少ししたら落ち着いたティファの様子に、アバンはホッとしながらティファと目線と同じになるように片膝をついて頭を撫で始める。優しい気配と手つきに、ティファは完全に泣き止んだ。

・・私が驚いて泣いてビックリしたろうな・・泣いた私もいろんな意味で驚いたけど。
「驚かせてしまって申し訳ありません。あなたが被っている風よけマントが私の捜している子のものと同じものでしたのでつい焦ってしまいまして・・こちらはお詫びになるか分かりませんが受け取ってください。」
貴重飴飴袋ごとくれるなんて本当にこの人は優しくていい人だ。
「大丈夫!!ありがとう。」
にっこり笑って謝罪受けよう。
焦ってる理由よく分かるし、アバン先生は本当にいい人みたいだしもう許しちゃう。
「あのね、私今お使いの途中なの。もう大丈夫だからおうちに帰るね。」
「引き留めてしまい申し訳ない。美味しそうなリンゴですね。ところでそのマントは・・」
「さっき道具屋さんがおまけでくれたの。場所はね・・」
・・まさかオマケでもらったマントのせいでアバン先生に会うなんて・・。
リンゴ買っておいてよかった。おかげでお使いですって言えた・・家に帰るまでがお使いだ。
あの後すぐにアバン先生と別れた。
向こうはヒュンケルの手がかりを探しに行って、私は反対方向に家があるように装って
子供らしく手を振って、内心冷や汗をかきつつ走って船に戻る。
・・もう油断しない様にしよう・・本当に驚いた。
あそこで辺に印象づけて、島に先生が来た時に思い出されてダイ兄と一緒に弟子入りいかがですかと誘われたら断りづらくなる。
以前会った縁のある子が―ダイの妹―として紹介された時、弟子入りを断った時不自然な印象を与えてしまいそうなのは困る。
・・あの人ものすごく記憶力が半端なさそうだし・・マァムの魔弾ガンなんてオーパーツこさえたり、輝聖石を削ってペンダントにして

お守りどころか神様クラスの加護までつけちゃう本物の天才だ。
一般人ポップを魅了して押しかけ弟子させて、ダイ兄とじいちゃんも一目惚れさせる、
そんなすごい人なら―転生者―ならぜひ自分も弟子にってなるんだろうけど、私はパス。
・・神様達は勿体ないって言っていたけれど・・これから私は原作知識をフルに使う。
いわば後出しじゃんけんのようなズルをすることになる。
ゲームで言えばイカサマで、これから起こるひどい出来事を黙っているずるい奴。
そんな私が―アバンの弟子・使徒―なんて笑っちゃう。
要するにずるをしている私からすれば、自力であそこまでになって、今も世界を良くしようと一人で頑張っているアバン先生はきれいすぎて眩しい存在だ。
私の実力バレない為にも、先生が島きた時モブに徹しよう・・。
でもどうしてヒュンケルはあんなに素敵な先生といたのに、心の闇を振り払えなかったんだろ？魂の貝殻みたいに凄いものが無いとやっぱりダメなのかな。
出会ったら何とかしてあげたい。
ともかく今は油断せずに色々と気を付けよう。

一年目は・・うまくいってるのかな・・

お出掛け一年目は、朝早く起きて畑の面倒を見てその日の勉強を終えてからお出掛けだ。
あまり出掛け過ぎると疲れるのとじいちゃん達が心配するので十日に一回にしている。
年月経てば大きくなって出掛ける範囲を広げていく予定なので焦らずに行こう。
毎回のお土産は二人にとても喜ばれた。
飴はあまり手に入らないのでダイ兄には他のお菓子とおもちゃを買っていく。
じいちゃんには古書や民芸品が喜ばれている。
狭い家なら置き場はないが、今三人で住んでいる―広い家―なら大丈夫だ。
私が出掛ける一年前に、ウォーリア船長が大工さんと建具屋さん達を連れて来て、
私達の家を建ててほしいと依頼をしてくれた。・・私とダイ兄へのプレゼントだって・・
―二人が健やかに育ってくれるのが条件だよ―
断ろうとしたじいちゃんに言った事・・頼もしい海の男スマイルで・・。
それを聞いたじいちゃんはウォーリア船長さん達に涙を流して感謝をして受け取った。
お礼の品物を渡そうとしても受け取らないウォーリアさん達は本当にかっこいい。
島に来てくれた大工さん達も、島の皆を怖がらずに楽しそうに家を作ってくれた。
―あの男からの依頼なら大丈夫だと信じてますよ―依頼主ウォーリアさんを信じてと・・。
半年で家は出来た。材料は島の木で、家具やベッド日常品の物は少しずつウォーリアさん達が持ってきてくれた。

さすがにその時の支払いはじいちゃんが出した。島の薬草・キメラの翼・海の底にある真珠は半魚人たちが採ってきて費用にした。
作り終わった後、記念に丸一日どんちゃん騒ぎの宴会を島の皆と関係者一同で開いて、
次の日の朝大工さん達は船長さん達と島を離れた。
ネイル村の平屋を二階建てにしたバンガローのような素敵なおうち。
お土産を沢山買っても大丈夫だ。
帰る度に島の外の話を二人に沢山した。
買い物でオマケをしてくれる人、迷子で困れば助けてくれる人、時折見かける島の子以外のモンスター達の事を話す。・・むろん人は親切な人だけじゃない・・。
時折私の財布を盗ろうと脅かしてくる大人や、キメラの翼を高値で引き取ると騙す人もいた。
でもそれは内緒。

「親切な人達ばかりだね」

そう言ってニコニコとお外の話を聞いてくれているダイ兄にはまだ聞かせたくない。
それはじいちゃんも分かってくれているみたいだ。楽しい話をしている時の、いつものニコニコ顔と少し違うもん。
全く・・ティファは・・しょうがないの～。ダイに人間の怖い面を教えるにはまだ早いかの～。
ウォーリア達のおかげで世界の広さと人の良い面を学んでいる最中のダイには、人の悪しき面を教えて水を差すには忍びない。
もう少し大きくなってからでも大丈夫じゃろう。
かくして私とじいちゃんの間に暗黙の了解が出来た。
この先嫌でも人間の狡さ醜さを知る羽目になる。
でもその頃にはウォーリアさん達を通して人の良さを学んでくれているはずだ。
知るのはそれからの方がいい。

今はそれよりも伸び伸びと育ってほしい。
このデルムリン島の大自然の中、じいちゃんや島の皆、ウォーリアさん達の愛情を全身で感じて元気いっぱいに。
私の方はそこそこうまくいっていると思う。
船を降りた後は式神で―私―を作って買い物やなんかをさせて、本当の私はダッシュで
港町の周辺の森や川、行ける範囲での村々の周りや井戸の中に―破魔の石―を置いてく。
一度はネイル村に行って無茶をした。
その日は式神に夕方乗船してもらい、空飛ぶ靴で船に近づいてこっそりとまた入れ替わるという荒業をして・・船員さん達に見つかりやしないかと心臓バクバクした。
一応習得をした―ジ・アザーズ―で視覚結界はしたけれども怖かった。
・・でも・・そこまでしてもネイル村は不首尾で終わった。
・・だってちょうど村にマトリフさんが居たんだもん‼しょうが無いじゃない!!!
ネイル村にはロカさん家族が住んでいる。
ロカさんが病床で動けないにしても、奥さんのレイラさん、娘のマァムさん、・・また
アバンさんに会ったらとってもまずい‼アウトだ‼
なので慎重に行ったら・・案の定マトリフさんいた・・。
しかも‼遠くの茂みから見ていたのに・・振り返ってバッチリこっち見てきたし!
なんなのあの人!本当に百歳近くなの⁉
見つからないように茂みに伏せてくれてテンパっていたら、
―どうかなさいましたかマトリフ様―・・女の人の微かな声と、
―いや・なんか気配感じて・・気のせい・・俺もボケ・・―しわがれたおじいちゃん声が
風に乗って聞こえてきた。
これ以上は近づけないと判断をして、その日はそこまでにして尻尾

を巻いて逃げ帰った。
今の私じゃ見つかるのがおちだ。
・・なんて諦めませんとも‼
筋トレ、瞑想自主鍛錬の中で、気配消す修行の事を忘れてた・・ならば‼今すぐやろう‼
超ポジティブな思考に君って前向きだね～って、普段暢気な人の神様からそうのたまわれた・・
でもいいもん!!やってできてなんぼだ!!!ファイトだ私！
気配を消す練習と、普段の気配をきちんと出す二種類の修行が必要だ。
いざという時以外、そこらの子供から気配を感じられないのは超怪しい。
なので修行第一段階はダイ兄と島の皆との鬼ごっこ。
野生児のダイ兄と島の皆は気配を読むのがうまい。
見つからないように気配を隠す方を先に習得をして、十中八九出来るようになったら、
見つかるように気配をわざと出す方を身に着けた。
気配の出し入れのコツをつかんだら次は―動いていても完璧に気配を消す方法―の修行を海の中でした。
最初の修行は五日間で習得できたけれども、こっちにはひと月を要した。
近づこうとすれば水の流れの動きや呼吸、気配ですぐにばれてしまった。
（私は石だ岩だ海草だ）
心の中で無生物をイメージして極最小の動きを無呼吸でしていき
一月後にようやく成功できて嬉しかった。
修行の間はネイル村以外に石をばら撒いていたが、ようやく目標の一つに落としに行ける。
早速行こう！

落とし物・・でも使おう。

みんなが寝静まった夜に早速ネイル村にゴー。
「これは紙にあらず、まこと私」
―ポン―身代わり式神用意してお出掛けだ。
「行ってくるからよろしくね。」
「行ってらっしゃいませ、主様。」
自分に見送られるなんて少し不思議気分だけどまあいいや。
夜だから目立たない様に黒マントも式で作って被って、空飛ぶ靴でネイル村は、
正直ゆうと寒くてつらい。
そろそろ初秋で風が冷たい。島に大型鳥獣住んでいてくれれば温かく移動できるのにの。
・・なんて現実逃避している間に着きました。
空飛ぶ靴は散々手こずってものにして、キメラの翼での移動を少し遅くしたくらいの速度で
一時間で着けた便利だ。
移動魔法の着地音もしないので、隠密行動に適してる!・・たん瘤作っても取得した甲斐ありだ。
さて・・村の皆さんの気配は・・寝静まってるみたいだ。
えっと・・井戸は・・あった!チャンスは一度きりと考えとこ・・ティファガンバ!!!
村の家は何処も明かりがついていなくて助かったけど、問題は井戸に石を落としていれたら
音で村の人達が起きてきちゃう。
昼間なら子供のいたずらと考えられても、真夜中なら怪しい。
・・マトリフさんいたら、瞬時に起きて来て周辺をトベルーラして私が見つかりそう!!
万一私が見つからずに逃げ切れたとしても、井戸の中を調べるくらいはしそうだ。
―破魔の石―は本当に―誰―が見ても普通の石にしか見えないよ

うに作られていても、井戸の中の石全部取り換えるくらいはやりかねない。
病床のロカさんと家族を守るために、怪しいと感じたら徹底して排除しようとするだろな
結論！空飛ぶ靴はいてるので井戸の水面まで下りて入れましょう。
・・暗くて狭いところ苦手だ!!・・お化け出てきませんように・・。
小さい身でよかったと思いながら、お化けが出ないことを祈りつつ、

―チャプン―

水面の上に着いた。
―効きますように―苦労した分の思いを込めてそっと下に置くように入れる。
ミッションコンプリートだ。
後は井戸周辺に人がいないか気配を確認をして一気に出て、森の奥まで飛んで行った。
見つからずによかったよ～もう疲れた。早く島に・・―キラン―
ん？何だろう・落とし物発見・・それもこれ獣王の笛だ!!!
・・ってことはこの近くにクロコダインいたりするの⁉・・さっさとずらかろう。
落とし物は懐にばっちりしまってその場を即退散！
ダメだ眠い・・眠気に負けて、島で式を仕舞ってベッドでバタンキューしました。
朝起きてすっきりしたので獣王の笛の使い道を考えて、大型鳥獣さんに来てもらうことにしました。
長距離飛行が出来るならスカイドラゴンでもいいかなと思ったけれど・・目立ちすぎるか
確か・・来て欲しいものをイメージして吹くんだっけかな？
島の絶壁で海に向かって吹いてみた。
島には音がいかない様に防音結界を張って―ジ・アザーズ―の練習も兼ねている。
来るかな～・・あれ・・バサー・バサーんんん？

「クワァー‼」
あれって・・やったー！なんと一発でガルーダきたー!!!
おっと、浮かれていないで実力見せないと仲間になってくんないんだった。
でもボコすのは嫌!!なので、―ドン！―「乗せてくださいっ！」
背中に飛び乗って、粘って言葉交渉開始!!
「グゥグー！―図々しい!!―」
「図々しいしいのは百も承知です‼」
「ギャー⁉―我の言葉が⁉―」
「分かります！なのでお友達関係結びましょう!!」
「グワー!!―人ごときが我に!!」
「お願いします。美味しいもの差し上げますから」
「ギャーッ!!―ふざけるな―」
「頼みます!!!」
文句を言われても何のその！結界でその場を移動できないようにして一時間近く背中で
低姿勢のお願いをして粘り勝ちしました。
「―分かった!!乗せてやる!!だからいい加減降りよ!!!―」
やった～。渋々ながらでも了承してくれた。
ゴメちゃん達みたいに友達になってほしい。大切にしよう。
でも条件出された。獣王笛で・・それもさっきと同じ音でないと来てくれないきびしい条件付きだ。・・よっぽど私を乗せたくないのか。
でも大丈夫！音出した時の息の量は覚えてるから何度でも同じ音は出せるって、
・・このガルーダ！背中に赤い羽根が一筋模様で生えてる!!
このガルーダ神獣クラスだ！
ブラスじいちゃんが教えてくれた。
モンスターの中では当然個体差があり、大型や、上級モンスターになると―神獣―クラスのモンスターが必ず一匹は存在するって。
同個体と同じ能力に加えて特殊能力が備わってる・・滅多に見られない特別なモンスター

・・普通のガルーダよりも気位が高い訳だ。
・・乗せてくれるって言ってくれたの奇跡に近いかも。
でもこれで・・もっと遠くに出かけられる～。！よろしくねガルーダ。

会ったらまずいでしょ!!

ガルーダのおかげで私の移動手段はぐんとレベルアップが出来て助かっている。

背中の羽毛は温かいし、スピードがなんと人のルーラよりも速い!!

さすが神獣様。

「ガルーダ、美味しいお魚採れたよ～」

「ブラッシングするね～。」

「木の実食べよう。」

島の外で出会って友達になって新しい家族出来ましたと、じいちゃんとダイ兄に紹介をして島に住んでもらって早二月。

ガルーダの事大好きなので時間の空いてる時はいつもガルーダの所に行っている。

最初はつんけんしてたけど、近頃は心なしか笑ってくれてる気がする。

本当のお友達になりたいな～。―今―みたいな浜辺パーティしている時も一緒にいたい。

ウォーリアさん達が島に大量の鍋食材を持ってきてくれて島の皆と鍋物囲んでます。

近頃は食事の用意は全部私がしているのでウォーリアさん達にも腕を振るってみました。

「ティファちゃん俺の息子の嫁になってくれよ～。毎日ティファちゃんの料理食べたい。」

「アホウ。そしたらティファちゃんお前のカミさんになっちまうぜ～。」

「ダイ君も頼もしくなって・・俺の娘どうよ?」

「「でもふたりともほんとうにいいこにそだったよな～。」」

私達が褒められてじいちゃん紅くなって照れてる。

・・ダイ兄は確かに食い気だ・・。「ティファ～早くしないと俺が全部食べちゃうよ～。」

・・・レオナ姫との出会いはまだまだ先だしいっか・・。元気でよ

ろしい!!
こんなにのんびりとした平和な日常。今のところは悪い噂の影もない。
・・本当に大魔王って怖いわ・・あれだけの大軍団きっちり統率しきって、ぼろ一つ出さないなんて!!魔界以外にも地上で拠点づくりに勤しんでいるはずなのに!全く分っかんないって反則だ!!・・なんかの病気でぽっくり逝ってくんないかな?・・無理よね。
無いものねだりしてもしょうがなし、こちらにも対策あり。
国が滅んじゃうロモス・パプニカ・リンガイア・カールの王城に―破魔の石―ばら撒いて、
大戦始まる半年前から―大戦の予兆―を夢で知らせて備えさせる。
仕掛けは簡単。―破魔の石―は聖結界の機能以外に、特定の場所の人達に伝えたい事を
伝えられる機能がある。
―夢―で伝えたり、機能が増幅するともっとすごい伝え方が出来るけれども、―今回―は
夢の方を実験して成功して浜鍋パーティーが出来た。
ウォーリアさん達の船の前後に―破魔の石―を隠して、島での楽しい鍋パーティーを
夢の中に送って大成功。
一応鍋パーティーの開催理由を聞いて石の成果か偶然かを確かめたら、
―楽しい夢をなぜか全員で見たので実行しちまうことにした―とのウォーリアさんの
お言葉で実験の成果が分かった。
これをもっと大規模な人数に掛けないといけないのでもっと大量の石を各国の城にばら撒かないといけない・・気配の修行終えててよかった。城にこっそり忍び込んで細工しよ。
偽勇者とレオナ姫暗殺未遂事件の直後辺りから始める。
パプニカはたくさんのゾンビと骸骨と・・不死身の騎士の怖い夢。
ロモスは大型鳥獣のモンスター―の群れ。

リンガイアは・・強大な竜の群れの大軍勢を・・。
カールは大戦始まってからリンガイアと同じ夢を。
・・ロモスとパプニカは助ける情報を渡してあげられる。
ロモスは武器の強化を、パプニカは不死身の軍団が嫌がる聖水に油混ぜて火攻めにすれば防げるし、ヒュンケルの鎧は魔法は効かなくても衝撃が有効なので―強力爆弾―を
バダックさんに開発してもらって外から大量攻撃して防いでもらう。
一対一で勝てないなら数で押し切ってもらう作戦。
どちらの国も大事件の後、毎夜見てもらう予定なので―何かあるのではないか―
と考えて行動を起こす確率は高い。
なにせハドラー大戦で辛酸舐め切っていた人たちがまだ現国王で居てくれているのが
この策の強みだ。
―万が一―を恐れて未だにモンスターや他種族に対する風当たりが強いので、毎夜見るものを馬鹿馬鹿しいと無視はしないはず・・したら滅ぶだけ・・原作通りに・・。
リンガイアとカールは逃げてもらう方向だ。
・・何せ相手が父さんよ!!!来たら・・ううん!来る前に逃げといて―!!
命大事にだ、父さんに勝てる人間いないから!!
っと・・こっほん・・策での要は―この情報が城外に漏れたら夢の敵はすぐ襲ってくる―
と・・要は情報操作だ。
最初はぼやけた夢から少しずつ鮮明にして―敵―認識させたあたりからそのメッセージも
挿入する。
敵に絶対気づかれない様に、細心の策を施しに行ってみよう。
鍋パーティーの数日後、ロモスには五日間でばら撒き終えてた。
「じいちゃん、明日ガルーダでパプニカいってみるね。昼に出て夕方

帰ってくるね。」
ガルーダならではの可能な移動だ。あっという間に行き来できる。
悪目立ちしてデルムリン島から頻繁にガルーダが長距離移動しているのを悪魔の目玉に映ってしまわない様に、島の上空から視覚結界を張るのは怠っていない。
移動にも苦労はつきものだけど、見つかるよりはましだ。
それに「ガルーダにあまり無茶させるでないぞティファ。」
大型鳥獣と行動を共にしているとの安心感で、じいちゃんの許可はすぐ下りた。
すぐに帰ってくるにしても、行き先を言わないのはじいちゃんに失礼だから正直に言う事にしている。
すぐ許可してくれてよかった。
明日から細工しに行ける。・・ただ・・オーザムは無理だ、細工できない。
死の大地が近すぎて、細工の波動が万が一にも大魔王に気取られでもしたら・・その為オーザムは・・でもやるしかない!!地上界・天界全滅絶対回避だ。

パプニカの最西端から上陸をして、一キロの間隔で石をばら撒いて歩く。
湖、川を見つければそこにも落として歩いて「―お前は何をしている・・―」
後ろを付いてきてくれているガルーダに呆れられた。
わざわざ長距離飛んできたと思えばちまちま歩いて何をしているのだと。
「今は内緒、そのうち教えるね・・あの果物美味しそう～。」
「―はあ～・・・―」
そんなちまちま道中をして十日目でパプニカの首都に着きました。
風光明媚でスペインとかに似ている・・行ったことないけど。
観光そこそこで城に入る荷車に紛れて入って、視覚結界で見つからない様にして、

各居室の天井裏、地下室まで石を置いてきて・・また荷車に紛れて・半日使った。
くたくただけれどもやる価値はある。
国が原作通りの事になったら復興が大変で・・人の心が荒れて、モンスター達に八つ当たりされるのは嫌だ。うまくいきますように。
パプニカ終わったあとは二・三日休んでからベンガーナとテランに行ってみることにした。
最南端の―アルゴ岬―に降りて泉の水手に入れて、薬草と混ぜる実験も始めたい。
洞窟で手に入れた上級薬草本に書かれているレシピを元に錬金もどきをしてみる。
そこから北上をしてデパートに入って薬の調合器具を買ってテランに入った。
パプニカで要領覚えたので仕事がはかどり六日で来れた。
ベンガーナは商人の町で・・なんか人がぎすぎすしているような気がする。
・・でも・・テランは懐かしい、覚えてる。
私が父さんに、ダイ兄は母さんに抱っこされて散歩をしてくれた自然の恵み深き地。
父さんとダイ兄と私の―母―聖母竜マザードラゴンを信仰してくれている国。
いいところだ。野生の薬草の宝庫だ。
ホイミ草・ムーラン草（眠り薬）・化膿止めのフレイ実を摘んだ後は少し湖の端で休憩。
・・この地で・・父さんとダイ兄が・・どうしたものかと考え事してたら・・
「あの～・・・」小さい女の子が声をかけてきた。
さっきからいるのは分かっていたけど、放っておいたら向こうから声をかけてきたか。
「どうしたの？」にっこり笑って答えてあげよう。私より二つ下、五歳くらいかな？

「お姉ちゃん薬草摘んでたけど、薬草に詳しいの？」
「まあ、そこそこ。」一通りは。
「誰か病気なの？」医者いないのかな？
「詳しいならお願い!!妹を助けてください!!!」・・それってマジ医者もんでしょ！
切羽詰まったニーナと名乗った女の子の言う事には、昨年の春に父親が竜の卵を保護したところから始まった。
この国では竜を攻撃せずに敬い、襲われても撃退をして殺さないらしい。
山に仕事に行って、偶々見つけた洞穴の奥に、竜の死骸と一つの卵が見つかった。
竜の死骸はキバと鱗、角・内臓は全てとられ、美味しくない肉だけが残され、
卵も放っておかれていた酷い有様だったのを気の毒に思い保護したようだ。
卵はニーナが温めて孵し、生まれたのは火竜の子供で初めて見たをニーナを親だと思い
育ってきたが「ミーナがここ十日間何も食べないの・・」大好きな妹で・・大切な家族が苦しんでいる。
人の医者はいても・・モンスターに詳し者は・・なら！薬草に詳しい人ならと・・。
「・・分かった、ミーナちゃん診てみるね。」
ニーナちゃんの熱意にほだされついて行ってみたけれど、・・これは無理だ・・助からない。
じいちゃんが教えてくれた中に竜の事があった。
火を扱う竜の心臓の少し横、肺の近くに第二の心臓ともいえる―火袋―という器官がある
そこが傷つくとたちまち弱ると・・この仔の火袋は潰れてしまっている。もって五日か。
・・それも激痛を伴って・・・。
私にできることはひとつ。

摘んでいたムーラン草にしびれ薬のジギタリスを八対二で混ぜて処方した。
弱ったミーナなら、この薬で眠るように逝けるはずだ。
診断結果を正直にニーナとその家族に伝えて、薬の効能を伝えると・・ニーナが泣いて怒って追い出された。
・・妹を助けるではなく死なせる薬を出されたら当たり前のことだ。
幸い両親は分かってくれて薬の事を引き受けてくれて飲ませると言ってくれた。
辛い事を長引かせないと言ってくれて・・。
その場を後にしても嫌な気持ちは無くなってくれない・・昼寝しよう。
手近な倒木見っけ。あれ枕にしよう。
・・どれくらい寝てたか・・
「・もう・・食べず・・何・・だいじょ・・そいつ・」
「そいつとかいうな!・・こいつはな・・」
「分かった、興奮・・」
「うるせえ!」
ズシーン!!
「・・何⁉何の騒ぎ!!」
声と物音に驚いて跳ね起きたら・・目の前にいるのって鳥人ガルダンディーに海獣人ボラホーンに空竜のルード・・超竜軍団!!!!

藪をつついて父が出た!!!

―何⁉・・何の音!!!!―

ティファが物音に驚いたように、物音をたてた二人も驚いた。

誰もいないと思っていたが・・倒木の影から人の声が!!

あ～・・

「誰だ!!」・・誰だってこっちがききたい事だ。

「なんだ人間のガキかよ。」・・失礼な奴・・人の昼寝の邪魔した奴が何たる言い草・・。

ガルダンディーの奴はたいて全力で走って逃げ切ろうかな・・って・・あの竜・・。

「なんだこのガキぽかんと間抜けずらして。」・・失礼な!あんたの竜見てんのよ!!

「怖すぎて泣くのも忘れたか。」・・むしろ貴方の毛皮でモフモフしたいですボラホーン。

原作通りの二人だけど・・ルードの方は弱ってる。

パット見鱗も角も目も正常で目立った病気の兆候はないし・・そういえば食べて何日って。

「そこの鳥のお兄さん。」

名前知っているけど言ったら絶対何で知ってるでバトりそうなのでこう呼ぼう。

「この竜いつから食べてないの?最後に何を食べたのかわかる?」

「な・なんだ一体このガキ!!!舐めた口利いてっと・・」

・・こいつ何処のヤンキーよ。

「この仔助けたいんでしょう?一見したところ病気の兆候ないし、火袋も正常だし助けられそうなんだから教えてよ。」

・・ミーナとは大違いだ・・この仔助けたい。

ティファのあまりな怖れ知らずの物言いに、ガルダンディーは絶句をする。

普通人の子が自分たち前にして、泣かないどころか・・ルードの事を聞いてくる!!

人間憎いとはいえ自分には見境が有るつもりだ。
主の言う―大戦―とやらが始まるまでは極力人とは関わらずに・・
こんなちっこいガキ位見逃してやろうと思っていたら・・鳥のお兄さんてなんじゃそりゃ⁉
見逃してやろうと思っていたら・・鳥のお兄さんてなんじゃそりゃ⁉
「・・三日だ・・」
って～!!ボラホーンの奴、何マジで答えてやがる!!
自分と同じくらいの人間嫌いの奴が!!
「・・三日・・」
「そうだ。確か最後に魚を食べてとか・・こいつが言っていた。」
しかも詳しいことを教えてる・どう言うつもりだ・・。
ボラホーンとしても人に対しての考え方はガルダンディーとほぼ変わらないが、
この妙な子は本気でルードを心配している気配がある。
「娘よ、お前はどうにか出来るのか?」
出来るのならばガルダンディーの為にも治してやってほしいと、同じ仲間を気遣っての事。
出来なければ立ち去れせればいいだけの事だ。こんな子供一人、どうこうする気はない。
ガルダンディーも自分も、同族を人間に狩られて滅ぼされた恨みはあるが、―大戦時―に晴らすつもりだ。
晴らすつもりだ。
さて・・この娘はどう出るか・・。
「・・最後に食べたのは魚・・竜君ちょっと失礼。
・・お腹は張ってない。ゴロゴロ音も無し・・とすると・・
ボラホーン情報で分かった事を頼りにルードのお腹の音を聞いてみても異常なし。
消化器官ではない、とすると・・。
「ねえ君名前は?教えてもらっていいかな?」
「―・・ルード―・・」

「そしたらルード君、のどのあたり痛くない？」
「―いたいよ・・チクチクする・・―」
「そっか・・あの鳥のお兄さんにはその事は？」
「―いったけど何もないって・・―」
「あっちゃ～相当奥か・・ルード君私がのどの奥に入って調べるよ。原因見つけたら
　取ってあげるからね。」
「―いたい？―」
　・・私が入って調べるから違和感の不快感は半端ないだろうけど・・
「食べられないと君死んじゃうよ？いいの？」
「―やだ!!・・やる・・。」
　よし良い子だ。
「服脱いでイガイガなくすね。」
　さて治療開始だ。
　服脱いでパンツ一丁になって腹ばいでルード君の口の中・・小さい身で助かった。
　ア・・この仔・・歯が弱い仔だ・・大きくなるまで苦労しそう・・ってそれは後々。
　あった!!原因見っけ。
（何だこのガキ⁉本当に人の子か!!ルードの奴名前を教えちまってすきかってて・・
　ちょっと待て!!このガキルードと普通に話してなかったか！⁉）
（・・ルードは弱っていてもガルダンディー以外は決して懐かないはず・・弱ってたとしてもここまでの事はさせないはずが・・）
　ティファとルードの事で唖然茫然している二人を尻目に、ティファはさっさと治療を進めていく。
「ルード君原因の―骨―抜くね。痛いのに驚いて私食べないでね。」
「―うん分かった―」
　さてと―プス・プスー・・これで・・
「―へ・・へ・・フェクション！・・すっきり―」
　くしゃみの前に間一髪脱出成功!!ルード君目に見えて顔色良く

なって元気になったな。
将来の敵とはいえ・・助けたくなちゃった・・ま、何とかなるか。
・・外の二人は固まってる・・薬造るから放っておこう。虫歯の処方箋も出すか。
―ゴリゴリゴリ―
「えっとホイミ草に回復の泉二滴、口のデリケート部分だから化膿止めのフレイも・・」
「おい・・」
・・このガキ俺たち怖がるどころかなにしてんだ？
「喉だし・・強すぎないように水で薄めて・・。」
「おい!!」
「さっきからおいおいって何ですか？鳥のお兄さんないてるの？」
「こっの・・ガッキー!!いい加減舐めた口利いてるとぶち殺すぞ!!!!」
「止せガルダンディー。」
「何で止んだよ!!ボラホーン!!!!」
「よく見ろ。この娘は薬を作っているんだぞ。・・ルードの薬か娘？」
「そうです。化膿しない様にもう一度ルード君の中に入って薬塗ります・・出来た。ルード君失礼。」
薬作ってうるさいヤンキー鳥は無視して、紳士ボラホーンにはきちんと返事してあげて薬塗って治療完了。
薬塗って治療完了。
「もう大丈夫だよ。」
「―うん・・ありがと・・―」
「どういたしまして。そこの鳥のお兄さん。」
「・・んだよ・・」
ガルダンディーとしてはこの訳の分からない出来事から逃げたくなってきた。
幼竜のころ、家族を人間に殺されたルードを保護してともに育ち、拾ってくれた主にも懐かなかったルードが・・人間のガキに名前を教え・・お礼を言いやがった・・・・。
あり得ない事に頭を痛める。話聞くだけ聞いてさっさと追い払い

たい。何言うつもりだ。
「この瓶の薬は飲んでも患部に浸み込んで効くから三日分出すから寝る前に一本ずつ飲ませてあげてね。それからこの仔は竜の中では珍しく歯の弱い仔みたいだから、歯磨き粉の処方箋書いておいたから作って歯磨きしてね。」

野生のモンスターにも個体差はあり弱い仔強い子がいる。
稀に歯の弱い仔がいる・・野生の中では致命的でも、幸いルード君にはガルダンディーがいる。
「大きくなれば歯も丈夫になるからその日までしてあげてね。」
（・・この・・ガキ・・本当になんなんだ・・）
もはや薄気味悪くなってきた。
人間の子供に見えなくなってきたところに爆弾発言が落ちてきた。
「それとお代ください。方法はお任せします。」
その一言にガルダンディーがとうとうぶちきれた。
「てんめぇ!!!このガキ図に乗るな!!!」
子供一人見逃してやろうと思ったがやめだ!!!
「てめえなんぞにくれてやるもんは無え!!!ぶっ殺す!!!」
「止めろガルダンディー!!娘よ、悪い事は言わん。早々に立ち去れ。」
「なんでまた止んだよボラホーン!!人間のガキ一匹位!!!」
「ガルダンディー、いかにこの娘が人間でもルードの命の恩人だ。一度は見逃してやれ。
さあ、早く行け。」
「けどよ!!」
・・全くこのくそ生意気ヤンキー鳥は・・ガキガキうっさい!!
殺気出されても洞窟のボス連中に比べればそよ風程度だ。
ボラホーンは紳士的だ・・とても将来ポップを人質に・・なんてしそうにない。
この世界のボラホーンはクロコダインに似ているのかな?
でも・・この人も人間嫌いか・・父さんの配下しているんだから・・。
いい人が敵だと思うとやり辛いけどしょうがない・・戦場であった

ら手加減なしだ。
・・とりあえず服を着よう。いい加減寒い。
それにしてもだ・・。
「あの～。」
「大体おまえはすぐに頭に血が上って・・。」
「・・あの～・・」
「なんだと！お前だって・・」
「あのー!!」
「なんだ!!!」・・やっと気が付いてくれた。
「歯の処方箋の事で聞きたい事ありませんか、鳥のお兄さん。」
「・・お前・・ルードの歯よりも自分の命の心配したらどうだ。」
「・・歯も大事だよ？」せっかく上げた処方箋ぐちゃぐちゃにして！もう!!
「だからそういう事を言ってんじゃねんだよガキ!!!」
・・ああ・・もう!!ガキにガキ呼ばわりされたくない!!
拳骨で伸して言う事聞か・・森の方から竜の足音・・二頭・・一頭はゆっくり走って・・
しかも人の気配もする・・まさか!!
―ガサリ!!―
「お前達!!やっと見つけたぞ・・なんだその人間の小娘は？」
・・やっぱり・・この二人の関係者で竜に乗る人といえば・・ラーハルト!!
まだ原作よりも若いけどかっこいいな。騎竜姿も様になってる。
(何だこの人間の小娘は・・竜と俺を見ても怖れもせず・・この二人となんでいる⁉)
「ガルダンディー、ボラホーン!!これは一体どういうことだ！」
ま・・説明ほしいよね。妙な状況の自覚はあるし・・でも・・―ガサリ―
残念・・タイムアウト・・二人の関係者で・・この三人の主。
超竜軍団の長・・父さんも来ちゃった!!!!!

変わった人の子と子守唄

「ガルダンディー、ボラホーン、何をしていた。ラーハルトとともに探したぞ。

・・それに何だその人間の子供は！今は目立つなと言っておいたはずだぞ。」

・・どうやら父さん・・私が二人に誘拐されてきた子供に映ったらしい。

全然違うけれどもこのままバレない様にやり過ごしちゃえ。父さん来たからにはこの三人も立ち去るはずだ。ぽつんと無視してほしい。

それにしても六・七年ぶりの父さんの声は・・カッコいい!!超渋い声!!!

騎竜姿もラーハルトなんて目じゃない！ソアラ母さんが一目惚れするわけだ。

（・・何なのだこの小娘は・・）

バランが来たことでティファはボラホーンの後ろに隠れてバランからは顔がはっきりとは

見えないが、竜から降りたラーハルトからはバッチリと見えている。

（俺の時もだが・・バラン様のお顔をにやついて見ているこいつは何なのだ・・。）

気味の悪い・・さっさとボラホーンに仔細を聞いてバラン様に報告をして終わらせよう。

小娘一人、置き去りにしてそれまでだ。

「おい!!、ボラホーン!!」「・・ああ・・実はな・・」

・・ラーハルトとボラホーンのやり取り聞いてたら眠くなってきた・・父さんこっちに興味なさそう。この人達行ったら「ふあ～～ぁ～・・」また寝よう・・。眠い・・。

伸びて欠伸してたら・・「・・おい、ガキ。」・・ヤンキー鳥が話しかけてきた。

「・・何鳥のお兄さん。」うるさいな。
「お前どういう神経してんだ？
お前今死んじまうかもしれねんだぞ。命いらんのか⁉」・・はい～？
・・こっのヤンキー鳥!!もうぶちぎった!!!!!!!!もう限界!!!!!!!!
「ふざっけるなー!!!!!!!!」
洞窟修行以外で初に闘気が溢れるのを感じる・・・腹の底から本気で怒っぞ!!!
「こっちは昼寝の邪魔されて！眠いのにそこのルード君が気になったから文句言わずに
診察して治療して!!処方箋書いてもこっちが勝手に押し掛け医師やったからお礼の方法任せるって言ったんだぞ!!!!
子竜のルード君ですらきちんとお礼言えたってのに!!
誠意の欠片も見せずに命いらんのかだ⁉
たわ言いうのもいい加減にしろ!!こんの年だけくったバカガキ鳥が!!!!!!
「ぜい・はあ・・。あ～言いたい事言ったらすっきりしたけど・・周りはしんとしちゃった。
（・・なんだこのちびガキ・・どっからこんな気迫が・・）
（・・何という闘気だ・・これは・・）
（先ほどまでの小娘とまるで違う・・まるで・・）
（（バラン様を怒らせてしまった時のようだ・・・））
・・あ～・・やりすぎた。三人とも青くなってる・・父さんもめっちゃこっち見てる・・
ティファだって気が付かれたらどうしよう⁉
（こんな小さな娘のどこからこれほどの闘気が・・。）
自分たちを怖れるどころかガルダンディーの物言いに腹を立てて一喝をする・・。
自分のいる魔王軍の中でもそんな者とは出会ったことが無い。
この娘は・・「変わった人間の子だな。」ボラホーンの報告も含めるとそう感じる。
・・変わった人間の子だなって・・私に対する第一声がそれ⁉超

ショックです父さん‼
ソアラ母さんの激似の私見て―・・もしや!――・・とかになったらなったで超困るけど、
だからってその評価もどうなの⁉グレテやりたい!!そんで将来困らせてやったら・・じいちゃんが泣くから止そう。
しょうがないか・・頭冷たら私も相当口が悪すぎた。
ソアラ母さんは間違ってもこんなこと言わんだろうし印象悪しか。
はあ～気を取り直して持っぺんきちんと話そう。何で私が怒ったのかを。
「あのさ、鳥のお兄さん。」
「・・んだよ・・」おっ少しは大人しくなってくれた。
「さっき私が言ったお礼って、別にお金でもものでなくても・・・って～ルード君!!」
何かルード君の気配が沈んだと思ってそっち見たら・・ボロボロ泣いてるー!!
「―・・ごめんなさい・・ぼく・・せい・・ケンカ・・―」
しまった!!ルード君の名前出したから自分のせいで喧嘩してるように見えたの⁉
ガルダンディーのせいなのに!!
「ルード君!!君のせいじゃないよ!大丈夫だから泣き止んで!!」
「―ご・・めん・なさい・・・―」
「ああもう・違うんだから!」泣き止んでくんない・こうなったら・。
(本当に変わった人間の子だ・しかもルードの言っている事が分かるのか?
マジックリングから・・あれはシターン・・この旋律は・・まさか!!)
ルード君を泣き止ますために、いつもダイ兄に使っている手を使うことにした。
シターンという和琴とハープを組み合わせたような竪琴を取り出し、
ルード君の前に陣取って・・。

「お休みね～・夢を見ましょう・また会う日まで～。
風が遠く～梢揺らし・おやす～みの歌をうたう。
星が～光～・月は笑う。まるで～見守るように～。
お休みね～・夢を見ましょう。また明日の朝に～・また会う日まで～」
ダイ兄も時々悪い夢見て泣いて・・泣き止ます時の歌。
・・ルード君は・・効いてくれて泣き止んでくれた！
「・・い」よかった～。「おいてっめえ!!何しやがった⁉」って、痛い!!
ガルダンディーに襟首掴まれた!!
「痛い!!何ってルード君泣き止ますために歌っただけでしょう！・・歌嫌いだった？」
「ふざけんなこのガキ!!あれ見ろ!!!!」・・あれって父さんの・・ほ・・う・・
「うわ!!」・・思わず叫んじゃったけど・・どうしよう!!今度は・・父さんが!!
「どうしたんですか!!私の歌泣くほど酷かったかお嫌でしたか⁉」
（・・この娘は・・私を見て何を言っているのだ？誰が泣いて・・む・・ガルダンディー・ボラホーン、それに珍しくラーハルトもポカンとした顔で私を見てなんだと・・泣いているのは私か⁉）
バランは自分で泣いているのにも気が付かない程の衝撃を心に受けたのだ。
変わった人間の子が歌ったのは・・かつて最愛の妻が子供たちと自分によく歌ってくれた
―アルキードの子守歌―だったのだ。
（ソアラよ・・私はこの歌を・・久方ぶりに聞いたぞ・・。）
慌てて涙を拭い、心の中に住まう亡き妻に話しかけつつ目の前の人の子を見る。
先ほど怒っていたのに、自分が泣いたのを見てとてもオロオロとしている。
滑稽で気の毒で・・なぜか可笑しみが湧くのを感じる。

「娘・・その歌何処で覚えた。」（なんとも心に響く・・気持ちの良い歌声だった・・）

それが私の生きる道

「・・この歌って・・」しまった!!これってしょっちゅう母さんが歌ってくれてた歌だった・・当然父さん歌の出所知ってる・・アルキードの子守歌だって・・。

でも・・「この歌ってベンガーナやテランで結構子守の人やお母さんたちが歌ってるよ?」

おそらくアルキードの女性が他国に嫁いで自然とその土地に運ばれて根付いたものの一つ。そう考えると、アルキードは本当の意味で滅んだわけでないのかもしれない。

風習や考え方、嫁いで生き残った人々の中にまだ残っているのかな〜。

・・とにかく「自然に覚えたんだよ。」これでいこう。

「・・そうか・・自然に・・」そうです・・ん・・あれ?

「「バラン様・・・」」父さんが笑ってる・・お日様みたいに・・温かい笑顔だ。

(嘘だろ⁉)(バラン様が・・)(それもたかだか・・)

子供とは言え人間相手に・・

・・私もびっくりだけど・・三人も驚いてる・・無理ないか。

大戦始まったら人間全滅目論んでる父さんが—人間の子供—相手に微笑んだらそりゃ驚く。

・・雪か槍降んないといいけど・・。

「私そろそろ帰るね。」名残惜しいけど・・。

「娘よ。」・・行こうとしたら父さんに止められた。

「まだ何かある?」こっちはもう無いのに。

「さきほどそなたはあの鳥の男に何を言おうとした。」ああ、あれか。

「お礼の方法はお金や物じゃなくても、感謝の心を相手に伝えれば良いんだよって言おうとしたの。

普通大切な人を助けてもらったら相手がどんな人でもありがとうってお礼を言うでしょ?

その心が無かったから怒ったけど・・私も口が悪すぎてご免なさい、

鳥のお兄さん。」
素直な娘だ。悪いと思えば怒った相手にもきちんと謝罪をする。
・・これはガルダンディーの完敗だな。心の度量はこの娘が上・・
いっそ清々しい程に。
「クククッ・」これ程笑ったのは久し振りだ。この娘は何とも面白い。
まるでビックリ箱のように次から次へと予想もしないものを見せてくれて、
何故か・・とても気になる子だ。
さて・・ガルダンディーはどうするかも見ものか・・怒るか・・別の事をするか・・。
ティファの言った事に対してガルダンディーは本気で悩み始める。
(・・人間のガキが・・でも・・ルード助けてくれたのは事実だ!どうしろってんだ!!お礼なんて・・言った事ねえ・・)
大嫌いな人間相手だが!高々ガキ相手に説教されっぱなしなのは・・もっと癪に障る!!
「おいガキ!!!」・・なんかガルダンディーの形相が鬼化してる・・
「あのよ・・」「・・はい・・」
「あのな!」「はい・・」なんなのよ!言いたい事はすっぱと言って!!
「・・・・あり・・がとな・・」うっわ・・すんごい小さい声・・。
でも顔真っ赤だし、ガルダンディーの中ではすんごい頑張って言ってくれた。
―殺したいほど嫌いな人間の子供―相手に・・ルード君の為に・・なら・・。
「はい!どういたしまして!!」このお礼の言葉で十分だ!
(なんて顔して笑ってんだこのガキ。さっきは俺の事ボコろうって顔してやがったのに。一体何なんだよこいつは。にんげんてのはもっと・・もっと・・)
あ、ガルダンディー今度は落ち込んでる。でもいいやもう帰ろう。
ティファは胸元から獣王の笛を取り出してガルーダを呼び寄せて帰ろうとしたが・・。
「娘よ!!」またもやバランに引き留められた。

(娘娘って・・今連呼されても嬉しくない!何なのよ父さんは!!)
「おひげのおじさん今度は何?私帰りたいってさっきから言ってるよ!」
何度も呼び止められてさしものティファも鬱陶しくなり少し邪険にする。
「・・おひげの・・」(この私をおひげのおじさん呼ばわりとは・・私を知らねば無理もない・・む!ガルダンディーとボラホーンは笑いをこらえて・・ラーハルトは・・)
ない・・む!ガルダンディーとボラホーンは笑いをこらえて・・ラーハルトは・・)
「小娘!!たかが人間風情がこの方に向かってなんと無礼な!!」
「だって誰だか知らないもん!!」
ラーハルトは子供と本気で口喧嘩をしそうになり、バランは子供相手にと少々ラーハルトに呆れるが、子供に聞かねばならない事がある。
「娘よ、その笛をどこで手に入れた。」あれは自分の同僚獣王クロコダインの物だ。
(・・しまった・・またやっちゃった・・)
ティファとしては歌と同じで笛もいつも使っているのでバランが笛の事を知っているかもしれないという用心を全くしておらず・・・つまるところ油断をしていたのだ。
(そうだ・・父さんとクロコダインて同僚だった・・獣王の笛知ってもおかしくない)
「・・私あちこち旅回りしてて、ロモスの迷いの森で薬草採りしてる時に見つけたの。」
嘘言ってもバレそうなのでティファは少しだけ本当のことを白状する。
「試しに吹いたら大きな鳥さんが来て、以来乗せてくれるけどこの笛おじさんの?」
(知らない振りするのって疲れる・・。)
「私のではないが、その笛を知り合いがずっと探している。」

「・・そっか・・それじゃあ返さないといけないね。おじさんが返してくれる？」
「ああ、必ず返そう」
バランは竜から降りて、手ずから笛を受けとり約束をする。
（本当に良き子だ）一瞬でも、人への憎しみを忘れさせる子の顔を見ようと。
だがこの顔は何処か暗い顔をしている。「どうした娘。」何を落ち込んで・・。
「あのね・・乗せてくれる鳥さんと約束したの。
その笛を吹かないと乗せてくれないってもう鳥さんに乗れないって思うと、・・残念だ」
「そなたその鳥の言っていることが分かるのか？」「うん、だから約束したんだよ。」
ガルダンディーのルードの事といい・・その鳥はおそらく大型モンスターだろうが・・
何故モンスターの言葉が分かるのか不思議な子だ・・しかし悪い子ではない。
現にがっかりとしても笛をきちんと渡してくれている。
人間の悪しき心に染まっていない・・人間には勿体ない子だ。
―ギャーッ―バサリ
あ～父さんと話し込んでたらガルーダ来てくれた。「こっちこっちい！」
手をぶんぶん振り回して居場所を教える。・・今日で最後か。
「来てくれてありがとうガルーダ。実はね・・」
笛の持ち主の事を全部話して、今日だけ乗せてもらうことを頼んでみた。
駄目なら空飛ぶ靴で帰ればいいかなと考えてたら「―構わんー」乗せてくれるって・・
「―この先もずっと我に乗ってろ。笛が無くてももはや構わん―」しかもずっとて!!
「やったー！ありがとうガルーダ!!大好き!!」もうすりすりしちゃう。

「―・・ふん・・・―」赤くなって照れてる・・一生よろしくだ。
誠意伝わって、本当のお友達になれてとても嬉しい。
「おいガキ!!」「ふあ・・・」喜んでたら・・ガルダンディーが水差してきた。
「何鳥のお兄さん。」
「手前その鳥何だか知ってて乗ってんのかよあ⁉」「・・ガルーダ・・だよね」
「ああそうだ!だがな・・そんじょそこらのとは訳がちげえ・・背中に紅い羽根・・。
そいつは神獣だぞ!!分かってんのか!」
そうか、鳥人のガルダンディーにとっては鳥のモンスターとはいえ、神獣クラスになると敬う対象なのか。
「んと・・来てくれて・・二時間近く背中にしがみついて頼んだら乗ってもいいって言ってくれたの。」
「はー⁉ばかいってんじゃねえ!!」
(このガキ本当に何なんだ⁉神獣クラスガルーダにとっちゃ人間なんて餌かそれ以下のはずが・・何でのれるんだよ!!おかしいだろ!!)
ティファの答えにガルダンディーは納得がいかずに心の中で突っ込む。
滅茶苦茶なティファを見ていると、モンスターと話せることなぞ些事に思えるほどだ。
普通の人間の子供が二時間も大型鳥獣モンスターの背にしがみつくってない!!!
「おい小娘。」
普段仲間以外に話をしないラーハルトも気になってティファに話しかける。
「お前実は半魔か?」人の子らしくないティファに問いただす。
半魔は魔族の容姿に赤い人間の血が流れているが・・この娘は・・もしかしたら魔法かアイテムで容姿を誤魔化しているのかもしれないと・・魔族ならば容姿が変わっても気配で分かるがこの娘からは人の気配しかしないので半魔かと・・自分と同じかと・・。

アイテムで容姿を誤魔化しているのかもしれないと・・魔族ならば容姿が変わっても気配で分かるがこの娘からは人の気配しかしないので半魔かと・・自分と同じかと・・。
(お・・やっぱそう思うよな・・このガキぜってえ人間じゃねえだろ。)
ティファ以外はラーハルトの言う事に納得したが・・ティファは心の中でショックを受けた。
・・まさかそんな目で見られるとは思わずに・・しかし返答は・・。
「分かんない。私の両親誰だか知らないから。気が付いた時にはもう二人共いなかった」
自分は何者だか知らないときちんと返す。「そうか・・。」
今の時代では珍しくも無いと受け取ったラーハルトに対しティファはさらに答えた。
「でも、私が何者でも別にいいから気にしたことない。」
「・・何だと・・」・・ラーハルトは今の答えに納得してないか・・。
「えっと・・私が何者であるかよりも、何をするかの方が大事なんだと思うよ。」
つまるところ血より育ちって・・分かってくれるかな・・。
「下らんな・・綺麗ごとだ。」・・駄目か・・ラーハルトの顔が冷たくなってる。
「そうかな?」「ああそうだ!!そんな戯言が人間に通じるものか!!」
(やはり小娘は小娘か・・そんな綺麗ごとが通るはずがない!世間を知れば嫌でも分かるこの世界がどれほど醜い人間で溢れかえっているのかを!!)
「・・優しい人もいるよ。それに私はしたいようにする。
この世界がどんな世界であっても私は私だよ。他の人じゃないもの。」
「・・綺麗ごとなぞ潰されるぞ・・」「そうならない様に色々強くなるよ。」
「・・迫害をされても言えるのか?」「いい人もたくさんいるはずだよ。」
(何なのだこの娘は!!なぜこうも世界を信じられる!!なぜ俺の言葉を聞いても平然としていられる・・まるで・・あの人のように・・)

自分の言葉を聞いても揺らがぬティファを見て、ラーハルトは亡き母を思い出した。
魔族と結ばれた事で、同族の人から迫害をされても、死の間際にも優しい人間はいると自分に言い残して逝ってしまった優しい母の面影をティファに見て動揺をする。
(ラーハルトが揺れている・・止めねば・・)
いかに人間よりも強くとも、心はまだ未熟。
バランはこれ以上ラーハルトが動揺しないよう、帰宅を促した。
「娘よ、帰るがいい。」
散々引き留めたのはこちらで勝手は承知だが、二人を引き離す。
「うん、分かった。さようなら~。」バサリ
・・行ってしまった・・様々な思いを自分達に残して・・。
・・私は私・・か・・そうなれるように・・努力しよう。
飛び去ったティファ自身も、選んだ生きる道の一つを考えつつ帰路に着くのだった。

縁は異なものひょんなもの？

（まったく・・なんで俺がこんなことを・・でもあのガキの言う通り、ルードの奴の歯が
弱くなってきやがったし・・癪だがガキに貰ったメモ通りにするしかねえか。）
ガルダンディーはひと月前に出会った子供に貰った処方箋の材料を探している。
黒髪を長く伸ばした人間の娘で・・超が付くほど生意気で!!・・ルードの命の恩人が
くれた処方箋には、ルードの歯を磨く薬草数種と歯の隙間の汚れを取る道具が書かれてた。
無論自分には人間の字なぞ読めないが、主のバランに読んでもらい、薬草と、―道具―
の材料となる生物の住処も教えてくれた。
―面白いことを考え着く娘だ・・。―処方箋を読みつつ、人間嫌いのバラン様を紙一枚で
笑顔にしてしまう妙ちくりんなガキにまた会いそうな場所だが仕方がない。
材料はどちらもテランが手に入りやすい。
あのガキに遭遇する前にさっさと探して帰ろう！
（それにしても、ラ―ハルトとボラホーンの奴!!遠くで高みの見物決め込みやて!!）
自分一人では騒ぎを起こしそうだからと付いてきて・・材料揃ったら戻って来いって完全に面白がって付いてきただけだろ!!・・さっさと探してとっとと帰ろう・・。
歯磨きの薬草はすぐに揃った。
化膿止めのフレイとハッカ、消毒になる赤いギシタリカの実とこれに粗塩を混ぜればいいと説明も書かれている。
後は道具の材料になる動物の巣を探せば・・「あれか？」見つけた。
森の出口に大きなリンゴの木の下に、こんもりと土が盛り上がった

箇所がある。奴の巣だ。
さっさと掘り出して「そこに触らないで!!」
「・・ああ?」
木の下の土を掘ろうとしたガルダンディーを、大きな声で止めに入ったものがいた。
(誰だ?ガキの声だったが・・まさか!!)ガルダンディーは先日会った者を脳裏に描いて
振り返ったが、いたのは茶色の髪を左右に三つ編みにした先日の子供よりも小さな女の子だった。
(何だよ驚かしやがって、・・それにしても・・)
「俺がここを掘ったら文句あんのか?」
(つくづくガキとは縁がありやがる・・。)
「あるわよ!そこはニーナの大切な妹ミーナの墓よ!!触ったらダメなんだからね!!」
(・・しかもまた気の強いガキでやがる・・。ニーナ・・このガキの自分の名前か・・)
いかにがガルダンディーが人間嫌いであっても、幼子が時折自分の事を自分の名前で言ってしまうの位は知っている。そこは言語を持つ種族共通だ・・自分も大昔はそうだった。
となると・・「おいガキ!嘘つくんならもっとましな嘘つけ!!」「何よ!嘘なんて・」
「人間のガキが何でこんなところに埋められるんだよ!!」それくらいも知っている。
「で?本当は何隠して・・。」
「・・うそじゃないもん・・。」
「・・あのな・・」
「ミーナは火竜の赤ん坊で!ニーナが孵したんだもん!!だからミーナは私の妹だ!!!」
ニーナと名乗る子供は目を真っ赤にしながらガルダンディーに怒鳴り上げる。
種族は違えど・・たったの半年しか居られなかったけれどもミーナ

は確かに自分の妹だと。
ガルダンディーはその言葉に衝撃を受けた。
（竜と姉妹って・・俺とルードと同じじゃねえかよ!!）
ガルダンディーとルードのいた群れは人間の迫害によって壊滅をし散り散りになって、
幼かった一人と一匹は偶然に出会い、以来年上の自分が兄となり共に育ち、二年前に
今の主に拾われた。
バラン様は人間ではない・・故にこそ自分とルードの仲をすぐに理解してくれた。
だが目の前のニーナという子はどう見ても人間だ!!
他種族を忌み嫌い、何の理由もなく酷い事をする人間の・・。
なのに・・自分と同じ竜の姉妹を持ち・・今も―墓―からどけばそれ以上は何も言わずに
掘った跡を綺麗に土を盛り直し花を添えて、掘った自分に文句を言わずに迷惑そうな顔も
せず、しゃがんで静かに祈りを捧げている。
（あのガキといい・・こいつといい・・一体何だってんだよ!!）
群れを滅ぼされた光景は今でも忘れられない・・人間とは酷い者しかいない・・そう思っていたのに・・・この子供たちは一体・・。
「フエックショーン!!・・何だろう急に。」
「―汚いぞティファ―」
「ごめんごめん、ん～一月ぶりのお外は気持ちいい～。」
「―・・よくぞブラスは一月で外出を許したものだ・・我なら許さんぞ―」
「そこはじいちゃの優しさだよガルーダ。でも心配してくれてありがとう。」
「―ふん―」
ありがとうしたらガルーダ赤くなって照れてる。ツンデレさんだガルーダは。
でもガルーダの言う通り、じいちゃよく一月で外出許してくれた

な。
一月前父さん達に会って物凄くいろんなことに疲れ果てて、島に帰ってすぐに寝て・・
次の日も眠りっぱなしでじいちゃんとダイ兄をものすごく心配させて、一月外出禁止令を出されたのは当然の話だ。言ったら何だけど私なら心配かけられたら一年は禁止するが、
そこは優しいじいちゃんのお陰で、深く反省をしたら許してくれた。
島にいる間は気を練る以外の修行はせずにのんびりとして体を休めてダイ兄と遊びまくった。
自分だけ父さんに会ったのがずるい気がして兄のお願いは全部聞いた。
「ティファ遊ぼう。」
「お菓子作って～」
「一緒に寝よう」
「冒険ごっこしよう」
子供らしい可愛いお願いだらけ。ゴメちゃんを肩に乗せて島で伸び伸びと過ごし、
じいちゃんとウォーリアさん達に優しく見守られてすくすくと育っている大切な兄。
・・絶対父さんとの事はハッピーエンドにしようと決心した・・原作の死に別れなんてさせない。
島でののんびり生活は私に大切なことを再認識させてくれた。
「ティファよ、この間作ってくれた薬はよく効くの。」
「へへ、よかった～。」
「ティファ～一緒にオレンジのみ食べよう。」
「ありがとうダイ兄。」
「ティファちゃん、ダイ君、お菓子持ってきたよ。」
「「ありがとうウォーリアさん。」」
一月外に出られない私を皆が労わってくれた。
笑う宝石袋たちは可笑しな小話で、一角ウサギさんたちはモフモフ

な体を摺り寄せて、
ゴメちゃんも寝る時はお布団に潜り込んできてくれた。
優しい皆がいるこの島に・・父さん達を・・呼んで・・って・・あそこ居るのは・・
何でラ―ハルトとボラホーンがいるの⁉
考え事してたらテランの湖について・・畔に二人発見・・テランて超竜軍団の秘密基地があんの？
・・勘弁してほしいけど・・ラ―ハルトと目がバッチリ合っちゃった・・シカトは駄目か。
とりあえず降りて挨拶して、薬草採りしよう。
―バサリー「ガルーダ、しばらくは大丈夫だから好きにしてて。」
「―分かった―」
―バサー行ったか・・さて「こんにちはおじさん達。」
やっぱり名前は呼べないのでこうなるけれども、「・・ああ・・」「・・・・」
ボラホーンは一応返事返してくれた。気になってる事ダメもとで聞いてみよう。
「あのう、鳥のお兄さんとルード君は・・」
「―おねいちゃ～んー」どか！
わ！・・名前言ったら・・いきなりルード君が空から降りてきた・・私の気配読みもまだまだね・・。
「ルード君、元気になってくれたのは嬉しいけど今のは痛いよ。」
「―・ごめんない・・―」
「うん、反省してくれたらいいよ。あのね歯を見せて。」「―うん!!―」
叱ってしょげたルード君に歯を見せてって言ったら元気よく口をかっぱり開けてくれた。ほんとなんて良い子!!・・そして・・「ああ!!奥歯が虫歯寸前!!・・あんの鳥のお兄さんめ!!　羽むしってやろうかしら!!!」
奥の歯数本危なし!!「ちょっと待ってて・・えっとこれとこれ・・」
―ゴリゴリ―
ガルダンディーは悪い子だった!!歯の治療は薬を塗ってすぐに、終わりガルダンディーはどうしようもないと思案していると、ルード君

に手を舐められたりふんふんされたりと
甘えてくれているのでルード君の鼻面を撫ぜてあげてると、ボラホーン達が何かを言いたそうだ。
「・・何か・・」
「いや・・」・・聞いても答えてくれないか。
（この娘は・・バラン様の言った通りとても変わっている。）
（変な小娘だ。）
ボラホーン達は内心でティファをとても呆れていた。
無謀か勇敢なのか・・自分たちにまた会っても平然として挨拶をして・・ルードの歯の事でガルダンディーに腹を立てつつルードの面倒を優しく見ている変わり者。
・・ガルダンディーが目の前にいても羽むしるとか言いそうだが・・口悪くても面倒見がいい。
（ラーハルトも呆れてみているな。「この娘は我らが知っている人間とは全く違う。
何よりも人間嫌いのバラン様を笑わせたくらいだな。）
・・何だろう・・視線がとても痛い。穴開きそうなほど私の事を見てる・・なんでだろ？
理由・・きいて・・ん？・・・んん～⁉
「お前が間違ってるんだよガキ!!!」
「なんですって!!この分からず屋!!!」
・・前から怒鳴りあってこっちに来る二人って・・ガルダンディーと・・ニーナ⁉
なんで・・あの・・二人が？・・どうなってんのよ・・誰か説明プリーズ!!!

人間にも色々います。

「ちげえって言ってんだろう！ハリネズミがいるのは木の下の巣穴だ!!」

「違うもん!!針金雀枝の茂みの土の中よ!!」

「まだ言うか!!」「そっちこそ!!!」

・・・ガルダンディーておバカ？五歳の子ども相手に何しちゃってんの？本当にガキね。

横見たらボラホーンとラーハルトも呆れた顔してる。

何をしているんだとボラホーンため息まで吐いちゃった。でも・・ハリネズミって今は・・

（このガキまだ分かんねえのかよ!!いい加減分かれってんだよ!!）

墓荒らし紛いをしてしまってばつが悪いと思っていたところに、掘ろうとした理由を尋ねられたので、悪いと感じていたのでハリネズミの事を話したら・・居場所が違うと言われたのに腹が立ちずっと口論になって十分近くが経つ。

（ガキを殺しても仕方なしと・・優しくしてりゃあ付け上がりやがって!!）

ガルダンディーの忍耐も切れかかっていたところに、先日会った方の―ガキ―が居た!!

相変わらずルードが何故かまた懐いているのが気にくわないがまあいい!!

「おい！ガキンチョ！」今会ったガキと混じらないと考えて、ガルダンディーはティファをガキンチョと呼ぶことにしたが、呼ばれたティファは当然不快な顔をガルダンディーに向けて、「何ですか？」と一応返事をしてやる。

（んだよ、ガキの分際でいっちょ前に怒ってんのか？まあいいか。）

むかっ腹を立てているガルダンディーはティファの心情は綺麗に無視する事にした。

「この分からず屋のガキにだな・・」「・・お姉ちゃん!!!!」「・・あ～？」

―お姉ちゃん―ニーナはティファを見てそれまでの事を忘れ果て、

ぶつかるようにティファに飛びつていき・・「ウ～・・ウ・・ヒィッ・・」むしゃぶりついて、ティファに受け止めてもらい、呻くように泣き出した。
（・・ミーナは・・駄目ったか・・この泣き方・・まさか！ニーナちゃんが薬を・・）
　初めてあった人に妹を助けてほしいと必死に頼んできた優しい妹思いのお姉ちゃんだった。
　助けられない代わりに安楽死の薬を渡したティファにとても怒っていたニーナが、ティファの腕の中で体を震わせて泣いている。
　妹の死を悼む以上の痛みの心を感じ取ったティファはゆっくりと座り、ニーナが思う存分泣けるように頭を膝に乗せてゆったりとニーナの背中を撫ぜ始める。
（こんな小さな子に酷な事をさせた・・）
　ティファの胸中には後悔の念渦巻く。
　いかにニーナが怒っても自分でミーナに飲ませるか・・せめてニーナの両親に頼み込む事をしておくべきだったかと・・。
（泣き止んだら全部聞こう。ニーナの心の為にも。）
（何だあのガキ・・さっきはあんなに怒鳴りあってたのに・・）
　お互いにハリネズミの事で一歩も引いてなかったガキが突然ガキンチョを見てボロボロと泣き始めてと・・ガルダンディーは呆気にとられる・・まるで・・自分の半身を失くしたように泣くニーナの泣き声が胸に突き刺さりながら。
　そういえば、火竜の妹の事を話していた時妙に早口であった・・あれはもしかしたら・・妹の死の痛みを思い出し、・・何故かガキンチョを見たことで悲しみが溢れたのだろうか？
（またあいつが何か関わってんのかよ～・・）少しげんなりとしてきた・・。
「おいガルダンディー、」「んだよボラホーン。」
「お前あの小さいのに何かしたのか？」「・・ガキ相手にするかよ!!・・あいつの妹っていう火竜の赤ん坊が死んじまったんだと・・後は知らん・・あの妙なガキンチョが何か関わってんだろうよ・・。」「・・そ

うか・・」絶対そうだ!!
　五分近く泣き続け、ニーナの泣き声が次第に落ち着いてきたのを見計らいティファは
　ニーナに声をかける。
「ニーナ・・」話をすべて聞こうと思ったが・・「お姉ちゃんごめんなさい!!」
　ニーナに謝られてティファは驚いた。
「どうしてニーナが謝るの?ミーナ助けられなくて・・」
「ううん!!ミーナね・・お姉ちゃんの言った通り・・息するのも苦しそうになっちゃって・・血を吐いて・・だから・・お父さんが薬・・」「私が渡したの?」
「うん、お父さんが・・ミーナに飲まそうとして・・でも!ニーナがミーナのお姉ちゃんだから・・だから!!ニーナが・・うわぁぁぁぁぁぁぁん!!」
「そうか・・。」大人に任せず自分の手で・・可哀そうに・・悲しくて・・痛かったろうに・・。
「おいガキンチョ!!そいつ一体何なんだよ!急に泣き出して謝ったりして!!」
　・・あれガルダンディー、ニーナちゃんの事気になるのかな?
　・・ボラホーンとラーハルトもチラチラこっち見てる。・・全部話すか。
「この子の名前は・・。」ニーナちゃんの名前を教えてあげて、あったことを事をすべて話してあげた。人にもいろんな人がいるのを知ってほしくて。
「もって五日・・苦しまずに眠るように逝く薬を処方して・・てっきり大人が飲ますんだと思ったけど・・」大人がするのを止めて自分で・・卵から孵した大切な妹の為に。
　余程ミーナが弱って苦しんでいたんだろうけども・・可哀そうなことをさせてしまった。
「ニーナちゃんご免。。」
「・・なんでお姉ちゃんが謝るの?」

「診てあげた時、私が薬をあげていればニーナちゃんがしなくて・・」
「違うもん!!」
わ!ニーナちゃんすっごい気迫・・。
「違うもん・・ミーナのお姉ちゃんは・・私だから・・大切な・・妹だから・・うわぁん!!」
そうか・・そうだよね・・大切な妹の命を・・他人任せにしたくなっかったんだ・・。
こんなに小さな子が・・悩み抜いて・・私も・・ダイ兄が同じ事になったら・・自分でするか。
・・ガルダンディーが・・泣いてる・・そっか・・ガルダンディーにも、ルード君がいる。
ニーナちゃんの気持ちが分かるか・・。
(こいつ・・俺と同じだ・・俺だって・・ルードの為ならなんだってしてやる・・
どうしてだよ!!だってこいつは・・憎い・・人間・・なのに・・)
(この娘たちは本当に人なのか?本当に何度目だこう思ったのは・・。
しかし・・今までにあったどの人間達と全く違う!何故なんだ・・。)
(どうして俺の心がこうも揺れるんだ・・たかが・・人間の小娘たちなのに・・)
ニーナの悲痛な叫びと優しい心が、人間憎しだけの三人の心の中に響き始め様々な思いを引き起こさせる。
ひょっとしたら人間にも・・そう思い始めていた矢先・・。
「あ!ニーナがいたぞ。」
「・・あれってミーナを診てくれったっていうお姉ちゃん?」
「でも側にいる人達怪しくね?」
「・・ってかニーナ泣いてるぞ!!!」
「なんだって!!」
「誰よニーナちゃん泣かした奴⁉」
「お前らニーナに何しやがった⁉」
「ニーナこっちに来いっ!!」
「「「「「ニーナ助けるぞ!!!!!」」」」」

うわ～・・ひょっとしなくても・・あれってニーナちゃんの村の子大集合？
ニーナちゃん人気あるみたい。ミーナの事で慰めようと捜してたのかな。
・・男の子もだけど・・女の子も怖い・・私ともかくこの三人見て向かって来るってすごい・・。
ってか！女の子の方が雰囲気がおっかない!!何故に⁉
（何だあのガキの大群は⁉）
（なんとまあ・・）
（・・何故・・）
（（自分たちを怖れず向かって来る⁉））
大人でさえもよける自分達を見ても、一人として怖がることなく、それどころかニーナを泣かせたと怒って一丸となって突撃してくる・・どうしろというのだ!!
武器を持った大人ならば何の躊躇もなく殺して終わりだが・・相手は素手の子供ばかり！
斬る気も起きず・・どうすればいいんか途方に暮れるしかない。
三人が本気で困ってる・・子供相手だしね。
でも、人間にも色々いるでしょ。酷い奴だけではなくて、優しくて勇敢な人達も。

・・行けません・・。

「ちょっと待って子供達!!」

向かって来る子供たちに、さしもの泣いていたニーナも顔を上げて驚くほどの勢いだったので待ったを掛けたら・・

「何よ!」

「ニーナ泣かせた奴が!!」

「酷いぞ!!」

・・クレームの嵐が吹き荒れた・・。

「違うの!このお姉ちゃんんはいい人だよ!!」

泣いていたニーナちゃんが説明をしてくれて、ようやく騒ぎが収まったくれた。

「「ごめんなさい!!」」

「すみません!」

「早とちりしました!」・・etc・・。

分かってくれて誤解が解けると、みんなきちんと謝ってくれた。

「分かってくれたらいいよ。皆ニーナちゃんが大切なんでしょ。だからいいよね、お兄さん達も。」

巻き込まれた三人も謝罪された訳だしと水を向けてみれば「・・ふん!」

「まあ・・」

「・・・」

三人とも憮然として全く納得いってない顔してる。かど、それだけでもなさそうだ。

・・それにしてもこの子供達ほんと凄い。

「この竜かっけえ!」

「空竜初めて見た!!」

「可愛い顔してる。」

「まだ小さいね~。」

皆でルード君を囲んでしげしげと見ている。

やたらと触られてはいないけど、囲まれているルード君はオロオロ

としてこっちを見て助け求めてる。
「こいつ若竜？」
「バカね角見なさいよ。まだ幼竜よ。」
「竜の年齢は鱗か歯か角見ろって父さん言ってた。」
　この国の子は竜信仰お国のせいかやたらと竜に詳しんですけど・・。
「君たち～。」
「「「なあに～」」」
「竜好きなの？」「「「大好き!!」」」
「スライムの子もいいよな！」
「一角ウサギの仔も・・」・・他のモンスターも好きか。
　・・全員デルムリン島にご招待して上げたくなってきた・・超喜びそうだ・・。
（・・こいつ等・・）
（どうしたら・・）
（こんな妙な子に育つんだ）
　ティファは純粋な子供たちを愛でるが、超竜軍団の三人は頭痛がしてきた。
　この一月で自分達の持つ人間の概念を木っ端微塵にしていく子供達にお手上げ状態である。
「そういえば鳥のお兄さん。」
「・・んだよガキンチョ・・」
　ガルダンディーは最早ティファにかみつく気力も失せ果てて、普通に返事を返した。
「さっきの二人のハリネズミの事だけど、二人共半分正解で半分不正解。」
「なんだそりゃ。」
「鳥のお兄さんのは冬で、ニーナちゃんのは暑い真夏。今は春だから、この湖の側の茂み探せばいるよ。」「・・そうかよ。」
　疲れとも、呆れともとれるガルダンディーの返事を聞きつけた子供達が「何々？」
「ハリネズミ？」

話しに食いつき、「疑ったお詫びにみんなで探すぞー!!!」・・捜索隊が組まれ・・
「そっち行った!!」
「囲うぞ!」
「「せーのっ!」」がしっと捕まえて、「はいどうぞ!」
ガルダンディーに手渡した。
皆葉っぱまみれの土まみれで、女の子たちの髪の毛もぐしゃぐしゃで・・でも、子供達の満面の笑顔はキラキラと輝いている。
いつの間にかニーナも捕獲隊に入ってハリネズミをガルダンディーに手渡す役をしていた。
「さて鳥のお兄さん、ハリネズミさんから二十本くらいトゲ貰って、二本一束にして・・。」
ティファはガルダンディーに楊枝づくりを教え、「この蔦で巻く?」
「もっとハリネズミいるか?」
子供達にも構われ・・
「うっせえぞガキども!!」一連の流れに唖然茫然とに流されていたガルダンディーも真っ赤になってブチ切れるが、
「えーいいジャン別に。」
「手伝ってやるよ。」
子供特有の怖いもの知らずの気安さに押し負け、結局ながされて
「そこはさ・・」
「やかましい!」子供と騒ぎながら楊枝の束を作り上げてしまった。
楊枝を手伝う子もいれば、
「おっちゃんカッコいい!」
「どうやったらそんなに筋肉つくの?」ボラホーンは男の子に、
ラーハルトは女の子達から花飾りを押し付けられて途方に暮れる。・・なぜ・・こんなにもまぶしい笑顔を自分たちに向けられているのかと困惑をする。
子供達の笑顔に邪気は全く無く、憧れのまなざしを向けられて・・その様子をティファは黙って笑って見ている。
楊枝作りは子供たちに完全に任せ、一方的ではあるが超竜軍団の三

人が・・人間の子供達と交流をしている素晴らしい光景を。
この交流がやがて魔王軍と世界を変えるきっかけになるとはつゆほどにも考えずに・・・。
今はただ、三人の中に優しさが芽吹き人と敵対しない道を行ってくれればと願うのみ。
作り終えたころには夕方になって暗くなってきた。そろそろ帰ろうと年嵩の子が言うと、
ニーナはガルダンディーの前に立ち「鳥のお兄さん。」ティファと同じ呼びかけをした。
「・・この子の名前・・ルード君ていうんだよね。お姉ちゃんが教えてくれたの。」
「・・だったらなんだよ・・」
「いい名前だね・・沢山長生きさせてあげてね・・」
「なん!!!!」ニーナはルードに優しい眼差しを向けてガルダンディーに願う。
自分の逝ってしまった大切な妹の分まで長生きをと・・・。
「けっ!・・・とうぜんだろ・・」
ガルダンディーの答えは素っ気なく・・顔を真っ赤にして小声で答えた。
半日も接していれば嫌でも分かってしまう。ニーナが本気でルードの事を案じてくれているのが。
分かるからこそ気持ちを持て余す・・人間に対して・・憎しみ以外を感じる、この気持ちを何と呼べばいいか・・どう・・接せればいいのか・・分からなくて。
その戸惑いは他の二人にも移ったが子供達は気づく事無く家路につき、その場にはティファ達だけとなった。
(さて・・もういいかな。)
「おひげのおじさん、いつまで隠れてみてるの?」
「「なっ!!!!」」
三人は主の存在に全く気が付けなかったが、ティファは割と早いうちに気が付いていた。

多分ニーナがガルダンディーにハリネズミを渡した辺りから居たことに。
「娘よ・・。」森から出てきたバランは真剣な表情でティファに近づき・・
「我等と共に来ないか？」
とんでもないことをティファに言い放つ。
・・・今・・父さんなんつった？
「どうしたんすかバラン様!!」そうよどうしちゃったのよ父さん!!
「いきなりどうされたのですか⁉」そうよ！
「こんな小娘相手に何を!!」・・そこは失礼よラ―ハルト!!
でも本当にどうしちゃったのよ父さん!!なんか変なもの食べたの⁉私も三人同様パニくりたい!!
「いきなり何言ってるのおじさん!!」とにかく訳聞かないと・・・。
「そなたは人間の中にいさせるには勿体ない。」・・はい⁉
「種族問わずの公平さといいちしきといい・・それに娘よ、何かしらの力を持っていて、それを自覚しているだろう。いや隠すな。身ごなしといい、先日ガルダンディーにみせた気迫と闘気はただの村娘ではあるまい。」・・どうしよう・・言ってる事否定しようとしてもとめられて・・完全なんかバレてる！
これはあれか？超竜軍団へのお誘いか⁉・・スカウト好きはバーンだけにしてよ・・。
はっきり言って今人生初の大ピンチだ!!三人相手には逃げ切れても、父さん相手じゃ無理だ・・ガルーダ行かさなきゃよかった・・でも・「おじさん人間が嫌いなんね・・」子供にも分かってしまうほど・・
「そうだ。」あっさり認められた・・。
「私も人間だよ？」
「そなたは自身が何者なのか知らないのだろ？」・・・そうきた。
「それに人間であっても別にいい。」
「・・なんで？」
「そなたは人間らしくない。」
はい⁉なんじゃそりゃ！父さん超失礼!!七年間まっとうに生きてきた私に向かって！

「・・その通りっすね・・」・・なんですって・・・。
「その点に関しては異議なしですなバラン様。」・・・ちょっと・・・。
「まったくです。」・・こんのー!!
「やかましいですよ!ガルダンディーさん!ボラホーンさん!ラ―ハルトさん!」
「「なっ!!!!」」
「お互いに呼び合っていたので嫌でも覚えました!!
鳥のお兄さんがガルダンディーさんで海獣人のおじさんがボラホーンさんがんで、貴方がラ―ハルトさんでしょ!!」もう面倒くさいからこれはカミングアウトしてやる!
・・怒りなんて消えてしまうほど悩んでるんだこっちは・・・。
父さんの優しい顔を覚えているだけに辛い・・今の父さんのは・・悲しみと怒りで暗い影を落としてる。
二度だけ笑って、優しく撫ぜてくれた手は温かくて・・泣きたくなった。
あの時に何もかもをぶちまけて親子の名乗りをしたくなった程に・・あの腕に飛び込みたくなった・・でも駄目だ・・今私がそっちに行っても本当の意味で父さんを幸せにはなれない・・皆不幸で終わってしまう。
今は・・超竜軍団の三人も幸せにしてあげたくなった・・だから!!
「お誘いありがとうございます。でも、いけません。」断らないといけない。
「一応理由を聞こう。何故だ?やはり人間の中がいいのか。」
「違うよおじさん。私には待ってくれてるじいちゃんと兄がいるんだよ。
それにね、ガルーダみたいなお友達も沢山いて、帰りを待っていてくれてるんだよ。」
だから・・「一緒には行けない。帰らないと皆が心配しちゃう。」
一緒には行かれない・・でも・・いつの日かきっと・・

リンガイアでの出会い

全く父さんたら・・「ねえ～」
本当にどうしてあんなに憎しみだらけになっちゃって「ねえてば～」
敵対したらコテンパンにして「ティファてば!!」
「・・どうしたのノヴァ？」
「どうしたのって、呼んでもティファちっとも返事してくれないんだもん。」
「ごめんごめん、他の事も考え事しちゃってさ・・それよりもホイミ草を改良したべホイミ草はうまくいったの？」
「あれは無理だよ。効能はホイミ草よりも確かに効くらしいんだけれど、作った箇所の土が枯れちゃって、無理して作ったら大地の精霊の怒り買いかねないって開発部の人達諦めたみたいだよ。」
「そっか・・作れても土をからせたら駄目だよね。・・ホイミ草の苗に回復の泉の水をかけたら駄目か。」
「うん、せっかくティファが良い案を出してくれて皆張り切ってたけど残念。」
「・・ノヴァ・・その件て・・」
「大丈夫。僕が精霊から教えて貰った事にして案出したから。」
「助かる・・でもな～失敗か・・ま、次行ってみようか。」
「そうだね。ホイミ草と回復の泉混ぜた薬は、少し濃すぎて過剰回復になって危ないって
皆が教えてくれたよ。」「少し濃度薄めて試すか。それよりこの間言ったホイミ系の回復は体内を本当に・・」寝そべってお友達と実入りのある話をするのは本当に楽しいな～。
父さん達と別れてから二月が経つ。あの後二・三日機嫌が悪くておっかなかったて、ダイ兄に言われてしまうほど悪かったらしい。
後年仲間になったクロコダインの話によれば、父さんとあの三人も機嫌が凄まじく悪く、それが元で魔王軍が一時期混乱したらしい。
―バラン殿―

―何か・・クロコダイン―
―この笛の拾い主は人間の娘だと・・考えたのだが、俺自身よりもバラン殿から間接的に礼を言ってはくれ・・―
―断る!!―
―バラン殿?―
―あの娘とはもう会うことはない!失礼する!!―・・バラン殿はなぜあれほど怒って・・。
―あっ、超竜軍団の三人だ。―
―機嫌悪そうだな。―
―この間なんて人の子を殺して自慢してた奴等を殺す寸前まで殴ったそうだぞ―
―ハドラー様も手を焼いてるそうだ―
―あ・・また揉めてんぞ‼―　―バラン様に止めて・・―
―止せ!今あの方の機嫌も―
―ギャーッ!!!―　―・・言わんこっちゃねえ～。―
とうとうハドラーが四人の事で部下達から泣きつかれ、新魔王軍の組織作りの書類に忙殺していた為と、相手が竜の騎士とその直属の配下なのを鑑みて大魔王に報告をして丸投げしたそうな。
超竜軍団は魔界の反バーン勢力潰しを命じられて、一年掛かるところを半月で潰してきたとか・・どんだけ相手に八つ当たりしたんだか・・それは未来のお話です。

くさくさしながらも破魔の石ばら撒きと、ＭＰ回復の泉の水採りにリンガイアにやってきたら、泉で溺れている精霊を見つけて助けて、後から来たノヴァと偶然に出会った。
その精霊はどうやらノヴァの友達で、ノヴァは精霊が見えて話が出来ると教えてくれた。
魔法使いでもなんでも、精霊が見えて話せるものはレアだ。
竜の騎士の子でも私は見えてもダイ兄は見えないっぽいし、ノヴァの周りにも同じ人はおらず精霊見えて話せると言って以来、家族の人達以外からは気味悪がられてさみしかったらしい。

お互いの共通点を知ってすぐに仲良くなって以来友達になった。
知識欲旺盛な子供で私の―旅話―や上級薬草の本を見せたら自分も作りたいと言ってくれて、共同研究者になってくれてあの思いついた―ベホイミ草―を試してもらった。
島の土壌は残念ながらホイミ草を育てるのには向いておらず、リンガイアの薬草園を管理している開発部所の人達に話してもらったんだけど、失敗したのは残念だ。
ノヴァのお父さんはあのリンガイア騎士団の団長を務めているバウスン将軍で、ノヴァ自身も騎士団の育成グループとして城に出入りしているのであっちこっちに顔が利く。
なので二人でそこを利用することにして万能薬開発を頑張っているのだがままならない。
でも焦っても仕方がない。今は純粋にノヴァとお友達になれた事が嬉しい。
ノヴァは本当に良い子だ。四六時中精霊たちが周りにいたがるほどに。
精霊たちは自然のそこかしこに存在しても、滅多に特定の人物の側にはいない。
清らかでかつ自分たちと話が出来る人間の子供をいたく気に入って居ついているようだ。
同年代の子と遊ばないかと一度聞いたら―あの子たちは僕よりも父さんを見てる・・―
ポツリとさみしそうに言ったので大体の事が分かったので二度と聞かないことにした。
貴族の子弟ともなれば親の意向と思惑が満載で、ノヴァに近づいた子はほとんどが―バウンス将軍の息子―と仲良くなるように吹き込まれてから近づいたか。
生来の勘の良さで気が付いて、子供の潔癖さがそれを拒んだか。
伸び伸びと育ち、バウスン将軍に溺愛されて育ったのがよく分かる天然王子様キャラに育ってる。・・なんで原作はあんなにつんけんしてたのか・・反抗期だったのかな？

こっちのノヴァは可愛くって大事な友達になって共同研究者だ。
「僧侶さん達に話を聞いてみたら全部治っているはずだって言ってたよ。」
「でも実際は表面が治れば中が見れるわけじゃ無いし、それよりも体内まで傷ついた経験のある兵士さんから話聞いた方が・・。」
こうやって万能薬開発の話を論じ合って、ノヴァの伝手で城で働いている休暇中の学者さんを訪ねたりして教えを乞うてアイデア拾って書き溜めて、研究本もでき始めた。
「兵士の人達には無闇に近づいて仕事の邪魔しちゃいけないって父さんが・・。」

「その通りだノヴァ。」

・・誰って・・げ!!バウスン将軍!わっか!!しまった・・。
「ノヴァその子は誰だ?」・・バウスンさんに見つかった上に・・ああ・・不味い。
「お前さんたちずいぶんと面白い話をしてんじゃねえか。」
しわがれた・・けれども力強い声。杖を片手に歩いてくる老人はマトリフ大魔導士!!

―数十分前の城の中―

「はじめてお目に掛かる。私はリンガイアの将軍を拝命している・・」
「しち面倒くさい事はいい。以前この城で見かけた・・バウスンつったか・・こんな年寄りになんの用だよ。俺の行く先々に兵士送りつけやがって・・今更人に仕える気は毛頭ねえぞ。」
「失礼いたしました。あれらは私の配下達で、国の事ではなく私個人の頼みごとを引き受けてくれた者達です。」
「お前さんの・・。」
「はい、ご無礼の叱責は後程甘んじて受けますが、ご相談したきことがあり些か強引な手段を取らせていただきました。」
「リンガイアにも魔法団が有んだろ。この平和なご時世に俺に何の用があるってんだよ。」
「彼らでは駄目なのです。いえ!無理なのです。」
「なんでだよ?」

「私には一人息子がいます。その息子はどうやら精霊が見えるそうです。」
「・・珍しい話だが魔法使いの素養に溢れてるってこったろう？」
「それが・・見えるだけではなく、話もできるそうなのです!!」
「・・ホントかよ。」
「その真偽を見定めるべくマトリフ様のお力をお借りしたいのです！この国の魔法使いにはできませんがマトリフ様は精霊と話せるとお聞きしたことがございます!!
　息子が悪い精霊に誑かされない様にご指導もお願いしたいのです!!よろしく頼みますマトリフ様。」
「・・マジかよ。」
　バウスンに押し負けをして中庭に来てみれば子供が二人いてすごい話をしていた。
　・・父さんといいこの人といい・・次から次へと・・。

変わった人の子パートｔｗｏ

（さっきからこいつ等すごい話してなかったか？）
　ベホイミ草の研究だのホイミ系の魔法に疑義を呈すだの・・おまけに二人共精霊と話せて
　当然とばかりに話を進めていた。
　面白そうな話だと思って二人を見つけて駆けだしそうなバウスンを止めて会話を聞いていたが、とんでもない子供達だとマトリフは鳥肌が立つ思いがした。
（どうしよう・・バウスン将軍だけならともかくマトリフさんまでいるなんて・・世捨て人してるんじゃないの⁉何でリンガイアにいんのよ！）
「ノヴァ！説明をしなさい。この子は城に入っていい子なのか？」「・・あの父さん・・」
　城内に入ったのがまずかったとティファは臍を噛む。いつもならば式鳩で来た事を知らせて城の外で落ち合っていたんだけどな～。
「ティファ！今日城の厨房の人がお菓子を作ってくれるっていてたよ。ティファも食べに来なよ。」
　ノヴァにお誘いをいただいた。
「ダメだよノヴァ。私そもそもこの国の人でもないし、城に行ったら不味いと思うよ？」
「大丈夫！僕の友達って言うからさ。」
　ノヴァは子供特有の無邪気さでティファを誘う。
「それに私あんまり目立ちたくないんだよ。」
　城内の主要人物の目に留まりたくないとティファは断ろうとしたのだどダメだった。
「ふ～ん、じゃあこの国でティファの名前を知ってるのは僕だけなんだ？」
「そうだよ。」
「そしたらティファは僕の秘密の友達だね！大丈夫、僕と精霊が守ってあげる。」

天然王子のノヴァはティファを守ってあげる認定をしておおはしゃぎをした。
勇者目指す人間の器の大きさを見せてもらったのか何なのか超微妙だがやはりティファも女の子で、守ってあげる発言は胸にぐっと来る。
ティファの名前も別名にすると言われて絆されて付いてきたら・・この事態を招いてしまった。
ノヴァは必死にお父さんを説得しようとしてくれているど分が悪い。
「この子の名前ネイって言って・・」
「ネイ・・孤児の子か？「孤児？」
「・・いや・・」
・・ノヴァ―ネイ―の意味知らないで私に着けたか。
ネイとは―誰であっても誰でもない―孤児院の子が付けられる通り名で・・二・三人知ってるって言ってたけど、
この様子だとバウスンさんがきちんと―孤児と孤児院―の事教えてないな？過保護だ・・。
でもバウスンさんがどんなにノヴァを溺愛していてもこの件は見逃さないだろうな。
城とは本来王家を守るための要塞で、素性の知れないもんが入るなどもってのほだ。
・・謝って・・。
「父さんのバカ!!」
「こらノヴァ！」
「分からず屋！大嫌い!!」
・・ああバウスンさん大ショック顔・・ノヴァもぼろ泣き・・仕方ない。
マンドリン出して・・
―だ～い好き～だ～よ。あなた～と一緒にいられるのなあらこんな幸せないは～―
仲直りしてもらおう。

―ず～とあなたが大好きで～一緒にいて笑いあいたい。雨の日も晴れの日も～一緒にいましょう～。
だ～い好き～だ～よ。あなた～と一緒にいられのなら～こんな幸せはないは～
あなたはいいかが～？―
ノヴァがお父さん大好きなのはよくる。バウスンさんがノヴァを愛しているのも。
怒りで忘れていること思い出してくれればいいけど、ノヴァ泣き止んだか。
「ノヴァ駄目だよ、お父さんにあんなこと言ったら。」
「でも!!」でもじゃない。
「ノヴァは勇者様目指してるんでしょ？」「・・うん。」
「勇者様ってすごいんでしょう？それこそ敵だって許して改心させちゃうくらいだって、
大人の人達言ってたでしょ。」
「そうだけど・・。」
「だったら心がうんと広い、大きくてとっても優しい人にならないといけないんでしょ？
なのに大切なお父さんに、ちょっと怒られたからってあんな酷い事言ったらだめだよ。
そもそも城の中に私がいる事がルール違反なんだよ。おとうさんがただしい。
ノヴァのお父さん、城に入ってごめんなさい。今すぐ出ていきますのでノヴァを怒らないで上げてください。」
ノヴァがティファをバウスンから守ろうとしたように、ティファもノヴァを守ろうとする。
お互いに初めての同い年頃のお友達を守りあおうとする行為はバウスンの心を揺り動かした。
「ネイといったね。悪いと分かってくれているのなら、今回は大目に見よう。」
城にいていい許可を出す。

その上・・出ていく発言をしたティファを止めるべく「皆止めて!!」
ノヴァの言葉に精霊達の言葉がティファの上にのしかかる。
知覚できないものにとっては何の影響力はないのだが、ばっちり見えて話しているティファには
大岩が乗っているように感じて身動きが取れなくなった。
「・・分かりました。お招きにあずかります!だから精霊たちどけてよノヴァ!!重い!!」
のしガエルにならない様に全筋肉を使いつつ、ティファがぶち切った。
「・・焼き菓子食べていってくれる?」
「食べるから!それまでどこにも行かないから!!」
「分かった!みんなありがとう!!もう大丈夫だって。」
「・・ったく・・重かった・・。」
ノヴァの一言で精霊達が下りていく。
「皆ノヴァに甘い・・」
「―当然!!―」
「私にも優しくしてよ!!」
「―してますが・・―」
「―ノヴァの方が・・―」
「良い子なのはわかるけど!!それって依怙贔屓よ!」
「―だってね～・・・―」
ティファが精霊達と揉め始める。
「ティ・・ネイ、皆仲良くでしょ?」
「う～。」
「ね?」
「・・分かった。」
「うん、じゃあ皆で焼き菓子食べに行こう。―他の子―もいいかな父さん?」
ティファを天然王子笑顔で宥めたノヴァは、バウンスに精霊達もいいかのお伺いを立てる。
精霊も飲食は出来るが、いきなり食べ物が空中に浮いて無くなって

いくのは一度やって
驚かれている。
驚かれない様に友達全員で行きたいと・・
「分かった。父さん達も一緒だ。」
「は～い」
（・・マジですかい？）
食べてさっさと逃亡しようとしたティファは笑顔のまま凍り付く。
（なんて子だこいつは・・こんなにちっこい奴がもう勇者の心構えを人に説いて教えている
・・まるでアバンの奴みたいな子だ。）
マトリフは心の底から―ネイ―に感服をする。
ネイというのは偽名であるのはすぐに分かった。先程バウスンの子が―ティ―と他の呼び方をしようとしていた。
どう見ても良い子のノヴァが庇う大切の友のようだ。
ノヴァと同じく精霊の見える子で・・底の知れない子供。知識も考え方も並の子ではない。
「・・変わった子供だな・・」そう評する以外見つからない。
（・・マトリフさん・・あなたもですか？）
ぽつりと漏れたティファに対するマトリフの評価が聞こえてしまった当の本人は、
笑顔を保ちつつ心の中でしくしく泣いた・・。

超年上の共同研究者

「ネイ焼き菓子もっと食べて。中身のジャムはそれぞれ違うよ。」
「うむ、リンガイアの名物の一つだ。遠慮せずに沢山食べなさい。」
「はーい。」
・・焼き菓子美味しい・・されど状況不味し!!
詩の韻ぽくなったけど何この状況!!ノヴァとバウスンさんだけならともかく!何故にマトリフさん⁉
ただいま一緒にリンガイアの名物菓子を一緒に食べてます。
―焼き菓子―はマドレーヌの中に様々なジャムが入ったお菓子で、リンゴ、オレンジ、様々な味が楽しめる。
ノヴァたちに勧められて笑顔のまま食べつつ、内心超焦ってます!・・気配の修行しててよかった。
目の前のマトリフさんはお茶を飲みつつ食堂にいる女の人を目で追いかけつつ・・私の事も探ってるっぽい・・。
本当~にこの人何しにリンガイアに来たの?
「ねえ父さん。」
「どうしたノヴァ。」
「この方どなたですか?」
おっ、ナイスノヴァ!!
「ああ済まない。マトリフ様もすみません紹介もせずに・・」
「いいよ堅苦しいのは嫌いだ。だがな・・坊や!!」
「・・はい!」
「人の事知りたきゃ先ず手前が名乗れ!礼儀だろ!!」
・・正しいけど・・この人が言うか・・。
「・・ごめんなさい。僕はリンガイア将軍バウスンの息子のノヴァです。」
ノヴァって素直だ。
「俺はマトリフだ。」
「・・マトリフって・・あの勇者アバン様の大魔法使いの!!」
ああ~ノヴァの目がキラキラしてる。男の子って冒険奇譚話すき

だな～。
　ウォーリアさん達に話聞かせてもらってるダイ兄と同じ目の輝きだ。
　でもノヴァの方がお父さんからもっと具体的な話聞いて勇者アバン一行のフルメンバーの名くらい知ってるか。
　その功績も実力も全て・・そして勇者目指してる分、兄よりも勇者道を一歩先んじてるのかな？
　どっちも頑張っていい勇者になってほしいな～。
「どうしてマトリフ様がリンガイアに？」
「お前さんに会いに来たんだよ。」
「僕にですか？」
「ああ、お前の親父さんが精霊と話が出来るっていう坊やを心配して俺を呼んだんだよ。」
「何故ですか？」
「ま・・精霊にも良いのと悪いのがいるからな。親父さんには見えねえから心配して見える俺を呼んだんだよ。」
「僕の友達はみんな良い子達です!!」
「―その通り!―」
「―失礼な!!―」
　・・嘘ね・・ていうか半分嘘か。
　きっと精霊が見えてお友達になりましたって言うノヴァの言った事が本当かどうか真偽を確かめたっかったんだろうなバウスンさん。
　普段人間のお友達が一人もいないノヴァがそんな事言いだしたら親としては心配か。
「悪かったな坊やと精霊達。どうやら悪い奴はいねえみたいだぞバウスン。」
「・・良かったです。」
　真偽が分かってもバウスンさんの顔微妙な表情だ。親って気苦労絶えないな～ノヴァみたいな特殊な子はなおさらか。
（・・この嬢ちゃん・・俺が見ているのに気が付いてるんだか・・。
　普通子供ってのは勇者の話が出れば食いつくもんじゃねえのか？）

勇者アバンの名前は今でも子供達に大人気でどこの国に行っても知らない子はいない程だ。
一行のものと知れば大概はノヴァのように食いついてくるのに、目の前の少女は焼き菓子にぱくついて自分の方は見向きもせず、時折精霊たちに小さく千切ってお裾分けをしている。
マトリフは心の中で―ネイ―を訝しげにし、ティファは心の中でマトリフにはよ帰れコールをしている。
かくして狐と狸の化かし合いお茶会は表面上穏やかに続く。
「そういえば、さっき坊やと嬢ちゃんが中庭で話していた事なんだがな。」
「何でしょう?」
「・・何か」
・・どれ・・どの話?
ベホイミ草・ホイミ系への疑問・・精霊達に聞いた万能薬の配合率・・どれ一つとっても一般の子供のする話じゃない!!どれですかマトリフさん⁉・・腹括ろう・・。
「ホイミ系が体内の機能までちゃんと効くかどうかってやつだが、なんだってそんなことを思いついたんだ?普通はホイミで治っちまえばそれ以上はどうかなんて考えねえもんだぞ。」
ああそれか。まあ―普通―の人ならそうだけどあいにく私は普通じゃない・・さてどうしよう?
「あのですね、以前旅の途中で・・申し遅れましたが私は旅回り孤児です。」
でっち上げよう。
「パプニカの山間部の小さな村で医者と僧侶さんが揉めていたんです。薬とホイミ、どっちが本当の意味で体をきちんと治せるかで。
医者は効きは遅いけど薬は塗るだけじゃなくて飲んで体の隅々まで効くって言って、僧侶さんはホイミは体内まで浸透するからきちんと治せて早いから魔法の方が便利で上だって、お互いに譲ってませんでした。」
(旅回りの孤児って・・この嬢ちゃん・・もっとましな嘘吐けねえのか

？）

ティファの身分詐称のお粗末な内容にマトリフはとても呆れた。

十歳以上の子供が言えば多少は信じようもんだが・・どう見ても大人の庇護がいりそうなこんな子供がウロウロしてたらどこかで必ず保護されてるだろう・・バウスンの顔も呆れている。

息子の唯一の人の友達がこんな怪しい奴でいいのかとも悩み始めてそうだが・・それでも

「で？」

「・・で・・・。」

「お前さんと坊やはどっちが効くと思う？」

呆れて怪しい以上に、この二人の答えの方がもっと気になる！果たして

「「分かりません」」

二人は正直に答えてくれた。

「薬草ではちょとずつ効く分過程が分かりますが」

「ホイミはあっという間に表面を治してしまうので」

「「だから体内まで怪我をして治った兵士さんから話を聞きたかったんです」」

（・・本当になんて子供達だ。その辺にいる僧侶や賢者の卵どもに聞かせてやりたい話だ。そんじょそこらの学者たちも真っ青になるだろよ。

ネイって言ったか・・話の発端は兎も角、中身は面白え!!）

マトリフはパプニカを出奔し、世捨て人になって以来の愉快さを感じる。

なにせ今までホイミ系の魔法に疑義を呈した者はおらず治ってお終いが通常だが、少女の言う通り、内臓機能まで治ったかどうかまでは確かめられていない。

治ったものを切ってみるわけにもいかないからだ。

しかし重傷者がホイミで治った後突然死をする者がいるのも事実だ。

今までは深く考えたことも無いが、もしかしたら体内の奥深くまで

届かずに傷が残ったのが元かもしれない。
　これを解き明かし、対処する方法を考え着けば世間がひっくり返る新常識の誕生だ!!　今まで昔の仲間以外の人間に嫌気がさしていたが！
「俺も混ぜてくんねか？」
　この子供達と共に研究したいと、研究者魂に火が付いた!!
「はい⁉」
「・・え？」
「マトリフ様⁉」
　ティファ・ノヴァ・バウスンの三人はマトリフの申し出に面食らった。
「マトリフ様・・この様な子供の遊びに・・」
「いや！こいつは遊びなんかじゃねえ!!立派な研究だ！」
（・・マトリフさん・・マジですかい・・目がマジだ・・どうしよう？）
　ノヴァは単純に大喜びをし、ティファは心の中で途方に暮れ、結局マトリフの熱意に負けて受け入れることとなり研究仲間が増えることとなった。
　マトリフさんが研究仲間になって早一月・・私は徹底的に逃げ回ってます！
　当たり前の話でついうっかっりぼろ出すか分かんないのに・・会ったらまずいトップ・スリーに、立て続けに会うなんて私どんだけ運が無いのよ！
　ノヴァには悪いけれども、式鳩飛ばして周辺見て近づいて、精霊達に確実にマトリフさん居ないか聞いてから会うことにして、五・六回しか会えてない。
　でもこの位しないと、どうも近頃私はついていない。
　神のご加護が・・減ってる訳ないか。いざという時、相談する相手は神様だし。
　島に引きこもってもいられない。まだカールに細工してないし、お宝洞窟制覇してないし何より万能薬研究を完成させたい。
　原作ではヒュンケルはホイミ系で表面治っても骨のヒビはついに

治らず、最終戦で全身粉々になってる。
その後は分かんないけど、私の考えではあそこまでいったら骨は再起不能の方だ。
それでも薬だけではあの三か月のスピーディーな戦いの傷には追い付かない。
だから薬とホイミ系を合わせての治療で、ホイミ系を増幅させられる万能薬を考案中だ。
しかしだ・・私はもとよりノヴァも回復魔法は出来ない。
よしんば出来るとしても、人においそれとは試せない。
私が傷つくって薬塗って島のホイミスライム達に頼んでやっても、体内深くまでは傷つけられないから実験になってない。
・・これってよく考えたら国家プロジェクトもんだ。
倫理に基づいて被験者に薬の効能を説明して同意して貰った上でやるなんて・・子供二人じゃ無理でしょ・・私バカ?今更気が付いた事実に自分蹴飛ばしたくなった。
本当の子供のノヴァは兎も角私は気が付きなさいよって・・偶然にもマトリフさんが入った事によって、バウスンさんが王様の耳に入れたところ、小規模ながら研究チームが立ち上がったとの　ノヴァ情報でホッとしたが・・私の考えの甘さが嫌になった。
そんなすごいプロジェクト子供二人でやろうだなんて・・絶対頓挫してる。
だからと言ってマトリフさんと机並べてなんてしたくない。
なにせ前回会った時は二・三ノヴァから私の話を聞いただけで私の事疑って見てたくらいだ。
名前の件も偽名だってバレてる気がする。これ以上ぼろが出ない様にと気を付けているけどノヴァはマトリフさんに懐いてる。
「こないだマトリフ様と一緒に兵士さんの話聞けたよ!そしたらね・・」
「マトリフ様ってベホイミもできるんだって!!」
ノヴァに会う度、ノヴァはマトリフさんの話をして・・必ずいう言葉がある。

「ティファも会いなよ！」
・・凄いのは知ってる・・むしろ知りすぎてるから会うのが怖い。
何かしらバレるのが面倒よりも・・怖い方が大きい。
今私もこの世界の住人だが・・一部は違う・・異世界人だ。
それを知られることは全く無くても・・世間の子供と私は全然違う・・それを他の人達に知られるのが・・今はなぜか怖い・・どうしてだろう？

強くなる!!・勇者になる!!

今日は三日ぶりにノヴァに会いにリンガイアに来た。
ノヴァの側にマトリフさんが居ないとウキウキして来たけど・・珍しく鋼の剣を腰に佩いた。
何故かそうした方がいいと・・後年思い返すと、虫が知らせたのだ。
ノヴァと会えるはずの森の泉で待っていても来ず、来たのは大勢の精霊達
「―ティファ！ノヴァ助けて!!―」
ノヴァの親友の精霊のティンクを筆頭に大勢の精霊達が血相を変えて飛んできた！
「皆どうしたの！ノヴァに・・」
「―バシリスクの群れが・・・―」
「―私達の仲間食べようとしてー」
「―ノヴァが庇って逃げて・・―」
バシリスク・・それって不味い!!今のノヴァじゃ・・
「ノヴァどこ!!式!!」
大量の紙を千切って闘気を流して鳩を作り森に飛ばせば・・ここから遠くないところを逃げ回るノヴァが居た！
懐に精霊を入れて必死になって・・
「皆ここも危ない!!・・もしかしたら近くにマトリフさんいるかも・・助け呼んできて!!」
「「―分かった!!!」」
・・あんなに会いたくないと思ってたのに・・虫のいい・・でも今は助けてほしい!!
そんな事を考えながら森の広い部分に出ると・・三匹のバシリスクが・・倒れてるノヴァを・・
「き・・さ・・まっらー!!!!」
倒れ伏し、出血をしているノヴァを見て!!、心の中の何かが切れたが・・構わない!!
こいつ等を・・許すものか!!!!

ーぎっしゃー!!ー　向こうもこちらに気が付いて纏めてかかってきたが丁度いい!!
「土龍閃!!!」抜剣と同時に地面の土砂に闘気をを乗せて大量の土砂でバシリスク達を怯ませ、動きが鈍ったところを「龍巣閃・咬!!!!」纏めてバラバラにぶった斬ってやった。
・・返り血が数的飛んできて肌を焦がしたが気にもならない・・ノヴァにした事を思えば!!!
それよりも!
「ノヴァ・・ノヴァ!!」
慎重に仰向けにして呼んでも返事はなく、呼吸も浅い!!
傷は：内臓まで・・万能薬の試作品はある・・でも・・ホイミを使わないと今のノヴァは
「私の役立たず!!なんで魔法が使えないの!!!」
初めて・・魔法が使えない自分を呪った。そんなことしても・・ノヴァは助けられないのに・・たった一人の親友を・・助けられないなんて・・。
(無茶しやがって!!無事でいてくれよ坊や!!)
ティファがマトリフに助けを求めるように精霊達に言った後、マトリフも案外近くにいたのですぐに伝えられ、マトリフはトベルーラで森の上からノヴァを必死に探しなかなか見つからないと焦っていると一私の役立たず!!なんで魔法が使えないの!!!(あの声は!!)
聞き覚えのある少女の悲痛な叫びが聞こえ、急いで行ってみれば、そこには一月前に会った少女と・・倒れ伏したノヴァの姿があった!!
少女は自分に気が付かず、ノヴァの腹部を手で押さえ必死に出血を抑えようとしている。
「嬢ちゃん!!」
声をかけて走って近づけば少女はパット顔を上げる!
「おじ・・さん・・ノヴァ・・傷が・・内臓まで・・」
泣きながら・・それでも必死に状況を教えようとしてくれている。
「分かった、見せてみろ。」
ーネイーをどかして傷を見てみれば確かに内臓まで傷が達してい

る。
・・この内臓までの傷では、果たしてベホマであっても効くかどうか・・・。
新薬研究前までならば何の疑問もなく回復魔法で終わりと思っていたが、十日前に山の鉱山で落石事故があり、実験の為リンガイアに居合わせた自分も救出活動に加わったが、体内深くまで岩に貫かれ傷ついたものはベホイミをかけ傷をふさいだが救えなかった。
遺体を解剖して調べてみれば、ホイミ系は内臓の奥深くまでは届いておらず出血が原因で亡くなっていたのだ。
今のノヴァも同じ・・どうすれば「おじさん!!これ!テランの回復の泉使った薬!!!
試薬品だけど、体内重傷していたあばれザルたすけられたの・・だからノヴァにも!!」
「・・駄目だ・・」
「どうして⁉あの時・・」
「そいつは人の子には濃すぎる!!水か・・せめて酒でも・・。」
(・・濃い・・液体ならなんでも?なら・・)ざしゅ!!
「おい!何を・・」
ネイが腰にしていたポーチから薬瓶を出したが使えないというと・・瓶のふたを開けて地面に置き・・いきなり右腕を斬って・・薬の中に入れ始めた!!
「もういい!!ベホイミ!!」―パー!!―少女の腕を治し、
「ベホマ!!」ノヴァには上級回復魔法を全力出掛ける・・死なせてたまるか!!
傷口に直接薬かけたのに・・ノヴァ・・呻き声一つ立てない・・死んじゃヤダ!!ノヴァ!!
もっと一緒にいたい!!笑い合ってお喋りして・・大きくなって勇者になるんでしょ!!
「起きてよバカノヴァ!!!!」・・戻って・・来てよ。
「バ・・カ・・ヒッ・・ク・・ノ・・ヴァ・・」
手を握りしめて・・どのくらい泣いたか分からない頃―ピクリ―

「・・ノヴァ？」
握りしめていたノヴァの右手が微かに動いた・・
「バ・・カは・・酷い・・よ？うる・・さくて・・おき・・たよ」
・・なんか暢気言ってる・・。
「バカだよ・・それも大馬鹿!!なんで逃げてる時!!ヒャド唱えなかったの⁉
唱えていれば！ノヴァになら皆マヒャドくらいのは無理でも、中級氷系呪文並みの力貸してくれたかもしんないのに!!」
ノヴァは本当に精霊・・それも氷系の精霊達に愛されている。
術者の能力以上の力を貸すのはルール違反らしいが、ノヴァが窮地に陥ればもしかしたら
・・その考えを裏付けるように、精霊達も同様な事を言って怒ってる。
「死にたくなかったら頭使いなさいよ!!使えるもの何でも使って・・次は私とマトリフおじさんがいるとは限んないんだからね!!!」「・・ごめん・・」
ノヴァは素直に謝ってきたけど・・私の怒りは半分八つ当たりだ。
私だって島の外で何があるか分かんないのに力を信してホイミスライムの一人もつけずに出歩いて・・大切な親友を失いかけた。マトリフさんが居てくれたからこそ助けられた。
・・強くなりたい・・どんな状況でも大切な人達をきちんと守れるように・・強くなる!!
「嬢ちゃんもういいだろ。坊やの傷は治ったが血が出過ぎて弱ってるんだ。勘弁してやれ。」
「・・うん・・」
「城に行く。ゆっくりと飛ぶから俺の背に捕まりな。」
「分かった・・」
ノヴァを抱えてかがんだマトリフさんの背に負ぶさり、トベルーラで城に戻った。
・・その前にメラゾーマでバジリスクの死骸を燃やしてたけど・・なんでだろ？

城内に入ってバウスンさんが血相変えて何か言ってるけど・・
「・・ちゃん・・」・何か
「嬢ちゃん!!」
「・・おじさん・・なに?」「お前も少し休め。」
「・・ノヴァは?」
「通常の眠りについた。お前も寝ろ。」
「そう・・」
もう・・いいんだ。
私も少し・・・やす・・もう・・
(ようやく休んだか)
気絶するように眠りについた少女を抱え上げ、ノヴァの血で衣服が血塗れになっているため城の侍女に子供服だけを持ってこさせベッドのある部屋に連れ込み、衣服と水の入った洗面器と手ぬぐいを受け取ると後は自分で面倒を見ることにした。
ベッドに横たえ衣服を着せ替え、頭部の生え際にできた極小の火傷をホイミで治し落ち着いた所で持ってきた鋼の剣を見れば、
「やっぱり・・あのバシリスク達を―殺した―のは嬢ちゃんか・・」
倒したのではない!!はっきりといえばあれは惨殺をしたのだ!怒りに任せて・・。
先の大戦時でも他でも・・いやというほど死体を見てきた。そして自分も多くのモンスターや魔族たちを・・それでも・・あんな死骸は初めて見た!!
切り口は見事で・・斬った者の怒気が切り口に残り伝わる死骸なぞ・・ありえない!!
こんな小さな・・まだ十にも満たない少女が・・・。
バシリスクは冒険者にとっても連携されてこられれば厄介な敵となり、初心者ならば下手をすれば命を落とすほどのモンスターなのに、傷は僅かな火傷で傷とも呼べないもので、
調べた剣にも血は薄っすらとしかついておらず、素人目には分からない程で・・この娘は達人と呼べるほどの腕を持っている事になる。知識だけではなく、力も・・並外れているという言葉だけでは片づけ

られない・・この国の兵士があの死骸を見て、万が一この娘の仕業と分かれば、間違いなく少女は化け物呼ばわりをされ下手をしたら魔物として処断されよう。
　そうならない様に死骸を灰にしたのだが。
「・・お前さんは一体何なんだよ・・」ぼやきたくなる。
　それでも、この娘を信じてみていい気がする。
　知識・力がとんでもなくても、友の為にぼろ泣きをしながら必死に助けようとし、必要であれば己の血を使う事も厭わないあの姿を見れば。・・何の根拠もなく、甘くなったものだと自分自身に呆れるが。
　毛布を掛け、ゆっくりと寝かすために部屋を後にし、バウスンにはノヴァは自分が助けたと説明をし、夕刻目を覚ましたノヴァには―本当の事―を告げた。
　話を聞いたノヴァは驚いて目を大きく開き、様々な事を考えた後マトリフの顔を見上げ、
「僕は勇者になります!!今度は僕が大切な人達を守れる強き勇者に必ずなります!!」
　少年の漠然とした夢は一人の少女によって明確な目的となり、真剣な表情でマトリフに誓いを立てた。

星空の下の誓い

ぶっ倒れてから目が覚めたら夕方で、なんとノヴァのおうちに泊まる事になった。
近頃は一泊の外泊許可が出ているので今回は野宿するつもりで出てきたからいいんだけどマトリフさんも一緒だったりする。
「ネイ、これ食べて！」
「遠慮せずに食べなさい。」
「痩せた女はもてねぞ嬢ちゃん。」
男三人に構いつけられて沢山食べても勧めてくるのは私が痩せすぎて見えるらしいけど仕方ない。
日々修行でカロリー消費をしているので肉はそこそこで筋肉になっていくので着痩せしているので細っこく見えてしまうだけだけど、料理がおいしいので文句なく沢山食べよう。
「ネイには心配をかけたが、見ての通りノヴァはもう大丈夫だ。ノヴァも沢山食べてネイを安心させてあげなさい。」
「はい、父さん。」
どうやらバウスンさんは私が気絶するように眠ったのはノヴァの事が心配し過ぎての事だと思っているらしい。
まあ心配はしたけど疲れが原因なんだけど・・バジリスク達を倒したのはマトリフさんという事になっているようで、バウスンさんが話の端々でマトリフさんに何度もお礼を言ってる。
・・マトリフさんは本当の事知ってるはずなのに言わなかったか。
でも当然だ。冒険者でも何でもない小さな私がバジリスクの群れ狩りつくしましたと言って誰が信じるんだろう。
信じられたとしても私が魔物並みの扱い受けかねないから黙ってくれたのかな？
だとしたら優しい人だ。
沢山の料理に優しい給仕のおばちゃん達とノヴァ達で楽しい夕食会になったのはマトリフさんの優しさのお陰。
皆本当の事を知らないで私にも優しくしてくれる・・怖がらないで。

「ネイ!デザート焼き菓子だって!!」
「本当!あれ大好き!!」
皆でお腹いっぱい食べて、マトリフさんも楽しそうにお酒飲みながら取り留めない話を沢山して、夕食会はお開きになって、客間の寝室に案内されて就寝する事になった。
寝間着を持ってきてないので下着一枚で寝ようかな～と考えてたら扉をノックされ、開けてみたらさっき給仕をしてくれたおばちゃんがノヴァの小さくなった寝間着を貸しに来てくれた。
「女の子が普段着で寝るもんじゃないからね。バウスン様には許可をいただいているから安心してお着替え。」
「ありがとうございます。・・でも、どうしてバウスン様に許可を?」
古着とはいえ館の主の息子の物を勝手に貸し出せないのは分かるけど、普通は主人ではなくそういった館内での日常を取り仕切る奥方が・・しまった・・。
そういえば奥方らしき人を全く見かけてない・・ここに連れてこられた時も夕食時にも。
考えてみればノヴァからお父さんの話を沢山聞いても、お母さんの話は一度もない!
家族愛の強いノヴァが話さないという事は・・
「ごめんなさい・・立ち入った事を言ってしまって。」
既に亡くなって居ないという事だ。
―ポンポン―よそ様の悲しい事情に踏み入った事を申し訳ないと謝ったら、おばちゃんが下げた私の頭を優しくたたいて撫ぜ始めた。
「いいんだよ。子供がそんな顔をするんじゃないよ。人はね、いつか亡くなるのは誰にも止められない。あんたが気に病んだって仕方がない事さね。」
「・・でも・・」
「・・仕方がないね～。あんたはどうやら優しすぎるようだ。
奥様は確かにお亡くなりになられた。でもね、その代わりにノヴァ様をこの世に残されたんだよ。奥様は大切な御子をお産みになられて天国に迎えられてる・・だからあんたが悲しんだら、天国の奥様が

坊ちゃんの友達を悲しませてしまったと上でやきもきしてしまうよ。」
「・・優しい奥方様だったんですね。」
「そうだよ。あんたと同じ優しいお方だった。」
・・優しい・・私が・・。
「さ、もう着替えて寝な・・って坊ちゃん。」
おばちゃんと話し込んでたらノヴァが来た。
「坊ちゃんはやめてよナタリー。」
「私からしたら坊ちゃんですよ。」
どうやらこのおばちゃんの名前はナタリーさんというらしい。
普段なら礼儀として名乗りあうけど偽名言うの嫌でスルーしたけど分かってよかった。
「ナタリーさん、寝間着ありがとうございます。」
きちんとお礼が出来た。
「ノヴァも寝間着借りるね。」
「いいよ。それよりもさ、部屋に入っていい？話があるんだけど。」
「何？べつにいい・・」
「いけませんよ坊ちゃん!!」
「「ナタリー・さん？」」
いいと言おうとしたらナタリーさんがおっかない顔して止めるので、ノヴァとハモって、名前呼んでしまった。
「いいですか坊ちゃん！それとお嬢ちゃんも！ご家族でない男女が同じ寝室で二人っきりで夜遅くまでいるのは好ましくはありません！覚えておいてくださいね。」
成る程、男女七つにしてってやつか。貴族の館に仕えてるナタリーさんが正しい。
「ノヴァ、お話ここじゃダメ？」
「う・・ん、ナタリー部屋に入らないですぐ済ますから、ちょっと外れてほしい。」
「かしこまりました坊ちゃん。おやすみなさいお嬢ちゃん。」
「おやすみなさいナタリーさん。」

ナタリーさんが居なくなって少ししてから話が始まった。
「ティファ、心配かけてご免ね。」
本当の私の名前を呼んでノヴァに謝られた。
「ううん、ノヴァ助かったんだしもういいよ。そういえば助けた精霊は？」
「無事だった。今他の子達と僕の部屋で休んでる。」
「そっか良かった。守れてえよかったね、ノヴァ。」
ノヴァが命懸けで助けた子が無事でホッとする。
命かけて守れなかったじゃノヴァの心に傷を負いかねないことだけど、そうならなくてよかった。
「・・ティファの・・おかげだよ。」
「・・ノヴァ？」
「ティファ、僕強くなる!!今度は僕が君を守る!!大好きな人達も!!!」
「・・ノヴァ・・」
「おやすみなさいティファ。」
「あ!ちょ・・。」
言いたい事だけを言ってノヴァは行ってしまった。多分ナタリーさんとの約束を守るために。
・・ノヴァ・・なんであんな事を。助けたのは・・マトリフさんだって事になっているはずなのに。
着替えてベットに入っても眠れない。
ナタリーさんとノヴァの言った事が気になって。
優しすぎるって・・数年後の大惨事を知っていても黙ってる私は優しくない。
ナタリーさんの思い違いだ。
それに・・ノヴァの言った事はまるで・・それに・・本当の事を知っているマトリフさんは私の事をどう思ったか・・
「ああ!もう!!」
眠れない・・少し外行こう。
「・・綺麗だ～。」
中庭に出てみれば雲一つない星空が瞬いていた。

今は初夏で、暑くも寒くもなく、夏の夜空は星が降ってきそうで心のざわめきをかき消してしまうほど美しい。
あまりにも綺麗で、ガルーダで空中散歩したいと思ってたら不意をつかれた。
「黙って帰るのは礼儀知らずだぞ。」
・・マトリフさんが近づいてきたのに全く気が付かずに声を掛けられてようやく気が付いた。
「おじさん、私寝間着着てるんだよ。これで帰る人いないよ。」
「そうか・・。」
「うん・・。」
そういったきり・・何となしに二人で星を見始めたけど・・
「あのさ・・おじさん。」
聞くの怖いけどきちんと聞こう。
(何だ?俺を警戒でもしてんのか・・いきなりおっかない顔になって。力ばらすなか?)
中庭に出たのを見かけて後追いかけてみれば、ボケっと星空を見上げていたので声をかけてみれば、びっくりした顔を向けてきた子供が突然険しい顔になって・・なにを・・。
「おじさん・・私の事怖くないの?」
「・・はぁ⁉・・なんでだよ・・」
「だって・・おじさんバラバラになったバシリスク達見たでしょ!!・・だから・・。」
(ああ、そういう事か。こいつは俺を警戒してるんじゃねえ。俺に怖がられる事を怯えてるのか・・)
なら・・
「俺を舐めるなよ嬢ちゃん。」
頭に手を置いてぐしゃぐしゃにかき回してマトリフは答える。
力が強くても、心はまだ弱そうなこの子供の心を守るために。
「俺くらいの年になりゃもっと凄え事を山ほど見て来てんだよ。あんな事屁でもねえよ。
いちいち怖がるかよ。お前さんは立派に坊やを守ったんだ。誇れ

！」
　果たして自分の言った言葉が心の中まで届いたのか、険しい顔がうって変わってボロボロと大粒の涙をこぼして泣き始める。
　やはりどんなにすごくてもまだこいつは子供・・大人が守るべき幼子だ。
　私はボロボロと泣き始めた。でもノヴァを守れなかった無力感で泣いた時とは全く違う。
　何故か・・安心をした・・この力を持ったまま・・皆の側にいていいと・・許された気がして。
「私・・このままで・・いいの？」
　声に出した確かめたい!!
「ああ。」
「気味・・悪くないの？」
　ぐしゃぐしゃ泣きながら馬鹿みたいに何度も・・
「そういってんだろ。」
　言い方はぶっきらぼうでも、言葉に温もりを感じる。温かくて、余計に泣ける。
　気が付けば・・マトリフさんに抱き上げられてた。
「嬢ちゃん。」
　耳元で声がする。とても古くて深みのある魔法のような声が。
「確かにこの世界には嬢ちゃんの力を知って怖がる奴も沢山いる。」はっきりと言うな。
「うん・・。」
　分かってる。いつかダイ兄もおなじめに・・。
「けどな・・。」
「なに？」
「少なくとも俺と―ノヴァ―はお前さんを怖がらねよ。」
「・・ノヴァ？」
「ああ、あいつには全部話した。」
「・・全部って・・どうして!!」
　話したって・・だから・・さっきノヴァあんな事を・・・。

「なんで話したの⁉もしノヴァが!!」
・・ノヴァが・・怖がったら・・。
「お前さんたちは友達なんだろ。」
「けど!!」
「なら何で友達を信じねえ!!」つ!!
「ノヴァは良い子だ。それにそんじょそこらの奴等よりも心が強い。全部話した後にあいつは強くなって今度は自分が守る側になるって言いきったぞ。お前を守るんだってな。」
十歳で城の騎士見習のノヴァならばバジリスクの強さを良く知っているはずだ。
それを倒したのが小さな親友だと分かっても、ノヴァは親友を怖がらずに守ると誓いを立てていたのだ。
「嬢ちゃん、この世の中は弱い奴らっばかりじゃねえ。坊やみてえに強い奴も沢山いる。
お前が思うよりも強くてしぶてえんだよ。お前さんが今までどんなでこの世界を見てきたのか俺は知らねえ。
けどな、お前さんが思う程には弱くも酷過ぎもしねえんだ、分かったか?」
いつの間に・・私はこの世界の人達を見下して・・勝手に憶病になってたんだろう・・。
力がついて・・知識が付いた分・・侮って・・勝手に怖がられるときめつけてしまって。
知らない人達には怖がられても別にいい、でも知って好きになった人達にはなんて・・それは世界中の人達を低く見積もっている最低な考えだ。
なんて・・愚かな考えなんだろう。はっきりといえば馬鹿だ。
ラ―ハルトに自分で言ったのに。―優しい人も沢山いるよ―と。
こんなんじゃああの人達にも友達にも顔向けできない奴になるところだった。
不思議な人だマトリフさんは。たった二言三言話しただけなのに、錆びついて汚れの付いた心を綺麗にしてもらえたのを感じる。

この古木のような老人は・・本当にすごい人だ。
痩せていて。中身はすっかりおじいちゃんで普段はちゃらんぽらんでちょっと女の人大好きで・・
なのに、大地に根差した大樹のような素晴らしい人だ。
そんな―素晴らしいおじさん―の首にしがみついてきちんと答える。
「この世界が大好きだよ。ノヴァもおじさんも・・今まで出会った人もみんな・・大好きだよ。」
「そうか。」
答えれば、優しく頭を撫ぜてくれる。答えを受け止めてくれるように何度も。
この力を使って知識フル活用して、大切な人たち守れるように突っ走る!!

前に進もう

星空の下で泣いた後、私はマトリフさんの事をおじさんと呼ぶことにしてとっても我儘なことを言った。
「一緒に寝よう。」
「嬢ちゃんが後十年育ったら考えてやる。」
「今がいいの！」
「何でだよ・・。」
「今一人で寝たくないから。」
「俺は安眠枕じゃね!!」
「ノヴァも一緒で!!」
「人の話聞きやがれ!!!」
我が儘にぶちぎれたマトリフさんに対して執念で勝って、ノヴァがぐっすり眠っているお部屋に忍び込んだ。
「なんで二人が居るの～!!!」
翌日ノヴァをとてつもなく驚かせた。
「二人が大好きだから一緒に寝たかったんだ～」
驚くノヴァと、怒り通り越して呆れ果てたマトリフさんに本音言ったら紅くなった二人が見られて大満足。
二人にはいろんな意味で泣かされたんだから、女の子を泣かせた責任は取ってもらった。
ノヴァも私もぐっすり眠れたのですんごく元気で、反対にマトリフさんが超不機嫌。
「なんで俺が子守なんぞ・・」
「ノヴァジャムとって～。」
「はい。」
「ありがと、バターいる？」
「使う～。」
「まるで兄妹のようだな～。」
私とノヴァにやり取り見ててバウスンさんがニコニコしてる。
「・・子犬が二匹の間違いだろ・・。」

おじさんまだご機嫌斜めだ。
朝食も終わってお暇しようとしたら、
「嫌だよネイ!もっと一緒にいたい!!」
ノヴァが駄々をこねてきた・・珍しいけどもね～。
「もう行くね。やりたい事があるからしばらくはリンガイアにもこれないけど・・」
「何でさ!!」
・・ノヴァ怒って落ち込んじゃった。
でもカールにも細工したいし、お宝洞窟でお金稼いで秘密基地作りも進めたい・・やる事てんこ盛りだ。
それでもお友達は大切だから。
「ノヴァ、鳩さんで連絡取ろうよ。」
「・・鳩?」
「伝書バトって言って、どこから飛ばしても私やノヴァに届くんだよでもこれ持ってて、おじさんも。」
「・・こいつは何だ嬢ちゃん。」
二人に紅い石の根付けを渡しす。
「これはねある特殊な魔力を放っていて、精霊だけが感知できるんだよ。それぞれ魔力の種類が違うからそこに向かって精霊さんが鳩と共に二人の所にたどり着いてくれるんだよ。
ノヴァにいるみたいに私にも精霊のお友達がいるんだよ。」
式鳩はまだ未完成だから友達の精霊に伝書バトフォローしてもらっている。
紅い石機能は本物で以前ロモスのお宝洞窟でゲットして、使い道無いと思ってたのが役に立った。
「友情の証だよ!」
「分かった!!」
「受け取ってやるよ。」
ノヴァは素直に、おじさんんはひねくれて受け取ってくれた。
「ネイの精霊のお友達は?」
「鳩の時のお楽しみだよノヴァ。」

「そっか。」
「うん、そろそろ行く前に・・ねえおじさん。」
「どした嬢ちゃん。」
「昨日ノヴァにお薬使おうとして、何であのまんまじゃ使えないってわかったの？」
　成分確かめたわけでもないのに一発で分かったのが不思議だと聞いてみたら
「色だよ。」
「・・え⁉」
「俺が配合実験して大丈夫そうだった色より黄みがかってたから分かったんだよ。」
　・・あの切羽詰まった状況で・・一瞬で冷静に薬見て
「ふふふ・・あっはははは！。」
　このおじさんほんと凄い!!一生かかっても勝てる気しない。これぞ大魔導士様だ！
　お腹がよじれるほど笑ったらバウンスさんとノヴァがぽかんとしてるけど、おじさんは優しい顔で微笑んで黙って頭を撫ぜてくれる。
　多分今の私の心の中を分かってくれて・・・・敵わないな～。
　おじさんに頭撫ぜられると気持ちいい～。これも何気にあの魔法なのかな？
「じゃあね～。」
　別れの挨拶をして思いっきり駆け出してリンガイアを後にした。

　リンガイアを出てからの四年半はあっというまだった。
　破魔の石をいつも通りに撒きながら、ロモス・パプニカ・リンガイア同様城の中にお邪魔して石置きしながら、ノヴァとおじさんとの共同研究をきちんと続けた。
「こっちで面白いホイミの掛け方が・・」
「マトリフ様が薬の火入れを考案して・・」
「面白い回復薬のみ見つけたぞ。栽培して・・」ｅｔｃ.
　少しづつ進んでいるが大戦までに間に合うかと思ったが・・どっこ

い・・おじさん凄い人に手伝わせたらしい・・・。
「ちょっとマトリフ・・。」
「なんだよ。」
「この凄い研究何処で・・貴方が考案をしたのですか・・⁉」
「・・んな事どうでもいいだろ。」
「しかし・・」
「いいからお前さんも知恵を出せアバン!!こいつはもしかしたら・・」
「分かりました!!全力を尽くしましょう!!!」
研究に行き詰ったマトリフはアバンを駆り出し、―とある一言で―やる気を出したアバンの知恵によって―内臓系回復薬系万能薬―はティファがリンガイアを出た半年後に完成をして、ティファをとても驚かせた。
―後年ティファはダイとポップの三人でロモスとネイル村を訪れた時にもっと驚くことが待っているが、未来のお話になる―
カールに細工をしている時に、テランとの国境の森に、手ごろの広さの森を発見した。
しかもお湯が沸き出て温度は少し熱めだけど超優良物件!!
なので早速目くらましを施した。式で岩を作ってふさがれた崖っぽく。
中に煮炊き用のかまど三基と、ベッドを二つと洋服入れのタンス持ち込んで少しずつ内装をして、五か月後には大改造終了して秘密基地の完成だ。
お宝ゲットしたらマジックリングに入れて専用棚に中身書いて保管して、薬草棚も作った。
どう乾燥させれば効能を損なわずに長持ちさせられるか、組み合わせによっては毒になるものも判明をして研究本も書いて保管している。
おじさんたちとの鳩のやり取りはこの部屋でしている、正に秘密基地だ。
少しずつ大戦の事を進めながらも日常も大切にしている。
「待ってよダイ兄～!」

「遅いよティファ～。」
「ピ～。」
大きくなるにつれて、ダイ兄の筋肉がついて足も速くなり、かけっこで負けるようになった。
スタミナは互角なのにな～・・ちなみに魔法の方はさっぱり駄目。
「俺勇者になる!!」
十歳の時にとうとう勇者になる!宣言をじいちゃんにした。
「こりゃダイ!!」
当然魔法使いに育てていたじいちゃんは反対だけど。
「いいんじゃない」
私は大賛成。寧ろなってください。
「でもじいちゃんの気持ちも分かってあげてね。それに勇者になっても呪文は大事よ。」
「・・ティファまで～。」
「だからゆっくり覚えよう。それでいいよねじいちゃん。」
「ティファはダイに甘いの～・・呪文を大切にしておくれダイ。」
「うん!!分かった。」
二人が納得いく提案をして、その後のダイ兄の偽勇者とロモスへの冒険と、レオナ姫編は
無事クリアーしたっぽい。
意識的にその二つ避けたのでじいちゃんから話を聞いて分かった・・ちなみに兄も説明してくれたけどよく分かんなかったが無事に終わって良かったです。
どちらも私の事話す暇なかったようだ。デルムリン島には鬼面導士と男の子のみで認識されただろう。私情報は少なくていい。
楽しい日々を過ごし・・ある春の青空が突如黒雲に覆われた・・大戦の日が訪れた!!

大戦初日は大忙し!!

【ティファよ!】『とうとう開戦じゃ。』［気を付けてね～］・・「はい。」

三神様の知らせで開戦を知ってやる気十分!!・・の筈が、人の神様のアンニュイ発言に脱力した。

でも大戦の長い日々を思えば力入れ過ぎは禁物か。

デルムリン島まで邪気が来るのにはタイムラグがあるので世界各国を式見発動で様子見をする。

パプニカ王国

「敵が押し寄せてきたぞ!」

「「夢のお告げの通りだ!!」

「あれはやはり神のお告げであった。」

悪夢を見ての一年!!耐えに耐えたうっぷんは・・

「ガイコツ・ゾンビども!!こいつを喰らえ!!」

聖水に無理やり油を混ぜた聖油を樽ごと投擲機で投げつけ「放てー!!」

メラ、メラミの魔法から、兵士の火矢で敵の陣形に打ち込み白兵戦を阻止している。

数は地底魔城から後から後から湧いてくる。

防衛線を一部でも食い破られれば後は雪崩れ込まれるのは必定なので遠距離攻撃に徹する!

兵士と騎士は戦い、一部は住民を逃がし・・近隣モンスターは呼応することなく魔王軍から逃げている。

前回の大戦では魔王軍と共に戦っていたのだが、今回はその魔王軍に怯えて逃げまどう。

破魔の石の効果がいかんなく発揮をされている結果だ。

今世界各地で暴れているのは生粋の魔界のモンスター達のみで、地上での現地調達の目論見が、

あえなく潰えた瞬間だ。

王国側よりの猛攻撃と、モンスター達の件で苛立った鎧を纏ったこの一団の軍団長ヒュンケルは激おこだ。

「たかが人間の攻撃如きが片腹痛いわ!!」自ら打って出て防衛線突破を試みてるけど甘いのだよ。
「いたぞ！隊長格だ!!」
「あの鎧には魔法は通じん!!魔法隊下がり！投擲隊前え!!」
「なん!!」ヒュンケルは驚き、出鼻をくじかれた。
たかが人の・・それも平和ボケした国を落とすのは訳が無いと・・父の敵アバンを打つ前の片手間位に考えていたことが、苦戦をし・・しかも魔装の秘密を知られていようとは！
「外から岩石及び爆弾攻撃じゃ!!」
「はい！バダックさん!!」
動きが一瞬止まったヒュンケルに対して兵站隊長のバダックが何故か指揮を執っている。
本来ならば補給が目的の兵站隊長がこの指揮を執る理由は至極当然。
今回のパプニカの防衛アイテム監修から作成は全てバダックの仕事。
「必ず火をつけて投げるのじゃ！目標及び周辺にもたっぷりと喰らわせて衝撃をお見舞いしてやれ!!」
鎧には魔法が通じないと二月前に夢の啓示を受けた王国は、パプニカの困った発明王バダックに白羽の矢を立てた。
初期のころは何の呪いかと呪術師まで城に呼んで慌てふためいたが、夢より半年が経った頃より、地底魔城より複数の魔族の目撃報告が上がり、王国側は夢を悪夢としてではなく神よりの啓示かと考え始めた。
備えるだけならば害はなく、やって損にならない範囲で用意をし、バダックには鎧対策の命が下った。
人の好い老人で各部署に顔が効き人望もそこそこあるのだが、奇天烈発明で時折爆発騒ぎを起こしてしまう難ありだが今はパプニカの英雄殿！
「隊長格の奴うごかなくなったぞ!!」
「爆弾衝撃作戦成功だ!!」

「残りは聖油作戦で散り散りにして投擲で侵攻ルートをつぶせ！」
「防ぐぞ!!」奇天烈発明只今大活躍。
魔法が効かない・・剣の腕も達人以上との啓示をもらい、バダックが導き出した答えが爆弾の衝撃で気絶をさせて捕えてしまおうだ。
鎧をはぎ、手足の腱を斬り、この軍の目的を尋問しようとも目論んだのだが、向こうの配下達に助け出されてそれはならなかった。
それでも先の大戦のように、訳の分からないうちに多数の死傷者が出てきたときを思えば・・
「守り通し!!勝つぞ!!!」パプニカの兵達の指揮は落ちずに防衛作戦続行である。

ロモス王国

ロモスの魔の森よりクロコダイン率いる百獣軍団が突進するも「打ち方よーい！」
「放て!!」
ベンガーナの最新式の石火矢五基に、魔法団の攻撃に、兵達よりの大量の矢に怯んだモンスター達は騎士の突撃の槍に掛かり、ロモス側は互角の戦いを展開している。
「おのれー!!」連攻撃と石火矢の攻撃にクロコダインは怒りに咆えた。
「一対一で戦う武人はおらんのか!!」・・そんな者、今の戦局で居るわけがない!!
国家存亡の危機なのだから絶対死守もんだ!!
勝ってなんぼ！負ければ死の状況で決闘してられるか!!武人気どんなら大群で攻めてくんな!!
モンスター達を倒しつつ、兵士達はクロコダインに心の中で怒鳴り返して目の前の敵に向かっていった。

リンガイア王国

「将軍！夢よりの情報よりも・・その・・軍の規模が・・。」
「言うなホルス！夢と違うとはいえこの目の前の軍も十分脅威に違いはない!!全力を尽くすぞ!!」
「いいですか！バラバラに戦っては危険です！必ず集団戦法を持続させて戦います!!」

「はい!!」「いざとなったら僕が氷の壁で敵を分断します!!—主力—のいない今の内に敵を叩きましょう!!」
「はい!!」
「行きましょう皆さん!!王国と王と民たちの為に!!!」
作戦本部側の城内では—敵の規模の小ささ—と、まとめる隊長格が見当たらないことに戸惑い、
前線の騎士団長で、最初の突撃部隊を指揮しているノヴァは反対に今が好機と兵達に檄を飛ばして士気を上げて打って出た。
—夢の内容—は凄まじいドラゴンの群れと、隊長と思しきものが三人の恐るべき配下に命じてこのリンガイアを蹂躙するものであった。
逃げる案も出されたが、騎士の国リンガイアが一戦もせずに逃げるわけにはいかないとの
武闘派が穏健派を退けて、逃げる用意もしつつ一戦交えることになった。
(・・馬鹿なことを・・)全軍を統括するバウスンは将軍の地位であっても戦を回避して被害を抑え再起に一票投じた一人だ。
夢のお告げはリンガイアにては割と早い段階で未来に確実に起こる事と判断をされた。
この世界には高名な占い師はナバラ以外にもおり、この夢は予言であると断言をした。
不作から天候、あらゆる災難を予見し続けてきた占い師の言は重く、城内全ての者が見ることが決め手となり、ならばどのような対策をとるかが議論をされ今に至る。
夢の内容がすべて本当であるのならば人間がドラゴンの大群に勝てるわけもなし。
・・バウスンはそう考えて反対をしたのだが否決をされ、のみならずリンガイア史上最年少の騎士団長となったノヴァにも突撃部隊隊長の命が下され心中は怒りで燃えた。
だが愛息子は国の為にとその命を微笑んで受けたのだ・・もはや止められない。
もしも息子に何かあればと考えて大戦の日を迎えてみれば・・ドラ

ゴンはおらず爬虫類系の獣人族と飛行モンスターのみ。
数はいるが・・この日の為にドラゴンを想定して訓練をしてきた者達からすればどうにかできる範囲内だ!!
主戦場ではノヴァを先頭にした部隊が戦闘を展開し、戦場より十キロ以上離れた山中にて
―主戦力―達は精霊の大群に足止めを喰らっていた。
「そこをどかぬか精霊達よ!」
「―退く訳が無かろう!何を血迷ったか当代の竜の騎士よ!!」
バランが精霊達に退くように怒鳴っても精霊達は一歩も引かない。
「人は存在に値せぬ!!滅ぼして何が悪いか!害悪を討つこそ我が本分!!」
「―他の者はいざ知らず、彼の地には我が精霊の愛し子がおる!!通すわけにはいかぬ!!」
「・・氷の精達を司るそなたが人に誑かされたか―ハイ・キング―!!」
誰だか知らないがリンガイアの地に氷の精霊王の加護を受けし者がいる。
かつて自分も人間を愛したが・・本性を知って愛想はとうに尽き果てている!!
バランは氷の精霊王ハイ・キングと付き従う精霊達を苦々しく思うも攻撃できずに、配下の三人にも攻撃を控えるように徹底させて足止めを食っている。
いかに魔王軍に堕ちたとはいえ、自分は竜の騎士の誇りを捨てたつもりは毛頭ない!
人間以外を傷付けるわけにはいかず、退くように言っている。
いざとなれば闘気で吹き飛ばすが大戦に期日があるものではなく、気長にやる心積もりでいる。
三日は精霊達に譲歩しても、四日後には押し通る!!
(愛し子よ・・無事でいよ・・。)
バランと対峙しつつ、ハイ・キングはノヴァを案じる。・・よもや生きとし生きる者達の守護者がこのような大戦に加担しようとは・・世も末だと嘆きつつ。

この地の氷の精霊達が一人の男の児を守護するようにしていると聞いて自分も会ってみれば、
澄んだ瞳をした今時珍しい程魂が清らかな少年だった。
礼儀正しく、精霊の加護を申し入れても遠慮をして困っていた優しい少年を・・堕ちた竜の騎士なぞに討たせるものか!!この身が果てようとも!!!
リンガイアの滅亡は精霊達に愛されたノヴァを有していた事により回避をされた。

オーザム王国

「温い!!温いぜこんな攻撃!!!」
「・・この・・化け物が!!」
「ヒャ～ハッハ!!皆まとめて死んじまえ!!!メ・ラ・ゾ～マ・フィンガーフレアボムズ!!」
神の啓示が無いオーザム王国は完全に不意打ちを喰らい、ハドラーの生んだ禁呪体フレイザードに呆気なく滅ぼされた。
「けっ!!こんなもんかよ・・にしても王族どもはどこだ?さっさと捜すか。」
兵を殺し、城を落としたが肝心な王増が見当たらない。
これではハドラー様に叱られちまうと頭をかきつつ王族捜索に向かった。

・・なんだか、原作よりも・・でも・・ノヴァ頑張って!!今日から三日食い止めれば
軍は一度引くはずだから!!
父さんとリンガイアは予想だにもしない方向に転がってくれた。
まさかノヴァが精霊の愛し子認定されようとは・・そのおかげで氷の精霊王が竜の騎士の父さんを止めに言ってくれて助かった。
三国は夢を信じてくれた。
今日からはカールに超竜軍団の事を知らせて逃げてもらう!
リンガイアと違って邪魔する者は現れないから即殲滅が目に浮かぶ。絶対阻止もんだ!!

パプニカは今の所持ちそうで・・そしたらバルジ島編無しかな？
ここまで大戦初日が知識と違っているんだから、知識ゼロの積りでやっていくのみ!!
培った本物の知恵と観察力を駆使して私の好きな人達みんなを守るんだ!!
・・こっちもそろそろ邪気が来た。三・四時間のタイムラグのお陰で世界の様子が知れてよかった。
この島には破魔の石は置いてない。今から現れる人物に怪しがられたら困るからだ。
それに―勇者に家庭教師―の凄さがじいちゃんとダイ兄に伝わるのがあの―マホカトール―だ。
宣伝も兼ねてやってもらう。
でも暴れて怪我されても困るので、毒蛾のモンちゃんから眠り粉の鱗粉を採って眠らせて蔦で手足ふんじばって安全確保をする。
これは私のアリバイ工作も兼ねている。
一大事に何をと聞かれても、島の裏手にいて皆を止めていたと。
「ブモォ～!!!」「ギ・・キー!!!」
本格的に邪気が来て凶暴化が、考え事は後だ!!
「こらー!!」粉かけてふん縛っているところに「あたたたた～」・・何か変な奇声がもの凄い速さで近づいてくる。
一旦作業の手を止めて手近な茂みに隠れれば・・「ふぉあた～!!」
赤い詰襟服に真っ赤なブーツを履いた銀の髪を横ロールを二段にした黒ぶち眼鏡をかけた人が走り抜けてった。
先の勇者、アバン・デ・ジュニアールⅢ世がデルムリン島に上陸したか。

原作開始
一人多いですね～

大戦が始まる二日前。
アバンは今は一人だけの弟子のポップを連れて、ロモス王国の城に登城した。
宿泊施設にいきなりロモス王の使者がやってきた。
「勇者の家庭教師のアバン様ですね。」
「はい、そうです。」
先の大戦より十三年の時が経ち、どこに行こうともこの身分を通してほしいと各王室に、頼み、
今でも約束は守られている。
「我が王が是非お目に掛かり直接頼みたき事があるので、急ではありますがご足労願います。」
「分かりました。ポップ、貴方は留守番を・・」
「アバン様、そちらのお弟子さんも共にと王から仰せつかっております。」
「・・何故でしょう。」
宮廷は子どもが近寄ってもあまりいい影響はないというのが持論で、弟子にはなるべく権力の側に近づいてほしくはない。
ポップの心はまだ柔らかい。素直なのが美徳だが、あまり人を疑うことをせずまだまだ庇護の対象である。
自分と伝手を持ちたいという輩の奸計に搦めとられてはと思うのだが・・。
「分かりました。ポップ貴方も行きましょう。」
「はい！先生!!」
（素直な子ですね～。）
ポップの返事につい顔が緩んでしまう。
自国の王ではないにしろ王命には変わらない。
何よりも留守と言えば落ち込み、共にと言えば大喜びをするこの素

直な弟子が可愛くてたまらない。
ヒュンケルにもこの明るさの半分でもあったらと・・つい考えてしまう。
ついに見つけられなかった一番弟子を・・せめて今育てているこのお調子者で少し逃げ癖のある、
魔法の才に溢れた弟子をしっかり守り切ろう。
城内では自分から離れない様に言えばいい事で、それをきちんと守るのがポップだ。
修行もこの位素直にうけてくれればいのだが・・贅沢な悩みか。
そうして二人はロモス王の御前にやって来た。
「アバン殿、久しぶりじゃの～。」
「はい、お元気そうで何よりです。ロモス王。」
（あれ？先生と王様って知り合いなのか？・・先生ってすごい人なんだな～。）
ポップはアバン先生の事が大好きだ、家出して押し掛け弟子をするほどに・・。
最初は何度も家に帰りなさい言われても、石にかじりつく執念で認めて貰えて早一年。
魔法の才は飛びぬけているが、体術・座学は苦手で感覚で魔法を使うので時折惨事を引き起こしかけてしまう。
メラミを習得して使ってみればメラゾーマ並みの威力であわや火事になりかけた事もある。
体力に自信はなく、楽な事が好きだったりと不安定なポップをアバンはつい甘やかしてしまい、
可愛がる。世に言う駄目な子程というやつで。
だがポップの為にも厳しい事もする。
一番厳しく無茶だったのは、苦手なヒャド系習得の為にドラゴラムで竜化し、炎を吐いてヒャダルコを発動させたことだ。
そんな優しくてハチャメチャなアバン先生をポップは慕い、敬愛している。
「そちらが今のお弟子さんかの？」・・俺⁉

「はい、弟子のポップです。ポップ、王様にご挨拶をなさい。」
「・・はい。」マジかよ～なんて挨拶したらいいんだよ・・こうなったら！
「初めまして！アバン先生の弟子でポップと言います!!」言い方違うかもしんねえけど堂々とすりゃいいか。
「ほう、元気のいい子じゃの～。そなたは何を教わっておる。」
「魔法です。」
「ふーむ、得意呪文は何かの～。」
「火炎呪文です。」なんか質問多くね？
「では今それをこの城の中庭にて披露してもらえんかの？」
「え⁉」どうして!!
「王よ、座興の為に私の弟子を呼びつけたのですか？」あ、アバン先生助かった・・顔がちょい怒ってる。
「いやアバン殿それは違う。その答えはお弟子さんの力を見せてもらった後にする。」
「・・分かりました。ポップ。」
「・・先生・・」失敗したらどうすりゃいいんだ？先生に恥かかせて・・
「ポップ。」
「・・はい。」
「スマイルですよ～」―グニ～―
「せんせい・・ひったい・・顔伸ばしたら痛いですよ・・。」
「いつもと同じ、リラックスですよ。分かりましたか？」
「分かりました先生。」・・へへ・・先生凄いや。今ので緊張が解けちまった。やってやる!!
「先生！メラゾーマ思いっきりやっても・・」
「・・メラミくらいにしておきましょう。」
　中庭にはもう薪が詰まれ、人も大勢いる・・それでも先生が近くで見守っていてくれる。
　怖いもんは何も無え!!
　メラミでは薪に狙いを定め「メラミ!!」―ゴオウ!!―灰にしてやったぜ！

大勢の人達が拍手称賛の声を送ってくれてっけど、「ベリーグッドですよポップ。」
先生からの誉め言葉が一番だ。
「見事じゃ少年。アバン殿もお弟子さんを見世物のような真似をさせてすまんかった。」
「何かのっぴきならぬ理由がおありのようですね。」
「先ほどの所に移ってからしますかの・・・。」
「実はアバン殿に頼みたい事がある。新たに弟子を採ってほしい。
その相手もこちらで決めさせていただいている。
その子はまだ子供で今回の件は全く知らせておらぬが、力のある優しい子じゃ。
早急にそなたの弟子にして鍛えてほしい。」
「何故でしょう?優秀な方は宮廷には幾人もおりましょう。
将来を見込める子供ならばロモス国で育ててあげればよろしいのでは?」
このロモスは他の国ほどの高い国力はないにしろ、良き国である。
わざわざ自分とポップまでもが呼ばれた理由が分からない。
「いや・・先ほどのポップ君の火炎術を見て確信をしましたぞ!
回りくどい事はいわぬ。次代の勇者を速やかに育ててほしい!」
・・おかしい。
先の大戦から十三年経つが、旅回りで各王国を訪ね歩いてもどこにも不穏の影は見当たらず、
それどころか何故か聖なる気配が高まっているのを感じるほどだが。
―これはティファがばら撒いた破魔の石の聖結界効果があらわれ始めている結果だが、
アバンは知る由もない。―
今の世は自分の目から見れば平和そのものだが、王はまるで敵がすぐそこまで近づいているような口ぶりだ。
「お話を詳しくお聞きさせていただきます。」自分は何かを見落としていたのだろうか?

「アバン殿、これは途方もない話から始まるが信じていただくしかない。」
「分かりました。」
「夢じゃ。それもただの夢ではなく、毎夜城内の者全員が見る夢なのじゃ。」
ロモス王は真剣な眼差しで話を始めた。
始まりは今から一年ほど前からで、毎夜獣系モンスターが魔の森より溢れ人々を襲う夢。
初めのころはただの夢と放っておいたが、それは城内の大臣から下働きの者たちも見ているのが判明し、何かの呪いがかけられたのかと宮廷付きの占い師に調査を命じた結果、
この夢は正夢となり予知夢である可能性が高いとの卦が出た。
それから半年後不思議な出来事が起きた。
夢の内容が変わり始めたのだ。
黄金に輝く羽の付いたスライムを肩に乗せた黒髪の少年が襲ってくるモンスター達を次々に倒し、この国を救ってくれる夢を。
額にはこの国の秘宝―覇者の冠―を被っていた。
その夢を見て五日後に―偽勇者事件―が起きた。
黒い髪の青年ではあったが、黄金のスライムを連れてモンスター達で有名なデルムリン島にて
捕獲をしたと。
夢はこの青年と一行の事を指し、ロモスを救ってくれる希望の星になるのではと期待をして
覇者の冠を授けようとしたところに件の―少年―が空から降ってきた。
ゴールデンスライムをゴメちゃんと呼び、デルムリン島から大切な友を助けに来たと大声で告げ、
珍しいモンスター筒からカニのモンスターを出してスライムを閉じ込めた檻を開けさせ、自身も青年と戦い追い払い、力尽きたのを何と人を襲うモンスター達が少年を守るように囲いを作り、
何かを訴える眼差しで自分達を見るだけで襲ってはこなかった。

もしやして、モンスターは最早人を襲うものではなくなっているのだろうか？
だとすれば勇者を名乗ったでろりんの―凶暴なモンスター退治―の話は偽りであったのか。
ゴールデンスライムも少年の肩口に留まり、案じて涙を流しているのを見て、夢の少年はこの
子供を指していたのだろうかと考えに至った。
眠っている少年に覇者の冠を被せて島に送り届けたところ、使者たちは島で人語を話せる鬼面導士と出会い、今回の件の一部始終を聞いて戻ってきた。
礼儀正しく道理をきちんと弁えた人物で、少年の育ての親であり、眠っている少年を受け取り、
とてもホッとしていたと。
島の大切な家族と少年の身を案じていたのがとてもよく分かったとも報告を受けた。
島のモンスター達は全て凶暴化をしていない旨を含めて。
その日を境に城の者たちは夢の内容を真剣に討議をし、国家予算を侵食しない程の武具・石火矢を
購入し、もう一つの策が「アバン殿にその少年を育てていただく事です。」
本当はもっと早くに頼むはずが旅回りや洞窟修行で居場所を転々とするアバンを中々見つけられずに、今日まで来てしまったと、ロモス王は結んだ。
「以上が儂からの話のすべてじゃ。」・・・これは本当に・・・
「途方もないお話ですね。」
「・・やはり駄目かの・・・。」
「いえ、お引き受けさせていただきます。」
「何と!!」「先生⁉」
（マジかよ、先生こんな胡乱な話を受けちまった。）
ポップは驚き、ロモス王は心底喜び島の位置地図と―少年・ダイ―と―鬼面導士・ブラス―の

情報を羊皮紙に書かせて渡し、アバンは準備をして必要品を購入し、次の日鍛錬も込めてポップの手漕ぎ小舟で一路デルムリン島へと向かった。
「・・先生・・なんでこんな胡散臭い話引き受けちまったんですか？
王様の命令だからですか・・。」
「ポップ、私は常々貴方に自身の直感を信じなさいと言ってきましたね。」
「・・つまりあの変な話が本当になるって先生の勘が告げたんですか？」
「その通りですよ・・それにポップ・・先ほどから感じませんか？」
「・・何スカ・・」おや、表情が曇っていますね。
これはポップが分かっていても嫌な予感がするから答えたくないときの表情ですね。
「ポップ。」
「・・分かりましたよ！なんとなくですけど、嫌な気配が濃くなってきてるような・・。」
「その通りです島に急いだ方がよさそうです。」
ポップを促し島が目視でき始めたところに―ギャオウ!!――グワーッ!!―
島からモンスター達の咆哮と邪悪な気配がする!!
もう少し近づくと、「嫌だよ!!じいちゃん置いてけないよ!!!」少年の泣き声と、
「ダイ!!・・分かっておくれ・・儂の理性が持つうちに・・」
「嫌だ!!俺逃げないよ!!!ずっと一緒だってじいちゃん言ってたじゃないか!!」
あれがダイ君とブラスさんですね。
ブラスさんの方は狂暴化しかかっている。
「ポップ、島に着き次第すぐに結界を島全体に張ります。あなたはダイ君を頼みます。」「分かりました。」
島に近づき、「こりゃダイ!!」
「嫌だ！逃げない!!」

「その通りですよダイ君。」
「・・へ？」二人とも呆気にとられましたね。無理ない事ですが。
「説明は後程、今から聖結界をこの島に超特急で張ってきま・・す・・!!」
「あちょっと!!」
いきなり現れた赤ずくめの服の男が枝で何かを地面に書きながら猛烈な勢いで走っていき止めようとしたダイを「いいから、先生に任せておけよ。大丈夫だから。」
緑の服の少年に止められた・・この二人何と、ダイは？だらけだ。
おかしい・・島のモンスター達の大半が蔦で手足を縛られ眠っている・・一体誰が・・
今はそれよりも。
島に巨大な五芒星を描き終え出発地点の海岸に戻り「マホカトール!!」―カアー―
聖結界を張り終えれば当然ブラスの狂暴化は止まり、ダイを喜ばせ泣きながらブラスに抱き着いた。
家族を見捨てて逃げることなく終わり、ホッとしたのだろう。
その二人の頭上を黄金のスライムが飛んでニコニコしている。
王よりの情報に偽りはなく、―この二人―は間違いなく家族のようです。
アバンがほのぼのと見ていると直後に敵が来て、一体をポップがメラゾーマで、もう一体はダイが、
・・そして三人目は何故か・・どこからもなく現れたガルーダが連れ去ってしまった。
唖然と見ていると森から何かがこちらに来る気配がした。
この島のモンスターかとアバンは考えたが、―べちゃ！―「いった!!」・・人の女の子だった。
「ダイ兄！じいちゃん!!無事⁉大丈夫⁉」
・・王よりの情報は島に住んでいる人の子は男の子一人の筈が「・・一人・・多いですね・・」

ポップ、兄になる

「あたたたた～」・・原作通りあの人本当に奇声あげて爆速しながら結界づくりしてる。
知らない人が見たら変人決定な気もするが知っているので落ち着こう。
しばらくしたら緑の光が島を覆ったのが見えたので海岸の見える森の崖付近に移動した。
ダイ兄泣いてじいちゃんに抱き着いているところを見ると狂暴化は止まったか。
少しすれば―べしゃ！―「なんだ？」
世界を見回っている魔王軍の使い魔二人が島の結界にぶつかって、結界に気が付いた。
「生意気に結界なんぞ張りやがって！」
「人が見えるぞ。行きがけの駄賃に殺しちまえ!!」
・・そう言う事を言うやつは―メラゾーマ!!―ポップのメラゾーマで倒されてしまえ。
倒すどころか炭化してる・・凄い！じいちゃんもびっくりしてる。
けど―マホトーン―で呪文封印された辺りはまだまだ詰めが甘い。
「うおおおー!!」
お！ダイ兄銅の剣もって・・紋章が額に輝いて・・「たあああ!!」
海ごと敵真っ二つ！
かっこいい!!我が兄ながら惚れ惚れしちゃうし・・羨ましくもある。
父さんとの繋がりが色濃く受け継がれているようで・・でも、私は母さんの血を色濃く受け継いだし半々でちょうどいいか・・って「貴様らー!!」何で三人目が登場すんの!!
―ヒィー「ギシャー！」―人には聞こえない鳥笛でガルーダ呼んでお持ちいただく。
そのまま遠くで倒して、お腹壊さないなら食べてもいいからね～。
海岸見たら皆ポカンとしてる。
まあいいか、そろそろ登場しよう。でも・・ポップの事を何て呼べ

ばいいのか―べしゃ！―
「いった!!」考え事してたら無様にこけた・・超ハズイ!!かっこよく颯爽とした登場予定が・・。
「ティファ無事だったの⁉」
「どこに行っておった!!」
うう～二人とも顔がちょっとおっかない。心配かけた・・。
「じいちゃん!!」それを振り切るようにじいちゃんの肩をがっしり掴んだ。
「何ともないの⁉」私だってじいちゃん心配したんだ。結界が間に合わずに狂暴化したらどうしようと。
「・・そうじゃった、もう大丈夫じゃ。こちらの・・」
「大丈夫なら私行くね。」
「待ちなさい！どこへ・・」
「さっき私島の裏にいて、急にみんなの様子がおかしくなったから毒蛾のモンちゃんの
眠り粉振りまいて寝かせて手足縛ったの。
大丈夫なら蔦取らないと。いって・・あった！」・・また足もつれて転んじゃった・・。
先生が島にいる間は実力バレない様に神様にリミッター掛けてもらった。
普段通りの動きをしようとすれば転ぶけど、仕方がない。
（あの少女が・・俄かには信じられませんね・・しかしよく転ぶ子で心配です。）
「ポップ、あの子を手伝ってきてあげなさい。その間に私はダイ君達に詳しいお話をします。」
「分かりました。」
ポップが少女の後を追うのを見届け、「さて初めまして。私は・・」
アバンがダイたちに説明をしていいる時、ポップは森の中で少女を探す。
今まで入った中で一番の深い森で土地勘は全くなく、探すのに時間がかかるかと思いきや、

「痛い!!」・・転ぶ音と少女の声がセットで聞こえてきた・・相当なドジっ子か？
「よう。」転んでいる少女に気軽に声をかけてみれば「・・誰？」座ったまま小首をかしげてる。
　ふっくらとした頬に、煌めくような黒目・・中々の美少女で可愛い！
「さっき浜辺で会ってるぜ。俺はポップってんだ。お前は？」
「あ！ご免なさい名乗らずに名前聞いて・・私はティファです。」可愛いうえに礼儀正しい。
　あれ？「足首捻っちまったのか？」足をさすり始めてる。
「はい、あの・・あばれザルの仔を先に助けて、ポシェットに入れてたハサミ貸して一緒に蔦きり手伝ってもらって戻ろうとして・・」
「何度かこけて、今捻っちまったと・・」
「・・うん。」しゃあねえな～。
「ほれ。」ティファという子に背を向けてかがんでやる。
「・・あの？」
「負んぶだよ。早く背中に乗れ。浜辺で二人も待ってんぞ。」
「いいの？」
「お前軽そうだから大丈夫だよ。」こんな事したことない、照れ臭くなるから早くしてほしい。
「・・ありがとうポップさん。」
「・・さんはいらねえよ。」
「でも・・なら・・そうだ！ポップ兄さんは？」
「・・はっ？」
「私ダイ兄がいるから、兄さんって・・駄目かな？」
「・・本当に俺の事そう呼ぶつもりか？」
「うん、年上の人あんまり呼び捨てにしたくない。」
　・・どうすっかな・・俺ずっと一人っ子で、先生と旅をしてもちみっ子の面倒なんて見たことない。
　でも、兄妹のいる奴らがうらやましかった。兄・姉無理でも下の子が居たらと・・なら、　「さんはいらねえ。ポップ兄でいいよ。」

許してやろう。
「ホントに!!ありがとう!よろしくねポップ兄。」
こんな他愛もない事で大喜びしてくれてぎゅうぎゅうと首にかじりついて来てくれる。
可愛い顔はきっと満面の笑顔かな。可愛い妹分が出来てこちらこそ嬉しい。
ふふ、お兄ちゃんが増えて嬉しいな～。
ポップがポップ兄なら、ヒュンケルは・・ヒュン兄に何のかな・・今はいいか、それよりも、
「ねえ、ポップ兄と来た人誰?」話合わせられるように聞いておこう。
「ああ、あの人はアバン先生って言って凄い人だ!」
「先生で凄い人・・。」
「おう!なんたってな・・」
ポップ兄は先生の話を沢山してくれた。本当に心の底から大好きなのがよく分かるほど。
分かるほどにハドラーとの初戦が辛くなる。
でもアバン先生助けない。自立しないと先生も込みで負けるのが分かってるから。
心・・鬼にしないと。
「そんでお前の兄ちゃんのダイが次代の勇者に選ばれたんだよ・・俺としては世界の危機なんて半分以上疑ってたけど、今日がドンピシャとはね～。」
破魔の石の夢告げ効果はそこまできちんと機能してくれてたか。ポップ兄の言う通りギリギリ間に合ってくれてよかったよ。
「ポップ兄は先生から何を教わってるの?」
「俺は魔法使いだ。」
「凄いね!もしかして氷系・火炎系全部マスターしてるの!!ルーラとか・・」
「おい、落ち着けよ。俺だってまだ半人前だよ。氷系よりも火炎系の方が得意だけどな。」
「ああそれで・・ポップ兄何となく火の方が得意そう。」

「何でだよ。」
「うんと・・動きや喋り方が元気一杯で、燃え盛った炎みたいだからだよ。
じいちゃんがいつもダイ兄に言ってた。魔法はそれぞれ力の種類が全く違うけど、その力の源は自分の魔力であることには違いが無い。
火なら火・氷なら氷の・・それぞれの力のイメージをすればいいって。
それで呪文唱えてそれぞれの魔法を手助けしてくれる精霊さんの力を借りるんだって。」
「そっか・・ブラスさん鬼面導士だから呪文には詳しいんだ。」
「ポップ兄、じいちゃんの・・ダイ兄の名前も知ってるの？」
「おう、ここに来る前にこの件頼んできたロモスの王様が詳しく教えてくれたんよ。
・・そういや～、ティファの事なんも言ってなかったぞ？」
「ああ・・私ロモス行ってないからね・・」ついでに言えば兄が帰って来る時も島を留守にしてた。
この分だとパプニカも各王室を見張っていたであろう魔王軍も私に関しての情報はゼロか。
情報戦の初戦はこっちの勝ちかな。
「ふ～ん、そっか。まあいいや。」
・・ポップ兄って軽い。でもこの軽さが優しさも含んでるからチームのムードメイカーになれるんだ。
一般人なのにレオナ姫の事軽く姫さんって呼んで、皆の輪の中に入れてあげられる優しさをもう感じる。
ずかずかと相手の中に入り込まずに、いつの間にかするりと入ってくる不思議な魅力だ。
「話それたけどよ、俺ってそんなに氷系の魔法苦手に見えるか？」
「うん、なんか苦手だから反対に意識しすぎてさあやるぞって余計な力が入ってかえって失敗しそう。」
いつもリラックスしているノヴァとは正反対だ。

「う～ん・・そうかもしんね。ティファ、氷系のイメージってどんなのか分かるか？」
「え！・えっと・・意識を落ち着けて心の中に水面を思い浮かべて、水面に細波を起こすようなかんじ・・かな。」確かノヴァがそんな風に言ってた気がする。
「水面か・・火の勢いなら分かりやすいけど、湖面を・・。」
　ポップ兄もう頭の中で考えてる。魔法が大好きなんだな～。
「あとね。」
「まだなんかあんのか？」
「うん。」とても大切な事で、この後マトリフおじさんが教えてくれる事だけど、前倒ししよう。
「ティファね、魔法使いが一番大変だと思うの。」
「何でだ？一行の後方支援だろ？」
「そう。だからね、後ろから全体が見えるから作戦を立てて指示するんでしょ？」
「・・まあな。」
「だからね、勇者一行の中でも常に冷静でいなくちゃいけないって大変だと思うの。」
「・・そっか！・・そうだよな。魔法使いは支援だけじゃねえか・・。」
「うん！だから冷静さが必要な氷系の呪文でイメージトレーニングをしていけばセットで体得できるんじゃないかな？ポップ兄凄い人みたいだから、ティファは出来ると思うよ。
　」
（そうだよな、先生の話じゃ一行の魔法使いの役割言ってたっけか・・忘れてた。）
　ティファのお陰で先生の教えを思い出せた。
　・・自分はどうやら今日から兄弟子になるっぽい。
　今から覚えるか？ティファの言う冷静な魔法使いを目指すために。

生じる違和感

ポップ兄に負ぶってもらったまま浜辺に辿り着行け、じいちゃんが羊皮紙にサインしているところだった。
「じいちゃん、ダイ兄～。」
「ティファ・・どうしてその人に負んぶしてもらってるの？」
「慌てて戻ろうとしたらこけて足首捻ったらポップ兄が負んぶしてくれるって言ってくれたの。」
「・・ポップ兄？」
「そうだよダイ兄、この人ポップさんって言うんだけど、さんは嫌だからって言われたからって、それでポップ兄になったの。」
「そうなんだ。」「うん。」
「あっ、お前ダイって言ったな。」
「そうだけど・。」
「お前は俺の事はポップて呼べよ。」
「分かった。」
「おう。」（ポップ兄はティファだけに許可しよう！）
「ポップ・・兄ですか。」
げっ！先生・・いつの間にか人の背後に立ってた。
「・・何すか。」
「いえ、早速仲良くなった様なので良かったですね～。」
「・・どうも・・。」絶対内心楽しんでんだろ先生！
「ほら、ティファもう降りろ。」「は～い。」
自分が甘ったれなのは百も承知だが・・可愛い妹分くらい作ってもいいだろ!!
弟弟子もできたんだ・・「先生!!」
「どうしましたかポップ？」
「ダイにハードスペシャル特訓コースやるんすか？」
今世の中大混乱で、俺みたくちんたら修行してる余裕はねえ筈だ。
「その通りですが・・。」
ビンゴだぜ・・なら!!

「俺も一緒にやらせてもらえませんか！」
「・・ポップ？」
「兄弟子が・・弟弟子に負けるのは癪です・・。」
ポップは受ける理由を小声で真っ赤になって言って来たが、アバンは特訓を自ら申し出たポップに感動をしていてそれどころではなかった。
逃げ癖のあるこのお調子者に・・何の心境の変化があったのかは分からないが、
「俺と一緒にするのポップ？」
「おう！兄弟子はすげえんだぞダイ!!」
「頑張ってねポップ兄。あっ、でも無理はしないでね二人共。」
「分かった。」「無理なんてしね～よ。」
自分よりも年下が出来て張り切ったのか・・しかし理由・動機は何でもいい!!
これはダイと共に、ポップの力が羽ばたく力になる。
ダイ・ポップ・ティファは、昔からの・・本当の三人兄妹の様にもう和気あいあいである。
「頑張ってね、お兄ちゃん達。」
「俺負けないよ、ポップよりも強くなる！」
「抜かせ、早々勝てると思うなよダイ。」
三人の交流をもっと見たいのですが・・時間がそれを許してくれませんよね。
「ダイ君、君の今の実力を見せていただきます。今この場で。」
「今ですか？」
「はい、剣の腕前は先ほど見せていただきましたので魔法の方を。」
「俺・・魔法は・・」
「苦手ですか。」
「はい、さっきじいちゃんが言った通り、―あれ以降―一度も成功してないんです。
それに、成功した時もどうして出来たのか覚えてないんです。」
「そうですか。」

ダイの言うあれ以降とはパプニカ王女暗殺未遂の件で、キラーマシンの不完全版を魔法一つで破壊したという事で、その際は額が光り、何かの紋章が浮んでいたとブラスが詳しく教えてくれた。
しかしそれ以降は簡単なメラすら出来ないと・・魔法の力が強すぎてバランスがとれず、
発動しづらいと仮説を立ててみたが、実際に見てみないと何とも仕様がない。
「やってみましょう。」話はそれからだ。
「あの～。」
「はいティファさん。」
「皆の飲み物持ってきてもいいですか？」
「それはありがたいですね。お願いできますか？」
「はい、行ってきます。ダイ兄がんばってね～。」
「転ぶなよティファ。」
「分かってるよぽっぷ・・わっと！」
「・・いわんこっちゃねえ・・」
・・また転びそうになって、ポップ兄頭掻いて呆れてるけど、めげずに頑張ろう！
「転んでないよ！」
「はいはい。」・・もう!!
さてダイ兄どうなるか。
「では波があるので氷系の・・」やっぱりヒャドか。
ダイ兄・ポップ兄がんば!!・・私は転ばない様にしよう。
「では先ずポップから。
「はい！」・・力まずに深呼吸して・・イメージは静かな湖・・。（おや？）
細波を広げるように静かに魔力をためて「ヒャダルコ!!」―ガッキーン!!―
どうだ!!（もしや？）
ポップはイメージで成功をしたか、見ていたアバンは期待をして手で氷をノックするのではなく、腰のナイフを取り出し氷を斬ってみれ

ば・・ほんの少し中心部分が水っぽいが、
今までの氷系中級呪文の比ではない！一気に威力が上がっている!!
「ベリーグットですよ、ポップ!!」もの凄く褒めてあげたい！
「へへ・・上手くいってよかったすよ。」
呪文が上手くいったのは嬉しいが、やっぱり先生に褒められるのが一番嬉しい。
「何かコツをつかんだのですか？」
「・・ちょっとだけっすよ。」
ティファの受け売りをそのまんま言うのも何か気恥ずかしいので頭を掻いて誤魔化した。
（今までのポップならばダイ君の前で格好をつけようとして失敗してますが・・いつの間に。）
愛弟子に何の心境の変化があったのかとっても知りたいが、「次はダイ君お願いします。」
こちらが優先だ。
「はい！」
ポップの成功を目にしてダイも張り切ったのだが・・結果は小さな氷の塊が出来て、
ダイはずぶ濡れに・・散々な結果に終わったダイであった。
「ダイ兄～・ポップ兄～。」落ち込んでいるダイをアバンとポップとブラスがこれからと慰めていると、可愛い声が近づいくる。
沢山の荷物が入っているバスケットを頭にのせて、肩にゴメちゃんを乗せて走ってくるティファの姿が飛び込んできた。
（・・まさか・・）
一生懸命走ってくる姿は可愛いのだが、ポップは嫌な予感がした！
「みん・・な～!!」（やっぱりー!!）
ポップの嫌な予感は見事的中！ティファは足をつっかけた!!
（―アレーを・・）「ヒャド!!」―がチン!!―
転んだティファの目の前の波を凍らせることに成功をし、胸部を支える。

「ポップ兄ありがとう。」
ティファは波のおかげで転ばずにすみ、態勢を立てなおしつつダイ達の元に辿り着きにっこりとポップにお礼をする。
「転ぶなって言ったろ？」
「は～い、気をつけますポップ兄。ダイ兄は着替えどうぞ。」
「・・なんでティファ俺の着替え持ってんの？」
「だって、氷系の呪文やるって聞こえたから、一応濡れても大丈夫なように。
「・・それって俺が失敗するの前提⁉」
「違うの？」
「違わないけど!!一応は出来るって信じてよ！」
「そこは気長な目でね。飲み物持ってきたから早く着替えなよダイ兄。」
兄の怒りをひょうひょうとかわしつつ、ティファはヤシの実の殻で出来たコップとオレンジの実で作ったジュースを配り始める。
手漕ぎでデルムリン島まで漕いでいたポップは無論、結界を張って疲れていたアバンは喜んで飲み干した。
（美味しいですね～・・それにしても、ポップは本当に一気に氷系の呪文をつかみましたか。）
大きな威力のみならず、転びかけたティファを波を凍らせて受け止めた事は本当に驚いた。
並の集中力ではああはいかない。凍らせられないか、術の余波がティファにいっていたかもしれないの見事にやってのけ、今もブラスにその事を褒めそやされて照れている。
ポップは手が本当～に掛かった分、今のやる気と力を見れて感慨がひとしおである。
当面の課題はダイの魔法のようだがその前に、「ティファさん、貴方も魔法を試してみませんか？」
何故かティファの事が何かと気になる。
身のこなし、話し方などはそこいらの娘と変わらない。
なのに狂暴化した大量のモンスター達を、眠り粉を使ったとはいえ

縛り上げたと言う。
果たして、あの身のこなしで無傷で出来る事だろうか？
そしてもう一つ、自分の少しの言葉で察してダイの着替えを用意をしている・・まるで自分がどのような方法でダイの実力試しをするかを知っていたかのように。
天性の勘か、余程魔法に詳しくダイよりも扱いが上手いのか。
これで分かるはず・・「ふ・・ふぇ・・」え⁉いきなり泣き出した⁉
先生のバカ!!!嫌なこと思い出させないでよ!!
・・先生達が島に来る前のパプニカ事件でダイ兄が今まで全くできなかった呪文が出来たのでじいちゃん大喜びをして・・もしかしたら今の私ならって、初級呪文契約してみたけど駄目で。
・・じいちゃんがっかりさせちゃって・・。
「ティファや・・大丈夫じゃ。泣かんでいい。
お前はとても良い子じゃ。呪文なぞなくても、儂の自慢の子じゃ。
アバン殿、言わなくて済まんかったの。この子は呪文は一つも契約を結べなかった。
じゃが今言った通り、ダイと同じ自慢の儂の子の一人じゃ。
ティファは出来ぬ事を時々気に病んでおっての・・泣いて驚かせてしまいましたな。」
顔をくしゃくしゃにして痛そうに瞳を歪めて泣くティファを、ブラスは優しく撫ぜながら驚いているアバンとポップに説明をする。
ニコニコしていた女の子がいきなり泣けば誰でも驚く。
ティファを慰めつつ、事情を話してもうティファに魔法の事を振らないでほしいとアバンに言外で頼む。
「ティファ、魔法は俺が頑張るよ！ティファは俺が出来ないこと沢山出来るよ!!
だからそっちを伸ばせばいいんだよ！」
兄も必死になって妹を慰める。いつも明るい妹の唯一つの地雷を踏まれてしまったと。
「すみません！何やら詳しそうでしたのでてっきり・・本当に申し訳ない!!」

（ふ・・く・・先生・・必死で謝って・・許して・・）
「それにティファは魔法使いだよ！」
アバンの謝罪を受け入れようとしたティファに、ダイが再び声をかける。
「このジュース、ティファが作ったんでしょ？
さっき呪文失敗して俺落ち込んでたけど、これ飲んだら美味しくて嫌な気持ちどっかいって、
また頑張ろうって思ったんだよ。
他にもティファが作ってくれた料理食べると・・じいちゃんのもだけど・・、元気出るんだ。
ティファは料理の魔法が使えるんだよ!!」
「うん!!ありがとうダイ兄!!大好き！」「俺もだよティファ。」
ダイの真っ直ぐの本音の優しさに、ティファは満面の微笑みでダイに抱き着き、その二人にブラスが寄り添う。
「・・せんせえ・・駄目じゃないっすかきちんと確認しないと。」
珍しく師が人を泣かせたのでポップとしてはティファが泣いたことよりもそちらに驚きである。
「・・本当に申し訳ない。私としたことが、嫌な気分にさせてすみません。」
愛弟子の言葉が止めとなり、アバンは再びティファに謝る。
「もう平気です。」兄と祖父の慰めで元気を取り戻したティファは元気を取り戻した。
「あのね、私お料理の途中だから、もう大丈夫だから行くね。」
（・・このセリフは!!・・以前・・）
「ティファさん！」
「・・はい。」
「以前どこかでお会いしませんでしたか？」「・・はい？」
アバンの問いにティファは怪訝そうな顔で返事をし、
（私の気のせいでしょうか？）勘違いだと思わせた。
「飲み物のお代わりいりますか？」・・あっぶな!!何あの人怖い!!
七年前のほんの一瞬だけあった私の事なに思い出そうとしてんの

⁉
　もうヤダ・・ホントの天才って。
　ティファが表面で笑って給仕をしつつ心の中でぼやいていると、
「先生・・なんか男が女の人を口説く文句見たいだったすよ。」
「おや、そうですか？」
「そうっすよ。大体ティファがどうやって島の外に出られるんですか？
　ダイの時はやむを得ずで緊急的に飛行モンスターで出ただけで、ここって外部との交流が一切無い孤島のはずでしょう。」
「・・そうですね～。」
　どうも自分の勘はティファが相手だと悉く外れてしまうと落ち込む・・勘に自信があったのだが。
「御馳走様。」
「美味しかったぞ。」
「ホント？そしたら―毎日―作るね。飲み物レシピは他にもあるんだよ。
　お味いかがでしたか？」
　落ち込むアバンからコップを受け取り、ティファは感想を求めた。
「美味しかったですよティファさん。ダイ君の言う通り元気いっぱいになりました。
　ただ・・。」
「ただ？」
「蜂蜜があればなおグットですが。」・・言っておいてなんだが島にない物を言ってもどうにもなるまい。
　天然物のハチの巣は危険なので、島にあったとしてもお勧めは出来ない。
「分かりました。今度は入れておきます。」
「おや有るのですか？」・・天然物を工夫して採ったのか・・。
「先生、ブラスさんが俺たちのお昼もティファがこさえてくれたって・・早く行きましょうよ。」
　話し込む二人をポップが急かす。

「ではお相伴にあずかりましょう。」
「俺たちの家はこっちだよ！」「早く行きましょう!!」
ダイとティファも二人を急かして森の中を案内する。
「特訓の続きは食べて午睡の後に・・。」「どんな料理か・・・」
にぎやかに話しながら家に案内をする。
森を抜けた山の裾に、ネイル村の作りと同じ民家が二階建てで建っている。
家の近くには花壇と・・なんと数種類の野菜の畑までもがある!!
島に自生していそうな芋とハーブの他に、「パプニカ産のパプリカまで・・。」
「これ全部ティファが一人で作ったんだよ先生。」
驚くアバンにダイが声をかける。
「ティファさんが・・ブラスさんに教わってですか？」
「ううん・・確か・・海岸で本拾って芋作って・・その後はウォーリアさん達が野菜の苗や種持ってきてくれて、育て方をティファに教えてくれたの。」
「・・そのウォーリアさんというのは？」
「えっと・・いっつも来てくれる船長さんで・・」
どうやらダイは説明が苦手な子のようだが、おおよその事はわかった。
どうやらこの島は情報と違って外部との接触がきちんとあり、小規模ながら交流があり、
そのおかげで家が建ち、畑もきちんと育っているようだ。
詳しい事はブラスさんに聞くしかない。

勇者一行の料理人に！

ティファちゃん三分クッキング!!

まずは時間のかかるスープから。

ジャガイモ・ニンジン・春先のカブに玉ねぎをひたひたのお水でコトコト煮込んで火が通るまで、ゴメちゃんに薪をくべてもらって弱火を維持して放っておきます。

次にサラダ。

パプリカ・ハーブにルッコラに似たローソの葉に白身の魚を湯引きにして一口サイズにして合わせて、

ドレッシングはトマト焼いて皮むきして潰して、塩コショウとオリーブオイル混ぜたものを皿に盛ったサラダにかけます。

スープが煮えたところに適量の塩を入れてひと煮たちさせてから火から降ろして蓋をして、余熱で味を浸みこませます。

「ゴメちゃーん、薪追加で～。」「ピ～！」

ゴメちゃんに火力アップ頼んで空いた竈にフライパンを置いてメインのベーコンステーキ!!

これは三日前にウォーリアさんが差し入れてくれたとっておき・・式で見た限りではウォーリアさん達は無事なのは確認できている。海の男はたくましい。

さて、ステーキは時折焦げの心配をするだけで後は焼けるだけ。

そっちの面倒を見つつ、朝焼いたパンを温め直して籠に入れて、テーブルの支度をしながらスープを盛って、フォーク・ナイフスプーンと取り皿を出して、待っている皆の前に並べてメインのベーコンステーキが焼けたところで全員分出して、

「「「「いただきます!!!!」」」」

出された料理は豪華だった！彩のいいスープにサラダ、ベーコンステーキが分厚い!!

しかもそれをたったの三十分で出したティファが凄い！

本人はみんなに配った半分よりも少なめをゆっくりと食べているが兎も角!!

「この、スープはとても美味しいですよ。ベリーグッドですよ、ティファさん。」
「そんな照れますよ・・。」
「よろしければ今度こちらを隠し味に使ってみてください。」
「・・この瓶の中身は？」
「これは私の故郷カール王国に自生しているパテギア草の粉末です。
本来ならば生の物をその場で擂り潰して使った方が風味は断然いいのですが、味のアクセントのお役に立てます。
それに粉末になっても滋養強壮の本来の効能は損なわれていないのがパテギアのグッドなところです。」
「貴重なものをありがとうございます。」「いえいえ。」
料理の凄腕のアバンとティファは優雅に話しながら食事をし、その様子をブラスは笑って見ながらゆっくりと食事を進めていく。
先程アバンがうっかりティファの唯一の地雷を知らずに踏んでティファを泣かせてしまい二人がぎこちなくなってしまうと心配したが杞憂だったようだとホッとしている。
ゴメちゃんはベーコンステーキを細かくして出してもらったのを味わいながら食べ、
ダイ・ポップと飢えた男子二人は美味しい料理に舌鼓をうちつつ無言でバクバクと食べ、
「ティファ、スープお代わり！」「俺も!!」
鍋にあるスープを全て飲む気満々だ。
「ふえ～食った食った・・」
「もう食べらんない・・」
腹っぺらし小僧二人は満足をして、片付いていないテーブルに行儀悪くうつぶせてる。
「美味しかった二人共？」
「もう最高!!」
「ホントマジで毎日食いたい!!」
二人に感想聞いたら嬉しい事を言ってくれる。・・毎日か・・。
「そしたら、ティファも勇者一行の仲間に入れてくれる？」

「「「はいー⁉」」」

料理の感想を言っただけなのに・・ティファが急にへんてこな事を言いだし、男一同は本気で驚いた!!

「説明するね。」

そんな男どもをティファは尻目に、説明を始める。

「勇者は先生が居て、ダイ兄もなるんでしょ？」

「・・ええ」

「なるけど・・」

「魔法使いはポップ兄でしょ。」

「・・おう。」

「私回復の魔法も使えないから、僧侶さんにならないでしょ。」

「そうじゃの～。」

「剣も体術も得意ってことはないし・・。」

「・・そうですか。」

「そしたら・・ティファが一行にくっついていっても何の役にも立たないでしょ？」

「・・ついて来るつもりだったのティファは・・。」

「そうだよダイ兄。置いてかないでよ。

さっきダイ兄はティファの料理は魔法だって言ってくれたでしょ」

「まあ・・そうだけど・・。」

「嬉しかったし、職業決まったの。」

「・・職業？」

「ティファね！勇者一行の料理人になるの!!」

「「「はいー⁉」」」

満面の笑みを浮かべて堂々と奇天烈な事を言いだすティファに男一同は今度こそ呆気にとられた。

勇者一行がこの世に誕生してい早数千年・・その間様々な一行が居たと語り継がれているが、

料理人なんて職業は存在したためしがない!!

「何それ⁉

大体なんでティファがついて来るの前提なの？」
「ダイ兄一人で島の外出したら何するか心配だもん。」
「ポップとアバン先生がいるだろ！」
「それにさみしがり屋で・・夜大丈夫？」
「・・それは・・」
「おいティファ。」
なし崩し的に負けそうなダイと、ポップが交代をしてこんな説得をし始める。
「あんな、俺たち遊びに行くんじゃねえぞ？超危険なんだぞ？
先生筆頭にして、各地を助けに行くの分かってんのか？」
はっきり言えば、何の力もない女の子には危険で、無謀以外何物でもない。
「分かってる！だから日々美味しい料理食べてもらって元気出してもらうの！」
・・意外に頑固な妹分にポップは頭をバリバリとかく。顔は超真剣だ。
魔法は元の素質ゼロ、よう転ぶこいつに体術・剣術は期待できず・・いいとこ料理だけって。
「・・そもそも・・たかが料理できるから一行に入れるって・・。」
その考え自体がおかしいとポップは本気でぼやく。
先生と旅をして、大半は先生が作ってくれるが時折自分も作る。
ティファの料理は確かに先生に匹敵するが、贅沢言わなければ飯が食えればいいだけの話だ。
・・むっか!!・・ポップ兄め～!!たかが料理ですって!!
「あのねポップ兄!!」
「んだよ・・。」
「人が最低限生きていくのに絶対に必要の物って何だと思う⁉」
「え・・と、お金とか物とかか？」
「ティファはね、衣・食・住・だと思うの！」
「は？」
「衣って言うのは服の事。裸でいたらいけないでしょ？

それが無くてもモンスターよりも人は弱いから服で身を守るでしょう。」
「・・まあ。」
「住の方は家。
風雨とか悪天候から身を守るのはもちろん、帰る家があった方が、人は頑張れるでしょ？」
「・・そんなもんか？」
ああ・・家出少年には帰る家云々はあんましピンとこないか。
でも本題はこっち！
「最後になったけど食は当然食べる事。
食べないと死んじゃう。でも食べたい物を好き勝手食べてればいいってもんでもない。」
「何でだよ、腹が膨れりゃいいじゃねえかよ。」
「塩分の摂り過ぎは体の毒になる。
肉・魚だけでも体にはよくない。
適度に野菜も摂らないと体調不良の元になる。
普段の食べるものと、体が弱った時に出す料理もおのずと違ってくる。
胃の消化によいもの、弱った体の免疫を下げない為の栄養価の高い食材を提供して
普段の一行全員の体調管理をきちんと出来て、初めて勇者一行の料理人だってティファは考えてんの!!本気だよ！
勇者一行は確かに戦いの人がメインでも裏で支えるのがきちんとしていた方が、長い戦いを乗り切りやすくなると思うよ？
支えたいの皆を！だからティファも行くからね!!」

三流魔王が来ました

ティファの発言は様々な反応を引き起こし、兄二人とブラスは猛反対をしようと迫りかけたが、
「ティファさんはチャレンジ精神に富んでますね～。」と、アバンののんびりした声が遮った。
ティファの表情から今は何を言っても心の内を変えられないのを見越し、喧嘩に発展しない様に止めたのだ。
だからといってこの問題を放置するつもりもないので、
「一行に付いてこられるか、ダイ君の特訓後に試させていただきます。
そこで私が無理だと判断をした場合には従っていただきます。
ポップの言う通り、危険に満ちた旅なのですからね。」
アバンもティファと同じくらいの真剣な表情で現実的な案を突き付ける。
「分かりました、それでお願いします。
片付けしてくるねじいちゃん。」
ティファは笑ってアバンの提案を受け入れ台所へと姿を消して、一旦はその話はそこまでになった・・表面的には。
・・現実のアバン先生は思った以上になまってんな。
ティファは胸の内で、今のアバンの実力に大分がっかりとした。
大戦から十五年経ったとはいえ、マトリフの方は凄みを感じたが、アバンからは全く感じない。
内に隠しているとかそういった感じも全くしない。
確かに知識力は凄く、人格者でカリスマ性はあってもだ・・大魔王どころか幹部クラスにも勝てそうにもない。
知識なら自分がどうにか出来る。何せ原作知識と七年間の世界旅で培ったものと、日々三神から教えを乞うているので、ある程度の事ならば自分でカバーが効く。
もしもハドラーが原作通りに来て勝てなければ、アバンの方にこそ一時退場して鍛え直してきてもらおう。
カールのお守りも確認できたので、アバンの安全性は確保した。

（ハドラー来たらメガンテコースか・・）
それも致し方ない。
弱い指導者が中途半端にいるよりも自分達しかいないという状況の方が、遮二無二なって生き残ろうとして知恵を絞って、やれることで対処しようとしてレベルもきちんと上がる。
その方が皆生き残る。
・・あの子の本当の実力はどれ程のものか・・。
弟子二人を外の草の上で昼寝させつつ、テイファの力量に頭を悩ます。
先ず知識力。ポップに言った料理の大切を説いたあの考え方は、島の中でしか生活をしていない子には考えつかないものだった。
テイファが台所で片づけをしている間に、ブラスからテイファの事を詳しく来た。
しっかりとした考えを持っていますねと、世間話の軽さで話しかけた聞いてみたところ、
出てくる話は凄いものばかりだった。
五歳でロモス近郊にほぼ一人で出かけ、七歳のころは何時のころから住み着いたガルーダで遠出をし始め、近頃は二・三泊外泊もしているという。
話を聞きながら周りを見回せば本棚があり、ブラスに断って手にして読んだところ驚いた。
一番分厚く大きいのは料理の研究書だった。
レシピがの隣には必ず栄養素と効能が書かれている本物の研究書だった。
テイファがポップに説明したことは、これをきちんと読破して知識を鍛えたからに他ならないが・・こんな研究書をどこで・・それも独学で身に着けたようだ。
先程の料理説明では鬼面導士のブラスも驚いて聞いていたことからその事が伺える。
他の本も読んでみれば、体術・剣術の基礎的な書物。
他にも薬草類の本もあり、どれもこれもしっかりとした内容の物ば

かりでちょっとした学び舎が開けそうだ。
もしも料理の知識同様に、対応・剣術も基礎を身に着けていたとしたら？
それを考えると疑問だらけになる。
ダイの中に眠っている力があるのは分かる。
海破斬もどきをした時に額が一瞬光り、もの凄い力を感じた。
対してティファの方は何の力も感じずよく転ぶ女の子にしか見えない。
しかし世界をたった一人で廻っていたのに、何の力も持たない方が不自然だ。
・・隠している？何のために。
ティファが悪い子に見えない分余計に悩んでしまいため息が出てしまう。

ティファとアバンは胸の内で考え、兄二人は修行で考えを発散させた。
石を結ばれての百メートル十本ダッシュ後のアバンとの一人ずつの組手に座学をし、体力が戻ったところでダイは素振り千本、ポップは瞑想を日が暮れるまで続けた。
・・まさかティファがあんなことを言いだそうとは、初対面のポップどころか、十二年も兄妹をしているダイにとっても驚きだ。
ティファが付いてこなくても自分達だけでやれると胸を張って言えるように強くなる!!
・・世界を救う云々よりも、明確な目的が出来たことで二人の修行熱が上がり、喜ぶべきかどうかアバンはまた一つため息をそっとついたのは二人は知らない。
「すみませんの～アバン殿に夕食を作っていただいて。」
「いえいえ、私も料理作りは好きですからね～。
それに、この島に来られて感謝もしていますのでお礼に作らせてください。
「はて？感謝とは・・。」

「ポップの事です。
彼は才能豊かなのですが、修行が少々苦手で今まで逃げ回っていたのが急にやる気を奮い起こしてくれました。
弟弟子が出来たおかげかもしれません。」
台所からほのぼの話がリビングにまで聞こえ、
「ポップって修行嫌いだったの？」
「うっ！・・まあ・・」
「それでもあんなにすごい魔法使えるって凄いねポップ兄。」
「いや・・全部さぼってたわけじゃねえし・・。」
リビングの子供達も楽しくおしゃべりをし、楽しい夕餉となる。
「先生のお料理美味しい!!」
「じいちゃんとティファと同じぐらいだ！」
「だろ～、先生は料理も得意なんだよ。」
食卓にもお喋りの花が咲く。
ダイの体力・根性にポップは舌を巻き、初めての座学に付いてこられたのにも驚いた。
アバンも基礎知識の確かな事を手放しでほめて、ダイを赤くさせた。
「そんなポップだって・・瞑想中少し浮いてたじゃないか。」
「・・ありゃ無意識だよ。」
素振りが終わりポップの方を見れば、ポップがほんの少し浮いていてのに驚いた。
ポップからすれば魔力を内で練って魔法力を増やす修行が、漏れ出してルーラもどきになってしまったのはどうかとも思うのだが「その内にルーラを教えます。」
アバンからのにっこり顔の誉め言葉が嬉しかったので素直に喜ぶことにした。
（へ～、ポップ兄も強くなっているんだ。）
強くなっていくカッコいいポップを想像してティファは思わずニヤついてしまう
「んだよティファ急に。」

「いや～、強くなったポップ兄を想像したんだよ。」
「・・どんなんだ？」
「敵がポップ兄を攻撃するでしょ。」
「ふんふん。」
「それをね、体術マスターしたポップ兄が颯爽とかわして、メラゾーマって叫んで、」
「ほうほう。」
「敵が動きを止めたら、―今だダイ！止めを!!―とか言ったらカッコいいな～って。」
目に浮かぶ、最終戦の最後の大一番の時のポップ君を、ポップ兄で早く見たいな～。
「・・それって俺が体術マスターすんのが・・・」
「そう、大前提だよ。」
「・・今は無理だろそれ・・。」
「でもダイ兄と特訓してるんだし・・。」
「俺も頑張るからポップも頑張ろうよ。俺も強くなるから！」
「チェ・・お気楽に。でも目指してみるかな。
お前に言われたカッコいい魔法使い目指すの込みで。」
口をとがらせながらも、ポップは食事の席でもティファの頭をくしゃくしゃに撫ぜて約束をする。
強くなって、ティファが島から出なくてもいいと思わせる為にも・・。
（・・ティファさんはポップに何を言ったのでしょうか？）
今まで修行嫌いのポップがたったの半日で厳しい特訓をして、さらに頑張ると言っている。
どうやらその心境の変化はティファが深く関わっているようだ。
憧れで弟子入りをされてもポップの逃げ癖をついには治せなかったが、わずか少しの間に治せたのがティファのお陰だとしたら、ティファが他者の及ぼす影響は凄い事になる。
三人の子供達はアバンの胸の内を知らず「じいちゃんお代わり」「俺も」「同じくお願いします」

楽しい時間を過ごした。

・・何で私だけがお留守番なの!!

夜の特訓するって言うからお夜食作って行こうと思ったら・・ティファは留守番って・・じいちゃん酷い!!

ゴメちゃんもあっち行っちゃってつまんない!!

きっと大地斬の練習だ。見たかったのにな～。

・・今の内洞窟行ってこよう。

【なんじゃティファ、こんな夜更けにどうした?】

「旅の準備だよ。鍋・おたま・木の食器に銀のカトラリーセット・下着がダイ兄と私のを三着と・・ダイ兄の洋服どうしよう。」

原作ではロモスまでボロボロのドラゴンボールの胴着来てたけど、こっちは服の品も結構あって、今は白の半袖シャツにこげ茶のベストに薄茶色の長ズボンに同系色のブーツ履いてる。

ロモス行ったら―勇者ダイ―のパーソナルカラーの青にシフトチェンジしてもらうか。

青の胴着も実はバッチし作ってある。袖がびりびりじゃない半袖の物を。

旅立ちはそれに着替えてもらって、私は・・空色にしよう。

勇者の妹のパーソナルカラーは空色に決めた。

丁度その色の詰襟の無地の長袖ワンピースがある。見た目ナウシカの飛行服っぽいのが。

戦いやすいようにシルク素材の長ズボンを下に履いて、足首の所に紐通しをして結べる仕様にして。

靴は足首までのブーツでいっか。

支度をしたものをリュックに入れるものを詰めて、洋服はハンガーにかけて家に戻ってグースか寝た。

次の日は二人は修行、私はいつもの日常で然したることはなくその日は終わった。

・・一つだけ島のとある部分に細工したけど・・

運命の日になるかもしれない三日目がやってきた。

予定外でしたが、うまくいって良かったです。
「アバン殿！」
「いやいやブラスさんお騒がせをしました。
事前にお知らせすべきでしたね。」
「・・んな事より先生・・鼻筋に怪我してますよ。」
「ポップも騒がせて・・絆創膏張って、これで良し。
ダイ君は大丈夫ですか？」
「先生・・おれ・・先生に怪我させて・・」
「ノンノン、海破斬習得の為の特訓です。ベリーグットでしたよダイ君。」
大地斬を一日でマスターしたダイならば海破斬もと考えて、ドラゴラムで竜化をして炎を吐いて、
見事ダイは海破斬で炎を切り裂き無傷で課題をクリアーした・・島の海岸で。
予定では頑丈そうな洞窟の事を予めブラスに聞いて直接見て大丈夫だと判断をしてそこでやるつもりが、何故か崩落をしていて使い物にならず、ついてきたダイと共に目を点にしてしまった。
（・・どこでやりましょう・・。）
特訓する気満のダイのやる気をそぐのは勿体ないと急遽場所を変更し海岸にて島に被害が及ばない様に森を背にし、万が一ダイが避けても火事にならない様に海に向かって炎を吐き、
両側に火の壁を作って逃げ場を封じて追い込み、思惑通りに海破斬を会得してくれて一安心。
・・しかし何故・・洞窟が・・バチ・・バチバチ!!
（これは!!）
結界が・・何かによってこじ開けられて・・バチイーン!!!!
・・入ってきた音。
・・来たか・・—予定—だとダイ兄達は—海岸—にいるはずだ。
ハドラーが来てもいいように、見通しのきく海岸に行くように洞窟

崩落させたけど、
―ぶもー!!――ピギー――また狂暴化・・はた迷惑の元凶!!原作無視して今すぐのしたい!!
・・やったら駄目か。アバン先生の試しの場でもあるし・・でも・・気配が小物っぽい。
皆の手足ふん縛ってさて行きますか。・・先生ぼろ負けだ。
またもや島の裏側にて式見でアバンと珍客の様子を見ていたティファだった。
「ふっふっふっ、ハァアハッハッハ!!久しいなアバン!!」
「お前は・・魔王ハドラー!!何故貴様が生きている⁉」
先の大戦の魔王の復活にアバンは驚き、
「俺は魔界の神!大魔王バーン様によって死の淵より蘇った!!
かの方の手により新たなる魔王軍が結成をし、今の俺は魔軍司令官ハドラーとして今大戦を任せられている!!」
驚いたアバンに気を良くして今の状況を高らかに説明を始める。
「今大戦の邪魔になる、因縁のある貴様を俺自ら葬りに来た!!死ねアバン!!」
「そうはい・・行かせません!ベギラマ!!!」―ゴオウ!!―
慢心で隙だらけなうちに倒そうと高呪文の魔法を放ったが、呪文はハドラーのローブを燃やしたのみで、ハドラー自身は無傷であった。
そこからはハドラーの一方的な戦いとなった。
アバンは防戦をするも防ぎきれずに次第に傷を負っていきジリ貧化をしている。
(・・不味い・・体が動かない・・)
ドラゴラムで力を消耗をしたとはいえ・・ここまで体が鈍っていようとは。
そしてもう一つ!今のハドラーは昔のハドラーよりも格段に強くなっている!!
―ドカッ!!―「ぐぅ!!」
避ける動きも鈍くなり、アバンはハドラーの膝蹴りをもろに腹に受け、砂浜に転がされた。

「「先生!!」「アバン殿!!」
弟子二人とブラスの悲痛な声が聞こえる・・傍から見ても・・力の差は歴然としているようだ。
・・ブラスもハドラーの強さはよく知っていようし。
まさかダイの育ての親が元魔王軍の一個師団を率いていようとは・・自分はそういう者達とよくよく縁がある。
だが今は・・そんな事よりも!立ち上がってハドラーを・・「哀れだな。」
「・・何?」お腹を押さえながら立ち上がるアバンに向かってハドラーが声をかけてきた。
「弟子育成なぞにうつつを抜かし、お前自身は弱くなりおって!!老いぼれたかアバン!!」
・・返す言葉が無い・・しかし今は何としてもこの子供達を・・自分が今諦めてしまっては全員が確実に死んでしまう!
それだけはどうあっても防がねば、己の命を賭してでも!!
「メラゾーマ!!」―ゴオウ!!―・・あれはポップ・・何を。
「先生に手えだすな!!」・・ポップ・・貴方は・・。
臆病な・・それでも優しい心を持つ弟子が自分を守ろうと、魔王と知っても呪文を放った。
足と声が震え怖がっているのが一目で分かりハドラーの右手一つで受けられたが、今までの中で一番の威力のメラゾーマで助けようとしてくれている。
「フッフッフ、小僧震えてるが何を・・」「今だ!!」
「大地斬!!」「ふん!!」―チィーンー
「あー!」
メラゾーマでポップが隙を作り、ダイが死角から攻撃をしたがハドラーには見抜かれて防がれてしまった。
「所詮は餓鬼の・・何?!」
ナイフを掴んだ右手を見てみれば・・指から血が・・しかも・・、自分の皮膚は耐火性に特化をしており、先ほどのアバンのベギラマにすら無傷であったのを・・高々子供二人が・・。

（この二人は・見逃せば厄介だ。）
島には打倒アバンの恨みで来たが、のちの厄介な種もみつけられた。
「まとめて始末してくれる!!
アバン！そこで無力な自分に打ちひしがれて弟子の死に様を見ていろ!!ベギラマ!!!」
「ああー!!」「くっ・・!!」
ダイとポップは死を覚悟した。
一つの技に、己のもてるすべての力を注ぎこみ動けず躱せないと覚悟をしたが、
―ズっガーン!!―爆音は響いたが・・何の痛みも・・「大丈夫ですか二人共？」
目の前に・・ボロボロになった師の顔が・・。
「・・せ・・んせえ・」
「背中が!!」
「アバン殿!!」
アバンは残りの力を総動員をして弟子二人を庇うのに成功をしてにっこりと微笑むが、
「ふうん!!」―ゴオウ!!―
ハドラーが止めの二発目を間髪入れずにうとうとしている！
（不味い!!まさか立て続けにベギラマを!!）
大技は魔力の溜を必要とするが・・力量が上がったハドラーは撃てるのか!!
「全員纏めて灰になれ!!ベギ・・」
―ギシャー!!!―
ハドラーのベギラマが撃たれようとしたまさにその時、大型鳥獣モンスターの鳴き声と共に、
真空最大呪文並みの風圧がハドラーの放ったベギラマをかき消し、
「ガルーダ!!そのまま体当たり!!!」
・・人間の子供の声の後、ガルーダがハドラーに強烈な体当たりを決めて飛び去ってった。

（・・ぐう・・誰だ・・今の声は!!）
この島にはかつての配下ブラスとガキ一人との情報しかなかったが・・もう一人いただと⁉
「あああっ!!」・・上空・・「小癪な!!」
ガルーダの体当たりのダメージはさほどでは無かったのでハドラーはすぐに態勢を立て直し、
上空から来た何かに、ヘルズクローで迎撃をする。
向かってきたものを串刺しにしようとしたが、―ガーン!!!―
鋼の剣で防がれ互いにすれ違い、襲撃者は無傷で砂浜に降り立った。
「・・酷い怪我ですが・・皆無事ですね。」
浜辺に降り立ったものは全員の無事を確認するや否や剣を左肩に担ぎ、自分の方を見上げる。
長い黒髪に、敵愾心に煌めく意思強き黒い瞳の・・少女が自分を襲ってきただと⁉
モンスターのガルーダに指示を出し、どう見てもそこらにいる魔族に見えない自分に対して撃ち込んできた・・。
「・・ティファ・・さん？」
「・・おまえ・・」
「ティファ・・。」
「・・何という・・」
どうやら自分のみならず、この場にいる全員が少女の出現に驚いているようだ。
（・・あれは・・一体・・）
自分のヘルズクローを完全無傷で躱されたことなど一度としてない!!
最盛期のアバンとてもだ・・なのにあの少女は無傷の上に平然と自分を見上げている。
傷はなくとも、打ち合った剣からその威力は伝わるはず・・自分の・・腕とて痺れているというのにだ!!
「・・小娘!!」

何者か・・アバンの新しき弟子かと問いかけようとしたが「初めまして。」

・・礼儀正しい挨拶で止められた!!

「私は勇者の家庭教師アバン・デ・ジュニアール三世の弟子をしているダイの妹でティファと申します。」

・・自分からキチンと名乗ってきた・・。

「さて、貴方はどなたで、如何なる理由ありてこのような乱暴狼藉の所業を働いているのですか?

この島は平和を望みし者達の住処なのです。即刻お引き取りを!!」

・・堂々と・・出ていけ宣言までされた・・。

ーアバンーの全てを預かります。

なんだか初っ端から不味い状況・・アバン先生ボロボロ過ぎです。
鈍っているとは感じたけどここまでとは。
相手は人がきちんと挨拶をして名乗ったのに、処理能力遅く状況呑み込めずにポカンと人の事を見て隙だらけになっている三流魔王相手にだ。
今すぐあの首落としたら駄目かな?
・・駄目か・・凄いのいるって思われて、魔王軍の総攻撃か父さん送られたら今の皆じゃ対処できん・・原作道理にしてもらうほかなしか・・。

挨拶と出ていけを言った後、ティファという少女は静かに自分を見ているだけで動かない。
・・突然の事で動かないのではない!動けないのだ!!何なのだあのガキは!!!!
アバンよりも底の知れない強さを瞳の奥から感じて・・動けない・・。
ティファは静かにハドラーを見ているつもりであっても、実際は激怒をしてハドラーに闘志を向けていた。
原作通りや世界の為と割り切っている積りであっても、やはり三日間共に過ごし同じご飯を食べたアバンを、心の奥底では家族同然とみなしている。
家族を傷つけたハドラーは本来ならば許しがたく倒している。
しかしそれでは世界を救える道が閉ざされかねないと、常の優しき心を封印し無理をしてアバンへの情を断ち切ろうとしているが・・やはり漏れ出し、それがハドラーの動きを封じて一見ポカンとしている隙だらけの三流魔王に見せているだけで、ハドラーが弱いのではなく現時点のこの場ではティファが強すぎるだけの話だった。
「あれは魔王だよ!ティファ!!!!」
その場の沈黙を破ったのはダイの返答だった。
ハドラーがティファの強い闘志を感じても、ティファの背にいるダ

イ達はまるで感じずにティファの強さが全く伝わっておらず、
「何でこんなやばいとこ来たんだよ!!」
兄二人は―弱い妹―をひたすらに守ろうと前に出ようとした。
守らねば!!
しかしその思いは「・・あれが・・魔王ですか・・。」
ティファの一言に立ち止まる。
「そうだ!!俺がかつて大戦を起こし!今大戦では偉大なる魔界の神大魔王バーン様の
軍を統括する、魔軍司令官ハドラーだ!!!」
ティファの闘志を振り切るように、自身の闘気を乗せて名乗りを上げた。
「小娘!!魔王に命乞いをするか?」
ビリビリとしたハドラーの声は凄まじく、ダイ・ポップ・ブラスは腰が抜けてへたり込みアバンとても腹に力を籠めねばひざを折りかけた。
・・しかし・・「・・全然全く魔王に見えません!!」
命乞いを勧告された当の本人は動じずに、鋼の剣を左肩に担いで平然と自分をしっかり見上げ、・・何かとんでもない返答言ってきたー!!!!
「小娘!!」
「・・確かに実力は御有りのようですが・・。」
「ならば!!」
「気配が酒場の外で喧嘩してるおっちゃん達並の気配しかしません!!」
なんじゃそりゃ⁉酒場の外で喧嘩してるって・・管巻いた酔っ払いといいたいのか!!
酔った勢いで凄み出してる不良と言いたいのかあの小娘は⁉
「力があっても精神と中身が伴わなければ魔王とは言えません!!」
・・あんの小娘が!!何を人に魔王道を説教している!!太々しい!!
自分を見ても、ボロボロになっているアバンを見ても、闘気で脅しをかけても怯んだ様子は全くなく・・たんに怖いもの知らずの馬鹿かあれは?

アバン諸共に全員始末してくれる!!その前に、
「昔のよしみだアバン!!世界を半分くれてやる!俺の部下になれ!!」
・・出た～魔王ロープレ・・本当にやったよあの小物さん。
ティファは原作後期のハドラーは大好きで、今の小物ハドラーは消去したいほど嫌いだ。
なのでとっとと一流魔王に育ってもらうべく王道を説いていくことにした。
一流の将は無駄な戦いも陰湿な罠もせず、後期ハドラーも正々堂々と戦っていたので、
そっちの方が闘いやすいと算段をしている。
何よりもあの男前ハドラーを見たいという欲もある!!
さて、アバン先生は何と答えるか。
「断る!仮に私がその申し出を受けても残虐なお前が約束を守るとは思わん!!」
「ほう、弟子の命が惜しくはないのか。」
「それに!」・・おっ出るか!あの大魔王の使い魔云々が!!
「この娘の言う通り!中身の伴わない今の貴様に!魔王の問いは相応しくはない!!」
・・・はいー⁉何言っちゃってくれてんのアバン先生!!魔王メッチャこっち見てますよー!!
「・・小娘・・」
「・・なんでしょ」
「貴様もそう思うか?」
・・何でそんな重要事を初対面の一介の幼気な女の子に聞くのよ!!大人同士で話し合いなさいよ!!
・・けど仕方ない!巻き込まれるように作為的に仕掛けたのは私だ!!
「はい!力があっても中身が伴わなくって、現時点では残念な人で勿体ないです!!」
責任もって全部言ってやった!!
「・・そうか。」

・・あれ？ハドラーの気配が妙に静かになった。
血走っていた眼は落ち着きを取り戻して・・呪力練ってるこれって!!

「アストロン!!」

ティファの危惧をアバンも感じ自分以外にアストロンを掛ける。
これから自分が放つ呪文から全員を守るために。
「ポップ、ダイ君、少し早いですがこちらを渡しておきます。」―チャリ―
アバンは懐より、自分の卒業記念の証の輝聖石を二つ取り出し、
「ダイ君、このままいけば君はきっと誰よりも強く優しい勇者になれます。
たゆまずに努力をしてくださいね。」「そんな・・!!」
「ポップ、」
「嫌ですよ!!先生！それいつか言っていた卒業記念の石でしょ⁉
俺はそんなもんまだいらねえ!!まだまだ未熟で・・この呪文今すぐ解いてください!!
俺も戦う!!」
「・・ポップ、貴方は兄弟子になったのです。
ダイ君の事を頼みましたよ。」「先生！」
「ブラスさん、ゴメちゃん、三日間お世話になりました。」
「・・アバン殿・・。」「ピイ～・・」
「二人共、これは仮免なので精進してください。それとティファさん。」
アバンはそれぞれに挨拶と残すべき言葉を愛弟子達に伝え、最後にティファに声掛けをする。
「ハドラーの注意を貴方に向けましたがあれでよろしかったでしょうか？」
ティファにだけ伝わるようにひそりと話しかける。
ダイ達と違い、自分はティファの強さがよく分かった。
今の自分ではこのティファには全く勝てず、あのハドラーよりも強

いと。
　しかし戦う気配が全くなく、ハドラーを倒すのではなく教え説こうとしているように見えた。
　強者のティファの思惑は分からないが、何か意図してしているのであればと考えて、あえてティファの思惑に乗ってみたのだ。
　・・小声で言ってきたって事は、あらかたの事はバレましたか・・この人は本物の天才だ。
　今のハドラーとアバン先生はコインの裏と表だ。
　ハドラーは力があれど中身が無い。
　アバン先生は中身があれども力が無い・・両者ともこの時点ではその地位には不足している。
「やり過ぎですよ・・」思惑見抜かれたのは癪なので少しムッとして返した。
「あなたにはこれを。」
　いたずら子供に対してする苦笑顔で―カールのお守り―を渡そうとしてきた・・。
「それよりも眼鏡ください。その眼鏡伊達ですよね。」
「・・これをですか？」
　砂地まみれだけどそれがいい。
「これでよろしければ・・」先生手ずからかけてくれた。
「私に似合いますか？」
「・・あまり・・」
「預かります。」
「ティファさん？」
「ティファさん、預かりますとは・・」
　自分はこれからハドラーを倒すべく、―あの呪文―をしようとしている。
　命を懸ける自分に眼鏡を預かるとティファは・・無駄であると言おうとしたが、
「私にはこの眼鏡は大きくて全く似合っていませんよね。」ティファが

話しかけてきた。
「はあ・・まあ」
知っていて・・なぜそれがいいと。
「だから一時だけです。この伊達眼鏡と―その理由―も全部預かります。」
「ティファさん⁉・・あなたは一体・・」
本当に・・この子供は何をどこまで知って、見通しているのか。
伊達眼鏡は自分の実力を隠し、平和を願う証。
これを掛けている今は教師をして平和の芽を育ててきた。
その理由を・・この子供はきちんと知っているのだろうか？
「守り抜いてみせます。様々な苦難や立ちはだかる者達から。」それはつまりダイ達を・・。
「返してほしければ相応の対価が必要です。
なので、頑張ってください、足りなければ返しません。」
「・・返してもらえますかね・・」・・今から自分は・・
「カールのお守り」
ティファに小声で言われ、胸元のお守りを改めてみて思い出した。
―これは王家に伝わるお守りです、必ずやあなたの命を守ってくれます―
先の大戦の旅立ちの日に―フローラ王女―が渡してくれた時に言ってくれた言葉を思い出した。
・・何故そんな大事な人から貰った大切な言葉を今まで忘れていたのか・・時の中に埋もれた大切に渡された思いを、ティファが掘り起こし、
「死の淵にいってもあがいてください。みっともなくてもじたばたと。」
また新たな大切な言葉を贈ってくれた。
自分よりも並外れて強くとも、心根の優しい少女なのだティファは・・ならば!!
「ティファさん！」
「はい!!」

いい返事だ、みんなに聞こえるようにきちんと宣言をしよう！
「―眼鏡―を預かってください。必ず返していただきます。・・大切に守ってあげてください。」
眼鏡に託した思いと、平和の芽をまもってほしい。
「先生・・？」「ティファ？」ポップとダイはきょとんとしている。
まだ分かりませんよね。でもいつかは必ず気が付いてくれるはずです。
自分達二人が何を預け、約束をしたのかを。果たしてティファに返事は、
「はい、必ず守り抜きます。」
ふわりと笑い、目を見てきちんと返事をしてくれた。
しかしだ、「名前を呼んではくれないのですか？」「・・先生⁉」
我が儘を言ったら、素っ頓狂な返事が来た。
実はこの三日間、ティファは意識的に自分を避け徹底して名前を呼んではくれなかった。
ポップとはすぐに兄と呼んで仲良くなっていたのに・・実力隠しと分かってもさみしく思う。
「・・っつう・・頑張ってくださいアバン先生!!」
ティファが、顔を真っ赤にしてエール付きで名を呼んでくれた!!
「ありがとう、ティファさん。」「・・はい」
「もういいか、弟子との別れはその辺で良かろう。どうせ後を追わすのだからな。」

あの残虐非道で・・暴君だったあのハドラーが・・呪力を溜めたまま待っていてくれた。
ティファが来る前のハドラーだったらいきなり撃ってきそうだったのが。
ティファが他者に与える影響は本当に凄い。
弱かったポップの心に勇気を与え、挫けかけ死なば諸共にと思っていた自分の心に希望を灯し、
・・ハドラーの心にも何かしらが響いたようだ。

おそらくは実力が高いと認めたティファの言葉に、感じるところがあったようだ。
それは―力のみ―ではハドラーもまた一流と言えよう・・それに中身が伴ってしまってはティファの思惑は何かは分からないが！今この場で確実にハドラーを倒す!!
「勝負ですハドラー!!!」
・・始まった・・・アストロンも全身に掛かって動けない。見守るしかない。
生きてまた再び会うことを・・信じて待ってますアバン先生!!

放て勇者の閃光を!!

全てはもう見守るしかない。
先生がメガンテをして、カールのお守りで助かる率は七割程度・・
万能なアイテムはこの世界にはない。
万が一先生が戻ってこれなくとも、私が先生の位置で一行をフォローして助けていく。
けれどもそれは力ではなく、心を導くようにしていく。
実力はこの大戦中嫌でも上げねば死んでしまうから自然について来る。
でもダイ兄・ポップ兄と兄と呼んでも私よりも子供な二人の心を守ってあげたい。
辛い戦いや出来事がこの先に待っているのを知っている分、出来る心のケアをどんどんしてあげる。
どんなことをしても、大切な人達の心身共にまもってあげたい。
・・だから、先生には必ず戻ってきてほしい!先生の死で、泣いて悲しむ人が大勢いる。
その人達の為にも、死を乗り越えて戻ってきてくださいアバン先生!!

「うおおお!!」
「アバン!!きっさっま〜!!俺諸共に!!」―バチバチ!!―
ハドラーの放ったベギラマを紙一重でよけて喰らったダメージをものともせずに、アバンは己の魔法力全てを指先に注ぎ、メガンテに気が付いたハドラーは振りほどこうとあがくが、
「グッ・・ガアアア!!」
注ぎ込まれる膨大な魔法力の引き起こす激痛に襲われ振りほどく事が出来ない。
「ポップ、ダイ君、ブラスさん、ゴメちゃん・・ティファさん、後を・・頼みます!!」

―メガンテ!!!!―

閃光と共に、炎と爆風が辺りを薙ぎ払う。
戦いへの狼煙か・・送り火か・・どちらにしてももう後には引き返せない。
―ガラ・・―・・あれは・・
―バサ!!―・・大量の土砂の下から出てきたのは・・ハドラーだった。
「・・アバンめ・・道連れを選んでもこの様か・・」
頭の両端から血を流している以外、ハドラーにさしたるダメージが無い!!
しかも・・妙に静かで・・先生に勝ったのに、傲り高ぶった様子が無い!!
―ゴオウ!!―「・・貴様ら全員、アバンの元に送ってやる。あの世で再会するがいい。」
慢心なく、きっちり止めさしていく・・でも!!
負けたくない!託されたんだ!!あの素晴らしい人から、大切な者達を守るように!!
「うおおおおおー!!!」・・ダイ兄。
ダイ兄の紋章が・・私の中からも・・力が溢れてくる・・共鳴してる!!
もっと・・力を!!守り切れる力を!!「あああああー!!」
・・なんで・・どうして・・あのハドラーは生きていて!!あんなにいい先生が死んじゃって!!
俺はもっと先生と過ごしたかった!!
ポップと先生の三人で、物語に出てくる勇者一行の様に悪い奴を倒して行って・・レオナと、
ロモスの優しい王様助けて・・冒険をして・・平和を取り戻して・・テイファとじいちゃんが待つデルムリン島に皆で帰って・・そう思っていたのに!!
先生が命を懸けても・・あの魔王には勝てなかった・・逃げる?どうやって?
全身がアストロンに掛かって動けない・・そもそも逃げたくない!!

俺が倒す!!敵を倒して皆を守るんだ!!!俺が・・勇者だ!!!

「うおおおおおー!!!」

想いに応えるように、体から力がどんどん溢れてくる・・レオナを守りたいと強く願ったあの時の様に・・どんな力でもいい!!今!皆を守れる力が欲しい!!!

―バキ・・バキバキ!!!!―

(こいつ等アストロンを・・自力で破るつもりか⁉)

アストロンは余程の破壊力があっても必ずかけられたものを守る呪文。

しかしそれは諸刃の剣で、アストロンに掛った者を守るものがいなくなれば今の様に窮地に立つことになる。

それでもアストロンに掛かっている間は手出しの難しい強力結界呪文を・・高々子供二人がヒビを・・。

―ビシーン!!ヒーイーン!!!―

(あれは・・あの額の紋章は・・まさか!!!)

アストロンは完全に破れ、ダイとティファの額には力強く紋章が光っている―竜の紋章―が!!

(俺の考えが正しければ・・今この場で二人を確実に殺す!!!)

「ベギラマ!!!!」

「あああああー!!!」ズガーン!!

(何という闘気・・ベギラマをかき消しただと⁉)

二人の竜闘気が合わさり、ハドラーのベギラマを完全に防ぎ切り、

(先生・・見てて!!)

ダイは腰のパプニカのナイフを右手に―逆手持ち―をする。

(あの構え・・まさか!!)アバンとの戦いで呪文を撃つ魔力も底をつき、ヘルズクローで

止めを刺そうとしたが・・あの構えは!!

「アバン・・」「させるか小僧!!イオ・・」

「邪魔するな!!土龍閃!!」―ズシャー!!―

ダイの構えと溜めている闘気の妨害をしようとイオラを撃とうとハドラーを、察知した

ティファが大量の闘気混じりの土砂をハドラーに浴びせる。
兄の思いの詰まった一撃を、邪魔させない!!
「今だダイ兄!!!」
「ストラーシュッッ!!!!」
紋章の力とありったけの思いを込めて、放て勇者の閃光を!!!

旅立ち

ダイの放ったストラッシュは未完成ながらも威力はすさまじく水平線の彼方まで届き、
直撃を受けたハドラーは手持ちのキメラの翼でかろうじて鬼岩城へと逃げ延びた。
ティファは行き先を知っているが放っておいた。
瀕死のハドラーよりも・・「先生!!アバン先生!!!」
アストロンが解けたポップは砂浜に力なく座り、師を思い泣き伏している・・。
ダイの方を見れば・・「う・・っく・・」無理やり泣くのをこらえている。
(泣きたければ・・思い切り泣いた方がいい・・)
ティファはまずダイに近づき、握りしめているパプニカのナイフをゆっくりと離させ腰の
鞘に納め、ダイの手を引いてポップの真横に座らせた。
何だろうと、疲れてぼおっとしたダイは妹の顔を見ようとしたが出来なかった・・ポップ諸共に、
頭を抱きしめられた。
「二人共、泣きなさい。
悲しいときは泣きなさい。
泣いていいのですよ。」
優しい声が、泣くことを許してくれる。
戦いに犠牲は付き物というのではなく、倒れたものを悼んでいいと・・許されて・・
「うああー!!先生!!アバン先生!!」
ダイも、ポップの様に師を悼み、心の痛みのままに叫ぶように泣き始めた。
ポップも同様に、喉も嗄れるほどの声で・・ティファの小さな体にしがみついて泣いた。
力の限り胸の中で泣き、しがみつく二人をティファは何も言わずに

受け止め、兄二人の悲しみを全身で受け取め頭をゆったりと撫ぜ続ける。
（今日だけは、今だけは泣いてもいい。）
これからもっと、今以上の過酷な旅が待っている・・子供にとっては地獄巡りと言ってもいい。
逃げたくなる程の酷きことが、恐ろしい敵たちがまっている・・死の淵まで行くことも。
そんな旅が待っている二人を、今日だけは心ゆくまで泣かせてあげたい。
その思いでティファは兄二人を心の底まで抱きしめる。
ダイとポップは泣き疲れと・・甘く優しいティファの気配につつまれて、眠りの底へとおちてゆく。

「おやすみなさい二人共。」
ゆっくりと休んでほしい。
「・・じいちゃん、先にポップ兄を家に・・ちょっとまっててて・・。」
島の皆は今狂暴化を防ぐために私が寝かせたので力を貸してもらえない。
かといって、今のダイ兄をじいちゃんじゃ背負うのも無理だ。一人ずつしか運べない。
ポップ兄を背負い、ダッシュをすればあっと言う間に我が家に着く・・私本来の力が使える
・・・アバン先生が居なくなったことで・・。
そのまま二階の客間に寝かせる・・布団はポップ兄と―先生―の二人分ある。
もしかしたら魔王は来ないかもしれないと一縷の望みをしていたが知識通りになってしまった。
ポップ兄を寝かせて、直ぐに浜に戻ってダイ兄を背負いじいちゃんとゴメちゃんとゆっくりと歩く。
じいちゃんは始終俯き涙を堪えて、ゴメちゃんは私の肩に留まってぽろぽろと涙を流している。

二人も先生が好きだった・・思う存分泣いてほしい。
悲しみに沈まない様に、前を向いて歩けるように、悲しみを内にため込まないのが一番いい。
今日はダイ兄も二階の客間に寝かせた。
朝起きた時、ダイ兄もポップ兄も一人は嫌だろうから。
「・・ティファや・・。」
「・・私は大丈夫だよじいちゃん。
それよりも、旅の支度してくる。
誰も・・これ以上悲しまない様に、薬草うんと持っていく。
いいよね・・わたしがふたりについていっても・・。」
「ティファ・・行って・・無事に帰ってきておくれ・・。」
兄二人を寝かしつけ、哀しみを湛えた瞳で二人を見つめても・・ティファは泣かない。
本来ならば、ダイよりもよく泣くティファが。
心配で声を掛けても、静かな声は揺るがず、かえって不安になる。
心配じゃ・・こうとなってはダイとポップ君の二人だけで旅をさせるのは不安じゃ。
ティファには薬草知識と、外の旅の心得がある。
島の外の知り合いもいて、三人の旅の方が心強い・・しかしやはり心配だ。
ティファはダイとポップ君を泣かせても、自身は泣いていない・・自分達が泣いてもだ。
泣くのは悲しみや痛みから心を守るのには必要な事だ。
ダイとポップ君の事を守っているのに、ティファは自分の事を守っていない・・。
「ティファよ。」
「何じいちゃん?」
「守るのじゃぞ。」
「うん、分かってる。皆を・・」
「自分もじゃぞ。」
「・・じいちゃん」

「自分を守れぬものが他者を守れるはずが無かろう。。」
「・・・・」
「アバン殿から何かを託されたのじゃろう?その眼鏡と共に。」
「うん。」
「じゃからなティファや、それと共に自分の事も大切にするのじゃぞ。」
（・・優しいなじいちゃんは）
ブラスの優しさが沁み込み、ティファはふいに涙がこみ上げそうになる。
「・・守るよ、だから・・日の出まで休むね。」
「分かった。準備は明日すればいい。」
「うん・・お休みじいちゃん。」
ティファは一階の自室で休むことにした。
扉を閉めて、ハイエントの防音結界を張ると―ポタン―
涙が一滴こぼれ、後からどんどん流れ・・胸の痛みにたまらなくなりベッドへと思いっきり
飛び込み布団を握りしめて大泣きをし、ダイ達同様眠りの底へと落ちていった。

「本当に行くんじゃな、ダイ・ティファ・ポップ君。」
「うん、ロモスの王様と、レオナを助けに行かないと。
俺、皆を守りたいんだよ。
「じいちゃん、私も一行の料理人として皆を心身共に守るね。」
「ブラスさんお世話になりました。
俺も先生がやり残したことをしに行きます。」
朝全員が起きた時、話し合って決めた事。
魔王・・今は魔軍司令官になったハドラーに止めはさせず、今この時にも世界は危機に瀕している。
・・一応兄二人からは静止が入ったけれども、私が回復の薬草に詳しいとじいちゃんが後押ししてくれてついていける事になった。
出発の為にポップ兄達が乗ってきた小舟を三人用の帆船型にする

のでちょっと手間取った。
「ティファならガルーダがいるじゃんか・・。」ちょっとポップ兄がぶうたれた。
「あのねポップ兄、ガルーダは目立つでしょう。
どこに敵の目があるのか分からないんだから、目立つことは禁止！
手の内はなるたけ隠しておく事。
今はそうでもないかもしれないけど、レベルが上がって手数が増えてもギリギリまで敵に気づかれないようにしないといけないよ。
変に目立つと敵に目を付けられて、攻撃目標一番にされたら危険度が増しちゃうでしょう。」
「そっか・・分かった。」最初のミニ授業になった。
こうやって少しづつ生きぬいてしたたかに強くなる方法を教えていかないと、
一歩間違えば全滅が目に浮かぶ。
勝って生き抜いて、これから出会う仲間達も守っていこう。

【ティファ・・本当に彼の者の行方は・・】
「知らずに行くね、竜じいちゃん。」
私も一旦は先生が完全にいなくなったと思って旅立つことにした。
私自身が何かに縋りつかない様に。
不確かなものを頼らない様に。
『気を引き締めて行け。
これより我ら三神はどのような事が起ころうとも其方に手助けはしてやれぬ・・』
「分かってますよ。
ですから、そんなに泣きそうにならないでください天神様。」
[本当に気を付けていくんだよ!!
変なのよって来たら種族問わずで倒しても、僕たちが許してあげるからね!!]
「・・もう・・人の神様は～。」
船の完成前に、忘れ物を家にとりに行く振りをして洞窟に来て三神

様に挨拶に来た。
三神様の方が旅立るんじゃないかってくらいに辛そうだ。
「行ってきます。」
この世界で育って十二年・・様々な思いを込めて挨拶をして洞窟を出た。
洞窟の隣には、「ガルーダ、行って来るね。」ガルーダの寝床がある。
「―我はいらぬのか・・―」・・ちょっと不機嫌だ。
「暫くは兄達の歩調に合わせるよ。
・・遅くとも十日後にはガルーダに来てほしい。
白い鳩が来たら、鳩に付いてきてほしいんだ。」
ヒュンケル戦後の後位にウォーリアさんに頼みごとをするために戦線離脱をして別行動したい。
近頃ようやく式鳩が上手くいくようになったから、離れていてもダイ兄達の元に飛ばせる。
仕組みは簡単。
ダイ兄達の服に極最小の式の虫を付けて、虫で周囲の位置を確認するか、その式を目印に式鳩を飛ばせばいい。
離れていても皆を守る方法が増えた。
ガルーダもしょっちゅういたら目立つし、ガルーダだってのんびりしたいはずだ。
「―分かった。気を付けて行け―」
「うん、また向こうでね。」
ガルーダにも挨拶をして浜辺に行けば、
「ティファ～船で来たよ～。」
「早くしろ～でるぞー！」
船の完成と、島の皆の見送りが待ってた。
―バサリ！―
「「出発!!!」」
帆は追い風を受けて満杯に広がり海へと勢いよく走りだす。
三人で島が見えなくなるまで手を振り続けた。

島に、じいちゃんに、三神様達にお別れをして、いざ旅立ちだ。

ー幕間ー勇者サイド

―三神―

【行ってしまったの。】

［無事に・・帰ってこられないか・・］

『致し方なかろう。

流れはあれを取り込んで動き出した。もはや止められん』

［・・酷いことしてるよね・・僕達］

運命はまさに動き出した。

それはダイ・ポップだけではなく、この世界に存在しないはずの―ティファ―という

少女を取り込んで。

ティファは他次元で死んだ者である。

この世界の大魔王バーンの力量は自分達を滅ぼすことなぞ容易にできてしまう。

しかしどうも大魔王は自分達を滅ぼすだけではなく、地上をも消そうとしている。

幾度かその試みを頓挫させようとしたのだが・・鎖国状態の天界からの干渉なぞ、バーンにとっては

無いに等しく全て無に帰した。

自分達は神と崇められてはいるが、力強き者には滅ぼされる。

それもこれも、十万年前に当時の主神が、やむをえずにした事とはいえ結果今の魔族たちの心を歪ませ闇を持たせてしまった責任はある。

だからと言って何も知らない地上界の滅亡を座視するつもりは毛頭無いが・・自分達の出来ることは尽きた。

そう嘆き、絶望しかけた時に驚くべきことが起こった。

当代の竜の騎士に子が出来ると。

人々が言うほど神は万能では決してなく、竜の騎士に子が出来ようとは予想だにもしていなかった。

しかし千載一遇の好機と三神には映った。

他の世界からこの世界の知識を持った者の力を借り、竜の騎士の双子の片割れになってもらう事だ。
神たる自分達が他者頼みなのは情けないのは自分達がよく分かっている。
それでも藁にも縋る思いで条件に当てはまった魂を呼び寄せたら・・いきなり死後の裁判を
楽しみにしていたのだと文句を言ってきた超が付くほどの変わり者だった!!
事情を話してもさして態度を変えず、
「責任もてませんがいいですか。」
なぞとのたまってきた。
・・どうなる事かと最初はハラハラした。
言う事やる事全て滅茶苦茶で、すぐに無茶して行き当たりばったりな行動で痛い目を見ても、
「次行ってみましょ～」
などと能天気に言いながらも・・心の奥底では痛いのや怖い気持ちを、無理やり押し込めて頑張っている優しい子なのを自分達はよく知っている。
家族の為、友の為、仲間の為に、決して弱音を表に出そうとしない。
「何となく、大丈夫です。」
今は、あの娘の言葉を信じて自分達も動くのみだ。

―アバン―

「返してほしければ相応の対価が必要です。」
「足りなければ返しません。」
―師―としての立場を返してほしければ這い上がって強くならないと返さない。
おそらくティファはそういいたかったのだろう。
メガンテをもってしても、ハドラーを倒せた確信はまるで持てない・・全ては自分の
力量不足のせいだ。

今自分が生きているのはフローラに貰ったカールのお守りが、自分の命の代わりに砕け散ったお陰だ。
「カールのお守り。」
「死の淵からでもあがいてください。」
・・お守りの力もさることながら、瀕死の自分を死の淵から足掻かせ、生き返れたのは
ティファの言葉があったればこそ死なずにこの世に戻れた。
・・勇者と呼ばれ、この平和の世に馴れすぎたのか。
今の自分はハドラーどころかティファの足元にも及ばない。
ヘルズクローは現役のころの自分でも手こずった技だったが、ティファは苦も無く避けきれ
飄々としていた実力者。
それもあるが、ダイの中に眠っている力を引き出すことすらできない程自身が弱くなっている。
今の自分が一行の中に入っても、足手まといになるのが関の山だ。
ダイとポップは自分を頼ってしまい、中途半端な強さにしかならないのが目に浮かぶ。
だからこそ助かって浜辺に行き、三人が旅立つときも黙って見送った。
ダイとポップは明るく島に別れを告げ、ティファは自分の眼鏡をきちんとかけていてくれた。
「預かります。」
「似合わないので一時だけです。」
おそらくはティファは意識して自分と同じような言動で二人を導いてくれるだろう。
・・本来は大人の自分がすべき事を、力量が足らずに子供に押し付ける・・最低な話だ。
「弟子育成なぞにうつつを抜かし、お前自身は弱くなりおって!!」
「老いぼれたかアバン!!」
あのハドラーの言う通り、全くもって駄目な自分を今一度鍛え直さねばならない!!

一時恥をかいても自分が出来る最良の力を身につけねば！
その為には故郷カール王国にある破邪の洞窟に行く必要がある。
今まで人が到達できなかった深部まで潜り、一行の助けになる強さを。
・・そのぐらいしないと、ティファさん眼鏡返してくれなさそうです。
中途半端な力だと思われれば、感動の対面なぞ丸無視されて即座に、
「全くもって足りません！返しませんので帰ってください。」
とか言われて追い出されそうだ。
・・そう考えると可笑しくなり、想像の中でも笑ってしまう。
ティファは本当に不思議な子だ。
会ってまだ三日しか経っていなくとも、自分の心に影響を及ぼしている。
次会う時には必ず眼鏡を返してもらいましょう。

ー幕間ー魔王軍サイド

―ハドラー―

おのれアバンの弟子達めっ!!次に会った時が最後にしてくれる!!
悪魔の目玉の情報で宿敵アバンの動向が分かり、大戦三日目ですべての指示を出し終えた後、
大魔王バーンの許可を得て単身島に乗り込んだ。
・・まさかアバンが弱くなっていたとは・・何故か心から喜べずにイライラとする!
メガンテを使っても自分を倒しきれなかったアバンを苦々しく思ってしまう。
島に行く前は強くなった自分が勝てさえすればいいと思っていたのが不快に感じる。
「全然魔王に見えません!」
「酒場の外で喧嘩してるおじさん達並の気配しかしません!!」
いきなり乱入してきた小娘の言葉が、胸の奥に引っかかったせいだろうか・・。
ガルーダに指示を出して従えさせ、鋭き一閃を放ってきて、ヘルズクローを無傷で躱した
アバン以上の実力を持った小娘の言葉が・・。
あの小娘と、ダイといった小僧の額に輝いた紋章は・・よもや竜の紋章か・・。
あの紋章が浮んだあとの二人は、爆発的な強さで自分を撃退した。
あの紋章が竜の紋章であれば大変なことになる!
何故なら自分の配下の超竜軍団の長のバランは当代の竜の騎士だからだ!
・・それを大魔王から教わった時には戦慄が体を駆け巡ったのを今でもはっきりと覚えている。
妻を人間に殺され、子等とも引き離された故にバランは今魔王軍に属している。
人間を深く憎むがゆえに。

しかしここであの子供達に会ってしまってはとてつもなく厄介な事になりかねない！
正義の使徒となった子供達に会い、改心させられれば魔王軍の最大の敵となってしまう!!
それだけはどうあっても防がねばならない！
ダイといった小僧は未熟ながらもアバンに受けた傷よりも治りが遅く、魔法使いの小僧から受けた右手の平もズクズクと深く痛む。
間違いなくアバンの弟子達は今後の自分達の脅威に成長するだろう。
そうなる前に叩き潰す！どのような手を使っても!!
しかし今の自分は手負いの身、誰かに任さねばならない。
道連れにされずとも、アバンから受けた傷も深かった。
やはり魔王の宿敵と呼ぶにふさわしかったのだろうか。
そのアバンが弟子達に別れの言葉を言っていたのを、何故自分は待ったりしたのだろうか？
問答無用でベギラマを放っていれば、もしかしたら弟子も諸共に片が付いたはず。
「中身が伴えば一流です。」
「現時点では勿体ないです！」
ティファといった小娘の言葉が妙に引っ掛かり、待ってしまったのだろうか。
竜の騎士の子で、勇者アバンも実力を認めていた娘。
そのようなものが認める魔王とは・・馬鹿馬鹿しいと・・鼻で笑おうとしたが、何故か出来なかった。

―キル・ピロロ・ミスト―

「ハドラー君、すっごく傷だらけになって帰って来たね～。」
「ね～、ボロボロだ。」
「・・・・」
「それに勝って帰って来たというのに浮かない顔をして妙に静かだったね。」

「してたしてた～。勝ったのに変なの～。」
「雰囲気が島に行く前と少し違う気がするね。」
「どうして？」
「それはねピロロ、なんだか妙に落ち着いて、少し貫禄が付いた気がするんだよ。」
「貫禄って？」
「ん～・・大人になったって事かな？」
「大人？それじゃあ今までは子供だったの？」
「・・・・・」
「ほ～ら～、ミストもだんまりしてないで少しは喜ぼうよ？
君のお気に入りのハドラー君が、ようやく大人の階段を上り始めたんだからさ、
祝ってあげなよ～。」
「・・・・・・」
「それにしても、それだけの事があの島であったんだね・・。
誰だろうね？ハドラー君にあそこまでの影響を及ぼした人物は？
倒された勇者様かな？
それとも勇者様が教えていたっていうお弟子さんの誰かかな？
お弟子さんだとするとちょっと楽しくなってきた。
僕にお鉢が回ってきて、暗殺依頼がバーン様から来たら楽しいな～。
あ・・でもそしたらハドラー君怒るかな？
獲物を横取りされたって。」
「・・その命をバーン様が下されたのであれば、ハドラーも文句はなかろう。」
「おや！珍しく喋ってくれたね。
久し振りだよ、親友の君の声を聞けたのは。
ふふ、とっても嬉しいな～。
でも中身はやっぱりバーン様に関する事なんだね、君って本当に分かりやすいよ。
バーン様一筋だもんね。」

「・・・」
キルとミストは味方の魔王軍の前にはめったに姿を現さない。
キルは始末人として裏で敵勢力と役に立たないとバーンに判断をされた味方を裏で殺す死神。
ミストは大魔王の右腕と呼ばれる影の参謀。
ミストはともかく、キルは今退屈をしている。
大戦が始まってしまえば、裏で暗躍をする死神の出番は当分なさそうだ。
バーンの真の目的を知らないミスト以外の軍の進撃を見ていても詰まらない。
最後には地上はすべてなくなるのだから。
―自分の本体―であるピロロは、真の主である冥竜王ヴェルザーの命を果たそうと虎視眈々と
バーンを狙いつつ、獲物を残虐に殺して楽しんで過ごしているが・・
近頃―自分―は
それに対して嫌気がさし始めてきた。
・・僕って機械仕掛けの人形の筈なのに・・
ヴェルザーに与えられた、自律出来るように埋め込まれた自我が育ちすぎたのだろうか？
退屈なのはとても嫌だ・・面白い事がおきてほしい。

ーロモス編ー　ネイル村

島を出れば大冒険が待っていた。
襲い掛かる魔王軍との攻防に明け暮れる日々に、いつしか兄二人は逞しく・・とかいえたらな～。
現実はそうはいかない。
私達三人は絶賛迷子です!!
あ～あ言っていて情けなし。
旅立って三日目なのに首都のロモス城は果てしなく遠そうだ。
ダイ兄は前回は飛行モンスターできたから魔の森は通っておらず、
ポップ兄もこの森は通ってないのと、ルーラがまだ出来ないので歩くしかない。
式でキメラの翼作れるから渡せばいいとどっからか突っ込みが来そうだけれども、
早々楽はさせません。
自力で歩いて辿り着くのも修行です。
迷子になっても休憩に合間に木の実や野草、川でとった魚を出したりして二人の士気を
下げないように気を付けながら旅をしている。
先はまだ長い、張り詰め過ぎたらばてちゃうもんね。
でも歩いていて収穫があった。それも飛び切りのだ。
地元のモンスター―達が全く狂暴化をしていない。
スライム、毒タケ、動く木がいても襲ってこずに、のんびりと通り過ぎていくのには
ダイ兄とポップ兄がキツネにつままれた感じでポカンとしていた。
無理もない話で、大戦の始まりとハドラーが来たときは確かに島の皆が狂暴化したいたのを見ているんだから、島のモンスターは全部そうなっていると戦う覚悟して出てきただろう。
「何でモンスター達普通のままなんだろう?」
「どうなってんだこりゃ?」
二人共首を捻っていた。

破魔の石を七年間ばら撒いた苦労が報われた。
魔王軍にとっては計算外だったろうけどざま見ろだ。
「でもこれで罪のないモンスターを倒さなくて済むね～。」
これから相手をするモンスターは間違いなく魔界産の魔王軍モンスターだ。
平和に暮らしていたモンスターが被害を受ける可能性はあっても、倒す必要はなくなったわけだ。
「・・そうだね、本当に良かった。」
「だな・・。」
二人もホッとしてる。
私もダイ兄も島でモンスターを家族として育ち、ポップ兄も島で三日間皆と接しているうちにモンスターに対して友達みたいになった。
戦わなくていいならそれに越したことは・・
「きゃー!!」
・・悲鳴？
「ダイ!!」
「うん！あっちから聞こえた!!」
「行くぞダイ！ティファ後から来い！」
・・二人共頼もしい顔で走っていったけど・・悲鳴の主は女の子っぽかった。
何に襲われてるの？
「こないで！・・だめ・・」
辿り着いてみれば黒髪を三つ編みにした五歳くらいの女の子が、バブルスライムから
遠ざかろうとしてる。
どうやら相手は女の子に危害を加える気はなさそうで、物珍しそうに近寄っているだけのようだ。
何となくわかったをダイ兄達の袖を引いて小声で伝えたら、
「んじゃ、お引き取り願うか・・。」
―ボン―ポップ兄がバブルスライムの頭上に軽いメラをして注意を引いて、

「あのね、この女の子恐がってるよ。」
モンスターとお話しできるダイ兄がスライムとお話をして、
「こっちおいで。」
私が女の子を保護した。
三人の初連係プレイで平和的解決が出来た。
「助けてくれてありがとう。」
お礼言われたけど・・この場合助けた内に入るのかな?
「お礼はいいよ、あいつ悪い奴じゃなかったし。」
「俺たちたいしたことしてねえよ。
それよりもお前、親とはぐれて迷子か?」
保護した子にポップ兄が聞いてみれば、村にいるお母さんが高熱を出して薬が切れているので一人で薬草摘みに来てしまったらしい。
・・原作通りモンスターが狂暴化してたら下手したらこの子死んでる。
つくづく破魔の石ばら撒いて良かったと思うわ~。
「私はティファ。あなたは?」
「・・ミーナ・・」
「ミーナちゃん、村への道分かる?」
「・・分かんない・・分かんなくなっちゃた。」
「そっか・・ポップ兄。」
「あいよ。」
「メラで焚火作って煙り上げよう。
こんな小さい子が一人で森に出たら村の大人が捜してるはずだよ。
煙で来てくれるかもしれない。」
「分かった。」
「そしたら俺は焚き木拾ってくる。」
「お願いねダイ兄。
さてミーナちゃんはこのビスケットをどうぞ。」
甘いものを食べて落ち着いてもらおう。
「・・いいの?」
「どうぞどうぞ。」

「ありがと・・いただきます。」
ようやく笑ってくれた、可愛いな～。
「俺にはないのかよティファ・・。」
「・・お仕事終わったら二人分あるからね・・」
物欲しそうにするポップ兄って子供っぽい・・てか子供だった。
ダイ兄も戻ってきて狼煙っぽいのを上げつつ、四人でビスケットを齧ってのんびりと
お迎えを待っているとヒトの気配が近づいてきた。
まだ二人は分からないようでまったりとしている。
・・仕方ないか・・まだ二人共見習いレベルを卒業したくらいだもんね。
でも、欲を言えば気付いてほしいところだ
―ガサリ―
木々をかき分ける音で二人もようやく気が付いた。
警戒する二人の前に出てきたは、「ミーナ！無事だったのね。」
ピンクの髪を長く伸ばしたマァムさん登場!!
生マァムさん超かわいい!!!
元気いっぱいな短パンに半そで姿がまたいい!!
・・いかん・・心の中とは言え興奮しすぎだ私・・落ち着こう。
「ミーナ！みんな心配して・・」
捜し人を見つけてほっとしたマァムさんがミーナちゃんに説教始めてる。
「まあまあ、その辺で続きは村でしませんか？
もうじき日が落ちそうですよ。
村に帰ってからゆっくりとミーナちゃんからお話を聞いてみてはどうでしょうか？」
・・アバン先生風ってこんな感じかな？
旅の間中眼鏡をかけて私なりにアバン先生の言動を思い出して、今マァムさん相手に
初・アバン先生風を披露して説得してみた。
ただでさえこの森は日中でも鬱蒼として日が当たり辛くて暗いの

に、夜になった真っ暗だ。
　モンスターが狂暴化していなくとも、縄張りをうっかり踏み荒らしたら確実に追い出そうと襲ってくる。
　リスクは避けたいし、ミーナちゃんの安全確保が優先だ。
「・・あなた達は？」
　・・ちょっと怪しい人風になったかな？
　何やら警戒されたような・・。
「あのねお姉ちゃん。ミーナねこのお兄ちゃん達に助けられたの。」
「そうなの？ごめんなさい、ミーナを助けてくれたのにお礼も言わずに。
　私はマァム、ミーナと同じネイル村に住んでいるの。
　ミーナを助けてくれてありがとう。」
　う～ん良い子だなマァムさんって。
「俺たち何もしてないよ・・俺はダイ。」
「そうだぜ、ダイの言う通りお礼はいいよ。
　ポップってんだ。」
「たまたま通りがかっただけですよ。
　ティファと言います。」
「ティファ・・あなたのその眼鏡。どこかで？」
　おっと鋭い、観察眼はなかなかのもんだ。
「マァムさんと言いましたね。」
「ええ。」
「その首から下げているペンダントはもしや―輝聖石―ではありませんか？」
「あっ!!」
「・・マジかよ・・」
　・・二人の兄は少々鈍いか・・。妹は悲しいぞお兄ちゃん達・・。
「よく知ってるわね。
　これは私の先生から貰った卒業の証なの。」
「えー！貴方達もアバン先生の・・。」

村に行く道すがら自己紹介だ。
「俺は一年前・・って事はマァムは俺の姉弟子ってことか？」
「俺は三日しか・・アバン先生の弟子ってあっちこっちいるのポップ？」
「ん～・・俺も初めて他の弟子いるって知ったしな？」
先生話で大盛り上がりだ。
「あなたも先生の弟子なの？」
「いいえ、眼鏡を―預かりました―がアバン先生のお弟子さんではありませんよマァムさん。」
「そうなの？
でも、貴方何となく先生に似てるはね。」
「そうですか？」
表面すっとぼけたけど内心ではよっしゃーもんだ!!
こうやって頑張って先生に近づけて、先生の立ち位置に行くようにしよう。
「光栄ですが、私は先生程凄くないですよ？
お料理の腕位は及ぶかもしれませんが。」にっこり笑ってウィンクもつけちゃおう。
「ふふ、面白い子ね貴方って。」お、掴みはオーケーか。
「そのお姉ちゃん料理上手だと思うよ。」
「あらミーナ、どうして分かるの？」
「さっきビスケットくれたの。
お姉ちゃんがつくったんだって。」
「ミーナ、きちんとお礼した？」
「はい、マァムさん。
可愛いお礼をいただきましたよ。
ちなみにビスケットはまだだいぶ余ってますので良ければ二人ともどうぞ。
・・ダイ兄達の分もありますよ・・。」
「よっし！」
「いただきまーす。」

ワイワイしながら森を抜ければ村があった。
「見えたわ。
あそこが私たちの村のネイル村よ。」
・・懐かしいな～。
石落としに来て以来か。
「さっ、ミーナお母さんが起きて待ってるはずよ。」
「え！熱は？」
「たいしたことなくて落ち着いてる。
早くミーナの元気な顔を見せてあげて。」
「うん！」
ミーナちゃんを無事に送り届けたら他の村人や村長さんまで来てお礼を言われて、
ダイ兄とポップ兄を大いに照れさせた。
「今夜はうちに泊まっていってちょうだい。」
マァムさんからの申し出に、
「助かる～！」「良かった!!」・お兄ちゃん達あからさまに喜びすぎ・・迷子が堪えたか。
「マァムさん、私達が泊ってもよろしいのですか？
却ってお邪魔になりませんか。」
「おいティファ！」
「ポップ兄、きちんと確認しないとマァムさんのご迷惑になりますよ。」
隅々まで確認しないとだ。
「大丈夫よティファ。
私の―父さん―と母さんが知ったら泊まるように勧める人達なの。
このまま行かせたら反対に私が叱られちゃうは。」
「そうですか、良い親御さんを・・」・・って・・あれ？
今・・マァムさん・・お母さんのレイラさんの前に・・お父さんて・・言った？
「あのもしかして・・マァムさんのご両親というのはもしかして・・アバン先生の・・」

「そうよ、先生が話したの？
父は先生の一行で戦士をしていて、母は僧侶をしていたのよ。
二人も先生の新しいお弟子さんに会ったらびっくりして喜ぶわよ。
だから泊って頂戴。」
「分かった！俺も先生の一行の人に会ってみたい!!」
「行こうよティファ！」
「・・そうだね・・分かりましたお言葉に甘えてお願いします。」
どうなってんの⁉
何でロカさん生きてんの？
・・人が死ぬより生きてんのはいい事だけど！
呪いと戦いのダメージどこ行ったの!!
・・訳わかんないけど・・マァムさん家行ってみれば分かるか。
サクサクとお宅訪問させてもらおう・・。

初陣

「あそこがうちよ。
三人とも、遠慮しないでね。」
ネイル村は思ってたよりも広く、村の奥まったところにマァムさんの家があった。
・・ロカさんが生きてるってどんなどんな状態なんだろう？
会ったら勇者一行の大先輩に、きちんとした挨拶せねば。
気合を入れて家に招き入れて貰ったら、リビングにも入り口から見える台所のも人影はない。
気配は二人分あるし、
「父さん母さんただいま！」
マァムさんも元気に挨拶してる。
いるはず・・「遅えぞマァム!!心配したろうが!!!」わっ!!
すんごい雷親父の声がバリバリと降ってきた!!
「お客さん連れてきたの。
ミーナ助けてくれた人達で泊めてもいいでしょ？」
「何だと・・そいつはぜひ泊ってもらえ！」
・・えっと・・「あのマァムさん、今のは父君ですか？失礼ですがどちらに・・」
「あっいけない・・あのね、父さんまだ体が本調子じゃなくて寝室で過ごすことが多いのよ。
母さんも今父さんの寝室にいるはずよ。
後で父さんとは食卓で会えるわよ。」
成る程、ロカさんともかくレイラさんは大きな声出さないか。
後でか・・いや、すぐに会おう。
「失礼とは思いますが、」
「何ティファ。」
「ロカさんに今ご挨拶をしてもよろしいでしょうか？
泊めていただく家主にお礼も兼ねて挨拶をしたいのですが。」
よそ様の家の寝室に入るのはマナー違反だろうけど・・。

「俺もきちんと挨拶したい。」
「俺もだな。」
ダイ兄とポップ兄も礼儀正しくて挨拶したいようだ。
「分かった、こっちよ。」
寝室に通されると、痩せた男性がベッドの上に座っていて、傍らにはレイラさんが私達を迎えるために
立っていた。
肺機能が低下しているのか息をするたびに肩が上下をし、姿勢が自力で保てない為か、
枕もとの壁にクッションを当てて座っている。
それでもこちらを見る瞳には力強さがあり、歴戦の兵の風格が自然とにじみ出ている。
この人がだれか知らなくとも、敬意をもって接したくなるほどの人物だ。
「失礼いたします。
突然の事なのに泊めていただきありがとうございます。
私はティファと言います。こちらは兄のダイと、共に旅をしているポップです。」
「初めましてダイです。」
「ポップです。泊めていただいてありがとうございます。」
「堅苦しいのはいいよ、俺はロカ。こっちはかみさんのレイラだ。
ミーナちゃんの事ありがとな。」
「ミーナちゃんを助けてくれてありがとう。レイラと言います。」
二人のお礼でまたダイ兄達照れて赤くなってる。可愛いな～。
「お・・ティファって言ったな・・その眼鏡、もしかしてあいつのか？
それにポップ、お前が付けてる紋章あいつの実家の。」
「そうです・・俺達先生の弟子で、この家紋は先生の許可をいただいて
付けさせてもらっています。」
「やっぱそうか！はっは、俺の娘もあいつの弟子なんだぜ。」
「はい、マァムさんから道々お聞きしました。」
「お前さん、なんかあいつに似てんな。あいつは・・どう・・っく！」

雰囲気と言動がアバンに似ていて、同じような眼鏡をかけている少女にアバンの近況を尋ね様としたロカは急に胸の近くの服を握りしめうずくまる。
「ガハっ!!ア・・クゥ・・ハァア・・ハァアクゥ!!」
咳と共に苦しみ始めた。
「あなた!」
「父さん!!」
(不味い!!)
「レイラさん、マァムさん落ち着いてください。マァムさん、洗面器にお湯を入れて来て持ってきてください。
レイラさんは厚めの布団をお願いします。・・ロカさん背中を失礼します。」
ティファはロカの突然の発作に慌てることなくてきぱきと指示を出し、
冷静な声のティファの指示に二人も何の疑問も持たずに動き出す。
「ダイ兄リュックからタオル一枚出して、ポップ兄はレイラさんから布団受け取ってきてください。」
どうしていいか分からず途方に暮れる兄二人にも仕事を割り振りながらロカの状態を診察をする。
触れている背中にはほとんど肉がついておらず、加減を間違えれば骨が折れてしまいそうなほどだ。
顔色も悪く、唇もかさついていて生気が乏しい。
「ティファ!布団持ってきたぞ。」
「お湯持ってきたわ!」
「ポップ兄布団私が貰うからロカさんをもう少しベッドの足元の方に・・そうそこくらい失礼します。」
ポップにロカを少し移動してもらい、布団を丸めて即席のマットレスを作って背に充てて
ほんの少しだけ寝た状態にし、お湯に布を浸して固く絞り、
「少しはだけますね。」

ロカの寝巻の下から布を差し入れて胸に置いて、ロカが蒸気を吸えるようにする。
全員が見守る中、ロカは少しづつ呼吸音が静まり眠ってしまった。
「ティファさん・・ありがとう。いつもなら、こんなに早くは落ち着かないの。」
「どういたしましてレイラさん。三人とも、ひとまずロカさんは大丈夫ですよ。」
「・・良かった。」
「ナイスだぜティファ。」
「ありがとうティファ。」
お礼言われても・根本的な解決にはならないから少し複雑。
脈を図ってみれば弱くてゆっくりとしている。
この分だと内蔵系統も相当よくない。
・・大戦から十五年・・いまだにこの人は癒えていないのか。
「レイラさん、ロカさんは夜は眠れていますか?」
「いいえ・・時折咳き込んで起きて・・うつらうつらとしか・・。
それでも、定期的に昔の知り合いの方が来てくださって薬を飲んだ後べホマを掛けてくださって、変わった治療法ではあるけれども薄皮を剥ぐ様によくなってきているのよ。」
昔の・・薬とべホマって・・ロカさん生きてるのはおじさんのお陰か!
私ったら何でそこに気が付かなかったんだろう。
万能薬作りの時にはまだロカさんが生きていて、ギリギリ間に合ったんだ・・。
おじさんが熱心にやりたがったのは研究魂はほんの少しで、本当の目的はロカさんを
助ける方だ。
「今の治療に差しさわりのない範囲で、少量の痛み止めと眠れるようにムーラン草（眠り薬）もいかがですか?
一応本職の薬草学を修めた人から教わっていますので安全は保障

します。」
「何から何までありがとうね。」
「いえいえ泊めてもらうのでこちらはほんのすこしのお礼ですよ。」
　笑って言ったら、
「ふふ」
「どうかしましたかレイラさん。」
「いいえ、ロカの言う通り貴方がアバン様に似てるから。」
「そうでしょ母さん。」・・二人とも照れます。
　泊めてもらうお礼第二弾は夕食作り、一行の料理人の出番だ！
　無論レイラさん達は固辞しかけたけれども、スマイルで押し通して台所をお借りした。
　食材は島から持ってきたのと、上陸したロモスの浜辺で売られていた干し魚と根菜類が残っていたのを使って調理した。
　パンに栄養一杯の海鮮スープの出来上がり。
　少し前にロカさんが咳と共に起きたので、スープだけ飲むことになって食卓はみんな集合で来た。
　口にあってくれればいいけど。
「これ美味いな・・なんか体にすっと浸み込んでくみてえだ・・。」
　ゆっくりとロカさんが飲んでくれてる。
　ロカさんのだけ長めに食材を煮込んで柔らかくして、干し魚は入れないで御出汁にして出した。
　パンもスープにしてゆっくりと食べてる。
「三人とも、何で魔の森になんていたの？」
「うん・・本当はロモスの王城に行こうとしたんだけどけど」
「迷子になっちまってよ。」
「そう、私が送っていってもいいけどアバン先生はどうしたの？」
　・・やっぱりこの質問来たか。
　平和な世ならいざ知らず、この大戦時に子供三人の旅なんてあのアバン先生が許可するはずないもんね。
　兄達思い出して落ち込んだ。
「あのね・・」

「あのな・・」
「先生は魔王に襲撃されて、戦闘後に魔王を追っていってしまいました。」
　ロカさんの体調を考慮してそういう事にしておこう。
「・・あいつ一人でかよ・・昔と変わんねな。
　という事は三人はあいつに無断で一行見習いとして旅してんのか。」
　ロカさんが話している間に兄達の足をつついて話し合わせてねを頼んだ。
「そうすっと・・お前達は勇者一行の見習いか。」
「はい。」
「そうです。」
「まだまだですが。」
「あいつの事を見つけて助けてやってくれよ。
　俺じゃあもう力になってやれねえからよ。」
　ロカさんの言葉には様々な重みがあって場が沈んでしまった。
「っと・・ダイが・・勇者見習いか？」
　沈んでしまった気配を感じたロカさんが明るく話しかけてくれた。
「はい！いつか先生のような凄い勇者になります!!」
「そうか・・ポップは魔法使いか。」
「そうです。」
「ティファは・・薬草に詳しいから僧侶か？」
「違います。」
「違ったか、レイラがお前さんは薬草に詳しいって言ってたから・・素手のようだし武闘家か？」
「それも違います。」
「・・んじゃあ分からねえな～。」
「勇者一行の料理人です。まだ見習いですが。」
「・・はあ⁉」
「ほらティファ、呆れられたぞ。」・・うっさいぞポップ兄は。
「料理人て必要かよ・・」

「必要です！いいですか・・」
ポップ兄にした説明をロカさんにもして、薬草に詳しいのはその為だとも話した。
「・・なんか変わったところもアバンに似てやがるな・・」
ロカさんは感心したのか呆れたのか微妙な顔してる。

私の調合薬を飲んでからロカさんは寝室に入り、少しして様子を見に行くと深く眠っていた。
脈を図ると特に変わりはなく、呼吸音も異常なしだ。
「ありがとうティファ、父さんがこんなにぐっすり眠っているの初めて見た。」
「いえいえマァムさん、まだ様子を見ないと。固形物は柔らかくして一口サイズでお出しして、肉や魚の栄養はスープでお出ししても摂れます。
眠れるようになれば内臓系の回復も向上されると思いますので薬のレシピを後程どうぞ。」
「ティファは本当に料理人を目指すの？」
「はい、まだ見習いです。」
「今でも十分凄いと思うけどね。」
「ダイの言う通りだぜティファ。」
「・・ダイ兄、ポップ兄、そう言うの身びいきって言うんだよ？」
嬉しい事を兄二人が言ってくれる。
楽しいひと時だけれど、
―グオオオオオオ!!!!―

凄まじい方向が戦いへの時間へとかえてしまう。。
来たか、獣王クロコダイン!!
距離は離れているだろうに強さを感じる咆哮だ。
「マァム!!」
片づけをしていたレイラさんも強さが分かって青い顔してる・・。
「何が・・やっぱりモンスターが・・。」

「そんな!!だって・・森で暮らしてるモンスター達は狂暴化しなかった・・。」
「魔王軍ですね。」
「・・ティファ?」
「マァムさん、大戦初日で城の方は襲われませんでしたか?」
「村長さんのところには、非常時用の伝書バトが届くの。
大戦当日襲われたけれども、何とか撃退したって・・」
「また主力を整えて襲ってきたのかもしれません。
・・もしかしたら隊長格かそれに近いもの自らが。」

「隊長格⁉」
「じゃあこっちに来たら不味いじゃないか!
早く行かないと!ポップ兄、私達も。」
兄が一人で突っ込んでいくのに頭を痛めつつ、ティファも追うようにもう一人の兄を急かしたが、ポップは真剣な瞳でティファを見る
「お前はここに残れティファ!」
「どうして!!」
ティファとしては早くダイに追いつきたいのに止められて焦りをにじませる。
如何に兄が紋章を発動させられるようになってもまだ土壇場で不安定な力でしかない。
一対一でクロコダインと戦えば敗れるのは必至だ!
駆けだそうとするティファの肩にポップは手をかけて再び止めて自分の方に向けた。
「お前が言ったじゃないか。料理人は敵を倒した俺達に美味いもんを腹いっぱい食べさせてくれるって。」
「それは・・」
島でまだアバンが居た時、料理人の仕事内容を話した時に言った事。
一行の者が戦い終わった後、傷ついた体を薬草で治して美味しいものを食べさせるのが料理人の仕事だと。

何時でもどこでも・・どんな状況下であっても料理を出すと・・・。
「だから・・美味いもん作って待っててくれよ。
必ずダイと一緒に帰ってくるからさ。」
ポップは怖い思いを必死に押し隠して妹に残るように言う。
・・本当は力強く笑ってティファを安心させてやりたいが・・手の震えが止まらない・・。
情けない、それでも妹分は守りたい。
「・・分かった・・」
「ティファ・・」
「飛び切り美味しいもん作って待ってるよ。」
にこりと、優しい笑顔を浮かべて信じて待ってくれると・・・。
「おう!任しとけ!!」
「私は行くわよ!!」
「「マァム・さん!!」」
「大丈夫!
私も先生のハードスペシャル合格貰ってる。
毎日鍛錬さぼってないし、特典ももらってるの。
足手まといにはならないわ!!」
「・・分かった、行こう!」

・・皆・・行ってしまった・・。
「レイラさんは止めないで良かったのですか?」
マァムさんの力は分かっている・・けれども、母親としては止めたかったろうに。
「あの子は、ロカと私の子です。ですから止めません・・いいえ・・止められません。」
レイラさん・・悲しげな顔をして・・。
かつて戦った自分達の娘に、戦うなと言えないと・・。
それでも、止めたいともう私は甘いのだろうか?
「・・レイラさん」
「はい。」

「皆が帰ってきた時すぐに食べられるようにして待ちましょう。」
「ええ、そうしましょう。」
これから夜明けまで勝負が続くのか・・長い夜の始まりだ。
―グオオオオオ!!!―
皆無事に帰ってきて。

獣王クロコダイン

魔の森の洞窟

「・・ロコダイン様・・クロコダイン様。」
「ん～・・む、どうした悪魔の目玉・・」
「魔軍司令官ハドラー様より通信です。」
「分かった、映してくれ。」
クロコダインは―退屈―で拠点の洞窟で眠っていた。
そこに数日前に会ったばかりの司令官から何の用だか・・。
「クロコダインよ。」
「ハドラー殿、四日前に会ったばかりなのに何事ですかな?」
「その前に、ロモス侵攻はどうなっているか。」
やはりそれか。
「この国には武人はおらず兵達は火器での多一戦しかしてこずに、正直今一つ
やる気が起きませんな。」
人間ばかりが収まりかえり、モンスターを迫害する人の世を滅ぼし人外全ての者の
理想郷を作ると言う現魔王軍の理想に賛同をして戦に挑むが・・。
「相変わらず気まままよな。
まあいい。お前の腕ならばいつでもロモスは落とせよう。」
む?・・おかしい。
先日会った時には功を焦るように各軍に檄を飛ばしていたのだが、
妙に分かりよく落ち着いている。
いや・・懐が深くなり、よく見れば映像越しでも貫禄が増している
気がする!
「ハドラー殿、ここ数日で何かありましたか?」
「・・どうかしたのか?」
「・・いや・・」
これは自分の勘でしかないので深く聞くのはやめにした。
「それよりもクロコダイン、

貴様に一つ命を下す。
ロモス陥落よりも優先すべきことだ。」
「ほう！
どのような事か？」
国よりも優先すべき重要ごととは。
「我等の前に立ちふさがる敵が出現をした。
そ奴らを確実に倒すのだ。」
「なるほど・・。
して、どのような者達で？」
「うむ、こやつらだ。」
ハドラーが一つの国よりも優先をして倒すべきだという敵を、悪魔の目玉が映せば・・それは
「ダ～ハハハハハ!!!!」
初めは映っていた者達を見て呆気にとられ、次に大笑いをしてしまった。
目玉に映っていたのはたかだか子供が三人。
少年が二人の、うち一人は少女！
しかもその少女は大きなリュックを背負い、リュックの横から鍋が下げられている。
「冗談はおやめくださいハドラー殿！」
大爆笑をしながら言ってみれば、
「冗談ではないクロコダイン。
こやつらは三日前に俺に手傷を負わせ未だ完治せずに身動きが取れん。
その内の小娘の方は俺のヘルズクローを無傷で苦も無くかわした手練れだ。」
「何と！
貴殿のヘルズクローを・・」
どう見てもただの子供の一行にしか見えないが・・
「面白い!!」
ハドラーに重傷を負わせた者達・・特にヘルズクローを無傷で躱し

た少女と全力で戦いたくなった!!
ここ最近自分はくさくさしていた。
王国側は火力勝負ばかりなのもあるが、
地上のモンスター達が自分達に呼応せずに、縄張りを荒らされたと獣王である自分に向かって来る
モンスターもいたくらいだ。
何故⁉
これは各地の進行している全軍に当てはまり、リンガイアの超竜軍団などはその地に住まう
全精霊達に敵対をされて主力が丸事足止めを食ったほどだ！
のみならずロモス・リンガイア・パプニカは備えていたよう各軍に適した装備を施されていた。
その報告を受け、二日でオーザム王国を氷炎軍が落としたのを機に一旦各軍団長は
緊急に呼び出されて報告会となる事態となった。
「・・明日には精霊達を力づくで押し通る積りであったが・・。」
あの魔王軍随一の強者バランは苦々しげな顔をし、
「け!!
甘いなあんたは。
たかだか精霊なんてちんけなモンなぞさっさとやっちまえばいいのによ～。」
六団の中で唯一国を落としたフレイザードは余裕の態度でバランを侮った。
「・・フレイザード。
我等の敵は人間のみ！
罪のない精霊達を殺して何になる!!」
バランは不快気にフレイザードに反論をし、双方にらみ合う形となったがハドラーによって
各地の報告が続き、ハドラーの判断でリンガイアはミスト率いる妖影軍団が内部からの崩壊を、
バランは群を整えた後に戦場をカールに移すように命が出された。

フレイザードは引き続き逃げたオーザム王国の王族探索を命じて会議は終わり今に至る。
久方ぶりに武人としての血が騒ぐ!!
早く・・もっと速く走ってよ俺の足!!
ダイは真っ暗な森を駆けながら自分を叱咤する。
ティファが相手は隊長格かそれに類する者と言っていた。
ティファの考えはよく当たる。
優しくてとても頭のいい双子の妹は自分の自慢の妹で一番信頼をしている。
今回だって間違ってはいないだろう。
そいつを倒せれば、あの優しい王様の助けになる!
モンスターを友と言った自分を優しく受け入れてくれて、伝説の覇者の冠までくれた優しい王様を!
助けたい!!
アバン先生の時の様に大切な人を失うのはもう嫌だ!!!
その一念でダイは声の主の元に駆け続ける。

・・遅いな。
人間とは不便なものだな、早き足も持たずに・・む!!
「い・・やああ!!」
少年一人か・・しかし「ふん!!」―ガッキン!!!―
走ってきた勢いの乗ったナイフの一撃をバトルアックスで受け止めれば、
思った以上の重みが感じられたいい一撃だ。
だがはじき返し、
「小僧!・仲間はどうした?
貴様一人か。」
「え!
なんでみんなの事・・。」
問いただせば敵の自分に素直に答えてしまっている。

未熟で戦い慣れをしていないのがよく分かる子供だ。
・・こんな子供が本当にハドラー殿は・・
しかし、先ほどの打ち込みの重みはただ者ではなかった！
手加減せずに本気を出そう!!
「来い小僧!!」
「でええい!!」
果たして真っ正直に正面から打ち込みに掛かってきた。
一撃は確かに重いが攻撃は単調であり、
「大地斬!!」
大振りな攻撃を仕掛けて来たが、
「甘いわ!!」
何の策もなく打ち込むダイにクロコダインは痺れるブレスを吐き、
バトルアックスの風特性で吹き飛ばし地面に叩きつけた!!
（しまった!!）
「小僧！止めだ!!」
（やられる!!）
―メッラゾーマ!!!!―
止めの一撃がダイに届く前に、両者の間をすさまじい炎の壁が立ちはだかるように横切り、
―ダーン!!―音と共にダイは光に包まれて「・・しびれが・・とれた？」
回復をした。
「そこまでだワニ野郎!!」
「遅くなってごめんダイ!!」
ポップはダイとクロコダインの間に立ちふさがり、
マァムはダイを急いで抱え起こした。
クロコダインは新手の出現に驚く事無く油断せずに冷静に観察をする。
（ふむ、こやつ俺を怖れて頬がわなないているが、仲間を守らんとするか。）
この国の兵よりもよほど気概に溢れている！

気に入った!!
・・もうひとりの・・少女は何だ⁉
映像の少女とは似ても似つかない・・そもそもあの少女は黒髪の筈！
少年が居て見づらいが、ちらりと見えた髪は桃色だった!!
あの黒髪の少女はどこだ!!
遅れてくるのか？
「おいワニ野郎！
どこ見てやがんだ!!」
少し辺りを見回したが気配もない！
「おい小僧!!
もう一人の黒髪の娘は何処に行った⁉」
戦うのをとても楽しみにしていたというのに!!

こいつ・・なんでティファの事を知ってんだよ・・まさか⁉
ハドラーの島だけの情報ではティファが同行して来たかどうかまでは分からない筈で、
方法は分からないが、どうやら自分達は何らかの方法で敵に随時見張られているようだ！
―変に目立つと一番の攻撃目標にされてやられちゃうよ―
まさにティファが言った通りとなってこんな強そうな奴が自分達目当てにやってきやがった!!
ティファって凄えな、これからは手数増えても慎重に動いて・・
「小僧！
答える気はないのか!!」
おっといけねえ・・魔法使いは常に冷静に考えて動かなきゃだ・・
これもティファの教えだが、
「あいつが出るまでもねえ!!
俺達で十分だ!!」
情報をくれてやる必要はねえ！
張ったりで十分だ!!!

はたして・・
「そうか・・」
来る!!
ここに来る道すがらマァムが先生から送られたという魔弾銃の事は聞いて、
二つの空の弾にヒャダルコとメラゾーマを入れておいてた。
さっきダイにキアリクの弾を撃って効いているようだ。
「ダイ、俺の魔力溜まるまで持たせられるか?」
「うん!やれる!」
「んじゃ頼む。」
「うん!」
「マァム!」
ダイがクロコダインに打ち込むとともに、マァムに作戦を伝える。
「ダイが上に飛び上がって撃ち込んだらあのワニ野郎もアックスで迎え撃とうと
振りかぶるはずだ。
そこを狙って腕を凍らせんぞ。」
先程自分が放ったのはメラゾーマで、あの鎧に効くほどの威力はないと看破されたはずだが、
そこが狙い目だ。
通常の魔法使いは滅多に相反する属性の呪文を使う事はなく自分も氷系は得手ではないが
そこはマァムの魔弾銃のヒャダルコと合わせれば効いて鎧のない腕の一本は凍らせられるはずだ!
勝負は一瞬!!
「でええい!!」
打ち込みで暫くし、ダイが飛び上がって威力を付けた一撃を放とうとすれば、
「通じんぞ!!」
相手も腕を上げた!!
「今だ!

マァム!!
ヒャダルコ!!」―ダァーン!!―
ガッチーン!!
「ダイ!!」
「止め!!」
「・・まだだ!!
小僧!!」―バッリーン!―
凍らせたはずの腕の筋肉が盛り上がり氷を吹き飛ばし、
「獣王痛恨撃!!」
「きゃー!!」
「あうぅ!!」
「ぐあ・・!」
凄まじい闘気の渦が襲ってきた!!
「・・手間を・・取らせおって・・」
地面に叩きつけられながらも敵を見てみれば、
今の攻撃ははじかれたが、無駄ではなく効いてやがる!
息遣いは荒く、余裕の気配が完全に消えてる!
あの野郎もジリ貧だ!!
「ダイ耳・・」
隣に吹き飛ばされてきたダイの耳に作戦を手早く伝える。
お互いに余力はなく次で最後のはずだ・・
「勝負だ!!」
ダイは気力を振り絞り最後の勝負を挑み、
「おおっ!!」
正面で受け止めようとしたところを、
「イオ!」―ズガーン!!―
敵の足場を狙って崩し、
ダイが素早く飛んで脳天に一撃を決めるはずが・・
「小賢しい!!」
相手も読み切ってきた!!
受け止められると思われたその時、偶然か天佑か・・敵の目に朝日

が・・
「喰らえ！
大地斬!!」
「グッアアアアー!!」
疲れ切り、初戦で実践慣れをしていないダイは目測を誤り致命傷を与えられはしなかったが、
左目に一撃を決められた！
「お・・のれ・・小僧ども！
我が名は獣王クロコダイン!!
次に会う時までこの名を覚えておくがいい!!
左目の返礼は必ずさせてもらう!!!」―ズガーン!!―
クロコダインと名乗った者は、地面に穴をあけて立ち去った。
「待て!!」
「追うなダイ！」
「でもポップ!!」
「俺達もボロボロだ。
それにレイラさんとティファが待ってるだろう。
俺達が帰んないと心配するぞ。」
「・・分かった。」
ダイは釈然としないが、
「二人とも凄かったわよ。
特にポップ、作戦立てるのが上手なのね!!」
マァムには手放しで褒められた。
「いや・・ギリギリ運にめぐまれただけだよ・・」
朝日が無ければダイがどうなっていたか・・考えただけでゾッとする!!
「そんなことないよポップ！」
「ん・・いやぁまあ・・帰るぞ二人共。」
「うん。」
「そうね。」
ダイも何か言おうとしたのを遮って帰途につく。

自分は凄くなんてない・・今でも指先が震えて心の奥底では恐怖で一杯だ・・

次は立ち向かえるか分からない程に・・。

料理人の仕事

二度目のクロコダインの咆哮が聞こえた。
それも苦痛の混じったような声で。
決着がついたのが分かって玄関の外で待っていれば、
「・・う、ボロボロ・・」
「・・から・・追わなくてよかったろ・・」
「あっ!ティファ!!」
兄達ボロボロで、マァムさんの体にもあちこち擦り傷切り傷がある。
でも・・皆無事に帰って来てくれただけで嬉しい。
「皆さんお帰りなさい。
レイラさんと一緒に軽い朝食を作って待っていました。
スープ温めている間にこの傷薬を塗って、
出来たらマァムさんホイミを掛けて上げてください。」
表面上の傷用の万能薬があれば、マァムさんの普段の魔法力の半分で治せるはずだ。
「分かったわ。
使わせてもらうわねティファ。
母さん、ただいま!!」
「お帰りマァム!」
マァムさん優しく笑って薬瓶受け取って家の中でレイラさんと喜び合ってくれてるけど、
「スープだけ?」
「もっと食いたい!」
飢えた男二人からはクレーム来た・・
「あのね、そんなボロボロの体で急に食べたら胃がビックリして良くないよ。
休んだ後にお肉出すから。」
「・・分かった・・」
理由言っても不満そう。

激戦の後にがっついて無事でいるなんて孫悟空かワンピのルフィーじゃない限り無理！
旅していてポップ兄の胃袋状態はしっかり把握してある自信はある！
ダイ兄は言わずもがなだ!!
あえて言おう！無理であると!!
・・話脱線しかけたけど、三人にはしっかり休んでもらおう、ロカさん同様。
マァムさんロカさんが薬がよく効いてあの騒ぎでも目を覚まさなかったと思っているのか
ロカさんの事を聞いては来なかったけど、
そこは歴戦の戦士。
弱っていても敵の気配で薬の効能吹っ飛ばして目覚めた・・気力だけでって・・信じらんない。
あの薬はちょっとやそっとどころか、
地震で震度六でも起きない効力はあるって自負していたのが・・粉々にされましたとも。
人の精神の強さを押して図るべしを地で行かれた結果だ。
戦士としての強さもさることながら、
「起きて待ってる。」
愛娘を思う心の強さが薬に勝ったと言えよう。
そんないいお父さんに申し訳ないが、
「駄目です！眠れなくともベッドに戻ってください!!」
ドクターストップ掛けなきゃいけない方の身にもなってほしい・・。
「一人娘が体張って戦ってんだ!!
せめて起きて・・」
「ではその娘さんに心配かけないようにしてあげてください！
先程ぐっすりと眠った貴方を見てマァムさんは泣くほど喜んでいましたよ。」
「っつ！」
「今ロカさんが出来ることは体を治すのを第一としてあげてくださ

い。
お願いします。」
「・・分かったよ・・ちくしょう!!」
無念だろうな・・こんな小娘に説得されなきゃなんないなんて・・。
説得というより脅しに近い言葉でロカさんを止めて、
止めたお礼をレイラさんから言われてすんごく複雑になったけれどもまあいいか。
「あれ・・マァムのちょっとのホイミで傷全部治っちまった。」
「ホント・・この薬が凄いのよ。
私のホイミいつもこんなに凄い訳じゃないのよ?」
「ほんと・・少し残ってたしびれも無くなった。」
一体何が調合されているんだろう?
傷の手当てを終えた三人は薬の威力に驚いたが、
「三人とも、スープが温まりましたよ~。」
「行こう!」
「腹減った!!」
「行きましょう。」
食欲が勝り薬への考えは霧散して、
「「いただきます!!」」
「美味しい!」
「美味え!!」
「母さん、お代わり!!」
心ゆくまで食べてバタンキューで休み、その光景をレイラとティファが
優しい笑みで見ているのを知らずに眠りの中に落ちていった。
「皆が無事でよかったわ。」
「そうですね~レイラさん。」
二人は台所で片づけをしながらお喋りに花を咲かす。
三人が無事に帰り、そのことによりロカが安心をして眠りに着いたのを喜びつつ昼食の話をしていたが、
―ピクン―

（・・なにか・・入ってきた!!）
ティファの気配探査網に何かが引っ掛かった。
（・・片づけは終わったか。）
「レイラさん、私は森に薬草を調達してきますね。」
「あら・・昨日の今日だから気を付けてくださいね。」
「分かりました。
・・そう言えば、この村には何か結界が張ってあるのですか？
何か力を感じるのですが。」
「ええ、ロカを治療してくださっている方が、
六・七年前に何か怪しい気配を感じたといって張ってくださったのがあるわ。」
「それは破邪ですか？」
「いいえ、破邪を張れるのはアバン様だけ、でも、
聖結界の凄いのよ。
（・・それって・・張ったのおじさんで・・怪しい気配って私かい!!）
ティファとしては覚えがある。
初めてネイル村に来た時、運悪くマトリフが居た。
しかもだ、遠目から見ただけなのにバッチリと振り返られて十分近くガン見された
怖い記憶が忘れられない・・。
（ロカさん生きてんのって、おじさんの万能薬＋聖結界でザボエラが入れなかったせいか。）
確かマァムさん達は流行り病で亡くなったって原作では言ってたけど、
なんかの前世情報だと実はザボエラの姑息な方法で亡くなってたってあったしな。
・・あの時の私の行動が今に結びついてくれたんならいいや。
その結界が綻んで何か邪気持つものが侵入して来たか。
目玉か、ミストのシャドーか・・どっちみち消そう。
ティファは玄関からは出ずに視界結界で姿を隠し、空いていた窓から音もなく外に出た。

村の入り口付近の木の枝の影に目玉がおり、辺りを探ればかなりの数の偵察用の魔物の気配がする。
（三人の事は・・絶対守る!!）
―バサラ・ダンカン!!―
ゴオウ!!
金の炎が辺りの木々や草を一つも燃やさずに、
「・・ぎ・・き」
「ぐ・・う・・」
多数の目玉やシャドーを焼き尽くした。
聖炎には物理的な破壊力は皆無だが、ほんの少しの邪気にも反応をする。
それは元々森に棲んでいたモンスター達にはない気配なのでティファは存分に聖炎の
力を広範囲に発揮をした結果だった。
少しでも三人の助けとなるために、ネズミをうろつかせる気は毛頭ない。
破魔の石と同じ効力がある紙で作った術符を村の外から円を描くように地面に埋めていき
村の中に魔王軍の偵察部隊が入れない様に再び結界を直したティファは、
レイラに言った通りに森に薬草の補充をしに行った。
料理人の仕事は料理以外でもやることはたくさんある。
仲間の傷を治すことや、こんな風に周りからの干渉を撥ね退けることまで。
アバンに託された約束と共に、料理人の仕事を頑張ろう。
ティファが張り切って仕事をしたため、―とある所―が少々混乱をした。
「いきなり目玉の映像がすべて途切れました！」
「シャドー、ゴースト部隊も瞬時に全滅です！」
（・・何故だ・・情報は戦の要！
今あそこには何がいるというのだ!!）

情報部隊を管理している魔影軍団の長・ミストは、配下の報告に珍しく驚いた。
あそこには元アバン一行のロカがいる。
アバンの弟子達が立ち寄るかもしれないと情報部隊を送ったのだが・・瞬時に・・
それも何の気配・痕跡を残さずにというのが納得がいかない。
アバンの弟子はまだ未熟なはずだと・・。
そしてもう一つ、ミストを悩ますのが・・
（・・これでまた新たな情報部隊を作るための予算を組まねば・・）
如何に大魔王の軍でも古今東西の軍の例外に漏れず、予算は常に組まねばならない。
シャドー、ゴーストは手勢の配下でいいが、悪魔の目玉はただでは作れない。
けっこうなコストが一体ずつに掛かっている。
大魔王が底知れない富裕者であったとしても、主の富を予定外の事で削られるのが、
ミストにとっては許せない！
（一体誰の仕業だ!!）
見つけたら確実に八つ裂きにしてやると、ミストは心の中で誓うのであった。

マァムの決意

昼過ぎに三人とロカさんがダイ爆睡の後に起きて昼食となって、
食べ終わった後に三人で修行名目で外に出て森の近くでポップ兄・ダイ兄、私で会議中。
議題はもちろん強くなること。
具体的にはダイ兄の戦力強化と、ポップ兄の身体強化の課題だ。
ダイ兄の方は強さがあっても実践的動きは単調で読まれやすいのが緊急の課題だ。
歴戦の猛者からすれば分かりやすくて単体では相手になんない。
パーティー戦ならいけても、何かの理由でばらけたり一対一の時に戦えませんじゃ勇者とは言えない。
魔法も使えるようになって、使える手数を増やしてもらわないといけない。
確かレイラさんがこの村の村長さんは初級レベルは出来て人に教えられる腕の持ち主と評してた。
そっちに頼むといったら、
「俺が教えるんじゃダメか？」
ポップ兄が申し出てくれたけど、
「ポップ兄って人に教えるの苦手っぽい。
頭で考えるよりも感覚で魔法使ってるでしょう。
それ人にきちんと伝えられる？」
「・・無理かも。」
「でしょう。
ダイ兄は理論的には理解してるから、後は実践をきちんと教えてくれる人の方がいいよ。」
力をボンと出せとか擬音使って教えそうで無理だろう。
「それにポップ兄にも課題があるでしょう。」
「つってもよ、ダイはともかく俺に教えてくれる人の当てあんのかよ。
・・ロカさんに口伝してもらうのか？」
「違いますよ、マァムさんに頼んでみる。」

「はっ⁉あいつ？」
「そうだよ。
これもレイラさん情報でアバン先生はマァムさんには特に体術を施してたって言ってた。
ポップ兄よりも上だよきっと。」
教えてくれる人の目途はついたとしてだ、頼むには大問題が一つ残ってる。
どうしてアバン先生に教わった者が、そんな初歩を学ばなければならないのかの説明がきっといる。
ポップ兄の体術だけならば魔法しか習わなかったと言い訳たってもダイ兄の場合はアウトだ。
島で三日しか教わっていないのを言えば、レイラさんはそんな中途半端な兄を放って
先生が魔王を単独追っかけるわけないと分かってしまう。
嘘を言っても哀しみ増えるくらいなら・・
「・・本当の事言うしかないよね・・」
「だな・・」
「そうだね・・」
二人は目に見えて暗く沈む・・未だに先生の消失の傷は癒えずか。
私も先生も周囲に酷い事をしている。
片や実際生きていて今頃は自分磨きの修行の為に弟子達を置いていかねばならず、
片や周りが傷つくことを承知で魔王と単身戦わせて舞台より退場させている。
皆が生きるためだというのを免罪符にしてだ。
そこはもう仕方ない事だと割り切ってレイラさんに話すのはいい。
あの人も一行と共に世界を救うために激闘をくぐり抜けてきた強い人だ。
哀しみに心を沈めてしまうことはなくともマァムさんの方が心配だ。
修業をしているダイ兄を見てもらって、何で今更と疑問を持っても

らって薄々察してもらって
ショックの少ない方向で話をしようとポップ兄と話をまとめてレイラさんの所に行って村長宅に行くことにした・・気が重い。
ロカさんが横になってマァムさんが居ないのを見計らって案内を頼んだ。
「おお三人共、昨日はミーナの事ありがとう。
聞けば魔王軍の者もおいはらってくれたとか、本当にありがとう。」
「いえいえ。
こちらこそお頼みしたい事がありまして、よろしいでしょうか？」
「ほう、何でしょう？」
「ポップ兄。」
「おう・・
レイラさん驚かないでほしい。
先生は・・」
ん？・・マァムさんの気配がする・・。
「そんな!!アバン様が・・」
レイラさんの顔が青くなって、話し終えた時には紙のように白くなって泣き始める。
元仲間・・それも一行の要の勇者の死はやはり重いか・・でも今はレイラさんよりも。
そっとその場を離れた。
気配を消して、誰にも気が付かれることなく。
(そんな!!・・アバン先生が・・
そしたら・・ティファは嘘を言ったの⁉)
母が三人と共に村長の家に行くのを見かけたので、自分ももう一度お礼を言おうとこっそりついてきた。
まさかこんな酷い話を聞くとは思わずに!!
飛び出して真偽を!!
「マァムさん、」
飛び出そうとすればティファの小声がして腕を引かれた。
「ティ!!」

「シィ～。
そっとこちらへ、本当の事をすべて話します。」
困った顔がどこかアバンに似ているティファの顔を見て、マァムは素直に従って腕を引かれて森の中に入っていった。
そこは鬱蒼とした森には珍しくぽっかりと木がなくなり陽光が降り注ぐ場所で、
自分のお気に入りの所だった。
辛い修業時や、父が病で不安でたまらなくなった時に来ては癒されている秘密の場所に、
何故ティファは連れてきたのだろう？
・・世の中上手くいかない事だらけ・・ひょっとしたら頼んでる最中にマァムさん来たらと考えて、
マァムさんの落ち着く場所をレイラさんに聞いておいてよかったよ。
「ティファ・・ここは・・」
「その前にマァムさん、
こちらをどうぞ。」
マジックリングから水筒とカップを出してマァムさんに上げるのは、
―コポコポ―「どうぞ飲んでみてください。」
「・・この香り・・」―コクン―
「やっぱり・・蜂蜜ティー。」
甘くていい香りの優しい飲み物は・・かつてアバン先生が淹れてくれたものと同じ味がする。
先生も、悲しくて不安な自分を励ましてくれようと、お茶を淹れてくれてゆったりと
頭を撫ぜてくれた。
―マァム、大丈夫ですよ―
優しい言葉をくれながら・・。
「ティファ・・先生は・・。」

「はい、嘘を言って申し訳ありませんでした。
先程は不意打ちの様になってしまいましたがすべて本当の事です。」
「そんな!!」
嘘つき!!
そうティファを怒鳴って罵ろうとしたが、
「先生の遺体は出てきていません。」
「・・それじゃあ!」
生きて・・そう思いかけたが、
「しかしそれはあくまでも推測です。」
その希望を・・言った当人に砕かれた。
一体・・ティファは何度自分を傷つけるのか。
「それでも私は先生は生きていると考えています。」
「・・どうして?」
「貴方達です。」
「・・私達?」
「先生から教えを受けた貴方達がいるかぎり、
先生は本当の意味で死んではいないというのが私の考えです。」
「それはどういう・・」
「彼の人があなたたちに教えたのは戦う事だけでは無かった筈です。
戦う意味と意義、平和の尊さ、生命に対する優しさも教えてくれたはずです。」
「・・あ・」
—先生!私こんな怖い力いらない!皆を守れればそれでいい!!—
かつて卒業の証として輝聖石と共に魔弾銃を渡されて説明を受けた後に泣いて受け取ろうとしなかった自分に、アバンが優しく教えてくれた。
守るために力を使いましょうと。
力なき正義は誰も守れないが、戦いは守る手段の一つでしかないと。
「マァムさん、人の本当の死とは何時だと思いますか?

私は肉体が滅んでも、その人の考えが受け継がれ実践される限りその人は生きていると言えます。
ですから貴方達が先生の教えを継ぎ、人々を、この地に住まう優しき者達を、
大地を守ろうとするのであればアバン先生は貴方達の中で生き続けていくでしょう。」
あの時の先生同じ優しい笑みを浮かべて・・似たような事をティファは・・
「マァムさん。」
「う・・あ・・」
・・優しい声が・・眼鏡をかけているティファと先生がかさなって・・
「あーあ!!アバン先生!!!」
蹲って泣きだしたマァムをティファはそっと抱きしめ、
マァムもティファの体にむしゃぶりついて、心の底から泣き続ける。
「せん・・せえ!!ああー!!!」
泣くマァムの頭をゆったりと撫ぜながら、ティファはマァムの悲しみをすべて受けようとしている。
・・これは自分が生み出した業の一つだと・・、自らに罪を科しながら。
ティファの心を知らずに、マァムはひたすらに泣き続ける。
(今は・・泣こう。
でも・・その後は・・ティファの言う通り先生の教えを受け継ぐ!)
心の奥で、アバンの教えを継ぐ決意をして。

再戦前夜

マァムを心ゆくまで泣かして眠ってしまったのでティファも一緒に昼寝をして、
夕方ごろに起きて手を繋いでマァムの家に帰宅をした。
道々ポップの体術を見てほしいと当初の目的を話して快諾をもらい、
今日の夕食を何にするか和やかに話をしながら。
マァムだとてそうすぐにはアバンの死を乗り越えられるわけではないが、
ティファの言う通り師の教えを実践して行く事を強く定めた。
それに自分が泣いたときは師はいつも悲しげな困った顔をしていた。
大好きなアバン先生を安心させたいと、マァムは前を向いて歩いていく。
（心を守ってあげたい。）
マァムと手を繋いで歩くティファは心の内の深い悲しみを感じとれる。
マァムが無理をしない様に静かに寄り添って守っていこうと決めてた。

女性はいつの世でも強い。
家に帰れば兄二人に急にどこに行ったと叱られて、レイラに笑ってとりなされた。
レイラも悲しみを胸の奥底に秘めて普段通りに振る舞い、夕食となった。
「お前たち暫くは村に滞在するんだって？」
「はい、その際ポップ兄がマァムさんに体術を習いたく。
薬などの装備も万全にして・・三日ほどは。」
装備と体術実は口実、本当はダイ兄が魔法を発現できるまで。
コツを掴めたら一気に出来るはずだ。

野生児のダイ兄の底力にかけて設定を三日にした。
「なので宿代を・・」
先生のお仲間でもきちんとしたい。
食費くらいは入れさえててもらおう。
幸いお金なら一行を優に一年くらい働かずに養える金額は今手元にある。
秘密の部屋と―預け金―足したら数十年は庶民生活レベルで暮らしていける。
旅先で散々お宝系洞窟で稼いだのでバッチリだ。
そう思って申し出たら、
「いらねえ。
二度というなよお前達。」
・・ロカさんに有無言わさずに断られた。
「お前たちはあいつの弟子だ。
それは俺の身内同然だ。
身内から金とるような馬鹿に俺が見えるのか、レイラはどうだ。」
「そうね、ロカの言う通り受け取りませんよ。」
「・・分かりました。
失礼を申し上げてすみません。」
「いいって事よ。
お前さん真面目過ぎんぞ。
子供はもっと考えなしに突っ走るくれえでいいんだよ。
三日と言わずに好きなだけいろ。」
頑固で優しいお父さんだロカさんは。
「カッコいいよなロカさんて!
俺もいつかあんな親父さんになりてえな。」
「そうだね、じいちゃんと違った良さが凄く感じられる。」
兄二人もロカさんファンになった。

「ティファー!俺魔法が撃てるようになった!!」
三日を見込んでいたダイ兄の魔法がなんと二日で出来てしまった。

「・・まあ・・一応成功な・・」
見てたポップ兄は超微妙な顔して顛末を教えてくれた。
メラは出せても前に放てず、掌で打って的に命中させたと。
「いいんじゃないかな。
ようは当たればいいんだし。」
「ティファも村長さんと同じ事を言ってら。」
ちなみに村長さんは発想力豊かだとダイ兄の事を褒めてくれたらしく、
ダイ兄が超ご機嫌だ。
そっちと比べるとポップ兄はこの二日機嫌が悪い。
体術をマァムさんから教わる度にボロボロにされてる。
きちんと手加減されて、打ち身擦り傷で済んでいるけれども痛そうだ。
「兄、塗るね。」
「つってえ、沁みる!!」
「終わり。
クッキー食べる?」
「サンキューティファ。」
頑張っているポップ兄にご褒美だ。
頑張れポップ兄。

「ポップたら、もう少し根性持ちなさいよ。
あれだけすごい作戦立てられるんだから勿体ないわよ。」
「・・ヘイヘイ。」
「もう!!」ポップったら!!
(何だろうな・・マァムが俺の事を心配して言ってくれてるのは分かるけど、
もうちっと優しく言ってくれてもいいじゃねえかよ。)
ティファから貰ったクッキーを齧りつきながら、ポップは少しぶすくれる。
―ポップ兄〜、頑張って―

思わず脳裏には優しくて可愛い妹分の顔が浮かんでくる。
（あれ？俺の好みのタイプそっちだっけ・・）
でもティファは可愛い妹だし・・
「聞いてるのポップ！」
「・・分かったよ！」
やれる事やんなきゃ勝てねえ！やってやる!!
そして次の日にポップも一応マァムから合格をもらえた。
「ロカさん、マァムさんを道案内にお借りしますが本当によろしいのですか？」
兄二人が大丈夫になったのでロモス王城に行く事にして、
ロカさんがマァムさんを案内にと申し出てくれたのはありがたいけど・・。
「どういう意味だよそれ。」
確認取ったらロカさんに変な顔された。
「もしかしたら数日前のクロコダインがそろそろ再戦に来るかもしれませんよ。」
―グホ！ゲッホ!!―
「大丈夫ポップ兄！」
「・・ティファ」
「はい。」
「マジ？」
「あちらももう傷が癒えてる頃合いです。
再戦の可能性はこの数日間の内と考えるべきです。」
そんなところに一人娘さんを借りてもいいのかの確認だ。
「ティファ、それと皆にも言っておく。
特にマァムよく聞けよ。」
「「はい」」
「お前達がどんな道を進むのか俺には分からん。
でもな、どんな道を言おうと俺は口を差しはさまない。
間違えたらその時には俺にできることで助けるし、
悪い道を行ったら拳骨落として止めてやる。

だからな、道を進むのを恐れるな、分かったか。」
「「はい!!」」
流石は歴戦の戦士、言葉に重みを感じる。
旅立つ私達にエールを送ってくれる。
迷わずに突き進めと、離れていても見守ってくれると。
ロカさんの温かい言葉を胸にその日はぐっすりと眠れた。
「母さん、行ってくる。」
「お世話になりました。」
「色々ありがとうございました。」
「薬のメモをどうぞ。」
「皆さん、気を付けて。
マァムもよ。」
優しい笑みを浮かべてレイラさんや村の皆から見送られて村を出立して、
魔王軍に見つからない様に遠回りしたので夜に首都に着いた。
「王様に会うのは明日だね。」
兵士に追い払われるイベント回避をして、さっさと宿屋でベットにゴー!!
したら・・「皆!!」
「・・何ダイ兄。」
「この宿屋に勇者一行が泊ってるんだって!!。」
「ふ～ん。」
兄嬉しそうな顔してお目目キラキラさせちゃってるけど、
「会いに行きたければ行ってらっしゃい。
私もう寝る。」
「・・ティファ・・年寄みたい・・」
うっさいダイ兄!
どうせ偽勇者一行イベントだ!!
あんなのよりも明日の為に睡眠優先だ。
案の定偽勇者一行だったらしいけれど、私はその時夢の中。
再戦前夜はそうして終わった。

王城決戦

―ぐおおおおお!!!!―

朝の目覚めが小鳥のさえずりじゃなくておっさんの雄叫びって最悪だ・・

今からクロコダイン本気で伸したくなった・・・。

―バン!!―

ポップ兄が窓を開けたら町にはモンスターの群れと、

「出てこい小僧ども!!

さもなくば町を火の海にするぞ!!」

クロコダインの通告が聞こえた。

「なんだよあれ⁉」

「ロモスは終わりだ・・」

どさくさまぎれに偽勇者一行が入ってきた。

「すみませんが邪魔です、出ってください。」

「あ!ちょ・・・」パタン。

纏めて叩き出してと、

「ダイ兄ナイフ落とさない様にバックル確認。

マァムさんは銃の点検急いでください。」

薬は・・使ってる暇は無しか・・それよりも、

「ポップ兄」

窓辺で青い顔して立ち尽くしてるポップ兄にそっと声を掛ける。

「・・ティファ・・」

声も震えて怯えてるのがよく分かる。

無理もない。

一般家庭で普通に育ち、旅の間もアバン先生に守ってもらっていた兄だ。

島でハドラーに立ち向かえたのは無我夢中で、クロコダインの時も無理をしてくれていた。

本来のポップ兄は優しくて少々臆病な質だ。

旅立ってまだ七日しか経ってない。

そんなにすぐに勇気を持てるようになったら誰も苦労はしない。
「ちょっとポップ！
しっかりして頂戴!!」
「・・分かってるよ！けど怖いんだ・・」
「でもあの時！」
「あの時だってギリギリだったんだ!!
けど・・あんな大群・・」
「ポップ・・」
ダイ兄悲しそうな顔したけど
「意気地なし!!」
不味い!!
—パン!!—
「「あっ!!」」
「・・ティファ！」
「いたた～マァムさん。」
「ティファ・・私、ごめん・・」
「大丈夫です。
それよりもダイ兄と先にお願いします、すぐ追いつきます。」
「分かった！」
「先行ってる!!」
さてと・・
「ポップ兄。」
「ティファ・・」そんなに泣きそうな顔して・・。
「ごめんな、臆病な兄貴で・・こんなんじゃ兄って呼びたくねえよな・・。」
「そんなことない。
ポップ兄は臆病者じゃない。」
「慰めはいいよ・・」
「違う！
ただ少し、勇気の出し方が人よりも遅いだけだよ。」
「・・・」

「あのハドラーにだってメラゾーマで立ち向かおうとした。」
「・・大して効かなかったけどな・・」
「ううん、それよりも先生を助けようとしたんでしょう。
他者を助けようと力を出すことの方が大事だよ。
出来るとしても強くても、やらなかったら無いのと一緒だよ。」
「ティファ・・」
「それにクロコダインの時も手が震えていても私に残れって言ってくれた。
どうして？」
「それは・・」
「私を守ろうとしてくれたんでしょ？
それこそが勇気だよ。」
凄い事が出来るのが勇気じゃない。
他者を思い、守りたいと力を発揮する事こそが勇気だ。
「ティファ、俺・・俺!!」
「私もそろそろ行くね。」
「俺も!!」
「駄目だよ今の兄は。」
「そんな・・なんでだよ!!
料理作るお前が戦場でて！俺が残るっておかしいだろう!!」
「戦いに行くんだよ、ポップ兄は何の為に？」
「つっ！」
「即答できないから駄目なんだよ。
私や他の人が戦うからじゃない。
ポップ兄自身の戦う理由をきちんと出さないといつか命取りになる。
だから答えをきちんと出してね。」
「・・お前にはあんのかよ！
戦うっ理由が!!」
「守りたい。
私が守りたいと思うもの全部を守りたい。」

ただそれだけの単純な願い。
どんな困難が立ちふさがろうとも譲れない信念だ。

「答えが出なくてこれなくても、私は優しいポップ兄が大好きだよ。
行ってくるね。」
行ってしまった・・待ってるとは言わずに。
俺の・・戦う理由は・・。
ダイとマァムは逃げ行く人の群れを突き進み、王城へと急いだ。
(見損なったわポップ!!)
(ポップ・・)
二人の心は乱れるが・・それよりも魔界のモンスターに神経を集中させる。
「どうしよう!きりがない!!」
倒しても倒しても・・
「ダイ!
先生が昔、戦いは一番強いものを倒せば大群でも引くって教えてくれた。」
「そっか!クロコダインを倒せば!!」
「行くわよダイ!!」
「うん!!」
二人は王城に辿り着き、玉座の間でロモス王とクロコダインを見つけた。
「王様!!」良かった無事だ!
「おお!ダイ君!!」
クロコダインと距離があり、兵士に守られているとはいえ変わらずに優しい声を掛けてくれる。
この王様を絶対守る!!
「行くぞクロコダイン!!」
「こい小僧!!」
ダイとクロコダインが打ち合っている隙に、
「王様、こっちへ・・」

マァムが安全を確保しやすい部屋の隅に王を誘導する。
部屋の外もモンスターがおり、この部屋の作りが一番頑丈そうなので外よりは安全だ。
「ありがとう娘さん。」
（ロモス王って話の通り優しい方だ。）
自国他国にも王の人徳は広く知れ渡っている。
この素敵な王様を守らなくちゃ！
「メラ!!」
「何だと！・・・グア!!」
ダイがメラを・・それも効いてる!!
（男子三日会わずば刮目してみよ・・ハドラー殿の言う通り、生かしておけば後の禍根となる!!）
クロコダインはダイの成長速度に怖れを抱き、
（やむおえん・・使いたくはなかったが）
クロコダインは黒いモンスター入れの筒を取り出した。
「・・あれって・・」まさか!!
「皆気を付けて!!」
「ダイ！あれが・・」
「あれはモンスターを入れる筒だよ！
きっと・・強力な魔界の・・」
「そんな・・」
クロコダイン一人でも手強いのを助っ人を呼ばれると二人は焦った。
「デルパ！」・・出てきたのは・・鬼面導士！
しかも・・「ピー!!」ゴメちゃん!!
島にいるはずの・・そしたらあの鬼面導士は・・「じいちゃん!!」
あの杖に見覚えがある!!
あれは自分とティファで森の木から一から作った杖だ！間違うはずがない!!
「―ダイ!!―」
ゴメちゃんが寄ってきて頬に顔をこすりつける・・何時ものゴメ

ちゃんだ!!
・・そしたら・・「メダパニ」
あの呪文は!!兵士さんに放った・・
「そんなじいちゃん!!」狂暴化してる!!
「止めてよじいちゃん!!」
ブラスの放ったメダパニで混乱をした兵と、元凶のブラスを討とうとする兵と、
攻撃を止めようとするダイの三つ巴となり、戦場が大混乱となった。
何となればブラスは大事な家族だ!!
ダイは涙を流してブラスを守ろうと必死にロモス兵達に懇願をする。
（・・嫌なものだ・・）
このような姑息な策を・・本来ならば使いたくはなかった。
昨日情報を嗅ぎ付けてきたザボエラが策があると言い提案してきたが一度は突っ撥ねた。
しかし「勝たねば地位はおろか、百獣軍団も敗戦の罪を諸共に受けようて。」
地位は別にいい！
武人としてのおのれのふがいなさなればこその結果だ・・
だがしかし、配下を守るためには!!
その一心のみでザボエラの奸計に乗ったが・・果たしてこれでよいのかと、
クロコダインの心は乱れる。

遅くなった!!
道々モンスターを一撃必殺で倒して走るのでどうしてもロスが出来る。
それでも人が救えてよかった。
城の中にもいても、狙うはクロコダインただ一人！
「弓兵用意!!」

ん・・高い塔の上から・・広間を狙って・・あれって!!
「放てー!!!」
じいちゃんがいる!!間に合え!!
「駄目ー!!」―ブアー!―「イオ!」・・へ？
じいちゃんの前に間一髪で間に合って剣の一閃で弓矢全部落としたら・・
―ズダーン!!―・・背後からイオがきた・・。
「ティファー!」
「そんな・・」
「弓兵止めー!!」
いきなり飛び込んできた少女は剣の風圧のみで大量の弓矢を落としたが、
守ろうとした鬼面導士に無防備の背後からイオの直撃を喰らった。
（・・いったいじゃないの・・
でも・・洞窟修行に比べれば無問題!!）
片腕もげ掛けたあの修業に比べれば、皮膚一枚の火傷がどうした!!
あの弓の量を風圧のみで防ぐとは・・。
「小娘!我がな・・」
「誰ですか？」
「・・ティファ？」
「そいつがクロコダインだよ!ティファ!!」
少女が名乗りを遮り、自分を冷たい目で自分を下げずんで見ている・・。
（それは分かってるよダイ兄・・そうじゃなく・・）
「誰が・・じいちゃんを島から連れ出しこの場に居させたのかを聞いている!!」
凄まじい怒気を発している!
（何という娘だ!!・・これ程の気を感じたのはいつ以来か・・）
ティファは闘気を前方のクロコダインにのみ発して威圧する。
「あなたですか？」
眼と同じく、冷たき声で再度問う。

「・・そうだ!!」
認めねば・・やったことまで否定してしまえば、自分は本当に最低なものになる!!
「・・その胸に掛かりし笛・・」
笛・・これはいつもかけている・・
「獣王の笛ですか・・」
「な!!」
人間の娘が何故それを!!・・まさか・・
「以前それを拾って二月ほどして持ち主を知っているから返してほしいと、
おひげのおじさんに言われたので返したのですが・・」
おひげの・・では!この者がバラン殿が言っていた笛を拾ってくれたという人間の娘!!
「何故、貴方が持っているのです?」
・・やはりか・・無理もない。
バラン殿を魔王軍とは知るまい・・
「あなたは王ではない。」
「・・何だと・・」
「あの時―じゅうおう―が何か分かりませんでしたが、獣王とはそういう事ですか・・」
「・・そうだ。」自分の事を指している。
「あなたは王ではない。」
「何だと!!」
「一度負けたからと卑劣な手を使う!
まして年端も行かぬ子に挑まれ策略を使うものを王とは言わない!!
即刻本物の王にお返しなさい!!!!」
先程よりも凄まじい闘気で百雷が落ちたが如く叩きつけられた言葉に・・
俺は・・しかし!!
「黙れ!!」最早引けぬ!!

「卑怯者!!」

・・何と言われようとも・・ここまでしたからには勝たねばならない!!

さもなくば・・何の為に戦ってみたいと願った者に罵られることになったのか分からなくなる。

それぞれの思いは交錯をし、戦場は混迷を極める。

戦う理由

何で俺は動けねんだよ!!
ポップは先ほどからベッドにうつむいたまま。
何時だったかティファが言っていた。
―剣も魔法も体術も、あやふやなまま使ったらすぐにやられるよ。
―
自分はあの時話半分で聞いていたが、戦う理由がきちんとなくあやふやだから行ってはいけないのだろうか？
―守りたい―
ティファは一言で言いきり、あの大群に向かって行けた。
では自分は？
仲間を守りたいと思っても・・動けない。
島を出る時は亡き師に弟弟子を託されたことと、師のやり残したことをするとブラスに言って出てきた。
しかしティファは、他者がどうではなく己自身の答えを出せと言っていた。
ここに来る前ロカさんが、―どの道を行ってもいい―
―悪い道なら拳骨だ―と言ってくれた。
遠くからでも見守るから安心しろと背中を押してくれたのに・・道も答えも見つけられない!!
ティファ・・俺は・・
「なんじゃ、まだいたのか小僧。」
「・・あんたは昨日の偽勇者の魔法使い・・」
「ほっ、人の事がいえるのかの～」
「何だと!!」
「お前さんは何でここにいる。
昨日人の事を散々偽物呼ばわりした威勢は何処に行った？」
昨日ポップはダイ達と共に偽勇者のでろりん一行に会い、偽物と分かりむかっ腹が立って散々けなした。
こいつ等と変わらない？・・違う!!

「俺だって行きたい!!」今すぐに飛び出したい！
「ほう。」
「でも・・怖くて・・それ以上に・・戦う理由が無い奴は来るなって!!」
ティファは、迷う心で戦おうとする自分を守ろうとしているのが分かってしまう・・。
その言葉に縫い留められて・・皆・・俺は・・。
（どうやらこの小僧は単なる臆病者ではなさそうだな。）
瞳に強い後悔の念を浮かべて肩を落としているポップをつぶさに観察をして、
まぞっほはそう判断をした。
誰だか知らんが、こんな子供に戦う理由を突き付けてくるとは・・酷な事をする奴がいたもんだ。
まるで自分の元師匠と兄弟子のようだ。
無茶苦茶で強くて・・でも分かりづらいが面倒見のいい優しさもあった・・とは今なら分かる。
戦場では迷った者は死ぬ。
言った奴はこの子供をむざと死なせたくない優しい心の持ち主で、故にこそこの子供の心に響きすぎて縛り付けてしまっている。
優しいが・・匙加減が分からずに難易度の高い壁をこさえてしまったのに気が付かない類の者。
・・人とはそう強くも賢くも無いというのに・・勝手にその者ならば乗り越えられると信じて
されたものは迷惑この上ない。
何やら昔の自分を見ているようだが・・この少年ならば乗り越えられそうな期待を抱く何かを感じる。
だからこそ、答えを出せと期待したものは信じたのか。
少しだけお節介をしてみよう。
「これを見て見ろ小僧。」
水晶を懐から出して映したのは、
「ダイ！・・なんでブラスさんが・・」
今の王城内部だ。

狂暴化したブラスをダイが必死に止めて、
ティファはその二人を守るようにクロコダインの前に剣を構えて対峙をしている!!
しかも・・背中を火傷して・・―ブーン・・・―
「あ!!」
「ふむ、儂の力ではここまでのようじゃな。」
マァムの安否を探す前に、水晶の映像が途切れてしまった・・
「そんな・・皆・・」
マァムだって・・戦っているだろうに自分は・・
「勝てるから!勝てないからとコロコロ勇気を出したり引っ込めたりするのは本物の勇気ではない!!」
―ビクリ―
「っと・・儂の師匠は常々言っておった。」
「・・・」
「儂は逃げ出したが、お前さんはどうするのじゃ?」
「・・俺は・・」
「む?」
「俺は逃げない!!」
「・・ほう。」
「あいつ等を!見捨ててたまるか!!」
大事な師が繋いでくれた兄妹弟子を!
可愛い妹分を!!
見捨てたくない!!!
あいつらは自分の大切な仲間だ!!!!
「答えが出た様じゃの。」
「あ・・」
「では行ってもいいのじゃろう、
答えのあるものは。」
「俺・・」
「行ってこい。」
「はい。」

「よし！」
まぞっほの言葉に背中を力強く押されるように、ポップは立ち上がる。
仲間がいる戦場へと。
「あの・・」
「ん？」
ポップは戸口で振り返り、
「ありがと・・まぞっほさん。
行ってくる。」
昨日なんだかんだあっても名前は聞いたので、きちんとお礼をしてから返事を聞かずに走り出した。
（ふふん・・礼を言われてしもうたわい。）
くすぐったくて、ちっとも自分の柄ではないのに。
しかし久し振りに心が清々しい。
自分も少しは頑張ってみるか、今の一行を少しは本物にするために。
ポップは走って走って急いだ。
（皆ご免!!遅くなっちまって・・。
もう仲間じゃ無えって見切り付けられたかもしんねえけど。）
それでも助けたい！見捨てたくない!!
答えは出したんだ！文句はねえよなティファ!!
自分だけの答えと、ありったけの勇気を胸に秘めて・・

決着よりもその後が大切

戦場は前門のクロコダイン！後門のブラスじいちゃんってどんだけカオスな状況よ!!
じいちゃん止めようとしたらクロコダイン来るし！
クロコダインに行ったらじいちゃん現主認定してるクロコダイン助けようともっと強力な
魔法をダイ兄に使おうとして手に負えなくなっちゃう!!・・勘弁してほしい・・。
マァムさんは悪魔の目玉の触手に捕まって動きが取れない・・それもこれも!!
―ちらり―「ひっ!!」
当たったら危ないので、マァムさんがもがいて顔をよそに向けている間に、
殺気の視線送ってやった・・驚いて心臓マヒでぽっくり逝ってしまえ!!!
万歳三唱して感謝してやる!!
覗き見しながら奸計を見物しているザボエラのせいだ!!
あいつだけはあったら速攻倒す!!灰にしてやる!!
あのダニの事考えてたら、
「どこを見ている!!」
むかっ!!
「うっさいですよ!!」
「何だと!!」
「他者の描いた策略の掌の上で踊っている輩にとやかく言われる筋合い無いです!!」
「・・何故それを・・」
「今あの目玉から短い声が聞こえました！
つまりこの場を監視しているか、表立って戦おうとしない臆病者が見ているのでしょう!!」
（・・ザボエラめ・・この視線の強さに怯えたか・・弱気者よ）

「憐れですね。」
「誰が・・」
「他者に言われるがままに、武人の心を捨てた貴方が憐れだ!!」
（・・返す・・言葉が無い・・）
「じいちゃん!!」
・・何?・・不味い!!
俯いてしまったクロコダインを警戒しつつ、兄の焦った声で振り返れば、
「メラゾーマ!!」
じいちゃんの本気の火炎上級呪文!!
「ダイ兄!!」あんなのを至近距離で兄が喰らったら!!
―ゴオウ!!―
「あ・・あ・・」
「だい・・じょうぶ・・ダイ兄?」
「ティ・・ファ・・」
「けが・・ない?」
「おれ・・おれ!!」
「なさそうでよかった・・」

ダイに怪我が無いと分かり、ティファはうっすらと微笑みながら広げたダイの腕の中に
倒れ伏す。
兄とメラゾーマの間に割って入り、背に闘気の膜を張ったがその前に受けたイオの傷も相まって、
背中に重傷を負ってしまった。
それでも兄を守れたと、ティファは痛みよりも喜びで心が満ち溢れ笑ったのだ。
「ティファ!・ティファ!!」
ダイはティファを抱えて部屋の隅に行き、そっと降ろして妹の名を泣きながら呼ぶ。
大好きな妹を守れない無力な自分を不甲斐ないと涙しながら・・戦

場だと・・分かっていてもだ。
（馬鹿な!!）
他者を守るために自ら傷つき、相手に怪我が無いと分かれば微笑みを浮かべるティファに対し、
クロコダインは驚愕の目をティファに向けた。
何故だ⁉
自分達魔物は常に他者と優劣をつけるために戦い、立場を決めて生きてきた。
しかしこの者達は弱い者を庇いながら戦いを挑んできた。
これが人間というものなのか？
あのティファという娘は本気で掛かってきたならば自分に勝てたかもしれないのに、
人質に取った育ての親とはいえ鬼面導士を守ろうとして傷つき、
今また仲間を庇って大怪我を負って勝ちをみすみす手放した!!
何故なのだ!!!
「そこまでだワニ野郎!!」
（あれは・・先日の魔法使いの小僧!!）
「いまさら何をしに来た!!」
「・・これ以上・・俺の仲間を傷つけるな!!」
ポップはそのままクロコダインに飛び掛かり魔法の杖をクロコダインに打ちつけ、
先端の魔石を粉々に砕いた！
（・・あれは・・そうか・・）
ティファはその光景を、部屋の隅でうつぶせになり意識をもうろう朦朧とさせながらも
見つめる。
（先生の破邪の魔法を契約出来たんだ）
一昨日一人で森に行き、何かをしていたが・・光が見えた。
あれは破邪魔法の契約の光だったのか。
「マホカトール！」
ポップの呪文でブラスの狂暴化が解け、それに怒りを見せるクロコ

ダインの姿が・・
（いけない!!気絶してる場合じゃない!!）
意識が薄れゆくティファは己の唇を噛み切り、無理やり目を覚まさせた!!
（このままじゃ・・ポップ兄が!!）
クロコダインに頭を掴まれながらもポップは闘志を消さず、
「仲間を見捨ててのうのうと生きていく・・そんな最低な奴になってまで生きていきたくなかったんだよ!!」
戦いに来た理由をクロコダインに言い放ち、啖呵を切った!!
（兄・・戦う理由・・見つけられたんだ・・）
それはいい!!しかし!!
「・・許せ・・小僧!」
クロコダインの胸にも響かせる言葉を放つポップを殺すのを偲びないと思いつつ・・
見逃せずに済まないと・・頭を砕こうとしている!!
（動け私の体!!）
「痛いのが・・何だって言うの!!」土龍閃!!
―バキバキバキ!!―
気力で立ち上がったティファは、倒れ伏しても手放さなかった鋼の剣で床の木材を土龍閃
の要領でクロコダインの腕をめがけて放ち、
「ポップ兄!!」―パシ!―
闘気で覆われた木材が刺さり、ポップを取り落としたクロコダインからポップを取り戻して
戸口まで飛び退り再び対峙をする。
「・・はぁ・・はぁ・・」
息遣いは荒く・・満身創痍であっても戦いを・・守るのをやめようとしない姿に、
ロモス兵達は気力を奮い立たせ、クロコダインは己の心の弱さをつきつけられ・・そして
「うおおおおお!!」

マァム同様に触手に捕まってしまったダイの心の闘志を極限にまで高めた!!
(俺は・・仲間を・・守る勇者だ!!)
「あああ!!」―ヒーン!!!―
(ダイ兄・・紋章が・・あ!!) ―ヒーン!!―
ダイの紋章に共鳴をしてティファの額にも紋章が光輝き、広間を温かく、力強い光で満たしていく!!
(・・なんじゃ・・あの光は!!) ―ジュウー!!―
悪魔の目玉は、紋章の発する光の下に瞬時に蒸発した!!
(恐ろしい力じゃ・・まあ良い、次の機会で葬り去れば。)
何の力かは分からないがクロコダインの敗北を悟ったザボエラは、クロコダインを見限り
次の策謀を練り始めた。
(この二人・・どこからこんな力が!!)
ダイとティファは部屋の中央に行き、クロコダインと正面から対峙をする。
二人はボロボロの姿であっても瞳の強さは全く失せておらず、クロコダインは心の底から
射竦められて動けない。
「これが、諦めない心が生み出した強さです。」
ティファは静かにクロコダインの目を見つつ話しかけ、
「貴方も、武人の心を捨てずに諦めずに戦っていれば、もしかしたら違う結果になっていたかもしれません。
・・少なくとも、今のような後悔の念に苛まれた顔を晒すことはなかったでしょう。」
おのれの卑劣さに恥じ入ったクロコダインを労わるかのような言葉を発した。
「うう・・うおおお!!」
返せる言葉を失ったクロコダインは渾身の力で二人に向かっていった!

全てを清算するために・・
「ああー!!
アバンストラッシュ!!!」
―ザシャー!!!―
多くの戦いをくぐり抜けてきた自分だからこそわかる・・この二人の力には及ばないと。
それでも・・最後は・・武人として・・
「見事だ・・まさか・・このような子供達に敗れようとは・・
いっそ・・最初から正々堂々と戦って敗れたかったわ・・」―グフ!!―
「特にティファとポップと言ったな・・お前達には教わった・・
人の勇気を・・優しさを・・」―ガハッ!ガハッ・・―
「もっと早く・・お前達にまみえたかった・・」
終始仲間を守ったティファと、敵に怯えて・・それでも仲間を見捨てずに助けに来たポップ。
その二人に、クロコダインの心の靄は晴れ・・敗れても悔いは感じられない。
「まだ遅くはありませんよ。」
そう思っていたら、ティファの静かな声が聞こえた。
「悔いたのであれば、どのようなものであってもそこからやり直せます。
それが貴方であっても。」
温かい穏やかな声で。
「くっはは・・俺の事を散々に言っておきながら・・今更・」
「先ほどの前言を撤回させていただきます。
今の貴方は獣王を名乗るのにふさわしい。」
「・・何故・・」
「敗れても堂々と立ち、私達と真剣に相対しているからです。
ボロボロの体を気力のみで立ち上がらせ、敵に別れを告げるものを武人と言わずして
何というのですか?」

「・・お前は・・随分と変わった娘だ・・」
「・・そうですか？」
「くっふっふ・・はっはは・・」―ガハッ!!!!―もう限界か・・
しかし・・この者達ならば本当に悔いはない。
どうやら・・自分はティファの言う通り、武人の心を失わずに済んだようだ。
今のハドラー殿ならば・・百獣軍団を悪いようにはするまい・・
焦った心が平時の自分の心を狂わせ・・ザボエラが如きものの奸計に利用されたか。
全ては・・おのれの未熟さゆえに・・
「見ていろ・・これが敗者の末路だ!!!」
―ぐおおおおお!!!!―
クロコダインは最後の力を振り絞り窓に向かい、撤退の咆哮を配下に出しつつ身を投げた。
長たる自分の死をもって幕引きにせよと。
その咆哮を聞いたモンスター達は、獣王を倒した敵に恐れをなして散り散りになった。
（人とは・・いい者だった・・）
地に激突をし、薄れゆく意識の中クロコダインは想いを馳せる。
ダイ・ポップ・マァムは人の勇気を示してくれた・・勇猛さではなく、
本当の勇気を。
しかしティファは・・敵の自分に笑いかけてきた・・敗者を嘲笑う笑いではなく・・
温かい言葉と共に・・心が温まる笑みを・・。
だから・・あの子供達に何か一つは残してやりたくなった・・
戦いしか知らない自分は・・せめて・・敗者の末路を・・
どうかあの者達の心に自分の気持ちが届いてほしい・・強くなり・・生き延びて・・ほしい・・・・か・・ら・・
（己の死を敗者としての手本として教訓にさせる・・貴方は誠の獣王だ。）

死したクロコダインの望み通り、ティファの胸の中に教訓として残った。
それはティファのみならず、ダイ・ポップ・マァムにも戦いの過酷さ、厳しさを刻み込み
クロコダインの武人としての心をそこに見たのであった。

―わああああー!!―
ロモス城と街に残ったモンスターの死骸がすべて片付けられた後、
王城前にロモス国民が詰めかけた。
ロモス王城のバルコニーに立つ、国を救った英雄たちを一目見ようと。
「皆の者!この者達が我が国を救ってくれた勇気ある英雄達じゃ!!」
―おおー!!いいぞー!!―
ロモス王に連れてバルコニーに立った―三人―は恐縮をする。
「名をダイ・ポップ・マァムと言う。
儂らは永久にこの者達の名を忘れないであろう。」
「・・なんか・・はずい・・」
「・・俺も・・」
「二人共ほら手を振って!!・・私もだけどね・・」
「だよねー・な」
「特に!!」
・・など何か王様言おうとしてると三人はげんなりしかけたが・・
「敵の隊長格を倒したダイを、ロモス王であるシナナがその功績を認め勇者と認定し、
この一行を勇者一行であると認める!!
おめでとうダイ君、ポップ君、マァムちゃん。」・・マジか!!
「マジ・・」
「ホントに・・」
「マァムちゃんて・・」
「「そこ⁉」」
いきなり王国のお墨付きの正式な勇者一行となった三人は戸惑い

ながらも、
今の姿を、アバン先生なら喜んでくれると思いつつ、
喜びを表すようにぶんぶんと手を振って大歓声にこたえた。
これで一歩、先生に近づけたと。
(ん!・・・あれって!!)
群衆が一層賑わう中、ポップはまぞっほの姿を見つけ、バルコニーから落ちんばかりに身を乗り出し、
まぞっほに向かって思いっきり手を振った。
何となればじぶんがここに・・無事仲間達と立てたのはあの人のお陰だからだ。
果たして自分の感謝の念が届いたのか、
まぞっほも振返してくれて、頑張れよと口が動いた。
(あの人は俺の心の師匠だ!!!)
自分はあの人から貰ったあの言葉を終生忘れない!
(やれやれ、本物とはすごいの~。
どれ、儂らも行くとするかの。)
ほんの少しだけ頑張りに。

「・・ティファ大丈夫かな?」
「ブラスさんの側にベッド持ってこさせてたよな・・」
「おじいさんが心配だって・・ティファは本当に優しいわ。」
(・・単なる頑固者だ・・)
マァムはティファの一面を知らずに賛辞を贈るが、兄二人はティファの頑固さを身に染みて知っている。
こうと思えばてこでも譲らない・・
「へっくしょん・・痛!!」
「ああ・・ティファや・・」
「大丈夫だよじいちゃん。
それよりもその陣から出ないように気を付けてね?」
「うむ・・」
「それより侍医さん、その薬の成分結果出たでしょう?

それつかってください。」
「こんな凄い薬をどこで!!」
「・・早く怪我治したいのですが・・」
「ああ・・すみませぬ・・」
私はじいちゃんの側で回復治療だ。
「じいちゃんの側でないなら治療は断固拒否です!!」
本気で要求をして、王様が優しい笑顔で許可をしてくれた。
そこまでは良かったけど、この城の薬じゃなくて私が自分で作った火傷用の万能薬を出して
こっち使ってホイミと合わせて治療して欲しいと頼んだら、向こうが断固拒否してきた。
・・考えてみたら薬のプロが調合したものよりも、素人に見える私が作った物を使ってほしいと言われたら、
そりゃ怒るか。
なので公平をきして急いで成分を分析してもらい、きちんと効能がある薬と認められて、
えらく驚かれた。
まあそれもそのはずか・・―世間―にはこの―火傷用万能薬―は出回っていない。
おじさんとノヴァと、リンガイア一国の力を借りて、二年前に完成されたこの万能薬は
一年前にノヴァの名前で論文が世界に発表されて、半年前に切り傷と骨折の二種のみの
薬がリンガイアから出回った。
・・おじさんよっぽど自分の名前を隠したかったのか・・
ノヴァから送られた論文の書を読んだら、ノヴァとリンガイア王国の共同開発って事になっていた。
でもいいか、おじさんもノヴァもそう言った手柄に興味ないし・・
話それたけど、ようは―万能薬はその二種類のみ―と世間では思われているので、
私の出した薬に驚かれたわけだが・・さっさと治療して欲しい。

背中が破けてみっともなくて寒いのでとっとと着替えたい。
「行きますぞ！」・・薬塗られたら・・沁みる!!
「ベホイミ!!」あ～あ効いてく～痛み取れてく～。
「何とも凄い・・我々の薬よりも遥かに治りが早い！
しかも傷一つ残らず・・娘さん!!
この薬・・」
「はい、こちらがその成分表です。」
「何と!!」
「これ差し上げますのでどうぞ行ってください。」
「まだ話は！」
「着替えたいんです。」
「・・・」パタン
やれやれ・・
「ティファ・・儂は・・」
「ストップ！じいちゃんのせいじゃないってポップ言ってたでしょう!!」
「しかし・・」
「ロモスの王様も、島に送った後護衛付けてくれるって言ってくれてたでしょう。」
「・・ホントに良いのかの・・」
「二度も三度もこんなことになったら困るでしょ？」
「・・分かった・・任せよう。」
「うん、
大好きだよじいちゃん、ゴメちゃん。」
「ティファや、本当にゴメを・・」
「うん、今は大丈夫でも邪気に侵されたら可哀そうだよ。」
「そうじゃな、儂と共に帰ろうゴメ。」
「ピ～」
「じゃあ行くよ二人共。」
「うむ」「ピイ～」
じいちゃんとじいちゃんの頭に留まったゴメちゃんを、

「イルイル～」
筒にいれた。
ゴメちゃんとはずっとただの友達でいたいから・・神の涙の力を発露させないために、
最後まで安全なデルムリン島にいてもらう。
落ちていたのに似せた式制の筒にいれた・・ザボエラの手垢がついた汚い筒に入れたくない！
―コンコン―「はい、どうぞ。」
着替え終わったらダイ兄達がノックをして入ってきた。
「大丈夫ティファ？」
「もうけがは完治したよ。
この城の侍医さん凄いいね～」
「そう・・あれ？
じいちゃんとゴメちゃんは？」
「この筒の中にいるよ。」
「もう入れたの！
・・俺もっと話したかった・・。」
「いつでも会いに行きなよ、キメラの翼結構あるから。」
「・・分かった・・」
「ティファ!!」
「・・いきなり何ですかポップ兄？」
「俺・・俺自身の戦う理由を見つけられたんだ!!
・・ありがとな。」
しんみりしていたダイの間に入るようにして、ポップは晴れやかな笑みでティファに礼を言った。
戦う理由と、まぞっほに貰った勇気の言葉を胸に抱く限り、自分はもう戦う事から逃げない。
沢山の勇気を二人から貰ったのだと言外に言って。
「それは何よりです。」
ティファも自分の言わんとすることを察して笑って受けてくれて嬉しくなる・・のだが・・

「戦う理由？」
「何それ？」
　他の二人に怪訝な顔をされて、
「ちょポップ！
　まさかそれを考えてくるのが遅くなったの⁉」
　・・怒られた・・。
「じゃあ二人にはあんのかよ！
　戦う理由が!!」
　人が必死こいて死ぬほど悩んで出したのに!!
「え・・俺は助けて守んなきゃって。」「・・へ？」
「そうね、私も守りたいって事で頭一杯になって飛び出したわ。」
「それって・・」ほぼティファと同じ・・
「ポップは難しく考えすぎなのよ。
　いいじゃない、単純な考えで。
　ポップの言っていた見捨てない、それから助けて守りたいで。」
「そうか・・」
「そうだよ！」
「ふふ、いい言葉・・
　ねえ！この言葉、一行の標語にしましょう。」
「あ！それっていいね!!」
「お・・おう・・。」
　―如何なる敵が立ちふさがろうとも、人々を見捨てずに助けて守る勇者ダイ一行―
「素敵な一行の誕生ですね。」
　三人のやり取りを静かに見ていたティファがにっこりと笑って褒め称えた。
「へへ・・」
「うん・・」
「そうね・・」
「守ろうぜ、皆で一緒に。」
　シンプルが一番だとポップが言った時・・ポップの脳裏に何かが

引っ掛かった。
　あれは・・アバン先生がティファに眼鏡を渡した時・・
「大切に守ってくださいね」
「必ず守り抜きます」
　眼鏡を・・とても大事なものの様に・・何で・・二人は・・
　それにティファの戦う理由は
「私の守りたい者達を守る為に戦います」って・・
　それって・・あの約束と関係が・・
「ポップ!!」
「わ！・・マァム・・」
「どうしたの、急にぼうっとして。」
「あ・・いや・・何でもねえ。」
「疲れたでしょう三人共、王のご厚意に甘えさせていただいて休みましょう。」
（今日はバタンキューだ!!・・ちと古いかな？）

奇妙な出会い

三人をベッドに寝かせて、伝言メモを残してネイル村に向かった。
今後マァムさんが一行に付いてきてくれると言ってくれたのをロカさん夫妻に報告しないといけない。
何となれば家出少年ポップと違って大切な一人娘さんだからね。
昨日通った道を空飛ぶ靴でひとっ飛びして、日暮れ前に辿り着けた。
―トントン―
「はい・・あらティファさん！・・・あなた一人？マァム達は・・」
「その事を含めてご報告がありまして戻ってきました。
ロカさんは？」
「まだ起きています。さ、中へ。」
「お邪魔します。」
飲み物を断って今日の出来事をすべて話し、
「マァムさんをお連れしてよろしいでしょうか？」
二人の顔が難しい顔をしているな。
「仕方ねえ・・マァムが決めた事だ。」
「そうね、ティファさんよろしくお願いします。」
・・私に頼むんかい・・でも、もとより守る気だからいいけど。
「分かりました、お二人の言葉をマァムさんにお伝えします。」
お暇しようとしたら、
「それよりもお前さんに聞きたい事がある。」
何故かロカさんに引き留められた。
「何でしょう？」聞きたい事って。
「アバンの奴、本当はどうした。」
「!!」
「・・随分驚いた顔すんな～。
お前達やマァムの様子見てればわかるさ。
ここに来た次の日からあいつの話が全く出なかったんでな・・長く戦いに身を置いてた俺には分かる事だ。

で、本当にあいつはどうした？」
「・・あなたをだますような真似をして申し訳ありません。
魔王がきて・・メガンテをされました・・。」
「・・そうか・・あいつは・・」
「・・はい・・」
アバン先生が死んだことには薄々勘づいてたロカさんでも、先生が自爆呪文を使ったって言う事には衝撃を受けたようだ。
無理もない、倒されたのと自らの命を投げ出したのとでは意味合いが全く違うもんね・・。
「・・後一ついいかティファ。」
「はい、何でしょう？」
暫く苦しそうな顔をして俯いていたロカさんんがもう一つの質問をしてきた。
答えられることは全て答えようと聞いてみれば、
「お前さんいったい何者だい。」
「・・それはどういう・・」
「一行の―料理担当―にしては薬学知識があり過ぎるんだよ。
それに俺はそいつの動きを見れば大概の実力は分かる積りだ。さっきの戦闘時の話、全部手前の事をすっ飛ばしたろう。」
これは・・本当にこの人は凄い人だ、頭が下がる思いしかしない。
それでも私の答えは一つだ。
「私は後にも先にも一行の料理人ですよ。」
目をそらさずに思いを告げる。
互いに真剣に見つめ合っていると、
「分かった、悪かったな変な事を聞いちまって。」
「いいえ、ではマァムさんをお預かりします。」
「ごめんなさいね、ロカが変な事を聞いて。」
「いいえ、大切な娘さんを得体の知れない輩の元に置きたくないというのは親として当然の事だと思います。
ロカさんはいい父君です。」
「あんな・・そういう世慣れた事を言うから怪しまれんだぞ！

ダイ君や・・ポップみたいに・・もっと子供らしくどたばたとだな・・」
「貴方!!」
「う!・・・とにかく!!
マァムもそうだけどな、三人の事頼んだぞ!!」
「はい、分かりました。」
何やら温かい言葉で子供らしくしろと変わった説教貰ってロカさん宅を後にした。

後日談
ロカの家に久々に治療に訪れたマトリフにレイラがティファの睡眠薬のメモを見せたところ、
はじめは感心をしていた顔をしていたが・・急に何か様子が変わり・・わなわなと震えだし遂には
「あの嬢ちゃん!!
人に全く会いに来ないで何をうろちょろしてやがんだ!!!!」
怒りの大絶叫を叫び上げた!!
・・確か御年九十八で・・近頃は人格が丸くなってきたと感じたマトリフをここまで激怒させるなんて・・。
メモを見た時は
(ムーラン草か・・いいアイデアだな。)
腕のいい薬師だと思って見ていたが・・筆跡がティファのものだとすぐに分かった!
伊達に五年も文通をしていない!!
自分に会いに来ない薄情者をつい怒鳴ってしまい、ロカとレイラを心底驚かせてしまった。
二人はマトリフの怒鳴り声よりも、マトリフと深い関係にあるであろうティファに対して。
大魔導士と誼があるって・・本当にティファは何者なのかと・・。
しかし当のティファとは全く無縁な話である。

(いい夜だ、月がとても綺麗だな~。ここがネイル村か、

ふふ、ミスト偵察部隊全滅させられたって、そうとうおかんむりだったな～。
あんなに怒ったミストを見られて僕は楽しいからいいんだけど親友の困りごとは
調べて上げないとね。
誰がやったんだろう、逗留した勇者一行の者かな・・楽しみだな～）
キルは一人偵察を名目に一人でネイル村の上空に佇んでいた。
偵察部隊を誰が全滅をさせたかミストが配下を使って調べようとした矢先に獣王が敗れた一大事の方で招集を受けたためキルが自ら申し出た。
暇で退屈だからと。
ミストは無言であったが、気配で呆れていたのがまる分かり。
しかし手を一振りして任せると言ってきたので散歩気分でやってきた。
一応ピロロにも声を掛けたが興味ないと一人に馴れて清々してる。
月明りで見つからない様に大樹の枝に立って元勇者の仲間の家を見てみれば、
「では失礼します。」
少女が一人、夜の森を行こうとしている。
灯りは一応持たされているようだが、
（こんなに遅くにどこ行く気だろう？）
面白そうなのでついて行ってみよう。
―スタスタ・ピタ―
―スタスタ・ピタ―
・・誰だろう、さっきから付けられてる気がする・・。
ご丁寧に足音を合わせて・・山賊か・・このご時世に人攫いか・・どっちにしても！
人を付け回すなんて碌でもない奴に決まってる!!
「誰ですか!!!」悪い奴はフルボッコ!!
ん・・少し感じた気配と・・足音頼りに振り向いたら・・誰もいない・・気のせい

「ふ～ん、僕に気が付くなんて鋭いね君。
かなり強いのかな？」
・・そんな・・声が真後ろから・・気配無く背後とられるなんて！
背中に冷たいものが奔る・・気配が全く感じられない・・誰!!
何時でも飛び退れるように準備をすれば、
「嫌だな～いきなりとって食べたりしないから、おっかない気配出さないで。」
・・やることを見透かされた・・相当な実力者に捕まったらしい。
しかもこの状況を楽しんでいるようだ。
じたばたしても仕方が無し、無駄しない様に体の余分な力を抜けば、
「そうそう、君は聞き分けの良い子だね。」
・・なんか頭撫ぜられて褒められた。
本当にどんな奴に捕まったのか、純粋な好奇心で知りたくなって振りむいてみれば・・
―キルバーン―がいるって何の冗談!!!
って・・あれ？
何か・・私の知ってるキルのお衣装が違う・・。
原作のキルは・・確か白の膝下ブーツに黒い頭巾と、黒部分が多い仮面に、装飾以外の
服の布地は薄紫だったはず・・
対してこのキルの布地と仮面の黒以外の部分が艶のある深紅だ！
原作のキルは如何にもな感じで登場早々気障ったらしく嫌な奴に見えたけど、
こっちのキルは・・「カッコいい。」
思わず思っている事が口に出てしまった。
長身肩広のキルによく似合っていいる。
気配も邪気がない・・機械人形なのは知っているけれど、そのせいではないだろう。
たまに呪われたアイテムやなんかからも、邪気があるもの知っている。

しかしこのキルからはそれが感じられない・・ネイル村出てきた辺りから付けてきたんなら、
私が勇者の関係者なのを知っているはずだ。
なのに尋問遊びとか、原作のキルなら喜んでやりそうなえぐい事をしようとしてこない。
真っ赤な瞳は一緒でも・・何故か深みを感じる・・怖くないと思ってしまう・・。
「カッコいいって、僕の服の事を言ってくれているのかな?」
普通に振り向いたら話しかけてきた。
「・・私的には好みの服です・・」
「そう、嬉しいな〜」
「嬉しい・・ですか・・」
「うん、この服は僕とその主以外からは評判悪いんだよ。
僕の親友からもね。
長く生きてきたけどこの服の良さが分かってくれたのは、僕と主と君を入れてようやく三人なんだよ。」
「そう・・何ですか・・」
つまりバーン以外には悪趣味って言われてんだ・・親友のミストにも・・気の毒だ。
「そうだよ、だからとても嬉しい。」
・・なんかにっこり笑ってフレンドリーな人だ・・こっちのキルって変わってる。
しかも人の頭やたらと撫ぜてくるし・・「あ!!」
油断してたら眼鏡とられた!!
「返してください!!
それは大切な方からの贈り物です!!!」
眼鏡ない方がこの子可愛いな。
数百年してこの服の良さを分かってくれるこの素顔を見たくて眼鏡を取り上げれば、
顔を赤くして怒ってきた。
血色のいい匂い立つような頬、少年のような薄く艶のある唇もさり

ながら、
ダントツに気に入ったのは黒い瞳だ。
自分は衣装と装飾・肌及び髪が真っ白な主と、衣がすべて真っ白な親友がいる。
外側は白く、中は深淵の夜のような美しい艶やかな黒を持つ者達だ。
それに対してこの少女は、長くふんわりとした黒髪に星のきらめきを閉じ込めたような
美しい黒い瞳を持ち、真っ白な無垢の子供のような印象を受ける。
こんな時刻にこんな真っ暗な森の中で自分のような怪しいものと話しているなんて、
危機意識が相当ない箱入り娘のようだ。
「君じゃないよね？」
思わず聞いてしまった・・ミストを困らせたのがこの子供であってほしくないと願って。
「・・何がですか？」
少女は取り返そうとしていた動きを止めて、きょとんとした顔をする。
「いや・・何でもないよ。」
何でかあまり深く聞きたくなくてはぐらかして少女の頭を撫ぜる。
(初対面特典で今日は見逃してあげるか)
何の特典だか考え着いた自分も？だが、百獣軍団を撃破した一行はこの地に留まるまい。
ならば偵察部隊がいてもいなくともさほど重要ではない。
この子もバーン様の作戦が本格的に始まれば死を迎えようし、
少しの間の生を無為に狩ることも無い、どの道地上の全ての命は消えるのだから。
現段階では一行の抹殺指令も出ていない。
わざとほんの少しの気配と普段は立てない足音をさせたが、実力が高くないと気がつかない程度を
気が付いた子だが・・気に入ったので見逃すか。

「はい、眼鏡返すね。」
「・・ありがとうございます。」
「その眼鏡、無い方がいいよ？」
「・・知ってます・・似合わないことくらい・・」
「違うよ、そうじゃない。」
「？」
「君本来の美しさが隠されてしまう。
　勿体ないよ。」
「・・あの・・何言っているのか・・」
「まあまだ子供の君には分からないか。」本当に勿体無い。
　この蕾のような少女は、美しく咲く事は決してない。
「早くおいき、悪い狼に食べられる前に。」
「・・狼出てきたら蹴っ飛ばします。」
「勇ましいお嬢ちゃんだ。
　でも―お転婆―が過ぎると、狼の群れに囲まれてしまうよ？」
「・・それは」
　それは今の一行が邪魔になったら確実に軍が総出で潰しに行くという事だ。
　果たしてこの少女に理解できるか？「そしたら・・」ん？
「力を合わせて狼さんを伸してお説教します！」
「・・は？」
「悪い事はいけないと教えてあげます。」
　・・何か・・変な事をにっこりと笑って言ってる。
　人を襲いし狼を説教して・・改心させるつもりかこの子は？
「ふっふっふ・・はっはっはは。」
　久し振りに楽しい笑いをさせられた・・こんな年端も行かない子に。
「もう行きますね、失礼します。」
　礼儀正しい子だ。
「そうだね、お行き。」
　まだ沢山話をしたいが、自分もそろそろ戻る時間だ。
「またどこかで会おうね。」

未練がましく次を言ってしまったが・・考えてみれば、敵の子と会うのは戦場か。
戦うよりも暗殺の確率が高い気が・・。
少女は驚いた顔をしたが「そうですね、また服について楽しくお話しできるといいですね。」
答えてくれて行ってしまった。
後姿が見えなくなるまで見送った後、空間を使って帰還した。
「キル!!何だこの報告書は⁉」
一応偵察名目で出たから気紛れに報告書をミストに出したら怒鳴られた!!
長ければ数十年はだんまりをしているミストから怒声聞けるなんて超レアだ!!
「それじゃあ駄目かい？」
何やらまだ会話できそうなので聞いてみたら、
「駄目に決まっているだろう!!」
―村を見回しても何も分からなかった。でも楽しかったよ？―
「こんなふざけたものを寄越して!!」
あの少女に出会えて素直に感想書いただけなのに、ミストはからかわれたと感じたらしい。
今日はついてるな～。
あの子と言い、ミストの怒号と言い、いい日だ。
「聞いているのかキル!!」
「うん、もっと聞かせてよミスト～。」
「き・・様は!!」
その後小一時間キルはミストの部屋で二人きりで説教三昧をされて大喜びをした。

ーパプニカ編ー上陸

あれは本当にキルバーンだったのだろうか・・原作の人物とは似ても似つかない。
中身がもんの凄い紳士で残虐キルバーンとはとても思えなかった。
ザボエラは原作通り屑で下種な策謀家なのは判明したけど、こっちの世界の人物は会ってみないと
分かりません状態か。
これからは先入観無しで会いに行こう！
知識じゃなく、自分の目で見たものが真実だ!!
・・それでいこう。
大海原を走る船上で、一人黄昏ながら昨日のキルとの遭遇を考えてようやく結論出た。
そんくらい私の脳内フリーズ起こしましたとも!!
何なのあの紳士キル!!
何の冗談？
なんかの策略の一環？
勇者一行の者を誑かすための演技かい!!
とは言えまい。
この世界は大魔王バーンからして違うんだから、考えた末に結論を出した。
こいつはこうの考え丸っとこの海にポイって捨ててしまいました。
捨てて新たに考えを定めて船上を見回してみれば、もう一人黄昏ていた私の双子の兄が
いつの間にやらポップ兄とマァムさんとでじゃれ合ってる。
ダイ兄の中のお悩みを、ふたりがかいけつしてくれたよ
三人とも元気があってよろしい。
「四人共、そろそろ目的地に着くが、本当に・・。」
ロモス王様が私達の行き先がパプニカと知って船を出してくれた。
じいちゃんの件と言い、この船と言い、本当に優しくて実行力のある王様だ。

船長さんも海の男らしくていい人だ。
けどウォーリアさんの方が美男子だと思うのは内緒にしとこ。
その船長さんが目的地を聞いて不安そうな顔をしている。
パプニカは今大戦は一進一退ではあるが負けておらず、首都も大きな港町も被害はなく
風光明媚で式で見た限り戦争の不安さはあってもそこまで暗い影はなかった。
行き先が普通にパプニカの首都周辺であった場合の話だけど、
「はい、行き先は地底魔城より五キロ離れた西海岸でお願いします。」
私が設定したのは敵の目の前すれすれだ。
斥候や見張りがギリいるかいないかの範囲を目的地に設定をした。
この決定をダイ兄達に納得させるのに超手間がかかったな～。
「敵の情報を少しでも収集してから王都に行った方がパプニカ国の為になると思います。」
ただレオナ姫や父王にのこのこ会いに行くだけよりも、勇者一行の者達らしく、
敵を調べ上げて倒す算段を付けた方が云々かんぬんで、
一行の良い子達をだまくらかした。
本当は悪魔の目玉でパプニカで見つけられて、ヒュンケルが単騎で王城に乗り込んで来たら
ぶっちゃけしち面倒な事にしかならないのが目に浮かぶからだ。
戦場においてヒュンケルは一度たりとも魔装は脱がずに戦ったろうから、誰も素顔は知らず、その格好で来られて城下及び城内で戦われたら最悪私が取り押さえないと被害甚大だ。
私の力量はまだ隠してやっていく方向だ。
せっかく三人が自分達の力でやり遂げられると自信をつけてきたのだから。
それに最大理由は魂の貝殻。
復讐鬼化しているヒュンケルの目を覚まさせるにはあれは必須だ。
戦うのはやっぱりあの貝殻が手に入るようにしないと、ヒュンケルを救えない。

あの人も助けたい方向ではある・・でもキルの件もあるので、実際のヒュンケルを見てそれで考えよう。
今でも純粋に亡き父を慕っての復讐か、暗黒に堕ちて殺人鬼となり果てたのか。
見定めるとはおこがましくとも、観察させてもらう。
それでも一番の目的は打倒不死騎軍なのには変わらないけど。
「早く着かないかな。」
さっきからダイ兄がソワソワして少々困る。
浮かれていったら怪我じゃすまない。
「おいダイ！御姫様に会う前に、おっかないとこに偵察行くの分かってんのかよ・・」
「そうよ！父さん達から地底魔城の凄さ聞いたことがあるけど、本当に危険なのよ。」
ダイ兄のソワソワ理由を知っている二人に怒られて少ししょげて落ち着いてくれて助かる。
「まあまあ。
二人共、気負って行くと余計な力が入って良くないですよ。
反対にダイ兄は少し浮かれ過ぎです。
首都及び周辺の被害が少なくとも、敵の攻撃で辛き目にあっている人達がいるんです。」
そろそろ仲裁の頃合いなので間に入った。
「まあ・・そうかもしんねえ。」
「ピリピリしてもしょうがないか。」
二人は素直に聞いてくれる。
「そうですよ、先は長いんですから出来る事をその都度していけばいいんです。
頑張るのと気負うのは別物ですよ。」
「おう。」
「うん。」
「・・でも・・」
二人は素直でも、

「俺、早くレオナに会いたい。」
ダイ兄が珍しく引かない。
気持ちは分かる。
何となれば初恋の人が今まさにピンチで、早く会いに行って無事な姿を自分の目できちんと確認をして安心したいというのが自然だろう。
けどね、ダイ兄は勇者になったんだ。
その辺をもう少し自覚してほしい・・ゆっくりとでもいいから。
「兄、必ず会えるよ。」
「ティファ・・。」
「私の言った事外れた事あったけ？」
「ううん、無い！そうだよ、敵調べてレオナ達助けよう!!」
十二年兄妹してる私への信頼感半端ないな。実現できるように全力尽くそう！
「では気を付けていくんだぞ！」
「はい！王様によろしく。」
「ありがとう。」
「気を付けていきます。」
「船長さんもお気をつけて。」
丘のモンスターと違って海のモンスターには破邪の石の効果はなく、
気のいい船長さんにお礼を言いつつ互いの無事を祈る。
パプニカに上陸だ。

正義の使徒も大変です

日の光の差さない松明の灯りの中で、玉座の椅子にてまどろんでいる青年が居た。
薄気味の悪い部屋には似つかわしくはない銀色の髪の青年は―人待ち―をしている。
「ヒュンケル様。」
「・・モルグか・・」
執事風のゾンビからヒュンケル様と呼ばれた青年はうっすらと目を開ける。
「勇者一行の者達が来たと、今しがた報告が入りました。」
モルグは一礼をして用向きを主に伝える。
「来たか・・パプニカ城ではなくこちらに。」
てっきり城に行くと踏んだのだが、攻める手間が省けてちょうどいい。
自分は父の敵アバンを討つ事を目標にして生きてきた。
正直魔王軍がどうなろうと知った事ではない。
自分について来てくれる不死騎団の者たちが可愛くてモルグの事も好きだが、その程度だ。
目標たるアバンはハドラーに先を越されてしまった、ならばせめて弟子の全ては自分が貰おう。
「さっさと俺に殺されに来い・・」
紫の瞳に憎悪と殺意をどろりと煮詰めさせた色を乗せて、ヒュンケルは誰ともなくそっとつぶやいた。

ああ・・来ちゃいましたよ、地底魔城近くに。
環境的には良い子が絶対来たらアウトなどん暗な雰囲気で、遺体はないけど道々に血だまりの後とかってほんっと勘弁してよ！
ダイ兄達のやる気テンション駄々下がり!!
・・仕方ない、平和に生きてきた子供達には少々グロイ光景だ。
遺体が無くてマジで助かる。

王国側は遺体の回収が出来る余力があるのか、死んでないのかは分からないけれど無くてよかった。
「こほん。」
青ざめてる三人には、
「あそこに池が見えますよね。
倒木があるので船で淹れておいたお茶を飲みましょう。」
リラックスしてもらう。
「ティファ!!お茶って・・」
「あのねダイ兄、体に力が入りすぎ。
ポップ兄とマァムさんもですよ。
余計な力はいざという時動けなくなる元です。
温かい物を飲んでリラックスですよ。」
説得に応じた三人は、意外にもネタで出したクッキーも食べてる。
案外子供というのは図太いらしいと学習させてもらった。
そろそろ行かないと・・悪魔の目玉の視線が痛いな。

「モルグ!連中はまだか!!」
報告を受けて一時間が経つが、来る気配が全くない!!
ヒュンケルは罠を張って待っていたが来ないとしびれを切らし、半ば八つ当たり気味に
モルグに報告を促す。
「その・近くまでは来ていますが・・」
「なんだ・・どうしたモルグ。」
いつもははっきりとした物言いをするモルグが珍しく言いにくそうにしている。
「・・矢張りガキはガキか。
近くまで来ておいて逃げ出す算段でもしているのか?」
戦う気満々の自分が失望するのを憂えたモルグらしいと思って聞いてみれば
「その・・彼等はお茶を飲んでいます。」
「・・なに?」

「倒木に腰を掛けて・・人間の食べるクッキーとやらも食べながら・・」
「はぁ⁉」
「四人おりますが、誰一人として怯えた顔をしておりませんヒュンケル様。」
・・何なんだそれは⁉
あの一行は少年少女しかいない一行の筈だ！
なのに戦場の影の色濃い地にて暢気に茶を飲んでますってなんだそれは!!
アバンが居れば可能な話ではあるが・・誰だ・・誰か戦い慣れした者がいるとでもいうのか!!!
「ふえっくしょうん!!」
何だろ・・ここ最近くしゃみが・・。
「大丈夫ティファ？」
「大丈夫ですよマァムさん、そろそろ行きましょう。」
きっとヒュンケル辺りがまだ来ないかってイラついてる気がする。
目玉の数が増えて来てるのがその証拠だ。
・・あれって餌付けできないかな？
頭の隅でらちも無い事を考えながら片付けすまして出発をする。
さっきよりも皆いい顔をしてくれてほっとする。

地底魔城まで一キロの所には神殿が一つ立っていた。
確かハドラー大戦の犠牲者の鎮魂目的のために建てられた物が、無残にも焼け落ちてる。
「ティファ・・これって・・」
「そうだよダイ兄、私達が負けたらこんな場所があちこちに出来るんだよ。」
「・・そんな・・」
初めて見る本物の戦場後は、ダイのみならずポップ達の心にのしかかる。
負ければ世界全てが破壊されるという事実に。

乗せて来てくれた船長の話では、パプニカは首都と大きな街は無事だが小さな村落は陥落されたと言っていた。
つまり・・ここと同じように。
「ティファ!!俺敵全部倒して皆を守る!!」
「俺もだ!!」
「私もよ!」
いい目だ、三人は本当勇者一行の人達にふさわしい。
怯えても逃げることなく立ち向かう方を迷わず選び取る三人を見て、ティファは心の中で微笑みを浮かべる。
しかし―ボコボコ!!―無粋な邪魔が入った。
「げっ!!」
「きゃっ!!」
「うぇ!!」
十メートル先の焼けた地面からガイコツが数十体出てきた。
アンデットの群れ来たー!!でも
「ダイ兄、ポップ兄、マァムさん!!」打ち合わせ済みだ。
―ガッシャン!!!―　―バッシャン!!―「メッラゾーマ!!!」―ゴオウ!!―
バダックさんの聖油を作っている時間は無かったので、油入り瓶と聖水の大瓶三つを同時に投げて聖油もどきぶっかけてポップ兄のメラゾーマ攻撃!
さっさと昇天してもらおう。
「うっし、効いた!」
「船長さんからアンデッドの軍の情報聞いておいてよかったね。」
「いつかお礼しないとね。」
半数減らせて三人共嬉しそうだけど、油断は・・
「ふん!!」―ガッシャン!!―
禁物って思ってたらなんかの一閃でガイコツ全滅した。
三人は驚いて声も出ない。
「誰ですか?」
分かっているけど一応聞かないと。

神殿の影から出てきたのは・・やっぱりヒュンケルだった。
・・うわ～隠してるつもりでも剣の方から殺気が出てる・・なのに気が付かないダイ兄と
マァムさんがのこのこお礼言いに行っちゃった・・危機感もって二人共・・ん？二人？
「なあティファ。」
ポップは行かずにティファに小声で話しかける。
「あいつ、なんか変じゃねえか？」
「・・どんな風に？」
「服が綺麗すぎる気がする。血どころか埃もなんもついてねえ。」
「そうだね。」
民家が近くにある平和な世ならばいざ知らず、大戦始まって被害が出ているこの地にいるものにしては綺麗すぎるとポップの勘が働くのだ。
「それによ・・俺らが来た時人の気配が無かったのにいきなり現れたのも変だ。」
アバンのハードスペシャルの中に気配を読む修業をして多少はよめるようになったのに、
あんな凄い技を使える者の気配が分からなかったはずがない。
「わざと消してた？」
「・・かもしんね・・確かめてみる。」
何故こんな所にいるのか目的を聞こう。

（二人は予想通りに側に来たが、あの二人は来ないか。）
寧ろ自分を疑っているようだ。
アバンの弟子ならば奴に似てお人よし揃いだと思っていたのだが、疑う者もいた。
（あの小僧は魔法使いか。少しは人を疑えとアバンに教えられたのか？）
アバンはお人よしそうに見えて底が見えずに抜け目のないところもあった。

その教えを受けたものがあれか、油と火炎の作戦はあの小僧か。
もう一人は・・何なのだあれは？
戦場にリュックと小さな鍋を下げて背負っている・・どう見ても場違いな小娘は？
（しかしあいつがかけている眼鏡は間違いなくアバンの物！見間違うはずがない!!）
憎い仇の形見をしているという事はあいつもアバンの・・どこか飄々とした雰囲気が似ている!!
ん？ヒュンケルこっちガン見してる。
「貴方もアバン先生の！」
「じゃあ俺達と同じだ!!」
二人とは名乗り終わったみたいだ。
二人は嬉しそうだけど、ヒュンケル全然嬉しそうじゃない。
口で薄く笑っても、目が全く笑ってない。
ポップ兄もそこに気が付いたみたいで魔力を備え始めた。
「二人ともこっちに来なよ！」
「ヒュンケルさんが同行していいか聞いてるわよ。」
「・・ポップ兄。」
「ああ、俺が聞く。」
「分かった。」
二人の側に来て、
「ヒュンケルさんて言ったな、俺はポップってんだ。」
「・・・」
「少し聞きたい事がある。」
「二人ともこっち・・」
「え？」「ちょ！」
ポップ兄が話している間に二人の腕をとってヒュンケルから引き離す。
「ポップ失礼だよ!!」
「そうよ！彼は私達と同じ輝聖石をしているのよ。」
ダイとマァムはティファたちの行動に驚き抗議の声をポップにあ

げる。自分達と同門の先輩に対して疑っていいはずかないと。
「クックッック、はっはっはは!!」
その二人の思いはヒュンケルの歪んだ笑い声によって打ち砕かれた。
「何がおかしい・・」
ダイ達は驚き、ポップの警戒度がマックスになった。
「アバンの弟子はお人よし揃いだと思っていたがどうして・・ふん!!!」
―ガコ!!―　―ボコン!!―
ヒュンケルが指で合図を上げると同時に、ばらけていたガイコツ達が再び起き上がった。
「さっきの!!」
「またかよ!!」
「うそ!」
「倒したふりですか。」でも甘い!!

二人は風上に連れて来てる、大瓶二つマジックリンクから取り出して―ガッシャーン!!―
「ポップ兄手加減なし!!」
「おう!メッラゾーマ!!!」―ゴオオウ!!!―
さっきよりも威力あるメラゾーマ、風下は安全です!
「貴様ら!!」うっわ怒ったか。
「どうしてアバン先生の弟子が!」
「そうよ!どうして敵と一緒にいるの⁉」
ああ、二人ともそれは
「そいつは敵といるだけじゃねえ!」
「ほお、どういうことだ小僧?」
「先生が言ってた。
ゾンビとがガイコツのアンデッドは基本主人の命令しか聞かねえって。
そいつがパプニカ攻めてる隊長格だ!!」凄いポップ兄。
ダイ兄達ショック受けてる。

「クック、正解だ。」
「どうせその輝聖石も偽もんだろう!!」
「そ・・」
「それは違うでしょうポップ兄。」
ヒュンケルが言う前に言っておかないと。
敵から聞くよりは見方からの方が心のダメージは少ないはずだ。
「確かにその人はアバン先生の弟子だった方だと思います。
心の在り様はともかく、先ほどの太刀筋はダイ兄が得意な大地斬でした。」

復讐？八つ当たりです！

―心の在り様はともかく―

つまりティファはアバンの弟子であっても悪になるものも居るといった！

正義のものとはならずに、悪の手先になるものがいると。

「・・そんな・・」

「？だ！」

「嘘よ！」

その考えはダイ・ポップ・マァムにとっては受け入れ難い、否！受け入れるわけにはいかない事だ。

流石にショックか、でも敵のヒュンケルから言われるよりはましか。

「その通りだ、あいつに教わった全ての者が奴を尊敬するとは限らん。」

ヒュンケルは吐き捨てるようにティファの答えを肯定をする。

奴は憎むべき者だと心の底から。

「では何故その輝聖石を？」

チェーンの具合を見れば皮脂が見られる。

長年掛けていなければああはならない筈だとティファはふみ問いかけてみた。

「奴の弟子をおびき寄せる為の餌にすぎん。それが終われば用済みだ。」

―ブチ―チャリン

ヒュンケルはティファの問いに対し、下らん事だと思いながら―用済みの石―を無造作に

放り捨てる。

「しかしあいつも馬鹿な奴だ。」

「何だと！」

「手前!!」

「何を！」

「お前達を守るためとか抜かして自爆呪文を使った挙句が相手を仕留めきれんとはな。弱く愚か者になったものだ。」
「「何だと!!」」
ヒュンケルの挑発にダイとポップが乗りかける。
「正直がっかりだ、俺が出るまでもなかったか。」
「酷いわ！先生は命を賭けて!!」
「その守るべき弟子たちに後始末をさせているのだから滑稽極まりないだろう。」
ダイ達の怒り悲しみの声を、ヒュンケルは侮蔑の声で返す。
嘲りの笑みを浮かべて。
「それ以上！先生の悪口を言うなー!!」
「ほう、ならばどうする？」
「ダイ兄！」
「くらえ！アバンストラッシュ!!」
ヒュンケルの挑発に乗ったダイはティファの制止の声を聞かずに剣を逆手に持ち、先制攻撃をしたが、
「ふん!!」
未完成なストラッシュはヒュンケルの剣の一閃でかき消され不発に終わった。
「くっくっく、これがアバンストラッシュだと？
この程度ならば俺でもできるぞ、ストラッシュ!!」
ヒュンケルはダイと同じ型でストラッシュを放った。
型は同じでも込められた闘気はけた違いであり、喰らえばダイの大ダメージとなりかねないのを、
「はあっ!!」―ザン！―
ダイの前でヒュンケルと同じく剣の一閃で相殺をしたものがいた。
「小娘貴様!!」
アバンと同じ眼鏡をかけた少女が、いつの間にかリュックを下ろし剣を抜いて立ちはだかる。
それも手加減なしの闘気の一閃をかき消して平然と自分を見ている!!

自分はアバンを殺すのを目的として日々鍛錬をしてきた!!
時に大魔王の命で魔界にて実践も兼ねた反乱討伐をこなし数々の敵を屠ってきた自分の
攻撃を受けても涼しい顔をしている！
この一行の実力者は奴か!!
「貴方の言う通りです、ダイ兄のストラッシュはいまだ未完成です。」
下手に慰め言っても何の解決にもなんないからきっぱり言ってしまおう。
「そんなティファ・・」
「けれどもこんなに酷い感情のストラッシュは撃ちませんよ。
清々しく、清風のようです。いつか必ずできるから、めげずに行ってみましょう！」
「ティファ！うん!!俺頑張る!!!」
素直って本当に美徳だな。
これで元気出てくれてよかった。
でも今の言葉に嘘はない、ダイ兄なら必死になって習得してくれるって信じてるもんね。
ヒュンケルの攻撃からは憎しみと殺気しか感じなくってまだ腕びりびりするな。
「そいつがか？」
「はい、ダイ兄は本当に勇者になれる素晴らしい人です！」
ヒュンケルに対して兄自慢してやった!!
「ならば、今すぐ死ね!!」―鎧化―バクン
げ！初っ端から魔装化してきた！
「気を付けてください！情報では隊長格の者の鎧には魔法が全く通じないそうです!!」
・・・言っててなんだがどこ情報だと自分で突っ込みたくなる。
そんな高度情報聞きまわっていた時間ないし、送ってくれた船長さんからもそんな情報教わってないだろと情報ソースどこだと突っ込みどころ満載だ。
まさか転生者＋大戦当日の戦闘状況式見で見ていましたは流石に

言えんが、
「その通り！この鎧の前では小手先技は通じんぞ!!」
・・なんとまあヒュンケルが助け舟出してきた・・複雑だ、根はいい人なのかこの人は？
「そしてこれが奴を殺すために編み出した技だ!!」
やっぱ!!
「受けて見ろ小娘!!ブラッディ―スクライド!!!」
って！ダイ兄じゃなくて私かい!!受けて・・
「ティファ!!」
「ダイ兄⁉」
「「ダイ!!」」
「あう!!」
ダイ兄が・・私庇って剣を受けて、数メートルまで吹き飛んだ。
「ダイ兄！」
ヒュンケルから目をそらさずに後方に跳んで兄の隣に来れば、ロカさんが餞別でくれた
鎖帷子を着てたお陰で致命傷には至らずに済んだ。
「痛う・・！」
それでもダメージは大きく立ち上がれない。
「どうしてこんな事をするの⁉
先生の生徒が・・凄い力を持った貴方がどうして!!」
「何故だと？」
マァムの悲痛な問いかけに、ヒュンケルお目は憎悪の感情で溢れかえった。
「・・いいだろう、話してやろう。」
マァムを睨む目は氷の如く冷たく、声も静かな怒りに満ち溢れ
「あいつは父の仇だ!!」
十数年間アバンに抱き続けている負の念を全て話しつくし
「だからこそ俺は魔王軍にいる!!」
マァムの問いに答えた。
「そんな・・」

「でも・・だって・・」
聞いたポップとマァムはヒュンケルの答えに反論が出来なくなってしまった。
敵にも身内はいる、仇をとろうというのは自然な考えではないのかとさえ思ってしまう！
それほどまでにヒュンケルの決意は固く、初対面の自分達をも圧倒する一途さを感じてしまうもの！
しかし、
「成る程、つまり貴方は父君と違って戦士ではないのですね。」
ティファの静かな声が聞こえた。
労わりや間違っているなどの説得ではなく、はっきりとした否定の言葉に
「おいティファ！」
「ちょっとティファ！」
それは不味いとポップとマァムが慌てる。
「小娘・・今何と言った」
案の定ヒュンケルの逆鱗に触れた。
自分は復讐することもさることながら父バルトスの強さを指し、父のような戦士足らんと
してきた！
それを見も知らぬ小娘は!!
「言葉の通りです。
貴方は戦士などではなくただの復讐鬼です。」
ヒュンケルが殺気を込めた闘気の気配を叩きつけてもティファは黙らない。
「何故だ！父の仇を討とうとして何が悪い!!」
「それが間違っています。」
「何だと!!」
「戦士とは敵と相対し倒し、時に倒されるものです。
戦場で戦えば間違いなくどちらかにしかなりません。」
「・・・」

「倒す者は倒される覚悟を持って戦場に出ているはずです。
あなたの話からするに父君は間違いなく戦士の心構えを持っていたはずです。
いつかは自身も他者に負けて倒される覚悟を。」
「っつ！」
「まして魔王軍の隊長格ならば戦士のみならず大勢の無辜の命もその手に掛けたはずです！
そんな深き業を背負った父君ならば戦場で堂々と戦い敗れて倒されたのならば文句は無かった筈です!!」
私の知ってるバルトスさんは止めを刺さなかったアバン先生に反対に食って掛かるほどの
潔い戦士として描かれてた。
そんなバルトスさんが今のヒュンケルをどう思うんだろ、悲しむかな。
「黙れ!!そんなことは綺麗ごとだ!!!俺はアバンを・・」
「仮に貴方が父君の事を思ってどうしてもアバン先生を許せなかったとして。」
怒りに任せて先生を殺すとは言わせません！
「なぜあなたはいまだに魔王軍にいるのです？」
「・・何を・」
「彼の人はいなくなった。
復讐すべき仇がいなくなったというのに貴方は未だに人に、世界に対して憎しみの剣を　振るい続けている。」
「それがどうした！」
「最早貴方のしている事は復讐にもなっていません!!
たんなる憎しみ感情を周りにぶつけているだけの八つ当たりです!!」
「貴様!!」
「父君は成る程、立派な戦士だったのでしょうが、息子であるはずの貴方は道を踏み外しましたか。
今の貴方を見て、バルトスさんはどう思うでしょうか？」

私がバルトスさんなら大ショックだよ！
種族差を考えず、赤子の頃から可愛がっていた大事な息子が世間様に対してこんなことしてるって知ったら。
私だってじいちゃん殺されたら迷わずやる！
でも当の仇死んだ事になってもまだ魔王軍して周囲を苦しめてますってなんじゃそら!!
それって単なる八つ当たりだ！
私は復讐はやった奴だけにするもんだと考えてるからヒュンケルの考えは受け入れられない！
ＮＯと言わせていただく!!

捕まりました

言わせておけば!!
小娘の言葉に腸が煮えくり返りそうだ！
実力は確かに高かろう、殺す気で放ったストラッシュもどきを振り下ろしの一閃でかき消したほどだ。
ダイと呼ばれた小僧と他の二人は自分の復讐理由を知ってショックを受けて口を閉ざしてるが、
この小娘は黙らせようと先程から怒気・殺気の闘気を叩きつけても平然と自分に話しかけてくる！
―バルトスさんはどう思うでしょうか？―
その時の顔は悲しげだった。
それはアバンが時折自分に向けていた顔と同じ、悲し気でしかし優しさのこもっていた顔。
―ヒュンケル―その顔で名を呼ばれるのが・・とても嫌だった!!
眼鏡のせいか、ティファという小娘とアバンが重なる!!

「ダイ兄、立てる？」
「ティファ・・おれ・・」
無理か、肉体よりも精神に来たんだな。
バルトスさんとじいちゃんを重ね合わせて・・生い立ちの似た二人・・片や幸福に育ち、
もう一方は悲しい結末で終わってしまった。
もし自分もおなじめにあったらって・・でも！
「駄目だよダイ兄！引きずられないで!!」
「ティファ・・」
「少なくともじいちゃんはこんな復讐望まない筈だよ！」
「でも！」
「それにダイ兄は大勢の人を助けたいんでしょ？
だったら、心が闇に落ちた人も助けないと！」
「どういう・・」

「何をごちゃごちゃと!!闘魔傀儡掌!!!」
「あう!!」
「ダイ兄!!」
「小娘!」
「何です⁉ダイ兄離して・・」
「お前は言ったな!俺の復讐は間違っていると!!」
「その通りでしょう!討つべき仇が死しても復讐するなんて間違っています!!」
「ではお前が最愛の者を目の前で殺されても同じ事が言えるか見てやる!!」
・・まさか!!
「ブラッディ!」
いけない!・・剣と体全体に闘気を纏わせ
「スクライド!!」
「竜巻閃!!」
ヒュンケルの技がダイ兄に届く前に竜巻閃の高回転で闘気の糸を切断して技も防げは・・
「がはっ!!」しなかった。
必殺の一撃はやはり重い、脇腹かすっただけで体内の臓器のどこかが傷ついて口の中が金臭い・・思ったよりもダメージくらったか。
でもいい、ダイ兄は傀儡掌で気絶しただけで守れて上々だ。
「ほう、よくそれで済んだものだ。」
本気で殺す気で撃った技を咄嗟に反応をして小僧を無傷で守り通し、無傷とはいかずとも
二人とも生きている。
しかし傷は深いようで剣を杖としかろうじて立っているだけで限界は近いようだ。
「・・強いですね。」
「ふん、今更命乞いか?下らん。」
「いいえ、勿体ないと言わせていただきましょう。」
「・・何?」

「その力があれば苦しんでいる大勢の人々や善良なモンスター達を、今この時にでも救う事ができるでしょうに。」
「何を!!」
傷ついても・・優しく教え諭そうとする・・アバンの様に!!
「黙れ!!」
女・子供を殺そうと思った事は今まで一度としてない!だがこいつだけは!!
―ダーン!!―
「・・何だ・・」
破裂音と共に霧がかかり、一行のもう一人の少女の幻影が広がった。
「・・マヌーサか・・」
カラクリは分からないが所詮は幻影の呪文、本体は・・「やあっ!!」
「甘いな!」―ドガ!―「ぐっ・・」
攻撃しようとする瞬間に捕捉可能だと、背後からの攻撃も難なくかわして少女の鳩尾に
肘を決めて気絶させる。
戦い方が素人を上回る程度のものなぞ軽くあしらえるが・・ティファという小娘は確実に殺す!
「メッラゾーマ!!!」―ゴオウ!!―
少女との間に炎の壁が立ちふさがった。
「ティファ!逃げろ!!」
「甘いわ小僧!!」
炎をかき消すついでに、呪文を放った者にも一閃を送り付け諸共に薙ぎ払った。
「ぐああ!!」
呪文に全神経を使っていたポップは反応出来ずにもろにくらい、数メートル地面を転がり
ティファ達から引き離されてしまった。
「そこで見ていろ!この小娘の死に様を!!」
憎悪に溢れた瞳に殺気を宿し、呪いを吐くようにヒュンケルは叫び

上げて気を最大限に練り上げる。
確実にティファを殺すために。
（まだ・・後一撃もって！）
実力バレてもいい！原作ブレイクになっても死ぬわけにはいかない!!
ここで本気でヒュンケル叩きのめす！
ティファも覚悟を決めた。
やろうと思えばヒュンケルを倒すことは可能だった。
しかしそれでは本当の意味でヒュンケルを助けられないから原作通りに進めようとしたが、生死がかかれば話は違う。
死んでしまっては大切な人達は守れなくなってしまう！それだけは駄目だ!!
「ああー!!!!」
ありったけの闘気を込め、
「止め!!」
自分に掛かってくるヒュンケルを迎え撃とうとした瞬間・・影が視界の端に映った。
（何⁉）何かが目の前に来たので急いで技を止めて、無茶な闘気のフルブレーキに体内が悲鳴を上げたが構っていられなかった！何故なら!!―ドシュッ！―
鈍く何かが刺さる音がした。
目の前に来た―なにか―が、自分の身代わりにヒュンケルの技を・・
「クロコ・・ダイン・・」
目の前の大きな鎧にピングの大きな尻尾は、二日前に死闘をした相手、獣王クロコダインだった。
「獣王クロコダイン！貴様何のつもりだ!!」
庇ってもらったティファと見ていたポップは様々な意味で驚き、ティファの止めを邪魔された
ヒュンケルは激怒した。敵を救うつもりかと！
「お前達！今は逃げろ!!」
腹部を刺されても平然とポップ達に退却の指示を出す。

「でもマァムが!!」
逃げるのならば全員でなければ意味が無いが、マァムはヒュンケルの側で気絶をしてしまっている!
「安心しろ!この男は婦女子に手に掛けたりはせん・・例外はいたようだがな・・」
「ふふ、その通りですね。」
クロコダインはヒュンケルの人柄からマァムの身の安全を保障しようとしたが、ティファを見て慌ててティファの事は例外だと付け加えてティファを苦笑させた。
(・・そろそろ私も限界だ)
この流れなら「デルパ!」
クロコダインのガルーダで・・
「離せよ!!まだマァムとティファが!!」―バサ・バサ―
逃がしてくれたか。
この傷で行っても出血死しそうだ・・ポップ兄、ダイ兄は頼んだ・・
幸か不幸かティファの思惑通りに原作の道を進み―三人―でヒュンケルに捕まった。

自分は戦士だ！

「へっくしょん!!・・痛い・・」

くしゃみしたら体全体が痛んで目が覚めた。

薄暗い部屋の端っこに据え付けられてるベッドに寝ている状態で、目の前に格子発見。

どうやら牢屋、それも地底魔城のようだ。

ひんやりとするベッドの感触が、少し熱をもって火照った体に心地いい。

・・人生初に捕虜になってるのにこんな感想しか出ないのも人としてやばい気がするのは気のせいだ。

良し！現状確認しよう。

えっと、私は・・腹部手当されて包帯巻かれて・・何故かショーツと・・白い長そでシャツ一枚姿。

大きさから判断するに成人男性の物って・・不死騎団でこんなシャツ持ってるってヒュンケルしか

思いつかん。

手当てしてもらった上に、服まで貸してもらえたか。散々な事を言った私に。

心の奥にはバルトスさんと同じような戦士がまだ残っているのか。

・・さっさと誤解といてあげないとだ。

とりあえずこれで動ける、眼鏡は・・取られたか・・ムカついて壊さないでほしいな。

武器と荷物は言わずもがな。

でも大丈夫、自分と一行の荷物類全部は―ラック・バイ・ラック―のマーキング済みだ。

他者の目が無い所ではハイエントは使いたい放題。

後で回収しよう。

周りを見回せば私一人、マァムさんもクロコダインもいない。

クロコダインはぜひ蘇生液に入れててほしい。

後で式飛ばして二人捜すとして・・首からかけてた金のマジッククリ

ングはどこ行った？
大切な物を入れてる金のリングと、―刀・雪白―を入れた銀のマジックリングはいつも首
から下げてる。
今回は捕まるの考慮して雪白の方はリュックに下げた鍋にして擬態させたから敵は放っとくはずだ。
銀のマジックリングは私の式で作ったからできたけど、金の方は本物なので擬態は出来なかった。
あれもマーキングして数ミリの虫の式を付けといたけど「式見。」・・式見したら動いてる、地底魔城の廊下を・・誰かが持ってる？
どこ！その中は―取り扱い要注意物―ばかりだ!!
寝てる場合じゃない!!あれだけは取り返さないと!!
体力よし！痛み・・無視!!「ああっ!!」―バキン！―蹴りの一撃で格子ぶっ壊して
牢屋脱走!!!
「―うご（待て！）―」
ミイラ男やゾンビぞろぞろ来たけど・・「ごめん!!」
頭踏んずけて突破!!
「それ返して―!!!」
リングを追って城内大爆走だ!!!!!

あいつはいつ起きる。
ヒュンケルは玉座に座り、一人苛立っていた。
一行の二人を捕虜にしたとはいえ女・子共の二人で、肝心な勇者と魔法使いに逃げられ、戦士として尊敬していた一人のクロコダインの裏切りが許せなかった。
今もあのやり取りを思い出すと心中煮えくり返る！
「天下の獣王が堕ちたものだな！」
刺し貫いた鎧の下は満身創痍、クロコダインの腹部を刺した剣をそのままにして捻れば
「ぐああ!!」

クロコダインの全身から血が噴き出す。
「・・敵に誑かされおって・・」
最早クロコダインを仲間とはみなさずに剣を抜こうとしたが、傷だらけのみであっても剣を両手で持ちダイ達の追撃を阻止してきた。
「ヒュン・・ケル・・人間は・・いいぞ・・俺のようなものが持っていない・・温かく優しく・・本当の・・勇気を・・」
死にかけの身で話しかけたことが人間への賛美だった！
自分と同じく人間を侮蔑していたあのクロコダインが
「黙れ！貴様は狂ったか!!」
敗者の戯言を聞きたくなくて刺さったままブラッディスクライドを放った。
それでも、
「・・俺も・・生まれかわれるなら・・にん・・げんに・・」
後方に吹き飛ばされ、倒れるまで人間を褒めることを止めなかった。
血を吐きながらも祈るように。
馬鹿な・・いったい何が奴をここまで変えた？
自分と同じだったものの変わり様にヒュンケルは混乱をしたが、もっと奇妙な事が起きた。
倒れ伏していたティファが剣を持ったまま這いずってクロコダインの元へと向かっている。
「はぁ・・はぁ・・っつ！」
呼吸は荒く痛みを感じながらもゆっくりと、しかし確実に。
ティファの横腹の出血も酷くなっておりボロボロの身で何をと見ていれば、クロコダインに辿り着いたティファは、腰につけている服と同系色の水色のポーチを右手で開き、何かの液体の入った小瓶を取り出した。
ヒュンケルは知らないが、中身はテランの回復の泉の水とホイミ草と血止めの薬を混ぜた斬撃用の万能薬が入っており、瓶の栓を口で取り一気にクロコダインの傷口に流し込んだ。
（これで・・蘇生液に入れて貰えば・・）

「死なないで・・くだ・・さい・・ごふっ！」
　自分の方が死にそうだというのに何を！
「小娘！何故そいつを助ける!!そいつはお前の敵だろうが!!」
　訳が分からない！おそらく瓶の中身は回復薬の類だろうが、自分に使わずに何故敵のクロコダインに使ったのか・・数日前に戦った相手にだ！
「ふふ・・」
　笑いながらクロコダインに覆いかぶさるようにもたれながら、ちらりとこちらを見て笑っている。
　おそらくもう体を動かす力もないだろうにそれでも
「この者が・・死なすには惜しい・・獣王だから・・」
　つっかえつっかへと答えてきた。
　まるで自分に大事な、とても大切な事を伝えようとするかのように柔らかい笑みで真剣に。
　気を失いながらもティファは剣を左手に握りしめ、右手でクロコダインを包み込むように覆いかぶさったまま。
　クロコダインを守るかのように。
　一体こいつと言い、クロコダインと言い何なのだ!!
　二人の言動が全く分からないと苛立つヒュンケルの心に―ヒュンケル―・・不意に父の声がした。
「戦士の強さは何だと思う？」
　一度だけ父が尋ねたことを、
「んと、父さんみたいな強いの!!」
　父を尊敬してた自分は即答をした。
「そうかそうか。」
　父は嬉しそうに自分の頭を撫ぜつつ、
「ヒュンケル、本当の強さとは真に優しく、自分が見事だと思った敵には礼を尽くし、敵であってもなるたけ弱い者を相手にしない・・そう言うものが本当の戦士だと儂は考えている。」
「・・むつかしいよ父さん、敵は敵でしょ？」
「今はまだ分からんじゃろうが、何時か分かる日が来よう。

お前は儂の息子なんじゃから。力だけでは駄目なのじゃ、心も強く優しくあれ。」
・・今まで忘れていた幼き日の遠い記憶・・父との大切な想い出の一欠けらを・・
―戦士とは・・―先程のあの小娘の言葉で思い出したのだろうか？
―今のあなたは戦士ではない！――・・俺は・・父の教えを・・
「ヒュンケル様。」
不意に後ろからモルグに声を掛けられてはっと我に返った。
「ここに倒れている人間の娘たちとクロコダイン様をいかがいたしましょう。」
モルグが自分の指示を待っている。
先程はティファとクロコダインに対して強い憎しみと殺意を感じていたが、バルトスの教えを思い出いして落ち着いてきた。
この二人も・・味方の為に命を賭した見事な敵だ。
「クロコダインは蘇生液に入れてやれ、黒髪の娘も手当てをしてやれ。運があれば命を拾うだろう。」死ねばそこまでの話だ。
「もう一人の方は？」
「手を戒めた後に牢に入れておけ、それ以上の事はせん。」
「かしこまりました。」
モルグは一礼をして早速命を果たしに行く。
ティファといったな・・こいつに分からせてやる！
自分も父と同じ戦士なのだという事を!!

ドタバタな再会

あの小娘はいつ起きるんだ！
ティファがとっくに起きて城内を爆走している事を全く知らないヒュンケルはイライラが収まらず、取り上げたアバンの眼鏡を破壊してやろうかと思った矢先に
「ヒュンケル様、魔軍司令官ハドラー様がお越しになりました。」
モルグからの報に何の用だと眼鏡の件は保留にしてポケットに入れて招かれざる客の対応に渋々と出た。

「昔と全く変わらんなここは。」
じめっとはしているが、静寂が心地いいとハドラーはしみじみと思う。
ここに来る前の軍議は酷かった・・リンガイアと相性が悪かったバランがカールを任され、
騎士団長を葬り、いよいよ王都戦に入ろうとしたところに軍議で呼ばれて出鼻をくじかれて
不機嫌で物凄くピリピリしていた。
その後ダイ達の殲滅戦で集まってもらったが、ヒュンケルに勇者一行の討伐命令がバーン直々に
勅命が下った事を詫びれば、フレイザードがぶちぎれて会議室で大暴れをして部屋が全焼する
大惨事に。
・・そこへ医務室の蘇生液に入れていたクロコダインがいなくなったと報告を受けて、
バランはカールに戻り、フレイザードは気を落ち着けさせるのに時間を要するために、
手の空いているのが自分とザボエラだけだったので行きそうな場所に探しにやってきた。
・・大所帯を切り盛りするのは楽ではない。
やりがいがあるが苦労も多い、一人で大戦やっていたころの気まま

さが少々懐かしく思ってしまう程ものすごく疲れた・・手を焼く配下が多すぎる。
ここは本当に落ち着く。
かつては地上にて魔王を名乗り、配下達を意のままに従えて共に戦った。
アバンに敗れた場所であっても、思い出深い地に変わりはない。
（あ奴は昔の方が強かった気がする。）
アバンは実力もさることながら飄々として掴みどころがなく、何を考えているのか分からない
得体のしれない強さも感じていた。
なのにデルムリン島にて再会した時はものすっごくガッカリとした。
ティファという小娘にその力を吸い取られでもしたのか？
最後に出てきたあのみょうちきりんな小娘の方が昔のアバンに似ていた。
（アバンの奴は腑抜けおって！）
ここで戦った時のアバンと倒したアバンはやはり違う気がする。
近頃はアバンの事を考えると胸の中がチリチリとして苛立ちが湧く。
昔のままのアバンを倒したのであれば倒したことを誇れたのだろうか？

―預かってください―
―守り抜きます―
アバンから何かを託されたあの娘を倒せば気持ちは晴れるのだろうか？

「これは魔軍司令官殿、この様な場所へようこそ。
かつての栄光をご覧になりに来たのですかな？」
ふいにヒュンケルの声が聞こえて我に返る。
配下だというのに棘だらけで皮肉満載の声だった。

（ハドラーでうっぷん晴らしをするか）
ティファとクロコダインの事で苛立っていた思いをハドラーに晴らすことにした。
確かあいつは挑発にすぐ乗るとアバンが言っていたし、ムシャクシャしていたので、
ハドラーで遊んでやろうと気分が浮上した。
何となればあいつが弱かったから父が死ぬ一端を作った奴だし罪悪感は微塵もない。
・・アバンを恨んでいる割にはチャッカリそういった情報も覚えているヒュンケルだったりする。

「貴様！ハドラー様に向かって!!口を慎め!!!」
挨拶よりも、侮辱にしか取れない発言にお供のザボエラが怒ったが、
当の言われた本人はしげしげとヒュンケルを見るだけで何も言わなかった。
（なんだ・・何故何も反応をしないんだ？）
自分をじっと見ているだけで気持ちが悪いと思い、
「何かありましたかな、魔軍司令官殿。」
重ねて聞いてみた。

「いや・・お前の方が可愛気があったのだなと思ってな。」
ティファのあの物言いに比べれば、ずっと腹が立つ反抗的な奴だと苦々しく思っていた。
生意気ヒュンケルのほうがずっと可愛気があり、今の皮肉なぞも子供の悪口程度にしか感じない。
「「はあ！⁉」」
ヒュンケルは面食らい、ザボエラは呆気にとられた。
軍議以外でも廊下等で鉢会った時にヒュンケルの皮肉にブチ切れていたハドラーの言葉とは思えない!!

（俺に可愛気だと⁉・・ハドラーの奴・・頭でも打ったのか・・）
物凄く失礼な事を考えてしまう。
しかしハドラーをよく見れば、以前会った時よりも貫禄が増していて魔王としての風格が
上がった気がする。
一体このわずかな間に何があったのか、かつての宿敵を倒したからだろうか？

ヒュンケルはおよそ人が考えられる常識の中での考えをしたが、実はハドラーの変わりようは
ティファの魔王道発言による。
それを知れば、あの小娘かと、同じようにティファにあれこれ言われたヒュンケルはうんざりとするが、知りようもないので打倒アバンを達成した為かと考える。
まさかあんな事を初対面の・・それも魔王にあのような無茶苦茶を言う者がいるとは普通
誰も考えない。
余談ではあるがアバンも心底ティファは無茶苦茶だと思った。
「それで、今日は何か？」
とっとと本題に入って、さっさと帰ってもらいたくなった。
憂さ晴らしがとんだ期待外れだとがっかりだ・・
「うむ、実はな・・」
ハドラーが本題に入りかけると「お話の最中に大変申し訳ありません。」
従者のモルグが珍しく割って入ってきた。
普段は節度ある従者がこのような事をするという事は余程の事だ。
「構わん、何事だ。」
ハドラーも察したのか従者の発言を寛大な心で許可した。
「ハドラー様・・」
ザボエラとヒュンケルは心底驚いた
かつてのハドラーならば従者如きがと不快感を示していたのが嘘

のようだ。
本当にハドラーはどうしてしまったのだろう？
「何事だモルグ・・」
とにかく用向きを聞いてみることにした。
「はい、実は手当てをした娘の首にマジックリングと思しきものがありまして。
何やら大切にしていたようなので武器の類が入っているのかと思いお持ちしました。」
あの娘の物か、あいつ同様厄介なものでも入っているのか？
調べてみる価値はある。
「あの娘とは、誰か捕えたのか？」
「・・実は・・」
モルグからリングを受け取りつつ、ハドラーの質問に答えようとしたその時
「サット・マーレー（ちょっと待ったー）!!」
・・およそ常の地底魔城では絶対聞こえないであろう元気いっぱいの少女の声が聞こえてきた!!
（あの声は!!）
その場にいた男四人のうち、ハドラーとヒュンケルが声のする方に目をむいた。
聞き覚えがあり・・今は聞きたくない声だった!!

薄暗い地底魔城をリングの気配追っかけてであったモンスター達を沢山踏みつけて大爆走して
ようやく見つけたって・・ん？あれってヒュンケルの他には・・ハドラーとザボエラもいたー！
ダニ野郎発見!!
しかし手リングの方が大事だ！灰にするのはまたの機会に!!
物騒な算段をつけつつ、ティファはヒュンケルの目の前でフルブレーキで止まった。
「小娘、貴様が何故ここにいる⁉」

ヒュンケルより先にハドラーが瞬時に毛を逆立てにティファに対して怒鳴り声をあげた。
何となればヒュンケル以上の無礼者だ!!
しかもだ！
「何だその格好は！貴様それでも年ごろの娘か⁉
そんな姿でうろついて恥ずかしくはないのか!!
ブラスが見れば嘆くぞ！」
明らかに男物のシャツを一枚着ただけで、あとはショーツしか身に着けていないティファに
対して思わず説教してしまった。
「他人の人格問うなら先ずは己自身の身嗜みをきちんとしろ!!」
果たして、
「うっさいですよ!!
パプニカに勇者一行の上陸の報告くらいはいっていたでしょう！
私がこの地にいるのは何ら不思議ではありません。
この姿は故あってのやむを得ずの事です！
理由分かっていないのに無闇に怒鳴らないでいただきたいものですね!!」
ティファも負けずにハドラーに怒鳴り返す。
「っと、改めてお礼申し上げますヒュンケルさん。
手当とこちらの服をお貸しくださりありがとうございました。
とても助かりました。」
服の持ち主にきちんとお礼をし、
「時に眼鏡をお返しくださると助かります。」
堂々と眼鏡の返還を要求した。
「・・・」
あまりの唐突な出来事にヒュンケルの思考はフリーズを起こし、言われるままにポケットから
眼鏡を取り出し、返してしまった。
「ありがとうございます。」にっこりとお礼言われた。
（・・何だこの小娘は一体⁉さっきの戦場でのあいつはどこ行った！）

初遭遇のヒュンケルはティファの妙ちくりんさに、アバン以上の得体の知れなさを感じて
内心でドン引きし、ザボエラもぽかんとしたが、二度目のハドラーは免疫が備わり
「質問に答えろティファ！
何故貴様が地底魔城のこんな場所にいる!!」
勇者一行の事は無論聞いているが、ティファがいる理由まで知る訳が無い。
（・・ハドラーが私の名前きちんと言った？）
（ありえん・・）
（ハドラー様が人間の小娘の名を・・）
三者三様に驚いた！
そう言えばハドラーなんだか・・しげしげ。
「・・何だ・・」
「いえ、貫禄が付いたなと思いまして。」
「・・・」
「魔王もどきが初級魔王になったようですね！」にっこりと言ってあげよう。
「おい!!」
「小娘⁉」
「・・お前、命いらんのか？」
ヒュンケルとザボエラはティファの発言に心底びっくりだ。
（・・まさか!!）
ヒュンケルは今のハドラーとティファのやり取りで先程のハドラーの発言を思い出す。
―お前の方が可愛気がある―
お前の方が・・もしかしなくてもこの小娘と自分を比べての事か!?
流石に自分だってあそこまでの事は面とは向かって言ったりしないと、片手で顔を覆い
げんなりとする。
「そんな事を言うなんてまだまだですよ。

ですが初めてお会いした時の貴方よりもずっと素敵です。」
ティファは本心から言っているようだが褒めているのか貶されているのか全く分からずに
ズタズタにしてやりたいが・・みたところ・・
「今の貴様はヒュンケルの捕虜のようだな。
処分はヒュンケルに任せる。」
今のティファは範疇外だとヒュンケルに任せた。

魔王倒します宣言

一気に成長したな～ハドラーは。
敵であっても他者の。いい方向への成長は何か嬉しい。
アバン先生が勇者辞めて教師やってた理由が何となく分かった気がする。
敵の前でニコニコしているのを見たヒュンケルとザボエラは気味悪くなったが、ハドラーはもう慣れた。
「お前はこの従者に何か用があったのではないか？」
ティファの用向きを尋ねる。
先程ティファが使ったのはアンデット語だった。
ならばモルグの方に用があったはずだと。
「あ・・忘れてました。」
いけない、いけない。
ハドラーの成長が嬉しくてつい忘れてた。
「ソーマーレ（すみません）
メイネームド・ティファ（私はティファと言います）
トゥレイマール・リング・カムパッタ（その手にあるリングをお返しください）
ウェルポン・ナウノウ（武器の類ではありませんので）」
じいちゃんに教わったアンデッド語が果たしてモルグさんに通じるか不安だ。
転生して早十二年。
やること沢山あって、モルグさんが人語が出来たかどうか細かいとこはすっかり忘れた。
アンデット語なら通じると思うけど、駄目ならヒュンケルにリング返還頼もう。
果たして
「カウム（分かりました）」
モルグが応えた。
「メイマスティアール・ヒュンケル・エニフレイン（私の主のヒュンケ

ル様に聞きましょう)」
ティファと同じくアンデット語で。
「モルグ!先程からこの小娘となんの話をしている!!」
アンデッド語が分からないヒュンケルはものすごく苛立った声で従者に問いただした。
「これは申し訳ありませんヒュンケル様。
こちらの娘さんがアンデッド語を・・つい懐かしくなってしまって。
娘さん、私は人の言葉が話せますのでそちらで。」
主を不快にさせてしまったとモルグはすぐにヒュンケルに詫びた。
主は戦は強いが心はとっても繊細で、断固として認めないだろうが結構な寂しがり屋の面を
持っている。
今のも詰問と言うよりも拗ねた声だった。
主を大切にしているモルグはすぐさまヒュンケルの事をフォローする出来た従者なのだった。

「そうなんですか、出過ぎたことをして申し訳ない。
こちらの方が良いかと・・・。」
ティファも困り顔で笑い頭を掻いて謝る。
「しかしヒュンケルさんはアンデッド語が・・・
確か御父君はアンデッド族でしたよね。
てっきり使えるものかと思ったのですが。」
・・父は一度として使った事はなかった筈だ。
なのに何故小娘の方が使える?
確か情報では兄ともどもモンスター島で自分と同じようにモンスター達の手で育てられたと、
アンデッド語が出来るモンスターか?
「そう言えばお前の養い親はブラスだったな。」
(ハドラーが知っている者だと⁉)
「むっ!養い親とかいうな!!

じいちゃんはじいちゃんだ!!」
「・・ブラスとは誰だ?」さっさと教えて話し進めろ!
「お前の父バルトスは俺の配下随一の強さで地獄の門の門番だったのは覚えているな。」
「当然だ。」
「こやつと取り逃がしたダイという小僧の育て親のブラスもまた俺の直属の配下で魔道に強く、
魔法系の隊を一個師団任せていたのだ。」
「はい⁉」
「何だと⁉」
(嘘でしょ!じいちゃん当時の魔王軍で結構高い地位にいたなんて・・。)
ティファはヒュンケル同様本気で驚いた。
てっきり操られて暴れてるだけだと考えていたのが、一個師団の隊長とは寝耳に水だった。
(だからハドラーに会って咄嗟に様つけて呼んでたのか。)
当時の関係は身に染みていたようだ。
「何だ、お前は知らなかったのかブラスの詳しい事を。」
「・・じいちゃん昔の話何にもしない。」
そりゃそうか、思い出したくもない葬り去りたい嫌な記憶でしかないもんね。
本当のじいちゃんは平和を愛する本当に優しい人だから。
でもどうやら、自分達兄妹とヒュンケルはよくよく運命の鎖で繋がっているらしい。
共にモンスター・・それも魔王ハドラーの直属で、末はアバン先生の弟子で、
片や闇の道に堕ち、片や光の道を走っているコインの裏と表。
複雑に絡み過ぎだ。
運命の神様ってのは相当悪趣味な奴決定認定してやる。
「お前このまま魔王軍に入るか?」
・・つらつら埒も無い事考えてたら・・なんか爆弾発言きたー!!!

「・・貴方何考えてんですか⁉」
「何を!!
「ハドラー様！お戯れが過ぎますぞ!!」
モルグ以外が一斉にハドラーに集中砲火を浴びせたが、本人はどこ吹く風だ。
「ヒュンケル同様親の代から俺と縁があるのだ。
実力もあるし・・」
当たり前だ！今すぐその首どころかこの場にいる全員相手にしても勝つ!!・・とは秘密だ。
「人間とは思えん程変わっているしな。」
どいつもこいつも!!人の事を変わり者の如く!!!しかも！
「・・何ですかヒュンケルさん。」
ヒュンケルまで人の事を珍妙なものを見るような目で見て超失礼!!
「・・いや・・何でも・・。」
（こいつと同僚・・冗談ではない！）
まさかこの小娘とここまで縁があったとは思わなかった。
そうするとダイも同じになるが・・この兄妹、はっきり言えば全く中身が似ていない！
兄の方は真っ当に見えたが・・むしろ小娘はアバンに似ている気がする。
ここまで妙で変ではなかった気がするが・・こいつが同僚なぞ真っ平だ!!
アバンがちらついて目障りだ！

「・・ハドラー。」
「何だ？」
呼び捨てにしたのに平然としてやがる。
「答え知ってて聞いてますよね。」あり得ない、お断りだと。
「当然だろう。」

「・・人の動揺を見て遊ばないでいただきたい！」厳重抗議もんだ！
「ふん、島で散々人を虚仮降ろした報いは受けろ。」
・・腹立つ！余裕で笑って～っ!!
「それよりもリングの中身は何だ小娘!!」
はれ？
「さっさと教えて、とっとと牢に戻れ!!」
「ヒュンケルさん、急にどうしましたか？」
何か急にヒュンケルが怒りだした。
「お前こそ一体何なんだ！」
「私ですか？」
「貴様はハドラーとも戦ったのだろう！」
うっわ、上司の事平気で呼び捨てっていけないんだ。
「しかも目の前でハドラーによってアバンを殺されたのだろう！」
ああそうか。
「何故仇と平然と話している!!」
自分は父の仇を討つために半年間共にいてもこんな風に穏やかに話した事は無い！
なのに・・ティファはまだアバンが殺されて一月も経っていないというのに仇で敵の軍司令官と
平然と話している神経がおかしい!!
「それで苛立っていると。」未熟者。
「ここは戦場ではありません。」
「・・・」
「日常の場で戦場での出来事を持ち込んでギラギラと敵視するのは三下のやる事でしょう。
ましてアバン先生とハドラーは正々堂々一騎打ちをして敗れたのです。
戦場で会えば間違いなく戦いますが、実力のある敵には日常の場で会えば礼を尽くすのが
戦士・戦う者と私は考えています。
戦うのは戦場だけで十分です。」

以上ティファの戦う者の心構えの授業でした。
ハドラーがあの時ダイ兄達を質にしてとかしてたら私もヒュンケルの言うように問答無用
してるけど違うからね。
「・・お前がそれを言うのかティファよ・・」
あれ？ヒュンケルからの綺麗ごというな類が来る前に、ハドラーが抗議してきた・・なんで？
「何か問題ありますかハドラー？」
問答無用したいのか？してほしいのか？
「お前のどこが礼をもって接しているというのだ!!」
そっちかい!!
「あれこれ無礼な事しか俺に言っていないどの口が!!」
「失礼な！
魔王もどきが初級魔王になって素敵ですって言ったでしょう!!」
「貴様それで人を褒めたつもりか!!」
「当たり前です！
このまま行けば一流魔王も夢ではありませんよ!!」
「その方が倒しがいがあります!!!」
きっぱりといったら・・なんか周りが静かになった。
「お前・・」
「正気か？」
本人を前にして、しかも敵に囲まれた状況で魔王倒しますって堂々と・・
こんなに呆然とさせられたのは初めてだとヒュンケルとザボエラは本気で思った。
「・・お前は俺を倒すつもりか？」
「はい。」
「兄の勇者がではなく？」
「はい！一流魔王になったら私の手で倒したいです!!」
いい笑顔ではっきりと自分の目を見ながら・・
「くっくっく、だ～はっはっはっは!!」

面白い！アバンの事でくさくさしていたのが吹き飛ぶわ!!
こいつと会って気が晴れた！腹の底から笑える。
ハドラーはティファの答えが胸の中まで響き、全身をゆすって愉快な気分で笑いあげる。
「返り討ちにしてやる!!」
ティファの宣告を冗談としてではなく本気で受け取り宣告し返す。
「いいえ！
頑張ってあなたを倒します!!」
宣告しあい、お互いバチバチに見合う。
この瞬間、ティファとハドラーに言い知れぬ、他者には理解できない一種の絆の様なものが
が出来た瞬間だった。
睨み合いながらも互いに愉快気な瞳をしているのをと、アバンを仇呼ばわりし憎しみに
とらわれていた自分が間違っているのかとヒュンケルは耐えきれなくなり、
「さっさと中身を見せろ小娘!!」
モルグからリングをむしり取りティファに押し付け話を強引に戻した。
「そんなに大切な物が入っているのか？」
楽しい事を邪魔されながらもハドラーも中身が気になっていたので尋ねる。
「今見せます、デルルー」
ティファはリングを床に置いてから出る呪文を唱えた果たして中身は・・楽器の山だった。
「いや～ハープ、シターン、二胡は手荒に扱われるとすぐ壊れてしまうのです。
長年の愛用品でして。」
驚く外野ににっこりと説明をする。
「・・モルグ・・」
「はいヒュンケル様。」

「さっさとこの娘を牢に連れていけ。」
「かしこまりました。」
「そう言えばティファよ。」
ヒュンケルにこの場より追い出されかけるティファにハドラーが声を掛けた。
「お前は何故ここに囚われた、誰かを庇ったか？」
ティファの強さから言って、ここに居るのがそもそも不思議だ。
ヒュンケルはその言葉にムッとする。
確かにダイを庇って傷ついたが、あれも自分の実力だ！
「ブラッディスクライドという技に競り負けました。」
そらみろ！ティファもそこは認めているとヒュンケルは気をよくしかけたが、
「何だと！
俺のヘルズクローを無傷で躱しておいて何だその様は!!」
ハドラーの一言で消し飛んだ！
一・二度、魔界でバーンの命でハドラーの戦いを間近で見たことがあった。
確かに強かったが、自分がいつか追いつけそうな強さに感じられた。
しかしヘルズクローは威力が凄まじく、自分の魔装でも無傷では済まない技の筈！
「そんなのまぐれです！吹聴しないでください!!」
「あれがまぐれだと！俺の目は節穴ではないぞ!!」
・・・また口喧嘩を・・・
「モルグ、連れていけ。」
「はい。」
ピタリと収まったが、あらゆる意味でため息しか出ない。
「その前に一ついいですかハドラー。」
今度はティファがハドラーに声を掛けた。
雰囲気が一変して、ティファの目が冷たくなっている。
「先日の獣王戦で彼の武人を唆し、薄汚い策略を使わせた者がいます。

お心当たりはありませんか？」
（（ザボエラか））
二人は即座に思い当たり、当の本人も肌以上に顔を青褪め血の気が引く思いがする。
それ程までにティファの目と声音は冷たく、凍る思いがする！
「知ってどうする。」
ティファの怒りの思いに、ハドラーも本気で答える。
「斬ります！」
「・・何があったのかは報告は受けている。
策略に腹が立ったか？」
「いいえ、策略よりも彼の武人の高潔の心が一時とはいえ穢されたのが許せません。
戦いとは無論綺麗ごとは通ぜぬでしょうがそれでも！
戦士の戦いに横やりを入れるものを許せるほど私は出来た人間ではありません。
そいつには先程ヒュンケルさんが言ったような問答無用をしてやります。
礼なぞ尽くす気はない!!」
獅子が咆えるが如く、ティファは内に秘めていた怒りを咆え上げる。
その瞳は本気の気迫がこもっており、聞くものを納得させるだけの力が宿っている。
それでも、
「言えんな、貴様に教える気はない。」
今のハドラーは配下を売る気は毛頭ない。
例え奸計を恥とも思わないものであったとしても・・そもそも少し前の自分もザボエラと同じだった。
今は違ってきても、同類の配下を売りはしない。
「やはり言いませんよね。」
今のハドラーの心情を思ってか、ティファは怒りを解いて穏やかに微笑む。

まるで怒りなぞなかったかのように。
「聞きたい事はそれだけか？」
「はい、後は自分で捜します。」
捜す、今ティファは確かにそう言った。
「脱出でもするつもりか？」
「いいえ、ダイ兄達が迎えに来てくれた後に捜します。」
「・・俺があいつらに負けると？」
「はい、兄達は強いです。」
仲間の勝利を全く疑っていない顔で・・・
「俺が二人を首だけにして持ってきてやる!!」
そして泣いて後悔をすればいい！
「・・ヒュンケルさん」
まだ・・またあの困ったような悲し気な顔を俺に向ける!!
「もういい！連れていけ!!」
「はい、さあ娘さん。」
今度こそ俺の目の前から消えろ！
「時に魔軍司令官殿、本当に何しにこちらに？」
散々ハドラーを呼び捨てにして今更だが、用件を果たして出ていってほしい。
「うむ、クロコダインを見かけなかったか？
自分で蘇生液から出て、こちらで目撃情報があったのだが。
「さて、気が付きませんでしたな。」
見るも何も自分に刺されてまたもや蘇生液にほうりこんでやったが、ハドラー直々に
追いかけてきた。
造反でも疑ったか？・・その勘は当たりだが・・
「あ奴の傷はまだ治り切ってはいない。
何故飛び出したかは知らんが放っておいたら野垂れしぬだろう。」
しょうがない奴だと頭をがりがり掻いてる・・
「ハドラー!!」―パシ―
そんなハドラーの手を取った者がいた。

「ティファ！お前はまだ牢に行ってなかったのか!!」
ハドラーに怒鳴られてもティファはお構いなしに両手をがっちり握りしめ、
「訂正します！
貴方は最早上級魔王です！
そのまんま一流魔王になっちゃってください!!では！」
言いたい事だけを言ってモルグについて行ってしまった。
「・・何なのだあれは？」
一方的にまくしたてられたハドラーは無論だが、ヒュンケルとしてはクロコダインを本気で
心配をして追ってきたハドラーの方にこそ驚く。
昔のハドラーと今のハドラーでは本当に何もかもが違い過ぎる！
敗けた配下を心配して追ってくるなぞあり得ない。
・・ハドラーがティファの言う通り、今のままの心の在り様で一流魔王になれば・・いつか
自分はハドラーを尊敬する日が来るのだろうか？
・・何故か・・馬鹿馬鹿しいと思えない。
ハドラーとしても、変だが、何故か悪い気が全くしなかった。
用も済んだ、さっさと帰ろう。
「行くぞザボエラ。」
「あ、はい。」
「それからザボエラ。」
「・・なんでしょう。」
「あまり奸計を用いり過ぎるなよ、あれは本気でお前を見つけ出して斬りに来るぞ。」
それこそ他のものには目もくれず。
そう言った一途な敵ほど恐ろしい者はない。
何をしでかすか、こちらの常識がティファには通じそうもないからだ。
（あの小娘の影響か。）
ハドラーが変わった一因はティファかと、ヒュンケルは悟った。

もうハドラーてっぱ!物凄い成長してる!!
「嬉しそうですな娘さん。」
「はい、敵であっても凄い人に会えるのは嬉しくなります。」
「さようですか、しかしこちらに入っていただきますよ。」
「分かってます、あでもこの服は?
この金のリングは服も・・」
「牢は冷えます、上から羽織りなさい。
ヒュンケル様はお優しい方です。
勇者達を倒しても、もう一人の娘さんともども開放なさるでしょうでは。」―ガシャン―
行っちゃった、知ってるよ本当はヒュンケル優しいって。
だから助ける・・貴方達も。
本当は予定なかったけど、「この石は石に非ず、誠にとモンスター筒!」―ぼん!―
落ちている小石から式でモンスター筒を数百個作った。
さてと、式鳥作ってマァムさんとクロコダイン捜してあれこれしますか!

決戦の舞台裏

ハドラーに倒しますといった喧嘩上等宣言した後、上層部のコロシアムで兄二人とヒュンケルが
戦っており、地底魔城内部でクロコダインと共に不死騎団の救出活動をしているティファです。
只今上ではドンパチ、こっちではモンスター達をモンスター筒に入れまくっている。
なぜこうなったかというと、少しさかのぼった数十分前。
着替えをして式鳥作ってマァムさんとクロコダインを見つけた。
クロコダインは蘇生液に入っててヒュンケルの事見直したけど・・
マァムさんのほっぺ見て腹立った。
あの赤くなってるほっぺは絶対にヒュンケルの仕業だ。
マァムさんに終わったら解放してやるって言った後、マァムさんに可哀想発言されたか。
でもまあ、武器も鳥に取ってこさせたし、「式改・ネズミ」ポン
少し大きめのネズミにして魔弾銃背負わせてマァムさんに近づけて、目を丸くしたマァムさんの
ロープを齧らせて、次いで壁の抜け道に案内をした。
「・・出られるかしら・・」
ゴメちゃんいないから少々不自然でも、式に活躍してもらった。
マァムさんも状況考えて今は何故ネズミがとか考える前にチャンスを生かそうと動いてくれて助かる。
そのまま魂の貝殻を見つけてヒュンケルに届けてほしい。
さて、牢から出ましょう。―ガシャン!!―
蹴りの一撃で格子を破って
「これ娘さん!!」
物音に駆けつけてきたモルグさんとお供のゾンビや包帯男達を「イルイル～」
モンスター筒に入れながらクロコダインのいる部屋に向かった。
蘇生液って便利そうだ、成分調べて人用開発出来ないかなとか考え

ながら「ふっ！」
開け方分かんないので剣でガラスの表面だけぶった切ってヒビを入れれば、液体と共に
クロコダインがガラスにぶつかり重みでガラスが割れてクロコダインが出てきた。
床に激突したら痛いのでそこはがしっと支える、筋肉と腕力鍛えた賜物です。
自画自賛しながらそっと床に降ろしてざっと見たところ呼吸は安定していて傷も癒えてる。

「コダイン・・クロコダイン。」
「んむ・・」
「起きてくださいクロコダイン。」
「う・・む・・ティファ！」
「しっ！大声出したら見つかっちゃいますよ!!」
「いや・・すまん・・お前も無事だったか・・」
「ダイ兄達助けてくれてありがとう。」
「いや・・俺こそ魔道に堕ちかけた心を救って感謝している。」
クロコダインは最初の蘇生液に浸かっている時、思考は動いていた。
（人にはすばらしき者達がいた、俺達がやろうとしている事は間違っているのだろうか？）
ダイとマァムは大勢の敵に怯むことなく向かってきた。
ポップも遅れてきたが命を懸けて自分に立ち向かい、ブラスを助けるのと引き換えに己の
命を落とそうとしたが、
「仲間を見捨てる、そんな最低な奴のまま生きていたくはなかったんだ!!」
尚敵の自分に啖呵を切ってきた。
見事だった、死の瀬戸際であっても己の信念を貫き通そうという・・あれこそが本当の勇気あるものなのだと教えられた。

そして今目の前にいる少女は、自分に王とは何かを説きそして心の底からの温かさを教えてくれた。
身を挺して仲間を庇い自らが大怪我をしても仲間に微笑み、敵であっても死にゆく自分に
「今のあなたは獣王にふさわしい」と温かい笑顔と言葉をかけてきた。
そんな素晴らしい一行を助けたかったから助けたのだ。
「全員無事だろうか？」
ティファも自分同様捕まっているだろうがつい聞いてみれば、
「二人は貴方のガルーダに助けられたので大丈夫でしょう。
あの時と違って瀕死の傷は負っていないのと、はぐれても大丈夫なように回復薬を持たせています。
ここに来る途中に他の牢屋を見ましたがマァムさんは見かけませんでした。
彼女も中々強いので自力脱出したのでしょう。」
スラスラと仲間の近況を話してくれた。
ティファの言う通りに助かって欲しいものだ。
「実は手伝ってほしい事があります。」
「ほう、逃げる算段か」
「いえそうではありません。」
「ではヒュンケルと戦うのか？」
「いいえ、そちらは兄二人に任せます、実はこの地底魔城にいる不死騎団の皆さんを
モンスター筒に入れて保護したいんです。」
「・・何故だ？」
戦っている最中の敵の軍勢を保護したいなんて聞いたことが無いとクロコダインはなんじゃそりゃ
という顔をする。
「ここのモンスターさんは見ていても邪気のある者がいないんです。
おそらくは隊長のヒュンケルの命で人を襲ったのでしょう。
襲った人達からすれば許せないでしょうが・・モルグさんたちを助けたいんです。」

ティファも一応悩んだ末の結果を伝える。
襲われたパプニカからすれば許せる話ではないが、この後の結末を知るものとしてはどうしても
見殺しにには出来ないのだ。
「まあ、俺もモルグの事は知っている。」
二・三度ヒュンケルの従者として会っている。
礼儀正しく物柔らかな優し気な者だった。
「不死騎団のモンスター達を助けたとしてヒュンケルはどうするのだ？」
隊長が死んでしまえば烏合の衆となり地底魔城跡で暮らしていけそうだが、モルグは後を
追っていきそうだ。
「彼も何とか助ける方向でかんがえてます。」
「・・何故だ？」
あれほど人間を憎んでいる男をなぜ助けるのか。
「勇者達を逃がした貴方を蘇生液に入れてくれて、
散々な事を言った私の手当てもしてくれました。
まだ心は闇に堕ちきっていないと思います。」
「・・そんなにいろいろ言ったのか？」
常に戦士足らんと婦女子を手に掛けなかったヒュンケルがティファ相手には本気で殺そうとしていたな・・
「はい、彼の人生丸ごと否定しました。」
敵討ちとその考え方が間違っているとはっきりと。
「少し酷くはないか？」
親の仇くらい討とうと考えてもいいのでは・・
「いいえ、それくらいの強さで言わないと何を言っても鼻で笑われそうだったので、全力で
ぶつかりました。」
「・・そしてあそこまでボロボロにされたのか・・」
「はい、おかげで彼の中に何かしら響いてくれたようなのでやった甲斐はありました。」

・・確かにそのようだ。
人間を擁護した自分と、自身の半生を全否定した敵を少女とはいえ手当てを施し助けている。
なにかしら届いたのだろうが・・しかしどうもティファはショックを与えてから助けるという
あまり人にお勧めできないやり方で心が闇に堕ちたものを助けている変わった娘だ。
・・少しヒュンケルが気の毒になってきた。
内容はどうであれ、一途に生きてきた者としてはティファの様なものは天敵と言えよう。
ヒュンケルを気の毒に思いながら、クロコダインはティファと共に片っ端からモンスター達を入れていく。
ティファは式見と普通の気配読みでモンスターを探して助けて行くのだった。
少し上の階が騒がしくなってきた。
ダイ達と鉢合わせしない様に式見でルートを検索していく。
フレイザードが来る前に間に合わせるために。

悲しみの結末

地底魔城内でティファ達が敵軍を助けまくっているのを全く知らないダイとポップの二人は
ヒュンケル相手に熱戦を繰り広げている。
ガルーダで逃がされた二人は地底魔城から離れた森の中でなんとバダックに助けられた。
国が無事だからバダックと兄たちの出会いはないだろうとティファは考えていたが、
「偵察行ってくる。」と城を出て地底魔城近くまで来たバダックに遭遇をした。
ヒュンケルと交戦をした事を聞いたバダックは、敵が城まで追ってきては不味かろうとその場で
支援をして隊長を討つべきだと素早く判断をした。
伊達にハドラー大戦を生き延びてはいない、現場の判断の高さを買われて一介の農民出から
兵站隊長の地位まで上り詰めた実力者。
今回の偵察も、若手の仕事では不安だったので役目をぶん捕ってきて出てきたが正解だった。
ダイ達の居場所を知られない様に連絡用の鳩も飛ばさん方がいいだろうと考えた。
全ては事後承認にする、隊長格を倒せば処分は無かろうと大人の狡さも少々あるが、
バダックの人柄を信じ気絶しているダイを抱えたポップは頼る事にした。
助けられたのはいいが、目が覚めたダイに覇気がない。
大切な妹と仲間を人質に取られたと話してもだ。
「どうした？」
初戦でぼろ負けしたのが尾を引いているのだろうか？
無理もない、手も足も出なかったのだからとポップは案じたのだが、

「俺・・ヒュンケルの気持ち少しわかる・・戦うべきか分かんないんだ・・」
じいちゃんがバルトスの様になったら、その考えがダイの心を迷わせる。
「・・バッカ野郎!!!」
そんな迷いをポップの一喝が吹き飛ばした。
「あいつは間違っている!!
先生いなくなったのに無関係の人達を傷つけてんだぞ!!
正しいわけあるか！
勇者のお前がそんなこと分かんないでどうすんだ!!!」
一行の魔法使いとは、一行を正しく導くのも役割だと考えているポップは手厳しくダイを叱りつける。
「マァムもティファもつかまってるんだぞ！
しゃんとしろ!!」
「・・ポップ。」
仲間の名前を再び出してダイがようやく顔を上げた。
「それにティファも言ってただろう、勇者は心が闇に堕ちた奴も助けるべきだって。」
「・・そうだ・・そうだよ!!」
ティファは言っていた！
もしもじいちゃんが殺されても、自分達に復讐を望むはずがないと！
優しくて、自分達の幸せをいつも一番に考えていてくれる素晴らしいじいちゃん。
もしかしたらバルトスも、こんなことを望む人ではないのかもしれない。
助けよう！人質の二人はもちろん、間違った道を行ってしまったヒュンケルも!!
迷いを吹っ切ったダイはポップと特訓をしてライデインを百発百中にした。

魔法は通用しなくとも、金属であれば鎧の中の物はダメージを受けるだろうとの
ポップの発案を受けて朝から猛特訓をして外さなくなったところにヒュンケルから
決闘の宣告を受けて、バダックにお礼を言って地底魔城へと二人で向かった。
バダックも同行を申し入れてくれたが、
「必ず勝って仲間を連れ帰ってきます。
皆でレオナのいる王城に。」
ダイとポップは頼もしくも高齢のバダックを案じて丁寧に断った。
「ダイ君、ポップ君も無事に帰ってくるんじゃぞ。
姫もダイ君に会うのを楽しみにしておるぞ。」
バダックはこの礼儀正しい二人の少年を一目で気に入った。
ダイの強さは姫から耳タコなほど聞かされており、その強さにアバンの教えが加われば
大丈夫だと確信をしている。
第一老体の身が足手まといになってはと、二人の無事を祈って待つことにした。
ダイはティファから渡された回復薬とポップのお説教で心身共に全快をして意気揚々で
地底魔城にポップと共に乗り込み、罠紛いの導きでコロシアムに出て即座にヒュンケルと
激突となった。
「ライディイン!!」
早々に魔装をしていたヒュンケルに対してライディインを使用したが、
「くぅ・・のお!!闘魔傀儡掌!!」
命中をしてポップの狙い通り肉体に大ダメージを負いながらも、不屈の闘志で気絶をしな
かったヒュンケルは、傀儡掌でダイを捕え、

「ブラッディスクライド!!」
ダイの胸部を深く抉った。
「はぁ・・はぁ・・手こずらせおって、止め!!」
「止せ!ヒャダ・・」
「待って!!二人共!!!」
ダイに止めを刺そうとしたヒュンケルと、させまいとヒャダルコで動きを封じようとした
ポップを止めたのは、
「マァム!!・・無事だったのか・・」
「小娘!!何故ここに居る!!」
ポップは無事を喜び、ヒュンケルは驚きと共に激怒した。
先程ポップ達が来る前に、勇者達を倒せば解放してやると言ったのに、人の事を哀れんだ
不快感が思い出される。
それと・・抵抗できない少女に手をあげた罪悪感もだ。
カッとなったとはいえ・・頬をうった手の感触の不快さも・・・。
「ダイ・・酷い!
あなたの弟弟子なのに!!」
闘技場の惨状にマァムは怒りよりも悲しくなる。
―真実―を知ってしまった今となっては、ヒュンケルが哀れだ。
マァムの感情を正確に感じたヒュンケルは、それを不快に感じ振り払うように吠え上げる。
「アバンの教えを受けたものは皆敵だ!!」そのはずだ!
―今の貴方を見てバルトスさんはどう思うのでしょう―
ティファの言葉がちらつき、それと共にマァムの言葉も拒絶しようとなおも叫ぼうとした先にまたもやマァムの言葉によって止められた。
「違うの!
アバン先生は貴方の仇じゃなかったの!!」
「何を出鱈目を!!」
「・・これを聞いて・・」

激したヒュンケルに臆することなく、マァムは隠し部屋で見つけた魂の貝殻をヒュンケルに
わたした。
真剣な瞳のマァムに何かしらを感じたヒュンケルは貝殻を受け取り耳に当てた。
―愛する息子ヒュンケル、これを聞いているという事は私はこの世にはいないのだろう―
「・・これは・・父さん!!」
紛れもなく・・幼き頃に聞いていた父の声。
全てを聞いているマァムは痛ましげにヒュンケルを見る。
父の仇だと思っていたアバン先生が、実はバルトス自身からヒュンケルを託されていたのを
知って・・。
ヒュンケルもどんどん表情を変えていっている・・。
「おいマァム、あれ一体。」
「あれは・・」
寄ってきたポップにも説明をする。
ティファの言う通り、ヒュンケルは悲しい間違いを犯していたことを。
(そんな事ってあるかよ!!)
聞いたポップも泣きたくなった。
半生を掛けたものが間違ったいた・・ハドラーのせいで!
あいつのせいで!もしかしたら兄弟子となっていたかもしれない同門のヒュンケルの心情を
思って遣り切れない気持ちが溢れてくる。
(ティファ・・)
今無性にティファに来てほしい。
皆の心が温かくなる答えを出してくれるかもしれない妹分に。
「嘘だ・・嘘だ!!」
聞き終えたヒュンケルは貝を叩きつけ叫び上げて半狂乱の体に

なった。
仇と狙ったアバンは・・実は父から自分を託されていたと・・・
本当の仇は父と自分が仕えたハドラーだったと!!

自分のしてきたことは・・
―八つ当たりです!!―
「黙れ!!」
ティファの言葉がよみがえり、この場にいないティファを怒鳴る。
―父君は戦士の心構えがあったのでしょう―
貝の話が本当ならば、止めを刺さなかったアバンに父は怒りをあらわにしていた。
同情は無用と。
父を助けたのはアバンの優しさであった。
―その胸の星飾りは大切な方からの贈り物でしょう―
自分の贈り物を見て剣を引いたアバンの優しさに父は心を打たれ、自分を託したと。
―アバン先生もお父さんも、貴方の事を愛していたはずよ!!」
マァムという娘の言う通りに・・・。
「ヒュンケル・・・。」
ポップとマァムは掛けられる言葉が見つからずヒュンケルの名を呼ぶ事しかできなかった。
呼ばれたヒュンケルが二人を見て見れば、自分の事を悲しそうにしている。
自分の事を悲しんでいる?・・馬鹿な!自分は敵だ!!
―人間はいいぞヒュンケル、優しくて温かい―
クロコダインの言葉が思い出される。
「黙れ!!・・いまさら俺にどうしろというのだ!!」
父とアバンの愛情に気が付けずに、大罪を犯した自分に!!
「俺は魔王軍のヒュンケルだ!!!」
何もかもを振り切ろうと叫び上げたその瞬間―勿体ないです―
一滴の雫の様に、ティファの言葉が胸に落ちてきた。

―その力があれば、今この時にでも苦しんでいる者達を助けられるのに―
困り顔の・・優しく笑うあの顔は・・アバンと・・そして・・父も重なる・・
心が揺れる・・あの小娘の言葉に・・
「ダイ!!」
「おい!」
何だ・・振り返れば、先程気絶をしていたダイが立ち上がっている。
目の焦点は合っておらず、無意識のようだ。
「・・けん・・ま・ほう・・。」
何かを呟いて・・「剣と!魔法だ!!」―ゴオウ!―
「うおおお!!」
「何だと!!」
ダイが訳の分からないことを叫んだと思えば、いきなり向かってきた!
それも剣に炎を纏わせて!!
しかも額には何かの紋様が力強く輝いている!
この者は人間以上の者なのか⁉
ヒュンケルの驚愕はポップにも分かる。
通常の者は剣か魔法のどちらかしか使わない・・否!使えない!!
稀に伝説の中に魔法と剣を両方使ったという者がいたと記されていたが、
片手で魔法を撃ち戦ったとあったが、剣に魔法を纏わせられるなぞ聞いたことも無い!
・・それにあの紋様は・・
「ポップ!ダイの!!」
「マァム、俺にも分かんねえ。けどあいつがああなんのは三度目だ。」
正義の力か・・否!そんな都合のいいものはこの世にあるはずがない!!
分からないが、ダイとティファは大切な自分の仲間だ。
あの力を正しきことに使っている・・だから、今度も!

「いけ!!ダイ!!!!
ヒュンケルの事も助けんだろう!!」
剣に雷を纏い、ストラッシュを撃とうとするダイにポップが叫び上げて背中を押した。
「な⁉」俺を・・助ける・・
ポップの言葉に驚いたヒュンケルは迎撃を忘れ去り、
「あああっ!!
ライデイン・ストラッシュ!!!!!!」―バリバリー!!―
「ぐあああ!!!」
ダイの攻撃が直撃をし、
(俺は・敗けるのか・・)意識が薄れていく。

―心が闇に堕ちた人も助けましょう―
―ヒュンケルの事も助けるんだろう―
ティファとポップの言葉が自分を包んでゆく・・ああ・・温かい・・

「ヒュンケル!ヒュンケル!!」
「おい!しっかりしろ!!」
「どうしよう!!俺やり過ぎた!!!」
「おいマァム!ベホイミ掛けてんだろうな!!」
「ダメージが・・あ!眼が開いた!!」
なにか・・とても騒がしい・・。
「良かった・・ご免・・俺やり過ぎて・・」・・なんだ・・
「おい!聞こえてるか?」・・何なのだ?
「大丈夫⁉」・・なぜダイとポップは心配をしてマァムは俺に膝枕をしている!!
何だこの状況は!!
「お前達・・敵の俺をなぜ・・」
「ストップだヒュンケル!!」
戸惑い聞いてくるヒュンケルの言葉をポップが遮る。
「お前を助けたいってティファが言った。

そして俺達三人もそうしたかった・・俺も・・間違ったあんたを見捨てたくなかった。」
「俺もヒュンケルを助けたかった！
だって俺勇者だもん!!間違ってたら助けないと!!」
ダイも答え、
「ヒュンケル、間違ったって気が付いたのなら償いましょう。
今度こそ先生の教えを守って、私達も手伝うから。」
―チャリ―
「・・それは!!」
「見つけたの、まるでアバン先生が導いてくれたみたいに。
きっと・・魂の貝殻もお父さんが導いてくれたんだと思う。
二人のあなたを愛する心が。」
アバンもバルトスも、ヒュンケルを闇から救いたかったのだろう。
「これは貴方の物よ。」
慈しみに溢れる笑顔で輝聖石を渡してくれるマァムは・・全ての罪を許す聖母の様に
ヒュンケルは映り、「俺の・・負けだ・・」
苦しい心を全て流すように涙を流して降伏宣言をした。
奇妙な事だ。
長年いた魔王軍よりもたった二日しか会っていない、それも敵であるこいつらの方が
自分の事を真剣に案じてくれる・・心から負けを認めよう・・
「けっけっけ!!
じゃあ敗者は死んじまえ!!」
「・・この声は!!」
「誰だ！」
「・・あそこに!!」
声のした方を見れば、氷と炎が合わさった化け物がいた!!
「・・フレイザード・・」
「ざまあねえな～ヒュンケルさんよ。
負けて女の膝枕か？結構なこったで!!」

フレイザードは侮蔑の言葉をヒュンケルに浴びせた。
フレイザードにとっては日頃から騎士道だ戦士だと収まりかえって偉そうに言う
クロコダインとヒュンケルとバランが大嫌いだった。
バランは実力が違い過ぎて手が出せないが、今のヒュンケルは葬り去る絶好の
チャンスだ!!
「そらよ!!」
―ズン!!―
「死火山に活を入れてやった！
お前は勇者たちと相討ちしたってハドラー様には言っておいてやるよ!!」
「おのれ・・フレイザード!!!!」
ヒュンケルは力を振り絞って起き上がり、剣を投げつけたがフレイザードには届かず
岩山に突き刺さった。
「おお～怖え怖え。邪魔者は消えるぜ～。」
「・・溶岩が・・」
「チックショー！ヒャダルコ!!」
「・・駄目よ溶けちゃう！」
火山の噴火で溶岩が迫り、もう駄目だと三人は諦めかけたが
「ふん!!」―ゴゴ!!―
「岩が・・」
「ヒュンケル!!」
(俺のこの命に代えても三人は・・)
「おい！」
「ちょっと待って!!貴方が!!」
「うおおお!!」
最後まで自分の事を案じてくれる、素晴らしい弟妹弟子を救うべく、渾身の力で三人を投げ飛ばす。
何と素晴らしい者達か・・ティファは・・あいつは何故か全く心配

する気が起きない。
チャッカリとクロコダインと共に脱出してそうだ。
ただ自分と共に滅びゆくモルグや不死騎団の者達には申し訳なく思う。
俺もすぐに逝く・・ダイ達は・・こんな自分の為に泣いてくれるだろうか？

―どがっ!!!!―
「そんな!!嫌だよヒュンケル!!!」
「ちくしょう!!
俺が・・ルーラさえ使えれば!!」
「ヒュンケル!!ヒュンケル!!」
岩は安全な場所まで三人を届けたが、ダイ達は泣き崩れる。
心を通わせることのできた兄弟子が・・自分達の命と引き換えに!!!
―パサパサ―
悲しみに泣き崩れ、どの位の時間が経ったか分からない頃、ダイの肩に鳩が
とまった。
「これ・・ティファの。」
真っ白い鳩は、ティファの手紙を運んでくれる鳩だ。
「・・ティファの・・」
「あいつ!!無事か⁉」
この溶岩の中で!!
「待って・・手紙読む。」
ー私は大丈夫です、皆と合流するから先に城に行っていてください。
何があっても前に進むように　　ティファー
「ティファ・・」
「・・一応無事か・・。」
「でも・・ヒュンケルが・・」
悲しみで立ち上がれない。

「あいつは・・最後は心が救われたのかもしれない・・」
自分達を命懸けで助けてくれたヒュンケル。
「だったら・・命救ってもらった俺達は前に進まねえと!!じゃないと・・」
ヒュンケルの想いは全て無駄になってしまう!!
「うん・・そうだね・・そうだね!!」
ポップの叫びに、ダイも涙をぐしぐしと拭って答える。
「・・そうよ・・進まないと・・」
マァムも涙を流しながらも決心して立ち上がる。
前に進むために、パプニカ城へと。

バルジ島編
姫君人質

待っててねレオナ！
必ず助けるからね!!
「バダックさん、まだつかないの⁉」
「焦んなダイ！つっても急いでくれバダックさん。」
「分かっとる！急ぐぞエイミ殿!!」
「承知しています！」
ヒュンケルの悲しみを引きずりながら、ダイ達一行は地底魔城を後にしてパプニカ城へと向かった。
当初の目的のレオナ姫に会えることになってもダイの心は暗く、顛末を知るバダックも
暗い表情の一行を慰める言葉が見つけられないまま城に向かえば、とんでもない出来事が待っていた。
なんと城で安全なはずのレオナが攫われていたのだ！
しかも相手が氷と炎の化け物だと。
フレイザードの仕業か!!
その化け物の事をヒュンケルはフレイザードと呼んでいた！
ヒュンケルを殺した後に！城を襲ってレオナ姫まで攫うなんて!!
悲しみに暮れていたダイたちの心は怒りの感情で溢れかえった。
姫を守ろうとして命を落とした兵もおり、三賢者と呼ばれているうちのマリンは顔をフレイザードの手で鷲掴みされ大火傷を負い、アポロンも足に重度の凍傷を負い、城の外にいたエイミだけが無傷で済んだ。
化け物ことフレイザードは姫を攫う際に、バルジ島で待っているとダイ達に伝言を残していった。
「気球で行きましょう!!」
三賢者のエイミの計らいで気球を出し、一行とエイミ、バダックの五人で姫の救出に向かう。

三人は許せなかった。
敵であることもさることながら、弱き者を平気で人質に取り・・分かりあえた兄弟子を殺した
フレイザードが。

「いったい私をどうする気ですか!!」
レオナは震える声を抑えつけながらも必死にフレイザードを睨みつけ目的を聞き出そうとしている。
如何に戦いに向いていなくとも、王族の自分がおめおめと捕まり質になるなぞあるまじきことだ!
恥を自ら雪ぐためにも!目的を聞き出し味方の助けの一条にならねばならないという王家の
姫としての使命感が、今の彼女の気力の元となっている。
「けっ!気の強いお姫様だぜ。
別に手前なんぞどうでもいいんだよ。
勇者たちをココにおびき寄せるための餌なんだよ、お前は。
真正面からやるのは面倒だからな。」
バルジ島で捕えたレオナに伴い、見張りの塔を占拠した後のフレイザードはレオナに全く
関心が無くどうでもよさそうに適当にあしらう。
この島は真横に長い地形で―アレ―をするにはもってこいだ。
正義面してのこのこ来たところを一網打尽にしてやる!
「・・我が国に攻め込んできた者達はこんな卑劣な真似はしなかったわよ!!」
不気味なアンデットの集団だと報告が来たが、こんな人質を取るような事をしなかったと
レオナは更に言いつのった。
「はん!!
それで敗れたら世話ねえぜ!」
「・・敗れた?」
「あん?

そうかまだ報告が行ってなかったか。
お前達を攻めてた軍隊長はついさっき死んだんだよ。」
「・・ダイ君が！」
レオナは人質の状況を忘れて顔を綻ばせた。
ダイが来てくれたのだと、女の直感が告げる。
勇者に育ったダイを思い、レオナの心は浮きだった。
「ま、そいつも俺にすぐ殺されるんだがな。」
「ダイ君は貴方みたいな卑劣者に負けるものですか。」
「何とでも言え。
俺はな戦うのが好きなんじゃねえ！勝つことが好きなんだよ!!」
自分はハドラーの禁呪体として生まれてまだ日が浅い。
他の団長達に比べれば戦いの経験も功績も少なく、常に他者に侮られない様にしている。
特に武人の心なぞと取り澄ましていたクロコダイン・ヒュンケル・バラン達は目障りだ！
綺麗ごとばかりを言って！いつか見返してやりたかった!!
そのチャンスはすぐに訪れた。
大魔王の勅命で勇者一行を討つというヒュンケルに腹が立ち、本陣の地底魔城にいってみれば、
ヒュンケルは勇者一行に敗れ説得されていた。
一行と相討ち、俺が手を下したのがばれても裏切り者の処刑で逃げ切れると判断をして
諸共にと狙ったのだが、しぶとく生き残ったのを見ている。
ハドラー様がヒュンケルの死に疑念を持つ前に勇者を殺せば帳消しだ。
手柄も上げられ大功績となり一石二鳥。
姫の相手もいい加減飽きたところ、
「レオナー!!」
窓から姫を呼ぶ声と共に、一人の少年が飛び込んできた。
「ダイ君!!」
癖ッ毛の黒髪の青服の小僧、こいつがダイか!!

「待ってたぜ勇者様よ!!」
「お前は・・よくもヒュンケルを!!
レオナまで人質に取って!」
「けっ!お前も綺麗事を言う口かよ!!
あいつは敵だろうがよ!」
「黙れえ!!」
ダイは怒りに駆られながらフレイザードに即座に斬りかかった。
「ダイく・・」
「しい!!お姫様はこっちだ。」
「そっとこちらに・・」
「・・貴方達は?」
ダイとフレイザードが戦って気がそれている間に、ダイとは反対側の窓から入ったポップと
マァムはレオナにそっとついて来るように促す。
「ダイの仲間です、詳しい事は・・」
―キィーキィー・ヒィーヒィー―
「・・あ?んだ手前ら!!メラゾーマ!!」
レオナを逃がそうとするも、フレイザードの小さい炎と氷のモンスター達が阻み見つかってしまった。
炎の威力は凄まじく、斬りかかったダイ諸共ポップ達も直接当たらずとも威力で吹き飛ばされるが、
「くらえ!!メラゾーマッ!!!」―ゴオウ!!―
ポップも負けじと最大級のメラゾーマをフレイザードの氷の部分を狙う。
「燃え尽きろ!!」
「ふん!甘えよ!!」
―シュウウ〜―
ポップの炎はフレイザードは炎の面で難なく吸収され、不発に終わった。
「バケモンが・・ダイ!マァム!!お姫様連れてずらかるぞ!」
倒せなくとも当初の目的を果たすべきと判断をしたポップが撤退

を叫ぶが、
「逃がすかよ!!結界!!!」―ズゴゴゴ!!!!―
フレイザードの叫びと共に轟音と共に地響きがし、島の両端に炎と氷の柱がそれぞれに建った。
「これぞ氷炎結界！
これで手前らの力は半分以下だ、なぶり殺しにしてやる!!」
「んだと・・メラゾーマ!!」―コウ―
（・・マジかよ・・威力がてんでねえ・・）
どうやらフレイザードははったりを言っているのではなさそうだ。

魔法使いの弟子に！

ポップの目の端に、レオナの近くの窓の外に気球が見えた。
「姫さん！あれに!!」
レオナの後ろを指さして気球を見るように促した。
あれはパプニカ王家の持ち物、エイミとバダックを見てすぐに分かるはずだ。
「姫様お早く!!」
「こっちですぞ!!」
二人もレオナを呼んでくれている、これで逃がせる！
「逃がすか!!」
レオナが窓の外に行く前に、フレイザードに追いつかれた。
レオナの頭部を掴んだフレイザードはそのままレオナを氷漬けにする。
「折角の人質を逃がすかよ。」
人質、つまりフレイザードには今すぐレオナを殺す気はないようだ。
そう判断を下したポップは、「ダイ、マァム!!目えつむれ！」―カアー―
用心にとバダックより持たされた閃光弾をフレイザードの足元に投げつけ破裂させ目をくらまし、
ダイとマァムを気球に押し込んだ。
「ポップ！レオナが!!」
「あいつは人質をすぐに殺す気はねえ!!
今は不利だ、出してくれバダックさん！」
「分かった！」
バダックも歴戦の兵、状況をすぐに判断して気球を出す。
「・・ちくしょう!!お前達、後を追え!!」
いいところで逃がしてたまるか！
気球を落として大渦の餌食にしてやる!!
皆まとめて死んじまえ！

フレイザードの呪いのような執念を叶えるべく、小さな氷と炎のモンスターは気球に張り付き、
布を破いていく。
「・・高度が・・」
「こんの！ヒャダルコ!!」―カシーン―
「・・駄目か・・」
「魔弾銃も作動しないわ！」
打つ手がなくなりさらに高度が落ちかけたその時
―バーン!!!!―
とてつもない光の魔力が気球全てを包み込み、モンスター達を一瞬で滅した。
「・・これは一体・・」
「見て！光の来た方向に島があるわ!!」
マァムが指を指したところに大きな島が見える。
「光はあそこから・・バダックさん、あそこまで持たせてくれ。」
「ほいきた！」風も味方してくれて、ギリギリ島の端に不時着出来たが、気球は使い物にならない程ボロボロになっていた。
「こいつは直さんと使えんな。」
バダックの言葉に全員が意気消沈とし、特にダイは焦りを覚える。
「早くレオナを助けないといけないのに！」
やっと会えると思っていた思い人が！敵の・・あんな奴の元に!!
「落ち着けダイ、とにかく移動手段とあの結界をどうにかする方法を考えねえと。
今行けたとしても策なしじゃ手も足も出やしない。」
―魔法使いは冷静に―ティファの言葉をかみしめて必死に考えを巡らせる。
これ以上、大切な者達を失わない様に。
「・・とにかく、助けてくれた人に礼をしよう。」あの洞穴の中か？
ダイの気持ちを落ち着けさせるために一旦話題を変えて、ポップは目の前の洞穴を見る。
深くて、人が住めそうな・・

「今時の若いのにしちゃあ礼儀がなってるじゃねえか坊主。」
いきなり後ろから声がした！
（嘘だろう！警戒してたのに気配しなかったぞ!!）
自分は近頃周りの物音や気配に気を配り、無意識でも出来るように心がけている。
なのに、気配どころか物音一つしなかった!!
振り向けば、高齢の男性が岩場の上に立っていた。
「誰・・・」
「マトリフおじさん!!」
ポップが聞く前にマァムが男の名前を呼んで飛びついた。
マトリフ、それは以前アバン先生が教えてくれた、かつての仲間で、世界一の魔法使いの名だった。

「マトリフ様。」
マトリフの姿を認めたバダックとエイミはマトリフに様を付けて最上級の挨拶で片膝をついて
礼をとる。
マトリフは先の大戦後、半年間だけパプニカ王室の相談役をしていた国の重鎮。
それが無くとも―世界最高峰の魔法使い―　―大魔導士―の異名を持つマトリフは
敬うべき相手である。
そんなマトリフ相手にも、
「おじさん久し振り、無事でよかった。」
マァムは笑顔で抱き着く。
何となれば幼き頃よりの大好きなマトリフおじさんだ。
「マァムも元気そうだな、お前さんの事はロカ達から聞いて知ってる。
そっちのお二人さんも堅苦しい挨拶はいらねえよ。」
マトリフは飄々としているが、先程の光の威力から実力はいやというほど分かった。
（さすがアバン先生の仲間だ。）

ポップは初見でマトリフの実力を見て取り、畏敬の眼差しを向ける。
この人に自分の魔法の師になってほしいと。
今の自分は足りないものだらけの実力不足。
もしもアバンの元でルーラを習得できていれば・・ヒュンケルを見殺しにせずに済んだはずだ!!
過去のチャラチャラしていた自分が悔やまれる。
優しい先生に甘えていただけのお調子者の自分を捨て、今度は死ぬ気で強くなりたい！
そうで無ければこの先の敵たちに―ゴン!!―・・すぐに敗れてしまうって・・あれ？
凄い打撃音が聞こえたので考えを止めて目の前を見てみれば、マトリフがマァムに伸されてる。
「・・おいダイ、俺考え事してて見てなかったんだけど何でマァムはあの人の事殴ったんだ？」
「・・あのね・・」
ダイは言いづらそうに話してくれた。
マァムの体が育ったと言って、おしりを触ったことを。
・・自分なら命が惜しくてそんなことをしようと思った事は無い！
マァムには組み手稽古で散々負けてボロボロにされているからだ。
そんなマァムの力を知っていてもやってしまうマトリフは凄いなと、別の意味でも尊敬が芽生えたポップだった。
「とにかく立ち話もなんだ、とりあえず中に入れ。」
洞穴の中は深くて広く、椅子とテーブルが置かれており、さらに奥にも部屋が見える。
椅子の一つにマトリフが腰を掛けると、ダイ達は先ほどの礼を述べその上で一連の出来事を話し助力を乞うたのだが、
「断る、俺はもう引退した身だ。
それに王族を助ける気なんてねえよ。訳はそこの二人にでも聞くんだな。」
にべもなく断られた。

話を振られた二人は暗澹たる顔つきでマトリフが隠者になった経緯を話した。
大戦後王室に乞われて相談役となったが、大臣達の妬み嫉みの権謀術数に人の醜さを見せつけられ
心底人に愛想尽きたと王に面と向かって言って出奔したのだと。
―人間なんてこんなものか―
半ば分かっていたが改めて見ると本当に醜くうんざりとし、以来ティファとノヴァに出会うまでは昔の仲間以外に会いたくもなかった。
エイミとバダックは消沈した。
今はあの時の大臣達は国王の命で放逐されたとはいえ、マトリフの人嫌いの原因はパプニカ王室のせいだからだ。
このままではレオナが死んでしまう。
ダイとマァムが食い下がろうとしたその時、
「だったら、助けではなく俺に魔法を教えてください。
その後は自分達でどうにかします!!」
ポップの弟子入り志願が洞穴に響き渡った。

「お前さん、ポップっったな。」
「はい!」
先程お礼の前に全員が一通り名乗っている。
「お前さんアバンの弟子だろ。
あいつに教わりゃいいだろう、奴さんどうした?」
先日ロカの治療に行った時、マァムが一行に付いて行ったのは聞いたがアバンの事を聞くのは忘れていた。
ロカとレイラは進んで何も言わないところを見るに、ある予感はしているのだが、
「先生は・・」
改めてダイ達の口から聞くとため息が出た。
いい奴ほど先に死んで、こんな世捨て人の自分が長生きするのは間違っていると。

「だからあなたに魔法を教えてほしいんだ!!」
「おじさんお願いよ!
せめてポップに魔法を教えてあげて!!」
「マトリフさん!お願いします!!」
・・この三人は・・まるで昔のアバンたちを見ているようだ。
三人の子供達を見てそう感じる。
飄々としながらも誰よりも心強く、世界の為に戦ったアバン。
短気でしばしばアバンと口論をしながらも、戦いになれば一行の盾となり勇者を支えたロカ。
心優しく常に仲間の身を心配をして、泣きながらも最後まで一行の回復役を担っていたレイラ。
アバンは最早おらず、ロカもレイラも戦えない。
この子供達はアバン達の意志を受け継いでいるようだ。
宮廷を出た時は二度と世間と関わるつもりはなかった。
しかし・・今は―嬢ちゃん―と―坊や―のおかげか、人をもう一度見直してもいい気がしている。
人もそんなに捨てたもんじゃないと思わせてくれた二人の子供達の笑顔が浮かぶ。
それに自分はかつて嬢ちゃんにある言葉を言った。
―世界は弱すぎも酷過ぎもしねえ―と。
力があり過ぎて、他者に受け入れてもらえるかどうかに怯えていた幼い少女の心を守る為だけに言った。
自身は全く信じていなかったが、今目の前の三人を見ていると信じたくなってきている。
昔自分が力を貸したあの三人に本当によく似て
「強くなってどうすんだよ。」
三人に問いかける。
「俺は大切な仲間を、皆を助けたい!!」
「俺は仲間を、大勢の人を見捨てない為に!!」
「私は皆を守れる力が欲しい!!」

果たして三人は即座に答えてきた。
自分の琴線に触れるほどの熱量を伴って・・・。
「分かった、坊主の弟子入りを許可してやる。」
昔とは違う方法であっても、この一行の助けになってやろう。
老いてどこまで出来るか分からんが、大魔導士の最後の大仕事だ。

再び島へ

「俺はアバンよりも厳しいぞ、音をあげたらすぐに放り出すからな。」
「構わねえ！俺は強くなりてえんだ!!」
二度とヒュンケルのようなことが起きない様に、あんなのは二度と御免だ！
目の前の大切な奴を見捨てない為にも!!
ポップの目には炎の様な力強い意志が煌めいている。
（ほう、こいつはなかなか・・アバンの奴、いい弟子をとったもんだな。）
優し顔つきからもう少し甘ったれを想像していたが、どうしていい面構えをしてやがる。
マトリフは万能薬研究以来、心が燃え上がるのを感じてにんまりと笑う。
「そんじゃま地獄の一丁目に行く気で励んでもらおうか。」
その言葉を聞いたダイ・マァム・バダック・エイミは青ざめる。
今マトリフが怖い事をサラッといったからだ！
「頼む!!」
当のポップは力強く受け、周りの全員は最早ポップの無事を祈る事しかすべはなくなった。
ポップ以外は結界破壊の策を練ることになった。
「火薬なんかその辺にあるもん適当に使っていいぞ。」とマトリフが許可をくれたので、
早速パプニカの発明王・バダックは取り掛かり、ダイは助手をする事になった。
意外とダイは手先は器用な方だった。
散々妹の薬作りや料理の手伝いをさせられたのが今役に立って嬉しく思う。
これがレオナの助けになるのだから。
マァムとエイミは何とか気球を修復できないかとそっちにせいを出す。
洞穴で四人が作業をしている時、ポップは文字通り地獄の特訓をし

ている。
体力テストはすぐに合格をもらえたので、ルーラを取得するための基礎として、手足を縛られて
重石付きで川の中に放り込まれた!!
(魔力を・・体全体に纏って!!放出して飛ぶ!!)
自分は以前瞑想中に無意識で飛べていたらしい。
今度はきちんとイメージをすれば・・こんなところでくたばってたまるか!!!
果たして、「げほっ・・はぁはぁ・・」
無事に岸のふちに着地できた。
(・・この人無茶苦茶だ・・)
自分にヒャダルコを習得させようとドラゴラムでドラゴン化したアバン先生もだが、
今目の前にいる老人も大概だ・・でも今の自分はこの位の無茶をしないと短期間で強くなれないのが
現実だ。
「ほう、もう出来たのか。」
どうやらマトリフの予想よりも早く出来ているらしい。
「へっ、まだまだいけるぜ。」
苦しがりながらも憎まれ口をたたくとは本当に対した奴だとマトリフは感心をする。
「それじゃあさっきの滝までルーラできるようにしろ。
さっき連れてった所だ、イメージをして魔力を操れるようにしろ。
そいつが出来れば大概の魔法が使いこなせるようになって、今まで使っていたのも
威力を上げられるはずだ。」
「上等だ・・やってやる!!」
疲れた体も厭わずにポップはすぐさまルーラの特訓に入り、マトリフを心の底から感服させる。
(こいつになら、俺のオリジナルの魔法を教えてやれる。)

威力と殺傷力が高すぎて今まで誰にも・・それこそ―坊や―にも教えなかったとっておきの自分の魔法を、大魔導士マトリフの大魔法を託せる。
―仲間を他者を見捨てない―
そんな理由で戦うポップになら。

ポップは何度も失敗をして地面に激突を繰り返したがへこたれずに挑戦をし続け、日暮れ前に
ようやく成功をして滝につき、にんまりと笑ってそのまま洞穴にまでルーラで移動した。
体はボロボロだが、「帰ったぜ師匠。」
心は軽く、マトリフを師匠と呼んで報告をする。

ポップが戻った少し後に、
「勇者ども!!姫の命はもって明日の日没までだ!!
さっさときやがれ虫けらども!!!」
しびれを切らしたフレイザードが悪魔の目玉の拡声器で近隣の島々に聞こえるように怒鳴っている。
これであのお人好しどもは来るはずだ、来たらズタズタにしてやる。
ポップは修行が間に合い、ダイ達も爆弾づくりを終えたところだった。
間に合ったと誰もがホッとした。
明日の日没まで、裏を返せばそれまではレオナが殺される確率は低い。
人質は生きてこそ人質になる、あの卑怯者がむざと手駒足りうるものをなくすはずがないというのが
マトリフの見立てだ。
明日の日没までに助ければいい、希望はまだある！
問題はどうやって行くかだ。
気球も直ってはいるが目立ちすぎる。

敵に上陸場所を隠して島に行くには船しかない。
如何にポップがルーラをマスターしていても、行き先はいきなりフレイザードがいる中央塔に行ってしまう。
それでは自殺行為だ。
かといって船ではバルジの大渦が行く手を阻む。
「俺がバシルーラの要領で島まで飛ばしてやるよ。」
誰に頼まれるでなく、マトリフが頼もしく言った。
(こいつら見ていると手前から力を貸してやりたくなっちまう・・俺も甘くなったもんだ。)
人嫌いだと言っていたのが嘘のように。

船は全員乗れば定員オーバーになってしまう。
爆弾の使い方はバダックの方が心得ているのでエイミが残る事になった。
「皆さんどうかご無事で。」
姫の事もあるが、エイミは全員の無事を祈りつつ心配そうに送り出す。
「大丈夫だよ、俺絶対レオナを助けて戻ってくるから。」
「そうだぜ、なんかうまいもんでも作って待っててくれ。」
「必ず戻るわ。」
「姫様と共にの。」
そんなエイミにダイ達は笑って答える。
ポップもマトリフの―薬―で体力・魔力共に全回復して溌溂とエイミに声を掛けている。
「いいかお前達助けるのも大事だが、まずは手前の命を大事にしろよ。
死んじまったら元も子もねえんだからな。」
マトリフも口悪くではあるが、優しい瞳でダイ達を送り出してくれる。
「「「はい!」」」
「お世話になりました。」
「いって来るぜ師匠。」

「マトリフおじさんありがとうね。」
「マトリフ様、ご助力感謝いたす。」
ダイ達もマトリフの分かりづらい中にある優しさをきちんと感じており、エイミと同じく
笑顔で応えるが、
「特にポップ、お前はまだまだひよっこだ。
帰ってきたら地獄の特訓の続きだからな。」
「望むところだ!!」
無茶苦茶師弟のやり取りに凍り付く。
回復するまでのポップは本当にぼろ雑巾の如くだったのに・・まだやるのかこの二人は!!
この二人には似た者同士二人以外は頭痛がしてきた気がする。
「んじゃ行くぞ。」
マトリフは船に向かって魔力を放ち、「でええい!!」
一気に放出をすれば―フワ―　―ギューン―
浮き上がった船はあっという間に見えなくなった。
「行ったか。」
「・・あの・・マトリフ様。」
見送っているエイミが不安そうな顔でマトリフを呼んだ。
「どうした姉ちゃん。」何かあいつ等忘れたか？
「あの船はどうやって止まるのですか？」
「あっ！・・いけね・・ブレーキの方法考えたなかった・・」
「そんな!!」
「・・しゃあね！なんとかすんだろうあいつらなら。」
「・・皆さん・・どうか無事に・・」
マトリフのうっかりさと適当さを見せつけられたエイミは再び全員の無事を心から祈ったのだった。

―ギュン―島があっという間に見えてきたが、
「これどうやって止めるのよマトリフおじさん!!」
「ぶつかる!!」

あとわずかで海岸の崖に激突だ!!
「おお!!」
ダイは最大限に集中力を高める。
あの力なら!!―ヒィーン!!―「バギクロス!!」―ギギギ!!―
自らの意志で紋章を発動をさせてバギクロスが撃てた！
（やった！自分で力をコントロールできた!!）
助かった事もさることながら、自分の中の力を制御できた喜びの方が大きかった。
島にいた時かけっこでも木登りでも妹に負けていたのが悔しくて、どうしたら力が付くのかを聞いたことがあり、教えて貰った。
「何事も集中あるのみ！自分の中に力があるのを信じて体の隅々までイメージして使えばいいんだよ。」
妹の言う通り、己の力を信じて集中した結果上手くいった。
「やったなダイ！力を使いこなせるようになったんだな!!」
ポップも弟弟子の成長を喜んで、ダイの頭をわしゃわしゃしながらぎゅうぎゅうと抱きしめてやる。
前回は助けるはずのヒュンケルを、力が制御できずに殺しかけてしまいどん底まで落ち込んでいた
のを見ていると、この成長が我が事のように嬉しくなり共に大はしゃぎをする。
「痛いよポップ！でも嬉しい!!」「おう！」
「・・ところで・・帰りどうしよう。
船壊れちゃったけど・・」
はしゃぐ弟弟子たちに、しっかり者の姉弟子マァムが二人を現実に戻す。
船は見事なほどバラバラに全壊していて、いかな発明王のバダックにも修復不能だ。
「ったく師匠の奴、ぜってえブレーキの事忘れてやがったな。」
ダイを離したポップは頭をがりがりと掻いてマトリフに呆れ果てる。
マトリフもだが、実はアバン先生も時々信じられないようなうっか

りさをやらかした時がある。
天才は日常においてはうっかり屋なのだろうか？
「ふぇくしょん!!!」
「・・どうしましたかマトリフ様？」
「・・いや・・なんか急に・・」
ポップの呆れが通じたのか、マトリフは急なくしゃみと寒気に襲われるのだった。

「まあ帰りは俺のルーラで何とかなる・・着地はまだ練習中だけど何とかなんだろう。」
実は滝は二往復したのだが、どちらも着地はボロボロで洞穴の時も激突音で皆を驚かせてしまったが
いまはそれよりも、
「敵は俺達に気が付いてねえから作戦会議すんぞ。」
なんだかんだあったが、当初の目論見通り敵に気づかれることなく上陸で来た。
時間は無駄にはできない。
「戦力分散になるけど、二手に別れよう。
戦力的に言ってオールマイティーなダイと爆弾を使うのがバダックさん。
バダックさん、爆弾の使い方を教えてくれ。
俺はマァムと氷の柱の方に行く。」
「うむ、作りは単純じゃ。
この出ている縄に火をつけてすぐに投げればいいだけじゃ。
思いっきり投げて叩きつけるようにすれば普通に投げるよりも威力倍増じゃ。」
「分かった、皆気を付けろよ。
あの野郎も馬鹿じゃねえ、むしろ蛇みてえに狡猾な奴だ。
もしかしたら魔王軍の増援呼んでるかもしれねえ。
多少時間がかかっても敵に見つからない様に柱に近づこう。」
ポップの予感は正しく、その言葉通りに島には魔王軍の増援が待ち

構えている。
「んじゃ行くぞ皆！」
「「「応！」」」
二手に分かれてのレオナ救出作戦が開始された。

驚きの再会

ダイとティファ、果たしてどちらがここに来るか。
ハドラーは日暮れと共にこおりに位置取りどちらが来るのかを待っている。
フレイザードよりの報告で島で勇者一行を一網打尽にするために。
魔影参謀・ミストバーン、妖術師・ザボエラを炎の柱に、そして自分はこちらに二手に分かれて。
無論の事バランは外してある。
ヒュンケルの時に会議でバランをカールから離した結果、王族と騎士団の主要な者達に脱出をされた上に
城を占拠したのに武器庫を壊して終わりという結果になってしまった為だ。今は怒髪天の形相で配下ともども
逃げた行方の手がかりを探して不在であるため、今回は内密にしている。
バランが敵に回れば間違いなく魔王軍の最大の敵になる。
ダイとティファに出会い、特にティファ辺りが説得をしてしまいそうなのが恐ろしい。
あれは誰かれ構わず己の思いを言いたい放題をしそうだからだ。
親子の情と、あの無茶苦茶な説得をされてしまっては、他者とのコミュニケーション慣れをしていない
バランが流されかねないのが一番の懸念材料だ。
あの親子が出会う前に禍根は全て断つ。
その意気込みで待っているのだが、果たしてどちらが来るだろうか。

「見えたバダックさん！炎の柱だ。」
「ふむ、フレイザードの手下はうじゃうじゃいるが他はおらん。
今の内に・・・」
「き～ひっひっひ！待っておったぞ小僧ども。」
「・・・」

「それ皆出てこい！」
ダイ達が炎の柱に辿り着いたその時、待ち伏せをしていたザボエラとミストバーンが姿を現した。
「しまった！罠だ!!」
「きっひっひ、儂は妖魔軍団のザボエラじゃ。
あそこにおるのは魔影軍団のミストバーンじゃ。
お前達の旅はここでお終いじゃ。」
「そんな事は無い！
お前達を倒してレオナを助けるんだ!!」
「ひっひ、威勢がいいの小僧。
お前達の仲間は気の毒にのう。」
ザボエラはダイの怒気を受けても心底楽しそうである。
なにせ魔王軍の大幹部の一人、ミストバーンがいれば安心だからだ。
自身の安全は確保されて優位であり、余裕である。
「氷の柱はハドラー様が直々に守っておられる。
向こうに行った者達も終わりじゃよ。」
「・・そんな・・」

おかしい、敵が一体も見当たらない。
いるのは氷の小さい奴等だけなんて。
ポップとマァムは違和感を感じて警戒を怠らずに慎重に進んでいく。
少しずつ何かの気配はするが
「なんだこっちに来たのはお前か、魔法使いの小僧。」この声は!!
声を聞いた瞬間、ポップの体はわなわなと震え始める。
「ポップ、今の声は？」
マァムは―あいつ―の声を聞いた事は無い。
この声は、死んでも忘れるもんか!!
「何だ小僧、俺の声を忘れたのか？」
声の主と仲間の問いに答えないポップに、声の主は更に問いかけて

きた。
「・・ふざけるな・・お前の声を忘れてたまるかハドラー!!!!」
ポップは全身で叫び上げ、声の主ハドラーの咆哮を振り向いた。
ハドラー⁉今確かにポップはそう叫んだ、ではこの男が!!
「ほう、小僧。
すこし見ぬ間に顔つきが変わったな、俺に怒っているのか？」
ハドラーは余裕の笑みでポップをからかい始める。
ダイとティファはどうやら共に炎の柱に向かったようだ。
せっかくバーン様より賜った新たな力を二人のどちらかに試したかったのだが、
この小僧の成長速度も侮れん、始末するなら早い方がいい。
「手前は先生の仇だ！許すもんか!!」
眼には以前は見られなかった闘気と覇気がある。
アバンの弟子達は本当に油断ならない。

「俺が仇か、笑わせる。
あ奴の本当の仇は奴自身の弱さと優しさとやらだ！
そんな者の為にアバンは俺に敗れたのだからな。」
ハドラーの挑発に、
「先生は・・」
マァムが乗ってしまった。
優しいが故に弱くなったと、尊敬する先生が侮られたのだ!!
「弱くなんかない!!」
結界のせいで魔弾銃は機能せず、代わりに持ってきたロットで、
「いやああー!!」
渾身の力でハドラーに打ちかかったが、―ばしん!!―
ハドラーの片手で止められた。
「・・そんな・・」
今までで一番闘気と力を込めたものをあっさりと止められたマァムは呆然となってしまい
「ふん。」

振り投げられ「メラゾーマ」火炎最大呪文を放たれられた。
やられる！
「マァム!!」―ズガーン!!―
間一髪でマァムの直撃をポップが庇った。
「ポップ！」
「無茶すんじゃねえマァム、挑発に乗るな。」
庇ったポップの両足に少しだけ当たった。
「ふん、寸でのところで守り切ったか。
ではこれならどうだ!!」
ハドラーの魔力が高まっていく。
以前島で会った時よりもハドラーは強くなっている！勝てないのか自分では⁉
しかし今自分が諦めたらマァムも死んでしまう！今は自分しかいないんだ!!
「うおおお!!」
「死ね！ベギラマ!!」
ポップの決意とハドラーの呪文は同時であり、腕を突き出したポップの腕からも魔力が放出された。
「・・出た・・ベギラマが・・」
「何だと⁉」

ポップが土壇場で出したベギラマは僅かながらハドラーの呪文を上回り
「くうぬおお！」
「おお!!」
―ズガーン!!―
相殺した。
こやつ！以前とは比べ物にならぬ！
今のポップの変わりようにハドラーは僅かながら怯み、その隙をポップは見逃さず、
爆弾を取り出し導火線に素早く火をつけハドラー達に投げつけ「べ

ギラマ!!」
二の矢を素早く放った。
―ドッガーン!!!―
爆弾の威力はベギラマと相まって凄まじい威力で爆発をした。
「やったわねポップ!」
その威力でハドラーを倒せたと思ったマァムは、喜色満面の笑顔でポップに駆け寄った。
「マァム、今の内に柱を・・」―ガラガラ―
「なっ!!」
「・・今のは多少はきいたぞ小僧。」
あの爆発でも、ハドラーにさしたるダメージはなかった。
ハドラーは元来火炎呪文系が得意で、熱ダメージに対しての耐火体質であった。
多少はくらっても、さしたるダメージにはならなかったのだ。
「ふっふっふ、小僧にしてはよくぞ持ちこたえた。
俺の新たな技で殺してやろう!!ふぅん!!」―ゴオウ!―
ポップの実力を認めたハドラーは確実に仕留めるために、
「ベギラゴン!!!」
爆裂系最大呪文を放った!
「ああう!!」
「きゃああ!!」
二人も必死でよけて直撃を免れたが、ダメージが酷く蹲って身動きが取れなくなった。
(ちっくしょう!うごけねえ・・)―ザッザー
身動きの取れないポップの元にハドラーが近づき、右手でがっしりとポップの細い首根っこを
掴み上げる。
「魔法使いの小僧!
貴様は確実に息の根を止める!!」
ハドラーは遊ぶつもりはなく、ポップを空中高く放り上げ右手のこぶしを掲げる。

（・・あの鉤爪は・・）
薄れゆく意識の中、ポップは落ちていく空中から―ヘルズクロー―を思い出す。
「止めて―!!」
マァムの叫び声・・おれ・・死ぬのか・・
「ブラッディスクライドー!!」
―ガッシャーン!!―
なんだ・・砕ける音が・・・・―がし!―
誰かが助けに・・
「闘魔傀儡掌!!」
「ああう!!」
暗黒闘気の糸に縛り上げられたダイは驚愕をする。
「馬鹿な・・この技はヒュンケルの」
「きっひっひ、その技は元々ミストバーンの技じゃよ。
ヒュンケルはそのミストバーンを師としていたのじゃ。」
「くっそおお!!」
辛うじて首は咄嗟に腕で防いだが千切ろうとしても、闘気の強さがヒュンケルの比ではなく
千切れない。
「あう!!」
「ダイ君!!」
バダックがダイを助けようと駆け寄ったが、
「おっと、じいさんは大人しくしておれ。」
「むっ!お前だとて儂と同じ爺じゃろうが!!」
行く手をザボエラによって阻まれた。
「これでも聞いてあの世へ逝け、ザラキ!」―ウォオーン!―
聞いた者を八割の確率で死出の旅に導くザラキに、
「ぐうああ!!」
バダックは頭を抱えて苦しむ。
―ダアーン!!―

その時氷の柱の方から轟音が響いた。
バダックの爆弾かどうか分からないが、柱は無事だった。
「ひっひっひ、あれはハドラー様のベギラゴン、
どうやら仲間の方が一足先にあの世へ行ったか。」
「そんな・・あれは!!」
―ガシャン!!―
その直後、氷の柱の崩壊が見えた。
「何じゃと!一体誰の!!」
今度はザボエラが焦る番となった。
一行の中でハドラーを退け氷の柱を砕けるものなぞ居なかったはずだ。
(この気配、やはり生きていたか。)
焦るザボエラとは反対にミストバーンは落ち着いている。
―あれ―は簡単には死なない、そんなやわな育て方をしていないと六年間育ててきた
自負がある。
しかし氷の柱を破壊したのがあれだとすれば、魔王軍に対して反旗を翻したことになる。
アバン憎さで戦っていたあれが何故自分達に対して牙をむく、やはりフレイザードに殺されかけて
腹を立てたか。
・・フレイザードめ、折角のバーン様のお気に入りを敵に走らせおって!
後でぼろくずの様に使い捨ててくれると、ダイを闘気で縛り続けながら物騒な算段を付ける
ミストバーンだった。
(誰だろう・・)
暗黒闘気で薄れゆく意識の中、ダイもぼんやりと思う。
妹だろうか?・・いつものように・・間に合って・・
(何だ・・ひんやりとした感触なのに、温かい気配に包まれてるような・・)

半ば気絶しているポップは状況が全く分からずに動けない。
―ブラッディスクライド―でハドラーを退けると同時に氷の柱を壊した者は、
地面に激突寸前のポップを両手で受け止めることに成功をして心底ほっとした。
爆発音を頼りに駆けつけ、空中高く放られたポップを見て肝が冷えた。
(間に合ってよかった。)
この細い体でよくぞハドラー相手に持ちこたえたものだ。
「・・貴方は・・」
驚きの声に振り返れば、マァムもよろけながらも立ち上がり、目を見開いて自分にゆっくりと近づいている。
まるで幽霊に会ったような顔をして。
(皆にはとんでもなく悲しい思いをさせてしまったか。)
「遅くなってしまって済まないマァム。」
助けに来てくれた男の力強い声にマァムの思いが堰を切り、
「ヒュンケル!!」
涙を流してポップを両手で抱えたままのヒュンケルに抱き着いた。
「ヒュンケル・・ヒュンケル!!」
とても・・とても悲しんだのだ!アバン先生の死を知った時と同じくらいに!!
「・・生きていてくれて・・本当に良かった・・」
「マァム・・すまないとても悲しませてしまったようだ。」
「ううん・・いいの・・生きていてくれたならそれで・・」
―貴方はみんなに愛されているのですよヒュンケル―
あの人の言う通り、マァムは心の底から自分の身を案じてくれていた。
生きていて良かった、この素晴らしい笑顔が見られたのだから。
―ヒュンケル!!―
マァムの声が聞こえる。
あいつは・・死んだはずじゃ・・え⁉

ポップの目が一気に覚めた！
何となればようやく目を開けてみれば、一番最初に見えたのが甲冑を纏ったヒュンケルの顔だったからだ！
（何だこの状況！えっ・・おれ・・ヒュンケルにお姫様抱っこされてる⁉
つうかヒュンケル生きてた？・・それとも・・）
「俺死んじまったのか？」同じ亡霊仲間として再会してしまったのだろうか。
つい先程までハドラーに対して一歩も引いていなかった頼もしいポップの百面相と口走った事に対し、頭でも打ったのだろうかとマァムは別の意味でポップを心配し始める。
「俺もお前も生きている、立てるかポップ。」
自分を労わるヒュンケルの声にとりあえず頷き、そっと地面に降ろされた。
「お前にも心配をかけたようだな。」
優しい声と笑顔・・出会った時とまるで違う、憑き物が落ちたようで・・しかし!!
こちらは心底嘆き悲しんだのだ！それを心配かけたの一言で片づけられたらたまったもんじゃない!!
マァムは喜んでるが・・だんだん腹立ってきた・・
「どうしたポップ？」
・・どうしただと・・「バッカ野郎!!!!」
ヒュンケルの一言で火が吹くほどに思いっきり怒鳴った。
「てんめぇ!!あそこで死んで償おうとしたせいで！ダイとマァムがどんだけ傷ついたと　思ってやがる!!
俺だって・・そこんとこ分かってんのかよこの大馬鹿野郎!!!」
怒りの形相で泣きながらヒュンケルの胸を鎧越しに叩きつつ、猛抗議をしてやった。
悲しかった・・痛かった・・死にゆくものを・・ただ黙ってみているしかできなかった無力な自分が許せなかった・・もう・・アバン先生の二の舞はご免だった!!

「ポップ・・」
マァムもポップの気持ちが痛いほど分かり兄弟子に対する雑言を止めずに、泣いて見守る。
ヒュンケルも―道々―ポップの気性を予め聞かされていたので驚かずにポップの全てを受け止める。
「すまない、もう二度と軽々しく命を掛けたりはしない。」
「・・絶対だぞ!!」
「ああ、約束をする。」
―この三日後に、ポップは同じような事でヒュンケルから説教を受けることになる―
(ティファ、お前の言う通り命を粗末にするものではないな。)
「二人共、ティファから回復薬を預かっている、今の内に飲んでおけ。特にポップ、お前には魔力の回復を渡してほしいと言われている。」
「そうだ!ティファは!!」
「ダイ達の方に行ったの?」
二人はティファはどうしたとヒュンケルに迫る。
「ティファは島には来ていない、別行動をしている。」

～回想・過去から今への道～

「いた！あそこに!!」
「間に合え!!唸れ　真空の斧!!」
　フレイザードのせいで地底魔城の近くの死火山が活火山になり、大噴火をしてヒュンケルがダイ達を逃がした後、先に脱出をしていたクロコダインとティファはガルーダの助けを借りて
　溶岩に呑み込まれかけたヒュンケルを間一髪のところで救い取った。
　ダイ兄達ご免！でも後でちゃんと会わせてあげるから。
　このマグマの煙でヒュンケルの救出シーンが見られず、きっと見殺しにしてしまったと泣いているはずだ。
　罪悪感あるけど先に進んでもらう旨の手紙を鳩につけて送り届け、「デルパ。」予想よりもボロボロのヒュンケルを手当てするために、島の友達ベホイミスライムの
　ベほちゃんを出した。
　これはノヴァの時の教訓で、あれ以降外出時はいっつもベほちゃんと行動を共にしている。
　火傷用と切り傷用の万能薬をそれぞれの効能を殺さない量で混ぜ合わせて塗って、
「ベほちゃんお願いね。」
「―うん、ベホイミ―」―パー―
　傷はすぐに治りホッとする。
「さて、こやつをどう説得をしたものか。」
　う～ん、とっても頑固そうだ。
　一行を命懸けで助けて償うのが俺の道とかの路線は勘弁してほしい、そんな下らなくて後ろ暗い
　覚悟なんて私の中ではごみ箱行き決定している。
　なので、「クロコダイン、私が呼ぶまでヒュンケルと二人で話をさせてください。」
「・・大丈夫か？」

またショックで説得する方法かと、クロコダインはヒュンケルの事を本気で案じる。
「・・取って食ったりはしません、穏やかにしますからね。」
なんかクロコダインに胡乱な目で見られた、ちょいショック。
「合図に鳩送ります。」
「分かった、ではな。」
クロコダインがガルーダと共に言った後、内面の手当てを始めた。
肋骨が二・三本折れているので包帯で固定をする、ダイ兄ちょっとやり過ぎだ。
終わった後ヒュンケルを寝袋に入れて、焚火を焚いてレモンティーの身ながら目覚めるのを待つことにした。

すこし空が白んできたか。
「う・・」
ん？目が覚めたかな。
「っう・・ここは・・」
まだはっきり覚醒していないのか呆っとしてる。
なんだ、体が重い。それに痛みもあって動きづらい。
んん・・あの眼鏡は!!
「アバン!!!」
ぼやけた視界にはっきりと映った黒ぶちの大きな眼鏡は、間違いなくアバンの物だ。
すると・・自分は・・「俺は死んだのか・・。」
死んで、あの世のアバンの元に来てしまったのだろうか？
「違いますよヒュンケル、貴方も私も生きていますよ。
おはようございます、ヒュンケル。」
「つ！ティ!!」―ズキ!!―
「ぐう!!」
「ああ、そんなに急に体を起こそうとすれば痛みますよ。
少しお待ちなさい。」
アバンでなくとも、自分が殺しかけた少女が穏やかに挨拶をしてく

れば十分驚愕に値する。驚いたヒュンケルは咄嗟に体を起こそうとして激痛に襲われてしまった。
そんなヒュンケルをティファは上半身を支えてゆっくりと起こし、用意していた寝袋で作った
簡易クッションを三つ背中に入れた即席の背もたれにもたれさせ、
「これをお飲みなさい。温まりますよ。」
呆然としているヒュンケルの手にレモンティーを両手で持たせる。
のんびりと挨拶をされて世話をされ、最早反論する気さえ全く起きないヒュンケルは流されるままにお茶を飲んだ。
「・・美味い・・」
世辞ではなく、本当に体の隅々まで温かさが伝わる沁み入るようなおいしさだった。
「それは良かった。」
「・・何も聞かんのか。」
自分にお茶を飲ませた後はティファもお茶を飲んでいるだけで、別れた後に何があったのか聞いてこない。
「ヒュンケル、私は言いたくない事は無理には聞かない主義なんです。」
「・・そう・・なのか。」
「ですが。」
ティファは左手の指を一本すっと持ち上げると、
「言いたい事は遠慮なさらずに何でもどうぞ、どんな事でもどんとこいです!受け止めます!!」
ビシッと指を指しながら・なんだか変な事を堂々と言っている・・・
「・・くっくっく・・は~はっはっは!」
可笑しな奴だこいつは、やることなすこと滅茶苦茶だ。
ひとしきり感じた可笑しさのまま笑ったヒュンケルは、ポツリポツリと決戦での出来事、
知った真実、全てをティファに話しつくした。
「お前の言う通り、俺は間違っていた。」全ての事を。戦士ですらなかった。

「そうですか。」
「ああ。」
「しかし貴方は散々な事を言った私とクロコダインの命を救ってくれました。
　そんな貴方は戦士だと、彼と私の意見は一致しましたよ？」
「・・そうだ！クロコダインは・・」
「大丈夫です、彼も無事に無傷で脱出しましたよ。」
「無事か・・」良かった
「ふふ」
「・・何がおかしい。」
「貴方の顔が出会った時と顔と違って穏やかになっていたのが嬉しいのですよ。」
「・・そんなに違うか？」
「はい、まるで憑き物が落ちたような清々しい良いお顔ですよ。」
「そうか。」
「ダイ兄達のお陰ですかね？あの三人は何事も全力で一生懸命に物事に向かっていきますから。
　貴方の事を助けようとしていませんでしたか？」
「ああ、マグマの中で全員が全滅しかけても最後まで俺の身を案じてくれていた。」
　命ではなく心を救われた思いだ。
　ダイの必殺技を喰らって倒れた自分を、慌てふためきながら介抱をし、あれこれと心配をしてくれた
　優しい三人の子供達。
　うるさくて目が覚めた、色々な意味で。

「これからどうしますか？」
　ん！魔剣か、今は来ないでほしい　―ジ・アザーズ―
　ヒュンケルに今後どうするか決めてもらう前に魔剣がお空飛んできた気配がしたので、
　無詠唱のハイエント結界で捕まえて、魔剣には空中で待ってもら

う。
今のまま魔剣が来たら戦って償おうコース確定だ、絶対阻止もんでしょ！
「俺は償いたい！しかし、死んだアバンは許してはくれないだろう。」
敵の遺児である自分を温かく迎え入れ、惜しみなく注いでくれた愛情を、踏みつけ裏切った自分を。
「・・先程ヒュンケルの話を全てしてくれましたね。」
「・・そうだ。」
「私も一つ話をします。
貴方とお話をしていて思い出した事ですが、今から七年も前のお話です。」
「七年・・」
自分がアバンと別れてから一年後の事か。
「実は私とアバン先生は会っているのですよ、一瞬の出来事でしたが。」
「会った・・アバンと・・」
情報では―ダイ達―がアバンと会ったのは大戦日に島であったのが最初の筈だが、あ・・いや、
そもそも島にはモンスター達とダイしかいないと魔王軍では認識をしていて、ティファの事は
影すら見えなかった。
そのティファがいつ、どうやって。
「島を初めて出てロモス王国の港町の古道具屋でカール産の風よけマントを買って、少し歩きながら
リンゴを齧ってのんびりとしていました。」
「・・・」
「そうしたらいきなりあなたの名を呼ばれたのですよ、ヒュンケルと。」
「俺の・・名を・・」
「名を呼ばれながら肩をいきなり掴まれて、振り返らされた目の前にいたのがアバン先生でした。

その時のお顔は血相を変えて取り乱していたようでしたよ？」
「あのアバンがか・・」
いつも冷静であったあのアバンが血相を変えていた⁉
「はい、まるでようやく捜していた思い人を見つけたような雰囲気でしたよ。」
今でもよく覚えている、血を吐くが如くヒュンケルの名を叫ぶように呼んだ先生の声は。
忘れるはずがない、ようやく愛し子を見つけた親のようなあの声を。
「今思えば、カール産の風よけマントはどこでも売っていて、当時の私とあなたでは大分背格好も
違っていたでしょうね。」
そうだ、アバンはいつだって落ち着いて行動をしていた、なのに・・何故そんならしくないミスを。
「それだけ必死に貴方を捜していたのでしょうね、風よけマントで判別しようとする程に。」
ティファはそっと、沁み入るような声で当時のアバンの気持ちを代弁するように言ってきた。
「・・俺を・・そんな気持ちで・・」
出会った当初から憎しみの瞳しか向けなかった俺を、アバンが
「時にヒュンケル、貴方はアメはお好きですか？」
「はっ？いきなり何を・・」
「好きですか、嫌いですか、どうでもいいですか？」
この話の流れでなぜ突然アメの話に。
だが、ティファは本気で聞いているようで答えないといけない気にさせられる。
「・・好きだ」
アバンが作るものは何でも美味しかったとは本人には頑として言わなかったが、アメが一番好きだった。
「ふふ、そうですか。
だから先生はあんなに大量にアメをお持ちだったのですね。

会った時びっくりして泣いた私にアメをくれたのです、それも袋ごと。
ダイ兄と分けっこしても半月は持ちましたね。」
「・・それがどうした・・」
「分かりませんか?島で先生と会った時、先生はあまり甘いものを自らは食べていませんでした。
無論ご自身でアメを舐めていることも、ポップ兄やダイ兄に上げている素振りもありませんでした。
では当時何故あんなにアメを沢山持っていたのか、ご自分用でないとすれば―誰―の為の
アメだったのか。」
「・・あ!・・」
それは・・もしや・・
「そうですヒュンケル、―貴方の為―のアメだったと思います。
いつ貴方と再会をしてもいいようにと用意をされていたのでしょう。
・・残念ながら、島に来た時の先生は貴方との再会を諦めてしまったのか、飴は持っては いませんでしたが。」
そうだ、何かあればアバンは常に飴をくれていた。
「ヒュンケル、よく出しましたね。ベリーグットですよ。」
そう言って、頭を撫ぜて来て・・飴をくれた。
あれだけは素直に受け取っていた、甘くて・・とても、温かさを感じて―ポタン―
「おれ・・は・・」
「先生はおそらく、許すとか許さないとかは考えていなかったと思いますよ。」―パタパタ―
「むしろバルトスさんから託された貴方を救えなかったと後悔されていたのかもしれません。」
「俺を・・救う・・」
「ええ、彼の人はとても優しく心の広い温かい人でした。
魂の貝殻に声と思いを残した貴方の父君もまた同じような方だっ

たのでしょう。」
―ヒュンケル、最愛の息子よ―　　―お前と出会えてよかった―
俺は・・俺は！
「貴方は確かに愛されているのです。
父君から、そしてアバン先生からも。
そして新たに、ダイ兄と、ポップ兄と、マァムさんからも。」
・・みんな・・本当に温かい笑みを向けてくれていた・・こんな自分に。
―どうか幸せに―
「ですから、貴方も幸せになっていいのですよ？」
!!その言葉は、魂の貝殻の父と同じ言葉！
いつの間にか自分の目の前まで来て膝立をしているティファは、頭をクシャリと撫ぜてきて
父と同じことをいった。
呆然とした思いでティファの顔を見てみれば、微笑んでいて「ヒュンケル。」
優しく名を呼ぶ様は・・
「せん・・せえ・・」アバンと、
「父さん!!うう・・うわあああー!!!!」父の姿が重なった。
「あああー!!うわーああ!!父さん!!・・先生!!」
ヒュンケルは泣いて・・ただひたすらに泣き続けた。
己よりも年下の、それも殺しかけた少女の細い体にしがみついて。
ティファも何も言わずにヒュンケルの頭を抱きしめて思いの全てを受け止める。
小さな体でヒュンケルの全てを包み込み守るように・・まるで雛を守る親鳥のように。

～回想・幸せへの道を～

どれくらい泣いたのか分からない、泣きすぎて頭がぼおっとする。
ヒュンケルは最早テイファに腕をまわすのも億劫で、だらんとしてテイファに支えられている。
自分は父を失った時、ただこうやって泣きたかっただけなのかもしれない。
父を失ったあの冷たさを、誰かのぬくもりに温められながら悲しみを・痛みを・苦しみを泣きなっがら
癒されたかったのかもしれない。
その機会は確かにあった。偉大で温かい師の胸に素直に飛び込めばよかったのかもしれない。
それをせず、師を世界を憎むことで乗り越えようとした。
だからすべてを間違えてしまったのだろうか？
師の気持ちを、歪んだ感情で受け取っていたから気づけなかった。
今ならばわかる、こんな自分を温かい声で何度も読んでくれた優しき師の思いが。
自分をどれ程慈しみ、愛し守ろうとしてくれていたのかが。
そしてアバンの亡き後は、その弟子たちが師の意志を受け継ぐ様に現れた。
―俺、ヒュンケルの事助けたかったんだ。気持ち分かるし、勇者としても助けたかったんだ―
―お前の事を見捨てたくなかったんだ！―
―間違ったのならやり直しましょう―
―　　―
―ヒュンケルを助けたかったんだ―
―　　―
本当の意味で三人の子供達に救われた。
では今ここに居るテイファは？
最初に自分に散々な事を言ってあらゆる意味で自分を怒らせた。
しかしそれがあったからこそ、憎しみしかなかった自分の心の殻に

ひびが入り、最後はダイ達の
温かさによって粉々に打ち砕かれたのだ。
「ふふふ・・はははは。」
何故かおかしくなってきた、この娘・・いやティファは本当に無茶苦茶だ。自分を怒らせ泣かせて、そして笑わせている温かさに溢れた素晴らしい人だ。
「答えは出ましたか？」
頭をくしゃくしゃしながら優しく自分の今後の事を聞いてくれる、罪人である自分の事を。
やりたい事は見つかっている、ダイ達の助けになりたい。
ではその後は？いや、今はそんなことを考えても詮無きことか。
「時に・・貴方を何と呼べばいいですか？」
「・・は？」
「いえ、仮にも年上の方ですのでヒュンケルさん・ヒュン兄・もしくはヒュンケルのどれにすれば。」
何か変な事で迷ってる。そっと顔を放してティファの顔を見れば、とても真面目な顔をしている。
どうやら場をほぐすためのジョークではなく本気で聞いているようだ。
「・・ヒュンケルで頼む。さんも、兄も、敬称は不要だ。」
「いいのですか？」
「ああ、俺はお前達に救われた身だ。偉そうにしているようで付けられる方が心苦しい。」
「分かりました。ではヒュンケル、今クロコダインを呼びますね。」
「ああ、頼む。」
殺しかけたクロコダインが、今の俺を見てなんというだろうか。
ガルーダで来たクロコダインに早速ヒュンケルを説得できた旨を報告をして、その後隠し持っていた魔剣はきちんとヒュンケルに返してあげた。
「こいつも・・生き残ったか。」

長年愛用の品の無事に、とってもホッとしてくれた。
そんなヒュンケルを、クロコダインも温かい目で見ている。
ヒュンケルの心の闇が消えたのを感じて喜んでくれているようだ。
さて、ここからは私も本気で挑まないといけない。
二人と周りの者達の人生がかかった岐路を、より良い道に進むためにも。
「さて、お二人はこれから一行の助けをしようと思っていますよね。」
「無論だ。」
「それ以外ない。」
きっぱりと言ってくれる、その心に偽りなしか。
「なら一つだけ約束をしてください、これは必ず守ってもらわねば困ります。」
「何だ？」
「どんな事でも聞こう。」
言った、どんなことでもって言った！約束して欲しいのは、
「一行の助けをしても、自分の命と幸せも大切にしてください！
出来ないというのであれば一行の助けはさせません!!私が力づくで追い払います!!!」
「何だと！」
「ティファ、それはあまりにも・・」
「言ってしまえば罪を償うために命を懸ける事は簡単なんです、自分の命だからと粗末にしてしま
えばいいのですから。
しかし、それは貴方達を助けようとした人たちに対してとても酷い事なんです！」
皆が悲しむだけじゃ済まない。
「戦えば命を懸けねばならない時も確かにあります！それでもギリギリの時でも自分達の
命も大切にしてあげてください!!」
「俺たちにそれをか・・」
「こんな・・俺達の命を・・」

「分かっています、生き続けて罪を償うのは死ぬよりも辛い事かもしれないと。
それでも私は！貴方達にも生き続けて幸せになってほしいのです。」

今ティファは何と言った？罪を償えというのならば分かるが幸せになって欲しいと、自分達に対して!!
いったいどこの世界に、元敵に対して幸せになって欲しいというのだろうか？
おそらくこれはダイ達の考えではない、彼らは助けたいという一念のみでその先のことまで
はなかった気がする。
ならばこの考えはティファだけの考えなのだろうか。
「ティファ、それは無理な事だ。」
「我等のしたことを考えれば、幸せになぞ・・・」
「駄目です!!」
二人の言葉をきっぱりと遮った。私は戦力欲しさにこの二人を助けたいわけじゃ無い、ダイ兄達もきっとそうだ。
だからこそ強気で言わないといけない。
「命を守る事はともかくとして、幸せを大切にするというのがどれほど難しいのかは分かってます。
正答なき物で何が幸せかその人にしか分からないものです。
きっと今のあなた方は幸せが何かを見失ってしまったのでしょうから。」
正しいと思って魔王軍に身を置いていたのが、負けて更に間違いだと思い知ったのだから、
「世界は貴方達につらく当たるでしょう。あの魔王軍の、それも隊長格であった者として許さないと。」
被害にあった人々がいつかまとまって糾弾をしに来る日が来るかもしれない。でも・・・
「それでも世界は貴方達が思う程弱すぎも酷過ぎもしません!!」

力が世間の子よりもあり過ぎて、周りの人達から化け物扱いされたらどうしようと悩んでいた私に、―おじさん―がくれたくれた大切な言葉。

―世界は酷過ぎも弱すぎもしねえ―

その人の本質を見て、分かって受け入れてくれる人もいると教えてくれた。

おじさん、力を貸して！私が分かったように、この二人にも!!

「案外しぶとくて強いんです！貴方達が償う道を歩ききる決心をして歩けば、いつかは分かって

くれる人達がいるはずです！」

今はダイ兄達だけだけど、それでもいつかはと切に願う。

「貴方達に笑いかけ声を掛けて、気にしてくれて心配をしてくれて、友に恋人に家族にと

思ってくれる人たちが出て来てくれるかもしれません!!」

私のこの望みは欲張りだろうか？子供の愚かな甘ったるい綺麗ごとだろうか？

それでも私は願うのを止めない！

「その時が来た時は、逃げずにその思いを受け取ってあげてください！

今は罪悪感で罪に恥じ入って受け取り難いかもしれませんが。」

「・・・ああ。」

「・・・その通りだ。」

今のティファの言う通り・・いや、ティファの言う事こそが自分達の心を苛む。罪深き自分達が、そんなことを許されるはずがないだろうと。

しかし、それでも目の前の少女が真剣に自分達の幸せを願ってくれているのも分かっている。

ティファ自身の声も震え、今にも泣き出しそうな顔をしている。己でも酷く辛く難しい事を言っている自覚はあるのだろう。

自分達のような罪人が、ティファの言う幸せになるというのはそれほど難しい事を。

「少しずつでいいんです。」
それでも、少女は言葉を紡いでゆく。
「貴方達が心の底から生きていてよかった、日の光を浴びるだけでも幸せだと思えるその時まで、
ダイ兄・ポップ兄・マァムさん、そして・・」そして？
「私も入れた皆で道を共に歩きましょう。」
他者の幸せの為に・・見知らぬ敵だった自分達と共に歩いてくれると言う。
おそらくはダイ達もこの考えを聞けば共にと言ってくれよう。
「だからお願いです！自分自身の幸せを見つけて守ってあげてください!!」
償いだけではなく、幸せも切に願われ、
「分かった。」
「約束しよう。」

―分かった―
―約束しよう―
「・・良かった・・」
その言葉を聞いたティファは、クシャリと笑った。泣きそうな、ホッとしたような、良い物がすべて詰まったような笑みを浮かべて、
「約束ですよ！」
力強く言いながら、左手の小指を出してきた。
「・・どうしたティファ。」
「ああクロコダインは知りませんか。これは約束の印に、小指だけを絡ませて約束をし合うんです。」
「・・俺も初めてだ・・」
「・・まあヒュンケルも父君が・・人間の、それも子供同士の風習ですが私はこれを大切にしている
んです。」
実はダイ大の世界にも指切りがあった、場所はテランとその周辺地域だけだけど。でも大切な約束はきちんと結びたい。

「・・小指を絡めるのか？」
「・・こうか？」
「一人ずつこうするんです。」
二人共律儀にしてくれた。皆で幸せ目指そうね。

ティファと指切りをした二人の顔はほんわかとしている。
小さな指は温かく、まるでティファ自身を現しているようだと。
この娘の温かさに掛けて、いつか必ず約束を果たそうと心に誓いを立てた。

―後に二人はティファに激怒をする事になる。自分達にあれほど命と幸せを守って欲しいと約束させたのに、ティファ自身が破ったと。
その行為が―ティファ自身が望む幸せのためだと分かっても、許せることではないと―

～回想・料理人の不在～

ティファと様々な事を話しながら、三人でとりあえずパプニカの王城へと向かった。

「兄がこの国の王女様と仲いいようです。助命嘆願はともかくとして、民達からも公正で知性高き王女との呼び声も高いようなので、貴方達の処遇を決めてもらうにはうってつけだと思います。」

勇者自らが助けようとした相手を悪くはしないだろうと話しながら。

王城と街が見えてきたところで、クロコダインとヒュンケルの二人はティファに頼みごとをされた。

「このマジックリングを兄達に渡してください。」青い色のマジックリングを渡された。

「・・・お前はついてこんのか？」てっきり一緒に来てくれるものだとばかりに思ったのだが。

「実は先の戦いで私達が使っている薬が尽きてしまったので、申し訳ありませんが別行動で作ってきます。材料は市販では手に入り辛くて、テランとロモスへも行かなければならないんです。

詳しい話は後日しますが、よろしくお願いします。中には残った薬が入っています。

効能は瓶にラベルが貼ってありますので私がいなくとも大丈夫ですよ。」

「・・もっと作り置きは出来ないのか？」ヒュンケルはとても不満そうに言った。

薬よりもティファ本人にいてほしいというのに、本人はにっこりと笑って行こうとするのが嫌だと。

「この薬は既存の物よりも効果が高い分、薬の効能を殺さないように防腐の物を使っていないのです。

腐るのが早いので、作って二・三日で腐り始めてしまうのです。」万能薬はそこが難しい。

これは市販薬には向いていないのだ。

「その代わりいい薬を沢山作ってきます。材料もなるたけ採ってきて、ストックをしておくようにしますので今回はよろしくお願いします。」
「分かった、我等の為に作ってくれるものだ。ヒュンケルよ、」
「・・・・分かった、すぐに帰って来てくれ。」
「はい、皆さんがどこにいるのかは魔王軍との戦闘を聞けばすぐに分かります。」
　終わっていたらその周辺を探せばいい。
「しっかりとしているな～お前は。」
「気を付けて行けよ。」
「はい、行ってきます。お二人も頑張ってください、ダイ兄達がきっと味方をしてくれます。ガルーダ!!」―ギシャ～―
　挨拶もそこそこにティファは自前のガルーダに乗って行ってしまった・・というかガルーダに乗って行くって・・まあいい、ティファだしと二人は深く考える事を放棄して、目の前の現実を見据えてパプニカの城下町へと入っていった。
　人、人、人。とにかく人だかりで、王城自体が攻撃を受けていないせいか、人々はどこか大戦とは縁遠く見えた。
　どこかで大変な事が起きているが、いまいちピンと来ていない活気がそこにはあった。
　誰もが笑い、普通の生活をしている。二人には縁遠く知らない人間の生活がそこでは当たり前にされている。
「ヒュンケル・・」
「ああ・・・俺達は・・碌に人間を見ていなかったのだな・・」
　人間は弱く、それゆえに卑劣だと思って生きてきた。他者を騙し、自分と違うモンスター達を数で囲んで虐殺し、強き者におもねり、醜い生き物だと何故思ってきたのだろう？
　答えは簡単だ、人間の一部しか見ていなかったのだから。
　それは種族が違うからの一言では済まされまい、何故ならばその場にいなくとも情報が収集できる、悪魔の目玉を使えば済む話だからだ。

しなかったのは人間に興味がなかったから、もっと言えば最初から決めてかかっていたから、人間は存在するに値せずと。
しかしここに住まう人間はどうだ？子供達の笑顔と、モンスターの仔の笑顔とどこに差異がある？
そんな事も知ろうともせずに、人間を滅ぼしてモンスター達の楽園を作ろうとしたクロコダインは己の思い上がりを恥じ、父の仇の人間なぞ死んでも構わんと勝手な憎しみに囚われていたヒュンケルも同様で、処刑にされた方がいっそ楽なほどの罪悪感に攻め立てられる。
「・・行こうヒュンケル・・」今この国にリザードマンがいては騒ぎになると、大きな布を被って正体を隠しているクロコダインが、下にうつ向いたまま動けなくなったヒュンケルを促す。
顔を上げたヒュンケルの瞳には、罪悪感と悲しみと、わずかながらも安堵の色がある。
それはきっと、この国を滅ぼさずに良かった、ダイ達が止めてくれてよかったと思っているのだろう。

王城の門番にまずダイ達を呼んでもらうことにした。あの三人ならばすぐに駆けつけてくれると思ったのだが、来たのは金のイカールと、青の宝珠を埋め込んだ男が、呼びに行った門番と共にやってきた。
「貴方達がダイ君の・・貴方のその胸にあるのは、もしやアバン様の弟子の証の輝聖石では!!」
男は何か焦っているようで、右足を引きずりながらも観察力はたいしたものだ。
「その通り、ダイ達の同門だ・・」嘘は言っていない！もしも償う機会を与えてくれるのならば、生涯師の教えを守り抜き、ダイ達の助けて守っていくのだから。
「ああ!!神よ！感謝をします!!!」・・急にどうしたのだ？
「実はダイ君達一行が来る前に、化け物が現れて姫様を攫って行ったのです!!」
それは氷と炎が合わさった化け物で、王国の騎士団も魔法使い達も歯が立たずにむざと姫君を!!

「・・私はご覧の通り右足を焼かれ、同僚の一人が瀕死の重傷を負ってしまったのです。」
三賢者と呼ばれながらもこの体たらくで不甲斐ないと男は己を呪っている。
「今ダイ君達が我が国の者達と追っています、あの化け物は自らバルジ島にいると告げて行ったのです。」
明らかな罠だが、ダイ達は聞いた瞬間一も二もなく飛び出していった。
ダイ達だけではと、バダックと、ほぼ無傷で済んだ三賢者の一人エイミと共に気球で乗り込んでいった。
「幸い私はかの島へといった事があるのです。今すぐにキメラの翼で!!」
「いや、すまないがその志だけ頂こう。島へは俺とこの男と二人で行く。」
この男の覚悟は本物なのだろうが、フレイザードの相手にはなるまい。怪我を差し引いたとしてもだ。
ヒュンケルはフレイザードの強さをよく知っている。伊達に魔王軍の同僚はしていない。
「しかし!!ご存知ないかと思いいますが、バルジ島には・・」
「知っている、大渦があるのだろう。それを承知した上での事だ、移動手段も持っている。」
口には出せないが、パプニカを攻める時の為と、下調べを十分しておりバルジ島の事も把握をしている。
万が一その島に逃げ込まれた時の対策も練ってあったとは言えないが・・
「・・・私では足手まといでしょうか?」
「・・すまない、俺はその化け物の正体と、実力をよく知っている。足にけがをしたものが敵う相手では決してない。命を粗末にするな。」・・・ダイ達を救おうと、命を投げ出した自分が言えた義理では無いが、この若者の目は真っ直ぐで、死なすには惜しいと思ってしまったのだからしょうがないではないか。

ヒュンケルは苦笑をしながらも止め、真摯な説得は相手に届いたのか、死を覚悟をした瞳から力が抜けた。
「分かりました、情けないと御思いでしょうが、どうか姫君を・・」泣きながら、腕を押し頂く。
大切で、心の底から忠誠をその姫に誓っているのだろう。そこまで大切な相手を、己が助けられない無念さはいかばかりか。
「・・俺の名はヒュンケル、ダイ達と共に必ず姫君を助ける。」
「俺はクロコダインだ、この身に代えても約束を果たそう。」
「・・・貴方達は・・申し遅れました、私は三賢者の筆頭アポロと申します。
貴方達もダイ君も、姫君と共に必ず無事にお戻りください！」
アポロはレオナ姫を助けると言ってくれた二人の覚悟を瞬時に見抜いた。本当に自分達の命を懸けてしまいそうな危うさも。
自分達三賢者が生きて、だが二人が命を懸けるのは間違っていると言外に込めて無事を祈る。

「いい青年だったな。」
「ああ、俺はこの国を滅ぼさなくて良かったと心底思う。」案じる姫と勇者一行のみならず、怪しい自分達の身さへ案じてくれた優しい者がいる国を滅ぼさずに。
「・・約束をしてしまったな・・」ティファ同様に、生きて帰る事を。
「生きて帰るぞクロコダイン。」たとえあの青年が自分達の真実の姿を知り、案じてくれた瞳が憎しみに変わる事になろうともだ。

そしてクロコダインのガルーダで島に乗り込み、別々の柱に分かれて氷の柱に到着し、無事にポップの危機に間に合ったと神に感謝をしたくなった。
ティファの不在であっても、必ず姫を助けてあの青年の元へと帰ろう！

因縁の決着

「ってこたあ何か？あの後ずっとティファと居たのかよ？」
マグマから逃れて暫くした後にティファの鳩から手紙が届いたが！そんなことは欠片も書かれてはいなかった!!後でヒュンケル共々雷落とす!!!
三者三様にティファの事を思っていれば、「ちょっと待て!!!」
何やら怒れる魔王様の声がした。この説明の間ずっと手出ししなかったのは昔のハドラーならば考えられんと、しみじみと思うヒュンケルではある。
見れば何やらわなわなと震えている。やはり自分が反旗を翻したのが許せないかと、ハドラーからの罵倒を甘受しようとしたが、「ティファが島に来ていないだと⁉」・・そっち⁉

何でティファが来ていないのに怒っているんだ？普通はヒュンケルの反逆を詰る所だろうが!!
ポップとマァムはそう思ったのだが、ハドラーの考えは全く違った。
ブラッディー・スクライドが飛んできた時は確かに驚いた、ヒュンケルが生きていた事に。
やはり日頃から仲の悪いフレイザードがヒュンケルを殺そうとし、死の淵から這い上がってきて復讐に来たかとチラリと考えが浮んだので反逆には驚かなかった。
少し前の自分なら、鼻水をぶら下げて右往左往していただろうが今はそっちは別にいい！反逆をしたならば返り討ちにすればいいからだ。
そんな事よりも！「ヒュンケル！本当にティファはここには来ていないのか!!」二度も聞いてしまう。
「そうだ！この二人に説明した通りだ!!」・・どうやら本当のようだ。
「んだよ・ティファ、ティファって連呼するな!!気安いぞハドラー!!!」
何度も妹の名を呼ばれてハドラー相手にポップがぶちぎれた。

「あいつな！俺等と違ってアバン先生からなんも教わってねえんだぞ!!
　ちょっと口が悪かったからって仕返ししようとすんじゃねえ!!!俺達が相手だ！」
「あんないい子を狙うだなんて最低よ！ティファは武術家でも剣士でも戦士でもないのよ!!」
　あいつは、あの子は料理人だ!!!
「・・・お前達・・ティファに騙されていないか？」
　あんなに強い者の何を庇おうとしているのだこの二人は？はっきりと言えば、島で戦った時よく自分は生きているなくらいに自分は思っているのに、この二人なぞ全く及んでいないのが分からないのだろうか？
　人を見る目がないのかと思わず頭をがりがりと掻いてポップとマァムを心配してしまう。
「何だと!!あいつはちっとは腕がたつかはしんねえが、戦士じゃねえぞ!!」
「戦いに巻き込まないで頂戴!!」・・・・やっぱり騙されてるぞ二人共。
　自分から魔王相手に倒します宣言をしてきた者を、戦う者でないと言われて誰が納得をするんだか。
　宣言を間近で見ていたヒュンケルも微妙な顔をしている。ヒュンケル程の実力があれば、ティファの実力も分かっているのだから、なおのこと複雑だろう。
　一体ティファはこの二人にどんな接し方をしてきたんだか、自分なぞ無礼な態度しかとられていないのに、だがまあいい。ティファがいなくともやる事は同じだ。
「貴様も小娘に誑かされた口か、ヒュンケル。」
　少し挑発をすれば、「貴様が彼女を小娘呼ばわりするな!!」烈火のごとくの怒りを向けてくる。
　しかしその瞳には、かつての闇が消え失せている。これもティファの影響か、厄介な奴だ本当に。
　その場に居ても居なくとも魔王軍に何かしらの被害を与えるのだ

から。
「魔王軍に反旗を翻してただで済むと思うな！ヒュンケル!!」
「望む所だ！先に行け二人共!!」ここでハドラーを相手にできるのは幸運というものだ!!
「そんな！三人で倒すぞ!!」
「・・すまない、分かってくれ二人共。」父の仇は一人でとりたい。
「分かった・・その代わり必ず追いついて頂戴!!」
「待ってんぞ！」
「ああ、必ず追いつく。」
　良い弟妹達だ。
「気安く約束をしていいのか？約束が破られた時、二人の心の傷が深くなるぞ。」
「破らなければいい・・それよりもハドラー!!貴様に問う!!!」
　二人が居なくなったのを機に、ヒュンケルは殺意を瞳に浮かべる。
「わが父バルトスを失敗作呼ばわりして処刑をしたか!!!」
「・・そうだと言えばどうする？」それを知られたか。
「貴様を斬る!!」
「・・・・確かに俺はバルトスを処刑をした。」しかしそれは故あっての事！
　破れたならばともかく、如何なる理由があろうとも門番が敵を素通ししていいはずがない!!
　その判断は今も間違っているとは思えない、しかしだ「あやつを失敗作呼ばわりをしたのは、
　謝罪しよう。」
　どの様な事で知られたかは知らないが、養父への侮辱は詫びねばならん。
「今の俺には分かる、あ奴にはあ奴の騎士道精神をもって戦ってくれていたのだと。」
　それが結果あの甘い行動になったとしても、そこは侮辱すべきでは無かったと今の自分には悔やまれるべき部分だ。
　本気かハドラーは。その声音と瞳には嘘は見られない。

「その謝罪は受け取らせてもらう、しかし！仇は討たせてもらう!!」
やはりあの死に様を見て、許せるものではない!!
―一度きりですよヒュンケル、仇の思いで戦うのは―ここに来る途中で約束をしたティファの言葉を思い出す。
分かっている、復讐は一度きり！その後はダイ達を助けるのを一番として剣を振るおう!!

二人の戦いは凄まじいものとなった。ヒュンケルの鎧には魔法は通じづらく得意の火炎系は封じられているが、ヘルズクローで応戦をする。
しかし剣での戦いはヒュンケルの方が上回り「ブラッディー・スクライド!!!」
大振りになったハドラーのヘルズクローを弾き、心臓をぶち抜く。勝ったとヒュンケルがそう思った瞬間、―左の心臓―をぶち抜かれて口から血を吹いたハドラーの顔がニヤリと笑う。なんと右手が自分の左胸部を貫通してきた！
「甘いわヒュンケル!!!」―ゴオウ!!―
殺ったと思い気を緩めたヒュンケルの隙を突き、右手のヘルズクローを貫通させてそのまま鎧の中にメラミを流し込む！
「う・・ぐう・・ぐわああ!!!」―ドシャ！―
如何にヒュンケルが強くとも、体内に炎を流し込まれてはなす術がなく、地面に崩れ落ちる。
「貴様は・・何故死なん・・・」
「ふん、俺には心臓が二つある。一つ潰されたとて問題はない。」
ハドラーは何気なく言うが、心臓を潰された激痛はあったはずだ。なのにそれに構わず反撃をしてきた・・・確実に強くなっている・・それでも・・勝ちたい！父の仇を!!
ヒュンケルもまた精神力のみで立ち上がり、剣を兜の位置に戻す。
最早立っているのがやっと・・それでもできる事はまだある。
―命ですよ、ヒュンケル―
―・・分かっています先生・・―あの技―を使います―

かつては心の底から憎んだ師の言葉を思い出し、気力で立ち上がったヒュンケルは心の中で師と話す。
一度だけ教えて貰ったあの技を。
む！ヒュンケルは何を？
手をクロスさせて・・闘気が・・しまった!!
「ベギ・・」
「遅い!!クルス・・グランド・クルス!!!」—カァァァァァ!!—
もしも攻撃の手段がなくなった時のアバン流の奥の手、己の命を闘気にして放つ大技を放った。—せん・・せえ・・教えてくれて・・ありがとう・・—
グランド・クルスは本来は剣の柄程度の大きさの集中技だが、ハドラーを討つためにとんでもない規模で撃ってしまい、ギリギリ生きていられる程度まで消耗し気を失ってしまう。
その後生きていたハドラーの殺気に体が無意識に動き、仇を討てた。

つつがなくになって無い!!

予定通りヒュンケルが氷の柱を、クロコダインが炎の柱を打ち壊して結界は破れた。
その後は原作と変わらず、ダイ兄はヒュンケルの助言を受けてアバンストラッシュを完成と。
惜しむらくは原作通りすぎで、クロコダインがザボエラを取り逃がした事か。
あのダニさっさと消したいから、ロモスで薄汚い作戦をもちこんだ奴は芯から腐ってそうだから逃がさない方がいいと念を押したんだけど、まあ仕方がない。
あのダニがいないとハドラーは真・ハドラーにバージョンアップされなくて、どんな未知数が生まれるかなんて面倒くさい。
ちょこちょこと原作と違うのもちらほら見られた。
まずポップ兄、爆弾岩の大群の下に隠れ潜んでいたフレイザードの気配感じて、バダックさんの爆弾を投げて、フレイザードの潜んでる辺りでベギラマを打ち込んで爆弾岩との相乗効果で大ダメージ与えてやってた、非道をしたんだからざま見ろだ。
次ヒュンケル、ヒュンケルって防御下手でいつも特攻精神持ってんですか位に大怪我しながら戦闘終了な人なので、島でのお友達ベホイミスライムのべほちゃん貸して上げたら、べほちゃんが燃えてた。

―回想―
この人いったい何なの⁉死ぬ寸前まで戦うなんて馬鹿なの？阿呆なの？死にたいの？
ハドラーとの一騎打ちの為に、ティファから借りたべほちゃんを森に隠したヒュンケル。彼の側に来たべほちゃんは心底呆れて、ティファから渡された薬の瓶を開けて傷に流し込み、ベホイミをしながら決意をした。
この人僕がいないと駄目な人だ!!　―べほちゃん、これから会ってもらう人はかなり自分の事を粗末にする人だから苦労かけるね。―

ティファの言う通りだ！こんなひどい戦い方をしていたら、早晩死ぬか良くても廃人になる!!
そうならない様に僕が面倒を見ないと!!!—触手を高く上げて決意をするのであった。

う～ん、あの温厚なべほちゃんを怒らせるヒュンケルもある意味で凄い。でもこれで原作よりもダメージが残る体になる確率が減ったか。
意外でもないけどヒュンケルもべほちゃんを労わってる。
肩に乗せて移動して、フレイザードに負け勧告してる時は面白かった。

—回想—
「この人数では貴様に勝ち目はない！降伏をしろフレイザード!!!」
ここまではまあ普通なんだけど、「べほ、危ないからお前は向こうにいってまた隠れていろ。」—分かった！怪我しないでね!!—
さりげなくべほちゃんを気遣ってた。どうやらいいコンビになりそうな二人で安心した。
まあ見ていたダイ兄たちは少しきょとんとしてたけどまあいいか。
フレイザードなんて自分を舐めてんのかとかヤンキーぽくきれてたけど、倒したし問題無し。

姫の方はギリ間に合わなくて、マァムさんの魔弾銃壊して氷から出しても死ぬ寸前だった。
私の薬なければ死んでたか。クロコダイン達に渡した青いマジックリングには、火傷・凍傷・ＨＰ・ＭＰの回復薬と生命力底上げの万能薬を渡した。
生命力底上げは、デルムリン島の洞窟で手に入れた精霊樹の葉っぱ入り。
かつてはテランに生えていた精霊樹、父さんが破壊して今はもうな

いこれから手に入らない。奇跡のアイテムを薬にしたものだからよく効く。
死にかけて飲めないレオナ姫に、ダイ兄は涙をこぼしながら口移しで飲ませて事なきを得た。
あの薬はあと四・五本しか作れない、大事に使わないといけないか。
ここまではいいんだけど、厄介事発生!!
なんとあの無口・冷徹参謀ミストバーンに、ポップ兄とマァムさんが名前覚えられちゃったよ!!何故に⁉まだ序盤でレベル低い二人が目を付けられるって運があるの無いのどっち!!
原因は二人の優しさだった。
これまた原作通り、空の技を会得したダイ兄にコアを斬られたフレイザードの元にミストバーンが来て鎧を貸し与えて、サクサクとやられたことに文句を言ったフレイザードの目を踏みつぶしたミストバーンに、二人が怒った。
「何て事すんだよ!!そいつはお前の仲間だろ⁉」
「仲間にそんな事をするなんて最低よ!!」
ミストは心底驚いた。今まで殺し合いをした相手の為に怒る者なぞ、ついぞ見た事も聞いたことも無い。
だが二人の目は本気であった。子供だ大人だの関係なく、その瞳には純粋な怒気と、覚悟が見て取れる、素晴らしい！
紋章を発動させたダイの力も素晴らしかったが、この二人の子供の中にも素晴らしい力と心が宿されている!!
自分は特殊な者の為、どうしようとも強くなることは出来ない。それ故に、強くなろうと努力を惜しまないもの、志を持つものをついつい興味を持ってしまう。
「・・・我が名はミスト・バーン・・名は？」
短くとも人間と会話をしたのは弟子のヒュンケル以外なく、まして敵対者と言葉を交わしたことは、生まれ出でて数千年で初めてで、案の定倒れ伏しているヒュンケルが信じられないものを見る目で自分を見ている。
「俺は勇者ダイの一行の魔法使いポップだ!!」

「同じくマァムよ！」
二人の目には敵愾心が煌めいている、本当に素晴らしい。
「・・・覚えておく・・・」

そう言い残してミスト帰っちゃったけど、不味い、敵の大幹部どころか大魔王バーンの本体管理者に覚えられていい事あるはず無し。でも仕方がない、二人共フレイザードの最後があんまりにも酷いから怒ったんだし。
でも、バルジ島に仕掛けておいた式で覗けて良かった。
良かったけど、今の私の状況が良くない。
テランの回復の泉の水・リンガイアのＭＰ回復薬の泉の水は順調だったのに、最後の一つ、火傷用の薬草が見つかんない!!これは本当に不味い!!!
次って間違いがなければ父さんが来る！そしたらライデイン・ギガデインも、もれなく降ってくる!!
雷の傷はほぼ内臓や皮膚の火傷が主だから、火傷用が欲しいのに!!
いつもあるロモスの薬草の宝庫に行ってもないなんて！これじゃあ薬の精製も入れて二・三日かかっちゃうよ！下手したらダイ兄の記憶消されちゃう!!
双竜の紋章だののフラグいらんから！ダイ兄も父さんも生き残らせる方面で行くんだから!!
双竜閃がなくとも強くなる方法は考えてあるし、なによりもポップ兄の事がある。
記憶消される＝ポップ兄のメガンテフラグ立つのだけは絶対に阻止もんだ!!
あれは原作通りいく確率が低いんだから、回避したいものの中でもトップにはいってる。
竜の血がなくてもポップ兄なら強くなれる！だって私のお兄ちゃんだもの。
バランとダイ達との激突に間に合わせるべく、式でバルジの決戦を覗き見しながら薬作りに邁進するティファであった。

洞窟のお茶会

島での決着がつきレオナを無事に救出した後、タイミングを計ったように気球でエイミとマトリフが迎えに来てくれた。
「俺を誰だと思ってやがんだよ。水晶の一つも扱えねえ奴が大魔導士名乗るかよ、ひよっこどもが。」
タイミング良すぎて唖然茫然したダイ達に悪態をつきながらもテキパキとレオナを診察をして、エイミとバダックと姫を気球に乗せて三人を返した後、有無を言わさずダイ達とクロコダインとヒュンケルも無言で掴んでルーラで洞窟に連れ込んだ。
「お前らけがの具合見せてみろ、特に鎧を貫通されてるお前が一番だ。ダイはマァムで足りんだろ。」
水晶で見た時は寿命縮むかと思った。まだほんの子供の彼等が命懸けで戦っているのを見ているしかできない己を呪いつつ。
ダイ達には王族を助ける気はないと言ったが、本当は助けられないが正解。
長年の無理が祟り、長時間は戦えない。仮に奥の手で今回の敵を倒せたとしても、ダイ達の成長の妨げにしかならない。
自分はもういつでも戦いに行ける身ではない、ならばせめて子供達の成長を妨げる老害にはなりたくないと、サポート役に徹するつもり・・だったが、「・・・おめえさん、何でこんなに、軽傷なんだ？」
鎧の傷からして体内は大ダメージだろうと、急いで斬撃・体内ダメージ用の万能薬を作ったのに、必要がない程綺麗に治っている！
よく見れば、あの激闘の割には全員の怪我が少なすぎる。
ダイ達の今のレベルと、今回の敵との実力差と能力を考えて火傷・凍傷用もこさえていたのに、そちらも出番がないようだ。
ヒュンケルと呼ばれている若者の肩にベホイミスライムが乗っているが、そんなものでは間に合わない筈。
軽傷なのはいい事だが、「おいポップ、ちょっと来い。」
なにか回復薬を持っていたのだろうか。
「・・んだよ師匠・・俺もう寝てえんだよ！」

洞窟の中には机と数脚の椅子がある。いつか―嬢ちゃん―と―坊や―達を招待するために。
その椅子をポップは無断でマトリフの前に持ってきて、ドカリと腰を掛ける。
「・・・今日は見逃すがな、次はそれ使う時は許可とれよ。
それよりもお前達、いやに傷が少ないじゃねえかよ。なにか回復薬を持って行ったのか？」
「あ～あそれか～んふふふ～」自分の自慢の妹分が用意をしてくれたもんだ。
急にポップがニマニマ笑いをし始める「気色悪いぞ！サッサと言え!!」
「分かったよ、理由があって別行動をしている奴が用意してくれたんだよ。」
「・・なんで来れなかったんだ？」
「あ・・そう言えば・・ヒュンケル！何で―ティファ―の奴来れなかったんだ？」
「そうだよ！ティファどうして来れなかったの？」
「まさか大怪我したの⁉」
あの溶岩に巻き込まれて、助けたヒュンケルとクロコダインに薬を託して治療中なのかとダイ達は案じる。
ティファ・・あの嬢ちゃんの本名か？
「いや、ティファに怪我はない。薬のストックが切れたから作りに行った。」
「えー！それってたくさん作れないの？じいちゃんは沢山作って保存してたよ。」
「既存の物よりも効きがいい分、保存が難しいらしい。」
「そうか・・」
「しゃあねえ、俺達の為に作ってくれんだから。」
「我慢しましょうダイ。」
「それから伝言もある。この先はもっと強敵が来るから、早めに備えたいそうだ。」

―強敵―その言葉にダイ達の顔が真剣になった。今回の件で自分達は間違いなく魔王軍の一番の敵と目されたはずだ。
軍団長を三人も撃破し、うち二人を一行に引き入れて戦ったのだから。
今後は魔王軍も本腰を入れてくるはず、ティファはそれすらも見越して自分達よりも先の道を進んでいる。
「・・やっぱあいつは凄えな・・」早く会いたい、会ってあのニコニコ顔でいつもの様に料理を作って欲しい。
―料理人はいつでもどこでもどんな時でも料理を出すんです―
そう言っていたのに。
ダイ達のみならず、ヒュンケルとクロコダインもいれた全員のしょげように、マトリフは少なからず驚いた。
まるでアバンが一年間不在だった時の、かつての自分達を見ているようだ。
―ある事―があり、アバンは一年間おらず、自分を入れた一行の者達の精神的ダメージは計り知れなかった。
そこまでとはいかなくも、―ティファ―とはこの一行の精神的支柱の要のような存在なのだろうか。
「そういえば・・」
クロコダインは腰の巾着をごそごそと探った。ティファから青のマジッククリングの他に、オレンジのマジッククリングも預かっていたのを思い出した。
戦いの後に出してほしいと言われて。
ポップ達に言って机の上を片付けさせて出してみれば、中身はお茶会セットだった。
茶葉が入った瓶・日持ちをするクッキーと焼き菓子、ティーポットにマグカップが七・八個、それとレモンとスライサー用の果物ナイフ。なんと酒瓶も二本とアメの入った瓶も入っていた。
きちんと湯沸かしポットも入っている。
「・・・・これって全部ティファが用意したのかな?」
「そうだろな・・」

「いつの間に？」
三人は不思議そうな顔をした。バルジ島に来る前はずっと一緒に居たはずなのに、いつの間にこんなものを用意をしたのだろう？しかも不在を前提しているかのように、手紙も入っていた。
―薬の材料集めで不在にしますが、一行の料理人が何も料理を出来ないのではいけません！
なのでこちらを用意をしました。状況は分かりませんが、落ち着いている時に召し上がってください。
もしも誰かにお世話になっているのでしたら、きちんとお礼をしてから一緒に食べて貰ってください。

ティファより
追伸、ヒュンケルにべほちゃんを貸しました。もしもべほちゃんがヒュンケルと一緒に居たいといった時には好きにさせてあげてください。
モンスター筒も入れておきました。―

見れば白いモンスター筒も机の上にあった。
「だって、べほちゃんどうしたい？」
唯一モンスターの言葉が分かるダイが、べほちゃんに今後の事を聞いてみる。
「―僕はずっとヒュンケルと居る！この人放って置いたら死んじゃうよダイ!!―」
べほちゃんは触手をヒュンケルの頭に回し、へばりつきながらダイに訴える。
「おい、いいのか？ティファと居るよりも俺達といる方が危険だぞ？」
ダイとティファほどではないが、育った環境で何となくモンスターの言葉と気持ちが分かるヒュンケルは、べほちゃんの言いたい事を察して困惑をする。

ティファとも別れた後、クロコダインと道々話し合い、魔王軍の本拠地である鬼岩城に偵察に行こうと。
危険は一行の中でも最も危険な所に、果たしてべほを連れて行っていいかどうか悩むところだ。
しかしべほちゃんはひっしりとヒュンケルにしがみつき、二本の触手を合わせてウルウルとした瞳でヒュンケルを見上げ、絶対に置いていかないでと目で訴える！
「・・分かった、よろしく頼むぞべほ。」しょうがない奴だと苦笑をしながら受け入れる。
「ダイ、筒はいい。べほは俺の肩に乗って移動するだろうし、何かあったら隠れているように言っておく。」
べほはガッツポーズをして大喜びだ。
その光景を微笑ましげに見ていたマァムは、机の端の小さな小箱に気が付いた。
「何かしら・・」よく見ればゼンマイねじがあり、ダイ達も寄ってきて蓋を開けてみれば、それはオルゴールだった。
―疲れた時に聞いてください―メッセージも入っていた。
マァムがねじを巻いてみれば―キィンティン～―音楽を奏で始める。
綺麗な音色に、マァムはうっとりとする。
これはティファがたった一度だけアバンを頼って一緒に作ってもらったオルゴール。
二日目の特訓後、ダイ達が昼寝をしている時の事。
ティファとしては決死の思いで顔を真っ赤にしながら作り方を教えてほしいと頼めば、
―ティファさんが私を頼ってくれました!!―
内心でジンとしながらともに作ったのだった。
曲名は―星に願いを―それはティファだけが知っている異世界の音楽。
その曲の様に、皆の上に幸せが訪れますようにと祈って作られたオルゴール。

そのゆったりとした音楽を聴きながら、ダイ達はお茶会の準備を始める。
「ポップ、お湯湧いたからマグカップを持って行って。」
「あいよ～、ダイも手伝え。」
「これでいいかな？」
「クロコダインは酒か？」
「俺は紅茶でいい。」アメを食べたいからな。

こいつは・・・。
マトリフは心底驚いた。クロコダインとヒュンケルの事はダイ達は話していないが、自分の情報網で、二人が元魔王軍なのを知っている。
別にその事をとやかく言うつもりは毛頭ない、かつてアバンも敵を改心させていたからだ。
大人の対応で許すのは分かるが、ダイ達からはそれ以上の、何と言うか二人は元からいる、古くからの仲間だったような印象を受ける。
ヒュンケル達の方は罪の意識があるだろう。それを感じるが、悲壮感や暗い影が一つも見当たらない、ダイ達がもう二人に許しを与えたのだろうか？
子供特有の優しさと柔らかい心で。アバンの教えか、それともまさか。
先程の手紙をもう一度読み返してみる。間違いなく嬢ちゃんの筆跡だ、ロカの薬メモと届けられた手紙と同じ。
しかし内容が、まるでアバンが書いたような飄々とした感じを受ける。いや、アバン以上の事をしている。
あいつもよく料理を作っていたが、音楽までは考えていなかった。
お茶会セットと、そして今流れているオルゴールの音色でこの穏やかな雰囲気が出来た気がする。
自分の知っている嬢ちゃんとは全く違う、確かに嬢ちゃんは音楽の才もあったが、もっと子供らしく、こんな風に飄々とした手紙を書いてきたことはただの一度もない。

・・まさかアバンの真似をしているのか？師を喪ってしまったダイ達の心を支えるべく、だとしたら納得がいく。アバンを喪ったというのに、ダイ達に悲しみはあれど、心に暗い影は見て取れなかった。
―嬢ちゃん―がアバンの真似をして癒したというのなら「おいポップ。」
「何だよ師匠、もうちょっとで出来っから。」
「そうじゃねえ、ティファって奴はアバンから何か頼まれごとをしていたか。」
「いや・・でも―眼鏡―を預かってくれって。」
眼鏡だと！「分かった、早く準備しろよ。俺は酒を飲む。」「へいへいっと。」
ポップをけむに巻きながら確信をした。
間違いねえ、嬢ちゃんの奴！アバンの代わりをしてやがる!!
伊達眼鏡の理由を自分は知っている、ならばアバンがティファに預けたものはこいつ等だ。
ティファは文字通りアバンの全てを預かり、見守りながら育てようとしている。何かあればすぐに助けられる位置にいながら。

―大丈夫か？―マトリフは一抹の不安を覚える。
ティファのすることでダイ達は一喜一憂をしている、この状態でアバンの様にティファに何かあれば大変な事になりそうだと。

―後にマトリフの予感が的中をする。ティファもそれを見越して様々な対策をしたのだが、まさかあれ程一行とその周りの者達の精神ダメージが大きくなるとは予想だにしていなかった―
師匠できたぜ～。ポップののんびりとした声が、暗い思考を破る。
今考えても詮無い事だ、今はそれよりも喜連の無事に帰って来た事を喜ぼう。未来は誰にも分からないのだから。
「おいポップ！ゴブレットは大目に出しておけ、気が利かねえな。」
「分かったよ！・・・飲んべ・・」―ゴン!!―
「ってえ――!!あにすんだよ暴力師匠!!」杖で人の頭叩きやがった!!

「うるせえ！弟子の分際で師の事をあれこれ言うんじゃねえ!!」もっと叩かれてえか！
「あんだと!!」
「なんだ!!!」
　マトリフとポップの師弟喧嘩に、一同は唖然としたが次第にマァムはおかしくなり、くすくすと笑い、それがダイ達にも移り大笑いになった。
「お茶冷めちゃうよ～。」
「マトリフ殿も飲まれよ。」
「ポップも少し落ち着け。」
「マトリフ叔父さんも座って頂戴。」
「ちぇ！」
「け！」
　二人は赤くなりながらも席に座り、座ったポップは真剣な顔をマトリフに向ける。
「師匠、助けてくれてありがとう。」真摯な声でお礼を言い「「ありがとうございました」」
　ダイ達もそれに続き、マトリフを大いに照れさせてお茶会が始まった。
　皆良い子達だ、クロコダインとヒュンケルも俺からすりゃあ良い子に入る。
　己の犯した大罪と向き合うののには生半可な覚悟ではやれない。その覚悟が二人にはある。
　嬢ちゃんにも会いたかったが、いつかそのうちに会えんだろう。

超竜軍団編
ー幕間・魔王軍ー①

紅茶を飲んだ後、ダイはそわそわし始める。
「なんであいつはあんなにそわそわして落ち着かねえんだ？」
「いやさ師匠、ダイはパプニカのお姫さんにぞっこんなんだよ。」
「成る程な～」

マトリフの洞窟がほのぼのしている時、魔王軍本拠地・鬼岩城は緊張感が奔っている。
フレイザードの敗北で、ダイ達に対する今後の方針を決めるべく残りの軍団長がまたもや招集をされた。
（生きている・・俺は確かに死んだはずだが・・）
意識の無くなったヒュンケルに、それでも心臓を貫かれて死んだのは自覚をしている。
「バーン様が貴様を生かすとお決めになられた。」
甦った直後にミストバーンに言われた言葉に、バーン様に対する忠誠心がさらに高まる。
それはともかくとしてダイ達の成長は早すぎる。まさか魔法使いのポップが、あの土壇場でベギラマを、それも威力は僅かながら向こうが上。
マァムといったか、あの娘も強き闘志を持っている。厄介な芽は早々に潰さねば！
しかし、敵の名前をこうもすぐに覚えるとは。アバン達の頃にはなかったが、それだけダイ達が厄介なのだろうか？
―敵の名前もきちんと覚えておくのは司令官としてのお仕事でしょう？覚えられない方がおかしいです。
そもそも敵に対する礼儀でしょう―
不意にティファの声が頭に浮かんできた！
―敵の名前を覚えるのも礼儀の内なのか？―

―そうですよ、せっかく一流魔王に育っているんですからそのまま育って下さいね。育ったら私が貴方を倒します！―
―ふん！島には来なかったくせに!!―
―こちらの都合です！放っておいて下さい!!―
頭の中でぎゃーすか喧嘩をしてしまったが、これもアバンの時にはなかった。
いつも意識していたが、こんなことも初めてだ。おかしな娘だあれは。
「ドラ―殿・・」
さっさとギッタンギッタンに「ハドラー殿!!」「・・・バラン・・」
「いかがした、先程から呼びかけているのに全く気がつかずに。」しまった。
本当に気が付かなかった！
―貴方はまだまだですね～―　少しうっとおしいぞ！
「バルジ島での敵の事は報告を受けた。手こずっているようならば手を貸そうと思ってな。」
バランはバルジ島の事を聞いてすっかり戦士の血を湧かした。
クロコダインとヒュンケルを撃破し、更には魔王軍の不完全とはいえ包囲網を突破してフレイザードを討ち破った猛者に成長をしている！是非手合わせを願いたい!!
「いや、お前には引き続きカールの女王達の行方を追ってくれ。
奴等の騎士団はほぼ無傷で行方をくらませたのであろう？再結集をされれば厄介だ。」
バラン達がカールを攻め滅ぼしに行った時、何故か城下町には人っ子一人おらず、城ももぬけの殻！
これはティファの式神・夢告げを発動したのを当然魔王軍は知らず呆気にとられた。
カールのフローラは柔軟な思考を持ち合わせ、リンガイアに竜の軍団が攻め上った情報も入っており、夢は真実かもしれないと取るものも取らずに逃げる指示を出し、国民からの支持も厚い女王の英断でカールはほぼ無傷で逃げおおせたのだ。

当然魔王軍としては手痛かった。
そこは分かるのだが、「捜しものはザボエラの方が得意なはずだ。それとも私では力不足だろうか？」
「まさか！」むしろ象が蟻を踏みつぶしに行くようなものだ！
だからと言ってはいそうですかと言えん!!
ダイ達、それもティファなんぞに会わせてなるものか!!
「くどい！これはもう決定事項だ!!」
持てる覇気を全て込め、バランの申し出を全力で阻止する。
実力は圧倒的にバランの方が上だが、権限は自分にある。姑息な手段ではあるがそれを押し通させてもらう！
一体、この短期間に何があったのだハドラーは？
二年前に復活をして会わされた時はものすごい小者だったのが、デルムリン島とやらに行ってから急激に変わった。先程の気迫は侮れん。
この様子ならば手柄を取られる云々は言わないだろうが、ならば何故自分を外すのか分からない。
本当に今のハドラーは読めない程の深き器を手に入れたか。

まさか当代の竜の騎士に認められたと知らないハドラーは、バランが口を噤んでくれた事にホッとしながら会議場に入った。
これで大丈夫、そう思ったのは甘かった！
「ハドラー!!ザボエラが全て白状したぞ!!!」激昂してきたバランが追ってきた!!
「何事だバラン！バーン様の御前だぞ！」
一応叱咤したが内心で冷や汗が出る！ザボエラの奴!!余計な事を!!!
「貴様に問う！」
「聞いてやろう。」冷静装うが嫌な予感しかしない！
「貴様は知っていたか、勇者ダイという少年の額に紋章が輝くことを!!」やはりか、ザボエラめ！余計な事を!!
―惚けますか？―またもやティファの、それも嘲るような声がす

る。―舐めるな!!―
「知っていた。」こうとなれば腹を括るのみ!!
知っていた・・確かにハドラーはそう言った！
ハドラーの様子がおかしいので後から来たザボエラに、島で何か変わった事がなかったかを聞いてみれば、「確かダイと呼ばれて小僧の額に紋章らしきものが光った。
今回の事ではないが、クロコダインの時には同年代の小娘の方にもあったかの・・」
同年代の少年と少女に額に紋章だと!!もしや・・それは・・だからハドラーは!!
「企みが読めたわハドラー!!!」絶対に許さん!!
そして尋ねてみれば知っていた！
「貴様は私の正体と魔王軍に席をおく理由を知っているはずだ!!そして我が子等を捜していた事を！」
「ああ全て知っている！」その頃は何をしているのか阿呆らしいと見ていたが、あの当時に見つけてくれればこんな面倒ごとは起こらずに済んだものを!!
―他力本願はいけませんね～―　―やかましい!!―
「知っていてなぜ黙っていた!!」バランめ、返答次第では俺を斬るか。
「あ奴等がその辺の子供らならば教えただろうが！今のあ奴等は勇者一行の勇者とその仲間!!
貴様と合わせるわけには断じていかん!!」
特にティファに合わせた日なんぞは・・一番ティファに変えさせられたのは自分だと自覚をしている。
よく最近部下たちが―今のハドラー様いいよな～―　―何があったか知らんがいいよな～―と言われているくらいだ。
ポップは島で会った時は様々な意味で強くなっており、ヒュンケルに至っては復讐の相手の自分を前にしても憎しみの色は見られなかった。
もしもバランが同じ事が起きたら?そんな博打は打ちたくもない!!

「バラン！貴様は言いきれるのか⁉我が子等に会い、親子の情に流されないと!!」
「・・それは・・」
「しかも貴様の―娘―はとんでもない者に育っておるんだぞ!!」
「はあ⁉」
　バランは呆気にとられた。ディーノが強くなって目を付けられているのは分かるが、ティファは寸前まで情報がないのに、もうハドラーが目を付けているのは何故だ？
「誰に対してもズバズバと物を言い、気が付けば相手は説得をされているんだか丸め込まれているんだか知れんが、確実に変わらされているんだぞ！」筆頭は主に自分だ!!
「お前があ奴等に会って我が軍に反旗を翻せば、間違いなく魔王軍にとっての最大の脅威だ！最高司令官を任ぜられているものとして許可は出来ん!!」腹蔵なく全部答えた！これで斬りたければ相手になる!!

ー幕間・魔王軍ー？

二人の間にはバチバチの闘気が渦巻く。バランとしては我が子等に会うのを邪魔する者への怒り、ハドラーはバランを止めるべく。

―ズバズバ物言いをする娘―ハドラーが放った一言で、昔に出会った娘を思い出す。

自分を―おひげのおじさん―と呼び、ルードの面倒をなにくれとなく見ていた奇妙な少女。種族の垣根無く、自分達を全く恐れずにニコニコと笑っていた変わった子供。

もしもティファがその子に似ているのならば「私も舐められたものだなハドラー。」

「・・・・」

「私が我が子等に会ったからと言って、私の中の憎しみが消えるわけでは決してない！」

「・・あの娘に会ってそう言いきれるのか？」無理だろう！あいつは本当に遠慮会釈なぞ無いと断言できる！

「ふん！昔貴様が言ったような娘に出会っているのでな、もう慣れたわ。」ティファだとてあそこまでではない筈だ！あの娘は本当に変わっていた。

「何だと！あいつの様な者が他にもいるのか⁉」あれ一人でもうんざりとするのに、もう一人いると思うと頭痛がする⁉

まさかその二人目の変わった娘がティファの事とは思っていないが、口論は激化をする。

「とにかく！貴様が懸念しているような事は起こりえない⁉さっさと許可を出してもらおう！」

「いかんぞ⁉許可はせん⁉」

「貴様！まだ言う・・」　―ガシャン⁉―　「はいストップ二人共～」

口論に夢中になっていた二人は、大鎌が間に割って入って来るまで―それ―の存在に気が付けなかった。

赤と黒の仮面に、同色を基調としたトランプのジョーカーのような男、大魔王バーンの直属の配下・死神キルバーンの存在に。

「駄目だよ～ミスト、二人の喧嘩止めて上げないと～。皆仲良くしようね～。」
　笑いながら歌うようにミストに話しかける唯一の人物。
「それに二人共、大事な事はバーン様にお伺いを立てないと。」
　いつもはハドラーに任せているが、今回は珍しく天井に掛かっている石像を通して出席をしている。
「バランよ、竜の子等を引き込む自信はあるか？」短くとも伝わる深みのある力強い声が、緊迫をした会議場の雰囲気を一変させる。
「無論！あの子等を人間の側に置いておくつもりなぞない!!」
「では己が宝を取り戻すがいい。」許可を出した後、石像の瞳から光が消え失せる。
「決まりだな。」大魔王の命は絶対だ。
「・・はあ～・・こうとなってはバラン、丸め込まれるなよ・・」
　ハドラーは頭をがりがりと掻きながらも観念をした。最早バランの憎しみの念を信用するほかない。
　あのとんでもない娘の言葉に負けないでほしいものだ。
「時にキルバーン、わざわざこのために来たのか？」
　軍内でも―始末人―と呼び名で恐れられているキルバーンが、これだけの為に来たとは思えない。
「違うよ～、もしもバラン君の問いに君がすっとぼけたら、今までの敗戦の責任を取らせるって脅して来いってバーン様に言われたんだよ～。
　君が正直に、しかも覇気満載に答えてくれて、成長していたのを喜ばれて脅しは無しってすぐに取り消しも来たから安心してね、ハドラー君♪」・・すっとぼけなくて本当に良かった。
「それともう一つ、裏切り者が偵察しに来る前にこの城を移動させておけって。」
「・・ちょっと待て！動くのかこの城は!!」
「うん、この鍵でね。」ガチャリ・ゴ・・ゴゴゴゴゴゴ!!
　キルが大きなカギを石像の真下の壁にある穴に入れて回すと、城全

体が鳴動をして、動き出す衝撃が奔った！
「さあ！グランド・ツーリングにレッツゴーだよ!!」楽しい世界旅行だ♪
「フンフフ～ン♪」「・・楽しそうだなキル・・」おや！
「ここ最近どうしちゃったのさミスト!!長ければ数十年だんまりしてる君が、ここ数日で沢山話してくれるなんて～。嬉しくて僕は君をお茶会に招待しようかな～。」
「・・・・」いいからさっさと言え！
「怒らないでよ～、スマイル・スマイルね。でも君の言う通り僕は楽しい。
　まさかハドラー君が竜の騎士様と互角に言い合いが出来る日が来ようなんてね～。」
　復活した時は本当に小物でどうでもよかった小物魔王がさ。
「―成長する者―を見るのは君も大好きだろうミスト～。」ミストの背後に回って、後ろから両腕をまわせば拒絶されなかった。
　ミストも自分同様、成長し、高みを目指す者が大好きっ子だから。
「それとねもう一つ、楽しい事があるんだよ。」秘密を話すようにひそりと話す。
「今日みたいに、ピロロを置いて僕一人でネイル村に偵察に行った事があるでしょう。」
「・・それがどうした・・」
「僕その時にね、バラン君の娘さんにあったかもしれないんだよ。」
　ハドラーがクロコダインに一行の映像を悪魔の目玉で見せていた時、丁度自分はハドラーと暇つぶしにチェスをしていたので一緒に見ている。
「黒縁の大きな眼鏡をかけていた可愛い子でさ、よく覚えていたんだ～」実際にあったらもっと可愛かったけど。
「見逃したのか！」勇者一行のものと知りつつ？
　驚き怒ったミストはキルを振りほどき、真正面からキルを見据える。

「うん、だってその時は一行の人達をどうしろとは命令されていないもの。」全く悪びれてない！
「・・それで行かせたのか・・」
「そう！可愛かったし、それに僕の服をカッコいいって褒めてくれたんだよ!!」嬉しくなって見逃したんだよ！
そんなド派手な服をか⁉あり得ん!!ハドラーの言う通り、娘の方はとんでもない子に育っているのだろうか？
戦力強化の為に、バランの子等を魔王軍に引き入れる事をバーン様に進言をしたのだが、大丈夫だろうか？
一抹の不安を覚え、自分にはあり得ない幻の頭痛を感じ始めた。

おのれ！ハドラーめ!!
バランは自室のベッドに腰を掛け、まだ怒りに震えている。あの後根掘り葉掘りいつから知っていたのかを問い詰めて全て聞いた、聞けば聞くほどに怒りが煮えくり返った!!
ハドラーの話が本当ならば、半月前にデルムリン島に言った時点で知っていた事になる！
今の今まで隠し立てをしおって！本当に自分がどれほどあの二人に会いたかったか、どれほど世界中を回って捜したか！
赤子の二人の顔を忘れた事は片時もない、二人共ソアラに似て優しい顔をしていて、ティファの髪はソアラに似てふんわりと美しかった。
抱き上げればディーノには泣かれてしまったが、ティファは嬉しそうに声を立てて笑って喜んでくれていた。　キャァ～ァ～フフフ～
あの笑い声を思い出す度に、冷え込んだ心が温かくなる。
それをハドラーめ！外界との接触のないデルムリン島で育てば、多少は変わった子に育ってもおかしくはなかろう!!それを本人の咎のように言いたておって！
ティファがそれを聞けば傷つこう、今の内にハドラーの意識を改めさせよう。そうでないと可哀そうだ。

バランにとって二人を連れ帰る事は決定事項であり、その後の事を考えるのは自然な事である。
しかし意外だったのは息子の方ではなく、娘の方を警戒していた事だ。
ディーノは島を出て半月しか経っていないのに、ロモス王国から勇者一行を認められ、三人の団長を討ち果たし、バルジ島では完全に力を使いこなしていたとミストが言葉少なく教えてくれた。
自分の血を色濃く継いでくれたと嬉しいが、今だとてティファの情報は全く入っていない。
辛うじて容姿が分かり、アバンとやらの黒縁の眼鏡を譲り受けて掛けて旅をしている事くらいだ。
ハドラーが目を付けたのならば実力がありそうなものだが、そちらで活躍をしたとの情報はない。
それにどうやら中身の方がトンデモないと言っているようだが、五年前に出会ったあの娘に比べれば、多少の事では驚かない。
五年前に二度だけあった変わった少女、ルードの虫歯を心配し、文句を言っていたガルダンディーを叱り、ラ―ハルトとボラホーンにきちんと挨拶をして、そして、懐かしい子守唄を聞かせてくれた少女。
―説得だか丸め込まれているんだか変わらされている―そうハドラーがティファを評したように、あの娘によって竜騎衆の三人も変わってしまった・・以前ほど人間への憎しみが感じられなくなったような気がする。
ティファも、あの娘と同じなのだろうか？
一度だけ自分達とこないかと誘ったが、今度は聞かずに連れてこよう。同い年の子がいた方がティファもディーノも喜ぼう、ついでにデルムリン島にいる育ての親とやらも。
後は・・確かパプニカの姫君か・・ディーノの為に、人間ではあるが少女の一人くらい良かろう。二人に会うのがとても楽しみだ。

ー幕間・勇者一行サイドー

たったの十五でいきなり戦乱の渦中に巻き込まれて、助かったと思ったら次は人様の人生の裁きをお願いしますって、私の人生どんだけハードモードよ！

マトリフの海岸での宴の最中で起こった事案に、レオナは冷静を装いながら内心で絶叫をする。

さっきまでは、これぞ幸せ絶頂だったのに――――！

目が覚めたらパプニカの城の自室にいた。「ダイ君達が助けてくださったのです！」

三賢者の一人のエイミが泣きながら起きた私に説明をしてくれた。

そうか、ダイ君が約束守ってくれたんだ。―いつか勇者になって、レオナが危なくなったらまた助けてあげる！―

デルムリン島でテムジン達に殺されかけて、落ち込んでいた帰りがけにそう言われて、頬にキスをされたオマケ付き。

夢みたいなこと言ってと強がっても、心の中では彼の言葉に救われた。

王女様に近づく人間なんて、皆下心あるか、私の後ろにいるお父様か国に忠誠を誓う者ばかり。その中で、彼と祖父だというブラス老だけは違ってて、男の子が力強い瞳で守ってくれるって約束をくれた事は私の宝物になった。

強がりを言っても怒りもせず、―レオナ、約束を守るよ―指切りもしてくれた。

他愛のない子供の約束、それ故に彼の純粋性の現われで、私は年下の彼に心を奪われた。

その約束は果たされ、死にかけた私は無事に帰ってきた。

「彼等にきちんとお礼をしたいのです。」

父王に無茶な頼みを承知で言ってみた。

「場所は―マトリフの様のいる洞窟の海岸です」

それを出せば案の定お父様は許可を出してくれて、反対をした重臣

たちを説得してくれた。
彼の方の力と名声は、今をもってパプニカ城内では鳴り響いているのを承知で出して正解だった。
エイミとバダック、アポロも付いて行きたいと志願をしてきて、夜の空を気球で出かけた。
ドキドキする、ダイ君はどんな風に成長を「レオナ～元気になったんだね!!」
してなかった、良くも悪くも純粋な―子供―のままだった！
「ねえレオナどうしたの？俺の事忘れちゃったの？」
私のスカートくいくいしてうる眼で見てくる勇者って！
「あのねダイ君!!」
ここはビシッと言って！大人の男性の階段を上ってもらわないといけなな・・
「良かった、レオナ元気になって。真っ白な顔して―雪―みたいだから心配だったんだ。」
へ⁉雪って
「雪みたいに消えてなくならなくてよかった。ごめんねレオナ、助けに来るの遅くなって。」
「・・ダイ君・・」
にっこりと、温かく笑う彼はとても素敵で、このままの彼が愛おしくて、気が付いたら膝をついて抱きしめたら、力強く抱きかえされた。
そうだ、自分はこの純粋なダイ君が好きなんだ、気障な言葉なんて言ったらそれは彼じゃない、嘘を吐く大人・媚びへつらう貴族の子弟達と彼は違う。
彼は、私が大好きな私だけの勇者のダイ君だ。

勇者とお姫様の感動の再会に、兄弟子のポップは半べそをかく。
「へ、ダイの奴・・良かったじゃねえかよ。」
本当に姫君を愛している弟弟子の喜びを祝福しての涙だ。
姫が助からないかもしれないとなった時、ダイの取り乱しようは酷くて、ヒュンケルが出してくれたティファ手製の回復薬をひったく

り、迷わず自分の口に入れて姫の口へと流し込み、鼓動が強まった時には生涯放すまいというように自分の胸に抱きしめていた。
それ程愛している女性がいるのはうらやましく、応援したくなる。
「良かったわねダイ・・本当に・・」
マァムも涙を浮かべ、ヒュンケル達も優しい眼差しで二人を見守っている。

気球から続々と食べ物と飲み物が出され、マトリフは食べるよりもバダックとクロコダインと飲み、ヒュンケルはアポロに終始お礼を言われ、エイミにも言われて困った顔で受ける。
自分こそがパプニカ王国を攻めた者だというのに。お礼を言われれば言われるほど苦しくなる。

「ねえダイ君、アポロと話しているあの銀の髪の男の人誰？」
「アポロ？」
「ああっと、紹介していなかったわね。エイミは知っているでしょう？」
「うん知ってる。」
「彼女と、今銀の髪の人と話している彼がアポロで、今回大怪我をしてこれなかったけれど、エイミの姉でマリンっていう人と三人で―パプニカの三賢者―って呼ばれているの。」
「へ～、あの人って賢者様なんだ！凄いな～。」
「彼って正義の心が強すぎて、滅多に初対面の人と打ち解けないのよ。」
特にデルムリン島騒動の後は、自分に近づくものを徹底的に警戒しまくってたっけ。
「・・・その割にはヒュンケルと仲がいいような？」
「彼はヒュンケルっていうのね。」
「うん、あの人は・・」
「ダイ、そこから先は自分で言う。」

「おい、ヒュンケル！」ポップは慌てて止めに入ろうとした。
今日くらいは言わなくともいいではないか、もっと一行と共に世界を助け、誰が見ても正義の者になったと言われるほどになってから罪の告白をすべきだと。
「ポップ、お前の考えている事は分かっている。お前の考えは正しい、俺達の身を案じてくれてありがとうな。」
心配をしてくれる弟弟子の癖ッ毛の髪をクシャリと撫でてお礼を言う。
「・・勝手な奴・・馬鹿野郎・・」
小声でも悪態をつくポップは本当に可愛い弟だ。
こちらを涙目で見るマァムも、本当に言うのと悲しそうな顔を向けてくれるダイも。
「クロコダイン。」
「分かっている。」
どんなに手柄を立てても、自分達の罪は自分達が一番知っている。逃げるわけにはいかない！
「俺は元・魔王軍！パプニカを攻めた不死騎団の団長のヒュンケルだ!!
この度は英明と名高いパプニカ王女のレオナ姫に、俺の罪を裁いてほしくまかり越した。」
「同じく元・魔王軍！ロモス王国を攻めた百獣軍団の長のクロコダイン！
ヒュンケルと同じ理由でまかり越した。姫君、我等両名は如何なる罰とてもうけさせていただく。」
たとえそれが極刑だとしても文句はない。
二人の静かな告解に、宴の楽しい雰囲気は霧散をする。
エイミとバダックは信じられない者を見る目でヒュンケル達を、ダイ達は苦しそうな顔で自分を見つめている。
ダイ達の表情で分かってしまった、彼等の言っている事に偽りは無いのだと。本当に元魔王軍なのだと。

半月前に起きた大戦。神のお告げの夢があったとて、民達は傷つき、田畑を焼かれ、兵士にも数十人の死者が出た。
先のハドラー大戦よりも酷くはないと父王達が言っていても、自分達若い者にとっては十分に酷いものだと思っていた。
その元凶の尖兵の隊長格が自分を助けた立役者の一人だなんて！理不尽で!!でも滑稽で、現実感が湧かずにうまく思考が纏まらない。
誰も助けてくれない、だって裁きを下す王女は自分しか・・・
「恐れながら姫君に言上奉る！」
くらくらとした頭に、凛とした声が靄を払っていく。
声の主を見てみれば、三賢者筆頭にアポロだった。
その瞳は何かを決意した強さがある。彼は正義の人、罪は罪だと言うのだろうか？
ダイ君達をどう説得しなければならないか、罪の重さはどのくらいをと算段し始めれば意外な言葉が飛び出した。
「彼等に温情を掛けてほしく。」
アポロだとて、己の国を攻めた彼ともう一人のクロコダインを許せない気持ちで、心がどうにかなりそうだった。
如何に勇者の助けをして、姫君を救ったとて処刑もやむなし。
そう思うのだが、姫を命を賭して助けると言ったあの瞳が忘れられない。
命を懸けた者だけが見せる本物の決意の瞳だった。あれはきっと罪を償うためにはどのような厳しき道を進む事も厭わないという、不退転の表れだったのか。
この先彼等が真の意味で許される日は来ないのかもしれない、処刑された方がいっそ楽なのかもしれない、それでも！自分は彼等を信じる!!姫を助けると言ったあの瞳を！覚悟を!!
「レオナ！ヒュンケルもクロコダインも俺達を助けてくれたんだ!!」
「二人とも命を懸けて守ってくれたんだよ姫さん！この先もずっと俺達と共に世界を救うって言ってるんだ!!」
「お願いです姫様！彼等を一度だけ信じてあげてください!!」

アポロに押されるようにダイ達も彼等の助命を願う。
「姫様、そこな獣王クロコダイン殿の人柄を、儂は見せていただきましたぞ。」
ダイと自分を助け、敵の大将首の一人を逃がしたと大層悔しがっていた。
「姫君は俺達が助ける、爺さんは回復薬を飲んで待っていてくれ。」
優しく自分を労わってくれた本物の武人だと。
そうか、そうなんだ。世界を混乱に陥れる大罪を犯して、その過ちに気が付いて罪を償おうとしている二人。
王族は公平であれ・厳しくあれ、そしてもう一つ大切な教えがある。
「裁可を下します。元・魔王軍の二人には—罪を償うために一行の助けをし、世界を救う手助けをする—のならば、パプニカ王女レオナ姫の名において、二人の罪を許します！」
慈悲深くあれと父王に教わった。
本来ならば、父王に裁可を委ねるべきだろうが・・今の父には負担になろう。
何かあれば責は己がとらねばなるまいが、ダイ達とバダック達の信頼を自分も信じてみよう。
甘い戯言かもしれないが、殺伐とした大戦の中で信を置いてもよいではないか。
星明りの下での裁可が下り、ダイ達は泣きながらクロコダインとヒュンケルにむしゃぶりつきながら、擁護してくれたアポロとバダックにお礼を言い、宴は深夜まで続くのであった。

「もう行くのかよお二人さん。」
月が沈むほどの時刻になってようやく全員寝たかと思ったが、一人だけ起きていたか。
姫君達は洞窟のベッドと長椅子に寝かせ、ダイ達もティファの持たせてくれたリングの中にあった寝袋に入れて、バダック達は気球の中に毛布ごと突っ込んだ。
「別れはいいのか？」

おそらく二人はこれから偵察に行くのだろう。
「先ほど沢山言ってきた、行ってくる。」
「我等がいなくともあいつ等は大丈夫だ。もうじきティファも来るだろう。」
あの嬢ちゃんがか
「分かった、気を付けて行ってこい。」
せめてこの老体にできる事は見送る事だけだ。
「ああ、行ってくる。」
「また必ず会おう、マトリフ殿。」
二人は心からの笑顔でマトリフの見送りに応え、べほもヒュンケルの肩に乗って触手を振る。
あれだけ自分達を案じてくれた者たちの為にも、必ず生きて帰ると約束をして。
またもや別行動だが、勇者一行の者達として心は確実に一つのところに集まっているのを感じながら。

つかの間の休息

「いいのかなレオナ、今日お城に帰らなくて。」
「そうだぜ姫さん、昨日夜遊びして今日も帰らなかったら不味いんじゃね？」
「・・うちの父さんなら雷落ちて、向こう一年は外出禁止出しそう・・」
昨日のどんちゃんの後に帰れなかったのは仕方がないにしても、王族のそれも唯一の跡取り王女がこのご時世にホイホイと表にいるは問題がある気がすると、レオナ大好きダイも一言もうした。
庶民育ち二人も少々顔を青くしている。何かあったら斬首をされても文句は言えない！
「あら良いのよダイ君。もうお父様の許可は貰ったし、ここが今一番安全なはずなのよ。」
塔のじゃじゃ馬姫はけらりと笑って意に介さない。
「ここって、師匠のところって意味か？」
「そうよポップ君、なんせ当代きっての大魔導士・マトリフ老師の洞穴が安全じゃなかったらどこにいても同じでしょ？」だから大丈夫とゆったりと笑っているレオナは、やはりいささか姫君っぽくはない。
昨日も酔っ払ったその勢いで、ヒュンケルの肩をがっしとしがみつき「罪を償いきるまで生きるのよ!!」とか感動的な事を言いつつ、なんとほっぺにチュウという大暴挙に打って出た!!した本人よりも、周りのバダック達が大騒ぎ。
特にされた当の本人ヒュンケルは、何が起きたのか分からないという態で唖然茫然とフリーズを起こした。
姫君とはおしとやかで麗しいもの、そう父バルトスが言っていたのに！姫君像が粉々に砕け散った瞬間だった。
（ティファの方が姫君の様な気がする。）
優しく、罪にまみれた自分達二人を優しく包み込んでくれる素晴らしい太陽のような人。
彼女も単身で捕まっていたのに、魔王に宣戦布告をするというとんだ無謀な事をしているが、少なくとも酔った勢いで暴挙には出まい！

ティファ大好きっ子がさらに熱を加速させながらクロコダインとべほと共に偵察に勤しむなか、子供達はマトリフの許可を得て海岸でのんびりとする。
このご時世とレオナが言った。確かに子供だからとのびのびとは出来ない時代に入ってしまった。
ならばせめて自分の下で位は子供らしくしてほしいとマトリフは願いつつ、「ほれどしたポップ、
もうへたばったか？」
弟子の方はきっちし修行を付ける。自分の手の届かない範囲で死なない様に強くするために。
「・・うっせえ・・まだまだ!!」今ポップは魔法使いの戦い方を伝授してもらっている。
かつてティファが言っていたような、動きながら敵を翻弄する魔法使いになる為に。
仲間に庇われなければ魔法を使えない奴は二流だとマトリフは考えている。この弟子は自ら高みを目指すべく、魔法力が尽きかけてぼろっちくなってもくらいついて来てくれる！
「ほれ足が止まったぞ！イオ!!」どのような敵相手であっても死なない様に鬼になりポップを鍛える。
「ポップ君ってストイックなのね～ダイ君。」「ストイック？」
「・・う～んと、まあ自分を成長させるのに余念がないって事かしら？」
「そうだね～、普段は調子のいい奴だけど優しくて温かいいい奴なんだよ。」
「私もポップが好きなんですよレオナひ・・」「あ！また言おうとした!!いい事マァム！貴方達は私の命の恩人、ひいてはこのパプニカの次期女王を救った英雄なのよ。
私の事はレオナって呼んで頂戴!!」ビシッと指を指して宣言する。
「分かりま・・」「敬語も禁止!!」
「分かったわよレオナ、でもほかの人の前ではね？」「・・マァムって大人よね・・」
レオナも分かっている、それこそマァム以上に自分が無理を言って

通してもらっているのを。
本来ならば王族が、元勇者一行の身内とはいえこんなに気軽に話せるはずがない。いかに庶民の味方を装っているレオナにも出来ない。
パプニカは現七王家の中でも栄えている上位に位置する。
その国の唯一の跡取り娘ともなれば、庶民に生まれた方がいっそ楽だと思うほど過酷だ。
王族の勉強・帝王学・行儀・外交の仕方から、幼少期より暗殺者の数はもう覚えていない程に来る。
そんな中で出会ったのがダイであり、今度はポップとマァムに出会えた。友人が欲しいとそう言えば貴族の子弟がわんさか来よう、おこぼれに預かるべく。
この二人もダイに似ている。権力とは縁遠く、姫と分かっていても無茶を聞いてくれて屈託なく笑っているところが。

「明日の昼頃来て頂戴ね、お父様たちに調整してもらうように頼むから絶対よ！」
お昼ご飯を食べて、日が沈む前にレオナ達はキメラの翼で素早く帰る。
王への謁見は明日に決まり、三人はドキドキしながらマトリフの洞穴で眠りについた。

マァムの旅立ち

今日の昼前にパプニカ王城に行く予定だったが、マァムが壊れた魔弾銃を直せないかバダックさんに見てもらいたいと朝を少し過ぎたころに向かった。

その時マトリフにおかしなことを言われた。「もしかしたらダイの額に紋章の謎を解くカギはテランにあるかもしんねえ。」

今日は遠出をしてきていいと言われたが、「俺は別に気にしてねえんだがな～。」

親友で弟弟子の力の源かもしれないと師匠に言ったら、自分よりも師匠の方が熱心に調べてくれていたらしい。

「何の力か分かんなきゃきちんと制御できると言えねえぞ！」暢気言ったら雷落とされた。

「へいへいっと、師匠は心配性だな～。もっと気楽に行こうぜ、長生きの秘訣って暢気が一番らしいぜ。」

「っつ!!馬鹿言ってねえで!!さっさと王城行って、テランに道草食って来いひよっこが!!」

「そんじゃ行ってくるよ。」

ポップ達が言った後、マトリフは盛大にため息を吐く。アバンの奴が弟子にする事だけはある、魔法の才能だけじゃねえ、あいつは底抜けに明るいんだ。

力だけならあった―嬢ちゃん―とは違う、あれは明るい振りをして心の弱さを一生懸命に隠していた子供だった。

嬢ちゃんが―ティファ―なら、ポップの本当の明るさに守られてほしい。

ダイ達もみんな良い子だ、こんな偏屈じじいを気遣い慕ってくれている。

長生きか、頑張ってみっかな。

マトリフには暢気にとは言ってみたが、今自分達の方が緊張をしている！

王様に会ったのはロモス王だけで、あの王様は気さくだった。
果たしてパプニカ王はどんな人物なのか「三人共落ち着いて頂戴、お父様もロモス王の様に気さくな人なの。
でも驚かないで上げてね、お父様はここ数年病を得て今は寝室で政務をなさってるの。」
明るいレオナが不意に悲しそうにするのはこちらも悲しくなる。
「大丈夫よレオナ。」マァムはレオナの手をとって、慈愛に満ちた微笑みを向ける。
「私の父もずっと寝たきりだけど、今でも雷親父って言われるほど元気があるの。
人って案外丈夫なのよ。」だから諦めないでほしいと優しく諭す。
「サクッとお礼を受け取って、ゆっくり話せたらいいな。」
「レオナのお父さんか、きちんと挨拶しないとね。」
「・・みんな・・ありがとう・・ありがとう・・」レオナは三人の優しさが嬉しくて、ぽろぽろと涙を流す。
「そうよね！お父様は強いのよ!!」涙を拭い、力強く言いながら歩き出す。
その様子をバダックと案内のアポロが優しい眼差しで見守る。姫に、本当の友人達が出来てよかったと。
生まれたころから知っている、お転婆姫と言われ、口さがない者達からは跡取りに相応しくないと言われている姫君を。
本当は誰よりも賢い、だからこそ分かってしまうのだ人間の醜い部分を。
この子さえいなければという親戚の者達・権力にすり寄る輩に怯えて姫は外に行くようになったのも。
古参のバダックはそれとなく見守るように王から直々に命じられ、ついでに子飼いも作れるように賢者見習の中から見繕ってくれとも言われた。
それが現・三賢者になったのは偶々だが、子供だった彼等にもきちんとレオナの行動の意味を話してある。
三人が大人達によからぬ姫の悪口を吹き込まれる前に先手を打っ

て。
以来アポロ・マリン・エイミは姫を守る忠実な者となった。
その姫に誠の友が得られたのを喜ぶのは、至極当然であった。
「君達がレオナを救ってくれた子達か。私はパプニカの王をしているレオールという。
この様な格好で済まないが、本当にありがとう。」
通された寝室の真ん中に天蓋付きのベッドがあり、そこに身を起こしていたレオール王に早々にお礼を言われた。
レオナと同じ明るい金の髪に深い青の瞳の男性は、意志の強そうながっしりとした顎を持ちながらもどこか甘やかな雰囲気がある大人の男性だった。
（・・同じくらいの年に見えても、父さんと全く違うわ・・）父・ロカはガキ大将がそのまんま大人になったような人だから、レオナの父と偉く違うと思わず思ってしまった。
けれどもロカは大好きだから別にいいかと思うが、少しはレオール王の大人の雰囲気を持てないかしらと思うのは自由であろう。
お礼は言われたがやはり王の体調はすぐれないらしく、側にいた侍医長とおぼしき人物に今日はここまでにした方がいいと進言をされて、三人はレオナに見送りを止めて城を後にした。
「・・ティファがいれば、ロカさんの時みたくアドバイスしてくれたかも・・」
「そうだね、レオナのお父さん回復するといいね。」
「今度ティファも連れて来てみない？」
三人にとってはティファならば病にも知識があり何とかしてくれるのではないか位に思っている。
あの場で言わなかったのはティファ本人がいないから、下手な希望を持たせたくないのがあったから。
次来る時はティファも一緒だ。
「そういやマァム、お前の用事は？」
「あれはもう直らないってバダックさんに言われたの。」作り主は真の

天才で、自分には構造すら分からないと一目で言われてしまった。
「そっか、先生って本当に凄いんだな。」
「これからどうするのマァム？」―ガン!!―
「・・痛いポップ!!なに・・」
「馬鹿野郎!!」―びくん！―
「先生から貰ったもんが壊れたマァムを少しは労われ！」
「あ・・・ごめん・・マァム・・」
良く言えば純粋だが少々無神経なダイを、ポップが拳骨を落として叱りつけ、叱られたダイはすぐに意味が分かって反省をしてしょげながらマァムに謝った。
マァムの魔弾銃が壊れたのはレオナを助けるために無茶な使い方をしてくれたからだ。
その事を忘れてしまうなんて情けない。
「いいのよダイ、ポップもありがとう。」やりたい事は見つかっている。
一昨日の宴の皆が楽しそうな時に、焚火を見ながらぼんやりと考えていた。
自分は何が出来て、一行の助けになれるのか。
回復役ならば、その場に居なくともティファの薬の方が自分のベホイミよりも数段上だった。あの薬とべほちゃんのベホイミがあれば、僧侶の自分はいらないと思い知らされた。
戦う手段の魔弾銃が壊れた今、果たして自分は―どうしましたかマァムさん―
不意にティファの声がした。
―貴方は笑顔が良く似合いますよ、ほら笑ってスマイルですよ～―
先生と同じ眼鏡をして柔らかい笑みを浮かべたティファの声が、自分の胸をほんわりと温めてくれる。
―寂しいの―自分の胸の内をいないティファに明かす。
宴の焚火に照らされたポップの横顔からは、力強い男の顔をしていた。
作戦が上手く、土壇場で力を発揮するポップからは弟弟子という感じがしなくなり、頼れる一行の魔法使いだ。

ダイも己の力を制御でき、遂にはアバン流の奥義アバンストラッシュを完成させて、一段と勇者らしくなっていく中、自分一人が置いて行かれているようで。
―そんな事はありません、マァムさんにはマァムさんにしかできない事がきっとあります。
他の人がではなく、マァムさんの良いところを見つけて上げてください―
私の良いところ・・力が強い・・そうだ!!そうよ!自分には父譲りの力がある!!―伝手―もある!
「だから、明日送って欲しいのネイル村の近くに。」
「・・急だな・・」
「御免なさい、でも修業が終わったらすぐに戻るから・・」
「マァムが決めた事だもんね、俺は応援するよ。」「あ!俺だって応援するぞ!!」
急な旅になったったが、その日の夜はマトリフの洞穴でまたもや宴会となった。
マァムが無事に一行に戻ってくれることを願いつつ。

戦いの序幕

大戦の最中にあってもベンガーナ国は魔王軍の被害を受けていない国であった。
オーザム王国の様に滅亡もしなければ、リンガイア・ロモス・パプニカの様に端っこの村や田畑を焼かれてもおらず、かといってテランの様に侵攻価値がないからと放って置かれたわけではない。
シャドー・ゴースト達の軍が来ても退けたという自負があり、来るなら来てみろ魔王軍と考えていた。
今日までは。

「ダイ!・そっち行ったぞ!!首が一頭の奴は俺が、お前はヒュドラを頼む!!」
「分かった!・気を付けてねポップ!!」
四日前に魔王軍の軍団長を撃破して、今日は竜を二頭相手にって俺達なんか呪われてんのか⁉
何でこんなにトラブルが向こうからくんだよコンチクショウが!!

ダイと二人でマァムをネイル村の近くに送り届けた。本当は村まで送りたかったが、「ダイ達にもやる事があるでしょう。武器を新調しないとね。」勇者一行のすべきことを優先してほしいと言われたら、それ以上強く言えない。
「そう、マァムとは当分会えないのね。」武器を新調したいが、当てが無い二人はレオナに相談をし、レオナはマァムに会えないとがっかりをする。
同い年であっても、どこかお姉さんぽかったマァムに懐いていた分ガッカリ度合いも増す。
「大丈夫だよ姫さん、あいつはすぐ強くなって戻ってくるよ。」
「またすぐに会えるよ。」
「そうね、二人共武器の事なんだけれどもベンガーナに行った事はある?・」

ダイとポップに慰められたレオナは気分を浮上させ、武器の相談に乗ってベンガーナ行きを提案する。
「まあ有るったらあるな、先生と旅してた時一度だけ。でもな姫さん、俺達はそんなに金持ってねえぞ。」
レオナがベンガーナと言ったのをポップはすぐに―デパート―だと察して表情を曇らせる。
先生とベンガーナに寄ったのも、世の中を見る勉強ですと連れて行ってもらったからだ。
「あのね、二人は私を助けてくれたのよ。」つまりパプニカという国を丸ごと守ってくれた大恩人。
武器の出資をするのは当たり前だと、マジックリングをアポロに言いつけて持ってこさせた。
「この中には五千ゴールド入ってるわ。武器と装備を充実させることを、パプニカの王女・レオナが命じます。
そんなわけだから行ってらっしゃい二人共。」茶目っ気たっぷりとした命を出し、二人が受け取りやすいようにする配慮も忘れない。
「分かった、良い武器を買ってくるねレオナ。」
「ありがたく使わせてもらうぜ姫さん。」
行った事のある場所なのでポップのルーラであっという間に到着をした。
街には活気が溢れ「・・何だか、ギスギスしたところだね・・」ダイはすぐに嫌になった。
何となればダイはモンスター島で育ち、人間の欲望とは無縁に育った。交流をしているウォーリア達は皆気のいい人達で、ここにいる人達は何か違う。
「・・武器買ってすぐに師匠のところに帰るぞ。」
ポップもあまりここは好きではないのでサクッと帰ることにした。
「・・・ポップ・・もう帰りたい・・」どんな強敵が来ても負けないダイが、デパートの人の多さにに半べそをかく。
「ほらダイ、泣くなよ。さっきも言った通りすぐに帰るから頑張れ。」
気持ちは分かる、ダイにはどこか過保護に育てられた箱入り感を感じ

ていた。
ブラスとティファによって守られて、ウォーリア達に見守られてすくすくと育った自然児には、デパートは少々刺激が強すぎた。
案内状を見つけ、階段で武器の展示場に来たダイは少し落ち着いた。
ここに来るのは冒険者の類がほとんどで、あまり人がいないので伸び伸びと武器を見るのに専念できる。
「ポップ、あれは何？値札っていうのが付いてないよ。」
一通りの物を買ったダイが、目敏くドラゴンスレイヤーを見つけた。
「ああ、あれは買いたい奴等が値段をつけ合っていって、一番高い値段を言った奴が買えるオークションっていうのをするんだよ。」
「ふ～ん。」「欲しいのか？」珍しくダイが物欲しそうにしている。
「うん・・鋼の剣より力を感じる。」先程買ったのは理力の杖と、ダイの鎧の一部だけ。
丸ごと売っていたのをダイが使える部分だけ見繕って店員に相談をして買ったのでお金は余っている。
「よしダイ、駄目もとでオークションに・・」
「止めとけよ兄ちゃん、そいつは俺のもんだ。」
「・・誰だあんた？」可愛い弟の為に一肌脱ごうとしたのは誰だと振りむけば、脂ぎったぽっちゃり体型の男だった。
「・・あんたがあれを使って戦うのかよ・・」どう見ても使いこなせないように見えるが。
「は？飾っておくに決まってんだろう。」
男の言い分に頭痛を感じる。この大戦の最中に武器を飾っておきたい馬鹿がいるなんて、最前線で戦っている者からすれば信じられない発言だ。
だが、極力関わりたくはない。
「行くぞダイ、オークション始まったら参加すればいいんだ。」なによりもダイの教育上よろしくはない。
「それがいいよ坊や達、そんな欲深な者に近づくではないよ。」

塩辛声の・・なんか雰囲気が師匠に似ている声がした！
振り返ってみれば、しわだらけの黒いローブを来た老女と・・「綺麗だ・・」
同行しているとみられる女の子を見て、ポップがぽつりと漏らす。
長いサラサラの黒髪にアメジストの瞳を持つ、儚げでどこか神秘的な感じのする女の子だ。
ポップのつぶやきが聞こえたのか真っ赤になり、「おばあさまが失礼を言いました、さ行きましょうおばあ様。」
欲深と言われた男が怒りだす前に、ポップ達の前からすたこらと行ってしまった。
文句を言えなかった男がぶつくさ言っているのも気にならない程、ポップは行ってしまった少女を惜しむ。もう少しだけ話がしたかった。
気を取り直してオークションに参加をしたら、手に入れたのは欲深男でも、ポップ達でもなく、八千ゴールドで落札をした男だった。
これといった特徴のない男で、手に入れてもさほど喜んだ顔をしていないのが特徴といえなくもない、平凡そうな顔をした男だった。
「あれがあれば便利だったよな～。」
「仕方がないよポップ、それよりもこの後・・」
―グギャアアアアア――――!!―
「ドラゴンだ!!」
「なんでこんなところにドラゴンが!!」
デパートの中にまで響いた咆哮に、デパートの中はパニックになった。
「・・嘘だろう・・ドラゴンが、それも二頭って・・」トラブルが早々にやってきたと頭痛がするが、ここは戦うしか「おい！少年！これを使え!!」
先程ドラゴンスレイヤーを手に入れた男が来てダイに渡してくれた。
「おい！・・いいのかよ・・」大金投じて買ったんだろうにと躊躇ってしまう。

「いいんだ、あれを倒さなければ私も死んでしまうだろう？私は血なまぐさい事が大嫌いだ、貸し出す条件はさっさとスマートに倒す事、以上だ。」
「あ、ちょ！・・・行っちまった・・」
「ポップ！早く行こう!!」
　借りたダイも変わった条件だと思いつつ、なによりもドラゴン退治を優先し撃って出る。
「スマートにか・・」ダイと別れたポップは杖を出し「ベダン!!」いきなりの大技を出した。
　昨日の特訓はこれを会得するためのものであり、死ぬ気でやってドラゴンをねじ伏せる。
　重力の重みで苦しんで開いた口の中に「メッラゾーマ!!!!」―ゴオオオオウ!!―
　最大火力をぶち込んで一気に倒す。特訓をしてくれた師匠に大感謝だ。
　周りは歓声を上げるがポップは意にも介さずダイを探しに行く。
　あいつならすぐに、そう思ったが苦戦をしていた！背には逃げ損ねた母子がおり思うように戦えないのがすぐに分かった。
　トベルーラの要領で親子の側に行きすぐにその場を離れる。
「ダイ！もう大丈夫だ!!やっちまえ!!!」
「ありがとうポップ！」庇う者のいなくなったダイは、一気に片を付けに行く！
「君達こっちだ！」親子を助けたポップの元に、先程の男がまたもや現われて避難誘導をしている。
「お前達も！巻き添えで死にたいのか!!!!」・・何か焦っているような。
「くらえ!!ライデイン!!!!!」―バリバリ!!!!!―
　避難した人達を見送ったポップが振り返って見れば、ドラゴンに馬乗りになって血にまみれたダイが止めを刺す瞬間だった。
（ダイの奴、戦いに夢中になり過ぎだ・・）この光景を先程の親子・・特に小さな女の子が見れば、ダイの凄すぎる力に怖れて泣いていたかもしれない・・先程の男にはあらゆる意味で感謝をしたくなる。

人間の弱さは、臆病者の自分がよく知っている。ダイの事をきちんと知らなければ、自分もダイの力に恐れをなしているのが目に浮かぶ。

「お役目を果たしましたよ主様。」

ポップの考える事は当然ティファも考えていた。

本来ならば自分自身がデパートに同行をして事態を収集したかったが、ほんの少しだけ薬作りに間に合わず、やむをえずに式でダイ達を細かくサポートするように男を作り、送り出したのだ。

―人間が自分を怖れるならば、自分は地上を去る―原作で言った言葉を兄に言わせないために、人から怖れさせないようにと徹底的に守り抜くつもりだ。

竜の親子の対面

いや～何あの子供達、本当に子どもって言っていいのかな？
あの勇者君はバラン君の子供だって言われているから一応納得いくけど、魔法使いの子って調べても出てこなかったよね。
つまり王族でも、勇者一行の仲間の子でもない一般庶民のお子様って事だよね・・どこにいたのあんな凄い逸材。是非魔王軍に欲しい位だ！
「・・・キルバーン・・仕事の時間だよ・・」
うるさいな～。
「分かったよピロロ、仕事・・」
「誰だ!!!」 ―ドガッ！―おや見つかったか。
気配が漏れ出たからって、空間内の僕に気が付く勇者君の実力は本物か。

「ダイ・・あの壁がどうかしたのか？」
誰何しながらドラゴンスレイヤーを投げたという事は、敵が潜んでいるのかとポップも魔力を溜めながら壁を睨みつける。
「うふふふ～怖い・怖い～。」
歌うような、楽しそうな声を出しながら、壁から長身の・・声から察するに男でいいのか？怪しさ満載な奴が出てきやがった!!
しかもドラゴンスレイヤーが胸元にぶっ刺さっているのをなんとも思っていない様に・・
「グッド・アフタヌーン勇者様たち。僕は魔王軍の一人で、―キルバーン―
口の悪い奴は死神って呼ぶけど、以後お見知りおきを。」
ドラゴンスレイヤーを右手で抜き、ドロドロに溶かしながら優雅に挨拶をしてくる。
「お前がドラゴンを放ったのか!!」
今にも斬りかかりそうなダイを抑えつつポップが問いただす。
口調と仕草はふざけて見えるが、レア武器であるドラゴンスレイ

ヤーを一瞬でとかせるものなど聞いた事がない！生半可なドラゴンの炎にも耐えられると言われているほどの武器をだ!!
　こいつはやばい、下手したらバルジ島でヒュンケルが倒したハドラー以上だ。名前に―バーン―が冠せられているのは伊達ではなさそうだ。
　実力が全く読めず、あの赤い瞳を見ているだけで寒気が奔る。
　おやおや、あの魔法使い君は僕の実力に気が付いて警戒してしまったな。
「ほら坊や達、顔が怖いよ。スマイル・スマイルね？今日はそこの勇者君の実力を見るためのほんの挨拶に来ただけだよ。
　でも勇者君の力が―人間―に見られなかったのは―ピロロ―の目論見は失敗か。」
　ちょっといい気味かも。
　挨拶・・街に被害が出て、人にこそ被害が出なくともそれは運が良かったにすぎないのを挨拶だ!!それも人間がダイの力を見ていなかったってのは・・つまりダイの力を意図的に人間に怖がらせようとしやがったのか!!
「お前は!!」―ヒーン!!―「許さない!!!」
　ポップが怒鳴る前に、ダイは完全に切れて紋章を発動させた。人を巻き込んだ者が挨拶だなんていう奴は倒してやる!!
「はい、ストップ」
　―ピタリ―
　いつの間にかダイは背後をとられて、冷たい感触が首筋に伝わる。
「短気は損気だよ勇者君。」
　大きな三日月型の大鎌が、ダイの頸を今まさに刈り取ろうとしている。
「今日は本当に挨拶に来ただけだよ。それと確認かな、君が竜の騎士様の子かどうか。」
「・・俺が・・何？」
　自分の事を知っている？
「君はまだその力の源を知らないんだね。テランに行ってごらんよ、

そうしたら分かるから。」
　そしてそこにはお父さんが待っているのは内緒だけどね。
「手前！ダイから離れろ!!」
　ポップはダイに大鎌が首筋に当てられても悲鳴を上げて動揺をせず、キルバーンの横位置に静かに配し、ありったけの魔力をかき集めて威嚇をする。
　ダイの頸が落ちる前に、ギラでキルバーンの腕を落とす！
「そういえば一つ聞いてもいいかな？」
　ポップの威嚇をものともせずに、キルは平然とダイに話しかける。
「君の妹さんはどこにいるの？」
　妹・・ティファの事も知られている⁉
「あの子も一緒に・・・」―イオ!!―ズガーン!!―
「・・物騒だね魔法使い君は・・、いきなり魔法を放ってくるなんて。」
「うるせえ!!こいつに近づくんじゃねえ!!」
　ダイどころかティファの事も出されたポップも、とうとう堪忍袋が切れた。こんなやばい奴が気軽に弟・妹の事を言うな!!
「あ～あ、怒られたから僕は帰るね、シー・ユー。」
　現れた時同様に、壁を背にして消えて行った。
　あとに残された二人は呆然とし、その場に居たテランの高名な占い師・ナバラと孫娘のメルルの導きによってダイの出生の秘密を知るのであった。
　怪しく死神を名乗るキルバーンの情報だけならばテランに行く事は無かったが、ナバラ達と、そして昨日のマトリフの助言を思い出し、ポップはダイをテランに連れて行くことにした。
「うまくいったよミスト～。ご褒美頂戴♪」
　帰っていきなりミストの背後から抱き着くのがご褒美。
　ちゃんと仕事をすれば許してくれるミストは優しいな～。
「二人は間違いなくテランに行くね。でも妹さんがいなかったのが残念だよ。」
　バラン君も教えてくれないから名前も分からない。
　勇者君にかまをかけても、魔法使い君によって邪魔をされてこれま

た情報が得られなかった。
「凄いよね～、今まで―魔王軍の監視網―に引っかからなかった子なんてさ。」
全世界とは言えないまでも、主要都市部・各王宮には必ず設置をして悪魔の目玉で、デルムリン島に先代勇者とその弟子と、弟子候補のダイが見つかったというにだ。
見た目は本当に可愛い女の子だった。しかし現時点でも今の紋章を使いこなしている勇者君よりも実力は上だと言える女の子っていうのもあり得ない。
そんな子が今まで引っ掛からなかった、ある意味異常事態と言えよう。
「・・・・監視は怠らん・・」
ダイ達の行く先のテランには、もう目玉を送ってあり設置済みだ。
見逃さないとミストは静かに、力強く宣言をする。敬愛するバーン様の障害となりうるものは全て潰す為に！

ナバラの持っていたキメラの翼で四人はすぐにテランについた。
静かな所で人も少ない。
「ここには魔王軍も来なかったよ。」
国の衰退と、それゆえに今大戦で放って置かれたのをナバラが教えてくれた。
「・・いい王様みたいなのに・・」
ダイとしては争いを失くそうとしたテラン王・フォルケンを好ましく思っただけに、それが元で国が衰退するといのが悲しくなる。
争いの元なんてすべてなくなった方がいいのに。
「ダイ・・」
そんな優しい弟の頭を、ポップはくしゃくしゃと撫でながら王城へと向かう。
ナバラは高名な占い師であり、フォルケン王の信も厚く顔パスで通れた・・通った先には！

「レオナ!!どうしているの⁉」
パプニカにいるはずのレオナがいた!!
「ダイ君達こそ・・ベンガーナに行ったんじゃないの？」
「いやそれがさ・・」
説明下手なダイに代わって、ポップがこれまでのいきさつを話した。
「そう・・そうなの。ダイ君、自分の事をきちんと知りたい？」
「レオナ・・俺・・ずっと俺は人間だって・・でも違うかもしれないって！分からない・・だから確かめに来たんだ。」
いつもの明るく元気なダイが泣きそうになりながら己の思いを吐き出すように話す。
人間と違ったら・・レオナは自分を
「ダイ君」・・温かい・・
レオナは膝をつき、ダイを包み込むように抱きしめる。
「ダイ君のその力が何なのかは私にも分からない。でもね、力は力であって、それをどう使うかを決めるのはダイ君でしょう？私を助けてくれて、世界を救おうとしてくれるダイ君の事が、私は大好きよ。」
何の思惑もなく、ただダイを好きだとレオナは告げる。
「俺・・俺も・・皆好きで、レオナは大好きだよ。」
泣き笑いしながらダイはようやく心が落ち着くのが分かった。好きな人が、どんな自分であっても好きだと言ってくれて心が癒される。
―ゴホン!!―「あ～・・もういいか二人共。」
ダイを慰めてくれるのは嬉しいが、それ以上は目のやり場に困る。止めていなければ口づけをしてそうな二人を、ポップは赤面をしながら止めに入った・・馬に蹴られて死んじまうかな？
「あ!!・・行くわよダイ君！」
「そうだね、でもどうしてここにレオナがいるの？」
「私はお父様のお使い。詳しい事は内緒だけど、親書を届けに来たのよ。」
外に待たせているが、護衛もきちんと魔法団の一団を連れてきてい

る。
話をしながら一行はフォルケンの寝室へと通された。
レオナの父の様にベッドの上で政務をとっているが、レオール王は病を得ても獅子の如くであったが、フォルケン王は深山の泉のような静謐さを讃ええた人物であった。
深き知識を持ちし老賢者の様に。
「話は分かった。ナバラ、そなたの見立てではどうか？」
レオナの挨拶とレオール王の親書を渡された後、レオナから勇者一行の紹介とテランに来た目的を告げられたフォルケンは、ナバラに助言を求める。
「はい、私も確かに見ました。勇者ダイの額に一族に伝わる―竜の紋章―が浮んだのを。」
「それはかの湖に沈みし神殿に刻まれている刻印と同じものの事か？」
「はい、我がテランが信仰せし―聖母竜・マザードラゴン―が生みし騎士様の紋章と同じでした。」
「そうか・・」
前大戦では姿も噂も無かった竜の騎士様が、此度は現れたか・・しかし、いかに騎士様とは言え若すぎる。
後ろにいる魔法使いの子もまた然り、老いた自分にできる事は無くこんな年端もいかない子等が戦う、なんと因果な事であろう。
「勇者ダイよ、湖に潜り己の出生を知りたいか？」
「俺は知りたい、知っておきたいんです！この力が何であり、きちんと使えているのかどうかを。
俺はまだまだ弱いんです、知った事で強くなれるのならば・・」
「何故強くなりたい？」
先の戦いの功労は知っている。老いたりとはいえ情報収集はまだまだ衰えてはいない。今だとて強さを備えているのもだ。
「世界を守りたい！」
ダイはフォルケンの瞳を見つめ、迷うことなく言いきった。
魔王軍から世界と愛しいレオナを守りたい！その為の力が欲しい

のだと。
「・・分かった。すまない試すような事を言って。」
フォルケンはダイの覚悟をきちんと受け止めて、湖に潜る許可を出した。
「行ってくるよ、ポップ。」
ダイは笑いながら湖に潜る。違う世界の自分達は、苦悩の果てに神殿に行かざるをえなかったとは知りもせずにこやかに。
「行っちまった・・」
苦悩ではなく、ポップは心配な顔をする。
「あらポップ君は意外と過保護ね。」
「いやさ・・ティファにも説明しないといけねえと思うとよ・・」
あの可愛い妹に、お前は・・なんてどう言えばいいんだよ⁉
「ティファ?・・ねえポップ君、ティファって誰の事?」
「・・・・・は?」
「だから!ティファって誰よ!!まさかダイ君のガールフレンドかなにかなの⁉」
ダイのとてつもない出生の秘密を共有する相手何てただの相手であるはずがないと、レオナは鬼の形相で迫る!
「・・ダイの妹だよ・・何で姫さん知んねえんだ?」
どこかでダイが話していないのか⁉
「妹⁉・・ダイ君に・・」
一度も聞いた事がなかった。
レオナの驚いた顔に、本当に知らないのだとポップは確信をする。
「ポップさん・今ダイさんに妹がいると言いましたか?」
今まで話しかけてこなかったメルルが急に話しかけてきた、それも青い顔をして。
よく見ればナバラも驚いた顔をしている。
「そうだ、ダイの双子の・・」
「あり得ません!!」
ポップの言葉をメルルは力強く否定をする。何故なら

「一つの時代に騎士様は常に一人でした！二人いた事は数千年の歴史の中で一度としてなかったのです！」
「何だって！」
だって・・ティファもダイ同様に紋章が光っているのを自分は見ている！
ダイ・・早く戻って来てくれ!!
メルルのもたらした情報に胸騒ぎが起きる。

「プハ！・・ここが神殿の中か・・」
空気があって助かる。
ここに俺の・・俺達の秘密が・・
「待っていたぞ当代の竜の騎士よ。」
「水晶が・・お前は言葉を？」
「そうだ、聖母竜より時代の竜の騎士たちを教え導くものとしてこの神殿に据えられしものだ。」
「だったら教えてくれ！俺は竜の騎士という者なのか！竜の騎士ってなんなんだ!!」
「そなた・・竜の騎士の記憶は受け継がれていないとは・・マザードラゴンの力はそれほど弱っていると・・」
「それは違うぞ水晶よ!!」
ダイと水晶の会話に割って入った者がいた。
柱の陰から、一人の男が出てきた。
長身で一目で戦士と分かる男は、ダイから目線をそらさずに水晶に話しかける。
「私こそが当代の竜の騎士、この者は私の子だ。」
「子なぞ！あり得ぬ!!竜の騎士は代々・・」
「そうだ、私もマザードラゴンより生まれ落ちたが、この子供は人間の女性から生まれた我が子だ！それが証拠に竜の騎士しか入れぬこの神殿に入れたのが何よりの証だ。」
「竜の騎士が時代に二人・・」
「訂正をしてもらおう、私の子は双子であり三人だ。」

この男は自分どころかティファの事を知っている！しかも会話から察するに父だと!!
「おま・・」
―ダイ兄、相手の名前を聞く時は自分が名乗ってからだよ～―
男に問おうとしたら、ティファの声がした。
三つの頃にウォーリア達に出会い、ティファが教えてくれた事だ。
「・・俺はダイと言います！・・貴方は誰ですか。」
・・確かこういったらティファとじいちゃんが褒めてくれたのもよく覚えている。
何と・・ディーノは礼儀正しい子に育っている！この分だとティファもそのはずだ!!
やはりハドラーが間違っていた！こんなに良い子に育った子をつかまえてとんでもない娘呼ばわりをしおって!!
「・・あのお・・」
は！いかん、ディーノが怪訝な顔をしている、ハドラーをとっちめるのは後にして。
「先ほど水晶に言った通り、私は当代の竜の騎士でありお前と妹のティファの父バランだ。」
「父さん・・本当に？」
「うむ・・これが証だ。」―ヒィーン―
戦いの時とは違い、バランは弱く紋章を発動させる。
「俺と同じだ・・」
自分では見る事は出来ないが、ポップ達が絵にかいて教えてくれたのと同じだった。
「そうだ、私はお前達の父であり、そなたの名は―ディーノ―という。」
「俺は・・ディーノ？ダイじゃなくて・・」
「そうだ、そなたの母と共に付けたそなたの誠の名だ。
ディーノよ、私と共に人間を滅ぼそう。」
そうすれば亡きソアラは喜び、親子三人でいつまでも仲良く暮らせる。

間に合ったーっ！

遅えな、ダイの奴大丈夫か？

待てど暮らせどダイが帰って来ないとポップは湖の周りをうろうろとする。

「ちょっとポップ君、落ち着いて・・」

「だって姫さん！・・・あ――もう!!」

先程のメルルの言葉気が気になってしょうがない、竜の騎士は一つの時代に一人しかいない筈。

そう言われてもダイとティファには紋章がある、これをどう判断をすべきか分からずとにかくダイの無事な姿を見たいと、先程から苛々としている。

師匠・マトリフが見たら、魔法使いの冷静さはどこ行ったと雷落とされているところだが、弟の心配をして何が悪いと心の中で開き直ったポップであった。

「おお！ここに居たかお前達!!」あれ⁉

「何でここに居んだよおっさん！」偵察に行ったはずのクロコダインが何でテランに？

「実は知らせたい事が・・俺がいていいのか？」

息を切らしてダッシュで来たクロコダインが、姫のみならずメルルとナバラに気がついて遠慮をしようと止まってしまった。

「大丈夫だよ、おっさん達の事はきちんと話してあるから。」

城から湖に来る途中の道々で自分達一行の事をきちんと正直に話してある。

「あの・・メルルと言います・・・初めまして・・」顔を赤くしながら、メルルはクロコダインに挨拶をする。

「む！あ・・や・・俺は獣王クロコダインという・・・おいポップよ！」武骨な武人の自分に、こんなお淑やかな年ごろの娘の相手は無理だと早々にポップに助けを求める。

「ふんむ・・お前さんは良い子のようじゃの～。」酸いも甘いも噛み分けたナバラは、マトリフの様にクロコダインを好ましく思う。

この年まで生きていると、敵だ味方だ、種族だ何だだの馬鹿馬鹿しい事に思えるのだった。
「で、おっさんはどうしてここに？」本当にどうやって自分達を見つけたんだか。
「いや、先にマトリフ殿の所に行った、お前達を水晶で見つけてくれてな。」あいつ等テランか。
「・・・師匠すげえ・・」
「本当にマトリフ様って凄いわね。」
普段ちゃらんぽらんの女好きに見えても、当代屈指の大魔導士の呼び声は伊達ではない。
「それでお前達はどうしてここに？」言っては何だが、魔王軍も目を付けなかった衰退している国に来た理由が分からない。
ポップは端的に説明をする。
「それではティファも竜の騎士とやらか？そんなに何人も居るのか・・」
「いや、ティファはダイの妹だからだろう？」
「ちょっと待て！ティファはダイの妹なのか？」
「おっさんも知らねえのかよ！」世界を相手にしようという魔王軍はきっと情報力収集力の桁が違うと思っていたが、その魔王軍の軍団長でさえ、勇者ダイの事を知っていてもその妹を知らないだなんて。
ティファはまるで陽炎のようだ、確かに存在をしているのに不確かな者のようで胸がざわざわとする。
ダイに早く戻ってきてほしい「あっ!!」
ポップの焦りを受けたように、メルルがびくりと揺れて大声を出す。
「来ます！底知れない力を持った二人が!!湖の底から!!!」
メルルの言葉に呼応するように、湖の中心が渦巻き始める！
「取り消せ！人間を滅ぼすなんて!!」
湖の底の神殿では、ダイが怒りに燃えている。
竜の騎士とは正しく優しきものだとナバラが言っていた！なのに

自分の父だという者が魔王軍だと名乗り、あまつ人間を滅ぼすといったのだ！許せるわけがない!!
「ディーノよ、その年でそれほどまで紋章の力を使いこなすとはな。だがしかし、まだまだ未熟!!!」―ヒィィィィィィィン!!!

ダイの言葉を耳ざとく聞きつけたバランは、すかさずにダイの父であると堂々と言いきった。
「お前がダイの父親だと・・」クロコダインは完全に唖然とした。
まさか元同僚が、伝説の騎士だとは思いもよらなかった。
・・・あんの野郎!!実の息子かもしれない奴にいきなり人間を滅ぼせだ⁉
あいつが魔王軍ならばダイは地上を守らんとする勇者だと知っているはずだろうに、そのダイに向かって何て事を!
「ディーノよ!何故妹を伴ってこなかった?」共に神殿に来ると思ったのだが、やはり少女であるゆえに一行が島に帰したのだろうか?
やはりソアラに似て優しい子に育っているのか、ディーノを説得したらすぐに迎えに行こう。
それに、ちらりとディーノに寄り添う娘を見る。
金の髪の中々美しい娘だ、聡明そうでディーノに相応しい。人間の娘だが認めてやらなくもない。
ソアラもかつては一国の王女だったしな。
まさか連れて行かれる要員で品定めをされているとは知らないレオナは、バランは自分達の戦力を図っていると勘違いをして、頭の中で素早く算段をする。
自分は王族であり、魔王軍の長を相手に早々にしっぽを巻いて逃げるわけにもいかない。
引き際は肝心だが、今はまだその時ではない。
メルルとナバラは非戦闘員でありどう逃がし、魔法騎士団をどう呼ぶかを必死に考えている。
「さてディーノ、もう一度聞こう。」
バランはゆっくりと湖のふちに立ち、我が子に尋ねる。愛娘ティファの行方を。
「うっせえ!!ベタン!!!」―ズン!―
「こいつは俺達のダイだ!!ディーノ何て名前じゃねえ!!!!」先手必勝だ!!
確かにダイの親かもしれない、竜の騎士に子が出来たというのは記

録上ないとされてメルルとナバラが驚いていたが、何事も例外はある！

だからと言ってバランがダイに言った事が許せない!!今は自分達の敵であると決めた！

「小僧が・・」・・嘘だろう・・重力の中をゆっくりとだが歩いている！

「図に乗るな!!!」―ヒィ―――――ン!!!―

ポップの切り札である重力の魔法ベタンを、バランは紋章の力でポップ達ごと吹き飛ばした！

「っっっうう！野郎!!メッラゾーマ!!!」ありったけの魔力くれてやる！あいつを焼き尽くしやがれ!!

手加減通じる相手なんかじゃねえ！やる気でやんねえとこっちが死ぬ!!

ポップは体内にある魔力を全て込めて最大火力のメラゾーマをバランに放った！

「ふううん!!」―ゴオオウ!!―

飛来してきた炎の塊を、竜闘気で覆った右手で受け止めて微動だにしないが、

「成る程、我が闘気を破るか。私の掌を火傷させるとは大した小僧だ。」

バランは嘲ることなく本気でポップを称賛をする。

竜闘気に覆われた体は生半可な魔法は自然消滅をして全くダメージにはなりえない。

自分を傷つけるものなぞ、ヴェルザーとその配下達と戦った時以来だ！

「返礼をせねばな・・」―イオラ!!―

しまった！魔力の使い過ぎで体が!!「ポップ!!」

動けないポップの前に、素早くダイが立ちふさがり紋章を全開にしてシールドを張って庇った。

「大丈夫ポップ⁉」先程まで泣きそうだったのが嘘のように、ダイの目は戦う男の目をしていた。

仲間を傷つけるものは誰であれ許す気はない！
ダイもまたバランを敵とみなしたのだ。
「へ、悪いなダイ。お前こそ怪我は？」「大丈夫だよポップ。」
「二人共、傷ついても私が治すわ。」
レオナもまた戦うことを決意して、回復は任せろと胸を張る。
その姫とナバラ達を守るように、クロコダインもアックスを握りしめてバランと対峙をする。
良い一行だ、しかし自分はよく知っている！優しかった人間が、本当は酷き者だと!!
「ディーノよ！くだらない人間との記憶など忘れるがいい!!!」
バランは竜の紋章を最大限にまで高め、ダイの紋章に干渉を始めた！
「ぐ！・・・ああああ!!」痛い！頭の中を掻きまわされるような・・・嫌だ!!入って・・

―ぼふん!!!!―

ダイがのたうち始めるのと同時に、―何か―が上空より落ちてきた！
普通の麻袋を十倍大きくした物が落ちてきたと同時に、砂埃が舞ったように辺りは見えなくなった！
「誰・・」―バッチ――ン!!!!―
「グウ・・アアアアア!!!!」
何者が邪魔をすると言いかけたバランの額に、小袋が当たり中の粉末と思しき物を浴びたバランがのたうち回り絶叫をする！
「・・何・・」
「一体・・」
「この場より失せなさい!!!」―ギュウ――ン！―
それぞれの疑問を吹き飛ばすよな凛とした声の後にルーラ特有の音がして、「ガルーダ、一気に吹き飛ばしてください。」バサア――

！

上空から突風が吹き荒れ、砂埃の様なものが一気に晴れた。

「遅くなって申し訳ありません。ただいまダイ兄・ポップ兄・クロコダイン。」

バランの立っていた位置にいたのは何と！「「ティファ!!!」」

黒縁眼鏡をかけ、長いふんわりとした黒髪をポニーテールに結わえ、左右の耳の横に一房ずつ垂らした少女。・ティファが立っていた。

相変わらずリュックを背負っているところがティファらしい。

「お前遅いぞ！今までどこほっつき歩いてた!!」

「ティファ・・無事でよかった・・心配したんだよ。」

地底魔城が溶岩で壊滅した時にティファが巻き込まれていなかったかと胸が冷たくなった。

「御免なさい兄達、でも美味しいもの作るから許してね？」ああまったく、にっこりと笑うのが本当に可愛いんだからこの妹は！

兄二人は死闘の直後だというのにすっかりと忘れてティファを撫でて愛で始める。

兄二人に髪の毛をぐしゃぐしゃにされてもニコニコとしているティファもある意味凄い。

「ダイ君！ポップ君!!今は・・・」

レオナは色んな事が一度に起こりついていけないが、敵が戻ってきたらどうするのだと辛うじて警告を発せられた！

「そうだ！・・ティファ・・今俺達敵と・・」

「先ほどの人なら強制的にキメラの翼を発動させて・多分・ベンガーナの南端に行ったと思います。」

ガルーダで皆を見つけたのはいいが、何やらピンチのようなのでいざという時の為の目くらましになる石灰を入れた特製の袋を落として、これまた特性の目つぶしを眉間に叩きつけたから大丈夫だと。

「目つぶしって・・何を使ったんだよ・・」ニコニコしながら言っている妹分に、ポップはおそるおそると聞いた。

先程のバランの叫び声は尋常では無かった・・自分の最大火力を受けても平然としていたのに。

その頃のアルゴ岬

「う・・くう・・ぐうわああ!!!!」バランは身も世もなくもだえ苦しんでいた。

一体自分は何をされたのか！竜闘気に覆われた自分に魔法は通じず、物理攻撃をも半減させられるというのに!!

「あ！・・くう・・」のたうち回るほどの痛みが両目を襲う!!このような事はヴェルザー達との死闘でもなかったというのにだ！

まさか実の娘が、―目つぶし―を使ってきたとは思うまい。

それも中身が―ハバネロ・キャロライナリーパー―に相当する、この世界屈指の辛い物をブレンドした粉末を浴びせられたとは・・。

オマケに「フエックション!!アッツウウ・・」胡椒の実もブレンドをしていたのであった。

(子供に否定されたからって記憶消すようなダメ父にする容赦は無し。)

思いっきり鬼の所業をしてやったが、「中身は秘密です。」にっこりと答えを拒否する。

良い子は知らなくてよろしい！

それぞれの決意

「・・・父親・・ですか・・」

一旦場所を移動して、メルルさん達と挨拶を交わして早々にされた説明に頭痛くなる。

いや知ってるけど、それでも我が子と初対面で死闘するって本当にどうしようもない父さんだ・・お髭のおじさんは優しくて、父としては駄目ってどうなんだろう？

「初めてお目にかかります。勇者ダイの妹で料理人をしているティファと申します。

兄達がお世話になっています。」

気持ち落ち着けてきちんとレオナ姫にも挨拶をする。

いや～原作よりも美人さん！ダイ兄頑張ってレオナ姫お嫁さんにして頂戴！そしたら私の義理姉さんだ！

テンションマックスで見てしまう程の美人さんだ。

メルルさんも綺麗な人だし、若い子がいるっていいな～。

ティファは自分の―今の年齢―を好かんと忘れて、頭の中がちょい親父化してしまっている。

さらに言えば、思考がバランに寄っていると知ったら「ダメ父と一緒⁉」ともだえ苦しみそうだが、知らぬがなんとやらだ。

「それで、ダイ兄はどうしたい？」ここはきちんと意思確認だ。

「・・ティファは・・どうしてそんなに落ち着いていられるの？父さんだっていう人が！いきなり敵なんだよ!!」なのに驚いていないだなんて!!

「兄・・驚こうにも、驚いている暇がないからそっちは一旦考えないようにしているんだよ。

状況はかなりまずい、クロコダインの話が本当なら魔王軍の最強戦士が相手なんだから。

それでも・・そうだね、現実感がまだ湧かないのが本当かな。」

声を荒げるダイに、ティファは困った顔をしている。

本当は知っていましたとは口が裂けても言えないが、それでも驚い

ているのは本当だ。
五年前から人間に対する評価を変えていなかった父に対して。
竜騎衆とテランの子供達との交流を見ていたはずなのにだ。
それでも変えなかったことに驚きよりも悲しみが先立つ。これであの三人とも戦わねばならないのか。
―伝言―を託されたというのに、どうしたものだろうか。

「・・・ごめんティファ・・俺分かんないよ!・竜の騎士だっていきなり言われて!!分かりそうなところに行ったら・・」
「そしたら原点に帰ろうか。ダイ兄はどうして勇者ダイになったの?」迷ったら原点回帰が一番だ。
「俺・・ロモスの王様と、レオナを助けたくて・・」皆を助けたい!!
「そうか、そしたら―ヒュンケル案件―で行こうか!」
「・・なにそれ?」ヒュンケル案件て。
「ヒュンケルの時も、先生の同門でも敵だったでしょう?」「あ!!そうだ・・そうだよ!」
「ダイ・・バランって奴も助けるのか?」クロコダインの話では、カールを実際に占領したとあった。
ヒュンケルは一国と戦ったがさして被害が少なかったからまだ何とかなったが。
「・・その事なんだけどねポップ君、皆も聞いて頂戴。私がここに来たのはカールの女王フローラ様から親書が届いたからなのよ。」成り行きを見守っていたレオナが口を開く。
親書の内容は、大戦の始まる少し前に―竜の軍団が攻めてくる夢を見た事―
俄かには信じられなかったが、その数日後に大戦が始まり、竜の軍団は来なかった。
それでも毎日国境よりも数十キロ先まで見張りを置いて、国民にもいざとなったら素早く逃げられるように告知をして四日後に異変が起きた。
見張りより竜の軍が集結をしているとの報に、フローラは迷いなく

国民から逃がして、首都が空になったのを見届けてから脱出をした。
「今は潜って散り散りになった騎士団達をまとめて機を窺うって。それは各王家に親書で渡されているって書いてあったけど、お父様とテラン王が旧知の仲で、フォルケン様の状態を心配されているの。」今大戦が体に響いていないかを心配し、その様子がはたで見ていても痛々しく、娘の自分が様子伺いに来たのだが、重大ごとの渦中に巻き込まれてしまったと苦笑する。
「彼の所業は人として許せないけれども―罪状―はヒュンケル達と同等と考えてくれればいいわ。」だから助けたいと思っていいのだと、レオナが許しを出してくれる。

よっしゃー！ここでも夢機能がきちんとお仕事してくれた!!後は父さんと三人ボコってとっ捕まえて説得三昧しましょう!!!
「・・・・・ティファ？」いきなり妹がガッツポーズしてる・・
「あ！ゲフンゲフン・・とにもかくにも、私がした事であちらは烈火のごとくお怒りの筈ですから、すぐにとって帰ってくるはずです。」
「そうね、私の護衛の・・」「姫、僭越ながらそちらはテラン城の守りでお願いできませんか？」ティファがレオナに待ったをかける。
「理由は一つです。即席の集団は、時に危険です。
きちんと機能しない集団はたんなる的にしかなりません。少数であっても連携をきちんと組めた方が戦いやすいでしょう。」特に父さん相手だったら、護衛程度じゃ一般人と変わらない。
数が多ければいいというもんでもなし、守ろうとして兄達の力をそっちに削減されても割に合わないしね。
「・・足手まといって事？」「・・・正直に言ってしまえば実力が不足しているかと。魔法使いの一団のようですが、お一人ずつがポップ兄並ならば話は別ですが。」
「・・無理ね、分かりました。貴方の発言を入れましょうティファ。」
「ありがたく。」話の分かるお姫様だ、増々ダイ兄のお嫁さんになって欲しいよ～。
「あの・・私の顔に何かついているかしら？」

「あっと！・・いえ失礼しました！聡明な姫君が兄の想い人だと思うとつい・・」
「へ⁉」レオナは素でティファの言葉に驚いて、口をおの字にして手を当ててダイを見れば、グミの実のように赤くなっている！
「・・・レオナは俺の事・・」しかも真っ赤になっても真剣な目で!!
「ダイ君・・私はパプニカの跡取りで、色々と重責がついて来るの・・」
「そんな事は分かってる！ティファが教えてくれた!!」事件の後、一生近くでレオナを守りたいと妹に言った。
「その時にね、近くで守るっていうのはどんな事だと思うっていうのも。」騎士として側近くに使えるのか、―結婚―をして夫としてか。
無論結婚をしたい。島の中には番が沢山いて、家族になっているのをよく見ている。
家族なりたい、そういう意味でレオナが好きなのだと。
その時にレオナの今の状況を教えてくれた。
「俺絶対にレオナの―夫―に相応しくなる！待っててねレオナ!!」
「ダイ君・・待ってるね、くしゃくしゃのおばあちゃんになる前に！絶対に私をお嫁さんにして頂戴。」「しわだらけになっても、レオナならいつでも綺麗だよ。」「ダイ君。」「レオナ」
「ゲフンゲフン!!・・二人共、こっちの世界に戻って来てくんねえか？」
「・・若いというのはいい事だ。」
「おっさんもしみじみ言ってねえで、とにかく！メルルとナバラさんはテランの王様と一緒に居てくれ。」
魔法使いの集団が城を警備してくれるなば、後顧の憂いなく戦える！
「ナバラさん、ここから少し離れたところに開けた場所はありませんか？」平原の見通しの良いところで決戦だ！

一方のアルゴ岬
「空戦騎・ガルダンディーまかり越しました。」
「陸戦騎・ラ―ハルト御前にまかり越しました。」
「海戦騎・ボラホーン推参しました。」

水で目を洗い流し、回復をしたバランはすぐさま竜騎衆三人を呼び寄せ、我が子が見つかり、妨害にあった事を伝える。
「かしこまりました、ディーノ様を迎えに上がるのですね。」
「それにしてもクロコダインがな～・・」武人の鑑だと思っていたのにとガッカリとする。
「こらガルダンディー！」「だってよ、ラ―ハルト。」
「二人共、バラン様の御前だぞ。して、ご息女のティファ様の方は？」
「うむ、それが会えなかった。ディーノたちが島に帰したのかもしれん。それよりもお前達に尋ねるが。」「「は、何なりと」」
「五年前に会った少女に近頃会うか話は聞いていないか？」
「「・・・は⁉」」「ルードはどうだ？」「―えっと・・―」
「何故ですかバラン様!!」ラ―ハルトは決死の思いで主に尋ねる。それほどまでにあの小娘は尋常一様では無かった！今思い出すだけでもすぐさま頭痛がしてる!!それ程の娘の事をなぜ今更と。
「いや・・やはり人の中にいさせるのは惜しい娘だ。ディーノたち共々保護をしたい。
それに年の近い者がいた方が二人も喜ぶであろう？」今度は有無を言わさずに連れて行くつもりだ。
「その様子で知らぬか。私は回復の泉で回復を図ってくる。各自も備えるように。」

「・・・バラン様、まだあのガキンチョの事を。」
「まあ、様々な意味で凄い娘ではあったな。」
「―僕もおねいちゃん大好きだよ、会いたいな～―」
「しかし、あの小娘は今の我等を許すまい。」人間全滅させるとか馬鹿言ってるな!!
かつてガルダンディーを烈火のごとく叱り上げたように。
バラン様は素晴らしい御方だが、人間憎さで見誤る時がある。あの少女が、今のバラン様を知って、果たして昔のように笑いかけてくれ

るかも分からない。
種族を全く見ていなかった優しい少女だった。
その少女と、似たような子供達に会ってしまったせいか、今はもう昔ほど人間を憎くは感じられない。少なくとも全滅を、ましてテランのあの村が襲われたらと思うとたまらなくなる時がある。
自分達だとて、他国を攻めているというのに何と都合のいい事をと思いつつもだ。
それはガルダンディーとボラホーンもそうだろう。ルードなぞは、兵士相手でも止めを刺そうとしない。
自分達を変えたあの少女は、今どこでどうしているのだろう？

「待たせたな、行くぞ。」亡き妻に子等を迎えに行くと誓い、アルゴ岬を後にする。
ラ―ハルト達は己の心を押し殺して従う。誰に誹られようとも、自分達はバラン様に付いて行く―最後―までだ。

再会の仕方がが予想と違う件

テランの平原にてダイ達は超竜軍団を待ち構えていた。
レオナはやはり危ないので、城でメルル達と共に安全確保。ごねたがダイのスマイルでいちころでお留守番決定した。
さあ来るなら来なさい父さん達！きっとあの三人組と、ルード君ももれなくセットだ!!
私を見て驚いて騒いで説得をされて改心なさい!!
当然ティファの事も兄二人は置いて行こうとしたが、「回復役どうするの？いた方が便利だよ？」
今回は初手から鋼の剣を帯剣している。雪白は威力がありすぎ＋伝説級の武具をどこでの説明が思いつかないので今回は鋼の剣ことハガちゃんの出番だ。
回復薬は準備万端、三人の説得材料もばっちり！お髭のおじさんこと父さんも頑張るぞ！
いつでもどうぞ・どんとこい！

しかしティファの周りはいつもバタつくのが宿命化をしている。

この気配と匂い！
―それ―に最初に気が付いたのはルードだった。
二度しか会っていない、それでも大好きになって！もう一度会えないかとずっと考えていた!!
「―降りてよ！ガルダンディー!!―」一人乗せているとやはり動きが鈍る!!
ガルダンディーも大好きだがいつでも一緒!!大好きなおねいちゃんに会いたい!!

ん？なんだろう、なんか懐かしい気配が迫ってる？それも凄い速さで「竜が来たぞ!!」

ポップ兄にも視覚できるって！あれは!!「ストップ!!ポップ兄!!」ルード君だ！

先手必勝でメラゾーマを放とうとしたポップはつんのめり、迎撃態勢だったダイとクロコダインも何事かとティファを見るが、当のティファも焦っていた！

何でルード君が単騎で来てんのよ～!!

「止まってルード君!!」大声でルードの名を呼ばわりながら、ルードの下へと走っていく。

見晴らしの良い平原で、ルードもすぐさまティファに気が付く。

「―おねいちゃ――ん!!―」低空飛行で地面すれすれにティファの周りを一周して速度を殺し、

体でティファを囲うようにしてティファの顔に鼻をこすりつけた。

「―会いたかったよ～おねいちゃん!!―」本人？としてはそっとやっている積りだが、五年の月日でルードはすっかりと体が大きくなり、対してティファはさほど大きくなっていないので押しつぶされかねない。筋力トレーニングはしておくもんだと、ティファはしみじみと思う。

でも重い！「ルード君！お口開けて!!」こうなればあの手だ！

「―は――――い!!―」案の定良い子でがっぱりと開けてくれた。

エットどれどれ～「奥歯よし、犬歯も大丈夫、歯茎も綺麗なピンク色。ルード君、石砕き毎日している？」

「―うん、寝る前にやれってガルダンディーが言ってるからしてる―」

「虫歯は無し！ルード君、はいご褒美の竜でも食べていい特性のオオアメどうぞ。」

「―アメ？いただきます。」ガリゴリ・・美味しい！なんか少し大きめの白い岩みたいなの噛んだら甘くてすっとする！

「良い子だね～ルード君、今からここ危ないからどこか他に・・」「―おねいちゃも一緒？―」

「え！いやちょっと・・」「―一緒じゃなかったら嫌！―」行かない!!

「困ったな～。」「―おねいちゃん大好き～―」だからベロンと舐めちゃう。

「わ！ルード君！眼鏡が壊れちゃうよ。」む！僕よりもその小さな黒いのが付いているのが大事なの⁉

親愛の嘗めをしても喜んでくれないおねいちゃんは少し意地悪だ！そんなものがあるからいけない!!　　―パク・ゴクン―　これで良しと。

今・・あの竜なにした？

展開についていけなかったポップだが、アバン先生の形見の眼鏡が、ルードと呼ばれた竜の舌で搦め取られて、呑み込まれちまった!!!!

物凄く焦る！それはティファも同様だった!!

「・・・・・」無言で素早くワンピースを脱ぎ捨て「ルード君!!!」びりびりに怒ってルードをビビらせ、隙をついて口を両手で開かせて、閉じない様に鋼の剣をつっかえ棒にして閉じないようにして、素早くルードの口から胃袋に向かって匍匐前進をした!!

何て事すんのよルード君!!その眼鏡ちょっと待った――――!!!

ルード君の三分の一辺りで眼鏡をゲット―ガシ！―

「ガキンチョの足捕まえたぞ！引っ張ってくれボラホーン!!」え？

「承知！苦しくとも口を閉じるなよルードよ!!」へっへ？

懐かしい二人の声がして、思いっきり後ろに引っ張られた!!―ずるん―

あ、青空が見えたら、なぜか私・・ガルダンディーに抱き上げられてる!!

周り見たら・・鬼の形相のボラホーンさんとラ―ハルトさんもいた・・上見たらガルダンディーさんも同じ顔して・・・あれ？

妨げられた思い

父さんと三人組が襲撃をしてきて、私を見て驚いた隙に説教する予定だったのに、
「このバカガキンチョが！ルードの粘液で消化されてえのか!!」
「無謀な馬鹿だとは思っていたが！考えなしの馬鹿まで追加されたいのか小娘!!」
「お転婆も大概にせよ！もっと自分を大事にできないのかバカ娘!!」
う～う～、何でか私がお説教されてる!!
「だって!!ルード君が!!!」―バッガン!!―本気で鳥兄さんに頭ぶたれた!!!
「だからって口の中に飛び込む馬鹿がいっか!!」
「ルード!!お前も悪いぞ!!」ルード君もボラホーンにしばかれてる。
「―だっておねいちゃんが！僕よりもそんな!!―」
「問答無用で筒に入れさせるぞルード!!!」ラーハルトさんがおっかないよ！
ひっくう～「そんなに・・怒んなくてもいいじゃないですか～」何で私が怒られないといけないの～・・理不尽だよ。
久し振りに会った少女が、いきなりルードの口の中に飛び込んだのを見た時は心臓が止まるかと三人は思った。
無謀で馬鹿だとは思っていたが、成長をしたら少しは落ち着いているのだろうかと夢見た自分達が馬鹿だった。
「・・ったく・・いいから服着ろ。」ほれ着せてやる。
「馬鹿な小娘だ・・ほら髪をきちんと結い直せ。」リボンくらいは結んでやってもいいだろう。
「あまりにも無謀が過ぎるぞ。」ポーチも全て落として服を脱ぎおって。
三人は何の疑問もなく何くれとなく少女の面倒を見る。
自分達の名前を知っている、それでも自分達は少女に名を聞いていないというのをすかんと忘れて。
ガキンチョ・小娘・娘とそれぞれ好き勝手に呼んでいる。今更名前

なぞどうでもいい位少女の存在は大きいのだから。
それに―ふわり―「・・あまりにも無謀が過ぎるぞ、娘よ。」バラン様とて娘を愛しているのだから。
大きな手に両手で抱き上げられた。
振り向いたらやっぱり「お髭のおじさんも怒ってる？」酷く憂い顔の父さんだ。
「怒ってはいない、しかしそれ以上ではある。」ルードが一目散に飛んで行った先にはもしやと思い期待をした。
そして案の定見つけた！それもボラホーンとガルダンディーによってルードの口から引きずり出された娘が!!
もうどうしてああなるのかが自分にはさっぱりと分からない！自分が人間とずれているとの自覚はあるが、この娘ほど変わっている訳ではないと断言できる!!
最早放ってはおけない！この娘は自分が保護をしてうっかり無謀をしない様に見ていなくては!!
「今度は聞かぬ。我等の元に来てもらうぞ娘よ。」そして大切にする。
「う～ん、お髭のおじさんそれって犯罪だよ～。」悪い事禁止だよ。
「そうでもしないと安心できぬ。どうせ今までも相当な無謀をしてきたのであろう？」
「・・・少しだけ？」自分でも疑問形。えっとハドラーに宣戦布告とか、わざと敵に捕まったのかって無謀かな・・やっていないと断言できない所がいたいな。
「バラン様、聞くだけ損です。さっさと連れて行きましょう。」「あ！ラーハルトさん酷い！」
「お前なんてバラン様が言った通りだろう！ゆうこと聞いておけ!!」
「そんなことないよ、ガルダンディーさん!!」
「ではどう違うのだ？無謀をしていないと言いきれるのか？」「・・突っ込み鋭すぎだよボラホーンさ・・」
「いい加減にしろ――――!!!!!!」バリバリ!!!

少年の怒りに満ちた声が、気配的にも物理的にも雷を落とした――

!!

妹を好き勝手する父親とは絶対に認めたくない男とその配下とおぼしき奴等が!!最愛の妹と何を気軽に話してる！

ティファは俺の妹だ!!好き勝手にしていいのも俺だけだ！他人が勝手に触るんじゃない!!

近頃はウォーリア船長の船員に、ティファに言い寄る若い船員達がいる

それらはもれなくお友達のモンスター達と一緒に邪魔をする。

好きだと言いかけた時にタイミングを見て出ていき、プレゼントのお菓子は美味しくいただき、花束は自分が受け取るｅｔｃ．だ。

大切で大事な可愛い妹に!!ティファがいなければさっさと当人達にライデイン落とすのに!!

何やら勇者として敵を討つという趣旨とはだいぶかけ離れているが、闘志は十分ある！

しまった、ディーノをすっかりと待たせてしまった。

いるのは分かっていたが、少女の方が衝撃度合いが大きかったためにそちらを優先し過ぎたか。

しかし瞬時に紋章を発動させて、平原にライデインを落とすとは流石に我が子だ！

戦士としてなんと優れた子に育っているのだろうと、父としては嬉しい！短気は大目に見よう。

「すまないディーノ・・」「五月蠅い！俺の名はダイだ!!ブラスじいちゃんがそう付けてくれたんだ!!!」ダイ以外は認めない！まして人間を滅ぼすと言っている男から・・「ティ・・」―モガ―

「随分と人間の女の子にご執心じゃねえかよ、人間全滅目論んでるお人がよ。」

ダイがティファの名前を呼び掛けたので急いで手で口を塞ぎ、余裕たっぷりとした挑発をする。

この言い方であれば、聡いティファならばすぐに分かってくれるはずだ。

その男が先ほど言った父親であり、今回の敵なのだと。

どういう経緯で知り合ったがは不明だが、まさか昔会っていた知り合いだと思わなかった。心底驚いたが、魔法使いがこの程度でうろたえて感情を出すわけにはいかない。
ティファは驚くだろうか？親しく呼び合う知り合いが、そんな複雑な関係だと知って。

「・・・・本当なの？」ティファは悲しい顔をバランに向ける。
「・・娘よ・・」バランはその顔を見て苦しくなる。この娘には笑顔がよく似合い、悲しい顔をさせたくはない。
それに、己の中の醜い感情を知られたくはなかった。
「お髭のおじさんはまだ人間が嫌いなままなの？」とてもとても悲しそうな眼で、自分の目をのぞき込んでくる。
自分からそらさせない様にと、小さな手がひたりと頬に張り付く。
「人間にもいい人は沢山いるよ。テランのあの子供達だって人間の子供なんだよ？」
そうだ、それがあるのがいけない。ルードの面倒を見て、ボラホーンとラーハルトに憧れの眼差しを向けていた十数人の子供達。
「・・あの村は手を出さぬ。」そうすればいいだろう。
「勝手を言うな!!」ダイはバランの言い分に本気で腹を立てる。
生殺与奪権利を持つ、神にでもなったつもりかとポップとクロコダインも同様だった。
「お髭のおじさん・・それじゃあ駄目なんだよ。」その村を救うと言ったのに、何故悲しい顔をするのだ。
「あの村の子供達も、大人だってそんなこと喜ばないよ。あの村の人達はテランが好きで、王様も大好きで、行商に来る遠方の友人が好きで、親戚の家も他国にあるんだよ。」
世界はバラバラに見えても繋がっている。
一人の人間が笑って本当の意味で幸せになるには、実は世界が平和でいなと叶わないのではないのかと思うほどに複雑に絡み合っている。
一概に自分達だけが助かれば幸せかといえば、あの村の人達は否と

答えるだろう。
「そんな事をしてたら、お髭のおじさん達皆が嫌いになられちゃうよ？」それこそルードに長生きを願ったニーナにもだ。

その言葉に、ガルダンディー達も苦しくなる。ニーナ達と敵対したくはないと、この期に及んでも都合のいい事を考えてしまう。
バランの子息で目の前の勇者ダイよりも、少女とテランのあの村の子供達の方が遥かに大切なのだ。
「・・・・人とは本当に狡猾な生き物だ・・」
少女と竜騎衆の悲しみを感じたバランは、胸の中にどす黒いものが覆いつくし始める。
「弱く！あどけなく!!そしていつかは裏切る業深き者!!それが人間なのだ！」二度と人間なぞ信じるものか！
かつては自分も少女のように人間を信じた。だが挙句どうなった？自分から最愛の者を奪い、あまつ死にゆく娘に罵倒までする醜い生き物ではないか!!
「・・お髭のおじさんは、人に酷い事をされたんだね。もしかしたらガルダンディーさん達も。」
「そうだ！ガルダンディーとボラホーンの一族は人間との土地争いが元で争い、一族を滅ぼされた!!ラ―ハルトは幼少期より、その出生によって迫害をされて死ぬ寸前に私が助けた!!
まだ当時は幼く、出会った時のそなたと同い年頃の時に！誰も手を差し伸べるどころか殺そうとしたのだ人間は！
そして私の大切な者達を奪ったのも・・」
呻くように、胸の痛みを吐きつくすかのようにバランは目の前の少女に叫び上げる。
「そなたは！人間の醜い本性を見ていないからこそ綺麗事が言えるのだ!!」
少女の美しすぎて眩しすぎる心を否定するように。
種族なんて気にしない、あの言葉を粉々にするために。

バランの激白に、ダイとポップは衝撃を受けた。
まさか同族がそこまで酷い事をするとは思ってもみなかった。
ガルダンディー達を見てみれば辛そうな顔と、微かな憎悪を感じる。底に仕舞い込んでいた痛みを思い出すように。
「駄目だよお髭のおじさん！」凛とした声がバランの負の思考を遮る。
「何度言わせる！そなたは・・」「私だってあったよ！酷い事に!!」
バランの怒鳴り声に負けない様に、ティファも負けじと大きな声ではっきりと言う。
ダイとブラスには絶対に内緒にしていた事だが仕方がない。
旅をしていれば、それも自分のような子供はすぐに襲われる。
追剥や盗賊たちは数えきれないほど、親切に泊めてくれた家の人が女衒で寝込みを襲われた。
傷薬を売ってあげたのに、渡すお金はないと石をぶつけられた。
言葉を話す大型モンスターを助けてあげたのに、そのモンスターよりも上位のモンスターに贄に出されて、食われかけた。
気を失っていたはぐれ魔族さんを助けたのに、話をする前に硫酸を浴びせられて背中には醜い傷が未だに残っている。
お金も騙し取られた、遊んでいたモンスターに騙されて目玉を啜られかけた。
本当に全種族に騙され酷い目にあった。危害を加えていない種族は精霊くらいしかいない。

「・・・娘よ・・そなたはどうして恨まない？何故平然と笑っていられる。」それこそ人間どころか世の全てに不信感を持っても不思議ではないだろうに!!
「だって、やったのはその人達であって、他の人達じゃないもの。
硫酸を浴びせた魔族さんはラ―ハルトさんじゃない。
私を騙して食べようとしたのはガルダンディーさん・ボラホーンさん・ルード君じゃない。
お金を騙し取ったり、殺そうとしたのはニーナ達じゃない。
私はね、種族なんかでは―その人達―の事を分かるとは思えないん

だよ。
　だってお髭のおじさんの言う通りだったら、酷い事をしたのは全部人間だけじゃない。全種族が悪しきものになっちゃわないかな？」だって、全種族に悪ささされた。
「それでも、私はニーナ達もお髭のおじさんたちの事も大好きだよ。」愛おしくて、助けたいと思うほどに。
「それは・・」
「人間だって、魔族だって、半魔だって、モンスターにだって悪い奴等はいる。
　腐ってどうしようもない奴がいるのも知っている。
　私だって、大切な人達を殺した奴は許さない。」きちんと殺す。
「でもその人か、関わった者以外を滅ぼそうと思わない・・もしかしたら、私の大切な人達は、私に復讐なんて願わないかもしれない。」ブラスじいちゃんが願う訳がない。
「お髭のおじさんの大切な人は、願ったの？」人間を滅ぼしてほしいと？

・・あの日の出来事を決して忘れはしない・・妻は願わなかった・・人間への復讐なぞ・・
　―あなた、人間を許して頂戴・・・―死の寸前でも、ソアラは優しいままで・・・では私は・・妻の思いを踏みにじっていると言うのか！この少女のように、死したソアラは悲しんでいる・・

「いけないお喋りをする子だね～」

バランの迷いを嘲笑うかのように、歌うような声が朗々と平原一体

に響き渡り、同時にティファの口を二つの手が覆いつくして、そのまま―黒い空間の中―に引きずり込んだ！

「忘れちゃだめだよバラン君。その素敵な大切な人を奪ったのは―誰―何だい？」

思い出してごらん、何故君はそんなにも人間を憎んでいるのかを。

死神の執着の始まり

「放してください!!!」

真っ暗な、どこまで行っても出られそうにない所は怒声とて呑み込む。

「駄目だよ。この前言ったでしょう、お転婆が過ぎると狼に食べられちゃうって。

忠告を無視した君が悪いんだよ、大人しくしてね?」

キルは少女を後ろから抱えながら空間をたゆとう。

いつもはピロロが肩に乗っているだけで基本は一人でしか入らないのに、初のお客様は気に入った少女で、これからひょっとしたら―仲間―になってくれるかもしれない大切なお嬢ちゃんだと内心でほくほくとしている。

こんなに思いを向けるものに出会ったのは本当に久方ぶりだ。

ヴェルザー様は別にどうでもいい、バーン様の方が今は好きだ。

ミストは言わずもがなで、近頃はハドラー君がいい感じになってきたと観察してみようかな～くらいだが、この少女は全く違う!

少し遡った魔王軍

「・・・・・・一体・・・・・・あ奴は何なのだ・・・・・・」

これはハドラーが振り絞るように出した言葉だった。

今魔王軍の残った団長達は、バランの戦を全員で見ていた。

何となれば、最大の障害になりうる勇者一行を壊滅させて、うまくいけばダイとティファが手に入るかもしれない重要な戦だからだ!

キルがお膳立てをして、待っていたバランとダイが激突をして・・・乱入者にバランが撃退をされたところは・・最後はともかくほぼ真っ当な戦いだったが・・ティファのせいですべてが茶番化してしまった!!!!

何なのだ本当にあれは!!冗談が具現化をして服着て歩いているようにしか最早見えん!!!

布陣を張っていたところはともかく！ルードとか言う竜にいきなり懐かれて、歯を見るだのアメ上げるだの！さらにはいきなり服を脱ぎ始めて竜の口の中に自ら潜り込むって何だそれは⁉

いかにアバンの形見の為とは言え！命いらんのかあいつは!!!!

もうやだ・・あれに関わると頭痛しかせん・・胃に穴が開きそうな・・

「く・・くっくっく・・はっはっはっは!!あああもう駄目!!あの子凄い傑作！僕笑い死にするかも!!」

それをミストバーンの肩にもたれて大笑いをしているキルバーンの気が全く知れん。

様々な意味で唖然茫然としているザボエラの方が納得がいく！

この状況は様々な意味でおかしいだろう!!

軍随一の冷徹参謀の肩に、軍随一の味方殺しの異名を持つ死神が寄りかかって大笑いをしている図も中々シュールだが、キルは心底大笑いをしている。

もう駄目！あの子があんなに面白い子だと知っていたら、ロモスの迷いの森で有無言わさずにかっさらってきたのに！

ティファと言う少女はまさしく自分の好みにバッチリと当て嵌まっている。

服の好み、独特の思考回路、それ故に我が道を堂々と行く姿はまさにバーンとミストにそっくりだ！

僕のお嫁さんになってくれないかな？そしたら好みの服をいくらでも作ってあげるし、大事に大切にしてあげる。

・・・僕―人形―だから子供は出来ないけど、―快楽―位なら上げられるから、そっちで我慢してもらおうかな？

親友の肩にもたれつつ、赤い瞳を三日月型に吊り上げながらうっそりと微笑む。

こいつ絶対に碌でもない事を考えているだろうとは、長年親友をしてきたミストには

手に取るように分かる。

キルは普段は意外にも淡々としている。

道化の如く瓢気ていてもそれすら仮面の一つで、自分とバーン様以外にはピロロにも感情を見せる事は無い。
それでも偶に、本当に稀ではあるがこうやって感情をもろに出す時は碌な目に自分が合わない。
何か楽しそうな事を見つけたと言っては巻き込まれるのだから。
「ねえミスト。」案の定甘えた声を出してきた！
「もう勇者君はバラン君に任せて、あの娘さんをさらっちゃおうよ～。あの子いた方が絶対に楽しい日々を送れるよ～。」・・・・駄目に決まっているだろうが！
大魔王の死神が！ホイホイと表に出ようとするな!!「・・駄目だ。」
内心で切れつつも、キルにしか聞こえないようにそっとつぶやく。
二人きりになったら説教の嵐だ!!
「・・・ケチだな～。」・・・当分口きかん!!!
そんな親友コンビが楽しいやり取りをしている間に、事態は増々おかしくなる。
あの氷の如くと評された超竜軍団の配下の竜騎衆たちまでもがおかしくなっている！
ティファを竜の口から引き出した後、がみがみと説教をしている！あり得ん!!
どの様な敵対者にも感情を見せず、唯一感情を出したのは―例の一件―の時のみで、あれ以降さらに他の軍団の者にも冷たかった三人とはとても思えない程の・・しかも三人とティファが知り合いで！あのバランが憂い顔に笑い顔だと⁉・・・・今日で世界の終末かと本気で思うほどあり得ん。
しかも会話を聞いている限りでは互いを親子だと認識すらしていないのに、あのバランが人の子にしか見えない少女に普通に話してあまつ連れ帰るとかもう訳分らん!!
ダイが事態に切れてライデインを降らせた気持ちがよく分かる・・ポップがいっている事にも賛成だ、お前は人間を滅ぼしたくて魔王軍やっているのだろうと内心でうんざりしながら突っ込んだ。

しかし事態はハドラーとミストの思いとは裏腹に―死神キルバーン―が動かざるをえない事になってしまった!!
ティファの純粋な思いの言葉が、憎しみで凝り固まったバランの心を溶かそうとしたのだ!
ティファの綺麗事を粉々にしようとしたのが反対に喰われた結果だった。
「行ってくるね～ミスト～」
これは不味いね～と瞬時に判断をしたキルは、返事を聞かずに空間を通って行ってしまい、次の瞬間には悪魔の目玉がティファの口を覆って黒い空間の入り口に引きずり込む映像と、冷たく歌うような―死神―の声が響き渡った。
竜の騎士たるバランが魔王軍にいる理由はただ一つ、最愛の家族を壊した人間を殲滅させる、それのみだ。
その理由がなくなってしまっては、いずれは自分達の邪魔になってしまう。
―手駒―が減っていてこの忙しい時に、そんな事になっては面倒だ。
バランが勇者一行の味方になったら洒落もならない、もれなく竜騎衆達も付いて行ってしまう。
こちらの戦力強化で目論んだことが、まさかティファを中心にどんでん返しを喰らいそうになるだなんて、悪い子は早々に僕が確保しないといけないな～。
確保されたティファは当然驚いた!父の腕の中、折角いい感じで話をしていたのに!!冷たい手に口を覆われて引っさらわれれば十分驚く!!
「シィ～、僕だよお嬢ちゃん♪」
・・甘い声・・どこかで・・あ!「迷いの森の!!!」
手を放されたので首だけで振り返ればキルバーンがいた!!
「そうだよ。覚えていてくれてありがとう、君を迎えに来たんだよ。」
「迎えって・・放してください!!」

そして今に至る。
黒い髪を振り乱し、必死に自分の腕の中から逃れようとしてもそうはいかない。
「ここでは君の力は及ばないよ、通常の空間じゃなくて亜空間なんだから。
―空間使い―の僕の独壇場だよ。」
「・・亜空間・・」
「そうだよ・・・詳しく言ってもややこしいから、簡単に言うと今の君の力はいつもの半分だけしか使えない。
僕や同じような空間使いでないと亜空間に作用している力場の法則から逃れられない。
―大魔王バーン様―クラスや竜の騎士様クラスしか破れない場だね。」―ピクン―
「おや、何に反応をしたのかな？
僕が大魔王バーン様や竜の騎士様と言った事？それとも君が弱くなった事？
改めて自己紹介をするね、僕の名前はキルバーン。
大魔王バーン様の直属の配下で、口の悪いものは僕を死神と呼ぶ。
以後よろしくね、超竜軍団バラン君の娘のティファお嬢ちゃん。」
様々に驚いているティファを自分の方に向かせながらゆっくりと挨拶をする。
見開いた一目はやはり夜空の星のように煌めいて美しい。
「バラン君！君の娘さんだよこの子は!!」
ダイ達が必死に隠そうとした秘密を暴く。
二人の兄達は、妹を守らんとしていたようだがお構いなしに。
「話してあげなよ、ご子息とご息女に！君の辛さを憎しみを!!世界は決して綺麗事が通らないと！」そしてこっちにきちんと戻っておいでよバラン君。
でないと僕は、君を狩らないといけなくなっちゃうからね。

消された想い出

や！駄目だ・・駄目だ!!今自分がティファだと知られれるのは最悪で、悪手もいところだ！

私は父さんだって最初から知っていた・・でも！お髭のおじさんが大好きなのは本当だ！あの三人組とルード君が大好きなのも本当だ!!偽りなぞない。でも今この状況で聞いた父さんは、どう思うのか考えるのも怖い。

「ふ・・・・ふっくっく・・はっはっはっは!!」

娘だと!!ティファだと⁉散々あの娘を娘と呼んでおいて！実の娘と気が付かなかった私は愚か者だ！

そうか・・私があの娘を愛おしく思ったのは、無意識にティファだと知っていたから！私が!!この私がただの人間の娘なぞ愛する訳がなかったのだ!!!

ティファの考えてた通り、バランはティファを知って―人間の娘―に対する思いを自分の都合の様に書き換えて行く。

あれは自分の本当の娘、ならば！娘は人間ではない!!ディーノと同じく自分とソアラの最愛の子供達で竜の騎士！薄汚い人間では決してない！

「その子を毛筋程でも傷をつけてみろ！貴様を粉々にして私は大魔王バーンと決別をする!!人間は我等のみで滅ぼす!!!心得ておけキルバーンよ!!」

「だ・・む!!」

「了解だよバラン君、君の娘さんは僕が保護をしておく。君は君の物語を存分に語りたまえよ。」

「ふん！貴様に言われるまでもない・・」

人間を滅ぼすなんて言ってはいけないと叫びたいのに！キルバーンの手が邪魔をする!!

「しぃ～、今君のお父さんが大事な話をしているんだよ。

静かに聞こうねお嬢ちゃん。」

完全に虜化している、如何せん体形に差があり過ぎて振りほどけない。
常の力があれば！両手を壊して逃げながら脱出方法を考えるのに!!
ああ・・父さんが血を吐くように、呻くように母さんの死を話している。
知っている、だって・・私はそれを見捨てたんだ！赤ん坊だからと言い訳をして、―その後の為―といって神様達と共に見捨てたんだ!!
「ふ・・っく・・ひっぅ・・」
「泣かないでお嬢ちゃん、君のお母さんの仇は皆死んだんだよ。小賢しい人間は僕達で滅ぼしてあげるからね。だから泣かなくていいんだよ。」違う・・父さんを・・憎しみに走らせた一旦は私にもあるんだ・・本当に何かほかにできなかったのかを話し合っていれば、今日の出来事は・・少なくともダイ兄にこんな悲しい事を知られる日なんて来ず！父さんが憎しみに堕ちる事もなかったのに・・

泣くティファをキルは愛おしそうに包み込む。母の死を知り悲嘆にくれていると勘違いをして。
ティファの心の中は罪悪感で溢れて折れそうになる。楽をしたつけが、守れたかもしれない家族を壊してしまったのではないかと。

俺の・・母さんが実のお父さんに？
父さんは・・人間を守ったのに・・裏切られた？
あまりの話にダイも流されかけた。父の言っている事が本当ならば、人間は身勝手で、どうしようもない・・・・・けれど!!
ダイはしんとしてしまったポップを見る。
青ざめて少しだけ涙が見える。
ポップは優しい、会ったことも無い、俺でさえ実感が出来ない母の為に泣いてくれている。
少しだけ臆病で、でも最後は命を張って自分達を守ろうとしてくれる頼もしい魔法使いで兄のような人。

それに自分達兄妹を見守ってくれていたウォーリアさん達は、デルムリン島の仲間達にも優しい。決してモンスターだからと虐めない。
自分の好きなレオナも自分が人間でなくとも好きだと言ってくれた。
―種族じゃない!!その人をきちんと見ないといけないんだよ!―
いつも妹が言っている口癖。人間もモンスターも魔族も半魔も変わらないよと眩しい笑顔で言っているティファ。
今ティファは捕らわれているが、危害はくわえられないと考えてよさそうだ。
ティファならば自分できっと戻ってくる。だから!!
「俺は行かない、あんたと行かない!!人間を滅ぼすなんて間違ってる!!!ティファだって行くって言う訳がない!!!」―ヒィーン!!―
俺は戦う!間違った思いを打ち砕いて!!闇を取り払うのが勇者だ!!!!
ああ・・ああ!ダイ兄・・強くて、本当の勇気ある勇者様だ!・・・私なんかの薄っぺらい勇気と違う、いけない事はいけないと真正面から言える正しい人だ。
幾度兄を尊敬している事か、兄のあの真っ直ぐな心を幾度美しいと思ったか知れない。
自分なんかが決して勝てない最強の勇者様だ。
母の死の真相を知って悲しかっただろうに迷っただろうに、悲しみにくれず、闇に堕ちず、灯りをともすように額の紋章が輝いている。
「ディーノよ、これ程に言ってもなお逆らうか・・」
理解が出来ない、母が恋しくはなかったのだろうか?父がいないと泣いた事は無かったのだろうか?
ティファの様に、人間の甘い面を知っているからだろうか。
ならば方法は一つ!先程は邪魔が入ったが!!
―ヒィ――――――!!!!

「あ!!」―ビクリ!!―
「いやだ・・嫌だ!!!やめろ!!入って来るな――――!!」
「ダイ!!」
「ダイよ!!おのれバラン!獣王・・」
「させぬ!!」
バランは先程と同じように紋章を最大限に発動をし、ダイの紋章と強制共鳴をさせて頭の中を掻き乱していく。
ダイの異変にポップは崩れて痛みに暴れるダイを抱え込み、クロコダインがやめさせようとバランに攻撃を仕掛けたが、神速の速さを持つラ―ハルトが槍でクロコダインの必殺技を止めて戦闘が起こった。
ラ―ハルト達にも確かに迷いがある、テランのあの村を思うとどうしても。
それでも!あの日自分達を救ってくださったバラン様の為に!!
「嫌だ!!!やめて!!!皆やめて――――っ!!!!」
大好きな者達が、それぞれの大好きな者達の為に戦い合う。
何と悲しく、なんと厭うべき事か!
それに・・兄との繋がりが薄れてゆく・・双子で、遠くに居ても必ず互いを感じていた兄のあの気配が・・「嫌だ!やめろ!!ティファ――――!!」
自分の名を呼んで苦しみながら、気配が!!―ヒィー・・―
その思いを断ち切るように、ダイの紋章を消えはて意識もうしないポップの腕の中に崩れ落ちる。

「あ・・・あ・・嫌だ!!ダイ兄――――っ!!!!」

消えてしまった、消されてしまった・・・あの温かい―ダイ兄―の全てが・・

伝説への反逆

―ドーン!!―

「けっほ・・ってえ・・おっさん!ダイは⁉」

「っつう・・安心しろポップ・・きちんと放さずに一緒だ。」

「そうか・・ってかここどこだ?」あの後すぐにダイとクロコダインと共にルーラで逃げた。

無我夢中でしたので場所設定を全くしていなかった。

―ヒィー・・・・・―

「ダイ!ダイ!!・・っ手前!!!ダイに何をしやがった⁉」

バランと紋章を共鳴をさせられたダイの紋章が光を消したと同時に、ダイ自身もポップの腕の中に崩れ落ち、呼び掛けに全く反応をしない。

見ればバラン自身も消耗をしている。

「ディーノ・・くだらん記憶を消した・・その子はディーノだ!!放せ人間!!!」

弱っていても目には憎しみの色がこく輝き、視線だけで人を射殺せそうな力を放っている。

記憶を・・ダイの・・・逃げねえと!!

「イオ!!!」

ポップはダイを左手に抱えたまま、右手でイオを・・何と連射を始めた。

コスパの低い初級魔法の連発は最早現時点のポップでは可能であり、今回は敵を倒すのではなく目くらましになればいい。

土煙を起こした後は上空に数発撃ち、「おっさん!!眼を瞑れ!!!」メッラゾーマ!!!

上空でイオ同士をぶつけて閃光を作り、目が眩んだラ―ハルトにメラゾーマを放つと同時に一気にクロコダインの元に走り、ダイを素早

く預けてルーラを掛けた。
ダイを受け取ったクロコダインも、咄嗟とはいえダイを放さずに無事に逃げおおせた。
ティファが敵に捕まり、ダイも記憶を消されてしまった。
あそこで戦っても、策のない、力が圧倒的に違い過ぎる自分達が戦っても万に一つの勝ち目はなかった。
今回の最善の策はせめてダイを敵の手に渡さない事。
瞬時に答えをはじき出したポップは逃げるのを躊躇わなかった。
逃げるのは恥ではない、その後逃げるだけなのが恥であり、反撃は生き残ってこそ出来る。

「・・・ここ・・デルムリン島だわ・・」
青い海と空に見覚えがあると思えば、デルムリン島だった。
咄嗟にダイにとっての安心できる場所を無意識に考えていたらしい。
ダイとティファの故郷はここだ。親もブラスさんがいる、人間を滅ぼす手伝いをしろ何ていう奴は親なんかじゃねえ!!
戦わないといけない!ダイを守り、ティファを取り戻すためにも。
「おっさん、ここをすぐに離れる。」
「どこへ行く?ここがデルムリン島ならばテランからは相当離れているだろう。」
「・・いや、あいつはダイの紋章と共鳴をしていた。もしかしたら繋がりが出来て居場所が分かっちまうかもしれねえ。」そうしたらこの島を戦場にしてしまうかもしれない。
ダイ達の美しい故郷を。
「ならばマトリフ殿を頼るか?」
「いや、あそこは足場が悪くて戦いづらい。開けていてそして他人が巻き込まれないテランに戻る。」
「・・そうか・・そうだな・・もしもお前の仮説が正しければどこに隠してもダイはすぐに見つかってしまうかもしれん。」ならば自分達が少しでも戦いやすい場所を選ぶべきだ。

「おっさん、ヒュンケル今どこにいるか分かるか？」
「詳しい話は省くが、もう少し偵察をしてからキメラの翼でマトリフ殿の洞穴に戻ると言っていた。」もしかしたら自分同様にテランに行っているかもしれない。
洞穴でのお茶会セットのリングの中には六枚のキメラの翼も入れられてた。
自分はルーラを覚えたからと、クロコダインとヒュンケルに３枚ずつ渡したのが功を奏してくれたようだ。
「・・したら戻ろう・・」ブラスさんに見つかる前に。
この平和な島を巻き込む前に。
俯いていると大きな手が自分の髪をくしゃくしゃとしてきた。
「・・んだよおっさん。」自分は餓鬼じゃねえと口をとがらせてクロコダインを見れば、深い瞳の色をしたクロコダインの目と合った。
「ポップよ、抱え込むな。お前達には俺達がいる、マトリフ殿がいる。ティファもすぐに戻ってくる。仲間で戦えば何とかなるのだろう。」
優しく決して大きな声ではなくとも力強い声が、励ましてくれる。
自分の弱った心を包み込んでくれるように。
今までも死にそうな時はあったが、今回はそれ以上だ。ダイとティファの親が見つかったと単純に喜べることだったらどれほどよかったか。
二人は優しくていつでも人を助ける良い子達が、実の親と戦わないといけないだなんて!!
しかも!ティファはあの四人ととても縁が深く、親しい間柄で、最低な話だが敵であってもあの場から連れ出されて良かったと思う自分がいる!
それでも戦わないといけないと考えると心は重く暗くなる。
そんな自分の思いを見透かしたような、それでいて戦う前にと叱責をするのではなく、励ましてくれるクロコダインの優しさが胸に染みてしまう。
「うう・・く・・行くぞ・・おっさん・・」
涙をこぼすまいと、ポップは乱暴に目をこすってルーラをする。戦

い守る為に。
「ブラスさん、やはり誰も・・」
「おかしいですじゃの～、確かにルーラの音が・・」
ポップ達のいた海岸に、ほどなくしてブラスと護衛につけられたロモスの魔法使いが姿を現した。
「ここに来るとしたらダイさん達ですよね。彼等ならば来たとしたらあなたに挨拶をしていくかと。」
「・・そうですじゃのう。」
ザボエラの時のような事が二度とないようにと護衛を付けてもらい、幸いにもモンスターに理解がある魔法使いが丁度いたので島に来てもらい、近頃はダイ達の幼少時代の話が弾んでいる。
少し前にルーラの着地音が聞こえた気がしたのでともに来てもらったが、誰もいなかった。
気のせいだったのだろうか？
ダイ、ティファ、ポップ君も無事に帰ってくるんじゃぞ。
育て子達と優しい少年の無事を祈り待つばかりだ。

テランの城門前でルーラを着地したポップは門番にクロコダインの身分を保障して中に通してもらい、真っ先にレオナ達の元に向かい、戦いの経緯と顛末を手早く話した。
「あいつ等はすぐに追ってきます、城にはなるたけ被害が出ない様に離れた場所で戦います。」
ルーラをしながら考えていた作戦の説明もしてテラン王に許可を求める。
時間は待ってはくれない、刻一刻とバランが迫っている。
「・・魔法使いポップよ、勝算はあるのかね？」
老王は、一気に十歳も年を取ったような顔をして重々しい声で尋ねる。
よもや生きとし生ける者達の守護者が敵に・・それも自分達が信仰をしている聖母竜の子を討たねばなるまいとは。
「・・正直分かりません・・それでも！座して死を待つつもりはありま

せん!!足掻いて足掻けば道は見つかるはずです。」その為にも戦う!
「そうか、許可をしよう。我らの事は心配せずに、思う存分に戦うがよい。
幸いといってはなんだが、巻き込むほどの民はおらんからな。」
フォルケンは優しくふんわりと笑い、許可を出す。
炎の様に熱い少年の強さに励まされる思いがした、年端もいかない子供が強い決意のもと戦っている、ならば自分達が悲しみにひたってなんとする。

「ポップ君!私も今回は行くわよ!!回復役がいた方が絶対に便利よ!!!」
話を聞いて、眠り続けるダイの手をとって泣いていたレオナの心にもポップの決意の炎がうつり、名乗りを上げる。
さっきはティファがいたが、今回は自分が仲間の回復役をするのだと。
「いや・・姫さん・・今回は守り切れるか分かんねんだよ・・」
あの時はダイがいたから勝算が高くティファに許可を出したが・・・
仕方がない、どこにいても危険ならば手元で守ろう。
いざとなればダイを連れて逃げるように作戦を立てて全員で伝説の騎士に立ち向かうしかない!!

ずれている感覚

「おねえちゃん、俺ここで待っていればいいの？」
「そうです、これから怖い人が来ます。私達と一緒に待ちましょう。」
記憶を失ったダイはメルルとナバラ達と共に王宮の最奥の部屋で保護をすることにした。
バラン一人ならばともかく、竜騎衆達がいては頑丈であっても牢に入れたら逃げ場がなくなる。
メルルにはいざという時の為のキメラの翼を渡してすぐに逃げるように言い残し、ポップ達はバラン達が来そうな位置に布陣をはる。
「・・・まさかダイの記憶が本当になくなっちまうだなんて・・」
物凄く落ち込んだポップとレオナを中央に配して。
「ポップ君・・命があれば、きっといつか・・」
「姫さん・・そうだよな、希望はあるよな。」いざとなったら頭思いっきりどついてみようと、レオナに慰められたポップは本気で考えた。
ショックを与えればいいのではないかと。
「・・・死なない程度にお願いねポップ君・・」
最愛の人が記憶を失っただけでも大ショックなのに、その記憶の為に命を落としたら自分は一生立ち直れないだろう。
「二人共、言っては何だが先の事よりもバランを倒すのを優先してくれ。」
何となればバランはあのハドラーなぞ問題でない程の実力の持ち主なのだから。
「せめてティファがいてくれれば・・」ないものねだりなのは分かっている。
ティファだとて好きで敵に、それも死神キルバーンに囚われた訳では無いのが分かっているが、それでもと思ってつい言ってしまう。
それ程の相手を倒すとなると奇跡でも祈りたくなるのが人情というものだろう。
「あんなおっさん、ティファがちとばかし戦えるからって無茶いうなよ。」

「ポップ、事ここに至っては親子であるというのは一時棚上げにした方がいいと俺は思うぞ。」
それでは記憶があってもダイも戦わせないつもりだろうか？
「は⁉お前はあいつを戦わす気かよ！あいつはダイとは違うだろう？剣が―少し―使えるからって数に入れようとするなよ。何の奇跡で戻ってきても、ダイと同じ部屋に速攻行かせる。できればダイとガルーダで逃げてほしい所だよ。」
クロコダインの発言にポップは呆れたように肩をすくめる。
少しだけ強いからと言って、妹分を戦いになぞだしたくない。すぐに返り討ちにあってしまう。

「ポップよ・・お前はティファの実力を知らないのか？」
何だポップの考え方は⁉
まるでティファが弱いが如く言っている！
確かに心優しく戦いには少々不向きかもしれんが、今の自分でもティファに勝てるイメージが全く湧かない。
この一行で今一番の実力の持ち主はティファ何だぞ。
「はあ⁉馬鹿言ってんな、あいつは自分で戦いはあまり出来ないって言ったんだぞ。」
―一行の料理人は戦い終わった皆に美味しい料理を振る舞う―と。
つまり戦いは得意ではないと言う事を言っているのだ。
「―たまたま―おっさんと対峙をしたからってホイホイと戦わすなよ。」本当ならあの時自分が臆病風を出さなければティファが戦う事は無かったのに。
・・・自分は一体誰の話を聞いているのだ？あのティファが戦いに出ないだと？ヒュンケル戦で散々戦っていたティファがか！
「ポップよ、一ついいか。」
クロコダインが真剣な目をしてポップに告げる。
「ティファは弱くなぞない。はっきり言えば何故ロモス王国で俺の頸がとばなかったのか不思議なくらいだ。
今の時点でもダイよりも上だぞ。」

「はっ！おっさん本当にどうしちまったんだよ!!」バルジ島で格段のレベルを上げて、アバンストラッシュを会得して、竜の紋章を使いこなせるようになったダイよりも強いだなんて！馬鹿馬鹿しくて笑い話にもならない。

いつも朗らかに笑い、少々お転婆で向う見ずなところがあるが、すぐに転んでいるドジっ子で可愛い妹分。

それがポップの中でのティファである。

マトリフが聞けば、客観的な冷静さを欠いた魔法使いとして落第だと雷を落とされかねない考えをしているのをポップは全く気が付いていない。

戦力を考えた上では、ティファが重要なのだと気が付いていない事にも。

だがそんな妹に対する思い違いは粉々にされた。

ティファは本当に凄いのだと思い知らされる羽目になるまであと少しなのを。

黒き疑念

三人が待っているのは城の裏手で目の前は森が広がっている。
ここならば平原の様にいきなり大技は来ないだろうと、戦い慣れをしているクロコダインが選んだ。
まさか大魔王の下で培った事がこんな所で役に立とうとは、皮肉ではあるがバランの行動も予測が付く。
向こうとて闘気は無限にはなく、ダイの記憶を消す為に体力も大分消耗をしたのだから無茶な進撃ではなく、用心をしてくるのであればこっちから来るだろうと。
「・・一旦休んで回復をしてから攻めてくるとは思わないの？」
バランがそこまで消耗をしたならば、そうするのが常套手段ではないだろうか？
「姫さん、あいつは人間憎さで凝り固まっている。一刻も早くダイを俺達の手からもぎ取りたいんだよ。」話し合いで何とかなる段階ではない。
自分を見る目は憎悪を固めた色をしていた、ティファに向けていたあの憂いを含んだ笑みが嘘のように。
「正直に言えばバランがあれ程人間を憎んでいたとは思わなんだ。」
元同僚の激情を、クロコダインは理解できなかった。
しかし理解できずとも止めねばならない！
ここで自分達が負けては魔王軍の勝利が決定的なものになってしまう!!
―ピィー!―　―きぃぃ――――　!!―
「・・おいでなすったか。」
森の中を何かが高速ものすごい速さで近づき、鳥や飛行小型モンスターが飛び立ち目印になっている。
その気配をポップは集中をして感じ取る。
（まだだ・・もッと・・今だ!!）メッラゾーマ――――!!―ゴ――――ウ!!―
近づく頃合いを見計らい、先手を取られない様に炎の壁を築いた。

「小癪な小僧が――!!」―ヒィ――――――!!!―
ポップが築いた炎の壁を闘気の鎧をまとったバランは苦も無く壁を突破して剣を抜き、一気にポップへと肉薄をする！
―ガッギィ――――ン!!―
「させんぞバラン!!」
その間を素早くクロコダインが立ちふさがり、間髪を入れずに―ボン!!―「獣王会心撃!!」
溜めていた闘気を一気にバランに向けて放った！相手は自分達とは強さの格どころか次元が違い過ぎる！休ませるわけにはいかない!!
「しゃらくさい・・」
バランは左手を闘気の渦に突き出し、「ふん!!」
纏わせた竜闘気のみでかき消してしまった。
だがポップは怯まずにバランの足元にイオラを連発をして、空宙に避けたところをさらにクロコダインはがすかさずにアックスを叩き込み、辛うじて頬をかすめたがけり一つで吹き飛ばされた。
「ふん、相変わらずの怪力だな、クロコダイン。」
バランの闘気の鎧を貫通をして、頬から紅い血が滴る。
効いてる、あいつだって不死身なんかじゃねえ!!
クロコダインのつけた傷は決して大きくはないが、それでも勝てない相手ではないと確信を持たせてくれる。
ポップは心の闘志が燃え盛るのを感じる、必ず勝ってダイとティファを守るのだと。
ここで持たせていれば必ずヒュンケルが間に合ってくれる、頼みの綱の兄弟子を心の支えに、ポップは持久戦を考えている。
たった一人だが必ず援軍は来る！それまで持ちこたえて見せる!!
そんなポップをバランは憎々しげに見ながら問いただすことにした。
「魔法使いの小僧よ!!一度だけ問う！偽れば慈悲亡き苦しみもがき死ぬ事と心得よ!!!」

何だ⁉俺だってティファの行方を聞きてえところだ！
「何を聞きてえんだよ。」
ポップは内心を押し殺して冷静を装う。
だが次の質問でポップの冷静さが吹き飛んだ。
「ティファを我等の元に差し向けたのは貴様の小賢しい策略か!!」・・・は？
「あの子の力と我等との絆を利用しようとはやはり人間は・・」「ちょっと待て!!!」
こいつは何を言っているんだ？
「ティファはお前の仲間が攫っただろう!!何を訳の分からねえ事を言ってやがんだよ!!」
「・・何？・・・・お前達の差し金では無かったのか・・」
あの子が、自分の判断で自分達の前に来たというのか。

少し遡った平原
「バラン様、いかがなさいます？」
「少し休まれた方がよろしいかと。」
「あの小僧は油断ならない奴ですぜ。」
バランの回復を待ち、ラーハルトがそっと尋ねる。
勇者ダイの記憶を消したのであれば、回復を待った方が良いのではないかと。
あの魔法使いの小僧は侮れない、よもやあのような真似をして気を失った仲間諸共逃げおおせるとは。
あれは油断をしていい相手ではないと、ポップは竜騎衆三人に目を付けられた。
万全の体調となって、慎重に行くべきだと進言がされるほどに。
「いいや、いいや!!ディーノを我が手に・・」―ビシ―
ラ―ハルト達の進言をバランが拒もうとした時、空中から何かが割れる音がした。
―ビシビシ・バッリーン!!!―
見てみれば、空間が割れた!!しかも出てきたのは、鋼の剣を左手に

握ったティファだった！
　地面に音もなく着地をしたティファは、鋼の剣を左肩に担いで自分達を見据えている！
「・・・ティファよ・・」愛娘が・・自分の前に立ちはだかるというのだろうか・・
「・何て事をしたんですか、己の考えを受け入れてくれないからとて、無理やり言う事を聞かそうだなんて。」
　それまで聞いたことも無いような冷たい声と瞳は、バランを凍りつかせた。
　明るく優しい娘からは決して聞きたくない感じたくはなかった氷のような声と気配が、少女を怖ろしきものに感じさせる！
「ティファ！話を聞いたであろう!!私は人間を・・」
「お黙りなさい!!百歩譲って貴方が人間を許せなくとも！ダイ兄の記憶を消したのは貴方のたんなる都合でしょう!!!子をなんだとと思っているのですか⁉」「つう!!」
「私達は物じゃない！人形じゃない!!意志ある生きている者だ!!!」
　ティファの怒りに満ちた咆哮に返せる言葉がない。人間達は愚かだからこそ滅ぼそうと思っているが、ディーノには・・自分が親として受け入れてもらえなかった事実も消してしまいたかったからだ・・
「・・そこまでにしてもらおう、いかにバラン様の御息女であっても許すわけにはいかんぞ小娘。」
　迷いしバランの前に、ティファからの言葉から守ろうとしてラーハルト達が立ちふさがる。
「バラン様、ガキンチョは俺らが取り押さえます。・・三人ならいけるでしょう。」
「娘の事は任せてお行きください。」
「・・・お前達・・」
　テランの少数とはいえ、人間の子供達を気にかけ、ティファと誼を通じた竜騎衆達が・・
「・・すぐに戻る！奴等を踏みつぶし！ディーノを取り戻して!!」

トベルーラでディーノの気配を頼りにとんだ。ティファを向かわせた小癪な小僧達を殺すべく。
だが問いただした小僧も嘘を言っているようには見えない、つまりティファは己の意思で敵対をしたのだろうか。

遠くの魔王軍
「・・ただいま―ミスト・・・ごめん、お嬢ちゃんに逃げられちゃった。」
ポップ達とのやり取りを聞いていやな予感がしたミストは、案の定すごすごと戻ってきたキルを無言の圧でビシビシと叱りつけた。
意気揚々と出て行って一体何をしているのか!!
「だってあの子反則だよ!!あんな闘気量を隠し持っていただなんて!!」
ダイの記憶が消えて、意気消沈をしたかと思って連れ帰ろうとした矢先だった。
「・・さない・・ダイ兄を!!よくも――――!!!!!!」―ズバァ――――ッ!!―
「っうう!!」
ティファの―白い闘気―が爆発をして―ビシ・・ビシビシ・・バッリーン!!―
亜空間の壁を壊すだなんて!!!
吹き飛ばされてティファが空間を出ていくのを止められず、追おうとしたが殺気にも似た瞳でじろりと睨まれて、不覚にも体がすくんで動けなくなってしまった!―殺人人形・オート・ドール―の自分がだ!
こんな経験は初めてだ、様々な悪意・殺気は散々浴びても何ともなかった自分がだ。
―動くな、追ってくるな―少女の無言の圧に負ける・・いや、従ってしまった気がする。
―魔物の自分―が従ってしまった?何故だろうって、「ミスト、ハド

ラー君は？」
よく周りを見てみれば、ミストと小物のザボエラしかいない。
（・・見切りをつけるの早くないかな？）
結果を見る気が無いのは、バランの勝利を確信してか、それとも・・
「まあいいや、僕達はもっと近くに行こうミスト。」
下手に手を出さず、今の一行と―ティファ―の実力を見定めるべく。

「てんめえ!!あいつを巻き込むな！あいつは威勢と度胸はいいが碌に戦った事がないんだぞ!!!」今頃あの三人に取り押さえられているか？下手に抵抗をしないで大人しくしていてくれれば怪我はないか・・無事でいてくれ。
「・・・貴様はそこまで未熟か。」「ああ⁉」
「貴様のような弱き者と同一視をするな！あの子は貴様なんぞ一瞬で倒せる実力を持っているのだぞ！竜騎衆達が三人がかりでようやく取り押さえられる強さをだ!!」
「・・何言ってるんだ・・」
「分からぬか小僧、はっきりと言えば、デルムリン島であの子と対峙をしたハドラーがなぜ生きて戻ったのか不思議なくらいだ。
あの時点のハドラーなぞ、あの子にとっては討つのが容易かったろうに、アバンと言う元勇者の死を看過したのが信じられない程だ。」
「・何言ってるんだよ・・あいつは!!」―ティファは弱くはないぞポップ―
訳の分からない事を言うバランを止めようとしたポップの脳裏に、先程のクロコダインの言葉がよみがえる。
クロコダインもティファは実力を秘めた持ち主だと言っていた・・バランのような奴は嘘は言わないタイプだ。
攪乱なぞさせなくとも、自分達を倒す実力があるものが下らない嘘を言うはずがない・・つまりティファは実力を今まで隠しており・・・アバン先生を見捨てたのか⁉
何の為に！いやそんな事はどうでもいい!!目的なぞどうでもいい

！先生を助けられたかもしれない妹分を・・今すぐに締め上げて白状をさせたい激情が胸の中からどす黒く湧き起こるのを止められない・・自分は先生が好きだった・・大好きだった!!家を捨ててもいい程に！家族と別れてもいいと思うほどに!!!

「ふん、どうやら本当にあの子の実力を知らなんだか。」

ポップの驚愕と生じた疑念はバランの不快さを増していく、碌に我が子を見ていなかったのかと!!

こんな下らないものがあの子達の仲間を名乗るなぞ不愉快だ!!―

グオオオ――!!―

バランは左目の竜の爪を模したモノクルを握りしめて赤い血を流し始め、闘気を増すごとにその血は青へと変わった!!

下らぬ人間なぞ殺せばいい。

「覚悟しろ、この姿になった私は手加減なぞ出来んぞ。」無慈悲な言葉が辺りに降り注ぐ。

渡せねえ！

それは戦いと言うには一方的で、蹂躙と言った方が正しい状況だった。

百戦錬磨のクロコダインもなすすべなく、バランの右手にギリギリと襟首を握られて宙吊りにされているポップを助けに行こうとしても体が動かない。

バランが見たことも無い、体は竜・血は魔族の青となった―竜魔人―とバラン自身が言っていた姿のバランは、一度も技も魔法も使うことなく自分達を圧倒した。

手から闘気を放っただけでレオナを気絶させ、膝蹴り一つで自分を蹲らせ、深々と手刀を背に受けたクロコダインは呻き声すら上げておらず、ポップは一瞬で捕まってしまった。

「小僧、ディーノとティファを誑かした罪は重いと知れ。」

お髭のおじさんと自分を慕っていたあの子が変わってしまったのはこの男のせいだとバランは思い込むことにした。

愛娘で気に入った娘に剣を向けられた衝撃は凄まじく、尚の事認めたくはなかった。

おのれの行いが娘と敵対をすると。

「っへ・・伝説の騎士様が八つ当たりかよ・・」

馬鹿馬鹿しくて笑えらと、ポップは窒息寸前であっても悪態をつく。

自分だって今まさに怒って・・いや、ティファは実力の事で疑念だらけだが・・憎めない！

仮に先生を見殺しにしたとしても・・・こいつ等にはやはり渡したくはないと思ってしまう自分にも笑える。

「・・・余程死にたいらしいな小僧・・」

自分の言葉がバランの憎しみを煽っていると分かっても、黙ってやる気はねえ!!

「本当のこったろ、ブラスさんなら死んでもこんなことを―ダイ達―にはしねえよ。あの人こそが・・」―ダン！―

「ぐっ!!」―グシャ!―
「・・黙れ小僧・・・あの子等の親は私一人だ!!!!」
ポップの発言は、バランの憎しみを増すだけではなく傷口に塩まで塗ってしまった。
―お前なんて親じゃない!!―
探し続けてようやく会えた我が子に言われた言葉が、思い出すだけでも生々しく自分を苦しめる!
それを知ってか知らずか人間の小僧如きが!!!
地面に打ち据え、頭を踏みつぶしても気が収まらない!塵も残さずに消し飛ばす!!生きていた痕跡すらも残さぬように!
バランは無言で空中に行き、両手を組んでポップに突き出す。
竜魔人化で最大の技、ドルオーラでポップ達を灰燼に帰す。
城の中にはディーノの気配が伝わる、威力は小さめに絞り、それでも人間なぞは残らない。
姫の方はディーノの嫁にと考えたが、記憶がなくなったあの子には必要はなくなった。
諸共にしても惜しくは・・―ギィー―

バランがドルオーラの威力を調節をしながらつらつらと考えていれば、城の裏門がそっと開き、黒髪の男の子が出てきた。
白い服に身を包み、頭に包帯を巻いたダイだった!
「ダイ!!何で出てきた!!」
ポップはものすごい焦りの声を出した。いざとなったらメルルが逃がすはずのダイが何でここに居る⁉
「うぇ!!だって・・俺を呼ぶ声がして・・・行かなきゃって思ったらおねえちゃん達が止めて来て・・行くんだって思ったら俺の体が光っておねえちゃん達寝ちゃって・・・」
・・・記憶がなくなっても説明下手か・・ようはバランがダイを感知できるように、ダイもバランを感知をしたわけで、無意識に力使ってメルル達を突破してきちまったのか。
「・・お兄ちゃん達どこか痛いの?」

危機感のまったくなくなったダイはひょこひょことポップに近寄り背中をそっと撫でる。
蹲っていたそうなお兄ちゃんを助けたいと。
「・・・ディーノ・・・」
「・・だれ？」
そっと人を呼ぶ声がして、ダイが上を見れば
「ひぃ!!」―化け物―が居た!!
「や！お兄ちゃん!!あいつ何？お兄ちゃん達をあいつが虐めたの？」
実の父と分からず、目が覚めて何も分からなくなっていた自分に優しかったお兄ちゃんにしがみつく。
「・・・ダイ・・大丈夫だ・・・大丈夫だ、お前の事は絶対に俺が守るから。」
痛む体を無理やり起こし、ポップは悲しみと憎しみと殺気をない混ぜた瞳をしたバランからダイを守るように立ちふさがる。
バランは無言で構えを解いて地面に降り立つ。
我が子に何度も拒絶をされて心が痛い・・一刻も早く自分の手元に抱きしめたいというのに!!この人間に懐くとはわ!!
はは、守るってどうすりゃいいんだ？こんな気配だけで俺の事を殺せそうな奴相手。
「一度だけ言おう、ディーノは渡せば一時は見逃す。」
その言葉にポップは本気でカチンときた・・超上から目線な言葉だな！
こいつが言っているのは嘘はねえ、ならば息子を渡せばッてか？は！そんなの・・
「冗談じゃねえ!!!」

ポップの怒声が周囲に散らばる。
ポップは持てる全ての力を返答に使い、全身で叫んだ。
「こいつは俺の可愛い弟弟子だ!!誰が手前に渡すもんか!・・こいつにであってなけりゃ・・俺はお前が言うような最低な人間になってたかもしんねえ。
強い奴にぺこぺこして、弱い自分を嘆くだけのダメ人間に!・・・それを変えてくれたのがこいつだ!こいつと一緒に世界見捨てねえために!!こいつ等と一緒に世界助けるために!!!こいつを守る為に俺は強くなろうとしたんだ!こいつは俺の大事な大切な仲間だ!誰が仲間を売るか馬鹿野郎――――!!!!」
まさしくそれは魂の叫びであった。
偽る事のないポップの本心であり、死しても渡さない気迫はバランをも圧した。
ただの、それも自分に万に一つも勝つ見込みのない少年が、他人のディーノの為に命を懸けた叫びは・・認めたくなぞない!!人間によきものなぞいるはずがない!

圧倒的強者を、心理的にとはいえ圧倒していることに気がついていない叫んだポップ本人は内心でどうすりゃいいんだと超嘆いている。
あ～あ啖呵切ったがさてどうしたものか、姫さんとおっさんは無理・・でも!ここで俺が諦めたらダイを守れねえ!!
可哀想に、震えてべそかいて俺の服を握りしめて・・俺しかいねえ!今こいつを守れるのは!!
先生!どうした・・・ら・・・・アバン先生?・・・・・・手はあった・・でもそれをしたら・・・それでも・・・・・あいつにダイを渡すよりはましだ!
―シュルリ―
ポップは自分のトレンドマークである黄色いバンダナを外してダイの頭に結んだ。
「ダイ、これをやる。」
「・・・お兄ちゃん?」

「お前にはティファっていう妹がいる。お前は兄ちゃんだ、何があっても泣いてるだけじゃ駄目だ。」

大丈夫だ。―お前達―は兄貴の俺が守るから。

やっぱり俺は・・

お兄ちゃんの体が震えている、それなのに笑っているのはなんでだろう。
「お兄ちゃん・・。」
心配になって服の袖をぎゅっと握れば、そっと優しく放された。
「大丈夫だダイ。」
優しく、でも力強く笑って・・お兄ちゃんがあの化け物に向かって走っていちゃった!!

「・・何をする積りか知らぬが・・」
バランは走ってくるポップを打ち砕こうと右手に闘気を込めて、走り寄ってきたポップめがけて振り下ろしたが、紙一重でよけられた！
近頃は身体強化にも勤しんでいた努力のたまものだ、おかげでこいつを倒せる！
空中でポップは両手にありったけの魔力を溜めてバランの両肩に乗っかりこめかみに両手全ての指を潜り込ませた!!
「グウアアアアアア!!!!!」
非力な魔法使いからはあり得ない力を感じたバランは激痛に苛まれながらもポップの両腕をひき散ろうと試みるが、察したポップは全力で魔力を注いで阻止をする。
今抜かれてたまるか!!
まさか・・あれは!!
「止せポップ!!!!」
クロコダインはようやく目を覚まし、痛む体を引きずり起してポップを止めようと叫び上げる。
「お前が死んでしまう!!やめろポップ!!!!」
「へ・・こいつを倒さなけりゃどのみち死んじまう、だったら俺の命と引き換えにこいつも道連れだ!!」
やはり！メガンテを・・
「馬鹿な！貴様!!何故ここまでの事をする!?」

メガンテと聞いてさしものバランも青褪める。
自分が倒される事よりも、たった一月しか経っていない仲間の為に自爆呪文を使うなぞ正気の沙汰とは思えない!!
ポップの死をも恐れぬ心が、バランの心に恐れを生じさせたのだ。
「・・分かんねえよ・・でもな!理屈じゃねえんだよ!!俺が!あいつを守りたいんだよ!!!!!」
一言いう度にポップは魔力をバランに注ぎ込む。
チャンスはこのたった一度きり!失敗をすれば・・ダイがも泣きそうな顔をして・・
「お兄・・」
「来るな!!!!」―びくり!―
駆け寄ろうとするダイを叱責をして止める。
記憶がなくなって、力も使えないのに優しいままでホッとする。
きっと状況は分かっていなくとも、無意識に自分を助けようと走ってこようとしたんだ。
あいつは本物の勇者様だ、世界には―勇者ダイ―が必要だ。
「ダイ・・」
俺の初めての弟は自慢の弟だ。
どうしよう・・どうしよう!お兄ちゃんが危ないのに!!・・前にもこんな事があった?
頭が痛い!何かしないといけないって俺の中の何かが言っているのに!
「駄目よポップ君!!」
「・・ポップよ!やめてくれ!!」
倒れている、今まで寝ていた金の髪のお姉ちゃんとモンスター―のおじさんが起きて言っているのに!「止めてよ!!お兄ちゃ・・」

「メガンテなんてしないでポップ兄!!!!!!!!」

ダイ達の声をかき消すほどの大音声の少女の声に、その場の全員が動きを止めた。
ここに居るはずのない，いたとしたらそれは最悪の事が起きたとしか思えないからだ。
魔力溜めを維持しつつ、ポップもバランもクロコダイン達も森の方から出てきた者を見れば、
髪はぐしゃぐしゃで掠り傷はあるが、軽傷のティファが出てきた。
頬に切り傷、袖も切れており・左手に握られている鋼の剣にはうっすらと血が付いていた！
「・・・ティファ・・お前・・」
ポップはティファが戻ってきたのを喜ぶ前に戸惑ってしまった。
あの剣にうっすらと血がついている。何故三人に連れてこられたのではなく一人で戻って来られたのか。
振り切って追われているのかとも考えられるが、一向に三人が来る気配はない！つまりティファが・・
「あの三人を倒したかティファよ。」
ポップ達の疑問を代弁するように、バランが静かに尋ねた。
その問いに、ティファの表情はぐしゃぐしゃと崩れる。
泣くのを堪えるように唇をかみしめ、泣くまいと堪えるように瞳を歪ませながらバランを見る。
「親しき者達をその手に掛けるか・・」
「そうだよ・・・あの三人は！貴方に従うことを決めていたんだ!!どんな事があろうとも！誰を敵に回す事になっても!!テランのあの子供達よりもあなたを選んで殉じたんだ!!」
来て欲しかったのに・・手をとって欲しくてテランの子供達の伝言を伝えたのに!!伝言を喜んだくせにそれでもいけないと断られたんだ!!
「バラン様を裏切る事は決してしないと、一人にはしないと、最後まで共に行くんだと言って！・・・・手加減なんて出来るはずがないでしょう・・」

激昂をしながらも徐々に落ち着いたティファはバランから目をそらさない様にしながらも呻きながら話す。
好きで戦ったんじゃない、倒したくはなかった！
「悪いなガキンチョ・・あの人の事を頼まぁ・・」
レイピアで来たガルダンディーを竜巻閃ですれ違いざまに首の動脈を斬った。
「娘よ・・せめて・・・バラン様の御心を・・」
氷の吹雪を吐いて私を生け捕ろうとしたボラホーンさんも、闘気の壁を作って防いでアックスと打ち合った末に・・
「二人は・・貴方の事を最後まで・・」
「・・・ラーハルトはどうした。」
あの二人とは強さの格が違う、いかにティファだとてそう易々とは倒せまい。
「・・ヒュンケルが来ました・・」
ヒュンケル！・・そうか・・あいつは間に合ったか!!
どうやってティファの元に辿り着けたかは分からないが！天佑と言う奴に大感謝だ！
二人を倒した事で、ティファの心はボロボロになっているのが分かる。
もう一人倒していたら、ティファの心が持つかどうか分からない。
「ティファ、安心しろ。もう戦わなくていいぞ。」
先程の疑念なぞ、今のティファを見て吹き飛んだ。
やはりティファは戦いには向いていない、確かにクロコダイン達の言う通り強いのかもしれないが、知ってしまった相手を魔王軍と割り切れず、倒したことに傷ついてしまう優しい女の子なんだティファは・・だから自分が!!
「止せポップ！俺に命を簡単に捨てるなと言っていたお前が何をしている⁉」
この声は!!
「ヒュンケル!!」
「・・ヒュンケル・・」

常の剣の魔装ではなく、槍を持った見た事がない鎧を纏っているがヒュンケルであることには違いなく、ポップは力強く、ティファは弱々しく名を呼ぶ。
ここに来たという事はきっと・・
「ティファ・・ラーハルトは俺が・・」
案の定ヒュンケルは申し訳なさそうにティファの横に来て詫びる。
「・・違う・・ラーハルトさんが決めた事だ・・」
その詫びをティファは否定をする。
ティファの元に辿り着いた時、ティファとラーハルトの話が聞こえてあらかたを察したヒュンケルがラーハルトを引き受けてバランの下に向かわせたのだ。
戦いながらヒュンケルもラーハルトを止めようとした。ティファの手をとりバランを説得すべきだと。
だがラーハルトも戦いを止めなかった。
戦いながらバランの過去と、己自身の過去を語る。
「俺達は皆バラン様に救われた恩に報いる。」
そう決めたのだと。
ギリギリで勝てたがどこかラーハルトは自分と重なり涙があふれた。
共に最愛の者を喪い、世界を憎んだことが、その憎しみの心をティファによって救われたことも。
「・・何か俺にできる事は無いか?」
その申し出に、ラーハルトは面食らった顔をした。
「ふふ、甘いな貴様は。噂に聞いた氷の剣士とは偽りか・・」情に厚い人間はどうやら沢山いるようだ・・
「頼もう・・バラン様の事は・・ティファ様がきっと救ってくれる。お前には・・」
その内容にヒュンケルは驚いたが、力強くうなずいた。
死にゆく忠義の士の心を確かに受け止めたと。
「・・・その剣の魔装は持つまい・・俺のをやる・・・手を握れ・・」
「ああ・・」

ラーハルトの技を幾度もくらってしまい、最早自己修復が追い付かず、それでは約束は果たせまいとラーハルトは苦笑をしながら右手を握らせ槍の魔装を渡した。
槍の魔装は嫌がることなくすんなりとヒュンケルに馴染んでくれた。
これでいい、バラン様なら小娘が救ってくれる。
後の事もこの男に託せた。
「俺は・・あいつの問いに・・・とうとう答えを出せなんだか・・」
心残りがあるとすればそれのみ、―種族―を見ていなかったティファの風景を、自分も・・みた・・か・・・っ・・た・・
呟いたことが何かを問う前にラーハルトは逝ってしまい、ヒュンケルは倒れ伏した三人に頭を下げた後、岩の陰に隠していたべほを回収してすぐにティファの言った方に走っていった。
着いてみれば!バランの異様な姿とポップがメガンテをしようとしているとんでもない場面だった!!
二人が止めに入る前にやるんた!!
「ダイ!ティファ!!後を・・」
「嫌だ!!!」・・は?
頼んだぞと言う前にティファに断られた!
「皆・・勝手ばっかり言って!!人間滅ぼすとか!後を頼むとか!!勝手言ってティファを置いて行って!!!」
もう・・置いて行かないで・・
「ティファを置いて行かないでよポップ兄!!!!」
ティファが泣いてる・・・そうだ・・どうして忘れていたんだろう、島でのあいつは少しの事で泣いていたじゃないか・・はは・・したらやっぱ、あいつは俺が守らなくちゃいけない可愛い妹分じゃねえかよ。
先程までの震えが完全に止まり、心は不思議と静かだ。
「ダイ。」
服を握りしめて泣いているもう一人の弟を見る。

「俺が死んでも、間抜けな面をしてたら許さねえぞ。」
衝撃で全てを思い出してくれよ。
ーメガンテー・・俺の旅はここまでだけど、後は任せたぞダイ、ティファ・・皆・・

いつだって希望はある！

弾けて・・消えてしまう！あの素晴らしい人が!!

「いやあ――――!!」

メルルは己の悲鳴で目を覚ました。

ダイがふらりと立ち上がり、扉から出て行こうとしたのを止められずに気絶をして、そして夢を見た。

ポップが何か巨大な者に立ち向かい、砕け散る夢を!!

横にはナバラ達が気を失っているが行かねば！

自分は時折予知夢を見る。今までは半分しか当たらなかったが嫌な予感がする！温かく優しい緑の光を宿したあの人が消えてしまう!!

嫌だ！消えないでほしい!!

その一心のみでポップ達が布陣をはっている後ろの裏に行って・・そしてそこには

―メガンテ―

優しい笑みを浮かべながら、自爆呪文を使って敵とともに消滅をしようとするポップだった!!

「・・・そんな・・」間に合わなかった・・もとより非力な自分に何が出来よう・・それでも！止めたかった!!

「ポップ――――!!ごめんよポップ!!!」

ダイさん⁉・・記憶が・・

先程まで何もかもを失い、弱々しかったダイが、力強く泣いて叫んでいる。

取り戻した記憶の中の、お調子者で、大好きな―兄―の名を。

「御免よポップ!!俺が・・不甲斐ないばっかりに!!!」

思い出した・・思い出した!!どうして忘れてしまったんだろう・・大切な・・忘れてはいけない―ダイ―の記憶の為に・・ポップは・・

「ポップ――――!!!」
吹き荒れる爆風の中、ダイは叫び続ける。
自分のせいで大切な仲間を、大好きな兄弟子を、兄と慕った人を犠牲にしてしまった!!
何が勇者だ!デルムリン島の時と変わらないではないか!!力足りずに先生を犠牲にした時と・・何一つ。
「・・・ポップ・・」
間に合わなかった・・また失うのか俺は!!
ポップは口が悪くとも、自分を心から労わってくれた優しい弟弟子で・・守りたい仲間だった!なのに・・なのに!!
悔恨の念と共に、ヒュンケルも悲しみと共に膝から崩れ落ちる。
戦場でこのような事は生死にかかわると頭のどこかで言っているが、ポップの死はそれほどの衝撃を仲間たちに与えた。
倒れ伏しているクロコダインは地面に何度も拳を打ちつけポップの名を呼んで咆え上げて泣き、レオナも大粒の涙を流してポップの名を叫び続ける。
たった一人、それでも明るくお調子者で・・そしていつの間にか一行の頼れる魔法使いとなっていたのだポップは!
兄・・ポップ兄!ご免なさい・・ご免なさい!!
父さんの事を知っていたのに!どこかで留められるのではないかと楽観視をしてしまった私のせい・・
―トック・・ン―　・・この音・・
―ト・・・クン―音がする・・上空を見上げればそこにいたのは
「ウワァ――!!」
ダイが怯えた声で叫び上げた。
ティファが上空を見上げた事で、全員も上を見ればバランが生きていた。
表面は傷だらけで呼吸も荒いが、左手でポップの襟首をつかんで生きていた!
「そんな・・ポップ君が命を懸けたのに!!」
ダイの記憶が戻ったとて、ポップの命がけの行動が無意味になった

事でレオナは悲痛の声を出して嘆き悲しむ。
「・・・こやつが未熟で助かった・・爆発の瞬間にわずかに指の力が弱まりとんで振り切れた・・」
おかげで爆発の威力も弱くすんだのだ。

―トク・・・ン―
弱々しい・・でも知っている!!この音は!!この心音は!!!

誰もがポップの死に、その行為の意味が潰えた事に悲しむ中

「アアアアア――――!!!」

裂帛の気合がその沈黙を打ち破った！
気合の籠った闘気の一閃はバランの左手を打ち据えて、落下するポップを一閃を送り付けた者が受け止める。
左手の鋼の剣を握りしめたまま、それでもポップを受け止めて地面にそっと降ろして素早くポシェットから小瓶を取り出し、ポップの口の中に入れればゴクリと喉が音をたて飲み込んだ!!
「べほちゃん!!」
ヒュンケルの肩にいるべほを呼び寄せてべホイミを掛けさせる。

「ティファ!!ポップ・・今ポップが!!!」
「今確かにっポップが!!」
地面に降り立った妹とポップの側に駆けよったダイとヒュンケルが驚愕の声を上げる。
「そうだよ・・ポップ兄が未熟で助かった・・あれ・・メガンテになって無かったんだよ!!」
単なる魔力の暴走で済んで、威力も弱かったから肉体のダメージがギリギリで・・助かったんだ・・
「オオ――――!!!」不味い!!―バキン!!!―
「・・・その男を庇うかティファよ!!!」

上空から闘気の一閃でハガちゃん壊された!!んの――!!
「当たり前でしょうが!!二度も三度も仲間に手を出されてたまるもんですか!!!」
「人間がどれほど・・」
「この状況でまだそんな馬鹿な事を言っているのですか⁉
貴方は一体何を見て聞いて生きてきたんですか!!
テランの子供達を、ポップ兄を見てもまだそんな馬鹿な事が言えるんですか!!!」

完全にティファが切れた！
もう知るか！忠義の三人の配下を持っていても全く気が付かずに一人で孤独だなんて思いこんで突っ走った馬鹿は!!ボッコボッコにして説教三昧の嵐大決定だ!!!
きちんと見ればソアラによく似た愛娘の・・鬼のような形相はバランを心底怯ませる。
ディーノも立ち上がり自分に闘気の籠った眼を・・認めぬ!!
「カァ――!!!」ヒィ――――ン！―

「ア!!ウアァ――――!!」
・・痛い・・・頭の中が・・火箸でかき回されたように・・
でも！
「兄、私!!忘れたくない!!」
「ティファ・・俺だって二度と忘れたくない!!!」
大事な大切な命と同じ価値を持つ記憶を!!
「忘れてたまるものか!!!」
ダイとティファは奇しくも利き手を握りしめ合い、天高く掲げて、その時ダイの
右手に、ティファの左手に―竜の紋章―を力強く輝きを放った。
世界を、仲間を守りたいと願う二人はバランの呪縛を振り切るように額から拳へと紋章を移動させたのだ!!
「うおおおお!!!」―ズドン!!!―

痛みがなくなった二人は間髪を入れずにバランの無防備になっていた腹部を容赦なくぶちのめし、ダイはそのまま連打に、ティファはポップの容態とクロコダインの傷を見に行った。

「・・勝つよ、だから・・」死んじゃ駄目だよポップ兄。

親子大決戦①　腹括ります

「ヒュンケル下がってって！」
「しかしダイ!!」
「大丈夫！今ならデイン系も防げそうな気がする!!・・俺庇ってくれたんだから・・」
ダイとティファに腹部の致命傷を受け、更にダイの猛連打を喰らったバランは事態の打開の為にライデインをダイに落としたが、瞬時にヒュンケルが庇いダイは事なきを得た。
「ヒュンケル!!」
いつまでたっても回復に来ないヒュンケルをティファがさっさと回収をする。
元々ラ―ハルトとの戦いのダメージをそのままにしておいてその上ライデインを喰らったのだから、ヒュンケルが動けないのはやむをえない事である。
しかしヒュンケルがそれを良しとはせずに、忸怩たる顔で俯く。
弟弟子達が命を懸けている時に、自分は動けずに何と不甲斐ないのだと。
「ヒュンケル。」
俯くヒュンケルに優しい声が降ってきた。
「ヒュンケル、自分にできる事を精一杯やって今に繋がっているんです。
今ダイ兄が思い切り戦えているのもヒュンケルがライデインをその身で受けてくれたからです。
痛かったでしょう、姫この飲み薬は体内の火傷を治す効果があります。
ベホイミと合わされば回復が早いのでお願いをします。
ヒュンケル、きちんと治してくださいね！」ここはがっつりと釘を刺そう!!
傷だらけで再起不能のフラグはバキッと折りますとも！
「分かった、姫君お手を煩わせるが・・」

「いいのよ！ティファの言う通り、名誉の負傷です!!きちんと治しましょう。
ダイ君を守ってくれてありがとうヒュンケル。」
レオナは王女としてヒュンケルに訓戒を垂れたが、後半は恋人を守ってくれて感謝をしている女の子としてお礼を言った。
「姫・・勿体ない・・」
少々じゃじゃ馬のようだが、素晴らしき姫だと改めて思うヒュンケルであった。
「メルルさん、クロコダイン！お待たせをしました!!」
背の傷にホイミをあてているメルルの下に駆けより、傷全般に効く万能薬をクロコダインの背中に直接流し込む。
「ぐう!!!!」
それはさしもの獣王をして呻き声を漏らさすほどの激痛を奔らせるものであった。
「すみません、効きがいい分沁みます。メルルさん、しばらくホイミを充ててもらいますがご無理はなされずに。」
「承知しています・・ティファさん、ポップさんは・・」
「助けます！」
メルルの憂いの質問を、ティファは迷いなくきっぱりと答える。
「死神如きにポップ兄はくれてやりません！蹴とばして泣きながらお一人で冥界に戻っていただきます!!」ポップ兄を死なせない!!
その断固とした・・少し風変りな返答は、初めての戦場でもあるにもかかわらずメルルをクスクスと笑わせる。
変わった、でもとても暖かくて優しい少女だ。
メルルはすぐにティファを好きになった。この一行の人達は皆いい人達ばかりだ、自分も何か役に立ちたい。
その為にもクロコダインの傷をきちんと癒そう！
「ディーノよ!!」―バキン!!―
「俺はダイだ!!ブラスじいちゃんが付けてくれたんだ!!」―ドカン!!―

下と違い、上空ではバランとダイが殴り合いの戦いを繰り広げている。
双方相手にダメージを喰らわせるの決定的なものがなく、乱打戦にもつれ込んだのだ。

ううん・・拮抗した状態・・不味い！体力は父さんの方が上だ!!このままずるずると戦っていたら・・「―ティファ!!!!―」
不味い状況だとティファが考え始めた時、べほの呼ぶ声がしたのですっ飛んで行った。
「べほちゃん！どうし・・ポップ兄!!」
駆けつけてすぐに分かった、ポップの心音が弱まっている!!
しまった！姫に使った精霊樹の入りの原液を薄め過ぎた!!
薬も強すぎれば毒となる！だからこそ効能を消さない同じ効能の薄い物を混ぜ合わせて薬となるが、ポップ程の瀕死の者には薄すぎたのだ。
薬は今手元にはあと一本しかない、飲ませようとしたがわずかに開いている口からこぼれてしまう。
先程よりも命の火が消えかけている証だった。
・・・こうなったら!!緊急事態!!!
バランはダイと乱打戦をしながらも時折ティファの様子を目の端でとらえている。
仲間を必死に助ける行動は尊いが、人間を助けてほしくはない！
むっ!!ティファそれは
!!!
―ズドン!!!!!―
ダイの拳をまたもやもろに腹部に喰らったが、全く気にならない程の事をティファがしてしまっている!!!!!
あれ？・今物凄く痛いはずだよね？
腹部の鳩尾は激痛を超すと先生に教わったのに無反応で、しかも反撃が来ない事にダイが訝しげにする。
見上げればバランは目を見開いて自分以外をガン見している・・気

になってしまって自分も首をそちらに向ければ・・
「エエ――――――――!!ティファ!!何でポップと口づけしてるの⁉」
なに⁉実はポップの事を好きなのティファは⁉俺応援した方がいいのかな？
―ぶうぅう――――!!―・・・・・・・何考えてるのよこの非常時にあの馬鹿兄は!!!!
薬を自力で飲めないポップの為と飲ませていれば、ダイのとっても勘違い発言に三分の一に吹いてしまったではないか!!
鬼の形相で下らない事言ってないでそっち集中をしようとすれば・・「あの・・・何か・・」
バランが思いっきりティファを見てブルブルと震えて、なんと優しい手つきでダイをそっと横にどかした。
あまりにも自然な動作に、ダイもうっかりと退いてしまった。
「ティファよ，そこを退きなさい。」
そしてまたもや優しい声ではあるが、目が据わってポップに向かってドルオーラの構えをした!!
「ちょっと待ってください!!今のは口づけでは無くて緊急事態の口移しをですね!!」
「問答無用!!」愛娘にたかる害虫は灰と言えども残してなるものか!!
ああもう!!
「ダイ兄!!!」「ティファ――!!」
ティファは飛べないが、近頃は常に空飛ぶ靴を履いておりそれが功を奏してダイと上空でドルオーラを受けることにして竜闘気を極限まで高め合い受け止めた!!!!
何て馬鹿馬鹿しい理由で最大奥義を撃ってくるのよ父さん!!!誤解なのに――!!
バランの超が付く親馬鹿満載のドルオーラは凄まじく、ポップを背に庇い二人の全開の紋章でかろうじて防げた程だった。
「兄・・もう少し一人でお願い・・」
「何言ってるのさ!ティファは・・・」

「ダイ兄、私弱くはないんだよ。」もう隠すのは止めにしよう、兄達はもう強いんだから私に縋りつくことはしない。
「・・分かった・・でも大丈夫だからね！」
いくら言ってもダイにとってはティファはレオナ同様に守る対象なのだから、戦わせたくはない。
頑固だなダイ兄もって!!
「お前の負けだ!!」
あれは不味い！「ストップダイ兄!!」
「え？った!!」
ああ～父さんに蹴り落とされた・・
「いきなり何さティファ!!」―ゴン！―
「痛い!!」文句言ったら拳骨落とされた!!
「当たり前でしょう！パプニカの使ったら、今のダイ兄の力で壊れるでしょうか!!」
「あ・・」
ドルオーラを完全に防がれたことでバランが焦ったところをアバンストラッシュをしようとしたのを止められたのに腹が立ったが・・よく考えれば今の自分のパワーにこのナイフが来られるかと言われれば無理だろう。

「その通りだ!!」
バランも地上に降りてきて真魔剛竜剣を手にする。
「我らの全開に耐えうる剣はこの真魔剛竜剣のみ!!大人しくするがいいディーノよ!!」
「・・・そんな・・」
剣が使えなければバランに勝つ見込みがない！どうすれば・・

「甘いのです!!」

ダイの焦りを吹き飛ばすが如く、ティファはバランに向かって否定をする。

ここで出すかどうか、ダイ兄の―ダイの剣―まで待つつもりであったが、事ここに至ってはやむおえない！

ティファは首から下げていた―銀のマジックリング―を鎖から引きちぎる。

「アクセス！雪白!!!」

―ヒィーンー　―カァ―――ァ―

ティファの求めに応じるようにリングは輝き、光が収束をした時にティファの手には細身で柄も鞘も全てが白く、見たことも無い形状の鍔もまた白い武器を手に携えていた。

親子決戦？愛があれば・・

その武器が異様ならば、その武器で構えをとったティファの姿もまた異様であった。

すらりと鞘から抜かれた剣は片刃であるのは真魔剛竜剣と同じであるが、色は鋼の色ではなく炎を閉じ込め剣にしたが如く真っ赤であり、抜いた鞘をポーチ止めのベルトの右腰に差し落としたティファは、左肩に剣を担ぎ右手を地面すれすれに突けるような低い前傾姿勢をとったのだ。

「・・・それが、真魔剛竜剣と同じ強度を持つ刀だというのか。」

神より賜りし天界製のオリハルコンと同等であると！

「そうです、お宝洞窟で見つけて数十回挑んでようやく手に入れた私の―雪白―です。

手に入れた時、素材はヒヒイロカネでオリハルコンと同等の力を持ち、かつオリハルコンよりも粘りがあり破壊困難であると声がしました。」

お宝洞窟や試練の洞窟では時折―神の声―がする。

その武器を・アイテムを・伝説級の魔法契約を手に入れるにふさわしいかどうか試練の神の声が。

死にかけたけど手に入れられてよかった、今日本当にそう思う。

話しながらもティファはバランから一切目をそらさずに、獲物に喰らいつく寸前の狼の様な気配を漂わしている。

強い、バランは背に汗が伝うのを感じ怯みそうになる。

実力があるのは五年前から知っていたが、まさかここまでの手練れとなっていたとは！

ディーノよりも、いや魔界で戦ったヴェルザー配下の幹部クラスに届いているかもしれない!!

―ポタン―

バランの汗が地面に堕ちたと同時に―風―がバランにはしった。

「つう!!」―ガギィーーン！―

瞬間的に剣を構えればティファの初太刀を辛うじて受け止められた。
ティファの超前傾姿勢は、自分のトップスピードを瞬時に出せるための姿勢だった。
両足の筋肉に闘気を流してばねの力と脚力を強化をし、右手を狼の様に爪を立てて前足でけり上げるようにして一気に敵に迫り、デルムリン島での洞窟ではほぼそれで階層のボス達を圧勝をしてきた。
流石は天下の竜の騎士であるが、一撃で倒せるとはもとより微塵も頭にはなく、受け止められても驚かず流れるように二の太刀・三の太刀を次々と放ち決してバランを休ませなかった。
素早く正確に、それでいて一撃ずつがとてつもなく重く、狙いは人体の急所ばかりで一つでも受ければ致命傷になりかねないものばかり!!
何という子に成長をしたのだこの子は!!
娘は強くなくてよかった！ルードを甘やかし、三人と賑やかにしていたあの子のままであって欲しかった!!
自分をお髭のおじさんとにこやかにしていた顔が今は古参の兵の如くで、そんな顔を見たくはなかった!!
「オオ――――!!」
だがいかに強くとも体格の差はいかんともしがたく、バランの横一閃の攻撃に吹き飛ばされ、そこからバランが追撃をする形となった。
不味いか、空中に行っても足場はない踏ん張りがきかないのは不利に変わりはないしここは！
「土龍閃!!」―ズバァ――――!!!―
後方に跳んで一旦距離をとり、追撃をしてくるバランにたいして―白い闘気―を纏った土砂を思い切り浴びせて素早くまた距離をとり今度は正眼に構える。
追撃をされてもティファは慌てた様子はなく呼吸も乱れておらず、それどころか策を練りながら戦っている。
「・・・ガルダンディーとボラホーンが手加減をしたわけではないか・・」
この実力では、二人を倒せるのは自明であったと思わずつぶやく。

その言葉にティファは泣きそうになる。
倒したくなかった二人を思い出して。

「どうしても戦うのですか!!」
バランが行った後、ティファは必死に説得を試みた。
「ニーナからの伝言です!――あの日何故魔王軍が来るのを鳥のお兄ちゃんが知っていたのか分からないけど、数日間は国の外に出るなって言ってくれたからルックの家族は助かりました―って。」
全世界同時襲撃の日程が決まり、テランは侵攻がないのを知ったガルダンディーは真っ先にテランのニーナの下に向かい、真剣な表情で村の子供達に伝えろと言って守ったのだ。
ニーナもガルダンディーの真剣な表情と声に驚いたが力強く頷いて実行もした。
「・・・そのルックの一家に腹痛を起こす軽い薬を一服盛って、行商の旅を断念させたそうです。」やり方が超過激な方法で。
「・・・あいつ何やってんだ・・」命無くすよりもましかはしれんが、友人とその家族にためらいもなく一服盛るって怖いぞニーナ。
助けられてホッとするが、聞いて脱力をするガルダンディーに同僚二人が物申す。
「ガルダンディーよ、いかに何でも侵攻作戦をばらすのは・・」
「不味いぞ、バラン様がお知りになれば・・」
「いいだろう、さっきだってバラン様あの村は残してもいいって言ってただろう?」だったら問題ないとガルダンディーは開き直り、同僚二人は頭を痛める。
「続きましてはボラホーンさん。」
「・・俺は人助けは!!」「二年前の冬!!」・・あっ!!あれか・・

ガルダンディーのような事はしていないと言おうとしたのを止められた。しかも二年前の冬には覚えがある！
「暖冬で毎年湖に張る氷でする氷像祭が出来ないと困っていた村人たちに、氷の息吹で湖を凍らせてくれたおかげで、小規模ながらも祭りが出来たのをぜひ感謝をしたいと村一同でお礼がしたいそうです。」
テランはただでさえ人口が百いくかどうかで、娯楽も少ない。
その数少ない氷像祭を出来たのは本当に嬉しかったのだと言っていた。
氷を作った後は何も言わずに立ち去った相手に、二年が経ってもお礼がしたいというほどに。
「最後はラーハルトさんです。」
「俺はこの二人のような事はしていないぞ!!」
助けるような事も、困りごとを解決も！そもそも直接かかわったのはったった一度しか・・
「いいえあります！あらかじめ言っておきますがこれはニーナ以外の女子達からです。
―いつも昼寝のお姿と草笛を吹くカッコいい御姿を拝見させていただいております。
是非一度でいいのでお茶をしてください!!―だそうです。」
その伝言にラーハルトも凍り付いた。
確かに子供の気配がして・・その気配に敵意は全くなくまるで憧れを向けられているようではじめは戸惑い、次第に心地よく感じていたのは事実で、くすぐったくて・・そしていつしか草笛を聞かせていた。
半魔の耳は魔族並みであり、草笛の音を聞いて楽しそうにしていた子供の声が自分を優しい気持ちにしてしまったのも分かっている。
「・・・言っとくがガルダンディー、小娘はニーナ以外の女子と言っていたぞ・・」
「なん!!・・・あいつがお前とお茶したがってたって俺の知った事か!!」
「だったら人を噛み殺しそうな顔を向けるな。」うっとおしい。
三人はこの伝言を聞いても互いに驚く事は無かった。

あの村の名も、ニーナ以外の子のまして大人達の事なぞ碌に知らずとも、自分達はいつの間にか心を傾けていた。
村を・同族を・自分達を迫害をしていた―人間―として見れなくなってしまったから。
それでも自分達はバラン様の行く道を共に歩くと言えば、ティファはくしゃくしゃの泣き顔になり、そして戦ったのだ。

「ボラホーンさんの氷像の今でも村の氷室に安置をされて鎮守様扱いです!!」
「ラ―ハルトさんは男の子たちも憧れて、どうしたらあんなにカッコいい大人になれるのか教えてほしいと言っていました!!」
ティファはバランに攻撃をしながらテランの子供達の伝言とその続きをバランにぶちまける。
「あの三人は!もう人間嫌いでは無かったのです!!それでも!貴方を一番にしたんです
!!」
バランは攻撃を受け止めながら、あの三人の思いも受け止めさせられていた。
どこかで自分も気が付いていた。
ティファと知らずに出会い、テランの子供達と短い交流とも呼べない出会いをした後には最早人間を憎む気が薄らいだのを。
それに気がつかない振りをして、戦いの道から外さなかった自分が三人を死なせたというのも分かっている!!
「ガルダンディーさんは・・ニーナが将来お嫁さんになりたいと言っていました!」
「・・なん・・だと・・・ガルダンディーは鳥人で!!あの娘は人の子だろうが!!」
最後のティファの言葉が一番衝撃的であり、思わず攻撃の手を止めてしまったほどだ。
魔族と人間はままあるが、獣人族と人の女性なぞ聞いた事は無く、仮にあったとしても万に一つあるかないかを。

「だから何ですか、好きであればそれでいいじゃないですか!!」
自分の気持ちを見透かしたように真剣な瞳で言い放つ。
「あの村は子供達も含めて本当に三人を好きになったんです！三人もきっと同じはずです。」
ティファの言葉はバランを切り刻む。
その三人を死に追いやったのは己自身だと突き付けられて！
「人が全てそうであろうはずがない!!!」
ティファの言葉を振り切るようにバランは叫ぶ。
「現に我ら親子を壊したのは私を魔物と怖れたのは人間達ではないか!!!」
今でも思い出すだけでもたやすく己の胸を黒焦げにする、怒りが憎しみが支配をする思いをさせたのは人間だ！
「・・・先に人間を・・母さんを怖れたのは貴方の方だ!!」
「・・・何だと・・」
その遣る瀬無い思いを、ティファはひていをする。
「魔物だと嫌疑をかけられた時、何故弁明をしなかったのですか!!
貴方は確かに人間ではない！それでも聖母竜・マザードラゴンから生まれし竜の騎士であると言えば！テランのフォルケン王に問うてほしいと言えば!!あるいは受け入れられたかもしれないのを貴方はしたのですか⁉」
「・・・それは・・・」
「ソアラ母さんが受け入れないと思ったのですか？あるいは—人間—ではないと知られれば怖れると思ったのですか？
母さんが貴方の言う通りの人の素晴らしい人ならば、貴方の全てを受け入れたかもしれないとは考えなかったのですか！」

その言葉はバランの深きところまで届いた。
いつでも太陽のように明るく優しかった娘。
瀕死であった見知らぬ自分を王女という身分であってもためらいもなく手を差し伸べてくれた慈悲深き女性であった・・だからこそ自

分は心の底から彼女を愛したのだ、ティファの言う通りの素晴らしい女性だから。

沈黙が辺りを覆い、それを破ったのはやはりティファの声であった。

「―お髭のおじさん―を愛してくれた素晴らしい人だったなら、貴方がただ人だろうが竜の騎士だろうが。」

ここまではまっとうな言い分であった。人でも竜の騎士でもで終われば。

しかしそこはティファである。

「天族だろうが魔族だろうが―魔王―だろうが―大魔王―であっても受け入れてくれたかもしれなかったでしょう!!!!!」

親子決戦？父さん

自分の妹は何を言っているんだろう？
確かに妹は常に種族の差異なぞ寿命や生態系・特殊な事の一つや二つで中身はさして変わらない、みんな怒って笑って泣いて悲しむ生き物であると言ってたが、この場面で愛した物が魔王・大魔王まで出してもいいのだろうか？
現にティファが発言をした後のこの気まずい沈黙はマズった気がする。
俺的にはアリだし、あってほしいと思う。
だって俺の好きな人は人間で、俺は違うと言われて身をひけと言われたら絶対に嫌だからだ。
でもティファ、この沈黙をどうするの？

「いい加減な事を言うなティファよ!!!」

唖然茫然で聞いていたバランがとうとう切れた。
自身の無意識の怯えを暴かれたうえ、その説得のためとはいえ何を荒唐無稽な事を無責任に言っているのだ！
綺麗事を言えばそれで丸く収まるとでも思っているの・・「いい加減じゃない!!!」
バランの言葉にティファも負けじと怒鳴り返す。何と頑固な娘だ!!
「お前が私の何を知ってそう言えるのだ!!」
ソアラの心情はティファ自身が思っている事を投影しての事ならば納得がいく。
ティファならばもしかしたら・・考えたくはないが好いた相手が本当にそうであったも―そうなんですか、何が問題なんですか？一緒に解決をしましょう―とか言って幸せを全力で目指す強さがあるのは分かる！
しかし自分を素敵な者と言いきる根拠はなんだ！たかだか二度し

か会っていない頑是ない子の言う事に腹が立つ。
自分の何を知っているのかと。
その言葉にティファは沈黙をして俯いてしまった。
やはりその場しのぎの言葉かと思ったが、
「・・・笑ったから・・」小さなティファの声がした。
「人間の子に見える私に!――お髭のおじさん―が笑ってくれた!!お日様みたいに温かく!!」
「私が・・日・・」
「だから私は―お髭のおじさん―が大好きになったんだ!それに付いて行く人達もきっといい人達だって!!ガルダンディーさん・ボラホーンさん・ラーハルトさんが大好きで、ルード君は最初から可愛くて!!―皆の事―が大好きだったんだよ!!!」
己の中の秘密にしておいた宝物を見せるが如く、ティファは真っ赤になって告白をする。
最後まで言うつもりはなかった、ずっと自分だけが知っている宝物にしておきたかった。
些細で小さな事かもしれないけれども、告白を面とするのは恥ずかしい。
誰かを大好きになったきっかけを言うのは。
最初から父と知っていた、それでもどこか遠くの事に思えて実感はなく、あの笑顔で頭を撫でられて初めて実感をした。
この人は自分の父であり、そしてまた―大好きなお髭のおじさん―にもなった瞬間を思い出せば、今この時でも胸が温かくなるのに。

私がお日様だと?
それはかつて自分が最愛の妻に言った言葉だ。
―ソアラの笑顔は太陽の様に温かい―と。
その言葉に照れた妻の笑みを見て更に幸せになった。
今その言葉を、かつて見知らぬ人間の子に向けた笑い顔をそう評してくれるとは夢にも思ってもみなかった・・
そしてもうひとつ言わなければいけない事がある。

今の自分の言葉に衝撃を受けている父には酷かもしれない、それでも伝えなければいけない事が!!

「ダイ兄、覚えてる？ウォーリア船長が、私達が島に流れ着く前の海の話を。」

ダイ兄にとっても大切な話だから覚えているはずだ。

急に俺に振る⁉でもティファなら何か考えがあっての事だ。

思い出せ、俺達がデルムリン島に流れ着く前の海は「嵐で多くの船が難破をして、ウォーリアさん達も死にかけたあの話だね。」

ウォーリア？また知らぬなの人間がどうかしたというのだ！

「私達兄妹がデルムリン島に流れ着いたのは嵐で船が難破をして、無事に流れ着いたからなんだよ。」

さっき父さんがアルキードにされた仕打ちの中で、私達兄妹が他国へ運ばれてしまった事も話していた。

父さんはその時のこと以外を知らない。

「あの嵐で大勢の船乗りたちが命を落としたって、赤ん坊がデルムリン島に漂着をするなんて本当はあり得ない程の災害クラスの嵐だったって。」

ウォーリアさんの真剣に話してくれた顔を今でもよく覚えている。

それ程の嵐で赤子が無事だったのはきっと「小舟に乗った私達を見つけたじいちゃんが目にしたのは、揺り篭から放られないようにって荒縄が揺り篭の足先から首当たりまで巻いてあって、その荒縄も小舟に固定をされていたから辛うじて無事だったんだって、じいちゃんとその船長さんが教えてくれたんだよ。」

あの人達は命を懸けて私達兄妹を守ってくれたんだ。

「そんな・・馬鹿な!!そんな事が⁉そんな事があってなるものかっ!!!」

ティファが言った事を頭の中で反芻をして理解したくない事をしてしまった!!

ティファの話が本当ならば！罪人と目された子等を、アルキードの者達が命を懸けて助けてくれた事に他ならないではないか!!・・その

彼等の・・家族を・兄妹達を・友人達を・恋人を自分はあの日に滅してしまったではないか!!!

ソアラを喪い、父王の心ない言葉にアルキードを滅し、それと知らず船の者達は我が子等を助けるために懸命の作業をして命を繋いだなぞと・・

「いまさら私にどうしろと言うのだ!!!!」

知ってしまった真実は、テランや魔法使いの小僧を通して人間の善き面を見せられたバランはとうとう耐え切れなくなり叫びあげる。

バランの悲痛な声に、ヒュンケルが反応をした。

自分もかつて己の過ちを気づかされ、戦いの最中だというのにダイ達に叫び上げた心の痛みのあの台詞と同じ。

「私はもう一国を滅ぼし、人死にが少なかったとはいえカールとても!!

そんな私に今更どうしろと言うのだ!!!」人が自分を許すはずがない!!

レオナとメルルからベホイミを受けているヒュンケルとクロコダインはその悲痛な叫びに胸が潰れる思いがする。

あれはかつての自分達だ、罪の意識を思い知らされて押しつぶされそうになった時の事を忘れる事は無く、今でも自分達を苛み呵責し心が血を流す痛みを伴う。

果たして自分達は許されて生きるのに値するのかとそれでも!あの少女ならばきっと!!

「だったら償おう!!」力強く言ってくれる。

「人は・・生き物は生きている限り間違いを犯す!どんなものだって心から悔いたのであれば、たった一度償う機会があっていいはずだよ!!

人間だって他の種族に酷い事をする、半魔だってモンスターだって・・もしかしたら天族や精霊だって・・」

「だから⁉他が間違いをするから気にするなと言うのか!!」
「違う!!償う方法はきっとあるはずだよ!!
命を奪って苦しいのなら今生きている人達を助けて守って・・償う道を歩けばいい!!!
歩いて歩いた先にきっと答えが待ってるはずだよ！」きっと答えがあるはずだ。だって、
「世界は弱すぎも酷過ぎもしない!!いつか許すって言ってくれる人がきっといる！」
辛くて死んだほうがましな茨の道を歩く事になるのは分かってる。
「それでも・・・世界中の人が父さんを許さないって言ってもティファが絶対に側にいる!!一緒に償う道を歩く!!!だからこっちに来てよ―父さん!!!―」

親子決戦④決着

とうとうティファはバランを父さんと呼んだ。
本当はもっとずっと前から言いたかった、今だって―敵―のバランを父と呼ぶのを躊躇っていたが、己の心の中を叫び上げに、心の声に従った。
「ガルダンディーさん・ボラホーンさん・ラーハルトさんもティファと同じ事を言ってる！」必死に・・
「母さんが生きていたらきっと父さんの助けをしてくれるはずだよ！だからこの世界でティファがする!!」なんと不遜に傲慢に、そして限りなく優しいのだろう・・
「・・それだけじゃ足りない？ティファ一人が助けるだけじゃ・・」返事をしない父親に切に切に訴える。

足りないはずがある訳がない!!一体ティファの心はどこまで広く温かく正に太陽のようではないか！
あの心にどれほど救われたかとクロコダイン達は痛感をする。
一体どこの世界に戦っている最中の敵に手を伸ばす者がいるというのだろう。
甘いのかもしれない、子供の綺麗事なのかもしれない、それでも懐柔しようというその場しのぎの嘘では決してなかろう。
いつだって本気で自分達にぶつかって来た、あの娘の言葉に偽りは無いのを知っている。
バランに言っている今の言葉も本心なのを。
ティファこそ、まさに生き物たちに恵みをもたらす太陽ではないか。
ティファよ・・
バランもティファの言葉が本気だと分かってる。
それでもティファの手をとる事が出来ない・・自分の犯した罪はあまりにも大きすぎ、そしてくだらない矜持と人間への憎しみを捨てきれずに―ズバァ―――!!―

剣の返答となった。

父さん・・

打ち合っている剣からは最早覇気はなく、まるで泣いているようだ。

重すぎる罪・全てを知っても捨てきれない人間への憎しみがすぐに消えるはずがない。

全てを察したティファは全てを受けることにした。

父の悲しみ・戸惑い・憎しみ恨みつらみ・やるせない思い全てを・・受けるつもりであった。

しかし小柄で女性のティファは、完成をされた強さを持っていても体力面ではバランに劣ってしまう。

ガルダンディー達も相手にしたティファの闘気量が底をつきはじめ、バランの一撃を受け止めようと気を練ったが発動をしなかった。

しまった!!「避けろティファ!!」「ティファよ!!」

ヒュンケル達もすぐに察したが体が動かずに助けに行けない。

打ち込んだバランも自身を止められずに心中でよけろと叫んだがどうにもならず、誰もがティファは斬られるかと思ったその時

「ティファ――――!!!」

ティファの万能薬で回復をしたダイが妹を肩に引っ担ぎ助け出す。

「ダイ・・兄・・」体力の限界も近く、肩で荒い息をする妹の頬をそっと撫でる。

「ティファ、ここからは俺が何とかする。ティファは休んでいて。」

「兄、どうするの?」倒すの?

「・・俺もあの人に言いたい事がある。でもねティファ、俺は勇者なんだよ。」

「分かった、お願い兄!」

妹が何を願ったのか、分からない程自分はぼんくらな兄ではない。

「ティファは優しいね。大好きだよティファ。」たとえ敵を助けてほしいというとんでもない事を願う妹であっても、だからこそ愛おしく思う。

優しく温かい妹を。
「行ってくる!!」
ティファと違い最早右手の拳の紋章を使いこなしているダイは気負いなくバランの前に立ちはだかりいきなり撃ちかかる。
言いたい事とは何か、自分の所業に対しての罵詈雑言かと考えたが全く違った。
ダイだとて父がいたという事実は純粋に嬉しかったのだ！自分だってティファと同様に父だと言いたい程に!!
それでもティファに言った通り、自分は勇者であり―敵―は倒さなければならない！だから!!
「ボコって!!」兄弟子のポップが言っていた言葉。
「とっ捕まえて説教だ!!」悪さをした自分にティファが言っていた言葉。

―そして助ける!!―

ダイはポップとティファの言葉を口に出し、心の中で自分達三人の考えを叫び上げる。
自分達は兄妹の絆を結び、三人で旅に出た。
ティファが―兄―と呼ぶのは自分とポップだけ、ティファを妹としているのも自分達二人だけ。
―兄妹の総意―で心が闇に堕ちてしまったバランを、父を必ず助ける!!!
「兄・・兄・・。」
その光景を、ティファは涙を流して食い入るように見つめる。
父の罪は重く、それもポップを殺しかけている。それでも助けようという自分の思いを受けとめてくれた兄は何と偉大なのだろう。
それでもダイが不利なのには変わらない、剣がない状態のは次第にジリ貧になるのが目に見えている。
闘気が尽きたティファの手から、いつの間にか―雪白―はなく銀のマジックリングに戻っている。
発動条件はティファの闘気を受け取る事で刀になる。
闘気が尽きてしまえば使えず、仮に使えてもティファの手から離れ

て他の者が使用をしようとすればたちまち銀のマジックリングとなり自動的にティファの首元にネックレス上に戻ってしまう、まさにティファ専用の武器と言っても過言ではない。
だからこそダイに貸せずに焦りもある。
「クロコダイン!!あとどれくらいで動ける!!」
「あと少しだ!それで、どうする?」
話が早くて助かる。動けるようになれば―剣―をダイに渡す!!
ポップとティファの全てを見聞きして動けない奴は男じゃない!!!
ティファがバランを助けることを決めた、それはおそらくダイも、倒れ伏しているポップも同じはずだ。
世間が許さなくとも、仲間である自分達はその考えを支持をして願いをかなえてやりたい。
その為にも出来ることは最大限にする!たとえボロボロであってもだ。

「もう大丈夫だメルル。ヒュンケル!」
「こっちもだ、大丈夫だ姫様。」
二人はそれぞれ回復をしてくれた者達に礼を言う。
その様をメルルとレオナは泣きそうになるが止める事は決してしなかった。
回復をしてもまた傷だらけになるだろう男達の強さを信じて。
「行くぞヒュンケル!!」
「おう!ダイ――!!!」
二人は連携で動き、クロコダインが先行をして空中のバランに会心撃を放ってバランの気をひき、そのすきにヒュンケルが宙にとびダイに―魔剣―を渡そうとした。
「小癪なり!!消えよ!!!」
クロコダインの技を闘気でかき消し、ヒュンケルにライデインを放ち退ける。
しかしライデインを喰らいながらもヒュンケルは笑っている。
ダイに剣を投げ渡せたのだ。

「それを使えダイ!!その魔剣ならば一度はもつ!!!壊しても構わん!!!!」

叫んだあとは落下のダメージを覚悟をしたが―ガシャン!!――・・受け止められた・・

「つぅう・・」受け止めたのは・・「・・無茶が過ぎるぞティファ!!」

自分よりもはるかに小柄なティファが、全身を使って受け止めてしまった。

体格も違い、鎧の重さと落下の速度は確実にティファのダメージとなっているはずだとさしものヒュンケルもティファを怒鳴りつける。

「大丈夫です、少し休ませてもらっている間に体力用の薬を飲んで回復はしています。

戦えなくともやれることはやらないと。」

にこりと言われてしまっては返す言葉がない。

「怒鳴ってすまん、助かった。」

「それよりもヒュンケル、ライデインは体の中に火傷を作ります。

それ専用の薬を飲んで、レオナ姫・・また・・・」「―ティファ!!!―」

ヒュンケルとクロコダインの薬を渡そうとしたティファはまたもや叫ぶべほの声に血相を変えてすっ飛んで行った。

まさか!!

予感がしてポップの胸に耳を充ててみれば、心音が確実に弱っている!!

どうしよう・・どうすればいい⁉もう・・薬がない!!

魔法が使えれば・・死ぬ気でベホマを覚えるのに!!ザオリク級の回復呪文を!!!

「私の役立たず!!何で魔法が使えないの!!!」

―あの時―と同じだ!ノヴァを助けられなかったあの時の無力な自分と・・・

ティファが役立たずだと!

ティファは思い違いをしている!!

役に立たないのは自分達の方だ。
自分達の力が足りずに、だからこそポップがメガンテをする羽目になったのだ！
今だとてダイに剣を渡してそれで終わりではないか！
もしもティファを役立たずだと言うものがあれば、切り殺したい程にヒュンケルとクロコダインの胸中はティファの叫びに荒れ狂った。
ティファさんは役立たずなんかじゃない！
誰よりも頑張っている人だ!!・・お願いですポップさん、死なないでください!!
竜の神様、この素晴らしい人達をどうかご加護を!!

ティファの嘆きが、ヒュンケル達の怒りが、メルルの心優しき祈りが通じたのか、ポップの魂にティファの嘆きの声が確かに届いた。
―こいつは何を言っているんだ？ティファは料理人なんだろう。
魔法使いは俺なんだぞ。しゃあねえな、泣き虫の妹は―
意識のないポップは、それでも―妹―を泣かせた―元凶―許せなかった。

その怒りはギガデインを剣に纏わせ、一撃必殺のタイミングを狙うバランの背にイオをくらわせた程に!!
「何だと!!」この状況で魔法を使えるのはあの小僧のみ！まさか死にかけの・・
「うおおお!!!」しまった!!!
奇跡のような一撃をダイは見逃さず、―全員―で作ってくれたこの一瞬を無駄になぞしない!!
「ボコってとっ捕まえて説教だ――!!!」
技の名ではなく、先程と同じ言葉にバランはあらゆる意味で驚いた。
こんな事をしでかした自分を倒すのではなく説教をして・・助けよ

うなぞと・・
バランは子等に完全に負けたのを悟り、技を受け入れた。
真魔剛竜剣は主の意思を受け入れ、魔剣に叩き折られバランも地に落ちる。
その様をダイは驚いたが「ダイ兄!!来てぇ――――!!!」
妹の叫びを聞いて一も二もなくティファの隣に降り立った。
「ダイ兄・・ポップ兄が死んじゃう!」そんな!!
「何か方法は無いの⁉」薬とか回復アイテムとか!!
「・・・不確かだけどある・・」
ティファはダイに―竜の血―の効能を話した。
綺麗な魂を持つ強靭な精神力の持ち主には効くことも。
「その条件ならポップは大丈夫だ!」ダイは力強く保証する。
ポップは少々臆病なところがあるが、それでも仲間を守る為には最後には踏ん張る強さがある!
「どうすればいい?」
「分からない・・・」効能は知っていてもした事はない、それでも!!
「ポップ兄を助けたいって心の底から思えばきっと!!」魔法もイメージが大切で、力は須らく自分の思いが大切なはずだ。
ダイとティファは祈りにも似た強い思いで掌を傷つけ血を振り絞れば、ほんの少しだけ七色になった血がにじみ出て、血を受けたポップの心音がわずかながらに強まった。
「ティファ!!」
「うん!ダイ兄!!もういち・・・」
ポップを助けるのに夢中な二人の頭上に腕が伸び、ダイ達同様拳を握りしめ、ダイ達よりも濃い七色の血がポップに降り注ぐ。
―トックン・・ドックン―
その血を受けたポップの鼓動は力強さを取り戻し、白かった顔に赤みが増す。
ダイとティファは驚いて振り返れば、傷だらけのバランがふらついている。

父さんが・・ポップ兄を助けてくれた・・それって!!「「とうさ・・」」
「来るな二人共!!!」
バランの意を受け取り、喜んで駆け寄ろうとするティファとダイを、バランは拒絶をする。
その声にダイとティファは止まってしまった。
「なんで!!」「どうして!!」
二人は今すぐに駆け寄りたいのに、バランが気配でそれを許してはくれない。
「私はもう人間に敵対をしない!だから追ってくるな!!!」
大罪を犯せし自分はあの二人の下には行けない、だからこそ代わりに魔法使いの小僧を助けた。
―人はね、優しい人もいるんだよ―
かつてティファが言った通り、仲間の為に命も惜しまずに守ろうとした少年を。
償いをせねば・・人にティファにディーノに・・そしてあの三人に・・
落日の下バランは誓いを立てダイ達の下を去った。

父さんがなんと言おうと!必ず追いかけてやる!!いう事なんて聞いてやらない!

ー幕間ー魔王軍サイド

その話は滑稽であった、荒唐無稽と言えなくもない。
報告をしている最中の自分だとて、言っていてどこの冒険譚の三文小説を読み上げているのかと馬鹿馬鹿しくすらなる。
だがしかし、残念ながら全てまごうことなき事実だ！
「成る程。現時点では勇者よりも妹の方が、我等の作戦の阻害要因になりうるものと判断をする・・そう言いたいのかミストよ。」
「御意にございます―バーン様―、今作戦を立案をした身ではありますが、―あれ―が我が軍に来なかったことを安堵しております。」
「なんと、そなたがそのような事を余に言ったのは初めてと記憶するが、それほどの者がいたとはな。」
鬼岩城ではなく、バーンがいる死の大地の奥深くにてミストはバラン戦で見聞きしたことをすべてバーンに報告をした。
勇者ダイ達の成長度合いは自分たちの予想を遥かに上回っているのも。
よもやたった十二の少年が紋章を使いこなし、バランと渡り合う力を手にしたのは脅威とみなしていい範囲だ。
それだけに早々にダウンをした弟子ともいえるヒュンケルに腹が立ったのは内緒だ。
お前はその程度の器ではない。やはり憎しみの原動力を消されたが為に腑抜けたかと苛立って見ていたのはキルにはばれただろうが、あれは自分の事を告げ口しないのは知っているので大いに荒れた。
さっさと捕えて、バーン様の役に立つ道具に―再教育―しなおしたい。
それは置いといても、やはり脅威なのはティファだ！
その実力・知識・判断力・所持をしている武器などでは断じてない!!
それらは全て自分の主が上回り、最終までたどり着けたとしてもこちらが勝つのは目に見える。
では何が危険かと言えば―ティファ本人―が危険なのだ!!

竜騎衆達とのやり取りを見ていてから嫌な予感はしていた。
氷の如くと言われていた超竜軍団の心を揺り動かし、遂にはあの憎しみに凝り固まったバランをして―もはや人間と敵対はしない―と言わしめて、長年抱き続けていたバランの憎しみを捨てさせた言動が脅威だ！
愛した者が魔王・大魔王であってもよいなぞという、子供の戯言を本気で言って押し通そうとしたものが自軍にいられたと思うとぞっとする!!
それこそ地上界を滅ぼそうとしている自軍を崩壊させかねない要因にしかならない。
人とは記憶が消されても本質までは変えられない。
記憶が消されたダイは弱々しかったが、それでもバランに逆らったことからそれは見て取れる。
ならば記憶が消されてもティファならば、種族全てを滅ぼすのは間違っていると逆らい続け、精神の弱い者から取り込まれてやがては大混乱の種にしかならない。
地上を消すまでもう僅かな時間だとしても、このタイミングで―五年前―のような事は二度と御免だ！
バランが破れて軍に反旗を翻す事になろうとも、ティファが来なくて良かったというのが最大の本音であり、余すことなく主に報告をした。

「ふむ、キルよそなたはどう見る。」
「僕に聞きますか？残念ながら僕は面白い事が大好きなので、真面目一途なミストが怒りそうな事しか言えませんのでご遠慮させていただきます。
今度―二人きり―の時にいかがですか？」
キルは―名目上―はヴェルザー配下であり、バーン暗殺の刺客なのだがさぼっている。
もっと言えば命令履行をしようとはてんで思ってもいない。
だってバーン様とミストが大好きになったからと、およそオート・

ドールが考えそうにない事を―考える―ものになっている。
キルの主はヴェルザーであり、その意を汲んで動く―人形―ではあるが、一から十まで命じなければ動けないものは役には立たないと、―疑似人格―を植えたのが、作り手の予想の範囲を超えて本物と言っても差し支えない人格が出来たのが原因である。
いざとなればヴェルザーなんて袖にする予定ではあるが、それはまだ周りには内緒であり、親友のミストにも言っていない。
よって現時点で自分とバーンが二人きりになる事は金輪際ない。
すぐにミストがすっ飛んできて、主を守ろうとするからだ。
つまるところ自分のティファに対する感想等をバーンに言う事は無いという遠回しのお断りである。
「そなたは変わらず仕方のない奴だ。」
自分の拒否すらも、その仕方に面白みを感じて笑ってくれる主なんてそうそういまい。
普通ならば馬鹿にしているのかと激昂しそうなものだが、この主の度量のなんと大きな事か。
その度量が大きく、かつ―面白い事―を何よりも愛するバーンには―ティファは面白い―と映ってしまったのは自明の理であったのかもしれない。

料理人の休暇願

疲れた、自分の子供達にここまで迷惑をかける親なんてダメダメだ。
まして世界規模で大迷惑を被らせるなんて論外だ、絶対に見つけだしてボコって説教しよう。
ダイ兄達大丈夫かな？

遡った数時間前
バランが去った後、レオナの采配でテランの森の小屋で一行は休むことにした。
何となれば魔王軍に狙われている者達が、ただでさえ兵の数が少ないテラン王に気を使わせたくないというレオナの発案で。
医者はいらない、何故ならばティファがいるからだ。
確か料理人を名乗っていたはずなのに薬学・医学に通じていて、下手したら市井の医者以上・宮廷医師を名乗れそうなほどの腕前で、ホイミ系ならば自分とベホイミスライムがいるので大丈夫。
一行には気兼ねがない所でゆっくりとしてほしいレオナは、周りにかなりごり押しをしているのを承知で押し通した。

「よく分かった、彼等にゆっくりと休むようにと伝えてほしい。」
何もかもを承知して、それでも笑って労ってくれるテラン王に涙が出そうになった。
今回の件で勇者ダイの身元が明らかになった。
それはつまり実の父親が魔王軍であり、先のアルキードの悲劇の引き金を引いた重大な犯罪者であることも明らかになってしまった！
それでも、その報告をメルルから受けたであろうフォルケン王は一切態度に出さずに、勇者一行の助けをしてくれると、短い一言で言ってくれた事にどれだけ救われる思いをしたか知れない。
感謝をしてもし足りないが、長々としては王の体に障るので飛び切りの笑みで応えて辞去した。

先に小屋に行ったメンバーはティファがてんてこ舞いをしている。
万能薬の瓶にはラベル張りがなかったのでメルルに説明をするよりも自分で塗った方が早いのでティファが三人の治療をしている。
傷によっては成分の違うものを塗らなければならないので慎重に。
塗った後に飲み薬も併用をすべきか、自己再生機能に任せるべきかも考慮しなければならず、矢張りメルルにすぐバトンタッチとはいかない。
終わったころにレオナが戻ってきて、ぐったりと疲労困憊しているティファの姿があって、レオナを驚かせてしまった。
そしてレオナがティファに説教三昧の嵐が吹く。
「何でもかんでも自分でやりすぎ!!」
「無茶しすぎ!!」
バラン戦の重要場面を支えた後に、ほぼ一人で手当てをするのは相当無茶だ！
メルルだとて旅暮らしでそれなりに医学知識はあるはずだ、なのに頼らないのはどうなのだ!!
「貴方達もティファを止めなさいよ!!」
怒りの矛先はヒュンケル達にも当然向かった。
薬くらい自分達で塗れ！付帯くらい巻きあえるだろう!!
ある意味ギガデインよりも怖ろしい雷が鬼軍曹化をしたレオナによって、一行滞在の小屋に堕ちた。
「ですが姫・・その・・・この薬はかなり特殊なんです。
万能薬と言うのはご存知ですか？」
怒られながらもおずおずとティファが意見を述べた。
「ええ、確かリンガイアのノヴァと言ったかしら。
その人の発案で国家規模で作られた薬だったかしら？」
「そうです、この薬も私オリジナルですが万能薬と同じで一般の薬と違って扱いが微妙なんです。
飲み合わせ・塗り合わせによってはお互いの効果を消しかねないもので、飲み薬は原液を持ってきてしまったので希釈を間違えると毒になります。

なので急に手伝ってほしいと言える代物では・・」何かあったら傷付くのはメルルさんだしな。
助けようとして体調悪化は駄目でしょう。
「・・・そんな凄いものを毎回使ってるの？」
「まあ・・はい・・」
「はぁ～しょうがないわね。でもこの後ゆっくりと休んで頂戴。
ダイ君、具合どう？」
一通りお説教をした後レオナはいそいそと寝台のダイに近づく。
激闘の後で弱っているダイを自分が看護する！
「大丈夫だよレオナ。」本当は起きたいのに、クロコダイン達とメルルも駄目と言ってきたので横になっている。
ティファなんか泣きそうな顔で休んでほしいと言ってきたのだから降参をするしかない。
ティファとてポップのメガンテ相当堪えただろう、たとえ助かったとしてもだ。
兄達が倒れ伏しているのを優しいティファが平気なはずがない。
妹の心配がとれるのならば何でもしよう。

だからこそクロコダイン達も自分で手当てをするというティファの無茶を聞いたのだが、それは言わぬがなんとやらだろう。
やり遂げたティファが疲れても、どことなく元気になった気配がしたのだから。
「あの～・・・」
そんなティファが何か言い辛そうに手を挙げた。
「どうしたのティファ、遠慮なく言ってちょうだい。ダイ君と一緒に寝台に横になりたい？」
「いいえ・・その・・あの・・」
なんとも歯切れが悪い、戦っている時やその前ははきはき言っていた子だったのに。
「いいのよティファ！遠慮なくどんと言って頂戴!!」
胸をどんと叩いて許可をすれば「その・・休みが欲しいんです・・」

何か健気なことをか細く言った!!
「ティファ！俺達の飯は自分で作る!!アバン先生には料理もある程度させられた!!」
「俺も明日になれば回復をしている！心配をするな!!」
「私が作りますから皆さんゆっくりなさってください!!」
「いざとなったら私の城に!!」
えっと、なんかみんな嬉しいけど怖い。
ティファが休みたいと言えばヒュンケルが真っ先に名乗りを上げ、ティファを取り囲むように料理の心配をするなと言ってくれたのだが違うのだ、それじゃない。
「えっと・・もっと具体的に言えば、しばらく一行を離れてまた薬づくりに勤しませてほしいと・・」

「絶対に駄目!!!!!!!!」

「・・兄・・」
ティファが最後まで言う前にダイが力強く却下をして、寝台から降りてティファの両肩を掴んだ。
「何考えてるのさ!!平原でキルバーンに攫われたくせに!!!」
「兄・・」
「ティファは俺の側にいないと駄目だよ!!遠くになんか行かせない！もうガルーダで遠出をしても大丈夫な時じゃないんだよ!!!」
「痛いよ兄・・」
「どうしても行くっていうなら・・俺本気で止めるよ?」
ダイは本気で掴んでいるティファの両肩に力を籠め、暗い瞳をティファに向ける。
ここまで言っても兄の言う事を聞かない悪い妹には仕置きが必要だと。
それは滅多に見せないダイの本気の怒りだった。
普段は自由で気ままで子供らしく明るいダイだが、ティファが絡む

と別人のように怖くなる時がある。
それこそが竜の騎士の子であるという証であるとティファは思っている。
―竜は宝物の守護者―
この世界にもある言い伝えで、竜は宝に近づく者には容赦はしない。それは翻せば―宝―が遠ざかろうとしたときも言えるのかもしれない。
年々兄の自分への愛情の度合いが強くなってきたのを薄々感じている。
レオナ達は初めてダイの激情に触れて声も出ずに見守っている。
ダイにこのような一面があっただなんて思いもしなかったからだ。
それでも、「ダイ兄、私もね皆を守りたい。今ある既存の薬じゃ間に合わないんだよ。」
兄が自分を大切にしてくれるように、自分も皆を愛している。

「ティファ・・」
「絶対に無茶しない、危なくなったらすぐにガルーダで逃げれるようにする。キメラの翼もすぐに使えるようにして、毎日手紙書く。
今魔王軍はヒュンケル達の話だと六団長のうち、三軍のそれも実働部隊が潰れたんだからすぐに動きはないと思う。
その間にこっちも備えておきたいんだ。」もう死にかける一行を見たくない。
「・・・・分かった・・明日の朝に・・」
「それは駄目、明日になったらダイ兄私の事絶対に引き留めるでしょう。ポップ兄使ってでも。」
「うっ!!」
「・・図星って・・もうみんなの手当て終わったし、兄の決心が鈍る前に行くね。」
忙しい一日で休みたいけど、―おじさん―と鉢合わせにはなりたくない。
その場全員に説得をされたがティファは振り切るように小屋を後

にした。
途中で走ってきたヒュンケルに呼び止められたのでお願い事をしたら却下された。
曰く「ポップ兄をあまり叱らないで上げてほしい。」と言ったら、
「駄目だ、ティファの願いでもそれは聞けんな。」
「・・どうしてもですか？」
自分達兄妹の為に身を挺してくれたポップをあまり叱らないでほしいが、ヒュンケルとしても思うところが多々多々あり過ぎて本気で説教をするつもりだ。
仲がいい兄妹弟子になってくれたかなティファが内心で喜んでいる隙に、ヒュンケルがティファを抱きしめた。
自分の体に押しつぶせそうなティファが、一番戦っていた。
知己を斬り、父と激突をして。それもこれも自分達が弱いから、ティファが戦わざるをえなかったから。
悔しい！腹が立つ!!おのれの弱さに!!!
「ティファ・・俺は強くなる。」
小さなティファが戦わなくて済むようにと、祈りにも似た誓いを立てるように。
だからもう、ティファが傷付く事をしないでほしいと願いつつ。
「・・行ってきますヒュンケル。落ち着いたら鳩を飛ばします。
ダイ兄達にはどこにいても鳩が着くようなマグを渡してありますので大丈夫です。」
そんなヒュンケルをそっと放し、ティファ―いつもの微笑み―を浮かべる。
それはガルダンディー達に向けた子供の笑い顔ではなく、一行を守る料理人の微笑み。
小屋に行く道すがら―眼鏡―をかけて一行の手当てをテキパキとした。
自分は勇者一行を守るために存在をしているのだと己に言い聞かせるように。
そうしないと、崩れてしまいそうで。

「・・分かった・・行って来い。」
何かを察しったヒュンケルも、それ以上は追及せずに黙って見送った。
ティファとあの三人とバランの事は、ティファにしか分からない事だから。
星明りがありがたい、三人のお墓は今日中に作れそうだ。

真夜中の招かざる客たち①プロローグ

ああもう!!俺って奴はなんて最低なんだ!!!

夜の小屋の見回りをしているポップは、全身で周囲を警戒しつつ内心で悶絶をしているという器用な事をやってのけている。

目を覚ました時はダイに抱きつかれた。

ティファはどうしたのだろうと聞いてみれば、薬作りに行ってしまったと聞いてビックリ仰天して飛び出そうとしたのをヒュンケルにとっ捕まって鬼の形相で説教をされた。

「命を粗末にするなと言っていたお前が一体何をしている!!!」

「いや・・・俺だってな!考えがあって・・・」

「問答無用!!!」

必死の抗弁も一蹴されて物凄く怒られた・・・アバン先生怒らすよりもおっかねえ・・

「ポップ・・・もう二度としないで・・・」

ダイに手をとられて泣かれたのは説教の何倍もこたえた。

「分かってる、二度としねえ。次は全員が助かる方法考えるよ。」その為にも師匠の特訓受けてえなって言ったら青い顔をされたのが解せん。

死にかけた人間が、更に死にかけそうな地獄の特訓を自ら課そうとしたら普通そうなるという心理をすかんと抜け落ちてしまった気の毒なポップであった。

しかしだ、兄弟子の説教・弟弟子の悲しみよりも深く心に突き刺さったのはクロコダインからの警告であった。

「・・・ポップよ、お前の言った通りだった。」

「何だよおっさん、急に改まって。」

自分達の事を一通り見ていたクロコダインが真剣な瞳をしている。

自分の言った通りと言っていたが、ティファに何かあったのだろうか?

しかしそれならばダイ達がティファの単独行動を容認するはずがない。ダイはティファの事になると過保護な面があるのは薄々知っ

ている。
旅の途中でティファがくしゃみ一つしたら毛布を出してその日は休ませていた時には驚いた。
そのくらいの過保護なダイが許可をしたのなら大丈夫な気もするのだが。
「お前の言う通り、ティファは戦いに出すべきではない。」そっちか！
「でも・・強かったんだろ？」
クロコダインが言う通りに、竜騎衆のうちの二人を倒せる程に。
「・・・確かに力は強い、戦い方も俺やヒュンケルでもできないような戦い方をした。
いつか紋章を使いこなし、戦い方を会得したダイならば届く次元にいる。」つまるところ現時点では一行の誰よりも強い事になる。
あの戦いでクロコダインが確信した事を全て話すことにした。
所持していた武器・戦術・闘気量。
その話をヒュンケルは否定をせずに聞いている、つまりヒュンケルも同様の事を考えていたことに他ならない。
「・・ティファが・・そんな強さを・・」
「全く見えなかったわ・・」
本格的な戦いを一月と経験していないダイと、戦場を知らないレオナは驚かされることばかりだ。
「その話が本当なら、おっさんがさっき言った事が理屈に合わねえ。」
ポップも驚いたが、真実だと受け入れる覚悟をしていたので表面には出さなかった。
当代の竜の騎士が、親馬鹿であそこまでティファの実力を手放しで褒めるわけがないとあの時点で悟ってはいたのだ。
ティファは強いのだと、本物の実力者なのだと。
ならば妹を心配して止める自分達ならばともかく、長年軍に身を置き幾多の戦をしてきたクロコダインが戦力を低下させる発言をするのがおかしい。
今の自分達は魔王軍の一番の標的になりえているというのにだ。
それこそティファがこの場を離れると言った時、何故反対をしなかっ

たのか？
「おそらく俺のモンスターとしての勘なのだが、ティファの心は強くはない。」
クロコダインが苦しそうに答える。
竜騎衆達を斬った事を告げた時、ポップがメガンテをしようとした時、バランが己の罪に苦しんだ時、ティファは泣いていた。
戦場で命を懸けた戦いをしていたというのにだ。
敵に手を差し伸べるのならばまだ分からなくもないが、敵を倒したというのを嘆く者がいるなぞ自分は聞いた事がない。
仲間の死を悲しむのも分かる、あの時自分も悲しみの底に堕ちかけたが「ティファは・・壊れる寸前に見えた・・」
自分やダイ達の様に嘆くでなく、悲鳴を上げるでなく、立ち尽くして壊れる陶器のように。
「ティファは戦いには全く向かぬ者だ。」たとえ力があろうとも。
仲間の死で心を乱すではなくひびの入る者・戦っている相手の苦しみを共有してしまう者を戦士とは言わないのだと、そう結ばれた。

そうだよ、ティファは女の子なんだよ！どうして・・自分達はいつからその事を忘れてしまったのだろう。
近頃はみんなが思っていた―ティファがいれば―
パプニカ王の病気の事で、今回のバランとの戦いにおいて、十二歳の女の子がいれば心強いだなんて・・「馬鹿だ俺は・・」
ちっとも強くなっていない、最後にはダイかティファ頼みだなんて弱いからか。
強く、力も心も全て強くなりたい！いや!!なるんだ!!!

真夜中の招かざる客たち?･因縁の二人

不甲斐ない自分とはおさらばだ！
その為に夜の見回りをかって出た。
何となれば今の一行の中で体力・魔力満タンなのは自分だけ、レオナとメルルには無茶しないでほしいと心配されたがやり通す。
そう思って見回っているのだが、先程から森の中の虫たちの鳴き声が小さくなっているのは気のせいだろうか?
それに、―誰か―が少しずつ近づいている気配もする。
ゆっくりと、しかし確実に小屋に近づいている。
そっと腰に差しているロッドに手を伸ばし警戒をすれば、「ポップ！良かった!!やっと見つけたわ」
茂みの中から出てきたのは何と修業に出たはずのマァムだった!!
「お前マァム！どうしてここに!!」
固い決意をして修行に旅だったはずなのに、何故の場にいるんだ！
「どうしてもみんなの事が気になって・・」何だ・・いやにしおらし過ぎねえか?
俺に言われたくらいでしょげるなんてマァムらしくない。
「お前どうして俺達がここに居るのが分かったんだ?･」
マァムらしくないのもそうだが、この場にいる事自体がおかしい。
ロモスとテランでは距離がある、おいそれと自分達の居所が分かるはずがない！
「ポップどうしたの?怖い顔をして。」
言葉遣いも声も甘ったるい！・・・試すか。
「武闘家になる修業はどうしたんだ?」伝手があるからそれを目指すと言っていた。
「・・私なんかじゃダイとティファの強さには敵わないわ。それならね、頑張って僧侶を極めようと考え直したの。」
「ふ～ん、そうだな。戦いはダイと―ティファ―をメインにすればいいからな。」
今の一行が聞けば間違いなく目をむいて怒りの説教がとんでくる

こと請負な言葉をわざと言ってみれば、
「そうよ、サポートは私に任せて。」・・・・ビンゴかよ！「メッラゾーマ――!!!」―ゴォーウ！―
「きゃあっ!!ポップなんで仲間の私を!!!」
「黙れ偽物野郎が!!!」寸前でよけられて三文芝居しやがるか!!
「本物のマァムは死んでもさっきみてえな事を言うはずねえんだよ!!」
―ティファを料理するだけの料理人だけでいさせたい―
まだティファの実力を知らなかったマァムが言った事。
戦い傷つくティファを見たくないと言っていた優しい言葉を！こいつは穢しやがった!!
「きぃ～ひっひっひ、見破られてしもうたのならば仕方が無いの～。」―ボフン―
「・・誰だ手前は。」
マァムに化けていたのは小汚えじじいか、どことなく腐っていそうだ。
「儂は魔王軍六団長に一人、妖魔軍団のザボエラじゃ。」
ザボエラ！こいつが!!
おっさんとヒュンケルがこいつは策略で来るやつだから一番に警戒をしろと言っていた奴だ!!
確か出掛ける前のティファも、ザボエラというものが万が一現れたら問答無用で攻撃した方がいいと忠告を残していったって・・こいつは！本当に・・・あれ？―ドサリ―
倒さなきゃ、そう思ったのに地面が迫ってきて気が付けば体が動かない。
「きっひっひ、ようやく周囲に撒いておいた毒の粉薬が効きおったか。
小屋の奴等はとっくに効いたというのに、何故お前だけには効き目が遅かったのかの小僧？」
ザボエラも腐っても魔道の研究者であり、自信作の痺れ・眠り粉が瞬時に効かなかった理由を知りたがった。
「ひょっとして、レベル上げにて何か―特別な力―を手に入れおった

のか？」
だとしたら実験動物としてぜひ飼って研究をしてみる価値はある。
ザボエラの問いに、ポップは特別な力に心当たりがあった。
すなわち―竜の血―が体内に入った事だ。
古来より竜の血を浴びたものは不老不死になれるという。それが眉唾物だとしても、伝説の竜の騎士達の血が体内に入った事で、自分の体に何かしら変化があったのかもしれない。
この場に居なくとも、ダイとティファが・・物凄く複雑だがバランによって守られているなんて。
そんな素晴らしい話を、誰がこんな下種野郎にする者か!!!

ザボエラがいかに脅し、殴るけるをしても、ポップは頑として口を割らずに堪えつづけた。
その頑固さにさしものザボエラが切れ、「もういい！死ね!!」
毒を仕込んだ右手の爪を振りかざし、ポップに止めを刺そうとしたその時！

―ヒュゥウッ!!―

鋭い風切り音と、続くように喚き声と何かが地面に落ちる音が朦朧としたポップの耳に届いた。
「腕一本切り落とされたくらいで喚くんじゃねえよ。」あっあっ！この声は!!
しわがれた深い声は！自分は絶対に間違うはずがない!!「師匠!!」
ザボエラが出てきた茂みから、大魔導士・マトリフがゆっくりと出てきた。
「ようポップ、大分情けねえ恰好をしてんじゃねえか。」
敵の腕を切り落としたというのに、いつもと変わらず飄々としているマトリフに涙が出そうなほど安堵したくなる。
「・・すまねえ師匠、こいつが味方に化けているのは見破ったんだが、最初から罠に引っかかっちまってた。」ざまあねえやとバツが悪くな

る。
「それが分かっているなら俺は言う事はねえよ。ポップ、魔法使いは・・」
「いつだって冷静にだろう、師匠。」
「分かってんじゃねえかよ、キアリー。」
ポップに優しい眼差しを向けて治療を施し、終えた後はザボエラに氷のような視線を向ける。
倒れ伏しているポップからは見えないが、往年の大魔導士・マトリフの顔をして。
敵に容赦なく、味方であっても邪魔になる者には一切の情けを掛けない怖ろしい大魔導士。
ポップは自分の唯一の、それも大切に育てている愛弟子だ。
そのポップに、毒牙を掛けたこいつはどう料理してやろうか？
一思いに殺してなぞやりたくない、己の罪をきっちし償わせてやりたい!!

「右手一本を斬り飛ばしたのだ、その辺でよいのではないか？」
物騒な算段をしていたとはいえ、周囲の警戒を怠っていなかったマトリフは近づく者がいた事に気づけずに驚愕をした！
老いたりとはいえ、生中な冒険者よりも気配を読む術にたけていると自負をしていただけに!!
しかもその相手が、「なにしに来やがったハドラー。」
自分のかつての最大の敵で、勇者アバンを殺した魔王ハドラーが来やがった!!
「遅くなったがザボエラの策略を止めに来た。」・・・・何かあり得ねえこと言いやがった！

真夜中の招かざる客たち？一流魔王

悠然とした足取りでハドラーはポップ達に近づいた。
無論警戒はしているのだろう、歩いているだけなのに圧力が重くのしかかる。
しかしそれに不快さを感じないのは何故だろう？
倒れているポップは不思議に感じる。だってその気配の仕方が、アバンに似ているからだ。
片や勇者で片や魔王、宿敵同士の者達が同じ気配だなんて。
「そんで、お前さんはこいつの策略止めにわざわざ本陣からおこしなすったってか？」
ポップの戸惑いをよそに、マトリフが尋ねる。
「久しいな妖怪じじい、人間の癖にまだ生きているのか。
先程も言った通りだ、流石に貴様も呆けたか。」
「けっ！抜かせ、そんじゃあそいつはお前の指図じゃなくかってに来たのか。」
昔の自分が知っているハドラーならば、勝手をした部下は見殺しにするか自ら殺すかをしていたのに、今は腕一本で済ませようとしてやがる。
―三流魔王―昔は本人にも面と向かって言ったのだ。
実力があるだけで中身が全くともなっていないと、だが今はどうだ？
「何故そのようなまどろっこしい事をせねばならん、戦場で会えばいやでも戦う。
その時に討てばいい話ではないか。」―魔王―らしい答えをさらりと言ってきた！
「ポップ！小屋の中のティファに伝えておけ、下手な策略を止められずに迷惑をかけたとな。」・・・・・・はぁ⁉
こいつが・虫けらと評していた人間に、それも勇者の身内に謝罪って何だそれは!!
策略は確かに褒められたものではないが、今は大戦中だぞ!!こいつ

は一体何を考えているのだ！
こんな事であ奴の中での俺の評価が下げられては困る。
マトリフの内心で驚愕の嵐が吹き荒れているように、ハドラーも内心で大焦りだ。
―やっぱり駄目駄目なままでしたか！こんの三流魔王が!!!―とか言われたら困る!!
それは絶対に嫌だ！自分はさっさとティファと戦いたい！それも手加減することなくバキバキに!!
その為には評価を勝手に下げられて戦う相手とみなされなくなるのは大変に困るのだ！そうだ!!
「ザボエラよ、自力で帰れるな。」
「・・しかし・・」―ギロリ―
「ひぃ！分かりました!!!」―ルーラ―
ザボエラは帰ったな。
「ポップ、伝言はいい。直接自分であ奴に言う、小屋に入らせてもらうぞ。」
レベルアップをした自分を見てティファがどう評するのか気になる。
ティファに会うのは地底魔城以来だ。少し楽しくなってきたし、妖怪じじいは放って置こう。
「・・・・・・はぁ！待てよハドラー!!!!!!」

あり得ない事だらけのオンパレードの上に、こいつは更に何言ってやがる？
「小屋に入るってどういうつもりだ!!何考えてやがる!!」
「別に危害を加える気は全くない、ティファだけ起こして詫びるだけだ。別によかろう。」
「伝言はきっちし伝えてやるからお前も帰れ!!」
打倒魔王軍を掲げている勇者一行の者としては大問題な発言なのは承知だが、今ティファが小屋にいない事を言う訳にはいかない。
この様子だと探し出して合いそうな気が・・いや絶対に草の根分け

ても会おうとしそうだ!!
「・・嫌に邪魔をするがさっきも言ったように俺は今日は攻めに来たわけではないぞ。」
「んな事言ってんじゃねえ!!何でお前はいつもそこまでティファにこだわんだよ!
デルムリン島でこき下ろされたことをまだ根に持ってんのかよ!!ちょっと口が悪かっただけだろうがよ!」
「・・うるさい奴だな・・」
ハドラーは頭をがりがりと掻きながらポップに呆れている。
あいつの事を全く分かっていない、ティファを少し口が悪いだけで済ますとは。
それにデルムリン島でのことなぞとっくに気にしていないのに。
「いいからさっさと許可をしろ!すぐに済む!!」
「そもそもなんで俺に許可求めてんだよ!」
「無許可で入ればあ奴がうるさいだろう。」—人様の家に勝手に入るな!!—とか・・魔王のダンジョンは土足で踏み荒らされても誰も責めないのに・・まあ地上を蹂躙しているのだからお互い様なのだろうか。
「またティファネタか・・誰が許可するか!!」
「何だとポップ!図に乗るな!!」
埒もない事を考えつつも、ポップとぎゃんぎゃん口論する羽目になったその時

「ちょっと待てよハドラー。」

ポップとハドラーが声の主を見ると、真剣な瞳をしたマトリフが
「今お前をこの場で倒すぞ。」
宣言をした。
倒す?今この妖怪じじいは確かにそういったが、「マトリフ、何度も言わせるな。俺は本当に戦いに来たわけではない、未だとてあ奴に会ったらすぐに帰るつもりだ。」
「だからだよ。」
「何だと?」

「今のお前さんが昔のお前さんと全く違うから倒すんだよ。」
何なんだよ、どうしたらあの三流魔王がこんな一流魔王になれちまったんだよ!!
昔のハドラーならば先程の策略を自分で考えて実行をするか、勝手をした部下を敵の眼前であっても処刑していた。
なのに腕一本で終わらせて、あまつさえ敵に詫びてほしいと人間の子供に伝言を託そうとまでしたのだ!
人間なぞ碌に見ておらず、アバン一行以外は虫以下とさげすんで侮っていた奴がだ!
かつては傲慢であり力があるだけで慢心が多く、それ故に隙も大きかった。
なのに今は口論している最中でさえ自分に対して気配をきちんと配っているって!隙が全く見当たらずに力量が段違いに跳ね上がっちまっている!!
ただ強い者だけではなく、中身も貫禄も付随しちまって風格も上がり、自分の目から見ても最早一流魔王としか評しようがない!!
はっきりと言えば別人だ、それに先ほどからハドラーはしきりに―ティファ―に逢いたがっている。倒すべき勇者と正々堂々というでなく、その妹相手にって・・まさか!
ティファが嬢ちゃんなら、嬢ちゃんは昔坊やに―勇者の心構え―を説いていた。
ポップがティファがデルムリン島でハドラー相手に何か言ったといっていたが!
まさかこいつ相手に―魔王とは・・―とか言ったんじゃねえだろうな⁉
だとしたら最悪だ!!坊やは正しく一流の勇者になったと風の噂で聞こえて大喜びをして年代物のワインを開けて一人で祝いをしたが、こいつが一流魔王になってもちっとも嬉しくねえぞ!!どう責任とんだよ嬢ちゃん!まだ後ろには大魔王が控えてるんだぞ!!
最早内心で泣けてくる、自分の宝物の一人が魔王軍の戦力を強化しちまうだなんて!!

会ったら絶対に説教の雷落としてやる！

真夜中の招かざる客たち④ハドラーの決意

「俺とも因縁あんだろう、悪いがここでお前を倒させてもらうぞ。」
マトリフは静かに素早く魔力を体内に練り始める。
おそらく決着は互いの大魔法一発ずつ、それ以上は自分が持たない。
世界最高峰と言われても年に勝てないのがなんとも情けないが、自分の倒せそうなうちにハドラーを葬り去る！
「はぁ～、下らん。」
マトリフの宣言を聞いても、ハドラーはつまらなさそうな顔をして呟く。
「老いたな、そんなつまらんことを言うようでは妖怪じじいからただの爺に成り下がったか。」
昔のマトリフはアバン以上に飄々としていて人を馬鹿にしていながらも何度煮え湯を飲まされたことか。
大部隊を率いても、どこか余裕のある顔で事に当たっていたのが今はどうだ？
自ら戦端を開くとは愚かしい。
ハドラーはマトリフをつまらなさそうに、いや見下げはてている。
ティファが今の自分を見てくれれば―また一段と力を付けましたね。そろそろ戦う舞台を考えましょう―
位は言ってくれそうなものだ。
妖怪じじいはただのじじいになって本当に詰まらん。
通るか、散々許可を求めて礼も取ったのだからティファもうるさく言わんだろう。
ハドラーが足を踏み出したその時―イオラ!!―
ハドラーの足元めがけてマトリフが仕掛けた。
「行かせねえよ。」見下げはてられようが何だろうがこいつは危険だ！
それでも今ならば自分でも!!
「そうか、戦う気はなかったが降りかかる火の粉は払わせてもらうぞ。」

自分が挑んで受ける気になってもハドラーは昂ることなく、平常心のまま魔力を溜めてゆく。
持つか今の俺の体は？
「ふぅ～ん!!」―ゴォーウ！―
あれは!!
ハドラーの技を見てポップの顔が青ざめる。
両手に爆裂呪文、あれはバルジ島で自分もくらったベギラゴンだ!!
師匠が危ないと見れば、なんとマトリフもベギラゴンの構えをとっていた！
「「ベギラゴン!!」」
同じ呪文ならばあとは術者の魔力の威力勝負になる！以下にマトリフが凄くともう高齢なのだ!!
それに自分の目から見てもハドラーの実力がバルジ島の時よりも数段上がっているの分かる程だ！
ダイ！ダイ!!頼むから起きてくれ！このままじゃ師匠が死んじまう!!!
ポップが必死に念じたその時「ぐふぅっ!!!」
咳！どっちが!!
「師匠!!!」マトリフが血を吐いている！
「けっ！年はとりたくねえもんだな。呪文の威力に体が追い付かねえとはな。」
軽口をたたいているつもりであっても、それが真実だと分かってしまうほどマトリフの表情には焦りが浮んでしまっている。
「ふん、許可をするか黙って通せばよかったものを無理をするからだ。」
「うるせえ――――!!!」ハドラーの言葉を叩き返すようにマトリフは言葉と共にさらに魔力を上げ始める。
ポップが嬢ちゃんを命懸けて守ろうとしているのに！俺がのこのこと通すかよ!!!
自分の宝を守る為ならば命惜しむか馬鹿野郎が!!!
マトリフの内心の叫びに何かを感じたのか、ハドラーは本気を出す

ことにした。
「よかろう、覚悟の上ならば塵になるがいい!!」
次第にベギラゴンはマトリフの方に流れていき、遂に大爆発を起こした！
「師匠!!!」―ヒィ――ン!!―
ポップの叫びと同時に、何かが光甲高い音がする。
煙が晴れればそこには右手の紋章を全開にしてマトリフを背に庇っているダイの姿があった!!
「頭の中でポップが俺を呼ぶ声がした!!」
ポップの祈りが通じ、ザボエラの薬を吹き飛ばしたのだ。
「消えろハドラー!!俺の仲間はもう誰一人として傷つかせるものか!!!!」
ダイはもてる力と掌に受けたベギラゴンをハドラーにぶつけて退かせた。
「へへ・・間に合った・・」
無理やり覚醒した後のこれは少々きついが、ポップを助けられて良かったと安堵したダイは尻モチをつきながらホッとする。
「ポップ、マトリフさん、小屋に帰ろう。」
二度と仲間を失いたくない。
「ダイの奴も、一段と力を付けたか。」
キメラの翼でかろうじて戻ってきたが、腕二本を持って行かれた。
「このままではあ奴等には勝てんか・・」
今の自分のままでは・・「ザボエラ!!!」
ならば強くなるためにザボエラが研究をしている―あれ―にならねば!!

まいた種が芽吹きし時

ハドラーが退き小屋の中も落ち着いた深夜に、マトリフは―嬢ちゃん―の話しをした。
相手はダイでもポップでもなくヒュンケルを相手に。
ハドラーが去った後ダイとポップは魔力負荷で体内が傷ついたマトリフを急いで小屋に運び込み、眠っている仲間全員を起して事態を説明した。
「おのれ！ザボエラめ!!」
やはり一番にクロコダインが怒りに燃えた。
あのバルジ島で取り逃がさなければ良かったと臍を噛んで。
「ハドラーも策略で来たのか？」
ひとしきりクロコダインに怒らせた後、ヒュンケルが不思議そうに尋ねる。
バルジ島で会ったハドラーからは考えつかない、そもそも倒したはずだ。
まあ何度来ても倒せばいいかと思うのだが。
「いや、あいつはザボエラ止めに来たって。」
一通りの説明の後にマトリフがここに来た用件を話した。
ポップ達の助けになる物がないかとアバンから預かった古い物をあさったら、アバンの書が出てきた。
地の章は技の・海の章は魔法と闘気技の・空の章は心の書と、アバンの教えが詰まったものだと。
渡されたダイは早速それの書を読み始めた。
そこには今の自分達の悩みや辛さを見越したように、助言が書き記されていた。
アバン先生とはどこまでも凄い人だ、この場にはもういないのに自分達を教え導いてくれる。
久方ぶりの師の温かく優しく力強い教えに触れて、ダイ・ポップ・ヒュンケルは涙がこぼれそうになり、レオナは何かを決意し、会った事のないメルルとクロコダインをも虜にした素晴らしき書だ。

「師匠、届けてくれてありがとう。」
ポップが代表してお礼をして、さあみんなで休もうとしたところにヒュンケルが待ったをかけた。
別室でダイ・ポップ・マトリフに聞きたい事があると。
「ハドラーはザボエラを止めに来た後何をしようとした。」
三人を別室に連れ込んだヒュンケルは直球で聞いた。
今のハドラーが弱った敵と戦う真似をするとは思えない、ならば何故戦闘になったのか疑問が残る。
「いや・・その・・・・」
「当ててやろうか、ハドラーがティファに会おうとしたかその類の事を言ってお前が止めようとしてか？」
「なんで・・・」
「バルジ島で散々ティファの事を聞いていたあいつが、今日に限って気にしない訳がない。
それに隠していたわけではないが、あいつはティファと地底魔城で会って・・」
「何だって!!それ本当かよヒュンケル！」
「ヒュンケル！その時ティファなにもされなかった⁉」
兄二人は寝耳に水状態で物凄く驚いてヒュンケルの言葉を遮って詰め寄った。
「・・・俺の捕虜だからと見逃していた。とにかく、あの二人は奇妙な縁が出来てしまっている。
注意した方がいい。」
「そんな縁!!俺がぶった切ってやる!!!」
この件に関してはポップよりもダイの方がブチ切れた。妹に近づく悪い物はすべて自分が排除するつもりだ。
ヒュンケルとしては注意喚起だけのつもりが、ダイを宥めすかす事になりぐったりとした。
まさかダイがここまで妹に過保護とは・・—あの件—は今は黙っておいた方が賢明だ。
そう思っていたのだが、あの件の事はダイとポップを寝るように

言って、自分だけ残るようにと言ったマトリフに白状させられた。
「そのティファって奴は、地底魔城でハドラーと少しの口論で済んだのかい。」
ヒュンケルの少しの間の不自然さであっさりと勘づかれてしまった。
それ以上の事があっただろうと。
流石は元先生のお仲間、隠し通せんか。
どうしたものか、ヒュンケルは今本気で悩んでいる。
自分は―人間―の弱さをよく知っている。
今の一行は皆がティファの良さを知っているからいいが、この先ティファの言動に恐れをなす者が出てこないとも限らない。
まさか丸腰の娘が、捕虜の身で堂々と魔王を倒します宣言をしたといっていいものかどうか、しかしそこはまだ何とかなるだろう。
勇敢を超えた無謀だと、それでも勇者一行の者として賞賛をされる道がないでもないが、今日バランに言った事の数々の事はどうすべきか。
あの場には自分達とバランしかいなかったからよかったものの、ティファをよく知らない他者が聞けばどうなるか。
おそらくティファは気のふれた者として幽閉をされかねない！
何故ならば愛した者が人間以外でもいいとはまだ常識の範囲内だが、―魔王―　―大魔王―
であってもいいという考えを持って、それを口に出してしまったのだ。
平時ならばまだおかしな者として放って終われても、今はその者達が最大の敵なのだ。
それなのにその二人を愛の対象のたとえに使っては、下手をしたらティファを人類の敵だという輩も出かねない。
人間は弱く、困難から目を背けるために迫害をする者もいる。
その者達の目に留まりそうなことをティファがしてしまっているのに気が付いているのは自分とおそらくはレオナ姫だけかもしれない。

ダイとポップがティファの事を話して笑っているたびに複雑そうな顔をしていた。
国を守る王族の身としては、ティファをどう扱うべきか戸惑っている印象を受けた。
ただのレオナとしては、思い人の妹で共に戦った仲間として受け入れられても、王女レオナとしては決めかねているようだ。
そのティファの事を、先生が信頼をしていたマトリフ師に相談をすることにした。

こいつは、えれえ事になっちまっている。
ヒュンケルは自分との戦いの始まりから地底魔城での口論と―倒します宣言―までを全て話し、終えた後今回の一件の事を全て話した。
自分が見て聞いて感じた事の全てを。
「ティファに少々自重を促した方が良いのでしょうか。」
自分はティファの温かさをよく知っている。その温もりに自身が救われたからだ、クロコダイン諸共に。
その事も話したが、しかしティファの考えは大半の人間にとっては異質なものなのもよく知っている。

嬢ちゃんの奴！あの後どう育ちやがった!!
実力があるのは出会ったころから分かっていた！あの強さを鍛え続けていれば、更に力量が上がった事も容易に想像が出来る。
だがしかし、あの子はとても臆病な子供だった。
力があるから世界に嫌われるのではないかと、怯えて実力を隠していた子が!!
それを全てひっくり返すようなことをし続け、クロコダインとヒュンケルの心を救い、バランの十二年間の憎しみを取り払ったとは。
自分も嬢ちゃんの事をよく知っている、仲間の為にその身をボロボロにしてしまう優しすぎる子なのを。
だからこそヒュンケルの話を聞いて驚いても、次第に胸にすとんと

収まりがつく。
嬢ちゃんらしいと。だが世間の者は？
―おじさんは私が怖くないの？―
不意に五年前の嬢ちゃんの問いが耳に蘇る。
このままでは、かつて嬢ちゃんの言った通りになってしまう！自重を促すべきか？
それもあるが、分からない事がある。
世界に怯えていたあの子供が何をきっかけにここまで強くなったのか。
その事が引っ掛かり、思考をうまくまとめられない。
百戦錬磨で通り、あらゆる悩み事を相談されてきた自分が何てざまだ。
本当に嬢ちゃんには振り回されまくる。
「マトリフ師、これは俺がティファから貰った言葉の中で特に大切にしている言葉ですが。」
思い悩むマトリフに、ヒュンケルが話の続きをした。ティファのすばらしさを知って欲しくて。
「世界は酷過ぎも弱すぎもしません。」それは！
「案外しぶとくて強いのです。」その言葉は、俺が嬢ちゃんに贈った言葉。
「これは俺とクロコダイン、そしてバランを助けるとティファが決めた時に贈ってくれた言葉です。」
―だから大丈夫、機会はたった一度でも償う道を歩きましょう。私も共に行きます―
その言葉に、敵で大罪を犯した自分達三人の心は確かに救われたのだと。
嬢ちゃん！そうか!!俺のあの時の言葉を信じてくれて胸に刻み込んで今の嬢ちゃんに・・あの星空の下で自分が言った言葉を信じて続けてくれて、力・知識をどんどんと蓄えて、温かい心も共に育てて種族どころか敵でも悲しんでいる者がいれば助けようとする、そんな―滅茶苦茶―な子に育ったのか、世界を信じてくれて。

親って奴は

ティファの話を聞き終えたマトリフは我知らずに涙がこぼれた。
自分はあの言葉をさして信じてはいなかった。
世界の大半が酷き事が多いのを知っているから。
だが、贈られた嬢ちゃんは信じてその道を歩んでくれている。
それでは今のティファの心を育てたのは、紛れもなく自分ではないか！
今聞いたとてつもなく、そしてとても素晴らしいティファを世に送り出した。
自分が嬢ちゃんの心の親だと思うと嬉しくなる。
満天の星空の下、小さなティファを抱き上げてあやしたあの情景が思い浮かぶ。
―何でノヴァに言ったの!!―
バジリスクの一件の真実を包み隠さずにノヴァに話した自分に激怒をしていた。
世界を今一つ信じていなかったあの幼子が、今や世界を愛して助けようとしてくれている。
―おじさん！―あの笑顔が目に浮かぶ。
自分が落とした種が芽吹き、育って大きくなり、そして今に繋がっている。
会いたい、今すぐに会って全ての事を受け入れて抱きしめたい。
いつしか涙は消えて、自然と笑みが浮かぶ。
「マトリフ師、もしやあなたはティファをご存知なのでは？」
どう見ても今のマトリフからはそうとしか思えない。
バラン達同様に、あちこち旅回りのような事をしていたティファと出会っているのではないかと。
「ん・・いや、俺の知っている嬢ちゃんがお前達の言うティファかどうか分からんが、似たような子を知っている。」あの時はネイと名乗っていたからな。
「ネイ、ですか。」

ネイとは、誰でもあって誰でもないという意味だったはずだとヒュンケルは首をかしげる。
「ああ、ティファって奴に似たネイの話をしてやる。」
そしてヒュンケルに語った、自分の知る限りの嬢ちゃんの全てを。
ヒュンケルならばいい気がした。話して七つの頃から並外れた嬢ちゃんの話からティファだと分かっても、他の誰よりもすぐに受け入れそうな気がする。
―そうですか―と言って、己の胸に仕舞い込んでくれると。
この一行の誰か一人にでも、ティファの全てを知って欲しいと願って。
案の定だった。自分の話した嬢ちゃんの凄さや、嬢ちゃんがティファだと気が付いても、ほんの少しだけ目を丸くしたきりで驚きも怖れもせずに、聞き終わった後に小さな声で、
「そうですか。」と一つ言ったきり、何も聞いてこなかった。
「お前さんは怖くはないのかよ。」ヒュンケルを試すことにした。
「何がです？」
ヒュンケルは昔、マトリフがティファに同じ事を聞かれた時のマトリフと同じ反応をした。
ティファの何を怖がるのだと。
「小さい頃からそんなとんでもない強さと、並み以上じゃあ片付かねえ知識力を持ってんだぞ。」そういう意味ではよく坊やが嬢ちゃんとの仲を続けられると感心すると言っていて気が付く。
子供の頃ならばともかく、今のノヴァは大人たちの常識の中にいる。
ならば当時のティファがどれほど世間の常識から乖離されているのか気が付いるはずなのに、来る手紙にはいつかティファと自分と三人で焼き菓子を食べたいと必ず書かれている。
ある意味ノヴァも世間とはかけ離れた者なのかもしれない、それはこのヒュンケルも同様のようだ。
当時からの実力と万能薬の発案そしてティファに贈った言葉、全てを話してもティファを怖れていない。

「それらがそのまま育ち、今の素晴らしいティファになってくれたのでしょう。
マトリフ師、俺はこの一行を代表して礼を言います。
―貴方の嬢ちゃん―に素晴らしい言葉を贈ってくれたことに感謝をする。」
ティファに贈ったマトリフの言葉が、巡り巡って自分達の心を救ってくれた事も含めて。不思議な縁が、この世界を少しづつ善き方向に導いてくれると信じて。
ヒュンケルはティファだと分かっても嬢ちゃんと言った、貴方の嬢ちゃんと。
ティファは一行の仲間、しかし―嬢ちゃん―はマトリフがただ一人大切にしている者だと。
「ヒュンケル、ありがとよ・・」自分の心情を分かってくれて。
「いいえ。」ヒュンケルはマトリフの礼にくすぐったそうに笑う。
自分もティファを大切な女（ひと）なのだから、何となくマトリフの気持ちが分かっただけだと。
しかし自重を促すこととともう一つ！二人は頭を痛める、ハドラーの一件は本気でかなり不味い!!
倒します宣言をした事により、宿敵の勇者よりも目を付けられるだなんて!!!
しかしだ、自分達がこんなにやきもきしても当の本人が今のハドラーを見ていそいそと戦いの準備をし始めるのが目に浮かんでしまう。
一流魔王になりました！倒させていただきますと張り切って。
嬢ちゃんの奴、素晴らしいこのまま育ってくれたがそれ以外の変な部分もきっちりと育ってやがる。
昔からそういった変さははちらほらあったが、ここまでになるとは。
良さは真っ直ぐ育ったが、その角度が世間様の者とは違う斜め四十五度の角度で突っ走って育ってしまったような。

そう思うとため息をつけばいいのか、笑って見守るべきか悩むところだ。
いつだって嬢ちゃんに振り回される。
だがそれでもいい、―愛娘―に振り回されるのは、いつの世の時代の父親はそんなものだろう。

鬼岩城編

勇者一行の楽しき休日

バラン戦の次の日には、ヒュンケルも入れた全員がマトリフの洞穴に強制連・・もといご招待をされた。

朝一で叩き起こされてナバラとメルルも巻き添えを食って。

「お前らの面倒くらい見るのは簡単だ。フォルケン王にも許可貰ってんぞ、ついでにお姫さんの事も伝えておいた。」

お年寄りの朝は大体早い、日の出前に起きてあれやこれやの事をあらかた済ましてから全員を拉致っても元気な百歳じいさんなマトリフであった。

最初は徹底的な回復を図った。

回復呪文の使い過ぎでは体の自己修復機能を衰退させてしまう、そこで万能薬の出番だ。

表面は治っているのでそれぞれにあった飲み薬を微調整しながら作って三食毎回飲ませる。

さて飯はどうするかと考えていれば、三賢者のエイミが調理器具と食材を旅人の袋に入れて張り切った顔をしてやってきた。

「皆さんのお食事はお任せください！」瞳を煌めかせて張り切っている御様子。

エイミならば料理や家事全般が出来、バルジ島の一件で一行とマトリフとも顔見知りであり、城に帰ったレオナが早速手配をしてくれた。

「本当はご自身で来てダイ君に食べてもらいたかったようですが。」

―お姫様って・・―ぽつりとこぼしたことをダイに告げれば、ダイは嬉しそうに顔が緩む。将来は毎日手作り食べたいな～とルンルン気分。

ちょっとむかっ腹が立ったのは内緒なポップであり、周りは温かい目で二人の関係を見守る事とあいなった。

さてこれから昼食をと言うところに、ダイの肩に鳩がとまった。
「あ！ティファの鳩、足にリングついてる。」
「何が届いたんだダイ。」
「ちょっと待ってよポップ。」
急かすポップを止めつつ、ダイは鳩の足についているリングと手紙をとり、先に手紙を読む。
ダイ兄達へ、鳩は無事に届きましたか？
兄に渡した鳩さんが辿り着く魔具を渡したのは昔の事なので心配です。
さてこちらは薬づくりに勤しんでいますが、料理をしていないと料理人とは言えません。
せめて昼食は鳩さんで届けさせていただきます。
朝と晩くらいは自分達で作るように。
リングの中には寝袋も入っています
ティファより
手紙を読んだ二人はすぐにテーブルの上を片付けてリングの中身を出した。
寝袋は三つに、大人がゆうに三人は被れる毛布が入っていた。
三つはダイ・ポップ・ヒュンケルで、毛布はクロコダインのようだ。
そしてお目当てのランチボックスがひい～ふう～みい～よっつもある。
それぞれに野菜だけのサンドイッチ、肉だけのサンドイッチ、卵とレタスのサンドイッチと、もう一つはクッキーとアメ一袋が入っていた！
ランチボックスの中にも手紙が入っていた。
取り急ぎ作ったものなので、凝ったものは出来ません。
リクエストや入用なものがあれば鳩さんに手紙を付けて送ってください。
出来れば近況と、どなたか食事を一緒に食べる方の人数が分かれば助かります。
もしも大人の方がいればすぐに言ってください、お酒も入れさせて

いただきます。
紅茶の時と同じく、温かい手紙が疲れ果てたダイ達の胸を温めてくれる。
「ティファのサンドイッチ！いただきます!!」
「うんめえ～パンも手作りなのかな？」
「うむ、この肉入りがなんとも言えんな。」
「・・・アメか・・」
「ほ～ん、うめえじゃねえか。」
男四人は単純に喜んだが、張り切ってきたエイミは複雑だ。
「エイミさんもどうぞ、美味しいんだよ。」
「沢山あるからみんなで食おうぜ。」
その複雑な思いもダイ達の天真爛漫さには勝てずに、夕食の手伝いをすることにしてお相伴に預かるのが日課になった。
その日の昼食を食べて、ナバラとメルルはテランの帰途についた。
「アメがもっとあれば・・」
「酒は頼めるか？」
「えっと、おっさんが酒で、ヒュンケル・アメ沢山ある気がすんだがな。」
それぞれの注文をとっているポップが胡乱な目つきでヒュンケルを見る。
形は手作りでごつごつとした小石のようだが、十粒以上はありそうだ。
それでももっと欲しいって食べ過ぎじゃね？
「・・・駄目か？」
あ――、物凄く強くて頼りになる兄貴弟子が、たかがアメ如きで捨てられた子犬のような目をしないでくれ!!色々と切なくなるから！
色々と負けたポップは返信にアメを書き込めば、次の日同じ量と注意書きが届いた。
曰く、一日で食べきらないように。
この量を一日ってとヒュンケル以外は注意書きに呆れたが、「駄目

なのか。」
悲し気に言ったヒュンケルに戦慄が走った。
言われなければ食べたのかこの男は!!
元魔王軍にして氷の如くと言われた魔剣戦士は、完全にお亡くなりあそばしたのだった。
今はティファと一行をこよなく愛し、同じくらいにアバン先生との思い出が詰まったアメを愛して、頼れるちょっとずれて面白いアバンの長兄に生まれ変わっている。

そんな一行とマトリフは賑やかではないが穏やかな日が流れた。
その穏やかな日にも騒ぎが起こった。
三日目にマトリフが苦し気にして咳き込み、血が少し混じっていたのだ。
鳩を返す少し前なのでポップは急いで手紙を書いた。
―俺の魔法の師匠が血を吐いた！超高齢で三日前にも魔力負荷で血を吐いている。
何か薬ねえか!!―
祈るような思いで鳩を出せば、日が傾く前に戻ってきた。
足には手紙と緑のリングが付けられて。
症状の進行がどのくらいかまでは分かりませんが、魔力負荷であるならば内臓がかなり弱り、高齢であるならばそのまま養生されることなく高度な魔法を使い続ければ、早晩その方は死んでしまいます。
少なくとも三日は薬を毎食飲ませて安静にして、十日間は禁酒をさせてください。

「師匠!!今すぐこの薬飲んでくれ～!!」
手紙を読んだポップは青褪めて、ベッドに横たわっているマトリフの下にすっ飛んで行った。
「何だ～寝ている人間をいきなり叩き起こしやがって！」
悪態をつくが、どこか声に張りがないマトリフの声にポップは泣きそうになる。

「これ、料理をいつも届けてくれるティファからだ。」
「こいつは薬か、何でティファって奴は俺の体調の事を知ってんだよ。」タイミング良すぎだろうと、渡された薬瓶を眺めながら訝しむ。
水晶かなにかで覗き見てんのか？
「俺が頼んだんだよ、ハドラーの時も師匠血を吐いただろ。
あいつの薬だからきっと効く、頼むから飲んでくれ。
それにもうこの前みたいな無茶しねえでくれよ・・・俺が強くなって師匠の分も頑張るから！」だから死なないでほしい、アバン先生のように。
「そうかよ、んじゃありがたく貰うぜ。」
涙ぐむポップを見て、色々と察したマトリフはすぐに薬を飲む。
嬢ちゃん印の薬なら間違いはなく、飲むことでポップが考えている不安を消し飛ばせるなら安いもんだが「まっず!!!!」本気で不味い！あの嬢ちゃん！この中に何入れやがった!!
良薬は口にとはこのことで、もう無茶しないでおこうと誓うマトリフであった。
その様子をヒュンケルは椅子に座りながら見るともなく見ていた。
師匠を楽させてやる、ポップの言葉が胸に響く。
自分はとうとう先生に苦労ばかり掛けて終わってしまった。
せめてアバンの長兄として、この一行を楽させてやりたい。その為にも体をしっかりと治さなければならない。
動けない間はアバンの書を読み過ごした。
地の章をダイと交代で読み、ポップは海の章と、マトリフに許可を貰って呪文書を読み漁る。
―スクルト―　―バイキルト―に興味を持ち、全快をしたら契約呪文を試すつもりだ。
誰も死なせないためにも、使える手数はどんどん増やしていく。
その為に判断力・観察力を上げるためにマトリフと連日問答をしている。
戦いの状況をマトリフが出し、素早くポップが対処方法を答える。
少しの判断材料から一瞬の思考で最良の答えを見つけるのは並大

抵ではなく、問答の時はマトリフは決してポップを甘やかさなかった。
少しでも間違っていれば喝を飛ばして、傍から聞いても泣きたくなる気迫だが、ポップはめげることなく喰らいつく。
マトリフもこの一行の無事の為に心を鬼にしてくれているのを感じるから。
一行がどうしても勝てない時はと聞かれた時、ポップは迷いなく答えた
とっとと逃げて再起を図る。
死んでしまっては元も子もないのだと自信満々に。
その答えを是とも非とも言わずに、マトリフは無言でベッドから降りてポップに近づいた。
基本問答はマトリフの部屋で、マトリフがベッドの上で身を起し、その近くにポップが座っているのだが、間違っても言葉がとんでくるだけなのになんだろうと思っていれば、
マトリフに頭をくしゃくしゃと撫でまわされた。
上を見ればにかりと良い笑顔の師匠の顔があった。
「へへ・・」
ポップは嬉しくなる。無言であっても、師匠が褒めてくれたと。
「皆さんご飯です!」
問答でお腹がすいているところにご飯の号令がかかり、ポップもすぐに向かった。
テーブルの上には今日もティファの手作りと弁当と、エイミさんが作ってくれたスープとサラダがある。
「パンお代わりある?」
「スープお代わり!」
「それは酒を・・」
「駄目だって!」
賑やかな食卓に怒声が一つ。
「少なくとも十日は禁酒させてくれってティファの手紙にあっただろう。」

問答の時と違って、酒は駄目だとポップがマトリフに怒ったのだ。
「・・分かったよ！」たく嬢ちゃんめ！手紙いいから本人が来やがれってんだよ!!」
「ふふふ。」
「何だよダイ、何笑ってやがる。」
「いやだってさ、ティファって凄いね。マトリフさんに言うこと聞かせちゃうんだもん。」
「・・・・薬の礼だ。」
マトリフのどこか照れた顔がさらにおかしく、食卓は今日も笑いで溢れかえるのだった。

再始動

バランとの激突から早十日が経った。
全員の傷も最早癒え、ダイもクロコダインと共に模擬戦をしたら・・・えらいことになった。
ライデインを自在に操り、トベルーラも習得をして完全に浮かれたダイは遺憾なく右手の拳の紋章を発揮して、空から落ちる惨事である。
「・・・・普通は大惨事じゃね？」
まっとう神経のポップは弟弟子の頑丈さにほとほと呆れた。
自分だったらペッちゃんこだろ。
「酷いよポップ！もっと他に言うことないの⁉」
「あ～お大事に？」
「なんでそこで疑問形なのさ!!」
そんもの、唾つけとけば治りそうだからだ。
そばで見ていたマトリフだとて、お義理で包帯を巻いたが薬はつけていない。
相手を務めていたクロコダインも、見物していたヒュンケルも心配している気配とてない。
ようはそういうことだ。
「・・みんな冷たい・・」
傷はいたくないのに心が痛くてダイはべそをかく。
ここにティファがいたら慰めてくれるのに、妹に会いたいよ～。
ポップは自分の頭をガシガシとかいてため息をつく。
ここ二日間、ダイは事あるごとにティファに会いたがる。
ハドラーが会いたがっていることを心配しているだけではなく、やれ一緒に寝たいだの、ギュッとしたいだの、こいつは重度のシスコンか？
確かにティファは愛らしくて可愛いが、こいつ妹離れできるのだろうか。
そんなダイは一時横に置いておいて、今回の要因対策の話し合いを

マトリフ・クロコダイン・ヒュンケルを交えて話し合った。
原因は直ぐに分かる。
ダイの力が強くなった分、加減が難しくなった事だ。
こればかりはダイに戦いまくってもらって感覚を自力でつかんでもらうしかない。
もう一つの問題の方に四人は頭を痛める。
使える武器がない、ヒュンケルの魔剣もダイの一撃必殺の技に耐え切れずにボロボロと崩れ去る有様。
あれは大魔王が太鼓判を押していた魔装だったのに。
頭を痛めているところに希望の光が差し込んだ。
「今覇者の剣がロモスの武闘大会の景品で出されておるぞ。」
この一行に欠かせなくなってきたパプニカの困った発明家の名をほしいままにしているバダックの知らせに、ポップは目をむき落ち込んでいるダイの首をひっつかんで挨拶もそこそこにルーラで旅立った。
「あいつは、落ち着きのねぇ。」
「まぁ元気なのはいいことだ。」
「そうだな、ダイも随分と元気になった。」
「そうですの～、ダイ君の笑顔が戻ってきましたの～。」
弟子の粗忽さに呆れるマトリフを、クロコダインたちは思い思いに擁護する。
ダイは父親と戦った事に心を痛め、ポップはそんな弟弟子を心配しこの場にいないティファの事も心配をしどおしていた。
二人は隠していたつもりでも、大人たちには手に取るようにわかっていた。
殊更明るく振舞うダイを、躍起になって新呪文を身に着けようとしていたポップをずっと案じていたが、あの様子ならば大丈夫だろう。
ダイは吹っ切れたような本当の笑い顔を見せ始め、ポップは今朝から心が浮き立っていた。
その浮き立っていた理由は昨日の夕刻メルルが来たことによる。
バラン戦の後、体調を崩したフォルケン王の看病をしていたメルル

がポップを訪ねてきた。
体調を持ち直したフォルケン王からの言付けともたらされた大量の回復薬の他に、
「ポップさん・・その・・良ければ使ってください・・」
ポップの為にメルルが縫った魔法使い用の服だった。
色も落ち着いた黄緑で、新しい靴もついていた。
「・・こいつを・・俺に・・」
「はい・・その・・気に入らなければ・・・」
「使う！大事に使う!!」
生まれて初めてメルルは男性を好ましいと思った、いわば遅い初恋である。
今まではこの力のせいで相手の嫌なところも透けてみえ、恋心を抱く前に幻滅をしてしまい終わっていた。
それを消してくれたのがこの一行であり、初恋の相手がポップとなった。
ダイの一行は全員が良い人達だ。
王女のレオナも、自分とナバラを取り込んで政治利用しようと気もなく、クロコダインとヒュンケルも、過去を打ち明けられても恐ろしいと思えなかった。
むしろこのような立派な人たちが、魔王軍にいたことこそが間違いなのだと思えるほど澄んだ心が分かる。
それにポップは、少々お調子者で臆病な心があるのも感じたが、その臆病さを上回る勇気を見せてくれる。
それが元で自己犠牲をしてしまい、心が張り裂けるかと思った。
自分をもっと大事にしてほしい、そう願って寝る間を惜しんで作った服を宝物のように喜んでくれるポップを愛おしく思う。
ポップもまたメルルを好ましく思っている、両思いになるのは時間の問題だと大人組は微笑ましく見ていた。
その服にそでを通して、にかにかしていてもマトリフはからかわなかった。
戦いは一時の事、その先の幸福を目指してほしいと常々思っていた

からだ。
可愛い愛弟子の恋の成就を祈るほどに。
「さて、俺もそろそろ行くとするか。」
ポップ達の心配はもういらないだろうと、早くに回復を終えていたヒュンケルはさっさと旅支度を始める。
本当ならば、傷が癒えた時点で槍の魔装を使いこなせるようになるべく旅立つべきだったのだが、弟弟子たちが心配で長逗留をしてしまったが後悔はない。
二人の笑顔が見れたのだから。
「俺も甘くなったか・・」
「今のお前の方が俺としては好ましいがな。」
かつては氷の如くといわれていた魔剣戦士よりもずっといい。
「世辞を言っても何も出んぞクロコダイン。」
かつての同僚に面と言われると照れ臭くなる。
「行ってくる、肩に乗れべほ。」
その言葉から逃げるように相棒となったべホイミスライムのべほを肩に乗せてそそくさと行ってしまった。
アバンの書は置いていき、マントと槍の魔装だけを持って。
「俺にはまだ重いものだ。」
自身の過ちで師を殺そうとし、兄妹弟子達を手にかけようとした自分が許せないでいるヒュンケルにとって、師の言葉と思いが詰まったアバンの書は様々な意味で重いのだと。
「行って、しまわれましたね。」
その背を見送ることしかできなかったエイミはそっと呟く。
かつて自国を攻めてきた隊長、エイミはヒュンケルに魅かれる思いを止められずにいる。
自らの罪から逃げず償いという茨の道を自ら突き進み、それでも優しい心を失っていないヒュンケルに。
「うむ、あの御仁ならばもう大丈夫じゃろう。」
バダックもまたヒュンケルに悪い感情を持っていない。

攻められて、幾人かの戦友を殺された恨みは確かにあるが、それでもバジル島での命がけの働きを知っており、テランでの出来事もレオナ姫より聞いている。
そして自らの罪をレオナ姫に告白をした時も立ち会っている。
クロコダインと共に、極刑になるのも厭わずに。
あの正義感の塊のアポロとても、ヒュンケルを嫌うことが出来なかったほどの澄んだ心の持ち主。
それだけに償いのためにがむしゃらに無茶な戦いをしないかと案じていたが、マトリフの洞穴での過ごし方を見て丈夫だろうと確信を得てほっとする。

―いつかあなたたちに笑いかけてくれる人たちがきっと現れます―

ヒュンケルの事を話しているエイミとバダックを見て、クロコダインはティファの言葉を思い出す。
自分達は許されるべきではないといった言葉に対するティファの答えだ。
（いつか、友をか・・）
恋人に・家族になろうという者も現れるだろうて言っていたが、少なくとも友は出来そうだと心が明るくなる。

こいつらも随分といい面になったと、安心をしてベッドで休もうとしたマトリフは足を止めた。
なんとヒュンケルが戻ってきたのだ。
「どうしたヒュンケル、矢張りアバンの書を持っていくのか？」
「いや、忘れ物をした。」
ものすごい真剣な顔をしてヒュンケルは鍋窯が置いてある棚を探し始めた。
アバンの書よりも大切なものとは果たして「あった!!」
棚から机に探索を変えたヒュンケルの手にあったのはアメの入った袋だった。

物凄い表情と気配を発していただけに、探し物がアメってどうなんだろう。
それも亡き師の伝授の書よりもだ。
「・・・・ヒュンケルよ・・」
万感の思いを込めて、クロコダインは呆れてがっくりとした全員を代表してヒュンケルの名を呼んだ。
「これはただのアメではないんだぞクロコダイン。ティファ特製、キズ薬にもなるアメなんだぞ！」
六日目にアメが最後の一つになってあわやダイ達と争奪戦になりかけた時に、ティファから送られてきた自分専用のアメだ。
中にホイミ草が練りこまれており―修行で無茶をしないでください―
ティファのメッセージも入っている大事なアメを全く分かっていないとヒュンケルは憤慨をしつつも、アメを一つ口に入れればたちどころに上機嫌である。
「では行ってくる。」
・・・色々と様になっているのが、口にアメが入っていては全て台無しであるのを分かっているのだろうか。
「・・行ってこい・・」二度と忘れ物をしてくれるな。
さっきのしみじみとした思いを返してほしい。
「あの御仁は、優しいだけではなく面白い方じゃの。」
「・・そうですね。」
バダックとエイミも呆気にとられたようだ。
昔、いやつい最近までは本当に氷の如くと言われていた同僚の様変わりに、いいのか悪いのかとため息しか出ない。
「・・・・ティファの影響か・・」あのとんでもない娘の荒療治と言えそうな説得が、ヒュンケルを様々な意味で変えてしまったのだろうか。
「クロコダイン殿、ティファというんは確か・・」
「ああ、この一行の料理人の・・」
「ふむ、面白い職業を作ったお人か。儂も会ってみたいの。」

「・・素晴らしい人物ではあるのだが少々並外れているところがある。
それでもいい子なのです。」
「ふふ、会うのがますます楽しみじゃな。」
今のクロコダイン達の会話と、ヒュンケルの態度にエイミの心は痛くなる。
滅多に感情を表に出さないヒュンケルが、時折出すのは決まって―ティファ―が絡んでいる。
勇者一行の料理人を称しているティファとはいったいどんな―大人の女性―だろうと、エイミは完全に勘違いをしてしまっている。
様々に忙しいレオナが、ティファの事をきちんと周りに伝えなかったことが原因である。
それにより、エイミは本人に会うまで誤解による胸の痛みを覚えるのだった。

変わり者の仲間が入りました

ロモスでの出来事は散々な目にあった。
武闘大会は魔王軍・ザボエラの息子ザムザの罠であり、そもそも賞品である覇者の剣は真っ赤な偽物。
「本物はハドラー様の手にある。」
超魔生物とやらになって自分たちに挑みかかり、敗れて死に掛けてもデータをザボエラに送ったザムザが満足そうに言った。
ザムザはハドラーを敬愛している数少ない魔王軍の中での忠臣であり、あのザボエラを慕っている出来た息子だった。
その思いはポップにも伝わった。
ハドラーはまだ分からないでもない、なにせ魔族の長だからだ。
しかしザボエラは違うだろう!!
「それでも・・私の父だ・・」
ポップの言葉にザムザはそっと呟く。
愛しみを込めて。
こいつを助けてえ!
「ポップ・・」
それはダイも同じであり、二人は―とあること―を実行した。
武闘大会は罠だったが、悪いことばかりではなかった。
なんとマァムと再会できたのだ、同門という大ネズミのモンスター・チウというのもいたが。
たった半月でマァムは劇的に変わっていた。
物凄く女性的な変化を遂げていたのだ。
綺麗な桃色の髪を美しく結い上げ、動きやすさ重視の武闘家の服が彼女の美しさをより強調している。
「きれいだよマァム!」
「凄く綺麗になったな。」
ダイ達は再会の挨拶もそこそこに手放しでマァムに褒め言葉の雨を降らせて、彼女を大いに照れさせた。
それを同門のチウは面白くない。

せっかく仲良くなった美しい人が、自分の知らない者達と仲良くしているのはむっとする。
わざと間に入ったが、ダイとポップに微笑ましげにされて終わってしまいそれもまた子ども扱いをされているようで腹が立った。
歯牙にもかけられていないようで悔しいことこの上ない。
ダイ達にはそんなつもりがなくともだ。
バラン戦というあらゆる意味での激闘・死闘を潜り抜け、ハドラー騒ぎだのを経験して心のありようも成長した二人にとって、チウの焼きもちは可愛いものであり心がほっこりとする余裕が生まれただけであり他意はない。
マァムもなんとなく二人の様々な成長を感じ取りうれしくなる。
二人とも強くなった、一行全員が強くならないと—守る—ことは出来ない。
世界を—彼女—を守るためにも。
その為にこの半月の間、自分でも尋常ではないと自覚するほどの猛特訓をしてとうとう師から—最終奥義—を伝授された。
「マァムちゃんなら使いこなせるよ。」
まだ早いのではという自分に、師はからりと笑って授けてくれた。
武闘大会は直ぐに罠で大混乱。
幸い出られなかったダイ・ポップ・チウが観覧していたロモス王と観客たちを事無く逃がして戦いが始まった。
マァム達を閉じ込めた檻はダイの闘気もポップの魔法も効かなかったが、中にいる—ゴースト君—の
「この檻生きている。」をきっかけにチウが外から自分の手足を丸めて突っ込んだ・窮鼠包包拳なる体当たりをして檻に胃液を吐かせる事に成功をして少しだけ檻をこじ開けさせることが出来た。
予選では短い手足で筋肉ムキムキのゴメスという男に、一発も入れることが出来ずに敗退をして落ち込んでいるところにダイとポップが声をかけてきた・
「君だけの技があるはずだよ、俺と同じくらい頑丈そうな体をしているんだからさ。」

「見栄を張って恰好つけた技だそうとすっからだろう。勿体ねぇぞ、せっかくの頑丈そうな体が。」
ダイは優しく、ポップは発破をかけるように強めであるが、二人は本気でチウに合いそうな技を考え始めてアドバイスをし始めた。
言われたときは突っぱねてはみたものの、二人の真剣な様子にチウも少しずつダイ達の言葉に耳を傾けて頭の中で思い描い始めた。
モンスターの自分に本気で向き合ってくれた変わった二人の言葉を。
そして辿り着いた技がマァムの助けになれたと心の中で感謝をした・・面と向かって言えないが。
それらを見聞きしていたゴースト君ことブロキーナ老師は大会が始まる前に帰ろうかとした。
弟子二人が心配で布を被って付いてきたものの、いらぬ世話だった。
まあ成長を見ていくかと残ったのがダイ達全員にとっては幸運だったと言えよう。
チウのファインプレーとマァムの新必殺技・閃華裂光拳がさく裂し、人質がいなくなったダイは超魔生物になったザムザを撃破したが、当初の目的の武器はどうすればいいのか振出しに戻った。

「世界会議？」
バダックの発した聞きなれない言葉に、レオナに会いに来たダイ達は首をひねる。
マァムと成り行きで仲間になったチウを伴って城に来たダイ達に、レオナ姫は世界会議の準備で忙しい旨をバダックに告げられた。
パプニカも無事とはいえその中でも魔王軍の脅威を肌で感じた国であり、このまま各国がバラバラで戦っていては駄目なのだと思い知らされている。
勇者一行が来てくれなければ、不死騎団に蹂躙されたか、フレイザードに滅ぼされているかしたのだと。
その恐れは各国にも当てはまるはずだ。

今は無事であっても、明日もそうだという保証はどこにもない。
そうならない為にも今ある地上の無事な王国の王達が一堂に会して魔王軍対策を話し合うのだと。
パプニカの誘いにいち早く賛成をしたロモスとテランの王達が到着していることも告げられ、ダイ達はさっそくロモスのシナナ王から訪ねる。
「おう！ダイ君達元気そうじゃのう!!」
相変わらず元気で気さくな王様に三人は嬉しくなり、初めての王族対面でガチガチになっていたチウの心を軽くしてくれる。
ひとしきり話をした後、ポップは意を決してクロコダインの現状を話し始めた。
「簡単に許されるものではないのは分かっています！」それでも、償うクロコダインを知ってほしくて。
いかに心強い味方となり、優しくて立派な武人であるかを懸命に。
ロモス王ならわかってくれる気がして。
「・・パプニカのレオナ姫が・・」
シナナ王としては複雑な気持ちで最後までポップの話を遮ることなく聞いた。
自国を攻めた獣王が世界の希望たる勇者一行の助けをしており、この国の姫が同じように攻めてきたもう一人の魔王軍の軍団長ともども限定的とは言え許しの裁可をしていたとあっては。
「少し時間をくれぬか？なに、悪いようにはせんぞ。」
心中を押し隠し、にっこりと笑うシナナ王の言葉にダイ達はホッとして辞去した。
「ちょっとポップ！いきなり言うからひやひやしたわよ。」
「いやさ・・ロモス王様に本当のこと知ってほしくてよ。」
部屋から出てそうそう、マァムに睨まれたポップは冷や汗をかきながら弁明をし、
「そうだよね、クロコダインもヒュンケルも俺達の大切な仲間なんだよ。」
ダイの言葉に助けられてテラン王のもとへ向かった。

道々クロコダイン達の話に驚いたチウに説明をしながら。
以外にもチウはすんなりと二人を受け入れた。
実際に会っていないが、マァムさんと好きになり始めたダイ達が言うなら悪い者たちではないのだろうと。
チウの思考は単純であり、そのせいか物事を歪みなく見抜く目がある。
物心ついたころから森で一人で生きてきて、人間から迫害をされてきたせいか人を見る目は確かである。
それ故に師のブロキーナを敬愛しマァムが好きでダイ達にも心を開き始め、ポップが必死になって話していたクロコダイン達との出会いも楽しみになっていた。
その様子をダイ達は嬉しく思うが、少々変わったものが一行に入ったようだ。
それがチウの―器―が大きいのだと、ダイ達は直ぐに知ることとなる。

ランカークスにて鍛冶屋を発見（超俺様）

ロモス王の次にはテラン王のもとへと訪ねたがフォルケン王は旅の疲れで眠っており、代わりに対応したメルルにダイ達、特にポップがでれでれして大喜び。

マァムとチウの紹介と今回の件を話してみたら、

「私にお手伝いをさせてください！」

メルルが張り切った。

普段はとても内気なメルルだがダイ達の手助けを、ひいてポップの助けになりたいと、乙女心がさく裂したのだ。

占い結果―ランカークス―の文字を見てポップが青褪めた。

俺の旅はここまでか・・短い人生か!!

行きたくはない！怖い!!しかしだ・・ランカークスを知っているのはどうやら自分だけらしい。

どこの事だと話しているダイ達に教えることにした。

すなわち「そこ俺の実家だわ。」

「あ～・・最後にティファの笑顔が見たかった・・」

「ちょっとポップ！実家に帰るだけでしょう!!」

「ポップさん、大丈夫ですか。ご無理はなさらずに。」

「ポップ・・お父さんお母さんに会えるんだよ？」

「昨日の君はどこに行った！情けない!!」

たかだか実家に帰るだけなのに、ポップはランカークスの手前でルーラしてしゃがみこんだまま動かず、マァムとチウに呆れて怒られ、ダイとメルルに優しく慰められるという何とも情けない恰好をしている。

皆あの頑固おやじの怖さ知らねえから気楽に言うんだ。

マァムの父も雷親父のようだが娘にゲンコツはしまい。

ブラスさんもダイとティファにそんなことはしないだろうし、つまるところ幼少期の親の怖さを体験したのは自分だけ。

しかしだ！ダイの武器探しには世界の命運がかかっているといっ

ても過言ではない！
「うっしゃいくぞ!!」
意を決して立ち上がった視線の先には「・・母さん・・」
自分の記憶の中よりも少し年を取った母ステイーヌが、重い武器屋の看板を上げようとしていた。
武器屋の看板は重い。女の細腕で上げるのは大変だと思っていたら、急に軽くなった。
驚いて後ろを振り向けば「・・ただいま母さん・・」
自分より背の高い、それでもまごうことなき愛息子の「ポップ!!!」
母さん少し老けたな、俺が家を出たせいか。
泣きながら自分を抱きしめてくれる母、家出前は少しは母のほうが背が高かったが今では自分の方が大きい。
抱きしめ返せば細くて頼りない。
アバン先生に付いて行った事は後悔しないが、母にこれほど心配をかけたことだけは悔やまれ始める。
どれほど身勝手なことをしたのかと。
「・・ポップ、今父さんを呼んでくるからね。待ってて頂戴！」
まるで自分がすぐに消えかねないような勢いで母は父を呼びに行き、ダイ達に説明をする前に
「あん⁉」出た!!
自分と同じくせっ毛の、長年鍛冶屋をしていて焼けた紅い鼻の父ジャンクが!!
「よう・・親父・・」
母の時と違ってがひきつるのが分かる、腰がもう及び腰！単騎でバランと対峙した方がなんぼもましだ！こええよ。
家には入れてもらえた、俺ボロボロでダイ達にはきっちりと茶を出して。
「こいつが勇者一行の魔法使いねぇ～。」あり得んと半信半疑の目を向けられて。
「うっせえ・・たく馬鹿力親父が。」すぐに腕力に訴えるのが嫌いだ。
「ちょっとポップ。受け身とればよかったのに。」

ポップ達の一部始終を見ていたマァムがこっそりと話しかける。
ジャンクによって担がれ地面に投げられ叩きつけられても、ポップは無抵抗どころか受け身すら取らなかった。
自分と組み手をしてせっかく覚えたのだから使って親に成長を見せるべきだったのでは。
少なくとも家出した価値はあったのだと。
「俺の自業自得だからさ。」
いくら今強くなりましたといっても、だからと言って両親の心情を思えば得意げになる気はしない。
よく見ればジャンクの髪にもスティーヌの髪にも白いものが混ざっている。
そんな両親をほったらかした罰は受けるべきだ。
「そう、ならいいわ。」両親を思っての事ならと、マァムはにっこりと笑いダイの武器探しを手伝いに行き、代わりにメルルが隣に座る。
「ポップさん、せめて軽傷用の薬を。」
「あ・・ん・・ありがと。」
若い恋を咲かせている二人をよそに、ダイはチウとマァムで武器の品定めをする。
そこらの武器よりはいいかやはり「あれ？」
ツボに無造作にさしてあった武器を手に取り抜いてみれば、今まで感じた事のない凄味があった。
「ダイ、そいつはいけそうか？」
メルルと話しつつも、きちんとダイの様子をうかがっていたポップがすぐに声をかけた。
「ううん、でもこれだけなんか凄いんだよ。」
「どれどれ、あらホントね、オーラがある。」
「マァムさんの言う通り、何か生きてるみたいだ。」
マァムとチウも興味津々となった。
「それ親父の作か？」
「違う、知り合いの魔族が作った。」
はい⁉このご時世に魔族の知り合いだ！とか普通は思うのだろう

が。
「そうなんだ。」
「そうか。」
「そうですか。」
「どんな方でしょう。」
チウを除いたダイ達はあっさりと返事をして終わりである。
「何だお前達、驚かねえのかよ。」
もっと反応があると思っていたジャンクの方がたまげるくらいあっさりとしすぎている。
こいつら魔王軍と戦っている勇者一行だよな？
「んと・・まあ・・」
「いいんじゃね・・」
「その・・ね・・」「はい・・」
今更自分たちは魔族くらいでは驚かない。
魔族とか種族以前にもっと無茶苦茶でとんでもない娘がお側にいるのだから、大概の事ではびくともしないメンタルゲットを果たしているのだ。
拍子抜けしたジャンクから、魔族の名前を聞いた時にはさすがにポップは驚いた。
何故ならヒュンケルと、今は亡き陸戦騎ラーハルトの魔装を作った男と同じ名前―ロン・ベルク―だったからだ。
一行はジャンクの案内でロン・ベルクの小屋へと向かう。
世間は狭い、まさか魔装シリーズを作った鍛冶屋が自分の父と飲み仲間とは。
「親父はおっかなくないのかよ。」
自分達の事は棚上げにして、このご時世に魔族と飲み仲間をしている父に尋ねてみれば
「あん、話が通じてウマが合えばなんだっていいだろう。」
あっさりと凄いことを言われた。
わが父ながら器の大きさを初めて知り驚かされる。種族で相手を見ないところはティファと同じだ。

自分は父の何を見てきたのだろうか、只おっかないだけではなかったのだと知れて嬉しくなる。
「いいお父さんだねポップ。」
親友の太鼓判が更にうれしさ倍増だ。
迷いの森とはいえこちらには天才占い少女メルルがいる！サクサクと進み、ジャンクが迷っても適切な道を指し示してついに小屋にたどり着けた。
「あいつ留守か？」
ノックをしてジャンクがぼやいたその時、茂みからゆらりと出てきたものがいた。
それは一目で魔族と分かる青い肌に尖った耳の男だった。
「ジャンクなんの用だ、こんなに大勢を引き連れて。」
話をしながらも碌に挨拶をせずに右手に持っていた酒瓶をぐびりと仰ぎながらも不遜に言い放つ。
「ここはひよこ共の遊び場じゃねえ、帰れ。」
・・ランカークスにて鍛冶屋を発見できた・・ただし超俺様系の奴だった！

剣が誕生します

生まれ故郷の森の中は落ち着く。
家を出た時は二度と戻るものかと思ってたのに、「いいところですねポップさん。」
わずか二年で帰ってきてた、それも自分の親友にして勇者一行の仲間たちと気になる少女を伴ってとは想像すらしたことがなかった。
武器屋の商売にも鍛冶にもなじめず、頑固おやじの反発をして小さな村で一生を終わりたくなくて、一目惚れしたアバン先生にくっついてた自分が今の自分を見たらどう思うだろう？
勇者と共に、魔界の名工と呼ばれた伝説にも近い人物に剣づくりを頼んでるだなんて。
ファーストコンタクトでは気難しい人物に思えた。
チウはともかく、ダイを一目見て人の子ではないと瞬時に見抜くところなんて一筋縄ではいかない凄い人だと。
予想通り一度目は断られたが、ダイがくらいついて真魔剛竜剣の話を出した時の名工のヒートアップ差にドン引いた。
あの剣を叩き折ったのが自信作のものだというのが余程嬉しかったらしい。
「作ってやる！ただし材料は自分たちで持ってこい!!」
常人だったらそれ一生無理だろうフラグだが、ダイの家に材料が鎮座していた。
「ちょっと行ってきます！」
ポップはダイを引っ担ぐようにして、ダイは慌てずにきちんと挨拶をして実家にゴーをした。
「・・・礼儀正しい奴らだな・・」
こういう場合は挨拶なく行っても腹は立てる気はなかったのだが、そういえば魔族の俺にきちんと名乗って挨拶してきたし。
「勇者をしているダイです。」
「武闘家のマァムです。」
「占いを生業にしているメルルです。」

「チウといいます。」
大ネズミが挨拶をしていた、まあジャンクの息子だけ反応が遅かったが名乗ったし。
こいつらはそんじょそこらの大人顔負けだな。
剣を作ってやりたいと本気で思うほどに。
「すぐに行くけど俺たち元気ですよブラスさん。」
「そうか、体には気を付けるんじゃぞポップ君。」
島に着いたダイは、ブラスへの挨拶もそこそこに家の中にかっとんでいった。
ロモスのシナナ王からもらった覇者の冠は自分とティファの寝室の窓辺の机の上に飾ってあるはずだと。
一目散に家に行ったダイの代わりにブラスへの説明と挨拶はポップがしている。
帰って早々元気一杯のダイを見れたとブラスは喜んでいるが、気がかりがある。
「ポップ君や、そのティファは元気にしておるかの？」
明るくて元気一杯な子だが、ダイよりも無理をしてしまうティファが案じられる。
その思いはポップにも分かる、いや分かるようになってしまった。
ティファは見かけ通りの子では決してない。
表面で明るくとも、心の中で無理をしているのが。
「ブラスさん、あいつは俺たちが守ります。どんなことをしてもきっと。」
ティファの心がもう傷つかなくて済むように。
「そうか、頼めるかのポップ君。」
「はい。」
ポップの心情を嬉しく思い、ブラスは涙ぐみながらポップの右手を両手で包みポップも左手を添えて明日の思いに応えているとき「あったよポップ!!」
空まで突き抜けそうな元気なダイの声が二人を面食らわせてくすくすと笑わせた。

元気一杯の兄妹だ。
そのダイを伴ってパプニカの王城にいるシナナ王の快諾を取り付け、ロン・ベルクに材料を渡した後はダイ以外は外に追い出されてまったりとしている。
「あのさ・・その・・服・・ありがとな・・」
「いえ!・・・お役に立てればと思って・・・」
ポップは地面に足を投げ出して座りながら赤くなった鼻をかきながら服のお礼をし、その隣にちょこんと座っているメルルも赤面をしながら小声で応えている。
双方顔を合わせずポップは明後日の方向を、メルルは恥ずかしくて逃げだしそうになる体を牛を握りしめて耐えつつもうつむいてしまっている。
双方がお互いを意識しているのが傍から見れば丸分かりである。
「あいつが本当に勇者一行の魔法使いか・・あいつあんたたちに迷惑かけてねえか?」
いつの時代のどこの世界の親はいつまでも子供は頼りないままの例にもれず、ジャンクも心配をする。
馬鹿息子と評しているポップの現在の活躍を聞けばぶっ飛ぶだろう。
自己犠牲呪文の事を聞いたらあらゆる手段を使って止めようとするだろうが。
「ポップは一行の頼れる魔法使いです。彼の作戦でいつも助けられているんですよ。」
親の心配ほどではないと柔らかく笑いながらマァムはジャンクの心配を拭っている。
マァムもポップがメガンテを仕掛けたことを全く知らない。
「あいつにいらない心配かけたくねえ!」
ポップがダイに頼み込んでその話題は一切しないことにしたからだ。
最初会ったときは自分も優しげな顔に少々不安を持ったものだが、王城決戦でもなんでかんだと間に合って体を張って仲間を守る勇気

をきちんと持っている。
「そうか・・そうなのか。」自分の心配なぞいらないほどに成長をしたのかと一抹の寂しさを覚えつつも、たくましく成長するポップが誇らしくなる。
なにかでかい事をしてほしかった訳ではない、ただ飽き性で性根がふらふらしていた息子に歯がゆさを覚えていただけなのだが。
「あいつの事を頼むよ。」
ポップとメルルらから少し離れたところで休憩をしているジャンク達は、二人の事を微笑ましく見つめながら親交を深めていく。
怖い頑固おやじがいるとポップは言っていたが、いい父親ではないか。
父さんと会ったらすぐに仲良くなりそうね、大戦が終わったらロモスの実家に招待しようかしら。
お外はまったりのんびりキャッキャウフフをしそうだが、小屋の中は圧がかかって普通の者ならばぺしゃんこになりかねない。
ロン・ベルクとしては、長年追究してきた真魔剛竜剣を叩き折ったという天地がひっくり返る大事件を起こしてくれた奴の剣が作れるのだ。
自分の命削ってでも最高傑作を作ってやる！
その心意気を肌で感じているダイも真剣な面持ちで応えてなんじゃこりゃな圧が生まれたのであった。
「あのロン・ベルクさん・・」
「・・・どうした。」
ダイに完全にあった剣を作るべく、ダイの利き手である右手を見続けるロン・ベルクに声をかける。
「あのさ、物凄い剣作ってくれるんだよね。」
「・・そうだ。」
「そしたら俺は、お礼としてロン・ベルクさんに何を返せばいいの？」
ほう！若いのに大したものだこいつは。
てっきり金の話が出るかと思ったんだがな。
昔はそうでもなかったが、今の奴らは何でもかんでも金で片付けよ

うとしてきやがる。
　それよりも大切な心意気などが廃れ始めているご時世に、中身も中々見どころのあるやつだ。
「金は要らん、お前が俺の作った剣を存分に振るってくれればそれでいい。」
　それこそが鍛冶屋冥利に尽きるというものだ。
「分かった！俺は剣に恥じない力をもっと身に着けるよ!!ありがとうロン・ベルクさん。」
　・・・本当に今時なんて気持ちの良い奴なんだこいつは！大魔王には頼まれた分の鈍ら仕事しかしなかったが！こいつのには俺の半生で培った鍛冶屋魂をすべて総動員してやる!!
　ダイの天真爛漫さに完全に虜になったロン・ベルクであった。

鬼岩城・・ですが恐れない

世界会議の段取りは大変だったがそこそこに順調であった。
病の床にいるとはいえいまだに力の衰えを見せない父の助言があったのが大きいが、大国ベンガーナの王と、騎士国家リンガイアの王を引っ張り出すことに成功したのだから。
だが運命の女神は残酷だ、魔王軍それもあり得ない大規模な攻勢を仕掛けてきたのだから!!
「ふん!あのようなもの図体がでかいだけの事!!アキーム!我が国の火力を見せてやれ!」
湾より侵入せんとする巨大な城を見てもベンガーナのクルテマッカ七世は不遜に言い放ち、すぐさま警備にあたっている自国の軍団長に命を飛ばす。
大砲と軍艦の威力を他国と魔王軍に見せつけるために。
その攻撃は確かに凄まじいものではあった。
並みの敵であれば総攻撃のもとに砕け散っているであろう・・そう―並の者―であればだ。
砲撃の一斉攻撃の煙で見えないが、その威力に会場警備にあたっていたクロコダインは舌を巻いた。
ポップ達が出かけた後にバダックに頼まれ警備役をしていたところにギルドメイン山脈から姿を消した鬼岩城を見た時は心底驚いた。
それを一国の武力で鎮圧せよという命令の方にもっと驚き、無謀であると戦車を駆り出そうとするアキームを止めようとしたが「私は王の命に従う武人だ。」と言われては止められなかった。
魔王軍を相手にと思ったのだがしかしあの威力ならば。
海に大量の岩石が落ちている、もしかしたら仕留められるやもしれない。
それは浅はかな考えであった。
大砲の威力で霧が晴れてそこに映った光景は、勝ちを確信して高笑いをしているクルテマッカを・もしやと希望を見ていた各国の王とレオナを・淡い期待を抱いていたクロコダインを完全に打ちのめすもの

だった。
大砲は鬼岩城の表面の岩を砕いたにすぎず、中の―本体―は無傷であった！
「馬鹿どもが、鬼岩城の真の姿を晒しおって。」
鬼岩城の肩当たり浮遊しているミストが冷たく呟く。
人間の浅知恵で作った武器が、バーン様の作りしこの鬼岩城に傷一つ付けられるわけはないのだ。
「姫さん!!」
「ごめんレオナ！遅くなったわ。」
「皆様ご無事ですか！」
「あれが敵・・」
バルコニーにて魔王軍の脅威に打ち震えていた王達のもとに、ルーラの着地音と共に力強い声がした。
「遅くなっちまって悪かったな姫さん、もう大丈夫だ。」
巨大な動く城を目の当たりにしても、ヘラりと笑うポップが頼もしく映る。
「レオナ・・ここは・・」
「人間どもに告げる!!」
ここは危険だとマァムが言う前に、なんと敵の参謀から通告があった。
何を言う気だ？普通ならば降伏宣言だろうが誰が従う「降伏すら許さん!!!」って違うのかい！
「お前達はバーン様にたてつく害虫だ！」・・んだと・・
「お前達に許されるのは虫けらの如く踏みつぶされ、断末魔の声をバーン様にお聞かせすることのみ!!以上だ！」
それは降伏すら許さない苛烈な通告だった。
誰もが敵の巨大さとミストの言葉に青褪めたが「けっ！誰がそんなもんに従うってんだよ。」
「そうね、元から降伏なんてするつもりなんてないわよ。」
「「勝って勝利の雄たけびを聞かせてやらあ・やるわよ!!」」
勇者一行の者にしてアバンの弟子たちは顔を上げて堂々と言い放

つ。
　その様はまさしく勇者一行にふさわしい威風堂々としたものであり、人々に希望を与えるに足る姿であった。
「ちょっくら行ってくるは、メルルはここで姫さんたちと。チウは小屋で打ち合わせたとおりにな。」
「・・分かった・・でも！僕も戦うんだからな!!」
「ポップさん達もお気をつけて・・」
　ダイの剣作りが佳境に入ったころ、メルルが邪悪な意思を感じ取りポップ達は鬼岩城騒動を知ることが出来た。
　メルルの水晶に映された鬼岩城は見ているだけでも怖気たつものであり、今すぐに自分達が行かなければいけない。
「早くいかないと!!」
　当然ダイが飛び出そうとした。
　魔王軍を撃破しなければならないのと、攻撃を受けようとしているのがパプニカだからだ。
　最愛の女性が危機に瀕しているときに、居ても立っても居られない。
　しかし「お前は残れ!!」
　ポップの待ったが入った。
「そんなポップ！こんな時に何言って・・」
「こんな時だからこそお前には剣が必要なんだ!!素手の攻撃じゃすぐに限界が来る、魔法もすぐに空っぽになっちまう。」
　ダイがそれらをすべて制御して戦えるのならば別だが、闘気も魔力も放出をして底をつきては戦えない。
「それは！でも!!」「ダイ！」
　どうしても行こうとするダイの両肩をつかみ、ポップは真剣な表情でダイを見据える。
「お前はなんのために戦うんだ！」
　それはかつて臆病で戦えなくなった自分に言われたティファからの言葉。
　今それを無謀な戦いに行こうとするダイに問う。

お前は一体何のために戦うのだ、ただ愛する女性の為だけに無謀な戦いをするのかと。
「俺は・・俺は!守りたいから!レオナやじっちゃんやポップ達がいるこの世界を守りたいんだ!」
自分の大好きな者たちがいるこの世界を守るために戦うんだ。
「なら、守るための剣がお前にいるだろう。」
ポップは弟弟子の答えに、笑って頭を撫でて諭す。守るための力が必要なのだと。
「ロン・ベルクさん、親父、あと頼むわ。」
「・・行ってこい・・終わったら一度帰って来いよ。」
馬鹿息子が戦う男の顔をしている、もはや止められないのだとジャンクは胸の中で涙を流す。
戦いに全く無縁だった息子が、世界のためにと言うのをどうして止められよう。
ジャンクが心の中で嘆くが、ロン・ベルクはポップに感心していた。
あの若さで戦う理由を他者に問うとは、ジャンクは馬鹿息子がいるといっていたがどうしていっぱしの男じゃねえかよ。
並の大人では一生かかっても言わないであろう言葉を口にしたポップを、それを受け止め答えるダイを、どう戦うか話すマァム・チウを本気で気に入った!
死ぬんじゃねえぞ!剣は絶対に間に合わせてやる!!
鍛冶屋魂をヒートアップをしたロン・ベルクの思いは露知らず、ダイ達はある問題にぶち当たった。
「これってティファに知らせた方がいいのかな・・」
妹の性格上、後から知らされたら怒る気しかしない。
「何言ってんだよダイ!あいつは今は休業中・・」―タンタン―
知らせない方向に持っていこうとしたポップの言葉を遮るように、小屋の窓ガラスが叩かれる音がした。
まさかティファか!!
いいタイミングできすぎじゃね⁉
恐れ戦いたが、窓にいたのは鳩だった。

本人様ではなくティファの鳩かよ、拍子抜けしたぜ。
鳩を中にいれて足の筒の手紙を取りつつぶちぶちと言っていたポップであったが、手紙を読み終えて真っ青になった。
「ティファには知らせちゃ駄目よダイ。」
「分かった、休ませないと・・」
「もう遅いぞお前達。」
「「へ⁉」」
内緒で行こうと案を練っているマァムとダイに、ポップは青い顔をしながら無駄宣言を放つ。
「もう何かあったんじゃねえかって嗅ぎ付けられてるわ・・」
「「げ!!」」手紙の内容は
例の件は何とかなりましたが、私は医者にも僧侶にも転職した覚えはありませんよ。
行い自体はよい事ですがよくよく考えてから行動してください。
それでこのようなことがあったという事は当然何かありましたよね、包隠さず白状なさい！
誰か大怪我はしていませんか、死に掛けていませんか？
敵の大攻勢前の前触れでしたか？
かくして後日分かった時にはポップ兄にした小一時間した説教のものを百倍にして落とされる覚悟をなさい。
よくよく考えて返信をお願いします。
ティファより
追記　嘘ついた時には今後は自分で調べて勝手に戦いに出ますのであしからず。
読み上げた後は小屋は静まり返ったがそれは一瞬の事。
「ポップ！きちんと知らせよう!!いやだよ俺おっかないよ！」ティファの説教受けるくらいならば、武器なしで魔王軍と戦う方がましである！
「あの説教の百倍・・」マァムも明後日の方向を死んだ目で見つめる。
ポップにされた説教は傍で見ていても恐ろしかった。

ロモス王がダイ達を船で送ってくれた際、どうしてもパプニカに行かねばならない行商人がおり、薬草をポップ達に売ろうとしてきた。
「あれば便利です。」笑って全部買おうとしたティファに、おまけで安くしてもらえばと冗談で言ったポップにティファは般若の形相でポップに説教をした。
「お金を稼いだこともない子供が口を出すんじゃありません!!」
「このご時世に命を懸けて商いをしている方に対して何という事を!!」ｅｔｃ.
あの時のティファは怖かった!あれされるくらいならば自分だってダイ同様で、単騎で敵に突っ込んでいく方がましである!!
「それに最後のがきいたわ・・」勝手に調べて戦場に出ます。
冗談じゃない!今後ティファは戦わせない方向で一行の考えはまとまってきているのだ!
・・ため息しか出ない。
「どうする?」
「けど嘘は・・」
「でも・・」
ジャンクとチウはその光景を不思議そうに見る。
先程までとてつもなく頼もしく見えた三人が手紙一つで狼狽するなんて、ティファという人はとてつもなく怖い人なんだろうか?
ティファを知っているメルルも首をひねる。
ティファさんは優しさの塊のような人なのに、ポップさんたちはどうしてそこまで。
三人の討議結果折衷案が出されて急いでポップがしたためる。
巨大な敵がパプニカに向かっている、そちらは自分達で足止めをする。
今ダイの剣を作っているさなかでもうすぐ出来上がる。キメラの翼が切れちまったからティファはダイをガルーダでパプニカに連れてきてほしい
何があっても大丈夫なようにとティファから五枚のキメラの翼を渡されており、武器の材料であちこち行った際に使わせてもらったが

まだ二枚残っている。
そこをあえて切れたといい、ダイの事を頼んだのはティファが戦場に来るのを遅らせるため。
ダイが剣を持てばティファは回復一手の裏方に回せる。
様々な策を練ってパプニカに向かった。
ダイには焦らず剣に集中すること、作る工程前にロン・ベルクから剣が強くなるかどうかはの気持ち一つだとがっつり言われている。
意思のある強靭な剣にするためにも、ダイお前が必要なのだと。
「俺達は連携して戦うスタイルが一番合ってる。ばらけて戦うのは得策じゃねえ。」
テキパキとポップは進めていき、チウには避難係を言いつけた。
「そんな！僕だって戦える!!」弱いお荷物扱いはごめんだ！
「チウ、パプニカには結構モンスター達が暮らしてるみてえなんだ。パニックで逃げて、ケガしちまう奴らが出ちまわないように安全に逃がしてやってくれ。
それが出来るのは同じモンスターのお前だけにしかできないだろ。」
パニックになっても、同族が力強く指示を出してくれればそれだけで少しは落ち着いて逃げられるはずだ。
「敵が来なさそうな広いところに逃がしてやってくれ、戦いは後だ。」
「分かった・・任せて！」
ポップの頼みを引き受けたチウに、ポップはにかりと笑ってチウの頭をくしゃくしゃにする。
「無理はするなよ、命は簡単に懸けるもんじゃねえ。」―置いて行かないで!!―
ティファの言葉が頭によみがえる。
「メルルは・・」「はい、傷ついた方たちを治させていただきます。」
「おう、頼む。」これで全部か？誰も死なせねえためにできることは。
戦うために、死なないための策を準備をしてパプニカに来たポップ達にとって、ミストの最後通告は恐れるものではなかったのだ。

鬼岩城・・ですが・・

今回ばかりは敵が巨大すぎる。
濃い霧が晴れて露になった動く城は、パプニカ城ほどの大きさでしかもまだ湾内におり上陸されたときの大きさがどれほどの者か考えたくもない代物だった。
だからと言って逃げるという選択は頭になく、
「メッラゾーマー!!」ゴォオウ!!
「道を開けた!・チウ!!今のうちに山の方に行け!」
「ハァアアア!!!」ガッシャー!!
「今のうちに逃げて!!」
「獣王会心撃!!!」ズバァー!!
「避難を早く!!」
ポップは空中からメラゾーマを、マァムとクロコダインは地上にて武術必殺技を駆使して人もモンスターをも守り通そうと奮戦をする。
勇者一行の活躍に応えるように王国軍も奮起をし、自軍の大砲が通用しなかったと心折れかけたベンガーナの軍・敵うのかと絶望しかけたリンガイア・ロモス王国の軍人達も獅子奮迅の活躍を始め、チウもモンスター達を励まし叱咤して避難役を必死にこなす。
今までこんな恐ろしいことにあってこなかった。
せいぜい人に殴られ忌み嫌われる程度で、昨日のロモスでの出来事がどうでもいいように感じる。
それでも逃げようなぞという考えは欠片も浮かばず、仲間の期待に応えようと駆け抜ける。
上空では攻撃しつつも的確に避難指示を出すポップがいる。
マァムもクロコダインも多勢の敵に臆することなく戦っている。
倒しても倒しても減らない敵に「ちっくしょう!・きりがねえ!!」
ポップが切れて叫べばいきなり台地が割れ多数のさまよう鎧の軍団が飲み込まれた。
避難を終えて戦いに戦場に出ていきなりの光景に目を丸くして亀裂のもとをたどってみれば、

「どうしたポップお前らしくもない、来た敵をすべて倒せばいい事だろう。」
槍を地面に突き刺した銀髪の偉丈夫がさらりととんでもないこと言ってる。
「うるせえ・・ちと疲れただけだよ。」
みっともないところを見られたとポップはバツの悪い顔をしながら銀髪偉丈夫の側に降り立つ。
「マァム・おっさん、いったん集まれ。チウもこっちだ。」
ヒュンケルの変わらずのドンピシャタイミングと、相変わらずのでたらめな強さのおかげで一息つけるとホッとしたポップは、周囲を警戒しつつも現状と今回の作戦をヒュンケルとクロコダインにつたえる。
「いい案だ、ダイが来るまでと分かればペース配分がしやすくなる。」
「うむ、それにティファを戦場に出さずに済むな。」
ヒュンケルとクロコダインの手放しの称賛にポップは赤くなるが、敵はお構いなく突撃をしてきてすぐに戦闘再開、問答無用である。
敵が減らないからくりは、鬼岩城内部のラングの間で新たにさまよう鎧が生み出されており、破壊しない限りほぼ無尽蔵である。
そろそろ鬼岩城を上陸をさせて人間に絶望を与えようとミストは操縦者のシャドーに命を出す、上陸せよと。

巨大な城がとうとう動き出した！城下町は蹂躙される!!
そう誰もが覚悟をしたが（さて、仕掛けを動かすか）ジュブ！ズブ

ズブ!!
「なん!!」鬼岩城がパプニカに上陸をして数歩歩くか歩かないかでなんと地面が鬼岩城を飲み込んでいった！
それはヒュンケルが先程さまよう鎧達を亀裂に落としたようなものでは全くなく！潰された家が仕返しとばかりに鬼岩城を飲み込んでいったのだ。
遠くから見ているレオナ達、地上からいきなり鬼岩城が縮んでいくように見えるポップ達は唖然茫然であり、急いで事態を調べに行ったミストは絶句をした。
なんと地面が泥状化をし、鬼岩城がめり込んでしまっている!!
硬い岩ならば砕ける、如何なる水圧にも耐えられるように設計をされている鬼岩城とても、泥に飲み込まれるなぞは全くの予想の範囲外であり、さすがのミストにも成す術がなかった。
一体なぜ地面が泥状化をしたのか！鬼岩城が上陸をする前には確かに家がきちんと建つほどの硬質な地面であったはずなのに!!
鬼岩城が胸あたりまで泥に沈んだところでようやく沈下が止まったが、周囲は少なくとも５０メートル同じく泥状と化しており、しかもたかだか泥のはずなのにかき分けて動くように指示を出しても無類の破壊力を持っているはずの鬼岩城がピクリとも動かずにいる!!
シャドーからも操縦がきかないと悲鳴に近い報告が来てミストの混乱に拍車をかけた。
一体・・何が起こったのだ。

泥はいい

どうやらうまくいってホッとする。
まさかここまで作戦にはまるとは。
「・・御子殿、うっとりと見ていないで参戦されよ。」
「お疲れさまでした土の精霊王様。」
「まさか御子殿が発案されたこの作戦がこれほどの被害を敵に与えるとは。」
「それもこれもすべて現場で頑張ってくれた精霊さん達と王のおかげです。
―12年間―お疲れさまでした。
最後の仕上げをしてくださりありがとうございました水の精霊王様。」
今作戦は一朝一夕で成されたものではなく、大戦が始まった時期でもない。
ゆうに12年の歳月がかかっている。
三神達よりもこの世界の大戦時の魔王軍の動きを知っているティファが発案をした。
「鬼岩城という巨大な城対策をしましょう。」
どこにあるのかまでの場所はよく知っているが、いかんせん手が出せない。
出してもどう倒せばいいのか、うかつに手を出して原作とは違いすぎる動きを魔王軍にされても困る。
ならば鬼岩城が動く時、すなわち大戦時パプニカを襲ってくるときの方に罠を仕掛けてしまえばいいと。
「日本は地震大国なのです。」
世界には火山活動・ハリケーン・台風・寒波・酷暑もあれば当然地震もある。
しかし日本は世界からも地震大国と名高いほど頻繁に起きる。
しかもだ、近年は二次被害の方がでかいときている。
ニュースでよく見かけた光景をこちらでは人助けに使わせてもら

うことにした。
それは液状化現象。
本来ならば地下からの振動で、海や湿地を埋めた地下水位の高い場所におこるものである。
確かにこの世界にも地震があるが、埋め立て地はないので一度として起こったことはない。
今回鬼岩城が埋まった場所も岩盤がしっかりとした土地だった。
ならばなぜ起こったのか、簡単な話で人為的に液状化現象を引き起こした。
種は簡単で、頑丈な岩盤の性質を土の精霊王とその眷属の精霊達が粘土質の性質に変えてそこに水の精霊王と眷属達が地下深くから地下水を高く上げ、そこへ巨大な鬼岩城が足を下すだけで地震の振動代わりとなって自然の罠の完成である。
簡単だが難しくもあった、水の水位を上げるのは鬼岩城が動き出したのを察知した時に上げれば間に合うが、土の性質はそうもいかない。
それも鬼岩城が来る範囲は予測しづらく、ざっくりと海から上陸してくるというも情報しかないうえに、予想場所は河口付近で頑丈な花崗岩でできている。
作戦をきいたときは却下されかけたがティファの執念が勝った。
「一年・五年が無理なら今から始めればいいでしょう。」
精霊の上位種ともなれば人間に変化できる者もおり、土地を少しずつ買っていけばいい。
資金は今まで貯めていた財宝の一部を売れば事足りるのでお金は問題なかった。
問題は常日頃より人間を低く見ている精霊たちからそんなことをしたくないと反発を食らった方であった。
目の前に危険も兆候もないので、未来を話されてもピンとくるものはなく当然といえばそれまでであったが、そこは三神達が本気の説得で通した。
今から自分達が行うことは単に大戦を天界と地上を勝たせるとい

う単純なものではない。
その為にも地上の被害が少なければ少ない方がいい。
その為に三神達は本気で頭を下げ、それに慌てた各精霊の王達も説得に加わり作戦が始められた。
鬼岩城の来る位置の土地に住み着き、パプニカの住人と挨拶をする程度で漁師町を作った体にしてそこそこ市場にも顔を出してパプニカ国を欺くのに腐心をしつつ夜中にせっせと土の性質を変えていく努力は決して並大抵ではなかった！
なので今パプニカ上空はプチお祭り騒ぎとなっていたる。
「そのまま全て沈んでしまえでくの坊!!」
「やったぞ！我たちの区域にまんまと嵌りおったわ！」
「あ～・・あともう少し右なれば自分達の・・」
「それでも構わん!!ざま見ろだ!!!」
日頃は高尚なるものを自負している精霊たちが、鬼岩城が罠にはまったのを見て喧しく騒ぎ、普段ならば一喝で窘める王達も笑って見守っている。
いかに納得をした事とはいえ１２年の歳月は長かった。
本来ならば自分達にとっては瞬きほどの時間であっても、人間の真似事をしていたせいか数百年ほどに感じられていたのだ。
その苦労が今報われたと、鬼岩城の遥か上空でお祭り騒ぎになるのは無理からぬことだった。
水の精霊達も気持ちはよくわかり、土の精霊たちと喜びを分かち合い労って益々賑やかになる。

さて、後はガルーダでダイ兄迎えに行くかな。
ティファは精霊たちにお礼をしつつ、ロン・ベルクの小屋に張り付かせた式バトで小屋の中の様子を見つつ算段をする。
剣の完成まであとわずか、ギリギリまで鬼岩城の動向を見るために空飛ぶ靴で上空待機をしていた。
鬼岩城をすべて埋めなかった理由はダイが内部に入り込み誕生したダイの剣で鬼岩城を真っ二つに斬るお膳立ての為。

あれをした方が各国の王達と世界に向けてのアピールになる。
勇者ダイとその一行は紛れもなく世界の希望となる本物の勇者一行なのだと。

勇者一行の料理人対魔王軍の料理人

おのれ！なぜ鬼岩城が沈んだのだ!!

ミストの心中は焦りよりも怒りが強く、もしも周りに誰かいたならば怒気だけで殺せそうなほどの殺気に満ちた怒気を発している。

幸い上空で一人しかいないので哀れな被害者は出ずに済んでいる。

「・・・シャドー、ラングの間に不具合は？」

「は！ございませんミストバーン様!!」

「鎧を生み出し鬼岩城からの頭部から出せ。」腕を伝わせれば上陸は出来る。

泥に埋もれ戦力は激減したが、それでも十分すぎる程の戦力ある。

気を取り直したミストはパプニカを滅ぼす算段に修正を加えて指示を出してから―捕獲―に向かった。

狙いはヒュンケルただ一人！アレは自分の所有物だ!!

む！来たか!!

元・師の殺気を感じ、ヒュンケルは鎧を相手にしつつ上空に目を向ける。

大魔王の命を絶対としているミストバーンが、鬼岩城一つ駄目になったくらいで諦めるはずがないとは思っていたが、早々に来るとは。

「闘魔傀儡掌!!」成程！自分をとらえに来たか!!

誰が魔王軍に戻るものか！

「おおっ!!!!」―カァーン!!―

「なん!!」

ミストの放った暗黒闘気の糸は、ヒュンケルの肉体に届く前に消滅をした。

同じ技を使っての相殺ならばミストも驚愕はしなかったが、ヒュンケルは傀儡掌を使ったのではない。

光の闘気を高めて消滅をさせたのだ。

つい最近まで暗黒闘気にどっぷりと漬かり、師と世界を呪い続けてきた男がだ！

「ミストバーン！俺は最早二度と暗黒闘気を使うことはない!!魔王軍に戻るつもりも毛頭ない！」
バラン戦より十日間、体を休めつつも体内で光の闘気を練り続けていた。
ダイ達と共に光の道を歩み続けるためにも、ティファとの約定を守るためにも。
―幸せも探してあげてください―
償う道以外を指示してくれたあの心優しき少女との誓いを思うだけで心が光で満たされる。
それを暗黒闘如きで穢させはしない、決して！
ヒュンケルめ！ならば消耗戦を強いるだけの話だ！
いかにヒュンケルとても、無尽蔵に闘気があるわけもなくほかの一行もまた然り！
上空よりのミストバーンの攻撃、地上よりのさまよう鎧の猛攻に次第に一行も押され始め遂にヒュンケルがミストの傀儡掌に捕らえられた。
「・・最後に聞いておく、戻る気は？」
普段寡黙を押し通すミストの精一杯の問い。
ヒュンケルや元同僚のクロコダインからすれば槍が降るのではないかという珍事であるが、答えは決まっている！
「断る！俺は・・俺達は光の道を歩くと決めたんだ!!」
それは自分のみならずクロコダインの分の答えも入れた返答。
力強く、誇り高い戦士の心の底からの叫びであった。
「・・そうか・・」
ミストの静かな声が、いっそ不気味であった。
ヒュンケルを助けようとポップ達が駆け付けようとしても、鎧の他にミストの影の軍団が行く手を阻み近づけず、ミストの声で一層焦りが増す！
戻る気がないならば・・捕らえて心を壊して傀儡とするのみ!!
大魔王様のための道具と・・・「ちょっと待ったぁぁぁ!!!!!」？ドッガ!!!―

なんだ⁉
ミストが暗黒闘気の糸を強化してヒュンケルを絞め落とそうとしたその時、ミストの遥か上空より大音声が聞こえたかと思いきや、声と同時に物凄い衝撃音があたりに響いた。
大音声を発した声の主は上空落下の速度を殺さずそのままの勢いで正確にミストの後頭部にけりを入れてミストを落とし、蹴った反動で無事だった時計塔に向かい建物を鋼の剣で斬っていき、斬った残骸をミストが着地した地点に容赦なく蹴って残骸の雨を降らせていく。
通常の地面ならばミストも難なく対処できただろうが地面はまたもや脆いものに変えられて、足場はなくなり残骸もろとも埋め立てをくらった。
それは一瞬の出来事であり、引き起こした者は鋼の剣を左肩に担ぎつつゆっくりとヒュンケル達の下へと歩いている。
黒い長い髪をポニーテールに結いつつも左右の耳横に一房たらし、黒縁の大きな眼鏡の奥の瞳はゆったりとした笑みを浮かべている少女。
「遅くなって申し訳ありません、ただいま戻りました。」勇者一行の料理人・ティファの帰還であった。
「ティファ!!」
まだ敵の隊長であるミストを倒したわけではないが、やはり嬉しさが勝ってしまってマァムは笑顔でティファに駆け寄っていく。
ずっと会いたかった、辛い修行も仲間とティファの笑顔を思い浮かべれば耐えられた。
その笑顔を間近で見たくなるのは無理からぬことであったのかもしれない。
「お久しぶりですマァムさん。」
応えてくれる柔らかい声が、自分に向けられる優しい笑顔が今までの苦労全てが報われ、今負った傷ですら癒されてしまうほどの心地よさを感じさせてくれる。
う～ん、マァムさんきれいになったな。
「今度買い物に行きましょう。ドレスの一着でもプレゼントさせてく

ださい。
きっと似合いますよ。」
「やだティファったら！」
照れて頬に両手当てて振り乱すところなんて絶景だ。
私が男だったら速攻で告白する魅力だな～。
「からかわないの！」
「いやいや～。」
女子二人はきゃいきゃいと盛り上がり、これって大丈夫なのかとチウは心配をする。
いくら大量の瓦礫で埋めたとはいえ、あいつはそう簡単にやつけられそうには見えなかった！
あれっていいのかと一行の男たちに声を掛けようとチウが振り返れば、男達も何やら話し合いではなく言い合いをしていた。
「何故ティファがこの場にいるのだ!!作戦をきちんと伝えなかったのか！」
「俺はきちんと伝えたぞヒュンケル!!」
「ならばなぜティファがこの場にいるのだポップ!!」
「おっさんまで疑うのかよ!!」
ここって戦場だよね？命懸けの場だよね？
なのにマァムさんもポップもほかの二人もさっきまでの凄い闘志が感じられない。
力は感じるので戦闘態勢は解いてないのが分かるがなんでだろう？
分かりやすいのが気負いがなくなったような。
あ、マァムさんと女の子がこっちに来た。
「初めまして、新しいお仲間ですか？」
「あ！はい!!」
「私は勇者ダイの一行で料理人をしているティファと言います。」
料理人？そんな職業あったかな。
「よろしくお願いしますね。」
あ！挨拶は返さないと!!

「僕はチウと言います!!・・よろしくです・・」
「チウ君ですか、共に頑張りましょう。」
この人、優しい人だ。
担いでいた剣を鞘に仕舞い、？右手―で自分に握手を求めている。
利き手が左手なのに、わざわざ僕に合わせてくれているみたいだ・・
でもなんで僕の利き手が分かったんだろう？
「チウ君の右手の腕の方が少しだけ太目だからです。」利き手は普段使うので反対側よりも少し太いのでわかったのだと笑って自分の疑問に答えてくれる。
強くて優しい人だこの人は！
さてチウ君と無事に挨拶を交わせたのはいいんだけど、ポップ兄達何してんだろ？
戦場で何やら言い合いって不味いでしょ。
「あの～・・」おしゃべり終わりを言おうとしたら―ギロリ!!―なんかすんごい目で睨まれた！
「なんでお前がここにいんだよティファ!!戦場は俺たちに任せろって詳しく書いただろう!!」
「作戦通り動け！」
「今からでも王城に引っ込んでいろ！」・・・・みんなが過保護に・・
「ティファ。」
あ、マァムさんもいい笑顔。
「私もクロコダインの言うことに賛成よ、王城に行ってね？」
慈愛の笑顔できっぱりと言われてしまった。
「すみません、作戦は伝えられて戦場の上空で待機していたのですがヒュンケルの宣言に嬉しくなってしまって。ですがダイに・・」
「貴様らぁぁぁ!!!!」
あ、ミスト出てきた。
ポップ達も警戒は解いてはいなかったのですぐさま臨戦態勢に入る。
衝撃を受けた時は驚いた、着地して迎撃しようとしたのに地面が泥状化をして埋まったのにはさらに驚いた。

しかしだ！ばっちりと聞こえてきたこいつらの会話は一体何なんだ!!
ここは戦場なのに何を呑気に挨拶交わしてる!!自分を虚仮にしているのかあの化け物娘は！
ミストにとって現時点でのティファの評価は化け物娘である。
何が恐ろしいかというとこういったところだ。
戦場の殺伐とした空気を一瞬にして変えてしまい、戦いの場を壊すものなぞ見た事も聞いたこともない！
人の心のうちにするりと入ってくるものなぞ自軍にとっては危険だ!!
しかも勇者一行の者のくせに不意打ち紛いをしおって！
前者はミストのティファへの評価だが、後半は完全いちゃもんに近い。
上空をきちんと警戒していれば高高度よりの攻撃も感知してよけられる範囲内だった。
だがヒュンケル捕獲を邪魔された恨みと、バランの一件で完全にロックオンした敵なぞいちゃもんでも構わん!!
「こ・・」「初めまして！」抗議しようとしたら声を掛けられた⁉しかもにっこりと笑っている！
「私は勇者ダイの一行で料理人をしているティファと申します。お見受けしたところ魔影参謀・ミストバーン殿ですね？」礼儀正しく挨拶された！
「先程は不意打ち紛いをしてしまい申し訳ありません。」謝罪までしてきた!!
「ですがヒュンケル達はお返ししません！この二人は私達の掛け替えのない仲間です！
光の道を行く二人の邪魔はさせません!!」
ヒュンケルの力強い宣言聞いて嬉しくて戦場出てきたんだから、私もやれることやろう。
返しません宣言だ!!
「それに!!」自慢できることあるもんね。

「魔王軍よりも私の料理の方が断然美味しいと宣言します！」
素材や香辛料は、地上の方が圧倒的にいいはずだ。
それ等をふんだんに使った料理の方が勝つ！古来より胃袋つかんだ方が勝つって相場は決まってる!!
「まあ料理をしたことのない貴方に言ってもなんですがね～。」にっこりと笑って言い切ってやった。
ティファのへんてこな宣言に味方一同本気で扱けそうになった。
挨拶と謝罪までは真っ当だったのに！今料理自慢している場合か!!
見てみれば案の定言われたミストバーンがプルプルと震えている。
「小娘!!」
言わんこっちゃない！敵だってあんなこと言われたら馬鹿にされたと怒る・・
「私がどれほど苦労をしてヒュンケルに食わせてきたと思っている!!」はぁ⁉
あんの小娘め！食に興味なく、小食で偏食のヒュンケルの体を頑丈なものとすべく、一体どれほど試行錯誤をして食わせて今の体に作り上げた事か！
「そいつが不死騎団に行くまで毎日食べさせたのは私だ!!」あんな小娘が料理人を名乗るなぞ小賢しい！料理の年季が違うわ!!
そのミストの告白に一番の衝撃を受けたのは、食べさせてもらっていた当人ヒュンケルであったりする。
戦場においての心構えを一行の中で一番持っているはずのヒュンケルが、口をぽかんと開けてミストを信じられないものを見る目で見続けていた。
「しっかりとしろヒュンケル！」
「正気に戻れ!!」
ポップ達も衝撃をくらったが懸命に心を立て直してヒュンケルに必死に声を掛けて正気付かせようとしている。
今のヒュンケルが攻撃をくらってしまってはひとたまりもない！
「あの～・・・」

なんだティファ！頼むからこれ以上変なこと言うなよ！
「もしかして・・大魔王のお食事も・・」
「無論私だ!!」主の料理を他者に任せるものか!!
・・・・・・マジかい・・ミストが料理ってない！
クールなようでいて激情家なのは知ってるけれど！これって知りたくなかったような微妙なところだ。
ヒュンケルも知りたくなかっただろうな～、ポップ兄たちの呼びかけにもフリーズ起こしてる。
しかしだ。
「申し訳ありません、よく知りもしないのに間違ったことを言ってしまって。」
きちんとお詫びは言わないとね。

影と変態に氷の雨を

只今めっちゃ敵より猛攻の嵐です！

地上はシャドー・ゴースト君達をポップ兄の火力呪文で凌いで鎧達はヒュンケル達が物理的攻撃でぶっ壊しています。

疲れて闘気がなくなったらチウ君がすかさず駆け寄り闘気回復万能薬でサポートしております。

そこは武神の弟子で、素早く味方の疲労を見抜いてすぐに対処してくれるので大助かり。

手が空いたらポップ兄の魔力回復も行ってくれて、パーティー戦がうまく機能してくれているので長期戦もどんとこい！

で、私はというと？

本来この一行の回復役は僧侶ではなく料理人のはずではと言われると痛いのですが、ミスト相手しているので無理です!!

この人何をこんなに怒ってるの⁉

闘気とまぁ殺気も分からんでもないけど、なにか滅茶苦茶怒ってる。

上空からいきなり暗黒闘陣を投網のように投げられて、一行がばらけたところに私に突っ込んできたし！

ヒュンケル目当てはどこ行った！

この小娘は必ず殺す!!

叫びあげた後すぐに冷静になってしまったミストは、叫んだ内容に恥辱を覚えた。

まさか自分が大魔王とヒュンケルの料理を作っていたのが自分だと自ら言ってしまうとは！

このことを知っているのはあれと魔界に置いてきた双子の姉妹たちのみであったのに！

選りにもよってヒュンケルに知られるとは！

この小娘はなぜこうも他者の心をかき乱す、本来ならば言うことは決してなかった言葉を表に出させる！

冗談でない！心をかき乱す元凶なぞ今すぐに消してくれる!!

ああもう！空飛ぶ靴での空中戦はかなりキツイ。
足場がないから腕に込める闘気の扱いがいつもよりも繊細さが必要で、かつ倍以上使わないといけないんだから。
それが嫌でほぼ逃げ回ってます。
諸手を剣にして打ち込んでくるのを受け流して離脱して、自分の手の内晒さないようにしています。
序盤では力を見せず、中盤の今も本気出さない。
元々の予定で通常運転ではあるけれど、ハイ・エントの結界術でも解禁になってくれないかな？
何でか授けられた後に、消滅呪文ガン・フレア使わないと対人では使用できない仕様にされてしまってる。
周りに人がいないと使えるのに不便だ。
使えれば結界術のジ・アザーズ使って空中戦での足がかりが出来て楽できるのに。
ティファがつらつら考えて逃げ回り、ちょろちょろ逃げるミストがぶちぎれながらの空中での追いかけっこはほどなく幕を閉じた。
鬼岩城の埋もれている辺りから膨大な闘気と金色の柱が上がったことによって。
「全員集まれ!!」
何が起こったのかを正確に理解したヒュンケルが一向集合を掛けた。
自分の考えが正しければ恐らくは、
「ダイ兄がやってくれましたね。」
隣に降り立ったティファが晴れやかに笑っている。
「ダイがやってくれたのね。」
「あのデカブツぶった斬ったか。」
「本当に強くなった。」
ダイを知らないチウ以外が、ダイの実力を信じて疑わずに心よりの称賛を口にする。
ダイの力とティファの優しさが一行の支柱となり、そのような困難な場も乗り越えられると信じている。

馬鹿な・・バーン様より任されし鬼岩城が・・あの小娘に目を向けすぎた！
何故ティファがいる時点でダイの存在も考慮に入れなかったのか!!
どのような後悔も後の祭りであり、地上のティファ達は喜びつつもミストへの警戒を解かずにいる。
鬼岩城が倒れたからと言って、目の前の脅威がなくなったわけではないからだ。
ガッ！
「貴様らは、今この場で息の根を止める!!」
あ～ミスト切れて衣に手を掛けちゃった。
封印無断で解いたら怒られるよ？
主のバーンとか、ガシャン
「ハイ、ストップミスト♪」
親友の死神とかに。
それは気配なく突然に表れた。
赤と黒を基調とした仮面と服を着こんだ魔王軍の死神キルバーンが、参謀ミストバーンの首に大鎌を突き付けて。
「そう短気を起こすものじゃ～ないよミスト～。
バーン様にとってはあんな玩具の動く城よりも、君の方が大切なんだから怒られないよ。
だから無理して挽回しようとしないで僕と帰ろう？
その衣、バーン様の許可なくとったら僕が怒らないといけなくなっちゃうから、そうなる前に、ね♪」
ミストの衣よりわずかに漏れた闘気にもポップ達は圧倒されたというのに、それをものともせずに歌うように話をしている敵に戦慄が走る。
ふざけた格好をしているが強敵だと直ぐに分からせられた。
「・・・・分かった。」
「うん、いい子♪」
キルの止めによりミストは衣より手を放して激情を抑え込む。

この戦場をただ見物していたであろうキルが出てきたという事は、衣に手を掛けた自分を止めるようにと主から直接命じられたのだろう。
主の命は絶対だ、どのような状況であっても。
「さ～てと、久しぶりだねお嬢ちゃん。」
ミスト止めた後は好きにして良いってバーン様許可くれたから好きにしよ～っと。
ミスト拗ねて当分口きいてくれないから愛しのお嬢ちゃんとお話楽しんでいってもばち当たらないよね～。
「は！・えっと・・・あ!!・今・・日は？」
なに！・なんで急に私に話しかけてくるのあの人!!
「元気そうで何より、今度―僕たちの城―でお茶でもしない？」
はぁ⁉
キルの常識無視な発言に一行どころか味方のミストも氷りつき、言われた当人の思考もフリーズを起こした。
あの人いったい何言っちゃってるの？私勇者一行の料理人で、貴方大魔王軍の大幹部様でヴェルザーの配下の暗躍人でしょう！
「お嬢ちゃん可愛いから綺麗なドレス似合うだろうな～。」
・・可愛いって私が？・散々力振るって敵を殺して、お友達になった人も手にかけたのを知っているだろうに可愛いって・・・。
「そこの人達じゃ～プレゼントなんて気の利いたことしてくれないだろう？
君にとっておきのドレスを用意したからプレゼントさせてもらうよ。」
そのセリフと共に、ティファの目の前に小包が出現をした。
「サイズはピッタリのはずだよ、ロモスの森で君の背後取った時にばっちりと君のサイズ見てるから。」
・・なんか贈り物もらちゃった・・・大人の人から・・
「メッラゾーマー!!!!」ゴォォォウ!!
「てんめえ！・俺の妹分に妙な粉かけてんじゃねえ！
てめえだろう！・テランでティファを攫いやがったのは!!」

歌うような、あざ笑うような気持ちの悪い甘ったるい声で、大事な妹におかしなことを言うな!!
「おやおや、子供が邪魔をするもんじゃ・・」
ブラディースクライド!!
獣王会心撃!!
せりゃぁぁぁ!!
ポップの会心のメラゾーマに続き、ヒュンケル達は必殺技をマァムは巨大な瓦礫をキルに立て続けに放ち、憤怒の形相をキルに向ける。
テランでの一件はクロコダインは当事者であり、ヒュンケルとマァムはポップから詳しい話を聞いている。
希望的観測でしかないが、もしかしたらあの時点でティファが攫われなければバランたちと大激突するにしても、ティファと交流が出来ていた竜騎衆達をティファ自身が殺さずに済んだのではないかと。
ティファが隠し通せたと思い込んでいるが、戦いの後にガルダンディー・ボラホーンを手にかけた罪悪感に苛まれたのをポップ達は知っている。
だからこそ小屋を出ようとしたティファをレオナは頑強に反対をしたのだ。
そんな傷ついた心で出掛けようというのかと。
しかし言葉にはできなかった、言えばティファが無理をして明るく振舞おうとするのが目に見えていたので快く送り出すことしかできなかった。
その原因を作った奴がお茶会だプレゼントだなぞと!寝言は永眠してから言いやがれ!!
「あの~・・もらってしまっていいのでしょうか?」・・・は?
「いいも悪いも、それは君にしか着られない仕様の特別性だよ。」は⁉
「それは可愛い君の為だけに誂えた君だけのものだよ。」
可愛い人へのプレゼントに君だけの特別な物。
それは古今東西の少女たちにとっては魔法の言葉。
可愛いとは周りの大人たちに子供のころから言われていたが、あれは娘・姪に可愛いという身内への言葉。

しかしキルが言っているのは完全にティファへの口説き文句。
数百年を生きているオート・ドールのキルが、本気で十二歳のティファを口説いているのだ。
免疫の全くないティファは顔を赤らめて止まってしまい、ティファを守ると決めたポップ達はひとみに怒りの炎を込めてキルをどう消そうかと算段した
「何？何か文句があるのかな～君達。」
目障りだから今潰すかな。
鎧を使ってミストと共にティファ以外を。
ヒュオォォォ～
キルがあくどい事を目論んだその時、あたりの気温が一気に下がり、ポップ達やキル達が警戒をし始めた時、それは上空から降ってきた。
大量の氷の粒が五月雨の如くキル達めがけて降り注ぎ、ポップ達の周囲の鎧達をいとも簡単に引き裂き、ミストの軍団をも蹂躙をしつくした。
ポップ達以外は何が起きたのか分からずに呆然としてしまった。
まるで自分達だけをよけるように氷が降ってきたのだから無理はない。ティファ以外は
―彼―が来ている。

ティファが見上げている上空は、
「騎士団長殿！これ以上はここには留まるのは・・」
「分かっています、無理を言って申し訳ない。
あそこまで敵の数を減らせばもう大丈夫でしょう。」
「しかし団長殿はすごいですな、遠くのこの地の異変を察知されて救援に来られるとは！」
「団長殿には精霊様たちのご加護がおありなのだ。」
本当に精霊たちに助けられた。
今回の一件も、ティファがその件に絡んでくるのも精霊達のおかげだ。
「みんなありがとう」
「―いいのよ～、貴方とあの子のためだもの―」
「―ついでにあの変態男があの子に渡した包みも壊す？―」
「・・・あれはティファに任せるよ。帰りましょう本国へ。」
今回の一件で、王と将軍不在の所を無理を言って魔法団からトベルーラを使えて氷の呪文が出来るものを借り受けて来たのだから大急ぎで帰らねば。
魔王軍がパプニカに集中をしているとはいえ、本国を手薄したままには出来ない。
「いつか会えるよねティファ。」近いうちに会える予感があり、そのたぐいの予感を自分は外したことはない。
出来ればあの変態に認定した敵を壊してからの再会の方が望ましいのだが。

「元気そうだねノヴァ。」

嘆きの大地にて

誰だか知らないけれどやってくれたね、おかげでミストの衣の裾が破けちゃったじゃないか。
氷の雨が降りやむと同時にキルは一気に上空に駆け上がったが降らせたであろう者は見当たらなかった。
キルが予想したよりも超上空からであり、間一髪のところでノヴァは死神と出会わずに済めたが、キルは憎しみを込めた瞳で虚空を睨みつける。
あのミストの白い衣は、主より賜ったものだと一度だけミスト自身が話してくれた。
滅多なことでは自分にも話さず、軽く十年はだんまりのミストが少しばかりの感情の色を乗せていた。
良かったねと言ってあげれば、短い返事だったがどこか照れたような初々しさがあり可愛い親友だと向こう半年はほっこりとしたものだ。
その衣に傷をつけたのもさることながら、
キルはゆっくりと降りながら思案する。
どうもお嬢ちゃんは今の襲撃者に心当たりがあるようだ。
攻撃に勇者一行の者たちも戸惑っていたのに、お嬢ちゃんだけがどこか懐かしむような表情を浮かべていたのが気に食わない。
まるで大切なものと再会できたような表情だったな。
「お嬢ちゃん？」
「・・・なんでしょうか？」
降りてきたキルは、いら立ちを隠さずにいるのでそれがポップ達を益々警戒をしてティファを守るように囲んでいるが、キルは構わずティファに平然と話しかける。
「今氷を降らせた奴に心当たりあるよね、誰？」
なんかとんでもなくシンプルイズザベストな問いをしてきた。
核心まんま突いてきてるって、キルって物凄く知略派だ。
だてに暗躍人やってないやつだから本気で気をつけよう。

「さて、誰だったのでしょうね～。」
感心したからって正直に情報教えてやるいわれないもんね。
ポップ兄達にも教えていないノヴァ情報渡すなんてするわけないもん。
惚けとこ。実際見て確信したわけじゃないから嘘は言ってないもんねだ。
ふ～ん～とぼけるんだ。
ちょっと可愛くないな～今のお嬢ちゃんは。
ティファが心当たりある？
もしかしてバランたちと会ったみたいに、昔会ったやつか？
本当にティファが今言った通り誰か分からないのかのポップとしては見当がつかない。
ティファはとにかくわからないことが多すぎる。
先程敵の大幹部と追撃戦をしていたというのにけろりとしているという事は、まだまだ本気を出していないからだ。
敵の大の力・知識・交友関係どれ一つをとっても謎である。
雪白という伝説のヒヒイロカネの武器とても。
どう手に入れたのか、ダイに聞いても知らないと返ってきた。
そもそも所持している事自体もだ。
いつかティファが自身が何もかもを話してくれるのを待つしかないかと、待つ寂しさがポップの心を冷え込まさせる。
戦いのさなかでの致命傷ともいうべき油断であった。
ヒュン
「な！」
「ティファ⁉」
「どう・・して!!」
それはポップが油断せずとも防ぎようのなかったこと。
悪い子には少々お仕置きが必要だね～。
「ミスト～、あの子を僕たちのお城にご招待しちゃった♪いいよね？」
ティファが立っていた地面の空間に穴をあけ、ティファを亜空間から魔王軍への本拠地へと堕とした。

無論地下には結界が常時貼られているのでお嬢ちゃんが傷つくと困るので大地の方に転移させた。
彼の頼み事もこれで叶った。
わざわざ一行の誰かを挑発して連れていく必要もないし・
「シ～ユ～♪」
キルは左手をミストの腰に回して亜空間で本拠地に戻っていった。
ティファが消えたことで狼狽している一行に冷たい嘲りの言葉を放って。
さ～て～お嬢ちゃんびっくりしてるだろうな～。
ここどこですかとか、可愛い怒った声が聞けるかな～。

ここどこ？冷たい大地だ、死の・・大地？
堕とされたときは驚いたけど、着地は失敗しなかった。
キルが空間使いだって知ってるからいいけれど・・ここ嫌だ。
寒い・・何か・・・冷たいものが入ってくる・・
これは・・・いや！嫌だ!!入らないで!!!

「いやぁぁぁぁぁ!!」
嫌だ！入ってくるな!!違う自分は！自分は・・・
「お嬢ちゃん⁉」
「・・・・」
死の大地へと帰ってきて、ティファとゆっくりと会えると楽しみにしていたキルが見たものは、錯乱しているティファの姿があった。
「違う！殺したくなんてなかった!!」
「・・見捨てて・ごめんなさい!!御免なさい!!」
「いや・・入ってくるなぁぁぁぁぁ！」
両手で頭を押さえて膝をつき、髪を振り乱しているティファの姿が。
「・・・こうなったか・・」
「ミスト⁉」
ミストは今のティファの状況を正しく理解した。

ここに死の大地、瘴気がたちこめる場所
瘴気は人の体力を奪い苦しめ、時にそのもの者が心に隠している傷を暴き出して責めさいなむ
どうやらティファは何故か肉体的なダメージは全くないが、精神を著しく傷つけられているようだ。
いや・・殺したくなかった・・見捨てたくなかった・・・・戦いなんて！
お前が殺した・お前は見捨てた・お前は知っていたのに止めなかった！全て！
見捨てた、母さんをあの三人を大戦の犠牲者を・・・鬼岩城襲撃も・・・
知ってたのに死なせた・・・自分の罪・・
「・・・ファ・・」
大義のために見殺した人殺し
「・・ィファ・」
こんなのが勇者一行の者？薄汚れた自分なんて!!
「ティファ!!!」
誰？なんでそんなに自分の事を必死に呼んでるの？こんな薄汚れた自分の名を・・・
「起きぬか戯けが!!!」・・・・ハドラー？
何だこやつのこの様は！
確かにミストバーンとキルバーンにダイかティファをと頼んでみたが、何故戦ってもいないティファが死ぬような苦しみを受けている⁉
「…あ・・・う・・ハド・・ラー・・」
なんでこの人が必死の形相で私の事呼んでるの？貴方魔王で私勇者の妹だよ？
ティファが来た時点でハドラーは地上に飛び出た。
まだ超魔生物にはなっておらず、ティファかダイが来た時に変身をする予定だった。
己はまた一段と高みに上ったのだと見せつけるために。
しかしそんな考えは苦しみもがくティファを見て消し飛んだ。

おろついているだけで進路をふさぐ邪魔なキルバーンを横に吹っ飛ばし、考える前に抱きかかえて名を呼び続けてようやく正気付いたようだ。
「わ・・たし・・どう・・!」
ハドラー⁉不味い!!近すぎる!!距離・・・・・つ!
正気付いたティファは当然ハドラーから距離を取ったが、すぐにハドラーのもとに戻ってきた。
「・・・・・お久しぶりです・・」
「・・ああ・・・」
赤くなって挨拶してきたがどうしたのだこやつは?
「・・ここ出たいです・・」
「ふん!のこのこと来たものを帰す・・」
「他はともかくここは嫌です!!」なんだと?
「貴方のそばを離れるとまた心に黒いものが入ってくるんです!!!」・・なんだそれは?
「・・僕が説明するね二人とも・・」
どこか憮然としたキルが話を進める役を買って出た。
自分達が何かしたのではないかと、ハドラーか喰い殺しそうな目でこちらを見ているので誤解を解く為に。
羨ましいんだけどハドラー君!
僕もお嬢ちゃんを抱っこしたかった!!
心はしくしく泣いて嫉妬で満ち溢れてもきちんと説明をしてあげた。
「・・・はぁ〜・・」
深いため息をハドラーは吐き出した。
こ奴は・・
キルの説明でハドラーはある考えにたどり着いた・・辿り着いてしまった。
力が強いのみで戦いに全く向いていないものだ。
「それで、何故こやつは俺の側から離れない?」
「きっと君の今の強さが無意識に瘴気を払っているんだよ。」

つまるところ無意識にティファを守っているに他ならないのだと、彼は気づいているのだろうか？

死の大地には雷が降る

古来より魔王と勇者一行の者は不？戴天の仇。
それは勇者であっても、一行の誰かであっても、魔王と会うとは激突・死闘しかありえない。
魔王軍にとってもそれは当てはまる、はずなんだけどな？
「いいからっさっさとこやつを返すぞ！」
「何言ってるのさ！せっかく僕がご招待したんだよ？返すわけないじゃないか。」
さっきから魔軍司令官ハドラーと死神キルが同じようなことを言って騒いでる。
ハドラーなんて私の事普通に抱っこしたまま返しに行くの行かないのの押し問答してて、正直今の状況に困ってます。
ミストなんてもう突っ立って動かないでやんの。
馬鹿馬鹿しくて不介入貫き通したいんだろう～気持ちとってもわかります。
「お嬢ちゃんだってさっき戦い嫌って言ってでしょう？
だったらさ、僕たちのお城で大戦終わるまで優雅に過ごそうよ。
食事も寝る場所も不自由はさせないよ？
こっちだったら君に戦えなんて言う人いないからね。」
だから私に構わないで返してください、死神さん。
「何を馬鹿を言っている！こ奴は俺を倒します宣言していたとんでもない娘だぞ!!」
あ、そればらしますかハドラー。
まぁ私も戦う者のはしくれとしては、こんなにすごい人と戦って勝ってみたいのですね。
・・理由がアバン先生の仇とか、まして世界の為ってところじゃないところが心苦しいんだけどね。
「ハドラー君戦いたいんだったらさ、お嬢ちゃんがこっちに来れば四六時中戦えるよ？」
絡めてできやがりましたよこのお人。

はぁ～
「そんなに私とお茶したかったら貴方がこちらに来ませんか？」
逆に勧誘したれ。
「おや魅力的なお申しでありがとうお嬢ちゃん。」
それを聞いたハドラーはぎょっとして抱きかかえているティファを正面に持ってきてまじまじと顔を見てしまった。
お前まで一体何を馬鹿なことを言い出すのだ！
しかし言われた当のキルは飄々とした態度は崩れなかった。
「僕はね、そこにいるミストが大好きなんだよ。」
突っ立って彫像の如くになって自分達を無視していてもだ。
「それにバーン様も好きだしね。」
ヴェルザーの命令なんてもう無視だむし。
バーン様とミストとそして「今の君もとっても僕好みなんだよハドラー君。」
ただの三流道化師魔王が、遂には高みを目指す戦士に成長を果たしたのがとっても好ましい。
その三人と、お嬢ちゃんが加わってくれれば自分はなんだってしてあげる。
自分の大好きな人たちを守るためなら世界なんて正直どうだっていい、魔界もまた然りだ。
「・・・・それ貴方が言っちゃっていいんですか？」
今この瞬間だってバーンは何らかの方法で状況を見てるはずなんだけど、主の理想がどうでもいいって。
「いやだって、僕にとっては今言った人たち以外はその辺の石ころと変わらないもん。」
誰が死のうが生き残ろうがどうだっていい。
それを示すようにキルは石ころを一つ蹴り飛ばして見せる。
世界なぞ自分にとってはこの程度だと。
「この大地も僕たちが使うまではそこそこ緑があったんだよ。」
しかしバーンが本拠地にするために魔界とつなげて資材を送らせているうちに、魔界の瘴気がこの大地を死の大地へと変貌をさせた。

自分にとっては興味のない事ではあったが。
「太陽だろうが緑だろうが、僕の好ましいと思う人達以外は大差ないね。」
だから世界よりも何よりも大事に大切にしてあげるからこっちにおいで？
その言葉を聞いたハドラーはティファを益々抱きしめて数歩後ろに下がった。
こいつは・・変わり者だと思っていたが！とんでもない変態だ!!
どこの世界にこんな年端もいかない少女にそこまで入れあげる成人魔族がいる者か！
いたとしたらとんだ幼女趣味の変態だ!!
しかも自分もその好意の中に入れられているなんて願い下げだ！
熨斗つけて叩き返してくれるわ!!
ハドラーが内心でうめき声をあげた時、ティファは別の事が胸に突き刺さる。
「ハドラー・・」
弱々しい声で魔王に呼びかける。
「・・なんだ、今すぐに帰してやるからな。」
「いえそちらではなくて、その・・」
聞いてみよう、魔界育ちのこの人から。
「魔界とは全部がこの死の大地のようなのですか？」
三神様達から話は聞いたけれども、自分の目では見ていない。
実際はどうなってるか聞いてみたら、ハドラーが苦い顔している。
きっと今聞いた通りで、魔界はそこまで深刻なんだ・・だったら・・この戦いは・・・あれ？
「ティファ⁉」
ハドラーが焦った声がする、私も驚いてる。
だってなんで私泣いてるの？
それは静かな嘆きだった。
ティファは魔界の現状を思っただけではらはらと涙を流してそれに自身が戸惑っている。

行った事もなく、縁もゆかりなく、まして今戦っている相手の故郷だというのに。
それでもティファは悲しみが止められない。
この大戦で人死にが出たのが分かっていても、自分だとて散々魔界の者たちを手にかけたとしても、無残な大地に生きねばならなくなった者たちの辛さが、この大地に充満した瘴気が証のようで。
恨み・嘆き・魔界にはない豊かさへの嫉妬が、この大地に埋め尽くされているように感じられて。
「君はとても優しい子なんだね。」
驚き対処し損ねているハドラーに代わってキルがティファに話しかける。
「魔界の住人が可哀そうかい？」
「・・・・・」
「そんな人たちと戦うのは嫌？」
「・・・・・・」
きっと泣いている理由はその辺りだろう。
自分にとっては路傍の石ころのような存在であっても、ティファにとっては愛おしいものたちなのだろう。
なんて底なしに優しい愚かな子なんだろう。
今自分が戦っている相手の事情なんて、知らない方がいいに決まっているだろうに。
察しが良くてこの子苦労しそうだ。
この優しさに寄って来て甘えて頼みにしてしまいそうな馬鹿たちが出る前に―保護―してあげないといけないな～♪
この子は優しいだけの子では決してない、世界のトップクラスに入る腕の持ち主で、会話の端々からも知識の高さが伺われる。
そんな子の末路はただ一つ、慕われ利用されて便利な道具とされてしまう。
それは地上だろうが魔界だろうが一緒だ。
あまり人を疑わない素直な子なぞ使い勝手のいい便利な道具だ。
自分はそんなことは決してしない、愛して愛でるだけでそれ以外

は。
「こっちにおいでお嬢ちゃん。」優しい世界だけを見せるようにしてあげるから。
いつの間にかキルはハドラーの正面に迫り、左手で優雅にティファの伊達眼鏡をはずして人差し指ではらはらと流れる涙を拭っている。
ガラス越しでなくなったティファの瞳はやはり美しい。
満天の夜の星空を閉じ込めたような黒い瞳は、涙によっていっそう煌めいていてうっとりとする。
これに触るなとハドラーが叫ぶその前に、死の大地の轟音が響き渡った。
音は空気をも揺らし、その正体は自分達の立っている数メートルさきにクレーターを作っていた。
「ああ、やっと見つけたよティファ。
駄目じゃないか、俺に無断で一人でこんなに遠くに来たら。」
死の大地に穴をあけた当人は、ティファのガルーダの背から降りてにっこりと笑ってようやく見つけたと話しかける。
「・・ダイ兄・・」
空からライデインを降らせた勇者ダイが、ガルーダに乗って自分を迎えにやってきた・・殺気放ちながら！

それぞれの思惑

「痛い！御免なさいダイ兄!!」

兄がガルーダに乗って、死の大地に来たときは本気でぶっ飛んだ。

だってどうやって私の居所が分かったの？

敵の本拠地に単身乗り込む云々吹き飛ばすこと言ってくれたよ。

「だってティファの気配がこっちからしたから。」

どうして分かったのかハドラーの腕の中で呆然と呟いた私の疑問に答えてくれたダイ兄の愛が正直重い。

そして目つきが相当やばい！

笑っているようでいて全く目が笑ってない!!

ここから私を返せのなんだのの激突になる前にダイ兄のところへぶん投げられた!!

投げたのはダイ兄の出現に目をぱちくりとしていたハドラーではなく、私を返す気が全くないキルでは当然なく、ミストの傀儡掌で放り投げられた。

「ちょっとミスト!!」

当然キルは抗議するが撃沈された。

「その二人を早々に死の大地より返すようにとのバーン様のお言葉だ。」

何よりも優先するべき主の言葉を伝えられたキルもすごすごと引き下がってくれた。

「お嬢ちゃん、次に会う時まで眼鏡は僕が預かって・・」

「今すぐに返してくれないと、貴方が私に渡した包みをそのまま燃やしますよ。」

なんかとんでもない約束させらそうになったので脅しをかけたら眼鏡をこちらに投げつつ、

「やめて！アレは君の事を思いながら一針ずつ丁寧に縫ったんだよ⁉」

なんか聞いたらイケナイ答えが返ってきた。

それってつまり、大幹部キルが私の為に手造りを？

ちょっと・・かなり嬉しいと思ったらいけないきもする。
でも嬉しい気持ちは消えてくれない。
乙女な思考にはまっている腕の中の妹の顔を自分に向けてダイはにっこりと笑って告げた。
「ティファ、あの包みならきちんと燃やしたよ。」
灰も残らないくらいにね。
そっから私は急いでガルーダにダイ兄ごと乗って逃げました！
だってキルがダイ兄の言葉聞いたとたんに殺気の塊化したんだもん!!
後の残されたキルは追撃して勇者をどう殺そうか算段するも、親友に見透かされて強制連行で地中の本拠地に戻され、ハドラーは様々な意味に頭痛を起こしながらも戻っていった。
死の大地にあるはずのない金のマジックリングが落ちているのにも、その様子を悪魔の目玉越しに見ていた策略老人の思惑にも気が付かずに。

ガルーダにパプニカ王城への直行はさせかった。
パプニカの城が見えるところでダイ兄が降りるようにガルーダに言ったからだ。
力の強くなったダイ兄のいう事をガルーダは素直に聞いて降りちゃった。
神獣よりも竜の騎士の方が上位なのかなと思ってなんだろうと降りたら、ダイ兄が私の手の甲に噛んできた！
手の甲から腕に、腕から首筋に、耳に頬に露出しているティファの肌を蹂躙するように、罰を与えるように。
「御免なさい！ダイ兄御免なさい!!」
今回は自分から引き起こしたわけでは決してないが、それでも兄は心配をして怒っている。
「許して・・お兄ちゃん・・」
暴れるのもやめて、くったりと力を抜いて自分に身を任せた妹の態度でようやく許す気になった。

動く巨大な城のところまでティファが降ろしてくれた。
剣が出来てキメラの翼でパプニカに向かおうとロン・ベルクの小屋を出てすぐに両肩をガルーダにつかまれ、そのまま城の肩口まで行けたのは幸運だ。
何故かパプニカの大地が泥と化して動く城を飲み込んでいたのだから。
自分一人だったらどうやって辿り着く考えるのに時間を潰してしまっていたのが自分でも分かるからだ。
中に入って中心地で剣に闘気を遺憾なく載せて大地斬を放ったら真っ二つに斬れたのには自分だって驚いた。
世界最強をと言っていたロン・ベルクさんの言葉に嘘はなかったんだ。
切った後にレオナを安心させようと剣を高々と掲げた後に力はいらなくなってしばらく休んでポップ達の方に行けば、ポップ達が取り乱していた。
ティファがいない、どこを探せば、その言葉で俺には十分わかった。
ティファに言った通り、ティファは直ぐに攫われてしまう。
だから俺のそばを離れたら駄目だと言ったのに。
「ポップ、俺がティファを連れて帰る。」
「でもダイ!どこを・・」
「俺には分かるよ、ティファの居るところ。」
居場所の名前なんてどうだっていい、北西の方にきっといる。
ガルーダが深いまなざしで俺を見ている。
ティファを助けられるかと。
無論助けられる、ティファを守るのは兄である自分だ。
ティファが渡されたという敵からの小包を完全に灰にしてからガルーダに方向を伝えて行った先には、冷たい空気の大地とあり得ない光景が広がっていた。
なんでティファは魔王の腕の中にいるんだ!!
ライデインで威嚇をしてから降りた後は、何故か敵からティファを返された。

放り投げられたのには腹が立つが、返してくれたのだから別にいい。
ハドラーもいるが、ティファの安全が優先だ。
道化の男が何か俺に怒ったようだがどうでもいい。
妹をきちんと叱らないといけない。
そしてティファに罰を与えたダイは反省をした妹に満足をして、そのままくったりとしたティファをガルーダに乗せてポップ達の下へと再び戻るのだった。
勇者が満足をしている一方で、宿敵の魔王は釈然としなかった。
あの後念願かなって御簾越しではない主との対面が叶った。
細い体の老人だったが漏れ出る気配や言葉の端々から位の高さを思い知り、自分なぞ到底勝てない器の大きさも見せつけられて嬉しくなってもだ。
主となるものが仕えるに足るものと知れるのが、これ程自分に喜びを与えてくれるとは正直驚いているが。
命を救われ、力を与えられたが心のどこかではいつか自分が大魔王の居る位置に座ってやると野望がなかったわけではない。
御簾越しや声だけからも圧倒的な力を感じてもだ。
そんな野望なぞ消し去るほどの主に出会えて嬉しかったが、心の中に刺さった棘が喜びに水を差す。
ティファのあの嘆きは、涙は何を意味しているのか。
大地に充満した瘴気によって心の傷を晒されたのは分かるが、何に謝り見捨てたといっていたのか。
最大の敵である自分に縋りついた手の小ささ、抱いた体の軽さの感触がいらぬ思考を自分にさせて苛立たさせる。
「ハドラー様、ご報告です。」
「・・・何事だ。」
城にいる数少ない見張りに思考を破られた。
「は、妖魔司教ザボエラ様が死の大地の地上部に勇者一行の者の落としたものを見つけたようで罠を仕掛けると言われて地上に行かれました。」

「・・・・こちらで対処する。バーン様にはあとで俺から説明をする。」
ザボエラめ、功を焦るか・・愚か者が。
落とし物とはあ奴の物だ。
脳裏には、マジックリング一つの為に敵がひしめいている地底魔城を爆走していたとんでもない娘の姿が浮かんでいる。
先程大魔王より下賜された物をさっそく使うか。

「其方は不服か？余が勇者達を見逃したのが。」
ハドラーとの謁見を終えて、太陽の下でワインを楽しんでいたバーンが背後に立っているミストに不意に声を掛ける。
ミストには自分の若き肉体を預けて半ば同化している状態であり、ミストの思考が流れてくるときがある。
大概は自分の命をいかに果たすかと腐心していてくれる心地よいものだが、今はティファを無傷で返したこと珍しく不満のようだ。
ダイはともかく、ティファは脅威だ。
ダイの強さは竜の騎士の子によるものでありある程度は想像の範囲内で収まるが、ティファは違う！
強さ云々ではなく、存在自体が危険だと。
何故そう考えるのだと言われても説明はつかないが、あれはきっと主の最大の障害となる。
それでも「バーン様の御心のままに。」
何かあった時は自分が対処するべきであり、主の命は絶対だとこたえを返す。
「あの娘が厄介なのには間違えはない、其方が正しい。」
ミストの返答にバーンはさらに言葉を紡ぐ。
「実力が全く読めん。」
あの場でティファ達を倒しきれると言えなかった。
神獣ガルーダが現れたからには、逃げに入るダイ達を追うのは容易な事ではない。
そこまでの労力を費やす事態でもないので引き取らせた。
どのみち自分が出れば敵になりえないとの事実があったればこそ、

面白いものを見せてくれたティファを褒美として見逃した。
頑なで普段は自分を全く出さないミストの様々な面を引きずり出し、本心が全く読めないキルも同様で、宿敵のハドラーにしがみついた驚くべき娘を。
それともう一つ、「ミストよ、―五年前―の騒動の事であの娘には聞かねばならないことがある。」
地上全てを一斉破壊をする準備は八割以上整った。
そんな最中にあの大騒動が再び蒸し返されては作戦の支障となりかねない。
天上を、地上を諸共に破壊しつくす為にも、憂いとなる可能性がほんの僅かにでもなるならば小石にも気を配らねばならない。
それぞれの思惑は奇しくも全てティファの事である。
ティファは文字通り、大魔王バーンにすら目をつけられたのだった

打倒魔王軍！

「なんでティファがいねえんだよ！ダイ!!」
「そうよ！連れて帰るってあれ程!!」
「ダイ、今ティファはどこにいる。」
騒乱が一応収まったパプニカの王城の一室では、混んでは別の騒ぎが勃発している。
なにせダイが、一人で戻ってきたからだ。
ガルーダに乗ってティファを迎えに行き、帰ってきたときはティファはおろかガルーダもおらずにキメラの翼で帰ってきたってなんじゃそりゃ！
必ず連れて帰ると意気込み・・いやあれは殺気むき出しだったのがなんという体たらくか。
ポップとマァムはダイに詰め寄り、ヒュンケルが冷静にダイに尋ねた。
二人は気が付いていないのだろう、ダイの胸中が今大荒れしているのを。
瞳なぞ、まるで噴火する寸前のマグマのように煮えたぎっているのを。
そこをなるべく刺激しないようにと、ヒュンケルは綱渡りをするような冷や汗を内心で掻きながら尋ねるのだった。
色々とできる長兄は辛い・・
「・・・・・ティファは万能薬の追加調合をしに道具が安置してある場所に向かうって。
明日の朝には絶対に戻ってくる、その前にこの薬入りのリングを医療関係者に渡してほしいって。」
ポップ達が自分に怒る以上に、自分はティファに怒っている。
あの妹はどれだけ危機感ないんだ？
あんな輩に目をつけられたというのに！
「だって大規模な襲撃の後だからそう何度も敵は動かないでしょう。」
自分に構いつけている暇ないし、料理人に手を出しても向こうのメ

リットないからね、なんて！
損得勘定で自分が狙われているとは考えていないってどうなの⁉
あの変態死神は間違いなく妹に目をつけた。
それも勇者側とかではなくティファの可愛さに！
ティファは可愛らしい。
黒く艶やかな長くふんわりとしてたっぷりとした美しい髪に、少し吊り上がり気味の煌めく黒い瞳は仔猫を思わせる。
ぷっくりとした桜色の唇に、薔薇のように匂い立つような血色のいい頬がまたティファを愛らしく見せる。
誰にでもすぐに懐いてあの魅力的な眩しい笑顔を振りまいてしまう。
そして笑顔を向けられた相手は直ぐに勘違いをする。
ティファは自分に好意があるのだと。
過去何度もそういった者達の邪魔を、島のみんなで散々してきた。
ウォーリアーさんは大好きだけれども、自分達に歳の近い船員たちが何人も挑んできては撃沈させてきたのに！
選りにもよってあんな変なのが現れるだなんて想定外だ！
ハドラーも、早々に討ち果たさないといけない。
ティファに触る敵なんて討ち果たさなければ。
これ以上最愛の妹にまとわりつく輩が増える前に！
魔王軍は殲滅しないといけない!!

やらかした

この状況どうすればいいんだろう！

死の大地に戻ってきた私ティファはとっても悩んでます！ダイ兄を説得して薬作りの拠点になっている秘密の部屋に帰る途中で落とし物に気が付いた。金のマジックリングがない！

あの中には万能薬のレシピが入ってる。きちんと私以外が使えないようには施しているけれど、あれがないと困る。

一応なくても作れるけれど、ほんの少しの配合を間違えただけで万能薬は猛毒として牙をむいてくる繊細なお薬だ。

コピーなんてとってるわけないので取りにいかないと・・勿論ダイ兄には内緒で!!

知られたら今度こそ軟禁されかねない状況なのよ私って。

ガルーダにも黙っているように拝み倒したし、死の大地に音速クラスの落下を決行してもらいました。

死の大地の海上付近には何故か飛行モンスターが山ほどいるようなので迂回ではなく超超高度からの急速接近！

知識通りならザボエラが・・いた――――!!!

「ガルーダ！周りのモンスター達は風で吹き飛ばして!!」

「―承知！―」

神獣ガルーダの真骨頂、バギクロスの嵐の連発！おかげでザボエラ以外のモンスター達吹っ飛んだ。

流石ガルーダ、

「行ってきます！」空から女の子が降っていきますよザボエラ！

何じゃあの者どもは！儂がせっかく配置したモンスター達を無視して上空から突っ込んでくるとはどういう神経をしておるんじゃ！大地にたたきつけられるという恐怖心はないのか⁉

まぁ良い！儂の周りには上級デビルなどの精鋭を配しておるのじゃ、辿り着くころにはスタミナは・・・・一瞬で吹き飛ばされたじゃと？それもまともや空から降ってきおった！

何なのじゃこの敵は！

空飛ぶ靴を履いていたティファは、高度からのダイブをしてもブレーキを掛けながらゆっくりと降りつつザボエラを観察をする。
こいつがクロコダインに策略を使わせて、じいちゃん危険な目に合わせてダイ兄の心を苦しめた奴。
知識通りならハドラーはもう超魔生物に魔改造され終わったはずだ。つまりこいつは用済みで殺してもいい奴だ。
「止まれ！取りに来たという事はこのリングは余程大事な物じゃろう？壊されたくなければ大人しく・・」
「妖魔司教ザボエラですね？」屑が何か喚いてきた。
「初めまして、私は勇者一行の料理人をしているティファといいます。」
そしてさようならだ!!
ティファのいきなりの挨拶に恫喝など様々な事を忘れたザボエラであったが、殺気を放ちながら手刀を構えて迫るティファに圧され無様な悲鳴を上げながら、リングを放り出して蹲る。
何なのじゃ、あれと自分は直接には会っていない！其れなのに何故あれほどの殺意を自分に持っている！訳が分からん！
ティファの考えはザボエラのような策略家には一生縁がなく理解できないものであり、理解できない上に圧倒的な力を叩きつけられたザボエラは命乞いのように蹲る。
最早自分には戦う力はないのだと。
誰がそんな無様な命乞いを受けるか！
勇者一行の者ならば許すかどうか迷うべきなのだろうが、私に躊躇いはない！
シィ――――！――バキン!!――へ？
「っそだろう！俺の体はオリハルコン製だぞ⁉それを貫くなんてどんだけだよお前!!」
ハドラー親衛隊のポーン・ヒム⁉
嘘だろう⁉こんなちび助の体の何処にオリハルコン貫く力があんだよ！

生まれ落ちた早々にポーン・ヒムは指令を与えられた。
妖魔司教ザボエラを生きたまま連れ帰ること。手足がなくなっていようがどのような状態になっていも生きていればよいという簡単なものだった。
自分の主に何の断りもなく勝手をしての事らしいので、捕らえた後は牢に入れておけと言われた。
「ザボエラを捕らえた後は何もせずに戻って来い。」
どうやら捕獲よりもそちらの方がメインらしい。敵が目の前にいても戻ることを第一とする事。
「こちらに戦う意思がない事を伝えればあ奴は引く。」
ザボエラ捕獲よりもその後の指示の方が細かく伝えられたのは解せないが、行ってくるかと死の大地の地上部に出て驚いた！
敵は鳥類モンスター一匹とちびな子供一人だと！げ!!あのじじい殺されそうなのに何蹲ってるんだよ！間に合え!!
殺気の塊のようなティファとビビこいて蹲ったザボエラとの間に割って入り、結果自分の正面でティファの手刀を受ける羽目になり左胸を貫かれた！・・あぶねー、後五cm左に貫かれていたら俺は生まれて早々に死んでんじゃねえかよ！
なんだこいつは一体・・どんな面した・・あれ？
「御免なさ――――――い!!!!!!」
いっやぁ！私一体何しちゃってるの？え！ザボエラ殺そうとしたことじゃないよ、あのダニ野郎は今すぐ殺してやりたい奴だよ。
それじゃなくてヒムを人違いで危うく殺しかけたよ！あともう少しで心臓位置にある核を壊すとこだったよ！よそ様巻き込むなんて最低だ!!
土下座しそうな勢いで謝るティファに、ヒムは面食らう。
これだけの実力の持ち主が半泣きしながら得体のしれないのこのこ出てきた自分に謝るなんてどういう事だ？
「落ち着け！俺は大丈夫だからとにかく落ち着け!!」
ハドラー様！こういう時はどうすりゃいいんすか⁉敵の倒し方の

知識ならばあるが！敵を攻撃して動揺するものを宥める知識なんぞありゃしねえぞ！一体どうしろってんだよ！

お友達が増えた

遅いな、ティファの性格ならば敵対行為をしに行ったわけではないヒムをさっさと返すと踏んだのだが当てが外れたか？

―斬ります！―地底魔上でザボエラを斬ると宣言をしていたあ奴の目は本気だった。

目の前に当人がいたと知っていたら、おそらくあれはザボエラを殺そうとしただろう。

たとえ敵だったヒュンケルや魔王の俺が止めようとしても、己の持てるすべての力を使って喉笛に喰らいついていたであろう姿が容易に想像がつく。

ザボエラの件に関しては自分が出ていくべきであったか？先程妙な別れ方が気になって行くのを躊躇ったのは間違いであっただろうか。

―戦いたくなんてない！―

一方ではザボエラの様な者を殺すのに躊躇いはなく、一方で戦いを疎む・・矛盾した心を抱えているとは相変わらずあれは読めん。

情に厚いのならば何故アバンを死に物狂いで助けようとしなかった？

情が薄いのならば何故戦いあった直後の敵であったクロコダインの名誉を本気で守ろうとする？

あれは謎の塊だ。一生自分なんぞには解けそうにもない。そもそもあれは・・

「・・君」

自分と戦いたがってみたり、戦いを極力しないようにしたりと・・

「ハドラー君！」五月蠅い死神だ。

人の考え事の邪魔をしおって！

「何事だキルバーン、今は自由に過ごしてよいと先程バーン様からお言葉を賜ったばかりだぞ。」

暇ならばミストバーンにでも相手してもらってこい。

「そのバーン様が君を呼んでいるの、早く来てよ。」

「何?それをさっさと言わぬか。」
「・・・呼びかけ無視したくせに酷くない?」
・・せせこましい奴だ、ミストバーンにでも愚痴って来い。
ある意味この二人の関係も謎だ。片や寡黙・堅物が具現化したようなミストバーン。片や軽佻浮薄を具現化したようなキルバーン。この二人の関係を成り立たせているのは共にバーン様への忠義だけかと思えばそうでもない。
それは先程のティファへの言葉でも分かる。
―僕はミストとバーン様以外はどうだっていい。緑も太陽もその辺の路傍の石ころと同じだよ―
そう、優先順位がバーン様よりもミストバーンを先に持ってきたという事はキルバーンは軽佻浮薄な輩ではないのだろうか?
・・・それがなくとも変態ではあるがな。幼女相手に何をやっているのだこやつは。服の贈り物をしたというだけでもあり得ないのに手づから作りましたってないぞ普通!
そんな輩に目をつけられたティファが本気で気の毒になる。さっさと本気でぶつかり合い、変態の毒牙にかかる前にあの世に逃がしてやりたくなる。
あれは知識はありそうだが低俗な知識はなさそうだ。純真無垢、あれに用意されたような言葉だ。
誰であれ立場関係なく心の通じ合うものには平気で話をしていつの間にやら相手の心の内に入ってくる。
踏み荒らすのではなくゆったりとした心地を相手に与える赤子かあれは?
つらつら考え事をしながらハドラーはキルの案内に従いバーンの下へと歩を進める。
時折キルがちらちらと視線を送っているのに全く気が付かずに。
ハドラーにはいくつか悪癖がある。力任せの傲慢さや慢心、敵への侮りなど。少し前であったならば魔王らしからぬ小心者の策略が上がっただろうが今のハドラーにはその考えが浮かぶことすらないので勘定に入らないが、もう一つある。思考の海に漂うと周囲が一切入

らなくなることだ。
ハドラー君今僕に殺される心配とかしないのかな？
自分は立場上は軍にとって役に立たないやつを処分する死神だよ？少し前だったら自分と二人で居る時はピリピリしていたのが嘘みたい。
折角超魔生物になったのにお嬢ちゃんにお披露目しようとして魔族のままだったのが、あんなことになってお披露目しそこなってまだ魔族の肉体のままなのに、それでも風格・実力は本物の魔王であり自分を魅了している。
自分は確かにオートドールの人形だが、自分に埋められた―動力炉―は魔界産の物。
少しは魔の者と呼べる部分が、彼の魔王の力に魅かれているのだろうか？それはそれで楽しい。退屈でミストとバーン様しかいなかった自分の人生が、今最も楽しい時間だ。
願わくば
「バーン様、ハドラー君をお連れしました。」
お嬢ちゃんも手に入れて、自分を入れた五人でいつまでも過ごしたいな～♪
「何事がございましたか。」
片膝をついてバーンに礼を取ったハドラーは直ぐに用向きを尋ねる。本来ならば主から言い出すのを待つのが礼儀だが、ヒムを迎えに行くかどうかヤキモキしているので時間が惜しいとサクサクと話をすすめたい。
「・・見てみよ。」
自分への返答は主の不機嫌な声と、目の前に水鏡が出されたことで返ってきた。
力のあるほんの一握りの魔族のみが使える水鏡は水晶のように遠くを映し水晶以上の大きさと鮮明さで見ることが出来る、今では伝説級の魔術だが驚くべきはそこじゃない!!
なんだこの映像は⁉
「そうなんだよ！ハドラー様ってすんげえ良い人なんだよ!!」

「そうですよ！あの人はまさしく一流の魔王なのですよ！」
なんでヒムとティファが自分を褒めながらきゃいきゃいとしているのだ！
しかも二人がいるのは何処だ！緑が見えているという事は死の大地では断じてない！ヒムは一体どこで何をしている!!

いや～ヒムがこんなに良い奴だなんて思わなかった。左胸貫いたときは本気でビビこいた。無関係で生まれたばかりのヒム殺してたら私本気でハドラーにお手打ちされても文句言えんもん。
パルプンテに掛けられたかというほどパニック起こした私にビシビシ声かけてくれて落ち着かせてくれたのが凄かった。
というのがティファのヒムへの第一印象であったが、こいつ本当に戦うものかとヒムはティファを疑った。
「いいから落ち着け！俺は禁呪生命体だから通常の生物よりも頑丈にできているんだよ。ああ、慌てて抜こうとするなよ。お前は動かずにそのままでいろ。俺が後ろに下がるから。いいからいい加減に泣き止め!!」
下手に動かれて中の核に傷がつかないように指示出ししながら下がったよ。敵のこいつに指示だしするっておかしくね？
「ほんとに・・本当に申し訳ありません!!私勇者一行のものでティファと言います！この償いはどうすれば！」
「・・・あんな、俺がこの場にいるって意味分かってんのか？」
「はい！ここは死の大地で魔王軍の本拠地と推察しています。そんな場所に居る貴方は・・」
「そうだ、俺も魔王軍のもんだよ。俺の名前はヒム、魔軍司令官ハドラー様の親衛隊のポーン・ヒムだ。」
こう聞いたら流石に俺から距離とんだろうとヒムは考えた。
その考えは間違っていない。ただし、一般的な考えを持った者に対しての正しい考えであって生憎とティファには通用しない正しさだ。
ティファはヒムから距離を取ることなく、ヒムの後ろで蹲ったまま気絶しているザボエラを指さした。

「ヒムですか、察するに貴方はあそこのダニ野郎を持って帰って来いとハドラーに言われましたか。」
距離とるどころか普通に話しかけてきた！
「ハドラーは優しいですね、自分の許可とらずに勝手に軍動かしたあんな奴助けるなんて。」
・・こいつは・・そうだよ！ハドラー様は優しいんだよ!!
そう叫んだヒムをティファはまじまじと見て、何を思ったのか無言で素早くロープをマジックリングからだして一瞬でザボエラをぐるぐる巻きにして放り出し、抗議しようとしたヒムをガルーダで掻っ攫った。
「手前！どういう・・」
「そうなんですよ！」「はぁ⁉」
「ハドラーは優しい凄い人なんですよ!!」
自分を死の大地の向い側のカール王国のサババに降ろした変な奴は、急に敵の軍司令褒めてきた！普通ならふざけんなと戦闘開始してもおかしくはないのだがヒムもある意味ティファと同じく普通ではなかった。
「そうなんだよ！あの人はすげえ良い人なんだよ！」
生まれた瞬間からハドラー様大好きっ子だったりする！
「生まれたばかりの俺にすぐに名前つけてくれたんだぜ！」
「あのじじい死に掛けてもいいからすぐに戻るように俺を送り出してくれたんだぜ！」
もう大好きハドラー様のマシンガントークである。
「そうなんですか！先程私もハドラーと戦うかと思ったのですが、私が万全の状態でないからと無傷で返してくれたんですよ！敵の私を！」
「あの人は最早一流どころか超一流の魔王です！」
「ヒムは良い上司に恵まれましたね～。」
そのヒムにティファも負けていなかったのは良いのだろうか⁉
いいわけない！お前は勇者一行の者だろう!!何をヒムと一緒になって自分を褒めまくっているのだ！・・・如何・・頭痛くなってき

た・・

「行って事態の収拾に努めよ。」

自分の自由時間を潰したのはティファか・・・心なしかバーン様のお声が疲れて聞こえるのは気のせいだろうか?気のせいであってほしい。

バーン様の左に控えているキルバーンは面白くなさそうな気配を出して水鏡見て、右にいるミストバーンは気配を殺してはいるが手が震えているのはみなかったことにしよう・・ヒムの馬鹿者をさっさと連れ戻さねば!

争奪戦⁉

実に実入りの多い忘れ物取りだったな～。
ルンルン気分で私ティファは只今秘密基地にガルーダともどもご帰還中です。
私は気分ルンルンだけど、乗せてくれているガルーダの気配が真剣におっかないです。なにせ敵と分かっているヒムを引っさらって、戦うではなく楽しく話し込んでいた私に相当おこのようなのです。
さっきから眉間に皺寄せてむっつりと怒ってますオーラを発してひしひしと私に反省してんのかと無言の圧力掛けてくる。下手したらダイ兄にチクりそうなので後でガルーダに全力で謝って内緒にしてもらわないと私の人権が風前の灯火だよ、監禁へのカウントダウン鳴っちゃうのは本気で勘弁だからね。
・・・・私とお兄ちゃんて勇者とその妹のはずだよね？
ティファが埒もない自業自得なことを悩んでいる時、ヒムはきちんとハドラーに言われた仕事を果たしながらご機嫌である。
ハドラーが水鏡越しに自分達に怒っているなぞ露も考えず、そもそも思い浮かぶはずもないのだが、ティファは何かを感じたのだろうかみぃ！とか可愛い声を出してびくりとして急いでヒムに帰るように進言をし出した。
「これはキメラの翼です。貴方なら使い方わかりますよね。これを使ってすぐに死の大地に帰ってハドラーからの命を果たした方がいいですよ。」
「・・・急にどうした？」
「いえ！果てしなく気のせいかもしれませんが怒っている気配がするのです!!」しかもなんだか身に覚えがあるような怒気だ！
野生児のダイと共に育ったティファも野生児であり、そんじょそこらの者よりも第六感が発達しており、故に水鏡越しのハドラーの怒りを感じ取り間一髪のところで二人揃って魔王ハドラーからの大目玉を回避してみせて難を逃れられる事に成功。
「ちょっと待て。」

ティファに帰りの方法を受け取ったヒムも、ハドラーからの最後に言われた指令をはたりと思い出す。
「ハドラー様からの伝言だ。」これ伝えておかないと本気で俺ハドラー様に怒られちまう。ザボエラを連れ戻すのは本当におまけで、自分の今回のメインはこっちである。
「近いうちに俺を入れたハドラー様の親衛隊が、お前達勇者御一行様に挨拶に行くって伝えておけって。」
「貴方を入れた・・・そうですか、彼がそんなことを。」
行こうとしたのティファは振り返り、驚いた顔をヒムに向ける。
まさかハドラーから―ふるいします宣言―がこようとは。
自分は知識で知っているからおおよその相手の動きが分かるが、今回は違う。ハドラー本人から自分達が直に相手をすると宣言をしてきたのだ。包み隠すことなく堂々と。
言わなくても敵から宣言することなどないこの世界では誰もとやかくも誹ることもないだろうに、本隊ぶつけに行くぞと言ってくるとは。
変われば変わるものだな。自分の知って・・違うな、私はこの世界のハドラーを本当の意味で知ってはいないのだろう。そろそろ知識だなんて言っていないで彼自身や周りの事をきちんと見ないと手痛い目に合う。
それでも笑みが止められない。彼の、ハドラーの急成長が嬉しくて。
今のヒムを見ればおおよその事は分かっても、本当のところは分からないものだ。
禁呪生命体は術者の影響を受けて生まれてくる。
数か月前の彼から生まれていたらフレイザードみたいな奴が生まれていたんだろうけど、ヒムはきちんとした戦士だ。
礼儀もあり、何より相手を思いやる心を持っている。ハドラーから私が敵だってきちんと教わってから来ただろうに、やらかした事で半泣きした私に自分は大丈夫だと言い続けてくれた。
フレイザードだったら半泣きした私をしめしめと殺して手柄顔で

ハドラーに報告するんだろうな～とか想像つく。
　でもヒムは違う。ようはそういう事だ。
「んだよ、急にニマニマして気持ち悪いぞ。」
「・・少しは女性に対しての口の利き方も勉強しておいた方がいいですよ？今のは男友達相手にはよくても女性に対してはアウトですよ。」
「あんな、さっき俺は禁呪生命体だって言ったろ？」
「それでも男よりの方だと思いますよ。禁呪生命体にも男よりと女性よりがいると思います。」ヒムの上司になるのはハドラーとクイーン・アルビナスがいるもんね。間違いなくアルビナスは―彼女―と呼んで差し支えないだろう。
「伝言確かに承りしたと、貴方の―キング―にお伝えください。」
　この場合のキングはあいつじゃない。物語の後半に出てくるおバカで屑キャラキング・マキシマムでは断じてない。
　ヒムのキングは唯一人。
「分かった、お前の伝言はハドラー様に必ず伝える。」ハドラー唯一人だ。
「お願いします。」ヒムと話しているのは本当に楽しい。でも楽しいだけじゃいけない。
「ヒム、戦場で会ったならば敵であるあなたにも容赦はしません。」
　今は戦場でないからハドラーの事できゃいきゃいと楽しく話せても、戦場で会えば全力で叩きのめす。
「へぇ～、お前が戦うってか。」
　確かにこいつは強い。なにせ素手でオリハルコン製の自分のボディーをあっさりと貫いてあまつさえ貫いた本人の手は無傷ときている。ある意味で出鱈目な奴だ。
　そして面白い！こいつぜってえ自分の手でぶっ潰してえ！
「手加減なんかすっかよ、俺の手でくたばらせてやるぜ！」
　ふ～ん、そうきたか。
　芯もしっかりとした戦士だヒムは。
「ではその日にお会いしましょう。」
「あ・・お・・おう・・」

あれ？今さっきの威勢どうしたんだろう？なんか面食らった顔してる。まいっか。
「帰ろうガルーダ。」
「・・・・・・・・・」
うぎゃ、ガルーダがめちゃおこだ。
怒ったガルーダは射殺しそうな瞳を背に乗せたティファではなく、ヒムに向けてから全速力で超上空を一路目指した。
ティファは呑気に秘密部屋に直行しようというが、冗談ではない！
もしもこいつが尾行してきたら、あるいは方角から大切なティファの場所が万が一漏れらと思うとぞっとする。ただでさえティファは大戦始まって物騒な世の中になったというのに相も変わらずに単独行動しているのに、そっちの警戒を全くしないのに頭が痛くなる！
しかもこんな得体のしれない敵ときゃいきゃいとして何をしている！
しかしティファは可愛い、なので元凶を睨んだ自分は間違ってない！・・はずだ！
そんなガルーダの思惑は丸っと無視して、ヒムは先程のティファの顔を脳内で何度も再現している。
ではその日にお会いしましょうか・・なんだよあの可愛い面した笑顔は！いきなり反則だろう⁉
戦う顔した奴が一転してあんな可愛い顔しやがって!!・・・ぶっ潰しても半殺しで持ち帰ったら戦利品で通してくんないかな？
ダイが聞きつけたら間違いなくヒムはお亡くなりあそばすような思考をしながらルンルン気分で死の大地に泳いで帰った。
自分には無限の体力があり、死の大地は目視できる距離なので泳いで帰る。
折角ティファがくれたんだ、使いのが勿体ない。
よしんば海のモンスター達に出会ってもオリハルコン製の自分をどうこうできる奴はいないだろう。マーマン出てこようが、シーサーペント出てこようが海馬出てこようが歯牙にもかけない。
ティファは例外中の例外だ。

ものの五分で泳ぎ切るという驚異のタイムを叩きだし、気絶したまま縛られて仰向けになっているザボエラを引っ担いで死の大地の地下に戻りザボエラを牢屋にさっさかとぶち込んでハドラーの下へと急いで戻った。

ティファとお喋りしていた事も、これからしようとしているティファお持ち帰り計画を考えている事も悪びれずに。

「ねぇねぇ君～。」

「あ～～～っ！」なんだ！急いでるのにいきなり甘ったるい声が自分を呼び止めやがって！

振り向いても暗いく長い通路しかなく、気のせいかと行こうとした矢先に通路から手が生えてきやがった！きっも!!

「やぁ～こんにちは、ハドラー君の新しい部下君♪」

「・・んだてめぇは？」

雰囲気も身に着けているもの全部も怪しさ満載な奴が何の用だ？ハドラー様の知り合いだったらやばいから返事くれえはしておくか。

「君、お嬢ちゃんから何か受け取ったでしょう？」

「はぁ！お嬢ちゃん？」

「あぁ、君が会ったティファっていう子を僕はお嬢ちゃんて呼んでるんだよ。

あらためて初めましてハドラーの部下君。僕はキルバーン、バーン様直属の部下でハドラー君の同僚だよ。」

ハドラーが聞いたら間違いなく変態に同僚呼ばわりされたくないわと怒鳴るところだが、何も知らないヒムはキルバーンの言葉を額面どおりに受け取る。

気にくわなさそうな奴だがきちんと相手しないといけないなと。

「それで、俺に何の用が？」

「さっきも言った通り、お嬢ちゃんが君に渡したものみせてよ。」

「・・・なんであんたに。」

「ふふ、だって僕はおじょう・・」

「ヒム!!」

キルバーンがヒムに迫って、ティファから貰ったキメラの翼を取り

上げようとする前にハドラーがしびれを切らして迎えに来た。
何故か怒り心頭でヒムを迎えに行こうとした矢先にティファのほうからヒムに帰るように促したのが水鏡を消す寸前に映り、バーンも興味を惹かれたのか継続をしてヒムが泳いで死の大地に戻るところまでみていたのだ。
当然ヒムがティファからキメラの翼を渡されたのも知られている。
ハドラーは頭痛と眩暈がし、ミストはあの小娘やはり八つ裂きにと再び誓ったが、キルだけは二人とは違う思いが生じていた。
それは嫉妬。自分はティファと碌にお喋りもしていないのに、生まれてすぐのヒムが楽しくお喋りしてあまつキメラの翼プレゼントってどういう事⁉
僕なんて贈り物したら憎き勇者に灰にされたんだよ⁉お嬢ちゃんに先に目をつけて一番に愛しているのにこの差は一体何！
嫉妬に駆られてキメラの翼を取り上げようとしたがハドラーに邪魔をされ、キルはその日から数日間はミストにべったりとしてミストにうざがられてもめげずに機嫌を直した。
ヒムもヒムで迎えに来てくれたとハドラーにわんころのように付いて行き、案内をされた部屋で新たな親衛隊がいたので早速自己紹介をして礼儀正しいとハドラーに褒められてテンションマックス。
その勢いでおねだりしてみた。
「ハドラー様⁉勇者と戦う時は俺ティファと戦っていいすか⁉⁉」ぜってえ勝って持ち帰るんだ！
「・・・・ティファとか？」
「はい！いいすっか？」
驚いた、まさかこやつもティファと戦いたがるとは。
自分も今や宿敵の勇者よりもティファと戦いたいという気持ちの方が圧倒的に上回っている。軍の司令官しては大問題で、魔王としても間違っている気がするがそれでも！戦士としてあやつと本気で戦いたいというのが本音だ。
最早世界征服には興味がない。あれだけ追い求めていた激情は、今やこの力のすべてをティファにぶつけ、本気のティファを引きずり出

したうえで勝つことに向かっている。
だが自分の命の恩人であるバーンへの忠誠も同じくらいにある。
全てに勝ち、自分が興味がなくとも主の望みを世界の征服を成し遂げる。
だが、ヒムの望みも無下には出来ない。
「ヒム！戦いは遊びではないのですよ!!」
「うっせえ！俺は本気だ!!」
自分の副司令官のクイーン・アルビナスの説教に、自分の主張を曲げずに挑むような目をしている。
本来ならばクイーンに逆らうはずのないポーンがだ。
どうやらヒムは自分に似すぎたようだ。ならば止めるだけ無駄だろう。自分だとて止まるつもりは毛頭なく、ならば他者を止める権利なぞないからだ。
「ヒム、許可をする。ティファを倒せるならばやって見せよ。」
ヒムに倒されるならばそれまでの奴だ。
「いいんすね。」
許可を得たヒムはにやりと笑う。望みの答えは貰った。あとは出撃する日が待ち遠しい。

「ミスト、今させている作業は後如何ほどかかる。」
「はっ、魔界よりの報告によれば一両日中には終わるかと。」
「ならば明日の夜、其方とキルで使者をせよ。」
「・・・・私も・・」
「珍しいな、余の言葉に不服か？」
水鏡を消し、キルもハドラーも去った玉座の間ではバーンとミストが打ち合わせをする。
―五年前の大混乱―の張本人に、あれは何かを知って仕掛けて策略か、百万が一の偶然かを聞き出すための大仕掛けを。
地上と憎き天界を消滅させるこの土壇場で、再びあの大混乱が引き起こされたらと思うとぞっとする。

ハドラーに話さずに、バーンは水面下で五年前の大混乱を引き起こした者をずっと探し続けていた。
魔界の敵対勢力、それもヴェルザーを真っ先に疑ったが何度調べさせても白だった。
第一かの暴竜ならばまだるっこしいことはしないだろうと、落ち着いた数年後に思い直して他をあたらせたが芳しくなく、遂先日疑わしきものを見つけた！其れも本当に偶然にだ！
「万が一にも取り逃がさぬように万全を期していけ。」
「・・・・直接連れ帰ればよろしいかと。」
ふむ、ミストとキルが行けばそれも可能であろうが却下だ。
「あれが白状するものに見えるか？」拷問をしたところで何もしゃべるまい。
精神力も強い、自分の―術―も通じまい。
「ああいう手合いには周りを巻き込んだ手段が有効だ。」
己一人の事ならば痛痒も感じないだろうが、他者を守ろうとする性質を利用すればいい。その為の準備も明日には整う。
明日という日が楽しみだと、魔界の神は生まれて初めて思ったのかもしれない。

薬

「そちらの方が重傷だぞ！連れてこい!!」
「ホイミ草ありったけ貰ってこい！消毒液・包帯も全然足りねえぞ!!」
「僧侶・賢者の手が足りん!!」
鬼岩城襲来からまだ一時間と経っていないパプニカ城内は野戦病院として半ばパニック状態と化している。
何故か泥で敵本隊の鬼岩城が上陸をせずに大惨事の難を逃れたとはいえ多数の重傷者は出ている。敵上陸を阻止せんと果敢にも海上にて撃破もしくは足止めをしようとしたベンガーナの戦艦は発砲と同時に鬼岩城の腕一つで撃沈をされ、幸いにも艦を任されていた船長が先のハドラー大戦の生き残りであったことが功を奏し、無理な徹底抗戦を選ばずに命を大事にの退艦命令を素早く伝達をさせて乗組員の命を繋げることに成功。
それでも波間に漂う内に、船の残骸との激突・マーマンなどの海洋モンスター達による攻撃などのせいで多数のけが人を出すことまでは免れなかった。

陸にてはさまよう鎧の他にもシャドー・ゴーストなどのモンスター達が暴れまわり、精神力の弱い兵たちに取り付き同士討ちをさせた。
普段から共に訓練をし、時に競い合い時にモンスター討伐などで互いの背中を預けあう同僚をおいそれと斬りかかれる猛者はおらず、神官・僧侶達による浄化がない間に迷いながら戦った結果瀕死の重傷者まで出す始末。
各国も勇者一行の活躍を目にし、耳にしていても決して対策・準備を怠っていたわけではない。
現にベンガーナは国家予算で開発をした虎の子の軍艦と戦車隊を引っ張り出し、リンガイアも猛将バウスン本人は自国防衛に残したが、彼が一から育てた王国騎士団を連れての会議だった。
それらを蹴散らした魔王軍の方が上手であり、勇者ダイが鬼岩城を叩き切ったとはいえその脅威は王達のみならず襲撃を受けた側、関

わったもの全ての者達に焼き付けられ恐怖を否が応でも植え付けられてしまった。
魔王軍、何するものぞと意気込んでいた心をへし折られるほどに。
それでも悲しみに暮れ・恐怖に慄いて立ち止まっているものばかりではない。
王達は国は関係なく全ての負傷者を城内か協会の大広間などに収容して医師・僧侶・賢者たちを重症患者の下に走らせているが手が足りなさすぎる。
回復役たちも懸命に働いている。なんと勇者一行からも武闘家・マァムと占い師・メルルも城内の回復役の一端を担っている。
「そちらの方を止血している間にホイミを掛けます！」
「この腕は折れているだけね、添え木を・・ない⁉なら椅子でも壊して持ってきなさい!!」
そしてなんと驚きの人物が回復役となっていた！
「べほ！まだいけるか？無茶は・・」
「べほ!!―やるからさっさと連れてきて!!―」
「べほ・・分かった・・無理はするなよ。」
ベホイミスライムのべほも奮闘をしている。手伝いを申し出た時、マァム・メルルは諸手を挙げて歓迎をされたがべほはそうもいかなかった。
なんとなればこの国はハドラー大戦時には魔王軍本拠地の目の前という不幸中の不幸と呼ばれていた国で、今また敵からの大進撃を受けたばかりであり、当然正体不明のモンスターなぞニコニコと受け入れられるはずもない。
それでも手伝えたのはヒュンケルの説得と、偶々通りがかったアポロが聞きつけ事態を把握したアポロの許可の下べほも回復役に入り込めた。
自分は戦えない、それでもできることはあるんだ!!
この半月間自分もダイやティファ、そして今相棒のヒュンケルと共に勇者一行をしている。
誰かを助けたいというダイやティファ達のような心構えは残念な

がら自分にはもてそうにもない。それでも目の前の苦しんでいる人たちを助けたい！
そのサポートをポップ・チウ・クロコダインも入り、ヒュンケルは次々と回復呪文を受けた重傷者たちを奥の部屋に連れて行き戻っていく。
城中のありったけのシーツ・毛布を敷き回復呪文を受けたとはいえ骨折の手当て、治しきれなかった表面上の火傷・傷などを見ていく。誰一人死なせないためにも。

それでも運なく死に向かっているものは確実に居る。
「アキーム隊長・・最早この者の手足を切断するより他は・・」
「分かっている！それでも・・」
ヒュンケル達の動いている場所とは反対の城の裏の一角に四阿がありもっとも重篤な者たちが運び込まれた。
勇者一行に見せる事を憚るようにひっそりと。
彼ら十分に世界のために働いていてくれている。ならばせめて戦いの傷跡の悲惨さを目に触れさせずにするのがせめて自分達に出来る精一杯の礼ではないかと考えて。
今この場は大国ベンガーナの隊長のアキームが任されている。
死線を超えてきたアキームは今追い詰められている。これが敵の撃破ならば何も躊躇する事無く進めるが、兵たちの命を救うために手足の切断を下すのにはその倍以上の決断力を要する。
退役した軍人達にも手足がない者もおりさして珍しい事ではない。寧ろ命を手足で買えたのだと笑っているものも来るくらいだが、この世界において手足切断は一種賭けのようなものだ。
斬った個所から腐り、それが元で死んでしまうもの。あるいは斬った場所の血が止まらず
に出血死してしまうもの、痛みのショックで死んでしまうなどリスクが高すぎる。
切り口から菌が入り壊死させるというのは突き止めたが、それを回避する方法が分からない。

斬って出血をさせても止める方法が分からない。
斬るときに痛みを回避させるにはラリホーマがあるが、使えるものが限られておりこの場にはいない！
どうすればいい・・イチかバチか・・
「アキーム隊長！勇者ダイ様より薬の差し入れが！」
「・・勇者ダイから？」
あの一行には僧侶から転向した武闘家のマァムがいたはずだが、彼女は薬を作っている余裕は・・
「受け取った医師によればマジックリングを三つ受け取り、その中身を確認をして説明文を読んだところ奇跡の薬・万能薬とのよし!!」
「なんだと⁉」
報告を受け取ったアキームは今度こそ本気で驚きを発した。
リンガイアを発祥の地としたその新薬は、一般人よりも軍部の人間たちからの支持を圧倒的に受けている。
なんとなれば平和の世とはいえ常に死の隣り合わせの任務に就くこともある兵士たちは常に命を守る確率を上げんと薬の類にまで気を使っている。
そんな中カールと比肩する騎士団国家の、それもリンガイア王国史上最年少の天才騎士団長の名をほしいままにしている猛将・バウスンの一粒種ノヴァが公表をした万能薬は各国の軍から奇跡の薬とまで呼ばれるに至った。
既存の薬よりも圧倒的に治りが早く、それに後遺症も全くない！
今までは治ったとはいえ中には数日後体調を崩して亡くなるものも出ていたが、同じような者を治しても後遺症は今のところは零という実績がある。
その奇跡の薬の作り方を自国で秘匿する事無く全世界の学会に発表をしたノヴァは勇者というよりも聖人扱いをされて困っているのはまた別の話だが、今回ダイによってもたらされた薬のマジックリンクは三つ。
中にはそれぞれの効能のラベルが張られた小瓶と、説明書が一枚づつ入っていた。

一つは緑で中身は斬撃・火傷・骨折用の三つの飲み薬と。
これはマァムたちがいる表の治療の方で使用されている。
残った二つのリングは赤と黒。中身を調べた医師は即刻裏のこの治療院に持っていくように指示をされたと伝令の兵が説明をした。
早速アキーム達が中身を調べると、なぜこの二つがこの場に持ってこられたのかを理解した。
手紙にはこう綴られていた。
もしもこの薬が入用な時はおそらく手足の切断をしなければならない瀕死の患者がいるという事。
赤のリングには痛みを感じさせさなくする強力な感覚麻痺薬と切断した後の処置の仕方のメモ書きが入っていた。
「各自にすぐに飲ませて治療に当たらせよ、腕のいい兵を表から即刻引っ張ってこい。それとメラでいいから火炎呪文を使えるものを。」
メモには切断の際斬る剣は火であぶり消毒をする事、切断をする腕に止血の為の縄をきつく巻いて血止めをする事を。
そして最後には切断後は直ぐに断面を大動脈諸共焼きつぶし、細菌感染と失血死を防ぐことが肝心であると書かれていた。
「アキーム隊長・・彼らの手を借りては・・・」
兵よりも腕の確かな戦士ヒュンケル、的確に呪文を使える魔法使いポップに助けを乞うてはどうかと進言を伝令は進言をするが却下をし、斬り役はアキームとなり彼は自軍を入れた総勢百五十七人の手足を切断をして治療を終えることが出来た。
途中で焼きつぶしただけでは出血が止まることのなかった者もいたが、メモ書きには予めそういった事態にも言及されており、糸を通し玉結びをしていた針を熱湯につけて消毒をし、血が出てもあわてずに動脈にさして玉止めで留めて何度も巻き付け止血をしている。
幸いにも失敗はなく、黒のリングの中身は使われることはなかった。
「・・・・願わくばこの薬が使われることがない事を願おう・・」
治療をすべて終えたのは夜半頃。少しでも休んでほしいとの副官からの嘆願に折れたアキームは赤のマジックリングはその場に残し

たが黒のリングは自分が持ち出し、与えられた野戦用の個人テントの中で重い体を横たえながらぽつりと漏らす。自分の手のひらにある黒いリングを見据えながら。

これの中身は確かに万能薬と言えよう。ただし人々の希望となる奇跡の万能薬では決してない。それでも戦場においては確かに必要となりえる場面があるのもまた事実だ！

そしてその時にはこの薬は真価を発揮するだろう。飲ませる者にとっては苛まれるだろうが、飲む側としては祝福の薬として・・・・忌まわしいこの薬を一体誰が製作をしたのだろう？あの緑と赤の中身は希望の薬であったのに、作った人物はこのくすりを作っている時どのようなことを考えながら作ったのかが全く分からない。

慈悲深くも怜悧な・・考えを・・・・持つ・・・

リングを握りしめながらもアキームは眠りの底に落ちる。どのような過酷な任務・訓練にも耐えてきた屈強な兵とても、強大な敵の襲来から同僚たちの死の隣り合わせの治療は精神的にも肉体的にも追い込み短い眠りの底へと押しやられた。

意識を落としながらもアキームは願うことをやめない。この―死の薬―が使われる日が金輪際来ないことを。

秘密部屋の秘密①

テラン王国とベンガーナ王国の国境は広大な森が広がっている。
そこは自然の宝庫であると同時にグリズリー、スライム、一角ウサギ、バジリスク等の大なり小なりのモンスターの住処であり余程の事がない限り足を踏み入れる者は少ない。
その少ない者の中に一体のガルーダとその背にいる一人の少女が入っている。
モンスターはお友達になれる、ここはお友達と貴重な手つかず薬草の群生の宝庫だとルンルンで秘密基地を作ったティファであった。
人を惑わし沼地に誘う精霊とももれなくお友達であり、天然温泉が出る洞窟という優良物件を精霊達に紹介をされてノリノリで改装をして立派な秘密基地が出来上がった。
入口はそのままで剣の修行～と鼻歌うたいながら中をガリごり抉り出して二十畳ほどの広さにしてから家具を設置。
パンを焼く竈を作り、壁には薬草を入れるタンスを作り、いつかお客様も来るかもしれないとベッドは二つ設置をしている。
複数人きてもマジックリングにベッドが五つ入っているので大丈夫。
入口にはただの崖にしか見えないように細工を施し長期使わない時には大岩で蓋をする徹底ぶりで出来て五年経っても中は一度として荒らされたことはない。
そもそも森のモンスター及び精霊たちとティファは早い段階からお友達になっているのでティファの大切な場所を荒らすものはおらず、人間も森の奥深くまで入ってくるものがいるのはいない。
だからこのご時世であっても魔族がゆっくり休めるのだ～。
「具合はどうですかザムザさん。」
「貴女と―父君―のおかげですっかりと良くなりました、ありがとうございますティファさん。」
「いえいえ、私はポップ兄達の頼みごとを果たしたまでですよ。」
「・・・そうですね、あのような卑劣な策をした私を生かそうとしてく

れた彼等には本当に感謝をしてもしきれない。
私はこのご恩を返したいのです。」
うん、本当にポップ兄達凄いよ。
でもね、いきなりザムザ助けてくれってぶっこまれた時には本気で驚いてぶっ飛んだけどね。
モンスター筒に入れられて、手紙一つでざっくりとした説明しかないのを見た時には本気で兄達をシバきたおしたくなったよ、うん。
会った経緯とされた罠と、―それでもこいつはザボエラには勿体ないほどの良い奴なんだ！助けてくれティファ―
その一言だけってどうなんだろう。
まぁダイ兄に持たせてた生命力と体力を回復させる特化系統の万能薬を使えばザボエラの中途半端な超魔生物もどきの反動位は回復させられるけど。
だからってなんも知らんはずの妹にやっぱい敵送って助けてくださいは普通しないと思う。
確か原作のザムザも嫌いじゃないけど、転生者しか分からんような状況に無茶ぶりしないでよまったく！
色々と考えながらも結局ティファは手紙を読んだ後すぐにザムザをモンスター筒から出して助けており、ザムザはその事を一生背負う恩だと感じているので結果オーライかもしれない。
何故ならザムザは魔法薬に通じた博士号まで修めているからだ。
「こちらに戻られたのは持っていかれた薬のストックが無くなりましたか。」
「そうなんです、大量に作って大丈夫だと思ったんですが見積甘かったようです。」
「・・・申し訳ない・・」
「ザムザさん・・あなたはもう・・・」
「いえ、私も大勢の人間と地上のモンスター達を直接手を下さなかったとはいえ殺戮する手助けをしていたのです。」
知らなかったから、人間の優しさを、命の本当の重みを。
ザムザは苦しそうに告白をするが、すぐさま微笑む。

自分の罪悪感で目の前の優しい少女が心を痛めるのは本意ではない。
「あの方よりのご伝言です。
貴女と兄君に約束した通り人間と戦う事はしないと。」
「そうですか、伝言をありがとうございます。父はいつ出立を？」
「貴女が行かれてすぐに。元気に出て行ったのだからもう大丈夫だろうと安堵されて笑いながら行かれました。」
「・・父さんたら・・」
「優しいお方です。貴女も兄君達も父君バラン様も。」
この人本当にあのザボエラのご子息様？
笑顔がめっちゃ透き通ってるんですけど、実は実子ではなく貰い子とかどっかからか攫ってきたんじゃないよね？
実験用にしようとしたけど頭いいから親子だってだまくらかして。
そんな考え浮かぶほどザムザさんは優しい人だ。
しかし父さん旅立ったか、十日間で体の傷は全回復したし、ちょこちょこ出ていた微熱もザムザさんのおかげで治って良かった。
私はこの十日、ザムザさんが送られてくるまでずっと父さんとの二人暮らしを満喫してた。
小屋でダイ兄達と分かれてすぐさま・・・・は父さんを追えなかった。
思ったよりも私の精神ズタボロで、ガルーダに見抜かれて速攻でデルムリン島の修行洞窟に放り込まれた。
そこはかつては修行の場で、終了した後も中でどれほど過ごしても外は五分しか経たない機能は失われずに私と神獣ガルーダしか入れないようになっている。
「―悲しいのならば泣け―」
ガルーダも近頃は私が呼べば聞こえる距離にいるせいで今回の父さんたちとの戦いを知っている。
戦った相手と私の関係も。
多くは言わないガルーダのぶっきらぼうな優しさに崩されて、張っていた心の糸が切れて私は泣いた。

泣く資格がないのは分かっている、こうなる未来が来るのを知っていたのに止められなかった、止めようとしなかった自分の罪は自分が良く分かってる。

あまりにも原作を変えすぎればどんな動きになるのか予想できないで、神様たちと進めている—計画—に支障が出てくるのが分からなかったから怖くて手をつけずに逃げ出したんだ。

あの三人よりも、計画をとったのだ私は。

それでもあの三人に生きていて欲しかった、テランの村の人達と笑いあう三人を見たくて説得しようとした気持ちは嘘でなくて、どうにもできなかったのは悔しくて悲しくて痛くて、耐え切れなくてガルーダにしがみついて泣いて・・気が付いたら眠って、自然と私の目が覚めるまでガルーダは私を包み込んで待っててくれた。

まるで雛鳥を包むように羽で柔らかく、何もかもから守ろうとしてくれる親鳥のように。

泣いたらいくらか心が回復できた。

あの三人の命を救えなかったことを悔やんで立ち止まったら、私は本当に最低な者でしかない。

罪は罪、それでも進むと決めてガルーダに飛んでもらって父さんを探しに島を出る。

島にいるじいちゃんには会わずに。

「いた！ガルーダ降りて。」

どこかに身を隠して見つけるの難しいかと覚悟してたら、テランの回復の泉に行く道の途中で倒れているのを発見。

父さんの特技の中に行き倒れでもあるのだろうか？母さんと出会った時も行き倒れがきっかけだよね。

来る途中で三人の亡骸を埋めようと寄ったらあるべき場所に三人の遺体はなくて、探しに来た父さんは行き倒れの重体で不可解な事だらけだけども考えている暇なし。

とにかく手当てしないと。

秘密部屋のベッドに父さん寝かせ斬撃と骨折用の薬を塗って、体力回復を飲ませたあたりで父さんの熱が一気に上がる。

身体中が熱いのに皮膚は乾いて汗をかく様子がない。
血もだいぶ流して水分も全くとってない状態ではいくら父さんが竜の騎士であっても不味い。
竜の騎士であっても血も流れれば病気にもなり、放っておけば死んでしまう。
大量の経口補水液もどきを作って、父さんの頭を抱え起こしてゆっくりと時間をかけてとってもらう。
熱と同時に意識の混濁も始まったせいかコップからは飲めなくなったから私に口移しで。
父さん唇も熱くて体が燃えるようなのにカチカチと震えてる。
これホントに不味い！
熱を下げようにも氷なんてここにはない！冬でないから少し離れた湖に氷があるはずもなく、私はヒャドを使えない。
ガルーダでオーザムまで行けば、あるかもしれないけれど離れたくないしあっという間に足りなくなるのは明らかで、往復したくもない。
昔、前の人生で本で読んだことを試してみる。
父さんのズボンを脱がせて下履きも脱がせて、私も何も身に着けないで上からあるだけの毛布を掛けて父さんと素肌を合わせる。
横向けにして細いけど自分の足も父さんの足の間に絡ませて体を密着させる。
しばらくは燃えるような息をカチカチと吐いていたけど、数十分したら震えは止まって息遣いも少し穏やかになって少しづつ額にうっすらと汗をかきはじめる。
一時間後にはぐっしょりとかいて毛布の中に持ち込んだタオルでせっせと拭ってたら、父さんの目がうっすらと開いた。
「・・ラ・・」
熱い息と一緒に何かを呟いたと思ったら、私の体を強く抱きしめる。
まるで逃がさないように閉じ込めるように。
「ソ・・アラ・・・やっと見つけ・・・」

途中で力尽きて眠ってしまったけど言いたいことはきちんと伝わる。
私を母さんと見間違えて、母さんだと思って喜んだんだ父さんは。
私は・・・本当に罪深い。
母さんを見殺しにして三人も助けなくてなんて奴だと罵倒してやりたい。
だけどね、止まるわけにはいかないんだよ。
だから前に進む。
ティファのすすり泣く声を聞いたガルーダは何も言わずに先程のデルムリン島の洞窟のように竜の親子を翼で包み込む。
父とガルーダの温もりに、ティファもいつしか眠りにつく。前に進む力を取り戻すために。

秘密部屋の秘密？

「ティファ――――――!!!!!」

うんむ～？眠いのに～なんだか大絶叫で？たたき起こされた・・二度寝したい。

ティファの秘密部屋の朝はバランの物凄い大絶叫で始まった。

何故ここにティファがいて！しかも裸で私と一緒に寝ているのだ!!

それも私も下履き一枚しかないのは何故だ！

最早突っ込みどころしかない状況に驚いた。

バランは目が覚めて意識がはっきりとして慌てて起きようとし、隣にいる素っ裸でくぅくぅ寝ている娘を目にして大絶叫を発してしまった。

どんな強敵・見た目化け物のような敵を散々相手にしてきても動じたことがないのに我が娘相手だといつもこうなるのは何故なんだ。

確かに自分はティファの父親である。赤子の頃はソアラを手伝ってディーノとティファのお風呂を手伝いもしたが！いきなり十二歳の少女に成長した娘の裸を見せられれば驚く！

・・くぁっとあくびをしながら瞼をこすっているのがまた愛らしい・・・我が娘が可愛すぎるだろう！

生んでくれて本当に感謝するぞソアラ！

えっと、何百面相してんだろう父さんは。

頭をバリバリとかきながらティファは胡乱な眼差しを父に投げつける。

いきなり絶叫で人叩き起こしたと思ったら私の事見たら顔赤くして笑って急に天井見上げてうっすらと泣き始めちゃったのどうすべき？

まぁいいや、お脈拝見。脈は少し遅めでも力強いから体力つける方向で、若干熱あるけれどまぁいいや。

我が娘は優しい、どうやら私の身体チェックをしてくれているよう

だ。
熱がどうとか言っているが、どうやら私は熱を出していたようだ。
そうか！私の熱を下げるためにティファはその小さな体で私を癒そうと一晩掛けて・・・裸でいたのはその為か。
この子はなんと天使のような子なのだ。
寝ぼけながらも診察をして、終えた後天使のような子だと評されたティファはバランをそのまま湯の中にぶん投げた。
傷は薬で表面上は全て治ってそこそこ体力もありそうなので湯船の中で丸洗いしても問題ない。
そんな理由で湯の中にぶん投げられたバランはティファの良い子さにうっとりとしていたため、何が起きたか分からずに対処し損ねて頭から湯の中に突っ込んでしまった。
あまりの出来事に抗議しようとしたが、後からあかすりタオルと石鹸をもって入ってきたティファに、流石に一緒風呂はどうなのだと上がろうとしたところを万力の力で右腕を掴まれ
「おとなしく丸洗いされなさい!!!」
まったく仕方がない人だとばかりに怒鳴られ理不尽な雷を落とされフリーズ起こした隙にバランは全身くまなく隅々まで洗われてしまった。
なんとなれば体力を消耗しているところに―竜の血―を散々使って体力回復の泉に辿りつく前に行き倒れたバランと、数時間の体力回復後に父と共にぐっすりと眠って体力満タンのティファとでは歴然の差があり、お風呂戦争の軍配はティファに上がったのは当然の事だった。
父親としての威厳と尊厳の全てもこそげおとされたとバランはしくしくと泣きたくなる。
予定では今頃は親子そろって魔王軍となって世界の人間すべてを滅ぼす計画を練っていたはずなのに。
そこは失敗してよかったと今は思うが、流石にこの状況は無いだろうと頭が痛い。

なんか父さんが鬱陶しいと思うのはあれかな？私反抗期になっちゃって父さんの洋服と一緒に洗濯しないでよお母さんの世界なのだろうか？

父さん騎士としては一流なんだろうけど父親としては新米さんか。

それも仕方が無い事だけど。

右往左往して落ち込む父をそっとしておいて、近くにバスタオルと着替えを置いた後は何も言わずに朝食の支度をする。

そんなティファの様子に観念したのかバランも湯から上がりタオルを使って着替えた。

なぜ男物の服が一式揃っているのだと絶叫したくなるのを我慢しながら。

野菜をくたくたに煮て擂り潰し、塩と胡椒で味つけたスープとさらに混ぜ合わせ即席の流動食を作り、ベッドに二人で腰を下ろし、スープの入ったマグをバランに渡してティファもゆっくりと飲み始める。

渡されて戸惑ったバランもティファが飲み始めるのを見て口にした。

ジャガイモをふんだんに入れたので自然のとろみもつき、ニンジン・玉ねぎ・根セロリの優しい味がバランの弱った体にもしみ込むほどの美味しさであった。

これ程の美味な食事をしたのはいつ以来か？

幼少期はひたすらに、自らの運命を知りヴェルザーと死闘の間も幼少期と同じく生きるためで、魔王軍にいたころは栄養補給の為で味など気にもかけなかった。

ソアラの料理は・・・味こそひどかったが心から美味しいと思った。愛しい妻が、自分の為にひたむきに作ってくれたのだから。

その時の幸福を思い、涙を流しながらバランはゆっくりとスープを味合う。

飲んでくれた、体を治すには食事が一番の基本だ。

バランがスープを飲んでくれるかティファは内心でやきもきしながらスープを渡して平然とした風を装って率先して飲んで、つられるようにスープを飲み始めた父に安堵する。

少しずつでいい、父さんときちんと家族に戻りたい。
この洞窟では何もしなくていい、ただ心ゆくまで休んで。
スープを飲み干すと同時にうつらうつらとし始めたバランの手からマグをそっと受け取り、ゆっくと寝台に寝かせ布団をかけながらティファは優しい手つきでバランの頭を撫でる。
生涯の半分を戦いと復讐に捧げ、安息の時期が一年足らずしかなかった父の境遇に思いを馳せてティファは祈りにも似た言葉をバランに投げる。
「おやすみなさい父さん。」もうゆっくりと休んでいいんだよ。

秘密部屋の秘密③

パンの焼ける良い匂いで目が覚めた。
喉が渇いたと思って周りを見回せば、マグをもって自分のベッドの横に立っているティファの瞳とぶつかった。
「水分多めでお願いします。」
どこか戸惑っているようなぎこちない声で話しかけられ、バランも落ち着かない気分で素直にマグを受け取り一気に中身を飲み干す。
その水は冷たいが硬さがなく、ほんのりとした塩と柑橘の爽やかさがあり体中に染みわたる美味しさだった。
回復の泉と違い肉体的な回復効果は見られなかったが、それは確かに自分の渇きをいやしてくれる水だった。
「・・・一度煮て湯冷ましして塩とレモン入れた水です。」
その美味しさに空になったマグをしげしげと見ていたバランにティファが作り方を教える。
何をどう話していいのか分からないのはバランだけではなくティファとて同様で、なんとか会話の糸口を探し探しで話しかける。
あの三人とは普通に話せたのに。
自分のぎこちなさが嫌になりついガルダンディ・ボラホーン・ラーハルトを思い出す。
鳥のお兄さんは話すというよりは怒鳴りあったのが大半で、ラーハルトには怒られどおしで、まともに会話したのがボラホーン一人であっても少なくともぎこちなさはなかった気がする。
そうはいっても父さん助けるって決めたの自分だ。
「夕飯食べられそうですか？」
とりあえず日常会話から言ってみよう。
明日ダイ兄たちに送るサンドイッチのパンと具材の仕込みは終わった。
「んと～、ダイ兄は肉多めのサンドイッチ、お酒は・・クロコダインとおじさんか。
アメって・・・・ヒュンケル～。」

「ティファ・・その食べながら手紙を読むのは行儀が・・」
「あ!・・・ごめんなさい。ダイ兄達からの返信早く読みたくてつい。」
小さなテーブルを出しまたもやベッドで並んで食事をしていたが、ティファが手紙を読み始めたのでバランとしてもつい行儀が悪いと注意する。
だが果たして自分が行儀云々など人にとやかく言える資格があるのだろうか?
自身の身勝手な思い一つで人間はすべて悪で全滅させるべきなどと神を気取った愚かな自分が。
幸いティファは悪いと思ってすぐに手紙をベッドの枕元に置き中身を教えてくれた。
どうやら自分が眠っている間にティファはディーノ達に大量の昼食と手紙を書き、お礼とリクエストの返信が来たようだ。
「明日は朝から買い物に行ってきます。」
リクエストの食材をベンガーナの朝市で買うために。
「その・・・良ければ一緒に行きますか?」
マグをもって空の底を見つめたままティファは小さな声でバランを誘った。
恐らく父は今まで—日常—というものは無縁だった気がする。それこそ母ソアラとの一年足らずの時とても逃亡生活であり不用意な外出は避け、最低限の衣・住を整えた後はモンスターの肉や自然の木の実で賄っていたとかそんな感じだろう。
足りない野菜はテランの人達と物々交換とか。
本当の人間の営みを見てほしい。
人間とは決して綺麗なだけの生き物じゃない。他人を騙し・貶め・憎み・盗み・貪欲に欲する困った者たちが沢山いる。
それでも負けずに綺麗だったり平凡だったり悪い奴らがひしめき合って生きているのが人間だ。
ベンガーナの朝市はその縮図と言えなくもない。
ティファの申し出を受け、夕食を食べ終わったバランは再びティファと同じベッドで眠る。

行くと答えた自分に驚いた顔をして、次第にほおを緩めた娘はいそいそと空になった互いのマグを片づけすぐに戻ってきて自分の横でスヤスヤと眠りについたからだ。
人間を憎んでいた自分がいきなり憎んでいた相手の日常を見に行くと言えば、誘った方も驚くか。
義理か会話の糸口かで聞いてきたことが、本当に受け入れられるとはティファとても思わなかっただろうとバランは微笑みながらティファの頭をしばらく撫で、壁に灯されている蝋燭を全て吹き消しバランもティファの横で眠りにつく。
朝は日の出とともに起き、ティファはいつもとは違ってフランネルの長シャツにひざ下までのスカートに水色のベスト。
肩口にかかるポシェットの中に五十ゴールドの入りの財布と鋼の剣の入ったリングを入れて、用心のために空飛ぶ靴を着用している。
たいしてバランは普段つけている鎧とモノクルと剣を置いていき、代わりにティファの用意した洋服にそでを通す。
丸首で長袖のボタンなしの綿のシャツに灰色の膝丈まである胴衣を赤い布で絞め、下もシャツの同じ黒のズボン。
ブーツは戦いでも無事だったのでそのままだが、こんな格好をしたことはなく果たして似合うのか等と常の自分では決して考えつかないと断言できることを思い浮かんでしまい消えたくなった。
・・・そもそもこの服は一体いつティファは買ったのだろう？昨日自分が眠っている間に見繕ってきてくれたのだろうか？
・・・やばい、我が父親ながら本気でかっこいい。ソアラ母さんが城を出てまで父さんに付いて行った理由が分かってしまうほどかっこいい。
五年前テランであった父さんの体形と変わっていないでよかった。
まさか我が子が五年前から今日という日が来ると信じて買っていたとは思いもよらないだろう。
そしてタンスの引き出しの奥には三人組の服も入ったマジックリングがひっそりと置いてあることも。

「安いよ!!それでいて新鮮!なのにこのお値段!」
「朝採れたてのトマトだよ～!」
「ステーキに最適な肉が今ならお安く売るよ～～!」
そこは見た事もないような品物の数々、それを声を張りあげて売り上げる店主達、路地に面した棚が空にならないように売れた商品を次々に補充する店員たち。
売り手は大人から子供の姿までである。
だが買い手たちは相手が子供であっても容赦ない。
「このカボチャは虫くってます!五個で一ゴールドなら買いますよ。」
「ちょっと姉ちゃん!こっちも商売なんだ!!」
「でしたらそこの青臭そうなトマトもいただきましょう。十個とカボチャ合わせて三ゴールド。それ以上ごねるなら買いません。」
「足元見やがって!分かったよ畜生!持ってけ泥棒!!」
「いただきま～す♪」
自分よりも年下そうな少年から安く買いたたいた愛娘はご満悦な顔で買い物をすすめる。
「あ!このお肉少し端っこが・・・とればいいか。」
「ちぇ!気が付いたんなら仕方ねえ。おまけするから持ってってくれ、端っこのやばいとこは切っとくよ。」
「その鶏肉もギリギリでしょう。今売って調理してもらえなければここでお腹を壊したお肉売ってると悪評立ちますよ?」
「可愛い笑顔でえげつないこと言ってくれんな～。半値でいいぞ。」
「その代わりこっちのもも肉はもう一ゴールド多めに出します。どう見ても値段よりいい肉ですよね?」
「おっ!分かってんじゃねえか。この肉はな、そんじょそこらの・・・」
安く買うだけだと思えば相手の付けた値よりも高く買うと申し出る。
自分にとってはティファのしている事は訳が分からない。
「市場の人達は皆さん今日の売り上げで次の日に繋げるんです。
良くないと知っていても通常の値段で売ろうとしたり、反対に物が

いいけどこの市では高いと思われる値段では売れないから泣く泣く安い値段をつけたりといろいろあるのです。」
生きていくというのは大変で、悪いと知っていても腐りかけの物を売ってでもという人がいるのは仕方がない。
買い手側がきちんと気が付いて値引き合戦をして、それでも代金を払うように持って行って売り買いするのが市の特徴なのです。
みんな生きるのに精一杯で、買い手側だとてそのことを承知していて余程の物でない限りただで寄越せという愚か者はいない。いたとしてもすぐに周りから締め出されるのです。
値引き合戦をした理由、反対に高く買おうとした理由等、自分の疑問を呆れることなくティファは丁寧に教えてくれる。
「これ食べながらもう少し買い物をします。」
朝採れたてのリンゴを皮つきのままむしゃむしゃと食べ歩きながらティファはふらふらとすべての店を覗き込みながら買い物をすすめていく。
自分もリンゴを食べてみれば、昨日のスープや水のように体に染みわたる美味しさであり驚く。
自分は今まであらゆることを無視して目を向けず、憎しみに凝り固まり一つのリンゴの美味しさにさえ気が付かなかった愚か者なのだと。
そして、日常を営むという事の難しさを。
自分が知っている生活といえば一人で生きていたかせいぜいアルキード国の王宮内。
自分一人の時には小さな村で狩ったモンスター達の肉と自分に必要の物を交換をし、王宮では食事も服もふんだんに与えられただけでソアラとの生活も一人暮らしの時と変わらずで、常人の日常とは程遠かったのだと思い知る。
それに思い至らなければ、粗悪品を高値で売ろうとした少年を汚いものとしか見なかっただろう。
その少年の生きていく糧を思いもせずに。
自分は本当に愚かで物知らずなものだと嫌悪感が増していく。

数千年の竜の騎士たちの記憶をこの身に宿していても、人間たちの生きるという難しさを全く知らず、知ろうともしなかった自分が人間殲滅を考えていたとは消え入りたくなるほどの恥。
その事を、荷物を山ほど持って前を歩く娘が優しく思い至らせてくれる。
強き言葉や激しい叱責ではなく、自分が気づくようにと願ってくれたのだろうか。
「ティファ・・・その・・買ったものは私に渡しなさい。」
ソアラのように重いものが持てないという娘では無い事は承知している。
だからといって、それが自分がなにも手伝わないでいいことの理由にはならないと、自分の顔が赤くなるのを感じながら申し出てみた。
申し出を聞いたティファは、この市に自分も付いて行くと答えた昨夜の時のように驚きながらも、昨夜よりも早く綻んだ笑顔を浮かべてくれた。

秘密部屋の秘密④

買い物から帰ってきた洞窟は森にすむモンスター達と精霊たちと、ティファの来客で一杯だった。

「はりゃ～皆ただいま～。」

ちょっと待っててね～とティファはのんびりと挨拶しながら荷を解き、終えると洞窟の奥に備蓄してある木の実や肉を客達に振舞い始める。

ティファの式能力で作られたマジックリングは特別性であり、中に保管している生ものは全て時間が停止して腐ることはない。

能力は半年位と制限はあるが、その応用で薬草類もストックしておけるのだが何故か加工された食品や薬にはその能力が適用されずに、一番ストックしておきたい万能薬に使えないのが泣き所だが、不意に来る友人たちをすぐにもてなせるのでこれはこれでありだ。

ニコニコしてしゃがんでスライムやドクタケ等小型のモンスター達を撫でている姿を見て、バランの瞳にうっすらと涙が浮かぶ。

ティファは覚えていないだろう、昨夜の事を。

「いやぁあああ!!」

夜中に娘の叫び声で目が覚めた。

何事だと直ぐに体が跳ね起き隣にいるティファを見てみれば

「・・・めんなさい・・・いや!死なないで!!」

ベッドの上で自分同様上半身を起こし、何もない天井に両手を伸ばしながらひたすら謝り続けている。

それこそ必死に許しを請い、血を吐くがごとく呻き泣きながら。

瞳を覗き込んでみれば焦点があっておらず、錯乱をしているようだ。

殺したことを詫びる・・・きっとガルダンディ達の事を夢に見て・・

あの三人と娘は本当に心を通わせていた。会ったのがたった三度であろうとも。

その三人と娘を戦わせる事態を作ったのは自分なのだ。なんと罪深く酷いことをしてしまったのだ自分は。

バランは罪悪感に打ち据えられながらも錯乱を続けるティファを膝に乗せて胸に抱きしめる。
ティファは滅茶苦茶に泣き叫び、疲れて眠るまで一時間を要した。
それでもバランは一度としてラリホーを使おうとは思はなかった。泣きたいだけ泣かせ、悲しみは全て受け止めよう。
それでティファの心が救われるのならば、ティファの心が本当の元気を取り戻せるまで側に居続けると決めたから。
そんなティファが穏やかに笑っているのだ、心の底から嬉しく思う。
「―竜の騎士様⁉―」
穏やかで静かな時間を一人の精霊の言葉で蜂の巣をつついたような騒ぎが勃発。
来た大半の精霊たちはティファと半年ぶりに会えるとほかのことをうっちゃっていたので気が付かなかったが、警戒心が強く臆病だと周りの精霊達からからかわれているエルという精霊がいつも通り警戒していたので気が付いた。
精霊達からすれば竜の騎士は神と精霊王達と同じくらい敬わなければいけない対象であり、うっかりと見逃していましただなんてマジ不敬罪もんである。
「私の父さんだよ。」
しかも友人の女の子ティファから爆弾発言！
おまえは人間の子だろ!!
精霊達の全てがティファの正体を知っているわけではない。
神と精霊王達から特別任務を言い使っている精霊達のみが知っているシークレットであり、そこらにいる精霊たちはティファの素性を知らない。
いきなりの竜の騎士様の降臨と長年友情を築いてきたティファからのいきなり告白に精霊達はぶっ飛んだが、更にぶっ飛んだものがいた。
「ティファ！いま・・そなた私の事を・・」
ぶっ飛び絶句をしたバランだった。

よもやこんな罪人を友人たちに自分の父親だと言ってくれるとは夢にも思わなかったからだ。
「でも・・私の父さんでしょ?」
三人の大切な配下を倒した自分にそう言われるのは嫌かと泣きそうになるティファを、気が付けば胸に抱きしめていた。
嫌なわけがない!自分はティファとディーノの父であり、紛れもなく親子なのだ。
「ティファ、お前は嫌ではないのか?」
こんな自分が父親であることが嫌ではないのかと問えば無言で胸を叩かれた。
何度も何度も、自分の言った言葉を打ち消すように。
その様子を心配をした小さなスライム達はティファの肩に乗り頬を擦りつけ、他のモンスター達もキュイキュイと案じた声を出しながらティファの背や足を一生懸命にさすり始める。
泣かないでほしいと、そして泣かせたバランを責めるように見つめる。
我が子はどうやら沢山の良き友人たちがいる様だ。
我が子の友人たちに、バランは感謝の眼差しを一人一人に向けて頭を下げる。

こうしてバランは洞窟の客たちの信頼も勝ち得て娘との短くも濃い共同生活が始まった。

秘密部屋の秘密？

ティファの客達を見ててバランは一つの決心をした。
ティファの心が治るまでは石にかじりついてでもティファのそばを離れない。
「そんな母さんが・・」
「そうだ、ソアラは素晴らしい女性であったが・・その・・料理が苦手だったのだ。」
「父さん何食べてたんですか？」
「大半は私が作って時折ソアラが作ってくれたものだ。」おもに焦げた肉や味が濃すぎるか薄すぎるスープなど。
最愛の妻との思い出話や
「そう、ラーハルトさんが父さんたちの日常見てくれてたんだ。」
「うむ、何せ男所帯で日常を回せたのはラーハルトしかいなかったからな。」
ガルダンディとボラホーンは着の身着のままで注意しなければ風呂にも入らず、辛うじて川で水浴びをする程度で、身の回りの用意の全てはラーハルト頼み。
ラーハルトは小さき頃に拾ったが、育ち盛りの服は自前で賄っていた。
「・・・神秘的でかっこいい服着てるな～って思ったのって・・」
「あの服が一番作り易かったからだと言っていたな。」
ギリシャの服を思わせる軽装の上に、最低限の防具だけをつけた姿はかっこいいではなく、単に作りやすさから生まれたものだったなんて・・テランの子供たちにはそんな裏事情は内緒だ内緒。
配下の竜騎衆との日常をできうる限りティファに話して聞かせることを徹底して心がけた。
ティファは洞窟にて休んでいたのはたったの半日で、一行の昼食づくりを終えて鳩に託して送った後は万能薬作りに勤しんでいた。
後何日かすれば鬼岩城がパプニカに来てしまう。その前に大量の万能薬をストックしておくことが、今の自分に与えられた仕事だと休

む暇を惜しんで。
何かに駆り立てられるようにして真剣な表情で薬作りをしている娘の邪魔をするつもりはないが、時には休憩は必要だと自分でお湯を沸かして二人分のお茶を出した時にはとても驚かれ、其の隙を突くように根を詰めては体に毒だと言えばさらに驚かれ、頷いてお茶を飲んだティファの顔は呆けていた。
普通に美味しい
「こいつめ。」
なんとも褒め言葉になっていない率直な感想に苦笑いがこみ上げ、気が付いた時には自然とティファの頭を撫でていた。
撫でられたティファと撫でた自分、果たして驚いたのがどちらだったのか。
それでもティファは嫌がらずに黙って撫でられ
「お茶なら、クッキーの余りある・・」
ポツンとものついでに言ったような話し方で茶菓子を出し、次の日からはお茶を出すのが休憩の合図となり、少しずつティファの知らないソアラと三人の話を聞かせて過ごすのが日課になった。
自分の中にあるのは決して憎しみだけではない、幸福な思い出が、何気ない日常の幸せがあったのだと話しているうちに甦る。
そのことを忘れはて、世界を憎んでいた事すらが不思議なほど自分は幸せ者だったのだとうちのめされた。
だがそれでもいい、自分の罪に押しつぶされようとも。
「ふへへ・・かぁしゃん・・・」
話をしてから四日目の夜からティファに変化が起きたから。
その前の日からうなされても軽いものであり泣き叫ぶことはなかったが、夢を見ながらティファが笑ってくれた。
昼日中でも自分の思い出話にほっこりと笑い、ソアラと三人の失敗談に吹き出して笑い、友人たちと笑いさざめくティファに安堵し、夢を見ながら笑う娘をそっと包み込んで声なく泣いた。
娘の心の傷全てを癒せたなぞとは思ってもいない。
それでも三人の死を夢に見ることなく楽しい思い出話で笑ってい

るのを見て、本当に嬉しくて涙が止められない。
こんなに涙を流したのはソアラを失った時以来。
あの時は世の全てを失った思いがしたが今は違う。
ソアラよ、私は今度こそ大切な者達を守り抜く
ティファだけではなくここにいないディーノも、全身全霊を使ってでも守り抜く。
父の温もりの中、ティファは少しずつ前に歩き始める。
この後の事を知っているからという義務からではなく、仲間を・家族を守りたい
ただ純粋な思いで薬を作る。
時には休憩をはさみ、時には鼻歌を歌いながら兄達を思い、お世話になっている―おじさん―に思いを馳せて、穏やかな時を思いがけずに過ごす。
しかしそれだけで済まないのがティファに日常であり、ティファの心をかき乱す出来事が休日三日目に起こった。
―カシャン―
「そんな・・・おじさんが・・」
血を吐いたっていう事は内臓系だ!ポップ兄の手紙に仔細書いてあったけど、なんて理由でハドラーとベギラゴン打ち合っちゃったの!
「薬・・・違う!あった!!」
万能薬を途中まで作り上げていたティファが、鳩に付けられた返信を読んですぐに顔が青褪め取り乱しながら薬棚から薬草を数種出し、それまで作っていた物を全て惜しげもなく廃棄して新しい薬を調合し、瓶に詰めて手紙を添えて再び鳩を送り出す。
夕日に背を向けて宵闇に飛び立つ鳩の姿が見えなくなるまでずっと見送って。
まるで自分こそが行きたいというような切なげな顔をして。
「今日はもう休もう・・」
お昼に沢山パンを作ったからそれでスープがあればいい。
その日の夜はティファは確かにうなされることはなかった。

高齢のおじさんに魔法の打ち合いなぞ自殺行為だ。
会いたい・・でも会いたくない・・・会ってしまったら、自分はきっとおじさんに縋りついてしまう。それだけは・・
翌日になっても父は何事があったのかを聞いてこない。
バランの優しさにまた助けられる形となった。
騒動の内の三つの内の一つは慌ただしく始まりこそすれ静かな幕切れで済めた。
日を追うごとにに食欲と血色が良くなるポップの返信手紙が功を奏して。
読むたびにティファの表情も落ち着き穏やかな日常に戻れたが、少しだけ困った事がある。
夕刻よりバランが微熱を出すこと。
薬を飲めば一時間もしないうちに熱は下がり、体に何の影響もなさそうに見えるのだがティファが心配をする。
何もないなら熱が出るはずがない
体の調子が崩れているのは分かるが、どう悪いのか分からずに手探りで薬を飲ませても次の日も改善されずでティファが泣きそうなところに意外な救い主が現れた。
「ポップ兄のぶわかあああ!!!!!」
休み九日目の夕方、洞窟に大絶叫が迸った。
返信手紙をいつもの如くルンルン気分で見ていたティファの形相が見る見るうちに変わりはて、周りの来客もバランも何事だとティファに声を掛けようとしたその時に大絶叫。
鬼の形相で叫びあげ、手紙を握りしめて肩で息をしながら仁王立ちをしているティファに、バランも含めた周りは本気でびびった。
屈強な精神を持つバランを本気でビビらせる偉業を達成してしまったティファは憤怒の形相を父に向け
「父さんはザムザという人を知っていますか！」
説明もなくいきなり同僚の息子の名が上がり違う意味でバランはぶっ飛ぶ。
だがザムザを知っている、軍の中で二・三度会った好青年であると

告げれば
「今その人がこのモンスター筒に入ってます！」
なんだそれはと心底驚き、先程ティファが読んでいた手紙を自分も見てみれば心底がっくりと来たくなった。
ディーノとあの少年ポップはもう少し賢いイメージがあったのだが。
親子そろって兄達のしでかしたことにがっくりと肩を落とす。
やっている事自体は悪いことではないので文句を言う筋合いはないのだが、こんな大事を手紙一つで頼む兄にも困ったものだと思いつつ、ティファはザムザを筒からベッドに場所を変えて手当てを始める。
内臓系のダメージは自分が兄に渡した生命力特化万能薬であらかた治っているので栄養剤を処方してゆっくりと吸い飲み流し込む、飲んだ後は放っておき、自然に目が覚めるまで待つことにした。
ティファが夕餉の支度をしている間、バランはザムザを見ていた。
それはザムザを見ているというよりも、ザムザを通して息子たちがしようとしたこの行為に戸惑いと僅かな嬉しいという自分の中の思いを見つめている。
少し前の自分ならば敵を助けるなどは甘いことだと切って捨てていただろうに、助けようとしたディーノ達を眩しく思う。
自分も己の邪魔をした魔法使いの少年を助けはしたがあれは贖罪であり、ザムザはディーノ達にとっては助ける謂れの全くない敵であるのに助けようとした。
ティファの優しさが仲間たちに伝わった結果だろうか？
敵で現在の大魔王と同じくらいの脅威である自分に、戦いのさなかであっても手を差し伸べてくれた太陽のような娘の優しさが。
「バラン様⁉」
つらつらと考え事をしていればザムザの絶叫で現実に引き戻された。
この洞窟はよく絶叫が響くところなのだろうか？
説明するのももどかしいので、ザムザが何かを言う前にポップの手

紙を押し付けた。
案の定ザムザは無駄な事を言わずに食い入るように手紙を読み全てを察したようでがっくりと肩を落とす。
「・・・まさか私を助けるだなんて・・・」
この場合ザムザの言っている事の方が正しい。自分もその気持ちがよく分かるが、折角子供たちが必死で助けた命を無駄にされては大変困る。
「これからどうする？」
短いながらも様々な意を込めて尋ねてみれば、軍を抜けるとあっさりとした答えが返ってきた。
「元々父の手伝いで入っただけですので。」
自分とやりたい方向性は全く違い、軍の技術班はとにかく手柄狙いで鵜の目鷹の目でギスギスしていて嫌気がさしていましたとあっけらかんと言われたバランはそうかの一言しか返せなかった。
ここが武人と科学者とやらの違いだろうか？
サバサバとしたザムザを見てバランはしみじみと思ってしまった。
「それでこの手紙に書いてあるティファさんとはどなたの事でしょうか？」
どうやら自分が助かったのはダイ達の恩情のおかげのようだが、実際に助かったのはティファさんという方の薬のおかげらしいので是非礼を言いたい。
「ああ起きましたか、ただいまです父さん。」
ザムザが礼をしたい相手が、ちょうど木の実とりから帰ってきた。
たまにはデザート欲しいと早生のリンゴを取ってきたところに父と他の人の話し声が聞こえたのでダッシュしたらザムザが起きていた。
お互いに名乗りあい、ザムザはお礼をティファもあっさりと受けてお互いにくどくどとはしなかった。
双方武人肌よりも理系であるのが理由かもしれない。
ダイ達がどんな薬を使って自分を助けてくれたのかがザムザとしては気になっており、ティファは快く薬の成分表を見せればザムザの

目が点になった。
　こんなにいくつもの種類の薬が、互いを打ち消しあうことなく調合をされているとは！
「何かをするのならば悪い事よりも良い事を研究した方が楽しいですよ。」
　それは地上でだけではなく魔界でも当てはまる考えだとティファに結ばれた。
　薬の凄さだけではなく、自分を諭すのに自然と魔界の事にまで言及する娘にザムザは穴が開くほどティファを見続け、何かに納得したように頷く。
　ザムザが目覚めたことで夕餉となり、ザムザはバランに初日に出した流動食もどきを出したところいたく褒められてティファを赤くさせた。
「ティファさんが目指しておられるのは医食同源ですね。」
　ザムザの的確な褒め言葉にティファは赤くなりながらも興奮し、自身の目指している事を理解してくれたザムザの手を千切れんばかりに振って大喜びし、その夜は遅くまでザムザと共に万能薬作りに励んだ。
　ザムザも新薬作りを楽しむ傍ら、微熱を出したバランを軽く診察するとおもむろにティファの許可の下薬の棚から数種の薬草を出して調合を始める。
「おそらくバラン様の内臓のどこかに傷があるのでしょう。バラン様は竜の騎士であるゆえ人用の薬では治りづらいかと。」
　僭越ではあるが作りましたとあっさりとティファのお悩みを解決してくれた。
「そっか・・・人用じゃダメだったか・・」
　的外れだと落ち込むティファをバランとザムザが慰めつつ、次の日に鳩を出したティファは出掛ける旨と、二人には自由にしてほしいと言い残して鬼岩城戦へとガルーダと共に飛び立った。
　ここに残るも旅立つのも自由であり、いつでもこの洞窟を使ってもいいと言い残して。

それが今朝の話だったけど、またこうしてザムザさんと薬作ってるのが不思議だ。
「明日またすぐ出かけます、朝食は置いて行きますね。」
「申し訳ありません。私もしばらくここを拠点にさせていただいても？日常品はモシャスで人になって買いに行きますので。」
「分かりました、自由にお使いください。」
その様子をガルーダは寝そべりながら見るともなしに見ている。
魔族と共に人を助ける薬を作る不思議な子だと思いながら。

一行の料理人の到着

鬼岩城襲撃の次の日の朝にはもうパプニカの朝市は滞りなく開かれた。

被害は精霊達と一行の料理人の策略により沿岸部分のそれも一部だけであり、内陸部の人間たちは商魂たくましく商売に勤しむ。

何があろうとも日々の糧を切らせないように

魔王軍が来ようとそうでなかろうと世界が続く限りは生活があるのだから。

朝市は生活必需品の他にもアクセサリーや花屋もたまにある。

その花屋にパプニカの三賢者の一人エイミの姿があった。

今パプニカ城内には勇者ダイの一行が滞在をしている。

昨日から一行の料理人を待つべく、とてもピリピリとして鬼岩城が攻めてきた以上のプレッシャーを城内に感じさせてしまっている。

そんな一行とヒュンケルの見舞いもかねてエイミは疲れた体をおして花を求めに朝の市場に訪れたのだ。

一行の全員とは面識が出来、苦楽を共にした家族同然の人達に少しでも和んでほしくて。

そしてできればヒュンケルに喜んでほしい。

自分はあの人が好きなのだ、元魔王軍でこのパプニカに攻め入り主家を脅かした相手であったとしても好ましく思いは消えてはくれない。

彼は今償いの道を歩いている。茨の道を自身が傷つくのも構わずにもう一人の償い人である獣王と呼ばれるクロコダインと共に。

二人の迷いなき光の道を歩く姿にエイミの心から憎しみは消え去り、クロコダインには尊敬の念を、ヒュンケルには好ましさを覚えた時は戸惑いもした、困惑というほどに。

元であっても敵は敵だと言い切れない信念を二人から感じ、あの正義感の塊のアポロが率先をして二人を心から尊敬している程の潔さを憎めるはずもなく、エイミは花束を抱えて王城に急ぐのであった。

衛士二人に軽く頭を下げ少々行儀が悪いと知りつつ小走りで城の

廊下を走って目的の部屋に急いでいる途中で先程門にいた衛士が大声で自分を呼びながら走って追いついてきた。
「何事です、少し落ち着きなさい。」
自分の事を棚上げているのは分かっているが、今の城内では普段以上の行動をしないといけない。
何故ならば世界サミットの為に各国の王族たちが集まりまだ城内に滞在をし、もしかしたら朝からであっても昨日の襲撃と見せつけられた魔王軍の脅威について会議をしているかもしれないからだ。
「申し訳ありません！」
まだ年若い衛士はぴしりと直立不動で不手際を詫びたが、なぜ取り乱したかの説明をされてエイミは納得をした。
エイミが城内に入ってしばらくして、勇者ダイの一行の者だという名乗った者がいた。
「その・・・料理人と名乗ったのですが、そのような職業は自分は聞いたこともなく同僚も同様でして・・」
そのような胡散臭いものの対応に苦慮して少し前に通った三賢者様にすぐに追いつくべく猛ダッシュをしたという。
「その方は名乗られましたか？」
「はい、勇者ダイの一行で料理人をしているティファだと。」
「・・・分かりました、私が対応をします。」
とうとうティファさんが来た。
年若い衛士は自分の言葉にホッとして、何かを話しかけてきたが全く耳に入らなかった。
昨日から一行の者達を待たせている料理人、それもヒュンケルに優しい微笑みを手紙一つで浮かべさせられるティファさんとは一体どのような—大人の女性—か。
エイミの思い違いはティファの情報が一切入ってこず、これまでの行動や手紙の内容のみでしか判断出来ないのが原因であった。
ダイ達はわざわざいないティファの年齢容姿などを話す理由がなく、レオナも何かと忙しいので右に同じであり、従ってエイミの想像と実際は違うわけである。

その実際との違いをばっちりと知らしめられたエイミは料理人を見てフリーズを起こしてしまった。
「初めまして、私は今ここの逗留している勇者ダイの一行で料理人をしているティファと申します。ご不信がおありのようでしたら一行の誰かにティファが来たとお伝えいただければと思いますがよろしいでしょうか？」
礼儀正しく、口上も言っている内容もきちんとしている少女が勇者ダイの一行の料理人のティファさん！⁉
黒くてふんわりとした髪を左右に一房づつ垂らし残りはポニーテールで結い上げ、長袖の詰襟の水色のスカートに下にシルクの長ズボンを履いており、水色の大きいなリュックを背負い、顔のサイズと全くあっていない大きな黒縁眼鏡をかけて穏やかに笑っているこの女の子が？
身長はどうやらダイ君と変わらないけれど・・
「ティファ!!」
エイミの戸惑いを断ち切るかのような鋭い声がエイミの横を通り抜けた。
緑の法服に黒髪に留まっているオレンジのバンダナ姿の彼は
「ポップ兄！」
一行の魔法使いポップだ。
うわ～いポップ兄が出迎えてくれたよキャッホー♡
「遅えぞ馬鹿！みんな心配したんだぞ!!」
「はりゃぁ～、でも無事だってダイ・・」
「そんでも心配したんだよ！ちっとは大人しくしろ!!」
「・・は～い・・」
「ったく分かってんのかよ本当に。おっと、おはようございますエイミさん。
いや～朝っぱらからお騒がせしちまって申し訳ねぇ。」
「・・・主に騒いでたのってポップ兄だけだと思うよ。」
「やかましい。」
エイミはポップの対応の仕方で確かにこの少女が一行が待ちわび

ていた料理人であると確信をしたが、ポップの遣り取りで別の戸惑いも生じた。
今までエイミの見てきたポップは努力家でありあのマトリフからの扱きに耐えるどころか自ら望んで力を蓄え一行の頼れる魔法使いの部分が圧倒的であった。
それがティファの前では年相応の子供にしか見えない。
兄妹なのだろうかこの二人は？
「ほれティファ、エイミさんにきちんと挨拶したのかよ？」
「あ！ポップ君、私は先程ティファさんに挨拶を受けたの・・」
「あ～そんでこいつ見て驚いたでしょ。こいつ見た目こんなんでも俺達の料理人なんだよ。」
「こんなのってポップ兄～。」
「しょうがねえだろ？お前のしてくれてることと歳ってさ・・分かんだろ？」
「それ分かるけど・・」
「だったら実際のお前見てもらった方が早いの。」
「む～、ふんだです。」
心配したのだと叱りながら抱きしめた後は、兄が妹を紹介するように頭をポンポンと優しくたたき、むくれている妹のほっぺを楽しそうに突いている姿からはそのようにしか見えない。
「挨拶が遅くなってしまってごめんなさい。私はパプニカ三賢者の一人エイミといいます。」
「貴女がエイミさんですか。いつも兄達からの手紙でエイミさんとバダックさんという方に良くしていただいていると。
兄たちがとてもお世話になっているお礼にお茶でもいかがですか？
綺麗な方に飲んでもらえればお茶も喜びますよ。」
まるで女性を口説くかのようなセリフを少女が発したことに可笑しみを感じ、エイミは戸惑いを吹き飛ばされてくすくすと笑ってしまった。
三賢者に選ばれてからはそのような失態を人前で一度としてした

ことがないのに、それほどティファは自然と口説き文句を言って心にしみてしまったのだ。
　お茶のお招きにあずかる旨を話し、城内に入れば今度は音もたてずに走ってくるマァムの姿が目に飛び込んできたと思いきやすぐに横のティファに膝をついて抱きしめていた。
「ティファ・・・心配したのよ・・」
「申し訳ありませんマァムさん、私は大丈夫ですよ。ですから泣き止んでください。」
「ティファ。」
「ほら、貴女には笑った顔の方がよく似合うのですよ。スマイル・スマイル。」
「ふふ、変な顔。」
　ティファを案じ一晩待ちわびていたマァムは気を落ち着かせようとお茶を貰いに部屋を出たところティファとポップの話し声が偶然耳に入りすっ飛んできたのだ。
　心配したのだと涙を流して抱きしめれば、あやされるように背中を優しく叩かれ顔を合わせればニカっとした笑みを浮かべるティファについつい笑ってしまった。
「心配させたお詫びにはちみつレモンティー淹れますね。」
「ほんと！。」
「ふっふっふ、私料理人ですよマァムさん。他にもお土産沢山ありますよ。」
「お！クッキーあるかティファ!!」
「もう、ポップ兄は食いしんぼさん。」
「お前のクッキー美味しいからだよ。それであんのかないのかどっちだよ。」
「ちょっとポップ、食べ物以外ないの？」
「お前だってはちみつレモンティー楽しみにしてんだろマァム。」
「・・それはそうだけど・・・」
「大丈夫ですよ二人とも、はちみつレモンティーもクッキーもきちんとありますよ。」

「おっしゃ！」
「もうポップたら、でも嬉しいわティファ。」
「はい、行きましょう二人とも。」
「そうね、みんな待ってるわよ。昨日会ったチウもね・・」
「お前の薬のおかげで師匠さ・・・」
不思議だわ
ティファが来ただけ、ただそれだけなのにポップもマァムも年頃の少年少女に戻ったようにはしゃいでいる。
そんな二人をティファは優しい瞳で見守っている。
そう、見守っているのだ。まるで大人のように。
先程門前でポップと二人だけの時は兄妹のようにみえたのが幻であるかのように二人に行くように促し、二人も当たり前のように従って歩き始めて話をし、ティファはひとみと同じくらいの優しさを感じさせる声で応えている。大人の女性のように。
一行が逗留している部屋に辿りつき、ポップが扉を開ければすぐさまティファの体が宙に浮いた。
「ティファ！」
鋭い声と共にティファを抱きしめたのはヒュンケルだった。
その声音は切なさと頼りなげな色が多分に含まれており、普段を知っているだけに尚更信じられない光景に映る。
勇敢で百戦錬磨の戦士が、自分の半分しかない少女に縋りつくように抱きしめ、少女の肩口に顔を埋めて震えている姿に。
「ヒュンケル・・・心配をかけてしまって申し訳ありません。ですが大丈夫ですよ。」
先程マァムにかけた以上の優しさと慈しみを込め、ティファはヒュンケルの銀髪に手のひらを埋めて優しく撫でていく。
ヒュンケルの気配を感じて咄嗟にリュックを下に置いたのは正解だったようだ。
おそらくヒュンケルは自分が城内に入った時から自分の気配を感じて取っていたようだが、長兄として弟・妹弟子に順番を譲って部屋で待っていたのだろう。

「ティファよ。」
「・・クロコダインも本当に申し訳ありませんでした。」
そしてクロコダインも。
勇猛果敢な獣王の目にも安堵と慈しみがこもっている。
ヒュンケルが震えながらティファを抱きしめても部屋で待っていたクロコダインとメルルとチウは大きな大人がと笑わなかった。
ポップとマァムに至ってはうっすらと涙が滲んでいる。
ヒュンケルの気持ちがよく分かるから。
自分達も尊敬している亡き師と同じくらいティファを慕っている。
そのティファが敵の手によって姿をかき消した時には心臓が凍る思いがした。
今だとてティファを捕まえていないと消えそうで恐ろしい。
ヒュンケルは自分達以上に親しき者を目の前で亡くしているのだから尚の事。
ヒュンケルはティファを慕っている。幼子が母を慕うように無心で一途な慕情は、好意を持つエイミにとっては胸が潰れそうな思いがした。

兄妹

はて、これは一体どういった状況かの？
ダイ君たちの仲間が到着したというので来てみれば、ダイ君の膝の上に同年代の女の子が乗っておる。
他の一行メンバーはお茶の支度をしているが
「エイミ殿、料理人殿が来たと聞いていたのじゃがな。」
エイミ同様マトリフの洞穴でダイたちのお相伴を預かっていたので是非当人にお礼をと思っていたのだが。
「その・・・あの少女が料理人のようなのです。」
この状況に困っているのか、料理人の子が想像と違って若いのに戸惑っているのかエイミの歯切れが大変悪い。
状況に困っているのはエイミも同様なのだ。
ヒュンケルがティファを抱きしめ暫くして降ろされたのを見計らったようにダイが入ってきた。
「おはようティファ！みんなときちんと挨拶した？」
朝早くなのに物凄くさわやかな笑顔で。
「ふぁ！えっと!!メルルさんとチウ君まだです!!!」
その笑顔にティファは完全にビビった。
あれは心底自分に怒っている時の顔で、二人っきりになってたら何されるか分かんない顔だ！
不味い不味いよ!!私の執行猶予は皆に挨拶してる間だけだ！
・・・・観念しよう。・・短い自由だった・・
「メルルさんチウ君おはようございます。昨日はお疲れさまでした。」
内心のしくしくは表に一切出さずにティファは二人を労りながらお茶の準備をてきぱきと進めてリングから茶葉と茶器人数分と、はちみつ瓶とレモンと小刀出したところでダイに捕獲されて強制的にお膝にだっこの状況の完成と相成った。
あまりにもダイの気配が怖いので、一行全員ティファには悪いけれど勇者宥めての無言のお願いにティファは引き受けるほかなく大人しくされるがまま。

マァムとしてもティファが入れてくれたお茶を飲みたいところだが空気を読んで断念した。
「・・・・ダイ君ってティファさんにはおっかないんですか？」
パーティー新参者のチウが、聞きやすそうなメルルに小声で尋ねてみる。
「ダイさんはティファさんの事をとても大切にされて心配しているだけなんです。」
チウの不安をメルルが吹き飛ばす。
ダイは兄として妹を案じ、無茶しそうなティファにヤキモキして強く行動に出てしまうのだと。
「あの二人兄妹なんですか。」
ならば身内の事は他人がどうこう言ってはいけないとチウは大人しく引き下がることにしたのだった。
「えっとバダックさんとお見受けします。ってダイ兄降ろして！挨拶位は!!」
「挨拶終わったらきちんと膝に帰ってくる？」
「う・・」
「くる？」
「・・・戻るから！自分で兄の膝戻るから！でもせめて全員分のお茶は淹れさせてね!!」
「分かった、戻るんならいいよ。」
鬼畜兄！過保護!!はずい！・・・・でも約束しないとずっと降ろしてくれないの目に浮かぶ・・
何の罰ゲームだと内心で泣きながら無事にバダックさんに挨拶できたので良しとしよう！
二人は深々と挨拶をかわし、ティファはバダックもお茶に誘っていそいそと入れ始める。
「レモンいる人・はちみついる人どなたです～・」
「クッキー・マフィン、お好きなジャム付けてどうぞ。」
「ヒュンケル、アメはほどほどに～」
ティファは支度を終えて、出来たのは宮廷にも劣らない豪華なお茶

会だった。
　お茶は全員にいきわたり、テーブルの上はお茶の他にもバタークッキー・マフィン・プレーンスコーンが並び、添えられるジャムが数種類
「ジャムはイチゴにオレンジ・オレンの実です。」付けてもそのままで食べてもおいしいです。
　食べ物のみならず並べられている茶器・食器・スプーン一式全てティファが用意をしたもの。
　大勢でいつでも使えるようにと、ベンガーナのデパートで買い求めたものを常にリングに入れて持ち歩いており、時折磨き粉で磨いているので銀食器に曇り一つない。
　様々な説明をダイの膝の上でニコニコとしているのを除けば真っ当なお茶会・・だと思っていたのだが。
「ティファ、お茶はストレートでいい？」
「クッキーにジャムたっぷりでしょ。」
「ほらこぼさないで。」
　なんとダイ手ずからティファにお茶を飲ませたり食べさせたりしている！
「ふんむ・・兄・・自分で・・」
「他に何か欲しい？」
「・・・スコーンにオレンの実ジャムたっぷりで・・」
「うん、たくさん食べてねティファ。」
　食べさせているダイはご満悦で、ティファの口端にかすが付けばすぐさま指でふき取り食べてしまう。
「いっぱい食べてふくふくになるんだよ。」
　スコーンやお茶をティファが飲み込むたびに、ダイはティファのお腹を両手でそろりと撫でる。
　テーブルで見えないからいいようなものの、一行の誰かに見られでもしたら様々な意味でアウトだ。
「もう！ダイ兄は私の事太らせたいんですか？」
「違うよ、ティファが痩せすぎて心配なんだよ。」

確かにダイの言う通りティファは少々細すぎる。腰も肩も折れてしまいそうで、手も他の年代の子に比べると少しばかり小さく頼りない感じがする。
何で中身と外見比例しないのかもっかティファの悩みなのをダイがドストライクで突いてきたので反論せずにむしゃむしゃ食べる。
その様子にダイの表情が少しずつ和らぎ、そろそろ許してもいいかなと思いながらお茶を楽しんでいる。
二人っきりならこんな甘いお仕置きじゃないんだけど
ティファの柔らかそうな耳を肩を背中を、服で隠れる二の腕に噛み後を付けるほどお仕置きしたいが今は出来そうにない。
「あの・・ダイ兄・・どうぞ・・」
恥じらいながらもオレンの実のジャムをたっぷりと付けてくれたスコーンで許してあげるか。
「いただくねティファ。」
オレンの実はこの世界ではデルムリン島にしか存在していない唯一の果実。
近くの島にもなく当然流通もしていない。
さっぱりとして甘すぎないこの果実のジャムが一番好きで、ティファが作って俺に食べさせてくれるかのが嬉しいんだ。
ダイに食べさせてもらい満腹になったティファは、自分もダイに食べさせてみる。
兄の好物など知り尽くしているのでオレンの実のジャムをたっぷりと付けて。
甘くなった二人の雰囲気に、周りは心底ほっとしたのであった。

躓き

兄の膝の上であっても鬼岩城戦での出来事を余すことなくティファは聞いた。

一行全員の活躍を聞きたいと言えば照れ臭くて活躍をしていないと固辞したポップ達に微笑み、ならばどう考えて動いたのか知りたいのだとさらに言えばお互いの活躍をそれぞれに言い始めて大いに盛り上がりを見せた。

特にポップの指揮能力はさらに増しており、如何に冷静で頼もしかったかをメルルを筆頭にいダイもマァムもチウとても賛辞を惜しまずポップを大いに照れさせた。

みんなそれぞれ成長をしている、ポップ兄がその筆頭か。

少々臆病なところがあってもそれを圧倒してもおつりがくるほどの勇気の持ち主の兄が、マトリフ老師に死ぬ気で師事をしていて原作と同じ成長速度であるとは思っていなかったが予想以上。

それに負けまいとして皆も強くなる道をひた走る。まるで灯火のようだポップ兄は。

勇者一行がひた走る道を照らす力強い炎。ポップ兄ますますカッコよくなってる。

誰がどう動きどう考えどう動いたかの他に、特筆すべきはやはりメルルの能力だ。それをもってして自分達は鬼岩城戦に行けたのだとポップの手放しの讃辞にメルルを赤くさせたのにほっこりとした空気が流れる。

一行の動きにティファは一つ一つを褒めながらお茶をのんびりとすすり、その姿はまるで生徒を褒めている先生のようだとエイミとバダックは思ったのだった。

お茶会をしているさなか、不意に扉が叩かれた音がしたのでエイミが立ち上がり扉を開けるとアポロの姿があった。

「どうしたのアポロ？」

たしか今アポロはレオナと共に王族会議に出席をしているはずだが。

「ダイ君と、料理人のティファさんはいるか？」
「ええ・・」
エイミの返事に失礼しますと声を掛けて部屋に入ったアポロは直ぐに料理人のティファを探した。
ダイは扉の真正面におりすぐに見つかったのだが、もう一人の料理人のティファと思しき女性が見つけられずエイミに尋ねようとしたが
「初めまして。」
自分の下から声がした。
「初めてお目に掛ります、私が勇者一行の料理人のティファと言います。」
にっこりと笑って挨拶をしてきたのが自分の胸元までしかない女の子⁉
エイミやバダック殿が話していた料理人のティファと全然イメージが違う！
・・・・・何この人？
ティファのイメージが全く違うとフリーズ起こしたアポロは固まってしまい、返事をし損ねている事に対して次第にティファが苛立った。
もう少しと待ってみてやったのに挨拶返し無し。
「・・礼儀知らず。」―パタン―
へ？
気が付けばアポロは気が付けば部屋の外に出されて扉を絞められてしまった後だった。
柔らかい手が少しだけ自分をおした感触が後から来たという事は自分は追い出されたのか⁉
「おいティファ！」
ポップが何かを言いかけたがやめにした。ティファの表情から察するに相当怒っているようだ。
テーブルに着いたティファは今度はダイの膝には戻らず新たに自分でお茶を淹れて啜りはじめたが、ダイも何故戻ってこないかなどを

言わずに黙ってティファを見守る。
ティファは静かだが瞳の黒色がしんとして冷たくなっている。
あれは妹が相当不機嫌な時の兆候で、下手に突つけばどんな目に合わせられるかわかない怖いティファの時だ。
こういう時はそっとしておくべきであると長年双子をしているダイはよく知っており、他のメンバーも何かを察したのかアポロを追い出した事を聞くに聞けない状態となった。
チウとメルルも怒らせたときのティファの怖さが分かり、鬼岩城戦前のティファからの手紙で何故ダイ達があれ程狼狽えたのか分かってしまい、ティファは怒らせてはいけないと学習をした。
礼儀はある程度の経験がないと身に付かないが、アポロはどう見てもいい年をした大人だ。
自分の見た目に、勝手に想像していたイメージが違うからと驚いてうかつに礼節を忘れていましたで通る年齢ではない。あの人確かパプニカの三賢者の筆頭だよね？
―温室育ち―
あのアポロは戦うスキルがあっても経験はないようで、愚か者は戦場に連れて行っても役に立ちそうもない。
うちの一行のみんなの爪の垢を飲まそうかな？・・・面倒そうだから放っておこう、
ティファの中でのアポロの第一印象は最悪な形で始まった。
お茶を飲み始めて気分が落ち着いたと思ったらまたノック。
今度誰が来たかと思ったら、三賢者の最後の一人のマリンさん来ちゃったよ。
物凄く困った顔で、折角の花の顔が台無しだ。
エイミさんと同じくお茶に誘ってあげようかな？
「私は三賢者の一人でマリンです。料理人のティファさんは？」
またかい、今日はよく呼ばれる日だ。極端な日は人に会うことが全くない日もあることが珍しくない。
むしろ自分に用事があると訪ねてくる人の方が稀なんだよね。
「私です、始めてお目に掛ります。」

次から次へと少しうるさいという内心はばっちりと押し隠したティファはきちんとマリンに挨拶を返す。
感情と礼儀は別であり、先程のアポロのような無様は死んでもしたくない。
「先程は三賢者の一人が無礼をしました、あのものは・・」
「お待ちくださいマリンさん。」
マリンの口上を無礼を承知でティファが途中で遮る。
あの人自分の不始末を他人の、それも女性にさせようっても？馬鹿でしょ。
如何に気まずく入り辛くなったからって自分で来い！
そんな意味をオブラートで包みマリンをアポロの下へと返した。
「いかに私が年端のいかないものであろうとも先程の方がご自分から説明しに来るべきでしょう。
謝罪が欲しい訳ではなくきちんとした挨拶と何をしに来られたかの説明義務があるはずです。
何か私に御用がおありのようでしたが、お話は先程の方からのみ承りたく思いますのでよろしくお願いします。」
「・・分かりました、少しお待ちください。」
にっこりと笑いつつも言うたびに圧を掛けるティファにマリンは折れてアポロを呼びに行くと詫びて部屋を出た。
耳のいいチウとダイの耳に、猛ダッシュで部屋から遠ざかる駆け足の音が入ってきた。
エイミとバダックはティファの対応の仕方に驚いた。
城勤めの相手に臆することなく、初対面であってもなぁなぁで済ませない貴族か官僚の対応を見ているようだ。
「ねぇティファ、不味くない？」
アポロと面識があり、パプニカに多少世話になっているのにいいのかとダイがティファに聞いてみる。
「不味くありません。あの方は何かしら重要な御用がおありだったのでしょう。」
激戦後の休んでいる一行の下に物見遊山気分で来る人には見えん

かったもん。
「そんな重要ごとを言い遣われた人が挨拶の一つもできないという方がよっぽど問題です。
あの方はこの部屋に来られる程の高い地位におられるようなので尚更最低限の礼儀は守っていただきます。
話はそこからですよ。」
なかなか手きびしい対応に、エイミはさらに驚いたがバダックは納得をした。どう考えてもあれはアポロの手落ちだからだ。
三度の来訪でようやくアポロは不手際を詫びたうえできちんと挨拶をしたところ、ティファも再び名乗り短気を起こして申し訳ないと詫びて来たのでアポロはようやく用向きをティファ伝えられるとほっとした。
「実は勇者ダイと料理人のティファに、各国の王が至急会いたいと仰せつかりました。
お二人ともそのままでよいのですぐに私についてきてください。」
王達に会う
それは一向にとってはまさに青天の霹靂であった。
レオナ姫も姫で王女であるが、彼女も最早一行の仲間でありそれにどこか王族らしからぬところがあり自分達に近い身内だと勘定しているので王族云々は最早明後日の方向にいる。
だが各国の王といわれれば、鬼岩城戦での功績が認められて何かしらの褒賞が与えられるのだろうか？
今までは国からの支援など皆無であり、これを機に援助をしてくれれば楽になるとポップなどは心の中で滂沱の涙を流して喜んだがティファの顔が浮かない表情をしていた。
「呼ばれたのは私と勇者ダイだけですか？」
「その通りです、王達が待っているのでお早く・・・」
「お断りします。」
「なんだと断るだと!!」
ティファの返答に各国の王、特にベンガーナのクルテマッカ王が驚きと共に怒り狂った。

昨日の出来事で天狗になったか！
早朝よりの世界会議の再会の最中に、勇者ダイ達の仲間がこのパプニカ王城に入った方がもたらされ、一行の料理人のティファと名乗るものは誰かと問われたレオナがダイの妹である事を告げた。
ダイ達を自国の勇者一行に認定したロモス王は当然ダイの妹の存在など知らなかったので驚き、フォルケン王も当代の竜の騎士が二人どころか三人もいるのかと驚愕をした。
その二人の驚きをレオナは納得する。自分だとて十日前までダイに妹がいるなんて全く知らなかったからだ。
そんな驚きとは無縁のクルテマッカから提案がなされた。
「ではその二人を呼んで昨日の戦いの褒賞を与えてはどうだ？勇者とその妹ならば体裁は整うだろう。」
昨日の大活躍を見て何の褒賞を与えないのは不味いだろうが、全員と会うとなると元魔王のメンバーとも会うことになる。
昨日はその事を散々な形でレオナ達に言ってしまった手前、手の平を返すような真似をしたくないクルテマッカの思惑満載な提案であった。
勇者ダイだけを呼べば露骨に元魔王のメンバーに会いたくないと言っているようなものだが、―一行の代表―として二人を選んだのだとしえておけば問題は無いだろう。
その案の思惑を知ってか知らずか満場一致で可決され、レオナは会議室の前に護衛として控えていたアポロに早速二人を呼びに行かせたが、アポロの不幸はレオナがティファの名前と職業だけで、きちんと素性まで言及をしなかったことだが誰もレオナを攻めまい。
世界会議開催だけでも大仕事なのに、開催してみればワンマン王に癖のある王もいて、進まない会議の途中で絶体絶命の襲撃に、撃退しても怪我人の救護と被災者たちへの救援物資送りと炊き出しと被害状況調査とやること山積み。
ほぼ一睡もできない肉体的にも精神的にもギリギリなところに料理人のティファの素性など勘定からこぼれてしまっても仕方がない。
そんなところに料理人のティファが謁見拒否ってどういう事⁉

あの子は礼儀正しく、ダイ君と違って常識・良識とかが大丈夫そうだったのに！

「畏れ多いと恐縮してしまったのですか？」お願いだからそうだと言ってちょうだいアポロ!!

そうだ、強いと言ってもなんとなれば少年少女の一行であり、恐縮してしまったのならば優しく諭してやろうとクルテマッカを筆頭に思い始めたのだが、レオナの願いも虚しくアポロはそうではないと言ったのでぶち壊しになった。

ティファは強い意志を持って言ったのだ。

「一行全員で謁見することを許可されない限りお断りします。」

王城決戦⁉①

アポロのティファの伝言により王族たちが騒ぎになったように、断りを入れたティファのいる部屋でも大騒ぎになった。

なんとなれば自分達よりも立場が上の雲の上にも等しい各国の王達の謁見許可をティファがにべもなく断ったからだ。

マァム・メルル・ポップなど庶民出身は青褪め、ダイやチウといった身分にかかわりなく生きてきた二人も不味い事だと分かり、ヒュンケルとクロコダインなどは折角自分達を受け入れてくれかつ今の勇者一行の面倒を全面的にバックアップしてくれているレオナ姫の面子をつぶさないかと泡を吹きたくなる。

だが二人も伊達に軍団長はしてきていない。

ティファが断った理由もきちんと筋が通っているのだ。

「断るとは⁉」

アポロもまるで予期していないない答えに泡くった。

「もしや畏れ多いと？」アポロもレオナと同じことを祈るように聞いてみた。

「まったく違います。」

その祈りにも似たアポロの質問をティファはいとも簡単に粉々に砕く。

しかし断った理由の方がアポロはさらに衝撃を受けた。

何故と聞いた自分を、年下の少女は呆れたような目で見てきた。

「何故といいたいのはこちらの方です。なぜ勇者ダイはともかくとして何の功績もない料理人の私が呼ばれたのですか。

いいですか、この度敵を粉砕したのは確かにダイの一撃でしたが、魔法使いポップが作戦及び住民の避難対策を立てて速やかに一般人を逃がせたことで武闘家マァム・戦士ヒュンケル・戦士クロコダインが十全の力を発揮し、敵の強大な力を足止めをしたおかげで勇者ダイは間に合えたのです。

そもそも一行がパプニカの異変に駆け付けられたのも占い師メルルの力によるところであり、一般人の他にも逃げ遅れたモンスター達

をパニックを起こさせる事無く逃がせたのは戦士見習のチウのおかげです。
だというのにまるで戦場に貢献をしなかった私が呼ばれて一行のメンバーが呼ばれないということは異なことです。
よって会うのならば一行全員で御前にまかりこしたい儀を、王達にお伝えくださりますようにお願いいたします。
不敬罪の罪も、後程料理人のティファが受けることも含めて。」
自分の手柄はなく一行の手柄をきちんと激する事無く伝え、その上で今自分がしている事が罪になることもきちんと判断をし、最後の一言は一行には聞こえないように自分だけにそっと伝えてきた少女の見識に驚愕をし、レオナ姫の待つ会議室に向かったのだ。
王族たちが激高するのを予想しても。
返事に行ったアポロが納得しても、一行の方が納得をしなかった。
ティファに詰め寄ろうとしたのを止めたのはこの場で一番の年長者のバダックだった。
「料理人殿、何故お断りを？先程アポロに言ったよりも深い事情がおありかな？」
自分の主の面子を潰されたのを承知したうえで、それでも優しく周りも落ち着かせるように。
一行もだがレオナ姫を敬愛しているエイミも落ち着かせるべく。
「二人でお会いするのは駄目ですかの？」
「私と勇者ダイだけでは駄目なのです。」
ティファもバダックの思いが分かり、思惑に乗っからせてもらう。
手柄云々のような小さなことよりも
「今後の戦いの為にも、各国の王達と今の一行全員とあっていただく必要があるからです。」
より大きなことの為にもだ。
「王達は何故一行全員と会いたいと言わないのか分かりますか？もっと言えば、―誰―と会いたくないと言っていると思いますか？」
「ティファ!!それは・・・」
ティファの言葉に聡いポップが青褪め、心当たりの者達も愕然とす

る。
「ティファ・・」
「それはつまり我らの事が・・」
ヒュンケルとクロコダイン達が苦しそうに答える。
「はい、もっと言えば—今の貴方達—を知らずに会いたくないと言う方か方達がいるからです。
それではいけないのです。
これから話すことは皆さん、特に一行の魔法使いのポップは覚えてほしい事です。」
ティファの表情はこれまで見た事もないような鬼気迫るものがあり、戦い以上の圧を覚えたポップは生唾を飲み込みながら頷き、無言でティファの続きを促す。
ティファも意を得たように頷き続きに入る。
「自軍の致死率が上がる要因の一つに味方の情報不足があると私は考えています。
ポップ兄は一行全員の特性と能力を、弱点も含んで把握している自信は？」
「ある！」
ティファの問いに、ポップは即答をする。
自分は足りないところだらけで、半人前を少し超えられたところにいると思っている。
それでも、勇者ダイの一行の事をだれよりも、それこそ師である大魔導士であるマトリフよりも把握しているとの自負が、ティファの圧をはねのけて答えられる。
その答えにティファの顔が綻ぶ。満点を取った生徒に微笑むように。
「だから昨日の作戦できたんだ。」
その微笑みにポップは赤くなりながら頬を掻いて続きをこたえた。
「その通りです。」
続きの答えにもティファは笑ってくれた。
「ポップ兄のように、各国全体の事を王達が把握していただけねばな

らないのです。
　これからは魔王軍の一軍と勇者一行の戦いのみならず、昨日のような大規模な混戦部隊で見知らない他国同士の兵たちが手を携えてで戦うことがこれからはますます増えてくれるはずです。
　その為にもそのトップである王達が、きちんと今の勇者一行を把握していただかなければならないのです。
　個人の好き嫌いを言っている時でも、裏切り者が云々などの倫理を言っている時ではもうありません。
　最前で戦うのは間違いなくこの一行であり、この地上世界の盾となり剣となる者達を、それでも王の個人の感情で会いたいかどうかなどといっているようでは大変困るのです。
　王がそのように考えているのだから我々もと、兵や騎士達にもうつりいざ戦いの時にそのことが影響をしてしまっては戦では間違いなく敗れます。」
　古今東西、内側が弱い軍が勝った試しはない。
　ティファの苛烈ともいえる話に聞いていた一同は青褪めたが、次のティファの言葉に肝が冷えた。
「昨日死の大地にてハドラーと、彼の親衛隊の一人である者に会いました。」
　爆弾発言を自ら落とす。あの後の事を兄に知られれば監禁間違いなさそうであっても言っておかなければならない事があるからだ。
「その者は名前をポーン・ヒムと名乗り、オリハルコン製の金属生命体でハドラーが生み出した禁呪生命体です。
　そのポーン・ヒムからの伝言です。近日中にハドラーからのふるいがあると。
　場所もどのようなことも言いませんでしたが、間違いなく本気でこちらの力量を試してくることが伺われる言葉でした。
　そして禁呪生命体はとても優れた戦士でした。ご存知のように禁呪生命体は生み出すものの力量を表しており、かの者の力量の高さはすなわちハドラーの現在の力量が私たちが知るよりも段違いに上がっているほかありません。

また彼は自らをポーンを名乗りました。察するに他にもクィーン・ビショップ・ナイト・ルークと少なくとも四つの駒もいるでしょう。ヒムと同じかそれ以上の力量を有した者たちが、本気で向かってくると堂々と宣告をしてきたのです。

魔軍司令官とその親衛隊の後ろにもまだ大幹部達と大魔王が控えているのです。それは間違いなくハドラー達以上の強さを秘めた者達が。

それこそ勇者ダイの一行とだけでは勝てず、バラバラの国々の混戦部隊が束になっても勝てないだろうと容易に想像がついてしまうほど相手との差があるを現状を王達には理解をしていただかなければいけない事態なのです。今のままでは負けるのが容易に浮かびます。」

勝つ見込みがどこにもない。

ある意味において大魔王の方が公平なんだよね。力・能力があり利害が一致すればば種族・性別関係なく、人間であるヒュンケルでも、天界の生み出せし竜の騎士バランであっても重用して軍団長にしてしまうんだから畏れ入る。

そんな懐のでかい相手と世界大戦とかって本当勘弁してほしい。

でも始まってしまったからには仕方がない、そもそも私は起こること自体知っていたんだから泣き言を言う資格がない。だからこそここらでこちら側の結束も固めておきたい。

「どんなに個人が気にくわずとも、戦においては能力もさることながら、他国の者であっても手を携え、如何なる場合においても背中を合わせる団結力が必要なのです。

危機に陥っても心折れず仲間を見捨てず自分達の判断しかなくとも命を預けあい戦い抜くほどの強さが。」

死なないために、味方だけでなくその人自身も死なないためにも。

「仲間同士で力を合わせ、魔王軍とは違い心も結束をしていかなければならないのです！」

こちらの方は悪魔の目玉でほぼ知られているのに、こちらには敵の情報が全くないような状況の中で味方同士の好き嫌いを言っている

場合じゃない。
「ですから一行全員と各国の王達が会うのを第一歩として王達の認識を改めていただき、ひいては各国の兵たちにも知れ渡っているヒュンケルとクロコダインの―裏切り者―という事を払しょくしていただきたいのです。」
先のハドラー大戦で各国連携が取れなかったから痛い目に合ったのに、たったの十数年で忘れてしまって教訓生かせないだなんて本気で困る。
あっちは数千年単位で地上を狙っているんだから、こっちは百倍の動きで結束力を固めてもらわないといけない。・・それでもぎりぎり向こうに届くかどうかだ。
「王達が―まぁいつか会えばいいだろう―では間に合いません。会える時にすぐに会う、出来ることは一秒も無駄にせずいなければならないでしょう。
出来ること考えうる限りのことを倍以上の速さでやって、ようやく魔王軍に通じると思っておかないと敗れると思ってください。敗れるという事はすなわち死に直結しているのだと。」
以上―錬金術師の某氷の女王様の受け売り―。
確か自軍の致死率上がるのは―差別―しあって団結力にひびが入るのが一番上がるって言ってたよね・・・間違ってないよね。
私なりのアレンジで不安だけど後一点言っとかないと。
「それからヒュンケルとクロコダイン、誰に会っても何かを言われても堂々としていてください。
威張ってほしい訳ではありませんが、昨日ヒュンケルがミストバーン相手に光の道を行くと言い切ったように顔を上げて前を向いてほしいのです。」
「・・分かった。」
「努力しようティファよ。」
「はい、二人はもう勇者ダイ一行の大切で心強い仲間なのですから。」
寸前の厳しい話の時とは違うティファの愛情あふれた笑顔を向けられた二人の心が温かくなるのが分かる。

裏切り者と、自分達こそが己の罪を知って潰されそうなのをティファが打ち消そうとしてくれる。
そして
「そうだよ！二人はもう大事な仲間なんだよ。」
「そうだぜ、おっさんもヒュンケルも俺達の仲間だ。」
「無理しないで頼ってほしいの。」
「そうです、抱え込まないでください。」
「・・・僕も、お二人の事好きです・・僕なんかに思われても・・」
付き合いの長いダイ達のみならず、日の浅いメルルも昨日会ったばかりのチウまでもが自分達を労わってくれている。大切な仲間だと何度も言いながら。
チウの自信なさげな告白に、クロコダインはチウの頭を撫でて感謝を伝える。
ヒュンケルとクロコダインは、皆の温かさに涙があふれそうになる。
この良き一行を守りたい。その為にも、ティファの言った他の者達とも団結をしていかなければ恐らくはティファの言う通りこちらが敗れる。
魔王軍の強大さと時折感じられた大魔王の強さは、軍団長をしていた自分達がこそが骨身に沁みているからだ。
「この世界のみなさんと一行全員が勝ち伸びて大戦の終わった平和な世を謳歌するためにもここから始めましょう！」
ティファの力強い言葉に、一行全員の承知した声が日で温かくなった部屋に響き渡った。

王城決戦⁉？

「と、いうのが一行と王達が会う理由の八割です。」

ティファの追加の言葉に、一同は残りの二割はもっとすごい深謀遠慮が秘められていたのかと身構えた。

一体ティファはどれだけの事を考えて動いているのだろうか。

「私の自慢の一行を王様たちに自慢したいのです！」

はぁ⁉

「だって勿体ないじゃないですか！こんなにすんごい一行をただの食わず嫌いで見逃すなんてもう犯罪ですよ犯罪。私なんて世界中に向かって勇者ダイの一行は凄いんだぞと叫んじゃいたいくらいなんですよ！そんな一行を是非知っていただかないと!!」

・・・先程とは全く違う変なことをにっこにこ顔で何言っちゃってるのティファは！

バダックとエイミとチウは呆然としただけだが、ティファのある意味の凄さも知っている兄を筆頭に、世界の中心で一行の凄さを自慢しながら叫びあげるティファの姿が浮かんでしまいがっくりとした。

そして気が付けば大笑いをしていた。

「なんで笑ってるんですか？」

ティファはまじめに言ったつもりのようで、何故笑われているのかと小首をかしげているのがまたいいと更に笑いが増していく。

「いいのいいの、ティファはそのまんまでいてくれればいいから。」

「そうだぜ、やっぱお前はこうでなくちゃ。」

兄二人は妹が可愛くて仕方がないと、笑いながら頭をくしゃくしゃと撫でまわす。

「そうよ、ポップの言う通りティファはそのまんまでいてくれればいいのよ。」

「ティファさんは素敵な方なのです。」

マァムもメルルも笑いすぎて出てくる涙をぬぐいながらティファの側による。

二人は昨日より重症者の手当てをし、怪我人の多さとその悲惨性に

心がまいりかけていた。
如何に救えたとはいえ、充満する呻き声と漂う血の匂いが体に染み付いたような錯覚を起こすような地獄絵図と化した場面を明け方に夢に見て飛び起きてしまうほどに。
その暗さを、ティファのあの笑顔が吹き飛ばしてくれた。自分達を自慢の一行なのだ、宝物なのだと力強く言って満面の笑みを浮かべるティファは太陽のようだ。
暗い場所から自分達を導いてくれる光を守りたいと思うのはヒュンケルとクロコダインも同じであり、慈しみの眼差しをティファに注ぐ。
大笑いがひと段落をしたのを見計らい、ティファが身支度の道具をマジックリングから出し全員に配り始めた。
「いつか王様たちに謁見する日が来ると思って用意させていただきました！」
満面の笑みで張り切って出されたものは
「全員分の歯磨きコップと、この磨き粉を使ってください。
ダイ兄とチウ君はこのブラシで髪を整えて、ポップ兄はロッドをこの磨き粉と柔らかい布で磨いてね。
クロコダインはアックスはさんでるベルトの新品をご用意しました。ベルト交換後にポップ兄が使った粉と布でアックスを拭いてあげてください。」
他にもヒュンケルには今着ている服と同じデザインであっても半そでではなく長袖を着て旅人のマントを脱ぐように指摘をし、マァムも武闘家とはいえ女の子らしいアクセサリ―があってもいいのではと銀の平打ちに桃の花をあしらったかんざしを、メルルも普段着から占い師らしさを損なわないワインレッド色のロングスカートに黒のサッシュベルトを渡す。
一生に一度の晴れ舞台。この日を想定して一行を離れている時にベンガーナのデパートに足繁く通って集めていった物を渡してテキパキと指示を出す。
ティファの言葉に一行は直ぐに従い、流石にメルルは隣の部屋に着

替えに行った。
ポップとダイは直ぐに身支度が終わり、ヒュンケルも部屋の隅で上着を取り換えただけで終わったのでダイ達と同じくチウの身支度の手伝いに自然と入った。
チウは普段から水浴びをしていて清潔を保ってはいるが、長く伸びた毛はあちこちからまっているので先端からゆっくりとほぐす様にブラシをかけてやらないと抜けてしまうので慎重に進めていく。
「その・・ごめんなさい・・」
真っ赤になりながらお礼を言うチウに大したことではないと男三人は優しくいいながら身支度を手伝い、戻ってきたメルルにポップはブラシを置いてメルルの下にすっ飛んでく。
「その・・よく似合うよ・・」
「・・・どうも・・」
ロングドレスがメルルの可憐さを一際輝かせながらも、生来の神秘性を失わない姿に見惚れたポップもチウと同様に赤くなりながらメルルを褒め称え、メルルも蚊の鳴くような声で俯きながらもどうにか返事をかえす。
ポップの抜けた場所を支度を終えたマァムが入り、かんざしが良く似合うとこれまたダイとチウ・ヒュンケルに褒められ矢張りマァムも赤くさせた。
なんとも良き一行じゃ、儂もダイ君達全員を是非見てほしいと思うの～。
老兵の心も打つその光景を見ていれば、ついついと袖口が引っ張られた。
何事かと引っ張られている方を見てみればティファがいた。
「料理人殿、どうかなされたかの？」
一行に向けていた時とは違った真剣な顔に、バダックは何事かと小声で尋ねる。
「エイミさんとバダックさんには謝罪を致したく、もちろん後程レオナ姫様にはむろんですが、恩あるパプニカ一国に泥を掛けるような真似をしてしまい申し訳もありません。」

アポロとマリンに厳しく接した事もそうだが、王達の呼び出しを断ったことでレオナ姫の顔に泥を塗ったことを詫びる。
「一行全員が良くしていただいている身で、後ろ足で砂を掛ける真似を・・」
「料理人殿。」
その謝罪をバダックが途中で止めた。
「貴女の判断はすべて正しい、間違っていないのですじゃぞ。
ですから謝罪はこれだけでもう充分、レオナ姫には後程儂から料理人殿のお考えを伝えておきますぞ。ですから顔をお上げなされ。」
アポロに厳しく当たったのはティファがアポロの地位を一瞬で見抜き、一軍の将に足るものかを見て、見限った結果であるとバダックは考えている。
これから厳しき戦いが待っている時に、甘さの残ったものが死んでしまわないようにと厳しく当たったのだろうと。
エイミにもその考えが良く分かり、ティファの謝罪を快く受けたところに折よくアポロが謁見の許可が出た旨を伝えに来た。
「アポロ。」
直ぐに一行を連れて行こうとするアポロにエイミが待ったをかけた。
「アポロ、今回の謁見に私・・ううん、三賢者全員が入れないか姫様に許可を貰ってきてほしいの。」
「それは・・いきなりだな。」
「無理を言っているのは承知しているの。でもお願いアポロ、今後の私達には絶対に必要な事なの。」
「分かった、みなさん少々お待ちを。」
エイミの急な提案に戸惑いながらも何事かを決断をしたエイミの真剣な表情を見たアポロは再び単身で会議室のレオナ姫の下に向かった。
エイミの行動にバダックも驚き何事かと尋ねたがエイミは答えなかった。

ティファさんの考えは私達では決して言えない、考えたこともない。
自分達は確かに魔法のエキスパートで三賢者と呼ばれこそすれ、この一行のように戦場の最前線で戦ったことはなく、人々の危急も救ったことがない。
そんな今の自分達がティファの言ったような自軍の致死率が上がる要因とその対策・誰であっても手を携えて戦い抜き、その先にある平和を謳歌するためにも王達に会うのはその第一歩でしかないのだという壮大な考えを持てるはずもない。
自分はティファの外見に驚き先のアポロのように礼を失してしまい、偶々来たポップに助けられただけ。その場の判断を冷静に下し動くという初歩的な事さえできなかった自分が恥ずかしくなるばかりだ。
自分よりも年若いティファは戦場に出て戦い人々を救い、その場におらずとも料理と手紙で一行の心を癒せてしまえる人だ。
今も王族の謁見にピリピリしている中ティファだけがのんびりとした表情で身だしなみのチェックをしながら柔らかい声掛けをして一行を和ませている。
「ダイ兄達は折角ですから輝聖石が見えるように表に出した方がいいですよ。なんとなれば晴れ舞台なのですから。」
「メルルさんに似合って良かったです。」
「チウ君、大丈夫ですよ。スマイル・スマイル。」
ノック音と共にアポロが再び入り、この際バダックも同伴してよい旨を伝えていよいよ謁見と相成った。
見てきちんと学びたい。ティファさんがどのような事を王達に言うのか聞くだけでも勉強になるはずだ。
おそらく王達と話すのはティファさんがするはずだ。今も入る順番と挨拶の仕方を歩きながらもダイ達に教えている。
「料理人は一番最後で、褒賞の話が出たら任せてもらってもいいですか？」
「別にいいけどティファ何か欲しいものあるの？」

「俺も別にいいぜ。」
「任せるわ。でも何か欲しいものがあるの？」
　最後のマァムの質問にティファは難問を問われたがごとく難しい顔をする。
「まぁ、ちょっと難しいかな？」
「ティファが何かを欲しがるとは珍しいな。」
「おやクロコダイン、私こう見えても強欲なのですよ？」
「あら、ちっともそうは見えませんよ。」
「そうですよ、ティファさんに強欲なんて言葉は似合いません。」
「ふっふっふ、メルルさん・チウ君、狼だって時には羊の皮を被っているものなのですよ！」
　悪っぽく言ったティファであったが・・・羊の皮を被ったティファが全員の脳何にポンと浮かび、愛らしい声でメェ～と鳴く声までばっちりと聞こえてきてしまった！
　一行は先程よりも大きな声で笑いだし、さしものヒュンケルも大爆笑してしまった。
　羊の皮を被ったティファの姿はあらゆる意味で凄く、エイミとバダックもダメージを食って笑いをこらえるのに精一杯の状態に陥り、ティファは本人は憮然とした顔で一行を注意するも効果はなく、不思議そうにしているアポロのそろそろ着きますよコールが言われるまで笑いどうしであった。

王城決戦⁉③

扉を叩く音に王達はようやく来たかと少々疲れている。
朝一の会議から始まり、謁見断る無礼な者の怒りから次はこの国の三賢者の同席許可願などバタバタとしていい加減クルテマッカもくたびれているところに待ち人の料理人が到着をした。
もしも今までの功績で天狗になっているのであれば罪を断じ、道理の分かっていない子ならば叱責する気満々だ。
レオナはティファならば何か意図があるのだと読んでおり、穏健なシナナ王とフォルケン王はティファの言い分ももっともだと頷いて、怒ったのは短気で有名なクルテマッカ王と武の国として有名なリンガイアのアーデルハイド王の両名。
一体会議はどんなことが起きるのか予測不能な流れとなってしまい、レオナは何度も心の中でため息をついていたりする。
入室許可を出し、真っ先に入ってきたのは勇者ダイ。
しっかりとした声で堂々と名乗りを上げて中央の程よい距離で止まり、魔法使いポップ・武闘家マァム・戦士ヒュンケル・戦士クロコダイン・戦士見習チウ・占い師メルル。
どうやらお待ちかねの料理人の登場は最後のようだ。
ふぅ～ん、なかなか広い部屋で窓が大きいからかなり明るいお部屋だ。
円卓会議してるかと思ったら長い・・なんだろう？審査委員会の人が面接するみたいな長いテーブルに王様たち座ってる。
真ん中がこの国のレオナ姫で順当だけど、隣に座ってるのベンガーナの王様だ。
反対側の黒髪長髪の偉丈夫の人は―原作―では見た事ない。という事は助かったリンガイアの王様かな？
そのお隣がロモス王で、ベンガーナ王の隣がフォルケン王か。
それぞれの座っているテーブルの位置関係から見るに、パプニカは開催国だからって顔を立てて中央にいて、ベンガーナとリンガイアが今この世界で力のある国なんだ。

てことは、私の欲しいものの為にはベンガーナ辺りを攻略しておく必要ありと。
ダイ達の挨拶時に必要な情報をサクサクと得たティファは、自分の番となってもいつもと変わらない態度を崩さずにゆっくりと前に進む。
「先程は王達の行為を無に帰すような不敬な行為を働き大変申し訳ありませんでした。」
一行の前に歩を進め、中央で歩みを止めたティファは優雅に右手を胸に当てながら謝罪を始める。
「またそのようなことを言った者にも寛大なお心を示され謁見願を許可していただいたことに感謝の念が絶えません。」
謝罪と共に感謝の言葉を添えて深々と頭を下げる。
「初めてお目に掛ります、私は勇者ダイの妹で一行の料理人をしているティファと申します。」
目の前にいる少女は何者だ？先程謁見を断ってきた無礼者と同一人物とはとても思えん！
礼儀正しく優雅ささえ感じさせるこの少女が料理人のティファとは！
立ち位置から見て、どうやらこの少女が一行の代表として話を引き受けるようだが。
「君が料理人じゃったのか。」
ロモスのシナナ王が早速人懐こい笑みを浮かべて話しかける。
「お久しぶりでございますロモス王、あの折はろくな挨拶も述べずに旅たったことをお許しください。
この場をお借りしまして勇者ダイ一行をお認め下さり有難く。」
「いやいあ、戦い厳しき時に礼じゃのなんじゃのは不要じゃ。それに君達にはそれだけの実力があり、此度も儂が見込んだとおりに・・・」
ウォッフォン！
お互いに長話になりそうなのをクルテマッカが咳払いで遮る。
時間は有用であり、今この時にも魔王軍は動いているのだからサクサクと進めたい。

決して自分が短気だからでは断じてない。
「レオナ姫よ、要件に入ってはいかがかな？」
「そうですね、勇者一行の皆さんを呼んだのは他でもありません、この度と今までの功績を称えて褒賞を・・」
しまった、シナナ王様お話ししやすいからついつい話し込もうとしちゃった。失敗・失敗。
それでも会議しきっているのは予想通り実質ベンガーナ王か。
欲しいものの為にも腹芸・化かしあい頑張ろう。
レオナが褒賞を送ることを伝え終わった時、ティファは発言許可をレオナに求めて許可をされると更に一歩前に出た。
「先程は王達に一行の者達と会っていただきたく、些か強引に此度の事は全て一行の手柄のように伝えてしまいましたがそれは間違いなのです。」
「なに、間違いとは？」
ティファの発言にクルテマッカがいち早く食いついた。
先程より行動は、全て一行の手柄を誇示したいがためだと思っていたのだが違うのだろうか？
「はい、此度の混乱であっても魔法使いポップが人々を避難させられたのは、各国の兵の皆様方がポップを若輩者がと侮ることなく指示に従ってくださったことで滞りなく避難させることが出来たのです。
それをして一行の者達は十全の力を出し切ることが出来たのです。
また人のみならず、逃げ込んだモンスター達を差別される事無く保護していただけたからこそ後ろを気にせずに目の前の敵に集中することが出来ました。
また勇者ダイが敵の本体の中に侵入を果たして撃破できたのは間違いなくベンガーナ軍の方々が敵の本体を暴いてくださったからです。それがなければ長引き一行を含めた全員が苦境に陥っていたやも知れません。」
あれがなければ本当に手間取って危なかったかもしれない。
「そして一行の占い師メルルの知らせがあったとはいえ、間に合うことが出来たのは敵の巨大さにも怯まず逃げずに踏みとどまって戦わ

れた兵や騎士の皆様方のおかげなのです。」
鬼岩城を前にしたら兵も騎士も一般の人と変わらないのに逃げなかったのは勇気ある行為だ。
お茶を飲みながら聞いた話でも、各国の兵達の手際の良さ、如何に果敢に戦っていたかなどの話もポップ兄達から沢山聞こえてきた。
これ無視して今回の一件を私達だけの手柄でございなんて言ったら馬鹿でしょ。
王達は心底本気で驚きを隠せなかった。
礼儀正しいだけの子供ではなく、観察力・考え方・手柄の評価の心得、どれ一つとっても子供らしくなく、まるで自国の官僚と話しているような錯覚さえ引き起こさせる。
自分達の戦力では戦の役には立たないのかと内心では忸怩たる自分達の思いを知ってか知らずか、褒賞を与える側から思いがけなく励まされて面映ゆくもなる。
「それはそれとして、敵の撃退をしたのはまさしくそなた達なのだ。」
クルテマッカの声からも刺々しさが完全に無くなり、優しい声で褒美は何が良いと問われて、ティファも少し困った顔で笑いベンガーナ王に目を向ける。
その困った笑い顔にどこか見覚えあるとクルテマッカは首をひねる。
そうだ、あの顔は先の大戦の褒美は何がいいと—勇者アバン—に問うた時の笑みだ！
大戦が終わりずいぶん経った後、各国を回って自国に来た情報を得て宿屋に兵を向かわせて強引に登城させた時に見た笑みだ。
あの時は褒美は二の次で自国に仕官をしてほしかったのだが、今のティファのように困った笑みを浮かべていた。
黒縁眼鏡をかけて。
「料理人よ！その眼鏡まさか先の勇者アバンのものか!!」
クルテマッカの興奮した発言に、シナナ王達もようやく気が付いた。
今ティファがしている不釣り合いな黒縁眼鏡が元々—誰—のもの

だったかを。
「其方はアバンの弟子か？」
そこから導き出された答えをクルテマッカはティファに問う。
その眼鏡は亡き師の形見であり、ティファはアバンの弟子なのかと。
「いいえ王よ、私は彼の人の弟子ではありません。」
自分は違うと答えた後、爆弾発言が落とされた。
「彼の方の弟子は、勇者ダイ・魔法使いポップ・武闘家マァム・そして。」
最後の一人は
「アバンの長兄は戦士ヒュンケルです。」
何だと⁉
ティファの言葉に会議室が一気に沸騰をした。
戦士ヒュンケルといえば、元とはいえ魔王軍に与した世界の大罪人ではないか。
その罪人が選りにもよってあの勇者アバンの弟子だと！
激高したクルテマッカは椅子から立ち上がりまじまじとヒュンケルを見つめる。
こちらの威嚇をものともせずに、静かに見返す紫の瞳は穏やかであり本当にこの者が元魔王軍の軍団長だったのかと疑いたくもなる程の青年だった。そして胸元にあるのは世に名高いアバン手作りの輝聖石か！
そしてもう一人の裏切り者と言われているクロコダインに目を向けてもヒュンケル同様の穏やかな雰囲気をしていた。
「王達よ。」
ティファの静かな声が、ざわつく会議室に凛と響く。
「確かにヒュンケルはアバンの弟子でありながら一度は闇に落ち道を踏み外し人類の敵となりました。
しかし過日ある戦いにおいて一行に敗れ、闇にいる愚かしさを知り、その後の戦いにおいて一行を助けてレオナ姫の命をも救いました。
そのレオナ姫より裁可を下され償う道を歩くことを指し示してい

ただき、今はその道を歩いている途上なのです。
昨日の戦いの最中、敵の大幹部より軍に戻ることを強要され命を脅かされながらも彼は光の道を歩くのだと宣言をしたのです。
故に各国の王達も、寛大なお心で何卒この者達が償う道を歩く許可を。この者達の償いがどの様なものであるのか長い目で見ていただきたくお許しを。」
一言の下に言いきった後、ティファは深々と頭を下げ、後ろにいるダイ達も泣きそうな表情で無言ながらも王達に願った。
ヒュンケルもクロコダインも最早自分達の大切な仲間なのだと。

「レオナ姫、元軍団長であったヒュンケルとクロコダインを許したというのは？」
「はい・・料理人ティファの言う通り、償う道を歩くことを条件に。」
これもティファの思惑の一つだろうか？
まさか眼鏡一つで複雑で込み入ったあの浜辺での裁可話を引っ張り出されるとは思ってもみなかった。
レオナはティファの手腕に舌を巻く。
これでヒュンケル達が勇者一行の後押しを、パプニカの公的認可なのだと確約をされたのだから。
しかしティファにとってはこれはまだまだ序章であり、褒賞話前の下準備がようやく終わったに過ぎない。
クルテマッカは落ち着きを取り戻して席に座り直し、レオナ姫以外の王達と協議に入る。
両名をこのままなし崩しではなく、自分達公認の下で勇者一行として認めるか否かを。
その答えは時間がかかるかと思っていたティファの思惑とは裏腹に案外すんなりと出た。
王達にとっては罪人が野に放たれるよりも、ダイ達と共に最前線で戦ってもらう方が建設的で見張らなくて済むからだ。
とは言えどのような思惑なのかはティファには関係ない、公認が取れたという事実が大切。

以外と王達のヒュンケル達に対する心象が悪くないことを指しているからだ。
「今後も一行のために働くと？」
ヒュンケルへの問いはリンガイアのアーデルハイド王から出た。
物事をまっすぐ射貫く力強い瞳に気を持っていかれそうになりながらもヒュンケルとクロコダインは恥じることなく顔を上げてしっかりとアーデルハイド王の瞳を見て答える。
「はっ、それが世界に対する償う道となると」
「我ら両名はこの素晴らしき一行を命を賭して守り抜き」
「「ともに世界を守りたく存じます！」」ピクリ
・・・命を賭したらだめでしょ！
周りを感動させるヒュンケル達の発言だが、一人だけティファが怒りの気配を漏らしてしまい、百戦錬磨のヒュンケルとクロコダインだけがそのことに気が付き冷や汗を流す。
今のはものの例えであり、実際は石にかじりついてでも死ぬ気はないのだときちんと話さねば！そうでないと説教の雷が・・それこそバランのギガデイン並みの恐ろしいものがティファより降ってくる！
ヒュンケル達の宣言は、ロモス・テランのみならずベンガーナもリンガイアからも概ね良好な反応を返されこれで一息つける。
さて矢張りそれはそれ、褒賞は褒賞と話は続く。
だが肝心の褒賞の話に入ると途端にティファの歯切れが悪くなる。
「あります・・ロモス王とレオナ姫に少々無心の義が・・しかし少し難しい事かと・・」
「言ってみよ。」
「・・いただければ我ら一行の者達はそれを励みにして一層働きが出来るものなのですが。」
聞いたクルテマッカは次第に苛立ってきた。
欲しいものがあればいうだけ言えばよいものを！それをいいか悪いかの判断をするのは自分達である！四の五の言わずにサッサというがいい！
「料理人よ！欲しきものがあれば言ってみよ！それがそなたたちの力

となり世界の助けとなるならばベンガーナは反対をせん!!」
言った!!ベンガーナ王は確かに反対しないって言った!もうその言葉撤回させないんだからね!
「では!改めましてロモス王とレオナ姫にお願いがございます。」
「なんでしょう?」
「うむ、言ってみなさい。」
「はい、パプニカには戦士ヒュンケルと獣王クロコダインに償いの道を示し許した旨を今この場にて書式にしていただき、ロモスには大戦終了時の宣言を自国民でされるときに、獣王クロコダインの功績をもって罪を許す旨を発表していただく事を書類にしたためていただきたくよろしくお願いします!!」
本命はこれだ!さあこの褒賞通してください!!
何だと⁉なんというとんでもない事を言うのだこの娘は!
財貨でも武器供給の類でもなく、とんでもない要求を突き付けてくるとは!!
ティファの褒賞要求に会議室はハチの巣をつついた騒ぎになった。
パプニカのレオナ姫がヒュンケル達を許した経緯も知っているために敢えて口出しはしなかった。
それは口頭だけの口約束だからであり、正式な書類はなく何か不都合が起これば容易に反故出来る事だからだとふんだからだ。
冗談でない!この二通の書類は―少し難しい―どころものではない!
この場には王のみならず各国の重臣たちも随行員として同席しており、この場で成されたことは全て公のものとなる。
その場で今言ったような書類を作成してしまえば世界の大罪人を各国の王達が許したのだと公認したことになり、それを不都合だからと大戦後に反故しようものならばきっと勇者たちが騒ぎ出し、救国の勇者達を騙したのかと民衆たちも騒ぐだろう。
世界の大罪人を許すかどうかを今この場で答えを出せというのか!
財貨を欲するよりも大それたことを抜かしおって!

反対をしたいが自分は口出しをしないと言ってしまった自分のうかつな発言に、クルテマッカは臍を噛む。

先程なぜ自分は短気を起こしてしまったのだ！

王城決戦⁉④

世界の大罪人を今この場で許すかどうかの騒ぎに、ダイ達は敵と戦うよりもはるかに恐ろしい思いをして固唾をのんで待つ。
まさかティファの欲しいものがこれだったとは。
―どうしても欲しいものがある―
あの欲とはトンと縁がないティファの珍しい発言は、少し考えればわかりそうなもんだった。
いついかなる時でも自分達を守ろうとしてくれる優しいティファ、薬で・料理で・優しい子守唄で、そして体を張ってこの一行を守ってくれている。
叶ってほしい、ヒュンケル達の為にも、優しい心で願ったティファの為にも。
メルルも手を組み合わせて祈りをささげる。
バラン戦の時のようにこの一行の、ティファの願いを守ってほしいと。
「ティファちゃんよ。」
重い空気の喧騒を、打ち破ったのは凛とした声ではなかった。
威厳のある声でも、まして身の程を弁えないものを叱責する声でもなく慈愛に満ちたのんびりとした声がその場ににつかわしくなく、反対に喧騒の声を飲み込んだ。
「ティファちゃんよ。」
喧騒が潮が引くように徐々に静まり、発言者を見ることによって完全な沈黙が降りた後もう一度同じ言葉をティファに掛けた。
「・・・ロモス王・・」
ティファは戸惑いに満ちた顔で発言の主、ロモスのシナナ王に返事を返す。
大それたことを言って叱責をされる、あるいは自国を攻めてきたものを許すことは容易には出来ないなどの厳しき返答を覚悟していただけに、シナナ王ののんびりとした、まさかのちゃん呼びかけに呆気にとられた。

シナナ王の顔を見れば優しく、そして何かを決意した強い瞳がそこにあった。
「儂はロモス王として、ティファちゃん・・いや、勇者達の望む褒賞を取らせようと思う。いかがかなパプニカのレオナ王女。」
優しくも、先程の呼びかけとは違った凛とした声が静寂の会議室に響き渡る。
そこにいるのはただ人情で流されているだけの好々爺ではなく、全ての事情を呑み込み決断をした一国の王がおり、同じ褒賞を望まれたパプニカ国現代表の王女レオナに返答を促している。
喧騒の中、勇者たちの褒賞の望みを反対をしないと言ったクルテマッカは確かに約定をたがえなかった。
しかし助言という形でレオナに思いとどまるかあるいは性急にこの場での返答はいかがなものかと止めていた。
シナナとしては、これまでのダイ達の活躍をその場で見聞きしておりまたロモス王城でのクロコダインとの事も全て知っている。
自分もクロコダインの武人として為人を知ってしまっている一人として、ただの罪人として裁くことを心苦しく思っていた。
昨日の魔法使いポップの話を聞けばなおさらだ。
今のクロコダインは一行にとって居なくてはならず、また世界を守ろうと命を懸けている。
殺されかけた当人が、熱い思いでクロコダインの許しを嘆願してきた。
その思いは確かに自分の心を打ち揺り動かした。
そしてこの褒賞の望み、叶えてやりたい。
凡庸であり、ただ人がいいだけの国王と言われ続けていたシナナ王の真剣なまなざしの問いに、レオナは笑みを持って応える。
「我が国も同意します。先にヒュンケル・クロコダインの両名を許す裁可を下したのは我が国です。
此度の褒賞の望みに否やはありません。各国の王達もそれでよろしいでしょうか?」
今この世界に勇者ダイ達は必要不可欠、彼らが望むものは財貨でな

く、大戦後の栄達でもなく、許しが欲しいという清らかなもの。
命を懸けて戦う彼らに、一筋の光を与えることを許してほしい。
シナナ王の呼び掛けに応え、両名を許すことの大切さをレオナも信念をもって切々と語る。
たかが十五の小娘の言葉かもしれない、それでも一国の王女として、この戦乱の世の指導者の一人としてこの望みをかなえることの大切さを語るレオナに、クルテマッカもアーデルハイドも気圧される。
彼女もまた、勇者ダイ達と共に最前線で戦っている者なのだと知らしめられた。
「その同意を、我がテラン国もまた賛同させていただこう。」
穏やかなフォルケン王の声に押され、リンガイアのアーデルハイド王も賛同をした。
「我がリンガイア国も賛同しよう。両名を信じ共に戦う勇者達と一行を見てきたロモス・パプニカを信頼して。」
「・・我がベンガーナも同意しよう。料理人ティファよ、其方の願い確かに聞き届けた。」
リンガイアとベンガーナの両王からの許しの言葉はダイ達に届き、はじめは信じられない思いで、そしてそれが事実なのだと実感が沸き起こるとともに気が付けばダイ達は歓声を上げてヒュンケルとクロコダインに飛びついていた。
「ヒュンケル!ヒュンケルとクロコダイン!!許してくれるって!」
「よかったよ・・ほんとに・・ほんとに!!!」
「おめでとう!・・おめ・・で・・とう・・」
「ヒュンケルさん!クロコダインさん!!・・ほん・・と・・に・・」
「ヒュンケルさん!クロコダインさん!!!」
心からの祝福を二人に言おうとしても、途中でつっかえてしまいうまく言えず、それでもヒュンケルとクロコダインには確かに届いた。
ダイ達の大泣きした顔を見て、分からないものはこの場にはいない。
苦難と死闘を共に潜り抜けた仲間の行く末をずっと案じていた。
戦っている今は良い、この力を必要とされているから。

その後大戦に勝てた後は?力が不要となった時、二人はどうなるのかをポップとマァム・メルルはずっと心の奥底で怯え、漠然としていものだが天真爛漫としたダイもその不安が確かにあった。
今その不安をティファが取り去ってくれた。
万能薬で自分たちの傷を治すがごとく。
二人を囲み抱きしめ、ヒュンケルとクロコダインもクロコダインもまたダイ達のように大粒の涙を流している。
自分達を案じていてくれたこの一行の、ティファの優しさが嬉しく、許すと言ってくれた各国の王達に感謝があふれ、とめどなく流れる涙を拭わずにダイ達を抱きしめ返す。
その光景に王達は、自分達の裁可の正しさを知る。
会議室に居合わせるすべてのものが、ダイ達の喜びように驚きながらも少しづつ拍手がなり、次第に沸き立つような万雷の拍手が鳴り響く。
彼等を知る三賢者とバダックも泣きながら拍手と共に心からの祝福の笑みを浮かべる。
辛き道を歩き、まだ先の見えない戦いを続ける彼らに祝福を祈りながら。
・・これもまた良きことか。
まさか魔王軍のものを許すことになろうとは。
先のハドラー大戦でもこんなことはなかった。
あの時も一方的に攻められ、無我夢中で戦い勇者アバンが魔王を討ち果たすまで殺伐とした日々を送り、国力が弱まった自国を強化と共に立て直すために武力国家を掲げて今大戦にも望み、離反したとはいえ魔王軍が味方の中にいると思うと苦々しくも思い厳しく責め立てようとしたがそれは無に帰した。
この様子ではその方が良かったようだ。
罪人二人の恩赦で味方の結束が固まるのならば安いものだと考えればよい。
さて、この望みを言った料理人ティファはこの結果に満足を・・なんと!

褒賞の望みを言い放ち、叶えられたティファの顔を見たクルテマッカは本気で驚き狼狽えた。
ティファが静かに涙を流して笑みを浮かべている。
心から安堵した表情を浮かべて。
先程から大人の官僚とさして変わらない話し方と考え方をしていた少女ならば、この結果は世界の結束の為には不可欠であり通るのが当然だと考えているのだとばかり思っていた。
それ故に涙を流すことなく、結果に満足をした笑みを浮かべているのだと考えていたのが、安堵した顔からはこの少女もまた一人の子供なのだと思い知る。

良かった、本当に良かった。
財貨なんていらない、手柄なんて欲しい人が声高に言えばいい。
あの二人の幸せへの道筋が、どれ程欲しかったことか。
知識は確かにある。
前の人生と今の人生を合わせればダイ達よりも大人かもしれない。
それでも経験はなく、考えに考えて今度の事をやってみたがうまくいく保証はどこにもなく、大それたことだと王達の不興を被り一行を認定してくれたロモスと援助をしてくれているパプニカにも何かしらの迷惑をかけるリスクの方が高く、それでも、どうしても欲しかった望みが叶い安堵する。
この望みが叶ったのは自分達の力だけでは決してない
優しきシナナ王が、レオナ姫が後押ししてくれた。
そしてこの場にはいないアバンもまた然り。
先の大戦を終結させた偉大なるアバン、彼の弟子という効力がヒュンケルを守ったのだ。

王城決戦⁉最終章①

望みが叶ってそれはとっても嬉しい。
これで大戦終了後でも二人の身の安全が保障されたら万々歳だ。
使い捨てでポイされたらぶちぎれるよ？
でもなんで私がかかわると騒ぎ起きんだろ？
騒ぎその一・
「ティファちゃんや、そち個人に褒賞があるのじゃが受けてくれんかの？」
書類書き終わったシナナ王が勇者一行の他に、ティファ個人への褒賞があると言われたので驚きだ。
私なんかしたっけかな？
聞いてみればなんとロモス王城決戦後に、治療手伝ってくれた侍医長さんに渡した火傷用の万能薬のメモ書きについてらしい・・マジですかい。
あれは着替えたいから邪魔に感じた侍医長さんに、追い出したいからさらさらと書いたメモですよ？
その雑メモになんと！
「百万ゴールドじゃがいいかの～？」
なんつうハンマープライス⁉
たかだか端書メモになんつう高値ついちゃったの⁉
「あの王様！俺達毎回その薬使ってますが、そんなに出鱈目に高価なものなんすか・・」
いつもじゃかすか使ってる薬のメモにそんな高値が付いたと驚いたのはなのもティファだけではなくダイ達も同じであり、気持ちを代弁したポップも言葉もしりすぼみになる。
そんな天文学的に高価なもん湯水の如く使ってたのか俺達は！
「その褒賞は続きがあっての、あれはメモ書きだけでは作れない・・万能薬じゃと侍医長が言っておっての、ティファちゃんの講義料も含まれておるのじゃよ。」
あ！しまった⁉

今世に出回っている万能薬は骨折か斬撃の軽いようのもので、火傷・雷撃・凍傷なんて高度なもの出回ってなかった！
しかもだ、過程・精製法も既存の物では作れずになんちゃってもできない代物で・・普段作り続けてたから一般普及との兼ね合い忘れてた・・やっちった。
どうしよう・・百万ゴールドなんてお金、今貰っても使い道ないし。
あ！そうだ!!
「シナナ王様、その褒賞確かに受けさせていただきます。」
お金とさっぱりと縁がなさそうなティファが、ルンルン顔で受けたことにダイたちはあれっと思ったが次の言葉で納得した。
「レオナ姫、一行よりこの度の復興費として百万ゴールド寄付させていただきます。
シナナ王様、手続きが良く分からないので報奨金をそのままパプニカにお渡しいただけますか？」
誰も損をせず、面目も潰されない方法を一瞬ではじき出す。
その手腕も含め！もう我慢できん!!
「其方大戦の後に我がベンガーナで働かんか!!」
「はい？」
騒ぎその二、ベンガーナに勧誘された！
一連のティファの全てを見聞きしたクルドマッカはもう抑えがきかなかった。
一行の為に官僚顔負けの策を張り巡らせる知略、世に―奇跡の薬―と呼ばれる薬を作り出せる知識、そして何が起きても動じることなく瞬時に解決策をはじき出す才覚！
この者はまさしく宝石の原石！磨けばどれ程の・・史上初の女性宰相も夢ではない！ぜひ自分の手元に置いて磨きたい!!
「お断りします。」
一瞬で断られた！
「料理人よ！我が国は才あれば女性でも登用しておるのだぞ！今はまだ始めたばかりの制度で高い地位におらずともそなたならば・・」
「クルテマッカ王様・・」

机から身を乗り出しなんとしても勧誘しようとする王を止めようとしたその時、扉付近が騒がしくなった。
「困ります！今は許可されたもの以外は・・」
「許可は自分で取る！押し通るぞ!!」
不許可のまま、力づくで衛兵を脇にどかして入ってきたのはベンガーナの隊長、スキンヘッドのアキームだった。
「アキーム！この場をなんと心得る!!」
厳つく居丈高で誤解をされやすいが、クルテマッカは礼儀を重んじ序列やしきたりをだれよりも重んじている。
その為に元敵であり軍を離反をしたヒュンケル達を苦々しく思い、今また謁見許可を出されていない押し入ってきたアキームを叱責して追い出しにかかる。
自国の重用しているものであっても甘い顔を見せる気は毛頭ない。
アキームとて、王の公明正大さを誰よりも知っている。
その厳しいともいわれている頑なさも、自分が忠誠を誓うに値する方だと喜びを感じて日々使えているのだから。
それでも今回はそこを曲げてでも会わなければいけない方がいる！
「料理人のティファ殿は何処に！」どうしてもお会いせねば
あんれ？あれって戦車隊を率いてたアキームさんだよね。なんで私探してるの？
「私です・・どこかでお会いしましたか？」会ってないよね・・次々になんで騒がしくなる？
あの方が・・黒縁眼鏡に青い服、間違いない、報告通りの方だ。
すぐさまアキームはティファの横まで来て片膝をつき、王達に謁見願を申し出た。
「王達よ！私はベンガーナにて隊長職を拝命しているアキームと申します！
今この場にて、昨日の鬼岩城戦での礼を勇者一行の方々達に述べることをお許しください。」
アキームは自国のみならず、他国にも響いている武人の鑑で礼節を

重んじている。
そのアキームの鬼気迫る顔に王達は顔を見合わせ瞬時に了承の許可を出した。
昨日の戦火で最前線で戦っていた隊長に敬意の気持ちも込めて。
許可を出されたアキームはダイ達に礼を述べ、更にクロコダインには昨日放った悪口雑言の非礼の数々を、クロコダインの近くまで行き深々と頭を下げて詫びた。
クロコダインもアキームの奮闘を間近で見ており、同じ武人として大いに感じるものがあったのでもうわだかまりは感じておらず直ぐに打ち解けあい互いに笑い顔を向けあえた。
うんうん！いい感じだ!!
乱入者にびっくりしたけど、周りとみんながいい感じに打ち解けあって嬉しい。
ニコニコ顔で見ていたティファの下に、アキームが真剣な顔で近づく。
ダイ達にお礼を言い、いよいよティファに礼が言える。
「料理人殿、昨日医師たちに大量の万能薬をお届け下さり、誠にありがたく！
あれがなければどれほどの死者が出ていた事か！」

王城決戦!?最終章？

武人肌の熱い人だと一目で感じた。
それこそクロコダインを若くして情熱的にしたらこんな感じなんだろう。
それでも私はアキームさんの感謝の言葉の嵐を全部受け止める。
いい事も悪い事もきちんと教えてくれたことに感謝をして。
良い事は、あの戦いでの死者が誰もいなかったこと。みんなぎりぎりで助かった事。
あんな大規模な、それこそ自分達が想像していた事を遥かに超えた戦いで死者が出なかったのは奇跡に近い。
あの神の加護のような地上がいきなり泥状化する事態がなければ確実に数百人の犠牲は出ていた。
その神の加護のようなことがあっても、料理人のティファの薬の支援がなければ傷が元で大勢のものの命が失われていたのだとアキームはティファの手を両手で惜しい抱き涙ながらに感謝の言葉を述べ続ける。
他の者にとってはアキームの言葉は全て良きことと受け取るだろうがティファは違った。
「沢山の人の・・手・足が・・」
それはぽつりとした一言で現れた。
その言葉はとても小さく、それでも確かに聞こえた言葉にアキームは延々と述べていた言葉を止めてティファの顔を見れば泣いていた。
そんなに大勢の人達が、これから先一生涯の傷を負ってしまった！
私・・自分達だけの褒賞を考えててその人達の事全く考えてなかった！
ずるい・汚い・最低だ！
薬を届けただけで人々を救った気になった己の心根の低さに唾棄し、傷ついた者たちのこれからの苦難に思いがいき苦しくなる。
だから・・戦なんて嫌いなんだ・・
人が訳もなく傷つき、最悪死ぬか助かっても一生涯の傷を負ってし

まう戦なんて大嫌いだ。
・・完全に子供の理屈かもしれない、甘いだけの戯言かもしれないだって自分はこの大戦のある程度を知っていても世の人に警告をしなかった。
しても相手にされないどころか早々に魔王軍に目を付けられると困るからという自己保身の為に。
全ての事に対し、申し訳なくなりティファは悲しみと悔恨の思いで涙を流す。
まるで迷子の子供のように。
「料理人殿。」
その涙を、アキームは美しいと思った。
他者の為にここまで心を砕く少女が愛しいとさえ思う。
まだ年端もいかなく、もしかしたら自分の年の半分もない少女に心惹かれ、片膝をついて少女と同じ目線になり微笑みかける。
「料理人殿、我らは兵士はその任に付いたときから命を失うかもしれない覚悟を背負っているのです。
此度の戦いでも彼らは誰一人として背中の傷はなかった。」
それはすなわち誰一人としてあの強大なる敵に怯んで逃げなかったことを意味する。
「我らは人々を守る盾であり敵を打ち破る剣なのです。嘆かずに褒めてやってください、その身を掛けて大勢を守りし彼らを。」
アキームはごく普通の事を言っているに過ぎない。この世界において死はすぐそこにある身近なもので、死を免れたことは幸運である。その為に手・足が欠損し、本人が一時嘆くことがあっても、ティファのように涙を流して悲しむ者はいない。
その証拠にダイ達も悲しい顔こそすれ心優しいマァム・メルル共にティファのように泣いてはいない。
それでもティファはそれを飲み込むことが出来ない。
この世界において、ティファの考えこそが異質。
それは甘い戯言・子供の考えだと捉えられる考えだが、実際に彼らの手足を斬って治療をしたアキームの冷え切った心を温めてくれた。

生き残らせるためとはいえ大勢の部下や同僚・他国の兵達の日常を潰す行為に百戦錬磨のアキームの心にも暗い影を落とそうとしていた。

明け方近く眠れたが、夢の中でも死に瀕した者の手足を斬り続ける夢に飛び起きた。

夢の中の斬られた者の恨みの言葉が耳について離れなかった。

そんな中一筋の光のような知らせが飛び込んできた。

勇者一行の料理人のティファが、新たな薬と真新しい包帯と大量の毛布を差し入れてくれたことを。

未明にやってきた奇妙な少女は名乗り、昨日と同じようなマジックリングを大量において行き、勇者一行の名を聞いた若い兵たちが昨日の自分達の不甲斐無さをこぼした時に料理人が吠え上げたという。

昨日の勝利は勇者一行だけの勝利にあらず！

前線で逃げずに留まり、大勢のパプニカの人々の為に命を掛けた貴方方がいたおかげなのです！

何故そのことを誇らないのです！

貴方方は勇者一行やこの国の人々に感謝されこそすれ俯く理由がどこにあるというのですか!!

その言葉にその場にいたもの、伝え聞いた自分達の心を救ってくれた。

料理人は未明に来たという。それは王城に赴き仲間に会う事よりも自分達を優先して見舞ってくれたのだ。

見ず知らずの自分達のみを案じてくれて、そして肩を落とした自分達に力強くも優しい言葉で叱責をしてくれた料理人に礼をしたくて礼節も手続きも全て吹っ飛ばして会いに来た料理人のティファは、とても小さく心優しい少女だった。

あの言葉と同じなのです、我らは大勢を守り抜いたことを誇りに思います。

だから泣かないでほしいのです。

常のアキームを知るクルテマッカは少しばかり驚くが無理からぬことだと思った。

極限の状態を救ってくれた相手が、これほどまでに心優しき少女だとは思っても見ず、全武人達が惚れ込んでもおかしくは無いだろうと。

歳など関係ない、その心に惚れてしまったのだろう。

そんなアキームにほっこりとした視線はたった一つで、残りは見ないようにしながら真っ赤になる意外と純なエイミや朴念仁のアポロ等や、大人の対応で見ない振りをしてくれている王達の他に、殺気を込めた視線が三つ！

背中がぞくりとしたアキームは首がそこまで回るのかというほどの曲げ方をしてその視線の先を見た！それでもティファの手を離さなかったのはすごい事だ。

しかしその凄い行いが、妹愛してますの兄と妹可愛いぞの兄とティファを慕いまくっているアバンの長兄の怒りをさらに買う羽目になった。

お礼を言うのは別にいい、しかしだ！いつまで手を握っている!!甘い雰囲気なんて出してるこいつは消してもいいよね、文句ないよね！

「ティファ、いつまで男の人の手を握ってるの？」

ダイは注意という名の警告を妹に発する。さっさと解かないとお仕置きだよ？

目も笑い、もの柔らかく言っているが兄の怖さをよく知っている妹は騙されない。

騙されないが、今回はティファは首をかしげて怒っている男性三人をつぶらな瞳でじっと見る。

なんでみんな怒ってるの？

無言の純粋な問いに、野郎一同はがっくりとした。

天真爛漫なダイでもアキームがティファに一目惚れしたのに気が付いたのに、なんで秋波送られた当人が全く気付かないんだ？

まぁいいか、つまるところティファはアキームを何とも思っていないのだからとダイ達は気を取り直して妹にこっちに帰ってくるように促す。

そろそろ謁見をを終えて、全員で休みたい。

「勇者一行、特にダイ君達に尋ねたいことがある。」
その休みの願いに待ったが入った。
入れたのはテラン国のフォルケン王で、とても真剣な表情を浮かべていた。
なんだろうフォルケン王様が・・私達・・ダイ兄に尋ねたいことってまさか!!
普段温厚で有名なフォルケン王が、ここまで厳しい表情を浮かべて勇者ダイに尋ねたいことは一つしかない！
フォルケン王の考えに辿りついたティファは、アキームの手を解きフォルケン王の言葉を止めようとしたが間に合わなかった。
「先のテランの戦いにおいて、攻めてきた魔王軍団長がそなた達の父だというのは事実であるか？」
・・・最悪だ

王城決戦!?最終章③

静まり返った会議室は異様に重い空気で覆われた。
先程までの和やかな雰囲気は霧散し、怖れと怒りと戸惑いが含まれた視線がダイ達に突き刺さる。
考えてみるとこの一行ってやたら魔王軍関係者が多いんだよね、ヒュンケルとクロコダインと私たちの父親が元魔王軍軍団長・・・普通考えたらないわな～とか、現実逃避してる場合でもなしか。
「あのアキームさん、ちょっと失礼します。」
フォルケン王の放った衝撃の事実に固まってしまったアキームに一言入れてティファは泣きそうなメルルの下へと急いだ。
「メルルさんのせいではありませんよ。」
側により優しい声を掛けてくれるティファに、メルルは申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
竜の騎士バランとダイとの親子関係を真っ先にフォルケン王に報告したのは自分と祖母のナバラだからだ。
先程まで築けた各国の王達との信頼関係にひびを入れたのは自分達の報告のせいだとメルルは悟り打ちのめされのをティファは見逃さなかった。
そして慰めの言葉をかけてくれるティファの足を引っ張ったことがさらに罪悪感が増して涙が出る。
そんな自分に、ティファは大丈夫だと何度も言ってくれるのが本当に申し訳なくなる。
だがファルケン王の追及はバランだけにとどまらなかった。
先の戦いの前哨戦ともいえる平原でのティファと超竜軍団とのやり取りにまで及ばれた。
平原には勇者一行のみならず、超竜軍団とティファと奇妙な縁が出来たリュート村の若者が成長をして衛兵となり、偶々あの場にて援護する気で待機していたのだ。
「成程、カイがあの場にいましたか。」
五年前には十三だった一番年長の彼が成長していればもうそんな

歳だろう。
驚いただろうな～カイの方が。五年前にガルダンディ―の歯ブラシづくりでハリネズミ捕りを一番に張り切って捕まえたの彼で、二年前のボラホーンさんのおかげで開催できた氷像祭りで一等になったボラホーンさん氷像作ったのカイだし。
ミーナの次にあの三人の事好きなのは間違いなくカイで、その三人が攻めてきた時どんな思いだったんだろう。
それも迎え撃った一行の中に私がいたんだから。
複雑に絡み合いすぎた私と超竜軍団の関係を明らかにしたいフォルケン王の意図が読めない。
父さんとの関係だけだったら私たちは世界を救う勇者一行を続けると表明すれば終われるのに、何の考えで複雑化させる？
穏健で戦嫌いで調和を貴ぶフォルケン王が不協和音を生み出した理由に流石のティファもフォルケン王の意図が読めずに困惑をする。
「ダイ兄、皆さん、その・・全部話していいですか？」
それは自分達の出生を、複雑に絡み合った糸の全てを意味する。
ここで父さんの素性を明かすのも悪い手ではないかもしれない。
この場には超竜軍団に攻められたリンガイアの王様もいる。
魔王軍に入るまでの地上を守った功績で罪一等減じてくれれば幸いだ。
リンガイア王あまり怒ってないみたいだしな。
ティファの読みどおり、アーデルハイドは超竜軍団の被害が自国に出ていないので個人的にはバランに対してさほど怒りは抱いていない。
ファルケンも伊達に王はしておらず、その辺の情報もきちんと掴んだ上で今回の一件を目論んだ。
敵の情報戦や思わぬところで勇者の父の素性が明かされるよりも、信頼関係ができそうな今が一番いいタイミングだろうと。
クルテマッカの様な猜疑心の強いものは情報を秘匿されるのを何よりも嫌う。
傷は浅いうちのほうがいい、今ならば、ダイ達の人柄を知った今な

らば受け入れてくれるだろうと考えて。
父の正体と、料理人が超竜軍団と繋がっていたのは人類を裏切っての事ではないのだと。
まさかティファと件の三人の絆が、ティファの魂にまで根を張っていたとは露知らずに。

王城決戦⁉最終章④

何をどこまで言っていいものか。
無論父さんの素性と母さんの素性。これに関しては母さんの事はヒュンケルが生前のラーハルトから聞かされていたから情報はあると言える。
魔王ハドラーの時に何をしていたのかもこれもラーハルトが教えてくれたで大丈夫。
問題は、私と父さんたちが幼少期の私とどう絡んだかをどこまで話せばいいんだろう。
父さんが魔王軍落ちした理由と、あの三人が人間を憎悪した理由は話せる自信があっても・・あの人たちの出会いは・・
「なんと！竜の騎士とはそのような凄き者なのか!!」
「なぜその様な者が魔王軍になど・・」
父さんに対しての予備知識としてフォルケン王様が父さんの正体と竜の騎士について王様達にレクチャーしてくれてるみたい。
「兄・・皆・・いってくるね・・」
言ってくるのか、行ってくるのか・・
足取りは軽く、心は重い。だってこれからするのはたんなる説明なんかじゃない。
この場にいる人・この世界の大半の人達はきっと知らない、私はこれから自分の罪を辿りに行くんだ。

それは果てしなく長く壮大で途方もない話
ティファは父親の正体とその使命故にハドラー大戦と時を同じくして起こった魔界での騒乱の話から始めた。
―竜の騎士バラン―が戦った相手は、時折迷宮に眠っている古文書にちょくちょく出てくる冥竜王・ヴェルザーであり、もしかしたら今戦っている大魔王バーンと同等の力の持ち主かもしれないことも紹介をして。

強大な敵を相手に五年もの歳月をほぼ一人で戦い抜き、遂には天界の力を得て封印したことを。
倒したのではないのかというクルテマッカにティファはきちんと補足を入れた。
彼の冥竜王は死しても輪廻の輪を素早くくぐり、何度でも冥竜王として復活できることが古文書に記されていたと。故に倒しきれず、封印が精一杯だったのだろうと。
文字通り戦いに明け暮れた瀕死の男を救ったのが運命の女性となるアルキード国王女ソアラであり、得られた幸福とその後の非業の最後の顛末までをティファは声を震わさないように話した。
聞くうちに優しきシナナ王は無論、クルテマッカの瞳にもうっすらと涙が滲み始めた。
命をかけて戦いし一人の男の、その時の無残な結果を思うとどれ程の無念であったか。
守った人間たちから感謝されるどころか理不尽な疑惑も迫害も、どれほど心を踏みにじられたのだろうかと思うだけで申し訳ない気持ちが湧き起こる。
竜の騎士は地上を守ったが、愛する女性と子供たちと引き裂かれた。
最愛の妻は自分を庇い死んでしまい、子等は嵐の中行方不明となり、人間に絶望した竜の騎士は血を吐くがごとく人間なぞ守るのではなかったと叫び上げて魔道に堕ちてしまった。
彼の竜の騎士を魔王軍に堕とした責任の一端が人間にあるのだと、神にでも言われればその通りだとしか言えない業の深い話であった。
いたい・・いたいよ・・・でも・・まだぜんぶじゃない・・

父バランの半生を話しただけでティファは胸が潰れる思いがする。
何時かの様に、父の半生を自分は見捨てたのだと思い知らされる。それでもまだ全部を話しきったわけではない。
竜の騎士と同じく許されるわけではないとティファは前振りをしながら、あのテラン戦で分かったガルダンディ―達の半生から話して

いく。
彼等だとて元から魔王軍にいたわけではなく、ガルダンディ―とボラホーン・ルードは人間との土地争いが原因で一族全てを殺されてしまったことを、ラーハルトは半魔故に幼き頃に人間達から迫害を受けて死にそうにまでなったことを。
それぞれが竜の騎士バランに助けられ魔王軍に入ったことを。
「それでも・・あの三人は私とリュート村の子供達に好意を持ってくれたのです。」
ガルダンディ―なぞは村の女の子のニーナに、魔王軍の襲来を詳しくでなくとも情報を漏らして村の誰かが他国に出ていって巻き添えを食わないようにと警告を発するほどに。
そう・・あの人たちは・・・本当はやさしくて・・・だから・・はなさないと・・

「もうよい！」

ティファがガルダンディ―達との出会いを、彼らが本当はどれ程優しくリュート村の人々を大切に思っていたのかを語ろうとしたその時、鋭い声が話を止めるように割り込んできた。
「リンガイア王・・」
止めたのは今までの全てに口を挟まなかったリンガイアのアーデルハイド王だった。
「料理人のティファよ、そなたの話はよく分かった。彼の騎士がなぜ魔道になぞ堕ちてしまったのか。
私は勇者ダイと料理人のティファ両名の父親である竜の騎士バランに、ヒュンケルとクロコダインに対してロモス・パプニカ両国が与えたような許しの猶予を与えてもよいと考えるが他の王達はどうか？」
結論を早急に出す様に促すアーデルハイド王の言葉に、いち早く返答をしたのはパプニカのレオナ姫であり、ロモスのシナナも、ベンガーナのクルテマッカも続くように許しを口にした。

バランの話はそれ程までに凄絶であり、彼の魔王軍入りの一端を担ってしまった同族としては、裁く権利が自分達にあるのかと思わされるほどだった。
そのバランが先の戦いで二度と人間と戦わないと言ったというのはまさしく僥倖である。
己の罪を償う道をヒュンケル達同様に行くというのならば、自分達が口を差し挟める権利もないのだと口に出して言いたいほどであった。
だが自分達にも守るべき国があり民達がいる。
その守るべき者達を脅威に晒した大罪人をそこまで手放しで言うわけにはいかず、許しの機会を与えるというのが精一杯であった。
占領されたカール程ではないにしろ、パプニカ・ロモスの様に攻められた国の王が許しを与えたのだからと追従する形となったが、それでも許しを出せたことに王達は何処かホッとした気分になれた。
もしもアーデルハイドが今の話を聞いても許しの言葉を発しなければティファ達の願いは永遠にかなわなかっただろう。
ヒュンケル達同様に、許しの機会を与えられたとポップ達は先程の様に泣き笑いしながらダイを揉みくちゃにして喜び、すぐにティファの下に駆け寄ろうとした。
ティファの望みがこれですべて叶った、否！思いもよらない願いが叶えられたのをきっとぐしゃぐしゃに泣きながら喜んでいるだろうと考えたポップが走り出そうとした矢先にまたもや止めが入った。
「料理人のティファは先程まで居た部屋に戻るように、残りの勇者一行は会議室に残ることを提案する。
よろしいかなテラン・フォルケン王よ。」
アーデルハイドは提案を何故か世界会議主催国のパプニカや、主導権を握っているベンガーナでなく、ダイ達を勇者一行に認定したロモスでもなくテランのフォルケン王に提案の同意を求めた。
それを受けたフォルケン王は沈痛な面持ちでアーデルハイドに了を応え、残りの三か国に頭を深々と下げティファを下がらせる事を頼み込んだ。

自分が良かれと思い仕出かした事の愚かしさを呪いながら。
キツネにつままれた思いがするが、両王の真剣な提案をレオナ達も受けティファに下がり、ダイ達に残るように命じた。
その時のティファの顔は俯いていて分からなかったが一礼をして部屋を出る時、何故か一行を避けるように遠回りをして別の扉から出て行った。
よろけるように・・まるで逃げるように足早に去っていったのは何故なんだ。
ダイ達はティファの異変を察して心配になり、後を追いたいが話があると残されてヤキモキとする。
一体ティファに何が起こったのか?先程まであれ程ヒュンケル達の事で喜んでいたのに。
ダイ達はアーデルハイドが何のために自分達を残したのか全く分からず、レオナたちもアーデルハイドとフォルケンの考えが分からずに困惑をしている。
少しして開かれたアーデルハイドから出たのは意外な一言であった。
「料理人のティファは勇者一行から離脱させ、故郷であるデルムリン島に返した方がよいのではないか?」

いたい・・いたいよ・・・ごめんなさい!たおして・・・そんなことしかできなくて・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・

戦いという沼に①

王達から謁見終了の許可を得たダイ達は走って待機していた部屋へと戻っていった。
会議室に残った王達やレオナ姫は沈痛な面持ちでその足音を聞く。
何故、どうして彼女ばかりが苦難を背負い込まなければならないのか理不尽さに憤りながら。
部屋に着いたダイ達が見たものは、泣いた跡が残るティファの寝顔だった。
泣き疲れ眠っている。辛くても笑い、自分達には決して泣き顔を見せないティファ。
強くなんてない、ティファは決して強くなんてない。
ただ強者の振りをしている女の子だと思い知らされる。
「馬鹿・・ティファの馬鹿・・」
たった一人で何もかもを背負おうとする妹に、ダイは泣きながら手を握ることしかできない。
起きた時のティファは―いつも通り―にしようとするのが目に浮かぶ。
笑って、料理を用意してくれて、なにくれとなく自分達の面倒を見てくれる―料理人―として。
辛い心なんてないようにしようとするティファ。
それでもティファを一行から抜け出させる事が出来ない。

リンガイアはカールと並び、多くの優秀な武人・騎士達を擁している武の国。
その国の王たるアーデルハイドからすればティファの今の姿は戦士として映らなかった。
如何に親しき者であっても世に仇なす敵に変わりはなく、魔王軍を打ち倒すことこそが勇者一行の本懐である。
それを割り切れずに戦いからずいぶん経っても心に影を落としている今のティファは危険な状態だ。

本来の強さで今は戦場で活躍できていたとしても、心の影に引きずられいずれ命を落としかねない危うさが見て取れた。
「今ならばまだ間に合おう、あの者は戦いには全く向かん。故郷のデルムリン島に帰すべきだ。」
それはかつてバラン戦後にクロコダインが感じた事と全く同じことをアーデルハイドが今再びダイ達に指摘をし、ティファを島に帰すように忠告をする。
勇者一行の者を魔王軍が見逃さないという危険も考慮して騎士団の中から出せるだけの精鋭達を選りすぐり、今この場で各国の王達と護衛の協議をしても良いとまで言ってくれた。
テラン王も忸怩たる面持ちでクルテマッカとシナナ王に協力要請を持ちかける。
自分はただ、ダイ達の親子関係と料理人の知り合いが魔王軍であっても、一行に二心なく世界を助けるために戦っている事を証明させてあげたかっただけだった。
それがティファの心を土足で踏みにじり、傷を再びこじ開けるようなことになろうとは思ってもみなかった。
心の傷を抉られながらも、ティファは気丈にも泣かずにこらえようとしていた。周りに気がつかれないように。
その証拠に後ろにいたダイ達は無論の事、前にいたレオナ・クルテマッカ・シナナ達は気が付かなかった。
数多の戦士たちを見てきたアーデルハイドと、かつて己の失策に心の苦しみを味わい今でもティファと同じ心の痛みを抱えているフォルケンだけが、微かなティファの変化に気付けた。
このままではこの子供は死んでしまう。良き心を持ち、優しさにあふれたこの娘を死なせないためにも一行から離脱させるべきだ。
レオナもアーデルハイドの言っている事に納得をした。
ティファは確かに強い。それは先のテラン戦を目の前で見ていたのだからよく知っている。
だがそこで見たのは力だけではなく、ティファの心が傷ついていくさまも見ている。

どうして忘れていたのだろう、あの時の悲痛な叫び声をあげていたティファを。
涙を流していたあの時のティファの事を。
その傷にアーデルハイドが気が付きティファの事を守ってくれると素晴らしい提案をしている。
アーデルハイドとフォルケンの提案をレオナ達は了承をするとダイ達に伝えようとしたが、ダイ達の様子も変わっていた。
「どうしたのですか勇者ダイ。」
俯き何かを堪えようとしているダイ達の姿は先程のティファと重なった。
「姫さん・・もうその手は使えねぇんだよ。」
レオナに声を掛けられたダイの代わりにポップが代わりに返答をする。
「ティファはもうデルムリン島に帰してやれねえんだよ。この大戦の決着がつくまで。」
ポップの返答はレオナ達にとっては意外であった。
ティファがバラン達との話をしている時、一人で退出をした時、全てにおいてティファの一挙手一投足を案じて見ていたダイ達ならばこの提案を喜んで受けると考えていたからだ。
エイミやバダックも、ダイ達がいかにティファの事を思い愛しているかを知っているだけに、ポップの言ったことが信じられなかった。
ダイ達だとて王達の提案を受けたかった。
如何にティファが嫌だと言ってもこの場の総意であると押し切りデルムリン島に帰したいと。
「それは料理人を戦力として考えての事か。」
ティファの心が弱いと言っても腕は一流の戦士である事には変わりなく抜けられるのは確かに痛手だ。
ならば自国の氷の勇者ノヴァを付けようとアーデルハイドが提案をしようとしたその前に、ポップはため息のような声でそれは違うと否定をした。
「戦力を考えての事じゃありません。」

強さならばダイとヒュンケルがおり、作戦・魔法は自分がいる。
武闘家マァムもクロコダインも強さを確実に付けておりそして今は各国の戦う者達が一丸となって魔王軍に立ち向かおうとしている。
その為に戦力の心配はしていない。
それでもティファを帰せないのには訳がある。それも深刻かつ解決できない事。

それはティファがティファとしてあり続けたせいだ。

ポップの謎かけのような言葉に周囲はいよいよもって疑問が深まりざわめきが増していく。
言ったポップ本人だとて、他の者が同じようなことを言えば何だそれはと一笑に付しそうな訳だ。
その者がその者であり続ける事は生きている限り当たり前であり、戦いから抜け出せない理由と全く結びつかない。
それでも、これはティファだからこそ起こってしまった理由なのだ。
自分達もテラン戦直後にはティファを島に帰そうという話が出たが、ティファは一行が危機になれば察して飛び出してきかねない。
実の父で地上最強の竜の騎士と分かってもバランに一歩も引かずに戦い抜き、鬼岩城戦が起きた時もティファは少しの情報から敵の襲来を予感をして伝書鳩を送ってきた程だ。
それを考えるだけでもティファを戦場から遠ざけることは難しい。何よりティファ本人が承知しないだろう。
仮に嫌がるティファをルーラでデルムリン島に連れ帰ったとしても、ティファは自分の力で島を出ていける。
空飛ぶ靴を取り上げ育ての親のブラスにティファにキメラの翼を渡さないように言っても、ガルーダという大型鳥獣モンスターがいる。
幼き頃より共にあるせいか、ティファが頼まないとティファと同じくモンスターの言葉を解し仲良くなれるダイですらも背に乗せない

ガルーダはティファの言う事しか聞くことはない。
おそらく自分達がティファの為だと言ってもティファ本人が本気で頼み込めばガルーダはティファを乗せてきてしまうだろう。ティファの切なる願いをかなえるために。
皆を守りたい
自分の知らないところで一行の者が傷つき、自身は安全なところで守られている事をティファはそれこそ泣きながら怒り、絶対に言う事を聞かないと怒鳴り上げる姿が目に浮かぶ。
ならば自分達がさらに強くなり、ティファがいなくても大丈夫なのだと、怪我を追おうとも生きて勝ち残れるのだと証明してティファが安心をしたとしても、矢張りデルムリン島に帰すことが出来ない。
ティファ自身が島に帰っていいと言ったとしてもだ。

戦いという沼に②

「ティファはもしかしたら大魔王バーンにまで目を付けられたかもしれねぇ。」

昨日王城でティファを待ち、今後ティファをどうするべきか一行会議をしている時にポップは真剣な面持ちでダイ達に最悪の可能性を告げた。

―お嬢ちゃんを僕たちのお城に招待したからね―

キルバーンの言った僕たちのお城とはどう考えても敵の本拠地であり、自分達を監視するように動いていた魔王軍ならば、尚の事御膝下での監視などわけなくできるだろう。

ティファの強さや言動が、もしかしたらハドラーを惹きつけてしまったように大魔王バーンの目に留まったとしてもおかしくはない。

誰に対しても分け隔てなく、それこそ敵にだとて平気で口をきいてしまうティファ。

時折笑顔までも向けてしまい種族・敵味方関係なく魅了してしまい思ってもみない、常識では考えられないような事態を引き起こしてしまうティファをデルムリン島に帰すわけにはいかない。

ティファと何故か会いたがるハドラー、主の命なくば出してはいけない力を使おうとしてまでティファを殺そうとしたミストバーン、ティファを変態的な理由で追い回しているキルバーン、そしてもしかしたら最大のラスボスまでもが目を掛けたかもしれない状況下ではとてもではないが帰せるわけがない。

ティファの安全はもうこの一行の中にしかない。

自分達の目の届く所にいてもらわないと守り切れず、大戦が終わるその日まで激戦を共に潜り抜けてもらわなければいけない。

しんとなってしまった会議室で、自分で言っていてなんだがとポップは泣きたくなる。

たった十二歳の少女の唯一の安全な場所が戦場のど真ん中にしかないなんてそんな馬鹿な話があっていい訳がない。

それでもこれは変えようもない事実であり、最早誰にもどうにもできることではなく、運命の神がいたら何故ティファだけに辛い道を行かせるのだと顔面に一発ぶちかましてやるのに!!!

理由を聞いた王達から血の気が引いている。

無理もない。今までは話にしか出て来ていない敵の総大将に目を付けられているなどと聞かされればこんなもんだ。

昨日の鬼岩城の恐怖で、より大魔王の底知れない強さが膨れ上がった後ならばなおさらだろう。

その大魔王を討たない限り、ティファ自身の平穏は訪れない。

世界を救う事がティファを守る事

それが昨日の一行会議で出た結論であり今後勇者ダイ一行の目標となった。

「分かった。そなた達の言う通り、料理人は一行の中に留めておくのが最善のようだ。」

アーデルハイドは苦い顔でポップの言を認めた。これは最善策というよりも唯一の方法で、選択肢など他にはないのだと思うと遣る瀬無い気持ちがこみ上げる。

ポップの推測が当たっているのならば、如何に屈強な者達が島に護衛でいたとしても何の意味もなさないだろう。昨日の鬼岩城の如くになってしまうのが目に浮かぶ。

戦いの激化に、あの少女の心が果たして持つのか。

憂慮しつつも、早くティファの下に行きたい気持ちを察した王達はダイ達に退出許可を出して下がらせる。

「・・彼らの全面的な支援を・・」

「分かっているパプニカの王女よ。我らに出来ることはすべてしよう。」

年若き彼らが今までほぼ独力で頑張り抜いてきたのだ。

今後は自分達の持てる力を最大限に使い、この大戦を乗り切る話がダイ達の退出した会議室で真剣に議論をされた。

「ティファ起きないね・・」

「眠れるだけ寝かしてやろうぜダイ。」

「うん・・」
ソファーで丸まり眠っているティファの手をそっと握っているダイの頭をポップがぐしゃぐしゃとかき回す。
普段は強いのに、妹がかかると途端に変わる弟を心配して。
部屋も会議室も重い空気がのしかかる。誰もがティファの事を案じて・ただ一人を除いては

あのお方ならば王の病も治せるのではなかろうか
主君レオール王の為にも、料理人の知恵を使っていただきたい。今すぐに

ふざけるな

「・・ファはまだ・・」
「そこを何とか！」
「ちょっと・・アポロ！いい加減に・・・」
「離せエイミ!!」
うう・・・うっさい!!
「なんですか!!!」
うん・・なんか目がしパしパする。泣きながら寝たのが拙かったのかな。
それにしてもダイ兄の声とエイミさんと・・
「何か御用ですか、三賢者筆頭のアポロさん？」
人の眠り妨げたのこの人か。
ティファにはいくつか悪癖がある。敵味方の立場をスカンと忘れて話し込んだり口が悪かったりがあるが、兄妹を十二年しているダイからすればそんなものは序の口だ。
ティファをよく知るデルムリン島ご一同様と海の荒くれ集団ウォーリア船長一同が絶対に順守していることがある。
ティファの眠りを妨げるな
ティファはあまり寝起きが良くない。普段は早起きをして体の目を覚まさせているので一行の前で襤褸を出さずに済んできた。
人から起こされること、特に午睡を邪魔する奴は滅べばいいとさえ思う時すらあるほど寝起きがよろしくない。
それも精神状態がズタボロの今は許してやる余裕すらがない。
そんな跳ね起きるようにして目覚めたティファに睨まれたアポロは、蛇に睨まれたカエルという可愛い例えでは効かない程のプレッシャーを受けて碌に口がきけなくなっている。
・・・人を叩き起こしておいて返事もなしだなんて、この人は・・
「もう一度聞きますよ、何の用ですか？」
「あ・・その・・」
アポロもここに来るまでの間は意気揚々と部屋に向かっていた。

ティファの知識があれば、今宮廷侍医達でも治療できていない病を治してくれるはずだと。
その知恵を借りるべく会議最中の部屋を出てきたのをエイミに見咎められたが、エイミだとて話せばわかってくれるはずだ。
「貴方それでティファさんのところに？」
アポロの言ったことがエイミには信じられなかった。王達やダイ達の話を全く聞いていなかったのだろうか？
今のティファさんは身も心も疲れきっているからこそリンガイア王が早めの退出を促したのは自分でも分かったのに。
アポロは自分が正しいと思い込むと時に無鉄砲で周りを疎かにするときがある。
今は王の病のためにとティファさんの状態を慮ってはいない。
ティファとティファを大切にしている者達の怒りを招かないためにも、それだけではなくティファを休ませてあげたいとエイミは必死にアポロを止めようとしたのだが押し切られて部屋に入られてしまったが、あの時の勢いが今のアポロにはなくしどろもどろにソファーから動かない少女に言い訳をするように要件を伝えている。
マジですか
この人馬鹿か？
「一介の素人に国王陛下の診察をさせてそれを治療しろと？」馬鹿だろ本当の話。
「はい！ダイ君達に用いている万能薬を・・」素人め。
ティファは心底ため息をついてアポロの言葉を遮った。いろいろと言う事あるが、その前に確認をしよう。
「これはパプニカの王女・レオナ姫からのご依頼でしょうか？」
「いえ！姫様は何もご存知ではありません。」
「では宮廷侍医長の方から？」
「違います。」・・・百歩譲って
「三賢者で話し合った結果の合意の下での依頼でしょうか？」
「これは私の判断で料理人殿のお力を是非お貸しいただこうと参りました。」

つまり全部の段取りすっ飛ばして、いろんな人たちの頭越しでここに来たっての？
駄目だこの人
「アポロさん、私に会ったことは言わないで今すぐにレオナ姫に――一行の料理人の薬学知識――を借りるかどうかのお伺いたてて来てください。
くれぐれにも私に会ったことは言わないようにお願いします。」
独断で王の治療頼みに来るなんてどんだけ馬鹿なのよ。
パプニカのような大国の王様なんて通常一般人が会う事すらできない、まして王の病だなんて国家一級の極秘情報でしょ！そんなことも分からずに情報をホイホイと漏らすこいつは無能かな。そもそもそこまでの権限が自分にあると思っているところがホント馬鹿。
怪訝そうな顔で私の言ったこと一応聞いるけど大丈夫なのあの人？
「エイミさんとマリンさんの三賢者の合意で――どうでしょか？――位で聞いてくださいね。」
「・・分かりました。」
「では・・」さっさと行ってよね。
「ティファ・・王様の事診てあげないの？」
「ティファ、父さんの時のように何かアドバイスしてあげれば・・」
一行の皆は本当に良い子だ。ダイ兄達も王様の病の事は知って心配してるようだけど、やっていい事と悪い事はきちんとある。
「あのねダイ兄、お城にもお医者さんはいるんだよ。王様の事をきちんと診ている人が。
その人達の事をすっ飛ばして私のところに来たってことは、その人達が役に立ってないって言っているようなもんなんだよ？
そもそも勇者一行だからって王族にホイホイと近づけるわけでなし、まして国王の傷病なんて国政を左右するかもしれない事なんだから、尚更近づいていいはずないんだからね。」
ロカさんの時とは全く違うんだからね。
城勤めの常識無視してきたあいつは・・温室育ちか。

本当の意味で苦労したことがないのか分からんが、もっぺん出直してこい阿呆が。
珍しくティファは悪口を言った、たとえ心の中であったとしても。あんな未熟者には初めて会った。
これはティファの生活環境が大きく影響しており、大抵の人間ではティファからの合格は貰えないだろう。
自分を育ててくれたブラス・ウォーリアはきちんとした大人であり、日々見守り助言をしてくれた三神達もまた然り。
その他にも―おじさん―だったり―おじ様―だったりと、ティファの周りには―大人―が沢山いて育った。
坊々育ちのアポロとティファは最初の出会いからして躓いているの事も尾を引いている。
それも加算され、アポロは一人レオナ姫にのところにお伺いをたてに行ったのだった。
ティファは横になっていたソファーから降りて自分のお茶を淹れて腰を掛け、ゆっくりとカップを回して休んでいる。
その顔は眉間にシワがよって恐ろしい。ティファの寝起きの取り扱いは全員で対処しよう。
「ティファさん、その寝ていた方が・・」
そんな怒れるティファに、チウは恥ずかしそうにしながらティファに休息を勧める。
自分はまだあったのはほんの少しだけれども、それでもティファに仲間意識が芽生え始めて休息をとった方がいいと促す。
「ありがとうチウ君、心配してくれるんだね。」
あんな坊のこと忘れてチウ君をモフリたい。
そんで愛でたら気持ちいいだろうな～。
「そしたらチウ君、一つ約束を・・」
「ティファさん!!」
・・人がまったりしようとしたところいきなりに入り込んできた！人を一人連れてきて
それも着ている衣服から判断するに、この城の侍医長来た!!

「料理人のティファとはどなたかな？レオナ姫より早急に会って王の体調をどうしていくべきなのか話し合えと言われましたぞ。」
うっわ思いっきり睨まれた。無理もない、こんな小娘と一緒に見ろだなんて私なら断るんだけど仕方がない。
「アポロ殿に王の体調の事を姫様に聞いてこいとか言われたらしいですな。全く余計なことを。」
ですよね～、段階すっとばした小娘なんて邪魔ですよね～、それが本当の話なら！
あの坊なんて言ってレオナ姫に説明したの!?
こんな状況を作ったのは私じゃない。
一体誰の差し金だ・アポロのせいだ畜生！
もうふざけるなと言いたくなる。

出来ることと言えば・・

「申し訳ありませんでした。」

とりあえず開口一番謝罪から入った。

アポロが連れてきたのは宮廷侍医長でロムスという人だった。

パプニカ王を出産時から取り上げて今日に至るまでずっと自分で診てきて他の誰にも診察をさせたことがないという筋金入りの侍医の鑑のような人だとか。

何でそんな人に睨まれてるんだ私は。そしてそんな現況を作った坊が説く説くと語っているんだどや顔までして。

そんな先達の顔を潰したって分かってるのかこいつは？

分かってないんだろうな・・この事態鎮静化させるためにも・・冒頭に戻るだまったく。

ダイやエイミたちの手前、この騒ぎの元凶はアポロだと言い募るよりも自分で頭を下げた方が早いとティファはさっさか判断し、やってもいないことに対してあっさりとロムスに頭を下げた。

「―ほんの少しだけ―薬学をかじったものがしゃしゃり出ようとして申し訳ありません。

ロムス侍医長にお会いして医師の造詣の深さを知り己の浅慮を痛感いたしました。」

「・・・謝罪を受けよう。話はこちらで。」

ティファから謝罪を受けたロムスは手近なテーブルではなく少し奥まったところにあるもう一つの方にティファと二人っきりで話をすると連れて行った。

ダイ達は事の発端を知っているだけに、アポロの不備を何故ティファが負うのか納得できずに心中穏やかではないが、アポロにもヒュンケル・クロコダインを擁護してもらった恩があるので表立って言えずに内心で怒りを抑えて事の成り行きを見守っている。

「アポロ殿ですね。」

「はい？」

「隠し立てしなくても結構ですぞ。本当の事の発端はアポロ殿が貴女

に王の体の事を言いに来たのでしょう。」
入ってきた時やその後の対応とうって変わり、ティファと二人きりになったロムスの顔と声は穏やかなものになっていた。
「申し訳ない。自国の者が困った事をしたのに、貴女に詫びなぞをさせてしまい。」
ロムスはこのパプニカ王城に務めてもう半世紀以上になる。同僚というか同期で現役の城勤めの者はもうバダックの他は数名しか残っていない程の古株中の古株。
ロムスとバダックはこの城に務めているもの達の事を大半は把握している。
流石に洗濯女や釜焚きなどは知らなくとも、長年働いていればメイドに至るまで知っている程の情報通。
その情報通は鬼岩城戦の後で料理人が行った物資寄贈の事は全て掴んでおりおおよその為人も把握済みであった。
だからこそ今回の一件も勇者一行の料理人が言い出したのではなく、王と姫君をひたすらに案じるアポロが言い出したのだと直ぐに当たりはつく。
つくのだがそれでも不機嫌を装わざるをえなかった。
アポロは有能で普段は出来た男だが、正義感が強すぎ曲がったことが嫌いな清廉な人物で通っている。
普段はそれでもいい。腹芸などは賢者の仕事ではなく大臣・官僚の仕事だからだ。
だが今回はそのことが災いした。内密な話でレオナを呼ぶことはせずに、会議最中のレオナに報告して周りの耳目を集めてしまった。
一応アポロもティファに言われた内容で報告をしたが、それでも一介の素人の発言を超えていることに変わりなく、周りを宥めるために全てを承知しつつもロムスが不機嫌を演出したのだ。
勇者一行の料理人の越権行為は侍医長が叱り、料理人のティファも反省をするだろう
筋書としてはこんな感じだと周りには聞こえない小声でロムスはティファにからくりを話し、そのせいでティファが謂れのない評価下

げに繋がってしまう事は防げない事にも言及をして申し訳なさそうに謝罪をしてきたのだ。
決してティファが悪いのではない。自分はその事をきちんと承知していると伝えるために。
この人凄い人だ。
ちょっとした情報で全部繋げて行動できてしまう素敵なお爺ちゃん医師だ。
ロムスさんはロモスのシナナ様をほっそりとさせた人で、後は髭の長さや茶目っ気があるけど凄さが分かるところまでもが。
ティファはロムスが話すパプニカ王の体調と処方してきた薬を聞いてるだけで、ロムスの医師としてどれ程凄い人か分かり目をキラキラとさせていく。
薬には作用と副作用がある。よく効く薬は当然のように副作用が強く吐き気・眩暈・頭痛等様々な事が起き、それに対処する薬も用いるので大量になりがちだが、ロムスは独自の精製法で毒気の強い薬の毒気自体を薄めて使っているという。
それはパプニカのレオン王を幼少のみぎりより見て来たからこそ、どのような薬が効くのか効かないのかを知り尽くしているからこそ出来ることだが、それでも薬の毒気を薄めるのはティファにも出来ないことであり、万能薬調合時に副作用に対処する薬草を同時に配合をしている。
是非ロムスから教えを乞いたい！
普段の自分ならばグイグイとロムスに迫るのだが、今はそんな気すら起きない。
パプニカ王を治してあげられない
ティファの内心にまたもや暗い影が落ちる。
胃痛・吐き気から始まり見る見るうちにやせ細り、近頃は吐血すらしているこの症状は―私―がよく知っている。
前世での私の死んだ原因の胃がんだ
この様子だとパプニカ王の余命は半年と見積もってもらった方がいい・・このことをレオナ姫は知っているのだろうか。

「ロムス様・・この事は・・」
「レオール王ご自身には告げてあります。もしも腹にしこりが出来た時はお命がつきかける時だと。」
「レオナ姫には。」
「・・まだその段階ではないので徒に姫のお心を乱すだけだと王ご自身より口止めをされている。」
そうか、王女様で帝王学習っていてもレオナ姫も多感な少女期だ。王様も国王としての立場で跡取りの姫に接するよりも、父親として娘の心を心配したんだ・・なんで・・良い人ほど早く逝ってしまうのだろう？
助ける薬の手立ては私にはない、出来ることと言えば精々苦しみを和らげることだけだ。
ティファは無言でポーチからメモの紙と羽ペンとインクの入った小瓶を出して無言で書き始める。
その様子は悲しさで満ち溢れ、悲壮ささへ出していた。
書き終えたティファは直ぐにロムスに渡し、読んだロムスはティファの様子にとても納得をした。
「ティファ殿・・これは・・」
ロムスは最後撫で言い切ることが出来なかった。
それは五年前にティファが、矢張り助けられない仔竜ミーナの為に作った眠りの死薬。
飲めば痛みを感じることなくねむるように逝く安楽死の薬。
今回は鎮静剤として薄めたものを処方箋に書き出したが、医療の特に薬学の造詣に深いロムスからすれば、その効能の恐ろしさを一目で看破したのだった。
「もう私には・・こんな事しか出来ないのです。」
悲しみを深くたたえた瞳を宿したティファにロムスも無言でうなずき一礼をして席を立ち、アポロとエイミにも一緒に退出するように促し部屋を去った。
ティファの薬の造詣の深さに脱帽し、出る直前にある事を質問した。

「もしや今世界を救っている万能薬の開発者に、ティファ殿も関わっているのではありますまいか？」
ダイ達はロムスの言葉に驚き、その可能性がある事に考えが至り驚愕の眼差しをティファに向ける。
それは先程―万能薬―と呼ばれている薬の事を知り、ロモス王がティファの端書メモに支払おうとした報奨金の高さから、自分達が普段使っているティファの薬の希少性が分かり自然と―ティファの薬―もイコール万能薬ではないかと結びついたからだ。
だが聞かれた当の本人のティファはその質問をされても驚きをあらわさず、是とも否とも言わずにただ黙って微笑むだけ。
これは無粋な事を聞いてしまったとロムスは自分に苦笑してしまった。
ティファのような者は自らの手柄話をするはずがないのだと分かっていただろうに、珍しく興奮して抑えがきかずに聞いてしまった。
それ程までに万能薬の魅力は凄まじく、効能を知ってしまった者達からは奇跡の薬とまで言われている。
長年医師をし、遂には侍医長となった自分をも虜にした薬の開発者と思しきものを間近で見て話が出来たのだから良しとせねば。
ティファの沈黙にロムスはまたも無言で一礼をして退出をした。
レオナ姫に―全て―を報告すべく。
如何に多感な時期の少女とはいえ、国王が亡くなった時に備えねばならない。
今の自分にできる精一杯の事を全てせねばならない。
たとえ姫君に恨まれようともだ。

何が奇跡の薬だ
自分に出来ることと言えばいつもこんな事だけ。傷はある程度のものを治すことが出来るが病には無力。助けることは出来ず、苦痛を和らげるだけ・・そんな事しか出来ない。

寝ます

「分かりました。ロムス、辛い報告をありがとう。」
「そんな姫様・・」
「私ね、薄々知ってたのよ。お父様の命が長くないことを。」
毎日欠かさずに父の下に言っていたから分かる。あの偉大で騎士のように屈強な父が日々やせ衰えていくのを見ているのだから。
見舞いに行くたびに安堵する。今日も生きていてくださったと。
日によって多い時には誤解は父のもとを訪れては人払いをして甘えている。
病床の父には重いかもしれないが、それでもベッドに身を起こしている時の父の膝に上に頭を乗せて撫でてもらっては安心をする。
「レオナはなかなか大人にならないものだな。」
苦笑しているような、どこか困ったような物言いをする父は、それでもいつも甘えさせてくれる。
父が助かるのならば大人に等ならなくてもいい。母は自分の出産と共に命を落とし、母を心の底から愛していた父は再婚をしなかったので自分は母というものを知れずに育ってきた。
家族はこの父だけで失うなんて耐えられない。
だからこそアポロの独断専行ともいうべき越権行為を咎めることなく自分も便乗をしたのだ。
フレイザードの時の自分を、バランの時のポップを死の淵から救い出してくれた奇跡をティファが起こしてくれるのではないかと。
「万能薬は確かに効きます。しかしそれは―傷―に対して有効であり、残念ながら病に効くものは今のところないのです。」
ティファはなまじな希望を持たせないために、現在の万能薬の限界をきちんとロムスに伝えた上で痛みの緩和剤を処方した。
痛みが和らげば満足な睡眠と僅かながらも食欲が出て寿命を少しでも伸ばせるのではないかと祈りにも似た気持ちを込めて。
ティファ・・ごめんなさい
ティファ自身も辛い事ばかりなのに、そのティファに縋りつこうと

したなんて。
愚かな行為、ティファの負担を無視してしまった。
敵やその周辺事情で疲れているというのに、味方である自分達までもが重しになるだなんてどうかしていた。
少し時間が経ち、冷静になったレオナは己のとってしまった行動を悔やむ。
この件の責任は端を発したアポロよりも、見逃して便乗をした自分にこそある。アポロともども、自分達のいる地位とそれに伴う責任を今一度認識しなければならない。
レオナは反省をしたが、もう片方のアポロは納得がいかなかった。
あれ程の薬の知識があるのならば、王の病状を診てその上でのことならば納得もいくのだが。
大戦が始まる前からレオナ姫は国王の病気の事で心を痛め、明るく振舞っていてもふとした拍子に悲しみの気配が漏れ出ていた。
大戦最中であるとはいえ、ダイの達のおかげで本当の意味での明るさを取り戻し、城内も活気づいてきた。
そこに薬学の知識を持つ料理人ならばと望みを持ったのだが。
自分は大それた事をしようとした訳ではない。国王と姫君の笑顔を守りたかっただけなのにエイミにまで常識を忘れたのかと叱られたのが解せない。
主君たちを守りたかった・・ただそれだけなのに。

レオナ達が様々な思いに駆られている時、ティファは何をしているかというとソファーに丸まってひたすら爆睡をしている。
それもなんと大ネズミのチウをひっしりと胸元に抱きしめて。
ロムスと快く話せた上に、精神的に苦痛になったアポロも一緒に引き連れられて去ったことでティファの精神が安堵したことで緩み、疲労がどっと押し寄せてきたのを察知したのは兄達ではなくクロコダインだった。
長年戦いに身を置く武人は少しの気配からも相手の様々なことを読めなければ死に直結をする。

この場合いもティファの疲労感が徐々に上がってきたのを察知して、疲労感からくる眩暈で椅子から転げ落ちる前に側によりあっさりとティファを抱き留め、ティファにもう少し眠るように忠告をした。
幸い王達も一行がどれほど滞在をしても良いと許可を出してくれたので、ここは遠慮する事無く有り難く言葉に甘えた方がいい。
「クロコダイン・・チウ君のとこ・・」
眠りに堕ちそうになりながらも、もごもごとチウの所に行きたいとの要望に何故も何も聞かずにティファをチウの側に連れて行き、目線が合うようにかがんでやれば、なんとティファは素早くチウを抱きしめてそのまま眠りの世界へと直行あそばしたのだった。
疲れきっているとは思えないその素早さにクロコダインも抱き上げられたチウ本人もいらた全員が目をぱちくりとした。
しかもだ、抱きしめる力は程よくとも、チウの服を握っているティファの指先には尋常ではない力が込められており梃子でも離さないというティファの底知れない意思まで感じられる。
そういえば謁見前のチウのブラッシングをティファも手伝っている時に言っていた。
チウ君の毛は見た目よりもぽわぽわしてますね
大ネズミモンスターとはいえチウは武の師匠ブロキーナに拾われて以来、礼儀の一環として身だしなみの事も教え込まれたので可能な限り水浴びをしていたので野生のモンスターよりも毛が柔らかくなっている。
その毛の触り心地が気持ちいいとティファがうっとりしていたのをチウも思い出し、このままでいいから自分ごとティファを寝かせて欲しいとチウは小声でクロコダインに申し入れをした結果、可愛い構図の出来上がり。
眠りながらもティファは時折チウの毛をさわさわして口元を緩め、クンカクンカと匂いを嗅いではニヘラとし、チウの頭に頬ずりをしているのに爆睡しているという器用なことをしている。
これにはダイも文句は言えない。言えないどころか妹が可愛いと悶え苦しんでいる。

ポップやヒュンケルも年相応のティファにやられてしまい、マァムとメルルの提案でお茶や残ったお菓子を食べながらティファの目が自然と開くのを待つこととなったのだった。

大魔王の篩編

真夜中の使者たち①プロローグ

夜中の森は昼とは違う顔を見せるもの。
昼のような陽の活気はなく、真夏でもしんとした冷たさを森全体に覆いつくしてどこか生者を拒んでいるが如く静寂が広がっている。
時折聞こえるモンスターの移動の音を除いては、真夜中のランカークスの迷いの森に入ろうという馬鹿者はいない。
ただでさえ昼の日当たりのいい時でも迷う森に夜中に入るのは間違いなく自殺行為であり、足を踏み入れたが最後、迷って崖から転落をするか遭難して野垂れ死にをするか、さもなくばモンスター達の餌食になるか、どれをとっても碌な死に方は出来ない。
だが今日は森の様子がいつもと全く違う。
森の静寂を破る駆け足が響き、藪をかき分け小枝を踏みつけて折る音がしている。
黒髪の少女がひたすらに走っている。呼ばれているから。
―こっちだよ―
―早く来て、君に会いたいんだよ―
―待っているから早くおいで―
―会えなくて寂しいんだよ―
行かないと
ただそれしか考えられなくて―声―がする方に走り続けている。
白い綿の寝具を着ただけで、裸足の足は笹藪や小枝を踏みつけて皮が破け薄っすらと血が滲んでいるのにも関わらず、時折周りを旋回して心配そうに声を掛けている精霊達の存在さえ気が付かない今の少女の状態は異常である。
常の少女ならばそもそもこんな時間帯に出歩くことはしない。
夜だとて活動しているモンスターに遭遇する危険性があり、夜の森にはモンスター以外の危険が潜んでいる事を経験から知っている。
一人での野営時もなるたけ森の中は使わずに、どうしてもの時でも

開けた場所を選ぶようにしており、こんな無謀なことはしない。
それでも走って声の主に会いに行くことに対しての疑念は何も浮かばず、それどころか早く行かなければならないという焦燥感が増していき、もっと早くと己を駆り立ててさえいる。
近づいているのか段々と―声―が大きくなっている。
―ようやく来てくれたね―
―早く早く、早く君に会いたいんだよ―
―声―の雰囲気が明るくなっている。自分が近づいているのが余程嬉しいらしい。
待たせてしまって悪いことしてしまった。早く行って上げないといけない。
頼りになる唯一の月明かりが木々や葉に遮られる場所になっても少女は躊躇いもなく突き進んでいく。
夜目が効くとはいえど、明るい場所を走るよりも肉体的にも精神的にもきつくなるというのにだ。
古来より人は暗闇を恐れる。それは迷信深いものがする事だと笑う者もいるが、実際はその闇の中に潜んでいる脅威を恐れている。
見えないという事は己をも守り辛くなるというに事に他ならず、暗闇なぞと嘯くものこそが愚か者だと、走っている少女は日頃より考えている。
だがその日常の戒めさえ破り、何かに憑かれたように走り続ける少女もとうとう―声―の下へと到着をした。
月明かりのない森が突如開け、泉と岩清水が出ている小高い岩がある円形状の場所に出た。
何で―この人達―が今ここにいるんだろう？
目的地に辿りついた少女は先程まで自分に取り憑いていた思いは霧散をし、―待っていた者達―を一目見て驚きを隠せなかった。
それは向こうも同様のようで、待っていた片割れも少女の出現に十分驚いていた。
まさか小娘が本当に一人でこの場に来るとは思わなかった。
「小娘何故来た。」

確かに主の命を果たすべく誘き出す予定ではあったが、どう脅して一人で来させるかを腐心していたのが馬鹿馬鹿しくなるほどにあっさりとくるとは。

私だって聞きたい

少女は待ち人の片割れの質問に答える術がない。

なぜ自分はこの場に来てしまったのか、それこそ自分こそが聞きたい。

この二人が自分に何の用があるというのだ。どうやって自分をここに来させたのか、何故—笛の音—が遠くにいた自分に届きあまつ声のように聞こえたのかを。

小高い岩の上で足を組んで座って—笛の音—をまだ奏でているもう一人の待ち人は、うっそりと瞳を微笑ませながらひたすらに自分の事を見ている。

蜘蛛の巣に掛った獲物を見る蜘蛛の瞳はこんな感じなのだろうか？

昼間自分はあれ程幸せな時間を過ごしていたというのに、何故危険な蜘蛛の巣になぞ来てしまったのだ。

真夜中の使者たち？昼前

パプニカ王国は本日もお日柄が良く、小高いところから海を見れば水平線がきれいに見える。
港町は呑気にカモメが鳴き、猫が隙あらば漁師たちの網からいくつかの魚を取ろうと虎視眈々としている。
誰が想像しよう、昨日でパプニカが壊滅していたかもしれない事態が起こったことを。
人以外の動物たちは昨日の事なぞ忘れその日生きる糧を得ようとそちらばかり考えているが、往来を行く人々の顔にはまだ脅えが残り、微かな音にもびくつく者もいる。
それ程の傷跡が人々の心にも上陸をされた箇所にも残っている。
攻めてきた者の象徴のような壊れた鬼岩城が残っているのだから尚更なのかもしれない。
ティファもこの鬼岩城どうすべきと悩んではいた。
ノリノリで鬼岩城を罠に嵌めてやっつけてやったぜイヤッァホォ～、とか精霊達と大盛り上がりしたけど、一夜明けて少し落ち着い考えてみれば、この超巨大産廃物どうすればいいの？
？魔王軍に苦情を申し立てて引き取らせに来させる。
人間界にはない物質も多分に使用されているはずだから解析されたら不都合でしょうとかなんとか取引風にして処理してもらいに来る・・・ないわぁ～。
？コツコツ解体
泥から見えるところから解体して、引っ張り上げながら少しずつ崩しておうちの材料にする。
・・・そんな怪力どこにいるんだか。現実的でないし次いってみよう。
？放っておく
ダイ兄の話だと中から感じたエネルギーの元になる物も斬ったって言ってたから、大戦終わるまで保留という事で。
ただしいつ再起動するか分からないから見張りは常時つくように

なるらしいと、王様達とレオナ姫が出した結論はこれらしい。
その話は城を先に出た私は知らず、辞去の挨拶に行ったダイ兄とポップ兄がレオナ姫から直接聞いたようだ。
私は先に城出たけど。

「昨日ダイ兄の剣を作ってくれた人のところに一行全員でお礼をしに行きたいです。」
昼近くになってようやく目を開けたティファは、早速やりたいことをダイ達に伝えた。
もうそろそろハドラーの篩から決戦への道筋になるのは明白であり、今の内に一行全員とロン・ベルクとの仲を親密にしたい。
知っているだけの者達と、よく知っている親密な者達とでは手を貸す力の度合いも違ってこよう。
ロン・ベルクとて力を貸してくれるとなれば別に手抜きはしないだろうが、そこは情が絡んだ方がより一層奮起してくれるだろう。
あの人なんだかんだ言っても原作の生意気ノヴァを弟子に引き取ったくらいの面倒見のいいひとだし。
今回行くにも、ダイの剣を作ってくれたからというお礼の名目もあるので行っても大丈夫だろう。
「その際ポップ兄のご両親にもお礼をしたいのです。」
こっちは純粋なお礼を込めて。
ポップの父ジャンクが鬼岩城という強大な敵を相手にしに行くポップを止めずに送り出していた所も式鳩で見ていて申し訳なくなった。
送り出す瞳にはこらえがたい悲しみが込められていたのが分かったから。
何処の親が好き好んで我が子を死戦の場に送りたがるというのだ。
それも武人の家系でもなく、かつて鍛冶屋として城勤めをしていたとはいえ今は市井の者だ。
本当はポップに行くなと言いたかったであろうとは容易に察しが付く。

ポップ兄の無事な姿を見せてご両親を安心させてあげたいのです。
ティファの優しいい思いからの発案に、ダイ達に否やはなく直ぐに行くことに決めた。
これ以上ティファの心を乱すことが起きる前に、ティファを直ぐに城から出す算段も付けてある。
「ティファさん、実は昨日僕が逃がしたモンスター達の中にはけがをした者たちも結構いるんです。」
今そのモンスター達の面倒はヒュンケルといつも一緒にいるベホイミスライムが見ているのだが、多すぎて診切れないかもしれない。
「はりゃ、そういえばべほちゃんいないなとは思ってたんですが、そんな訳が。」
五年前に親友のノヴァが死にかけて以来、回復大事とべほちゃんと共に一緒にあちこち行って、今はヒュンケル専用と言っても過言ではないダイ一行の頼れる仲間の一人だ。
うちって人族とモンスター族の割合が半々なんだな。
人族
ダイ兄（竜の騎士とハーフでも母は人だからいいよね）
ポップ兄
マァムさん
メルルさん
モンスター族
クロコダイン
チウ君
ガルーダ
べほちゃん
みんな仲良くて和気あいあいとしていて良い一行だな～。
出来れば初決戦で蹴りつけられるのが理想なんだけど、どっちに転んでもいいようにしておいてあげたい。
その為にもロン・ベルクさんとの仲をより深く・・・の前に行かないと。
「チウ君、怪我した仔達は何処いるの？」怪我した者を治すの先だ。

ティファはダイ達の目論見通り、怪我をしたモンスター達の方に気が行った。
ティファは誰よりも優しく、怪我をしたのが何者であっても放っておくはずがないとポップが発案をした。
「姫さん達には俺達から言っておくよ。お前だってまたアポロさんと会ったら気まずいだろう？」
「う・・えっと・・・」
「レオナだって分かってくれるよ。先に行っててねティファ。」
「でも・・」
「ティファ、チウと一緒に行っててね？」
んと・・ポップ兄達いやに張り切って私を城から出そうとしてる。ここは素直にお言葉に甘えよう。
ダイ達にお願いしますと言って、ティファはチウに案内をされて怪我をしたモンスター達の治療に向かった。
「―ヤッホー、ティファ～―」
「お疲れ様べほちゃん。手伝いに来たけどやる事ある？」
「―流石に骨折とかは僕のベホイミだけじゃ無理。ティファ来ると思ったから骨折の仔達分かるように、怪我した箇所に蔓を巻いといたよ―」
「流石べほちゃん！チウ君も手伝っていただけますか？」
「分かりました・・でも・・その・・」
「ん？どうかしました・・」
「僕に敬語を使わないんでほしいんです。」
「うん？」
チウは真っ赤になりながらも、ティファに敬語を使われると何だがティファと自分との間に壁が出来るようで嫌だとはっきりと言った。
自分もべほのように気軽に話してほしいのだとも。
「僕なんか弱いかもしれませんけど・・それでも・・ティファさんの心を軽くできたら・・」
この一行は誰もが強い。自分のいた世界が井の中どころか猫の額ほどの者だと思い知らされるほどにとんでもない人達ばかりで、そん

な一行の中に果たして自分がいていいのだろうかと思ってしまうが、それでも自分はこの優しい少女の助けになりたいのだ。
あの時、王様から話を聞かせろと言われたときのティファさんの心は少しずつ澱み暗くなり、遂には冷たい悲しみが覆い始めたのが自分には分かった。
それはかつて自分がいた暗い場所に、ティファさんの心が堕ちてしまいそうだと怖くなった。
ブロキーナ老師に拾われる前の自分は、マァムさんに出会う前の自分は孤独と悲しみしかなかったせいか、あの時のティファさんの心の悲鳴が聞こえたのかもしれない。
部屋に行ってみれば、案の定ティファさんは泣いた顔をして眠っていた。
外の全ての事から身を守るように体を丸めて。
あれをまたみるのは嫌だ、ティファさんと友達になりたい。仲間よりも、もっとティファさんが気楽に接せる友達に。
「・・分かった、チウ君には敬語は使わない。チウ君手伝って。」
「分かりましたティファさん。」
「・・チウ君は敬語なの？」
「僕は良いんです。老師も婦女子にはきちんとした態度をとりなさいと教わりました。」
「老師って、拳聖って言われてるブロキーナさん？」
「御存知ですか？」
「マァムさんが教えてくれました。」
「そうですか！あの方は凄い方で・・」
ダイ達を待ちながらのんびりとチウとべほと共に怪我をしたモンスター達を診ながらティファは自分の心が穏やかな心持ちになって行くのを感じている。
先程までの遣る瀬無い怒りや悲しみの気持ちが、心優しいチウによって癒されて行くのが分かる。
友達
良い響き、大事にしないといけないものだ。

ティファ達はまったりと、ダイ達はレオナからアポロの所業は自分にも責任があるのだとあの時の思惑も話し、頭を下げての謝罪を受けていた。
「レオナ・・ティファなら許してくれるから大丈夫だよ。」
「そうだぜ、あいつは困っている人に酷い事は言わねえよ。」
ダイ達はティファの代わりに謝罪を受け取り、ティファの気持ちも代弁もしたが、早々なんでもホイホイと許してしまうティファの事を聞いたレオナはかえって心配になった。
そんなに何でもかんでも受け入れてしまっているからこそ、ティファの心は今疲れきってしまっているのではないだろうか？
そしていつか、受け止めきれなくなった時にティファの心が壊れてしまうのではないだろうか
杞憂であってほしいと、ダイ達が辞去して去った部屋で一人レオナは暗い考えを振り払おうとした。

「チェックメイトか・・ねぇミスト、まだ夜にならないの？」
「・・・まだに決まっているだろう」
「あ～！もう!!早くお嬢ちゃんに会いたいのに！」
とある場所ではキルとミストがチェスをして時間を潰している。
真夜中になったら二人で使者を務める予定で待機中で、早く夜にならないかと騒いでうっとおしい事この上ないとミストは早々に邪険にし始める。
だがそこでめげずに親友にべたつくのがキルの特技であり、寡黙ながらも案外情に弱いミストはなんだかんだとキルの相手をしているから親友という言葉が成立をしている。
しているのだが
「そうだ！ねぇ～ミスト、魔界から術者呼んでラナルータ掛けさせてよ！」我ながらナイスアイディア
「・・・こ・の・・馬鹿者が!!!!」
天候呪文よりも今や希少な、伝説とまで言われる昼夜逆転をさせら

れるラナルータを何だと思っているのだこの馬鹿者は!!
そもそもそんな大規模異変起こした日には騒ぎになるわ！隠密行動とのバーン様の命を忘れたのかこいつは！
ミストのぶちぎり説教聞いてもキルはいつもの事とどこ吹く風。ミストが怒って怒鳴ってくれれば声が沢山聞こえるから寧ろ大歓迎。
だがその嬉しいはずの怒声も耳に入らない。
キルは今終えたばかりのチェス盤を見下ろす。
自分の陣は、キングの前にクィーンを置いて守りを固めている。
まるであの子のようだ。
キングと周りの者達を、己の全てを砕いて守っているあの子に。
そんなに自分を砕いていたら、いつか自分が無くなってしまうかもしれない事をまるで考えていないようだ。
可哀そうな子。いっそ僕の―死神―の力で今の状況から抜け出させて上げようか。
キルが死神と呼ばれている所以はたんに暗殺が得意なだけではない。
その力を―可哀そうなあの子供―に使ってあげよう。
キルは全ての感情が抜け落ちたような視線を自軍のクィーンに向けて、おもむろにクィーンを人差し指で軽く弾き、クィーンはコロコロ転がって盤上から転げ落ちる。
抜け出させてあげたい、そしてそろそろ自分の事をきちんと見てほしい。
可哀そうな子供への憐れみと苛立ちが内包したキルは思う。
早く夜になれ、死神が出現をする逢魔が時を経た真夜中に

真夜中の使者たち？愉快な昼

ダイ達がレオナに辞去をしてティファとチウの所に行ってみれば、なんとティファがモンスター達に乗っかられているのにニヘラ～とした緩んだ顔をしていた。

スライムちゃんたちぷにぷにほっぺですりすりしてくれてる、モグラたち毛が固いけどお腹周りぷにぷにでここはもう天国だ～。

フライキャットちゃんの子たちもみ～んな可愛いよと、ほっこりまったりしまくっていたりする。

「おいティファ、出掛けんだろう？」

「はりゃ～ポップ兄、そろそろ行く時間？」

も少しのんびりしたかっったけど残念だ。

「皆、困った事あったらいつでも言いに来てね～。ここにいる人達も良い人だから、匂い覚えておいても損はないよ。」

モンスターの嗅覚は一様に良く、覚えた匂いは大概忘れない。

手当てをしてくれたティファ達は勿論、後から来たダイ達の匂いもクンカクンカと嗅ぎまくり、当然ダイ達は真っ赤になる。

ダイも慣れているとはいえ、知り合いでもないモンスターにかがれるのは矢張り恥ずかしいらしく、真っ赤になって狼狽えた。

「もういいでしょう！行こうよティファ!!」

さっさと行こうと言いながらも、さりげなくティファの腰に手を回し妹を確保するあたりが流石である。

妹を守るお兄ちゃん特権である。

「でもランカークスまでどう行くの？」

「へっへん！」

ティファの問いにポップは鼻の下を人差し指で撫でながら得意気である。

なんとなれば俺はもうルーラをマスターしたと言っても過言ではない！

・・・ちょっと待って、確かポップ兄のルーラって・・・

「着地大丈夫なの？」思わず素で聞いちゃった。

「あ！疑うのかよティファ！」
「一応私で実験してみて。」
こん畜生！可愛い妹の言い分であってもこれは捨ててておけねぇ!!
師匠の地獄の特訓の中に、じゃかすかとメラだイオだギラだヒャドだの初級呪文撃たれる中を、トベルーラで逃げ回れっつう無茶修行があったが、かすりこそすれ直撃は受けず、トベルーラで逃げ回れればルーラの速度も上がっているはずだとのお墨付きを、あの鬼師匠から貰ってんだぞ！
着地もそこそこ良くなったはずだ！
「ルーラ!!」俺の精度のいいルーラに驚ろ・・「いっやあああああ!!」
はぁ？
「おいティファ!!」
「来ないでポップ兄！もうヤダ！ティファそれヤダ!!!ガルーダ!!」
ルーラの目的地を最も近いパプニカ城に設定してとんできたポップは呆然とした。
ルーラ発動して早々に悲鳴を上げられ、着地と同時にもがくように自分の腕から降りたティファは怯えて半泣きまでしてる！
そして愛鳥（？）のガルーダを大声で呼び寄せ、来たところをさっさか背に乗りダイ達の居る所へと戻ってしまった。
後に残されたのは訳が分からないと呆然としたポップと、悲鳴を聞きつけてきたパプニカ城の門番だけであった。
「あの・・ポップ殿？」
「なんすか？」
「その・・一体何事が・・」
この門番も度々城に来る一行の顔を覚えており、ポップに対して丁寧な対応をしてくれる。
冒険譚の勇者一行の話しに憧れ兵士を目指した二十歳前の若者は、若狭特有のきらきらした瞳でいつも応対をしてくれているのだが、流石に今回は困惑気味である。
無理もない。幼女の悲鳴を聞きつけて来てみれば、いたのは勇者一行の魔法使い殿しかいなかったのだから。

この場合、若者の心中は察して余りあるものがあるだろう。
だがしかし！ポップにだって言い分がある！
「俺だってわっかんねぇよ。」
自信のあったルーラだけに、可愛い妹からあんな反応された日には地獄だ。
「ふぇぇ～ダイ兄～」
「よしよし、あ！ポップ・・・」
「よぅ・・」
ティファの言った先はダイ達の所だろうと帰ってきてみれば、ダイの腕の中でえぐえぐと泣いているティファがいた。
なんとここでティファの意外な弱点が露呈した！それは
「私もうルーラしない！アレ気持ち悪いからやだ!!もう空飛ぶ靴かガルーダでないと移動しない!!」
ルーラ恐怖症
聞いていたガルーダは、愛し子が自分を頼ってくれていると単純に喜び嘴でティファの頭をよしよしと撫でているがここで一行全員に疑問が湧いた。
ガルーダ乗ってる方がおっかないのでは
速度も動きも旋回の仕方も神獣ガルーダに比べれば、人のルーラなぞ可愛いものだと思うのだが。
「だっていきなりぐにゃんとした感覚で動くんだもん！気持ち悪いし怖い!!
そんなヘンテコとガルーダの颯爽とした飛び方と比べないてよ！」
余程怖かったのかいつもの料理人の口調がかなり崩れてしまいガルーダの足にひっしりと縋りつくティファだが、一行全員はその事よりもティファの言い分にがっくりとしてそれどころではなかった。
ルーラと言えば、使える者は限られているそこそこレア魔法の一つに入ってもいいくらいなものなのだが。
それをヘンテコと言い切ってしまうティファの方が十分ヘンテコであると。
魔法の使えないヒュンケルも、ルーラ初のマァム・メルル・チウも

ルーラを怖がらなかったのだが。
そんな半べそティファからのお願い事が来た。
「ふゅぅ〜、ポップ兄たち先ルーラで飛んでって。後からガルーダが付いてくから。」
神獣ガルーダにとっては訳ないことであり、こうして一行は困惑をしながらもようやく出掛けることが出来た。
早くしないと日が暮れる。いつになったら昼食が食べられるのだか、長い一日になりそうだ。

真夜中の使者たち④到着

すったもんだがあったとさ、山あり谷あり急な下り坂があったありましたが何とかランカークスには辿りついたから私の勝ちだ！

何が勝ちなのか突っ込まれたら負けな気がするから表には言わないもんね。

けれどもだ！根本的に合わない人にあっちゃうわ、過去のほじくり返されたくないことを炭鉱掘るが如くザックザクにほじくり返されるわ、落ち着いてきた気持ちをどん底にされても、引きこもりしないできちんと恩ある人たちにお礼をしに来た私は褒められても良い気がする！

ゲフンゲフン。つまりだ、何が言いたいかと言うと人生生きてりゃどん底が津波の如く襲ってきても狼狽えてはいかんという事だが、長閑な田舎村に来たら幾分か落ち着いたからまぁ良しとしよう。

ポップの生まれ故郷ランカークスは本当に長閑な村だった。

モンスターの襲撃がないとか、大戦の魔の手が及んでいないという事を差し引いても矢張り平和だ。

「ようポップ！ま～た帰ってきたのか。魔法使いゴッコは相変わらずかよ。ジャンクさんたちの心配考えろよ。」

「あんたはもっと頻繁に帰ってきてジャンクさんたちの手伝いしなさいよ。」

「うるっせえ！その親父たちの所に行くんだから邪魔すんなよ！」

狭い村でも子供は割とおりポップの同年代の子たちも当然いる。おむつが取れないうちからの付き合い連中ばかりなのでお互いに遠慮なしなしで口悪く騒ぐのはいつもの事。

村の子供達もポップがアバンに付いて行ってしまった二年前のあの日から姿を見なくなった事に心を痛めており、中には初恋だった少女もおり涙を流した日もあった。

その鬱憤を今晴らさんと幼馴染連合はポップに言いたい放題であり、大体は相手の言う事が正論なのでポップとしては分が悪く、ジャンク達の所に行くという攻撃カードしかないのが辛い。

幼馴染ってすごいな。
今は村の子供たちはポップ兄がどれだけ凄い者なのか知らないから言いたい放題なんてできんだろうな。
魔王軍相手に日々戦いの研磨をし、近頃は王族にも物が言えるようになった魔法使いポップ。
その気になれば、人間の一個師団と戦っても圧勝できる実力の持ち主になってきてる。
それでも偉ぶらず、いつものお兄ちゃんでいてくれるポップ兄が私は好きだな～。
「なんだよにやにやとして、早く親父たちの所に行くぞ。」
「は～い。」
今ダイ達とポップとティファは二手に分かれている。
そもそもルーラのみならず、ガルーダが来たり獣王が歩いていたりした日にはランカークスは大騒ぎと化す。
そんな中訪ねられてきたジャンク夫妻にもどんな噂話が出るか分かったもんじゃない。
ジャンク夫妻の村での生活を乱さないようにとティファが配慮をし、大勢ではなくポップとティファだけで迎えに行こうと相成った。
ダイもティファに付いて行きたかったが、剣のお礼が先でしょう正論の前に敢え無く撃沈。他のメンバーに引っ張られてとぼとぼとロン・ベルクの下へと向かったのだった。
明日必ず戻る。
息子が出かける時に言った言葉を信じてジャンクとスティーヌは一晩眠れず過ごしたが、無事なポップを見れば疲れは全て吹き飛んだ。
特にメルルの水晶に映った鬼岩城をその目で見たジャンクはスティーヌ以上に息子を喪ってしまう恐怖に心が折れかけていただけに、無事なポップを妻が抱きしめる前に無言で抱きしめた。
まさかジャンクに抱きしめられるとは思っていなかったポップは狼狽をして振りほどこうとした。もう自分は小さな子供ではないのだと。

だが、自分を力強く抱きしめている腕は震えが伝わってきた。それは自分の事を、本気で心配して待っていてくれたのだと、嬉しさと戸惑いと申し訳ない気持ちが胸の中にあふれ出て、ジャンクの胸元のシャツを両手で握りしめ、ポップは震える声を懸命に押し出す。

「親父・・・・ただいま・・・」

厳しい父だった。鍛冶が下手、飽き性、根性がないと直ぐに自分を怒鳴っていただけの父だと思っていた。

でも、自分の無事を震えるほど喜んでくれる温かい父だったのだと思い知る。

自分の細腕とは全く違う、太く逞しい腕に囲われて胸元に抱き潰されても痛くない。それどころか安心をする。

親父の腕の中は、暖かい。

ジャンクは無言で涙を流しながらポップを抱きしめる。

本当はこの腕の中から二度とは出したくはない。二年前より与えることが出来なかった親の庇護の中に戻したい。

けれどもそれは息子自身が望まないのはよく知っている。

根性がないくせに、変に言い出したら聞かないところがある。分かり易く言えるのが二年前のあの家出だ。

あの時もポップの諦め癖と根性なしの所に妻共々望みをかけ、弟子にしてもらえなかったとトボトボと帰ってくるとばかり考えていた。その時は少し叱ってからいつもの日常に戻るのだとばかり思っていた。

だがそうはならず、息子を弟子にしたとアバンから丁寧な手紙が届いたときにはアバンを恨みかけた。

その時の怒りと悲しみは今でもこの胸の中にある。今回だとて、死にに行くような大規模な戦に何故年端もいかない息子が率先して戦いに行かなければならないのかという理不尽に対する怒りが胸を焦がす。

先の大勇者の弟子だからしなければならないという者がいたら、それはとても名誉で誇るべきことだと言ってくる者がいれば躊躇わずにぶん殴るほどに腹が立つ。

それでも、先の大戦を経験をしており、伊達に腕一本で荒波の多い世間で家族養っているわけではないジャンクは鍛冶の腕も度胸もあり、何ならお城の馬鹿大臣にも噛みつく気概も気骨もある。
だからこそ分かってしまう
この大戦とやらも―誰か―が戦わなければならず、その誰かの中に息子はもう欠かすことが出来ない者になってしまったのを。
「お帰りポップ。」
腕の中で守ってやる息子は自分の知らぬところで大きくなり、戦う男になっている。
そうジャンクは自分に言い聞かせ、惜しみながらも息子を腕の中から外に出す。男の巣立ちを邪魔してはいけないと。
「親父・・俺・・馬鹿でどうしようもない息子だけどよ・・全部終わったら帰ってくっからさ、待っててくれよ！」
ポップもジャンクの思いが伝わる。どうしようもなく不器用で、それでもこんな駄目息子をいつまでも愛してくれている父を、今自分に抱き着いて泣きながら無事でよかったと喜んでくれている母とまた暮らしたい。
あの頃には全く分からなかった家族を、自分は守りたい！守らないといけない!!
ポップは父母からの深き愛情をしっかりと受け取り、魔王軍に勝ちたいという思いがより一層深まった。
勝ちたいから勝たなければという思いに変わっていってはいたが、ポップの中の思いが明確化をした。
勝って家族と共に暮らしたいのだと。
その決心はポップの表情に現れ、傍で見ていたティファを驚かせた。
まだまだ甘いところがあった兄が、一人前の戦士となったことを。
守りたい、その為にも頑張らないとだ。
ポップ達が落ち着きを取り戻したのを見計らい、ティファはきちんとジャンクとスティーヌに挨拶をして名乗り、用向けを伝えれば快諾をされた。

ジャンクとしては、息子よりも幼さを残す少女が勇者一行の者だと名乗るのを悲しく感じてしまったが表情には出さない。
「息子がいつもお世話なっている。招待を受けよう。」
「ありがとうねティファさん・・あなたもポップも無理はしないでね・・」
スティーヌも眼のふちに涙を溜めながらもティファを優しい言葉で労わる。
早く大戦など終わってほしい。戦わなければいけない子供たちの為にも。
夏の少し前に大戦が始まってから早三か月経とうとしており、迷いの森にも秋の気配が感じられる。
木々の葉は色づくとまでは行かなくともうっすらと端を染めており、まだまだ咲いているハナミズキ、野ばらの群生が歩く者たちの目を楽しませ、木々の間からクラブアップル・ノブドウなどが美味しそうに実を付けている。
ジャンクがなれた道を、妻と少女が歩きやすいようにとなるべく平らな道を選び、ポップとスティーヌが他愛も無いお喋りをしながら付いて行き、その後ろからティファは目につく秋の収穫物を背負っているリュックに入れながら付かず離れず歩いている。
高くにあるノブドウは普段ならばジャンプしてとるか、空飛ぶ靴を使うかをしているがスティーヌたちを驚かせないようにと、森に入ってすぐに仲良くなったドラキーたちに取ってもらう。
それとポップ達には見えないが、精霊達もティファの優しい気配に寄ってきて、森の美味しい木の実はどれかを教え、取りに行けないと伝えると持ってきてくれる者達もいて賑やかだ。
ドラキーたちやゴルバットもパタパタとティファの周りを旋回しながら付いてくる。
「なぁポップ、ティファさんはいつもモンスターと友達になれんのか？」
「そうだよ・・おかしいか？」
「いんや、おかしかねえが優しい子なんだな。」

当然ティファに初対面のジャンクは驚き息子に聞くが、おかしな子とは思っていない。
挨拶も向上もしっかりとしたいい子であり、ああやってお友達がすぐにできるのは優しい証拠なんだなくらいにしか思ってない。
伊達に魔族の友達はやっていない、多少の事ではびくともしないジャンクの姿に一層頼もしさを感じるポップとスティーヌだった。
なんやかんやとスティーヌもティファと共に食材取りをしながら小屋に付いた。
ダイ達が首を長くして待っているだろうか？

真夜中の使者たち⑤昼食会の始まり

「う～遅いよティファ達・・迷子になってないといいけど・・」
「ダイ、この道に詳しいポップの父も一緒なのだろう？もう少し落ち着け。」
「そんなこと言ったて、ヒュンケルだってさっきから窓の外何度も見てるじゃないか。」
「う・・・まぁ少しは落ち着け。」
「二人とも・・ティファならば大丈夫だ。」
二人にこの言葉を言っているのは何度目だと、クロコダインも少々お疲れ気味になっている。
戦闘になれば思い切りよく戦い、常勝中の勇者とその戦士はティファが少しでも絡めばからっきし駄目になるというステータスでも獲得してしまったのではないかと、クロコダインは本気で二人を心配し始める。
二人ほどではないにしろメルルとマァムも落ち着かず、チウも匂い辿って迎えに行った方がいいのではとまで言い出す始末。
「お前さん大変そうだな。」
「むぅ・・いや、普段はしっかりとした者達なのだが・・」
「あと数人来るだけなのにこんなにそわついて何なんだ？」
初対面で気難しそうでおよそ他人の心配などしなさそうな魔界の名工に労わられるほど、クロコダインは周りに落ち着くようにと促しまくって気分はもう保父さん状態。
ダイ達も小屋に着いた当初は礼儀正しく挨拶をしてダイは剣のお礼と使い心地と感想を、ヒュンケルも使用している魔装シリーズのお礼と、魔剣を破壊したことのお詫びも述べた後に魔槍の修復もきちんと頼んだところまでは良かったのだが・・。
流石に人情を表に出すのが苦手なロンベルクも少々同情する状態だが、もっとすごくなるのはこの後だったりする。
―ピクン―
少し落ちてきた気の葉を踏む複数の足音がロン・ベルクの魔族の耳

に届いたとき、ダイにも届いたものがあった。
「ティファが来た!!」
小屋までおよそ二百メートル先だが、妹の匂いは絶対に間違えない!!
「ティファ――――!!」
兄なんだから妹は全速力で迎えるべし!!
ダイは小屋の扉を物凄い勢いで開けると爆速でティファの下に向かい―ガッゴン!!―
「いきなり抱き着かないでよダイ兄!!」
「遅いから心配したんだよティファ！」
「ポップ兄とジャンクさん達もいるのに何の心配があるの！」
いきなりダイが爆速してきてティファに抱き着こうとした時はポップもジャンク達も驚いたが、目にもとまらぬ速さで抱き着かれる前にダイの頭に拳骨を瞬間で落としたティファにもびっくりだ。
すったもんだの兄妹ならではの言い合いというじゃれあいしながら小屋に辿りついたティファを、矢張りヒュンケルが確保。
ティファが目の前に来て抱き上げられてようやく一安心だと、少し強張っていた体から力が抜ける。
マァム・メルル・チウも着いて早々抱き上げられているティファに何事もないように話しかけ、全員を宥めていたクロコダインとてもティファの頭を撫でて笑っている。
ポップもその光景が普通だとばかりに見ているが、初対面でティファの事をよく知らないジャンクとスティーヌ、ロン・ベルクからすれば何事だと思うほどだ。
迷いの森とはいえジャンクの家から小屋まではせいぜい数キロ程度で、道に迷わない限り数十分で付くほどの短距離だ。
そんな程度の距離しか歩いていないティファの身をここまで案じているのか全く分からない。
「おいポップ、皆ちと大袈裟すぎやしないか？」
「うん？いいんだよ親父、ティファに関しては俺達はいっつもこんな感じだよ。」

ジャンクのもっともな疑問をポップはいつも通りだと帰して終わらせる。
ポップは母スティーヌと話しながらも周りへの警戒は一切緩めていなかった。
いつまた空間から手が伸びてきてティファが攫われそうになってもギラで腕を切り落としながらトベルーラでティファを確保できるように全身に魔力を張り巡らせていた。
あらゆるものたちから狙われてしまっている妹を守るにはこれくらいの事は自然に出来て然るべきである。
疑問に思いながらも当人からしっかりとした挨拶と、お礼を兼ねての昼食会をさせてほしいと言う提案を気に入り、ロン・ベルクはあっさりと許可を出す。
「言っとくが台所はここにはないぞ。」
自炊はせず、肉は竈の火で焼き後はその辺の果物かジャンクが持ってくる酒で生活をしている。
・・・・えっと・・典型的な独身貴族様だこの人。それもちょっと駄目系な。
家なのに台所がないというまさかのロン・ベルク発言に、食は生きていく上での基本を標語に掲げているティファにとっては聞いた瞬間血を吐きたくなる衝撃を味わってしまった。
気を取り直して次いってみよう！
「分かりました！外で調理しますので大丈夫です。」
ここは野宿グッズが物を言う！デルパ～。
丁度全員外にいるので説明の手間が省ける。オレンジ色のマジックリングから調理台になる背が低く平たい天然石を小屋の隅辺りで出し、竈にするためのレンガも出してあっという間に三基の即席竈を作り、鍋・包丁・俎板などの調理道具類を置くテーブルと調理器具を置き、料理の支度を整える。
「メルルさん、マァムさんお手伝い願います。できればスティーヌさんにもお願いできれば・・男の人達はその・・」
「俺は手伝うぜ。」

「ありがとうポップ兄～。ダイ兄達は？」
「俺はヒュンケルと一緒にロン・ベルクさんに剣の手解きしてほしい。」
「支度を整えるのは手伝うぞティファ。」
「分かりました。頑張ってくださいね、うんと美味しい物を作ります。」
　眩しいほどの笑顔でエールを送られたダイとヒュンケルは生きてよかった、ティファが可愛すぎると内心で悶え苦しむ。
　ヒュンケルが魔槍の修復を頼むために、エイミから借りた旅人の袋から槍を出した瞬間にロン・ベルクにしこたま怒られた。
　如何に自己修復機能を備え付けたとはいえ、こんなにヒビが目立つ様では早晩魔槍も魔剣のようなってしまうと。
「お前たち俺の特訓受けろ！いくらいい武器作ってやっても、碌に使いこなせず壊れましたではたまらんからな。」
　鍛冶屋魂の意地にかけても、この二人には自信作を使いこなしてもらおう!!
　男達が戦いで頑張っている間、ポップは一人女子たちに交じってキャッキャッウフフと料理作りを楽しんでいる。
　男達が戦いで頑張っている間、ポップは一人女子たちに交じってキャッキャッウフフと料理作りを楽しんでいる。
「ポップ兄って手先器用ですね、野菜切るのこんなに上手だなんて。」
「ほんとねポップ、料理得意だったの？」
「いんや～先生ってさ、戦い以外にも家事全般教えてくれただろう。」
「そういえばそうね。それで料理も教わったのね。」
「素敵な先生ですね～。」
「ポップと一緒に料理を作れる日が来るだなんて・・母さん嬉しいよポップ。」
「よせやいお袋・・家に帰ったらさ、覚えた料理全部作ってやるよ・・な。」
「ポップ・・ええ、今から楽しみだわ。」
　良い感じの親子の会話に、聞いていたティファ達の目にうっすらと

涙が浮かぶ。
　ポップが言ったようなことが出来る世の中に早くしてあげたいと。
「ほらどうした、俺に一太刀も入れられないで終わる気か。」
「はぁ・・うう～、まだまだ！」
「もう一度！」
　木刀一本でダイとヒュンケルを相手にしているロン・ベルク息を乱すことなく立っているが、二人がかりで有利なはずのダイとヒュンケルは汗まみれでボロボロになってへたってしまっている。
　強すぎる。打ち込んでも軽くいなされバランスを崩した所を打ち込まれ、それを隙と捉えてもするりと避けられる。
　ロン・ベルクからすれば二人は真に武才の塊であり闘気量も申し分ないとみているが、如何せんダイは実戦の経験不足であり、ヒュンケルも本来は剣士であり槍はほぼ素人なので剣の達人であるロン・ベルクに勝つには色々と不足をしている。
　それを承知しながらもダイとヒュンケルは諦めることなくロン・ベルクに喰らいつく。
　強くなり、世界とティファを守る!!
　残りの気合をかき集め、最後に一矢報いるために渾身の力を体と木刀に込めた二人の気迫についついロン・ベルクは口元を緩めてしまう。
　良いぞ、その気迫のまま仕掛けて来い。
　礼儀も態度も何もかも気に入っているうえに、向上心の塊であるダイ達は本当に気に入った！全力で来るのならば相応の力で返してやる。ありったけを打ち込んで来い！
「ご飯できましたよ～。」
　そんな気迫満載、男の情緒溢れた場はティファの呑気な声でぶち壊された。
　それも遠くから言ったのでは失礼だろうと、ロン・ベルクの真横で。
「ちょっとティファ！今いいところだったんだよ!!」
「ティファ・・その空気をだな・・」
「空気でお腹は満たされません。」

「そうだけどさ・・」
出鼻崩されたとダイとヒュンケルは思わず脱力してしまい、ピリピリした戦いの場で固唾をのんで見守っていたチウもティファにがっくりするが、横に来られたロン・ベルクは驚愕をした。
嘘だろ！側で見ていた大ネズミの表情を見ないで分かるほど全神経で気配を探っていたのに、こいつが声を出すまで気が付かなかったなんて!!
今までいやというほど魔界で戦い、時には格上の上位竜や魔神級を相手にしてしまい死掛けたことはあっても、戦いの最中に気配を察知できなかったことは一度としてない。
それこそ調子がいい時は数キロ先の気配まで読める時があると言うのにだ！
「おい。」
「はい？」
「お前さんは強いのか？」
「さて・・・どうなんでしょうね～。」
ロン・ベルクの当然の質問に対してティファははっきりとした返事はしなかった。
たんに誤魔化したわけではない。今自分の強いランキングの味方では堂々一位が鬼岩城をぶった切ったダイであり、敵では間違いなく大魔王であり、その二人に比べれば自分は強いと言い切れるのだろうかと悩んでしまう。
よって疑問形の答えしか返せないのが実情だ。
真顔で返事をしたティファは、料理が冷めてしまうとダイ達をせかしている。
そんなティファを見てロン・ベルクのティファに対する評価が決まった。
変わった奴だな
ティファの評価は矢張りこれ一択なのだろうか？

真夜中の使者たち⑥昼食会の大賑わい

ポップと母スティーヌの手伝いもあって思ったよりも昼食が早くできた。

一行のお子様に圧倒的に人気のあるベーコンステーキ、野菜は前日からスティック状にして酢漬けにしておいたものを、今日もパンではなく皆で大量に作ったサンドイッチ。

中身はハム・サラダレタスに塩で味つけたマッシュポテト・道々摘んできたアップルのジャムなどが所狭しと置かれている。

「子供はジュースで、後はお酒もあります。」

食べるものだけではなく飲み物もばっちりと用意してあり、無論取り皿・マグカップ・ゴブレットも持参してある。

一行にはそれぞれのパーソナルカラーでばっちりと用意済み。

ダイは無論青いマグカップを、ポップは緑でマァムは桃色、ヒュンケルは紫でメルルはイメージでポップよりも色の濃い深緑でチウは明るい子なのでオレンジ色を用意した。

大人は飲むだろうとゴブレットを五つ用意したが、もしかしたら飲まないかもしれないので無難な薄い緑のマグも二つ用意してある。

これらすべてはティファが出かけるたびにベンガーナのデパートに足繁く通い、少しづつ用意したもの。

マグ・ゴブレットだけではなく皿もフォークも全て選び抜かれたものだ。

皆にそれぞれあったものを用意できてよかった。

「では改めて、ロン・ベルクさん、ジャンクさん、スティーヌさん、大変お世話になりました！カンパーイ。」

全員が座り飲み物が行き渡ったところを見計らいティファが乾杯の音頭を取って昼食会がようやくスタートを切った。

「うんめぇ！焼きたてのベーコン最高!!」

「あ！ポップ食べすぎだよ！」

「こっちのハムサンドもおいしいわよ。」

「ジャムのリンゴは角切りでシャリシャリしたのも入っているのです

ね。」
「こっちのノブドウも粒粒していていいですね～。」
「あら、この野菜よく漬かっていていいわね。うちの人もこれならお酒のつまみにするかしら。」
「後で作り方お教えしますね。」
ダイ達お子様と女性陣はもっぱら食べるのを楽しみ、ヒュンケルを入れた大人の男組は酒を飲んで楽しむ方向で行っている。
何か少しでも食べるようにと、ティファはサンドイッチを一口サイズにしたり、野菜の酢漬けを皿の上に出して手でつまんで食べられるようにとちまちまと男性陣の面倒も見て、時折自分の作った物をちびちびと食べている。
ロン・ベルクさんて結構笑うんだな。ジャンクさんと酌をしながら出会った時の話もしてる。
クロコダイン・・お願いだからお肉だけでも食べてほしい。ヒュンケルは飲むのも食べるのもゆっくりと味わってる。
普段は見られない仲間とその周りの人たちの意外な一面を、ティファはニコニコ笑って眺めていれば、クイクイと袖を引かれた。
見てみればスライム等の小さいモンスター達が敷物の上には乗らないがティファの後ろに集まっていた。
「はりゃ～君達も食べたいの？」
「―うん・・美味しそうなの・・―」
「そうか～・・ちょっと待っててね～。ダイ兄、ちょっと料理作るけれど気にしないでね～。」
モンスター達はどうやら大勢いるようで、森の木々の間に隠れている。
ティファは可愛いな～と目を細めながら、火を落とした竈に薪と携帯火種を入れて火をつけてフライパンを出し、熱している間に小麦粉と砂糖に飲み物で用意した牛乳を入れてかき混ぜる。
本当は卵もあればいいのだがあいにくないのが残念だ。それでも膨らまなくとも、甘いパンケーキもどきにはなった。
大量に焼いて行き、程の良い大きさに切った上にジャムを乗せてい

く。
ベーコンステーキが乗っていた一際大きいお皿が空いたので盥にはっていた洗いようの水で軽く濯いで水気を布巾でふき取り沢山のジャムパンを乗せて出来上がり。
「皆おいで、足りなかったらもっと焼くから。」
地面にぺたりと座り込み、皿を持ったまま森の中にいる子たちにも呼び掛けるティファの下にはあっという間にモンスター達が集まりパンの争奪戦が始まった。
「こらこら、みんな仲良く。」
ティファは決して大きな声ではないが、注意をされた者たちは皆しゅんとしてしまい、パンに手を伸ばさずじっとティファを見つめてきた。
「大丈夫だよ。」
しょげる子たちの頭をティファは優しく撫でてもっと作るねと立ち上がり、食べる子はおいでと声を掛ける。
モンスター達は邪険にされなかったと喜び、もっともらえると更に大喜びをして竈の近くが一番賑やかになる。
「おいダイ、ティファってあんなにモンスター達に好かれてたっけ？」
「・・・どうなんだろう？」
さっきも手当てをした後のモンスター達に埋もれてニコニコしていたし、敵方のスカイドラゴンもティファに甘えていた。
考えてみればティファの周りはガルーダをはじめ多くのモンスター達が沢山いる。
けれど、昔っからああだったかと言われれば、ダイとしても首をかしげるほど妹は―魔物―に好かれやすくなっているのはなんでだろう？
その―理由―を知っているのは今ティファと全くつながれない三神ともう一人だけ。
そして三神達は、いつか―理由―を話さなければならないと心を痛めている。
叶うならば、理由を生涯ティファに知られたくはないと願って。

う～ん、思ったよりもご飯の減りが早い、もうそろそろデザートだすか。
この季節は果物沢山なっててて助かるな。
竈の横で果物を切り分けようとリングを探すとポーチの中にはなく、小屋の中の置かせてもらったリュックの中に入れたのを思い出し取りに行く。
やっぱり同じところに入れておかないと駄目だな。
近頃は薬と薬草と食器といろいろとリングを使い分けすぎて、食材はリュックの中に入れておいたのだが、他に分ける方法ないかなと考えていると思いっきり大きな声が飛び込んできた。
「なんだと!そんなすごいものをあのお嬢さんが持っているのか!!」
「うん・・そうだけど・・」
「見たい・・」
ロン・ベルクのすごい剣幕と押され気味のダイの声にびっくりしたティファだったが、いきなり小屋の扉が凄い勢いで開いて、ずかずかと入ってきたロン・ベルクの方にもっと驚いた。
「えっと・・ロン・ベルクさん?」
「どれだ・・」
「あの～・・・」
入ってきたロン・ベルクは必死の形相でティファをじっと見つめ、何事かとティファが聞いても答えない。
見つけた!あの鎖の先にリングが付いてんのか?
か細い首周りにわずかに見える鎖を見つけたロン・ベルクは何も言わずに近づき、―無言―でティファの首元に指を這わせて鎖を持ち上げる。その先にはダイの言った通り、金と銀のマジックリングが掛けてあった。
これが、神の最高傑作と謳われた真魔護竜剣と互角の打ち合いをして折れなかったという武器だと?
「おいお嬢さん!今すぐこいつを・・・」

「こんっのおおおおおお!!!!!」
ドガーン!!!
「いきなりなり何をするんですかぁ!!」
信じらんない何なのあの人！
確かに私は子供かもしれないけれど！いきなり人の胸元に指突っ込むってどういうつもりよ!!

真夜中の使者たち⑦夕暮れ前の問答

魔界の名工と呼ばれて幾久しく、知る者にとっては魔界の剣客五指にも入るロン・ベルクは、人生初に説教をくらっている。
今まで自分の行いに恥じ入ることなく、誰が何か言ってきても我が道を行く超俺様が服着た者がだ。
周りからの視線も突き刺さるような、ごみを見るような目が痛い！
「聞いているんですかロン・ベルクさん！」
しかも説教の相手が魔族の成人男性からすれば幼女どころか赤子にも近いたったの十二の少女だ！
「まったく、貴方は凄いお方のようですか良識・常識なさすぎです！反省して下さい!!」
無言で他人様の胸元に手を突っ込んだ奴は何されても文句ないよね！
あんまり酷い出来事に、大概の事は笑って許すティファも思わずロン・ベルクの腕をつかんで開いている扉の外に放り捨て、突然の背負い投げに対処し損ねたロン・ベルクは家の外にあった木の幹にもろに背中をぶつける羽目になった。
「いってって・・俺がなにしたってんだ!!」
何を悪いことをしたと反省零な態度のロン・ベルクに、ティファが久々にぶちぎった。
「それはこちらのセリフです！いかに私が子供だからと言って、無言で胸元に手を入れられれば怒るのは当たり前でしょう!!」
「・・・あ・・」
「一体どういうつもりですか!!」
しまった！ダイに教えてもらったヒヒイロカネの武器に夢中になって、断りを入れるのをすっかりと忘れた・・
「すまん・・」
悪いと思ったロン・ベルクの謝罪は、つまるところティファが言ったことをティファにしたことに他ならない！
「ねぇ～ヒュンケル。今からさ、さっきの稽古の続きをロン・ベルクさ

んにやってもらわない？」
　ロン・ベルクが認めたことにより、周りの温度は一気に氷点下を記録した。
　特にダイはマジ物の殺気をロンベルクに叩き付ける！この人自分で作った最高傑作の剣で刺されて死ねたら鍛冶屋として本望だよね！
「ダイ・・腕は勘弁して足腰を・・」
　アバンの長兄ヒュンケルも、弟弟子の暴挙を止めるどころかもっと具体的に恐ろしいことを提案する。
　鍛冶屋としては尊敬している、同じ剣士仲間としてもまぁいいだろうが、ティファに手を出したのならばそれ相応の報いは受けてもらおう！
「それで、一体ロン・ベルクは何がしたかったのですか？」
　大人としての常識をスティーヌにまで叩き込まれて大人しくなってしまって青菜に塩と化したロン・ベルクにティファは理由を聞いてみることにした。
　スティーヌさんのニコニコ顔のお説教は、傍で見ていて一番怖かったと大声で言えないが、ダイ達も震えあの海千山千のジャンクも震えあがり、反省と言う言葉を知っているかと聞きたくなるロン・ベルクにもう二度としないと誓わせた女傑殿に誓ったのだから今回は許そう。
「雪白見るためでしたか・・」
　その位は口で言えばきちんと見せたのに。
　ティファはしょげているロン・ベルクの目の前に寄る。
　ダイがまだ言い足りなさそうだが、今回の騒ぎの発端を作ったのは自分なのだからと我慢する。武器好きそうなので話のタネに教えただけなのに。
「アクセス・雪白」
　魔族のロン・ベルクも聞いたこともないような文言を唱えたティファの左手には、これまた見た事もない剣の様な武器が握られていた。

柄から刀身の先まで長く下手をしたらティファの背の半分かそれ以上ありそうだが、本人は気にした様子もなく左手の親指で鯉口をきり、すらりと造作もなく刀身を抜いてみせた。
柄も鍔も鞘の拵えも全てが真っ白だった刀は、その刀身は赤く燃え盛る炎の様であり、何つけられた雪を溶かさんとするが如く、煌煌と輝いている。
「こいつは・・」
「とあるお宝洞窟で見つけた―刀―という武器です。」
驚きの目で愛刀の雪白を見つめるロン・ベルクに、いつかバランにしたような雪白の説明を聞かせる。
この雪白が何故真魔護竜剣と互角に打ち合えたのか直ぐに分かるように。
「凄い・・」
鍛冶屋として、オリハルコン以上の材質があるなどと今まで聞いたこともなく、それを間近で見られるなどなんと幸運な事かと満たされる思いがする。
手に持ちたい、実際にふるってみたい！こいつならば、俺の必殺技に耐えられる!!
頑是ない少年のようになったロン・ベルクにティファは苦笑しながら雪白の特性を話す。
これは自分にしか使えないのだと。
試しに渡されたロン・ベルクは受け取ろうとしたが、その瞬間に手からすり抜けティファの胸元に再びリングへと戻ってしまってがっかりとした。
その素直にがっかりとした姿がダイ達の怒りも柔らかくし、ジャンクも噴き出し始めて次第に大笑いになってロン・ベルクを大いに腐らせた。
「お前ら笑うな！」
「だって・・ああもう駄目だ!!」
先程までの怒りが嘘のように、空の上まで響きそうな笑い声の中でチウだけが笑っていなかった。

笑うのが失礼だとかそういったことを思っているのではなく、なんでだろうと不思議に思う事で頭が一杯になったからだ。
どうして誰も、ティファさんがそんなすごい武器を持っている事に対して疑問を持っていないんだろう
ダイが持っている伝説級の武器は、昨日自分も作るところを立ち会っているから知っているし納得も良く。
魔界の名工と呼ばれる凄い人が、伝説の防具・覇者の冠を溶かして出来たオリハルコンの剣だと。
しかしだ、ティファはとあるお宝洞窟で見つけたと言ったきりで後はどうやって手に等を何の説明もしていない。
そんなに凄い代物が、子供にホイホイと見つけられるところに等あるのだろうか?それも罠も何もなく手に入ることなど更に不可能な気がする。
だが自分が本当に気になるのはそこではない。
ティファの強さの方にこそ疑問が湧く。鬼岩城が来た時マァムを始めみんなが言っていた、―ティファを戦うことなどさせない、料理人は戦わせない―のだと。
最初自分は思った。この一行の中で、自分の次位に力の弱い人なんだと。
しかし会ってみればダイと同じくらいで、自分と同い年の女の子だったが強かった。全員を捕まえてしまうほどの恐ろしい敵を、瓦礫の中に埋もれさせるほどに。
其の力はどこから来るのだろう?クロコダインや人間の王が言ったように、戦いに向いていなさそうな女の子なのに。
「あの～・・・ティファさん。」
分からないことはきちんと聞いておきたい。だって僕はティファさんとお友達になりたいから、ティファさんの事をもっと知りたい。
「どうしてティファさんは強いんですか?」
「ん?どうして強いって?」
「いやあの!料理人は戦いに出さないって皆さんが言っていたから!!その・・・」

「はりゃ～みんなそんなことを。」
チウは思っただけを聞いたのだが、つまるところティファ本人にその考えは筒抜けになってしまい、ダイ達は内心冷や汗ものになった。自分の事を勝手に決めるなと説教をくらうのではないかと。
だがティファの顔は穏やかだった。
ティファだとて薄々は察していたのだ、優しい一行の仲間が自分を気遣ってくれている事を。
その上で応える。チウの疑問に。
ティファはチウの目の前に腰を下ろし、少々行儀が悪いが胡坐をかいてチウの目線に合わせて説明を始めた。己が考える勇者一行の料理人定義の全てを。
勇者一行の心身を保ち、たとえ敵の本拠地のど真ん中であっても必要とあらば料理を出し、傷があれば薬を出すか作って仲間の回復呪文と連携を図る。
体は料理の栄養と薬で癒し、心は料理の美味しさと音楽で癒せるようにしたい。
「だからね、勇者一行の料理人は一に強さ・二に愛情・三四五は同順で薬学・味付け・も一つ愛情がたっくさん必要なんだよ。」
力がなければどんなに美味しい物が作れても、優れた大量の知識を持っていても最終決戦までともに行くことなんてできない。
「私はね、最後まで皆といたいんだよ。」
置いて行かれないように、力は必要だとティファはにこりと笑って答える。
なんと途轍もない事を考えているのだと、ロン・ベルクとジャンクは絶句する。
たった十二の少女が、世界の命運をかけるであろう最終決戦まで行くのだと何事もないように話しているのだから無理はない。
最前線で戦うのが当たり前なのだと言わんばかりに笑っていられるのが不思議な程、その顔には恐怖は微塵もなかった。
しかし目の前で応えてもらっているチウは驚かなかった。昨日ティファの強さを見ており、今も強くなりたいという思いがきちんと

あるのだから有言実行したのだと納得をしたが、違う疑問が出てきた。
「強さに愛情が必要ですか？」
力・料理の腕前・薬学知識は分かるが、愛情が必要だなんてどうしてだろう？戦いは相手を倒すのであって力は必要だが何故愛情がいるのだろう？それも二回も言っていたのは？
「う～ん・・・」
これ答えても良いけど・・・自分で気づいてほしいな。
よいしょっと
ティファは答える代わりにチウに考えてもらう事にした。自分の膝の上に座らせて。
「え！ちょっとティファさん？」
いきなりのことに驚くチウの頭の上に、ティファは顎を乗せてチウを固定させる。きちんと考えてほしいから逃がさない。
「チウ君、今からたとえ話するね。」
「例えばなしですか？」
「そう、あるところに―薬草―作りの名人がいました。その人は薬草作りだけは凄かったですが、その薬草で誰かを助けてあげようという優しさは全くありませんでした。
ある日その薬草作りの名人の下に病人の娘を持つ人が訪ねてきました。その薬草作りの名人だけが作れる薬草でないと治せないと泣きながら訴えました。
薬草作りの名人はその人達を思うよりも、お金をきちんと払えるかだけを気にして尋ね、余りの法外な値に娘さんのお父さんはお金がないと正直に言いました。
それでもどうにかしてお金を稼ぎ、少しづつでも一生をかけて払うと訴えました。
それでも薬草作りの名人は病人の娘さん共々追い出しました。
それから何日かして薬草作りの名人の家に泥棒が入りました。それは追い出されたお父さんであり、直ぐに捕まってしまいましたが誰もその泥棒を責めず、反対に薬草作りの方が非難を浴びました。

心ある人たちは泥棒をした人が本当はそんなことをしたくはない、其れでも病気の娘さんの為にと仕方なくしたのを知っているからです。
泥棒をしようとした人も無料でほしいと言ったわけではなく、対価を払うと言ったのを信じず、薬草が沢山あって余っていても分け与えることなく冷たくした結果の泥棒なのだと。
もしも薬草作りの名人に病気の娘さんを心配して、その人の苦しみを分かってあげる優しい心があれば、その人は悪い事をせずに済んだのです。」
薬草は力・薬草作りの名人は力のある者・病気の娘さんとそのお父さんは助けを求める弱い人だ。
弱い人は対価を払わないとは言っていない。自分に出来ることで返したいと言ったのを心なく追い返し悪事を働かせた。
―心無き力―は暴力と同じ。誰も救わず周り不幸をもたらすことが多い。
力があるだけでは駄目なのだ。
ダイ達は直ぐにティファの言わんとしている事が分かった。
それはティファが常々言っていた。敵を倒す力だけがあればいいのではない、人々を救う力こそが必要なのだと。その言葉を実践するように、ティファは敵であったクロコダインとヒュンケルの幸せを願い、父バランに必死に呼び掛け、叶わなかったが竜騎衆の三人にも、光の道を行こうと手を差し伸べたのだから。
そして自分達も目指している。ただ強いだけではない、誰かの心も救えるティファの強さを。
「ダイ兄。」
ティファはすっと目線だけを兄に向けて質問をする。ダイ兄ならば、助けを求めてきた人にどう対応するのかと。
「助ける。俺は俺の力で助けられる人たちを全部助けたい。命だけじゃなくて全てを。」
「俺も見捨てねぇ！困っている人たちを、助けを求める人達を絶対に見捨てるもんか！」

「私も助ける！病気の娘さんの心も全部助ける、もう何も怖くないって言ってあげられるように。」
「俺達も、」
「無論助ける。」
「そうです、皆の力を合わせれば―病気―も吹き飛ばせると、私もお手伝いさせていただきます。」
　ティファの問いに、ダイだけではなくポップ達も答える。助けて誰もが幸せになるために全力を尽くすのだと。
「チウ君ならどうする？」
「え！・・・とお・・薬草とは力の事ですか？」
「どう思う？」
　チウは本気で頭を悩ませる。ダイ達の答えを聞く限り、自分の考えている事は間違ってはいないようだし、思っている事を言ってみよう。
「助ける力があれば―正義―の為に使います。」
「ん～、正義か・・」
　チウの一生懸命考えた答えに、ティファは少し難しい顔をする。
　何故ならば正義という言葉ほど曖昧で恐ろしい物はないとティファは考えているからだ。
　正義の名の下に起こった戦は無数にあり、偽正義を掲げての事も同じくらいある。
　また本当に自分達は正しいと思っていても、相手側からすれば悪と断じられるのもまた正義だ。故にティファは正義と言う言葉をあまり信用していない。その言葉を免罪符に思考を停止して何かをするのは良くないのだと。
「チウ君にとっての正義って何？」
　だからこそ深く聞く。チウにとっての正義の根源は何処にあるのだと。
「へ？正義って、正しいことですよね・・」
　ふむ、十歳の時のダイ兄もおんなじこと言ってったっけ。その時もチウ君にしたような質問をしてとことん悩んでもらって半月後にダ

イ兄にとっての正しい事に辿りついたんだよね。
困っている人を助けて、皆で笑っていくんだと
果たしてチウ君の考える正しい事は何だろう？

真夜中の使者た⑧黄金の黄昏時

「質問を変えるね、どうして正義を目指そうとしたの？」

言っちゃなんだが正義云々なんて野生モンスターにはない考えで、教えられたか何かしらの大本があるはずだ。

チウの言う正しい事の大本を知るべく、ティファは質問の切り口を変えてみた。過去に何があってチウは今の答えに辿りついたのかを思い起こさせるべく。

その正しい事を、チウだけの答えを具体的な物になる手助けとなるように。

誰にも惑わされる事無く、己の信念を曲げる事無く穢させない為にも、核となる明確なものが必要だから。

チウはそれなら簡単に答えられた。

自分は生まれた後はずっと一人で、親も誰もいなかった。良いことも悪い事も知らずに、ひたすら食べる事だけをして生きてきた。

森の中で獲物とり争いに負けることが沢山あり、畑から盗むことの方が多く自然人間に嫌われて追われるようになった。

生来の頑丈さがあるとはいえ痛いのは嫌なので反撃をして日々を過ごした。老師が自分を捕まえに来るまでは。

自分を打ちのめして捕まえた老師は自分を退治せずに住んでいる洞穴に連れ帰りなんと傷の手当てをしたときは何事かと思った。

それでも誰かに助けてもらったことがない自分は老師の優しさが分からずに怯えて暴れたが、老師はただニコニコとして優しく大丈夫だと声を掛け続けてきた。

三日目にしてようやく気が付いた。自分は老師が出したものを食べなかったが、老師もまた何も食べていなかったのを。

不思議になってじっと見つめてみれば、言葉をまだ満足に話せなかった自分の気持ちを、それでもちゃんとわかってくれて答えてくれた。

「だって君だって食べていないでしょう？一緒に食べよう。」

そう老師は笑って言って、温かい木のお椀を自分にも持たせてくれ

て一緒に飲もうと一息に飲み込んでいた。
それに釣られるように飲んだスープの味を、自分は一生忘れないだろう。
体だけじゃなく、心を温かくしてくれたあのスープを、美味しいねと笑いかけてくれたあの老師の笑顔を。
一人の時、時折森の中で人間の子供たちが正義の味方ごっこと言うのをしていた。
あの時は―正義の味方登場―とか騒いでいた子供たちの言葉の意味が分からなかったが、老師と共に暮らすうちに何となく分かってきた。正義とは老師のように強い人の事を言うのだと。
老師と一緒に暮らすようになってから沢山の事を教わった。
―一緒に食べるのは美味しい――嬉しい――楽しい―と、自分の心をぽかぽかと温めてくれる優しい言葉を自分は覚えることが出来た。
森で暮らしていた自分は、―嫌だ――痛い―と、心が寒くなる事しか考えられなかったのが嘘のように。
だから自分は、温かい言葉を沢山教えてくれたあの老師の強さを目指している。
「そうか、尊敬している老師様がいるんなだね。」
「はい！」
「チウ君が目指しているのは、その老師様の―力―の強さだけなのかな？」
「力だけ？」
「うん、力が強ければ、チウ君はその老師様みたいになれるの？」
僕が・・ブロキーナ老師様みたいに？
誰かを助けるために付けた力だけで、僕があの老師様みたいになれる？
なんだろう・・違う・・老師様は凄い人だ。いつもにこにこと笑っている、温かい言葉を僕に教えてくれ・・・あ！
そうだ！僕は老師様に会うまで―知らなかった―んだ!!温かい優しい言葉を何一つ、それどころか嬉しい事も笑う事も―幸せ―というものすらも!!全部全部老師様が僕に教えてくれたんだ！

温かい心を知って以来、自分は悪い事は恥ずかしい事なんだと知った。そして二度と、悪い事をしないと誓ったんだ！温かい心のおかげで！

「僕は!!」

チウは辿りついた答えをティファにはっきりと言うべく、ティファの膝から立ち上がった。

子供が母の手を離れようと力強く歩き出そうと一歩を踏みしめるような力強い意志を宿した瞳をティファに向けて。

「僕は、僕のように温かい心も喜びも幸せも知らずに育ってしまった人達に、温かい・優しい心を教えて上げたいです！

僕がブロキーナ老師やマァムさんを始めとした皆さんから教えてもらったように、今度は僕が教えて上げる者になりたいです！」

自分のように悪さをして負けて捕まって、教わってようやく知ることが出来る者達が大勢いるかもしれない。

恐らくはそんな者達は―優しい心―を知る前に―退治―されるのが常で、自分のような者が稀なのだろう。

どれ程の僥倖下で自分がここにいるのかが初めて分かった。

だったら、その幸せに甘える事無く助けられた自分の命にかけても、自分が教わったことを教えてあげたい。

温かい優しい心を。

だからこそ、心身ともに強くなりたい。

誰に無謀な考えだと言われても馬鹿にされても折れない心を、悪さをしているものを止めるための力を付けなければ夢物語で終わってしまう！

どれ程の時間が流れたか。答えを言いきったチウを、ティファはとっくりと見つめて微動だにしない。

チウを覗き込んでいるティファの瞳が不意に崩れた。

その崩れと共に、ティファの顔が満面の笑みとなり左手でチウの頭をくしゃくしゃと撫でまわす。

「チウ君の心はもう一人前だよ。力が足りなければ私達が貸せばいい。仲間は助け合う為にいるんだから、チウ君はチウ君の思う温かい

心をどんどん広めていこうね。」
新しい正義の誕生だ。
温かさを知らない者達に温かさを教え上げた。そうする事で、悪事を減らしたいとは予想していない答えだった。
世間の者達は夢物語・綺麗事だと嘲笑うかもしれない。
それでもチウ君の考えはなんて素晴らしく素敵な考えなんだろう。
世界は本当に豊穣で素晴らしい可能性に満ち溢れている。こんなにも素晴らしい―心―がするりと生まれ出る程に。守りたい、自分の命を賭してでも。
「チウ君、そしてメルルさん。」
ティファはチウの両手を取りつつ立ち上がり、メルルにも優しい目を向ける。
「ようこそ、勇者ダイの一行に。これからもよろしくお願いします。」
ようやく一行全員が揃っての歓迎会が出来た。
にこりとティファが二人に正式に挨拶をしたのを皮切りに、ダイ達も次々と声を掛けヒュンケルとクロコダインも近くに寄り二人に優しい眼差しを注いでいる。
力だけではなく心も絆も深めていくダイ達の姿を、ジャンクとスティーヌは寄り添いあい静かに涙を流しながら見守っている。
あの幼かったポップが今や世界を救おうとこんなに素晴らしい仲間と共に敵に立ち向かっている。
この勇気溢れ、強いきずなで結ばれた一行ならばきっと勝って帰ってくると信じて。
まったく、大した奴らだこいつらは。
数百年も生きていれば、良き事よりも悪しき事の方が目に映る。チウという大ネズミの言っている事は単に綺麗事だと、昨日までの自分ならば鼻で笑っていた事だ。世の中はそんなに甘くはないと。
だが今はどうだ？ダイ達を知れば知るほどに、チウの言った事を信じてみたくなっているではないか。
温かい心を広めたい。チウの言った正義を貫かせてやりたいと思う程にダイ達に肩入れしている自分に苦笑したくなるが悪くはない。

それは多分、こいつらを見ていると温かくなるからだ。冷え切って止まっていた自分の心が。
だからこそこんな事を言ってしまうのだろう。
「お前達、今日は夜まで飲んで行って泊ってけ。」
「「「「はい⁉」」」」
なんだよ・・そんなに驚く事かよ？
えっと・・あの人って、ヒュンケル以上の孤高なお人じゃなかったのだろうか？それにだ。
「あの～・・泊まっていいと言われても寝る場所は・・」
今はそろそろ秋になりかけで流石にお外は寒い。だからと言ってこの小屋じゃどう考えても雑魚寝も無理でしょう。
申し出は有難いけれどお断りするしかないか。
「安心しろティファ。」
お断り方向の流れを切るように、ポップがニカニカの顔をしながらティファの頭をポンポンと叩く。
「ほれ、これがあればいいだろう。」
ポンポンとしている反対の左手をティファの顔に近づけて開いてみれば、ポップ達の寝具一式が入ったマジックリングがあった。
「ポップ兄、これって・・」
「おう、俺の魔法の師匠の所に預けておいたやつでよ。お前とロン・ベルクさんが意気投合してこうなるんじゃねえかと思って持ってきたんだよ。」
案の定だったとポップは人差し指で鼻の下を擦り付けながらどうだとばかりにティファを見る。
自分の予想的中だろう。
「ありがとうポップ兄。」
「へへ、良いって事よ。可愛い妹の為なら火の中水の中ってな。」
「もう、直ぐに調子に乗るんだから。でもありがとう。」
ティファにぎうぎうと抱き着かれながらお礼を言われているポップの相貌はデレデレと化している。
こんなに自分に甘えてくれるティファなんて島以来だと嬉しくな

る。
だからこそ忘れてしまった。リングを取りに行った時、マトリフから一行の料理人・ティファへの伝言を。
日が暮れる前に昼の宴会の残りをアレンジして、ベーコンステーキは角切りにされてトマトと酢漬けの野菜で煮込まれ、塩と胡椒で味を調えたのを水分がなくなるまで煮詰めたところを器に盛りつけ、火に溶けるタイプのチーズを乗せて竈の上で焼けば、香ばしい匂いのグラタン・トマト味の出来上がり。
星空の下で新しい味に全員が舌鼓をうち、場の雰囲気が盛り上がったところでなんとポップがティファに、アルキードの子守唄をいきなりのリクエスト。
ティファは真っ赤になって全力でお断りしたが、ポップのお願い攻撃に負けて一曲だけを約束させて歌うことになった。
その際何故か眼鏡を取られて髪留めも解かれてびっくりした。
「ポップ兄！」
「いいんだよ、そのまんまのお前で歌ってくれ。」
眼鏡がなく、髪もはらりと落ちているティファの姿は年相応か少し幼く見える。
自分の妹分は、矢張りかわいい女の子なのだとマァム達にも知ってほしい。例えどれほど強く、知識があってもティファは十二の少女なのだと。
そんな兄の心知らずなティファは少し膨れるが、シターンを出して全員が見える位置に座り込み、ゆっくりと呼吸を整えながら旋律の調整をする。
その楽の音だけでも素晴らしく、お相伴に預かっていたモンスター達どころか森に住まう精霊達も何事かとすっ飛んできて、着いてみれば優しく柔らかい雰囲気を纏った少女がまさに歌い始めた時だった。
―お休みね～、夢を見ましょう。またあ～う日～まで～―
優しい旋律に乗って響く甘やかな声音は、朗々と歌い上げられ辺りを包み込みその場にいるすべての者たちを魅了する。
それこそロン・ベルクとてもうっとりとした心持になった。まるで

極上の酒を飲んだが如く、テイファの甘やかな声が体の奥底にまで入り込み、心の中にまで沁みていくようだ。

少女の子守唄は月をも魅了したように、満月が煌煌と青白い光を発して辺りを照らす。

夜が更けたのだ。

真夜中の使者たち⑨大魔王バーンより

「私もお外で寝たいんです！」
　ダイ兄達と一緒にお星さまを見ながら沢山の喋りをしてグッスリと寝たい。
「駄目よ！あなた女の子なのよティファ。ロン・ベルクさんの厚意を受け取って私達と一緒にベッドで寝なさい。」
「そうです、女の子のお喋りも楽しいですよティファさん。」
「今度皆で野宿した時にお喋りしようよティファ。」
「むぅ～ダイ兄まで。」
　外なんて危険だ、どんな悪意がティファに覆いかぶさろうと狙っているか分かったもんじゃない
「・・マァムさん、ベッドは三人は狭いのでは？」
　いくら男物のベッドでも、私とマァムさんとメルルさんの三人はどうなんだろう？
「あら、だったらこうしましょうティファ。」
「ふぎゅ！マァムさん・・胸当たってます・・」
「ふふ、ティファって本当に小さいわね。ミーナとおんなじくらいの細さね。」
「あら、もっと太っても良いと思いますよティファさんは。」
「・・ひゃい・・」
　こうやって抱きしめていれば、不意に―腕―が出て来てティファを攫おうとしても一瞬の気配で分かる
「ポップ、寝ずの番の最初は俺がするよ。」
「そうだな、おっさんとダイで組んで次が俺とヒュンケルで・・チウはダイ達と組んでくれ。」
「分かりました！気配したら直ぐに皆さんにお知らせします!!」
「うむ、頼んだぞチウよ。」
「あまり力を入れすぎるなよ、夜は長い。」
　何処から敵が来ても対処できるように万全の守りを敷く

あいつら何考えてやがる？
ダイ達の動向をつぶさに見ていたロン・ベルクは疑問だらけだ。
こんな片田舎に魔王軍は一度も来たことがないと言うのに、まるで決戦前夜のような物々しさだ。
しかもその中心にいるのはどうやらあの少女。強いのか弱いのかさっぱりと分からない変わったお嬢さんをどうやら守ろうとしているようだ。しかも本人には何も告げずに。
ティファはいたって普通に兄たちと野宿を楽しみたいと言ってもすぐに却下をされ、女性とはいえ三人では手狭になるベッドでも抱きしめられて眠っている。
本人はすやすやと眠っているが、マァムもメルルもどこかピリピリとしている。
俺も周りに気を張ってみるか。
あいつらも矢張り勇者一行で、多くの敵から狙われているんだ。不意の襲来に備える方が当たり前なのだろう。ここにいる限りあいつらは俺の大切な客人だ、誰が襲ってきたとてみすみす見逃すつもりはねぇ。
かつて魔界の剣豪とまで呼ばれた俺の名に懸けて

八重に十重に二十重に、いくつもの守りが少女の周りに張り巡らせられた。
万全の守りと言っても過言ではない守りが、本当ならば何事もなく朝を迎えるはずだった。

―おいで―
ほの暗い水底から響くような重く幽かな声
―待っているんだよ―
どこか物悲しさを感じさせる声がティファの頭に直接届いた時、その守りの加護は脆くも崩れ去った。

ティファ自らがその守りの揺り籠から抜け出し、走って森の奥へと直走った。
マァムの腕から抜け出し、土間で剣を脇に置き椅子で寝入っているロン・ベルクの横を通り過ぎて扉を開け、―眠っている―ダイ・ヒュンケル・クロコダイン・チウ・ポップ達の間を走り抜けて意の奥を一路を目指す。
行かないと
焦燥感に駆られて走った先にいたのは・・
「今晩はお嬢ちゃん♪」
自分の出現に驚いているミストと違い、いつも以上に飄々とした雰囲気を纏ったキルが演奏止めて岩から降りてきて挨拶をしてきた。
「・・・今夜は・・キルバーン、ミストバーン。」なんで・・自分はここにいるんだろう・・
ただ声に導かれるままに来たティファは、挨拶を返してきたきりぽかんとした顔でキルとミストを見つめているだけで動かない。
流石のバケモノ娘も驚くことがあるのだとミストは意外に思った。
どの様な事にも動じずに、小憎らしいほど落ち着いて行動をしては自分達の作戦の邪魔をしてきた娘とは思えん。
一方のキルは内心でご満悦状態だ。
「ミスト～、お嬢ちゃんを誘き寄せる方法僕に一任させてくれないかい？」
「・・どうする？」また空間から攫ってくるのだろうか。
「ふふ、な～いしょ～。でもきっと来てくれるよ。あの子自身が僕達の下へ。」
そんな都合のいい話があるものかと馬鹿馬鹿しく思ったが、いざとなれば空間からキルに攫わせる算段を付けてダイ達の食事に一服盛った。
この場合ティファが用意をしたダイ達のパーソナルカラーのマグが災いをし、ティファ以外のマグの内側に無味無臭の眠り粉を塗りつけた。
それが出来るならば普通は毒殺を算段しそうなものだが、致死の毒

に無味無臭はなく直ぐに感づかれて終わってしまう。神経を研ぎ澄ませた達人ならば、命に関わる事には尚更神経が行き渡るもので、ロン・ベルクの目をごまかせるとは到底思っていないミストは下手な欲はかかずに大魔王の命を忠実にこなす。今回の狙いはあくまでも勇者ダイではなくその妹なのだと。

こいつの目をかいくぐるのは至難の業だ

かつて因縁浅からぬロン・ベルクの実力を熟知しているミストは、キルに大量の無味無臭眠り粉をふんだんに渡し、ロン・ベルクの酒に大量に混入をさせた。その量たるやクラーゴンでも昏睡するだろう程の量に、流石のキルも少々引いた。

「ねぇ～ミスト、あの鍛冶屋さん殺したいの？」

そう言わしめるほどの量を平然と盛るように指示したミストは少しばかり私事も入っている。

「構わん、大魔王様に―二度―までも楯突いた奴だ。死んでもよかろう。」

「・・分かった・・」

粛々と、ダイ達が張り巡らせる守りの垣根を取り払うべくキルは思う存分暗躍をして夜は更けて、煌煌とした満月が空に昇り切った時に満を持してキルは死神の大鎌の握りについている―笛―を奏で始めた。

スルスルと音は夜空を上り、あたりに満たされ始めた時にそれはやってきた。

森の静寂をかき分け、ひた走る何かがこちらに近づき、藪をかき分けて出てきたのは寝具を着て髪を振り乱したティファだった。

やっぱり来た！僕の考えは当たっていたんだ!!

キルが吹いた音は―とある者達―だけに声として届く波長を笛に乗せて奏でたもの。

このあたり一帯にはその音を拾えるのは小屋の主とこのティファだけで、小屋の主には来てほしくないからミストが盛るように言ってきた馬鹿みたいな量の眠り粉を盛ってやった。

もしかしたら来ないかもしれなかったけれど、僕の考えは正しかっ

た！
お嬢ちゃんはやっぱり僕たちの側に居るのが相応しい子なんだ♪
キルが心の中で自分の考えの正しさが証明できたと拍手喝采してる中、ティファは状況よりも、自分の落ち着きように驚いている。
なんでだろう？怖くない
キルとミスト、大魔王の直属の側近で魔界でも屈指の実力者が揃っているのに私はたった一人だけ。
ダイ兄達がいるわけでもないのに、本当に怖さを感じない。
それどころか美しいと思っている。
満月の光の中綺麗な白い衣装を着たミストは尚その白さを際立たせており、少し斜め後ろに佇むキルも相も変わらずにかっこいい。
そうだ・・これはまるで・・
「・・私は夢でも見ているんでしょうか？」
お伽噺の中に迷い込んだみたいだ。
・・何を言っているんだこの小娘は？
どう考えたらそんな非現実的な答えに辿りつくんだとミストは馬鹿馬鹿しさに本気で頭痛を感じた気になってしまう。
中身は暗黒闘気の生命体で、表は主の若く最高潮の頃の肉体であるはずなのにだ。
これはキルに相手をさせよう。一段落着いたらさっさと用向きを終えてバーン様の下に戻るべきだ。
ミストの思惑通り、キルはニコニコとティファに話しかける。
「お嬢ちゃんはちゃんと起きているよ。」
「え・・でも・・・」
「ふふ、魔物の僕達をそんなに綺麗に評価してくれるのなんてお嬢ちゃん位なものだよ。」
「・・・そうでしょうか？」
「そうだよ。そもそも普通はね、勇者様の仲間なら魔王軍の僕達と会った時点で警戒すべきなんだよ？君全くしていないけどいいのかな。」
「あ・・」

「それって勇者一行の者としては失格なんじゃないのかな。」
キルの言う通り、ティファは常時身に着けている雪白を発動させようという考えすら起きないほど無警戒のままで魔王軍の大幹部達と対峙をしてしまっている。戦場であれば、あり得ざる事だ。
・・・今日のキル・・何かヤダ・・
魔の森でもテラン戦でも、攫われた死の大地でもこんな物言いはしてこなかったのに。
絡みつくような粘っこい蜘蛛の糸で雁字搦めにしようとする様で気持ちが悪い。
「・・・私に、何の御用でしょうか?」
早く用件を聞いて小屋に帰るべきで。戦う気ならばミストがとっくに私に斬りかかって来ている。
つまりは今日は戦いに来たわけではなく、私を帰す気はあると考えて間違えではないだろうけど・・
「大魔王バーン様よりのお言葉だ。」
ティファの問いに、すぐさまミストが応えた。
長年バーンの側近くにいたヒュンケルやハドラーがいない今、大魔王の姿どころか影すらも見た事がないティファにならば声を聞かせても問題は無いだろうと。
「明日の朝、パプニカ国内において大魔王バーン様の篩を勇者ダイ達に行う。
もしも受けぬとあれば、パプニカ王国の滅亡と思え。以上だ!」
・・・・・はぁ⁉

真夜中の使者たち⑨蛇（くちなわ）の妄執

私は一体何を聞いているんだろう？

大魔王バーンの篩って一体なんだ？そんなもの、原作のどこにもそれこそ劇場版にもアニメ版にもなかった・・この時点では、大魔王の影すら見えないはずなのに・・

聞いた内容が理解できずに、ポカンとした顔を晒すティファに、キルは愉快気に声をかける。

「不思議そうだねお嬢ちゃん。」

聞かれたティファは、不思議どころか疑問しかない。

「これは魔軍司令官も知っているのですか？」

たった数日前に彼からのメッセージをヒムから聞いたばかりなのに、横割りをされるような作戦をハドラーは反対しなかったのだろうか？

自分達の力で敵の実力を見定めると意見を言ってそうなもんだ。

「知らないよ。これは急遽決まったことなんだから、ハドラー君には知らされていないんだよ。」

「はぁ？」

「原因はね、君なんだよお嬢ちゃん。」

「私が！」

キルから知らされた新情報に、ティファは益々混乱を深める。

何それ？

鬼岩城を一撃で切り裂いたダイ兄でなく、なんで私が原因なの。

言ってる事が滅茶苦茶だ。現時点での料理人は、大魔王の目に引っかかることはしないように細心の注意を払って動いてきたつもりだ。

幼少時から島を出掛ける時も、ガルーダで出掛ける時も悪魔の目に映らないように主要都市国家は全て徒歩で歩いて入り、目玉の気配がしたらハイエントの結界・ジ・アザーズで自分を覆って目くらましをてきた。おかげで大戦が始まるまでこの世界の主要人物はおじさんか—小父様—以外は私を知らずに済んできた。

その私が大魔王の目に留まるだなんてどう考えても・・

思考の海を漂うティファに、キルは更に情報を与える。
漸く自分の言う事に耳を傾け始めたティファに気を良くして。
「君、自分がバーン様の目に留まることしてないって考えてるでしょう。」
「・・はい。」
「くっくっく、君って正直な子だね。考えてることが丸分かり。正直ないい子に教えて上げるよ。君、死の大地では物凄い活躍したじゃないか。」
「・・・・ほぼ泣き喚いていた気が・・」
瘴気のせいで、見たくもない自分の心に負けてのたうち回って散々な目にしか合っていないぞ。
「そこじゃないよ。二度目の時はなんでか瘴気は効かなくて小物君を躊躇なく殺そうとしたり、いきなり出現したハドラー君のオリハルコン製の部下君の胸を手刀で綺麗に貫いたりの大活躍してたじゃないか♪」
「・・むしろ勇者一行の者として恥ずかしくて死ねます・・」
自分がしでかした黒歴史に、ティファは内心悶絶しまくった。
深い穴掘って埋まりたい！
無抵抗になった無力化したゴミ屑でも一応無抵抗のご老体殺そうとしたり！うっかりでポーンヒムを生まれた瞬間お亡くなりあそばせようとして!!私どんだけダメ人間⁉
埋まっておきなさいよ！阿呆自分！
「君には恥ずかし～い事でもさ、バーン様は君の本当の実力はどんなものか知りたくなっちゃたんだって。」
ティファの顔はギリポーカーフェイスを装っているが、内心の悶絶を感じとったキルは、楽しそうに続きを話しながら、内心で本当の事を反芻する。
もっと言えば、力の方ではなく料理人の真の姿を。まぁこれはまだ内緒だけどね。
本当の所、―五年前の大騒動―の時、この子が本当に関わっているのかどうか僕も知りたくなってきたんだよね。あの当時はてんで興

味なかったけど、この子が果たして意図的にしたのか偶発的に引き起こしてしまったのか、あるいはまったくの無関係・・・三番目はないか。
意図的ならばこの子供の真の正体は天界からの刺客に他ならない。
ただの子供が魔界の神にちょっかい掛けられるはずもなく、大魔王の思惑を知った天界が寄越した者だ。
しかしそれにしてはやり方が実にまだるっこしい。確かに当時の魔王軍は大混乱をしたが、それでも軍の立て直しが出来てそれ以降の干渉はなく大戦は開始された。
天界からの刺客ならば、二の手三の手を打ってくるかもっと直接的な干渉がありそうなものだがなかった。
そして本当に偶発的に引き起こした物だとしたら・・矢張り見逃せない。
天文学的な確率よりも低い偶発性を引き起こす者なんて、現時点での勇者よりも厄介だ。
なんで自分が標的なんだとぼやきながら頭をガリガリとかいている暢気なお子様。
自分がどんな事態を引き起こしているのか分かっていない。
「本当に迷惑な話だよ。」
「貴方がそれを言うんですかキルバーン。」
「迷惑なんだよね、誰もかれもが君に注目をしだして。」
君の―本当の正体―を知っているのは僕だけなのに。
不意にキルの雰囲気が一変をした。苛立を隠そうともしない瞳がティファを射抜く。
その赤い瞳に常の深みはなく、怒りとは違うもっと濃く深いものがちろちろと燻りはじめ、ティファの心を竦ませた。
なに・・あの目は・・
見た事がない、あんな色を乗せた瞳を自分は知らない・・
「私が・・注目をされるのは迷惑ですか・・」
あの色が怖くて、話しかけて変えようとしても上手く声が出ない。口の中がカラカラになって、何を言っているのか自分でも分からな

い。
「そうだよ、僕にとっては迷惑以外の何物でもない。―本当の君―を分かっているのは僕だけなのに。それにね、僕もそろそろ怒っているんだよ?僕の事を無視している君にね。」
「・・無視なんて!」
「しているよ。君は話し掛けてくれてはいるけれど僕がどんな気持ちを君に向けているかだなんてこれっぽちも考えたことないでしょう。こんなに君の事を想っている僕の気持ちを。」
　怯え始めたティファに話し掛けながら、キルはゆっくりと前に進む。その歩は本当に緩慢な動作で、少しでも速度を上げれば警戒をし始めたティファは瞬時に逃げ出すだろうが、その境のギリギリの動きをしながら確実に近づく。
　もうそろそろ自分も限界だ。これほど愛しているのに少しも知ろうとしない薄情者を逃がす気はない。
「いっそのこと、僕の空間に攫って二人っきりにしてしまえばいくら鈍い君でも気が付いてくれるのかな?」
「・・何言っているんですか?」
　戦うや倒すじゃない。まして殺すでも無い事をなんで平然と言っているのこの人は!
「そうだよ・・君を攫って行けばいいんだよ!そうしたら篩なんてしなくて済むし、君もパプニカや周りにも迷惑を掛けなくて済むんだからそうしようよお嬢ちゃん。
　君はさ、戦いに疲れているんだろう?」
「・・・・」
「だったら僕と楽しく過ごせばいいじゃないか。好きな食べ物も服も欲しいものは何でも上げる。退屈になったら遊び相手を攫ってあてがってあげるし。」
「・・・なにを・・」
「その代わり籠の鳥になっちゃうけど大丈夫。ちゃんと可愛がってあげて面倒を見て上げるから。僕の空間はお風呂も入れるようになっているから身綺麗にもして、寂しくなったら僕が子守唄歌ってあげる

し、もう少し大きくなったら快楽も与えて上げるよ。」
この人は
パキリ
キルの言葉に怖れを抱いたティファは、顔を青褪めさせて近づいてくるキルから無意識に逃れようと一歩足を引いた先にあった小枝を踏み抜き、静寂が支配している森に大きな音として響き渡る。まるで何かが壊れる前の前触れの音のように。
「僕が怖いのかい？」
「急に一体何なんですか！」
自分が怖がっている事すらも楽しそうに聞いてくるキルの言葉を跳ねのけようと精一杯出せるだけの声でティファは怒鳴るが、その声に常の力はなく幽かに震えさえも混ざっている。
闘気や殺気は幼き頃の洞窟修行のおかげで怖れを克服することが出来たが今自分に向けられているものは違う！
それは―男の情欲―なのだと知るにはティファの心はあまりにも幼すぎ、分からないことが更にティファの怯えを助長させている。
「お嬢ちゃんがいけないんだよ。」
「なんでですか！」聞きたくない
「僕の言う事を一つも聞いてくれないから。」
「貴方は敵でしょう！」走って逃げたい
「そんな酷い事を言うんなら、いっそ死体の君でもいいんだよ。」
「・・死体？」
「そう、死体だよ。ねぇお嬢ちゃん、なんで僕が死神って呼ばれているか知っているかい？」
とうとうティファの目の前まで来たキルは、両膝を地面につけてティファと目線を合わせる。
ティファが逃げ出さないように小さな両の手を大きな自分の両手ですっぽりと覆って拘束をし、可愛い貝のような小さな耳に口を寄せてひそりと囁く。
「僕はね、殺した相手の幽体をこの世に留めておけるんだよ。」
余程の執着か魂の貝殻のようなレアアイテムかもしくは、自分が

ヴェルザーから与えられたこの能力は例外だが、この世界では亡くなった者の大半は―地霊―と呼ばれる死の神に仕えていると言われている灰色の精霊達によってあの世に幽体と魂を連れていかれる。
本来ならば殺しても情報を吐かせるために授けられたものだ。自分の旧主も魔界の大半の者達も程ほどという言葉が脳内に存在していないために編み出されて今のところ自分にしか成功していない与えられた能力だが、愛しい少女の幽体を永遠に繋ぎ止めることが出来るのならばこれほど素晴らしいことはない。
「ねぇお嬢ちゃん、僕と一緒に遊ぼう。生きていても、死んでいても僕は困らないから。」
小さな体を抱きしめて請い願う。
永劫の時を自分と共にいてほしい、オートドールの人形の体が朽ち果てるその時まで

真夜中の使者たち⑩嘆き

腕に抱きかかえている泣いている少女を刺激しないようにしながら、ロン・ベルクはゆっくりと歩を進める。ダイ達のいる小屋に戻る為に。

泣きじゃくり震えるティファに泣き止めとも言わず、時折背中を撫でて慰める。

あんな変態に目を付けられたら誰だって泣きたくもなる。ダイ達があそこまで警戒をした訳が分かった。

ぶっきらぼうで凡そ人の心を斟酌しない自分までもが哀れに思う程の目に遭ったのだ・・やっぱあいつだけでも叩き切ればよかったのだが、もう一人のせいで断念をした。

「どうして？」

「ん？」

「どうしてそんな酷い事を言うの？」

キルは敵、でもこんなに酷い人だと思わなかった。魔の森で出会ってしまった自分を見逃すような人だった。

「どうしてそんな酷い事が言えるの？」

自分も敵を倒す、でもこんなひどい事を思ったことは一度だって無い！

キルは自分がティファに対して持っていたイメージが当たっていた事に内心ほくそ笑み、瞳が赤い三日月を描く。
やっぱりこの子は僕が思っていた通りの子だ。
この子は確かに旅もどきで酷い目にあってきただろうが、ほとんど物理的な物で欲望を剥き出しにしたものに出会っていない。自分のようなどろどろの欲望を。
太陽の下ですくすくと育ち、醜い欲望を見ずに育ったティファのような者にこそ効果が発揮される。
今のティファは自分の欲に恐れ戦き混乱までしている。敵の自分に何故等聞いてくるのがその証だ。
さて、もう一押しが必要だ。
「お嬢ちゃんが悪い子だからだよ。」
体を引き離し、顔をしっかりと見つめながら断罪をする。この一連の出来事全てをこの子供に背負わせる一手。
魔王軍の邪魔をする、自分の実力をひた隠しにする、挙げればきりがないな～。そんな子は隔絶しないといけないよ♪
「・・・悪い子？」
私は・・悪い子？

その言葉は、キルが意図したよりも深くティファの心の中に突き刺さり毒をまき散らす。
キルは知らずにティファの心の傷のかさぶたを剥がし、抉ったのだ。
そうだ、自分はこの大戦を知っていた。オーザムが滅びるのを知っていた、親友のいる国がもしかしたら滅亡していたかもしれないのを知っていた、鬼岩城で沢山の人が死んでしまうのを知っていた！それでも自分は世に警告を発しなかったではないか！
それどころか心を通わせた人達をこの手で斬り殺したのだ！
ベンガーナのアキームが自分を称賛してきた時、本当は泣きたくなった。知っていたからこそ薬が用意でき、何かしらの警告を発していれば、あそこまでの被害は出なかったのだと。

自分は称賛に値する者ではない、穢れた醜き者だ。
ならばキルの言う通りだ。
「ティファは・・・・わるいこ・・・・」
静かに、ティファの心が軋み始めひびが入り、大きな黒い瞳からはらはらと涙をこぼすティファをキルはうっとりと見つめる。
漸く自分の言葉が少女の中に食い込み、今まさに自分の望み通りティファの心を壊せる。
早く心をカシャンと壊して。君がいれば僕はもう何もいらない、バーン様とミストと君がいればそれでいい。
十年でも二十年でも壊れたティファの心が治るのを待とう。今は兎にも角にもティファ自身が手に入ればいいのだから。
ミストもまさかここまでキルの思惑が当たりティファにここまでの心の傷をつけられるとは思っていなかったので驚きを隠せないが、一行の精神的支柱である料理人ティファを落とせることに喜びを隠せないでいる。それ程までにティファを危険視していただけに、キル同様に早く心を壊して堕ちる事を心の底から望む。
だからこそ森から泉に近づく人物の出現に心底驚きを隠せなかった。

「馬鹿か貴様等は。」
その人物は右手に抜身の剣を携え、開口一番に罵りの声を上げる。
「そのお嬢さんが悪い子な訳があるかよ、その手を放しやがれ！」
言葉がキルの耳に届くと同時に剣の一閃が自分を目掛けて上から振り下ろされた。咄嗟にティファも突き飛ばしながら自分も後ろに飛ばなければ、自分を真っ二つにしていたであろう斬撃は大地を深く切り裂いた。
ロン・・ベルクさん・・・
ロン・ベルクは人生でこれほど深く怒りを覚えたことはないと断言できるほど怒りが湧くのを感じながら、ティファをここまで傷つけた人物を視線だけで殺せそうな瞳で射貫く。
深夜に目が覚めた時、自分の体調に愕然とした。泥の中から這い上

がるような重さが体にも思考にも纏わりつく。こんなことは一度としてない。不信感を覚えて女性たちが寝ている部屋に行ってみればマァムとメルルは眠っており、二人の間にいたであろうティファがいなかった。

二人を揺り起こしても起きず、表に行けばダイ達も同じように深い眠りについていた。森に行ったかとティファの気配を探ってみれば、不意に―声―が頭に響いた。早く来てと。

誰のどんな策略で連れ出されたか分からないが、ダイ達の警戒を見ていれば物凄く不味い状況だと馬鹿でも分かると剣を差して声のする方に駆けていけば、信じられないことが次から次へと耳に飛び込んできた。

ミストバーンがいるだのバーンの篩だの、挙句あの優し気なティファがした数々の事にたまげたが、そんなことはどうでもよくなった！なんだあの変態は!!

次々にティファに投気掛けられていく変態的な数々の言葉に、ティファの気配がどんどんと怯えていく。

挙句身勝手な物言いに、心がぶちぎれた。

「ふぅぅぅ・・」

剣を構え敵と対峙するロン・ベルクの後ろで泣きじゃくる声が響く。痛々しく、抱きしめて慰めなければならないと思う程に。

「君も、何も知らないのにその子に魅かれたのかい？」

「・・こいつは俺の大事な客人でな。手を出したからには相応の覚悟は出来てるんだよなミストバーン？」

冷え切って怒りに満ちた互いの声がその場を支配する。

キルはもう少しでティファの心を壊して手に入れられたのを邪魔しに来たロン・ベルクに。

ロン・ベルクは心優しいティファをここまで傷つけた、ふざけた格好の敵に。

だがキルの苛立ちはロン・ベルク以外にも向いていた。森から多数の気配と、上空からは音を響かせて突如舞い降りたガルーダに気が付いたからだ。

バサリと翼を畳みながら、ガルーダはティファの姿を認めて一息をついた。
近頃ティファの様子が心が沈みがちでずっと案じていた。いつでも優しい笑顔のティファが、争いの中に居るのは無理だ。大人や戦士たちに任せてずっとデルムリン島に居ればいい。そう言っても応じなかったティファに何があっても守れるように付かず離れずで小屋の外にいたのが不意に眠ってしまった。
幸いに毒や異常ステータスに耐性がある自分は直ぐに目が覚めたがティファの気配は小屋には最早なく、焦って来てみれば少し前に会った敵もいたが、ティファを庇っている男の後ろにいるのが上空から見てとれすぐさま降り立つ。
「・・・が・・る・・だ・・」
顔をくしゃくしゃに歪め、泣きじゃくるティファがいた。
これは・・・あ奴か？
数日前にティファを空間から攫った男が・・・
「―貴様が！ティファを傷つけたのか!!!!!」
―ギシャアアアアア!!!!!―
ガルーダの凄まじい怒りの方向は夜の森に響き渡り、呼応するかの如く突如森から大勢のモンスター達と精霊達が飛び出し、ティファ達とキル達の間に躍り出た。
リリパットは弓をつがえ、バブルスライムは毒を沸騰させ、大サソリが尻尾を向ける。キル達に向けて。
この場にいるモンスターや精霊達は昼間ティファに関わり、美味しいものをくれて楽しいひと時を味わった者達。
昼間優しくしてくれた少女の気配が深夜の森にしたことに、人の常識を知る精霊達がまず驚き、つられるようにモンスター達にも精霊達の危惧がうつり共に来てみれば、優しい少女が涙を流しているではないか！
精霊達はすぐさま魔界の気配を纏わせたキルとミストを敵だと認識をしてモンスター達に伝えた結果、戦いの布陣がすぐ様に敷かれたのであった。

一体これはどういう事だ！精霊達が魔界の者である自分達を厭うのはまだしも、何故モンスター達が自分達に敵意を露にしている⁉
地上のモンスター達は本来争いの心を持たず、争うにしても生きていく上での戦いしか持たない生き物のはずだ。
それも自分達との力の差は本能で分かっているだろうに何故だ！
「・・・みんなお嬢ちゃんの為か・・その子の―正体―も知らない癖に、慕い―仕える―事だけは本能的にするか・・」
ふっくっくっく・・・
「はぁっはっはっはっは!!!」
不意にキルが狂ったように哄笑し始めた。
ティファの事を知りもせず、ただ本能だけで慕うモンスター達にも精霊にも、邪魔をしに来たロン・ベルクにもガルーダにも腹が立つ！
殺気と憎悪に塗れた自分の声に青褪めながらも踏みとどまるモンスター達を踏みにじってやりたい！
自分にバギ並みの突風を巻き起こさんと翼を広げたガルーダをティファの目の前でバラバラにしよう。
ロン・ベルクを惨殺すれば、ティファは手に・・・

「撃たないでガルーダ!!!!」
戦いの火蓋がまさに切って落とされかけた時、ティファの悲痛な叫び声が怒りに満ちた場を切り裂いた。
「撃っちゃ駄目！ガルーダ止めて!!森の皆もこの場から離れて!!」
ガルーダの足にしがみつき、必死に戦を回避しようとする。
戦えば、キルとミストならばこの場にいる皆が殺されてしまう！ロン・ベルクさんがいても！
どうして・・・何でこんな事に・・答えは決まっている。
自分が悪い子だから、こんな事態を招いてしまったんだ。
「お願いだから・・戦わないでガルーダ・・」
こんな自分のせいで傷つかないでほしい
しがみついたガルーダの足に顔を埋めながらティファは請う。誰も傷つかないでほしいと。

その願いにガルーダは寸でのところで羽を止める。残念ながら相手と自分達との差がありすぎ、魔族の男と共闘をしたとしてもモンスター達が殺されてしまうのが目に浮かぶ。
それではティファの心が死んでしまう！
ティファを思い、敵を倒せないガルーダの苛立ちはロン・ベルクの心をも荒らした。
せめて赤と黒の道化男だけでも倒したい！もしもダイ達に出会う前に自分のあの技に堪え切れる武器が完成をしていたのならばそれが出来るのに!!
ガルーダ達の無念さを踏みにじるようにキルがティファに声を掛ける。
「君はそんなになっても周りに助けを求めないんだね。」
「・・・助け？」
何を言われたのか分からないティファは顔を上げてキルを見てみれば、可哀そうなものを見るような視線とぶつかった。
「いつでも君はボロボロになっているよね。なのに周りに助けを求めないのはどうして？」
キルの不思議そうな物言いはロン・ベルクの癇に障った。
「何を言ってやがる！手前のせいだろうが!!」
元凶がなにをほざくと再び剣をキルに向けるが、キルはロン・ベルクを無視して静かにティファだけを見つめる。
助けなんて・・・私が求めていいものじゃない・・・
罪悪感と心の痛みにぽろぽろと涙を流し、沈黙を続けるティファにキルは溜め息をつく。
こんな中途半端に心を傷つけたかったわけではなかったのに、儘ならないものだ。
不意にキルはくるりと向きを変えてミストに話しかける。
「ミストもういいよ帰ろう。」
「・・・・・いいのか？」
ロン・ベルクの手前、微かながらもキルに問う。ティファを連れて行かないことに対していいのかと。

「うん、こんなに邪魔が入った。興醒めもいいところだよ。」
連れ行くならば、ひっそりと音もなく。死神の自分の美学に反する事はしたくはない。
「お嬢ちゃん、明日必ずパプニカ城に行くんだよ？でないとあの国は酷い目に遭う。」
空間にミストを入れ、去り際にしっかりと伝える。
ティファの心を縛り付ける言葉を投げ、キルも主の待つ死の大地へと帰還をした。

・・・・いなく・・なった・・・
糸の切れた人形のように、キル達がいなくなって直ぐにティファは崩れ落ち地面に倒れる寸前にロン・ベルクが抱き上げる。
「―・・・・ティファ・・・・―」
なぜ、こんなに優しい娘がこんな目に遭い続けなければならないのか。
ガルーダもティファを思い涙を流す。周りに居るモンスター・精霊達も悲しげな瞳でティファを見つめる。
「俺がこいつを連れて帰る。」
「―・・・頼む、我はこの者達を帰そう―」
ロン・ベルクはガルーダの言葉は分からずとも、ティファを思う心は伝わりダイ達の下へと連れ帰ることを告げて小屋へと歩を進め、途中で目を覚ましたティファを慰める。
小屋に着いてもマァム達のいるベッドではなく、土間に座り込み毛布を自分に巻き付けティファをしっかりと胸元に抱え込む。
「眠れお嬢さん。」
明日の為にも。
パプニカとやらが滅んでも自分は別にいいが、ティファは必ず行くだろう。
ならば体を休めるべきだと包み込む。
明日の為に、いつしかティファは眠りの底へと落ちていく。ひび割れた心を抱えながら。

大魔王の篩①

ダイは人生でこれほど葛藤をしたことはなかった。
今にも自分が暴走をするのではないかと危惧している親友達の手前暴走するわけにもいかない。
何で妹はロン・ベルクの懐で眠っているのだ？しかもしっかりと同じ毛布にくるまって顔を埋めて寝てる！
そんな自分の気配に気が付いたのか、ロン・ベルクの目が覚めた。
「うん？お前たち起きたか・・お嬢さん、起きれるか？」
「ううん・・・・や・・」
「お前さんが起きないと駄目なんだろう？」
「・・・あれ・・滅べ・・」
「俺もその意見に大賛成だが、ほれ。井戸連れてってやるから顔洗うぞ。」
起きるのをいやいやとぐずっているティファをそのまま抱き上げて、裏手の井戸へさっさか連れて行ったロン・ベルクに、ダイ達はぽかんとした表情で見送った。
あのティファがひとに甘えている！しかも滅べとか物騒な事を言ってしまっている!!
何があったかと問い詰めようと、戻ってきたティファは矢張りロン・ベルクに抱き上げられていた。しかも顔は泣きはらした後で少々晴れて赤くなっている。
ダイ達が絶句をしていると、ティファが話す前にロン・ベルクが昨日の事をあらかた話した。
変態的な奴の事は言ったら口が腐りそうなのと、言われたティファが思い出して心を乱さないように配慮をして大魔王の篩と場所だけを端的に。
「・・・・何でそんな所に行ったのさティファ！」
「ふぇ!!」
「ティ・・」
「よせダイ！俺もそうだがお嬢さんは誘き出されたんだよ、―声―

に。」
危険なところに一人で行った事にダイがティファに腹を立てたが、弱り切っているティファはダイの怒りを受け止められずにいるのをすかさずロン・ベルクがフォローする。
昨日ティファが受けてしまったことの全容を知っているのは自分しかおらず、必然フォロー役になるのはやぶさかではない。
ロン・ベルクのフォローに渋々ながらもダイは引き下がり、弱っている妹を受け取りに近寄る。
「おいでティファ。」
「・・・いい、自分で立ちます・・」
そんなダイの手をティファはとらず、自分でロン・ベルクがらそっと降り立つ。
今はダイの気配すら響きすぎて落ち着かない。
眼鏡を取り出し顔に装着をする。自分は勇者一行の料理人だ、何があっても逃げてはいけない！
ダイ達の視線から逃げるように小屋の外に出れば、先程は気が付かなかった青空が目に飛び込んでくる。どこまでも・・どこまでも広く吸い込まれそうな青空・・・

「コンチクショウ――――――――!!!!」

何が私が悪い子だ！何が君のせいだ!!飾なんてする奴の方が悪いじゃないか！他人様に罪擦り付けたあいつはまじで燃やす!!!!
顔をのけぞらせ、全身を震わせてティファは叫び上げる。
悲しみも怒りも全て身の内から追い出す為に、たった一言の中に様々な思いをぶつけて。
「ロン・ベルクさん！行ってきます!!」
唖然茫然する全員を尻目に、ティファは力強い笑みをロン・ベルクに向ける。
「・・・立ち直りの早いお嬢さんだな～。」

「何のこれしき!負けっぱなしはぜっったいに嫌なんです。」
昨日と先程と違いすぎるティファに苦笑するロン・ベルクだが、弱り切っているよりもよっぽどいいと、ティファの頭をくしゃくしゃと撫でまわす。
「俺も付いて行くか?」
「いいえ、招待を受けたのは私達です。それにダイ兄達がいます。」
「ティファ・・その大丈夫?」
「ごめんね兄・・心配かけたよね。ポップ兄達もびっくりしましたよね、体に違和感は?」
何となれば一服盛られたのだから、落ち着いたティファはようやくその考えに至りポップ達に声を掛ける。
ダイ達としては一服盛られたことにも気が付かなかったのかと内心では忸怩たる思いだが、体に特に変わったことはなくそれよりもパプニカが気になりすぐさま行く事になった。
大魔王の篩なんてぶっ潰してやる

大魔王の篩②

目が覚めたらパプニカ王城の寝室とは違った。だからと言って自国のテランの自室とも違う。質素なベッドに周りは石造りの部屋で殺風景な景色が広がっていれば、寝ぼけていたとしても嫌でも分かる。

「目が覚めましたかテラン国フォルケン王。」

目覚めて体を起こしてみれば、正面には少々変わった風体の長身の者が立っている。声から察するに男の様じゃな。

「儂を此処に連れてきたのはその方か？」

「いいえ違いますフォルケン王。それよりも僕・・いいえ、正しくは僕等から詫びを言わねばなりません。」

「ほう、その方は何者か？」

「はい、僕は大魔王バーン様の直属の部下でキルバーンと申します。詫びと言うのは今回の一件では貴方のような人質を取るつもりはなかったのです。」

「ふむ。大魔王という事は儂は魔王軍の何かしらの行動に質として取られた・・というわけではないのか？」

「ええまぁ・・バーン様はご本人は戦いにおいて人質を取るのを嫌う質なのですが、現場を任せた者が暴走をしまして貴方にはご不便をおかけしますが此度の事が終わるまでこちらでお待ちいただきます。」

「儂を帰そうとは？」

「如何に主が嫌う事であっても、魔王軍が弱気だと思う行動をとると？」

「・・・愚問じゃったな、忘れてくれ。それよりもこの件が直ぐに済みそうな口振りだったが？」

「終わります。あの愚物がお嬢ちゃんに勝てるはずもありませんし、そもそも貴方を人質に取った時点で今回の作戦がご破算になりそうなので愚物にはこちらからもペナルティーを科す気満々なのでご心配なく。貴方を五体満足でお帰しをさせていただきます。」

「無事に・・・」

「はい。僕はこれから出かけねばなりませんが愚物に手出しをしないように釘は刺していきますのでどうかご安心を。」
「どこに？」
「今回の騒ぎの中心地であるパプニカ王城に。」
　あの子の怒りを解きに行かないと、本当に今回の目的達する前に問答無用でこの塔に向かってくるだろう。怒り心頭に発して愚物を斬る分には構わないのだが、長年主を悩ませ続けていたあの大騒動の真相を知るべく、昨日の今日だが会いに行かねば。きちんとお話してもらえるように、頑張って今回の件は全力で誠心誠意をもってお詫びしないといけないね。
　え？昨日脅した件についてのお詫び？しないよ。だって昨日のは本気で実行するつもりだったんだもん。
　お詫びの口上何にしようと真剣な目つきで右手の親指を顎に持っていきながら、腕を組んで思案するキルバーンの様を見ているフォルケンはこの状況下でも不思議と落ち着けた。
「・・・余程怒らせたら不味い者の下に行くのか？」
「ええ・・あの子は怖い子ですからね～。下手に怒らせたらどんな被害がこっちに来るか分かったものではありませんので・・いっそあの愚物の首持っていけば許してくれるかな～・・・味方を殺したって反対に怒りそうか。」
　かといって人質返せないしとぼやく姿に、不謹慎ながらもフォルケンは吹き出しそうになってしまった。
「今回の件は地上に被害を出すつもりは？」
「は？あ、申し訳ありません失礼を。元々決戦は近いですので無駄な殺し合いはしませんよ。」
　様々な機密事項を抱えているキルバーンだが、地上側だとてこのくらいの事は当然予想しているだろうからこの程度の情報は漏洩には当たらないと堂々とフォルケンの疑問に答える。
「ふむ、今回の事は現場の暴走であり魔王軍の総意ではないと儂から一筆したためるかね？」
「よろしいのですか？」

キルバーンは意外そうな面持ちでフォルケンを見る。
愚策とはいえ理想を掲げた徹底的な平和主義者のテラン王が、魔王軍の自分の言葉を信じてあまつ手を貸そうとは。
「なに、そうした方がこの騒動もすぐに収まるのであろう。儂は王としての資質は欠けるが、それでも政治と言う伏魔殿の中で目を鍛えてきたつもりじゃよ。」
風体こそ奇抜だが、このキルバーンという男には実がある。人質の自分に対する礼儀もあり、虚言妄動で人を誑かす者でもなさそうだ。
詫びている時、いや自分に話しかけてきた時から申し訳なさそうな雰囲気が漂っており、―お嬢ちゃん―の話をしていた時は困ったような気配がして笑いそうになった。
敵であることに間違いはなく、近い将来どちらかが滅びるだろうが今回は自分が手を貸してもよかろう。
そこは王としての懐の広さであり、これをして百にも満たない国を国家として纏め上げている度量であるのを、残念ながらフォルケンが自覚していないのが勿体ない。
「ではご期待に沿えるようにこちらも務めさせていただきましょうテラン国フォルケン王。」
敵の大幹部に一礼させる本物の王だという事を。

などと言う平和的な一場面があるなどと思いもしないパプニカ王城は大混乱を極めていた。
今朝の夜明けに地底魔城跡に大規模な塔が突如として姿を現し、警戒すべくすぐさま支給されている貴重なキメラの翼を使って王城に警告が発せられ、さしもの現状に病状のレオン王が起きて陣頭指揮をとろうとしたのをレオナとロムスが文字通り体を張って止めてすぐさま各国の王に警戒するように回ってみたら！城内にいるはずのフォルケンがいなかった!!
「あいつ燃やす!!!」
城内がパニックになりかけたところにルーラとガルーダでやってきたダイ達にすぐさま話せばなんと怒りを発したのは温厚であるは

ずの料理人のティファだった!!
「あの塔にいるのが敵なんですよね！今すぐぶっ潰してきますので少々お待ちを!!」
「駄目よティファ！無茶しないで!!」
「行ったら泣くぞ俺達!!」
「ティファ今回は堪えて！」
どうやらティファは怒らせてはいけない部類の様で、マァム・ポップ・ダイが本気で涙目になって止めているのを見た大人達は却って落ち着きを取り戻せてしまったほどだった。
「人質は無事に・・」
「ティファさんが一人で行くのが駄目なんです！」
「あう・・分かりました・・」

「姫様！鏡に・・鏡に血の文字が!!」
ダイ達の騒動が一段落着きそうになった時に、次の騒動が湧いて出た。
先のハドラー大戦の時と言い・・この国は何かに呪われているのかしら？
パプニカ王女として泣きたくなってきた。

大魔王の篩③

鏡の通信文字が送られたこと自体はさほど驚かれはしなかった。
各国にも先のハドラー大戦でも前例があるので、血文字であっても大騒ぎにはならない。
それでもティファと翻訳で呼ばれた学者たちは頭を抱えている。
送られて来た血文字の字が汚さすぎて
「・・・・翻訳不能です。」
意気揚々と翻訳してさっさとテラン王を迎えに行くと鼻息荒くしたティファが早々に白旗を上げ、おっとり刀でやってきたパプニカの魔道研究三兄弟の長男インス・次男ワイズ・三男フォスも見て早々に諦めた。
「「「こんな汚い字は読めません」」」
書いた本人としては書体を流麗に崩して書いたつもりのようだが、たんにバッチい字にしか見えない。これから察するに、送った本人は理知的だと思い込んでいる馬鹿であるとのプロファイルが精々できたくらいだと、ティファと三兄弟の意見が一致した。
何とか解読できないかものか。
最早翻訳ではなく解読と呼べるほどの汚い字をティファはじっくりと見つめる。
ダイ達も何か手伝いたくとも専門外もいいところで、多少はかじっているポップも邪魔にならないように距離を置いてい見守っている。
だからこそまたしても侵入者がティファの側に寄ることを許してしまった。
「本当だ酷い字だねこれは。」
「そうなんです。せめてとっかかりさえつかめれば。」
「それに内容が間違っている。肝心な内容が書かれていない。」
・・・・は⁉
間違っているって・・・私誰と・・・・!!!
「今日はお嬢ちゃん♪」キル!!!
どう謝るかは結局決められなかったので、出たとこ勝負でティファ

に会うかと空間を通ってパプニカ王城のど真ん中に出現したキルは早々に愚物の間違いをこき下ろす。
「てんめぇ!」
「キルバーン!今日こそは・・・」
バッガァン!!!
ダイが剣を抜く前に、ポップが怒声と共にメラゾーマを放つ前に、勇者一行全員攻撃が始まる前にキルは壁まで吹き飛び、激突をされた壁は四方一メートルに亀裂が奔る。
無論そんな事では何のダメージにもならないキルではあるが、自分を蹴り飛ばした少女を信じられないものを見る目で見つめて呆然としてしまった。
無論蹴り飛ばした人物はそんなキルの隙を逃すはずはなく、青のリングから大量の大瓶を取り出しキルに投げつけ、ついで部屋中に投げつけた。
ティファの素早すぎる行動にダイ達はなすすべなく呆然と見ていれば、敵のキルバーンどころか部屋一体が水浸しになった。
床や壁は無論の事、天井も濡れていないところはなく、一連の出来事で静寂した部屋には天井から滴り落ちる水音のみが響いた。
その静寂は、小さな足音にかき乱される。
パシャパシャと、雨後の道を歩くようなゆっくりとした歩を進めてティファはキルにゆっくりと近づきながら雪白を具現化し、座り込んでいるキルの顔の右のすぐ横に突き立てる。
「おはようございますキルバーン、逃げられるものならばどうぞご自由に。今この部屋からあなたが出られればの話ですが。」
こんな時にもティファは挨拶を忘れないが、冷たい瞳がキルバーンを射すくめる。
これは本気で出直すべきだとキルはいつもの様に空間を通って退出をしようとしたが・・「!」
「開かないでしょう。」
「・・どうして・・」
「今私が一帯とあなたにかけた水は、聖水を私独自の製法で濃度と効

能を上げた代物です
。魔族や高魔力を帯びたものは外には出しませんよ。」
「そんな物が・・」
「あるはずが無いと言おうとも現に貴方は外には出られていない。」
雪白を壁から抜きつつ、ティファは冷たい目をキルに向けたまま告げる。
「貴方は今捕らわれの身だ、何もかもを話していただこうキルバーン。」

大魔王の篩④

「間違いありません、これはフォルケン王様の直筆です・・・フォルケン様・・ご無事で。」

ティファにシバかれたキルバーンは、様々な衝撃に呆然としながら辛うじて懐から手紙を取り出しティファに手渡した。

魔王軍の重要書類にも匹敵し、もしかしたらこの場の状況を改善してくれるという観点からすれば、自分にとっては滅多に受け取らないバーン直接の命令書と同等の価値がある物を忘れるはずもなかったが、ティファに手渡す際若干震えてしまったのが情けない。

(どうしよう!僕の昨日の態度のせいでお嬢ちゃんぐれちゃったよ!!!!)

自分が脱出不可能で勇者一行全員に取り囲まれてピンチだとか、そもそも空間を閉ざせる聖水なぞが存在しているとかと言う問題などミジンコ分もキルバーンの頭には湧かず、ティファがぐれてしまったとただただひたすらに嘆いている。

昨日のあれは、疲れがたまっているティファの心をいったん壊してリセットしてリフレッシュさせてあげたいだけだったのに!中途半端な邪魔が入って結果が大惨事になっちゃったよ~!!

責任取って死ね鍛冶屋!!

・・・この人何をしくしくしたり、いきなり切れた気配出してんだろ?

ティファは別にぐれて態度が急変したわけではない。たんに疲れているのでぶっちゃけ素の怒りをキルバーンにぶつけただけである。

怒りをぶつけた後渡されたフォルケン王からの手紙というものはさっさと受け取り、フォルケン王から占い旅の労いの手紙を幾度かもらったことのあるメルルに真贋を見極めてもらい、結果書は確かに本物のフォルケン王の筆跡でありしっかりとした字から健康状態も良好であると安堵して、手紙を胸元に抱きしめて涙ぐみながら座り込んでしまったメルルをポップと共に落ち着かせている最中、ふと見た先に少し離れた壁によりかかりながら百面相をしているキルバーンを

見てしまった。
まったく、邪を通さない聖水だなんて大嘘信じるなんてこの人大丈夫なのかな？
自分でやらかしたパフォーマンスではあるが、まさかこれ程までに信じられてキルバーンが空間を通れない聖水とはすさまじいと絶賛の嵐が吹くとは思わなかった。
キルバーンが空間を開けられない仕掛けは簡単。私の能力な～んだ？
1・式神
2・聖炎
3・ハイ・エントだよ～。
ぶっちゃけ人前で三つともダイ兄達や人前で使ってないからみんな知らないけれど、3つ目のハイエントの結界術ジ・アザーズをこの部屋全体に張り巡らしただけ。
キルバーンはかつて私に、自分以上の空間能力者でない限り亜空間の脱出は無理とか言ってきたけど、ハイエントのジ・アザーズはその亜空間をも封鎖できる謂わばキルバーンの空間能力の上位互換なんだよね～。
でも私がハイエントを使えるのは何故か知られたら駄目だって神様たちにきつ～く言われているから派手なパフォーマンスで耳目を集めて大音響に紛れて小声で呪文を発していっちょ上がり。
そして捕らわれの身となったキルバーンは、自分の心配全くしてなさそうでいろんな意味でこの人本当に大丈夫と聞きたくなる。
なのにだ！フォルケン王様の手紙にはキルバーンは敵ながらも信用に値する者だとか、今回の件に限ってはこの人のせいじゃないとか擁護してるの何でよ!!!
かっこーん！
「いい加減気配がうっとおしいですよキルバーン！今回の事は貴方が悪い訳ではないのは最初っから分かっていた事ですから少しは落ち着きなさい!!」
とうとうキルバーンの気配の百面相にティファは切れ、人質取られ

ている状況でまさか敵の大幹部に武器の類をぶつけて落ち着かせるわけにもいかないので、長年旅の苦楽を共にしてきたひとつの木から彫って作った湯桶をマジックリングから取り出してキルバーンの頭にぶつけて、どこぞの温泉街で響きそうな音と共にティファの怒声も部屋中に轟いた。

そして部屋は一切の音がしなくなった・・あれ？なんでみんな固まっているんだろ？

大魔王の篩？

変だ。

この篩で起きたフォルケン王の誘拐にキルは無関係だって言ったらキルの奴ルンルン声でありがとうとか言ってきた。

それも人の手をがっちり握って今にも抱き着きそうになってきて、おかげでダイ兄は剣抜きかけて皆戦闘モードになったし勘弁してほしい。

単に今までのキルを考察した私見を述べただけなのになんでだろう？

ああ～、お嬢ちゃんは本当に僕の事をきちんと見てくれて理解してくれているなんて！まるで天国の気分を味わえた!!

「そうだよ、僕はこんなちんけな策なんて弄さない、攫うのは君だけだ。」

とか言ったら、流石に大惨事になりそうだから言わないけどね。

お仕事きちんとしないとミストに怒られるのは良いど、嫌われたくはないから頑張ろう。

キルは跪いてティファの手を押しいだいてお礼を言って、懐から小さな水晶を取り出しティファに持つように手の平に乗せる。

何かの攻撃か呪いのアイテムかとダイ達がいきり立つ前にきちんと説明を始めた。

「これはね、記憶を読み込んで周囲の者達に映像を見せられる特別な水晶なんだよ。

魔界にもこれを入れてバーン様の手元には二つしかない特別製でね。」

「・・・そんな特別なものまで使って、大魔王は私に何を聞きたいのですか？」

超レアアイテムを渡されたティファは流石に気色ばみ始めた。キルは自分の実力を知りたいと言ったのに、どうも話が違ってきた。

「そうだね～。君はね、現段階で魔王軍にとってはとっても危険で要注意人物なんだよ。」
は☒
「それこそそこの勇者君以上のね。」
ホワッツ？
「ちょっと待ってください!!」
「ん？どうかしたの？」
どうかしたのじゃないでしょ！
「なんでですか！魔王軍の作戦を悉くつぶしたのは一行の皆で!!」
「はいストップ、言いたいことは分かるよ。実力云々で君を注視しているんじゃないんだよ。君の底知れない影響力を僕らは警戒してるんだよ。
そうだね・・ここ最近だと・・そこの大ネズミ君。」
ティファに説明をしていたキルは突如としてチウに話しかけ、話をいきなり振られたチウとしてはもう天地がひっくり返るかと思った。
敵の大幹部が、こんな端のモンスターの自分に話しかけて来たのだから無理もないが、そこはチウの度胸が勝った。
「初めまして！僕にはチウと言う名前があります!!」
両足を踏ん張り、堂々と敵の最高幹部のキルバーンに対して名乗りを上げた。それもきちんと礼儀正しく挨拶から入り。
道々今回仕掛けてきたキルの狡猾さ非情なる死神にして折り紙付きの実力者だと言うのはきちんと聞かされていたが、それでもチウは精一杯の勇気を振り絞った。
尊敬するティファならばきっと・・
「成程、お嬢ちゃん・ティファの模倣をもう君はしているのか。」
「！・・どうして・・」
「なんで分かったのか不思議そうだねチウ君。君の勇気に敬意を払って僕もきちんと名乗らせてもらうね。
初めまして、僕は大魔王バーン様の側近で、軍にとっての邪魔ものと軍にとって必要のない不用品を始末する死神キルバーン。以後お見知りおきを。」

これまでティファ以外の敵に対して碌に礼を取らなかった死神が、一介の戦士見習のモンスターに対して右手を胸に当てて優雅にお辞儀までしてみせた。
この大ネズミ君もどこかお嬢ちゃんに似てとてもキラキラしていて美しい。
二人をお持ち帰りできないか、早速頭の中で算段し始めるくらいに気に入ってしまったのだから、このくらいの礼儀は初歩であろう。
それにもう一つ。
「君のおかげで説明の手間が大分省けたよチウ君。一つ聞くね、君はどうして僕に名乗りだけではなくに挨拶までしたのかな？」
「え？それは・・ティファさんが、敵のミストバーンって人にも挨拶していたから・・だから僕もそうしたいって・・」
誰に対しても礼儀を欠かさないティファの真似をしたのだと、全身を真っ赤にして両指をつんつんしながら俯きながらチウはぼそぼそと話す。
尊敬する当人の前でその人の真似をしてるなんて告白なんて死ぬほど恥ずかしい!!
言われたティファさんも真っ赤になっちゃったじゃないか!!
「ほらね、出会って間もない彼だってもう君の影響を受けちゃってるよ？」
「・・・礼儀正しいのは良い事でしょう。少しのきっかけを私が及ぼしたかもしれませんが、影響力と言える程とは・・」
「いや違うね。君は誰に対しても変えるきっかけを与えてしまえるのが怖いんだよ。」
「は？それこそ過大評価の極みと言えましょう。」
「違うね、僕の考えでは君はいるだけで話すだけで、もしかしたら君自身でなくとも関わった―者―か―物―が関わっただけでもどんどんと物事が変わっていくんだよ。」
キルは優しくティファ今回の篩の目的の話を。
「実はね、君があの竜騎衆三人とバラン君が五年前に出会ってしまったと思われる頃に、僕等はとっても大迷惑を被ってしまったんだよ。」

あの超竜軍団の側近で強いと言われる竜騎衆にお近づきになろうとした者が、三人が人間を憎んでいるのは有名な話なので人間・特に子供を幾人も多く殺したと自慢話をしたものを相手に、魔界の拠点の食堂で大乱闘をして、遂には参戦をしたその場にいた数百もの屈強な精鋭達を素手でぶちのめしてしまった竜騎衆達。喧嘩の仲裁をしてほしいとバランに泣きつきに行ったものは、何故か竜騎衆同様に不機嫌だったバランの手により半死半生にされてしまった。

似たような騒ぎはあちこちで頻繁に起き、どうも竜騎衆達は人間を多く殺した自慢話、特に子供の事を聞いた時点でぶちぎれ誰かれ構わずぶちのめしてしまい、とうとう話を聞き付け事態の対処を図った魔軍司令官の手によってバーンに反抗している者の中でも最大勢力の下に討伐に送り出された。

これで一年は帰ってこまい。その間にごたごたになった軍を立て直せると思ったが甘かった！

「なんと彼等ね、一年はなくともバーン様の予想でも半年は帰れないと予想された討伐をたったの半月で壊滅させてきちゃったんだよ。」

それも大軍勢の相手を、竜魔人化しなかったバランと竜騎衆のたったの四人でやったと言うから驚きである。

「・・その話って・・」

「そうだね、五年前で、地上での季節で言うところの夏に当たるのかな？」

・・・どうしよう。今の話と私が父さん達にさよならを言った時期ときちんとあっちゃってる！つまり私にさよならされて不機嫌になった父さんとテラン村の子供たちにそれなりに親近感湧いちゃってくれたあの三人が騒動起こして今私にとばっちり来てるの☒・・本気で勘弁してほしい。

大魔王の篩の篩⑥

水晶を手に持って五年前のあの夏の日を思い浮かべればいい
そうすれば水晶が勝手に私の記憶を脳から直接読み込んで、嘘偽りのないあの日の事を映像にして壁に映して全てが分かる
そしてみんなが見てしまった
あの五年前の幸福で残酷なあの日の事を

「それじゃあ危ないよ鳥兄さん。」
「そうだよ、怪我しちゃうよ。」
「うっせえぞガキンチョ共!!ハリネズミの針位俺に抜けねえ!いって!!!」
「ほら言ったでしょう鳥兄さん。長いのが抜きやすくて中位と短いのはまだ抜けずらくてやろうとしても滑って指先怪我しやすいって。」
「マーチ、確かいつも持ってる工具道具の中にピンセットあったろ。」
「これでしょう、ほらこうしてこうで・・抜けた!」
「ちっ・・・あと全部自分で抜くよ・・」
「ピンセットどうぞ。」
「・・・ふん・・こうすりゃいいんだろう。」
「そうそう、怪我しなくて済むよ。」
「ねえねえ、牙のおじさんはどうしてそんなに筋肉ついてるの?」
「俺も筋肉の付いたかっこいい大人になりたいんだよ!何か修行してるなら教えてくれよ。」
「う・・いや・・・日々鍛えている。それだけだ。」
「ふぇ〜、それだけでこんなになるもんなのか。」
「種族の違いかな。うちの父ちゃんも木こりで毎日木を切って持ち運んで、筋肉盛り盛りでもここまではねぇぞ。」
「おっちゃん、特別なことしてるんなら教えてくれよ〜。」
「いや・・そういわれても本当にないのだ少年達よ。」
「少年達だって。」
「俺達いつも悪ガキどもとしか呼ばれてねえからくすぐってぇな。」

「おじさんは強いだけじゃなくて学もあるんだね。文武両道だ！」
「なんだよアル、お前迄気取ってさ～。」
「あの・・・この花の冠どうぞ・・」
「よかったらうけとってください。」
「・・・・・もしかしなくとも俺にか・・」
「はい！・・・ここら辺は薬草多くてもお花が少ないので・・・」
「皆で探して作ったの！」
「ニーナちゃんは鳥のお兄さんに引っ付いてるけど作るのあの子が一番上手だから、ニーナちゃんに教わりながら作ったの。」
「お前達・・・・俺は・・俺は人間ではないぞ・・」
「え？」
「はい？」
「あの・・それはその・・・半魔さんですよね。」
「お話で聞いたことあるから知ってます。」
「魔族の姿に、顔に黒い文様がある種族がいるって。」
「私達は子供でもその位は知ってます。」
「知ってて・・なぜこの花冠を俺に・・」
「だって・・」
「ねぇ・・」
「「「お兄さんかっこいいから!!」」」

懐かしい・・・子供たちの誰もガルダンディ・ボラホーン・ラーハルトを恐れず、それどころか無邪気に笑ってルード君の歯磨きを作りながら三人にも温かく接していたあの時。
ガルダンディは文句を言いながらも最後まで男の子たちを拒絶する事無く
ボラホーンは強くなる鍛錬の仕方を教えて
ラーハルトは戸惑いながらも花の冠を受け取って途方に暮れて女の子たちにもごもごお礼らしき言葉を言って
そんな温かい素敵な思い出を・・・私が粉々に・・・
ティファは自分も過去の日々をまじまじと見て更なる後悔が胸を

襲う。
あの時、自分が運命を変えて三人を救い出す。誰も不幸にしないように自分ならばできると慢心をしていた。
今目の前で繰り広げられている竜騎衆達と子供たちの交流は大戦後も続けられるように自分こそが出来ると信じて、原作知識があるから、能力を知っているから、自分ならばと・・・結局自分が壊すことになったのに！
何と愚かで思い上がった考えを持っていた事か！誰も救えず、ほぼ原作通りにしか物事を進めておらず！ほんのわずかな者達しか救えていない自分の!!何と愚かで醜く・・・温かくて懐かしい日々だったんだ・・

ふと視界が暗くなる
視界が何かに遮られた。
「もういいよ、充分だお嬢ちゃん。」
涙を静かに流すティファを、キルの大きな右手で視界が遮り左手でティファが両手で持っている水晶を取り上げる。
ここまで見ればもう充分。あの竜騎衆三人が何故、子供を虐殺したと言う魔族達に切れて喧嘩したのかよく分かった。
今見たテランの子供たちが三人の脳裏に浮かぶ程、心の奥底まで根を張り息づいてしまったからに他ならない。
自分から見ても、あの子供達は素晴らしい。世の垢に染まらず、無邪気で賢くそしてみんな優しい子供ばかりだった。
この戦いで死なすには確かに惜しいが、柄にもなく来世での幸せを願ってしまう程に。
「もう・・・いいのですか？」
「うんいいよ。君はそれでも戦ったんだね。」
「っつ！」
「辛かったね、悲しいね、・・辛い事をさせてしまったね。」
それは何を指しているのか。
自分の過去を再びこじ開けた事か。魔王軍として敵対をさせた事

なのか。それとも今大戦を起こして自分を戦い続けけさせている事をだろうか？
どの事にしても、その道を選んだのは・・
「これは私の選んだ道なのですよキルバーン。」
「お嬢ちゃん・・」
キルの右手をそっとどかしながら、ティファは周りを見ながらキルに振り返る。
キルが自分のこんな近くに来ているのに、王や護衛達が騒がないどころか、仲間もあの兄すらが何の反応もしないのは何故なのか。
見て納得をした。
誰もが俯き涙を流し、途方に暮れている。
この場にいる全員がティファの過去と竜騎衆と父バランとの因縁を知っている者達ばかり。
昨日ティファに話させた事だけでも後悔したばかりの所に、あの映像の衝撃は計り知れない程の影響を与えて、ダイですら妹に近寄れない。
何故ならば自分が弱いがゆえに記憶を消され、その為に妹があの三人を直接手をかけねばならない羽目に陥らせてしまったのだから。
全ては自分が弱かったために！
それはダイ達のみならず、仲間全員縛り付けうごけなくした。
自分達の弱さが、ティファのあの美しい思い出を穢させてしまい壊させてしまった。
なのにティファはその辛さも悩みのひとかけらさえも自分達に見せる事無く、笑っている・・笑おうとしてくれている・・・自分達が弱いせいでティファは・・
ティファは力強い瞳をキルに向ける。
片膝をつき、自分と目線を合わせているキルの瞳を。
「分かってる。ここまでの事をさせたのだから・・」
「ええ、何故この記憶をあなた方は知りたかったのか教えていただきましょう。」

いつもの様に悲しみを押し殺し今起きている事態を解決させる道筋を見つけるために。
この篩の篩を終わらせるために。
これ以上自分の過去に触れられない為に
キルはティファの何かを感じ取り、余すことなく魔王軍に起きた大混乱の全てを語る事にした。
本当は混乱した内容を語るつもりはなかったが、ティファに辛い事をさせてしまっている詫びとして。

キルがポツポツと語った事はティファの予想の範囲を完全に超えていた。
あの竜騎衆達と戦いの時に話し込んでいた事で、自分が魔王軍の事を知っていて近づいた過去があるのではないか、それを探られているとばかり思っていたが、そんな事ではすむ話ではなかった。
曰くティファは魔王軍の尖兵となるべく魔界のモンスター達全てを使い物にならなくしてしまい下部組織を丸ごと潰し、それどころか魔王軍の高官達を数名失脚せしめて魔王軍を文字通り大混乱の渦に叩き込んでいた。
事の発端は竜騎衆達三人が子供たちの話に切れて、魔界の食堂で大乱闘を引き起こしたところから始まる。
「その中にね、尖兵モンスター達の中でも強い仔がいてね～。その喧嘩の発端から三人が圧勝するところまでを全部見ていたんだよ。」
魔界では強さこそが全て。その中でも強者の上位に入るあの三人が、人間の子供の死に途轍もない怒りを見せた事、そしてその怒りのまま百人近い魔族・魔者達を半死半生にされて行く様を見てそのモンスターに、本来ならば生涯思う事のない思考が生じてしまった。
人間、特に人間の子供は襲ってはいけないのだろうか？
なまじそのモンスターは周りよりも知能が高いドラゴン種であり、地上の事も人間の事も知識と知っていたのが災いしてしまったのか

もしれない。
強者三人が擁護するほどであれば、人間の子供は襲ってはいけないのだろうか。
その思考を後押しするように、同じ事で三人と周りは争い続けては勝ち続けていることが裏付けになってしまった。
そしてその思考は野火の様に全尖兵達に広がってしまい、遂には人間を襲う事は良い事なのかと口にしてしまった者が出た。
「その報告を受けたミストは慌てていたね。本来ならそのモンスター達は何かを疑問に思うことなく命令を遵守するように作り変えて生まれた仔達ばかりだからね。どこからそんなバグが入ってしまったのか探すのに苦労していたよ。」
一つの命令が全体に届きすぐさま行動する様に調教していたのがこの件では災いしたと言っても過言ではない。
リーダー格の竜種のモンスターの疑問は近くの者達から、次から次へと移ってしまったのだから。
「事態を重く見たバーン様がミスト自ら調べるように命じて、超竜軍団たちを隔離する為に反乱勢力討伐に送り出したんだよ。」
そして真相に辿りついたミストは、暗黒闘気の生命体として生を受けて―二度目―
の恐怖を味合った。
一度目は主バーンとの出会い。そして二度目が下部組織の尖兵隊全軍がたった一つの思考によって壊滅をさせられたことだ。
疑問を持ってしまったモンスター達は最早使い物にならない。
仮に戦闘力の高さで地上に出したとしても、人間を確実に襲うかどうか分からない軍なぞ役に立つものではないどころか害でしかない。
ハドラー大戦とは違い、地上を消す為にも素早い進攻こそが肝心であり、その為に命令が瞬時にいきわたり、従順なモンスター軍が必要であったというのにだ！
そもそもがあの竜騎衆達とバランは人間憎しで魔王軍に所属をしたはずであった。
その事は、あの三人組が騒動を起こした時バーン自らがバランに確

認を取っている。
人間に対する恨みが消えかけているのかと際どい言葉を使って
案の定バランは怒り狂った。自分達のこの憎しみを疑うのならば魔王軍なぞ出ても惜しくもないと激高をして。
流石にそれは不味いとバーンは言葉のみであったがすぐさま謝罪をして事なきを得たが、それにより三人への聞き取りをする事は出来なくなった。
そんな事をすれば今度こそバランは出ていくことは確実であったからだ。
調査は続き、下部組織全体を入れ替えるために途方もない数のモンスター達を捕獲し、魔界各地の王達からも貢がせ調教しなおすという労力の中、魔王軍の上層部からも人間は全て滅ぼさなくともよいのではないのかと、バーン達にとって看過できない思想が蔓延しようとしていた。
尖兵隊長格のモンスターが見てしまったように、上層部の一部も見てしまっていた。
下部組織丸ごとの入れ替え、上層部の首のすげ替え
どちら一つにしても天地がひっくり返るほどの大騒動であり、魔界の神をして戦慄せしめた事態である。
どこかの組織、主にヴェルザーの策謀か、あるいは天界がとうとうバーンンの勢力に手を伸ばしたのかと疑いあらゆる手を使い探らせたが痕跡一つ見つけられなかった。
「見つけられなくて当たり前だったんだね。」
キルは本心からしみじみという。
あの五年前の大騒動は誰の策謀などではない。
テランと今目の前にいる少女の無邪気な優しさが、竜騎衆達三人の心を変えてしまっただけなのだから。
「君のしたことではないかもしれない、けれども君がいなければ起きなかった騒動の、これが全てなんだよ。」
先のテラン戦において、あの大混乱がたった一人の少女の存在が引き起こしたことはミストをして三度目の戦慄をさせ、バランが去って

でもティファが軍に来なかったことを心底安堵させ、この篩の篩をさせる決意をバーンにさせたほどだが結果はティファの優しさだったのは幸運なのか、これ以上の悪影響を魔王軍に与えないように今直ぐに殺してしまうべきなのか。

死神キルは本気でため息をつきたくなってきた。

大魔王の篩の篩⑦

「結局あの時の大混乱に件の料理人は関わっていなかったと。」
キルの持って帰ってきた情報にバーンは静かにそう結び、隣で聞いていたミストは思いっきり納得がいかずに殺気丸出しとなり、今すぐにでもティファを八つ裂きにしに行く気満々となった。
それはそうだろう。
大騒動終息を本当に迎えられたのは騒動から五年の月日を擁した。
原因を探し出すのに、始めにとんでもない思考を持ってしまった原因のモンスターを探し出すのに半年かけ、原因が分かったところで下部組織は丸ごと使い物にならなくなってしまったために、用意していたモンスター達の代わりを広大な魔界からとはいえ集めるのに苦労をし、軍として使えるようにするための調教を施すのに実に五年と掛け、モンスター達を集める費用と調教師の費用に莫大な出費がかかり殺意が湧いた。
如何に主が巨万の富を有しているとはいえ、本来ならば出さなくてもよい出費を、それも高額すぎる無用な出費を強いた奴を八つ裂きにしてやると考えながら主とヒュンケルの食事の支度で包丁を使っていた時のミストは本気で怖かったなとは内緒であるキルだったりする。
考えている事が丸分かりで流石の親友の事であっても本気でドン引きしたもんだ。きっと本当に犯人を食材の様にバラバラにして、サイコロステーキ化しそうだなと思ったのも内緒である。
「して、料理人はこちらの話を聞いてもまだ篩の篩をする気であったか？」
「はい。あの子は変に義理堅いというか、例え敵が作ったルールでも、ルールを尊重する子ですからね。塔の敵攻略してテラン王を助けに行くと言っていましたよ。」
少し遡ったパプニカ王城内
「これが五年前のあの時の全てです。」

喋るだけ喋ったんだからとっととテラン王返せとティファは常にないぶっきらぼうな短めの言葉でキルに迫った。
無理もない話で、昨日今日と味わった精神負担を考えれば、穏やかな料理人モードが緩むのも仕方なく、疲れきっているところに敵に礼儀正しく全うするのが難しくなっても当たり前だ。
前世プラス今の年齢当てはめれば自分が一行の中で一番年上だとかティファは考えているがそれは単に実年齢だけの話で、中身が追いついていないのに自覚がなく、そろそろ精神的に容量を超えそうな限界水域なのに本人が全く気が付いていないせいで色々と重ねている無理がたたって精神不安が起き始めている不味い兆候である。
キルとしては本当にため息しか出ない。
こんなにボロボロになっているティファを休ませたいから昨日心を壊そうとしたのに邪魔が入った。本当にあの鍛冶屋は命令なしで抹殺してやりたいが、いまさら言っても詮無いことであり、せめて塔にいる愚者を倒させて憂さ晴らし位させてあげても罰は当たるまい。
「ここに書かれている鏡通信の間違いから説明するね。」
これを送り付けた愚者の筆跡が酷すぎてティファをしても解読できずに、城のお抱え魔導士たちにとっても願ったりかなったりなので早速筆記用具とテーブルをキルに用意した。
戦にとって情報は命綱であり、内容から相手の度量も知れることもあるので、ティファは是非一字一句隠すことなく教えてほしいという要望をキルに出したところあっさりと快諾された。
出しといてなんだが、味方の情報あっさりと売って大丈夫なのか心配になったのが顔に出たのか、キルに苦笑されたいいからいいからと書き出されて行った。
あんな馬鹿な奴は君が倒しちゃっていいからね、とかお墨付き迄つけられて。
「あのですね・・・その・・・篩の篩はもう終わっても良いのでは？」
キルが味方をあっさりと切り捨てたことにティファは小さなショックを受けて思わず言ってしまった。
原作とは本当に違いすぎるキルしか見ていないので、あっさりと味

方を売るならやる価値はなく、お互いに知りたかったことが知れたのだからもういいのではないのかと。
「この篩の篩を受けているのは君達だけじゃあないんだよ。」
キルはまたもや書き写しながら苦笑して今回の篩の対象も話し始める。
大戦もそろそろ終盤であり、予定通り黒の核晶（コア）も精製し終わり落とせるようになるまで秒読み段階に入った。
そんな時にバーンの膝下から反乱の一報が入るのはよろしくない・・とまでは言えないが、そのモンスター達が大戦最中の今も逆らう気なのかどうかテストも込みである事を。
隔離しているとはいえ、監視している兵たちの雑談で地上界と戦をしている事は知れ渡っているはずであり、よろしくない思考を持った者達が行動を起こさないとは誰にも言いきれないので実際に地上に出して人間達と直接戦わせるので、報告にある塔の周りを囲んでいるモンスター達こそが、先に潰された尖兵達の一部であり、リーダー格のモンスターこそが始まりのモンスターである。
「その仔達殺されなかったんですか！」
ティファは思わず声を張りあげてキルに詰め寄った。
魔界で異質の思考を持ってしまい、期せずして大魔王の意向に真正面から逆らうような事をしてしまったモンスター達が生きているとは思ってもみず、全て処断されてしまったとばかり思ったからだ。
「生きてるよ。あの仔達は別にバーン様に逆らうつもり無さそうだもん。バーン様は広大な領地を持ってるから、高い塀に監視付きだけどあの当時の尖兵の仔達全員生きているんだよ。」
丁度鏡通信の写しを終えたキルは、羽ペンを置いて空いた手でティファの頭を撫でて優しく笑って教えてくれる。
ティファは強いが命を奪うのに罪悪を感じているのを見て知っている。間接的であれ自分が苦境に陥れてしまったモンスター達の事で胸が潰れる思いをしているかもしれないとあたりはついていた。
たとえそれが全く見た事もない、しかも敵でありティファ達と戦っていたかもしれない者であっても甘いティファは悲しむ。

「あの・・鏡にはなんと書かれていたのですか？」
流石にティファも周りの空気を読んでキルの手を躱して本題をせっつく。
そろそろ仲間たちと兄も先程の件から立ち直り始めているのでキルを追い出さないとまずそうだ。
キルとしては今すぐティファを攫って行きたいところだが、ミストほどでないにしろバーンからの命は絶対であり、篩は続行しなければならないのでティファに写した紙を手渡す。
渡されたティファは読み進めていくうちに超微妙な表情になり、遂には溜め息をつく。
「料理人殿、何が書かれていたのですかな？」
「それ程すさまじい内容ですかの？」
「儂らにも見せてくだされよ。」
読んでも中身を一向に読み上げないティファの周りに魔導士おじいちゃん三人組がわらわらと寄ってくる。
年を食ったせいで怖いものはもうほとんどなく、奇妙な敵の大幹部キルバーンがいてもものともせずにだ。
「ほほう、流暢で綺麗な字ですじゃな。冥土に行く前にこれほどの美しい字に出会えるとは。」
見る所そこなの⁉
魔導士長男・インスの一言に、キルと大広間の心の声は完全一致した。
敵からのメッセージ内容ではなく筆跡の良しあしから入るのはどうなのだろう？
「確かに見事な字じゃのう～。」
「お若い方、折角の綺麗な筆跡をお持ちなのに戦いなぞするのは勿体ないぞ？どうかの～、儂等と一緒に魔導書の翻訳の仕事せんかの？」
「はい⁉」
「それは名案じゃの、フォスの言う通り書き物の仕事に就かなかな？魔族であれば辞書いらずで、給金もうんともらえるぞ。」
「ワイズ兄さんもええこと言うの。儂等も年で後継者に恵まれずに

困っているのじゃがどうじゃろう？」
いやどうじゃろうって駄目に決まっているでしょうお爺ちゃん達!!
くいくい
大声で断ろうとしたキルの袖を引く者がいたので見てみれば
「・・・そうしませんかキルバーン？」
なんかお嬢ちゃん迄おかしなこと言っちゃってる!!
「駄目だよティファ！そいつは倒すの決定してるんだからね!!」
「ティファさん！正気に戻って!!」
「インス！ワイズ！フォスもとんでもないこと言ってないでさっさと内容読み上げてお引き取りしてもらいなさい!!」
あまりの阿呆ごとに落ち込んでいた周りはすっかり復活をしてキルをさっさと返す様にお叱りの声が四方八方から飛びだす。
魔導士お爺ちゃん達は魔道研究に半生を捧げ、共に仕事が出来るのであれば種族問わずの学者気質であり魔道狂いと呼ばれて周りからは変わり者バダック以上に敬遠されがちであり、後継者が見つからないのを嘆いていた。そこにキルという字は綺麗で翻訳うってつけの魔族であり性格もよさげな後継ぎ候補が見つけられていいアイデアだと思い、ティファとしても敵が減ってしかも性格よさそうなキルが来てくれないか少しだけ期待したので四人としては本気でがっかりとする。
周りとキルは何を考えているんだこの四人はと本気で呆れて室内には溜め息の声で満ち溢れた。
「もう僕が読み上げるね。」
折角写しておいてなんだが話進まなさそうなのでキルはサクサクと読むことにした。本当はあんな愚者の書いた文なぞ読んだだけで口が腐りそうだがしょうがない。
考えてみればこんな文章を読ませてしまったらティファが可哀そうだ。
―人間どもに告げる
吾輩は偉大なる大魔王バーン様よりこの篩の全指揮権を賜りしキ

ングマキシマムである。
お前達とは塔にて戦う事を命じられたが、貴様達が吾輩の強さに怖れを無し来ない可能性を考えた。
よって貴様達が逃げ出さないように貴様達の仲間を一人預かる。
どこにいようとも吾輩の―全能の目―から逃げる事は叶わぬと知り、速やかに塔に来て吾輩の剣の錆となるがよい。

大魔王バーン様の親衛隊隊長キングマキシマム―

・・・・・何が悲しくってこんな愚かしい文章読み上げなければならないんだろう。しかも
「あの・・キルバーン、こんなお粗末な事しか書けない同僚がいる所とは手を切った方が・・」
「そうですぞ！字はその者を表すといいますぞ。こんなに素敵な字を書く貴殿のお仲間にはふさわしくないですぞ。」
「矢張り儂等と共に働きましょうぞ！戦いなぞよりも遣り甲斐のある良き仕事ですぞ。」
「なんでしたら今すぐに儂等の地位をお譲りしますので安心して来られよ。」
本気でお嬢ちゃんとお爺ちゃん達に慰められて勧誘されてるのが辛い！

大魔王の篩の篩⑧

あのアホか、バカ殿様キングか。どうりでキルが塔にいる奴を毛嫌いしているのかがよく分かった。

あいつ大魔王バーンの唯一の失敗作だって常々私も思ってたもん。

弱くて頭の中身おがくずのくせに、ミストやキルに妙な敵対意識持ってた勘違い野郎なのは、どうやらここでも同じみたい。

とは言えここまでバカ殿様キングだとは思わなかった。

キルが言ってた不備の説明受けたらあってもいないのに私だって馬鹿だこいつと思ったもん。

「私が篩の対象なのに私の名前がないってなんですかそれ？」

お粗末な鏡通信のメッセージにはまだ続きがあって、キルがうんざりとした口調でこのメッセージにある不備を教えてくれた。

メッセージの後に、塔に行かなければならないものを指定するのは分かる。

勇者ダイ一行で、なんと占い師のメルルさんどころか武闘家見習チウ君もバッチし入ってた。小さなものも見逃しませんの大魔王の用心深さが窺える指示であるはずなんだけど肝心の所がないとかってわけが分かんない。

「あの馬鹿よりにもよって君の名前だけ抜かしてね。本来ならメッセージの後の塔に来るメンバーの頭に君の名を書くようにバーン様から指示されたはずなんだよ。」

なのにそれを無視したんだから愚か者の極みである。

曰く、料理人なる職業など有史以来勇者一行どころか一般職業にもなく、バーン様のユーモアあふれた冗談であり、勇者に付いて来ているおまけの勇者の妹か何かだろうとか勝手に解釈しちゃって抜かしたと、本人から聞いたそうな。

・・・・上司の命令自己判断で削るとかって普通ない。

「キルバーン、こんなバカな奴いる所辞めてこっちに就職しませんか？幸い職探しはせずに済みますし、インスさん、ワイズさん、フォスさん本気であなたと働きたそうですよ。」

私の言葉にお爺ちゃん達は目をキラキラ輝かせてキルをじりじりと包囲しながらお願いポーズしながら迫ってる。夢見る乙女よりも可愛いと思って絆されてきてくんないかな？

ポン

「そっちには行かないけど、塔にいる馬鹿倒してくれたら僕の自筆の感謝状届けて上げようか？」

三人の可愛いお爺ちゃん達に絆され掛けたけど僕はミストたちの側を離れる気は全くないので残念ながらお断りだ。その代わり贈り物くらいしても良いはずだ。

「魔族文字ですか！」

「おお！それは何と素晴らしい!!」

「それは是非に！できれば魔族文字とその下に翻訳された人文字があれば!!」

「ティファ殿！儂等が額縁と保管ケースを作るので是非お貰いなされよ。」

「はい！欲しいのでお願いしますキルバーン!!是非翻訳付きで！」

もうティファ達としては百万ゴールド貰う以上の大興奮だ。

なんとなれば魔族と人間は長い間敵対関係しかなく、偶に地上にいるはぐれ魔族で人と交流している変わり者がいても魔族文字が書ける者は本当に稀である。

ロン・ベルクあたりが書けるかどうか分からないので、聞くのも失礼なのでティファ達のような変わり種からすれば、金貨宝石等に価値を見出せず生の魔族文字こそが宝中のお宝である。

「さっさと塔にいる敵叩き切ってテラン王お救いするのでルール教えてください。」

ルールを教えてティファとお爺ちゃん達と別れの挨拶をしたキルはすぐさまバーンの下に報告に向かったのだ。

今から感謝状の内容検討しないと。麗しく、けれども気障にならない文章考えるのは難しいな。

今回の敵の目掻い潜るのは難しいな。あいつの目って確かステータス・ＨＰやＭＰを調べるキングスキャンと、体内ダメージ調べられ

るレントゲンみたいなスーパースキャンがあるんだよね。
別に骨くらい見られてもいいけどＨＰ見られるのは勘弁願いたい。
神様達から教わった、この世界の勇者のレベルカンスト時のＨＰは７５０で、ダイ兄は竜の騎士の血も色濃く受け継いでいる特典で１，０００台はいけるらしい。竜魔人化すればもっとだとかその倍だそうな。
今は中盤よりは上なので見積もって６００くらいはあると思う・・・
ちなみに一度だけ大量の神力使って大魔王が地上に出てきた瞬間にステータス測って絶望して私呼んだらしい。この世界のラスボス様大魔王バーンは老紳士の時はＨＰ７，０００でＭＰ測れなかったんっだってさ！ほんと嫌になる！
如何話それたが、今はそこじゃない。ラスボスが勇者よりもステータス高いから、こっちは知恵と勇気と友情で団結して皆で力合わせて戦えばいいんだから。
何が言いたいかというと現時点の私のＨＰは８００ほどある。どう考えておかしいだろうと目立ちすぎることこの上ない。しかもキングスキャンの能力に相手の使える能力まで検出できる機能付きだった場合、私の式とハイエントが暴かれたら非常に不味い！だってこの能力ダイ兄にも言ってない。能力隠してる味方なんて疑う対象以外の何物でもない。説明する時期は考えてるけどそれは今じゃない。
「遠距離攻撃で全能の目とやらを潰してから一気に畳みかけましょう。」
メッセージから相手の能力はもしかしたらでごまかし説明したら、あっさりと全員信じてくれたので作戦迄提案してみた。こういうことは日頃の行動が物言ってくれてるのをひしひしと感じられて嬉しい、頑張ってる甲斐があるな。
「具体的にはどうすんだ？」
ティファの日頃の見識の高さから説明と作戦には納得したが、具体的な案はどうすんだとポップは尋ねる。他の仲間にダイを取り押さえさせながら。

キルに目をキラキラさせて近づいて、感謝状貰う約束取り付けた妹は今からでもデルムリン島に連れ帰って、お仕置きして自分の帰りを待っているように言い含めて閉じ込めておきたい！情念をどろどろに纏わせたダイのやばさにさしもの親友ポップも妹の危機を感じて取り押さえの号令を一行に発して押さえつけさせている。
「落ち着いてダイ！大丈夫、あのキルバーンは私達も倒す対象だから。」
「そうだぞダイ！ティファは知識欲で多少暴走しただけだ。」
「女の子には優しくですよ！」
ダイ達がドタバタしている間にティファとポップが中心になって作戦はサクサクと進められ、決まった頃にティファはダイの下に自らおもむき、ダイの顔をむにゅっとつまんで一言申し上げて終わらせた。
「私はダイ兄達が一番だよ。」
にっこりと何の迷いもなく。
その言葉にダイは本当かどうかなどと愚かな事は聞かずに大人しくなってマァム達の拘束を解いてもらい、すぐさまティファを抱きしめる。
「俺にとってもティファ達が一番だよ。感謝状貰ったらあいつ直ぐに倒そうね。」
・・・・どうやら勇者様の地雷は妹君だと周りは勉強した。

作戦決まったのでサクサクと一行と５０名程の騎士・兵士を連れて塔の目の前まで来た。
途中に待ち構えていた元尖兵のモンスター達にはなるたけ手を出したくないので戦闘起こるかどうかのギリギリの距離まで近づいて、獣王クロコダインと神獣ガルーダに闘気練りこんだ威圧のある雄叫び上げてもらい、弱い仔は気絶して強くても実戦出たことない仔達には耐性がないのか弱ってくれたのでダイ兄、ヒュンケルも武器抜かずに当身で気絶させて終われてホッとする。無駄な血が流れないのに越したことはないもん。

作戦はこうだ。
とにかく塔の周りのモンスター達を気絶させて、付いて来てくれた人達に手足と翼拘束してもらって塔以外の戦力を全て削ぐ。
これは直ぐに終われて後残るは塔の中の戦力とマキシマムだけだ。
テラン王様の居場所もメルルさんのおかげで分かってる。
キルが帰った後すぐさま水晶を取り出して見つけてくれた。塔の中で眠ってる。日が差した部屋なので分かりやすく、ダイ兄達が下の階で暴れて敵の目を引いて、その間にポップ兄がトベルーラで窓を覗き込んで探し出しす。
私の役目は王様助け出す時だ。爆裂呪文で塔を攻撃した場合、マホカンタ系の守りが付けられていたらポップ兄死んじゃう。
魔法が駄目なら雪白で壁を切断するのが一番効率的だ。大砲が魔界の材質に効かないのは一昨日の鬼岩城戦で嫌というほど知れたのでその案も早々に通ってる。
人質救出した後はダイ兄が紋章全開の大地斬をしてくれるのがベストなんだけど、それはポップ兄や魔導士さんたちに大反対にあった。
魔界から出現したばかりでまだ空間が不安定かもしれないところに大技ぶち込んだら下手したら大陸の3分の1が消し飛ぶエネルギー暴走が発生する恐れがあるそうな。
遠距離一撃攻撃はその恐れのせいであえなく断念。目を使われる前に視界に入らず倒したかったのだがパプニカ消滅の恐れがあるのなら仕方がない。
本当にいい手が・・そうだ！あの手があった!!・・・ふっふっふ、待ってなさいよキングマキシマム！貴方の無駄に長かった数百年の歴史は今日で終わりだ!!

大魔王の篩の篩？

「ひっぎゃあああ!!目が目が!!!」

篩の塔での最高指揮官キングマキシマムは目を両手で押さえて敵であるダイ達の前でもあるにも関わらずに無様にも転がりながら悶え苦しんでいる。

自分達は何が入った目つぶしを投げさせられたのだろう？

塔の中は一階の入り口部分から人の形をした見るからに金属の敵が襲ってきた。

「ポーンヒムの劣化版ですか・・ダイ兄達に話したポーンヒムの事覚えてますか？あれに比べればさしたる強さ感じないのでダイ兄、剣反応してないでしょ？

無理に抜こうとしなくていいから、パプニカのナイフに壊さない量の闘気乗せて斬ってみて。面白いくらいスパスパ切れるよ。」

数の脅威に怯むどころかティファは慌てずににっこり笑って指示を出す。ダイも敵の材質がまさかオリハルコン製だとは思っていない、精々鋼位だと見積もったので可愛い妹の言う通りにして見れば本当に面白いように斬れていく。

最初は大地斬を使っていたが、さしたる技はいらないだろうと塔の天辺にいるであろうキングマキシマム専用に体力を温存しつつ斬っていくが問題なく撫で切り状態。

ヒュンケルも槍を閃かせ、敵の主に足の部分の切断して立ち上がれないようにしてサクサクと進める道を作っていく。

流石に素手のマァムには痛かろうとティファは違うアドバイスし

た。
「ダイ兄かヒュンケルの目の前に行くように投げ飛ばしてしまえばいいんですよ。」
投げるマァムに斬っていくダイとヒュンケル、クロコダインも伝説の武器と謳われる真空の斧の力をいかんなく発揮し、オリハルコン印の兵士達の手足をもぐように切り伏せていく。
うん！なんだか皆が魔改造化されちゃってる気がする、原作の皆ここまで強くないよ！
その光景を隅っこで見せられてるティファは表面笑って内心ガタガタ震えが止まらない。だってハドラーの篩であれだけヒム達に翻弄されてた勇者一行の話は、ここにいる全員には当てはまるまい。
変に気負わないようにオリハルコン製を内緒にしているが、だからと言って知らないから斬れましたと言えるほどオリハルコン製って弱くないはずだよね！
なに、私の考えが間違ってるの？知らなければ本当にあんなにスパスパ切れるもんなのオリハルコンって！誰か教えてよ!!
死の大地でのティファの所業を知っているものが、今のティファの内心を知ったらこう突っ込むこと間違いない。
手刀でオリハルコン製のヒムの胸に風穴を易々と開けたお前が言うな
そんなやらかしティファがドン引く程ダイ達の動きはすさまじく鬼気迫るものがある。
自分達がティファ以上になれば、ティファが標的の一番になる事はない。ここで敵の目は全て自分達に向かせる！向かないのであれば首をもいででも振り向かせていやでも注目をさせる。その為にもここにいるすべての敵は自分達のみで片を付けるべく、ティファには戦闘禁止のお達しが下された。
別に塔にいれば戦わなければいけないという禁則事項はなかろうと一行の名軍師・鬼参謀のポップが発案をしてティファ以外の全員、それこそレオナ達を含む味方一同の満場一致で決議された。
ティファは大人しく見ているように、することはただ一つテラン王

救出のみである
聞いたティファは嫌だといった。自分一人が楽しているのは違うだろうと。
「ならお前はチウにも命かけて戦えっていうんだな。」
そんなティファに、ポップは事実を突きつける。
戦えるもの全員が塔で戦うのであればチウにも参戦させる事態が発生する。
今回は鬼岩城戦のような広い場所に逃げられる場はなく、ダイ達にもチウを守り切れるという保証はない。それでもいいというのなら出ても良いと、ポップはあえて悪役を買って出て厳しい口調でティファに選ばせた。
己の信念貫いて仲間を危険に晒すか、チウも出なくていいように静観しているかのどちらかを。
案の定ティファが下唇を噛んで俯いてしまった。
言い返せない、自分の信条でチウを危機に晒すわけにはいかない。
見ているのを選んだ。チウの命を危機に晒せないと。
納得しないが折れたティファにホッとするが、我ながら嫌な手を使ったもんだとポップは苦いものが胸中を満たして嫌になった。
戦支度の合間、ポップはチウに出しに使った事をきちんと謝った。
決してチウを低く見ているのではないこともきちんと伝えて。
「分かってるよポップ。ああでも言わないとティファさん戦うこと辞めなかったのは僕にも分かるさ。気にしないで。」
こいつの器ってマジでけえな。
謝ったらあっさりと笑って許してくれるチウの器の大きさにポップは心底感嘆する。自分ならば分かっていても面白くなく、少しは不貞腐れるのが目に浮かぶ。
こいつを見習いてえな。
そんなこんなで篩に指名されてしまったメルルもチウと共に塔の外でアキーム達に護衛をされている。
早く戦いが終わり全員、それこそフォルケン王も入れた味方全員が無事に帰れるように竜の神に祈りを捧げながら。その横でチウも心

配そうに等を見上げるて祈る。早く終わればいいのに。
塔の中の三階辺りで進撃は止まり、ダイ達の斬る速度が落ち始めた。

「ふふん！やはり勇者共とはいえ吾輩の無敵のオリハルコン軍団には敵うまい！バーン様もあの者達を過剰評価されすぎたのだ。」
その様子は塔の最上部にいるキングマキシマムが見ていた。
悪魔の目玉を要所要所に張りつけ随時映像を送らせており、最初のダイ達の快進撃に戦慄したが、次第に勢いが無くなりはじめてからまた粋り始めた。
「矢張り大方参謀を気取るミストバーン辺りが大袈裟に騒いだか。あのような大魔王様の右腕を自称するものなぞ使えぬわ。バーン様！吾輩の雄姿をとくとご覧あれ。」

「・・・・・あいつ斬ってきていいですかバーン様。」
雄姿をご覧あれ、あの塔と死の大地奥深くの大魔王の玉座も悪魔の目玉映像で繋がっている。音声はもっぱら向こうから入るようにしてバーン達側から送れない仕様になっているが。
例えば今のようなキルの発言がマキシマムの耳に届いて厄介なことにならないように。
とは言え向こうからの言葉が聞こえるのには変わりはなく、キルとしては親友虚仮にする愚物なぞ抹殺対象でしかない。
「やめろキル。」
それを止めたのはなんとバーンではなく悪し様に言われたミスト本人だった。だんまりを時に十数年するミストがはっきりとだ。
一体何事かとキルは驚いたが次の言葉に心を打たれた。
「バーン様やお前が私の事を評価して下されている。私にはそれで十分だ。」
愚物の言葉に小動もしない信念の元、バーンと自分の評価だけで良いと知ってキルは心の赴くままに親友を抱きしめる。
早くそいつ始末しちゃってよお嬢ちゃん

内心でとんでもない願いをしながら。
キルの願いは早々に叶えられた。マキシマムが粋がっているそのころ、ポップが塔の五階の窓辺から眠っているフォルケン王を発見し、急いで一階の中で待っていたティファに知らせに行き、知らせを受けたティファは雪白を右腰に佩き空飛ぶ靴で急いで向かった。
キルの施した守りがいつ切れて人形達がとち狂って攻めてくるか分かったものではない。
ジャキン
何の気合の声も、構えもなくティファは抜刀一閃で塔の壁に人が二人悠々通れる四角い入り口を開けてみせる。
塔の材質は魔界産で材質は不明だが、仮にも大魔王が作戦で使っている物が安普請なはずが無い。つまるところ斬ったティファが凄まじいのだと横で見ていたポップはあらためて思い知らされる。
「王様と一緒に下で待ってる。」
刀を納めては、早く行こうと兄をせっつく。
ティファは今回の敵にはさして興味はない、精々兄達のステータスが暴かれないようにすればいいと思っている。
ポップとティファの二人がかりでフォルケン王の寝ている寝台ごと外に運び出し、そっと地面に置く。ルーラでこのままパプニカ城に連れて帰る案も出たが、それでは病弱な上にこの件で弱ったフォルケン王の体の負担が大きすぎると心配の声が多く、マキシマム討伐後に大きめの馬車に横たわって連れ帰ることになった。
「ここ私がいるから大丈夫だよポップ兄。それよりこれダイ兄達に渡して。」
敵の大将はおそらく塔の天辺にいるはず。上の階に入ったら人影見かけたら誰かは確認しなくていいのでこれを投げつけてほしい。
「ティファ、これなんだ？」
「煙幕みたいなものかな。全能の目っていうのを使われても、煙ってたら見えないでしょう。狡いかもしれないけれど変な能力でみんなの力量測られる前に倒してほしいの。」
「分かった、俺だって自分の今の強さ敵に知られたくねえもんな。ダ

イ達にも徹底させるよ。」
今回は本当にきれいごとを言ってはいられない！直ぐに倒す・・・
はずだったのに
塔は八階まであり、七階を突破したダイ達は階段を上って少し奥まった所にある扉を発見し、全員気配を消して扉に忍び寄ってみれば中からハドラー以上の品のないだみ声が聞こえた。
あ奴らなぞ吾輩の手でズタボロにして地獄に送ってくれるわ！
一人称が吾輩、どうやら中にいるのがマキシマム当人で間違いあるまい。
マキシマムは焦っていた。
フォルケン王が敵の手で救出をされ、知らせを受けた一行は魔法使いも連なり怒涛の勢いで塔を攻略し始めあっという間に制圧をされた。
こんなのは悪夢だ、なに自分が真の実力を発揮すれば小僧共なぞ一捻りよと己を鼓舞しなければならない程に。
その鼓舞の為の一人称が致命的なミスであり敗因となるとも知らずに。
ダイは扉をそっと開け、ティファに渡された煙だまの様な物をマキシマムの頭部目掛けて投げつけ、マァムとヒュンケルも同じく投げた。
その気配に気が付かない程塔で起きたことに動揺していたマキシマムは当たるまで気が付かず、当たって中の―モノ―が空気中に散布された瞬間にこの世のものとは思えない絶叫がマキシマムの口から飛び出し地面に倒れ伏しのたうち転げまわり始めた。
一体自分達は何を投げてしまったのか
マァムは敵とは言えここまでの非道をするつもりはなくマキシマムの苦しみに顔を青褪めさせ、魔界でもそれなりの死線を潜り抜けてきたヒュンケルすらも顔色を変えさせたが、ダイとポップ、それとクロコダインはこの惨状にとても覚えがあった。
それは
父さんに投げた以上の特製目つぶしだ。苦しんでしまえ。

前回はハバネロ級だが、今回はドラゴンチリブレス級と、それ以上の物をブレンドした。
自分が知る限りの地球最強の激辛物ヌーク草に匹敵するものを、この前オーザム行ったときに見つけたからとっておいたもんね。
流石に父さんにあれ使うのは止めにしたけど、あいつにならいくら使っても惜しくはない。

大魔王の篩の篩⑩

塔の天辺は大絶叫、塔の真下は鼻歌が。
大絶叫はキングマキシマムが悶え苦しみ、鼻歌はティファが機嫌よく歌っている。
曲の中身は『星に願いを』
良いことがあった時、反対にささくれだった時に歌ういつもの癖。
今回は両方かもしれない。
最悪で心底嫌いなマキシマムが原作よりも早めに滅せそうな事に喜びを感じるが、テランのフォルケン王をここまで非道な目に合わせたことに対する苛立ちが心をささくれ立たせる。
さっさと滅べ
常にない苛立ちが、普段では思い浮かばないどす黒い欲求がティファの胸の中を荒らしまわる。
「・・ティファさん、大丈夫ですか?」
塔を包囲している騎士たちの少し離れたところにティファ達はフォルケン王のベットを置いてそこで待機している。早く敵が倒されてほしいとメルルとチウが祈っている中、突如鼻歌が聞こえて振り向いた。
この殺伐とした戦場で一体誰がと見てみれば、ベットの足元の木枠に浅く腰を掛けて冷たい瞳で塔の頂上を見上げている。
その目にはいつもの温かさは何処にもなく、ティファには少々不釣り合いな大きさの眼鏡越しでも分かるほどの怒りを浮かべて。
そんなティファが心配になり、チウは側により心配そうにティファに声を掛ける。
「ん?・大丈夫だよチウ君。あいつはきっとダイ兄達が倒すよ。」
いけない、私心配かける状態なのかな?・よく見たらアキームさん達やついてきた三賢者さん達も心配そうにしてるし・・私よっぽど疲れた顔してるのかね。
疲れではない、無意識に怒りを表している事が、チウ達にとっては心配なのだとティファは全く気が付いていない。精々心配かけない

ように休みを取るかくらいの軽い気持ちで―いつもの様に―笑って周りを安心させようとした矢先、塔から何かが破壊された音と同時に瓦礫の雨が取り囲んでいた兵達と、鎖で拘束されていたモンスター達に降り注ぎ、間髪を入れずに空からマキシマムが降ってきた。
吾輩がこれほど非道な目に合っている最中誰が歌なぞ！
禁呪生命体として生を受けて以来、こんな苦痛を味合わされたのは生れて初めてだ！
そんな中、微かに耳についた歌は癇に障った。今目の前にいる勇者達よりも先にずたずたに切り裂いてやりたいほどに！
激高により一時の激痛を忘れたマキシマムは、それでも視力は回復しなかった。粉一粒で人体に甚大な悪影響を及ぼすティファが作った目つぶしは、この世のものとは思えない程のやばさにより本来ならば目を潰されない限り視力が奪われることのない禁呪生命体にバグを起こさせるほどの凄まじい破壊力があり、マキシマムは粉を取り除かなければ視力回復の望みはない。
だがそんなことは知った事ではない、歌が聞こえる音を頼りにマキシマムは恥も外聞もなくただ転げまわり始めた。
だが、ただの物体ではない、オリハルコン製の巨体は転げまわるだけでも破壊力はあり、その変則的な動きが功を奏したのかダイ達が対処する前に壁を破壊しマキシマムは外に飛び出した。
衝撃で地面に激突したことが分かり、隣になにか気配がする。
自分が受けたのは―目つぶし―の類らしい。ならば目にある物体を除去すればいい。
マキシマムはすぐさま―それ―を実行した。
グシャリ
「ふ～、ようやく吾輩の目が元通りだ。塔の外ではあるが、問題はなかろう。」
にやにやとしながら目についた―血―を手に持っていた骸の毛皮でふき取り、終われば無造作に投げ捨てた。
マキシマムは粉をとるために、捕虜となり身動きが取れなかった魔界のモンスターの一体を気配を手繰り無造作に掴み上げて引き千切

り、裂かれた体から流れ出る血で目潰しを洗い流したのだ。

・・・・あいついまなにした？

その光景はティファは見ていても理解が追いつかず、ポカンとする。

捕らえられ捕虜になっても味方は味方、仲間をたかが目の粉を取る為だけに殺して平然としているマキシマムは、ティファにとっては理解を超えた存在と化した。

「ふん！大魔王様の慈悲で生かされていた奴共が、捕虜となってもまだ生き恥を晒すか嘆かわしい。」

更には自身の醜態を棚に上げてマキシマムは侮蔑の言葉を、仲間とまではいわずとも同じ魔王軍の者達に投げつける。

マキシマムは大魔王にこそ忠誠を誓うが周りの者達とは軋轢しか産んでこなかった最低な男であり、弱い者と目を付ければ徹底的に見下しいたぶりに喜びを感じる。

その様は敵であるはずのアキーム達の心に怒りを灯させた。

「貴様！仲間を殺してその物言いはなんだ！武人としての心を持ち合わせていないのか!!」

「勇者様達の剣が勿体ない！我らの力で倒れるがいい!!」

アキーム達を始め、アポロ達にとってもマキシマムは嫌悪し倒すべき敵となり力を溜め始める。この敵は見逃してはいけない忌むべきものだと。

ダイ達も急ぎ塔から降り臨戦態勢に入る。こいつは生かしておけない。

「ふん！こ奴らなぞ仲間でも何でもない、ただの使い捨ての駒共ではないか。

そんな事よりも貴様等こそたった一人の吾輩に数頼みとは恥を知れ。厚顔無恥な輩が貴様等なぞバーン様が相手にする価値もないわ。」

この状況を分かっていないはずはないのにマキシマムはふてぶて

しい態度を取り続けダイ達に雑言を吐き続ける。自分はバーン様のお気に入りであり、いざとなれば気取った始末屋キルバーンに浮かんで逃がしてくれるだろうと、愚かで醜い算段をして。本当はバーン自身からも見限られている事も知らずに。

「人質取った手前が偉そうな事抜かすな！」

塔の上からでもマキシマムの行った非道はダイ達にもしっかりと見えた、見えてしまっていた。今までの行いとこの非道な振る舞いにポップの怒りは限界を迎えマキシマムに怒鳴りつけるが効果はなかった。

「偉大なる吾輩に恐れをなして逃げられたら困るであろう。」

自分の行いを正当化させているこいつの神経は一体どうなっているのか理解できず呆気にとられたダイ達に、マキシマムはさらに調子に乗った。

ただ呆れられて攻撃をされないだけの状態を、自分の強さに攻めあぐねている勘違いをして増長し言いたい放題をする。

「自分の相手にもふさわしくない、どこぞの馬の骨の三流魔王こそが貴様らの相手にふさわしわ！」

その言葉はマキシマムに死を呼び寄せた。

ガッシャン！

マキシマムが突如吹き飛び、塔に激突をした。

「もういい、お前はさっさと滅べ。」

吹き飛ばした人物は赤い刃を左肩に担ぎ、塔に激突をして蹲ったマキシマムの頭を踏みつける。

こいつの―核―は人間の脳の位置と同じだ。ここを貫けばこいつは―死ぬ―簡単な事だ。

マキシマムを吹き飛ばしたのはアキーム達でもましてダイ達でもない。眼鏡をはずし怒りに身を震わさるティファの仕業であった。

数々のマキシマムの非道さに、そして敵であっても敬愛するあの魔王をこいつは死にも値する侮辱をしたのだ。マキシマムが死ねば、大魔王の篩なぞという馬鹿げたことは終わりだ。

冷たい思考で算段をつけたティファはなんの躊躇いもなく雪白を

逆手に持ち、マキシマムの頭部を踏みつけたまま一気に刀を振り下ろした。

ハドラーの篩早く始まってほしい

冷静に振り返ってみれば、勇者一行の者が激情で敵倒したらいかんだろう、とは一体この人の前で何度反省すればいいんだろ・・・

「聞いておるのかティファ！」
「もう勘弁してください!!もうしませんから！」
「その言葉信用できるか！ヒムから報告は上がっておるぞ!!ザボエラの時と同じことをしおって！」
「今度こそ反省しましたから！もう本当にしませんから勘弁を!!」
グスグスヒグヒグ私が泣いても容赦してくれないよこの御人！ブラスじいちゃんにだってここまで叱られた事ないのに、人生で一番叱られる相手がこの人って・・少し時間遡ってマキシマムにとどめ刺そうとした自分止めたい！

結論から言えばティファはマキシマムにとどめをさせなかった。
ダイ達が止めに入ったわけでも、ティファの慈悲の心が働いたとかは全くない。
上空からいきなりベギラゴンが降ってきて、間一髪のところをティファは後方に飛び避けたが、内心では冷や汗が滝の如くに流れる。
いっや！この攻撃ってどう考えてもあの人じゃないの!!
不味い不味い！こんな乱れた心で敵倒そうとしたなんて無様な所をあの人に見られるなんて人生の中で一番・・ではないが最悪な部類だ!!
相手の視認を心が拒否して上を向きたくないけど、もうこの場にいる味方全員が視認してしまっているので自分が拒否したところで意味は全くない。
突然の攻撃にダイ達が上空を見上げてみればそこにいたのは
「なんで・・ハドラーが・・・」
それはダイかポップか、誰が発したかは分からない言葉だが、勇者

の味方全員の心中の呻きを代弁している。
マキシマムが片付くと思った矢先、まさか魔軍司令官が出てくるとは誰も予想はしておらず、それはティファも同じだった。
いや、この場合は出てくるタイミングを読み間違えたというべきである。
マキシマムが倒されれば、それ以上争う益が大魔王サイドにも勇者サイドにもなく必然誰かがこの場を納めるために使者が来るとは読んでいた。だが軍の管轄にキルが来るには違う気がするし、かといってミストも表立ってくることはまだあるまい。そうなると後は魔王軍の軍団長はザボエラかハドラーしか残っておらず、ザボエラは私に速攻問答無用で斬るしかないからそれもないだろうし、そうすると残り枠でしかもふさわしいのは魔王軍・軍司令官のハドラーしかいない・・・と思ってこいつ倒そうとする前に来ちゃったよ！
しかも何か怒ってる！なに？マキシマムがそんなに大切なの！この人貴方の事散々こき下ろした人なんだよ、庇う必要ないんだよ。
ハドラーを攻撃するかどうか、それこそダイ達は本気で攻めあぐねた。
確かにハドラーは魔王で敵の軍司令でしかも師の仇ではあるが、この場で先端を開けば鬼岩城戦の後のパプニカが今度こそ壊滅の憂き目にあいかねない。
敵と会ったからといって、早々に戦っていいレベルではなくなってしまったのだ自分達も相手も。
それに、ハドラーの出で立ちがバルジ島やテランの小屋の時とは全く違っている！
あの三本の角は一体なんだ！
纏っている雰囲気や気配すらも違っている。
強い
長年戦いに身を置くヒュンケルやクロコダインはハドラーの内に秘められた強さに慄きすら感じ、体は強張り自然と持っている武具に力が入る。

「・・・・・・あなたが来ましたか・・」
周りの緊迫した空気を、ティファの溜め息の様な言葉が打ち破る。
「俺が来るのが意外ではないのか？」
「ええ、ただ来るタイミングを計り間違えました。もう少し・・・そこの馬鹿が倒された辺りと踏んだのですが間違えましたね。」
上空の変わり果てた姿のハドラーを見てもティファは驚かず、それどころか得物の雪白を仕舞ってしまった！
「ティファ！こっち・・」
「いいよダイ兄、今ハドラーに戦う気はないから。みんなも下手に手を出さないでくださいね。城に来たキルバーンと同じで今の彼は使者でしょうから。」
めんどくさそうにティファは頭をガリガリとかきながら状況の説明をする。ダイ達が考えている通り、下手に戦端なぞ開いた日にはパプニカは今度こそ壊滅するだろう。それこそ廃墟と化すほどに。
下手にダイ達の所に行くよりは、戦う意思をしない意思表示をしてその場で待っていればいいと、考えたのが甘かった。
ゴ～ン!!
「・・・・・いったい!!!」
マキシマムが粉の目つぶしをくらってあげた絶叫以上の音と、それによるダメージに叫ぶティファの声があたりに響き渡る。
なんとハドラーが上空より急降下をし、その威力を右手の拳に乗せてティファの頭に拳骨を落としたのであった。

あれはどう見ても考えても攻撃だろう！ダイは即座に剣を抜き、ヒュンケル達も飛び出そうとしたがハドラーの大音声がそれらをすべて蹴散らす。!!
「この戯け者が!!!!」
バリバリの雷がティファに降り注いだ。
「なんだ貴様の先程の体たらくは！貴様それでも勇者一行の者か！殺気丸出しでどこの不逞の輩かと思ったわ!!」
「あ・・・それは・・」

「これで二度目だぞ！死の大地はザボエラで、今度はマキシマムとは、どちらも貴様にとってはとるに足らぬ敵を相手に何をしているのだ！」
「・・ですが・・」
「貴様には勇者一行の者という自覚がないのか！だったらさっさと一行抜けてデルムリン島のブラスの下に戻れ!!自覚無き者など相手にする謂れはない!!」
「そんな！」
そこまで酷いこと言うことないでしょうハドラー!!
そしてティファはハドラーの説教に涙目になり、えぐえぐになりそうなところでようやく説教の言葉がとまった。
「全部見ていた。」
「ふぇ？」
「塔からの戦闘時からだが、その辺りから上空で待機していたのでな。マキシマムが何をして言っていたのか全て見ていた。」
「みてた・・」
「そうだ。」
ハドラーだとてマキシマムが倒されてもよいとは思っていた。
少し前の自分なら、マキシマムがやらかした配下を顧みず、どこまでも自分本位なところは同じであっただろうが、今は不快に感じて助ける気さえも失せ果てていたが、ティファが殺意を放出したのに焦り急いで止めに行こうとしたが間に合わずとはいえ生半可な術ではティファが引いてくれる気が全くしなかったのでついベギラゴンを使ってしまってではあるが。
あのままマキシマムが倒されても構わなかったが、あの倒し方では後々ティファ自身が、正しい事をしたのかと気に病み心が傷つきそうだった。
倒したい敵ではあるが、決戦で自分と当たるその日までティファにはそんな暗い感情にとらわれてほしくないと思うのは、きっと自分の勝手な我が儘なのであろうが。
故に、邪魔をしたことを詫びるつもりはなく悪いことをしたとは

思っていないが遅くなったとは感じている。
「少し遅くなったしまったがな・・」
「・・本当です、さっさとお開きにしてくださいこんな茶番・・」
こ奴は本当に・・
ティファの物言いに呆れながらもポンとティファの頭に手を置く。
「お前の言う通り篩の終わり宣言をしてくるように俺は大魔王バーン様より命じられてここに来た。あの者達は終生魔界より出る事はさせないと確約をするゆえに捕虜返還を頼みたい。」
「・・・・・それなんで私に言うんですか？」

なんで勇者一行の者とはいえ勇者や頭脳の魔法使いでなく料理人に言うのかね。
そんな話さっさかまとまるはずもないけれどと思っていたのがどっこい通ったよ。
この場には今レオナ姫がおわしまして、姫君の英断一つで話がすんなりとまとまるってすごい事だ。
「我が国もこれ以上の戦闘の継続は望みません。そのモンスター達が敵対する事無く疾くこの場より去るのであれば連れておいきなさい。
ですが先程の約定、守ると誓えますか魔王ハドラー。」
城で待っていてほしいというダイの願いを蹴飛ばして塔に来てよかったとレオナは心底思う。
こんな力づく荒事ではどうにもならないような話をダイ達だけでどうにかなる物ではない。
王族の判断で下したことであれば、後日敵と独断で取引したとダイ達やこの場の兵達が誹れ罪に問われることを回避できたのだから上々であろう。
レオナだとて今のハドラーからは得体のしれない強さを感じる程にはレベルが上がったせいで感じている。それこそ竜魔人化したバランと対峙した時のような空恐ろしさが先程から体を震わせるている。
気丈にもそれを押し殺し、レオナは人生の中で一番の胆力を使って

敵の使者との交渉を始める。
　ほう、面白い。力はともかく俺に向かって面とした物言いをするか。
「そなたは？」
「名乗りが遅れました。パプニカ王レオンが娘、レオナです。」
「そなたがこの場の将というわけか。」
「ええ、そう考えてくださって構いません。」
「成程、ならば約定を守る事を魔軍司令官の座にある者として、また我が主大魔王バーン様の名に懸けて誓おう。この者達は最早戦いには出ぬ。」
「・・・その言葉を信じましょう。アポロ、マリン、エイミ、他の者達も彼らの縄を・・・」
「しかし姫！」
「命令ですアポロ。即座に取り掛かりなさい。」
「・・・分かりました。」
「ティファ、貴女もこちらに来なさい。」
「う・・はい・・・」
　あれよあれよという間にレオナの采配で捕虜のモンスター達の縄は解かれ、全てハドラーの周りに集った。
　ついでにティファはレオナの横にしがみつきそうな勢いでいる。
　今この安全地帯を離れたらダイが怖いからだ・・・今回はポップ達も鬼の形相をしている。
　それもそうだろう。師の仇で宿敵の魔王と説教されてそれを受け入れて聞いて話し込むは、頭に手を置かれても拒絶しなかった仲間なんて色々と論外すぎるだろうと頭が冷えた今では冷や汗しか出てこない。
　そんなティファの様子を、パプニカの兵達、特にアポロはじっと見ていた。
　百体近くいた捕虜のモンスター達はダイ達も手伝い即座に解き放たれ、どうやら自分達の新しい上司が来たようなのですぐさま駆け寄る。

もしかしたらすべての責任を取って自裁を命じられるかもしれないが、この場で死んでしまおうと覚悟を決めて。
だが、魔軍司令官を名乗った者は途轍もない言葉を放った。
「貴様らは命令を全うし指揮官であったマキシマムの非道を前にしても反旗を翻さなかった。よって魔軍司令官の権限において大魔王バーン様の名の下に罪を許し処断されることは決してない事を誓おう。魔界に帰るぞ。」
ハドラーの声はよく通り、後ろの者達にも説いたとき大歓声が起きた。
ある者は泣き叫び、ある者は隣の者達と抱きしめあう。
モンスター達には本能でハドラーが魔王であり強者であることが知れている。その者が言う事には間違いがあるはずもなく、自分達は救われたのだと涙を流して喜びに涙する。
ダイ達としても、好き好んで敵を倒す趣味はないので無用な流血が無い事に喜べるが内心ではかなり複雑である。何せ相手がハドラーならば仕方がない事であるが、ここは黙って帰すことで話し合いは済んでいる。
ティファとしても、自分がしたことで巻き込んでしまったモンスター達が無為に死ぬ事無く追われたことにホッとする。
早くハドラーの篩があればな～。
そうすれば無駄な犠牲出さないで早く死の大地での決戦が出来るのに・・
だがティファの願いはいつでも裏切られ、事が静かに終わらない

味方は守らないといけないでしょう

人間というか、知性を有した生物は、時としてその知性や理知よりも感情を優先させることが多々ある生き物だ。
理性でも分かっていても、感情がそれを許さないというのはよくある話。なんで私はそのこと忘れてたんだろう。

いや～、魔界のモンスターの仔達嬉しそうに続々と塔の魔法陣通って帰っていくな。さっきまで生きるか死ぬかなら自決させられると考えていたんだから、ハドラーの言葉は地獄の底から天国に引き上げられたようなもんなんだろうな。
塔は魔界から転移してきた物であり、転移空間の力は一階中央の隠されていた魔法陣に移され、魔界と繋がっている。
そこを通ってモンスター達を帰した後はハドラーがベギラゴンで魔法陣を崩して閉じる予定である。
塔の残骸に座れる適当な大きさな物があったのでそれに腰を掛け頬杖をついたティファは本当に戦闘意欲零でモンスター達の帰還を見守っている。
元をただせば自分が巻き込んだような者達で、五年も処刑の恐怖を味合わせていたのかと思うと本当に申し訳なくなる。
モンスター達の帰還を、ティファは笑って見送っている。
ここでダイ達は疑問が生じる。ティファだとて好き好んでではないにしろ敵を散々切り殺しておいて、今回は何故元とはいえ尖兵予定

であったモンスター達を気に懸け同情するのか。
　その疑問を隣にいるレオナがさっくり聞いてみた。
「だって姫、彼等はそもそも誰も襲っていないですし、それどころかもう争いに巻き込まれたくないって言ってましたよ。」
「・・・今言ってたって、誰が？」
「ああ、実は塔に突入する前の作戦時に、縛り上げている時彼等に戦いは楽しいか挑発して聞きだしてみたんです。そしたらもう嫌だ、そもそも命を襲うのは間違ってる迄思想が発展しているみたいで、もうデルムリン島の子たち並なんですよ彼等。」
「ふ、ふ～ん、そうなの。」
「はい、なのでそんな良い子達が無事に・・ああ、そうでした。ハドラ～。」
　一体ティファは自分達が見ていないとき何をしているのか本当に分かったものではない。あんな短期間で何をホイホイ情報収集しているんだか。
　しかもなんかハドラーを呼びつけている！それも緊張感の欠片もなく!!
「おい、」
「はい。」
「お前は・・・もういい、何の用だ。」
　今自分は使者で確かに争う気はないが、だからといって敵の軍司令官の魔王の自分をホイホイ呼びつける勇者一行の者はどうなんだ？
　それを指摘するのがもう面倒臭くなったので突っ込まずに素直に聞いてしまった方が早い。
「これを。」
　小さな布袋をティファは掲げた。
「中身はその・・・あの馬鹿が死なせた仔です。」
　モンスター達解放のお知らせと帰還の方法を説明している間、ハドラー達は勿論ダイ達もそちらから目が離れている間に、ティファは死んでしまった仔の亡骸を手持ちのマジックリングに入れて、小さなポシェット状の布袋に入れたのだ。

「向こうで出してあげて埋葬してあげてほしいんです。」
「分かった、最後の者が魔法陣を通る前に受け取ろう。」
本当にこやつは戦う者なのかとハドラーは頭を痛めるが、そんな器の広い者を討ち果たしたい者に選んだのは間違いではなかったと嬉しくもなる。ただ強いだけの者は探せばいるだろうが、強く賢く、そして限りなく優しい者はそうはおるまい。
二人の心の内は一致している。自分の手で相手を倒したい。だが無駄な戦いや犠牲を増やしたくない。
片やティファは限りない優しさから、片やハドラーは戦士として弱い者を相手にする気がないのと少しばかりの慈悲からではあるがその辺りも一致している。
決定的に違うのはティファは人間側で、ハドラーは大魔王側で相容れることのない敵という事。
水と油で決定的な何かが起きない限り覆ることのない事実である。
それでも、ハドラーとティファは穏やかな瞳で互いを見て話を続けている。
「あの仔達はもう自由なのですか？」
「ああ、あそこまで争う気が無くなったのは魔界では少々不味いが解き放つ。」
「それって強いモンスターの餌食に・・・」
「んむ、保護した方が矢張り・・・」
「如何に弱肉強食の魔界でも・・・」
「バーン様に上奏するか。」
それは歪で異様な光景にダイ達には映った。仲間の下に戻るそぶりはなく、敵である魔王と穏やかに話しているなど本来であれば許されることではない。
ここが戦場の中立化している場でなければ誰も許さない光景であった。

許さない

たった一人、割り切れない者がいたとしても不思議ではない。
さらに言えば、その一人以外の兵達の心も複雑であり、レオナ姫の命令が無ければ勇者達と共に魔王を討ち果たしたい心積もりではある。
しかし命令は絶対であり、それよりも戦端が開かれてしまった時の被害を考えれば個人の私心は封じなければならないのを兵たちは心得ている。
だが、残念な事に男にはその考えることが出来ない程に魔王軍への憎しみ強すぎた。

何故敵のモンスター達を案じる、何故敵の軍司令官と穏やかに話している!!
パプニカはオーザムのように蹂躙されたわけでも、カールの様に国を乗っ取られたわけではないが!それでも無辜の民にも被害が出ている!!
ヒュンケル達はまだ許せた。彼等は己の罪と向き合い、償ういばらの道を選んだからだ。
だが今目の前にいる者達は?
仮に元尖兵達は誰も襲わずに度と戦いに身を投じないといっているのが本当ならば許せるが、魔王ハドラーは違うだろう!
十五年前のハドラー大戦を自分は覚えている。
焼きだされ逃げていた母の震えていた手、怯えた声を。
城に保護され程なく大戦は勇者アバンの活躍で終息したが、あの時の事は決して忘れない。攻めてきた魔王を許さないと幼い自分の心に生じたあの憎悪を。
ここにいる兵達も自分と同じだろうに!何故平然と見ている、何故誰もこの状況の可笑しさを指摘しない!
姫様も、王侯貴族としての立場で動けないのだろうか?
ならば自分が法螺貝となろう!死しても戦う事を示す盛大な法螺貝に!!
その為にこの命とて惜しくはない!

「魔王ハドラー!!!」

普通の思考をすれば、それは防げたことかもしれない。
敵を目の前にした者達が、ましてや祖国を二度も蹂躙せんとしている者がいるのならば、どの様な行動をとろうとするのかを予測する事は容易であったはずだった。
だが急転直下のような出来事が次々に起こり、自分の思考も鈍っていたらしい。
ああ、ならばこれを止めるのは自分の役目か。

アポロの放ったベギラマは確かに盛大な爆発音をたて、周囲全ての者達の耳目を引いた。ただ、それは標的の魔王には当たらず小さな、それこそ自分の背の半分も無い者の背中を焼き尽くした。
「申し訳ありません魔軍司令官、戦場慣れしていない者が魔力の暴走を引き起こしてしまったようです。」
アポロ渾身のベギラマはハドラーに届く事無く、ティファがその小さな背中で受け止めた。

ああしょうがないか、普通に考えてみれば前の大戦でも散々な目に合わせたハドラーをそのまま帰そうとは思わないよね。その辺の心の痛みを無視してハドラーと話した私が悪いや。
周囲はしんと静まり、今にも飛び出しそうなダイをポップが羽交い締めにして止めている。
使者であるはずの魔軍司令官を攻撃したこちらの分が悪い。下手に動いて本当に戦端を開くことにでもなれば最悪である。それでは身を挺して必死に止めたティファの行いが無駄になる!
「・・・魔力の暴走か・・」
「はい、この者は能力こそ賢者ですが未だに戦場に出た事はありません。未熟な者が仕出かした代償は私のこの背中で許してもらえませんか?」

ああいやだ、本当はアポロさんの罪ではないのに、気安く敵の司令官と話していた私とハドラーの罪なのに。後でアポロさんに謝って、皆にも謝らないといけないことだ。
背中から全身にかけて激痛が奔り、気絶していれば楽であろうに。
ハドラーも長年の戦闘経験からダメージによる体の痛みと状態は熟知している。
あの黒髪の白い服の男の放ったベギラマを防御する事無く背で受け止めれば下手をしたら死んでいてもおかしくはない！
それでもティファは躊躇いもせずにベギラマを受け止める事を選んだ。
雪白で斬撃を放てば無傷であっただろうが、武器を出してこの中立の場を破ることを懸念してとの思惑もあるだろうが、それよりもベギラマを放った男も傷つける事を厭ったか。
今もそうだ。小さな体を大きくしようとするかの如く両手を精一杯広げ、男を庇い立てている。
「ダイ・堪えろ、ティファの思い無駄にしてくれるな。みんなも動くなよ。」
取り押さえているポップだとて本当は駆け付けたい。マァムもメルルもティファの下に走り回復呪文を一刻も早くかけたかろう。それでも！ティファの行動を無に帰すことは許さない！早く手前も帰れハドラー!!
「・・・未熟な者が粗相をしたのはこちらが先だったな。その事とこれで互いに帳消しか。」
「そうですね、こちらももうキングマキシマムの事は言及しません。お騒がせして申し訳ありません。」
マキシマムを引き合いに出し、ハドラーはアポロの起こした騒動をそれで帳消しにする。
本来なら人質を取るつもりのなかった作戦を引っ掻き回し、大魔王バーンの名に泥を塗ったマキシマムはハドラーの登場と共にキルが空間に引きずり込んだ。
どうなるかは知らないが、この場を納める口実位の役に立った。

だが、ハドラーはそれだけでは良しとしようとは思えなかった。ティファのあの小さな背が焼かれた事に何故か胸が痛みキリキリとする。自分で倒す敵と定めているのに可笑しな話ではあるが、これだけで帰るのが何故か不誠実な気になる。
「ティファ、いや、この場全員に告げる。魔軍司令官たる俺も篩をするのは我が親衛隊の配下ヒムが先刻伝えた通りだが、一つ確約しよう。決して非戦闘員を殺さないことを・・・その時にまた会おう。」
確約を一つ置いて行き、ハドラーはそれ以上アポロ達を刺激しないように最後の一頭が魔法陣を通ったのを確認しベギラゴンで破壊尽くしキメラの翼で死の大地へと戻っていった。
ティファが渡すはずだった骸の入ったマジックリングを受け取らずに。

おじさん

ハドラーが去った塔の周辺は静寂のまま誰も動かない事に、ティファはまずい事をしてしまったと反省する。
あ～これ不味いな、やらかしたな。謝罪して状況説明して動かないと。
ハドラーが去り、モンスター達がいなくなってもやることは山ほどあるだろうに誰も動かないのはいけない・・責任取らないといけない事だ。
「レオナ姫、皆さんも騒ぎの原因を作ってしまい申し訳もありません。アポロさん、不快な思いをさせてすみません。以降このような事はしませんので今はお許しを。
私は大丈夫ですのでフォルケン王の護送と、あのマキシマムの残りの配下がいないかの警戒と巡回を。他にも何か魔法陣による仕掛けがないか魔導士たちによる巡回の強化をした方が良いかと。」
その現状にダイ達は違和感と苛立ちを覚える。
・・おかしいだろう、なんで大火傷を負ったティファが謝罪してる？何故無闇に戦端を勝手に開こうとした賢者アポロは謝らずに突っ立っているのを許されている？
いかにティファに非があろうとも、やってしまった事に自身が追いついていないとでもいうのだろうか？
「それと破壊されたとはいえ塔の周辺は聖水ですべて清めておいた方が・・」
「ティファ!!!」
背中の傷などないように、何事もなかったの如く振る舞いいつもの様に献策をする妹にダイは駆け寄り抱きしめる。
「もういいよティファ！マァム早く傷治して!!」
「ダイ！ティファの背中こっちに」
「いいよダイ兄、それよりもフォルケン王を早くパプニカ城で安静にしてあげないといけないよ。」
「そんなこと言ってる場合じゃねえだろう！マァム早く・・」

「いいといっているんですポップ兄！私なんか放っておいて!!早く周辺全員で見回ってきてください！薬でも振りかければ放っておいても治りますから。」
　自分の身を案じるダイの手すら煩わしそうにティファは振り払い、言葉を発しないレオナに矢継ぎ早に献策をしていく。
「おそらく城下の方にもモンスター出現の報は言っているでしょから沈静化の一報を早くした方が良いかと。」
「その際勇者達がパプニカ及び連合国の兵達と共に退けたと知らせた方が民達も安心した上に人類の勝利がより伝わり希望が生まれるのでは。」
「ああ、その前にパプニカ城に至急伝令を飛ばして一報が必要ですね。ポップ兄、ルーラで三賢者さんの誰か連れて行ってきて。」
「え？レオナ姫じゃダメかって？姫は今ここの指揮官なんだから離れたら誰が命令下すのさ。その辺きちんとしないと駄目だよ。」
　はっきりといえば異様な光景だ。
　自身の痛みを無視している。
「ティファ！お願いだから治療させて!!ベホイミかければすぐだから！」
「マァムさん、周辺見てきた下さい。このくらい自分で出来ます。」
「ティファよ！何故分からん！皆お前を案じて・・」
「この程度で死にはしません！いい加減にしてください!!」
　どうしてわからない!!こんな火傷なんてどうでもいいのに!!
　自分の事なんてもうどうでもいいから放っておいてほしい
　なんでみんな動かない、謝罪もしてアポロさんにも周りにも謝って、それよりも優先することがあるのに何で動かない。
　ああ、面倒だ。

これではハドラーとお話していた方が余程楽ではないか
それこそが今のティファの心を覆いつくしている思い。
仲間は大好きだ、ダイもポップもマァム達は慈しみさえ感じる。
周り者達、三賢者もアキーム達も頼もしい味方だと思った・・・思っているんだ。
そしてこの世界を救う事が大事なのに・・・
けどね、少し疲れた・・・放っておいてほしいほど疲れたんだよ。
何で放っておいてくれないの?まだ何かを私にー説明ーして欲しいの?
・・、謝罪した、献策もしたのにまだ足りないの?
少しでいい・・・ほんのすこしだけひとりでいさせてよ

自分は妹の何を見て育ったんだろう。
双子の妹は優しくて泣き虫で、でもやっぱり優しい妹はこんなことが出来てしまうなんて。
「ダイ！呆けてる場合じゃねえだろう!!」
「だってポップ！ティファが・・ティファが放っておいてほしいて!!だから」
「だからティファをこの闘気の渦の中に一人でいさせるの？違うでしょう!!」
「ティファさん出て来てください！さっきティファさんが言った事全部やります!!治療が嫌なら薬塗るお手伝いだけします!!嫌なことがあるなら全部聞きます!!だから・・だから出て来てください!!」
「出て来てくださいティファさん！」
「ティファよ！頼むから出て来てくれ!!」
突如としてティファより発せられた白い闘気の竜巻が、ティファ一人を覆いつくし何人も近づけんと荒れ狂う。
マァムの説得もチウ・メルル・クロコダインの懇願すらも欠片も聞く気はないとばかりに渦巻く闘気の音が全てをかき消す。
その光景に、ダイ達は涙を流しながらもどうしてよいか分からないが、それでも必死にティファに言葉を発する中、ヒュンケルの心の中は暗澹たる思いと、己の不甲斐なさに忸怩たる想いが満たし尽くし、ティファに甘えすぎていた事を悟らされ、悔恨の念が尽きない。
ああ、ティファはここまで疲れきっていたのだ
ティファは泣かない、愚痴も弱音も自分達には言わない・・言えないのだきっと。
不甲斐無く頼りにならない自分達が、今のティファの何の助けになろうか。
あの人にしかできない

突然の出来事に呆然とし手が出せない兄達ではなく、懇願するマァム達の横をヒュンケルが通り、渦の手間で止まり槍の柄を地面に突き刺し固定する。
「ヒュンケル！何するつもり!!」
「止めるなマァム。アバン先生から教わった光の闘気系の技で威力を誇るグランドクルスをあの渦にぶつけて相殺させる！」
「ヒュンケル・・・なら俺が海波斬で！」
「ダイ、今のお前の状態ではリスクが高すぎる。ここは俺に任せてくれ。」
「そんな！」
ティファの身長よりも一メートル上を狙い一瞬でもいい、あの渦が途切れればすぐさまティファを保護する。
ティファを無傷でかつ保護できる手段は今のヒュンケルにはこれしか思いつかなかった。
あの技であれば範囲は広く、渦を消せる可能性は高い。今ティファは己を顧みず、途轍もない量の闘気を放ち続けている。手をこまねいて見ていれば魔力切れと同じ状態になり下手をしたら死んでしまう。
今この手段を取れるのは自分しかいない。ダイはまだ自身の力を持て余し完璧に制御しているとは言い難くリスクが高く、マァムとクロコダインも闘気系の技を持っているが闘気の桁が違いすぎて太刀打ちできまい。
分かっている、ティファを救うためなのだと。
それでも心が拒絶をする。かつて敵として相対し、ブラッディースクライドを放ちティファを傷つけた光景が脳裏をよぎり体を縛る。
ラーハルト、俺に力を貸してくれ
ーバラン様はティファ様が守ってくれよう、貴様はティファ様の助けとなってくれー
かつてこの魔槍の鎧の持ち主ラーハルトはティファを自分に託して逝った。
力はあるが純粋無垢で何でもかんでも受け入れ抱え込んでしまうティファの行く末を最後まで案じて。

その誓いを今果たさなくて何とする、ティファの心が悲鳴を上げている今こそ助けなくて何が仲間か!!
「グランドクルス!!」
ティファを救いたい、祈りにも似た思いで放った渾身のグランドクルスは白い闘気の渦を相殺し辺りはその威力で暴風が吹き荒れたが、ヒュンケルはものともせずに槍から手を放し瞬時にティファに駆け寄る。
呆然とし、ただ立っているだけのティファ。様々な事に疲れ果て、心もなく
許してくれティファ
ヒュンケルは駆け寄ると同時にティファの細い首筋に手刀を振り下ろし、前に傾く幼い体を抱き留める。
何と軽い体か、まるで今にも消え果そうな頼り無く儚げで、今までこんなに小さな体に頼り切っていたのかと思うと己の不甲斐無さと申し訳なさで涙が後から流れ出てくる。
「ヒュンケル!治療を・・」
「ここではしない、ポップ!今すぐルーラでマトリフ導師の所に飛んでくれ!!全員一緒だ、出来るか?」
「師匠の・・出来るけどいいのか?」
ヒュンケルの要請にポップは戸惑う。自分もティファを治したいが、今この場からがティファを連れ出してレオナが許すのか。
「構いません!ヒュンケルも考えがあっての事でしょう、行きなさい。この場の全員に緘口令を敷きます。塔の周辺で見た事聞いたこと全て他言無用、よいですね!!」
アポロがしたことにもレオナは一定の理解を示している。あれは確かにティファに非がある。
今大戦最中なのに敵の、それも前回の大戦を引き起こしこのパプニカを壊滅にまで追いやった魔王ハドラーと親しいような会話をしてしまったのは下手をしたら敵との密通を疑われても文句は言えない程の非が。
だからといってアポロはあわやそのパプニカを火の海にするきっ

かけを作りかねなかったのもまた事実。
この件は自分一人には手に余りすぎる。
お父様
病室の中でも政務をとる父に裁可を仰がなければならない程の事を今この場で処断できることではない。
マトリフ導師の元ならば安全であり、一旦お互いを離せるきっかけになってくれる。
「感謝する姫、もう一つ頼みたいことが。」
「言いなさい、可能であれば叶えましょう。」
「三賢者の一人エイミ殿もお連れしたい。」
「・・・エイミを、深くは聞きません。早急に料理人ティファの治療に行きなさい。」
「感謝します。ポップ！」
「分かってる！ダイ、皆も全員掴まれ!!」
早く着いてくれ、ティファがおじさんと慕うあの人の下に

おせえ！パプニカに渦巻いていた魔界の気が霧散して随分経つのにポップ達が来る気配がないのはどう言う訳だ!!
バルジ島の対岸に位置する洞穴でマトリフはイライラと歩き回る。
昨日ポップ達が寝袋を取りに来た時に伝言を頼んだ。
勇者一行の料理人ティファにここに来るようにと。
自分の考えが正しければ料理人ティファは嬢ちゃんだ。あの時ネイなどと、誰でもないという意味のふざけた偽名名乗ったせいで探せなかったが今度こそ本名聞いて逃がすもんかよ！
心配なのだ。あの弱い心を持った幼子が成長したとはいえ親しい者達をその手にかけて何事もない訳がない。泣いているのかそれとも無理をして笑っているのか、アバンの真似事の為に心を押し殺しているのか！そう想うと堪らなくなる。
優しい娘に大の大人が寄ってたかって頼りにして重荷を背押せなければならない不甲斐無い自分達を殺したくなる。
今のティファの状態を自分の目で確かめたいと思っていた矢先に

今回の騒動が起きた。
伊達に大魔導士は名乗っておらず、塔が転移してきた時点で気が付き水晶で見てみたが一瞬映ったきりで水晶は粉々に砕け散った。おそらく敵が結界を張ったのだろう。こんなおいぼれでボロボロな自分が行っても足手まといにしかならず、終わればポップの性格ではすっ飛んでくるだろう待っているのだが。
不意にダイ達が敗北したのかと嫌な予感がよぎった時、爆発音にも似たルーラの着地音が洞穴を揺るがせる。
なんだ！
マトリフが表に飛び出そうとした矢先にポップの悲鳴のような声の方が飛び込んできた。
「師匠!!」
焦りが滲んだ声に何事かと思えば大勢がどかどかと洞穴の中に押し入ってきた。
ヒュンケルを先頭にダイとポップが纏わりつくように、他にも見た事のない大ネズミと三賢者のエイミまでも迄いるがヒュンケルの腕の中にいるのわ！
「嬢ちゃん!!!」
・・・師匠今なんて・・
「ヒュンケル！嬢ちゃんに何が・・なんだこの背中の火傷は!!」
「落ち着いてくださいマトリフ導師！ティファは俺が手刀で気絶させたんです。それよりも背中の手当てを。」
「気絶させたって・・分かった、治療するから奥に・・・嬢ちゃん？」
「う・・・・」
懐かしい声がする、温かい気配がする。魔法のような深みのある声を私は知ってる
マトリフの気配を感じ取り、ティファの目が覚めかける。
自分が唯一縋りたいと思う人がいるとしたらそれは・・・
本当にティファは強すぎる、まさかもう覚めかけるとは。とはいえその方が今は良いかもしれない。
洞穴の奥のマトリフのベッドに辿りついたヒュンケルは目線でマ

トリフに断りを入れてティファを抱えたまま腰を掛ける。
「起きろティファ！ここにお前が慕う―おじさん―がいるぞ！」
「う？」
「お前は今より五年前、竜騎衆以外の出会いをしたはずだ!!お前に温かい言葉を、あの、世界は弱くもなく酷すぎもしないと俺達に贈ってくれたあの素晴らしい言葉をお前に授けてくれたマトリフおじさんがここにいるんだ!!」
「お・・・じ・・さん・・」
ティファの目が徐々に覚めていく。あの言葉を自分に教えてくれた魔法使いのおじさんが・・
「嬢ちゃん。」
ああ本当だ、本当に目の前におじさんがいる。
「嬢ちゃん！」
ああ、おじさんがきっと何もかも終わらせてくれるだろう。なら大丈夫だ。
薄っすらと目を開けたティファにマトリフは力強く呼び掛け、ティファは嬉しそうに目を細める。
「おじさん・・・ノヴァは？助かった？」
「つ！・・ああ、何もかも大丈夫だ。後は俺がやっておく、眠れ嬢ちゃん。」
「うん・・わ・か・・った・・」
マトリフの言葉に安心をしたティファは微かに微笑みを浮かべて眠りの底へと落ちていく。
―今―ではなく、五年前窮地に陥り死掛けた親友の身を案じながらも
おじさんがいればもう大丈夫だと安心をして

大魔導士の怒り

「俺達に世界なんて救えんのかな？」
「ポップ、やっぱり冒険辞めておく？」
「いや俺もこのまま行くぞダイ！俺も先生の敵討ちもしたい!!けどさ、不安が消えねえんだよ。」
「大丈夫だよポップ兄。」
「何が大丈夫なんだよティファ、相手は先生だって・・」
「あのね、世界は弱くもないし酷すぎもしないんだよ。頑張って進めばきっと誰かが手を貸してくれるよ。」
「そうか？」
「そうだよ。ダイ兄、ポップ兄、私達だけで世界を救うんじゃない。まだ会っていない誰かや皆と手を携えていけば大丈夫だよ。」
「そうか、そうかもな。」
「うん。」
　デルムリン島を出た小舟の中で、不意に気が弱くなっていった言葉をティファは優し笑ってく諭してくれた。
「けどティファは良いこと言ってくれたな。」
「う？」
「俺なんて弱っちくって酷い奴だけど、世界は・・そうだよな広くて強い人達がごまんといるだろうしな！いっちょ俺も頑張んねとな。」
「・・ポップ兄も強いよ。」
「世辞はいいさ。それよりも含蓄があって深みのある言葉だな。ブラスさんの言葉か？」
「ううん違う。」
「違うのか？」
「うん、じいちゃんじゃない。外の世界であった・・・ティファのとっても大切な―おじさん―から貰った言葉なの。」
「・・・ティファ、それ誰？」
「ダイ兄顔怖いよ。その人とはもう随分会ってないよ。」
「そっか、会えるといいなそのおじさんと・・無事だと良いな。」

「ふふ、ポップ兄は優しいね。きっとあのおじさんなら大丈夫だよ・・会えたら・・嬉しいな。」

そう言った時のティファの顔は複雑そうであった。その後すぐにロモスに着き迷いの森の一件で今まで忘れはててていたが、あの時のティファの顔は切なさと悲しみがあった気がする。

そして懐かしさも

大切に心に仕舞っていた宝物を取り出し慈しむ様な、本当に大切な相手を思っていたのが今なら分かる。

「ああもう!・なんでこんな時に火傷の万能薬切らしちまったんだよ!!ストックもありゃしねえ!・マァム!・つなぎでいいからベホイミ掛け続けててくれ!内部のもしかしたら臓器まで火傷いっちまってるかもしれねえから表面の皮膚塞ぐなよ!!傷薬流し込めなくなっちまうからな!」

冷静沈着でいつでも、それこそ戦友のアバンが死んだと聞いた時も取り乱さず、その仇の魔王ハドラーと再会した時でも飄々としていたあのマトリフが慌て取り乱し、必要な薬剤以外どうでもいいとばかりに辺りに散乱させたまま薬作りに入り、マァムへの指示も怒声を飛ばしてしまっている。絶対に常のマトリフには見られないことだ。

そんなマトリフに長い付き合いのマァムを驚くが、ティファの小さな背の傷を見ればそんな驚きなどすぐさま霧散をし、マトリフの指示通りにする。

「出来た・・嬢ちゃん・・ラリホーマ。」

「マトリフさん何を!」

「落ち着けダイ。今からお前さんの妹の傷に薬を流し込む・・死ぬほど痛むことだ。」

「あ・・」

「深く眠っちまった方が嬢ちゃんの為だ、マァム流し込んだら通常のベホイミで大丈夫だ。」

「マトリフおじさんがベホマ掛けた方が・・」

「この万能薬と合わせれば死ぬほどの傷でもベホイミで間に合うんだよ。俺が改良したからホイミでもいいかもしれねぇが、様子見ながら指示出す。」
「分かったわ。」
　気絶する様に眠るティファに更に強力な眠りの上位呪文を掛けられ慌てたダイをマトリフは難なく説明をする。
　どうやら薬作りの間に気を落ち着けたようだ。

　万能薬は今は斬撃・骨折用の二種類が出回ってる
　火傷用は出回っておらず、ティファちゃん自身に説明してもらわんと作れんらしいのじゃ
　もしや今世界を救っている万能薬の開発者にティファ殿も関わっているのではありませんか
　なんでこんな時に火傷の万能薬切らしちまったんだよ!!ストックもありゃしねえ
　どうして師匠がティファにしか出来ねえって言われた火傷の万能薬作れるんだ・・・昔会ったおじさん・・・・どこで?いつ・・・・あって、そして・・
「万能薬作ったの師匠とティファか?」
　治療の場には似つかわしくない呆けた声に薬をかけ終えたマトリフが即座に振りむき、その顔を見てポップは確信した。
「そうか、師匠か。師匠がティファと会って万能薬作ったんだんな。」
「ポップ・・」
「そうか、そうかよ!二人は知り合いだったのかよ!!俺達と会う前からティファは師匠と知り合いで!こんなすごいもん作ったのか!昔から!こんな途轍もないもの作れてつよくって・・・なんなんだよ一体!!」
　ポップとてティファ同様に限界だった。
　テランから続き、昨日今日と見せつけられたティファのすさまじさに、ポップの常人としての感性が異常だと訴え続けていたところに、実は師匠と仰ぐ大人物とティファが知り合い、幼い子供の範疇を完全

に逸脱した事を成し遂げていたと知っては無理もない話であった。
一体自分達はティファの何を知っている？何も知らないではないか！其れこそ兄であるダイとても!!
いつでもふんわりと笑って自分達を包み込もうとしてくれて、その実敵のキルバーンの言う通り疲れ果てて心は壊れかける寸前で・・自分達は仲間ではないのか？なぜ自分達に頼ってくれない！何故ティファ自身の事を何も話してはくれない？
こうやって事実が明らかになるまで、自分達はティファの事を何一つ知らないではないか！自分達は何一つ知らせる価値もないお荷物だとでも言いたいのかティファは!!
その叫びはダイ達の胸中にも突き刺さり、マトリフも苦い顔をする。
ティファは本当に何一つ自分の事を話さず今日まで来た。能力・持ち物、そんなことはどうでもいい！
ティファ自身の話をしてほしかった、疲れていると、その時頼りたい相手がいるのだと。それを聞けば妹の為に、戦いの続く中でも世界中を探し出していたのに！
もっと、ティファが疲れているかもしれないと分かった時から嫌がられても聞きだせばよかったのだと後悔の念に押しつぶされかける。
「ポップ、確かに俺は嬢ちゃん・・このティファを知っていた。」
「師匠・・」
「だがな、俺も―嬢ちゃん―がダイの妹の料理人のティファだとは最近まで知らなかったんだよ。」
「それってどういう・・」
「・・嬢ちゃんも落ち着いたみてえだしな。俺と嬢ちゃんの話をしてやる。その前に嬢ちゃんに何があったか詳しく話せ。
昨日のパプニカ城から俺の所に担ぎ込まれる寸前の話し全部だ。」
「分かった・・」
マトリフも、柄にもなく隠し事をしていた自分に後悔をしていた
テランの小屋でハドラーとベギラゴンを撃ち合い、その影響で後日吐血をした時にポップの願いで料理人のティファから届いた体内の

治癒薬を見た時・・いやもっと前の、ロカの家に残された治療薬のレシピの筆跡を見た時から分かっていた。
だが、ポップ達にその事を話し、嬢ちゃんとティファが同一人物かどうか確認しようとは欠片も思わなかった。
―嬢ちゃん―と―坊や―との思い出を自分一人の胸に仕舞い続け宝物のように慈しんでいたから。
だが、テランの小屋でヒュンケルの話を聞いた時、即座に連れてこさせればここまでティファがボロボロになる事はなかったかもしれない。
その思いでティファに何があったのか、詳しく聞くことにしたのだ。起きた時のティファの心を癒す為に知っておかなければ対処できない。

ポップが話をすすめていくうちにティファの枕元の側に腰を据えたマトリフの顔はどんどん恐ろしいものとなり、アポロの時には怒気を発し、アポロが引き起こしたことを聞いた時は一瞬目をつむり開いた瞳には何の感情も見えず、正面から見えているポップは背中に冷や汗を一滴流しながらもここに辿りつく前に自分が見聞きした事すべて話しきった。
聞き終えたマトリフは、一言も発さずまず先にティファの頭をゆっくりと撫で始める。
「頑張ったな嬢ちゃん。辛え事を投げ出さず逃げ出さず、本当に頑張った。」
ティファを労わりつつ、冷静に頭の中を落ち着け整理していく。
嬢ちゃんが疲れきるわけだ。話したくもない心の傷につながる事を何度も聞かれ暴かれ、敵には執着をされて大魔王にまで目を付けられ・・・しかも今回の敵が本当に嬢ちゃんが嫌悪する者が相手で精神が乱されたのが容易に目に浮かぶ。
だがここで分からないのが、なぜ嬢ちゃんは騒ぎの一端になったハドラーとの普通の会話になったのか。
あの二人は敵同士、しかも嬢ちゃんは現段階では魔王軍の要注意の

敵でハドラーにとっては邪魔もの・・・いや、確かテランの小屋で嬢ちゃんに会って謝罪だとか寝とぼけた事を言っていた・・俺やダイ達が知らない結びつきが二人にでもあるのか・・・嬢ちゃんが全回復したら聞いてみるか。

それは後にするとして、最初に竜騎衆達の話を聞きだそうとしたテランのフォルケン王に悪意はなかっただろうとは思う。

ハドラー大戦時に面識があり、理想が過ぎた者ではあったが、聡明であり心底の善人だったと今でも覚えている。

聡明なフォルケン王であっても、まさか嬢ちゃんと竜騎衆達が今話しに聞いたような強い結びつきがあったとまでは想像しろという方が酷であろう。

おそらく決戦間近なこの時期に、どこから他の王達に勇者とその妹が魔王軍の軍団長をしていた男の子供だと知られ、嬢ちゃんと三人の話が漏れ聞かれあらぬ嫌疑が掛かる前につまびらかにしておきたかったのだろうと想像に難くないのでフォルケン王に非はなかろう。

嬢ちゃんが疲れ切った原因はおそらく三つ

テラン戦の心に負った傷が回復していない事、敵からの精神的な攻撃

そしてテラン戦を除けば最大の原因はどう考えても

「三賢者のアポロか・・」

冷たく落ち着いた声に俯いていたエイミの肩がびくりと揺れた。

ポップに話を聞くまで、まさか昨日の疲れ切ったティファにそんな無理な事を、しかも自分達どころか姫様にさえ相談せずに独断で勝手に頼もうとしていたのを知らなかった。

その時間帯は確か各国の王達全員が、勇者達と料理人のティファの助けになろうと意思が固まっていた時にだ!!

そうか、ヒュンケルはこのために自分もマトリフ様の洞穴に来させたのか。同じ三賢者としてアポロをどうにかしてほしいと。

エイミがヒュンケルに視線を向ければ、ヒュンケルは申し訳なさそうにしながらも目線で訴えてきている。

「エイミさんよ。」

全てに合点がいったエイミに、マトリフが声を掛ける。
マトリフとて愚かでは無い。アポロのとった行動の原因はどう考えてもティファに非しかない。
それはティファも考えた事で、先の大戦でハドラーにもっとも傷付けられたのはこの国であり、今もまさに世界を蹂躙している相手の最高司令官と、穏やかに話をして良いわけがなく、アポロでなくともハドラー相手に誰かが、若しくは集団で暴発していたであろう事は容易に想像がつく。
だがそれでも、これは理屈では無い！まして自分にとっては世間の常識も何もかもがどうでもいいのだ。
一度は見限ったこの世界の助けをしているのはダイ・ポップ・マァム達一行の手助けをしてやりたいとの事もさりながら、矢張り大事なのはー嬢ちゃんと坊やーの方！
この二人がいなければ、本当に世界なぞどうでもよくなる程心を凍てつくしていたのを、温めてくれたのはこの二人で・・その片割れの嬢ちゃんをここまでにした要因の一つとして許せないのは自分の我儘・・
「三賢者のアポロ・・いや、三賢者全員の謝罪やその類を嬢ちゃんにしようとするだろうが、俺がいいと言うまで会いに来てくれるな。謝罪の手紙もなしだ。」
きっとティファは自分が悪いと自身を責め立て、許そうとして心の負担が増すばかりではっきりといえばティファの心の毒にしかならない。
「それを破れば、パプニカは大魔導士マトリフを敵に回すことになるとレオール王とレオナ姫に必ず伝えてくんな。以上だ。」
飄々とし惚けたところのある常のマトリフは何処にもいない。
今ここにいるのは、かつての大戦の死線を潜り抜けた今世紀最大の大賢者と世に名を轟かせた大魔導士マトリフが宣言を発した
自分がティファの後見人となる事を
アポロは知らず、虎の尾を踏み抜き大魔導士マトリフの怒りを買ってしまったのだ。

それは呪いか祝福か

エイミからの報告で王城に激震が奔った。
今まで表舞台に立つことのなかった大魔導士マトリフが、姫を助けた救国の勇者を支援していると知ってパプニカ王城は士気が上がった。
先の大戦での活躍を知る者達は多く、いざとなれば矢張り戦ってくれっるのだと純粋に喜んだものから計算高く喜んだ者達と様々な反応ではあったが、それでも士気が上がったことは喜ばしいことであり、病の床に就くレオール王の顔も綻ばせた程の効果があった。
それが蓋を開けてみれば、たった一人の少女の為に、国を相手取ると宣言をしてきたのだ。
常人であれば正気を疑われ捨て置かれるが相手は常人ではない。やろうと思えば本気で一国と戦える世紀の大賢者。
その大賢者が勇者の妹を嬢ちゃんと慈しみを込めて呼び、背中の大火傷一つで取り乱し、遂には宣戦布告までしてきたのだから落ち着ける者などいなかった。
古株の大臣達はマトリフの事をよく知っている。
情はあれどどこか冷めていて冷静沈着を崩すことなぞついぞなかったあの御仁の逆鱗に触れたのだから大人しく言う事を聞いておくべきだと。
「言葉を違えた時、マトリフ導師が敵に回ると、そうはっきりと言ったのですね。」
「はい・・」
「そう、分かりました。マトリフ導師の言う通りにしましょう。彼の方からの許しがない限り、パプニカの人間は洞穴に近づく事も伝書鳩を送ることも禁じます。
アポロ、貴方は沙汰があるまで謹慎を命じます。くれぐれも軽挙妄動を慎みなさい。マリン・エイミ両名が監視につきなさい、以上です。三名とも下がりなさい。」
エイミからの報告を受けたレオナは心中の不安や後悔を押し隠し、

事態に対処していく。このくらいの事をせねば、今まであの小さな体で様々な困難にたった一人で対処しようと頑張ってきたティファに合わせる顔がない。
　王族の責務を全うすることで、これ以上ティファの重荷になる事態を防ぐことをレオナは誓い、大臣達との協議の後に父王に報告をして相談する算段を付ける。
　果たしてアポロの処分をどうすべきか、各国の兵達にも目撃されており王達にも今回の失態は伝わっているだろう。
　各国は勇者たちを全面的に支援をしようと纏まってくれていただけに、今回のパプニカの失態を許してくれるだろうか？

「そんじゃ、嬢ちゃんと俺との事話すぞ。全員分の椅子があるから座れ。」
　マトリフの真剣な様子に、ダイ達は椅子をもってきて座り、固唾をのんで見守る。それ程普段のマトリフと今のマトリフが纏う気配が違いすぎる。
　マトリフは心底怒っていた。それはやらかしたアポロだけにではなく、ティファに対しても怒っている。
　やらかしてしまった未熟な部分もさることながら、力は増し実力は断トツだが、ティファ自身の心が追いついていない。心は幼いころのままで知識という外側だけを育てて中身は―嬢ちゃん―のまま、はっきりと言えばティファは歪に育ってしまったのだ。
　優しく温かい心は成長させても、自分を大切にするという生き物にとってとても大切で基本的な部分がまるで駄目だ。その事もひっくるめてすべて話す。
「ポップがさっき言った通り、嬢ちゃんと俺と、もう一人が中核になって万能薬はこの世界に誕生したんだ。もう一人の方はお前達もこの後会うことになるだろうからそっちは省かせてもらうぞ。」
「構わねえ、どんなことでも受け止める。だから師匠全部話してくれ、俺達の知らないティファを。」
「分かった。」

そしてマトリフは本当にすべてを話した。
七つのティファと、十になった坊やたちの話していた途轍もない会話から万能薬が誕生するきっかけになった事を。
やがてそれはリンガイア王の耳に届き国家規模の一大プロジェクトに発展し、程なくアバンも加わったことを。

「師匠！其れってティファは島に来る前から先生と面識があったのかよ!!」
「落ち着けポップ。アバンが加わった事は嬢ちゃんは知らねえ。俺の独断で引き入れたからな。ロカの回復の手助けの一条になるって言ったら奴さん目の色変えてのめり込みはじめてな。」
「そうか・・・わりい、話しの腰折っちまって。」
「気にするな、ここからは嬢ちゃんも知らねえ話だ。」
あの時のアバンの驚きようは今でも覚えている。試験薬の切り傷の万能薬を実演付き説明と途中まで完成させた火傷用の万能薬の論文を読ませた時、血相を変えていた。
―マトリフ！こんなに凄い薬を誰が考案したのですか！―
アバンは即座にそれがマトリフ自身が考案したものでない事を看破した。
長い付き合いの中、一度も薬作りをしているところを見た事も聞いたこともないからだ。
―うるせえな、んな事よりもアバン、こいつが完成すれば体内迄傷が回っちまったロカの助けになるかもしれねえだろう。黙って手を貸せ―
―確かに・・・分かりました、出所はもう聞きません。協力をさせて下さい―
「それって・・」
「そうだマァム。一時俺とアバンが頻繁にロカのもとに通ったのは万能薬の試験をしていたんだ。ロカが今生きているのはそのお陰なんだよ。
三年くらいして目途が立ってアバンの奴も新しい弟子を取ってか

らは実際に関わらなくなったが、それでも俺と嬢ちゃん達はずっと文の遣り取りを大戦始る前までしていたんだよ。」
「ティファは・・・俺達全員と会う前から繋がっていたのか・・」
「どういう意味だよポップ。」
　話を遮るようにぽつりと言ったポップの言葉をマトリフが聞き返す。
「だってそうだろう師匠。その万能薬を中心に、師匠とアバン先生とロカさんと縁が出来た。つまり俺達とも間接的に関わっている・・・話聞いてて思い出したんだよ。俺がドジって崖から落ちて骨折した時、先生に飲み薬と塗り薬を使って治してもらったの。とても頼りになる友人からもらった薬だって。」
「そうか、あいつ俺がやった薬お前に使ったのか。」
「ああ、おかげですぐに治ったよ。俺は会ってもいない頃からティファに助けられていたんだな。」
「私も・・小さい頃に鉈で指を切ってしまった時に母さんがいそいで薬とベホイミを掛けてくれたおかげで失わずに済んだの。」
　本来ならそのまま千切れてもおかしくはなかったのを、マトリフから渡された薬のおかげで助かったのだと、マァムも話す。
　そしてクロコダインとは獣王の笛拾いの一件で、ヒュンケルとは育ての親同士のつながりで、バラン達とは五年前に・・・話せば話すほど、本当にティファは今起きている渦中の中心人物との関わり合いが凄まじい。
「あの実は・・」
「うん・・・僕もね・・・」
　・・前言撤回、凄まじい超えてあり得なかった。
　ポップ達の話を聞いて、メルルとチウまでもが、万能薬のお世話なっていると言ってきた。
　メルルは心無い占い客に石を顔にぶつけられ城の中庭に逃げ込み泣いていた時、城勤め見習に上がったニーナに出会った。
　泣いていた理由を聞いたニーナは憤慨しながら良く効く薬だと顔にかけてくれて、当時はホイミしか使えなかったメルルでも顔に傷跡

が残ることなく治療でき、チウの方は老師との出会い時、捕獲され村人に私刑を受けてボロボロになった自分を洞窟に急いで連れて行き薬を掛けられ程なく良くなったという。
「・・・俺があいつに渡した薬なら間違いなく嬢ちゃんが考案した打撃用・斬撃用の万能薬だ。」
「老師も、知り合いから貰った凄い薬だと言っていたので間違いはないかと。」
「ニーナさんもとても頼もしいおねえちゃんから貰った薬だと・・」
全員がティファの寝顔を見つめる。ティファは本当にこの一行の者達全てと、出会う前から繋がりを作っていたのだ。
ティファは、良くも悪くもすべてを繋げてしまう、なんと数奇な運命をもっているのだろう。
「あと一つ、嬢ちゃんの事で話しておくことがある。」
まるで自分達の出会いと成した途轍もない事が前座であったが如く、マトリフは重々しく話しを再開する。
「お前達は嬢ちゃんの悪い癖を知っているか?」
「ティファの?えっと、直ぐに無茶をする。」
「口が悪すぎる時がある。」
「状況をすかんと忘れて敵・味方問わず話してしまう。」
「・・・無謀すぎる時がありすぎる。」
「・・・・色々あんだな・・」
予想してたよりも悪い癖多すぎねえか嬢ちゃんよ
「それもあるが、決定的な事がある。」
「それってもしかして・・」
悪い癖が多々ある妹だが、決定的な事はあれしかないとダイが答える。
「怒りに駆られやすい事?」
ティファは許さないと決めた時は徹底的に許さない性質がある。一度それで島のモンスター達を侮辱したウォーリアー船長の部下を半死半生の目にあわし、二度と島に入れる事を許さなかった。
「そうだダイ。万能薬作ったもう一人の子が、バジリスクに追われて

瀕死の重体になった時、嬢ちゃんはバジリスクの群れを怒りに任せて惨殺したんだよ。」
「惨殺って師匠！其れは倒したって事だろう!!」
「いやポップ、あれは倒したとかそんな生易しいもんじゃねえ。ヒュンケル、お前さんなら倒したと殺したの違いが分かんだろう。」
「・・はい、助けたいと思うだけでなく、怒り憎しみにとらわれてしたのならば・・」
「そんな・・」
　あの優しいティファがそんな事をしたのは流石のダイ達にもショックが強すぎた。
　だが、今日見たマキシマムへの対応は、まさにそれではなかったか。
「いつか・・それが嵩じて魂が堕ちるんじゃねえかと心配していたが、杞憂であってくれてよかったよ。」
「師匠・・・」
　マトリフは本当に昔からティファを心の底から慈しみ案じていたのが良く分かる。
　怒りに駆られやすいところは変わってなくとも、優しいままのティファにマトリフは安堵し、優しく微笑み眠り続けるティファの頭を撫でている。
「それとな、もう一つあるんだよ悪い癖が。」
　その瞳を曇らせ、マトリフは呻くように話の続きを始めた。
「嬢ちゃんは自分を大切にしないんだよ、昔っから。」
「「「・・・・・・」」」
「どうやら全員心当たりある様だな。」
「最後は・・いつもボロボロになってる。」
「それだけじゃねえ、嬢ちゃんは自分の事を―外れた者―だと思ってやがるんだよ。」
「そんな・・」
　沈痛なマトリフの言葉に今度こそダイ達も言葉が出なかった。
　自分だとて竜の騎士と人の間の子ではないかとダイには言えるが、それとは違う感じを受け、ポップ達もティファがそんなことを考えて

抱えていたのかと思うと何も言えなくなってしまった。
「嬢ちゃんはどんな奴でも受け入れる。自分の中で許せないと思った者以外は、考えどころか種族・年齢問わずでだ。そうやって他人は受け入れるのに、嬢ちゃん自身は自分は世間には受け入れられる者ではないと断じて、最初に俺と会って以降一か月俺から逃げ回ったんだよ。」
その理由は自分がマトリフに怖がられて拒絶されるのが怖かったからだと程なくして知った。
「自分の力や知識が、並み以上だの神童だのでは片付かないことを承知していたんだろうよ。けどな、俺ともう一人の子は嬢ちゃんがどんなに途轍もなくても受け入れ共にいるって言ったんだよ。」
それこそがあの、世界は弱くも酷すぎもしないと贈ったあの言葉だ。
その言葉の意味は世界は素晴らしいと賛美のつもりで贈ったのではない。ティファがどれほどの事をしても誰かがきっと受け入れてくれる、だから自分を大切にしてほしいと贈った言葉だったのだ。
だが、ティファはそうとは受け取らず、良き世界を救おうと自身を削っているではないか。
世界を救いながらアバンの代わりを己に課し、一行を守る盾となり剣となり、陰日向なく一行の心身を守らんと

見舞客は死神⁉

ダイ達の剣となり盾となる、それを託したのはほかならぬ先代勇者アバン

あいつは何子供に甘ったれてやがると―料理人のティファ―の立ち位置を推測して憤慨したものだが・・

「俺は嬢ちゃんを大切にしているつもりでも、嬢ちゃんの優しさに甘えていたのかもしれねえな。」

アバンを責める資格は自分にないと、心底自分が耄碌したもんだとうんざりとする。

「嬢ちゃんが疲れていると知った時、さっさとここに来させればよかった・・」

強い後悔の念がマトリフを責め立てる。何故、そうしなかったのか？

大切な宝物を他人に知られたくなかった？なんと子供じみた愚かな妄執に囚われていたのだろう。大切な嬢ちゃんを下らない思いで放っておくなぞ何と愚かで・・・ハドラーに言われた通り、ただの役にも立たない爺になり下がった事か！

マトリフは身を切るように呻き泣き、わななく両手でティファの寝顔を包み込む。

許してくれと、請い願うように

「師匠・・そんなこと言ってもあの時ティファの居所分からなかったんだ！師匠のせいじゃ・・」

「そいつは甘えだポップ！」

―ビク！―

「嬢ちゃんは毎日鳩を送ってくれていた。その鳩をお前にトベルーラで追わせる手段があったんだよ・・・魔法使いはいつでも冷静に・・あらゆる手段を考えろ。」

ティファに会う手段を分かっていながら怠ったツケを、ティファに負わせてしまったのだから最悪もいいところだ。

だからこそ、ポップが自分を庇おうと、慰めようとしてくれる言葉

を拒絶する。そんな資格は自分にはまったくないからだ。
「俺も耄碌したもんだ。」
自嘲するマトリフを、跳ねのけられても言葉を出そうとしたポップの声よりも先に、深みのある声が洞穴に響き渡る。
「本当だよ。なんだってお嬢ちゃんの周りに居る者達は役立たず揃いばかりなのかな～。しかもお嬢ちゃんはそんな役立たずばかりを大切にして自分を削っていく。
見ていられないよ本当に。」
洞穴の入り口に腕を組んで肩を持たれかけさせたキルバーンが悠然と立っていた。
「グットアフタヌーン役立たずの勇者諸君。さっきぶりだね。」
ダイ達の小馬鹿にしたような笑みを瞳に乗せて
「お嬢ちゃんの見舞いに来させてもらったよ。」

少し遡った死の大地のハドラー執務室
あやつめ・・俺を庇いおって
あの時攻撃されても片手で受け止め鼻で笑って済ませる気でいたのだが、まさかティファが身を挺するとは。
あれはどちらを庇ったのか・・あの男か、それとも？
・・・馬鹿馬鹿しい、無論味方を庇っての事だろう。
背に庇われた情況も読めない役にも立たない男は、ただ味方だというだけでティファに庇われた。
その様を見た瞬間愚かな男をずたずたにしたくなった。
だがそれをすれば、ティファの行為が無に帰す。それに、敵でティファを倒したいと願う自分がこんな事を思うなぞ間違っている。
さっさとティファと戦い決着を付けたい。
そうすればこんな不可解な思いなど浮かばずにに済むものを・・
―トントン―
「ハロ～ハドラー君・・・何で今書類仕事しているのさ？」
「・・・何の用だキルバーン。見ての通り俺は忙しいぞ。」

構ってほしければミストバーンの所に行け。
ティファと先程話した通り、許された者達が迫害されないようにバーンに上奏すべく、早急に具体案を書類にお越し提出しようと奮闘中に変態死神を相手にしている暇はない。
「カリカリしているね～。」
「絡むな！うせ・・・」
―バン!!!!―
「怒っているのは君だけじゃあ～ないんだよハドラー君。」
キルはハドラーの執務机に左手を叩きつけ、右手の人差し指をハドラーの喉元にあて、冷たい瞳でハドラーのダークルビーの双眸を覗き込む。
「最後の最後でお嬢ちゃんをぼろぼろにしたでしょう。」
「何故それを・・」
ハドラーの問いにキルは右手を腰に下げているポーチに入れ水晶玉を取り出す。
「お嬢ちゃんが暴れて悪魔の目玉はいなくなったけど、僕自前の水晶で一人で続きを見ていたんだよ。」
それこそ最後まで
ひそりと冷たい声をハドラーの耳に落とし左耳を千切り取る。
「つ！」
「ふふ、痛いかい？あの子はもっと痛かっただろうね。」
「・・・・かもしれんな・・」
「おや潔いね。これからあの子の所にお見舞いに行くから見舞い品にしようかな。」
机に浅く座り、千切りとったハドラーの耳を弄りながらハドラーを嬲る。
確かに近頃のハドラーは自分も気に入って好きになっているが、お嬢ちゃんと天秤にかけるまでもない。
「見舞いというが、あやつのいる所を知っているのか？」
耳を千切られても顔色一つ変えずにハドラーは平然とキルに質問をする。

耳一つ、確かにティファの痛みに比べればどうという事もあるまい。
「あ～ふふふ、良いね君は。どんどん成長していく、実に素晴らしいよ。」
ハドラーから感じる気高さを感じ取ったキルは嬉しそうににんまりと笑う。この顔をした時は、向けられた相手は碌な目に遭わないとミストがいたらうんざりとするだろう。
「いいもの見れたご褒美に耳返してあげるよ。」
「・・・いらん！物凄くお前を殴りたくなってきた!!」
「つれないな～、お嬢ちゃんに慰めてもらうよ～。」
悪寒が奔ったハドラーにシ～ユ～と手を振り、ティファのポシェットに仕込んでおいた極小型の悪魔の目玉の会話から分かった居場所に空間を開け、愚かな勇者たちに挨拶をしたのだ。

良い子に免じてお見舞いだけで帰るよ

「魔法使いのお爺ちゃんが、お嬢ちゃんに呪いをかけたんだね～。」
「お嬢ちゃん・・・俺が嬢ちゃんに呪いをかけたって？」
「そうだよ。僕も知っているよ。バラン君の時にもお嬢ちゃんは―世界は酷すぎも弱すぎもしない、いつか許してくれる人がきっといる―って言っていたのをよく覚えてる。あの言葉をお嬢ちゃんに教えたのはお爺ちゃんなんでしょう。」
　洞穴の入り口の岩にもたれかかったままキルはマトリフを詰る。
　あんな言葉はお嬢ちゃんにとって呪いでしかない。
「てんめえキルバーン！ここに来たからには無事に帰れるたあ思ってねえだろうな!!ふざけた事抜かさずさっさと失せろ!!」
　妹の疲れの一人、ティファに贈られた素敵な言葉を呪いだなんて抜かしてタダでは済ませたくないが、今戦えばようやく深く眠りについたティファを起こしてしまう恐れがある。
　如何にラリホーマが掛けられていても、ティファは敵・味方より一流の戦士だとの評価を受ける程の実力の持ち主、であるならば本格的な戦いの気配がすれば跳ね起きてしまうのをポップは厭い、今すぐ倒したいキルバーンに立ち去るように怒鳴りつける。
「お断り、さっき言った通り僕はお嬢ちゃんのお見舞いにきただけだよ。戦うつもりないから通してよ？」
「ふざけるなキルバーン！表に出ろ!!今すぐ俺が・・・」
「よさねえかダイ!!」
　飄々としたキルの態度にダイが切れかけるのをマトリフがすぐさま止めに入る。
「お前さん達もだマァム、ヒュンケル、クロコダイン。今そいつに邪気はねえ、言った通りに来たみてぇだからむやみに戦おうとすんなよ。」
　この洞穴にはマホカトールほどではないにしろロカの村に掛けたのと同じ聖結界が施されている。
　その結界が反応しないという事はキルと呼ばれている妙な奴は今すぐどうこうしようと言う気はなさそうだ。丁度いい、自分も話に聞

いていたこいつの実際の所を知りたかったところだ。
アポロがティファの最大の疲れの原因だという見立てに間違いはないだろうが、ポップ達は別の者が最大原因だと口にした名前がこのキルバーンだ。
会う度にティファに絡み幾度も攫う変態死神野郎だとポップは言っていたが、その時のチウの反応がいやに気になった。まるでキルバーンはそこまで酷くはないと言いたげに。
今もダイ達は戦意を発しているが、キルバーンが見舞いに来たと言った時は意外そうではなく、どこか納得をしていたように見えた。
実際のこいつがどういう奴か知っておいた方が対処しやすい。
マトリフはティファの側を離れず座ったまま相手をする事にした。
「俺が嬢ちゃんに呪いをかけたってのはどういう意味だよ。」
「そのまんま意味だよ。お嬢ちゃんを甘い言葉で騙して人の世は素晴らしいなんて説いちゃって。結果お嬢ちゃんはその言葉を信じて、周り助けようとして寄ってたかって頼りにされちゃって雁字搦めになっているじゃないか～。みんながその子に甘えて理想押し付けて・・・可哀そうに、ボロボロになってしまって・・」
「ふざけんなよ手前!!」
「そうよ！ティファが疲れたのは昨日貴方がティファを攫ったのも原因の一つなのよ!!」
「マトリフさん！バルジ島にこいつ連れて行くからそこでならいいでしょう!!」
「分かってないな～君たちは。」
ダイ達の怒りに満ちた声にもキルは怯む気配はなく話を続ける。
「僕はね、お嬢ちゃんが半端にボロボロになる前に一度一気に壊してあげたかったんだよ。なんでだか分かるかい？」
「そんなの！ティファを攫いやすくするためだろう!!抵抗できないティファを死の大地の手前たちの所に連れて行くためのよ！」
「少し正解だけど違うよ魔法使い君。」
「んだと！」
「簡単な話だよ。複雑骨折よりも単純に折れた骨折の方が直り早いで

しょう。それにお嬢ちゃんが壊れている間に僕たちが勝利してお嬢ちゃんを悩ませる元を全部消していればお嬢ちゃんが疲れる事はもうないでしょう。そんな・・・お嬢ちゃん・・・」

滔々と自説を語るキルが不意に口をつぐみ、目を見開く。

いきなりな出来事にダイ達もキルの見ているところに目をやれば、いつの間にかティファがベットで上半身を起こしてい。

「嬢ちゃん・・・」

気配なく、それこそ手一つ分の位置にいたマトリフすら気が付かない程であった。

「キ・・ル・・?」

目の焦点は定まっておらず口調も気配もどこか虚ろで、まだ完全には覚醒に至っていないよだが、確実に異変を察して起きてしまったようだ。

嘘だろう!ラリホーマ掛けたのに!!

マトリフはティファの本当の底知れない強さを肌で感じ戦慄が走ったが、それ以上にティファの身が案じられる。これではティファをきちんと休めないではないか。

不意にキルが動き、ダイ達は即座に警戒して身構えたが、なんとキルが手を振りかざすと花が部屋に舞いだした。

花は一色ではなく色とりどりで甘い匂いが部屋を満たし始める。

花を部屋に投げかけながら、キルはダイ達の驚いた隙をついて空間を開けて一足飛びでティファの枕元に出現してにこりと笑ってティファに話しかける。

「夢だよお嬢ちゃん、ここはお嬢ちゃんの夢の中だよ。」

言った言葉はとんでもなかった。

「ゆ・・め?」

「そうだよお嬢ちゃん。ここが夢でなかったら今頃僕は勇者様達と殺し合いをしているよ。ここは夢の中で君の好きな人達しかいない素敵な所だよ。」

にっこりと笑いながらとんでもない嘘をしゃあしゃあと話し、ちゃっかりと自分もティファの好きな人に入れた図々しい事を平然

と言いだす。
・・・こいつ絶対にろくでなしだ
マトリフの中のキルの立ち位置は決まった。自分も若い頃はキル以上のとんでもない事を平気で言ったもんで、同族のような奴でろくでもない奴だとすぐさまに分かる。
だからと言って、今攻撃をすれば今度こそティファの目が完全に覚めてしまい、下手したら傷が治った体をおして自ら戦う姿しか目に浮かばない。
ポップ達に黙っているように目で制し、起きてしまったティファの体を自分に寄り添わせ優しい言葉を掛ける。
「こいつの言う通りこれは夢だ嬢ちゃん。安心してもっと深く眠っちまえ。」
癪だがキルの言った言葉に乗っかる事にする。
「ふふ、魔法使いのお爺ちゃんの言う通りだよ。夢も見ずに深くお眠りよお嬢ちゃん。」
攻撃はないなと踏んだキルは図々しくも大胆に、なんとティファの顔をそっと両手で包み込み顔を近づけ小さな貝の様なティファの耳に優しい言葉を流し込む。
野郎！戦場で会ったら今度は全員で倒しつくすとポップは歯噛みしながらも隣にいるダイを見やる。こいつ切れて戦おうとしたらひっ捕まえてルーラでこの場離れようと算段をしたのだが・・・ダイの表情は凪いだ海のように静かで何の感情も浮かんでおらず、かえって不気味であった。
そんな兄達を他所に、不意にティファの可愛い小さな笑い声が聞こえはじめた。
「ふふふ、キル・・優しい・・・昨日と違う・・」
たどたどしく、それでもはっきりとキル呼び、優しいと褒めている。
「ここはお嬢ちゃんの夢の中だからね。誰もお嬢ちゃんが嫌がる事はしないよ。」
お嬢ちゃんが僕の事キルって呼んでくれてる！嬉しいな～、もっと聞きたい!!

「お嬢ちゃん、夢の中で何がしたい？」
今ならティファの本心が聞ける。リクエスト取っておいて自分達の所に攫えたあかつきにはぜひ全部叶えて上げよう。
夢で・・・ああ、夢ならいいよね
「お茶会・・じいちゃんやダイ兄達や・・・」
ティファは大好きな人達とお茶会をしたいという。なんと優しいティファらしい事だとダイ達も異常なこの状況な中でも優しい気持ちになりかける。
それは次の言葉を聞くまでは。
「ハドラーもお茶会に呼びたいな・・・」
・・・・今誰と？
「お嬢ちゃん・・・ハドラー君も呼ぶのかい？」
「うん・・・夢でもいけない？」
キルの確認を否定ととり、ティファは悲しげな表情を浮かべている。それが本当にティファの望む事だと分かってしまった！
「いけなくはないけど・・・彼は魔王だよお嬢ちゃん。」
「うん・・一流の・・ふぁ～・・魔王様だ・・・ヒ・・ムも呼んだら喜ぶかな・・」
「・・・他に呼びたい人はいるかい？」
「・・さ・・ん・にん・・」
「三人・・・そうだね、夢の中なら、ガルダンディ君・ボラホーン君・ラーハルト君達三人もきっと来てくれるよ。きっと・・・バラン君も・・」
「うん・・ミストも・・・くる・・かな・・」
眠いよう・・でも・・・今言わないときてくれないかも・・・
ティファの言葉に、洞穴に沈黙が降り積もる。
ティファが自分達やバラン、そして亡くなってしまった竜騎衆達の名を上げるのは分かるが、何故ハドラーやミストバーンを上げているのだ!!
ハドラーはアバン先生の仇で、ミストバーンはティファを殺そうとしたばかりではないか!!

「お嬢ちゃん・・・嬉しいけどね、ミストも呼ぶのはなんでだい？」
流石にキルも今のティファの発言どうなんだろうと疑問を持ったが、ティファは微笑みすぐに答える。
「あの人本当は面白そうな人っぽいもん・・・」
大魔王のお料理番しているならどんなご飯作るも知りたいのだと、ウトウトしながら話を続ける。
「そう、ミストとお料理作りっこしたいの？」
「うん・・夢なら・・・戦う事も・・憎みあう事も・・しな・・く・・・ていい・・・」
最後まで言い切れずティファの体はくたりと力が抜けマトリフの膝にあたもを乗せる形に倒れ、眠りの底へと落ちていく。
本当の夢を見る眠りの中に。
夢の中で誰かが出て来たかいい事があったのか、微かに笑みを浮かべて。
「・・・・・・参ったねこれは・・」
「・・何がだよ。」
キルは生き物のように頭を掻く仕草をしながら溜め息の様な声を吐き出し、それをティファを寝かしつけるマトリフが拾った。
「惚けなくていいでしょうお爺ちゃん。この子が言った事問題あるでしょう。」
「ふん、手前がお呼ばれされなかったのが問題か。」
確かにハドラー・ヒム、そしてミスト迄出て来て自分の名が上がらなかった事は少々斬根ではあったがそこではないのをお爺ちゃんだとて承知しているだろうに、認めたくないのかね～。
「勇者様達を見てご覧よお爺ちゃん。ショックで固まっちゃってるよ。」
「・・・んな事はみねえでも分かってるよ。」
「だろうね。勇者一行の者がこんな考え持っていて人間達は許してくれると思うかい？」
キルの言う通りダイ達はキルがまだいるのにティファの発言に固まってしまった。

ティファはバランとの戦いの時に言っていたことがある。
心底愛した者であれば相手は天人でも魔族でも魔王でも大魔王でも構わないではないかと。
あの場にはレオナもいたが、ティファの立場を思いやってくれたのか、ティファの言ってしまった事を胸の中にしまっておいてくれたようで味方や謁見した王達から問題視された気配が一切見られない。
だが、ティファの今の考えが、ティファ自身が疲れきりほろりと漏らしてしまったら？
それが万が一人に漏れたらティファは今度こそ敵と通じる恐れのある者として囚われかねないではないか!!
う～ん・・・そうなる前に僕がここで保護しよう・・・
「それでもティファさんは戦うって言います！きっと最後まで一緒に戦うって言います!!!」
さしものマトリフもティファが心の底に押し込め秘めていた願いを聞き青褪め、ダイ達も言葉を失いキルが連れ行こうとしたその時、力強い声と言葉が洞穴に響き渡った。
「確かにティファさんは優しく戦いでは無い事を夢に望むかもしれませんが！それでも最後までダイ君達と一緒に最後まで戦うと言っていました!!」
チウは小さな体を震わせながらも、力強くキルの瞳を見つめ言葉を続ける。
昨日のロン・ベルクの昼食会で言っていたから。
料理人が強いのは、最終決戦の最後まで一行についていけるようにするのだと。
怪我を治せるように医術に通じ、料理で心と体を癒すのだと。
全ては皆で勝つために!!
「僕は弱いです！それでも僕もティファさんと一緒にダイ君達と最後まで戦います!!ティファさんが戦わなくていいように僕はもっと強くなります!!!」
チウの言葉はダイ達の固まってしまった心を揺り動かす。
「そうだよ・・・ティファは最後まで俺達と一緒なんだ！俺の大切な妹

で大切な俺達の仲間なんだ!!」
「こいつは大切な」
「私達の」
「俺達の」
「「大切な仲間だ!!」」
チうの放った言葉にダイ達の心に火が付き、キルの胸にも届いた・・・届いてしまった。
―ポオン―
「うん、君やっぱり良い子だねチウ君。」
キルが相手をきちんと名前で認識して、空間開けて自分の腕の中に攫う程に。
「へ!・・・わ!!」
「大丈夫、大丈夫。きちんと降ろしてあげるよ。今日はね。」
ニコニコととっても物騒な事を言う!今日はってどういう意味!!
「モンスターの君がお嬢ちゃんに一番近いんだね。今日は君に免じて大人しく帰るよ。その代わりこれをお嬢ちゃんに渡しておいてほしい。」
ティファの枕元にそっとチウを降ろし、良い子二人の頭をそっと撫でて満足そうに笑い、二通の封をした手紙をチウに渡す。
「なんですかこれは?」
頭を撫でられても嫌な顔をせず、渡されても迷惑そうな顔をしないチウにキルはニコニコ顔で答える。
「お城でお嬢ちゃんとお爺ちゃん達と約束した感謝状と、急遽書いたお見舞い状の二通だよ。
それ渡す時今日は大人しく帰るけど、次こんな事があったら僕がお嬢ちゃんを連れて行くって伝言もお願いね。チウ君も一緒だから安心して。シ～ユ～。」
やりたい放題し、言いたい事を言ってようやく帰った。
こっそりとティファのポーチに仕込んでおいた超小型の悪魔の目玉を回収して。
後に残されたダイ達は様々な事に呆然となる。

ティファの心の奥底のあの願いを、自分達はどう受け止めればいいのか。

キルが夢だと言う為に出現させた色とりどりの花が残り甘い匂いが漂う洞穴は、しばらく静寂が包み込んだ。

それぞれの・・

「そう・・・あの子マトリフ導師とも知り合いだったのね。
きちんと休めるなら何よりです。」
あの後様々にすったもんだがあった洞穴で、ダイとヒュンケルはレベルアップしてティファを付け狙う様々な者をぶった斬れるようにロン・ベルクの所に修行に向かい、居残り組はパプニカ王城に一晩泊ることになった。
「今夜だけは嬢ちゃんと二人きりにさせてくれ。」
遠慮呵責なく嬢ちゃんが辛い事を全て吐露できるようにと言われては、ポップ達とてティファの側に居たかったが、今夜一晩我慢する。
パプニカの城下町で宿をとっても良かったが、レオナも今頃は後処理で心労が溜まっているだろうと労いに来てみれば悄然とうなだれているレオナのいる居間に通されたポップ達はすぐさま労いの言葉を掛けまくってレオナの心を浮上させることに成功した。
レオナにとって、今日・・というよりは先程の事は大戦始まって以来の悪夢である。フレイザードの人質取られていたあの時の方がまだましに思えた程に。
「パプニカは他の国を蔑ろにするおつもりか?」
昨日勇者一行、ひいては料理人のティファを―全面的に―バックアップすることを誓い合ったばかりなのに、サミット主催国のパプニカの者が仕出かしたことはあまりにも罪が重い。
全面的にとは、ティファの敵味方問わず優しさを発揮する場面も盛り込まれているのは、昨日の竜騎衆達の話の後にリンガイアのサライ王・ベンガーナのクルテマッカ王が発案したことであった。
人の生来の気質は早々変われるものではない。ならばそのような場面に味方が出くわしたとしても、料理人が敵と通じているわけではないと末端兵士達にも徹底通達する段取りも組まれたところにあの騒ぎ。
まさしくアポロは各国どころか自国のパプニカに泥を塗ってしまったのだ。

謹慎では甘いのではないかとクルテマッカなどは言いたい顔をしていたが堪えてくれていた。大戦最中で決戦が近い時に他国の内政に干渉して話を乱すのを嫌ってくれたのは僥倖と言えよう。
どうするべきか喧々諤々になりそうなその時に、パプニカ王レオンが病の身をおして議会場に姿を現し、各国王に頭を下げ二度とないように戒める事を誓ってその場は事なきを得てくれた。
お父様に無理をさせてしまった。
自分が将として現場にいたというのに、側近中の側近でしかも三賢者筆頭を任せたアポロの暴挙を止められなかったのがなんと不甲斐無い事か。
しかもだ、リンガイアはアーデルハイド王のみならず、鬼岩城騒ぎで急遽国の防衛を息子に託し、王の護衛に馳せ参じた、勇猛でその名を轟かせる将軍バウスンが激怒して会議場に乗り込んできた。
道中でパプニカで起きている事態の全容を把握しようと情報収集をしている過程で、ティファに起こった事も全て聞いて到着早々王に挨拶をではなく猛抗議に来た。
「某はリンガイア国アーデルハイド王より将軍職を拝命しているバウスンと申します！ティファの事でお話したきことがあり各国の王達に拝謁つかまりたくまかり越した次第にて!!」
何事かと自国王も驚いていたが、バウスンがティファと―五年前―よりの知り合いであると聞いて謁見はそのまま許可をされ、詳しい話がなされた。
曰く、ティファと今代リンガイアの騎士団長をしている氷の勇者と呼び名の高いノヴァと交流があるどころかノヴァ自身の命の恩人であり、そして今世を助けている万能薬の発案者はティファとノヴァであると言う。
「あの娘は、間違っても魔王軍に与する者ではありませぬ！時折状況を忘れて妙な事をしてしまうところはあれど、あれほど心の清らかな娘は居りませぬ！」
数多の人間を見てきたバウスンをそう言わしめるほどのティファを・・・

最早バウスンがティファの良いところを話せば話すほどレオナは死にたくなり、全てが終わった後にポップ達が来てくれなければ本当に心が死んでいたであろう。
「姫さんよ、ティファだってきっと元気になるからな。」
「そうです、ですからレオナ姫様も。」
「ティファさんならきっと大丈夫ですから。」
パプニカ城は、ポップ達の優しい言葉に溢れながら更けていく。

一方魔王様執務室
「だはっはっはっはっは！実にあ奴らしい夢を持っているものだ。」
「あのねハドラー君、これって笑いごとにして良い類のものなの？」
「なんだこれしきの事で驚いているのか？あ奴に執着している割ではないな。」
なにそれむかつく
キルは死の大地に帰還して早々にハドラーの執務室にまいもどった。
ハドラーならば、ティファの心の内を知ったらどんな反応をするのか。
驚くのかあり得ないと一蹴するのかどっちだろう？
どちらでもなかった
聞いたハドラーは大爆笑してキルを驚かせた。
「無茶苦茶だが実にあ奴らしいではないか。茶会か、叶うならば一度はしてみたいものだな。」
何かハドラーまでもがとんでもない事言っちゃってる。
くふふ、本当に久しぶりに心の底から大笑いさせてもらったぞティファ。これほどの心持は二度目に会ったあの地底魔城以来か。
捕虜で敵しかおらず身に武具一つなかった状況で魔王にの自分に倒します宣言をしてきて以来に笑わせてもらったな。
あれは気ままで自然の様な物だ。今は疲れきり曇って大雨のようだが、早く元気を取り戻して晴れた顔で向かってこい。
「あのさハドラー君、一緒にお嬢ちゃん攫いに行かない？」

「・・・・何を言っているのだ貴様は・・」
「だってお嬢ちゃんはハドラー君好きみたいだし、ハドラー君だって・・」
「くだらんな。」
キルの誘いをハドラーは心底詰まらなさそうにキルを見て切り捨てる。
キルも強者である事に違いはないが、根本的に戦う者同士の心の在りようを理解していない。どこまで言っても自分とティファは戦う運命が待っている。
その中をいかに有意義にかつ相手を尊重して接している過程を楽しんでいるのに過ぎない。
そこを理解していないとは。
「話すことはもうない、出ていけ。」
ハドラーのにべもない断りを聞いて、キルはしばし思考しおもむろに立ち去った。
これ以上誘っても意味はない。お嬢ちゃんを攫うには、矢張り単独でやらねばならないか。

その頃のダイ達
ダイとヒュンケルはロン・ベルクの指南を受けてボロボロのへとへとになり、ダイは修行という名の扱き終了の合図と共に崩れ落ちて泥のように眠りに落ちた。
眠ってしまった弟弟子を抱え上げたヒュンケルは、その様子に内心は安堵している。
ティファの抱えている悩み、夢を知ってダイこそが一番苦しかっただろう。幼い頃より片時も離れずに育った双子の妹の心中を見抜けず、兄としての葛藤や苦しみも忘れて眠りについてほしい。
ダイをソファーに寝かしつけるとロン・ベルクが無言でゴブレットを投げてよこしてきた。
テーブルの上には数本の酒瓶がもう乗っている。
ヒュンケルも無言のままロン・ベルクの向いに座り、黙って注がれ

るままに酒を飲み干していき、次第にぽつぽつとティファとの事を話し始める。
自分とクロコダインの心はティファによって救われた事を、恋とは違う慕情をティファに抱いている事も余すことなく。
ダイ達にも救われているのは本当で、アポロにも恩義があるだけにヒュンケルも板挟みになり葛藤を抱えて辛かった。
あのフレイザード戦の後、真っ先にレオナ姫に自分達の助命嘆願をしてくれたアポロが、自分が慕いしティファに傷を負わせた事がどうしても許せずに・・・自分だとて、否！自分は殺すつもりでティファを傷つけた癖にだ!!
その事を詫びたくともティファは悲しい顔をするだろう。ならば、行動で返すほかないと心に決めているのに・・・
「なぜ・・・俺達はティファを助けてやれないんだ・・・・」
その言葉を呻くように絞り出して程なくして、ヒュンケルも机に突っ伏して眠ってしまった。痛々しく涙を流しながら。
眠ったか・・・
自分は生来誰かを慰めてやれるほど高潔な者ではないが、愚痴位は聞いてやれる。
そう思って酒を飲まして愚痴聞きしようと思ったら、ヒュンケルの心の深い所迄聞く事になろうとは。
「みんな・・・お前さんを案じてんぞお嬢さん。」
ダイ達が夕刻に来た時には何事かと思った。
顔は青褪めながらも、何かを強く決意した瞳を輝かせたダイとヒュンケルを見て、大魔王の篩どころではない何かが起きたのだと知って全てを話させたら、予想外なことだらけでティファに腹が立った。
あのお嬢さん！戦場のど真ん中で何やってやがる!!
アポロという男が、暴挙に打って出たくなった理由は分からんでもない。
周りの心情を丸無視したティファにも非があろうと。
そのティファが傷つき眠らせて知り合いの洞穴の所に保護された辺りでロン・ベルクは話を止めた。

「それでお前さんたちはどうしてここに来た。」
傷ついたティファの側を離れて。
「俺は強さが欲しい！妹がもう何物にも傷つけられずに守り切れる強さが欲しい!!」
「俺もだ。頼むロン・ベルク、俺とダイを鍛えてほしい。」
「・・・分かった、昨日以上に手加減しねえから死ぬ気で喰らいついてこい。」
その宣告通り、昨日の稽古以上にロン・ベルクは容赦なくダイ達を打ちのめし発破をかける。
「どうした、お嬢さんと世界を守るんだろう！これしきの事でへたばる奴に出来ることなのか？」
「つう・・・まだまだ！」
「もう一度!!」
日が暮れ月が昇り始めた頃に終了を言い渡し、眠るダイと潰れたヒュンケルにロン・ベルクは優しく毛布を掛けながらティファに説教するかと算段を付ける。
人に干渉されるのを極端に嫌い、自身も干渉する事を厭ってきた自分には珍しい事だが、ダイ達やティファはしたくなるのが不思議だ。

大勢の者達が案じるティファ自身は少しずつ目が覚め掛け夢を見始める。
「ティファ～父さんと母さんのお菓子無くなっちゃったよ。」
「それってダイ兄が食べたんでしょう。じいちゃんと今クッキー焼いてるから待っててよ。」
「おいガキンチョ、お前も向こうで飲みに行けよ。」
「誰がおかし作るのさガルダンディー。」
「ン？ニーナ作れないのか？」
「ラーハルトは作れるの？」
「こいつは作れるぞ、何せバラン様の身の回りのお世話をだな・・・」
「余計な事を言うなボラホーン!!」
ああ楽しい。私の大好きな人たちがデルムリン島に来てお茶を飲

んでる。
父さんも母さんも笑ってダイ兄の頭撫でて、ガルダンディー達が手伝ってくれてる。
テランの子供達なんて島の皆に夢中だ。
「お嬢ちゃん、お茶のおかわり貰えるかな？」
「キル飲むの早くないですか？」
「だって美味しいもの。」
「それは何より・・・ハドラーにも持って行った方がいいでしょうか。」
「一緒に行こうか。」
ハドラー来て爺ちゃん驚いていたけど、ヒムのハドラー讃美歌聞いたら毒気なくして受けてくれて嬉しいな。
みんな笑って・・・・あれ、アバン先生が一人でどっか行っちゃう・・
「先生、どちらに・・・」
「ティファさん。」
「はい。」
「―眼鏡―を預けますよ。」
・・・眼鏡・・・ああそうだ。
アバン先生眼鏡してない。自分の顔を触ってみたら・・・ここにある。
アバン先生と来た道を振り返れば何もなかった・・暗い空間だけ・・消えてしまった・・・
そうだ、私は自分で預かったんだ。アバン先生の全てを・・
「夢なのですね・・」
「ええ。」
「叶う事のない・・楽しい夢でした・・」
「・・・」
「もう起きます・・・・起きないと・・」
起きて、自分がなすべきことをします。だからどうか、悲しい顔をしないでくださいアバン先生
目が覚めたティファの双眸は、涙を流しながらうっすらと開いた。
ここはどこだろう？王城でも宿屋でもない。ロン・ベルクさんの小

屋でもない。
ごつごつとした岩肌・・・ここは・・
「目が覚めたかよ嬢ちゃん。」
この声は!!!
あり得ない声に、ティファの意識は一気に覚醒し、上半身を起こして声の方を見やれば、飲み物を用意しているマトリフの姿があった。
「今茶を淹れてやるから待ってな。」
優しく深い声・・・私の大好きな魔法使いのおじさん・・・今の私におじさんに会う資格ある？
中途半端に先生の真似事をしても、結局は救えない者達が大勢いて、挙句が今日の騒ぎだ!!合わせる顔なんてない!!!
上半身を起こしたティファが一瞬のうちに加速し、マトリフの横をすり抜けて洞穴を出ようとしたが阻まれた。
「ヒャダルコ!!」
咄嗟で呪力を練り切らずとも、マトリフは洞穴の出口を全て隙間なく氷りつかせた。
嘘でしょう！水も何もないのに全部凍らせるなんて・・・でも砕けないわけじゃ・・
「逃げても無駄だぞ嬢ちゃん。地の果てまでトベルーラで追うからな。」
そんな！そんな事したらおじさんが!!
マトリフの発した言葉に、ティファは攻撃の手を黙って降ろす。高齢のマトリフが今言った事をしてしまったら死んでしまうではないか！
「狡いか、俺の命で嬢ちゃんを脅す俺は。」
「ずるいよ・・・」
そんな事を言われたら、逃げられるはずもない！
「逃げねえでくれ・・」
俯き方を震わせ握りしめた両手から血の雫がしたたり落ちるティファに、マトリフは懇願をする。きっと泣いているだろう。
これしか手段がなかった。優しいティファを引き留められる手立

てはこれしか。
　それでも止めて、そして・・
「ダイ達から全部聞いた。旅の始まりから今までを全部。」
　後ろから抱きしめたティファの小さな体がびくりと揺れる。知られてしまった、大好きなおじさんに、自分が仕出かしてきた酷い事すべてを。
「それでもな、俺も坊やも、今はダイ達もお前さんの事が好きなんだ、大好きなんだよ。何があっても起こってもお前さんの事を嫌うものかよ。」
　優しく優しく、幼い子供の中に沁み込ませるような声に、とうとうティファの心が溶かされる。
　幽かに振るえ握りしめた両手は力を抜き、何かに縋ろうと前に出し、ティファはふいにマトリフに向き直りすがりつき声を震わせ泣き始めた。
「うわぁぁぁぁぁぁ!あああああ!!!」
　痛かった、自分の心だとて痛かった!!それでも・・・ダイ達には言えず、頼る人とてなく、不安で押しつぶされそうになっても止まるわけにはいかなかった。
　この世界を助ける。自分はそうなるべくして生まれたのだから・・・今更投げ出せない!全ては自分で始めた事だから!!
　それでも・・誰かにこうして縋り付きたかった、泣きたかった、誰かに弱音を吐きたかった!
　もっと早く嬢ちゃんをここに来させるべきだった
　ティファの泣き声を老体で受け止め、マトリフもいつしか泣いていた。
　なぜ、こんな状態になるまで放っておいてしまったのだろうと後悔の念に駆られながら。
　ひとしきり泣いたティファは次第に泣き声も弱まり、頃合いだとマトリフはティファをベットに上げ、自身も上がり枕元に腰を掛け足を延ばし、膝の間にティファを座らせる。
「ふ・・・く・・・」

「辛かったのに頑張ったんだなお嬢ちゃん。」
「う・・・ん・・・・・」
「今は休んでいいんだぞ。」
「お・・じさん・・」
マトリフの優しい言葉に、ティファは今まで辛く悲しかったことを少しずつ話し始める。
自分もアバンの死は兄達と同じくらい辛かった事を。旅慣れているとはいえ、ダイ達を抱えての旅はうまくいくか最初から不安があった事を。敵と戦う度に兄達が傷つくのが嫌で、それでも守りすぎて弱いままでは死んでしまうと心を鬼にして戦いに出すたびに感じた胸の痛みも。
少しずつ話し、とうとう核心的な話が出た。
敵である者達に心を寄せ、味方であるものを厭うなど間違っていると。
黙って聞いているマトリフの胸中は苦かった。
自分もさんざん人間の醜さに嫌気がさし、モンスターや魔獣の方が余程上等な生き物ではないかとさえ、ハドラー大戦時にも感じたものだが、今はその思いを胸に仕舞ティファの言葉を黙って聞く。
「こんなんじゃ・・アバン先生・・・かな・・しむ・・・」
その言葉を最後にころりと涙を流しきり、ティファの瞳は閉じられた。
・・・・アバン、俺は今ほどお前さんの死を恨めしいと思ったことはねえぞ。
大切な嬢ちゃんに重荷を負わせて逝ってしまった仲間を思い、マトリフはティファを包み込んで共に横になる。どんなことからもティファを守り切れるように。

お休み貰いました

ミャ～、ミャ～

静かだな。波の音と海鳥の声と海風の音しかしない、こんなに静かな時間を過ごしているのはいつ以来だろう。

マトリフの洞穴から少し離れた砂浜に岩があり、その岩を背もたれにしティファは座って海の方角を見るともなしに見る。別段海を見ているわけではない。

寄せては返す波を、空を自由に流れる雲を眺め、海鳥の声をなんとなしに聞いてもう三十分近くがたっている。

そのすぐ横にはガルーダがあたりを警戒しながらティファを見つめている。

ようやくティファが休める。何もしなくていい、休みたいだけ休めばいいとガルーダは己から話し掛ける事無く、ティファのしたいようにさせている。

朝見た時、ティファは人間の老人に甘えていた、まるで鬼面道士のブラスに甘えるように。ああいうのが側に居てほしいものだとずっと願っていた。

ティファを心の底から安心させて甘やかせる者が。

昨夜洞穴にて大泣きした後、マトリフによりかかるように寝たティファの目はなかなか覚めなかった。

いつでも朝日の気配で目を覚ましていたティファが。余程心労が溜まっていたのだろうと戻ってきたポップ達が相談をしている声でティファの目が覚めてしまった。

「うん・・・ポップ兄・・・」

「あ！起こしちまったかティファ。」

「うんん・・・あ、あのね、マトリフさんとはその・・・」

「いいよティファ。」

目が覚めて開口一番、自分とマトリフ導師との事を説明しようとし

たティファを、ポップは止めながらティファの居るベットに腰を下ろす。
「昨日師匠から全部聞いてるよ。お前と師匠の事丸ごと全部だ。だから説明はいらねえよ。」
「そう・・・」
説明はいらない
そう言った時ティファは何処かホッとしたような顔をした。自分達がどれだけティファによりかかり、事態に対して一から十まで手とり足取り教わってきたのかよく分かり内心自分の不甲斐無さに落ち込むポップだが表には出さず、大切な妹の頭をゆったりと撫でる。
撫でればいつもならば嬉しそうにしてくれるのだが
「どうした?」
何か嫌がっているように見えるのは罪悪感のせいか⁉
「・・・魔法グローブいや・・」
「ああこいつか。」
普段滅多な事では外さないグローブなので付けている事も時折忘れてしまいがちな代物だが、ティファはその感触を嫌がったようだ・・・自分に触られたくないと言われなくてポップは内心で泣きながらガッツポーズをし、手袋を外して改めてティファを撫でればえへへと可愛く笑ってくれる。
「ティファ、笑い顔可愛いわよ。」
「マァムさん・・・からかわないでください・・」
「そんなことないですよ、本当に可愛いですよねクロコダインさん。」
「そうだな、マァムやチウの言う通り可愛いぞティファ。」
「もう!クロコダインまで!!」
メルルはフォルケン王の身の回りの世話をする為にパプニカ王城に残り、ポップ・マァム・チウ・クロコダインが戻ってきて、昨日とは違う柔らかな気配を出しているティファに嬉しくなり、ついつい構ってしまう。それをティファが恥ずかしそうに真っ赤になっている姿がまたなんとも愛らしいが、それを言えば起こりそうなので褒められないのが残念だ。

ある人物以外は
「本当だぞ嬢ちゃん。」
「おじさん・・・」
「ほれ、レモン湯に砂糖入れたから飲め。こぼすんじゃあねぞ。」
「・・・こぼさないもん。いただきます。」
天下無敵の大魔導士マトリフは、毛を逆立てそうなティファに臆面もなく可愛いと言い切り、完全子ども扱いをしている。
ティファがどれほど強くなろうが、王侯貴族に物言える立場になろうがそんなことは知った事ではない。いつまでも心配の種が尽きない可愛い嬢ちゃん以外の何物でもなく、たとえ明日世界が滅びようともその思いが揺るぐことは無い。
可愛い愛弟子も嬢ちゃんに軍配を上げて枕元から引っぺがし、その位置に堂々と収まる。
だが追い立てられて立たされたポップも何となくマトリフの気持ちが分かるので文句は言わず、黙ってその場を明け渡す。
「うまいか嬢ちゃん。」
「うん、きちんと味感じるから大丈夫だよおじさん。」
「そうか、ならマァムに美味いもんうんと作ってもらえ。」
「・・・マァムさんに？」
「なんだ嬢ちゃんしんねえのか。おいマァム、お前さん一度も嬢ちゃんに何か作ってやったことないのか？」
「や！・・・えっとその・・・全部ティファに料理任せてたの・・」
「・・・おい・・」
「あ！おじさん!!私職業料理人だから！それが正しいんだよ・・だからね・・」
「分かったよ・・だがな嬢ちゃん、今日は全面的に料理作りは無しだ。万能薬作りも俺がいるからやるんじゃあねぞ。」
「・・・そしたら・・・お部屋のお掃除を・・・」
「あのねティファ、マトリフおじさんの言う通り今日はティファは何もしなくていいからお休みよ。お昼にうんと美味しい海鮮スープ作ってあげるから。」

何もしないのは申し訳ないとティファが言う前にマァムは努めて元気な声で話し掛ける。
マトリフに言われるまで、ティファに料理を振舞おうと一度も思わなかった自分を恥じて落ち込みたいが、そんなことをしてもティファは喜ぶまい。ならば明るい笑顔になってもらうようにするのが一番だ。
「はい、ごちそうになります。」
ティファは本当に嬉しそうにはにかむように笑い、よろしくお願いしますと座ったまま頭を下げる。
そのほのぼのとした様子にポップは涙ぐみそうになり、クロコダインもチウも嬉しそうに見守る。
「嬢ちゃん意外と食べるから作る量間違えるなよマァム。」
こう見えてもティファはよく食べるのだからとマトリフはアドバイスするが、マァムも聞いていたポップ達も首をかしげる。
「ティファってそんなに食べたか？」
「ん？嬢ちゃんは朝からよく食べてたぞ？」
「・・・おとといの昼食会や夕飯の時も・・・他の時も私たちの半分以下ね。」
「嬢ちゃん!!!!!」
「み！」
「一行の料理人掲げてる分際で、手前の体調管理出来てねえとはどういう了見だ!!」
「あう・・・」
マァム・ポップの思わぬ暴露話にマトリフは自分の体調管理どうしたと大激怒し、恐れをなしたティファはもしょもしょと毛布を被り丸まって隠れてしまった。
何だこの可愛いティファ！・・・デルムリン島でもこんな子供っぽいことしてるんの見た事ねえぞ。なんだろう、毛布ごとギュッと抱きしめたくなってきたポップとは対照的に、マトリフはため息をつく。
まったくしょうがねえな嬢ちゃんは。嫌な事あると直ぐ逃げるか隠れちまって。

「痩せてる女はもてねえぞ嬢ちゃん。」
　優しい声を出しティファの背中の辺りをポンポンと優しく叩けば、ティファは亀のようにひょっこりと毛布から顔を出した。
「おじさんも痩せてるの嫌い？」
「そうだな・・女っていうか、どの種族も性別問わずに多少はふっくらしていた方がよかねえか？」
「・・・頑張って食べるね。」
「そうしろな。」
「ん・・」
　旅が始まってから様々な事を考えて・・考えすぎて食欲が減退していたが別に体調に響かなかったので放置していたが、ベットの周りを見まわせば自分を心配しているポップ達の顔がよく見える。
「マァムさんのお料理・・・楽しみに・・」
　あれ？なんでだろう、少ししかお喋りしていないのに眠い・・
「寝ちまえ嬢ちゃん。」
「でも・・」
「俺がいるんだぞ。」
「・・・うん・・ね・・る・・」
　俺がいるんだぞ
　ティファな何の説明も不要とばかりに再び眠りにつく。小さな子供が、親に包まれて安心しきって眠るように。
　その様を見たポップは見ていて胸が痛くなる。
「師匠はすげえや。」
「何がだよ。」
「いやさ、ティファは師匠の言う事全部聞いて・・・頼りにして・・俺達本当に頼りなかったんだなって改めて思うわ・・」
　ポップの身を切るような告白を、マトリフ鼻で笑い飛ばす。
「馬鹿言え、俺からすればお前さん達も嬢ちゃんもけつの殻がようやく取れたひよっこだぞ。俺の事いくつだと思ってんだよ。」
　じき百歳になろうかという自分からすれば、ポップもティファも等しく可愛い子供でしかない。扱いに何の差があろうかと。

「へへ、そうだよな。俺達も頑張って早くそう言えるくらいにならないとな。」
「そうね、とりあえず起きたティファにうんと美味しいもの作るわね！」
「僕も手伝いますよマァムさん。」
「俺は・・・薪拾いくらいならできるぞ。」
「お願いね二人とも。」
良い奴らだなこいつらは。仲間が倒れても迷惑な顔しねえでみんな良い子だ。
それにしても、嬢ちゃんの疲れは大分深刻だな。
旅の間マァム達の半分の量しか食べていないという事は、見ていないところでは三食食べていたのかすらはなはだ疑問になる。少しの会話で疲れるのも体力的にと言うよりは心労が原因だろう。
ポップ達も極力明るく振舞ってはいるが、端々で案じる気配が漏れ出して、察しのいいティファが拾ってしまっている。
そこは何とかなろう。ポップもマァムも特訓をするので日中は食事以外会う事はなく、その間にティファの心の回復に務めればいい。
その事とは別に、マトリフは頭を痛める。
たっく、嬢ちゃんの奴この期に及んでまだ隠し事してそうだぜ
昨日心労を吐露してくれたが、全て話している感じが全くしなかった。
まだ奥底に隠している、それも途轍もない事が。
そんな時にあいつのお見舞いだの感謝状だのは見せねえ方がいいな。
心が乱れてる時に、キルバーンから渡された感謝状とお見舞い状は見せない方がいいと、ダイとポップ達が処分する前にマトリフがチウから取り上げ預かる事にして戸棚に隠している。
如何に敵からであっても、これは嬢ちゃんの物だ。きちんと悩み事話し終えるか心が元気になるまでお預かりだ・・・・・渡せるの何時になんだか頭痛くなる。
マトリフの勘は当たっている。

ティファもまさか大好きなおじさんに転生者でこの世界に起きてしまう災厄を全て知っているとは言えるべくもない。

他にも山ほど隠し事をしているが、最大の悩みを聞いたのはダイ達でもましてマトリフでもなく、この後に出会うとんでもない人物が聞く事になる。

料理人の休暇編

メドローア

パプニカと書いて呪われた国と読むんじゃないか？
パプニカ城の上を下をの大騒ぎ・・・もとい大混乱になると思うと気の毒になる。
「ちょっくらパプニカ城に行ってくるぞ、留守番できるな嬢ちゃん。」
ティファはマトリフ達が朝食を食べている辺りで再び目を覚まし、起きてポップの横に座りマァムからパンを受け取りもしょむしょと食べている時に爆弾発言が投下された。
「・・・・・おじさん・・・みんな仲良く・・・」
「あんな嬢ちゃん。」
ティファもマトリフの性格はよく知っている、敵には一切の情け容赦がない。そして自分とノヴァはマトリフの特別枠に入れてもらっているのも。
それを踏まえれば今回の一件でアポロはもしかしたら敵認定されてしまったかもしれない。
敵にはとことん容赦のない怖いおじさんが王城に行ったらアポロはどうなるのか考えるだけで怖ろしい。
それがなくともパプニカ城内は間違いなく大混乱に陥るだろうと予言できてしまいそうだ。
「パプニカ城の様子と、レオール王の見舞いに行ってくるだけだよ。」
「そう・・・おじさん・・王侯貴族の人達その・・」
「あん？嬢ちゃん何でそのこと知ってんだよ。」
「・・・ノヴァが教えてくれたの・・・内緒だよって。」
「ったく坊や情報かよ。まぁあいつの言う通りではあるが、俺はこの国の王は嫌いじゃねえんだよ。当時の馬鹿大臣達俺が出ていった次の日に速攻で頸にしてくれたくらいの英断できる奴だ。・・・まぁそれでも二度と宮仕えなんて御免だがな。」
「そっか、行ってらっしゃいおじさん。」

まぁ本当はアポロって奴の面を実際に拝みたいだけだ気だがな。嬢ちゃんはこの辺素直に騙されてくれて助かるぜ。
マトリフがあくどい事を考えている時ポップ達には当然のように疑問が生じる。
ノヴァって誰だ？
とはポップ達は口が裂けても聞きなかった。
ティファに説明させるという一番の心労事をさせるわけにはいかないのでぐっと我慢の子。しかしやはり気にはなる！
ノヴァは世間様では有名人で、大きな場所でそれなりの学者に聞けば分かるし屈強な兵たちに聞いても分かる程の押しも押されぬ人気がある。
片や万能薬の第一人者として、片や北の国の氷の勇者としての勇名を馳せているが、残念ながらポップ達は目の前の敵たちとの闘いの日々で世間の話を聞いている暇はなかった。
だがティファとマトリフの話を聞いているとどうもあった時期が一緒の様なので、鋭敏な頭脳を持つポップは何となく察したので、後でもしかしたら情報をマァム達に流してやるかと算段する。
「師匠、城に行くなら俺とマァム連れてくといいかもしんねえぞ。」
「あ？なんでだよ。」
「俺達門番の人と顔見知りになったの、通りやすいから連れてってくれよ。」
自分達が言った方が絶対にレオナは安心するだろうとは口が裂けても言えないが、ここで断られたらこっそり先回りする心づもりだ。
ティファ程でないかもしれないが、確実にレオナの心も疲弊しているのは昨日で分かっている。レオナも大切な仲間だ、守ってやりたい。
「分かったよ、その代わり帰ってきたらすぐに特訓だぞ。」
「おう！望むところだ!!」
「・・・ポップって特訓好きよね。」
「ポップ兄、あのね・・・頑張っても無理しないでね・・私が言えた義理じゃねないけど。」

「おう！無茶はするけど無理はしねえよ!!」
「・・・・クロコダインさん、ポップの奴が何言っているのか分かりますか？」
「んっむ、まぁいつもの地獄の特訓を乗り切るだけでやめておくという心意気では・・」
「それって無理とどう違うんですか？」
「・・・俺にも分からんよチウ。」
　ポップのへんてこな慰めの言葉にチウは疑問をクロコダインに聞いてミニコントな様相を呈していた。
「分かった、無茶なら傷は治せるから頑張ってね兄。」
「おうよ！頼まぁ。」
　・・・・ポップとティファも物騒なコント化している気がすると、常識的なマァムは頭を痛める。もう少し自重という言葉をマトリフおじさんにも一行の皆にも持ってほしいと思うのは贅沢だろうか？
「おじさん、ポップ兄にどんな修行させるの？瞑想か反対に魔力限界まで放出させて底上げする系？」
「いんや、俺のとっておきを教えてやるよ。」
「・・・え・・・」
「やった！師匠すげえの教えてくれんの・・・」
　―ダン!!―
「駄目だよおじさん!!!!!!!!」
　マトリフが奥義的な魔法を教えてくれるという言葉にポップは喜び勇んだが、ティファの大音声が止めに入る。
「駄目だよおじさん！そんな大呪文撃ったらおじさん死んじゃう！駄目だよ!!ティファが作ったお薬でおじさんの内臓は少しは回復したかもしれないけどそれでも駄目だよ！撃たないでよ!!」
　机を勢い良く叩きながら立ち上がり、涙をぼろぼろと流しながらティファは座ったままのマトリフに近づき縋り付き、幾度も駄目だと言い続ける。
　きっとおじさんがこれから兄に教えるのはメドローアだ！

こんな大事な事を忘れていたなんて・・
原作ではハドラーとの篩の前に、ヒム達の強さを知ったポップがマトリフに相談に行き授かった大呪文。
あれが無ければこの先は辛い戦いが更に大変な事になるのは頭では分かっている！それでも、今ここに、目の前にいる大好きなおじさんと引き換えにしてほしくはない！もう原作とこの世界の差異が酷すぎてもしかしたらアバンは生還しておらず、この場でマトリフが息絶えてしまう事だって十分に考えうることだ。
・・・耐えられない、自分の何と醜い我が儘を言っている事かは分かっている。魔王軍に勝つには、大魔王の野望を阻止するには戦力強化は正しいと分かっていてもそれでも、マトリフの死を見るかもしれないことに耐えられない。
「嬢ちゃん、俺がこれからどんな技ポップに教えるのか知ってんのかよ。」
泣き縋るティファの頭に手を置きながら尋ねる。
「・・・おじさんの呪文は世に出回ってない、それは威力が強すぎて生半可な人には扱えないからだってノヴァが教えてくれた。決戦近いこんな時だもん、その中でも一番の大呪文しかない。」
「・・・・・お前さんはもう少し馬鹿な方がよさそうだな・・」
「無理だよ・・・分かっちゃうんだもん。」
ノヴァ情報だけではないが、全てを知らないマトリフにその言い分は通ったようだ。
マトリフは自分の膝にティファを横座りにさせて包み込む。
「あんな嬢ちゃん、俺だってそうそう簡単にくたばらねえよ。しぶといんだぜ俺は。」
「そういうのは何も分かっていない人達に言ってよ。おじさんの心音昔より弱いの聞こえてるよ。なに？ティファの診たてにケチ付けるの？」
「・・・そこは騙されてくれよな、とにかくポップには今まさに必要な・・・」
「師匠、特訓は師匠の口頭だけで教えてくれ。後は自力で手前で習得

するから。」
「ポップ、！あの呪文は・・・」
「へ！師匠だって誰かに教わった訳じゃあないんだろう？だったら口頭で教えて貰える分楽だ。だからティファ安心しろ、師匠に魔法は撃たせねえから。」
「ポップ・・・お前・・分かったよ、言ったからには是が非でもものにしろよ。」
「分かってるよ師匠。」
「へ！あったりまえよ!!」
「兄・・ありがとう・・」
　先程まではしゃいで子供になったポップは何処にもおらず、たくましい男の面構えで宣告をし、泣きじゃくる妹の頭を何度も撫でて落ち着かせる。
　師匠もティファも、もう充分世界のために頑張ってきたんだ。なら次は俺が・・俺達が頑張んなくてどうするのだと覚悟を定めて。
「嬢ちゃん、それでいいか。」
「うん、御免なさい話を遮って。おじさんこれからどんな呪文教えるの？」
「お前達はハドラーの禁呪生命体のフレイザードを覚えてるか？」
「あの氷と炎の奴か。」
「・・・元同僚だからな。」
「私会ってない。」
「そうか嬢ちゃんはそん時いなかったな。ハドラーがそのフレイザードを作った時、やっこさんのレベルが低くて助かったよ。」
「それってどういう意味だよ師匠。」
「俺がこれから教える呪文はその氷と炎を合わせた技でな、名前はメドローアだ。」
「ほ・・・正反対の呪文混ぜたら反発しあって危険じゃねえかよ！」
　ポップは真っ青になって、先程の言葉を撤回したくなった。一歩間違えればこの世とおさらばだ!!
「だからそこは上手い事やるんだよ。とにかく、今レベルや中身が格

段に上がっちまったハドラーが作っていたら、新技でそいつに作らせそうだからレベル低い時で助かったって言ったんだよ。」
・・・おじさんの推察あたってそう。この話聞いたらハドラーいそいそとフレイザード二世作ってこっちにぶつけてきそうだ。
嬉々とした顔が目に浮かび思わず笑ってしまった。
「ティファ・・・俺があの世に行きかけるのはそんなにおかしいかよ・・」
「あ！違うのポップ兄！ハドラーならね、間違いなくおじさんが言ったこと笑いながらやりそうだからね。つい目に浮かんじゃって。」
「そうか、今のあいつはやりそうに見えるか。」
「うん、死の大地で親衛隊の一人に会ったけどとても強そうだった。」
ティファは死の大地で出会ったヒムの話をマトリフ達に余さず話した。
昨日の敵と同じオリハルコン製だが、中身は雲泥の差がありヒムが月で馬鹿はすっぽんである事、隙のなさそうな身のこなし、決断力もさることながら敵ながらにあっぱれな性格だったと。
「話していて気持ちの良い奴だったよ。だから怖い、心に余裕のある敵ほど怖いって思った。それを生み出したハドラーの実力は間違いなく超一流の魔王だよ。」
「あんな嬢ちゃん、情報は助かるがやっこさん褒めてどうすんだよ。」
「ティファ・・・お前な・・・」
「あ・・・あとね！そんなすごい技おじさんどうやって使えるようになったの!!」
ヒム情報は喜ばれたが、ハドラーの話を出した途端雲行きが怪しくなったので、ティファは手近な話題で逸らそうとして直ぐに後悔する羽目になった。
面白い話じゃねえぞとマトリフもティファの思惑に乗って話してくれたのは、マトリフ自身の苦い悔恨の念だった。
サポートすべき勇者が、自分達を置いて自ら魔王と共に封印をされた事を淡々と話していく。
「ハドラーだけぶっ壊しちまいたかったんだがな、既存の呪文全部撃っても駄目だったんだよ。」

大賢者とまで言われておきながらこの体たらくと自身に絶望し、其れでも諦めずに開発したのが炎と氷の反発作用を指向性攻撃にしたのがメドローアであると。
生半可な思いでこの技受け取れねえ。
この一つの技には、アバン先生たちの思いの全てが詰まっている。魔王をなんとしても討ち果たさんとした勇者、その勇者を助けられなかったと強く後悔した仲間たちの思いが全て凝縮された技だ。
淡々と話しながらも、悲しい気配がそれを物語っている。
「おじさん・・聞いてごめんなさい、ごめんなさい。」
「いいさ、もう昔の話だ。あの後ハドラーも倒した昔の話だ。」
「でも・・」
「師匠。」
ティファの謝罪をポップが遮る。大事なことを伝えるために。
「話してくれてありがとうよ。俺、その大呪文の全部受け継ぐよ。」
「ポップ・・・ありがとよ。」
「ああ、だから安心して俺達に後託してくれよ。長生きするためにもさ。」
決意を告白し、それでもなおポップは軽やかに笑って見せる。
先代達の思いは全て今代の勇者一行が引き継ぎ世界を守ってみせると胸に秘めて。
魔法使いの決意の炎は自然とマァム・チウ・クロコダインにも移り、燻ぶってしまった戦いへの、そして世界とティファを守るあの決意の心に再び火を灯す。

優しいが故に

ティファも落ち着きマトリフ達も朝食を終え、ティファに留守番するように言おうとした矢先にティファからお願い事をされた。
「あのね・・・おじさん達出掛けてクロコダインとチウ君も特訓でいなくなるでしょう？」
「ああそうだ。大人しく寝てろよ。」
「・・・・浜辺で散歩しちゃ駄目？」
「嬢ちゃん・・・・」
「ティファ・・・・」
今は眠気もすっかり覚めてしまったので、ベットで寝ていても寝れそうにもなく、暗いところでは嫌な考えしか浮かびそうにもない。
明るい日の光の下に行きたいと言うティファの願いも分からんでもないが・・
「―ティファよ寝ていろ、散歩などもってのほかだ。大人しく・・―」
「ガルーダがいても駄目？」
「―ん・・・いやしかし・・・―」
「駄目？」
ティファの身を案じていたガルーダはずっと洞穴の外で待機し、ティファに大人しくするように促したいが、つぶらな瞳で弱々しくお願いされるのには弱い。
「嬢ちゃん・・・分かった、その代わりあまり洞穴から遠くに行かないように。何かあったらすぐにガルーダの指示に従って逃げるんだぞ。」
「分かった、すぐそこの岩がある海岸にいるね。」
「そうしろ、ガルーダ頼んだぞ。」
ティファに様々な注意を与えてマトリフ達はルーラでパプニカ城に向かえば案の定城は大混乱に陥り、すぐさまレオナがやってきた。
家臣一同の前で片膝をつき最上の礼をレオナがすれば瞬時に他の者達もそれにならい、立っているのはマトリフ達だけとなる。
先頭のマトリフは当然とばかりに礼を受けるがポップとマァムの

表情筋がひくりと動く。
マトリフのパプニカでの影響力の凄まじさを目の当たりにし、これって自分達でフォローできるのかはなはだ不安になってきた。
「お姫さんよ、謝罪はいらねえよ。昨日俺が言った事を守ってくれればそれでいいんだからよ。他の奴らも立ってくんな。」
あれがアポロか
レオナに話しかけるが目線はレオナのすぐ後ろに控えている黒髪の逆立ったアポロを鋭く見つめる。
青い顔をして身を震わせているという事は絞られ相当身に沁みているようだ。ならば自分がこれ以上でしゃばる事はないし・・表には出さないが、どう考えても三流魔王と和やかに話した嬢ちゃんも悪い。
喧嘩両成敗って言葉に従うか。
「レオール王とフォルケン王の見舞いもしてえんだが。」
「分かりました。フォルケン王も昨日の夕刻に目を覚まされ今朝も食事を摂られました。
案内にエイミを付けます、私は父の見舞いを整えてきます。」
マトリフの影響はすさまじく、次期パプニカ女王を顎で使ってしまってる。その事実にポップ達は言葉もなく顔色を白黒させる。落ち着いたら絶対にレオナ労おう。
「師匠何でフォルケン王の見舞いに？」
「そうね、私達はとても気になるけどマトリフおじさんはどうして？」
「俺はテラン王とも面識あってな。昔っから病弱なもんで薬処方してやった事もあんだよ。」
「フォルケン王様って昔から病弱なのか。」
「ああ、会えるならもう一度会っておきたくてな。それに嬢ちゃん何にも言わねえがフォルケン王の事も案じてるはずだ。」
「それはそうかもしれねえ。」
「だろう、フォルケン王の体調が良くなっていたら嬢ちゃんへのいい土産話が出来る。」

「マトリフ様、ティファさんにこの度の様々な事誠に申し訳ないと・・」
「良いさ、お前さんの気持ちも分かってる。ひいてはティファとダイの今後の為にやった事だろう。人質の件ならやった奴が悪い以外ないだろう。」
マトリフが見舞いに来て早々、ポップ達を見たフォルケン王は開口一番頭を下げる。
あの後、自分が眠ってしまった後どうなったかをメルルに詳しく話すように命じ、事の顛末から疲れ果てたティファの話を聞いたフォルケン王は自分自身を責めた。
心労の原因は間違いなく自分も入っているだろうと。
「お前さんは元気になって、ティファに会う時笑って礼を言ってくれりゃあいいんだよ。その方があいつは喜ぶ。」
「そうですね・・・そうしましょう。」
「メルルって言ったな、お前さんも時間あったらティファの見舞いに来てくれ。」
「はい！必ず伺います!!」
「だってよポップ、良かったな。」
「な！何言ってんだよ師匠!!メルルはティファの見舞いにって!!!」
「はいはい分かったよ、それじゃあなフォルケン王。ゆっくり休んでくんな。」
「ええそうしましょう。ポップ君、早々にメルルを行かせるから頼んだよ。」
「王様迄！」
「フォルケン様!!」
「ほっほっほ、若いとは良い事じゃよ。」
マトリフはわざとメルルとポップの話を引き合いに出し、思惑を察したフォルケンも乗っかり若い二人を弄る。
最初部屋に入ってきた時の重い空気は軽くなり、ポップ達は笑って寝室を後にする。
「我が国の者達は本当に貴方には迷惑をかけてばかりいる。誠に申し訳ない。」

次のレオール王の見舞いも謝罪から始まったのには勘弁してほしいとマトリフは心中で呻いた。
自分は謝罪が欲しいのではない、ただティファを守れればそれでいいのだから。
だがレオール王は矢張りマトリフには負い目がありどうしても謝りがちになってしまう。
ハドラー大戦後に再三再四頼んで出仕してもらったマトリフを、当時の大臣達が嫉妬心から追い落としにかかり、うんざりとしたマトリフは何も言わずに城を出奔し当分行方をくらませた。
レオール王は戦後復興に忙しく、マトリフから助言を貰っていたがまさかそんな最中で策謀が蠢いているとは露知らずに知った時には驚きを通り越して激怒し、関わった大臣達一味全て、罪明らかになった即日に城から叩き出したがそれで済んだとはとても思えず今日まで来て、昨夜悪意なく、元を正せばとも思うが、滔々マトリフの逆鱗に触れたものを出してしまって最悪の心情であった。
「まぁ配下の責任はトップのお前さんにあると言えばそれまでだろうし、生憎そんな事はティファは望まねえよ。」
「その料理人・・・ティファは・・」
「ああ、あのアポロって奴を罰した日には自分のせいだって気に病みむな。お前さんにも思うところはあるかもしれんが当人が反省してんなら当面の間お互い会わない様にしてくれりゃそれでいいし、今回の件はティファの方にも落ち度があらぁな。」
「分かりました、もし会えるのであれば私も一度その者に会いたいのですが。」
「ほう、なんでだ。」
王自らが会いたいという言葉に、少し飄々とした気配を出していたマトリフの全てが鋭いものに変わるが、レオールとしては会って自分が少し謝して有耶無耶にしてもらおうなどの疾しいところは無いので気にせず話を続ける。
「他意はありません。ここ数日眠れなかったのを料理人が処方してくれた薬を飲んだら朝まで起きることなく眠れたのです。」

「薬・・・ティファのか。」
「はい、良く効く薬で助かったと一言お礼がしたい。」
じっと見つめてもレオール王の瞳は揺るがずに、確かに少しばかり顔色も良い。
生き物はきちんと眠ってこそ様々な活動を行える。さらに言えば眠れない者が病の回復などあり得ない。胃の激痛と体の痛みで近頃眠れなかったのが一昨日と昨日はよく眠れたとレオール王は久方振り笑ってレオナと話をしようとしたが、とんでもない事の連続でそれどころではなくなってしまったが、直接ティファにお礼が言いたい。
「分かった。ティファに伝えておく。それじゃあ・・・」
「お待ちくださいマトリフ様。」
辞去しようとしたマトリフを、医師長のロムスが引き留めた。
「レオール王、不意の発言をお許しください。」
「どうしたロムス。」
「マトリフ様に二・三尋ねたい事があるのです。」
「ふむ、よろしいかマトリフ導師。」
「俺は別に構わねえよ。」
「マトリフ導師もよいとの事だ、発言を許すロムス。」
「有難く、マトリフ様はもしやして万能薬発案者のお一人で、もしやティファさんもですかな?」
「そうだが。」
「それは何より。実はティファさんに処方していただいた王の薬の中に調合が少し難しいものがあるのでマトリフ様のお知恵を借りたく。長い話になるのでできれば別室にて。」
「・・・俺は良いが・・」
「私も構いません。ロムス、よく話を聞くように。」
「かしこまりました。マトリフ様こちらに。」
「おう、ポップとマァムは先に市場で買い出してろ。帰ったら飯にするんぞ。」
「分かった。王様お大事に、姫さんも今度ゆっくりとな。」
「これにて失礼します。」

「それで俺に聞きてえ事って本当はなんだよロムス。」
ポップ達を追い出し、ロムスと別室に行ったマトリフは開口一番にロムスの真意を問いただす。
ロムスの為人はそれなりに知っている。患者第一の良い医者で、薬の事であれば患者が安心できるように患者の目の前で習い聞くような性格のはずだったと記憶している。
それが別室にとは何事かと。
「その前にマトリフ様に会わせたい者が・・・ちょうど来ましたな。」
話し始めた時扉のノック音がし、ロムスはすぐさま開けて入ってきた人物をマトリフに紹介する。
「この方は面ガーナの戦車隊長でアキーム殿です。アキーム殿、あちらにおられるのがマトリフ導師です。」
「お噂はかねがね、某は・・・」
「面倒な挨拶はいい！ロムス、なんだって俺とこいつを引き合わせた。」
ベンガーナ戦車隊長と自分を引き合わせていったい何がしたいんだ。
「マトリフ様におかれましては疑問が浮かぶのは当然かと。某とロムス殿は実はティファさんの心労の一つを知っているかもしれないのです。」
「・・・なんだと・・」
「マトリフ様、まずはこちらにお掛けになってこれをご覧ください。」
ロムスはマトリフに椅子をすすめ、腰かけた後書付の紙を二枚マトリフに手渡した。
フォルケン王以外の各国の王達は来るべき決戦に向けて早々に帰国の途につき、アキームだけがマトリフに説明するために居残りをクルテマッカに命じられて残っていた。
ティファがマトリフの保護下に入ったのはパプニカ城にエイミがもたらし程なくして各国の王達にも伝わっていた。
それ故にアキームはマトリフに説明役として残された。
二枚の薬の処方を見比べていくうちにマトリフの体は震え、遂には

額から汗が流れた。
最初ロムスの方を見ていた時は、ロカの薬を強くしたものだと分かった。回復重視ではなく、痛み止めと眠れる効能を優先したものだと。
王の病状はそれ程までに酷く手遅れなのだと知りマトリフも胸が痛くなり、ティファは尚の事小さな胸を痛めた事だと思いを馳せる。
しかしその思いはアキームの薬処方を見ていっぺんに吹き飛んだ。
何だこの処方は！こいつは助けるための薬じゃねえ!!死の薬だ!!!筆跡は・・・嬢ちゃん！なんでこんなものを作った!!
「昨日アキーム殿より、この薬は世に知られてはいけないものかと相談を私が受けたのです。」
苦しそうになるマトリフの表情を伺いながらロムスが話し始める。
先の鬼岩城戦後ほどなくして勇者一行の料理人から大量の万能薬と的確な怪我の処置方法を記載されたメモが届き、大勢の者達が命を取り留めた。
幸いにも、渡された安楽な死が訪れる薬を使わずに済んだが、これは世間には生涯秘した方が良いかと他国にも名が届く賢医ロムスに内密に相談をし、その後に主たるクルテマッカ王に報告をした。
「王も・・・ティファ殿を思い泣いておられました。」
それ程ティファのしたことは痛ましい事だ。
あの頑固で猜疑心が強く、他者を思う心が少し薄いクルテマッカに涙を流させるほどに。
知識があるとはいえ、たった十二のそれも心優しい女の子が、助けられない事を想定したとはいえ死の薬を用意したとは。
「こんな事を続けていてはティファ殿の心が疲れて当たり前です。出来る事ならば、いえ、二度とはしてほしくは無いと言うのが我らベンガーナ一同の思いであり王のお考えです。」
「そうか・・・分かった。アキームさんよ、教えてくれてありがとうよ。二度とは作らせねえから安心してくれ。」
「はっ！王にも必ずお伝えします。」
「ああ、頼まぁ。」

辞去の挨拶をしたかどうかマトリフは覚えておらず城を後にした。
それ程の衝撃をマトリフは受けたのだ。
嬢ちゃん！なんだってこんなものを作っちまったんだよ!!
ロムスの処方された薬も、突き詰めていけば死の薬に辿りつく怖ろしいもので、この薬は自分だけが処方し他者には語らず墓場まで持っていくと言ってくれたロムスに感謝をする。
心優しく、どこか弱いままのティファがこんなも死の薬を作って、作っただけでも悲しみむだろうに、使われてしまっていたらと思うとぞっとする。あのティファに耐えられる訳がない。
隠していた事の一つはこれか、嬢ちゃんの奴俺にも死の薬を作ったとは言えなかったか。
マトリフも同じ思いに囚われる。ポップ達には絶対に知られてはならない。
優しい一行の料理人がこんな薬を作ったと知れば精神的ダメージが計り知れない。
こうした隠し事の積み重ねでティファは疲弊したのかと思うと堪らなくなる。
周囲を思いやり、助けるために己を削っていく・・・いつかティファが全てを使い切り消え果てしまいそうな怖れと共に。
しかしティファの最大の心労を聞き届けたのはマトリフではなく、あり得ざるべき、途轍もない人物が聞き届けていた。

予期せぬ客はいつもの事だけど・・・・

暖かいな～

ガルーダを伴い、浜辺の岩に身を持たれかけて座っているティファは何もせず意識をさまよわせる。

ガルーダもティファが沈黙を望んでいるのを察して黙って側に居る。

日の光を浴びるだけでも体にはよかろう、ゆっくりと休むがいいティファ

ガルーダも、ずっとティファを休ませてやりたかった。幼き頃から世界を飛び回り、大戦時はずっと気を張って過ごしてきたティファが今ようやく心の底から休めている。

このまま・・・戦いの世界から身を引きダイ達だけに任せて欲しいのが本音だが、ティファ自身が承知すまい。

守れる力があるのに何もしないのは嫌だと、頑固者だ本当に。

その性質を変えられないのであれば、今は今だけは静寂ので微睡み休むがいいと心の底から願う。

「・・・ガルーダ、なにか気配する。」

「―・・・どこからだティファ―」

「右の岩場の水の中ににひっそりと隠れてるのがいる。」

「―分かった、ティファはここを動くな―」

「うん。」

ティファは時折自分よりも気配を鋭く感じる時がある。

少し離れた岩場の陰に、背びれが傷ついたマーマンがいた。

「―ティファ、怪我を負ったマーマンだ―」

「・・・連れてきてガルーダ。」

疲れているのに治したいのかティファは。

ガルーダは溜め息をつきながらも気配の重圧でマーマンを圧して気絶させ、ティファの下に咥えていきそっと浜辺に降ろす。

「怪我痛そう、えっと、薬と包帯は・・・薬だけの方がいいか。」

ゆっくりと体を起こしたティファは、のんびりとした様子でマーマンを診察し的確に薬を塗っていく。その気配は何処か嬉しそうだ。
矢張りティファは優しい。生来このように誰かを何かを助けるのが性に合っている・・・戦いに出るのが間違っているのだ。
「ガルーダ、手当て終わったよ。イルイル～。」
手当てを終えたマーマンをティファはモンスター筒に入れガルーダに差し出す。
「ガルーダ、この子を島にお願い。」
「―・・・・ティファ・・―」
「邪気にあてられたらこの子がしたくない悪い事させられる。あそこなら島の内湾にいれば破邪の結界が効いているから。」
「―ではティファも一緒に―」
「私はいかない・・・行ったら、出たくなくなる。この子のためにお願いガルーダ。じいちゃんの様子も見て来てほしいの。」
「―・・・・分かった、その代わりここを動くなよティファ、それか洞穴に戻っていろ。―」
「ここで待ってる。」
「―そうか、行ってくる―」
モンスター筒を口に咥え、ガルーダは一路デルムリン島を目指す。
早く行ってきてティファの側に居なければ、変態的な敵が来た時バラバラに引き裂くために。
行ってくれた、ガルーダは優しいな。
ガルーダを見送ったティファは、また岩にもたれて沈思する。一人になると、塔でのモンスター達の声が忘れられない・・・生きているのを喜んでも、嬉々として魔界に帰っ行ったたわけではない。
半分ほどのモンスター達が、地上にいる事を望んだのだ。
あの明るいものをずっと浴びていたい
暗き地に帰るのは嫌だ
何故この地はこれ程までに恵まれているのか
最後の言葉は怨嗟のように、どろどろとした情念を感じさせるほどモンスターの言葉が分かるティファはモンスター達の近くにいた

ためにその声を拾ってしまった。だがどうする事も出来ない、残っていいとは言って上げられるはずもなく、どうしようもない。
己の奥底に隠している悲しみの悲鳴に耐え切れず、ティファは両手で顔を覆いすすり泣く。
暫くして、何やら大勢の気配を感じ顔を上げてみれば、大勢の小型モンスター達に囲まれていた。
その周りをマリンスライムやキメラ達がわさわさと取り囲む。
ガルーダがいたので遠慮して出てこれなかったが、ティファの優しい気配に魅かれて様子を窺っていたのだ。
洞穴の裏手の森から出て来たのかドラキーマやホイミスライムもいて、中には傷を負っている仔達もいる。
みんな、私を心配して来てくれたのかな？
小さい頃から野宿先でよく知らないモンスターと直ぐに仲良くなり一緒に寝ていたのはしょっちゅうだ。
モンスターは基本優しい、弱った自分を心配してくれる。
一昨日の鬼岩城戦で怪我した仔もまだいたんだ。
救護所にいる仔達みたいに手当てしてあげたい。
「傷のある子はこっちにおいで、手当てして上げる。」
両手を広げ来るように促し、マジックリングからあるだけの薬と包帯を出しのんびりと手当てをする。
「この薬は沁みるからね。」
「我慢出来てえらいね。」
「もう大丈夫だよ。」
優しい言葉を掛けられ手当てされ、寄ってきた子達はますますティファにべったりとする。
手当てをしていてもスライム達は肩に乗ろうとし、一角ウサギはちゃっかり膝に乗っている。
温かい温もりにティファがふと微笑むと、自分の背後から影が伸びた。
影はモンスターの物ではない、長身の人型であった。
誰？キル・・・ならどうしたらいいんだろう？

誰が来たのか分からないティファは不安で心音が高まるのを感じる。
ともかくも見て確かめようと後ろを振り返るとそこに居たのは
「・・・・・神様？」
呆けた声で思わずついて出た言葉に自分で驚いたけど、言われた相手も同じくらい驚いてる。だけど、白くて長い髪に白磁のを思わせる肌、年輪のように深く掘り込まれた皺は却って威厳をこの人物に持たせ、思った事が口をついて出ちゃったんだもん。
普段の自分なら物凄く驚き取り乱しているかもしれないけど、今は疲労感で頭にもやがかかった状態なのか、手当て以外の事したいと思えない。
―きぃ―
「あ、ごめんね。前足に包帯巻いたら終わりだからね。」
ティファ背後に立っている人物を一旦放っておく事にし、モンスター達の手当ての続きを再開する。攻撃してくる気ならとっくにしている、してこなかったのならいいだろう。
その様子を神様と呼ばれた者は興味深げに見下ろす。
どう見ても自分はそこらにいる魔族に見えないだろうに、神様と驚いた後は特に何も言ってこず、あまつ放っておかれる経験は初めてで新鮮味を感じる。大抵の者は自分に媚びへつらうか忠義心を示すか、敵対者でありば自分を見ただけで絶望するのが普通で、このような扱い生まれて初めてかもしれない。面白みを感じたのでしばらく様子を見よう。
全ての怪我を手当てしおえたティファはもう一度首を後ろに向ければ、矢張りまだいた。影があるから当然そうだろうが、なぜ今この人物がこんなところにいるのだろうか思わず首を傾げてしまう。

大魔王バーンの出番はもう少し後だろうに

料理人と大魔王の邂逅は・・

この者は本当に勇者一行の者であっているのだろうか？

七千年の年月を経て、地上の動向を探るために有史以来初の勇者一行が誕生してから様々な者達を見てきたが、こんな者はいなかった。

自分はどう見ても放っておいていい類のものではなく、そもそも魔族の自分と戦をしている最中に無防備に背を向けモンスター達の手当てに勤しんでいていいのだろうか。

それも警戒している気配が全くない。

ティファに面白味を感じながらも、こんなに警戒心の無い者が最前線で戦う勇者一行の者でいいのだろうか奇妙にも老婆心がうっかり働きそうになってしまう。

怪我をしたモンスター達の手当てを終えたティファは再度振り返る。

その顔にはやはり警戒心の色は全く見て取れない。

まじまじと自分を見上げ、緊張感の欠片もないのはどうした事か？

バーンがティファの行動に驚いているように、ティファ自身も今の己の心情に戸惑いを覚えていた。

なんでだろう、この人怖いとちっとも思えない。

自分はこの人を知っている。勇者一行とこの世界の最大の敵大魔王バーンだ。

原作では自分が魔界の神に君臨し続ける野望の為に地上を消滅させて、太陽を魔界の物にしようとした者。野望に満ちたそれこそ自分本位の邪悪な者のはずなのに・・・何でだろう、この人の気配はとても落ち着く。

本当なら勇者の仲間として、妹として敵として戦わないといけない人なのに、戦う心が全く湧かないのは何故？

ああこれでは、戦いも満足に出来ない自分はみんなのお荷物になるばかりの役立たずではないだろうか？

悩みに苦しみ心を縛られ動けないティファに焦れたのか、バーンが動いた。

待てど暮らせど自分に何者かと尋ねる気配もなく、埒があきそうにないので自身であける事にした。
ティファの両脇に手を差し入れ持ち上げ、手頃な岩に腰を下ろし小柄で華奢な体を膝の上に横座りにさせて。
だがこれでもティファは悲鳴を上げるどころか戸惑いもせず、じっと自分を見ている。その瞳に、恐怖はおろか警戒心の色すらも浮かんでいない事にバーンは戸惑いながらもティファに言葉をかける。
「そなた名は？」
その声にティファは今生で、まして前世でも味わったことのない多幸感に包み込まれた様にうっとりとしてしまい、常の平常心の全てを取り払われてしまった。
それはー魂の奥底ーにあるナニカが反応したのだと、この時のティファは知る由もなく・・
ああ、なんて深くて魂に響くような声を発する人なんだろう。
おじさんの声が魔法の様な声なら、この人は夜の深みを音にしたようだ・・
「ティファ・・・」
バーンの声と気配に魅了されたティファは、敵のそれも大魔王と知っても名を教えてしまい、気をよくしたバーンはそのまま知りたい事を聞きだす。
「ティファ・・・そなたは一体何に疲れ果てているのだ？」
「・・・」
「そなたは何か途轍もない重荷を背負っているように見えるが、何を抱え込み苦しんでいる。」
「私は・・・」
それは、誰にも言えず、それでもー誰かーに聞いて欲しい心を掻き乱す懊悩・・聞かないで欲しい、それでも誰かと共に共有してほしい相反する思いを崩されかける事にティファは恐怖する。
これはー自分の仲間・味方ーには絶対に知られたくないから・・
「話してみよ、話すだけであれば誰にも害はなかろう。」
「わ・・わたしは・・・」

「ここには人間は誰もおらん。言ってもよいではないか。」
深く囁くようにそそのかす様にするりと心の内側まで入り込む声に、そして的確に己の痛みを知ってなお聞き届けてくれるという誘惑にティファは自制心を崩され、知られる恐怖よりも打ち明けて楽になりたい想いが勝り呻くように言葉を発した。
私は・・・・・

全てを話しきり、ふらりと自分の膝から落ちかけたティファを咄嗟に腕に抱き留め包み込みながらバーンは驚愕の念をティファに抱いた。
改めて見るティファは、頼りなくか細く見た目はそこらの子供の何ら変わりない。
では中身は?これまでの発言や行動から、英知を称えた賢者と遜色のない者と評価してきた。それこそ先代勇者アバンと同じくらいに警戒をしていたが、ー今ー聞いた内容から真の中身はこれ程までの優しさを内に秘めた者であるのを知らしめられた。
知恵有りこの世の酷さ醜さを見て実際に惨い目に遭ってきて、それでもなお優しさが損なわれていないのは評価に値する。
どうりでキルが目を付けミストが持て余すはずだ。
二人も自分同様無知なる者か敵意・悪意・憎悪に満ちた者達を相手

ばかりをしてきた。
キルはこの優しさと慈愛に魅かれ、ミストは今までの敵対者と違いすぎるのに戸惑いから恐怖を覚えたと言ったところか。
この場に集うモンスター達も、ティファが涙を流すのに胸を痛め案じている様だ。
今までの自分達と敵対した者とは違い、敵意ではなくまして悪意など欠片がなくとも敵の大軍団を大混乱に陥れた厄介な者は、かほどに優しい魂をその身に収めた者であったとは。
このまま連れ帰り、飼い殺して愛でるかそれとも・・・

「・・・ファ・・ティファ・・・・ティファ。」
「ん・・・起きろよティファ。」
「んあ、ポップ兄・・・あれ？」
「お前此処で寝たら・・・・まぁいいか、ガルーダが見ててくれたんだから。」

「あれ?ガルーダ・・」
「―我が帰ってきた時は眠っていたぞ。ブラスからの伝言だ、一人で無茶をせず周りにきちんと頼るようにと―」
「はりゃ・・・あのね、ポップ兄、モンスター達いなかった?」
「ん?俺がお前の所に来た時はガルーダしかいなかったぞ。」
「―・・・我は追い立てていないぞ・・・―」
「あ~ガルーダ強いのに遠慮したんだよ。あのね、怪我してる仔達手当てした後
急に眠くなって寝ちゃったんだよ」
「そうか、あんま疲れることすんなよ、でも朝より顔色良くなってんな。寝るのが一番か?」
「ううん、そろそろ寝坊助返上したい・・・それよりに兄・・」
「どうした?」
「あのね、洞穴迄でいいの・・・・負ぶってくれるかな・・」
ティファは顔を真っ赤にさせて俯きながら小さなお願い事をポップにする。
願われたポップは聞いた瞬間に瞳を歪ませ涙が堕ちそうになるのを我慢し、無言で背をティファに向けかがんで両手後ろに広げてくるように促す。
こんな小さな・なんでもない事かもしれない。それでも、ティファが自分に何かを願ってくれたのが嬉しくて、いじらしくて堪らなくなる。
その背にティファはゆっくりと体を預ける。
何と軽くて子供特有の温かさを感じる。初めてデルムリン島でティファを負ぶったことが思い出される。
アバン先生がいて、単純に弟弟子と可愛い妹が出来たと喜んでいた自分。
あの時の自分は先生がいるから怖い事など何もなかった。それからたったの数か月で世界を守るために戦っている。
自分達はなんと遠くまで来たのだろう。
「ティファ・・・」

「ん？なあにポップ兄。」
「―みんな―で勝とうな。」
「・・・うん。」
「お前は一人じゃねえ、俺達がいる師匠がいるロン・ベルクさんや王様達も皆お前が好きなんだよ。」
「・・・・嬉しい。」
「嬉しいか？」
「うん・・・・嬉しい・・・・嬉しいよ兄。」
二人が笑いながらボロボロ泣く様を、ガルーダは嬉しそうに瞳を細めて見守りながらゆっくりと歩く。
何故かは分からないが、ティファに纏わりついていた悲しみの気配が大半消え失せている。眠るのが一番の薬なのだろうか？
ああ、心が軽い。たくさんの人達に話したくない事無理やり聞かれたりやらされたり、色んな事起きすぎて頭パンクしかけたけど、今はそれを重く感じない。・・・・けれど何だろう？なんで私そんな事だけでここまで疲れちゃったんだろう？
・・・・・色々やりすぎて疲れ溜まったのかな？
これからは話したくない事や、したくない事はなるたけ嫌だと言える様にすればいいか。
うん、そうしよっと。

「バーン様、こちらにおいででしたか。」
「何事だミスト。」

「はっ、ハドラーが重要な話があり謁見したいと。」
一人死の大地に戻ったバーンはハドラーと初めて顔合わせをした太陽の間でワインを飲みながら先程の事を思い返していた。
連れ行くのもいいが、今連れ帰ってもティファは頑強に抵抗し自分の物になる事はなく面白みに欠ける事この上なく無粋であろうし、意味合いがない。
それならば待ってみよう。
ワインの如く、機を熟してから収穫するべきか。
「悪夢の蔦を切り裂き、眠りて忘れよリャナンシー。」
右手をティファの額に当て短い言葉を詠う。
これでティファは忘れる、記憶を取り出しまた自在に戻すことが出来る今や自分だけが使える技の一つ。
自分に会った事、そして心の奥底に秘めていたあの悲しみの一切合切を一時忘れさせ、その後に返そう。
次に会う時はおそらくはハドラーが仕掛けると言っていた篩の後、つまり決戦時に敵として会う時。
万が一門番たるハドラーが敗れて自分の元に来た時、会ってすぐにこの記憶を返そう。その時にあの者は耐えきれるだろうか？
ー仲間ーには決して言えない苦悩を思い出し、その上で尚も魔界の神たる自分を屠ることになる戦いをすることが出来そうにもない。
しかしその時になってみないと分からぬものだが、戦う道を選んだとてもあの者の心は保つ可能性は低く、簡単に捉えられるやもしれぬ。
そうすれば、労せずして勇者達を殺せよう。
あの一行の力の柱がダイであるなら、精神的な柱はティファの方。
今攫ってみるよりも、堕ちた料理人を見せつけた方が効果が高かろう。
便利な仔猫を見つけられたものだ。
久方振りに自然と笑みが零れる。先の事を楽しみにするなど、あの太陽を手に入れんと願った日以来ではなかろうか。
バーンは視線をグラスから太陽に向ける。

そう、あの太陽がなくば我らに未来はなく、それどころか時間もない。我等だけが暗い地に押し込められかほどに理不尽な目に遭わせられるのを何故許せると思うのだ神々よ。
様々な複雑な思い怒り憎しみや怨嗟はあれど、先程触れた温かいティファの温もりを思うと笑みが崩れる事はない。
記憶を返した時、悲しみの底に沈み自分の腕の中にまた堕ち、そして勇者達を崩壊させよ。
バーン様が笑っておられる。
ミストが長年主として仰ぎ仕えてきたが、真の笑顔を見るのはこれで三度目だ。何か良き事でもあったのだろうかと、ミストは不思議そうに主を見ていると不意にバーンから声をかけられる。
「してミスト、ハドラーの用向きは分かっているのか？」
「はっ、塔の篩にて恩赦を与えられたモンスター達が、魔界にて迫害されぬように各行政に置いて悪魔の目玉から直々にバーン様のご命令を発してほしいとか。」
「ふむ、分かった。その話を詰めるために会うと直ぐに伝えよ。」
「かしこまりましたバーン様。」
バーンは広大な領地を持ってるが故に、いちいち書類で重要案件を伝えるには時間がかかりすぎる為に重要拠点には目玉を設置しているが滅多な事では使用されない。
それこそあの五年前の大混乱以来の使用になるだろう。
皮肉な事に、仕出かした本人が二度もそれを使用させるとは考えつかない、それこそあり得ない話だと、バーンはまた可笑しみを感じ、心の底からの笑みが浮かぶ。
ふっふっふ、勇者一行の者の発案を魔王が受け入れ大魔王たる余が実行するとは誠におかしな話だ。
だが、あの娘の願いならば嫌ではない。この事を知ればあの娘はきっと喜び微笑むのだろう。

しかし、数百年振りにハイ・エントを使用して些か疲れを感じるとは情けない。

精霊がイメージと違いすぎる

ハグハグムグムグ
パン柔らかくて美味しい、スープ出汁が効いててこっちも美味しい。
浜辺からポップに負ぶわれて洞穴に戻った時、丁度特訓を一段落終えたクロコダインとチウ、そして偶然特訓に居合わせたバダックも洞穴の入り口に到着をしていた。
「あ！ティファさん!!」
「どうしたティファよ、珍しくポップに甘えているのか。」
「もぅ・・・クロコダイン・・・からかわないでください。兄降りるね。」
弄られて真っ赤になったティファは顔を赤らめながらもポップから降り、バダックの前に立ち深々と頭を下げる。
「この度はお騒がせをして申し訳も・・・」
「ティファ殿。」
ティファは塔での一件から、詳しくは知らずともあの後騒ぎになった事は察しがつくのでパプニカ関係者のバダックに誠意をもって謝罪しようとしたのをバダックは途中で止める。
「ティファ殿は確かに少々騒ぎになる事をしましたがなに、それ程の事でもありませんぞ。」
「しかし・・」
「ティファ殿、本当に悪いと思われるのであれば何もかもが自分が悪いと抱え込みすぎずに周りを頼ってほしい。こんな爺でもそれなりに出来る事はあるもんですぞ。」
「それは・・・」
―ポン―
「失礼かもしれぬが、貴女は一人で戦っているのではない。大勢の味方と戦っている。苦しい時こそ一人にはしませぬよ。」
「・・・はい・・・・はい。」
伊達に先の大戦は生き延びておらず、様々な事を見聞きして生きてきたバダックとしては、ティファが塔でしたことはアポロが騒ぎを起

こすほどの事ではなかったと思っている。
それ故にアポロがティファに仕出かした数々の事の方が申し訳なく思う程で、反対に詫びを言いたいがそれではティファの心を苦しくしてしまう。謝罪が出来ないのであればせめて年長者として励ましの言葉を掛けたい。
忠言とも励ましともとれるバダックの年長者としての言葉に、ティファの心に温かさを吹き込む。
頭に置かれたバダックの手からも温もりを感じ、まだ硬さを残すティファの心をもほぐしていく。
自分は決して一人じゃない。
用事があるからと帰ったバダックと入れ替わりに、市場での買い物を終えて大量の荷物を持ったマァムがマトリフと共に戻ってきた。
「おじさん!!」
マトリフを一目見て、ティファは猛ダッシュでマトリフの下に駆け寄り腰にしがみつきえへへと笑う。
「って・・嬢ちゃん俺の歳考えてくれよな。あの時よりもさらに爺になってるんだぞ俺は。」
「へへ、でもおじさんにしがみつきたかったんだもん。」
あの時、幼いティファを抱っこ出来た五年前よりも自分の筋力は衰え、安泰にティファが大きくなっていると暗に言ってもちっとも反省せずに笑うティファを仕方がない嬢ちゃんだと包み込む。
城で聞いた数々の出来事に暗い影を落としていたのが霧散する。寝てすっきりとしたのだろうか？
「ティファ、お腹すいた？」
「あ・・・・少しは・・」
「少し待っててね、美味しいもの作るから。」
「はい。」
マァムさんが作ってくれている間暇だ・・・・・お手伝いもいいって言われたけど何かしてないと落ち着かない。
「ポップ兄、私も何かしたい。」
「師匠が駄目って言ったろ、少し回復したからって直ぐに動こうとす

んなよ。」
「うぅ、クロコダイン、特訓はどうでしたか？」
「ああ、チウに手伝ってもらって順調だ。新必殺技の完成も程なくできそうだ。」
「そっか、チウ君どんなお手伝いしてるの？」
「クロコダインさん、バルジの大渦の中で技を編み出そうとして、息が続かなくなりそうになったら合図で僕がクロコダインさんに繋がっている鎖を引くんです。」
「ふふ、力持ちのチウ君がいないとできない特訓方法だね。」
「その通りだ、チウがいてとても助かる。」
「そんな、ティファさんもクロコダインさんも褒めすぎですよ。」
「いんやチウ、俺じゃあ一生掛かってもできない手伝いだわ。」
「ポップ迄・・・・でも、皆さんのお役に立てて僕嬉しいです。」
「チウ君・・・・」
　健気な事を言うチウを、ティファは椅子を下りてチウに近づきそっと抱き上げ、チウのいた椅子に座り膝の上に乗せ顎をチウの頭の上に乗せる。
「皆はね、役に立つとか立たないで君を仲間にしてる訳じゃあないんだよ。チウ君が仲間思いの立派な戦士の心を持っているからなんだよ。」
「ティファさん・・・」
「そうだぜチウ、ティファの言う通りだ。俺達はつまるところお前が好きなんだ、ずっと仲間でいて欲しいんだよ。」
「その通りだ、ティファはいつもいい事を言ってくれる。特訓を手伝ってくれるのは無論嬉しいが、それ以上にお前の心根の在りようが好きなのだ。」
「クロコダインさん・・・ありがとう、ありがとうございます。」
　物心ついてから一匹で生きていた自分が、老師に拾われマァムさんに出会い、もっと多くの素晴らしい仲間に会えて好きだと言われ・・・これほどうれしいことがあるだろうか？
「そしたらティファさん。」

「ん、なぁに？」
「僕達もティファさんの事が大好きです。とってもとっても大好きなんです。」
「うん。」
「大切仲間でとっても大好きな人なんです。」
「うん、ありがとうチウ君。」
嬉し涙を流しながらも、チウはティファの事が大好きだと言う。自分だけではなく仲間全員が大好きなのだと、ティファの心に刻もうとするように。
テーブルの端で頬杖をついて見守っているマトリフはその素晴らしい光景に自然微笑みが浮かぶ。
この一行なら大丈夫だと、心の底から安堵をして。
ご飯できたわよ～とマァムの掛け声を合図にマトリフとティファは座らせたままポップ達は食べる支度にとりかかり、程なくして洞穴は食べる音と美味しいと言う歓声が響き渡った。
昼食を食べ終わるころ洞穴に一人の妖精が入ってきた。
「お～、なんだが今日は随分と賑やかだなマトリフちゃん。」
「パック！手前そのちゃん呼びは辞めろって何度言えばわかる!!」
「俺達精霊からすれば人間なんて多少老いても赤ん坊と変わらんのよ。おんや、そっちの黒髪の子は俺の事をばっちり見てるってことは見える子か。そっちのリザードマンと大ネズミ君もかい？」
洞穴に入ってきた妖精パックはマトリフの怒声にも怖じずに飄々としている。
白い肌に青い髪を結わえている姿は絵本に書かれてそうなこれぞ妖精と言われそうではあるが、中身がとんでもなく性悪でマトリフとても手を焼く。
そんな奴がティファ療養中に来るとは最悪だ。
「ふ～ん、見た目可愛いし贔屓にしてやろうかおチビちゃん。」
「え！や・・その・・」
「くっふっふ、初心な所がまたいいね～。俺は・・」
―貴様いい加減にしろ!!!!―

悪い顔でティファの肩に留まり色々と吹き込みそうなパックにマトリフが切れる前に、洞穴の外で待機していたガルーダがぶちぎれた。
「おんや神獣ガルーダが人を案じるとは珍しい。」
「―ティファは我が愛しの雛鳥だ!!まとわりついてみろ、食い殺すぞ貴様!!!!―」
出会いの当初は迷惑な者だとしか思っていなかったティファを、いつしかガルーダの中では愛しい我が子への思いへと変わっていった。
まだ本当の子はおらず、結婚もしていないだろうと言われそうだがそんなことは知った事ではない。
「ガルーダ連れた女の子・・・君さ、ティンクを知ってるかい?」
「知ってます、あ、私ティファって言います。」
「礼儀正しい良い子だね。ティンクの言う通りだ。」
「ティンクの友達ですか?」
「ああ、あいつとは生まれた場所まで同じでね。そうか君が竜の騎士様の子供か。見た目も気配もただの人間だね。」
「・・・・・どうも・・」
パックって、もしかしてティンクの幼馴染で光の精霊王様の変わり息子さん?
パックがティファを事前に情報を得ていたように、ティファも本人に会う前からパックの事を知っている。
ティファはこれから起こす事の為に精霊王達と様々な事をしている為に縁が深い。それがなくとも普通に精霊達とは友達であり様々な情報を貰っている。
その中には光の精霊王の外れ息子の噂も届いている。
教えたのはパックの幼馴染みで偶然ティファと友達になったティンクだが、ティファにははずれとは言わずに変わり者として教えた。
精霊とは思えない偏屈さで、状況を引っ掻き回し困りごとを楽しむ、精霊どころか悪霊と言えそうなパックの事を忠告したのだ。
ティファは優しい、そんなティファが悪霊もどきのパックに会ってしまったらパックの餌食になる事は容易に想像がつき、悪口にならな

い範囲で忠告したのだ。
「警戒しなくていいよ、君マトリフちゃんのお気に入りの子でしょう？」
「ふぇ？」
「ティンクが一時手紙運びしていた時があってね、それって君で間違いないかい？」
「はい、確かに私です。」
「ふふふ、その時僕も洞穴にいたんだよ。お気に入りのマトリフちゃんが俺に何でも良く効く薬作るの手伝えって言ってきたから二・三年洞穴を離れられなくてね。」
「貴方が万能薬の手伝いを・・」
　このパック、性格は最悪だが気に入った相手にはとことん優しい面もある。
　若い頃の無茶をしていた破天荒なマトリフを気に入り以来八十年近く自主的に側に居る。
　普段はそこそこで追い払ってるパックを、精霊の薬学知識を欲して頭を下げて共同研究をさせたのだ。
「その時の手紙ね、マトリフちゃん嬉しそうに読んでたよ。」
「パックてめえ・・」
「おじさんそれ本当⁉」
「あ？」
「私からの手紙嬉しかったって本当！」
「あ！・・・・それはだな・・」
「違うの？」
「・・・・・あぁもう！嬉しかったよ！本人がくりゃあもっと嬉しかったよ!!」
　年甲斐もなく照れて怒鳴るマトリフにティファは嬉しそうにしがみつくが、精霊パックの姿が見えず声が聞こえないポップとマァムはぽかんとする。
　何やらうんうんとうなずいたり笑っているクロコダインとチウは、今何が起こっているのか分かってそうなので聞いてみる。

「おっさん、師匠とティファ誰に話しかけて今ああなってんだ?」
「ポップ、そうかお前には精霊が見えていないのか。マァム、お前もか?」
「うん・・・・精霊が今いるの・・・・」
「ああいるとも、ここにいるとも、ずっといたとも。」
「きゃっ!」
　人間の男の子と女の子が自分の事を聞いているのだと察したパックはいきなりマァムの鼻先に姿を現しマァムを心底驚かせる。
「初めまして人間の娘さんに人間の坊や、俺の名前はパック。そこのマトリフちゃんとは半世紀以上の付き合いの者だよ、よしなに。」
「あ!はい、私はマァムと言います。」
「俺はポップ、し・・・・マトリフ導師の弟子です。」
「くふふ。そうかしこまらなくてもとって食いやしないよポップちゃん。驚いた顔は可愛かったよマァムちゃん。」
「「ちゃん・・・・」」
　精霊って・・・・考えていたのとイメージが違う気がする・・・・余程ティファの方が精霊の化身の様な気がすると二人は思ってしまう程にパックの物言いは人を食ったような態度だ。
「・・・・珍しいじゃねえかよ、お前が人前に姿見せるなんてよ。」
「別に今まで隠れていたわけじゃないよ。人間に姿を見せないとか高尚で退屈でコチコチに固まった考えでいた訳じゃないさ。」
　精霊は見える者以外は―滅多には―見えないが、絶対ではない。
　精霊自身が姿を見せて声も聞かれても構わないと思えば任意で姿を現すことが出来る。
　しかしできるが本当に滅多な事ではなく、物語に描かれる程に稀な事であり、この洞穴にはアバンも出入りしていたが、最後まで姿を見せる事はなかった。
　マトリフの疑問に、パックは肩をひょいとすくめてみせる。
「単に興味が湧いただけさ。マトリフちゃんの洞穴で食べて飲んで大事にしている子供達に。」
　自分と同じくらい偏屈な男が面倒を見ている子達はきっと面白い

退屈しのぎの玩具になりそうなので唾つけておこう。
・・・・・某仮面の死神と似通ったような精神構造をしている精霊が存在してしまっている。
要は自分が面白いかどうかでしか動かない厄介者同士である。
「あぁもういいからお前は今日は帰れパック！」
「おやつれないなぁ～マトリフちゃん。」
「けっ、ぬかせ！俺はこれから弟子の修行見るんだよ、暇してねえから帰れってんだよ。」
「おやおや張り切って。」
「なんだよ。」
修行の言葉を聞いて、パックにニヤついてマトリフの心臓の辺りにそっと手をかざす。
「こんなに小さく弱くなった心音を出しているマトリフちゃんが無理していいの？」
「パックてめえ・・」
「忠告だよ、忠告。良き友としてね。じゃあね～。」
言いたい事だけ言って、マトリフの怒りをくらう前にパックはさっさと洞穴を去っていく。
「あいつは全く。おい嬢ちゃん。」
「はい？」
「あいつが言った事気にすんなよ、朝言った通り、ポップには口頭で教える以外はしねえから、そんな顔すんじゃねえぞ。」
「おじさん・・・うん、うん。」
パックの言葉に不安を覚えたティファをマトリフは直ぐに察して案じなくていいように優しく諭す。
まったくあいつは・・・・本当に精霊なのかとパックに頭痛がする

夕食会へのご招待

「ヒュンケル、まだいける？」

「愚問だぞダイ、なんとしても今日中にはロン・ベルクに一矢報いる！」

日の出前に起きた三人は、昼食以外ほぼずっと実践稽古をして日が斜陽に傾いてもダイとヒュンケルは止める気配はなく、息は二人とも多少乱れているがダイは剣をヒュンケルは槍を構える姿勢に乱れはない。

またぶっ倒れるまでやるか？上等だ、いくらでも付き合ってやる。

朝から付き合っているロン・ベルクは、勇者と戦士を二人同時に相手取っても疲れる気配はなく、まだ二人から一太刀も浴びていない。

だがいい線まで行くようになっては来ている。徐々にだがお互いの動きを意識して即興で連携めいたものが出来る余裕が生まれてきている。

二人は間違いなく戦いの天才・申し子と言っていいほど才がありそしてそれに見合う以上の努力もしている。

ここまでしてもバーンに届くにはまだ不足してやがるんだから頭が痛くなるが、一行全員で戦えばギリギリ届くとは見積もっている。

その前にミストバーンとキルバーン攻略出来て、回復は・・・・お嬢さん戦場に出したかねえんだがそっち専用にさせてほぼ全回復させてからバーン戦が望ましいんだよな。

一時バーンの下で働いたことがあり、それだけにあの二人と先日あった変態野郎の戦力も分かっている分、ダイ達の戦力が少々不足しているのが分かってしまい歯がゆいことこの上ない。

だからと言って手を貸すにしても戦場に自分が出向くのも何か違う気がし、もしもダイ達が敗れた時は、一緒にあの世に行ってやるかくらいで考えている。

確かにこいつらといるのは楽しく先の世を共に見てやりたい位に気に入っているが、そこまであがいて生きていたいかと聞かれれば否である。

どうにも自分は偏屈が過ぎるらしいが、性分であるからしょうがないとどこかで自分とこの世界に見切りを付けている。
あがいているダイ達を全力で鍛える気持ちに嘘はない、世界を守りたいひいてはお嬢さんも守りたいと言う高潔な心を自分は持てずに、眺めて満足しているのだからどうしようもない。
だからこそ稽古であっても手は抜かず、ダイ達が死なないように甘い動きをすればすかさず手痛い反撃でボコボコにし体で覚えてもらう。それでは戦場で何度も死んでいると。
それでも文句も言わず食らい付いてくる二人は大したもんだ、夜通し稽古やってやるか！
ダイとヒュンケル、そしてロン・ベルクの気合が臨界まで高まる寸前に、ポップがルーラをして双方の間に割って入ってきた。
「よう、ダイ・ヒュンケル。ロン・ベルクもお邪魔するぜ。」
ルーラをマスターしてから轟音と着地で転ぶことが無くなったポップは軽やかにダイ達に挨拶をする。
「ポップ！ティファは？目を覚ましたの!!」
そんなポップにダイは剣を大地に突き立てむしゃぶりつくように両手を掴み、魔法使い特有の華奢な体をがくがく揺さぶりながら質問攻めを始める。
ティファはまだ眠っているのだろうか？もう心配で心配でたまらない!!
「って！落ち着けよダイ、それと今腕痛えんだよ。少しは馬鹿力加減してくれよ。」
「え？ポップ・・腕焦げてる・・・」
「ああ、今師匠に新技教わって形にはなってきたんだがまだ威力制御できなくて腕焦がしちまうんだよ。」
「マトリフさん治してくれないの？」
大切な仲間の怪我を、身勝手な理由で見逃したダイはしょげながらポップのみを案じて子犬が泣きそうな顔になってしまった。
「そんな顔するなよダイ、こいつは俺が治さねえでくれって言ったんだよ。」

「どういう事だポップ。」
「おっと!そうおっかない顔してくれんなよヒュンケル。本当に重傷なら師匠がそんな言葉許してくれる訳ねえだろう。」
「・・・・たしかに。」
「だろう?俺がきちんと制御して新技ものにしたあかつきに治してくれって頼んだんだよ。」
「そっか、へへ。」
「ん?なんだよダイ。」
「だってポップがかっこいいこと言うんだもん。」
「は?」
「そうだな、本当に逞しくなった。」
「よせやい二人とも、お世辞でも嬉しいけどなんかムズムズし今うぜ。」
「違うよ～ポップ。」
「本当に思った事を言っただけだぞ。」
「もうよせよ!」
天然ジゴロなダイとヒュンケルコンビの思惑なしの褒め言葉にポップは陥落寸前で赤くなって止めようとするが、通じない天然コンビの二人はさらに褒め言葉を乗せてくるので質が悪い。
言い出しておいてなんだが口頭での呪文の説明で上手くいくかと内心不安であったポップだが、デルムリン島でティファのアドバイスで氷系呪文にも苦手意識が無くなっていたのが功を奏したのか直ぐに形になって、あの師匠から驚きの顔を引き出せた上にべた褒めされてもう嬉しい通り越して恥ずかしくって逃げるようにお使いに来たのに、その先でも同じ目に遭うとは・・
少し離れた木に腕を組んでもたれているロン・ベルクは黙って笑ってみている。
きっと平和になれば、毎日こんなに気持ちいい奴らの楽しい出来事を見てられるのかと本当に先を見てみたくなる。
なのに俺って奴は・・
「ティファは起きたぞ。」

「ほんと！元気？食べてる、ああ!!ポップ一緒に連れて来てよ!!!!」
・・・・あいつは妹の事になると大暴走する癖何とかさせた方がいいのか？
「ポップ、何故連れてこなかった？」
「あいつ今買い物でベンガーナのデパートに行ってるよ。マァムとメルルの三人で。」
「「デパート!?!」」
「そ、そんでロン・ベルク、ティファがこの前の昼食会みたいなやつを今日の夕食でしたいんだと。俺の師匠の洞穴近くの海岸でやんだけどあんたも招待したいってさ。いいか？」
「・・・お嬢さんの発案か？」
「おう、迷惑と心配かけたお詫びとダイ達で楽しい夕食が食べたいんだと。俺からも頼めねえか？あいつのお願い聞いてほしいんだわ。」
「ロン・ベルクさん・・・」
「ロン・ベルク・・・・」
「分かった分かった。だからそんな潤んだ瞳で俺を見るんじゃねえ。行く、今からか？」
「助かるわ。そろそろ帰ってくる頃だと思うから今から行くぞ。」
「うん！早く行こうポップ!!」
「・・・その前に泥位落としていけよ二人とも。」
「「分かった!!」」
疲れていたはずの二人はティファに会えるとなった途端に元気百倍になり裏の井戸にすっ飛んで行った。
だが気持ちは分かる。自分もティファのこの御願いを聞いた時嬉しくなったのだから。
パックもいなくなりさぁ特訓に行こうとしたポップ達をティファの遠慮がちな声が引き留めた。
「あの・・・その・・」
「ん？どしたティファ。」
この声は何かお願い事の前振りだとポップはもう察知する能力を獲得している。大抵の事は叶えてやる、さぁどんとこい！

「買い物行って、皆で夕食食べたいんです。」
「ダイやヒュンケルも呼んでか？」
「それと・・・できればメルルさん、ロン・ベルクさんも。迷惑かけたし心配もさせちゃったから、また昼食会みたいに楽しくみんなで食べてお詫びと楽しい事したい・・今が大変な時でみんなも余裕がないと思うけど・・・・駄目かな？」
　ティファのお願い事を聞いたポップは上を向き数舜目をつむり思考する。
　確かにあの鬼岩城戦の後と今は違う。そろそろ大決戦が待ち構えている今は特訓の時間に時間を当てたいのが本音だ。
　だが、戦いの事だけに心を囚われるのは自分達のこれまでの行動とはそぐわない気がする。
　今まで戦いの寸前であってもティファがあの手この手で自分達を笑わせてくれて心に余裕を持たせてきてくれたではないか。
　なら今度は自分達がティファに返す番だ。
　思考が直ぐにまとまったポップはマトリフの方を見る。
　マトリフも似たような思考した上で、少し頷いて許可を出す。
「分かった。いいぜ、やろう夕食会。マァムもおっさんもチウもそれでいいか？」
「賛成よ！私の腕によりをかけた夕食用意するわね。」
「これは特訓でお腹を空かせんとな～。」
「はい！僕も合図が来て鎖を引く迄筋トレして鍛えてお腹すかせます。」
「決まりだな。」
「・・・ありがとう皆・・」
　ポップ達の気遣いが心に沁み、ティファは嬉しくてポップにしがみついてポロポロと涙を流して喜ぶ。なんと素敵な仲間たちだろう
「買い物は市場か？」
「ううん、ベンガーナのデパートまで行く。ガルーダならすぐだから。」
「・・・・遠すぎねえか？」

「駄目？」
「ううんん・・」
「ポップ、私が付き添うのはどうかしら？ついでにメルルも呼ぶんだから一緒に行ってくるわ。」
「いいのか？」
「ええ、今日半日は自分なりにみっちりとやった積りだから大丈夫よ。」
「そしたらメルル呼びに行ってくるわ。」
話が決まればポップの行動は早かった。
王城にルーラで乗り付け、門番に言伝をしてメルルを呼び出してしまう。
さっき来たばかりなので何度も入るのは気が引けるし、また城内が自分を見て師が来たのかと勘違いをされてピリつかれたらとっても困る。
「どうしましたかポップさん。」
門番は気を利かせて誰にも会わないルートでメルルのいるテラン王の居室に行き、素早く連れて来てくれた。
「勇者様達には返せぬ恩ばかりです。このくらい当然です。」
お礼を言ったポップに、門番はさわやかな笑顔で男前な事を言って再び門の守備に戻った。
「いい人だな～。」
「はい、ところでポップさん私に何か用事があったのでは？」
「・・・うっかり忘れてた、ティファが目を覚ましてな・・・」
ティファが目を覚まし少し元気を取り戻し気配も明るくなった事、そしてしたいと言っていた事を伝えたところメルルは涙をにじませ喜び、フォルケン王に言ってきてよいか許可を取ってくるとスカートの裾を摘まんで駆けて行き、程なくして許可が取れましたと可愛い笑顔で告げてきた。この笑顔ずっと見ててえな～
二人が洞穴についたころ、何やら中は少々物騒だった。
ティファが床で正座し、少し俯いて目をきょどつかせている。
そんなティファをマトリフが椅子に座って腕を組んで見下ろして

いる。その目は三角で怒っている！
「なぁマァム、ティファなんかやらかしたか？」
　クロコダインとチウは出掛けた後の様で見当たらないので洞穴の入り口にいるマァムにこっそりと尋ねる。
「ティファったらね・・・私とメルルもガルーダに乗せようとしたのよ。」
「はっ!!」
「キメラの翼での移動も嫌だから、ガルーダに乗って三人でガルーダで行きましょうって。」
「・・・・・・・・あいつ何考えてるんだ。」
　ティファは可愛いが、どこかぶっ飛んでるところあるなと思っていたがここまでぶっ飛んだこと考えるか普通？
　少し遡った洞穴
「ティファ、ベンガーナのデパートまではどうやって行くの？」
「先ほど言ったようにガルーダです。」
「あ、ティファの事じゃないの。私とメルルはどう行くのかなって？ポップに送ってもらう？」
　そうすれば帰りはティファから貰ったキメラの翼で帰って来れる。
「いえいえ、ポップ兄の手を煩わせません。女の子三人くらいならガルーダに乗れちゃいますよ。」
「へ!!」
「気持ちいいですよガルーダの飛行・・・」
　ゴン!!!!
「馬鹿言ってんじゃねえ嬢ちゃん!!!」
「痛い！なんで頭に拳骨落とすのおじさん!!!」
「馬鹿野郎！マァムは大丈夫でもメルルのあのきゃしゃな体じゃ吹っ飛んじまうだろう!!安全第一で行けこの馬鹿嬢ちゃん!!」
「そんな！メルルさんは私にしがみついてもらうか、そうだ！安全ベルト私につないで・・・」
　ゴン!!
「二度も!!」

「あたりめえだ！お前さんはもっと常識学んで来い!!マァム！今言ったことやりてえか？」
「私！・・・・・ティファちょっとそれは勘弁・・」
「そんな!!」
「少し話し合おうか嬢ちゃん？」
「あう!!」
味方なく孤立したティファは、マァムとメルルのとりなしがあるまで説教された。
解決案としてメルルはデパートに行ったことがあるのでメルルにキメラの翼を渡してティファはガルーダでその後を追い往復する事になった。
「・・・兄の薄情者・・」
「師匠に賛成、お前もう少し自重ってもん学んでくれ。」
とりなす二人の顔も確かに引きつっていたぞ
「あう、とにかく行ってきます。」
ドタバタはしたが、三人を見送りどっと疲れた兄とおじさんは予定通り特訓に向かっていった。
どうかティファが何もやらかさずにトラブルに巻き込まれず無事に帰って来ますように

ベンガーナデパート①

ベンガーナのデパートにマァムさんとメルルさん入れた私達三人で出かけることになって、ポップ兄がメルルさん迎えに行っている間に夕食会の注文とっておいた。
「僕はその・・・色とりどりの野菜のピクルス美味しかったです。」
「あの瓶詰めは売っていた物だからまた買ってくるねチウ君。おじさんは？」
「酒飲めればそれでいいよ嬢ちゃん。あ、つまみに青カビ付いたチーズ買って来てくれ。」
「う！・・・マジックリングに入れれば匂いは平気か・・・」
「なんだ、嬢ちゃんには大人のチーズはまだはえぇか？」
「・・・・デザートチーズで一生いいもん!!次クロコダイン!!」
「俺は・・・ベーコンステーキにそれをサンドしたあれか。」
「お肉多めと・・・」

ワイワイと買い物メモを書き終えた直後に少々ティファが説教され、真っ当にメルルがマァムとキメラの翼で、ティファがガルーダで行くことになって無事出発が出来た。

街中ではガルーダが目立ちすぎ、ドラゴン騒ぎも新しくまた魔獣の襲撃かと騒ぎになっては困るので街よりも大分離れたところにティファとガルーダは降り立ち、ガルーダは留守番をすると言って大木に寄り添い昼寝を始める。

ここまで元気になっているティファならば、変態が来ても遅れは取らないのを知っているので安心して待っていられる。

幼い頃からずっとここに通っている、二人にとってはなれた遣り取りをしてマァム達と合流をした。

ドラゴン騒ぎがあっても、そもそも大戦最中であってもベンガーナの町は商人たちの活気で熱気に満ちている。その中でもデパートは一際賑やかで初デパートのマァムは気後れして入口に入ってから何度も人にぶつかって謝って早々に疲れてしまった。メルルもティファも平気な様子で人を避けているのに、これでは特訓・修行の方が

楽ではなかろうかとか、乙女にあるまじき思考の海に逃げ出し掛けた時、小さな手が自分の手を握って人気が少しでも少ない所迄引いてくれた。
「ティファ、ごめんなさいデパート初めてで。」
「こちらこそすみませんマァムさん。考えてみればロモス育ちのマァムさんがこのデパートに来る機会ありませんでした。」
「少し休みますか？」
「ううん、買い物優先しましょう二人とも。」
　まいったな、マァムさんデパート初なのに思い至らなかったよ。
　しょうがない、今日は寄る積りなかったけど、あそこの力借りるか。
「マァムさん、メルルさん、楽して買い物できる方法があるのでそちらに移動しましょう。」
「そんなところあるのメルル？」
「さぁ、私も聞いたことがありません。」
「ふふ、大丈夫ですよ。何とかしますので安心してください。」
　ティファは二人を安心させるようににっこりと笑う。
　今ティファは眼鏡をしていない。料理人はしばらく休めとのお達しが下り、であるならば職業アイテムにも等しいアバン先生眼鏡にも休んでもらっている。
　だが、眼鏡がなくともティファの中身は変わらない。
　優しく世慣れたティファである事に
　エレベーターに乗った三人は最上階まで行き扉が開くと、数歩先にパプニカ城でも見たような豪華で重厚感溢れたオーク製の扉があった。
　そのフロアーに降りてみればふかりとした感触が足裏から伝わり、見回せばフロアー全てに深紅の毛長絨毯で敷きつめられている。
　ここって、いつの間にエレベーターと御城がつながったのかとマァムとメルルが思う程に下のフロアーと違いすぎる雰囲気に飲まれかけたが、ティファは慣れた様子で目の前の扉を数度ノックし、返事も待たずに開け放つ。
「お二人ともこちらですよ。」

「でもティファ!中の人の返事して貰ってないわよ。」
慌てるマァムをまぁまぁと笑って宥め、メルルも伴い三人で中に入るとそこは矢張りお城の一室の様であった。
ティファが手近なソファに座って二人にもおいでおいでしようとした時、黒のお仕着せを着た男がゆったりと近づいてきた。
「これはティファ様。出迎えが遅くなって申し訳ありません。おや?珍しくお連れ様が。」
「こんにちわアクバルさん。実は普通に買い物をしようしたのですが思った以上の混雑ぶりに疲れましてね。各フロアーを回りたいのですが売り場を見回って買うのも億劫で。久しぶりですが―ガイド―を貸してください。」
「そうですかかしこまりました。誰か指名したい者は?」
「ロシナンテさんを。」
「彼・・ですか。仕事ぶりは最近目を見張る程の上級職になりつつありますが。」
「彼の素直さと仕事熱心さは好ましいですよ。空いているのであれば彼でお願いします。こちらのお嬢さん方はデパート慣れしていないので彼の気さくさも欲しいのですよ。」
「分かりました、初めましてお嬢様方。ご挨拶が遅れて申し訳ありません。
私は当デパートのコンシェルジュ部門で長をさせていただいているアクバルと申します。ベンガーナデパートにようこそおいで下さいました。」
「あ!はい、初めまして私はマァムです。」
「初めまして、私はメルルです。」
「お嬢様方、どうか硬くならずに。デパートは皆様の買い物の場を提供する場であり便利で楽しさも売りにしているのです。少々お待ちを、今飲み物をお持ちしますのでお二人もティファ様同様そちらのソファー開始におくつろぎを。では。」
優雅にお辞儀しアクバルは足早に奥に引っ込んだ。
長年ベンガーナデパートで働き、酸いも甘いも噛み分けた大人の渋

みを称えた雰囲気に加え、少々彫りの深い顔に程よい皺が更に年輪を感じさせ、黒髪をオールバックできっちりと整えた美中年に初めて遭遇したマァムとメルルはアクバルの言葉に従いストンとティファの両脇に腰を落とした。
「ティファ・・・ここ何？」
　先程の遣り取りの間、ティファは一度も立ち上がることなく座ったまま話を進めていた。
　いつものティファならば相手が立っている時は自分も立つはずなのに、ここではこれが当たり前のようだ。
「私結構デパートに買い物に来ているので、一般の方よりも少々特別な優遇が出来る会員に入れまして、ここもそのうちの一つです。」
「ティファさんそんなにしょっちゅうデパートに？」
「はい、この前パプニカ城で渡した服装・整える品一式は全部ここです。普段使用している食器類もですよ。」
「・・・・そんなに・・」
「はい、ティファ様にはいつもご贔屓にしていただいています。」
「え！・・・・・いつの間に・・」
　三人で話し込もうとした矢先に、足音どころか気配も消して近づいてきたアクバルに、メルルはともかく武闘家として大成してきたマァムも気が付けづ思わず驚きの声を上げてしまって赤面をする。
「驚かせて申し訳ございません。マァム様・メルル様とお呼びしてもよろしいでしょうか。」
「二人は許可しないと思いますので私が許可しますねアクバルさん。これは彼の仕事だと思ってお願いします。」
「様って・・・ティファ、ここ本当になんなの？」
　冷たいジュースを出され、二人は気後れするが慣れた手つきでティファはコップを持ちの一口飲んでからアクバルにお願いしますと丸投げをする。ここでの仕事は全部彼の領分だ、自分はジュース堪能させてもらう。
「こちらはコンシェルジュ部門と言いまして、お客様が欲しい商品の説明と、売り場までご案内をさせていただく所です。お客様に付き添

うコンシェルジュをガイドと呼び、その者が各フロアーの案内から商品の説明をし、ドレスや大型の物なのどはその者がフロアーからこちらの待合室でお持ちし、その間にお客様には飲み物のサービスを提供してお待ちいただきます。」
「はぁ・・・」
「そんなすごいサービスが・・」
「ようするに、デパートの便利屋でございます。」

普段の買い物と全く違いすぎて理解が少々追いつかないメルルとマァムにアクバルは気さくに笑って話しかけ、かみ砕いて話しているのに気が付かせない話術を駆使して二人の緊張をほぐしていく。
二人は本当にデパート慣れしていないようなので、ロシナンテにその事を肝に銘じておくように伝える事を頭の片隅で算段を付けながら。
程なくして扉が叩かれ入ってきたのは、アクバルの半分くらいの年齢の茶髪を短く刈った青年が入ってきた。
「これはティファ様、お久しぶりです。」
「お久しぶりですロシナンテさん。今日は貴方にガイドを頼みたい。」
「僕ですか！かしこまりました!!精一杯務めさせていただきます。」
「はい、とはいえ私ではなくこちらのお嬢様達のガイドを。」
「これは挨拶もせず失礼を。ロシナンテと申します。本日はガイド役を精一杯務めさせていただきます。」
「ロシナンテ、ガイドに入る前に伝えたいことがある。ティファ様・マァム様・メルル様少々失礼を。」
「大丈夫です。その間にマァムさん、メルルさんもジュース飲みましょう。このデパートの目玉商品・フレッシュジュース美味しいでしょう。」
「あら本当美味しい！」
「柑橘なのにとがった味がしなくて・・・」
アクバルの話術とティファのいつも通りの態度に二人は緊張が大分ほぐれ、いつしか夕食会にも出そうかと話が盛り上がっていく中、

裏手でアクバルがロシナンテに様々な助言をする。
マァムとメルルはティファと違いデパート初心者である事、今日の買い物リストを先程渡されたのでこれを主軸にしてもよいが、二人の要望を引き出し最優先にする事。
そしてここが一番肝心な事で、二人に値段を一切知らせないことをティファの要望である。
ティファはこのデパートの数十人しかいないＶＩＰ会員であり、滅多に来ない客ではなく常連である。
そういったＶＩＰは支払う額が半端ではないのでこのデパートに数万ゴールドを預けている。
「支払いはもうティファ様が支払ったように伝えればよろしいのですね？」
「ああ、このコンシェルジュ部門からもう通達が来て支払いは滞りなく終わったと。リスト以外の品物の時はティファ様から預かった中から払ったとお伝えするように。」
本来は各フロアーの売り上げ帳簿が上がってきてそこから預かり金から引いて行くのだが、その事を二人に伝える必要は全くない。気兼ねなく楽しい買い物をしてほしいと言うのがティファの願いだから。
「分かりました、ティファ様の時の様な失態は二度としません。」
「頼んだぞロシナンテ。普段通りにやれればそれでいい。」
「はい！」
様々な注意を受けたロシナンテは待合室に戻り、マァムとメルルに気さくに笑いかけ、行ってみたいところや欲しいものはないか物柔らかに尋ね買い物経路地図を頭の中に作成していく。
その様子をティファとアクバルは楽しそうに眺める。
ここのＶＩＰになっておいて良かった。二人が買い物している間にわたしもいってくるか。

ベンガーナデパート②

「ティファ様、こちらが当デパートが誇る武装です！」
「あ！こちらは自分がお持ちします!!」
「重い・・・わぁ!!!」
「ふふふ。」
　ロシナンテとすっかり打ち解けたマァムとメルルは三人で買い物をしに出掛け、ティファはアクバルの淹れた紅茶を飲んでいると不意に笑いだす。
「どうかなさいましたかティファ様。その紅茶には笑いの作用がある新種でございましたか？」
　クッキーを出しながらアクバルは微笑ましげな瞳で不意に笑いだしたティファに何事かを尋ねる。
　ティファがＶＩＰ会員になってもうじき三年ほどになるが謎の多い少女に興味は尽きず、実際に同い年の孫娘がいるので気分は客とコンシェルジュというよりは祖父と孫に近い。
　だが長年接客業で身を立て、コンシェルジュ部門の長をして十年以上たつ自負が、それを微塵にも表に出さず、察しの良いティファにもその思いが気取られたことは一切ないというある意味物凄い離れ業をしているともいえる。
「ああ、ロシナンテさんが私に初めてガイドとして就いてくれた時の事を思い出してつい。」
「・・・・・あの折は本当に申し訳ございませんでした。」
「いえいえ、仕事に対する情熱とそれ以上に客に対して何かをして上げたいという彼の気持ちはとても素敵ですよ。あの時鎧一つ傷物になりましたが、素晴らしい若者に対しての先行投資と思えば安いものでしょう。」
　この方は本当に・・・
　何食わぬ顔で紅茶を飲みながらしれっと言うティファに思わず苦笑が浮かんでしまう。
　二年前のロシナンテはまだコンシェルジュ部門に入って日が浅く、

ティファのガイドに就いた時は研修開け間もなくの事であった。
知識はしっかりと覚え、後は実地で覚えてもらおうとした矢先にティファがサンプルとして買い求めた鋼の鎧を代わりに持とうとして落として衝撃でほんの少しの傷を付けてしまった。
当然落としたロシナンテは真っ青になり、事態は直ぐ部門長であるアクバルにご注進が奔り、ロシナンテはあわや降格になりかけたのに待ったをかけたのは迷惑を被ったティファ自身だった。
その鎧は丁度在庫がなく最後の一つだったが気にもせずに笑って言い飛ばした。
「鎧は使われているうちにボロボロになる物ですからこんなのは傷とも呼べないでしょう。」
からりと笑い拾い上げ、指に嵌めているマジックリングに収納し何度も謝るロシナンテに優しく笑いかけ、いつかまたガイド頼みますと言い残し颯爽とその場を立ち去った。
そこからロシナンテはさらに猛勉強をし、コンシェルジュ部門の中級者にまであっという間に駆け上がり、今やアクバルの後継者とまで目される程になっている。
迷惑をかけたティファに庇われ、次を期待されたことが余程嬉しかったのだろう。
「それに私にやらかしたのはロシナンテさんではなくアクバルさんが先でしたでしょう。」
「ティファ様・・・あの折の事は本当にもうご勘弁を。」
「ええ、たった九才の子供がＶＩＰ会員候補に挙がってきては普通驚きますもんね～。」
今度はしれっとどころかニマニマと笑っているから手に負えない
デパートで半年間、同じ客が毎回数千ゴ―ルドを使っていると聞いたアクバルはさっそく会いに行った時、表情筋を動かして内心の驚きを悟らせてしまった。
「初めましてこんにちわ。こんな子供が毎回高額買い物をしたらびっくりですよね。」
自分の驚きに腹を立てずにクスクスと面白そうに笑っていた様は

その辺の子供と同じであったが、中身は大人顔負けであった。
「私がそのティファで間違いありませんよ。ＶＩＰ会員のお話ならお受けしますので案内お願いします。」
会う前に予め店員からそこそこ話をしてもらい案内をスムーズにする手はずを整えていたが、まさか小さな女の子からすべて切り出されるとは思ってもみなかったので二度も顔に出してしまうという大失態を侵し、以降ＶＩＰ会員候補の年齢はきちんと聞くルールが定められたが、今のところは成人していない者の会員候補は表れていない。
それが当たり前の事だと言われればそれまでなのだが
「さて、そろそろ私も行きますね。また近々寄りますのでよろしくお願いします。」
「かしこまりました、行ってらっしゃいませ。」
扉の外まで来て一礼して見送るアクバルに手をひらひら振りながら、ティファはエレベーターに乗って買い物へと出掛ける。
近々・・・来るにしても半月先がざらなティファにしては珍しい。
来る度に鋼の鎧と鋼の剣を十ずつ注文し、受け取りに来た時に大量の薬草や医療器具、はては大所帯でも持つのかという程の鍋釜食器類を大量購入した時もあった。
鎧・剣はもう五百程売ったが、そんなに大量に何に入用なのか疑問ではあるが、犯罪の形跡がない限りお売りするという不問律を守り何も詮索せずに今日まで来ている。
それにあの子供ならば悪用はしまいと、接客業者にあるまじき私見ではあるが信頼しているのだ。
買い物フロアーに降りたティファは目的を定めずにふらふらと店を見回り、目に付いた物にふらふら寄るという買い物スタイルを貫いている。
店側もティファの性質はよく知っている。セールストークを嫌い、話しかければ余程欲しい品でない限りすいっと逃げてしまう。
新しく入った見習店員はそこから叩き込まれる。まず買い物に来たティファの容姿を徹底的に覚えさせ、買い物が終わりティファが立

ち去って少ししてから、あのお客様にはセールストークはおろか支払いの時までこちらからは話し掛けないように教える。
破れば減給であるときつく脅して。
一度破った者がおり、折角買ってもらえそうだった数百ゴールドの魔導書を無言で元あった所に置かれそのまま立ち去られてしまったことがあるので徹底されている。
楽しい時間を知らない者の声で煩わされたくないティファはそのスタイルを徹底して貫き受け入れさせるのに成功して買い物を満喫する。

何といいものが！これはマァムさんとメルルさんに是非着てもらおう。
そろそろ薬草のストック切れかけてるな。
「アオおじいちゃん、良い薬草入ってる？」
「ティファ嬢ちゃんか、今これといった物はないな。いつも通りの薬草類はあるぞ。」
「そしたらいつものを十セットずつと眠り草を五セット頂戴。」
「あいよ～、毎度あり。」
女性の服装店で可愛い二着のワンピースを買い求め、着ているマァムとメルルとそれに喜ぶ野郎どもの姿を想像してニマニマし、なじみの薬種問屋の名物頑固爺さんと素で話をする。
ダイでもめったに見ない普段のティファは、いきいきとデパートの買い物を楽しんでいく。
デパートは客も商人も実に楽しそうに往来し売り買いし、中には市場の露店のように値引き合戦をする剛の者や、慎ましい生活の中でもお金を貯め子供の一張羅を買い求めに来た親子連れもいる。
小さな頃からちょくちょく来ているが、ここはいつ来ても楽しい。生活感に溢れ誰もが笑っている。買えなかったとがっかりしている人も中にはいるが明日か明後日には入荷しているかとさくっと立ち直り、笑いさざめきの声がそこかしこに溢れている光景を、宝物を見る眼差しで見回す。

ああ自分は、こんな何気ない日常を守りたい
特別な事は何もないが、今日過ぎれば明日が、明日が終わればまた次の日が待っていると誰もが特別に考える事無く何気なく訪れる日常が送れる日々を。
「守りたい・・・違うか、守るんだ。」
この世界の誰もが明日が来るかどうか分からない不安なんて感じることのない平凡な日常を。
もしも自分が存在しないかもしれない未来であっても、この笑いざめく声を守ろう

心の整理が一段落し気分が晴れやかになったティファは地下食品売り場に行く途中で珍しい衣装や装飾品の出店を見つけて珍しいなと足を踏み入れる。
夏のこの時期にはカーニバルがあるようでマスカレードの衣装と仮面が所せましに置かれている。大戦最中でもカーニバルはやるのだろうか。
白黒のピエロマスクに目隠しだけ。その内の一つに、赤と黒が半面ずつの仮面もあった。
これは・・・・キルの仮面にとても似ている・・・・
ティファは何かに誘われるようにその仮面を手に取りそっと輪郭を小さな人差し指でなぞり上げる。あの人は今どうしてるかな。
親友のミストといるのか、それとも約束通り感謝状を書いてくれているのか・・・・また服作りをしてくれているのだろうか？兄が燃やしてしまった服は本当に見てみたかった。
なぜ自分はこんなにもキルが気になるのか不思議。
先程から雑踏を歩き、背が高い人を見るとどきりとした。あの人がモシャスで紛れて自分に会いに来たのではと、どこかで期待している自分がいる。
・・あの人は敵で、倒さないといけない人なのに・・・会う度に分からなくなる人。
優しいのに怖い事も平然と言ってきて、でもまた優しさを見せてくれる不思議で・・・・不意に甘い声がする。
お嬢ちゃん、可愛い可愛いお嬢ちゃん
っ！
耳元で囁かれように甦ったキルの声にティファは身の内からゾクリとした感覚が広がり動揺する。
あの人は・・・・・倒さないといけない人だ・・あの人を倒す？ああ、それを想像すると悲しくなるのは何故なのだろう
「こっちにきて・・・・」
あの真夜中の呼び出しの時、キルがティファに言った言葉を、反対

にティファがキルに向けてそっと呟く。
赤と黒の仮面を買い求め、自分にとって大切な物、アバンの眼鏡も入れている金のマジックリングに入れながら。

地下の食品売り場には、欲しい物を買い待合室に戻ろうとした三人とうまい事合流できた。
ここのベリータルト美味しいからお土産に買って、アクバルさんによろしくとロシナンテさんに言伝をして帰途につく。
そろそろ日も傾いてポップ兄がダイ兄達を呼びに行く頃だ。
早く帰って支度しよう・・・・その前に試着室借りてと。
「ちょっとティファ！本当にこれ着せる気！」
「はい！値札は取ってもう返品不可です。」
「あの・・・ティファさんお金を・・・」
「む、メルルさんこういう時はお礼を言ってきてくれるのが礼儀に適っていますよ。」
「・・・・・そういうものでしょうか？」
「そういうものです。はい、二人とも着替えて着替えて。」
付き添いの女子二人は、ティファが買い求めた服をプレゼントされ半ば強引に着替えさせられたのであった。

あれはどう判断すべき事なのかな？
暇なキルは与えられている自室で水晶でティファが見れないか試していたら、マトリフの結界の外に出た女の子三人が見れたので夢中で余すことなくティファの一部始終を見た。
意外にお金持ちで驚いたが、素のティファは少々やんちゃっぽい女の子で可愛いことこの上ないとご満悦で見ていた。
だが、人間のお祭り用の衣装の中に自分と少し似た仮面を手にしてからのティファのあの表情と言動がよく分からない。
不意に赤くなり、かと思えば仮面をそっと胸に抱きしめ買い求めた。
そしてあの言葉の意味は？なぜ自分にそこまで来て欲しいと求めるのかが分からない。
自分でもティファにこちらに来て欲しい本当の理由が明確になっていない。
戦力削ぎ？来てくれれば楽しいから？ああもどかしい、なぜこれほどまでに自分はティファが欲しいのか、そして欲しがられるのか分からない。
それでも、この瞬間にでも攫って閉じ込めたいと思う理由がなんであるのか分からないがこい願う気持ちは止まらない
「こっちに来てよお嬢ちゃん。」
きっときっと大切にするから

料理人の預かり者達

ドン！

「ティファ何処!!!」

ポップのルーラでマトリフの洞穴入口に到着したダイは、ヒュンケルとロン・ベルクを置いてきぼりにし、座っているマトリフに挨拶もせずに妹がいるであろう気配がする洞穴の奥へと突進していく。

妹がどこにいても自分なら分かる！

他人が聞いたらどん引き案件間違いなしの妹センサーを頼りに進んでいけば、手痛い目に遭うことになった。

「兄入るな!!」

洞穴の一番奥はマトリフの寝室で一応カーテンが取り付けてあり今は閉まっていて、そこから出てきたティファは暴走してる兄の肩口にラリアットをかまして押し止める。

「痛いティファ！でも元気だから許す!!」

「・・・・ありがとう・・・」

時々兄の愛が重く感じても私悪くないよね。ラリアットしたのに倒れないでそのままぎゅってされてびっくりだよ。

「二人とも会って早々ドタバタするなよ。」

「あ！御免なさいマトリフさん。」

「騒がせてごめんねおじさん。」

ダイとティファのじゃれあいにマトリフが物申し、基本は良い子兄妹はしっかり謝り、ティファは早々にダイから離れ洞穴入口にいるヒュンケルとロン・ベルクにひょこひょこ近づく。

「こんばんわロン・ベルクさん。」

「ああ、夕食会に呼んでくれんだって？」

「はい、たくさん用意しますので食べてください。ヒュンケルもその・・・・」

「ティファ・・・」

ロン・ベルクとは普通に挨拶をするが、矢張りヒュンケルにどう話し掛けていいのか分からず、ヒュンケルの方も手刀をした負い目でな

んと言えばいいのか分からずぎこちなくなる空気をポップのお気楽声が打ち破る。
「ティファ、おっさんとチウとマァムとメルルは？」
「あ！ポップ兄ありがとね、三人呼んできてくれて。」
「いいって事よ。俺のルーラならどこでもひとっ飛びだからな。そんで四人は？」
「そうそう！クロコダインとチウ君は浜辺に薪設置してくれて、マァムさんとメルルさんはね・・・くふふ。」
ポップの問いに、ティファは怪しげに笑いながら洞穴の奥に消えていき、直ぐに女の子三人組で登場した。
「ティファ！やっぱりこれ恥ずかしいわよ!!」
「ええい！可愛いは正義です!!よく似合ってますから大丈夫ですよ二人とも!!」
「ティファさん！きゃっ！」
ティファに無理やり手を引っ張られてカーテンから姿を現したマァムとメルルは戻ろうとしたが、がっちりと手を握られ戻れずポップ達に気が付き顔を真っ赤にする。
「こいつは・・・」
男達、特にポップはメルルの可憐な姿に呆けた顔を晒し、言葉が上手く出てこない。
マァムは淡い白のロング丈リラックススウェットワンピースに薄絹で作られたショールで肩を包んでいる。
ワンピースは首筋はカットアウトが深めで常よりも肌が露出し袖もないのをショールが守っている。
靴も其れに合う柔らかめの白革のハーフブーツ。
実によく似合うとティファは大満足。
そしてメルルの方はもっと大胆であった。
いつも、それこそ真夏でも長袖のロングスカートな彼女は、生まれて初めて膝丈までのサンドレスを身に纏い恥ずかしそうに両手を前でもじもじさせて落ち着かない様子でポップの方を上目遣いでちらちらとみる。

色は水色で綺麗な薄紫の花があしらわれており普段から履いているサンダルと良く似合う。
「どうだポップ兄！可愛いでしょう！ロン・ベルクさんもヒュンケルも二人とも綺麗でしょう！」
「お・・ああ・・」
「ああ、まぁ・・」
「うむ・・」
ティファのどや顔二人は可愛いいでしょアピールに野郎三人は上手い事が言えずに四苦八苦。
確かに可愛い！似合うが、一人は多感なお年頃で好きな子を褒めちぎれず、一人は武器以外興味がない生活を長年していたせいでこういう場合の褒め方が分からず、もう一人も戦い以外習ってこなかったのでどういえばいいのか途方に暮れる。
だがそこをポップは頑張った！
「メルル・・・そのよ・・・綺麗だ。」
上手く言えない部分はメルルの両手を取り、瞳をしっかりと見つめてカバーする。
本当に綺麗だと、何度も繰り返して。
「あれティファが買ったの？」
「そうだよダイ兄。マァムさんも綺麗でしょう。」
「うん、とっても似合うよマァム。」
「ありがとうダイ。」
服のことで盛り上がったところでティファは再びヒュンケルにアタックを掛ける。
「ヒュンケルこんばんわです。心配かけました。」
「ティファ・・・」
アタックを掛けてみたが不発で終わり。ヒュンケル私に手刀した事物凄く気に病んでる。理由おじさんから聞いた時私を止めてくれた感謝こそすれ恨んでないのに・・
「ヒュンケル、これからお酒を取りに行きますが一緒にお願いします。」

「・・・買っていないのか？」
「はい、天然の氷室に長年集めていたのがあるのでガルーダで取りに行きます。一緒にお願いできますか？」
「・・・・分かった。」
「はい、おじさん、皆行ってきます。」
「おう、ヒュンケル嬢ちゃん頼んだぞ。」
「え～！俺も行く!!」
「ダイ兄、行ってくるね。あ、御免、べほちゃんもお留守番してて。」
「・・・・いってらっしゃい。」
「―二人とも行ってらっしゃい―」
　ヒュンケルと二人きりにさせてねのアイコンタクトに負けたダイはティファからべほを受け取り渋々二人を見送り、マァムとまだイチャアマしているポップとメルルにも声を掛けて砂浜に宴会準備に行くように促す。
　ティファが戻ってきた時すぐに食べさせてあげられるように。
　声を掛けられたポップとメルルは赤くなりながらもしっかりと手を繋いでダイとマァムの後を追い、洞穴にはロン・ベルクとマトリフだけが残った。
「良い奴らだなあいつらは。」
「ああ、若いってのは眩しいもんだ。」
　一行の保護者的位置に居ると言ってもいいロン・ベルクとマトリフはダイ達の明るさと素直さにしみじみと感想を述べた後互いに礼儀だのは面倒なタイプなので簡素に名乗りあう。
「夕食会に呼んでもらって感謝する、ロン・ベルクだ。」
「こっちこそ一昨日の夜は嬢ちゃん守ってくれて感謝する。マトリフだ。」
「一昨日のな・・・守れたかどうか怪しいもんだが、一応は礼を受け取っておくぜ。」
　ロン・ベルクは夕食会の礼を述べ、マトリフは一昨日の真夜中にティファを守り抜いてくれたロン・ベルクに感謝を述べたが、ロン・ベルクは素直に礼を受け取れないと苦い顔をする。

自分が行った時にはティファの心は傷だらけにされて、きちん守り抜いたとは言えないからだ。
その事を告げてもマトリフの返答に変わりはなかった。
「それでも、お前さんが間に合わなかったら嬢ちゃんはキルバーンに連れて行かれていたよ。それを阻止してくれただけでも良かったよ。」
ロン・ベルクが間に合わなければティファは本当に連れ去られ、ダイ達の精神的ダメージは計り知れず、下手をしたら一行全員の心は折れていたかもしれないとマトリフは危惧している。
力、技術は最早ダイ達が上であっても、この一行の精神的支柱はティファだからだ。
「そうか、そういってもらえるとありがたい。掛けてもいいか？」
「好きにしてくれ。時にだ、嬢ちゃん連れて行こうとしたキルバーンは嬢ちゃんに何言いやがったんだ？」
「・・・・聞くだけでも気色悪いぞ。」
「ああ、全部頼む。」
ティファの疲れの一端をきちんと把握しておきたいマトリフは些細な事でも知っておきたいとロン・ベルクが見聞きしたことを余すことなく聞いた。
・・・・・確かにダイ達がやっこさんを変態だと評する理由がよっく分かった。
だが、昨日のあいつの様子じゃそんなこと嬢ちゃんに言いそうになかったが、わざと心を壊すために言ったのか？
マトリフの考え込む様子に気が付かず、ロン・ベルクは溜め息を吐きながら話を続ける。
「お嬢さんにも困ったもんだ、そんなに大変な目に遭ったのに仲間に心配かける事ばかりして。もっと周りを頼らないと駄目だ。」
「・・・周りにか。」
「ああ、昨日ヒュンケルがお嬢さんのした事全部話してくれてな。敵との交渉・判断を全部一人で抱えちまってる。それじゃあお嬢さんが疲れきるのは当たり前だろう。」

「その通りだな。」
「だろう?その事をお嬢さんと話し合いたいんだがいいか?」
「・・・・なんで俺に聞くんだ?」
「あ?ヒュンケルが今のお嬢さんを守ってるのはお前さんだって言っていたからな。話すにしてもあんたに筋通しておきたいだけだ。」
「そうか。」
ロン・ベルクの言い分に、マトリフは目を少しつむり思案する。
この男の言い分は正しい。嬢ちゃんは今まで何もかもを背負い込んでとうとう抱えきれずに昨日の大惨事を引き起こしたことに間違いはない。
だがそれでも、許可は出来ねえな。
「ロン・ベルクさんよ、その話待ってくんねえか?」
「何故だ、お嬢さん自身がチウに仲間を頼ってくれと言っているのを聞いていい事を言うもんだと感心したが、お嬢さん自身が出来てねえんだぞ。」
「それでも待って欲しい。」
「・・・ヒュンケルに聞いていたよりも甘い男だな。お嬢さん自身の為にもきっちし話しておいた方がいいだろうに。」
「嬢ちゃんが今まで彼奴等に頼らなかったのには訳があんだよ。」
「訳?」
「その話の前に、嬢ちゃんの事を話させてもらうぞ。」
ロン・ベルクの説得のために、マトリフは七つの頃からのティファの話しを始めた。
幼き頃より戦う力も知識も桁外れにあり、ガルーダ連れとは言えたった一人で世を回り世間の大人以上であったティファの話を。
「・・・・あのお嬢さんはそんな頃から・・」
話を聞いたロン・ベルクは驚きを隠せず絶句する。
確かにダイも強いが、幼い子供が単騎でモンスターを易々と倒すなどとはこの地上では聞いたことがない。竜の騎士の子供だから才に溢れできたのだろうか?
そんな子供がたゆまずに努力を怠らずに成長すれば・・

「お嬢さんが戦い慣れしてるわけだ。」
「お前さん嬢ちゃんが実際に戦った姿見た事あんのか？」
「いや・・・・投げ飛ばされた・・」
「・・なにやってんだ。」
「いや・・・・ともかく実際はないがダイやヒュンケル達から聞いた程度だ。それにキルバーンの奴がオリハルコン製の敵の胸に風穴開けたとは言ってたが・・・最初会った時はとてもそんな事できるような者には見えなかったんで話聞けば聞くほど驚いてる。」
「そうか。話の通り嬢ちゃんは確かに強いけどな、単純な力・技ならもうダイ達の方が上だろうよ。」
　マトリフはティファの実力の天井はまだ知らないが、バラン戦や鬼岩城での戦い方をダイ達の話を聞いていて冷静に判断をしてそう評価した。
　ティファにはダイのように鬼岩城を真っ二つに出来る大技はなく、ポップが身に付けたような消滅呪文もない。
　膂力も体格からしてヒュンケルやクロコダイン、格闘専門のマァムに軍配が上がるだろう。
「だったら尚の事何故お嬢さんは仲間を、ダイ達を頼らねえんだ。」
　マトリフの話と評価を聞けば聞くほど、ティファが仲間を頼らない理由が分からないと苛立つ。自分よりも強いものを頼らない理由は何だとマトリフに続きを促せば、とんでもない返答が返ってきた。
「ダイ達は今まで―料理人ティファ―の預かりものだったからだ。」
「預かりものって・・・・あのお嬢さんは随分と傲慢な考えを考えを持っているんだな。」
　聞いたロン・ベルクはかなり不快な気持ちになった。
　他者を預かるとは容易な事ではなく、如何に知識実力があろうとも十二歳の子供がして良い事だとはとても思えない。ましてダイとチウ以外はティファよりも年が上であり、なおさらして良い事ではないだろうと。
　その様子にマトリフは嘆息をつきながら弁明する。
「今お前さんが何を思ったか大体予想できるがそうじゃねえんだよ。」

「何が違う？言っている事はそういう事だろう。」
「お前さん、ダイ達の師を知っているか？」
「ああ、確か先代の勇者でダイ・ポップ・マァム・ヒュンケルが同門だったな。」
「そうだ、嬢ちゃんはその先代勇者アバンから直接頼まれて預かったんだよ。―平和の芽―ってやつを。」
「平和の芽？」
「ああ、嬢ちゃんが眼鏡かけてるのは見た事はあるか？」
「最初会った時からずっとかけてるが、そういえば今掛けてなかったが。」
「ありゃ伊達眼鏡で嬢ちゃんが料理人のティファとして動く時のお守りだそうだ。」
　昨日嬢ちゃんが話してくれたと前置きをし、先代勇者の思いも伝える。
　伊達眼鏡はアバンの実力の高さを隠すための物であり、大戦時はカールのフローラ王女に預け、大戦後にまた再び掛け始め平和の芽を育てる為に教師となり世界中を回り、ヒュンケル・マァム・ポップを育て、最後のダイの時は修行三日の時に魔王ハドラーが来てしまい全てを教えきれなかった事を。
「だからか、アバンの奴は嬢ちゃんの実力の高さを看破して後を・・ダイ達を託してメガンテをしたんだと俺は考えてる。」
　眼鏡と共に、育ち切れていない頼りない平和の芽を守るように託して。
　島にハドラーが来た時アバンはダイとの修行の為に魔力の使い過ぎもあったが、実力差がありすぎ、ダイとポップも師を思い果敢に立ち向かいほんの少しだけ傷をつけることが出来たが焼け石に水であった。
　しかしティファは、そんなハドラーの必殺ともいえるヘルズクローを無傷で躱し、全然魔王に見えない、中身が酒場で喧嘩しているおじさん達並ですと、怖れげもなく魔王相手に啖呵を切っていたという。
　その実力と胆力を見込み、アバンは全てをティファに託してメガン

テをしたのだろう。
「それ以降、嬢ちゃんは料理人のティファとしてあいつ等を力だけじゃなく心も育てようとしたんだ。」
　それぞれに戦う理由と心構えを問うてきて話をし、遂にはダイ達全員の心は強く育ち、どこに出しても恥ずかしくない威風堂々とした立派な勇者一行に育った。アバンとティファの願い通りに。
「そんな・・・壮大な願いをあいつは果たしたってのか・・・」
　たった十二の子供が、そんな途轍もない事を願い果たしたことに今度こそロン・ベルクは言葉を失う。
　あいつは・・・一体何なのだ？望んだからと言って、人の心それも一人だけではなく幾人もの心を出会って数か月でその通りに導ける者なんて聞いたことがない!!
　幽かな怖れをティファに抱き血の気が引く思いをロン・ベルクは味わう。
「・・・嬢ちゃんが怖いと少しでも思ったんなら、あの子に関わらねえでくれ。」
　黙り込んでしまったロン・ベルクに、マトリフは静かに告げる。
　ティファが今も昔も怖れているのは、他者を守れないことと同じくらいに他者に怖がられる事なのだから。

「へっくしょん！て・・・誰か噂してる・・」
「大丈夫かティファ。」
「はい・・・・何やら噂されているようです。」
「そうか。時にティファ、氷室とはここでいいのか？」
　ヒュンケルはティファの身を案じながら岩に埋まっている崖を指さし尋ねる。
「ここです。入口は毎回岩で埋めて防犯してるのです。どかしましょう。」
「ああ、なるほど。」
　納得したヒュンケルはガルーダとティファに下がるように言ってすぐさま岩をどかしていく。
　その速さはすさまじく、あっという間に入口が姿を現し大人二人が通れるほどになった。
「・・・凄いですね、私の倍の速さです。」
「―ティファもすごいと思ったが、この男も中々のものだな―」
　ティファと、言葉は分からないが雰囲気でガルーダに褒められているのが分かり、照れ隠しにコホンと一つ咳をして中に入る。
　流石にガルーダは中に入らずヒュンケルとティファの二人だけで取りに行った。
　中は確かにひんやりとし、下に続く道があり松明が置かれていた。
　ティファが携帯の種火をリングから取り出し松明に火をつけヒュンケルが受け取り下に降りていけば沢山の樽が下に置かれ、棚がありそこにも密封された瓶が所狭しと置かれている。
「様々なお酒がありますが、クロコダインやロン・ベルクさんはどんな

のがいいでしょうね？」
　どんなお酒がいいか一昨日のお昼に一緒に飲んでいたヒュンケルに尋ねる。
「そうだな、持って行ったワインもいいがもっと強いのが良いと言っていたな。」
「そうすると・・・ああ、あれがあった。あ、ヒュンケル届かないので持ち上げてもらっていいですか？」
「ああ・・・」
　いつもの自分ならば喜んでそうするが、今はティファに対して罪悪感が一杯で素直に喜べず、暗い表情でティファの背中を見ながら持ち上げた後俯けば、ティファの優しい声が降ってきた。
「ヒュンケル。止めてくれてありがとうございます。」
　声を聞いてすぐに上を向けば、温かくて優しいティファの笑顔があった。
　そんな笑顔を、自分は向けられる資格は自分は無い。荒れ狂ったティファ心を止めるのに力づくでしか止められなかった自分にふさわしいはずが無い！
「ティファ・・・俺は・・」
「私を止めて、助けてくれようとしたのでしょう。」
「それは・・・それでも・・・」
「嬉しく思いました、ありがとうヒュンケル。」
「あ・・・あっ！」
　否定しようとしても、ティファの温かい言葉が冷え切った心に優しく染み入り、溶かされたヒュンケルは持ち上げたティファを振り向かせ掻き抱き咽ぶ様に泣き叫ぶ。
「ティファ！ティファ・・・俺は・・俺達はお前を・・・助けたかった、救いたかったんだ!!」
　いつも自分達の心を慰め温めてくれるように、今度は自分が救いたかった。
　だが、ティファの様にいかず力づくになってもそれでもと。
　溢れるヒュンケルの涙と思いをティファは何も言わず、ゆっくりと

頭を撫でながら受け止める。地底魔城戦のあの後のように、後悔と悲しみを全て受け止めたあの時と同じ様に。
氷室内は泣き声が響き、程なくして落ち着いてきたヒュンケルの頭をポンポンと叩く。
「ヒュンケル、お酒持って帰りましょう。」
「ああ、そうだな。」
結構な量のお酒をマジックリングにに入れ、氷室を出た二人は再び岩で入り口を塞ぎガルーダに乗って一路仲間の下へと飛び立つ。
ガルーダの背にいるヒュンケルの顔には悲しみは最早なく、晴れやかで力強い笑みが浮かべながら。
「おじさん！ロン・ベルクさん!!ただいまです。」
「酒を持って来たが、ダイ達は何処に？」
「お帰り二人とも、」
「あいつ等なら今頃浜にいるぞ。」
「ふ～ん、行ってくるね。」
挨拶もそこそこに、ティファはヒュンケルを置いて浜へと爆走していった。
「つたく嬢ちゃんは元気になると落ち着きのねぇ。」
「その元気さこそがティファでしょう。」
「まぁな。時にヒュンケルよ、随分と晴れやかな顔になってるじゃねえか。」
さっき見た時はこの世の終わりみたいな面してたのに。
「はい、ティファに止めてくれてありがとうと言われまして。」
面映ゆそうにマトリフの問いに答えるヒュンケルは年相応の青年に見える。
たった二言三言でヒュンケルの心を晴らしたのか嬢ちゃんは。酒云々は口実か。
マトリフ同様、昨日からヒュンケルの苦悩を見て知っているだけに、短時間でそれを取り除いたティファに驚きながらも、先程聞いた預かりものの話に心底納得をした。
確かに料理人ティファは勇者一行を預かり、力だけではなく心を守

り育ててきたのだと。

宝石箱の様な中に・・・・

マトリフの洞穴から走ってきたティファの眼前には、幸せがいっぱい詰まった光景が目に飛び込んできた。
和気あいあいと話しながら食器を配る兄達が、片方の意見を聞きながら笑って料理を作っていく女の子達が、薪をつぎ足し火の番をしながら時折鍋をかき混ぜているクロコダインとチウの姿が、煌めく宝石の様にティファには映る。
ああ、なんと愛おしい光景なのだろう
満天の星空の下、大好きな人達が幸せそうに笑っている光景は、本当に愛おしい
「ティファも手伝います!!」
「あ!ティファ!!駄目だよ、今日くらいは・・」
「手伝いたいのダイ兄!いいでしょうポップ兄〜。」
「ったくしょうがねえな〜、マァム、メルルいいか?」
「はい、肉団子の煮物の味付け決まらなくてマァムさんと・・・」
走りながらお手伝いを申し出、その宝物の中にティファは自分から入っていった。
少し前ならば見守るように少し距離を置いてみていた中に、自分も入れて欲しくて。
「これに胡椒とパテギア草の粉末入れてと。」
「あら!アバン先生そっくりの味になった!」
「これ先生に貰った物なんですよ。」
「ティファさん、キッシュの味見を・・」
「それポップ兄に頼んだほうが喜びますよメルルさん。」
「ちょ!ティファったら!!」
「・・・・ティファさん・・」
女の子三人はきゃいきゃ言いながら様々な料理を瞬く間に作っていき、その匂いに待っている野郎どもの腹が鳴る。
その音を聞いたティファは、一瞬びっくりとして次の瞬間はじけるように大笑いして後から追いついたヒュンケルやロン・ベルクを入れ

た周りを驚かせた。
普段自分達の知っているティファからこんな大笑いする姿は想像できず、だがこれもティファの一部なのだと思い知る。
マトリフだけが、やっと元気になったなと笑ってティファを包み込み喜んでいる。
普通に女子トークをし、普通に大笑いをする。このティファがいつものティファなのだと言える世の中に早くしてあげたいと、誰もが思う程生き生きとしている。
「ティファ、ここいいからそのままマトリフおじさんと座ってて。」
「ですがマァムさん・・」
「ではティファさん、お酒の用意をお願いしますね。」
「・・・分かりました。」
マァムとメルルに体よく休まされたティファは、ヒュンケルと取ってきたお酒の数々を出し、終わった頃に全ての料理が出来上がり、火を囲んでマトリフは流木を椅子代わりにしてもらい、他の面々は思い思い砂浜に腰を下ろす。無論ティファはマトリフと同じ流木へと押しやられマトリフの横にちょこんと座る。
メルルとマァムが大人達に酒を注ぎ、チウはジュースを注いで回る。いつもならば全てティファがしていた事だが、今日はそのティファに楽をしてもらう。
「さぁ、ティファさんもどうぞ。」
「ありがとチウ君。次は私が注ぐね。」
「いいからお前は今日は食べる事に専念しろ。」
「ポップ兄・・・ありがとう皆。」
ほんのりと赤くなり、少し俯きはにかんで笑うティファに温かい労りの言葉が沢山降り注ぎ、一段落してから乾杯の声が海岸に響いた。
温かい鍋を食べ、なくなれば隣にいるダイがすかさずおかわりをよそう。妹の好みを知っているのは至極当たり前なのでサクサクよそい、ジュースを適度に注ぎ足しさりげない給仕力を発揮する。
「・・・兄、ホテルマンでも食べていけそう。」
「ティファにだけだよ。あ、でも将来はレオナや俺の子供にもしてあ

げるんだ。」
「結婚は確定なのかよダイ・・」
「え？ポップもメルルもするんでしょう結婚。」
「ぶぅ!!
!!」
「!!」
「どうせなら一緒に結婚式ってのやろうよ、ね。」
　天真爛漫なダイのあっけらかんとした物言いに、ポップとメルルは真っ赤になって口をぱくぱくとさせ周りは驚きながらも次第に温かい笑みを浮かべ、その時は必ず呼んでで欲しいとまで要望が上がった。
「結婚式か・・・・出たことないな。」
「その前にお前さんが結婚したらどうだよロン・ベルクさんよ。」
「・・・お前もしてねえだろうがマトリフ。」
「まぁまぁ、おじさんもロン・ベルクさんも、まだまだ先の話だよ。でも、合同結婚式いいかもしれないねダイ兄。」
「そうでしょう、ティファもかわいい服着て最前列に出るんだよ。チウもクロコダインもヒュンケルも来ないと駄目だからね。」
「分かってるさダイ、姫君とお前の結婚式に出ないわけがなかろう。」
「うっむ、俺はこのままで出ていいか？」
「・・・・・僕頑張って生き延びて結婚式に出ます！ダイ君もポップもメルルさんもお幸せに!!」
「つだああ！なんでそこで俺とメルル出すんだチウ!!!」
「え？メルルさん嫌なのポップ？」
「・・・・・そうなんですか？」
「ば！違う!!!嫌じゃねえ!!してえ・・・て!!きちんという時に言いてえから待っててくれメルル!!」
　ポップとメルル、もうどう見ても良い中なのにまだ告白もしてないらしい
「・・・・なぁ、ポップ、魔法使いはな！いつだって冷静にそして迅速に物ごとに対処しろって教えてんだろう!!何をもたついてやがる！」
「うっせえぞ師匠！それとこれとは話は別だ!!俺にだってな・・・俺に

だって言いたいタイミングがあんだよ～!!!」
酒の入ったマトリフに絡まれたポップは絶叫しながらいずれするからでメルルに待ってますの返事を貰って許してもらい、その光景にダイ達は吹き出し、そして大笑いの渦があたりを満たす。
あぁ楽しい、皆未来に希望を持って前に進んでいくこの光景のなんと尊い事か。
誰もが勝って明るい未来を作る事を疑わず、クロコダインもヒュンケルもその輪の中に自然と溶け込み、ヒュンケル等はほんの少し酔ったのかダイとポップを両脇に抱え込んで頭を撫でながらほんのりと笑っているという珍しい光景迄広がっている。
「お前達の結婚か・・・・・俺にも・・」
「何言ってるのさヒュンケル!そんなにかっこいいんだから!!」
「そうだぜ、ダイや俺よりも先に結婚するの絶対にヒュンケルだぜ!!」
抱え込まれ頭を撫でられても二人は嫌な顔をせず、ヒュンケルも結婚できると自信満々に言って、どんな人が好みか、結婚てのはなとか主にポップが話し盛り上がっている。ジャンクやスティーヌを見て育ったポップは、とくとくと知った風に言うのがなんともおかしくヒュンケルはますます弟弟子の頭を撫でている。
ダイもデルムリン島の皆とブラスじいちゃん呼ぶの大変だからデルムリン島で式を挙げ、ウォーリアー船長達も呼ぶんだと夢一杯に話し込む。
その横には赤くなりながらもマァムと笑って料理をつついているメルルがいて、クロコダインに少し貰ったお酒が苦いと舌を出すチウと笑っているクロコダインがいる。
右隣を見上げれば、黙って微笑みながらロン・ベルクと静かに酒を酌み交わすマトリフがいる。
嬉しくて、言葉を発したら壊してしまいそうで、ティファは唇を震わせ涙が零れそうになるのをこらえる。
自分はこんな素敵で幸せな場所にいれて、なんと幸せなのだろう。
いてもいいのだろうか、こんな自分がいても・・・
あぁ勝ちたい、勝って皆が話している事を全て実現させてあげた

い。その為にも勝たないといけない、どんな手段を使ってでも。その為にこそ、自分がいるのだから。

「とこれでマァムさんは結婚はしないんですか？」
「あのねチウ、私まだ相手もいないのよ。まずはそこからでしょう。」
「あ、そうするとティファさんもですね。どんな人が好きですかティファさんは。」

・・・・・幸せって脆いの忘れてた

チウの何気ない言葉が、温かい空間にヒャド系の呪文がぶち込まれ冬が到来した。
「ねぇチウ、ティファにはねまだその話は早いと思うんだけど？」
「！」
「ね？」
「は・・・はい!!」
冬将軍化したダイの目力に押され、チウはびしっと敬礼してダイに返答した。
二度とこの話題に触れてはいけない！今度はヒャドじゃなくライデインが降る!!
私の好みの人か。そんな事考えた事もない、そもそも考える事でもない・・・・お嬢ちゃん♪
「っ！」
まただ・・・どうしてキルの声が時々響くんだろう・・・それもこんな時に・・
冬将軍化したダイをポップが宥め終わり、赤くなって俯くティファに気が付かずまた食べ始める。
ただ隣にいるマトリフだけが気づいたが、突かないでおくかと気を利かせて黙っている。
聞かれていたらティファは困っていただろう。敵のキルバーンの声を思い出し赤くなったとは言えずに誤魔化すしかなくなるのだから。

約束が果たされし時

かぁ～らぁす～、何故なくの～カラスは山に～かわいい七つの子があるからよ～。
星空の下、ティファは海を背に竪琴を弾き火を囲んで座っているダイ達に歌を聞かせる。
かわい、かわいとカラスはなくの～
ダイ・ポップ・ヒュンケル・マァム・メルル・チウ・クロコダイン
古い古い昔の自分が好きだった歌
夕暮れ時に一人で誰も聞いていないのに歌っていた歌の通り、自分はこの七人が誰よりも何よりもかわいく愛おしい
可愛い、可愛いと鳴くんだよ～
辛い道をそれでも生来の明るさを失わすことなく歩き切ろうとするこの一行が本当に愛おしい
山の～古巣へ～行ってみてごらん～
種族見た目なんてどうでもいい
まぁあるい目をした～良い子だよ
この子達はとても良い子達なんだから

食べて喋って満たされたダイ達お子様組は、ティファの優しい歌を子守唄替わりとし寝そべって聞いていたダイとポップはそのまま寝入ってしまった。
その顔には戦いの疲れも苦労もなく、ただただ安心して眠る子供の寝顔を浮かべて。
「しょうがない奴らだ。」
「ダイもポップもまだまだ可愛いもんだな。」
見回せばマァムもメルルも眠そうにし、チウもダイを起こそうとして力尽き上に覆い被さってくぅくぅと寝息を立てている。
クロコダインがポップを、ヒュンケルがダイを横抱きにして洞穴の少し奥に連れて行き、寝袋をティファに渡されていたので起こさないようにそっと入れる。

そのヒュンケルも相当出来上がっているのかほんのりと顔は赤く、可愛い弟弟子達の寝顔を飽かずに見ている。
そのまま横で二人を見ながら寝たいがもう少し起きていたいきもする・・・なんと贅沢な悩みをするようになったのだろうか自分は。
魔界でミストバーンに師事していた時は単に体を休めるための行為で、さらにさかのぼればアバン先生の時は、話しかける師から背を向ける口実になるとだけしか考えていなかった眠りが、こんなぜいたくな悩みを持つ行為になるとは。
「ヒュンケル、マァムさんとメルルさんは敷き藁敷くので手伝ってください。」
「そうだな、二人にはそうした方がいい。」
軽い酔いのヒュンケルは柔らかく笑いティファの手伝いをせっせとする。
マァムさんとメルルはクロコダインが連れてきてティファが寝袋に入れる。
流石にうら若い女の子達のお世話はティファの方がいい。
チウはティファにだっこされて連れられ、ダイの横に寝かしつけて一息つく。
「さて二人共、おじさん達まだ飲んでますがどうしますか？」
無論二人の答えは決まっている
もっと飲もう
浜辺に戻ればティファの言う通りマトリフとロン・ベルクはおもいおもいに酒を注ぎ静かに飲んでいた。
これ程楽しい酒はいつ以来だろうか？
二人共に世を捨てたような生活をして久しく、この数日でなんと色濃く充実した日々を送っている事だろうか。
足音と気配でヒュンケル達が戻ってきたのを察した二人は黙って空のゴブレット二つに酒を注ぎ座るように無言で勧める。
「相伴に預かろう。」
「いただこう。」
男四人の酒盛りを、ティファも黙って給仕する。

それぞれのゴブレットの近くに小皿を置き、チーズ・ピクルスと酒のつまみを盛りつけ、自分もジュースではあるがマトリフの横にちょこんと座り輪に入る。
そんなティファに、ヒュンケルは思いがけない事を告げる。
ここ数日、自分は仲間たちの言葉で人の王達から許しを認められ、励まし迄受けてきた。
そして・・・素敵な人から頑張っても無茶はしないで下さいと真っ赤になって言われながら花を渡された。
自国を攻め滅ぼそうとした自分を責める事無く・・・あの女（ひと）はこんな自分に花をくれ優しい言葉まで贈ってくれた。それを思い出せば今この時にも自分の胸を温めてくれて・・・
「ティファ、俺はきっと幸せを見つけられたのかもしれない。」
戦のこんな中にあっても、自分は幸せなのだと実感できる
その言葉に、クロコダインは驚いた。
確かに自分とヒュンケルはティファに、戦いの後自身の幸せも見つけに行くと誓ったが、まさか早々に見付けられていたとは。
それはとても嬉しく、我が事のように喜びが胸を打つ。
ヒュンケルに良かったなと祝いを述べようとしたが、言葉を止めた。
ふらふらとヒュンケルに近づくティファを見て。
ヒュンケルの言葉を受け取ったティファは弾ける様に顔を上げまじまじとヒュンケルの顔を見た後、引き寄せられるように腰を上げふらふらとヒュンケルに近づき、そしてヒュンケルの顔を胸に抱きしめた。
「・・・・ヒュンケル・・」
「ああ」
「ヒュンケル・・・ありがとう・・」
「ティファ・・・・・ああ・・・」
ヒュンケルの頭を抱きしめたままティファは幾度もヒュンケルの名とありがとうを繰り返し、ヒュンケルも小さなティファのか細く頼りない腰に縋るように腕を回して何度もこたえる。

ヒュンケルが幸せを見つけたと言ってくれた・・・これ程嬉しい事があるだろうか

どのくらいたったのか分からない、ほんの数舜だったのか長い時間だったのかは分からないがいつしかヒュンケルの腕は落ち寝息が聞こえる。

そっとヒュンケルの頭を胸から離し、ゆっくりと横たえ膝に乗せる。

「ティファよ。」

「はい。」

「ヒュンケルはお前との約束を果たしたのだな。」

「はい。」

「幸せを見つけられたのだな。」

「はい。」

顔を上げればクロコダインの目にも涙が溢れている。

「そうか、幸せかヒュンケル。」

共に同じ魔王軍の軍団長であり、自分達のいく道は険しく茨の道を行くことになると覚悟を決めていただけに、ヒュンケル同様自分達はこんなにも周りから庇われ励まされ受け入れられていいのだろうか悩みさえしたのだ。

自分達がこれほどまでに周りからよくしてもらい・・・あぁならば自分もきっと・・

「ティファ、俺も幸せをもう手にしているのかもしれん。」

敵を倒すことしかできない自分の両手を見つめ、クロコダインもぽつりとつぶやく。

この手を一昨日、王達に許された直後にダイを始め仲間達が次々と握ってくれた。

温かく優しい気持ちがそこから流れ込んでくるのが分かる程力強く。この素晴らしい一行と共にあれる、そしてダイ達だけではない。

パプニカのバダックやベンガーナのアキームまでもが後からおめでとうと言いながら握手を交わしてくれたのだ。

勿体ない

罪を償う最中の自分達に、これ程までに優しくしてくれる仲間たちがいる。これを幸せと言わずして何を幸せだというのだろうか。
下を向けば、またもや涙を流しながら喜んでくれているティファがいる。
そしてマトリフとロン・ベルクも優しい笑顔で自分とヒュンケルを見ている。
ああヒュンケルよ、俺達は本当に幸せ者なのだな

勝つ為の算段をつけておく

幸せは、見つけるだけじゃ駄目なんだ。その幸せを守れるようにしないといけない。

ヒュンケルとクロコダインの思いがけない告白に、ティファは決心する。

「ロン・ベルクさん、魔界の神・大魔王バーンに直接会ったことはありますね。」

会ったことがあるかではない、会ったことがありますねの断定系のティファの言葉にクロコダインとマトリフのみならず、言われたロン・ベルク自身も目を見開きティファを凝視する。

確かに自分は直接大魔王バーンから仕事を頼まれスカウト迄されたが、誰にもその事を明かさずに今日まで来た。

それを何故目の前の少女は断定できる？

「二つの貴方の作品が魔王軍にあったからです。」

ティファはロン・ベルクが疑問を言う前に、自ら考えを披露する。

ロン・ベルクの様な鍛冶師が人伝からの話で依頼を受ける事はなく、直接依頼主が頼まなければたとえ神が相手でも動かないだろう事を。そしてあんな凄い武具をいくつも作ってばら撒くような者にも見えない。一点作った後は余程の改良か新着想を思い浮かべない限り二点目を作らなさそうだ。

「以上の事を考えて、貴方が大魔王に直接会い仕事を頼まれ武具を作って納入したと思ったのですが外れましたか？」

知識なくともこの人分かりやすいから推測できる範囲内だ。さて、返答はどうか？

「・・・・当たっているよ、お嬢さんの言う通り俺は直接大魔王バーンに会ったことがある。」

何なんだこのとんでもないお嬢さんは。会って数日の相手を此処迄分析できるって無いだろう普通う。

ロン・ベルクの告白に、さしものマトリフも絶句する。

敵の中枢たる長と会った者が身近にいた事に。そしてティファの

慧眼に血の気が引く思いを味わう。成長して更に思考に磨きが掛かっていたのは分かっていたがここまでとは。
「それで、お嬢さんは俺に何が聞きたいんだ。」
「単刀直入に聞きます。―今―のダイ兄で大魔王バーンに勝つ見込みはありますか。」
「・・・・本当に聞きたいか？」
「前置きはいいのでお答えを。」
話し合う二人は火花が散りそうな程真剣なまなざしで互いを見あう。
ティファは腹の探り合いではなく今すぐにその答えが知りたいと願い、ロン・ベルクも昨日からのダイ達との特訓で得た今のおおよそのダイ達の力を算出し、溜息が出る。
「今のダイ達じゃあ奇跡が起こらん限り無理だ。」
労りの言葉もなくはっきりと告げる。どう言い繕うと結果が変わらないのであれば無駄な言葉は不要である。
その言葉を受けたティファは、詰めていた息を吐きだす。
「矢張りそうですか。」
「おい嬢ちゃん！」
「ティファ！いったい・・・」
得心したティファに、マトリフとクロコダインは目を？く。戦う前から負けると分かっていたと聞いて冷静な者はそうはいないだろう。
落ち着いているティファの方こそ尋常ではない。
はっきりと言われて良かったよ。これでロン・ベルクさんに頼みやすくなった。
「私も一度で勝てるとは思っていませんでした。おそらく一度目はぼろ負けしますが逃げる算段は付けていますので大丈夫です。」
「・・・・いつからだ？いつからお前さんはそんな事を考えていた。」
「そうですね、先日の鬼岩城戦でミストバーンに殺されかけた時、彼の強さ×十倍で試算した結果ですね。」
「そうか。」
「はい、そしてその上での頼み事です。逃げる算段は付いているので

再戦する時にヒュンケルが槍ではなく剣の魔装で再び戦えるようにこちらで製作を依頼します。」
自分の一行が負けると平然と言い放ち、そしてその後の事を淡々と話しながらティファはマジックリングから―オリハルコン製の手足―を数本取り出し砂浜の上にそっと置きロン・ベルクに依頼をする。
「おそらく剣の魔装と後いくつかの武具は作れると思いますので、他の皆の分の武具作りも並行してお願いします。」
クロコダインのアックスを改良できないか、マァムに手甲型の魔装は出来ないか、ポップに魔法を撃つだけではなくそれ自体が武器になるロッドを作れないか。要は原作知識の先取り依頼である。
そして使用されるのは全てオリハルコン製、大魔王との二戦目は是が非でも勝ちたい！
「ダイ達は一度負けたくらいでは折れません！必ず勝つために己を鍛え、敵の喉笛に喰らいつきに行きます。」
その時にふさわしい武装を用意するのも自分の役割だ

逃亡者

あぁ、どうしてこんなことになったのか

「きぃぃぃ・・」

「大丈夫、大丈夫だよ。ティファが絶対に守るから・・・」

浜辺でロン・ベルクに注文を細かく出すために注文票を書こうとしたティファは、何かの気配に気が付きヒュンケルの顔頭を膝からそっと下ろし、ゆっくりと森の方を向いて立ち上がった。

洞穴でダイ達を見守っていたガルーダも幽かな気配に気が付きティファの真横に音もなく降り立ち警戒の目を森に向ける。

それは本当に幽かで、話に夢中になっていたロン・ベルクは無論マトリフもクロコダインですらも気が付かなかった。

一体ティファとガルーダは何に気が付いたのかクロコダインとロン・ベルクは武器に手を伸ばし、マトリフもいつでも攻撃できるように魔力を静かに練り始める。

程なくし、一匹の小さなデビルが姿を現した。その気配は地上のいたずらデビルとは気配も形状も大きく違いどこか禍々しく一目で分かった。

「・・・・魔界の・・・君帰らなかったの!!」

ティファは驚きのあまりに咄嗟に大声を出してしまった。

魔界から来たモンスター達は許されたとはいえ終生魔界より出る事を昨日大魔王の名の下にハドラーから命じられたばかりで、一頭でも破れば連帯責任になるのは目に見えている。

折角助かった者達が命を落としかねない事態で、助かったと心の底から喜んだティファが叫んだのも無理からぬことであった。

昨日はハドラーの帰還命令の後、アポロを始めとした騒ぎが起き、このデビルはそのどさくさに紛れパプニカの森へと逃げ、空腹でこの浜辺から漂う料理の良い匂いにつられて出て来たのだ。

「―我も・・我も皆が好きだ!・それでも・・・―」

この地上にいたかった

気配と同じく幽かな嘆きの声がティファの安定した心を再びかき乱す
ああ、暗き世界しか知らぬものが暖かきことを知ればそれを欲するのは自明の事では無いか。
温かい太陽が、満天の星空が、このデビルの瞳にはさぞ美しく羨ましく映った事かしれない。
だが、軍の命に背いた者を見逃すほど魔王軍が甘いとはとても思えない。
「・・・ガルーダ、単身で天界に行けるって言ってたけど、魔界に行ける？」
「―・・・あれを戻すのか？―」
「うん。」
「―・・・保護はしないのか？―」
今日の昼間凶暴化して傷ついたマーマンをデルムリン島へ連れて行き保護したようにはしないのだろうか。
「ガルーダ・・・昨日見てたでしょう。命令違反したらあの子助かっても他の子・・・」
ティファは言葉を切りいきなりデビルの下へと駆け出し叫び上げた。
「だめぇぇ!!殺さないで!!!!」
デビルの後方の背景がいきなり黒塗りになりティファには直ぐに分かった。
死神の空間が空いてしまった
叫びながら走り、自分の声に驚き固まってしまったデビルと振り下ろされる大鎌の間にその身を滑り込ませ、昨日アポロを庇ったように両手を大きく広げ懇願をする。
「お願い！殺さないで!!」
「っ！」
空間から振り下ろされた大鎌はティファの白い頬に切っ先を食い込ませて止まり、空間を開いてキルが姿を現した。

ティファ達が楽しい宴会をしていた時、キルはミストから一つの仕事を命じられて気が進まないながらも死神の仕事に務めていた。
昨日のアポロ騒ぎの時、もしやその機に乗じて逃げ出した者はいないか帰還したモンスター達の頭数を確認を魔界の配下に命じ、ミストに一頭足りない事がすぐさま報告が上がり、悪魔の目玉で探し今日の夕刻見つけ自室でのんべんだらりとしていた穀潰し死神に見せしめにするように命じ、まさか先にティファが発見するとは思っていなかったキルは驚いたが、これも仕事とティファの目の前ではあるが惨殺して空間で直接魔界に運ぶ算段を付けて大鎌を振り下ろしたのだが。
「お願いだから、殺さないで・・・」
大鎌を顔に当てられても気にもせず、瞳からほろほろと大粒の涙を流し懇願をされる。
味方である自分達は見せしめの処刑をしようとし、敵のティファが助けようとする・・・
「お嬢ちゃん・・・・これはね・・」
「分かってる！分かってるの！でも・・・・けど・・」
どうなだめすかしてもこれは無理だ。お嬢ちゃんも本当にこの事態が不味い事は承知している。それでも助けたいと願っている。
「おっらあああ!!」
ザン！
一昨日の真夜中のように、またもやロン・ベルクがキルとティファの間に斬撃を振り下ろし、二人を分断する。
「手前が何でここにいるかなんてどうでもいい・・・おれがたたっ壊してやる!!」
こいつは絶対に倒したかった。それこそ大魔王やミストバーンよりもだ!!
「ふぅ～ん、僕の事が随分と嫌いなんだねぇ鍛冶屋さん。」
後方に飛んで斬撃を避けた大鎌を肩に担ぎ体勢を立て直したキルも、自分の邪魔をしたロン・ベルクを憎々しげに見つめる。
こいつさえ出しゃばらなければ、今頃お嬢ちゃんは僕の腕の中にい

たのに!!
　二人の戦意が高まり頂点に達しようとしたその時、ティファがデビルを抱えて森の方に飛んで行った。
　足には空飛ぶ靴が履かれており、自分を庇うように動いてくれたクロコダインとマトリフを振り切り森の奥深くに潜り込んだ。
　あの子は本当に!!
「クロコダイン君、分かっているよね。命令違反をしたものは死ぬまで追うのが僕の仕事で、魔王軍・ひいてはバーン様の総意だって。僕が帰らない時は魔界に帰った子達全員処分されるよ。」
　それは脅しではなく事実だとクロコダインもよく知っている。
「マトリフ殿、ロン・ベルク殿、このキルバーンを今は見逃してほしい。」
「お前・・・こいつ見逃せってか！」
「そうしなければティファが悲しみ・・・それ以上に傷つくことになるのだ！無理は承知だ！それでも今は堪えて欲しい!!ティファも聞こえているだろう!!そのものが戻らなければどうなるか!!!」
「分かりが早くて助かるよ獣王クロコダイン君。」
　クロコダインを説得したキルは大鎌を仕舞い上空に上る。先程の説明でおそらくマトリフも事態を飲み込み攻撃はしてこず、ロン・ベルクを止めてくれるだろう。警戒はとぎらせないが交戦して自分に何かあれば、魔界にいるあのモンスター達がどうなるか、それにより大切にしている嬢ちゃんの心が傷だらけになる。それだけは防ごうとして。
「出ておいでお嬢ちゃん！その子をこっちに渡してもらうよ!!」
　森の中にいるであろうティファに堂々と呼ばわる。
「君の大好きなハドラー君が定めた約定を破る悪い子になってもいいのかい！その子の逃亡は残念ながらミストも知っている。可哀そうだけど見逃せないんだよ!!」
　その呼び掛けに、デビルは不安な顔でティファを見上げぶるぶると震える。今自分達を探している者は強者だ！こんな小さい者が敵うはずもない!!もしや・・・これが殺してはいけない―人間の子供―と

やらか?だから、あの強者はこの小さい者を見逃したのだろうか?
「―人の子よ・・・我はもういい―」
「そんな!」
「―我を引き渡せ―」
木のうろの中に身を潜ませたティファはどうすればいいのか思案に暮れたが、デビルの健気な言葉に心を決めた。
「師匠!なんであの野郎を攻撃させてくれねえんだ!!」
「離してクロコダイン!!あいつを斬るのに邪魔するなんて!」
「どういうつもりだロン・ベルク!!!」
「あいつを今攻撃したら不味いのだ!今は堪えてくれ!!!」
キルの大音声の呼ばわりは、当然洞穴にも響きダイ達を一気に覚醒させた。今すぐ斬り倒したい敵ナンバーワンのキルの気配は間違いようもなく、声を聞いた瞬間洞穴で寝ていたダイ達は無論、浜辺で深く寝ていたヒュンケルも跳ね起きたが上空にいる為洞穴に立てかけてある魔槍を取りに行こうとしたがクロコダインに止められ、浜辺に出て来て攻撃しようとしたダイ達もマトリフとロン・ベルクに止められ攻撃させろと躍起になっている。
チウとメルルは戦闘になった時足手まといになってはいけないと洞穴からその様子を見ている事しか出来ずに胸を焦がす。
訳を話すにはダイ達は熱くなりすぎ、どうすべきかマトリフ達が思案する前に森から数撃の斬撃が上空にいるキルに放たれた。
まさかお嬢ちゃんから戦端開いてくるとは
それを避けるために昨日のあの騒ぎであったが、よほどデビルを守りたく少々思考が鈍ったらしい・・・と思案している暇もなく次々に斬撃が襲ってくる。
避ける暇もなく間断なく飛んでくる斬撃を大鎌を出して応戦して気が付かなかった。
斬撃を大鎌で受け止める衝撃波に紛れ、ティファがいつの間にか背後を取った事を。
「あああああ!!!」
月に照らされて出来た影が覆い被さり振り向いた先にティファの

足が自分の肩口を蹴り飛ばし、躱す間もなくもろに喰らったので衝撃を吸収し損ね浜辺へと墜落する。
　ティファは蹴ると同時に握っていた雪白を逆手に持ち直し、浜辺に仰向けで墜落したキルの胸の上に片膝をついて体にのしかかり、右横顔すれすれに雪白を突き立て通告をする。
「今の貴方を私は倒せる!!」
　はっきりとキルの目を見つめながら。
「けど見逃す!だから!!あの子を助けて!!」
　それは通告というよりも先程と同じ懇願。
　両手で雪白の柄を握るティファの手はぶるぶると震え、まるで自分の方が殺されそうな程顔面を蒼白にし、大粒の涙が赤と黒の仮面を濡らしていく

成されし賭け

後から後から流れるティファの涙でキルの仮面と衣装を濡らしていく。
その涙と同じくらいに懇願の声が降り続ける。
「お願いだから・・・あの子を殺さないで・・・」
幾度も幾度も―お願い―をする。何かを強く願いながらも、他者に対して助けを求めなかったティファが、初めて願い縋りついた相手は・・・・

あぁ困った、こんな時だというのにどうして僕って奴は・・・
雪白とやらがすぐ側に突き立てられ逃げる事は出来ず、周りには勇者一行のフルメンバーの中で捕まっているというのに、ティファが自分に縋りつくように願ってくれる事が嬉しいだなんて。
必死に他者の為に願いを口にするこの子が・・・・あぁそうか、僕はこの子が、この子の事が・・・・

「分かった、殺さない」

「ふ・・・ぇ・・・」
「あのデビルの子は殺さない、見せしめに手足もぐ事もしないで・・・・お説教小一時間と暫く一人で独房に入って・・三日の絶食位で済むようにする。」
「・・・で・・きるの？」
「君がお願いしておいてどうしてここで疑問持つのさ。」
いざ願いが叶ったティファは、そんな事が通るのかと泣いた顔のままぽかんとし、いまさら何を言っているとキルは苦笑してゆっくりと上半身を起こす。
その様子を、クロコダインとマトリフの説明で一応はキルに攻撃をやめたダイ達の警戒度は一気に引き上げ、ダイはパプニカのナイフで

いつでもアバンストラッシュを撃てるように構え、ポップもマァムもそれぞれ備え、ヒュンケルもいつの間にか槍を手にしている。
　だがキルはそんな事はお構いなしで飄々とした様子を崩さずティファを膝に乗せ、いつの間にか雪白から両手を離させ軽く自分の手を握らせている。
「僕こう見えてもバーン様とミストに重宝されている立場でね、今まであの二人にお願いしたことないから一度くらいは通してくれるよ。」
「・・・あの子・・・・助けてくれるの？」
「助ける・・・・まぁ殺さないことがそうだというんならそうなるね。」
「どうして？」
「ん？どうしてね・・・・・・お嬢ちゃんが僕に願ってくれたからかな。」
「・・・・わたしが？」
「そうだよ、ところでお嬢ちゃん、僕のお見舞い手紙と感謝状読んでくれたかい？帰る前に是非感想聞きたいんだけど。」
「・・・・私何時貰ったの？」
「そう・・・・・チウ君！」
「はい⁉」
　いきなり転がりつくす展開に付いて行くのに精一杯なチウは突如名前を呼ばれて仰天し、ダイ達を掻き分けキルの少し近くに寄って返事をしてしまった。
　一体何事⁉
「昨日そこのお爺ちゃんの洞穴で渡したあの二通の手紙どうしたの？」
「あ！・・・・・その・・」
「俺が預かったよ。」
　それまで沈黙し事の成り行きを見守っていたマトリフが狼狽するチウの代わりに返答をする。
「お前さんから渡されたもんをひょいひょいと嬢ちゃんに渡すと本気で思ってたのかよ。」
「酷いな～。何の罠もなく純粋に書いた手紙位渡してほしかったな

あ。」
・・・・・おじさん何言ってるの？感謝状って・・・お見舞い状ってなに？キル何時・・・・いつって！
「おじさんの洞穴に入ったの⁉」
話の流れを推測して辿り着いた答えに驚愕し、ティファは本気で驚き絶叫に近い声でキルに問いただし、ロン・ベルクもあり得ないと隣にいるポップを捕まえ真偽を問いただせば・・
「来たよ・・・そいつは確かに師匠の洞穴に入っててきやがった・・・」
嘘を言っても直ぐに分かってしまうなら自分達の口からと、ポップは弱々しく認める。昨日確かにキルバーンが来て、手紙二通をチウに託した事も。
「お前達なんで見逃したんだ！」
「仕方ねえだろ！俺達が好きでこいつ見逃したって本気で言うのかよロン・ベルク!!」
捕まえたポップの襟首を締め上げるロン・ベルクに、ポップは力の限り怒鳴り返した。戦いに疲れ果てていた妹を慮っての事とは言え、それをティファの目の前で言えるはずもなく今も戦端が開けないことにいら立ちを募らせる。キルバーン本当に、自分達にとっては疫病神もいいところだ!!
幾度もティファを攫いつけ狙い心を掻き乱し傷つけ、かと思えばプレゼントだの感謝状だのを贈りつけ、挙句自分達がティファにされた事の無い事をされている。
ティファが他者に助けを求める姿なんて！ただの一度も見た事が無いのに!!
いつだって他者から助けを求められ、其の度に手を差し伸べるティファしか見た事が無いのに!!何故敵の、それもその疫病神キルバーンに!!!
そんなポップ達の様子を見て、キルは感謝状がティファに渡されなかった事に納得する。
仕方がないか、普通敵に対しての扱いはダイ達が普通でティファの方こそが異質なのだから。

読んでくれていないのは残念だが、これで贈った事は伝わった。本当に約束守ってくれたのかと、ぽかんと口を開けて見上げるティファの頭をそっと撫でる。
泣いてゴワゴワしてしまっても血色のいい頬、満天の星空を詰め込んだような煌めく黒い瞳が自分をじっと見ている様は嬉しく思う。
いつまでもその瞳を向けて欲しいと自分こそがティファに懇願したくなるほどに。
「お嬢ちゃん、僕はねずっと考えていたんだよ。」
「考える？」
「どうして僕はお嬢ちゃんが欲しいのか。その答えが今出たんだよ。」
「出た？」
「そう、きちんと分かったんだよ。」
幾度も幾度も考えた。最初は面白い子がいれば面白そうだと手元に置きたかったのが始まりだった。しかし会えば会う程、話せば話すほど、他者を助ける姿を、自分が傷ついていてもなお周りを守ろうとする姿を見るにつけ募っていくこの思いがなんであるのか今ようやく分かったのだ。
「お嬢ちゃん、一つ僕と賭けをしよう。」
「・・・賭け？」
「そう。僕はね、もう君とこういう風に会いに来ることはしない。」
「・・・会わない？」
「戦場以外で会いに来ることはしないし、攫う事もしない・・・・バーン様の命令なら別だけど。戦場でもハドラー君が開く篩と、ハドラー君との戦いの時も邪魔をしない。」
「どうして・・・」
いきなりのキルの提案にティファは本気で戸惑い、戸惑う自分にも驚く。
キルは元々が敵でこうして会って話をしている事自体がおかしくそれがないのが普通なのに、なのに会いに来ないと言われてどこかで嫌だと言っている自分の気持ちを持て余し上手く返答が出来ない。
「賭けの内容はね、僕が君の事をどう思って欲しがっているのか、その

答えを君が見つける事。」
「キルが・・・私を欲しがる・・・・邪魔だからじゃ・・・」
「それは不正解だよお嬢ちゃん。」
違う?ずっとそうだと思っていたのに違うって・・・戦力削ぐために私を追いかけまわしていたと思っていたのに。
「・・・・分かってくれないかな~僕の気持ちを。」
それは寂しい事だとキルが感傷にふける前に、ロン・ベルクから言葉が飛び出した。
「機械仕掛けのオートドールの分際で!気持ちが分からないかなどと戯言言ってんじゃねえ!!!お嬢さんもいい加減にそいつ追い返せ!!!」
この中で一番キルが嫌いな人物の堪忍袋がとうとうぶちぎれた。
事情は分かった!そいつ返さないとどんな惨事になるのか、その為に見逃すことは我慢しよう!昨日来たことも今更見逃したなんだ言っても後の祭りだからその二通の手紙は燃やしちまえばいい!!だが!いつまでも居座らせるなとロン・ベルクはティファの方にぶちぎれ、もののついでにキルの正体をぶちまける結果となった。
「ロン・ベルク・・・なんだよその・・オート何とかって・・」
「オートドールは、魔界で作られる機械仕掛けの自動で動く人形の事だよポップ兄。」
聞いたこともない単語にポップは戸惑い、ダイ達もキルから視線を外しロン・ベルクを見る。長く魔導に携わり、魔界の文献にも触れたことあるマトリフも知らない言葉だが、答えたのはロン・ベルクではなくティファだった。
「・・・・お嬢ちゃん、僕の事知ってたの?いつから?」
「・・・・・森であった時に、心音しないで歯車の音聞いた時から・・・でも貴方は貴方だ、キルバーンであって意思無き人形じゃない・・・少なくとも貴方には心がある・・・・貴方だって生きていて何かを思う気持ちがあるのはおかしくないよ・・」
人の内部を暴く事を忌避するティファは、キルの事を暴く事に申し訳なさそうに、それでもキルにも心があるのだと言い切る。
そんなティファだからこそ、自分は魅かれるのだ

周りの騒ぎが不思議と煩わしく感じない。ダイ達の怒りの声も気配も外に追いやり、キルは賭けの続きを話す。
「さっきの続き。もしも君が僕の思いがなんなのか正解したその時は、僕は君の物になる。」
「・・・・・わたしの？」
「そう、その答えが正解だったら、バーン様やミストが目の前にいてもその瞬間僕の全ては君の物だ。不正解の時は君が僕の物になるんだよ。」
「それって!!」
キルの言葉にティファもダイ達も聞いた瞬間に黙ってしまった。
あり得ない！軍の大幹部、それも魔界の神の死神がたった一人の少女に対する思い一つで反逆を起こすなど!!
ずるをするつもりか？何を言っても不正解だと！
だが空間を防ぐ手立てはなく攫おうと思えばティファをいつでも攫えてしまえるキルバーンが、そんな面倒な事をするメリットがない！ならば本当に賭けの内容を履行するつもりだというのか？ティファが正解とやらを出せば、キルバーンが何もかもを捨てて魔界の神に反逆する事が！
その驚愕の隙を縫うように、キルはそのまま地面に空間を開いてティファを引きずり込む。
空間に入れられたティファは戸惑うが戦意は湧かない。キルが言った事をすぐに不履行するような不義理ものだとは思えず、意図が読めない。
キルの方は最後になるかもしれない二人きりの時間を楽しみたいが、戻るのが遅くなればデビルを庇う事が難しくなるので手短に済ませる事にした。
自分の頭巾は左に星飾りが、右には三日月のアクセサリーがある。その右の月は、死神の自分を表す大鎌に似ているのでこちらにしよう。
右の月を取り外し、ティファの金のマジックリングの中に押し付けイルイルと言えば、中に収納された。

「これは・・・」
「僕との約束の証、僕の事を一生懸命考えて答えを持ってくるんだよ。」
こういう時口付けを交わして約束させたいのだが、如何せん自分の体は機械仕掛けの人形で、ティファに偽りの唇を押し当てて不快な思いをさせるのは嫌だ。
だから代わりに右手の親指で、事態についてこれず呆けて薄く開いたティファの唇を優しくなぞり上げてみれば、ティファは感じてくれたようだ。
「つぁ・・・」
幽かな声が自分の聴覚をうち、うるんだティファの瞳が物語る。
今の行為は口付けと認識された事が

「あの野郎!!」
「キルバーン!!叩き壊し・・・」
「それは困るね。僕がいないとデビル君返せないでしょう。」
　ティファが消えた空間にすぐさまダイ達が駆け付け閉じる寸前手をねじ込もうとして弾かれ、怒りに駆られて叫ぶ前にその当人がティファを抱き上げ洞穴の入り口前に出現し呼び掛けて来た。
「賭けは成立、お嬢ちゃんとの約束は全部果たすから安心していいよお兄さん方。」
　何処までも飄々としした態度は、チウとメルル以外の神経を逆なでる。生来占い師として生きてきたメルルも、チウと同じくキルから邪悪さが伝わってこないのでいまいち敵視しづらく、それよりもティファの心配が先立ち返してもらえないかと声をどうかければティファを返してもらえるか思案に暮れている。
「お嬢ちゃん返すから安心していいよ占い師さん。」
「！・・・そう・・ですか・・」
「てんめえ！ティファ離してさっさと失せろ！そして二度度メルルに口きくんじゃねえ!!」
「了見の狭い男は嫌われるよ魔法使い君。」
　メルルの前にティファをそっと下ろす前に一行全員にも通達していく。
「もしも賭けをさせない為にお嬢ちゃんを戦場から遠ざけたらその時は僕も問答無用でお嬢ちゃんとチウ君とパプニカのお爺ちゃん達を攫いに行くから覚悟しておいてね。お嬢ちゃん、待ってるから必ず来るんだよ、必ず。」
　最後までティファの瞳を見つつ、キルはデビルの気配を探って迎え

に行きミストの元に戻る。
　ティファとした約束を全て叶えるために
「ティファ!ティファ!!返事してティファ!!!」
「・・・・にい・・・どうしよう・・」
「ティファ?」
「答え・・・わかんないよにぃ・・・」
　一体何がどうなれば―キルバーン―がこっちに来るなどという宣言をしてくるのかティファからすれば天地がひっくり返るほどあり得ないことでもう訳が分からない!
　ヴェルザーに仕え、バーンにも使えている大幹部が、何故と考えても分からず途方に暮れ兄に縋りつく。
「ティファ・・分かんなくていい。あいつは俺達が倒すから、ティファは何も心配しないで。」
「にぃ・・・」
「ああ、ダイの言う通りだ。あんなふざけた事もう忘れて休もうぜ。」
　兄二人は妹を左右から抱きしめ安心するように宥め、ティファは考えるのに疲れ果てそのまま眠りの中に落ちていく。
「師匠とティファがベッドで寝てくれ。俺達は交代で見張りすっから。」
　キルの言葉を信用する気のないポップ達はマトリフとティファだけをきちんと休ませ寝ずの番をする。あいつが来たら、叩き壊すために

「どういうつもりなのさ。」
　ティファとの約束を全て果たし、無事（？）にデビルを独房粋だけで済ませたキルに―ピロロ―が話し掛ける。
「おや、誰もいないところで君が僕に話しかけるだなんて随分久しぶりだね。」
「ふざけていないできちんと答えなよ、人形。」
「随分不機嫌だね～、何が聞きたいのさ。」
「惚けないでよ。どうしてバーンの命令に逆らうのさ。」
「バーン様だよ。僕はバーン様の命令に逆らっていないよ。ただ少しだけお願いしただけさ。」
「・・・主の意向に唯々諾々と従い、懐に深く飛び込めとのヴェルザー様のご命令を無視してか・・」
「いやだなぁ～。バーン様はそんな物こそ嫌うお方だ。不変を何よりも疎み、近頃の僕はさらに面白いとお気に入り度合いが高くなっているんだよ。ヴェルザー様の命令にも反していないでしょう。」
「・・・・・そう、分かったよ。でもね、余り勝手な事しないでね。所詮君は人形で、今自律している気でいても所詮は・・・・」
「僕に与えられた自律思考するための疑似人格で動いているだけの人形でしょう僕は。」
「・・・分かっているならそれでいい、勝手しないでね人形。」
　言いたい事を言ったピロロ事、ヴェルザーからキルバーンと名付けられた一つ目はキルの部屋を出てどこかへと行った。

どうせヴェルザーに僕の事を報告しに行くんだろうな。煩わしい、いつか隙を見つけてあいつも消すか。
自分がこうして独自の考えを持つのはヴェルザーが気紛れで与えてくれた疑似人格のおかげ。
自分では何一つ動けない人形など詰まらぬと余興で作られた物が、心と呼べるほどまで育つとは予想していなかっただろう。
おかげで自分は素晴らしい事に出会えた。
愛している
自分がティファに抱いた感情の名は愛だ。その答えをあの子が出すには正解が一割、残り九割は不正解の割合を考えている。
他者の事には聡く、反面自分の事になるとまるで駄目なティファは、きっと正解は出せないと踏んであの賭けを成立させたが・・・・もしも正解したら
当然、僕の全てはあの子の物だ

幕間―魔王軍―

「あれミスト、こんな時間にバーン様は夜食かい？」
　ピロロを適当にあしらって、ミストのお部屋に遊びに行く途中で料理の乗った銀のトレイを運んでいるミストに行き会った。
　バーンは老人の見た目とは違いかなりの健啖家で時折夜食も食べるのだが。
「・・・・・・違う、ハドラーにだ。」
「おや珍しい。君今までバーン様かヒュンケル君にしか料理作ってなかったのにどういう風の吹き回しだい？」
「・・・・・・・・・・・・あの小娘に振り回されて気の毒すぎる。」
　ティファからの頼み事。平和の心を持ってしまった魔界のモンスター達の保護願いをハドラーもそうした方がよさそうだと案に乗り、バーンに奏上したところ案を出したハドラーが保護方法と魔界のバーンの領地に通達する分を考えて提出せよという無茶ぶりなお達しが下り、今の今までハドラーは書類と格闘して撃沈をした。
　ただでさえ主より賜りし肉体を捨て、超魔生物へと肉体改造をした結果ハドラーの体調がよくないのを知っているミストは、夜食くらいは差し入れてもよかろうと作り届ける途中でキルにばったり会った。
「そう、僕もお見舞いに行くね～。」
「好きにしろ・・・・」

　ハドラーの自室につきキルがノックをして返事を待たずに開けたところ怒号が飛んできた。
「お前達！・またハドラー様になんかさせる気かよ!!」
「およしなさいヒム！・失礼を、この者には後程厳しく言って聞かせますので何卒お許しを。」
　怒号でミストとキルを出迎えたのはポーンヒムで、すぐさま仲間の不出来を叱責したのはハドラー親衛隊のクイーンアルビナス。
　ヒムとして書類仕事でくたびれ果てようやく休めた主を起こしに北辰を叩き出したく、アルビナスもハドラーにはぜひ休んで欲しいと

ころだが、魔王軍の大幹部相手にヒムの様な啖呵を切って万一不興を買うわけにもいかずに頭を下げる。
怒号を受けたミストとしては、自分がハドラーに仕事をさせたわけではないので理不尽さに怒りが湧く！
そもそもこの仕事の発端は勇者一行の料理人を名乗るあの化け物娘のせいで、それを受けたハドラーもハドラーである。
古来よりの天敵で不？戴天の仇同士の二人が何を仕事の遣り取りをしているのだと叱責されてもおかしくないのを、面白いと笑って受けさせた寛大な主に礼こそすれ怒号を受ける謂れは無い！・・・とはヒム達には絶対に口が裂けても言えない！
ハドラーが敵からの依頼で仕事を受け、そのティファだけに注視していると知られた日には、親衛隊一同もそれに倣い勇者達を放っておかれるのは非常に困る！
今ダイ達もあり得ない速度で成長し、放っておいていい段階ではなくなっている。路傍の石とても主を躓かせる可能性のある者達は全軍を持って叩き潰したいのだが、近頃のハドラーは本当にティファと戦うこと以外さして興味がなく、全力でぶつかる日を指折り数えて待っている。
肉体の極限の改造で寿命が来る前にと考えているのだろうか・・・
その崇高な精神に免じ、部下の非礼の一つくらい見逃そう
「・・・・・」
ミストは無言で料理を覆っていた銀盆を取り、奥の寝室の方へと僅かに顎で示す。
主とキル以外、今のところ積極的に口を開くつもりはなくジェスチャーで示せば、ヒムの方はなんだそりゃという失礼な顔をしたが、副官はどうやら察しがいいのか喜色満面になる。
「これをハドラー様にですか？」
「・・・」コクン
「なんと！ハドラー様!!労いの料理が届きまして・・・」
頷くミストに喜びアルビナスはルンルンの声でハドラーの寝室に入り早速呼びに行く。

「・・・・ったく、こんな決戦間近な時に普通書類仕事なんてさせますかね・・」
　言い足りないヒムは頭を掻く仕草をしてぼやく。万全な状態のハドラー様で勇者達を迎え撃ちたいのにと。
「あれ知らないの？その書類仕事バーン様が出したんじゃないんだよ？」
「は⁉じゃあ誰が出したっていう・・いうんすか！」
「お嬢ちゃんだよ。」
　キル!!!!
　ヒムの!!!!ボヤキを拾ったキルが、ミストが止める間もなく懇切丁寧に説明した。
　五年前の大騒動から顛末、そして書類仕事になる一連の流れ全てを。
「・・・・・・あいつってマジもんの魔王軍の敵だわ・・・」
　一度しか会っていないあの少女が、魔王軍全体震撼させて今も魔軍司令官ハドラーに間接的にダメージ与えてますってなんだそりゃ!!
　ヒムは驚愕したが、ハドラーの目が覚めそうだと報告に来たアルビナスは瞬時に怒りを沸かした。
「ヒム！その者は篩の時に叩き潰します!!」
「おい！あいつの相手は俺だってハドラー様が認めて・・」
「それで打ち漏らしたらなんとします!!その者は話を聞いただけでも危険ではありませんか！あなたの遊びに付き合っていい相手ではありません！親衛隊全総力で叩き潰します!!」
　まだあった事がない相手を、それでも危険だと判断したアルビナスは篩だというのに討ち果たす宣言をティファに出した。魔王軍を震撼させた事よりも、敬愛するハドラー様を口先一つでこんなに苦労させているものなど滅べばいい!!
　それは怒りよりも嫉妬心に近い。何かの話に一度は出てくるティファとやらはヒムをも惑わし輪を乱そうとしている！排除するべき相手だ。
・・・・・・やはりこうなったか・・・

話を聞いてしまったハドラーの副官もティファに目が行ってしまう・・・あの化け物娘は話に出るだけでどうしてこうも他人の耳目を引くのだ・・・

「あいつの相手は俺だって！」

「いい加減にしなさいヒム・・・」

「やかましい！！！！！」

ヒムとアルビナスの言い合いに、起きて覚醒しきれなかったハドラーをとうとう怒らせてしまった。

寝台横の机に置いてある兜を被り、寝所から出てきたハドラーはミストに軽く頭を下げてからしゅんとなった配下二人に声を掛ける。ちなみにキルの存在に気が付いていても、ティファに対しての数々の変態行動を鑑み放っておく存在として丸無視する。

「良いかアルビナス、そもそもティファが保護案を出す前に味方の俺達が考えついていなければならなかった。その事に俺が気が付かず、偶々あ奴が気が付いた。それだけの話だ。」

味方の保護案件などはどう考えても中間管理職の間軍司令か参謀が考えるべき事だと、不甲斐無い自分をハドラーは己を責めて仕事に向かい、結果良き仕事が出来たので満足している。

「あのハドラー様・・・・本当にあいつってなんなんすか？」

主と軍を此処迄振り回すティファは何なのだとヒムが問えば、ハドラーは溜め息しか出ない。

「先に言った通り、あれは説明不能な者だ。直接自分で見聞きして判断するしかないな。」

数日後に行う篩の説明時にヒムはティファの情報をハドラーの求めたが同じ答えが返ってきた。

曰く、あれは予測不能な者で世の常識では及びもつかない事態を引き起こす途轍もない者だということ以外は説明不能だと。

ティファが優しさとやらで動けば動くほど、何故か魔王軍が大ダメージを喰らうという図式が五年前から出来上がってしまっている・・・・どう考えてもあり得ないことを引き起こす者を説明しろと

言われても無茶である！

その事を考えるとまた疲れて溜め息をつくハドラーの姿にアルビナスの怒りが再燃した。

「ハドラー様！勇者達は篩でも、ティファとやらは討ち果たさせていただきます!!」

「アルビナス⁉」

「軍に被害を出す者を討ち果たしとこその親衛隊でございますれば!!」

「いや・・・勇者ダイも危険であってだな・・・」

「今軍の脅威度合いはティファとやらです！討ち果たしてごらんに入れます!!!」

三人の言い合いを聞いてミストはうんざりとした。こうなってしまったかと、ティファに耳目を引いた原因のキルに怒りの目を向ければ、キルは右手を顎に当て何やら思案していた。

そうだよね、僕にとっては愛おしい子でもバーン様とミストの邪魔をする子でもあった。

愛しているが生きていなくとも自分は困らないし、通告文送っておくか

キルのあり得ない言動に振り回され疲れ果てマトリフに包まれて寝ているティファの枕元に、キルからの感謝状とお見舞い手紙が空間を通して置かれた。
キルが空間で探し出し置いたのだ。
そして三通目も忘れずにおいておく。
それは明るい色合いの二通の封書とは違い、漆黒を塗り固めたような黒い封書であった。

もしも君が軍に甚大な被害を出しその事が僕の怒りに触れたなら、その時は僕自らの手で君を殺す

死神は愛した相手にも容赦なく、大鎌で狙い定める

勇者同士の邂逅

朝の森をティファとマァムが散歩をしている。
秋近くとは言え青々とした森の息吹を癒しとし、ティファは何も考えずただただ歩いている。
何をどう考えてもキルの自分に対する思いがなんであるのか全く分からない、歩いて思考を動かせば浮かぶと思っていたのだが当てが外れてがっかりとする。
落ち込む気配にマァムの優しい声が降ってきた。
「ティファ、悩まなくていいのよ。」
「・・・・マァムさん・・でも・・」
「昨日も今日も言ったでしょう。あいつは皆で直ぐに倒すから、賭けなんて馬鹿らしい事で悩まなくて大丈夫よ。」
そうだ、昨日に続いてダイ兄達が言ってくれている。
キルバーンは戦場で会った瞬間に問答無用で灰にすると
常のティファならば、思考もせずにそんな短絡的な事をしてはいけないと止める立場だが、今回はむしろダイ達の考えに縋りつき思考を放棄している。
歩いていても思い浮かばないのではない。己が―魔王軍のキルバーン―を本当はどう思っているのか知るのが怖く、怯えてその事と向き合いたくないと無意識に逃げている。
早くハドラーの篩が始まってほしい・・・そうしたら、こんな煩わしさから解放されるのに・・・
キルと話せば自分の心はいつも掻き乱されるのに対し、ハドラーと話せば反対に落ち着く。共に敵で同じ魔王軍にいるのにこの差は何なのだろう?
埒も無い事を考えながら、頼りなく歩くティファをマァムは心配しながらも何も聞かず、ティファの好きなようにさせる事にしている。
本当は手を繋ぎ守って歩きたいところだが、今のティファは干渉を拒んでいるように感じ、負担にならないようにとそっとしておく。

森の中は平和な散歩だが、ティファとマァムが散歩に行って暫くした後、ロン・ベルクが何故変態野郎が洞穴に来た時叩き壊さなかったのかをマトリフに話す様に迫り、余りの執拗さに観念したマトリフが話し、それはそれで一悶着になった。
「どうしてお嬢さんにそんなバカげた考え捨てさせるように誰も説教してねえんだよ!!!」
夢のお茶会
味方どころか魔王やミストバーンともしてみたいなどという子供の戯言を何故そのまま見逃してやがる!!そんな訳の分からん考えなど持っているからおかしな奴に興味持たれてこんな大騒動にまで発展したんだろうと大激怒し、散歩に言ったティファに追いすがろうとしたロン・ベルクを矢張りマトリフが止める。
「言っとくがな、夢の話を知られたって知ったら嬢ちゃんの奴本気で俺達の前から姿消しちまうぞ。」
ただでさえ騒動を引き起こしやすい自分が、勇者一行の者にふさわしくない考えを持っているとダイ達に知られているのを知れば、ティファは本当にダイ達の前から消えるだろう。
会えるのは戦場でとなり、回復アイテムをダイ達に渡して共に戦い、戦闘後には直ぐにガルーダで飛んで行ってしまう姿が目に浮かぶ。
ティファの実力はマトリフをもってしても底が知れない。
昨日のキルを押し切った戦い方は間違いなくダイ達かヒュンケル以上に戦い慣れをしている。
己の攻撃に一切の躊躇いはなく大幹部を一瞬のうちに制圧した様は見ていて戦慄が奔ったほどだ。
そんなティファを一行の者達が取り押さえられるとは思えず、出来たとしても逃げ様と足掻きボロボロになるティファを見かねて行かせてしまうだろう。
「嬢ちゃんが洞穴に来た夜にな、やっぱり俺から逃げようとしたんだよ。」
狡い手だが、その時は自分の命を質にして優しいティファを足止め

させることが出来たが、二度もその手が通用するとは限らない。
「だからな、この件は本当に勘弁してやってくれ。」
マトリフはそう結び、ダイ達も視線でロン・ベルクに懇願をする。
お願いだからティファをそっとしておいてあげて欲しい。これ以上心を掻き乱さないで欲しいと。
・・・・こいつらは本当にお嬢さんに甘い、甘過ぎる。
だが、ダイ達があの変態野郎を会ったらすぐに壊すと言っているのだから、これ以上自分がグダグダいうのも筋違いか。
「分かった、この件はこれ以上は踏み込まん。それでいいだろうマトリフ。」
「済まねえな。」
「いいさ、その代わりお前達は俺の特訓を受けてもらうぞ！戦場であの変態野郎を叩き壊す為にもだ!!」
・・・・打倒魔王軍はロン・ベルクの中では打倒キルバーンへとシフトした瞬間であった。
「俺も受けられるか？」
特訓、それも地獄の特訓大好きっ子なポップはいの一番にロン・ベルクに申し出た。
メドローアの特訓と併用して、体術もっと強化したい。
「・・・・お前魔法使いだろう？」
「いんや、単身でも戦える魔法使い目指してるからよ。」
「なんだそりゃ？」
魔法使いとはロン・ベルクの中のイメージでは、戦士・剣士等の前衛を後方からサポートする者だと思っていたが、どうやらポップは一人でも敵と戦い勝てる魔法使いを目指しているという。
体術で敵の攻撃をさばき、よけながら間髪入れずコスパの低い初級魔法を近接近で連発で打ち込み、相手に隙が出来た瞬間に距離を取りながら魔力を練り、中級か上級の魔法を素早く練り込み大ダメージを与え、倒せなくとも敵を無力化できるようになりたいと。
今習得しようとしている大魔法も、その動きと併用できれば一行の更なる戦力になると確信して。

「分かった、ダイとヒュンケルは引き続き俺と打ち合いで。ポップはその間その新魔法の修練して午後にダイ達と交代だ。それでいい・・・・」ガシャ！

ロン・ベルクが特訓内容を話している最中、不意に言葉を切り机に立てかけていた剣を手に掴むと同時に表に走り出す。

魔族特有の聴覚が、この洞穴に向けてルーラをしている者がいる音を拾い上げた。

この洞穴にはダイ達以外が訪れる事もあるというが、昨日の今日で警戒心をマックスにしているロン・ベルクは迎撃態勢で飛び出したのだ。

ロン・ベルクのただならぬ様子にダイ達も即座に動き、マトリフとメルルは洞穴から出ないようにポップがいいながら表に飛び出す。

本当はチウにも残ってほしいが、ダイ達と共に出てしまったので仕方がない！いざとなったら未完成でも大技出すかと算段を付けダイ達がいる砂浜に出た。

「ロン・ベルク、なんか聞こえたのか？」

「ああ、じき此処にルーラで来る奴が・・・来た！」

海の端から光るものが見え、それはあっという間にダイ達の前に降り立った。

ルーラ特有の着地音もさせず衝撃もなく、その人物はダイ達の前にふわりと降りと舞い降りるように。

降り立った者は長身ながらもまだ表情にあどけなさ残っており少年の様に見え、氷の色をそのまま髪の色に写したような透明な水色を長く伸ばし、中央だけが少し黒毛がある不思議でどこか幻想的な雰囲気を纏わせている。

青年と少年期の境にいるようなその人物は、武装しているダイ達を見ても腰に佩いている剣に手を伸ばすことなくふわりと笑い話しかける。

「どうやらお騒がせしてしまった様で申し訳ありません。」

もの柔らかい声にダイ達が毒気を抜かれた瞬間、洞穴からマトリフ

が飛び出しきてダイ達をどかし、降り立った者の両腕を掴みながら叫んだ。
「坊や!!!」
それは負傷したティファを見て叫んだ時と同じ声音だった。
自分の宝物に再び、それも何の前触れもなく再会できた時の驚愕の声。
「お久しぶりですマトリフ様、息災の様で何よりです。」
「お前さんはこんなにでかくなっちまいやがって！前は嬢ちゃんより少し大きいくらいの背しかなかったのによ。」
「最後にお会いしたのは二年前でしたか。手紙だけで本当に申し訳ありません。」
「坊やだって嬢ちゃんとおんなじでやること沢山あったんだろう？こんな爺に絶えず手紙を送ってくれて感謝こそすれ恨む道理はねえよ。」
右手で訪問者の頭をわしゃわしゃしながら嬉しそうに話すマトリフに、その人は誰かポップは尋ねづらくなるが、空気読まないロン・ベルクがサクサクと聞く。
「マトリフ、その子供は誰だ？お前の知り合いか？」
問い掛けでようやく自己紹介をしていなかったと少年は参ったなと苦笑し、マトリフの腕を優しく外し、ダイ達の方に歩き前に立つ。
「挨拶が遅くなり申し訳ありません。僕はリンガイアで騎士職をしているノヴァと言います。以降お見知りおきを。」
右手を胸にあて一礼する様は優雅で一目で柔らかい人柄が見て取れる。
北の氷の勇者が、マトリフを訪れて来た。

心繋がり

優雅に挨拶をこなすノヴァは、爵位こそないが代々リンガイアの将軍職を拝命している家に生まれつき、宮廷の出入りの為に教育が始まってから当然の如く宮廷作法も教え込まれ、今では息をするのと同じくらいの自然さで人と接せられる。

当然デルムリン島育ちのダイにはそんな教育は受けてこず、それどころか王族とは言え少々おてんばなレオナ以外は本物の貴族に会ったのはこれが初めてで、ポップ達も右に同じくでノヴァの優雅さに圧倒される。

なにか・・・・根本的に自分達とは違う生き物に見えてしまうのは失礼だろか？

だがそこは普段から礼儀を守っているダイ達であり、優雅さこそないがしっかりと名乗り上げればノヴァはふんわりと笑って頷く。

「そうですか、貴方達が今世界を救ってくれている勇者ダイとそのお仲間なのですね。お会いできて光栄です。」

ダイ達に敬意を表しまたもや一礼し、特にダイに右手を差し出し握手を求めてきた。

「いつか同じ戦場に立つことになると思います。そのときはよしなに。」

「え！・・・あ・・はい・・」

こんな挨拶をされた事がないダイは、熟れたグミの様に赤くなりながらもノヴァの右手をしっかりと握り、よろしくと笑って応える。

いつかともに戦う仲間を歓迎して。

「そういえば坊や、よくここが分かったな。」

和やかに挨拶を交わすノヴァにマトリフが尋ねる。この場所はノヴァにも教えていないはずだが。

「実は、この子に案内してもらいました。」

ノヴァは懐から真っ白い鳩を取り出す。

「昨日ティファから手紙が届いたので返さずに案内してもらいました。」

鳩の帰巣本能を利用してティファの元に戻ろうとした鳩の速度に合わせてトベルーラをし、島と洞穴が見えた時点で懐に入れ速度を落としてダイ達の前に降り立った。
「嬢ちゃんが・・・いつの間に。」
「ティファは結構僕に手紙をくれていました。大戦が始まってしまった翌日から僕達の心配と自分の無事と・・・デルムリン島を出た後も二・三日おきには。」
「お前さん嬢ちゃんの事・・」
「はい、実は五年前から僕だけ全部知っていたんです。ティファの名前も住んでいるところも・・・・怒ってますか？」
「・・・・・今更だよ、それで嬢ちゃんからなんて手紙が昨日届いてここに来たんだ？」
実はティファの事情全部知ってましたのノヴァの告白に、マトリフは一人仲間外れにされた気がして少しむっとしたが、今は自分も知っているので許すかとここに来るほどの内容が書かれていたのかとノヴァに尋ねる。
「昨日のでは、今おじさんの所にいて元気貰っています、の一言文でした。」
「・・・・・・・・・・なんだそりゃ？」
「ティファは僕の手紙の時は調子がいい時ほど短文になるんです。元気ですか、薬作り順調だよの内容を貰うと本当に安心します。」
薬の内容や実験結果以外の近況報告が短ければ短いほど調子がいい。
何か思い悩み長文になると心配になる。
「ふ～ん、なら調子のいい嬢ちゃんの手紙を読んでなんで坊やは鳩の速度に合わせてトベルーラで来るような面倒な真似をしてまで来たんだ？」
ノヴァがダイ達に明かしていなくとも、マトリフは知っている。ノヴァはリンガイア始まって以来の最年少の騎士団長で、氷の勇者と呼ばれ国の防衛の要である事を。この大戦の最中、そんな重要な任に就いている者が、まして責任感が人一倍強いノヴァが、大切な友人であ

るとはいえティファ一人の為に国を離れた理由が分からない。
「実はここに来たのは仕事の一環もありまして、時間を前倒しして国を出てこさせてもらったんです。」
「仕事・・・パプニカにか？」
「はい、内容は機密事項なのでマトリフ様やダイ君達にも今はまだ。」
「分かった、そしたら仕事前に嬢ちゃんと近況報告の仕合か？本当にお前さん達は子犬みたいに引っ付きあいたがるな～。」
それで坊やと嬢ちゃんと俺の三人で寝たことあんだよな～
昔を思い出し、マトリフが懐かしそうに笑ったがノヴァの顔つきが変わった。
「近況報告・・・とは少し違いますがマトリフ様、ティファは本当に元気になっているのですか？」

柔らかい雰囲気が少し硬くなったノヴァをマトリフが訝しげに見る。
「嬢ちゃんが嘘書いて寄越したって言いたいのか？」
「そうは言いません、ティファは嘘を書く位なら本当の事も何も書かず手紙自体をくれないでしょう。手紙を書いたのはおそらく昨日のお昼頃でしょうがマトリフ様、昨夜ティファの心を掻き乱す何かがあったはずです。今ティファは大丈夫なのですか？」
「坊や・・・どうしてそれを。」
「鳩は本当は僕が付いてくる為ではなく、リンガイアが大雨だったので返すのが忍びなく一晩預かったのですが気になって。ここ半月の・・・・いえ、大戦が始まって三日目の夜に一度、その後はここ半月の間ティファの心が悲鳴を上げていたはずです。マトリフ様、本当にティファは今大丈夫なのですか？」

大戦の三日目にはアバンの死が、ここ半月はテラン戦の戦いと、追い打つように次々にティファの心が傷だらけになっていた時期と一致している。

「ノヴァ・・・あんた何で・・・手紙に書いてあったのか？」
遠く離れたリンガイアに居ながらにして何故ティファの、それも怪我などではなく心の状態を知っているのかとポップが青褪めながら聞く。自分達とてティファの疲れた状態を見て漸く知れたというのに。
自分達では頼りにならないと、幼馴染のノヴァに助けを求めたのかと。
「いいえ、いいえ違います。ポップさんと言いましたね、ティファがダイ君の他に頼りになる優しい兄が出来たと貴方の事を嬉しそうに書いていました。
貴方が考えている事ではないので大丈夫です。」
ダイ達が頼りにならないから相談されたのではないと、ノヴァは優しく笑い安心させるように訂正をする。本当に手紙ではないからだ。
「信じられないかもしれませんが、僕とティファは遠くにいてもお互いの事が分かる時があるのです。嬉しい事や悲しい事で心が強く揺れた時に・・・例えば、マトリフ様から話されているかもしれませんが僕も今世に出た新薬の研究に携わらせていただいて、新しい効能が見つかって物凄く嬉しくなって、次の日にティファに手紙を出そうとしたら先にティファから手紙が届くことがしばしばありました。」
―何か物凄く良い事あったでしょ！薬の事？他の事？嬉しい事独り占めしないで教えてね！―
それだけではない、訓練の厳しさに自分の不甲斐無さに泣いた時、親しい人が亡くなって泣いた時、他にも辛く悲しい時にすぐにティファから大丈夫と心配の手紙と甘いお菓子の入ったマジックリングが届けられる。
その反対に自分もティファの喜びや悲しみを感じ取り、直ぐにペンを取りティファにお祝いや慰めの手紙を書いてもう五年になり、今まで勘違いや気のせいであった事はただの一度もない。
「坊や・・・・いつからそんな事が・・・」
ティファとノヴァにそのような奇跡的な繋がりがあるのを知らなかったマトリフは驚愕の面持ちで聞いた。

今の今までそんな素振りをノヴァは見せた事がないので無理はない。
「始まりは、ティファの血が僕の体内に入ってから程なくしてからです。」
バシリスクの群れから精霊の友達を助けて逃げたがすぐに追いつかれ、牙でお腹を裂かれ内臓にもダメージが入ったのに死なずに済んだのは、ティファとマトリフのおかげである。
ティファが万能薬の試薬で、唯一大ダメージを治すことに成功したのと同じ製法で作った薬を自分に見せるために持っており、それが濃度が濃すぎて子供の自分には薄めないと毒になるとマトリフが看破し、酒でも何でも液体で薄めないといけないとマトリフが逡巡すると、ティファは躊躇いもなく自分の右腕を剣で斬り血を流し薬の濃度を薄めてくれたおかげで自分は今この世に生きている。
「それからです、僕とティファの心が繋がったのが。」
ダイ達はその話を聞き、特にポップは直ぐに腑に落ちた。―竜の血―がなせる奇跡の御業だと。
自分もダイ・ティファ、バランの竜の血によりメガンテで瀕死となり生死の世界を彷徨いながらもこの世に呼び戻して貰えた。
それ以来、ノヴァの言ったような事は起きずとも、以前に比べると倍以上も自身の魔力値が上がり、魔法の精度も段違いになっている。古来より竜の血を浴びた者は不死になるという伝承がある程、奇跡を起こす力があったとしたら、ノヴァとティファのつながりもあり得る事だと。
そしてその繋がりの為にノヴァがティファの苦しみを共有し、直接自分の目で確かめに来たのだと。
「坊や、お前さんパプニカでの騒動は？」
「・・・大魔王の篩とやらと、その後の騒動は全て昨日帰国した父から全て聞きました。それも含めて大丈夫だとティファは手紙を出してきたのだと安心したのですが・・・」
夜の見回り当番を交代し、寝台に入り程なくして突如胸を掻きむしるような悲しみと焦りが自分を襲った。

それは父が教えてくれたティファがテラン戦であったあの嘆きと絶望感と同じで、何故マトリフの下にいるティファがそんな悲しみの状況に陥ったのか訳が分からず、父の名代でパプニカに来れるのを幸いにマトリフの下に来たのだ。
「―塔での騒ぎ―はどうでもいいのです。昨日の夜に何があったのかも時間が惜しいのでそちらも大丈夫です。マトリフ様、ティファは今どのような状態に？」
「・・・元気だとは言えねぇ。けどな、解決できる範囲内だ。」
ノヴァが心配しているのはおそらくテラン戦でティファが味わったあの絶望的な状況と同じことが昨夜起きたのではないかと案じたのだろう。
「そうですか・・・・良かった、本当に良かった・・・」
マトリフの言葉を聞き、張り詰めていたノヴァの心は緩み心底安堵し息を長く吐く。昨日はそれ以降眠れずに一晩起きていた程心が痛かった。
自分がこの位なら、ティファ本人はいかばかりか・・・
「坊や・・じき嬢ちゃんが戻ってくんだろ。それまで・・・」
「ストップそこまで！」
ティファ本人と会っていかないかとノヴァに勧めようとしたマトリフを、ノヴァの懐から飛び出してきた精霊に止められた。
「エンフェリス、久しぶりだが・・」
「御免なさいマトリフジィジ、ノヴァもうそろそろ行かないと・・」
「え！もうそんな時間なの⁉」
「あん！うっかり屋さん!!早く行かなとお父様にも怒られるわよ、ノヴァの仕事に遅れちゃうの。分かってマトリフジィジ。」

ノヴァの精霊友達で一番しっかりとしているのが紫の髪を肩口まで伸ばしているエンフェリスであり、人間の常識にも通じているので、時折うっかりをする愛息子を案じるバウンスがお目付け役をしてほしいとエンフェリスに頼み込んでノヴァに付けたのだ。
付いて来てよかった、この後ノヴァには重要な役目があるのだから

遅刻は厳禁だ！
「そうか・・・嬢ちゃんには俺から伝えておく。気を付けてな。」
「はい、ダイ君達と一緒に直ぐに後日会えると思いますがよろしくお願いします。それとこちらを。」
　仕事に行く前でも慌てずにダイ達にも別れの挨拶をし、マトリフにティファの鳩と手紙を渡し言付けを置いて行く。
「分かった、必ず伝える。」
「はい、では皆さん失礼します。」
　一礼し、少し離れてからノヴァはトベルーラで飛び去った。
「・・・良い奴だな師匠。」
「ああ、俺の大切な子だ。」
「そうかよ・・・・それにしてもダイ、どうしたんだよ。」
　ノヴァの爽やかさに終始圧倒されていたポップは、自分以上に大人しく顔を俯けたままのダイの頭を撫でて尋ねる。
　大切な妹が自分の知らない男の幼馴染がいたと聞いたら暴発するかと警戒していたのに。
「あのノヴァって人リンガイアの人なんでしょ？」
「そうだな。」
「リンガイアって・・・あの人が攻めたんでしょ!!」
「あ!!・・・ダイ・・・お前・・・」
　普段の自分なら、ティファが教えてくれなかった事全てに腹を立てどうお仕置きしようかと考えているが、相手は超竜軍団が襲いに行ったところだと、レオナが大戦が始まってからの魔王軍の動きを全て教えてくれた。ロモス・パプニカは自分達が知っていたので、オーザムが殲滅された事、話辛そうに超竜軍団が攻めきれずに甚大な被害こそ出なかったがリンガイアに攻め上り、カールの方は首都制圧をした事を。どちらも奇跡的な出来事で難を逃れたとはいえ、父が攻めた相手に自分が何を言えようと、両手を握りしめポロポロと涙を流してしゃくりあげながら話す。
　父がした事で辛い目に遭った人が、それも全ての事情を知っているであろう人がその事を一言も責めずに優しく笑いかけてくれたのが

却ってダイには堪えた。責められれば、その方が謝れてそれでも償っていくと言えるのに！
「ダイ・・・ティファもだがお前のせいじゃねえ。バランだって、償うと言ってるんだ。一緒に歩いて行こう、その道を・・」
「ポップ・・」
「ダイ、俺達も一緒だ。マァムも一緒だ。」
「ダイさん、私も一緒に歩きます。最後まで。」
「ヒュンケル・・メルル・・」
「そうだダイよ、お前達には俺達がいつでも一緒だ。」
「そうです！どこまでも、何があっても絶対に一緒ですよ!!」
「クロコダイン、チウ・・・うん、うん！俺・・・俺頑張る・・歩こう！最後まで!!」
ポップに抱きしめられ、ヒュンケル達から熱いエールを送られたダイは、ティファと同じ太陽のような明るい笑顔で仲間の思いに応える。最後まで一緒に行くのだと。

本当にこいつらは何と良い奴らなのだとマトリフとロン・ベルクが温かいまなざしを向け、そろそろ朝食にとマトリフが言いかけると森から絶叫しながら飛び出した者がいた。
紙は葉っぱだらけで頬には擦り傷もあるティファだった。
「ノヴァー!!せめて後五分待ちなさいよ薄情者!!!!」
なんとノヴァが飛んで行った方向を誰にも聞かずに的確に向いて叫び上げた。
ノヴァが言った通り、ティファにもノヴァの心が分かる時が更にその上を行っていた。
半径一キロ以内なら気配を消していてもノヴァの居所が分かる。
トベルーラで砂浜に降り立った時から分かっていたが、生憎空飛ぶ靴は履いておらず、ガルーダも疲れて眠っているので洞穴の横に置いていき、今の今まで眠っていてティファの叫びで起きてきた。
そうなると直に走るしかなく、森の木々を傷つけずモンスターや精

霊達も避けてきたロスで会えなかった！
叫び上げて肩で息をするという珍しいティファを見たポップ達は唖然茫然だが、マトリフが宥めすかし、来た理由と行かなければならなかった理由を説明して手紙を渡せば、申し訳なそうにしたり喜んだりと忙しそうにしながらも一応落ち着いてくれた。

「フェックション！・・・・・ティファかな？」

「ノヴァ・・・・時間余ったからティファに会いに行く?」
「やぁ～、あれだけ言ってのこのこ戻るのも・・」
「貴方のうっかりってお父様譲りなのね・・」
「そういわないでよ～。」
パプニカ王城の一室で、早く着いてしまったノヴァはレオナと大臣達からの呼び出しを紅茶を頂きながら待っている。
昨日纏まった人間側からの大攻勢でリンガイアからの支援兵が予定よりも送り出せる事とそれに伴い支援物資の数等諸々増える事を伝えに来て、レオナから緊急時の謁見可能な時間を教わっていたアーデルハイド王に父経由で教えて貰い来たのだが・・・父が伝えた時間よりも一時間も後だったという落ちがついて赤面ものだった。
レオナ達にも予定が詰まっているので定時の謁見時間までお待ちくださいで待っている。
そのお陰で、幼馴染二人が会える事をまだ知らない

決戦は近い

ふ～ん、ノヴァからの手紙は近況報告とこれか～。
マァムとメルルが用意してくれた朝食を早々にすませたティファは、ご馳走様をして少し離れたところでノヴァからの手紙を読んでいる。
「おじさ～ん、ノヴァの家のナタリーさんって覚えてる？」
「あ？・・・俺が可愛い子にお茶しねえかって誘う度に怒ってたあのばあ様か・・」
「・・・それ絶対におじさんがいけない奴だよね。女の人をばあ様も酷いよ。ナタリーさんに初孫生まれたんだって。」
「なんでぇ、そしたら正真正銘のばぁ様じゃねえかよ。」
「確かに・・・」
ノヴァの家の乳母兼料理頭のナタリーさんは、少々・・・魔女宅のおソノさんの様に恰幅の良い性格もさっぱりとした優しい人だった。
お泊りはあの一度だったけれど、その前にちょくちょくノヴァの家の近くで遊んだり研究をお外でしていた時はお昼ご飯を届けてくれた優しい人。もう本当におばあちゃんになる年だったんだな～。
「何かお祝い贈りたいね。」
「お祝いね～・・・・マァムの時は確かおもちゃをロカ達にやったぞ。」
「あ！そうよ、マトリフおじさんが木のガラガラくれたって母さん言ってたわ。懐かしいな～、大切に遊んで無くさないように今でも箱にしまってあるわよ。」
「なんでぇマァム、あんな安物取って置いてんのかよ。」
「もう！安いかどうかじゃなくて!!マトリフおじさんが暮れた大切な物でしょう。」
「あ、マァムさんの考え分かります。私もおじさんやノヴァからもらった手紙全部取ってある。」
「・・・・嬢ちゃんもかよ・・。」
「うん、だって大切だもん。」
何を可愛い顔して笑って可愛い事を言っているんだこの子は！

もうジジ馬鹿呼ばわりされても愛で倒したいマトリフは内心で悶えまくる。
「お嬢さんにとってあのノヴァってのはマトリフ位に大切な奴なのか？」
食べ終わったロン・ベルクがティファにズバット聞く。
「ノヴァは・・・そうです、大切な人です。」
「ほう、そいつはあの坊やが好きって事か？」
「は⁉」
ロン・ベルクはダイ達並に、初対面であのノヴァを好もしく思った。
話し方は礼儀正しく、だが口説過ぎず相手に不快な印象を与えない好少年。余計な事は全く言わず、端的に聞ける見識の高さ。そしてダイ達が気づいたかどうかまでは知らないが恐らく途轍もない強さを秘めている。
ティファは今もって実力が読めないが、ノヴァの瞳からは力を感じ、物腰からも戦いになれている動きを感じた。
強く優しい男がお嬢さんにふさわしい
ロン・ベルクは昨日キルがティファに提示した賭けの答えのおおよそは見当がついている。それは薄々マトリフも知っているはずだ。
考えたくないが、あのオートドールはティファの事を男女の仲の意味で愛しているのだと。
数百年を魔界で生きていれば、動いているオートドールにごくまれだが出会うことがある。大概は迷宮の番人で、プログラムされた通り宝を守り敵を排除するしかしない人形ばかりの中、あれ程自律し、遂には感情を獲得したオートドールがいるとは・・・・それも真っ当な感情ではなく、幼女を愛している対象にする超変態思考をだ⁉
だが答えをダイ達、ましてティファ本人に教えるつもりは毛頭ない。教えて変に意識され、百万が一ティファがその気になってしまった日には・・・それよりは答えを出さずに怒って向かってこさせ、バラバラにぶっ壊す方がいいに決まっている。
そんな奴なんぞよりも、あの坊やとくっついた方がお嬢さんは幸せになると、ロン・ベルクは本気でそう考えている。

私が・・・ノヴァを好き?お嫁さんになりたい好きの事?
この大戦が終わった後、自分とノヴァが付き合って、ゆくゆくはお嫁さんになっていつかノヴァの子を産む?
ティファはほんの少しだけ想像してみた。今のノヴァの背格好は原作で見ておおよそ分かっている。もちろんあっちよりも険がなく柔らかい優しい顔をしているだろうが。
性格も穏やかでゆっくりとした話し方をする物柔らかさもきっとそのままだろう。
自分達が結婚をすれば、小父様もおじさんも喜んでくれて、子供が生まれたらきっと精霊達がこぞって面倒見てくれようとしてくれて・・・・互いに穏やかで楽しい年の取り方をしてお爺ちゃんおばあちゃんになっていく・・・・それは何と楽しい事だろう。
ティファはいまだに愛は知っても恋を知らない
兄の様にレオナ姫を激しく愛する思いを抱いたことは無く、ポップの様に初々しい初恋もいまだにしていない。
脇目もふらず、只々ひたすらに世界を救う事だけを優先し、優しい心だけは育ち他を顧みない結果そうなった。
そもそも自分はそこまでこの世界には・・・
想像を楽しみ笑いながらも目をつむって頭を数度振り、穏やかに笑ってロン・ベルクに答える。
「私はそういう事を考えた事は一度もないですよ。」
透明なその笑顔に、ロン・ベルクは何故か気に障った。
「だったら今から考えてみたらどうだ?ダイやポップはとっくに相手がいるだろう。」
「い!」
「う!・・・ロン・ベルク!!こっちにまで火の粉飛ばすなよ!!」
「本当の事だろうがよ!!!」
「うっせえぞ!ったく・・・ティファにゃまだ早いんだよ・・」
「兄馬鹿してて妹行き遅れ手もいいのかよ!」
「ティファなら引く手数多になるから・・・・ダイ・・・その邪魔迄し

たら俺怒るぞ？」
「う！・・・だってポップ!!」
「手前に恋人いてティファ駄目だって言ったら兄の座から蹴り飛ばすぞ！」
「・・・分かった！だったら俺に勝ったら・・・」
「そしたら姫さんはティファに勝たないといけなくなんぞ？」
「・・・ポップ～!!」
「泣いても駄目だ!!」
　ノヴァとティファの事なのにいつの間にやらダイとポップが騒がしくなり、掛け合い漫才の様で見ているマァム達は少し笑って完全高みの見物モードになり、ティファは少し呆れながら手紙の続きを読み進めていくうちに食べ終えたマトリフの袖をクイクイと引っ張り、―毒物に対する万能薬―の話を切り出す。
「あれって・・・おじさん目途立った？」
「まぁ八割・・嬢ちゃんは？」
「私もそんな感じ、どうしても毒消しと傷の薬草のお互いの効能消えないように混ぜるのが難しい。」
「うん？何の話してんだ？」
　漫才に一区切りつけたポップとダイも食べ終わり、マトリフ達の話を聞きつけ寄ってきた。
「ん？ノヴァがね、ハドラーの篩の時の敵の能力分からないから、斬撃と骨折と火傷と凍傷用に、解毒の万能薬も開発急いだ方がいい気がするって。」
　その予測は当たってる。敵のクイーンアルビナスのニードルには確か痺れる作用があったし、魔改造並みに強くなったハドラーから生まれているんだからもっと超強力な毒性が出来ている可能性が・・・・・そうなってたら八割私のせいなのかな？いや！何でもかんでも自分のせいにしてはいけないってバダックさんも言っている!!ハドラーは自前で今の超一流魔王様に育ったんだうん！
　若干現実逃避しているが、原作を少しでも知っている者がこの場にいれば魔改造ハドラーは間違いなくティファのせいだと拳骨では済

まなかろうが、いなくて何とやらだ。
「ティファ、ポーンヒムって奴は強いのか？」
「オリハルコン製で格闘タイプに見えたよ。動きもすごいきびきびしていて強いね。」
「そうか・・・ハドラーの親衛隊名乗ったんなら他にもいるんだよな～。」
ポップとしては、戦闘前に少しでも情報が欲しいところだと頭を掻いてぼやく。仲間を危険から守るためには力押しで行くのはしたくない。
少しでも情報があれば、出会った時に少なくとも驚いて動けないことにはならないだろうと一行の頭脳として色々と考えている。
そんなポップをマトリフはひよっこがもう立派な魔法使いになったのを喜びながらも一抹の寂しさを感じる。もう少し自分の手を煩わせてほしいと、巣立つ若鳥を見守る親鳥の気分だ。
「そうだね・・・・情報はあるかもしれない。」
「ほんとかティファ!!」
ティファのぽつりとした一言にポップは食いつく。
「うん、ヒムはポーンを名乗ってた。だったらチェス駒に当て嵌めてるのかもしれない。ポーンがいたらナイト・ビショップ・ルーク・クイーンがあるでしょう。」
「確かに・・」
「それでね、私ヒムと別れる時にあなたのキングによろしくお伝えくださいって言った時笑って確かにハドラー様に伝えるって言ってた。キングがハドラーなら残りの駒でいけばポーン・ナイト・ビショップ・ルーク・クイーンだ。ハドラーはここ最近単身で動くこと多いから、昔おじさんが言っていた大勢で動く事を今はしないと思うから、親衛隊は全駒一種につき一人で・・」
「全部で五人を考えてると・・」
「うん。」
「そうか・・・今のハドラーなら少数精鋭でくっかもな。」
ティファの予想と、島と今回の塔で見たハドラーの性格を鑑みて

ポップもティファの意見に辿りつく。
　オリハルコン製の少数精鋭はきっと手強い。
「それで何で毒を考えてんだ?今のハドラーは卑劣な手は嫌ってんだろう。」
　ザボエラの奸計止めに来てたし・・・結果師匠の体内ボロボロにしやがったが。
「ポップ兄、皆にも言っておく。私はね、戦場で勝つ為なら毒も暗器も其れこそ事前に張った罠もありだと考えているんだよ。戦は勝ってこそ意味があるからね。」
　人質だの弱い者を嬲りものにするだの謀略だのは論外だけど、戦場で戦う者同士が命の遣り取りをするとあっては今言った事は全部ありだと思っている。
　大切な仲間の為に、守るべき後ろの者達の為にも勝たなければ意味がない。
　きっと今のハドラーなら卑劣奸計は使わなくとも、戦場で使える戦いの手を出し惜しみはしないだろう。全ては勝利の為に。
・・・大魔王がやった様な黒の核晶を大切な部下に本人に秘密で埋め込んで爆弾にするのは許さんけどね!
　同意もなく自爆要員にするとか嫌いだけどね!!
「まぁだからと言ってこちらも同じ手を使わないといけないわけじゃないからしなくてもいいけど、少なくとも毒の心配もしておこうって話だよダイ兄。」
　ティファの話に納得がいかないと憮然とするダイの頭を優しく撫でる。
　価値観は人それぞれであり、勇者一行は正攻法で行きたいと望むならばそれを自分が適えるだけだ。
「うん!俺達はそれでいきたい。」
　にかりと言ってついでとばかりにティファをギュッと抱きしめる。ここ最近ティファは敬語を使う事無く話してくれるのが何よりも嬉しい。妹が早く大人になったようで実は落ち着かなかったのだ。
「もう!ダイ兄はすぐに・・・」

ドン！
洞穴で話し込んでいたらいきなりルーラの着地音が入り口に響き、ダイは直ぐに振り向き脱力をする。
姿で分かり、他の者達も一瞬で緊張した体をぐったりとさせる。
「・・・どうした爺さん・・」
一番仲のいいクロコダインが、訪問者バダックに声を掛けた。
「いや・・・コホン・コホン・・・・そのな～。」
どうにも歯切れが悪い。いつも明るくさっぱりとしているバダックらしくない。
「おはようございますバダックさん。何かありましたか？」
「うんむ、実はマトリフ様と・・・ええい！勇者一行―全員―に来て欲しいとレオン王よりマトリフ様に伝えて欲しいと言われたのじゃ!!」
腹を括ったバダックの言葉に、ロン・ベルクとティファ以外の全員が氷りつき、そろりとマトリフを見て後悔した・・・・無表情が却って怖い!!
クイクイ
「あのねおじさん・・・私行っていいならお城行きたい・・」
「嬢ちゃん？」
「メルルさんが、フォルケン様まだパプニカ城にいるって教えてくれたの。だからね・・」
「・・・嬢ちゃん。」
見舞いと今回巻き込んだ謝罪をしたいのだと目で訴えてくる。どうしたもんか
嬢ちゃんも含めて呼んだという事は、間違ってもあの兄ちゃんを嬢ちゃんと鉢合わせる事はしないか。下手打ったら俺が本気でパプニカの敵になる事はレオン王なら分かってるだろうしな。
「分かった、少ししたら行くって王に伝えておいてくれや。ロン・ベルク、お前さんはどうする？」
「俺が行きたいっていうと思ってんのかよ。少し休んで午後ダイ達を扱くよ。」
意外なほどあっさりと承諾され、バダックは拍子抜けした。昔のマ

トリフを知っている者ならば誰もが目を疑うだろう。柔らかい笑みを浮かべ、一人の少女を慈しむ大魔導士を見れば。

城に着いた時、バダックと同じ思いを抱き中には目をこすって二度三度見直す者もいた。

大魔導士の衣装を着たマトリフの左手をティファが添えて歩いている。

「おい嬢ちゃん・・・」

「だっておじさん超高齢だし・・・」

「あのな～。」

腰が多少曲がっていてもまだ介助は必要ないと言いたいが、心配するティファの心情を無下にできず、城門くぐってからずっとこれで歩いている。おかげで周りの視線が痛い。

「マトリフ様、ダイ君達もその・・・」

出迎えに来たレオナも、考えていた挨拶と詫びの口上が吹っ飛んでしまいしどろもどろになる。それくらいこの光景は破壊力抜群だ。

ティファの着ている服はいつもの料理人の時に着ている服だが、アバンの眼鏡をかけておらず年相応か少し下に見える。

威厳のあるはずの大魔導士を世話する孫娘に見えて仕方がない。

「レオナ姫様、一昨日は申し訳ありません。」

レオナがしどろもどろする反面ティファの方から詫びを入れる。様々な意味で騒がせたのは、矢張り誰が何と言っても悪いのだから。

「その件は反省し二度としないと言っていましたね。その言葉確かにきちんと受け取っています。だからもういいのよティファ。」

ティファの言葉で落ち着いたレオナは、いつものレオナに戻る。前半は責務ある王族として、後半はダイ達の仲間として上手に使い分けられるレオナに。

「レオナ姫・・・はい、はい。」

その言葉はティファの胸の中に沁み込む。レオナの優しさが嬉し

くはにかんで笑うティファをレオナは優しく包み込む。
「無理言ってきてもらってごめんなさい。どうしてもお父様が皆にお礼がしたいって。」
今回の件の発案は病床にいるレオン王だった。
ハドラー達との決戦の前に、愛娘を守ってくれたヒュンケルとクロコダインにも直接お礼が言いたい。また間接的であれ、レオナの命が尽き掛けたのを救った万能薬の礼をティファにもしたいと。
そしてもう一つある。
「今から数日後に皆に集まってほしいの。完全装備で決戦に行く覚悟を持って。」
レオナはエイミとマリンだけを連れてマトリフを出迎えに行き、今も三人だけでダイ達をある部屋に案内しながら説明をする。
「彼からも詳しく話を聞いてほしいの。」
ノックもせずに開けた扉の先にいたのは。
「先程ぶりですねマトリフ様、ダイ君達も。」
ほんのりと笑ったノヴァ一人がいた。

「三日後に作戦行動？」
「そうよ、ティファの情報で死の台地が敵の本拠地だって突き止めたんだから、今度はこっちから打って出る事で案が纏まったの。」
「その打ち合わせの為に僕が名代できたんです。」
「・・・姫さん、ノヴァって騎士職以外になんかあんのか？」
「あらポップ君、さっきノヴァ君と会った時聞いていないの？ノヴァ君は・・」
「姫様。」
レオナがノヴァの全てを紹介しようとした時、ノヴァ自身にやんわりと止められた。
「僕が自分で言いますね。僕の父はアーデルハイド王よりリンガイアの大将軍の地位をお預かりし今度の作戦の全容も打ち合わせ済みで、一昨日纏まった案よりも良い条件で兵や兵站が出せそうなのでその

お知らせに僕が来たんです。
僕一人ならトベルーラで国境付近まで来て、帰りはルーラで帰れますので。」
「成る程、お前凄いんだな。騎士でルーラやトベルーラ使えるったらかなりだぞ？」
「僕なんてまだまだですよ。」
「そんな事ねえと思うぞ。それよりもさ、本国そんなに兵出して大丈夫なのか？」
敵からの攻撃がやんでいるとはいえ、油断はできないご時世だ。
「はい、実は・・・勇者ダイ一行の中にティファがいることが分かって、皆張り切ってくれて引退した人たちがこぞって志願してくれたんです。」
国境は自分達が守る、若い奴らは最前線で役に立ってこい
もう歳だろう、大人しく守られていろと止めようとした王を叱り飛ばしもしてきた。
「こんな年寄り連中の命惜しむな！未来ある若いもん達の助けになる盾にしてやる位言ってみろってんだ洟垂れ王!!」
騎士王と名高いアーデルハイドも、年上の古参兵には勝てずに苦笑しながら志願を受け取り支援兵が大幅の増加できたのだ。
「マトリフ様やティファのおかげで生まれた万能薬の恩恵をリンガイアが一番に受けています。その恩返しをしたいと僕も彼等も願っていたので渡りに船だったんです。」
「そうか、そうだよな。けどな、敵には空間使って神出鬼没の奴がいるからな～。」
「そちらも大丈夫です。」
「なんでだ？」
「あ～・・・・実は僕の事を守護してくれている精霊様が、空間も凍結できる秘術をお持ちで伝えれば空間索敵もしてくれるかと・・・・」
そんなすごい事できる奴の加護持ちって何こいつ⁉
流石のマトリフも開いた口が塞がらない。
精霊の王様から加護受け取ってほしいと言われたのですがどうし

ましょう？
　とは手紙で相談され受けておけ言っておいたがそこまでのハイクラスだとは思ってもみなかった。
「・・・・名前はキルバーン、これが人相書きです。」
　今までマトリフの側に居て一言も話さなかったティファがようやく口を開き、ポーチから人相書きを出してノヴァに渡す。
「衣装は赤と黒で直ぐに分かります。何か言う前に倒した方がいいでしょう。そしてもう一人の人相書きも渡しておきます。名前はザボエラ、奸計を使い人を惑わすもので、この者も見た瞬間斬る事をお勧めします。」
　眼鏡は掛けていなくとも、それは確かに料理人ティファの声色であった

ノヴァ

「申し訳ないが作戦の細かな概要と場所はまだお教えできません。当日移動中にお知らせする手筈となりました。」
「構いません、知らなければ万一相手に漏れていても情報源は勇者一行ではないと言い切れますのでご配慮痛み入ります。」
「承知してくださり助かります。アーデルハイド王も、此度の戦も武運あるように祈っているとの事でした。」
「父の件と言い、いたみ入ります。」
　あの二人は幼馴染だったはずなのに・・・そうか、そうよね。
「こほん。」
　勇者一行の料理人と、リンガイアの名代をしている二人の間にレオナは割込み空咳をして会話を止める。
「皆さん、実はフォルケン王のご容態を今朝はまだ確認していないの。後お父様の方も確認するから、こっちの部屋で待っていて。エイミ、案内したらすぐにお願いしたことあるから来て頂戴。ノヴァ君も―詳しい話―をしてから帰って頂戴ね。」
「は、分かりました。皆さんこちらに。」
「レオナ姫、ありがとうございます。」
　エイミに先導されダイ達は後を付いて行き、一番最後に出る時ノヴァはレオナの心遣いに礼を言う。
　いいから早く行きなさいと笑って手を振るおてんば姫に
　先程の部屋よりも落ち着いた調度品が置かれている部屋に案内されたダイ達はそれぞれ席に着き、ティファもマトリフを日の当たる席に座ってもらってからいきなり猛ダッシュをしてノヴァに突っ込んでいった！
「ノヴァ!!!!」
「ティファ!!」
　ダッシュの勢いのまま突っ込んで飛びついてもノヴァはびくともせずにティファを受け止め抱きしめる。
「五年間本当に一度も会いに来ないなんてティファの薄情者!!」

「会えなくっても手紙沢山送ったじゃないか馬鹿ノヴァ！」
「でも寂しかったんだよ!!」
「いつでもノヴァのこと忘れたことないんだよ！いつだって!!」
「それでも会いに来て欲しかったんだよ！」
「忙しかったんだよ!!」
「君はいつだってそうだ！勝手に来たりいなくなったり!!」
「そうだよ！そんでノヴァの事大好きなんだよ!!!」
「もう、本当に君は勝手なんだから。僕もティファが大好きだよ。」
二人はひっついたまま怒鳴りあい互いに薄情者だの馬鹿だの勝手だのと罵り合う。
だがその声色は何処までも楽し気で優しく、お互いが大好きだと笑いあう。
レオナの読み通り、この二人は子供であっても公私を使い分けるのが異様に上手すぎ、先程はお仕事モードで接していたのだが、マトリフはともかく未だにその辺のオンオフが分からないダイ達からすればいきなり人が違ってしまったような二人にポカンとしてしまう。
「おい嬢ちゃん坊やも、周り見てみろ。呆れてんぞ。」
二人の世界に入ったが最後、ひっつきあってじゃれる様は本当に昔と変わらずと安心したいところだが、ダイ達もいるのだと苦笑する。
「そうでした、すみません皆さんお騒がせして。」
「ダイ兄・・・ノヴァと本当に久しぶりでね・・・」
片や柔らかく、片や少々恥ずかしいかもと赤らめながらもひっついている二人はある意味筋金入りかもしれない。
だが声を掛けられてもダイはノヴァをきちんと見れずに俯きちらちらと見て言葉が出せずにいる。
ダイのその視線の意味が分からない凡庸ではないノヴァは、ティファをちらりと見て下におろしダイの前に来て膝をつく。
「ダイ君、僕の事が嫌いかい？ティファと仲がいいのが嫌かな？」
あえて敬語を取り払いダイに話しかける。
「違う！そうじゃない・・・けど、俺・・・」
洞穴でポップ達のエールを受け取った後でも、いざ本人を目の前に

すると竦んでしまう。妹はどうしてこの人とこんなに仲良くできるのか不思議なくらいだ。
「ダイ君、それは君の御父上の事かな。」
ビクリ!!
「その事だったら君が気に病むことは何一つないんだよ。」
「え？」
ノヴァの言った事に体が揺れたが、変わらず優しい声で話し掛けてくれる。
その優しさに釣られるようにダイはようやく顔を上げれば、あった時と同じ優しい笑みが目の前にあった。
「きみの御父上は確かに大逆を犯した。でもね、それは言っては何だけれども君の仲間のお二人も一緒なんだよ。それでも各国の王の裁可の下、罪を償う道を歩くを事許されている。
他の国は知らないけれど、少なくともアーデルハイド王が下した裁可を否やという者達はリンガイアには存在しない。王の命令は絶対ではあるしそれ以上にアーデルハイド様は本当に許されない時は誰が言っても求めても許しは出さない厳しさで有名なんだよ。その方が許すと言ったならば、僕達も君の仲間や御父上を信じて一緒に戦う。
だからね、ダイ君が俯いて泣く事は何一つないんだよ。」
ノヴァの言葉にいつしか大粒の涙を流すダイをそっと包み込み優しく労わる。
「大逆者の分際でとかいう奴はリンガイアの兵じゃないのを覚えておいて。例え僕等と同じ鎧を着ていても、敵の内部崩壊を狙った策略者として処罰するから大丈夫だよ。」
優しいのに少しおっかない事もさらりと言って、ダイは少しおかしくなり少し笑ってしまった。
「うん、笑う声がティファに似ているね。」
「だってティファのお兄ちゃんだもん。」
「そうだね、二人とも良い子だ。」
十五のノヴァは、ダイとティファを抱き寄せ良い子だと言い続け

る。
一行以外の者達から、これ程優しくされたのは初めてだとダイは嬉しい心のままノヴァに抱き返した。
この人なら、本当にティファの相手になってほしい
「ノヴァって氷の呪文も得意なの⁉」
「剣・槍だけではなく弓もか・・・」
「確かリンガイアには闘気技の開発が盛んだったとか・・」
ダイが打ち解けた事でポップ達もノヴァともっと距離を縮めたいとヒュンケルすらもがグイグイといっている。
人見知りのきらいがあるヒュンケルにしては本当に珍しい事だが、何故かノヴァには警戒心が働かない。
「あ～あ、ノヴァ取られちゃった。」
「嬉しそうな顔して何言ってんだい嬢ちゃん。」
「ふふばれたか～。ポップ兄やマァムさんとメルルさん以外の皆って、接している人たちって極端に少ないでしょう。エイミさんやバダックさんやアキームさん・・・それにアポロさん以外にもいい人はたくさんいる知ってどんどん世界を広げて欲しいんだ。」
チウもリンガイアの闘気技を自分の技に応用できないか熱心に聞きながら笑っている。こうやって世界が広がるのを見ると本当に楽しい。
「そうか。」
「そうだよ。」
だが楽しい時間もいつかは終わりになる。程よい時間にレオナがエイミを送りお開きにさせる。
「ノヴァまたね！」
「うん、またすぐに会えるよ。」
ダイ達は城門迄ノヴァを見送りに出てぶんぶんと手を振る。
「良いお兄さんだね。」
「そうでしょう。」
ティファは城門の外までノヴァを見送る。いつもの約束をする為に

ノヴァは無言でティファを抱き上げ、抱き上げた後右手の親指をティファの口に持って行きティファも左手の親指をノヴァの口に当て、互いに薄皮を噛みちぎりほんの少し血が出たのを確認しあい、お互いの親指と傷口を押し付けあう。
「また必ず無事に会おうね。」
「また元気な姿で会おうね。」
リンガイアの騎士に代々伝わる呪いの一つ。
互いの無事を祈りながら互いの血を体内に分け合いまた会える事を祈願する。
そしてこれは自分達だけの呪い
額もくっつけあい笑い合う。次に会った時も同じように笑い合えますようにと祈って。

その不思議な光景は何処か侵しがたく尊いものに映り、誰もが無言でノヴァがティファを降ろした後もとやかく言わず、一礼してルーラで飛び去るノヴァに全員が手を振った。

「良い子達ね～あの子達。」
「そうだね、ティファと同じ良い子達だ。・・薄汚れた者達や了見の狭い者達から守らないと。」
「ふっふ、釘はきちんと刺したんでしょう?・まだ心配?」
「う～ん、ティファもだけどダイ君や他の人達、ヒュンケルさんやクロコダインさんも世間ずれしてないから心配だよ。」
帰りのルーラの中でノヴァはダイ達の心配をする。
一応釘は刺してはきたが、効力あるのか不安になる。
手元にいてくれれば守りやすい。あの綺麗な一行の良い子達を護っているつもりのティファも込みで。

「ノヴァっていい人だね。」
「そうだな、あいつと一緒に戦える日が待ち遠しいな。」
「心強い仲間が増えるっていいわね～。」
「はい、皆さんならきっと勝てます・・」
ダイ達は完全にノヴァの大ファンになり口々に褒めそやす。
特にダイの懐き様が凄かった。今別れたばかりなのにもう会いたいというほどに。
自分は今まであまり叱られる事なく伸び伸びと育ってきた。
だから今まで許す側であり、許される側に立った時、心の底から恐ろしさを感じた。
もし相手が自分を憎み許してくれなかったら？
そう思うだけでもゾッとし、心まで凍る思いがした。
寄る辺なく心細く、それでも周りに助けを求めてはいけないと縮こまっていた。
しかし、ノヴァは許してくれた。父の罪は自分のせいではない、そして父も償う道を歩くなら共に戦うと言ってくれたのだ。
縮こまった自分に差し伸べられた手に縋り、包まれた時のあの安心感は言葉でいい表されないほど嬉しかった。
ヒュンケル・クロコダインは、バルジ島戦の後と王様達から正式に許された時、自分と同じ思いをしたのだろうか。
許された時のあの想いは・・

俺も・・許せる人になろう
今までヒュンケル・クロコダインを許し助けてきた。それよりも更に大きな罪を犯してしまったものでも、誰かの為だったりどうしようもない事情でそうしなければならなかった者がいたら・・全力でその人の助けになり光の道を示してあげたい。その人が助かり償う道を歩ける様に。
ティファや先程のノヴァの様に自分も。
ダイの中で、勇者としての確たる己の道を見つけた瞬間であった。

明るく賑やかなダイ達を先導しているエイミの胸中はかなり複雑なものであった。

優しい？あの氷の勇者が優しく良い人？もしかしたらマトリフ様以上に怖い人を、何故そこまで仲良くできたのだろうか？

「料理人のティファの事で騒がせた方は今回の作戦に来るのですか？」
「いいえ、その者は別の任に就きます。」
「そうですか、それは助かります。今回の件は海洋に詳しいリンガイアが主導させていただくので、その方が来たら少々騒ぎになるなと危ぶんでいましたので。」
一国の国主代理に向かって平然と内政干渉紛いの事を笑ってさらりと言い放ち、脅し迄掛けて来た時の彼の瞳は、まさしく氷の勇者の名にふさわしく冷たかった

パプニカ王に願いを

敵の大魔王直属の配下キルバーンは実は凄く紳士的で礼儀正しい人でした

・・・・・・この情報欲しくなかった

ノヴァと別れた後、フォルケン王、レオン王の順で会うことになったダイ達はエイミとレオナに先導されフォルケン王の寝所を訪れた。

顔色がよく、穏やかに笑っているフォルケン王を見て誰もがホッとする。

先の大戦でも戦場に出たことない王が、いきなり敵の人質になってさぞ恐ろしく心細い思いをして、それが体に響いたらと心配していたが杞憂で終わって良かった。

「フォルケン王、此度は巻き込んでしまい申し訳も・・」

「いや、ティファ殿のせいでは無かろう。そうではないと、こちらに使者としてきたキルバーン殿が一切を話してくれた。」

・・・・・キルバーン―殿―⁉

近頃は変態か疫病神としか呼ばなくなったあの死神を、フォルケン王様何で殿なんて付けてんだ!!!

「あの・・・あの人が一体・・・」

流石にキルをそこまで酷い人だとは思っていない超少数勢力の筆頭ティファが恐る恐る聞いてみる。

だっておじさんまでもがこいつ何言ってんだってフォルケン王様に胡乱な視線投げてんだもん。

聞いてティファは後悔しなかったが、ダイ達は幻覚か幻見たのではないかと大騒ぎし、フォルケン王を苦笑させている。

戦場出てくればティファに変態的な事しないあいつが！他の奴には真っ当な態度とってますで誰が納得するか!!

あいつは斬る・燃やす・叩き壊すでダイを筆頭に燃えているが、メルルとチウはそこまでになれず、変態被害の当事者ティファの下に集まる。
「あの・・・今のフォルケン様のお話本当だと思います。」
「はい、そこは私も疑っていませんよメルルさん。」
「・・・・あの人本当は優しい人なんでしょうか。」
「そうだねチウ君、一面だけじゃその人を推し量る事は出来ないけど、少なくとも優しい人は合っているって私も思うよ。」
そうでなければ命令違反したデビル君を殺して終わりにさせていただろう
そんな人と敵味方、だから戦なんて嫌いなんだよな～。
「ティファ！メルルもチウもあいつは駄目だよ!!」
「そうだぞ！壊すで決めてんだからな!!」
ティファ達の様子に気が付いて聞き耳立てた兄二人が、打倒キルバーンで固まっているのだと言い聞かせる。良い人だろうが何だろうが、あいつは戦場で会ったら真っ先に倒す者だ。
「分かってますよ二人共。お話しくださりありがとうございましたフォルケン王。」
「いや、さして有益な話は出来なかったが会えてよかった。」
ティファがフォルケン王を案じたように、フォルケン王もティファを案じていた。自分がティファの心を土足で踏みにじり、その後も立て続けに心の傷を暴かれたティファを。
だが、今屈託なく笑っている顔に影は無く、声色も随分と明るくなっている。自分の心配は要らぬお節介であったか。
フォルケン王の体を慮り、辞去の挨拶は短めにし、いよいよレオン王の下へと向かう。
レオン王もフォルケン王同様に寝台の住人であり、同じく寝所で会う手筈になっている。
流石のヒュンケルとクロコダインは緊張し、ティファは表情が暗くなる。
「ティファ、お父様は大丈夫よ。」

「姫様・・・」
「今朝はパン二つ食べてスープも飲まれたの。声もはっきりとしているのよ。ここ数日キチンと寝れて嬉しいって笑ったの。だからね、大丈夫よ。」
　三日前アポロの無茶ぶりではあったが王の様態を思いがけなく詳しく知ることになり、胃癌で助けられないと知ったティファは、せめて苦痛を和らげ夜眠れる薬を処方した。
　だがそんなのは対処療法の一環で治療ではなく、治してあげることが出来ないと負い目を感じている。
　優しいがゆえに人の痛み悲しみを共有していまうティファに、父は大丈夫だとレオナは優しく宥める。
　本当は自分も父を失ってしまう悲しみに押し潰されそうで夜中に起きて眠れなくなる時があるが、それでもここ数日の父は本当に調子がよさそうで嬉しいのだ。
　トントン
　レオナがノックをすると、入りなさいと深みのある返事が来た。それを合図に扉を開ければ、寝台の上でロカの様に枕を背もたれにして起き上がっているレオール王の姿が直ぐに目に入った。
　ダイとポップ、マァムは一度会っているのでお久しぶりですとにこやかに挨拶をし、ヒュンケル、クロコダイン、チウとメルルは緊張しながら初めましての挨拶をする。
　他のメンバーが挨拶をし終えた後、手を添えたままマトリフとティファが寝台に近づく。
　レオナ姫と同じ赤みがかった金の髪を腰まで伸ばし、フォルケン王と同じ病人だとは思えない程力強い威厳を感じる。これをして、病床の身なれど大戦最中のパプニカ王国を纏め上げ、各国の王達との連携を強化させているのか。
　ティファはマトリフから手を外し、胸に手を当て一礼する。
「初めてお目に掛ります。勇者ダイの妹で一行の料理人をしているティファと申します。」
「そなたがティファか、娘やロムスより話は聞いている。そなたの薬

のおかげでここ数日眠れるようになった。感謝する。」
レオール王は目元を和ませまずはティファに優しく話し掛け礼をし、次いでヒュンケルとクロコダインに目を向ける。
娘を助けてくれた礼を言えるうちに言っておきたかったと話、深々と二人に頭を下げる。
「そんな王よ！我ら等に頭を下げられては・・」
「左様！我等はそれ以上に十分にしていただいている、それだけでもう報われているのです。」
元とはいえ魔王軍の軍団長であった自分達に頭を下げないで欲しいとヒュンケルとクロコダインの焦りを聞いたレオールは頭を上げる。
目の前に見えたヒュンケルとクロコダインと目が合った。
「レオナはしっかりとした子でこの国の次期女王だが、私にとっては掛け替えの無い、何度お礼を言っても足りないくらいに愛しい娘なのだ。礼を受け取ってくれまいか？」
穏やかに笑いながらもダイ達にも再び礼を言い笑っているレオール王を見て、ティファは胸が痛む。
どうしてこの人を治してあげられないのだろう。
俯いていると、マトリフの手が頭に置かれ声を掛けられる。
「嬢ちゃん、王がさっきから呼んでんぞ。」
「え！・・・あ!!申しわけありません。」
心と一緒に思考も何もかも沈んでしまっていたようで、呼ばれていたのに気が付かなかった。
「料理人ティファ、娘の命を助け、今また私の事を助けてくれているそなたに礼がしたい。」
「そんな・・・私は薬を・・・そもそも王を助けているとは言えません・・」
どうしても沈みがちになる心を、温かく強い声がすくいあげる。
「確かに勇者ダイとその仲間たちの活躍があったればこそ娘は助かった。その礼は一行にもうしてある。」
ダイとポップの新しい武装の資金、ヒュンケルとクロコダインの許しを出し残るはティファのみ。

「何か望みはないか？」
「・・・望みですか？」
それはティファが一番苦手な事であった。
財貨に興味はなく、武装はもう最高の品が揃っており、万能薬の材料は事欠かず欲しいものが何もない。そもそもヒュンケルとクロコダインの望み以外後は何もないのだから困ってしまう。
だからと言って、ここでありませんでは申し出てくれた王の顔を潰すことになるのでありませんともいえない。
私の望み？・・・・ずっと望んでる事は今も昔も大切な人達が皆笑っている事だ・・
「王様長生きしてください。」
するりと口から出た望みはそれだった。

「・・・私が長生きする事？」
「えっと・・・・・はい・・」
それは言ったティファか言われたレオールか、どちらの方がより驚いたのか
ティファが一行の全面的バックアップを更に望めば出す用意の手筈をしていただけにレオンは肩透かしを食らった思いをし、言ったティファ本当に何でこれ言ったんだろうと少し不思議になったが、視界にレオナの顔が見えて得心した。
自分も兄同様レオナ姫が大好き。明るく笑っていて欲しい。
「王様、この戦いきっと私達が勝ちます。」
「なんと、この段階で断言するのかそなたは？」
「はい、険しく辛い戦いになると思いますが今この世界は人間だけではなくモンスターやとある魔族の人―達―も力を貸してくださっています。一昨日は各国の王様達が力を携えて勝とうと言ってくださいました。なので私は勝てると信じています。」
「そうか・・・先の大戦と何と違う事か・・」
ハドラー大戦のときはいきなり攻めたてられ、孤立したままの状態で戦っていた。

アバン達がハドラーを倒すのがもう半年遅かったらこの国は滅ぼされていた恐ろしさをよく覚えている。
だが今回は違う。神々の加護としか思えないような奇跡が次々に起こり、オーザム以外の各国はほぼ惨状はなく、あのカールとても人身的には無傷で逃げおおせている。
さらにティファのいう事が全て本当なら、この世界全てが大魔王に立ち向かおうとしている。
「この戦に勝利した後、兄は姫と結婚すると張り切っています。」
いきなりの爆弾発言に、レオールの目は点になった。
「・・・・・勇者ダイが・・・」
「はい。」
ティファは滅茶苦茶いい笑顔で肯定する。
「レオール王！身内贔屓になりますが、兄は将来もっといい男になりますよ。レオナ姫ももっともっと素敵な女性になる事請負です！見たくありませんか？綺麗になったレオナ姫の花嫁姿を。純白の綺麗なドレスに身を包んだレオナ姫はとってもとってもきれいですよ!!」
「・・・・たしかに・・・・レオナは母に似てくれて今でも十分美しいが・・・」
「お父様⁉」
「そうですよね、今でも物凄い美人さんです!!」
「ちょっとティファ!!」
何を言い出すと真っ赤になるレオナをうっちゃって、二人はレオナの美しさを言い続ける。
「普段はお転婆だが、芯は優しい子なのだ。」
「はい！もういっつも優しくて、ダイ兄のお嫁様は姫しかいないと!!」
「それに甘えん坊でもあるのだ。朝起きてあの子はいつもこの部屋に来て私の膝にもたれてな・・・」
「なんと可愛らしい一面も。」
・・・・誰か今直ぐ私の存在全部消してほしい・・・
自分が絶対にダイ達に知られたくなかった甘えん坊まで実の父に暴露されたレオナは赤くなって蹲る。

そこにダイが来て頭を撫でられた。
「レオナ、俺すぐに背が伸びると思うから俺にも甘えてね。」
にっこりととどめ刺された!!
「王様!人は・・・いえ、生き物は生きたいと強く願う意思が大切なんです!!」
「生きたいと?」
「はい!今は大戦最中で心配事が絶えない日々ですが、将来の楽しい事を思い浮かべて上げてみてください。レオナ姫が結婚したらその後にはお孫さんが生まれます!抱いてみたくありませんかその手に!戦いは一時の事です!!楽しい事が必ず待っています!だから・・・」
切々と訴えるティファを、レオールは渾身の力で持ち上げ膝の上に乗せ強く抱きしめる。いきなりの事に驚いたが、ティファはレオンの顔を見て何事かとは言わなかった。
レオールの瞳がぐしゃぐしゃに歪み痛そうな表情を見て言葉を飲み込んだのだ。、

「そなたは・・・なんと・・・」

ずっと誰かに言って欲しかった
戦いは一時の事、必ず明るい明日があるのだと、ハドラー大戦の時からずっと。
各国に救援要請をしても自国で手一杯だとはねつけられた時より、自分の心が冷え込んでいった。大戦を辛うじて生き延びる事は出来たが、レオナが生まれるまで見捨てられた思いが心を凍り付かせ閉ざしていた。
愛娘を授かれば最愛の妻に去られたが日々成長し笑って大きくなるレオナに何度癒されたか分からず、また前を向いて歩く事を決め良き国を娘に残すべく、病の身なれど王の仕事を精力的にこなした。その矢先に愛娘が大戦の犠牲になりかけ、先の大戦以上の絶望に身を包まれた。
レオナが死んだ時は自分も後を追う事を決める程に。

国の主導者が立て続けにいなくなれば立ち行かなくなる事を分かっていてもだ。
だが、今回は勇者達が間に合いあい国も娘も何度も助けられ、そして今は勇者の妹が、優しい心で自分を・・・
厳格であると評され威厳あるレオール王が、勇者や大魔導士の前であっても人目を憚らず少女を抱きしめ涙を流す。
初めて見た父の本当の弱った姿にレオナは戸惑い近づこうとするが、ロムスに手で制された。
今二人の間に入ってはいけないと。
王様・・・
「王様、長生きして下さい。沢山寝て、少しずつ食べて、周りの人達と笑ってお話して、病に勝ってください。」
レオール王の首に両手を回しティファは何度も繰り返す。長生きしてほしいと。
「食事は固形が無理でしたら根菜をくたくたに煮て擂り潰してスープとよく混ぜてどろりとした物からとると良いかと。」
「笑うと元気が湧くので、姫様の幼少の頃の思い出やお孫さんはどんな子かなとか思い浮かべてロムスさん達とお喋りするのも良いと思います。」
「日光浴も体にはいいので、決めた時間にバルコニーに椅子を置いて過ごすといいです。」
「今日の様に体調がいい時は肩や足を動かして血の流れをよくしてあげてください。寝たきりでは体が衰えてしまいます。」
ティファは穏やかに持てる知識でレオールに体に良い事を次々に話す
この位の知識は現代では当たり前でも、ダイ達の世界には医療はまだ発展しておらず、中世のヨーロッパ初期程である。
薬は薬草などで発展しているが、食事療法や血液の循環、日光浴の恩恵などはまだ知られていないが、聞いているレオンは不思議とティファの未知な話をやってみようと言う気になっている。
側で聞いていたロムスもあわてて手帳と書くものを取り出し急い

でメモし、熱心に聞き入る。
ここで万能薬の第一人者である立場が功を奏し、ティファが言った事ならばやる価値はあると評価されたのだ。
いつしかレオールの涙は止まり、ティファが話す姿を見つめる。なんと生き生きと楽しそうに話す子供なのだろう。近頃は早く大人になろうとして背伸びをしているレオナの小さい頃を見ているようだ。この大戦が終わった後は、復興など大変な事は自分が全て見て、レオナにまた明るい娘に戻ってほしい。
その為にも
「ティファ、そなたの願いは必ず叶えよう。私は病に打ち勝ち、長生きをして娘の花嫁姿を見て孫をこの手に抱こう。」
願ってくれたものの頭を優しく撫で約束をする。

太陽の温もり

王様の寝所なのに賑やかにしてていいのかな？
「ポップ君！是非しましょうね合同結婚式！」
「姫さんまでなんてこと言うんだよ！つうか俺らと姫さんじゃあ結婚式の意味合いがだな・・」
「救国の勇者とお姫様の結婚はある意味御約束なのよ！其れ反対する人いないから安心して頂戴だい。」
「そっちじゃねえ！王族と庶民が合同でなんてな！」

ダイ兄が夢一杯の結婚式プラン王様に話したらがぜん姫様の心に火がついて、王様も二次会はデルムリン島でするれば良いかなんて言い出しちゃったよ。
「ああもう分かった!!」
レオナの執拗攻撃にとうとうポップが音を上げた。先程の褒め殺しでポップにまで弄られたレオナは、復讐するは我にありを標語にポップとメルルもその時合同でするのだと迫ってとうとうポップの決意を固めさせた。
「メルル！今からフォルケン様に俺とメルルの結婚許可とご招待しに行くぞ!!」
・・・・ホワッツ!!
「ポップさん⁉」
メルルさんが裏声出して絶句した・・言い出して騒いでた姫様も固まっちゃたよ。
「ポップ君・・・何でフォルケン様？」
「あん！メルルにナバラさん以外の家族いないのかって聞いたら、小さい頃から城に出入りしてフォルケン様がお父さんみたいだって言ってたんだよ。娘さん貰うのには父親の許可要るだろうが!!ロムスさん、さっきティファが言っていた体にいい事のメモ貸してください、フォルケン様にも当てはまること沢山あったんで今から国に戻ってから実行してもらって、フォルケン様にも長生きしてもらうんで。

行くぞメルル。」
パタン
ロムスからメモを受け取ったポップは、固まってしまったメルルの手を握りしめ一緒に連れて行ってしまった。
「ふむ、合同結婚式の前例はあったかな・・司祭たちに調べさせるか。」
いきなりの急展開の中、唖然茫然の一同の中でレオール王だけが合同式を具体的にしようといち早く算段に入る。
「あの王様・・・・許可成されるんですか?」
「良い事は皆で祝うのが一番であろう?それも楽しみの一つにさせてもらおう・・・・ドレスはこちらとテランとどちらで用意すべきだと思う?」
「花嫁衣装は国ではなく・・・祖母さんのナバラさんが用意して、花婿衣装もポップ兄のご家族が用意するかと。」
「そうか、ならばレオナはこちらでそなたの兄は・・・」
「はい、手筈は何とでも。」
意外な程許可がサクサクと出ちゃうけど・・・
「王様・・・そろそろ私降りた方が・・・」
さっきから私王様に抱っこされたまんまなんだけど
「重くないぞ。」
・・・ずれてる、王様どこかずれてる
「あんなレオール王、ポップもだがこいつらは特訓が待ってんだ。そろそろお開きにしてくんねぇか?」
「おやマトリフ様、それ程早くティファを手元に取り戻したいのですかな?」
ビキ
「・・・嬢ちゃんはな!弱っている奴には誰にでも優しいんだよ!!そこんとこ勘違いすんじゃねぇ!!!」
レオールのお茶目な挑発ともいえない言葉に、百戦錬磨のマトリフが感情をあらわにし、ダイ達は目が点になりついで大爆笑の渦になる。
「はっはっは・・・マトリフさんのこんな顔初めて見た!」

「だ・・ダイ・・マトリフおじさんに・・失礼よ・・」
「マァムだって・・・もう駄目！マトリフ様可愛い!!」
お子様組はけらけらと笑い、ヒュンケルとクロコダイン、ロムスは静かに笑って憮然としながらお子様組に抗議しているマトリフと笑い転げるダイ達を温かい笑みで見る。
敵だ味方だと暗い影なく笑っている光景は、まさしくティファが居なければ生涯見る事はなかっただろうと思う。
一人の少女が笑って話すだけ、たったそれだけでこれほど幸せな光景が繰り広げられる様を見る度に、ヒュンケルは常々考えている。
誰もがティファに会えば何かしらの影響を受けずにはいられない。それは味方だけではなく敵にも影響を及ぼしてしまい、良くも悪くもなのが困りごとだが、それでもこの優しい世界を守りたい。その為にも
「レオール王、マトリフ導師の言う通り、俺もダイも剣の訓練をする時間なので失礼する。」
「あ！そうだね、ロン・ベルクさん待たせてるんだ。王様、レオナ姫様御免さない。」
「チウ、我等もだな。」
「そうですね、王様、姫様も失礼します。」
「私もね。レオナ姫、またゆっくりできる時に・・」
「ええ、分かってるわマァム。みんなも無茶しないでね。」
「レオナの言う通り、戦いに赴けばそうも言っていられないだろうが命を大切にしてほしい。」
レオールの優しくも力強い言葉に、ダイ達は明るく笑い辞去の挨拶をして部屋を出る。
部屋は一気に静かになり、少々寂しく思ってしまうのが不思議だ。
今までこの静寂こそが安らぎであったのに、そういえばダイ達が来てから一度も咳が出ておらず、体のだるさも感じられない。
「あの王様・・・降りてもいいですか？」
膝に乗せている温もりが無くなるのはやはり寂しく感じるが、いつまでもいてもらうわけにはいかない。

ティファの脇に手を入れそっと寝台から降ろすも、頭や顔を撫でる手は止められない。
不思議な子だ。これほど人の心にするりと入り込み温めてくれるものを自分は知らない。レオナは最愛の妻の忘れ形見で愛娘であるので当然だが、この子はまるで・・そう・・
「そなたは太陽の温もりのようだ。」
あの力強い太陽そのものではなく、冬の寒い時にも温めてくれる暖かさを具現化し女の子にしたのがティファではないか。
レオールの言葉に、物怖じしないティファがはにかみ俯く。
母は父に太陽のようだと言われていた。その娘の自分が同じような事を言って貰っている。それはとても嬉しいが恥ずかしくもなる。
「そなたも決戦に赴くのか?」
「はい、勇者一行の料理人は最後の決戦まで付いて行きます。」
「そうか・・・そうなのだな・・・」
娘も戦い、同い年の兄も戦っている中でティファだけを特別に戦線離脱させて良い時期はとうに過ぎていると各国の王との協議で最早決まっているとはいえ、出したくないとこの期に及んで考えてしまうのは戦に対する覚悟が足りていないのだろうか?
悲しいレオンの気配にティファが心配そうに見つめ、すぐさまレオールは笑みを浮かべる。
「勝つのであろう?こちらが。」
「はい、そう信じてます」
ならばそれを信じて無事を祈ろう
「嬢ちゃん、俺もレオール王に試してみてぇ薬があるんだよ。昔フォルケン王に作ってやった滋養強壮の薬なんだが、ロムスも交えて話してえから先に帰ってな。」
「・・・・待ってちゃ駄目?」
「待つってどこで・・」
「えっと・・・・・」
「マトリフ様。」
マトリフの提案に渋るティファの援護をすべく、レオナが口を開

く。
「私とエイミとティファの三人でお茶会をしてもよろしいでしょうか？」
「お姫さんと・・・その三人だけならいいぞ。」
他は入れるなとティファには気づかれないように言外に釘を刺し、レオナもエイミも心得ていると頷きティファを連れ出す。
「私もティファのお茶飲んでみたかったの。」
「んむ・・・クッキーも何も持ってきてないですよ？」
「ティファさんのお茶はそれだけで十分ですよ。」
「ティファ。」
部屋の出口で挨拶をされる前に、レオールはダイ達に言った事と同じ言葉をティファにも送った。
「戦いに行く事になろうとも、命を大切にしなさい。」
っ!!
それは・・・その言葉には・・・・
ティファは言葉に詰まり、笑みをもってレオールの言葉に応え一礼をして先を歩いているレオナとエイミに追いすがる。

あの言葉に、自分は頷くことが出来ない・・・・

「マトリフ様・・・・今ティファは・・」
「ああ、お前さんの言葉に返答しなかったな。」
ティファならば、今の言葉に飛び切りの笑顔で元気よく返事をしてくれるものだとばかり思ったのだが・・・返ってきたのは柔らかく透明な笑みだった
それはマトリフの洞穴で、ノヴァと将来結ばれてはどうかというロン・ベルクの問い掛けに対しての時と同じ、向けられた者が不安になる笑みであった

気に掛ける理由

マトリフの浜辺ではロン・ベルクがダイとヒュンケル相手に手を焼き始めている。即興のコンビネーションが形になってきて、二度三度といいところに打ち込まれ始めている。

たった二日でこれとは恐れ入る

かつて天才剣士の名を過酷な魔界に轟かせた事もある自分をたった数日でひやりとさせるとは大した二人である。

油断していればヒュンケルの斬撃が嵐の如く吹きすさび、それにかまけていればダイが瞬時に打ち込んでくる。徹底的に自分と距離を置き、隙あらば打ち込んでくる。

中距離と近距離コンビの理想に思わずニヤついてしまった時は二人はぞっとした顔で警戒してきた時は失礼な奴らだと思ったが、笑っていられなくなるのも時間の問題のようだ。

それにしても、城から帰ってからのこいつらの動きは昨日とはまるで別人だ。特にヒュンケルの熱量が増している気がする。城で何か決意した事でもあるのだろうか？

まぁ、主にお嬢さんが起因してんだろうが強くなる理由はなんだっていいい。

強くなって生き延びることが肝要だ。

「ティファのお茶って・・・飲むとどうしてホッとするのかしら？」

「いつもと同じ茶葉なのですが。」

強さを目指す理由候補筆頭のティファは、ただいま可愛い娘さん達相手にティータイム中。美味しいと言ってくれる二人をニコニコしながら眺めている。

これ分かってたらうんと美味しいもの持ってきてたのにな～

「姫様、後でクッキーやマドレーヌお持ちしましょうか？エイミさんに洞穴に取りに来て貰ってもいいですし。」

マトリフのティファお近づき厳禁を知らない当人は悪意なくパプニカ破滅カウントダウンを歌いだし、レオナとエイミは一気に血の気

が引きティーカップを落としそうになる。・・・・・食べてみたいが取りに行ってもこの国無事だろうか？
マドレーヌで国が亡ぶ・・・・・笑い話にならないところが恐ろしい
「あのねティファ、作戦迄時間あるし・・・そうよ！ティファが作りにくればいいのよ!!」
我ながらナイスアイディア！と、内心でレオナはガッツポーズをとる。
―おじさん、マドレーヌ作りにお城に行ってもいい？―
マトリフの袖をクイクイと引くティファの可愛い頼みごとは大概通るはずだ！
アポロは現在作戦の調整の為に各国に飛んでもらっている。ベンガーナやリンガイアにも行って貰い、針の筵だろうが本人からの申し出だ。
各王家の使者は今回キメラの翼をふんだんに持たせている。物より時間が惜しい為、各国それも王城に行ったことがあり自分の身をきちんと守れるくらい高き者はパプニカではそう人数はおらず、アポロの申し出は渡りに船であった。
「私は本当に何という事を・・・」
パプニカにも歴戦の兵や騎士はおり、アポロが仕出かしたことがどの様な惨状を招くか容赦なく突きつけ教え諭された。
それは叱責よりも堪えた。自分があの場で戦端を開けば、下手をしたら姫どころか国そのものが無くなっていたかもしれない事に。
勇者一行がいれば大丈夫などと・・・鬼岩城戦でダイ達の活躍に目が眩んでしまったとしか思えず、自分の危機管理能力の低さに心底落ち込んだ。
ティファさんは、身を挺してこの国全てを守ってくださった・・・
大元を言ってしまえばそのティファにあるのだが・・初手から躓き、王と姫の為を免罪符に負担を押し付け、挙句があの騒ぎになったとロムスを筆頭に淡々と何がいけなかったのかを言われれば言われる程に自分消したくなった。

だが、それでもあの時に覚えた怒りに偽りはなく、とは言えあの小さい方に本気で詫びたいのであれば、針の筵に自分から飛び込んでいく。
各国の調整をしつつ、ー料理人ティファーを見定める為に。
戦闘は経験は少なくとも、政の中枢にて各機関同士の調整は得意なアポロは、自分から志願し今頃は嫌味と怒りの気配はあるだろうが、それでも一定数はアポロがあの塔で感じた怒りを理解して同情してくれるものもいるだろう。彼は今、様々な意味で嵐の只中にいるだろう。
つまり二人が会う事はない！
「うんむ・・・兄達が大特訓中に私一人が・・・」
「ティファは今休むのが仕事なんでしょう?ダイ君達にも作ってあげて、特訓ご苦労様って持って行けば喜んでもっと頑張るわよ。」
右手を口に持って行きオホホ笑いの形で姫らしくない崩したクフフ笑いを浮かべながら、レオナはティファの真横で悪魔の誘惑を掛ける。
休んでいても一行の為にな～る呪文
ムムム、確かにみんな甘いもの好きで、ここのキッチン借りればうんと美味しい物沢山作れる。材料は市場で買って、何なら王様にも食べやすいお野菜のマドレーヌ作って差し入れればビタミン糖分諸々の栄養取らせてあげられる・・・おじさんやロムスさん達にも差し入れられて、お城の人達にも配って日頃の感謝伝えて・・・
美悪魔レオナの誘惑に、ティファはすっかりその気になる。
「あのティファさん・・」
その気になりかけているティファに、エイミがもじもじとした様子で話し掛ける。
ん?
「どうしましたかエイミさん。」
「その・・・あの・・・」
余程言いにくいのか机の下で両手をもんで赤くなっている。
ティファは促さずに黙って待つことにした。

エイミの言いたいことが何となく察したからだ。
丁度い、自分もエイミに―その事―をきちんと聞いておきたいことがある。
「ヒュンケルはその・・・甘いものは好きなのでしょうか？」
「ヒュンケルですか？なぜ知りたいのです。」
「え？」
「あの大逆を侵した者を、何故それほど貴女が気に掛けるのですか？」

お守り

―ヒュンケルは今罪を償う道を歩いている途上なのです―

―何卒その道を歩く事をお許しください―

一行の中で誰よりも王達にヒュンケルとクロコダインの恩情を願っていたティファが、今ヒュンケルの事を大逆を侵した者と言い放つ。

目にいつものあの暖かさはなく、まるで罪人を弾劾する判事の様に。

「ティファ・・・さん・・・」

「あの者は貴女の国を攻め滅ぼそうとしたのですよ？一歩間違えばこの城は陥落し、レオール王の病気は間違いなく悪化しもしかしたら死んでいたでしょう。国が滅べば姫様も命を落としていたやも知れない元凶に、何故貴女はそこまで気に掛けるのです。」

「それは！・・・それは・・・」

一体、ティファは何が言いたいのかエイミは途方に暮れる。魔界のモンスター達にまで心配るティファが、ヒュンケルの事をまるで断罪しているようではないか！

「確か鎧を着て攻め込み、一般兵には顔は知られていないとか。」

「その・・・通りです。」

マトリフの海岸で自分達で名乗るまで、ヒュンケルが攻め込んできた者とは全く分からなかった！其れはあの優しい雰囲気だったからだろうか？

初めて見た時からヒュンケルは優しい瞳をしていた。そしてどこか頼りなげで心細い少年の瞳がよぎったように見えた時がありどきりとした。

それは、断罪を望みながらも怖れていたからだと後から分かった。

「いつかどこかでヒュンケルがあの時の隊長格だと漏れ知られるかもしれません。その時あの者に石を投げ罵り罵倒する者は必ず出てくるでしょう。―生半可―な気持ちで側に居れば、とんだ巻き添いをく

いますよ?中途半端な気持ちなら離れた方がエイミさんの為です。」
言いたいを事を言いきったティファは、自分で淹れた紅茶を飲み始め、言葉に詰まったエイミを放っておく。
私は・・・ティファさんの言う通り生半可な気持ちなのだろうか?
言いたい放題されても反論できずにいるエイミはティファの言葉を肯定しかける。好き・・・淡い恋心?子供の様に強いあの人に対する憧れ?それは何と中途半端で・・
思い悩むエイミを、ティファは紅茶を飲むふりをして見続ける。
そして次第に俯くエイミに心の中で嘆息した。
・・・・駄目かな?エイミさんがヒュンケルに抱いている思いは私に言われたら崩れるくらい脆いものだったのか。
仕方がない、中途半端されるくらいなら二人の為にも・・
「違う・・・」
会話を変えようと言い過ぎましたとティファが言葉を発する前に、エイミのポツリとした、それでいて力の篭った声にティファは開いた口を閉ざし、カップを置いてエイミの言葉の続きを黙って待つ。
果たしてエイミは、少し前の弱々しさはなく、毅然と顔を上げ己の心の中にある思いを叫び上げた。
「私は・・・私は!!あの人を放っておきたくない!!」
いつか誰かにヒュンケルの罪が知られる日が来てしまう・・ならば尚の事・・・
「私は!あの人と共にあれるのであれば地獄の底まで付いて行きます!!」
償う道の先に待っているのが例え地獄の底であっても!あの優しく気高く、それでも頼りない少年の心を宿したあの人とならばどこに行こうとも後悔する事は決してない!そうだ!自分は・・
「私はヒュンケルを愛しています!!!」
私は・・・ヒュンケルを愛している
優しさに魅かれ、気高い心に憧れ、そしてヒュンケルの全てを自分

は愛している
ヒュンケルに対する漠然とした恋心が、明確な愛だと知った

立ち上がり激しくティファに言いきったエイミは、挑むようにティファを見据える。ティファが何故ヒュンケルを断罪するかのごとく言い放ったのか意図は分からないが、自分の思いは決して中途半端なものではない！
石を投げられたら共に受けよう、罵倒されたのなら共に罵られよう。
苦難を分かち合いたい、分かち合わせてほしい・・・それを例え尊敬し、ヒュンケルが慕っているティファに反対されようともだ。

本気の目だ
この人だ、ヒュンケルが幸せを見つけられたきっかけの人は!!!
ガシッ！
「試した事！誠に申し訳ありませんでした!!」
「試すためとはいえ心無い言葉で貴女を傷つけたお詫びは幾重にもさせていただきますが、今言った事の全てをヒュンケル本人に是非にお願いします!!」
うって変わった様なティファの怒涛のお詫びとがっちりと握られた両手にエイミは何が何だか分からずに本気で戸惑う。ティファの目がそれ程真剣で本気で詫びているのが伝わり試されたことを不快に思い怒るという選択肢が浮かばない程に。
「あのティファさん・・・一体急にどうされたのですか？」
なぜ自分にヒュンケルの思いを明確化させ、あまつそれを反対するでなくお願いをされているのか全く分からずについていけない。
「実は昨日ヒュンケルがですね・・」
ティファはエイミに昨夜ヒュンケルの事を全て話した。
幸せを見つけられたかもしれないと告白をした後酔い潰れて眠り、騒ぎが起こる前にヒュンケル自身が知らない事を
「眠ったヒュンケルはエイミさんの名前を呼んでいたのです。」

―エイミさ・・ん・・・はな・・を・・―
後はよく聞き取れなかったが、確かにエイミの名を呼び寝顔に笑みが浮かんでいたのだ。
私が、あの人の夢の中に・・・
「エイミさん、ヒュンケルが言った事に覚えは？」
「あります・・・あれを・・・喜んで・・」
何気ない花だった。そこらに売られている花に、それでも自分の精一杯の気持ちを込めて渡した時、あの人は一瞬きょとんとした顔をしていた。
自分から花を貰ったのが意外だったのか、驚いてそして確かにはにかむように笑っくれた・・・
「エイミさんはもうご存知でしょうが、近々大規模な作戦・・いいえ決戦間近です。私はエイミさん、貴女にヒュンケルのお守りになってほしいのです。」
「お守り？」
「はい、ヒュンケルは罪を償う以上に一行が本当に大好きで守るために無茶な戦いをするときがあります。無論戦なのだからと言ってしまえばそうなのでしょうが、それでもヒュンケルに愛する者がいるのならばその人の下に帰りたいと願う心があれば最後の最後でも足掻いて、帰ろうとすると私は見ています。ヒュンケルは愛する者を悲しませるのをとても厭う者です。
そして私が見たところ、その誰かはきっと貴女なのではないかと。」
私が・・・戦に何の役にもたっていないこんな私が、あの素晴らしいヒュンケルのお守りに？
「おこがましいお願いなのは承知しています。それでも、ヒュンケルのお守りになっては下さいませんか？」
「私で・・・いいのでしょうか？」
「それを本当に決めるのはヒュンケル自身ですが、エイミさん自身はどうしたいですか？」
愛している気持ちだけを胸に秘めているだけかそれとも・・・
ヒュンケルの帰る場所に・・・何があろうとも揺らがずに・・・

「告白します!!!」
伝えたい！胸に秘めて眺めているだけなのは嫌！甘い言葉だけを掛けるのも御免よ!!振られてもいい！拒絶されても構わない!!それでも幾度でも言う！私が！ヒュンケルを愛して死んでしまったら悲しむのだと、どのような辛い目に遭っても最後には生きていてくれればそれでいいのだと!!ヒュンケルとならば・・・本当に地獄の底に落ちても構わないと・・・

エイミさん・・
「よろしくお願いします。あの者は言葉にしないとそう言った事は自分から言い出さない・・・・言い出すと思いつかない朴念仁な所があるのでエイミさんから言ってくださるのが一番かと。」
「そういった所も含めて愛してますので大丈夫です。」
泣きながら、それでも愛を抱けたことで心が充実したエイミは晴れやかに笑いティファに宣言する。
ヒュンケルの母親的存在なティファが味方に付いてくれたのだ。世間の者が謗ろうとも怖ろしくはない。

落ち着きを取り戻したエイミを、それまで黙ってみていたレオナが労わるように椅子に座らせる。
何か意図があったのは察していたから静観したが、まさかヒュンケルとエイミの恋心を此処迄昇華させるとは思ってもみなかった。
愛しい人が帰りを待っていると思えば、人はどのような事にも耐えて帰ろうとするかもしれない。自分も・・・ダイのお守りになれるだろうか

落ち着いたエイミは早速ヒュンケルにアプローチを強めるべくティファに先程の事をもう一度聞きなおす。
「ヒュンケルは甘いものは好きですが？」
「・・・・・・・エイミさんはヒュンケルがアメを好きなのがご存知ですか？」

「アメ、はい・・・・・確かに好きですよね・・・」
アメの事でとっても変わったヒュンケルの一面が見れたほど、ヒュンケルはアメが好き・・・・あれは好き以上な気がしたのをよく覚えている。
「あああ～、実はヒュンケルはアメに思入れが有るのですよ。」
アメと師アバンとの思い出も教えてくれたティファの顔が超微妙だった。
「心情は理解できるのですが、物凄い勢いで消費してしまうので一日三粒迄と禁止したんです。」
糖分の摂り過ぎは体に毒なので、マトリフの洞穴でダイ達だけで十日間お世話になって五日目の日の注文書にアメが書かれていたので驚いてきちんと取り決めたのだ・・・・どう見積もっても常人なら十日は持つ量を送ったのに二日でなくなったのだから仕方がない。
「確かに・・・摂りすぎですね。」
「そうです！なのでエイミさん!!これからはヒュンケルのアメ管理もエイミさんにお願いします！作り方のレシピも後程お渡ししますね。」
「え！アレはティファさんの手作りだったのですか？」
「はい、買っていたらきりないので自分で作ってストックしていつでも送れるようにしていたのですが・・・・底尽き掛けました・・」
少々遠い目を擦るティファに、エイミとレオナは吹き出してしまった。
「笑っていますがエイミさん、これからは貴女が管理するのですからね。」
「はい。」
「もしも喧嘩したらアメ質取っちゃってください。」
「はい⁉」
何か今へんてこな事をティファが言ったような？
「アメ質です。絶対に良く効きますよ。」
そんなこと言うのならもうアメは上げません!!
そう言われてしょげるヒュンケルが三人の脳裏に浮かび、すぐさま

大笑いになった。レオナもエイミほどではないが、ヒュンケルの幼い少年のような心があるのを感じていただけに、ティファの今のアメ質が本当に効きそうで直ぐに思い浮かべられてしまい、ヒュンケルに悪いと思いつつ笑い転げてしまう。
「は・・は～、そうしますティファさん。レシピの方よろしくお願いします。」
「はい～、は～、色々とよろしくお願いします。」
「合同結婚式・・・エイミもやる？」
「姫様⁉・・・・気が早すぎます。」
自分はダイ・レオナ、ポップ・メルルの様に両思いではないのだ。
「予約はありよ！頑張ってねエイミ。」
「姫様・・・はい！」
レオナの励ましに笑顔でエイミが答えた時、扉がノックされたのでエイミは慌てて扉を開けてみれば、マトリフとロムスの姿があった。
「ずいぶんと賑やかに笑ってたな。なんか楽しい話でもしていたのか？」
少し離れた廊下にまで、女の子達の楽しい笑い声が響きロムスと何事だと顔を見合わせながら来たのだが
「おじさんにも内緒だよ。女の子達だけの秘密だもん。」
ティファがいたずらっ子の様な顔でマトリフに内緒宣言をする。
それは先程までお守りを話していたティファとはまるで別人のように。
「こんな枯れちまった爺さん達にならいいだろう？教えてくれよな。」
「だ～め、秘密だよ。」
それはマトリフも同じで、まるで仲のいい孫と祖父にしか見えない。
「ったくつれねえな～。まぁいいか、嬢ちゃんが世話になったな。レオール王に体にいいもん渡したから帰るわ。」
「マトリフ様、私の時と言い父の時と言い本当にありがたく。」
「いいさ、そいつはお互い様だ。エイミ達なら洞穴に来てもいいぞ。」
「それは助かります。エイミ、良かったわね。」

「姫様！・・・はい・・・よろしくお願いしますマトリフ様。」
どうやらティファお近づき厳禁は限定解除されたようだ。
「ほれ、帰るぞ嬢ちゃん」
「は～い、おじさんルーラで私ガルーダね。」
「へいへい、見送りはいいぞ。」
「私は城門まで送ります。エイミはここの片づけを。」
「かしこまりました。マトリフ様、ティファさんまた。」
「はい、お待ちしています。」
「あんな・・・あそこは嬢ちゃんの家か？」
「・・・駄目？」
「いや・・・もういい・・」
ぱたりと扉が閉まり、レオナとロムスが見送りに出た部屋は途端に静かになった。
思いがけない話に、エイミは驚いているが心は決まっている。ティファの言う通り、自分がヒュンケルの帰る場所・お守りになれるのならばこれほど嬉しい事は他にあるだろうか？共に人生を歩きたいと心の底から願う。

しかしエイミはふと思った
ティファさんは皆の幸せを願い口にしている、
だが一度としてティファ自身の幸せの話を聞いたことがあっただろうか？ダイやポップ、メルルの様に好いた相手もいないようで、マァムやチウ、クロコダイン達の面倒をなにくれとなく見て望みを叶えて喜ばせているが、ティファ自身はどうだったかと辿れば・・・ぞっとした！
いくら考えてもないのだ！誰かの幸せを望む以外、ティファ自身の事で何かを望んだ姿を見た事が。
ティファが言っていたお守りは、ティファ自身にあるのだろうか？あってほしいとエイミは心の底から祈りを捧げるように願う。
ティファ自身にも帰りたいと強く思えるものがある事を。

最後の授業①

「ダイ！お嬢さん!!二人とも手加減するなよ!!」
「分かってるよロン・ベルク！ティファ！手抜きしたら一生怒るからね!!」
どうしてこうなったかな～
ヒュンケルとエイミさんをイイ感じに出来たから今日はお料理作る以外のんべんだらりする予定だったのが、皆の前でダイ兄とその後ヒュンケルとＶＳする事になっちゃったよ。
メルルさんはあのままお城に残ってフォルケン王様の帰国までお世話することになって私の荒事見られずに済んでいいのだが、なんだかな

城からそれぞれの方法で洞穴に戻ってきたマトリフとティファを昼食を作っていたマァムに出迎えられた。
「そろそろお昼ご飯の支度するから二人はのんびりしててね。」
徹底的にティファを休ませる気でいるマァムは、自分の稽古をこなしながら三食作る気満々である。
やる事ないと落ち着かないティファはそわそわし、真水汲んできておじさんのシーツ洗ってきますとマァムに止められる前に森に猛ダッシュ。
落ちているほどよい木の枝に闘気を通し、式で大きめの担げる桶を作り皮で水を汲んですぐに洞穴に戻る。
当然式の事は一行にもマトリフにも教えていないので、マジックリングに収納していましたとばっちり言い訳を用意している。
普段から使っている食器一式、鍋・釜・包丁類以外は全て式で出来ている。特に一番多いのがキメラの翼であり、ダイ達に常にストックは五枚以上あるか確認し、なければ補充できる。
どこで手に入れているのかの疑問もこれは直ぐに解決できる。デルムリン島には大量のキメラが生息し、それを百枚集めていたのを持ってきましたと笑って教えているのでそれで通ってる。

必要なものをすぐに出来る式で日常を便利に過し、桶のついでに盥も作りリングに入れてマァム達の前で取り出しマトリフが寝起きしているシーツと、ついでに兄達の服も洗っている。
ボロボロの物をそのまま着ているのはバッチいを標語に、男全員の下着は全て買い揃え三着ずつ持たせている。
時間がある時はダイ達は自分で洗うが、特訓の間は自分がするとティファが強引にもぎ取りお洗濯タイム。
洗剤ないけど固形せっけんでざ～ぶざぶ～
みょうちきりんな鼻歌口ずさみながら洗濯全部終え、森から三本の若木を切ってきて簡易竿を即席で作り、いつでも持ち歩いている縄に袖や裾を通して干せば一丁上がり。
流石に兄達の下着は目につかないところに干してきたが、折悪しく突風にシーツもってかれた!!
「え!ちょ・・・」
支度を終えて呼びに来たマァムも気が付き手を伸ばしたが間に合わず浜辺まで行ってしまい大慌てで二人で追いかけた先に斬撃が飛んできた。
そこは丁度ダイ達が特訓しており、シーツとティファ達が来る前にダイがロン・ベルクに斬撃を放ち避けられてしまったのだ。
「マァム!ティファ!」
「間にあわ・・・」
ブワ!
斬撃に気づいたマァムが拳で相殺しようとした時、真っ白いシーツが割入りそれで収まってしまった。斬撃の衝撃も何もなく。
「騒がせてごめんダイ兄、ヒュンケルもロン・ベルクさんも御免なさい。」
シーツの端をティファが掴み、シーツ全体に闘気を流し瞬時に柔らかい盾にしたおかげで。
武器や体に闘気を流し強化する方法はあれど、シーツなどに流すのを見た事も聞いたこともなロン・ベルクは絶句する。
それのみならず、ティファの身のこなしが尋常ではなかった。

シーツを握ると同時に自分の体をその場で横回転をし、斬撃の衝撃を防ぐのではなくいなしてシーツも無傷で済ませたティファの動きは間違いなく達人であった。
「お嬢さん・・・お前さん一体・・」
マトリフから実力の一端を聞いていたが、まさかこれ程とは!!
雪白を出されて本気でやれば、自分でも勝てるかどうかの実力を持っているとは思ってもみなかった。
「ティファ・・・」
それはダイにも同じ思いを抱かせた。
自分はまだダイの剣を使いこなせず、鬼岩城を斬って以来まだ一度も抜けないでいる。その剣を使っても、果たしてティファに勝てるかどうか。
優しい妹はもしかしたら自分よりも・・・・
「ティファ!本気で一度俺と立ち会ってくれ!!」
妹を守りたい、その為に強くなるために特訓しているが、守りたい妹の実力を知りたくてダイは立ち合いを望んだ。
「にい・・・うん・・分かった。一回、一回だけだからね。あ、ヒュンケルも一度いいですか?」
「俺もか・・・むしろお願いしたい位だ。」
「そしたらご飯の後にしましょう。」

「ダイ!ティファとやるってお前な・・」
「いいじゃねえかポップ、お嬢さんもダイも互いに手加減すんなよ。」
「ティファさん・・・・大丈夫ですか?」
「稽古だよチウ君。大丈夫だから安心してね。」
「俺も見ていていいか?」
「私もティファとダイの動きから取り入れるところあると思うから見たいわね。」
なんやかんやとみんなの立会いの下で二人と立ち会う事になった。
丁度良かった、私も二人に教えておきたいことがあったから

最後の授業？

どうすればいい・・・・隙がない

浜辺でお互いに木刀を持って対峙しているダイとティファは、始まりの合図から微動だにせずそれから五分近くが経ちダイの息が上がり始めた。

正眼に構えているダイに対し、ティファはロン・ベルクと同じく木剣を左手に持っているだけで何の構えもしていない。だというのにロン・ベルクよりも隙が見当たらず、打ち込みに行けばそのまま喰われてしまうのではないだろうか？

「どうしました？来ないのですか？」

不意にティファが口を開いた。その声音は冷たくて、聞いているだけで体が心が凍てつきそうな冷たさを感じる。

「なるほど・・・こちらから埒を開けないといけませんか・・・」

ティファの呟きと共に、何かが来る気配がして考える前に木剣を顔の高さで横に構えれば、打ち込んできたティファを受け止めていた。

受け止められたと思ったのも束の間、そこから二撃目三撃目が立て続けに振るわれて行く。

それを受け止めるのも矢張りダイの本能であり、次にどう動けばいいのか途方に暮れかけるが負けたくない!!

「うおおおおお!!!!」

ティファの威圧に、弱りかけ竦みそうな自分の心を振り切るように、ダイは力強く闘志を込めた声を腹の底から絞り出し反撃に打って出る。

攻撃こそが最大の防御

アバン先生もロン・ベルクも言っていた。

戦いは相手の観察も重要だが、竦みそうになった時こそ己から打って出よ

前に出てこそ活路が見出される時が多いと。

それはパーティー戦の時には無謀な事だが、一対一の時には有効な手だ。

「あああ!!!」
早い
ダイの俊敏さにティファも手を焼く。腕力は完全に兄の方が上であり、浜辺の様に足場の悪いところでは俊敏さが最大の利点の自分にとってはいささか不利なのは否めない。
だからと言って、負ける気もないが
「土龍閃!!!!!」
自分の十八番、土竜閃で浜辺の砂粒に大量の闘気を練り込み兄に浴びせる。
横一メートルの砂の壁がダイに迫り、横によけようとした矢先残りの三方も同じ砂の壁に阻まれた!!
どこから・・・
迫る砂の壁のどこからと警戒していれば、上空から気配がした!
「龍槌閃!!!」
横からくる砂の壁のどこから来ても見えるようにとトベルーラで上空に上がったダイを待ち構えていた真上からの攻撃に、ダイは反応できずに右肩を強打され砂浜に激突する。
そのまま追撃が来る!
痛みを押し殺し、ダイはすぐさま跳ね起き上からくる妹にメラの壁で防ぐ。
なるほど、魔法もきちんと戦いに組み合わせるか。
勇者はオールマイティーなのだからそれが最適解。生き延びるためにはなんでもしてもらおう!!
だけどね甘い!!
体の前方に闘気を薄く張り巡らしメラの炎のダメージを軽減させたティファはそのまま打ち合いにもつれ込ませる。
緩急自在に打ち込んでいるティファの動きに、ここ数日ロン・ベルクの特訓のおかげでダイは慌てる事無く冷静に軌道を見極め躱しながらティファの木剣の根元を執拗に打ち込みそして
バキン!!
武器破壊

これで決着がついたと思った途端、ダイは顎に衝撃をくらい気が付けば青い空を見上げ、そのまま左腕を掴まれ体が浜辺に打ち付けられティファの拳が自分の鼻先でぴたりと止まった。
「それまで！勝者ティファ!!」
目まぐるしい攻防にポップ達は詰めていた息を吐きだし汗を拭う。
ダイの武器破壊迄の攻撃も、それをものともせずに武器破壊後にも冷静に左足でダイの顎下を蹴り上げ宙に飛ばし、流れるようにダイの左腕を掴み投げ飛ばし止め迄気を抜かずに流れるように動いたティファの強さに。
「ダイ兄、私の武器壊した時点で勝てたって思ったでしょう？」
「う・・・うん。」
やっぱり
「あのね、武器は壊されるのは当たり前って考えておいた方がいいよ。」
「どうして・・俺の武器もティファの武器も・・・」
「うん、オリハルコン製だね。それでもダイ兄はヒュンケルの魔剣でオリハルコン製の剣折ったじゃない。」
「あ！・・・そうだった。」
兄に手を貸し立たせながらティファは教える。
「伝説の武器もね、無敵じゃないんだよ。それは武器頼みになって折られた時に心まで折られちゃうよ。頼りにしている相棒が折れた時も、負けないように心折れないように考えてね。折られても今私がしたみたいに攻撃をやめなければ勝てるから。」
かつて真魔剛竜剣を叩き折ったことがあるのをすっかりと忘れていた。そうだよ、神様からのアイテムだって折れたんだ、ロン・ベルクさんが作ってくれてこの剣も、俺が力足りない時は折られてしまう・・・その時負けたと心が折れたら・・・嫌だ！負けたくない、俺達が負ければ守りたい者は全部なくなってしまう!!
「ティファ、勝ってくれてありがとう。」
「ダイ兄・・・へへ・・」
自分に勝って教え諭してくれた妹の心遣いをダイは考え至りお礼

をする。
さて、次はヒュンケルか・・・・
「ヒュンケル！お前も手加減すんなよ!!」
無論だ、ティファは手加減できる相手ではない！
合図が始まる前からヒュンケルは木の槍を右手で持ち肩口に構え、直ぐに動けるように左足と左手を前に出し戦闘態勢に入った。
流石はアバンの長兄隙が無い。
新しい木剣を出したティファも左肩に木剣を担ぎ、右足と右手を前に出し姿勢を低くしトップスピードを出せる構えを取る。
ダイ兄の後でスタミナが減った自分が長引けば不利だ。
それにヒュンケルには是が非でも覚えて欲しいことがある！やったら間違いなくおじさんとロン・ベルクさんに怒られるのは必定で、下手をしたら・・・それでもヒュンケルを信じて!!
「始め!!」
フッ
始まりの合図と共に、ティファは躊躇いもなく木剣をヒュンケルの胸元に切っ先が当たるように真っ直ぐに投げつけた。
もしこれが乱打戦で体力が消耗し構えが乱れて居た時なら有効な手であったろうが、始まりのこの時に何の意味がある？
避けて構えを崩れる事を嫌ったヒュンケルは、槍の穂先で木剣を易々と跳ね上げる。
直後にティファが迫ったが、振り上げた槍で打ち据えさせてもらう!!
だが、それは果たされず今まで感じた事のない冷気が体を支配し動けなくなり
パァン!!!
ティファの両手が鼻先で叩き込まれた直後頭の中が真っ白になり気が付けば槍を取り落とし後ろに倒れて行く
「ヒャダルコ!!!」
バキン!!!
ヒュンケルが倒れると同時に氷系呪文がティファに放たれ、ティ

ファはすぐさま上空高く飛び立ち難なく避ける。
氷系呪文を放ったマトリフは怒りの形相で上空を見上げ一喝する。
「降りて来いティファ!!其れとも引きずり降ろされたいか!!!」
如何なる時でも嬢ちゃんと呼び大概の事を笑って許していたマトリフが、初めてティファの名を呼び本気で怒りを見せている。
何が起こったのかはたで見ていたダイ達には分からなかったが、ロン・ベルクもティファのした事が分かり無言で剣に手をかけ威圧を放つ。
降りなければ二人が相手になる
老いたりとは言えマトリフは一分という制限時間の中であればハドラーをも圧倒できる魔法戦が出来、そこにロン・ベルクが加われば間違いなくティファとてタダでは済まない
二人はそれ程までにティファの行ったことが許せなかった。
ティファが先程したのは、ヒュンケルに本気の殺気を叩き込み意識を崩したのだから

最後の授業③

デルムリン島で洞窟修行を始めて少ししてから私はずっと怖いものがあった
―それ―を浴びると心も体も冷たくなって竦んで動けなくなって・・・・何度死掛けたのか分からない
みんなはきっとこれ程冷たいものは浴びてこなかっただろう
ヒュンケルもクロコダインとても
ヒュンケルは地上での軍団長が初の本格的な戦闘だって言ってた
魔界では、明けても暮れてもミストとの修行か、実地を兼ねた反乱討伐をこなしていたくらいで強者はほぼミストが倒してたと言っていた
クロコダインも、温かい地上で死ぬような思いをしたのはダイ兄達が初めてだと
これはとても困る
怖いものに遭った事のない者達が、怖いものに遭ってしまったら・・・・きっと動けなくなる
動けるようにしないといけない
みんなは無理でも、たった一人でもいいから・・・

パン!!
乾いた音が洞穴に響き、その後を追うように怒声が響く。相手の言い分を一切言わせない怒涛の勢いで。
その音と声に、ダイ達を洞穴の遠くに連れてきたロン・ベルクは満足する。
それでいいマトリフ、今度は絶対に怒れよ!!
ヒュンケルは殺気を浴びながらも直ぐに意識を覚醒させ、ティファを叱ろうとした自分達を押し止められてしまった。

「ロン・ベルク、マトリフ師もあまりティファを叱らないでやってほしい。」
殺気を叩き込まれた本人が庇ってはその場で叱るのは難しい。
「ティファ、今の事すべて体に刻んでおく。お前の思い、決して無駄にはしない。」
ヒュンケルが頭を下げてマトリフ達にとりなすのを、歪んだ瞳でティファは意を受け取ったと頷いた後、黙ってマトリフと洞穴に入っていった。
ロン・ベルクは先程の場所よりも離れて開けた海岸にダイ達を引き連れ、先程の仕合は何が足りなかったのかダイに反省をさせアドバイスをしながら洞穴の様子にも聞き耳を立てている。
如何にこいつらが預かり者で何か深い考えがあっての事だとしても、仲間に本気の殺気をぶつけるなぞ許されていいはずが無い!!!馬鹿げた夢の茶会や変態との賭け事なんて見逃してやる!その代わりティファを叱りつけろ!!

ロン・ベルクが怒りを覚えているようにマトリフも今回の事を見逃すつもりは毛頭無かった。
ダイ達を遠くの海岸に行かせ、二人きりになり気配も感じなくなった瞬間ティファの頬を思いっきり打ち据え言い分を聞かずに怒りの言葉をティファに叩き付ける。
言い分を聞いてしまっては、おそらくティファの考えの正しさに流され叱りつけることが出来なくなってしまうからだ。
深い考えで先程の事をしたのは分かっている。ティファが何の考えもなくあのような酷き事をする子供ではないのはマトリフ自身がよく知っているからだ。
だが正しい考えを持って成したことが、すべて正しいとは限らず今回はまさにそれだ!!
「仲間に殺気など浴びせていいはずがねえ!!ヒュンケルの心に傷がついて！下手したら心壊して廃人になってたかもしれねえんだぞ!!!」
今回はヒュンケルが無事だったからよかったようなもので、一歩間違えれば本当にそうなっていたのだ!!
決戦前だからどうこうではない！マトリフ自身も仲間と認めた者は死ぬ気で守る気がある。仲間とは信頼しあい手を携えていくものであって、間違っても殺気をぶつけた事はただの一度もない！
そしてもう一つ、ヒュンケルの心を案じている事と
「もっと自分を大事にしねぇか!!!」
これが一番言いたかった。
ヒュンケルが心に傷を負い、廃人になろうものなら一番傷つくのはティファ自身ではないか!!
げんにヒュンケルに殺気と闘気を練り込んだ柏手を打ちこみ崩れていくヒュンケルをティファは泣きそうな目で見ていた。
崩れ行くヒュンケルを支えようとする両手を血が滴る程に握りしめていたではないか・・
「・・・・・ごめんなさいおじさん・・」
それは様々な意味を込めた謝罪の言葉であった。
仲間に殺気を向けた事、ヒュンケルの心を自分の考え一つで壊しか

ねなかった事、ロン・ベルクとマトリフに対しての。
「嬢ちゃん、なんであんな事をした？」
自分が叱る前から嬢ちゃん自身が本当に反省しているのは分かっている。それでも、きちんと言葉に出して叱るのが大人の役目だ。
叱るのは反省を促すだけではない。何故そうしたかを聞き出し、間違っている事ならば教え諭すことが重要だ。
だが口を開いたティファから出た言葉は、正しい事だった。
これから先、一行はハドラーだけではなく大魔王バーンと直接対決する事になる。
兄達も戦い慣れはしてきても、―明確な殺意―に遭ったことがない。
強敵たちは皆どこか若輩者の一行と侮り、初手から殺す気できたヒュンケルとてもさほど恐ろしさを感じなかった。
それは何処かで矢張り侮りがあり、重い殺気になりえていなかった。
テラン戦も同じで、真の強者を目の当たりにし憎しみに慄いても、子を取り戻そうとした父に殺意は薄かった。
大魔王バーンは古い文献に魔界の神とまで記されてる。そんな者の殺気が、殺意がダイ兄達を襲ったらきっと動けなくなるのが目に見えている。
普段ならば場を壊すために挨拶と名乗りをして自分が場を壊し兄達を動けるようにしているが、いつでも自分が万全な状態でいるとは限らない。
今の内に一行の誰かに耐性を持ってもらい、自分が動けなくても何かしらの方法で場を壊してくれれば・・
兄達ならばきっとその後はいつも通り動けて戦える。
今一行の中で殺気を浴びせても心壊れず、一度で耐性が出来る可能性があるのが戦闘センスが圧倒的に高く、実践慣れしているヒュンケルだと見込んだのだが
「もうしない・・・ヒュンケルに怖い思いさせて・・・ごめんなさい・・・」
この場にいないヒュンケルに、心配を掛けてしまった大人二人に

ティファは泣きじゃくる。
「もういい・・もう分かった・・」
「おじさん・・・私ね・・死んでほしくない・・・みんなにね・・・生きて・・ほしいの・・・」
「分かってる分かってるんだよ嬢ちゃん・・・」
一昨日の夜と同じ
泣き崩れる疲れた嬢ちゃんを抱きしめて、自分も泣いていたあの時と同じく涙が止まらねぇ・・・アバン!!本当になんでお前は嬢ちゃんに全部押し付けて逝っちまったんだよ!!
お前さんに託された事を果たすために、この子は優しい心を削ってまであいつらを守っているんだぞ!!
数奇な運命に翻弄される嬢ちゃんが憐れで堪らない・・・嬢ちゃんにこんな運命を押し付ける神様って奴がいたら、メドローアで消滅させてやるのに!!!
逝ってしまった先代勇者と、運命の神を呪いマトリフも呻くように泣く。
愛しいティファが、どうかこれ以自分を削る事が無い事を祈りながら

あのお嬢さんは・・・
アドバイスを終え、それぞれに思うように修練しろと言ったロン・ベルクは一人森の入り口の木に寄りかかり、全てを聞いて奥歯をギリッと噛みしめる。
そうでもしなければ泣きそうだからだ。
たった十二の子が、仲間を死なせないために敢えて憎まれるかもしれない事を承知の上で殺気を浴びせた。それもこれも仲間を勝たせる為に、生かすために、心を鬼にして・・・
マトリフが何度アバンを心の中で責め立てたか分からない程怒りを燃やし、今回の件でロン・ベルクも同じ怒りを覚えた。
十二のお嬢さんに縋って何勝手に死んでやがるんだよ!!幽霊でも何でも出て来い!俺がぶちのめしてやる!!

先代勇者との約束を守り、自分の何もかもを使い切ろうとするティファを思い、一滴の涙を流しながら心を決める。

自分が大魔王に作ったのは魔剣と魔槍だけではないと、ダイ達に忠告しようと。

真夜中の語らい

夜の帳は優しく誰をも包み込む
昼の事もありぐっすりと眠るマトリフの腕から抜け出したティファは、洞穴の椅子とテーブルを全てどかし、寝袋にくるまっているダイ達を優しい笑顔で見守る。
「寝なくていいのかよお嬢さん。」
「寝るのが勿体なくて、ロン・ベルクさんは？」
「お嬢さんが外に出やしないかひやひやして起きちまったよ。」
にやりとニヒルに笑うロン・ベルクさんってちょい悪親父っていうのかな？
「昼間お騒がせしました。」
「それはヒュンケルに言った時聞いてる。悪いが洞穴での説教と言い分も聞いてるよ・・・お前さんが正しかった。」
「ふふ、驚きです。」
「・・・・何がだよ。」
「貴方がそんなに早く怒りを解いてくれたことが。」
「俺だって正しい事は認めるぞ。」
憮然として椅子を取り出し座るロン・ベルクをティファはじっと見つめる。
「それ以上に大魔王の話を自らした方が驚きましたがね。」

昼のあの後、説教を全て終えたマトリフは打ち据えて赤くなったティファの頬と握りしめて傷ついた両掌にホイミを掛け、二人でダイ達の下へと向かった。
着いてみれば、ポップはロン・ベルク相手に魔法と体術を駆使した戦いを挑んでおり、コスパの低い初級呪文に翻弄されている珍しいロン・ベルクが見られた。
他にもマァムとクロコダインが格闘で仕合、ヒュンケルは先程の事などなかったが如く鋭い動きでダイと打ち合いをしている。
チウも大岩を砕くのを目標に窮鼠包包拳で何度もアタックしてい

る。
今日会ったリンガイアのノヴァが、体に闘気を纏わせ強化する方法を教えてくれたのを身に付けるべく。
全員がティファの強さを目の当たりにし奮起した。あの強さに追いつき追い抜き全員でティファを囲って守れるように。誰も脱落する事なく大戦を勝って生き残る為に。
「嬢ちゃん、お前さんがしてきた事は無駄じゃなかった。」
「・・・うん・・」
「あいつ等は芽吹いて力強く成長してんぞ。」
「うん!!」
嬉しくて、さっきと違う涙が止まんないよ・・・
ダイ達の力強い顔に、ティファは報われた思いがする
最初はひ弱く、世間も知らず戦いの本当の恐ろしさを知らなかった子供達が、大きくなり羽ばたこうとしている。
夕日が沈むまで修練は続き、ダイ達が洞穴に戻るとティファが料理を全てこさえてくれていた。
「手を洗ってきてからですよ。」
無理をしている声ではなく、本当に柔らかく温かい声で一行を迎えたティファは、ダイ達に手洗いうがいを促しその間に夕食の支度を全て一人で整え上げる。
食器一式を出し、人数分のゴブレットと酒とジュースを用意しシチューを手早くよそいながら王城から戻る道すがら買い求めたパンを簡易竈で面倒を見つつ昨日の残りのピクルスをパンと同じ時に買った野菜を千切りにして手早くサラダを作る。
ダイ達が戻ってきた時には、宴とは違う日常の夕食が出迎えてくれた。
「う〜!ティファの夕食!!いただきます!!!」
兄が真っ先に食いつき、行儀が悪いと言いつつポップも食器に手を伸ばそうとし、本当に行儀が悪いとマァムに二人は止められ全員が席に着いて挨拶をしてから夕食になった。
ティファの本格的な料理を口にしたマトリフは美味いと言ったき

り黙々と食べる。
こんな美味いもん毎日食いてぇ・・・・もっと長生きして食うか。
ティファなら毎日届けてくれそうだ、なんなら坊やと本当に結婚して新居この辺に作ってこねぇかなと頭の片隅でちらりと思う程ティファの料理が美味しすぎた。
「話がある、大事な話だ。」
全員が夕飯を食べ終わるのを待ってロン・ベルクが口を開く。
「お前さん達に黙っていたが、俺はバーンとミストバーンと直接会ったことがある。」
その際スカウトされて断って顔のこの傷を作ったのはミストだと、いきなりロン・ベルクが自分から話しだした。
片づけも終えたティファは、まさかロン・ベルク自ら大魔王との事を言うとは思ってもみなかった。
そして話す意図が分からず困惑する。
昨日浜辺での話はダイ達には内緒だと約束を取り交わしたばかりなのに。

「情報はあって困りませんが、知るタイミングとも大切かと。」
ティファ自身で辿り着いた第一回決戦で負けるだろうと弾き出した情報は伏せて欲しいとロン・ベルクと聞いていたマトリフとクロコダインに頼んでおいた。
ヒュンケルはともかく、ダイ・ポップ・マァム・メルル・チウは本当に素直ないい子で隠し事にとんと向いていない。
僅かでも逃げる算段がある気配を出した日には間違いなく躊躇なく大魔王は大技で自分達を消しにかかってこよう。
有無言わさずに殺されたら困る。
「分かったよ・・・お前さんなんだってそこまで考えが及ぶんだか・・・確かにダイ達には毒になる情報だ。知らせずにおくが、クロコダインも今の話忘れとけよ。」
「承知した。」
そう約束してくれたのに・・・

だがロン・ベルクが語ったのはバーンの強さではなく自分が作り渡した武器の方だった。
「光魔の杖・・・ですか・・」
「そうだ、原理は理力の杖と同じだが、決定的に違うことがある。理力の杖は誰が使っても武器自体の強さは変わらないのは知っているか？」
「ああ、弱い奴が使っても強い奴が使っても威力は一緒だ。」
ロン・ベルクの問いにポップが答える。あれはＭＰを攻撃力に変換する都合上誰が使っても変わらない。
「俺はその上限を取っ払った方法を思いついて大魔王に作っちまった。」
杖が触手の様な飾りで使用者に巻き付き、直接魔力を吸って魔法力を光の刃に変える。
その威力に上限はなく・・
「使用者のＭＰが高ければ高いほど強いと・・・」
ティファの結びにダイ達は青褪める。
鬼岩城の様な途轍もないものを生み出し動かせる大魔王自体もＭＰが高いとポップは踏んでおり、ダイ達に伝えてしまっているだけにその恐ろしさがきちんとイメージ出来てしまった。
「つまりＭＰが切れるかそれが無理でも削ればいい訳ですね。」
こともなげにティファはさらりと言う。
確か・・・原作ハドラーがそれで押し勝てそうだったのをあのダニ野郎が・・・・如何、思考脱線したが要は使用者の魔法力枯渇狙いの持久戦か大技バンバンは・・・カラミティ―ウォールは危険だから私とダイ兄が打ち込んでヒュンケルを中距離援護に回してマァムさんとクロコダインのトリオにしてキルとミスト相手にしてもらうかね？
ここまでくると原作通りになる保証零だ。父さんの動きは今分からないし、当てにした行動は危険だ、いない方のプラン練らないと。
などと考えながら、ダイ達と対策を練り全員が寝床に潜り込み暫くしてティファがベットを抜け出し、その気配にロン・ベルクが目を覚

まし今に至る。
「俺も話す気はなかったんだがな・・・」
聞かれてもいないのにペラペラと、実に自分らしくない
「兄達の為にありがとうございます。」
きっと話してくれたのは兄達を生かそうと決めてくれたからだ。
そんな事を考えていたら、ロン・ベルクさんに頭をくしゃくしゃと撫でられた。
「いいって事よ。」
にやりと笑ったロン・ベルクはそのまま表に出る。柄にもないことをした後に矢張り柄にもなく星空を眺めに。
良い人達がみんなを助けてくれている
もう大丈夫だ、この一行は―料理人のティファ―が守らなくとも、たとえ私が居なくとも最後まで戦い抜ける絆と力と心を手に入れているのだから

死の大地決戦編
新たなる戦いへの序曲

天候は晴れず一年を通して薄曇りのギルドメイン山中の洞窟の最奥に、一人の男が瞑想をしている。
黒髪に黒いカイゼル髭を生やし、左目に竜の爪を模したモノクルを掛けている偉丈夫。
男の名はバラン
当代の竜の騎士であり、勇者ダイとその妹ティファの父。
最愛の妻を亡くした悲しみから、元凶となった人間を憎み全てを滅ぼそうと大魔王に与したが、子供達との戦いの中にて、人間は醜いだけではなくかつて自分が守るに値すると信じていた素晴らしい者達を実際に目の当たりにさせられ、今では人間と敵対する気など毛頭ない。
如何にして罪を償えばいい
ティファの秘密の部屋を出てもう十日以上になるが、考えても答えが出ない。
自分は陥落させられなかったとはいえリンガイアを攻め、人身的に被害はないとはいえカールの首都を破壊しつくし・・・・そして一国を殲滅させた大罪者だ。
ティファは罪を償う機会が一度はあっていいと言ってはくれたが、果たして許されるのだろうか?否、許されていいのかすら分からない。
温かいあの子ならば罪を償う道を本気で歩けば許されると言ってくれようが・・・
「死神か?私を殺しに来たのか。」
思考の海に漂いながらも、バランは思考を中断した邪魔者を気配だけで看破してみせる。
「ふっふっふ怖い怖い。気配を消してもこれだもの。バーン様が一目置く訳だよねぇ～。」

笑って話しかける者に、バランは警戒を解く事はせず傍らに置いている真魔剛竜剣をすぐさま引き寄せ立ち上がる。
軽薄そうに笑い、右手に大鎌を持っていてもひょいと肩をすくませる仕草は道化を思わせるだろうが、この男の恐ろしさを自分は知っている。
狙った獲物は絶対に逃がさず、バーンの命令が一度下されれば年月を掛けてでも仕留める暗殺者・死神キルバーン。
今も自分が闘気を放って威圧しようとも、飄々とした態度を崩すことがない。
「フッ・・死神の仕事が、他にあるとでも?」
飄々とした態度を崩さず、されど内心ではかなりバランの事をキルは惜しんでいる。
いや～参ったな、お嬢ちゃんのお父さん・バラン君はあんまり殺したくなかったんだけどな～。
誇り高き戦士であり、清廉潔白な騎士様はかなり自分好みの綺麗な人なのに、敵に奔ってお嬢ちゃんと合流されたら本気で困るもんね～。
お嬢ちゃんこと勇者の妹ティファは、現魔王軍の一番の敵。
知らず五年前には軍に大惨事を引き起こし、今では世界中の者達の心を纏め上げ魔王軍に立ち向かおうとしている旗印の一人。
すなわち力の勇者ダイ、優しさの料理人ティファとして。
今でも手を焼いているというのに、この上当代の竜の騎士迄加わっては不味い事態にしかならないのは誰の目にも明らかだ。
それに、お父さんにまで邪魔されたらお嬢ちゃん手に入れるのにもっと苦労しないといけなくなるのは自分的にもとっても困る。
キルはバーンの命令できたのが半分、残りの目的はティファを手に入れる障害を消しに来たのが半分。
オートドールの機械人形に与えられた疑似人格が長い年月を掛け育ち心を獲得し、遂には生き物の様に愛を知ったと、どこぞの物語辺りならば美談となろう・・・・ただし愛している対処が十二歳の女の子なのがいただけないが。

バーンやミストと共に長い、それこそ人の世が興廃を幾度も繰り返すほどの長い年月を共に渡ってきたキルが愛しているのが勇者一行の料理人ティファ。
笑顔に、泣いた顔に、時折見せるあどけない顔に、そして限りない優しさに魅かれている。
その事をバランが知っていれば、愛娘に纏わりつく害虫としてキルの気配を感じたと同時に有無を言わさず叩き切っていただろうが、残念な事に知らず穏やかに問いかける。
「かつて大魔王が私に約定した事を反故にするのか？」
最愛の妻ソアラを喪い、怒りのままに力を暴走させアルキード王国を滅ぼした後、妻の亡骸をひっそりと葬った後息子と娘をあてどなく探していた時に大魔王から魔王軍に勧誘をされた。
地上の害にしかならぬ人間を全て滅ぼし共に理想郷を作ろう
その言葉に感銘を受け自分は軍に入ったのだが。
「だって君はもう人間と敵対しないって子供たちにはっきりと言っていたじゃないか～。」
死神の大鎌を弄ぶように回しつつ、キルは歌うように答える。
この大鎌の柄の笛の部分は、動かし方によって生物の感覚を麻痺させ遂には神経をも麻痺させ動かなくさせる特殊な音波が出る。
それは魔族の耳にも聞こえる事のない高音波であり、目の前のバランも気が付いている様子はなく、自分が言った事を吟味している。
「テランの、あの場にもいたか。」
「ミストも一緒にね。あの時君を消そうかとも思ったんだけど、どう出るか見定めていたんだよ。残念な事に君は軍に戻る選択してくれなかった。
でもね、寂しくないよ？」
「何？」
「バーン様が滅ぼすのは人間だけじゃあない。人間と一緒に精霊も地上のモンスター達も全部消すんだよ。」
「馬鹿な！そんな事をして何になるというのだ!!」
人間を滅ぼすのは地上を手に入れる為には最適解だからだ。将来

の反乱の芽を生ませる事無く永劫支配するためには。
「地上・・地上ね～。僕にとっては魔界も地上もどちらも大差ないけど、バーン様にとっては魔界が大切なんだよ。その魔界の蓋になっている地上を消して魔界を浮かせたいほどにね。」
「な・・・・馬鹿な・・・そんな事が許されるとでも!!そのような邪悪な企てを天界が黙って見過ごすものか!!」
「邪悪ね～。地上と天界にとってはでしょう?魔界にとっては朗報を届けてあげられる。正義を気取ってるあの邪魔な天界も滅ぼす予定なんだよ。だからねバラン君、あの世は直ぐに大賑わいになるから寂しくないよ。僕にとってはどうでもいい事だけど・・・・バーン様の為にも死んでもらうよ!!!!!」
ヒュゥゥゥ!!

高音波をバランにたっぷりと浴びせ、自分の言葉に動揺し隙を見せたバランに、キルは予備動作なく一気に大鎌を振り上げ首筋目掛け一気に振り下ろす。
自分の為、何よりも親友と大好きな主の望みの為に!!!
「そうはさせん!!!」
キルの不意の動きにも動じず、何事もなく真魔剛竜剣を抜くと同時に同を真っ二つにする。
斬られ宙を舞うキルが見た物は健在なバランとそして完全な刀身の剣。
「そ・・・んな・・僕の罠が・・・それに剣も・・」
「ふん、何の小細工をしていたかは知らぬが、この私に通じるとでも思ったか。真魔剛竜剣もとっくに直っている。」
キルの驚愕にバランは真っ二つにした者を見下ろして答える。
当代の竜の騎士たる自負と、長年生死を共にした愛剣を誇り自然と口に出た。
「はは・・・君は・・とんだバケモノだ・・・」
生き物全て、それこそ今のハドラーでも無事では済まないあの音を浴びても何の不具合もないとは・・・

その言葉を最後に、死神の赤い瞳から光が消えた。

あの子の下に行かねば・・・
行って伝えなければならないことが山程増えた。
バーンと魔王軍の企みを・・・そして―あの者達―の事も
バランは真魔剛竜剣を鞘に納め背中に背負い、キルの骸をそのままにして洞窟を後にする。
後には真っ二つにされた死神の体だけが横たわっており、助けに来る者とてなかった。

いざ戦場へ

うおおお!!!
頑張ってください勇者様達!!
姫様!どうぞご武運を!!
人類からの大反撃
その作戦を今朝がた王の御触れにより知ったパプニカ国民達は、今まさに出立せんとするダイ達を歓声をもって送り出そうとしている。
「す・・・すげえ人だかり・・」
「ポップ・・・早く行こうよ。」
「こらダイ!みんな俺達を応援してくれてんだぞ。」
静かなデルムリン島育ちのダイは、どうも人だかりが苦手らしい。
ベンガーナデパートでも人の波にもまれて半泣きしてたし、今も自分の服にしっかりと手を掛けて早く行こうとせっついている。
戦いの時はあれ程冷静に強い奴なんだがな～。
「ダイ、俺との特訓時弱音吐かなかっただろうがよ。」
「だってロン・ベルクさん・・・」
見送りに来たロン・ベルクとポップにお師匠様マトリフに苦笑いされる。
「気を付けて行けよお前達、絶対に帰ってくんだぞ。」
ダイ・ポップ・マァム・メルル・チウの頭を一様に撫で、ヒュンケル・クロコダインにも優しい瞳で送り出す。
「はい、行ってきますマトリフ師。」
「ああ、必ず。」
「皆さん、出立の時間です。」

レオナの言葉を合図に、全員が気球に乗り込もうとするが、マトリフが一冊の本を懐から取り出しダイ達に渡す。
渡されたのは、アバンが遺したアバンの書・空の章であった。
「あ!持って行こうとして・・・机の上に・・」
「ったくポップ、お前は大事なもんを・・・」

今朝持って行こうと用意しておいたのを忘れたとポップは赤面しながら師の説教と共に大切な本を受け取る。
「これで先生も一緒だね。」
「そうね、何があってもいつでも一緒だったわね。」
「ああ、そうだな。」
本だけではなく、ダイ達の胸元にはそれぞれアバンから授かった輝聖石のネックレスが下げられている。
それぞれ服の上に出し、今はいない師に自分達の今を見て安心してみて貰えるように掲げている。
ダイとポップがアバンの書を持ち合い空高く掲げる。
行ってきます先生

「行ってしまうか・・・どうか、全員無事に帰ってきておくれ。」
王城のバルコニーにて、椅子に座ったレオールと侍医長ロムスが気球で飛び立つダイ達を見送る。
彼等は人類の希望そのもの、何度祈っても足りない程に・・・

「・・・・・ティファも一緒だと思ってたのに。」
「仕方がねえだろう、向こうで傷薬大量にこさえておくってんだからよ。」
「そうですよダイ君、ティファさんらしいじゃないですか。」
さっさと現地入りした妹の不満を言えば、ポップとチウがすかさずティファ援護に回る。
自分だってその位分かっているが、どうもティファは個人で動き過ぎてはしないだろうか？
「その事なんだけどねポップ君、私ティファに詳しい作戦も場所すら教えていないのよ？大丈夫なの？」
別の意味で心配するレオナがポップに尋ねる。
これから行く場所は死の大地がよく見え港を持っているカール王国の漁村サババに行く。
勇者一行と大勢の兵や民間の格闘家・魔法使い・戦士達と共に攻め

込むために、大勢の船大工を各国から募り船を作らせてじきに完成する。
　このタイミングでダイ達に招集を掛けたのだが・・・一人足りなかった・・・
　ティファは一人で先に行った
　不機嫌なダイがぶっきらぼうにレオナの不思議そうな顔に答えた。
　そろそろ作戦とやらが始まるだろうから先に行ってノヴァと一緒に薬作って待ってるね～。
　何ともお気楽なメッセージをマトリフに預け、自分達が寝ている間に行ってしまったのだ。
「あ～それがよう姫さん、ティファはノヴァの居場所分かるらしくてさ・・・あいつがいる所が作戦場所だろうから大丈夫だろうって師匠に言ってたらしいんだわ。」
「ノヴァ君・・・・まぁ彼と一緒なら平気ね。」
　何せ天下の氷の勇者様だしと、レオナは心の内で安堵した時、一羽の白い鳩がダイだちの追いつき気球の端にちょこんととまる。
　足にはマジックリングが括りつけられており、ティファがいつも飛ばしてくれる鳩だった。
「ダイ、ティファからか・・」
「うん、ちょっと待ってて。」
　ダイはそっと鳩の足からマジックリングを外すと鳩は用は済んだとばかりに飛び立ち、ダイは見送ることなくリングの中身を取り出し入っていた妹からの手紙を読む。
　そこには今朝死の大地の一部が隆起した異変が書かれていた。
　敵からの何かしらの攻勢が考えられます。不用意に城に気球で乗り付けずに死の大地から目視されない手前で気球を下りて歩いてきて下さい。
　降りる場所とそこにベンガーナの戦車隊長アキームが待っている事も記されていた。
「死の・・・ハドラーの言っていた篩って奴か。」
　先程までの和やかさが吹き飛ばされる。ついて早々一戦かと力を

籠めるポップの袖を大学行くと引っ張った。
「ポップ、ティファからアメの差し入れもあった・・・ヒュンケル！一人一粒って!!!」
力を籠めすぎないようにとティファからの心尽くしのアメを聞いた途端、がぜんヒュンケルが覚醒した！
そのアメを死守すべくダイは目の色を変えてとびかかって来そうな長兄に先制攻撃をして動きを封じ込める。
「・・・・俺だけ二粒でも構わんのに・・」
いや構うだろうと長兄を尊敬しているアバンの弟子一同は口に出さず、内心で押し止めた自分達はえらいと思う。
「甘くて美味しいです～。」
「チウはアメ初めてか？」
「それはそうだよポップ、クッキーだけでもありがたいくらいなんだよ。」
「・・・・それバカすか食ってるヒュンケルって贅沢か？」
「え!!・・・それ罰当たりそう・・」
砂糖はこの世界では高級品の部類に入り、それをパカパカ食べてるとはチウからすれば罰当たりそうだとなげき、その言葉にヒュンケルはしょぼんとし見ていたダイ達の笑いを誘い、気球の中は笑いの渦に包まれる。
「あ～あ、なんか変に入っちまった力抜けたな～。」
笑い涙を拭いながらポップは一つ深呼吸をする。
これだ、大事な戦い前であっても、いつも通りの自分達でいることが大切だ。
「死の大地、着いたら俺がトベルーラで上空から見てみるわ。」
アメを食べながらポップは早速戦いの為の打ち合わせをする。
全員がどんな新必殺技が出来たのかも把握するために。
「俺とダイは新技は無いな。」
「私もね、その代わり今までの技の練度と戦い方を磨いてきたわ。」
「それじゃあ新技は俺とおっさんだけか。」
クロコダインの新技は、完成したその日の内に全容を教えて貰い、

その日の夜は新技祝してとティファが少し豪華な夕食を用意して宴会になった。
　この三日間で一行全体の戦力が跳ね上がり、それに即した作戦をポップは常に頭の中で組み立て、如何なる敵が来ても対処できるように用意している。
　その頼もしい様を、マァムが微笑ましそうにして見ている。
「ん？どしたマァム。」
　視線に気が付いたポップがマァムに尋ねる。何か自分は笑うようなことをしただろうか？
「最初会った時のポップを思い出していたのよ。」
　作戦上手で頭が切れるのにクロコダインとの決戦時には青褪め動けなくなってしまったポップが、強敵が待ち構えているのに顔色一つ変えずにいる頼もしい様を見て嬉しくなったのだ。
「ポップさんにもそんな事が・・」
「今のポップ君からは想像もつかないわ。」
「なんだか意外ですね～。」
　メルルたちが出会った時からポップはその細い体躯の中に勇気を詰め込み、バランやザムザ相手にも怯まず立ち向かっていただけに、今のマァムの話は本当だろうかと疑問に思ってしまった。
「俺だってな・・・最初からこんな風に出来ていたわけじゃねえんだよ。」
　戦いは怖いが、師の仇を柱にしてダイとティファと三人で冒険に出てきたが、いざという時に動けなかったのを助けてくれたのはティファだった。
　ポップ兄はなんの為に戦うの？
　私や、他の人が戦うからじゃない、ポップ兄自身がの戦う理由をきちんと出さないといつか命取りになる。だから戦う理由をきちんと出してね
　そう諭され、一人では出なかった時、偽勇者一行の魔法使い・まぞっほの助言を貰い―見捨てない為に戦う理由―を見出し今に至れた。
「俺は一人で強くなったんじゃねぇ、ティファもだしまぞっほさんに

教えられて、師匠やみんなの力を借りてここまで来れたんだ。だからみんなももう一度思い出してほしい。戦う理由を。」

その思いを強くし、一行全員で勝つ為に。

そしてこの一行が掲げた、勝って戦の無くなった平和な世を謳歌する事

今はこの場にいないティファと共に。

一同はその言葉に表情を引き締め、一路サババを目指す

親衛騎団揃い踏みと初遭遇です

霧が深くなってる・・・ダイ兄達大丈夫かな？
今朝兄達が寝ている間に一足先にサババに出立。きちんとおじさんに挨拶はしてきた。
「一緒に行きゃいいだろうによ～。」
「あはっは・・・多分大歓声の中出立するんでしょう。私はああいうの苦手なんだよ。」
誰かに勇者一行の数に覚えられなくて済むのは内緒だが。
「ノヴァに何か伝える？」
「いんや、気を付けて行けよ嬢ちゃん。」
「うん、それじゃあね～。」
ガルーダに超高高度飛行頼んで成層圏ギリギリでカール領内に入ってそこからは低空飛行でノヴァの気配を辿ってみれば・・・ノヴァがトベルーラで迎えに来てくれたよ。
「ティファ！こっち!!」
「おはようノヴァ！ガルーダ、この人ノヴァっていいってティファの大切な人なんだよ。付いて行って～。」
「―承知―」
ノヴァの不意の出迎えにも慌てずに、ティファはノヴァの先導で今回の作戦砦になる城に案内された。
「ノヴァおはよう！」
「ティファおはよう!!」
城の中ににに降り立ち、ガルーダから降りたティファをノヴァは直ぐに抱き上げてガルーダに断ってからティファを連れて行く。
「ティファお借りします。」
「―・・・律儀な子だ・・好きにせよ。―」
「あんら、ノヴァに任せておけば大丈夫よ。」
「そうだよ、この二人はずっと仲がいいもの～。」
ノヴァ大好きの精霊達は、神獣ガルーダにも怯える事無くノヴァを売り込む。

精霊にここまで愛されているのもか・・・良いだろう、ティファの番候補に認めてやろう
ガルーダが妙な勘違いをした事を知らない二人はそのまま城内のバウンスの下までやってきた。
「小父様!!あ、ノヴァ降ろして・・」
「気にするな―ネイ―・・・いやティファであったな・・」
「・・・・・・・その節は偽名で通して申し訳なく・・・」
過去の恥ずかしい事が思い出され、赤面しながら謝ってくるティファの頭をバウンスは優しくよしよしと撫でる。
「名など構わん。よく来てくれた。」
「そうだね～、ティファが来てくれたらこれ程心強い事はないよ。」
「小父様・・・ノヴァ迄～。」
からかわれていると思いティファは赤い顔で怒るが二人は本気でそう思っている。
バウンスとしては、幼い頃は家族やほんの数人以外―人―を寄せ付けなかった息子が、ティファを友としてから自分から人の中に入り、話を聞いたり研究をしたり交わる事を当たり前とし、その事が騎士団に入団した時人付き合いのスキルを獲得できていたノヴァは円滑に人と付き合えたのだ。
大将軍たる自分とのつながりを求める者、薄暗いものを背負っている者は頑として近寄らせないが、程良き事を覚えて今ではあしらう事も覚え騒ぎは起こさず、国王の覚え愛でたく今日に至る。
全てはティファが、狭い世界からノヴァを外の世界に連れ出してくれたからだとバウンスは考えている。
確かに国が開発した万能薬の事もあるが、それがなくともティファはノヴァ同様に愛娘の様に思っている。
お泊りしたのは一度だが訓練後や休暇の時、ティファがノヴァと外でご飯を食べているのを知ればいそいそと仲間に入れてもらい、泥だらけになった小さな二人を湯船に放り込んだのは二・三度では足りない。
二人の髪を洗ってあげたのが昨日の事の様に思い出される。

ノヴァもティファがいればご満悦で、薬作りに励んでいる。周りの法術師や魔法使い達も万能薬試薬作りでティファと顔見知りの物ばかりで楽しそうにせっせと作っている所に襲撃の報が入り、バウンスの判断で先遣隊をノヴァに率いらせ、ティファも自分から行くと言い、サババの漁村に兵二十名とノヴァとティファの二人が出撃した。

「ティファ、霧が深い・・」

「うん、それに音が小さいけど斬撃や打撃音や呻き声聞こえてる・・・ハドラーの親衛隊だ。」

兄達早く来て・・

「妹はもう向こうに!!」

アキームと合流したダイ達は急いで砦に向かったが、ノヴァとティファはもういってしまったと言われてとっても焦る。

気球の中で装備は点検している!自分とポップの二人でサババの場所教えて貰ってトベルーラで・・・

「ご報告!!ノヴァ様と―ティファ様―よりの伝言です!!」

ダイが妹を早く追いかけようと算段していた時、兵士が一人慌てて入ってバウンスに報告をするが・・・ノヴァはともかくなんでティファも様なのと一瞬聞きたくなったが、兵士の報告の邪魔をしてはいけない。

「続けよ。」

「はっ!サババを襲撃せし者はハドラー親衛隊であるとティファ様からのお言葉です。・・・勇者一行の方々ですか?」

兵士はダイに向き直り尋ねられ、いきなりの事にあわあわするダイの代わりにポップが代わりに返答する。

「ああ、勇者ダイ一行だ。ティファから何か伝言か?」

「はっ!お察しの通り、ティファ様からの伝言です。

キメラの翼をお預かりしましたのでサババの一キロ手前まで自分

と来るようにとの事です。」
一行がばらけて来て勝てる相手ではありません、全員揃って来られる様にお願いしました
先を読み動くティファらしい。
ダイ達は兵士と共に、霧に包まれたサババ漁村の一キロ手前で降り立ち、兵士は途中で救護活動をすると言って別れ、一行は聞き耳を立てて更に奥に進んでいく。
戦闘の音も、妹のあのハチャメチャな言葉も聞こえてこない・・・自分達が付く迄何も起こらないで欲しい。
だが、都合よくそんな祈りは届かないものである。地響きと共なんと巨大な船が近づいてきた!!
「出てこねぇな～、ブロックその大型船適当にその辺に投げつけて炙り出しちまえ!!」
「ブロ～ム!!」
自分達のいるのがもう知られているのかと焦ったダイ達は、せめて大型船が周りに被害を出さないように、投げる前に船を斬撃と魔法で破壊しようとポップがダイ達に指示を出す前に、その声は辺り一帯に響いた！
「バギクロス!!」
「ガルーダ!!最大風圧で船体後方落として!!」
バキバキバキ!!!
真空呪文最大呪文と同じ威力を持つ神獣ガルーダの固有スキルで船体を三枚おろしにして前と後ろを地面に落とし、中央の残りも忘れていなかった！
「ノヴァ！ガルーダ!!三人で思いっきり海の方に投げるよ!!」
「せぃの!!!」
「―おおお!!―」
バッシャン!!!
「ガルーダ!!最大風圧出してそのまま旋回しながら上空に飛んで!!!」
矢継ぎ早な指示に船は解体され巨体の金属生命体から船体を取り上げ海に落とし、そのままサババを覆っていた霧を全て晴らした。

「物を投げて遊びたければ広い死の大地に戻って遊んでらっしゃい!!他人様の迷惑です!!!」
霧が晴れれば、元気一杯怒鳴るティファと、側にノヴァとガルーダの姿が上空にいるのが直ぐに見えた。
「ふん!いつまでもネズミみたいにちょろちょろしてるお前さんが姿見せねえのが悪いんだよ!!久しぶりだなティファ!死の大地以来だが、今日はバキバキにぶちのめさせてもらうぞ!!」
・・・・勇者目の前にいるのになんで私に宣戦布告って何しちゃってるのよヒム!魔王の最大の敵はあっちでしょう!!
親衛隊は五人全員揃い踏みでダイとヒム達の距離は凡そ五百メートル。上空のティファ達もその位で、ヒムもダイ達の存在は勘定に入れているので油断はせずに、それでもティファを優先してしまう。
あの者が・・・ティファですか・・
鋼の剣を抜いて左肩に担ぎながら上空からゆっくりと降りて来たティファを、アルビナスは食い入るように見つめる。今朝の出撃前に、矢張りハドラーから注意された事がある。勇者達は全員が強敵で油断すればすぐさま足元を掬われこちらが返りうちに遭うと。そしてもう一つ・・・ティファにペースを乱されるなと。
心理戦に長けた者かと聞いてみればどうも違うらしい。
あ奴の挙動に振り回されるなと、酷く疲れた様子で言っていた主を思い出すだけで胸の中が炎で焼かれる!!
「貴女がティファですか。」
話してみれば分かるだろう。
情報収集の一環で話し掛けてみた。ヒムと普通に話したというのなら、自分も話して為人を探りそこから戦い方のスタイルでもと思ってみたのだが、ティファは自分をつまらなさそうに見てぽつりと呟いた。
「芸がない上に礼儀知らずな・・・」
・・・はい⁉今・・・何を言われた?

「情報収集するにしてもせめて自分の名くらい名乗れないものですか？」
もう一人の男からも叱責が飛んできた⁉
チョいチョイ
「・・・・なんですかヒム・・」
「今のお前が悪いぞアルビナス。きちんと名乗りくらいしろよ、あいつ礼儀に五月蠅いぞ？」
・・・・ヒム迄!!!
まさか仲間からも注意が飛んでくるとは思わず、アルビナスははらわた煮えくりかえる思いで名乗り上げる。
「・・・申し訳ありません！私はハドラー親衛隊副官・クィーンアルビナス!!」
主に忠告して貰ったのに早々に振り回されるとは思ってもみなかったが、謝罪までして名乗ったからには文句はあるまい!!

「初めてお目に掛ります。勇者ダイの妹でティファです。」
「お初にお目に掛ります、リンガイア騎士ノヴァ。」
二人共本当の役職は言わずに名だけを返す。
ティファは―料理人のティファ―を出して、兄達から料理人戦場禁止令を出されるのを厭い、ノヴァも―色々―しているので警戒されるのを避けて。
「勇者ダイ一行に頼みたいことがあります！この辺り一帯は我がリンガイア騎士団が守護していた場所。故に彼等との初戦はリンガイア騎士の僕から始める事をお許ししていただきたく!!」

激突寸前であってもノヴァは律義にダイ達に確認を取る。ノヴァの言い分ももっともであり、ポップがすぐさま分かったと頷く。
「ポーンヒムにお尋ねします。」
ノヴァのすぐ後にティファも口を開く。
「ああ？なんだ言ってみろよ。」
「私一度死の大地に行ってますが、再上陸は貴方達と戦う必要ありま

すか？」
「あ～、それに関してハドラー様直々の伝言がある。」
「ヒム⁉私はそのような事・・・」
「悪いアルビナス、本当にあんだわ。続けるぜ、俺はな、直接ハドラー様にお前ぶちのめしていいかお願いして許可貰ったんだよ!!」
「・・・・ほう、ハドラーがですか。」
ヒムの言葉にティファの左目がピクリと眇められたが、ヒムは構わず伝言を伝える。
「俺が納得しなけりゃ死の大地にお前は来るなってさ!!!」
・・・・・・・・今すぐ死の大地行ってあの人ぶん殴りたくなってきた・・

三匹のモグラと氷が北に行く

「ノヴァ、モグラちゃん三匹行きたい。」
「あ、そっちで行く。ティファ、モグラ君早いだろうけど二匹目の時―北―に行きたい。」
「え～・・・下？上？」
「上で。」
「む～・・・分かった。」
　ヒムの言葉に憮然としたティファは、一度死の大地の方向を思いっきり睨みつけ、なんと子供がよくやる―い～っだ!!―の顔を向けて気を取り直す。
「おいおい、俺じゃあ不服ってか？」
「貴方に文句はありませんが・・・」
　どう見てもハドラーの物言いに不機嫌になったのはダイでも分かるが、ヒムに文句を言っても仕方がない。
「文句なら直接あの人に言いに行きます、タッグ戦でここにいるノヴァと一緒にやります。」
　仲良しコンビのお通りだい
「いいのかよ？勇者様達と一緒じゃなくてよ。」
「安い挑発はみっともないと知りなさい。ノヴァ、いい？」
「ティファと一緒に出来る事に文句なんてないよ。僕にも異存はありません。」
　・・・こんなひゅろっこい優男がね～。
　ノヴァの物柔らかさに、ヒムは完全にノヴァの実力を見誤る。無論クィーン・アルビナスはヒムの様に敵を侮りはしないが、どうしても目がティファの方に行ってしまい、自分達を観察するように見ているノヴァの目に完全に気が付かず、二人が打ち合わせなのかなんなのかよく分からない言葉を数度発しって決まった様子を見た後、こちらの先鋒も決めた。
「ヒム、ハドラー様からの許可を無駄にしないように!!」
「お、イイね！分かってんじゃねえかよ!!!」

クィーンの許可に、ヒムは内心小躍りしながらティファとノヴァに対峙する。
絶対にティファのして死の大地に連れて帰って戦利品として認めてもらうんだ!!
野望満載なヒムの出鼻を、ノヴァが期せずして挫いた。
「その前に!リンガイア兵!!」
不意にノヴァが自軍に呼び掛け、どこにいたのかという程の兵士たちが姿を現す。
何だこの野郎!!タッグ戦じゃねえのかよ!!
ヒム同様ダイたちも、宣言と違う事をするのかとノヴァを驚いて見る。清廉潔白そうだが、戦いの時は問答無用なのだろうか?
だが、ノヴァの次の指示でその誤解は直ぐに解ける。
「この場の怪我人を症状関係なく担架で一斉に運び出せ!一分で済ませろ。」
「は!ノヴァ様!!」
有無を言わさぬ命令に、兵士たちは答えながらも手を止める者は誰もいなかった。
今回はリンガイア兵団・騎士団から選りすぐりの歴戦の者達を連れてきており、こんな場で敬礼を返す無様なひよっこは存在しない。
「勇者様達失礼を!!」
よく見ればダイ達のすぐ後ろにも怪我人はおり、兵達が素早く戸板や布地で作った担架に乗せて連れて行く。
その様子をヒム達はあっけに取られて見る。戦場で救護活動って後じゃね?
この世界では動けないものは自分の判断ミスであり、よほどでない限り戦闘終了後に助けるものだとヒム達の生まれながらにして持っていた知識ではそうなっているので今の事態に面食らう。
「皆さん~ん、速度もいいですが揺らさないようにお願いします。」
ティファも一度鋼の剣を地に突き刺し、両手で口を囲い兵達に届くようにしてる・・・何でリンガイアの兵達に指示出してんだ⁉
「ご心配なくティファ様!我らこの時の為の日ごろの訓練であります

れば!!」
「ティファ様！ノヴァ様もご武運も。」
そして一分後には辺りは静寂に包まれた
「・・・・本当に一分だった・・・」
「もう少し縮められるかな？」
「・・・・・・やめて上げようよノヴァ・・・」
ノヴァがちょっと怖い・・・
「おい！これでいいだろう!!さっさとやろうぜお二人さん!!!」
「せっかちは嫌われますが・・・いいでしょう!!」
ヒムの誘いの言葉に剣を再び肩に担いだティファは、左に位置をずらした。―射線―を開ける為に
「ヒャダイン!!!」
いつの間にか剣を鞘に納めたノヴァが、氷系呪文中級を放つ。
「おや、騎士の分際にしてはなかなかな魔法を使いますね。ふふ、ですが甘いですよ。シグマ!!」
迫る吹雪にアルビナスは動じず、どこかノヴァを小馬鹿にしたような嘲りの言葉の後に、ナイト・シグマを出す。
呼ばれたシグマもにやりと笑い、ヒムの前に立ち―胸部―を開けた。
中にある鏡が、ヒャダインを受け止め反射させた!!
「マホカンタの類くらい警戒すべきでしたね～。」
吹雪は反対にノヴァたちを襲う中、アルビナスはにんまりと嘲笑う。話に聞いていたティファとやらも、実際は大したことは無いのだと。
マホカンタ・・・そんな事・・

ノヴァどうしたの？暗い顔して。
ティファ～、魔法師団の子達が、僕が精霊と仲良くなっているのは無駄だって。・・・
何それ？
強い威力があっても！魔法跳ね返す奴に遭ったら味方全滅させる役立たずだって!!
・・・・マホカンタなんて使えるの今の世の中人間にいないよ、モンスターだって滅多には・・
でも・・・知らずに出遭って・・・・皆を殺しちゃったら・・・
ノヴァは優しいね、悪口言っている子も助けようとして。
ティファ・・・・強い呪文使わない方が・・・
大丈夫!!
ティファ？
精霊の加護付きの呪文はティファと一緒の時はバンバン使って!!
でも！・・・返されたら・・・
大丈夫だよ、今思いついたあのね・・・

「あああ!!!土龍閃!!!!!」
吹雪が返される前からティファはノヴァの前に立ち、左上方に剣を振り上げ十八番の土龍閃の構えを取っていた！
白い闘気を通常の倍に練り込み地面の岩石を抉り飛ばし、吹雪にぶつけて相殺させる。
「おや、意外とやりますね。」
止めるくらいの技は持っているようで感心してあげるかと、どこまでも上から目線なアルビナスを打ち砕く言葉が響き渡る。
「二連撃!!!」
「なっ⁉」
岩石の塊と吹雪がぶつかり氷の礫となった岩石が落ちる前に、ティ

ファは二度目の土龍閃を飛ばし再びヒム達にぶつけに行く。
たかが岩石の塊くらい!!
ヒムが拳を、シグマがランスを構えた時、その呪文は紡がれた。
「マヒャド!!!」
「いっけぇ!!!!!」
一度目のヒャダインは中級呪文なのを差し引いても、このマヒャドは別格であったと後のポップが語った。
ノヴァは―氷の精霊王・ハイキング―の加護を持ち、リンガイアにいる氷の精霊達から愛されている。
このマヒャドは、国から離れてもノヴァに付いてきた精霊達の加護が上乗せされている。
仮にそれでも魔法に変わりないとマホカンタや、シグマの鏡で跳ね返そうにも跳ね返せるものではない。
マヒャドは敵を攻撃するためではなく、敵に襲い掛かっているティファの土龍閃の岩石を更に大きな礫にすると同時に速さとばら撒かれる範囲を拡大する為の物だった。それは最早魔法ではなく、圧倒的で暴力的な物理攻撃と化していた!!
巨大な氷の礫は人以上の大きさに一様に成長し、ヒム達に襲い掛かる。
拳で対処するヒムの横に、いきなりティファの姿があった!!
飛ぶ礫と共に加速し隠れて近寄りヒムを上空高く蹴り上げる!!
「貴様!!!」
仲間を蹴り上げられたシグマは怒りと共に礫ではなくティファに向かってランスの一撃を突き入れようとしたが、蹴り上げた後すぐさま体制を整えたいたティファにランスを踏み台にされ流れるような蹴りを右頬にもろに喰らい体勢を崩され、成すす術なく飛来する礫の餌食になる。
無論ティファは後方で高みの見物をしている者達を見逃すつもりはなく、礫の範囲はアルビナス達にも届いているが、ビショップ・フェンブレンが、全身を刃に特化させた機能を余すことなく発揮し礫を様々な方法で斬り裂き、クィーンとルークを守っている。

だが後方から攻撃されたら？
一番上空からルーク・ブロックの頭上を越える礫を見定めたティファは、吹雪で視界が効かないのを利用し音もなく見定めた礫に乗り予想通りブロックの後方に行けると同時に降り立ち、三度目の土龍閃を放ち、フェンブレンとブロックの足の関節部分を過たず打つ。
ティファ単独の闘気が練り込まれた礫が、オリハルコンの体にヒビを入れフェンブレンの片膝とブロックの両足を崩し、膝をついた二人にアルビナスを守りきる術はなく、前方のシグマ諸共に埋まっていく。
土竜閃は膝を崩す為ではなく、ブロックの後方足場を大陥没させ仰向けにし、暫くは出てこられない質量の礫が辺り一帯に散乱する。

流石だねティファ
地上の吹雪と土竜閃の轟音で掻き消されていたが、上空に飛ばされたヒムを待ち受けていたノヴァが、得意のオーラブレイドを展開し必殺技を放っていた。
少し離れた切り立った崖に技の威力をしのばせる。
ヒムは上空でろくに防御できず喰らってしまい、技の威力で吹き飛ばされ激突して埋め込まれた箇所は巨大な十字の穴が開いている。
ノーザン・グランブレードは確かに敵の体を斬った手応えがあった

マホカンタ使える相手かどうかはともかく、先に弱いヒャド系使って様子見るんだよ。
それって・・・返されたら同じじゃない？
ここからが違うんだよ！その後にティファが土竜閃を撃つから。
土竜閃・・・あの地面削って岩飛ばせるの？

そうそれ！マホカンタか道具で跳ね返されなくても魔法と物理攻撃で敵が大ダメージでしょう。
そうだね・・
その後ね、
まだあるの？
うん、これが大切なんだよ
大切？

「マホカンタで返された時は、土竜閃で相殺の為に一撃、相手に返す為に一撃、モグラが二つ行く前に僕の最大の氷系呪文をぶつけて加速か・・・・うまくいったねティファ。」

上空から敵が直ぐに出てこないか警戒しつつ、ゆっくりとティファの横に降り立とうとするノヴァは、遠い昔タッグ戦の為の自分達の技を開発した時の言葉を誰に言うでもなくそっと呟く。
自分の事を思って作ってくれたティファの技を愛しむ様に

繕うのやめます!!

「・・・ティファって・・埋めるの好きなのかしら・・」
辛うじて味方から出た言葉がそれってどうなんだろう。
マァムの呆然とした言葉に思わずティファは苦笑する。
確かに強敵相手のは今のところ埋めて対処してるな～。ミスト蹴ったぐって埋めたし、その前に鬼岩城は十二年越しの・・・怨念だか執念で埋めたし・・・・うん、そうだよ。
「埋めると静かになって便利なんです。」
一行の下に戻りながらティファはいい笑顔できっぱりと言い切る。殺さず捕縛できるし、しばらく時間稼ぎにもなるし。
「ポップ兄～、―全部―見れた？」
マホカンタできるシャハルの鏡を暴いたし、フェンブレンの全身これ剣なの分かっただろうしこれで作戦立てやすいっしょ。
「おう、助かったぜティファ。それにノヴァも。俺達だけでぶつかってたら、あの鏡の餌食だったな。」
「お役に立てたのなら何よりです。僕等はもう行きますね。」
「えっ、何処に？」
「ごめんダイ兄、皆も。あの怪我人の人達かなり不味いから私とノヴァで薬作らないといけないんだ。」
「そうか、行ってらっしゃいティファ。」
「ここは任せておけ。」
「無理はするなよティファ。」
全員にナデナデされてご満悦なティファは黒縁眼鏡を金のマジックリングから取り出し掛けて、料理人のティファになる。
「ダイ兄達も気を付けてね～。」
「皆さんご武運を。」
ティファはガルーダで、ノヴァはトベルーラで簡易砦に向かい、ダイ達は見送ってすぐ気を引き締めてヒムが飛ばされた場所と今大量に氷の礫が散乱している箇所を交互に見る。
一体どちらが先に出てくるか・・・・果たして・・・

ガラ・・・ガラガラ・・・・ドン!!
「あんの優男!!!オリハルコンの体すっぱりと切取りやがって!!!」
最初にダイ達の前に出てきたのはヒムだった。
勢いよく崖から飛び出てきたが、右肩上半身が斜めに切り取られ右腕がなかった。

防御が出来なかったとはいえ左側を斬られそうになったヒムは、咄嗟に体をよじり核がある左側を死守した結果、右肩から綺麗に斬られる形になった。
「って!!ティファとあの優男どこ行った!!」
埋まった時の体の態勢が悪く、四苦八苦してようやく出て来てみれば二人がいないってどういうことだ!!勝ち逃げなんざ許すか!!
「喧しい!!あいつはな、戦う専門じゃねぇんだよ!!」
ヒムの疑問にポップが怒鳴り返す。
「あいつは勇者ダイ一行の料理人のティファだ!専門はサポート支援で前衛荒事は俺達が本当なんだよ!!死の大地にわたる為に篩だか何だか知らねぇが律義に付き合ってただけだよ!分かったか!!!」
「・・・はぁ⁉馬鹿言ってんじゃねぇぜ!あんだけ鬼みてぇに強い奴がサポート支援ていかれてんのかお前達!!あいつはな!左腕一本で俺のこの体をぶち抜いて風穴開けたんだぞ、そんな奴が戦いませんて俺ら馬鹿にしてんのかよ!!」
ティファが聞いたら間違いなく穴があったら入りたいと縮こまる黒歴史を平然と暴露するヒム。
・・・・・・・ティファは、一行メンバーがいないところで本当に何をしているのかダイですら不安になってきた。
何をどうして戦場外でそんな事になったんだろう?
「俺達の事なめてんのかお前達!いいからあいつ呼んで来い!!」
「誰が呼ぶ・・・」
「ヒムの言う通りです!!」
ゴゴゴゴゴゴゴ・・・ガラガラガラ!!!
「お前達!はは・・良かった!無事だったか!」

出てきたアルビナス達の傍らに、ヒムは喜色満面の笑顔で瞬時に近寄る。
「ヒム・・・貴方は・・無事とは言い難いですがまだやれますね。」
「あたぼうよ！核壊されたわけでもねぇのに縁起でもねぇ。シグマ、どうせばれてんだからその鏡出しちまえよ。」
「・・・・分かっている・・」
シグマは憮然としながらシャハルの鏡を取り出し左腕に通す。
シグマ的には一行の誰かの魔法を先程の様に盛大に返しダメージを与えてからシャハルの鏡を今のように腕に付けながら伝説の鏡の名前と機能と、ハドラー様から下賜されたのだと鼻高々にしてお披露目したかったのだが・・・・あんな返しの返しなど反則もいいところではないか！魔法を物理攻撃に仕立て上げるなど何なのだあの娘は!!
しかも味方は相当な被害を食っている
ヒムは右腕はなく、格闘タイプとしては手痛いダメージを。フェンブレンは片膝を、ブロックなどは両膝の可動域にひびを入れられている。
あれでは素早く動く事も、巨体を生かした戦い方にも支障が出よう。
たった二人の子供相手にだ!!
「お前達悪い事は言わん、死の大地に帰れ。」
臍を噛んでいるところにいきなり獣王クロコダインがとんでもない事を言ってきた！
武人として生きてきたクロコダインとしては、満身創痍とは言わないが、戦力全体が半減している相手を、敵とは言え戦おうという気が起きなかった。
「今のハドラー殿ならばお前達が帰ろうとも悪いようにはせん。大人しく帰路に付け。」
それは侮りではなく言葉の中に紛れもなく労りの響きが込められている。

懐深く、戦場で命の遣り取りをせれど、弱っている者達をこれ幸いに討つ等は恥ずべき事だというのを信条にしているクロコダインにとって、今の状態のヒム達を撃つのは忍びない。
それが相手から仕掛けてきた例え命懸けの戦場のど真ん中でもあってもだ。
強さだけではなく、この懐の深さをしてクロコダインはライリンバーの覇者・天下の獣王クロコダインとまで名を轟かせ、そのクロコダインの言葉に暖かみと度量の大きさに、ティファとノヴァの二人にいいようにされたハドラー親衛隊達の中に響いてしまった。

私達は・・・ハドラー様に信頼され、勇者ダイ一行とその周辺を篩に来たというのに・・

決戦の時は近い。有象無象達がバーン様の御前を騒がせんとしている。お前達はその力をもってダイ達以外の者達が役にもたたない事を知らしめて来い。
無論ダイ達にもバーン様の御前に立つ資格があるのかどうかと問うてくるのだ

そう言われて送り出された自分達が・・あのティファともう一人の男に負けて尻尾を巻いておめおめと逃げるのか？
敵の情けに縋って見逃されるのか？
・・・料理人という訳の分からない職業を平然と仲間達に言わせるあの・・・あのふざけた娘がますますハドラー様の関心を集めるのをみすみす・・
「おいアルビナス!!」
「・・・クィーン・・」
「アルビナス・・・」
「ブ・・・ブロ～・・・ム・・・」
？
「急に何ですかヒム・・・貴方達まで・・」

ヒムが大声で自分の名を、それも冷静なシグマとフェンブレン、普段滅多に言葉を発しないブロックが、どこか心配そうな・・
「お前・・・人間みたいに涙出てんぞ？」

ヒム達が驚愕するのは無理はない。金属生命体、それも冷静沈着なクィーン・アルビナスが涙を!!
仲間のヒム達もそうだが、ダイ達も驚く。自分達が以前戦ったハドラーが生んだ禁呪生命体フレイザードは、涙など流す者ではなく勝利の為なら卑劣な事を平然としてのけた者だったから無理はない。
だが一番に驚いた、いや驚きを通り越しアルビナスは指摘されダイ達も驚いている事から本当に自分が涙を流している事が分かり、屈辱を覚えた！
・・・・私が・・惰弱な人間の様に・・・それもこれも!!!
「出てきなさい！戻って来なさいティファ!!我等と・・・ああもう！繕いません!!!ハドラー様のお心を奪った貴女を！ズタボロにして引き裂いてしまいたいので私の下に戻って来なさい!!!!」
完全にアルビナスは開き直ってぶちぎれた
そうだ、命令が果たせないのが悔しいのもあるが、それ以上に敬愛する主の心の大半があのティファ一人で占められているのが許せないのだ！あの方から生まれたからこそそれはダイレクトに伝わってくる。ティファの名を出すたびにハドラー様が嬉しそうなのを!!
その顔を見て、気持ちを感じてどれ程自分の胸が黒く焼かれる事か!!
「おい！そんなのお前の・・」
「ええそうですよ！八つ当たりです！逆恨みですよ!!あの者が悪くないなんて百も承知ですよ！」
ポップの反論を最後まで言わせずに、アルビナスは堂々と言いきり噛みつき返し、ポップは勢いに押し負ける様にたじろぎ押し黙る。
なんだこの妙な勢いと威圧感は！
魔王軍の一番の敵だからなんていうのも建前だ！ハドラー様の心を捕らえて離さないティファが憎いだけだと

「ふっくっくっく・・・はっはっははは!!なんだよアルビナス!お前要はハドラー様にほの字なのかよ!!」
「な!私は・・・あの方を敬愛してるだけ・・」
「そこまでぶっちゃけちまったんだったら今更取り繕うなよ!そうかそうだよな!あの方程いい男なんてそうざらには・・・おっと、俺達を見逃そうとしてくれたあんたもいい男だぜ。」
　冷たい奴だと思っていたら可愛いもんじゃねぇかと、ヒムは目をいからせ否定しようとするアルビナスの頭を無事な左手でよしよししながら、クロコダインにもいい男だとウィンクして讃辞する。
「あんたの男っぷりにもうっかり絆され掛けたがよ、悪いんだがそうもいかねぇんだわ。」
「左様、アルビナスが惚れる程の良き漢で敬愛する主からの命でな。」
「ここは引くわけにはいかぬな。」
「ブロ～ム!!」
「・・・・貴方達・・」

　右腕がない?だからどうした、左腕も両足御健在だ!
「悪いがな、うちの大将の命令は絶対なんだよ。それにうちのクィーン泣かせた落とし前ティファに取ってもらうからな!改めて名乗らせてもらうぜ、俺はポーン・ヒム!」
　その役割を指し示す様に親衛隊の前に立ち、名乗りを上げる。
「私はナイト・シグマ。この左腕にあるのはハドラー様から賜りし伝説の武具シャハルの鏡だ。」
　少し斜め後ろからシグマが名乗り、堂々とシャハルの鏡を披露する。
「儂はビショップ・フェンブレン、お前達を全員切り刻み料理人のティファとやらの下にクィーンをお連れする。」
　その横にフェンブレンが、自慢の全身の刃でこれからする事を堂々と告げる。
「ブロ～ム。」
「こいつはこれしか言えねぇんで勘弁してやってくれ。ルーク・ブ

ロックだ。」
アルビナスを守るように後ろに立つブロックを代わりにヒムが紹介する。
親衛隊の真ん中に守られるように立つ事になったアルビナスは、ヒム達の名乗りに冷静になり、途端に自分が口走ったことが恥ずかしくなるがそれ以上に・・・
「私はクィーン・アルビナス。ハドラー親衛隊の副官を任じている者です！」
嬉しかった、馬鹿な望みを胸に秘めている自分をヒム達は下らないと蔑むどころかいいではないかと言ってくれた事が。
禁呪生命体、それも金属生命体の自分が生みの親たるハドラー様に、どうやら惚れている、様々な事で忌むべき事と思い消える時にも胸に仕舞っておこうとしていたのを・・・あの娘のせいで抑えられなくなってしまったではないか!!
絶対に叩きのめす!!
アルビナスの健気な気持ちに触発され戦う気を起こしたはいいが・・・
「へ、ボロボロで情けねえ姿見せちまった俺達とはもう戦えねぇか勇者様よ。」
果たしてダイ達の方こそ戦ってくれるだろうか？

「・・・情けなくなんかないよ・・」
「ん？」
「ボロボロなのがなんなのさ！流されかけたから何なのさ！そんなのいつもの俺達だって一緒だ！ヒム達だけじゃない!!俺達はいつもそうなって、でも戦い抜いてきたんだ!!」
ヒムの問いに、ダイが叫んで答える。
敵に恐れて動けなくなったポップ、相手の事情を知って戦えなくなった自分、真実から目を逸らし闇に身を堕としたヒュンケル、弱ったところに奸計に心売ったクロコダイン・・・
「俺はダイ！勇者ダイだ!!」

気力を無くしても、仲間を思う心で戦いを挑むヒムにダイは力の限り名乗り返す。
「俺は魔法使いポップ。勇者ダイの言う通り、俺らもボロボロにみっともないことになっても足掻いて戦ってきたんだわ。」
「武闘家マァム。今の貴方達を情けないっていう奴いたらのして上げるわ。」
「戦士ヒュンケル。正々堂々受けてたとう。」
「同じく戦士クロコダイン。済まなかったな、立派な心を持ったお前達を低く見て侮辱した事は詫びさせてもらおう。」
こいつらは確かにハドラー様のお眼鏡に適う奴らだ。
ティファだけではない、ハドラー様がこいつらを真の敵だと何度も言っていた訳だ。
「そんじゃァよ！第二ラウンドと行こうじゃねえかよ!!」

勝利の為に

ハドラー親衛隊の闘志が十二分にあっても矢張り先のダメージある限り自分達が勝つと思っていたのに

「おっら!!―ヒートシュート―!!」

「グッ!!」

片腕を喪ったヒムにすらダイは手を焼く。

それぞれの敵に狙いを定めポップがそれぞれの相手と自分達の特性と相性を見極め指示を出す前に、フェンブレンがダイ達の前で自身の最大の技ツインソードピニングで地中に潜り、すぐさまダイ一行の中央から姿を現した。

「全員散れ!!」

地中の振動からフェンブレンの進行方向を見極め、すぐさまフェンブレンの意図を察したヒュンケルはダイ達警告を発しすぐ様四散させ難を逃れた。

「ちぃ!勘の鋭いのがいるな。」

気付かれずに出られていれば、バギを纏った双剣で勇者達の身を切り刻めていたのだが。

「そいつで十分だよフェンブレン!!」

飛び退り避けたダイをヒムが追いすがり、着地前にメラゾーマのエネルギーを拳に上乗せたヒートナックルではなく、左足を軸に回し蹴りの右足にエネルギーを乗せた新たなる技ヒートシュートを即興で作りだし、腕をクロスして防ごうとしたダイの体を軽々と吹き飛ばし、容赦なく追撃する。

マァムにはシグマが追いすがりスピードでは勝てないと踏んだマァムは反撃に出るため構えるが、シグマはお構いなしに突撃をし速度から生まれる破壊力ある突きを高速で繰り出し見る見るうちにマァムの体に細かい傷が付いていく。

余人であればそれは一撃一撃が死の攻撃となる所だが、攻撃を即座に捨て防御に徹し相対するマァムは手の気配を読み切る事で躱して

いる。だがいずれスタミナが切れる自分と、お構いなしな金属生命体シグマとやりあっていては分が悪いのは明白である。
ポップはフェンブレンに執拗に追いかけられ、クロコダインは同じ巨体のブロックと両手で組合そのまま拮抗して動けずにいる。フェンブレンに片膝のひびがなければポップは追い詰められ、ブロックの両足が無事であればクロコダインはすぐさま組み伏せられている力を感じ取り戦慄する。
ヒュンケルもオリハルコン製の親衛隊に魔法使いのポップは不利だと助けに行きたいが、アルビナスが含み針を駆使し妨害し、槍で倒そうにも全て躱され翻弄されている。
しかも一度手の甲に受けてしまった針から痺れを感じすぐさま抜いて口で血液まで吸い出し事なきを得たが、毒針があると分かり益々動きが限定的にされている。
強い・・・
ティファとノヴァがダメージを与えてくれていなかったら、自分達はもっと苦戦を最悪全滅とはいかないまでも大ダメージを負っていてもおかしくはないと、ダイ達の背中に冷や汗が流れるが、誰も絶望してはいない。

「鬱陶しいんだよ!!」
いい加減鬱陶しいとポップがトベルーラで上空に飛び出す。
「おっさん後ろに飛べ!」
ジャキン!
フェンブレンは上空までは追いかけてこれないと見定めたポップは、ティファが新調してくれた新品の杖を取り出し大地に向かって叩き付けるように一気に振り下ろす!
「ベタン!!」
確かにオリハルコンに通常の攻撃呪文は通じまい!だが、重力で押しつぶされるのでは話は別だ。
ポップの目論見通りブロックは押し潰され、狙った効果ではないがブロックのひびが増し巨体を支え切れずに地に膝をつく。

「ブ・・・ブロック・・・・」
「今だおっさん！マァムの方に!!」
「承知！」
　真空の斧を取り出し、クロコダインはその巨体に似合わず素早い動きでマァムとシグマの間に割って入り、シグマのランスを斧で受け止める。
「ほぅ・・・単なる力自慢ではないか・・」
　シグマはクロコダインを侮らず一度距離を取る。クロコダインとしてはシグマがそのまま押し切ってこようとしていれば詠唱をして零距離で真空の斧でシグマの体を巻き上げ、無防備になったところを攻撃しようとしたのだが果たして。
「手強いな・・」
「そりゃそうだ。」
　呟くクロコダインの横にポップが降り立ちその言葉を肯定する。
　何せこいつらの強さはティファのお墨付きがある。
　今のハドラーの生み出した親衛隊達は今までの敵の比ではなかろうと評していたのだから。
　ダイの方も仲間の下に合流する事を優先し、パプニカのナイフを鞘に納めヒムに向かって無手で突っ込んでいく。
「はん！何のつもりか知らねえが・・・」
「おおお！ドラゴニックオーラ!!」
　ヒィィィィン!!
「なん！」
「でぇぇぇぇい！」
　無手となったと侮ったヒムのオーラシュートの射程圏内ギリギリの外でダイは紋章を全開にし、紋章発動時の光の奔流に目が眩んだヒムの胸部を殴打して殴り飛ばすと同時のそのままの勢いでアルビナスに阻まれているヒュンケルをトベルーラで攫いポップ達の側に降り立つ。
「・・・ティファ・・・あんなのよく一人で埋めたよね・・・」
　慣れない動きを即興でしたツケでダイはスタミナを一気に減らす

が、ポケットから小瓶を取り出し素早く口に含み飲み干す。
「マァムも傷薬飲んどけ。」
「分かってる。」
マァムも腰の巾着からダイと同じ小瓶を取り出し素早く飲み下すと血が直ぐに止まった。
戦いの合間にも薬を飲める訓練をしてきて正解だった。前回の鬼岩城戦ではチウがサポーターとして薬をくれていたが、単独戦の時でも飲めるようにマトリフとロン・ベルクに徹底的に鍛えられたダイ達は今その事に感謝してもしきれない思いでいる。
あの扱きに比べれば、今分が悪くとも突破口がない訳ではない！
「おっさん・・・あの技でシグマの左腕落とせねぇか？」
「・・その後は？」
「やっこさん達は仲間意識が俺達と同じで強いようだ。負傷した仲間を放ってはおかねぇだろう。」
何せティファ並みに滅茶苦茶な事を言ったクィーン・アルビナスの言動を呆れるどころか後押しする始末だ。
今も彼等を支えているのはアルビナスをティファの下に送り出し、その思いを存分にぶつけさせるのが狙いだろう・・・・・・ハドラーの篩はいいのかよ・・・とは突っ込んだらなんか可哀そうだから言わんでおくが
自分達も可愛いティファが滅茶苦茶でも何かお願いしてきたら天地ひっくり返してでもお願いは叶える!!そこに善悪の余地はいらん！正しい・間違いではない、最早理屈など無用、ある意味人間臭いのだこいつらは。
その特性利用しようってんだから俺も悪党になっちまったな
「おっさん、頼めるか？」
自分は納得して考察した結果の作戦をしようと思うのだが、武人たるクロコダインが弱った仲間を助けようとするところを一網打尽にしようというこの作戦に乗ってくれるか・・・
バン!!
「・・・ってえなおっさん!!」

憂えてたらなんかおっさんに思いっきり背中どつかれた!!
「ポップ!ここは戦場だ!!敵を倒すのに方法などで躊躇するな!そもそんな生半可が通じる相手ではないのは全員分かっている事だろう!」
抗議しようと振り返ったポップが見たのは、かつてなく厳しい顔をしたクロコダインであった。
「ティファの言葉と同じだ、負ければ意味がない。卑劣な手を使わぬ限り俺はお前の作戦に反対する事は決してない。」
そこにあるのはポップの清廉さと勇気と仲間を思う優しいさに信を置く言葉のみ。
その何処までも、愚直とまでも言えそうな信頼にポップはほんの少しでも仲間を疑った自分を恥じ入り、それでもすぐさま切り替える。
「そしたら頼んだぜ!」
「任せておけ。」
頼もしい返答ににやりと笑ったポップは、動きがとりずらいブロックの周りに集結したヒム達に向き直る。
「そちらさんの作戦は決まったのかよ。」
「ああ、待たせちまって悪かったな!!!」
答えと同時にポップはイオラを二発、親衛隊目掛けて打ち出す。メドローアの特訓は量の手から魔法を複数出せる副産物が付いてきた。だが
「俺達に魔法が効くかよ!シグマ!!」
「おう!!」
シャハルの鏡の威力を忘れたかと、親衛隊はポップが勝負を焦ったと見たがポップはまたもや口角を上げて笑って言い放つ。狙い通り、シグマが釣れた!魔法を使えば必ず前衛に出てくると踏んでたぜ。
「誰がお前さん達に当てるって言ったよ。」
そのイオラニ発の軌道は直線ではなく斜め下を進み、シグマの足元で炸裂し爆風で前衛にいたシグマは吹き上げられた直後、闘気の渦に包まれる。
これが情報にあった獣王クロコダインの技か・・・

技を喰らいながらもどこかシグマはまだ余裕があった。二度もの逆方向回転の闘気の渦を喰らうまでは！

「獣王激烈掌!!!」

バルジ島の二つの逆方向の渦を消すことに成功した自身の生涯で一番の大技が、一行の魔法使いの頼み通りシグマの腕を、両腕をねじり切った!!

「シグマ!!!」

空中で両腕をねじり切られたシグマを、ヒムは片手で支え仲間の下にすぐさま降り立つ。普通であればオリハルコンのヒム達が固まるだけで鉄壁の防御足りえる、はずだった。

悪いな・・・恨みはねぇんだがよ!!

「メドローア!!!」

ポップは内心で詫びつつも、必殺の技を親衛隊に容赦なく放つ。

・・・これは・・・間に合わない・・

迫りくるポップの魔法に防ぐ術がないと思考が止まったアルビナスを容赦のない光が飲み込む。

メドローアが通った後には、地面が抉られた跡と海を割った軌跡だけが残り、余りの威力に味方のダイ達の呆然とした視線に、海が割れたのを思い出したかのように波を寄せ元の姿に戻っていく。

向いの岬を抉り取り、通った後の海の水すら消滅せしめたメドローアをヒム達は真正面から受け姿が見えない。

「勝ったな。」

だいっきらい!!!

この場にティファがいればこう思っただろう

ブロックの脚にヒビ入れたのだから、メドローアを避ける為に土中に仲間を埋める事は出来まいと。

実際にブロックは立ち上がることが出来ず、メドローアの速度が速すぎ王を守るためのキャスリングを仲間の為に使おうにも間に合わない！

ダイ達はそんな事は知らなくとも、あのタイミングであればポップの言う通り勝ったと思いポップに駆け寄りダイが飛びつくのを皮切りにポップは揉みくちゃにされる。

「やったねポッ・・・・・・・」

ドン!!!

誰もが勝ったと思った瞬間、光の塊が先程ヒム達がいた場所よりも後方の場所に降りて来た。

光が収まり現れたのは・・・

「う・・・嘘だろう・・・完全に決まったはずなのに!!」

驚愕するポップの目の前にいるのはヒム達だった。

完全に消し去った積りであっただけに満身創痍とは言え生き残ったヒム達に驚愕するのは無理はない。

ブロックは完全に両足が消えと、アルビナスも下半身の一部が削り取られ無傷なのはフェンブレンたった一人であってもだ。

「へっへっへ・・・ティファに感謝しねえとだな。」

「な!!なんでティファに・・・」

「以前あいつが俺にキメラの翼くれてな。無くさないように体内に埋め込んでおいたんだよ。」

死の大地に自分が戻るのに使ってくださいと渡されたキメラの翼。ティファを思うよすがとして体内に自分で穴をあけ埋め込み、主にその旨を伝えたところとても呆れられながら治療してもらったが、まさ

かここで役に立つとは思はなかった。
咄嗟にキメラの翼の事を思い出し、死の大地に逃げ帰るのをよしとせず先程の場所よりも後方を思い浮かべて発動すれば、果たして翼は一旦上空に自分達を連れて行き、指定した場所に再び戻された。
仲間の傷は重傷だが、それでも戦う術はまだある!!
「皆、気を引き締めて行こう。」
ダイはヒムの底知れぬ闘志にすでにパプニカのナイフを構える。
敵が弱っていると侮ることが命取りだとピりつく肌が教えてくれる。
「へっ！大呪文ただ見させるわけにはいかねぇな。」
「その通りだな。情報料はしっかりと頂こう。」
「悪いけど、ここで・・・」
「うむ、決着を付けよう！」
ダイの言葉にポップ・ヒュンケル・マァム・クロコダインも構え、第三ラウンドをヒムが告げようとした時、気配なく滑り降りる様に空から降りたち双方の間に割ってきた者がいた。
「双方そこまでにすることをお勧めしますよ。」
先程の鋼の剣ではなく、雪白を左肩に担いだティファであった。

予想より親衛隊達にダメージ与えられなかった。
今のポップ達ならもしかしたらここで決着つくのではないかと踏んでいたのだが、式鳥で見たのはほぼ自分が知っている展開になったのが残念だ。
せっかくロン・ベルクとの特訓時にタイプの違う者同士の戦い方を学んだのだからここで生かせると思ったのだが、相手もさるものだった。
ちなみにティファが見れたのは手当てがひと段落した後なので、戦いの中盤辺りになってしまったと本人はがっかりしているが、始めか

ら見ていたら怪我人の手当てをしながら様々な意味で恥ずかしくなって大絶叫間違いなしであっただろうから不幸中の幸いと言えよう。

「ようティファ！お前さんがくれたキメラの翼で命拾いしたぜ！」
「・・・・貴方あの後どうやって死の大地に帰ったんですか？」
「あん？そんなの泳いで・・・そういえばここじゃなかったか！俺とお前がハドラー様の事で話してたの。」
「おや・・・・・ああ、確かにここでしたね。」
奇しくもここはハドラー大好きっ子たちが大盛り上がりに盛り上がった場所だった。もうすし言えば、ポップが消し飛ばした岬であったが。
ゴン!!
「・・・ったい！・・・・げ・・・・・」
ヒムと話していたら頭叩かれ振り返った先に見たのは怒り狂うダイ兄達!!!しまった！細かいところ隠してヒム情報だけ強調してたの忘れてた!!
「ティファ帰ったらＯＨＡＮＡＳＩしようね？」
ああ！ダイ兄!!顔が勇者様がしたらいけない顔してますよ!!
笑っているのに目が笑ってない!!ラスボスキャラの顔しとる!!!
ダイ達としてはティファのお願いはともかくもうスタンドプレーを許すのも限度が来ていたので、この後は一行全員で囲い込むかと慈愛のマァムをして算段させていただけにヒムの話は看過できるものではない。
「あ・・・来ましたか・・」
ダイ達に弁明しようとしたティファは、何かを感じ取り眼鏡をはずし、再び雪白を担ぎヒム達の方に向き直る。
妹の行動にダイも切り替え、ポップ達も構えたところにヒム達の側にルーラの着地音が鳴り響き、舞い散る砂粒が収まり見えたのは・・
「ハドラー⁉」

「ハドラー様⁉」
親衛隊がキング、魔軍司令官ハドラーが直々のお出ましにたった一人を除いて驚愕をした。
「ハ、ハドラー様・・・」
「アルビナス、戦況はどうなっている。」
自分達が役に立たなかったからハドラー自らが来てしまったのかと、副官として人を全うできなかったと深い悲しみの中でハドラーに声を掛けたアルビナスに、ハドラーはヒム達を庇うように前を向いたまま戦況を尋ねる。
「ハドラー様？悪魔の目玉では・・・」
「その悪魔の目玉が最初にティファが降り立った辺りから映らなくなった。」
全ての悪魔の目玉どころかミストが忍び込ませていたシャドー・ゴーストの類からの報告も一斉に途切れた。
こんな常識外の事を引き起こすのは自分が知る限りただ一人!!
「ティファ！貴様何か・・・」
ドバシャン!!!!!!
したかと言う前に濡れたタオルがハドラーの顔面、それも両目にクリーンヒットした!!
「こんの嘘つき魔王!!最低魔王!!確約破りで地獄に落ちちゃえ大馬鹿魔王!!!!!」
戦端が再び、それもハドラーとやりあう気かと敵味方双方に緊張が奔る前に、ティファは力の限り怒鳴る。
何だと!!
「どういう意味だティファ!!この篩は前々からダイ達の前でも宣言してた通り・・」
「嘘つき!!その宣言の時貴方は私達に確約した!!!」
決して非戦闘員を殺さない
「そうだ、そして俺はそれを親衛隊達全員にも伝え・・・」
「そしたら！どうしてドックで働いていた職人の人達が大勢死掛けているの!!!!!」

「・・・なんだと・・・」
ノヴァと自分がいなければ、瀕死の重体どころでは済まなず、ほぼ全員が今日の夕刻前に亡くなっていたと断言できる。
悪魔の目玉を消したのは自分やノヴァ、ダイ達の実力を隠す為であったが、メドローアが放たれた直後に新たな目玉達が上陸した気配が伝わってきていた。
それはミストが情報収集の為、またハドラーが篩終了宣言の為に映像を送る為と分かっていたが、式で感知した時ノヴァの許可を貰い海岸に行き全て消してからダイ達の下に降り立った。
戦況が分からなければ、ハドラーなならば部下たちを案じてくるかもしれないと。
確約を貰った時には嬉しかった、
なのに！実際には・・・・・
「確約破りする今の貴方なんて!!変質者死神さんよりも最低だ!!!!!!!」
ティファは全身で叫び上げる
大嫌い!!!!!

敵は信じるか信じないか

「ティファ！本当に魔軍司令官は確約したの⁉」
「・・・ノヴァ・・・」
「ああごめんねティファ。ティファが悪い訳じゃ・・・」
「若君！こちらの者が吐血を!!」
「若ではない！すぐ行く!!ティファ、止血薬と体力回復多めに。」
「うん・・・うん！」
　兵士さん達と一緒に誰一人死なせないように頑張って、目途ついて偵察申し出てハドラー来るように細工したのを確かめに来たら本人きたし・・・・これって嘘吐きましたって言ったら戦闘開始していいんよね!!
　ティファはハドラーの言葉は嘘だったのかと信じていた分心の底から落胆し憤慨するが、反面送り出したノヴァは敵の言葉を最初から信じていなかったのでティファの様に動揺せず淡々と仕事をこなす。早く終わらせてティファが無茶しないように見張りに行かなくてはと気が急く。
　ここは戦場であり、戦闘に無関係な一般人はおらず、ドック作業の者達もそこは承知で来たのだから死も覚悟してるであろうし・・本当にティファとその仲間達はその辺が分かっていないので手が掛かると、溜息ついてもいいだろうか？
　そんなティファとノヴァの心情は知らずとも、ハドラー自身もショックを受けていたりする。
　確約を守る積りで親衛隊達を送り出した！
　だが結果・・・・ティファが嘘を言うわけがない。
　何故だ・・・・どうしてこんな事に・・
　ハドラーはティファとの確約を優先する様にヒム達にはくどい位に言い聞かせていただけに、困惑しそして言われた事にとても胸が痛む。
　ティファの言葉は、これまで散々言われてきた罵倒に比べれば子供の悪口であるのに・・

ダイ達も塔での確約を驚きながらも今のハドラーならと信じかけていただけに裏切られた思いでハドラーとヒム達を見すえ、静かに闘気と魔力を練る。
今回はティファが戦っても許可する！

だがこの件で最大の被害者は誰だろうか？
ドックの大工達もノヴァ達の考えだ通り危険と襲撃は承知で仕事を引き受けており戦えはしないが志はダイ達と一緒であり、襲われるのは百も承知だったと言っただろう。
ハドラーは原因不明でも襲撃した側であり、現在進行形で確約破り紛いをしているので自業自得と言えよう。
ティファもある意味敵の言葉を鵜？みにしてはいけない世界に生きて長いのだからハドラーの事でいちいち怒る事ではないとノヴァに言われればそれまでで・・・では誰が被害者か？

「お嬢ちゃん!!どうしてそんな確約破りの事での引き合いに僕を出すの!!!!!」
ティファをこよなく愛し、ティファとの約束を守る為ならばたとえ火の中水の中、冥竜王だろうが何だろうが消し去ってでもを掲げている死神キルバーンだったりする。
バランに胴を斬られ、小一時間も誰も来ずにいたのになんとこの

オートドールは復活している。
ピロロ来なかったのにだ。
ピロロとしては最近勝手している人形にお仕置きとして倒された二時間後に助けに行き、これで懲りたか二度と僕に逆らうなと言い聞かせようとしたがどうやってか自力復活して死の大地に戻ってきて、今も元気一杯にティファの言葉に両手を握りしめ絶叫しながら憤慨している。
ハドラーの来る気配で、悪魔の目玉阻止作戦をティファが解除したので辛うじて波間で様子を窺っていた一匹の目玉が上陸を果たし、ティファが確約破りの嘘吐きとハドラーを詰っている辺りから見ていた。
「バーン様!!ミスト!!!僕ちょっと行ってきます!」
酷い事の引き合いに出すなんてあんまりだとお嬢ちゃんに抗議してきます!!

「・・・・よさぬか・・」
バーンは額に手を持って行きながら心なしか疲れた声で制止する。魔王軍で怖れられた死神が、あんな子供の悪口でホイホイ表に出ようとしないで欲しい。
キルとはこんなものだったかとため息ついてもいい気がしてきた。
「・・・バーン様のおっしゃる通りだ。」
「・・・・そんな~!!!」
おのれお嬢ちゃんめ!!!僕との賭けで答えが出ていなかったり不正解の時はどんな手段使ってでも捕まえてありとあらゆるお仕置きして苛め抜いてやる!!!
ティファからは変質死神、ダイ達からは疫病神、ハドラーからは変態と呼ばれるキルは、その呼ばれ方にふさわしい怒り方をしている・・・・・流れ弾くったとはいえある意味被害者枠に入れなくともいい人物かもしれない。
死の大地にまで余波を及ぼしている確約破りの真偽は、ハドラーの

静かな声で進展する。
「ティファよ、瀕死の者達の内訳を教えてくれぬか。」
静かだが力強い声であった。
ティファの言っている事を全く疑っておらず、只々真相を知りたいという声音に、ティファの表情が心なしか険が薄まる。
「・・・・瀕死の人達の傷は斬撃とランスの突き傷が半割りで、残り全部は―打撃―によるものです。」

・・・打撃だって!!!それって・・・・・そいつは・・・
「嘘をおっしゃい!!ヒムが・・・ハドラー様の命を違うはずがありません!我等は敵とは言え・・・」
「もういいアルビナス!!」
自分を庇おうとしてくれているクィーンの言葉を遮り、ヒムがハドラーよりも前に出る。
その表情は沈痛な面持ちで酷く後悔している者の顔であった。
「俺が・・・・・加減間違えて殺し掛けた・・」

深い深い後悔と、敬愛する主が戦利品としてまで欲したティファと交わした確約を、選りにもよって自分が・・・
ポタン・・・

ヒム・・・

それはこの日二度目の奇跡的な事、金属生命体のヒムが深い自責の念から流れ出た涙に、ハドラーはすぐさま動いた。
その行動に、ヒム達は動揺し、ダイ達の怒りが霧散したほどに
ハドラーは兜を取り外し脇に抱え、そのままヒムの前に出て敵である勇者一行の前で無防備な状態で深く頭を下げたのだ。

ハドラーは兎角いい評判が聞かれない魔王であった。

三流魔王、慢心が多い男、驕りが過ぎた男、そして昔のハドラーを知る者は必ずこう評した。
プライドが高く、人間を塵芥の如くしか見ていなかったと。
その話をロカやマトリフから聞いていただけに、ダイ・ポップ・マァムはハドラーの深い謝罪に動揺し、かつての上官たるハドラーがここまでティファとの確約を大事にしていた事にヒュンケルとクロコダインは心の底から驚く。
敬愛し、身をささげても構わないと思い詰める程ハドラーを思うアルビナスは、それでも何も言わずにハドラーのしている事を止めないでいる。
これ以上、ハドラーに泥を塗り道化にする訳にはいかない・・・・
心底ティファを憎みながら

ハドラー

ティファも分かっている。ヒムが涙を流した時に、確約は意図的に破られたのではなく、ヒムが強すぎて手加減しているつもりが出来ていなかった事だと。もしかしたら死の大地で自分がヒムの胸を易々と貫いた事で、ヒムの人に対する実力の認識が高く見積もられてしまったのかもしれない。

ティファの考えは当たっていた。ヒムは生まれてすぐに出会ったのが抜きん出た力を持ったティファだった為に、人間の強さの最低基準を見誤った。人間とはもっと脆いものだと今知る程に。

だがそれもいい訳でしかない。自分の首を差し出そうとヒムが動こうとしたその瞬間、剣が鞘に収まる音がいやに大きく辺りに響いた。
誰かと見れば、ハドラーと自分に一番距離が近いティファが雪白を鞘に納め銀のマジックリングに変換し、ネックレスとして首に下げる。

「・・・・・確約破ってしまった処断はそちらにお任せしますねハドラー。」
「ティファ・・・」
「私が誰も死なせません・・死神位蹴っ飛ばして！あの世に一人でシクシク泣きながら戻ってもらいますので!!」
　力強い笑みで・・・滅茶苦茶な事を・・・これは・・・
「そうか・・」
「はい！勇者一行の料理人が！死神如きに負けるはず無しです!!安心しなさいヒム！誰一人死ぬことはありません!!悪いと思うのなら次の戦場で私達にズタボロにされて負けて償ってもらいますので!!!」
　にっこりといい笑顔しながら何か物騒な事を言っている！

　その言葉を聞いたダイ達は闘気を練るのをやめ、ティファの様に仕舞はしないが武器を下に向ける。
　不思議な事だが、ティファが許す方向に向かった事で戦端が再び開かれることは回避された。

・・・・・またあの小娘は・・
　映像で見ているバーン達は今の状況を様々な思惑で見つめる。
　ティファに興味を持ち始めたバーンは、矢張り面白く手元に飼っておく予定を強め、キルはいつもの元気一杯なお嬢ちゃんが戻って嬉しいと思いながらも、ハドラー達が帰ってきたら一言も二事も文句言う積りで。
　一人ミストだけが、なぜティファが許しただけでダイ達までもが許すのかが分からない。キル以上に心の機微に疎いミストは、ティファの影響力ばかりに目がいき、怖れを抱く。

　目の前に敵の本拠地から監視されているのは知っていても、まさか飼うだの元気出ただのと喜ばれ、ある意味この世界一番の危険人物ミ

ストから怖れられたとは知らないティファは、来た時の心の苛立ちが霧散し元気一杯にハドラーと話している。

「魔界のあ奴らの保護決まったぞ。」

「本当ですか！それは何より!!!あ！何かお礼・・・」

「いらん、あれは俺達の領分だ、貴様から礼を言われる筋合いはない!!」

「・・・つれないですねハドラー・・」

「ふん！お前のおかげで昨日と・・・五年前にも死に掛けたがな・・」

「それは大変でしたね～。」

「何を呑気に言っている!!あの書類地獄！お前も味わえ!!!」

「いや～私にはそういう事に向いていないので、できるハドラー凄いですね。尊敬して、書類に埋もれて過労死してしまったら敬意をこめて―書類仕事お疲れさまでした―と彫った墓石立てて差し上げますね！」

「しゃ・・・洒落にならん。」

ヒムの心とティファの心を和まそうかと話題振ってみれば、非常識な答えが返ってきてハドラーは溜め息をつきながら兜を被りなおすが内心で安堵している。

ティファの心は思ったより回復しているようだ。

あの地底魔城の時の様にハチャメチャな事をからりと笑って言っているティファが、自分は一番好きだ

そう！このティファにこそ今こそ言いたい！決戦の時の自分の相手は・・・

ドン!!

「ティファ遅いよ!!!」

ティファに決戦時の時の相手はという寸前に、見慣れぬ者が遮った。

「あ！ノヴァ御免・・・・・でも真偽は分かったよ！」

「そう、後でいいよ。今は帰ろう。」
ノヴァのトベルーラでの出現に、一番ティファが慌てた。この幼馴染に叱られるのが一番堪える。
しっかりとした年上の幼馴染には弱いのだ。
ティファが反省した事を確認したノヴァは、ハドラー達に向き直る。
「初めてお目に掛ります。僕はリンガイアの騎士職をしていて今はこの地の警護を纏めているノヴァと言います。魔軍司令官ハドラーとお見受けしますが、篩が終わったのならば即刻御引き取りを！」
今のハドラーと対峙し、それでも恐れげもなくノヴァは堂々とハドラーに退去勧告を突きつけた。
ティファの様にハドラー達が確約云々などどうでもいい。それよりも戦闘継続のタネをさっさと返したいと、態度にありありと出ている。

そのノヴァに、ハドラーはある事に思い至りノヴァを信じられない物を見たと凝視し、口元を戦慄かせながら言葉を紡ぐ。
「お前が・・・お前が―ノヴァ―だと・・・」
その声は震えている。ティファの実力や知識の高さのあり得なさを知っても怖れなかったハドラーの額から汗が流れている。

どうしたんだろうハドラー？
てっきりノヴァの事を―お前が北の氷の勇者と名高いノヴァ―か、位で言ってくると思ったんだけどな。
ノヴァはダイ達以外には敵味方問わずにその名が知られているので、魔軍司令官職のハドラーが食いつくのはそこだと思っていたのだが・・・
だが、ハドラーがノヴァを知っているのはそんな生易しいものではなかった。ハドラーの中で戦慄と共に刻まれたノヴァの名前は・・

「貴様が！貴様が主力を欠いていたとはいえリンガイアに攻め込んだ超竜軍団を執拗な追撃戦の果てに全滅させた―殲滅の騎士団長・ノヴァ―か!!!」

氷の勇者

「バウスン将軍・・・・ご子息は・・」
　戦車隊長アキームはやきもきしながら出城でダイ達の帰りを待っている時、バウスン将軍の子息も戦いの場に出た事を思いだし共にその身を案じる。
「初めまして、リンガイアで騎士職をしているノヴァです。」
「これは・・・私はベンガーナの戦車隊長のアキームです！まさか有名馳せる氷の勇者殿にお会いできるとは。」
「いえ、僕は勇者ダイのように世界の助けになれていないので勇者なんて・・・精々端っこを全力で守らせていただきます。一緒にお願いします、アキーム隊長。」
　爽やかに笑っていた彼が、急報を聞いてティファと一緒に出て随分経つが大丈夫だろうか？
「ご心配なくアキーム隊長、息子は柔ではありません。」
「確かに氷の勇者の名がある方ですが・・」
「それに今回はあの子と一緒です。」
「あの子？」
「はい、きっと二人揃って元気に帰って来ますよ」
　アキームの心配をバウスンは笑って宥める。きっと大丈夫
　今でも思い出される。たった数か月前のあの大戦を。

―いいですか！バラバラに戦っては危険です！必ず集団先鋒を持続させて戦います!!―
―いざとなったら僕の氷の壁で敵を分断します!!主力のいない今の内に敵を叩きましょう!!―
―行きましょう皆さん!!王国と王と民達の為に!!!―
　大戦初日、敵は主力を欠いていたとはいえ五千以上のモンスター達が山間から侵入し首都に迫ろうとした。
　それを止めに行ったのは騎士団長とは言えたった十五のノヴァであった。

王国から騎士団長兼突撃隊隊長の命を受けた時、息子は恐れる事無く名誉であると笑って受け、見事その任を全うせしめた。
ハドラー大戦の恐ろしさを知る古参兵は悪夢が蘇り、中堅達・新兵は恐ろしさに動けなくなったのをノヴァが檄を飛ばし、剣を握りしめ城門が開くと同時に一番に敵に向かって行った。
その勇敢さに、兵達は恐れながらも前に進み敵を切り伏せ無我夢中で戦った。負傷兵はノヴァが日頃から訓練していた―衛生兵―という集団が戦場から連れ出し、即座に傷に合った万能薬を使用し、一日目の味方の使者は三千の兵のうち僅か十名に満たない奇跡的な数であった。
墓を作る傍らノヴァは夜の見張りも買って出て、夜行性のモンスターに備え城壁に近づく敵を容赦なく氷漬けにして侵入を許さなかった。
二日目の日はノヴァが単独で城門を出て、精霊達に呼びかけていた。
「ちょっと大きな氷の壁を数本作りたい。」
「いいぜ！ノヴァの為だ！」
「長さどのくらい？」
「そうだね～。」
昨日と同じくらいの敵の数が来てもノヴァは慌てず、三つの氷の壁を自分を起点とした扇の様に広げ敵を分断する。その氷の長さは何と一つずつが一キロにも及び
「今です！全軍敵を打ち取りなさい!!!」
うおおお

夕刻には壁に閉じ込められた敵は全て骸と化し、ノヴァは松明をあるだけ焚かせ兵達に命じた。
「これより敵モンスター一頭残らず狩りつくす。」
そこには檄を飛ばした頼もしい勇者ではなく、敵の殲滅を宣告する底冷えをした瞳を湛えた騎士団長がいた。
精霊達の忠告で周囲の地上モンスター達は全て避難済みだと分かっているからこそ慣行し洞窟奥まで追い込みをかけ、最後の一頭が十日後に見つかり終了宣言を出した時には魔王軍からその執拗な追撃戦が口の端に上り、以降魔王軍に恐れをもって覚えられたのが、殲滅の騎士団長ノヴァであった。
時にダイ達がロモスでクロコダインを撃破し、パプニカに向かう船の中で楽しく話をしていた時の話だった。

アバンを倒しにデルムリン島に行き、その後様々な事があって最後までは自分で診ることが出来なかったが、悪魔の目玉からの多角的な報告とその結末迄聞いたハドラーは背筋が凍る思いをした。
人間は、そこまで非情になれるものなのか
戦場で命乞いを無視した事、街一つ全滅させたことはあれど、逃げる敵に追いすがり、まして洞窟奥までなめる様に探し出し屠ったと聞いた時はゾッとした。
その執拗さに苛烈さに、そして最後まで全うしたその精神性に!!
心が真っ当である者ならば、脅威にならなくなった敵は追い散らし来させなければよいものを、徹底追撃して全て殺し尽くしてのけた殲滅の騎士団長が・・まだ顔にあどけなさが残り、ダイよりは上でもヒュンケルよりの年下な男が!!
報告にあった人物像とかけ離れ過ぎている事にハドラーの戦慄はさらに増す。その幼さを残した顔とは違い、瞳によぎるあの冷たい光はなんだ!!相手の心臓すら凍らさんとする、あの冷気は尋常ではない!!
奴は本当に人間なのだろうか・・

「・・・・ノヴァ・・・殲滅って・・・何したの？」
ハドラーの言葉に、優しいノヴァしか知らないティファは何事かと少し顔を青褪め尋ねるが、ノヴァは小さい子に笑って宥める様に頭を撫でて落ち着かせる。
「ティファは気にしなくていい事だよ。ちょっと僕に、話させてね!!」
バキバキバキ!!!
「ノヴァ!!!!」
「あいつ!!」
「ポップ！あれ不味いよ!!」

話していたティファを後ろに行かせハドラーに向き直ったノヴァは、小声でマヒャドを唱え、瞬時に自分とハドラー達を囲むようにう氷の壁をドーム状に覆いつくす。
それはマトリフであっても出来ない芸当だが、氷の精霊王の加護を受けしノヴァだからこそ出来ること。
氷の壁を作った時同様に、予め敵と自分達を誰に邪魔されることなく対峙できる様に頼んでおいた。

「貴様・・・何のつもりだ・・」
「それはこちらのいう事だ、無能な魔軍司令官ハドラー。」
強さに慢心したかと問いかけるハドラーに、常の敬語を取り外したノヴァは見た物を全て凍てつかせる程の冷たい瞳でハドラーに答える。
「あんな良い子達の前で物騒な事を言わないで貰いたい。」
「ふん！己の評判が大事でこんな無謀な真似をしたと？」
「評判？全く違う、殲滅した事は今でも正解だったと考えている。そんな事よりもダイ君やティファに血生臭い事を言わないで貰いたいものだ。無謀？この精霊の数の前で負けるのはそちらだ。」
「なん・・だと・・・」
「ハドラー様!!精霊達が・・」

傲岸不遜ともいえるノヴァの言葉に答えるかの如く、突如ドーム状の内部に数多の精霊達が姿を現した！
ハドラー達はダイ達と違い最初から精霊は見えていたが、これ程の数は寸前までおらず今や精霊達の包囲網に閉じ込められてしまった。
「彼等は僕達とは異なる異界に棲んでいる。あの世とこの世を境を淡くし、精霊世界を異にせず。」
ノヴァはハドラー達の驚愕の顔から何に驚いているのかを的確に推察し答えた直後、精霊達に更に働きかける。
この言葉を知るのは精霊王の加護を持つ者だけであり、発せられた直後精霊達が加護を受けた物を全面的に助けてくれる合言葉。
「人の子何を望む？」
「あれは敵か？」
「凍らせるか？」
「凍らせて砕くか？」
数多の精霊達がクスクスと笑ってハドラー達を取り囲み―殲滅―のお伺いをノヴァに立てる。
「彼らの出方次第で。魔軍司令官ハドラー、僕はティファと違ってお前を評価しない。―塔―での騒ぎは確かにあの子に非があろうが、あの事態になる事を数百年も生きていて気付かなかった無能など評価するに値しない。」
ノヴァは吐き捨てる様にハドラーを詰る。
塔でアポロが暴走した一端がティファであっても、あの子はまだ世間知らずだ。
人間の弱さを、弱さゆえの醜さを、身勝手さを、残酷さを知らない可愛い子。
そして本当の憎悪を知らない子。
ティファは自分の大切な者達を一目の前一で失った事はなかろう。
無力故に親・兄弟・などの家族を、友人・知人などの大切な人達を守ることも出来ずに殺されて奪われる事を・・一度でもあれば、アポロの傷に触り、激怒されることもなかっただろうに。
強者として奪われず、故にこそ守られているティファの優しさは時

に自身も周りにも害ある猛毒なのだと知らない女の子。
だがハドラーは？彼こそあらゆる負の面を知っていて当然である筈の者が、ティファと同じに敵と暢気に話していたのだというからそれこそお話にもならない。
「そして今日のこの確約破り紛い。本来なら親衛隊達だけであればあの子が止めても殲滅したのだが、ティファと話さず疾く死の大地に帰れ。」
ティファ達のいる場所とは反対方向の氷を精霊達に音もなく崩し指し示す。
これは警告
まだティファと話す気なら、精霊達と共に刺し違えてでもハドラー諸共殲滅すると。
圧倒的な冷気が地面に蹲るブロック達をじわじわと凍らせていく。
数秒思考したハドラーがとった行動は

「ノヴァ!!開けてよノヴァ!!!」
「ティファ！手が!!」
「離してダイ兄！無茶だよ!!!開けてよノヴァ!!」
氷のドームを叩くティファの手が凍傷となりかかりダイが後ろから全力で抱え込んで止めている。
ノヴァが強いのは知っている！精霊王の加護があれば大抵の敵は・・・それでも超魔生物のハドラーには無茶だ！
ダイを振り切りろうとしたその矢先、ドームの反対側からルーラの光が見えた。
光の中に幽かに見えたのは、ティファの目にはハドラーの横顔がちらりとこちらを見た気がした。
真偽のほどは分からないが・・・これで!!
ガラガラガラ
「ティファ～、手が酷い事になっているじゃないか。駄目だよほら出して。」
ハドラー達が去ってすぐ、ドームは崩れ中からいつもののんびりと

した優しさをたたえたノヴァが出て来て、早々にティファの凍傷を治療する。
「駄目ってノヴァの事でしょう！心配したんだからね!!」
「大丈夫だよ。ただ単にお話しただけだからさ。」
「・・・・何の・・」
「うん？確約破り紛いはティファに免じて許すけど、まだぐずぐずいるつもりなら戦端開くって通告しただけ。」
「・・・ハドラー達帰るつもりだったと思うよ・・」
「ティファ、僕はここの警護責任があるから有耶無耶は困るんだよ。ダイ君も・・・怒ってるね・・・」
「当たり前だよノヴァ!!ティファも俺も・・・馬鹿!!」
「はは、ごめんごめん。皆さんもご心配をおかけして・・・その今の事は出来れば父には・・」
「バウスン小父様にちくる・・・」
「ティファ⁉・・・焼き菓子上げるから・・・ね？」
「言う!!」
「困ったね・・・まぁいいか。早く戻って皆さんにも手伝っていただきたいことがあるのですが・・」
「承知した。」
「うむ、行こう。」
「手伝うけど無茶しないでね。」
「あはは・・」
「笑ってごまかさないでよノヴァ!!!」

幕間―ノヴァ―

僕はいつか勇者になる

二歳くらいから物心つき、そして世界を知った。

一つはとても美しく楽しい世界

ふわふわと浮く小さい人達にこんにちわと言ってから世界が彩られた。精霊と名乗った小さい人達は皆優しくて楽しくて、いつも僕と遊んでくれてスライムやホーンラビット達と僕の間をつないでくれて遊び友達が増えていった。

―彼等―と遊ぶのはとても楽しい。

もう一つの世界は美しくない

大きい人達は皆笑っているのにどこか嘘くさくて油の中に入れられたみたいな不快感しか感じない。彼等が連れてくる僕と同い年位の男の子も女の子もどこか嘘くさくて嫌いだ。

勉学や訓練を教えてくれる大きい人達はそうでもない。だけどこの言葉を言う大きい人達は嫌いだ。

御父上はお元気ですか？

いずれ御父君の後をお継ぎになられましょう。

我が家の娘などは将来のノヴァ様のお役に・・・

五月蠅い

ノヴァ様、お友達になってあげますよ。

御1人では寂しいでしょう？

僕にはたくさんお友達がいる

五歳くらいから分かり始めた。

父さんの事を言いだす奴等は僕ではなく父さんと繋がりたいだけの、ただそれだけの者達。

その子息や息女も将来将軍職になる僕と繋がりたいだけの、ただそれだけの者達。

いつからか僕は人を避けるようになった。乳母や古くからいる家に仕えている者達を除いては、父さんが信頼して僕に付けてくれた勉学や戦いを教えてくれる人達以外の知り合いを作らず、人を寄せ付け

ない冷たい子供だと評判が立っても其れは変わらなかった。
父と家族同然の使用人達と師達がいて、大勢の精霊と小型モンスターの友達が大勢いればそれでいいではないか。
とても世界狭い自分の力を疑わずに僕は父の跡を継ぐに足る男になると張り切っていた十歳のある日、僕の狭い世界を壊してくれた女の子に会った。

友達の精霊にとてもそそっかしい子がいて、リンガイアにしかないＭＰ回復の泉に堕ちたと他の子から聞いて急いで言ってみれば、とても可愛い・・・ふんわりとしたお日様の様な笑みを柔らかく浮かべた女の子が、泉に落ちた子を助けてくれていて怪我の手当てまでしてくれていた。
僕とおんなじ子だ・・・
初めてだった。精霊が見えてきちんとお話が出来る子は。
「こんにちわ。」
僕達に気が付いたその子は笑顔と同じくらい暖かい声で挨拶してきた。
「こんにちわ・・・・僕はノヴァと言います・・」
向こうは名乗っていないのに僕は自分から名を教えた。リンガイアに住んでいる子ならバウスン将軍の子だって分かると何かしら嘘くさい笑みになるけど、どうしても相手の女の子の名前を知りたくて。
「私はティファ。」
ティファ、優しい響きで、とってもこの女の子にぴったりの名前だ！
「その・・・・ティファは見えるの？その・・」
「ん？精霊達の事？見えるし話せるよ。ノヴァ君・・・」
「ノヴァでいい！」
「・・いいの？」
「いい！僕も見えるしお友達なんだ。」
「そうなんだ！私もね、沢山の精霊のお友達がいるよ。」

「ティファは・・・・・その・・モンスターは・嫌い？」
僕の周りの友達は精霊以外にもいる。それを隠したくなくって言ってみたけど、女の子だったらショックで嫌いになられるかな・・・
勢いで聞いてみてすぐ後悔した、モンスターとも友達は流石に・・・
「うん？私モンスターとも話せてお友達になった子沢山いるよ。」
「本当！あの子たちの言っている事分かるの⁉僕も友達に沢山いるけど言葉までは・・・」
僕がティファと仲良くなるのに時間はいらなかった。直ぐに沢山話して、精霊に使っていた薬が何か聞いたら、今までにない新薬作りの一環で出来た回復薬だって言っていた。
「回復呪文で治せないものも治す？」
「そうだよ。ベホマの使い手なんて国に十人いるかいないか、そんな奇跡的な物に頼らなくても、ベホイミだけでも治せる補助薬や、回復の底上げや体力回復、後はこのＭＰ回復の泉みたいな効能を薬として作って持ち歩けるようにしたいんだよ。」
・・・・行っている事のスケールが大きすぎて付いて行けないけど、皆の役に立つ薬という事だけは分かった。
「・・・・僕も作ってみたい・・」
父さん達は騎士として凶暴なモンスターや野盗と戦って怪我をする。時に怪我の跡が残る時や、後遺症もある。それがなくなるお薬を僕も作ってみたい。
「いいの！あのね、一人じゃそろそろ限界だったんだよ！よろしくねノヴァ。」
「うん！こちらこそよろしくねティファ！」
その日から僕の世界は見る見るうちに広がった
「ノヴァ！薬草園に行こう！」
リンガイアにある薬草園の管理をしている修道士さんは親切でいろいろな効能を教えてくれて、帰りに余り物だと乾燥した薬草まで持たせてくれた。
「いいお薬が出来ると良いね。」
優しく僕とティファの頭を交互に撫でて、温かい言葉までくれた。

「今日は村に行ってみよう!ちょっと遠いけどいいかな?」
睡眠を誘うムーラン草、火傷・麻痺・凍傷に効く薬草の群生地に行く時、村の子供達が案内してくれた。
「そこ足場悪いから気を付けてよ。」
「もう少しだから頑張って。」
「見えた!よかった、まだ残ってら〜。」
頼んだだけでお金も払っていないのに村の子供達は楽しそうに案内してくれた。
途中でティファが持っていたクッキーを上げただけで、後は別れた際にお礼の言葉を深々と言ってさよならした。
「ティファ・・・なにも払ってないのにいいのかな?」
「ノヴァ、あの子たちの親切をお金に変えるのは間違いだよ。良い薬作りたいっていう私達の夢を応援してくれたんだよ。」
・・・見返りを求めない優しさ・・・いつ以来だろう?僕が大切だと思っている人達以外からそんな優しさを貰ったのは・・・

人の醜さをずっと見てきた
媚びへつらい、下の人達に横暴で、弱くて酷い人達を
そんな人達が嫌いでいつしか僕は閉じこもった。周りは大半の人間は弱くて相手にしなくていい、僕はこの強さと精霊とモンスターの友達と家族だけがを守れればいいと・・・そんな酷く歪んだ世界を、ティファは優しく壊していく。
新しいところに行く度に、沢山の人達と触れ合い僕ももう少ししたら嫌っていた醜い者達と同じになる所だったのだと思い知る。
勝手に知らない人達を声もかけず知ろうともせず、自分の価値観だけで決めつけ貶める最低な人間に。
きっと泉でティファと会わなければ、僕は酷く傲慢で驕り高ぶった人間になって、いつかそんな僕に嫌気がさして精霊もモンスターの友達も離れていったかもしれない。
ティファは僕にとって光のような存在だ
暗い道に落ちかけていた僕を明るい道を指し示してくれた人。

そんな僕の前にとても眩しくて凄い人が来た。魔法力に溢れたその人は、勇者アバン様のお仲間マトリフ様。
僕が精霊と話せると言った事に父さんが心配して、同じく精霊と話せるマトリフ様を呼んだらしい。
僕の友達に悪い子はいないかと確かめる為にと言っていたけど、大きくなった僕はその時の事を笑って思い出す。
マトリフ様の付いた優しい嘘
きっと精霊と話せるっていう僕の事を心配した父さんが真偽を確かめたかったんだろうけど、まさか本人に嘘を言っているのか疑っていると言う訳にもいかない、咄嗟に出た言葉。
けどそんな話は直ぐに隅に追いやられた。ネイと偽名を名乗ったティファと僕が話していたホイミに対する話を聞いて、自分も薬作りの仲間に入れろと言ってきた。
こんな凄い人と薬作りが出来る！嬉しくなってその日は眠れなくて、次の日まだリンガイアにいたマトリフ様にくっついて行ってあちこちの薬草群生地や、ティファと書き溜めていた資料をお見せしたらうなりながら凄いを沢山言ってくれた。
薬の効能と混ぜ方も直ぐに覚えられ、試薬品も作られ精霊達もすごい人間だと称賛して、そんな凄い人と入れて僕は楽しい日々を過ごしていた時に転機が訪れた。
友達がバシリスクの群れに襲われているのを助けて、無我夢中で逃げたけどお腹に熱い衝撃を受けて真っ暗になった。
・・・死なないでよ・・・馬鹿・・・ノヴァ・・・
温かい涙が僕の頬にかかる。ティファ・・・泣いているの？ティファは笑った顔が一番好きなのに・・・
「馬鹿は酷いな・・・」
抗議しながら目を開けたらティファにとても叱られた。
「馬鹿だよ！それも大馬鹿！なんで逃げる時！ヒャド唱えなかったの⁉」
そうだった、僕の友達は氷系の子が多くて・・・何かあれば弱いヒャドにもヒャダルコ並みの力かしてくれるって言っていたのを忘れて

た。
「死にたくなかったら頭使いなさいよ!!使えるものなんでも使って・・次は私とマトリフおじさんがいるとは限らないんだからね!!!」
「・・・・ごめん・・・・」
本当にティファの言う通りだ。僕は弱い、ただ同い年よりも少し強いだけの子供だと思い知らされた。
ただ逃げる事も儘ならない・・・弱い子供だった。
そんな弱さを僕は変えたいと強く願った
ティファの強さを知って。
僕はバシリスクはマトリフ様が倒したのだと思ったが違うと言われ―本当の事―を教えられた。ティファが一刀のもとにバシリスクの群れを惨殺したのだと。
切り口から怒気が伝わる程の怒りに任せて殺したのだと。
殺す・・・あの優しいティファにふさわしくない・・・それは、その役は・・
「僕は勇者になります!今度は僕が大切な人達を守れる強き勇者になります!!」
マトリフ様に誓いを立てる
ティファの手が汚れないように敵は全て僕が滅する強さを持った勇者になると、心の中で自分と、自分の中にあるティファの血に誓いながら。
その日を境にティファは来なくなったが手紙と心で繋がりは絶えず、それを励みに僕は自分を鍛えた。文武両道を目指し、討伐に積極的に混じり、目指す道を歩いていたらある日突然、本当に何の前触れもなく、氷の精霊王ハイキング様が僕の前に現れた。
「優しい子のようだが、なぜそれほど強さを目指す。」
近頃僕の鍛錬の多さに心配した精霊達の声を拾い上げたようで、僕に興味があったので見に来たらしい。
精霊王ハイキング様に嘘をつくのは嫌で、僕はマトリフ様と自分に誓った強さを目指している事を全て話した。
綺麗な方達は、血生臭い道を行こうとしている僕に失望しただろう

か？
「険しく、汚れた道だな。」
「構いません。あの光を守る為なら僕は何でもします。」
「なんでもか？」
「はい。」
「くっくっく、潔い事だ。惚れた女の為か？」
「惚れ・・・違います・・・・・ティファはそんなんじゃありません。」
　自分はティファが好きだ。でも惚れたとは違う、家族とは違う・・・もっと身近な・・・身近じゃない・・
「あの子は僕の半身です。」
　ティファがいなければ、きっと今の僕はいなかった。
　暗い道を引き返させてくれた、今の僕を作り上げてくれた僕の半身・・・表の世界を知れたけど、僕は暗い道を歩くのも厭わない。ちゃんと表の道も歩きながら、裏の道で僕はティファが憂う事全てを消してあげたい。
「なんとも欲深な・・・・この身は数万年の時を渡ってきたが、これ程献身的で欲深く血生臭い思いを知らぬ。それ程の思いをその身に宿してもかほどに美しい魂を持った者も・・・・ノヴァ、我の加護を受けよ。さすればその身に宿る―血―の力が活性化し、今の自分が弱いと思う程の力が目覚めよう。」
「加護・・・それに血とは・・・」
　ハイキング様の言葉に困惑した。血生臭い思いを抱く僕の魂は真っ黒だと思っていた。みんなは優しいから我慢していてくれたんだと思っていたから・・・
　僕の魂は煌めく氷と同じ色だと教えてくれても、血とはどういうことかは教えてくれなかった。
　けれど何となく分かった。それは僕とティファの心を繋げてくれたティファの血だと。
　あの子の事を僕は詳しく知らない。本当の名前とモンスター島・デルムリン島に兄と鬼面道士の三人で住んでいる女の子以外の事を。
　それでも構わない、優しいティファは血も特別なんだ。

マトリフ様に相談して、父さんの了承を得て僕はハイキング様の加護を受けてすぐに力が溢れた。
それは熱くて・・・とても甘美だった
頭の先から足のつま先、指先までに溢れた力は暖かい。まるでティファの笑みを見た時と同じ温かさが僕の全てを満たして、そして僕を強くしてくれる。
「その力を更なる高みに昇すも腐らせるも其方次第、好きにするがいい。」
「はい、ありがとうございますハイキング様。」
僕は益々鍛錬し、時に未踏の迷宮にハイキング様が連れて行ってくれた。
「神子がされた事の焼き直しだが・・・」
一度ぽつりと言われていたが、どういう意味かは教えてくれず忘れろと言われたので追及しなかった。
それよりも強くなることが肝要で、いつしか王国内で僕に勝てる人がいなくなった時僕は騎士団長を拝命した。
それから程なくして夢で告げられた悪夢を回避すべく、周りも備えて切り抜けることが出来た。
敵は須らく滅する
あの誓いを僕は果たしたい
ティファの敵・障害は僕が滅する。あの光がどこまでも伸びていかれる様に

サババフラグなんて滅べ！

ハドラー達が帰ったからと言って私達は一息つける訳じゃあない。
寧ろ料理人としてはここからが本番だ！
「そちらの治療は終えた！包帯斑ぐずぐずするな！」
「黄色布はオレンジ布の治療終えてだ！ぼやっとしていると海に叩き込むぞ!!」
「内部骨折している！骨接げるものは・・・」
出城は今や野戦病院だ。それでも滞りなく治療できているのは間違いなくリンガイア兵の皆さんのおかげ。
薬作る斑、それぞれの怪我具合によって分けられて治療する班、治療を終えた後包帯や添え木をする班に分かれて効率的に治療が施されて行く。
布の言葉が聞かれたけど、あれは現代のトリアージを模した物。
赤が最優先、次がオレンジ、黄色、緑の順。最悪は黒だけど今のところ黒はいない。
黒は死亡か、助けられない為・・・いなくて心の底から安堵する。
私は薬作りを、ノヴァは現場を取り仕切ってダイ兄達も懸命に手伝ってくれてる。
瀕死の人の様態が安定したのを見計らってクロコダインと私のガルーダの脚で大きめのシーツをハンモックの様にして、後方にあるバウスン小父様のいる砦に低空引くで輸送している。
敵からの襲撃を懸念してヒュンケルとダイ兄がガルーダの背中に乗って護衛している。向こうも一枚岩じゃないし、もしかしたらザボエラが逃亡して手柄稼ぎ狙っているかもしれないと思うとあの時消しておければ憂いなかったのに。
マァムさん、メルルさん、べほちゃんは回復呪文いかんなく発揮してくれてるけどやり過ぎないように古参の方達にそれとなく見てくれるようにお願いしたら、本当なら私達には休んでいて欲しいって言われたけどそうもいかないでしょう。一応瀕死の人はいないけど、重傷者がいつ悪化するか分からない。とりあえずオレンジ布の人まで

全員治療終えたら順次キメラの翼で軽傷の人達送って、残りはガルーダたちにがんばってもらおう。
ん？治療もいいけど最大にして最悪なこと忘れていやしないかと？
まさか忘れいませんとも！此処はサババですよ、二度言いますがサババです！
もうここの所だけはダイ兄の記憶消失と同じくらい阻止もんですとも!!
ダイ兄の時は寸での所で変質者さんの邪魔入りましたが!!ここではそうはいかせませ・・・
「ティファさん！パピィと一緒にこの辺の偵察・・・・」
「却下!!チウ君！それ以上言うならパピィ君とスラちゃんと君を問答無用で筒に入れるよ!!もう少ししたら軽傷さん達キメラの翼で送ってもらうからそっちして!!」
「・・・分かりました・・・」
「砦に全員戻ったらその時は君とパピィ君に上空哨戒してもらうからね。」
「ノヴァ!!」
「本当ですかノヴァさん!!分かりました！パピィ達に伝えてきます!!」
・・・びしっと敬礼してチウ君張り切って行っちゃったよ・・・・
「・・・・・ノヴァ・・」
「ティファ、無理に止めても納得しないよ。それよりも役割があった方がいいでしょう。大丈夫、精霊達にも応援頼むから。」
「・・・・むぅ・・・」
サババ最大の出来事は私の中では篩じゃなくてチウ君を死の大地に偵察に行かせない事。知識で海底の中に魔宮の門があるの知っているのに、チウ君の命を掛けさせるわけなし。仮に知らなくとも私が単身で行った方がいい。この一行の中で隠密行動取れるの私が一番だしね。
ハドラーに抗議に行く前にチウ君にがっつりと釘は刺していった。

「チウ君、獣王の笛クロコダインから貰っているだろうけど、その笛で飛行モンスター呼んで偵察しようかなとかしないでね。」
「いや・・・はっはっはティファさん・・そんな無茶僕しません・・」
そんな言葉は信用しませんとも。二段構えでチウ君の姿見掛けなかったら直ぐに探してほしいとメルルさんにも包帯斑で手が空く人にも、皆にお願いして行ってダイ兄達と戻ったらメルルさんに懇々と説教されてるチウ君発見。
やっぱり偵察に行こうとしてパピラスと勝負して、何故か近くにいたスライムを配下にすべく勝負したら、あっという間に勝ったとか。
そして死の大地に飛び立とうとしたところをチウ君の姿が見えないと速攻で探しに来た兵士さんと、占いの直感がますます冴えたメルルさんに見つけ出され三人とも御用になったと・・・・チウ君!!
「偵察なんて行かないで!君が一人で行っていい場所じゃないんだよ!!!」
地下には大魔王達がいる所に偵察に行ってタダで済むはずが無い!
「ティファさん!それでも僕は皆さんの・・・」
「チウ君!!!・・・・拘束されたい?」
冷ややかな瞳でチウを見据える本気のティファに、誰も何も言えなくなりさしものチウも震えあがる。
「ティファ、その位にして上げなよ。チウ君、君が仲間にした子達は中にいていいから君は包帯巻きの手伝いをして。あの子達は精霊達に見てもらうから大丈夫、ここの兵達は僕がモンスターを友達にしているの知っているから理解ある人大勢いるからね。」
「・・・・分かりました。」
心底怒っているティファのフォローをしたノヴァの言葉にチウも落ち着き、自分がしようとした事の危うさもヒュンケル達に優しく説かれ悄然とし、ティファ達に詫びを入れる。
ちなみに原作通り死の大地に行っていたらチウは速攻で死んでい

た。
今のフェンブレンの機嫌が最悪で、敵を弄ぶより憂さ晴らしの為チウとスライムとパピルスを瞬時に惨殺をしていただろう。
ティファ達にいいようにされ死の大地に戻った自分達を、死神キルバーンが待ち構えていた。
「君たちのせいでお嬢ちゃんからとんだとばっちりを言われる羽目になっちゃったじゃないか。しっかりしてよね。」
親衛隊達の不甲斐無さにいい迷惑だと主の前で抗議され面目丸つぶれもいいところだ。
「・・・ティファが言ってた変質者死神ってあんたの・・・」
ギロリ
ヒムが思いいたったティファの発言の真相を、選りにもよって本人に聞こうとし死神の不興を本当に買ってしまった。
「その言葉はね、あの子が言うから僕は許しているんだよ。ハドラー君の配下の君が言っていい言葉じゃ～ないね。」
言葉遣いは優しいが、重苦しい殺気が弱った親衛隊達に襲い掛かろうとしたのをハドラーが守るように前面に立つ。
「済まなかったキルバーン。」
ティファの時とは違い、兜こそ取らなかったがキルにしっかりと頭を下げて詫びを入れる。
「うん、ハドラー君が詫びてくれるならそれでいいよ。次は気を付けてね、シ～ユ～。」
ハドラーには優しい笑顔で労い飄々と去っていき、重苦しい空気を一変させるようにハドラーも次は気を付けろとヒム達に力強い笑みを向け治療するぞと部屋に連れて行き、フェンブレンだけが一人残った。
先程の光景が、ヒム達がどう感じたかは知らないが、フェンブレンは全てティファが元凶だと忌々しく感じた。
あんな綺麗ごと、戦場で通るはずが無い。戦闘員だろうがそうでなかろうが関係ないではないか！
もしも敵の誰かが偵察に来たら―俺―がなます切りにしてやる

ティファの阻止行動のおかげで、チウ達は命拾いをした。

再会は嵐の予感

僕本当に哨戒に出してもらった！

「パピイ、スラちゃん!!怪しい奴いないかしっかり見張ろう!!」

「―はい！―」

「―了解!!―」

チウの指示に、獣王遊撃隊なる隊員一号二号になったパピラスとスライムは意気揚々と応える。

同じモンスター同士、チウの温かさは笛で呼び出された時即座に分かっていたが、パピラスは強さはどうかと挑みかかり、回転しての体当たり一撃で負けてしまった。

スライム事スラちゃんは、勝負というより仲間とはぐれて久しくうろうろしていたのを偶々あの場に居合わせただけで、チウのデコピン喰らった時は面食らう。

「これで僕の勝ちだよ、君は僕の配下だ。配下の事は隊長の僕が面倒みる事になる。お腹すいてそうだからこれをお食べ。」

美味しそうなリンゴを何の躊躇いも無くくれて、スラは半月ぶりに心の底から安堵して泣きながら貪り尽くし、一生この人の配下になると心に誓った。

「僕は今戦っている勇者達の仲間で、あの人たちを助けたいんだよ。」

その為に本戦力ではないけれど、遊撃隊を組織して死の大地に偵察を・・・とは最後まで説明して飛び立つ前に鬼の形相のメルルと砦の兵士に見つかり御用になって、カンカンに怒られた。

どうしてばれたのか聞いたら直ぐに分かった。

「ティファさんが！チウさんは優しくて仲間思いだから、自分達を楽させるために敵の本拠地の入り口探しに行くかもしれないと教えてくれたんです!!!」

そこからは説教の嵐

「貴方に何かあれば私は悲しいです！ダイさん達も・・・それに・・・ティファさんの心がどうなるかチウさんだって分るでしょうに・・・・」

泣きながら言われた言葉は、最後が特に重く胸にのしかかった。

僕が死んだら?ティファさんの心は・・・
「ごめんなさい・・」
僕は、どうしてこう考えが足りないんだろうとティファさんやヒュンケル達にも諭されてようやく気付く。
僕に何かあったら・・ティファさんの心もその時・・・
「―隊長!!鳥の獣人がいる!―」
「―あの人?魔族?もいる!!―」
へ?鳥の獣人に・・・・あれは半魔の!!それにもう一人・・・あれは、あの人達は!!!

敵は・・やはり敵なのだろうか・・・・
ハドラーの親衛隊達の戦いで確約が敗れかけた事に落ち込みながらも治療をし真相分かった今でもティファは落ち込む。
全員死なず、後方砦に最後の一人を連れてきた途端疲れと共に悲しみも押し寄せる中、扉の物凄い開閉音と共に二階奥の治療所まで通る声が響き渡る。
「ティファさん!!!ダイ君何処!!!!」
けたたましチウの声がダイとティファを探している。声が物凄く慌てて。
あの様子では怪我や敵が来た類ではなさそうだが・・・
「チウどうしたの!!」
チウの呼びかけにダイが先に出る。
「お・・・落ち着いて・・・聞いて・・」
「や、チウの方が落ち着いてね。」
「そうだぜチウ、そんなんじゃダイだって分かんねぇよ。」
「実は・・・今さっき!!」
「そこからは私が自分で言ってもいいかね?」

チウの慌てぶりにダイと一緒に出てきたポップが落ち着かせようとすると、落ち着いた深みのある声が割り込む。
これは・・・この声は!!!
「父さん!!!」
ダイとポップが声のする扉の方に目をやると同時にティファの驚いた声がした。
「父さんどうしたの?よくここが分かった・・・・あ、ティンクが教えたんだ。」
「えへへ、ティファ、お父さん―達―連れてきちゃったわよ。」
「ああ、ティンクがお前の居場所を教えてくれてここまで来れた。」
そしてチウに連れてこられたのだと。
ダイとポップは固まり、対照的にティファは何の拘りもなくバランに近づき素早く脈をとる。
秘密の部屋で熱を出したバランが心配ですぐさま身体チェックだ。
「私はもう大丈夫だティファ。其方と―あの者―のおかげでな。」
ザムザの事はぼかしながら、バランは優しくティファの頭を撫でるのをダイは羨ましい。
ちょっとティファ!どうして父さんと仲良くなってるの!!俺も・・・俺だって・・
やはり十日も一緒に入れ親子関係を築けたのが大きくバランは素直にティファを撫でられるが、ディーノも撫でていいものかと躊躇いが生じる。
触るなと振り払われたら生きて生きる意欲零になる!!
「あのよティファ、ヒュンケルの時とおんなじか?」
「んみ?」
「俺達のいないところでその・・・」
「うん・・・・父さん助けて十日間一緒だった。」
「そうか。だってよダイ、お前もゆっくりどうしたいか考えな。」
メガンテした相手が目の前にいてもポップは平然とし、ティファがバランと打ち解けている理由を察して聞いてみれば案の定であった。
自分達の知らないところでは、余りよろしくないがティファの十八

番だ。
だがバランはあの時点・・いや、今も大逆者であることに間違いはなく
ちらちらと息子が見ているのは分かるがその前にティファに引きさわせなければいけない者達がいる。
「でもチウ君よく父さんの事分かったね。」
「いや・・・塔の時の水晶の映像に・・・・」
「あれ?あれって父さんの・・・」
「ティファ、お前に会わせる者達がいる。入れお前達。」
キルが渡した水晶の投影時・・・出てきたのは・・さっきティンクはこう言った
お父さん―達―と
入ってきたのは・・・・
「ガルダンディーさん・・・・ラーハルトさん・・・・」
自分がよく知る二人が入ってきた・・・

歩いてきた道が繋がる時①

その人達はいつも三人でいたはずなのに・・・
父さんの呼びかけで、入ってきたのは二人。鳥の獣人・ガルダンディー、半魔のラーハルト二人・・・・竜の血で蘇った？精神力の強い人達だから早くなった？でもそしたら・・・
「ボラホーンさんは？」
ぽつりとしたティファの言葉に、入ってきた二人はみじろぐ。
矢張り我ら両名のみが蘇った事を、この子供は見逃さない・・・
ダイとポップもティファと―三人―の仲を知っているだけに二人しかいない事態に焦りを覚える！
ポップの時の様に竜の血の奇跡が働いたのだろうが・・・三人いなければティファがますます傷つくではないか！実は三人蘇り、合わせる顔がないとあのグレートオーラスが言って逃亡しているのならば早く探しに！
「ティファ!!!」

ダイ達の奇跡的な再会は、ノヴァの悲鳴にも似た声に斬り裂かれる。
断りもなく砦に入ってきた三人を一瞥したきりノヴァは何も言わずにティファを抱き上げ奥に戻る。今は声を出すのも惜しいとばかりに
「ちょ・・・ノヴァどうしたの!!」
礼儀をここまで欠くノヴァに驚くティファに、さらに驚く言葉がノヴァから発せられた。
「重軽傷者問わずに大勢の人達が毒化したんだ。」

最初に気が付いたのはベほだった。小さい体を駆使してひしめく患者たちの様態を観察していると、軽症者がいきなり震え出し、痺れ毒に当たった症状となりすぐさまベほは患者の下にマァムを引っ

張って症状を見てもらい、キアリクが出来る者をすぐに呼んでもらい治療したが、周りも一様に同じ症状になり、治してもすぐに同じ症状になる。
どう見ても異常事態だ！本来ならば麻痺解除呪文で治るはずが・・・
「・・・推測だけど、傷口から入ったクィーン・アルビナスの針が見つからないから中で悪さしてるんだと思う・・」
ヒュンケルが撃ち落とした針は鎧の隙間に一本あったから見せてもらったけど、原作よりもさらに細くて小さかった。
血が流れている間は痺れ毒も流れ出て症状が出ずに、反対に傷が塞がった事で毒が本来の役割をはたしていたら…これ不味い!!痺れをとるために全身キアリクしている間に他の人が痺れ毒全身に回って神経や呼吸器までに行ったら死んでしまう!!
「・・・ノヴァ、毒の万能薬確か・・・」
「全身にいきわたるようにしてある。」
「今から痺れ毒に特化したのは？」
「・・・・マトリフ様の頭脳があれば・・」
「そう・・・」

バン！

勢いよく扉を開け、ティファは外していた眼鏡を再び掛けなおす。
私を全て脱ぎ捨て料理人のティファになる為に
「ポップ兄！裏にいるマァムさんとメルルさんを至急呼んできて！ダイ兄はレオナ姫を！ノヴァ、そのままキアリクを出来るだけ大勢の人達に掛け続けて!!手元にある痺れ用の万能薬を薄めて症状が出ていない人にも飲ませて！チウ君、ヒュンケルとクロコダイン探してきて此処に呼んで欲しい。」
「分かった！」
「レオナだね、行ってくる!!」
兄達を始めとし、誰もティファの指示に疑問を持たずにすぐさま実行に移す。先程の少女とは思えぬほどの迫力に、バラン達は気圧され

ながらもその光景を黙ってみている。
　ティファの真剣な表情が、ただ事ではないと告げている。
「ティファ！一体何があったのです？」
　今後の打ち合わせをしていたレオナは、ダイのただならぬ様子に打ち合わせていたバウスンも伴い息せき切ってティファに尋ねる。
　走って辿りついた時、ティファは机をリングから取り出し書き物をしていた。
　一秒でも時間が惜しく、レオナの呼びかけに一旦手を止め顔を上げる。
「姫様、砦の怪我人の大半が痺れ毒に見舞われています。」
「それは！直ぐにキアリクを!!」
「いいえ、それでは根本的な治療にならないのです。」
　ティファは取っておいたアルビナスの含み針とその特性をレオナに話す。
　アルビナスはヒュンケルを威嚇し足止めする為に、あえて痺れる事を明かし警戒させたのがここでは功を奏した。
「そんな・・・それではキアリクを全身に・・・」
「それでは間に合わないものが出て死人が出ます。実は少し前に毒用の万能薬開発に成功し、マトリフ様の力があれば痺れ特化も出来るのです。」
「では・・」
「その為にこの砦の全指揮権を一時私に預けて欲しいのです!!」
　痺れの万能薬を作る間の対処法、必要な道具の買い付け、その他諸々の事を指示する為に、レオナのお伺いをしている時間はない！
「ティファ!!」
「おい!!」
　さしものティファの発言にダイとポップですら顔色を変える。自分達も王族と接していくうちに、ティファの今言った事に発言の大きさが分かってしまったから。
　如何に勇者の妹とは言え、自分達に指示を出すのと一つの砦の指示を出すのでは全く違う！

「分かりました。」
だがその言葉を、レオナは冷静に受け止める。
「バウスン将軍、勇者ダイ一行とみなに告げます！パプニカ王代理レオナ王女の名の下に、今よりのこの砦全員は勇者ダイ一行の料理人ティファの指示に従いなさい!!ティファ、貴方は正しいと思う事全てをしなさい。」
「有難く!!早速、メルルさんはベンガーナのデパートに。コンシェルジュのアクバルさんにこの手紙をお届けください。中身はデパートに在庫がある八割の痺れ毒に効く薬草と薬作りに使う道具も同じくらい売ってもらうように書いてあります。キメラの翼を渡すので父さん!!」
メルルに指示を出しながらティファは急にバランを呼び、部屋の隅でガルダンディーとラーハルトと邪魔にならぬようにいたのだが、注目を集めて驚く。
「ティファ・・・彼等は・・」
「姫様、今は黙認していただけませぬか・・」
「私は・・」
「姫、ティファも、我らリンガイアの民は彼等を敵視しない。だから安心して指示の続きを。」
リンガイアを攻めた事でティファもレオナもバラン達をバウスンが一時でも見逃してくれないかと見た瞬間、察したバウスンが先に許可を出す。
理由はパプニカでノヴァが話したのと同じだ。
「分かりました。父さんこちらに。」
「・・・うむ・・・・」
バウスンの言葉にバランは驚いたが今はそんな時間はないようだと直ぐに動く。
「メルルさんの護衛をお願いします。」
「な！ティファ・・・」
「父さん、魔王軍も一枚岩ではないようです。この機に乗じてあちこち動く私達の誰かを人質に取らんとするものが出てもおかしくはあ

りません。その為と、メルルさんがデパートで物資を待っている間にテランの回復の泉で、この水瓶一杯まで入れて来てください。その後デパートに戻ってメルルさんと戻ってきてください。」
「分かりました！」
「・・・・そなた・・・・良いのか？」
　ティファの指示にメルルはすぐさま頷くが、そんなメルルにバランの方が戸惑う。先の戦い時、自分はダイとティファ以外全て殺し尽くそうとしたのを忘れているわけではあるまいに。
「龍の騎士・・・いいえバラン様！ティファさんとダイさんは貴方を許し助けることを決め、私達も貴方達を信じる事にしたのです。ティファさんが貴方を信頼しています。ですので、私も信じます。」
　そこにあるのは信頼、ただその一言に尽きる。自分もあの戦いの全てを見ている。バランの憎しみも悲しみも苦悩も、罪を自覚した時の絶望も、そしてティファとダイがすくい上げた事を。
　そして人間と敵対しないと言ったバランの言葉を自分も信じようと。
「分かった。ティファ、全力でこの娘を守ろう。」
「行ってきます！」
　指示を受けた二人は手紙とマジックリングを空ぞれ受け取り、往復分のキメラの翼を受け取りすぐさま出掛ける。
「ダイ兄はこの手紙をもってベンガーナ王様に会ってきて。自国のデパートの重要品をほぼ買い占めるから許可とってきて。デパートの手紙には事後で許可貰うって書いておいたらから慌てなくて大丈夫。」
　書き終えた手紙を封書に入れ蜜蠟で封をしダイに渡す。
「手紙を読み終えたらもしかしたらベンガーナ王は無償で出すっていうかもしれないからその時は黙って受けて。お礼はこの世界を救う事で払おう。」
「分かった！」
「チウ君はおじさん呼んできて、詳しい事はこの手紙に全部書いてある。」

「分かりました！」
「ポップ兄はパプニカに行って、王城から何人かキアリク使える人貸してもらえるか聞いてきて。全員いいって言われても・・・後ロムス様貸すって言われてもそこは断って来てね。」
「任せとけ！」
「あと・・・レオナ姫、三賢者はキアリク使えますか？」
「大丈夫よ！エイミとマリンを・・」
「姫様、三賢者で一番―誰―がキアリクが得意ですか？」
「っ！アポロね・・・けど・・」
「ポップ兄、エイミさんとアポロさん二人お借りできるかも合わせて聞いて。駄目ならせめてアポロさん一人で。」
「ティファ！・・・けどよ。」
「分かってる、おじさん辺りでしょ私とアポロさん会わないようにしたの。後でおじさん説得するからお願いします。」
「・・・分かった、行ってくる!!」
ティファだとてぼんくらではない。アポロと一度も会っていない事、城内が自分に気を使うというより刺激しないように遠巻きに見ていた視線の意味で何となく察した。
大魔導士が手を回して自分を守ってくれているのが。
感謝しているが、この緊急事態には使える人手はいくらでも欲しい！
「兵士の皆さんは痺れが特に酷い人を部屋の最前列に移動を!!」
「薬が作れる空間と、直ぐに届けられる経路の確保を！」
「大勢の人達が直ぐに来ます、大まかな説明だけしか受けていないので詳しい説明が出来る人を！」
「マァムさん、ロモスの迷いの森にある毒に良く効く薬草の場所は？」
「知っているからすぐに取ってくる！」
「お願いします！護衛にヒュンケルお願いします！」
「承知！」
・・・・これで全部か？必要でみんなに回せる仕事は・・・
「・・・ガキンチョ、その・・」

「俺達に出来る事はないか？」
　ティファの行動に、口を挟まなかった二人が自分達にも何かできる事はないかと尋ねる。
　自分達もティファの役に立ちたい！
「ガルダンディーさん・・・分かりました！ガルダンディーさんは・・」
「さんいらねえよ。」
「・・ガルダンディーはこの城に近づく敵いたら容赦しないで！これ・・」
「筒・・・これって!!」
「ルード君・・・・出してあげて・・」
「行ってくらぁ!!!」
「ラーハルトさんは手先は？」
「器用な方だ。」
「そしたら薬作りの時は手伝ってください。その間は患者の皆さんの移動や場所作りの用意を・・・・皆さん・・・・」
　半魔のラーハルトを受け入れて欲しいとティファが顔を上げれば、先手を打たれた。
「私はバウスン将軍の副官でホルスと申します。よろしくお願いしますねラーハルト殿。」
「俺を・・・分かった、俺はバラン様の配下ラーハルト。よろしく頼む。」
　ホルスの導きにより、ラーハルトはすぐさま兵達と行動を共にする。人間だなんだだの、今は時間が惜しいとリンガイア医療チームは燃えている!!
「ティファ、貴女はどうするの？」
「少々あちこち動きます。一人当てがありますが、私は別件でその人に帯同できません。ガルーダに乗ってこさせるのでそれを見印に信頼してください。」
「・・・・せめて容姿は？」
　・・・・・・・・どうしよう、ザムザさんモシャス出来るの知ってるけど容姿聞いてなかった

歩いてきた道が繋がる時？

―メルルとバラン―

早く・・・早く行かないと!!

「バラン様！ベンガーナの入り口で降りて歩く時間が惜しいです！デパートには直接キメラの翼で屋上に降ります。」

「待て、あそこは確かティファが王城並みのガードをしていると・・・直接降りて警備の者が来ないのか？」

「来ます。」

「では・・・・」

「ティファさんが緊急事態時の言葉を言えば通してくれると教えてくれました。」

「あの子が・・・分かった、行ってみよう。」

ティファの言葉が本当ならば、この娘に危害は加えられまいと判断し、バランはメルルと共にデパート屋上に直にキメラの翼で降りればあっという間に警備兵に取り囲まれた。

バランにとっては数にもなっていないが、メルルは震えそうになる体を両手を握りしめ叱咤する。戦いに身を投じても矢張り大勢の人に取り囲まれると怖くて言葉が上手く出なくなる。だが、今はそんな事を言っている場合ではない！大勢の患者と自分を信じて送り出したティファさんが待っている!!

「き・・・緊急レッドコール！コンシェルジュ部門アクバルさんに至急お取次ぎを!!」

震えてしまう声を押し出し、メルルは力の限りティファに教わった言葉を叫び上げる。

この言葉はＶＩＰ会員が本当に緊急でデパートの品が必要に迫られた時のみ屋上に直乗りする時の言葉です。屋上にいる警備兵さんにも伝わりますよ。

「・・・・貴方は当人か？」

「違います！私は・・・・」

「これはメルル様！レッドコールで呼ばれましたが・・・・一体・・」

「ロシナンテさん!!あぁ・・・・これをティファさんから!至急アクバルさんに!!」
緊急コールは即座にコンシェルジュ部門に報が入り、どうしても手が離せないアクバルの代わりに来たのが、コンシェルジュ部門の中堅ロシナンテだった。
見知った者が来たことで、メルルの緊張の半分が溶けかける。
彼ならばすぐにティファさんの言った事が伝わるはずだと、縋る思いでロシナンテに取次ぎを願う。
「かしこまりました。その前にメルル様、そちらの騎士様は護衛の方ですか?」
「この方は・・・・ティファさんの父君で騎士をされているバラン様です。」
「そなた!」
「なんと・・・ティファ様の・・分かりました。メルル様同様バラン様もどうぞこちらに。」
メルルが嘘をついているように見えず、仮に嘘を言っても後日ティファ本人に確認してしまえばバレル嘘を言うはずもないと踏んだロシナンテは、バランの身元を一応信じ、警備兵を引かせて二人をコンシェルジュ部門のゲストルームに通す。
ティファの父と堂々と紹介されたバランは少々狼狽したが次第に落ち着き、メルルをちらりと見る。か細く先程も大勢に取り囲まれただけで震える娘が、場合によっては肝が据わることに感心する。ティファは、良き友人に恵まれているようだ。

「メルル様、お出迎えもできずに申し訳ありません。」
「アクバルさん!こちらを至急!!」
「承りましょう。」
バランよりもいくらか上の男が、ティファからの手紙の封蠟をナイフで斬り裂き取り出し、真剣に読み進める。
コンシェルジュ部門の長アクバルは、中身を読み終わると直ぐにメルルに向き直る。

「メルル様、この手紙に書かれている物全てを、大至急集めさせましょう。貴女はその間休んで英気を整えてください。」
「いいえ！私もお手伝いを・・・」
「メルル様。」
少しでも早くティファさんに物資を届けたい。
あの人達が死んでしまってはティファさんが傷つく!!
急く心がメルルを焦らせ、手伝いを申し出ようとするがやんわりとアクバルに止められる。
「貴女は物資が集まった後にやる事があるはずです。この手紙にある必要な物が緊急に使われるならば、沢山の傷病者がいるはずです。物資を取り揃えるは我らデパートスタッフの務め。その先は我等にはできませぬ。その先の為に、今はご自愛を。」
「アクバルさん・・・・分かりました。」
「はい。ではロシナンテ、メルル様とこちらの・・・」
「申し訳ないが私は少し他に用がある。そちらをすぐ終え戻るがまた屋上に直接来ても？」
「かしこまりました、警備兵にもうし伝えましょう。」
「バラン様・・・」
「案じるな、私の敵になる者は今は表に出まい。其方も体を少し休めよ。」
「はい、バラン様お気をつけて！」
「行ってらっしゃいませ。」
あの子は・・・様々な者と繋がっている。
自分の半分にも満たない我が子は、人間社会の高い位置の者達と繋がっている。
不思議なものだ、そんな子が知らずとは言え我等と縁を結んだのだから・・・
テランの回復の泉に向かう道すがら、バランは我が子を不思議に思う。
一体ティファは、この世界とどこまで繋がっているのか。
そのティファの手紙で、ベンガーナデパートは燃えている。

「よいですか！この依頼は勇者ダイ様一行と料理人ティファ様からです!!我等ベンガーナの民は、一行と彼女に尽きせぬ恩がある！これを今返さず何時返すか!!倉庫にある痺れ毒の薬草をあるだけ、他にも回復類は八割を、薬作り器具は最高の物を全て放出する。王城からの許可は待たず、無償である分全てを!!」

コンシェルジュ部門の長アクバルの号令一下、在庫品倉庫と薬品店頭販売部門は急ピッチで荷造りをしている。

ＶＩＰ会員のティファだからではない、彼女が勇者ダイ一行の料理人ティファだからこそだ。

勇者様達のお陰で被害が少なかったは言えど、それでも出てしまった被害は当然あり、彼女の万能薬のおかげで大勢の自国の兵は死なずに済んだ。

それは家族が、恋人が、父が、兄が、弟が、友人が生きて帰ってきたのだ。

手足が無くなろうとも生きていた事にベンガーナの民は王直々の演説で鬼岩城の戦の規模と撃破した勇者達の勇猛な活躍を、そして料理人ティファの限りない優しさと叡智によりすくわれた事を知った。

勇者ダイ達にも感謝の念はある。敵が撃破できなければ戦は負けている。そして戦にこそ出なかったが直接の命を救ったティファの方もまたベンガーナの民に尊敬されいつの間にか畏敬の念が生まれた。

その勇者一行とティファが助けを求めているのだ。

「アクバル!!ティファ嬢ちゃんのピンチだろう！俺が直接サババ砦とやらに行くぞ!!」

薬部門の長にして、ベンガーナデパート名物頑固爺アオが意気揚々と乗り込んできた！

ティファが行くのは大概が彼のいる薬草店であり、当然顔見知りで、そしてこの頑固で有名なアオは、礼儀正しく、そして薬草の知識をきちんと持ち楽しそうに話をするティファを気に入っている。

「アオさん・・・行く先は戦の真っただ中です。許可は出来ません。」

「五月蠅ぇ！あんな娘っ子達が頑張っているのに俺達男衆が荷物届け

てはい終わりが出来るかってんだよ!!!」
「貴方が行けば確実にティファ様が驚いて仕事の手を乱しますよ?」
ティファは色々と―大人っぽい―が、端々で優しい女の子だと知れる。まだまだ未熟なのだティファは。
子供や成長しきれていないものはころりとティファの雰囲気に騙されようが、少なくともアクバルとアオは騙されていない。
片や勇者も入れた小さい子供達を助けに行きたい、片やその心を乱すなで、軍配はアクバルに上がり物資は無事メルルに渡されたところにバランが戻ってきた。
「メルル様、バラン様、どうか無茶はせず。」
「はい、その旨ティファさんにお伝えします。行きましょうバラン様。」
「行こう。世話になった。」
「はい、いつか皆様でまたお越しくださいませ。」
二人が戦場に戻る事を承知で、アクバルは次と言う。この方達ならば、きっと危機を乗り越え来てくれると信じて。
「分かりました。」
「いつかまた。」
その思いに応える様に、メルルとバランは笑ってアクバルに向き直り返答して駆けて行く。
ティファの待つ砦に向かうために
―ダイ―
ドン!!
ダイもメルル達同様王城に直にキメラの翼でやってきた。本来ならば城の結界に引っかかり、捕縛されるはずだが城門警備が守備隊長であり、パプニカのサミットに王の警護として随伴していたおかげで、ダイの顔を見て知っていた為にすぐさま応対してもらえた。
「ダイ様!我が国に御用が?」
「あ・・・あのティファから手紙預かって・・王様に会いたくて・・・」
説明下手な自分を呪いつつ、ダイはそれでも言おうとした事を門番が察してくれた。

「緊急事態案件ですね・・・分かりました！ご案内します。」
本来城門番にそんな権限はないが、勇者ダイと料理人ティファの案件を迷う兵はベンガーナにはいない!!
「王様⁉」
クルテマッカに会いに行く途中で、走って自分に向かってくるってどういう事⁉
「門番の片方の者が、ダイ殿が来たと。何があった。」
「王様！とにかくこれを!!」
渡された手紙をクルテマッカは即座に開けてすぐさま読む。
「分かった、ここに書かれている事すべて許可する。デパートには無償にする旨も合わせって直ぐに知らせよう。其方は直ぐにサババの砦に戻り、ティファの助けを。」
「王様・・・ありがとうございます!!行ってきます！」
クルテマッカの思いを受け取ったダイは、直ぐに砦に戻る為来た道を駆け戻る。
その背中を、クルテマッカは悲しみを湛えた瞳で見つめる。
ティファもだが、ダイもまだ小さな子供ではないか・・・幼い子供達を戦わせる、自分達は王を名乗ってもなんと小さく役にもたたない者か
「せめて出来る事を最大限にしよう・・」
デパートにすぐさま国の在庫の薬草の三分の一を渡しに行く。メルルが受け取った品は、ティファが頼んだ物の倍となって持ち帰った。
―チウ―
「マトリフ様!!」
「おうチウ!!どうした？今日は篩が・・・」
「これをティファさんから!!」
「ん？嬢ちゃんから・・・・・・・・・・・・・・・ハッドッラー!!!あいつメドローアで消滅させてやる!!!」
「えええぇぇ!!!マトリフ様⁉」
「あいつ嬢ちゃんに確約しておいて!!あんの三流魔王とうとう馬脚を

表しやがったかなっ!!!!」
過日テランの小屋であいつに下した高評価!!詫びと共に返しやがれ!詫びは当然あいつの命だ!!!
「落ち着いてくださいマトリフ様!それよりも・・・」
「チぃ!命冥加な奴・・・・チウ!俺の服そこらにほっぽってあるからそいつ持ってってくれ!俺は薬のレシピとある分持ってく!!」
「分かりました!!」
ハドラーに怒りつつも、マトリフとしては内心ティファが頼ってくれた方が圧倒的に上回って嬉しかった。
嬢ちゃんの奴が助けを求める事を覚えてくれた。こんな老骨惜しくもねぇ、背え一杯働くぞ嬢ちゃん!!
「行くぞチウ!」
「はい!」

着の身着のままでマトリフはチウに連れられ砦に向かう
―マァム、ヒュンケル―
「ここは・・・人の気配が近いな。」
「ええ、私の村が近いの。」
「ティファは前からここに来ていたのか・・・・マァム、以前ティファを見かけた事は?」
「それがないのよ。そもそもここの群生地はネイル村の人しか知らないし、知らない子がいたらすぐに噂になるはずなんだけど・・・」
二人は薬草を探しながら話、その内疑問を深める。
何故ティファはこの群生地を知っていたのか、どうして村の誰にも見掛けられなかったのか。ここは村の大人も子供も結構な頻度で行きかう場所なのに。
・・・いつかティファに尋ねてみようかしら・・
ティファの小さい頃の話を聞いてみたいとマァムは思うが、薬草が集まれば長居は無用
「この位あればいいか?」
「ええ、行きましょうヒュンケル。」

今は大勢の人とティファを助けるべく砦に急ごう！
―ポップ―
「ポップよ・・・・その本当に・・・」
「私が行っても・・・」
「うう!!だああ!!王様！アポロさん！もうここはティファ信じましょう!!いざとなったら俺も一緒に師匠に土下座でもなんでするから！エイミさんとアポロさんお貸しください!!」
命かかってる時の人手不足に！いいも悪いもへちまもあるか!!
完全にポップがキレた
妹の無茶ぶりに悩んでいるのが阿呆らしい！とっとと人助けに行くぞ!!
烈火の炎のようなポップの奇妙な迫力に押し負けた形でレオール王はアポロと数名の魔法使いの貸し出しを許可する。
あの太陽の温もりの優しい願いを叶えるべく

世界各地の大勢の者達が一つの目的の為に動く。料理人のティファを起点にして。
砦には一陣・二陣と物資と人が大勢押し寄せるのをレオナとラーハルトが整理し、ノヴァが詳しい話をし、ポップが連れて来た応援に来た者達はすぐさま手指消毒の為の強い酒を手に掛け自然乾燥をさせる。
医療はまだ未発達なれど万能薬開発が様々な副産物を生み、その一つが清潔保持。
汚れた手で傷口を触れば更に細菌感染が起こる事と、水・熱湯・酒で手指を洗った所、酒が一番有効だった。
元来酒は化膿止めで使われていたが手指消毒に有効だと知れ渡り、以来医者や薬作りに少しでも造詣がある者は作る前にも消毒が徹底されている。
黙々と手指を洗う姿を少し怖いと思うレオナ達の前に、チウとマトリフが現れた。

「マトリフ様!!」
「挨拶はいい、嬢ちゃん・・・・おいお姫さんよ・・」
ついて早々ティファの所在を確認しようとしたマトリフは、地を這うような冷たい声で問いただす。
「なんでアポロがいる?」
その言葉で場が凍りかけたが、ポップとノヴァがすぐさま飛んできた。
「師匠!アポロさんの要請したのティファなんだ!」
「僕も最初は・・・それでも、ティファが望んだことです!!」
・・・・・ああああもう!宝物三人結託しやがって!!
マトリフにとってはティファとノヴァ、そして毛色は少し違うがポップもかわいい愛弟子で二人と同じ掌中の珠!この場にはいないがティファ共々三人でアポロ擁護されたら・・・
「分かったよ・・・役に立たなかったら簀巻きにしてやら〜。」
ぽつりと怖いこと言われながらアポロは無言でマトリフ達に頭を下げ、マトリフとノヴァで打ち合わせたレシピ通りにせっせと薬を作る中、ガルーダが一人の男を連れて戻ってきた。羽の音を聞きつけたポップとダイが飛び出す。
「ガルーダ!ティファは・・・あれ?」
「・・あんたは・・・・まさか!!」
「お久しぶりですダイ君・ポップさん。その節はどうも。ティファさんから手伝って欲しいと言われて来ましたが、何をすればいいですか?」
耳を丸くし、肌の色を色白にしただけの顔はそのまんまのザムザ来た!!!こいつ魔王軍から追われる心配ねぇのかよ!!!
しかも爽やかに笑っている好青年になっちまってるし!!一体何があったんだよザムザ!!!

歩いてきた道が繋がる時③

バサリ
「ガルーダ！ザムザさんお願いね！」
「―分かっている！すぐ戻る。用を終えたらここで待っていろ。ー」
「うん。」
リンガイア首都の入り口の前にガルーダで降りたティファは、直ぐに走って王城に向かう。
五年前は入る事すら躊躇っていたが今は違う。
「―ネイ―・・じゃなかったティファちゃん！血相変えてどうした!!」
「こんにちわアルフさん！大至急アーデルハイド王にお目に掛りたく勇者一行の料理人ティファが来たとお伝えください!!」
「んだよ、水臭いぞティファちゃん！お前さんなら取次なし、ほら入りな。」
「・・・・分かりました。」
顔パスで入れる。
―ネイ―の偽名でずっと万能薬開発に携わっていたティファの正体がこのほど知れ渡り、以降アーデルハイドはティファが来た時は即座に城に入っていい許可を出し、下級兵士から大臣達にまで人相書きを見せて覚えさせた。
「よいか、この者なくば我らリンガイアが生み出した万能薬は生まれていなかった。よってこの者をリンガイア特別宮廷侍医長の称号を近々本人に贈る積りだ。努々忘れるな。」
リンガイアに万能薬をもたらしたティファの功績を考えればまだまだ安い位だが、財貨に興味がなさそうなので贈れるのは精々こんな程度。もっといい案があればと思い、構い無しで城の出入り許可も追加されたのが昨日の話だった。
ティファにとっては何が何だかなのだが、渡りに船とばかりに王の所在を聞いてそちらに足早に歩く。王城内を走るのは流石にマナー違反が過ぎるだろう。慌てる状況でも落ち着てかつ素早くいく事が肝要だ。

謁見の間にティファの来訪は即座に報が入っておりすぐさま会えた。
「お久しぶりですアーデルハイド王様。」
「久しいなティファ。用向きは緊急と見た。用件だけを述べよ。」
流石は騎士王の異名を持つ王であり、戦場で礼儀は最低限あれば後は本題に入るアーデルハイドらしい物言いに、ティファもサクサクと話を進める。
篩の事は後でノヴァが報告するだろうとそちらは省き、毒化と今必要な物にＭＰ回復の泉の水が欲しい事を。
「戦時下においては限りある泉の水の採取は王の許可がいるとノヴァが教えてくれましたので。」
「確かに、今は不用意に持っていかない様見張りを立てている。行って汲み取り、すぐさまサババへ戻れ。辞去の挨拶は不要だ。」
「畏まりました、有難く。」
「うむ、気を付けて帰れ。」
どうもこの二人似た者同士で、合理主義な所が特にそっくり。
勇者一行の料理人と王との謁見であれば、もっとこう何かないのかと周りにいた大臣達は頭を痛める。そんなんだから王妃に言葉足らずの不愛想なのだと言われるのだ。

合理主義の片割れは、アーデルハイドの言葉通りに水を汲んですぐに城を後にした。
後でお礼の手紙書けばいいじゃない。
・・・もっと年ごろの娘らしい情緒もてと、突っ込まれても文句は言えまい
何はともあれガルーダが戻ってきたのですぐさま砦に戻る。

「あんた何でここにいんだよ!!」
「いや、ティファさんに頼まれてですね・・」
「その姿でいいってティファが言ったの？」
「・・・・・流石にこれは不味くはないか？」
　ガルーダでサババの砦に着いて早々、竜の騎士二人と魔法使いに拉致られようとはなかなか楽しい。
「いやこっち楽しくねぇから!!」
「おや、うっかり本音が。」
　ザムザの思いっきりザムザな容姿にどうにかならんのかと、砦のロモス応援兵達や有志達に見つかる前にしょっ引かれる。ロモスの有志にはザムザが罠で用意した武闘大会出席者が大半だ。もしもここで魔王軍のと言われたら・・・・なんだろう、なんで自分達の周りの頼もしいお人達の大半が元魔王軍なんだろう・・・
　ポップは改めて自分の周りの―大人達―を勘定して嫌になってきた。
　兄弟子、頼りになる戦士、味方になってくれた騎士様とその配下二人・・・・・魔王軍って実は勇者一行強化でもしてくれてんのか？ラスボス強いから余裕ぶっこいて・・・
　軽い現実逃避するポップを労り、ダイはそっとしておいてあげる優しい子。ともかくザムザに旅人のマントを渡し、頭から被ってもらって手伝ってもらう。
「私モシャスは苦手でして。」
　悪びれずにいい笑顔で言うザムザにダイ達は本気で頭痛くなる。この人本当に元敵の自覚あるのかな？
「ところでティファは？」
「あのお方なら今頃はリンガイアかと。」
「・・・ガルーダなしでか？」
「いいえ、ガルーダ殿がティファさんの手紙を携えて来たので私はそれを読んでこちらに来ました。大体の事は分かりましたが、詳しい事は砦のノヴァさんという方に聞くようにと。ちなみに今必要な万能薬製作に一番詳しい方は？」

「ああ、師匠とノヴァが今レシピ作ってる。こっちだ。」
「ではご案内を。」
砦に入ってすぐのホールにティファが出していった机はそのままで、今はノヴァとマトリフが真剣な表情でレシピを作成している。
「失礼・・・・ふむふむ・・なるほど、これではなくこちらではいかがでしょう？」
「あ！ザム・・・・・不味いだろう!!」
「あん⁉・・・お前さん誰だ？」
二人のレシピを後ろから覗き込み、おおよそ理解したザムザは必要な薬草名を書き込みポップ達が慌てて止めるが間に合わなかった！
「私ティファさんとダイ君、ポップさんに大変お世話になったものです。本名は明かせませんのでご容赦を。ティファさんに頼まれこちらに来まして。」
「・・・・手前ぇ自身で怪しいって言ってるようなもんだろう。ポップ、こいつ本当に大丈夫か？」
誰がどう聞いても怪しい自己紹介に、大抵の事では驚かないはずのマトリフも流石に面食らい、愛弟子に真相聞いたところポップは頭痛を堪えながら頭をガリガリしながら答える。
「・・・後で詳しい話するけれど、多分薬学に関したら師匠とノヴァとティファと張る。」
「ほん・・・まぁこのレシピならできそうだ。坊やはどうだ？」
「出来ると思います。ポップがザムと言いかけたので仮の名前でも？」
「構いませんよ、若き氷の勇者殿。」
「分かりました。ではザムさん、このレシピを今すぐ調合してください。僕とマトリフ様は体力回復と増血の方を作ります。」
「承知しました。調合できましたらお知らせしましょう。」
怪しい者の出だしではあったが、ザムザが来たことで一気に事が進む。マトリフとノヴァだけであれば、薬の効能が強すぎて薄めるにしても効能を消さないように何を入れるかで躓いていたが、伊達に魔界で博士号は取っておらずすぐさま解決してみせた。

それを特別な事をしていないと言ったような飄々とした掴めない感じがどこかティファっぽい。
そのティファ本人もリンガイアから丁度戻ってきた。
「御免遅くなった！ノヴァ！今何作ってる？」
「お帰り、体力回復と増血！」
「それ後にして、ＭＰ回復の泉の水持って来たからキアリク掛けている人全体に渡るように効能消さないで薄めるの直すの手伝って。」
「分かった！マトリフ様今増血薬作って・・・」
「ダイ兄達も手伝って!!!!」
帰ってくればあっと!!!!という間に薬作りに勤しみむが、患者の数と見る側の数が圧倒的に違いすぎ、これでは患者の体力と回復する側の魔力がもたず間に合わないと判断したティファが、薬工程の最初の部分をダイ達にも手伝わせる。
もう一生分の薬作っているような錯覚を起こす程に薬作っているのに端から無くなり作っても作っても間に合わないってどういう事⁉
「ハドラーのぶわぁか!!!!!!!!」
あまりの目まぐるしさに、キレたティファが年頃の娘らしくない罵り言葉を言っても誰も叱責はしなかった。
寧ろもっと言え!!!
ホゥホゥ
「・・・・・もっぺん言ってノヴァ・・」
「だからね、あの魔軍司令官からの伝言なんだよ。」
「・・・超ありえなくない？」

「知らないよ、寧ろ確約破りだって非を鳴らしながら堂々と夜襲掛けてもいい案件なんだよこれって。」
夜の帳が降りて夜行性のフクロウが鳴くほどの深夜の砦に起きている人影は少ない。
日の落ちた頃、怒涛の勢いで砦一丸となって治療したかいあり、最後の患者も痺れ毒が完全解毒されたのを確認した後砦から歓声の声は・・・残念ながら上がらなかった。
ある者は初めての万能薬作りの緊張感から、ある者は魔力回復する端からキアリク掛けまくりまた回復をするうちに気分を悪くし水を一杯飲んだ後は床に転がり似たような骸もどきがあちこちに転がった。
ノヴァに鍛えられたリンガイアレスキューとそのノヴァ自身とティファ以外はザムザを除きなれない事に疲れ果てたダイ達もうつらうつらとしていたのでそっとしておき、二人は塔の上で見張りをしながら話をしている。
昼間の篩の時ノヴァは単身ハドラーと親衛隊達と対峙し、その際去り際にティファに伝言を託された。
「体調が万全にな時に決戦に来いって。」
・・・・・敵の体調心配する敵将って変だ・・
「まぁお詫び何だろうと思うよ。自分から言い出した確約破り掛けて、この位でも間尺に合わないけど確かに伝えたよ。」
「・・・・・早速明日お休みさせてもらうよ。」
ハドラーの馬鹿・・・・
内心でハドラーを思い出し、ティファの胸がズキリと痛む。
あの人とはどうしてこうもかみ合わないのだろうか？
お互いに戦う事を望んでいるのに、いつも何かしら邪魔が入る・・・
悲しそうなティファの横顔に何かを感じたノヴァはそっと抱き上げ瞳を覗き込む。
「泣かないでティファ。」
「ノヴァ・・・・」
「悲しい事は全部僕が凍らせて消してあげる。だから悲しい顔をしな

いでティファ・・」
　ティファのこんな顔見たくない。
　俯くティファの姿に、ハドラーに対する怒りが否が応でも増す。
ティファにこんな顔をさせるだなんて・・
「ティファ・・・大好きだよティファ・・・」
　狂おしい迄の感情のままに、ノヴァはティファを掻き抱く。
　それは愛なのか慕情なのか分からない。分からないがこの感情に名を必要としない、ティファを守れるならそれでいいのだから
「私もノヴァが大好きだよ。」
「そう。」
「うん・・・・ノヴァ本当に大きくなったんだね。」
「そう?」
　ダイにはない身長と手の大きさ、ポップにはない逞しい胸板にしなやかでいてそれでいてしっかりとした筋肉を付けている腕に包まれ、ティファは不意にドキドキとする。
「ノヴァ・・・今日はもう休もう?」
「僕はもう少しで見張りと交代する。ティファ眠い?」
「・・・うん・・」
「マトリフ様の寝室分かるね?ゆっくりお休み。」
　暗がりでティファの表情が見えないノヴァは、赤くなったティファに気が付かずそっと下ろし寝るように促す。
　夕刻前に一段落着いたのを見計らってノヴァとティファが速攻でマトリフを寝室に―お連れ―という名の連行をし、泣き落として寝て貰った。
　百歳の超ご高齢を考えれば仕方がない
　そのマトリフの寝室に向かう途中、起きていたザムザに会えた。
「ザムザさん、この度はありがとうございました。」
「なんの、貴重な経験をさせていただきました。バラン様からお借りしたマントのおかげで正体はばれませんでしたな。」
「それは良かったです。もうお休みに?」
「その前にティファさん、―例の物―が全て揃いました。遅くなりま

したがギリギリ間に合って良かった。」
「あれが・・・ザムザさん!本当に何から何まで・・」
「いいえ、礼には及びません。使うかどうかはティファさん次第ですし。」
「ええ、ですが―これ―があるとないのとでは・・・」

ザムザと話、眠気が出かけてしまったティファは砦の中庭に出る。
満天の星空・・・綺麗だな・・・この星空見覚えがある。篩の篩の為に、キルに呼び出された時も美しい星空だった。

お嬢ちゃん、可愛い可愛いお嬢ちゃん

・・・こんな時はいつも声がする
まるですぐ後ろにいて、耳に直接声を掛ける様に甘い声が脳の奥底、体の中まで響き渡り、どうしていいのか分からなくなる。
いつもならばおじさんにしがみつけば、背中をポンポンとしてくれて落ち着けるのに・・・今は自分一人しかいない。
自分の奥底まで入り込もうとする声を振り払えず、幻のキルの声に囚われる寸前で―別の声―が響き渡った
そんな変態死神など放っておいてさっさと俺の所に戦いに来ぬか!!!!
・・・ハドラー?
お前がぐずぐずするからいらん邪魔建てが毎度毎度入るのだ!!俺との約束忘れるな
約束・・・あの時の約束
貴方を倒します
返り討ちにしてやる
地底魔上でのあの誓いにも似た約束の様なもの・・・忘れるわけがない
不意に手の中のひんやりとした物があるのを思い出す。
これを強く握ったから、ハドラーが出てきたのだろうか?

先程ザムザから受けて取った―六角形の黒い水晶―をティファはまじまじと見る。
キルの声は最早せず、再びハドラーの声もしない。
ティファは黒い水晶を胸元で握りしめ、何かを惜しむかのような表情をしている。
それはキルの声か、ハドラーの声どちらを惜しんだのか・・・・・

暫くその場で佇み、意を決したように歩いた先に、扉付近の床で寝ている兄と、その頭を膝に乗せ撫でている父がいた。
ティファの気配に気が付いたバランが無言で空いているもう片方に来るように促す。
父さんのお膝・・・・それよりも・・・・デルパ
ティファは大きな毛布をリングから取り出し、一度バランにダイを抱えて起きて欲しいと頼み立ち上がってもらい毛布を床に敷く。
その上に座った父の右太腿にきちんと兄の頭を乗せさせ、自分も反対側の太腿に頭を乗せる。
少しすれば、大きな手が背中を優しく叩いてくれる。
ティファはほんのりと笑う。
あの十日間の始めは、父は自分に全てぎこちなく、撫でるのも背中を優しく叩くのもとても不器用で。
今はとても自然で・・・・・温かい気配にも包まれ、いつしか眠りの底に落ちていく。

翌朝目を覚ました一行とラーハルトとガルダンディーはその光景に涙を流す。

陽光の下、竜の親子が寄り添い穏やか眠るその姿に

歩いてきた道が繋がる時・エピローグ

父の大きな手から温もりを感じて安らぐ暗闇に落ちていく。
時々眠りに落ちる時から夢を見る。
でもこれは夢なのだろうか?真っ白い何も無い空間で父さんが泣いている。
・・・何故お前は起きぬのだ・・・・お前がいなくなれば、あの子がどれほど悲しむか・・・他の二人は起きたのに・・・・私の身勝手な行動に愛想が尽きたのならば私を罵りに来い、だがどうかあの子のために起きてくれ・・・・
テランのリュート村の子達とて待っているのであろう・・・・

はらはらと泣いている父さん・・・何が悲しいの?誰が起きなくて泣いているの?
父さんの涙が不意にどこか流れる。風も吹いていないのにどこか遠くに行こうとしている。
涙の色が竜の血の様に七色に輝き煌めく。まるでこっちだよと言っているみたいに
泣いている父さんを慰めに行きたい。でも何かが私の中で叫んでる。―今―呼ばれている方に行かないと一生後悔するって。
涙の流れる方について行き涙を流し、両手で顔を覆い遂にはに膝をついて蹲って泣き伏す・・・・まるでソアラ母さんを喪った時の様な慟哭に、引き返したいのに、今は駄目だと何かが言ってくる。
その内父さんの姿も小さくなって見えなくなる程遠くに来たら、ガルダンディーとラーハルトも泣いている。
起きてくれ!我ら両名だけでどうしてあの子に会えよう!!
起きろよ!ルードもいるんだぞ!!なのにお前がいなくて!!!ガキンチョ泣かすきかよ馬鹿野郎!!!!

・・・・あぁそうか、父さんもこの二人もあの人の為に泣いているんだ・・・

どこ・・・・どこにいるの？・・・・・・どこにいるの!!

キラ

・・・・・？

二人の涙も、父さんの涙と同じ七色に変わって同じ方向に流れていく。

・・・・行かないと・・・・行って起こしに行かないと!!!

待って！そっちに行かないで!!!!

白い空間が少しずつ薄暗くなって、更に暗くなる手前の狭間にその人を見つけることが出来た！

その人は更に奥に行こうとする。待ってって言っているのに返事もしてくれない!!

行かないで！行っちゃやだよ!!

追いついて、その人のマントを握りしめて叫んでようやく歩みを止める。

何処に行くの⁉もう何処にも行かないで!!!

必死に必死に止めれば、ようやく私の方に向き直ってくれた。

優しい瞳に、どこか困った様な色を含んで笑っている。

娘よ、我らの罪は知っているだろう。

知ってる！知ってるよ!!リンガイア攻めた事も！カールの首都占拠したのも全部全部知ってる!!

ならば分かるだろう？誰かが罪をその身で償わなければならないのを。バラン様達を頼む。俺の命をもって、どうかあの方と二人が罪を償う道を生きて歩く事を許して・・・・

・・・・・ば・・か・・・馬鹿馬鹿馬鹿!!!大馬鹿!!!!

なんてこと言うんだこの人は！
命をもって？そんなの死んで逃げるのとどう違うのさ!!
・・・娘よ・・・分かってくれ、この世界はお前が考える程甘くはない。我等がのうのうと生きればそれを誹り、お前達に害成す牙となる。誰か一人でも欠ければ、其れで丸く・・・・
収まったから何だっての!!そんなのおかしいよ！そんなの罪を償わないんじゃない!!生きて誹られ詰られ迫害されても償う道を歩く事が本当の償いだ!!!・・・・そうじゃなければ・・・ヒュンケルもクロコダインも・・・・父さん達だって生きていたらいけないことになるじゃないか!!!
ッ！
生きてよ！辛いし怖い事が待っていても世界は酷いだけじゃない!!リュート村のあの子達が待ってるよ!!
・・・・あの子達に・・・向ける顔などあろうか・・・・・・俺はガルダンディーやラーハルトとよりも尚人間をこの手にかけている。
・・・・種族滅ぼした人達を殺したの？
あぁ、そして憎しみに任せてもっと大勢の・・・・・バラン様の時とは違う。アルキード王国のあれは俺は悲しいが偶発的な暴走だと思っている。翻って俺のは自覚してした事だ。
分かるだろう娘よ。お前達が思うような者ではないのだ俺は。さあ、お話はここまでだ、俺は償いを・・・
そしたら・・・
ん？
そしたら！大切な人達を殺した私も一緒に行く!!!
な！娘よ!!お前が償うことなど何一つないのだぞ!!!我等を止めたは・・・
自覚して殺したのが悪なら数なんて関係ない!!あの時あの場所で私は自分の意志で貴方とガルダンディーを私が殺したんだ!!!
罪は一緒だ！ならティファも一緒に行く!!!一人でなんて行かせない・・・・一緒だよ・・

お前は・・・・本当に何処まで・・・俺が行くと言ったら、本当についてくるのだろうなお前は・・・

行く・・・・行くよ

それは困る・・・お前が来てしまっては大勢の者が悲しみに沈む。俺の罪がさらに増える・・

なら帰ろう?ティファと一緒に帰ろう

あぁ仕方がないな、お前を連れ行くわけにはいかん・・・・あの二人にあそこ迄格好つけておいてこの体たらくか・・・・何を言われたものか・・

・・・・何か言われたら私も一緒に謝る。一緒に帰ろう・・・

あぁ帰ろう

夜深き頃、眠りながら涙を流すバランとティファの紋章が淡く光る。

バランの中の竜の血が、与えた三人の内一人が蘇らない事の深い悲

しみを紋章の共鳴を発動させティファに伝える。紋章に意思がありティファの助けを借りる様に。
共鳴でティファはバランの精神世界と繋がり、そこから更に竜の血の絆で繋がったガルダンディーとラーハルトにも繋がり奇跡はそこで止まらずさらに先に進ませた。
起きない者が黄泉路に完全に着く前に間に合い、引き留め手を繋いで共に現世に帰る。
ティファが夢だと思った事は全て現実世界の出来事であった。

バン!!
「小娘!!」
「起きろガキンチョ!!」

翌朝ダイとティファを膝に抱えて眠っていたバランは、自分が大勢の者に取り囲まれている気配にすぐさま目を覚ました。
歴戦の戦士であるバランは、敵意がなくとも瞬時に目覚め意識をすぐさま覚醒させられる。
囲んでいたのが部下とポップ達だと分かり照れ臭くなる。こんなに無防備な自分を他者に晒そうとは思ってもみなかった。
今まで魔王軍の自室でもこれほど熟睡した事は無く、ティファの秘密部屋でもいつ娘が悪夢で目覚めても包み込めるように気を張っていたが、昨日は本当に落ちる様に眠りに付けたが・・・・何か途轍もない夢を見たような気がする。
「バラン様、ディーノ様が目を覚ましそうですがその・・・・」
一番にラーハルトがダイの目も覚めそうだと告げるが、ティファの事をなんと言えばいいのか分からず沈黙をする。
ティファに様を付けるのを躊躇うほど自分達の関係は近くなりすぎ、とはいえ主君とティファの仲間の前で親しみを込めているとはいえ小娘と呼ぶのもどうなのだろうか？
「あんな、ティファなら好きに呼んでいいっていうぜ。後で話しあえよ。」
「・・・・・けどよ・・俺達だけで会って、こいつ喜ぶのかよ・・・」
ポップの気遣いにガルダンディーもそこは感謝するが、自分達二人だけで蘇った事に罪悪感を感じている二人としては、このまま会っていいのか分からず途方に暮れる。
その言葉にポップ達、特にヒュンケルとクロコダインはその思いが分かってしまう。ヒュンケル等はフレイザードの奇襲でアバンの弟子全員が死ぬのを防ぐ為、一人溶岩の中に残りながらも弟妹弟子達を命を掛けて救った事に悔いはない。
命を落として償う方が余程楽なのを自分が一番身に沁みている。幸せを見つけられたからと言って、罪悪感が突然消えてくれる訳ではない。
ティファが自分達に望んだ道は、本当に茨の道だ。誰が誹らずと

も、自分達の罪は自分達が一番知っている。時折振り切るように逃げ出したい・・・・ティファがいなければ、おそらく自分の命を顧みず一行を助けて死んで終わらせていたかもしれない。あの幸せを見つける約束をしていなければ・・・

「きっとティファならば、悲しみに暮れてもお前達の生還を喜ぶはずだ。辛い事を共に分かち合ってやって欲しい。この件だけは本当に俺達にはどうする事もできん。」

ヒュンケルの万感の思いが込められた言葉に、ガルダンディーとラーハルトはティファが起きるのを静かに待つことにした・・・・・・はずだったが・・・バランからの知らせで血相を変えてティファの寝ている部屋に二人で突撃を掛けた!!

幼女とはいえ年頃の娘が眠っている部屋に突撃を掛ける暴挙に、深く眠っていたティファが目を覚まし唖然茫然となった・・・・二人の形相が怖い・・・

「小娘!!今すぐ俺達と来い!!!!」

「ラーハルト!言葉いらん!引っ担いでいくぞ!!」

「え⁉ちょ・・・・何するんですか二人共!!!」

有言実行を貫いて生きてきたガルダンディーが、ベットで上半身を起こしたばかりのティファを肩に担いで、階段降りるの面倒とばかりにいきなり寝室の窓から虚空に身を躍らせ中庭に向かって飛んでいく。

「ちょっと!ガルダンディーさ・・」

「さんいらねえっったろうガキンチョ!!あいつが起きたんだ!!起きたんだよ!!!」

「・・・・あいつ・・・・あ・・・・あ!!」

「見えた!!」

ティファの寝ていた寝室から中庭庭は正反対の方向で少し距離があったが、ガルダンディーが飛べばあっという間に着き、ゆっくりと着地する。

降りた先に待っていたのは父とそして・・・

グレートオーラスの竜騎衆が一人・・・・・

「うっく・・・・ひっぐ・・・・」

うわぁぁぁぁんん!!!!

ボラホーンの姿を認めたティファはその場で立ちつくしたまま、顔をぐしゃぐしゃに歪め大声で泣き始めた。

それは過日マトリフの洞穴で泣いた時よりも更に大きな声で。

いきなり泣き始めたティファに、ラーハルトとガルダンディーはぎょっとしどうすればいいのかオロオロとする。

元気一杯なティファか、悲しませてしまったティファしか知らない二人からすれば、まさかティファがいきなり泣き出すとは想定外だった。

てっきり生き返ったボラホーンを見て、説得に応じなかった自分達を叱り飛ばすとばかり思っていたから。それが泣くとは・・・

自分達だとて目を覚ます気配がないボラホーンに怒りを抱きながらも悲しみ涙を流した。

そして・・・先程ボラホーンが目覚めたとバランに教えられた時は頭が真っ白になり、気が付けばティファの部屋に突撃を掛けていた。

ティファの泣き止まない気配に、次第にラーハルトとガルダンディーも涙を浮かべ、鬼の形相でボラホーンに向き直る!

「お前が素直に起きなかったせいでガキンチョ益々泣いちまってるじゃねえかよ!!」

「何が俺が命で償うだ!!余計なお世話もいいところだ!!そんな益体も無い事せず素直に俺達と業火に焼かれる道を歩くと言って、共に起きていればこんなややこしい事になっていなかったんだぞボラホーン!!」

二人は泣きながらボラホーンに向かって罵倒する。

テラン戦の後、バランはポップに竜の血を与え完全回復させ我が子達と別れてすぐ、ガルダンディー達が倒された場所に向かい、ポップ

に与えた竜の血を三人も与えたのだ。
直ぐには甦れまいと思い、三人が起きるかどうか分からないが安置する場所は何処かと思案する前に、ガルダンディーとラーハルトが即座に起きた時は心底驚いた。
「待てボラホーン!!」
「行くなってんだよ!!!」
それも起きて直ぐに発した言葉がボラホーンを止める言葉だったのが更にバランを驚かせた。一体なぜ直ぐに蘇れたのか、それにボラホーンが何の関係があるのか？
「お前達・・・・何があった？」
少し錯乱している二人に声を掛け暫くして落ち着いたラーハルトの話に暗澹たる思いがした。

三人は死んだ後、気が付けばどこか真っ白い何もない空間に集っていた。
ここはあの世の入り口だろうか？バランとティファは大丈夫だろうかと心残りを誰ともなく口に出し自然に話している時、上に引っ張られる感じがした。
自分達は生き返ろうとしている
ガルダンディーとラーハルト、ボラホーンは今まで何も感じなかった体に温かい血が通うのを感じ直ぐに分かったが、生き返るのを喜べなかった。
罪に塗れた自分達は、素晴らしい奇跡に値しないと
だが、ガルダンディーとラーハルトは甦った。上に上がるようボラホーンが二人を即座に投げたのだ。
「お前達は目覚めよ！罪は俺の命で贖う!!お前達はバラン様と共に生きて償え！―ティファ様―がきっと導いてくださる!!!」
「待て！お前も共に・・・・竜騎衆の長の命令だ!!」
「待てよボラホーン!!」
「・・・・・達者で暮らせよ・・・・」
二人の伸ばした手に、遂にボラホーンはその手を取らなかった。

「・・・・分かった・・・私は暫く一人でどう償えばいいのかを考える。お前達は・・・」
「我等は回復の泉近くの洞穴に身を潜めましょう。バラン様が迎えに来られるその日まで。」
「食っていくには困りませんな。」
「そうか・・・ボラホーンは棺に入れリングに入れて連れ行く・・・・程良きときに北海の故郷のあった所に埋めに行こう・・・」
　そして別れ、再びティファに会う決心をしたバランは二人を伴い、秘密部屋にティファの友人ティンクがいないか尋ねていき、折よく会えたのでティファの気配を辿ってもらい三人でサババに来たところにガルダンディーとラーハルトの顔を知っていたチウに出会い砦に来られたのだ。
　ティファに会い、今日共にボラホーンを北海に埋めに行こうと棺を取り出した時、ボラホーンがのそりと出てきた。最早奇跡が起きたとしか言いようがない。
　決意固く竜の血を拒んで黄泉路を辿ると思っていたのだが、とにもかくにもバランは直ぐにガルダンディーとラーハルトを探し出し、ボラホーンが起きた旨を告げ当然のごとく大騒ぎになる。

「死んで償うとか馬鹿でしょう!!!生きて償ってよ馬鹿馬鹿馬鹿!!!」
「俺達と共に生きて苦しめ!!!」
「二度と死んで云々言うんじゃねぇぞ!!!」
「―ボラホーンの馬鹿!!―」
　中にはにいつの間にかルードも降りてきてとぐろを巻いてバラン達を包み込み泣きながら咆哮を上げている。
　ガルダンディーが一度ダイ達を取り逃がした後、ティファと再び戦う恐れもあるのでルードを筒に入れ、ティファに敗れた後その筒を託したおかげで、ルードはあの悲劇を知らずに心に傷を負わずに済んだが、ガルダンディーは簡単にボラホーンが死んだことを短く教え、仲間が大好きなルードを悲しませた。
「―もう生き返ったんなら死んだら駄目!!―」

「ルード君の言う通りだよボラホーン!!」
「そうだな、死んで何の役に立とうか・・・バラン様申し訳ない・・・・ラーハルト、ガルダンディーすまん。」
主と仲間に頭を下げ
「娘よ誓おう。俺は生きる。生きて業火に焼かれようが生きて償おう・・・」
「うん・・・・うん・・」

その光景を、遥か上空で見つめている―神―がいる
竜の騎士の親、マザー・ドラゴンその人であった。
「子等が喜んでいる・・・・私の最後の力を使った甲斐はありましたか・・・」
魔界よりの日々強まる邪気に押され、力が削り取られる中で使った最後の奇跡
バランが竜騎衆三人に竜の血を与えた時の祈りがマザーに届いた。

自分の命の火を分け与えてでも生き返ってほしいと、バランの切なる願いがマザーを動かし、最後の力を使う決意をさせたのだ。
「私に出来るのは最早ここまで・・・・数奇な運命を歩く―孫娘―よ、子等を頼みます・・・」
力を使い果たしたことに後悔はない。三人の魂を一つの場所に集め、ボラホーンも寸前まで黄泉の道に行かれないようにしていたが、力が尽き掛けあわやの所を寸前で間に合ってくれた。
これでダイ達に何があっても最早助けられないが、今眼下で繰り広げられている光景を見れた事を嬉しく思う。
神としては公平性に著しくかける行為であっても、―母―として、―祖母―としての務めを全うできたのだから。

決戦行かずに突然の休日①

もう泣きすぎて怒鳴りすぎて頭の中ぐしゃぐしゃだよ

「責任取ってはこんで～。」

疲れたから歩くの面倒、ボラホーンにしがみついて肩に乗っかるもんね。

「分かったがもう少し年頃の娘らしい口をきかんか娘よ。」

「めんどい、かったるい、疲れた。」

ボラホーンの忠告丸無視してたった三言葉で撃破する。

ボラホーンに抱っこされ、ガルダンディーとラーハルトを従えたティファは食堂に向かう。父は途中退席し、三人と自分がしっかりと話し合えるまでそっとしておきその間におじさんに挨拶に行ったらしい。

「初めてお目に掛る。ティファとダイの父でバランと申す。」

「ご挨拶いたみいる。俺こそ嬢ちゃんにいつも世話になってるよ。マトリフだよろしくな。」

バランとしてはダイをディーノと呼びたいが、それは自分の望みであって、果たして息子が良いと言ってくれるか分からずとりあえず無難にダイと呼ぶ。

マトリフもバランの為人は昨日把握済みで、今更何か言うつもりはなく嬢ちゃんの父親で受け入れ仕舞にする。

二人も挨拶をし終えた後食堂に向かう途中でボラホーンの肩にしがみつくティファを発見。

「ティファ、きちんと話せたか？」

「あ！父さん、おじさんもおはよう。降りるねボラホーン。」

二人の姿を認めたティファはぴょんとボラホーンから降りいそいそと二人に近寄りマトリフの方にまずむぎゅっとする。

「へへ、おじさんおはよう。体は・・・心音平常、脈平気、暖かい～。」

「ったく嬢ちゃんは。俺だってこの位いじゃへたばんねえよ。親父さんの方に行ってやれよ。」

「へへへ、父さんもおはよう。」

マトリフから離れれば次はバランに抱き着き少し上目遣いでちらちらと見る。抱っこしてほしい。
「お前は抱っこが好きだな。」
バランは苦笑しながらティファを直ぐに抱き上げる。赤子の頃から自分に抱き上げられ笑ってくれるティファを忘れた事は片時もない。ディーノは妻でなくては駄目だったが、親子四人で暮らしていたあの幸せの時間は色あせる事無く今でも胸を温かくする。
「ひひ、父さん大好きだよ。」
少し照れ臭そうに笑いながら、愛娘は自分の首にしがみついて嬉しい事を言ってくれる。これほど幸せな事が他にあるだろうか・・・
そのままで食堂に行けば兵達は大半が食べ終わり、席が丁度空いている。
「あ!ティファ達遅いよ!!」
「ほらこっちこっち。」
「全員分確保しておいたわよ。」
入ればすぐにダイ達が机と椅子を人数分くっつけて用意してくれていた。
そこには竜騎衆三人の場所もきちんと用意してあった。

ここに座っていいのか?三人が悩むその前に、ティファはさっさかボラホーンの手握って広い端の方に誘導し、二人にも来るんだよと目で凄む。威圧に負けた三人は大人しく席に座り、ティファはボラホーンの横に椅子を持っていき陣取っていただきますを言うとさっさか食事を摂る。
率先してやったもん勝ちだもんね。
果たしてティファの読み通り、ティファが食べればダイもバランの横に自分から行き座らせさっさか食べ始める。それを合図に各々も席に座り朝食が始まった。
「昨日ノヴァから聞いたんだけどハドラーが体調万全になってから決戦に来るようにだって。」
「・・・・・・あんの三流魔王・・・何上から目線なんだよ・・・」

「あ～おじさん、そこはまぁいいとして今日は行かないって伝える方法なんかない？」
「あん！そんなの放っておけばいいんだよ!!」
「あう・・・でもね」
「ふっふっふそこは俺に任せておきなよおチビちゃん!!」
「にゃ！パックさん!!」
　お休みお伝えしたいティファはマトリフに相談するが、あの三流魔王に守ってやる礼儀はないと切って捨てた途端パックが異会から出現。
「パック！今までどこほっつき歩いてたんだよ!!」
「いやだな～、俺が居なくて寂しかったかいマトリフちゃん。可愛い可愛いおチビちゃんの甘ったるい可愛いお願い聞きに来てあげたのに。」
　にっこりと絡みつくパックにティファは少々引くが、お願いできますかと恐る恐るお願いする。
「いいよ、可愛いおチビちゃん、今手紙書いたら死の大地に置いてきてあげるよ。」
「おい、あんた精霊だろう？死の大地の瘴気平気なのかよ。」
　ティファ達見える勢だけではく、人間にも見える様に顕現したパックにポップが尋ねる。確か精霊は清らかな所を好むと先生に教えて貰ったような？
「その精霊なら大丈夫だよポップ、彼なら魔界に行っても生きていかれるよ。」
　ポップの疑問に答えたのはようやく昼食を取りに来たノヴァであった。時間を合わせバウスンも共にやってきた。
「久しぶりだねパック。」
「おや坊ちゃんもお久しぶり。相変わらず大勢の精霊達従えてるね～。」
「彼等は僕の友達だ、従えてると言わないで貰おうか。」
　何だろう・・・パックさん普通なのにノヴァがピリピリしている気がする・・・

ノヴァはパックがはっきりと言えば嫌いである。潔癖なノヴァは、パックの芝居がかった物言いや時折にじませる毒なんて好きになれる訳がない。周りの精霊達もパックの性質を知っているだけに早く立ち去ってほしい。
「まぁいいや、おチビちゃん、手紙今書いて。」
「・・・・パックさんがいくんですか？」
「ん？君自分で行きたいの？」
「・・・・・・駄目ですよね。」
ティファとしては手紙だけ死の大地の片隅においてはドラーに呼び掛けて立ち去れればいいかなと思うのだが、パックの言葉聞いた途端、食堂に残っている一同の気配が変わったので辞めておく。行くと言ったらなんかすごい事になりそうだ。
「そうそう、俺に任せておきなよ。異界通れば俺は安全だよ。誰に渡せばいい？」
「そしたら手紙今書きます。あて先は魔お・・・・魔軍司令官ハドラーにと言えば本人出てくると思います・・・ガルーダに付き添って・・・」
「要らない要らない、いいから手紙書いてね。」
「分かりました、お願いしますが無理だと思ったらすぐ帰ってきてください。手紙ポイと置けば大丈夫だと思うので。」
朝食の席を離れ、隣の席で直ぐに手紙をしたためる。内容は昨日の毒化騒ぎでもしかしたら自分達も発症する恐れがあるので万一考え決戦お休みします。
まぁ遅効性を考えてもそれは無いだろうと分かっているが、体力的に駄目ですと書くのも癪だし、何よりそちらのせいだと珍しく嫌味も言いたいのでこう書いた。
この文言のせいで夕刻騒ぎになるのだが、ともかく今日は決戦には行かずお休みになった。

決戦行かずに突然の休日②

お休みになったからには今日はのんびりタイムだ!!

「え～、折角なので改めて自己紹介を。」

「おいティファ、なんでそうなる。」

「だってポップ兄、一緒にいるんだからまずは名前知ってそこからでしょう。」

私と父さんと三人はお互い知っててても、ダイ兄達はそうもいかない。私の話か水晶の映像で―知っている―だけで実際には知らないんだからしょうがない。

チウ君とマァムさんなんて父さんに会ってすらいない、これから一緒に戦うのだから名前の紹介から入って仲良くして欲しい。

「そしたら先ずは・・・・父さん達から?」

「う・・・うむ・・・・」

「ティファ～!父さん困ってるよ!俺達の名前知ってもらえればそれでいいでしょう!!」

「え～?・・・・父さん達それでいい?」

ティファの無茶ぶりに固まったバランは、息子の言葉に縋りつき全力で首を縦に振る。自分達の立場をどう説明して名乗ってほしいのだティファは!!

優しいがもう少しこう・・・なんとも複雑な気分になり、ラーハルトたちも溜め息しかでない。矢張りティファの思考はどこかぶっ飛んでいる。大逆侵した自分達を許して受け入れ普通に自己紹介までしろって普通ない。

「えっとそしたら俺はダイだけど、父さんや・・・ラーハルトさん達はディーノでもいいよ。」

「・・・・良いのか?」

「うん・・・・父さんと母さんが付けてくれたんでしょう。そしたら俺はダイでもあって・・ディーノでもいいかなって。変かな?」

照れ臭そうに頭を掻きながらもごもごいうダイを、バランは素早く膝に乗せ抱きしめる。

「ありがとう・・・・ディーノよ・・」
「父さん・・・泣いてるのかい?」
自分の身勝手で子等と死闘し、その親友迄殺し掛けた自分を許してくれる。その上で名前まで許してくれるとは思ってもみなかったバランは、息子を抱きしめはらはらと涙をこぼす。
自分はこれ程迄弱かっただろうか?テラン戦から幾度自分は泣いたのか最早数えきれない・・・・涙など、妻を失ってから枯れ尽くしたと思っていたのに・・
「へへ・・・ダイの奴良いこと言うじゃねえかよ。俺はポップ、知っているだろうけど魔法使いだ。」
弟分の優しさに涙ぐみながらポップが名乗るのを皮切りに、一行全員が名乗り上げる。
元同僚のヒュンケルとクロコダインも改めて名乗り、よろしく頼むと笑みをもって。
チウの時はラーハルトがまず礼を述べる。
「チウと言うのか。我等をこの砦に連れて来てくれたこと感謝する。」
「そんな・・・僕はただティファさんがその・・・・喜ぶと思って・・・」
「世話になったなチウ、良かったら後でルードに乗せてやろうか?空飛ぶの気持ちいいぜ。」
「ありがとうございます。でもパピィ・・・僕の部下のパピラスがさっき一緒に空の哨戒に行く約束したので・・・」
「そっか、お!そしたら一緒に行くか。」
「それでしたら。」
ダイ一行のマスコット化しているチウは、直ぐに竜騎衆三人と打ち解け、本人はそのつもりはなくとも潤滑油となり自然に場を和ませてくれる。
いい雰囲気の中でマトリフも名乗り、残るはバウスンとノヴァだけ。
「私はバウスン・・・今更名乗る事はないな・・」
昨日治療を全て終えた後、バラン達は落ち着いた頃合いを見計らいバウスンのもとを訪れ直接詫びも受け取っているので略式で終える。

償う道を歩くのならば何も言わない事も伝えているのでそれ以上くどくどしくなるのを避けて。
だがノヴァは様々に忙しすぎて今ようやくバラン達と落ち着いて対面する。
「初めてお目に掛ります。ティファと仲良くさせていただいている騎士職をしているノヴァと言います。今後色々とよろしくお願いします。」
のんびりとした、身内だけに向ける心からの笑顔で名乗る。昨日のバラン・ラーハルト・ガルダンディーの働きを忙しいながらもつぶさに見ていたノヴァは、彼等の言葉に嘘偽りはないと判断し受け入れる。
もしも偽りがあったら?その時は凍らせて砕くので問題ない
温かい笑顔だが、元魔王軍の内部事情をヒュンケルとクロコダイン以上に精通しているバラン達は、魔王軍が怖れた殲滅の騎士団長の二つ名を知っているだけに背筋に冷や汗が流れる。
この子供が精霊王・ハイキングの愛し子・・・・・二日間あの精霊王の足止めなければ、下手したらバランが竜魔人化してドルオーラで突破しなければならない程の氷の魔術に長けた者にはとても見えない。
それが手を携えていきましょうとほんわかと笑って言われ、何やら気を張るのが馬鹿らしく思えてしまう。

「そういえばティファ、昨日来たザムさんは?」
「うん・・ふぐふぐ・・昨夜の内に帰ったよ。あの人魔族でここで見つかると少し面倒な人だから。」
「あ!あいつ帰っちまったのかよ・・・師匠に引き合わせてやろうと思ったのによ・・師匠覚えてるかロモスの偽覇者の剣事件。」
「あん?ああ、お前とダイが引っ掛かった奴・・・・まさかその罠張った奴か?」
「そ、あいつザボエラの息子とは思えねぇ良い奴でさ、俺とダイとマァムで助けようって決めて、ティファに渡されていた生命力底上げする

薬飲ませたら全部直してくれてよ。ダイがたまたまポケットにしまって忘れてた筒に入れてティファの所に送ったんだよ。」
「ポップ・・・・お前な、嬢ちゃんは医者じゃねぇんだぞ？」
「いや、結果オーライだしいいじゃんかよ師匠。」
いい事したろうとどや顔してるけど、おじさんの言う通りだ。その件一言ものもうそう
「あのねポップ兄、あの時私も父さんもびっくりだよ！助けてやってくれの一言文で知らない人送られる身にもなってよね!!」
本当にあの時は驚いたんだから！
「わりぃわりぃ。」
「・・・反省する気ゼロか・・・まぁいいや、ザムさん助けてよかったみたいだし。」
「あの青年には世話になったしな。」
「そうだね～・・・・あ～、時にね父さん。どうしてこのタイミングで私に会いに来ようと思ったの？」
もののついでの様にティファは出来るだけ自然に聞いてみる。このタイミングできたからには重要情報あるはずだ。皆と打ち解けたみたいだしとんでもない事聞いても受け入れてくれよう。
タイミングを見計らい聞いてみるティファに、其れ迄柔らかい笑みでダイを撫でていたバランの体が瞬時に強張る。
「どうしたの父さん？」
「ディーノ、ティファ、そして皆も聞いて欲しい。私は大魔王バーンの恐ろしい企みを知ったのだ。」
明かされる大魔王バーンの最終目標を聞いたダイ達の表情も一変し、血の気が引く。
ハドラーの様に地上を征服するのではない、地上そのものを消す気でいたとは!!
「そんな事って・・・そんなのって・・・」
ダイの体がカタカタ震える。仲良くなったロモスの人達が、パプニカの人が、ポップの両親がいる村も・・・・マァムの村も・・世界全て消されようとしていただなんて!!

ポロン～
お休みね～夢を見ましょう～　夢を見ましょうまた会う日まで～
震えているのはダイだけではなく、ポップやマァム、チウとメルルも震えが止まらない。歴戦の強者のヒュンケル達も、大魔王バーンの途方もない企みに青褪める中、不意に優しい歌声が耳朶をうつ。
兄達の震えを見たティファは素早く竪琴を取り出し床に座り兄達の好きな歌、アルキードの子守唄を歌い上げる。
ティファの歌が優しく心に染み入り、聞き終えた時には心の中が温まり震えが止まっていた。
「勝てばいいんだよダイ兄。」
歌い終わったティファは楽器を仕舞い、にこりと微笑む。
どんな事を相手が企もうと、こちらが勝てば問題ないではないかと笑う妹に、ダイは父の膝から降りて抱きしめる。
「そうだね、そうだよ。俺達が勝てばいいんだよ。」
「ティファの言う通りだ！相手の企みに飲まれてる場合じゃねえ。」
「ありがとうティファ、落ち着いたわ。」
「ふふ、どういたしまして。」
「ティファ、もうちょっと一緒にいたい。」
元気になったダイは、どさくさ紛れにティファを自分の膝に乗せてまた食べ始める。
「もうダイ兄たら!!」
「ほらほら、ティファも食べようよ。パン取ってあげようか？」
「う～・・・その前に父さん、その情報どうやって知ったの？」
「あ、そういえば・・・・あのさ・・・まさか単騎で死の大地の大魔王に会ったとか・・」
「ディーノよ、流石にそれでは今私はここにはいないぞ。」
息子の思いっきり的外れな言葉にバランは苦笑しながらなでて爆弾発言を投下した。
「キルバーンが私を殺しに来た時、問いただしたら素直に話したの

だ。」
「・・・・・・え？」
「余程私を殺せる自信があったのだろうが返り討ちにした。」
「・・・・・・えええええ!!!!!」
今日一番・・・・・・否！一行にとっての大朗報が今聞けた!!!
バン！
ポップは机を叩きながら立ち上がり、バランに真剣な瞳で問いただす。その威圧は尋常ではなく、バランすら飲み込まれかける。
「バラン！あんたあの疫病神倒したのかよ!!!」
「疫・・・」
「言い方どうでもいい!!キルバーン倒したのかよ!!」
「んむ・・・胴を真っ二つに・・・」
「・・・・・・いっやほう!!!!全員聞いたか！聞いたな!!今日はお祝いすんぞ!!!飲んで騒いでの無礼講だ！」
「父さん！凄いや!!あいつ倒すなんて本当に凄い!!」
「バランさんありがとう！本当にありがとう!!!」
「あんた流石だぜバランさんよ！今日は飲んで祝うぞ!!お前達も飲んでいいぞポップ!!」
「見事だ！流石わ竜の騎士!!」
「見事なりバラン!!!」
・・・・・・・・・・・・何なのだ一体・・・
ポップの狂乱めいた喜びのガッツポーズをしてお祝い宣言を高らかに言い、息子に礼を言われ、マァムという娘に手を握りしめられぶんぶん振られながらお礼を言われ・・・マトリフ殿も沸き立って・・・ヒュンケルとクロコダインにまであそこまで礼言われるとは・・・
まるでたった今世界を救ったかの如く称賛されるとは思わなかったバランはぽかんとし、竜騎衆三人も死神の恐ろしさは承知しているが、倒しただけでここまで喜ばれるとはどうした事かと唖然とする。
「・・・・ティファさん・・これ僕達ついていけない・・」
「何もここまで言わなくとも・・」

「・・・少しそっとしておこう・。」
例によってキルバーンそこまで悪く言えない極少数派はティファの下に集い膝を屈してこっそりお話をする。
折角のムードを壊すのは忍びない。
ああ、でもこれ聞いておかないと・・・
「父さん、その・・・遺体はそのままにしたの？」
「ん？いや、魔界の者は時折胴を斬った後でも動く者がいる。暫く見ていたが動かず助けも来なかったのでそのままにした。」
・・・・ピロロこなかった？・・・そういえば私一度もあいつ見かけてない。この世界のピロロと仲悪くて見捨てられてコアだけ回収されたのかな・・・
それは見捨てられたみたいで・・・悲しいな
回収してあげて・・・せめて埋めて上げたいけどダイ兄達が許すまい・・・賭けは・・答えは見つからなかった・・・これでよかったのかもしれない・・
言い知れぬ悲しさを振り切るようにティファは一度目を閉じバランにもう一つ尋ねる。
「真魔剛竜剣で斬ったの？」
「ああ、こちらはかすり傷一つ追わなかったぞ。」
「・・・・今すぐ剣抜いて貰ってい良い？」
「ん？後ででは・・」
「今お願い。」
娘の真剣な様子に食事中ではあるが、机に立てかけていた剣を手に取りすらりと抜き放つ。
ティファの様子にダイ達も剣を見れば、剣の中ほどが腐食している!!
「・・・これは・・・何故このような。」
愛剣の痛ましい姿にバランは絶句する。今まで数多くの死闘を共に潜り抜けて来た剣の異変に。
「父さん、オートドールって知ってる？」
「オート・・・ヴェルザー陣営に数体いたが・・」

「キルバーンはそのオートドールなんだよ。もしかしたら倒された時用の報復の罠が体内に仕掛けられていると思って見て貰ったんだよ。」
「あれが・・・そうか、このまま気が付かなければ大事な戦いの場面で役に立たないところであった。助かったぞティファ。」
　魔界のマグマ設定は案の定あったか。これを治せる人と言えば・・・
「魔界の名工、ロン・ベルクさんの下に行きましょう。」

決戦行かずに突然の休日③

お出掛けしたいが今は決戦前・・・・どうすっかな～

真魔剛竜剣治してあげたし、されど砦で出ていいものか頭を悩ますティファに天啓が降りる。

「ティファ、バランさん達と行っておいで。砦には僕がいるから大丈夫。何だったらダイ君達も一緒に出掛けておいでね。良いでしょう父さん？」

「そうだな。明日に備えて準備は万端に整えておいた方がいい。ダイ君達の剣も確か同じ匠の業物だったね。きちんと手入れをするのも戦いに備える大切な事だ。」

ノヴァは優しく、バウスンは一行のメンバーも外出できる理由をきちんと作って行ってくるように後押ししてくれる。

「う～うっっノヴァ大好き!!!」

兄の膝から飛び出し、向いに座っているノヴァに飛びつく。飛びつかれたノヴァは何事もなく受け止める。

「ありがとノヴァ!!」

「いいよティファ、この位何てことないよ。」

「・・・ノヴァなんか変わったね。」

「そう？」

「うん・・・大人っぽくなった。」

「そうかな？大人か・・・・・ねぇティファ、僕が大人になったらティファお嫁に来てくれる？」

「・・・・・・は？」

「ん・・・実はさ、今まで散々僕に見合い話きて大勢の人と会ったんだけどティファよりも大切にしたいと思う人がいなくて。」

「・・・・それで？」

「うん、ティファの事恋愛じゃないけど一番大切な人なんだよ。ティファと生涯を共にできたら僕は嬉しい。」

・・・・えええ!!

いきなりの氷の勇者の告白に、ノヴァの父バウスン以外が凍り付く。恋愛ではないが一生一緒にいたいってなんか達観した大人の様ではないか！

惚れたとかではないとハイキング様には言ったけど、生涯を共にしたいのはティファだけだ。

「ノヴァ・・・・私そういうのよく分からないよ・・私もノヴァ好きだけど・・」

「ゆっくりでいいよ、この戦いはこっちが勝つんでしょう？」

「うん・・・・」

「その時に・・・・・」

「そういう事は早く決めて貰った方がいいんですよ坊ちゃん！」

甘いんだか何だかの空間に割って入ったのは、バウスン将軍一家を陰日向なく支えてきたノヴァの乳母、現メイド頭兼料理頭を務めている恰幅の良い姉御肌のナタリーが、リンガイア名物焼き菓子をもってやってきた！

「坊ちゃんはやめてよナタリー。」

「好いた女の子一人口説き落とせない様じゃまだまだ坊ちゃんですよ。」

「ちぇ、ナタリーは本当に・・」

「おはようございますナタリーさん。」

「ティファちゃん。」

「はい。」

「おばあちゃんでしょ？」

「は・・・あ、いえ・・・でも・・」

「ナタリーさんなんて他人行儀じゃ返事しないよ。」

「・・・・・ナタリーおばあちゃん・・」

「はいよ、二人の好きな焼き菓子焼けたよ。お食べな。」

「うわい！焼きたてだ!!」

「いただきます!!!」

さっき生涯を共にしてほしいと言っていた大人っぽいノヴァは、焼き菓子を前に相好を崩し、机に置かれた焼き菓子に手を伸ばしパクパク食べる。
「あ！こっちキイチゴジャムだ。」
「こっちオレンの実の果肉入り!!」
ティファも手を伸ばし、中身が違えばどちらからともなくお互いの口に持っていきそのまま直に分けっこする。
昔からの癖を知っているバウスンとナタリーは目を細めて笑っている。
二人は実に似合いの夫婦になりそうだ。こうやって毎日仲良く暮らし、いつか子が出来る程の大人になっても仲睦まじく暮らそう。
「ノヴァなら・・・本当にそうなってくれたらいいのにな・・」
「・・・ディーノ、あの少年とティファは・・・」
「うん、マトリフさんとおんなじくらいに出会って、以来仲良しなんだって。俺もノヴァ好きだよ。」
「そうか・・・」
娘の無邪気に笑う姿と、息子の後押しにバランはそれ以上何も言わない。二人が好き合うのならば、自分が何を言えよう。
「ナタリーおばあちゃん、昨日から今日まで大変だったでしょう。」
「あんなのどってことないよ。ティファちゃん達の方が大変だったろう。」
昨日の夕刻前に、リンガイアのバウスンの家に戻ったノヴァはナタリーを砦に連れて来た。連れてきたのはナタリーだけではなく城から大勢の料理人を借りてきて。
空腹は思考を鈍らせ体力ももたなくなる。徹夜になるのはあきらかだったので早々に料理人を確保して一口サイズのサンドイッチなどを作ってもらいお陰で薬作り治療と集中してできた。
「私も手伝えば・・・」
「ティファちゃん、あんただって薬作って疲れてただろう？無理しなさんな。」
「それは―慣れてる―から大丈夫・・・」

「ティファちゃん！」
　徹夜も薬作りもひっくるめて大変なことに慣れていると言おうとするティファを、ナタリーが強く止めに入った。
「―子供―が、そんな大変な事に慣れるもんじゃないよ。」
「ナタリーおばあちゃん？」
「分かったかい？」
「でも大丈夫だよ。体力は自信あるし、力持ちだし、料理だって慣れてるから大丈夫なんだよ。」
「・・・・・ティファちゃん・・」

　あれ・・・まただ・・
　時々私の事を知っている大人の人は、私の事をこうやって困った事を言う子供みたいな顔をするんだよね・・・どうしてだろう？出来るからできるって言っているだけなのに・・・そして大抵この後は・・

　ポンポン
「無理しないんだよティファちゃん。」
「・・・・はい・・」
　こうやって宥めようとする
　ティファは子ども扱いされてると憮然とするが、ナタリーは胸が痛む。
　急いで大人になろうとするティファが可哀そうで仕方がない。力があろうが何だろうが、ナタリーにとって、ノヴァもティファも可愛い子供なのに。
「沢山お食べ、出掛けるんだろう。」
「はい、夕食前には戻ってきます。」
「あいよ、ティファちゃんのお父さん達は何か食べたいものあるかね？」
「・・・いや我々はいただけるのであれば・・」
「・・気にしなくて・・」
「食えればいいし・・・・」

「お任せする。」
「なんだい張り合いのない男達だね～。ここはドンと決戦前には肉がいいとか言えないもんかね。遠慮せずバンバンお食べ、あ、それとマトリフさんは若い女の子見ても口説くんじゃいよ。」
「けっ、言ってろばあぁさん。若い女の子は生憎嬢ちゃんで満杯だよ。」
「はっはっは!その通りだね～。」
バランやマトリフ相手にも豪快に話しかけ竜騎衆三人も手玉に取ったナタリーは手を振って食堂の調理室に戻る。その目尻に、涙が浮かんだのは誰にも見られる事なく・・・

「出掛けるのは私とダイ兄とポップ兄と父さんとラーハルトとヒュンケルでいいのかな?ボラホーンとガルダンディーは行かないの?」
「俺はチウと空の見張り一緒にする約束してるからな。」
「俺はまだ体が本調子ではないから止めておく。それよりも明日に備えよう。」
「分かった、そしたら・・・ダイ兄達着替えてね。」
ダイ兄と父さんとヒュンケルは武具の手入れ、ラーハルトさんは父さんの護衛とロン・ベルクさんに魔槍のお礼で、ポップ兄はついてきたいからだとか。
残りの皆はゆっくり休むのと見回りをすると言ってお留守番。
例によって例の如くお着替えだ。
出掛ける前の御着替え待っている間にレオナ姫とエイミさんとアポロさん発見!!
早速お声掛け!
「レオナ姫、エイミさんアポロさんおはようございます!!」
「あらティファ達まだ食事中?」
「おはようございますティファさん。」
「・・・おはようございます。」

食堂前を偶然通りかかった三人はティファの声で一行メンバー勢ぞろいなのに気が付き食堂内に入り、レオナとエイミは明るくティファに挨拶を返すが、アポロは矢張りといおうかかなり距離感を感じる様子で返す。なにせマトリフがいて視線がまだ険しいうえに、アポロ自身がティファに対する態度を決めかねている。
別にティファ自身は嫌いではない。何せ自分の敬愛するレオナ姫を救ってくれたのがティファの作った万能薬だからだ。
そこに感謝はすれど・・憎いハドラーと和やかに話をしていた光景が、今でも自分の胸中を怒りが焦がしている。
どうしてもそこは許せず、さりとて世界の為に最前線を支えているのもまた事実であり、様々な葛藤を抱えているのを知らないティファは気軽に話しかけてくる。
「皆さんお食事は？」
「打合せしながら摘まんだくらいね。」
「そしたらリンガイア名物焼き菓子食べませんか？ノヴァの家の・・・」
焼き菓子はあっという間に売れました。女の人はスィーツに弱いのは古今東西変わらない。意外にもアポロさんにも好評で平らげた。
「これは何とも・・・」
「アポロさん焼き菓子初めてですか？」
「ええ、余りパプニカを離れる事はなかったので・・」
「後でナタリーさんに伝えておきます。きっと夕食のデザートに出してくれますよ。」
「それはありがたい。」
兄達を待っている間に思いがけなくアポロさんとお話できた。
昨日のキアリク凄かったな～。
この砦で一番キアリクを掛けたのはアポロであり、その後も全員が解毒できるまで他の手当てを懸命に手伝い、終了宣言と共にぶっ倒れたのを運んだのがなんとノヴァ自ら運んだのだ。
ティファの騒動事はどう考えても一割はティファで、八割は無能魔王で、残りの一割しかアポロは悪くないのを知っているから・・世間知らずすぎるティファと世間知っているくせ無能者に無神経された

アポロを、傷つけるつもりは無い。
　昨日のアポロの献身的な働きを見て、アポロという人物の為人を知っているのだから。
「これからベンガーナデパート経由でロン・ベルクさんのところ行きますが、デパートで入用なものありますか？」
「特にないわね、楽しんでらっしゃいティファ。」
「たの・・・・姫様、武器の手入れに・・」
「はいはい、よしよし。」
「むぅ～。」
「皆お待たせ!!」
　レオナに弄られている丁度その時、ダイ達が着替えから戻ってきた。
　全員前回と同じ服だが、バランの砕けた服装を始めてみたラーハルト達は絶句する。モノクルも取っているせいか、ダイと並んでいれば市井の親子のようだ。
「へへへ、父さんやっぱりかっこいい。」
「言いすぎだぞティファ。」
「ティファの言う通りだよ。父さん其の胴着よく似合うよ。俺も早く背が伸びないかな～。」
「ダイ兄ならあっという間だよ。さてお出掛けお出掛け～。」
　いつもの様にティファはガルーダで、他はキメラの翼を持ったダイに運ばれベンガーナデパートの屋上の降り立つ。
　デパート内ではとやかく言われずとも、このご時世街中を半魔のラーハルトが堂々と歩けないところが辛い。
　石投げられなくとも痛い視線回避で屋上に降りて御免しようと思ったら・・・
「これはバラン様！また何か緊急の？」
「いや、今日は娘が来たいと・・」
「あ～どうも、昨日レッドコール活用したティファです・・・・緊急でないですがガルーダ預けても？」

「構いませんとも!!ささ、皆様お早く中に。」
　昨日の警備兵がいたおかげでスムーズに話が進み、ラーハルトを見ても誰も特別な事を言わずにコンシェルジュ部門接客室に案内してもらえた。
「小娘・・・・俺が居てもいいのか？」
「大丈夫、デパートって時折はぐれ魔族さんや半魔の人が宝物持ち込むことあるから偏見は―外―よりは少ないよ。」
「そうか・・・そういう事もあるのだな・・」
　人生の大半を人間の迫害に晒されて来たラーハルトにとって、リュート村以外でもそういう場所があるのだと知るのは不思議で、そして胸が苦しくなる。
　自分は・・・自分達は一歩間違えれば酷い事をしない者達も諸共に消す手伝いをしようとしていたのかと思うとゾッとする・・・・そして同時に安堵する。
　我らはこの方達に敗れて良かったのだと

「これはティファ様！バラン様も昨日ぶりですかな。」
「早い再会になったな。」
「お久しぶりですアクバルさん。昨日は大変助かりました。」
「何の、我等ベンガーナデパートは全面的に貴方方をサポートできたこと誇りに思います。
　ご入用の物あらばいつでもお言いつけを。」
　アクバルとの再会にバランは苦笑し、ティファはにっこりと笑ってお礼をする。昨日頼んだ以上の物資に目を丸くしたが、あれがあったおかげで助かったのだ。
「今日も薬草が入用ですか？」
「いいえ、お礼と少し注文が。少し急いでいるので手紙で失礼します。
　そしてこちらが私の兄達と仲間達です。」
「え！・・えっと・・・・ティファの兄で勇者している（？）ダイです。」
「兄のポップで魔法使いしています。」
　ティファ！いきなりの無茶ぶり毎度毎度酷すぎる!!

「ダイ一行の戦士ヒュンケル。」
「バラン様の配下のラーハルトだ。」
狼狽しながら挨拶するダイ達が全員名乗り終えるとアクバルも優美にお辞儀し挨拶を交わし終えると、ティファは用は済んだと直ぐに辞去の挨拶をする。
「せめてアオの所に寄っていただけませんか？」
「アオじいちゃん・・・分かりました。ついでに少し食品店も見てから行きますね。」
「はい、是非に。」

ティファ達が行った後、アクバルは早速手紙を読み始める。
昨日のお礼からが始まり、ベンガーナデパート全員食事とお酒を贈らせてほしい旨がしたためられていた。
―三千～五千ゴールドかかるでしょうが受け取ってください。皆様の迅速な対応のおかげで死者が一人も出ずに済みました。そのお礼なのでお願いします。

勇者一行の料理人

ティファより―
一通目にはお礼の品を送りたい旨が。そしてもう一通は―礼服―の注文書が。
それは―大戦終了後―、兄達に必ず必要になる物。いざという時に慌てなくていいように、特急料金でお願いしますと書かれ、入用の人物の名前と寸法が全て書かれている。
そこに書かれているのは男物三着と、大ネズミの子ですがと書かれた子供用が一着、そして女性物が―二着―
それぞれ詳しい寸法が掛かれており、特に大ネズミの子はイラスト付きの寸法書で、当人がいなくとも仕上げられるようにきちんと全て書かれていた。
本人たちが寝ている間や、式をふんだんに使って測った寸法に誤りはないとティファは自信満々である。

大戦が終われば、あの方達はあちこちに引っ張りだこになるか・・・
王城にも行くだろう、これは早急に届けられるようにしよう

「アオじいちゃ～ん。こんにちわ～。」
「来たかティファ嬢ちゃん!!薬草足りたか！何かまだいるか⁉」
「・・・デパート破産しない？」
「はん！子供はそんな事気にすんじゃあねえ!!いつでも言えよ！」
「はは・・・ありがとうアオじいちゃん。」
手短ながらもしっかりと礼を言い、次に食品店に向かう。
「・・・・ロン・ベルクさんに贈り物・・」
「あの武器見たらロン・ベルクさん怒るかな？」
「うむ・・・武器を大切にしない奴は滅んでいいと言っていたしな・・・」
これから向かう先の主のご機嫌とりのお酒を探し。伝説の武器腐食させた父に対する怒りを和らげて貰う為にティファ達は真剣に選んで買った。
酒店の向い側に甘味売り店がある。甘味の中には当然・・・
「・・・・ヒュンケル、それ欲しいんですか？」
「いや！俺は・・・」
「いいですからどれですか？」
「その・・・・・・鼈甲色のを・・・」
アメをまじまじと見始めたヒュンケルに溜息つきながらティファはもう何も聞かずにさっさかと買う。
「ヒュンケル、一日一個にしてね？」
「お前食べ過ぎじゃね？」
「いやそんな事は・・・分かった、一つにしておく。」
ヒュンケルはアメが絡むと本当に駄目っ子だとダイ達は溜め息をつき、元同僚達はヒュンケルとはこんな者だったか？自分達の次に人間憎んでいなかっただろうかと目を疑う。
特にラーハルトは不安になってきた。
頼りになる強者と見込んだからこそティファ様と魔槍を託したのだがこいつ本当に大丈夫だろうか？

全て買い終わったティファ達は屋上に戻り、一路ロン・ベルクの下に飛んでいく。

決戦行かずに突然の休日④

「こんのバッカ野郎!!!!!!!!」

え～、ベンガーナのランカークス村より数キロ離れた森の中にて只今絶賛説教の嵐ふいてます。

説教しているのは言わずと知れた魔界の名工・武具を大切にしない奴は滅んでよし、寧ろ俺が滅ぼすを地で行っている俺様系美中年・ロン・ベルクさん。

対して説教されているのは神がこの世に遣わした奇跡の御人、三界の守護者・当代の竜の騎士バラン父さん。

・・・・やっぱりこうなるよね～。

デパートを後にしたティファ達は、一路ロン・ベルクの下に飛んでいく。

行った先には小屋の前で椅子に座ってお酒飲んでるロン・ベルクがいた。

「・・・・・どうしたお前達？」

昨日パプニカで見送り今日の今頃は大魔王達との決戦だとばかり思っていたロン・ベルクは、急にダイ達に訪ねられ驚く。

「いや～、実は決戦お休みしまして。」

頬を掻いて説明するティファになんじゃそりゃと胡乱な目を向けるロン・ベルクは悪くない。

普通決戦休みましたと言われてそうなんですかという奴がおかしい。

だが訳を聞いてみれば納得する。

「・・・・粗忽な奴がいたもんだ・・」

敵の落ち度で日延べになったのなら仕方がない。

そこは一旦置いておいていい。

「ロン・ベルクさんの特訓のおかげで俺慌てずに戦えたよ。」
「俺はむしろ敵に翻弄されて情けなかったが、明日の決戦で借りを返すつもりだ。」
「そうか・・・それよりもそこの二人は誰だ？」
　ダイとヒュンケルのお礼をそこそこ受け取ったロン・ベルクは、見知らぬ二人を警戒する。
「ええ、こほん。私とダイ兄の父・バランです。そのお隣の人父の配下のラーハルトです。」
「・・・なに？」
　ティファの紹介にロン・ベルクはフリーズする。何故ならダイとティファの親父と言えば・・・
「初めてお目に掛る。―ダイ―とティファの父でバランという。いつも子等がお世話になっている。」
「バラン様の配下、ラーハルトだ。実は以前貴公の作られた魔槍の世話になった者だ。」
　ロン・ベルクのフリーズに気かつかないバランとラーハルトは真っ当に挨拶するが、ロン・ベルクの耳に届いておらずまだ固まっている。
「・・・ダイ兄・・・これって・・」
「ティファ・・・ロン・ベルクさんもしかして・・」
「あれか！あれなのか!!!」
「・・・バランに忠告すべきだったか？」
　ロン・ベルク初見のバラン達はともかく、ダイ達は―とある事―に思い至り集まってひそひそと話し出す。
　自分達の考えが正しければそれはそろそろ起こるだろう！

「・・・・・くれ・・・」
　ん？
　挨拶しても返さない魔界の名工にバランとラーハルトは、ようやく何か言いながらゆらりと近づくロン・ベルクに何事か問おうとした時―それ―が起きてしまった。

「真魔剛竜剣見せてくれーっ!!!!!!!」

武器大好き愛の大暴走来た～!!いきなり叫び出して父さんにのしかかる様に迫って剣見せろの一点張り!!

「神々の奇跡の武具!!真魔剛竜剣見せてくれ!!」

「な!いや見せるが・・・」

「だったら四の五の言わず今見せろ!直ぐ見せろ!!とっとともったいぶらずに見せやがれ!!!」

一体どこのやくざもんになったんだロン・ベルクさん・・・

凄いお人なのに聞いてて悲しくなる事言わんで欲しい

剣の師匠で自分達の武具の面倒なにくれと無く見てくれる頼りになる名工の大暴走に、ダイ達は聞いていて切なくなる。

「小娘、ヒュンケル、あれが本当に魔界の名工ロン・ベルクであっているのか?実は違う奴なのではなかろうな。」

剣見せろの一点張りで、目を据わらせて主に迫る超やばい奴が魔界にその名高き名工ロン・ベルクだと信じたくないラーハルトがティファ達に頼むから矢張り別人でしたと言って欲しい口振りで尋ねる。

・・・気持ちとっても分かるんだけど・・・

「・・諦めてラーハルト、あの人本当に当人だから。」

「ラーハルト、本来のロン・ベルクは良い奴だ。」

「・・・・・俺の中の想像と違いすぎる。」

気持ちは分かるが諦めて。あれもロン・ベルクさんだから。

「これが・・・・夢にまで見た真魔剛竜剣。」

神が生んだ奇跡の剣を、この手に持てる日が来ようとは

自分が編み出した技、星皇十字剣に耐える事が百%可能な武器をバランから渡されたロン・ベルクはジンとする。

鞘に収まっていても感じるこの圧倒的なオーラは、自分の作る武具もかくありたいと目標にしている夢にまで見た憧れの剣なのだから

無理はない。
刀身を見る前からうっとりとしている魔界の名工に、バランは少し・・かなりドン引きしたいが常日頃子供達がお世話になっているようなので失礼な事は出来まいと気力で踏みとどまる。
小屋の中に通され武器をバランから受け取ったロン・ベルクの様子に、ティファは速攻でダイ達に完全見えない所で式で耳栓作り、は無言で父以外に渡しラーハルトには問答無用で付けさせた。
絶対に嫌な予感しかしない。憧れていた剣の惨状見ればこれはきっと・・・
「なんだこれは!!!!」
・・・・・・こうなる。
ロン・ベルクの怒鳴り声に、ティファの気配に気が付いて寄ってきた小モンスター達と精霊達がビビって逃げ出し、一帯にいた鳥達も空に飛び立った。

愛剣を腐食させたのは紛れもなく自身の落ち度だと、人生初にティファ以外から説教くらっているバランは弁解せずにひたすら怒られるのを見かねたダイとヒュンケルが二人の間に割って入り、ロン・ベルクに途轍もなく効く一言を放った。
「「キルバーン斬ったせいで腐食した」」
「・・・・・・今何って言った二人共？」
「だから父さんがキルバーン斬り倒したんだよ！」
「あの疫病神、斬った相手の武器駄目にする罠体に仕込んでやがったんだよ。」
「そのせいなのだから余り叱らないでやってほしい。」
ぎっぎっぎ・・
ダイ達の説明を聞いたロン・ベルクは、そんな音がしそうなほどゆっくりとバランの方を見るや否や
「ハッハッハッハッハ!!よくやった!!あいつ倒すだなんて大した奴だ

お前さんは!!!それならそうと早く言ってくれ！」
　みるみるうちに上機嫌になりバランの手を握りしめ下手したら真魔剛竜剣受け取った時よりも大喜びし、椅子を勧める始末。憧れの武器より天敵の変態死神滅んだ方が余程嬉しかったらしい。
「そこでゆっくりしててくれ！この剣は俺が全力で治してやる!!今まで以上の切れ味にしてやるから待っていろ!!!」

　本当に・・・何故キルバーンはここまで嫌われぬいているのだとバランとラーハルトには疑問しか浮かばない。

「ふ・・ん、これなら表面の腐食を研いで剥がしておしまいだな。この剣は大したもんだ。」
　剣の腐食度合いがどこまであるか音で判断するために槌で軽く腐食周りを叩いてみれば、表面しか腐食がないのが直ぐに分かった。どうやら自己修復が早く、粗方直っているようだ。
　これではあまり自分の出番はないが、放っておいていいものではない。大魔王が相手であれば、これくらいでも致命傷になりかねなかった。
　キルバーン倒しましたの大朗報を聞いたロン・ベルクは機嫌よく真魔剛竜剣を研いでいく。
　あの変態は自分で斬りたかったが、お嬢さんの親父さんが斬って捨てたのなら納得する。これであの馬鹿げた賭けなどご破算だ、あの世で嘆いてろ！
「うん、これで良し。見てくれ。」
「これは・・・見事だ。」
　神のアイテムをあっさりと治すとは途轍もない腕だ。
　しかも受け取った剣を掲げてみれば、今まで以上の輝きを光を放っている。
　バランは心の底から感謝し、お礼に何を贈ればいいのか分からず途方に暮れかける。

決戦前に真魔剛竜剣が腐食していたのはそれ程大事だった。
だが、バランが何かを言う前にロン・ベルクの方が先に口を開く。
「キルバーン倒してくれた礼だ。それにお嬢さんから酒をしこたま頂いた。お前さんから報酬を取る気はないからな。」
「・・・・不思議なのだが・・」
「うん？どうした。」
「何故誰も彼もがキルバーンを倒したのを聞くだけでそれほど喜ぶ。まだ魔影参謀ミストバーンに魔軍司令官ハドラー、そして大魔王バーンがいるというのに。」
確かにキルバーンも恐るべき敵と言えようが、この目の前の男も尋常一様の者ではないのがすぐ分かる。
恐らく今の自分では少し届かず竜魔人化してようやくかもしれない、そんな男がたかが一人の死神を倒したくらいであそこ迄感情を露にする理由が分からない。
「なんだ、誰もお前さんにあいつが仕出かしたこと聞いてねえのか？」
「キルバーンがした事？」
あの変態がお嬢さんにした事の数々知ってたら、この親父さん平静ではいられんだろうに。
少し過ごしている間に娘の頭を撫でたりちらちらと見ている所から、バランがかなりな親ばか、ひいては娘馬鹿なのが見て取れる。
そんなバランがキルバーンの所業を知れば、切り捨てたキルバーンの遺体を回収して塵にする事請負である。
まぁ倒した後だが、知らせておいても良いだろう。
「いいか、あいつは・・・」

ヒィーン!!!

キルバーンの極悪変態所業をバランに告げようとしたその瞬間、甲高い音と同時に青白い閃光が窓から差し込み小屋の中を照らし尽くす。
「なんだ一体!!」

「これは・・」
ロン・ベルクは何事かと小屋の外に飛び出すが、バランには見当がついた。自分の考えが正しければこれは・・
「う～ん、やっぱり距離の問題なのかな。」
「鬼岩城戦の時と同じ距離だと―共鳴―しなかったね。」
「ロモス王城の時の距離だと共鳴するな。」
「少しずつ距離を離していって、限界地点を見極めると良いな。」
「そうだねヒュンケル。ダイ兄、このまま後ろに下がるね～。」

矢張り、息子と娘の竜の紋章が共鳴していた。
ダイの右手にティファの左手にそれぞれ紋章が力強く輝いている。
どうやら二人は紋章の共鳴がどこまでの距離ならば可能なのか探っているようだ。
その様子をポップとヒュンケルがアドバイスし、ラーハルトはバランの血を確実に受け継いでいる二人の御子を慈しみの瞳で見守っている。
「・・・・お前達、騒がしいぞ。静かに待っていられないのか・・」
いきなり敵襲かと身構えたロン・ベルクはがっくりとする。もう少し静かに出来んのか？
「む！遊んでいるんじゃありません!!私は父さんやダイ兄みたいに自力で紋章発動させられないんです。もしもミストバーンの滅殺陣や他の方法で敵に掴まった時、ダイ兄に紋章発動してもらって共鳴すれば戦力底上げになって大逆転できるでしょう。こういう情報の積み重ねがいざという時に物を言うんです。・・・もう少し離れてみるね。」
「大ピンチか。お嬢さん、まだ戦場に行くつもりか？」
父親で当代の竜の騎士がいるというのに戦場に行くのが当たり前の様に。
「当たり前です。勇者一行の料理人は一行と共に戦場に出てあらゆるサポートするんです。」

「そうか。」
ポンポン
「お嬢さん、周り頼って無理しすぎないでくれ。勝って皆で幸せになるんだろう？」
ロン・ベルクは悲しみを湛えた瞳でティファを見て願う。死なないで欲しいと。

決戦行かずに突然の休日？

魔界の名工は孤高の人で偏屈だなんて誰が言ったんだろう。
実際のロン・ベルクさんはこんなに優しいのに。
頭を撫でられているティファはまったりしながら思う。原作のロン・ベルクも生意気ノヴァの本気の覚悟を受け取って、その両腕を犠牲にして仲間全員を救っている。
たんに優しさを出すのが不器用な人なのだろうか？

「ダイ兄、お皿足りそう？」
「敷物いるかティファ？」
「父さん達お酒飲む？」
ティファが来れば矢張り始まる昼食会。
どうせお昼ご飯まだなんですよねの少々失礼だが的を得た提案に、デパートで買ったお惣菜と、その場で作られる即興のパンケーキの山でお昼ご飯。
「お嬢さんはいい嫁さんになるな～。」
パンケーキにチーズを挟んだサンドイッチもどきを肴にしながらロン・ベルクはご満悦である。
戦いが終わって世の中が落ち着けば、毎日お嬢さんが作りに来てくれたら嬉しい。
・・いっそ俺の嫁さんになってくれないだろうか
気に入ったノヴァの嫁さんにどうかと進めてみたが、せっせと周りの男達の面倒を見て、美味しいという言葉に花開くように笑うティファを見ているうちに浮かんだ思い。
寿命は竜の騎士の子供であっても人間とあまり変わらないようだが、たった数十年でもあの笑顔を独占できるのなら・・・
「さん・・ロン・ベルクさん。」
「んあ、どうしたお嬢さん。」
「酔いましたか？お酒こぼしてますよ。」
「おっと、あ～確かに酔ったかもしれんな。」

「珍しいですね、まだ数本しか飲んでいないのに。」
「あ、そういえばマトリフさんの洞穴の夕食会でも俺達起きている間にもっと飲んでたよね。」
「酒ってそこまで美味しいのかヒュンケル？」
「まぁ美味いが・・・お前達はまだ駄目だぞダイ・ポップ。」
「あ！俺確かもういい頃だったはずだ!!今日の夕食に景気づけに一杯飲んでみらぁ！」
「ポップずるいよ・・・」
「ダイ兄、子供用のデザートワインも仕入れたから私と其れ飲もうよ。」
「あ！やっぱ俺も其れにする!!」
「ポップは大人なんでしょう？ティファ、二人だけで飲もうね～。」
「あ、こらダイ！兄妹外れすんなよ～!!意地悪いって悪かった!!」

兄妹のじゃれ合いに大人達はひとしきり笑って見守る。
確かに俺は酔っているな。今楽しい居心地いい空間にいつまでも居たい程に。
数百年の内、自分の人生の大半は殺伐とし自身もそれを良しとして生きていた事に後悔はないが、今はどうだ。
たった半月足らずでダイ達と過ごしただけで、あの頃に戻るはごめんだとまで思う程に慣れたこの幸せを手放したくはない。
いつかティファが大人の女性になり周りに誰もいないその時に・・・

「お嬢さんからお前達の新武具の依頼があってな。」
「え！ティファいつの間に？」
「浜辺でダイ兄達が寝た後だよ。具体的にはポップ兄とヒュンケル、マァムさんとクロコダインのをね。」
「俺達の・・材料は？」
「ふっふ、あの塔でダイ兄達が斬った物をすこ～し―加工―して残る

ようにして回収したんだよ。」
「・・・・ねえ、あれってさ・・そのもしかしたさ・・」
「ダイ兄？」
「俺達がばかすか斬ったのってもしかしなくともオリハルコン製っだったりする？」
「あんなダイ、そんな訳・・」
「ピンポーン、ダイ兄正解。」
「い⁉」
「やっぱり・・・」
「やはりか・・・」
　オリハルコンとはその時露知らず斬っていたが、ヒム達を実際に見たダイとヒュンケルはとっても納得したが、ポップはそんな奇跡の鉱物バカすか斬った二人を人外のもの決定の様な目で二人を見る。
　それ程パカパカ斬っていたからだ。
「あ～、でもあれって意思が伴わないお人形だから簡単にいったんであって、ヒム達にそれ通用しないからね。」
　あの人形と親衛隊達は別物だと釘は刺す。
「分かってる。それでロン・ベルクさん、新武具って何かできたの？」
　妹に忠告されるまでもなく、ヒム達を侮る気は毛頭ないダイはさくさく話を進めたい。
「ヒュンケルの鎧の魔剣だけとりあえず出来た。」
　お休みの日の大朗報その二、ヒュンケルの魔剣が帰ってきた!!!!

決戦行かずに突然の休日⑥

ロン・ベルクから出来たての鎧の魔剣を受け取ったヒュンケルは、受け取ったままの姿で固まりもう五分近くたっている。
「ティファ・・・アメで釣る?」
「さっきから声かけてもこのままだしそうしようか・・・」
「・・・一日二粒許可出しますって言えば動くかも・・」
ダイ・ティファ・ポップが端っこの方でひそひそと作戦練り、ティファは恐る恐るアメの袋を取り出しヒュンケルの目の前に差し出し作戦決行!
「ヒュンケル、アメ一日二つ食べますか?」
大人達も固まったヒュンケルに呆れているが、ティファ達も何を馬鹿な作戦やっていると溜息つきかけたその瞬間・・
「食べていいのかティファ!!」
かっと目を見開きヒュンケルが覚醒した。
「・・・魔剣戻ってきて嬉しいの分かりますが、そろそろ帰りましょう。」
「あ・・う・・・ロン・ベルク、その・・ありがとう。」
ティファに指摘され、ようやく現状に気が付いたヒュンケルはバツが悪くともきちんと礼をする。
槍も慣れて来ていたが、矢張り自分は剣士でいたい。父バルトスの様な剣士として、師から教わった剣術を忘れたくなかった。
「そこまで喜ばれたら鍛冶屋冥利に尽きるってもんだ。」
苦笑しながらも、これ程まで喜んでもらって悪い気がしないロン・ベルクは魔剣の説明をする。
「まぁ早さ重視したせいで前回の魔剣と機能は変わらん。だが素材をオリハルコンで作ったから厚みは可能な限り薄くし、前の三分の一は軽量化できた。魔槍の時と同じスピードで動けるところが利点だな。」
前のはあらゆる魔法無効化の為にそれなりの厚みを持たせたが、オリハルコンであれば材質自体が魔法を弾くので軽量化に成功した。

「有難い。敵の中には幾人か素早いのがいる。これなら捉えられよう。」
魔剣を受け取ったヒュンケルはラーハルトに向き直る。
「これでお前に魔槍が返せるな。」
「ああ、だが俺との約束まで返そうとはしまい？」
「あれを返すものか、安心しろ。」
長年の友の様に二人は笑う。
あの時、魔槍と共にラーハルトから受け取ったのは、ティファを守る約束。
バランとダイはティファが守ってくれる、そのティファを守ってほしいと託された大事な思いは、味方全員に宿っているのだから。
「なになに？ヒュンケルとラーハルト何か約束したの？」
「ディーノ様・・・いつかお話しましょう。」
「そうだな、今は内緒だ。」
「ええ～、今知りたいけどしょうがないな。」
「ダイ、男同士の約束ってやつだぜきっと。」
「そっか、いつか教えてね。」
「畏まりましたディーノ様。」
まさか当人目の前にいるのに教えられず、ラーハルトとヒュンケルは淡く笑いながら知りたがりのダイの頭をポンポン叩く。
穏やかな時間もそろそろ夕暮れを迎えて終わりに差し掛かる。
ガルーダとルーラで帰るダイ達を、ロン・ベルクはしばらく見つめて無事を祈る。
勝って全員帰って来い

穏やかの一日の終わりが差し掛かるが、ティファの周りはいつもあり得ないことが待っている

遅くなった。夕食くらいは作りたいけど、ナタリーさんが作っ

て・・・・・・え？

この気配!!!!まさか！

遅いな・・・まさか決戦休んでる時に出かけるとは。

サババ作戦砦の前で待ってもう一時間が経つ。

ティファを待っている人物は砦の者達、特にノヴァからの冷ややかな警告を受けても微動だにせず待っている。

精霊達も初手から姿を現し、この場の氷系呪文を唱えるもの全員に加護を与える気満々で、ノヴァの攻撃が始まらないか待っている。

ヒューン

バサリ

待っている人物の聴覚に幽かなルーラ音とガルーダの羽ばたく音を捉える。

ようやくのご帰還か・・・

間違いない！

「ガルーダ速度落として！父さん、ダイ兄、ポップ兄！ルーラからトベルーラに切り替えて!!ラーハルト！トベルーラ出来るなら今発動して!!ポップ兄ヒュンケル抱えて上げて！」

「な！・・・ッ！」

「いきなりどうしたティファ!!」

「なにか・・」

「・・・・・・あり得ない人が来てる・・」

砦目前にしてティファは減速し、トベルーラに切り替えさせる。ホバーリングもできるガルーダと共に全員ゆっくりと進めさせれば案の定

「なんで今いるのさ!!」
「野郎!!ふざけてんのかよ!!」
兄二人が怒声を上げるのは無理ない・・・だって今いるのは・・・・って!!
ズルリ

「ティファ!」
「あんの馬鹿!!」
「小娘!」
「ティファ!!」
下にいる人物をまじまじと見過ぎたティファは、動揺のあまりガルーダの背から滑り落ちた。
「―ティファ!!―」
ガルーダを含めた全員と、下にいたノヴァが、落ちるティファを受け止めようとしたその時
ダイ達よりも先にふわりとティファを包み込んだものがいた
下からティファの帰還を見ていた人物は、誰よりも先にティファの重心がガルーダからずれたのを見て取り即座に動いて受け止める事に成功し、ティファを抱えたまま地面に降り立ち、鬼の形相でうっかりものを怒鳴り上げる。
こ奴と戦う前に、何かあられてはとても困る!!自分に倒される前に死にそうな目に遭うな!!
「この戯け!!!死にたいのかお前は!うかつにもほどがあろう!!!」

言っている事は至極真っ当だが、お前にだけは言われたくないの大炎上が起こる前に、ティファ当人がぶちぎれた!
ゴン!!!
「こんの大馬鹿魔王!!!」
抱き留めた人物の兜を取り外し地面に放り捨て、思いっきり頭突きをかまして怒鳴り返す。

「敵の司令官がのこのこアジトにくんな!!馬鹿なの阿呆なの斬って捨てられたいの⁉自殺願望あるなら今すぐそっ首斬り飛ばして差し上げますよ!!!」
「俺が好きでのこのこ来たと思っているのか！」
「好きだろうが嫌いだろうが非常識にもほどがある!!馬鹿でしょ貴方!!!」
「・・・・おっまえは！少しは年頃の娘らしい口がきけんのか⁉」
「毎度罵られる自分を反省して魔界の奥底に埋まって来なさい!!そのまま逝ってら非常識魔王ここに眠ると墓標位立てて差し上げますよ!!」
なんとそのまま口喧嘩始めてしまった。
戦うでも、キルの時の様に使者相手の礼儀正しくでもなく口喧嘩をしだしたティファに、生真面目で規律を重んじるノヴァとてもポカンとし、ハドラーが来ていて頭に血が上った兄二人どころか味方全員が唖然とする。
「決戦体調如何によっては休みして良いと言ったのはそちらでしょ！なんですか、言った後に撤回して夜襲掛けに単騎で来ましたか!!」
「誰がそんなせこくてみみっちい事なぞするか戯けが!!!お前達こそ休みの理由が本当かどうか確かめに来て良いと言っておきながら今更なんだ!!!」

はい⁉

ハドラーが放った最後の一言に、砦全体がフリーズ起こした。
待って待って!!
「ノヴァ！ダイ兄達も!!私無実だからね!!手紙には毒化の事と、遅行で後からなるかもしれないから休むとしか書いてないからね!!!」
ハドラーが言った事が、あたかも自分の書いた手紙の中に書かれているようにダイ達に疑われた視線を向けられたティファは、即座に否定する!!
これ全力否定しないと私の明日がない!!

「ハドラー!!一体どこからそんな・・・・そんな・・—パック・スクイ—ル—出ろ!!!」
バン!!

「アッテッテ・・・・おチビちゃん、なんで俺の真名知ってるのさ～。」

真名とは精霊が持つ—本当の名前—であり、家族の中でもごく一部の者しか知らない特別なもの。
知られれば今の様に強制的に呼び出されたり、下手をしたら死を命じられても拒否できず死んでしまう程、魂に直結している。
自分の真名は、マトリフにすら教えていないのに。
「どうでもいいでしょう、白状なさいパック・スクイ—ル。ハドラーに妙な事を吹き込んだのは貴方か。」
ティファの瞳も気配も冷たいものになるが、パックは畏れ入りもせずに肩をひょいとすくめ悪びれずに答える。
「そうだよ、その方が面白いからね～。おチビちゃんだってこの魔族を気に掛けているじゃないか～。感謝されこそすれ怒られる謂れはないよ。」
昨夜ハドラーの名前を切なげに呟いたティファを見ていたパックとしては、良い事した積りである。
パックからすれば恋心抱いた乙女の呟きにしか聞こえず、会えるように手配して上げたのに怒られては間尺に合わない。
「じゃ～ね～。」
手を振って、真名呼ばれて影響の出ない異界に逃げ込む。
「あ!!・・逃げられた・・・」
「・・・あの精霊に担がれたか・・」
元凶分かったが、それにしてもだ。
「だからと言って、のこのこ来る貴方も貴方です。」
「分かっている・・・・だが、どうしても直接詫びがしたくて来た。」
確かにあの精霊が言ったからといって、敵の軍司令官がして良い行為ではないのは百も承知だが、その言葉に縋らせてもらったのだ。

お外でそのまま詫び内容聞こうとしたら揃っておじさんに怒られた。
「ハドラー手前！いつまでティファを抱き上げてやがる!!消滅させるぞ！嬢ちゃんもいつまでそのままでいる積りだ!!!」
老いたりとは言え、当代随一の魔法使い・大魔導士マトリフの怒声が大気を震わせ、周囲もようやく我に返る。
無論ティファとハドラーも例外ではない。漸く周りには自分達以外がいるのを思い出し、ティファはハドラーから降り立ち兜を拾って投げ渡す。
「本当になんで貴方来ちゃったんですか。」

人間同士の戦では、決戦前に敵軍の使者が来る事は儘ある
「敵の軍司令官が来たのだ。それなりに持て成させて頂こう。」
騎士団の国として名を馳せるリンガイアの大将軍・バウスンの鶴の一言で、あり得ない事にハドラーは砦内部に招き入れられた。
脅され威嚇攻撃を受けても激せず、ティファ達が帰るまで静かに待っていたハドラーの為人を判断したバウスンは、さっさと聞いて用事を済ませた方がいいと判断したので、兵士達を引かせるために敢えて内部に誘い込んだ。
今ここに集う戦力であれば、いざとなればハドラーを討つのも視野に入れて。

まじまじと無言で周囲、特にバランの視線が一番強く感じたハドラーは鬱陶しくなり問いただす。
「何か言いたい事があるのならば口で言ったらどうだバラン！」
「・・・ハドラー、お前こそ私に言いたいことは無いのか？」

「は?特にないぞ。」
「お前の言った事全て無視した挙句に・・・」
「ああその事か。」
ハドラーは今一階大広間の真ん中で椅子に腰かけ、その目の前に大きい横長の机があり、向い側にはバランとマトリフが陣取っている。
その周囲をダイ達が囲み、ガルダンディー、ボラホーンは外を、ラーハルトは室内の二階から見張っている。
そんな状況でもハドラーは何事もなくバランの疑問に答える。
「お前が昔会ったというとんでもない娘がティファだと分かった時点で俺はお前の事を諦めた。」
「戦う前から!!」
「ああ、言ったであろう。バーン様の許可が下りる前にお前の娘はとんでもない娘に育っていると。
その時点で七・八割諦めて、残りは何の奇跡が起きてダイ達の引き込みに成功するかと賭けたのだが案の定だ。想定通りになっただけの話だ・・・あれに関わったのだから諦めがつく。」
「つかないでくださいよそこは!!」
茶器を食堂から用意し終えて大広間に入ってきたティファが抗議の声を上げる。
「さっきから聞いていれば人の事をとんでもない娘呼ばわりして失礼にもほどがありますよ!!」
「ふん、そう評する以外あるまい。」
「もっと言い方というものがあるでしょう!途轍もない者とか、意思強き者とか。」
抗議のをしながらもお茶の用意をする手つきは優しく、程なく淹れ終わりマトリフとバラン、そしてハドラーにもきちんと出す。
敵だろうが何だろうが、持て成すからにはきちんとするのが料理人の流儀だ。
「さて、本当に貴方何しに来たんですかハドラー。」

決戦行かずに突然の休日⑦

「ふっふっふ、あはっはっはっは～。」
魔軍司令官ハドラーがいるはずの大広間にひとしきり笑いの声が響き渡る。
笑っているのはダイ達では無論ない、ハドラーでも決してない。
笑っているのは・・・

「死の大地地下入口が海底にあるですか。それって私達に言ってしまっていいんですかハドラー？」
こんな守備機密情報敵に渡しちゃって大丈夫かねこの人？
お茶淹れ終わったら後は父さんとおじさんに投げて私はさっさと兄達の側に行こうとしたら止められた。
「確約相手はお前だろう。詫びの件で持って来た重要情報をお前以外に渡す筋合いはない。」
ハドラーめ！人引っ張り出すのに無理筋の様な正論言ってきたよ!!
それ言われると弱いな、明日の決戦には相手の情報いくらあっても足らん。ヒム達がどの辺で待っているとか、地上戦は新鋭達全員か何人かはハドラーの付き添いかとか親衛隊達情報の前渡しかな～位の軽い気持ちで父さんとおじさんの間に座らせてもらったら、超重要機密情報きた!!!!
思わずハドラーの心配しちゃったよ
「それ言ってあなた消されません？」
「言っていい許可位取っておるわ。」
「・・・・魔影参謀ミストバーンがよく許しましたね。」
「あ奴ではない。バーン様に直接聞いて許可を得た。」
はい⁉この人何とんでも事さらっと言ってくれるかな!!!
ラスボスが自分の居城にウェルカムってどういう事⁉
「あのお方の度量は深く、お前でも驚くか？」

「・・・・・あっさり許可出たんですか？」
そんな情報ホイホイ上げていいって言うラスボスおるんかい？
「いや、流石にやり過ぎではないかと苦笑されたが粘ってみたら許可を下された。おかげでこの時間になったが、お前達が出かけていたのなら丁度良かったのだな。」
裏事情を話し終えたハドラーは、飲み頃になった紅茶に口を付ける。美味い、近頃弱り始めているこの肉体にも沁みるような美味さだ。ここにいる間おかわりでも貰うか？
何かハドラー良い事言い終わって紅茶が美味いみたいに飲んでるけど、この時間まで粘られた大魔王が音を上げて許可下ろしたとしか思えんのだけど。
胡乱な瞳でハドラー見てたらおじさんがぼそりと呟いた。
「三流魔王がなんだってそこまで敵に義理尽くす。」
呟きであってもハドラーの届くのは承知しているだろうに、嫌味かな？
「言っただろう。確約破りの詫びだと・・・・・お前達にはきちんとしておきたいのだ・・」
どこか物悲しそうなハドラーの雰囲気に、さしものマトリフも口を噤む。散々三流魔王と馬鹿にしてきたが、今のハドラーにそのころの面影は皆無で、言っている自分こそが矮小に思わせられる。
あのアポロ迄もが魔王に対する嫌悪感が薄まりそうで、流されまいと睨んでいるが口を差し挟まない程ハドラーの言葉は真っ直ぐで、聞く者の心をうっている。
「ハドラー、その情報だけでしたらポーン・ヒムが来ればよかったのではありませんか？」
詫びならばやらかした当人であり、魔軍司令官が来るよりもここまでの騒ぎにならず、とはいえ使者として来れる格もそこそこあるヒムが妥当ではなかろうかとティファは情緒いらんとばかりにあっさりと言ってのける。
詫び自体にさして興味なさそうに。
本当の話、ヒムが謝るよりもクィーン・アルビナスの方がやらかし

たのでそっちが来いと言いたいがそこは我慢。あれも格がありすぎるのと、ヒムのように自分と接点があるわけでもない。
　来ても擁護するつもり零になるの目に見えているので、矢張りヒムが妥当ではなかろうか？
「その事だがな、ヒムからお前に伝言がある。」
「おや、こちら全員ではなく私だけとはこちらの事舐めてます？」
「そう言われるとそこまでだが・・」
「まぁいいでしょう、一応伺いましょう。」
　私とハドラーだけなら今の詫びの伝言素直に受けれるけど、周りには被害受けた多数の人がいる。
　その人達に詫びなしとはと、一言入れないといけないのが・・・・・・疲れると言ってはいかんか。

「ヒムがな、お前に会わす顔がないと言っていた。」
「おや。」
「あれは篩の時お前を倒すと張り切っていたのだがな。戦場でも会わんと言っていた。」
「ヒムにお伝えください。戦場での借りはきっちり熨斗つけてボコって倒して返します。」
「ボコって・・・」
「はい。戦士気取りたいなら甘ったれたこと言ってないで、親衛隊としての責務全うして戦場で散れともお願いします。」
　紅茶啜りながら臆面もなくさらさらと怖ろしい事を何気なく言うティファを、ハドラーは苦笑するだけで終わらせる。
「相も変わらずお前は手厳しいな。」
「相手を甘やかしてもいい事ないでしょう。生まれたての赤ん坊にしては彼は大きすぎますしね。知識も能力もあるなら甘ったれないで欲しいものです。」
「確かに伝えよう。責務果たして戦場で勝てと。」
「お好きにどうぞ。」
　ティファも言いたい事を言ったと一息ついた時、ハドラーが再び口

を開く。
「実はな、ここに来たのは詫びだけではないのだ。」
「ほう？矢張りですか。」
「なんだ、見越していたのか？」
「はい、ヒムの伝言は言わなくても済む事で、詫びの件も鏡文字で事足りますからね。言葉と座標を送れば済む話です。なのに貴方のような大物が来た。その理由さっさとお話なさい。勿体ぶる阿呆は嫌いです。」
「・・・・お前本当に俺には容赦ないな・・」
「鼻水たらしそうな顔してないでとっとと言いなさい。」
何処までも尊大なティファに、ハドラーは溜め息をつきながら首筋をガリガリと掻きながら周りを見渡す。
昔とんでもない娘に会ったというバランとその配下は今のティファの態度に驚いておらず、殲滅の騎士団長とその一派もしかりで、驚いているのがダイ一行全員というのはどういう訳か。
確かバルジ島ではポップ・マァム・ヒュンケルは、ティファを人格者の様に言い募っていたな。
どうやらティファにとって、一行はこの本性を見せる相手ではなく優しく包むように庇護しているようだ。
こいつ本当に俺には容赦ないんだが、今から言う事を聞いてくれるだろうか？
ティファと周りの関係を観察して何か納得がいったハドラーは、意を決してティファに話す。
「今回毒消しに使った薬の成分表をこちらに書いてくれないか？」

・・・・・はい？

ガタン!!
「こんの三流魔王!!ダイ達が嘘吐いたって言いてぇのか!!!」
瞬時にハドラーの言った言葉の真意を察したマトリフが激怒した！

「師匠・・・どういう・・」
「いいかポップ!ダイ達もよく聞け!!成分表がないとなれば、毒云々の話は無いだろうってこいつらいちゃもんつけに来たんだよ!!何が詫びに来ただ!!命要らねぇなら・・・」

くっくっくく・・・
昨日から今日の未明にかけて必死に薬を作り看病してきた自分達を踏みにじる言葉を言ったハドラーに激怒するマトリフの言葉や、理解した大広間全員の怒気の間を縫うように、不意に笑い声がした。
「嬢ちゃん・・お前さん何がおかしい!!」
「だって・・・もう駄目です!!」
マトリフの怒りも何のその、ティファはコロコロとひとしきり笑い転げ、かと思えば一つ深呼吸をしてうっすらと微笑み、優しい瞳で砦の外に目を向ける。
その視線の先にあるのは死の大地
貴方は心配なのですねミスト
「ハドラー、あててみましょうか。成分表を欲した人物を。」
「分かるのか?」
「はい、大魔王バーンの右腕にして魔王軍の料理人、魔影参謀ミストバーンでしょう。」
「・・・・正解だ。」
ああ、矢張りそうか。
「何故分かった?」
「ある意味彼と私が似ているからですよ。おじさん怒ると体に悪いから落ち着いてね。」
「あんな嬢ちゃん!これが怒られずにはいられるかってんだよ。」
「でもおじさんも本当は分かっているんでしょう?疑いもたれる理由が。」
「・・だからってそれとこれとは話が別だ。」
マトリフはティファの言葉で落ち着いたが、ティファがどうして嘘をついたと疑われても怒らないのか不思議な全員を代表して父バラ

ンが尋ねた。
「ティファよ、何故お前達の懸命な努力を疑われても怒らんのだ。マトリフ師の言う通り、これは・・」
「父さん。」
父の疑問に、ティファはぴしりとした声で答える。
「今この砦にいる戦力は、はっきり言えば地上最強なんだよ。私が相手だったらいちゃもんつけて突破口出来たら、非を大々的に鳴らして夜襲掛けて倒したい位だよ。」
「まさか!そんな大袈裟な・・。」
「竜の騎士!」
「⁉」
「当代の竜の騎士の配下竜騎衆・竜の騎士にして勇者ダイが率いるその一行、そして氷の精霊王ハイキングの加護を持つリンガイアの氷の勇者ノヴァ。」
「ほう・・・あの騎士団長はそんなすごい加護持ちであったか・・」
「まだまだいますよハドラー。支援サポートには王女レオナと三賢者筆頭、大魔導士マトリフ・戦略に精通しているリンガイアの猛将・バウスン将軍がこの砦に集っている・・・よくもまぁ大魔王は今ここを攻め落とせと貴方に命を下しませんね。」
少しでも焦りや功名心がある者ならば、どんな手段使ってでもここ攻め落とそうとするだろう。
はっきり言えば、今ここに超兵器ピラァ・オブ・バーンが一本振ってくればあちらの勝ちで終わっている・・とは内緒だか。
「お前ならするのか?」
「私はしませんが、ミストバーンの本心そこら辺りでしょう。なにせ彼は大魔王を勝たせたいのではなく、万難を排した勝利を献上したいでしょから。路傍の石ころとて見逃したくない彼の心情は分かりますよ。」
自分もそうだから
小石に躓く事無く、何か不足して困ることなく常に周りを見て備え準備した道を歩いて欲しい。

愛しい彼らが笑っていられるように。
前世の中国では、―宰相―とは、宰は料理人、相は歩行を助ける、共に天子の家内的使用人をさしていたとか。
身の回りから戦場までの指揮をする彼にふさわしい地位だと納得する。
私もかくありたいと、勇者一行の料理人を名乗ったのだから。
つまるところ私は本当にミストと立ち位置が似ている。
共に謎に包まれ真の力を未だ誰にも知られる事無く、常に裏から守りたい者達を守るために暗躍し、いざとなれば表に出て敵を制圧する。
それもこれも守りたい者を守るために。
あの孤高の影は、主の為ならどのような事も厭うまい。私達に疑う猜疑心強き卑小な者と思われても痛痒を感じず、ハドラーに成分表を差し出させるように指示したか。少しその辺聞いてみるか。
「私が言わなくても自分の名前を出していいとミストバーンは言っていませんでしたか？」
「その通りだが・・本当にお前は何故あれの思考が分かる？そこそこ共にいた俺にも分からんのに。」
「彼は寡黙なだけで、私からすれば分かりやすいですよ。何物にも惑わされずぶれず、ひたすら主と自軍を勝たせる事に邁進するだけではなく優しい人ですよ。」

は⁉
その言葉は誰が発したか、寡黙で冷徹な参謀を見て来た元同僚バラン・クロコダインか、死ぬ寸前まで鍛えられた元弟子のヒュンケルか、冷酷な味方殺しを見たダイ・ポップ・マァムか、それとも味方のハドラーか？
ミストバーンに殺されかけた当人が何を言っているのだ？
「ヒントはヒュンケルです。」
「俺⁉ティファ一体何を・・」
「貴方好き嫌いありませんでしょう。さらに言えば味覚がそれなりに

肥えてますよ。」
「好き・・・何でも食わされればそうなると思うのだが・・・」
「・・・まだ分かりませんか。貴方を人としてではなく戦力の駒扱いしていたのであればあの台詞は出てきませんでしたよ。」
鬼岩城戦の折だった。包丁持ったことのない貴方には分からないでしょうと言った言葉に切れたミストが叫んでいた
―私がどれほど苦労してヒュンケルに食わせて来たと思っている!!―
―そいつが不死騎団に行くまで毎日食べさせたのは私だ!!―
「毎日どうでもいい相手を食べさせること程苦痛な事は、はっきりと言えば料理に携わっている者からしたらまっぴらごめんです。ミストバーンがヒュンケル拾った頃は、才能の片鱗あれど戦力になるかどうかなんて分かっていなかったでしょうに。それなのに苦労してでも拾ったからにはきちんと食べさせると面倒見の良さが伺えますよ。あの人にだって情はある、本当に面白い人だ。」
「そう・・・なのか・・」
「まぁ大魔王の裕福さで食料賄う事に苦労はなくとも、どうでもよく戦力駒扱いの相手なら栄養素だけ足らす薬草類や、軍の食堂に丸投げして終わりで、味付けに文句あるなら食わなくていいだろうと放っておいて終わりだと思いますよ?魔界の食糧事情は地上の様に裕福でもないでしょうからね。その辺どう思いますかハドラー?」
「んむ、まぁお前の言う通りだな。ヒュンケルの肉体はきちんと成長している。つまるところお前の考えた通り、あれにもそれなりに情がありお前をそこまで大きくしたのであろうよ。」
その言葉に当のヒュンケルは本気でどう考えればいいのか分からず、周りにも動揺がするが、ハドラーはティファの言わんとした事に納得した。
ハドラーも魔界育ち。食糧事情どころか辛酸を舐めきり、魔界の非情さをよく知っている。そこに育つ者も自然と非情になるのを。
だが確かに、自分も一昨日ミストバーンの手作り料理を振舞ってもらった。

ミストバーンは無言で渡してきたが、変態死神が言っていた。
「ミストの料理なんて超レアものだから味わって食べてあげてね～。」
言われた瞬間頭が真っ白になった。こいつが料理してしかも俺にくれるだと⁉
まじまじとミストバーンを見ていれば、なんだろう・・・あれは幽かな動揺と・・・恥じらいの気配か脱兎のごとく出ていってしまった・・・キルバーンの襟首ひっ捕まえて・・
「そうだな・・・あれは確かにお前と似ている部分があるのか・・」
「はい。」
ハドラーの言葉に微笑みで応えたティファは、おもむろに腰を上げレオナの下に行き突然片膝をつき臣下の礼を取る。
「ティファ？」
「パプニカ王女レオナ姫に、勇者一行の料理人ティファから願いがあります。聞き届けていただければこれまでの私の功績全てを報いてくれたものと思います。」
「・・・言ってみなさい料理人のティファ。」
「は。大魔王バーンの魔王軍・参謀ミストバーンがこちらに要請した毒物の解毒薬の成分表を渡すことをお許しいただきたく。」
倒す予定だが敬愛する者を持つ者同士、意図しなかったとはいえやきもきさせてしまった詫びはしたい。
果たして
「分かりました。その事を許可しましょう、料理人のティファ。」
「有難く。」

決戦行かずに突然の休日⑧

「随分芝居がかった事をするものだな。」
　ティファとレオナの遣り取りに、何の茶番だとハドラーが平然と突っ込む。
「ふっふっふ、ここまで壮大な遣り取りしないと書けなかった成分表ですと、小姑参謀さんに是非お伝えください！書くのには非常に困難な道のりがあったのだから、ありがたく読むようにと!!」
　もしかしなくとも小姑ってミストバーンか⁉
「・・・カッコつけて言っとるが、ようはミストバーンに対する面当てか？」
　勢い立ち上がり両腰に手をあてがってどや顔で言うティファに対し、試しにミストの名前で聞いてみれば
「当たり前です。嘘言っていないのに、そちらの都合と思いに応えてやるだけでも有り難く思いなさい!!」
　平然と悪戯っ子が悪さ思いついた時の様な良い笑顔で、何言ってるんだこやつは！
　誰がただで書いてやるもんですか、成分表と内容に仕掛け施しとくもんね

　何やらキッヒッヒと笑いそうないい笑顔で笑い出したティファを、ハドラー含めた全員から冷や汗が流れる・・・!!
「ティファ！その成分表に何書くつもりだ!!」
「いやですね～ハドラー。悪い事なんて考えてませんよう～。」
「嘘つけ!!その悪辣な表情を今すぐ鏡で見て来い!!!」
　完全に悪の組織の奸計担当が悪い事思いついた顔だろう!!
「まぁまぁ、きちんと書きますから、あの小姑参謀さんは―どんな文章―でも読めますか？」
「あ？当たり前であろう。あ奴はバーン様に長年・・・その前にミストバーンの事は・・」
「小姑参謀でいいじゃないですか～。」

何だそのとってもいい笑顔でいいこと言っている顔は!!
あの冷徹寡黙参謀そんな風に言うのお前しかいないぞ絶対!!
「いいのかヒュンケル!元とはいえ師が小姑呼ばわりされているんだぞ!!」
「俺に振るなハドラー!!・・・・・・ノーコメントだ・・」
様々に周り振り回しまくっている張本人は、ハドラーの言う通り悪辣な笑顔で内心ルンルン歌いながら成分表を書いていく。
あの人位ならこれ―読む事―出来るよね～きっひっひっひ

「書けましたよハドラー、ってみんなどうしたのチウ君?」
周りの声が届いていなかったティファは、何故ハドラー含めた主な者達がグッタリしているのか不思議で、―参戦―せずに体力あるチウに尋ねる。
だがチウは答えない、答えられない!!
どうしてティファの思考がこうもぶっ飛んでいるのか!それでいいのかお前達から始まったハドラーの言葉に、慈愛に満ちた素晴らしい人との崇高な答えから、元気一杯でいいじゃねえかと実に爺馬鹿・親馬鹿・兄馬鹿な答えの応酬で疲れたとはチウだって言えない!!
「ふ～んまぁいいや。チウ君、悪いけど下行ってお湯貰ってきて。お茶のおかわり欲しい。」
「大丈夫です、そう思ってもう貰ってきました。」
「流石チウ君、淹れてくれる?」
「喜んで。」
チウは茶器がある―全員分―にお代わりを注ぐ。ティファだけではなく、ぐったりとしたバラン・マトリフそして
「・・・・俺にもくれるのか大ネズミ・・」
「はい、良ければどうぞ。僕は大ネズミですがチウという名前がありますよ。」
「・・・・・・俺が怖くないのか?」
地上の小モンスターからすれば、魔王は恐怖・畏怖の対象だろうに。自分の邪悪な気配が通じないとはいえ、怖れるくらいしてそうだがそ

の気配が全くせん。ティファ様に見た目に反した強者には全く見えないが。

怖い？この人が？

「穏やかにティファさんと話しているのに怖がる必要あるんですか？」

自分達を威圧したり殺そうとしているわけでもない人をわざわざ怖がる理由っているのかな？

きょとんとして聞き返してくるチウに、怖くないかと問うた己の器量が低いようで恥ずかしくなった。

「チウ君良い子でしょう。私達の自慢の仲間ですよ。度量や心はチウ君が一番です。」

「そのようだな。」

ティファのどや顔に、ハドラーは真面目に返す。ティファの言葉にうなずくダイ達の気持ちも分かる。

心根が素直で器の大きいもの、自分の周りに是非いて欲しい者であった。

「いただこう。」

チウを柔らかい瞳で見たハドラーは、ゆっくりと紅茶を啜りはじめる。

「・・・ティファと同じくらい美味いな・・」

「そんな・・僕のがティファさんと同じだなんて・・」

「チウ君これ美味しいよ。後でまた淹れてね。」

「・・・・はい・・」

「お、ほんとだこいつは美味ぇぞチウ。」

「む、確かにティファと同じくらいに・・・」

「もぅもぅ！皆さん人の事からかわないでください!!!」

褒め殺しにあったチウは、恥ずかしくなってダイ達の方に逃げこんだ。ここなら安全だ、そう思ったのだが。

「後で俺達にも淹れてくれよなチウ。」

「俺も飲みたい。」

「・・・・・もぅ・・」
ダイ達君達迄!!

楽しいひと時、気兼ねなく気心知れた人達と過ごす休日は実に楽しい。その知れた中に、魔王がいたとしてもだ。
書き終えたティファは、再びバランとマトリフの間に座ってのんびりと紅茶を啜る。その顔には警戒心を浮かべるどころかのんびりとしている。自分という敵がいてもだ。
ティファは本当に、出会った頃から変わらない。

「・・・あれからもう数か月経つのか・・」
デルムリン島での出会いを考えてみれば、数か月が経っていた。
「さて、もうと言うべきか、まだと言うべきか、どちらにしてもその位ですね。」
春先に始まった大戦は、気が付けば夏の盛りを迎えている。
この半年に満たない間にどれ程の激闘が詰まり、どれ程の悲しみ喜びを味わったか分からない。
島を出た当初、こんな大冒険になるとは思わなかったダイやポップ、村で慎ましく暮らしていたマァムも、祖母と旅回りの日々をしていたメルルもハドラーとティファが発した言葉に思うところが多々ある。
それは広間にいる者だけではない。目まぐるしく動く世に生きている全員が思うところであっただろう。
この数か月は、途轍もない数か月なのだと。
「確かお前はあの時俺の事を、」
「ええ、酒場の外で喧嘩しているおじさん並みだと言いましたよ。」
「今はどうだ?」
「今は・・・一流、それも超一流の魔王ですよ貴方は。」
「そうか、そう言ってくれるか・・」
「はい。」
「俺は変われたが、お前は変わらんな。」

「そうですか？」
「ああ、初めて会った頃と口の悪さがちっとも変わっておらん。」
「・・・そうですか・・」
「そうだ。」
魔王もどき
大馬鹿魔王　ｅｔｃ．だ。
「嬢ちゃん、こいつにそんな事言ったのかよ・・」
魔王の自覚もたすこと言ってどうすんだと呆れたマトリフに、ティファはしれっと返す。
「だって本当の事しか言ってないもん。」
「まったくよ・・」
そんなんだからあちこちから目を付けらるのだと呆れるが、バランはこの状況に困惑している。
何故敵の、それもただの敵ではない勇者一行の宿敵と娘はこうも穏やかに話していられるのだと。まるで古くからの知り合いの様に穏やかに・・・バルジ島では、ハドラーと一行は死闘迄演じたとういうのに。
ラーハルトもまたバランの様に困惑しダイ達を見るが、二人の話を止める気配が無いのに気が付き更に戸惑う。
ダイ達も最早師の仇という考えで戦う気はなく、戦場でハドラーを討つ事だけを考えている。
他者を仇と呼ぶには、自分達とて大勢の敵をその手に掛けたのだから。

「ティファよ、お前は何のために戦う？」
「私ですか？」
「ああ。」
こうしてお茶を飲んでいて不意にキルが言っていたティファのお茶会の夢の話を思い出した。
―夢なら、戦う事も憎み合う事もしなくていい―
あの言葉も余さず聞いている。戦う事が嫌いであるなら、何故戦い

続けている？父にして戦士・竜の騎士バランが戻ってきても、前線に何故居続ける？
　ダイ達もハドラーの言った言葉に思うところありティファを見る。一度だけポップが聞いたと言っていたが果たしてその理由は。
「守りたいからです。」
「守る？この世界をか？」
「まさか！そんな広くて曖昧なものではなく、単純に私が守りたいと思っている人たちを守りたいんです。」
　心を除けば思い浮かぶ。王様達・デルムリン島の皆・ウォーリアー船長達に、ロモスの親切な港町の人々、リンガイアの皆様、カールで沢山おまけしてくれたお店の人達、ベンガーナデパートの皆、パプニカの古書店のお爺ちゃんや王城の人達それに、テランのリュート村の人々・・
「・・・それは世界ほぼ各国、つまるところ世界ではないか。」
「全然違いますよ～。それにそこで出会って友達になったモンスターさんや精霊さん達もですよ。」
「お前は一体どれほどの知り合いがいるのだ。」
　人脈の多さもさることながら、ティファの戦う理由のなんと優しい事かと呆れる。そんな優しさを胸に抱きながら、血みどろの道を歩いてきたのかティファは。
「―今―の貴方はどうなのですか？」
　不意にティファから反対に問われた。
　貴方はではなく、今のと聞かれたがこれは。
「まるで昔の俺の戦っていた理由を知っているようだな。」
「ええ、死の大地の時、貴方に魔界の事を聞いた時辛そうにしていましたので大方は。冷たい地にて朽ち果てたくなかったのでしょうか？」
「・・・・その通りだ・・なんだマトリフ、その意外そうな顔は。」
「お前・・・・そんな理由で先の大戦おっぱじめたのかよ!!」
「貴様の欲望を満たすためにか!!」
「そのような事許されると思っているのか!!!」
　たった一人の男が！生まれ故郷が嫌だからと!!そんな理由で五年

も十年も地上を蹂躙したのか！
今のハドラーの言葉に、先の大戦に苦い思いをさせらえた兵士・有志の者達もこらえきれずに叫び出し、ダイやティファが不味いと止めに入る前にすぐさま掻き消された。
「黙れ！お前達には分かるまいよ!!あの太陽の恵みを余すことなく受けているのが当然だと思っている貴様等には!!!」
マトリフや大戦経験者の激昂に、ハドラーも古傷に触り悲痛な声で怒鳴り返す。
辛さしかなかった、喜びも楽しみも、それ等は強者の身に許された特別な事！だがこの地上はどうだ？貧しいと言っているところもたかが知れている！お前達は泥水ではなく血の混じった水を飲んだことがあるか？ひと月飲まず食わずは？他者に騙され時に騙し、裏切りあい罵り合い、それでも辛うじて信頼を結んだ相手がいとも簡単に目の前で殺されるあの地獄を!!お前達が何を知っているというのだ!!!
楽園に生きている者どもが！地獄の住人の何を・・

「・・・・ドラー、ハドラー！」
「・・・ティファ・・」
「ごめんなさい、余計を事を聞いたみたいで・・」
今の思いを表に出す前に、気が付けば自分の椅子の横にティファが立ってローブを引っ張っている。
ハドラーの思いがけない激昂に、マトリフも青褪めティファの行動を止める動きが出来なかった。
「・・・古傷触れ・・うかつに聞いていい事ではありませんでした・・」
しょぼくれて、どこか捨てられた子犬の様にしょげるティファに、悪いと思うが吹いてしまった。
そうだ、こうやって時折俺の悲しみを拾って分かってくれるこのティファと、全力で戦い合うのが―今―の俺の戦う理由。ある意味自分もキルバーンの事をとやかく言えまい。自分こそティファにもっとも執着しているのかもしれないのだから。

「これではバーン様に顔向けできぬか・・」
「うん？大魔王に？」
「ああいい、今言った事は忘れろ。」
「・・・・気になります・・」
「なるのか？」
「はい。」
　敬愛する主の為に戦うのではなく、ティファと戦いたい。そんな思いを持つ者が魔軍司令官なのだから呆れられようと言ったにすぎぬが。
「なんだ、俺がバーン様を敬愛している事が面白くなさそうだな。妬いているのか」
　今のティファは、自分の言葉にむくれているように見る。いつも自分があれこれ言われているのだからからかう積りで聞いてみる、。
　周りはハドラーの雰囲気が和らぎ、次いで―あり得ない事―を堂々と聞くハドラーに呆れティファを呼び戻そうとしたその時
「ええ妬いてますよ！おかしいですか!!」

・・・・何か物凄い問題発言が発せられた!!!!

「ティファ⁉お前は何言っているのだ!!!」
「なんですか！驚くくらいなら聞かないでくださいよ!!」
　地団太を踏み鳴らしそうな勢いのティファに、聞いたハドラーが思わず謝りかけるほど今のティファは迫力がある！

　ハドラーが私以外をそんな風に褒めるのなんだか本当に面白くない！これが妬くというのかは分からないけど・・・凄く嫌だ!!

決戦行かずに突然の休日？

主を敬愛し、その身を使う事を厭わない武人。
そんな本物になったハドラーを手放しで喜びたくない。
だって大魔王はハドラーに―黒の核晶―を埋めているのだから

最初はどっちか分からなかった。原作通りか、それとも埋めていない方か。分かったのは死の大地で再会したあの時、ハドラーに抱えられてキルと私を帰す帰さないでもめていたあの時、ハドラーの腹部から彼の闘気とは似ても似つかない冷たい気配と魔力にゾッとした！
それは何物をも受け入れず、只々何かを壊す意思しか感じられずに即座に破壊しないといけない気配に分かってしまった。
ハドラーの腹部に黒の核晶が埋められている事を。

仕掛けたのは間違いなく大魔王で、入れたのはあのダニ野郎。そんな主と知らずに敬愛していると言われて気分が本当に悪くなる！
あの主は最初から貴方を駒にしているのだと叫び出したい程に。
だがそうもいかない。
手紙書き終え彼と話している間に黒の核晶にを私の手の中に移動させられないかと、ハイ・エントの移動能力・ラック＝バイ＝ラックを試しているけどピクリとも動かない。
ラック＝バイ＝ラックはハイ・エントの魔力をマーキングすれば、私の能力及ぶ範囲内でははは確実に物でも者でも動かせる。
死の大地で、ハドラーの体内の黒の核晶があるのが分かった時、即座に体内の核晶に魔力流し込んでマーキングはしてある。
なのに発動しないという事は、強力な結界に守らせているという事だ。
恐らく強力な敵とぶつかっても容易に爆発しない為の処置なのだろうが、まさかハイ・エントにも影響及ぶだなんて想定外だ！
ここでハドラーの体内から核を取り出し、黒の核晶を実際に知っている父さんに驚愕の中説明してもらってハドラーを説得する夢は潰

えた。後は取り押さえるかどうにかして、ハドラーの腹を裂いて取り出すしかないんだけど・・・やって結界無理やり突破して、結界張ったのが大魔王だった場合解かれたのを感づかれて問答無用で遠隔操作爆発させられたら―まだ―対処方法準備整っていない今の私では防げない。

ハイ・エントの結界術・ジ＝アザーズでも零距離の核は防げない。

四方手詰まりの中、配下に非道を行う主自慢をされて、楽しむ奴はいないとはハドラーは知らないだろうけど！それでも腹が立つ!!

これ程の超一流魔王に忠誠心を捧げられても、顧みずに駒としてしか見ていない大魔王なんて・・・・

それをハドラーに言ってしまえればどれ程楽か・・・だが、主を敬愛してやまないハドラーを徒に傷つけ、否定されて不快な面持ちでこの場を立ち去るのが目に見えている。

例えハドラーが信じずとも自分に圧倒的な力があれば取り押さえるか瞬時に腹部だけきって摘出して証拠を突きつけるかすればいい。

だが生憎今のハドラーと自分にそこまでの力の差異はない。デルムリン島のあの時にはハドラーを討ってしまうか、核を取り出すかすれば危険な者排除の為に下手したらミストが来ていただろうし、死の大地でやっていたら確実に私は殺されていた。

どちらにしても手詰まりであった情況に変わりなく、今もそうだ。

私にできる事とはただ一つ、ハドラーが主の裏切りを知る事なく逝かせてあげる事だけ。

そんなティファの深い思いを知らず、ただ沈黙をするティファにハドラーは妬いている発言だけを捉え呆れた声を出す。

「お前は一体、何を考えて・・・」

バン!!

ハドラーの言葉は、扉が勢いよく開く音に遮られ最後まで言えなかった。

扉を勢いよく開けた人物はずかずかと押し入り、並み居る兵士やダイ達を押しのけティファの背後に立ち抱え上げる！

「・・・ナタリーさん⁉」
入ってきたのは分かっていたが、まさか魔王の横にいる自分のところまで来るとは思わなかった!!
「おばちゃんだろ！あんた料理の味付けもしないで何してんのさ!!」
下の食堂でハドラー達に出すお茶を用意している時、今日の夕食の味付けはして良い許可出されて二つ返事で受けたティファが、待てど暮らせど戻ってこないではないか!!
「おばちゃん!!今この場にいるの魔王なんだよ!!危険はないけど来たら駄目・・・」
「だったら!!」
ティファとしてはハドラーは信用しているが、だからといってなんの力もない一般女性が来てはいけないと考えている。だからこそメルルや戦闘技術が無い者はこの広間から出されているというのに、選りにもとってメルル以上に戦場を知らないナタリーがいる事に焦り出て行ってほしいと言う前に遮られる。
その言葉にティファは、否、ハドラー以外の大広間全員がぴたりと止まってしまった。

「たかだか十二歳の女の子のあんたが！なんだって魔王の相手をしているんだい!!」

この場には勇者が二人！大将軍も大魔導士も戦士も魔法使いもいい大人たちが揃っているというのにだ!!
「あんたも!!」
それのみにとどまらず、ナタリーは自分を見下ろすように立ち上がったハドラーの目を睨みつける。ダークルビーの双眸を、恐れげもなく燃えるような瞳で見据え、両足を踏ん張り啖呵を切った。
「立派な魔王様だって言うんなら勇者や戦士達を相手にしな!!この子は子供の、それも料理人の女の子なんだよ!!」

決戦行かずに突然の休日⑩

「行くわよティファちゃん!!」
「あ!待ってください!!ハドラー!明日は・・・・」
「いいから!後は―大人達―に任せておきな!!」
ハドラーに啖呵を切ったナタリーは、ティファを担いだまま食堂に行ってしまった。
後に残ったのは静寂
ティファ以外にも自分を恐れず啖呵を切った者に驚くハドラーは例外として誰もが冷や水を掛けられ夢から覚めた気分になった。
たかだか十二歳の女の子のあんたが!なんだって魔王の相手をしているんだい!!
ティファの隣にいたとはいえバランは今回の事態を上手く説明できないにしても、成分表を渡した時点で帰るように言うことが出来たはずだ。
それはバウスン将軍たちも同じであり、ナタリーが言った事が正しいのだ。
ただ一人、その事を最初から承知してながらも事の成り行きを見守っていた者が、ハドラーに声を掛ける。
「分かったかよハドラー。嬢ちゃんの奴がいかに凄くてもあれが普通の考えってもんだ。」
自分が対処してもよかったのだが、ハドラーと嬢ちゃんの間にある絆がどの様な者か実際を見ておきたくて放置していたのだが、これはかなり不味い絆が出来ている。
ティファを見るハドラーの瞳から、ハドラーを労わるティファの言動から分かってしまった。
この絆は、今はまだ自覚がないティファ本人以外に断ち切らせるべきものだ。
「分かったら、明日の決戦はティファ以外と戦え。」
勇者と竜の騎士なれば、今のハドラーであっても不足はなかろう。

その言い方に幾人も引っ掛かりを覚える物言いであった。
ティファ以外を相手にしろでは無い、ティファ以外と―戦え―と。まるでそれでは、ティファと　ハドラーが戦うことが前提の様ではないか！
「師匠何言ってんだよ！そんなの当り前だろう!!何を今更ハドラーにそんな事言ってんだよ！」
ポップの驚きの声に、周りもその通りではないかと口々に言いだす。
料理人は戦わず、支援サポートという不問律が周りにはいつしか暗黙の了解となり取り乱す。
ヒュンケルとマトリフを除いて
「何故だハドラー！ディーノや私ではなく!!何故ティファと!!」
一番に驚愕したのはバランであった。確かにティファは尋常でなく強いが、今ここには竜の騎士たる自分と、娘の言う通り勇者が二人いるというのに全く目もくれていないとでもいうのか！
「ふん、親となり戦士として弱くなったかバラン。」
「・・・なんだと？」
「バルジ島での勇者の戦果を聞いた時、お前は息子と知らずともダイが十二の少年だと知っても戦おうとしたではないか!!」
「っ！それは・・・それは・・」
あの時親子の情で敵に奔られることを厭うて反対したが、敵の年齢問わずに戦いたがるこやつは根っからの戦士だと尊敬しかけたのが馬鹿馬鹿しくなる。
マトリフの時と同じ。テランでティファと会いたがったのを理由に、自身の状態・周りの状況を　顧みず戦端を開いたこ奴は妖怪爺ではなく、ただの老い耄れになり下がったと評価を下にしたあの時と。
ティファは見ている限り少なくとも敵の目の前で取り乱した事や、無駄な戦端を開いた事は無い。
怒りで激昂しても冷静であり、今のバランが無様に映る程に卓越している。
「ポップよ、お前はいつぞや俺に問うてきたな。何故俺がティファに

拘るのかと。」
「ああそうさ！あいつは確かに強いがな!!魔王の宿敵は勇者だろうがよ！」
それ故に宿敵である先代勇者アバンを殺す為にデルムリン島まで来たのではないか!!
なのに勇者どころか戦士でもないティファに拘っていた理由が戦いたいからだと言われて誰が納得するかよ！
「宿敵か・・そうだな。古来より魔王の相手は勇者と定められたが如く連綿とそのように戦ってきたな。」
ポップの怒りにもハドラーは冷静に答える。一昔前のハドラーならば、格下の者が自分に無礼だと激しただろうが、穏やかさが崩れる事はなく受け止める。
何かに、誰かに定められたが如く、誰かが言ったかの如くそれはずっと続いてきた一連の戦い方。
神の啓示を受けたでもなく、言われたわけでもないのに魔王の相手は勇者だと。
だからなんだ？数千年の歴史に従えとでもいうのか？世の敷いてきた道をその通りに歩けとでもいうのか？
冗談ではない!!
「ティファは俺自身が定めた好敵手だ!!」
誰に言われたでもなく無論命じられたわけでもない！だが俺が戦いたいのは、俺の命を燃やし尽くして戦っても惜しくないのはティファたった一人だけだ!!
偽らざるハドラーの激情に、さしもの百戦錬磨のバランまでもが青褪める。
「・・・あの子と何があったのだハドラー・・」
これ程迄の男にそこまで見込まれた娘と何があったと父としてバランが弱々しく問うた。
その思いはダイやポップ、ティファの全てを愛しているノヴァとても同じで、ハドラーの返答をじっと待つ。
「ヒュンケル話していないのか？」

ハドラーはバランの問いに答える前に、ヒュンケルに振り返った。
ヒュンケルこそが、あの時の自分達の約束の証人と言っても過言では無かろうに。
「・・・ヒュンケル？」
「何隠してやがんだよヒュンケル!!・・・まさか・・・まさか地底魔城でやっぱりなんかあったのかよ!!」
ダイはヒュンケルに泣きそうな顔で問いかけ、ポップは思い至ったことがありヒュンケルの胸倉を掴んで問いただす。
テラン戦の後に、地底魔城戦でティファが捕虜になったあの時二人が偶然再会したが、何事もなかったというのは嘘だったのか!!
「ポップ・・・皆も、ティファの方が、ハドラーに宣戦布告したのだ。」
戦場で倒しますという曖昧なものではない、私の手で貴方を倒したいですと、地底魔城の薄暗い通路で捕虜の身であったにもかかわらず堂々と。
ヒュンケルは胸に秘っしていた事を味方全員の前で打ち明けた。遅いと思われても、今まで隠していた事に後悔はなくポップの瞳から逃げる事無く見つめ返して。
「そうだ。そして俺はそれを受けた。」
返り討ちにしてくれると、あの日から自分達の奇妙な絆が始まった。

蘇生装置のおかげで蘇ったとはいえ、満身創痍でそのままでは野垂れ死に確定なクロコダインを放っておけず地底魔城に出向きヒュンケルと話していた時、従者モルグとその後にとても五月蠅い足音がした。
騒々しく走り回りみっともないと思えば、デルムリン島で自分に無礼な事しか言わなかったいけ図々しいティファであった。
それも下着一枚に男物のシャツをボタン一つというこれまたみっともない恰好をしたティファを思わず叱りつければ、敵地のど真ん中で捕虜であってもデルムリン島のあの時と態度を変えず怒鳴り返さ

れた時は面食らった。
てっきりあの時はアバンがいるから強気だったのかと思うところがあったから。
だがティファは違った。
ヒュンケルに戦場外であれば敵がいてもやたらいがみ合うのは愚かであると教え諭そうとし、あまつ自分を魔王もどきから初級魔王になって素敵ですと、どう聞いても悪口にしか言えんようなみょうちきりんな褒め方をしてきた。
それに腹が立ち、貴様それでも褒めている積りかと怒鳴った。どう考えても悪口だろうと。
だが本気で褒めていたのだあれは。
当たり前です。！このままいけば一流魔王も夢ではありませんよ!!!その方が倒し甲斐がありますと、怖れげもなく言い放って来たではないか。
倒したアバンが自分を倒した時よりも弱くなっていた事に失望し少々腐っていた時に、アバンの眼鏡を預かったティファが宣戦布告をしてきた。
地底魔城というアバンに討たれた因縁の地にて、アバンの跡継ぎの様なティファが言った言葉は重みがあり、布告された時何かが自分の中で満たされたような嬉しさがこみ上げ大笑いをした。
誰に媚びるでもなく怖れるでもなく、清々しい真っ直ぐなあの言葉と思いと力強い瞳が、アバンの事で腐っていた自分のよどみを全て吹き飛ばす程に。
「最初はあれもお前達と同じアバンの弟子で、師の仇を戦場で討つという意味で捉えたのだがな、戦い方の違いで直ぐにあれがアバンの弟子ではないと分かった。」
健気に師の仇を討つと堂々と言ってのけるかと思ったのだが、塔の篩で初めて見た戦い方に、アバンの面影は全くなく違うと分かったがその時はそんな事はどうでもよくなっていた。
アバンの弟子でなくともティファと戦いたいのだ。
「なんでだよ！先生の後継者に一番近いと思ったから受けたんじゃね

えのかよ!!」
怒りでヒュンケルの首を絞めつけていたポップはもうどうでもいいとばかりにヒュンケルを離してハドラーに向き直り、違うと分かった時点でティファを放っておけばいいではないかと怒鳴るが、反対に問いただされた。
「ではポップよ!あの時点でお前は出来たか⁉捕虜であの時点ではヒュンケルは敵の軍団長であり、周りは敵のみしかいない。そんな中雪白とやらの武器リングすらもなく文字通り無防備な姿で魔王相手に宣戦布告する事が!!」
ティファはシャツと下着に腹に包帯を巻いていたのみで本当に丸腰であった。格闘が出来ると言えど傷を負った直後の動きなどたかが知れている。ポップの様に魔法が使えるでもなく、ダイの様に竜の紋章を発動して危機を脱する力が湧くでもないあの状況であったにも関わらずに言ってのけたのだ。
「ダイやマァム!お前達もどうだ!!」
今は出来る程の胆力と精神力を持っているだろうが、当時は無理だろうと断言できる。
それが証拠に、ポップ達は今の自分の問いに答えられず悔しそうに拳を握っているではないか。
「―三界一のとんでもない娘―故に!俺はティファを好敵手と定めたのだ!!」

これこそがティファと戦いたい最大の理由。
命尽き果てるその前に叶えたい狂おしい迄の自分の望み

決戦行かずに突然の休日⑪

ハドラーの内に秘めていたティファとの戦いへの渇望は凄まじく、ダイ達はハドラーの思いに?まれ沈黙する中、幽かな声が場に落ちた。

「ハドラー?」

ナタリーおばちゃんに沢山泣かれてしまった・・・もう危ない事しないで欲しいって。あんなとんでもない事は大人か男に任せる事だって沢山泣かれた。

・・・ハドラーと戦いたい宣言は最初は私の打算だった。

三流魔王を一流魔王へと早くから覚醒させて、原作にあるテラン戦後の策略や他にも考えうる小物が策を弄しそうな事を防ぐ為の・・・ただそれだけの筈だった。

デルムリン島で一流魔王とはを言ってみたらどうなるか試してみれば、予想以上に食いついて島での段階で原作と違う事が起きた。

アバン先生に勝ったと高笑いせず、どこか苦々し気で数瞬前の小物感が薄れていた。

学習能力が早いのか、他者からの影響を受けやすいのかどっちかは知らないが、私の方に多少目が行ってくれたのであれば、二度目に会った時宣戦布告をすれば戦士への覚醒が早まるのではないかと考えた。

二度目に会えたのは地底魔城、先代勇者に討たれた因縁の地において私がなした約束は、した直後には私自身の中ではさして重きを置いていなかった。

これでテラン戦後の策略の心配が減ればいいと思ったくらいで。

その直後に私は打ちのめされた

捕虜としてモルグさんに連れられて行かれる時、ハドラーの真価を偶然見てしまったから。
あ奴はまだ傷が治りきっていない。何故飛び出していったかは知らんが放っておいたら野垂れ死にするだろう
敗れたクロコダインが離反したとは全く疑っておらず、しょうがない奴だとぼやいていたハドラーが美しく見えた。
武人たるクロコダインを疑わずにその身を心配して探しに来たハドラーに対し、打算に塗れた宣戦布告をした自分のさもしさが恥ずかしく消し去りたいとさえ思わせられた・・・・あれをして禁呪生命体の騎士・バルトスさんが生まれたのだと。
高潔な騎士を生みだすからには、その者の中に同じく高潔な魂がなければ生じないのが禁呪生命であり、まさしくあの瞬間ハドラーの内に秘められていた高潔で情に厚い魂が浮かび上がった瞬間だったのであろう。
あぁ、こんな高潔な人物になんとあさましい事をしたのか・・・ハドラーは愉快気に私のあさましい思いも知らずに純粋に宣戦布告を受けた・・・受けてくれてしまった。
子供の戯言だと笑わず本気に真摯で・・・・あの気持ちに見合える高潔な魂など私には存在しないというのに。
世界を裏から助ける為に多くの命が失われるのを承知で見捨てる最低な私と知ったら、あの人はきっと私を軽蔑して二度と目もくれまい。
それは兄達も一緒で・・・・それでも、どうしても私はあの時生じた思いを捨てられずに今日まで来てしまった。
あの高潔な戦士と本気で戦いたい。戦ってお互いの命を削り合いながらも全てをぶつけあって・・・・そして倒したいと
愚かな子供が見た瞬きの夢・・・・
だけどそんな夢ももう終わっているだろう
ハドラーは最早誰もが認める超一流魔王。彼が本気で戦いたいと望めば竜の騎士・勇者・戦士が彼の思いに応えよう。
私の周りには本物の高潔な志に溢れた勇者・騎士・戦士がいるのだ

から、篩の塔で無様な事をし、その後の騒動もキルから聞いていて知れているだろうから、メッキの?がれた私と戦おうとは思うまい。
たださっきは面白いから話し相手にしていたにすぎなかろう。
私の出番はこの辺りだ。多少知識が飛びぬけ難なく会話が出来れば茶飲みの余興くらいには使えようし、それ以上でもそれ以下でもないだろう。
明日の決戦には来いと兄達に宣戦布告をして今頃は死の大地に帰っている頃合いか。
彼の中の黒の核晶は、ダイ兄か父さんが戦って露呈した時か、彼がどちらかに敗れた時に対処すればいい。
真魔剛竜剣は復活し、今の兄と父さんならきちんとタッグで戦ってくれるだろうから敗れる事もな心配はない。
百万が一敗れそうか黒の核晶の露呈で本気が出せない時の事も考えていればいい。
倒せるならそれが一番だけど・・・・もしもそれが無理なら・・・・それをした時は本気であの人は私を軽蔑し、恨み憎むだろうがその時はその時。

私の戦いたいという思いも、近頃ハドラーに抱くよく分からない思いも所詮は夢物語、私には私の―役目―がある。
好きな人全員の幸せ
それ以外を望んでいい筈が無かった。大好きなあの人達が笑ってくれる世界を作れる大切な役割が私にはあるのだから。
物別れのまま終わるはずだった父さんと家族になれて、ラーハルト以外は死別する筈だったガルダンディーとボラホーンが蘇ってくれて、ロカさんも生きていてくれているこの世界を。
オーザム以外はほぼ無傷でいてくれているこの世界を。

誰が知らなくとも三神様達と精霊王達が知ってくれている。これ程大切な事はない・・・ない筈だ

「ナタリーさん、心配かけて御免なさい。二度と馬鹿な事言わないから安心して。」
「ティファちゃん・・・あんた・・・」
「もう魔王も帰ったと思います。茶渋付く前に茶器洗いたいから下げてくるね。」
「ティファちゃん・・・・あいよ・・」
おかしいな、もうしないって言ったのに、ナタリーさんはどうして泣きそうな顔したんだろう？
やっぱり私には本当の意味で誰かを理解する事は出来ないのだろうか？泣かせて困らせて振り回して・・・・近頃自分の事すら上手くいかないな。
―余計な思い―など抱かず、役目をしていれば・・・・・あれ？
「ハドラー？」

どうして居るの？一目見てしまえば消しかけた思いがまたゆらゆらと浮かんでしまう・・・・あの約束を果たすと言ってくれるのではないかと期待してしまう・・・

何故・・・自分で戦いたいという夢を捨てさせてくれないのだろう、また胸が苦しくなる。
大勢の敵に囲まれても泰然自若としたその様は本当に美しく、役割を負って生まれた私の心を捉えて離してくれない貴方はとても素敵で、同時に残酷な魔王陛下だ

決戦行かずに突然の休日⑫

幽やかな声に似つかわしく今のティファは儚げなく、戸惑いの瞳でハドラーを見つめる。
少し前のティファとはとても思えない程に弱り、消えそうな陽炎と成り果てて・・

ああ、死の大地のあの時と同じだ。戦いを厭い、倒した敵に懺悔し己を壊す程に嘆いていた時と。

いや！戦いたくない!!
殺したくなんてなかった!!!

瘴気に侵され心の内側の傷全てを抉られのたうち回っていたティファを見た瞬間、気が付けばティファを抱きかかえ幾度も名を呼んだ。
十か二十か数えられない程に。
その最中に叫んでいた言葉をあれは覚えていなかった。

殺してごめんなさい・・・見捨てて・・・助けられなくて・・

必死に必死に何かに謝り罪を数え、少しずつ声も弱まり消える寸前の陽炎の様に気配も弱まり、そのままその者達の下に行ってしまうようで心臓を握られる程の恐ろしさを味わった。
引き留める為に名を呼び続けた甲斐あり戻ってきた時のあの安堵感は今も忘れていない。
あの時と同じか⁉仲間や周りを思い、謝して己の罪でも数えたか!!
あの時とは理由が違かろうが、陽炎の如くにさせるものか！
それがティファ自身の中の―何かの思い―であっても！俺にとっては下らぬ！そんなものに渡すものか!!
―これ―は俺の！魔王ハドラーの物だ!!!!

それは何と傲慢で独占欲の強い思いか。

そう、ハドラーにとってはティファが抱えている事が何かは知らずとも、ティファが居抱いている罪悪感も役割も何もかも全てが邪魔な事でしかない。

あの自由奔放で、何処までも突き抜け燃え盛るようなとんでもない娘を弱らせる事は、事象であれ本人の意思であれただの邪魔だ!!

「答えよティファ!!」

ビクリ!

「お前は俺と、ハドラーと戦いたいか!!」

その言葉にはハドラーの思い全てが詰まっていた。

過去の栄光も、有り得たかも知れない未来も、全てを投げ打ってもティファと戦えるのならば惜しくもない男の狂おしい迄の情念全てが込められた願いへの問い。

以前のティファなれば、地底魔城のあの時と同じティファなればこの思いに容易く答えてくれていたであろう。

はい!戦います!!約束を果たしましょうと。

だが今は?あの時にはなかった—何か—に縛られ雁字搦めの様になり、己を押し殺しているように見える今のティファは、応えてくれるだろうか。

ハドラーが私とじゃない・・・・私がハドラーと戦いたいか?

・・・どうして・・・どうしてそんなこと聞くの!!

さっきナタリーさんと約束したばかりなのに!さっき自分の中で

決めたばかりなのに!!
下らない子供の夢など!もう見ないと決めたばかりなのに!!
「どうなのだ?」
揺らすな!
「お前が言ったあの言葉を、約束をどうする?」
浮かばせるな!!
「お前は・・・」
「貴方はどうなのだハドラー!!」
先を聞きたくないと耳塞ぐように怒鳴るティファの問いに、ハドラーは揺らぐ事なく返答する。
「俺がではなく、お前はどうしたい?」
「う・・・・あ・・」

その言葉は、あの言葉は!

ハドラーの言葉にティファは完全に揺らぎ、力づくでもハドラーを帰そうと算段を付けだしたポップに動揺が奔った。
何故ならあの言葉は、かつて己の戦う理由を明確化できずになし崩し的に戦い、いざ強敵との戦いを前に怯えて動けなくなったポップに、ティファが言った言葉と似ている。

私や他の人が戦うからじゃない、ポップ兄自身の戦う理由をきちんと出さないといつか命取りになる
他者の考えに由来するのではない、己自身がどうしたいか、そしてどう動くかを決めるのは自分自身だと。

「ティファ!ちゃんと嫌だって言って!あの時と今とは違うんだって!!明日は俺か父さんが戦うから!!」
「今すぐ立ち去れハドラー!!それともここで一戦交えるか!!」

「ティファ！向こうに行きましょう！」
「ティファ殿!!」

兄が、父が・・・・仲間やアキームさん達が私を守ろうとしてくれている・・・そうだよ・・・みんな私を心配してくれているんだ
そんな人達に心配かけたらいけない・・
貴方ともう戦いたいと思わない
一言そういえばいい。そうすればハドラーはもう私に対しての興味は失せて、さっ気の考えた通りにすればいいんだ・・

貴方に興味がなくなった、最大の敵大魔王との戦いこそが大事だと言えばいい!!
なのに・・・
「あ・・・」
言えない・・・言葉が出ない！どうして!!
―今まで―と同じ！こんな事私にとっては大切な事じゃない！
もっともっと大事な事が山積みになっているじゃないか！
成すべきことがある、それに向かって歩いてきたのに・・・・どうして・・・たった一言が言えないの・・

唇を戦慄かせ瞳をぐしゃぐしゃにしている痛ましいティファの姿に、怒声もいつしか消え果て、
ハドラーの言葉のみが響き渡る。
頑是ない子供に辛抱強く聞くように。
「お前自身はどうしたいのだティファ？俺と戦いたいのか違うのか？」
「わ・・たしは・・」
「どうしたい？どうする。」

やめて！聞かないで!!立ち去って！どうして・・・どうして私に構うの！

そんなに強くなったのなら、もっと強い人がここには大勢いるのに、立派な志を持った人が・・・もういい！私は貴方とは・・・

「自分を殺すなティファよ!!!」

瞳を歪め己すらも騙す言葉を吐き散らかそうとしたティファを止めたのは

「・・・・クロコダイン？」

それまで押し黙っていたクロコダインが、突如として叫び上げた。

「俺は・・俺達は今までお前に沢山の願いを叶えてもらった!!」

「なにを・・」

「我ら罪人達が償う道を歩けるようにしてほしいと王達に周りの者達に願ってくれた！幸福になってほしいと願ってくれたが故に！俺は幸せを見つけることが出来た!!他者の為にお前は様々な事を願い叶えて来てくれた!!だが！お前自身の願いを、俺は一度として聞いたことがない!!!」

それは・・・

「ハドラー殿の言う通り！お前自身がどうしたい!!周りの思いを受けて自分の思いを殺すな!!一度でいい！ティファ！たった一度でいいのだ!!周りの事柄ではない!!―ティファ―が望む事はなんだ!!!お前の答えを聞かせてくれ！」

クロコダインとて、今自分が言っているのは暴挙であると理解している。家族を兄妹を仲間を心配しないものなど恥である！ダイ達がティファを思い、戦わせたくないという思いは自分だとて負けない！だがその思いが今ティファの心を押し殺そうとしている。

ダイ達も其れが分かっているであろう。ティファが本当にハド

ラーと戦いたくないのであればもうとっくに言っている。
意にそわない事に対して容赦のないティファが、ハドラーの問いに苦悶の表情を浮かべ答えられないのがその証。
それでも戦わせたくないとダイ達は否定しようとしているが、それではティファ自身の望みを潰すことではないか!!
散々様々の者達の願いを聞いて尽くしてきたティファが望む事なれば、自分は叶えてやりたい！
それがティファの死に繋がったその時は、仇を討って自分も後を追う!!
仲間としてではなく、一人の武人としてクロコダインはティファの背中を押す。
自分だとて、少女と知っても強者のティファと戦いたいと望んだのだ。
高潔な戦士となったこのハドラーと戦いたいと願う事の何が罪になるというのだ!!
ダイ達が勝つとティファが信じているように、自分達もまたティファが勝つと何故信じてやれぬ!!

それはまさしく綺麗事。武人ならば通る理屈は、全ての者に通じるものでは無く、寧ろ理解されない事・・・・それなのに・・・

クロコダインの心からの言葉が、今も自分をじっと見ているダークルビーの瞳が、私に嘘を言う事を許してくれない・・・・逃げる事を許してくれない・・
かつてポップ兄に言ったあの言葉の通り、本当に自分が出さなければいけない正答の無い問いに・・・・・

もう無理だとティファは観念した。
信頼する仲間が己の本心を明かしてほしいと願った、願ってくれた

「・・・たい・・・・・」
私は・・・ティファは・・・・・・
「戦い・・・たい・・・・」
「誰とだ」
「貴方と・・・・魔王ハドラー・・・貴方と戦いたい・・・」

一生を賭けて問うた答えに満足し、ハドラーは穏やかに微笑む。

「では決まりだな。」
「・・・・ハドラー?」
「明日の決戦で俺と戦うのはお前だティファ。」

決戦行かずに突然の休日⑬

明日の決戦で俺と戦うのはお前だティファ

「待っているぞ、死の大地にて。」

漸く己の願いを聞き届けたティファに満足したハドラーは、自身の言葉に呆気にとられ、呆然とするダイ達を尻目にそのまま出口から普通に出て行った。

ティファからの応えも聞かずに

待って・・・待って待って待って!!ハドラー今何て・・・明日の決戦はって!!

「ハドラー!!!」

バン!

漸くハドラーの言葉が届いたティファは、広場中央でまだ反応できていない兄達を押しのけ、閉ざされた扉を開きハドラーの後を追った。

森に続く道にハドラーの姿はなく、其れでも分かる!

きっとこの先に!!

走って、走り抜いて、森を抜けた先に・・・

「待ってハドラー!!!」

自分が来ることを予想していたように、砦の方を向いて佇むハドラーがいた。

矢張り追ってきたか。

「どうした？俺がお前の相手では役者不足か？」

この肉体になっても、大魔王バーン様どころかミストバーンに精々半分追いついたくらいだとは感じている。

自分が強くなればなるほど、あれの底知れなさを感じるとは皮肉なものだ。

弱かった時は強いとも思えなかったのだから気楽なものだと自分に苦笑する。

もしかしたらティファなら、ミストバーンすらも相手が出来るかもしれんが・・・

「違う！それは貴方の方だ!!

竜の騎士がいるんだよ⁉勇者がいるのにどうして⁉私なんかと戦いたいの！

約束だったら気にしなくていい！貴方が本当に戦いたい相手と戦うべきだ!!」

勇者支援を目標にしている私が言っている事はあらゆる意味で大問題だ。

明日の決戦の最大目標は大魔王バーン出会って魔王ハドラーではない。

なら兄や父達は温存するべきだ。

それでも、この人の人生の最後はこの者に敗れても悔いはないと思える人が相手するべき事だ！

今のハドラーは義理堅い。きっと、地底魔城の私の約束を果たそうと・・・

「・・・戯けが・・」

・・・戯け？
言葉と共に、ハドラーの手が頭の上に置かれる。
考え事をすると俯く癖で下を向いていて、ハドラーが近づくのが分からなかった。
上を見上げれば、さっきとは違う温かい光を宿したダークルビーの双眸と目が合った。
何を己を否定しているのだこの戯けは。言ってやらねば分からんのだろうか？
「俺が戦いたいのは、俺が命を燃やし尽くしても惜しくない相手は、竜の騎士ではなく、勇者ではなく、まして料理人ではない、三界一とんでもない娘ティファ、お前なのだ。」
「・・・・私？」
「そうだ、お前になら、お前ならば俺は敗れても文句はない。」
「っ！そんなの・・・・そんな事・・」
「明日は必ず俺の下に来てくれティファ。」
「ハドラー⁉」

ハドラーは兜を脱いで跪き、それでも自分より低いティファの顔の頬を両手で優しく包み込み自分を見上げさせる。

「お前でなければ駄目なのだ・・・」

焦燥感に駆られた切なげな声で、魔王ハドラーが懇願する。
自分の寿命は自身が一番わかる。
昨夜ミストから差し入れられた料理を食べた後、眠りについたが吐血した。それも今まで感じた事の無い胸に激痛を伴って。
持って数日・・・俺の命の灯火が消えるのに未練はない。
バーン様から頂いた肉体を捨ててでも、対等な力でぶつかりたいと願ったティファと戦えるえばそれ以外何を望もう。

この人は・・・自分の死期が近い事を知っている・・・知ってしまっている。
それでもまだ主の裏切りに気が付いていないこの人を・・・・
「いきます・・・・かならず・・・」
「そうか・・・・来てくれるか。」
「・・・はい・・・・行きます。」
この人を憐れむのは間違っている。この人は主を敬愛したままの戦士として倒すべき人だ。

一つの思いが蘇る。この高潔な精神を有した魔王ハドラーだからこそ自分の手で倒したいと願った事を。

炎の灯火が僅かながらも胸に灯ったティファの瞳は、悲しみではなく生命力に溢れ、光を双眸に宿させる。
漆黒で満天の星空を宿した、死神すらも魅了したその瞳は魔王とても例外ではない。
今まで自分が見てきたティファの瞳の色は、敵愾心に煌めくか悲しみや戸惑い、疲れた様子で、穏やかに煌めき、年相応に可憐な少女に映った。
抱き上げれば軽く、顔も自分の片手で覆えるほど小さいこのティファと、戦いたいと望む自分はきっと壊れた者だ。
だがそれとても今更で止まる気はない。
「必ず来てくれよな。」
互いの吐息が触れ合い、唇が触れる寸前のギリギリまでハドラーはティファの顔に近づき約束を再び交わす。
今度こそティファの中に沁み込む様に。
ティファが押し黙ってしまい、返事を待とうとしたその時背の方から焦る声や大勢の足音が聞こえた。

「・・・ファ!!」
「どこに!!!」

・・・・・・迎えが来たか・・・無理もないか。俺だとて配下の者が一人で訳も分からず飛び出されては血眼になって探しに行く。

ダイ達の声が近づく前に、ハドラーはキメラの翼で死の大地へと帰還する。

明日の決戦に備える為に。

・・・・ハドラー

一人残されたティファは五月蠅く鼓動する心臓を持て余し、顔に血が上るのすらが恥ずかしい。

・・口付け落とされるかと思った・・・

顔近づいた時のあのハドラーの表情は今まで一度も見た事がなかった。

あれが―大人の男―の顔なのだろうか・・・・あの人と私が明日・・・・

「ティファ!!」

ビクリ!

「あ・・・」

気が付けばダイ達全員がそれって後ろにいた。それも凄まじい形相で。

何考えてる!!

ダイ達としては、今すぐ妹を怒鳴りつけて閉じ込める気でいる。この場には父もその配下もいる!ティファを閉じ込めるのに不足は・・・・

「クロコダイン、嬢ちゃんを砦の食堂まで運んでやってくれ。ナタリーばぁさん怒ってんだろうから一緒に謝ってやってくれや。チウは茶器もって一緒に行け。ほらぐずぐずすんな。いつまで外で屯ってんだよ。」

ダイの声が響き渡る前に、大魔導士マトリフの飄々とした声がその場を仕切り出しす。

「・・・分かった。ティファ来い。」

マトリフの言葉にクロコダインは直ぐに動きティファを抱き上げる。

今のダイ達の剣幕に後ずさりそうになったティファは、クロコダインの首筋に縋りつき目をつむる。

兄達の心配はもっともで、でも叱られるのが、更に言えば異端な考えだと否定されるのが怖くて、

クロコダインとマトリフの優しさに縋りつく。

「ティファさん、茶器持っていった後お手伝いしますね。食器並べるの手伝うくらいはできます。」

その後を追うチウも、いつもの通りにティファに優しく言葉を掛ける。

きっとティファさんなら勝てると信じて、あの約束を否定せずに。

全員が砦に戻りティファ達を地下の食堂に行かせた後、マトリフは直ぐに防音結界を張り、ダイ達に告げた。

「今からどんな物音立てても嬢ちゃん達には聞こえない。遠慮しなくていいぞ。」

この中にいる誰もが、ハドラーとティファの一騎打ちなど望むま

い。果たして

バキン!!!

一番に動いたのはダイ達ではなく、父バランでもなく竜騎衆の長ラーハルトが、マトリフの言葉を聞くと同時に動き、ヒュンケルの頬を思いっきり殴りつけ吹っ飛んだヒュンケルの胸倉を容赦なくつかみ上げる。

ヒュンケルを見つめるラーハルトの双眸は狂気が宿ったように赤黒い炎が燻ぶっていた。

決戦行かずに突然の休日⑭

バラン様も含めて、俺達全員はあの方によって救われたのだ。

テラン戦の最中ティファの説得に応じず戦端を開き、一撃のもとにガルダンディーとボラホーンは敗れ去った。

死の間際でも、二人はティファに優しく笑って逝った・・・・心の中で済まないと謝りつつ。

二人を倒したティファは泣いていた。涙は流さず表情は冷たくとも心が泣いていた。

それでも止まるわけにはいかなかった。我ら迄もバラン様の成そうとした事、その根幹の思いを否定してしまっては、あのお方は本当に一人になってしまう。それだけはどうしても。

我等は命を持ってあの方に尽くすと決め進んできた。その思いをどうかバラン様に伝えて欲しい。

例え俺が死ぬことになっても。

身勝手で何処までも自分達本位でどうしようもない思いを―小娘―に託して戦おうとした矢先にその男が現れた。

銀の髪に紫の瞳、手には俺と同じ魔装を持った元・軍団長ヒュンケルが。

小娘の様子のおかしさから俺達の戦闘の異常さを感じ取ったヒュンケルが、無言のまま俺の前に立ちふさがり鎧化をして小娘に代わる様に促す。

これ以上戦わないようにと。

これが氷の剣士ヒュンケルか・・・・この者も―小娘―に救われでもしたか・・・俺達と同じ様な痛みを抱え、なおかつ救われたものであるならば・・・あるいは。

「選べ 小娘！お前は俺とまだ戦うか⁉それともバラン様の下に行くか!!」
「それは・・・それは・・」
「俺はその二人の様にはいかんぞ。ぐずぐずするのであれば、ディーノ様とお前が我らの下に来ることになる。バラン様はさぞ喜ぶであろう。」

笑って告げたが内心ではそれを止めて欲しいと願う。
そんな未来はきっと誰もが最後は傷つこう。
「・・・・私は・・・あの人を止めたい!!!」
「ふん、ならばさっさと行け。行ったところで結果は変わるまいが。」
最後の最後まで憎まれ口しか利けんのかと我ながら苦笑したものだ。
だがあの方は走る前に言ってくれたのだ。
「ありがとう、ラーハルトさん。」
泣き笑いの顔をして

「お前は・・・ティファを知っているのか。」
俺達の遣り取りで察するところを見ると、ただの武だけの者ではなさそうだ。ならば試させてもらおう。
あの方の仲間でいるに足る者かどうか・・・・我ながら小姑な気分だ。
結果は強く、そして優しかった
戦いながら俺は話した。―小娘―と俺達がどう出会い、どのような数奇な運命を辿ったか。
知ったあいつは小娘のように俺を止めようと試みてきた。
バランとお前だけでもティファと共に歩くべきだ、何故戦わなければならない！
だが言葉だけで俺が止まるはずもなかった
ではお前はどうなのだ！お前は言葉だけで止まることが出来たの

か!!
　果たしてその言葉にヒュンケルは苦しそうに顔を歪める。
　きっとボロボロになるまで戦い抜いた筈だと分かっていた。あいつも俺達と同じく大罪を犯したのだから、言葉だけで止まるはずもないと。
　だからあいつも最後は加減せず、俺の必殺の技をカウンターで返してきた。
　敗けた、もう指も動かない俺をあいつは悲しそうな顔で近づいてきた。
「俺に、何かできる事はないか?」
　まるで自分の方が負けたような情けない面で・・・あぁ、本当に世の中は広く酷い者ばかりではなかった。
　俺達は何を見て生きてきた積りでいたのか、おかしくなる。
　あの方はたった七つの頃にその事を知っていたというのに・・・
　心配だ、俺たちの死がきっとあの方の心の傷になる。
「頼まれて・・・くれるか・・・」
　俺の言葉に、ヒュンケルは沈痛な面持ちで頷いてくれた。
「バラン様とご子息のディーノ・・・お前達にとってはダイ様であったな。あのお二人はきっとティファ様が助けて下さる。」
　優しい、敵になったと知っても俺達を最後まで見捨てようとしなかったあの方の心は今は・・・
「お前にはティファ様を守ってやって欲しい。」
　あらゆる敵から、悲しみから、身も心も守ってほしい
「受け取ってくれ・・・・」
　ヒュンケルの剣の魔装は俺のせいでボロボロだ。俺の代わりに槍の魔装と共にどうかティファ様を・・・・・・そう託したはずなのに!!!
「ヒュンケル貴様!!ティファ様とハドラーの件を知っていて何故御止めせなんだ!!優しいあの方が戦いに向かぬのはお前もよく知ってい

るではないか!!!」
地底魔城の時は確かに敵の軍団長であっても、今はかけがえのない仲間ではないか!!
ティファ様の無謀な所は自分もよく知っている!その考えを改めさせる時間がヒュンケルにはあったはずだ。
「なのになぜ貴様は何もしなかった!!どころか何故ディーノ様達にティファ様の無謀な考えをお伝えさえしていないとはどういう積りだ!!」
優しく賢いあの方なれば、仲間の思いをくみ取り止められた筈なのに!この男はそれすらもしていなかった!!
「やめてラーハルト!!」
「やめろよ!!ヒュンケルが悪い訳じゃねえだろう!!」

ハドラーと約定したのはティファ自身、ならば責められるのはティファ自身であってヒュンケルではないはずだとダイとポップがラーハルトを止めようとするが止まらない。
「手を放せポップ!!ディーノ様、こればかりは許すことはできませぬ!」
激昂しヒュンケルの頬を加減なく殴り飛ばし、胸倉を掴み引き立てて迫るラーハルトをダイ達は必死に止めるが、仲間と主の子息の制止も振り切り、怒りの炎が冷めやらぬ瞳でヒュンケルに問いただす。
「なんの為に俺がお前に槍の魔装を託したと思っているのだ!!」
あの方を敵からだけではない、あらゆる事態から守ってほしいと命を賭して願ってあの約束をしたといのに・・・・選りにもよってハドラーとの決闘約束を許すとは!!

ヒュンケルだとてラーハルトの気持ちは痛いほど分かり、だからこそ拳を避けず今もされるがままになる。
ラーハルトは自分達と同じくティファを愛しみ守りたいと願ってやまないのだから。
分かっているからこそ何の弁解もせず、そんなヒュンケルにラーハ

ルトは愛想が尽きたとばかりに手を放す。

「もういい、貴様を頼りにした俺の目が曇っていたというだけの話か。約束は忘れてもらって構わん。」

放り捨てる様にヒュンケルを離し、一顧だにせずに歩きだすが、道を塞ぐ者がいた。

「どこに行くんだよ。」

食堂への階段前に、マトリフが立っていた。

「知れた事、ティファ様の所だ。」

今からでも遅くはない！あの方を説得する!!

「今それをされると困るんだよ。」

「・・・・なんだと？貴様何を・・」

「ダイ達も聞け！今ティファを止めるな!!」

マトリフに続き、ヒュンケルまでもがティファを止めるなと言い出す始末。

「貴様達どう言う積りだ!!」

むざとティファ様を死地に立たせるというのか⁉邪魔をするというのなら斬り捨てでも!!

「ティファを本気で止めたければ明日の早朝だ!!」

その言葉に、殺気立ったラーハルトは訝し気にヒュンケルを振り返る。

マァムやエイミに手を貸してもらいながら立ち上がったヒュンケルの瞳は真剣そのものだった。

「何故明日なのだ？お前も止める積りならば今直ぐ俺と共に来い!!」

「それ言った瞬間嬢ちゃんに砦から逃げられたら困るんだよ。」

ラーハルトの熱い思いに、マトリフは冷水をかける。

ティファが真剣にハドラーとの決闘を受けた。最早言葉では止まるまい。

テラン戦でのラーハルト達がそうであったように。

外にはルーラよりも早い神獣ガルーダが待機している。ティファが望めばどこにでもいくガルーダに乗られてしまっては追いつける手立てがこちらにはない。
ティファは死の大地に何度か行っている。そしてハドラーからの情報で地下への入り口も先程知った。
逃げたティファをそこで張っていても、察知したティファが死の大地にてハドラーに決闘に来たと呼ばわれば、先程の様子からハドラーならば別の入り口からティファを中に入れる様が目に浮かぶ。

「マトリフ導師、明日ティファが眠っている間にラリホーマを掛けて欲しい。」
「・・・・・やっぱそれっきゃてがねぇか・・」
ヒュンケルのとんでもない頼みをマトリフは断らず、それしか手段がないかとぼやきながらも承諾する。
「ちょっと待てよ!!」
「なんという無体な事を!」
そのとんでもない話をガルダンディーとボラホーンが顔色を変えて止めに入った。
ティファがクロコダイン達と共に下に降りる辺りで見回りから戻り、アポロとエイミから大体の事情を聞いた二人はぶっ飛んだが、そこはあのティファ様の事だから有り得てしまうと頭を痛めている所にとんでもない提案が耳に入り待ったをかける。
「なんでガキ・・・ティファ様と直接話し合わずにいきなりラリホーマで止めるなんて話になんだよ!それに逃げるって・・」
「バラン様、仮にティファ様がどうあっても戦うと言ってこの砦を出ようとしても、我等全員でお止めすれば・・・」

「それが出来りゃぁ俺とヒュンケルだってここまで悩んでねえんだよ!!!!」
ガルダンディーとボラホーンの言い分に、マトリフは苛立ちと共に一喝する。そんな単純にいくような相手ではないのだティファは!!

「・・・・ティファの持っている能力が分からない限り無理だ・・・」
一体どれほどの力を秘めているのか、他にどのような能力を持っているのか謎なのだティファは。
マトリフの一喝で静寂した場に、ぽつりとしたヒュンケルの言葉がやけに重くのしかかる。
仲間の能力が分からないというおかしな言葉であるはずなのに。
「謎って・・分からないって・・・それはガ・・・ティファ様が教えてくんねぇならディーノ様に聞けば済む話だろう。」
他が知らずとも、兄に聞けばいいというガルダンディーの言葉に、ダイは泣きたくなった。
「俺も・・・・知らないんだ・・・・分かんないんだよティファの事が!!」
堪え切れずにダイは叫び涙を流し始める。
兄なのに、妹の事が分からない！
鋼の剣の事は知っていたが、―雪白―という伝説級の武器の事をテラン戦のあの時まで全く知らなかった！武器一つとってもこれだ！それこそティファの高い知識力、実力、そして世に言う奇跡の薬、万能薬開発者の一員だと知ったのはここ最近で、全て大戦が始まってからだ。それも少しずつ知っていき、幾度―妹―を見失いそうになって不安になった事か分からない・・・島にいる時のティファは穏やかで優しい女の子だったのに。
ハドラーの時もそうだ！穏やかに話している時はまだよかった。ティファは敵味方を問わずに優しい子だから・・・・なのに戦いたいと自ら望むティファを自分は知らない!!
「ディーノよ・・・」
泣きながら胸の内を明かす息子を、バランはそっと抱き上げ背中を優しく叩き宥める。
自分もティファの何を知っていよう？何も知らぬ・・・・あの子の考え一つとても・・・
「ティファは・・・俺達の事なんでも知ってくれてるのに・・・・俺達は・・・ティファの事が分かんない・・・分かんないんだよ・・・」

「ダイ、それはここにいる全員がそうなのだ。お前だけのせいではない。」
「でもヒュンケル！俺はティファの兄なんだ・・・お兄ちゃんなんだよ!!」
ヒュンケルの言葉とても、ダイには何の慰めにはなりはしない。十二年間共にいた妹を分からない情けない兄なのだと。
これで妹を守る積りでいたのかと・・・
「ダイ、分からなくとも確実に止める手段を俺はずっと考えていた。ハドラーと戦わせるつもりは毛頭なかった。きっとティファは激怒するだろうがな。」
尊敬する敵のハドラーとの約定を破らされることは心に傷を負うかもしれない。
それでも・・・
「―今―ならばティファを戦場に出さなくとも安全の筈だ。」
明日の決戦時はティファをこの砦に留め置く。どんな事をしてでも。

「・・・・そっか！あいつがいなくなれば!!」
ポップはヒュンケルの言わんとしている事が分かり得心がいった。
「そうだポップ、キルバーンがいないのならば戦場外であってもティファの安全は確保される。」
決戦時なれば、ハドラーと大魔王バーンは勇者一行全員を確実に葬り去る為に本拠地に居ようし、その時ミストバーンが大魔王バーンの側を離れる可能性はほぼゼロであろう。バーンの腹心故に。
読めなかったのはキルバーンの行動だけだった。神出鬼没でいつ空間から現れるか分からず、ノヴァに加護を授けているという精霊王も、リンガイアの地を離れる事は出来ず空間からの敵を察知する方法は皆無であったが、バランが倒してくれたと言われた時、神の加護を授かった気持ちに陥ったほどだ。
「そしたらヒュンケル！ティファを・・・・あの子をもう戦場に行かせなくても・・・」

「そうだマァム、一行の真ん中にいなくとも決戦時ならば今あげた理由で大丈夫だ。」
「・・・良かった・・・」
優しいティファをもう戦場に出さなくとも良いと、頼れる長兄が行ってくれたことに安堵したマァムはエイミと共に手を取り合いポロポロ泣き崩れる。
エイミもティファのした約定に胸が潰れる思いであり、反故になるがティファが戦わなくて済む事の方が大事であった。
「・・・ディーノよ、これ程ティファを案じていたのなら、なぜもっと早くに戦場からあの子を遠ざけなかった？」
しかもここでもキルバーンが一番に警戒されており、何故ミストバーンや大魔王バーンの名まで上がるのか・・・・まるでティファが全ての敵から狙い定めらている様に。
「・・・・長い話になるけどな・・・」

これを話さねばティファの取り巻く状況が分かるまいと、ポップが全て話した。
キルバーンはもういないので馬鹿げた賭けやそれまでの事は省いて。
―五年前―の出会いで起きた魔王軍の大混乱からその顛末までを。
「そんな・・・・俺達が起こした騒動のせいでティファ様が・・」
「それって俺達のせいじゃねえかよ!!」
「・・・なんということに・・・」
ティファの危機的状況の元凶たるは自分達ではないかと竜騎衆三人は呻く。
ティファとニーナ、そしてリュート村の子供達を知ってしまってからは人間を憎めなくなり、どころか人間の子供達を殺したと自慢気に言い放つ輩に腹が立ち誰かれ構わず殴り飛ばしたのに後悔はない。
ガルダンディーとニーナの出会いは最悪であったが、最後別れる時ニーナはルードの事を大切にして長生きしてほしいと願ってくれた。

別れた後も蘇ってからもニーナの事は片時も忘れず、今も身が案じられる。
ボラホーンとラーハルトも、リュート村の子供達を思わない日はなかったが！それがティファを危険に晒すことになるだなんて・・・
「それも明日で終わる。」
嘆く三人にヒュンケルの声が響く。
「明日俺達が勝てばいい、そうすればティファもテランの村の子達も・・・この世界全てが救われる。」

その通りだ・・

「そうだよ・・・俺達が勝てばいいんだよ!!」
「勝って、そしたらティファに謝魔ればいいんだよ!!」
「そうね、そうよね！勝ちましょう!!」
ヒュンケルの呼びかけに、ダイはバランから降りて力強く応え、ポップ達もそれに続く。
明日の決戦は勝たねばならない!!是が非であろうとも、この世界とティファを守り抜く為に!!

決戦前の夜の過ごし方・前編

ありがとうって伝えたくて～
ええ、ただいま私ティファは皆様の前で歌っています。伴奏はノヴァのピアノで、食事広間の机を全て片付けて。
明日の決戦の士気を高める為にってバウスン小父様に頼まれてだけど。

・・・・・なんでみんな怒ってないんだろう？

食事の支度全部整って、おばちゃんに言われて皆呼びに行く時は物凄く緊張した!!
全員、それこそおじさん含めて物凄い非難の嵐と説教で遂に私はダイ兄に監禁されるの覚悟して、逃亡する気満々だったのに
怒っている人が誰もいなかった!!

「ティファこれも食べて。」
「えっとダイ兄・・・いただきます。」
「ティファよ、このデザートもどうだ？」
「父さん・・・・うん、食べる。」
どうして誰も怒っていないのか混乱しながらも、兄達に優しく給仕され次第に緊張を解きパクパクと食べ始める。
「・・・あ～ガキンチョ、これも試してみっか？」
「あっと、ガルダンディーもお肉沢山食べた方がいいよ？明日決戦だし・・・父さん、ガルダンディーとボラホーンとラーハルトは明日どうするの？」
「ん！・・・まだ何とも・・」
「そうなの？」
ティファの問いに、バランは冷や汗を流すのを辛うじて押し止める。まさか娘を見張るために残すとは言えない!!
「ティファ～、食べ終わったら久しぶりに歌おう。僕あれからピアノ

ずっと続けてたんだよ。」
「続けてたんだ！ノヴァって凄いね。文武両道だ。」
「お？ノヴァって楽器弄れんのか？」
「ああ、昔嬢ちゃんと坊やの家で一度だけ泊まった時に二人で披露してくれたっけか。懐かしいな～。一丁聞かせてくれよ嬢ちゃん。」
「私からも頼めるかなティファ。」
周囲からの聞きたいリクエストに、受けるかどうか悩んでいるティファにバウスンも頼み始める。
「明日は大事な決戦だ。皆が無事に帰れるように歌ってくれまいか。」
戦勝祈願の奉納の舞や歌があるけれど、私の歌で・・・・
「ノヴァ！―アレー歌おう!!」
「僕と昔作ったやつ・・・いいね、それにしよう。」
私とノヴァの完全オリジナル・・・・とは言えないけど。出だしと内容は某曲を使わせていただきました。
砦にあるピアノを食堂に持って来た時には、机やいすは完全に取り外されてみんなが直に座って待っている。
ノヴァが旋律を鳴らし、ティファも石畳に胡坐をかいて座り二胡を鳴らし歌が始まる。

ありがとうって伝えたくて～
真っ青な空を、見上げながら～僕等は願う～
まだ来ない未来は～　今日と同じく暖かい日が来ないかと～
悲しみ辛い事で～　俯く事もあるだろう
転んで躓き立ち上がれなくとも　大丈夫　その手を引き上げて
共にまた　立ち上がっていこう
ありがとうって伝えながら～　貴方と～歩いて行こう～
繋ぎ合ったこの手を～　握りしめ合い～　ゆうっくりと歩いて行こう～
いつまでも～いつの日までも～　貴方と～笑っていたいから～
繋がったこの道を～ゆうくりと歩いて～　今～伝えに行くよ～
ありがとうって

誰かとの縁があって今がある。それを歌にしたいとノヴァが願って作った歌は、今初めて私とノヴァ以外に披露された。
出会って手を繋いで、皆が笑う明日への道が開ける事を願って。

その歌は優しく、歌の通り愛しい者達と歩く願いを引き起こさせるものであり、万雷の拍手と共に戦意と士気が跳ね上がった。
明日勝ち、温かい未来を紡いでいこう。

・・・・・・・それで終われば感動的な一夜になったであろう
事の発端は―風呂―を用意したというバウスンからのねぎらいから始まった。
決戦前に身綺麗にするのと、リラックスの為に浴場に湯を流し整えたと。
カールも自然豊かで結構あちこちに温泉があったりする。
この近くにも源泉があり、それも程よい湯音の源泉で見つけた兵には特別褒賞を与えて船の建設と砦の修復と同時並行して今日やっと完成したとか。

「温泉・・・風呂・・・ノヴァ!背中流しっこしようよ!!昔は小父様に丸洗いされたけど今日はゆっくりと入ろう,,、ィ(゜∀、゜)」

・・・・・・北の氷の勇者の葬列カウントダウンが始まった・・
「いいねティファ。何ならダイ君や・・・・ポップはどうする?」
「俺も入りた〜い!お風呂なんて物凄い久しぶりだ!ポップも入るでしょ?」
「あ〜・・・デルムリン島以来まともな風呂入ってね〜しな。」
「そしたらみんなで・・・あ!―女性―先の方がいいかな?」
・・・・なにかお子様組がとんでも発言してる!!

デルムリン島滞在時、ポップはダイとティファの三人で島の天然露天風呂に入っている。
ポップもポップで、妹でツンツルテンのまだまだ子供体形のティファだしと安直に考えて三人で遊びながら入ったのが懐かしい。
今回は大浴場のようだからお湯のかけっこは止めておいて、背中の流しっこにするか。
何だったらバラン誘って親睦深めるのもありで、師匠も入るかな？
ヒュンケル達？
赤の他人の男は駄目に決まってんだろう！

「ちょっと待ちなさい貴方達!!」
お子様組のとんでも考えでありとあらゆる暴動が起こる前に、制止の声で周りを牽制しつつ待ったをかけたのはパプニカの賢王女と名高くなっているレオナ姫その人であった！
「何考えてるのよ！ダイ君、ポップ、それにノヴァ貴方迄!!」
いくらティファが幼女で・・・言ってはなんだが年よりもあれな体形だが十二の女の子と兄以外の男どもと共に入っていい筈がない!!
その言葉に感銘を受けたバランは、即座にレオナの下に行き両手を握りしめ滂沱の涙を流す。
「ティファ！この姫君の言う通り!!慎みを持ちなさい！」
「ポップ手前何考えてやがんだ!!嬢ちゃん嫁入り前の娘だって分かってるのかお前は!!」
大魔導士マトリフの言葉はともかく、バランは涙流して言っているので説得力に欠ける事甚だしい
「え～・だって父さん、ノヴァと久しぶりに一緒風呂入りたい。デルムリン島でだってポップ兄とダイ兄と入ってるからいいでしょう？父さんも一緒に入る？洞窟のお風呂以来だね～。」
いいわけあるか!!
その言葉に主を敬愛してやまない竜騎衆三人組も凍り付く。確かにティファとバランは親子だが！やむおえずとは言え半月前まで繋がりのなかったほぼ他人の女の子といきなり風呂に入ったのかこの

人は!!
バランは父親だからぎりセーフだが!ポップは見逃される道理はなかった。
「ちょとポップ!さっき言った一緒にお風呂って本当なの!!」
「くるじぃ・・・」
マァムの怪力で締めあげられ尋問を受けるポップの顔は土気色になり次第に口から泡吹くが、どう聞いてもギルディーなので誰も止めようとはしない。竜騎衆などはそれぞれの得物を出し掛けて、流石にそれはとマトリフに止められるが矢張りマァムの制裁は止めていない。
「・・・・分かったわ、私達と一緒に入りましょうティファ。」
「そうですよティファさん!!ティファさんは女の子・・・」
「嫌です!!!」
レオナとエイミ、それに続こうとするメルルの言葉を聞く前にティファが珍しく声を荒げて嫌だという!
私達の計画もしかしなくともばれて嫌われた⁉
この御風呂計画のそもそもリラックスして欲しい対象はティファ一人。お風呂でリラックスと軽い疲れで朝までぐっすり寝ている所をマトリフがラリホーマかける予定なのだ!!
大好きなおじさんの気配ならば万が一ティファの目が覚め掛けても、まだ早いだとかなんとかあやしてもらって寝て貰おう作戦!!
作戦がばれたのだろうかと周囲は固唾をのんで見守る。もし万一逃げようとしたら、バランとダイは紋章全開で止める打ち合わせもすでにできている!!
「だって・・・・レオナ姫もマァムさんもメルルさんもエイミさんもナイスバディなんですもん!!」
・・・・・はい⁉
「そんな超凄い人達の中になんて入りたくない!!つるつるぺったんの

私が惨めだよ!!!」
ノヴァ一緒に入ろうよ～と最後は泣きついてる。
どうやらティファも慎み恥じらいはあまり育ってなくとも、発育不良（？）な自分の体にはそれなりにコンプレックスがあったらしい。
確かに今ティファが挙げた人物達の体は・・・・・
「何処見てんのよ!!」
「最低です!!」
「これだから男というものは！」
「皆一体全体何考えてるの!!明日は決戦なのよ!!!」
瞬時に集まった野郎どもからの視線に抗議するレオナ達のの大絶叫が砦に響き渡った。

ところ変わって死の大地のハドラー居室は静寂に包まれている。
先程親衛隊全員に、明日の決戦はの段取りをし終えたばかり。
親衛隊全員は死の大地の地上に来るであろう勇者達以外の相手をさせる。

ティファなればダイとバランを連れても一対一で向かってこよう。自分が勝った時に、二人を相手に出来るかと言われれば無理だと断じられる。
ティファを喪った怒りと悲しみを力にした二人を相手にする時、おそらく自分の体もティファの攻撃ダメージで動けまい。
仮にティファに敗れたその時も、自分の死で親衛隊全員が即座に共に逝く。
ならばどこで戦わせようと同じ事。ヒム達もポップ・ヒュンケル・マァム・クロコダイン達にしてやられているのでリベンジマッチを望んでいた。
存分に戦うがいい、可愛い俺様の親衛隊達
感慨に耽り、ワインを啜ろうとしたその時、扉が勢いよく開くと同時に怒号も入ってきた！
「ハドラー!!!貴様あの小娘になんと言って成分表を書かせた!!!!」
部屋に押し入り怒号を発したのはなんと寡黙で冷静沈着なミストだった!!

「何事だミストバーン！成分表とは・・・偽りでも書かれたか？」
成分表と言われ、即座にティファがまた何か仕出かしたかとピンときた・・・・あの悪辣顔は
矢張り気のせいでは無かったか！

「あ奴はお前が―どんな文章―でも読めるかと聞いてきたので俺は読めると答えたまでだ。読めない代物か偽りかどちらだ？生憎俺はお前にそのまま渡したので目を通しておらんぞ。」
「・・・・成分表自体は本物だ・・・」
「ん？ならば何をそこまで怒っている？」
そもそもミストバーンがここ迄感情を露にすること自体が珍しいが・・・
「・・・・ハドラー、お前は―アナグラム―は知っているか？」
「あの人間も魔族も使う・・・・まさか！」

「そうだ！あの小娘は死滅寸前の古代魔族文字で！超上級難解なハイフォン式アナグラムで寄越してきたのだ!!!」
その難解性は他の追随を許さない程で！これを解くためにこんな夜中まで掛かってしまった!!しかも死の大地に埋めている―バーンパレス―の都市構成部分のライブラリーの資料奥から解読表を引っ張り出してようやくだ!!
何なのだあの小娘は本当に!!人間界で生きてきたくせして、魔界の者でも解読が難しい、それこそザボエラであっても使えるかどうか分からない超高度な文字とアナグラムを活用できる!!
最早突っ込みどころ満載な生き物だろうあの小娘は!!
しかも内容がきちんとしているから質が悪い!!
今回は父とその竜騎衆の事で騒がせて申し訳ありませんとか・・・こちらの意図丸見えですと挑発しているんだか謝罪を本気でしているんだか分からない珍妙な言葉で始まり、
明日はよろしくお願いしますで締めているとはどういう神経しているのだあれは!!
これがでたらめに書かれたものであれば、成分表はなく体調不良も偽りであったかと非を鳴らして討ちいるのに！合っているうえに微妙に礼儀正しい事がなお腹ただしいことこの上ない!!
無理して、アナグラムなど寄越したことが敵対行為だとこじつけで行けなくもないがその場合
「なんですか？あの程度のアナグラムも解けませんでしたか。今すぐ教えて差し上げますので少しお待ちなさい!!」
とか両手に腰を当てて上から目線のティファが想像できてしまい行きたくもない!!
大魔王バーン様至上主義のミストをして相手したくないティファの影響力とは・・・
絶対に嫌がらせだから口実に攻め込めそうだとハドラーなどは思うが、何故あれはいらん騒動を起こそうとするのか頭痛くなる。

頭痛めている所に珍客もう一人！
「ミスト!!!此処にお嬢ちゃん直筆の成分表あるでしょ!!!!僕にも見せてよ！」

・・・・・こ奴ら人の私室を何だと思っておるのだ
押し入ってい来た其の二は変態死神キルだった。
ミスト同様ノックもせずに扉を左右の手で豪快に全開で開けてずかずか押し入り早速ミストにお強請りしている。

ミストは怒りを全てハドラーにぶちまけお疲れモードなのでキルの相手が面倒とばかりにティファからの成分表を放り投げた。
「おっとミスト、駄目だよ女の子からの手紙投げたら～。ふんふん、文字自体読めるけどアナグラムは僕無理だ。けどあの子の字は温かみを感じるね～。」
決して流暢な字体ではないが、相手の読みやすさを優先していて、それでいてどこか丸っこいあの子みたいな字だ。
「解析は出来たのかい？」
「・・・・・無論だ・・」
「ふ～ん・・・・あれ・・余白？ねぇミスト、この余白の先に何か書いてあるの？」
「・・・・・読めばよかろう・・」
「どれどれ・・」
成分表は突然余白部分が出来ていて、だがその先も紙が続いている。

これは・・・・・！
「ハドラー君!!君お嬢ちゃんの成分表読んだかい⁉」
「五月蠅いぞキルバーン！ミストバーンにも言ったが俺は目も通しておらん!!」
「なら今すぐこれ読んで!!」

最後の余白に辿り着き、書いてあった言葉は・・・

キルバーンは読むな！成分表に触るな!!あっち行け!!!

とんでもない言葉で締めくくられていた!!

「・・クックックックック・・ダっハッハッハッハッハ!!!」

読んだ瞬間ハドラーは腹をよじりながら大爆笑した。読むなどころか触るなあっち行けとはなんと子供のしそうな悪態であるか！

あのティファから想像がつかず、ギャップでさらにおかしくなる！

「ちょっと酷いよハドラー君!!そこまで笑うだなんて!!!」

「あ奴からの手紙を貴様ならば読むのを見越して書いていたのであろうよ。良いではないか、お前の事をきちんと分かっていると言われたも同然ではないか。」

常日頃から味方からも疎まれているとは思えない程の死神の憮然とした様に、ハドラーはつい揶揄う。

ある意味言っている事は正しいのだが何か釈然としない！

「・・・・まさかハドラー君？お嬢ちゃんに僕の事をある事ない事吹き込んで、僕の評価下げるように仕向けたんじゃ～ないよね？」

なんだそれは！完全ないちゃもんだろう!!!

「お前の変態的な言動が真っ当に評価された結果だろう!!!俺を逆恨みするな!!それと明日の決戦の相手はあれで決まりだ！余計な邪魔立てと変態行動するなよキルバーン!!」

「失敬な！邪魔なんてしないし！そもそも変態行動ってなんなのさ！僕は―一度も―そんな変なことした事ないよ!!!」

・・・・・こいつ無自覚だったのか!!!!

ハドラーと、隣でもう嫌だあの小娘と匙投げていたミストが覚醒して二人の心の大絶叫が一致した！

自覚を持てこの変態死神!!!!

キルにトラップを仕掛けたティファは、父と兄との三人風呂に入りながらトラップの結果を待っている。

あの人原作通りピロロ来たのかそれとも見捨てられたのかいまいち分からんのよね。

生きてたらあの文章見たら流石に激怒してくれるだろうし待ってよ～。

だがそのトラップは不発で終わる

「止めないでよミスト!!ハドラー君もその手放して!!」

「誰が行かせるかこの戯け!!!」

「あの小娘に振り回されるのも大概しろ!!!」

ハドラーとミストの必死の阻止により、死神健在はダイ達の知らぬところとなった。

決戦前の夜の過ごし方・後編

お風呂気持ちよかった～。
お風呂は結局父さんとダイ兄の三人で入った。ポップ兄とノヴァが駄目でもせめておじさんも一緒にって言ったのに駄目だって。
湯から上がった後眠いって言ったら皆して早く寝なさいって寝室に突っ込まれた。
まだやる事あるから蠟燭に火を付けて作業する。
皆も早く寝てるかな？

・・・・ハドラーも寝ているだろうか？
ハドラーの唇が触れ合いそうになった時を思い出し、ティファの心臓が早鐘をうち我知らず人差し指で唇を辿る
逞しい両腕に抱きすくめられたら自分は・・・・・
埒の無い思いを振り払うようにティファは頭を一度振り、作業に戻る。
明日行くので待っていて

バランとマトリフ

「父さんの背中って大きいね。」
「ホントだね～。兄も将来この位になるのかな？」
「俺背が伸びるのかな？」
「う～ん、少し私よりは大きく・・・・なってるかな？」
ダイとティファの二人がかりで背中を洗われているバランは滂沱の涙を流す。まだ戦いが終わったわけでなく、明日は我が子と共に死地に赴き厳しき戦いが繰り広げようというのに。
ソアラよ、ティファは置いてゆく。ディーノも我が命賭け全身全霊をもって守る故安心してくれ。
湯の中でまだ自分の両腕に収まる我が子達を胸に抱きしめ、亡き最愛の妻に心から誓いを立てつつ、二人の他愛ない笑い話に頬が緩む。

湯から上がればティファが眠そうにしているので早々に寝室に引き取らせたが、自分と息子はどうするか。
「俺ちょっとレオナと話あるから父さんよかったら先に寝てて。」
「決戦前だ、存分に話してきなさい。」
「うん！行ってくる!!」
好いた者と存分に語らうと良い。
「なんでぃ、ダイも早熟だな。」
通路での親子のやりとりを邪魔しないように見ていたマトリフがバランが一人になったのを見計らい声を掛けた。
「これはマトリフ師。明日は・・」
「分かってるよ。それもいいけどお前さん飲める口か？」
「・・・そこそこは・・」
「だったら付き合えよ。明日の決戦前の景気づけによ。」
「いただこう・・・竜騎衆の三人を誘っても？」
「いいぜ、今日はリンガイアの奴等が見張り番するって張り切ってるからな。飲もうぜ。」
バランに声を掛けられたラーハルト達は、恐縮しながら主共々マトリフと飲み明かす。

ダイとレオナ
「ダイ君・・・明日はきっと勝って無事に戻って来てね。」
「大丈夫だよレオナ。父さんもいる、俺だって特訓で強くなったし皆で全力で戦う。俺は大好きなレオナが生きているこの世界を絶対に守りたいんだ。」
「・・・ダイ君・・」
砦の裏庭にレオナを伴ってきたダイに、レオナは無事に帰って来て欲しいと縋りつく。
まだ自分よりも小さな、それでいてもう―男―を感じるダイの胸に。
逞しい腕が、自分の体を包み込んでくれるのに安心感を覚える。大戦が始まってからずっと気を張り詰めて来た。病床にいる父を支え

ようと、国民や家臣たちが不安にならないよう明るく振舞い、ずっと不安を胸に押し殺して。
「俺に甘えてよレオナ。」
サババに来る前に父の病床でダイが言ってくれた。
その後もう一度ダイに会う機会があり聞いてみた。
「ダイ君はしっかりしたお姫様な私でなくてもいいの？」
「レオナはどんな時だって俺の好きなレオナだよ。レオナが疲れたら俺は嫌だ。」
「ダイ君・・・うん、うん・・」
ティファの疲れて請われた様を見せつけられたダイにとっては、頑張りすぎている気がするレオナも心配だった。ああやっていつか突然壊れたらと思うだけでゾッとする！
それは今も同じで、自分を案じてくれるレオナが愛しくて存分に甘えさせてあげたい。
ゆっくりと座り、胸に抱えたレオナの頭を自分にもたれさせたまま甘やかす。
明日必ず勝つんだ

ポップとメルル
木が覆い茂る中庭で、ポップとメルルは深い口付けを交わしている。
明日無事に帰って来て欲しいというレオナと同じ思いをメルルはポップに伝えた。
その姿は儚げで脆く、触れれば溶けてしまいそうだがそれが一層少女の内に眠る恋で育てられた色香が漏れ出し、頬を紅に染め潤んだ瞳で見上げられたポップは堪らなくなり、其れ迄自制していた思いをぶつける様にメルルの頬を両手で挟み、自分を見上げて薄く開いた唇を突如として貪り始める。
メルルは驚いたが抵抗する事無く、震える両手でポップの緑の法服を握りしめて懸命にポップの思いに応える。
いつでも優しい人だった。自分と結婚したいとフォルケン王に

はっきりと告げてくれて、驚かれながらも祝福された。
「二人とも幸せにおなり。」
長い事占い師の孫娘としてながらも自分に目を掛けてくれた父の様なフォルケン王の祝福に、嬉しくて泣いた自分の腰を力強く支えてくれた時心臓が飛び跳ねた。
自分達はまだお互いに明確に好きだとも言っていないのに。
マトリフの洞窟に帰る前に、優しい口付けと好きだという素敵で、自分にとって終生の宝物になった言葉をくれた人の思いに応えたい・・・
柔らけぇ・・・ああなんでメルルのどこもかしこもこんなに柔らかくて心地いいんだよ!!
身の内から溢れる愛しさと、それ以上にメルルを欲する気持ちがポップを突き動かす。
柔らかい唇を食む様に何度も貪り、口内を味わいたくて遂には舌を入れても受け入れようと唇を開いてくれる健気なメルルが！愛おしくて堪らない!!
自分達の荒くなる息遣いと、唾液が混じる音の中に、メルルの苦しそうでそれでいてどこか甘い声に理性が飛びそうになる!!
これ以上はやばい！
獣性に落ちかける寸前にポップは理性の警鐘に耳を傾け力づくで己の顔をメルルから引き?がす。
お互い息をするのも忘れはて、ポップは木に凭れ掛かりメルルを抱えたままズルズルと地面に座り込む。
膝の上にメルルを横に抱え、胸元に抱きしめながら。
「・・・ポップさん・・・私は・・」
力が入らずポップにもたれるメルルは、其れでも何かを伝えようと荒い息を整えずに口を開くが、その口を再びポップに塞がれる。
先程の荒くて、それでいて自分の何もかもを溶かしてしまう口付けではなく、あの時と同じ優しい口付け。
口付けをしながらポップはメルルの頭をゆっくりと撫でる。宥める様に慈しみを込めて。

メルルが苦しくなる前にそっと唇を離し、また胸に凭れかけさせる。
「メルル、この続きは結婚式の後だ。」
「それは！」
「明日勝って、ダイと姫さんとの合同だから・・・少なくとも三年はかかるだろうけどそれでもいいか？」
男は大体十五位で嫁を迎え始める者が出る。レオナの年齢も加味され、十五の歳と共に結婚の運びになるはずだ。
それまでは口付けより先に行く事はしないがいいかと優しく尋ねる。
「ポップさん・・・私はポップさんと皆さんといられればそれだけで幸せです。それ以上を望むだなんて・・」
「メルル。」
「・・・はい・・・」
「いつか俺の子を産んでくれ。俺一人っ子だから弟妹が欲しいってずっと思ってたんだ。たくさん産んでくれるか？」
今はダイとティファという弟妹がいるが、自分の子にもそんな弟妹が現れるか分からないから。
その言葉に、メルルは涙を流して思いに応える。自分は本当に何と幸せ者なのだろうか。
「はい・・・はい！私もポップさんの子供欲しいです・・・だから・・」
「ああ、絶対に帰ってくる。」
手足無くしたとしても、這いずってでも勝って戻ろう。
世界とティファを守り抜き、この愛しい少女と共に人生を歩むためにも。

ヒュンケルとエイミ
「綺麗な星空ですね。」
「あぁ、この時期の星空が俺は一番好きだな。」
塔の一角ではエイミがヒュンケルを誘い出し、他愛のない話をしている。

エイミはヒュンケルにまだ思いの丈を打ち明けられずに焦っている。
ティファから、ヒュンケルももしかしたら自分の事を憎からず思ってくれていると聞いてから機会を窺っているのだが・・・
明日は・・・
「ところでそのだな・・・」
エイミの葛藤を知らないヒュンケルは、突如人差し指で鼻の頭を掻き話しかける。
エイミが言いたいことがある様に、ヒュンケルにもエイミに伝えたい言葉がずっとあった。
「その・・・・花をありがとう・・」
その言葉にエイミは面食らった。自分から見ても分かる程照れているのヒュンケルからどんな言葉が出るかと思えば、鬼岩城戦後のお見舞いの花のお礼とは。
「あ～・・・やはり遅い礼だったか?」
貰った直後や、その後いくらでもいう機会があったろうに・・・戦いと一行の人間以外にはどこか不器用で、子供っぽいヒュンケルの顔にエイミは吹き出してしまった。
「・・・そんなにおかしいか・・」
しょげた様子が可愛く見えて・・・そして愛おしい・・・
エイミは両手を伸ばし、正面からヒュンケルの胸に自ら飛び込んだ。
「好きですヒュンケル・・・」
この不器用で、そして茨の道を自ら歩く高潔なヒュンケルが愛おしい。
エイミの不意打ちにヒュンケルは反応できず、抱きしめもせず、拒絶の為に引き離す事もせずに呆然とする・・・・エイミの行動が全く予測できなかった!
好きだと? 一体何の聞き間違いだ?
聞き間違えでないならばその思いが間違っている!この素晴らしい人が俺を・・・俺なんかを

「エイミさん・・・俺は・・・・俺は貴方の・・」
「分かっています。それでも償う道を歩くのでしょう?」
「そうだ、そして俺を疎む者が・・」
「構いません。石打たれる時は共に、もしも地獄に行くのが決まっているのならばそれも共に・・・・貴方と同じ道を歩きたい・・」
あぁ、どうしてこの女性はこんな俺をここまで・・・
力強い声では決してないが、自分の心に入り込むのには十分な声音で、なんと甘美な事を言ってくれるのだ・・・
三賢者の一人で、聡明で美しいエイミなれば国内外問わずに引く手数多であろうに!戦い償うしかできない自分に目を向けてくれて・・・俺はそれだけで満足だ・・・・満足の・・・筈なのに!!
「エイミ!!」
不意にヒュンケルはエイミを抱きすくめる。常の敬称を外して閉じ込める様に。
満足なものか!この人が他の男の手を取るのを想像しただけでも怒りでどうにかなりそうだというのに!!
自分を誤魔化そうとしたが出来なかった・・・・幸せの根幹のエイミを、それでも罪人の自分などが手を取っていい筈がない、もっとふさわしい男がいくらでもいると言い聞かせる度に胸を焼く嫉妬の炎が許してはくれなかった!
想像するだけでこれで、現実では相手を斬り殺してしまうかもしれないと自分の心根の低さに吐き気がして、それでもエイミの幸せを願って諦めようとしたのに!!
もう駄目だ、もうこの人を逃がしてはやれない・・・
「・・・・帰ってきてヒュンケル。どんなことがあっても・・」
「ああ帰る。貴女の下に必ず!」
そしてこの先の返事を

恋人達は互いを思いやり、クロコダイン達独身の野郎どもはバランとマトリフ達の宴に加わり明日を思う。
必ず勝って平和の世を謳歌するのだと

死の大地
バーンとミスト
「いよいよ明日か・・・・長かったよな。」
「は・・・」
玉座にてワイングラスを弄びながらバーンは明日・・・・そして勝利した後の事を思う。
ダイ達を始末した後は手筈通りバーンパレスを浮上させ、六芒星を描く為に世界を回る。
果たしてその時自分の側近くにいるのは誰か？
ミストとキルは確定しているが・・・・出来ればハドラーと、無茶であろうが仔猫の様なティファにもいて欲しいものだ。
最初は単なる駒であったが、今では失うのが惜しい男になっている、そして竜の騎士の娘であろうとあの娘を手元に置いておくのも一興・・・だが、悲願の為にはそうも言ってはいられない。
「ミストよ、魔界の状況はどうなっている？」
「は・・・・最深部の古都がまた一つ―沈んだ―と・・・」

「そうか、急がねばならぬか・・・」
「御意に」
ミストからの報告を聞いたバーンは苦い顔をする。神々め、魔界の現状を知っているのだろうか？
我等を魔界の者全員を苦境の奈落に落として置いた後は、竜の騎士をヴェルザー討伐で差し向けて来た以外は何の干渉もしてこない。監視もせず、そして事ここに至っても救いもしない、憎み殺すだけでは飽き足らない天界の民と三神達。
明日の決戦ですべてが始まる、地上と天界を全て滅ぼさん

ハドラーとキル
死の大地の地上部に出たハドラーは満天の星空を見上げる。
自分が最初に地上に辿り着いたのも丁度こんな時期であった。
小さな境目の穴を命懸けで潜り抜け、精魂尽き果て仰向けになった自分が最初に見た物は太陽ではなくこの星空であった。
魔界には空がないので、見た時は天蓋に宝石を散りばめたかと思ったものだが、慣れとは恐ろしいものだ。
地上征服の野望に囚われてからは、星空の美しさを太陽の温かさに覚えた感動すらも忘れはて・・・マトリフの言う通り三流魔王になっていたと思うと馬鹿らしくなる。
この天地の下で、ティファと存分に戦えれば悪くない人生であったと思える日が来ようとは。
「感慨に耽ってるね～ハドラー君。そんなにお嬢ちゃんと戦えるのが嬉しいかい？」
「・・・・お前、少しは俺を放っておいてくれんか？」
「え～嫌だよ、大好きな君を応援しているんだからつれなくしないでよ。」
・・・・どうしてこの変態に懐かれた？
「お前に取っておれは重要ではなかったはずだが？」
最初に会った時は自分に対して恭しく一礼しながらも、馬鹿にしている気配を隠そうともしていなかったキルが、ここ最近は別人の如く

接してくる。
「当然だよ。あんな三流魔王に敬意払うって本気で思うかい？」
「いや・・」
「今の君は本当に超一流の魔王様で戦士だ。僕が大好きな人になってくれて嬉しいよハドラー君。」
「・・・・・嬉しくないな。」
「嫌だな～照れちゃって。」
軽々しく肘を自分の肩に乗っけてくるキルを、ハドラーはまじまじと観察する。
こうして自分に気軽に接しながらもその内部に巣食っている闇はとてもではないが受け入れられる者ではない。
邪恋
キルバーンがティファに向ける感情に名を付けるのであればこの一つのみ。
敵相手にだからではない、たったの十二の少女に情念と情欲を抱くキルの悍ましさをどうあっても受け入れるわけがない。
そんなハドラーの思いを見透かしたのか、キルはハドラーの耳に近づき毒を流し込む。
「お嬢ちゃんのあどけない顔は堪らなかったでしょう？」
ズバン！
聞いた瞬間は理解できず、理解した瞬間ハドラーは覇者の剣を抜剣してキルに斬りかかったが空を斬り裂いたのみ。
「怖い怖い。」
「・・・・覗いていたのか貴様・・・」
「あの子は監視対象だよ。とはいえ僕自作の目玉だけしか映っていないから安心してね。」
見たのかこやつは・・・ティファと自分の神聖なあの約束を!!
「邪魔はしない、その代わり君が負けそうになっても助けないけどいいかい？」
「・・・・余計なお世話だ・・」
「ふふ、口付けしそうな勢いでいて、戦い合うだなんて僕には理解でき

ないけど、明日は頑張ってねハドラー君。」
「貴様!!」
「おっと、怒られる前に退散退散。でもね、勝って欲しいな君に。」
「!!・・・・言われずとも・・」
「もしも君がお嬢ちゃんに勝って、勇者君達に囲まれそうな時は助けるけどいいよね～。」
言いたい事を言ったキルはそのままハドラーからの応えを聞かずに空間を通って消えてしまった。
・・・あれほど望んでいた静寂に耳が痛くなる・・・
口付け?・・・・・馬鹿馬鹿しい!俺は・・・・・俺はあ奴と・・・
キルバーンの戯言に耳を傾けてどうする。だが・・あの時のティファの顔に俺は見惚れたのは事実だ。

明日連れ行く
勝ってあ奴を俺の行く冥界の底に諸共に、誰にも渡さずに済む場所に

いざ決戦へ

夜が明ける。決戦に行く者、見送る者、戦いを知らない者達に平等に朝は訪れる。
これから地上界の全てが決すると言っても過言ではない日においても、太陽は何食わぬ顔でいつも通りに昇り地上全てを照らしていく。

「本当に・・・ティファさんを置いて行くんですね・・」
「チウ・・・分かってくれ。あいつの為にはそうした方がいいんだよ。」
「チウよ、俺とてあの願いをかなえてやりたい気持ちに偽りはない・・・されど皆の意見にも一理あると得心してしまった・・・・後でみんなで謝ろう・・」
死の大地に赴く一行の顔は何処か浮かない。
敗けるかもしれないとは誰も考えていない。どのような事になっても這いずってでも戦い抜き勝つ積りでいる
浮かない理由はこの戦いの最初から一行にいて、常に中心にいた料理人のティファを強制的にこの砦に置いていく事への後ろめたさから。
言葉で説得したのではない、眠っている間に大魔導士マトリフがラリホーマを掛けての事。ティファとハドラーを戦わせない為と、チウとクロコダインはその事を今朝突然聞かされた。
「あいつは置いていく。ラリホーマを掛けて。」
ポップが辛そうに二人に告げた時、案の定二人は大反対をした。
「ティファの心情を無視するのか！あれ程の葛藤の果てに俺達に明かしてくれた思いを潰すというのか!!」
「ティファさんなら勝てます！本当に危ない時はダイ君とバランさんがいるじゃありませんか!!」
ティファの心情を第一に考え望みを言わせたのはクロコダイン。あの時のティファは自分達の思いを汲み取り偽りを口にしようとしたのを、止めた果てに告げられた思いを踏みにじらせたくなどないと

激高し、チウもティファならばと信じてティファを止めようとはしなかった。
マトリフは二人の考えを分かっていたからこそ、昨夜この策謀相談の時わざと席を外させた。その思惑はどうやら当たり、案の定二人は猛反対する。
だがティファの心も大事だが命こそが、生きている事こそが第一ではないか。
仮にティファが勝ったその時は、大魔王から一番に狙われる可能性がぐんと高まり死亡率の桁が跳ね上がるのは必定。
戦場から逃がそうとしても、ハドラーがデルムリン島で言っていた魔界の神とまで呼ばれている大魔王バーンが逃がしてくれるはずもない。
「分かってくれ、嬢ちゃんの為なんだ・・」
これまでずっとティファの事を、それこそ心身全てを守らんとしてきたマトリフの辛そうな顔が全てを物語っていた。
ティファ自身に恨まれ憎まれ拒絶され絶縁されようとも、もしかしたら心が壊れるかもしれなくとも、生きていればなんとでも持ち直される。その時例え恨まれたままでもいい。
あの子がこの世界のどこかで生きていてくれればそれで自分にとっては十分なのだと。

「・・・・・どうしても駄目なのだな・・」
「うん・・・俺もティファにを戦わせたくない・・・・嫌われてもいいから!もうこれ以上危険な目に遭わせたくないんだ!!・・・・・ごめんよティファ・・」
「ダイお前も・・・・・そうか、分かった。」
「クロコダインさん⁉」
「チウよ・・・・致し方ない・・・・・ティファを置いてゆく。」
「そんな!そんな事って・・・・あんまりです!ティファさんが可哀そうです!!」
クロコダインは全て飲み込みティファを置いていく決意をしたが、

チウは納得できずに泣いてその案を拒絶する。
強く頼りになり、それゆえに今まで周りから頼りにされていながら自身の望みを何一つとして言わなかったティファのたった一つの思いを潰されることが許せずに。
「おっさんありがとう。チウ、俺達絶対に勝って全員戻ってくる。その時ティファに謝ろう・・・許してくれなくても、拒絶されても俺もあいつを戦わせたくねぇ。」
ポップも次第に涙ぐむ。チウの言っている事は正しい。ティファの思いを踏みにじっているのは百も承知で、それでも願うのがいかに自分勝手かも分かっているだけに辛いのは一行も味方も全員同じで。
ポップの言葉にチウは俯いていた顔を上げ仲間と砦入り口で見送る者達の顔を始めてしっかりと見た。
ダイ達も、ここに残って万が一目覚めたティファを押し止める役を任された竜騎衆とノヴァもうっすらと涙が滲んでいる。
それ程までに昨日ティファが葛藤の果てに望んだ事を踏みにじる事への罪悪感の重みがある事か・・
誰も心からこんな事を望んでいないいんだ・・・
チウも馬鹿ではない、皆同じなのだ。あの大人の様なそれでいて脆いティファを守りたいと望み、間違った方法であると承知してもそれでもこの方法を採ったのだと。
それは日が昇る前の話し合いであり、チウも説得し眠るティファにラリホーマを掛け、一番気配を消すことに長けたラーハルトが中でティファを見張っており、他の者達はダイ達を見送った後、万が一魔王軍がティファ相手に刺客を差し向けても対処できるように配置される。
決戦時である時に敵がそんな事を仕掛けるとは―普通―は思わないだろうが、ティファの事に関してはそれは適応外。
ティファの周りで起こった事象は、全て普通では考えられない事ばかりであったのだから無理もない。
砦の外をガルダンディーとルードが哨戒し、入口をノヴァとボラホーンが見張り、中から入口に通じる広間にマトリフが座って陣取

る。
ティファが目を覚ましラーハルトを突破した時の保険として。
他の出入り口には精霊が見張り、どこから出ようとしても止めてその間にノヴァに知らせる手筈も整えている。

「行ってくる!!」
「娘を頼みます。」
ダイとバランの声を合図に砦入り口の前の者達は小声で、他に配置している者達は無言で剣を抜剣し大きく振る。
歓声でティファの目が覚めないように。
ダイとバランが海底の魔宮の門を破壊し、ポップ、マァム、ヒュンケル、クロコダインが地上の様同部隊。
ヒュンケルは早々に剣の魔装を鎧化し身に纏っている。
向こうで待ち伏せされてもすぐさま対応できるように。
ポップも師・マトリフから渡された万能薬をそれぞれに渡し、全員がポーチの中に入れて準備万端にする。
効能一種類につき一瓶ずつ渡され、回復魔法を使うマァムと、魔法使いポップは魔力回復薬を、闘気系を主に使うダイ・バラン・ヒュンケル・クロコダインは闘気力回復薬を二瓶ずつ追加される。
戦いながらも薬を飲む特訓は嫌という程してきて最早自然と出来る程になっている。
この薬はティファとマトリフが昨日の内に用意しておいた物。
マトリフとしてはそれだけで足りるかまだ不安があるが言っても詮無く、自分のこの老体では付いていくことも出来ないのだから、後はダイ達を信じて無事を祈るのみ。
一方は海底に、もう一方は死の大地に二手に分かれたルーラの光が見えなくなり、手筈通りそれぞれの配置につく。

ここで一つの謎が、戦場に行った者達と残った者達全員に残っている。時間となり仕方なくその詮索を諦め決戦へと向かったがその事に不安を覚える。

昨日の深夜には砦の尖塔にとまってティファを脅かす輩が来ないか見張り、いつティファに呼ばれてもいいように待機し、常にティファの側近くにいた神獣ガルーダの姿が、クロコダイン達同様説得しようとして日の出前から探したのだが何処にも見当たらず、ようとして行方が分からないのだ。

ティファは確かに砦の寝室で眠っているというのに。

頼むから常識・良識を！

死の大地地上

「・・・・なんだか寒いな・・・・ティファの奴此処に一人で連れてこられたのかよ。」

どこかうすら寒いのは風景のせいか武者震いか・・・・キルバーンがいたらメドローアぶち込みたくなる場所にティファを連れ込みやがって!!

「ポップ・・・・」

「ん・・ああ悪いマァム。そうだな、目の前に来た敵ぶっ飛ばして・・・」

「威勢がいいじゃねえか魔法使い!!」

埒も無い事を考えていたポップをマァムが優しく引き戻した途端に敵が来た。

「よう、この間の様にはいかねぇぜ。」

「はん！何度やっても俺達が勝つ!!・・・・て・・お前ら俺達の事舐めてんのか？」

「あん！」

「フェンブレンって奴はどこ行った!!」

ポップ達を見降ろす様に出現した親衛騎団達にも憎まれ口を効くが、よく見れば一人足りねぇじゃねえか!!

その指摘に一番に驚いたのはヒム達の方であった。先程までは確かに五人揃っていたというのにまさか！

アルビナスがもしやと思い至る。・・・・あの者を相手しに行きましたか・・

「・・・・どうやら貴方達の相手は私達四人ですが丁度いいでしょう。」

「だな。」

アルビナスは冷静に戦力分析をそう断じ、ヒムが力強く応じる。こいつら相手に二度も三度も負けていられっか!!

その言葉と共に、親衛騎団達はポップ達の目の前に降り立ち戦いの構えをとる。

「さて、勝って自分達の大将の所に行くのはどっちかな。」
その言葉のすぐ後に、地響きが死の大地を襲う
揺れは激しくかなり長く続いた。どうやらダイとバランが魔宮の門を破壊するのに成功したようだ。
「勝つのは俺達だ!!」
「はん！かかって来いよ!!」
その言葉を合図に双方ともに火花散らして激突する。

死の大地海底
ダイとバランはハドラーの言った座標にて巨大な門を発見した。それは今まで見た事の無い大きさとそれに比例するような圧倒的な何かを感じ取り、ダイの剣が自然と開いた程であった。
それがお前の剣か
うん、皆のおかげで生まれた俺の剣だよ
二人は竜の紋章の共鳴で念話を送って会話している。
記憶を消す消さないで敵対していた時は、こんな穏やかな使い方をするとは思ってもみなかったが、ティファが共鳴できるなら念話位出来るでしょうとあっけらかんと言っていたので試してみれば出来てしまった。
あの妹には本当に敵わない
ダイはその時の事を思い出し、笑ったおかげか気負いが無くなり自然と剣を構える。
我ら親子が揃えば砕けぬ物はない
父の自然と満ち溢れる自信に安心感も覚える。今の自分達なら！
「おおお!!!!」
竜闘気を練り合わせた二人の竜の騎士の前に、破られるはずのなかった大魔王の結界も張ってある門が砕け散り、その余波は死の大地と—内部—をも揺るがせた。

死の大地地下奥深くの大魔王の玉座も例外ではない。振動でバーンのワイングラスの中に小石が入る程であった。
じっと見つめ、不快気にグラスを弾けば中身のワインもグラスも砂と化す。
「・・・代わりを持て・・・」
「は」
「彼等がきましたね～。」
今まで自分の結界を破った者は存在しない。それこそ敵対していたヴェルザー軍の者では無くヴェルザー本人でなくば・・・
「大したものだ・・」
其の力で何処まで余に抗うか

海水が入るのを厭うたのか、ダイ達が入って少しして直ぐに新たな結果が張られた。これで誰も出る事も―入って来る事―もかなわなくなった・・・・筈だ。

内部は一直線で敵の姿はなく、程なくして天井が高い大広間に二人は出た。その先にいるのは・・・

「・・・・矢張りティファは置いてきたかダイ、バラン。」
ティファの不在を予想しながらも自分達を待ち構えていたハドラーがいた。
「・・・・・我らがあの子を置いてくる事を予期していたのか？」
剣を構え前に出ようとする息子を背に庇い、バランは静かにハドラーの問いかける。
ティファがいなくとも自分達を前にしても落ち着いていられるハドラーの実力が読めずに、息子を相手にさせるわけにはいかない。まだ自分の方が戦いの経験値は上であり、自分が負うダメージを少なくしながらも相手の実力を引き出す戦い方が出来る。
ここは自分が行くべきだ。

「・・・父さん・・」
「ふん、言ったであろう。貴様は親となり戦士としては弱くなったと。まさか戦いに水を差すまでの道化になろうとはな！」
「なんとでもいうがいい！私にとってあの子は我が命よりも大事だ!!此処にいるディーノとても！その愛する我が子等をむざと死なせる位ならば、貴様からの誹りも罵倒もなにほどの痛痒も感じんわ!!!」
　五年前に自分に光の道を指し示してくれたのを無下にし、大罪侵してもそれでも手を差し伸べてくれた娘を！そして非道を行った自分を許してくれた息子を守るために自分はここに来たのだ!!
「・・・・よかろう、覚悟の上ならば来い！バラン!!」
「受けるかハドラー!!」
「ふん！その後にダイ、貴様が相手か。」
「待ってよ父さん!!此処は二人で同時に倒した方がいい!!」
「・・・ディーノ・・」
「俺もハドラーとは直接戦ってないけど、ティファとは本気で仕合ったんだ・・・強かった。そのティファが強いって断言してるハドラーは俺達二人でやるべきだ!!」
「ディーノ・・・」
　騎士としては多一の戦いは卑劣とされ気が進まないが、返事を聞かず横に並びたち剣を構える息子を頼もしく思ってしまう。
「ふん、俺はどちらでもいい・・・来い!!ふたりと・・・・・」

その戦いちょっと待った!!!!!

　ハドラーがバランとダイの覚悟を受け取ったその時、ここに聞こえてくるはずのない声が制止を掛けて来た!!
　まさか・・・まさか・・
「もういい加減にしてくださいこの覗き魔!!!」
「誰が覗き魔だ！こんな敵地で着替えなどする非常識なお前が・・・」
「喧しいですよ!!」

・・・・なんだ・・・―誰か―と言い争いながら・・・・覗きだ着替えだとここで聞こえるはずのない単語まで聞こえてくる!!

「うっとおしい!!!」

バシャン!!

何かを切断する音と、爆発音の後に

ズシャアン!!

ドカ!!!

「・・・・これでちったあ大人しくしていなさいね。」

現れたのは確かにティファだったが、手足を斬りもがれたフェンブレンを仰向けに転がし、その胸の上にティファは―生足―のまま踏みつけた。

「ハドラー!!貴方我が子の躾どうしているんですか!!着替えていたらいきなり襲ってきましたよこの馬鹿!!」

「・・・・・は?」

「まったく礼儀の・・・」

「なんて格好しちゃってるのティファ!!!!」

ティファが珍妙で訳の分からない・・・経緯すら分からない抗議をする前にダイが絶叫した!

それも先程までの頼もしい戦士の顔ではなく、顎が落ちそうな間抜けな顔をして・・・叫ぶと同時に妹の下にすっ飛んで行き、ティファの足元にいるフェンブレンを無言でハドラーのいる階段の中ほどまで蹴ってどかし、剣を持ったままティファの膝裏に手を等してお姫様抱っこであたりをきょろきょろし始めた!!

「なんて格好しているのさティファ!!じいちゃんに言われてるだろう!女の子は人前で足見せたらいけないって!!・・・こっち見て妹の足

見るなハドラー!!
・・・・座れる場所も見えない場所もない・・なんて気の利かない場所なんだ。」
舌打ちしそうな勢いで広間の文句まで言う始末!誰がティファの足を見ようとしたか!!
「父さん!ハドラーの足止めしてて!!ティファ!御着替えするよ!!」
そのまま妹を抱えて入口の方にとって帰ってしまった・・・・
ダイは一体どうしてしまったのか!!
ハドラーとバランはその様に呆気にとられ、動く事も出来なかった。
「どうしてスカート下のズボン脱いじゃったの?え!濡れたから着替てた?・・・・そこにあのフェンブレンが来たと・・・・ティファ、ズボン出して。はい足通して。靴は?代わりの無いなら俺の履く?ああ、あるのね。足出して。」
「それであいつはいつ来たの?・・・・タオルで全部水気とって下履き履いてスカートに袖通す前・・・・父さん!そいつがティファの可愛い肌思い出す前に消滅させちゃって!!
何なら竜魔人化してドルオーラで塵も残さないで欲しい!!〃え?ここ崩れるから駄目だって?
ティファは優しいな。分かった、お兄ちゃんがなます切りで倒すから安心してね。」
本当にダイは一体どうしてしまったというのだ!!先程の勇者ぶりが嘘の様に、妹を惑溺している馬鹿兄化したとでもいうのか!!しかもさり気なくフェンブレンの頭に今岩を投げてぶつけようとした!!
当てさせるかと流石にハドラーが飛んできた岩を右腕で壁の方に振り払い、フェンブレンを回収する。
しかもだ!ダイの会話からティファのとんでもない行状迄知る羽目になろうとは・・
「それにしてティファ、なんで着替えようと思ったの。え?地底魔城でハドラーに身嗜み怒られたから今回は濡れていないきちんとした格好で出ようとしたの。ティファは良い子だ。」

・・・・・・・そんな阿呆な理由で敵地のど真ん中で着替えを敢行したのかあのとんでもない娘は!!!
身嗜みの前に常識・良識を優先しろ!!
「・・・・・バラン・・・・・」
「・・・言うなハドラー!!!私にとってあの子等はかけがえのない宝物であることに変わりないのだ!!」
頭痛がすると左手で目頭を押さえるバランに対し、息子と娘の奇行を知っても大切な子等かと問うとしたハドラーに、バランは言い切る。
―多少―変わっていても良いではないか!!

・・・・・そもそも自分の―子―とも呼べるフェンブレンも一体何をしているのだ?覗きって一体何をした!
「フェンブレン、他の親衛隊達と地上で戦っていると思っていたぞ・・」
「・・・ハドラー様・・・俺は許せなかった!あんな甘い事を平然と戦場で通そうとして貴方を悩ませた小娘が!!!」
「・・・・・そうか。」
フェンブレンは常の儂という一人称から、激昂した時の俺といって悔しさを滲ませる。
自分達が負けたよりも甘い戯言を言うティファの存在そのものが、そのティファがハドラーを振り回すことが許せず、来るであろうティファを内部で待ち伏せしてダイ達を素通りさせて待っていれば案の定に来たが、待てど暮らせど入り口付近で止まって来ないので、待ち伏せが露見したかと攻撃をこちらから仕掛けてみれば・・・
「この変態ビショップ!!」
被りスカートの袖口を通しきる前にフェンブレンの攻撃をするりと避け、蹴りの反撃で時間を稼いだティファは辛うじてスカートをきちんと着ると同時にフェンブレンの手足を闘気を纏った手刀で切り落とし、先程の爆発音はフェンブレンの手足が爆発した音だった。

「それでティファ、結界張ってあった扉どう通ったの？・・・・・・雪白に闘気纏わせて縦一文字に斬ったら斬れて通れたの・・・・・・・俺と父さんの苦労ってなんだろう・・」

全力でぶち破った自分達が馬鹿らしいと嘆くダイに、ハドラーは哀れを催し肩に手を置いて慰めたくなってきた。

あれもとんでもない娘に振り回されている被害者の一人か。バランとても・・・

実力は高いのにやることなすことずれている・・・・着替えか・・・変態死神に見られたらあ奴に攫われていたやも知れんとは・・本人見ているだろうから言わんでおくが・・・

ティファを中心としたダイ達の奇行に、これから決戦かと真面目になった自分が馬鹿らしいとバーンは本気で溜め息を吐くが、もっと奇行に奔る者がすぐ隣でぼそりと言ってきた。

「・・・・・見損ねた・・・・・・」

!!

それは何に対していったのだ!!あの娘の実力を見損ねた事であろうな!!間違っても他の事を見損ねたと言うでないぞ!!

魔界の神を内心であっても大絶叫させるという三界初の快挙を仕出かしたキルは、当然の如くに

―ティファの生着替え―が見れなかった事を惜しんでいる。

それともう一つ

「バーン様、あのビショップもう戦えないようなので回収してもいいですか？」

にこやかに大鎌取り出して何か言ってるし・・・・もう嫌だ、あの小娘はどうしてこう周りを掻き乱すとミストは内心で号泣し始める

・・・・・・どうしてこうなった？
諸々の作業終えて二時間くらい寝た後ガルーダと深夜にお出掛けして明け方近くに砦に戻ろうとしたしたら、ベットに寝かせておいた―身代わり式神―からとんでもないメッセージが届いた。
拝啓主様、私は今マトリフ様からラリホーマを掛けられたので掛けられた振りをしながらこのメッセージを届けております。
どうやらお仲間の皆様は主様を置いていく積りの様なので戻られませぬように

とか！なんじゃそりゃ!!
鉢合わせしたら監禁まっしぐらが目に浮かぶ!!
父さんとダイ兄が魔宮の門を破壊して少しした後こっそり斬って入って着替えていただけで・・・・なんだろう？各方面騒がせたような・・・何やらごめんなさい

―愛刀・雪白―

なんだろう・・・・一大決戦なのに切なくなってきた・・

寝る前に―色々書き物―して少し寝て、起きた後ガルーダと一緒に―各方面―によろしくしに行って戻ってきてみれば監禁まっしぐらな目に・・・・出掛けて良かった・・

そのままのこのこ出たら確実に捕まる事請け合いでダイ兄と父さんが魔宮の門を破壊した後自分も雪白出して一点集中縦一文字で結界を斬り裂くと同時に中に突入成功。

ノヴァに教わった闘気剣がこんなに役に立つだなんてジンとする。他にも闘気の扱い方教わって助かることが山ほどあるけど。

前回ハドラーに身嗜み怒られたからきちんと着替えてたらフェンブレン来て、戦闘不能にしてハドラーとダイ兄達の激突防げたけど・・・

「あの～・・・」

ダイの手で着替え終わり、いつのもスカート姿にシルクの白ズボンと靴をきちんと履いたティファは、兄と共に広間に戻る。

何やらお騒がせて申し訳ない、そう謝罪しようとした自分達にイオの嵐が突如として襲ってきた！

「ディーノ！ティファ!!」

イオはコスパの低い初級呪文で上級者は溜めを必要とせず、それ故にバランはハドラーからの攻撃を完全に見過ごしてしまった！

「ティファ!!避ける・・」

妹に避ける様に指示したダイは、なんとティファの手でバランの胸元に放り投げられる。

兄を放り投げたティファは落ち着いて空飛ぶ靴の機能を発動させ浮かび上がり、イオの軌道を読んで避けていく。

当然イオに当たらずともその爆風や破壊されたものが当たっての

ダメージもあるがティファは全て計算に入れて後ろに下がり、爆発の粉塵で見失ったハドラーの気配を探している。
滅茶苦茶に撃っているようでいて次第に自分を壁際迄押し込もうとしている、とはいえハドラー自身が動き回るも自分の所に来る気配がない。
成る程、飛来物が来ても避ける範囲を限定したいか。案の定

ジャララララ

「地獄の鎖!!」

爆炎と煙で視界零な所に鎖が一直線に迫ってきたか、今なら!!
ズダン!!
飛来する鎖が自分を巻き取る形になる直前に前に出て鎖を右足で踏みつけ、伸びきったところをリングから取り出した剣でぶった斬る。
先端を無くしたハドラーと繋がっている鎖は無視し、斬った鎖をそのまま剣に巻き付け見つけたハドラーの気配の先に無造作に剣を一閃させて送り返し、闘気を纏ってその場で回転を始めた。その威力はバギ程度の威力があり、風を起こして煙をはらす。
視界が戻ればそこには上空にいるハドラーの頬に傷がついているのが見て取れ、天井には鎖がめり込み落ちる気配が全くしなかった。

「・・・・なんですかハドラーあの温い攻撃は？私の事馬鹿にしてます？」
回転を止めたティファの瞳は冷たく、先程までドタバタを繰り広げさせた人物とは思えない程の様変わりをしていた。
「お前こそ俺の攻撃を雪白とやらでなく鋼の剣で防ぐとはな。他人の事をとやかく言えんのではないか？」
ハドラーも上空からゆっくりと降りながら、ティファの武器が決戦に相応しい物では無いだろうと詰る。

確かに地獄の鎖でティファをどうこう出来るとは露ほども考えていないが、だからといってこの場でそんな代物を出されるのは不愉快だと鼻を鳴らして応える。
「あの程度の攻撃とも呼べないお粗末な行為で雪白を拝もうだなんて一千年早いんですよ。小細工の手にはこの鋼の剣で十分でしょう。」
言外にさっさと超魔生物になれと促す。

「ちょっと待ってよティファ!!」
「待ちなさい!!」
いきなりの攻防にバランとダイは出遅れたが、今ならまだティファを止めるのは間に合う、ハドラーが超魔生物になる前に説得しようと試み、ハドラーとティファの間にバランが剣を構えて塞ぎ、ダイが妹にやめる様に懇願しようとした矢先、ティファがダイに優しい顔を向けて拒絶する。

「駄目だよダイ兄、これはハドラーとの約束や私の私情が入っているけど、間違いなく―料理人のティファ案件―なんだよ。」
「ティファ・何言っているのさ!料理人のティファならなおさら戦ったら!!」
「―料理人の仕事は一行の者達を無傷では無理でも軽傷で最大の敵の下に送り届ける―ダイ兄、ハドラーがどんなに強くても彼は今回の最大の敵ではないんだよ。彼の奥にいる、まだ誰も本当の実力を知らない大魔王バーンこそが、勇者達の力がいる相手なのを忘れたの?」
「あ・・・・」
「ここで勇者と竜の騎士を消耗させるわけにはいかない。ハドラーが魔界の神と敬っている相手は万全のダイ兄と父さんがいないと無理でしょう。」
「そんな・・・そしたら俺達三人で!!」
「それも駄目、魔法や闘気も温存して欲しい。万能薬も限りがある。分かるでしょうダイ兄。
先の大戦と違って勇者が門番と戦った後でも最大の敵と戦って勝

てる相手じゃ無いって。」
　勇者アバンがそれをできたのは当時のハドラーが三流魔王でお互いの実力を知り尽くしていたからこそ出来た事で、大魔王バーン相手に通じるはずもない事をダイも知っているだろうとティファは優しく諭す。
　そう言われてしまって、生来勘が鋭く自頭もいいダイには分かってしまった。
　この場にはほかの仲間はいない。自分達を温存するのであれば戦えるのはティファしかいない!!
　父もティファの言葉に苦悩の表情を浮かべている。この中で唯一、大魔王バーンの恐ろしさの一端を知っているであろう父も、ティファの言葉に頷かざる得ない様子で。
「どうして・・・ティファなのさ・・・」
「にぃ・・・」
　ヒっくヒックと泣きだすダイを、ティファは優しく抱きしめる。
「大丈夫だよ、ティファも強いんだから。きっと勝つから泣かないで。」

　力強い笑みでダイの不安こたえる。自分は決して弱くはない！
　勝つ算段は付けて来た。その為の方策を散々練ってきたのだから。
　ダイの言う通り三人で戦う手段もあったが、二人の闘気か魔法の強さで黒の核晶が暴発する恐れがあるとまでは言えないが、これは本当に勇者一行の料理人案件。
　兄や周りに言っている通り、一行を軽傷で最大の敵の下に送り込むためにも。
「父さん、ダイ兄と下がっててください。」
　ティファの言いたい事に納得したダイを下げたティファは父の隣に並びたつ。
　兄も分かっている。この戦いには本当に―世界全て―の命運が掛かっている。妹可愛さで動いていい時ではもうないのだと。
　使えるものすべてを使ってでも自分達は勝たなくては。

「ティファ・・・・万が一の時は割って入ると心得よ。」
「大丈夫だよ父さん！私も竜の娘なんだよ!!!」
「ティファ・・・」
「ダイ兄みたいに紋章使えなくても竜の騎士の父さんの子供で、その父さんを守ろうとした母さんの娘だ!!弱いはず無いもん!!!」
　ティファの言葉に、その時浮かべられた笑みにバランは亡き妻・ソアラの面影をティファに重ねた。
　ソアラは力はともかく心が途轍もなく強かった。ティファは心が弱いかもしれぬが、芯の強さを受け継いだか。
「分かった！ティファよ！ハドラーを打ち倒してこい!!!」
「はい！行ってきます!!!」
　先程の弱々しい承諾ではなく、バランは力強く我が子を戦場へと送り出した。
　先程の突発的な戦闘にも怯まない娘の実力は切り結んだ自分が一番知っている！ならばその強さを信じて送り出す。いざとなれば、この身を割り込ませればいいのだから。

「話はついたのか？」
「お待たせしましたハドラー。待っていてくださりありがとうございます。」
「ふん！湿っぽい事で邪魔されてはかなわんからな!!ようやくか!!これで何の邪魔立ても無かろうな⁉」
　今まで自分達が戦おうとする毎に入る邪魔立てに、ハドラーは相当怒り心頭であったのか、その鬱屈をはらす様に広間の中央に一人立つティファに挑む様に威圧を掛ける。
　これ以上何の邪魔立ても無かろうな!!
「ありません!!!」
　両足に力入れ、いつの間にか武器を収納したティファは空いた左手を横一閃に薙ぎ払い威圧を霧散させる。
　自分だとて待ったのだ！料理人案件を差し引いても戦いたかったハドラーとのこの時を!!

「お待たせしました魔王ハドラー。」
一閃した左手を胸に当て、ティファはハドラーに一礼する。待たせた事とを詫び、決闘を受けてくれた事、兄に諭す時間を作ってくれた事に感謝をして。
その様は礼儀に適い、普段と先程のあのとんでもない娘とは大違いで。
「クックックック、ハッハッハッハッハ！お前は本当に愉快な奴だ！面白い者だ!!とんでもなく礼儀正しく、次は一体どのようなお前を俺に見せてくれる!!!」
「さて、それは貴方次第かと。」
「そうか・・・ならば―戦うティファ―を見せて貰おう!!!」
最後の言葉と共に、ハドラーから気が満ち溢れ、耐え切れなかった兜は砕け散り、纏っていたマントとローブも引き千切れ、出現したのは。

「・・・・・綺麗だ・・・」
戦う為だけに誂えられた超魔生物ハドラーに、ティファは見惚れ思わず呟いてしまった。
ダイとバランは、圧倒的で暴力的な魔獣の体に驚愕したが、ティファはそれが美しいと言う。
「・・・・なに？」
「綺麗だと言ったんですハドラー！力溢れ、隠しきれないその肉体は綺麗だ!!」
戦う為に信念を体現したような肉体に流れる銀の髪すらがティファの目には煌めく宝石の如く映る。
「未だかつて誰とも戦っていない新雪の如き貴方と戦えるだなんてなんて!!」

パシン！バシン!!

ティファが讃辞を重ねるのを止めた―物―があった。

ティファの首筋にあるリング化している雪白が、発光し闘気の火花を上げているではないか。
「そうだよね！雪白もそう思うよね!!あのハドラーの最初を私達が貰えるんだよ!!嬉しいよね！」
そのことに驚かないばかりかティファはいきなり武器に向かって話し掛けたではないか!!

「ティファ・・・何と話している・・」
またとんでもない娘に戻ってしまったかとハドラーが危惧したが、きちんとした返答が返ってきた。
「この雪白には意思があるのです！思考は出来ませんが嬉しいとか嫌だとか、私がきちんと扱えなかった時は物凄く嫌だと言われてしまいましたが今は仲良しです!!その雪白も貴方と戦えるのが嬉しいそうです。」
にこやかに愛刀の気持ちを代弁し、リングから武器化する。
「アクセス！雪白!!」
ティファの求めに応じ、武器化した雪白はパリパリと帯電しているように白い闘気をまき散らしている。
「ハドラー、これは刀という武器ですがご存知ですか？」
「ああ、今はない国が作っていたと、資料でしか知らんがな。」
「ふふ博識ですね、その通りです。これはヒヒイロカネの素材で刀身は真っ赤ですが、何故私は―雪白―と名付けたか分かりますか？」
いきなりのティファの問いにハドラーは困惑し、そういえば赤い武器に何故雪を付けたのかダイ達も今更ながらい疑問を持つ。
確かに鞘と柄は白いが、武器全体を表していない。
「もったいぶらずに教えろ！」
焦らすなと言うハドラーに気を悪くした様子の無いティファは続きを話す。
「この武器はじつは私が身に付けている間ずっと私の闘気を吸っていたんです。持ち主の闘気を吸い続けて満ち足りればその刀身が吸った闘気の色になって放出してくれるんです！」

「・・・つまり闘気をストックし、満タンになれば力に還元されると。」
「はい！まさしくその通りです!!私の闘気はその・・・暗黒闘気の黒ではないですが、無色でも黄金でもないので―成った時―には白なので、完成した時の名前をずっと呼んでいたのです。」
刀身迄白くなる、まさしく雪の如き刀になる。故にこそ雪白だと。
「成る程、つまりスタミナの心配はほとんどせず、お前は全力の打ち込みを何度も俺に出来るわけだ。厄介だな。」
「嘘は駄目ですよ。どう考えてもこれでようやくあなたのスタミナとトントンになった位なんですから。」
他にも追加効果があるがそちらは実際に味わってもらおう!!

ああ、本当の雪白がようやく会える!!

雪白を右腰に佩いたティファは、雪白を解き放つ言葉を高らかに宣言する。

「我が言葉に答えよ！真の姿となりその力を示せ！雪白・リミットトリリース!!!」

ヒィ―ンンンンン!!カァーッ!!!

その言葉と共に白い光の奔流が広間を満たし、奥の玉座で戦いを見ているバーン達の視界も焼き切らんとする勢いで辺りを白一色に染め上げる。

ジャキン!!
光が収まりかける中、ティファが雪白を抜き放ちまじまじと見る。刀身は白く、白い雷が帯電する様に刃の上を横滑りにうねらせている。
完成した愛刀と戦えれば怖いものなど何もない!!
「行こう雪白!!」
そして勝つんだ！

獣の喰らい合い

ティファが名付けた雪白は、実はその全容は三神達にも―知らされていない―機能が備わっている。

これをうった鍛冶屋は凄腕だが偏屈の極み物で、ロン・ベルクを百倍偏屈にしたと言えばわかってもらえる程に屈折していた。

自分の扱う武器の性能は自分で味わって体感して血肉にするものだ。何でもかんでも教えて貰えると思ったら大甘なんだよ、とは三神達に譲渡した時はそんな事は言わず、隠し機能も告げずにこの世を去った。

それ故にティファがデルムリン島で三神達が出現させた洞窟の地下五十階で、雷の竜を降して手に入れた刀の説明の時の性能に加え、機能は闘気をストックさせる事のみ。

ティファも其れは凄い事だと喜び、隠し機能があるのを今の今まで知らなかった。

バランは雪白の刀身が白くなると同時に―娘の容姿―までもが変わり果てた事に絶句し、反対にダイが叫び上げた。

「ティファ!!何があったの⁉それも雪白の力なの⁉」

「ん?どうかしたのダイ兄?雪白綺麗・・・」

「雪白じゃない!ティファの髪が・・・髪の色が白銀になってるよ!!!」

・・・・・・・・・・え?・・・・え?・・・・・えええええ!!!!!

わ!横の一房見たら本当に白銀色だ!ん?何やら体に力が巡っているような・・・・心なしか皮膚の上も膜が一枚被さっている感覚がする。

これってもしかして・・・もしかしなくても雪白の追加効果だ。

自分の雪白ご披露だとテンションが上がっていたティファは、自分の外見が見えない事はともかくも、内部に溢れる力に気か付くべきで

あったのかもしれないと反省する。
浮かれて自分の今の状態を把握できないなんて決戦前にして良い事ではない。
把握できない＝死に直結するのが戦いなのだから。
雪白のもう一つの機能は、刀自身が主の闘気をストックし、それを刀身と主自身に還元する事。
雪白は何度も全力の打ち込みを、主にはそれまで貯めていた闘気を開放して外部は薄い闘気の鎧を自動で張り巡らせ、体内のそれこそ毛筋一本にまで闘気を流し込む。
ティファの髪が白銀色になったのは、元の黒色に白い闘気が混じり完全に白にならなかった為にその色となった。
真っ白ではなく、それでいて力強い白の色は奇しくもティファそのものを体現する形となった。
純粋だがそれだけではない、なんともティファらしい色だとハドラーは見惚れていたが故に黙っていたが・・・

「美しい・・・」
感極まったように言葉を放つ。
ティファ達が自分の肉体を見て瞬時に分かったように、自分もティファの今の姿から途轍もない力の奔流を感じる！ティファの真正面にいるせいでとこで見ているダイ達以上に!!
力強く、そしてどこか神々しくあるあのティファの！何と美しい事か!!
「今のお前は！俺が見てきたどのような者達も敵わぬほど三界一美しい娘だティファよ!!!」
数百年生きて来た。魔族は総じて強いものほど美形が多く、其れなり以上の者達を自分も見てきたが、今のこのティファに敵うものなどいるはずもない!!
美しさの中にあれ程の力強さを感じたことがあったか？力強さの中に、無垢で純粋な光を宿し満天の星空の様に煌めかせる黒き瞳を瞬たかせ、頬を紅に染めるあの可憐な美しさを備えた者はいただろうか

？

どちらも否だ！今まで自分が出会ってきた者達はどちらかしかなかった。

俺のこの悍ましい魔獣の肉体を恐れず綺麗だと言い放ち、戦う事を純粋に喜び力を露にしたティファと戦える自分はなんと幸運なものだろう。

偽りをもそれこそ世辞も言わないハドラーの真っ直ぐな言葉に、ティファの胸が今までになく高鳴る。

あれ程の凄き男から、超一流魔王のハドラーが自分を讃辞してくれたのだ!!

「ハドラー!!!!」

それが嬉しくて、ティファは叫び上げ、果たしてハドラーはそれに応じてくれた。

「おう!!」

ああ、この人に宣したい!!

「デルムリン島の長鬼面道士ブラスが孫娘!!」

む？

「龍の騎士バラン・アルキード王国王女ソアラが娘!!」

それはティファが尊敬し愛している者達の名が、次々と紡がれていく。

「勇者ダイの妹で一行の料理人を務めている―三界一とんでもない娘・ティファ―が！魔王ハドラー!!貴方に決闘を申し込みます!!受けますか！引きますか!!!」

雪白をハドラーに突きつけ、力強く戦うか否か問うた！

それは堂々たる宣戦布告

昨日なし崩し的に決まった戦いではなく、自分を今の自分たらしめてくれている全ての人達を織り込んだ自らの宣戦布告。

自分がこの世界に生まれたのは父さんと母さんが道ならぬ恋の果てに、其れでも私達を産んでくれたからだ!!
礼儀を優しさを教えてくれたのはじいちゃんだ!
ここまで自分が折れずに来れたのは、いつでも明るく強いダイ兄が、迷子になりそうな自分に本物の勇気を見せてくたからだ!
疲れた果てに壊れた自分がここ迄立っていられるようにしてくれたのは、ポップ兄・マァムさん・ヒュンケル・クロコダイン・チウ君・メルルさん・べほちゃん・おじさんのおかげだ!
それに・・・自分を強くしてくれたいったんは間違いなくハドラーも担ってくれている。
だからこそあれも入れたのだが・・・
今の自分を作ってくれた人たち全てに懸けて!私はハドラーと戦って勝ちたい!!
その言葉に出ない胸の中での思いを、ハドラーは何かを感じ取りにやりと笑う。

「そうか、ならば俺も返答せねばな。」

ジャキン

ハドラーは戦闘迄仕舞っておく積りだった覇者の剣を右腕から出現させティファに突きつけ返答する。

「大魔王バーン様の配下、魔軍司令官ハドラーが―ティファ―の決闘申し込みを受けよう!!」
ティファが自分を魔王と言ってくれるが、自分はまだ主からその許しを得ていない。勇者達全てを倒したあかつきに名乗るがいいと言われている。
ティファに背負うものがある様に、自分も尊敬する主が与えてくれた官職で受けさせてもらおう!!

だが、ここでもう一つ言っておかねばならないことがある!!
「これよりは俺とティファだけの戦い!!この決闘を邪魔する者は容赦せぬ!!!」
主とミストバーンはともかく、この美しいティファに矢張り欲しいとなったキルバーンへのけん制のつもりで言ったのだが、意外にもティファも其れに乗ってきた。
「私も宣言させていただきましょう!もしも横槍入れるものあらば!!塵も残さず消滅すると心得なさい!!!」
決して許さない!

「そうか。」
「はい!」
ティファも自分と同じ!世界の命運掛かったこの戦いでも俺を一番の敵と定めてくれている!

「いざ!尋常に勝負ですハドラーッ!!!!!」

その言葉が発せられたのと、白い物が弓なりの様にハドラーに迫ったのはほぼ同時であった。
言葉と共に、ティファは先手とばかりにハドラーに向かっていた。凄まじい速度で迫り、通った後が闘気の圧力に耐え切れず抉れていく!!
「ふんぬ!!!」

バギン!!!!

その初太刀はハドラーの覇者の剣に弾かれた。ハドラーは見えてはいなかった。だが圧倒的な威圧から打ち込まれる太刀筋を先読みし薙ぎ払ったにすぎず、払った方も払われた方も一瞬構えが出来ず無防備な状態になった。
先に態勢を整えたのは空中に放られた形のティファではなく、ハド

ラーの方であった。
払われた勢いで後ろに飛ばされたティファを追撃して袈裟切りにするも、受け止められそこからは打ち合いへとに突入する。
お互いの力の余波に体勢が崩れるが、ハドラーはその体躯を活かして踏みとどまり、ティファは打ち込まれるハドラーの剣を反対に利用し、雪白を打ち込み支点にして態勢を立て直して斬撃を繰り出していく。
ハドラーが一の動きで事足りる動きは、ティファは二が必要だが今は雪白の追加効果でスタミナを心配する必要がなく存分に迷いなく打ち込める為に互角の打ち合いが、大広間をして所狭しと二人はそこかしこで打ち合い、相手に届かなかった闘気は余波となり、ダイ達を圧している。

ガラン

何かに躓いた・・・これか！
ガン！
「ダイ兄！フェンブレン邪魔!!預かっておいて!!!!」
手足なく身動きが取れないフェンブレンは当然自力で逃げる事は出来ず、ティファはそこに躓き、其の隙を見逃すはずもないハドラーが剣ではなく蹴りをティファの腹に入れようとしたが、察したティファは一度大きく後ろに飛んで間合いを取り、追撃してきたハドラーを躱し、直後に振り向くと同時にフェンブレンをダイの下に蹴り飛ばしすぐさまハドラーに向かって行く。
巻き込まない為の優しさではない、ハドラーの間に入る者は誰であっても邪魔だ!!

雪白の斬撃一辺倒のティファに対し、ハドラーは拳や蹴りも交えティファを翻弄する。油断をすれば、何が飛んでくるか分かったものでは無いと、ティファの神経を最大限迄稼働させ追い詰める。
幾度目かの打ち合いの果てに横に薙ぎ払われ、刀身と共にが完全に

のけぞったティファの腹に、左足で地面を踏みしめ、右足の重い蹴りの一撃をすかさず振り抜く。

だが、その足にと自分の腹の間にティファは素早く雪白を捻じ込み後ろに吹っ飛ばされるだけで済ませてみせた。幸い狙っての事ではなく咄嗟の事で、刃の部分ではなく峰の部分が足に当った為、こちらの足を切断されずに済んだわ。

・・・・本当に油断も隙も無い・・・ハドラーにはまだ魔法があったっけ・・

体格・リーチ・筋力の差は如何ともしがたいけど、速さなら負けない!!

「おおおお!!!!」

両足に闘気を流し強化したティファはの姿は初太刀の時よりなお早く一瞬ともいえる速さでハドラーに迫る。

また同じ手か!!

見えずとも横薙ぎにして防ごうとしたハドラーの覇者の剣は空を裂く。

読んだ場所にティファはおらず、トンと、空を裂いた覇者の剣の先端が重くなる。

ここ!!

自分の速さについてこられていないと読んだティファは、初太刀と違い闘気を抑えその軌跡から割り出されずに、ハドラーの手前で足に闘気を再び流し込んで強化し、ハドラーの右後方に飛んでいた。

空振りに終わる覇者の剣に乗って足場にし、その首を刎ねる為に!!!

「あああああ!!!」

その斬撃は決まり斬首されるかと見ていた全ての者達が思ったほど完璧にタイミングが決まっていた。

相手がハドラーでなければ

イオラ!!!

ズッッガァァァァン!!!!

「ティファ!!!」

ハドラーも伊達に過酷な場会で生き延びた強者ではない。先端の重みを感じて直ぐに察し、魔力を溜めティファの雪白が自分の首に触ると同時にに左手から爆裂中級呪文を放つ。。

あの態勢からでは避けられない！

見ていたダイは、煙渦巻く戦場に入ろうとしたが父バランに左腕を掴まれ止められた!!

「離して父さん!!ティファが心配じゃないの!!!」

「落ち着くのだディーノ、煙は直ぐはれる。」

果たしてバランの言葉通り、爆裂呪文とはいえ単発のイオラの煙はたかが知れておりすぐさまはれた。

直ぐに目に入るのはハドラーだが、ダイは妹のみが案じられるが、同時に戦士としての疑問が湧いた。

何故ハドラーは追撃戦をしていない？呪文でダメージ喰らった敵に討ちかかる絶好の機会を何故？

その答えはおのずと直ぐに出た。

よく見ればハドラーの右耳が千切れて血が流れ出ているではないか！べしゃりと何かが地面に打ち付けられる音がし、そちらを見れば煤けているがダメージをさして負っていないティファが雪白をいつもの様に左肩に懸けて立っていた。

ダイには分からなくともバランからは見えていた。

ティファが呪文の詠唱を聞くと同時に首を斬首する為の斬撃をし

ている最中であっても左手を即座に離し、闘気を掌に集中させイオラがその威力を発揮する前にぶつけて己の被害を最大限に殺すと同時にハドラーの右耳を口に咥え爆発の威力で後ろに吹き飛ばされる威力を利用して噛み千切ったのが。

吐き捨てられたハドラーの右耳は生々しく、見ている者達の背筋を寒からしめる。

もっと惨いものを見て来たバランとても、それが我が子ティファが仕出かしたかと思うとうすら寒さを感じずにはいられない。

「ふん、噛み癖があるとは行儀の悪い娘だ。」

だが、そんなティファに平然と話しかけるのは耳を噛み千切られた当人ハドラーであった。

今のティファならば、この程度出来て当たり前だろうとばかりに驚かず、行儀が悪いと咎めるほどの余裕がある。

「いいでしょう、首の代わりが右耳たった一つ。」

本当は口の中に入った血も吐き捨てたいが、これ以上の行儀の悪さは止めておこうとばかりに右手の甲で拭い去り、魔族の証たる青い血を口の端に付けたままにやりと哂う。

目の瞳孔は完全に開き、そこに居るのは戦いに魅入られた戦士が、否！戦う獣が佇んでいる！

「何か問題ありますか？」

あくびれずに傲岸に言い放つその様は・・・

「クックックッ、問題なぞない!!」

「でしょうね!!!」

それを合図に二人の打ち合いが再開される。

銀の髪と白銀の髪をたなびかせ、二頭の美しい戦う獣が喰らい合いを再開する

これはまるで・・・・

「実に楽しそうですに戦ってますね～あの二人。」

高みの見物を完全に決め込んでいるキルは、二人の激突と喰らい合いに唖然としているバーンの横に来て玉座の階に行儀悪く腰を据え、膝を肘掛けに使い頬杖をついてハドラー達の狂宴を見ている。

バーンとて双方の実力が高いのは知っていた。だが！ティファのあの獣性は何処から来た!!

ハドラーの右耳を噛み千切って平然と挑発し、今も口角を上げ哂って激突している姿など想像できなかったバーンにとっては、ティファの可憐さを弱さ脆さを知っているだけにバラン同様うすら寒い思いがしている。

しかしキルは知っている。篩の塔で、あの馬鹿を平然と壊そうとしたティファならば、あんな一面があってもおかしくは無いだろうと。

「あの二人はまだ自分達の力に振り回されているようですね～。」

キルは戦闘そのものには興味がないが、暗殺・討伐・始末を引き受けていただけあり実力者の動きに目が肥えている。

その自分から見ればティファは雪白の力と引き出せる速度に少しばかり振り回されすぎている。ハドラーも己の力の強さを持て余し、攻撃動作が大きすぎて拳を繰り出せば無駄に地面を抉りすぎる等の力と動きのロスが生じている。

仕方がないか～。ハドラー君は超魔生物としての戦闘はこれが初めて。お嬢ちゃんも雪白とやらの性能を十全に引き出しての戦闘はこれが初めてだと言っていた。

まさしく二人は処女

初めての事に戸惑い、とはいえ今更やめる積りは毛頭無く、手探りながら肉薄してぶつかり合い、お互いの様子を見て互いで存分に愉しめ

るように息を合わせて上り詰め、最高潮に達しようと懸命に努力しあっている。自分から見れば可愛いくてそしてとても愛しい。

命を削り合い喰らい合う様は、最早戦闘と言うのが野暮で最も縁遠いもの。

これはまるで睦事

存分にお互いを貪りあっている様は途轍もなく美しく、これ程の興奮を覚えた事は一度としてない!!

妬けちゃうな〜。僕だけ爪弾きにしてハドラー君だけお嬢ちゃんと愉しんでいるなんて。

でも・・・あぁ・・・見ているだけで僕の思考も感覚も蕩けそうだよ二人共。

先程から—自分の中の何か—がざわざわとして仕方がない。これを沈めるにはどうすればいいのか分からないが、この感覚とも呼べる者はとても甘美だ。

もしもハドラー君かお嬢ちゃんどちらかが逝ってしまたら、お嬢ちゃんだけの時はハドラー君は僕にお嬢ちゃんを渡さないように遺体を灰にするだろうからその時は諦めよう。

大好きなハドラー君の思いに免じて。

ハドラー君か、あるいは双方相打ちの時に、僕の能力で二人の幽体を現世に留め置こう。

お嬢ちゃんは怒って百年ほど口を利いてくれないだろうけど、ハドラー君はバーン様に仕えられるって喜んでくれそうだから、そんなハドラー君を見せてお嬢ちゃんの機嫌を直してもらおう。

願わくば、お嬢ちゃんを生きたまま欲しかったけれど、いくところまでいかないと食らい合っている獣達は納得しまい。

それがとても残念だ。

「おい、竜の騎士バラン。」
ハドラーとティファの激突に巻き込まれないようにダイ達の足元に避難（？）させられたフェンブレンが、突如としてバランに口を利いた！
「・・・なんだ・・・」
敵ではあるが、こんな悲惨な状態の者を相手に威圧する気は零なバランは一応聞いてやる。
「―儂―にとって戦いとは攻めてきた敵、邪魔になる敵を倒す為のものだ。」
「・・・・・」
「なのになぜハドラー様はそんな―作業―で笑っているのだ？それはお前の娘も同様だぞ。」
フェンブレンにとって、戦いとは作業と同義語。いかに効率よく敵を斬り捨て粉砕するかが命題であり、少々のサドッ気があるのは認めるが、激突して喜んでいる二人の感性が分からない。
あれは途轍もなく効率が悪く、愉しむことではない・・・筈なのに。
フェンブレンの言葉にダイも同じ思いを抱き始めたのでバランを見上げる。
その顔には困惑の色がありありと出ている。
ダイも戦いを楽しいと思った事は唯の一度としてない。攻めてくる敵から大切な人達を守る為以外に、戦いの意義を見出していない。
アバンからの特訓も、ロン・ベルクの強化修行も全ては世界と自分の大切な人達を守る為に必要な事であった。
だが今戦っている二人の様子はどうだ？あの二人は何故楽し気に戦っているのだ!!
ティファだとて、この一戦に世界の命運が掛かっているのを知っているだろうに!!
二人の疑問に、バランも何と答えればいいのか分からない。
自身も―三界の守護者・竜の騎士―として生を受け、連綿と継がれた使命と戦いの記憶をもとに、魔界の兇悪・冥竜王ヴェルザーとその軍を相手に長年戦い、強者との戦闘に血が湧きたち戦った事はあれ

ど、笑ってぶつかり合った経験はない。
だが、それでもうまくは言えないが・・
「あの二人は戦士として最高の戦い相手を得られた事を喜んでいるのであろう。」
ただ強いだけではない。互いの事を隅々まで知り尽くし熟知し、その上で互いを好もしく思い、激突するに足る相手を得られたと歓喜している様子だ。
ハドラーは幾度ティファのとんでも無さと、それ以外を見ても接する態度を変えず、ティファもハドラーがまだ三流魔王と言っていた頃から内面を評価し、遂に超一流魔王になってくれたハドラーを喜び自身の手で倒したい願った。
これはまるで、古くからの敵同士が長い年月を掛けて胸の内で親愛の情を育み、お互いの手で倒すことを望んでいる古参兵ではないか。
二人にそれを話しながらバラン自身、戦士として我が子とハドラーが羨ましく映る。
自分にはそれ程深く心を繋げた相手はいただろうか？
妻を愛し愛されたが、あの二人の様に胸の内や、遂には自身の正体すら明かせられなかったではないか・・・・
ティファの言った通り、人間ではないと知られるのが怖くて逃げだした自分は、我が娘の様に深く心を繋げられたのだろうか？
不意のバランの沈黙に、ダイとフェンブレンが戸惑い顔を見合わせる。
バランからの推察を聞いても、矢張り二人にはハドラーとティファの心情は理解できなかった。

「ちょこまかと!!」
「貴方が鈍いだけでしょう!!!!」

さっきからいいところで首斬れそうなのに！その都度蹴りだ、拳だ、魔法だで対処してくるハドラーの方がちょこまかしてる!!

ティファは絶対に体の中心部分に刃を突き立てようとしない。ハドラーに埋め込まれている黒の核晶の気配は感じれども、正確な位置が分からない。

そこに万が一刃を突き立ててしまったらこの場にいる全員のみならず、地上で戦っている勇者一行とハドラー親衛隊は間違いなくお陀仏だ!!

知っていて敵を喜ばせる趣味は自分にはない!!

それにしても、さっきから攻撃を止められているのにイライラとしない。反対にこれ止められるんだと嬉しくなる。

鍛えて来た技をいともあっさりと躱され受け止められ弾かれる度に、次の攻撃を考えるとわくわくする・・・・三界の命運が掛かっているのを一番知っているのはこの場では私なのに、それでもこの昂ぶりが止められない！

「愉しいかティファよ!!!」

その思考を読んだように、ハドラーはティファとぶつかり合いながらも言葉を掛ける。

自分との戦いは、激突は愉しいかと問うてくる！

・・・愉しい？

「愉しいかどうか分からないが!!!」

その思いと覇者の剣の刃をティファは真正面から受け止めた。

両足と両腕に闘気を流して強化し、ハドラーの上段切りを一度雪白の刃で受け止め、すぐさま横に刃を滑らせ威力を殺しながら脱出し、上体を前に泳がせたハドラーの隙を見逃さず踵落としで更にバラン

スを崩させ蹴り込んで壁に激突をさせ追撃しながら答える。
「貴方の首が欲しい!!!!」
この雪白を手に入れてもその時の自分にとって戦いは手段でしかなかった!世界と守りたい者達全てを守る為の!!
だがハドラーとの戦いはどうだ?この戦いは自分が望んだもの。キルやミスト、父達と激突しても胸が高鳴る事はなかった!
夢に見た
自分がハドラーの首を落とし、主の裏切りを知らずに逝けたハドラーの首が、超魔生物の定めに従って灰に成り果てるまで抱きしめてよかったと笑う自分を。
戦士としての誇りを穢させる事無く、無念の思いも抱かせずに逝かせられた自分に満足をしながら!!
これはまるで葬送の義
ハドラーが何にも知らない内に私の手で送りたい私のエゴ。
「自分の手で倒し、他の誰にもその首を渡したくないと願ったのは!!貴方一人だハドラー!!!」

ふん!ティファの奴め!!あ奴は一体どこまで俺を喜ばせれば気が済むのだ!!!
迫るティファを魔法で迎撃する事無く、ハドラーはティファの攻撃諸共に思いも受け止める。
無垢な娘にここまで思われる自分はなんと幸せ者なのだ!
自分はザボエラに改造を施され、この肉体になったその日から毎夜ティファが夢に出る。それこそ培養液に使っていたその時から。

夢の内容は三つ
一つは全力で向かってくるティファを自分の手で倒し、力尽き息絶え果てるその瞬間まで、ティファの小さな体を胸に抱いて笑っている。
強者でありながら純粋で優しすぎるティファにはこの時世の世の中で生きていくには辛そうなティファに安らぎを与えられたと満足をして。
そして無論自身が倒される時もある。それは首を斬られてか心臓を二つ刺し貫かれてかは様々だが、自分を倒したティファが少し泣きそうになりながらも、崩れ行く自分を抱き留めてその灰を一身に受け止めてくれていた時もある。
そして一度だけしか見ていないのは、自身がティファを倒し、ティファの息が絶えたその瞬間、
自分も力尽きティファの遺骸の上に灰となり降り注いで共に冥界の黄泉路を辿る夢。

俺の体は最早限界で、今こうして命を削って戦える事に初めて神に感謝したくなっている。
ティファのような素晴らしい者を俺の前に立たせてくれた事を、こうして戦い合える場を作ってくれた事を！
今が俺にとっては奇跡のような時間だ。おそらくこの戦いが最後で、勝ったとしても俺の体は崩壊する予感がする。
願わくばティファ諸共に黄泉路を辿りたい、一度しか見ていないあの夢の様に。

これはまるで心中立てする様ではないか。
この場合ティファの心情は考慮していない俺の我が儘。
倒した時俺の力は残っているだろうか？わずかでも残っていれば、俺の魔炎気で諸共に焚き上げたい。
ダイとバランには悪いが遺骸とても渡したくない。無論あの変態死神になど論外だ！

あ奴なれば遺骸のティファとても愛でそうだ・・・・・虫唾が奔る。
ティファの尊厳の為にも、安息の為にも・・・

ガン!!!!

「何考えて何処見てるんですかハドラー!!!!」

ッツ!!こ奴何と石頭な!!
折角お前の事を後々まで考えてやってるというのに頭突きをしてくるとは!!

「今あなたと戦っているのは誰ですか!片手間で私が倒せると思っているんですか!!!
他の事なんて考えていないで私だけ見てろハドラー!!!」

黒い瞳に煌煌とし赤黒い炎を浮かべて俺を睨み据えてくるわ。

フ・・・クックックッ、存外こ奴は嫉妬深いらしい。今の俺がお前以外の何を考える事があるというのだ!!
愛い奴だ
俺の首も命も魂さえもお前が取れるのであればくれてやる!ただし俺もお前の全てを貰いに行く。
覚悟せよティファ!!

必殺の技

あぁ、そろそろ決着の頃合いだ・・・

自分もハドラーも見た目はダメージさほどなくても、内臓方面はがっつりダメージ負ってる。

私は肋骨にヒビで、長袖の下絶対に痣になってんだろうな。

闘気の鎧で覆っていても衝撃迄殺してくれるなんてチートアイテム貰った覚えはない。

どこもかしこも痛くとも、ティファから笑みが絶える事はない。

痛みを感じれば本来生物は止まるか動きが鈍る。生きる為の防衛本能故に。

戦いの中ではそれは邪魔でしょう

などと生き物の本能全否定したティファが修行で徹底したのは、痛みは痛みでダメージを計測する為の物と割り切り、動きを鈍らせる本能の方を殺す事。

死ぬ痛みか死なない痛みか判定できればそれ以上は不要と、自分の本能を屈服させている。

戦闘時に限らず興奮して出る脳内麻薬とも呼ばれるアドレナリンに頼ることなく、正気のままで。

その痛み計測からするに、自分は体力含めて三割は削られている。

向こうに与えたダメージは、手応えからではあるが二割といったところか。

上級呪文は使わせていないが、コスパ低いとはいえ初級呪文は百近く打たせているのでそろそろ魔力も目減りして闘気技メインで行きたいところだろうか？

まぁそれはこっちも同じで、雪白のストックも四割使った。

これ以上になると―技―が撃てなくなる。

「どうした！先程よりも動きの切れがないぞ!!」

「ほざかないで下さい！私の方がうんと若くて元気一杯ですよ!!!」

上記の事はハドラーとの打ち合いしながら考え中!!この人どんだけ元気なの！本当に寿命迫ってんの⁉

動き回りながらの打ち合いで周りの壁も地面も抉れて大穴開けて、廃墟化の様想を呈させてもまだ衰えてないって・・・・スタミナのお化けめ!!

如何に雪白の追加効果があっても、そもそもハドラーとティファでは当然スタミナ量が違う。

ハドラーが百ならティファは元が精々六十かそこら。底上げしても普段使っている力とは違うので当然筋力疲弊も早く、そろそろ全身が軋み始めている。

今撃たないと本当に不利だ!!

ハドラーから繰り出された拳の上に乗っかり、ティファはそのまま後方に飛んで着地と同時に追撃してくるハドラーに土龍閃を放ち、攻撃の動きを一時停止させる事に成功し、その僅かな時でも気を整えようと呼吸を深めにとる。

先程の激突時であればそれは命取りになるだろうが、ハドラーの方もタイミング的には整えたいところだろと安全を確信して。

スゥ～ハァ～

心なしかティファの息が上がっている様子にダイは飛び出しそうになる体を己が意思で必死に抑える。

まだティファは負けていない。俺がティファを、妹を信じてやらないでどうする!!

唇を噛みしめ耐える我が子に、バランは畏敬の念の眼差しを向ける。

この短時間で息子は驚くべき速さであらゆる成長を果たしている。
幾度ティファが危険な目に遭い、その都度飛び出そうとしたのを抑えていたが、今は己の意思でここにいる。戦士として、また勇者としての自覚が、この戦いはぎりぎりまでティファにやらせなければならないのを心は兎も角、頭は納得させられたようだ。
この後に続く大魔王戦を見据え、大局で物を見始めている・・・・生中な思いや覚悟では到底できない事を。
そしてこの短時間でダイはハドラーとティファの動きに付いていき、時折腕や手首がピクリと動く。
二人の速さに目が慣れ、ハドラーの方の攻撃に、自分ならばどう攻撃し対処するか考えているかの様に。
バランの思う通り、ダイは脳内でハドラーと戦いを繰り広げている。ダイには竜の騎士が受け継ぐ戦いの記憶は受け継がれず、―原作―では超魔生物ハドラーと一番に激突したがこの世界でのダイは全くの未知で、戦いの経験もある意味摘み取られ不足しているところがあった。
だがしかし、妹の闘気の使い方、身のこなし、ハドラーからの攻撃を防ぎどう連撃に繋げるかの戦術を―見て―己の中に吸収する。
それはまさしく見取り稽古。ティファは期せずしてダイの前で全力で戦う事で、不足していた兄の戦闘経験値を爆発的に高める事に繋がった。
そこまでは意図していないが、自分の戦いで何かを掴んでくれればいいと考えていたティファが知れば、兄の役に立てたと大喜びしたであろう。

そのティファは今呼吸を整えている。
「流石にへたばったか？」
「さて、どうでしょうかね～。」
ハドラーからの問いに、ティファは人を食ったような笑みを浮かべて答える。この疲れも演出で誘ってるのかもしれませんよと、言外に―罠―である可能性を示唆して。

「・・・全く油断も隙も無いなお前は、疲れたのならば素直に俺に斬られたらどうだ？痛くはせんぞ。」
「・・・・・貴方一体どんな感性してるんです。斬られるのに痛いも何もないでしょう。」
　案に即死させてやるという物言いに、流石のティファも鼻白む。自分はここで死ぬ積りは毛頭ないのでお断りである。
「クックック、遠慮せんでいいぞ？」
「しますし！お断りですし!!・・・・貴方そんな性格でしたっけ？」
「さて、どこぞのとんでもない娘に毒されたのやも知れんな～。」
「・・・・・・今すぐ黙りやがれです。」
　ハドラーの言葉にティファは青筋浮かべて―満面の笑み―を浮かべてシャラップをかける。
　どう見てもハドラー浮かれてる！それは自分もだからお互い様か・・・・
　無駄話とまでは言わないが、おしゃべりしているうちにティファの呼吸は正常に戻る。ハドラーの思惑通りに。
　疲れているティファを倒したところで詰まらんことこの上ない。そろそろ戦いも終盤。
　もう少し打ち合ったら、自分の生涯最高傑作の―技―を繰り出す!!
「おおおお!!!!」
　この戦いで初めてハドラーは闘気を練り上げた雄たけびを上げる。それはこれから、今まで以上の圧倒的な力でティファに討ちかかる事の宣言!!
　その雄叫びの余波は凄まじく、見ているだけのダイとバランの肌をビリつかせ、フェンブレンの手足の傷のヒビが、さらに増してしまった程に。
　背中のスラスターも吹かせ両足に力を込めたハドラーの突進にさしものダイ達も危機を感じ取り割って入ろうとしたがその動きをふいに止めた。
　ハドラーがある地点を境に、見えない壁に激突しそうになり全力で止まったようにその場に足をめり込ませ、構えを解かずとも止まった

からだ。
それも先程には全く見られなかった驚愕の表情に、微かに汗を浮かべて。
ハドラーが凝視する先にはティファがいるだけ・・・・・なんだあの構えは!!
その構えは、ダイとフェンブレンはおろか、数千年の戦いの記憶を受け継いだバラン、数多の多様な敵と戦ってきたハドラーすらも見た事がない。
「・・・・あの構えは一体・・」
それは魔界の神すらも知らぬ構えで、バーンも訝し気に玉座に座ったままだがワイングラスをサイドテーブルに置き身を乗り出して見る。
「ミスト・・・あの構え何?」
「私も知らん・・・・小娘の奥の手か・・・」
キルも終盤の為、構えは知らないがあれは必殺技の類であろうと推察し立ち上がる。この戦いの行く末をしっかりと見届ける為に。

ティファは右腰に差した鞘に雪白を仕舞い鯉口を切り、左足を前に出した前傾姿勢でハドラーの
一挙一動をつぶさに見ている。
ただそれだけ
そう感じたのはその場ではフェンブレン唯一人であったが、見ているだけのダイとバランも汗を浮かべ始めた事に何事かと訝しむ。
分かる者には分かる、今のティファは静かすぎるのが。それは嵐の前の静けさに似て、内側に闘気を練って溜めているのが。
ハドラーが止まった地点がおそらくティファの間合い。全方向二メートルが、ティファの構えている技の間合い。
踏み込めば確実に技が飛んでくる、不用意に入り込めない剣の結界にハドラーは足止めされたのだ。
「どうしました、来ないのですか?」

状態と同じく、先程まで荒ぶっていたティファとは違う、静かな声がハドラーの耳をうつ。
「私がどの様な技を繰り出すのが予測出来ずに怖れをなしましたか？分からないのであれば、
その身で全力を以って確かめに来ればいいではないですか。」
だがその言葉のなんと苛烈な事か！それは挑発。自分は技を撃つ、それに見合った技を出せと。

「ふん！お前にしては随分と安い挑発だなティファ。ここいらで決着を望むか。」
「どうとでも。それで、貴方は技を出すのですか出さないのですか、どちらなのかはっきりとなさい!!」
「お前に言われずとも出す！その身を焼き尽くす技で冥土に行くがいい!!!」

ズァァァァァ!!!
ティファの言葉に背中を押された形になったが、ハドラーはこの戦いで一番の闘気を放出し、暗黒闘気の炎・魔炎気を練り上げ左腕から右腕の覇者の剣に伝わせる構えをとった！
その熱量だけでも凄まじく、技も放っていないのに辺りの瓦礫が壁まで吹き飛ばされ激突をした。

もってくれよ俺の体、ティファを倒しきるまで!!
自身で編み出したこの技を超魔爆炎覇は、この体になって会得した魔炎気を剣に伝えて放つ技。
その為には魔炎気を発生させる為に、自身の生命力を限界以上に振り絞る必要があり、まさに不退転の必殺技。
決まればバランのギガブレイクにも負けない自信がある。ティファがどの様な技を出そうとも、
正面から打ち砕けば何ら問題はない!!

双方が構えをとってからはピクリとも動かず言葉による応酬もない。ただひたすらに―その時―を待っている。
この緊張に満ちた均衡を崩す何かを。
図らずもその均衡を崩したのはダイであった。彼の為に言わせてもらえれば、ダイが未熟で緊張感に押し負けて何かをしたのでは決してない。
続く激突と、妹とハドラーの情念ともいうべき狂気にも怯まず見続けたダイが崩したのではない。
彼が流し顎を伝い滴り落ちた汗が地面に落ちた時が―その時―になったに過ぎない。

ピチョン

二人は瞬時に動いた。それもコンマのずれもなく。

「超魔爆炎覇!!!!!!」

魔炎気を存分に纏った覇者の剣を振りかざし、ハドラーは必殺技を繰り出す。
体内で練られた気を存分に放出し、動いたタイミングはティファと同じであったが、僅かに技の速度が自分の方が早いと感じて渾身の力を込めて打ち下ろす！
勝った!!
傍から見てもハドラーの方が僅差に見えた！だがその考えをは吹き飛ばされた!!
文字通り超魔爆炎覇諸共に!!

「あああああ!!!」
ガッツシャァァァァァン!!!!
バッガァァァァン!!!
武器と技がぶつかり合った破裂音が広間に鳴り響き、一瞬の間が空いたが天井が―何か―によって大穴を開けられた!!!

僅差と思われたハドラーの技をティファも闘気を練って雪白に纏わせ強化し打ち上げ、超魔爆炎覇の威力を全て自身の白い闘気諸共天井へと放出させる。

双方これで技はなくなり、振出しに戻ったかに見えたが！よく見ればティファが左手に持っているのは、鯉口は斬ってはいるがまだが鞘に収まったままの雪白であった!!

ティファの技はまだ終わってはおらず、この技はここからが本番。

二段抜刀術　双龍閃・雷

潰えし夢・・・・

《》天翔龍閃

あの技を知っている人は誰もが思うだろう。

ここ一番の必殺技にはあれこそが相応しい

超一流魔王にして高潔な戦士ハドラーを黄泉路に送るに、あれ以上相応しい技はなかなかあるまいとは私も思っている。

その威力、決まった時の荘厳さすら感じさせる龍そのものを表したような技なのだから。

本音では私だとてあれで決着を付けたい。

だがそれを現状が許してくれない。原因はたった一つ、黒の核晶が邪魔をする。

別に大魔王が今覗いていようが私の奥義知られようがどうでもいい。だけど天翔龍閃は威力がありすぎる。

雪白ではなく、鋼の剣でデルムリン島の洞窟ボス戦をした時はさほど感じずとっておきが出来たくらいに気軽に考え、雪白でやった時危うく洞窟が崩壊しかけた。

全てのボスを倒して雪白を手に入れて威力を試した時で、まだ雪白をきちんと扱えなくとも、神の結界が張られたあの洞窟を崩壊一歩手前にまでして見せた。

ではリミットリリースした時に使ったらどうなるか？確実に黒の核晶周りに大魔王が張った衝撃吸収結界ぶち抜いて暴発する事請け合い。

次善の策で九頭龍閃も考えたが、突進系の超魔爆炎覇と競り合った場合重量の大きい方が勝つ。筋力の弱い私の方が当然負けて、威力殺されて負けるのが目に浮かび却下。

万が一早さで優り超魔爆炎覇をすり抜け懐に飛び込みながら技を繰り出せたとして、九番目の突きが黒の核晶に当ったら・・・・駄目だみんな死ぬ。

ハドラーの必殺技を殺し、尚且つそのままで流れる様に打てる二段構えの必殺とは言えないが、それでも確実に二撃目が撃てる技。
それが二段抜刀術　双龍閃・雷
左手で鞘に収まった雪白を振り上げ覇者の剣と超魔爆炎覇の威力の全てを上方に行かせ、上体がのけぞり命を振り絞った代償に数瞬動けなくなるハドラーの隙を見流さず、畳みかけるべくティファは右手で雪白の柄を掴み鞘走りさせ抜刀する。

まさに流れるような連撃

本来のこの技は利き手ではない方に鞘を持ち、抜くと見せかけて鞘で相手の武器を止める虚実の技。
だが自分では利き手ではない右手でやった時、鞘で止めようとしてもハドラーの筋力と超魔爆炎覇の威力に負けてそのまま斬られてしまう。それに左手で凌ぎ切れた後、利き手で技を出そうとすれば持ち替えるしかなくロスが出来てしまう。それでは一瞬の動きが明暗を分ける極限の場では使い物にならない。
ではどうすべきか？利き手よりは威力が落ちようが、雪白の性能と追加効果で筋力を底上げし、凌ぐために全身の力で飛び上がる時に上がる左腕の速度を殺さずそのままハドラーを可能な限り上体をガラ空きにして無防備な態勢を作り出させ、右手は自然体で抜刀すればいい。

だからこれはただの雷なんかじゃない。私のオリジナル
「二段抜刀術！変異双龍閃・雷!!!!」
元の技などこの世界の誰一人として知るまい。だけど私は知っている、だからこれは—変異—だ。
利き手ではない手で技を出すのだから。

やられる!!

見た事も、まして聞いた事もないティファの技が確実に自分の首を切り落としに迫っている！
その動きはいやに遅く動いている様に自分には見えるが、これはきっと死にたくないと俺の本能が抗いどうにかできないかと高速で思考している証だろう。
極限での戦いを幾度か経験しているうちに何度か味わった感覚だ。
先の大戦でのアバンとの最終戦以来で久しくの事に驚くが、その分ティファの技がいかに見事かまじまじと見れている。
動きに一切の無駄なく途轍もなく洗練された必殺技。
技の語尾に雷と言っていたが、まさしく竜の娘が使うに相応しい。雷鳴轟かし相手を怯ませ雷が降ってくる。
不思議と心は凪いでいる。アバンの時は死にたくないと必死に念じたのが嘘の様に。俺はこれで敗れるのか・・・・満足だ・・・・満足の筈・・・なのに・・

「おおおおお!!!!」
自身の肉体の突如とした動きに驚愕するハドラーの思いとは裏腹に、ハドラー自身の肉体はそれを拒絶する。死にたくない!!それは生き物の本能として当たり前であり、本来はそうでなければおかしいと体が、本能ががハドラーの死を許しはしなかった！
全身が動けずとも、一部分なれば動く事を証明してみせた。死なない為に、足掻いて足掻いて無様でも生きろと！

「なんと!!」
「そんな!!もう少しでハドラーの首が!!」
「おぉ・・・・ハドラー様!!お勝ちなされよ!!!」
動けないかに見えたハドラーの執念ともいうべき肉体の動きに、バランとダイは驚愕しフェンブレンは歓喜する。
ティファ自身があの技は二段抜刀術と言っていた！ならばここを凌ぎ切ればハドラーにも勝つ見込みが高まる。

例え体の一部を切り落とされようと、今度こそ振出しに戻るはずだ!!

そんな・・・・・

思った通り右手での抜刀術であっても、雪白の威力でハドラーの体を斬り裂けた。

雄叫びと共に咄嗟に振り上げられたハドラーの左腕を斬り落としたが、太い筋力を斬り落とす際に雪白の軌道を図らずも逸らされ、首ではなく左胸部から脇腹に懸けて斬り裂いてしまった!!

なんで・・・・どうしてそのまま逝かなかったの!逝ってくれなかったのハドラー!!!

・・・・・最悪だ・・・

自分が今考えている事がいかに殺される相手にとっては理不尽な事かなど自身が一番承知している!だがこれで、ハドラーがバーンの裏切りを知らずに逝かせるという私の望みが潰えた・・・・

技の不発などどうでもいい!まだカバー出来る技はある!!

だがこれは・・・・・これではもうどうしようもないではないか!!!

斬り裂きながらティファは泣くのを堪え、唇を噛みしめ苦い顔を見せまいと俯く。

ティファが死角となりこの場にいるダイやバラン、フェンブレンはおろか、―仕掛けた―バーン自身にもまだ見つかっていない。

ティファは自分にだけ見えている物に対し視線だけで射殺せる程の、ハドラーに終ぞ向ける事は無かった殺意を浮かべた瞳でそれを睨みつける。

左脇腹を斬り裂いた事により露になった呪われた忌々しき黒の核晶を

だがそれで露わになる前に時間が戻る訳でも、まして黒の核晶が消えてくれる訳でもない

・・・ハドラー、貴方はこの先一生私を許さなくていい！

ティファは覚悟を決めた

苦い決着

同時刻　死の大地地上部

「はァァァァ!!!」

「クッッ！小賢しい!!!」

「おっさん！」

「おう！獣王激烈掌!!!!」

死の大地の中でも岩場と崖が多い地にて、勇者一行とハドラー親衛隊達が激突を繰り広げている。

互いに負けられない思いを背負いどちらも欠ける事無く、一行はポップの、親衛隊はアルビナスの統率の下にまさにチェスの盤上の駒の様に目まぐるしく動く。

互いに相手の弱点を突かんと、マァムをブロックに行かせようとするのをシグマが横槍を文字通り入れそれをクロコダインがアックスで討ちかかり、まさに堂々巡りで膠着して随分経つ。

ヒュンケルが縦横無尽に動ければ膠着した戦局の打破になるが、ヒムに食いつかれ身動きが取れずにいる。

「どうしたよ！その新品の鎧は飾りか伊達か!!」

「ちぃ!!大地斬!!!」

ようやく戻ってきた長年の愛剣の一撃を、ヒムはヒートナックルスクリューアッパーを繰り出して剣をいなし、そのままヒートシュートを打ち込もうとしてしたその時

バッガァァァァン!!!!

何かが吹き飛ぶ音の後に、微かに大地が鳴動しヒムはバランスを崩しその隙にヒュンケルは飛び退り距離を取る。

もしかしたらそのまま剣を振るえば、ヒムを仕留められたかもしれないがそれよりも

「・・・・・ティファ？」

大地が鳴動する前に暗黒闘気と自分がよく知る闘気の気配の方がはるかに大事であった！
今のは・・・そんなまさか!!ティファは今サババの砦でノヴァを筆頭に大事に堅固に守りの中で眠っているはずだ!!
そう想おうとしたが、戦士としての思考が否定する。今の闘気の気配は確かにティファであったと。それが証拠にマァムもクロコダインも戦闘をやめて防御しながら自分の下まに集ってきた。
「ヒュンケル!!今の・・・・今の・・」
「間違いない・・・・ティファの闘気だ！」
闘気を扱う二人の言葉に、ヒュンケルも確信し愕然とした。あの守りをどう突破した、どうして来てしまった!!
「何馬鹿言ってんだよ!!」
マァム達の言葉にポップが青い顔をしてトベルーラで降り立つ。
「ティファはあいつは・・・」
「おいお前達!!」
ティファがこの場にいるはずが無いと否定しようとしたポップの言葉をヒムが遮る。
「今日のハドラー様の一番の相手はあいつだろうがよ！約定が果たされそろそろ決着が近いんだろうよ。それなのに何オタついてんだよ？」
ポップ達が驚愕している事は、ヒム達にとってはハドラーから予め知らされていた事で既定路線であり、闘気の気配がしたくらいで何を驚いているのか呆れ果てる。
「だがまぁ、あんな凄い闘気をあんなちっこい体に秘めていたのか。お前達が驚くのも当たり前か。」
ヒム達は知らず、ポップ達は置いてきた者として、おのずと次の行動が違うのは自明の理。
ヒムはティファのあの小さな体に、ハドラーと張る凄まじい闘気を内包していた事に感嘆している間に、ポップは全員に小声で自分に掴まるように指示し一気に飛んだ!!

トベルーラ!!!

「あ!待ちやがれ!!!」

意表を突かれたが慌ててヒム達も内部にルーラをかけて追っていく。

ハドラー様の邪魔はさせねえ!!あの方は命かけてティファと戦うことを望んだんだ!!

ポップは自分のトベルーラをこれほど遅く感じた事は無かった。時間にすればほんの数秒か長くとも十秒もかからないが、其れでも遅いと感じた。早く言って真相を確かめなければと思考がせっつき、闘気が噴出した箇所の穴を山間に見つけすぐさま降下する。

その先に見たのは、最初に見つけたのはダイと何かに怯えるように震えているバランと、何故か手足なく転がっているフェンブレンがいた。

ポップはその横に降り立ちすぐさまダイに駆け寄った。

「おいダイ!今ティファの・・・ティファ⁉」

ダイの肩を揺さぶり問いただす前に、気配がしてそちらを振り向けば・・・

「ティファ!!!」

「これ・・・・何があったのダイ!!」

「一体・・・・」

見つけたティファとその周りのその有様に、ポップは絶句しマァムとクロコダイン、ヒュンケルも凝視する。

「おいお前達!!決闘の邪魔すんじゃねぇ!!」

「まだ二人の決着・・・・なんだあれは!!!」

「ハドラー様!!!」

「ブ・・・ブロック!!」

追いついてきた親衛隊達もポップ達を止めようとしたが、ティファとハドラーにかが付き目を向け途中で口を噤み言葉を喪う。

大魔王達の部屋に通じる入口の壁に白い刀身の雪白がハドラーの

右腕を縫い留め、その横にティファが立っている。その左手は青い血に濡れ、まだ血が滴り落ちている。その掌にはティファの手よりもはるかに大きい見ているだけでも禍々しさが伝わってくる何かを手に持ち、俯いて佇んでいる。

ハドラーの方は左脇腹に抉られた傷があり、呻き声を上げながらも身動きが叶わないのかピクリとも動かない。

「・・・・べほちゃん、もう少しべホイミお願い・・・」

「―うん！―べホイミ―」

「べほ!!」

その光景と、自分が砦に置いてきた相棒がいる事に更にに驚いたヒュンケルがバランに問いただす。

何故ティファがここにいるのかもさる事ながら、重要なのは何故ティファが敵で倒すと宣言していたハドラーの治療をべほにさせているのだ。

露呈させてしまった・・・・・映像を見れば、バーンは躊躇いなく使用するだろう。

私の考えが間違っていなければ魔界の為になりふり構わず有能な部下をも贄にして勝つことを優先する・・・・そんな事許したくない!!

倒せなかった、どうしても駄目なその時の為の用意はもうしてある・・・

「ハドラー・・・」

技の直後にティファの暗い声が自分の耳をうつ。まるで、愉しき事を無理やり終わらせなければならないと悲しむ様に・・・顔を上げたティファの泣きそうな顔を見てそれは確信に変わった!!

「よせティファ!!!」

何を止めようとしているのか己自身も分からないが！今ティファがしようとしている事は、ティファ自身にとってやりたく無い事だと

断言できる！
やりたくないのであればやめろ!!お前はなぜ自分の心情を無視し続ける!!そんな事だからお前自身が削られ遂には壊れたのではないか！
だが、ハドラーの祈りにも似た願いが叶う事は無かった。
「貴方はこの先、一生私を許さなくていい!!!」

叫び上げながら、ティファは首にかけているリングから煙玉を取り出し、視界を遮る。
・・・今更この小手先の事に何の意味が・・・
目眩ましにもならない直ぐにはれそうな煙にハドラーの思考が一瞬取られる。
その隙は本当にほんの一瞬、刹那と呼べそうな短き時にそれは起きた！
ドガ!!!!
グシャ!!!!!
「グゥオオ!!!!オオオ!!!」
一瞬あれば十分
逆手で雪白を持ちながらまだ力が入り辛いハドラーの巨躯に渾身の力で壁に激突させ左腕を刺し貫き縫い留め、見えている黒の核晶を引きずり出す為に左手を無造作にねじ込み一気に闘気でハドラーと体に接続している神経ともいうべき触手を焼き切る。
それは死にも勝る激痛であり、ハドラーから苦悶に満ちた声が広間を覆いつくす。
「ハドラー様!!!」
余りの苦悶に満ちた声にフェンブレンがハドラーが死んでしまうと悲痛の声を上げ主の名を叫び、ダイとバランも決着がついたのかと考えた。
本当はその真逆、ティファはハドラーの命を繋ぐ為に懸命に務めている。
・・・・温かいな・・・・ハドラーの体内は・・

泣きたくなる思考に無理やり馬鹿な事を思い浮かべさせ、左手は作業を、右手でリングから六角形の黒水晶と、―万能なる万能薬―とモンスター筒を取り出す。
もしも倒せず、こんな事態になってしまった時の為に用意した全ての物を取り出し、煙がはれる前にまだ結界に覆われている黒の核晶を取り出し、右手で素早く黒水晶を黒の核晶のあった場所に置き、液体万能薬の瓶の蓋を口で開け黒水晶と周りにかけ、最後にデルパを唱え中に居たモンスターに頼む。
「べほちゃん、べホイミ・・」
「―ピ!!・・・・べホイミ!!」
砦で待っていて欲しいというヒュンケルのお願いだったが、明け方よりも更に前に、寝付けず散歩していた時ティファに会って頼み事をされた。
決戦に一緒に行って欲しい
たとえどんな人でも治療して欲しいと頼んだらしてほしいと。
「―分かったティファ、一緒に行く。―」
ヒュンケルも大切な相棒だが、ティファお大事なお友達だ。頼み事を引き受け呼ばれて見れば、満身創痍の・・・・ヒュンケルをいためつけた奴がいた!!
バルジ島でのハドラーの所業をべほは覚えているが、それでもティファの頼みと、べホイミを掛ける。
「ありがとうべほちゃん・・」
ティファはお礼を言いながら最後の作業をする。
結界を壊さず、その上を自身の白い闘気で覆いつくす。
紋章は発動できないが、それでも確信がある。自分の闘気には間違いなく竜闘気が自然と混じっている事を。
それは先程近距離でのハドラーからのイオラを闘気で防いだ時無傷であったことが何よりの証。
それらすべてが終わった後にヒュンケル達が来た。
これで大魔王が魔法を注ぎ込んでも防げる。
遠距離操作による爆発が無理ならミストバーンが来る・・・・これ

を爆発させたために・・・
こんな・・・・・こんなものが私達の邪魔を!!!
「よさぬかティファ!!!」
左手を振り上げ戦慄くティファに、バランは一瞬で駆け寄り細い腕を本気で掴んで止める。

何故ここに、地獄の火種・黒の核晶がある!!!
この中で唯一、ティファ以上に黒の核晶の怖ろしさを知り、なおかつティファと違い実際に地獄を体験したバランは自分の体の震えが止められずに、それでも娘の暴挙を止める。
「・・・・ごめん父さん・・・腕・・・痛い・・・」
「ッツ!済まない・・・ティファ、その黒の核晶を今すぐ渡しなさ・・・」

「貴様等は何処にも行かさん。」
バランの言葉は遅すぎた。
黒の核晶を自分が受け取り、死の大地から最も遠い海上で安全に爆破処理しようとしたバランの言葉は、いつの間にか広間上空に浮かぶミストバーンによって遮られる。

―心―の変化

洞窟でザムザさんと二人きりの最後の夜に教えて貰った。
ハドラーと死の大地で再会した時、とても冷たい禍々しい、黒い瘴気が渦巻いている気配がするものが埋まっている気がすると言ったら、それはおそらくこれだと小箱を取り出して見せてくれた。小指の爪ほどの黒の核晶を。
ザボエラの頭脳をもってすればこのくらいの大きさなら個人で作れたらしいとは、これが何でありどれ程怖ろしいかのレクチャをーを受けながら聞いた事だ。
予算と何度も作るのは危険な作業なので二度だけ作り、一つは失敗したが、一つがここにあるという事は・・
「私の父が、護身用に持っていろと・・・父なりの愛情だったのでしょうが使う気はしませんでした。」
使っていたらロモスは消失していた。そんな大量破壊兵器に手を染める気にはなれない。
冷たく禍々しく、黒い瘴気を感じさせる体内に埋まっているものだとすればこれしかないとも。
「ハドラー様を助けたいですか?」
「助けるかどうかは・・・でももしかしたら・・」
「分かりました、ではそのようにしましょう。」
敵の軍司令官助けるのに何故も何も聞かずにザムザはティファ望みに奔走してくれた。
まず黒の核晶をただ抜くだけでは死んでしまう事。あれを埋めたのはおそらく魔界の神の仕業であり、長年ハドラーの体内にあり最早第三の心臓と化しているであろう事を。
「黒の核晶のもととなっている黒水晶を手に入れてみます。それが手に入れば後は簡単です。ハドラー様の体内に黒の核晶を抜いて直ぐに黒水晶を入れて、生命を活性化させるタイプの万能薬を振りかけ回復呪文で塞ぐのです。それがうまく作用すれば、黒水晶が黒の核晶の機能を果たす筈です。」

其れなら当てがある。レオナ姫とポップ兄を助けた精霊樹の葉入りの万能薬の最後の一本が。
「ティファさんの望み通りになるといいですね。」
実際には誰もそんな事は試した事は無く上手くいくかどうかなど分からないのに、にこりと微笑むザムザさんに、あの時自分は何と答えたのだろうか。

「あ・・・・あれは!黒の核晶!!!!」
ティファがハドラーから抜き取った物体を見た時のミストとキルの驚愕は筆舌に尽くせぬものがあった。
なぜハドラーの体内にそんなものがあるのか等、自分達にとっては分かりすぎるほど分かっている!!
それでも
「バーン様、なぜハドラー君の体内にあんなもの埋めちゃったんですか?」
茶化す様に、それでいて冷たい瞳で怒りの色を浮かべているキルは

恐れげもなくバーンに問いただす。
直ぐにあれを誰が埋めたのかをその鋭敏な頭脳で弾き出し、埋めた自分を詰る様に。
今のハドラーは自分にとっては大好きな子。そんな子の中にあんなものがあっては黙っていられない。

こ奴を育て過ぎたか
近頃のキルの言動に頭を痛めていたバーンは、自分がした事とは言え育ちすぎ余計な意志を持ち始めたキルに手を焼く。
キルがヴェルザーから送り込まれてきた当初からオートドールで、近くにいる一つ目がマスターだとはすぐに見破った。
だが常のオートドールとは違い、どこか自分で動いている節があり面白そうなので探ってみれば、なんと自律思考する為の疑似人格が植えられているのを突き止め興が乗り、七千年間一度も使った事の無い備わっている能力ハイ・エントを試してみた。
無論ミストには内密で。二人きりの空間内に閉じ込め、疑似人格を更なる高みに昇らせる為に—生命力を与える—ハイ・エントを。
このような能力が一体何の役に立つと今まで忘れはててていたが、—人形を真なる生命体—にして見るのもまた一興。
無論キルにそんなことをしたと覚えられているのも面倒なので、記憶を消すリャナンシーも使用して。
自分のハイ・エントは、生命と記憶を司り、もう一つはあらゆる物質を転移させる能力。使い勝手が悪く自分には不要だと思っていたのが、存外暇つぶしには使える事が分かりキルがどう育つかその時は楽しみにし育ってくれたのは喜ばしい・・・だけでは済まなかった。
まさかここまで育ち人臭くなろうとは・・ティファに出会って加速したようだが、あれは本当に周りに与える影響と、次に何をしでかすのか全く読めない所が怖ろしい。
現に、今の今までハドラーの側に居た魔王軍の誰もがハドラーの体

内にある黒の核晶に気が付かず、如何なる時も冷静なるミストをして驚愕せしめているのを、あの娘は平然と持っている。
ハドラーの外傷が塞がれる前にちらりと黒水晶が見えた。ならば手に持っているものが何であるかは当然知っているはずだ。でなければ黒の核晶の代用品を再度埋め込み修復を試みる等出来はしない。
何故その存在を知り、どのようにしてハドラーを救う手立てを探し出してきたか、五年前の大混乱同様全く分からない。
あれは早々にどうにかせねばならない。キルの言葉を無視しながらハドラーとティファを惜しみながらも遠隔操作をし、爆発に巻き込まれない結界を張ろうとしたが起爆魔力は作動しなかった。

・・・そうか、あの娘もまた竜の騎士の端くれであったな。
紋章を使えずとも、闘気の中に自然と竜闘気が備わり、黒の核晶の暴発を防ぐか。
「ミストよ、行って魔力であの黒の核晶を起動してまいれ。」
「バーン様!!それは・・・・」
「余の言葉に不服かミストよ?」
近頃ミストも自分で考え始めるか。以前のこやつは余の考えが全て正しいと何も考えずに、盲目的に追従してきていたが、はてさてどう返答するか?
「・・・・畏まりましたバーン様。行ってバーン様の敵を全滅させてまいりましょう。」
「うむ。キルは黒の核晶が発動したと同時にティファを空間からこちらに引き入れよ。」
あれには聞きたいことが山程出来た。
ミストは内心ハラハラしながら主と親友を見守る。
キルは暗殺はすれどもどこか正々堂々とし、相手の前に姿を見せて刈り取ってきた。罠は使えど謀略・策略の類を嫌悪しているきらいがある。
そこにハドラーは見捨て、小娘だけをこちらに引き入れよとの命令に素直に従うだろうか?

自分は大魔王に仕える義理はあれど義務はないと常々嘯いているキルが・・・

「畏まりましたバーン様。」

キル⁉

ミストの内心の心配と裏腹に、キルはあっさりと・・・・どこか機械的にその命を受け取りミストを愕然とさせた。

それは普段のキルとは全くの別人の雰囲気を漂わせているからだ。

だがバーンには直ぐに看破された。とうとう人形の勝手な振る舞いにマスターがしびれを切らし、自らがキルを動かし始めたのだと。

これはこれで退屈になろうが、戦場を引っ掻き回され魔界の悲願の邪魔をされてしまう事とは引き換えには出来ない。

「行って、黒の核晶を爆発させて来よ。」

「お前達を何処にも行かせん。」

出現したのは大魔王本人ではなく、ミストであったことにバランは拍子抜けする。このハドラーの体内に黒の核晶を埋めたものなどとうに知れている。

恐らくバーン本人の魔力が注がれれば黒の核晶は起動し爆発する。

だが来たのがミストとは・・・
「貴様一人が来た所で何になる!!死ぬのは貴様だ!!!」
ミストとは直接戦った事は無いが、予想するに自分を上回ってはいまい!!
ダイ達も応戦態勢をとるが、ヒム達は事態のそもそもの全容を知らずどうするべきかと迷っているその時
「ティファよ・・・・その・・・手に持っているのはなんだ・・」
弱々しくもハドラーの声が聞こえた。

大勢の気配に目が覚めたハドラーが最初に見たのは、禍々しい物であった。それはに何かと問うたが、ティファは沈黙をして教えてはくれない。
再度問おうとした時、教えてくれたのは意外にもバランであった。
「ハドラーよ!それは地獄の火種、お前達魔族・魔界の者達も禁忌としている超破壊兵器黒の核晶だ!!!」
「・・・・なん・・だと・・・」
「そしてそれはお前の体内に埋まっていた!!」
「そんな・・・・何故俺の体内にそんなものが・・・」
「知れた事!!おまえを助ける振りをし、その実強敵と相打ちにさせんと目論んだ大魔王バーンよ!!そしてお前諸共我等を始末しようとミストバーンもそこに居るのだぞ!!!!」
一切をバランはぶちまけた。この際ハドラーの心情を無視してでも、何が起きているのか分からない息子達全員に、如何に黒の核晶が危険であるか、そしてそれを目論みハドラーを駒に扱いしたのは誰かを暴き立てる為に。
それが果たして正しいかは分からない。自分もハドラーの戦士としての内面に触れハドラーを評価していただけに、このような事はしたくはない!!
それでも、これでハドラーと親衛隊達に味方の裏切りは十分に伝えられていよう。
そして選択するがいい。駒としてでも主の思いに準じるか、親衛隊

達と共に反逆するのかを。

「・・・ミストバーン・・・・・」

バランの言葉を全て理解し、偽りが無い事を確信する。昔の自分には確実に黒の核晶などという危険極まりないものなど埋まってはいなかった。

ではどこからだと言われれば、大魔王バーンに救われ新たな肉体を与えられた時しかない・・・・

分かってしまい、それでも問うてしまう・・・

「ミストバーンよ・・・お前にとっても俺は駒でしかなかったのか?」

以前までは不気味で、いつ自分の寝首を掻くか分からない者であった。

しかし自分が本気で強さの高みを目指さんとした時、それを肯定してくれたのは間違いなくミストバーンであった。

ザボエラの改造部屋まで来て、自分の現状を見てとても驚き、それでも改造の時間を稼いでほしいという自分の願いを、バーン様の城・鬼岩城をもってしてパプニカ強襲をしてくれた。

嬉しかった。自分を気にかけてくれるものが身近にいてくれたのだと思い・・・・一昨日と昨日の夜は騒がしく・・・そして楽しかった・・・・キルバーンも入れて、本当に楽しかったのだ!!

寿命迫る中で心が通じ少しは絆と呼べる者達が出来たのだと・・・・喜びさえ覚えたのだ・・・

その自分の思いを嘲笑うかのように、全て知っていた上で自分に接してきていたのかミストバーン

ハドラー・・・・・・

ミストとても身を切られる様な感覚に戸惑う。今までは唯バーン様の命令を遂行する事こそが無上で唯一の自分の喜びであった。

だが今は・・・・主が自分に与えてくれた任務を辛いと思うなどとは・・・

しかしそれでも!自分にとって・・・

「大魔王バーン様の命令は全てにおいて優先される。」
その言葉を行動で示すかの如く、ミストは封印を解き、バーンの若い肉体の顔を晒す。
ハドラー、せめてわが手で眠れ

破滅への序曲か・・・滅びの道か・・

若い魔族の青年
それが―ミストバーン―の素顔。
今までミストバーンは大魔王バーン・キルバーン同様軍の中では謎に包まれた者であった。
前者二人はそもそも人前に出る事無く当然の話で、ミストは参謀として現場に幾度も出て来ても寡黙で怜悧冷徹な態度に、誰も好んで話さず外見の姿が分かっているだけで、衣の中を見た物が誰もいなかったからだ。それこそ同僚のハドラー・バラン、元とは言え弟子であったヒュンケルとても。
その顔は冷たさを感じるが見る者に静謐を与える美しさがそこにはあった。
衣の封印を解く時のあの圧倒的な威圧感が嘘の様に。
ミストは衣を脱ぐのに宝石付きの前止めを取り外すのではなく、真っ二つに割った。
その時に発せれられた威圧感だけでダイ達は圧倒されかける程であったが、衣が取れると同時にその気配は凪いでいた。
丸で元からそのような力はなかったと言わんばかりに。
だが真の強者とはそのようなものかもしれない。内に秘め込み、必要な時に必要な力を取り出し、無駄な力を一切排する事が出来ている者こそが一流の強者とは言えないだろうか。
もっともミストの場合は、主の若き頃の強靭な肉体を―凍れる時の秘法―でピークを保つために、そして主がそれ以上歳をとらず、不死紛いになる為に封印をしている肉体に入って番人をしているにすぎないのだが。
それでもバーンほどでなくともミストは今までこの肉体を主と親友以外に晒した時、その二人以外はすべて消し去ってきた自負があり、魔力を練り上げティファの持つ黒の核晶に注ぎ込む。
白い閃光が迸り、黒の核晶の起爆が作動し始める。

一瞬の静寂後、何もかもを揺るがす大鳴動が一切の物を襲う。それは破滅への序曲なのだろうか？

「申し上げます！死の大地もこのサババ同様鳴動しています!!まるで活火山が今にも噴火するかのように!!」

黒の核晶の起爆から数瞬後、ノヴァたちがいるサババの、それも奥にある砦までも揺るがし、何事かが死の大地に起きたと直感が働いたノヴァがトベルーラで偵察すれば・・・

「あ・・・あ・・なんてことに・・・」

死の大地は大鳴動し、近隣の海のモンスター達も必死に逃げているではないか！幸いにもこの辺りに航海している船はなく安堵したが、まるで地獄の蓋が開かんとする光景に、さしものノヴァも顔を青褪めさせ、父バウスンとレオナ姫達に報告にすぐに戻った。

これは・・・・

広間でも多々事ではない気配にレオナを中心とし、バウスンとアキームがノヴァを筆頭として救援対策を講じるべきか話している。

ボラホーンもバランとダイの身を案じ今直ぐにでも飛び出したい

が、ティファを残していけないと必死に留まっている。
「マトリフ様、死の大地の異変はダイ君達が・・」
「分からねぇ・・・だがいい予感は確かにしねぇな。さっきからとんでもない気配が・・・」

「きゃぁぁぁぁ!!!!」
レオナが頼ったマトリフも、こんな大鳴動は初めてだと表情が厳しくなった矢先、メルルが悲鳴を上げながら蹲り、何事かとエイミが駆け寄り支える。
「メルルさん!!」
「あ・・・、消えてしまう・・・・・怖ろしい邪悪な力が皆さんを消してしまおうとしてます!!!!」
黒く禍々しい物が光と共に弾けた時！ダイ達が消えてしまうヴィジョンをメルルは見てしまった！
だがその直後
メルルさん落ち着いて
「・・・・ティファさん？」
春風の様に暖かく優しいティファの声がした。
いつもの様になんとかします。ですから怯えなくとも大丈夫ですよ。
いつもの様に・・・・困りごとがあればいつでもティファさんが解決してくれた・・・・
ティファの声に導かれるようにメルルの震えは止まり、顔を上げる。
確かに今ティファさんの声が・・・
「マトリフ様!!」
メルルは揺れをものともせずにマトリフに駆けよった。
「ティファさんは本当にこの砦で眠っているのですか⁉」
血相を変えながらとんでもない質問をするメルルの後に、ノヴァも同じことをマトリフに聞いてきた！
「実は僕も疑問なのです。先程ティファの心が斬り裂かれるような悲しみを受けたのを感じたのです！眠っているだけならば感じる事の

無い痛みを・・・あそこに眠っているのは本当にティファなのですか!?」
　大地の鳴動と、迫り始める危機的な気配よりも二人はティファの所在の方が大事であった。
「お前達・・・俺は確かに嬢ちゃんにラリホーマを掛けたぞ！アレは確かに・・・」

「そのお話は移動しながらでもよろしいでしょうか皆様。」
　二人に詰め寄られ珍しくたじろぐマトリフの後ろから女性の声がした。その声は凛としており、命じる事に慣れた王の声であった。
「・・・・貴女は・・」
「フローラじゃねえかよ!!」
　広間に入ってきたのは長い髪を後ろで縛り、軍服に身を包んだカール女王フローラであった。
　レオナはフローラと幾度か手紙の遣り取りをしていたが、生死すら知らなかったマトリフは驚きを隠せなかった。
　あの竜の軍団の中よくぞ生きていてくれたと。
　今起きている決戦とこの砦の事、は随分前から連絡を取り合っているパプニカ王達から聞かされており、異変が起こる前から決戦で何があってもいいようにとフローラとそれに付き従うカール騎士団が移動してきていた。
　それは何かの采配の様に、導かれるように

「お久しぶりですマトリフ様。ハドラー大戦終結直後以来ですが、今は一刻も早くこの場をお立ち退きを！私どもの隠れ砦の用意がありますのでそちらに・・・」
「それは困りますよ女王陛下。」
　その声を更に遮った者がいた。広間から寝室の二階へと続く階段から降りてきたのは、白い寝間着を着た―ティファ―であった!!
「―主―からの命令を果たさせて頂く為にも、全員何があろうとこの砦からお出に・・・いえ失礼しました。全員ではなく、レオナ姫様、バ

ウスン将軍、フローラ女王陛下と―ノヴァ様―と―マトリフ様―にはいてくだされなければ困ります。
後は皆様女王陛下の配下の方にカール南西の森にある隠し砦に行っていただいても構いま・・・・」
ズバン!!
「貴様・・・何者だ!!ティファ様をどうした!!!」
二階から槍をふるい降り立ったラーハルトは―ティファの様なもの―に殺気を叩きつけ問いただす!
大地の鳴動と共に―起きたこれ―に反応しきれず固まってしまったが、容赦はせん!!

「・・・・・もう起きる時間ですか・・」
何の気配の前触れもなく突如として起きた―ティファ―に、ラーハルトは恥じ入りながらも謝罪から始めようとしたのを―右手―を上げて止められた。
「ティファ様は誰も恨んでいません。―ラーハルト様―もお気になされず。」
声も容姿も確かにティファなのに!自分が知っている―小娘―とまるで違う者が外に出るのを許してしまった!!
「落ち着いてくださいラーハルト様。私は生き物ではありません、式神と申します。詳しくは―私―に書かれておりますれば。この鳴動は直ぐに主が収めましょう。皆様はさらにこの後の異変に対処してください。では」ポン

自身を生き物ではないと言い、―しきがみ―と言う聞いた事など無い名称を名乗った者が、突如として紙の束になった!!

誰よりも早くマトリフがその紙の束をつかみ取った。こんなくそ忙しい時に罠の確認なんかしてらんねぇ!罠なら躱すか壊す!!
ティファとおんなじ声でマトリフ様と言われたのが余程癪に障ったのか、それとも嫌な予感に駆られたのか・・・

そこに書かれていたのは・・・・

「まさかミストバーン!!貴様が・・・貴様こそが真の・・・」
「・・・・無駄なお喋りは不要だバラン。地獄に行く貴様達が知ってなんになる。」
黒の核晶を起動させられるのはバーンのみ!それをミストバーンがしたという事は、ミストはバーンという事に他ならないとバランは真実に辿りついたが、ミストの言う通り、黒の核晶を起動が始まってしまった今!その事に何の意味があろう!!
「ティファ!!!それを早く私に渡しなさい!!!」
黒の核晶とてすぐに大爆発する訳ではない。超破壊兵器故に溜を必要としいくばくかの時間た確かにある!今ならば自分が竜魔人となり、ドルオーラで相殺させる!!
自分の命と引き換えになる事に何の躊躇いも無く、バランはティファから黒の核晶を取り上げようとしたが、ティファの右手で打ち据えられた!
「貴方の言う通りだミストバーン。地獄へ行く貴方のお喋りなど何の意味もない。」

それまで俯き黙っていたティファが突如として喋り出した。砦に残してきた式神に念話で指示し終えたティファは、キングマキシマムに向けたあの冷たい瞳をミストに向ける。
「貴方を尊敬に値する敵だと思ったのですが見立て違いでしたか。残念です。
しかし―逃がさない―のは貴方ではなく私の方なのですよミスト・バーン。」
冷たい瞳に渦巻く怒りがティファの全身を支配しつくす。それはハドラーとの戦いを邪魔されたからではない、ハドラーを駒と使った主の命に唯々諾々と従い、先程の嘆きをハドラーから言わせたミストが許せない！許すものか!!
その怒りは冷気を伴いこんな異変の最中であってもダイ達を縛り付け口を差し挟むことを許さない。
ミストはそんな気配よりも、キルが一向に動かない事に訝しむ。予定ではもうとっくにティファだけを主の前に引き入れ、黒の核晶だけを残し自分も帰還する筈だ。
キルは・・・やはり主の命を受けない事にしたのだろうか?・・・・それを困りごとではなくどこかホッとする自分がいる・・・・キルには策略を嫌ったままでいて欲しい。
こんな汚れ仕事は自分がしてきた事ではないか。
ハドラー、恨むならば起動させた私を恨め。
キルの代わりにティファを攫う為に、バランを目印としティファの側にリリルーラの座標を合わせたが
?・・・何故だ・・・
移動できず、もう一度試みるも発動しない。ならば主と親友の下に一度向かおうとしたが、何か目に見えない壁に阻まれた!!
それはキルも同じであった。ピロロに自我を乗っ取られ為す術もなく策略をさせられているキルは、それでもしぶとく育てた自我を守り抜き、開かない空間に苛立ち次第に焦り始める。
このままでは・・・
キルは突如として広間へと続く通路への扉に向かって走りだし、開

けようとしたびくともしなかった！溶岩系の罠で溶かそうとしたが、其れすらも発動しない!!
「そんな！バーン様!!開きません、空間はおろか扉さえも!!!これではミストが死んでしまいます!!黒の核晶を止めて下さい！」
親友の危機に自我を乗っ取り返したキルは、バーンの下に走りながら懇願をする！
ハドラーだけではなく、このままではミストをも喪ってしまってもいいのかと。
「・・・今、余も試したが止められぬ！何かが・・・見えない壁に阻まれておる。」
「そんな!!」
逃げてミスト！お嬢ちゃんもハドラー君も大事だが！親友の君を喪うなんて僕には耐えられない!!

キルの嘆き、バーンの焦りを受けたが如くミストもまた焦り絶叫する。
「一体何をしたのだ小娘!!」
仕組みは分からない！だが、この不可思議な現象の元凶は間違いなくティファだと確信を持って。
無いところから正答を出したミストにも、矢張りティファの瞳は冷たいままで、だがそれとは裏腹に燃え盛る炎のような苛烈な答えが返された。
「言ったはずだ!!この決闘を邪魔する者は、横槍を入れるものあらば塵も残さず消滅させると！
その道を選んだのはお前だ!!私は許さない!!ハドラーの高潔な魂を傷つけ嘆かせたお前を決して許すものか!!!」
常の敬語も相手に対する呼び方すらも変え果てたティファの口調からその怒りの度合いがいかに凄まじく深いか分かる。
「私は一行の者達に伝えた！勝たねばならない戦において、罠や策略は致し方がないと！だがこれは違う!!慕う相手の思いを利用し尊厳

を踏みにじり、駒とし魂を穢したお前達は謀略者だ!!
私はな!そんなものが嫌いだ!!虫唾が奔り消してしまいたい程に!!!綺麗事だと笑うか?
世の大変さを、生きる事の難しさを知らぬ子どもの戯言と言いたいか⁉それでも構わん!
私は私の思う通り!偽りを言わず宣告した事は果たさせてもらう!!」

策略以下の謀略・・・・私は・・違う!!全ては主の、ひいては滅びの道を辿らんとしている魔界の為に!!
だが、本当にハドラーを駒とする意味があったのだろうか・・・自分がハドラーを戻しながら前線に出て、キルと二人でティファ達と戦う事を主に強く進言していれば道は違ったのだろうか?
ティファの魂の叫びともいえる慟哭は、ミストの心の奥にまで届いた・・・届いてしまったが故にミストを罪悪感という鎖に縛り付ける
その隙をティファは見逃さはず無く、黒の核晶をミストに投げる。ガン＝フレアの発動条件が整ったが故に。

ガン＝フレア　黒の核晶すら暴発させる事無く一瞬のうちに塵にしてしまう怖ろしい技。
この技は発動の前準備として―空間―を封鎖する。それは自分やキルや、リリルーラで使用される亜空間から、扉・窓・穴など―外―に通じる現実空間の物全ても対象になる。
得物を逃がさない為に、ガン＝フレアの前段階発動ともいえよう。相手を確実に閉じ込めた後黒の核晶同様本領発揮するには少しばかりの時間が必要だが、黒の核晶よりも僅かにガン＝フレアの方が早く発動条件が整った。
「報いを受けて消えるがいい!!ミスト・バーン!!」
黒の核晶の白き閃光すらも飲み込む炎が一瞬見えたかに思えたが、何の音もせずに消え果た。

鳴動も鳴りやみミストも黒の核晶も消え果てた、炎に飲み込まれたが如くに

本来ならガン＝フレアが消せる対象は一種類だけと定められている。

だがティファは、ミストが来た時対処せずに黒の核晶を起爆させるに任せた。それを止める手立てはあったが、黒の核晶諸共ミストを消す為に。

黒の核晶にミスト、というよりはミストが操作しているバーンの若い肉体が放つ魔力を黒の核晶に纏わせる事で、あたかも黒の核晶もミスト・バーンの肉体の一部だとガン＝フレアに誤認証させる為に。

優れていると言え知恵のあるわけでもない技が誤認するには十分な魔法量を纏った黒の核晶を、ティファの言葉に心を抉られたミストは、懐に黒の核晶を受ける事で、ガン＝フレアは核晶とミストを混同し、そのまま諸共に消滅させたのだ。

この結末はミストが来なければ起きなかった事・・・・彼自身が選んだ滅びの道だ

死神

一切の気配も音すらも消されたような空間は耳が痛くなる
ハドラーとバラン等元魔王軍はミストバーンの恐ろしさを心底知っていただけに、ダイ達は実際に戦った時のあの強さを、ヒム達も先程の威圧感に竦んでしまっただけに、一瞬とも言えない瞬きで消滅した事が、それを平然と敢行したティファが異様に映ってしまった。
常の優しさは何処にもなく！報いを受けろと言っていた時のティファは、まるで断罪を下す神の様に・・・・
そのティファがグラリと倒れかけ、慌ててバランが抱き留める。
「とう・・・さん、みんな・・・説明を・・」
「分かった、お前がした事は途轍もない事だろう。体が辛いのであれば休みなさい。」
「・・・うん・・・お願い・・」
先程のティファとうって変わった弱々しい娘を労り地面にそっと座らせ、バランは黒の核晶の怖ろしさと仕組んだものを再度説明する。
娘は一行とこの場にいるもの全員を救ったのだと。その反動が体に来たであろう事を。ティファはバランの説明にもピクリとも動かずに、疲れたとぺたりと地面に座り込んでいる。

そのティファは頭の中で目まぐるしく現状を考えている。
ミストを消せたのは大きい。これでこの世界の大魔王の強さも、私の知る原作の若い肉体と融合した時の強さで止められた。
そう、この世界の大魔王はミストが守り抜いていた若い肉体と融合されてしまった時神々であろうが、双竜閃を手に入れ、竜魔人化したダイだろうが止めようのない、正真正銘の怪物クラスの力を有してしまっていた。
それを阻止できたのだから勝率はぐんと上がったろう・・・。
ある意味、これでこの世界の目的の為の第一段階を漸く終了できた訳だが、これでしばらく私は使い物にならない。

ガン＝フレアは威力がけた外れに凄い反面、使用後は少なくとも三十分はまともに活動できなくなる。
闘気も喪い、ハイ・エントの魔力も枯渇し本当に何もできない。
動けるのであれば、ハイ・エントの移動能力でこの場全員逃がしつつ、自分は結界を斬り裂き脱出する手もあるのだが・・・あれ？
なんで―アレ―が残ったんだろう？

・・・・そんな・・・・こんな状況でまともに戦えるはずねぇ!!!
「勇者一行全員撤退すんぞ!!!」
こんな訳の分からない状況でまともに戦って勝てる気がしないポップは瞬時に撤退を弾き出す。
あの黒の核晶が一つだけという確証はなく、また長年己に仕えていた腹心の配下を消された恨みがどんな力を大魔王に引き出させるか分かったものでは無い！
「お前達も連れて行くぞハドラー!!!」
「はぁ⁉お前何言ってんだよ!!」
「お前達こそ今の状況分かってんのか！此処に残っていたら間違いなくお前達全員消されるぞ!!」
ポップの発言に驚いたヒムの抗議をポップは瞬時に黙らせる。
自分達を消す為にハドラーを駒にした事を、ハドラー自身が良しとするはずはなく、そうであれば必然叛逆の芽を刈り取らんと手負いで弱っているハドラーと親衛騎団全員が処理されるのは自明の理ではないか！
「・・・貴方は・・・・我等は敵なのですよ!!」
ポップの説明を聞いたアルビナスはそれでも尚、否、それだからこそポップが自分達も連れて行くという理由が理解不能となった。
これが魔王軍の内部情報の最新版欲しさだとかの情報収集の為ならばまだ分かり、主を此処から連れ出せるなら渋々ながらう付いていく積りであった。

自分達の主は何処まで言っても魔軍司令官ハドラーであり、その主を駒扱いした大魔王と魔王軍の情報などくれてやる！
「うるっせぇ!!!時間が惜しいんだよ！グダスカ抜かさず行くぞ!!俺はな！お前達を見捨てたくなくなっちまったんだよ!!!分かったか!!」
ポップの暴言ともいえる発言に、アルビナス達は今度こそ固まった。
ポップにとっても、最早ハドラーは師の仇以上にティファの言う尊敬に値する敵となってしまった。
先生・・・いいっすよね、こいつは先生が知っている三流魔王じゃないんです。味方だと思っていた奴等からこんな仕打ちをされているこいつを助けてもいいですよね。
師ならば、アバン先生ならきっと許してくれるはずだ。かつてハドラー大戦の決着前に、その無限ともいえる慈愛の精神でバルトスを倒さず、ヒュンケルを育てる事を約束した先生ならばきっと、ベリーベリーグットですよポップと言ってくれるはず・・・あの満面の温かい笑みで。
「いいなダイ達も。」
「うん、ポップの言う通り。難しい事は後で考えよう!!」
・・・・真顔で少々おバカな事を平然と言うダイに、ポップ筆頭に全員ががっくりとしたくなった。
・・・・・・先代勇者と氷の勇者と、竜騎士を兼任している勇者ダイは・・・・そこは自分がいるから何とかしようと、鼻水を啜りながらポップは素早く―全員―の決を採る。こういう時こそ全員の意思を一つに固めておかないと後々問題になって、亀裂になられては困る。何よりこの方がヒム達も観念しよう。
決議とったら直ぐに全員つかまってもらい、やった事ねぇ人数だが一世一代の大ルーラで逃げ切ってやる！
マァム達も直ぐに頷きバランも賛成し、最後の一人に聞こうと足元を見れば・・・・いるはずのティファがいなかった!!
「おいティファ!!!!」

ミストが浮かんでいた辺りの地面に、真っ白なミストの衣が落ちていた。封印の前止めは消失したのに。もしかしてガン＝フレアはこれをミスト・バーンの一部とは認識せずそっくり残したのだろうか？・・・・・だとしたらミスト・バーンは確かに消滅したが、ミスト自身は本当に消滅したのだろうか？

他者が聞けば謎かけの様なもの思いに囚われていると、兄から呼び出され。返事をする為後ろを振り向く。

普段のティファは後ろを向く時、左側に顔を向ける事が多いいが、右後方から聞こえた為に体を右向きに捩じり振り返る。

それは偶然か天祐か。体全体を右に捩じった直後、ティファの左胸があった空間に突如としてレイピアの刺突が黒い空間から出現した！

更に言えば、そこは丁度ティファの心臓のど真ん中の位置であった。

普段と同じ左側に向いていれば、心臓は辛うじて貫かれず済んだかもしれないが、確実にレイピアが体のどこかを刺し貫き大ダメージを追うのは免れなかった。

強運により凶刃を擦り抜ける事が出来た。だがしかし、、空間から出現する死神からは逃れる術がなかった。

振り向いた瞬間目と目が合った。その瞳の色は殺気を宿した冷たい炎で、レイピアを偶然避ける事が出来たティファの細い首を瞬時に左手で締めあげ、渾身の力を籠め地面に押したしレイピアを逆手に持ち替え無言で振り下ろす。

今度こそ確実に心臓を刺し貫きティファの命を刈り取る為に

死神と影

この人は皆が言う程酷い人じゃない。チウ君もメルルさんもそう思っている。

だってこの人が変な事言うのは私だけ。他の人にはきちんと礼儀正しい、字も流暢で身のこなしも軽やかで優雅で、そして優しい。

ロモスの迷いの森で出会った時からそれは感じていた。ロカさん宅から出てきた私の事は間違いなく勇者一行の者かその関係者だと知っても、見逃してくれた優しい人。

初めて知らない大人の男の人に綺麗だとか可愛いと言われて嬉しくなった。例え敵で、この後どちらが倒される事になるのかもしれないと知っていても。

でもね、その人は困った事にずっと私の心を揺らし続ける。嬉しい事柄から困った事柄まで様々に。

今は・・・・どっちに揺れているんだろう？

黒い封筒を受け取ってもう五日は経つ。感謝状とお見舞い状は封を開けずにおじさんに正直に渡して、黒い封筒は私しか知らない。

もしも君が軍に甚大な被害を出しその事が僕の怒りに触れたなら、その時は僕自らの手で君を殺す

これは避けて通れない。どうしたって彼の親友は消さなければならないから。

正確にはミストが守っているバーンの若い肉体を消す、だが彼にとってはそれは同義語。

ミストも諸共に消滅するんだから、キルの怒りには正当性があるんだよ

自分の細い首を絞めている金属の手、其れなのに熱を感じるのはなんでだろう？

それは彼の怒りの度合いをあらわしているのだろうか。

ティファの首を左手で絞め地面に押し倒しているキルの瞳は真っ赤に燃え上がっている。
決して許さない
先程の自分と同じだ、ハドラーの魂と尊厳を傷つけた大魔王の走狗をしたミストに覚えた怒りと、彼を消した私に対するキルの思いはきっと一緒。変に執着している私よりも、親友を取る彼は、
本当に優しい人だと讃辞したくなる。
あぁ、本当にこの人はなんと優しい人良い人なんだろうか。
己を殺さんとしているキルの、それでもその心情を理解しているティファはこんな状況下でも笑みを浮かべんとする。
ただそれは、表情筋も動かせない程のダメージによる疲労で果たせないのが残念に思う・・・

メッラゾーマ!!!!

ゴオウ!!!!!
ティファに覆いかぶさり、まさにレイピアを打ち下ろさんとしたキルの顔面目掛け、ポップは間違いなく今日一番の最大火力でメラゾーマを遺憾なく放つ！
「マァム！ティファとこっちに!!!」
ポップのメラゾーマと並走する様に走り出したマァムは、地面に倒されたティファを素早く抱き上げすぐさまポップの下に走り抜け、ダイ達の後方で蹲る。
腕の中に居るティファを、迷子になってようやく見つけた我が子を二度と手放すまいとする親の様に。
渡さない・・・二度とティファをあいつになんか渡すものか!!
自分は、キルバーンがティファに馴れ馴れしく触るたびに嫌だった！
ティファに触らないで！穢れた事を平然と口にする者の手でティファに触れないでと何度叫びたかった事か!!
マァムの思いが伝わったのか、抱きこまれているティファはそっと

マァムを優しく抱き返す。
追撃してくるキルにはヒュンケルとダイが立ち塞がり、キルは仕方なく一度後方に飛んで距離を取り、その場に停止する。
だが、ティファを逃がすつもりは決してない!!

キルが憎々し気にティファに憎悪の目を向ける様に、この中で一番キルを嫌悪しているポップが口火を切った。
「てんめぇキルバーン!バランに斬り殺されたんじゃあねぇのかよ!!なんで生きていやがる!!!」
暫く待ったが誰も助けに来る者はいなかったとバランは確かに言ったはずだ!なら何で野郎は今ぴんぴんしてやがる!!
ダイ達一行が思った事を代表してポップが烈火のごとく追及する。
ティファを助けられたのは本当に偶然だった。ティファは何処だと何気なく左前側を見れば、キルバーンに押し倒されレイピアを突き立てられる寸前のティファを発見できた。
ほんの数瞬でも見つけるのが遅ければと思うとゾッとする!
マァムに抱きしめられ守られているティファは苦しそうに咳き込んでいるが、生きている・・・それだけで済んだが、こいつが生きている限り安心もへったくれもねぇ!
ポップの、ひいてはダイ達の疑問にキルはひょいと肩をすくめながらどこか全員を小馬鹿にするようにレイピアを仕舞い大鎌を取り出し方に担ぎ、目の前には敵か叛逆者予備軍しかおらずとも悠然と応える。

「おかしなことを言うね魔法使い君。僕は昨日お嬢ちゃんから僕宛に手紙を貰っているんだよ。
その時点で僕が生きている・・・というか無事だった可能性の示唆は受けている筈だよ?」
昨日のあのとんでもないメッセージ、あれを読んでいた時僕は確かに幸せな時間を過ごしていたのに・・・それを壊したのはバーン様であっても!親友を殺されたら矢張り許せない!!

キルバーンが無事であった可能性を・・・・・テイファが知っていた？予期していた⁉

「・・・・別に貴方が確実に無事であったことを知っていた訳ではありませんよ。降りますねマァムさん。」

キルの言葉にもティファは詰まらなさそうに頭を掻きながら心配で話したくないと抱きしめるマァムに大丈夫だと宥めてから降り、答えながらハドラーの下に歩いていく。

「貴方はオートドール、つまり生命は生命でも機械生命体。」

ズルリとハドラーの右腕に差した雪白を引き抜きリングに戻し、壁に凭れかけさせながら座らせる。

「ようはキラーマシーンが命を持っているようなものです。つまり―壊れても修復可能―な生き物である可能性は非常に高い。」

ハドラーの斬り飛ばした左腕に細胞活性化を促す万能薬をふりかけ、座り込むハドラーの左腕にそっと押し付ている。斬った細胞は潰さずに綺麗に斬った自負はある。

細胞が無事ならば、超魔生物の自動修復に万能薬の効果が上乗せされれば元通りになるはずだが・・・・細胞の活性化で激痛走るだろうなと予想し、案の定であるようで、ハドラーの額から玉のような汗が浮き出るが、それでも激痛に呻き声を漏らさないハドラーを労りながら。

「以上の事により推察しましたが、あの時点では私もどちらか判断付かなかったので、成分表の最後のトラップ仕掛けたのですが、不発で終わっていましたか。」

キルは読むな！触るな⁉あっち行け⁉⁉⁉

そう書けば、キルが生きているなら自分との約定無視して抗議に位すっ飛んでくると踏んだのだが。

「・・・・・・ハドラー君とミストに止められたんだよ・・・」

知らずうかうか行っていれば、自分はダイ達が知らなかった死神生存情報をくれてやっていた訳か・・・・クックッ

「ああ～、本当に君はなんて怖い子なんだろう。魔王軍の死神と呼ばれる僕も改めてそう思うよ。
成分表の振りしたトラップを平然とハドラー君に渡した君の智謀には頭が下がる。」
「・・・・・不発に終わったトラップなど無価値だ・・」
ティファはキルの言葉に詰まらなさそうな表情を崩さない。当たっていた推測で仕掛けたトラップを外されたのだからそうなるだろうが、ポップ達の心情は荒れに荒れていた。
冗談じゃねぇ！ティファを置いていく作戦のそもそもの大前提からして崩れていたなんて洒落にもなんねぇ!!
何故しくじったか分からないが、ティファを砦に置いていく作戦を立てたのは空間使いのキルバーンがいない事が条件で組まれた。
ティファが戦場に居なくとも、ハドラー、ミストバーンだけならティファ一人を狙いに行く事は無いと読んで。
それが根底から覆され慄然とする！
もしも作戦が上手く機能して、その結果眠っているティファをキルバーンが攫っていると思っただけで心臓を掴まれた気になる・・・・・幸いティファはここにいる。一行の中で守り切れる位置に・・・・・現金な話だが、ティファが来てくれた事に感謝したくなる。
別にキルバーンが生きているかもしれないという推測を話さなかった事は怒っていない。
不確かな話をして自分達に余計な事で煩わせたくないというティファの気遣いだからだ。
知らされたとしたら、それは確実に分かった時だけ。だとすればあの時点ではティファも半信半疑以上にキルバーンは倒されたと思っていたのだろうから、隠し事をされた気にはならず、よってダイ達に怒る気はない。仮に知らされていてもキルの空間出現は誰にも分からず、打つ手がなかったのも事実だからだ。
ティファを隠すように布陣を整えようとした矢先、矢張りティファがキルに話しかけた。
ティファにとってはこれが一番聞きたい事。

「キルバーン貴方は知っていましたか？ハドラーの体内に黒の核晶が埋められていた事を？」
「ッウ!!」
「知らなかった・・・・のですね・・」
　ティファからの質問に憎悪の塗れていたキルの瞳が痛みをこらえる様にぐしゃぐしゃに歪み、それが全て物語っている。
　先程突如として知らされ、謀略の片棒を担がされ、その事に対しては罪悪感を抱いている事を。
「・・・・知っていても知らなくともそんな事は関係ない。僕は・・・・君達の神聖な決闘を穢した事に違いはないんだよ・・・」
　殺気だった気配は消え果て、俯き呻くようなキルにポツンと言葉が降り注ぐ
「だったらお前こっちに来ちまえよ」
　その言葉に、ダイ達はぎょっとした顔で発言したものをあり得ない者を見た顔で凝視する。それを言ったのはティファではなく、この中で誰よりもキルを嫌っているポップであった。
「お前ハドラーとティファの邪魔は嫌だったんだろう？お前ってさ、物凄く変態だけど策略も謀略も嫌いなんじゃねぇのか？」
　ポップは思い返してみれば、ベンガーナで竜を使ってダイを襲わせ、人間離れしたダイを人に見せつけ怯えさせようとした策略が失敗した時何処か嬉しそうに言っていた言葉がある。
　ピロロの目論見は失敗か、ちょっといい気味かも
　あの言葉は、自らの手を汚さず高みの見物の策を弄したものを小馬鹿にしていたのであろうか？なら、それなら!!
「お前はそっちにいる限りずっとそんな汚れ役させられるんだぞ!!いやならこっちに来ちまえよ!!」
「ちょっとポップ何てこというのよ!!あいつは・・・」
「こっちに来ればだれもおまえによごれやくなんてさせねえ！ティファとも一緒に居られんだぞ！あの変態言動慎めばお前は・・・」
「親友殺されて僕だけのうのうと幸せになれって言うのかい魔法使い君。」

仲間の制止も聞かず紡がれるポップの言葉に、敵戦力の削減や甘言を弄してはいまいとはキルには分かる。そういう汚い者達を散々見て来たのだから。
ただ彼は無垢で純粋な気持ちで自分を憐れんでいるのだろうが、冗談ではない!!
綺麗であるが故にその光は何処までも相手に差し込む。その事で相手の矜持が、思いが、尊厳がどれほど傷つこうがお構いなく!!
自分は確かに汚れ仕事は嫌いだ!嫌いだがそれをする事で大好きな親友の仕事と苦労は確実に減り、それがとても嬉しかったのを知らない坊やが!土足で踏み込むんじゃない!!!

ポップの優しさが仇になり、キルの心の怒りの炎に薪をくべた結果になった。
「・・・・そうかよ、なら交渉決裂だ!!今度こそ地獄に戻りやがれ死神!!!」
自分の言葉が届いて、あるいはクロコダインの様に、ヒュンケルの様になってはくれまいかと思ったのは甘い判断か・・・
ティファの事以外は本当に真っ当なこいつを評価した思いに偽りはなく後悔していないがな!
ポップの言葉に、剣を抜き打ちかかる構えをとるダイ達と、トラップの発動を仕掛けたキルの動きが止まったのはほぼ同時であり、ティファは広間上空に顔を向ける。

何かの気配が凝り固まろうとしている。それは気配を強め暗黒闘気だと分かるころには徐々に形を整え、次第に人の様な、シャドーの様な形へと変貌していき、顔が出来―瞳―がカっと開いたと同時に言葉が飛び出す。
「このバケモノが!!貴様は・・・・貴様は一体何をしたのだティファ!!」

それは紛れもなくミスト本人であった。

その愛は狂気につき

広間の上空に突如出現したシャドーの様なものに、ダイ達はおろかハドラーも親衛騎団達も唖然とした。
自分達が知っているシャドー・ゴーストとは明らかに異質なもので、では何かと聞かれれば見た事もない・・・
三人を除いては。
一人は間違いなくティファ。知識であれが何であり、あれこそがミストの本体だと知っている。
残り二人はバランと、そしてなんとキル。
バランは目の前に現れ愛娘をバケモノ呼ばわりした不届き者が何であるのか見定めるべく、数千年間の知識が蓄積されている竜の騎士の記憶に直結し、高速で閲覧し該当する者を探し当てた。
「・・・・バケモノか・・・我が娘をバケモノと呼ぶとは片腹痛いわ！貴様こそ・・・」

「ミスト!!!!」

バランの検索結果であれは魔界に漂っていた暗黒闘気の集合体、生命体とも呼べない意思があるだけの半端者がと罵ろうとした矢先、キルは一目見た時から親友だと分かった。
暗黒闘気の集合体だとは知らずともだ。

「ミスト！ああ生きていたんだね!!君が無事で僕はとっても嬉しいよ!!!!」

上空にすっ飛んでいき先程までの殺気も憂鬱さも煙か幻かの様に消え果て、代わりに歓喜の気配を振りまいてミストに纏わりつこうとするが、肉体がない為素通りしてしまう。
「あ!!ミスト僕近づかない方がこの霧みたいなの消えたりしない？僕離れた方がいい？」

触れようとした手を伸ばせば素通りして霧状の暗黒闘気が霧散してしまう。
大好きな親友消すの嫌だと健気に申し出る姿にミストは驚く。
「キル・・・・・お前は・・・どうして私だと・・・」
暗黒闘気集合体・ミストは、ティファに抱いた怖れと怒りすらも吹っ飛ばされた。
キルは自分の様な暗黒闘気の集合体は知らず、そもそも自分は誰とも名乗ってもヒントもなかった・・・・筈なのに。
そんなミストの言葉をキルは、なに言っちゃってるのさという気楽さで答えた。
「親友の君の気配分からない訳ないでしょう。」
容姿ではなく、君の中身に僕は惚れたんだからさ
返ってきた返答がそれか！気配だと⁉私の気配はバーン様の若い時の肉体から発せられるもので、自分は今まで奥深く・・・そもそもキルよりももっと間近にいて寝食を共にさせた弟子のヒュンケルでさえ、私の事を分からなかったのにだ!!
・・・主に食べて寝ていたのはヒュンケルだけだが、十五になるまで傍らから離したのは料理をしに行く時以外は風呂にも入れてやり、バーン様の仕事も其れまでは他に回して貰っていたのにだ!!
なのにこいつが分かってどうしてお前は本当に私かと怪訝そうな顔で見ているのだヒュンケル!!
色々と各方面に驚いているやら逆恨みをしているミストに、またもやキルの返答は脱力したくなるものであった。
「だって怒っている時のミストの気配とさっきお嬢ちゃんを罵っていた時の気配一緒だったもん。」
・・・・・もんって、もんてそんなよく分からん気配理由でこいつは私の事を分かったというのか！
キルは伊達に数百年間もミストの親友をしていない。ミスト大好きっ子なキルは、不器用でも情に厚く、実は物凄く怒りんぼうな親友を日夜弄り倒してわざと怒らせて愉しんでたという悪癖があったり

する。
怒りの気配の時は、戦いや他で感じる冷たい気配と違い熱が感じられるのが大好きだ！
ちなみにキルが冷たい気配とさしているのは言わずと知れた凍れるときの秘法で肉体的にも本当に冷たいバーンの若い肉体の方。
謂わばキルはずっとミストの本質・本性である方を本能的に探り当てて愛でていた、本当の意味での親友であったのだ。

「キル・・・私は・・・・私はバランの言おうとしていた通りバケモノ以下の・・・」
「うん！その事はバラン君倒して反省させようね！君に対してなんて失礼尚と言おうとしたんだろうし許せないよ。
でも君も駄目だよミスト。お嬢ちゃんにバケモノとかって、女の子に対して失礼すぎるよ!!」
「いやしかし！あいつは黒の核晶を暴発させず消滅させたのだぞ!!」
「方法分からないけど世の中にはそういう秘法が山ほどあるんだよ！それの一つや二つ使えたくらいで女の子けなしたら駄目でしょう!!!!」
「・・・・・お・ま・え・は!!どこまであの小娘の肩を持つ積りだ!!いい加減あの小娘のあり得なさに気が付いて真っ当に消せ!!!そんな途轍もない秘法が山ほどあってたまるものか!!常識的に気が付け！」

自分の本性を見ても親友だと言ってくれるキルに感動しかけたが！相も変わらずの小娘べったり思考何とかしろ!!
ミスト頭硬い！お嬢ちゃんが凄いのなんて今更過ぎる！あの子がラナルータ単騎で使えるって言っても僕驚かないもんね!!
双方目の前の敵をうっちゃって置き、ティファの処遇を巡っての大口論。
・・・・今の内ルーラでとんずらすっかな・・・・
ダイ達はその様子にポカンとし、馬鹿馬鹿しくなったポップは頭をガリガリ掻きながら逃げる算段していると不意に冷たい声が降ってきた。

「僕等が本当に君らを放っておいていると思うのかい？まだまだ甘いね～魔法使い君。」
「・・・・・小娘は引っ掛かりもしていないがな。可愛げもない。」
キルは悠然と大鎌を肩に担いだまま、うっそりと笑い、ミストも冷静にティファを見遣っていた。
二人にとって、口論しながら敵を殲滅した事等数知れない。キルは悪魔の目玉を自分の視力と共有させ、ミストは敵の周りに可視化できない程の粒子状の暗黒闘気を張り巡らし、見なくとも相手の気配と大体の状態を知れる。
もしもポップが直ぐにルーラで全員と逃げようとしていたら、その瞬間トラップを発動させていた。一瞬で人体が溶ける高濃度の酸を振りかけながらティファだけを引っさらうつもりで。

その言葉にポップは首筋に鎌の刃を突きつけられたような怖気が奔り、冷や汗を流し縫い留められ、全員の警戒度が最大限上がる。
ただ一人ティファだけが、今の二人を冷静に見つめている。自分達の普段からの戯れを無視し、虚実を見抜こうとして。
あぁ、本当になんて様々な意味で素敵な子なんだ君は。是が非でも欲しくなるじゃないか～。
先程ハドラーとの食らい合いを見た時と同じ。思考が蕩けて何かがズクズクとうずくじゃないか～！
「お嬢ちゃん！」
「・・・・・なんですか・・・・」
キルの情熱的な呼びかけにもティファの言葉はどこか冷めている。何を言っても心に響かないような冷たさを感じさせ。
それでも結構！僕は丸ごと君が欲しいんだよ!!
「ミスト生きていたから君を殺すのは無しにして上げるよ！」
「キル⁉」
「・・・・それはどうも・・・・」
隣のの親友は悲鳴を上げ、殺さないと言われた当人は喜ぶ素振りすらないが気にしないよ僕は。

何故なら死んだ方がいい目に遭うかもしれないからさ。
「その代わり君をどんな手を使ってでも捕まえるよ！君のした事でミスト本人とバーン様は怒り心頭に発して君の手足もいでそこにいるフェンブレン君みたいにされる可能性高いけれど大丈夫!!君の面倒の一切は僕が見て上げるから安心してね♪
君が死んでしまうその日まで僕がずっと大事に大事にして上げるから！」

まさにその狂気は死神に相応しく、途轍もない喜色の色を乗せ歌う様な声で紡がれしは、途轍もなく気色の悪い悍ましい言葉であり、―魔界でそれなりのもの―を見聞きして来たハドラーとバランの顔色を無くさせ、ダイ達はおろか、元味方であった親衛騎団達をも怖気を震わせる。
たった一人、ティファの気配だけが欠片も揺らがず静かにキルを見つめている

それは生かすか殺すか・・・

その狂気はダイ達を飲み込みポップを後悔の底に突き落とす。
俺はどうして・・・・なんだってあんな奴を引き入れようとしちまったんだ!!!
変態なんかではない！あれは・・・あいつは壊れている!!感情が狂っている！
可愛いという相手が無残な姿になっても気にしないなどという者がまともな訳がない!!!
ティファは・・・・あいつはあのキルバーンを知っているのか？知っていてそれでも優しいなどと言っていたのか⁉

マァムは震えながらそれでもティファを直ぐに抱え込み蹲る。あの狂気から守らんとして。
「娘に穢らわしい事を言うな!!!!!!!!」

キルの狂気を纏った言葉に我に返ったバランは、当然その発言を許す筈もなく真魔剛竜剣を抜くと同時に紋章を全開まで発動させ打ちかかる。
今理解した!!
何故味方全員がキルバーンが倒された事であれほど喜んでいたのか！喜ばれて当然の者であったのだキルバーンは!!

「ライディイン!!!」
ガシャーン!!!

ミストと二人でバランを迎え撃とうとしたキルの横を、ミストと分断させるように雷が落ちる。
父を援護しつつ落ちて来た雷を剣に纏わせたダイは、そのままアバンストラッシュの構えを取り、父同様上空に飛びライディインストラッシュの構えをミストに向ける。

キルバーンは父さんが戦っている！俺はミストバーンを確実に倒す!!

分断した時素早くバランは、キルとミストコンビを合流させまいと乱撃に持ち込んでいる。

「おんやバラン君、どうしてその剣は無事なんだい？僕のマグマの血をたっぷりと含ませた筈なのにね～。」

「貴様に答えてやる義理はないわ!!!」

「当てて上げようか？健気で君達の事をいつも一番に考えている可愛い可愛い娘さんが、僕の性質を考えて罠看破して進言してくれたんでしょう。本当になんてお利口でいい子なんだろう！益々欲しくなるじゃないか!!!」

「黙れ!!!貴様は・・・貴様だけは何があろうとも私が滅する!!!」

それこそ刺し違えてもだ!!

「消えろ!!!!」

ミストに迫りダイが放った其の一撃は、今までで一番の威力を有していた。右手の紋章を使いこなし、剣とのシンクロも完全で、何より気力が今までとは段違い。

妹を守りたい！

其の一点のみで放たれた技は、あるいはミストでなくバーンが相手であったなら大ダメージを被らせられたやも知れない。

だが今の相手は暗黒闘気の集合体であり、ミストは技の臨界点を見極め、炸裂する寸前で己の体を文字通りミスト状にし、離れた位置で直ぐに濃度を濃くし実体化させた。

己は決して強くはなれない、この、体とも呼べない半端な身故に。しかし、だからこそできる戦い方はある。

光の闘気や破邪系にさえ警戒すれば、後はこうして霧状の体の密度を自在に変えれるのみ。

「ダイ!!俺の技と合わせてアバンストラッシュを撃て!!」

虎の子のライデインストラッシュを難なく避けられたダイに、ヒュンケルが駆け寄り合わせる様に指示を出す。
光の闘気に目覚め早三ヶ月が経ち、今のヒュンケルであればアバンストラッシュは可能である。
アバンストラッシュを撃つ為の発動条件、心・技・体の内、心だけが習得できなかったのは最早過去の事！
だが自分が撃つのはアバンストラッシュではない。ブラッディスクライドに光の闘気を纏わせる。
暗黒闘気の集合体であるならば、アバンストラッシュよりも攻撃範囲を広くした光の闘気の渦にわずかでも捕まればダメージになり、そこをアバンストラッシュで貫けば・・・・・

カツ――ン

ひとつ、たった一つの足音が、攻撃の糸口を掴み活路を見出したと構えたダイとヒュンケルの視線をミストから逸らさせ、そちらに目と剣を向けさせられた！
打ち合っていたバランも突如として感じた気配に慄然とし、キルを弾いて距離を取り直ぐにティファ達の下へと降り立つ。
その気配は途轍もなく重く、そして体を凍らせることが出来るのではないかと思う程に冷たい。

「・・・ヒム、ハドラーを海底の入り口の方に移動させましょう。あちらに陣取った方がいいかと。」
一瞬で沈黙した広間に、ティファの静かな声がよく通る。
この感じだとまだ距離はあるか。歩き方がゆっくりでハドラーを動かせる時間がある。
本当は回復途上のハドラーを動かしたくはないが、ここで鉢合わせさせる訳にはいかない。
「行かせないよ！」
「ブラッディスクライド!!!」

ティファの考えを読んだキルが、ハドラーの移動を邪魔しようと仕掛けるもヒュンケルの必殺技に阻まれる。
「今の内に急げお前達!!」
ヒュンケルに急かされるが、それがなくともヒム達もこの入り口がどこに繋がっているのかは知っている。そしてそこから出てくる途轍もない巨大な気配を出すのはたった一人しかいない事も。
「ハドラー様!痛くても勘弁してください!!」
「ブロック!ハドラー様をお早くあちらに!!シグマとヒムはキルバーンとミストバーンの警戒を!!」
「あ、フェンブレン・・・・悪いけど―筒―に入ってて下さい。イルイル。リングイン・・・・ハドラー持っていてください。」
「・・・・」
手足がないフェンブレンを人質にされるなり壊されるなりされてしまってはハドラーが苦しむ。
ポーチには常に筒とリングの予備が二つずつ入っている。備えあれば憂いなしとはよく言ったものだ。
ハドラーとしては、複雑な思いでそれを無言で受け取る。味方に殺されかけ、敵で倒したいはずのティファに様々に助けられているのだから無理からぬ事だが。
「ブロック早く!」
「ブ・・・・ブロ～ム!!!」
アルビナスの叱責に、ブロックは腕の中で回復を図っているハドラーのダメージにならないようにと、巨体を揺らさないように繊細かつ可能な限り早く動こうとして苦戦する。
たかだか大広間とは言え広大な土地を移動するわけでもない。それでもミストとキルの攻撃をダイ達も加勢して防ぎ、ノロノロと移動する。
ミストも本体になったとはいえ闘魔の技は健在であり、攻撃してくるのを防いでの移動は容易ではなかったが、それでも正反対の位置で距離を取れる場所まで辿り着き、ブロックはそっとハドラーを床に降ろし壁に凭れかけさせ安堵する。

ハドラー達を護衛する形で移動速度を合わせたダイ達もキルとミストの動きに警戒しながらも詰めていた息を吐きだす。
「・・・・・あいつ等・・・反則だろう・・」
ポップが思わずぼそりと呟く。自分達はこうして気配や威圧に苦しめられているのに、片や機械・片や霧状の生命体もどき。どちらも疲労やスタミナ切れの辛さを味わう事はあるまいと。
戦いにおいてその二つは勝敗を分ける事が多々ある重要な事だが、あの二人には無縁であろうと、引きつった笑いで無理やり言葉にして出した。
無理にでも軽口を言わねば飲まれてしまう、そんな気配がもう間もなく奥から出てこんとしている。

あの者は本当に一体何をした？

ミストがガン＝フレアで黒の核晶と自分の若き肉体諸共消滅させられた時、バーンは今まで感じた事の無い喪失感に襲われ呆然となってしまった。
それは黒の核晶が、己の肉体が消えたからではない。
自分にとってその二つはミストほど重要では無かった
黒の核晶は強敵を一網打尽で確実に葬り去る為の道具でしかなく、若き肉体は・・・はっきりと言えば扱いに困り果てていたほどだ。己の肉体であったにもかかわらず。

自分の若い肉体ピーク時程、自分自身で戦うことを禁じていた。戦えば敵勢力は一瞬のうちに葬り去れる強さを有していたが、それは魔界の地形も一瞬で変えてしまう凄まじきものであった。
地にはクレーターが穿たれ、山は消失し刺激されたマグマが、辛うじて住むことが出来ていた地域を飲み込んでしまうことが実際何度も起こり、遂には若いバーンは己自身で戦う事をせずに宮殿奥に引きこもった。

不毛な大地を、それでも己の故郷をこれ以上荒らしたくないと。
だが魔界制覇は己の悲願、憎き天界とこの魔界の蓋になっている大地を消滅させるには、少なくとも魔界の半分以上を治め、敵勢力に邪魔をされない環境を作らねばならず、力あれど寿命はおそらく他の魔族と変わらず、時間が足りなすぎる。
だが自分が戦えば魔界は荒れ、自分の配下もまだ冥竜王やそれに匹敵する敵勢力と渡り合うには心許なく、どうすべきかと悩んでいた時に凍れる秘法を探し当てたが、それも頭を痛める事になった。
理由は簡単、自分の肉体を力と若さ・魔力と叡智で分ける方法も見つけたが、分離させた肉体をどう保存し守り抜けばいい。
あの冥竜王であれば急に年老いた自分を見て何をしたか知った瞬間から肉体を付け狙い、破壊するよりも乗っ取り自分にぶつける事は容易に想像がつく。
では自分の姿を出さなければいいかと言えば、ようやく築いた国の主が姿を見せなくとも纏まる程円熟している訳でもなく、内部崩壊されるのが分かり本当に苦慮させられた。
様々な理由から、自分の若い肉体は何と厄介なものかと思い知る。とはいえ自分で消滅させてしまえば普通に歳をとり、狙っていた不死紛いにはなれない。
仮に魔界を征服できたとしても肉体に戻ることはしない。
その力で天界に乗り込んだ時、おそらく力を振るえば余波は、浮上した魔界にも及ぶ。
その時の魔界は更に滅びの道すがらで疲弊し、余波で滅ぶ懸念がある。
では先に天界を滅ぼしてから地上にとも考えたが、様々な理由で矢張り地上が先。そうなると・・・思考が堂々巡りになり、最後にはこの肉体の厄介さが浮き彫りになるばかり。
そんな折に出会ったのがミストであった。
玉座でどうすべきかと思案しそのまま寝入っていると、突如自分の魂に侵入してきた者があり、それが後のミストであった
出会いは己の体を乗っ取らんとした不逞の輩だが、乗っ取れず魂の

中でおろついていた様に笑ってしまった。
それを馬鹿にされたのだと食って掛かるミストに、お前はなんだと問いただし、正体を知り使えると閃き、お前が必要だと本気で言ってみれば呆然とし、次いでそれは本当かと何度も尋ね返され、幾度も必要だと言った果てに生まれたのが忠誠心の塊・ミストであった。
ミストも若い肉体の力の制御に腐心していた。出さねば敵勢力は消せず、加減を間違えれば・・・・・まさに力のありすぎる厄介な肉体であったと、自分の肉体ながら辟易とする。
ミストは本当にどこまでも自分に付き従い、忠実な腹心として使えて来てくれたいわば苦楽を共にした従者・・・・・・其の従者が消された時の喪失感は計り知れず、動かない自分の代わりにキルがティファを殺しに行った。
空間を幾度も開けようと必死になっていたキル。
開くと同時にティファの心臓目掛けてレイピアを刺し貫かんとしたが果たせず、そのまま空間を通り直接対決に言ったのを見届けて自分も立ち上がり広間へと歩を進める。
どの様にしてティファを殺すか算段を付けながら、冷静になろうとゆっくりと歩く最中にキルよりの念話でミストの無事を知り、不覚にも涙が零れかけた。
ミストが無事であったか
はいバーン様！ミストが無事でしたからお嬢ちゃんは半死半生で許してあげてください!!僕がきちんと面倒見るので！いいですよね。
構わん、聞きたい事を聞いた後はそちの好きにせよ。

聞きたい事は、ティファが自分達の計画を知っているかどうか其の一点のみ！
ハドラー達諸共ダイ達を葬った後に起こす大地消滅の作戦迄知っているはずが無い！
だがその知らないはずの事を、ティファは悉く邪魔をしてきた。
遠くは魔王軍を知らず半壊させ、今はハドラーの黒の核晶と自分の若い肉体を。

そしてこの後の事は？
知っているのならばティファは当初の考え通り天界より遣わされた者に他ならず、自分達の事を作戦をどこまで知り対処方法をどうするのかをすべて把握しなければならない。
全ては数千年の自分の、万年の魔界の悲願成就の為に。
そして知らなくとも必ず邪魔になる者だティファは。
本音としては消したいところだが、あの厄介な肉体を―安全―に消滅させてくれた褒美に、二度と逆らえない体にした上で生かして飼っておく。
幸い今の肉体も老いているとはいえ、数百年分の寿命が残っている。地上を消し去り天界も滅ぼし、新たな魔界を統治し後継者に託すための時間は十二分ある。
その間の戯れに、―仔猫―を捉えて絶望の淵に突き落とす。
自分の肉体を消滅させてしまったと気に病むであろうミストに、それは重要な事ではないと示す為に。
忠臣の為、ただそれだけの為に最大の障害となり得る者を情報を余さず把握した後も生かして捕え様とするバーンは、それを実現可能に出来る怖ろしい敵。

現時点では、間違いなくダイ達よりも実力も実戦経験値も全てを凌駕している大魔王の名に相応しき者である。

その大魔王の姿を、ダイ達は見る事になった。言い知れぬ怖れを抱きながら

拒絶

これが魔界の神なのかと、初めてバーンの容姿を見た物は誰もが思う。

確かに威厳と畏怖を自然と感させられる。しかしあの細い首等、まるで力を少し入れれば折れそうな老人の姿に、付いている異名との差異に戸惑う・・・・外見だけを見れば。

だが、広間に入る前から感じていた途轍もなく重苦しい殺気にダイ達は潰されかける。

それは何処までも冷たく、何らかの重力魔法か呪縛の呪法でも使っていると思う程に、竦められかけたダイ・ポップ・マァム達と、戦場で初めて殺気を浴びせられた親衛隊達の呪縛を解いた者がいた！

ガン!!!

剣に闘気を纏わせ地面に思いきり突き刺したヒュンケルであった。その音に目を覚ましたように、無意識の落ちていた腕と武器をダイ達は構え直す。如何に恐ろしくとも、ここで負ける訳にはいかない!!

先の特訓の折ティファから殺気の洗礼を受け耐性を付けて貰えたヒュンケルは、すぐさま音と気配を立て大魔王の無言の圧力の呪縛を解いてみせ、元・師のミストとなんとキルを感嘆せしめた。

「へぇ～やるもんだねヒュンケル君。君ってミストに大分過保護にされた温室育ちだから、てっきりバーン様の殺気に抵抗できないと思ったんだけどね。」

「・・・・・・其の力をこちらで振るっていればいいものを・・・・」

バーンが来たのだから当然ミストとキルはバーンの横に降り立ちながら、キルはヒュンケルを絶賛し、ミストは未練としながらも魔王軍にいない事を惜しむ・・・憎々しげにだが。

魔界で修行させていても実戦に出したのは数えるほどで、殺気を浴びせられた事は無かったろうにとキルの叩く軽口を、ヒュンケルは無

言を貫き直ぐに剣を構え直す。
殺気を叩き返せたとは言え、背中を流れる汗と震えが止まらない。大魔王がここまで底知れない者であったとは・・・

そのバーンの目は、じっとハドラーとティファに注がれている。周りが自分を怖れるか警戒の目を向ける中で、ハドラーは自分を見るのが苦しいと視線を外し、ティファは無表情で無言で自分を見返している。
あの浜辺で出会った時の様な表情豊かなティファが想像できない程、心を閉ざしているのだろうか？

「そなたは・・」

沈黙を破ったのはバーンの方。誰もが戦いの火蓋を切るのを怖れてか無言でいる。埒が明かないので開ける事にした。
「ハドラーの黒の核晶の事を―いつ―知った？」
それはハドラーとティファにとって、最も触れられたくない言葉であった！
その言葉にハドラーは平然と口にした主の心情を知ってしまった。やむを得ず自分を駒にしたのではない！
当初の予定通りに駒にしたのに過ぎないのだと!!
自分が命を救ってもらったと恩を感じたあの時から既に決まっていたのだ。相打ち用の武器として・・・
ハドラーは嘆き、ティファの心はかっとなり思わず怒鳴り上げようとした。ハドラーの心情を無視した言葉に、味方を何だと思っているのだと。そう言おうとした矢先足元の地面は消え、少しの落下後に直ぐに―地面―に降り立っていた。
自分の目の前に、大魔王バーンが手を伸ばせば触れられる距離にいる。

「ティファ!!!」

ジャキン！
「そんなティファ！」
「行ってはいかんディーノ!!!」
「なんで!!!」

やられた!!・・・・・チックショウ!!!

ティファを人質に取られ、ダイはすぐさま飛んでいこうとしたのをバランが抑え込み、駆けようとするマァムをポップが理力の杖を伸ばし制止させる。
その杖はカタカタと震えていた。幾度も妹をキルにとられ続け、今度こそは取られまいとしたのに!!
ヒュンケルとクロコダインも同じ思いであっただけに、武器を握る手から血が伝っていく。
ポップ達も無警戒あった訳では決してない。今までキルが空間を使う時は自らの手を空間に入れてティファを引きずり込んでいた為に、動きに警戒し動いた時にキルの両腕をギラで打ち抜き落とすか、先程の様に必殺技で退けるかの算段を付けていた。
しかし予想は外され、腰に両手を当てた無警戒を装ったふざけた体勢から空間を開けられた。。
キルは構えなくとも自然と空間を開けられる空間使いの上位者であり、一行の警戒などあって無いも同然であった。
ティファの足元をキルが空間を開け亜空間に落とし、バーンの前に降り立つように繋げ降りてティファの態勢が整う前に、キルは無言でティファの細い首に、大鎌の刃を掛ける。
もしティファが少しでも動くなり、仲間が助けに来ようと動こうとした時、ティファの首を掻き切り堕とす為に。
「動いちゃ駄目だよお嬢ちゃん。勇者君達も当然親衛隊の君達もだよ。あぁそれと魔法使い君、魔力溜めただけでもお嬢ちゃんの首堕ちるから注意してね～♪」

その言葉に言われた全員が歯噛みし、暴れ出そうとする体を両手を握りしめて耐えようとした時、キルはさらに言葉を紡ぐ。
「それとね、物騒な剣もアックスも全部地面に放り投げてね～。手の届かない遠くに、ほら早くしないとお嬢ちゃんの首が・・・ね？」
ツゥ～
要求しながらキルは大鎌の先端でほんの少しだけティファの首を引っ掻けば、それだけでティファの首筋から血が流れる！
キルとしては、ティファが生きていても死んでしまってもどちらでもいいので躊躇いがない。
なんならバーンやミストに殺させる位ならいっそ自分で殺してしまおうと思っているくらいだ。

「止せ!!捨てる!!」
「やめて！ティファ!!お願いだから動かないで!!」
「捨てたぞ!!キルバーン！」

こんな戦場で仲間の為とはいえ、たった一人の為に武器を捨て去るとは正気だろうかとかつてのハドラー、歴戦の戦士バランは断っただろうが、質にとられたのがティファなのだ！やむおえずバランも真魔剛竜剣を遠くに放る。屈辱と悔しさに打ち震えながらも、せめてもの抵抗の意思としてバーン達からも離れた位置に。
どの様な技かは知らないが、黒の核晶を暴発させずに消し去った技の反動のせいか、先程からまともな身動きが出来ていない！状況を打開する為にも、相手の要求を呑んで時間を稼ぐしか方法が今は無い。どうやらバーンはティファに何かを聞きたいらしく、今すぐ殺す気はないようだ・・・・・ほんの少しの隙でいい。
ディーノよ、少しの隙あらば私が直ぐにでも紋章閃でキルバーンの大鎌を・・
分かった、俺もバーンに紋章閃で牽制しながらトベルーラでティファを・・
二人の竜の騎士が、念話で打ち合わせする中ティファは戸惑ってい

た。

どうして・・・・・この人からひどく懐かしい気配がするの？

自分はバーンに一度として会った事は無いのに、其れなのに心の何処かで途轍もない懐かしさを感じている事に。

その感覚はマトリフに五年ぶりに会ったあの時と同じ。二度しか会っていない、それでも心が深くつながっている者と再会した時のあの懐かしさと同じで、そしてその気配が不愉快に感じられない!!

ハドラーにあんな酷いことをした人なのに！ハドラーを傷つけた人なのに・・・

ティファの無表情の仮面にひびが入る。ハドラーを助けてしまった事で、彼の矜持と誇りと尊厳を踏みにじった事が痛くて、其れでも大魔王の策略の果てで死んでほしくは無くて!!

其れならば自分の手で助けて人生全うしてもらい、天命で死を迎えて貰った方が何万倍もましだ！

時が・・・いつか彼の心の傷を癒してくれることを願いつつ・・・・

それでも今ハドラーや周りから黒の核晶の事を聞いて欲しくなくて、壁を作っていたのを崩されて行く。

戸惑い・・・幽かに自分の中の奥深くから湧き上がらってくる、バーンの殺気の底から感じられる気配に、自分は・・・・・

ほぅ、近くに寄せればあの時と同じになるか。

無表情が崩れ戸惑いの表情の他に、ティファの瞳の中に自分に魅かれている色が幽かに浮かんでいる。

聡い娘ならば、この状況であれば名乗らずとも自分がこの大戦の最大の敵だと分かるだろうに。

だが、自分も同じ。海岸であった時と同じく自分もティファの気配に懐かしさを感じている。

それは本当に幽かだが・・・これはまるで・・・・・

ティファの戸惑いがバーンに移った様子に、ミストは不振の思う

が、キルは当然の事と見ている。
バーン様も戸惑うか・・・お嬢ちゃん自身も自分の―本当の素性―を知っていないもんね。
どうして今のお嬢ちゃんが―人―と全く差異がないのかまでは知らないけれど、本当のお嬢ちゃんは、本来なら僕等の方にいるべき子なんだ。

主もティファの事を深く知れば、当然その事に気が付くはずだ。精霊とモンスターに好かれるどころか、主持ちのモンスターをも従えてしまえるティファの正体を。
テラン戦の折竜騎衆ルードが見せたような、主人であるガルダンディーでは無くティファの言う事を聞くのは本来はまずない。
あるとすればガルダンディーの主バランか、モンスター達を従えさせることが出来る上位の者。
ただ戦う力が強いだけの―人間―では決してなく、竜の騎士の血を色濃く継いでいるダイにもない力をティファは持っている。
それは魔界のモンスターの騒動の時で証明されている。あの時のデーモンは、ティファにだけ懐き、ダイの側によってもすり寄る気配もなかったのがその証。
真にモンスターを懐かせ従えさせられるのはティファのみであったと。
ティファを本当に誰よりも深く深く見続けていた自分だけが知った事を、主も知ろうとしているのに少し妬けるけどまぁいいか。
その事でお嬢ちゃんがバーン様に気に入られて、さほど酷い目に遭わずこのまま穏やかに捕まえられればそれに越した事は無いからね～。
キルは大鎌を固定したままうっとりと夢想する。バーンに捕らえられこちらに来たティファの姿を。
バーンも、そんなティファの頬にそっと右手を差し伸べる。
伸ばせばあの時の様に表情を崩し、何もかもを話してくれるだろうか・・・

そんな甘い夢は、すぐさま―痛み―と共に覚まさせられ手を引っ込めさせられた！

「触るな!!!!!」

何とティファは大鎌で刃を突き立てられ、ミストとキルがいつでも己を殺せる状況下であるにも関わらず、伸ばされ頬に触れんとしたバーンの右手の中指を噛み千切り拒絶した。

噛み千切った為にバーンの青い血が口の端に付き鉄錆びた味が口内を満たしても拭いもせず、大きな黒い瞳をぐしゃぐしゃに歪め、目を真っ赤にし大粒の涙をハラハラと流し拒絶の言葉を紡ぎ続ける。

「ハドラーに酷い事した人が私に触るなっ!!!!!!」

双子の竜の騎士

その行為に対して一番驚いたのは誰であっただろうか？
巨大な力と権力で魔界の半分以上を統治している事を知っているハドラーかバランか。
殺されんとしている状況であっても大人しくできないティファを案じる一行だろうか。
敵である軍司令官を庇うおかしな勇者一行の料理人に驚いたハドラー親衛隊達だろうか。
自分の状況が分かっていないのかと呆然としながらティファを見ているミストだろうか。
直前までバーンに対して、全く警戒心を働かせていない事が分かっていたキルだろうか。
それは次の言葉を聞いた全員になった。
「どうして・・・・どうしてハドラーと共に戦わなかったの・・・」

燃える様うな怒りの炎ではなく、悲しみの色を乗せたティファの瞳は、自身が噛まれて傷を付けられた事に驚いたバーンを捉えて離さない。
どうしてこんなに強い人がハドラーを駒にしたのか・・・・何故共闘しなかったのか

ハドラーの門番としての責務として？巨大な力を何故・・・

「・・・・もうよいティファ!!」
その言葉を止めたのは・・・
「これ以上俺を道化にしてくれるな・・・・」
「！ハドラー・・・」
「駒にされたと気が付かなかったは俺自身・・・・これ以上言ってくれるな・・・」
「そんな・・・・そんな事!!」

「それでも・・・」
ティファの嘆きは意図せずともハドラーの矜持を傷つける。敵に倒されるのではない、無様にも助けられそして嘆かれる・・・・これ程の恥辱を自分は知らない。
幾度も倒すと言っていたあのティファに助けられる。これ程惨めなことがあろうか？
それでも、そんな目に遭っても自分は・・・
「其の御方が、俺の命を救ってくれた事実に変わりはないのだ・・・」
例え今日この時の駒としての意図しかなくとも事実は変わらない。未練だろうが、まだバーンを其の御方と呼ぶ程に、敬愛の念が捨てられない・・・・これ程の目に遭ったとしてもだ。
ティファに敗れる時には、どのように無様であっても相打つ気でいた。せめて自分が恩を返すにはこれくらいしかないと思い定めて。
結果はこの様だがあの思いに偽りはなく、後の主の勝利を祈ってさえいたのだから。

ハドラーの静かな言葉はバーンをして心揺らされるものがあり、キルとミストの心の奥まで確かに届き、それは―僅かな隙―が生じた。
それは隙というのにはあまりにも僅かな気配の緩み、本来ならば隙とも呼べないものであったが、ひたすらに―妹―の奪還のみを考えハドラーの忠義心に満ちた言葉など欠片も入らず、だからこそ父も含めた周りの者達が情に流されかけても己は流されず、僅かな気配の変化を見逃さずに動いた！
「オォォォォォォ!!!!!」
ヒィィィ

ダイン戦の時、テラン戦の時、どちらも自分達は意識したことは無かった。
昨日ロン・ベルクの小屋の前で初めて意識して共鳴するまでは。
私の紋章はダイ兄と繋がってるみたい
そう可愛い事を言ってくれた。
もしも私が捕まった時に、ダイ兄が紋章を発動させてくれたら私の紋章も発動して、一瞬でも爆発的に力が上がったら逃げられると思うんだよ。
それいいな！ダイ!!今やってみようぜ。
あぁ、ティファの力とお前の力が合わさればティファの言った事は可能だろう。
ディーノ様お頑張りを。小娘も発動が負担になったらきちんと言え。
ポップとヒュンケル、ラーハルトの前で繋がりを意識して発動させた時、眠っている妹を起こすような感覚であった。
深く、体の奥で眠っている力を揺り起こすようなそんな不思議な感覚に。
あの時はうまくいき共鳴範囲も見定めている！この距離であれば十分だ!!

ダイの紋章の発動は瞬きの間でありティファの紋章も兄の紋章に応える様に発動した。
其の力は今までにない瞬時に爆発的な力を発揮し、力の奔流がキルの大鎌を吹き飛ばしミストは耐え切れず吹き飛ばされ、バーンをも後ずさせる。
自分達兄妹を遮り止める者達の、今度こそ出来た明確な隙をダイとティファが見逃すはずはなく、ダイは前方に走り出しティファは兄の気配の下に駆け寄る。
気が付いたバーンはすぐさまイオラを連発するが、真魔剛竜剣を再び手にしたバランが、ティファと魔法の間に立ち塞がり次々と切り捨てていく。

息子と娘を毛筋ほども傷つけさせるものか!!!

「ティファッ!!!!!」
「ダイ兄ッ!!!!!」
父の助けを借り、互いに懸命に伸ばしあった二人の手はしっかりと指を絡ませ合う。
二人共利き手を伸ばした為に、兄は妹の左手を、妹は兄の右手を。指が絡まり合い、掌もひたりと合わさった時、ダイは自分の体の中の力が掌に集まるのを感じた。
これは、この手の形を俺は知っている・・・・きっとこの手の形は偶然などではない。どちらかの利き手が違っていたら、この形にはなる事は無かった!
自分達は双子で共に生まれ、共に育ち、それでも利き手が違うことが不満であった。
性別の方は良い、可愛い妹なのだから。だが利き手は違う事は別だった。
今日この時までは

身の内から溢れる力を開放すべく、掌の二つの紋章が一層輝きを増した事に戸惑う妹に微笑みながら、ダイはティファの右手を開いている左手で自分の腰に回させ、自身の左手もティファの腰に手を回し体を固定させる。
ティファ、今から放つ技は俺とティファ、其れと父さんしか撃てない技だよ
心の中で呟きながら、ダイは妹の左腕をしっかりと伸ばさせ自分も伸ばす。
その時になってティファも漸く分かったようだ。これから自分達が放つ技がなんであるのかを。
この間僅か数瞬であり、誰も二人が何をしようとしているのか分からず、それ故に邪魔をする者はいなかった。
ダイの右手が上で上顎となり、ティファの左手が下顎となるその構え

は・・
ダイは二度其の形を見た。一度は父が仲間達に向け、二度目は自分と妹が受けた時。
ティファはその時の一度だけ。
その技を、今妹と自分の二人で撃つ!!
本来であれば真の竜の騎士が、その技に耐える為に竜魔人と化し肉体強化をするのだが、二つの紋章がその衝撃を分散させるとダイは本能で察知し、妹と自分の体を固定させる。
自分とティファ、二人合わせてこそ一人前の竜の騎士。紋章の共鳴で発動されんとしている技の闘気と衝撃は全て自分に流させ受ける!!
「ティファ・・・撃つよ・・・」
「ダイ兄・・・大丈夫・・・ティファにも分けてね・・」
「ティファ、お兄ちゃんに任せて」
妹が何を分け合いたいと言っているかは分かっているだけに、その願いをすげなく断り、ダイは前方の討つべき敵を見据え、ティファも諦め兄と同じ方を向く。

うとう

「父さん!!!!!」
「横に!!!!!」
流石にこの時は周りもダイ達の力の高まりに気が付き、キルとミストが二人の下に行こうとするのをクロコダインがアックスでキルに討ちかかり、ヒュンケルも光の闘気を纏わせた大地斬の連撃で足止めをする。
バーンも―武器―を召喚し、これから来るであろう技に対処しようとしたが、その時は既に遅く、バランが横にどいてしまい、射線があけられた!!
目の前の竜の咢が口を開く!!!己の・・・己達の敵を食い殺さんとし

て!!!

食い尽くせ!ドルオーラ!!!!!

暴力的な光の奔流がバーンに向かって伸びていく。まさしくそれは、光の竜が敵を飲み込む姿となって。

光の竜が通り過ぎた後には、巨大な抉り取られた筒状の穴がどこまでも伸びきりはてが見えず、立っていたバーンの姿も見当たらなかった。

選定？剪定・・・

ドルオーラの体内に返ってくる衝撃は暗黒闘気に近い！
その事を身をもって知っているバランは即座に子供達を抱き抱える。
技を放った直後のダイとティファは、己達の技の結末を見届ける為に互いに倒れそうになる体を支え合い、苦しそうな息をつめながら見据える。
バーンがいない・・・気配が完全に・・・
バーンの姿が無い事を確認して緊張の糸が切れ、クラリと倒れかける子供達を、バランはしっかりと胸に抱きこむ。
「二人共・・・・なんという無茶を・・・」
如何に肉体が他よりも強靭であるからと言えど！まだ成長しきっていない子供の体でドルオーラを撃つなど!!下手をすれば肉体崩壊が起きても不思議では無いのに!!!
だからこそ歴代の竜の騎士の紋章と記憶の継承は肉体が出来上がる成人の時。
だが二人は歴代の竜の騎士の定めと理から外れて生まれて来た奇跡のような子達・・・その事が二人をこれほどまでに過酷な道を歩かせているのもまた事実！
しかし・・・これで・・・

「っこほ・・・・イルル～。ダイ兄・・・・これ・・・飲んで・・・」
「肉体回復・・・うん・・・」
コクリ
バランの心配と、大魔王バーンが消えた安堵を他所に、ティファは肉体回復の万能薬を即座に兄に飲ませながら自分も飲み干し、直ぐに父の胸元から出るように立ち上がり、―何か―を警戒する様に前方を見据える。
その瞳は、バランと代わってキルを相手に魔法を駆使ししマァムと

タッグを組んで戦っているポップ達の方ではなく、光の闘気で師を討たんとしているヒュンケル達ではなく、穿たれ巨大な穴が開いた通路の方を。

いやな予感しかしない・・・

バーンの姿が見えないのに、心が震えるのが止められない・・・・

これは怖れだ・・

未だかつてこんな恐れを抱いた相手は、ハドラー相手でもなかった。近距離からの完全に決まったかに見えたドルオーラを撃った後だというのに・・

「ティファよ、後はキルバーンとミストバーンのみ。二人の事は私達に任せて・・・」

「父さん。」

バランが警戒を解かず、体の衝撃に参っても休もうとしない娘を案じて言葉を掛けようとしたが遮られる。

「バーンが消えた・・・・・ならどうしてキルバーンとミストバーンは―普通―に戦っているの？」

「・・・・・なに？」

キルは大釜で、ミストは暗黒闘気の糸で、それぞれ戦う事をやめてはいない。

「ミストにとっては、誰よりも何よりも敬愛し・・・違う・・・・自分の命よりも大切な主を喪ったのなら・・・」

「あらら～ばれちゃってますよバーン様」

ティファの言わんとした言葉は、キルのおどけた言葉で遮られる。

「演技しないといけなかったかね～ミスト。少し飽きたからいい加減に遊ぶのやめるよ魔法使い君に武闘家さん♪」

「・・・・・下らん。」

ゴオウ!!!
それは一瞬の出来事。キルのおどけた言葉とミストのうんざりとした言葉の直後、広間全体が魔界のマグマが噴出しダイ達に襲いかかる。
キルトラップの発動

この広間にもキルはトラップを仕込んでいた。それこそ剣戟の類から炎・マグマの類まで。
そればまではハドラーの事を慮って使用しなかったが、バーンを攻撃されても止めなかったという事はそういう事だろうと判断を下した死神は、容赦なく敵に大鎌を振り下ろす!

・・・・これは地面から出てんのかよ!なら!!ヒャダルコ!!!
マグマが噴出したとはいえ、キルもミストや主の事も考えて対応している。それは相手にも避けられるタイムラグが多少生じるが、マグマを凍らせても直ぐに溶け、上空に昇ればそこを別トラップが発動する。
十重八重に二十重に敷かれたトラップは、これで必殺になる。
魔法使いがヒャダルコで凍らせても直ぐに溶けるので意味は無く、大鎌を振って仕留めに行こうとするのをマァムに止められても大した事にはなるまいと。
だが、一行の魔法使い、マトリフをして天才と評されているポップの名は伊達では無かった。
ヒャダルコで地面を凍らせ、素早く―地に深く埋め込まれているであろうトラップの仕掛け―を・・・
「全員避けろよ!!お前達はこのまま俺の後ろに居ろハドラー!メドローア!!!」
味方が自分の号令と同時にティファはマァムを空飛ぶ靴で、ダイは

ヒュンケルを、バランはクロコダインをトベルーラで高く飛んだのを確認し、ハドラーとヒム達を背に庇い極大消滅呪文で地面を抉りトラップを消滅せしめ、のみならずメドローアを避けなければならず上空のトラップを発動させようとしたキルの邪魔をして見せた。

マトリフに教わった通りのメドローアならば味方も敵も全滅であった。

今ポップが放ったメドローアは、極大消滅呪文とは程遠い威力、ヒャダインでは無くヒャダルコを、メラゾーマではなくメラミと、どちらも上級呪文ではなく中級のそれも出力を最低限にした、いわば小型のメドローア。

その威力は本当のメドローアと比べれて数分の一にも満たず、それでも敵のトラップを地面諸共消滅させるのには程よく、呪文で消滅した地面も辛うじて残っている範囲でとどまった。

メドローアを授かってからずっと考えていた。局地戦において、味方が周りに居ても使い勝手のいい呪文に昇華出来ないかと。

当たれば確かにでかい、だが当たらず味方の方にマホカンタ系で弾かれたら？それが怖ろしくて使えないのでは意味がない。

跳ね返されたメドローアをどうにかするにはメドローアを当てるしかねぇ

ポップが一番に師から教わった言葉を幾度反芻しても空恐ろしさが消えなかった。

この呪文は兎に角魔力を食う。それを跳ね返された後に２発も放ってはコストがかかりすぎる。

いざという時の切り札にしかならない呪文に、―とある所のポップならば満足していたであろうが、今のポップには不満が残った。

強力であっても仲間にも自分にもリスクが低い呪文に出来ないかと。あれこれ考え頭を悩ましているある時突然閃いた。

そうだ！準備する魔法を弱くしてみれば!!

善は急げと、とりあえずヒャドとメラを同量の魔法量で発生させ合わせて撃ってみれば成功だった!!

地面を抉りながらも消滅はさせず、だが初級魔法を組み合わせた威

力とはとても思えない威力になっている!!
以来ポップはマトリフにも内緒でこの技をひたすらに磨いた。マトリフにはやはり習得には時間がかかると言いながら、その実様々な魔法量で初級・中級を試し、どのくらいの魔法量でどれほどの威力になるのかを徹底的に身に覚えさせ・・・
「へへ、マグマ消しちまったぜ疫病神さんよ。」
「・・・・僕は死神だよ。間違えるだなんて失礼な坊やだね～魔法使い君。」
大仕掛けを消滅させても不敵に笑み一つ浮かべて慢心した様子の無いポップを、キルは忌々しげに見つめる。
この子供は、勇者君とお嬢ちゃんに並んで厄介な者だ。
今まではこの二人にばかり目が行きがちであったが、確実にこの場で消さなければならない。

敵の戦力を見定める選定は終わった

「いい加減に高みの見物しないで御出座し願いますよバーン様。」
詠うようなキルの言葉に、ミスト以外の広間にいる全員が慄然とする。

果たしてその言葉と共に上空の空間が歪み、安全になった地面に降り立ったダイ達を見据え、杖の様な光る刃の武器を持った大魔王バーンの姿があった。
衣服に傷は無く、表面上は傷一つないかの様な泰然とした姿にダイ達は恐怖した。
あの至近距離からのドルオーラですら傷を付けられないのかと。
バランに至っては、魔界のヴェルザーとの死闘において、幾度となく窮地を救ってくれた必殺の技が破られた衝撃は大きくくじけかけたその時
「成る程、素手ではなく武器を用いて戦わねばならぬ程には貴方を削

れましたか。」
誰もが実力の彼我の差に絶望しかけたその時、一筋の道を作らんとする声が奔った。
ティファは大魔王の表面には騙されなかった。
ここに来た時は素手で現れた。だが今は違う。キルの言葉の通りなら、自分達の戦力を見定める為に待機し、光魔の杖を発動させての出現は、バーンから余裕が無くなったと見るべきだと。
それが幸か不幸かわからないが・・・
実際にバーンはドルオーラから身を守る為に、前方に衝撃を殺す為のマヒャドを展開しつつリリルーラで死の大地のもう一つの玉座、太陽の間へと飛んで事なきを得られた。
魔力の3分の1は不発にさせられたが黒の核晶を遠隔操作させる時に、そこからまた四分の一ほど削られてしまった。
キルよ、構わぬから広間諸共そ奴らをマグマの餌食にせよ
畏まりましたバーン様、ご無事で何よりです♪
ミストとキルにはリリルーラ直後に念話で無事を伝えながら指示を出した。
勇者一行の、今まで何かに妨害され見られなかった真価を見定めるべく！
「さ～て、第二ラウンドの開幕だ～。」

彼我の戦力さとはかくもありし

死神の言葉で、文字通り地獄の蓋が開かれた

バーンが何気なく振るった光魔の杖から、数え切れないほどの光る球体が発生しダイ達に襲い掛かる。それも杖が振るわれるのは一度だけではなく、二度三度、それも横一閃だけではなく上方にも、気が付けば前方の縦横全てから。

それはバーンが自らの魔力を、光魔の杖を介して闘気の剣の様に高密度にし硬化した物質。

闘気量の少なさを、なんと魔力を代用にして攻撃できるまでに昇華させた球体。

ほぼ全方向からの高密度の攻撃にダイ達は回避するも、数の多さにいつしか蹂躙されて行く。

一つ当たれば凄まじい衝撃で息が出来ず、止まった体を貪り食らわんとする兇悪な怪物の群れの如く襲いかかる。まるで球体に意思があるかの如く。

ポップとマァムは一撃で壁に叩き込まれたがた為にそれ以上の攻撃は来なかったが、クロコダインとヒュンケルは抵抗した分だけ、それが悪いと断罪されたが如く打ちのめされる。

ダイだけが光の球体を竜闘気全開にして弾き返し、バーン達の方向に球体が返され、球体後の追撃戦をしようとしたキルとミストの二人の態勢が崩れる。

波状攻撃と辛くも追撃は無くなり、攻撃がやむと同時に地面に倒れ伏した二人の下に駆け付け背に庇い剣を構える。

ハドラーは親衛騎団達が庇い、オリハルコンの盾となってくれたおかげで無傷だが、その直後にミストが霧状となりハドラー達を囲んだ。

やべぇ!!

勘が働いたと言おうか、霧に閉ざされる前にヒムは手荒ではあるが

ハドラーをダイ達の下へと投げつけた！
「ヒム!!なにを・・」
「ティファ！言えた義理じゃねぇがハドラー様を・・・」
「闘魔滅砕陣!!!・・・・・勘の良い奴め・・・」
ハドラー諸共一網打尽としようとしたミストはヒムの勘の良さに忌々しげに舌打ちするが、これで万が一にも親衛騎団達が主に牙を向けられなくなった。
今のハドラーも、ティファ同様に戦える身ではないのが一目瞭然。
戦力削ぎには確実に成功している。

気が付けばダイと、娘を腕に抱き全てを避け切ったバランとその腕の中で守られていたティファ以外が倒れ伏し呻き声を上げるか囚われの身となった。
幸運にも一撃しか喰らわずに済んだポップとマァムはすぐさま動き、当たった個所を手で押さえながら直ぐにダイと合流し、マァムが素早くクロコダインとヒュンケルに
打撃用の万能薬を口に流し込みベホイミをかざす。

嘘だろう・・・・たったの一撃でこれだなんて・・・・

ポップの脳裏にはロン・ベルクの言葉が蘇る。
俺が大魔王に作った光魔の杖は―駄作―だが、それは俺の感想であって使い手があの大魔王だとダイの剣以上の力を発揮する代物だ。
使用者の魔力を吸って発生する剣、それが光魔の杖。理力の杖と違い、使用者によってはそれ以下の武器にもなるが、魔力が自分から見ても桁違いの大魔王が使用すれば危険な代物になると・・・・・忠告を受けていただけに、あの杖を見た時から警戒していたのが無意味のように蹂躙された！

「・・・ッウ、世話をかけたなマァム。」
「大丈夫だ、心配をかけたな・・・」

「起きれたかよヒュンケル、おっさん・・・・あの大魔王さんの武器ってとんでもんでもねぇわ・・」
たった一度の波状攻撃で、幾多の死闘を乗り越えてきた自負がある自分達を此処迄ずたずたにしやがったよ。
悔しげに言葉を滲ませるポップだが、その瞳は死んではいない。こんな序盤で負けた気でいるわけにはいかないのだと。
その思いに応える様に、ヒュンケルは剣を、クロコダインもアックスを構えバーンを見据える。
彼我の差があろうとも諦めるつもりは毛頭ない！
バラン息子の下に降り立ちマァムをティファに預ける。地面で休ませたいが、其れではいつ死神に攫われるか分かったものでは無い！

バーンが・・・これ程の強さであったとは・・・
あの攻撃は技でも何でもない、ただ己の魔力を開放した波状攻撃に過ぎないとバランは見ている。
それだけであの威力！・・・・・この姿では勝てぬ・・・・

「ティファ・・・・・すまん・・・」
バランの目を見たティファは、父がこれから何をするのか分かってしまった。駄目だ！自分は・・・
「とう!!」
ラリホーマ
ティファが止める言葉を言う前に、バランは娘を寝かせる。

「あぁ・・・いや・・・・いや！私も・・・・ティファも・・・・た・・・た・・う」
優しく娘の額に指をかざし睡眠呪文を掛ければ、ティファは眠りに抗いおうと必死に手を自分に伸ばしてくる。
「おいて・・・・いか・・・」
その言葉を最後に、ティファの腕がするりと下に落ちる。
赤子の頃は自分が抱けば泣いていた息子と違い、自分の腕の中が安

らぎの場だと言ってくれるように笑いながら眠りについてくれた愛しい娘の、泣く寝顔に胸が痛む。それでも
許してくれティファ、お前の今の体では戦えぬのだ・・・・

自分が知らない高度な術で黒の核晶と、もしかしたらバーンの秘密を背負った肉体を消した時から弱っていたティファは、ダイと共にドルオーラを放ってしまった。
大半はどうやら息子が自分の闘気を使い、ダメージも引き受けたようだが全部と言う訳に行くはずが無い。
僅かであってもかなりな負担になるのがドルオーラ。そのダメージを回復させるためには安静にさせなければならない。
だがティファが、黙って一行の戦いを見ているだけでいられるはずが無い！きっと傷ついた体でも動ける範囲で戦おうとしようとするのが目に見えている。
優しい娘、それ故に自分の肉体など顧みず躊躇いも無く動いてしまう。
それを防ぐと共、睡眠呪文をかけたもう一つの理由、それが

「おおおおおおお!!!!!!!!」
バリバリ!!!

バランは左目のモノクルを左手で外した直後雷をその身に受け、肉体が変貌していく。傷ついた掌から滴る血の色が、人間の赤から魔族の青へと変わった時、肉体は変貌を遂げていた。竜の騎士の最終戦闘形態・竜魔人へと。

この肉体を、ティファに見せたくは無かった！
自分と戦ったあの時、自分のみならずティファはガルダンディーとボラホーンと戦い、そしてその手で死なせてしまった事を思い出さずにはいられまい。
竜騎衆が蘇ったとはいえ、古傷が消える事がないのは自分が一番

知っている。
　己とても、二人の子に迎えられた今でも妻を喪った時のあの痛みを、大罪を犯した罪悪感が消える事は終生ないのだから・・・
　本当ならば・・・
「ディーノよ、不快だと思うが済まない。」
　ディーノにも見られたくは無かった!!
「だが、バーンに勝つには・・・」
「分かっているよ父さん。ティファには休んでてもらおう。マァム、べほちゃん、ティファ頼んだよ!!行こう父さん!!!」
「ああ!行くぞディーノ!!!」

「ハドラー、悪いがここにいてくれ。ヒム達の思い無駄にしたかねぇんだ。」
「しかし・・・・」
「・・・・それにティファ守る為にも俺達も動けねぇんだよ・・・・おいでなすったか!!」
「海波斬!!」
　バーンはダイとバランを迎え撃つべく、ミストは親衛騎団達を捉えてここに来るのは・・・

「お前が行くのは地獄だろうがよ疫病神!!!ギラ!!」
「死神だって何度言えば覚えるのさ、頭の悪い子だね魔法使い君は!」
　ティファを捕らえ、出来ればハドラーの首を自分の手で堕とすべく大鎌を振り上げ投げながら迫る死神を、ヒュンケルの海波斬とその威力を殺さないようにしながらサポートとして放たれた収束して撃たれるギラの連発で迎え撃つ。
　それら全てを空中で優雅に躱しながら迫るキルの前に立ち塞がったクロコダインが、腕力に極限の力を込めたアックスの一撃をキルに振り下ろす。
「渡さん・・・・我らの光を貴様などには!!!」
　キルの赤黒い瞳を見据え、死神の何もかもを潰さんとするクロコダ

インの力と言葉を、苦も無く受けるキルは歌うように拒否する。
「渡してもらうよ獣王君♪」
光を喪えば生き物は滅ぶしかなくなるのだから

苦戦

ティファを取られない為に、無意識にティファをきつく抱きしめる。
ほんの少しの隙間から細く小さなティファを攫ってしまわれそうで、きつくきつく・・・
ベホイミスライムのベほも、ティファの肩に乗り周りを警戒している。
隣にいるハドラーを時折りベホイミの光で癒しながら。
「俺の事は良い・・・それよりも加勢に行かなくていいのか？」
「・・・・・私の今の役割はティファを守り抜く事よ。」
ハドラーからの問いに、マァムは素っ気なく返答する。いかに呉越同舟の様な態になったとはいえ、気安く話せるほど自分達の因縁は単純ではない。
それでも、ティファが助けると決めたのだから！
そのティファを守るのが今の自分の役割だ。いつ攻撃が来てもいいように片膝をついて、全方向の気配を警戒する。
マァムは目の前の激戦を見ている事しかできないが、それが悔しいとは思わない。腕の中に居るのは、クロコダインの言う通り私達の光そのもの。渡すものか!!!
ティファ、絶対に守り切る。だからお願い、このまま眠っていて。
お父さんのバランも、ダイもポップもヒュンケルもクロコダインも皆んなが戦っているから・・・

「あぁぁぁぁ!!!」
「はぁっ!!」

竜魔人と化し速度も威力も上げたバランとダイのタッグにもバーンは平然と対処した。
真魔剛竜剣とダイの剣の猛攻にも光魔の杖は耐え抜き、バーンは剣

の部分だけではなく柄の部分にも魔力強化を施すことをしてのけ伝説の武具達にひび一つ入れるのを許さず、突けば槍、はらえば薙刀、斬れば剣の三位一体の攻防でダイ達の猛攻を凌ぎ、二人を振り払えば即座に地面にイオナズンを放つ。

竜の騎士の竜闘気に魔法はほぼ無効化する。とは言え、物理攻撃は―半減―するのであって無効化ではない。

いつぞや一行の料理人がしていたように魔法を物理攻撃に転換すべく、ダイ達の吹き飛ばされるよりも数歩先にイオナズンを放ち、後頭部と背面を爆風と大量の土砂が容赦なく襲い、トベルーラでフルブレーキをするも光魔の杖の光球体が容赦なく二人を襲う！

ダメージが降り積もり、いつしか二人の息が上がり始める。

あの時のティファはノヴァとタッグを組んでやっていた事だが、バーンはそれをたった一人でこなし確実にダイ達にダメージを与えている。

バランとしては大魔王の弱点であろう近接近戦に持ち込みたいところだが、バーンも己の弱点を熟知しているだけに二人を近づかせない戦い方を展開している。

なにか・・・・父さん！俺が撃って出る間にドルオーラを!!

ディーノ、おそらくその手は向こうも読んでいよう。私が竜魔人になった時点で。

そんな！そしたら・・・

今はバーンの攻撃パターンを知る所からだ。時間制限があるわけではない、焦るな

・・・・・分かった！とにかくバーンを消耗させる！

息子からの問いに冷静に返答をするが、バーンの攻撃パターンを知れたからと言って直ぐに突破できるだろうか・・・

いや！突破せねばなるまい!!

息子よりも先に弱気になってどうすると、バランは己を　咤する。ダイ達よりも戦い慣れしている反面、かつて一度も出会った事がない強敵にバランの心は少しばかり弱気になっていた。

ダイ達にとっては、敵は凄くて当たり前。勝てる見込みが薄いのもいつも通りであったが、バランは違う。
生まれし時より戦士として定められ、記憶を受け継いだ時より周りはほぼ敵はなく、ヴェルザーとの死闘の時も死ぬ思いはしたがそこまでの力の差は感じられなかった。
唯一感じたヴェルザーも、封印すればよしと精霊達の力を借りていただけにほぼ勝ち筋の見えていた戦いをしてきた身としては、道なき道を進む戦いは初とも言える。
だが、その道しか知らないダイの、そして仲間たちの直走る姿にバランは勇気づけられ供に掛けようと前に進み・・・・・・其れは起こった。

ザシュ!!!

「・・・・ディーノ!!そんな・・・・何故!!」
「と・・・うさん・・・」
バーンに斬りかかったはずの真魔剛竜剣の刃は、愛する息子の肩を斬り裂き、バランは愕然としながらも息子を抱え即座にバーンから距離を取り残り一本の斬撃用の万能薬をダイのポーチから取り出し振りかけ、息子を背に庇いバーンの警戒をする。
一体何が起きた・・・・自分は確かにバーンに!!
何をされたのか分からないバランに、ダイはそっと声を掛ける。
「父さんが急に現れたみたいだった・・・・大丈夫、薬で治るくらいのかすり傷だよ。」

痛みはすでにないと笑うダイを、バーンは少しばかり感心した。
ほぅ、寸前で避けてみせたか。
バーンの目論見は半分成功し、半分は失敗した。
己の持っているハイ・エントの能力、移動させるラド＝エイワーズを無詠唱で発動させ、バランが斬りかかる寸前それがダイを真っ二つにする位置に送ったが、ダイが何かに気が付き寸前で避け肩口を斬り

裂いたのみにとどまった。
「父さんが急に移動してきたみたいに・・・あれも何かの技なの？」
「分からん・・・・」
「・・・・来ぬのか？」
自分を見ながら互いに話す二人をバーンの方から話し掛けた。
「ではこちらから行かせてもらおう。」
宣した後バーンは一際大きく光魔の杖を横に振りかぶり、球体を発生させながら剣を巨大で太い鞭へと変換させ二人を容赦なく打ち据える。
ダイとバランは咄嗟に二手に分かれダイは放出型のアバンストラッシュを、バランは鞭の下を床すれすれの低飛行で避け、バーンの懐に潜り込み、息子の放った技が光魔の杖に当るように羽交い締めにせんと迫る。
鞭の形状が太くなりバランの動きを隠す形になったのが幸いし、手を伸ばせばバーンの袖を捕まえようとしたその時
「駄目駄目～、貴人の袖を掴むだなんて行儀の悪い♪」
冷たい声が歌うように紡がれた時、背中に途轍もない激痛が奔った!!
「ッガァァァァァ!!!!」
「父さん!!!」
意識していない外からの攻撃は、キルトラップの一つ、剣の雨が容赦なくバランの羽の付け根を柔らかい部分に降り注いだ。
その部分は他よりも筋肉が少なく、常時竜闘気で覆われている部分でも弱い部分の一つを、もろに喰らいバランはたまらず苦痛に満ちた悲鳴を上げてしまい、ダイは直ぐに父の下に飛んで続いて出てくる剣を壊しながら、ダメージを負った父を地面にそっと下ろす。
「父さん!!」
「・・・大丈夫だディーノよ。驚かせたがダメージ自体はさほどでもな

い。それよりもバーンを・・・・・」
「分かった・・・」
ダイは素直に父のいう事に従いバーンに向き直り剣を構えるが、心の中はキルに対する怒りで煮えたぎっている。あいつは一体俺の大切な者達を何処まで傷つけれる積りだ!!
妹を始め、父をも・・・・・敵うならば今直ぐに叩き壊したい！
ヒュンケルとクロコダインを相手取り、時折放たれるポップの魔法も身のこなしで躱すかあ空間を広げて魔法を消すかと質の悪い戦い方でポップ達を翻弄する。
そして片手間とばかりにバーンの援護までして見せている。
「行儀の悪い子にはお仕置きだよバラン君。君もオイタ過ぎるよヒュンケルく～ん。いくらミストの秘蔵っ子だったとはいえそろそろ僕も君をお仕置きしないといけないよ～。」
ヒュンケル達にとって、はっきり言えばキルとは相性が悪すぎる。
戦闘力を単純に表せれば、力も技のスキルも操る能力もほぼ全てヒュンケルが上といよう。
アバンからもミストからも武の天才と言わしめ、あと数か月本気で特訓すれば自分にも勝てると天才剣士ロン・ベルクをして言わしめたヒュンケルだが、今までキルの様な搦め手を得意とし、千変万化に動きを変える敵がいなかった。
みな得意な得物で自分の前に立ちふさがってきた。あるものは剣を、あるものは魔法で、あるものは槍であり、あるものは爪や牙であった。時に複数のものを合わせてその度に大ダメージを喰ってきたが対処する事は出来、ミストとの修行を除いては今日までダイ以外に負けた事は無く勝ってきた。
だがキルはそのどの動きにも当て嵌まらない！先程大鎌を持っていた時に打ち込んだクロコダインを、キルは大鎌を上に振りアックスを払うと同時に、すぐさま右手を大鎌から離し空間に空いた手を入れたと思えば、レイピアがクロコダインの腹部を貫き、キルはそれを見届ける事もせず足でクロコダインの巨体を壁に打ち据える。

「グァァァァ!!!」
「クロコダイン!!!」
「余所見している場合じゃないでしょ。残りは君だけだよヒュンケル君。さしの勝負だ、存分に僕と踊っておくれよ!!」
クロコダインの腹部にレイピアを残し、キルは再び大鎌を持ち愉し気にヒュンケルに討ちかかる。
キルにとってはマァムなど少々手強い武闘家程度であり、ヒュンケルさえ倒せればそれでチェックメイトとなる。
「ほらほらどうしたのさ!!そんな様じゃ君を鍛えたミストががっかりするじゃないか!!こっちに戻ってきてまた一からミストに鍛え直してもらいなよ。君の事はバーン様も気に入っていたんだよ?今ならお嬢ちゃん込みで君の事も僕も口利きして・・・」
「黙れ!!!」
ふふ、本当にこの子は小さい頃から何も変わっていないな~。
直ぐに怒り出す
ヒュンケルに弱点があるとすれば其の一点。
それは普段は無表情で氷の如くと言われているが、それは仮面。誰よりも熱い情熱を持っているヒュンケルが己を隠す為の。
普段はそれを上手に被っているが、幼い頃からキルはモシャスをして自分と知られないようにしながらヒュンケルをからかって遊んでいた。
それは主にアバンの事をネタにして。
口でそして心の表面上では彼のものを憎んでいるというが、心のもっと深い所ではアバンの優しさに魅かれているのをキルはずっと知っていた。
暗殺者の観察を日常としている者からすれば、ヒュンケル等隠し事をしている内にも入らず、見ていて数日で知れている。
憎しみの裏返しを心に秘めている。
口で憎しみを吐かなければその思いが持たないから、復讐の動きを止めれば気が付いてしまうから。いつしか無意識にアバンを心の奥底では慕っていた事を。

親友を自分にとっては無価値な者にとられた腹いせに、姿を幾度も変えアバンをぼろぼろにけなさえば、決まってヒュンケルは激怒した。
貴様如きがアバンの何が分かる!!
あれは自分の者だと独占欲丸出しにしているのに全く気が付かず。滑稽な有様を見て留飲を下げていたが、大人の様になってもまるで変っていない。
他の事を言っても戦場の今では表情を変えないだろが、ティファを持ち出されれば途端に崩れる。

崩れた所を更に狙って行けばいい。君の弟子殺しても怒らないでおくれよミスト~。
困った事に、親友が弟子の様子を食い入るように見ている。
敵に走っても、情の厚い親友にとっては弟子のままらしいが仕方がないよね。
僕にとってはこの子は今も昔も無価値なままなんだからさ♪

覚醒

ガガガがガガガッ!!!!

眠りの底にいるティファにも届くほどの轟音がすぐ側迄迫っている。

それは何もかもを喰らい踏みつぶし進む無慈悲な壁が迫る音。

・・・・・・なんの音だろう?何か途轍もなく硬い何かを掘削機で掘っている様なそんな途轍もない音なんて、この世界に生まれてから一度も聞いた事ない。

・・・・・・音が迫ってる、なのに眠い・・・・・起きたい・・・・・・起きないといけないのに何かが私の邪魔をする!

私の大切な人達を傷つけるかもしれない音等消さないといけないのにっ!!!邪魔をするな!!!

私の邪魔は許さない!!!たとえそれが何であってもだ!!!!消え失せろ!

おおっ!!!!

それは突然目覚めた。

迫りくる壁の前で呆然としてしまったマァムの腕の中で精神世界で自分に絡みつき眠らせ続けんとするラリホーマの力を引き千切りぱちりと目を覚ます。

驚くダイ達を尻目に睡眠呪文の威力を吹き飛ばし、ティファは完全に目を覚ました。

少し前にダイ達はバーンを相手に、ヒュンケルはキルを相手に苦戦

していたが、それでも一進一退の攻防に膠着し、互いに決め手がない戦いへと突入した。
キルがヒュンケルを感情から崩そうとしても、その実力が崩れた所をカバーしてしまい揮いし大鎌をとうとう破壊され、空間からの突如の罠も多少のダメージを喰らってもギリギリで致命傷を回避し、少しずつ自分の動きに目が付いてきたようで動きが格段に良くなり辟易とし始めた。
武の天才児の二つ名は伊達では無かったんだね～・・・厄介な。
早くヒュンケルを倒してティファを手に入れたいのだが、立ちはだかるヒュンケルが邪魔になり始めた。
バーンの方も魔力の桁が周囲の者達よりも底なしに近い程違うとはいえ、いずれは限界を迎える。
黒の核晶の起動、ドルオーラを防ぐ為にもう半分方使っている。ここいらで幕引きを図りたいと、キルに念話を飛ばす。
―壁―で一気に押し潰す。其方は好きにせよ
たった二言三言の素っ気ない指示とも命令とも呼べないバーンの物言いに苦笑しながらも、キルは壁が放たれるのを喜んだ。
あれは何もかもを押し潰す―災厄の壁―
あれから逃げきるのは至難の業で、仮に壁を崩す為に伝う地面を破壊しようとするのを自分が即座に阻止すればいい。
壁がマァムに迫った直後、邪魔だがティファ諸共に亜空間に落とす。出現した直後にマァムの首を切り落としてティファを手に入れれば済む話だ。
ダイとバランを何度目かの払い攻撃の後、バーンは光球体を生み出すよりも更に大きく後ろに光魔の杖振りかぶり、バランはその姿に背筋がぞくっとしたものが奔り、ダイもカタカタと震えはじめた・・・・・あの動きを！あそこで止めなければいけない!!!
「やめろぉぉぉぉ!!!!!」
ライデイン!!!
何かなんてわからない！それでも今までにない何か途轍もない物

が自分達に襲ってこようとしている!!
あれは！放たれてはいけないものだ!!!!

怖れが上回ったダイは、無闇にバーンへとライデインストラッシュを放とうとした。
止めなければいけない
ただひたすらその事のみを考えて。だが、冷静にバーンに向かって行ったとしても、例え父バランと同時攻撃をしても結果は変わる事は無かった。
―厄災の壁―カラミティウォールが放たれたのだから。
壁は放たれたライデインストラッシュを受けながらも飲み込み前進し続ける。
それは何もかもを砕きながら徐々に前へと進む。その威力はすさまじく、オリハルコンですら容易に砕くが半面移動速度ははさして早くはない。
だからと言って逃れる術はない！四方は壁で、出口方面からの攻撃にポップ達は追い込まれ、まさにカラミティウォールに閉じ込められ死を待つ袋のネズミと化してしまった！
「チックショウが!!!」
どうする？メドローアで消滅させるか・・・・・だがそれをすれば相手は大魔王！マホカンタ系の仕込みくらいはしていようし、跳ね返されれば結局は全滅するだけ・・・・・どうする！どうすれば!!

「全員伏せよ!!!!」
「父さん!?!」
「ディーノ!!お前は妹とマァム達を衝撃から守れ!!」
バランは両手をがっちりと合わせ、目の前まで迫っている壁に向け構える。
その動きと指示にダイは父の言った事を実行すべく、壁に激突したままのクロコダインを回収し、いつの間にかキルが消えたので壁にどう立ち向かうか対処しようとしているヒュンケルとポップも抱え、

マァムとハドラーを起点に全員を伏せさせる！
「全開!!竜闘気!!!」
ダイの防御陣の展開を見届けたバランは、ギリギリまで壁を引き付けドルオーラを放つ寸前に、カラミティウォールの音にも負けない声が聞こえぎょっとした。
「ティファ!!!どうして・・・」
息子の狼狽える声で何が起きたのか分かった。
あの子が目覚めた⁉だが、自分がやる事は変わらない!!ドルオーラで・・・・

「ラド＝エイワーズ」

ドルオーラが放たれんとしたまさにその時、微かに聞こえるバーンの声がバランの耳に届くと同時に、厄災の壁よりも怖ろしい物がバランの目の前に出現し、視界に映った直後バランは瞬間硬直してしまった。

「―それ―に向けてドルオーラ撃って父さん!!!」
目覚めたティファは、瞬時にマァムの腕から飛び出し兄の張った竜闘気の防御幕から身を踊り出し、動きの止まってしまった父に怒鳴り声で指示を出す。
あれは！アレは存在してはいけないものだ!!!
かつてザムザから見せられた超小型の黒の核晶に、バランもティファも怖気震えたが、ティファはどう対処すべきか瞬時に弾き出し、バランもまた同じ考えに至り黒の核晶諸共壁を破壊すべくドルオーラを全力で放った！

ヒュッ・・・・ドッッゴオオオオオオンン!!!!

ドルオーラと黒の核晶の爆発は、余りにも威力が強く瞬間周囲の空

気を全て吸い上げ真空状態になり、その直後途轍もない規模の大爆発を起こした。
それは何もかもを消さんとするかのような大爆発であり、ダイが全員を地面に伏せさせ竜闘気の防御をしていなければ間違いなく巻き込まれ瀕死か重症になっていたのは間違いないほどの威力であった。
バーン達もミストは陣を維持したまま密度を極力薄くした事で回避し、キルはバーンの張った結界の中に入ってやり過ごす。
ティファも雪白の中に残っていた僅かな闘気を防御に回して瀕死は免れたがある程度のダメージを負ってしまった。
だが！そんな事は関係ない!!!

「父さん!!!」

ドルオーラで相殺できたとしても零距離からの破壊衝撃に、竜魔人化したとはいえバランが無事で済むはずが無く、肉体がボロボロになりぐらりと空中から落ちてくる父を両手で広げようとして受け止めに落下地点に走った。
この戦いで軽傷で済んだヒュンケルも、今動かずに何とすると傷ついた己の体を叱咤して走り、ティファが受け止める前にバランを空中で受け止める事に成功し直ぐに担ぎ、地面に降りると同時にティファも小脇に抱えダイの下へと戻り、二人を降ろして瞬時に剣を構える。
誰が傷つこうとも、大魔王が攻撃の手を休めるはずが無い！警戒を怠れば即座に二の矢三の矢が放たれてしまう!!
それを防ぐのには仲間が傷ついた事は胸の中で嘆いても、攻められてきても容易にはいかないと構えなければならない!!
「ダイ・・・・」
「分かってる・・・・・父さんはティファが・・・だから・・・」

ボロボロになった父に縋りつきたい思いを殺し、ダイは目の前の敵を見据える。
妹は戦いもさることながら人を癒す術に長けている！心の悲しみ

から現実的な傷迄、これまで癒せなかったものは無かった!!そのティファが目覚めている。
ティファがいればなんとか・・・・・・

「父さん御免!!!!!!」

だからこそ、妹を信頼していたからこそ次に起きた事への衝撃は凄まじかった。
ティファのこれまで聞いた事もない悲痛な声に振りむいたダイが見た物は、マァムに支えられている父の右腕を肘から少し上の部分を雪白で斬り飛ばした光景だった。
それにとどまらず妹はすぐさま斬った右腕の傷口に噛みつき、青い血が顔につくのも構わずに―細い何か―を口に咥え伸ばし、いつの間にか手にしていた糸で細い何かを縛り上げると同時に、傷口に斬撃用の万能薬を振りかけ叫び上げた。

「べほちゃんべホイミ!!!!!!」
それは泣く代わりに叫ばれた言葉。
どうして・・・・・・ティファは父さんの腕を・・・・・・

・・・・これは・・・・・もうどうしようもない・・・・・
ダイの悲痛な心は、そのままティファにも当て嵌まる。

ヒュンケルに降ろされた直後父を見れば、体全体が火傷に侵され、特に腕の・・・・・右腕の方は完全に焼き潰れていた。
これでは傷口から細菌が入って壊死してしまう!
如何に竜の騎士が頑強であっても、あの秘密部屋の十間日で嫌というほど自分は知ってしまった。竜の騎士とても病になる事を。
肉体がいかに頑強であっても細菌が強ければ死んでしまう!―死んでしまった箇所―が、他の箇所を殺してしまう前に!!
マァム達が止める間もなく、躊躇う事無くティファは雪白をふるい

上げた。
「父さん御免!!!」
　雪白で父の右腕を肘から上で斬り落とし、腕を通っている大動脈をすぐさま歯で噛むことで多量出血を止め出血死を防ぎ、髪の毛ですぐさま式能力で糸を作って大動脈を縛り上げ、斬撃用の万能薬を振りかけすぐさまべほちゃんに表面の傷にベホイミをかけて貰った。
　斬撃用の万能薬、火傷用どちらも破傷風菌を殺せる強力な殺菌効果を持つ薬草が入っている。表面を治しても破傷風で内部から死んでしまわないように・・・・・助けるにはこれしか方法がなかった!!
「・・・・・父さんの腕・・・」
　せめて父の腕を弔ってあげたくて探すティファを、マァムが瞬時にバランを床に下ろし、胸に抱きしめ視界を防いだ。
「見ちゃダメティファ!!!」
「メラミ!!!」
　ゴォウ!!!
　ティファに斬り飛ばされ、どさりとダイ達とバーン達の超で真ん中に落ちた腕を見せまいとマァムはティファを抱きしめ、ポップがすぐさま燃やし尽くす。
　ティファが見なくて済む様に・・・・いかに父の命を救うためとはいえ、心優しいティファがその事に耐えられるはずが無い!!
「・・・・・ティファ・・・・・お前はなぜ・・・・」
　自分が傷つくのも顧みず他を助けようとすると、見ている事しかできない己の不甲斐無さを責めているハドラーすらが嘆き、見ていたヒム達もやりきれない思いが胸を占めた。
　ボロボロになりながらも、それでも命を救わんとするティファに

妹と父のその姿を見たダイの中で―何か―が切れた

折れる物　折れない者

ゆるさない

　べほのべホイミである程度回復したバランは薄っすらと目を開け、それに気が付いたティファは父に縋りつき咽び泣く。

「めんなさい・・・ごめんなさい!!ごめんなさい!!!」

　何度も何度も自分に取り縋り謝るティファに、意識がまだ半分朦朧としたバランは状況が分からなくとも、取り合えず愛娘の頭を撫でようと右手を持ち上げようとしたが・・・・

「・・・どう・・しても、父さんの右腕治せなくて・・・・ティファが・・・」

「そうか・・・・・お前は何処も怪我はしていないか?」

　戦士として生きて来たバランは、娘の短い言葉の中で己の腕がどうなったのかを悟り、それ以上言わなくてもいいように優しく笑いかける。

　大逆を侵し、償う道すら分からない自分が生きているだけで何の文句があろうか。

　ティファが無事なればディーノも無事の筈。腕一つで子等を守れたこと以上に喜ぶべきことがあろうか。

「・・・ない・・・無いよ、だって、父さんが守ってくれたんだもん・・・」

　グシグシと泣き、腕で滅茶苦茶に目をこする娘にバランは苦笑する。

「目が傷つくぞティファ。それよりもディーノはどうした?無事なればまだ戦いは・・・」

「・・・・・・俺が起こそう。」

「ハドラー・・・・お願い・・・・私の力ももうほとんどないので・・・」

　娘の無事を知ったバランは次に気になった戦局を聞けば、まだ戦えないが動く事が可能になったハドラーがバランを抱え起こす。

「・・・・・貴様の子は・・いや、子等はとんでもない者達だ。」
以前ハドラーはバランの娘はとんでもない娘に育っていると評したが撤回した。ダイも十分とんでもなかった!!
ハドラーに抱え起こされるという不思議な状況にバランは少し狼狽するが、目の前で繰り広げられている戦いを目の当たりにして困惑など吹き飛んだ!!!

「ハァァァァ!!!!!」
「クッ・・・・・・」
息子が一人で大魔王バーンと一騎打ちをしていた!!
其れもどうやら息子の猛攻に、バーンが押される形で・・・

滅ぼし尽くしたい!!!
今ダイの剣で猛攻しているダイの頭を占めている感情はたった一つ。目の前のこの敵を打ち砕き滅ぼし尽くすのみ。
目には少し前まで宿る気配すらなかった殺気が宿り、その瞳は竜魔人化したバラン、あるいは雪白を全開にして戦った時のティファと同じ、戦士でありながら獣性を宿した獣の目。
元来ダイはティファ以上に優しい少年であった。自然を愛し、仲間を愛し、ティファと違い広い世界ではなく身近な家族を大切にする子。父バランよりも、母ソアラの穏やかな優しい気質を継いだのはダイの方であった。
だがそのダイが、魂の底で眠っていた獣性を呼び覚まされた。父と妹のあの凄惨な姿に、優しさを忘れる程の怒りに震えて。

「アァァァァ!!!」
それはバーンの波状攻撃と同じで技と呼べる攻撃ではなく、ただ力の限り剣をふるい、我武者羅に光魔の杖に打ち込んでくる単調攻撃であった。
本来であれば、バーンも捌けない範囲の攻撃ではない。

しかしここで、先程二度使ったラド＝エイワーズの消耗が効いてきた。
如何に呪文の魔力とハイ・エントの魔力が根本的に違っていたとしても、それを使ううのは同じ人物。
リャナンシーなどに比べれば消耗はさしてないが、其れでも溜し疲労と久方ぶりの実践で体の負担が思ったよりも大きいのが誤算であったが！

「調子に乗るでないわっ!!!!」
ダイが杖に執拗に攻撃するのを逆手に取り、打ち込んできたのを弾かず受け止め、左手に火炎呪文を素早く溜め込み、零距離から食らわせた技は・・・

「カイザーフェニックス!!!」
いつからか、大魔王バーンのメラゾーマはそう呼ばれるようになった。
たった一つの火炎上級呪文が必殺の域にまで高めたその偉業を讃えてか、それとも美しいその姿をさしているのか分からないが、誰とも分からずつけられたその名に恥じず、
カイザーフェニックスは使用した主の敵を嘴にはさむ様にダイの体を包み込み、燃やし尽くさんと大爆発を起こした。
その威力は凄まじく、如何に魔法を無効化する竜闘気をもってしてもダメージを殺す事は完全に出来気ず、ダイの体は空中に無防備で放り投げられた！
「ディーノ!!!」
「ダイ兄!!!!」
「ダイ!!!」
動けず叫ぶことしかできないバランとティファと、護衛の為その傍らを離れることが出来ないマァムは無力感に苛まれながら叫ぶことしかできなかった。
「ダイ!!!退けキルバーン!!!」

「退く訳ないでしょうがおバカな子だね～ヒュンケル君！」
片方で死神を開いてい戦っているヒュンケルは、カイザーフェニックスのダメージで上空に放り投げられた弟弟子に、もう一撃放とうとするバーンの下に駆けて呪文を阻止せんとしたが、死神が邪魔をする！

「メッラゾーマ!!!!ヒュンケル!!」
ゴオオウ!!
自分にはあの火炎呪文は止められない!!しかし疫病神位は止めてやらぁ!!!
ヒュンケルの行く手を阻むものを焼き尽くさんとしたメラゾーマは、バーンほどでなくともキルにとっては十分脅威であり、回避行動をせざるを得ずヒュンケルを行かせてしまった。
・・・・・間に合わん！
バーンの下へと行くには距離があり過ぎ、着いた時にはもう遅いと判断を即座に下したヒュンケルは、走るのをやめありったけの闘気を足の筋肉に込め、上空高く飛びダイと放たれたカイザーフェニックスの間に割って入った！
この鎧ならばもつ！弟弟子を!!ダイを守ってくれよ鎧!!
槍の魔装ではなく、剣の魔装であったのが功を奏した。
剣の魔装は本来の機能、魔法を完全に防ぐ機能が備わっているとロン・ベルクは言っていたが、想定以上の魔法を弾くのはマホカンタ系の呪文かシャハルの鏡など伝説の代物ではない限り不可能だ。
現にヒュンケルはディン系の前で敗れ去っている。それが金属であり通電してしまうからだ。
通電の弱点があり、通常とは違いすぎる呪文などロン・ベルクとて出会うとは思わず、それ故にあらゆる魔法を無効化にすると謳っていたが現実はそううまくはいかないものであった、はずだった。
その鎧の素材はオリハルコンであり、魔界の伝説の名工とまで呼ばれるに至ったロン・ベルクが正真正銘ヒュンケルの事だけを思い渾身の力を込めて作られた鎧は、シャハルの鏡同様伝説の武装へと昇華さ

せた。
バーンのカイザーフェニックスは、新たな敵を燃やし殺そうと体内に取り込むが燃える気配がなく
「海波斬!!!!!」
数多の敵を焼き滅ぼしてきたカイザーフェニックスは、たった一つの技に斬り殺される。
斬られた炎の名残が消え尽くす前に、ヒュンケルの横を猛スピードで落下する者がいた！
「ダイ!!!!」
第二波から守られたダイは即座に態勢を空中で立て直し、動くと分かった己の体をバーン目掛けて突進し、その威力を存分に剣に乗せる！

これで！壊れろ!!!!

闘気と落下速度を存分に乗せ、威力が数倍になったダイの剣は・・・・悲鳴を上げる。
今までの様な剣に与えられ積もったダメージを考慮せず、使い潰すが如く大魔王バーンがふるいし光魔の杖相手に猛攻の連打し、如何にオリハルコン製でロン・ベルクが打った剣であっても金属疲労を起こすのは当然であった。
これが相手の武器が同等の、覇者の剣などであったならば話は違っていたかもしれないが、今相手にしているのはそれ以上の威力を放っている魔力の剣の前に・・・・

バキン・・・・・・

ダイの剣は、その刀身をまっぶたつに叩き折られた

あ・・・あぁ・・・・・

折れた？俺の・・・・俺を支えてくれた剣が・・・・・大魔王には誰も勝てないって言うの？

相棒とも呼び始めた剣の無残な姿に父の敗れた姿も重なり、ダイも自分の心が折られかけたその時

武器は壊れて当たり前だよダイ兄

優しい、そして力強い妹の声が脳裏に響いた

折られても・・・・・そうだ・・そうだ・・・・・そうだよねティファッ!!!

「おぉぉぉぉ!!!!!」

ズダン!!!

剣が折られ自身も地べたにへたり込もうとした体に、ダイは気力の鞭を入れ両足に力を込めたダイはそのまま流れる様に光魔の杖の柄の部分を掻い潜り、無防備なバーンの腹に渾身の拳を叩き込んだ!!

「折れてたまるもんか!!俺は折れない！何があっても!!どんなことをしてでも！俺は勝つんだ!!!!!」

ダイの剣が折れた時、使用者のダイからも心が折れかける気配を感じ取ったバーンであったが、決して油断はせず止めを刺そうと光魔の杖の剣で刺し貫こうとしたが、今生で味わった事の無い激痛に体を傾がせる。

「バーン様!!!!!」

「バーン様!!!!!」

先程と違い今度はキルとミストがバーンを助けに走ろうとしたが、ミストはその場を離れればヒム達を解き放つことになり、無論ヒム達も即座にその事に気が付く。

「いいんだぜミストバーンさんよ、大魔王様を助けに行っても。」

「その瞬間我らはどちらに加勢するかは知れませぬがな。」

「我らが主、ハドラー様の敵を打ち倒す方に決まっているでしょう。」

「ブロ～ム!!!」

「クッ！・・・・・人形の分際で!!」

「邪魔をしないでよねヒュンケル君！」

「馬鹿が、先程貴様自身が言ったではないか！此処を退くと思うなキ

ルバーン!!」
「この・・・師を裏切りこちらに来てまた敵に奔った蝙蝠の分際で!!」
「なんとでもいうがいい!!」
ミストとキルは、互いの相手を忌々し気にしながらもバーンの下に駆け付けられず、ダイの猛攻は傾いでよろけるバーンを容赦なく振るわれ続けていく。

光は・・・・

ダイの体術による猛攻は途切れる事無く、徐々にバーンを圧していく。

老人姿の時の強みは底知れぬ魔力をもとにした光魔の杖の波状攻撃と魔法を組み合わせた連撃で敵を屠ってきた分、接近戦をされれば不利になる。

そこをミストとキルが補い戦ってきたが今は両名ともこちらに来れる状況ではない。

何故だ、何故誰も心折れず戦い続けることが出来る。

頼みの一人竜の騎士バランが右腕をなくし、ダイも剣が折れ自分を倒せる決定打がないこの状況で、勇者もその仲間達も誰一人として諦める気配が微塵もないのは何故だ⁉

バーンからすれば、今のダイ達は理解不能であった。自分を倒しきれる保証のない戦いに対しても果敢に自分達に向かってきているのが。

押されているとはいえダイも自分との差が埋まっている訳ではなく、スタミナが切れれば逆転されると分かっているだろうに・・・・・其れなのに・・・・

「ウォオオオ!!!」

拳の力が衰える事無く次々に・・・・・・

「鬱陶しい!!!」

ダイの拳を柄で払いのけた瞬間、それはバーンの目に留まった。

「ハドラー父さんお願い!!マァムさん一緒にクロコダインを!!」

「ちょ・・・ティファ!!」

ボロボロになりながらも戦場の端を、仲間と共に傷ついクロコダインを助けに走るティファの姿が。

「ティファ急いで!!」
「・・・は・・・い・・・・・」
マァムは自慢の腕力に物を言わせクロコダインをバラン達の下へと素早く引きずっていき、ティファが腹部に刺さったままのレイピアを抜きすぐさま斬撃用の万能薬を振りかけべほとマァムでベホイミをかけていく。

「ポップ兄!ヒュンケルと一瞬代われる?」
「・・・・どうした?」
「そろそろヒュンケルもダメージ積もっている・・」
「分かった・・・・イオラ!!!」
「ヒュンケルこちらに!!!」
急なイオラの嵐にさしものキルも翻弄され後手に回り回避行動に手一杯になった隙に、ヒュンケルも急いでティファの下へと駆け付ける。
「・・・助かったティファ・・」
「これ飲んでください、あと一歩です。キルバーン倒したら・・」
「あぁ、この剣をダイに渡せばいいのだな。」
「はい!」
今兄の手元に剣がなく決定打がない。だが、ヒュンケルがキルを倒せればテラン戦の時の様に剣をダイ兄に渡せばいい。
あの時と違って今のヒュンケルの剣もオリハルコン製で、魔力もかなり削られた今の大魔王相手なら勝てる見込みがぐんと上がる!!
本当は父さんの剣が、無事ならそっちの方がいいけれど、バーンが投げた小型の黒の核晶の爆発余波でヒビが入った。
本来ならありえない傷だけど、持ち手の竜の騎士の闘気が通っていなかったのが原因かはわからない・・どんな理由であれヒビの入って

しまった神剣よりも、武器としての格が下でも、ここはロン・ベルクさんが作ってくれた剣を信じよう。
「ヒュンケル、お願いします。」
「ティファ・・・・任せてくれ。」
ティファの発案を聞いたヒュンケルは力強く笑って引き受ける。
暗い中をいつでも光で照らし道を指し示してくれているティファの思いに応えたい。
ティファが出来ると信じているのであれば、自分達が迷う必要などどこにもない！
ただその道をひた走るのみ。
回復し道を指し示されたヒュンケルは、大鎌から逃げている弟弟子を背に庇う。
「さっさと地獄の戻ったらどうだ疫病神!!」
「君迄間違うだなんて本当に失礼だねヒュンケル君!!君達こそこの状況にさっさと絶望したらどうだい⁉バーン様を倒せる決定打の無いこの状況でダラダラ戦ってもじり貧になるのは君達だろうに!!」
「ふ、ティファが、一行の料理人が勝てると信じている戦場で俺達が絶望する訳がなかろうが!!」
キルの言葉を鼻で笑い飛ばし、ヒュンケルが吠え上げた事でバーンは―次の一手―に何を打つべきかを悟った。
ヒュンケルとしては、自分と仲間たちを鼓舞するつもりで叫んだ言葉であったが、同時にそれは―一行の弱点―を晒してしまった。
余の魔力はまだ半分ある、ハイ・エントの方であれば六割も・・・ならば。
バーンはダイが下肢に力を入れ右手の拳と紋章に力を注ぎ込み振り抜く直前のタイミングに合わせ、足元をヒャドで凍らせ足止めをする。
今までの自分の戦い方を鑑みれば、なんと自分らしくない戦い方であろうかとちらりと浮かぶが、勝つことが全てだ！

足を凍らされダイは、そのまま光魔の杖の鞭状の攻撃で壁に激突し、そのまま光球体に打ち据えられる。
背中の激突の痛みに無防備になった所へのこの攻撃は、頭に血が上りアドレナリンが全開となり痛みを無視していた体も正気に戻ってしまい痛みにのたうちたくなった。
「あぐぅぅぅ・・ああ!!!」
それでも俺は!!!
痛みに耐え、叫び上げるダイを見て確信に至った。
叫ぶ寸前ダイが見た者。
その者こそがこの一行の心を支えている。ならば先にそれを取り除く!

「ラド＝エイワーズ」

戦場の中での声とは思えない程の静かな声がバーンから発せられた時、ダイ達の絶望への道が開かれた瞬間。
詠唱と同時にマァムに守られていたティファが、バーンの左手で胸倉を掴まれ宙に浮かされていた!!
何故☒
マァムは、寸前まで抱きしめていたティファが、突如として大魔王の手に掴まれている事に愕然とした。
クロコダインを治療して、ヒュンケルに指示を出したティファを、再び自分の腕の中で守っていたのに!それなのに!!
マァムは心の底ら狼狽、ティファもまた状自身におきた状況に追いつかずにいた。
キルが、空間開けられてないのに・・・・・さっきも―一瞬―で黒の核晶の超小型版を・・・・
なぜ自分が捕まるような状況になっているのか分からないティファは呆けた顔を晒し、その顔にバーンはくつくつと笑ってしまう。
「ティファ!!!」
「そんな・・・・ティファ!!」

「ティファ!!!!」
「ティファ!!」
ダイが、寸前まで抱きしめて守っていたマァムが、タッグを組んで共にキルを倒さんとしていたポップとヒュンケルが、それぞれ駆け付けようとしている。
必死に、其れこそ自分達の全てをかけて取り戻そうとせんとして。
ダイ達が必死であればある程に、バーンはティファの全てを滅茶苦茶にしズタズタに引き裂きたい衝動がこみ上げる。
かほどにこの子供が大切か。余の邪魔をするのであれば、罰せねばなるまいよ。
左手でティファを掴み浮かせているバーンは、右手の光魔の杖の触手をそのまま接続させながら剣の部分を持続させ地面に突き立て、ティファの胸の中央にひたりと掌をあてる。
力は一切込めずにそっと優しくあてがう様に。
その感触に、カイザーフェニックスか何かで焼き殺されると警戒していたティファが戸惑ったその瞬間、今まで味わった事のない冷たい何かが自分の体を突き抜ける。
駆け付けようとは知るダイ達の足元を、陣でヒム達を捕縛しているミストが陣を維持したまま地面に傀儡掌の闘気の糸を蜘蛛の巣のように張り巡らせ瞬間の足止めにし、主が行った結果をまざまざとダイ達に見せつける。
「キャァァァァッ!!!!!!」
冷たい感触ににティファ本人は何も感じられない程感覚がマヒしたが、体は確かに感じた。
真っ黒い暗黒闘気がティファの体を通り抜けた瞬間、目は見開かれ体はのけぞり、自覚の無い痛みがティファに悲鳴を上げさせた！
「あぁ・・・あ・・・かはぁ・・・・」
悲鳴にのけぞり体内の内臓まで傷ついたダメージで咳込みと同時

に、ティファの小さな口から血が溢れ出る。
小さな体が痛みに震え、吐血しながらえづく感触が左手から伝わり、ティファの赤い血はまだ温かさを保ちながら顔を濡らした時、ティファの赤い血に濡れたバーンの顔は嗤っていた。
ティファの苦痛を愉しむ様に。

リャナンシー

これを一目見た時驚いた。魔族の自分を、其れも一般的にいる魔族とは全く違う自分を見ても、必要以上に驚かずにいた娘に。

そして向けられた言葉も・・・

神様？

可憐な唇から零れ出た言葉は、まさしく自分を指し示していた。

魔界の神である自分の正体を、知らずして図らずも言い当てた少女は、それ以上何も言わずに目の前の怪我をしたモンスター達の手当てにの続きをしだす。

まるで目の前の自分に等興味なく、重要でも何でもないと言わんばかりに。

再び自分を振り返っても特に騒ぐことなく、それどころか手を伸ばせば不思議と懐いてきた娘を昔可愛がっていた―あれ―に似ていた。

本当に古い記憶で、それとどう出会い、どうして可愛がっていたのかを今でも覚えているあれと同じ瞳を向けられて。

それ故に一時でも愛い者だと感じていたが、これ程の邪魔をされるとは。

可愛さ余って憎さ百倍というが、余にとっては万倍と言っても飽き足らぬ。

「あぁ・・・かっは！」

吊られた小さな体を震わせ、溢れる赤い血がバーンの顔に当たるたびに、バーンの笑みが深くなる。

左腕から伝わるティファの痛みに震える感触が、耳に聞こえる苦痛の声が心地いい。

己の悲願の邪魔を誰よりもする強者のティファを、存分に仕置きしていることが。

「どうしたティファよ、先程の元気はどこに行った？」

掴んでいるティファを自分に近づけ、貝のような耳に息を吹きかける様に話しかける。
「う・・あぁくぅ・・」
痛みと溢れる血で、ての口からは意味を成す言葉が出る事がないのを知っていても、愉快気に聞き続ける。
「そなたはハドラーの黒の核晶の事をいつどのように知った？」
「あぁ・・・い・・う・・」
「答えてくれないとは、悪い子だな其方は。」
それはいつかの夜に、キルがティファの心を壊すために言った言葉を再びバーンが口にする。
あの時のキルは、ティファの体を傷つける事は無かったが
グシュ！
「あ！ぎゃぁぁぁぁ!!!」
バーンは左手で無造作にティファの胸に爪を容赦なく突き立てる。暗黒闘気で皮膚も体内もボロボロになっているティファに対して無造作に。
「あぁあ！ガッハ!!!」
ティファがもがけばもがくほど、痛みで叫ぶ程にダイ達の心が抉られて行くのを承知で。
ティファの凄惨な姿に、耐え切れなくなったマァムが悲痛な叫びをあげる。それ以上ティファを嬲り者にされるのが耐えられない。
「やめて!!!ティファはもう！戦えないのに!!!」
今まで様々な戦いを繰り広げ、その度にティファの何かは確実にすり減るようにボロボロになっていたが！それでも惨い目に遭っていい筈がない！
「やめろバーン!!戦うなら俺と戦え!!!」
ヒュンケルの剣を手にしたダイが、紋章を光らせバーンに戦いを挑むが、バーンはダイに視線すら向けずに馬鹿らしいと切り捨てる。
「そなたの兄は実に愚かよな。己達の立場をまだ弁えていないと見える。」
正義感からか知れぬが、この状況で自分に物を言える立場だと思っ

ている愚かな勇者の行いも、他の者達の行いも全て・・・
スゥ
パサリ
「すべて其方に行くというのに。」
ティファの束ねた豊かな黒髪を切り捨てながら優しく言い放つ。
髪と同様、ティファの首をいつでも落とせるのだと。
その事実にダイ達は心の底から震え上がった。あの髪が・・・・もしもティファの首であったれば・・・・・
ガラン
今の状況を今度こそ思い知らされたダイの手から剣がするりと抜け落ち、今度こそ力なく地べたにへたり込む。
如何なる時も折れずに前を向いてきた勇者のその姿に、ポップ達の中でも何かが折られかける。

その瞬間、広間から一切の音が消えた。
ダイ達の抵抗の声も、制止する声も全て消え果てる。
こうなって当然だね～、これで勇者君達も終わりか。
篩の篩の前に自分が目論んだ事を、図らずも主が代わりに策を成功させるとは。
キルが周りを見回せば、ダイ達どころかハドラーも親衛隊達までもが抵抗する気力を奪われている。
ティファの影響のすさまじさの弊害といったところ。希望を与える者がいなくなれば、絶望にすり替わる時の速さは普通の比ではない。
最早決着がついたかに見えたその時

・・・シン・・・・・
・・パ・・シィン
パシン・・・・パシン!!

始めは幽かに、だが次第に大きくなる音に、ダイは虚ろになりかけ

る自分の顔を音のする方に向ける。
その目に映ったのは
駄目だ！抵抗をやめたら駄目だ!!
掴まり体の半分以上をぼろぼろにされ、母譲りだと大切に伸ばしていた髪を無残に切り捨てられながらも、戦う事を辞めず諦めていない瞳を持ち続けたままバーンの右腕を叩いているティファの姿があった。
諦めるもんか！私が死んでも逃がせる手段はある！
「・・・・・其方は、何故抵抗する？」
「わたし・・・まもる・・・・まもるの・・・」
バーンでなくともダメージにもならない頑是ない子供の様な抵抗するティファに、バーンは心底呆れる。
最早決着は付き大勢は決まっているのに無駄な抵抗をするティファに。
自分に取り縋り泣いていた幼な子の分際で。
「さほどに余らと戦いたいか？戦いたくないと、余の腕の中で泣いていた其方が何故戦う事をやめようとしない。」
バーンの放った言葉はティファ自身は無論の事、ダイ達も弾かれるようにバーンとティファの双方を見た！
今、バーンは何と言った？余の腕の中でと・・・・それはティファがこの戦いの以前よりバーンと会っていた事に他ならない!!
隠し事が多いティファは！そんなことまでも隠していたというのか⁉
「・・・・バーン様・・・いつお嬢ちゃんと会ったのですか？お嬢ちゃんもいつバーン様に会ったんだい！」
あまりの事に声をなくしミストと、死神キルバーンですら驚愕する

事を言ったバーンは、あの時の事を思いだす様に薄っすらと笑い、キルの問い掛けにティファが何と答えるのかを見定める。
ハイ・エントのリャナンシーの効力がまだ残っているのか。
「あ・・・で・・・出鱈目言うな!!・・・ガハァッ・・」
バーンの言葉をティファは、血を吐きながらもありったけの気力で否定する。
如何に隠し事が多すぎ、世に対し、仲間達に対し言えない秘密を抱えている自分でもこんな事を秘密にする道理がない!!
声が出るようになったとはいえ叫んだ事で更に血が溢れ激痛に襲われながらも、ティファは気丈にもバーンを見据える。
「わたしは・・・・あなたに会った事なんて・・・・無い!!!」
その答えにダイ達はティファの言葉を信じ言い知れぬ安堵を覚え、バーンもまた満足する。
そうか、ティファが自分と会った記憶も、取り去ってやったあの胸の痛みも忘れはてたまま・・・・・よかろう、それほど知りたくば返してやろう。

「余との出会いの記憶と共に、己が心をも壊す程のあの胸の痛み諸共に思い出すがよい。」

ポォウ
左手に光球体を蓄えたバーンは詠唱を始める。
「蔦を伸ばし宿主の下へと帰りて蘇れ、リャナンシー。」
さぁ、あの悲しみと痛みを宿し、再びのたうつがいいティファよ
そして今度こそ壊れ果て、その姿を勇者達に晒すがいい

箱の底には・・

何故だ・・・何故ここはこれ程に迄美しい・・・我等は苦しんでいるというのに!!何故この地は清いのだ!

あの暖かいものはなんだ⁉

―空―が何故黒くない・・・・あの白い物青い物は一体・・・

知ってどうする・・・・俺達が帰る所にあれは無い・・・

殺されない、其れだけで・・・

何故!俺は帰りたくない・・・・・ここを見て、再びあの暗い地に戻るなど・・・

我等が戻るのを待つ者もいる、帰ろう。彼らの為に・・・・・・大魔王様が勝てば、この地は我等のものぞ

そうだ、楽園を享受していた者達等!全て滅べばいい!!

篩の塔の最後尾、ティファは兵達と共に魔界のモンスター達がつつがなく帰るのを、瓦礫の上で膝を抱えて見ていた。

当然兵士たちにはモンスター達言っている事は分からずとも、ティファには分かる・・・・分かってしまう・・

私は・・・・この子達を地獄に送り返す・・・

太陽を知らず、温もりを知らず、白い雲も青い空とても知らないこの子達を・・・

この子達が大魔王の勝利を願うのは当然だ・・・・・暗い地にて希望の無い日々を、ただ漫然と無為に生きる辛さを自分も知っている・・・・生まれた時からまともに生きる事すら許されず、いつ死んでもおかしくない体に生まれ、偶々助かる薬でそこそこの時を、死の足音に怯えながら生きて来た前の自分とこの子達に何の違いがある?

あぁ・・・私は・・・・・・この子達を殺してない・・・・でも・・・この子達の仲間を!私はたくさん手に!!

そして―あの日―マトリフの洞窟の前で、一切の悩みをティファはバーンに打ち明けたのだ。

疲れきっている中で自分に優しくしてくれて、自分の中の―何か―が、自分の慕うおじさん以上に、バーンに縋りつけと後押して・・・・
「わ・・たしは・・・魔界の人達と・・・・戦いたくない！」
「・・・・なに？」
「魔界の仔達は泣いていた！命が助かっても日も差さない暗き地に戻りたくないって!!地上に残りたいって泣きながら魔界に戻っていた!!!」
「そなた・・・」
「死の大地も寒かった、心の中まで寒くて悲しくなって、瘴気がある所は全部死の台地みたいなら・・・・魔界は地獄だ・・・・」
地獄のような場所で生きていくにはずっと強者であらねばなるまい、誰かを慈しみ優しさをはぐぐむ土壌があるとはとても思えず、過去に幾度も魔族達が地上を狙ったのが温かさを得る為ならば心情が理解できてしまう！
自分は悲しい事があればこうやって日の光に暖めて貰え、優しい隣人たちの体温と心の温もりで癒して貰えるが、魔界にはその温かさがあるのだろうか、
「わずかにでもあるのならば・・・あの仔達は泣いて帰るはず無い・・・寒いところで終生を過ごす・・・・・わたしなら・・そんな事は耐えられない・・」
ティファはいつしかバーンの白い衣を握りしめ、瞳を歪めボロボロと大粒の涙を流し切々と嘆きを吐き出していく光景がダイ達の目の前で写されて行くと共にティファの中に、リャナンシーによって封ぜられた記憶と懊悩が蘇り、ティファの心を瞬時にずたずたに切り裂く！
「あぁぁぁぁっ!!いやぁ!!違う!!殺したくなんて・・・・あぁ・・・ああ・・・」
バーンに掴まれたままティファは咽び泣く。
記憶が還り共に痛みも戻される。

あの日自分は、バーンと出会い、そして終生胸の奥に仕舞っておくはずだった心の底の悩みを、苦しみをこの人に話した事が思い出す。
自分は―話し―だけで魔界の苦境を知っていた・・・知っていた積りになっていた!だが実際の彼らの怨嗟は深く、故郷だというのに帰りたくないと嘆いている!そんな地獄に生きてきた者達が・・・・地上を欲するのは当たり前ではないか!!

ハイ・エント・リャナンシーの記憶は元の持ち主に還る時、その記憶の映像をさながら大型スクリーンに写しながら還っていく。
ティファの心の底の苦悩の全てが、ダイ達にも共有された瞬間だった。
ポップとマァムにはモンスター達の言葉が分からずとも、ダイとバラン、そして近頃はべほと話しているせいか、其れとも過去にモンスター達と共に育ったせいか、ある程度言葉を解するようになったヒュンケルとも分かってしまった。
ティファは、篩の塔で思い知ったのだ。太陽がない世界の辛さを苦しみを。それ故に魔界の者達が持つ地上に対する憎悪と怨嗟の声を。
そして今自分達も・・・・

「クックックックク!ハァッハハハッハハッハ!!!!」
ティファの嘆きを共有し、共に沈むダイ達の頭!の上をけたたましい笑い声が響き渡る。

「・・・・てんめぇ!ティファの嘆く姿の何がおかしい!!!!」
心折れかけても、疫病神に対して未だに闘争心消えやらぬポップが笑い声の元、キルを怒鳴り上げる。
妹の優しさからくる嘆きの何がおかしい!!
「笑えるさ!勇者一行の料理人のお嬢ちゃんはずっと―僕達―の戦っている本当の理由を知っていたんだから!!
今までね!それこそそこにいるハドラー君もバラン君もヒュンケル君も長い事バーン様に仕えて来たくせに知らないのに!!戦って数

か月しか経っていないその子が知っているのは滑稽じゃないか！」
「お前達の・・・・ほんとうの・・・」
「おやおや、魔法使い君は存外頭が悪いんだね。ここ迄答えが出揃っているっていうのに。
お嬢ちゃんの映像のモンスター達の言葉が分からなかったんだね。いいよ、特別にこの僕が解説してあげるよ。」
大鎌を右手で肩に担ぎながらも、ティファを質にしているせいかどこか余裕の笑みを浮かべるキルは、ポップとマァムに映像のモンスター達の怨嗟と嘆きの内容を全て教える。
魔界の過酷さを、地上に住んでいる子供達が知る由もなく、魔界の現状に青褪める。
そんな地獄にモンスター達を送り返したことに罪悪感すら浮かぶ程に。
「そうさ、僕等はね魔法使い君。あの太陽を欲して戦っていたんだよ!!なん千年も何万年も！暗い地に押し込められていた者達のこれは復讐戦であり生存をかけた戦いなんだよ!!」
「そんな・・・復讐って！」
「驚くのはそこなのかい？君はもしかしなくとも、この戦いは君達が善で、攻めてきた者達が悪の勧善懲悪の物語が紡がれているとでも思っていたのかな？
現実はそんなに単純で生易しいもんじゃぁないんだよ!!!」
キルの言葉はいつしか激し、生の怨嗟の感情がポップ達を討ち据える。
自分にとって周りの事等石ころだと嘯いていたが、本当は心の奥底でずっと燻ぶらせていた。
魔界と地上の差異を知れば知る程に！何故魔界は打ち捨てられ顧みられることなく!!今は滅びへの道を辿っている!!!
その理不尽さにずっと怒りを燻ぶらせていた
「こっちにおいでよお嬢ちゃん!!君の考えている通り、魔界は救いのない光の欠片すらも届かない悲しい場所なんだよ!!僕等はね！ずっと欲しかったんだよ光が!!救いが！君の様な温もりを与えてくれる

太陽のような希望が!!!」
ティファを知ってから思い知った。
自分達がいかに寒い地にて打ち震え、それを当然だとしてきたのが。
だが、ひとたび温もりを知ってしまった今！あの寒さに耐えられる気がとてもしない!!
あの笑顔を、温かい言葉を、優しさをどうか僕達に降り注いでおくれ!!!
怨嗟の声がいつしか懇願になり、キルもバーンとティファの側に近寄る。
「魔界の太陽になっておくれよお嬢ちゃん・・・・・」
泣き濡れるティファの顔を、そっと両手で包み込みながら請い願い、ハドラーの方にも顔を向ける。
「君も魔界の現状は知っている筈だよハドラー君。ならどうしてバーン様が君を駒にしてまで完全勝利を目論んだか分かるでしょう？」
魔界の神と呼ばれるその名に相応しく、全ては魔界全土の為に
「怒るのも分かるよ。けどね、戻っておいでよ僕達の所に。一緒に地上を消して、魔界に太陽を届けて欲しい。」
静かなキルの言葉に、さしものハドラーも動揺する。
自分を駒にした事に対する怒りは最早ない。ティファがその仇をとってくれた時から。
怒りがあるとすれば、天晴な敵であるティファを嬲り者にした事にこそ怒りで動かぬ自分の体を呪ったが、今まで自分は魔界の苦境があれ程酷く、自分も上げていた怨嗟の声と抱いていた憎しみの心を忘れはて、己の事ばかり考えていた自分の不甲斐無さに氷水を掛けられた思いがした。
この戦いに・・・・善も悪もない・・・・・正しい事を無理にでも上げろと言われれば・・・・それは大魔王の方にこそ・・・・
「・・・・ない・・・・」
ティファの苦悩と嘆きに引きずられ、ハドラーの中の天秤をも傾け

ようとされていたまさにその時、声が聞こえた。
「望まない・・・・ティファは!!地上を消すことを望まない!!!」
ガン!!!
再びヒュンケルの剣を手に取り杖代わりにして立ち上がり吠え上げる。
「映像を―最後まで―見ていなかったのかい勇者様。お嬢ちゃんだって戦いたくはないってバーン様の腕の中で・・・」
「言っていた!だけど!!この映像には続きがあるんじゃないのかバーン!!!!」
映像は途切れ、最後に見えたのはティファがバーンの腕の中で知ってしまった魔界の者達の心情と凄惨な状況に苦悩し、自分ならばそんな地獄では生きていけないと
、わがことのように嘆き苦しんでいるティファの姿で終わっている。
それが全てだとキルは言い切るが、ダイには確信がある。
妹は確かに優しすぎ心の弱さがある!だが、地上を消し去る事を良しとする子じゃない!!!その考えを肯定する子では無い!
「・・・かえせ・・・・・俺の妹と妹の記憶の全て返せ!!バーン!!!!」
ダイが、再びバーンに討ちかかる。
ティファをバーンに託し、ダイを迎え撃つために振りむこうとしたキルの足元と手が
「ヒャダルコ!!!」
凍結させられた!
勇者が再び動き出した時、魔法使いもまた動いた。
いや、ダイの目に再び闘志が灯った時から動いていた。
ここにきてロン・ベルクの特訓が助けてくれた!

ダイ達と共に体術で体の使い方と、闘気の扱いを学んだ。
魔法使いだからと言って闘気が使えない訳ではない。十全に使えずとも、例えば足の筋力にだけでも流し込めればいいのだと。
魔法の特訓の傍ら闘気の流れを感じ、遂に両足の筋力を闘気で強化し普段の数倍の速さで動いたポップはバーンではなくキルを標的にし、次いで次弾を素早く装填する！
勇者を支えるは一行の全ての者達の役割！だが!!勇者ダイの相棒はこの俺だ!!!
ダイが折れないのに俺が先に折れてたまるかよ!!!
素早く超小型のメドローアを生成する。
狙うはバーンとキルの足元！
コスパがとても低く、それ故に放たれるまで感知されづらいメラとヒャドの超小型メドローアを、放つ寸前にポップにも暗黒闘気の触手が伸びる。
ミストとて警戒を怠ってはいなかった。どうしても勇者とティファに目が行きがちになる主と親友の代わりに全体を見張っていた。
その技を放つ前に!!
空烈斬!!
其の触手はポップに届く事無く霧散する。
見遣ればヒュンケルが折れたダイの剣を握りしめていた。
大技でなくともいい！弟弟子達の道を開ければそれで!!!
「メドローア!!」
「大地斬!!!」
それは狙いすませたように技の連撃が決まった。
ポップの放ったメドローアは、バーンではなくその足元を潜り込むように抉られたため直ぐに張ったマホカンタは意味をなさず、衝撃でバーンが吹き飛び、空間にティファ諸共消えようとしたキルは再びヒュンケルとマァムの蹴りで阻まれ格闘戦に持ち込まれた。
マァムもダイとポップが動いた瞬間、己の顔を両手で叩いて心をしゃんとさせていた。
どんな状況になっても、最高の動きが出来る様に!!

「ティファを!ティファの記憶を返せバーン!!!」
全ての、体の奥底にまだある闘気を振り絞り、ダイは己の命すらも無意識に闘気に変換し爆発的に高められた闘気が、飛ばされながらもティファを離さないバーンの右手を切り取り、そしてバーンの左手でまだ淡く光っている球体にまで切り込みを入れた!!
バーンにとって手の再生など一瞬の事だが、今のダイにとっては十分な時間。
手が放され放られた妹をその両手に抱きすぐさま距離を取りつつ声を張りあげる。
「ティファが!俺の妹が最後に言った言葉を聞けぇ!!!!!」

パッリン

光球体が割れ、震えるように空間に広げられた映像に映り発せられた言葉は

それでも私は剣を捨てられない・・・
守りたい・・・守らなくちゃいけない・・・
それにどんなにあの子達が哀れであっても・・・・

この地を明け渡してあげられない

全てを知りながらも、それでも地上を守り抜くというティファの言

葉。
ティファの本当に嘆きは、魔界の全てを知ったとしても、守る為に戦う事にこそあったのだ。
どうすればいいのか分からないではない。己の出した答えの非道さに嘆いていたのだ。

「ティファの心は決まっている!そして俺の心も!!!俺はこの地上を守り抜く!敵がどれほど可哀そうでも!!俺にだって守りたい者がいるんだ!!!!」
脳裏に愛しい少女を思い浮かべ、帰りを待っていてくれる家族を、仲間を思いダイが再び吠え上げる。
その声に応える様に、ポップ達の目に再び火が灯る。
世界を守り見捨てず助ける勇者ダイ一行の決意の炎を再び胸に

封印された箱、パンドラの箱には決まった物がいつも入っている
それは苦悩であり絶望であり争いの種であり破滅をもたらし死をまき散らすものが

しかし箱の底の底にある物に気が付いた者だけが見つけることが出来るものも必ず入っている

パンドラの箱の奥底には、迷いながらも道を進もうとしている者達の足元を照らさんとする希望の光が、いつでも見つけられる事を待っている
絶望に負ける事無く希望の道を歩く者の足元を照らす事を望んで
そして箱の底から、暗き道を歩く光を見出したのはダイ達だけではなかった。
ー全てーを思い出した料理人も、また光を取り戻し再び立ち上がって歩きだす

照らし出される道

守りたい
守り抜く!!
守らなくちゃ
守りたい者がいるんだ!!!

私の心はもう・・・
俺の心ももう・・・
決まっている!!!!

ダイ兄、ありがとう。私のお兄ちゃんに生まれてくれて・・・・
自分はいつも迷子になる。道が、やるべきことが決まっていてもいつだって途中で迷子になる。
迷子になった自分を必ず手を握って握って導いてくれる、私が一番好きな勇者様だよ。

痛みに、嘆きに共感し慟哭しても、ティファの心は壊れはしなかった。
涙にくれ、それでも兄の首にしがみつきながらゆっくりと地に足を着き、自ら立ち上がる。
きちんと自分が決めた道を歩く為に、道を指し示す為に。

「ティファ・・・大丈夫？」
「ダイ兄、皆も大丈夫だよ。にぃの言葉のおかげだよ。」
「ううん、ティファがいつも言っていた事を俺も真似しただけだよ。」
妹のお礼にダイは頭を掻きながら面映ゆくなる。面と向かって言われると矢張り照れ臭い。そこは年相応のやんちゃな男の子になる。
戦場のど真ん中であってもだ。
ティファが目を覚まし、いつもの状態になった、ただそれだけで一行の雰囲気ががらりと変わった。

力強く、それでいて余計な気を負っていない、厄介な強敵たちへと。

「そなたは、魔界の現状を知っても？」

「はい、私の答えは先程兄が言ったようにもう決まっていたのです。私も、この地上に住まう親しい人達を守りたいのです。」

バーンの問い掛けにも揺れる事無く、ティファは静かに微笑みを浮かべて答える。

その事にバーンは訝しく思う。

先程与えたダメージで、喋る事は出来ようが。最早立つ事は儘らない筈。仮に筋組織にダメージがなくとも、激痛が奔っている筈だが・・・・何を隠している？

バーンが警戒するのは正解で、ティファの体は本来ならば最早立つことする儘らない激痛に襲われている。

ハイ・エントの力が戻っていなければ。

ようやくガン＝フレアの反動ダメージが消えた。

禁呪以上の最悪の攻撃方術、ガン＝フレアの影響で、能力も体力も使えない程の影響がようやく消えたので、早速結界術ジ＝アザーズで自分の脳細胞の電気信号の一部を遮断した。

それは痛みを脳に伝え体に知らせる生きていく上では必要な最重要機関。そこにストップパーをかけ、痛みを無視して立っている。

敗れた皮膚の上にも、千切れた血管の先にもそれ以上出血しないように細かい結界で止めている。

とは言えこれは一時的で根本的に直されている訳ではなくあくまで御応急処置に過ぎない。

結界術の威力切れになるその前に・・・

「ダイ兄、皆を守りたい？」

「・・・・ティファ？」

「守りたい？」

「・・・守りたい。」

バーンから視線を切らず、それでも聞いてくるティファの質問の意図が分からず戸惑うが、それでもダイはしっかりと答える。
「ポップ兄は？マァムさんは？ヒュンケルは？父さんは？」
「・・・俺は見捨てず守るぞ。」
「私もよ。」
「無論だ。地上を消すなど、あってはならない事だ。」
「うん、そうか・・・・ハドラー、貴方は？」
「俺⁉」
「はい。魔界で育ったあなたにとって、矢張り地上は消したいですか？」
「俺は・・・」
ポップ達はすぐさまこたえられる事だが、ハドラーにとって、地上とはどういう所かを改めて考えさせられる。
自分にとって地上は・・・
「俺にも、先の大戦で付いて来てくれた配下がまだいる地上を、消してしまいたいとはどうしても思えん・・・」
先の大戦時、邪気で洗脳したとはいえブラスのように自分に従い戦果を挙げ、共に戦場をかけた配下のモンスター達が地上にまだいくらもいる。
その者達の顔も声もまだはっきりと覚えている。
キギロやガンガディア、バルトスは最早いないが、それでも自分を支えてくれていた大勢の配下モンスター達を・・・
「そうですか。」
答えが出揃った

ティファの心が凪ぎ始め、首に掛けている金のリングに手を掛ける
デルパ

取り出したのはアバンの黒縁伊達眼鏡。何の守の効果もないマジックアイテムでもないものをこんな場面で出し、しかもするりとかけるティファは、一体何を企んでいる？

奇しくも今のティファの服は血塗れで、普段の空色ではなく赤く染まっている。
同じ詰襟のその姿は、先代勇者アバンと同じではないか。

アバン先生、約束を果たします。私にこの平和の芽達を守り通す力を、どうかお貸しください。
アバン先生がやり遂げたように

ガシャン
「お嬢ちゃん、この状況で何企んでいるの？」
ティファを様々な意味で分かっているキルは、警戒度をマックスにする。ティファが何も考えず動く事等まずありえない事も。
「守りたいだけです。私は、この子達全員を守り切る。料理人の仕事を果たす。ただ・・・それだけですよ!!!!!」

ゴォウ!!!!
話すと同時にティファは左手を地面に一閃させれば、そこから金色の炎がミスト目掛けて奔っていく！
先程台を捕まえようとした暗黒闘気の触手を道とし、炎は瞬く間にミストを取り囲む。
下らん、私に魔法、其れも物理魔法など・・・
暗黒闘気の集合体である自分が、火炎呪文や爆裂呪文、其れこそデイン系の呪文とても密度を変えれば素通りさせることは可能だと鼻で笑おうとした矢先に、有り得ざるべきことが自分のみに起きた!!
「ぎ・・・・あぁぁぁぁ!!」
金色の炎が自分の足の部分を捕らえた瞬間、生まれ出でて数千年間、一度も感じた事がない感覚を、其れも痛みという感覚が自分を襲っている!!
「ミスト⁉」
「あ・・・ぐぅう・・・・あああ!!」

その場を離れる事は、親衛騎団達を解き放ちダイ達の戦力強化をさせてしまうことに他ならない！
だが、初めて味わう痛みに、ミストは底知れない恐怖を覚えてしまった！
死にたくない!!
その恐怖がミストをバーン達の下へと戻させた。

ティファが放ったのは聖炎。魔の、其れこそ暗黒闘気の集合体であるミストの天敵のような技を、遺憾なく放ち、ティファの動きはそれだけでと留まる事は無かった。
親衛騎団達がダイ達の、更に言えば主であるハドラーの元に戻ったかどうかは気にせず、ミストがバーンの下に戻ったのを食い入るように見つめ、側近くに戻った瞬間ティファは空飛ぶ靴にありったけの力を込めて天井近くまで詠唱しながら飛びあがった。

「我は守り人、守りの担い手。我が守りたき者達を守れ、ジ＝アザーズ。」
バーンの耳に届かないように自身の口の周りに無音になる結界を張りながらの詠唱は、目論見通りバーンや他の者達の耳に届くことは無く、バーンとキル、ミストを閉じ込める結界術の構築に成功する。結界が閉じる寸前、中に聖炎を流し込みながら。
バーンがそれで滅びる訳がない、これは時間稼ぎだ。
下準備を全て終えたティファは、くるりと向きを変え全ての魔力を開放した。

「繋がりし道よ!!」
ガン！
「此方と彼方の道を繋げ!!!」

ガン！ガッガン!!
「契約の名の下にティファが命じる!!」

ガガガガン!!!!!

ティファが何かを詠唱の様な言葉を発するたびに、空間を震わせながら途轍もない音が響き渡る。

何か目に見えない巨大な物同士がぶつかり合い繋がっていくように!!

それは―道―を繋げている音

「我が思い!我が言葉に従い!!運と不運の道筋を入れ替えよ!!!!」

逆転への道が開かれて行く音だった。

ティファの詠唱に応える様に道を繋ぐ音が静まり、深緑色の光を放ちながら広間を覆いつくす程の魔法陣が突如として出現した!

あれは・・・・まさか!!!

其の魔方陣に、バーンは見覚えがあった!

まさか・・・・そんなバカな!!

自分の考えが合っているのならば!ティファがミストと黒の核晶を消し去ったあの技は・・・・・・古代に絶え果てた秘術中の秘術、ガン=フレア・・・・馬鹿な・・・あの者が!ハイ・エントを使えるわけがない!!!如何に竜の騎士の子であろうとも!あれは・・・・人間と同じ赤い血が流れているあの者が使えるはずが無い!!!

バーンもまた、生まれ出でて初めての経験をティファにさせられた。ティファのした事と、ティファ自身の素性がまったく一致せず、出来るはずが無い事を今目の前で繰り広げているティファに思考が混乱をきたしたのだ。

バーンが動かずとも、キルが動こうとしたがぎしりと何かに関節が掴まれている様に身動きが取れないでいた。

ミストもまた、聖炎の炎に炙られ力を発揮できずに、ティファの企みを止めに行けずに憎々し気に見る。

ティファは、妹は一体何をしようとしているんだ？
見えないものがぶつかる轟音と、見た事もない陣にダイ達も不安になり上空でティファと合流しようとしたが、ダイ達も動けなかった！
これからする事を止められないようにティファはダイ達の体の一部にも結界の足止めを施している。

私がする事を、皆は決して許してくれない
これから自分がするのは途轍もなく罪深い事、一行全員と親しき人達全員に対しても
それでも、私は皆を信じてる
許してくれとは願わない
ただ、先程の答えを、実現してくれる力をみんなはもう持っている。
―神々や精霊王達―と進めていた計画も、道半ばだがあそこ迄であればバーンを倒した後で何とでもなる程にはしておいた積りだ。
最後の詠唱で魔力を込めるべく左腕を上げながら、ティファは戸惑い何かをさっ急いて泣きそうになっている兄の顔を見ながら困った笑みを浮かべて懺悔する。
大丈夫、ダイ兄なら道を歩き切れるよ
皆がいるんだから

「ラック＝バイ＝・・・・・・・」

ヒュパ

「ティファ!!!」
詠唱途中で、ティファの皮膚がずたずたに斬り裂かれる。
攻撃は見えなかったのに。

・・・・早いな、流石はバーン、結界を突破したか・・・・でももう遅い!!!
詠唱の最終段階で他の言葉を言ってしまえば、始めから空間を繋ぐ

作業用の詠唱から始めなおさなければならないが、痛みの電気信号をストップしているティファは、血が噴き出た事でバーンが結界を破壊したことに驚き一瞬驚いたが声は上げていない。
ジ＝アザーズは汎用性が広く、メリットがたくさんあるデメリットも当然高く、敗れた時、術者にダイレクトにダメージが行く。
それを考慮しても脳内に対する結界が功を奏した。

最後の詠唱を・・・・

だが、その決意をもってしても、ティファが声を上げかけ寸前で飲み込んだ。
自分に攻撃が来たのには驚かなかった。
結界を破れたのはバーンのみで、キルは出来ずにもがき、バーンも直接上空にいる自分に近づくのを警戒して、光魔の杖を投げつけて来たのだ。
それもただ投げられたのではない、恐らくバーンに残っているありったけの闘気を込めてだ。
迫る剣に今は避けられない。詠唱途中でその場を動くのは詠唱は気と同じになってしまう！
貫かれても！詠唱は・・・・そう覚悟を決めていたのに・・・・・

ガッシャン!!!!
その剣を身に受けたのは・・・・

「ブロック!!!!」
「あ・・・あ!・・・・か野郎!!ブロック!!!」
「そんな・・・・何故・・・・・何故ですブロック!!」
「ブロック!!!」

それはティファの結界を、―外側の鎧―を脱ぐことで脱したブロックが、露になった細い身で受け止め、吹き飛ばされながらも笑みを浮

かべ・・

「みんな・・・・ハドラー様を・・・・・」
ジジ・・・・・・ズガァァァンンンン!!!!
何処までも仲間を思う言葉であった。

ブロックどうして・・・・・・貴方の王はハドラーではないか!!なのにどうしてキャスリングを私に使ったの!!
本来は使用者と庇護する者の場所を完全に入れ替える技であるが、ラック＝バイ＝ラックの発動間際で空間術がティファ以外使えず、ならばとキャスリングの途中である外殻を脱いで飛び出し、その身でバーンの剣を受け止めた。目論見通りに。
この人が今やろうとしている事はきっとハドラー様達を救ってくれる。
守る事に徹して生まれたルークの守りに対する勘が、正しくそれを教えてくれた。
ならばその邪魔をさせない事こそが、ルークとして生まれた自分の役目ではないか・・・

・・・・ブロック御免・・・・・そして・・・・

「ラック!!!!
ありがどう!!!!」・・・・

バーンがすぐさま放った三羽のカイザーフェニックスが迫る寸前に詠唱を終えたティファの言葉に、術が発動する。
それは最早誰にも止める術はなく、神々や術者のティファであっても停止は出来ない。
カイザーフェニックスにその身を焼かれる前に、ティファの体は真下へと落下し始めた。
「ダイ兄!!!!」

体が粒子化しはじめ戸惑う兄を呼ぶ。
結界はダイだけが解かれ、声の主にダイは思いっきり左手を伸ばす。妹の手をしっかりと握れるように、ティファの利き手に合わせて。
「ティファ!!!」
自分達に、何か途轍もない事が起ころうとしている！その感覚と共に、怖ろしい何かを感じている。
手を伸ばさなければいけないと!!
パシリと、ドルオーラの時とは違うお互い左手同士で握り合った時、紋章が再び力を最大限に引き出し、光魔の杖を再び手にし、ティファとダイを切り捨てようとしたバーンを弾き飛ばした。
ラド＝エイワーズを使おうにも呪力が足りず、切り捨てようとしたのが仇になった。
偶然に出来た安全な時間にティファは幸運に感謝する。
これで、兄に渡せる・・・・
昔、転生してくれた者達に与えられるギフトが二つあると三神様達に言われた。
それぞれの秘められた能力や才能を跳ね上げるギフトに、ある物は底なしの魔力を、ある物は回復力が高いからと一度だけ死から蘇る体を、そして自分が願い欲したのは一つは見聞きしたものを任意で永久的に覚えておける記憶保全・・もう一つは・・・
「あぁぁぁぁ!!!!!!!!」
カァァァァァァァ!!
ティファの叫びと同時に、ティファの左手の甲の紋章が薄れ・・・
「・・・なんで・・・・」
驚愕するダイの左手の甲に・・・・・
「なんで!!どうしてティファの紋章が!!!!!!」

新たな紋章が光ながら浮かび上がった。

私の紋章を、任意でダイ兄に譲渡する事
父を死なせず、双龍紋を完成させる為に必要な事を願った。
ギフトの話がなければ、最悪ゴメちゃんを冒険に連れ出して心の底から願う積りであったが、
友達を利用しなくてよかった。
ダイに取ってそうであるように、知っているティファとてもゴメを一度として生きたアイテムだと思った事は無い。
危険な目にも、まして利用する事がなくてよかったと喜ぶ程の親友なのだゴメちゃんは。

何かを達成したように笑うティファの手を、ダイは放すまいとしたが!!
スゥ

消える・・・・自分の体が・・・・・・

「なんだよこれは!!」
「ティファ！一体何を・・・」
「どうして・・ティファの体だけ・・・」
異変に戸惑い叫ぶ仲間達を見れば、体が透け始めている。ティファとバーン達は透けていないのに!!!
其れこそ、ハドラーや親衛騎団達も消え始めているのに！

「ダイ兄、皆も。大好きだよ。」

眼鏡をかけながらも、とっておきの笑みを浮かべたティファの声に応える間もなく、ダイ達は粒子と成り果て広間から姿が消えた。
その瞬間、広間の陣は消え果て静寂が支配する。

カァァァ!!!!

同時刻、カールサババの砦にて、テイファの手紙の指示通りに砦の裏手に刻まれた魔法陣の前で待っているマトリフ達の眼前で、陣が深緑色に発光した。

しきと言っていた者が手紙となり、中に書かれていたのは確かにテイファの筆跡。

内容は勇者達を逃がす筈があり、死の大地が長く鳴動することあらばすぐにそこに行き待っていて欲しい旨がしたためられていた。

その中にはある筈のない事柄も書かれ、信じられないながらもマトリフとノヴァの言葉で、式に指名され、その者達と共にと心を決めた者達が陣を見つけずっと待っていた。

カァァァン!!!

光が増し金属音のような音がした時、一瞬視界を奪われマトリフ達が再び目にしたのは・・・・・・

「ダイ君!!!」

「ポップ！」

「ポップさん!!」

「マァム殿！」

「ヒュンケル！」

「クロコダインさん!!」

「「バラン様!!!」」

ズタボロに傷つき気絶している一行と

「どうしてこいつら迄・・・」

ハドラーと四人の金属生命体が、ダイ達の側で横たわり

「・・・・ティファ・・・ティファ何処!!!!」

ノヴァの言葉に恥からるように全員が周辺をくまなく探したが、一行の中にある筈の、否！無ければならない者、勇者一行の料理人の姿が見つかる事は無かった

再戦への道編
交錯し絡まり合う運命

この場で一番事態についていけず、混乱したのは賢女王と名高いフローラであったのが皮肉である。
彼女はアバンのあの言葉、大変な時こそじたばたしましょうを胸に今大戦を生き延び、反撃の手筈の支援も何処からか届いて準備がすべて整い、世界を救わんと表の世界に出て来て指揮をとるはずが・・・

「・・・・ハドラー・・・」
呆然とした言葉が、女王の口から紡がれる。
無理もない話で、前大戦では攫われかけ、今大戦では愛しい男の、希望の象徴勇者アバンを殺した男が、傷だらけとは言え当代の勇者一行と共に気絶しながらも共にいるのに、驚かない方がおかしい。

「・・・・・嬢ちゃんが逃がしたかよ。詳しい話はこいつらの目が覚めてからだ!!
フローラ!キメラの翼でこいつら全員お前さんの隠れ家に連れて行くぞ!!」
「な!待ってください!!何故ハドラーを!!この男は敵の・・・・それもアバンを!!」
「フローラ!!!!」
ビクリ!
「・・・お前さんの言いたい事も分かるした言い分が正しい物も分かっている。
だがな、今起こっている事は尋常な事じゃねえ。全部が・・・・そうだ、全部がきっと繋がってやがる!!」
ベッドで寝ていたはずのティファが居らず、代わりに式と言ってい身代わりが手紙になった。
あの時から異常事態が起きていたのだ!

全部、これは嬢ちゃんの仕業だ!!
「目が覚めればダイ達が詳しい事を話してくれる。今は兎に角こいつらも纏めて連れて行くぞ。」
「マトリフ様!!」
「フローラ!勇者一行の料理人を知っているか?」
「料理人のティファ・・・・・知っています。この砦の位置と・・・・我が国を攻めて来た軍団長の素性を教えてくれたのが彼女なのです。」
「・・・・・なんだと、その手紙どうやって届いた。」
「私達をずっと支援してくれている方が、船を使って物品をずっと送ってくれていたのです。
その方はウォーリアー船長と言って、その方に手紙を託したのです。」
ウォーリアー船長!!・・・・ダイと、嬢ちゃんが幼い時からずっと世話になっていた男が・・・・・これも偶然か・・・其れとも本当に天の導きでもあんのかよ。
フローラの告白した内容に、ダイとティファの二人と深く関わっている男が逃げたカール騎士団を丸ごと面倒見ていた者と繋がっていると聞けば、さしものマトリフとても驚かざるおえない。
まるで目に見えない力が、強引にでも世界とティファを繋げんとしている様に感じて。
だが今はそれどころではない!
「なら話は早え。ダイ達と一緒にハドラーを逃がしたのはそのティファだ。俺はあの子がした事に意味があると信じている。
フローラ、一度でいい!たった一度!!この老い耄れの我が儘を通させてくれ!!」
「マトリフ様・・・」
「フローラ女王、私も同じ意見です。」
「バウスン将軍。」
「あの子・・・・勇者一行の料理人が、彼等を逃がしたのであれば受け入れてみてください。

最悪自分の息子のノヴァであれば、ここまで傷ついた魔軍司令官なれば取り押さえられましょう。」
今世紀最大の大賢者マトリフが、勇猛で名を馳せるバウスン将軍の嘆願が、フローラに決断させる。
料理人のティファという者が手紙を送ってきた時、途轍もない内容に驚愕したものだ。
礼儀正しい挨拶から始まり、自分と兄と、その父親の氏素性と、父親の罪を全て告白してきた。

ソアラ姫の子達
フローラとソアラは歳が近く、共に同じ王女で跡取りの身であり何かと親交があっただけに、出奔してその後の事を知った時、胸を痛め泣いたのが昨日の事のように思い出す。
アルキード国が消滅してしまった真実も、父と母が犯した罪の果てに生まれた事も全て正直に書き連ねられ、その後の顛末も。
複雑であった。親友とまでは言えなくとも、友人の愛した男が為に、子を宿し出奔し、その果てに国が一つ消し飛ばされ、逆恨みのような復讐に身を投じた男のせいで自分の祖国までもが蹂躙されたのだから。
父は今、配下の者達と共に命を懸けて償う道を進もうとしています。
どうか父達が、道を歩く事をお許しください。
そこには恨みがあるのは分かりますだの、父達がしてしまった事は等、賢しらな言葉は一つもなく、只々許しを願う言葉のみであった。
世界会議でバランが許されている事にも触れておらず
レオン王との内密の新書の遣り取りである程度の情報は手に入り、その事も掴んでいる。
フローラ女王の許しもなく申し訳ないと書かれていたのには、レオン王の律義さがしのばれ思わず笑ってしまったが。
償う道を行く、であるならば一度は信じようとバラン達の事は見守る積りであった。

礼儀正しく、心優しい手紙を送ったティファはこの中に居ないようだが。
「分かりました、―全員―を私達の隠れ砦に連れて行きます。」
バラン達の時の様に、マトリフ達の言葉を一度だけ。
バウスン将軍の言う通り、ここ迄肉体がボロボロなハドラーであれば、殲滅の騎士団長、北の氷の勇者ノヴァがいれば制圧できると見積もりもきちんと入れて。
名目は捕虜とすれば連れていける。
本音としても、謎に包まれていた魔王軍の情報は全て欲しいのだから。

「・・・・・マトリフ様、僕はしばらくこの場に留まります。」
「坊や・・・」
「ティファが、あの子が出て来た時一人では迷子になってしまいます。必ず・・・・必ず戻りますので何卒・・・・この場に留まるのをお許しくださいフローラ女王陛下。」
陣がまだ残っている。
其れに未練を残し、ひょっとしたら遅れてティファも出てくるのではないかと、ノヴァは一縷の望みをかけている。
「分かりました。ただし日が暮れる前に砦に来なさい。場所は・・・」
「大丈夫です。ティンク！」
「ハァアイ!!」
「!!・・・これは・・・」
「ティファと僕の友達の精霊のティンクです。」
「精霊の!!」
ノヴァに呼ばれ、顕現したティンクはフローラに一礼する。
「初めまして人の女王様。私がいれば、ノヴァについている子達が砦に導くから大丈夫よ。
ノヴァ・・・・必ず砦に来るのよ・・」
「分かっている。父さん、マトリフ様・・・」
「日暮れ前にだぞ。」

「危ないと思えばすぐに砦に来いよ坊や。」
「はい。必ず。」
「ティファ様を・・・どうか・・」
「我等も残りたいが・・・」
「貴方方はバラン様に・・・・」
「頼むぜノヴァ・・・」

キメラの翼で移動する一行を見送った後、ノヴァは幽かに光る陣に跪きティファを思い浮かべ祈りを捧げる。
その顔は悲痛で、ティファが戻らないのではないかという思いを必死に振り払うように一心に祈る。
大切な自分の半身が帰って来る事を。
バラン様のように腕を失くしたとてそれでもいい。
手足が無くなっている程の怪我でも、マトリフ様と自分が命を繋ぐ。
余生の全ては僕が見る・・・だから・・・お願いだからティファ・・・帰ってきておくれ
皆が君を待っているんだよ
だからどうか!僕等の元へと帰ってきておくれ!!

握りしめた己の手が血を流すのにも気が付かず、ノヴァは一心不乱に祈りを捧げる

落日

暗い、どことも分からない暗い道をポップは歩いている。
道さえ見えず、歩いているのかどうかの感覚さえ定かでは無くなる暗い場所をただ一人
寒い・・・・
時折冷たい風が、体の芯まで凍らせるように吹き付ける風に、気持ち迄が凍えそうで。
早くティファの所に帰りてぇ
可愛い妹分のティファ。きっと冷たく凍えた自分を一目見た瞬間に心配しながら暖かいも毛布を掛けてくれながら、同じくらい暖かい食べ物や飲み物を作ってくれる。
どうしてそんなに冷える所に行ったのと少し怒りながら。
早くこの道を出てぇな・・・・・ティファもダイもマァムもみんなどこに・・・
魔界の太陽になっておくれよお嬢ちゃん
其方は、魔界の現状を知ってもなお？
可愛げのない小娘だ
・・・・なんだ？誰もいないのに声が・・・・
ポップ兄～。
ティファ！
三つの声が聞こえた後はまた静寂が続く中、一番会いたかった妹に会えた!!
ティファまでここに来ちまったんかよ。ダイ達はどうした？それに他の奴等も・・・
ポップ兄・・・覚えていないの？
・・・・何をだよ。

本当に覚えていないの？
・・・・・だから何をだよ!!!
覚えていないのか？俺は一体何を忘れていると言いたいんだティファは・・・・自分が何か忘れるなんて近頃は・・・・・ちか・・・・ごろ・・・

父さん御免！
きゃぁぁぁぁぁ!!
戦いたくない!!!
この戦いが勧善懲悪の物語だとでも？
魔界の太陽になっておくれよお嬢ちゃん・・・
守りたいだけですよ!!!

あ！ああ・・・・・
ティファ!!俺は・・・・俺達は・・・・
大丈夫だよポップ兄は一人じゃない。皆で戦えばきっと困難に打ち勝てるよ
ティファ!!
皆の事が大好きだよ・・・

「ティファ!!!!!!」
はぁはぁはぁ・・・・・
叫びながら跳ね起きたポップは、荒い息をつきながら今見た夢

を・・・・現実で起きた事を思いだし混乱する。
俺は・・・・・俺達はどうなっちまったんだ・・・・
バーンとキルとミストの攻防に翻弄され、自分達は生きているのさえ不思議な程のダメージを喰らい、バランに至っては右腕を消失し、ティファは・・・・ティファが!!!
「目が覚めたかポップ。」
もう馴染みとなっている低い濁声のする方に目を向ければ、自分と同じ場所のすぐ横にハドラーがいた!!!
「ハドラー!!!・・・・・ここは・・・・なんでお前迄・・・」
「知らん、俺も今しがた目が覚めたばかりだ。おっつけダイ達も覚めよう。その前に知りたくばあそこに座っているじじいにでも聞け。」
途轍もなく投げやりなハドラーの言葉に周りを見渡せば、右隣にはハドラーがいたが、左にはダイが眠っていた。
同じ部屋に、マァム、ヒュンケル、クロコダインの姿も。
そして最後に扉近くを見れば
「・・・・師匠・・・・・・」
「目が覚めたかポップ。」
いつも以上の優しい声に、ポップは悟ってしまった。
自分達は大魔王に完全に負けて、逃げ延びて偉大なる師に労わられている事を。
「・・・・敗けちまったんだな俺達。」
「ポップ・・・・酷な事を言うがその通りだ。だがな、こうして生きていれば再戦の機会があるんだ。今は生きている事に感謝するべきだ。」
「うん・・・師匠、バランとティファの姿が見えねぇけど・・・」
「・・・・バランは絶対安静だ。ことは違う場所で手当てしている。血も大分流して、今増血の薬を調合させて飲ませる所だ。」
「そうか。けど、生きてるんだ・・・・」
ダイとティファの父親が助かった事に、ポップは我がことの様に喜びほんわかと微笑む。
ブラスという育ての親がいたとても、矢張り肉親は特別。短い日数

しか過ごしていないとはいえ、二人もバランを父親として慕っているのだから。
早く起きろよダイ。ティファと三人で見舞いに行ってやろうぜ。
ある意味自分もバランとダイとティファの血が入っているのだから、広い意味で竜の騎士の血縁に入ってもいいんじゃねぇかと思っているポップは、眠っているバランを見舞う事にした。
・・・そうするとノヴァも誘うべきか。あいつもティファの血のおかげで助かってるわけだし・・・・俺達―竜の兄妹―がいれば、大魔王との再戦にも希望はある!!
今回は少人数で行ったのが敗因の一つ。次はノヴァも入れて全力で当たるべきだ。
マホカンタで氷呪文を封じられても、ノヴァには竜闘気に迫れるほどの闘気剣がある。
バーン相手でなくとも疫病神とミストバーンの相手でもいい。
今回は、大魔王達の総力を間近で見れたのを幸いとするべきだ。
「師匠、ここどこなんだよ。」
「ここか?サババ砦をもっと南に入った隠し砦だ。俺達以外にも魔王軍を相手に決戦をおっぱじめようっていう連中のな。」
「い⁉・・・・・・・そいつは・・」
「・・・後で会わせてやる。」
「おう!頼まぁ師匠!!そうか、俺達以外にも・・・・・ありがてぇ。次は本当に負けられねぇし、心強いな。」
「・・・・・大魔王は強かったんだな・・・」
「あぁ。けどよ!!次は絶対に勝つんだ!!」

ポップの思考が―次―の事にシフトチェンジしているのを、マトリフは暗澹たる思いで見ている。
ポップに、否!ダイ達はまだ知らない・・・・・いつ、知らせればいい・・・
「マトリフ!」
ポップの思考を中断させる程の声で、ハドラーがマトリフの名を呼

ぶ。
　その声に、ダイ達ももぞもぞと動き目覚め始めた。
「・・・・ここ・・・は・・・大魔王は!!」
「ティファは何処に!!」
「う・・・くぅ・・・・ここ・・は・・」
「駄目よクロコダイン！貴方の傷は深く・・・・つぅ！」
「お前さんもだよマァム。」
「マトリフおじさん!!・・・・ここはサババなの？」
「違う、ここは・・・」
「ここがどこなんてどうでもいい!!!」
　マァムの疑問を遮る怒声が部屋に響き渡り、シンとした。
　体が重く動けないことに苛立ち、寝台の上でもどかしげに問いただす。
「妹は・・・ティファは何処⁉」
「ダイ・・・・」
「ティファの紋章が・・・・ティファの左手から俺の左手に移ってきたんだ!!聞いた事もない呪文唱えて・・・・握ってた手が離れて・・・・」
「ダイ！あいつは大丈夫だよ!!今はバランと別室に・・・・そうだよな師匠!!」
　ダイの疑問を、ポップが青褪めた顔で遮りマトリフに泣きそうな顔を向ける。
　次の再戦を考えていた時の顔とは全く違う。
　ポップも薄々は察していた！自分達の体が消えかけていたあの時、ティファの体だけが消えていなかった事で！
　だが認めたくない・・・・認めてしまえばそれは・・・・・それだけは嫌だ!!
「きっと親父さんと一緒にいるんだよ。あんだけの大ダメージ喰らった・・・」
「もうよかろうポップ!!!」
「何がだよハドラー!!!俺はティファの居るところを師匠に・・・」
「この砦に、ティファはいないのだなマトリフ。」

ポップの望む甘い考えを、厳しいハドラーの声が粉々に打ち砕く。
「・・・・うそ・・・そんな・・・・・そんな事ない!!そうでしょうマトリフおじさん!!!」
痛む体を無理やり起こしたマァムは、寝台から降りマトリフの側に駆け寄る。
「マトリフおじさん!ティファはこの砦にいるんでしょう?・・・・どんな方法か分からないけど・・・私達と一緒に・・・」
「マァム・・・」
「だってハドラーもここに居るのよ!!なのにティファがいないだなんて・・・そんなそんな事が!!!」
「あるんだよ。」
マトリフの服を握りしめて問いただすマァムの言葉に、ヒュンケルもクロコダインも無理やり体を起こした矢先、暗く冷たい声が降り積もる。
気配を消していた為気づけなかった。部屋の一番端の窓際に椅子があり、そこに悄然として座っているノヴァに。
窓から差し込む西日に照らし出されたノヴァの顔は、戦場での時のノヴァよりも怖ろしく感じさせる。
「・・・・・ノヴァ・・・お前今何って言った・・・」
「ティファは・・・・・ここにはいないんだよ・・・・」
ポップはふらりとノヴァに近づき、不意に襟首をつかんだ。
「どういう事だよ!!ティファが、あいつがいないってのは!!」
「言葉の通りさ!!!」
ノヴァもポップ同様激し、乱雑にポップの両手を払いのける。
非力で、まして体力がほぼないポップが倒れかけてもノヴァは助けず、辛うじてすぐ後ろにヒュンケルが座っている寝台があり受け止めて貰え事なきを得たが、ポップはノヴァの顔を見て絶句していた。
ノヴァが、唇から血が出るのも構わず噛みしめ何かの痛みに耐えている姿に驚き。
「・・・・君達は同時に―とある陣―から出現したんだ・・・・そこの魔軍司令官と親衛騎団達と共に・・・・・彼らが一番早く目が覚めた

から父達が今情報収集をしている。
・・・・話逸れたね・・・・・」
「ノヴァ・・・・陣て・・・・」
「ダイ君、その事は僕にもマトリフ様にも分からない。その陣から出て来た君達全員を父達が砦全員に運んだあとにね、その陣はまだ幽かに・・・・光っていたんだよ・・・・」
「!!そしたら!!!」
「でもティファは出てこなかった!!!」
ノヴァの言葉に、ダイ達は僅かな希望をかけたが、無情にもそれは打ち砕かれる。
「ティファは出てこなかったんだよ!!そのうちに陣の光も！陣も消えてしまって!!!周りをくまなく精霊達と一緒に探しても何処にもいなかったんだよ!!!」
待っていたのに！自分はずっと、ティファが出てくるのを待っていたのに!!!
「嘘よ・・・・ティファが!!」
「もしかしたら別の場所に!!!」
「逃げている最中かもしんねえんだろ!!!師匠！俺探しに!!!!」
「ポップ！俺も・・・・」
ガン!!!
「あの・・・・戯けが・・・・・・・・」
寝台が砕ける音に、全員がハドラーを見れば!!ハドラーが涙を流していた・・・
マァムの様に嘘だと言わず、ダイ達の様に探しにいくそぶりも見せず、まるでそれは・・・それは!!!
「あ・・う・・うわァァァァ!!!ティファァ!!!!ティファァ！なんでだよ!!!なん

で俺達を置いていっちまったんだよお!!!!!」

崩れる様に床に膝をついたポップは、両手を床に叩き付けながら突如泣き叫び慟哭の声を上げた。

ポップとても観念せざるを得なかった。

ノヴァと師が嘘を言うはずもなく、ましてあの大ダメージでどう逃げれるというのだ!!

心の何処かで分かっていた、この砦にティファがいないと知らされてすぐに!!

動いている事自体が不思議で、奇跡的としか言いようがない大ダメージを負ったティファがどうなったのか・・・・どうなってしまったのかを!!

それでも認めたくは無かった!!認めてしまえば・・・・ひょっとしたらいつものようにひょっこりと現れるティファが消えてしまうと・・・・甘く馬鹿な夢が消えてしまいそうで・・・・・・認めたくなんてなかった!!!

「いやぁ!!ティファ!!ティファァァァァァ!!!」

「アァァァァァ!!!ティファァ!!!!!」

マァムとダイも泣き崩れ、ヒュンケルはやり場のない怒りと渦巻く悲しみに打ち震えながら涙を流し、戦士として生死を見てきたクロコダインとても無事な右目から大粒の涙を流しながら悲しみに吠え上げる。

・・・・・嬢ちゃん・・・・

崩れたダイ達を前にし、マトリフもまた崩れ落ちる様にへたり込む。

常の自分なれば、魔法使いはいついかなる時も冷静であれ、仲間が死んだとても犠牲はたった一人であり、バラン以外は勇者達全員が身体を損ねる事なく脱出でき、もしかしたらハドラー達も助けられた事を恩に着て共闘し、共に大魔王を打ち果たす戦力が揃ったと！料理人が命を賭けて守り抜いたお前達が、託された希望なのだと!!それを声高に叫び仲間を鼓舞せねばならないのに・・だのに・・心が冷え込み、

軋みあげ自分の何もかもが崩れる音しか聞こえない・・・そして、違う言葉を叫び出したくてたまらない!!
俺みてぇな悪党爺が生き残って!!どうしてお前が逝ってしまったんだよ嬢ちゃん!!!

親衛隊達の話から、決戦で瀕死の重傷を負ったティファの話を聞いた時から軋む音がしていた。
魔界の神と呼ばれるものを相手に、誰の犠牲もなく戻る事は無いのではと危惧していたが、的中しちまっただなんて!!!!!

ティファは希望の光を、平和の芽を未来に届ける為にダイ達を逃げ延びさせた。
魔界の現状を知っても、それでも地上を守るというダイ達の答えを聞いて、今の一行ならば自分が居らずとも勝てると信じ、一行の料理人の任を全うすべく、一行全員を無傷は無理でも軽傷で、最終戦で最大の敵の下に送れるようにと。
だが料理人は一つの事を見誤っていた
見誤っていたとも言えないかもしれない。
料理人が命を賭しても守りたいと一行全員を愛したように、一行全員もまた同じ思いを料理人に向けていたのを理解していなかった。
自分は何処までいってもアバンの代わりだと、温かい―保護者―を演じた結果の果てに、仲間達が結束したのだと誤解して。
そして、それぞれには守り抜きたい大切な者達がいるのだから、前を向いて歩くだろうと・・
本当は、ティファ生来の優しさに魅かれ、大切な者として守り抜きたいのだと思われているとも知らずに。
ティファが保護者を演じていたのはごく一部分だけ。後は本当に一行を、周りを愛している優しい女の子なのを見続けた末に向けられた愛情なのだと、目的の為に走り続け周りをきちんと見ていなかった

為に気が付かずに。
一行にとって、世界と同等に守りたいと思ってやまなかったティファ

そのティファが姿を消した
その事実を前に、ティファを愛した者達は脆くも崩れ落ちる
太陽がその姿を隠し、暗雲立ち込め星も月明かりもない暗い夜の帳が落ちる様に真っ暗な闇の底へと落ちていくように

夜明け前の暗闇

途轍もない事に対する対応にカールの隠し砦が大騒ぎになっている!!!

「彼女の言った事が現実になったと・・・」

「ハッ!さらにご報告が!!ロモス王国北西の町は・・・・その・・・」

「・・・何事も報告なさい。」

フローラは今カール騎士団兵士の一人から報告を受けている。

一人の少女の破滅への予言じみた言葉に本気で対処しようと動き、結果その予言は不幸にもも的中してしまったと報告が上がり今それを受けている最中である。

ロモス北西のポルトスの町は、死の大地から飛び立った巨大な鳥のような建造物がロモスへと飛び立ち、巨大な柱を落とされ町は消滅し周辺半径数キロのクレーターが出来たと。

だが、報告には続きがあった。

「その・・・・ロモス王城の様子も気になり見に行った時、ポルトスの町の住民が一人残らず城下町へと逃げ延びていたのです!!」

「それは・・・・・我らが受けた夢の啓示と同じと・・」

「はい。時刻的には勇者ダイ一行が敗れ、陣に出現したのと時を同じくして、町の住民の頭に一斉に声が響いたそうです。」

勇者が敗れ、巨大な敵がこの地を襲う

その言葉は一度ではなく、町の動ける住民全員に伝わりきるまで続いた。

当然聞いた者達は大混乱をきたしたが、声は凛とした声で混乱を治めた。

落ち着け!勇者達は生きている。生きて巨大な敵を打ち取らんとしている!希望は潰えておらん、生きて再戦し勝つことを信じ、お前達も逃げ延び生きよ!!

力強く、どこか神々しさすら伺わせるその声に導かれ
「町は滅んでも誰一人として・・・・・分かりました。引き続き―彼女―の言葉を・・」
「は・・・・しかしフローラ女王・・・・彼女も・・・勇者様達と共に・・」
「・・・沈んでしまったのですか・・」
報告を全て受けたフローラは机に両肘をつき頭を抱えて重い溜め息を吐く。
勇者一同が生き残り、負傷したとはいえ伝説の竜の騎士とその配下も加わり、今回でもマトリフ導師は先の大戦同様に本腰を据えて今大戦に携わり、勝つ希望が強く輝いたと思った矢先の敵の攻撃を―彼女―が託宣を授かった。
尋常一様の様子ではなく、虚偽を言う者にも見えず、勇者達も度々彼女の予言めいた力に救われているとアキームから助言を得たフローラ達は、彼女の言葉を信じてポルトスの町へと助けられる者はいないかと兵を数十名を送った。
だが、託宣と思われることをしたものが、ポルトスの町の住民にも声を掛けていたとは・・・
一体・・いいえ、こちらの不利になるようなことをしなければ、神でも悪魔でも構わない・・・
町の住民と、彼女が聞いた声はきっと同一人物に違いないと睨んでいるのだが、この際地上の危機を救ってくれようというのであれば何でも使う気でいる。
引き続き託宣を貰った時きちんと伝えて欲しいのだが・・・・ダイ達と共に沈むとは・・・
ここで負ける心の弱い者はいらないなどと気取った事を言ってはいられない!!
何故ならば主軸に考えていた主戦力全てが、たった一人の仲間の為に暗き闇へと心を落としてしまったのだから!!
「フローラ女王、僭越とは思いますが、お疲れなのでは・・」
「・・・ありがとうございますバウスン将軍。・・・・ご子息は・・」
「申し訳ありません。騎士としてまた勇者としての責務を放ってしま

い・・・あの子にとっては、ネイ・・・・テイファが・・あの子と共に生きる事が息子にとって全てだったのです・・・」

辛く苦しそうにバウスンはノヴァの心情を吐露する。

強くなったのも、知識を蓄えたのも、周りとぶつからず味方を増やすことをしたのも全てはティファの力とならん為に！ただそれのみで生きてきたノヴァが、ティファを喪うという事は道を喪うという事なのとフローラに伝えたくて。

だからと言って、責務放棄のいい訳にもならない。この大戦で、大切な物を喪っているのはほかならぬこの女王なのだから。

そのフローラも難しい顔をする。頼りになる中核を喪った時、立ち直るにはそれ以上のきっかけがなければ立ち直れないのは身をもって知っている。

自分はアバンの死を知った時、沈みかけた時に大勢の自国の民が脳裏によぎり、彼等を思い沈まずにギリギリで踏みとどまれた。

王の責務としてだけではなく、十年以上治め守り抜き愛してきた民達の笑顔が自分を支えてくれたのだが・・・・ダイ達にとって、心を呼び起こすものがあってくれるだろうかと危惧をして。

砦が騒がしくとも、一つの広間は静寂が支配している。

その中にはバランもおり、泣き疲れ果て、虚ろな瞳の息子を残った左腕でしっかりと抱えながらも共に苦しんでいる。

利き腕が無くなる負傷をおして、息子と娘を探して砦中をくまなく探そうとしたのをラーハルト達が押し止めようとしたが有無を言わさない目に負け、ダイ達の下へと連れて来た。

後からチウとメルルもダイ達の部屋に駆けこんでティファの状況を知った時、部屋にいた全員が沈んでしまった。

何が勇者一行だ!!俺達は大切な女の子一人守れねぇ役立たずじゃねぇかよ!!!!

嘆き悲しみ、普段敵に対して容赦なく火を噴くポップの苛烈な言葉

が自分達に向かった時、希望が焼き尽くされ、心が砕かれた・・・・

ティファが、命を懸けて自分達を救ってくれた意味を考えられない程に・・・・・

夜明け前、それが最も闇が濃い時間帯。

月も消え果て星空も見えなくなるその時が最も闇が濃く、時に夜明けが来ないのかと人々を不安にさせる。

太陽が昇らなければ暗闇は全てを覆いつくしたまま飲み込んでしまいそうで・・・・

その暗さに―魔王軍の偵察部隊―も灯りが取れずに逃げたダイ達を探すのを休んでる。

どこにいようとも見つける気でいるバーンはミストに命じ、あるだけの悪魔の目玉とシャドー・ゴーストを使って探し出す様にと。

―陣―に刻まれていた呪術には、超長距離ではなく長距離程度の威力であった。

ならば逃げた先は寸前まで使っていたカールのサババかその周辺を徹底的に捜索されている。

その索敵部隊が休むほどの濃い闇が、辺り一帯を覆いつくす。

ダイ達を隠す様に。

夜間飛行が出来るモンスター達をも怖れさせる闇夜の中を、神獣ガルーダがダイのいる砦を目指し、超上空から飛来する。
背に乗せた大切な者を、ダイ達に大至急かつ、敵に気取られない為に高度を取り、この時刻に飛んできたのだ

頼まれごと

夜明け前は、星明りさえない時間は、夜目の利くものを持ってしても、明かりがなければ数十メートル先さえ見通せない。
だがラーハルト、その耳に捕らえた。
昔二度聞き、最近は聞こえるのが当たり前の・・・あれは！あの音は!!

バランの傍らで蹲っていたラーハルトは、音がした外へと直走った。
あの音は・・・

バン!!

外へと飛び出し、目にしたのは神獣ガルーダであった。
だが・・・・・その背にいたのは・・・
「何故貴方が・・・・・」
自分も主達もこの男をよく知っている。だが、なぜ今この時に神獣ガルーダの背に乗ってこの砦に・・・・
相手の風貌を確認した門番達は、一斉に抜剣し警戒を露にしたが男は気にもせずラーハルトの側近くに寄る。
ガルーダの背から降り立った男は深い溜め息を吐く。門番達の対応はどうでもいい。このご時世なれば、自分ほど怪しい者はいないからだと自覚はしている。自分の種族もだが、魔王軍の目をかいくぐる為とはいえこんな深夜も過ぎた頃に来たのだから警戒されてなんなら斬りつけられてもも文句は言えまい。
溜め息を吐いたのは、これから自分がやる事はこれまでの人生の中で最も厄介で面倒で、昔の自分ならば絶対にやらない事だが、仕方がない。
一度引き受けた事をやめる方がずっと自分らしくない。
あの時頼み事を引き受けた、ならばやり通す方がましだ。

「お嬢さんからの頼まれごとだ。悪いがラーハルト、お前さんの権限でここを通してくれないか。」
その言葉を聞いたラーハルトの目は光、急ぎまだ起きているフローラ女王の下に向かい、いましがた来たものを砦に入れて欲しいと嘆願し、主以外に下げた事の無い頭を深々と下げた。
あの人が頼まれた事はバラン様とディーノ様、ひいては今沈んでしまっている仲間全員の心を救ってくれると信じて。
「分かりました。許可をしましょう。」
女王の鶴の一声で、来たものは直ぐに砦のダイ達の下へと向かった。
希望の光の欠片を届けに。

何もする気が起きない

最後に食べたのは朝食、それも食べる気はなかったがせめてパンとスープをとナタリーに渡されて・・・・・かなり時間が経つが空腹を感じない。
深夜帯も過ぎているのに眠気も来ない・・・・・涙も乾いて、悲しみも出し尽くして・・・・・心までもが空っぽになって・・・・・このまま沈んで・・・ティファの所に・・・・

バタン!!!

「・・・・・なんだこの有様は・・・」

ノックもされず、乱雑に開けられた扉をノヴァは億劫そうに見遣った。ティファがいないこの世界がもうどうでもよくて、膝を抱えたまま沈んでしまいたいと、瞳一つを動かすのも面倒だと思っていたのだが、入ってきた者の気配に覚えがあり、空になったはずの心が僅かば

かりに動かされて見た先に居たのは、ラーハルトを従えた・・・

「・・・何しに来たんだよロン・ベルク・・・」

自分のすぐ横で同じように壁に寄りかかって座り込み、俯いていたポップがノロノロと顔を上げ、投げやりな声で入ってきた者に声を掛ける。

その目に覇気は無論の事、生気すらなく生きたまま死んでいる者の目をしている。

自分と同じように。

その瞳を見たロン・ベルクは堪らなくなる。

死んだ瞳であっても、ノヴァとポップは顔を上げて自分を見ているだけまだマシだ！

周りを見れば全員・・・・それこそマトリフとても俯いたまま動きもしないではないか!!

ほんの数日前まで賑やかに、明るく気持ちの良い一行が壊れ果ててしまった・・

お嬢さん!!あんたが考えていたよりもこの結末は悲惨すぎるぞ!!!

今と同じ時刻に自分を訪ねて来たティファの、とんでもなく、ダイ達にとっては非道な内容の頼み事を自分も引き受け、ダイ達の心がボロボロになっているのも予想してきたのだが、これ程までにダイ達はティファを愛していたのだ・・・・一行の心を殺してしまう程に!!

自分があの時、是が非でも、手足切り捨ててでも止めればよかったのだと後悔してももう遅い

それに！自分も知りたいことがある!!

「随分と情けねぇ面を晒しているなポップ。」

ポップの前に立ったロン・ベルクは、辛辣な言葉をポップに掛けるが、ポップはどうでもよさそうにその問いかけに応える。

普段のポップならば、自分に対する雑言を許す事はしないが今は其れすらもどうでもいい。
実際に自分達は、ロン・ベルクに言われている通りの者なのだから。
「へ・・・・そうだよ・・・情けねぇのは面だけじゃねぇさ・・・」
「どういう意味だ・・・」
「そっか・・・・あんたは知らないか・・・・知らねぇ方が!!いっそ幸せだよ!!」
泣き叫び、心も気力も空になったと思っていたポップは、何も知らず澄ました顔をしているロン・ベルクに無性に腹が立ち感情をぶちまける。
知らないのはロン・ベルクの責でも何でもない!!これは自分の逆恨みだと頭の冷えた部分で分かっている!それでも、ティファを喪った事が、常の冷静な自分を壊していく。
ティファが・・・・この世界の何処にもいないのだと思うだけで胸を掻きむしりたくなるこの気持ちを!こいつは知らない・・・

ダン!!!

「知っている・・・」

蹲り叫ぶだけで拗ねているポップを、ロン・ベルクは容赦なく襟首を掴み壁に叩きつけ顔を上げさせ強制的に自分を見させる。
「し・・・・知っているって・・・あんたが何を!!」
「大魔王に敗れて、お嬢さんがお前達を移動させて逃がし!!そのお嬢さんが陣から出ていない事を俺も知っていると言ったんだポップ。」
「・・・・なんでお前さんが知っているんだよ。」
知っていると言ったロン・ベルクに、マトリフも顔を上げ話しかける。
ロン・ベルクが、ダイ達が敗れたのを知ったのには納得がいく。廊下の扉に一番近くに座り込んでいた為に、外の慌ただしい声で、大魔王の攻撃が始まったのを知り、ロン・ベルクもそこから察したのだと。

それでも、何かする気も起きずに蹲っていた訳だが。
敗れてから時間が経ち、ダイ達の事もティファの事も詳しい情報がフローラ経由で各国に行っているのも容易に想像がつくが、ロン・ベルクが知らされるわけがない。
なのに正確に知っている事がおかしいのだ。

マトリフの言葉に、ロン・ベルクは激した言葉や声とは違い、労わる様にそっとポップを寝台の上に戻し横にさせる。
治療され体に傷がなくとも、こいつらはいまだ瀕死の状態だ。原因は唯一つ！あのお嬢さんのせいだ!!!

「俺がここに来た理由を話す前に、ポップ、お前は自分を飛ばした陣の色を覚えているか？」
先程自分を乱雑に扱ったとは思えない程の優しい声と、同じくらいの優しさで駆けてくれている毛布の温かさにポップは戸惑う。
乱雑に扱われた事に反発しようと思っていた心が、スゥと軽くなりロン・ベルクの質問に素直に答える。
「緑だ・・・・・なんかの呪文みたいなのをあいつが唱えて・・・深緑に周りが。」
「そうか、おいマトリフ。こいつらが出てきた陣の色は何色だった？」
「・・・・ポップが言った通り深緑色だったよ・・・それがどうか・・・・お前・・・泣いてんのか・・」
「え!!」
師の言葉にポップが弾かれたように上を見上げれば、ロン・ベルクの瞳から涙が流れていた。
おおよそ泣く事と最も縁遠そうなこの男が・・・
震えてそして・・・
「クック・・・・・ハッハッ・・・・・」
「あんた・・・・・笑ってんのかよ・・・・」
「あぁポップ、そうだ・・・・・」
泣きながら笑うロン・ベルクは、黙ってポップの枕元に座り頭を撫

で始める。気を落ち着かせる為か、傷ついたポップ達を労わる為か分からない。
だがティファがいなくなったのに笑うロン・ベルクを怒る気すら出てこずに、それどころかごつごつとした大きい掌の感触が、空っぽになりかけていたポップの冷え切り死んでしまいそうな心ををわずかに温めてくれた時、その言葉が降ってきた。

掌の感触と同じくらい温かく、今までで聞いた中で一番、途轍もなく優しい声で、そして穏やかに瞳で自分の目を見ながら告げられたのは・・・・

お嬢さんは生きている

怒りと立ち上がりと

今日の決戦で一行が敗れて逃がさなければいけない時、私は逃げられません。残らなければ逃がせないのですよ。

ティファはロン・ベルクの小屋で、小屋の主と自分様に淹れた紅茶を飲みながら穏やかに微笑みさえ浮かべながら、まるで出掛け先から戻れませんと言うように気軽に言い出していた。

その直後、自分はティファの小さな頬を殴り飛ばしていた。

空が白んで少しした時、馴染んだ神獣ガルーダの羽音で目が覚めた。

昨日来た時、今日決戦だと言っていたが、よもやまた日延べになったと言いに来たのかと苦笑が浮かんだが、其れにしては早すぎる時刻だ。

昨日言われなかった、逃げた後の決戦時に武器が間に合うのか問い合わせにでも来たのか。

いずれにしてもティファを迎えるのは嬉しい。一人で来たのならば尚の事だ。

ある意味でキルを変態呼ばわりできなくなったロン・ベルクは、珍しく浮かれて小屋の外に出て目にしたのは

「泣かないでガルーダ。大丈夫、きっと何もかもうまくいく。」

「―そんな保証がどこにあるというのだ!!!敵はお前と・・・お前達とは

違うのだぞ!!ましてあの変態のいる所にむざむざと・・・―」
「他に方法がないんだよガルーダ。どうあっても私達は大魔王と対峙しないといけない。こちらが行かなければきっと地上のどこにいても総戦力で探し出して私達を抹殺しようとする。
其れされたら不味いのは分かるよね。」
「―何故・・・お前なのだ・・・・―」
「これが出来るのは今のところ私しかいないんだよ。―全部―を片づけて尚且つ・・・おはようございますロン・ベルクさん。」

ボロボロと泣くガルーダを宥めているティファの姿があった。
ガルーダが何を言っているのかは自分には生憎モンスターの言葉は理解できないので分からないが、雰囲気からして相当不味い事が起きようとしている、そんな嫌な予感しかしない。
その証拠にティファの顔には自分が嫌いなあの笑みが張り付いている。
自分の心を全て隠そうとするあの透明な笑みが。

「今からダイ兄達と海底の扉から死の大地の奥底にある敵の本拠地に乗り込みます。敵の門番を務めている魔軍司令官ハドラーとは私が戦うことになりました。」
ガルーダを宥め、ロン・ベルクの小屋に入ったティファは、早速鍛冶の竈の灰の中に必ず残している火種を慣れた手つきで取り出し、足の着いた金網を竈の中に置いて、その下に燃えやすい小枝を入れて火を熾し、これまた竈に残っている炭に火をうつして大きく燃やし、ポットの中に裏の甕から汲んだ水を入れて湯を沸かす。
沸かしている間に今日の決戦の話となった。
「・・・・・言っちゃあなんだがよく周りが反対しなかったな。」
魔軍司令官ハドラーと料理人の一対一の話など、悪いが自分ならば大反対どころか、話の段階でハドラーという奴を消しにかかっている。
面倒な事せず、敵ならば大義名分なくとも切り捨てて終わらせれば

いい。
「ロン・ベルクさん。」
自分の表情や気配で悟ったのか、ティファは苦笑しながら沸いた湯で紅茶を手際よく二つ用意する。
相変わらず綺麗な所作で、立ち上る香りも申し分なく、普段液体と言えば酒しか飲んでこなかった自分からしてもティファの淹れてくれる茶の方が美味い。
こうして毎朝こいつが俺の為に茶を淹れてくれたなら・・・・もっと言えば、朝ベットで目が覚めてまず目にするのがティファであったなら・・・・俺はきっと幸せの中で溺れ死んでも後悔はなかろう。
あり得そうであり得ない未来を、らしくもなく想像をし、ロン・ベルクは自分に苦笑する。
今考えたのは、もしもティファがあの氷の坊やとは矢張り恋人ではないとくっつかず、そして成人しても一人でいた時に口説いて自分の恋人になってもらえた時の、本当にあり得そうであり得なさそうなあやふやな想像だ。
あの坊やでなくとも、ティファなれば引く手数多になるのが目に浮かぶ。
今は固く蕾んでいる花だが、年を経て大輪の花として咲いた時、ティファは世の男どもがこぞって結婚を申し込んでこよう。
容姿とその優しさに魅かれた男どもが・・・・・有象無象には渡したかねぇんだがな～。
自分の理想としては、矢張り坊やと連れ添い、子が出来穏やかに老いていく二人を眺めていたい。
二人の子供であれば礼儀正しく穏やかで、俺の事をおじさんとか可愛く呼んでくれて・・・二人が亡くなっても、もしも子孫が二人に似ているのであれば長い魔族の一生を二人の子孫の傍らで過ごしてみたい気もする。
長い・・・・本当に長い魔族の生涯の中で過ごす百年にも満つかどうかの刹那かもしれないが、子孫代々二人に似る様に自分が二人の良さを子守唄替わりにして育ててみるか？

気分としては、親戚の叔父か。
騎士の一家でいてくれれば、俺が成長する子供達に武器をうって贈り、稽古だってしてやれる。
こいつの一家だけの面倒を見るのは贔屓が過ぎるな。ポップやダイ達の子孫、ヒュンケルも確か女の名前言っていたし、そちらの面倒も・・・マァムは・・・・これから探すのか・・。
ティファはお茶一杯で幸せ未来を脳内に咲かせているロン・ベルクを見て、自分のお茶にここまで喜んでくれているのかと勘違いして喜び、同時に心苦しくなる。
何故ならば
「ロン・ベルクさん、あの浜辺で言った事を覚えていますか？」
「あ？・・・・悪いがどれだ？」
あの浜辺とはマトリフの浜辺で楽しくも忌々しい夕食会の時のあの事だろうが、―色々―とありすぎてどれがどれやら分からん。
あらゆる意味で正直なロン・ベルクに、ティファは思わず吹き出し掛ける。
この人は本当に、子供をそのまま大人にしたような人、一言でいえば一昔前のガキ大将みたいな人だ。
実力も器量もあり、他者を引き入れる大らかさもあり好ましい。
・・・・それだけにこれからいう事は。
突如愁眉を潜めるティファに、ロン・ベルクは慌てる。
不味い！
「お嬢さん!!おまえと話したことを忘れている訳じゃあないんだぞ！むしろ覚えすぎていてどの話か分からないだけだからな!!!」
テーブルをはさんでいきなり立ち上がり、身振り手振りをして慌てふためき、しなくてもいい言い訳をするロン・ベルクに、ティファは矢張りおかしくなり、失礼だと思うがコロコロと笑ってしまった。
ロン・ベルクとしては何故笑われたのか分からないが、怒っていないなら大丈夫かと一安心する。
惚れた女性に、不快に思われるのが頃ほど耐え難いとは知らなかった。遅い恋を、ロン・ベルクは胸の中で転がし愉しみ、時にこうして

振り回されるのすら楽しんでいるが、ティファの言葉が楽しさを一転させた。
「最初の、つまり今日の決戦では魔軍司令官ハドラーに勝てても、大魔王には届かないという話です。」
「あぁあれか。確かに・・・・・逃げる算段があんだろう？」
「はい。詳しくは・・・・私も使えても原理までは分からないので省きますが、―陣―から―陣―を通して逃がします。」
「陣・・・だと？」
「はい、あちらは地上を虎視眈々と狙っていたのに一切気取られる事無くいた勢力です。ハドラーの時は、魔界と繋がった時彼の邪気で世界中のモンスター達が凶暴化したというのに、彼等は其の片鱗すらがありませんでした。
どう考えても格どころか次元すらが違う彼らの気配がハドラーの時の様にならなかったのはおかしいのです。
ですが、大魔王が一流の結界を張れるか、もしくは術者がいた場合は・・・・」
「ルーラの類では逃げられんと。」
ティファの言わんとした事を分かったロン・ベルクは、溜め息を吐きながらティファの言葉を結んで見せる。
確かに、古来より大魔王からは逃げられないと魔界には伝わっている。それが結界の類のせいなのか、それとも高い大魔王達の実力のせい何かは分からないが、ティファの懸念はきっと当たっているのだろう。
結界の類は魔界で国を守るには防衛の為に必須だから。
「それで、ルーラとは違う方法をと。」
「はい。ですがその為に私は―その場に―残らないといけないんです。」
「・・・・は？」
「陣で飛ばす際、出口には陣を予め呪力を注ぎ込んだ詠唱を刻んでおけばいいのですが、入り口側は、術者が残って維持しないといけないのです。」

「それは・・・それはつまり!!!」
「はい、その通りです。」
ティファが何故愁眉を顰め、何故ガルーダが泣いていたのかが今の話であらかた理解したロン・ベルクは、椅子を後ろに倒したのにも気が付かずに立ち上がり、ティファの次の言葉を、固唾を飲んで待つ。
自分の考えなど外れて欲しい!きっと、ティファ自身は別の方法で、何かは分からないが途轍もなく困難で大半な方法で逃げるので、それに困っているのだと・・・
「今日の決戦で一行が敗れて逃がさなければいけない時、私は逃げられません。残らなければいけないのですよ。」
「それは・・・その後お前は他の方法で逃げるのだろう?」
「ロン・ベルクさん・・・」
穏やかに紅茶を飲み終わったティファは、困ったように笑って言った。
「いいえ、逃がした後私に力は残されていないでしょう。文字通り全てを使い切りますから。」
その言葉の直後に、自分は人生で初めて、愛した女の頬を殴っていた。

躱される事無く、その身で受けたティファの体は椅子事吹き飛び床に倒れ伏した後、ロン・ベルクは、無造作に襟首を使い引き上げた。
その顔は憤怒に染まり、今にもティファを殺しかねない程の殺気を湛えて。
「ふざけるのも大概にしろ!!お前は・・・お前は一体俺達の事を何だと思ってやがんだ!!!」
これまで積み上げてきて、それでもぎりぎり堪えて来た怒りの堰を切ったロン・ベルクは、ティファの目を見据えて怒鳴り上げた。
「お前は!これまでどれだけダイ達を!!仲間を心配させて心を傷つけたか分かっているのか⁉お前が一人で事を解決しようとする度に!ボロボロになって行くお前を見ている事しかできないと嘆いていた

あいつらの気持ちを考えたことがあんのか!!!」
ずっとダイ達の嘆きを傍らで見ているしかなかった自分の辛さも！
そんな辛さを!!こいつは無視してやがる!!!こいつはもうどこにも行かせねぇ！手足の腱切ってでも止める!!!
グ・・
「・・たしだって・・・」
「あん⁉」
激昂した自分に怯むことなく、じっと見つめていたティファの瞳が歪み、襟首を掴んでいる自分の手を握りながら何かを言おうとしている。
ティファだとて自分の非道さに吐き気がしている。そんな事を自分がされたらたまったものでは無い!!
それでも他に方法がないのも事実で、だからこそお茶を飲んで―全て―を飲み込もうとしたのに!!!
「私だって!!好きでこんな事して無い!!!」
「・・・・・」
「自分を犠牲にして逃がす！話で聞いていても自分だって虫唾が奔る!!そんな事しないで足掻く方法が他にないのか考えてじたばたしろって言いたくなる!!!もっと言えば！私がぶん殴って止めている!!」
自分の意見を真っ向から否定しながらもティファの言葉はまだ続く。
「それでも!!どんなに考えてもこの方法しか無かったんだ!!一行の誰をも見捨てず取りこぼすことなく全員を安全に逃がす方法がこれしか見つからなかったんだ!!!
これに文句があるんなら!!これ以外の方法を教えてよ!!!」
身を真っ赤にはらし泣き叫び、反対する以上はそれを上回る方法を出せと吠え上げられれば、ロン・ベルクは黙るしかなかった。
自分も知っているあの怖ろしの大魔王から、ティファが言ったようなことを現実にさせる逃がす方法など思いつくはずが無かったからだ。

「お前は・・・・・死んでもいいのか・・・」
浮かばずに、苦しい声でそれしか言えなかった。
歪み苦しそうなロン・ベルクの顔に、ティファは本当に申し訳なくなる。
「ごめんなさいロン・ベルクさん!・・・・私だって、死にたくない・・・死ねないよ!!!だって、ダイ兄達をこんな状況で置いて逝きたくない!!!」
自分がポップに置いていかれそうになった時、竜騎衆達において位からた時の絶望を今でも覚えている。
置いていかれるのは、本当に・・・・
「死なないようにはする!逃がす方法は二つ。一つは誰かの命を犠牲にして開く扉がある。万一私が死にかけた時はこれを使う。陣は黒に染まって私は確実に死ぬ。
もう一つの方は深緑色に陣が光る。この時は、私は死なない。
ダイ兄達全員逃げられれば、私は生かされる可能性が高くなるはずだ。」
逃げた勇者達が地下に潜りながら予測不能な戦いをされるよりは、捕虜を餌にして一か所に集めた方が効率的で取り逃がす可能性がぐんと減る。

「お前は・・・・・捕まりに行くのか・・・」
「うん、ダイ兄達には言っていかない・・・・ロン・ベルクさん、頼みがあるんです。」
ズルズルと、壁に寄りかかりながらティファを抱きしめるロン・ベルクに、ティファは頼みごとをする。
「・・・・・何をだ・・・」
「この―手紙の束―を、逃げた後のダイ兄達に届けて欲しいんです。」
金のリングから、果たしてティファは大量の手紙の束を取り出して見せる。
「中身は?」
「きっとダイ兄達は私を残したことに後悔の念で傷つく。今ロン・ベ

ルクさんに話した事と似た内容が書かれている。」
謝罪と説明と、道を照らす事を。
「・・・・・俺に、共犯者になれってか・・・」
全てを知ったうえで、ティファを止めずに見送る俺も、黙って置いて行ったこいつと同罪に・・・・
「貴方にしか頼めない・・・・」
狡いだろう・・・・そんな縋られる声で言われて、俺の気持ちも知らないだろうお前のその言葉を、俺が断れるわけがない・・・・
「緑に・・・」
「・・・・・・」
「必ず深緑色の陣にしろ！黒に染めるな!!」
「ロン・ベルクさん・・・・・」
「約束しろ・・」
「・・・・・最後まであがいて、貴方の言葉を優先します・・・・」
その瞬間、自分は共犯になった。
殴ったことを詫びた後、ハドラーの黒の核晶の事や、其れも処理する話、もしかしたらその時はハドラーとその親衛騎団達も逃がすかもしれないので手紙の束の中に、ハドラー達の分がある事も。
「それぞれに名前が書いてあります。」
「・・・・・・お前は本当に・・・」
「あきれて・・・・ますよね・・」
「あぁ、呆れているさ。」
途方もない秘密を仲間達に隠し通してきたことに、もしかしたら宿願である倒したい敵を助けようとしている事すべてに、呆れる他ないではないか。
「俺の言葉を・・」
「はい、優先させます。もしも日が暮れても私がここに来ない時は、その時は一行が敗れて陣で逃がしたと思ってください。
ダイ兄達の所にはガルーダが導いてくれます。
ガルーダ、ダイ兄達の気配分かるね。」
「―あぁ・・・・・あぁ!!だが！お前がここに!!帰って来い!!!」

「ありがとう・・・・ガルーダも辛い事させて御免ね。」
無くガルーダの頬に擦り寄り、ティファはキメラの翼で死の大地近くの海上迄飛んでいき、監視網に引っかかる前に海中に潜り込む。
ロン・ベルクとの約束を胸に。

「これが今朝がたの俺とお嬢さんの話だ。」
自分の周りを取り囲んでいるダイ達に、ロン・ベルクはそう結ぶ。
「陣が緑色だったなら、お嬢さんの考えが正しければ殺されずに捕虜になるとは俺も思う。あいつ一人を殺しても、お前達の復讐心を煽って強化させるのは悪手だからな。」
自分もダイ達の成長のあり得なさに目を瞠っている。そこに、復讐心を加えて爆発的な成長をされたら如何に大魔王とは言え負ける可能性が高まると見ている。

「俺も・・・・逃がすのをお前は承知したのか？」
「あぁそうだ。お嬢さんがお前を生かすと決めたんなら仕方がねぇ。」
立ち上がりはしたものの、ずっと俯きダンマリを決め込んでいたハドラーに、ロン・ベルクは辛辣な目を向ける。
自分の勘が正しければ、十中八九、こいつもティファに・・・・
だがそれでも自分が負ける気はしないが。
「分かったらお前達もしゃんとしろ！お嬢さんが命懸けでお前達を逃がしたのを無駄にするのか!!!命張って、逃がしたお嬢さんが無事かもしれねえのにお前達は俯いて腐って!!大魔王の暴挙を指を咥えてみているのか!!!」
ティファが願った事を、ロン・ベルクを通じて知ったダイ達の言葉に、ダイは・・・
「ティファの馬鹿!!!!!!!!!!!」

堰を切ったようにぶちまける。
いつでも無茶して勝手して無謀して!!!自分達を頼りもしない非道な妹の悪癖を全てぶちまけ始め、呆然したポップ達も、だんだんとティファに腹が立って来た!!!
「あの馬鹿妹!!こんなこと自分がやられて嫌だろうに!!!置いて行くなと泣いたのあいつだろうがよ!!!」
「なんでもっと私達に危機を知らせないのよ!!!お荷物だとでも言いたいの!!!」
「俺達に幸せ探せと言っておいて!!」
「ティファが破るなどけしからんではない!!!」
「ティファさんの馬鹿!!!」
「必ず皆さんに怒られてもらいます!!!!!」
「嬢ちゃんの奴!!再会したら覚悟しておけ!!」
「氷漬けにして逃がさない!!!」
一行とマトリフとノヴァの怒鳴り声に負けないくらいに・・・・・
「ガキンチョ!!!ゲンコツじゃ済まさねぇ!!!」
「俺に逝くなと言って引き留めておいて!!!!許さん!!」
「矢張りバカ娘のままだったかあいつは!!!バラン様とディーノ様と・・・・俺達をこんなに悲しませやがって!!!!」
竜騎衆全員も怒鳴り上げ

「あの娘は・・・・たまには私も説教した方がいいのだろうか・・」
「存分にしろバラン・・・・俺が一度殴っても?」
「ゲンコツ程度・・・それ以上は私が許さん。」
それは砦に百雷が落ちたが如くで、何事かとフローラを筆頭としたレオナ達が見た者は、打ち沈む者達ではなく、怒りに震え力強く吠え上げる、戦う者達の姿であった。

再会を果たした時に思いっきり怒り、そして抱きしめて二度と放すものかと意気込む勇者達の姿に、レオナ達は涙を流して喜んだ。
勇者ダイ一行とその仲間達全員が、力強く立ち上がったその姿に

未来の為に

その部屋の熱気は異常であった。興奮の坩堝と言っても過言ではなかろう。

「大体!!僕に仲間頼れって言いましたよねティファさんは!!」

「俺達にも言ったぞ!!皆で勝とうとか!!!」

「ティファはね！もう本当に昔っから自分勝手なんだよ！会いたいって言っているのに忙しいの一点張りで手紙しか寄越さなかったんだよ!!もう三界一の勝手娘って呼んでやる！」

「それにね!!人に心配と迷惑かけたら駄目だってじいちゃんと一緒になって俺に言ってたんだよ⁉なのにやっている事がどうなのさ!!!」

ティファが大好き男の子組が、憤懣やるかたなく大爆発。

最初の怒声で粗方発散させたマァム・メルル女の子組と、大人組全員はそろそろ止めた方がいいのか悩みだすが、待ったをかけた者がいる。

「言いたい事を溜めさせるよりはいいだろう。言わしてやれよ。」

世間の裏表を見て数百年、魔界の名工にして美中年のロン・ベルクが言わせてやれとストップをかける。

「お前さん達こそいいのか？あのお嬢さんに振り回されてた口だろう。今なら言っても誰も咎めねぇぞ？

マトリフも言いたいことあんなら言っちまえよ。」

「・・・・お前さん結構いい性格してたんだな。」

「あぁ？ふん、まぁな。」

本当に素の性格をさらけ出す自分に苦笑しながらも、ヒュンケル達にまでもういいのかと唆すロン・ベルクは本当にいい性格している。

「・・・・・・女王様・・・これ止めた方が・・・」

「・・・・・・・ティファさんは本当にどのような人物なのですか・・・」

いなくなれば一行の心を壊し、無事と分かればここまでの炎を灯させる。良くも悪くも影響力が凄まじい・・・そう！凄まじいのだ、凄

いのではなく。
あらゆる意味で先代勇者アバンの上を行っている！
この場にいないのに、ダイ達の心を動かしている事もさることながら、ティファのした事で、先程からこの砦でカール騎士団とリンガイア・ベンガーナの混戦部隊が諍いまでは行っていないが、あちこちで口論をしている。
魔王ハドラーをいかにするかの処遇を巡って。

カール騎士団は当然彼を処断したい。先の大戦時からの遺恨と、今大戦アバンを殺した事と、彼の配下の軍団長が首都を無血とは言え占拠した恨みがまだ新しい。
それを言えば、バラン達の処遇こそと思われるだろうが、彼の半生はカール騎士団も知る所となり、償う道を歩いている内は許す方向で固まっている。
だがハドラー達はそうもいかない！そもそもなぜ勇者一行の料理人が彼を助けたのかすら不明である。
だのにリンガイア兵達に至っては料理人のティファに様を付け、あの方が救った者なれば信用できるとまで言わしめている。
それこそ厳格で敵に容赦しないと勇猛で名を馳せているバウスン将軍すらが、ハドラーの処断に難色を示している為に、リンガイア兵達も自説を曲げずに結果口論にまで発展している。

そろそろダイ達の発散の場をお開きにさせハドラー達から詳しい話させるべきだろうか？
フローラが頭の中で様々な考えを張り巡らせていると

パンパン!!!

「そこまでよダイ君達！元気になったのはいいけど、その元気は他に回して頂戴ね。」
「レオナ!!レオナ達もここにいたんだ。」

「ええ、死の大地が鳴動してすぐにフローラ様が来たの。」
「そう・・・無事でよかった。レオナ御免・・・俺達敗けて・・・」
「ダイ君・・・」
　遭えた喜びは一転し、負けて申し訳ないと俯くダイに、レオナは駆け寄り膝をついてダイを抱きしめる。
「いいの！負けても・・・生きていてくれさえすればそれで・・・生きていれば、何度だって・・・」
「うん・・俺達次は負けない!!ティファが必死に逃がしてくれたんだ!!!次は絶対に負けるもんか!!!」
　涙を流しながらダイを慰め、ダイもその思いに応える。妹が逃がして作ってくれたこの貴重な時間を無駄にしてなるものかと。

「さて、落ち着いたんならお前さんたち宛の手紙渡してぇんだが・・・ベホイミスライムはいないのか？」
「な!!・・・起きた時は！確かに俺の枕元に・・・」
「あいつにも手紙あんだがな。」
　ロン・ベルクの言葉に、ヒュンケルは慌てて周りを見回す。如何にティファの事で沈み、憤っていたとはいえ、相棒のベホの行方が分からないとは不甲斐無いにもほどがある!!
「ベホ殿ならば、先程森に待機している―獣王遊撃隊―の子達の所に居ましたよ。」
　探しに行こうと飛び出し掛けたヒュンケルにベホの行き先を教えたのは、パプニカ三賢者筆頭のアポロであった。
「アポロ！お前もここに・・」
「はい、エイミも居るのですがお会いになりますか？」
「!!いや・・・その・・・・・アポロお前はその・・・」
　アポロを見たヒュンケルは、もっと言えばダイ達が固まった。
　前回ティフが引き起こした大騒動は、ティファとアポロとそして・・・
「魔王ハドラーの事は、ティファさんが助けたのだと親衛騎団達全員が証言しています。今の彼らが偽りを言っても理がありません。ダ

イさん達が目が覚めてしまえば偽りかどうか直ぐに知れてしまうのですから。」
穏やかに笑い、ティファが助けたのだから一度は受け入れると笑う彼は、本当にあの篩の塔で短慮を起こして先走り、大惨事を引き起こし掛けた人物であるのかと、マトリフすらも穴が開くのではないかという程アポロを呆然とした様子で見つめている。
確かアポロは各国を回る仕事をするってレオナが・・これって各国の関係者がティファの功績を称え尽くしてきた結果がよもや?!
「ティファに感化されちゃったの?!!ダメだよそれは!!」
「そうだぞアポロさん!!あいつだって間違うことは沢山あって・・・ハドラーの事は正解でも!他はやらかす困ったやつでもあるんだぞ!!」
「ティファのする事すべて正しいとか全肯定したら駄目ですよ!人生どぶに投げないでください!!」

後の世に、―竜の兄弟達―と呼ばれる事になる、ダイ、ポップ、ノヴァが、アポロが変な方向に行こうとするのを全力で阻止する。
ティファは確かに素晴らしい面もあるが!それと同じくらい困った面が多々あるとんでもない娘なのだと。
しかし、ダイ達の心配とは裏腹に、アポロの考えは違った。
別にティファの考えに感化された訳でもなく、時と場合を鑑み無かったことは間違いであっても、敵の魔軍司令官と気安く話していたティファを罰し、敵を討たんとした心に間違いはないと確信している。
ただ、各国を周り、確かにティファの功績やそれを元にした纏り感が半端ではないと感じたのもまた事実。
最終決戦でこの世界の行く末が決まるのであれば、使えるもの、それこそ憎い魔王だろうがー料理人ーであろうが使う、そう心を決しただけの事。
全ては、この世界とパプニカ王と王女達のために。
その為ならばカール騎士達とハドラーの溝を埋められないにしても和らがせる事をしなくてはと算段するほどに。

それを全く表に出さないアポロに対して止めようとするダイ達と、ポーカーフェイスで笑って受け流すアポロの図式が出来上がってしまった。
アポロは元より優秀であり、ヒュンケル達に見せた公平さも慈悲もあるのだが、ティファとの相性が最悪という運の悪さに見舞われただけに過ぎないが兎も角として。
「はぁ、それでべほは？」
四人の、最早コントと化した遣り取りに疲れた全員を代表してヒュンケルがべほの居所を訪ねながらアポロと共に迎えに行き、部屋が静かになると漸くといった風にハドラーがフローラの前に立つ。

「久しいなフローラ・・・」
「・・・・・こんな形で会おうとは思いませんでした。」
「俺もだ・・・お前は・・」
「はい、アバンがいればこう言ったでしょう。私怨よりも公を優先し、世界を救える力があれば利用するべきだと。
貴方の配下が、貴方が大魔王の駒にされた事、それをティファが助けた事、そしてこの地上を消すことに異を唱えて大魔王と完全に袂を別った事を聞きました。」
「そうか。あいつらは？」
「別室で見張りを置いていますが大人しくしています。一人・・・手足がないのですが・・・」
「構わん、俺が後で・・治しても構わんか？」
「ええ、戦力はいくらあっても足りません。ヒュンケルが戻り次第そちらとこちらの話を総合させましょう。
決戦時に何があったのかをダイ達が、その後世界に何が起きたのかをフローラ達が話し合う。

「そうか。フローラ、カール騎士団は、俺を許してはおるまい。」
「何故そう思うのですか？」
「ここにいる者達はリンガイアの者達だ。お前が主導で動いているの

であれば、カール騎士団の者達が俺を見張っている筈だ。それがないのは、暴発したもんが俺の寝首を掻く恐れがあるからではないのか？」

「・・・・慧眼ですね。その通りです。中にはそのまま貴方を死なせよという意見も出ています。」

「だろうな。　本来であればそれが正しい。ティファとそれに感化されたものの方が・・・・其れで生かされている俺がいえた義理ではないが些か逸している・・」

「その通りです・・・・」

フローラに送られていた手紙には、ハドラーの事は書かれていなかった。ここまで見越して動いていたというのならば、それも頷ける。

自分達が過去と今の因果で、ハドラーを助けるという料理人のいる一行を、果たして救援に来たかどうか・・・・世界の為とはいえ、その恐れもあったのだ。

カールと世界を蹂躙し、故郷の英雄を殺したハドラーを助ける者達等見捨てたいと、ごく当たり前な人の感情が優先されて。

「その事は後で話しましょうハドラー。今は、今後どうするかが最優先の筈です。」

愛した男を殺されても、フローラはハドラーを一時とは言え受け入れる。

それは愛して逝ってしまった男が、常々言っていたから。

私事よりも公を優先し、世界に貢献する事こそが力を持つ者の義務だと、大戦を終えても世界を回り、人々を救いながら平和の芽を育てると旅から旅をした男の口癖を、忘れれる筈も無く。

アバン、私はカールの女王として、この世界を守る為にハドラーとも手を組みます。

貴方が愛し、守ろうとしたこの世界を。

そこに居るのは、為政者として長年君臨してきた女王陛下その人であった

幕間―とあるべホイミスライムの悩み事―

ティファって律儀って言うかなんというか、スライムの僕にまで手紙遺すってどうなんだろう？

大ネズミのチウ君は人語も人の字も一応習得しているから有りだろうけど、どっちもできない僕に遺すなんて本当に変わってる。

ある意味ヒュンケル以上に・・・・比べたらヒュンケルに失礼だからやめておこう。

あらゆる意味でティファに比べれば他の人は全員真っ当だろうな、うん。

獣王遊撃隊の隊長たるチウも、ティファの事で沈んでしまい隊員一同が不安に駆られていたのを、代わりにべほが宥めていた。

ダイ達はティファが死んでしまったと考えていたが、べほはガルーダよりは短くとも、ティファの傍らにいた時間が長く、だからこそティファの強さとしぶとさをよく知っている。

あのティファが簡単に死ぬ筈も無く、どんな手を使ってでも周りと自分が助かる道用意しない訳がない。

不可能だと思った事をひっくり返すのはティファの手だ。それを信じ切るのは甘いだろうが、死体を直に見る迄は、ティファの訃報は信じないと決めている。

もしも本当に死んだとしてもだ。

ヒュンケルと仲良しのアポロが共に迎えが来て、ティファの手紙の事を聞いた時は呆れたものだ。

ヒュンケルのと一緒に書いて、ヒュンケルが伝えてくれるようにしてくれればよかったのに。

読めもしない手紙を残されたべほは、微妙な気持ちになりながら親衛騎団の一人のポーンヒムに読み上げて貰っている。

本来ならヒュンケルかもしくはダイ達だろうが、ティファの手紙を涙を流し握りしめながら食い入るように読んでいるので頼めない。

それは大人達も同じで、自分がべホイミをかけたハドラーすらもがその状態で、唯一ティファの手紙を読んでも、なんだかな～とぼやい

ていたヒムに頼み、肩に乗せて貰らい呼んでもらった。
内容は、とても簡素だった。
勝手に捕まりにに行ってごめんねべほちゃん。生きて捕まったら絶対にどんな目に遭っても必ずみんなの元に戻る。
ヒュンケルや皆の事お願いね。
・・・・・たったの三言で終わってる。
聞けばヒム達の方が、ハドラーの異変を知っても黙っていた事、そして勝手に生かしてしかつ、勇者達と共に逃がした事を丁寧に詫びられていたとか。
ダイ達にとっては味方になっても、ハドラーや親衛隊にとっては敵のど真ん中に放り出されたのだから致し方ないのだろうが・・・・何か負けた気がするので釈然としない。

「・・・・あいつって本当にぶっ飛んでるよな。」
「―大いに賛成だよ金属生命体君。―」
「・・俺はヒム、ポーン・ヒムだ。」
「―そう、僕はヒュンケルの相棒でティファの友達のベホイミスライムのべほだ。読んでくれて助かったよ。―」
「なぁ、あいつっていっつもこうなのか？」
「―こうとは？―」
「いや・・・周りが思いもしないようなことをいつもしているのか？」
「―そうだね～。あの子と付き合っていくコツは、もうティファがする事だしで難しく考えない事かな。―」
「ちょっとよろしいでしょうかべほさん。」
「―べほでいいよ、金属生命体のお嬢さん―」
「・・・・私はクィーン・アルビナスです。」
「―そう、ふん・・・アルビナス嬢か。何かようかな？―」
「その盗み聞いた訳ではないのですが、ティファがした事は難しく考えるなと今あなたは言いましたが。」
「―言ったね。―」
「それは思考の放棄でいけない事では？」

べほな発言に、アルビナスとしては其れはあまり良い事だと思えなかった。
何故ならばそれは相手を信用しているのではなく、ただ相手のしている事言っている事を鵜呑みにした、仲間どころか主従関係でもなく、隷属的な関係でしかないのではないかと。
アルビナスの自説を聞いたべほは、少し考えて再び口を開く。
「―アルビナス嬢の言っている事は、―一般的な範囲―では正しいと思う。さっき僕が言った事は、一般的には奴隷と主人の関係だ。
でもね、悪いけどティファにはそれが当て嵌まらないんだよ。」
「何故・・・おっと、自分はナイト・シグマ。以降お見知りおきを。もう一度尋ねるが、ティファだと何故思考放棄してもいい事になるのだ？矢張りいかんと思うのだが。」
「吾輩はビショップ・フェンブレンだ。シグマやアルビナスの言う通りだと俺も思うのだが。」
いつの間にか集まってきた親衛隊達全員がべほに名乗り、べほの意味を問うと、べほは溜め息を吐いて触手で頭を擦り付けて掻く仕草をする。
「―やれやれ、本当に君達分からないのかな？いいかい、確か―君達全員―にも手紙はあったんでしょう？
武運拙くここに来れなかったルーク・ブロックとかいう人にまで。―」
「・・・・まぁな、あいつは俺達にまで残してるってやっぱ・・・」
「―そこでもう分かるはずだよ。あの子の思考、いや言動全てが―この世界の常識―から外れているのが。―」
変わっているのでもズレているのでもない、外れているとべほは断言する。
自分もティファにくっついて世界を回っている内に数多くの人間や他の種族を見てきたが、人間は人間のコミュニティを、モンスター達もはぐれ魔族達にもその境界線はしっかりと存在する。
偶に精霊やモンスター達と友達になれても、境界線を越えての付き合いをするなどほぼない。

例外はノヴァの様に精霊達から愛され、遂には精霊王の加護を貰うかしないとあり得ない。
必ずある筈の境界線が、ティファには存在していない。
ただ―同じ生き物―だと、生まれた場所、生まれ方、生活の違いや言語が異なるだけで、―生きている者―の括りに入れてしまっているとべほは考えている。
其れこそティファの中には、―敵・味方―の概念すらないのではないのかと。
そうでなければ倒すべき相手を、万一自身で倒せなくともダイ達と共にやれば勝てるだろう相手の事を、助ける選択肢を用意している時点でおかしい。
助ける用意と、助けた後逃がすことを見越した手紙迄用意をしている時点で、―常軌を逸した―ティファの考えを理解しようとすること自体が間違っている。
自分達とは考えの根本が違いすぎ、知ろうとして振り回されて自分の身動きが取れなくなる方が本末転倒だ。
「―ティファの考えを理解するよりも、ティファが起こした事自体にどんな意味があって、それを有効的にするにはどうすればいいのか、それともこれは正しいかの精査をすべきだよ。―」
ティファがする事の大半は良き事でも、ティファだとて完璧とは程遠い存在だ。
ティファの個人的な動きで、世界が動いていい筈がない。
どれ程壮大で途方も無い事をされても、それが正しいかどうか、受け入れるべきか正すべきかを常に考えなければそれこそ思考の放棄だ。
「・・・・俺達まで助けたのはあいつの間違いだってか？」
「―そうは言ってないよ。僕もあの時を一から全部見ていたんだから。正しいかどうかは言えないけれど、少なくとも僕が君たちの立場でも今ここにいる事を望むね。
されたら許したく無い事のオンパレードだもん。
そうでなくて、一つの事象、この場合は爆弾がハドラーに埋め込ま

れていると知った時から、ここまでの遠大な展望で動いたティファが異質すぎるって言いたいんだよ。
やっている事自体が良い事で味方にとって有益を生むから、今まではティファは優しくて凄い子だで終わらせてしまうんだけれどもね。―」
不利益を生む訳でない事で、ティファ自身のぶっ飛んだキャラクターで隠されて来た事を、べほはずっと胸に仕舞ってきた。
あの子は様々な意味で逸した子だと。
「私も、ハドラー様を駒にした大魔王が・・・」
「我等一同の主はハドラー様なのだ。」
「ティファが与えてくれたこの機会を無駄にはしたくないな。」
「そうだな。あいつが与えてくれたチャンスを無駄にしない事があいつへの・・」

この金属生命体の子達もダイ達と同じか。
先程はティファの考えを深く考えない方がいいとは言ったが、あの子が逸していると言ったばかりなのにその事はもうどうでもいいとばかりになって、あの子がした事を恩に感じて感謝をし、その先どう動けば有益かつ―ティファへの礼―になるかで頭が一杯になり、いつしか逸している事する疑問を持たないか。
いずれはティファのする事を全て賛同していくのだろうか。
べほはヒム達に知られないくらいの小さな溜め息を吐く。

いつかこれが降り積もり、ティファが―世界全体を巻き込んだ途轍もない事―を仕出かした時はどうなるのだろうか心配になる。
それが間違えでないと何故言い切れる。
どうして誰も、ティファが凄い知識を持つに至り、雪白などと言う―伝説の武具―を持ち、遂には魔法とは全く違うとモンスターの自分でも分かるような力を行使できたたのかを真剣に考えないのか不思議で仕方がない。
唯一、大ネズミのチウが、一度どうしてティファはそこまで凄いの

かを問うていたが、矢張りというかなんというか、ティファの優しい言葉や雰囲気に飲まれ、二度とは聞いてこなかった。
目先の事が大変になるとこういうのが普通で、こんな事を考えている僕も・・

ティファ・・・・君は一体この世界をどうしたいのさ。
守りたいと言っているのに、敵を救う事しかしていないティファにべほは胸の内で問いかける。
この悩みを誰かと共有したいのだが生憎自分の周りにはティファに多大な恩があり良さしか考えないで賛同するか、ティファを全く知らない者しかいない。
ティファを知りながらも疑問を持つ人がいない、このおかしな状況にべほは頭を痛める。

こうとなれば、ティファが間違った道を行かない事を祈るしか出来ない。
精々、ティファの言う通り、精神的に弱ったダイ達の心の回復をはかる事が役目だろうかと諦める。
何せあの子は世界の常識が通じないのだから、あの子が敷いた道が合っている事を祈りながら行くしかいい手立てが思い浮かばないのだから。

魔王の思い

カールのフローラ女王の隠し砦は今まさに暴発しそうな程の熱気を孕んでいる。

少しの言葉を誤れば、主にカール騎士団が暴動を起こしそうな程に。

世界の為にどう動くべきかを、見張りと哨戒兵以外の者達全員参加できる大広間にて話し合われる場とは思えない程に殺気立っている。

勇者ダイ一行とフローラ女王と率いるカール騎士団と各国の有志連合達だけであればここまでの事態にはなっていなかった。

原因は唯一つ、魔王ハドラーとその親衛騎団四人が問題なのだ。

ダイ達も目覚めてから大分経ち、ロン・ベルクの朗報とティファの手紙を読んで希望を取り戻して幾分落ち着き、周りが思いがけないほど不味い状況になっている事に気が付き蒼褪め、ハドラーの背後で護衛の様に立っている親衛騎団達も心中心穏やかでは無い。

ロン・ベルクやマトリフ、バランなど歴戦の戦士や戦いに身を置いてきた身としては、敵から立場を変えた時点でここまで殺気を露にするのはどうなのだと呆れたいところだ。

アバンを殺したと言っても、互いに命の遣り取りをしたのは、紛れもなく本人達の意思。

百歩譲って大戦を仕掛けて来た大罪人の、其れも張本人だと言い張られればそうなのだが、言ってはなんだが人間同士の戦争でも、国家間の利が合えば和解し昨日迄殺し合っていたとは思えない程蜜月を築いてきた王家や各家に枚挙に暇がなかろうに。

矢張りハドラーが魔族でしかも魔王というところが足を引くかとマトリフ達は見ている。

ハドラーは悪い意味ではないが美形ではなく、おどろおどろしい魔族の恐ろしさを体現している容姿をしている。

鋭い目から発せられる眼光が、意思の強さを表す厳つい顔が、対峙する相手を知らずに竦ませてしまう。

どう考えてもとっつきやすい相手ではない。
そして癪に障るほど落ち着いた雰囲気が、相手によっては歯牙にもかけられていないのかと挑発されている気分に陥らせてしまう。
その証拠に、ダイ達やハドラーも含めて円卓に椅子を用意され席に座り、友好気分を少しでも出そうとフローラの采配で配られたお茶をダイ達が啜ればお茶菓子でもと持ってくるが、ハドラーが啜ればそれだけで咎める目が行っているのだからどうしようもない。
この状況に、一番頭を痛めているのは砦と指揮を纏めているフローラ女王だ。
彼女は為政者の覚悟としてハドラーを受け入れはしたが、気が立ちすぎている騎士団達に、ハドラーの事で命令を出せばどんな反応が返ってくるのかが予測できずに叱責に留めている。
普段であれば果敢な決断をする女王とても、機微に疎くてはやっては行かれないのが王族。
頭ごなしだけの命令では王家と国は立ちゆかない。心より忠誠を誓われ仕えて貰ってこその王家なのだから。
そのフローラも今や岐路に立たされる寸前である。
このままいけば、ハドラーの処断か、それとも勇者達はハドラーと共に、カールは独自で動くかを迫られかねない。
それ程に、カールはハドラーを憎んでいるのだが。
「はぁ〜。」
その憎まれている当人が、溜め息を吐きながら頭をガリガリと掻いてうんざりとした顔で天を仰ぎ見る。
その様子に、場の空気を察して欲しいとダイ達は本当に青褪め、フローラのこめかみがひくりと動いた。
この場の雰囲気にうんざりとしているのだろうか？お願いだから余計な事を言わないで欲しいとフローラは内心で神に祈ってしまった。
そもそもの原因はハドラーではなく、いなくとも場を掻き乱した料理人のティファのせいなのだとフローラは恨みたくなる。
ダイ達の決戦の事と居所や他にも事細かな情報提供には感謝する

が、だからと言ってここまで面倒を掛けれては割に合わないと嘆きたくなるのは罪なのだろうか？
ハドラー達の事は同情もしようが、逃がすのがダイ達だけであったれば今すぐにでも砦と世界を一つに纏め上げ、各国に使者を走らせている頃合いだったのを、予定の全部が覆された苦い思いをティファに抱く。
そんなフローラの危惧を知ってか知らずか、ハドラーは自身からとんでもない事を提案してきた。
周囲を見回し、睥睨しながら告げられた言葉は

「俺が居るのが許せんのは分かる。だがこの地上が消されるかどうかの瀬戸際なのを、お前達は本当に理解しているのか？」
挑発的な言葉で始まり、瞬時に会議の場は沸騰した。
「貴様如きがそれを言うのか！地上支配を目論んだ魔王の分際で!!」
「陛下！矢張りこの者は今すぐに処断を!!」
「勇者殿たちも何を考えておられる！敵の最高司令官を助けるなど正気の沙汰では無かろうに!!」
それは至極当然の罵倒で、彼等には魔王を罵る権利がきちんとあり、ダイ達のハドラー擁護ともとれる行動も批判されるべき点があり、ダイ達としても、ティファが助けたからが八割、残りは敵味方に分かれていたとはいえ戦場を共にし、いつしか共通のものを持った者という不思議な情が出来たのが残りの理由で、そんな曖昧なものでハドラーを擁護するのは間違っていると面と向かって言われてしまえば言い返すのすら躊躇われる。
これがヒュンケル、クロコダイン、バランと竜騎衆達の事まで言われれば、彼等は償う道を歩いていると正面切って反論できるが、ハドラーはまだ、この後地上消滅の手伝いはしないまでもどうするのかを明確にしていない。
次の言葉が飛び出すまでは。

「大魔王との決着がついたら俺のこの首好きにせよ。」

殺されようが嬲り者になろうが文句はない。だから今この時だけは我慢しろ。

平然と頭を下げ、己の首を差し出すと言いのけるハドラーに気負いはなく、明日の天気はどうだと日常会話をしているのと変わらない声音で、己の命を差し出す約定を口にした。

地上消滅を阻止する為に、この場の全員を一致団結をさせる為が六・七割り。残りは純粋に自分が死にたいからだ。

呆れてみせたのも挑発したのも自身に全てのヘイトを集める為の茶番に過ぎない。

ハドラーからすれば、この半月はティファとの戦いで自分は死ぬものだと思い定めて来た。

今生きているのは、命を懸けて自分達も救ってくれたティファには悪いが単なるおまけであり、あの時の死こそが自分の望みであり、それは幸福の内の死であった。自身が討たれても、ティファを討った後に寿命で果てるか怒りに燃えたダイ達に殺されるかは知らないが、あの三界一のとんでもない娘と存分に戦えればどちらでもいいという、最高司令官としては最低で、あらゆる意味で大魔王に砂をかける真似を仕出かすことになるが後悔はない。

あの度量の広い主ならば、自分の戦士としての思いを分かってくれると信じて・・・その主に初手から駒にされていた訳だが、感じたのは深い悲しみで不思議と怒りは感じない。

もしも主が、魔界の為に死んでくれと言ってくれれば、小物魔王の時は無理であっても、今の自分ならば喜んでやり遂げた。

無論ティファとの決着はつけられないが、あの世でやればよいと開き直って。

だが現実はどうか？

主は自分を頼むに足るものでは無いと評価したままでいられた事が悲しかった。

助けられた時より恩を感じ、遂にはここ迄の戦士に育つ道を用意してくれたバーン様に命を捧げても構わない程に敬愛していただけに悲しみが先だった。
駒にされ消されかけてもバーン様に恨みの念が欠片も湧かない。それでも、かつての配下とその子孫たちが生きているこの地上を消させるわけにはいかないのだ。

バーン様、貴方を倒した後、俺も直ぐに逝きましょう。

葛藤の果てに袂を別つ事になってしまったが、死ねばその因果から互いに解放されてもいい筈だ。
あの世で裏切り者と、共に倒されるであろうミストやキル達にも詰られようが、それでもいい。
最早現世で仕えられずとも、あの世とやらがあればまたお供の端に・・・
折角助かったヒム達には済まないと思う。自分が死ねば、それはすなわちヒム達も諸共に逝くことを意味している。だがこの俺の我が儘をどうか許してほしい。

料理人が遺したものたち

「それはとても困りますよハドラー様。それではティファさんが命を掛けて救った甲斐がないというもの。こんな世界の片隅で吠える小物達の言葉に真剣にお答えいただいては困りますな～。」

ハドラーの真剣な思いにカール騎士団までも情に絆され結束が固まりかけた部屋に、とんでもない暴論が吹き荒れた。

誰が言ったのか、カール騎士団どころか親衛隊達もハドラーを取り囲みながら辺りを警戒する。

先程の暴論は、主を擁護しているようでいて窮地に追い込んでいるではないか！

何処の世界に自分達を小物と言った人物が庇っている者を同じように守ろうと思う者か!!

この声にとっても覚えがある者達は青かった顔が更に青くなり、最早紙のように真っ白になる。いっそこのまま魂も燃え尽きって真っ白に慣れればどれ程楽か!!

ダイ達、正確に言えばダイとポップとマァムとバランにとってなじみのある声の主は、まだ大広間の外にいて扉をこつこつと礼儀正しくノックをする。

そのノックに一番に応えたのは、声が聞こえた瞬間に扉近くまで来たポップであった。

頼むから―あいつ―じゃありませんように！あれもある意味ティファ同様場を乱すことに関しては天才的な面がある。逃げ延びた先で何が悲しくて味方になれそうな奴等とごたごたせねばならんのだと、天才二代目大魔導士寸前のポップをしくしく心中で泣かしている人物は、ポップが女王の許可なく開けると同時にポップの横をすり抜け颯爽と部屋に入り挨拶をする。

「こんばんわ皆様。お初にお目にかかります、私はぐれ魔族でダイ君、ポップさん、マァムさん、チウ君とティファさんと懇意にさせていた

だいていますザムザと申します。
過日ロモス王国にて武闘大会にてわなを仕掛けて急襲いたしましたが、勇者ダイ君に負けた上に命を救ってくだされたので二度とは致しません。
なのでどうぞよしなに。」
芝居がかったように右手を大きく振り上げながら胸元の持っていき一礼しながらも、言っている事は人を食ったような暴虐武人な挨拶もも呼べない言葉を歌い上げた人物は、元魔王軍の化学部門に勤めていた、妖魔司教ザボエラの息子・ザムザであった。
「私が来たからには皆様にご不自由はさせませんぞダイ君。」
右目をバチンとウィンクしながら手を振って言ってくるこいつは本当にあの親孝行で生真面目そうな青年と同一人物なのかと、あの闘技場で思ったダイ達と、元を知っているハドラーとバランは呆然とする。
こいつはこんなに軽薄そうな奴だったか⁉
その軽薄したザムザに一番に驚いたのはハドラーであった。なんと成れば自分がこの超魔生物完成形態の肉体になれたのは紛れもなく命を張ってデータを収集してくれたザムザのおかげなのだから。
このザムザの働きに報いる為に、死の大地で勝手に部隊を動かし、ティファを討って手柄にせんとしたザボエラを一度だけ許したのだが。
「ザムザ・・・生きていたのか・・」
「お久しぶりで御座いますハドラー様。見ての通り、また先ほどお話した通り私は・・」
バン!!!
其のしんみりとした感動の再会を、机を力の限り叩いたフローラが壊す。
「・・・先程あなたはロモス王国の武闘大会を急襲したと、そう言ったのですが。」
「はい、確かに申しましたよ人間の・・・失礼、カール王国女王フロー

ラ陛下。目的があって急襲したのですが、死掛けた私を先ほど言ったようにダイ君達に救われましてね～。」

超魔生物の試験役を父にさせられたとはいえ、自分も科学者の端くれとしてこの未完成な体で何処までできるか試してみたいのが本音であり、心の欲求のままにわなを仕掛けダイ達と地上の実力者たちを呼び寄せ戦ったが結果は承知の通り。

それでも任務の為のデータを父に送り、さぁ灰になるかと目を閉じた後に奇跡の万能なる万能薬を口に無理やり突っ込まれ、吐き捨てようとしたのをダイとポップがこれまた口を押さえて来て無理やり嚥下させられた！

ごくりと飲んでしまった後は、ティファ達の前で目覚める迄よく覚えて・・・・嘘吐いた、よく覚えている。

生命力が急激に底上げさせられたのを感じながら、朦朧とした意識でダイ達を罵倒していた。

死ぬ自分の命を気紛れに救って何が楽しい。死掛ける敵を助ける麗しい正義の味方ごっこがしたいのならば他で遊べと。

だが、完全に目を閉じる前に自分が見たダイ達の顔は困った顔をしていた。その答えに対して答えを持ち合わせていないのが丸分かりで、すなわち自分を助けたのは深い考えも無く、正義ごっこの為ではなく、助けたかったから助けただけなのだと瞬時に府に落ちる程間の抜けた顔をしていた。

思惑と打算だらけの魔王軍では触れる事の無い奇妙でそして暖かい思いにザムザは心の底から負けを認めながら眠りについてモンスターの筒に入れられ、送られた先のティファとバランによってザムザの心はダイ達とティファ達を助ける事で固まった。

「なのでご安心ください女王陛下。私はティファさんより万能薬の作り方を伝授されています。

其れにバラン様は人間用の万能薬ではこれから出てくるであろう微熱や体調不良には効きません。幸いにも以前バラン様の熱を下げ

る事に成功しているのでサポートの方はご安心を。人間の皆様用にも大量に作るので、最終決戦まで殺し合いの如き特訓をされても必ずや―直します―ので恐れずに鍛錬なされませ。」

・・・・女王陛下自らの尋問にも態度を変えず、爽やかに物騒な事を言っているこいつは本当にザムザでいいのだろうか？

「その証は立てられますか？」

次から次へと降ってわいてくるティファ周辺問題の襲来を受けているフローラは、健気にも匙を投げる事無く、マトリフ達迄をも唖然とさせている、軽薄そうでいて自分を見ている眼が少しも笑っていない魔族の青年を問いただす。

この青年の物言いはいろいろと問題はあるが、どうやら言葉に嘘はないと思うのだが、これ以上元魔王軍関係者を入れたくないという葛藤が働く!!

一体全体どうしてこうなった！勇者一行の頼れる大人たちの大半が、マトリフ以外は一人は魔族で他は元魔王軍というこの異常事態はさしものフローラにもは想定外過ぎた。

せいぜいヒュンケルかクロコダインを受け入れるのは訳ないと思っていただけに、蓋を開けてみれば埒外の事ばかり。

アバン・・・神は私に何か試練を与えているのでしょうか？この事態に泣いてもいい気がしてきたが、そこは踏みとどまる。

「ふむ証ですか・・・・―私ーではなく―彼―にお願いしましょう。お願いします、式神殿。」

式

その言葉に、マトリフとラーハルトは瞬時に反応して立ち上がる。

―しき―という言葉に、自分達は苦い思いがある。

愛してやまないティファを、精巧に作られた偽物と判別できなかった問い思い出したくないものが。

あの時と同じ、ティファに似せられたものが現れるのだ廊下と身構

えたがはいってきたのは
「あ!!あんたあん時ドラゴンキラー貸してくれたあんちゃん!!」
「ホントだ!!・・・・あの・・・・ザムザさんどうなってるの?」
　式という言葉自体をそもそも初めて聞くダイ達にとって、あの時ベンガーナで助けてくれた人がどうして自分達を助けるというザムザ証になるのか疑問でしかない。さまざまどうしてここにいるのだ!!?
「今からご説明させていただきます。あの折は主様に・・・分かりやすく言えばティファ様に頼まれて―武器探し―をしていたところあの場面に遭遇しティファ様にご指示を仰いだところあのような流れに。」
　式はすらすらと息を吸うように嘘を言う。もしも自分がダイ達の前に出ることがあり説明を求められた時のバックグランドのプログラムは予めされているからだ。
「そしたら・・・あの時点でティファは・・」
「はい、巨大な敵が来た時の為の万能薬作りから手が離せずに、代理で私がお助けさせていただきました。」
　あの時の辻褄合わせの話もばっちりと搭載されている。
　式はスタスタとフローラの下に歩き、にっこりと笑いながら自身の腕を無造作にねじ切る。
　その異常な行動に広間全員とは言わずとも大勢が叫ぶと思われたが、重い沈黙が降り積もる。
　式のねじれた腕からはいくら待っても血は一滴も出ず、あるべき骨の露出さえも無い!!
「改めて名乗りましょう。私はティファ様によって作られ長年共にいるうちに個体名を与えられた式神と申します。
　式神とはこの場合、ティファ様の魔力から生み出された者達を差します。
　それは多岐にわたり、アイテムや私の様に疑似生命を生み出したものです。
　アイテムの方は本物同様に機能しますが、疑似生命体は何処まで

いっても作り物で、血も出なければ骨も神経も当然ありません。
ダメージが過ぎれば元になった素材に戻るだけです。
ラーハルト様達は既に会っている筈です。ティファ様の手紙を依り代とした式の一人に。」
「・・・あれと同じ類の奴かよ・・・」
あの時、ティファではないと完全に分かった時の絶望と嘆きがマトリフ達の胸を焦がすが、感情の機微に疎い式神フラメルは、気にも留めずに話を続ける。
「ちなみに私は長年自律して思考し、主様の命を完璧にこなせるために精霊性の高い物質を作って生み出されているフラメルと申します。
私はティファ様のご兄妹であらせられるダイ様がどこにいても分かるように作られています。
此度はこちらのザムザ様を、ダイ様達の下に届ける様に命じられました。」
ねじ切った腕をフラメルは無造作にくっつけ、フローラに素っ気なかったのが嘘のようにダイの前で額づく。
「主様の兄君であらせられるダイ様。私フラメルが貴方様の命を果たしましょう。何なりとご命令を。」
「私もフラメル殿同様、勇者一行と御味方のサポートに全身全霊を捧げましょう。」

毒を食らわば・・・

人間は色々とあると混乱し、思考が逃避する事が多々ある。
人外どころか生き物ですらない式とやらの出現、軽薄そうでいて有能ぶりを発揮している魔族の青年の乱入に!とうとうフローラが本気で切れた!!

「もう結構!!!!!!」

先程よりも荒々しい声で叫び上げながら立ち上がるフローラの目は据わっており、しかも薄っすらと笑っているから凄味が増している!!

良いでしょうティファさんとやら!!貴方が様々な策をしているというのであれば私は!!!!

「魔王だろうが元魔王軍だろうが式神とやらだろうが!!!私カール王国の女王フローラの名の下に!!全員の一切合切の面倒を見ようではありませんか!!!!!」

全てを丸ごと飲み込んで受け入れて上げようではありませんか!!!

「陛下!!」
「お待ちください!魔王はその・・・先程の意気込みを聞いた我等は少しは得心がいきましたがしかし!!」
「この得体のしれない・・・」
「世界の危機である時こそ確かに冷静な判断が求められましょう!!しかしこの件に口をはさむことは誰であっても許しません!各国に使者を走らせなさい!カール王国フローラの権限において、勇者一行の料理人ティファが命を掛けて救た者達の中にハドラー達がいた事、今起きている事包み隠さず全て知らせる様に!!」
世にこのような言葉がある。

毒を食らわば皿まで
確かにハドラー達は敵であって何をしでかすか分からない！だが!!その力の有用性は自分がよく分かっている。
フローラは戴冠してから賢女王と名高いが、ハドラー大戦以前は、レオナ以上のお転婆王女で勝つ敗けず嫌いであった。
そのフローラは、次々と押し寄せてくるティファからの無理難題としか取れない協力者派遣が、まるで自分という人間の度量を図っていると感じて高らかに宣言する!!
その挑戦受けて立ちましょう！貴方が送ってくれた有用な人材を余すことなく使い切ろうではありませんか！覚悟なさいティファさん!!

待って！待ってください女王様!!私はそんな大それたこと考えていません!!良かれと思ってやった事です!!皆で大魔王の悲願を止めましょうよ!!
とか、ティファが聞いたら半泣きしている事を言い放つ。

完全覚醒したフローラは為政者として兵達に次々に命を飛ばし、今後の事もダイ達と話し合うが、兵士達全員持ち場に戻した。

パンパンパン

「采配御見事。」
兵達が下がり、残ったのはダイ達と、兵士関係ではバウスンとアキームが残った中、ザムザが拍手をする。
先程の軽薄さが微塵も見られず、ザムザは改めてフローラの前に立ち片膝をつき、周囲とフローラ本人も驚かす。
「この部屋に入ってからの無礼の数々どうかお許しを。この大戦終わりし後、いかようなる罰も受けましょう。」
「貴方は・・・先程はハドラーへの悪感情をわざと貴方に！」

「まぁそこまで大したことはありませんが、話がまとまるきっかけにくらいになればいいとは思いましたが、皆様にも不快な思いをさせてしまい申し訳ない。」
ザムザとしては、ティファと式から得た情報で、おそらくハドラー様がダイ君達と共に逃げた事で砦の雰囲気は最悪であろうと推察はついていた。
何とかハドラー達が生きている事で生じるメリットを説きたいところだが、元敵で・・・言ってはなんだが陰キャラの自分が物を言ったところで通るまい。
声が大きく多少風変わりなものの方が目立ち、怒りを自分に向けさせつつそこから話術で取り込む積りであったが、最後の最後はフローラの本物のカリスマで事が収まった。
本気を出した女王の言葉に逆らう者はいないようで、―全ての命令―が今実行されようとしている。
であるならば自分も無理せずに済みそうだとお礼も言いたいところだ。
「ザムザ・・・・お前何をどこまで知ってんだ？」
真相を知っても押し黙った一同を代表してポップが聞く。一体ティファからどのような頼まれ事を予めされていたのかを。
「そうですね～。私も座ってもいいですか？」
・・・・・こいつ軽薄は演技であっても、図太さは素だろう。

「ふぅ～、ではご説明は・・・・・その前に寝て下さいねダイ君達。」
今ダイ達は案内された席に座り、ハドラー達と見事に分けられている。そのダイ達に向け、ザムザは粉の入った袋を取り出し、瞬時にダイ達に振りかけた直後、ダイ達は何かを言う前に混とんするように深く眠りについてしまった。
一人を除いて
ロン・ベルクはザムザが何かしそうな気配を感じ、素早く椅子を蹴立てて後ろに飛んで難を逃れた。

「随分と思いきったことをする奴だなお前さんは・・・」
「はい、これもティファさんからの頼まれごとの一つで、起きて立ち直っているようであればその後はぐっすりと夢も見ずに寝かせて欲しいと。
女王陛下、ダイ君達を寝室にに運んでも?」
「俺も手伝おう・・・」
「ハドラー・・」
「ハドラー様・・・いいえ、親衛騎団達の方にはお願いしますが、貴方は私の診察を受けていただき、私が許可を出すまでは力を使わないでいただきたい。」

ダイ達は兎も角、クロコダインやボラホーンの巨体は人には無理だと申し出たハドラーを改めて見直したフローラとは反対に、ザムザは困った様な顔でそれを押し止める。
もし万が一ティファと自分が考えだしたハドラーの治療が成功していない最悪の場合意を考えて。
その日の未明に起きたカールの隠し砦の大騒動は、奇しくも引き起こすきっかけになった料理人の寄越した新たな味方の手により収束し、本当にティファとはどのような人物なのかフローラは分からなくなり、この後様々な事を知るたび頭を痛めることになる運命が待っているのを誰も知らない。

子供の如き思いで助ける者

「体が崩れるような感じは？」
「・・・無い。」
「どこかに痛みや痒みなどの些細な違和感は？」
「それも無い。」
「では今掌にメラを出していただきます。」
「・・・・・」ゴォウ
「いつもと何か違う感じは？」
「無い。」
「最後に闘気の放出を微量ですがお願いします。」
フォン
「・・・特に変化は見られず。ハドラー様は、黒の核晶の無くなった影響は欠片も無いように見えます。
しかし長期的な事もあるので煩わしいとは思いますが、一日朝と夜に私が診察させていただきます。
ですが今すぐどうこうという事は無くなりましたので、親衛騎団の皆様もご安心ください。」
砦の者達と式神と親衛隊全員でダイ達を寝室に送っている間、ハドラーはザムザから渡されたローブとマントを身に付け兜を被り、ザムザの診断をフローラの立会いの下で行っている。
結果はザムザの満足のいくものであった。
ティファと自分が考えたハドラーを救う方法は今のところ不具合なく、ハドラーの体を正常に機能させている。
このまま数日何事も無ければ診察は一日の終わりに一度でよさそうだ。
だからと言って
「貴方様には迷惑な話だったようですね。」
「・・・・・まったくだ。」
ザムザの憂いを含んだ質問に、ハドラーは素っ気なく答える。
ハドラーの命が助かるという言葉に親衛騎団が喜びこそすれ、ハド

ラー本人は憂い顔のまま。
死に時と決めた時に死ねなかった事が余程堪えている様だ。
「察してくださいとは申しません。これは私とティファさんの我が儘に貴方を巻き込んだだけの話なのですから。」
命を救ったという恩を着せるつもりは毛頭なく、さりとて命を大切にしてほしいともザムザは言わない。
全てはティファが望み、自分はそのティファの考えに賛同しただけで積極的にハドラーを救いたかった訳ではなく、結局のところ救われた当人を含めてもハドラーを助けたいと心の底から願ったのはティファ一人しかいないという何とも皮肉な話であった。

「それで、この後俺にどうしろと？」
「それを決めるのは貴方様です。」
「ふん、―あれ―は何も言っていなかったのか？」
「はい、ハドラー様にお会いしても、診察以外の事は何も頼まれていません。」
ダイ達を、ひいては世界を助ける為の力を貸してもらうように説得して欲しいとのお願いもされていない。
つまり、ティファは純粋にハドラーを助ける事だけを望んでいた事の表れである。
見返りを期待せず、ハドラー達を戦力に組み込む意思の欠片も無い、何とも奇妙な話だ。
「・・・・ティファさんは、本当に何故貴方を救ったのでしょう？」
ティファの行動原理が世界を救いたいと言うのであれば、ハドラー達の様な不確定要素を見返りも求めず救う意味が分からない。
命を助けた恩を着せれば、現在のハドラーならばしぶしぶであっても受けそうなものだとフローラは見ているのだが、ティファにその意思がないとザムザが断言してしまっている。
「・・・あれは・・・・フローラ、お前は幼い頃何かの命を助けた事はあるか？」

「命・・・ですか・・」
「そうだ、小さきスライムでも鳥でも獣でも何かないか?」
「さて・・・」
ハドラーにした質問の答えは返ってこず、反対に埒もないような質問をされたが、生来生真面目なフローラはハドラーの質問に対して真剣に考えこむ。
そう言えば・・・
「まだ私が幼い時、小さなスライムが傷を負っていたので手当てをした事が・・・」
レオナ同様城を抜け出て入った森で出会ったまだ幼体のスライムが怪我をしていたのを助けたことがある。
侍女達に見つからないように傷薬を持ち出した時はハラハラしたものだが、助けたいと　・・・夢中で・・・
「まさか・・・」
「そうだフローラ。あれは、―助けたかったから助けた―。それ以上でもそれ以下でもない。幼子が傷ついた者を見た時自然と思う事をしたにすぎん。」
「そんな!!これ程迄の用意周到さを持ってした事が!そんな子供じみた考えだけで実行されたと!!そんな馬鹿な話が・・・・」
自らが辿り着いた答えをもってしてティファへの質問の回答とされたフローラは、馬鹿げていると思わず叫び出す。
黒の核晶の怖ろしさは、ハドラーの診察前にザムザから聞かされ脅威を覚えて身震いした程であった。
其の核晶の影響からハドラーを救い、敵の何かしらの切り札と共に消し去ったティファの偉業が、たかだか助けたかったからだと愛い子供のような思い一つで成されたと聞けば誰だって納得する筈も無い。
それこそ切り札を消された敵も、不本意な思い出救われた本人とても・・・ただの子供の思いで成されたと言われて。
「・・・事実だ。フローラ、一つあれの事で忠告をしておく。あれが何をしようと悪意は欠片も無い。俺を救いダイ達と共に逃がしたのも他に手がなかったからだろう。お前に迷惑をかけるという考えが

浮かばなかっただけの話だ。」
　ティファに悪意はない
　ただその言葉だけで・・・
「私達に納得しろと?」
　虫のいい話だ。
　魔王に被った過去の痛みを、今大戦で味わった屈辱をそれで許せと・・そして!最愛の者を奪った憎い魔王を!!たかだかそんな子供の戯言で!我儘でなされたなど、許せるはずとてないものを!!!
　キリキリと唇をかむフローラに、ハドラーはフローラの考えをあらかた察して溜め息を吐く。
「その考えもあれには無い。あるのは駒にされ捨てられかけている俺を助けたいと願っただけだ。」
　そこには周りに対する忖度も無く、子供じみた勝手な思いしかない。周囲がそれを許すかどうかなどの事もきっと考えてはいなかったのだろう。
　其れに振り回される周りの思いもきっと・・・
　ーあれーは本当にここが奇妙なところだ。
　他者の悲しみに共感し、共に憂えることができる癖にこうした憎しみの機微が理解できていない。
　おそらくだが、この地上がかかった戦いの為ならば、戦力になり得る俺を、カールもー渋々ーながらも受け入れると見積もったのだろうとは逃す寸前の確認問答で窺い知れる。
　おそらくあの時迷い、地上が消えて迷いと答えていたならば置いて行かれていた可能さもあるだろうが、今自分はここにいて、カール騎士達の憎しみを浴びている・・人族も魔族も変わりなく、憎いと思った相手をそう簡単に受け入れる事などありはしない。呉越同舟と言われても、実際にはその言葉とても夢幻なのを、きっとティファには理解出来まい。
　それはダイ達も同様で・・あれは本当に地上勢にとって傍迷惑な事をしてくれた。
「会った時文句を言うのもいい。罵倒する権利もあろうし顔を叩く位

はしても良いだろうが、悪意があったとは思ってはやらないでくれまいか。」
今ティファがしている事は、確かに地上を助けんとする力になる事には間違えではないのだから。それすらも否定されては周囲を引っ掻き回しているとはいえ、命を懸けたティファが哀れだ。
「貴方は・・・・随分と変わったようですね・・・」
己の意に添わぬことをされても、した張本人を庇うハドラーにフローラも溜め息を吐く。
これでハドラーが昔のまま残虐非道な男であったのであれば、ティファが救おうとは思わずもっと単純な話で終われただろうに。
其れこそティファとは違う、現実にそくした考えでフローラに溜息をつかせる。
「あれに会えば・・・多かれ少なかれ影響を受けるからな。」
自分を変えたきっかけは紛れもなくティファだと言い切るフローラは、何やらのろけを聞いているようで馬鹿馬鹿しくなってきた。
勇者アバンと激突しても変わる事の無かった男が、たかだか・・・・いや、ティファは中身と年齢が全く一致しない。
している事が、最早十二歳の少女であると言われて納得する者などいる訳がない。
「明日、ダイ達が起きた時この場所で話し合いをしましょう。」
先程とは違い、今度子をこの砦と各国の者達が一致団結して地上を救うためにも。
「否やはありませんねハドラー。」
「無論だ。俺とてこの地上消滅は阻止したい。」
其の一点において、ハドラーは敬愛する主と袂を別ち、かつての敵達と手を組む理由。
纏まる為ならば、道化にも処刑の身にもなろう。
「私も同席しても?」
ハドラーとフローラの話し合いを黙ってみていたザムザが参加を口にした。
「勿論です。この砦全員のサポートをしてくれるのでしょう?期待し

ています。」
「はは、貴女は根っからの為政者の様ですね。割り切りが早くて助かります。不肖の者ですが、精一杯女王陛下とティファさんのご期待に応えましょう。」

ハドラー同様、ダイとポップ、ティファに勝手に救われたザムザが一礼をする。
それをにこやかに受けたフローラを、ハドラーはじっと見る。
何となくではあり、全てがそうだとは思わないが、フローラもどこかしらティファに似ているのではないか？
無論、フローラはティファには欠けている常識・良識・周囲への配慮などを山ほど持ち合わせているが、呉越同舟のこのような時に、感情よりも公を優先するという思考に切り替わる速さ、受け入れると決めれば丸ごと飲み込む気概などがそっくりだ。
二人が会った時、どうなるのかとハドラーは不謹慎ながらも考えて内心で笑ってしまった。
何故なら、フローラに説教をされたティファが、フローラの毅然とした態度のカッコイイですとべた褒めをして、怒れるフローラを最終的には顔を赤らめさせ、もういいからそれ以上は言わないで下さいと涙目で怒鳴るフローラが想像できてしまったからだ。
あれは今どうしている？
捕えられたであろうティファがどうなったかを考えると、せめて手荒に扱われていない事祈るしか出来ないない事に胸が痛みだす。
ヒュンケルの時の様に、捕まっても手当てされた後は牢で放置されていて欲しいと、それ以上の事が起きない事を祈るしか出来ない自分は何と無力なのであろうか。

雨降って地固まるも・・・・

これは本当に勝てるのだろうか？

目覚めた勇者達の情報に、砦の者達全員が青褪める。

一体ザムザは何を盛ったのか、ステータス異常耐性の強い筈の竜の騎士のダイ達までもが本当にまる一日ぐっすりと眠り、目を覚まし状況を早く確認し合いたいという真っ当なお願いを蹴り飛ばしたザムザは有無を言わさず食事を摂らせた。

「ティファさんが戻られた時、何故貴方がたが痩せたのか等と聞かれるのは屈辱です。」

にっこりと笑ってるのに反面怖い顔で言われたダイ達は、コクコクと首を縦に振って大人しく食事をする。

あのマトリフでさえも拒否できない程の般若な顔は、ダイ達にしか見えなかったので、言葉一つで勇者達を抑え込めるザムザの株が一気に上がった。

「薬だけでは無く栄養面でもサポートしますので。」

「・・・・なんだかティファみたい・・・・」

「おやダイ君、それは嬉しい事を。」

ダイの言ったのは、怖い感じが似ていると言ったのに、薬と料理がティファと似ていると言われたのだと思い喜んでいる。

水を差すのでダイは余計な事を言うのは止めたが・・・・・

「ティファ・・・・・」

ひとたび言葉に出せば・・・・

「ウっク・・・・・ヒゥ・・・・」

胸が痛み、呼吸するのすらが苦しくなる！

自分の左手に紋章を移すという奇跡を起こした妹なんていらない

!!ただ・・・平凡でも今この時に自分の隣で笑ってさえいてくれればそれで良かったのに!!
「ダイ・・・・」
「ダイ・・」
「ディーノ・・」
　様々な事で気を張り詰めていたが、緩んでしまえば一気に傷が開くのは自明の理であった。
「大丈夫ですよ兄君様。」
　傷が開き、手にしていたスプーンを取り落とし苦しそうにしたダイをいち早く包み、柔らかい声を掛けながら抱き上げた人物は
「フ・・・フラメル・・・」
　柔らかい茶色の髪を長く伸ばし、後ろで結い、これといった特徴のない青年の姿をとっている式神・フラメルだった。
　ダイ達の周りは誰もがティファを案じ、ダイの様に苦しくなり父のバランとても身動きが取れなかった。
　だがその代わりの様に、フラメルがダイを柔らかく抱きしめ背中を優しく叩いて宥めながら子守唄替わりに一つ秘密を教える。
「兄君様と皆様、実は私達式は、主様の命と直接の繋がりがございます。すなわち私が消えた時が主様の死、裏を返せば私がこうしてお側に居る事こそが主様の無事な証なのです。」
　柔らかくゆすぶられて落ち着いてきたダイは、物凄い重要情報に驚きがっしりと近くにあった顔を掴んでしまった。
「本当なのフラメル!!」
「はい、なので皆様ご安心ください。状況までは分かりませんが、主様が生きている事に相違はございません。」
「そっか・・・そっかよ!ダイ!!食ったら特訓だ!うんと喰って、どんどん強くなって再戦挑むぞ!!ノヴァももっと食えよ!!」
「ポップ、分かるけど詰め込むのは行儀悪いよ。ほらメルルさんが呆れて・・」
「そこでメルル出すな!おまえだってティファとの仲どうなんだよ⁉」

「えぇ・・・ティファしだい？」
「男なら玉砕覚悟で口説けよ!!」
「そこ僕振られる前提なの⁉酷くないですかヒュンケルさん！貴方の弟弟子後で凍らせてもいいですか？」
「いや・・・・流石にそれは困るが、謝っとけポップ・・・・・後ろから冷気が・・」
「げ!!嘘！ノヴァ悪かったから冷気引っ込めさせてくれ!!!」
「・・・・・半日は命に別状ないから。」
「悪かったてば!!!!」
「ノヴァさん・・・・ポップさんをどうか・・」
「後で私からも言っておくから・・」
「メルルさん・・・マァムさんも・・・女性の頼み事とあれば致し方ないですね。」
「口は禍の元だねポップ。」
「・・・・ふん・・さっさとダイも食えよ。」
フラメルの言葉に、一向に再び活気が戻る。
少し無理をしているが、それでも歩きだし、もう少しすれば走り出すだろうとザムザ達大人は見ている。
「フラメルさん。」
「フラメルで結構ですよ、精霊の愛子様。」
「僕もノヴァで・・・」
「ではノヴァ様で。いかがしましたか？」
普段知らない者とは仕事上でない限り自ら口を開く事の無いノヴァが、フラメルに話しかけた。
「僕はその・・・ティファと心が繋がっているのは知っているかな？」
「はい、よく存じ上げています。主様が親友と心まで通わせられて素敵だと言っておられましたので。」
「そう・・・」
思いがけなくティファの心の一端を知ってしまったノヴァは我知らず赤くなる。
ティファが、自分と心が繋がっている事をそこまで喜んでくれるの

はとても嬉しい・・・。
だが今は・・
「目が覚めてから幽かにあったティファとのつながりを感じられない。それでもティファは・・・」
「ノヴァ様・・・」
陣が現れてからティファとのつながりが弱まっていた。その不安が、最後まで陣の側を離れなかった理由。離れたら、ティファとの繋がりが掻き消されそうで。
そして一晩に眠って・・・
ポン
その頭を優しく撫でたのはフラメルではなく、意外にもロン・ベルクであった。
「落ち着けよ坊や。フラメルが言った事が本当なら、あいつは今頃厳重に閉じ込められているんだろうよ。」
魔界育ちのロン・ベルクは、魔界の国を守る為の結界レベルは、はっきりと言えば地上の結界などあって無いも同然に感じさせるほど威力が違う。
勇者と魔王を逃がした者など厳重監視どころか生かされる方が不思議な程だ。
「そう・・・ですね。きっと僕等の助けを・・・」
「あぁ、全員で迎えに行ってやろうぜ。説教付きで。」
「はい!!」
ノヴァの素直な返事に、ロン・ベルクは嗤いながらノヴァの頭を抱え込み優しく撫でまわす。
本当にこいつ等は良い子だ。さっさと結婚して俺にも可愛い赤ん坊抱かせてくれよ。
ここにいないティファにも無茶を願う。有象無象や自分が相手でなく、ノヴァとティファの赤ん坊一択にされたときいたらてぃふぁはどんな顔するのだろうか?
様々に落ち着いて食事を終え、いざ情報交換となった時、果たしてどちらがより驚いたか。

ダイ達の方は無論大魔王の真の実力
勇者達と竜の騎士を相手にしながらも、伝説の騎士の右腕を消滅させ、ダイの剣も叩き折った、まさに魔界の神と呼ばれるに値する強敵過ぎる。
しかも
「大魔王は・・・・あの時点で力の一・二割を最初から削られた状態であった。」
認めたくない口振りで、バランはあの時のバーンの戦力分析を正確に伝える。
ハドラーの体内に埋め込まれていた黒の核晶は、ティファが持っていた時僅かに光った。
恐らく遠隔操作の魔力を送ってきたのだろうが、ティファの竜闘気がそれを阻んだようで不発に終わったが、送られた魔力がそれで還元されることは無い。
黒の核晶を発動させるのにはそもそも膨大な魔力を食うのだ。
「・・・・・其れなのにあんなにじゃかすかイオラの嵐しやがったのかよ・・・」
同じ魔法を使う身として、バーンの底なしのような魔力に寒気が奔る。
だが同時に頭は冷静に考えている。如何にこちらにダメージが少なく戦いを進めながらバーンの魔力を吐き出させるかが戦いの鍵になる。長期戦を視野に入れてみるかと、次々と思考を回している。
黙って考え込むときのポップは、一行の魔法使いとして頼もしい顔をするのでマァム達は安心するが、周りは別の意味で沈黙をする。
ステータスが下がっていた時ですらその強さなれば、万全の時はどうなるのか・・・・
パンパン!!!
「その為に我等はここに居るのですよ!!」
勇者達だけでは敵の強さに届かない時、共に戦い少しでも近づける

ように自分達は雌伏の時を過ごし、牙をとぎ策を練ってきた自負を忘れるなと、フローラが力強く兵達に檄を飛ばす。

「そうだね、俺達だけじゃあ無理だ。みんな!!俺達に力を貸してほしい!!!!」

フローラの言葉にダイが応え、そして結束する事を願う。

共にこの地上を守ろうと。

勇者の願いを、砦全員が歓声をもって応える。

もう魔王だなんだと言っていられる時ではない！

総力戦でも勝てるかどうかの瀬戸際なのだと、本当に肌で感じたカール騎士団は、一時は恨みかけたティファに敬意を表する。

地上勢だけでは勝てないこの状況に、憎らしくも頼もしい者を命を賭けて送ってくれたのだから。

それは、この砦の者達の心が本当の意味で結束した瞬間であった

その様子を、フラメルは嬉しそうに笑って隅で見ている。

主様、貴方の望み通りの事に運べそうですよ。

逃げた先の新たな仲間達と共に歩く事を、主は願っていた。

この事を念話で伝えられないのが残念です。

自分もノヴァ同様で繋がれないが、自分とティファの間の事で、ダイ達に隠している事が一つある。

それは自分が五体満足に無事な時は、主の肉体も精神も健やかである状態である事を示している。

例えばティファが体調を崩せばフラメルも具合が悪くなり、精神苦痛を味わえば体が歪む。

その繋がりはどのような結界があろうと関係なく、つまり自分が今健康体であるという事は、少なくとも大ダメージを受けた筈の主が、敵の手によって完全回復された事に他ならない。
この事を人間達に知られるわけにはいかないな。
折角こうして結束が固まっているのだから、主が敵の中で、自分からしても好待遇と思われる扱いを受けている事を知ればどうなるか・・・
裏切り者か、はたまた・・・人間は弱い。分からない事に牙を剥く。
不要な牙が主とその周辺に向かわぬよう、フラメルは笑って沈黙を守る

新たなる希望と光

・・・・俺達が敗けたせいで・・・

ダイ達の情報でカール隠し砦の者達とサババ砦に残っていた者達が、バーンとその側近たちの圧倒的な強さを知って絶望しかけたように、自分達が敗れた直後、よもや死の大地が崩壊して地下からとんでもない巨大な飛行物体が出現し、ロモス王国の町を強襲したとは知らなかったダイ達が暗澹たる思いをする番となってしまった。

しかし希望がない訳ではない。

「メルル、今のところ託宣は？」

「ありませんフローラ様。あの後一度も・・・」

「そうですか・・・・いつ託宣が来ても私達に知らせなさい。」

メルルがバーンの攻撃を―託宣―で授かった事だ。

それは攻撃を受けたポルトスの町も同様で、人死にどころかノヴァの友達精霊の伝手で知ったのだが、精霊にもモンスター達にも同様の託宣があり、精霊達の主導の下モンスター達も逃げ延びることが出来、被害が本当に零だった。

最早神が起こした奇跡としか言ようのない事だが、諸手を上げて喜ぶ訳にもいかない。

人々が助かったとはいえ、これからどれ程同じ様な攻撃がバーンから繰り出されるのかが分からず、止めようにも超高高度を飛行している大魔王達に辿り着こうにもいく術がない。

よしんば死の大地の埋まっていた飛行物体に居室を持っていたハドラー達がキメラの翼を使おうとも強力な結界を突破する方法がない。

そもそもどれ程同様の攻撃が続くのかが分からず、このまま地上を蹂躙され続けられれば、いずれは逃げ場を失った地上の者達が全滅してしまう。

根本的な解決策を見つけない限り、問題の先送りでありじりじりと迫る死に怯える事になるしかない。

その解決策をフローラが提示した。
カール王国最大の迷宮にして、古文書によれば太古の昔、神が人間も邪気と戦える様にと作られた洞窟の二十五階にあるという大破邪呪文・ミナカトール。

「これを、貴方達も持っている筈です。」
強力な大破邪呪文を提案したフローラは、おもむろに首筋から一つのペンダントを取り出しダイ達に見せた。
それはまごう事なき
「アバン先生の卒業の印!!」
フローラの手にある涙滴形の輝聖石であった。
「どうして・・・・フローラ様がそれを・・」
ある意味フローラよりも、勇者となりてその後世界を旅し続けたアバンと長い時間関わりを持っていたマァムが一番驚きの声を上げる。
この輝聖石は一つを作るのにとてつもない時間が掛かる故に、自分の弟子の卒業にしか送れないと言っていたのを、卒業記念の思い出の一つとして話してくれた事を今でも覚えていただけに、カール王国の女王たるフローラが持っているとは思いもしなかった。
「そうですか、アバンはそんな事を。」
マァムが話した事を、フローラは彼らしいとクスクスと笑いだす。
彼は嘘は言っていない。マァムに話した事はきっと、―これから作る新しい―を抜かして伝えたのだろう。
最初の輝聖石を、自分に渡してくれた時の事を話すのが照れくさくて。
かつてアバンとロカが魔王ハドラー討伐の為に旅に出る際には眼鏡を受け取った。
その後の二年間は戻ってこなかったが、ハドラー決戦の前に一度自分に会いに来てくれた時、死んでほしくないと王家に伝わるカールのまもりを渡した時、交換するように渡された。
この御守りが貴女を守ってくれますようにと願われながら手ずから首に掛けてくれた事を、今でも鮮明に覚えている。

その話をするのを恥ずかしがってくれるところが、人の枠内から飛びぬけている様に見えるアバンの人間臭さが垣間見えて思わず笑ってしまったのだ。
「そっか・・・先生にもそういうところがあったんだね。」
「俺、先生は超人かなんかだってずっと思ってた・・・・何でも出来て分からない事が無くて、困った顔で笑う事があってもいっつも何とかしちまってくれてたからよ・・」
「そうね、私もおんなじ。だってアバン先生だからで・・」
「俺は・・・そんな先生にずっと甘えて八つ当たりをして・・・」
アバンの知られざる青春時代を思いもかけず触れたダイ達、特にヒュンケルの反応は凄まじかった。
超人でも何でもない師に対し、自身の抱えきれない苦しみや悲しみと向き合うことが出来ずに逃げ出して復讐だのなんだのとカッコつけた八つ当たりをし、遂には道を踏み外し大罪を犯したのだから無理はない。
だが落ち込むだけではないのがヒュンケルの強さであった。
償う道を、仲間が、ティファが指し示してくれており、自分はその道を歩き続ける事を誓った身！
その誓いの中に、先生へ御恩返しも入れねば！
アバン先生！先生の分まで俺は更にに弟妹弟子達を守り抜き、この世界を共に守ります!!どうか安心してください!!!
落ち込みながらも新たな決意を燃やし、誓うように取り出した自身の輝聖石を握りしめたその時

カァァァ

ヒュンケルの輝聖石が紫の光を発した。
その光は力強くも暖かい、ヒュンケルそのものを表しているかの如く燦然と輝きを放ち、大広間を満たしていった

祈り

ヒュンケルの輝聖石から発せられる紫の光に一番に驚いたのは、ミナカトールを発動を提案したフローラ自身であったかもしれない。
「ヒュンケル!どうして先生の石が光ったの!!」
「お前何したんだよ⁉石に異常ないだろうな!それ先生の形見なんだぞ!!」
「いや・・・・俺も何故光ったのか・・石にはヒビも入っていないようで特には変わった様子は・・」
「でも・・・・とても暖かい光だったわ・・」
アバンの弟子達が、師の形見ともいうべき輝聖石の光に驚きわらわらとヒュンケルの周りに瞬時に集まり、ダイは光った事を不思議がり、ポップは魔法使いの視点で見て石の異常を心配し、マァムは感じたままの感想を口にしている。
どうやらアバンの弟子達は情報通り、魔王軍に身を堕としてしまったヒュンケルも受け入れ全員仲がいいようだ。

アバン、貴方が育てた子達は皆立派になっています。
ヒュンケルの事はフローラもよく知っている。魔王の門番が拾って育てたという少年を託され育てる事は報告を受け、その時は優しい彼らしいと笑っていられたが、半年後に憔悴したアバンが一度カールに来た時、ヒュンケルの卒業時の顛末を聞きアバンと共に暗澹とした。
私は彼を探します。もしも彼に似た・・・・いえ、フローラ様もカールの皆様もお忙しかったですね。甘えようとして申し訳ありません。
アバンは一日だけカールで休んだ後すぐに出立し、見送る際にヒュンケルを探すのは自分一人で探す事を伝えられた。
頼まれれば自分達もそれとなく探すのを手伝ったものを、アバンは頼もうとし事すら申し訳ないと言いながら行ってしまった。
それ以降、アバンが自分の元を訪れる事は無く今日まで来たが、ヒュンケルの事はサミットの情報をレオール王から知らされた時に

入手している。
元魔王軍の軍団長で大戦初日からパプニカを強襲した事も、ダイ達に敗れ諭され改心し、王女レオナの裁可をきっかけに各国の王から償う道を歩く事を元魔王軍の軍団長仲間のクロコダインと共に茨の道を歩いている事を。
とても澄んだ瞳をした青年だとあった時の印象がそれだった。
アバンの事を恨んでいた事すら恥じ入るヒュンケルを見て、平和を担う後継の弟子として育てようとしたアバンが間違っていない事の証に見えて嬉しかった。
そしてそのヒュンケルが、大破邪呪文・ミナカトールを発動するのに重要な輝聖石の力を発動を一番にして見せた。
まだ古文書に書かれている発動条件や心構えも話していないのに自然と。
その長兄をダイ達は心の底から慕っている。
アバン、どうか彼等を導いてください
全員が無事、アバンから受け継いだ志を胸に、己の中の魂の光で輝聖石を光らせられる様に

大仕掛けの呪文を用いる意味

アバン先生の卒業の証の輝聖石

アバンの弟子達にとっての輝聖石の認識は、マトリフの下で魔道具に造詣が深まりつつあるポップであっても大切な証が精々であった。

だが、これは本当に今の世界を救う希望の象徴のアイテムへと変貌を遂げた。

「つまりこいつらの魂だかが、古文書に記されている大破邪呪文・ミナカトールの五芒星の一角を占める程のものだったら発動できる・・・・まるで夢物語のような呪文だな。」

ミナカトールの説明をざっくりとフローラからされた後、当代随一の大魔導士マトリフも呆れたくなるような仕掛け・・・大仕掛けもいいところだ。

まず第一に必要なのは五つの輝聖石・・・これ自体がとんでもない代物だ。

ただの―輝聖石―ではない。アバンが精製したのは、呪文の効果を増幅させる輝石と、魔法力を蓄積する聖石を併せ、聖なる力を高めて邪を退け、効用は高くはないが敵からのダメージを減らし、持ち主の力を高める効果があるとか・・・・最早伝説級の代物じゃねぇかよと、マトリフは頭痛がしてきた。

ダイ達は単純に、死しても先生が守ってくれていた、激戦を首の皮一枚守って来てくれたおかげで切り抜けられたのかと単純に喜んでいるが、そもそも五つも用意できる奴がいつの時代にいるとも限らない。

それともう一つ

「フローラよ、この呪文は輝聖石があればいいというものでは無かったな。」

そこも難点だ。

アバンに認められ輝聖石を授けられた四人の内ヒュンケルと、フローラの眼鏡に適っているレオナが先程輝聖石を譲り受ける形で授けられ時、どんな思いで戦うかを頭に描いてみなさいとフローラに言

われたレオナは、敵の力を打ち砕き、背に庇う大勢の命を守り抜くと誓った時、先程ヒュンケルが光らせたように、輝聖石は白い光を放ちレオナを認めた。
これで二つの光が揃ったことになるのだが、残りの三つが問題であった。
それぞれの石には五種の異なる力が秘められていると書かれそれぞれの力も書き記されているのだが、古文書の文字が肝心の最後の部分がかすれて読めない。
今光ったのは古文書に記載されている『正義・白』『闘志・紫』
よしんば古文書の全てが読めたとしても、意思が光る保証は無いと、ハドラーはあえて厳しい現実をこの場で突きつける。
石が揃っているからとは言え、そう何もかもが都合よく揃うものでは無いだろうと。
其れと一番の懸念は
「どうやって空を、其れも超高高度を飛行している物体に呪法を施すつもりなのだ。」
バーンの空飛ぶ居城は今も雲よりも高い位置を飛行しているようで、ようとして影すらも見えない。
そんなところにどうやってミナカトールを施せるのだと鼻を鳴らしながら半ば呆れて聞いてくるハドラーに、フローラはある確信があって用意してきた中でも難易度の高い作戦を決行することにしたのだ。
それはダイ達が最も聞きたくない事
「敵がティファさんを囮にして勇者一行とその仲間達を一か所に集める時を狙います。」
言い切ったフローラの顔には、優しさの欠片どころか表情一つ浮かんでいなかった。
ダイ達の持ち帰った情報で、敵の狙いは征服ではなく地上消滅が目的なのは分かっている。
どうやら魔界にも何かしらの事情があり、急いで事を運ぼうとして

いるのが敵の大幹部キルバーンの言葉の端々からにじみ出ていたとはポップの言葉であった。
地上消滅が魔界の悲願であると言わんばかりであったと。
ならば、悲願達成のためには直前で邪魔をされる要素があるのを見逃すはずはないとフローラは踏んだ。
ただの邪魔ではない。幾度となく魔王軍の進行を防ぎ、撃破してきた各国の猛者と勇者一行に加え、地上消滅を真っ向から反対した魔王ハドラーとその親衛騎団達が丸ごと無事な状態でティファの手によって逃がされたのだ。
万全な状態で地上消滅阻止の為、地上組の士気が高まっているのは相手も知る所だろう。そこに氷の勇者・大魔導士マトリフと武力・知力も加わり大魔王達を阻止せんと立ち向かってきたならば厄介どころではなく、打ち破るのも夢ではない。
そのような脅威が地下に潜り、力を蓄えようとするのを看過せず、近いうちに全員を一所に集め一網打尽を狙う、少なくとも自分ならば。
その地上組全員に共通しているのが、大魔王達にとって厄介すぎる展開にしたティファ本人。
彼女の為ならば命を投げ打っても構わないという者達がリンガイアを始め、ベンガーナにもパプニカにも多数居り、各国の王達も支援は惜しまないという約定の手紙が届いている。
地上消滅阻止だけではなく、手紙のどこかに必ず料理人ティファを助けられるのであれば救って欲しいと言う様な言葉が書かれて。
支援理由の中身が明白になる文章であった。
明日にでも勇者一行は健在であると地下トンネルを使って砦の遠くに出て貰い、その場から各国の王に姿を見せる様に話すつもりだが、その前からこの騒ぎ。
ティファはこの地上の重要人物全てにとって囮になりえ、かつ全員が罠だと承知であっても救い出そうとする者ならば、近々大魔王サイドから何かしらのアクションがある筈。
それが

「私ならば公開処刑の名目で各国に鏡文字通信を送ります。」
自分達がまだ魔王軍に見つかっていなければ、支援しているであろう王室に対して通信を送り付け、ダイ達に知らせるように仕向け炙り出す。

「そんなところだな。」

フローラの冷徹な思考に周囲が押し黙る中、ハドラーが賛同の言葉を口にする。
囮と罠は、昔自分もアバン達に散々仕掛けた手だけにその有効性も知っている・・・それが結果に結びつかず最後にはアバンに敗れたのだから意味があったのかどうかは別だが。
公開処刑
その言葉に誰もが暗い表情になるが、マトリフ達大人は反対に希望が持てる。
「公開処刑があるとするなら、その間嬢ちゃんの命の保証が高まりそうだな。」
マトリフの言葉に、ダイ達はどういう意味だと俯いていた顔を上げる。
「考えても見ろ。嬢ちゃんが殺されてるんならとっくに殺されて、そこのフラメルも消滅しちまっているだろう。」
だが、逃げ延びてから二日経った今もフラメルは消えていない。
「フローラの考えがすべて正しいとは思わんが、あいつ等にとっても嬢ちゃんはお前達に対する切り札の位置に置いているんだろうよ。それまでは殺しても意味が無いからな。」
ひっそりと知らずにティファを殺したところで―価値―が無い。
先の決戦時の様に、ダイ達の前で無残に散らせる事にこそティファを殺す意味がある。
ここまでくれば、ティファの命はどちらの陣営にも重みが増される。
味方にとっては生きている事に希望を見出し救おうと力を磨き士

気を高める反面、前述したとおりの事が起きれば士気等一気に吹き飛ぶ。
例えその後に地上消滅がなされると分かっていてもだ。人間は理屈や理想だけでは動けない。感情が時にそれらを阻害するからだ。
ティファを深く愛するが故の諸刃の剣。

敵にとっては生かしておくのも憎らしいだろうが、むざと殺せばそれだけで地上勢力は地上死守と共に、愛する者を殺された仇討の念で力を跳ね上げる手伝いをしてしまう反面、無残に散らせる事で地上の希望を粉々に砕ける。
だがこちらも取り返されれば敵に塩を送る事になる。
どちらにも意味があり、諸刃の剣となったティファの命こそが、フローラにミナカトールの作戦を実行させる鍵となったのであった

希望の光は・・・

見えてきた希望の光は、目に見えて隠し砦の味方全員の士気を高めるのに尽力した。
例え生かされている理由がとんでもなくとも、ティファが生きているだけでダイ達にとっては希望であり、あのとんでもないティファならば公開処刑の場であっても必ず戻ろうと足掻いてくれる。
その時は自分達の全力を尽くして救い出せばいい!!
「私の右腕があれば・・・・肝心な時に本当に役に立たない・」
三界の守護騎士の身なれど、バーンの真の目的も知らず人間憎さで魔王軍に身を堕とし、危うく地上消滅の手助けをしようとするは、その地上の危機の際して戦えず戦力になれない事をバランが無念そうに俯くが、ダイの考えは違っていた。
「父さんは昔冥竜王ヴェルザーから地上を守ってくれたじゃないか!!だったら今度は俺達が頑張る時だ!!」
「そうだぜ!後は後進に道譲って、あんたは後ろででんと構えてくれればそれでいいの!」
「ティファが戻ったら一番に抱きしめてあげて。それが一番喜ぶから。」
「戦いは力だけではない、バランがいるだけでダイもティファも心強く有れるはずだ。」
「うむ、後は俺達が無様な戦いをしないように見張っていてくれ。」
ダイ達の励ましが
「バラン様が生きてるだけでガキンチョ絶対喜びますぜ!」
「バラン様、戦いは我等が。貴女様は小娘とディーノ様のお心をお守りください。」
「娘とて助け出された後は弱っておりましょう。マァムの言う通り一番に抱きしめてそのままお守りください。」
竜騎衆達の言葉が
「ティファさんのお父さんがそんな悲しい事言わないでください。ティファさんは仲間は役に立つ立たないじゃないっていつも言って

います。」
「そうです、供にずっといたい。それが仲間であり家族なんだって。」
チウとメルルの言葉がバランの心を、そして聞いている周りの仲間全員の心の火を強く燃やす。
「そなた達・・・・ありがとう・・・こんな私に対しそこまで・・・・」
「父さん・・・父さんは、生きてくれてるだけで俺嬉しい・・・だってあの時死んじゃうって・・・・・バーンは俺達が倒すから・・・父さん長生きして・・・・」
「ディーノ・・・・あぁ、約束しよう。白髪の老人になるまでお前達と共に生きよう・・」
周りからの感謝の言葉に心を震わせ、涙ぐむバランにダイが力強く抱き着く。
これからの戦いは自分達が担う。だから何も心配は要らないのだと言い続けて。
今この地上があるのは紛れもなく、目の前の―先代の竜の騎士―のおかげなのを、この場にいる全員が知っている。
もしもヴェルザーの野望が阻止されていなければ、十五年前に魔界の大侵攻の前に人間はなすすべなく、其れこそハドラー諸共逆らい抵抗した者はおろか、国は滅び人間も徹底的に殲滅されていた事であろう。
大罪を犯した事実は消えない。それと同じで地上を救ってくれた恩に報いるのもまた同様で、一刻も早く、ミナカトールの実現を一歩でも二歩でも前進させたいと、ダイ、ポップ、マァムがフローラに詰め寄らんばかりの勢いで古文書の内容に書かれている魂の性質を教えて欲しいとせがみだした。
有事の際とは言え一国の主に対して少々問題はあるが、何時も遠慮のないダイとポップでは珍しくはない光景。
二人は世界と妹が掛かれば誰に対しても遠慮も容赦も無くなる超が付くほどのシスコンブラザーズ。
両方を助けられることが可能な事を知るのに何の遠慮がいるとばかりにフローラに詰め寄る中に、マァムも混じっているのがマトリフ

にとっては意外だった。
　マァムはどちらかと言えば身分や常識を弁えている方で、こういう時には反対にダイとポップを諌めてフローラに謝る方だとばかり思っていただけに、必死の形相に面食らう。

「・・・・・・最後がかすれて読めないって・・」
「運が無ぇ・・・・・このかすれたの絶対俺だぞ・・・勇気はダイで、慈愛ったらどう考えてもマァムだろ・・・」
「・・・・・今のポップなら勇気百倍な気もする・・」
「したらかすれてんのがダイか？いややっぱさ、勇気がダイでこのかすれたのは智略とか頭脳系じゃねぇ？」
「そうね・・・・そしたらそれはポップ枠かしら？」
「そうだね、俺達の頼れる魔法使いだもんねポップは。」
「照れんじゃねぇかよ二人共・・・そしたらそこはまっかせなさい！」
　一行のムードメーカーポップは力強く自分の胸を叩いて二人を励まし、全員が見守る中三人も輝聖石を握りしめ、思いを浮かべてようとする。

「ダイ・・・お前難しい事考えるとややこしくなりそうだから、単純に自分の思い浮かべた方がいいと思うぞ？」
「単純って・・・例えば？」
　心に浮かべる思いをどうすべきか、ダイはヒュンケルとレオナを真似して戦う理由や誓いを胸に浮かべようとしたが、其れだけで怖い顔になったダイを見かねたポップがアドバイスする。
　ダイは言ってはなんだが頭脳派でも難しい事を考えて上手くいくタイプでもないと、親友で弟分に対してかなり失礼だが真っ当な評価を下すポップのアドバイスは唯一つ。
「お前が大好きな人達全員思い浮かべりゃいいんでねぇ？」
　その人達を守りたいという思いこそが、ダイの勇気の源では無いだろうか？
「俺の好きな・・・」

ポップの言葉に、ダイは真っ先にレオナを見た。
その反応に、塔のレオナが顔を赤らめる。
「ちょっとダイ君!!此処はお父さんのバランを見る所じゃないの⁉」
恋人の気持ちはとっても嬉しいが！家族愛も大切にしたいレオナはこの場合は父親を真っ先に見なさいと赤くなりながら叱ろうとしたが
「姫、ディーノのした事は正しい。自分が愛する者を一番に見るのは自然な事だ。ディーノ、ティファは私達が守る。お前はこの女性を生涯をかけて守り抜け。」
「分かってるよ父さん。レオナもだけど、皆も俺が必ず守るよ！」
当のバランが息子の思いを擁護し、其れにダイが力強く応える者だからレオナとしては嬉しいを通り越して居た堪れない。
そんなレオナを、ダイは優しく見つめながらブラスじいちゃん、島の皆、ウォーリアー船長達、旅先で出会ったネイル村にいるロカさん夫婦や村の人達。それに戦いながらも助けたモンスターの仔達、そして可愛いティファの笑顔。
今ダイの頭の中を、大好きで愛おしい者達が笑顔で駆け巡っている。
そう、俺はこの大好きな人達がいる地上を・・・・・

ダイの雰囲気が落ち着いたのを見たポップとマァムは顔を見合わせて一つ頷く。
これで安心して自分自身の思いを高める。
ポップとマァムにも思いがある。
その思いを胸に輝聖石を握りしめた時、―二つの光―が広間を満たした。

光った輝聖石は二つ、
その事実が、広間全員を静寂に包むには十分であった。

光れなかった者をよく知るマトリフが愕然とし、ヒュンケル達もか

ける言葉が見つからずに動揺する。

「なんで・・・間違えだよこんなの!!!」

「嘘だ!!こんな事・・・・きっともう一度やれば!!」

それは光らせられなかった者よりも、光らせた者達の方が動揺し、輝聖石の下した評価を打ち消そうと躍起になる。

一行の中でティファと同じく慈愛に満ち、心優しいマァムの思いに輝聖石が応えず光らないのが間違っていると

自責の念

希望の五芒星を光らせる。
ダイの青い光、レオナの白い光、ヒュンケルの紫の光、ポップの緑の光が着々と灯されて・・・・なのに・・・

失敗だ!!
これではミナカトールが出来ない!!
マァムのせいで・・・・
何故お前のだけが光らない!!
私の、私のせいで!!
マァムさん・・
ティファ!私・・・私どうしても・・・
マァムさんが失敗したからほら
ミナカトールが失敗し、自分を詰っていた周りの者達がいなくなり、代わりにティファが悲しそうな顔で自分に近寄り、後ろの方向を指さしている。
振り返ってみれば、大地が消滅し何もかもが消え失せてた!!
私のせいだ!私が、皆と違ってアバン先生の印を光らせることが出来なくて
そうです、マァムさんのせいで地上は滅びました。
ティファ・・・・
両手をまだ残っている大地につき嘆き悲しむ自分に、ティファの無慈悲で冷たい声が降ってくる。
きっと、肝心な最後の最後で役に立たなかった自分に失望している。自分のせいで、アバン先生やバランが救ってくれた地上を消滅させてしまった。
父も母も村の皆もあの世で会った時に自分を許してくれまい・・・・いるであろう先生も、きっと失望した顔をして・・・
マァムさんが—殺した—のは地上だけではありません。
ティファ?

打ちひしがれてもティファの言葉の意味が分からずに顔上げたそこには・・・・

首を斬り落とされ倒れ伏しているティファの体が!!
そしてティファの首は、死神キルバーンが両手で持ち愛おしそうに頬ずりをしているではないか!!
首から滴る血が服につくのも構わずに蕩けそうな恍惚の表情を浮かべて!!
返して!!
首だけとなっても!ティファを冒涜する事を許せるはずが無い!!
怒りを力の言動に変え討ちかかる自分を制止いた者があった
首だけになっている筈のティファの目がキロリと自分を見たて口を開いた!!

貴女のせいで私も死んだのですよ
残酷で容赦のない真実を突きつけられ、心が抉られる

わたしは・・・・あなたを・・・
もう結構です。二度と貴女の顔など見たくもない。失せなさい!!
そんな待ってティファ私は!!
行かないで懇願しても、キルバーンが笑いながらティファの首を抱きしめ空間に消え、気が付けば体すらも無く、真っ暗な暗闇に居るのは自分だけで・・・・
「行かないでティファ!!!!」

「さん・・・マァムさん!!」
「起きてマァム!!」
「それは夢だ!!早く目を覚ませ!!」
「起きなさいマァム!」
「目を覚まされよマァム様!!」

ハァハァハァ・・・・・ここは・・・そうか・・・・・私は・・・
魘されているマァムをメルルが気が付き揺り起こし、レオナとフローラと、ラーハルトとフラメルが必死に呼び掛けようやく目を覚ましたマァムは、夢の出来事と現実の情けない自分に嫌になり、両手で顔を覆って膝に顔を埋める。
どうして自分は・・・先生の弟子の筈なのに輝聖石を光らせないの・・・
こんな大変な時なのに、役にもたたない自分など消してしまいたい!!
「・・・マァム、泣くなとは言わないが、少し気配を落とせ。ここはモンスター達が比較的来ないところだが・・・」
「・・・・・うん・・」
ラーハルトはマァムを労わるように優しい声で注意を促す。今自分達がいるのはカール王国の破邪の洞窟。
輝聖石の光の事で大騒ぎになった後、急遽レオナにミナカトールを習得させる事態が持ち上がった為に、光が揃わなくとも来る羽目になった。

マァムの輝聖石が光らず、周りが騒ぎ当のマァムが呆然としている中に、更に驚愕を上回る報告が広間に飛び込んできた。
「申し上げます!!魔界の神を名乗る者より、鏡の通信文字が届きました!!!」
それは、先程フローラが言った事が現実に現れた瞬間であった

各国の王達に告げる
勇者達は敗れ、最早この地上を消すのみ。
この事を祝し、魔王軍が捕えし勇者ダイ一行の料理人・ティファの公開処刑を開く事とする。
仔細知りたくば今日より三日後の真夜中までに、パプニカ王城に以下の者達全てを揃えよ。

勇者ダイ
魔法使いポップ
武闘家マァム
剣士ヒュンケル
戦士クロコダイン
殲滅の騎士団長ノヴァ
魔王ハドラー
大魔導士マトリフ
魔界の剣士ロン・ベルク
以下の者達が一人でも欠けてた時は、その時は料理人のティファの命で贖ってもらう事になる。
真夜中に使者を送る。
努々逆らおうなどと愚かな事を考えぬこと願おう　　魔界の神・大魔王バーン

「そんな・・・・早すぎる・・・・」
内容は短文であるが、ティファを慕う者達を動かすには十分な効力を持ち、敵は本腰をいれ、障害となり得る者達を早急に一堂に集める積りのようだ。
恐らくはティファの囮としての効力がどこまで働き、誰迄を引きずり出せるかを知る為に。
だが！内容よりも期限が問題であった！
ここに書かれている人物達は全員が砦に居るので問題はない！問題なのは、今日より三日後にパプニカ王城に行かなければならないという事だ！
全員が集められればもしかしたら次の日が公開処刑だと告げられる恐れがある!!
その前に・・・
パン!!!
鏡通信に動揺しているダイ達を諌める為に、闘気を乗せた柏手を打ったフローラが全員に告げる。

「急ではありますが、これから急いでレオナ姫にミナカトールを習得してもらいにカール王国の破邪の洞窟に言って貰います。」
突然の事で驚く周囲を、危惧している事を伝えれば反対意見はなくなり、万全な準備をマトリフとザムザが手掛け、その間ダイとポップ達は青褪めるマァムを労わっている。
「大丈夫だよマァム！きっと緊張してうまくいかなかっただけだよ!!」
「それも大事だけど、洞窟の中では考えなくていいからな。それよりも命が大事だ。とんでもねぇ洞窟行くんだから気を付けろよ。」
「二人共・・・ありがとう・・・」
洞窟に行くメンバーは、習得するレオナと、危機に対する感知能力が上がっているメルルが立候補した。
メルルは敵からの攻撃に対する託宣があると反対されかけたが
「でしたら私をお連れ下さい。この鏡はティファ様が式で作られたもので、ティファ様か私のメッセージのみを受信する物です。メルル様が託宣を受けた時はこれに送信しましょう。
ちなみに効力は、破邪の洞窟クラスの結界内でも使えているので大丈夫ですよ。」
何かあり得ない、其れこそ輝聖石並みの伝説級アイテムをさらりと渡されたダイ達は超微妙な顔をして受け取る・・・ティファって、他に何とんでもない物拵えているのだろうか？
喜ぶよりも溜め息を吐いて受け取るマトリフ達であったりする。
他のメンバーは、洞窟を古文書のマップではあるが熟知しているフローラと、そしてマァムとラーハルトになった。
ラーハルトは槍の遠距離で、マァムは近接近戦の能力で選ばれた。
ラーハルトとしては、主達の下を離れたくはなかったが仕方がない。ティファ様を救う為だと思う事にして、ガルダンディーとボラホーンに、くれぐれにも頼んだと念を押し、二人も必ず全員守り抜けよと発破をラーハルトに掛ける。
万能薬をマトリフ達が用意し、防御力と聖なる力を増幅させる衣装に身を包んで支度を終えたレオナ、メルル、フローラ、マァム達をダ

イ達は激励して送り出し、ラーハルトとフラメルには、女性たちを守り抜く様に野郎一同が凄んでいる。
ポップとしてはメルルには残ってほしいが世界の命運が掛かっている時にそんな事は言っていられない。
せめてもの救いが頼れる味方のラーハルトが護衛についた事だ。
そのラーハルトに、マァム達を守ってほしいと手を握って送り出し、レオナ達は洞窟へと入ったのであった。
一階はスライムの巣で、ラーハルトが槍の一閃で退け、残りはマァムが脚の一閃でで風圧を起こしてさして時間を掛けずに進み、五階層、十階層と楽々と降りていけた。
途中レオナが宝箱を開けようとするのをメルルの高い探知能力で偽者か碌なものが入っていないと断言し、レオナが開ける前にラーハルト槍で串刺し倒すか中身をぶちまけさせて確認していくという効率的な作業で物凄く時間が稼げ、これならば十分間に合うと、時計代わりの蝋燭で知らせるフローラの言葉で交代で仮眠をとる事になった。
目当ての二十五階は、モンスター達の巣だと書かれている為、ラーハルトとマァムがいても万全な状態で挑めるのならば休んでいくべきだと。
その仮眠をとっている最中に、マァムの騒ぎが起きたのだった。

慈愛なんて言われても分からない・・・・だって・・・・今私は・・・・
テイファとこの世界に酷い事をしている敵を倒したいとしか浮かば
ない・・・・浮かばないの・・・・

―母―

魘されレオナ達に起こされたマァムの様子が気になり、ラーハルトはフローラに進言をした。
「今ここで無理に進むよりも、マァムの心に澱んでいる思いを一度吐き出させた方がいいと思うのだが。」
この先で待っているのは上位級のゴーレム以上のシルバーデビルにギガンテスと言った強敵の群れを相手にする事になる。
自分がいても際限なく出てくるであろう敵を捌き切るには予想以上の精神力が必要になってくる。
どれ程敵が来ても迷うことなく、どこまでも戦い抜き仲間を守り切るのだという意志の強さが。
そんな時に少しでも迷いのある物は何かな拍子に死んでしまう事があるのを、魔王軍としてではあるが戦いに身を置いてきた自分はよく見てきた光景で、今のマァムにはその危うさが見て取れる。
「分かりました。少し離れた角ならば他の者には声は聞こえませんのでそちらで話を聞きましょう。幸い時間はまだあります。」
ここまでは普通であった。
迷いがある者が戦場では一番に死んでしまう。それもマァムが死ねば、仮にレオナがミナカトールの呪法と契約出来たとしても、ミナカトールそのものが出来なくなってしまう。
このメンバーの行動や成功如何によって、文字通り世界の命運が掛かっている。
少しでも不安要素は取り除くべきだと。しかしだ
「ラーハルト、貴方がマァムの話を聞きなさい。」
・・・・・・ちょっと待て、どうしてそうなる？

「あの・・・・・ラーハルト・・・其のごめんなさい・・・」
「・・・いい、お前が俺を指名したわけでは無いから別に気にするな・・・」
ラーハルトしては、不安要素を取り除く進言をしたのであって、聞

き手は親友のレオナ姫かメルル嬢になるか、それか三人でということになり、存分に話さるように自分が周りに気配を配る中での話し合いををするかしか考えていなかったが、蓋を開けてみれば何故俺なんだ・・・・。

俺にうら若い女性の悩みを聞いてどうしろというのだあの女王は。

言ってはなんだが自分はヒュンケルや主以上に女性の扱いは知らない。何故なら自分が知る女性と言えば母かティファ様しか知らない。

二人は俺に悩みなど言った事は無く、後は人自体を遠ざけていたので、ひょっとしたら同性の悩み相談も怪しいが兎に角！女性の悩みなど言われても助言できる自信がないと断言できる！しかしだ、周りと自分に迷惑をかけているとしょんぼりと俯いて座っているマァムに罪はない。

「助言は出来ないが聞き役くらいは出来るぞ。」

フローラ達と自分を同時に守れる絶妙な位置の通路の壁に立ったまま寄りかかり、槍を手放さずに話を聞くぞというラーハルトの武骨な優しさに、マァムは面食らったが少しおかしくなり笑ってしまった。

それは声を立てて笑った訳ではなく、自然と口角が上がった程度であったが、輝聖石が光らなかった以来の笑いは、微かではあるがマァムの心の蓋を開けさせ、するりと言葉を吐き出させた。

「私ね、昔から失敗した事が無いの。」

「お母さん、薬草採ってきたよ。」

「ありがとうマァム。お父さんの薬早速作りましょう。」

「私も手伝う。他に何がいる？」

「そうね、そしたら水を汲んできて。滑車は重いから誰かに頼むのよ。」

「平気！だって私はお父さんに似て力持ちだもん!!」

「そう?無理しないでね。」
幼い頃から病の床についている父の面倒をなにくれとなく見て忙しそうにしている母を手伝っていたのが最初だった。
父の病気は言えずとも、痛みを和らげる薬草は幸いにもロモスの迷いの森に自生していて、いつしか自分が採りに行くのが役目になった。
初めは心配していた母も、遠くまで採りに行けるのが当たり前のようになっていった。
その頃にはアバン先生の弟子となり、一週間のハードスペシャルコースを無事卒業し、魔弾銃も授けられ、母の手伝い以上に村の人達からの頼まれ事も増えていった。
父の薬草を採る傍らで、毒消しや熱さましの薬草採りをしに更に森の奥に入る事もいつしか慣れていき、体が大きくなるにつれて力も増して柵の修理や井戸の改修など男の人達の手伝いをするのも当たり前になっていった。
村には自分と同い年の子はおらず、村にいる男の人も多くはなく、働き盛りのおかみさん達も日常の事で忙しく、必然その担い手は自分になったのだ。
「いつもありがとうねマァムちゃん。」
「本当に助かるよ。」
近所の皆は手伝いをすると喜んでお礼を言ってくれて、お菓子や時にはご飯を振舞ってくれる。
その時に見せてくれる笑顔が嬉しい反面、聞いても嬉しくない言葉のお礼もちらほらとあった。

「流石はロカさんとレイラさんの子だ。」
「世界を救ってくれた勇者様のお仲間の子だ。頼りにしているよ。」
「マァムちゃんは何でもできて凄いわね。」
「馬鹿ね、ロカさんとレイラさんの子なんだから。」
自分は、あの二人の子だから手伝いをしているわけではない・・・
其れでもそういう目で自分を見る人がいるのも確かにいて・・・・こ

の大戦が始まる少し前の頃には、母も自分の強さを信じてくれているのか、自分がどこに行っても心配する素振りが無くなっていて、それが少しだけ寂しかった。
「違うわね、悲しくなったのかな？」
頼りにされて嬉しかった筈なのに、失敗せずにやれるのが当たり前に思われている気がしていつしかそれが重たく感じ始めた最中。
「そんな時にティファとダイとポップに出会ったの。」
ミーナの母が高熱を出した時、運悪くミーナの家にも村にも熱さましの薬草が切れていて、母を案じたミーナが誰にも相談せずに薬草探しに行ってしまい、当然村は大騒ぎになった。
大戦が起きた事はネイル村にも伝わっていた。何故かモンスター達が凶暴化されなかったが、攻めてきたモンスター達とその長がいる事、世界各地が同時に攻撃された事をロモス王が直ぐに各町や村々に使者をたてて注意喚起の振れが回されたからだ。不用意に外に出ないようにと。
当然森にはモンスターが居り、いつ凶暴化するか分からない中で、矢張り探しに行く役目を自分が負った。
誰に言われたわけではなく、それが自分の―使命―だと村長に笑って申し出て探しに行った時の出来事であった。
最初に出会った時、ダイとポップは兎も角、ティファは変わった子供に見えた。二人は年相応の男の子なのに、ティファの雰囲気はもの柔らかく、言葉遣いも丁寧で何処かアバン先生に似ていて。
「村でもティファは色々としてくれてね、本当にアバン先生を見ているみたいだったの。」
ミーナを助けてくれた、同門の三人にお礼をするべく家に連れて行けば、病の父を診察してくれた上に、症状を和らげなんと熟睡できる薬迄処方してくれた。それも何も難しいことをした訳ではないと言わんばかりにあっさりと。
自分が物心ついてから知っている父の、初めて見る熟睡する姿に涙が零れた時、ティファはにっこりと笑って言ってくれた。
眠れるようになれば、体の回復力が上がりますよ

薄皮をはぐように、それでも少しずつ良くなるという言葉に、自分も母も救われた思いをしたのをティファは知っているのだろうか？
長い間、息を殺す様にして生きてきた父が回復する道が開けた事に感謝した事を。
次の日にダイの魔法特訓を村長に頼むべく、アバン先生の死を話した時盗み聞いた自分の悲しみを癒してくれたのもまたティファで・・・ティファの優しさに包まれるのがいつしか当たり前になっていったあれが最初であった。
ティファの小さな体に縋りついた時、体の小ささよりも果てしない大きな優しさに包まれ安心したあの時が。
ポップの体術特訓を頼まれた時には少しがっかりとしたが。ティファもまた自分を頼りにする方なのだろうかと。
少しだけ抱いた子供っぽい不満。世界を助けんとするダイとポップを強くするのは当然だと知っているのに、ティファに頼まれたのが少しばかりショックであったのだ。
優しく自分を包んでくれる人も矢張りと。
だがそんなちっぽけな不満は直ぐに無くなった。
マァムさん、ご飯の前に手を洗ってきてくださいね。もう支度は出来ていますよ。
お代わり要りませんか？ダイ兄達もですがマァムさんもお腹すいたでしょう。
あぁ手に切り傷が。食事のあとこれを塗りますね。
少し休憩にしましょう。マァムさんははちみつミルクでしたね。
母以上に自分の面倒をなにくれとなく見てくれて、たくさんの気遣いの言葉を言ってくれて、最後には必ず
無理はしないでくださいねマァムさん。

近頃は聞かれなくなった言葉を必ず言ってくれるのが一番嬉しかった。
一度だけ言われた言葉も
マァムさんは女の子なんですから、無茶して将来結婚した時に赤

ちゃんが出来辛くなってしまったら申し訳が立ちません。
真剣に自分の事を思ってくれる言葉が忘れられない。
「父さんや母さんや周りの皆も私の事を愛してくれているのは分かっているの。私もみんなが大好きなのよ。」
けれども本当に時世が悪いとしか言いようが無かったのも事実で、働けて頼れるものが少ない山奥の村では前大戦の爪後から立ち上がるには時期少々で、必然的に自分が役目を負うのも仕方がないと受け入れていた最中に突然入ってきたあの優しさに、自分は抗うことが出来なかった。
「私ったらね、レイラ母さんがいるのにね、ティファの優しさの中にも―お母さん―を感じていたのよ。」
酷い事を言う自分の顔をラーハルト見られたくなくて、俯きながら小声で話す。
こんな酷い思いを、レオナとメルルには絶対に知られたくなくて。
「私は、ダイやポップ達と誓ったの。」
如何なる敵が立ち塞がろうとも、人々を見捨てずに助けて守る勇者ダイ一行、と。

だが今の自分が戦う理由は、―母―を傷つけた敵を倒したい思いだけだ。
どんな時も微笑みを絶やさず、無理をしてでも自分達に笑いかけてくれていたティファに、自分はいつしか依存してしまっていたのだ。
自分が戦う理由は、なんと身勝手で自分本位な事か。
「酷い女でしょう私は。」
こんな自分に輝聖石が光らないのは当然なのだと、涙に濡れた顔を上げてラーハルトに向ける。

戦いたいと思った理由

「それの何が悪いのだ？」
「・・・・へ？」
「ティファ様の中に母を見た。そしてその母を傷つけ奪った相手が許せない。道理にかなった事ではないのか？」
　自分の言った事が、まさか肯定されるとは思わなかったマァムはポカンと口を開けてラーハルトを見てしまったが、ラーハルトとしては正義や守りたいだけで戦うフローラ達よりも、マァムの考えの方が分かりやすい。
　人は誰しも大切な者を目の前で奪われて冷静であれるものなどいやしない。その方向性が、大切な者を取り戻しつつも周りを思う広い視野を持てるか、その敵のみの事を考えてしまうかは程度の差でしかない。
「・・・・其れって私の視野が狭いって言いたいの？」
「違うな・・・お前はディーノ様やポップよりもティファ様に対する依存心が強かったようだが、俺もお前と同じであの方の中に母を感じている。」
　自分などは五年前に出会った時、当時たったの七つのティファの中に、亡き母の優しさを重ね合わせて今も重ねている。
　人間だった母は、はぐれ魔族であった父との間に出来た半魔の自分を、父亡き後も捨てる事なく育ててくれた。
　同族の人間達からは異端の扱いを受け迫害の中で体を壊し、死の床に就いても優しかった母。
　ラーハルト、世界には酷い人もたくさんいるの。けれど優しい人達もきっといる。
　酷い世界を信じ続けて亡くなった母。
　その後は口にするのさえ嫌になる様な、坂を転がる様な目に遭い、いつしか母との楽しく綺麗な思い出すら忘れ果て憎悪に塗れ世を呪う中でバランと出会い、共に人間を根絶やしにする道を歩んでいた矢先にティファと出会った。

「破天荒で天真爛漫で、我等を全く怖れなかった変わった子であったよ。」
「・・・・ティファは昔からああだったのね・・」
「そうだな。種族ではなくその人を見ると、あのお方は言っていた・・・・俺は今もその言葉の意味が分からない。」
「・・・・普通分からないと思うわ・・」
種族どころか同族の人間とだって分かり敢え無い事の方が多いのに、モンスターや保管種族ともするりと付き合えるティファの凄さがまざまざと分かる。
「そうかもしれんがな・・・・俺もいつかはあのお方が見ている景色を見てみたい。」
「景色？」
「そうだ。あの方に見えている景色はきっと素晴らしいのだろう。」
人間も魔族も・・・半魔もモンスターも精霊達すらもが平等で、誰もが仲良くなれる相手として光輝いて見えている事だろう。
自分は今も人間全般は無理でも、少なくともサババ砦にいた者達と生死を掛けた戦いを共に挑む事を苦には思はない。寧ろ苦楽を共にしこれからも背中を併せて戦える仲間意識を持つに至っている。
―人間―相手にこの自分がだ。
―底―で世を呪っていた自分達を、優しさで引き揚げてくれたティファ。
そのティファを慕って当然ではないかと、ラーハルトは柔らかい笑みをマァムに向ける。
その為に戦いたいと思ってもいいではないかと。
「でも！それで私の輝聖石が・・・」
「ふむ、矢張りそこか・・・マァム一つ聞いてもいいか？」
「何かしら？」
「お前の―戦おうと思った理由―はなんだ？」
「私の戦おうと思った？・・・・戦う理由では無くて？」
ラーハルトの問答の様な問いに、マァムは首を傾げる。戦う理由は分かっている。だが、戦おうと思った・・・

「幼かった頃からお前は先代勇者に師事していたのだろう？何故幼かったお前は力を持とうとしたのだ。親か周りに勧められでもしたのか？」
先代勇者の仲間の子なのだから、力を持っておくべきだとか。
「ううん、寧ろ父さんと母さんは・・・・そうだ、反対していたんだ。」
少し伸ばした膝に頭をつけ、幼い頃アバンに弟子入りをした時のことを改めて辿ってみれば、父と母は反対をしていた。
お前は女の子なんだぞマァム！もう戦いの世は終わったんだ!!
そうよマァム！お願いだから危ない事はしないで!!
そうだ・・・・父さんも母さんも私を心配して反対して、でも自分がやると言ったんだ。
山間で訪れる人も少なくて、森のモンスター達も時折畑を荒らしたり異常個体で暴れるモンスター達もいるから、父さんと母さんの代わりに皆を・・・・・

「泣いて・・・いるのか？」
静かに涙を流し始めたマァムに驚きつつも、ラーハルトは優しく問いかける。
おそらくだが今、マァムは大切な事を思いだそうとしている気がする。それがなんであるのか、ここまで来たら自分も引き出してやりたい。
接していて分かる。マァムもまたティファ様同様、力はあれども本来は敵を倒して戦う戦場には向いていないのだと。
そのマァムが何を願って力を欲したのかを知りたくもなった。
「・・・たいの・・・」
「ん？」
「守りたかったの・・・・村のおじさんやおばさん・・・村長さんや父さんと母さん達を私が守りたいって・・・・」
「守るか・・・・幼い子が持つには大それた望みだ。来る敵を一人でなぎ倒す気だったのか？」
英雄を志す子の願い

「違うの・・・どう守れるかなんて分からなかった。でもね、皆が笑っているネイル村を、私は守りたかった。」
涙を流しながらも座ったままではあるが背を伸ばし、マァムは力を望んだ過去を思い起こしていく。
あの当時はまだ今以上に戦火の爪後を残し、暗い表情になる人が多くて・・・・手伝いをすればその表情が明るくなって笑ってくれたのが嬉しくて・・・そしてアバン先生が村に来ればその笑いがもっと沢山見られた時に自分で決めたのだ。
「私が強くなって皆を守って、大人の人達も泣かなくて済むようにしたいって。」
戦で親兄弟を亡くした事で泣くおじさんが、夫が行方知れずになっていると嘆いているとおばさんが、時折モンスター達に襲われた事を思いだして辛そうにしている人たちがこれ以上辛い目に遭わなくていいように・・・
「泣かせたくない、泣いて欲しくない、私は・・・・もう誰も泣かないで欲しくなかった、苦労を掛けるって時折泣きそうな父さんにも！父さんを案じて泣く母さんにも!!」
誰にも・・・・・そしてティファにも・・・・
こんな大切な事をどうして忘れていたんだろう。
自分が望んで、頼られるのが嬉しくて自分からどんどんとお手伝いをしていたのに。頼られるのが嬉しくて、もっと手伝うと言ったのは自分の方からだったのを。
気遣いの言葉が無くなったと不貞腐れていたのが、本当に馬鹿みたいで！
「・・・ティファ様も、本当はよく泣くお方だ。」
ぽつりと言われたラーハルトの言葉に、マァムは乱暴に涙を拭いながら答える。
「分かってる。本当はティファは優しすぎる泣き虫な女の子だって。」
大人顔負けの知識があるのは間違いではないが、それは単なるティファの一部分でしかないのを自分だとて知っている・・・知っていてもそんなティファに自分は縋っていたのだからみっともないが、それ

でも・・・
「あの時！大魔王にティファを獲られるまで抱きしめていたのは私なのよ!!」
母として慕い、そして優しく泣き虫な女の子のティファも全て守り抜こうと抱きしめていたティファが！自分の手の中から消えたあの時の絶望が忘れられない・・・
手がちぎれても何をしてでも、守れていればもしかしたらティファは今頃自分と一緒にこの場にいたかも知れないのに!!
その絶望が自分を苛み、敵を憎む心を消せないでいる。

「そうか、ならば敵全てを俺が一緒にバラバラにしてやろうか？」
「え？」
「憎いのだろう敵全てが。ならば丁度いい。ディーノ様達や他の一行の者達はいざ知らず、俺もティファ様に非道をなした敵の勢力など皆殺しにしてやりたかった所だ。一緒にやるかマァム？無様に命乞いをしてきても許してやる気はないから安心しろ。全部殺しにしてやる。」
「何を・・・・」
先程までの優しさが消えた瞳は薄っすらと笑みを浮かべて怖ろしい事を言うラーハルトが手を差し伸べて来た。
「俺と共に、ティファ様にされた事を敵に返したやろう。」

差し出された手と提案。これまで自分は敵は倒しても追い払えればそれでいいと思って戦ってきた。
必要以上に奪わず殺さず、来た敵を倒すだけで。
しかしラーハルトは、自分達から命を奪いに行こうと言っている。それは憎い敵なのだからと。ティファと世界に非道をしている敵なのだと。
マァムはその手をじっと見て、おもむろに右腕を上げラーハルトの手にゆっくりと近づける。
この手を取れば、ラーハルトはきっと約束を果たしてくれる。あの

憎いキルバーンも共に・・・・・

殺したくなんてない!!!

ラーハルトと手が触れるその直前、ティファの悲痛な叫びが響いた。

殺したくなんてなかった・・・それでも、この地を明け渡してあげられない・・・

あぁそうだ、ティファも・・・・・私も・・・戦いたくて力を欲したんじゃない・・・

思い出すのは、アバン先生の卒業の時に渡された魔弾銃。

その威力を知り恐れをなしていらないといった自分に、先生は自分を優しいと言ってくれが、守るのには力もいると諭され、だからこそ自分は力を持ったのだ。

敵を殺すためではなく。

「守りたいの・・」

「うん?」

「守ってあげたいの、今度こそ、私はティファを守ってあげたいの・・・・」

ダイ達と共にティファを救い出し、取り戻して今度こそ守り抜いて・・・

「あの子が・・・泣かなくていい世界を見せた上げたい。」

「そうか・・・」

近頃は日に一度は何かしらの事で心を痛め泣いていたティファを自分達では思いもつかないようなどんな途轍もない理由で泣いても全部受け止められる強さが欲しい。例え敵の境遇に共感し泣いていても驚かずに抱きしめてあげたい。

ティファ・・・・
今自分の中で殺したくないと泣いて蹲るティファを、そっと抱き上げ抱きしめたその瞬間、淡い桃色の光が洞窟を照らす。
守りたい。守り抜いて、ティファが、父が、母が、ネイル村の皆が、自分が守りたいと思った全ての人達が泣かなくて済む様に世界を守りたいのだ自分は。
「・・・・答えを・・」
「私は・・・・・敵を倒す。世界を守る為に勝たないといけないから。」
「そうか。」
マァムの答えを聞きながら伸ばされたマァムの手を握り立ち上がらせたラーハルトの顔は、先程と同じ柔らかい笑みが浮かんでいた。
「ではそのように力を貸そう。」
敵を殺すのではなく、世界を守る為に勝つ戦いの力を貸すと、ラーハルトはマァムの頭を柔らかく撫でながら約束をするのであった。

思いは誰をも強くする

「・・・私、付いてきた意味あるかしら？」
「マァムさん・・・・その、レオナ姫様を見守って応援しましょう！きっとそれも大切な事です!!」
「そうね。―彼―のおかげで私の輝聖石が光れたのよね。感謝しないと罰が・・・・」
「二人共、いくら―敵―がこなくとも暢気にお喋りしていたらいけませんよ。もうそろそろレオナが契約の為の試しの儀が起こる筈です。」
マァムの輝聖石が淡い桃色に光ってミナカトールがこれで出来ると冷静なフローラをして大興奮させた。
一時はどうなる事かと本当にひやひやしていただけにその分の喜びが倍増した結果なので、いつもの冷静沈着な女王様と違うとは突っ込みは入れなかった。
マァムのお悩み相談の間、フラメルは残った女性三人に温かいお茶を淹れ携帯食も美味しく調理し、お悩み相談の後はラーハルトが来るモンスター達を全て薙ぎ払い、女性四人にきちんと食事を摂らせてからの出立となった。
今まで以上に頑張ろうとマァムは張り切ったのだが・・・・・
さまようよろい？闘気を込めた刺突の嵐で終わりだ。
ゴーレム？纏めて横薙ぎの一閃で終わりだ。
トロールの中に一際大きな一つ目がいるな、羽があるのはシルバーデビルか？どのみち何が来ようとも同じだ。
幸いこの契約の広間は奥行きも高さもあって俺の必殺技を繰り出しても問題はないな。
途中の階層はいざ知らず、二十五階はモンスタールームで数多のモンスターと、その中には地上で会う事はまずない者達が混じっていたのを、青褪め戦いの構えをとるマァムの両拳をそっと下ろさせたラーハルトは、マァム達にはレオナ姫がいく祭壇近くで見ているように優しく笑い、迫るモンスター達には凄絶な笑みで迎えた。

槍の魔装を鎧化させる事無く、持ち前のトップスピードで敵のど真ん中に進みながら刺突し薙ぎ払い次々と屍の山を築き上げていく。
神速
そう言っても過言ではないその速さに、シルバーデビルは甘い息で眠らせる事も出来ず、密集形態の中を突っ込まれてはベギラマも放てず気が付けば視界がずり落ちて漸く首を落とされた事を理解する有様で。
他のモンスター達も同様で、マァムが危険視して警告を発する前にギガンテスはこん棒諸共細切れとなり、モンスター達を蹂躙している。
高速で槍を回し、最後に弧を描いて繰り出されるラーハルトの必殺技ハーケンディストールが、出てくる敵を全て逃がさず薙ぎ払い、原形をとどめる事無く斬り裂いている。
仕掛けはラーハルトからすれば簡単で、ハーケンディストールを一度撃った後にすぐさま反対方向に飛んでまた放ち、ハーケンディストール同士を敵の真ん中で交差させわざとぶつけている。謂わば敵をハーケンディストールの挟み撃ち。
挟み撃ちの状態にする為には二発技を繰り出さなけらばならないが、二度目を放つ時、本来の技よりも回転数を半分以下にし弧を描く大きさも半減させているが、挟撃の状態になるので多少威力が弱まろうとも問題はなく、技がぶつかった衝撃で生じる衝撃波がそれを補っている。
だがそれでは後から湧いて出た敵には対処できないように見えるが、二方向から放てばその場の敵は逃げ場がなく、範囲漏れも威力を弱めても同じ理由でハーケンディストール同士のぶつかり合いの余波で生まれる衝撃波で体のどこかしらは吹き飛び、動けない所をラーハルトは容赦なく槍を突き刺し止めを刺す。
余りの鬼神の如き様相で戦うラーハルトに、戦い慣れをしていないメルルが青褪め、フローラから預かった破邪の洞窟の古文書を胸に抱きしめ幽かに震えている。
「メルル・・・ラーハルトが怖い？」

「え!あ・・・彼は私達の為に・・・」
「そうね。私達を守ってくれている。」
その優しさに、震えていたメルルも次第に落ち着き、フローラやマァムと共に戦局を静かに見守る。
自分達にかすり傷一つ負わせる気はないとばかりに神速の槍をふるうラーハルトの傍らにはフラメルがいる。
ラーハルトの闘気が切れかかれば瓶の蓋を開けた万能薬を渡し素早く飲ませ、時に煙幕を張り、毒の目つぶしを生物系のモンスター達にぶつけてラーハルトが戦いやすいように援護している。
マァムとしては迷惑や心配をかけた分も含めて自分もあそこで戦うべきだと幾度か出ようとしたのだが、その度にラーハルトに出てくるなと強く言われて守られている。
お前達は大魔王と戦った。その時自分達はサババ砦で、偽者のティファを見ていただけの不甲斐無い者。その分今は休んでおけと言われては出るに出られない。
サババ砦のティファの偽者
式神と呼ばれ、ラーハルト共に戦っているフラメルと同じ疑似生命を、本物のティファと疑う事無く守っていたのだという事実がラーハルトの中では忸怩たる思いとして燻ぶっている。
自分はバラン様とディーノ様、そしてティファ様を敬愛し終生を掛けてお守りするのだと誓っていただけに、知らずとは言えティファ様を本物かどうかすら見抜けなかった自分が許せない。
それは砦全員にも言えるだろうと言われたが、ラーハルトは万が一ティファが起きてもストッパーになるべく眠っているティファのベッドに付いていた。
その時一度だけ髪を撫でているその時、何故それが偽者だと分からなかったのだと責めている。
ティファが聞いたらそれは式神を知らず、そもそも本物か偽物か疑う事態になる方が異常で気か付かない方が普通だと言っているだろうが、生憎そのティファはおらず、ラーハルトを納得させる言葉を持つ者もおらず鬱屈していたところにティファと同じくように清らか

な乙女を見つけたのだ。
それが今背中越しに守っているマァム。
自分からすれば復讐戦をしたいと望むのは自然だと考えているが、マァムはそれを良しとせず、戦うのは大切な者を守り、泣かなくていい世界にしたいと言う―あの言葉―と同じく何とも現実を知らない甘い戯言で、あの言葉同様に自分も見てみたくなる夢だった。
五年前にティファが言った、種族ではなくその人を見ると言うあの甘くて素敵な言葉と同じ願いを持つ少女。
是が非でも守ってやりたい。
その不器用ともいうべき優しさが、ラーハルトの強さを底上げしていると言っても過言ではない。
その戦いにもフィナーレが訪れた。
ラーハルトとフラメルの活躍で、際限なくモンスター達が湧いてくると思われていた破邪の二十五階層は、神の試練すらも細切れにしてやると言わんばかりの輩を粉砕するべきだと言うようにギガンテスの群れが地面を踏み鳴らしラーハルト達に迫った。
流石にラーハルトだけでは危ういとマァムが飛び出ようとしたが、その前にラーハルトの技が、迫りくるギガンテスの群れを打ち砕く。
ギガンテスの群れの真上に飛び、繰り出された技はハーケンディストールでは無かった。
ラウシースピア!!!
それは直情的で、真っ直ぐなラーハルトの気性を表したハーケンディストールとは違っていた。
一つの波が、寄せては返し遂には百にも千にも万にも遂には大津波となるが如く、幾度も槍を突き出す波状攻撃に、ギガンテスの群れは為す術もなく飲み込まれ静寂が契約の広間を支配した。
いずれぶつかる魔王軍は、今まで以上の強敵で数もその比ではなかろうと考えたラーハルトが考えぶっつけ本番で繰り出された技は、ハーケンディストールの威力と範囲を遥かに超え、名の通り荒海が一切を飲み込んだ。
新たなモンスターは現れず、レオナは何の憂いも無くミナカトール

の契約の儀に集中し、為しのぎの試練の炎に飲み込まれても落ち着いて己の戦う理由を問うてきた者に告げる。

先達達が命を懸けて守り、連綿と続いている自分達の世界を今度は自分達が守り抜く為の力が欲しいと迷いなく答えた時、レオナはミナカトールの契約に成功したのであった。

悪夢

破邪の洞窟でレオナがミナカトールを習得している時、地上に残っている者達はそれぞれの武を練り技を磨き、最終決戦では大魔王達を討ち果たすべく猛特訓をしている。

ポップは最早マトリフから学ぶことが無くなり、攻撃魔法よりも習得だけした回復魔法を使えるようになれと言われ瞑想をしている。

どうしてもベホイミ、ベホマが使えず、回復のイメージが足りていないのが原因ではないかとのお達しで、飲食の休憩時間以外は瞑想に没頭しているが一向に使える気配がない。

使用できれば自分を攻撃されてもちょこちょこと回復しながら持久戦に持ち込めるので是が非でも習得したいポップは音を上げずにいそしんでいる。

クロコダインは対ミスト用にと、ヒュンケルから光の闘気を教わりあと一歩まで差し掛かっていた。

暗黒闘気の集合体であるミストバーンには、光の闘気が有効であり闘気系を主体にしている全員が覚えれば誰であってもミストを迎え撃つことが可能になり、戦略・戦術双方においても幅が広がり取れる手段が増える。

マァムが戻ってきた時に、光の闘気が扱えるか確認するが、おそらく使えるだろうとヒュンケルは踏んでいる。

マァム自身が光と慈愛に満ちた女性なのだから。

それぞれが活路を見出し特訓に邁進する中、ダイだけが浮かない顔をしている。

「ダイ君、そう根を詰めないで。」

「でも！・・・・俺だけ皆と違って全然ダメなんだもん・・・」

「ディーノ・早急に力を使いこなせる者などいない。焦る事は無い。」

「けど・・・・」

兄と慕うノヴァの言葉にも、大好きで尊敬している父の言葉にもダイは頷けなかった。

折れた剣はロン・ベルクが精魂を傾け新たな剣に生まれ変わろうと

している。
打倒大魔王の為にも、ダイの全力に耐えられる様に剣に活を入れると凄絶な笑みを浮かべて言っていたのが気になる所だが・・・
新技の方も構想は出来ている。
ヒントはティファの抜刀術・双竜閃・雷。
鞘を一撃目とし、二撃目を鞘から抜いた剣で攻撃を自分でも出来そうであった。
だが二撃だけでは心もとない。三撃目が欲しいところだ。
ティファにもそれがあればあの時ハドラーに勝てたかもしれないとダイは考え、三連撃の攻撃を構想している。
其れも闘気と剣の達人のノヴァと父とハドラーに相談しながら進めていくが、憂いは一つ。
ティファから譲られた左手の竜の紋章を発動させることが出来ないでいる。
これを使いこなして力の底上げをせねばあの圧倒的強さを誇る大魔王には届かない。つまり新技が出来たとしても意味合いが無く、左手の紋章を使えるようになるかどうかが鍵になっている。
其れは分かっているのだが、ダイは今一歩紋章を使いたいと心の底から思えない。
これを使えば、ティファの命が無くなるのではないか
紋章はまだ妹と繋がっており、自分が使えば使う程ティファの闘気を使用し、遂にはティファの闘気が使い果たされたのも気が付かず使用した結果、ティファの命を闘気に変換させてしまうのではないかという恐れがダイを縛っている。
数千年に及ぶ竜の騎士にもこのような事例はなく、ダイの怖れを一笑に付す証が無い為、誰もダイに無理強いは出来ない。
もしもダイの考えが当たってしまったらと思うとゾッとする。
敵を倒したその先に、ティファの死をも見る事等御免だからだ。
ダイが左手の紋章を使うには、ティファが目の前にいなければ怖ろしくて使えない。
今朝の明け方に見た最悪の夢を現実化させたくない

夢を見た
何処までも続く白い花畑で、ティファを大人の女性にしたような優しい人と二人で花の冠を作っていた。
其れが母だと、夢の中であってもダイには分かった。
それはバランが常日頃からティファは母親のソアラに生き写しだと言っていたから。
花場だけには自分と母が笑いながら冠を作りあい、互いの頭に乗せている時に父と妹が昼食の支度を終えて、自分達を呼びに来てくれた直後、辺りに黒雲が立ち込め雷鳴が轟き、嵐が巻き起こる。
急な暴風雨から母を守り、妹は父に保護されているかとそちらを見て目に映ったのは・・・
光魔の杖に刺し貫かれ倒れ伏す父と、ミストバーンとキルバーンを左右に従え、杖から手を放し妹を抱き抱えるバーンの姿があった!!
「大魔王!!!」
様々な事に怒りに駆られ、討ちかかるが素手の自分は大魔王どころか側近の攻撃に翻弄され・・・・母もキルバーンに首を落とされたところで悲鳴を上げながら目を覚ました。
悲鳴を聞いた仲間全員が駆け付け、直ぐに側に来た父にしがみついて声の限り泣き叫んだ。
きっと、この悪夢はティファを取り戻し、大魔王達を討たない限り続くのだろう。
ティファ・・・・・無事でいて・・・・・
自分の中で眠っている竜の紋章に口付けをしながら、ダイは妹の無事を祈る。

「・・・・・んみゅ？」
だれ・・・・だれかが・・・・わたしの名を・・・深くて悲しい声で呼んでる・・だれ？
「ティファ。」

・・・・・あ・・この声は・・・

「まだミストが夕餉の用意を整えておらぬ。」

「・・・ま・・・だ・・」

「もう少し寝ておればいい。」

「う・・・・ん・・・・・・」

目を開けるのも辛い、声を出すのは更に辛い。

ご飯食べれば一時間かそこらは動けるようにはなったけど、それ以外はてんで駄目だ・・・

目を開けるのは辛いから見えないけれど、深みを感じる声や全身を撫でている手の感触で、誰の膝の上で寝ていたのかは分かる・・・この人私の事抱っこしていて重くないのかな・・・・時折魔族や魔獣の気配や・・・・動けるようになったら殺してやりたいダニ野郎の気配と声が聞こえる。

つまり魔王軍の人達と謁見している時も私の事を膝に乗せている様だ

・・・・・本当に酔狂な人だな・・・大魔王は・・・・・・

夢現の中にて―前編―

何かに反応する様に薄っすらと開いた幼子の目を、左手で覆えば顔全体が覆い隠され退けてみればもう眠りについている。

自分の膝の上で無防備にも喉元を晒し、スゥスゥと寝息を立ている様がなんとも自分の優越を満たし尽くす。

どちらの陣営にも最大の影響を与えている料理人が、自分の腕の中で穏やかに眠っている。数千年間、ここまで穏やかな思いで心を動かさられるのは太陽を手に入れんと欲し、全ての用意が整った時以来かも知れない。

直に、自分と魔界が望んだ事の一切が手に入る。

だが、油断はできない。敵にはティファが遺した厄介な者達が勢揃いで、一斉に自分にかかって来られては流石の自分も危ういのは愚か者でない限り分かり切った話。

どちらも生存権を争っている。互いに死に物狂いで勝利を目指さねばならないのは同じで、ならばこの生きていれば魔界サイドに厄介ごとしか起こさないティファを殺してしまえばいいのだろうが、ティファの命には使いどころがある。

下手に殺してそれが万が一勇者達に伝わりでもすれば、復讐という強さを手にする名目を上乗せするだけであり殺すにも殺せない。

ならば捕虜として牢に閉じ込めておくよりも、今や抵抗する術が一切ないティファを手元に置いて遊ぶのも一興だ。

ティファの伸びきった黒髪を弄りながら、バーンはティファが目覚めた一昨日の夜を思い出す。

ズァァァァァー

死の大地を吹き飛ばさせ、バーンパレスを浮上させたその日の夜に、パレスの内部の玉座の間まで異常な気配が覆いつくした。

ミストは何事かと狼狽えていたが、自分には直ぐに分かった。ティファが目を覚ましたのが。
ラック＝バイ＝ラックで力を使い果たし、自分とドルオーラの暗黒闘気で体内がズタボロになったティファ。
常人であれば倒れ伏したままこと切れても不思議ではなかったが、倒れ伏したままの状態でも顔を上げ、自分の顔を見た時薄っすらと笑っていた。
可笑しな伊達眼鏡はラック＝バイ＝ラックの衝撃で吹き飛び、素顔のまま薄っすらと笑うティファに、キルがすぐさま駆け寄り抱え起こして状態を確認した。
ヒュウとか細く消えそうな頼りない虫の息であっても、キルを見ず自分から目線を逸らさないのは何故だ？
「そなたはこれから死ぬ。」
事実を其のまま告げても、ティファ自身がよく分かっているだけに自分の告げた言葉は何の意味をなしていない。
ティファの笑みが益々深くなるのが不思議になった。
微笑みではなく、獲物を喰らい殺して満足した獣の笑みを浮かべるティファは・・・
「死ぬだけの其方は何故笑っている。」
どうにも気にかかり再度問うた。
今まで自分の前で死んだ者は、無念の表情か、殺した者を憎みながらも死にたくないと媚びへつらうか、どのみち何の感慨もわかない死に顔であったが。
果たしてティファの答えは、凄絶であった。
「あなた・・・・の・・いまのかおがおかしく・・・・て・・」
「何？」
「大切な・・・事がうまくいきかけた直前に・・・・・だい・・なしにされて・・ぶぜんとして・・・クフッ・・・それが・・・おかしい・・」
ティファは嗤っている理由を、血を吐きながらも言い募る。
「冥土の土産が・・・大魔王のぶぜんとしたかおなのもわるくは・・・・

ない。」
七千年間、様々な敵対者達がいた。初期の頃には間違いなく国の興亡に関わる戦もし、血みどろの戦に明け暮れ大勢の者達を殺し蹂躙して来たが。
「勇者と魔王達全てに逃げおおせられ・・・・ざまみろと・・もうせましょ・・・・・」

死ぬ間際に、魔界の神とまで呼ばれるに至った自分に対して、ざまみろと言いながら死んで逝った者は誰一人としていなかった。
最後まで言い切るには至れなかったが、何を言いたいのか分かるまで話したティファの手かがするりと落ちる。
放って置けば直に死ぬと分かっているが、小憎らしい事この上ない。
「どうなさいますかバーン様?」
自分の考えをある程度察したのか、キルは答えを知りながらも伺い立ててくる。
これもある意味ティファ同様小憎らしい者に育ってしまった者だと嘆息が自然と出る。
「牢よりザボエラを出し、至急ティファを―蘇生装置―に入れよ。」
「バーン様⁉」
「憎らしい敵を助けるのですか?」
ミストは何故ティファを助けるのだと悲鳴のような声を出す程の可愛げがあるのに対し、本当にキルは自分の何もかもを見透かしたような言動をする。
「助けるのではない。」
自分の憮然とした顔を冥土の土産に等されては業腹な事この上ない。
「生き地獄を味わい嘆きの底に沈みながら黄泉路を辿ってもらおう。」
「成る程、勇者君達は兎も角―人間―がこの子の―正体―知って、受け入れる訳ないですもんね。」
百万が一何かの奇跡でダイ達の下に戻れたとしても、ティファは最

早地上特に―人間―の中に居場所などあろうはずがない。
仮に善意ある者達が居場所を作ろうとも、人間がそれをいつまで良しとする筈も無く、聡いティファが己の正体に気が付けば、地上の味方同士が諍いを起こす種にならないようにと自害する可能性すらある。
生きても地獄なら、こちらに素直に来るか死んだ方が確かに楽である。
「その通りだ。」
キルに正確に総てを当てられたバーンは矢張り面白くないと憮然とした顔をしてしまい、今度はキルに笑われる。
叱責しようとしたが、用命を果たしてきますとティファを抱えられたまま逃げられてしまった。
「ミスト、そちには苦労を掛ける。」
自分の若い肉体を消され本性を晒さなければならなかった事、その元凶となったティファを助ける事、そしてそれにより奇行が更に出るであろうキルのしでかす事を先に謝すれば、ミストは姿勢を低くし一言の身を言ってきた。
「全ては大魔王様の思し召しのままに。」
如何なる命であろうと自分の言った事を最優先にするミストが、無事であった事が幸いであった。
「すまぬな。」
今生、誰にも如何なる事態にも屈せず乗り越え、頭を下げた事が無い主が、矮小なこの身の自分に対し・・・・
「忠誠をあらためて、この身消え果るその時まで貴方様のお側に。」
「うむ、付いてくるがいいミスト。」
忠義を更に深めた主従は、直ぐにパレスを浮上させる手はずを整えロモス王国の北西に黒の核晶を搭載したピラァオブバーンを落とした。
そこを皮切りに、早くとも次の日か間隔をあけて二日後に一つずつ、―六芒星―を作るべくピラァを計六つ落としていく。
早くとも十日を掛ける事になるが、性急に勧めようにも黒の核晶か

ら放たれる暗黒正気を大地に根付かせ、それぞれの柱に到達して地下で六芒星の陣が結びつかなければ地上の表面を吹き飛ばすだけで終わり、大地そのものを消滅させられない。

其れもあるが、落とす場所は六芒星と気付かれないようにバラバラの場所に落とす。

ロモスの次は、二日後にパプニカ西のベルナの森。

調べではあそこは人が居らず、何故攻撃されたのか分からない筈だ。無差別攻撃だと謝った考えに至り、柱そのものに仕掛けが施されている事を分からなくするのが目的。

万が一柱に近づくものがあれば、策を施している。

確か・・・キルが暇潰しに、地上の強敵とやらを倒して手に入れた【はんにゃのめん】を参考にしたのであったな。

柱に触れれば触れた者は混乱し、追加効果で周りを敵だと認識させて斬りかかる仕様にしてある。

呪われたものに近づくものはおらず、それでも調べようとした者がいても、ピラァの頭頂部は発動寸前まで閉じており、破壊しようとすればその倍の威力を相手に返すカウンターの結界を張っている。

つまり強者であればあるほどカウンターのダメージは強まり、自分の技で死ぬ事にもなる。

まさに死角のない時限爆弾であった。

地上を消滅させる準備を着々と半日で整えている最中の真夜中に異常事態は起き、引き起こした物をラド＝エイワーズで出現させれば、一糸纏わず、焦点が合わずに床にただ座り込んでいるティファと、その傍らには切り飛ばされたのか、肘より下の無い右腕を抑えながら呻き声を上げ蹲るザボエラの姿があった。

牢の中で表の騒ぎに戦々恐々としていたザボエラは、突如静かになった後急に現れた死神に魂消て悲鳴を上げ、更に無茶ぶりの命令に魂を飛ばし掛けながら唯々諾々と命を果たし、ティファを蘇生装置の中に放り込んだ。

自分を殺し掛け、牢に入れる原因を作った忌々しいバケモノを助ける手伝いなど御免であったが、保身一択で表面上を繕い笑う自分を無

視した死神にも頑張って愛想笑いをしてみせるのは我が事ながら偉いと思う。
どうしても外せない用事があると死神が立ち去った後、忌々しい小娘を事故死に装って殺そうとした。死神は立ち去る前に、バーン様の命令に逆らうなと釘を刺してきたが、事故死ならば仕方あるまい！
行動に移そうとした矢先、娘の目が薄っすらと開き、凄まじい気配と―黒い闘気―が自分を襲い、気が付けば大魔王の御前に蹲っていた。
ティファの方は完全な覚醒に至っておらず、両手とも床につけ、足を曲げてぺたりと座り込んだまま何もしないでいる。
常のティファであれば状況確認をすぐさま始めるのだが、口も半開きに開けぼうっとしている。
濡れた髪が全身に纏わりついているのも気にもせず。
ティファの髪は、ダイ達に見せつける様に短く切ったはずだが、体のダメージを直すとともに伸びたか。
黒き髪を身に纏わせ、ザボエラの青い血が飛び散りその身が汚れているのも気が付いてもいないティファに、バーンは玉座より立ち上がり近づく。
「バーン様!!」
その行く手をミストがその身で阻もうとしたが、退くように命じられ道をあけざるおえなかった。
「ミストの懸念も分かるが、今のティファは抵抗しまい。」
先の戦い時には手を出した自分の小指に噛みついてきたが、果たして今は
ティファの目の前で片膝を付き視線を合わせる為にティファの小さな頤に指を添え上を向かせれば、うっとりとした色を乗せた瞳で自分をぼんやりと見始める。
やはりそうか・・・
抵抗は無いと確信したバーンは、服が濡れるのも関わらずティファを抱き上げ玉座に向かい、其のままティファを膝に乗せたまま腰を下

ろす。
膝の上にいるティファは、甘える様にそのまま自分の胸に顔を擦りつける。まるで仔猫が親に甘えるような仕草に、バーンは自然と笑みが浮かぶ。
可愛い者でないか
「一体・・・・何故・・・」
常のティファを知るミストからすれば、目の前のティファの行動が信じられな面持ちであった。
謀略をした自分達を幾度も許さないと抵抗していたあのティファが、最大の敵に甘えている!!
其れが朦朧とした意識の中にて無意識でしている事であってもだ!

夢現の中にて―後編―

「今この者は本能のみで動いておる。」

知識や常識などと言った―余計なもの―は一切無く、ティファは己の本性のままに動いている。

―大魔王―の気配に魅かれ、自分が差し出している右手に自らの頬を押し付け、今にも喉を鳴らさんばかりの甘えぶりである。

この様を勇者達に見せられないのが残念な程だ。

自分達の光であり希望だと散々言っていたティファが、こうして無邪気に甘えている様を見てあの者達は平気でいられるだろうか？答えは決まっている、否だ。

自分にメダパニを掛けられ錯乱しているか、洗脳されたと思考の逃避をし、ひたすら―元凶―たる自分を討たんと死に物狂いで攻めてくるのが容易に目に浮かぶ。

その時―真実―を知れば今度こそ一行を崩壊させられるだろうが、最早厄介なのは勇者達だけではない。

表舞台から隠れていた―者達―が次々と裏から手はずを整え出て来ようとしている気配が満ち満ちている。

自分達の襲撃から無傷で逃げおおせカールの女王が、何もせずに今日まで来たからには何かを企みそろそろ手筈を整え登場する頃合いだろうか？

ロモス王国の北西の町にピラァを落とした時は、その場所から天界に連なる者達が発する特有の気配が、超高高度を飛行しているこのバーンパレスの自分にも感じられる程に満ちていた。

ピラァを落とす前に、悪魔の目玉で町を探らせれば、住民はおろかモンスターも精霊すらもおらず文字通りもぬけの殻であった。

ここに来て次々と自分達の作戦の障害となる事柄が浮上してくる。

まるでこの先の自分達の行動を知っており、先回りをするような得体の知れない動きに少々苛立っているだけに、ティファのこの無邪気さが慰めの様になり不思議と乱された思考を落ち着かせていく。

障害となるは矢張り―天界―か。ヴェルザーの時の様に予め何かを察し、自分達の行動を逐一見張り勘づきでもしたか。
魔界の寿命と自分の言動を見ていればおのずと察し、地上消滅の手段は向こうとて承知であったな。
魔の六芒星が必要な事も・・・・だが、ただそれだけの事だ。
天界は数万年という長き月日にあって、地上が滅亡する寸前であっても―間接的―な支援しかしてこなかった。
間接的な支援なれば、ピラァの仕掛けで事足りる。
つまるところ現状の支障となるほどの事はなく、脅威足りえない。
慢心による無警戒など論外ではあるが、反対に警戒しすぎて動きを限定させられる事もまた然り。
警戒は常にしつつも、計画に手を加えればそれで済む・・・・
落ち着いて考えればどう動けばいいか修正案さえ出るものだ。
自分を落ち着かせ良策さえ浮かばせた者に目を向ければ、動かない自分の手を動かしてほしいとばかりに頬を擦りつけているではないか。
薄っすらとした笑みが、自然と自分の顔に浮かぶのが分かる。
「完全に目覚めた時の其方は、今と同じ様に余に従い慰めをくれるか？」
ティファの頬を優しく撫でながら、応えの無い問いをする。
今のティファは、バーンの声を―音―として聞いている。
力に満ちた深き調べが自分の中に甘く響いて心地よく、蕩けるような甘い表情で益々頬を、一糸纏わない細い肢体をバーンに擦り付け甘える。
その様がなんとも愛おしい
「このままの其方でいよ。」
知識も力も全て自分が持っている。―幼子―は、ただ愛らしく自分に甘えてればいいのだと、甘えるティファの貝のような小さな耳に口を近づけ、バーンは言い含める様に言葉を発する。
ティファの心に刻まれるように小さな肢体を服の袖で囲い込み、一言も聞き洩らさせないようにゆっくりと。

不意に顔にひたりと少し熱を帯びた物が当たった。
見れば自分の顔に、ティファが手を伸ばしていた。そして更に伸ばそうとした矢先、ティファの手が落ち体からも力が抜ける。
まだティファの体の半分以上が治っていはいまい。
「ザボエラよ、その腕は直ぐに再生するのであろう。」
腕一つ如きでいつまでも苦痛に満ちた声を出し蹲る無様な姿。身が破壊されようとも戦ったもの達と比べれば情けない姿。
しかしこれにはまだ役割がある。
「さっさと治してティファの治療班を至急編成せよ。それと並行して―例のもの―の完成を急げ。あれの完成期限は今日より五日だ。それに伴う部隊の編成も急がせよ。今まで時間はたっぷりと与えた筈だ、同時に完成する事であろうとは思うが、どちらか一つでもそれを過ぎれば其方は余にとって―不要なもの―だ。この意味が分かるな？」
「は！はい!!全て身命を賭して!!バーン様の望まれること全てを成し遂げます!!!」
バーンはティファを腕に抱いたまま立ち上がり、負傷しているザボエラに冷えた視線で見遣りながら次々と命を発する。
魔王ハドラーを拾った時期を同じくして、ザボエラには任務を与えている。超魔生物ハドラーを完成させられたのは、その任務の為にふんだんに与えた研究費と材料と資源のおかげ。
ハドラーはザボエラが単独で独自に研究していたと思っていたようだが、その糸を引いていたのは自分だ。
まさか、その完成品が生き残り、自分の手を噛みに来ようとは因果応報だろうか。
そちらは予期していなかったが、地上消滅と天界に攻め入る駒は多いに越した事は無く、ハドラーと同時に拾った者を再利用する。
―アレ―が目覚めた時、征服しようと誓った地上に与したハドラーの事を許すだろうか？
ぶつけた時の事を考えれば、驚愕に満ちたハドラーが目に浮かび今から笑いたくなる。

―戦友―と戦うのだから。
その酷薄の笑みも、バーンの威圧に屈し、苦痛とは全く違う意味で蹲るザボエラからは見えていないが、気配から怖ろしい事を考えているであろう主の気配に恐れ戦く。
一方ではティファに慈しみの笑みを向け、自分のものとなるように優しく言い含める。
一方ではザボエラに酷薄な笑みを向け、対天界も視野に入れた作戦の本腰を入れる様に命じる。
失敗すれば、ザボエラの命は無い事を示唆しつつ。
クシュン!!
怖ろしい思考は中断された。ティファが身を震わせくしゃみをした事で。
くしゃみをしたティファは目こそ覚まさないが、寒いとばかりに自分の服を握りしめている。
「おお寒いか。ザボエラ、下がって疾く命を果たせ。これの治療の用意が整い次第ミストに声を掛けよ。」
それだけを言って、後は用はないとばかりにティファを包んで温めるべく玉座に戻る。
その短い道すがら甘い声が聞こえる。
「寒い思いをさせたなすまぬ。」
その言葉にミストは、主が親友同様ティファに捕まってしまった事を悟り、諦めと共に、ティファを手にしながら主が勝つ算段をすべきだと思考を切り替える。
・・・・・伊達にこの数か月、ティファに囚われ振り回されている親友と付き合ってはいない。まさかそれが役に立つ日が来ようとは・・・・嘆けばいいのか喜ぶべきか超微妙ではあるが、主の望みはすべて叶いたい。
この御方は、長い、本当に悠久の時を魔界の為に心血を注いできたのを間近で見ていた。
其の御方の心を慰めるものは余りにも少なく、ほぼ無いと言っても過言ではない。

魔界の悲願達成まで脇目を振らずに歩くべきだといった者は、自分が滅する。
主のこれまでの孤独を知らないものがほざくなと。
であれば、自分もティファを主の許可なく殺す事は出来なくなったか。ティファが死ぬ時は、最後まで主に仕える事を拒んだ時。
命の使い道は決まっており、死しても親友が幽体を捕らえるので死んでも問題はない。
甘いティファの事だ。百年かそこらか、もっと短い時間で幽体であっても傍らに置こうとする主の思いに絆されるに決まっている。
そしていつしか微笑みを主に向ければいい。

忠実な影は、ひたすらに主の幸福を念頭に置いて動かんとするが、保身が何よりも大事な翁は死にたくない一心で命を果たし、ティファの治療は再開される。
一時ティファを手放し、考えうる限りの策を施した後無聊をかこつ事になったバーンの下にキルが戻ってきた。
「ただいま戻りましたバーン様！お待たせミスト!!―ヴェルザー―の配下から暗黒闘気と剣の達人を見繕ってきたよ!!確かあれの親衛隊長で眷属だけどいいかな？」
キルは超ご機嫌で大好きな主と親友の下に帰ってきて、しれっととんでもない成果を報告してきた。
愛するティファの傍らをどうしても離れなければいけなかった理由は、親友のミストの新たな入れ物となる獲物探し。
「ねぇミスト、僕は君がどんな姿でいても気にはならないけど、暗黒闘気の集合体でいると色々と不便じゃないかな？」
ティファを捕らえ、蘇生装置の前で様子を見に来た親友に新しい体はいらないかを尋ねた。
そのままでは戦いは出来てもバーンの身の回りの世話などはとてもできないだろうと。
確かに！これでは食材も持てずに料理を御作り出来ない!!着替えの支度も朝目覚めた時の湯を運ぶのもこの姿ではやりたくはない！

主より賜ったあの服をもう一度身に付けお仕え出来るのであれば・・・
早速ミストは主に、新たな肉体をキルに見繕って貰ってもよいかのお伺いを立て、ミストが可愛いバーンはすぐさま許可を出した。
ついでに封印されている間抜けな竜の軍勢の力削ぎも同時にしてくるようにも命じて。
今冥竜王はバランと天界のせいで封印されている。
それでも魔界を浮上させて直ぐにでも自分を蹴落とそうとするのが手に取るように分かる。
それをされては面倒なので、向こう百年は立ち直れないような逸材をミストの新たな肉体にするように指定をして、よもや竜魔人化したバランといい勝負をした親衛隊長を持ってくるとは恐れ入る。
「いやぁ～お陰で攻撃と捕縛罠のストック空っぽになりましたが、これならいいでしょう♪」
ウィンクしながら軽薄そうに言ってはいるが、途轍もない―男―だこれも。
バーンにとって、キルもミスト同様人格を認め一つの生命体として扱っている。
例え自分が生み出した生命体であっても、これ程のものには自前で育ったキルに感心しながら。
魔界を浮上させた横にミストとキルがいて太陽を存分に浴びる。
これほど幸せな夢が、あともう少しで現実となる。
十日後が楽しみだ

最後の戦いに・・

【・・・あの子は我等の力及ばぬばかりに・・】

［ああもぅ仕方がないよ!!いい！あの子がその身を犠牲にして稼ぎ出した時間は有効的に使わなくちゃぁいけないんだ!!泣き言繰り言一切ご法度だ!!!］

『然り・・・・我らの悲願達成の為にあの者が出来得る限りの事をしてくれているのだ。無駄にする事こそあの者に対する侮辱ぞ。』

【すまぬ・・・最早繰り言は言わん。六芒星への仕込みはどうなったおるかの。】

『バーンが発動するのが先か、その前に我らが乗っとるかは五分。もしかしたら寸前になるか・・・』

［全てはあの子次第か・・・まったく、こんな綱渡りみたいな事しないと救ってあげられないってどんだけなんだか。］

『先代も・・・・まさかあれ程の事になろうとは思われ・・・』

［見積もりが甘いんだよ!!そもそもが一人で三界仕切ろうとしていた事自体が無理だったんだよ。冥界と精霊界の二柱を、運命と時間の因果関係の神も二柱とそれぞれサポートの神がいたのにどうして魔界が地上界にあったからって人・魔・竜の神を兼任しようとしたのかな?もう意味分かんないよ。］

【・・・あの方は若かりし頃は本当に―全て―に対応できる万能なお方であったのだよ。】

『それが全ての種族を見られると思いあがられたか・・・』

［ふん!それで当時弱かった人とその近くでしか生存できなかった弱い種に肩入れしすぎて不満爆発寸前にさせてたら世話無いよ・・・・こうして十万年経った今もそのツケを支払わされているんだから魔界側が地上と天界消したいって言っても当然だよ。］

【これ!お主もその天界の・・・】

『いずれにしても、地上界と天界の消滅は阻止せねばならん。』

［・・・・そうだね・・・そして。］

【うむ、魔界もその時に・・・】

「それ以前に人死にを絶対に出さないようにしないと。一人でも出たら・・・人間は―彼等―を・・・」
『案ずるな、闇の精霊王と眷属達が首尾よく託宣を浸透させている。有人の所は後リンガイアとバルジ島と最後はあそこであったな・・・・光の精霊王は今六芒星の落ちる土壌に―細工―をしている。―我等の最後の仕事―の為に・・・』

バーンが地上界と天界の消滅への最終手筈を整えているその時、遥か彼方の高次元でもそれを阻止せんとし様々に暗躍している者達がいる。
ティファが、地上界を救う為だけであればここまでまだるっこい事をしてはいない。敵を倒し、魔界の現状を知り憂う事をしていない。ただ大魔王の首を落とす斬首作戦のみを敢行していればいいのだから。
だがそれでは救えない者達がいる事を打ち明けられたティファは、迫りくる敵からこの世界を守りつつも、―助けたい人達―が増えすぎた。
助けると誓った約束を果たす為には、―力―だけの勇者一行では駄目だ。
―どのような者達―であれ、本気で救いを求める者達を救う一行でなければ助けたい者達をも殺してしまう。

―自分達―の望んだ事は愚かなのかもしれない、傲慢なのかもしれない。甘い戯言の度という生易しいものでは無い。完全に狂人の戯言と同義語。
それでも願ってやまない。
私達は守りたいんだ
この―世界全て―を

あぁ・・・・眠いし体が辛いな～。全身ズタボロにされて自分でもボロボロになる原因の事をしたんだから仕方がないのだけれど。
でも望みの為にも目を開けたら・・・・

「知らない天井だ。」

奇妙な生活の始まり

目が覚めた・・・・というのには少々足りないかもしれない。正確には薄っすらと開いた目に映った天井がぼんやりと見えた程度だ。

目を開けるのさえ億劫で、その上首を回して現状確認をしようとしたら死んじゃう気がするけれど！そこは頑張れ私!!!

ゆっくりと、本当に亀の歩みの様にノロノロと左側を見たら・・・・

「・・・・起きたか・・」

いっやぁ!!!!!会ったら気不味い人其の二のミストが居るじゃ無いのよ!!

一番は全部の謀の八割を台無しにしてやったバーンで、三番目は答え出ない時は自分のものになれとか勝手に賭けをしてきたキルだけど・・・・って今は其れはどうでもいい！

どうして私牢屋にいないの？少し見ただけでもこの部屋超が付くほど豪奢な場所だって分かるくらいの部屋のベッドで寝てるし、そもそもなんでこの御人がいるの!!こういう見張りは悪魔の目玉とかがやるもんじゃないの⁉もうこの際ちょっと変質的な所があってもかっこいいキルにチェンジでお願いします!!

ミストだって最終決戦前でやる事会う山積みだろうし忌々しい私の見張りなんてチェンジの方が嬉しいよね！嬉しいって賛同して欲しい!!

気不味い事もさることながら、内心で必死にチェンジを望むほどにティファはミストにした事に対して後ろめたいところがあったりする。

ハドラーの黒の核晶を起動し、謀略の片棒担いだ瞬時にぶちぎれて罵倒しちゃったけれど！この人にも守りたいものがあるからああしたわけで。

どういう時でも相手の気持ちが透けて見え、大抵それが正解であるので察して気遣う心がポロリと出てしまい、。戦う者にとっては其れ

こそ命取りになる欠点。
其れが一緒に居るのが居た堪れない理由。
何と声を掛ければいいのか分からず、まじまじと見ていて大事な事に気が付いた。

あれ？・・・・ミストが本体でなくて白い衣被ってる。新しい肉体に入ったのかな？そうであっても主たるバーンの本体消しちゃった私を殺したいだろうけれどとりあえず・・・沈黙は失礼すぎるよね。ここは思い切って！
「あの・・・・・おはようございます・・」
目が覚めたからとりあえず挨拶が無難かな？
まぁ、返事されるわけないけれど、礼儀は大事だってじいちゃん言ってたし。
何かあっても、相手がだれであっても、何処までもブラスの教えを貫こうとするティファであった。

・・・・・この小娘の精神は本当にどうなっている？
ベッドにいるだけならば兎も角！私がいた時点で状況がどうなっているのか分からん愚か者では無かろうに、何故私に挨拶をしてこれるのだ!!!
こんな状況であっても挨拶してくるティファは、自分の中でバケモノから―理解不能な生き物―にまで昇格を果たした。
やっている事は凄まじく、味方の為にも殺すべきだと思い―続けたい―のにこうやって毒気を抜かされて脱力してしまうと敵対意識を保つ事自体が難しい生き物など冗談ではない!!
本来であればこれの―世話係―は・・・
「ただいまミスト!!!僕勝って・・・あああああ!!!」
バガンと開いた扉からは姦しいキルが入ってきた。
主からティファお世話係に任命されたのはキルであり、―とある事―を賭けて主に賭けチェスをしに行ったキルの不在で一時自分がいたに過ぎない。

・・・・戻ってきたのだからもうここに居なくとも・・・
さっさと外に出ようとしたミストをキルが逃がすはずが無かった。
がっしりとミストを捕獲したキルはそのままティファの枕元まで親友を引きずっていき、目を開けているティファの顔を覗き込む。
「あ・・・・おはようございますキルバー・・・」
「はい、おはようお嬢ちゃん。それとストップだ。」
「・・・ストップ？」
「そうだよ、今お嬢ちゃんは僕の事を―キルバーン―って呼ぼうとしたよね。」
「はい。そうですが・・」
「それじゃぁダメダメ。僕の事は―キルーって呼ばないと。」
「は⁉」
ハイテンションなルンルン声でキルバーンを愛称呼びしろと言われたティファの目は点になり、何言っているんだこいつという胡乱な視線を浴びせてもキルは一向に堪えず、捕獲している親友のあがきも抑え込んで涼しい顔で―理由―を滔々と話し出す。
「君が今捕虜なのは分かっているよね。」
「あ！はい・・・」
「フッフ、バーン様の捕虜になった者はね、バーン様に―様―をおつけして呼ばないと殺されちゃうんだよ。」
「え!!」
「バーン様が捕虜後の敵に呼び捨てにされているのを放って置いたら、バーン様が捕虜に舐められる位、低き者と誹られて周りが勘違いして助長して歯向かってもいいかなとか考える馬鹿者共が出ないとも限らない。自分に負けても反抗的な者を見極める為と、冷徹さの演出も兼ねているんだよ。」
「それは・・・確かに合理的ですね・・」
「でしょう！けれどね、君の命の使いどころはもう決められているから特例としてバーン様にも―様―を付けづにすむ呼び方を考えておいてね。」
「はぁ、それでしたら、次会う時には―大魔王―と呼べばいいですか

？」
「うん、其れで行こうか。それでね、そこでどうして僕の事をキルって呼んでと言ったか分かるかい？」
「あ・・・そちらは全く・・」
「分からないか～残念だな。」
何だろう、自分が物凄く馬鹿になった気がする。キルの今の言葉のどこかに、キルバーン呼びがいけない理由がある気がするんだけど・・
目線をしたにし落ち込むティファに、キルはにっこりと笑って―正解―を教える。
「僕はバーン様と同じ―バーン―の名を名乗る事を許された大幹部だ。つまりバーン様と同じく舐められたらいけない位置にいるんだよ。けれど君は僕に様つけて呼ぶ気ないでしょう。」
「あ!!・・・確かに・・」
「だからね、今回は本当に―特例―のオンパレードで、愛称呼びでいいようにバーン様のお許しを貰えたんだよ。」
「そう・・・なのですか・・・すみません、何やらお手を煩わせてしまって・・・」
「いいのいいの、君は気にせず僕の事をキルって呼べばいいだけなんだから。」
「分かりました。」
ティファの言葉と態度に満足したキルは、空いている右手でティファの頭をゆったりと撫でるが、キルにがっしりと捕まって動けないミストは、今手を放されても逃げない程のフリーズを起こしていたりする。
この小娘、この馬鹿の言った事を丸ごと信じ切ったのか!!!
あり得ん!!
そもそもが今まで主は捕虜を取ったことなど一度としてない！その前に敵対したが最後!!命乞いも丸無視で殲滅してきたので取れる捕虜など存在して来なかった。
ティファが唯一の生け捕られた捕虜である。
それがなくともそんな馬鹿げた決まりがこの世の中の何処にある

のだと疑問を持たずに相手の言葉を鵜呑みにするのはどうなのだ⁉
ミストにしてはあり得ないが、こいつ少しは危機意識持った方がいいとか老婆心を働かせてしまう程ティファは天然であった。
だがキルとしては今の話で十分通じるだろうと確信があった。ティファは相手が強いて来たものであっても―決まり―や約束事に弱い。
それは篩の塔で証明されている。
あれはティファが様々な事にぶちぎれて単身乗り込んでもよかったのだが、そうはせずに律儀に決まり事を果たしていたところから推測が容易に出来た。
この決まりがあるのだとバーンにも口裏を合わせて貰うべく、キルは賭けチェスをして魔界の神相手に見事勝利をもぎ取ってきた。
お嬢ちゃんにキルって呼んで欲しい!!!
その異常ともいえる執念の思考にバーンが面白がって手を抜いたのにも気づいていたが、勝ちは勝ちであり堂々と如何なく―嘘ルール―が言えるのでどうでもいい。
「ミストも同じ理由で―ミスト―って呼ぶんだよ。ちなみに今日から僕は君のお世話係だからよろしくね。」
「世話?見張り役ではなく?」
「そうだよ、君は現状戦えない体だ。歯向かえない君の日常を見て楽しみたいバーン様は、君に―日常―を送らせるそうだからその積りでいてね・・・・とはいえできる事は多寡が知れてるだろうけど・・・」
「そうですね~。」
キルの説明にティファは色々と思うところがあるが、強者の余裕なのではなく、本当に戦えず、それどころか自力での逃亡も不可能な自分を娯楽にすると言うバーンの酔狂さに苦笑が浮かぶ。
まぁその酔狂さに自分の命が助けられたのだから文句はない。
そもそもこの砦も本来のバーンパレスの姿を晒して敵が来ても近づけない結界を張りながら飛んでいるのだから動けても逃げられないだろうが、其れは兎も角として
「分かりました。よろしくお願いします。キル・・・ミスト・・・」

疑う事よりも敵であっても相手にも善意があると考えるティファは早速世話になる者達に出来得る限りの笑顔で挨拶をし、これが奇妙な捕虜生活の幕開けになった瞬間であった。

・・・・こいつよく今まで他者に食い物にされずに無事であったものだとミストが本気で感心した瞬間でもあったりする。

奇妙な日常

馬鹿馬鹿しいほど穏やかで緩やかで間が抜けたような再会だったと言えようか。
戦場において自身と父親とその仲間をズタズタにして殺し掛け、現時点で地上消滅を目論みもうすぐそれを実行しようとしている自分に掛けて来た再会の言葉が

「おはようございます大魔王。―時間―が来るまでお世話になりますのでよろしくお願いします。」
声音はまだ弱いが、キルに抱きかかえられたまま穏やかな挨拶からくると言うのはどうなのだ？

キルの？ルールを信じ込みバーンと呼び捨てにしては来ずとも、これまでの経緯をもってしても憎しみの念も何も持たない・・・・そのような者が存在するとは・・・

ティファは自力では全く動けない。別にバーン達が体に細工をして訳ではなく、肉体の九割が死んだのをザボエラの素早い治療のおかげで、三割回復したとしてもまだまだ完治には至っていない。
蘇生装置は特定の種族達を―死―から蘇らせられるが、肉体のダメージそのものを完全回復するとなるとそれなりの日数を要する。
クロコダインが短期間で抜け出た後もボロボロの体をおして動き、ダイ達を救わんとヒュンケルに肉体を貫かれてもその後完全回復に至れたのは、ティファが刺されて穴の開いた腹部に万能薬を流し込み、自身の生来の凄まじい回復力を補佐する様な爆発的な回復力に繋がったのだ。
だが生憎ここには―今のティファ―の肉体に合う回復薬は無く、無能と誹られても今回ばかりは仕方がないと腹を括った保身一択で生きて来たザボエラが素直に白状した。
既存の薬や蘇生装置ではティファの体をこれ以上は修復は不可能

である事を。それこそアルキード王国の消滅と共に消え去ってしまった世界樹の葉か雫でもない限り無理だと。

長年富ではなく名声や喝采を欲し、自身の注目集めに一心不乱であり、誰を何をどんなことでも、其れこそ身内であろうが己に対する評判さへ犠牲にしてきた研究者の初の敗北がティファであったのは皮肉というほかない。

ティファ自身がこの男を死ぬほど嫌い抜いているのでそんな事態になっていると知ればざま見ろと拍手喝采している。例え己の肉体が完治する道が遠のこうともだ。

何と厄介な小娘だと歯噛みする一方で、これ程のダメージでも死ななかったティファの肉体を研究すれば、更なる力を自分も手に入れられるのではないかと実験しようと手始めに採血しようとしたところにキルがやってきてティファを治療班から引っぺがした。

治せないんならもうここには用はないよね～。

強者特有の弱い者を自然と蔑むような視線と小馬鹿にしたような声音にで放たれた言葉に血が凍りかけたが、言われた内容も事実なので癪であるがその通りですと言う言葉と愛想笑い一つ浮かべたザボエラの見送りを受けたキルは、ティファを用意しておいた部屋に連れて行き、ほどなくしてティファは目覚めた。

キルの嘘ルールを完全に信じたティファに呆れたミストはそのまま部屋を出た。主と、業腹だが主の命令でティファにも同じ朝食を出す支度をする為に。

残されたティファは当然自分で着替えられないのでキルに着せ替えて貰わなければならない。普通ならば、顔を真っ赤にして拒否するお年頃なのだろうがあいにくティファは普通とは無縁に近い感性をしている。ツルペタな自分にそんな気を起こす者はいないだろうの思考のもと、よろしくお願いしますと自分から頭を下げて頼みだす始末である。

キルはルンルンでクローゼットを開け、―どれ―を着たいかティファの前に差し出した。

服の数はざっと見ても数十着はある。主にドレス系が多いが、ちら

ほろとキュロット系もあった。
全部自分の手作りだとキルは嬉々として言っているが・・・・
「あのキル・・・その、私自分のリングに―着替え―持って来てありますよ？水色のリングの中にあったのは見ませんでしたか？」
今回の戦いでは捕虜になるのが予定であったティファの持ち物の中にはばっちりと着替えも入っている。
服がボロボロになってもいいように、長期で拘束されてもいいように下着はそれなりの数を入れてきている。
それを見つけた時のミストは、暗黒闘気の集合体でなければ胃痛で死んでいたかもしれないレベルで呆れ果てたのは言うまでも無く、報告を受けたバーンは本当に頭痛を起こし、その傍らでお嬢ちゃんらしいと大爆笑していたキルにも匙を投げたくなり、頼りになる影に胃痛を訴えようかと思った程であったが、其れは兎も角。
「あれでしょう？普段着とあまり変わらないようなスカートとベスト、シルクの長袖ブラウスとシルクの長ズボン。
駄目だよ、これから君は魔界の神様と朝食を摂るんだからそれなりの支度をして前に出ないと失礼だよ？」
これはキルの嘘でも何でもない。貴人の前に出るのにあの服は簡素である以前にみすぼらしい事この上ない。
あれが布装備の中で最高装備のみかしわの服やカールで作られる破邪の効果がある布地や、人間界では高評価のパプニカの布地で作られた上等なローブであったなら考慮の余地もあろうが、ティファの持ってきたのは旅人の服と同じ効果しかない何の変哲もない服であり、貴人の前に出るには格が足りないのもいいところだ。
ちなみにティファが戦闘時に来ていたのも同じ布地であり、よくもまぁこんな代物を着てハドラーと激突をし、魔界の神の裏を掛けたものだと心底呆れたものだがそれは置いておいて、相手が敵の最高司令官であっても、理由があるとはいえ好待遇で扱われるのだからその辺のマナーは守られて然るべきだと言うのがキルの持論であり、ティファもなるほどと頷けるものが確かにあるので御着替えは完全にキ

ルにお任せした。
戦いに必要な知識はあれど、貴人との食事の為のドレス選びなんて知らないのだから丸投げは仕方がない。
お任せされたキルが選んだ見た目簡素でも艶のある七分袖の空色のドレスに着替えさせられてティファは、そのままキルに抱えられて空間を通り、その先にいたバーンに早速挨拶をしてバーンに苦笑されたのであった。

食事は穏やかに始まった。ティファはティファで、戦場でされた事、これから起こる事の全ての決着は最終決戦で晴らすべきだという持論のもと、戦場外で諍いを起こそうという気が無い。
―下―の大騒動も無論知っている。ピラァが落とされているが、―全ての生き物―が逃げおおせている事も知っているので通常運転で行ける。
六芒星は、―自分達―の未来の為にも必要である。
これが成功すれば、もしかしたら今後魔界からの侵攻に怯えずに済むかもしれない。少なくとも見えないところからの攻撃はなくなり、訳の分からない内の蹂躙はされ無い保証はできる。
その為にも土地と生活を捨てさせているが、―詫びる方法―も考えている。
酷い話だが、滅びを目の前にした死に物狂いの敵と戦う未来よりは幸先はいいはずだと。
対してバーンの方も大体の思考はティファと一緒であり、使いどころの決まったティファの命を脅かす気も無ければ騒ぎ立てる事も更にない。
情報収集をしようとも、生憎ティファの体が弱りすぎて術が掛けられない上に拷問してもティファが吐く者では無いのは承知なので無益な事をする積りもない。
似ているのだこの二人は
思考も立場も何もかもが。
同じような持論を持ち、同じように世界を背負って戦っている自覚

がある者同士。
違いがあるとすれば、ティファは背負っているものがあるものの、目的の為であっても非情にも冷徹になる事もできず、それどころか敵の事にまで心を配ってしまう底抜けのお人好しで賢い愚か者。
対してバーンは目的のためなればいかなる手段も問わず、兵士を駒にし己の心情が痛もうとも非情な手段をとる事を厭わない。
これは時間が約束されている地上育ちと、時間が尽き掛けている魔界育ちの差なのだろうかとミストは見ている。
つまるところティファも所詮は楽園育ちの甘い者・・・・と、片付けられない。
ティファの魂は、どれ程の目に遭おうとも穢せないのだと―昨夜―で思い知らされている。
主が眠りしティファにどれ程の暗黒闘気を注ぎ込み、その都度ティファの魂に取り付こうと試みて潜ったがティファの魂は白きままであり、輝きが損なわれる事無く取り付こうとした自分を跳ね返す事も消滅させようとする事なくその場に留まる事すら許す気配を発していた。
無限の優しさなどお伽噺でしかなかった筈が・・・・
その報告を主にした直後に、ティファを堕とし眷属にする事は断念された。

そのティファは今キルの膝の上でパン粥を食べさせられている。
腕が動いても手は曲がらないので仕方がないが、これでは赤子だとティファは真っ赤になって半泣きしているが、あれは赤子と同じだとミストは結論に至った。
赤子とは次に何をするか分からない理解も予想も不可能な生き物だと。

その様を見ながらバーンは愉しげに朝餉を平らげていく。
クルミのパンにブドウパンを半欽づず・・・・鮭のムニエルにポーチドエッグサラダ、肉料理はローストビーフ系かな？一塊を少しずつ

切りながらも平らげてる・・・この人本当にご老人？
バーンの健啖振りに、ティファは見ていて唖然としている。
その視線に気が付いたのかバーンは顔を上げた。
「ミストの料理はいかがであった？」
自分とは違い、パン粥だけのティファに感想を問うた。敵から手ずから食べさせられているのにも拘らず、毒の心配もしていないのかあっという間に平らげていたが。
「美味しかったです。」
簡素であるが故に、其れが世辞でないと分かる一言を言った後、ティファはバーンの傍らで給仕するミストに顔を向け、御馳走さまでしたと頭を下げた後、うとうととし始めそのまま眠りの底へと落ちていく。
お前にそんな言葉を言われる覚えはない、全ては主の采配だと毒づこうとした言葉をミストに飲み込ませたまま。
「・・・キルは兎も角そちは苦労しよう。」
礼を言われて困惑しているミストに、バーンは苦笑しながらも不吉な予言をする。
果たしてそれは当たってしまうのがミストの不幸であった。
眠ったティファは部屋には戻されず、バーンの膝に留まることが多いのが原因であった。
今後の作戦も見据え、パレスのゲートを通って続々とくる魔界のバーンの配下達が謁見をするたびに、ギョッとして主の膝の上にいる者をまじまじと見て口をぱくつかせる者を、あるいは冷や汗を流してしどろもどろになる者達を見る度、痛みを感じない自分の体は便利だと、主の傍らで不心得者がいないかを睨みをきかせながらも思考は現実逃避させるミストであった。
そんな感じでティファを捕らえて二日が過ぎた。
主と朝食ら始まり、アフタヌーンティー、に昼食、夕食も共にするティファはその度に着せ替えられてはパン粥一杯の生活をしている。
余り回復されない為にも、その位で丁度いい。時折デザートを主が挙げている程度だが、それを素直に食べて喜び、少しずつ起きている

時間も伸び始めた中で、とんでもない提案ティファになされた。
食事前に何かを歌えと
聞いたティファは面食らったのは当然であったが、その後の対応もとんでもなかった。
敗者の歌姫にさせられるという屈辱も感じていないのか、捕虜の身でここまで食べさせてもらっているのだから、礼になるかと受けたティファもティファである。
パレスには幾ばくかの楽器があるが、ティファの金のマジックリングにも入っており、そちらが使われた。
主に二胡かシターンの様な弦楽器で心地のいい歌を一つ、昼食の時にはそれを聞く者たちが主の私室の周りに群がる始末。
ティファの歌声は甘く、特にその性のせいか魔族達の耳には一際心地よく響き渡っている。
その待遇といい、ティファの穏やかな雰囲気とバーンとキルの接し方の態度も相まってたったの二日でティファは、誰が言い出したのか知れないが、ティファは魔界の高貴な家の出か、それとも—魔界の神の御落胤—ではないかという者が出る始末。
ティファの丸い耳が、黒い髪で隠されている為に見えない為に発生したとんでもない誤解。
その誤解をミストが速攻で解こうとするのを、バーン自身が笑って止めた。
そのまま誤解させ魔界の者達に大切にされればされる程に、ティファの—人間の中での居場所—が奪われて行くのだからと、冷酷な言葉を優しい笑みで告げる主に背中が震えてしまった。
ティファを愛しみながら、ティファとその仲間達を地獄の苦しみに落とす策も着々と進めている主。
主の腕の中で微睡め、そうすれば残酷な目に遭わずに済むだろうと主の腕の中で眠るティファに心の中でミストは願う。
主が気に入ったものに酷い事をしなくて済む様に。
そんな様々な思惑と策謀が周りに漂う中、目が覚める時間が増えた

ティファは少しずつ魔界の者達と顔見知りになった。
戦闘タイプのものからザボエラの様に後方支援が得意そうな者まで。
中には魔界の料理長をしていると言う双子の姉妹にも会って・・・・可愛い子がいるときゃいきゃい言われ、珍しく一人でベッドにいた時に突撃掛けられて撫でまわされキスの嵐が降って・・・・逃げる逃げられない所をキルに助けられて大泣きしてしがみついてしまったのは黒歴史・・・・

そんな中、ハドラーと同じ肌の色と黒い文様が顔にある魔族の男と、その配下達と出会った。

黒炎とその配下達

バーンパレスには外見では分からない建物がいくつもある。
真ん中はバーンの居城内区でバーン専用の調理場があり、その周りは軍用の台所や食堂がある。
少し離れた所には憩いの場が幾つか点在している。
その一つに、緑の肌をした魔族の男が配下を連れて訪れた。
入り口にはそこそこの結界が張られていたが男はものともせず無造作に破り、中へと押し入る。
その中には地上の南国植物が所狭しと生えている庭園であった。
少しでも主の慰めとなるべく、枯れても落葉しない南国の植物を提案したのはミストであり、以来個々の一切を取り仕切っているのも彼だった。
この場所は、パレスが死の大地に埋まっている時でも採光が取れる様に崖に見せかけた穴を大地に大きく開け、入ってきた光を余すことなく植物にいきわたる様に最近までは庭園は内側に向けた鏡張りで出来ていたが、このほど地上に出るので鏡は不要とすぐさまガラスに取り換えてあり、直ぐに改修された庭園を主はさらにこの場所をお気に入りにしたようで、ティファとのアフタヌーンティーは専らここである。
つまりここは魔界の神のお気に入りであり、無断で押し入れば死が待ち受けているのを男も付き従っている者達も気にした様子は一切なく、奥へと歩を進めている。
途中のバナナの生地を物珍し気に見、行きかう鳥を見ているが歩みは止めずに奥へと進めば、少し小高い丘風に作られた場所で寝ている子供の姿を見つけ、先頭の男の顔に笑みが広がる。
眠っている子供は長い黒髪で顔の半分が隠れている。だが間違いない、見たいと思っていた勇者一行の捕虜だ。

昨日からティファは一人で寝かせられる事が増えた。もともとそ

れが当たり前だろうと言われればそこまでだが、起きる時間が増えたティファの耳に機密が入るのは好ましくない。切れ切れの断片的な言葉であっても、どのような方法か分からないが―正解―に辿り着かれでもしたら目も当てられない。

一種出鱈目な所があるティファの対応には苦慮させられる。しかし牢に入れて放って置く気も無いバーンだが、かといって下手な所においてまたあの双子の料理長に狙われたら今度こそティファが暴走する可能性もある。

双子はいわゆる―百合―であり、其れも可愛い女の子を好む。唯一の例外は全ての物ごとに対してストイックで軽薄さが一切ないミストの命令だけは一応聞く。

大魔王であろうが時に料理の事では一歩も引かない変人ぶりをバーンが愛でているので罰するのも難しい。

ミストを巡ってキルとは天敵であり、更にその上ティファが襲われた事でキルの機嫌の悪さも一気にマックス化している。

・・・・最終決戦前に身内で大爆発させるわけにもいかず、折衷案としてティファも好きで大魔王とその最側近以外が立ち入れない庭園の最奥でティファは丸まってねむっている。

体を丸めて眠っているティファが、何かを感じたのか身じろぎをした次の瞬間、薄っすらと目が開きだした。

ぼんやりとしか見えないが気配で目の前にいる人数が分かる。

人数は七人、その内の六人とは比較にならない強さを秘めた者が一人いる。

「・・・・だれ？」

薄っすらと目を開けたティファが目にしたのは、ハドラーと同じ肌の色とかおに似たような黒い文様があり、赤い髪を逆立てた偉丈夫な魔族の男であった。

「お前がティファか？」

ハドラーとは違うかすれた声だが、ティファとしては嫌な気配を感じないので億劫だが頑張って頭を上げて返事をする事にした。

「そうです・・・こんな格好でごめんなさい。まだ体を起こせないので・・・」
　話すのすら辛いが、返事をするに値する者だと感じたティファは懸命に言葉を押し出す。
「お前が捕虜で体の事情も全て知っている。それでもお前を一目見たくてこうしてきたのだ。」
「・・・なぜ？」
　こんなズタボロの自分をわざわざ見に来るとは物好きな人だ。
「私に用が？」
「違う、―ハドラー殿―が執心されたものがどの様なものか気になったのでな。」
「・・・・ハドラーの・・・知り合いですか？」
「ふっふっふ、知り合い・・・知り合いか。それは少し違う。ハドラー殿を光とするのならば私は影だ。光と影は同時には存在できず、出会えばどちらかの消滅を意味する・・・・私はずっと影の中で動く積りであったが・・・・光りは何をとち狂ったのだか・・」
　奇妙な物言いに訝しんでいたティファは、それでも後半の部分は何となく分かった。
　この炎の様な魔族は、ハドラーが魔王軍を離反した事によって急遽表に出された者だと。
「影・・・・あなたがハドラーの・・」
「ふむ、私達の存在は裏切り者たちも知っている筈だが聞いていないのか？」
　裏切り者、ヒュンケル達の事かな？
「聞かない・・・・ヒュンケル達は、魔王軍にいた頃の事を話したくないと思うから。」
「ふん！甘い事この上ない。なぜ自分達の有利になれるように事を運ばん。裏切り者であれば心象をよくしようと敵対する事になった軍の事等洗いざらい喋るだろうに。」
「・・・ヒュンケル達はそんな事しない・・・・父さんもクロコダインも・・・裏切っても大魔王達を倒そうとしてもだよ・・」

「それが甘いと言うのだ！よいか小娘、何事も勝たなければ意味がないのだ。負けていい戦いなどこの世に一つとしてないのだからな!!」
其れは一つの真理。勝たなければ、勝てなければ、負けてしまっては大切な者達を守れなくなる事を意味する。
目の前の男のいう事は正しいのは分かるが・・
「それでも、無理に言わせる気はないよ・・・・・」
自分もダイ達も、クロコダイン達は掛け替えの無い大切な仲間であり、共に背中を預け互いを守り合う存在だ。
「甘い事を言うお嬢さんだ。」

不意に、二人の会話に割り込んだものがいた。
紫色のローブを纏った神官風の男がティファと男の前に立ち、片膝を付いてティファの顔を覗き込む。
白いどくろの仮面のような男の目は空虚で、ティファがいくらのぞき込んでも底が見えない。
「こんな甘い魂など何の役にもたたぬ。私が魂を抜いてやろうか？」
見えないが、その瞳が冷たく光ったのを肌で感じたティファは直感が働いた
このまま何もしないのは不味い!!
「ジ＝アザーズ!!!!」
パッキン
何をされたのかは分からないが、相手が何かしらを仕掛けてきたのを結界が弾いた音がした。
「ほう、私の脱魂魔術をこのように防ぐとは・・・見た目と中身は一致しないと言うのを地で行く者とは興味深い。持ち帰って研究してみても・・・」
「止さぬか。」
術を破られても愉快気にし、嬉々として関わり合いたくなくなるような事を滔々として話す神官風の男の言葉は遮られた。
「ティファとやら、私はお前を憎む。」
その言葉に偽りはなく、男の目には明確な殺意を宿してティファを

見据える。
「・・・・初対面・・・ですよね・・」
　如何に今までの所業を思い起こしても、目の前の者達に覚えはなく、軍と魔界の邪魔をしているから憎むと言うには気配が生々しすぎる。
　この気配は、自分を知り尽くした上で憎んでいる。
「確かに直接的な相対はお前と私は初だ。だが貴様は・・・・貴様はハドラー殿を狂わせた!!」
「え？」
「貴様がいなければハドラー殿はバーン様の偉業達成の礎になる事に否やはなかった筈だ!!それを貴様がハドラー殿を誑かし、思考を狂わせた!!!・・・その罪は重いと知れ小娘。」
「・・・・・・・」
　激昂しミシミシと感じる圧力のすさまじさが、この男は自分とハドラーの関係をそんな目で本気で見ているのだと窺い知れる。
　これははっきりと言えば・・・
「ハドラーは・・・大魔王に・・」
「分かっている。」
　ティファはハドラーは大魔王の駒にされ敵対勢力諸共に殺されかけたのだと言おうとしたが信じられない言葉で遮られた。
「分かって・・・」
「そうだ、バーン様がハドラー殿を使ってお前達諸共にしようとした事等先刻承知だ。だがそれがどうした？我らが主の戦いには、魔界全土の悲願が掛かっている！その為に犠牲になれと言われれば我等は喜んでこの身を差し出す!!私とて勝つためなれば配下も、自分の命を使い切るのみだ!!」
「あ・・・・」
　己が命も、配下の命すらも投げ打つ・・・・その放たれた言葉に嘘の音は無く、目の前にいる骸骨のような男を見れば小さく首を縦に振られた。
　見れば男の後ろに付き従う者達の目も力強く光っており、覚悟のほ

どが見て取れる。
この男の言葉に偽りがないのを示さんとばかりに。
パンパンパン

その言葉の重みに思考も弱っているティファが引きずられかけた
その時、気の無い拍手がその場を破った。
「ご高説大変結構。」
拍手をしながら空間を開いて出てきたのは
「これはこれはキルバーン様。我ら影の前に現れるなどいつ以来か。」
「見せ掛けのへりくだりはいらないよ。君達が従うのはバーン様だけだ。僕に興味もまして敬意も無いんだから挨拶はいいからここから出ていきなよ。」
「つれない事を・・」
「だらだらと居てバーン様の不興買いたいなら居ればいい。今のご高説でそれなりに気をよくしてこの庭園への無許可の立ち入りは許していいって言われて来たけど、長居するなら話は別だ。」
男達を牽制しながら、青褪めているティファを抱き上げしっかりと守る様に胸に抱え込み、厳罰を下される通告を出す。
「ふふ、その娘の死は決定事項であるのに随分と・・」
「それも—お前達—には関係ない事だ。影らしく日陰に戻りなよ。」
「冷たい事を。そこまでいわれては引きましょう。行くぞお前達。」

どうやらキルも相手も互いを好きではないようで、一触即発の空気が漂いかけたが、一笑して配下に声を掛けながら踵返し庭園を去っていった。

まるであの人は炎のようだ、其れも自身が汚れても構わないと言い切る情念は黒い炎の様であった。
ハドラーの印象は風
時には小さな木枯らしで人々を困らせ、時に人を癒す優しい風を吹かせ、時に何もかもを壊して吹き飛ばす竜巻のように自由気ままな風

のような人
対してあの男は身内を温めるが、時にその身うちすら薪にして主を守らんと豪炎となりて、敵対者達を燃やし尽くさんとする炎の様な苛烈な気配を感じた。
光と闇、互いに交わる事は無いと言っていたが、風と炎は相性がいい筈だ。
あの男は、裏切ってもなおハドラーに殿と、敬称をつけていた。
どうやら自分はハドラーを大切に思うか、少なくとも尊敬している相手からの恨みを買ったようだ。

「ごめんねお嬢ちゃん、もう僕が絶対に君から離れなくていいようにバーン様に進言するからね。」
ティファの思考の為の沈黙を、怖い目に遭って沈黙したと思い違いをしたキルは、ティファに詫びながら慰める。
赤い瞳がどこか泣きそうで、その様がティファにはおかしく映って少し笑ってしまった。
双子の料理長、アンリとセシルに迫られたのも、こうして所用で出ているキルの不在を狙われて来ているのだからキルの心配も分かるが、処刑確定の捕虜に対して少し過保護が過ぎないだろうか？
「大丈夫ですよキル。」
「・・・・そうかい？」
「はい、そうです。大丈夫ですよ。」
キルの心配を他所に、ティファは大丈夫だとにこやかに告げる。
何せ自分は戦い慣れているうえに殺されかける事も、殺したいと憎まれているのにも慣れているのだから。

ティファが内心で物騒な事を考えている時、庭園に押し入った男はティファの力の一端を知り冷や汗を流している。
ティファの魂を抜こうとした脱魂魔術は、この秘術が編み出されて数千年間発動前に破れた事は一度としてない。
破れるとすれば魂を取り返されるか、術の途中で術者が殺されるかのどちらかしかなかった。
其れとは違う方法で、あれは破れたというよりは弾かれていた。

他にどんな能力を有している。

ティファに宣した通り、大魔王を勝たせる為ならばどのような方法であっても敵の情報方を掴み取る。
不意に何かを仕掛ければ、防ぐ為に能力を発動するのは常套手段であり、ハドラーの事を持ち出せば怒りに気配を感じた。
他にティファのパーソナルデータもいくつか穫れ、実のある接触だったと自然と笑みが零れる。
男達がティファに接触をしたのはその為。ハドラーの事を繰り言を言いに行ったわけでは決してない。

全て自分達が勝つ為に。

豪魔軍師・ガルヴァス

皮肉なものだ、光りたる表の軍団が次々と撃破され、その中においてハドラー殿は失意に落ちる事無く、寧ろ己を更に高みに上げて遂には超一流の戦士になったのだから・・・其の力をもっと早くつけてくれれば魔王軍は今頃世界征服を果たしていただろうに・・・

ティファとの邂逅を終えて部下を引き連れ下がらせた自室でガルヴァスは一人溜め息を吐く。

自分はハドラーと時を同じくしては大魔王に拾われた。

ハドラーは地上で勇者に敗れ、自分は魔界の権力闘争に敗れ死掛けた所を。

命を継がれ目が覚めたと自分に、最初に掛けられた言葉は―影―として生きる事。

これから作る魔王軍の六人の団長とそれを束ねる魔軍司令官も決定している。

その軍団と指令が赴けない所に、影達がカバーする様にとの仰せだった。

聞いた時は憤然とし、腸が煮えくり返る思いは今も忘れていない。生かされたことは確かに大恩あれど、尊厳迄踏みにじられる事になろうとは・・・・

何時か―ハドラー―とってかわる積りであったのだがな・・・・

初対面の時は実力も中身も自分とさして変わらない者であった。・・・認めたくはないが小物感も似通っていたな。

そのような者の一歩後ろの影に入れられたのだから野心を持つなという方が無理であろう。

だが、ある日を境に突然ハドラー殿は変わられたと耳にし、超竜軍団の長バランが敗れたタイミングで完全に一人になった時に会いに行った。

変わったといえど、この事態にはさしものハドラーも焦燥感に駆ら

れて悄然としているか焦りで醜態を晒しているかと思えば、そんな素振りは全く見れず本当に驚いたものだ。
容姿は髪を撫でつけてとさかが無くなり、それを除いても纏う気配すら変わり、威厳が増していた。
何を言われたわけではない。会いに来た自分を見た時も口うるさく言わず、どうしたと一言問うてきたのみ。
自分はあの時何と答えたか覚えておらず、気が付けば自室に戻って・・・・違うな、あの時俺は逃げたのだ。
それまで自分と同格か、手段を問わずに戦えない見識の狭い甘い男だと侮っていた男の突然の変貌ぶりに打ちのめされて。
苦悩する俺に、十数年振りに大魔王様直々のお言葉を掛けられた。
以前より妖魔司教ザボエラに研究させていた、完全生物になってみないかと。
表の団長たちは次々に敗れ、それどころかフレイザード以外は勇者の下に集い魔王軍に反旗を翻していたのは知っていたが、あの人間を憎むバランまでもが―人間と敵対を二度としない―と宣したという。
其れは不味い！
その原動力が無くなれば、あの者は遠からず他の軍団長同様に魔王軍に反抗しよう。あれの子供達こそが勇者なのだから。
聞けばその勇者の妹によって軍団長達は改心後に仲間達との絆を深め、以前以上の力を発揮し、バランを完全改心させたのもその者であると。
近いうちにその者達と激突をするという。その前に、―影の軍団―を俺も含めて強化したいのだがどうかと問われて二つ返事でその命を受けた。
すなわち完全生物の力の一部分を移植する事。

影の六代将軍は、表の六団長と違い弱い。
それを補う為の【豪魔六芒星の魔宝玉】を与えたのだが、親子の情に流されたであろうが、超竜軍団の長を下せるような勇者相手に勝てる見込みは無い。

とは言え完全改造している時間も無いという。聞けば超魔生物の研究はこのほど完成され、完全超魔生物に改造できる素体数は一人分でもうハドラー殿が使っているという。

だが一部分の能力で超再生能力は授けられずとも超竜将軍・ブレーガンに物理耐性が高い皮膚を、戦士系の百獣将軍・ザングレイと魔影将軍・ブレーガン、そしてベグロムは二つ目ではあるが物理攻撃の高いトロルキングの筋力を、妖魔将軍・メロネーには己の命を削るが魔炎気を発せられる核を埋め込まれた。デスカーレと魔影将軍・ダブルドーラは特には内臓改造は施される事なく終わったのは、それ以上の戦力増強ではなく、持っている能力と使いどころを研究班と共にみがけとのおっ達しであった。

そして私も含めた全員の体に黒水晶が埋め込まれ外から暗黒闘気を補充できる体となった。

私自身は筋組織の改造と皮膚の下に物理防御の高いフォレストドラゴンの皮膚を埋め込まれた。・・・・流石に外側では魔族の姿を捨てる事になり美学に反するので難易度が高く、失敗すれば皮膚定着すらできないと言われたが成功して何よりだ。

そして課題も出され、暗黒衝撃はを完全にしろとの事であった。あれは暗黒闘気の技の中でも、闘魔滅砕陣や傀儡掌、最終掌をも上回れる爆発的なパワーがある。扱いきれない己の未熟を何とかしろと言われ、魔界に戻され瘴気が濃く、バラモスクラスのバケモノ級しかいない場所に放り込まれ、命懸けで会得をしてきたが・・・・戻ってくれば、表の軍団は実質壊滅、ハドラー殿も離反したという言葉を聞いて、元凶に会ってみれば・・・・・・あのような小娘にうつつを抜かしおって!!再会した時はハドラー殿をズタズタにして説教三昧にしてからバーン様に執り成しを願うか・・・・

これまでの実績も鑑みて命だけはとりとめて欲しいものだ。

再会が待ち遠どおしい。

見落とし

・・・ここの人達の私に対する扱いと呼び方がおかしい・・・・

ども、捕まって四日目のティファです。

魔界側の魔王軍支部・双子の料理長、アンリさんとセシルさんが私が捕虜と知ってもティファちゃん呼びをしてきて、こっそりとお肉料理やらプティングやら美味しくて栄養満点なものを差し入れて貰ってからの半日で、体の半分は治ってら。

ちょっとだけ・・・・お散歩しても良いよねと、キルとミストの不在狙って居室区域の外出て最近できた―お友達―の部屋の前でへたばった。

「・・・・何してるんだム～ン？」

「いや・・・・お散歩？」

「なんでそこで疑問形なんだよ？本当にお前さんって奴は・・」

「う！これキルとかにばれたら不味い!!―ガァちゃん―!!今からお部屋に―ゲート―・・」

「もうアウトに決まってるでしょお嬢ちゃん。」

「ひぎゃ!!!」

「―逃亡罪―付けられたいの？」

来ちゃったよ！こっそり戻ろうとしたら、キルってば私の真後ろに空間あけて、瞬間で捕獲されてしまった!!

あう!!一昨日知りあって―お友達―になった、このパレスの魔力装置を制御しているモンスター・ドラム―ンを、バーンが鬼眼の瞳の力で進化したゴロア君と、魔界とこのパレスを繋げる―ゲート―の番人をしているガーゴイルの―ガァちゃん―こと・・・本名はガァグラウンスさんなのですが！言おうとすると口が回らないか舌を噛んじゃうのでガァちゃんで許して・・・・貰ったのかあれは？

な～んて現実逃避してたら、怒りの気配振りまいてるミストも来ちゃったよ。

「・・・・・・・!!!!!」

うん、無言だけど何をどう怒っているのかは伝わるレベルの御怒り具合だ。
「あ～、ちなみにどのあたりで無断外出ばれました？」
言ってはなんだがここから私が置いて貰っている部屋からは十分、移動する距離はある。ちなみに普通に歩ければ二、三分だが、居室には確か結界張ってあったような気もするのだが・・・
「あれね、双子が君の部屋に突撃して無理やり結界突破してるせいで緩みまくって用をなさなくなったから、今バーン様自ら張りなおしてたよ・・・・あいつ等の首堕としておくか・・」
あ～あ、いつでも冷静で優雅さを忘れないキルが遠い目をしながら殺気立つほどあの二人とそりが合わない!!
私が一昨日あった時もそんな感じだったっけ。
その時の事をミストも思い出したのか、重たい溜め息を吐く。ちなみに逃亡がばれていたのは、へたばった私を心配したゴロア君が大魔王に念話でお知らせしたせいだとか。
後で大魔王からも罰喰らうかね。
一昨日の双子みたいに苦笑で済んでくれたら嬉しいのだが。

一昨日
パレスに備蓄している主の食材が切れた。
これまでの食べる量に、プラスして一ヶ月分もストックしていたのが底を尽きかけた。
原因はダイ達との激闘で弱った体を直す為に普段の倍ずつ取られていたのだから無理はないと思いたいが！原因というか要因はもう一つある。
捕虜にしたティファと食事を摂っている事も挙げられるのが癪に障る。
ティファが食べている訳ではない。ティファは今パン粥をスープ皿一杯で終わらせている。瀕死の後で体に障る事もさることながら、

回復されてちょこまかとパレスをうろつかれるのは不都合であり、ならば手足の腱を切ればいいと言う者がいようが、主は初の捕虜にそんな無粋な真似をする気はなく、代案で体の回復力を阻害する方法がとられている。
　つまり実質食料を食い尽くしたのは主なのだが、その原因がティファと話して食べていると普段よりもおいしく感じるのでついたくさん食べてしまうとか。
　今まで数多の上級貴族や、属国にした王族達との会食でもそんな事は無かった主が、食事が楽しいと、楽しみだと言われて喜ばぬ料理人など居るまい。
　何を命じられた訳ではないが、私も自然と多く作っていたのだから食材が尽きかけて当たり前か。

「キル、魔界に行く。」
「分かった、不在時のバーン様の身辺は任せてよ。」
　こいつのこういうところは本当に助かる。私の一言で十を知り、更に今主に手を出せる者がいる訳ないなどと言う寝とぼけた慢心など皆無なのだから。
　主の周りを守るものは、常に最悪を想定して動いて然るべきだ。例えば天界からの刺客、あるいはヴェルザーが突如封印を破り直接ここに乗り込まないとも限らん。
　様々な想定をしてキルも私もバーン様にお仕えしているのだ。
「直ぐに戻ると思うけど見送るね～。」
　キルは転移装置―ゲート―まで付いてきた。胸に目が覚めている小娘付きで・・・
「・・・・・・おい・・」
「あ！御免なさいミストバ・・じゃなくてミスト。魔界に行き来できるゲートを見てみたくてキルにその・・・」
「いやぁ～、可愛いお嬢ちゃんが、更に可愛い顔になってお強請りしてくれたらね～。」
　何をとんでもない機密を敵に晒しているのに相好を崩しているの

だこの馬鹿は!!!!

前言撤回だ!!こいつはほぼ困った奴だ!!

「ちなみに動かし方も仕組みもお嬢ちゃんには分からないし使えないし、最終戦ではゲート自体を転移させるって言っていたから今見られても困らないって言うバーン様のお墨付きは貰っておいたよ♪」

どうして小娘の事で馬鹿になるのに他の事は有能なのだこいつは!!!

ミストが内心でむしゃくしゃしながらゲートに近づけば、何処からともなく一体のガーゴイルが飛来しゲートの上にとまった。

「これはミストバーン様。行先はバーン様の直轄地でよろしいでしょうか？」

ガーゴイルは大魔王の側近で宰相の地位にもいるミストに対して慣れた容姿で少ししゃがれたような声を軋ませながら行先を気軽に尋ねる。

このガーゴイルもまた古参であり、キルより少し古い頃からバーンに仕えているので今更畏れ入る事は無い。

「おんや珍しいですねキルバーン様もお見えとは。普段はご自前の空間使って、あっしの守るゲート来ることなんてないで・・・・・・」

キルの姿に物珍しそうに見ていたガーゴイルは、珍客のキルよりもその腕の中に居る生き物に驚いた。

パレスが死の大地に埋まっている時もゲートは稼働され、必然ゲートキーパーのガーゴイルもハドラー達に知られずにひっそりと地上にいた訳だが、キルの腕の中に居る―女の子――・・のようなものの存在は知らされていないので面食らった。

「あ！すみませんご挨拶もせず。初めまして、私は―捕虜―のティファです。近々起こる大決戦の日までお世話になりますのでよろしくお願いします。」

「は⁉捕虜！・・・・お前さんがかい？」

ティファの馬鹿ッ正直な身分明かした挨拶内容にさしものキルも苦笑し、ミストは胃痛になるが、ガーゴイルは違う意味で馬鹿なのかこいつはと思った。

その時ティファが身に付けていたのは、シルクの半そでブラウスにチェック柄が入った深緑のベスト、下も同じ布でこさえたキュロットに、黒の絹の靴下を優美な靴下留めで留められており、靴は少しかかとの高い黒革が輝くハーフブーツ。
高く結われている髪に付けられているリボンもシルクで、どう見ても貴族の子女だろう。
だが、話し方はしっかりとしているので馬鹿ではなさそうだ・・・・そうすると、奇人変人なキル様の新しいお遊びに付き合わされているのかこの子は・・・可哀そうに、捕虜ごっことか馬鹿らしい事に付き合わされているんなら仕方がねぇな。
「あっしはガーゴイルのガァグラウンスだ。よろしくな。」
「ガグラウンスさんですか。」
「ちげぇ！ガァグラウンスだ!!」
「ガァ・・・・った！」
「・・・・もいい好きに呼べや。」
少し崩した話し方をするガァグラウンスには、キルの行動は奇人変人に映る。主にミストにべったりとして揶揄って遊んで怒られて馬鹿だろこいつと見ているのだから、―被害者其の二―のティファに同情し、名前を教えて上げたのだ。
ほぼ自分と主にしか口を開かないガァグラウンスを見ても、ティファが相手になるとこんなものだと学習したミストは見ない事にしてさっさとゲートを通り、食材ついでに―魔界支部・魔王軍の料理長―をしている双子も連れ帰った。
二人は同じ赤毛に白い白磁のような肌の色をした、魔界でも美貌の双子として名高いが、キルとは違う意味で難物であったりする。すなわち自分以外に興味なく、主にはそこそこに敬意を示してくれるがそれ以外の事はせず、自分が与えた仕事以外は基本断ってくるという問題児。
その偏屈さを却って面白がった主の寵を受けているのも知ったうえで興味が無いという振る舞いを仕出かす・・・・・主は少しばかり趣味を見直してほしいのだが。

久方ぶりに会った二人に案の定絡まれた。文字どり前後から抱き着き、何が楽しいのか、自分の衣に口付けを降らして次第に興奮し、自らの興奮で極まり崩れ落ちる所迄がいつも通りだ。
「あぁ、久方ぶりのミスト様の気配が・・・」
「ええ、今日は冷たくなく―熱い―とは・・」
「「それもそれでそそられます!!」」
興奮しながらも、私の変化に気が付くとは流石だと思えるが・・・・私の周りにまともな奴が欲しいと思うのは贅沢なのだろうか？
今後のバーン様の予定と、それに伴い魔界に温存していた魔王軍を地上に呼ぶ事、その者達を飢えさせない為に来ることを命じれば二人はいそいそと乱れた服を直して早くいきましょうと笑いながら袖を引っ張ってきた・・・・遠慮もへったくれも無い。
溜め息を堪えてゲートを出た瞬間、一瞬だけ出口間違えたかと踵返そうかと思ったわ!!
ゲートの先に広がっていた光景は

「うっし、合ってました！次は―ガァちゃん―の番ですよ!!さぁ早くひいてください。」
「ティファ・・・そのな、ガァちゃんは・・・」
「だってさっきポーカーで三回勝ったら好きな呼び方していいってガァちゃん自身が言ってくれたんですよ。」
「そうだムーン。お前が言って、負けたんだから約束は守るんだムーン。」
「ゴロア君とお嬢ちゃんの言う通りだね。観念してその呼び方を・・・おやミストおかえり。」
足を組んで椅子に座り膝の上にティファを乗せて支えているキルが、ミストの帰還に気が付き振り返りにっこりと声を掛けて来たという・・・パレスにそぐわぬのほほんさ!!!
テーブルを囲んでどう見ても―ジョーカー抜き―に興じているキルとティファと・・・ゲートキーパーのガァグラウンスと、何故魔力装置の番人のゴロア迄もがいて遊んでいるのだ!!!

「いやぁ～待つだけってのも手持無沙汰でしょ。もしかしたらと思ってゴロア君見に行ったら暇そうだったからカードゲームして待ってたんだよ。」
・・・・・この馬鹿！なにをしれっと!!捕虜と遊ぶ馬鹿が・・・
「あら。」
「あらあら」
「「あらあらお邪魔な死神が。」」

ミストの怒りの思考は、双子の険悪な声音で停止した。そうだった・・この二人と
「・・・・ちょっとミスト・・なんでその二人連れて来たのさ。邪魔だから送り返してよ。何だったら今直ぐ―抹消―しようか？」

双子とキルは自分を巡って険悪な中で、其の日から双子がティファに一目惚れして更に悪化したのを思い出し、ミストの胃が爆発のカウントダウンを起こし掛けた。
ちなみにその日はティファも死にたくなった。
双子はどんな魔法を使ったのか、ティファ絶対死守のキルの腕からティファを掻っ攫って撫で回しながらバーンのもとへ行くという奇行を果たし、あらゆる意味で嫌になったティファは、人生初の悲鳴をあげてしまった。すなわち
「助けてください大魔王!!」
双子の様々なヤバさに負けたティファが人生初に助けを求めたのが大魔王となり、その様を愉快げに見たバーンは、双子の奇行を苦笑程度で許したのであった。
ちなみにティファはその直後にキルが空間から腕を伸ばして保護され、美味しいもの攻撃3回分は双子に毛を逆立て抵抗したが、四度めで、そこまで嫌わないでほしいという嘘泣きにものの見事に騙され絆され許してしまったというオチもある。

ミストはそのことを振り返りながらも、キルに抱きかかえられて

バーンの下にティファを連行している道すがら、双子の視線はばっちりと感じている。それどころか自分達に会釈する者の中には
「これはティファ様、お部屋から出られるとは珍しい。今日の昼食前の歌はどのようなものを？」
「よろしければ手前と合奏を。」
「お顔の色がよくなられて・・・」
等と親し気に話しかける者が続出している。
主と自分達の接し方と、ティファの柔らかい雰囲気と着ている物を見て、捕虜だと思う者がいないのは当然と言えば当然なのだが中には
「これは―おひぃ様―、ご機嫌麗しく。」
ティファを堂々と姫呼ばわりする者が出る始末。一部の者達は、ティファを主の御落胤などととんでもない勘違いをしている者がいるが、主も考えがありその噂を放って置かれているのでどうしようもない。
普通の挨拶には挨拶を返すティファは、おひぃ様の意味が分からず困惑するが、その度にキルが答える。
「君は―お日様―のような子だからじゃないの。」と
―その時―が来るまで、ティファには己の本性を知らせない方針もあり、キルはその辺を上手に誤魔化し隠せてしまう。
成る程、ティファの世話係にはキルが一番か。

ミストは―色々―と納得しているが、ティファも馬鹿ではない。
自分に向けられている視線が、どことなくリンガイアの、其れも騎士団と魔法師団と同じ敬意を払われて向けられる視線だとは気が付いている。
何故？敵の捕虜だとお達しが無くとも、何故子供の自分に？
・・・・自分は一体、何か見落としているのだろうか・・・・こんな訳の分からない事態を引き起こす程の何かを・・・・

仮初の果ては

あ！お空見てダイ兄！じいちゃんとゴメちゃんも!!嵐の後の大虹だよ!!ふふ、嵐すごく怖いけどこの虹みられると思うといいもんだね。

綺麗な星ですね～。ところで傷の具合はもう大丈夫ですか？どうせですからこのまま一緒に野宿しちゃいますね。お礼？薬の効能の評価だけでいいですよ～

夕日が凄く綺麗だよ船長!!このままあの夕日に向かって突っ走れ!!!

じいちゃん大好き!!ダイ兄も好き好き～。

―みんな大好き―

トプン

ここまでは見られるのだが、―ここより先―は・・・封ぜられている？違う、意図的に入られないように何かしらの術を施しているのともまた違う。

封ぜられているにしても、術を施しているにしても一体―誰の力と知識を使って、何時―他者の記憶を見るハイ＝エント、ヴレ＝アナリュシスに対する防御策を施されているというのだろうか？

夕食と軽い夜食の後に眠ったティファをバーンは自室に抱えて連れ込み、寝台に上げシュルリと着ている衣服を慣れた手つきで全て取り払う。

今まで寵愛を与えていた女達は全て自分から脱いで着ていたので衣服を脱がせるという行為はティファが初めてであったが、体格が小さく、半ば気絶するかのごとく深い眠りについて脱力しきっているティファの服を脱がせるのは造作もなく、脱がせ、自身も寝台に横たわり一糸纏わぬティファを抱きしめ詠唱を始める。

緑の蔦、銀の道筋を辿りて在りし日を咲かせ蘇らせよ、ヴレ＝アナ

リュシス

ハイ＝エント使いはそれぞれが少なくとも三つ、多くて五つの能力を有している。

自分は中間の四つ。

命を与える事、記憶を奪う事も操作する事も任意で返す事も出来る事、

任意の者も物も限定範囲内を移動させる事、そして最後が他者の記憶を覗けるこのヴレ＝アナリュシスの四つ。

今まで自分がハイ＝エントを使ったのは七千年生きてきたが、これを入れても九回。

一つはキルに命を吹き込み真なる生物の領域に高め、その事を忘れさせた事で二回。

後は全てティファとその周辺に使ったのみ。

もしもティファが最初自分が疑った通り、天界より使命を帯びて遣わされたっ者であったとしても、自分がハイ＝エント使いのハイティーンである事を知られている筈も無く対策は取れまいとティファの記憶に三度潜ってみた。

全てが素晴らしい体験であった。これまでティファが見てきた地上界の美しい自然、命の横溢に満ちたモンスター達の営みの中に混じり育ってきた事、出会いし者達との美しくも時に残酷な出会いの数々が、大戦前のティファから見られた。

神獣ガルーダの背に乗り世界各地の飛び立つ爽快感も心地よく、何処までも真っ直ぐに飛んで行く様は今のティファ其の物の様で・・・だが、ある所からは記憶が見れなくなる。

正確に言えば―黒い液体の様なもの―が記憶の空間に満ち、記憶が塗りつぶされ見れなくなる。

ヴレ＝アナリュシスは、無差別に記憶を見るものでは無い。発動詠唱後に、その者の中にあるであろう記憶のキーワードを入れれば―検索―をして見ることが出来る。

だがこの術は簡単には記憶を見る事は出来ない。大事な記憶程意

識の中にしっかりと仕舞われており、深層心理が働くのか―他者に見られる事―を拒絶する事が多く、無理やり見ようとすれば最悪は廃人となると文献には記されていた。
　そうなってはこれを堪能できなくなる上に、捕虜を虐待する主に見切りをつけ去る者も出よう。ミストやキル、ガルヴァス辺りは残ろうが、他に残って付いてくる部下などたかが知れているのでしない。
　ティファの情報を今日も暴けずに残念だ。

「雪白・・・ですか？それはですね・・・お宝洞窟に死ぬほど突撃を繰り返して何回も死掛けても挑戦して手に入れたのです!!!」
「ハイ＝エントですか？はりゃ、バー・・・大魔王も知っている術だったのですね。
　こちらも
　お宝洞窟の奥で出会いを果たして契約してもらったのです!!」
「いやぁ～中には魔界の料理レシピやお茶の淹れ方なんて言うのもありましてね～。持っていたらミストに是非見て貰いたいのですが、生憎とデルムリン島の我が家の本棚にありまして。」
「強い理由ですか？お宝洞窟に挑戦し続けた結果ですかな～。」
　起きて話している時に、他の話の後に何気なくティファに上記の物の出所や術を契約出来た経緯、強さの理由を問うてみれば、全部が―お宝洞窟―で片づけられて憮然としてしまったのは仕方がないと自分でも思う。
　世の中何もかもがお宝洞窟から出る訳がない。ハイ＝エントの術等は古代精霊でもない限り契約することなぞ不可能だからだ。
　そんな古代精霊と会え、若しくは神話級の武具をドロップするお宝洞窟など、其れこそカールにある破邪の洞窟など目ではなく、子供が一人で攻略しましたなどと絵空事以前の狂人の戯言に等しい。

ティファの―正体―を調べるべく、体力が戻るまで待ち、最初は―浅瀬―の何気ない日常の記憶から潜り、徐々に深度を深めていき、重要な記憶の底へと潜るが拒絶などの失敗ではなく、何かの力が働き突然記憶が真っ黒くなり見れなくなる。

日常会話からお宝洞窟の話の真意を掴もうとしているが、こちらも芳しくない。ティファは―会話―に長けている。

相手と話を愉しみながらも、言いたくない事をするりと躱し、言わざる得ない時も本当の事を嘘で覆い隠すのではなく、本当の事を―全て―言わない代わりに少しだけ話した後に、その話は終わりだとばかりに食事に手を付け、あるいは飲み物を飲んで―飲み込んで―終わりにさせてしまう。

会話を執拗に追うても意味が無く、直ぐに別の話になるのがお決まりと化している。

これはティファの前世と大いに関係している。

ティファはティファとなる前は死を待つだけの半病人であり、話す相手も自然と似たような入院患者か看護する者達となり、つまるところいつ死んでもおかしくないのをきちんと知っている者達とだけ。

会話をしても、未来の無い者達が暗い話をして精神を殺しても仕方がないと考えついたのが―禁止ワード―を会話の中で出した者をみんなでくすぐるゲーム。

―病気の話――死――希望が無い――いつ死んでもいい―など、後ろ向きになるワードはほぼ禁止で、それ以外の話を探す事が生きる目的になった者が結構な人数となり―ティファ前―の人生をそれなりに謳歌できるようになった。

一輪の花の話でもいい、出た特別メニューのデザートが美味しかった、新しく入った新人の子が鶴を折ってきてくれた等些細な事にも美を見出し嬉しさと喜びを感じられるようになり、自然禁止ワードも出なくて済む話の仕方をそこで身に付けたのが、偶然とはいえ己の秘密を守れるようになっているとはティファ本人は気が付いていない。

己の秘密を如何なる会話の流れでも出さない技術を身に付けたと

は当人はトンと思っていないからだ。
其れは苦しみも悲しみも全て同じであり、ティファが表に出すのは全て優しさで出来たものだけで、見せたくない物を隠す術にも長けていると言えよう。

だが、前世だの転生者だのがいるとは知識としても持っていない者達からすれば、いつかの時ダイが叫んだように―ティファが分からない―となる。
其れは魔界の神とても例外ではなく、黒い液体の事は天界とのつながりが全く見られないティファに作為的に施された術ではなく、ティファの強固な意志が見られることを阻んでいると結論付けざるおえない。
無論ティファに対して―天界からの刺客―説は捨てる気はないが、其れにしては自ら捕まるだの死に掛けるだのと言動も一貫せずにふらふらとしている。
敵を倒す傍ら敵と戦いたくないと泣き、敵を救うなどと言う訳の分からない行動をする者が天界からの刺客であるのだろうかと。

「・・・・・んん・・」
シーツもかけず、素肌のままのティファが身じろぎ、思考の海から引き上げられる。
目の淵は赤く、恍惚とした表情を浮かべたティファはなんとも愛らしい。
ヴレ＝アナリュシスは、記憶を覗き込める術だが相手に快楽と悦楽を与える。記憶を覗かれる事を拒む意思を、快楽を流し込み屈させる為なのだが・・・
するりとティファのなだらかな肢体に指を奔らせれば
「あぁ・・・や・・・いや・・・」

パチン
ティファは無意識に手を振り拒絶するかのように―黒い闘気―で

弾き返そうとする。
どうやらティファにはまだ快楽は早いようだ。その感覚をよいものだと受け入れるにはまだまだ幼く、そもそもこの術の対象者は大人を想定している事は容易に想像できる。
何処の世界の子供が、三界の決戦時に重要な立ち位置になるというのだ・・・・ダイかティファしか思い浮かばん。
大人を想定して編み出されたであろう術はティファには相性が悪く、無意識レベルでの抵抗が激しすぎるが故に潜り込む力を弱めているのも術が失敗する原因の一つであろうがもう時間が無い。
「明日に決戦の場所を告げ、四日後に激突をするか・・・」
こちらの地上消滅のスケジュールは最早決まっている。ダイ達を逃がしたが一つ目のピラァを落としたた日を入れた十日と。
ティファの正体が本当に天界よりの刺客だとしても最早変更する事は出来ず、後は対処法を万全にするのみ。
その為にキルのトラップ陣とガルヴァス達を筆頭とした人員配置を想定よりも三倍としたのだ。
全てはティファが引き起こした事に殺意すらが湧くが、そんな事とは露知らずにまたスゥスゥと寝息を立て始めるのだから毒気も抜かれてしまう。

このティファが、こちらに堕ちてくることは期待していない

どれ程仲を深めている様に見えようとも、結末が決まっている自分達の今の楽しさは所詮は仮初。
ティファも其れは承知で、時折話している最中でもぼんやりと遠くを見ている。
焦点が定まらず、微かに哀愁を漂わせ寂しそうな表情からは、ダイ達の事を恋しがっているのは一目瞭然。
体はここにあれど、心は勇者達の下に置いてきているかのように。
最早互いを殺し合いかねないキルも双子もその様を見るのを嫌うのは一致しており、ティファが勇者達の事を考えないようにあの手こ

の手で楽しませようとしても、日に何度か見る事になる真実。
故にこそ、ティファは殺さなければならない。
其れは肉体となるか、精神となるかはティファと周囲の――人間――次第。
「死して余のもとへと戻ればいい。」
太陽と、太陽の申し子の様なティファを手に入れる為にも、三千世界を朱に染めぬく。
その為の布告を、明日勇者達に通告をする。

地上か魔界か、互いの生存を賭けた戦の時間の始まりを告げる言葉を全世界に

駆け抜けろチウ①

チウはひたすらに走っている。
王城の長い廊下を駆け、途中階段を上ってまた長い廊下を駆けて行く。幾人かが自分に驚いて声を掛けてくるが、こちらにも急ぐ理由があり申し訳ないが立ち止まっていられない。
今が大戦という非常事態であるとはいえ、本来であればモンスターの自分が人間の王城に入れて貰える事自体がおかしい。
其れはひとえに自分が勇者ダイの一行メンバーだと認識してもらえているからであって、もしかしたら町中に入る事さえ許されないかもしれない身なれども、急いで行かないといけない!!

ダイ達が大魔王達に敗れて五日目の朝に、破邪の洞窟でミナカトールを習得し終えたレオナ達が帰還した。
たったの二日という驚異のスピードに、洞窟の難易度を本当の意味で知っているマトリフが目を剥いたのは言うまでもない。
「・・・・どんな魔法使ったんだよ・・」
一階から十五階はさほどでなくとも、ある階層を境に兇悪モンスターの巣が一つ二つは済まないだろうし、洞窟の一番目玉と呼べそうな太古の秘儀、ミナカトールを習得する二十五階層前あたりからはそれ以上だろうに。
レオナ達がマァムの持っていたキメラの翼で戻ってきた時砦は歓声に包まれ、特訓でへとへとであったダイ達も飛び出してそれぞれの恋人と仲間を出迎え、レオナとメルルは恋人からの抱擁と口付けに顔を赤らめながらも疲れは吹き飛び、チウとマトリフに労われているマァムも砦を出る前の暗い表情は欠片も無いのが見て取れ、妹弟子のその様子に安心したヒュンケルに頭を撫でられるという微笑ましい

ほっこりとした一場面であった。
砦を出る前のマァムは、己の心理状態から輝聖石を光らせられずに最悪な面持ちであったが、ラーハルトと思いがけず自分の深い所迄話せたことにより己の中の葛藤を全て吹き飛ばせ、本来の慈愛の心を取り戻すに至り石は光万事上手くいったのだ。
「もうね！後半は全部ラーハルトがね!!」
「そうです！私達はもう本当に後を付いて行くだけでよくて、私の邪気察知なんていらない程でした。」
「あの時の頼もしさったらなかったわよね！あ、でも私が好きなのはダイ君だから安心して頂戴ね。」
「本当に、許される事ならば復興したカール王国の騎士団長ホルキンスの副団長に押したい位でした。」
出発込みで、実質は一日半で破邪の洞窟という極悪難易度の迷宮を走破出来た理由を問われれば、女性陣全員がきゃいきゃいとラーハルトの勇姿を口にする。フローラなどは本気でスカウトできないかバランに後で聞いてみようと機を窺っている程の働きぶりであった。
あの時のラーハルトこそ鬼神の如くと言えようと、マァムが我が事の様に嬉しそうに言うのを、ラーハルトは照れ臭くなる。

「もうよせマァム、俺は自分に出来ることをしたまでだ。そう余り持ち上げてくれるな。」
「でもラーハルト！貴方のおかげで洞窟をこんな短い時間で往復できたのよ。」
言い過ぎてはいないとマァムはさらに言い募ろうとするのを、ラーハルトはマァムの頭をポンポンと叩いて落ち着かせる。
「あまり言ってくれるな。」
「もう、でも嘘は言ってないのよ。」
これはマァムの言う通りで、レオナはミナカトールを習得した後は無理にミナカトールの不完全版を使う事無く、ラーハルトとマァムの護衛の下歩きで出口に向かった。
―原作―ではそのレオナの無駄ともいえる動きが時間ロスを生み

出し、無茶を敢行していたが、ラーハルトがいるというたった一つの違いで文字通り楽に帰還を果たしたと言えよう。
帰りは行きとは全く違いモンスター達が出る事は無かったのが不思議だが、破邪の洞窟が古文書に書かれている通り、邪から人々を守るに足る相応しい者かを見極める所であるならば、力を示した者達の前には出ないのかもしれないとフローラは考察したが真偽は人間などの理解の及ぶべくも無いとの結論の下、さっさと帰ってきた。
マトリフやザムザ等研究に生きがいを見出す者達であれば時間があるのだからと何かしらを試して本当にモンスター達は出ないかなどという実験をしそうだが、フローラ達にはそんな趣味も生き甲斐も無い。
フローラ達の帰還を聞いて、少し遠くで朝の鍛錬をしていたハドラー達も砦に戻り、砦の大広間にてまたもや―出られる者出たいもの全員参加型―の会議が行われる。
この際砦全員の結束を固めるべく、広間と廊下の壁は全て取り払われ大黒柱以外の柱も同じ運命を辿り、数百名の有志達が一堂揃い踏む。
「姫さん達が出立した後、俺達も地下トンネル使って遠い森に出て各国巡りしてきたぜ。」
先ずは互いの現状報告から始まり、口火を切ったのはご存知勇者ダイ一行の頼れる魔法使いポップ。
一番近いロモスから時計回りにベンガーナ、テラン、リンガイア、パプニカの順で巡ってきた。
自分達は健在であり、まだ戦える事を各国の王達と戦える全ての者達に示す為に。
どの国も自分達の姿を見ただけで涙を流さんばかりに喜んでくれたが、大袈裟だとはとても思えなかった。
無理もない話で、ダイ達がバーンに負けた直後に死の大地から大型の浮遊建造物が突如としてロモス王国の西北の町を消滅する破壊行動をしたのだから。
その脅威がいつ自分達の落ちてくるか分からない現状に怯えてい

た者達にとって、勇者一行は希望の星なのだからと自覚をしているポップ達は激励を受ける食べに力強く頷き、時には悄然とし俯いている者達を勇気づけ、共に戦おうと励まし合いの巡回となった。
しかしここでもティファを案じられる悲痛な声にはダイ達も泣きたくなった。
ロモス王国のシナナ王などは、一行全員が逃げおおせられた理由をポップから聞いた時、ティファちゃんがといいながら泣き崩れていた。
人情家で優しさをもって民達に慕われているロモス王にとって、小さき女の子が自らを犠牲にしてこの世界を守らんとする姿に耐え切れずに。
シナナ王程で無くとも各国の王達もその事に心を痛め沈痛な面持ちであった。
賢く強く、それ以上に優しいティファを知る王達の、心深くまで入り込んでしまった影響は計り知れない。
だが、各国の王達以上の悲嘆に暮れても立ち上がったダイ達はそんな王達に力強く宣した。
「俺達は負けません！必ず妹を救って共に大魔王を倒します!!」
「そうです！俺達は生きてます！生きている限り勝てる迄何度でも立ち向かいます!!」
普段はティファやポップに弁を任せているダイが堂々と表に立ち、呼応するようにポップが続き、ヒュンケルとクロコダインが力強く頷き、ティファさんならきっと大丈夫ですと太鼓判をチウが押す。
その力強い言葉に、態度に、王達もまたダイ達に励まされた騎士達の様に希望の光をそこに見た。
暗い雲を斬り裂く一条の雷鳴を、闇を駆逐せんとする業火を、若き勇者と魔法使い、そしてその二人を支える仲間達の中に。
後の史実書でも二人の逸話は多々あり、二つ名も他の一行に比べて多かった。
ダイは竜の勇者、希望の勇者とそして雷鳴の勇者と称号が、ポップは二代目大魔導士が最も有名となるが、音速の魔導士、知略の士の他

に炎の魔法使いが贈られる。
　これは二人の得手の魔法でもある事もさることながら、各国の王達の前で見せた勇士が、その称号となるのだがそれは先の話。
「そうですか、皆さんのおかげで各国の王達も民達も勇気づけられましたか。何よりです。」
　一国を預かる身のフローラとしては、王達の心情と国の現状が手に取る様に分かっていただけに、希望を与えられたことが何よりも嬉しい。
　ただ戦う力を取り戻せたからではない。それも無論大切だが、人間にはいつでも生きていく上では希望は大切なのだ。今日が苦しくとも、必ず明日があると信じることが出来なければ心弱り死んでしまうのだから。
　その息を吹き返させたダイ達には感謝してもし足りないが、懸念材料はまだある。
「各国の王達はハドラーの事は何と?」
　フローラの最大の懸念はここにある。
　この砦の者達はハドラーの決意とダイ達の真摯な思いの言葉によって、ハドラーも受け入れた上で結束する事になり、安心して破邪の洞窟に行くことが出来た。しかしここで矢張り魔王を受け入れられないと王がいえば、その国の兵は動揺し、折角固まった結束にひびが入るのが一番怖い。
　その言葉を聞いた時、それまでは良い顔で報告していたダイとポップが顔を見合わせ、クロコダインは頭を掻き、ヒュンケルも微妙な顔をする。
　その様子に、自分の危惧が当たってしまったかとフローラは血の気が引く思いがする。せっかくマァムの輝聖石が光大魔王を倒す光明が見えてきた矢先の出来事を如何にして対処すべきか早急に対策すべきだと言いかけたフローラに、予想外の言葉が掛けられた。
「いやさ・・・・魔王の事はいいってさ・・」
「・・・・は?・・・・いい・・とは。」

ポップに掛けられた言葉にフローラは素で驚いてしまい普段成りを顰めさせている少々おてんばな言葉で返事をしてしまった。
「それは・・・大戦終わった後に考えると？」
「いやそれも違くてその・・・・これもティファ影響なんすよ。」
「はい⁉」
ティファ影響
その言葉にフローラは目を剥く。何せ事は魔王である!!先の大戦では各国とも尋常でない被害を出し、あわや攻め落とされかけたパプニカも他の国の王達と同じだとでもいうのだろうか!!
料理人ティファの命惜しくば今から三日後に以下の者達をパプニカ王城に集めよという敵からの脅迫を飲むことにしたフローラが一番頭を痛めたのが、パプニカ王城に集める者に魔王ハドラーの名が挙がった事だ。
ハドラーは手元にいるからいいが！問題はどうやってパプニカ王城に入れられるかが、マァムの輝聖石が光る前のミナカトールと同じくらいの懸案事項。
魔王ハドラーは処刑してやりたいか、百歩どころか千歩・万歩譲って地上存亡の為の戦力としての存在を許すが、自国の領内、其れも王城に入れるなどもってのほかだと言われないか、ダイ達と魔王殿の複雑な関係を事細かく親書にしたためながら胃に穴が開きかけたフローラとしては、ポップの説明を聞けば聞くほど泣きたくなってきた。
曰くティファが助けたのであればそこには途轍もない深謀遠慮がありこちらとしてはいう事は無い、深い思慮あっての事であろう、大恩あるティファが救った者をとやかく言う資格が自分達にはない、過去の遺恨よりも世界の為に料理人が救ったハドラーとその親衛隊達を存分に使い潰せというお達しの下、ハドラーがいても口出ししないという確約迄一筆入りで貰って来たとか。
順にロモス、テラン、ベンガーナ、リンガイア王達からの言葉であり、其れも懸念していたパプニカのレオール王などは病床の寝室にても、

「過去の遺恨は今も忘れず今この瞬間にも殺してやりたいが！その事とこの度の事は別!!ハドラーが罪悪感からパプニカに来ずティファが殺された日には、私自らがハドラーのそっ首を落とすぞ!!」

とまで言い切っていたとか・・・・・自分のあの葛藤と苦悩は一体何だったのか!!

本当に一体彼女は何なのだと心中で憤ったフローラは悪くないと思う。

何となく、初手からまだ会ってもいない妹に振り回されて精神的ダメージを食っているフローラに対し、申し訳なくなり同情すべきだろうかとダイ達もだが、意外と常識を重んじるマトリフ達も、受け入れて貰えたハドラー達すらもが溜め息を吐きながら思ってしまったのだから。

とんでもない娘の影響力はどうなっているのだと。

またティファ効果かと溜め息を吐く者達の中でただ一人、チウだけが頭を痛めている周囲を不思議そうな顔で見ている。

どうしてティファさんが素晴らしい事に溜め息を吐くんだろうか？

お陰でハドラーさん達は受け入れて貰えていいことずくめなのに。

早くティファさんを取り戻してあの笑顔が見たいと、チウは難しく考えずにティファを思うだけなのだから、大人や常識の思惑は理解の外であった。

駆け抜けろチウ？

ダイ達の報告で外の現状も分かったフローラは、最後の懸案事項を確認する。

「―昨日―の夕刻に落とされた柱で出た被害の程は？」

レオナがミナカトールを習得して少しした後に、メルルが託宣を受け取った。

内容はバルジ島に落ちると。

フラメルが砦に置いてきた通信で知らせた直後、主力不在の砦を預かるバウスンの命でノヴァが単身でバルジ島に飛び、人が誰もいない事を確認した後は精霊達に頼み、モンスター達の救助をして帰ってきた。

原因は一切不明だが、今大戦では陸のモンスター達は邪気に侵されておらず海のモンスター達は影響を受けている。

更に言えば、陸から海に入ったモンスターも矢張り凶暴化してしまう。

人族以外とは言え、精霊・モンスターを友に持つノヴァとしては大勢のモンスターの命を見過ごせないと、精霊達に異界を通して逃がしてほしいと頼み、当然彼等はその望みを叶える。美しく優しい彼の望みを。

全てを逃がし終えたノヴァは敵の監視に引っかかるのを厭い、どのような攻撃方法かを実際に見たかったが諦めて撤退した。その十分後に、大地は二本目の柱を落とされクレーターを穿たれた。

其れは奇しくもダイ達が敗れ、柱を落とされた刻限と同じ―黄昏時―であった。

「被害は出ていません、しかしあそこが無人なのはあちらも知っている筈なのですが・・」

実際バルジ島に行ったノヴァが発言途中で言葉を濁す。

あそこはレオナを人質にしたフレイザードとの決戦の地跡で、その後見張り等の再建設はされずに人員の再配置も無く無人島と化していた。

そのような所を攻撃する意図が読めない。
何か重要拠点や、ポルトスの様に人口が多い場所でもないのだがと、敵からの攻撃糸を知るには手掛かりが皆無でハドラーとしても意図が読めずに頭を悩ませてみたが、ここでい考え込んでも仕方がない。
「現状で敵からの攻撃の意図を調べる手掛かりがない以上他の事をしましょう。マァムの輝聖石も光ったのでミナカトールには問題なく、仮に明日来る敵からの使者が、最終決戦は明後日といってきても問題ないようにしましょう。」
フローラは立ち止まって考えている暇は無いとばかりに次々に指示を出す。
最終決戦で死者が出ないように万能薬の増産を主眼に置き、各自の特訓と、それ以上に自己完治を徹底する事や武器の手入れまでと、やる事は山積みである。
戦とは始まるまでの準備段階が一番重要で、それを怠る事はすなわち敗北に結びつく。
ダイ達もその言葉に気を引き締め頷こ闘志たその瞬間、
「はっはっはっはっは!!遂に完成したぞお前達!!!!」

大広間に一つだけある扉がバカンと左右に吹き飛ばし、テンションマックスの高笑いをしながら押し入ってきたのは
「おいロン・ベルク!!!扉壊して入って来る奴がどこにいるんだよ!!」
魔界にその人ありと謳われている名工ロン・ベルクであった。
「細かい事は気にするなポップ!!俺はな!お嬢さんから依頼された品物―全部―完成させたんだぞ!お前らも喜べ!!」
「え!ティファが頼んだって奴!俺見たい!!」
「あ、俺も見てぇ!どこにあんだよ!!」
「確か俺の破壊されたアックスもいたから作ってくれるとか。」
「ティファの依頼品全部・・・この短期間で⁉」
反応は様々だが、ダイ達にも自分の喜びが共有できたとロン・ベルクは更にほくほく顔になり、気をよくして扉の脇に置いた木箱を持っ

てきて広間の中央において取り出し始める。
「まずはポップ、お前さんだ。こいつはブラックロッド。原理は大魔王の光魔の杖と同じだって言えば分かるか？」
「俺の魔力を吸って、武器になってくれんのか？」
「その通りだ。お前さんの魔力を吸ってロッドが伸びて打撃戦も出来れば、投げつければ投擲武器にもなる。どちらも込めた魔力の量で威力が比例する。
　其れと投擲武器にもなる穂先ともいえる先端部分はオリハルコンを使ってある。」
「!!ってことは！これであの疫病神貫いても、腐食こそすれ・・」
「その通りだ、先端は使えずとも打撃戦と通常のロッドとしての機能は保たれたままだから安心してあの変態野郎を刺し貫けるぞ。」
「へっ、一番有難い機能だ。串刺しにしたところをメドローアぶち込めるってもんだぜ。ありがとよロン・ベルク！」
「おう！是非そうしろ、まぁその前に俺がぶった切る予定ではあるがな。」
「あのさあのさロン・ベルクさん!!俺の折れた剣は⁉」
「おっと悪かったなダイ、あの変態を始末できる算段が付いて付いたかが外れたが、他のもきちんと仕上げたぞ。
　折れたのはそのまま鍛錬して治したが、剣からは並々ならぬ意志を感じたぞ。」
「意志？剣から？」
「あぁ、次は折れてたまるかとばかりな強い意志を感じた。俺もその思いに応えたくてバージョンアップを図りたかったんだがこれ以上剣自体は上げられなかった。
　その代わりに、―鞘―の方に細工をした。」
　ダイにせっつかれたロン・ベルクは、木箱から二つ目の武器を取り出す。
　其れは黒光りする鞘に包まれた新しいダイの武器であった。
「この鞘に施した細工は、魔法剣をこの中に入れれば、剣に付与した魔法のランクが上がって威力も比例して上がる。」

「い・・・」
「あぁ、分かりやすく言うとだな。」
　自分の言葉を聞いてフリーズを起こしたダイに、どう言えば分かりやすいかかみ砕いて説明せなばなるまい。
「お前がよく使うのはメラかライデインだろう。」
「うん、それを剣に付けて火炎大地斬とライデインストラッシュだ。」
「そのライデインを纏わした剣を鞘に再度入れれば、ライデインはギガデインにチャージアップ出来るんだ。」
「ええ!!そしたら俺ギガデイン使える事になるの⁉」
「そいつはすげぃや・・・・」
「うむ、ディーノの戦力がさらに飛躍する！良かったなディーノ。」
「うん！俺父さんと同じ魔法が自分でも使えるってすごく嬉しいよ!!ありがとうロン・ベルクさん!!!」
　ダイの、その純粋な喜びようと言葉に、偏屈ロン・ベルクの顔も緩んで思わず大の頭をわしゃわしゃと撫でて思いに応える。
　これ程の言葉を貰えて鍛冶屋冥利に尽きるとはこの事であろう。
　ダイの戦闘センスがあれば、この途轍もない付与を付けた剣を十全に使ってくれよう。
　それに追加機能は其れだではない。
「チャージには十秒かかるが戦闘継続できるように鞘はさっきのポップのロッドと同じでオリハルコン製だ。
　試しに構えて鎧化と言ってみな。」
「うん！鎧化!!」
　ロン・ベルクの言葉で、帰ってきた相棒ともいえる自分の剣を、鞘に入ったまま正眼に構えて鎧化を唱えれば、
　鞘の外部分がパプニカのナイフを少したくらいの短剣となり、外部分が取れた鞘自体が鋭い剣の様になっていた。
「チャージの間も其れで戦えるようにしておいた。短剣で戦ってもいいし、鞘で戦っても、出来るなら二刀流でも好きに使ってくれ。」
　魔法チャージの着想までは良かったが、十秒という時間が弱点となる。敵がそんな時間を待ってくれるはずが無く、当然撃たせまいと

襲ってこよう。
その弱点を埋めるべく鞘に二段構えの細工を施した。
先に使っていた鞘の材質では、強敵たちの打ち合いに耐えられる事は出来ないと、弱点自体をカバーする方法を考えておけとダイに丸投げしていただろうが、こちらにはティファから受け取ったオリハルコンがある。
優先順位としてヒュンケルの剣の魔装、ポップのロッドとマァムとクロコダインの武器を作っても余ったのでこれが作れた。
至れり尽くせりの武器のバージョンアップにダイは思わずロン・ベルクに抱き着いて何度も何度もお礼の言葉を言い続ける。
剣が折れてしまった時、ティファの教えが無ければその時自分の心も折れていた。それ程剣に全幅の信頼を置き、最早自分の相棒ともいえる剣のレベルアップしてくれたロン・ベルクには、何度お礼を言っても足りないとばかりにしがみ付く。
その直情的な行動に、ロン・ベルクは驚きはしたが嫌だという気持ちが少しもわかず、寧ろ片膝を付いてダイの思いと言葉を受留める。
自身も、己の求める武器が完成したならば今のダイと同じほどの喜びを抱くのが目に見えるからだ。
ダイ達の武器作りで、近頃は自分の剣作りを置き去りにしたが悔いはない。
「今度こそ壊さずに戦い抜いてくれよ。」
優しく抱きしめエールを送れば
「うん!うん!!俺約束する!!勝ってこの剣をみんなの前で掲げるんだ!」
鬼岩城を倒したあの時の様に。
その言葉は力強く、誰もがその姿を見たいと、見るために勝つのだと胸に新たな炎を宿す。
勝って味方全員で勝鬨を上げ、平和な世を謳歌する為にも。
ダイのお礼を受け取ったロン・ベルクは、他の武器もあるとダイを諭して離れさせ、マァムとクロコダインにも渡す。

マァムは腕に嵌めるタイプでクロコダインはアックスの柄が長くなり、己の部分の先端にも刃が付けられていた。
名はグレイトアックス。
「こいつは斧の部分がオリハルコンで、それに埋め込んだ魔石は二つの効果がある。一つは轟火といえばメラ系の力を、爆音といえばイオ系の技が出る。威力は初級呪文を強くした以上は出るはずだ。」
その言葉と共に、ずしりと受け立ったクロコダインのダイ同様に感極まる。
真空の斧は、先の戦いのカラミティウォールに砕かれていただけに、新たな武器のすばらしさに感動して、受け取ったままの姿でジンとする。
その姿は剣の魔装を受け取った時のヒュンケルと同じだが、今度は急かして正気付ける必要も無いだろうとそっとしておき、マァムの腕に嵌めさせた武器の説明をする。
「こいつも鎧化できる。とはいえ武闘家の動きの邪魔をしないように上半身は額と両肩と左腕と心臓部分を、下半身は左脚と右膝を鎧で包み込む。」
「ふふ、そしたら右で攻撃して左で防御すればいいのね。」
「そうだ、こいつも言わずと知れたオリハルコンだ。大魔王のカイザーフェニックスという出鱈目なメラ系にも対処できるぞ。」
「ありがとうロン・ベルク！十全に使わせてもらうわ!!」
これで威力が大きすぎて反動を怖れて使えなかった猛虎破砕拳も、自身の防御力が上がった事で使える！
鎧化はしなかったが、マァムは戦いの幅が広がったと喜び、何故かラーハルトに嬉しそうに見せに行き、良かったなとラーハルトに頭を撫でて貰いご満悦であった。
それが最後の武器化と思えば、ロン・ベルクはチウの名を呼んだ。
「チウ、お前にもあるから来い。」
「ええ!!!・・・・ぼくに・・・・ですか？」
まさか一行どころか砦の中でも支援サポートのそのお手伝いをするくらいだと思っていたチウは、呼ばれるとは思わずあたふたと口

ン・ベルクの下へと向かった。
何だろう？もしかして僕にも使いやすい初級武器でもくれるかと思えば、見るからに立派な籠手が渡された。
「こいつに鎧化と言ってみな。」
「え⁉」
「早くしろ。」
チウに手づから装備しながらロン・ベルクは早速使ってみろと促し、まさか味噌っかすの自分にそんな立派なものが来ると思っていなかったチウは、装備後戸惑いながら鎧化を唱えれば。
籠手は手首の先が鋭い刃となり、チウの両肩口と背中の部分をスパイクの突いた鎧が覆う。
「お前さんは自分の体を弾丸にして敵に体当たりする必殺技があるんだろう。これで威力も上がる。それよりも肝心なのは。」
ロン・ベルクはダイにしたように片膝を付いてチウと目線を同じにして大事な説明をする。
チウの両手を包んであげさせ、チウに籠手に埋めた魔石を見せる。
「こいつはクロコダインの真空の斧と同じ真空系の魔石だ。籠手の溝が見えるだろう。これはバギ系の技の威力を指向性にする。―誰か―に籠手を掴まれたら
躊躇わずに真空よと言えば、―オリハルコン―や上級モンスター出ない限りは斬り裂く！」
真剣なロン・ベルクの瞳に、チウはロン・ベルクの言わんとしている事が分かり青褪める。
「それってもしかして!!」
「そうだ、お前さんもお嬢さん同様あの変態に捕まる対象にされちまったんだ。あいつの腕だろうが首だろうが容赦なく落とす気でいけ!!それが出来なければ捕まるぞ。」
「それは・・・」
「あいつがいる限りお前さんをどこにいさせても空間で連れて行かれちまう。いいか、迷うんじゃないぞ!!」
これ以上俺の仲間を、あいつの好き勝手にされてたまるか!!

キル憎しの一念で作った籠手を握りしめ、鬼気迫る思いをチウに託す。
余りにも鋭く、真剣な面持ちのロン・ベルクの言葉に押されるように、チウは無言ではあるが首を一つ縦に振った。
「いい子だ、俺もなるたけ早くあの野郎を始末するが、油断するなよ。」
チウの返答に満足したロン・ベルクは、ダイにしたようにチウの頭を撫でるが、チウの心の中はもやもやとした。

マトリフさんの洞穴に押し入ってきたキルバーンさんに向かって、僕も戦い抜くとは言ったけど・・・
あの人は優しくい言葉をかけてくれても、どこまでいっても敵で・・・その敵を撃ち倒せる凄い武器も貰えて・・・
なのにどうしてだろう?こんな凄い武器を僕も貰ったのにちっとも嬉しくないなんて・・・・

駆け抜けろチウ③

「お前の気持ちも分からんでもないがな、チウに扱いきれねえような代物渡してどうしろってんだよ。」
「あのなマトリフ、そいつはチウに失礼すぎるぞ。闘気量だの技量だのを全部差し引ても、あいつは間違いなくダイ達の仲間でいる資格があるだろうが。」
「・・・・確かに器がでかい奴で、ここ数日でまた配下のモンスター増やして面倒見てるけどよ。」
「そっちじゃねぇ、てかそれはそれで凄いけどな。あいつの頑丈さは自分は強いだとかこのくらい平気だとかの思い込みで成り立ってるもんじゃねぇ。あいつの体は間違いなくあの籠手に付けたバギ系の技撃っても耐えられる体だ。」
　全部の武具を短期間で作り上げたロン・ベルクは気力体力尽き果て広間でチウの目の前で崩れ落ち、目を丸くしたチウが有無を言わさず俺様系の名工様を、お姫様抱っこして廊下を爆走して自分のあてがわれているベッドに寝かしつけた。
　その頃には多少体力も戻ったロン・ベルクはもう大丈夫だと起きようとしたが、チウのジト目とそれ以上に、チウの後ろで般若の形相をしているザムザの顔を見て血の気が引いた。
「一体何をしているのですかロン・ベルク殿？私はティファさんから―皆さん―をお預かりしたと言いましたよね？そして誰一人体調を崩させないと、ええええ宣しましたとも。
　そして二時間おきほどに一度は体調はどうですかとしつこいくらいに聞いて、貴方何と答えてましたか？」
　この砦に来る前からティファの依頼品を製作し、ここにも窯を速攻で作らせて寝食はそこそこ取りながら、文字通り心血を注いで武具作りに励んだロン・ベルク自身としては悔いはないが、ティファからの預かり者の健康管理阻止損ねた事にご立腹を通り越して激おこなザムザの表情に、俺様を貫いて数百年のロン・ベルクがあっさりと謝った。

「・・・・・すまん・・」

大変不本意ではあるが、寝食をそこそこ取れて過労死しなかったのは間違いなくザムザのおかげ。

ザムザも昼夜問わずに二時間おきほどに一度は体調を聞いてきて、時には飯も持ってきてくれて、数時間は仮眠を強制的に取らされた。

脅し文句が凄かった。

「貴方が寝ないのであれば私は更に寝るのやめます。貴方がいつ倒れても善処できるように。

あぁしかし貴方はお気になされずやりたいようにどうぞ。私が勝手にやるだけですので。」

それを実行した日には自分は他者の思いを踏みにじる最低野郎になるだろう・・・降参して数時間仮眠をとる間ザムザも寝る事で話を付けたのだが倒れてりゃぁ世話無いわな。

チウのうる目懇願に癒されながら、ザムザの鬼説教を大人しく受けつつ今日半日は爆睡する事にして、起きたら枕元に椅子を置いて座っている、あきれ顔のマトリフに別口で説教された。

あの武器の性能はチウには高すぎて扱えないだろうと。

そんな事は無い、あいつは本当にタフだと、不本意ながらも抱き抱えられた俺自身の感覚が告げている。

あいつの頑丈さはクロコダインに通じるものがあると。

「そうかよ、お前さんがそこまで言うんだったら後は言う事はねえ。」

「あいつらが心配なのは分かるが、信用してやれよ。」

「そうかも知んねぇがな、俺にとっちゃ全員が―いい子―で無用な怪我して欲しくねぇんだよ。お前だってその辺は一緒だろう。」

「あぁ、だからこそチウにあれをやったんだ。」

ダイ達の武器の面倒だけでも死にかけたが、実はチウに渡した武器が一番手間取った。

ダイ達の武器の作り方には培ってきたノウハウを使えばいいのだが、バギ系の魔石の威力を指向性にするには、籠手にどれ程の溝を彫

り、何処までであれば耐久値が割れないかを模索しながらの作業は本当にきつかった。
　そもそもがオリハルコンを精製する事自体が自分の生命力を燃やさなければならない事であり、其れがヒュンケルのも合わせて計五人分の武器なのだから、マトリフとザムザから体力回復の万能薬を貰っていなければ過労死していたレベルだ。
　そん中、戦力と数えるには心許ないチウにどうしてもあの武器が必要だった。
　戦力にするのではない、戦力になれない弱い者だからこそ必要な武器を。
　あれならば死神の腕が伸びて来ても切り払い、狙った効果が出なくとも驚いた死神から例の体当たりで窮地を抜け出ててくれさえすればいい。
　後は自分でもあの坊やでも対処できる。その時間さえ稼ぎ出せれば。
「お前は・・・・そんな理由であんなぶっ飛んだ破壊力の武器をチウに渡したのかよ。」
「まぁな、あいつを斬らないと―魔法使い達―が安心して魔法撃てんだろう。」
「あん？そいつはどういう意味だよ。」
「言葉通りの意味だ。いいか。」
　ロン・ベルクは自分が感じたキルバーンの脅威をきちんと話すべく身を起こす。
　あれの変態気質だけで、ここまで執拗に討とうとしているのではない。
「あいつの空間は―ノーモーション―で、何処にでも自在に開けられるとポップが言っていただろう。」
「あったな。」
「仮にだぞ、ポップがブラックロッドを使いこなしてあいつを串刺しにして、止めを自分の魔法で刺そうとして、特大の魔法撃ったとするぞ。その魔法を防ぐ為に空間を開けて、ポップの直ぐ後ろに出口を

作ったらどうなる？」
「!!そいつは・・・」
「そうだ、俺がその発想に辿り着いたんだ。魔法使いポップの脅威を知った空間使いのあいつだったら、間違いなくそういう類の罠か空間の使い方をしてくると俺は睨んでる。」
「・・・確かにそうなるとキルバーンは厄介なのにもほどがあるな。」
其れが出来たとしたら間違いなく魔法使い殺しもいいところだ。
魔法使いの誰も彼もがマホカンタが使える訳ではなく、仮に使えたとしても四六時中は張っていられない。
自身の魔法も撃てず、討った後に張るにしても魔力切れですぐに戦えなくなるので現実的ではない。
それを言ってしまえば、放出系の闘気技も同じ憂き目にあうのは自明の理。
「だからこそ俺は戦場ではあいつを真っ先に討つ。あいつのせいで仲間を好き勝手にされるのは俺は我慢ならん。」
その言葉を言いながら、ロン・ベルクの両手は強く握りしめられ薄っすらと血が滲んでいる。
其れはロン・ベルクの静かな怒り。
自分が人生の中で一番大切に思う仲間達を窮地に追い詰め殺し掛けた、ミストバーンよりも厄介な大魔王の死神に対する深い怒り。
「つたく、やっこさんが動いてる限り俺も魔法はウカウカ撃てねぇわな。」
その激情を冷ますようなマトリフの気楽な口調の内容に、ロン・ベルクは怪訝な顔を向ける。
「・・・・・お前人間の中では超高齢だろ？なのに決戦場に来て戦う気かよ？」
しわくちゃで、吹けば飛びそうな御老体の身で。
魔族からすれば百年しか生きていないのにと思う程、人の寿命は短すぎる。瞬く間に、自分は置いていかれる寂しさを埋める術を今から探している程に。
そんな短い生を生きている奴が、無茶をしてくれるなと遠回しに止

めたのだが、マトリフはその言葉を馬鹿馬鹿しいと蹴っ飛ばして見せた。
「七千歳のジジィが地上と天界相手取って立ち回ってやがんだ。たかだか百前の俺がへたばってられっかよ。」
にやりと笑い、図太く言い切るマトリフの暴論にさしものロン・ベルクが目をぱちくりとさせた。
ジジィと言った、魔界の神を、今地上の全ての民達を震撼させている敵の首領を臆面もなく・・・ミストバーンが聞きつければ間違いなくマトリフを抹殺しようととびかかる発言を易々と。
「クックック・・・」
「あん！立ち聞きすんの飽きたのかよハドラー。笑いてぇんなら堂々と目の前で笑えや。」
「すまんな、明日の日程が決まったのをお前達に伝えてくると買って出たら、入っていい雰囲気ではなくな。悪気はない。」
気配を消していた訳で名はいハドラーの事は、二人とも気が付いていたが入って来るか来ないかはハドラーの勝手だと放置していた。
しかし、自分の発言を笑うのならば堂々としろと、マトリフが痺れを切らして入れと促す。
「魔界の神を、ジジィ呼ばわりするのはお前くらいなものだな―妖怪ジジィ―。」
「抜かせ、そんで明日はいつごろ此処を発つんだ？」
「夕日が沈むころ辺りだ。その時呼ばれた者以外は置いていく事にした。」
「それが一番だな。使者は間違いなくあいつだろうよ。」
「斬ったらダメか？」
トントン
ハドラーのもたらした明日の予定に、物騒なコメントを出したロン・ベルクを諌める前に、扉がノックされ返事も聞かずに入ってきた者がいた。
「いるか師匠？加減はどうよロン・ベルク。」
「ポップ、お前は返事されてからは入れよ。」

「別にいいじゃねぇかよ師匠。それよりもさ、明日俺魔力ほぼゼロにしてから行くからさ、回復薬くれようとしなくていいから。」
「はぁ⁉」
「いやだってよ、其れくれぇしないと俺―使者―撃ち殺さねぇ自信ねえんだわ。ダイ達も同じようにするからって一致してる。
理性的なノヴァが満タンで行くから余程でない限り大丈夫だろう。」
「・・・・・・好戦的になっちまいやがって・・・分かった、その代わりいざという時すぐ回復できるように持っておけ。」
「そうする。師匠の許可出てよかったわ。」
ポップ達の心情を察したマトリフは、無茶をするダイ達を止める事はせずに許可を出す。
自分が後十歳若ければ似たようなことを仕出かしているだろうと断言出来てしまうからだ。
魔法使いはいつだって冷静にの、己に課した不問律を破りたくなる程に憎い奴が使者としてくるだろうから。
「んで、―置いていかれる奴等―は全員納得したのかよ。」
「あぁ・・・メルルは直ぐに、ただ姫さん達はパプニカ王城に顔出しも兼ねるからこっちは帰還する。
フローラ女王はカールに拠点があるって絞られないように顔を見せないでそのままの案でいくけど・・・・チウの奴がな～。」
「戦力外にした積りはねぇんだが、やっこさんと話してくらぁ。」
言葉を濁したポップの言いたい事を察したマトリフは腰を上げ、チウの居所を訪ねて部屋を後にする。
「俺もあいつと話してみるか。」
チウには恩があるハドラーも、チウの心情を察して慰めるべくマトリフの後を追う。
砦で受け入れる話になっても、打ち解ける事は無いだろうとハドラー達は思い、敵意を見蹴られなければそれでいいと考えていた。
その自分達に、ダイ達も距離感を掴めずどうしたものかと考えあぐねているのを尻目に、チウは普通に挨拶をし、普通にハドラーを食事

に誘い、己の足りない格闘術を、普通にヒムに教えを乞いたいと頭を下げて来た。
同門のマァムは破邪の洞窟に、他の仲間も各自の特訓で忙しく、自分と、配下になったモンスター達を鍛えて欲しいと真面目な顔をして。
その様子を砦の者達は当然見ている。
チウが挨拶をすればハドラー達も自然と返し、共に食堂に行き、弱いなりにも戦う方法を必死に身に付けんとするチウを厳しくも励ましながら教えるヒム達の姿を。
そして四日目の朝に変化の兆しが見えた。砦の者達の自然とハドラーと行きかう時挨拶をし、騎士団達も恐る恐るだが剣士として強そうなフェンブレンと打ち合い稽古を所望して来た。
敵意どころか幽かな敬意さえ向けられるようになったのは、ダイ達、特に分け隔てなく自分達に接してくれたチウのおかげ・・・だけではないが。
下地としてアポロが大局的な話をし、恨みつらみを捨てるのではなくハドラー達を戦力の道具くらいで見る様にしてはどうかと話していたのも功を奏していた。
カール兵達とアポロの心情は一致している。
ー料理人ーの傲慢で独善的な偽善に振り回され、さりとてそれが今の状況ではそうしなければならないという、個人の思惑や感傷など度外視された理不尽な正しさを思い知らされ、どうすることもできない悔しさに共感し、ハドラー達に対しての敵としての憎悪を一旦胸にしまっていたのが、チウの自然な行動が本当の意味でハドラー達とカール騎士達の垣根を低くできたのだ。
そんなチウは今配下にした獣王遊撃隊メンバーと共に、ノヴァの指導の下―リンガイア救命団―と共に怪我人を運ぶ訓練をしている。
チウが組織した獣王遊撃隊というのはなかなかの大所帯になっている。
飛行モンスターでは、パピラス・ドラキー・ハンターフライと割といる。

其れならば空中から負傷した見方がいないかを探してもらい、深手を負っているものがあればすぐに知らせて駆け付けられる様にする特訓を。
発見後、報告の間に敵の目を引き付け混乱させて時間稼ぎが出来る様、パピラスのパピィの背に大王ガマのだいごと一角ウサギのアルミラージのラミたを乗せさせ、投入する事を検討している。
その三体がいる辺りは何があろうと近くの騎士・兵士たちは駆け付け援護させる手はずにして。
救護所を作るにあたり、隊長をしているチウと、グリズリーのクマチャと大アリクイのアリババに守りを固めて貰おうか？
物理系警護に彼等を付け、スライムのスラは見張りに、ドロルのドルやすはラリホーマが使えるとの事なので手当ての手伝いを頼みたい。
これもティファ影響で、本来はダイ大にない救護団がリンガイアに誕生し、その団長はなんとノヴァ。
若き天才は騎士団の団長と救護団団長を兼任している。
その彼の頭脳をもってすれば、予想以上鵜の戦力を押し出してくる魔王軍を相手にも、獣王遊撃隊の活躍の場が作られて行く。
配置は決まり、隊長のチウの許可も取りていざ特訓の最中にマトリフ達が訪れる。

「マトリフ様、見にいらしたのですか？」
マトリフ大好きなノヴァは、休憩中だったことも相まっていそいそとマトリフの下に駆け寄る。
その顔は本当に子犬みたいで可愛い事この上なく、ジジィを悶絶死させる気かと内心でぐぬぬものであるが、表面は努めて冷静に。
「なに、ちょっくら様子を見に・・・・・」
ノヴァの頭に手を伸ばして撫でてやりながらチウ達も見ようと首を伸ばしたマトリフは、そのままフリーズを起こした。
そして後から来たハドラーも、ティファに出会ってから一度もした事が無い阿保面をしてノヴァの背後から見える人物を凝視した！

マトリフとハドラーに気が付いたチウが手を振ってきたのは可愛い!!

しかしだ!その隣で同じように―フラフラ―と手を上げて振っているあいつは!!

最早マトリフとハドラーの心情は一致した

なんでお前が今ここに!!それもそんな姿でいるんだ!!!!!

幕間―拳聖師弟―

弟子の一人が心配だった

自分がこの隠し砦に来た理由は其れに尽きる。

一番弟子の方ではない。

あの子は武闘家として大成する事は無いけど、あの子は純粋で真っ直ぐで強い子だ。

出会った時は人の畑の野菜を盗り、見張っていた農夫たちに反撃して遂に僕に退治依頼が来た。

話を聞く限り余り悪い子でななさそうだ。畑から盗る量も大したことは無く、精々大根一本か人参数本、キャベツ一玉とかそんな感じで、反撃と言ってもひっかいて相手が怯んだ隙に逃げる撤退を最優先している。ようは飢えを凌ぐ為に行き当たりばったりやっている感がある。

それが人同士であったならば話し合いで解決するか、盗られた被害が少ないしまぁいいかで済むだろう話は、相手がモンスターというだけでその数倍は憎まれ排除されるしかなくなるのが残念だ。

先の大戦でモンスター達は自身ではどうしようもない理由で恨みを買っていまだに根強く残っている。

余り無益な殺生はしたくないし、手刀一発でおとすかと出掛けてみれば、その手刀一発では気絶せず、最後にはみぞおちに当身を喰らわせて漸く撃沈したタフな子だった。

依頼を済ませたとその村の村長に話している間に、引っかかれた男が鋤をもって仕返しに来た時は、これは不味いと慌てて洞窟に連れて帰った。

他の村人達からも受けた暴行を、マトリフに貰った傷薬を飲ませて治して、数日は何にも口にしなかった子が、ある時いきなり声を掛けて来た。

「・・・たべないの？」

？

可笑しなことを言う子だ、何も食べていないのはそちらだろうに。
その子はどう言えばいいのかを懸命に考えながらたどたどしく、僕が食べていない理由を聞いているようだった。
そんな事は決まっている。
「だって君だって何も食べていないじゃないか。」
食べやすいスープを出しても威嚇するだけで口もつけずそっぽを向いて。
「一人で食べても美味しくないんだよ、一緒に食べよう。」
あの時の、あの子の驚いた顔と、ボロボロと泣きながら美味しそうに僕の作ったスープを掻き込む様は、きっと僕にとっての一生の宝物。
あの子は一人で生きていても、人に迫害されても純粋なままだった。
村人を恨むでない、ただ生きていたかっただけだとそれのみで生きて来た子・・・其れはモンスターとしての性としては自然な事なのかもしれない。
ただ生まれ、生きて、死んで逝く
そこに理由も何もなく、力足りなければ死んでいく自然な命。
あの子を見ていると、人間等の知性を持ちすぎた者達こそが不自然だと突きつけられている気になる。
命は命、たった一つしかない何時かは死を迎える生命がそのまま育ったような子を、僕は初めて弟子にしたいと思った。
この子が穢れなくて済むように強くしてあげたいと。
ハドラー大戦で知った事、モンスターは魔王の邪悪な気配に否が応でも染められ凶暴化してしまう。
僕が生きている間の二度目があるかどうか分からないけど、この子が生きている時のもしも・・・幸い他にも分かった事があった。
精神力の強いモンスターは、邪気に侵されずに跳ね返せるのだと。
だったら僕が鍛えて上げればいい。幸いにもあの子も僕に懐いてくれた。
驚いた事にあの子は人里の側にすんでいたせいか、人語を解してた

どたどしくではあるが自力で話せるようになっている。頭も良い子なのだろう。
あの子が言うには、僕は正義の味方であるらしい。
村の子供達がしていた正義の味方ゴッコを見てその言葉を覚え、正義の味方役の子が困っている子をさっそうと助ける所がカッコよくて何度も遠くで見ていたとか。
「僕にとっては老師が正義の味方なんです。」
辛い修行の後に、修行で出来た傷を手当てするたびニコニコしながら言ってくれる言葉。
一人だった自分を拾ってくれて、その上強くしてくれる凄い人だと。
不思議な子だ
僕はこの子を退治する様に依頼されたのをその時は知らないだろうけど、共に暮らしてもう一年近くの今なら分かるだろうに。
強さだけでは生きていくのには不便だろうから、僕が生きている間に教えられることは全て教える事にした。
人間の言葉を教え、読み書きも教えた。
話せれば、それだけで便利だ。物珍しさでこの子と話せば、この子の良いところを知ってくれるきっかけになってくれる。
その良さを分かってくれて、村の隅にでもひっそりと暮らせる場所でも作ってくれる奇特な村が、この拾い世界のどこかに一つはある筈だと信じて。
読み書きもかけなくていい。
ただそこが立ち入り禁止で、近づいたらいけない所だと分かってくれれば、厄介ごとの巻き込まれる可能性がぐんと減る。
僕が生きている間は僕が守れても、僕ももうじきお迎えが来てしまう。せめておいていく事になるこの子の行く道を、歩きやすくしてあげたい。
そんな生活が続いたある日、かつての仲間の子のマァムちゃんが訪ねて来た。
ロカに何かあったのかを聞けばそうではないらしい。

今ロカは、マァムちゃんが仲間に入った勇者一行の仲間に診て貰って新しい治療を試して具合がよくなってきているらしい。
眠れる薬を処方され、どうやらロカの体に合っているようで何よりだ。
「私は、その仲間の足手纏いになりたくないんです!!」
生まれた時から知っている子の、泣きそうな顔程見ていて辛いものは無い。
来た経緯を全部聞いて、最後にそう叫んだマァムちゃんは泣いていた。
その様子にオロオロとしたあの子は急いでお湯を沸かして砂糖を入れたお湯をマァムちゃんに持たせた。
「飲むと落ち着くよ・・・」
僕以外と話すのは久しぶりな子だが、泣いているマァムちゃんにとても優しく接していた。
「・・・・ありがとう・・」
渡された時にきょとんとしたせいか、マァムちゃんの涙は止まって砂糖湯を受け取ってゆっくりと飲む頃には、来た時の様な焦燥感が薄れた。
「私・・・村で生きていただけで外の世界の広さを知らなかった・・・自分よりも強い人がいるのを本当の意味で知らなかった。辛い事も悲しい事も嬉しい事も全部知らなさ過ぎて・・・・先生から貰った魔弾銃が無ければ僧侶としても半端なんだって思い知って・・」
ハドラーに放った渾身のロッドの一撃を苦もなく受け止められたのが余程ショックだったか。
そして、当代の勇者の側には一国の姫君とは言え賢者がいる。その中において、確かにマァムちゃんがいる必要性を感じられないのは無理もない。
先の大戦以上の規模の今大戦において、半端者が勇者一行という最も過酷な最前線のパーティーに居れば、下手をしたら一行全滅の引き金になりかねない。
誰に言われたわけでもないようで、その事に自分で気が付いただけ

でもマァムちゃんは大した子だと思う。
そしてこの子には確かに武闘家としてのセンスの方が上だと思う。
僧侶で実は盗賊の職を持つレイラと、国一番の怪力無双と言われたロカを両親に持つマァムは、素早さを母レイラから、力を父ロカから受け継いだマァムちゃんにとっては武闘家はうってつけの職なのかもしれない。
其れにマァムちゃんなれば、僕が編み出した武神流・閃華裂光拳を教えてあげられる。
あの技はホイミ系の魔力を拳に乗せて打ち出し、相手を強制的に過剰回復を起こさせ生体組織を破壊する技。
マァムちゃんはべほいもの使えるから下地はばっちりだ。
そしてアバンから力の正しい使い方も教え込まれ、身についた力を悪用する子ではない。
あの技は威力がある分悪用されれば大惨事になると、誰にも教えようとは思わなかったがマァムちゃんならば安心して教えられる。期せずして僕が考えてその後受け継がれずに消えていくだけの技だと思っていたら、受け継げる子が自ら弟子入りしてくれて嬉しい事この上ない。
弟子入りの許可を出したらマァムちゃんとっても喜んで、チウも新しい同居人が出来たと喜んでいたけど・・・・心配なのはそのマァムちゃんの方。
マァムちゃんの修行はあっという間に終わった。たった半月にも満たずに。
両親から受け継いだ才もさる事ながら、死に物狂いでやっていたのだから当たり前だと言われればそれまでの様な気もするけど・・・・・尋常ではなかった。
まるで自分の限界を無視したような無茶ぶりに、何度兄弟子としてあの子が止めても止まらなくて、訳を聞けば泣きそうな顔をして口を閉ざして・・・一度だけ話してくれた。
「どうしても、―守りたい人―がいるんです。」
その子は仲間の一人で、誰よりも強く、そして誰よりも優しくて戦

いにはまるっきり向いていない人だとか。
その人を戦いに出さなくていい程強くなりたいのだと、辛い修行を己に課して歯を食いしばって険しき道を歩き切ったマァムちゃんが強くならないはずが無い。
マァムちゃんの免許皆伝の後に息抜きもかねて二人をロモス王国の武術大会に送り出して、自分も―こっそりとばれない格好―をして出場すれば、なんとお仲間と合流出来てた。
あの子は妹弟子がとられると、慣れない焼きもちを焼いて微笑ましかったがそうも言ってられない事態が直ぐに起きた。
あの子が予選敗退した事ではない。困った事に、あの子は自分の持ち味を生かせる技を持っていない。
大ネズミ故に、手足が短いのは仕方がないが、かつての様にひっかくだの噛みつくのはマァムちゃんの前でやりたくないとカッコつけたのが即敗退の原因だから仕方がない。
その直後に僕もマァムちゃんも魔王軍の罠に陥ってしまったのだから反省しなくては。
・・・・・まぁお陰で弟子達の成長は見られたからいいけど。
マァムちゃんは檻が生きていると示唆してあげれば、的確な判断を下して閃華裂光拳を繰り出してくれた。
あの子も頑張って考案した体当たりの技、窮鼠包包拳を繰り出し、外からの援護攻撃で檻の胃液を吐かせるほど弱らせてくれて、思いがけない連係プレーが見れた。
もう僕が二人の教える事は無いも無いようだというのが、騒動の顛末まで見届けた僕の感想。
今度こそ本当に引退するかなと帰ろうとした矢先、マァムちゃんから途轍もなく悲しんでいる気配がした。
振り返れば仲間と何か深刻な話をしているのか、遠くて切れ切れではあるが話も聞こえた。
「そし・・・・ティファ・・・傷ついて・・・」
「詳しい話は宿屋でする。そっちのお前も来るんだろう?」
「当然だ!僕はマァムさんの兄弟子なんだから、マァムさんを守る!

ブロキーナ老師なら分かってくれる。」
その言葉を最後に行ってしまった。
切れ切れとした話ではあったが、どうやらマァムちゃんが守りたいと思い定めた人が何か酷い目に遭ったようで、不確かな話でもとても動揺していた。

心配だ。あの子、チウよりもマァムちゃんの方が精神的に弱い。いくら強いとはいえあの子はまだ女の子と言っていい歳の子だ。
もう少しだけ、マァムちゃんを見守ってあげた方がいいかもしれない。

駆け抜けろチウ④

「これが僕がここにいる理由だよ。」

ブロキーナのその―真っ当―な理由を、別室に連行して聞いたマトリフとハドラーは揃って溜め息を吐く。

確かにマァムは先日まではブロキーナの心配が的中していたし、弟子を慮ってきた事自体は立派なのだがそれにしてもこれは無いだろうと、マトリフは真っ当に説教しようと試みる。

「そしたら堂々と姿現せってんだよ。白い布被って何なんだよビースト君ってのはよ!!」

マトリフの抗議もごもっとも。

チウを探してノヴァの下に行き、探していた本人の横にどう見てもシーツを被ったとしか見えない不審者迄発見。しかも気配から二人は直ぐにブロキーナだと分かった。

マトリフは戦友として、ハドラーはアバンとこの妖怪じぃじ共々自分に幾度も煮え湯を飲ませた敵として忘れられる筈も無く。

しかもその白いシーツの胸元に、―隊員バッチ―が付いていた!!

少し前にクマチャが連れて来たんです。行くところ無いようで他の皆ともすぐに仲良くなっていたのでそのまま隊員にならないかって誘ったら頷いてくれたので。

このどっから見ても不審者な奴を保護したとにこやかにいうチアが本気で心配になる。

二人は少し話をすると言って老師を借り受けて別室で事情聴取したら、存外まともな理由だっただけにがっくりとしながら不審者カッコを何とかしろと説教した断られた。

「僕の姿見てチウとマァムちゃん安心して油断生まれちゃわない？」

拳聖とまで呼ばれた自分を頼りにして。

そう言われては二人は頷くほかない。頼りにすると頼みにするのでは意味合いが違う。

前者が、意外と強く動きがいいビースト君を頼りにして動く。後者は拳聖ブロキーナがいるのだから大丈夫と、心の何処かで変に余裕を持たれては困るのだが・・・

「チウは兎も角マァムは絶対お前に気が付くぞ。」

「あぁ～駄目かな。この完璧な変装にマァムちゃん気が付くかな？」

・・・・・・絶対気が付く

二人の無言の言いたい事に、ブロキーナは思案し名案を思い付いた。

「よし！マァムちゃんが気が付いたらその時はマァムちゃんとだけお話あいしよう。」

手を打ってとってもいい事思いついたというブロキーナに、こんなひょうきんじいじに煮え湯飲まされていたのかと思うと頭痛がするハドラーに、うって変わった様なひやりとする気配がブロキーナから向けられた。

「ときにマトリフ、僕も聞きたい。どうして敵の魔王、其れもアバンを倒したハドラーがこの砦に平然といて君と仲良くしてるんだい？」

先程まで朗らかで茶目っ気の会った声音はひやりとする冷たさを孕み、返答次第では戦闘も辞さない気配に、マトリフがハドラーとブロキーナの間に立った。

「物凄く複雑で、途轍もない話しすんぞ。」

それは天高く昇っていた日が、山の葉に傾くまで続けられた長い話の始まりであった。

「・・・・君迄が・・・・その子のせいで有り得ない事態が、次々と起きている訳なんだ。」

「ああそうだよ・・俺も耄碌したと、なんだあの子の事でおもったかしんねぇが・・それでも俺は・・嬢ちゃんが愛しいんだ。」

前回の大戦でも仲間を大勢失い、今大戦でもかつて全身全霊をもって支えてやりたいと願った勇者アバンの死を前にしても崩れなかった自分がと、マトリフは自嘲する。

ー死ーなど身近な者である筈なのにそれでもと。

ブロキーナとしては何処から反応すればいいのか分からない。

山奥にいたとはいえど、其れなりの情報網が今でも生きているブロキーナは、リアルタイムよりは遅くはなるが、今世界で起きている事の大半の出来事を、市井レベルの内容ではあるが掴んで知っている。
ダイ達の活躍も、魔王軍の動きも、そして巨大な飛行物体が巨大な柱を落として回っている事も。
その尖兵で魔軍司令官であったハドラーが、隠し砦で見つけ、あまつ自分の一番弟子が気さくに話している時は魂消たもんだが、―世の中こんなものだ―を信条にしている身としては、こういう事もあるのだろうと今の話で納得をする。
良い事も悪い事も、どちらもあり得ない事が起きるのがこの世の中なのだと、酸いも甘いも噛み分け、世の不条理を見て来たブロキーナならではの思考はブレなかった。
昨日の敵は今日の味方になるのもあるのだと。
もう少し言えば、マトリフの話の中にあった地上消滅目前の時に、味方と言い切るかどうかは別にして、大魔王を討たんとする者と敵対していい事など何一つとしてないのだからと怜悧な思考も手伝い時間が少しかかったが飲み込んで見せた。
この近くで寝起きしている―彼―も、今この場に居て説明を聞けば納得するだろうしまぁいいかなのだが・・ティファという子の話には不安しか感じない。
自分と同じくらい冷静沈着が服着て歩いていた筈のマトリフにここまで言わしめる者なぞ、いられるだけでも諸刃の剣を抱えている様で厄介な匂いしかしない。
その者一人の為に自陣が瓦解するものなど昔のマトリフならば周囲と本人を力づくでも矯正させるか、元凶のままならば追い出していただろに・・
「その人質になった子の為に、君達は明日パプニカ王城に行くんだね。」
「あぁ、許可はもうレオール王が出してくれた。こいつ来ない時は自分がこいつの首堕とすとまで言ってな。」

「そう、マァムちゃんは兎も角、チウは呼ばれていないから行かなくてもいいんだよね。」
「そうだ、置いて行く。」
　チアを無用な危険に近づける理由が無い。
「そう、そしたら僕は敵の様子も知りたいし付いて行っていいかな？」
「行く意味あんのかよ？」
「いやぁ、僕が引きこもっている間に敵の強さが物凄く上がっているみたいだからね。ハドラーなんてその典型じゃないか。ロモス王国で実際にハドラーの雛形と戦っているんだけど、どうもあの時の相手は戦いの素人だったみたいだし。それでは敵の一端を知ったとは言えないからね。」
「ふん、だったら今の俺とさしで勝負するか？」
「やめておくよ、ひざがしらむずむず病が悪化したら困るからね。」
　ブロキーナとしては、先の大戦など児戯にも等しく映ってしまう敵を知る為に見ておきたいのであって、間違っても戦いたい訳ではないのでお断りである。
　チウは納得いかないながらもお留守番は決定している。
　その晩、特訓から戻ってきたマァムは師の気配で直ぐに分かりすぐさま種が明かされ、チウには秘密だと約束をした。
「明日・・・・ポップ、昼間でガンガン力使っておかないといけないんだよね・・」
「私も・・・腕一本とは言えやらない自信がないのでそうしておこう・・」
「バラン様とディーノ様を護衛する俺もそうしないとか・・・・」

　ダイの言葉に端を発し、夕食の席はまるで通夜。明日パプニカ王城に来る使者とは絶対にあの疫病神である事は確定しているだろう。
　もし万が一暴走したものが出て使者を殺そうとしても、キルバーンであれば空間を使い自在に逃げられるからだ。
　今回の呼び出しに、戦力外になったバランとそれに付き従う竜騎衆三人組は呼ばれなかった。
　バランも竜騎衆も、呼ばなくともティファの為ならばどのような事

も仕出かすのは分かっているので確かめる必要は無い。
殲滅の騎士団長ノヴァとティファの個人的な仲は知られておらず、引き摺り出せる範疇かを知る為に、またハドラーが黒の核晶を抜いても無事であるのかを確認する為に呼びつけられた。
そしてロン・ベルクは、武器を供給するだけの間柄なのか、それとも人間達と共に抵抗する者なのかを見極める為に。

明日の話を聞くチウの心はどんよりとする。
僕だって、ティファさんが無事かどうか直接聞きたいのに・・・・

駆け抜けろチウ？

行ってはいけないと言われた。
あの人に二度と近づくのは危険だと、捕まりそうになったら壊せとも言われた。
それでも僕は行きたい。行って、自分で確かめたい！
だって僕だって・・・

日が沈んだパプニカ王城の大広間の一室は異様な静寂が垂れ込めている。
大勢の者達が円を描く様に一人の使者を取り巻き、気配で威嚇しているがその使者は意にも介さず泰然自若な様子でただ立っている。
空間を通ってきた時に、一度挨拶をしてきてからは一度として口を開かず、時折懐中時計を空間から取り出して見ては、自分達を眺めまわしてそれっきり。
そんな時間がもう十分近く経過している。

少し遡ったパプニカ大広間
日が沈む前にダイ達はパプニカ王城に到着し、直ぐに大広間に通された。
そこには玉座に座り国の重鎮の大臣達と話をしているレオン王の姿があった。
一昨日会った時よりも顔色はむしろ良い事にダイ達はホッとする。自分達が敗けた事、世界で起きている参事、ソシエティファの事で心労をマシ体調が悪化しているのを危惧していただけに、以前よりも針のある声が聞こえて安堵した。
レオン王もダイ達に気が付いて立ち上がり、自ら側に寄ってきた。
ダイ達の顔を見て相好を崩し、マトリフにも挨拶をしたレオン王は、意を決したように、ダイ達の後ろから付いてきたハドラーの方に向き直る。

「・・・・・来たかハドラー。」
「あぁ久しいなレオン王、最後に会ったのはパプニカの防衛線であったか。」
「・・・・遠目の私をよく見えたものだな。」
挨拶もそこそこにレオン王は呆れて溜め息を吐く。
ハドラーの言う通り、大戦が終わりを迎える半月前に、ハドラーはこの国を落とさんと大攻勢で攻めてきたが、兵士たちが数多死んだ防衛戦で辛うじて跳ね返し、その半月後にハドラーはアバンに討たれた。
「貴国が持ち応え、魔王軍の数を減らしてくれたおかげで地底魔城へと入れたのです。」
国と世界を救ってくれたお礼を言いたくて呼んでみれば反対に感謝される形で終わったのがつい昨日のよう。
その時の防衛線で前線とはいえ、陣の奥で指揮をとっていたのをハドラーから見えていたとは・・・・ひょっとして、もう少し陣の奥深くにハドラーが来てまかり間違っていればあの時私は死んでいたのだろうかと今更ながらに冷や汗が背に流れる。

その時の兵達の犠牲は忘れないが
「今は、―あの子―の為に。」
「ふん、お前もティファに捕まった口か・・・・この城にいる者共全員か。呆れたぞ、俺を見た兵達が憎しみを宿らせる者もいたがそれは少数で、後は来てくれたのですかなどというおかしな老人達に手を握られて・・・」
「インス・ワイズ・フォスか。その老人達全員が白いフワフワの毛があったら彼等だ。
その・・・少々変わり者であるが、この後は部屋から出ないように厳命してある。
今からくる使者とも浅からぬ縁がある故な。
ダイと御父君も、同じ子を持つ父として心中察するが・・・」
「王様こんばんわ。分かっています、その為に俺達はノヴァ以外は闘気も魔力も空にしてきました。」

また思い切った事をしてきたものだとレオン王は思ったが、城を戦場にされるよりは良かろうと口を開きかけたその瞬間、―笛の音―が突如大広間に響き渡った。
誰もが周りを見回したが、こんな場面で笛を吹く者など居る筈もなく、何かを察したマトリフがノヴァにレオン王をの護衛につくように指示を出しながら玉座の方へと追いやり、全員に大広間の中央から離れる様にとも指示を出す。
程なくして中央を取り囲む様にした大きな円が描かれた次の瞬間、空間が開き黒い円から死者が出て来た。
「グットイヴニング皆様。」
出てきたのはダイ達の読み通り、大魔王バーンの側近・大幹部死神キルバーンであった。
空間から出て来たキルは大鎌もレイピアすらも持っておらず、空間を閉ざすと同時にレオン王の方を向き、右手を胸に当て夜の挨拶をしながら一礼をする。
「今宵この場を使う事をお許しいただき感謝の言葉を。我が主も大変

満足しております。」
其れはこの城の主に最大の敬意を払い、貴族の優雅さを伴った完璧な礼に則った挨拶であった。

その優雅さに、そして自身が勇者達に包囲されている中で言ってのける胆力に、キルが初見のブロキーナの背がゾワゾワとする。
何この敵は!!これが敵の大幹部・・・・・こんなの、先の大戦のハドラーが子ウサギに見えちゃうよ!!!
力の底が感じ取れないのは、彼がキラーマシーンと同じ類の機械人形だからと予めマトリフとキラーマシーンに最も詳しいハドラーと、オートドールに詳しいバランからレクチャーを受けていたが、そんな事では目の前の―人物―を推し量ることはできやしない。
そう！機械人形の類だと言われても目の前にいるのは人物だ。自分達と同じく思考し自らの考えで動く者。
その思考する者は、敵陣にあってあそこまで堂々と挨拶をし、その後は押し黙ったまま。
「てんめぇ!!ティファ一体どうしやがった!!!」
「あの子は無事なのだろうなキルバーン!!」
「ティファの無事を教えなさいよ!!」
「大魔王ともあろうものが小さきものを人質にとるなど卑劣にもほどがあろう!!!」
ありとあらゆる罵倒も、口を開かす為の煽り言葉も意にも介さず、ただ数度懐中時計を開いては周りを一度見回したきり何もしない使者。
その見回す時、赤い瞳の瞳孔が細まり、獲物を観察する爬虫類を思い起こさせるのが余計に不気味なのかもしれない。
こんな場にチウを連れてこなくて良かった。あの子にはこんな恐ろしい・・・・怖ろしい場に・・・・・・・・何故・・・
足音が聞こえる。その走り方、足音にとても覚えがあるブロキーナは、シーツの中の顔を青褪めさせる。
何故この場に来てしまったのだ!!

あぁ、こんなに大広間が遠く感じるだなんて・・・・でも行かないと!!僕が行きたいんだ!!
初めて仲間達と老師の言葉を破った。城には行かず、砦で留守番をしているように言われて、他の皆と待っているように言われたのに・・・

「本当は君も行きたいんだろう大ネズミ君。」
「パックさん・・・・こんばんわ・・・」
「うん、こんばんわだね。君もおチビちゃんと同じで礼儀正しい子だ。そんな良い子を僕は応援したいんだよ。」
「応援・・・ですか?」
「そうさ、君もパプニカ王城に行きたいんだろう?」
「つぅ!でも!!僕が言っても足手纏いで・・・・」
「近々大戦が始まる。その中に行こうとしている君がそれを言うのはおかしいじゃないか。
弱いからここにいるの?弱いからじっとしてる?何もかもを他の人に任せるのかい?」
「そんな!!僕は任せたりなんて・・・」
「そしたら、おチビちゃんの事を自分の耳で聞いて確かめなくていいのかい?」
砦の隅で、膝を抱えていたチウの下に精霊のパックが突如姿を現し、しきりにパプニカ王城へ行かなくてもいいのかと聞いてくる。
パックは精霊とは思えない程歪んでいる。歪んだ彼は、今夜来る使者と、この大ネズミとの関係も知っている。
どうして仲間達がこの大ネズミを遠ざけようとしているのかも無論知っている。
知った上で問うている。この大ネズミが、パプニカ王城に行けば面白い者が見れるだろうと見込んで。

世界が滅ぼうがどうだろうが興味はなく、面白いかどうかでしか動かないパックは、全力でチウを堕としにかかり、純粋なチウはパックの言葉に抑えていた気持ちが溢れてしまった。
「僕だって！僕だってティファさんの事を直接聞きたい!!でも、メルルさんだって我慢してる。ガルダンディーさんもボラホーンさんも、ザムザさんだってて・・・・僕一人が・・・」
良い子のチウは、気持ちが溢れても平然と勝手なことが出来る子ではない。今挙げた者達もまた、自分と同じ気持ちでいるのを我慢しているのだと。
「そう、そしたら君が見て聞いた事を―鏡に映る―ようにすればいいのか。」
「へ？」
「君、鏡通信はこの間見て知ってるよね。あれを使えるのは何も魔族だけじゃない。―高位の精霊―にも使える。そして僕にも使える。」
「パックさん・・・・実は凄い精霊様ですか？」
「あっは！違う違う、偶々いいところの血筋に生まれただけの者だよ。そんなのに縋って生きている様な化石連中と僕を一緒にしないでくれ給えよ。
其れよりも、君が行く事で彼らの目となり耳となれる。直接ではないかもしれないけれどまた聞きにもならない。
人っていう奴は、自分で診て聞いた者に自分の思いや曲解を入れて真に正しく相手にそのまま伝える事なんてできやしない。
まして相手の使者は君と占い師の子以外は毛嫌いしているんだろう？そんなものが言った言葉を一字一句違えず君達に伝えてくれると思うかい？」
「それは・・・・・・」
無理だと思うというのがパックの言葉を聞いたチウの感想であった。
あの冷静沈着なマトリフ老師も、ティファさんのように優しい皆の心を苛立たせてしまうキルバーンさんの言葉を、正しく伝えてくれるとはとても思えない。

其れは悪意からではなく、彼に対する敵意から、何を言われても計略か作為だと思ってしまうからだ。
きっと敵に対しての言動の受け取り方はあっちが正しく、額面通りに受け取ってしまう自分とメルルと、この場にはいないティファの方が異端であるかもしれない。
それでも自分は・・・
「連れて行ってくださいパックさん。」
「オッケー大ネズミ・・・」
「パックさん、僕にはチウという名前があります。僕を武闘家として育ててくれた大切な人がつけてくれた名前が。」
「分かった、チウ君。行こう、パプニカ王城に。」
ルーラの類の移動ではなかった。
そもそもチウは前科があるだけに万が一抜け出る事を考えられて、キメラの翼は全て取り上げられ、今夜は飛行モンスターの配下とも会えずのお達しが下されている。
パックが異界の通り道を通してくれた。
そこは何もない暗闇で、先導してくれるパックを見失えば永遠に出られない常世の空間。
見失わずに光り輝く出口をにけ出た先は、パプニカ王城の門前前。
「これはチウさん!!貴方が後から・・・皆様はもうお通りです。さ!早く。」
鬼岩城戦において、人もモンスターも被害を最小限にとどめて逃がしたチウの功績も知らされている門番は、直ぐにチウだと分かり挨拶をしようとしたチウを急がせる。
その事に感謝するようにチウは無言で一礼し、脱兎のごとく教えて貰った大広間へと駆けていく。
途中で自分に気が付いて声を掛けて来た人にも後で詫びないとと思いつつ、その足を止める事はしなかった。
そろそろ時間か・・・・
挨拶をきちんとして、あれから十分が経つ。

もういいか・・・・・・おやおや？

足音が聞こえる
とても急いでばたばたと走っている、足音から体は小さく体重も軽いものだと知れる。
そして失礼だが・・・・足がとても短い子だ

使者の雰囲気が和らいだ
足音が聞こえたあたりから、得体の知れない者の瞳が柔らかくなってまるで笑みを浮かべているような気配となり、足音が近づく扉を注視している。
なぜ？この扉から出てくるのはおそらく!!

バン!!!

「こんばんわキルバーンさん!!!!ティファさんはお元気ですか!!!!!」

扉をノックする事は忘れたが、敵の使者に対しチウは挨拶をする。
両足に力を入れて床を踏みしめ、両の拳にも力を込めて力強く堂々と

「こんばんわチウ君。」
そんなチウの挨拶を、キルは中央に留まったまま、先程レオン王にした最上位の礼と共に挨拶を返す。
優しい声音と笑みをもって

近況

キルの優しい気配に絆され掛けるが、チウは全身の力を解かないようにぐっと我慢する。
内心ではどうしてこの人は僕に対してこんなに優しくしてくれるんだと絶叫していてもだ。
キルバーンさんは、あまり人を知らない僕から見てもとても素敵に見えるから困るのだ!!
先程までの敵の使者の気配とまるで違う事に、ブロキーナは師として来てしまった弟子の近くで、正体ばれるの覚悟で護衛をした方がいいのか、それともここは下手に動かず推移を見た方がいいのか決めかねる。そんな中、ダイ達は真っ先に動こうとした。
これ以上キルに仲間を好き勝手されてたまるかと、二人の間に入ろうとしたその時、またしても大広間の扉はノックをされずに物凄い勢いで開けられた。
入ってきたのは・・・

「はぁ・・・はぁ・・・こんばんわ敵の使者殿・・・・・」
髪を振り乱し、普段からは想像もつかない鬼の形相をしているメルルの乱入。
急いで掛けて来たのが振り乱した髪と、靴が片方脱げて片足の裸足が物語っている。
「えええええ!!メルル!!何でお前迄きちま・・・・」
「ポップさんは黙ってそこにいてください!!!!」
叫びながら自分の側に来ようとしたポップに対してぴしゃりと言い放ち、言葉をぶつけられたポップは灰と化しその場に崩れ落ちた。
「ポップしっかり!!」
「ダイ・・・・俺もう駄目かも・・・」
親友の慰めに、ポップは力なく笑って益々崩れた。
俺の可愛い可憐なメルルが!!!あんな言葉を俺に!!
まさかのメルルの出現に、ポップはおろか、大人しい娘だというの

がメルルに対しての、キルを入れた大広間にいる全員の見解だか、それを卓袱台返しの様にひっくり返してみせたメルルはキルに挨拶をした後、チウに近づき説教を口にしようとしたまさにその時!!
「おお見よお前達!!矢張り使者はキルバーン殿であったぞ!!!」
「お久しぶりですぞキルバーン殿!!!」
「こんばんわですじゃぞ!!キルバーン殿!」
「「ティファ殿はどうしておられる!!泣いておりませぬか!きちんと食べておりますか!!虐められてはおりませぬか!!!」」

メルルの開けた扉を怒涛の勢いで入ってきたご老人三人組が、チウとメルルとは違いワラワラとキルに近づいて取り囲み、ティファは無事なのかと物凄い怒涛の勢いでキルを押し倒さん勢いで迫りながら聞き出そうとする。
先程ハドラーを大歓迎したインス・フォス・ワイズ三兄弟は、高齢の為に身長は縮み、キルの身長の半分くらいしかないので子供が大人にしがみ付くように、キルの服をがっしりと掴んで逃がしませぬぞの構えである。
本人達は大真面目で必死の思いであるが、キルは気配を出さないように必死に耐お爺ちゃんズの可愛さに脳内で悶え苦しみながら耐えている。
本当になんでどうしてこのお爺ちゃん達はこんなに可愛いの!!!
何この小さな体!!ふさふさの御鬚に、同じ毛の眉に目が隠されているけど、今は滂沱の涙を流しながらしっかりと僕の服握りしめちゃってくれて!!なにこれ!もう僕このお爺ちゃん達とチウ君お持ち帰りしちゃってのいいかな!!良いよね!!!
脳内大暴走させているキルとは露知らず、危機感ゼロのお爺ちゃんズは益々泣いてプルプル震えながらキルバーン殿を連呼してくる。
これって僕何かを試されちゃってる訳!!もう勘弁してよ!!!!
幸せながらも使者の役目を全うしなければならないキルは、ある意味地獄を味わった。

数分後
少し落ち着いたキルは、一旦お爺ちゃんズを引き離して態勢を整える為にコホンと空咳をする。
誰がどう見ても悶えていたのはしっかりと見られていただけに、貴族然としても少々様にならない。
だがキルにも言い分がある！
お爺ちゃんズの中に、どさくさに紛れてチウもキルの所に走って服を握ってティファの情報を引き出そうと必死になったものだから、可愛いもの全員大集合された自分の脳内ダメージのゲージが降り切れポンコツ化したのだと・・・・どう聞いても言い分にならない言い訳でダメージ回復を図ったキルは、チウの頭に手を置いて優しくそしてあっさりと聞きたかった事を教える。
「心配しなくてもお嬢ちゃんは―今の所―無事だよ。」
ダイ達がどれほど脅そうが煽ろうが口を開かなかったキルのその態度に、今まで事の成り行きを見守って押し黙っていたハドラーがとうとう口を開いた。
「いやにあっさりと教えるが、あ奴の近況ををこうも簡単に教えていいのか？」
ティファが無事だと知られるだけでも勇者サイドの士気は跳ね上がるのが目に見えているだろうに。
「うん？あの子が無事でもそうでなくても君達死ぬ気で強くなろうとするでしょう。それにね、きちんと挨拶をする―良い子達―にはご褒美を上げないと。
さっきのお爺ちゃん達の質問にも答えてあげるね。お嬢ちゃんは泣いていないし、ご飯も三食食べてるし、虐めようとする馬鹿は僕が潰す気満々だから安心してね。
さて、占い師さんは僕に何か聞きたいことは無いかな？」
良い子にはご褒美を
これこそが自分の中でしていた賭け。もしも敵の使者の自分に、きちんと挨拶をしてくる者達がいたら、一つだけ質問を受け付けて差し支えない範囲で答える。

誰も居なければ料理人のティファの処刑日時と場所を告げて帰る積りであった。
ダイ達だけであれば後者で終わっていたが、存外良い子達が沢山いたのでティファの近況は思ったよりも知られる事になったがまぁいいだろう。
チウ君達と同じく挨拶をしてくれたあの女の子の質問も受け付けないとね。

「あ・・・・えっと!!」
これはティファの近況を知れ千載一遇のチャンス!!!泣いていないのは分かった、ご飯ももらえていて捕虜虐めにもあっておらず、おそらくキルが守ると言えば、処刑寸前までティファの安全は確保されていると信じられる。
変態で疫病神だが、少なくともティファに関わる事で嘘もいい加減な事も言わないだろうというのが、ポップが出したキルに対する評価で、仲間全員で共有されている認識。
だからこそ先程ポップはキルの口を開かせようと躍起になったのだ。敵からの使者だからとティファに関しての事ならば嘘の情報は言うまいと。
・・・・・ある意味でキルバーンを信頼していると第三者から突っ込まれれば、ダイ達は憤死しているであろう。
其れは兎も角、メルルは何をどう聞けばよりティファの近況を知れるか頭を悩ませる。
ティファさん・・・・・・ティファさんが元気だったら真っ先にしているのは・・・・
「あの・・・・・」
「ん?」
砦を抜け出たチウを叱ろうと鬼の形相で追って来た時の勢いは何処へやらと吹き飛んでしまい、いつもの可憐な乙女に戻ってしまったメルルのか細い声を、キルは馬鹿にせず急かしもせずに辛抱強くメルルの言葉を待つ。

戦わない者で、特に老人・女性・子供には基本柔らかく当たるキルの、其れは本領発揮であった。
その姿もまた絵になり、思わずかっこいいと思ってしまったメルルは益々赤くなり、その様子を歯噛みしてその場で見ていいなければならないポップは、あらゆる意味でキルを呪い殺したくなっている。
今動いて折角の情報を逃がすわけにもいかずにじっと我慢の子だが!!あいつ戦場で一番に叩き壊すと戦意に加えて嫉妬の炎がメラメラと焦がす・・・・悔しいが自分にはあの大人の優雅さが出せるとは到底思えない!!
様々な炎が渦巻く中、メルルの問いはとうとう決まった。
「あの!ティファさんは―笑って―歌を歌っていますか?」

たとえどんな姿になろうとも

歌、ティファさんが現状料理をさせて貰えるとはとても思えない。
戦だの政だの分からない自分でも、捕虜に料理を作らせるところなんて・・・ティファさんなら一緒にどうですかと言いそうだけど、魔王軍であればまかり間違ってもない筈！
泣いていないのもお腹が空かない事も捕虜虐めも無いのも分かった上で、ティファさんの心身の健康に繋がる事は。
「笑って歌をね～。そんな質問でいいのかい占い師さん？」
「そうです！ただ歌うだけではありません。ティファさんは―笑って―歌っていますか？」
「ふむ・・・」
チウ達の質問の時と違い、キル右手の指を顎に当て、メルルの質問の意図を吟味する。
歌と、あの少女は言った。元気に走り回ってますかや、体関係は全く聞くそぶりも無く歌だと。
「どんな楽器を弾いているかとか興味ない？」
「・・・・」
ふむ、矢張り―体―に関する事は聞こうとはしない。
手足を拘束されているのを考えているのかそれとも、直接聞いてみるか。

「君はお嬢ちゃんの手足が無くなっているのも想定した上でその質問をしているのかな？」
キルの何気ないような言葉の意味に、問うたキルは当然の事で、質問をしたメルルにも驚愕の目が向けられた。
其れは特に、ダイ達が全く考えていなかった事であったからだ。
陣に飛ばされる直前までティファの体が五体満足であったのを見ていたから。それは先の大戦や、戦や市の場面に幾度も立ち会った大人達にも少なからずその考えはあった。
ティファならばきっと今頃は無傷でいるであろうと、冷静に考えて

いれば有り得たかも知れない可能性を全く考慮していなかっただけに、メルルがその意図で持って先程の質問をしたのかと問うように見つめる。
　そのメルルの唇は戦慄き、それでも先程と同じ質問をする。
「ティファさんは！笑って歌っていますか?!」
　今にも崩れ落ちそうな、泣き出しそうな顔で。
　メルルだとてこんな恐ろしい事を問いたくなんてない！けれど、もしも今の時点でティファさんが笑っているのであれば、少なくとも心は平穏であり、であるならば最終決戦当日に、手足いずれかか全てが無いティファであっても全員で助け出した後に抱きしめてお帰りなさいを泣きながらでも笑って言うのだと、心を強く持つためにキルに問うたのだ。
「成る程・・・」
　言動や仕草よりも存外強い心を持つメルルの姿に、キルは何かを得心して空間を開け一足飛びでメルルの前に出現をし、メルルの目を覗き込む。
「てんめぇ!!離れろ!!!!」
　その暴挙を当然ポップもダイ達も許す筈も無く、ノヴァも動いて臨戦態勢を取ろうとしたをメルルが押し止めた。
「平気です!!」
　震えながらも力の籠った声は、動き出そうとした者達を押し止めるには十分であった。
　敵が手を伸ばせば触れられる距離にいるというのに、味方を押し止めた。
　ティファさんは、使者である時のこの人の事を信頼していた。
　戦場で会えば叩き潰すと言っていても。それならば自分も信じてみる。
　其れで命を獲られるのであれば、きっとこの場にいる全員がキルを討ってくれると信じて。
　ティファへの信頼が八割、残り二割は自分の考えでメルルはキルの目の前に毅然と立つ。

キルの赤い瞳からも気配からも敵意や害意は感じられず、何かを探っている。こんな弱い自分の何かを。
不意に、大きな掌で頭をポンポンと叩かれ面食らう。
メルルをとっくりと観察したキルは、心の中でメルルを称賛する。
自分を怖れずに見つめる瞳の奥には、知性溢れ、そして様々なものを見て来た者特有の瞳をしている。
確かこの子は占いで祖母と二人で旅をしているとか。勇者君達よりも尚過酷なものを見て来たか・・・
この世界は戦が無くとも死が満ち溢れている。旅を多くした者ほど其の場面に触れる機会が多くなるものだ。
一体、この子はどんな地獄をこの瞳に写して来たのかとても気になって俄然興味が湧いた。
「君は今まで散々醜い者達を勇者君達以上に見て来たんだね。安心していいよ、さっきも言った通りお嬢ちゃんは今の所―五体満足―で元気に笑って歌っている。
バーン様の前であっても、一人の時でものびのびとね。」
「あ・・・・・」
キルの言葉に、其れ迄張りつめていたものが砕けるのがメルル自身にも分かった。
涙が、後から後から溢れて止まらない。
ティファさんが無事、其れが知れた事のなんと喜ばしい事か・・・・
その様に、キルは表に出さないようにしながら内心で苦笑する。
やれやれ、あの子の周りはどうしてこうも良い子達が揃っているのか。
情に流されはしないが感心はする。地上消滅の時、この子達全員お持ち帰りを決定だ。
「さて、僕も使者としての役割を果たさないとバーン様に叱られてミストに怒鳴られてしまうね～。」
様々な意味で重苦しくなった空気を厭うように、キルはわざとおどけてみせる。湿っぽい事は大嫌いなんだよね僕って。

ティファの公開処刑日は四日後、場所はカールの涸れ谷のロロイの谷。
刻限は正午より始まるが、来たければ朝から張り付いていてもいい。
処刑内容は当日に見て知ってもらう。
必ず来ないといけない指定は特には言われていない。どのみち此処にいる戦える人達全員来るつもりなんだろうから言うだけ野暮というものだ。
目当てのハドラー君の体調も良好の様で、黒の核晶が無くなった影響は零と。
勇者君達の中の誰も心が折れて戦えなくったものも無しと。
大広間の中央に戻って使者の役目を果たしつつ、キルはつぶさに周りを観察し終える。
「伝える事はこれで全部。質問は無しだ。」
先程の質問を全部答えるのすらが破格なのだから、これ以上は情報を上げるつもりはない。
「これから僕はここから帰るけど、変な気は・・・・」
・・・たえ・・
・い・・です・・・・
空間を少しだけ開け、後を追うなり背を見せた自分を襲う成りをした時の警告を発していたキルが、突如として押し黙って動きを止める、不意に振り返って周りを、特にハドラーをじっと見始め口を開いた。
その気配と声音は、先程までおどけていた者とは思えない程の真剣そのもので。
「これから—何—が聞こえても声を立てないように。少しでも破れば二度とは聞かせない。」

歌

今までにない真剣な口調でダイ達に警告を発したキルは、再び空間を開ける。
もしかしたら聞けるのは―途中―ではあるかもしれない。
それでも彼等には宝石以上の価値がある筈だ。

先程と違い、握り拳一つ分の空間から幽やかな―音色―が流れ出た。その音に聞き覚えが物凄く有るダイ達は叫び出しそうになったのを、キルはじろりと見遣り黙らせる。もしも声を漏らせば・・・・ダイ達はすぐさま己の口を塞ぎ、耳と全身でその音を聞き取ろうとする。
その音色は徐々に大きくなり

おやすみね～　夢を見ましょう　またあ～う日まで～

矢張りティファさんの!!

「むぐ!!!」
「しぃ～。」

空間から零れ出た二胡の音色に体を震わせているチウに危うさを感じていたキルは、歌声が聞こえると同時に空間に手を伸ばし叫び出しそうになったチウの後ろに片膝を付いて抱きすくめ、右手でチウの口を塞いで耳元に静かにするようにそっと息を吹き込む。
もしもチウであっても声を上げれば空間を消すつもりだ。

チウはキルにこうも接近されても嫌悪を示さず、其れよりも夢中で歌を全身で聞こうと研ぎ澄ませている。歌だけではない！あの優しい気配も空間からは確かに伝わってくるのを全身で感じたい!!

風が遠く～梢揺らして　おやす～みの歌を歌う
星は光～　月は笑う　まるで～見守る様に～

その歌声は甘く、何処までも自分達を包み込んでくれる優しい子守唄

おやす～みね　夢を見ましょう　またあ～すの朝に～
またあ～う日まで～

勇者ダイ一行全員が知っている、今は無きダイとティファの母親の生まれし、アルキード国の伝統ある子守唄・・・
チウはいつしか自分の口を押さえているキルの腕にしがみ付いてボロボロと涙を流して聞き入った。
そうでもしなければ、自分の体はティファ恋しさに飛び出してしまいそうで、それをすれば！歌が聞けなくなってしまう!!
歌の終わりと同時に、空間は閉じられチウも解放された。
離されたチウはさまようように今まで空間の開いていた場所までフラフラとした足取りで近づき、何かを掴もうとするかのように両手を伸ばし、掴んだように手を握りしめながら崩れ落ちた。
「ティファさん!!ティファさん!!!」
どうして僕達の側に居てくれないの!!なんで一人で危険な事を僕達に黙ってしたの!!!
「仲間を頼れって言ったのに!!ティファさんの嘘吐き!!!」
其れは慟哭であった。嘆きであり、苛立ちであり、そして激しい慕情の叫びが、パプニカ王城の大広間に散らばる。
ティファの事を夢に見たのはダイとマァムだけではない。ティファに救われた者達、ティファを慕っている者達全員が見ていた。
無論チウも。
力が足りない時には力を貸すよ
其れが仲間なんだよ
強くて、それでも優しいティファを一途に慕うチウの叫ぶ姿に、ダ

イ達も堪え切れなくなり―子供達―は堰を切ったように泣き崩れる。
キルがまだいるのだからと我慢しようとしたダイはバランにしがみ付き、ポップはいつの間にかメルルの側に行き泣き崩れそうな恋人を支えるながら、薄っすらと涙をこぼしながらも気丈に喚かないように唇を強く噛みしめ堪える。
ヒュンケルもエイミを支え、泣いているマァムをラーハルトが胸に抱きしめ思う存分に泣かせている。
キルの見張りを、ハドラーとマトリフ、ロン・ベルク達大人が無言で引き受けるのを目線で確認をして。
ノヴァ等は、様々な感情が高まりすぎて逆に凍えるような瞳でキルを睨みつける。叶う事なれば、今すぐにでもキルを凍らせ粉々に砕いてしまいたい!!
一人の少女の短い歌は、勇者達の心の奥底まで響き渡り様々な感情を湧き起こさせる。
無事でいてくれた事に喜びが
声しか聴けない苛立ちを
其れでも生きていてくれたのだから助けられるのだと希望が
そして最後に、必ず助け出すだと闘志の炎が胸を焦がす
「キルバーン、貴様何故ティファの歌をこ奴らに聞かせた。」
ダイ達の気配が徐々に落ち着くのを見計らったハドラーが、キルに何故と問う。
悲しみから一転、ダイ達の気配は戦う者へと昇華している。
先程のティファの近況を知った時の比ではない、高い戦意を引き起こさせるのキルバーンであれば容易に想像できた事。
こいつはティファに関してのみ馬鹿になるが、普段は魔王軍の始末人・死神キルバーンの名に相応しいものだとハドラーは評価している。
それだけに、敵に対してここまでやってやる理由が分からない。お気に入りの者に絆され任務をふいにするような甘いものでは無い筈だ。
だからこそ尚更意図が読めずに何を考えているのか。

ハドラーの疑問に帰ってきた答えは、ある意味不意打ちの様な答えであった。
「君に対するお詫びだよ、ハドラー君。」
「・・・・なに？」
「死の大地の星空の下で決戦前に僕が言った事を覚えているかいハドラー君。」
先程空間を開ける前に、確かにこやつは俺を見ていた。仮面のせいで表情が窺い知れなかったが、瞳からは確かに悲しみと後悔の念が見て取れたが・・・・
「分からん、お前が俺に何を謝すというのだ。」
自分を殺し掛けようとしたのはミストバーンであり大本は大魔王バーンであり、キルバーンには殺されかけてもいないのだが。
「僕はね、お嬢ちゃんにも言ったんだよ。君とハドラー君の決闘の邪魔をする事はしないって。
・・・・・あの子と君に二重で交わした約束を・・僕は破ってしまったんだ・・」
「お前・・・・」
その言葉はまさしくキルがこの世界に生じて初めての後悔の言葉であった。
ただ主に操られ使命を果たす為だけに生じた筈の、それが本物の命を吹き込まれたオートドール・キルの後悔に生じた心の痛みの声。
主と親友の為ならば、どんな事でも厭わずに手を染めて来た。
役に立たなくなった軍の者を手にかけ、敵対勢力となれば一族郎党を、其れこそ赤子であろうとも見逃さずに全てを闇に葬ってきた死神がの初めての後悔の念。
詫びを言うわけにはいかない。それを口にしてしまえば主と親友への裏切り行為に他ならない。
滅びゆく魔界を見捨てる事をせずに救おうとしている主を、其れを己の全てを賭けて支えている親友を裏切ることなぞ一欠けらも浮かばず、それでも交わした約束を―操られた―とは言え二人の決闘の横槍を見ているしか出来なかった事が苦しく・・・どうしても自分が許

せなくて・・
なぜオートドールの自分がこんな思考をして、胸の痛みを抱えなければならないのかは分からない。それでも、何かの事で言葉に出さずともハドラーとティファに謝する方法は無いかとずっと考えていた。
其れが、ダイ達とハドラーに歌を聞かせる事。
ハドラーはきっと自分では気が付いていない。ティファを一人の―女―として愛してしまった事を。
それでも無自覚であっても、愛しい者の声を直接聞けることは望外の喜びになろうし、ティファに知られずとも、兄や仲間全員に歌を聞かせて上げることが出来たのは詫びになろう。
これは自分の自己満足の為に行為。
主と親友に知られれば、親友は敵を強化するとは何事と激怒しようが、懐深く度量の器は底知れぬ大きさを持つ主なれば自分の思いを汲んで分かってくれようと、主の恩情に甘えているのは百も承知で。

「今度こそ僕は帰るよ。おやすみね。」

キルも心の奥に仕舞っていた言葉と痛みを吐き尽くし、ハドラーからの返答を聞く気は最初からなく、言いたい事を言った後、再び自分が通る空間を開く。
これ以上、己の醜態を晒さない内に急いでその場を離れようとした自分の背後から声が響き渡った。

「ティファさん!!必ず!必ず皆で迎えに行きます!!!絶対に!何があっても行きます!!!」
「助けに行く!!絶対に!!!」
「おとなしく待ってろよティファ!!」
「ちゃんと食べて寝て待ってるのよ!!!」
「大人しく待っててくださいね!!!」
「ティファ!」
「ティファよ!!」

「ティファ様！待っていてください!!」
・・・・あの子から離れた場所に空間開けて正解だ。
去り行く自分を罵倒する事無くチウの言葉を皮切りに、慕いし少女に向けて喉も裂けよと声を張りあげる。
あの子は太陽・・・・再び落日させなければならない勇者達の・・・・

歌の余韻　あるいは余波―大魔王と死神―

キルが空間を開けたのはパレスの中央部分の入り口前。ここから塔に上って玉座に行くか、都市部に入るかに分かれる。
耳もよく気配を読むのに長けたティファの近くに開けるとは・・・
一度目は何気なく帰ろうとして、主達の待つ食事の間の扉前に空間を開いた時に偶然、主とティファの話し声が聞こえた。
「美味なる夕餉であった。ティファよ、最後に飾る歌を一つ歌え。」
「分かりました大魔王。今日もご飯御馳走様でしたミスト。お支払いとして歌わせていただきますね。どのような歌でもいいですか？」
「構わん、其方の歌いたきものを歌えば良い。」
どうやら今日も食事の間の扉が開けられている様だ。ティファが歌うようになってから、その歌を聞こうと扉付近にいるどころか耳を当てて聞こうという輩が続出している。
ならばいっその事こと最初から開けておけとあいなった。

大魔王は当然そこより奥深くの鉄壁の結界を張った居室があるが、ティファとの食事の為にわざわざ食事用の間を拵え、其れをして魔界から来た配下達はますますティファは魔界の高貴な出の息女か、はたまた御落胤だという噂を増長させている。
キルとしては其れはどうでもいいが・・・扉の前でうっとりとしているはどう見てもアークデーモンにしか見えない。
こいつの配下の様なベビーサタンやミニデーモンの子達は自分の姿を見た途端脱兎のごとく遁走したというのに、こいつだけ頬を赤らめてなにうっとりとした顔で熱い視線をお嬢ちゃんに送っちゃっているのかな？このまま幸福を胸に抱いたままあの世送りにして良いのかな？
戦えば怪力を有した上でイオナズンを持って敵を文字通り爆裂四散させられるアークデーモンが、夢見る乙女ポーズをしているのが気色悪い。
すなわち両手を頬に当て、うっとりとしている姿はお嬢ちゃん以外

が似合う筈も無し！
「あ、お帰りなさいキル。」
強くて戦力として申し分ないが、如何せんティファの歌にやられてだらしくなったのは何も取り残されたアークデーモンだけではない。
キルが来るまで扉の前はそのような醜態を晒した配下達が山のようにいたのだ。
ティファの言葉に気をよくして挨拶を返して室内に入りながら、置物化したデーモンを片手で扉から引っぺがして投げつけ、室内を見回せば主とティファの夕餉のお相伴に預かる栄誉を賜れた魔界とパレスを繋ぐゲートを守っているガァグランスと、同じようにパレスには無くてはならない魔力炉を預かっているゴロアが、ティファの歌声に——酔って——正体をなくしている有様。
「ただいま戻りましたバーン様。帰ったよミスと、お嬢ちゃん。」
主には最高の礼を、二人は同格の好きなので同じように柔らかく微笑んであいさつをする。
「使者の役目果たしてきたか？」
「無論です。僕出来る子ですから。」
重々しいバーンからの言葉も何のその、おどけて肩をひょいとすくめて答える。
その図太さに、堂々とした態度に、ティファはついつい引き込まれて笑っている。
ティファは食事前や食事後の歌の時は、いつも大魔王の足元に座らせれる。
其れは歌声をよりよく聞く為か、ティファへの所有欲を満たす為かは分からないが座らせられている当人は気にした様子もなく、今も二胡を柔らかく指でつま弾いて戯れの音を出しながらキルの言動を楽しんで見ている。
この子にとって——敵・味方——の定義はあるのかと、ついつい考えさせられてしまう程の異端ぶり。
自分がどこから帰ってきたかは、ティファも朝食の場でバーンの口から直接聞かされている。

「今宵キルが其方の仲間達の下に使者として赴く。」
「おや・・・・・・最終決戦告知でも出すのですか？」
「・・・そのようなものだ。」
「分かりました。行ってらっしゃいキル。」
其れは実にあっけらかんとした反応であった。
置いてきた仲間達の心配も、迷惑や心配をかけているという気づかいも一切見られない。
「お嬢ちゃん、チウ君達心配じゃないの？」
キルがダイ達の事を言う時はチウが筆頭になる。後はどうでもいい存在だからだ。
「死の大地で勝てるとは思っていませんでしたので、複数のパターンを考慮してきました。
一つは何の奇跡が起きて勝てるかもしれない。
一つはハドラー倒して骸が灰となって黒の核晶だけ残った所を強奪してその場を私込みで一行全員でキメラの翼を出鱈目に使い続けて行方を眩ませる方法。
一つは今の現状になる三つのパターン。
最初のは無論論外です。世の中そんな奇跡などという戯言がまかり通る筈も無い。
二つ目は果たしたかったですが私の武運拙く果たせなかった。
それが故に私はこの場にいる。
そして三つ目になった時のための策も様々に施してきた。あそこまでやっても立ち直れない勇者一行ではないと、私は自信をもって言えます。」
手紙も残し、頼れる味方達に頼んで、ともに勝利の道を歩くカールの女王に根回しもし、自分の生存の証である式神フラメルも置いてきたのだから大丈夫だろう。
その自信に満ちた笑顔に、バーン達は苦笑したのであった。
きっとその言葉通りになっているだろうという苦い思いを強めにした笑みを。

ティファの予想通りになっていたのを報告するキルは、ティファのニコニコ顔が今は小憎らしく感じる。
何もかもが自分の思い通りになっていると無邪気に喜んでいるあの顔は可愛くない。
ハドラー君だったら、にやにやするなとか一言・・・・・ハドラー君・・・
「キル、報告は以上か？」
「え・・・あ！いえ・・・・その・・・」
「・・・・キル？」
報告途中で突然俯き、黙したキルにバーンが声を掛ければ、今まで見た事もないようなあたふたとしたキルの態度に、ミストは驚いた声を上げる。
「御免ミスト、心配かけちゃった？」
先程の様におどけようとしているが、長年付き合っている二人と、数か月の付き合いしか無いティファから見ても十分察せられる。
キルの心が何かに囚われているのが。
「・・・・ミスト、ティファを寝室へと連れ行け。」
「は⁉」
「はい!!」
バーンの突如とした言葉に、ミストとティファ、果たしてどちらがより驚いた事か。
主の命令は絶対を数千年間貫いてきたミストは、間抜けにも主の命令を耳にした瞬間素っ頓狂な声を上げてしまったが構っていられない!!
「ちょっと待ってください大魔王!!キルの報告が終わるまで私待ちます!!私が聞くのが都合が悪いのであればミスト諸共結界の中で過ごしますから!!!」
「私では不服だというのか小娘!!」
異議申し立てしようとしておいてなんだが、先にそんなに嫌がられるのは不本意だとミストが怒鳴れば。
「貴方だって変な声出して拒否感丸出しだったでしょう!!キルと是非

チェンジで!!!」
「きっさま!!」
「止さぬか。」
　言い合いを始めそうな二人を、バーンはため息交じりの言葉でとめる。
「キルから詳しい話を聞く。異論はあるまい。」
「・・・・分かりました、よろしくお願いしますミスト。」
「・・・・・・・・」コクリ
　仕方がないと観念したティファは、礼儀正しくミストにお願いをし、葛藤の果てにミストも頷きティファをそっと抱き上げる。
　今のティファは、少しでも力を籠めれば脆く崩れる土人形と変わらないからだ。
「良い子だティファ。ミストよ、明日のデザートにそれの好きなフルーツタルトを出してやれ。」
「・・・・畏まりましたバーン様。」
「おやすみなさい大魔王、キル。」
　反論せず、―良い子で言う事を聞く―褒美にティファの顔はニコニコとなり、二人に挨拶をしミストに連れられて部屋を後にする。
「バーン様もお嬢ちゃんには大甘ですね～。」
　親友の心情を察せられるキルとしては、苦笑いするほかない。
「そちだけには言われたくはないな。」
「確かに・・・」
「時に、其方一体何を思い悩む。」
「え？」
「ふむ、己では気付いていないと？」
「・・・・それは・・・・」
　バーンの直球的な聞き方に、キルは気圧される。まるで自分の何もかもを見透かされているような感じが落ち着かない。
　少し前であれば、落ち着かないなどという感覚を味わう事も無く面白がっていただけで済んでいたのが、ここ数か月で劇的に自分の内面が変化して行く様に戸惑いさえ感じる。

ヴェルザーが与えた自律思考する為に疑似人格とはここまでのものなのだろうか？
其れはヴェルザーへの反逆審も芽生えさせることにしかならないのではないだろうか？
現に今、自分はヴェルザーに逆らう事をしているのだから。
バーンの前で片膝を付きながらつらつらとどういえばいいか考えていると、不意に目の前が暗くなった。
見上げれば、主の顔が目の前にあり、自分の瞳を覗き込んでいる。

「成る程、―悩みを持つ―程に其方は育ったか。」
「・・・・バーン様？」
「―今―の其方に話してもよかろうよ。」
キルの瞳の奥にある懊悩を感じ取ったバーンは玉座に戻り、キルバーンに命を与えて遂には本物の生命体となった全てを話した。
「つまり・・・・僕がこうして悩んで苦しんでいるのは・・・」
「全て余のせいだと言えよう。」
そんな酷い事をあっさりと・・・ここ数日、本当に時折苦しくて、何度叫び出したくなった事か。
其の度にオートドールの自分は変調をきたしたし、このままでは自分は壊れて二度と主と親友とティファに会えなくなるのかと恐れ戦きいていたのが馬鹿馬鹿しくなる。
生き物なれば悩み苦しむ。そのお手本のようなティファを見続けていたキルは、バーンの話を聞いて却って落ち着きを取り戻す。
自分も、これから悩み苦しみ答えを出していかねば。幸いハドラーとティファとの約束を破った事の蹴りは先程ついたのだし。
「しかし、バーン様にそのような能力がおありとは・・・ミストはこの事は？」
「あれは知らぬ。余も其方に会うまでそのような力を持っていた事自体を忘れていた。」
「使い道が確かに・・・・」
記憶を操作するリャナンシー、物体を出し入れするラド＝エイワー

ズに比べ、命を吹き込むマスター＝エンゲージは使いどころが限られよう。
其れ死者にも命を再び吹き込ませる、ザオリクを完全慮がする能力だが、発動条件は己の命の欠片を相手に分け与える事。
キル決戦後、ミスト同様に、ミストが何を預かり守っていたのかを教えられている。
それ故に、自分に術を掛けた当時は―無限の時間―がバーンの肉体内には存在をし、故にこそマスター＝エンゲージを戯れ事に使えたのだが、本来は己の寿命を相手に分け与える能力え、普通の者ならば最愛の者を助ける為でなければ使うまい。
「すると僕にとって貴方は父親になるのでしょうか？」
「・・・・戯けた事を、もういつも通りか。」
「はい、僕が今どうしてこんな僕になったのかが分かればそれで。変調きたし過ぎて生き物で言うところの死期が迫っているのではと焦っていたので。」
「そうか、なれば話はもうない。疾く行ってティファとミストに追いつけ。」
「畏まりました父君。」
「・・・・・・キル・・」
「バーン様、僕の心はもう決まっていました。永遠の忠誠を貴方に、僕の心をミストに、思いをあの子に。
―邪魔な竜の使者―は二度と人前に出ません。ご安心を。」
おどけながらも、真剣な声音で話しながら最上級の礼をバーンにとったキルはおもむろに立ち上がり扉を開けてもう一度振りむく。
「おやすみなさいませバーン様。」
優しい笑顔を、憮然としながらもどことなく面映ゆそうにしている主に向けながら。

余を、父と呼ぶか・・・・

無論あれも照れ隠しの戯れであろうが、―父―と呼ばわれたのはいつ以来であろうか。
力をもって村を始めて作ったあの頃、弱き者達に庇護者の位置として父と崇められていたのが懐かしくなる。
あの時は魔界にも明るい笑顔が確かに・・・・・・・・バーン・・・・イアス・・・

っつ!!!
パリン
弄んでいたゴブレットを割ってしまったか・・・・近頃は昔に思いを馳せる事が増えた気がする。
其れはあの娘の目が、―懐かしい者―を思い起こさせるのがいけない。巨大な力を持つ余に対し、何も望まず無邪気に笑っていたあの者と。
魔界はじき救われ、あの時のような笑顔が魔界全土に広がる事こそが余の悲願。
誰にも、決して邪魔はさせぬ。

歌の余韻　あるいは余波―影と料理人とその周辺と―

「いんやぁ～おらみたいな戦いしか能のねぇ奴が嬢ちゃまみてぇな綺麗な人と口を利けるだなんてな～。
　地上ってところはいいとこだ。」
「いや、魔王軍においては戦える人は・・・」
「いんや、おらみたいな戦闘ガンガンタイプの中には頭も働いて動ける・・・・シャドーサタンやホラービーストみたいなのもいれば、ミストバーン様配下のシャドーゴーストなんちゅうのもいてるでよ。
　おらがもっと頭良ければ色々と立ち回れて配下達も肩身の狭い思いさせんですむんだけんどな～。」

　うん、とりあえずこのアークデーモンさんはいるだけで助かっている。主に私とミストが。
　この人いなかったら私もミストも寝室行くだけでも苦行の道のりだったよね。
　キルに放られても私の事で待ちしてくれていたみたいで、歌をもっと聞かせて欲しいと言われたのを皮切りに、こうして世間話の様な・・・・魔王軍あるあるの様な苦労を聞けている訳で。
　どうも魔界から来た人たちも目的の為に結集しても、それぞれの能力ややり方の優劣をつける人がいるらしくてアークデーモンさんみたいな脳筋タイプは少し馬鹿にされているそうな。
　別に直接被害無くともこそこそ言われるって地味に嫌だろうな。
　クイクイ
　いじめ蔓延寸前で、これでいいのか魔王軍と、思わずミストの服引っ張って視線向けさせて目でがっつり聞いてみたら、存外ミストも思うところあるのか視線逸らさなかったよ。
「おらも配下も大魔王様と魔界の為に死力惜しまねぇけんどよ、もうちっとこう・・お互い助け合えるような事できねぇもんかな？」

・・・・・この人魔界では異端な人だ。
魔界においては強さこそが全て。はいかを作れば守るのは対象として当然の務めであって、他勢力と本気で絆を結ぼうだなんて随分と―人間臭い―人だよ。
この考えは私でも分かるくらい魔界では随分と異端児扱いになる人だろうな。
ひょっとして、脳筋では無くてこちらの考え方の方が・・・
「したら地上の蟻んこどもをガンガンに屠れるじゃねぇか。」

・・・・うん!!この辺はとっても魔界の魔王軍らしい考え方だね！口調が某農家のおっちゃんで、ニコニコしながら言うところが更に怖さ倍増だよ！
「・・・・・・お前達は等しく大魔王様の配下だ。」
「いぃぃ!!・・・ミスト・・・バーン様？」
「大魔王様の下で戦っていればいい。」
「おら・・・おらみたいな奴に・・・・・・おら頑張りますだ!!配下の者達にも今のお言葉伝えてきますだ!!!!」
見た目の巨体の通り地響きを立てながらも、あっという間に見えなくなったアークデーモンに、ティファとミストはしばしポカンとする。
「・・・・貴方が―他の方―に口を開くのは珍しいですね・・」
「・・・・・・ふん・・」
大魔王に使えて数千年。自分の配下のシャドー・ゴースト以外の魔王軍以外の者達とは口を開いた事も無いミストは、自分としても珍しい事だと自覚している。
しかし、あのアークデーモンのひたむきさに、何かを言ってやりたかったのでさして拘らず口を利けた。
「げっ!!!!」
再び歩き出しつらつら考えていたら、ティファの方こそ途轍もなく珍しい声を上げたではないか。

あの馬鹿な親友にも嫌な顔をせず付き合い、双子のセクハラをも許したティファの視線の先にいたのは・・
「・・・・・それはこちらの台詞じゃよ小娘。」
妖魔司教ザボエラの姿があった。

ガルヴァス達の肉体調整が順調であり、最終決戦において最高のパフォーマンスを発揮できる旨を報告に行こうとした矢先に、まさかにっくきティファに会おうとは運が無い。
深夜帯であっても、研究している者達の時間は不規則であり、動ける時に動くのを基本としている所があり、戦力に関する事であればいつでも単身で来るようにとバーンに言われているのでいそいそときてみれば・・・
「良い御身分じゃの～、地上があれ程蹂躙されている最中であるのに、おぬしはぬくぬくとしていて。」
「・・・・・戦場で会ったら真っ先にバラバラにしてやる。」
「おぉ怖いの～。それまでにお主が生きていればじゃがの。」
「殺されてもゴースト化して祟り殺してやる。」
「な!!」
「私は貴方嫌いだ、あの馬鹿マキシマム以外で殺したい奴は貴方だけ。誰が逃がすか。」
「お・・・お主は・・・」
自分から嫌味と皮肉を浴びせたが、思わぬティファの返しに怖気づいてしまう。
ティファの瞳から発せられる殺気が、ティファの本気度合いを表している。
「何故じゃ！お主と儂は一度としてまともに戦い合った事も無いというのになぜ儂をそこまで憎む!!」
ザボエラとしては訳が分からない。
初対面であった自分を殺そうとしたティファに自分が憎むのが当然だが、ティファの方が自分を憎む理由はない筈だ！

「私が地底魔城で言った事を覚えていないと？」
「う!!・・・しかしだ！策謀に乗る事を選んだのはクロコダイン自身であろう！儂は強制しとらん！選んだのはあ奴自身じゃ!!それが罪だとでも言いたいのか！」
「ハドラーの件は？」
「それとて!!」
「確かに仕掛けたのは大魔王で実行したのはミストであっても、貴方は命の恩人のハドラーに対して恩をあだで返しても平然としてる。」
「ハドラーが・・・」
「様だろう。私はテランでお前が兄達を襲って返り討ちに会うところをハドラーに助けられているのも知っている。その命の恩人に何してんです？」
「うう・・・」
「貴方は恩という言葉ご存知か？」
　冷ややかに正論を言い放つティファに、とうとうザボエラが切れた。
「黙らぬか小娘!!!!」
「ん？」
「恩がなんじゃ？そんなものを後生大事にすればよい事でもあるとでもいうのか!!」
「・・・・貴方は・・」
「ふん!!軽蔑するか？どこに行っても強者として物おじしない事でちやほやされているお前なぞに儂の何が分かる!!ハドラーとても！儂の長年心血注いで完成した超魔生物に改造したのを恩にも感じず!!何をしても高き方々に認めて貰えない儂のの気持ちが!!!名誉を欲して何が悪い！権力こそ!!己が認められたという証ではないか！ハドラーは其れを儂に与えなかった!!儂を正当評価しようとしてくれる主を選んで何が悪いか!!」
　ザボエラの半生は、不遇の一言に尽きている。
　矮小な体を馬鹿にされ、生まれついての猜疑心の強さが周りとの軋轢を更に生み出し、悪循環の中どうにか上に這い上がる為に媚びる事

が身に沁み、何時しか他人は自分の満足度を高める為だけの道具に思うようになっていった。
　自分の能力と、研究を認めて高評価してくれる強者であれば誰でもいい。ただ認められたい、名声が欲しい、それに伴った地位が権力を欲して何が悪いか!!
「名誉や権力ね～。」
　そんなザボエラの考えは、ティファからすれば何を言っているんだこいつにしか映らない。
　ちやほやというが、最終決戦では激突する相手だぞ？
「はぁ～・・・」
「なんじゃ、いつも言っている様な綺麗ごとのお題目でも言う積りか小娘!!」
　いや、大魔王配下であっても、未だにハドラーへの高評価をやめないミストを前にしてこうも赤裸々に自分の欲望をぶちまける所は凄いと思うよ、うん。
　タダな～
「その先に待っているのはなんだと思う？」
「は？先じゃと？」
「そう、誰も彼を利用しつくして仮に望みの頂についた場所がどんなところ？」
「ふん!!決まっておる！輝く儂・・・」
「きっと一人ぼっちで死ぬ羽目になるよ？」
「・・・何じゃと？」
　どうして分かんないかな、この人物凄く頭脳明晰なはずなのに。他者を利用するだけの者について行く者など同じく碌なもんじゃ無かろう。
　そんな者達がいたとしても、死の間際はこいつ一人で孤独死しそうだ。
「役に立たなくなったと誰も顧みらず、死なないで欲しいと泣く者もいないだろう。そんな人生の終わり迎えるような生き方でいいの？」
「馬鹿馬鹿しい！生まれた時から人は一人じゃろう！死ぬ時のことな

ぞ・・」
「悲しいよ。」
「なに？」
「一人で死んで逝くのは悲しいよ。状況で敵の只中で一人で死んでいく事もあるだろうけど、大切な者が一人も思い浮かばず死んで逝くのは悲しい事だよ。」
　だって―前の人生―では私の大切な人達皆んな先に逝っちゃったもんだから本当に一人で悲しかったよ。
「それは・・・そんな事は!!」
　ティファの言葉を、ザボエラは躍起になって否定しようとする。
　生きてこその人生、死んでしまっては元も子もない。しかしだ、いつか死ぬ時の事を考えて何になるというのだと。
　だが、その言葉が口から出ない。
　ティファの瞳が悲しみの色を浮かべて自分をじっと見据える。
「過日、ロモス王国の武闘大会に貴方のご子息が来て兄達がそれを討った。」
「そうじゃ！その時の戦闘データを元に超魔生物は完成したのじゃ!!あ奴も・・渡した小型の黒の核晶を使って己だけルーラで逃げればよかったものを!!」
「・・・・・ご子息が死んだのは無念か？」
「ふん！アレは甘い愚息であったよ。そして愚図な奴じゃった。死に際で泣きでもしながら灰に・・・」
「それでも、あの人は私の父だ。」
　ザボエラの言葉を、ティファは強い言葉で遮る。
「・・・・・何じゃと？」
「超魔生物としては灰になる前の、貴方のご子息の言葉だ。死ぬ寸前であってもデータを空に放り投げ貴方に届けられたのを満足そうに笑ったそうだ。
　ポップ兄が、そんなご子息に対して、なぜあんな屑野郎の為にここまでして満足そうにしているんだと言った問いに対する言葉が先程の言葉だ。」

「それは!!っ・・」
「少なくとも親子の情で貴方の望みを叶えんとした者を、貴方は自分で切って捨てたんだ。
その時点では一人だけであっても、貴方を慕っていた者を貴方は自ら切り捨てた。
その価値に気づかず、見もしない者に付いてくる者などたかが知れている。
そんな―どうでもいい他人―に評価されて喜べるというのなら別に私がいうことなど何もないしどうでもいい。
だがな、もう一度聞くぞ。貴方は死ぬ間際に思い浮かべられる人はいるのか?」
ティファは淡々とザボエラに言い放つ。
ロモスでの出来事を兄から聞いて実際に助けてもいるだけに、ザムザをも切り捨てたザボエラは本当に一人になったのだと実感している。
そんな者の死に際は、きっと碌なものでは無かろうと。
その言葉に、ザボエラは何も言えず黙って俯いていると、コツコツと足音がした。
これ以上言い合いをさせる気はないとばかりに、ミストが無言で歩を進める。
実際にミストもザボエラに対して思うところはあるが、今は主の為に働く―便利な道具―であり、それを損なう事は今の時点でする積りはない。
・・そもそもが、自分だとて主人の勝利の為にハドラーを駒にした時点で、ザボエラと同罪なのだから、自分に何が言えようか・・
ティファもザボエラからまともな返答は期待しておらず、興味を喪ったようにミストの首に抱き着きそのまま体を預ける。
小さくなる後ろ姿の二人に、呪詛の様などす黒い念を込められた言葉がぶつけられた。
「お前にはいるというのか!!一人で死ぬ時も頭に思い描ける等という者が!!!」

そんなの
「大勢いすぎて走馬灯が追いつくかどうか。」
軽やかに答えるティファに、ザボエラは憎しみに加えどす黒い嫉妬心をティファに抱く。
何故あ奴ばかりがちやほやされる!!何故誰も彼もが儂を顧みぬ!!!
―アレ―じゃ。アレさえ完成すれば、儂の力を大魔王様がきっとお認めになる筈じゃ!!!

コツコツ

「・・・・・ミスト、眠いです。」
「部屋で寝ろ。」
「・・・・・やすみ・・・・」
「・・・・おい!!」
部屋に着く寸前で寝息を立て始めたティファに、こいつは本当に何なのだと呆れたくなる。
危機意識の欠片も無く、敵しかいない中であんな事を言い放つとんでもない娘だが・・・・・先程のは自分でもティファの、言わんとした事は分かる。
きっとこの娘なれば、一人ぼっちで死ぬことは無かろう。
私も、その時がくれば思い浮かぼうか？
敬愛する主を　無二の親友を　自分を慕う双子を・・・敵になっても私が尊敬した戦士の姿を

歌の余韻　あるいは余波―勇者達とその周辺―

「この馬鹿!!俺達がどんだけ心配したと思ってんだよ!!!」
「娘に続いてお前までもがと！我等の心臓は止まりかけたぞ!!!」
「チウ殿！貴方は確かにティファさんのようにお心広く素晴らしい方だが！敵の力を跳ねのける力は貴方には無いのですよ!!」
　キルも去り、王達とも処刑場所にどれ程の兵力と支援物資を回すかの話を終え、もう少し細かい調整の為にレオナ達は城に残ったが、ダイ達は砦に戻ってきて、一番最初に掛けられたのは出迎えの言葉ではなくチウへの説教の嵐。
　必ず留守番するので一人にしてくださいと信じた自分達が馬鹿であったと。
　戦力外のように扱われたのが矢張り堪えたのだからそっと見守っておこうと思っていた自分達が甘く、そして!!
「そうですよチウさん!!もう二度と・・・」
「貴女も同罪ですよメルル殿!!」
「え・・・えええええ!!!」
　砦に戻ってきて最初の飛び出してきたのがガルダンディーとボラホーンとアキームであり、チウの姿を認めた瞬間大広間に掻っ攫い三人がかりで説教し、其れに乗っかってきたメルルも同罪だとアポロが断罪する。
　パックとかいう精霊だか悪霊だか分からん奴が、いきなりチウが何かを決意して砦を飛び出し、その対価に自分が水鏡でその様子見して上げるとかふざけた言葉抜かした瞬間、竜騎衆の良心・ボラホーンおじさんがぶちぎれて凍てつく息で氷漬けにしようとして逃がしたのが無念!!
　言いつけ守ろうとしたチウを唆したのは絶対にあの悪霊であろうとボラホーンは睨んでいる。
　だが！それを無断で追いかけて鉄火場に行ったメルルもメルルである！
　チウを止めに行くのが間に合わないのであれば、キメラの翼を使え

ば直ぐに王城に入れてチウの護衛にもなるアポロが行くべきであったろうに!!
　戦場では何が起こるか分からないのを骨身に沁みている歴戦の戦士達からの説教を受けた二人がしゅんとなったあたりでバランがとりなす。

「確かに二人の行動は無謀であり、軍であれば軍規違反で重罪にもなるだろうが、二人のおかげでティファの現状が知れたのもまた事実だ。」
「それは・・・・確かにガキンチョの事知れて・・」
「しかしバラン様、其れは敵の気紛れのおかげであって・・・・まぁ実際二人のおかげですがな。」
　その言葉に大体は力強く頷き二人を援護する。
「俺達だけだったら絶対にあの情報手に入らなかったよ。」
「そうだぜ、あの場には俺達も師匠も居たし、いざとなったらあの野郎取り押さえる手筈もハドラー達とは事前にしてたしよ。」
　ダイは結果論で、ポップは万が一の過程も含めて二人を擁護する。
　あの時、キルバーンに一番突撃を掛けたのはチウではなく三人の学者のお爺ちゃんずだったのも功を奏して二人は説教から解放されたが、フローラからもきちんとお小言を受けた上での解散となった。
「ガルダンディー達も聞こえた?ティファのあれ。」
「ああ聞こえてましたぜディーノ様。ガキンチョのあれは・・・へ、五年振りっすかね。」
「あれを平和になった世で聞きたいものだ。」
「きっと聞けますバラン様。我等一同も其れを励みに戦い抜きますれば。」
「その願い叶いましょう。」
「今日きちんと寝てまた明日から特訓ね。ダイの方は何か進展あった?」
「う～ん、もう少しで何か掴めそうなんだよ。・・・・左手の紋章も明日重点的にやってみる。

ティファ元気そうだしやってみるよ。」
「おう、俺もロッドの使い方を・・・ハドラー、シグマ借りていいか？ランスとロッドの使い方似てると思うから付き合って欲しいんだけど。」
「僕もヒムさんともう少し格闘戦教わって、籠手を使えるように・・」
「ラーハルトにも教わったらどうだポップ？」
「いんやヒュンケル、お前さんと戦った方が双方実りある特訓になるだろう？機会奪ったら悪いって。」
「皆さんが怪我しても大丈夫うなようにしておきますが、無理はしないでくださいね。」
「あいよメルル。無理しないで無茶でやめておくわ。」
「もう!!またそんな分からない事を!!」
明日に向けての活力を得た一行は、早速それを原動力に動き出す。
特訓にサポートにと次から次気と明るい声で話し合われ、礼によってポップの意味不明な言葉を返されたメルルは憤慨すると、ダイ達は大声で笑う。
メルルの心配しての言葉が嬉しく、ポップのいつものずれている所がホッとする。
「ポップ、魔力回復薬も用意しておく？」
「頼めるかノヴァ？」
「一度リンガイアに報告に戻るから帰りに寄ってくる。いいかな父さん？」
「行ってこいノヴァ。王にご報告する事は書式にしたためておく。」
ノヴァも落ち着いてようでいつもの優しい顔と雰囲気に戻り、将軍にお伺いを立て明日早く行く事になり、見回り当番を代わってもらいダイ達と共に早々に部屋へと向かう。
「帰ってきたら俺の相手に・・・」
「・い・よ・・・」
ダイ達は誰一人として広間や砦に充満している微妙な空気に気が付く事無くそれぞれの部屋へと立ち去るが。

「どうしたフローラ、何かあったか？」
気が付いていたハドラー達を代表し、ダイ達に声が聞こえないように無音の結界を張ったマトリフがそっと尋ねる。
帰ってきてもそうだったが、ティファの歌が話題に上った時確かに兵士たちの空気がピリついた。
ダイ達はティファ恋しさに気が付いていなかったが、あの空気は見逃していいもんではない。
その空気と言おうか気配は、ブロキーナからも感じられたのだから。
「僕・・・女王様達の気持ちわかるよマトリフ。」
「あん？」
「一体―ティファ―っていう子はなんなんだい？神様か何かのかい？」
「・・・・お前・・」
ブロキーナとしてはダイ達よりもフローラ達の気持ちの方がはるかに理解できる。
怖ろしくなったのだティファという存在が。
これまでなした事、言ってきた事全てを総合し、その上であの使者来る場に行ったのだが、―ティファ―という存在がその場に居なくとも途轍もない影響力を行使していた！
なぜあの気概はあれども戦力が低いと自分で自覚しているチウが！キルバーンというあの敵にああも近づき無茶な事を平然としたのか!!それもこれもティファという子の情報を知ろうとした為にだ。
あのキルバーンという男は危険だ！優雅に立ち回りながらも隙は一つも無く、それどころか気配を押さえていた自分を鋭い視線で観察していた。その視線するも怖ろしく、冷や汗が止まらなかったというのに、チウもメルルもパプニカのあの三人の老人たちもティファの事を聞くのに夢中なためか何なのか詰め寄ってすらいたのだ！
そして・・・歌っていたのだ姿見えない少女は・・
捕虜で周りが敵しかいなくとも胆力ある者というレベルを遥かに逸した―穏やかな歌声―を紡いで。

敵の使者があれ程の者であれば、大魔王の怖ろしさは自分の考えでは推し量れない程だと算出した中でのあの歌声の衝撃が凄まじかった。
まるで味方しかいないという穏やかなあの歌声は一体どうすれば出せるというのだ!!
その歌声を聞いただけでダイ達の心を揺り動かし、様々なものたちの感情を乱してのけた。
最早ティファという少女自身をきちんと知っていなければ、何か得体の知れない者に映ってもおかしくはない。
「・・・そうなのかフローラ・・・・・お前さん達も・・・」
ティファの凄さに怖気づいたというブロキーナの正直な言葉を聞き終えたマトリフは、悲しい声でフローラ達もそうなのかと問う。
「・・・・申し訳ありません。指揮官としても王としても味方を怖れるなど未熟の一言でしょうが、兵達も私も・・・」
「そうか・・・・だがなそいつは仕方がねぇ事だ。あの子は並外れてる、知識も強さもそして感性も、あの子は世間並じゃあねえ。」
「マトリフ様・・・」
昔自分が嬢ちゃんに言った事がこんなところでこのタイミングで現実化するなんて最悪だ・・・
マトリフの胸中はほろ苦いもので満たされる。
いつかティファの凄さに怖がる者が出てくると予言のように言ってしまった。
それでも自分とノヴァは怖がることは決してないと言いたくて、ティファの何もかもを受け止める決意と共に言ったのだが、まさか最大の味方の中で怖れるものが出てくるとは想定外もいいところだが、仕方がないと頭のどこかで納得する。
自分達だとて、ティファをきちんと知っていなければティファの言動に怖れをなしていると思ってしまう事がティファという少女の不幸な所であろう。
あの子供は唯優しくて、どこにいても、誰といてもその優しさで過ごしているだけなのだと、いないティファの事を言ってみても仕方が

ない。
人は誰しも自分の目で見て接してみなければ、相手の本当の所は・・・・いや、其れでも分かるかどうか怪しいのだから、会った事も無い奴等にティファの良さを伝えるのは無理があろう。
ただそれでも
「ティファは、あの子は力も知識も断トツだがよ、人から怖がられる事を恐れる、まだかわいい女の子なんだよ。そこだけは信じてくれねぇか？」
マトリフの懇願の様な言葉に、残っていたハドラーも同意するように頷く。
あれは、まだまだ可愛い子供なのだと。

「・・・・分かりました。今一度兵達にその事を伝えましょう。それでよろしいでしょうかブロキーナ様？」
「そうだね・・・会ってもいないのに怖がるだなんて酷い事しちゃったね僕。
これじゃあチウとマァムちゃんに合わす顔無いよ。」
「仕方がねぇよ、嬢ちゃんは本当に並外れた事しかしてねぇんだからよ。」
話は終わったとマトリフは結界を解き、ジジィも寝るかとブロキーナを慰めながら寝室に向かうのを、ハドラーとロン・ベルクは難しい顔で見送る。
「・・・・話すだけでお嬢さんの事を受け入れるなんてできんのか？」
「無理だろうな、実際のあ奴を見れば大抵の人間は怖れかねんぞ。」
「それは・・・・しかし彼女がダイ達の心の支えであるのは間違いは無いのです。士気の為にも、先程言ったように彼女の脆さも含めて兵士達に話します。」
マトリフもブロキーナの手前簡単に引き下がってみたが、胸中では二人の様に、人が一度怖れを抱いた者を受け入れられるとは思っていない。
しかし現実問題それを表面化すれば、戦う勇者達と支援するカール

の者達の間に亀裂が奔るのは容易に想像がつく。
ティファに恐れを抱いた者は全員がカールの者達であり、他の者達はサババ砦でティファに命を救われるか予め知っていた者達。
ロモス王国武闘大会出場者は魔王軍の脅威を身をもって知り、そのまま義勇兵となったゴメス達もサババ砦の勇者達の活躍でティファにぞっこんとなり、歌を聞いていた時はティファの無事を知って涙を浮かべていたのをカールの者達は理解できない目を向けいたのが知られずに本当に助かった。
怖れても仕方がない、せめて表面化させないようにしなければならないというのがフローラの偽らざる本音。
もう一つ、浮かんでしまった途轍もない疑惑の方も含めて。
考えたくはない、最悪のシナリオがフローラの脳裏に浮かんだ時、この世界の為には、最悪自分達の手で、ティファを―殺さなければならない―事を覚悟した。

ティファという者は身も心も魔界の者となったのではなかろうか？

最終決戦への序曲―魔王軍・ミスト―

「闘魔傀儡掌!!」
「甘いよミスト!!ほ～ら!これはどう躱す?」
「っ!ビュートデストリンガー!!」

ミストの闘魔傀儡掌を空中でバク転しながら避けてみせたキルは、その時に生じたミストの隙をつくように、ミストの真横に大量の剣戟を出現させる。
体をひねって避けても隣からも仕掛けた同様のトラップを同時に撥ね退けるべく、ミストは得意技の一つ、ビュートデストリンガーを鞭のようにしならせ反対にキルへと叩き返し、とんできた剣を大鎌で捌いているキルに、爪を剣にしたデストリンガー・ブレイドで襲いかかる。
無論キルも乱打戦に持ち込まれては不利と後方に空間を開けつつ後ろに飛ぶが、逃がさぬ構えのミストはリリルーラを応用してキルの真後ろに立ち、剣と化した右手をキルの首筋にピタリと押し付ける。
「おや、僕のチェックメイトだねミスト。」
「ふん・・・・・ようやくだ。」

二人は死の大地の決戦後からずっと戦っている。主にティファと主が寝静まった深夜帯に。
ミストが新しい肉体を完璧に使いこなせるようにとキルは毎晩付き合う。
新しい肉体であっても自身の暗黒闘気を纏わせた闇の衣を羽織っていれば、ビュートデストリンガーとデストリンガー・ブレイドは使用可能だと確認できたことが大きい。あれは主の若い肉体で出来たのではなく、闇の衣の手先部分の鋼鉄の爪部分に魔力を流し込んで出来ていたという理論が裏打ちされたので、ミストは表に出さずとも内心はかなりほくほくしている。
主の若い肉体由来の最強のマホカンタ系フェニックスウィングは

最早使えず、ならばどう魔法から主を守るか試行錯誤もしている。
幸いキルが見繕ってきたこの体は魔力も暗黒闘気も使えると判断に足る程の量を有しており、デストリンガー・ブレイドなればメドローアでない限りは爆裂系や火炎系は斬り裂けるとキルのトラップとアークデーモン達も特訓に付き合わせ実践済み。
「う～ん・・・魔法使い君のあのメドローアっていうのはどうすればいいかねぇ～。」
キルの言葉に、ミストもそこが悩みどころであった。はっきり言えばあれは反則だろう。
威力は絶大な上に、使い手の微調整次第で小型化も大型化も自由自在な上に、パーティー戦で乱戦をされポップを見失ったが最後、何時仕掛けられるか分からない魔法とは厄介な事この上ない。
主もマホカンタを使えるとは言え、その時ダイやハドラーと切結んでいる時にしかけられれば百万が一お体に傷でもつけられたと思っただけでゾッとする。
キルとしても自分の空間を開けて反対に返す方法を考えて見てはいるものの、ミストと同じく乱打戦になった時はどうすべきかが悩ましい。
向こうには先の大戦から鳴らした大魔導士がマトリフが居り、自分の空間の使い方の恐ろしさを弟子のポップ等と想定してるだろうし、初見殺しが出来るという甘い考えはしていない。
自分のトラップの最大の目玉のマグマ系はほぼ地面から噴出させるものであり、中でもダイヤのセブンはその最たるものだが、地面を抉り取るあの魔法が邪魔をしよう。
もっとも、トラップはバリエーション豊富であり、そこまで火炎・マグマ系のダイヤシリーズには拘ってはいないので深刻に悩む事でもない。
決戦当日のパレスはキルトラップで主要部分で固める方針で勧められている。
無いとは思いたいが相手もパレスの結界を無効化する大技を持ってこないとも限らず、念には念を入れる・・・と言う訳でもない。

来たならばきたで、先の決戦時の様に一網打尽すればいい。
地上でティファの処刑敢行と、勇者達を迎えうつ部隊もガルヴァス達を筆頭に魔界のモンスター部隊をもう編制している。
人数も千を越し、前日にはさらに呼び集めスペース確保と逐次投入できるようにモンスター筒に入れて待機をさせる。
地上のあのロロイの谷は、広間のような部分は広いが、切り立った崖部分が邪魔をしてダイ達サイドは大人数で来るにしても百数名がいいところだろうとミストは読んでいる。
それ以上となればあのたにの狭さがネックになり、固まって待機している所を打ち取られる事は向こうも予想してこよう。
―魔の六芒星―の為と、戦術的意味においてあのロロイの谷は何かと魔王軍に有利に働く。
敵にはモンスターを入れておける様な筒も、逐次兵を別の所から来させる悪魔の目玉の様な通信手段も、ルーラを使っての伝令をさせる人材も不足してよう。
大戦始まってから、ミストは当初カールを攻めて頑強な抵抗に―手を焼いていた―ように見えたが実は裏で行っていた事に注力していたので、表のカール攻めはほぼどうでもよかったのだ。
裏でしていた事、其れは各国のルーラを使える者達をシャドー・ゴースト達に暗殺させていた。
国のトップではない、大戦で一番目障りだと感じたのは各国で支援し合える力を発揮できるであろう人材のルーラの使い手を早々に葬っておく事の方が大事。
その策は当たり、各国も余力はあれど他国の情勢を随時知れる手段を喪い、連携は取れずダイ達がいなければ時間をかけてでも各個撃破できたはずであったが、其れはあえなく潰え、各国は今協力し合い連携しているが矢張りルーラの使い手不足がここで響いている。
キメラの翼にも限度があろうし、道具を使おうとすれば魔法よりも動作が増えて監視していれば直ぐに見つけるに至り、すぐさま攻撃して妨害すればいい。
「ミスト～、悪い気配が漂ってるよ～。策がうまくいきそうなんだね

～。」
もしもミストの表情筋が豊かに動くのであれば、悪党が策を弄してうまくいきそうなにんまりとした顔になるであろう気配を漂わせているとキルはミストの背後から手を伸ばしてそのまま軽くのしかかる。
親友の策が上手くいくと良いな～。
「ふん、全てはバーン様の勝利の為に・・・」
「同感だねミスト。勝つのは僕達だ。地上を消して天界を滅ぼして太陽とあの子を手に入れるのは僕達だ。」
「・・・・・幽体でも欲しいのか？」
「うん？ふっふっふ、そこはね～ミスト、ナ・イ・ショ・だよ。当日その時御覧じろってね。」
「・・・・・・なんだそれは？」
「んふふ、あの子を完璧に手に入れる方法見つけただけだよ。あ、でもね、あの子を殺してもその策はうまくいくから、処刑する時あの子が叛意しないままだったらそのまま殺して大丈夫だから安心して処刑してあげてね～♪」
「・・・私はお前のその辺が理解できん・・・」
愛しいものを殺してどうぞとはどういった了見してるんだこいつは。
「いいのいいの、君はストレートのままでいてね。僕みたいに歪んじゃぁいけないよ。」
・・・一応こいつも変態は認めずとも歪んでいる事は自覚しているらしい。それも振りなのか本心なのかは知れんが、どのみちこいつの愛情とやらが屈折しているのは確かだな。
何だろうか、この件に関してはティファに同情してやりたくなる。
重苦しい溜息を吐きながらも、ミストは親友を振りほどかないでいる甘さがある。
なんだかんだ言いながらもキルを最終的に受け入れてしまう。
「ミスト～、夜食―食べなくて―いいのかい？」

振りほどかれない事を良い事に、キルは白い衣のタイ部分を弄って遊びながらミストに―食事―を勧める。
この体で不便だと思うのは、―生きた肉体―を維持する為に食事をしなければならない事だ。
主の肉体は凍れる時の秘法で肉体時間を静止していたので食事等は不要であったが、寝なくとも食事は不可欠であり、清潔を保たなければ細菌感染もあり得るので入浴の必要も出てきたのが不便だが、神経は通わせていない筈なのに何故か―味―は分かる。
これまでは主の好みの味付けになるまで大勢の者達に味見をさせて計量で味を調えていたのが、味わえる事で―味見―を自分で出来る事になったのがメリットなのだろうか？
何の奇跡が起きたのかは分からんが、食事を摂る行為も含めるとメリット・デメリット半々ではあろうか？
食事を終えればやる事は次々とある。
兵士達の装備点検のチェックと、―回復薬―の一覧作り。
ティファのしている事を見て、こちらも随時傷ついた者達を回復させるように態勢を整えている。
魔界は強さこそすべて、自己防衛も己の力量の内と言えようが、それでも犠牲少なく最終的に大勢で押し切れる味方の数を残せるのであればやってみる価値はある。

最終決戦への様々な手筈を、大魔王の最側近たるミストは着々と進めている。
全ては敬愛する主に勝利の花を贈るべく

最終決戦への序曲―新生六大将軍とその周辺―

ガルヴァスの朝は意外と早い。
パレスが常時超高高度を飛行して朝焼けだの夜明け前などは分からないが、ミストの次位には早く、朝食を済ませながら自分に与えられた部隊の運用方法の調整を進め、副官として働くデスカーレに振って後は自室か鍛錬室で過ごし、時折ザボエラの超魔生物としての調整と健診を受けてひきこもる。
本当はもっと活発的に動き、他部隊の連携やら大魔王様への謁見やらをしたいが兎に角必要最低限以外出たくない!!
本当に必要な事は悪魔の目玉通信で部隊長とやりとりをしているが、本当は直に会った方がより親交を深めあい、背中を併せて戦い抜く気力の一条となるのは隊長格としては分かっているのだが!!本当に出たくない。
理由は周囲からすれば物凄くしょぼい。ティファに会わないようにする為というしょうもない理由なのだが、本人は切実な思いがそこにはあった。

私はお前を憎む

ハドラーを誑かした娘を許さないと宣言して颯爽と立ち去ってティファはそんな自分に恐れ戦くと思っていたのが蓋を開けてみれば!!

憎まれる程には私は貴方を知りません。なのでおやつ一緒にいかがですかとか、自分の憎しみに気圧されたのが嘘の様に、数時間後に目がばっちりと覚めたティファが物凄い嫌がる気配を垂れ流す死神に抱っこされての訪問とかってあいつは頭がおかしい!
実はハドラーよりも卑劣であるが、ハドラーと同じように世間一般常識を重んじるガルヴァスと、横紙破りを常識として生きてきたティファとしては根本的に相性がいい筈がない。もっと言えば最悪であ

る。
しかもティファの言っている事が何一つとして理解できない！
戦場では戦い合っても知り合う事に罪は無いかとか・・・・言っている事が意味不明すぎる!!こんな状況で捕虜と敵としてではなくおやつ食べ合う仲間として知り合ったら、お前は百万が一味方の中に戻れたとしても利敵行為をしてきたのかと罪に問われる事請負だわ!!
地上が蹂躙されている中敵と楽しくやってましたとかいう奴が捕虜で通る訳ないだろう!!
自分が相手の指揮官だったら間違いなく百パーセント寝返ったと断罪するわ!!
会って数時間後にガルヴァスはティファに会いに行ったことを後悔した。
自業自得と言われればそれまでだが、おやつと共に叩き返した時はあの死神もおかしかった。
お嬢ちゃんの好意無にするんだ～、へ～、ふ～ん・・・・とか・・・お前も私に会いに来ること自体嫌がっておいて断ったら断ったで何故その事で不機嫌が増す!!
これはあれだ、娘と付き合っているのか！　いえ其れは無いです!!なんだと！俺の娘の何が悪いとかいう面倒な父親と同じ類の奴だ!!
速攻で帰れお前達!!
自室から叩き出した後・・・・・本当に嫌だがミストバーンに懇願する羽目になった。
私の精神状態の為にもあの二人を近づけないで欲しいなどと・・・屈辱的な事この上ない・・・

「キル・・・結局どうしてあの人が私を憎んでいるのか分かりませんでしたね。」

「なんでそんなに知りたいの？」
「いえ・・・いざこざを戦場に持ち込んで戦場混乱させるのは望ましくはないかな～と、あんな素敵な人に恨まれたまま戦うのも嫌なので。」
「素敵⁉あいつがかい？」
「はい、心の内側に燃えるような炎を感じました。彼はその業火で己を焼くのも厭わない武人です。
ふふ、クロコダインとは真逆の覚悟でしょうが、私からすればあの人も好もしい武人です。」
己の手を汚す事に躊躇いは無く、全ては主に勝利を捧げる為に突き進む。
クロコダインやヒュンケルには逆立ちしても真似は出来まい。
あれは小悪党などが近づけば瞬間灰にされる類の黒き業火だ。
戦う瞬間まで存念を打ち明け合って見たかった。それこそハドラーの時の様に。
「・・・・・僕はあいつが嫌いだよ。」
やり口の卑劣さをキルはどうしても良しとできない。それが主の為にどれ程貢献しようともだ。
暗殺者が何を気取っていると言われても、赤子殺しも日常としている死神の癖に、人質作戦を幾度も敢行するガルヴァスが嫌いだとは・・・自分でも偽善的で最低だと分かっている。
ガルヴァス達は周到だ。
常に相手の一番弱いところを突こうと念入りに調べ上げ、弱い戦力から崩し、補給を断って干殺し、重要人物の身内を攫って誘き寄せ打ち取るなど枚強に暇がない。
魔界ではその国の主の魂をデスカーレの脱魂魔術で抜き取り、主要人物達を一堂に会させている隙に城下町から蹂躙し、混乱したところを潰した事もある。
やり口がどうにも気にくわない。ハドラーは小物の時分、夜襲・朝駆け掛ける時であっても自分がガンガン出るタイプで、裏からこそこそしたことは無いのを知っているだけに、ハドラーの影武者があれな

のはどうなんだとそちらでも苛ついている。
あそこの者達は本当に表の者達の影武者をする気有るんだろうか？
デスカール等はヒュンケルの対で不死騎団だがミストと対の方が合っている。
共に暗黒闘気の使い手で、怜悧な所が似通っている。
似てないのは山ほどいる。
魔影軍団の次期参謀として生み出されたリビングデットのダブルドーラ等は、バラバラにされても頭部と二つの半身の三つを分離して行動できてまた復活するところややたら好戦的な所などどう考えてもフレイザードの枠内だろう。
超竜軍団・バランの影武者ベグロムなどは突っ込みどころ満載過ぎる。
単なるガーゴイルで、ドラゴン要素と言えば使役しているワイバーンが精々で、其れであればバランではなく、その配下の竜騎衆が一人、スカイドラゴン・ルードを使役しているガルダンディー枠が精々だ。
他は取り立てて剣がさえわたるわけでも魔法が使える訳でもない・・・・どこにバラン要素があるんだあいつは。
ザボエラ枠のメローネという―植物系の魔物―女も全く魔法を使えず専ら茨の鞭で戦っている。
普段は美女に化けているが、本当の顔は醜悪で醜く、中身もまた醜い。己よりも美しいものを見ると痛めつけたくなるサディスト・・・・な所がザボエラとの共通点だとでも言えるのだろうか？
多少似ているのは百獣魔団の影武者ザングレイかな？あいつ自身もクロコダイン君と同じパワー型の牛型獣人で、武器も拳の装着可能な手斧と槍に分離するアックス・・・確か本人の名前から来たザンバーアックスとかいうの使ってるしな。
度々仲間を庇う動きもあるらしく、これには少し好意を向けられるのだが、如何せんガルヴァスに忠誠誓っているので自分が近づいてのお話しできないだろう。
フレイザードと同じく氷炎将軍の異名が被ってしまったという不

幸なブレーガンも、三節根から炎と氷を出して真っ向から戦う武闘家タイプという。
・・・・・六大将軍の中で強いのは一番はガルヴァスなのは間違いないが、ティファと会わせても問題なさそうなのは上記の二人。
しかし、ガルヴァスがもう配下達にお達しを出しているので最終決戦の戦場以外で会える事は無かろうし、自分としてはどうでもいい。
「そんな事いいから、お茶会蹴った事バーン様に謝ってお茶一緒に飲もうよ。」
「いや、流石にそれって・・・」
「大丈夫大丈夫、君がバーン様の膝に乗って御免なさいすれば許してくれるよ。」
「・・・・・・其れってあらゆる意味で大問題過ぎません？」
「一人でお茶しても美味しくないでしょう～。」
等と文字通りお茶を濁させてガルヴァス達との接触を断たせてキルであった。

キルの読み通り、ティファを叩き出したガルヴァスは配下達に注意喚起を行っていた。
変な小娘に誑かされんように会う事も姿を見る事もしないように
最早ティファに対しては珍獣ではなく猛獣か害獣扱い、其れもすぐにでも撃ち殺した方がいい害獣なのだが！魔王軍内でのあいつの扱いもおかしい!!
「いんや～、嬢ちゃまと居る時のミストバーン様はいつもよりもお優しくなるだよ。おらみたいな戦い馬鹿のアークデーモンに優しい言葉くれただよ。益々頑張って地上潰すだよ！」
「バーン様もおひぃ様を膝に乗せている時はいつもよりも頭が冴え渡るらしく天界への策も格段に良いものを多々お出し成されていたな～。」
「料理長たちの機嫌もいいから飯も上手いし、ホント、ティファ様様だ～。おかげで訓練も倍頑張れらぁ。」
「貴殿、ティファ様と合奏申し出たとか・・・」

「おや、ならば貴殿も竪琴の一つでも・・勝利の宴では是非合奏したいものだ。」

お・・の・・・れえ!!

士気が上がっているのは良い事だが!!あの娘の正体が知れた時の反応をバーン様達はどうなさるおつもりだ!!

捕虜に骨抜きにされていたとあっては魔王軍の面目丸つぶれであり、士気が駄々下がりではないか!!!

ガルヴァスの危惧は相手が―ティファ―出なければその通りであったが、最終決戦の前日、大魔王から何故ティファを亜そこまで野放しにしていたのかを理由を聞いた時戦慄しそして嬉しくもあった。

主の一挙手一投足は全ては勝利のための布石であったのだと。

何も知らない哀れな娘だと、ガルヴァスに見られる事をティファは知らずに最終決戦を迎える。

最終決戦への序曲―魔王軍の料理人と勇者一行の料理人の騒動記―

空飛ぶ浮遊要塞・バーンパレスの一室の窓辺に、一人の少女が窓を開けて細い両腕を外に出し、窓枠に頭を凭れさせてみるともなく外を見ている。

長く豊かな黒髪はリボンでまとめる事をせずそのままであり、超高高度を飛んでいるとは思えない程ピクリも揺らがずに外に向かって垂れている。

本来であれば動いている要塞に吹き付ける風も大気の干渉も、全てこのパレスの主の結界によって跳ねのけられている。

純粋な空気だけが出入りをし、後は埃の一つも入って来ることは無いという徹底ぶりには頭が下がる。

そんな静けさが、昨日の騒がしくも楽しい珍騒動が蘇る。

「・・・・・三度目も健康じゃ、忌々しいほどに健康じゃ。」

「遂にキルの前であっても取りつくろうのをやめましたかジジィ殿。」

「ふん！お主などあと数日の命だあるというのに！何が悲しくてお前の健康など見てやらねばならんのだ!!」

捕まって五日目にして、最終決戦時の時も元気な姿を勇者達に見せつける為に、日に一度健康診断受けろと大魔王からお達しに、何の因果でザボエラは主治医なんだか。

・・いや、これは向こうとしても何度も命を狙ってくる相手の健康診断しなければならんのだから御相子か？

ティファの考えた通り、ザボエラとしては拒否出来るものであれば

ティファの診察なぞ願い下げではあるが、そこは矢張り研究者としての性が疼く。
　ティファの体は、それ程までに特殊であった。
　死ぬ筈であった者がここまで回復するのは―本来―であればありえず、そこを研究しようとしたができずに諦めたのだが、それともう一つ。
「しかしお前は面白い位にぺったんこだの。別に筋組織は普通であるのに、―性組織―にでも異常あるのか？」
　その年齢に相応しくない体つき。
　平均女子にはあり得ないほどに、背丈は同じなのに二次性徴は見られず、とは言え男子の様に無骨ではなく柔らかさは確かにあるのが不思議であったが。
「む!!私の母はナイスバディーだったとバラン父さん言ってました!!いつかは必ず!!」
「・・・身内と違う体形という事はお前自身の問題か・・・肉などのタンパク質取っておらんじゃろう。」
「うぅ!!」
「肉はあまり好きではなく野菜や果物やパンなどの穀物で腹を満たしていったなら当然の結果じゃな・・・・よくもこれで筋肉が出来たもんじゃが、女として必要な部分を育てる脂肪が全て筋肉になっただけの話じゃな。反対の意味で偏食で、ある意味健康的であるから今までなんともなかったが、体は正直の様じゃな。」
　まさかの超偏食家であったとは・・こやつ勇者一行の料理人ではなかったのか？
　栄養バランスの概念はないのかこやつは？
　うぅぅぅ!!ザボエラの癖に!ザボエラの癖になんだか真っ当なお医者様みたいなこと言っているよ!!
　そうだよ!お肉嫌い!!野菜美味しい!!お魚焼いたのは半身あればいいじゃない!
　真っ当な、ど正論をザボエラに呆れながら言われたティファは反論できず、内心では留められずに悔し涙を流して悶え苦しむ。

その様子にザボエラは日頃の溜飲を下げほくそ笑む中、お嬢ちゃん情報はなんでも欲しいキルは、ティファに聞こえない様にそっとザボエラに質問をする。
「そしたらお嬢ちゃんのこのぺったんな体は偏食から来てるのかい？」
「そうですじゃな。取るべき時期にきちんと肉・魚などのタンパク質を後回しにして、別の意味での栄養不足ですじゃな。」
よくもそんな偏食家が魔王ハドラーとの死闘を演じられたのものだと魔王軍の大幹部キルと、この度ミストの補佐になった幹部のザボエラは若干呆れている。
悪魔の目玉の記録映像見たザボエラは、よくこんなバケモノから命を狙われて生きているなぁと、自身の幸運を噛みしめているその時、扉が左右に吹っ飛んだ。

「小娘!!!!!」

入ってきたのは怒れる冷徹参謀ミストバーン。
大魔王バーンの最側近で、魔界においては宰相の地位に居り、現魔王軍を実質的に切り盛りしている影の大実力者。
あらゆる敵対勢力が主の眼前迄迫ろうとも冷静に対処してきたこの男が、ザボエラの前であっても口を開き、上半身がまだはだけているティファにずかずかと迫ろうとしたその瞬間
ガッシリ
「はいストップだよミスト。それ以上はお嬢ちゃんの色々が見えるから少し待ってね。
お嬢ちゃん、今の内にボタン留めようね～。」
その影の大親友、死神キルバーンが親友を背後から抑え込む。
ザボエラはきちんと医者の立場なのでティファの肌を見るのは有りだが、親友はアウト。え？着替え全般を手伝って、ついでにお風呂に入れている僕はいいのかって？
いいに決まっている。僕はお嬢ちゃんのお世話係なんだから、お嬢

ちゃんの心身の健康管理全般僕のお仕事だもん。
とっても碌な事を考えていないキルは、実力は本物でありミストの怒気にも慣れているので平然とミストを押さえつけている。
ボタンを留めるのに夢中なティファも、殺気だ怒気だその他諸々の負の感情になれているのでやはり平然としているが、ティファの後ろでとばっちりのようにミストの怒気を浴びているザボエラとしてはたまったものでは無い。
入ってきた時の気配だけで心臓止まるかと思った程だ。
ティファが衣服を直し終えるとさっさくミストに挨拶しかけた。敵であっても会えば基本挨拶だという平常運転のティファの言葉は、怒声によって遮られた。

「貴様!!よくもバーン様が勝利の祝宴で飲み干す筈だった―エッダ―を菓子酒などに使ってくれたな!!!!バーン様が許そうとも!!私が・・・」

ガッツシャン
ミストの怒声もザボエラが片付けていた器具を取り落として遮られた。
それはミストの発言というよりは・・・・・いや、実質無口参謀が喋った事にも驚いたが、内容の方がびっくりじゃわい!!
「エッダ・・・・と、ミストバーン様・・・・・本当に?」
「・・・・・・・バーン様が余興でこいつに菓子作りをお許しになり、双子の監視の下で菓子作りをして酒も蔵から出していいとの許可を出して使ったのがエッダだ!!!!」
「・・・・・はい!!!!」
「いやミスト、お菓子はその・・・・大魔王が喜んで全て食されましたよね?」
ミスト何怒ってザボエラは何をそんなに驚いているんだろうとティファは不思議そうに尋ねる。
そもそもお菓子作りは料理人名乗っているのならば何か作れとバーン本人から言われて、メイン料理はミストの領域であろうから

と、デザートにして簡単なトライフルを作っただけなんだよね。
あれはスポンジケーキと果物と美味しい洋酒があれば出来る簡単レシピ。クリーム入りや無し、チョコチップ入りやヨーグルト入りなどの豊富なバリエーション作ったら、気が付けば一本使って良しの洋酒がスポンジケーキに沁み込まれて空になった。
当然それを全部食べたのは大魔王。七千歳の超高齢おじい様とは思えない健啖家で、アフタヌーンティーで十ッ種作ったトライフル綺麗に完食してくれたよ。
しかも一つ一つを綺麗に味わうように食べてくれたのが嬉しかったな。矢張り料理人足る者誰であっても作ったものを喜んで食べて貰うのが一番嬉しいご褒美だ。
私が大魔王の様子を飽かずに見ているのをミストが何か納得したように一度頷いたのもばっちり見ている。
ミストもまた大魔王の料理人であり、私のその辺の心情をきちんと理解してくれれているのもまた嬉しい事だ・・・・・さっき迄はミスト何にも怒っていなかったのに。
「バッカモンが!!!

「あれはその昔神々の置き土産、知恵のリンゴから作られた幻の酒じゃ!!作られたのは数万年の記録が最後で、最後の一本をまさか大魔王様がお持ちじゃとは・・・・ともかく!!金銭では測れない価値あるものなんじゃぞ!!」
「・・・・・・えっと、具体的には?」
知恵のリンゴ
昔神々が知恵を生物たちに持たせる為に作られたという由来のある黄金のリンゴ。
其れは魔界が先代の神のせいで沈められてもしぶとく生き残り、最後一つがとりつくされる数万年前まで存在した。
その味は至福といわれ、一欠けらの為に国が興廃したという噂まで出回るいわくつきのリンゴ。
それを酒として造られたのがエッダであり、数本しか作られなかったのを魔界の実力者たちが血で血を洗う争いをしながら奪い合ってきた。
飲むためではない、其れを所持して守り切っている事が実力者の証として、いわばステータスの為の酒を、若いころ手に入れたバーンは、いつか天界を滅ぼした暁に、神が遺したリンゴ酒で祝おうととっておいたものを、知らずティファが使ってしまったとは、価値を十全に知っているザボエラは頭痛しかしないがともかく・・
「価値か・・・・・お主、テランは知っておろうな。」
「小国でも信仰の厚い国でしょうが。」
「うむ、その国民の数は百にも満たんが、兵士官僚を入れれば結構な数になる・・・エッダはその国を百年養って遊ばせてもまだ釣りが来るくらいの価値がある・・」
「え?」
「ひょっとすれば、意外と質素なパプニカならば優に五十年は・・」
「うわぁぁぁぁぁ!!!」
「やっとか仕出かした事に気が付いたか馬鹿娘!!!」
ザボエラに知識叩き込まれたティファは本当に青褪めた。
私なんてもんを使っちゃった・・・は!!

「ミスト!まさかとは思いますがエッダ使うの止めなかった双子さんは!!」
「・・・・・バーン様は笑って許したが!!」
「ごめんなさい!!それには負けますがとっておきで弁償します!!ハイハニーの蜜酒五百年もので許してください!!」
「な!!あの精霊族秘蔵の酒だぞ!!!なぜ貴様がそんなものを持っている!!」
「お友達の精霊から貰いました!!一番高いのが千年ものですが流石にそれは王族系しか飲めないからって二番手の五百年ものです!!弁償します!!」
・・・・・この小娘ホント何なんじゃ?
精霊の秘蔵酒・ハイハニーの蜜酒は、一滴でも舐めれば常人なれば溺れる程の美味だと魔界でも大評判で、コップ一杯の為に地上に出て精霊達を脅し奪う実力者思いる程の酒の、其れも五百年ものなんぞ聞いた事もないわ!!
「ミストも小物お爺ちゃんも其れで手を打って上げなよ。バーン様別に怒ってないんでしょう?
お嬢ちゃん、お酒何処にあるのかな?」
「はい!場所は・・・」
お酒なんてどうでもいいキルは、ミストたちが怒っている内容が実にくだらなく映り、代わりがあるのならばさっさと取ってこようと提案して単身空間をティファが教えてくれた場所に開けて取りに行き、すぐさま戻ってきた。
其れはクリスタルで出来た壺に入れられており、早速主に届けようと中身を改めかけたミストは困った。
味は分かるようになったが・・・
「・・・ザボエラ、飲んだ事は?」
「は⁉・・・若い頃に一口・・」
「・・・・・・」
言葉少ないが、ミストが何を聞いて何を自分にさせたいのかを察したザボエラは、溜息をつきながら棚に近づき、茶器の横にあるカップ

を手に取ってミストの前に戻った。
今ティファ達がいるのはザボエラがバーンから下賜されたパレスの一室に作られた研究室。煮詰まった時や休憩時に飲む為の紅茶の類が常備してある。
ミストは無言でカップに壺の中身を注げば、其れだけで甘くも爽やかな芳醇な香りが室内を満たす。
その匂いだけでティファは酔ったように赤くなり、ザボエラも誘われるように口をつければ・・・
「美味いですじゃ・・・・」
ティファの情報で持ってこられた物だけに、毒の可能性を疑ってた。
しかし飲めばそれは若かりし頃に飲ませてもらった本物のハイハニーの蜜酒であり、極上の酒を思いがけずに飲めたことに感動すらした。
「・・・・・・・二度と騒がすな。」
中身を確かめたミストは、主に献上するべく足早に立ち去る。
「あのキル・・・・・ザボエラにもあれ上げてください。小さな瓶が隣にあったと思いますが、あれも中身は一緒です。」
「小娘⁉」
敵で憎んで殺し掛ける自分に、極上の酒を渡すとは何の魂胆がある!!
「騒がせた詫び、それ以上でもそれ以下でも、そうそれですキル。」
「どうせお嬢ちゃんの事だからそんな他愛も無い理由だと思ったよ。受け取っておきなよ小物のお爺ちゃん。」
「・・・・・・ふん!!用が無いのならばもう出てゆかれよ!!!」
様々に意味で切れたザボエラは、キルの手前ギリギリ敬語を使って叩き出し、一人になったザボエラはティファ達が置いて行った壺を睨みつける。
儂を小物じゃからと歯牙にもかけていないというのか!!
馬鹿にされたようで気分が悪く、壺を割ろうと振りかぶるが割れなかった。

騒がせた詫び
そう言った時のあの小娘の顔は・・・何故申し訳なさそうな顔を・・
何故じゃ・・・何故あの小娘は憎んでいる儂に申し訳なさそうな顔した!!
一昨日に一人は寂しいよと悲しそうに言ってきたあの顔が更に脳裏にちらつくではないか!!
ティファの心情が全く分からなくて、壊す気力も失せたザボエラはハイハニーの入った壺を研究所の机においてそのままにしている。

ティファは珍騒動を思い出しながら、眼下の様子を見ている。
未だにとまる気配のない空中要塞は、先程―リンガイア―の都市から外れた山間にピラァオブバーンを堕としてすぐに移動している。
落ちた瞬間も落ちた後も見ていないが、三神様達の計画通りなれば命は一つも喪われていまい。
願わくば、あの人達と自分の願いが成就して欲しい。
だから、この暴挙を見逃す事を今は許してほしい。
今日で掴まって八日目。私の公開処刑はあと二日だ。
・・・・・・みんな元気だろうか

早く会いたい

最終決戦への序曲ー勇者ダイと頼もしき船長ー前編

俺って補助系～呪文てんで駄目だな～。
ピオリムでも覚えられればダイ達前衛系の戦士全員にかけて速攻アタックをもっと支援してやれんのにな～。
若き二代目大魔道士ー候補ーポップはただ今お悩み中。
田舎武器屋の、なにをやらせても長続きしなかった自他共に認められていたダメ息子が、今や世界を救う一行の戦力強化に繋がられる魔法が使えなくて駄目だなと悩んでいるのだから人生なにが起こるかわかった者ではない。
父のジャンクに性根の座らないやつと毎日怒られていた頃のポップが見れば、あれが俺!?嘘だ!!とか騒ぐほどの男に成長している。
ロッドの扱いに慣れ、後は自分になにができるのか模索しながら昼食の為に砦に向かう。
「ポップさん、お帰りなさい。」
「あ、ただ今～。皆んな戻ってきたか？」
「はい、珍しくもポップさんが最後ですね。ゆっくりお休みを。」
「うん、あんがとな。」
ポップは手を一つ振り、人懐っこい笑みを浮かべて門番に別れの挨拶をして広間に向かう。
今日のお昼は何かな～と浮かれていると、ダイの元気な声が飛び込んできた。
「俺嬉しい!!ここで船長さんに会えるだなんて夢見てるみたいだ!!」
ん？・・・船長って、確か？
「俺こそ、ダイ君に会えて嬉しいよ。世界を助けるのも大事だが、まずはダイ君自身を労るんだぞ。」
「うん！きちんと寝て、食べてみんなで頑張ってるんだよ!!」
あ、やっぱりダイ達が世話になっているウォーリア船長か・・・なんでダイの知り合いがここに？
それに広間の入り口前にいるのって。
「どうかしたんすか女王様。」

「あ!ポップ君・・・いえ、大戦が始まって国を堕ちてからずっと私達に支援してくれる人がいる事は話しましたよね。」
「そうすっね・・。」
「その、支援物資を届けてくれているのが今ダイと話している彼なのですが・・・あの人までもかダイやー料理人ーと知り合いとは思わなくて・・・」
あ～、女王様すっかりティファに苦手意識持っちったか。俺達は名前でティファだけ行為なのか無意識なのか、最近あいつの話出す時名前で呼んでないな。
ダイ達の話し声をききながら、どこか苦い顔して入り口前に立ってたのが気になったので突いてみたらビンゴかい・・
「世の中狭いっすね～。」
ポップは当たり障りのないことを言ってフローラの隣を横切り、平間に入れば目敏いダイが駆け寄ってきた。
「船長さん!この人が俺の兄のポップだよ!!ポップ!あの人がデルムリン島のみんながお世話になっているウォーリア船長さん!!いい人なんだよ。今日もこの砦に食べ物や他の物沢山持ってきてくれたんだって!俺達よりもあの秘密トンネル沢山使って今までずっと女王様助けてるだって!」
大雑把な説明を笑顔で一生懸命するダイの頭を一つ撫でながら、ポップは広間を見回す。
船長の他には船員達は見当たらない。支援物資の方か?
バランはまだ広間にいない。
竜騎衆もまだで、自己紹介すんでんのかいつものメンバーと師匠はまったりモードで見物してる。
「弟分が騒がしく紹介してくれたが改めて。勇者ダイ一行で魔法使いしてるポップだ。話はいつもダイやティファから聞いてる。ここの物資全般は船長が全部?」
「挨拶すまない、ウォーリアだ。俺達はー頼まれたー物を運んでるだけだ。大した事してはいないさ。」
広間に入りながらポップは挨拶をし、ウォーリアも返しながら大し

た事はないと何気なく手を振る。
ただ、頼まれた物を届けているだけだと。
「いや、大戦が始まって地上のモンスター達は凶暴化しなくとも海は別なのは知っている。地上も今やモンスター以上の騒ぎなのに物資届けてくれるなんて感謝以外ないさ。」
ポップの真っ当評価の褒め言葉に、ウォーリアは年甲斐もなく赤くなる。
「よしてくれ。それをいうなら世界を守っている君達の方こそ・・あの小さかったダイ達がこんなに立派になって。」
自分は大した事は無いと、ダイに話を振ろうとしたウォーリアは、不意に幼かったダイとティファを思い出して、我知らず涙が込み上げそうになる。
本当に二人は小さく、世界のことなぞ何も知らなかった。船を見せればはしゃいで駆け回り、クッキー一つを宝物の様に喜んでいたあの幼子達が、世界の命運を分けた大戦をする。
「ダイ君、約束してくれ。きっと生きて、デルムリン島に帰るんだ！ブラスさんもゴメちゃんきっと待っている!!また、浜辺で鍋をしよう。」
自分ができるのは物資を届けるのが精々で、その先を助けてやる事が出来ないのが不甲斐ない気持ちでいっぱいになる。
「船長さん、俺、俺達は絶対に勝つよ！勝ったら真っ先に皆んなでデルムリン島のジィちゃんのところにルーラして帰るんだ。落ち着いたら鍋しよう！ずっとずっと先も、俺はあの島で皆んなで鍋食べたい!!」
それはダイの幼き頃の楽しい思い出の一つ。
小さかった頃、ウォーリアは鍋と具材を取ってきてくれて昼間皆んなで笑いながら鍋を食べていた。
ティファも小さな手で包丁を持って具材を切るのを、周りの大人達は大丈夫かとオロオロしながら見守ってくれていた。
皆んな優しく良い人達だ。ゴメちゃんのこと知っても悪い事しようとした人は一人もいない。
ずっとお友達でいてほしい大人の人に、ダイは目を輝かしながら力

強く約束をする。
ここ最近元気がなくとも無理をして笑っていた時とは雲泥の差がある。
矢張りティファの事で落ち込んでいても、必死に前に進もうとしてくれるのは仲間としては頼もしいが、兄としては弱音をせめて自分にだけでも話してほしかったと思うのは贅沢だろうか？
父バランも娘一人をと罪悪感からダイとしても言えないだろうが、勇者の相棒たる自分にも漏らしてくれなかった少し寂しいのだが。
「俺・・・おにいちゃんなのにティファを・・・」
自分よりも、父よりも気心が知れている船長に話しているのだから良しとすべきだ。
ウォーリアも、表の世界では船長として動いているが、裏の事にも情報通である。
この世界の海は、どこにどんな脅威が潜んでいるか分からない。
それは海の中のモンスターの最新情報から、海賊の出没する場所、港を纏める権力者の話などを知らなければ大船団の船長は務まらない。
普段は船一隻でデルムリン島に行っているが、本来は五十隻の船団を纏めている。
その規模と、ウォーリアの個人的な人物の確かさから、ティファはカールの支援物資を彼に託した。
とはいえ幼い頃から知っているティファとしてではなく、船長にも世間的にも、何より受け取るフローラが警戒せずに受け取れる環境をでっち上げて。
フラメルよりも壮年で、元商人風の式神をこさえてウォーリアの元に向かわせた。
内容はシンプルで、先代国王の時代に世話になった商会で、フローラの代替わりの時に商会も引退して田舎に引っ込んでいたが、此度の戦で是非カール王家から受けた恩を返させて欲しいと。
ちなみにこの元・商会は実在している。ティファも自分の話に合うようなところは実際にないかと探した結果本当に実在して一家全員

元気であった。超竜軍団が首都に攻め入る前にカールより離れたリンガイアの親戚の家でのんびりとしている。
　ティファも悪いと思いながらもその家を探し出し、先代国王との書簡でやりとりした時に必ず押されていた商会の家紋のハンコを無断拝借して一筆書いた横にしっかりと押したので、幾度となくそのハンコを見ていたフローラの信用を勝ち取り今に至る。
　話しは少し逸れたが、ウォーリアの周辺にいる海の男達は情報集めがうまく、いつの間にか国の機密や重要なことを耳に入り、勇者一行現状も知っている。
　ティファが、一人残り魔王ハドラーも救った事も。
　人の口に戸は立てらないとはよく言ったもの、ダイ達が助かって寝ている間にも砦に物資を届けた時に、偶然兵士の話を聞いてしまったのだが、ウォーリアはあまり心配はしていなかった。
　魔王救ったのもあの子は何か深い考えのもとでそうしたのだと、そちらも動じる事なく受け止めて見せる度量の持ち主は、昔からティファを正しく評価していた。
　世界を見たいと言った時も、五歳になるティファの中に眠る途方もない力強さを信じて行けるように後押しもしている。
「ダイ君、ティファちゃんならば大丈夫だ。あの子は俺達はなんかよりもよっぽどしっかりとしてる。勝算の無いことをする子じゃない。きっと戻ってくる。」
「船長さん・・」
「ティファちゃんはいつでも大波の中でも道を指し示してくれたんだろう？大戦でのあの子の活躍もあちこちから入ってる。今回もきっと考えた末の行動なら戻る道も用意しているはずだ。ちがうか？」
「・・・そうか、そうだよね！きっと戻ってこようとする！それで俺が迎えに行けば良いんだよ！ティファが小さい頃迷子になった時みたいに。」
「そうだ、兄なら妹信じて助けてやるもんだ。」
「俺はティファを、世界守る・・その後、浜鍋しよう。」
　自分達兄妹をよく知るウォーリアの言葉に勇気づけられ、ウォーリ

アに抱きつきながら約束をする。
必ず皆んなでデルムリン島に帰るんだ。

最終決戦への序曲―竜の騎士と海の男と村の子供達―

自分は学のない男だ。生まれたのが船の上ならば、育ったのも船の上。

覚えている最初の光景は、縄を作りながら空模様があれているのを発見し、親父である船長に急いで伝えに言った事だ。

代々が船乗り。俺の祖父もその前もずっと前から船上で生まれて船上で育つ。

勉強はお袋が、船と海での生き方は親父が、そんな余のカノの渡り方は船員たちが全部教えてくれた。

厄介なモンスター海域の場所も難なく乗り越える為聖水を切らさないように、教会とのパイプを途切れさせないように周りへの配慮を欠かさない方法も。

俺が知っているのは其れだけだ。全ては海で陸の上で、俺と船員達を死なせない方法だけだ。それは引いては自分達の家族も守る事に繋がっている。俺達が死ねば、家族はたちまち路頭に迷う事になる。

家族は大事だ、誰の家族であっても其れは変わらない。

俺のだろうが船員のだろうが知り合いの家族だろうが関係ない。

―家族―というものを本当の意味で大事にしてこなかった奴は屑だ。例え心の中で愛していたと言われようが、疎かにして自分の復讐優先した奴は間違いなく屑だと・・・言ったらダイ君が悲しむか。

さて、目の前で狼狽しているこの隻腕の男になんと声かければ正解なんだ？

こんな時ティファちゃんいてくれたらうまい具合に仲介してくれて、場を荒らさずに済むんだが、ここには言い子でよくしゃべるがその辺の要領の良さをティファちゃんに任せていたダイ君しかいない。

他の子達も俺と目の前の男の立ち位置きちんと知っているのか下手に口出してこないし、きっかけ作りになんねぇな。しわくちゃの爺さんは俺達だけで蹴りつけろって顔して見物してやがる。

はてさて、相手の出方を待ってみるか。

人間の中に、こんな男がいたとは

切り取られた右腕がうずき、微熱を出してザムザより絶対安静を申し付けられていたバランは、砦内に支援物資を持ってきた男が息子と娘の知り合いの船長だと廊下より聞こえてきた話で知り、是が非でも会いたいと痛む右腕を無視して着替え、途中でラーハルト達に見つかったが事情を話して大広間に連れて来てもらった。

その自分の目に飛び込んできたのは、自分に甘える時と同じ安らいだ瞳で偉丈夫の男に抱き着く愛息子の姿であった。

そしてそれを柔らかく笑いながら包み込んでいる男の姿が。

ディーノは、ティファは、幼い時よりあの男にああして抱き着いていたのだろうか？

父たる自分ではなくあの男に・・・

羨む視線に気が付いたのか、男はディーノを抱きしめながら視線を私に向けて来た。

目が合った瞬間、その男の瞳が鋭く光り、私に対して怒りを覗かせて。

ウォーリアーは瞬時に隻腕の男が誰だかを察知した。情報で得た隻腕だからではない。どことなくダイが大きくなり一人前の戦士となればああなるのではないのかと直感で分かった。

顔はどうやら二人共会った事は無いが母親に似たのだろうが、それでも自分の前の男がダイとティファの父親だと分かり、自分にはそれで十分。

抱きしめていたダイをそっと離した後はウォーリアーもバランも無言で相手を見ていたが、均衡を崩したのはウォーリアーの方であった。

やれやれ、どうやらこの男では埒があかんな。

じっと見ているというのに狼狽こそすれ逃げようとはせず、とは言えどう口火を切ればいいのか分からないらしい。

世間にはこういう男はざらにいる。すなわち強いだけで日常の類がてんで駄目な奴。
仕方ない。
「私としては、一度はあんたを殴ってから名乗ろうと思ったがやめておこう。そんな事をしてもダイ君もティファちゃんも喜ばん。二人を幼少期より見て来たウォーリアーだ。」
史上最強の生物、竜の騎士相手に堂々と啖呵を切った。
「・・・・殴られても、殺されても私は文句は言えぬ。ダイとティファの父、バランだ。」
「・・・あんた、俺が何で怒っているのか理解できてんのか？」
「せ・・船長さん・・」
二人に間に発された不穏な空気に、ダイは泣きそうになりながら割り込もうと多が、いつの間にか広間に入ってきたフラメルによって止められる。
今二人の男達の大事な話を邪魔させないように。
ウォーリアーの問いに、バランは悲しい顔で笑って応える。
「無論だ、私が世界相手になした非道はこの身でもつぐ・・・・・」
バキン!!!
「あんたは！一体何を勘違いしてやがる!!!」
その答えに、ウォーリアーは止めにしておいた拳で持って返答をする。世界に非道をなした事で俺が怒っていると思っているのかこの馬鹿親父は!!
「バラン様!!」
「いい！お前達も来るなガルダンディー、ボラホーン。貴殿が怒っているのはそうではないのか？」
「・・・あんた本気で分かんねぇのかよ。」
体が弱っているとはいえ、本気で吹き飛んだバランを案じて駆け寄ろうとしたラーハルト達を止めたバランはふらつきながらも一人で立ち上がり、再度ウォーリアーに問い、その事がウォーリアーを苛つかせる。
「俺とこの子達の関係は？」

「知っている。息子たちが余すことなく話してくれた。優しく逞しい海の男で、自分達の親を熱心に探してくれていたと。」
「あぁそうだ！俺はな、俺達はずっとあんたを探していた!!港町だけじゃねぇ！国々の掲示板がある所全部に！ダイ君とティファちゃんの年齢と特徴を捉えた似顔絵を掲示して、心当たりのあるものは俺の商会に連絡を入れて欲しいと大戦始まるまでずっと更新していたんだ!!!」
「な!!」
「あんたが少しでも人間の町の中で探していれば、その情報は直ぐに知れたんだ!!だのに！あんたは子供達よりも魔王軍としての動きを優先したんだろう！そうでなければとっくに二人はあんたの目に留まっていたんだよ!!あんた父親なんだろう!!何故自分の復讐よりも子供探しに一生を費やそうと思わなかったんだよ!!!!!!世界滅ぼした中に自分の子供がいると何故考えなかった!!!!」
ずっと自分はその事を怒っていた。この砦にいる竜の騎士にして元魔王軍でダイとティファの父親であるこの男に対して。
重罪を侵した経緯も情報で手に入れて知っている。愛した女性の死で暴走した事も。
そこまではまだ自分が怒る筋合いではなかった。滅んだアルキードには縁が無いと言えば薄情と誹られようが、自分が正義の味方だと思った事は一度としてない。
他人を断罪するほど偉い者でもない。
問題はそこではない！その後の生き方には怒りしかない。
自分の復讐心を優先して！大切な女性との間に出来た子供達の行方探しをおざなりにした事が許せない!!
親ならば、まして母親がいない家族の父親ならば、何を投げ打って出も最愛の我が子達を探す事を優先するべきではないのか？
其れが蓋を開けてみればどうだ？魔王軍の大部隊の隊長だと⁉ふざけるのも大概にしろってんだよ！
他人の俺達がそれこそ持てる伝手を総動員して貴族連中の中まで探りを入れ、年間其れなりにかかる掲示板の一角を独占し、心当たり

のある情報提供者に莫大な賞金迄用意していたというのに当の父親が子供探しを片手間でやっていたのを許せるわけがねぇ！

かかった費用などどうでもいい！これは俺達が勝手にやった事だ。ブラスさんから頼まれた訳でも、ダイとティファに請われた訳でもない。

二人がいい子だったからだ。そんな頑是ない子供達が父親と母親の温もりを知らないさまが哀れで仕方がなかったからだ！

生きているのであれば併せてやろうと思った俺達の勝手な思いだが、あの当時は見つけられなくて正解だったなとこの場で罵ってやりたい!!

怒りに震えながらバランの首筋をぎりぎりと絞めるバランの心にウォーリアーの言葉が全て突き刺さる。

私は、本当に必死にディーノとティファを探していたのだろうか？

この男の言う通り、本当に二人を愛していたのであれば、復讐を優先するはずが無いではないか！

ずっと探していたのは本当だ。しかしそれは超竜軍団を育成しながらであり、時には魔界の反大魔王サイドとの戦いもして地上を不在にする事も多々有り、本気で探す気があったのか問われても、今は本気で探していたのだとは恥ずかしくて言えようはずもない!!

「わ・・・私は・・・・本当に何という事を・・・・・」

もしも子等がデルムリン島ではなく、他の激戦地区にいたのであれば、私は子供達を見殺しにしたも同然ではないか!!

私は一体・・・ソアラを喪ってしまってから何をしていたのだ・・・

ウォーリアーの手を振り払う事無く、はらはらと涙を流すバランに、ダイがフラメルを振りほどき二人の間に割って入り、ウォーリアーを突き飛ばして父を背に庇った。

「やめてよウォーリアーさん!!父さんは確かに沢山酷い事をしちゃった！世界にも人にもモンスター達にも!!でもね！辛くても生きて償うって言ってくれたんだよ!!もう俺達の側を何があっても離れないって!!だからお願いだから！父さんに酷い事言わないで!!!」

叫ぶダイの瞳からも涙が溢れ出ている。島にいた時の時分とは違い、父がなした非道が許される事の方がほぼ無いのだという事も知っている。
それでも、大好きな父と船長さんが悲しい顔をしてほしくはなかった。
言われているバランもだが、怒りながらも自分達兄妹の事を思って悲しんでくれているウォーリアーも大好きで・・・だから・・・・もうこれ以上は・・・・・

パンパン

「そこまでにした方がいいですよ船長さん。次の運搬先も物資が欲しいと待っている筈ですよ。」

重く澱んだ空気を、可憐な少女の声が斬り裂き
「そうだぜ船長さん。テランでせっせと摘んで採ってきた薬草を、早く砦の人達に上げないと。」
「昨今何処も薬草は品薄とは言え、まさか自生しているのをそのまま運ぶ日が来るだなんてね。」
「まさに薬草宝庫のテランでしか出来ない手だ。」
「しかもうちの―リュート村―の側の森に、この時期なのに大量自生していたなんて本当に何御偶然だろう〉」
「これあれだ、俺達に―三人―に会えっていうマザードラゴン様のお告げだ。」
「神様も粋な事をするね～。」
少女の声よりもずっと大人びながらもまだ子供の域にいる少年達の声と、少女の挨拶が広間の空気を一変させる。
「お久しぶりガルダンディー。ルード君は元気かしら？」

最終決戦への序曲―竜騎衆とリュート村の子供達―

ずっと気になっていた
ずっと会いたかった
其れと同じくらいに会いたくない者達が目の前に姿を現して挨拶をしてきた時、一体何と言えるだろうか

先程までの大広間の喧騒が嘘の様に、今度は重い沈黙が・・・・落ちなかった。

「あなたって本当に昔っから口が足らないか悪いかのどちらかね!!人が挨拶したのに無視しないの!!!!」

ニーナたちの姿を認めても呆然としているガルダンディーに、沈黙ではなくバリバリの、其れこそライデインではなくギガデイン級の雷が落とされた。

少女は小さな体であっても途轍もない威厳を感じる!

つかつかと大広間を横切ってガルダンディーの前に立ってびしっと両手に腰を当てて踏ん張る様はまさに未来の女傑!

それでもガルダンディーが何も言えないでいるのを呆れた溜め息を吐いても顔は怒っておらず仕方がないと苦笑している。

「まったく本当に仕方がないんだから。ボラホーンさんとラーハルトさんもお久しぶりです。大広間の皆さんは初めまして。テラン国リュート村のニーナです。あ、メルルお姉さんお久しぶり。ふふ、二年振りかな。元気してた?」

これぞ女子という程の弾丸トークの勢いではあるが、挨拶をぬかりなくするニーナに続くように、ニーナよりも年上の男達も広間に入りながらまずはガルダンディー達に挨拶から入った。

「相変わらずニーナにあれこれ言われてんなぁ~。お久しぶりですガルダンディーさん、ボラホーンさん、ラーハルトさん。大広間の皆さ

んは初めましてですね。ハルと言います。」
「この小さい子がティファちゃんのお兄さんか。確かによく似ている。俺はディアッカ。お久しぶりですお三方。」
カールの、其れも最終決戦前日に、何の因果か竜騎衆達が愛してやまないリュート村の子供達がゾクゾクと入ってきた。
女の子はニーナ一人だが、その一人でも問題だろう!!
「ニーナ!!お前何考えてやがる!!!此処はな！おまえみたいなガキが・・」
「分かってるよ!!!」
ガルダンディーは本気で腰が抜けるかと思う程に驚いた。こんな戦場に十歳のガキンチョがどうしていやがるんだと説教しかけたのをまたもやニーナの雷に遮られた。
「此処がどんなところで、此処にいる人達が大戦戦い抜いている人たちだって!!しかも近々最後の決戦てやつするんでしょう。それで世界中の薬草欲しいけど小さな村や町から徴収するのは忍びないから余裕のある所かテランみたいに大量自生している薬草譲ってほしいっていう要請が来たから私達の村に問い合わせが来たのよ。」
三か月の大戦で、地上側のストックしていた薬草類は底を尽きかけている。度重なる敵からの襲撃に、死者が少ない分重傷者用の薬と、皮肉な事に彼等を救える万能薬の存在が追い打ちをかけた。
効きが良いが、単純に薬草を使うよりも数倍の量から薬を作り出す万能薬の数少ない欠点の一つ。
だが最終決戦でロロイの谷に大量に戦力投入が出来ない分、傷を負った兵士をすぐさま回復させ戦場に出られるようにするにはその万能薬がどうしても必須になり、ノヴァとマトリフを中心に、砦でもせっせと制作され、それでも足りずに各国に掛け合ってかき集めて貰っている。
無論それで各地の薬草全てを根こそぎしてしまう訳にはいかない。
そこで苦肉の策で、自生している薬草だった。
乾燥させずその場で調合するから問題ない。この決戦は、本当に地上の一切合切をかき集めなければ挑めない最後の戦いなのだと各国

の民達も協力は惜しまず探してくれているのだが・・
「だからといって、なんでお前達がここに居るのだ!!薬草は王宮に届ければよいのに!!」
　其れとこれとは話が違うだろうと、竜騎衆の良心にして常識人・ボラホーンが問いただせばニーナ達はけろりと返す。
「テランが薬草受け取りの最終場所だって小耳にはさんで、私が皆に提案したの。皆でお手伝いしながら貴方達にお礼しにこようって。」
　とんでもなく無謀な事を、ニーナはさらりと言い放ち、後ろの男達も従うようにうんうんと頷き、全員が一斉に頭を下げる。
「「ガルダンディーさんありがとうございます!貴方が大戦の事教えてくれたのでルックの家は助かりました!!」」
「お前らまさか・・・」
「うん、このお礼直接したくて来たのよ。魔王軍のくせに、私達の身を案じてくれた馬鹿でとっても素敵なガルダンディーにお礼が言いたくて。」
「明日かその辺が決戦なんだろう?本当はルックも来たがってたんだけどあいつ風邪ひいちまってさ。」
「ニーナはガルダンディーに会いから来たんだもんな。」
「ちょっと!!きちんとお礼だってしたかったんだからね!!」
「お前ら・・・たった・・・・それだけの事で・・・・」

　数か月前、ガルダンディーがニーナに会いにいった。
　まだ日が山の端にいある夕刻に。

　その日隣町にお使いに行って小走りに村に帰るニーナの目の前に、単身で飛んできたガルダンディーが降り立ちニーナを驚かせた。
「貴方!!・・・びっくりするじゃないの!もぅおどかして。あれ?ルード君は一緒じゃないの?」
　突然目の前に鳥獣人が降り立てば驚くどころか悲鳴を上げるだろうが、ニーナは色々とあって年齢上に肝が据わった女傑へと邁進している。

相手が旧知の者だと分かれば落ち着いて怒鳴る様が、―普段―のガルダンディーであれば呆れてもう少しましな口効けないのかと、五年前の様にギャースカ返しただろうが、その日のガルダンディーの様子は真剣そのものであった。
今から自分は魔王軍が今までひた隠しにしてきた事を暴露する。完全ではなく、ただの子供相手であっても知られれば間違いなく抹消されるだろうがそんな事はどうでもいい!!
この世界の事は知った事ではないが、それでも、どうしても目の前の元気な少女とあの村の子供達にに死んでほしくはない!!
ガルダンディーは片膝を付いて両手をニーナの肩に乗せて目線を合わせる。
初めてみる大人の男の真剣な様子にさしものニーナも気圧され口を閉ざす。
ガルダンディーはは幾度か口を開いては躊躇うように閉ざすが、意を決っした。
「ニーナ、これから数日後、何があってもお前もリュート村の誰もテランから出るな。」
「・・・・・え?」
「いいか!数日内にテラン以外の国は全部とんでもない事が起きる!!テランだけは無事だ!此処を出なければ安全なんだ!!!」
「ちょ・・・急に何言って・・・」
「ニーナ!!!」
突然雲をつかむ様なよく分からない話をいきなりされたニーナが戸惑い、何事かを尋ねようとするのは無理からぬことだが、ガルダンディーも全てを言うわけにはいかなかった。
具体的な事を知ってしまえば、其れは間違いなくテラン王宮に話が言って全世界に知られてしまう。
別にそこは良いと感じている。たかだか数日で備えが出来ようはずもなく、そもそも襲撃の話も子供の戯言と受け潰しにあうだろうが、王宮内にいる悪魔の目玉にそれを注進した者が知られて、辿られリュート村に焦点が当てられてしまえば折角弱小国だからと見逃さ

れたこの国に災禍が訪れてしまう。なんとしてもそこだけは避けねばならない!!
「詳しい事は言えねぇ、だが信じてくれ!!何があっても数日はテランを出ないでくれ!おまえも家族もリュート村の連中全員だ!!!あのがキンチョ共全員だ!!」
　こんな訳の分からない事を、聞いてくれという方が無理なのは百も承知で、それでも!信じて欲しくてガルダンディーは必死にニーナに頼み込む。
　あの日、半魔だろうが、獣人だろうが竜の子だろうがお構いなしで優しく接してくれた子供達を誰一人死なせない為に。
　どうかテランを出ないで欲しいと。
「・・・・・数日でいいの?」
「!!・・そうだ、そうすればどうしてかは理由が分かる・・・・」
「そう、私達の命に関わっている事なの?」
「そうだ!だから出ないでくれ!!絶対になにがあっても!・・・・・・頼むニーナ。」

　最後はニーナの手をおし抱き、ガルダンディーは懇願さえした。
　この願いが身勝手なのは分かっている。自分達はこれからテランではなくともリンガイアを滅ぼしに行く。
　あそこはカールよりも手強い騎士達を擁しているが故に、物理的攻撃が一番長けた超竜軍団が行く事になっている。
　同じ大陸の国を滅ぼしに行く傍らで、テランのリュート村の安寧だけを願うなどどうかしているのなぞ己自身がよく分かっている。
　ならば軍を抜けて全世界に警告しろと偉い者達ならば言うだろうが、自分と他の二人も主たるバランが突き進む道に何処までも付いていくと覚悟を決めている。
　引き返す気などなく、それでもニーナ達だけはどうあっても・・・
「分かったわ。皆に伝えてみる。そうは言っても、うちの村は他国に行く人がそもそもルックの行商一家しかないから手立て考えてみる

わ。」
「お前・・・・俺の話・・」
「何ポカンとしてるのよ。あんたが言ったんでしょう。あんたは口は悪いけど与太話する人じゃァないって信じただけよ。必ず守るから約束して。」
「・・・・すまねぇ・・・・・・頼む。」
「ふふ、その代わり何にもない時は今度はボラホーンさんとラーハルトさんと、後必ずルード君連れてきてね。今度は皆でお茶しましょう。ふふ、お姉ちゃんも一緒だと嬉しいな～。」
何もなかった時
その無邪気な願いに、ガルダンディーは何も言えずに無言で飛び立ちその場を後にした。
その答えは、確実に決まっていたから。

現役の魔王軍が、大戦前から軍を裏切りそしてリュート村の誰一人欠ける事は無かった。
「だったら・・・だったら分かんだろう!!俺は魔王軍の兵士だった!!あの時俺は!同じ大陸のリンガイアに・・・」
「分かってるわよ!!」
ガルダンディーの懺悔を、ニーナは最後まで言わせなかった。辛そうにしているガルダンディーと、同じように俯くボラホーンとラーハルトの方も見ながらニーナは分かっているともう一度静かな声で言った。
「八日前に、ティファお姉ちゃんが来て全部話してくれたの。ガルダンディー達の事を。
その前からカイの話で知ってたの。覚えてるボラホーンさん？貴方みたいに筋肉のある男になるんだって言ってたカイはね、鍛えて鍛えてお城の見張りの兵士になったの。」
「・・・・まさか!!」
「そう、テランに攻めて来た時カイが見て知ったの。ガルダンディー達がどういう人達なのか・・・・お姉ちゃんとの相変わらずの遣り取

りもね。」
　その歳に似合わず、ニーナはほろ苦い笑みを浮かべている。相も変わらず三人とお姉ちゃんは会えばどたばたし、そして悲しい結末になってしまった事を。
「俺達が・・・・憎くはないのかお前達？」
　世界に非道をなした自分達を何故憎まないとラーハルトが尋ねれば、ニーナもディアッカ達も困った顔をする。
「・・・・私達の村というか、国自体本当にいつもと変わらないから実感が湧かないの・・・薄情で酷いとは思うけど、実感の無い事で貴方達を憎む気持ちも湧かないのよ。」
「実際超竜軍団が攻めったていうリンガイアも無事なのは王宮発表で知ってるしな。」
「むしろ返り討ちにあってるし。」
「カールも・・・・蓋開ければ全員無事っぽいし。」
「それにガルダンディーさんのおかげでルックたち無事だしな。」
「お前達・・・・」
　其れは結果論であるが、ニーナ達は憎む気持ちが出てこなかった。
　そんな中、ティファは死の大地に行く前にニーナ達にどうしても竜騎衆の事を教えて上げたかった。
　三人が生きて、この大戦を戦い抜いて罪を償わんとする事を。
　其れこそが、これから先起こるであろう災禍を乗り越える希望となるだろうと信じて。
　あの三人が生きて今度は地上を引いてはニーナ達をを守らんとするのだと。
「お姉ちゃんが言ってた。生き物は大きなことや小さなことで間違いを起こす者だって。それでも、償う道を本気で行こうとしているのであれば一度は信じて欲しいって・・・私ね！私達はね!!ガルダンディー達が大好きなんだよ！口が悪くて口が下手でそれでも優しい三人が大好きなの!!生きていてくれて其れだけで私は嬉しいの！
　お姉ちゃんと一緒にまたみんなで笑いたいの!!」
「ニーナ・・・・・お前・・」

「ニーナの言う通りだ。」
最後には泣きじゃくり始めるニーナに代わり、一番年かさのディアッカがニーナを抱き上げながら思いを伝える。
「世界が貴方達を赦さなと言っても、少なくとも僕等は貴方達に生きていて欲しい。守ってくれなくともその思いに変わりはありません。被害が無かったからだと言われ誹られても、どうか大戦後にリュート村に来てください。
氷室の中に、カイが作ったボラホーンさんの氷像が残っています。ラーハルトさんとお茶をしたいのだと、僕の妹も泣きながら伝えて欲しいとせがまれました。
大人達もルックの家の件をどうしてもお礼を言いたいのだと言伝を受けています。」
「俺の母ちゃんが腹いっぱい食べさせたいって気合入ってたな。」
「ちびっこいままのティファちゃんにもだな。」
「お前達は・・・・・本当に・・・・」

その赦しの言葉が、自分達をどれ程救ってくれているのか分かっているのだろうか？
たった二度しか直接会っていない子供達の、甘い戯言ともいえる赦しの言葉が世間に通用する筈も無く、それでも縋りたくなる温もりに、ラーハルト達は涙を流して上手く言葉が伝えられない。
後悔の気持ちを、罪悪感を抱えても、其れでもあの村の子供達には許してほしいと醜い願いを持つ自分達を受け入れてくれるこの素晴らしい子供達が愛おしくて。
「来てね？ティファお姉ちゃんと必ず来てね!!それでね！後五年したらガルダンディーの事御婿さんに貰ってあげるからね!!」
とんでもない言葉まで落ちて来た。
「・・・・・・・はぁ⁉!!!!!お前何言って・・」
「うっさいわね！私があん!!たを好きだって言ってんの!!五年したら私だって結婚できるの！今まで味わってなかった幸せを沢山上げるか

ら大人しく結婚しなさいよ！」
　泣き止んだニーナは、ディアッカから飛び降り再びガルダンディーの前に立ってびしっと腰に手を当て宣言したのを、涙を流して見守っていたダイ達も顎が外れるほど驚いた。
　当然プロポーズ（？）を幼女からされた当人はもっとびっくりだ!!
「お前何言ってんだよ！俺は鳥人・・」
「見ればわかるわよ！ついでの超年上なのも!!!だから何？私はあんたが好きなの！ルード君も好きなの!!一緒に年取りたいのがあんたなのよ!!」
「お前・・・お前!!結婚ってのはな！ガキもこさえんだぞ！」
　過去に異種交配が無かった訳ではない。魔族との子は半魔に、そして獣人との子はその特徴を宿した人の子が生まれるのが常だ。それは間違いなく白い目で見られるのが分かっているのだろうか？
「それもね・・・ティファお姉ちゃんに聞いて知ってる。私がどうしても結婚したい人がガルダンディーしかいないっていったら、今のあんたみたいなことを物凄くおっかない顔で言われた。」
　子が生まれた時の事を細かく詳しく、上手くいった例は一割にも満たないのだと。
「でもね、お姉ちゃんが言ってくれたの。人里離れてもいいならデルムリン島に来なさいって。お姉ちゃんの故郷なら私達も、生まれてくるかもしれない子も虐める事はないって言ってくれたの。もしもガルダンディーが私の事御嫁さんにしてくれるって言ってくれたら、全てを受け入れてくれるのならおいでって・・・・・これでどう？後はガルダンディーが私を好きか嫌いかだけ。
　好きでも結婚したい好きじゃないなら振り向かせてみる。駄目ならそう言って欲しい。」
「ニーナ・・・・お前そこまで・・・・・どうして俺なんかを・・・」
「馬鹿ね。惚れたはれたにどうしてなんて聞くなんて・・・・・口が悪くても、それでも命をかけて私たち守ってくれる貴方だから・・・・答えは大戦後に頂戴。」
「それは！」

「そう、勝って、生きて戻ってきてよ！もう死なないで戻って来てね！そしたら結婚もどうでもいいの！生きて・・・また会いに来てくれれば・・」
其れはひたむきで、純粋な願いであった。
打算も欲もない、綺麗な願い。
生きてよ!!!

それは、この場にいないティファが自分達に願ってくれた事と同じこと。
「ここにいる人達もですよ。貴重な薬草を使うのですから誰一人欠ける事無く大戦後にリュート村にお立ち寄りください。
ティファちゃんのお兄さんもお父さん、貴方もです。」
「本当はさ、ガルダンディーさん達をそっちの道に引っ張った親父さんはって話出たんだけどさ、ガルダンディーさん達許してんのに親父さんだけ許さないってのは筋が違うんじゃないかなって思ってよ。」
「そう、だから皆さん。どうか平和になった時リュート村に来てください。何は無くとも村一同歓迎します。」
「できれば祝・ニーナとガルダンディーさん結婚おめでとうの横断幕張りたいね。」

その綺麗いな願いを、扉の前で聞いているフローラは複雑な思いで聞いている。
彼等が願う事、特にニーナが望む事は途方もなさすぎる事だと。こんな大戦後の元魔王軍の、それも鳥獣人と結ばれることなどあり得ない。
それでも、積み荷の分の礼はしなければならない
「それは、是非勝たねばなりませんね。」
「あ・・・女王様・・」
「フローラ様。」
「初めまして、此処の指揮をしているフローラです。これ程の薬草があれば、たくさんの薬が作れます。届けてくれてありがとうございま

す。」
「そんな！私達・・・すっかり長居して・・・・その・・・えっと・・」
ニーナは先程とは打って変わって真っ赤になる。なんとなればカールの女王の名は有名であり、大国の女王に頭を下げられるなんて思ってもみなかった！
「ニーナちゃん達、そろそろ送る時間だ。女王様、ダイ君達も、彼女たちの言う通り生きて帰ってきてくれ。いろんな話は其れからしよう。」
「そうですね、皆さんお気をつけて。テランのフォルケン様によろしくお伝えを。」
ウォーリアーもタイミングを見計らっており、子供達を纏めて挨拶をさえる。
「気を付けて。」
「どうかご武運を。」
口々に言いながら退出し、最後に残ったのは
「ルード君と必ず来てね。待ってるから。」
軽やかに言ったニーナは、くるりと向きを変え一度も振り返ることなく大広間を後にする。

最終決戦日前日の砦は、怖ろしい熱気に包まれた。
一人の少女の純粋な願いを実現したいと砦全体が勝つ為の士気が否応なく高まり、薬はハイペースで作られ、充てられたダイ達も昼食後にそれぞれが編み出した必殺技を再度検証しあい、大人達もまた何かできないかと模索する。
五年前、竜騎衆とリュート村の子供達が出会いで巡り巡って魔王軍は下部組織は壊滅し、そして今また魔王軍への剣が鋭くとがれる結果となった。

何があろうと、目玉一つになっても戦うのだとガルダンディー、ボラホーンとラーハルト達は胸の中で誓う。

何があっても生きて勝つのだと。

最終決戦への序曲―エピローグ前編

只今冥竜王と相対しています・・・・・言っている意味が分からないと？

私だって何言ってるのか自分で意味不明だ！バーンのパレスで冥竜王ヴェルザーと！何が悲しくって相対せにゃならんのだ!!

私の平穏は何処いった!!家出なんてしてないで帰っておいで!!

「頼むからお嬢ちゃん・・お口閉じてやり過ごしてね・・・・」

「うぅ・・・キル・・・・・あいつ消したい。」

最終決戦前の最後の晩餐時に、何が悲しくて父さんと天界と因縁深すぎるこいつがくんのよ！

バーンなんて不機嫌通り越して激おこで、袖を両手に入れて余裕ムーブしてるけど視線が絶対零度で怖いよ!!

ミストも双子さんも戦闘態勢で尖兵として送られて来たヴェルザー配下屠って返り血浴びて・・・どうしてこうなったんだろう・・・この竜何しに来たのよ!!

最終決戦の前日のティファは、傍目から見ても分かる程どんよりとしていた。キルに世話され朝食をのパン粥とロースと少々食べた後はもういいと顔を背けてキルの胸に凭れて食べないと意思表示をする。

ティファの肉体は完全に回復したが、―昨日―見せつけられた光景が脳裏から離れず、食べる意思がないのでキルが膝に乗せてせっせと食べさせているのだが芳しくない。

昨日、ティファはキルに連れられて魔界の最深部をその目で見てしまった。

―悲惨である―

その一言以外言える事は無く、行って直ぐにティファの心が悲鳴を

上げた。
滅びゆく者に手を伸ばそうとし、さしものキルも半時は見せよというバーンの命令を聞かずにすぐさまティファを地上のパレスへと連れ帰った。
数分でもティファに魔界の最深部の現状を知らしめたのだから。
「キル！戻して!!あの人達が!!!」
「あの子達だけ救って、他はどうするんだい？」
「・・・・でも！けど!!」
「救う方法はたった一つだ。どうしてバーン様やミストたちが躍起になって地上を消そうとしたか分かるだろう？
魔界を浮上させる為だ。」
「あ・・あぁ・・うわぁぁぁぁぁぁぁ!!あああああ!!!!」
泣いて、叫ぶほど泣いて、目玉が溶ける程にティファは泣き叫ぶ。
酷すぎる現実に、どうしようもできない現状に、―今―はどうしてあげる事も出来ない無力な自分の不甲斐無さに、この瞬間にも死に逝く者を助けることが出来ない事に、キルの服を握りしめて、声の出る限り泣きつくし、その日一日ティファは全てから逃げる様に眠りの底へと落ちていった。

「壊れはしなかったが、疲弊したか。」
「はい、これを機にこちらに来てくれれば僕としては嬉しいんですが。」
最終決戦前に、ティファがこちらに来ることは無いかと試しに魔界の最深部に行かせてみたのだが、眠ってしまってはどうするか選ばすことは出来ない。
ティファは死の大地の様子から、キルの話から、ハドラーの話から魔界の凄惨さは―それなりに―に知っていただろうが、魔界の最深部の悲惨を目の当たりにさせれば、魔界側に心傾ける事をバーンは望み、見せてみたのだがその返答は明日となるか。
「ちょっとキルバーン！」

「ちょっと死神!!」
「「ティファちゃんが目を覚ましたら教えなさいよね!!」」
「・・・・なんで僕がお前達にお嬢ちゃんの情報くれてやらないといけないのさ・・」
「「美味しいものをうんと食べて元気になってほしいからに決まっているでしょう!!」」

双子はティファが大好きだ。それもただの好きではない。隙あらば食べてしまいたいそちらの好きで、そんな思いをティファに抱いている双子をキルは消してやりたいと算段している。
其れは双子も同じであり、今も両者バチバチと火花を散らしている程仲がすこぶる悪い。
共通しているのはミストとティファの迷惑にならない範囲で嫌悪し合うというアクロバティック的なややこしい事をしてでも争う事をやめない筋金入りだが、もう一つは二人を喜ばしてあげたいと常々思っている事。
双子はティファが泣き叫んだ理由は知らないが、泣いているのならば慰めてあげたい。起きた時に自分達の作った美味しいお菓子を食べて元気になってほしい・・たとえ明後日公開処刑される捕虜のティファであっても、今はまだ自分達の捕虜。
虜にして魔王軍に寝返らせることを諦めていない。
そのティファ自身は、精神世界でも泣いていた。
誰も知る事は無く、一人丸まって泣いている。
ごめんね・・・・ごめんね!!絶対に―何とかする―から・・・・・

翌日のティファは、鈍痛の頭を抱えて起き上がる事すらできなかった。
原因は精神的な物と、現実的に水分不足。診たてたザボエラ指示で、その場で水差し一本分の果実水を一気に飲み干させて一息つくと同時に双子にお風呂に拉致られた。
キルの腕からどうやって埒れたんだろうと、双子に体と頭を同時に

洗われながらティファはぼんやりと思う。
「難しくて!!」
「悲しい事なんて!!」
「ティファちゃんは考えなくていいんですわよ!!!」
自分の為に泣いてくれる双子に、ティファの心はほんの少しだが浮上し小声でお礼をする。
「・・・・・ありがとう・・・」
素のままのあどけない声で。

食べて寝て、起きたらバーンが夕餉に何を食べたいか聞いてきた。
最後の晩餐にするつもりはないけど、食べたい物・・・
「う～ん・・・・プティング美味しい、フルーツタルトもチーズケーキも捨てがたい・・」
そんなに沢山食べられないが、出来れば今言ったのは全部食べたいな～。
「・・・・・・メイン料理はどこ行った・・」
主料理聞いて、デザートしか上げないティファにミストが痺れを切らした。
「あ!えっと・・・・オムレツ・・・」
一度だけ出されたふわふわでとろとろのプレーンオムレツ。あれをできれば最後にもう一度食べたいと言えば、ミストは主に一礼して直ぐに作りに向かった。
待っている間にティファはバーンの足元に置かれ、座っているのも億劫で、其のままバーンの膝に凭れ掛かった。
バーンもいつもの事と気にもせず、ティファの髪を梳き始める。
「魔界の現状をその目で見たか?」
「・・・・・見ました・・・・」
「あれが魔界を覆いつくすまで後数百年ぞ。」
「どうして・・・・今まで・・」
「放って置いたのかと?我等の祖先も浄化装置をあちこちにおいてもみた。魔法除去は精霊達にしか出来ず、魔界では精霊は生きられん。

そもそも魔界に来るという酔狂な精霊もおらん。」
「・・・・助けを・・」
「どこにだ？神が沈めたのに天界に？それとも地上にか。」
「・・・・・地上に穴を開ける事を赦してもらって散らせば・・・」
「許すのか？」
「・・・・・」
「そなたの沈黙が答えぞ。地上からすれば魔界なぞ滅んでもいい、寧ろ自分達に対する害悪が減ると喜んで見ていようよ。」
「・・・・そんな事ない・・」
バーンの言葉を、ティファは膝に顔を埋めながら訴える。
「地上の人だって酷い事に会っている人達を助けたいって言ってくれる人が必ずいる。世界は弱すぎも酷すぎもしない！心優しい人達も大勢いるんだよ!!」
「そなた・・・・」
「お願いだからもう地上を消そうだなんて言わないで！地上の人達に魔界の現状訴えてみて!!!
あの柱の下には―地霊―は一体もいなかった!!今ならまだ間に合うんだよ！」
一度だけ、リンガイアに落とされる前にティファは偶然柱が落ちるのを見た。その時、地霊は一体もいなかったのをバーン達にも話している。
人もモンスターも精霊も死ねば地霊となって天へと還っていく。それは精霊を見るよりも希少な力だが、見る方としては堪ったものでは無い。死者の霊を見ているに他ならないのだから。
其れがいないという事は、文字通り誰も死んでいない証。今大戦も死者は少なく、今ならば魔界の現状を地上側に訴えればまだ双方の激突を避けられるのではないかと訴えるティファを、バーンは憐れみの眼差しをティファに向ける。
「世界が、其方の様なものばかりであれば可能であろうよ。」
何処までも限りなく優しいティファ。自身を殺し掛けた者とても許してしまえる者など希少であり、大半は憎悪の目を自分達に向けて

いる。
甘い考えのティファ。それでも自分に降らない事を再確認したバーンは、ティファを膝の上に抱きしめる。
「明日其方を殺す。」
「・・・・」
「だが、明日の朝食も摂っていけ。」
「・・・・・はい・・・」
寸前まで一緒にご飯しろって、バーンは我が儘な人だ。

なんだかんだと落ち着いたティファは、一人で座れるのでキルに給仕をして貰いながらだが久しぶりに自分で食べている。
フワフワのオムレツが美味しいとミストにお礼を言えば、バーンにワインを注いでいたミストの手がブレ、初めてクロスにこぼすという失態をしてしまった事も相まってギンと睨みつけられたのを笑って受ける。
その様子を双子も端の方でミスト様可愛いとクスクスと笑い、キルもにっこり笑って見ている。
この時間がいつまでも続かないかな？
誰も争う事をしない穏やかな時間がいつまでも・・・・しかし、ティファのその願いはいつも叶った試しがない。

バーンとティファの頭上に、突如として黒い空間が開いたのだ。
其れはキルの開けた空間とは違い禍々しい気配を放ち、開いた瞬間その場にいる者達に分かり、キルがティファを抱き上げると同時に後ろに飛び退り距離を取ると同時に大量の魔界の飛行モンスター達があふれ出た。

「闘魔傀儡掌!!」
「無礼者ども!!!ヒャダイン!!」
「砕けなさい！イオナズン!!」
「失礼な奴らだね～スペードのセブン!!」

魔界において不意打ちは日常茶飯事であり、驚いたのはティファ一人でバーンは椅子に座ったまま、シルバーデビルが目の前に迫っても平然としてミスト達に任せている。
主に近づく者を片端から部屋の隅に投げ捨て、アンリが凍らせセシルが爆撃で粉々にし、キルが剣戟のトラップでズタズタに斬り裂いて行く。
だが、いつまでも途切れない事に苛立ったのか、バーンは左手で頬杖をつき右手を軽く火捻り、炎の鳥をその手に留らせ空間へと解き放った。
「カイザーフェニックス」
さしてやる気のない声とは裏腹に、その威力は空間内に待機していたモンスター達を全て焼き尽くし、断末魔を上げることすら許さず灰にする。
その圧倒的な力を行使したバーンは、油断せずに空間を見据えている。
この気配に覚えがある。
かつて幾度も自分と死闘を繰り広げた竜の気配。
バーンが誰何を発する前に、其れは姿を現した。

「久しぶりだが、相も変わらず元気そうで何よりだ。」
空間がこごえるように固まり、現れたのは石像姿の竜。
それは封印されているのが一目で分かるが、余りにも禍々しい気配に、ティファは怯えてキルの服を握りしめた。

最終決戦の序曲ーエピローグー中編

惜しくもあらんこの命、怨敵どもを滅せるのであれば
惜しくもあらんこの命、我の恨みを鬱屈を何物にもぶつけられるのであれば
魔界を救う為ならば
俺のこの恨みをはらせるのであれば
何をも引き換えにしよう

ひ～ふ～・・・・ふむ、影はいつもの如くいるが、羽虫が二匹に余の人形に・・・あれはなんだ？
これしきの事で何を怯えているのだあれは？たかだか虫が数百焼かれた程度で。

空中に浮いている彫像の竜・・・・間違いなく・・・

「何しにまいったヴェルザー。」
やっぱり、冥竜王ヴェルザーだ!!
「ふむ、お前が決戦前に地上のぬるま湯でふやけていないか心配でな。明日当たり決戦なのであろう？お前の領地が大分騒がしいから余も激励に来てやったまでだ。
たかだか数百の虫の―挨拶―では足りなんだか？」
「・・・・・・悪趣味が。」
堂々とパレスの結界をすり抜け乱暴狼藉を尽くしたヴェルザーの口上に、バーンは不快を示す。
この二人はそもそもが根本的にそりが合わない。
バーンもヴェルザーも魔界の将来を憂えて行動しているのは間違いないが、バーンは魔界の民達全ての為に、対してヴェルザーは魔界というよりは魔界を荒らした天界を滅ぼし、鬱積を周りにぶつけている節が目立つ。

地上進行に対しての姿勢からしても違う。
ヴェルザーは―従来通り―に地上は無傷で残し、魔界の深部から移住させようと画策させた。
その際地上の命をそのままにして。別にそれは慈悲が働いている訳ではない。長く地上の命を嬲り者にして、食い尽くし数百年を掛けて狩り尽くすという残虐な計画によるものであり、それを掴んだ天界は、魔界の神よりも尚暴虐性を内包したヴェルザーを討たんと当代の竜の騎士バランを派遣したのだ。
バーンはそれを忌まわしく苦々しく思っていた。
例え自分達の長年の仇であろうと苦しめて喜ぶ趣味は持ち合わせていない。
滅するのであれば素早く一瞬で、苦痛も無く逝かせてやる事こそ慈悲であろうと、壮大で馬鹿馬鹿しいとヴェルザーから言われた大仕掛けを整えたのだ。
そもそもがヴェルザーは魔界にも自国にも己の眷属すらに対しても愛着が無いとバーンはヴェルザー本人に面と向かって幾度も言い放っている。
バランとの長年の戦い方一つ見ても其れは窺い知れる。ほぼ無策で数を向かわせ、領内に入り込んだからと黒の核晶を無造作に使ったのがその証。おかげでヴェルザーは親衛隊の大半と領土の半分を喪っても痛痒を感じてもいなかった。
自分なれば、そんな愚を犯すまいと苦い思いでバランとヴェルザーの抗争を見ていたのを思い出すだけで不快である。
「お前は真面目だな。雑兵にもなりえぬ奴らを案じるとはお優しい事だ。余も見習わねばならんか？
・・・例えばそうよな～。―捕虜―を厚遇するところから始めてみるか？」
ピクン
「さて何処だ？お前が厚遇せし・・・あぁ、もしやしてあそこで―人形―の腕に抱かれ震えているのがあの獰猛な竜の騎士バランのご息女ではあるまいな。」

・・・・こ奴の目当ては!!

ヴェルザーはバーンの地上制覇を注視している。

地上を消した暁には、天界を殲滅させられる前に―キルバーン―を自爆させ諸共にバーンを消す為に。

地上でのお楽しみは、邪魔ものを消す為にはくれてやる。

ヴェルザーの耳にも、勇者ダイ達のあり得ない成長速度とその活躍が届いている。

一行は皆若く、なればこそ何事をも吸収できるが故に脅威であるとヴェルザーは長年の抗争の果てにその恐ろしさを熟知している。

未熟なのは伸びしろがあり、才あればそれは己を滅ぼす災厄となる事も。

故にバーンに火中の栗を拾わせ自身は最後の美味しいところだけを貰う手筈が、―ピロロ―から思わぬ報告が入った。

近頃人形がヴェルザー様の命を果たそうとしません

何のバグが生じたのか、生じて数十年で少しずつ疑似自律思考機能以上の事を話しだし、遂には自分の命令を平然と無視したと。

先の死の大地でハドラーを黒の核晶で敵諸共葬り去る命をバーンから出された時―キル―が危うく拒否しようとしたので意識抹消を目論んで主導権を乗っ取ったのが、弾かれてしまったのだ。

このままでは最終的にあれはバーンの持ち物になる恐れがあります。

その報告通信を最後に―ピロロ―からの音信は途絶えた。

別に一つ目の心配をした訳ではない。

その前に―面白い―情報が入ったからだ。

バーンが自分にとって今一番忌々しく憎らしい竜の騎士バランの娘を捕らえ捕虜にした事だ。

自分が封印されている間にバーンに水をあけられ、動けず指を咥えて黙ってみているほかない事が業腹である。

そのバランが、たった数年で魔王軍に闇落ちした時にはもっと腹が立った。自分がさんざん人間の醜さを教えてやった時は―人間は素

晴らしく守るに値する！――などといっていた男が数年で趣旨替えした。自分はそんな簡単に趣旨替えするような軽薄なものに敗れたかと思うと惨めになり、嫌になって数年精神奥に引きこもっていたら、何やら面白い事になっているようで出て来てみた。

あの冷酷な魔界の神が、捕虜に対してあり得ない対応をしています

一つ目曰く、捕虜にまるで貴族の子弟達が着るようなドレス・スーツを与えて共に食事を摂り、お茶会まで共にさせている。

捕虜が眠っている間でも手放さず、評定の間においても膝に乗せてまるで寵姫の如く扱っていると。

・・・・あいつがか？寵姫どころか正室も持たずに寝床に呼ぶ女は伽の相手としか見ていなかったあいつがか⁉信じられん！

確かにバーンは民達を思いその為に行動しているが、其れは深層心理であって実際のバーンもヴェルザーに負けず劣らず謀略戦を幾度も仕掛け、数多の血を流してその地位を手にしている。

間違っても敵対した者をそんな扱いをする男ではなかった。

その捕虜の何かが、バーンの琴線に触れたかと見に来てみたのだ。いざとなればその捕虜を奪い取ってバーンに対して質にならぬかと見定めにきて落胆を味わった。

・・・来た甲斐の無い事だ。

実際を見てみれば、人形の腕の中で震えながら自分を見ているしか能の無い、哀れな羽虫と大差ない小娘ではないか。

いや・・・・あいつは嫌!!嫌だ!!!

ティファはいつになく大人しかった。

普段のティファであれば、バーンと話していたヴェルザーの内容に激怒し、会話に割り込んでヴェルザーの考えを怒鳴りつけている。

命を何だと思っているのだと

無論相手は甘い考えだと小馬鹿にしてこようが、否定されようが何だろうが、ティファは怒りを乗せて吠え上げる。たとえ相手に届かなくとも、届かないから怒らないという考えはティファにはない。

ではなぜそうしないのか?ティファは厭うたのだ。ヴェルザーの内から発せられる怨嗟と恨みとそれをぶつける事を躊躇いもしない暴虐で禍々しいヴェルザーの本質を肌で感じ嫌悪感に、ヴェルザーからすれば怯えていると映る程に震えが止まらないのだ。

「お嬢ちゃん・・・・お口閉じてこのままやり過ごして・・」

「うぅ・・・・キル・・・・・あいつ消したい・・・」

キルもティファの状態を察している。伊達にティファに執着している訳ではなく、ティファが命の火が消えるのを悲しむこそすれ怯える事は無いのを知っている。これは嫌悪に震えているのだと。

自分も久方ぶりにある―アレ―の気配に辟易とする。同じ魔界の一大勢力の頭だというのにバーン様と何と違う事かと唾棄したくなくる。

ティファを守る様に、キルはティファを抱く腕に力を籠めて一歩後ろに下がったが、その行動が仇になった。

一つ目からの報告は様々な情報があったが、その中でも傑作だったのが人形がまるで自分は本物の生き物だと勘違いしている様に、捕虜を愛していると公言しているとか。

何があったか知らんが余の手元を離れて勝手をし、疑似思考が勘違いしているとは問題だが、遊ぶにはよさそうだ。

捕虜も何故かあの人形に懐いているという、好都合だ!

ズッ

あ!!・・・・こいつは・・・・・・ぼく・・・・・をつかって・・・・・

にげ・・・

ふむ、意外と抵抗したが―乗っ取った―のだから何の問題も無かろう。

キルの疑似思考回路はヴェルザーの魔力を含んだ回路が基盤で作られたのもであり、時たまヴェルザーがキルを乗っ取りバーンに戯れてみようかとお遊びも含めて作られた代物。

その基盤を使われては、キルは為す術無くヴェルザーに容易くその身を乗っ取られ意識を落とされた。
これを機に、自分の自我を消すために。

この体になっても―感触―はあるか。
本体のキルと違い、キルに入ったヴェルザーは全身の感触が味わえる。
腕の中に居る少女の何と軽き事か。その身は柔らかく、まるで姫君の様ではないか・・・・バーンはこの娘を飼う積りだろうか？
ならば納得だ。地上を消し、天界を滅ぼした後にも三界の調停者を自称した者の末裔を魔界の神が飼い慣らすとは其れもまた一興。
バーンの命を獲れず、長き抗争になった時にもこの娘だけは貸し出してはくれまいだろうか？
お互いの疲弊を嫌って停戦する事はしばしばあり、停戦条件をこの娘にすればいいだろうか？
父親がした事を、子に支払って貰おう。その身をもってして・・・・
さて、確か人形はこの娘をこう呼ぶのであったな・・・

キル・・・・どうしたんだろう？突然黙って・・・
まさかティファも、キルの中身がヴェルザーに乗っ取られたとはすぐに思い浮かぶ筈も無く、きゅにどうしたのだろうと心配になって―キル―を見上げれば、―ニッコリ―と笑うキルの瞳と目が合った。
「どうしたのさお嬢ちゃん。」
「え？」
―キル―は優しく甘い声をティファの耳に近づけ流し込む。
「あのお方は僕のもう一人の―大切な主様―なんだよ。あのお方に挨拶をしてほしいな～。
してくれないのかいお嬢ちゃん？」

これは・・・・こいつは・・・・・・・

「・・・なせ・・」
「ん？なんだいお嬢ち・・・」
「黙れ!!放せと言ったんだ!!!」
バチン!!!
「・・・・ほう？」
「誰だお前は!!即刻キルの中から出ていけ!!!」
甘ったるい声に這いずり回るような手つきで自分を撫でまわした、こいつがキルであろうはずがない!!!
キルの声は甘くて心地よいのだ!!
キルの手は戦う時以外は優しい!!
断じてこんな嫌悪感を感じさせる者では無い!!!
耳に近づく顔を張り飛ばし、出来るならば体を吹き飛ばしてやりたい!!こんな奴の手の中に居る事自体が気持ち悪い！
出来ないこの身を、今ほど恨めしく思った事は無い・・
「っふっふっふっ、成る程、確かにあの男の娘であるあお前は。」
「ッッ!!!」
余の事を知らずとも、人形と違うと直ぐに見抜くか。
先程までの震えが嘘のように消え果て、自分を睨みつけるその瞳の奥にある獣性が見て取れる。
戦闘時のバランと瓜二つの瞳は確かにあの男の子供だが。
「余はヴェルザーだ。冥竜王ヴェルザー。この名に覚えがあろう？」
「・・・っカッハ・・・お前が・・・・・太古の世より死をまき散らす冥竜王・・・」
「そうだ、頭が高いとは思わぬか小娘？」
正体を知られたヴェルザーは其れすらも面白いと嗤い、ティファの細く首を締め上げぬたりと笑い瞳を覗き込む。
穢れを知らぬこの竜の娘をどう穢そう

最終決戦への序曲―エピローグ後編

その昔、何時であろうか最早覚えもない遠い昔は自分もそれなりの思いで魔界の領地を守り抜き、幾度も死んでは輪廻の輪をくぐり再び―ヴェルザー―となって同じことの繰り返し。

何時までも変わらぬ魔界の後輩振りに身勝手な者達・・・・・守る価値を見出せず幾星霜がわが身に降り積もったか・・・・命など最早自分にとっては玩具と同名。

其れもたかだか人形の体を乗っ取ったからと言ってこの小娘は何を騒ぐ？

「おのれぇ!!その穢らわしい手をその首から離せ!!」

「その身壊そうとも我等は構わん!!」

「その人形より出て本体に戻らねば破壊するぞヴェルザー!!!」

そしてあの赤い髪の羽虫の双子もいきり立って居る。ふむ、これは面白い。

「バーンよ、お前の羽虫の双子はこう申して居るがお前はどうなのだ？」

映像とは言えヴェルザーの出現によりいち早く戻ったミストを横に置いたまま、バーンは再び両腕を袂に入れ座ったままだが、その目と気配から発せられる冷気は尋常ではない。

過去に幾度も激突した後に会った時でも、これほどの気配はいまだかつてない。

お気に入りの人形かそれともこの小娘をとったせいか、あるいは両方かは知れないが。

「お前は―どちら―を返して欲しい？余も優しさとやらを見習って、一つくらいは聞かぬでもないぞ？」

聞くだけ聞いて、叶えると言わないところにヴェルザーの質の悪さが窺い知れる。

敵の本陣の中であっても堂々としているのも精神でキルを乗っ取り、たとえこの場でキルを壊したとしてもヴェルザー本人には文字通

り何の痛痒も無く、魔王軍の損失を被るだけというところが本当に嫌なるところだ。
その狡猾さが、計算高いところが、人を嬲って喜ぶ残虐性はバーンにとって最も忌むべきところであり、両者が並び立つ事が金輪際ない。
だが、バーンは口を閉ざして黙ってみているだけで何かを仕掛ける気配もない。
ミストを動かす事も、周りの兵達に知らせる素振りも何もなく、ただ冷たい瞳を向けてくるだけ。
何を考えている？
お気に入りを取られ、ここまで煽られたバーンが沈黙を選ぶのが解せない・・・

「・・・・黙れ・・」
「ん？」
「その口閉じろ!!お前如きの偽りの慈悲に縋る気は毛頭ない!!!どちらかを選ばせてやる？偉そうにするなこの―駄竜王―が!!!」
「な!!・・・・・・図に乗るな小娘!!!」
「ッウ!!・・・・・・フッフ・・・本当の事言われて腹立てる所がみっともない。お前が王だと？
配下の命を弄び!!たかだか―死んでも同じ身に転生する魂―を持ってるからと言って偉そうにするな！この戯けが!!!
お前が王であるものか!!私の知る王は皆何かを守ってきた！背負っていた!!何かの為に抗い戦い譲らず、守らんとしていた!!!配下の命を弄ぶようなお前が王であるものか！」

死しても輪廻の輪をくぐろうとも魂がまた同じ―ヴェルザー―として生まれてさらに強化されるという、どう考えてもぶっ壊れチートだろうと―とある知識人―であればもう無敵じゃねぇかと言われようが、ティファからすればそれがなんだという代物でしかない。
ティファは―力―に余り価値を見出していない。それらは―守り

たい何か―の為に使っているかどうかに重きを置いている。
其れは民であったり配下であったり家族・友・恋人・そして自身と周りの幸せという小さな事でも良い。
何に使うかを重視している。力とは所詮手段であり、それを目的にしている者など評価に値しない。
「フックックック・・・お前は、本当にあの父親によく似ている。あれも矢張り人間の為と綺麗事を抜かしていたぞ?そしてその後どのような道を辿ったかお前は知っている筈だぞ小娘。」
―普通―のものであればティファの言葉に激昂し首の骨を折らんとしようが、ヴェルザーからすれば子犬が吠えているのと変わらず頸に当てている手の力をわずかに強めただけで、ティファの言葉を嘲笑う。
何故なら
「しかし吠えるのは良いが、お前にはさしたる―力―が無かろうに。ただ吠えるだけの者が余を愚弄したところで何も感じんぞ?悔しければ―俺―のこの手を斬るくらいしてみてはどうだ。」
ティファには最早竜闘気が体内に残っておらず、先の戦いで見せたような敵と激突する力が皆無だからだ。
瞳の奥には確かに獣性があれど、肌を通して感じる気配からは竜闘気の気配は欠片も無く、自分の下級配下よりも少々強い位が精々。
ティファは己の左手の竜の紋章を兄であるダイに譲渡した時、その強さの一切をも渡してしまい、最早バーンやハドラーはおろか、最強ではなくなったミストにもキルにすらも勝てない程弱体化をしたのだ。
だからそれがなんだというのだ。それが自分がこの男に屈してやる謂れなど何一つとしてない!!
自分にとっての王とは、ロモス王のように優しくとも国の為ならば戦の中においても毅然として兵を指揮し、リンガイア王やベンガーナ王の様に厳しくも懐深く、テラン王の様に理想と現実の間に苦しもうとも投げ出さずに治世を治め、パプニカ王の様に病の身を押しても国と民を思う素晴らしい方達こそが王である。

そしてハドラーの様に苛烈で己の弱さすらも超えて遂には超一流魔王となり・・・大魔王バーンの様に―己の全て―を投げ打ってでも魔界を真に救わんとする者こそがティファの中の王達。
先の死の大地でバーンを悪し様に言った事に後悔はないが、それでも魔界の現状とこの数日で見続けたバーンの王としても姿勢を知ったティファは、あの時詰った自分を恥じ入っている。
バーンは己の矜持も外聞も全て投げ打ち魔界浮上の害となる自分達を取り除こうとしたのだ。
たとえその為に配下を犠牲にしても、何を引き換えにしても魔界を救う為に。
それを知らずして詰った事を、バーンはさして気にしていない懐の深さにまた打ちのめされ、遂にはハドラーと同じ様な尊敬をバーンに対して持ち始めているこの時に、正真正銘の配下の命を弄んでいるヴェルザーなどに屈する気など欠片もない!!
力が無くなったから尻尾を振るか?殺されかけているから媚びろと?そんな事お断りだ!!!
その敵愾心に煌めく瞳を今すぐ潰してくれる!!
「そうか、屈する気はないか・・・バーンよ、この者は冥竜王たる俺に無礼を働いたぞ。
同盟の誼としてこの小娘を連れ帰って・・・「お断りしましょうヴェルザー公・・「な!!」
キルの口から、尊大なヴェルザーの言葉を紡いだその口から、ティファのよく知る声もまた紡ぎ出され、其れはヴェルザー本人が愕然とした。
―声―を皮切りに、ティファの首を押さえていた右手が震え出し、のみならず徐々に解かれんとしている!!
「き・・・貴様!!人形の分際で冥竜王ヴェルザーに楯突くか!!人形は人形らしく主の・・・・」
「違う!!!」
忌々しくもそこに沈めて消し去ったはずの人形の自我が、何の奇跡で浮上してきたかは知らないが、再び消そうとしたその時鋭い声が叫

び上げる。
「キルはキルだ!!断じてお前の人形なんかじゃない！」
「・・・・知らぬか小娘・・・聞こえるだろうこの人形の歯車音が!!これはオート・・」
「―機械生命体―だからなんだ!!キルには心がある!!お前が百度・千度生まれ変われたとしても届かぬ高潔で優しい心をその身に収めた素晴らしい人だ!!
命の重さを最初から知らぬか幾星霜の年月で忘れはてたか知らないが！弄ぶ貴様がキルを人形呼ばわりにするな!!
戻って来てよキル!!こんな奴に負けないで帰って来てよ!!!!」
ゴォウ!!!!
ティファが叫び上げた瞬間金色の炎が立ち昇り、キルとティファを諸共に燃やし尽くす。
「ティファちゃん!!」
それを見た瞬間、アンリとセシルがティファの下に駆け寄ろうと走り出し、ミストもまた駆け寄ろうとしたが、その動きをすぐに止めた。
炎が割れ、その中からティファを優しい手つきで抱いているキルが出て来たからだ。
「・・・・・・キル？」
「そうだよお嬢ちゃん。落ちて消えていく僕の意識に君の声が届いたんだよ。ごめんね怖い思いをさせて・・・」
「・・・キルが・・・・・戻ってきたならいい・・・」
「・・・・・本当にごめんね・・」
うぅぅ・・・この人明日戦う人なのに！それでも・・・・消されなくて良かった・・
キルの謝罪にボロ泣きで答えるティファを、キルは愛おしいと泣いている頬に自らも頬を当て頬ずりをする。
その瞳も気配も穏やかで、温かさすらも感じさせる。それはまるで・・・
「馬鹿な・・・・・馬鹿な!!たかだか人形が―俺―の頸木を!!!」
「そなたの負けだなヴェルザー。」

「なんだと？」
「お前にはまだキルが人形と映るか？」
「・・・・・あれは人形だ!!それだけのものだ!!!」
精神を弾き出され、魔界の本体に戻されたヴェルザーは憤然と吠えるのをバーンは冷たい瞳に嗤いを乗せてみ下げ果てる。
キルもヴェルザーが戻ったのに気が付き、ティファを左手一つで抱き上げ右腕を優雅に胸に当て一礼する。
「ただいま戻りました我が主大魔王バーン様。この身は貴方様にお仕えするする者。如何なる命をも果たしましょう。
つきましてはそこな―駄竜王―をこの場より・・」
「うむ、いられるだけ不快だ。疾く叩き出せ。」
「貴様!!!」
「畏まりました。」
キルは優雅に、ヴェルザーへの絶縁状を叩きつけてみせたのだ。
「この子の言う通りお前は王足りえず仕えるに値しない。お引き取り願いましょうヴェルザー公。」
「黙れ!!!!!」
確かにこの身は封ぜられているが！やれる事はある!!
キルの言葉を憎々し気に遮ったヴェルザーは、空間を再び開け毒の瘴気を送り込む。
その濃度は魔界の深部の瘴気を濃縮し、魔族と言えど耐えがたく、仮にバーンとその側近が無事であってもパレスにいる魔王軍は無事では済まず、キルの腕の中のティファは確実に殺せる！
何もかもを喪い自分に楯突いた愚かさを嘆くがいい!!!
だがその怨嗟の念も、キルが邪魔をする。
「お嬢ちゃん、さっきの金色の炎出せるかい？聖炎を使えるのは解析済みだから隠す必要ないよ？」
「あり・・・・・しかたない・・・ですねぇ!!」
ゴォウ!!
金色の炎をティファに出させ瘴気を燃やし尽くさせる。聖炎は魔

を弾き、故に瘴気に少しでも触れれば全てを消すまで炎が消える事がない。
　ティファとしては、使えなくなった力が多い中でも残ってくれたとっておきは隠したかったのだが、ザボエラあたりが自分を解析して知られているのであれば仕方ないと協力をする。
　それに自分も相当怒っている！あの馬鹿に!!
「ここは明日！魔界と地上!!そして天界の命運が決する神聖な場所だ!!!先を思わずただ徒に私怨を晴らす者がいていい場じゃない!!さっさと出ていけ！」
「またもやこの子の言う通り。お帰り頂こう!!!!!」
　スペードのキング!!!!
　ガシャンと、何かが壊れる音がヴェルザーの開けた空間から聞こえたその瞬間、ヴェルザーの映像が消え果て、数瞬待っても戻ってくる気配が無く、キルはにこりと笑ってティファを両腕に抱きなおし、バーンの下へと歩いて行く。
「あのような輩に付け込まれ言葉もございません。」
「・・・・二度は許さんぞ。」
「はい、肝に命じましょう我が主。」
　ティファを手放さぬまま、主に頭を垂れて詫びを入れる。
「・・・・キルの・・・・ぶわぁかです・・・」
「あぁ本当にごめんねお嬢ちゃん。お詫びにミストに美味しいものこさえて・・・」
「・・オムレツまだ途中です・・・」
「・・・・あれ食べるのは駄目だよ。ミスト新しいの作れ・・・おやいない。」
「・・・ミストバーン様なら・・」
「ティファちゃんの言葉と同時に・・」
「「台所に行きましたわよ」」
「そう、バーン様とお嬢ちゃんの新しいのをこさえに行ったか。」
　機嫌を直し始めるバーンとは対照的に、キルに縋りつくティファを見せつけられる双子の機嫌は最悪マックス。

そのままヴェルザー諸共どこかに行って欲しい!!
私達の敵が、あんなの出なくて良かった。
キルにしがみ付きながらティファは思う。
あんな私怨塗れの敵でなく、何かを守り戦う尊敬できる、そんな偉大な敵を止めるのが自分達であると誇りに思える相手で心中で喜ぶ。
そのような相手だからこそ自分の何もかもを投げ打って出も勝ちたい。あの時、ハドラーと戦う時と同じ思いがティファの胸に再び蘇る。一介の戦士として、これ程誇れる戦を明日するのだと。
「キル・・・大魔王も。明日、明日私の全てを使って貴方達を止めてみせます。」
「そう・・・ならどんな手を使ってでも君をまた捕えて上げよう。」
「再び目覚めた時には地上の風景は一変してよう。」
自分からの宣戦布告にも慌てない。本当に天晴な敵だこの人達は。

おのれ!!!おのれ!!!

「ヴェルザーさ・・・・・」

「黙れ!!!」

近づく配下をグシャリと闘気で潰し殺しても、ヴェルザーの気が収まる気配は一向にない。

スペードのキングは、キルが一度だけ嫌々ながらヴェルザーの元に戻された時に、ヴェルザーの封印された台座に細工をした時の奥の手のトラップ。

ヴェルザーは今封印されているため物理攻撃は何一つ・・・とまでは行かないが大概の攻撃は通用しない。

しかし、台座はヴェルザー本体ではない為その台座に細工をした。

其れは空間使いのキルだからこそヴェルザーにも、その親衛隊達にも見つかることなく台座の中に仕掛けたのは黒の核晶とまでは行かずとも、黒水晶を濃縮した暴発するミニ爆弾。

スペードのキングは、威力は小さくとも超遠隔距離であっても発動させられるトラップであり、剣戟の衝撃で黒水晶を暴発させた事によりヴェルザーの足に亀裂が入り、二段構えのトラップで割れたと壺からまき散らされた液体が亀裂から入った時、ヴェルザーは激痛に叫び苦しみ映像どころではなくなった。

壺の中身はキルが地上に出て教会から面白半分で取ってきた聖別された特別な聖水。

地上見物で言った時、余りにも態度の悪い横柄な神官にぶちぎれて困ればいいと秘中の秘であるという聖水がここで役に立つとは、人生何が功を奏すか分からないが、ヴェルザーにとっては散々である。

小娘も人形も容赦せんぞ!!!明日どちらが勝とうともただで済ますものか!

幕間―魂となりても・・・―

会いたい、逢いたいどうしても・・・・夢の中でもいい、僕はどうしてもあいたいんだ・・・

パプニカ王城に使者としてきた死神キルバーンが帰る時、あの男の詫びだという思いでティファの歌を聞けた・・・・聞いてしまった。・・・・・ティファ・・・僕は声が聞きたいんじゃない！君をこの手で抱きしめたいんだ!!

抱きしめて二度と手放したくないんだよ。

砦近くの深い森に一人古木の根元に蹲るノヴァは、後から後からあふれ出る負の思いを持て余し泣き崩れる。

自分が生涯で泣いたのを覚えているのはこれで二度だけ。

一度目はティファが死んでしまったと思った四日前のあの時。ティファのいない世界になど居たくないと自ら死んでもいいとあの時は心からの思いをしながら泣くしか出来なかった。

今もそう、自分は強いと言われても泣く事しか出来ないでいる。

ティファが絡むと自分は強くもなり反対に無力にもなる。ティファを守ろうとすればどんなことだってしてのけらる自信はある。オリハルコンを斬り裂き大地を海を凍てつかせ、空を掛けてあらゆる敵を屠りに行ける。

それもこれもティファがいるのが前提で、ティファのいない世界はきっと色褪せてどうでもよくなる。

今は・・・ティファを感じられないが式神のフラメルがいる事で辛うじてティファの生存が確認できているの―まだ―自分の目に映る世界に色が残っている。

味気ないが、ティファを取り戻せばまた世界は輝きだそう・・・・それまでの間ティファとの心の繋がりを断たれているのが辛い。

これまでは会えずともティファを感じていたのが当たり前で！断ち切られた時がこれほど辛いだなんて・・・

それでもティファの兄達と父達も耐えている。それを知っているのに僕だけが嘆き悲しんでもいられない。マトリフ様だとてティファを掌中の珠・大事な宝としておられるんだから・・・

我慢しようとした、前を向いて歩こうと歯を食いしばって歩こうと、己の心の痛みを気取られない程誤魔化していたが、ティファのあの歌が・・・・

「・・・・会いたいんだよティファ・・・」

・・・・・ティファ・・・・

だれ・・・・・誰かが私を・・・・悲しい、とても悲しい声が・・・・行きたい・・私はあの声の下に行きたい！

あぁでも体は動く事すらままならず！そしてこのパレスには結界が・・・・自分がこの部屋を出れば結界が察知して直ぐに捕まる・・・・構わない!!行かないと！

パレスの与えられた寝室で深く眠っているティファは、深層意識の中で強く願う。
悲しみに暮れている自分の―半身―に逢いたいと、逢いに行かねばならないと。

ふわりと体は軽やかに宙に浮いている・・・・自分は空飛ぶ靴は手元になく、魔法も使えないのに・・・だがこれで!!
試しに居室の窓に手を掛ければ、開けるどころかするりと一気に表に出てしまったではないか。
これは・・・・もしかして・・・・・・
自分の考えが正しければきっと・・・・・
ティファはパレスの結界を―すり抜け―そのまま会いたい者の下へと飛んでいく。
星がきれいな事にも気にも留めず。

「・・・・ノヴァ、ティファはきっと無事よ。パックの馬鹿には文句言いたいけど、あの子達のおかげでティファの事知れたんだから良しとしましょう。」
「決戦まで・・・・・あと四日も・・・・・・」
大勢の小さき友達に慰められてもノヴァの気持ちは一向に晴れる事は無い。自分が本当の意味で愛しているのは・・・・・それは・・・

「・・・・ヴぁ・・」
・・・・・・え!
「ノ・・・・・ヴァ・・・・・・」
「・・・・・ティファ?」
俯いた自分の耳に幽かに届くこの声は・・・・・・・・間違いない!!

周りの精霊達も気が付いたようでざわつき始める。ティファはあの大魔王バーンの捕虜となり、パレスの強固な結界内の奥深くに隠されているのを精霊達も知っている。
大魔王と魔界の事を、ある意味地上の者達よりもよく知っている精霊達からすれば、此処でティファの声がするのはあり得ない!!それでも・・・
「ノヴァ!!!」
今度こそ！確かに聞こえた!!
ノヴァは立ち上がり東の方角をひたりと見据える。その先にいたのは・・・・
「ノヴァー!!!」
「ティファ!!!!」
何故あ一糸纏わないティファの姿が自分を目掛けて飛んでくるではないか！
姿もだが何故飛んでこられたのか、なぜ逃げられたのかなどという疑問は今のノヴァに思い浮かぶ筈も無く、自分に飛び込んでこようとするティファを抱き留めようとしたその瞬間、体はお互いをすり抜けた。
「・・・・・ティファ?」
「え・・・どうして・・・」
ティファもノヴァも、お互いが触れられないことに驚き何度も何度も体を重ね合わさんとしてもすり抜けてしまい、遂には互いにボロボロと泣き崩れる。
どうして触れられないのだ
たったの一度でもいい、ただお互い抱きしめ合いたいだけなのに・・・・
その光景は純粋で美しく、そして哀れで悲しい。
精霊達は一目で分かっていた。
今この場にいるティファは―魂―だけの状態であり、生者と魂が触

れ合えることなぞ金輪際ないのを。
二人の子等を友としている精霊達も、その光景は悲しくてほろほろと泣き崩れる。
好いた二人が、目の前にいても触れないのが哀れで・・・
ノヴァとティファの共通の友達であるティンクの説明で、ティファは己の現状を知り落ち着きを取り戻し、ノヴァもそんな状態になってまで自分に会いに来てくれたと心が温かくなるのを感じている。
「・・・・泣いていたのはノヴァだったんだね・・」
「・・・―皆―だよ。僕達は皆君の事で泣いて沈んで!!」
「ノヴァ・・・・」
「どうして僕すらも置いて行ったんだ!!ティファの為ならどんな事でもして上げるのに!!!どうして!」
今までずっと溜め込んでいた思いを、ノヴァはティファ本人にぶつける。
ダイ達に遺された手紙は優しい言葉と、立ち上がれる言葉が溢れていたようだ。それはハドラーにもマトリフにも同じで・・・・だが自分への手紙はたったの一言であった。
御免ねノヴァ
なぜこんな事をしたのかも、この後どうなるかどうすべきかの言葉も何処にもないたった一言が、自分をきちんと知っているのだから今更言わなくとも分かるだろうという信頼の証なのは承知している。
だが心が納得できない!自分は・・・ティファの傍らに入れればそれでいい。例え底が地獄であろうとて基地の中であろうとそれは変わらないのに!置いていかれて心が痛いのだと・・・
「・・・・・ノヴァ・・・」

触れらない・・・・それでも、ノヴァを慰めてあげたい。
自分はノヴァの優しさに甘えてきた。何を言わなくとも自分のする事全てを受け止めてくれるノヴァに。
自分もノヴァも、互いで一人前なのかもしれない・・・・
その思いが愛しく・・・・

「ノヴァ」
「ティファ・・」
気が付けばティファの方からノヴァの口に口を重ね合わせていた。
無論触れられない・・・それでも・・・
「ティファ・・・・好きだよティファ。誰よりも何よりも君が好きなんだよ。」
「ノヴァ・・きっと・・絶対に戻る。迎えに・・」
「行くよ・・・どんな事をしてでも君を取り戻す!!!」
ノヴァの心に、再び火を灯すには十分であった。

魂だけの状態というのは非常に危険であるとティンク達に諭された二人は、精霊魔法の詠唱でティファの魂が返される事になった。
「ティファきっと・・」
「ノヴァ絶対・・・」
会おうと約束をして・・・・

精霊達の詠唱が終わると同時にティファの姿が消える寸前にノヴァからティファの唇に唇を押し当てる。
・・・・柔らかい感触がしたと思うのは気のせいだろうか・・・
勘違いでもいい。ティファを一瞬であってもこの身で味わえたのならば・・
「皆付き合ってくれてありがとう・・・もう大丈夫だ。」
「そう、そしたら寝ましょうノヴァ。」
「明日は早いんだろう。」
あぁそうとも。沢山寝てうんと鍛えて今度こそティファの側でティファを助けるのだと、清々しい笑顔を取り戻したノヴァの宣言に、精霊達も微笑み砦へと戻っていった。

「お帰りお嬢ちゃん、―夜遊び―とは感心しないね？」
「ん・・・・キル？」
精霊達の手助けでパレスの中の本体の戻った自分を待ち構えていたのは・・・
「どうやって―魂抜け―なんて覚えたんだい？それとももともと出来たのかな？」
言葉遣いは優しくとも声も気配も冷たいキルが、自分が寝ているベッドの枕元に腰を掛けて覆い被さっている。
瞳はいつもの綺麗な赤ではなく、一度見た怖い赤黒い色をして熾火が燃えている様だ。
捕虜の自分が逃げたと思っているのか・・・・
「キル・・・・ティファね・・・・・どうしても行かなくちゃいけなかったんだよ・・」
眠いのも手伝い、慣れぬ魂抜けをして疲労困憊なティファはたどたどしく話す。
どうしても悲しみに暮れた心を慰めたくて
・・・・・この子は・・

「初回だから今回は僕の胸に納めておくけど、二度目は相応の罰を下すからね。」
「うん・・・・・ふぁ～・・」
「もうお眠りお嬢ちゃん。このベッドでぐっすりと、夢も見ずに。」
「・・・・・・・」
理由を知って落ち着いたキルは、ティファから少し体を離し優しく髪を梳いて寝かしつける。
この優しさが厄介でありそして最大の魅力である。

自分も、この優しさに魅かれてティファを欲している。
だからこそ一度目の逃亡には目を瞑る。
ティファの様子を見に来た時、ティファの体が半分透けていた時は愕然としたが、すぐさま魂が戻ってきた。
まさかティファが魂抜けを使えるとは。
奪魂魔術でもないのに、ときたま自分の力で魂を自在に出入りさせられる者が極まれにいる。
ティファは本当に何事も極まれの少数に入る者で、そこが厄介事に繋がり自分でも頭が痛くなる。
とは言えティファの現状を話せばさしもの主も、ティファを罰せないといけなくなるので内緒にしておく。
主もティファを殺す気でいても罰するのはしたくはないだろうから。
様々な者達の思惑を外に、ティファは眠りの底に落ちていく。
キル言った通り夢も見ず深い底へと

最終決戦編

最終決戦プロローグ

晴天で雲一つ浮かんでおらず、太陽は遮る物のない事を喜ぶように、光であまねく世界を照らしている。

ここカール王国北部のロロイの谷も例外ではなく。

カール山脈唯一の平原であるこの谷は、広さはそこそこあれど四方を山に囲まれ岩しかなく普段そこを訪れる者は誰もいない場所の中央に、白い石で作られた人が優に五・六人は乗れるほどの舞台ような物がある。

そこには確かに表れる者があり、山間と岩の間に身を潜めている者達は現れる者を日が昇る前から待ちわびている。

遅い！まだか!!

待っている者達の服も鎧とてもほぼばらばらであり、中には数名の魔族とモンスター達の姿もあるが、全員此処にいる目的は同じ。

上空の空中要塞にいる者達の地上消滅を止めるべくここに集っている。

その集団の中には若い者で特に歳が一番したのが十二であり、名をダイといい当代の勇者である。

その勇者ダイの周りを年若き者達が囲んでいる。隣には相棒の魔法使いポップがおり、武闘家マァム、―剣士―ヒュンケルとその肩には相棒のベホイミスライムのベほが乗っており、戦士クロコダインの隣には戦士見習のチウがいて、その彼の部隊である獣王遊撃達も待機させ、息を凝らして中央舞台を見つめている。

少し離れた場所には、占い師のメルルがレオナ王女やフローラ女王たちと共に戦士・騎士団の護衛される形で囲まれており、その指揮を氷の勇者・ノヴァが父のバウスン将軍と共に取っている。

彼等は勇者ダイと共に、この地に大魔王と最後の雌雄を決するべく

戦いを挑みに来たのだが、もう一つ同じくらいの大切な理由がある。
先の決戦で囚われた勇者ダイの妹にして、一行の料理人を名乗るティファを奪還する事。
正午になれば、あの白い舞台に姿を現す事は、四日前にパプニカ王城に使者としてきたキルバーンが告げていた。
料理人の処刑は正午にロロイの谷にて行われると。
―料理人―なる職業は、勇者一行が誕生して数千年経つが今までにそんな職業はない。
ティファ自らが―勝手―に言って生み出し周囲に強引に認識させた職業もどきとも言えようが、たったの数か月で各国の兵達から料理人のティファを知らぬ者はいなくなる程の絶大なる影響力を及ぼした者が、今まさに処刑されようとしている。
それを救い出さんとダイ達は逸る心を無理やり押さえつけてじっとティファが現れるのを待っている。
待つ身としては、正午になる時間の間も狂おしく感じ、いっそパレスを強襲したいほどだ。
「ポップ・・・正午は・・」
「焦るなダイ、もう少しなんだから焦って気負ってたら戦う前からへたばるぞ。」
十五になる癖っ毛のある黒い髪を黄色いバンダナでまとめているポップが、相棒の勇者を宥めすかす。
「ポップ・・・・ティファは本当に・・・」
「あぁ、むかつくけどな、あの変態の疫病神はティファの事に関しては嘘言わない奴だよ。戦場で会ったら真っ先に消し飛ばすけどな・・」
マァムの不安もきっちりとしながら死神キルバーンを消す算段も素早くつける。
あいつはさっさと消すに限る!!ティファ達の安全と俺達の心の平穏の為にもだ!!
「ヒュンケル!おっさん!!是が非でもあの変態・疫病神消すぞ!!」
「無論だ!!」
「アレだけは決してうち漏らす者か!!」

・・・・・ある意味で打倒大魔王バーンより盛り上がっている。理由は推して知るべしだが、チウとメルルはそのテンションにはついていけずなんだかな～と頭をひねっている。

二人にはキルに対する悪感情が無いので仕方がない。

しかしキルバーンを知る者の中でその考えはごく少数と言おうかこの場にはその二人しかおらず、ダイ達の後方に位置しているロン・ベルクはキルの名前が聞こえただけでも殺気を漏らし、ダイとティファの父バランなぞは、この身と引き換えにしてでも倒したいを願ってやまない・・・・ある意味どうしたら大魔王よりも倒したい人物に指定されるのか謎になるだろうが、ティファを愛する者達のほとんどの共通認識化しているのでこれも仕方がない事。

其れで士気が上がるのだからこれでいいのかと問われればいいと言えよう。

大魔王に負ければ地上はその日のうちに方法は不明だが消滅させられる。

負けても再起を図るなどという言葉はなく、文字通り背水の陣で不退転を強いられているのだから士気はいくら上がっても良い・・とはいえ、ティファとは一体どのような人物なのかまだ会ってもいない少女に振り回されているフローラは溜め息を吐く。

彼女のおかげで戦力は想定以上と言ってもまだ足りない程の大戦力となったのだが同じくらいの厄介ごとも被った。

慈愛に満ち溢れ優しく、その反面酷く幼く脆い心を持った少女という何とも奇妙な説明を受けているフローラが目を向けている白い舞台に突如として赤い光を帯びた魔法陣が出現をし、周囲にざわめき始める。

正午となり、大魔王バーンが偽りなくティファを地上に降ろした瞬間であった。

その陣から出現して真っ先に目についたのは白い衣に身を包んだミストバーンであった。

「そんな!!あいつは・・」
「落ち着けディーノ。」
「・・・父さん・・・あいつの腕の中に・・」
「ディーノ、処刑の内容が分からねば我等は動けん・・・・今は・・・堪えよ!!」
白い舞台中央に身を表した腕の中には、同じく白いスカートにシルクのズボンを身に纏っているティファの姿があった。
横抱きにされ見えている足にも同じ白い色の布靴を履いているのがみてとれる。
眠らされているのかその瞳は閉じている。
その顔は歳よりもあどけなく幼く映り、ティファを知らない者達からどよめきの声が上がるのは無理からぬ事であった。

「あれが勇者ダイの妹御・・・」
「あのような子供が大魔王の強大な力から勇者達を逃がしたのと言うのか!!」
「・・・あり得ぬ・・・・・」
周囲のどよめきの声は全く耳に入らず、父バランに取り押さえて貰っていなければ飛び出して今直ぐ妹を取り返しに行きたいダイは、力の限り叫び上げた。
「ティファ!!!」
ダイの声!!!を皮切りに、次々に叫び声がロロイの谷を満たしていく。
「起きろよティファ!!」
「必ず助けてあげるから!!」
「ティファ!!」
「ティファよ!!」
「ティファさん!!!」
「ティファさん!!」
声の出る限りダイ達は叫び上げる。
此処にいる味方の概要を知られなければいいというフローラのお許しを予め貰っていたダイ達は遠慮する事無くティファの名前を叫

ぶ。
　果たしてその叫びが届いたのか、ミストの腕の中で身じろぎをし薄っすらとティファの目が開き始めた。

何事も準備は大切に

「・・・・うぅ？」

赤子が目を覚ましたか

薄っすらと開いたティファの瞳をじっと見つめるミストの感想はそのようなものだった。

おそらくあの山間にいるであろうダイ達からすれば待ちわびた目覚めだろうが・・これはここからが長い・・・

「ん～・・・・」

眠いと矢張り―むずがる―か・・・・

自分の衣をしっかりお掴み、ぐりぐりと頭を押し付け寝たいと駄々をこねる・・・起きろ、もう時間なのだから。

ミストの腕の中で寝る事もあったティファは、ミストの気配を感じてもそのまま寝る事を敢行しようとするもそのまま舞台の上に降ろされる。

乱雑に降ろされるのではなく、優しい手つきでそっと座れる体制で。

地面に降ろされたティファの眼は、徐々に開かれて行く。

温かい・・・・パレスと違って暖かい・・・・これは・・

お日様を沢山浴びた地面の匂いだ!!!

此処がどこなのか気が付いたティファは、一気に覚醒し瞳を欄と輝かせ地面に行こうと立ち上がりかけたがふらつき、そのままドシャリと舞台から転げ落ちた。

当然ミストは助ける気はない。

こんな高低差とも言えない高さから落ちてもこいつは痛くはないだろう、などというミストの心中の声を拾えばダイ達は即座にミストも滅殺リストのトップに入れていただろう。

現時点ではなんだかんだと矢張り大魔王がいてはいけないとトップワンで同票でキルがいるが、その次は誰かは決まっていないので今のが知られれば確実に当選確実。

ダイ達からすれば、ティファであっても魔王軍の捕虜などという立場は心労を感じる過酷なものであったのだと泣きたくなる。
地面に倒れ伏したまま起きないのは、やはり体がまだボロボロなのではないか！
だが、ティファはそんな理由で起きないのではない。
ふへぇへぇ～、お日様の匂いたっぷりの土の匂いだ～。
起きたくないが正解で、土の匂いを思う存分肺腑に満たしてエネルギーチャージ真っただ中。
パレスにはなんとガラス張りの温室があり当然土もあったが、長い年月を掛けて日の光の恵みと大自然の風雨によって育まれた命の息吹の匂いは無かった。
どこかよそよそしい土の匂いだけに、ティファは随分とがっかりしてしまった。
十日ぶりの土からする命の匂いに、山から吹き下ろされ自分の全身を優しく撫でていく風の中に生命の息吹を感じ取り、ティファは全身でそれらを堪能している。
自分は地上に帰ってきたのだと。
寝ていたいな～、でもこの地上を守らないといけないんだ。ゆっくり寝ていいのはその後か。
ぼんやりとしていた頭が次第に覚醒させながら、ティファは両手を地面に付けてゆっくりと体を起こして座り込む。
その顔は締まりなく笑っており、見ている者達全員を唖然とさせるには十分な威力であった。
ティファは気が付いていないのだろうか！後ろにはミストがいる事を!!
しかし味方の懸念とは裏腹に、当然ティファは気が付いている。ミストが自分を見つめてじっと立っている事を。
それでも気にせず少しだけ好きにさせて貰う。だってこの位の事ならばまだ観察の範囲内で怒っている訳ではないと断言できるくらいにはなっている。
ミストの視線の強さによって、言いたい事や考えを察知できる日が

来ようとは、本当に人生歩いていると何があるか分からないのがいとおかしきかな。

ティファは少し座ったままに伸びをし始める。両手を宙高く伸ばし上げ降ろすのしばし繰り返し、すっきりとした顔になればゆっくりと立ち上がった。

そのままミストの方を向くのかと一同が固唾を飲んで見守る中で、なんとティファは膝の屈伸運動を始めたではないか！

うわぁ～体中かパキポキいってる。相当訛ってるなこれは。

パレスでは移動はキルが専らであったが、ミストや時にガーゴイルや極稀に大魔王に運ばれていた生活を十日もしていたので無理はない。

さっきこけたのも単に足がもつれただけであって中身はピンシャンしている。

うん！思いっきり動こう!!!

「・・・・綺麗ですね～お嬢ちゃんのあの動き。ふふ、舞を舞っているみたいですねバーン様。」

「余興にひとさし舞わせれば良かったな。」

「そうですね～。それにしてもお嬢ちゃんは本当に凄い。見て下さいよ地上の連中間抜け面。

お嬢ちゃんの行動についていけなくてポカンとして。お嬢ちゃんこっちに来ればいいのにな～。」

ティファの動きはパレス内にてバーンとキルもぽっちりと見ているが、当然ロロイの谷の山間にも目玉をしかているのでダイ達の顔もぽっちりと映っている。

キルとバーンが美しいと評した動きを、ダイ達にとってはティファは一体何をやっているのか分からない動きをしている。

今ティファに問えば、筋力と神経の肩慣らししてるんだよと無邪気な答えが返ってこよう。

屈伸運動の後に、ティファは体内にある闘気は使わず筋力だけで地

面を蹴り上げ高く跳んだ。
着地と同時に何度も跳び上がり、腕を体に巻き付け身体を横回転させたり反対に腕を伸ばして独楽の様に回って見せる。
足での着地ではなく手を尽き後ろ返りに前回り、跳んだかと思えば着地と同時に足を開いて低い姿勢で左手を一閃させまた跳びはね一時もじっとしていない。
嬉しいのだティファは。
おのれの体を存分に使えるのは久しく、自由に動ける事が。
其れはこの世界に生れ落ち、己の足で走った時のあの興奮が蘇る。
生きていればこそ、健康であるからこそできる体の動きをティファは思いっきり存分に堪能している。ただそれだけの事。
そして地上に降り立ち始めて発せられた言葉はこれであった。
「いい天気だ!!」
この地を守ろうや救わねばという勇敢な言葉とは程遠い、のびやかで無邪気な笑みを浮かべ、此処がこれから戦場になるとはとても思えない言葉に、ティファを知らぬ味方どころかダイ達も絶句した程の能天気な一言であった。
飛び跳ねる事をやめても辺りを散策するように歩く様は、本当に子供が散歩している様にしか見えず、様々な叡智・知略で翻弄されたフローラを筆頭にしたカール王国勢は、目の前の人物は別人なのではないかと現実逃避したくなってきた。

そのティファの動きが、ぎくりと一瞬したかと思えばぴたりと止まった。
何事かあったのかと目を凝らすダイ達にも見る。
ティファの顔に、どことなくバツが悪そうな顔をしてミストの方に体を向き直り、頭を掻きながら何やら弁明を始めた。
「いやぁ～もう少しだけ見逃してもらえませんか？物凄く久しぶりの地上にはしゃいでいただけですよ～。」
「それは・・・確かに自分で捕まりに行ったようなものですけど、あの

時点では奇跡的に勝てるか私込みで逃げられるかの方にも張っていたのですから、ただのこのこ捕まりにいったんじゃぁありませんよ。」
まるで誰かと会話するように話しながらミストの方にゆっくりと歩き始めている。
実際にティファはキルとバーン並みにミストの視線一つで何を言いたいのか大かた察することが出来、今もティファにとってはミストと会話をしているも同然であった。
自分がティファに向けている視線の内容も、ティファの返答と概ね一致しているのでそのままの癖で視線と話の会話で済ませるミストも、ある意味ずぼらであろう。
そのティファが、何かに気が付いたようにぴたりと止まる。丁度舞台迄半分の距離で止まり、地面をじっと見つめ始めた。
ミストも何事かを察し、ティファが止まったのを咎める視線をやめて観察モードに移行させる。
あれは一体何を感じたのか。

困ったな～、此処にいたら―この子達―危ないや～。
「あの～、これから闘気発しますが敵対行為ではないのでいいですか？」
「・・・・・・コクリ。」
「了承有難く!!!
!!」
ズバン!!!
ティファは何を思ったのか、ミストに宣言し、ミストが首を縦に振ると感謝の言葉を述べながら突如地面に両の掌を闘気諸共叩き付けた!!
バキバキバキ
ティファの闘気に反応したかの様に、何か固い者がぶつかる音がしたが今はそこじゃあない。
モコ・・・モコモコモコ・・・
ぴぃ～!!ぴぃ～ぴぃ～!!!
!!
・・・・か・・・・・可愛い・・・・なぁ!!!!

ドシャドシャドシャ!!
「・・・・・何をしている?」
「うぅう!!地面から出て来た大量のスライムちゃん達に、のしかかられている以外どう見えるんですか!!」
呆れ果てるミストに切れたティファが、助けを求められたスライム達にのしかかられたままミストに怒鳴り返した。
ティファが察知したのは地面の中に居たたくさんのスライム達。
昨夜の雨の中を巨大な其れ跳ぶ物体が来た時、カール山脈のモンスター達は山の外へと逃れたが、地面がぬかるみ山間を登れなかったスライム達は、反対に地面にか潜って何を逃れようとしたのだが、ティファからすればこの後起きるであろう大戦の中では、地面の下にいてはその余波であってもこの子達は死んでしまうと表に引き出した。
それはいいのだが困ってしまった。
この子達何処に逃がせばいいんだろう?闘気が何か当たる音が四方からしたという事は目に見えない壁があり、どうやらこの場所には結界が張られている可能性がある。
そんな中で・・・私じゃ～・・・
「・・・・・なんだ?」
「・・・・・・・」
「・・なんだ!!」
「・・・・・・・」
「・・えぇい!!何故そのスライム達を抱え込みながら私に近づく!!」
・・・・・・・・」
「何か言ったらどうだ!!無言でじりじりと近づくな!!」
ティファの意味不明な行動に、今度はミストの方が切れた。
少しどいてとスライム達に言った後、立ち上がったティファは両手に抱えるだけのスライムを胸元に抱いて、残りは両肩と頭に伸してじりじりと無言で自分に迫ってくる!!
しかも瞳をスライムの様に潤ませるな!!言いたいことがあるのならば口で言え!!
それはまさしくミスト自身に対する盛大なブーメラン思考であっ

たが、突っ込める者は生憎とここにはいないのが残念であった。
「ミスト～この子達を・・」
「・・・・・・それか・・」
ティファの短い言葉でミストは察した。
どうやらスライム達を逃がしてほしいと訴えているらしい。
馬鹿馬鹿しい！地上が消えるのだからどこにいさせても同じだ!!・・とはミスとも言い難い。
何故ならば相手はスライムだからだ。
何故スライムだとそう言いづらいのか。その理由はバーンが大事にしているパレスの庭園にある。
あそこには主がいつの頃からか面倒を見ているスライム達の子孫が住み続けている。
そのスライム一族は取り立てた所はなく、能力も平均でメタルだのレア性も皆無な本当に何の変哲も無いスライムばかり。バーンは何が気に入っているのか分からない程スライム達を庇護し、そして亡くなれば遺体を灰にする事なく庭園の隅にある石の前に手づから穴を掘って埋葬している程で、自分も日々そのスライム達に餌をやり体調を管理している。
故に、自分も自然とスライム達に懐かれ目の前にいるスライムとティファの潤目が庭園のスライム達と重なり邪険に振り払えないではないか!!
「駄目だよおじょうちゃ～ん。ミスト困らせたら駄目じゃないか～。」
風の中をそよぐような甘い声が谷に広まった時の反応は実に十人十色であった。
ある者達は殺気に満ち溢れ、ある者達は困惑をし、何事かと警戒をし、ミストはうんざりとして、ティファはぱっと気色の色を浮かべて声の方を向けば!!
「その子達をお外に出せばいいのかな？」
「キル!!・・・できればカール山脈の向こう側に・・・お願いできますか？」
空間から出て来たキルに駆け寄り、躊躇いも無くスライム達をキル

に託す。
「お安い御用だよ。それよりもこの子達庭園に入れて上げようか？―君―も込みで。」
渡されるスライム達は、キルの邪気の無さに安心して身を預け、大人しく腕の中に納まり、受け取ったキルは言外にティファに降るように伝えてみるが、ティファはにこりと笑って後はだんまりで返されてしまった。
残念、降らないか。
予想はしていたが矢張りがっかりとしてしまう。
こうとなってはミストが痛くないようにティファを殺してあげる事を祈るばかり。
痛いのは切っち嫌だろうから。
「ミスト、上手にやってあげてね。お嬢ちゃんも抵抗してもいい事ないからね。
其れとこれは返すよ。」
「・・・・これは・・・・いいんですか？」
「うん？これに武器はないんでしょう？」
「まぁそうですが・・・」
「なら返しても別にいいでしょう。それじゃぁミスト頼んだよ。お嬢ちゃんの心残りもこれでなくなるだろうし、―公開処刑―の宣言を高らかに上げてくれ給えよ。」
ティファに没収していた金のマジックリングを返したキルは言いたい事を言った後、スライム達を逃がすべくさっさと空間をさっさと通って行ってしまった。
・・・・まるで通り魔に会った気分だとミストは胃薬飲みたくなってきたのを、ティファが白い衣の腰辺りをポンポンと叩いてつい慰めてしまう。
ある意味でティファもミストもキルに振り回されているので、ミストもそこには文句は言わずに公開処刑の幕開けを宣言した。
「・・・・・始めるぞ。」

質問です

「私の処刑方法はどうなっているんですかミスト？」

自分の処刑内容を自分で聞くとはいささか常軌を逸しているとは自分でも思うんだよ、うん。

流石にね、お前をこれから処刑すると言われ続けても平然としている子供ってのも可愛げが無いどころのレベルでないのも分かるんだよちゃんと。

其れでも生き残るには―多少―は変わっていても多めに見て欲しいんだよ。

だからさミスト、そんなに呆れた盛大な溜息ついて頭を押さえないで欲しいんだよ。

割と私でも傷つくよ？

始めよう

その一言で上空のパレス内と隠れ潜んでいた者達の間に緊張感が奔ったのを、ぶっ壊したのは矢張りティファである。

こいつは自分の命が無くなる心配していないのかとミストだって頭を痛めて溜息ついても文句は出ない筈が、ティファにとってそれは不満であり心の中で反論するが、目は真剣な表情でミストをじっと見つめ、見つめられているミストもティファの考えている事は分かっている。

これは状況の読めていない馬鹿などでは決してない。もしも今のこれのふるまいだけでそう侮る馬鹿こそ魔王軍には不要だと早々に追放物だ。

誰よりも分かりすぎているが故に、どう動くのが生き延びるのに最善なのか早く組み立てたいからこその質問であるとは分かっているのだが・・・・もう少し緊迫感や悲壮感を持って言ってくれればこちらだとて頭痛くならずに済むのだが・・・・今朝の朝食何ですか並みの気軽さで聞かれると本当に色々と思うところが出てしまうのは仕

方がないだろう。
・・・・勿体ない。何故この者が魔界の、其れもバーン様の直轄地に生まれなんだか・・・

ミストはティファの本当の所を知ってどれ程その事を思ったか数え切れないでいる。
最初は少しばかり知恵が回る腕に覚えあるものであったが、とんでもないバケモノであった。
何が怖いと言えば、バーンしか見ていなかった自分の目を真剣に向けさせるその存在感そのものが怖ろしい。
そして同時に惜しみもする。ティファのような者がいたなれば、主はもっと早くに大願成就を楽に出来たであろうと。
主は実力主義を重んじ、名が聞こえれば奴隷の子であろうと登城させて使えると判断すれば魔界とパレスのゲートを守護するガーゴイルのガァグランスの様に重用する事を躊躇わない。
貴族が居らず、いるのは主とそれに使える者達で、其れなりの地位差はあるが他国よりも分かりやすいシステムな国を慕い、移住してきた者達でさらに国力が上がり今に至る。
まさに強者こそが正義を地で行っているのがバーンの国であり、最早ヴェルザーとその傘下の国以外の魔界の地はバーンの傘下。
その中のどこかにでも生まれてくれたのであったれば・・・・
感傷を、あえて切り捨てるようにミストはティファを見据えて質問に答えた。
「お前を処刑するのは私だ。」
「うわぁ・・・・死亡率がこれで跳ね上がり・・・方法は？」
「お前が死ぬか、私が死ぬかのどちらかの決着がつくまでこの地に張られた結界は解かれん。」
「はりゃ、結界の事言ってもいいんですか？」
「戯けた事を、先程の闘気を発しいた時に察しはついているだろう。」
「確かに。あの結界の作用は私だけで貴方には？」
「バーン様がお張りになった結界が私を害すると？」

「で～す～よね。つまり私には作用して貴方は出入り自由と。ちなみに・・・やっぱり自分で試してみてもいいですか？」
「構わん。」
「では遠慮なく。」
　サクサクと話を進めているティファは、ミストに断りを入れて再び舞台から降りて地面をけり上げ大きめの土塊を作り出し、まずは真っ直ぐに投げれば、ある所を境に土が一瞬にして消失した。
　それを残った三方と上空にも順番に投げれば結果は同じ。
「成る程、結界に触れた物を消し去る・・・逃げる距離間違えたら確実に死にますね。」
　広さは大体百メートル四方で高さも大分あるな。これなら―立体機動戦―が可能か。
　ミストには作用せず私だ・・・・・あ、これ聞いておかないと。
「ちなみに―外―から―誰か―が入ってこようとした時はどうなりますか？」
　ここ重要
「お前と同じだ。」
「・・・・・・さいですか・・」
　平然と怖い事言ったよこの御人!!つまり結界で見えないのか、原作では周りに居る筈であろうダイ兄達の姿どころか気配を感じないのもこれのせいで、私を助けに来ようとした人たち即死かい！
　これはあれだ、○キホイホイならぬ、勇者ホイホイ・・・・私はホウ酸団子か何かか・・・囮の時点でそうなるのね。

　等と暢気にどうでもいい事を気にするティファと違い、勇者ダイ一行の頭脳たるポップは慄然としていた。
　・・・あっぶねぇ・・・ティファがきちんと情報引き出してくれてなかったら俺達バーンに会う前に全滅してらぁ・・・
　ポップの立てた作戦はシンプルなものであった。
　ティファが処刑されるその寸前、イオラの嵐を魔法部隊と共に打ち上げて爆炎で煙を立てる。

無論ミストを狙ってだが、これであればティファが何かに繋がれ殺されるだけであっても有効な手段であり、混戦部隊であっても即座に臨機応変が取れるこの作戦をマトリフも支持しフローラに奏上されて通ったのだが、やっていたら魔法は分からないがイオラの爆炎に紛れて突撃を駆ける予定だったダイ達は確実に死んでいた！

これでティファを助けに行く望みは潰えたが、ティファが端から結界の存在を露呈していてくれたからこそあの参謀も結界の事を話したのが不幸中の幸いであった。

そうでなければ何も知らずに自滅するところであったのだから。

周りを見渡せば、自分と同じ結論に達したのかどこもかしこも青い顔に冷や汗を流している顔しかない。

そして焦りの色も浮かんでいる。

当然だ、此処で大魔王の張った結界を無効にする虎の子のミナカトールを使うわけにもいかず、ティファには自力でどうにかしてもらうしか手が無くなったのだから!!

ドッガ!!

ポップの思考を、鈍い音が遮る。見ればダイが、そしてヒュンケルもが拳を岩肌に叩き付け無念だと呻いている。

どうして自分達はティファに助けられてばかりいるのに、ティファを一度として助けることが出来ないのだ!!

周囲の思惑を他所に、ティファの思考はいつも通りに忙しなく働き、そして算段が付いたのかふんわりと落ち着いた笑みをミストに向けながら再び舞台の上に自ら上がる。

これから何が起こるのかを承知しているのに穏やかに。

そのティファに、ミストは思い出したように右手を宙に差し出せば、親友のキルの手が現れ、キルが持っていたゴブレットを受け取りティファに持てと押し付ける。

「―これ―を飲め。」

「なんですかこれは？・・・・私は今生別れの酒を嗜める歳では・・」

どう見ても大人がお酒を飲むのに使うゴブレットをミストから差

し出されたティファは、この場所に来て初めて困惑する。
お酒は二十歳とまでいかなくともせめて十五までは待つべきだけど・・・心尽くしとして受け取って方がいいのかな？
この場で出されるゴブレットの中身をすかんと忘れているティファは、てっきり酒だと思っていたのでミストに言葉にぶっ飛んだ。
「中身は酒ではないから安心しろ。」
「へ？・・・・・・別れの水杯ですか？」
確か大戦前には味方同士でそれをするところもあるってノヴァが教えてくれたけど、私の事惜しんでくれてるのならって・・・・この色どう見ても水では・・・
「暗黒闘気を濃縮してゴブレットに入るようにしたものだ。」
「・・・・・・・・・は？」
「これも処刑の一環だ。」
「・・・・・はい⁉」
ちょっと待ってミスト!!酒なんて及びじゃない程やばい物を人様に差し出して安心しろって何よ其れ!!
どう考えても安心出来ない物ナンバーワンじゃないのよ!!!

拝啓お父様、私は暗黒闘気を飲んで亡くなりました・・・なんて絶対に嫌だ!!!

結果は・・・・

苦しいものだと思っていた。
体内に侵入しするであろうそれを拒絶する為に、体内での攻防となり苦痛と吐き気にのたうち回るものだと。
暗黒闘気を飲んだのだから

「ヒュンケル!!ティファ一体どうしちゃったの⁉」
「あれを飲んだら取り込まれるのを拒絶しようとするか取り込まれるかのどちらかじゃなかったのかよ!!!」
「俺も・・・俺にも分からん!!俺が暗黒闘気を習得する為に飲んだ時にはあんなことは無かった!!」
ミストから渡されたゴブレットを渡されたティファは逡巡していた。
当たり前だ。
何処の世界に処刑の一環であるという物を、其れも暗黒闘気を渡されてそうですかと飲み干す者がいるだろうか。
ティファが逡巡している間、ヒュンケルはダイ達から質問攻めにあった。この中で唯一暗黒闘気を使っていたのがヒュンケルだけだ。
暗黒闘気を飲めばどうなるのかを問われヒュンケルは思い出したくはないが、幼き日に一度だけ飲んだ時の事を思いだす。
打倒アバンを掲げ、暗黒闘気の使い手となる為に極少量であったがそれは苦しくそして地獄の怨嗟のような声に乗っ取られかけ、持ち応え自我を保ち正気に返った時に暗黒闘気が体を巡っていたと。
乗っ取られるか使い手となるか・・・・・死んでしまう事もある。
だからこその処刑の一環。
ヒュンケルの言葉に、少し離れたところで聞いていたフローラ達も青褪める。
もしもティファが暗黒闘気に飲み込まれたその時は、間違いなくダイ達は戦えなくなってしまう!様々な意味で!!
乗り越えられるか、それが無理な時はいっそを願うフローラの心情

は幸い表に出ずに済んでいる。
　ティファがそれで没した時は、其れがダイ達にとっては何よりも戦う原動力足りえるはずだ。
　一人の少女よりも世界全てを考えるフローラとは裏腹に、ダイ達はティファが暗黒闘気に打ち勝つことを願う。
　特に暗黒闘気の恐ろしさと悲しさを知るヒュンケルは両掌から血が出んばかりに握りしめ取り込まれないで欲しいと。
　あれは魔族達にとって当たり前の力だろうが、人間があれを使う時は怒りとそして悲しい怨嗟の心からしか生み出されない・・・ティファには決して堕ちて欲しくない！
　逡巡の果てに、ティファは微かな溜め息を吐いてゆっくりとゴブレットを口につき傾け暗黒闘気をその身に納めていく。
　自分が飲まなくとも、じれたミストが飲ませようとするだろう。無理やり飲まされるくらいならば自分で飲む方がましだと。
　自分が飲めばどうなるか分からない。苦痛の果てに乗っ取られるのか暗黒闘気を屈させるのか・・・・・しかし、そのどちらでもなかった。
　ガラン！・・・・カラン・・・・・
　悶え苦しむ姿も乗っ取られるのを厭う拒絶の姿でもなく、飲み干したティファはゴブレットを落としながらゆっくりと崩れ落ち、傍らで見ていたミストは両手で崩れ行くティファの体を抱え上げはしなかったが、両脇に手を入れ支え、じっとティファを見つめる。
　支えられたティファは瞳を閉ざしたが死んではいない。
　心臓は安定して脈をうち、呼吸は深い眠りについたようなと息を立てている。
　漸く堕ちるだろうか？
　遠目からでもティファの胸が上下に動く事で生存確認したダイ達であったが、気が気でない！目を覚ましてほしいが、起きた時のティファは一体どうなってしまうのかが怖ろしい。
　いつも通りなのか・・・・それとも

ティファの体内に入り込んだ暗黒闘気はまるで意志あるが如く、ゆっくりとティファの体内と精神に侵食していく。
強引にではなく宥める様に徐々に少しずつ。
まるで自分を受け入れる事こそが正しいのだと教え込む様に。
それは苦しみではなく心地よさを与えられる様でティファは困惑をする。
暗黒闘気・・・・・なのに心地がいい・・・・私は・・・・あぁ・・・じんわりと私を包み込む様に入ってきて・・・・―中―から何かが溢れそうだ・・・・
とても心地よく―抑えていたナニカ―が喜んで表に出たいと訴えてる・・・出たいの？
入ってきた暗黒闘気誘われる様に出ようとしてる・・・ナニカってなんだろう？
まるで・・・・・私が作り替わっていく・・・・
違う、其方は―元に戻る―だけぞ
・・・・・誰？・・・・ううん、違う。私はこの声をよく知ってる・・・・戻る？
そうだ、其方は我等の下にかえってくる時が来たのだ
・・・・・帰る？返る？
そのどちらでもあろうよ
私は・・・・ティファは・・・・・・ナニ？
其方は・・・・・・・・
ヒィィィイン・・・・
・・・・・ふむ、まだ―マザードラゴン―の力が僅かに・・・
・・・・・カァァァッ!!!!!
愚かしき事だなマザーの力の残骸よ。この者の行く末は最早決まっておるのを、哀れな事だ
ティファの魂の中にまで暗黒闘気が入り込まんとしたその時、魂の

表層に幽かに残っていた竜闘気の残滓が最後の抵抗をする。
生まれ出でた時よりティファの魂の表層に覆っていた竜闘気の全てがダイに譲渡されたわけではなく、僅かながらティファの意志に逆らいしがみ付く様に残り、ティファの魂を穴だらけであっても包んで守ろうとしていた。
決して、ティファの―魂の本質―を大魔王達に察知されんとして。
だがそれは端から徒労に終わっていたのだ。
キルが知り、バーンもティファがハイ＝エントのラック＝バイ＝ラックを使った事で知られてしまった時点で、マザー亡きあとの力の残骸に出来る事などたかが知れていたのだ。
それでも、僅かであろうともティファの心の平穏を保てる時間を稼いであげたかった。
マザーの残留思念ともう言うべき思いが最後の力を振り絞り、大魔王バーンの暗黒闘気をティファの体内から消し去りたかったが侵入を拒むだけでその力を使い果たし徐々に消えていく。
せめて最後の足掻きとばかりに、―外から侵入してきた―暗黒闘気をも道連れにしてまざーな力は最後の瞬間までも見守り続けてきたティファの行く末を案じる。
文字通りー母ーの様に
子よ・・・・・愛し子よ・・・・其方が何者であっても、其方は其方である事をどうか忘れず、己が信じる道を、どうか迷うことなく・・・・・その為にも起きるのです・・・何か待っていようとも

母の声に応える様に、ティファの目がぽっかりと開く。
体内で誰かに起こされた。
誰か分からないけれど自分が生まれた時からずっと共にいてくれた何かが・・・消えてしま・・・・
「堕ちなかったか。」
消えてしまった何かを悲しむ間もなく、ミストの酷く冷え切った声に、ティファは本能的に体内に残っている闘気を両足にかき集め飛び退ると、すぐさまミストが両手を剣に変形さえ追撃してきた!!

心臓が酷くドキドキしている。思考がくらくらするがそんな事を言っている場合ではない!!
ミストにすぐさま追いすがられ留まる事の無い太刀筋を紙一重ですれすれに躱す。
「大魔王バーン様に逆らうか!!」
「私は・・・・私は!!」
「あのお方に逆らう者には死を!!!」
ミストの両の手から繰り出される網目の様な太刀筋でティファが死の結界の側迄追い詰められた時、足元に暗黒闘気が奔ったのを見たティファは、咄嗟にミストの斜め横に跳び上がる。
傍から見れば其れは悪手。ティファは魔法が使えず空飛ぶ靴すらも履いておらず、空中で避ける術がなく
「闘魔傀儡掌!!!」
「ティファ避けて!!」
「無理だ・・・・・ティファ!!!」
背後に迫る暗黒闘気の糸から逃れる術がない!!
誰もがそう思った時
ダン!ダダン!!!

ティファが空中で―何か―を蹴る動きと音がした時、ティファは暗黒闘気の糸から脱し、遥か上に―立って―ミストを見下ろしていた。
その表情は酷く落ち着いており、慌てた様子も無くミストを観察する様に鋭く冷静な色を乗せた瞳で。

世の中広いのだ！

往年の力と言えるほど自分は長生きもしていない。
それでも先日の某駄竜王に言われた通り、私には竜闘気はない。
だからと言ってやれる事は多々あり勝てないまでも―負けない事―位は出来る。
其れは私の得意技だ・・・・・とかカッコつけたんだけど!!
あの人私に酷い事言って今も私の事追っかけまわしてんだよ!!

闘魔傀儡掌が躱された。
其れは躱せるものだから別にいい・・・・そこはいいのだが!!
「・・・・・この出鱈目娘が!!!!」
「えぇぇぇ!!!!」
完全にミストが堪忍袋の結を切らせながら、ティファに突撃攻撃を敢行した。
躱された事ではない。この状況になっても怯えない、可愛げのない娘にではなく、あの様な―珍妙―な躱され方を自分がされたのが酷く不愉快だ!!
「出鱈目ってなんの事ですか一体!!」
身に覚えのないティファはそのまま空中であるにも関わらず、あたかも地面か見えない結界でもあるように走って逃げ、追いつかれそうなればやはり宙を蹴り変幻自在な動きで振り切ろうとする。
下に降りたかと思えば不規則に、上下左右を問わずどころか斜めの動きも取りいれた動きの予測は不可能であった。
トベルーラでは断じてない。あれに通常魔法の魔力が一も無い事は役立たずのリビング・ピースのマキシマムを引きずり出し確認をさせている。
それによりステータスの場所に読めないブラック箇所がいくつもあったが、聖炎とハイ＝エントの識別ができ、通常一般魔法の才能は皆無だと知れている。
ではあの動きを可能にしているのはなんであるのかが分からず、ミ

ストを苛立たせる。
「ポップ!!ティファ空中を蹴ったけど高度な魔法にあんなのあるの⁉」
「あるわけねぇだろうが。・・・・無いよな師匠・・・」
「あん!!・・・・・あぁもう俺にだって分かるかよあんな動きの仕組みがよ!!」
ミストにも分からず、外から見ている勇者は混乱し大魔導士とその後継ぎ大魔導士たちの頭を悩ませている代物なぞ・・
「お前の存在其の物が出鱈目だろうが!!!」
キル以上にティファから―様々―な被害を受け続けてきたミストが叫びたくなっても彼は悪くない。
この処刑ではなけなしの闘気を、ティファが其れでも使えるうちはと自分の双剣を受け流し聖炎を駆使して抗い、最後は力尽きた所でとどめを刺すと想定していたのが!!いきなり空中蹴って逃げるとはなんだそれは!!
「常識良識無視も大概にしろ!!!!」
実に鬱積のたまったある意味でティファに対する心情の一部を代弁した叫びであったのを、ダイ達はあの素晴らしいティファになんの文句があると内心怒りを燃やしたが、常識ある大人達は思い当たる節があり過ぎて微妙な顔になる。
ティファにはそのまま逃げ切ってもらい何とか窮地を脱する手立てを考えて貰うか、こちらで立てている手が早急に浮かぶかの時間を稼いでほしいところであり、ダイ達と共に声を張りあげる。
「ティファそこ避けて!!」
「そのままよけながら時間稼げ!!」
「マトリフおじさん!!まだいい手浮かばないの⁉」
「結界解くってのは簡単じゃねぇんだぞ。ましてあんな高威力のもの、なまじな・極大消滅呪文やった日にはやっこさんが出張るか・・」
ミナカトール使えないならメドローアがあるじゃないとはいかない。
おそらくミストが―外から来たもの―を言及していたという事は、

こちらの切り札の一つ、メドローアやギガデイン・ライデインなどの魔法も対策はされていると見るべきだ・・・・八方手塞がりじゃねぇかよ畜生が!!

あぁもう!!—変な怒り方—しているのにこの人なんだってこんなに強いのよ!!

バーンの若い肉体でなくとも強いだなんて反則もいいところだ!!何が自分では鍛えて強くなれないから他が羨ましいとか言っちゃってのよこの人!!

十分自分を鍛えて強くなってるじゃないの!!

ティファとて伊達に十日もミストを側で見てい来たわけではない。日に日にミストの動きの一つ一つが洗練されて行く様を、間近で観察していた。

最初はバーンの給仕もぎくしゃくしていたが、その日の夜には素早く膳を整え、三日で鬼岩城戦で感じたあの滑らかで洗練された動きに戻っていた。

おそらく裏で相当体を慣らすことをしたのだろう。素敵な人だ、天晴な敵だ、己を高みに上げてもって主を勝利に導く事を妥協しない凄い人に・・・・何が悲しくって酷いこと言われなならん!!

「出鱈目とは失礼な!!!」

ドゴンと、岩が落ち割れるような音が谷に響いた。

其れはティファの見事な踵落としが、ミストの首に決まった音であった。

幾何学模様を描く様に逃げていたティファの、初の攻撃が決まった瞬間であった。

しかし—痛み—を本体に感じないミストはものともせずに、衝撃で体を傾がせただけで双剣をティファにふるうのを、予想していたティファは踵落としが決まっても深追いせずに逃走に再び入る。

しかしミストもティファの動きを予想して、前方に暗黒闘気が投網上に投げて上には逃さず、地上に降り立たせそのまま乱打戦にもつれ

こまさせた。
「お前の言う事、やる事、成した事全てが出鱈目であろうが!!トベルーラの類でもなく空中蹴って避ける者など居る者か!!」
「ふざけんなです!!こんなに真っ当に必死に生きている者を捕まえて超絶失礼な!!!」

漸くミストの予定した乱打戦に入り、ティファも受ける手の部分に闘気を纏わせグローブ形状に張り巡らせ、デストリンガー・ブレイドを凌いでいく。
そしてティファは真正面から受けるだけではなく、突いてきたミストの腕を飛んで躱し、そのまま伸びきるミストの腕を伝い、宙に棒があるかの様に何かを掴んで放たれる暗黒闘気の糸を躱して再び宙に戻り態勢を整え一息ついて吠え上げる。
「世は広大無限!!誰にとっても広いのです!!貴方の知らない事等山のようにある!!井の中の蛙大海を知らずとしりなさい!!!この天地三界を極めた者もいない事もまた然りだ!!!」
ミストが出鱈目と評した物は、絡繰りが分かれば簡単だ。
ハイ＝エントの結界術、ジ＝アザーズを指定した場所にむ詠唱で小型に張るなり足場にするなりして逃げいているだけ。
出典は―某結界術師―を絶賛参照!!
私としては温厚で知的な雪○筋を目指したかったけど、あの空蝉のすり抜けは出来ないので、脳筋の墨○筋の絶海は無理でも結界を足場にすることは出来る。
この世界で今のお話分かった人は転生者で間違いない。
話逸れたが結界は守りだけに使うという既存の概念をぶっ壊してくれたあの漫画大好きな私としては使わない手はない!!惜しむらくは結界を伸ばして剣や槍みたいに突き刺すことは出来ないけれど。
「・・・この・・・闘魔傀・・・」
バヂュン!!!
闘魔傀儡掌を討とうと掲げたミストの右手の指先が弾け青い血を流す。

成る程、バーンの本体を預かっていた時とは違い―あの体―は傷つける事は可能か。
何が起きたのだと当人も含めて見ていた者達全てが何が起きたか分からず呆然としている中、ティファだけが冷静な瞳で観察を続ける。
種を明かせばこちらも何という事は無い。闘気の糸を出すタイミングで―出口―を塞がれたらどうなるか。
おそらく凍れる時の秘法で守られていた肉体では傷はつかず闘気が押し戻されるだけで終わったろうが、今のミストの宿っている肉体では出口を喪った闘気によって肉体は傷がつく。
「出血死・・・・その肉体が滅べば本体の貴方はどうなるのですかミスト？」
その言葉に呆然としてしまったミストが弾かれるようにティファの方を警戒してみれば、獣の瞳が燦然と輝いていた。
獲物の弱点を見つけた肉食獣の瞳が、欄と輝きを増し宣する。
「いきます。」
その宣告と共に、ティファの猛打が始まった。

「あぁぁぁ!!」
「くっ!!!!」
その激しい猛打に今度はミストが手を焼き、距離を取り糸で首筋が無理でも体を絡め取りブレイドの刃を突き立てようとするも、ティファ自身が追いすがってきて先程と動きが反転させられた。
ならば自分が前に出てティファと自分の体格差を利用し上段から打ち下ろしティファの態勢を崩させたいが、大振りになる前にティファの手から金色の炎がちらりと見えた瞬間飛び退さり、ティファが振り下ろした拳から聖炎が繰り出されたが不発となりそのまま地面を叩いてしまい、すぐさまティファも後ろに逃げる。
この攻防を―四度―目になるが、ティファは諦めずに自分に聖炎を打ち込もうとする。
ティファに出来るのは精々その辺り。如何に出鱈目な逃げ方をし

ていてもいずれは万策尽きよう。
時間稼ぎにはうってつけだ。
そんなミストの心情を、先刻承知なティファは猛攻しながら内心でうんざりとする。
ったくいやになる。向こうは—時間稼ぎ—しながら私の処刑を見物していると思うと腹が立つ。
ミストの本当の所は分からないが、ティファはこの処刑自体が勇者達を誘き出す囮であると同時に時間稼ぎなのを知っている。
バーンは待っているのだ。この地に黄昏時が訪れるのを。
今までピラァは落とす時間が決められていなかった。朝であったり夕刻・夜という時もありばらばらであったが、六芒星最後は—黄昏時—に打ち込むのはティファ達は予想している。
黄昏時とは生命の源たる太陽の落日と生命を休ませあるいは尽きかける命をそのまま闇に誘う夜が混じる刻限。
古より魑魅魍魎が跋扈する逢魔が時であり、魔を増幅し禍が増幅する大禍時。
黒の核晶を核とした魔の六芒星陣が一番力を発揮するのはこの時間であろうと三神様達と精霊王様達で算出した時間帯。
けれどそちらが時間を稼ぎたいようにこちらも時間稼ぎに箱の茶番の様な処刑撃破有難い。
大魔王にとっては私の生死よりも、そちらを発動させる方が大切だからいまいち私のこの処刑に対して本気度が感じられないのは好都合。
—仕込み—は終わった。
ティファの気配が変わり、ミストは双剣を構え警戒をする。ティファの姿勢が前傾姿勢となり、今にも喰らいついていきそうな獰猛な気配を発している。

蠢動する策謀

今のミストの有様に、結界外のミストを知る者達は呆然とする。
しかし一番この状況にあり得ないと驚愕しているのはヒュンケルであった。
自分のかつての片方の師は途轍もなく寡黙な男であった。
修行の時も食事の時でも、面倒くさいと風呂に入らなければ無言で人の服を?ぎ取り湯船に放る、そんな男であった。
万事視線かジェスチャーか実技化の三通りでしか話した事がない自分からすれば、―今―のミストバーンなぞあり得ない!!

「貴様大魔王バーン様を愚弄するか!!」
「本当の事でしょう!三界全て知る者などこの世に居る筈も無し!!―多少―を他より多く知っているからと言って全て知ってますなど言っているとしたら鼻で笑ってやりましょう!!!!」
「あのお方の叡智を!慈悲を!!大器を悪し様に言いおって!!!!」
ティファとミストは完全な打ち合い試合に縺れ込んだ。ティファとしては距離を取りながらちまちまとミストの全てを削りながらいきたかったところではあるが、ミストが我武者羅に突っ込んできたのでやむおえずに乱打戦に付き合わされている。
ミストとしては、ティファの発言を撤回させたいと躍起になっている。
主が知らぬことなどあるものか!全てを知り!!それでも魔界を憂えて二界を敵に回して大戦を起こしたというのに!!
もう技の応酬もへったくれも何もない。ミストが双剣でティファを叩き切らんとし、ティファは闘気だけでは追い付かないのでジ＝アザーズを両手拳に纏わせ地味にハイ＝エントの魔力も削られている。
ミストは本体が暗黒闘気の集合体であるだけに、体力は考えなくてよく闘気の心配も全くない。
ジリ貧となるのはティファの方なのである意味作戦があると言えばあるのだろう。偶然の産物ではあるが。

感情の？き出しなど自分には全く縁が無いと思っていた。声と雰囲気から主とのつながりを看破される事を怖れ時に数十年でもだんまりをしていたのが嘘の様に打ち合いながら小さき少女と本気の怒鳴り合いをしている。

だが！何としても前言撤回を引き出してからその身を貫く!!

その光景は―ミストバーン―を知る者達にとっては天地がひっくり返るほどあり得ず、ロン・ベルクを筆頭にクロコダインと元弟子のヒュンケルなぞ唖然として口をぽかんと開けている。

そして―ミスト―をよく知るパレスの二人はその様を苦笑してみている。

「いやぁ～、お嬢ちゃんに掛ればミストも本質剥き出しにさせられるようですね。」

「うむ、あれは本来とても短気で直情的だが、余とのつながりを知られる事を厭うて相当な無理を強いて来た故な。」

キルとバーンはミストの本質をよく知っている。普段は取り付くしまもないほど他を受け入れないが、ひとたび懐に入れると決めれば情深く、本質を垣間見せ短気で直情傾向を読まれてしまう可愛い性格をしているを。

ティファは本当に良くも悪くも相手の中に入り込んでくる。その結果がどうなろうともだ。

時に顔を突き合う程の肉薄をし、少し離れてもミストが追撃し距離が取れない。

「さっさと前言撤回したらどうだ!!」

「地上の素晴らしさの一端を知りもしない人の何が三界全部知っているというのですか！

貴方達は知っていますか⁉大雨の後の虹を、雪の下にても健気に咲く花を、命を繋ぐ為に渡る鳥達が夕暮れの中を飛ぶところを。

この地上は素晴らしい宝物が詰まっているのです!!」

「そんなものは！悪魔の目玉を通じて我等も知って・・」

「実際に死の大地から出た事の無い映像だけの代物を見て知っているというな!!

地上だとて過酷な所は多々ある!!大雨の為に山は崩れ水に流され生き埋めになったところがいくつあるか!!雪の中にて餓死した者達がどれほどいるか！命繋げずに死んで逝く者も多く!!!疫病もあれば貴方達が讃辞だけを送っている太陽に干殺しにあって滅んだ国もいくつもある!!!

地上は楽園じゃない!!災害！天災によって滅びの手前まで来たことが幾つあるのか知っているのですか!!!」

魔界は確かに瀕死でそして凄惨の一言でしか言い表せない。それでも、地上がぬくぬくとしていたと思われれば心外だ！

あの太陽の起こす大干ばつでいくつの国が滅び！自然災害の前で無力感を味わってきたかが書物によって後世の私にも無念が伝わる程に酷かった。

魔界が過酷なのは間違いないが！だからと言って地上が楽園と断じられるのがティファには我慢できない!!

「魔界の現状がどうにもならなくなるまで声を上げなかったのはそちらでしょ!!」

「ではなんだ！我等が地上に訴えていれば何か変わったかもしれないのか!!人同士でも諍い、モンスター達が凶暴でなくとも迫害してきたお前達に言ってどうなったというのだ!!お前ならば訴えていたとでもいうのか!!」

「その通りです!!!!」

ミストの問われたティファは、ミストを弾いて後方に飛んで距離をとり、腰に手を当ててどきっぱりと答えた。

「百年でも千年でも万年でも!!魔界の環境悪化を止める手立てを同時進行で勧めながら毎日毎晩朝・昼・晩を問わずに分かって助けてくれる迄訴え続けます!!

分かってくれる人がきっと現れてくれのを信じて!!」

・・・・・其れは助けを求めるのではなく呪いをかけているのではないのか⁉

きっと相手もずっと言われ続けた果てに、呪いを説くべう窮状訴えを聞いてくれよう・・・決して善意からではなく楽になりたいが為に

!!
　聞いていたバーンは本当にあれならやるだろうと頭が痛いと手をこめかみに持っていき、結界外の全員もティファならやるだろうと溜め息を吐く中、問うたミストは静かな声でティファに問い続ける。
「ならばお前は我等が助けて欲しいと言えば助けんとするのか？」
「はい！魔界の瘴気はお友達の精霊に助けてもらう事になりますが、そちら解決している間に地上界で余っている食料・医薬品類の支援物資は可能でしょう。割と地上も手つかずの地があるので薬草類はそちらで見込めますし、何より喫緊の事態が解消されれば魔界だけでも何とかなるのでは？」
　ティファがずっと考えていた事。もしも神々の協力がない世界でこんな事態になった所から助けを乞われた時はどうしていたのかを。
　そこは矢張り精霊王達の繋がりありきになる矛盾した未熟な考えでお粗末この上ないが、それでもその本気の度合いは分かる。
　ティファなれば魔界を助けようと手を差し伸べるのが。
「なれば、大魔王様が争いを辞めると言えばどうする？」
「本当ですか!!」
「・・・・仮にだ。」
「チェです。その時は何処にでもご案内します!!それこそ私のとっておきの場所！ダイ兄と私が育った地上の宝石箱・奇跡の島たるデルムリン島にご招待して浜鍋ご馳走しますよ!!!」
　百万が一にもあり得ないもしもの筈であるのに、ティファは両手を握りしめ瞳を煌めかせて笑って言い放つ。
　その言葉に、様々な感情が生み出されたのを知らず。
　ある者達は子供の戯言だと呆れ、ティファならするんだろうと溜め息を吐く中、有り得ない声がロロイの谷に響き渡った。
「ふっふっふっふ、はぁはっはっはっはっは!!!」
　其れはミストがこの世に生を受けて初めての笑い声であった。
　主に褒められた時とてもほんのりと笑うだけであったミストの呵呵大笑とした反応に、今度子をヒュンケル達は息をのみこれは現実で

あろうかと自分の頬をつねり痛みでこれが現実だと知り尚更狼狽し遂にミストバーンも怒りでどうにかなったかとやや心配をしだし、さしものティファもポカンとした顔をしたが、すぐさま真っ赤になって怒鳴り上げた。
「笑うな!!!」
　顔を真っ赤にしてティファの言葉に、ミストの笑いはクスクス笑いにまで落ちたがまだ笑っているのにティファは更に怒りを募らせ地団駄を踏み怒鳴る。
「何がおかしい!!人が真剣に答えた言葉がそんなにおかしいか!!!」
　ティファは、己の短い一生を掛けて考えた答えが笑われたと思い怒っているが、ミストは笑いを漸く収めて双剣の形状はそのままでも地面に向けて追撃の構えを解いてティファに答えた。
「おかしいが、お前の真剣な答えを笑ったのではない。」
「・・・・・じゃあ何を？」
「お前がどの様な者相手でもお前であるからだ。」
「・・・・・意味不明です。」
「世の常識で測れない程の器の大きさを持ち、優しいが故だ。」
　ティファの言動は全て一貫している。死に掛ける寸前であっても媚びへつらわず本当の微笑みを絶やさず、誰が相手であっても怒りそして優しくする。
　こんな命の遣り取りをしている相手であってもだ。
　認めようこの娘・・・・ティファを。この者は本物の大馬鹿であり心直ぐるものなのだと。
　そのような者を相手にしているのが不思議と楽しいと、本気で感じたが故に自然と笑いが出てしまったのだと。
「流石は地上界初の竜殺しの英雄―初代勇者―相手てでも罵倒した者だけの事はある。」
「・・・・・竜殺しの初代勇者を？私がいつ？」
「・・・・・お前は覚えていないのか？バーン様に向かって―初の竜殺しをした勇者―を否定したあの話を。」
　ミストは静かに話し出す。

三日前の夕食でのあの時の事を。

「私が戦う理由ですか？」
「そうだ。今まで魔界の魔王と戦ってきた勇者共にはそれぞれの正義がありそれを掲げて戦ってきた。」
大半は故郷を、国を守る為にと魔王と戦ってきた。
中には家族や友人というコミュニティの最小限を守るだけという奇特な者達もいたが、果たしてティファが掲げる―正義―とは何か、バーンは興味本位で聞いてみればティファは良い顔をしていなかった。
「どうした？食事が口に合わなんだか？」
「まさか・・・美味しいですよ・・。」
今日はティファのような子供でも飲めるデザートワインを出したのが合わなかった様子は・・・まだ口を付けてもいないのだからないだろう。
苦い顔は一体何を示しているのだろうか。
「私は・・・・そうですね・・・・守りたいから戦うんであって、正義の為に戦う積りは金輪際ありませんよ。」
「ほう、其れは珍しい。」
正義の使途の代名詞とも言える勇者一行の者が正義を掲げる気も従う気もないとはバーンにとっては少し以外であった。
「正義って・・・正しい儀ってそれぞれにあるじゃないですか？それがぶつかって起こるのが戦であって・・・地上でも人同士が正義を掲げ合って酷い事するのも腐るほどあるのは貴方も魔界で散々見て来たのでは？」
ティファは苦い顔をしながらグラスにようやく口をつけた瞬間カっと全身が熱くなり、くらくらしそうになるのを堪えながらバーン

の答えを待った。
「確かに・・・・だがそち達勇者一行は常々正義の名の下にと奮い立ってきたではないか。
初の竜殺しを成した勇者とても・・・・」

ダン!!
「―あんな者―が勇者であるものか!!!」
捕虜となってティファは初めて、バーンを相手に声を荒げその言葉を真っ向から否定した。
「貴方が言っているのは―ファブニールの竜を殺して勇者と呼ばれた卑劣な男―の話か⁉」
「・・・・そうだ。」
ティファの態度に檄したミストが前に出ようとするのを手で制しながら、ティファの様子をつぶさに見ながらバーンはそうだと肯定する。
地上界でも魔界でもこの話は有名だ。
地上では初めて魔界から来た竜を倒した英雄譚として。
魔界では人間等に倒された間抜けな竜の話として。
そのどちらにもティファがここまで否定する要素はない筈だと。
数千年前、その討たれたとされる魔界から地上に出た竜は、討たれた地の名をとってファブニールの竜と後世に名を遺す。
ある時地上に出た竜が、その地上の美しさに目を眩ませる中で、美しい姫を一目見て恋に落ち、人の字を学んで恋文を出した。
その竜は太古よりの竜の先祖帰りをし、人型にも竜の姿にもなれる古代竜であり人に化けて地上の読み書き一切を覚えた上で姫に求婚をしたが、叶う筈も無かった。
姫は身分高き者であり、そこは魔界も地上も変わらず地上では何の身分もない男に姫が会うはずも無い。
分かっていても一度だけ、たった一度だけでも笑って欲しいのだと、竜は焦がれた思いを暴発させて姫を攫ってしまった。
王はすぐさま国中に竜を討つよう命じ、幾度も軍を送ったがその度

に手加減をされ死者は出ないがボロボロになる軍を迎えるだけであった。
成果はなく、己の威信も地に落ちかけたその時、一人の男が王の前に現れた。
自分なれば竜を討てると

攫って半月、その間姫に自分の使い魔に作らせた豪華な食事を出し、衣服も与え、未開の鉱山から手ずから掘ってきた金銀宝石を贈っても姫は竜を罵倒し続けた。
汚らわしい醜い者が私の目の前に現れるなと。
人型になれてもうろこが目立ち、耳はとがったままで、瞳も爬虫類と同じなのを姫は醜いと評し、食事を食べても宝石類を受け取っても竜を罵倒し続けた。
それでも竜は、いつかは姫も自分に笑いかけてくれるのを待つ。たった一度でも微笑んでくれたのならば返すつもりで。
そんな折に、いつもの様に食料を取りに行った道すがら、吟遊詩人の話を聞いた。
その話と歌を聞いた者はたちまちどのようなものも笑いだすと。
これだ！姫も楽しい話を聞けばきっと笑ってくれる!!
早速金を掘り起こし、竜はフードを目深に被り、件の吟遊詩人のもとを訪れた。
どうか我が城にて歌って欲しいと。
吟遊詩人は優しく笑って共に城に着いてきた。
「姫!!貴女に素晴らしい贈り物があるのです！」
今度こそ笑ってくれるとのではないかと期待した竜は、はやる心を抑えきれず姫の部屋に入ろうとしたその瞬間、それは起きた。
「正義の名の下に!!滅ぶがいい悪き竜よ!!!今天の罰が下されん!!!」
吟遊詩人は王に竜討伐の命を受けた男であり、剣をマジックリングに隠し持ち竜が油断したその時を逃さず後ろから首を斬り落とし、姫を助け出してめでたしとなった。
攫われた姫の部屋から竜の思いを寄せた手紙を見つけた男がとっ

た作戦が見事に成功したのだと。
当時魔界の竜を倒した勇者はおらず、その男は初の竜殺しの異名をも贈られた。
「そして、男は地上にて初代勇者と呼ばれたのであろうが。」
「そんな卑劣な作戦を敢行した者が！勇者であるものか!!」
バーンの言葉はティファは益々怒りの炎を増していく。
勇者とは！平和の世になれば権力を欲さず在野に降りて平和の芽を育てたアバン先生や、たとえ相手がどの様な者であっても常に真正面から正々堂々と戦い打ち破るダイ兄達の様な者こそが相応しい!!
相手の恋心を利用し闇討ち紛いを平然としてのけ恥じ入る事も無く正義の名の下にと言った場面がしっかりと書かれていた。
ティファの読んだ物語にはきちんと竜が秘めに恋をし手紙を出したところも書いてあった。
其れは美しい悲恋などではなく、身の程知らずな竜が高貴なる姫に懸想したのがそもそもの間違いだと貶める為に！
「確かに竜は悪い事をした！姫を攫ってそして人々を傷つけたのだから!!だからと言って闇討ちをして良いはずが無い！そんなものを正義と言っていい道理もない！
恥知らずの男が恋に心狂わせてしまった哀れな竜を闇討ちしただけじゃないか!!」
しかも姫は竜の残した宝の在りかを聞き出しておりそれを父王に教えて国を富ませた聖女扱いなのも納得がいかない!!
その後男と姫は結婚したとある！今現存しているかは分からないが!!哀れな竜を討った男は卑劣な真似をしあまつさえそれを功績として王にまでなったのだ!!!
「竜が恋に落ちたのが悪なのですか！攫ったのを差し引き身分さを超えようとしたのも鑑みても誰も男がとった非道を疑問に思わず称賛しているのですよ⁉」
相手が人間ではなく竜であるという！それだけで!!
「・・・・・・十位の時に、私は似たような人間に会いました。」
近隣に住むモンスター達を駆逐し、偶々行き会ったティファの後ろ

に逃げ込んだホーンラビットの群れを追いかけてきた男に。
おじさん、この子達は悪さしないよ。山奥に連れて行くからもう許してあげて。
人里に居るのがいけないのだと考えて言ったのを鼻で笑われた。
そいつらはモンスターだ！下賤な命にもならない奴等を庇うんじゃねぇ!!
聞いた瞬間、自分は危うくその男を殺しかけていた。命を、種族だけで差別しそして殺すのが当然だと言い放つその男を。
気が付けばガルーダに取り押さえられ、男に殺されかけたホーンラビット達すらも自分にのしかかり止めてくれた。
そうでなくば素手であっても自分に殴られズタボロになった男は死んでいただろう。
怒りに駆られながらも辛うじて生きている男から手を放し、ホーンラビット達を筒に入れ秘密基地のある森に逃がし今も元気に過ごしている。
後日知ったのは、その男は近隣から正義の人だとたいそうな評判であった。
モンスターを駆除してくれる頼もしい戦士として。
その半月後に兄も正義を口にするようになった。
正義の味方として悪者をやっつけるのだと子供らしい事を。
だが自分はその言葉に恐怖した。
優しいダイ兄が卑怯な男や酷い男と同じ事を言っていると。
「兄に正義の意味を尋ねました。」
うんと・・・・正しい事？
正しい事って何？ダイ兄に正しい事でも相手にとっては酷い事かもしれないんだよ
・・・・難しいよ
にぃ！やっつけるって倒すって事だなんだよ。自分でも分かっていな事で相手を倒していいの？
その時ダイに逃げを許さず、ティファは徹底的にダイに考えて貰った。

己にとっての正義とはないか。
先の大戦の恐ろしさは二人ともブラスやウォーリアー船長達から聞いて身に沁みている。
戦いの怖さ、倒される事の怖さ、死ぬ事の恐ろしさを。
そんな中、十日以上掛けてもダイは答えを出した。
「えっとね、俺はさ、じいちゃんとティファと島の皆と船長さん達大好きで、何時までも笑っていたい。
だから、俺の大好きな人達を泣かせる奴を倒すよ。」
例え自分がどれほど強くなろうとも、自分から戦わない—専守防衛—の正義を。
其れも正面から正々堂々と戦うのだと。
どれほどホッとした事かしれない。
兄ならば正しく己の儀を貫くだろう。綺麗な心のままその道をひた走って。
「その通りになって私は嬉しい。」
ダイの話をする事で落ち着きティファは朦朧としながらもほんのりと笑う。
初めての酒に酔い、終生他の者に明かすまいと決めた想いを話しながらも。
兄はこの大戦で自分に応えてくれた事を実践してくれている。
正々堂々と真正面から戦い、其れを誇ることなく和気藹々としている素敵な勇者一行に居られて自分は幸せだと。
バーンとキルが、己を可哀そうなものを見る目で見ているのに気が付かず。
ティファの考えは人の中では異質すぎる。初代勇者と呼ばれた男を、モンスターを倒す男を卑劣な男と言えば、其れだけで今の時世では人類の敵となるのを堂々と言ってのけてしまう。
ティファの居場所は、本当に人の世にあるのだろうか？
だがミストだけは憐れみながらもティファに感心したのだ。
同族であろうと、間違えていると思えば堂々と言い切るティファのすぐる心に。

・・・・・・・・・・・・・・・ファブニールの竜の鬱憤を私大魔王達にしちゃたの！⁉

「忘れて!!いや忘れて欲しくは!!けど！あぁぁぁ!!」

墓場まで持っていくはずだったあの思いを!!敵の総大将にカミングアウトって私ってば何しちゃったのと別の意味で真っ赤になったティファは思わずその場で埋まりたくなってきた！

いっそ殺せと口走りかけたがそこは止めたが!!恥ずかしくて死ねる!!!

もろに厨二で青臭い奴と思われた事だろうと想像するだけで死ねる!!!!

「・・・・ダイ、お前正義って言葉使った事ないな・・」

「だってポップ、俺の正義は俺のであって他の人のじゃないでしょう？」

「確かに・・」

「ティファさんて小さい頃から凄い事考えてるんですね。」

「私結構あの話好きなんだけど・・・・改めて聞いてみると確かに酷いかも・・」

ファブニールの竜と勇者の話は知らぬ者が無く、其れに憧れて勇者を目指した者達が数多居り、マァムもその一人であったがこう聞くと確かに彼は勇者としてどうかと疑問が出て来てしまい、周りも引きずられてどうなのだろうと談議が始まる始末。

ある者はマァムの様に改めて考えさせられ、ある者は子供の青臭い考えだと。

ノヴァは元々あの話が好きではなくどうでもいいと周りを警戒しているが気が付かない事もある。

先程から様々な感情をティファに向けられる中に大きくなる思い

を。

―アレ―は本当に勇者一行の者であるのか？
それに相応しい者なのか？

処刑演目の行方

処刑演目が佳境を迎え始める。
ティファの動きが少しずつ鈍り、斬りつけられないまでも徐々に押されて後ろに弾き飛ばされ、あわやという場面が増えた。

そろそろスタミナ切れか・・・・癪だがザボエラの言う通り偏食が祟ったか？
お肉好きじゃない、畑のお肉大豆は余りないこの世界で野菜と魚料理と海産物で誤魔化してたのがいけなかったか？
・・・・料理人の不栄養とかって真面目にお話になってないな。
ミストの蹴りを腹部に諸に受け朦朧とする意識を無理やり奮い起こす為に馬鹿馬鹿しい事を考えて脳を無理やり活性化させたが、体が動いてくれない！
数瞬前なら無理やりにでも体を反転させて結界の足場を作って上空に飛びながら結界の壁を作ってミストを足止めしていたがこれは!!

ティファが吹き飛ばされながら思考をめぐらす中で冷や汗が止まらない。
案の定ミストが迫り、左手の剣状の手が元に戻され滔々ティファの首根っこを捉えるのに成功した。
漸くか、長く保った方だ。
たった一人で武器も無く素手で万全とは程遠いとはいえ、自分を相手に三十分近く戦っていたのは見事というほかあるまい。
上手くやってねミスト
分かっているキル、私はもうこれに恨みはない。あるのはよくぞ戦ったという畏敬の念のみ。苦します事はせん!!
親友が望んだのはティファを苦しませずにひと思いに殺してやる事。遺体を辱めようとも思わん。
ティファの細い首を締め上げたミストはそのまま高々と宙に持ち

上げる。結界の外にいるダイ達に見せつける為に。
「ここに張り巡らされた結界にはマホカンタ系の効果もある。これを助ける為に自滅したき者はするがいい。
地の底まで届いているがな。」
言外に過日の戦いでポップがメドローアを地面深くに打ち込みその威力をもって捕えたティファを助けた手は使えぬと通告をして。
その言葉に、ティファを助けようとした者達全ての動きが止まった。文字通り―全て―が。
助けんと飛び出そうとした者達は出来る手立てが浮かばず座り込み、叫んでいた者達の声はやみはて、ロロイの谷は普段通りの静寂が支配した。

この結界内ではティファだけが外の様子が分からない仕掛けとなっている。それは当然ミストには外の様子が逐一分かるという事。
これの影響は凄まじい。
たった一人の死が、あれ程の者達を一瞬にして沈黙させている。本人は抵抗する気満々のようだが!バーン様の、魔界の悲願の為にも!!
高々と掲げるティファは、最後まで自分に抵抗する事を示す様に入らぬ力の手でパシパシと叩き睨んでくる。
その瞳の、何と美しい事か・・・命の横溢溢れた瞳を!閉ざさせて貰おう!!
右手剣を斜め下から刺し貫く!狙うは心の臓ただ一つ!!せめて楽に・・・

ミスト!パン粥美味しいです

不意に、本当に何の脈略も無くティファが初めて自分のパン粥を食べた時の無邪気な感想の言葉が脳裏をよぎった。
媚びて命永らえようとも、世辞でもないキルの手を借りていたが本当に美味しそうに笑って食べていたあの顔は・・

だからどうした!!
ミストはその顔を振り払うように自らの思考を叱咤する。
キルが言っていたではないか!これを殺しても手に入る方法があると!!死してバーン様に仕えるがいい!!!
あの十日は、地上・パレスにとっても凄まじい激動の時であった。
ダイ達は宿敵である魔王と共闘すべくフローラを筆頭に纏まりを見せた。ティファの願いゆえに地上の王達の執り成しもあって。
パレスもまた平穏でいられるはずが無かった。ティファという温かい太陽に照らされ、何の影響を受けない者は良くも悪くもなく、ミストもまた知らずティファの温もりを知ってしまった一人。
知らなければ生じるはずのない幽かな躊躇い。

「ツク・・バイ＝ラック!!!!」
バァン!

幽かな葛藤を、ティファは見逃さず移動型ハイ＝エント、ラック＝バイ＝ラックを発動させ、結界内ではあるがミストを自分から一番遠い場所に強制移動させ難を逃れるのに成功した。
結界の外に力及ばず、技が不発になっては目も当てられないと結界内に留めたがそれで充分!
ミストを急に跳ばした事で受け身を十分とれず地面にぶつかりえずいて咳をしながらでも、その顔は決してミストから逸らさなかった。
「・・・・楽になればいいものを・・」
「御冗談を、今死んだら化けて出る自信があるくらい未練しかないですよ。」
白かった服は最早ズタズタで土塗れで髪も酷い事になっているがそれでもティファの魅力を損なっていないのが不思議だ。
しっかりと両の足で立ち上がり、唇を手の甲で拭いながらも不敵に笑う顔には負ける気はないという勝気な色が見て取れるせいだろうか?

「最後に問おう。」
あの覚悟を決めたティファを相手に躊躇いを出したのは失礼であろうと数瞬で己の覚悟も決めたミストは最後の一撃を決めに行く前に問いかける。
ティファをきちんと殺す覚悟を決めたが故に。
自分も甘くなったものだと己に苦笑したくなるが、何も考えず道具の如く命を殺している自分に戻れる気がしないので仕方がない。
あれの言う命の重みを知ってしまったのだから。
其れでも殺すという覚悟を定めた。最早揺らがんが、せめて最後に一つだけ残った疑問を解いて貰おう。
「何故暗黒闘気を飲むのを躊躇った？」
その奇妙な問いに、ティファが何か言う前にダイ達が怒声を発った
「そんな毒薬紛い誰が飲むか!!」
「手前えこそ常識習って出直しやがれってんだよ!!」
普通はそう考える。
だがティファは普通ではない。
「・・・・あれ飲んで舌が馬鹿になってしまったら料理作れないじゃぁないですか。貴方だって嫌でしょう？せっかくできた味覚で大魔王に自分の味見だけで料理作れるようになったのが不意になったら。」
何処まで言っても料理人だった。
「ふっくくっくっく、確かに嫌だな。」
「でしょう。」
「だが、もう今生で作る機会は無い!!」
闘魔最終掌!!

叫ぶと同時にミストは己の使える中で一番の物理的破壊力を有する、暗黒闘気を己の掌に凝縮させ敵を握りつぶす必殺の技を出しティファに迫る。
これはオリハルコンをも砕く！
ラック＝バイ＝ラック封じに、ミストは左手で闘魔傀儡掌をティ

ファ目掛けて投げつける。
当たらぬでも技を出させない為の一手・・・の筈だった。
暗黒闘気の糸を見たティファの口角が吊り上がるまでは。
なんだ・・・・一体になにがおかしい!!
怖気が奔る感覚を覚えながらも、ミストはもはや止められない速度でティファに迫るしかなかった。
これを待っていた!!
ミストが茶苦戦距離で突進技に出てくるこの時を!それも闘気の糸を出してくれたのは尚結構だ!!
ミストの怖気は的を射ていた。ティファはこの瞬間をずっと待っていたのだから。
この処刑演目を自分が生きて終わらせる為に。
「シュガー＝アンド＝スパイス!!!」
ティファもまたミストに突っ込みながらも詠唱と共に左手を一閃させる。
指先から出てきた火花の様な者が糸にあたると同時に、大量の煙がミストとティファを覆いつくし、結界内が黒一色となった。
どよめくダイ達の声を聞きながら、ティファは何処だと速度を緩めて探す前に、左右両方の腕が—何者か達—にとられ!その速度を殺される事無く前方斜め上に放り投げられた!!
何だ!!この結界内には自分とティファしかいない・・・・
ドガ!!!
何が起きたのかを理解しようとする前に、ミストは崖山に当たり外に放り出された事だけを理解した。
前方を見れば、投げ出された自分をぽかんと見つめているダイと目が合ってしまった!
ダイ達も一体何事が起きたのか理解の外らしいが!ティファは何処に!!
幸いにも崖山の棚に当たったらしく、座ったまま身を起こし結界を見つめてみれば、煙がはれた結界内にいたのは・・・・何だあれは

!!!
!!!
いたのはティファではなく、奇妙な・・・・物体としか言いようがない者達がいた。
手と足はきちんとあるのに、頭からつま先まで真っ白でのっぺりとした自分と同じ背の高さほどの人型をした何かが二体居るのみで、ティファの姿が見当たらない！
地に深く潜った形跡は地面には無く、諦めて自ら消失するような者では絶対ない！
「どこだ!!どこにいる!!」
そのままの姿で怒鳴るミストにつられるように、敵の大幹部が一人でいるのは討つ最大の機会であるという事をダイ達は忘れ果て・・・・そもそも思い浮かばずだが、ティファが結界内にいないと騒ぎだしたその時、世にも奇妙な事が起きた。
ミストの白い衣が、モコモコと動き始め・・・・・・なんだとミストが顔を向ければ
「プッハ!!!」
・・・ひょっこりと顔を出し盛大に息継ぎしたティファと目が合ってしまったではないか・・・

希代の奇術師あるいはペテン師

誰もが驚き目を剥いた。
其れはティファの事を熟知していると自称であっても自負していたキルも唖然とし、必殺の結界を張った大魔王バーンとても、一体何が起きたのか理解できずに、水鏡をまじまじと見る。
何度もみても目の錯覚ではなく!ミストの白い衣からティファの顔だけが出ているこの異常事態は何事だ!!
何がどうしたらああなるのだ!?

周囲を唖然茫然とさせている当の本人は、どこ吹く風で思考の海を漂っていたりする。
ふぇ〜上手くいった。結界私が越えられるかどうか肝が冷えたよ〜。あんな大博打もうしたくない!全部終わって私も生き残れたら絶対にグータラしてやる!
その思考は、ーとある震えーで中断された。

プルプルプル
ん?

「この非常識娘が!!!」
あぁ!ミスト酷い!!またそんな酷い言い方してる!!!
ミストの体が震え怒声がまき散らされ首根っこ掴まれそうになったのでティファはさっさか衣から脱出し、張られていた触れたものは絶対死ぬ結界の上に何故か着地している!・・ミストが非常識だと詰ったのはある意味当然かもしれないが!!怒り心頭に発しているミストはそんなことはどうでもいい!そんな事よりもだ!!
「ティファ貴様!!どうやってあの結界から脱出した!!」
「み!!」
「・・・・なんだ?」
「ミストもっかい!もう一度何と言ったか言って下さい!!」

「・・・どうやって・・」
「違う!その前!前!!」
なんだ?私が一体何を言ったと言いたいのだあれは?
「・・・ティファきさ・・・・・・!!」
「ふへへ。ミストがとうとう私の事名前で呼んでくれました~。」
今まで小娘・化け物・非常識・良識無しとか言っていた人がとうとう私の名前きちんと呼んでくれたよ。
そうだよ、私はティファなんだよ!父さんと母さんが一生懸命付けてくれた名前はティファなんだよ。
「こほん、別にさして難しい事は・・」
「前置きは良い!!そもあのみょうちきりんな物体はなんだ!!」
「む!五ツ君と六ツ君に何の文句があるんですか!あの子達は私の闘気で作った式神の子達で五番目と六番目の子達です!
あの子達が突進してくる貴方の腕を片方ずつ掴んで投げ飛ばしている間に私が貴方の衣の内側に入って貴方の胴体にしがみついて脱出したんです。
煙幕はその目晦ましです。」
「・・・・そんな馬鹿げたことを・・・一歩間違えればお前は結界の餌食になって・・」
「賭けとしては成立しますよ。鬼岩城が壊れても貴方の確保を優先した大魔王が、こんなところで貴方の身を損ねる事は無いと踏んでいるので。」
本当にこの世界の大魔王とミストとキルは仲良しで強い絆で結ばれている。
その大魔王が、ミストを自分の結界で傷をつけるはずが無いと賭けてミストを表に叩き出して一緒に出させてもらったんだよね。
それにしても、ミストはあの子達の可愛さ分からんのかな?あんなに可愛いのに分からないだなんて勿体ない。
「ほら見て上げて下さい!自分達頑張りましたよと一生懸命腕を折り曲げて、出ない力こぶ作ろうとしてアピールしている所が可愛いでしょう。」

ティファの言葉につられるように、誰もが結界内に取り残される二つの物体を見れば、確かにティファの方に何度も腕を振ったり力こぶ作ろうとしてアピールしている。
だがあれが可愛いのかと、流石のダイも頬を掻いて困ってしまう。妹の感性が時折分からない。
「ポップ・・・あれって可愛いのかな？」
「・・・・自分で作ったから可愛さ一押しとか？」
「そうかしら？」
はい⁉
ダイとポップの言葉に異議を唱えたのは何とマァムであった！
「私もあの子達可愛いと思うけど・・・駄目？」
女子の感性が分からない！
さしもの娘の全てを全肯定しているバランパパも、あれが可愛いと思うのはいかがなものかと思っていた矢先にマァムが賛同するとは思ってもみなかった！
女子率の高いフローラの方を見れば、レオナとメルルも何かいいもの見ている目で見て時折あの二つに手を振っている・・・・女子って変かも。
・・・・そもそもこの状況ダイ達含め誰も動かず変にまったりしている事態が変だと誰も突っ込まない事事態が異常であろう。
ティファが脱出した時点で保護しようと動くべきであったが、そこは矢張りティファ自身が自分で動く。
「さて、—この演目—に出るのにも少々飽きました故、幕引きとさせていただきましょう。
大魔王バーンに忠告を！捕虜となりても無下に扱われずに三食出して頂いた恩をただ今すぐに返しましょう!!
私は先程四度聖炎を—地面—に打ち込みました。
その場所はこの結界の丁度四隅！その聖炎の力は死んでおらずに地の底に潜り込み満遍なくこの結界内に浸食させてある！最後に私が頂点のこの位置より聖炎を最大限に打ち込めば呼応して破邪の力で持ってこの結界を破壊しましょう！

もしこの結界と貴方がリンクしているのであれば、結界を壊した時の威力がダイレクトにそちらに行くはず!!傷つくのがお嫌なら、直ぐに解くかダメージ覚悟で意地を通すかご随意に!!」
ゴォウ!!!
ミストを警戒しつつ忠告をしながらパンと両手を併せたティファの手から、黄金の聖炎が燃え上がる。
そんな暴挙を誰が許すかとミストが動こうとするが、身動きが叶わない！
結界の外はティファの見方が大勢いる。それは目に見える者達だけではなく、ミストが今いる崖の土の中から大勢の土の精霊達が一生懸命にミストの衣を押さえつけていた。
「ティファ頑張って!!」
「やっちゃえ!!!」
「抑えていられる今の内に!!!」
ピンチを脱して直ぐに友達が助けてくれるのは本当にありがたい。
ティファは友達に感謝しつつ黄金の炎をそのまま振り下ろそうとしたその時、パキィーンと何かが壊れるような金属音が鳴り響いた。
まさか
ティファが自分の髪の毛を一つ引っこ抜き、落としてみればそのまま髪の毛は何事も無く地面に着いた。
其れは、大魔王バーンが結界を解いた事に他ならない。

ティファは満面の笑みでそのまま自身も地面に降り立つ。
「ティファ貴様!!!」
その様子をミストは憎々し気に見る。主が万座の中で、其れも敵の目の前で譲歩させたように仕向けたティファが憎い。
おそらくダメージよりも、結界を張る意味が最早なくなり無駄を嫌う主がただ解いただけでもこの状況であれば解かざるおえなかったなどという判断を向こうにくれてやることになる！敵の士気が上がる要因を!!
なぜ貴様は主の好意を知ろうとしない！その身がいかに欲されて

いたかを知ろうとしない!!
矢張りあれは生かしては・・・・

「大魔王!!お詫びと謝罪です!」
・・・・・今度はなんだ?なんだというのだ!!
「実はですね!先程言った事は嘘です!!聖炎は確かに破邪の効果でこの結界を壊せたかもしれませんが、聖炎の力はそこまで長い事保つことは出来ません!この協力結界破壊しようとしたら物凄い労力使う事になったのでちょっとひっかけさせていただきました!
畏れ入って騙されてくれてありがとうございます!!」
・・・・・何とんでもない腹黒い事を物凄く良い笑顔で言っているのだあいつは!!
其れもパレスに直接自分の声が届けよとばかりに両手で口を覆って全力の声を上げて!!!

「このペテン師が!!!」
ミストの憎しみはティファの告白で霧散し、いつもの怒声に切り替わる。非常識娘がペテン師にクラスチェンジし怒り心頭に発したのだ。

見ろ!!お前の味方もお前のした事で全員どう対応していいのか分からず唖然として誰もお前を迎えに来ようとしていないぞ!!
・・・・おそらくそんな事をティファに言ってもそうなんですか、困りましねと頭を掻いて終わらせるのだろうと思うと頭が痛くなる。
その様子にダイも泣きたくなってきた。
ティファ、お願いだからあんまり奇行に走ったらだめだよとほろりと涙を流したくなる。

「さて、お嬢ちゃんが言った事は本当だと思いますかバーン様。」
「ふむ、先程の言葉が嘘であるという方か？それとも―本当―に聖炎の力はが結界に浸食していた方か？」
「どちらだと？」
「余にも本当の所は分からん。」
ティファが言った事のどちらが嘘か本当かバーンも測りかねる。別に自分で結界を解いたのはミストとの考えた通り張る意味合いが無いのでそうしただけ。
そしてミストとは違い敵の前で恥をかいたとも思っていない。羽虫にどう思われようが気にする事は無いのと一緒で、恥にもならない。
問題は、ティファの有している力がまだ隠されていた事の方が重要。
「聖炎の力に天族が古に持っていたという式神をも扱えたとは・・・あれは―先祖帰り―の見本よな。」
聖炎の力は太古の昔、神の加護を授けられた人間が扱っていた力であり、式神は天族の者。
ティファは正しく三界の調停者・竜の騎士が、連綿と繋がれる血脈

の中で絶えてしまった力を有していた。
初代の竜の騎士は、ティファの使っていた力をも使っていた形跡があり、数代の後に絶え果てているのが古文書に記載されていた。
その詳細までは書かれておらず、故にティファが聖炎の力は嘘だと言った事自体も
其れすらがこちらを惑わし、いざという時の切り札に使う為の嘘である可能性もある。
あれはここが怖い。
―分からない―という事が一番恐ろしいとバーンは常々考えている。分からなければ対処する事が困難となる。
どちらが嘘なのかと悩まされる事もまた然りだ。
しかしティファよ。―分からない事―が敵を混乱させるように、それは―味方―と思っていた者達も牙を剥く事になると何故分からんのだ？
其方は本当に可愛い、賢い愚か者ぞ。

バーンの深い思惑を知らず、ティファは己が生きて戻れることで少々浮かれた。

ティファはキルから返された金のマジックリングから伊達眼鏡をかける。

此処よりは戦うティファは不要。これより先は料理人としての力を存分に振るいましょう。

己自身で自分の処刑演目に幕を引いたティファは、眼鏡を落とす事なく優雅にお辞儀をする。

この世界の命運をかけた戦いの開幕ベルの代わりとして。

それがどれほど恐ろしい者として他者に威として映るか、考えが及ばずに

帰還

待ち望んだ人質の奪還は・・・奪還とは言えないが一段落を見た。
何せ目の前で自力で脱出をし、奪還する者達を阻む敵の結界をも自らの手で消さしめたのだから奪還という言葉は出番を喪った。
そして料理人を一行に迎えた勇者達が、勇ましい鬨の声を上げ大魔王の居城へと侵入するべくミナカトールを素早く張りに行くと・・・・そう段取りをしていた。
勇者達がミナカトール張りに専念できるよう有志連合とカール騎士団が周りを固め、その合間に料理人のティファと対面をし。今後の事を打合せするのだと、―自分の中―ではそうなっていたのにと、フローラは現実世界で繰り広げられている光景に、頭を痛める。

「ヒュンケル、私は生きていますよ。ほら、心臓も動いていますし足もあります。ですから安心なさい。」
「・・・ティファ・・・・もう二度と、あんな事をしないでくれ。俺達はもう負けん・・・だからもう二度とは・・・」
「ヒュンケル・・・」
アバンの弟子・その長兄足るヒュンケルがティファを抱きしめ小さな胸に顔を擦り付け泣いて懇願をする。
そのヒュンケルを宥める様にティファはその小さな体でヒュンケルの全てを受け止め、柔らかく微笑み安心する様に言い聞かせている。
ティファが優雅な一礼をするや否や、戦場が敵味方双方入り乱れる前にダイ達が光の如き速さでティファに迫った。
一番に駆け付けたのはトベルーラを使った兄達ではなく、神速の名を欲しいままにしているラーハルトでもなく、剣の魔装という重さのハンディを背負ったアバンの弟子の長兄足るヒュンケルが、誰よりも早くティファに辿り着き、ティファの服に指が掛かると同時に素早く抱き上げ立ったまま大泣きを始めた。

元師で今は敵の大幹部ミストバーンが、パレスに待機しているであろう敵の大軍が、この状況を見ているバーンやキルバーンの目があるのを知っても、恥も外聞も無く泣き崩れた。
ヒュンケルにとって、ある意味ダイ達よりも辛い十日であった。父を目の前で、しかも幼い己が腕の中でボロボロに崩れ死んでいく父を見ている事しか出来なかった無力なあの頃を幾度も夢に見、その骸が父からティファになった時に絶望の声を上げながら目を覚ました。
いっそ狂えればどれ程楽であったろうか・・だが自分が狂えば、弟妹弟子達の心を誰が守るというのだ？
ダイ兄・ポップ兄・マァムさんを頼みます
今は亡き師に弟妹弟子達を守ると心に決め、そしてティファからの手紙でも頼まれた事を頼り出すくらいならばいっそ死んだ方がましだと思い定め、己の心を騙し騙し過ごしたと十日は地獄であった。
悲しみに暮れ時に泣いているダイ達の前では安心させるように微笑み、ラーハルト達とは軽口を叩いてはエイミに軽くたしなめられてそして笑っていた時、ティファはずっとこの地獄くぐってきたのかと思うと堪らなくなった。
如何なる時もティファはこのようにあった。辛くとも悩んでも誰にも弱みを見せずに軽やかに笑って、その果てに壊れたのは当然であった。
それを思い耐えてきたが・・・・
「ティファ・・」
「はい。」
「ティファ・・・・」
「ヒュンケル・・」
「俺は・・・・・約束を果たせたか？」
「はい、よく守ってくれましたヒュンケル。ありがとうございます。」
この温もりが戻ってきた今、俺も・・・泣いてもいい筈だ。
ヒュンケルが一番にティファに辿り着いた時、ダイ達は何も言わず全員が示し合わせたようにティファとヒュンケルの前でフルブレー

キを掛けそのまま周りから敵が攻めて来ても守れるようにヒュンケルとティファを囲んで、周囲を警戒する体制に入った。
ダイ達はよく知っている。自分達の長兄は物凄く頼りになる兄であり、そしてティファを最も慕っているのを。
マァムがティファの中に母を見たと言ったのを知れば、ヒュンケルはこうマァムに言っただろう。
ティファは俺の母なのだと
父を強く温かい温もりを知っても母というものを知らず、柔らかい温もりははティファが教えてくれたのだから。
「マァムさん、無理はしていませんでしたか?この戦は前回よりも長期戦になるのでどこかではちみつレモンティーを飲めるようにしますね。」
「メルルさん、泣いても擦っては駄目ですよ。目が腫れてしまいます。美人さんにはスマイルが似合いますよ。」
「クロコダイン、そんなに力入れられたら・・・・折れたら骨折の万能薬使えば・・あ!怒らないでください。冗談です。」
「チウ君、マァムさんに無理したところは?ない・・・良かった。チウ君達が励ましてくれたおかげだよ。」
「ポップ兄!!痛い!そんなに頭ぐしゃぐしゃされたら取れる・・・ダイ兄!!監禁場所はとか怖い事言わないでよ!!あぁノヴァも同意しないで!」

勇者一行全員がお祭り騒ぎもいいところ。
流石のヒュンケルも程の良いところで弟妹弟子達やクロコダイン達にもティファを差し出した。独占したいが全員がティファを思っていたのだから。
マァムはティファを包む前からワンワンと泣いていた。守れなくて御免なさいと、何度も何度も謝って。
メルルも役に立てない己の無力を泣いて、クロコダインは万感の思いを込めてティファを抱きしめ、チウは小さいのでティファに抱き上げられながら泣くまいとして仲間達の近況を震える声でティファに

伝えるという大任を果たした。
誰も無理はせず、無茶だけであったというあのポップ流の言い回しで。
ティファにはそれだけで十分伝わったようで、良かったと安堵の笑みが零れ、チウは役目を果たせたとはにかんで喜んだ。
マァムさんをお願いします
そう手紙で託された事を拡大してダイ達の事も頑張ったのだと内心で誇り、口には絶対に出さない所にチウの器の広さが見て取れる。
それをしてあのキルをも魅了し、ハドラー達迄もが一目置いているのを当人だけが知らない。
精々弱い自分でも皆さんのお役に少しは立てたのかなと思う程度。
そのチウを抱えたままのティファを、ポップは抱きしめ妹の頭をぐしゃぐしゃにしながら泣いて怒って安心してと途轍もなく忙しない。
この後は一行の魔法使いとして動く。即ち魔法使いとはいついかなる時も冷静に、例え一行全員がカッカとしても「魔法使いだけは氷の如く冷静であれという師の教えを守る為に。
だが、ティファを抱きしめるこの時だけは、ただのポップでいる事を誰にも文句は言わせない！
ダイが同じ事をしても文句は・・・ダイ・・・俺もティファに怒ってるけど監禁しようとは賛同してねぇぞ！しているように同意の言葉求めんな！ノヴァも目を覚ませ!!
「お前達！何時までそうやって嬢ちゃんにしがみ付いている積りだ!!!さっさとやる事やりやがれ!!!」
流石に感動の時間が長すぎだとマトリフがようやく重い腰を上げた。
自分もダイ達の気持ちがよく分かると甘やかしすぎたかと反省しながら、ゆっくりとティファの下に向かう。
その自分を見て、ティファはあり得ない物を見たと言わんばかりに目を剥いた。
何だ嬢ちゃんの奴？俺がここに居るのそんな意外に・・・

「ミストバーン!!!」
バサラダンカン!!
ゴォウ!!
「質問に答えろ!!大魔導士マトリフをこの地に呼んだか!!来ねば私を処刑演目なく即座に殺すと脅しつけたか?それを示唆したのは誰か!大魔王か?キルバーンか!!」
今まで穏やかにダイ達の思いを受け止めていた人物とは思えない激昂した様に、戦場に沈黙が落ちた。
ダイ達がティファと存分に再会を喜べるようにとロン・ベルクとラーハルト達を筆頭に迫る魔王軍と激突になっていた場が、ティファの殺気にも似た怒気に、沈黙の帳が落ちたのだ。
ロン・ベルクと激突をしていたミストバーンに聖炎の炎を奔らせる事で。
「・・・貴様が頼みにする数少ない・・否!唯一の者を我らが見逃すと思うか!」
「ッ!!」
ミストの言う通り、ティファが頼みにする者はマトリフしかいない。偉大なる世紀の大賢者を、バーンが見逃す筈も端から無く、ティファが頼りにしているというのが更に警戒度を上げるきっかけとなりマトリフは強制的に処刑演目観覧チケットを押し付けられたのだ。
それがなくともティファの為とこの場に来ているだろうが、ティファはそんな事は考えつかず、魔王軍が強制的に呼んだとしか考えつかず激昂した。
「百歳にもなるご老体を労われ阿呆が!敬老精神の一つも持てんのか!!」
御年九十八歳のマトリフの身を案じて。
その言葉に、ミストの方もキレた。
「敬老精神がなんだ!!この戦になにが掛かっているのか忘れたのか小娘!!そも敬老精神を言うのであれば我が主にこそ!!」
「うっさいですよ!!決戦の朝っぱらからベーコンステーキとロースト

ビーフ平らげて！クルミパンを一斤食べておいてアップルパイを胃袋に納めるような人がご老体なもんか!!
そんな事私は認めんぞ!!!!!」
あんな健啖家がご老体とか言って誰が納得するってのよ!!
握り拳を固く握って断固認めんを言ったティファに、其れを言われるととミストも微妙になる。
精々、あのお方が健康な証拠だとしか言えなくなるところが辛いが、何時までもティファと話すなとロン・ベルクに突っ込まれながら剣の打ち合いになり戦場が戦場となった（？）のを見届けたティファは、改めてマトリフの側にチョコチョコと寄り、申し訳なさそうな顔をしながらマトリフの袖を摘まんでそれっきり無言となった。
何を言えばいいのか分からない。
ダイ達の様に慰めや安心の言葉を掛けるのとは違い、おじさんが相手だとどうしていいか分からなくなる。
謝るのも違う気がして、どうしていいのか・・・
そのティファの目の前に、父バランも漸く姿を見せた。
ティファとの再会の一番を息子とお世話になったマトリフに譲り漸くティファの前に来た。
「・・・・父さん・・・・・あのね・・・その・・」
「いいのだティファ。無理に何かを言う必要はない。あの時お前の決断が無ければ私はおそらくここにはおらず、ディーノ達も・・・ありがとうティファ。辛い事をお前にさせてしまった私達を、どうか許してくれ・・」
父の無くなってしまった右腕を見ながら、全ての事を謝ろうとしたティファを、バランは残った左腕でティファを包み込み反対に謝した。
ティファがこれほど辛い決断をして成した事は、全て自分達の無力さから来ているのだと。
ティファは何も悪くないのだと。
「・・・とうさん・・・・・ふ・・っく・・・・」
「嬢ちゃん、お帰り。良く帰ってきてくれた。」

「おじさん・・・・・うん・・・・・・うん・・」
父に抱かれ、ティファもまた張り詰めていた緊張の糸が溶けて泣き始める。
その顔は幼く、年相応の娘に戻る。
今この時だけは、ただの娘で泣きたいと。
そのティファの頭を、マトリフが泣きながら優しく撫でながらお帰りという言葉をティファに贈る。
その言葉で、ティファは本当に自分は―家族の下―の帰れたのだと心の底から安堵し何度も頷き漸く声を振り絞って返した。

ただいまです

2011

戦いへの道筋

にぃ達、おじさん父さん経由で・・・・

「この馬鹿ガキンチョ!!これが終わったらお前一生外に出られると思うなよ!!」

「ガルダンディー言う通りだぞ娘よ!!俺に死ぬなと言いながら・・・分かっておるのか!!」

「分かっているならへらへらするな小娘!!」

うん、もうね、この三人と私っていっつもこんな感じに何だよね。もうさ、私がバランパパのレディーだってこと頭にないよねこれって。

でもさ仕方がないでしょう、へらへらするなって言われても。

三人ともボロ泣きしながら私の事抱きしめてくれるんだもん。嬉しいよ。

もうどんなに口悪く言っても、私の事大好きって全身で言ってくれてるんだもん。笑うわ。

「ガルダンディー、ボラホーン、ラーハルトもだいまです。心配かけて御免ね。」

何とか怒り収めてね、そうでないと前線が大変だよ。

ダイ兄達がミナカトールをする為に、今ロロイの谷の中央部分で大激突が起きている。

さっきまで私が処刑される寸前の中央部分が、丁度パレスの真ん中でミナカトールをするにはうってつけなのだろう・・・私はまだこの谷で何が起ころうとしているのかを知らない事になっているから、うかつ言えないよ。

言ったら何で知ってる騒動勃発だもの。

そんな時間はない。

「・・・・もうバラン様の横にいるだけにしろよ。」

「マトリフ大魔導士様の側でもいい。」

「戦場に出てくるなよ。」

念を押しながら三人とも渋々戦場に戻ったら、なんだか前方の敵が大量に吹き飛んだ気がするのは・・・・気のせいだという事にしよう。
「おじさん、その・・・カール女王様に・・・」
「ようやく会えましたね、料理人のティファ。」
あう！おじさんに取次頼む前にご本人来ちゃったよ！隣にバウスン小父様引っ張てきて。
あ～しかもなんか顔が怖い？だが王族相手でも私が縮こまってはいけないのだ此処は!!
「そうですね、漸くの顔合わせとなりましょう。カール女王フローラ陛下、初めてお目に掛ります。
当代の勇者ダイの妹で一行の料理人をしているティファと思います。
此度は―様々―の事を手紙一つで女王陛下に託してしまった事誠に申し訳なく。
そして兄達に成り代わりお礼を。ここに行きつくまでの道を指し示され勇者ダイ達を此処までお導き下された事を。」

ティファは内心とは裏腹に、自分に出来得る限りの礼節をもってフローラに礼をとり、頭を下げて挨拶をした。
父である竜の騎士は無論の事、母である故アルキード国の王女を名乗りに入れず。

・・・これが実際のティファですか。
先程から見ているが、矢張り想像と一緒で目の前で見てもティファの事が全く分からない。
強くしたたかなように見えたが、父とマトリフ導師にボロボロと泣き崩れ、かと思えば敵の大幹部と平然と口喧嘩紛いを味方の前であっても憚らずにし、其れをティファをよく知る有志の兵達も、サババ砦から付いて来てくれているゴメス達もティファはしょうがないと苦笑して終わっている。

礼儀がそこそこで後はその天真爛漫さが皆に受け入れられているのかと思えば、今の様に大人どころか一国の大臣の様な配慮をした挨拶をしてくる。

勇者達を庇護してくれた、ここまで導いてくれたと自分達に華を持たせることでそれまでのかなりな・・・・とんでもない案件を押し付けてきた事の詫びとしようとし、そしてこちらの心情を配慮までして見せた。

バランを受け入れたとはいえ其れはこの戦いの為にやむおえない部分が多々あり、祖国を荒らした者の名を誇らしげに名乗りに入れられてはカール騎士達が納得すまい。

あの敗走で死者は確かに出なかった。しかし斥候で出されたドラゴンが運悪く住民を逃がしたのを見届け引き上げようとしたホルキンスが、隊を纏めて撃破できたが両足を負傷しこの決戦に出る事も出来ずに今もカールを離れさせて医療の発展が著しいリンガイアに預かっていて貰っている。

彼がいれば。カール騎士団もここまでピりつかずに済んだだろうに。

ホルキンスは勇猛であり、単純な剣の腕では氷の勇者ノヴァにも引けは取らないと名が知れていたがそれだけではない。

大らかでどこかロカに似ている。強く小さな事に囚われず、そしてロカとも違い大局が見れる。

魔王がのがれて来ようとも、不満を一切言わずに世界の為といち早く口火を切って周囲を一喝して受け入れるぞと笑って終われていただろう。

幸いハドラー達の態度が良い方向に動いて五日目あたりで挨拶を交わす様になってくれたのがせめてもの救いであったろう。

カール騎士団にとって、ホルキンスは頼みになる団長であっただけに、負傷させた超竜軍団を心の底からは受け入れていないのが実情だ。

ティファは其れを知って、自分は勇者の妹であると留めてくれたのだろうか？

だとしたらなんと・・・
「おいフローラ!!!」
「!!・・・マトリフ様・・」
「・・・・俺じゃねえだろう。いつまで挨拶返さないつもりなんだよ。」
「・・・・あ!!」
いけない!!考えすぎて、ティファに挨拶する事を・・・
「申し訳ありませんティファ。過分な挨拶を貰いましたが、今は手を携える時です。ハドラー達の事は無論驚きましたが、大丈夫です。それよりも今後の事を話しましょう。」
「はい、そう言っていただけるとありがたく。よろしくお願いしますフローラ様。」

「ここで怪我した人達を治療して、休ませてまた戦えるように・・・持久戦?」
「ティファはよく知っているな。その通り。この戦いは短期決戦にはなるまい。」
「・・・其れでノヴァが前線でなく後方のこの天幕を守りにつくんですね。おじさんもここで傷の手当と万能薬のストック作り。ノヴァ、氷を今の内に常温で溶かせるようにしておいて。この谷の暑さだと鎧着て戦っている人達がばてるの早いと思う。
フローラ様、意見具申しても?」
「・・・構いません。」
「ではお言葉に甘えて。バウスン小父様、兵達を時間を区切っての用兵をするんですよね。」
「先程説明した通りだ。」
周りに幕はなられていない、簡易天幕の一つでロロイの谷の全景の見取り図を置いた机を囲み、フローラ・バウスン・マトリフ・バランがティファに今後の動きを教えている。
ダイ達が実際に大魔王達と戦った時に知った事を聞いた時、この戦いは短期決戦はならないとバウスンは感じた。
魔界が悲惨な状況であれば、必然地上をとるか滅して魔界を浮上さ

せてとってかわらんとするほかないのであれば、敵は不退転の軍だ。そう言った者達は前にしか進まず必然的に心が強く士気もこちらよりも高いかもしれない。
敗けるとは思えないが苦戦を強いられるのは間違いない。
谷にいる兵達を予定よりも百名多く連れて来てもらい、交代制で戦えるように布陣を敷いている。
其れも後半になれば全軍一斉投入の総力戦になるのは予想の内だが、序盤かせめて中盤までは其れが機能すればいい。
その間にダイ達が大魔王討伐を成し遂げるか、其れが無くともいざとなればノヴァを筆頭に魔法のごり押しをする。
後半なれば、向こうの手の内も明かされようから臨機応変に動ける体制があればいいのだ。
そんな中でティファに意見があるという。なんだ？何か不備な点でもあったろうか？
「交代できなくとも兵達が塩を摂れるようにして欲しいんです。塩の粒は・・・フラメル！リングここに全部を出して。」
「畏まりました主様。」
ティファの呼びかけに、フラメルは突如姿を現しティファの横に並び立っていた。
自分が戻った事でフラメルは早々に式札に戻っていたが、ティファとしては決戦時出ずっぱりにさせるつもりだ。
ティファの命を受け、フラメルは保管していたリングを全て机の上に出した。式札にも保管できる機能があるので自分はお役御免でも良いだろうと戻ったのだがどうやら主は自分を扱使うようだ。やれやれ仕方がない。

マジックリングの数の多さに、フローラは目を剥きそうになった。これ一つで庶民の一家が優に半月は食べていけよう！それ程の高価な品なのだこれは。
其れが十もある・・・
「えっと、あ、これです。」

透き通った水色のリングを摘まんだティファは、机の上に中身を出す。
其れは白い丸い物であった。
「これは―塩飴―といって、砂糖と塩とレモンの果汁を混ぜて固めたもので、疲れもとれて汗で失った体の大切なものを補充してくれるのです。これと併せて水が飲めたらいいのですが、最低でもこれが即座に口に入れられる様に各自に持たせてほしいんです。
三人一組で戦うスタイルで行くのでしたら、二人が一人を守って、交代ですればいけると思います。」
「成る程、確かにレモンも疲れをとるとティファが前に言っていたな。塩も摂り過ぎれば毒だが汗をかいた者には多少は取らせるべきだと。」
「ふふ、あの時はもっとつたない考えの浅慮で言ったのですが覚えていてくださって嬉しいです。」
ティファがまだ七つの頃、ノヴァの下に来ていたティファは仕入れた食材の効能や体にいい事をよく教えてくれていた。
其れはたいていが本当に役に立つもので、蜂蜜に付けたレモンの輪切りを訓練後に食べさせると疲労回復に良いとりんガイアのどの兵団でもそれは正式採用されている。
「そのアメはたくさんあるのか？」
「はい！死の大地に行く前からフラメル以外の式達に作らせていたのですがフラメル？いくつできてる。」
「・・・・おおよそですが五百以上は・・」
「五百!!其れは・・」
「足りない！なぜもっと作らなかったの？」
「・・・ティファ？」
娘の物言いに、バランが目を丸くする。
五百もアメがあると言われれば、この世界では砂糖は貴重品の部類のだから驚きこそする少ないとは・・・それもティファが不満を露にするのも初めて見る。どんな事にも飲み込もうとして無理をしてきた娘が・・

「フラメル、材料あるのなら今この場で作りなさい。小父様、ヒャドでいいので使える人一人貸してください。
五百では長丁場には少し不安です。足りるギリギリではなく溢れるくらい作れと言ったはずだよフラメル。」
「申し訳ありません主様。今すぐに御作り致します。バウスン将軍、お手間を掛けますが・・」
「いや!ティファ・・・無理はさせぬように。」
ティファの言い方に驚いたのは何もバランだけではなく、付き合いの長いマトリフもバウスンも驚く。
ティファの物言い方は其れはまるで・・・
「それにしても鋼の剣を二振り持っての出撃とは豪華ですね。」
「カール国に恩のある豪商が色々と支援してくれたのです。この決戦に間に合うように世界各地の武器屋が空にならない程度に買い上げてかき集めてくれたと。」
「それは・・・その方達の思いを無にしない為にも勝たなばなりませんね。」
「ふふ、其れに鎧も破損が酷い時は取り換えるような数もあるのです。」
男達の思惑をよそに、ティファはどうにか硬い表情のままのフローラの心のケア真っ最中。
フローラも自分が率いて来た一軍の良いところに目をつけて貰い口に出して褒めそやされれば心が自然と綻ぶ。
長期戦であれば剣も血肉の脂で駄目なり、あるいは刃こぼれもあるだろうし破損もある。
腰に予めもう一振り下げさせ予備を持たせることで思い切り戦わせられる様にと、支援で届いた鋼の剣をふんだんに放出している。
敗ければ地上はなくなり、文字通り出し惜しみなぞ論外だ。

その剣も鎧も支援金の全てがティファが裏で出していると知らないのが、フローラの心情の平安となっているのは間違いない。
つつがなく、着々と大魔王討伐への道を歩いている。

天幕内の誰もがそう思った

2019

思惑だらけの戦場

主様には困った事だ。凄い方であるのは間違いないのだが物凄く抜けていると言おうかご自身の御立場を軽視されている節がおありになる。

その最たるものが兄君達を命懸けで逃がした事である。あそこで自分が死んでも後の事は兄君達がお思いであろうが冗談ではない。

主様が死んでいればその時点で―この世界―は終わっている。

我等式達は、兄君様達が知りようもない主様の出生の秘を知らされている。

即ちこの世界を―漫画―なる書物にてバーン大戦の始まりから終わりまでご存知であったとの事。

この世界の神々に呼ばれて、其れであるならば少しでも多くの方達に幸せになって終わってほしいと数々の事をされている事を。

異世界とやらに興味はないが、我等は親・兄君様達が知らぬことを知っている優越感がない訳ではない。

特別な事を主様と共にしており、この世界をより良い形に導いていくという自負もまたあるのだが、当の主様にはその気が全くない。

―少しだけ―良くするだけだと小さくお考えになられる。

そして自分はさして凄い事もしておらず、知り合われた方と―程良い―関係を築けていると思うのが精々・・・・なんとも歯痒い事ぞ。

そしてご自身が表に出すぎないように腐心もされている・・・・物凄く目立ちたがりのように前に出るが、主様が今までしてきた事の一つでも表沙汰になればこの世界は引っくり返ろう。

敵の前で・王達の前で様々な事を言ったことなぞそれに比べれば些事に過ぎんと。

だが、主様が低き者に見られるのは我慢ならん！そして理解できぬからと奇異の目で見る事も自分達にとっては許し難い！

なればこそ、アメも主様の希望よりも少なく作ってきた。

最初から溢れるほど作ったとて、策の一つとして作ってくれたのですね。ありがとうございますの一言で終わらされるのが精々で、どれ

程のありがたみを感じられようか。
其れよりも五百という数で驚かせ、感心される前に主様が少ないとご不満を持って私にこの場で作るように命じさせる。
貴重な砂糖を五百のアメでも消費しきれないほど持たせている財力を、そしていざとなれば主様は優しいだけではなく、配下にも厳しく当たる事がお出来になる指導力がおありなのだと見せする。
勇者の妹御という事で決して弱い立場ではないが、主様がこれより意見を通さねばならないのはカール女王フローラ陛下。
騎士王国として先の大戦でも活躍し、今またこの戦場の総指揮者であるフローラ陛下に物申して円滑に通すには主様を知らぬ者相手では主様の今の御立場では低すぎる。
仮に主様をよく知られるバウスン将軍が良い意見で御座いましょうとお口添えいただこうとも、其れでは意見のごり押しと周囲には映り、特に側近のカール騎士達が収まるまい。
人とは実に不合理で厄介この上ない。
目先の危機を前にしても、時に己の心情で動く輩がいる事を見せつけられてきた自分としてはうんざりとする生き物だ。
其れは魔族もそうであろうし、知恵を多少持つ者たちは皆同じか。
主様の力を認めさせる事こそが、この戦場を混乱なく戦わせるには一番。
理解は出来ぬが少なくとも戦いには有益だと思わせる事こそが肝要。
主様と自分の遣り取りを見て、不満顔をした主様のお顔をご覧になった時のフローラ陛下は何処かホッとした表情になられた。
それまでは自分達が分からないような事しかしなかったのが、案外年相応の所があるのだと理解しやすい面を見て安心されたところか。
本当に人とは厄介で面倒な。うちの主様の合理的・・・・でもないな。
あのお方は良くも悪くも大らかに過ぎる。
御味方相手にそれはいいのだが、敵相手には・・せめてお味方の前ではお控えいただきたいのだが・・・・無理であろうか。

忠臣フラメルの思いティファ知らずの当人は、今物凄い頭痛を感じている。
何でザムザさんがザムザさんのまんまでこの戦場に居ちゃっているのよ!!
意味分かんないって？この人モシャスしないでノヴァの救護部隊手伝ってるんだもん!!おかげでミストからの視線が痛いわ!!
「ミスト！言っておきますが私この人にこんな事してくださいと強要した覚えはないですからね!!気にせず目の前のロン・ベルクさんと存分に打ち合って敗けて下さい!!!」
「訳の分からんことを！ザムザ！貴様父のいる魔王軍に堂々と反旗を翻しおって!!」
もう全てのあり得ない事は自分のせいにされると、ある意味において自業自得なティファであるが、この件だけは違うとミストに反論するも矢張りミストに受け付けてもらえるはずもなく、更にはザムザ自身がとんでもない爆弾発言を高らかに発した。
「申し訳ございませんミストバーン様！私も魔界の現状を―よく知っている―一人ですが！一度は死んだ身!!非道と没義道と誹られようとも私を救ってくれた勇者一行の皆様の御味方を致します!!
戦場の隅で呆然とされているであろう父上！私の事はあの時死んで此処にいるのは別人と御諦めを！
でかした！よくぞ地上の者達の内部に潜り込んだと調略しようとされても無駄に御座います！
私の心は唯一つ！地上も魔界もどうでもよろしい!!只々勇者様達とティファさんの行く道のお供をするのみ!!」
その発言に、周囲とミストは凍りつき、とんでもない娘と評されたティファをもゲンナリとさせる。
・・・・・何か魔界軍も地上軍が聞いても超微妙で物騒な決別宣言してるし・・
どっちもお互いの生き残り掛けて生存競争闘争真っただ中で、そんな事知らんとぶった切る人いるとは誰も思わんだろう・・・おかげで

ミストも絶句して動き止まって、相手してるロン・ベルクさんも察して仕方ないと他の敵相手し始めてら。
戦士の情け、一度は見逃すといったところかな。

・・・・これ聞いてるザボエラパパどう思うってるんだろう。あいつまだ姿見せてない・・・超魔ゾンビの前に首すっ飛ばしたかった・・・

「なんでよ!!!」
あり、私も物騒な事考えてる暇なく緊急事態発生か。
「どうしたのかちょっと見てくるねノヴァ!!」
「気を付けて!!」

ティファが戦場の真ん中に出れば、一斉に魔界の軍たちがティファ目掛けて撃ちかかる。
それも敵意ではなく、攻撃してくる全員が憂いを秘めた悲壮感を漂わせながら。
「ティファ様!!ご再考の程を!!」
「地上に心寄せたとて！最早大勢は決しているのですよ！」
「これ以上バーン様の心に背いては！我等本当に貴方様を!!!」
その気配と言われている内容に、さしものティファも困惑するしかなく、いっそ腹正しさを感じて内心でブチ切れた。
・・・・だ！か！ら!!なんで敵の私に様つけたままなのこの人達!!見てよ！味方の人達も訝しんで!!中には疑惑の目を私に向けているじゃないのよ!!!
一体どうなってるのよ状況!!
ティファが腹正しく感じるこの状況を生み出した人物たちは、パレスの玉座の間にて満足げに成り行きを見守っている。
状況を生み出しているのはバーンの策謀、実行者はキル
決戦の朝方、パレスには震撼が奔った。
「成して嬢ちゃまを殺すのですだ!!」
「あのお方が何をしたというのです！」

「地上消滅のこの良き日に!!訳をお話しくださいキルバーン様!!!」
パレスの大広間にてティファの処刑演目が伝えられた時、その場にいたもの全員が騒いだ。
無理もない話で、ティファはずっと最初に会った時の挨拶は捕虜ですと言っているので通じていたと思っていたが、ガーゴイルのガァグランス同様誰も其れが本当だとは受けとっておらず、その後のティファの穏やかな接し方で矢張り高貴なるお方のお遊びだと笑っていたのだ。
バーンもミストもキルもパレスの魔王軍の心情を熟知しており、故にキルはこう伝えた。
「あの子は優しい。地上の命をも大事にするいい子なんだよ。でもね、バーン様のする事に刃向かう者は誰であっても許して置けないんだよ。分かってほしい。」
キルは何一つ―嘘―を言わずにティファの心の優しさが地上の者達を消す事を反対しているのだと言ってのけた。
ティファの本当の立場も言われない事で、その場にいた魔王軍全員が決意した。
早々に地上を潰す傍らで、ティファ様を反意させねばと。
キルにとっては策とはいえず、勘違いを助長させただけだがそれで充分。
魔王軍が敵であるはずの料理人に様を付けさせるだけでそれだけで。

その思惑を知ることなく、ティファは攻撃はせずに全てをスピードに振り分ける事でハイスピードて敵をすり抜け、舞台にいるダイ達の中に飛び込んでレオナに近づく。
レオナの顔が、可哀そうな程の青褪めている。
「・・・姫様・・・」
「ティファ・・・どうしよう・・・・ミナカトールの力が！飛行物体に届かないの!!」

ミナカトールは神々が人間に与えたもうた破邪の中でも特別なもの。その力はすさまじく、故にこそミナカトールの破邪の柱は直ぐに大魔王の結界を突破し、五芒星を直ぐに完成すると思っていたレオナは打ちのめされた。

レオナのミナカトールの光の柱は、拒まれるように空中の中ほどで止まりそれ以上上げようにもとんでもない圧力が掛けられてくる！

「落ち着いて姫様。敵もそれほど死に物狂いなのです。時間はこちらで稼ぎます。

姫様もみんなも突破する事だけを第一に。姫様お口開けて、そう良い子です。飴食べて落ち着いて行き・・・・ヒュンケルにもあります！いいから姫の応援でもしなさい!!

ダイ兄達の分もあるから・・」

パニックになりかけたが、ティファのいつも通りの落ち着いている雰囲気と、塩飴の優しい味で落ち着いたレオナは結界突破に集中し、程なくしてあと一歩のところまで来れた。

落ち着いて行こう

レオナ達は落ち着いたが、ティファはそっと溜め息を飲み込む。

これは、長丁場になる。今の内に準備をしないといけない。

フラメルの以外の子達も出して手伝わせよう。即興で食べられるものを作らねば

戦場の庭にて

「あのさティファ・・・皆が俺達の魔法陣完成の為に頑張っているのに、これっていいのかな？」

ダイ兄、顔を引き攣らせながら聞くんじゃありません。無論いいに決まっています。

「けどよ・・・俺まだ何もしとらんのだけど・・」

これからするんだから体力温存しておきなさいよポップ兄。

「ティファ・・・私達其の、特訓ではもっとつらい姿勢維持しているからやっぱりこれはちょっと・・」

「マァムの言う通りだ、矢張り敵前でこの格好はいかんと・・」

「立たない！座ってなさい!!少しはレオナ姫見習って！今後の為の体力温存の為にも座って魔法陣完成なさい。」

うん、私の言い分を認めたのか立ちかけたヒュンケルとマァムさんもきちんと座り直したか。

良い子にはご褒美。

「はい二人共、蜂蜜入りクッキーです。お疲れさまでしたヒュンケル。頑張ってくださいマァムさん。なに、あと少しで大魔王の居城を貫けますよ。」

「ありがとうティファ・・・よし!!あと少し!!」

うんうん、マァムさんは本当に素直でいい子だ。それに引き換え・・

「ティファ・・・その・・・」

「・・・・上に行ってから差し上げますから我慢してくださいねヒュンケル。」

ご褒美にアメ欲しいと目で訴えてくるアバンの長兄ってどうなんだろう。

色々と切なくなる。

ダイ達は今前代未聞な事をさせられている。

「結界突破に時間かかりますから、体力温存の為にみんなこの椅子に座って手を握って魔法陣完成させてください。」

とか・・・・この戦終わったら絶対に史実に超賛美されるべきこの

重大場面を座ってやってくださいって普通ない!!
・・・・・史実を伝える時はお父様達王様連合に懇願して、勇者一行全員は頑張って立っていたのだとしてもらうように頼みこもう。
間違っても楽な道を選んだわけではない!絶対にない!!ただ料理人ティファの意見がよさそうだから、良い事を実行しただけだと脳内理論武装したレオナは、後は悠々快適さを満喫する事にした。
そうでもしなければティファの折角の心遣いを無駄にしてしまう。
あれから３０分近くたってようやくマァムにまで回せた間に、ティファはクッキーを口に入れてくれて、程良いぬるさのレモンティーを飲ませてくれてなにくれとなく自分達の面倒を見てくれている。
戦場を駆けまわっている間を縫っての事だ。
そしてその戦場は途轍もない事になっている。

「ノヴァさん!行ってきます!!」
「チウ君!・・・ゴメスさん!!一緒に・・・」
「ああ俺も付いていくから安心しな大将!!行くぞチウ!」
「いけませんね、敵は減らずにこちらばかりが消耗させられて。」
「・・・・まさか敵があれ程の者達だとは・・・」
先程からチウ達獣王遊撃隊が有志の戦士達と共に戦場を駆け回り頑張って傷ついた兵達を素早く連れて来てくれているのでどうにか死者だけは出ないが・・・・表面上の傷よりもずっと深刻な傷を負わせられている。
怪我が治っても、果たして線上にもう一度立てるだろうか?
それは有志兵達よりもカール騎士達の方が深刻であり、ノヴァは溜め息が出そうになるのをそっと飲み込む。
「ザムザさん・・・魔界はかほどに・・・」
「ノヴァ殿、今は相手の事情など無視なされよ。でなければ持っていかれますぞ。」
「そう・・・・ですね・・・・・そうなのですよね」
普通なれば、こんな狂気的な敵を相手の事情も思いも全て分かって受け入れた上で止めますと平然と宣言する方がおかしいのだろう。

先程のティファの様に

そこは戦場だ、血が流れ悲鳴と怒号が飛び交うのが当たり前の場所の筈なのだが・・参ったな、これは本当に不味い。
「手足切ったのにどうして!!」
「!!離れろ!そいつ最後の魔力でメガンテを!!」
「く・・・首が半分千切れているんだぞ!どうして止まらない!!」
救護部隊の手伝いをしながら勇者達のフォローをするようにと最初はバウスン小父様に言われていたけど、これは本気で不味いな。
手足千切れようが首が落ちかけても敵は戦う意志を貫こうと突進をかけていく。
生命を投げ出したその戦いとも呼べない特攻の狙いは唯一つ。
「く!勇者様達の下へと近づけるな!!」
「この身果ててもお守り申し上げろ!!」
こちらも士気では負けていないけど、士気以前の問題だこれは。
「あの魔法陣さえ潰せば我等の勝利だ!!」
「誰か一人でもいい!!アバンの弟子の手の一本でいいのだ!!押し込め!!」
真っ当に戻ったミストが、ロン・ベルクと切結びながら配下のモンスター達に明確な指示を与え、与えられた者達は周りの敵など顧みる事無く一路ダイ達を目指し始め、バウスンが不味いと直ぐに察知し魔法陣の周りに六人一つの組み分けをさせ四方に配置させ、残りの半数を中央突破で敵を掻き乱し、残りを左右から押し包む陣形で迎撃しようと試みたが、中央の兵達は前方からくる魔法でほぼ壊滅しかけた。
魔王軍もこの地での決戦を想定していく通りもの戦い方を研鑽し、まとまっての突撃号令が出た時は前衛は魔法が使えるアークデーモン隊が受け持ち、崩れた所を剛力のシルバーデビルや痛みをものともしないさまよう鎧達が、地上軍の中を食い尽くそうと迫った時大音声がした!
「地上軍一同下がれ!!!」

本来ならば失敗する筈のベビーサタン達のイオラの嵐に晒され、あわや蹂躙されかけたのはリンガイア兵達であったのが幸いであった。
号令一下、左右に四散した敵を追わずその場所を通り抜けようとした者達はぞわりと背筋が凍り付き止まろうとしたが止まる筈も無く
「マヒャデドス!!!」
マヒャドすらをも凌駕する、本来であれば喪われた古代最強の氷系呪文が突進する敵を喰らいつくし、凍り付いた者達を魔法団のイオラの嵐が粉々に打ち砕いた。
「ここより先、通れるとは思わんことだ。」
剣を抜き放ちながら凍って粉々になった敵の遺骸をものともせずに踏み砕いて地に降り立ったのは、氷の精霊王・ハイ＝キングの寵愛を受けし、氷の勇者であり敵を脅かす殲滅の騎士団長ノヴァが、冷たい瞳で冷然と言い放ち敵の進軍の足止めをする。
遥か昔に消えた筈の秘術にも近い魔法を行使され、自軍が大量に減らされても、軍の参謀であるミストにとってはノヴァが現れた時の自軍被害は想定内で収まっているのを見て取り、慌てるではないが矢張り軍の被害を被った事に忌々しさを覚える。
「・・・出て来たか殲滅の騎士団長・・・・マホカンタ系を持つ者を前に・・・」
「お前!!俺相手によそ見して勝てるとでも思ているのか!!!」
「・・・・何の理由あってかは知らんが―本気―を出す気も無い貴様に私が敗れる者か!!」
「っ！」
ミストが指示を出しながら戦う事にいい加減苛立ちを覚えたロン・ベルクの言葉に、ミストは易々と論破してみせる。
先程からミストも不快であった。
この地上と魔界の攻防戦の最中、実力を隠す様に戦うロン・ベルクに苛立ちを覚えて。
理由は兎も角、互いに決め手の無い二人の戦いはまだまだ熾烈を極めていく。
短く途中まででであったが、指示を貰えた魔王軍の中から、ウイング

タイガーとキマイラロードの二体がのそりと姿を現した事により、双方魔法は使えず肉弾戦の激突となり、装甲装備で固めた上に肉体的強度の高い魔界のモンスター達の攻勢に、次第に負傷兵が続出し、そして地上軍は恐怖した。
敵は手足千切れようがものともせず、首が落ちかけても動くのだ!!なんなのだあれは!!
さしものノヴァとても、目の前の異様な特攻が理解できずに気がつけば味方全体が押し込まれていた。
不味い！ダイ君達迄の距離があと・・・
「繋がりし道よ」
・・この声は!!
「此方と彼方を繋げ!!契約の名の下ティファが命じる！わが思い!!我が言葉に従い！運と不運の道筋を入れ替えよ!!ラック＝バイ＝ラック!!!!」
ガァン!!!!
地上軍全体が焦りかけた時、少女の声が朗々と戦場に流れ緑の魔法陣が谷を覆いつくし、大音声の後にノヴァ達の目に映ったのは、谷の端まで送られた魔王軍の姿であった。
「・・・・これで少しは時間が稼げるか・・」
迫りかけた数十体を一斉に遠くへと動かすというとんでもない事を仕出かした幼馴染は、消耗した力を回復させる薬の瓶をあおりながら歩いて自分達と魔王軍の間にスタスタと歩いて割って入る。
少しの距離であれば、送りたいと思う者達を大量に送れるラック＝バイ＝ラックを遺憾なく発揮し、直ぐにハイ＝エントようの魔力補給をしながら両軍の間に立ち雪白を抜いて地面に突き刺し、敵を見て、そして悟った。
「・・・成る程、この場にいる・・いえ、魔王軍全軍がそんな様にまで堕ちて勝ちに来ましたか。」
「・・・ティファ？」
「バウスン将軍！この戦が初めての戦いとなる物、十以上戦った事の

無い者達は後方支援に回す事を意見具申しましょう!!」
「ティファ!!」
「・・・・最悪ノヴァも下がっていて欲しい。前衛に立つのは古参でないとあれに飲まれておしまいだ。」
厳しい目を向けたままティファは言い切る。
自分の考えが正しければあれは・・
「ティファ様!我等が何になったというのです!随分と地上の軟弱者達を庇われますな!!」
「なんだと!!」
「おのれ!その減らず口今直ぐに!!」
「出るな!!!!」
敵の挑発に飛び出そうとした若い兵を、ティファは雪白を横にし、刃を走り抜けんとした兵の方に向けて止めながらも、なおも相手から目を逸らさないでいる。
何故ならそんな事をすれば相手は一気呵成に攻めてくる者達、己の命など端から度外視している
「死兵相手に初級・中級者を相手にさせるはず無いでしょう。」
「死兵!!ティファ其れは!!」
「バウスン将軍、彼等の目を御覧ください。皆凪いでいる。逸る心もこちらを蹂躙して嬲ろうとういう気も無い瞳で、彼等は手足千切れんとも、首が落ちんとも動くのを躊躇わなかった・・・」
「・・・・料理人ティファの言う通り!編成を組みなおす!!古参兵前に!若き者達は後方よりの援護を!騎士団長ノヴァは左右挟撃の援護を剣と闘気のみで行え!!」
ティファの言った事を理解したバウスンも、敵の尋常ならざる気配で漸く分かった。
あれは死兵なのだと。
「将軍・・・死兵とは何なのですか?」
傍らで聞いていたフローラも、敵が尋常でない事は分かったが死兵の意味が分からない。
自分も先と今大戦で騎士・兵士達を指揮し、民達の為に命をかけよ

と命じてきたが、死兵という言葉を聞いた事はなかった。
「陛下・・・我等地上の者達同士が国同士で争うともここ数百年は出なかった者達です。
死兵とは言葉の通りに己達の死を恐れず戦う・・・」
「それは違います!!」
バウスンのレクチャーに、ティファが否やを唱える。
確かにバウスンの説明もある意味において正しいが、この場合は間違っている！
其れでは危険だ。この死兵達の恐ろしさが半分しか伝わ無いのは危険なのだ!!
「今目の前にいる者達は！死んでも戦い抜く者達です!!」
ティファの言葉に、地上軍は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。
「死んでも戦うなどあるものか!!」
「動けないもの何が!!」
「出来るのです！するのです!!せねばならないと思い定めだのです!!!」
その騒ぎを一喝する様にティファの言葉が百雷の如く谷に落ちた。
「彼等は勝ちに来た！自分達ではなく魔界全土を勝たせる為に来た!!!」
まるで断言するようなその言い方に、地上軍は黙ったが魔王軍からは笑いが起きた。
最初はさざめく様に、徐々に大きくそしてとうとう大笑いとなる。
嬉しいのだ彼等は。
自分達の心情を全て察してくれるティファが、そしてそんな自分達を悍ましげに見ずに、変わらず接してくれるティファの存在が。
死兵なぞ、本来ならば魔界においても忌まれる存在。
何故なら敵対したが最後、塵になるまで闘うと言われる存在。
端から己達の生命など武器の一つとしてしか見ずにいる、生命の理への叛逆の様なものを、忌まずに受け入れ平然としてくれる相手がいようとは！

「その通りですティファ様!!我等はこの地を消滅させに来た!!」
「今まさに生命が誕生している事も承知でこの地の全てを消しに来た!!」
「我ら果てようとも!!必ずや魔界の神たる大魔王バーン様が魔界をお救い下さる!」
「なれば我等に何の躊躇いがありましょうや!!」
「血だろが骨だろうが生命の一欠片だろうがそれで地上側の敵全てを倒せるのならば安きもの!!」
「「我等はその為にここにいる!!!」」
其れは自らが業を背負う事を知った者達であった。地上にも命が横溢している事をきちんと知った上で自分達の生命全て使い切って消すと言っている。
そんな心決めた者達に、さしものノヴァもロン・ベルクすらも青褪める。
戦いに長い事身を置いていたロン・ベルクだが相手をしていた者達の中に、これ程の覚悟を決めている者達はいなかった。全員が己の誇りや剣の腕に対する思いなど、個人的な事で戦った者達が大半で、これ程の思いをぶつけられたのは長い年月初めてであり圧倒されるなか、声が響いた。
「成る程!成ったか!!成らされたのではなく自らがそう成ったか!!馬鹿が!大馬鹿者達が!そんな思いを背負わされるものの身は堪らんぞ!!!」
謎かけの様な事を言うティファの言葉に、矢張り魔王軍は愉し気に笑う。
「バーン様には悪いと思う。我等の命をも背負わせることになろうよ。」
「それでも止まるつもりはないと?」
「その通りです!我等がここで敗れれば魔界にはもう後がない!!」
「俺達が行く先は最早前にしかない!!」
「上に!此処しかない!!」
「どのような事をしてでも魔界の悲願の為にも!!!」

「よろしい!!!」
ガン!!!
その言葉に、ティファは雪白を鞘ごと大地に突き立て不退転を顕す。
彼等は本気だ、本気で死んでも戦う事を辞めまい。首が落ちても手足振り回していく足りも殺そうとしよう。
目玉だけになっても食いついて来よう!!ならば私がする事は一つ!!
「将軍！彼等を制圧しても止めは刺さずに!!その後は私が何とかします故！」
「ティファ！策はあるのか？」
「ございます!!この場にいないパレスにいる魔王軍にも告げる!!勇者一行の邪魔は！料理人たるティファは許しません。
兄も昔から調理中の料理を盗み食いしようとして私に何度も捕まりました。
料理であれ事象であれ、途中で邪魔する者は許しません！
私の一切を使い！合切を持ち出します!!!」

その言葉が合図の様に、魔王軍は雪崩うちノヴァを筆頭に迎え撃ち、地上軍が三人一組で敵の手足を斬った後、止めを刺す前にティファが飛び込み筒を敵に向けて唱えた。
「イルイル!!」
ティファの作戦は単純であった。
敵を弱らせ、そして筒に入れていく。
味方の消耗を抑えつつ、敵を減らしていく最前手。
止めを刺す時に出来てしまう隙もなくすための策。
「どんどん入れますので次に!!」
そしてティファは戦場を駆け巡る間にダイ達のフォローもして三十分以上が立つ。
本当はまだ出番が来そうにないポップも参戦したいが、自分達が要なのだと言い聞かせて耐えている。

ティファとノヴァが揃っているのだから大丈夫だと。
それに古参兵をアキームが指揮し、無理はさせずに隊を回して兵の温存に成功している。
ティファも筒が切れかければ瓦礫に闘気を通してどんどん作る。
そしてノヴァも休みを兼ねて救護隊を指揮ししながらザムザと共に前線を警戒している。
何もかもがうまくいくと、ポップは思った。
その思いとは裏腹に、この事態を懸念している者達が幾人かいる。
マトリフはティファが魔王軍の心情全てを察し、その上で受け入れるような言動を見せる中、相手から様呼びをされているのが気に入らない。
これでは嬢ちゃんがあいつ等と親しくなって、この消耗回避の策も敵を庇っている様にしか―カール騎士達―には取られていないかもしれない。
先程からずっと嫌な予感がする。
どうしてもそれが振り払えない中、同じように危惧している物がもう一人

「困りましたね～。この状況はベリーバットですね。」

脈打つ疑惑の萌芽

困った事だ、どうにも彼等の心内の方が私とよく似ている。
共に切羽詰まり、どうしようもない理不尽さに―長年―付き合ざるをえない中、死ぬ事も儘ならず、さりとて生きる事に希望を持つ事も出来ず、目の前に温かい物があればそれが何であっても、どのような事であっても飛びついて暖を取ろうとするところなど同じだ。
同族意識がないとは言えないな。
手加減せんけど。
そして―普通―の中に居るのが時折苦しくなるんだよ。
光りの中で、温まる事を夢見て死んで逝ったのに、いざそうなると落ち着かない。
人は何かしら大なり小なり苦労や悩みがあるから苦労知らずな人はいないだろうけど、先に思った事の様な思いをする人などこの地上にはいないんだよ。少なくとも私の知る範囲の中では。
私だって自分で決めてこの身とを奔ってきた事に満足はある。
健康になって、他の人たち以上に世界を駆けめぐれて・・・そしてこの後だって・・・・後ってあるのかな私に・・・・

「ティ・・・ティファ!」
「・・・あぁノヴァ・・御免少しぼっとしてた。」
埒も無い事を。不幸自慢なぞ最も唾棄すべき事だ。自分よりも不幸な人がいるとも言わないが、それによってヒロイズムを出す輩など屑だ・・・・ブーメランが痛い。
如何、矢張り少しでも休めと言われたからとてじっとしていると碌な事考えんな。
其れよりも前だけを見て進まないと、今の状況の意地が出来ない。
漸くマァムさんのミナカトールの光の柱が届きそうなんだ。
「あと少しだぞマァム!!」
「終わったらラーハルトに死ぬほど褒めて貰えんぞ!!」
「ティファの美味しいはちみつレモンティー飲めるわよ!!!」

「そしたらクッキーも頂戴ってたくさんリクエストしても全部聞いて貰えるよ!!」

・・・・・・・なにか・・ヒュンケル以外がおかしな声掛けをマァムさんにしてら・・

「ノヴァ・・・・あの掛け声って応援になってんの?」

「あ〜、マァムさんとラーハルトさんが急接近したんだよ。」

「ほへ!!」

「だからあれはマァムさんへのご褒美になるし、後の三人が言った事も全部マァムさんがティファにして欲しい事だから正しいと思うよ。」

なんとま〜、そんなこと聞いたら!是が非でも勝たないといけないじゃぁないか!

皆んなの結婚祝いは地上の完全勝利でどうだ!!!

「ティファ様!・・・・」

「問答無用!!」

ズバァ!!

「イルイル!!次!!さっさと斬られて筒に入れ!!!」

雪白片手に寄ってくる者達の勢いを利用して最小限の力で斬るので闘気量と筋力の差は埋め合わせられる!!

愛娘の慶事だ!!速攻で終わらせられるように頑張る!とりあえずラーハルト!

マァムさんお嫁さんにしたければまずロカさんレイラさんと私を説得してからプロポーズ申し込む様に!!順番間違えたらお仕置き決定だ!

「フエックション!!・・・・なんだ?」

「どうしたラーハルト?」

「いえバラン様・・・其の少々寒気が・・」

「あん?一度も熱どころか具合悪くなった事の無いお前がそれ言うの

かよ。」
「鬼の霍乱か？」
「うるさい!!小娘!さっさと回収しに・・・・回収されたいのかお前は!!お前が刃物持つんじゃない!!ガルダンディー!行って回収して来い!!」
「・・・・ったくガキンチョは・・・・」
「済まぬなお前達・・・・」
ティファの思惑でくしゃみしたラーハルトは、戦場で雪白振るっているティファに怒り心頭に発し、ガルダンディーにティファ回収を命じながらバランを軸にして戦っている。
片腕がないだけでバランにはまだ気力も体力の十分あり、敵の攻めづらいところをあえて受け持ち、地上軍の支援をして回っている。
硬いとはいえボラホーンのアックスで隙を作り、ラーハルトがその中を乱れ付きにすればあっという間に装甲鎧は剥がされ、ガルダンディーのレッドフェザーを突き刺し赤い光の粒が敵の身から放出され体力を奪い、後から来た兵達に手足切らせている間にまた強敵の所に進む先鋒を取っており、これが見事に嵌っている。
隙が出来なければバランの紋章閃が斬り裂き、イオラを打ち込み最初の先鋒に戻るの無限ループ戦法の一丁上がりである。
これをして今の戦場を何とかトントンで維持させている。何せ後から後から魔王軍は捕えられた人数分をきっちりと補充してくる。
其れも彷徨う鎧だけではない。
パレス待機していた者達が次々に投入され際限がない！
弱音を吐きたくなるものが続出しかねない。だが、自分達にも後が無いので踏みとどまる以外の何が出来よう。
只々勇者達の魔法陣完成の為の防御が手一杯ではないか。
そんな中、慶事があったと晴れやかな顔のティファを見ている・・・見せられている味方の兵達がどの様な心情であるのか。
「ノヴァ様、我等はもう大丈夫です！」
「直ぐに戦場に!!」

「落ち着いて。君達は戦い慣れしていない。痛みで動けないのは命取りになる。もう少ししたら痛み止めが効くから我慢してここで待機だ。

大丈夫。料理人ティファが、本領発揮して戦場を支えてくれているからまだもつよ。」

年若いが自分より幾分か上の兵達相手にも諭し、そして安心するようにと言ってノヴァは次の患者の様子を見ていく。

ティファが生き生きとしている時は絶好調で、生中な事では均衡は崩させまいとする策を用意できるのをよく知っている。

現に筒がきれればすぐさま作り出し、今ではチウの獣王遊撃隊にも回収を手伝わせている。

ミストもロン・ベルクが足止めをしているのだから大丈夫だろうと、楽観ではないが信頼をしている。

何かあれば、精霊達がすぐさま自分に知らせてこようし。

手当てをし終えたカールの若き兵士の胸の内を知らずに。

「・・・・あんな―バケモノ―を信頼するなんて他の国の者達はどうかしている！」

「その通りだ。我等だけでも惑わされぬようにせねば。」

いざとなればフローラ女王に奏上しなければいけないかもしれない。

―あんなもの―が味方であるはずが無いのだと。

若き兵達は頬を紅潮させながら内密の話を進めていく。

いざとなれば自分達が―正しい事―をせねばならないと。

バーン達が何もせずとも、ティファがティファとして振舞えば振舞う程に、バーン達の策略の芽が面白いほどに芽吹いて行く。
カール兵達の内密の話は、悪魔の目玉がじっと見ていた。

策

・・・・おかしい・・・どうしてあの人が出てこない？

戦闘が始まってもう大分経つが、一向にあの人、ガルヴァス達が出てこないのを訝しみながらもティファは次々と手足を斬られ、体力を削られた敵兵を筒に入れていく。

敵の数が減らないと味方は消耗戦になると思い溜め息を吐いていたが、仕方がない。

何せ向こうにはガァちゃんが守っている何処でもドア的なチートアイテムがあって、補充は際限なくできるとは内緒だ。

そんな事を言ってしまった日には、味方の士気が駄々下がり間違いな。ただでさえこちらは新しい人員を補充する手立てがない。

フローラ様が、キメラの翼は作れないかと言ってきたけど意見は棄却させてもらった。

本来であれば王族の要請棄却なんて平民がやったら打ち首にされても文句は言えないけど仕方がない。

パレスには怖ろしい空間使いの死神が鎮座ましましているんだから。

「キルバーンが戦場に出て来ていないのは、此方が増援を頼みにルーラの類をかけた時に上空で仕留める為だと推察します。」

上空で味方が死んでその死骸が落ちて来た日には間違いなく戦意が削がれる。

ただ殺されたのではない。あり得ない状況であっても殺される危険があるのであれば、何時その兇刃が自分達に斬りかかるかと心身ともに竦まされる。

手ぐすね引いて待っている死神の存在を知っているのにそんな愚は犯せない。

物凄く具体的に言ったら、フローラ様の顔から血の気が引いてしまったが仕方がない。実際に起こるよりも、想像内で怖がってもらった方が実害はないのだから。

・・・・大魔王の策の一つは潰せたかな？

「残念でしたねバーン様。せっかく僕が死神としての仕事を全うしようと張り切った途端にこれだ。
本当にあの子には困ったものだ。」
パレスの玉座の間で、大鎌を担いでティファが言ったような類の事を実際にやろうとしていたキルはがっかりとしながら大鎌を空間に戻した。
目論見が外れたならば仕方がない。戦場に空間開けて大鎌を振るう手もあるのだろうが、其れは少しばかりリスクが高すぎる。
空間から大鎌が出た殿をティファが見れば、そこから自分を辿って何を仕掛けてくるか分かったものではない。
繋がった空間からラック＝バイ＝ラックで自分を戦場に放り込んで壊しに来る公算が一番高い。
此処はまだ無理をする時ではない。
―そろそろ―こちらの策も動かす時のようだ。
「上手くやってねミスト。お嬢ちゃんも抵抗しないんだよ。」
処刑演目前に二人に言った言葉を、キルは再び水鏡に向けた呟く。
バーンもミストに念話を送る。
ミナカトールの柱の四本目が間もなくパレスに届く。
五本目が出される時が、ティファの収穫の時だ。

そして四本目の柱がパレスへと到達をした。

「やったわ!!ティファ!!!届いた!!」
「やりました!!父さん！ここ私もいるのでラーハルト！マァムさんの頭撫でてらっしゃい！」
「なん・・・・・・・・バラン様のおそばを!!」
「ラーハルトよ。」
「う・・・・はい・・」
「行ってきなさい。マァムが喜ぼう。」
「・・・・・すぐ戻ります!!」

ラーハルトは顔から火が出る思いをしながら、周囲己敵を八つ当たり気味に蹴散らし、通った後には死屍累々寸前の敵が転がりティファがそれをせっせと回収しながら若人二人を応援する。
仲良くやるんだよ二人共。
ラーハルトの行く先を見れば、兄ポップが最後の柱を迸らせている。
今地上軍の方は大分いい感じになっている。
三賢者の三人全員が頑張って支援系魔法で味方の力の底上げをしてくれている。
攻撃力を上げるよりもスクルト・スカラで防御力上げて、味方の負傷兵を助けに行く遊撃隊たちの子にもピオリムで速さを上げて危険度をぐっと低くしてくれている。
「マリン、魔力系の万能薬を飲むのは三度目だろう。それ以上は飲むなよ。」
「分かってるわよアポロ・・・・・もっと魔力量があれば・・」
「姉さん、やれる事をやりましょう。呪文の位階を落として支援も出来るし、べほ君が回復した人達の手当ても立派な仕事よ。」
「そうだ、焦るな。俺達には俺たちなりのやりようがある。」
魔力・体力回復万能薬は、三本以上飲めば体の害になる。
三人はマトリフとノヴァから口を酸っぱくなるほど言われているので無茶はしない。
もっとマトリフ達並の魔力があればと嘆くマリンを、アポロが諭しエイミが宥めて前を向かせる。
べほもヒュンケル達がパレスに突入するまでは救護部隊のお手伝いで、無論パレス突入の時にはヒュンケルの肩に乗って共に行く。
ヒュンケルは自分が見ていないと駄目な男だからだ！
もう少しすればパレスへの突入の道が開ける。きっとガルヴァス達は上の守備隊をしているのかもしれない。
自分達が行けばミストも必然上に来るだろうし、其れだけでも地上部隊は楽に・・・

其れは一瞬、瞬きとも思えない程の毛筋ほどの事であったが、ティファの意識が戦いから逸れてしまったその瞬間、叫び声が聞こえた。
「避けろガキンチョ!!!!!」
ズバァ!!!
声を聞いたかどうかのその刹那、ティファは無意識に飛び退りながら、ガルダンディーの警告の意味を知ろうと眼下を見れば、直ぐにミストが上空の自分を追ってきている！
なぜ！ロン・ベルクさんが相手をしていたはずなのに!!

結界を足場に逃げ回りながらロン・ベルクを探して見つけた先には、多数の敵がロン・ベルクを囲んで攻めていた。
因縁浅からぬ二人である事をティファはよく知っている。それだけにミストがロン・ベルクとの決着を放り捨てた事が信じられなかった。
おのれの主の顔に、二度も三度も泥を塗った男を見逃すなぞミストらしくない！
なんだ？一体何が狙いだ？分からない、私を倒そうとしても今のミストでは倒しきれる保証は無いのだが。

逃がさん!!
最後の一人がミナカトールの柱を逆らせた時、仇敵にも近い男との対峙を放り捨ててまで来たのだ。
「全軍!!バランとその配下及び殲滅の騎士団長とそこのどうでもいい魔族の剣士を足止めしろ!!
大魔導士マトリフ！その場動くか大魔法を放つかすれば!!お前の背にいる負傷兵全員が我が軍の餌食になると心得よ!!」

ティファを孤立させるための策は用意してある。マホカンタ系の配下を途切れさせずに投入してきたのはノヴァ対策。
魔法が使えなければ剣で戦う以外なく、乱戦時に派手な闘気技は味方をも傷つけてしまう為に、どうしても剣に闘気を流して強化する以

外の術はなくなり、敵の一斉攻撃をいなしていくしかなくなりその場で足止めとなり、ロン・ベルク達も似たような状況に陥り、マトリフもミストの一言で足を縫い留められる。
あれは脅しなどではない！動けば負傷兵皆殺し等、相手は平然としてのける。
やらないのは単に戦力を裂いてまでする必要が無かったからだ！今までは!!
なにか分からないが途轍もなく嫌な予感がする！
「逃げろ嬢ちゃん!!!」
逃げてくれ！もうこの戦場の外に行ってくれ!!
ロン・ベルク達も戦いながら口々に叫びを上げる。
「戦場の外まで行けお嬢さん!!」
「逃げてティファ!!!」
ティファも、回復薬を飲んでいるとはいえ疲労がかなり蓄積している。
息が上がり、避ける速度も格段に落ちてきている。
足が重い・・・逃げないと・・・・・

蓄積された疲労がティファの内部を蝕み始めた時、不意に―内部―から何かが溢れかける。
暗黒闘気を飲み干した時の様な、―甘さを伴うような眠気―が自分を襲いながら。
くらりとし掛けた時、ミストの刃が自分に斬りかかるのを見つめる。
無理だ・・・・避けられない・・
せめて傷は浅くするべきだ。結界も今は強度が保てない・・・後方に飛んで・・・少し切られるけど仕方がない・・
ダン!!
今ある渾身の力で後方に飛んだが、矢張りミストの刃の切っ先が自分の胸元を斬り裂き、地上から悲鳴が聞こえる。
其れは誰の声か分からないが、心配しなくてもいいのにと苦笑しか

ける。
血が染み出ても・・・・・・・なにこれ・・・・・・え？なんで・・・・なんで!!なんでなんでなんで!!どうして!!!!!!
「あ・・・・あ!!あぁぁあ!!嘘だ!!嘘だ嘘だ嘘だ!!!!!」
戦場において敵の前であればいつでも冷静足る料理人のティファが、その日初めて錯乱に近い狼狽をし、ミストが追撃して来ない事を疑問に思う余裕すらなく叫び上げ、その声に姿にそして味方全員かすればあり得ない事に、戦場に沈黙が落ちる。
先程までの怒声と悲鳴、戦の干戈を交えた音全てが絶え果て、ロロイの谷にティファの声だけが木霊する。
ティファは今起きている事象の全てを拒絶する様に叫び続ける。

嘘だ!!嘘だ嘘だ!!こんなの絶対にない!!!そんなはずが無い!!だって！私は！
信じたくない！目に映る事がそれがどれほど途轍もない事であろうと受け入れるべきだと、様々な事を飲み込んできたティファが全身で叫び上げている。
己の体から滲み出る血が白い服を染めていき、まるで普段着ている—水色の服—の色となるのを否定しようとして

謀

種族がなんだというのだろう？血の色？肌の色？見た目？寿命？
最後の物言うの中身が大切なんだよ
そう思って大きくなったティファが己の青い血に狼狽し、戦場においてはじめて醜態を晒している。

嘘だ！だって私の血は赤だ・・・母さんの血を色濃く受け継いだ人間よりの竜の騎士・・・そのはずだ!!
十二の年月の全てがひっくり返りそうなことに、ティファが恐慌をきたしたのだ。
其れもティファを宥めて包める者達はミナカトールの柱の維持と、敵からの総攻撃で全員が身動きを取れない状態であり、ティファはたった一人で恐怖に震え更なる恐怖を募らせる。
そして先程から自分の体の奥から異常な感覚が襲い掛かる。
やっと・・・
得体の知れない感覚が言葉を発せられるなら、歓喜の言葉を迸らせたろう。
漸く—生来の体—完全になれる。
生まれいづる時、竜の紋章を通しマザードラゴンに—封印—されていた本来の力と共に!!
ずっとずっとその時を待っていた!!
竜の紋章に魂を覆われ表に出る事を許されなかったティファの力が、本来あるべき姿に戻りたいとティファの体を駆け巡る。
どれ程本人が否定しようとも赦すことなく。
「あぁぁぁぁぁ!!!!!」
空中で座り込み泣きながら否定の言葉を繰り返していたティファ

の声が悲鳴に代わり、―暗黒闘気―の柱が立ち昇る！
バーンとキルがずっと待ち焦がれ、ミストが願った光景は、ダイ達の魂の底まで震撼させる！
「ティファ!!!放してレオナ!!!」
「ダイ君駄目!!!今は耐えて!!!お願いだから耐えて頂戴!!!ミナカトールの柱の為にティファがどれほどの事をしてくれたのか忘れないで!!!」
「けど姫さん・・・・」
「・・・・私達が動けば、マトリフ様と同じ通告されるわ・・・それにこれまでの事が水泡に帰すの！みんなも動かないで!!!」
ミナカトールの柱を討ち捨てでも妹の下に、ティファの下に駆け付けようとしたダイ達の手綱をレオナは取り乱すことなく制御せんと奮闘する。
幾人の兵達の身がこの柱の為に犠牲になったか・・・中には死兵に恐怖しまともな生活を送れない程のトラウマを植え付けられてしまったか知れない。
そんな中で、ティファ一人の為に全てを台無しにする事は、勇者一行の者としても、全ての民達の上に立ち彼等を守らんとする王族の者としても許すわけにはいかないのだ！
ダイ・ポップ・ヒュンケル・マァムは今すぐにでもティファの下に駆け付けたいが、レオナの言い分が正しいだけに、死ぬほどの葛藤の果てに緩めかけた手をお互いに力強く握り締めなおす。
そうでもしなければかけたくなるこの身を抑える為に！
レオナは自分が言った言葉の残酷性を誰よりも熟知しているだけに心の中で泣いて謝るしか出来ない己の無力さを憎みすらした。

ティファ御免なさい・・・・いつだって私達を助けてくれているのに・・・ごめんなさい・・
ノヴァ達もまた駆け付けたいが敵の層の厚さに阻まれ上空に行けず、声を掛ける余力すらも奪われ屈辱の下、早く駆け付けたい時ばかりが焦る。
不意にティファの悲鳴が止まった

長く響いていた悲鳴の終止符が、戦闘中断の合図であるかのように敵味方両陣の誰もが、上空のティファを見上げさせた。
そこにいたのは―ティファ―であったが、自分達の知るティファではなかった。
真っ白い肌は人間にもいる。だが、雪花石膏の様、あるいは陶器の白磁の様に滑らかな白い肌を持つ者は人間にはいない。
銀色の髪を持つ者も人間にいる。だが、金色の瞳を持ちし人間は誰一人としていない。

金の瞳に生気無く、銀の髪をたなびくに任せ、白い肌をより青白くさせた顔で俯き座っているティファの姿に、叫び上げたのは父バランであった。

「ティファ!!!」
竜騎衆三人の力で一早く戦場をトベルーラで抜け出たバランは直ぐにティファを包もうと左腕を差し伸べたが、ミストがそれを赦す筈も無く蹴りの一つでバランを地に叩き返す。
かつてのバランであったれば、この身であれば瞬殺されていようが、右腕なく竜魔人化になれるかすら怪しいバランに討ち書く事は造作も無いと見せつける。
だが、落とされたとてバランは全身から力をかき集め、ミストに吠え上げた。
「ミストバーン!!貴様等魔王軍は娘に一体何をした!!!ザボエラの人体実験の贄としたか!!!」
返答次第では、息子を置いていく事になろうとも!自己犠牲呪文を使い、ミストバーンだけでも道連れにしてくれる!!
吠え上げるバランの身の内に、久しく忘れていた、最愛の子供達のおかげで捨てられた憎しみの業火が駆け巡る。
あの時よりも強い憎しみに駆られた瞳でミストバーンを食い殺さんとするかのごとき咆哮に、ミストは笑止と嘲笑う。

「愚かな事を！小娘が・・・ティファがあの時点で死にかけていたのは貴様ら全員の知る所であろう!!その瀕死の者が！何故生きて捕虜の身になれたのかを誰一人として考えもしなかったのかうつけ共が!!」
「ッ!!それは・・・その子の生命力が!!」
「そうだ！いかにバーン様がティファを助けよとザボエラに命じたとて!!人間に近しい竜の騎士もどきであったれば死んでいただろう!!」
「助けた・・・死に瀕していたティファ様を貴様らが助けたとでも戯言を言う積りか貴様は!!!!」
ハーケンディストール!!
「・・・・愚かな・・」
ミストの言葉に偽りを言うなと激昂して乱れた心で放たれたラーハルトの渾身の必殺技をミストは易々と避け、憐みの目を向ける。
何も知らぬ無知なる事が、哀れと思うは初めてだが、教えてやろう！
「ティファよ・・」
「ふ!!」
敵意も戦意も無い、優しいと思えるほどのミストの声音に、ティファはびくりと体を震わせ目の前に来たミストを見上げる。
昨日の夕餉に、キルは―仕事―でティファの下を離れていたのである時のいる食堂と帰りの往復をしたのは自分であった。
不思議なものだ、殺してやりたいと思っていたこの娘を、ティファの事を憐れと思う日が来ようとは。
ラーハルトと同じく、いや、それ以上に自分の事に対して無知であることが更に憐れに思うのかもしれない。
「ティファ、お前は―ハイ＝エントは―何者―が使えるのかを知っていたか？」
「あ・・・ハイ＝エント・・・は・・古代精霊のハイ＝・・・」
「そうではない。どうやれば取得するのかではなく、―誰―が習得できるかと聞いている。」
「誰って・・・・・―素養―あるものが・・・」
聞かれているティファも、周りもミストバーンが一体何を言いたい

のかが分からず困惑をする。
　ティファの分からないという態度に声も気配も荒げる事無く―教える―ようにゆっくりと説明をする。
　其れは今までティファが、周囲にしてきた事。―分からない事の無い料理人のティファ　―がしてきた事を、奇しくも敵の大幹部にされている不思議さに、ティファの狼狽が静まる結果となり、次に聞こえる言葉がより一層頭の中に染み渡った。
「ハイ＝エントを使えるのは魔族のみだ。」
「・・・・・・え？」
「魔族、其れもただの魔族ではない。お前は自分の力を疑問に思った事は無いのか？何故お前に出会うモンスター達が一様にお前に懐き、はてはお前に付き従うようになるのか、一度として考えたことがあるか？」
「それは・・・・ノヴァだって！ダイ兄だってみんなと仲良く・・・」
「では今はこの場にはいない神獣ガルーダが、お前の許可なく二人を乗せた事はあるのか！」
「・・・・あ・・・・・」
「ハイ＝エントは人間も精霊も、まして天族には決して扱えん!!使えるのは魔族の、それもただの魔族にも使えん!!」
「そんなの!!そんなことどうしてあなたが断言できる！ハイ＝エントを授けてくれた古代精霊のお爺ちゃんが教えてくれた!!
　ハイ＝エントを使えるものは最早私以外この世界にはいないって！私の前に契約を結べたのは数千・・・数千年も・・・・・」
　ハイ＝エントを使えもしないミストが何を知った様な事を言おうとしたティファの言葉が止まった。
　ティファが契約した時、ハイ＝エントを授けてくれた古代精霊がしみじみと言っていた。
　最早この世の中でハイ＝エントを授けれるとは。
　最後に授けたのは、儂等にとっても随分と長い時の彼方・・・・・数千年以上も前の話であったとか。
　精霊達の寿命をもってしても長いと言われる月日・・・・ハイ＝エ

ントを知っているようなミスト・・・・ミスト自身は魔法する使えない暗黒闘気の集合体だが・・その主は秘儀を使いて七千年の年月を渡っている・・・・まさか・・・そんな!!
「・・・・バーンが・・・・ハイティーン?」
「そうだ、漸く分かったか!ハイ=エントを使える魂を有した者をハイティーンと呼ばれる所以は、古い、其れこそ死滅した古代魔族語で位階高き魔族!魔王、大魔王級の方達を指し示す言葉だ!!」
「・・・・・・・・・」
「分かるかティファ?お前は生まれながらにして魔王・大魔王になれる魂を有してこの世界に生まれたのだ。」
「嘘・・・ティファの・・・血は・・・・・・」
「・・・お前の血は確かに赤かった。バーン様は其れは竜の紋章が、竜の騎士として天地魔界の三界者を体現させる為に、魔族の力を押し込めていたと推察成された。
お前が瀕死の身でダイ達を逃す寸前までは赤かった血が、ダイの左手にお前の紋章を譲渡瞬間に流れ出る血の色が青くなるのを確認されての推察だ。」
「あ・・・・あ・・・・」
「そうだ、―枷―の無くなったお前の生来の姿が元に戻っただけだ。」
血は青くなり、容姿すらも様変わりしたが、これが生来のティファの姿。
ティファの闘気がこれまで―白―であったのも、暗黒闘気を放出させんと阻んだ竜の紋章が干渉をし、結果黄金の闘気でもなく、世にも奇妙な、ティファ唯一人にしか出せない白い闘気と成り果てていただけの事。
今までの一つ一つの事象を指折る様に数えながら教えるミストの言葉こそが、真なる狙いと気が付かずにティファは聞き入ってしまった。
常なるティファであれば、敵から情報を教わる事は大半が何かしらの悪意ないし策略が潜んでいると瞬時に黙らせているのを、黙って聞いてしまった。

「お前が使いしラック＝バイ＝ラックは、ハイ＝エントの中では最上位の禁術にも近しい力。
それを易々と扱えるティファ、お前は・・・」
ミストは一度言葉をきりティファと周囲を見回す。
誰一人として自分の言葉を遮ろうとしていない。
魔王軍はティファと自分の邪魔をする事をしないのは当然だが、ティファの味方すらがだ。
あるものは事態に追いつけず、そして自分がこれから何を言うのか見極めようとして。
これを聞いて、―お前達―は正気でいられるか？
慕いし者の本当の身分を知って尚これを慕えるか
己の本性を知った上で尚我等と戦えるか
「お前の魂は我が主、魔界の神たる大魔王バーン様と同等なのだ。」

策謀成れり

何で・・・どうして!!この力を―この子―が習得できるわけがないのに!!

このような事が・・・・何故?・・・・どうして・・・

ティファを今すぐにでも天界に!!

出来ないでしょう!もう契約はなされてこの子は僕達の所に入れない!!

思い出した・・・浮かれていたから断片的にしか聞いてなくて、いつしか忘れ果てていた三神様達のあの取り乱しようを・・

魔法が一切使えない

その事が悔しくて、契約が出来ない度に爺ちゃんは笑って大丈夫だと言っている影で溜め息を飲み込んでいた事が悲しくて、三神様達に泣きついたあの日、人神様が最後の手段だって言って、古代精霊と引き合わせてくれた。

これでだめなら他の事に目を向けろと言われながら。

契約前から天神様と竜神様は難色を示していた理由が今なら分かる。

私が契約出来た・・・・出来てしまった時にどうしてああも狼狽されたのかも。

そして、最終決戦一歩手前でミストかハドラーの黒の核晶を消す時にガン＝フレアを使う前は何があってもハイ＝エントを使うなと約束させられた理由も。

私が魔族の、其れも魔王じゃない、大魔王になれる魂持ちだったからだ

・・・・どうして・・・私が・・・・・父さんと母さんの子なのにどうして・・・

ミストの言葉はあまりにも重く、地上軍全員の魂の底まで心胆寒からしめた。
ミストの言葉で呆然として座り込んでいるあの少女が、魔界の神と同じく大魔王の魂を持っていると言われ、冷静になれる者など居る筈がない。
其れはティファを愛してやまない父親も兄達も仲間とても例外ではなく、ティファを信用しきれない者達にとってはこの世界の崩壊を聞かされたと同等の衝撃を受け言葉も出ない有様になったのは当然なのかもしれない。

「だからそれがなんだというのですか!!!!」
たった一人の者を除いて。
「ティファさんが大魔王の魂を持っているからそれがなんだというのですか！それがティファさんの優しさを損なわせる物なんですか⁉優しくて皆で笑い合うのが大好きなティファさんが変わってしまうナニカなんですか⁉」
剣戟もやみ、誰一人、其れこそティファの半身を自認しているノヴァとても、余りの事に衝撃を受けて言葉を発せられない中、チウはその小さき体の何処から発せられるのだというほどの大音声で、ミストの言葉を叩きつけていく！
「僕はティファさんが好きです！大好きです!!ティファさんが例え魔族でもそうでなくてももしかしたらもっと凄い何かであっても僕はティファさんが大好きです!!
強いからじゃない！頼りになるからじゃない!!笑っているティファさんが僕は大好きだ!!」
其れは愚直な程の単純な思いであるが故に、聞く者全ての心に不思議と染み渡る言葉であった。
大好き
ティファに助けられたという理由からではなく、マァムやヒュンケル・ラーハルトの様に母として慕うでもなく、ダイやノヴァの様に囚われた愛でもバラン達の様に救われたという負い目も何もない只々

無心なる思いだけのチウには、ミストの言葉の策略は通じはしなかった。
その言葉に、ティファが俯いていた顔を上げチウを見る。
力強く、そしてどこまでも真っ直ぐに自分を見てくれるチウの顔に、ティファの心が浮き上がろうとした。
真っ直ぐな心に救われようとするかのように手を伸ばそうとも思った。
察したチウも、今すぐティファに降りて来て欲しいと言いかける。
だが不幸な事に、チウのように純粋に叫べるものが他におらず、チウの後に続けるものがいなかった。
あのマトリフとても・・・・常識という枠を壊して生きてきた積りであっても、マトリフも矢張り―人間―という枠組みを超えられてはいなかった。
人間にとって、魔王・大魔王は魂の奥底で怖れを抱いている。それは連綿と続いた太古からの恐怖が染み付き、―本能―が怖れさせてしまうという原始的で人柄によらずどうしようもない事であり、マトリフに一切責任があるわけではない。
そしてそれは他の者達も同様であった。
そして魔族たるザムザもロン・ベルクもなまじバーンを直接知るだけに、其の力を持っているティファに瞬間的に畏怖の念を抱いてしまい言葉が出なかった。
ティファの身の内から放出された暗黒闘気と、そしてその容姿からあふれ出る力の凄まじさを魔族であるが故に感じ取れてしまった。
ヴェルザーが封じられている今、魔界全土の支配者と言っても過言ではい神たるものと同じ気配をまざまざとその身で。
誰か一人でもチウの言葉に続く者があったれば、ミストの言葉を紡がせることは無かった。
「チウ・・・と言ったな。いつぞやティファとキルが貴様をバーン様の前で評価していたな。」
「・・・・・・へ？」

「お前の心の器の大きさは三界一だと二人共に同じ様な事を言って。キルはティファ同様この大戦のどこかでお前を捕まえて共に自分の者にすると張り切っていたぞ。」
「・・・・・・あの人の考えも僕分かりません・・・」
そんな事を言われても困るとチウは本気で溜め息を吐く。
チウとしては、キルを変態と呼び真っ先に叩き壊すと気炎上げるポップ達にもついていけないが、キルのその辺も良く分からない・・・・あの人最終的に敵の僕達どうしたいんだろう？
「成る程、こんな状況下の中で私が話し掛けても動揺せんか・・・一つ問おう。」
「？」
前半のミストの一人心地は聞き取れなかったが、問いたいという言葉ははっきりと聞こえ達は目を丸くして、ティファではなくミストの方をきちんと見た。
・・・・本当にチウというのはティファと瓜二つだ。
兄であるはずのダイよりもだと、ミストは本気で思う。
敵の自分の言葉を警戒せずに何だろうと—良い子—で待ってどうするのだと、ティファに感じた老婆心が働くくらいに。
自分の言葉の毒に気が付かない所迄同じとは

「お前がティファを慕うのはそれは—モンスター—としての本能がそう成さしめているのではないか？」
「・・・・・はい？・・・・・あの・・・なさしめ？」
「・・・・・・済まない、言い直そう。お前のモンスターとしての本能がティファを此処迄慕っているのではないのかと聞いたのだ。」
「!!そんな事!!」
「無いと何故言い切れる!!」
「なん!!」
チウがティファを此処迄慕うのは、チウのモンスターとしての本能が、魔物の王たるティファの魂に魅かれているからではないかという事を言われたのだと理解したチウは、顔を真っ赤にして怒鳴り上げよ

うとしたのをミストは情け容赦なく言葉で踏みにじっていく。
「周りを見るがいい!!」
「なにを!!」
「ティファを見る目がどの様な事になっているのか周りをよっく見てみるがいい!!
私の言葉の正しさを身をもって知れよう!!ティファ！お前も見るがいい!!!
味方だという者達を！敵だという者達の顔も全て見てみるがいい!!」
二人はとても良い子だった。言われた事を一度はするべきだと思う程の・・・可哀そうな程の良い子達が見たのは・・
「あ・・・・・あぁぁ・・」
「そんな・・・・そんなどうしてみんな！どうしてそんな目でティファさんを見るんですか!!!」
心の底から怯えてティファを見る味方の者達と、ティファを慕う目を向ける敵の顔であった。
味方である筈の者達の顔に、ティファは瞳をぐしゃぐしゃに歪め涙を流し、チウはどうして問狼狽える。
「これが現実だ。ティファ、お前が言っていた事は全てまやかしだ。この世界は―弱く・酷く―そして己達と違いすぎる者を受け入れるようには出来てはいない。」
「・・・・そんな事ない・・・」
味方の顔に打ちのめされても、それでもティファはミストの言葉を否定しようと必死に言葉を紡ごうと懸命に足掻こうとする。
幼い日、自分が世界を本当の意味で愛することが出来るようになれたあの素敵な呪文の反呪文の様な言葉を、認めるわけにはいかずに。
「そうか。」
その反論すらも、ミストにとっては想定内であった。
「―人間―に問おう!!」
ミストは最後の仕上げの言葉を発した。

「貴様等大魔王の魂を持っているティファが、この後も存在する事を赦しておけるのか？
敵と言いつつも魔界の為に涙を流して憂えるティファを！
もしも奇跡が起きこの地上にいる魔王軍全てが滅んだ世にて、魔界を本気で憂える大魔王がいる事を貴様達は赦せるか⁉」
答えは否だと知っている最後の毒がまき散らされた。
人間はこの楽園のような地上にて、其れなりの不自由以上の事がないのにそれ以上の繁栄を望み、領土問題に明け暮れ、経済を過剰に貪り、同族同士で争うと思えば一致団結をして金になるモンスター達を狩り尽くしその利権の為に争うという醜さを内包している。
そんな者達にとって、ティファは毒の様なものでしかない。
いつかその利を害悪だと断じ、声高に叫ばれれば人間にとっては堪らなかろう。
地上を救った勇者の妹というだけではなく、ティファは名を上げ過ぎた。
其れはティファの優しさから、己の罪を後悔した者達を救いたいと言いう善意からの発露であっても、一国であっても無視できない程の支持基盤が各国に増えすぎた。
地上が救われて暫くの間はその恩を王達は感じようが、周りはどうか？
特に戦場の恐ろしさを知らない文官・大臣達は？
十年経たずにティファへの恩など返し後嘯き、其の支持されている立場から躍起になって引きずりおろそうとするのは目に見えている。
だがそれはこの場にいる者達には関係がない。政治的問題で許せなくなると見ているのはカール女王フローラだけである。
だが他の者も赦せると断じきれるものがいなかった。
何時かティファが魔界の者達を助けたいと言い出し、そしてそれを実行しようとすれば、間違いなく人間社会がそれを赦すはずが無いからだ!!
ズガァァァァン!!!

たった一つのメラミが、全ての者達を代弁しているとでも言いたげにティファに打ち込まれた。
幸いティファの防衛本能が、暗黒闘気を放出して闘気の盾となったが、撃った者は其れを憎々し気に見る。
矢張りあれはいてはいけない者であった!!

「そんな―バケモノーはいらん!!」
「そうだ・・・勇者様の妹とは言え!そんなバケモノはいていい筈がない!!」
「フローラ様!!やはりあの者はバケモノです!!勇者様の片割れとはとても思えません!!
生かしておいては後の禍根となります!!」
「我等にあの―悪竜―を討つ命をお出しください!!」
頬を紅に染めたカールの若き騎士の軽率なる行動はすぐさまカール騎士達に伝播し、フローラにティファを討つ命を下す様に取り囲んで迫った。
「何を愚かな事を!!」
「そんな事が許されると!!」
「黙れ悪逆の徒達!!お前達は確かに罪を償う道を許されているというが!!我等の故郷を滅ぼした大罪人ではないか!!」
ティファを擁護しようとするバラン達に、カール騎士団達は憎しみの声で怒鳴り上げた。
カール騎士達にとっては全てが我慢の限界であった。
バラン達を予め受け入れて欲しいという、料理のティファからの厚かましい願いからそれは始まっていた。
フローラが為政者として様々な理由でそれを飲み込めたとしても騎士は怒りを飲み込む事になった。
故郷を踏みにじる敵と戦い退ける試みも許されずに逃げるしかなかった屈辱、そして慕っているホルキンス団長の重傷が、彼等の心の憎悪をいやが王にも増させ、その思いが下火になる事も無い時に来た

其の願いが許せず。
そしてサババ砦で助けたのは勇者だけではなく、長年カールの宿敵にして故郷の偉大なる英雄を殺した魔王ハドラーを助け受け入る事が拍車をかけた。
そして次々とティファのかかわった者達が人間以外を擁護し、迷惑を掛けられている自分達の前でティファをほめたたえる言葉を聞くたびに胸を掻きむしりたくなる思いを何度した事か!!
それでも、パプニカの三賢者筆頭のアポロ殿の説得もあったればこそ耐えてきた思いを!次々とあの化け物は踏み躙り!!あまつ大魔王の魂を宿しているなど許せるものか!!!!
此処であの悪竜を消す!!
間違った竜の騎士が生み出した悪竜を今ここで始末する!!
たとへここが戦場であろうと、地上の行く末が決まる大決戦であるのならばなおのこと地上の禍根は断つべし!
勇者達もきちんと話せば目を覚まして、共にまた大魔王バーンを討てばいいだけの事!!
「聞けバケモノ!!お前はファブニールの竜を討った男を勇者と認めないと言ったな!!!」
「あ・・・あ・・・」
生まれて初めて向けられる憎悪と悪意の目に、ティファは完全に怯えてしまい言葉も出ない。
ティファを本当の意味で知る者達が口をそろえて言う言葉がいくつかある。
その一つに、ティファは本物の悪意に晒された事がない。
其れは敵意ではなく殺気でもなく、憎悪や嫉妬、妬み恨みつらみの負の感情をティファは知らず育ってきた。
今日この時まで。
満足に言葉を発しないのを自分達を侮った取ったメラミを放った者は、一層憎しみの目をティファに向け勝手に話し出す。
「貴様が言ったファブニールの竜を討ちしお方は!我等が仕えしカール王の祖なるぞ!!」

「・・・・カール・・・・・」
「そうだ!!ファブニールの竜の逸話は有名であっても、其の古の地が今は何処かというのはカールが今の国名となる前から秘っされて来た！祖となりしお方が、おん自らの力を誇示する事を望まぬという！目立ちたがり屋の貴様などには到底理解できない高潔なお心の下に秘っされてきたのだ!!
そして時代が下り！ファブニールの地が併呑・統合されてもなお祖の血脈は絶えず、数百年前に簒奪された王権を取り戻されカール王国を作られた!!
分かるかバケモノ!!貴様は我等がフローラ女王陛下の好意を端から踏みにじってきたのだ!!
その罪だけでも万死に値すると知れ!!!」

ミストの策は、処刑演目の時から始まっていた。
ティファの性質をただ褒めるだけをしたのではない。カール騎士達とフローラ女王の心をティファから引き剥がす為の一手。
己らの故郷を破壊した者を赦してほしいと懇願しておき、その口で尊敬し忠誠を誓いし主の祖を貶められ激昂しない騎士がいれば見ものである。
策は成れり
カール騎士達の言葉に、全てが飲み込まれた。憎悪と嫌悪の渦に。

どうしてティファの運命はここまで酷いのだろうと、眼下の光景をただ見せる蹴られるだけの三神は崩れる様に泣き伏す。
ハイ＝エントを隠すと決めた時、其れでティファを守れたと思ったのに・・
三神がハイ＝エントの使用許可を最初の決戦時に指定したのは、その十日後に最終決戦で敵・味方双方そちらにかかりきりになり、誰もティファの能力調べを悠長にしようとはしないだろうと踏んでいた。
そもそもが調べるにしてもミストの言う通り、死滅した古代の魔族語の古文書も、途切れ途切れにしかなく、ハイ＝エントの技を記した者は現存していないから調べようがない、筈であった。
そして、ティファが大魔王の魂を持っている事を知る者はなく、天界にて魂を再封印すればティファに重荷を負わす人生ではなく、力をなくした女の子としての身とを歩ませられる筈であった！
バーン自身がハイティーンであったのが最大の誤算。
その事を知っていれば、確実にティファから力を取り上げ記憶も封印していたものを!!
この世界には、様々な神がいる。
自分達のように直接的にこの世界に関わる為の神と、一生自分達も会う事の無い運命と魂の輪廻を司る神もいる。

肉体と魂を与える神は、この世界に異物の様なティファに殊更に辛い道を用意した。
この世界は本来であれば二界は滅び、魔界だけが残るはずの道を、現世を憂う三神達がその道を違えようとしている。
ならばその道を行くのであれば、正道を歪めるのであれば代価が必要だ。
其れは三神達が払っては多すぎ、しかし只者がせる筈も無く、必然的に代価を取り立てる相手はたった一人となった。
この世界を好き勝手に生きていくとのたまった何も知らぬ無知なるものから。

三神達は、ただ三界を救いたいと願い、ティファもまた同じことを願った。
純粋なる善意から。
代価を知らぬうちにティファが支払わされたことを知らずに

無知は罪だと誰かが言う
それが誰が言ったかよりも、混沌が蔓延った事が問題であった

ただいまという言葉は良いものです

好きだから守りたいと思った
愛しているから守りたいと思った
愛おしいから守りたいと思った
たったそれだけで今日まで来た・・・・ただそれだけの事が罪だったのだろうか・・

未知なるものが自分達の許容範囲を超えた時、大概は種族問わずに迫害への道を転がり出す。
今まではティファが何を言ってもやっても、其れは―ティファだから―と済まされて来た。
前段階的にティファの優しさと穏やかさに魅かれ、ときに救われて来た者達で周りが固められていたティファを守る楽園の中での出来事であったから。
あるものはその慈悲深さから何かをしても救う為だと割り切り
あるものは子供特有の優しさの発露と笑い
あるものは苦悩の果てにそれでも助けたいのだという高潔なる志にうたれ
楽園の中の者達の誰もがティファを止めようとはしなかった。
それが世間で通るはずのない毒にも等しい理想論であれ、常識を無視する事であれティファの成してきた実績を前にしてはそれらを忘却の彼方へと押しやらえていたが故に、誰もティファを諭そう、言い聞かせようとした者がいなかった。
一人だけいた。ティファの考えは世間からそして常識内から逸脱しすぎている。
その考えが捨てられないのであればせめてそれらを外に出すなと言い聞かせようとした者が。
陰日向なくダイ達を支えて来たロン・ベルクその人は、ティファに触れても珍しくもティファの考えに驚愕して思考を止めてしまい、その間にティファの素晴らしさに魅せられ遂には賛同しないまでもそ

ういうものかと見ている者になる事なく、幾度か説教しようとさえした。
しかしそれはタイミングがかみ合わず、ある時は敵の襲来などで結局言い出せないままティファを一人の女性として愛してしまい、仕方がない、無茶したら自分がフォローしてやればいいと受け身に回ってしまい、―楽園―は崩れる事無く来てしまい、そのツケが全て今日この時に噴出をしたのは、そこをつく為の敵の策略である前に、あらゆる意味でティファの自業自得であった。
幾度となく放たれて来た理想の言葉は、時に人を温め、そして燻ぶる憎悪を燃やす燃料になっていたのだから。
ティファは自分を殺そうとした者も笑って許せる。
だが他者から見れば、―普通―の者達からすればそれからして異常者と見えよう事を思わずに許してきた。
そして―どうにもならない理由―があれば赦される機会が一度はあってもいい筈だという言葉が、―普通―の者達からすればどれ程現実を見ないふざけた言葉だと取られるのかを。

憎しみ、悪意、嫌悪の目に、ティファは息をするのすらが苦しくなる。
自分は・・・・カールの人達を不快にしたかったわけではない・・・それでも、自分が言った言葉に傷つけられた人達が目の前にいる。
その目の前の人達は私を殺そうとしている・・・・
助けたいこの世界の人に要らないと言われた・・・・不要だと、悪竜だと、バケモノだと・・・・ああそうだ、私はそのような者だった・・・・はは・・・・・はははは・・・あぁそうだ・・・・忘れていた・・・・私は悪い子だった・・・・私は嘘吐きだった・・・・私は罪人だった・・・・
バーン大戦も鬼岩城襲来もピラァの襲撃も全部全部知っていても口を噤んでいた罪人だった・・・・・何を勘違いしてたんだろう
優しい人達の中に入れて貰えたから完全に―勘違い―してた・・・

あぁ・・私は―怖い―ものだ・・・今までもずっと、優しい人達も言いたい事があっただろう・・
許せない事が沢山あっただろうに・・・
周囲の―目―が、ティファに思い出させる。
自分は何処まで行っても―異質なる者―であった事を・・・・困ったな・・・このままじゃあダイ兄達があの人達と諍いを起こしてしまう。
優しい人達だからこんなバケモノでも庇おうとしてくれて・・・・
其れは困るんだ・・・
雪白・・・・付き合って・・・・・・
自分を取り巻く悪意を、それにより引き起こされる最悪のシナリオの全てを思考したティファは、雪白のリングをそっと包み込む。
其れは瞬きの間に思考され、カール騎士達の暴走にダイ達すらも心が追いつけずに止まってしまった間に行われたティファの思考。
私がいなくならば大丈夫だ
兄達も、大魔王の魂を持った者がいてはのちの迷惑になろう
世間も、きっと恐怖から私を庇う人達にまで迫害の手を伸ばそう
そして世界に諍いを撒いてしまおう
―そうなる前―に―元凶―がいなくなればいい
瞬時に己の答えを弾き出したティファの後ろに、空間が音もなく小さく開く。
ティファが行う―その時―を待ちわびて
「アクセス・・・・・・」
不思議と心が凪ぎ―その時―を実行しようとしたティファに、漸くティファが何をしようかと誰もが気が付いた。
雪白を取り出し、その刃を己に突きつけたその時に！
「やめてティ・・・・・」
「おやめなさいティファさん!!!!!!」

ダイが叫び、ミナカトールの柱を支える事を放棄しようとしたレオナ達の言葉よりも尚響き渡る声と共に、―五本の白い羽―が過たずティファが据わっているけっかいを円状に刺さり、五芒星の陣の展開と共に光がティファを包み込み、側に居たミストと―空間を開けて待機していた者―を瞬時に弾き飛ばす。
其れは本当に瞬く間の出来事であった。
さしものレオナも、此処に至ってはティファを助ける事を優先しようとした。
今までティファがどれほどの事をこの世界にしてくれていたかを知らぬ者達が、ティファを倒そうなど言う言葉を赦せずに。
勇者一行の仲間であり、将来の妹をむざと敵の策謀に死なせたくないと。
その願いが天に届きでもしたのだろうか・・・・
あの声を自分達は知っている！
一体自分達の目の前で起きている事は現実なのだろうか？
光りの渦が収まった先に見えたものに、ダイ達は息を？む。
何かを言えば、其れは自分達の願望の幻が消えはて雪白をその身に貫いて果てたティファの骸を見る事になるかもしれない恐怖に縛り付けられ。
憎悪に塗れんとしたカール騎士達もまた時が止まった錯覚を覚える。
あの偉大なる英雄は死んだはずだ!!あれも敵の・・・・
そう思うには、目にしている人物の雰囲気があまりにも優しすぎた。
ティファが太陽と評されるのであれば、その者は木漏れ日の様に穏やかで、惨状が始まらんとしたこの中に会っても微笑みを絶やさず―バケモノの本性―を露にしたティファを平然と抱き上げている。
今まで戦場の殺伐とした空気を、ティファ特有の雰囲気で霧散視させていたものとは違う意味で戦場の空気を一変させる男。
「・・・・・あ・・・・アバン・・・・・」

体も心も震えさせながら絞り出すフローラの言葉がさざ波の様に、カール騎士達に、彼の英雄を知る者達の間に細波のように広がり、口に出して名を呼んだ者達の中から負の感情をも外に吐き出させていく。

先の大戦で世界を救った男の名は、料理人ティファをも凌駕する。

「いけませんね～大魔王の参謀さんとやら。可愛い女の子を策謀で雁字搦めにするとは無粋というものですよ。」

この状況下においてもティファ以上に飄々とした言葉を、破邪の五芒星の力に吹き飛ばされたミストに向かって言い放つ。

その柔らかく頼りないと映りがちな態度とは裏腹に、圧倒的なカリスマ性を誇り、大戦から十五年経っても衰える事の無い人望を持ち、大魔王ですらが強さの根幹が自分達と違い過ぎる事に警戒をし、ハドラーに抹殺を命じた―伊達眼鏡―を掛けていないアバンと呼ばれた男は、柔らかい微笑みを―伊達眼鏡―を掛け続けてくれているティファに口を開く。

ずっとティファに言いたかった言葉を、満を持して解き放つ。

「随分とお待たせてしまい申し訳ありませんティファさん。ただいま戻りました。」

漸くティファとの約束を果たす為に、アバン＝デ＝ジュニアール３世の帰還であった。

じたばたと足掻き、この世界を救うあの約束を守る為に

死神の宣告

ペタペタと顔を触ってみれば確かなる感触がある
銀を混ぜたような不思議な青い髪を横算段にする人は一人しかいない
呆けている自分を呆れもせずに優しい瞳で小さい子を見守るような温かい目も確かにこの人で・・・・

不思議な静寂が戦場を覆いつくす。
パレスの玉座の間にてアバン出現を見ていたバーンとキルは、死んだ男がこのタイミングで出てきた事に度肝を抜かれ、現場にいるミストは、ティファと違い一切の隙を見せないアバンを攻めあぐね全軍に待機命令を出し、地上軍は目の前にいるのが本当のアバンかどうかの真偽が付かずに見定めんと沈黙をする。
不思議な静寂を破るのは、何時でもティファである
「私にただいまという貴方は、どなたですか?」
ティファとても半信半疑でいた。原作ではカールのお守りが機能して身代わり効果を発揮していたが、この世界でもそうなるという保証は何処にもなく、優しい雰囲気なればキルにも同じようなものが出せようし、なればこそモシャスを疑っている。
そのティファの慎重さにアバンは嬉しく思う。
場の雰囲気に流されず、見た者だけを信用しすぎず、これをして自分が託した者達を守り通してきてくたのだと。
「私は勇者の家庭教師・アバン=デ=ジニュアール3世です。」
「なれば本物のアバン先生である事を、この2つの質問をもって真偽を明らかにされる事を是とされますか?」
「構いません。この場全ての者達が納得するのであれば如何様な事でも。」
あぁぁ!!なんて物凄い落ち着き感!アバン先生だ!本物の先生だ!!・・・けれど・・
質問前からティファは目の前の人物が本物であることを野生の勘

で分かったが、ちらりとミナカトールの柱制作中の兄達を見れば、ダイ・ポップ・マァム・ヒュンケル・レオナの全員が本物であるのかどうか分からず判断に苦しんでいる。
そしてマトリフとても。
長年友誼を結んだ、相方にも等しい勇者の帰還を、魔法使いたる彼が真っ先に駆けつけて喜びたいであろうが、迂闊な事はできないという信念を持った大魔道士としての性が身を縛っている。
兄達を早く安心させてあげたい、そして喜ばせて上げたい。
偉大なる師が、先代勇者の帰還が本当の事であると。
「一つ!!」
ティファが一体何を問うのか、戦場でアバンを知る全員が固唾を飲んで見守る。
一体何を聞く積りか。
質問するティファの喉はカラカラになる。
味方の不興を一心集めた自分が、偉大なる先代勇者に質問を投げかける事自体が、烏滸がましい事この上ないという自覚をして。
それでも！聞かないといけない!!
「先のハドラー大戦の時、カール王国では魔王に対抗できる術がないと右往左往した時、アバン先生は何と言って励まされましたか？」
これは原作知識もさることながら、フローラと顔合わせをして矢張り眼鏡の事からアバンの話になり、先の大戦時のアバンの勇猛な活躍と、そしてその時の話を実際に聞いたので出してみる。
これはカール騎士とフローラを安心させる為の質問。
そしてもう一つは今この場では自分と兄二人しか知らない質問
「ハドラーに最後の力を振り絞って立ち向かう寸前、私は貴方になんと言ったのか？」
こう来ましたか。
「一つ目の方からお答えしましょう。」
朗々たる声がロロイの谷を渡る。
「皆さんじたばたしましょう、です。」
これはハドラー大戦の最中に当時のカール国王が病に手倒れてし

まい、兵力も圧倒的な差がある中で、自分達にはハドラーに対して打つ手が何も無いとあのロカですらが呻く様に言ってきた時、出来る事はあると言ったのだ。
じたばたと足掻き、少しずつでも前に進めばいつかは光明が見えると信じて。
その言葉に勇気を得たカール兵達は国王の代わりに前に出て立ち向かうフローラの下で一つに纏まり、後の世に多大なる影響を与えた言葉。
それをして巨大なる大魔王を前にしても世界が抗おうとしているのだから。
そしてもう一つは
「ティファさん、貴女が今かけている伊達眼鏡を託した後、私は一つ貴女に我が儘を言いましたね。」
「・・・・・」
デルムリン島でアバン先生に本当の実力を知られるわけにはいかないと、当たり障りのない会話で過ごし、なるたけ近寄らなかった事をアバンは寂しく思い、命を懸ける前に一度思い切り名を呼んで欲しかったのを・・・
「叶えてくれた貴女はこう言ってくれました。頑張れアバン先生と。力強く思い切り。」
「!!・・・・・ふぅ・・・・・・・く・・・・・」
「長い事貴女に大切なもの全てを守り切ってもらった上に、想像以上の重荷も背負わせてしまい申し訳ありません。」
「ふぅぅぅ・・・ふっく・・・・」
「ただいま戻りましたティファさん。」
「・・・おか・・・おか・・え・・り・・なさい・・・お帰りなさいアバン先生!!!」
うわぁぁぁぁぁぁぁん!!!!!
本物だ！本物のアバン先生だ!!!生きててくれた・・・来てくれた!!先生が!!

帰って来てくれたのだと、ティファは恥も外部もなくアバンに縋り付く。
ずっと不安だらけ心の全てを、大好きなおじさんにも漏らすことの出来なかった全てを吐き尽くすかの如く。
「姫さん！このミナカトールってのは魔法陣が完成したら陣を固定できんのか⁉」
「え・・・・出来る・・・」
「そうか・・・・俺の一切合切くれてやらぁ！！！！だからしゃんと伸びやがれ！ミナカトールの柱！！！」
ズバァ！！！
ポップの叫びが柱に乗り移ったが如く、膨大な気力を受けた柱は勢いのまま上昇しパレスに届くや否や、レオナも叫び上げた。
「ミナカトール！！！！」
全ての柱で描かれた五芒星の陣が繋がり、金色の陣を描くや否や全員が一斉に手を放す。
アバン先生の真偽のほどは先程の２つの質問によりてなされた。カール騎士達の間で伝説になった名言が、ティファが送ったエールがその答えだと、味方は現れたアバンとティファを守る為に、魔王軍は現れた新たなる脅威を排する為に。
双方の動きに気が付いていたアバンだが、何かを待つように上空から動かない。
腕の中で自分にむしゃぶりつく様に泣いているティファの頭を撫でながら待ち、意外にも早くそれは訪れた。
「先生⁉後ろに！！！！」
トベルーラで二人を迎えに行こうとしたダイとポップを飛行モンスター達が立ち塞がり、応戦する二人の邪魔を排そうとするヒュンケル達にもそれは確りと見えた。
黒い空間が開き、大鎌がアバンの首の身を堕とさんと横一閃に振るわれる光景を。
誰もがアバンの首が落ちると悲鳴を上げるその中で、異常なる事が起きた。

首にまで迫った大鎌が、寸前で止まったのだ。
全員がティファを見た。アバンではなく、またもやティファが何かの力でアバンを守ったのかと。
しかし当の本人は大鎌と殺気の気配で寸前まで本当に気が付かず、敵の接近を赦してしまった事に驚愕し恥じて泣き止んだが何事だと目を丸くしているが、アバンは冷やいだ瞳を大鎌に向ける。
気づいていた、自分だけに向けられた憎悪に塗れた殺気に。
「どなたかは見当がついていますよ。空間から出て来てはどうですか、死神さんとやら。」
よくよく見てみれば、何時アバンが動いて刺したのか、大鎌の柄と鎌の間にティファを守った五芒星の陣に使用されたのと同じ、白く輝く羽が突き刺さっている。
シルバーフェザーに込められた破邪の力はすさまじく、道具からでも使用者が邪に連なるものであれば直接的に動きを止める事も可能にしてしまう。
キルも動けないからくりに気が付き大鎌を放し、それと同時にアバンも地上のヒュンケル達の下に素早く降り立つが、ティファを抱き上げたまま、出て来た死神と対峙する。
「初めましてですね先代様。」
「ええ、お初にお目にかかります。貴方が大魔王の死神と名高き死神キルバーンですね。」
キルはアバンの力を警戒し、ミストの隣に姿を現す。
死んだと思った者が何故生きているのかなど、どうでもいい。今目の前にいるのが確かな事実なのだから。
問題は、生きていたのであれば何故ダイ達の前に姿を見せなかったのか？
未熟なダイとポップを如何に強者であっても、子供のティファの三人で戦乱の世界に送った後何をしていたのか？
今のアバンは監視していた時が小粒に思えるほどの強さを、内に秘めているのが気配で分かる。
其れはダイ達の様な物理的な強さや、ポップやティファの様に強か

な強さ以上の何かを感じる。
この手の者が、力を蓄え確固たる信念の元で動いてくれれば厄介な事この上ない。
だが、警戒をして怖れる以上の感情がキルの身の内を支配し、初対面のアバンに憎悪を燃やす。
今ティファはアバンの腕に抱かれ、どこか安心した気配を醸し出している。
マトリフに縋る時のあの安心感を。
本当であれば!!雪白でその身を刺し貫き、倒れゆくティファを絶望するダイ達に見せつけながら自分の腕（かいな）に取り込むはずでった！
それにより勇者達は完全に絶望に墜ち、その瞬間に全ての決着がつき、有象無象を殺し尽くしながらチウとメルルも手に入れ、黄昏時を待てばいいだけだったものを！目の前に佇む一人の男のせいで全ての目論見が外されたのだ！ティファを確実に手に入れる千載一遇の機会諸共に!!
「ねぇお嬢ちゃん。」
憎悪に塗れ、しんとした冷たい声でキルはティファに問う。
まだ引っ繰り返せる手がない訳ではない。
外野が騒ぐその前に。
「先代様が帰ってきても、カール騎士達と女王陛下が君の存在を許したわけじゃぁないんだよ。
このままだと君は確実に大勢の―人間―の敵になる。
今ならまだ間に合うからこっちにおいでよ？」
優美に優雅に、差し出すキルの手に、果たして絶望に落とされかけたティファが何と言って答えるのか。
各王国の兵士やその家族たちに感謝されたからとて、ティファの考えを知れば手の平を返す事は十分あり得るのを、この場ではダイとチウ以外の誰もが思い至り青褪める。
アバンはその質問を止める事無く、ティファの答えを待つ。
果たしてティファが、何と答えるか。それによって自分のやるべき

事もおのずと変わるのだが、ティファの答えはいつでも単純であった。
「私が―皆―を好きだからいいの。」
「・・・・いい？」
「皆が私を嫌いになってもいいの。私が皆を好きだから、守りたいから、だから勝手に守ってるだけだからいいの。・・・・どうしてもいちゃいけないなら、この地上を去るよ。
皆んなが幸せなら、私はそれで嬉しい。」
静かに紡がれる少女のその言葉に、衝撃を受けない者はいなかった。
ティファは何処までも単純でそして純粋であった。
見返りなど端から求めておらず、嫌われていても自分が好きだから守るのだという、だから敵と言われても構わないのだという思いを持つ者が、一体どれほどの数いるというのだから？
愛しているのだから愛し返して欲しいという、原始的な本能さえ排したその思いの、何と美しく異端である事か!!
そしてだからこそキル達にとっては地上の全てが許せず憎くなる!!
「君を殺そうとした者達まで愛しているだなんて!!本当に君は!!君って子は何処まで愚かでお人好しが過ぎるんだ!!!」
ティファが守ろうとする者達にその値打ちがあろうはずがない!!その異端なる愛に相応しい者か!!!
「いいよ、その戯言打ち砕いて君を手に入れれば其れでいい。パレスに―帰って―おいで。
先代様、邪魔をした貴方も念入りに僕自らの手で殺し尽くしましょう。二度と黄泉路から這い出られない程に!!!」
全ての目論見を台無しにしたアバンを狩る宣言をし、ダイのストラッシュが届く前に地面からパレスへと帰還した。
パレスの罠の数を増やすべく。

アバンの言葉・前編

許せない！許さない！殺して肉体を灰にしてもなお飽き足らない!!幽体を壊し！魂を粉々にし、輪廻の輪から外すその時まであの男に対する怒りを治めてなぞやるものか!!

自分の言葉と気配をぶつけられても飄々とした気配をやめない上に、力強い視線で僕の宣告を受けて立ってきたあのいけ好かない男は必ず殺してやる!!

「さほどに許せぬか？」

怒りと憎悪に塗れ戻ってた荒れた気配を治めないキルに、バーンは静かに声を掛ける。

許せない？許せるはずが無い!!ミストと共に練りに練った罠を！あんな乱入者にお釈迦にされ!!お嬢ちゃんを手中に収めていた先代を刺し違えてでも取りたい!!

バーン様は何故そんな冷静に・・・・おやおや・・・

「許せないのは―全員―でしたか。」

見れば主は両腕を袖に仕舞い座っている。これは主が自分の激昂を内に納めておく為の癖。

魔界の神たる主が怒鳴ろうものならば、配下の不安の直結に繋がってしまう。

周りの混乱を避け、配下を不安にさせない為の配慮だが、相当激怒している時でなければ見られない光景。

ミストも気配が冷たかったし、他の子達も怒りに満ちていたな～。

「もしもあの男がパレスに一歩でも足を踏み入れて来たら、即座に首にして余の下に持ってまいれ。」

馬鹿な男だ。魔界の神様の逆鱗に触れて怒りを招いてしまったね。

念入りに素早く殺してやる!!

「先生!!!」
「アバン先生!!!」
「生きて・・・生きてたんなら俺達の前にさっさと来てくれよ先生!!!」
「先生!!!」
生きていたアバンを、ダイ達が囲むと同時に四方を囲む味方の円陣も組み上がる。
「有志兵全軍に告げる!!アバンの使徒達が帰還せし先代勇者との邂逅を、敵の手で邪魔などさせるな!!
我等が盾となり剣となりて、一切の雑音も彼らの耳に届けさせるな!!」
「「「「「おう!!!!!」」」」」
もう一人の若き勇者・殲滅の騎士団長ノヴァの号令一下の下、有志兵達は素早く隊伍を組みなおし迫りくるて来たとと大激突を食い止めに走り出す。
ティファ・・・君と君達の邪魔などさせない。―誰―であろうと!!

隊伍を組み直す前に、ノヴァはフローラの下に集まったカール騎士達の下へと素早く足を運び、釘を刺しに行っている。
「あの子を嫌おうが何を思おうがそれは貴方方の自由だが、それを行動に移した瞬間凍らせる。」
冷たい瞳でたった一言を言い放ち立ち去るノヴァの背を、カール騎士達は先程の勢いを失い沈黙で答える。
格が違いすぎる。
長く軍務に仕えていたとはいえ、ハドラー大戦以降戦わなかったカール騎士達と、この大戦で激戦を繰り広げ常勝無敗を誇るノヴァとでは段どころではなく格すらが違っていた。
彼と料理人ティファが幼馴染だという情報を得ていたが、まさかここまでの感情を、ノヴァに表させるほどの深き仲とは知らなかった・・・知らない、分からない・・・・これこそが一番のお互いの相

互不理解の原因であるのかもしれない。

凄まじい・・・・特にヒュンケルがべったりになってる。

「先生!ティファ!!もう俺の側を離れないでくれ!!!」

「そうだぜ!二人はもう俺達の側から一メートル以上離れたら駄目だ!!」

・・・ヒュンケルに続いて何言っちゃってるのでしょうポップ迄?

ダイ君?監禁しながら連れ歩く方法を真剣に討議して・・・・マァム?ひもで体縛ればとかレオナ姫・・・・其れに賛同しないでくださいね?

ティファを抱き抱えたままのアバンは些か困惑をしている。

黄泉路から戻ってきた時、冒険に向かって舟をこぐ三人を見送った後、破邪の洞窟で再修業しながら、百五十階層まで潜り込んで手当たり次第に契約をし、あの洞窟の目玉ともいうべき破邪の秘法を手に入れそろそろ上に行こうかと考え出てみればあ・・・・フローラ女王陛下の後姿を見て思わず隠れてしまった・・・・情けないですね~私は。

マァムもレオナ姫もいたのだから、死んでいた事に関してマァムに責められてでもそのまま彼女の前に出て一切を説明していれば・・・・言っても詮無い事ですが。

その後をこっそりと付けて秘密砦の外で―彼ら二人―に見つかって一人に物凄く殴られとっちめられて説教されて・・・・・まさかあの男からそんな事される日が来るとは思わなかったが、話を聞けば納得するしかない。

ティファさんがとんでも無い事を引き起こす傍らで、とんでもない重荷を自身に課し、雁字搦めの中で己を殺しながらダイ達を守ってきたと言われては。

戦場は真っ二つに割れている。

アバン達は戦闘の邪魔にならないように端により、ついでにカール騎士達とフローラにも目線で付いてくるように示し、ノヴァ達の盾を突破遷都する魔王軍との激突が続いている。

「さて、長話をしているわけにもいきませんので単刀直入に。そして詳細は全てが終わった後で話すので質問も無しです。」
アバンの言葉に、落ち着いたダイ達はコクリと頷く。
この素直さがまたいいのだと笑いたくなるのをアバンは必死に抑えながら、生きていた理由とその後の自信を鍛え直す修行をしていた事、そして破邪の洞窟で秘法を手に入れる事に成功したので参戦しに来たのだと。
「ティファさんにはカールのお守りの事を知っていたので、生きていたら鍛え直して帰って来て欲しいと言われたのですよ。」
そしてなぜ自分が戻ってきた事自体に驚いていないティファの事もきちんとフォロー説明する。
「・・・・・確かに・・・あの時の先生は小物のハドラーにも負けてたし・・」
「・・先生と居たら俺達あそこまで必死に戦えていたか分からないや・・」
「おや?あっさりと納得しますか?」
自分で言っておいてはなんだが、ポップ辺りが癇癪起こすかと思っていたのだが、妙に納得をしている。
それはダイ達も一緒で、些か拍子抜けしそうになる程だ。
「いやさ、ティファ強いのにさ、前半ほとんど力使ってなくって・・・使われてたら魔王軍総攻撃来ただろうし、何より俺達ずっとティファに負んぶに抱っこしてたと思うんすよ。」
「そうだね。俺もそう思う。」
「ティファが後ろでドンと構えてくれてたから前に行けたのよね・・・ティファが前に出てたら私達はその後を追うだけしかしてないかも・・・」
ポップ、ダイ、マァムの目を瞠る成長ぶりに、思わず微笑む。罪と知りながらもそれでもティファに託したのは間違いではなかったのだと。
ヒュンケルも幼い頃の闇を抱えていたのが嘘のように消え去り、いの一番に自分に抱き着き何度も御免なさいと悔恨の言葉を繰り返す

中、自分の事を、心の奥底では慕っていたのだと言ってくれたあの言葉だけでもティファに感謝したい。
自分では取り払うことが出来なかった彼の闇に、ひびを入れてくれたのは間違いなくティファであり、そしてダイ達が溶かしてくれたのが容易に想像がつく。
周りを見回せば、クロコダインとチウとメルルもティファの事を抱きしめたいと、そわそわしているのが丸分かりで。
砦の外からずっと彼等も見ていた。皆素晴らしい、自分の時とは違うが、同じくらい素敵な一行を築いてくれた弟子達が誇らしくなる。
だが、どうしても言わないといけないことがある。
「さて、私に関する事は此処迄ですがティファさん、あなたはもっと自重する事を覚えなさい。」
静かで、そして重い言葉がティファに降りかかる。
「破邪の洞窟を出て数日、砦の外からダイ君達を見ながら貴女の足跡を追ってみました。
素晴らしいの一言では片付かない程の善行を積んでいる傍らで、貴女が引き起こした騒動も耳にしています。」
敵の使者と気軽に話すは、敵の魔王と意思疎通して気心知れている様にし、そして先程も似たような事をしている。
「貴女が敵の事であっても苦境を思い悩む程、優しい心を持っているのは私も知っています。
しかしだからと言ってそれを表に出し過ぎるのです。味方から見れば、敵を思いすぎる貴方は裏切り者としか見られない。仮に上に立つ者がそうでないと分かっていても、全体の士気を下げるか不和を生み出す者であれば処断せざるを得なくなります。
貴女の言動が、味方に不和を生み出す程の影響力があるのをもっと知って行動すべきなのです！」
ただの子供のいう事であれば、戯言とに苦い顔をされて終わる事でも、ティファにはそれでは許されない。
敵味方双方に多大な影響を及ぼし、彼女の一挙手一投足が注目の的である中での、敵との内通を疑わせるような言動はなされるべきでは

ないのだ。
その言葉はダイ達全員の耳に痛い。如何にティファの言葉に救われて来たからとは言え、だからと言ってあまりにもティファを好き勝手にさせ過ぎたきらいがあるのは自覚していた。
だがそれも自分達がフォローすればいいのだという甘い考えが、今日の不和を生み出したのだ。
「・・・・・すまねぇアバン・・」
じっと聞いていたマトリフが弱々しく謝罪する。
本来アバンが言った言葉は、自分が言わなければならなかった。如何にティファが優しいとはいえ、もっと自重と責任ある言動を促す様に諭すべきだったのだと。
アバンが生きていたのを知ってもさして驚かなかった。世の裏表全て知っている身としては、死人が生き返ったくらいでは驚かない。
驚かなかったがぶん殴ろうとはしたが。
心の弱い嬢ちゃんに負担を強いてきた事だけは許せなくて。それはロン・ベルクも同様であったが、察したティファが、泣きそうな顔でアバンにしがみついて守ろうとしたので、ロン・ベルクはアバンを馬鹿野郎と面罵した後戦場でミストを相手に戦っている。
まるで憂さ晴らしのようだが。
そしてマトリフは重症患者はノヴァの部隊が守っているのでダイ達共々アバンの話を聞いて色々と納得をし、そして自己嫌悪に陥る。
嬢ちゃんに・・・・ティファに厳しい事が言えなかった自分に。
「アバン!そんなバケモノに道理は通じんぞ!!」
「・・・・・セイン・・・貴方の非人間族に対する嫌悪は否定しませんが今の言葉は赦しませんよ?」
落ち込むティファとダイ達の姿を見てもどうとも思わない元・同僚の態度に、アバンは溜め息を吐く。
カール騎士団の中堅セイン。
彼は先の大戦で一族郎党をモンスター達によって滅ぼされているという経緯があり、彼がここまでの態度をとるのかを自分も知ってい

る。
だが、ティファをバケモノ呼ばわりして赦しておけるかどうかはまた別問題である。
確かに今のティファの姿は―ちぐはぐ―としている。
肌も瞳の色も魔族だが、耳は丸いままで半魔とも言えない奇妙な容姿に。
だが、中身は心優しい子供である彼女をバケモノ呼びは赦さない。
フローラ様が止めて下さると期待したのですか・・・・・この局面に来るまでのティファさんのアレコレですっかり自体がややこしくなりましたか。
今フローラ様が押さえつけても、効果はないでしょうし、何よりも彼女自身がすっかりティファさんを持て余して、どうしていいのか分からないのでしょう。
アバンとしても、ティファがフローラ達に頼んだ事やしてきた事に頭を痛める。
確かにティアの支援でカールにも恩はあろうが、いきなり宿敵も助けて下さいは無さすぎる・・・・・そんな事を理路整然に考え、正しい事であればと平然と受け入られる者など数名しか思い浮かばない。
一人はマトリフ、もう一人はブロキーナ老師、そしてティファだけ。
それについては後で説教するとして、カール騎士団にも言わなければならない事がある。
「我等ファブニールの竜を討ちし大英雄の末裔足るフローラ様の・・・」
「いい加減にしなさいセイン。」
カール騎士団達の不満を一身に背負い、何も言い返せないダイ達に向けて更に言い募ろうとするセインにアバンが止める。
「なんだと!お前迄・・・・いい加減にその悪竜を降ろせ!自分達で討てないのであれば俺達が・・・」
「そもそもが間違っているのですよセイン。」
「・・・・・なんだと?」
アバンの言葉を受けたセインは、抜剣しながらアバンに迫り問いただす。

「・・・俺の・・・・俺達の何が間違っているのだアバン？」
「ティファさんの言動の酷さを赦せとは言いません。それだけの事を彼女はしてきてしまったのですから。」
アバンもティファの悪いところは容赦なく突く。
それに気をよくしたセインは次の言葉に凍り付いた。
「貴方方が言っている―悍ましいファブニールの竜殺し―を理由に、ティファさんを処断しようとしているのが間違っていると言っているのです。」

アバン先生の言葉・後編

―私―は一体何という悍ましい事に手を貸してしまったのだろうか・・・後悔してももう遅い・・・・彼の純真なる竜を、無知蒙昧なる私の薄汚い策謀で殺してしまったのだから。

知らなかった

彼の竜がどれほどあの―悪女―を愛していたのかを

知ろうともしなかった

悪女のもとに行く前に、彼の竜から何か贈られていなかったのか、悪女の侍女にでも聞けば・・・

―手紙―を読めば、彼の竜と話し合い、其の恋が決して実らない事を、笑顔を見られることなど無い事を話し、純真なる竜を殺さずに済んだものを・・・

あの悪女は彼の竜からどれ程の物を貪ったのかを、部屋から出したその瞬間から嬉々として私に話してきた。

眩暈がした。

害されているなどとは程遠く、なまじな貴族の子女よりも丁寧に扱われ、そしてそれがために彼の竜は私は計略にまんまと嵌ってしまった。

知らなかったから、姫を攫い、兵達を傷つけた竜は悪しき竜だとしか考えなかった。そして力の無い私でも姫様をお救いし、国王と民たちの憂いを晴らすのだと、自己満足を果たす為に酷い事を平然とした。

彼の竜が―人間―の若者の様に、ただ恋をしたなどと思いもしなかった・・・知ろうともしなかった。

―無知―とはかくも罪なる事か

悪女は彼の竜から財宝の在りかも聞いたと王に告げ、宝はそのまま彼等の懐に。

以て私は悪女の夫にさせられた。

世間的に―竜を倒した英雄―を手放さず、その名誉をもって小国であった我が国をのし上がらせる為に、―初代竜殺し―の私に兵を率い

させ、怯んだ同じような小国を次々と併呑して行く様に、私は何度死にたかった事か・・・私は唯、国の父たる国王が嘆き悲しんでいると聞いたので―何とかしたい―と思っただけであるのに・・人殺しの罪人へと落ちていきながらも、子が出来彼等彼女らを守る為にも生きなければならないこの身が呪わしい・・・結婚をする時の条件に、私は一つ王と悪女に破れぬ約束をさせた。

誰かが破れば自身が死ぬ呪いの約束を

初代竜殺しは流れ者、勇者になった後は何処ともなく消えたと偽りを話し、王城内の貴族・騎士達以外には自分の事を知らせない事を。

謙虚で奥ゆかしいと悪女がしなだれかかってきた時には斬りたくなる・・竜よ、この血まみれの悪女の何処に惚れたか、狂うてしまったか・・・

悪女と王達は知ってしまった

竜とモンスター達の死骸が珍しき素材になる事を。

国を大きくする傍らで、次々と罪なきモンスター達を狩りつくし、殲滅させれば他の国を飲み込みまた同じ事をする・・・・これもまた私の罪か・・・

私はこの悔恨を書に記し、いつか子孫たちに伝えて欲しい。

初代竜殺しの英雄は唯の罪人であったと・・・・・

おいで―アバン―

どうなされましたか父上？母上と兄君・姉上たちがお待ちですよ

よい、待たせておきなさい

はい・・・

アバン、お前は今年で十五になり分家を作るのは知っているね

はい！父上の様に立派な騎士王に・・

ならん!!!

ひ!!

アバン、父は罪人だ、同じように罪人になるな、お前は、お前達は剣を取って戦うな

・・・・父上？

上の子供達は悪女の教育でもう腐ってしまっている。皇太子も他の三人の王子・姫も利を貪る事しか頭にない。
だが―五番目―のこの子を産んだ時―スペア―はもういらないと悪女が放り出し、私の手元で育てられることが出来た。
世間的には贅沢であっても、それ以上貪る事は罪だと教え込み、知らぬ者達とは分かりあえると思うまで礼節を以て話をするように仕向け、何よりも慈しみの心を育てる事に傾注したのだが果たして・・・
アバン、お前の家名は―ジュリアル―とし、長子には必ずアバンと名付けなさい
・・・・其れは我が国の言葉で―継いでいく者―という意味を長子に付けろと？
そうだ、父の罪を記した書をお前に与える、父の罪を知りこの国の罪を知りお前が許せないと思えば国を立ち去ってもいい、それ程の罪を私は犯したのだから・・・
父上・・・分かりました、この書物お借りします

そして―私―は父達の罪を知る
こんな事をこれ以上続けていれば、長くとも数百年は持つまい。
―憐れな竜―を討ったが為に、この国は貪る国になってしまった・・・父上、貴方の罪を、我が一族に継承させましょう。
そして彼の憐れなる竜の手柄話を盾にして他者を脅かすものあれば我等ジュリアル家が断罪しましょう。
其れはそもそもが罪からなる忌まわしき事なのだと・・・・貴方の名声はその時地に墜ちましょう。
されど父上、貴方にとっては仮初の名誉の為に無辜なる者を脅かされる方が許せますまい。
来なさい―アバン―
父上これは？
私が十五の時に私の父から預かりし書だ。そこには―罪―が書かれている。
罪ですか？

そうだ、私は父からこの書の罪を知りこの国を嫌ったならば出て言っても構わないと言われた
あのお優しいおじいさまがそのような事を!!
そうだ、しかし私はあえて別の事を言おう、この罪を我ら一族の長子が受け継いでいくべきものだと、もしもお前がこの国を出る事を望んだ時がお前の死ぬ時と心得よ
・・・そして弟が―アバン―に?
聡い子だ、其の賢さならば父の言葉と私の言葉の意味を知ろう、地獄を覗かせるが共に歩んでやることは出来る、出来れば耐えてくれ・・・・・

連綿と続く―アバン―達の遣り取りのはてに、五百年の後に悪女と初代勇者が拡張した国は一度滅んだ
小国の連合王国と、何故かモンスター達が彼等を助けるような動きを見せ、精霊達からも見放され、―地上―の一切から見放され、滅ぼされた後は忌み嫌われるように広大な土地が捨て置かれた。
全てが風化するのに長い時のはてに、彼等の末裔が再び荒れはてた土地を開墾し、悪女の血統ではなく初代勇者の血を色濃く残した起こしたカール王国は、代々騎士王を輩出しながらも周囲の国と摩擦を起こす事の無い穏やかな国として今に至る。
初代勇者は罪を消させないために敢えて表立って言う事は無くそのまま逝去した為、罪は受け継がれずに偽りの英雄譚だけが受け継がれる中、亡国の憂き目にあった時、王家と共に必要な物数点と―原罪の書―を持って国を堕ち、王家に従いながらひっそりと原罪を継承する。
何時か偽りの英雄譚で無辜の者を苦しめるものあれば断罪に処する事を誓って。
たとえそれが我らが仕える王家の者であれ誰であれ、億光の年月が経ちれども、我等―アバン―がいる限り、偽りの英雄譚を振りかざす者は赦さない。
原罪に苦しんだ初代勇者、我らが偉大なる高貴なる先祖の為に。

知らない事が、無知であることが罪であると知って苦しんだあのお方の為にも
初代勇者の国が滅び、幾年月のはてに誕生したカール王国内ではジュリアル家は学者としての功績を認められ―三代前―にジニュアール家へと名を変えた。
初代様から受け継いだ名ではあるが―アバン―が残ればそれでいい・・・・争わず子孫を確実に残せるように、そして無知でいない為に我が家は代々学者として生きて来たのですが、私が勇者になったのも何かの因縁を感じる。
現にこうして―竜の娘―を守る為に、初代勇者の偽りの英雄譚を振りかざす者を止めることが出来るのだから。
「・・・・嘘だ!!我等は正しい・・・・」
「疑うのであればこの戦いに勝った後、我が家に来なさい。その書物には初代勇者が―二度―しか使わなかった判が押されています。」
「・・・・・そんな・・・・」
初代勇者の悔恨から始まる連綿と受け継がれた罪の書を保管し守り通してきたジニュアール家の言葉には、疑う事すら許さない重みが込められる。
フローラ達現王家も知らず、されど初代勇者の判は今でも国宝級の者として封印魔法で保護をし遺されている。
其れは現在の書も同じであり、判を見ればすぐに明らかになる。

「フローラ様達王族にとっては不快なる一族ではあるでしょうが、―我等アバン―が受け継いできた初代勇者様との約束を今果たしましょう。
セイン、初代勇者は―無知―を憎んだのです。分からないから知らなくてもいい、殺しても良いという短慮に奔った事を嘆き悲しんだのです。

人間すべてが善でない事にもお嘆きになり、其れでもご自分が得た教訓で諍いの芽を摘む事を選ばれたお方。
功を述べるならばそちらだと私は思うのです。己の恥を残してでも子々孫々が正しい道を歩ける指標となる事を選ばれた事こそが。」
真実を知り、打ちのめされた。
セインも周りも愚かでは決してない。
きっと、―アバン―の話は真実だ。
ジニュアール家になる前からかの一族の長子は必ず―アバン―を名乗り、不幸にも幼くしてなくなればそれまで別名であった弟をアバンとしてきたのをカール王家に仕える者は誰でも知っている。
彼等は継いできたのだ・・・・・全ての罪を、誰であれ偽りの英雄譚を振り回した愚か者を断罪に処する覚悟を・・
フローラすら青褪める中、すすり泣く声が幽かに聞こえはじめる。
ファブニールの竜の後の壮大で悲劇的な話に黙り込んでしまったダイ達も辺りを見回せば・・・
「めんなさ・・・・ごめんなさい・・・何も知りもしないのに・・・・酷い事言って・・・ごめんなさい・・・」
「・・・・ティファさん・・・・」
泣いていたのは偽りの英雄譚を振りかざられたティファであった。
私も・・・・無知だ・・・・無知なのに初代勇者の事を酷い奴と決めつけて酷い事言った・・・アバン先生はどんな気持ちで・・・・
受け継がれた時の長さと思いの重さを別の事で知っているティファは、誰よりも打ちのめされた。
彼等の高潔なる思いを知らず泥を塗ったのが申し訳なくて恥ずかしくて・・・・偉そう言った自分が許せなくて!!
カール騎士達が青褪め沈黙する中、申し訳ないと泣くティファに、セインは何か面罵してやりたいが、言葉が出ない。
「セイン、初代勇者の思いを知ってもまだこの子を殺そうとしますか?」
「五月蠅い!!そいつは!!・・・・そいつは・・・・」
「この子は貴方の家族を滅ぼした者ではありません!!!」

「!!」
「この地上にに生きるモンスター達も魔族さん達も半魔の方々も！あそこにいる魔界の者達も貴方の家族を殺した者でもありませんよ!!!
魔王軍を倒すはあくまでこの地上を救う為!!いつまで己の憎悪に浸り傷口を嘗めまわして時を過ごせば気が済むのですかセイン!!!」
断罪の声がセインを打ちのめし、カール騎士達の頭上に降り注ぐ。
地上を救う事と、私怨の為の鬱積を晴らすのを同一視する事をアバンは冷ややかなる声で罪だと処する。
「貴方方もです！この子の罪は確かにある！だがこの子は殺されなければならない程の罪をいつ犯したか!!フローラ女王陛下、お答えください。
ティファは、死ななければならない程の罪を犯しましたか？」
親しき者とても逃がさないその有無を言わさない声に、聞いているだけのダイ達の背筋すら震わせ、当代一の鬼謀を策すマトリフをも震え上がらせる中、フローラは毅然と顔を上げ答えた。
「料理人のティファは確かに地上軍に不和を齎せるほどの事をしました。その罪は今すぐ態度を改める事をカール王国女王フローラが命じます。
そして・・・ティファ。」
「陛下!!」
「そのような事を!!!」
「・・・・・・フローラ様!!」
ティファの罪を今すぐ改める様に宣告した後のフローラの行動に、騎士達は狼狽し、ティファと憎悪に彩られながらも正しき儀を知ってしまい心中が混とんとしてしまったセインまでも慌てさせた
セインとて、アバンの言葉が正しいのは分かっている！だからと言って、直ぐに受け入れれる訳もなく、どこかでまだティファを罵倒する心が自分を浸食しようとしていたが、其れすら吹き飛ぶことをしたのだ。
「貴女の恩を仇で返そうとした我等を赦してほしい。」

これまでの受けた大きすぎる恩を忘れ果て、殺そうとした自分のあさましい心根を謝すために、フローラが一介の平民に頭を深々と下げたのだ。
「顔を上げてくださいフローラ様!!」
「ティファ・・・」
アバンの腕から飛び出たティファは、泣き顔を更に歪ませフローラに駆け寄り必死に言い募る。
「ティファの方が悪いの!!父さんや・・・必死になってハドラー達も受け入れてくれた女王様達の事を考えなかったティファが悪いの!!ごめんなさい・・・ごめんなさい!!!」
「ティファ!!」
泣きじゃくりながら謝るティファを、フローラが抱きしめ、そしてある言葉を思い出す。
―アレは幼い子供と同じだ。善悪よりも、助けたいと思いから助けるという幼い子供と同じだ。話す知識と雰囲気に騙されるなよフローラ。あれが何を言ってもやっても頑是ない子供が仕出かす事だ。悪いと思えば速攻で拳骨落として叱れよー
この場いないハドラーからの忠告を忘れ果て、話す知識と雰囲気にまんまと飲み込まれ怖れ・・・・・無知とは本当に怖いものですねー
アバン―
無知でいてはいけない
「ティファ・・・・地上を共に守ってくれますか?」
「・・・守る・・・・だって、その為に私は今まで・・・」
「そうでしたね・・・・そうなのですよね・・・・・ごめんなさいティファ、貴女の外側だけを怖れて・・・また私達と共に地上を守りましょうティファ。」
「はい・・・はい!!」
偉大なる女王の力強い言葉に、冷え切ってしまった騎士達とティファの心を氷解していく。
彼女もまた、偉大なる初代勇者の名に恥じない末裔であり、無知でいる事を怖れる事も逃げる事無く認め、己を改めんとする高潔なる志

を持ちし王であり、その瞬間、大魔王とキルがファブニールの竜の話に仕掛けた罠は全て食い破られた。
一つはティファが地上で正しいと語られる英雄譚を信じない異端者である事の暴露
二つ目はファブニールの竜の後継たるカール王国の騎士達の不快感をあおり不和の芽を撒いた事
三つめはその不和を育て、ファブニールの竜の英雄譚を誇りにする騎士達を暴発させる事
四つ目は其れにより起こってしまった不和を沈める為に、自ら犠牲になる事を躊躇わないティファを自死させる事。
そして五つ目に自死したティファを見て崩壊するダイ達を前に、キルが自死したティファを腕に抱きながら、ファブニールの竜の後日談たる原罪の話をぶちまける。
大魔王はファブニールの竜を殺した男がどんな生涯を送り、それが後の世の自分の邪魔になる勢力になるまで国家を成長させる男かどうかを偵察させ偶然に知った事。
こうして各王室の罪や弱みを地上進行時に使えないかと細かく記載し保管し、地上総攻撃前に念入りに各王室の弱点と弱みを突く為に再調査させて浮上した話を、最終決戦時に仕掛けて来た。
もしもアバンが現れなければ、五重殺のこの罠でダイ達諸共カール騎士達も戦意喪失して楽に勝てる筈であった。
たった一人の男の為に念入りに仕掛けられた罠は噛み砕かれ、不和までいったティファとカールの結びつきを確かなものにされた。

「生きなさいティファ。貴女は大勢の人達に頼みにされているだけはなく、こうして愛されても居るのです。
ダイ君をはじめとした大勢の者達が貴女を愛してやまない事を、罪と同じくらいに自覚しなさい。」
この大戦の中身すらも変える程の・・・」
「先生・・・」
二人が落ち着いた頃合いを見計らい、アバンがまたもやティファを

抱き上げ、心の底から心配しているダイ達を見るようにティファを促しながら言葉を贈る。
この大戦の最終決戦の場に、不思議と憎しみの念が薄いのはティファのせい。
怒りでも悲しみでもなく只々守るというティファの単純な思いが、魔王軍は魔界を、地上軍は文字通り地上を守る、ただそれだけの単純でそれが故に引けない戦いへと変わってしまった。
その強い思いが何処へと繋がるのか誰にも分からず、故にこそ先程の暴発へと繋がったのもまた事実。
「貴女が歩く道が何処に繋がるのか生きて歩いて指し示しなさい。」
ティファが二度と己を殺さない為の言葉を何度でも贈ろう
「生きて行くのですよティファ。」

ティファの言葉・前編

「はい。」

たった一言、たったの一言だった。

偉大なる先代勇者がティファに対して贈った言葉の返答は、本当にたったの一言であった。

だが、ティファを知る者達にとって、その一言のが万金に値する、ずっと欲しかった言葉であった。

ティファはまるでこの大戦の為だけに生きようとする危うさが、そこかしこで見てとれていた。

だからこそティファを思う誰もがティファに言った。

今も大切だが未来を夢見てその先を歩く事を。

散々他者に歩ける道を用意し、歩きやすいように整えてきてくれたティファは、いつも自分だけが歩く中に入ろうとうせず、見送ろうとうしている様に見えていた。

怖かった、恐ろしかった。

この大戦が終わる頃に、ティファは自分達だけをその先に送り出して手を振って消えてしまうのではないかと！

だが、アバンの言葉に返事をした。

今まで似たような事を言われても透明な笑みを浮かべ沈黙してきたあのティファが、たった一言であってもその言葉を肯定したのだ。

・・・・・皆が私の事じっと見てる・・・・何となく理由分かるけど恥ずかしい・・

私は今までずっと目を向けてこなかった。自分を―ティファ―を

生きるという事を。
確かに十二年の年月は生きていた。バーン大戦の為だけに、起こる不幸を少なく、最後には―皆―が笑っていける世界にする為に―ティファ―としての人生を歩んできたとは到底言えない生き方を。
本当だったらバーン大戦の事やその事を考えながらでもティファとしての人生を生きることは出来た筈なんだよ。
お洒落して、恋をして、大戦関係者以外の身近なお友達を作って愉しく生きてその先を望んでとか・・・・自信がなかった。
お洒落している間に取り返しのつかない何かを見落としているのではないか
修行しなければ強大な敵と戦えないのではないか
でも一番の理由は、話をすればどこかで襤褸が出て、仲良くなれたお友達に普通と違うと言われるのが怖かった
ずっと・・・・怖かった
何時か普通ではない自分が、親しき人たちに恐れの目を向けられるのが
我武者羅に守る方が楽だ、何かを課して突っ走っている方が楽だ、装っている方が楽だった・・・・今までは・・

「先生・・・」
「何ですかティファ?」
・・・・先生もう私に―さん―付けてない・・・・・・何か・・・・嬉しいし気恥ずかしい
「先生に眼鏡お返しします。」
「おや、その眼鏡は私が力を付けたのを示さなければ返してくれないと言っていましたよね。」
「う!!・・・先生悪趣味です・・・・」
あぁ!偉そう言ってた数か月前の自分ぶん殴りに帰りたい!!先生も人が悪すぎる!!
ニカっといい笑いしながら私の反応楽しまないで!!
「・・・・・じたばたと足掻いて帰ってきてくれた時点で返すつもりで

した・・・私はもうこの眼鏡から卒業したいんです。」
「おや？」
「んとですね・・・・これを付けて先生みたいにしようとしていましたが、先生帰ってきて・・・だから・・」
「・・・・偽物は不要と言いたいのですかティファ？」
「う!!違います!!だからおっかない声出さないでください!!」
二人の遣り取りにダイ達はハラハラとする。
アバンは徹底的にティファの―悪い事―を潰す気満々のようだ。
軽率な程の敵味方無しの態度に、そして己を羽毛よりも軽んじるティファの悪い癖すらも。
あまり厳しく言ってほしくないと、漸く戦場が一段落しそうなので竜騎衆達にティファの側に居て欲しいと懇願されたバランも息子共に、様々な事から娘を守らんとしてくれている恩人のアバンをハラハラとしながら見守っている。
息子に生き残れる力を与えてくれ、こうして娘の全てを救わんとしてくれている偉大なる先代勇者だが、あまり厳しすぎないで欲しいとつい親心が出そうになるのを我慢して押さえつけながら。
「あう・・・料理人の看板は下ろしません。上に行った直後とその後暫くは罠と敵兵達との戦闘になるでしょうが、合間を見てご飯食べさせる予定ですから。」
料理人は、最後まで一行と共に行動を共にし、どのような状況であれ料理を出す。
其れがティファが自分で定めた料理人の定義の一つ。
「それでも、―導く―料理人はもういらないかと・・・」
その言葉の後、ティファは一旦言葉をきりダイ達を見回せば、ティファの言いたい事が分かったダイ達は力強く頷き、一人ずつアバンの前に出る。
「俺達はもう自分のやる事が分かっています。俺は最大の敵大魔王を討つためにここにいます。」
「俺は一行全員を纏めながら全員で大魔王に辿り着く方法を考える。」
「そしてポップが決めた事を」

「俺達は十全の力で実行して全員で勝ちに行きます。」
「「「「この大戦を全員で勝つ為の全てを料理人のティファから授かったから」」」」

・・・・・見事です。
心・技・体の全てを兼ね備えた自分の弟子達を、アバンは愛おし気に見まわす。
自分だけでは決してここまでの子達には育てられなかっただろう。ティファが、この子達の良さの全てを表に出してくれたおかげだ。
クロコダインとチウも力強く頷き、メルルに至っては涙を流してティファの変化を喜んでいる。
本当は優しい子のヒュンケルの心の闇を払えず、高い能力と勇気を心の底に持ちながらも表に出してあげられなかったポップ、強さと優しさを兼ね備えたが故に自己に責任を一身に背追わせようとしていたマァム、一国の跡取りとして砕けた態度を取りながらもどこかで他者と一線を引いていたレオナが、ダイとティファに出会い、ダイの天真爛漫さとティファの深い優しさに包まれ、素敵な一行を作ってここまで来て・・・なんという優しい笑みをみんなが浮かべている事か。
「先生、私も・・・・ティファも皆の中に入って歩きたい・・・・だから・・・」
「この―眼鏡―を確かに返してもらいましょうティファ。」
「!!・・・はい！」
導き手を本来の下に、私も歩いてみたい・・・皆と一緒に・・・・・・でも難問が出来た・・・
「あの・・・でも・・・・・私大戦以降何していいのか・・・・・」
ずっと考えた事が無かった・・・・そもそもが、―この後―やりたい事して私生きていられるか・・・・勝算は上がったけど不安だ。
私の魂が大魔王級なら、生き残れる要素がぐんと上がっただろうけど・・・とにかく分からない。
生き残れた後何していいのか・・・
「そうですか・・・・其れはゆっくりと考えていきま・・・」

「ティファ!!!!」
その事は追い追い考えましょうという言葉を、戦場でティファの言葉を聞きつけたノヴァがダッシュでやってきた！
行ってこいとガルダンディー達が送り出したのだ。
戦場は支えるから、ティファの幸せをお前が守る宣言して来いと。
「今日この戦いに勝ったら明日教会に行こう!!!」
「はい⁉・・・・・ちょっとノヴァ!!」
「大丈夫！男子は十五にならないと結婚できないけど!!女の子は十二からでも結婚できるから！
一緒に僕が君とずっと歩く!!だから安心して!!」
・・・・・・これってまさかの戦場プロポーズ⁉
ノヴァの言葉に、アバンとティファとカール騎士達―だけ―が固まった。
戦場では戦っているのでそんな事に構っている暇は・・・・作りたいというのが双方の心に燃え上がる!!
ティファ達の味方は若き二人を祝福する為に！
敵はティファ様に触るな下がれ下郎者と、其れは主と親友の者だと内心で叫びまくっている―某影―ばかり。
ダイ達に至ってはそうすべきだと固まるティファにやいやいと催促する！
「そうしなよティファ！先生!!ノヴァはとってもいい人で俺にとってもお兄ちゃんなんだよ!!」
「ティファ！ノヴァとだったら絶対に幸せになれんぞ!!」
「ティファをお願いねノヴァ!!」
「ノヴァ！娘を頼む!!私も竜騎衆達も其方とティファを全力で守る!!
ディーノもレオナ姫其方も・・・・もうこの場にいる全員丸ごと守るぞ!!!」
「明日か・・・・俺とエイミも明日行くか？」
・・・・・ちょっと待て・・・・
「・・・・ヒュンケル？今何と言いました？」
ノヴァとティファを全力応援団の中に、ぽつりと一言違う言葉が

入ってた・・・
「お！ヒュンケル達はそうしろよ。俺はやっぱメルルがも少し育つまで・・・」
「ちょっとポップさん!!!」
「ちょっとポップ君！言いたい事分かるけどストップよ!!!・・・けどメルルもそうだけど私もマァムも三年待った方が・・・」
・・・・・ちょっと待って、これ何の話になって来てるの？何を三年待つの？
メルルさんなんでそこで赤くなってるの⁉
「・・・・姫様、皆何の話して・・・メルルさんとマァムさんは何を赤くなっているのですか？」
ティファはこの十日間のダイ達の―恋人進展―を全く知らない為に、爆弾発言を聞く事になった。
即ち
「あら、私達が子供産むにはまだ早いから、十五よりもしっかりと―色々―と育った十八の方が良いと思わない？」
・・・・・・何ですかそれは!!!
「ちょっとレオナ!!」
「いくらなんでもストレートすぎます姫様!!」
「え？だってメルルもマァムの好きな人の子ども何人も欲しいって言ってたし？」
今更何照れているのとしれっとしているレオナであったが、爆弾落とされさしものアバンはフリーズ起こし、ティファも衝撃で眼鏡割れる思いがした。
ちょっと待って！恋人としてのお付き合いすっ飛ばしていきなり子供云々てどうなってるの⁉
ファブニールの話を直接アバンから聞かされたダイ・ポップ・ヒュンケルと、戦場のど真ん中であってもティファとダイに危機が及んでも対処できるように聞き耳立てていたラーハルト達とロン・ベルクは、神に感謝した。

神よ！自分達が好意を寄せた女性達が素晴らしき者達であることに感謝します。
ファブニールの竜の悪女のなんと酷き者か!!そんなのが目の前にいたら全力排除したくなる!!
引き換え自分達の側に居る女性達は、皆優しく賢くそして強さを内にも外にも秘めている素晴らしき者達ばかり。
其れはバランにとっても同じであり、同じ姫であっても太陽の様なソアラを思い、出会えたことに再び神に感謝していたほどだった。
おそらく彼女達がいなければきっと・・・
「俺達全員女性不振になってたな！」
「うんうん。」
「その通りだな。」
「・・・・俺にもどこかにいい人は・・・」
「おっさんの男っぷりを分かってくれる人絶対いるって!!それよりも先生！結婚式先生も出てくれるよな!!」
「そうだ！俺のにも絶対に!!」
「ダイは俺達と合同だろう？」
「あ・・・そうだった・・・へへ・・・」
「うっかりだなダイは。」
「・・・・・あのさポップ兄・・・ジャンクさん達に結婚報告は？」
「あぁ昨日した。」
「はい⁉」
「昨日一日使ってルーラであちこち飛び回ったんだよ。敵さんももう俺達待ち構えるだろうから偵察もさして意味無いだろうって。案の定監視していた敵さん引き上げてたな。
まぁきちんとばれないようにやったから大丈夫だ!!」
・・・・何が大丈夫なんだんだろう？大丈夫の意味ってなんだったろう・・
「ちなみにフローラ様もこの件には賛同してくれてるかろもっと大丈夫だ!!」

・・・・だから何が大丈夫なの!!フローラ様!!!??
「・・・・勇者とその一行は戦い終われば後は―碌な事しない―ので・・」
ティファとアバンのもの凄い視線に顔を明後日の方向に向けながら、冷や汗流してもフローラは懸命に弁明する。
そもそもが！大戦終わってもフラフラと旅をして自分から逃げ回るアバンが悪い!!
自分に好意を寄せてくれていながら、はっきりと結婚するとも、結婚しないとも言わず!!態度を保留したまま逃げたアバンにこの件だけはとやかく言われたくない!!
心当たりのあるアバンは強くは言えずフローラ以上に冷や汗流して押し黙ってしまい、ティファも皆幸せならそれでもいいのかなと許す気配を出した事でホッとしたポップがまたもや色々と教えてくれる。
「マァムの所も行ったぞ。」
「・・・は？」
「あぁそうかティファと先生は知んねぇか。実はさ、ラーハルトといい感じになれて、三年後に結婚しようって事になって、ロカさん達に報告しに行ったんだよ。」
「ウェ!!」
・・・ラーハルトよく生きてたな・・・・・いやそれよりも何よりも病人のロカさんにいきなりそれって・・
「・・・ロカさん血吐かなかった？」
「まぁ憮然としてたけどさ、戦いの最中でも惚れた女に子供産ませた俺がとやかく言えることは無いって了承してくれたぞ。」
その後に言い方があるでしょうとレイラさんにシバかれていたが、。ラーハルトの保護者として付き添ったバランが、ご息女との仲を認めて欲しいと言った後に、ロカはぽつりと、レイラはふつつかな娘ですがと笑って了承したのだと。
「・・・なんともロカとレイラらしいですね～。」
「そうなんすよ、そんで俺の親父とお袋で終了したんです。」
何とも明るい未来を築いているものだとアバンが微笑みかけた時、

またもやレオナが爆弾発言落とした。
「そういえばヒュンケル、昨夜エイミと二人きりになった後、エイミ私の部屋に帰っ来なかったけど・・・・・」
何ですと⁉

ティファの言葉・後編

あのガキ!!!絶対殺す!!アバンと同じ方法で魂までも殺し尽くす!!!
いつでも優美と優雅さを忘れないキルが、内心であっても口汚い罵倒をノヴァに向ながら、パレスの罠強化をせっせとする。
ティファは僕の者だ!!バーン様の寵姫だ！お前みたいな若造の者じゃない!!
何が明日教会に行こうだ!!そんなこと誰が許すものか!!!教会に行きたい？首だけにして埋めに行ってやるから安心して逝け!!!
殺気駄々洩れに全員ビビこく中、何となく気持ちが分かるので手伝っている全員がキルの思いに賛同する。
ティファ様に近寄るな害虫!!・・・・お前と魔王軍こそがティファによりつく害虫だと、知れば地上軍は満場一致して叫ぶのを知らぬが何とかである。
その地上も、パレスと同じくらいの物騒な雰囲気に包まれている。

「未婚のお嬢さんに手を出すような子に育てた覚えはありませんよ

ヒュンケル!!」
　レオナの爆弾発言はティファの中の倫理観に諸に直撃し、アバンの腕からダッシュで降り立ち鬼の形相でヒュンケルに迫り、見ていた全員が一斉にレオナをじろりと見る。
　この場で言わなくてもよかったじゃないか！おかげでヒュンケルが大好きなティファに叱られる羽目になってる!!
「落ち着きなさいティファ。」
　迫られてたじたじとなるヒュンケルを見かねてアバンが助け舟を出す。こうも言われてはヒュンケルも言いずらかろう・・・いや別にいう必要はないのですかね？
「・・・・・した・・」
「・・・・・した？」
「・・・・我慢した・・・・」
「・・・・我慢を？」
「・・・・・そういうのは・・・・結婚してからしないといけない気がしたから・・」
　した発言を聞いて地の底を這うようなティファの絶対零度の言葉に負けず、ヒュンケルは兜を取って片膝を付き、ティファの顔を見ながらきちんと話す。
「俺はエイミと結婚したい・・・・・良いだろうか？」
「ヒュンケル・・・・」
　師でもエイミの主でもエイミの両親でもなく、ヒュンケルはティファに同意を求める。
　自分の現在の母親たるティファに。
「ヒュンケル、絶対にエイミさんと貴方の二人で幸せになってください。それさえ守れれば、、私はどんな人たちが反対しても必ず二人を応援して守ります。」
「・・・ティファ・・」
「安心してエイミさんに結婚を申し込みなさい。幸せになりなさい。家族を作って守って笑って幸せになりなさい。」
「ティファ！必ず・・・エイミと笑いながら共に生きて行く・・・絶対

に俺が守る。」
「貴方ならきっとできますよヒュンケル。」
自分に何度も泣きつくヒュンケルを、ティファナ何度でも抱きしめ優しく頭を撫でていく。
其れが自分とヒュンケルとの約束であるかのように。無償の愛を何度でも与え続ける。
意外とヒュンケルは古風な所があり、ある意味でダイ達以上に純情であった。
昨夜決戦前に思いを遂げたいエイミを、あらゆる言葉で説得した。とは言え共にいたいのでエイミをシーツに包み込み、胸に抱きしめて一晩を過ごした。
柔らかい素肌が触れようものならば自制が効かないのは分かっていたので苦肉の策。それでも眠りに落ちるのには随分と苦戦した。
始めはどうして駄目なのかと泣いて縋るエイミにぐらつきかけたが、俺の意志は決まっている！
「・・・・ティファに俺とエイミとの仲を祝福してもらってからがいいんだ・・」
「ヒュンケル・・・そう・・・そうよね。そうしましょう。」
エイミはその言葉に物凄く納得をした。自分もティファさんに祝福してもらいたい思いがあるのだから。
・・・・そのまま帰ろうとしたエイミを引き留めるのにもまごついたが、今朝の目覚めは俺の生涯の中でも―二番目―に良かった。
一番は言わずと知れたダイ達に負けた後、ティファにレモンティーを初めて飲ませて貰ったあの時だ。

・・・・・・ヒュンケルはすっかりティファに懐いていますね～。
しかし不思議です。
「ティファもヒュンケルも随分と古式ゆかしい考えですね。」
実は二人が言った未婚云々は、平民や貴族であっても王族急でない限り考慮されずになってから幾久しく経っている。
単純にいつ死ぬかもしれない戦乱の世が続いたのと魔王騒動も相

まって、思いが通じるうちにというのが一般的になり、いわゆる出来ました婚も相当な家柄か余程の事でない限り誹られる事は滅多になく、ロカやレイラの様な事の方が多い。
「・・・バルトス父さんが、好きになった人は大切にしなさいと・・・」
アバンの問いに、ティファを抱えたままのヒュンケルは真っ赤になりながら答える。エイミは大切にしたい好きな女性なのだと。
それにこれは実はミストの影響も多分にある。
ミストは言葉こそ少ないが非常に礼儀と礼節を重んじ、慣例に従う事を是とし、弟子にも戦うだけのとりえのないバカに育つのを許さず、合間を見ては一般教養を教え込んできた。
話さないので専ら本だが、読みかけの時だけは言葉少なに教えた甲斐があり、漢字だ平仮名だカタカナだがないローマ表記と同じ文字なので一文字一音は直ぐに覚えさせたので上手くいき、結果教えた礼儀が数千年前の礼儀なので端々で古式ゆかしい戦士に育ったりする。
ちなみにティファの方は言わずもがな前世の記憶の方に引きずられ、未婚のお嬢さんに手を出したら駄目でしょうを地で行っているだけである。
それを傍らで聞かされたバランは耳が痛い!!
未婚のソアラに手を出し!あまつ父王に弁明も何もせずにソアラを攫って逃亡したという、今だからこそわかる最悪の事を仕出かしてしまったのだから!
あぁしかし、そのお陰で私はディーノとティファを授かれた・・・・後悔はすまい。私の残りの人生は、二人を見守ることに全てを費やそう。ソアラの分までも。
「ティファ、そろそろディーノ達をパレスへと・・・」
見守るだけではなく、楽しい時間を潰すのは忍びないが誰かが声を掛けなければ。
「はり!そうです、兄達そろそろパレスに行って・・・罠どう解除しよう・・・」
バラン父の言葉に一同はっとなる。

そうだった!結婚も幸せも、全ては勝たなければ訪れない!!
「ふっふっふ!罠は私に任せなさい!!!」
キルトラップ絶対に必殺技の域に至っているだろうと予測したポップとティファが頭くっつけて悩む前に、アバンの高らかな笑い声が響き渡り。デュワ!というおかしな声もばっちし聞こえた!!
・・・・どうしよ。先生尊敬してるダイとティファに見せたくない予感が!!
ポップとマァムとヒュンケルもよく知っている!このテンションの時のアバン先生は・・・
「・・・何すかその眼鏡・・」
お茶目な事をして楽しむときの先生だ・・・・なんだあのダサいぐるぐる眼鏡は!!
見てくださいダイを!先生の初めてのお茶目に唖然としてますよ!!あぁ・・この先生見てがっかりしないでくれよティ・・・
「可愛い眼鏡です!!!」
はい⁉
「そのぐるぐる模様とっても素敵ですアバン先生!!」
ホワット!!!!!
「そうでしょうそうでしょう!この良さが分かりますかティファさん!この眼鏡はミエールの眼鏡といって、可愛いだけではなくて隠し罠を見つける優れものなのですよ!!そうです、この眼鏡ティファさん掛けますか?」
「え!いいんですか?」
ちょっと待って先生!!そこで喜ばないでくれティファ!!!
「先生!!それ俺!俺が付けます!!俺が罠の場所見つけて指示出ししたいんで俺に下さい!!」
ナイスだポップ!!
アバンとティファ以外の慌てふためく者達心の声は満場一致した。
ティファにそんな妙な者掛けさせないでくれ!!お前の尊い犠牲は無駄にはせんぞポップ!!

「そうですか？でしたらこの罠を壊すドッカンハンマーは・・・」
「・・・俺が持ちます先生。」
「ヒュンケルですか、頼みますね。」
「はい。」
「それではティファさん、そろそろ眼鏡を返してもらってもいい・・・」
「・・・先生・・・また私に―さん―付けるんですか？」
「あ！・・・あぁ・・・」
「・・・・・寂しいです・・・・」
・・・やってしまいました・・・
しょんぼりとさせてしまったティファを見て、アバンは自分がやらかしたのが分かり思わず天を仰ぎ見る。
どうにもティファには意識して呼ばないと敬称を付けてしまう。
どうしても、ティファを尊敬する気持ちが先立ってしまい、ついついさんを付けてしまう。
其れが他人行儀だと、ティファを寂しがらせてしまうようで・・・
クイクイ
・・・ん？
「どうしましたかダイ君？」
「あ・・・やっぱり・・・アバン先生、ポップ達には君やさん付けないのに、どうして俺達だけにはつけるんですか？」
「・・・・・ダイ・・・貴方も嫌ですか？」
「・・・ティファも俺も先生大好きなのは皆と同じなのに、寂しいよ。」
ダイも意を決してアバンの服の裾を掴んで引っ張り、自分も嫌だと主張する。
ティファも兄の横に並び立ち、同じ様にアバン先生の服の裾を握ってじっと見上げる。
・・・・・瞳潤ませて見つめられるともう幸せで死にたくなってきます・・・
「分かりました。ダイ、ティファ、これからは二人に敬称を付けません。」
「!!はい!!」

「・・・へへ・・」
まるで宝物を貰ったように無邪気に喜ぶ二人にをアバンは優しく頭を撫でて、ティファに眼鏡を返してもらう。
「ティファが付けて上げます!!」
「お願いしますねティファ。」
「へへ・・・じっとしててくださいね。」
其れは王の戴冠式の様に厳かに、片膝を付いてティファが自分に眼鏡をかけやすいようにしゃがむアバンは、瞳を閉じてその時を待つ。
ゆっくりと、眼鏡が顔にかかる感触に身が引き締まり、耳にかかり—全て—が自分に戻ってくる。
導き手としての自分の役割全てが。
瞳を開けたて一番に目に入ったのは、満面の笑みを浮かべたティファの美しい笑顔。
「お帰りなさい、アバン先生。」

ラック＝バイ＝ラック

―眼鏡―は無事に先生に返せた。あるべきものがある所にあるのはとっても落ち着く。
「どうしましたティファ？」
「ん？・・・・やっぱり眼鏡のある先生素敵だなって・・・」
「・・・・おや・・・」
・・・何でしょうか？はにかむティファにドキッとするとは・・・・はぁ、私もこんなかわいい娘が欲しいですね～。
朝起きればおはようございますと言って、おやすみなさいのキスをしてくれる・・・将来はお父さんのお嫁さんになるのと言ってくれる可愛い娘が!!
・・・・全てが終わったら・・・・・フローラ様は私の事を待っていてくれているでしょう・・・

「先生!!先生ってば!!」
「・・・ポップ？」
「何ぼうぅっとしてるんすか？」
「ああ・・・いや失敬失敬・・・はぁはは・・」
勝ちましょう、是が非でも
良くも悪くもティファは味方の士気を上げまくる。アバンも絶対の目標に向かってダッシュする事を決意する・・・・なんじゃそりゃとはご愛敬。

ちなみに士気上げまくりのティファは先程からそわそわし、何か問たげにポップを見つめる。
さっきまでの雰囲気では聞けなかったが、今なら聞いても怒られないかな？
「どうしたよティファ？・・・・パレスに侵入するメンバーなら今決めたぞ？」
「ふぇ！・・・そっちじゃないけどそれも気になる・・・・最初からメ

ルルさん以外の一行全員？」
　べほちゃんも担当した人達の治療終えて、ヒュンケルの肩に帰ってきている。
「―ヤッホーティファ。今度は皆で帰るよ―」
　べほちゃんてどこかドライなんだよね。感動の再会とかよりも合理主義一貫してるって感じでそこが好きだ。
「べほも入れて、ダイ・俺・ヒュンケル・マァムとラーハルトであの疫病神のトラップ粗方壊して、お前が貸してくれた通信鏡使って、頃合いに呼ぶよ。」
「え～!!・・・・ティファもトラップ壊したい。先生はキルに相当目つけられたから分かるけどどうして私もお残り？」
「・・・・トップ狙いはお前だろうが・・」
「・・・・・分かった、けど半分行ったら知らせてね。」
「おう、分かった。」
　何時になく聞き分けの良いティファの頭をポップはわしゃわしゃと撫でまわす。
　銀の髪だろうが、黒髪だろうが中身は可愛いティファであってそれ以外の何物でもないとばかりに。
　ただ一つ、そろそろ着替えさせたい。
　白い服は、ティファの青い血をことさら強調させる為の演出の服で、さっさと着替えさせたいのだが・・・
「あのねポップ兄、聞きたいことがあるの。」
「ん？どうした？」
「ハドラー達どこにいるの？」
　その言葉に、アバン以外の全員がぴしりと固まり、ティファもそこから察してしまったと顔から冷や汗を流す。
　先生に魔王ハドラー助けてますを言ってなかった!!!
「こほん、ティファ、其れと皆さんも・・・実は私ここ数日カールの隠し砦の隅っこでお世話になっていました。」
　・・・・・ええええええ!!!!!!
　まさかのアバンのカミングアウトに、ティファまでも凍り付いてい

る隙に、アバンは全部説明した。
奇妙な服を着たブロキーナ老師とハドラーに見つかり、ハドラーには本気でボコられて説教をされた事を。
大方の察しはつく!!弱いお前があの冒険に付いて行ってもダイ達は中途半端な成長しかしなかっただろう!!だがな!全ての責任の重しをティファに背負わせるとは貴様最低だぞ!!!!
デルムリン島で再会したアバンの弱さにがっかりとしたが、死に掛けが生き返って後も弟子達のフォローを何もせず、全てティファに丸投げした事が一番許せなかった。
ブロキーナの様にふざけた格好とまでは言わんが、モシャスでそれとなく一行のフォローをする事くらいは出来た筈だ。
己の修行も大事なのは分かる。何せ本当にあの時のアバンは鈍ら以下だったが、だからと言えやり方が酷すぎた。
如何に強かろうが所詮は・・・否!それ以上に心も精神も幼く、世間の何たるかも知らないティファに、アバンの代わりにダイ達を託した事が罪だと断じられた。
お前は弱くなった事でその目すらも曇ったのだと言われた時、アバンはどれ程後悔しても尽くせぬ思いに打ちのめされた。
弱い事は罪だと、弱ければ何も守れないと散々偉そうに弟子達に言ってきた者がこの体たらくで、弟子達にもティファにも合わす顔が無いと。
打ちのめされた自分を、ハドラーは溜め息を吐きながら手を取って立たせてくれた。
二度と―アレ―を見誤るなと。
「・・・・・そんな事が・・」
「はい、そして私はティファの足跡と評判を全て各国を回って調べ尽くしてきたのです。」
二度とティファを見誤らず、足りない所を教え導けるように・・・・足りないものだらけで驚いたが、ティファはそれ以上の素晴らしさがある。
追々と教えて行けばいい。

「・・・其れで、先生にそれ言った後はハドラーどうしたんですか？」
「こほん、私が言いましょうティファさん。」
「あ、フローラ様。」
「ふふふ、間近にいたのに挨拶も出来ない薄情者は放って置いて、きちんと説明しますね。」
「み!!!」
・・・・・怖い！フローラ様夜叉になった!!!・・・・・先生頑張れ・・
あらゆる意味でアバンに切れたフローラ様、夜叉になろうともティファには優しく教える。
凍りつき、別の意味で沈んだアバンをうっちゃって。
「各地に巨大な柱が落とされたのです。」
フローラはティファが知っているかどうかは確認せず、話を進める方向で説明を始める。
遣り取りの時間も惜しく、早くダイ達をパレスに突入させる為だが、ティファにとってはありがたかった。
地霊がいないので柱が落とされてもいつも通りにしていたが、それを言ったら角が立つ事請負い。
黙って聞こうとしたその瞬間、悲鳴がティファの耳に届いた。

神子様助けて!!!
神子様!!死んじゃう!!!!銀色の金属の人達と銀色の髪の魔族が死んじゃうよ！
赤い髪の魔族と物凄く嫌な気配出したちびの魔族が銀髪の魔族の人殺しちゃうよ!!
赤い髪の魔族が銀色の金属の人を茨で雁字搦めにして!!
他の銀色の金属の人達も!!

・・・・この声!!!
死んじゃう!!!助けて！皆柱を守っている奴らに殺されちゃうよ!!
「あ・・・・・アル・・・シル・・」

「・・・ティファさん？」
「どうして柱に!!!」
「ティファさん!!」
「おいティファ!!!」
寸前まで大人しく笑っていた娘が、突如として厳しい顔になれば誰でも驚く。
だがティファは掛けられる声を全て無視し、戦場の一番端を目指して直走った。
あの声は！今の声は柱に張り付いている精霊王達の従者の声だ!!死んじゃうって！不味い!!広い場所・・・・あそこがいい!!!
「ノヴァ!!!今から私がする事―誰―にも邪魔させないで!!!」
「・・・ティファ・・・・了・・解!!!」
バキィン!!
氷の勇者の氷の吹雪が敵の一軍を凍り付かせ、ティファと敵の間に降り立つ。
「邪魔などさせない!!ティファのしたい事して!!!」
「うん!!!」
突然!!の事に、敵味方双方が何事かと訝しむ。それはパレスの玉座の間にいるバーンと、罠補強を全て終えて戻ってきたキルもまた何事かと注視する。
それ程までにティファの顔に焦り待見てとれる。そして思わぬことをティファがした事で誰もがティファに釘付けになった。
ズシャア!!!
何とティファは。己の両腕に爪を立て、青い血を大量に流し出す。
「ティファ!!」
「あいつ!!何を・・・・」
「繋がりし道よ！」
ダイ達がティファの行動に目を瞠り、飛び出す矢先に詠唱が聞こえた。
それに合わせ、ティファの青い血がゆらゆらと宙に漂い、其れは徐々に形を成してきた

「此方と彼方を結べ!!!」
青い血が空中に魔法陣を描きだす。其の魔方陣にマトリフ達は見覚えがあった。ダイ達を逃がしたあの魔法陣が、あの時とは日にもならない程の巨大さで空中に描かれて行く!!
「緑の蔦よ!茨の弦よ!!我の虜となりし全てのものを!我が眼前へと引き連れよ!」
ラック＝バイ＝ラックには二つの使い方がある。
一つは対象者をどこかに送る事
そしてもう一つが、対象者を自分の下に連れて来る事。
其れはバーンのラド＝エイワーズと同じ性質だが、距離が違う。ティファのラック＝バイ＝ラックが、ミストが言った禁術に近いと言わしめるその理由は、術者の力量次第では無制限の人数と距離を移動させられるバグにも近い技。
言ってしまえばマーキングしてある対象者を天界から魔界へと行き来させられる程の、まさに無制限の技。
ただそれだけに、術者にかかるリスクも高い。
身の丈以上の力は身を亡ぼす
まさにそれを地で行く究極ともいえる転移方法を、ティファは全力で行っている。
己の血を媒介にする事で術の底上げをし、―全員―を一気に呼び戻す!!
「ラック＝バイ＝ラック!!!!!」
物がつながる轟音と共に陣は完成したが、呼び寄せた者達は直ぐには陣から現れなかった。
当然か、一番遠いのはパプニカのバルジ島。だからといって!!
「おおおお!!」
手繰り寄せんとティファが両の腕に魔力を注いだ時、反動で体の皮膚が裂け始める。
「ティファ!!」
全てが尋常でないティファの下に、ダイ達が駆け寄りために行こうと走りだす。

あんな事をしてはティファが死んでしまう!!
しかし、彼らの前に氷の壁が立ちはだかり邪魔をした！
「ノヴァ!!」
「誰にも邪魔はさせない!!ティファの邪魔はさせない!!」
「ノヴァ!!」
ダイの叫びにもノヴァは動じずに黙ってティファとその他のもの達の間に立ち続ける。
ティファの言う事こそが、己にとって何よりも優勢すべき事だから。
バチ!!バシィ!!
・・血が溢れ出るな・・コンチクショウが!!
「散々私を翻弄した大魔王の魂とやらはこの程度か!!こんな事も成し遂げられないほどにか弱いものか!!!私の肉体と魂でありたいのならば!!この程度の事で音をあげるな!!!」
まさしく無茶苦茶な言葉で、道理なぞ無視した言葉を己の肉体に対して怒鳴り叱咤する。
散々自分と周りを振り回しておいて、術の一つも成就させられないとは情けないと、それに見合った働きをしろと叱咤し、血が噴き出るのもお構いなく魔力を陣に注ぎ込むティファの顔は、不敵な笑みを浮かべていた。
「禁術とまで名を上げしラック＝バイ＝ラックよ!!偽りなきその力私に示してみせろ!!!!」

訣別

其れは本当にきりきりで間に合った。
後ほんの少しでも遅ければ、彼等の誰かは死んでいた。
巨大な緑の陣から出て来て者達を一瞥したティファは、ダブル・エンチャントをえいしょうする。
これはいわば片手づつで別の魔法を同時に発動させると同じ原理だが、似て非なるもの。
本来高位のハイ＝エントを権能させるのは一つずつ。やれば肉体が持たないが、そんな事を言っている場合ではない!!
「我は守り人!守りの担い手!!我が加護の下、愛し児達全てを揺り籠の淹れるが如く守り抜け!!」

ジ＝アザーズ!!!!
陣から出て来てたヒム達はボロボロであった。
アルビナスは茨の蔓に全身を縛られ首を堕とされる寸前であり、フェンブレンは闘魔傀儡掌の糸で絡めとられ、ザンバーアックスで核を刺し貫かれる寸前であり、シグマもまた左腕と右足をに捩じり取られ、そして・・・
「ハドラー!!!!」
最後に陣から出現をしたハドラーもまた酷い火傷を負って陣から抜け出ても受け身を取らずに、何故か―ビースト君―に抱えられ墜落している。
超魔生物として耐火性が飛躍的に上がったハドラーがあそこまで!!
陣から出てきたのはハドラーと親衛隊の他に、彼等をここまで追い込んだ者達も追撃してきた。
メローネがアルビナスを、ダブルドーラとベグロムがシグマを、デスカーレとザングレイがフェンブレンを、ブレーガンがヒムを追撃し止めを刺そうとした瞬間に、ティファの結界が親衛隊全員を守り、ティファは落ちゆくハドラーの下に直走った。

「ハドラー!!!」
ダン!ダン!!!」
結界を多重で使うリスクで皮膚が破け血が出るのも構わず、雪白を顕現させ
「ガルヴァス!!!」
暗黒衝撃波を繰り出そうとしたガルヴァスに斬りかかる。
当然いとも簡単に避けられるのを承知で。斬りかかりすれ違いながらハドラーを救出する事こそが最大の目的。意識喪失しているハドラーを助けること以外頭にない。
其れはガルヴァスも見越した事であり、すれ違いざまにティファに耳打ちをした。
「銀の髪に金の瞳がよくお似合いですぞ―ティファ様―」
「ッ!!!」
揶揄するようなその声の気配で全てを察した。
此処にいる魔王軍全員が自分の本性を全て知っていた事を・・・でも!それでも!!
それでもいい!なんだって!その力がハドラーを助けられるならば!!!
心を決め動揺しないティファに、ガルヴァスは一瞬目を見開き、そして追撃をせず見送った。
動揺しないのであれば今技を放っても結界とやらで守られるだけだと。
事態を察したダイ達も、それぞれ駆け出し技を放ちながら落ちてくるヒム達の救出に向かう。
その技で敵の一人でも倒せればと目論んだが、ヒュンケルのブラッディ―スクライドを受けたダブルドーラは分裂しすり抜けさせ、ダイの大地斬をデスカーレの暗黒衝撃波が威力を殺し、他の地上軍の援護が始まる前にメローネの鞭が振るわれる打ち据えられた地面から茨の弦が伸び、混乱したところをブレーガンの氷炎の三節根が猛威を振

るい、そしてポップ最大の得意技のメラゾーマが・・・
「き～ひっひっひっひっひっひひ!!魔法など、我が糧でしかないわ!!」
「あの野郎!!!」
ガルヴァスに向かって撃った自身の魔法が、割り込んできた敵を中心に収束されていくのもさる事ながら!ダイ達一行の中で中身が腐りはて真っ先に倒すべき敵の一人、ザボエラである事にポップが反応する。
だが、ザボエラ自身に構う余裕がないとポップはすぐさま思い知る。
「喰らえ!マホプラウス!!」
其れは本来大人数に自分に魔法を撃たせ、威力を収束させた魔法を自身の魔法も上乗せして放つザボエラだけのオリジナル技。
これをしハドラーはガルヴァスとザボエラのタッグに敗北したのだ。
奥の手を如何なる時も最後までとっておくザボエラの用心深さで、ハドラーもその技を知らず渾身のベギラゴンをガルヴァスに向けて放ち、収束され返されたのを直撃していまったが故に。
放つ人数が多ければ多いほど威力が増すが、大魔導士の後継者たるポップの一撃であれば充分である!
「ポップ!!!」
「オオオオオ!!!」
ヒィィィンン!!!
ズガァァァン!!!
大魔王バーンのカイザーフェニックスにも届くメラゾーマがポップに直撃する前に、バランは素早く魔法とポップの間に滑り込み、左腕でポップを包み込みながら額の紋章を全開にした。
「バラン!!・・・・・助かった・・」
「怪我は・・・ないか。」
「父さん!!ポップ!!!」
片腕が無いとはいえバランの竜闘気は健在であり、魔法であればその威力を殺すことが出来る。

バランは躊躇いも無く、我が子達を守る時と同じ様にポップを守った。
この場にいる味方全員を守り抜く事を誓ったのだから。
「チぃ！命冥加な・・・・」
ガルヴァスが側に居るという安心感で、ザボエラは敵から注目されても平然としている。
バーンからはガルヴァスのアシストを命じられ、取り入るチャンスとここ一番の働きを・・・
「ハドラー様!!!ティファさん!!早くこちらにハドラー様を!!!!」
・・・・・・ザムザ？
「ザムザ!!!!」
「・・・・父上・・・・」
ボロボロのハドラーを見た時、ザムザの心臓は早鐘を打ちながらも頭の中で素早くハドラーに最適解の治療を模索しながらティファに早く来るように促した矢先、父に身釣りバツの悪い思いがした。
だが、不思議な事にそれ以上の感情を父に持つことは無かった。それよりもハドラー様の治療が優先・・・・いつの間にか本当に、自分は父に対する愛情は消えた薄情な息子になったのだろうか？
手柄を頭に描いていたザボエラは混乱をした。あれは死んだ・・・
「ティファ!!どういう事じゃ!!!!」
息子にハドラーを託し、雪白を肩に担いで自分達を睨みつけるティファに詰問する。
息子は・・・・ザムザはあの時!!
「・・・・私はザムザさんが死んだとは一言も貴方に言ってない。」
「嘘をつけ！お前は儂にザムザの言葉を!!」
「私は―超魔生物として灰になる前―のザムザさんの言葉だと言った。ザムザさんの今際の際（いまわのきわ）の言葉とは一言も言っていない。」
「あ!!・・・この！貴様は詐欺師か何かか!!!舌先三寸で他を丸め込み!!儂と同じ様な同類・・・」
「おやめください父上!!」

「ザムザ!!・・・・お前はどうして生きている!!生きているならばなぜ儂の・・」
「私はダイ君達の光の心に救われたのです!!争い他者を蹴落とし生きて行くしかないのだと思っていた私の心を彼等が救ってくれたのです!!その時より父上・・いえ!ザボエラの息子ザムザは確かに死んだのです!!今ここにいるは勇者一行を助ける変わり者の魔族が居るのみ!!!」
悲しみに震え、其れでもはっきりとザムザはザボエラに訣別宣言をした。
其れは以降は親とも事も思わず戦い合うと宣言した悲痛なる言葉であり、あのザボエラを愕然とさせるには十分であった。
あれは・・・・儂の、―儂だけ―の駒・・・・
自分を嘲笑う者が多い中で、唯一自分のいう事だけを聞く―便利な駒―・・・たかが駒が離れただけ・・・・なのに・・・・

そのままだと貴方は一人ボッチで死ぬ羽目になる
死ぬ瞬間誰も思い浮かばなくなるよ、それでいいの？
・・・るさい！五月蠅い五月蠅い五月蠅い!!!!
「この愚か者が!!!大勢も決しようとする事も分からぬ愚か者の駒など!!こちらから願い下げじゃ!!!
ズタボロになって死に掛けようとも助けるものか!!!!」
「何という事を!!」
「貴様!!実の息子に向かって言う言葉かそれは!!」
「き～ひっひっひっひっひっひひ!!甘い奴等じゃ！敵であったものを庇う愚か者たちが何を言おうが痛くも痒くもないわ!!」
悪口雑言を吐き散らし、地上軍の罵声にも痛痒を感じないザボエラを、ザムザは最早父の魂を救う術はないと嘆き、怒れるダイ達をアバンと共に宥めながらハドラーを治療し、ひょこひょこと近づいてきた―ビースト君―にも誰にも見られないように飲む様にと―ビースト君―こと老師に回復万能薬を手渡す。
柱をどうにかした方が良いのではないかと、決戦前夜に話し合わ

れ、老師とハドラーがタッグを組み、他の四本は親衛隊達がそれぞれ言ったのだが、柱を守護していた六大将軍たちに返り討ちに遭い、ブロキーナ老師は己の技がもう通じないと悄然としている。
「・・・老師様、きっと出番は来ます。気を落とさずに。」
「うん・・・そうだね・・・・もうひと頑張りしないとね。」
今まさに父親と訣別し、苦しむザムザに慰められたブロキーナは、己を奮い立たせ、ザムザもまたブロキーナの気遣いを感じて微笑む。
その光景すらがザボエラを苛つかせる。
そんな中でティファだけが、自分に憐みの眼差しを向けているのに微塵も気がつかずに

とっておきをくれてやる

・・・・あれはもう放って置こう。死ぬも死なないももう知らん。
珍しい事だけど、ザボエラの事はもう運命という奴に任せよう・・・
それよりもだ、上空で待機しているガルヴァスと、その周りに集まった五人が私の事見下してるみたいに見ているのがむかつく。
本当に珍しい事だが、ティファはザボエラに対する怒り全てが霧散していた。許さないと一度敵視すれば、滅多な事では気持ちが変わらない程のしつこさがあるティファだが、それよりも自分の事をニヤニヤとしながら見ている六大将軍の方が今は最優先だ。
・・・何を勝ち誇った顔してるんだあの五人？
ガルヴァスは相変わらず自分を警戒し見ている分には分かる。私敵で大魔王の邪魔ものだし。
それに比べて、特にあの青いガーゴイルが特ににやけている理由分かんないし・・
「お前は豪魔軍師ガルヴァス!!」
「お前達影の軍団が何故表に出て来た!!!」
無論元魔王軍のヒュンケルとクロコダインはその存在を知っている。自分達の手の届かない地区を担当すると一度だけ顔合わせし、そして二度とは交わらない筈の影達が・・
「はん！裏切り者たちが随分と馴れ馴れしく口を利くじゃないか!!」
空中でぴしりと茨の鞭を振るって小気味よい音を立てながら、妖魔将軍メネロがヒュンケル達を嘲笑い、ザングレイたちも似たように冷笑を浮かべ、常に感情を表に出さないデスカーレですらがはなで笑っている。
ガルヴァス以外の全員が浮かれているせいで。
超魔生物としての力の一端を移植された彼等は、飛躍的に力が向上し、何よりも防御力が高まった事でハドラーの親衛隊達に勝ったことが彼等の増長に拍車を掛けている。
クィーンアルビナスの相手をしたメネロは、アルビナスの最終形態

前の必殺技・ニードルサウザンドの猛攻の中をいとも容易く突破しながら、攻撃の為動きを止めているアルビナスを、茨の鞭で地面を叩いて発生させる茨の弦で雁字搦めにして捕えた。
シグマの起動力も、ランスで突いたダブルドーラが分裂した事に驚いたところを二つに分かれた手で足と腕を捩じり切られ挟み込まれ、ベグロムの剣が迫り、全身刃で捉えられないフェンブレンを、強化された暗黒闘気の糸でデスカーレが捕えブレーガンが止めを刺す寸前であった。
格闘タイプを自負していたヒムもまた、ブレーガンの三節根相手に苦戦し、自分の最大限の力を込めて放ったヒートナックルもヒートシュートも相手に当てられたがさしたるダメージにはならず、逆に威力を利用されたカウンター攻撃で体にヒビを入れられ右腕が切れ掛けている。
表の六団長達にも匹敵するとうわさが流れたヒム達に圧勝した事が、彼等の長年の鬱積を晴らすには十分であり、口を軽くするにも十分であった。

「噂の魔軍司令官様の親衛隊達も大したことなかったな！」
一番鬱積が溜まっているベグロムが口火を切った。
長い間、どこにあの凄き男バランの要素があるのだと味方から言い続けられていた彼にも言い分がある。
自分であいつの影の志願をした訳ではない！ただガルヴァス様と大魔王様に命を受けたからそうなったのだと。
しかし日陰者であり、功も何もない彼の言葉を聞く者がいる筈も無く、鬱積と不満だけが溜まり、今日という日をずっと待ち続けて来た!!自分だとて強いのだと!!力があるのだと誇示する日をずっと!!
「・・・・ヒム達が弱いと？」
その言いざまに、一番にカチンときたのがティファであった。
ティファは、特にヒムに一目置いている。そのハドラーに対する熱い忠誠心を、純粋に主を慕う熱い思いを、間違った事をすれば敵にだとて謝罪できる清き心を。

其れが一度勝ったくらいで浮かれ騒ぐ者達が鬱陶しい事この上なく、そして不愉快だ!!
「へ、大魔王様のお慈悲で生かされただけの弱っちいちんちくりんがなんか文句あんのかよ?」
「・・・・・」
「お前みたいに弱い奴に尻尾振ってるヒュンケルだのと言う奴もたかが知れてんだろ?」
「・・・・ベグロム・・」
「そんでお前如きに敗れた竜騎衆のガルダンディーとボラホーンてやつも大したこと・・・」
「ベグロム!!!」
「何ですかガルヴァス様!俺達がもっと早く表に出てれば!あんなちび達に好き勝手させなかったでしょうに!!」
流石にベグロムの言葉が過ぎる止めたガルヴァスに、ベグロムは不満の声を上げる。
陰にいる中、特にベグロムは情報収集を苦手とし、弱っている時のティファしか知らない為に、吐かれた大言壮語に、ダイ達は怒りに震え、ティファを侮るなと怒鳴る前に笑い声が響き渡った。
「クックック・・・ハッハッハッハッハッ!!!」
腹を抱える様にして笑うは、誰でもない、侮られ馬鹿にされたティファ本人であった。
涙迄流して笑い転げる様に、怒りを覚えた者達はポカンとし、言葉を吐いたベグロムはわなわなと震え怒鳴り上げた。
「何がおかしいんだよガキが!!弱いお前迄俺を馬鹿にしてんのか⁉」
自分が偉そうを言っていると嘲笑しているのか!!
その言葉に、ティファは益々おかしくなるが、なんとか深呼吸をして笑いを一旦収める。
気が付いていないのかあの馬鹿は?私の目が笑っていない事を?そしてお前の言葉でお前の味方であるはずの者が不機嫌を通り越して不快になっているのを?
「おかしいさ浮かれたお前が。」

「何だと⁉弱いお前が・・」
「弱いとお前は私の事をそう評するが、その根拠はなんだ？たかだか一度弱った私に遭った位で、私の―戦歴―を知らない無知蒙昧のお前が、勘違い端ただしい事を叫んでいる様が滑稽だと言ってるんだよ。」
「なん!!」
「お前気が付いていないのか？」
「な・・・何がだよ!!」
　雰囲気が一変したティファの、笑っていない瞳から溢れる闘志に睨みつけられたベグロムは、ティファの全身から立ち昇る闘気にも気が付き、此処に至って漸くティファの本当の実力に気が付いたが、何もかもが遅すぎた。
　ベグロムは怒らせすぎたのだ、あらゆる者達を。
「私を弱いと言い、その私を慕ってくれているヒュンケル達も弱いと？」
「そ・・・そうだ!!!お前達と戦って無事だった親衛隊達は現に俺達に敗れたんだだからな!!」
　事ここに至っても虚勢を張るベグロムを、ガルヴァスが黙らせようとしたが思う遅く、ニンマリと笑ったティファが先に言葉を発した。
「では弱い私によって、勇者一行と魔王ハドラー達を取り逃がす羽目になった大魔王も弱いと言いたいのだなお前は。」
「・・・・・・・は？」
「黙れティファ!!バーン様このベグロムのおろ・・・」
「周りを見てみろベグロムとやら!!ミストが先程の言葉でお前が不快だと気配が言っているぞ!!
　成る程確かに私は弱い！大地を割る力も、巨大な城を割る力とてなく、魔王にも勝てなかった者だが自負はある!!
　今日この決戦の中核の担い手たる勇者一行全員を丸ごと無傷で逃がした自負が!!
　そして弱い私にまんまと出し抜かれた大魔王達は！お前の言葉を借りるのならば弱く大したことは無いのであろうよ!!!
　そう言い放ったお前を！大魔王の忠臣たる影の参謀殿が果たして

許してくれると思うのか？」
ガルヴァスの言葉を大音声で遮り、口角を吊り上げ冷笑を浮かべながらティファはベグロムの処刑宣言書を読み上げていく。
影の参謀が愚か者の軽率な発言を赦すかなど、答えは否と決まっている。
先程ティファが言った通り、この最終決戦での敵の戦力増強は忌々しい事にティファのせい。
だが、そのティファを貶める事は即ち、ティファに出し抜かれてしまった主と自分達を貶めている事に他ならない。
仮にその事に気が付かずにした発言であったのならば、それはそれで軽率で無能なる者をミストは何よりも嫌う。そんな者は主の害悪にしかならないと。
ティファの言葉で自分を見てくるベグロムに、冷たい一瞥をもって対応する。
今は戦の最中なのを考慮し、この戦終われば、あの愚者を抹殺する。
・・・・いや、この魔王軍の中で、ティファを貶す者などあそこにいる六人しかおらず、敵に奔られてもなおティファを慕う残りの者達が大半のこの状況であれば・・ガルヴァスの戦力が抜けるのは痛いので我慢しよう。
いずれにしても、ベグロムの運命は確定した。
遥か上空のパレスの玉座に座る人物の胸三寸で。
「・・・・あの愚か者の首を・・・・」
「今刎ねますかバーン様？」
「・・・・・戦後に灰も残さず消せ。」
「御意に。」
大魔王と死神の言葉で決定された。
バーンは自分の事はいいが、忠臣二人を知らず貶めたベグロムなぞ、生かしてやる価値はなく、其れは影と死神にとっても同じで、主を貶めた愚者など味方でも何でもないのだから。

ガルヴァスは苦い顔をし、他の者達にはもう余計な事を言うなと釘を刺し掛けた時、矢張りティファが動いた。
ティファは静かに怒っていた。自身が弱いと言われるのはどうでもいい。先に述べた通りだからだ。
しかし!!ヒュンケル達を巻き込み!あまつガルダンディーとボラホーンを貶したことは許さない!!!
そして!自分が弱いと言われ馬鹿にさせるは、ひいては自分と戦う事を望んでくれたハドラーをも遠回しに馬鹿にされたのだと思い至り、ティファの心が静かに怒りに震えていた。
「・・・・ダイ兄、ポップ兄、技一つ、それ以上はしないからあのベグロムっていう奴と、他に付いてくる奴に技放っていい？」
静かに静かに尋ねるティファに、ポップは素早く算段する。
ティファは約束を守る。技一つであれば、それが成功しようとも失敗しようとも追撃はしまい。
後詰めにダイとヒュンケルを・・・・
「ダイ達いいか？」
「うん、ポップが良いなら俺もいいよ。」
「良いわよ。」
「へ、サンキューな。」
自分に何か考えがあると察してくれるダイ達に感謝しながら、ポップがはティファの頭をわしゃわしゃと撫でて許可をする。
「お前達が弱いと言った料理人のティファが!そこのベグロムに用があるってよ!!まさかとは思うが弱いこいつ相手に逃げねえよな？」
ポップもマトリフ譲りの悪党が己にやりとした笑みで、ベグロムの逃げ道を潰していく。
此処で逃げるは恥ではないが・・・・
「誰が逃げるか!!俺の剣で真っ二つにしてやるよ!!!」
案の定プライドが高いベグロムはポップの挑発に怒り、ガルヴァスのそばを離れてティファの直線状の上空に移動する。
この防御力であればどのような技が来ようと死ぬ事はあるまい！

ダメージを食っても翼で一気に加速し、技を撃ち終えたあいつを真っ二つにしてやる・・・なんだあいつのあの出で立ちは!!
いつの間にか、ティファの周りには人が居らず、ぽっかりと戦いの為の場所が作られていたが、ベグロムが訝しげにしたのはそこではない！
ティファが先程まではいていたのは白い布靴であったはずだ。ティファの肉体の何処に傷がついても、青い血が目に付くようにと白一色の衣装であったがはずが・・そもそもあれは靴なのか
何か小汚い縄で出来た靴もどき・・サンダルのようにも見えなくもない。
靴もどきは足を覆いつくさずかかと部分も無く、縄が人差し指と親指の間を通っり、その他は足首に何度か縄が巻き付いて固定されている奇妙な靴もどき。
何時の間に履き替えたとベグロムも他の者達も驚くが、履き替えたのではなく、ティファの式能力で白い布靴を変えただけが、知らない者達からすれば、何事かと思わせ戸惑わせるには十分であった。
そしてもう一つ。
ティファは本来左利きなのを、流石のベグロムも知っている。
だのにティファは、衣装についているサッシュベルトの左側に雪白を落とし込み、姿勢を低くし構えを取ったではないか。
何を考えている?
あれでは利き腕でない方の右腕で雪白を掴む事になるではないか!!
アバンも初見の靴もどきとその構えに戸惑い、ティファになんと声を掛ければいいのか分からない。
先程無茶をしない事、敵と一人で対峙しない事を言ったばかりだが、これにはティファとその仲間の名誉もかかっている為に、とめるべきではないのかもしれな・・
周りの戸惑いを、ティファの声が斬り裂く。

「私が弱いかどうか、その身で私を測ればいい。」

ハドラーにもやらなかったとっておきをくれてやる

生きて行く

静寂が、ロロイの谷を支配した。
先程までの闘争剣戟の音が掻き消え、敵味方双方たった一人の少女を注視して

ティファの、あの構えはなんでしょうか？
幾通りの剣・槍をはじめとした古今東西の武術全般の一通りを調べ尽くしているアバンとても、ティファの抜刀術は初であった。
当代の智者をして知らない者が、当然ガルヴァス達は知る由もない。
其れは静かな構えであった。それが構えだと思わぬ程の自然体でティファは立っている。
アバン流には、己の闘気を一度すべて内に仕舞込み、相手の攻撃の後に出来た隙を狙い、一気に闘気を高めて撃ち放つカウンター技の無刀陣があるが、其れとも違う。
ティファは雪白の鞘と鍔を持ち、チキリとほんの少し、雪白の刃も見えない程本当に少しだけ鞘から出したきり静かにベグロムを見据えたまま動かない。
ダイ達も、魔王軍もまたたったそれだけで立っているティファに、得体の知れない空恐ろしさを感じている。
まるで嵐の前の静けさの如く静かにたたずむティファに。
周りで見ているだけでもこの反応であり、空中にいるとはいえ対峙しているベグロム自身の恐怖は計り知れない者であった。
隙が無いのだ！どこにも!!
闘気の斬撃を振りまく？そんな小手先の技が通じる気すらしない!!
一体自分はあんなバケモノの何処を見て弱いと言ったのだ？少し前の自分を殺してくなっているがもう何もかもが遅すぎる!!此処で逃亡すれば、パレスにいる死神が自分を逃がすまい！全力で逃げたと

しても、あの大ガマが自分の首を落とすだろう。大魔王と参謀の命を受け。
　ベグロムとて馬鹿ではあるが真の愚者でもない。ここはもう目の前の敵を撃破するしか自分の生き残れる道が無いのは承知している。まさしく自業自得なのだから。
　だが、攻められな・・・・攻めれば、あの化け物はどのような・・・

ベグロム！
・・・・ガルヴァス様!!俺・・・俺調子に乗って・・
過ぎた事は仕方がない、どう贖うべきかは分かっているな？
はい！あの化け物を倒すしか・・・
うむ。そこでだ、お前は手足の一・二本は失う覚悟があるか？
・・・たったそれだけであれに勝てると⁉
そうだ、お前がティファが繰り出す何らかの技を撃たせ、無防備になった所をデスカールがお前の背後から飛び出し脱魂魔術を仕掛ける。
　そうすると・・・俺を死角にして・・・分かりました！その役目務めあげます!!
・・・・死ぬなよベグロム・・・
・・・・・はい・・・

・・・こんな馬鹿した俺を、ガルヴァス様はお見捨てにならない・・・覚悟しろよバケモノ!!
　ガルヴァスからの念話で、ベグロムの覚悟は決まった。
　ティファの技はどうやらティファの味方も初見の様で、おそらく技の方に目が行きがちになり、油断はない迄も技の範囲外に向けていた目が少しでもそちらに行くだろう。
　相手の心理を読みつくしてき作戦を立ててすべて成功してきたガルヴァスだからこその心理戦にも等しい策をベグロムとデスカールのみに念話で伝えるという念の入れようで。
　デスカールならば腹芸も出来、ティファと対峙しているベグロムで

あれば、策を授けられ勝機が上がったと多少浮かれても、ティファと対峙する武人としての覚悟が決まったと思われるだろう。
戦後にベグロムを生かすにはこの策しかない。
嫌いなティファの魂を大魔王バーンに献上するくらいせねばならない程の事をベグロムは仕出かしてしまったのだ。
業腹な事に、部下を助けるのにティファ頼みとは情けないが、ガルヴァスとて情はある。
敵やそのほかはどうでもいいが、自分を引き立ててくれた大魔王バーンと、日陰者になってもずっと付いて来てくれた部下は大切なのだ。
だが其れはティファにとりても同様で、貶し尽くされた身内とそれに等しい大切な者達の名誉の為にも負ける訳には行かない。
これには己の勝敗だけではなく、自身の強さを証明し、以て自分と対峙した者達が弱い訳がないと証明する、謂わば誇りを掛けた一世一代の大勝負に匹敵している。

「覚悟しろよバケモノ娘!!」

先に動いたのはベグロムだった。彼もまた、文字通り全てをこの斬撃に込める。
もしも無様に負ければ、先程の咎がガルヴァスと仲間達に及ぶかもしれない事に思い至り、決死の特攻となった。

「うおおおおおおお!!!!!!」
先程の軽薄さが欠片も無く、覚悟を決めたベグロムの裂ぱくの気合がロロイの谷の静寂を破り、空気を震わせティファに迫る。
その気合に混じった練り上げられた闘気の純度を感じ取った戦士達は青褪め迎撃するであろうティファを見た。
見た先のティファは・・・・未だに静かであった

ベグロムの動きが、まるでビデオのスローモーションのようだ・・・
ベグロムの動きをティファはさほどに凄いものだとは感じていない。さらに言えば、先程から周りの動きもさして見ていなかった。

逃げねえでくれ！お前さんが大好きなんだよ!!何があっても起こっても嫌うものか!!
戦いに行く事になろうとも、命を大切にしなさい
大好きだよティファ！明日教会に行こう!!
二度と俺達の前から消えないでくれ!!
ティファ!!守ってあげられなくて御免なさい・・・ごめんなさい!!
俺達に生きろと言ったお前が一体何をしている!!
俺達が強くなる・・・・だからティファ・・・もうあんな事しないで・・・・
ティファ・・・・愛しい娘・・・・・・
この構えを取った時から頭の中に甦る言葉と思いをティファは噛みしていた。
沢山の人達から贈られた言葉を、自分は受け取る振りをして逃げていた。
何時かバケモノの自分を知られて逃げられるのではと馬鹿みたいに疑って怯えて・・こんなにも・・・・自分は愛されていたのだと気付こうともせず。
貴方はたくさんの人達から愛されているのですよ

・・・その通りでしたアバン先生

魔法使いのおじいさんから貰ったあの素敵な呪文を、誰よりも信じ

ていなかった愚かな自分・・・業は確かにある。その言葉と思いを受ける取るのが苦しくなる程の罪を、自分がよく知っている。大戦が始まるのを知ってもなお、取りこぼした命の多さに慄き、そしてその事で何時か好きな人達全員から嫌われるのではないかと怯え、そこから逃げる様に自分の命を投げ出していた臆病で愚かな自分。・・この考えもまた傲慢な思いなのかもしれない。結局何をしても私がいてもいなくとも、対戦は起こる事はきまっていたのだから・・それでも、こんな自分を愛し続けてくれている人達の為にも・・・

「死ねぇ!!!!!」

死ねない!!!!—今—ここで死ねない!!死ぬわけにはいかない!!私を信じて愛してくれている人達の為にも!!

「あああああ!!!!!」

ベグロムがティファのいる位置の中ほどに来た時、ティファがようやく動いた。

芒ことした瞳に、再び光を宿して。

ベグロム以上の闘気を発し、裂帛の気合を吠え上げ

生きて

「くたばれバケモノ!!!!!」

「断る!!!!!」

後から動いたティファよりも、上空からの滑空の推進力も相まったベグロムの方が早く、ベグロムの振り上げた剣の技の方が早く決まるかに見え、鋭い悲鳴がそこかしこで響き渡る中、

「うおおおおおおお!!!!!!」

行きなさい

敗けない!!勝つんだ!!!!

マトリフのお守りの言葉を始めとし、アバンから贈られた言葉がティファのそれまでの負の思い全てを薙ぎ払い、今まで暗闇にあったティファの道を照らしだす。

ズダン!!!!

勝って!!—その先—に行くんだ!!!!

自らは望んだ事のない、その先を見る為に、ティファはベグロムの刃に向かって、迷いなく最後よりもその先に向かう為に、左足を前に出し、力強く大地を踏みしめながら雪白の刀身を抜いた。

その一歩が、ベグロムの技の間合いを外し、修正する為の刹那の時間が明暗を分けた。

先に決まる筈であったベグロムの技とティファの技がぶつかり合い、ベグロムの技は、ベグロムの剣諸共粉々になり、ベグロム自身もその身を竜の爪に引き裂かれたが如くズタボロになり、天高く舞い上がる。

白目を剥き、受け身も取らず宙に放り投げられたベグロムを見て、誰もがティファの勝ちを確信し、ティファの技の威力の凄さに、その美しさに見惚れ警戒を怠り、その刹那を突かれた・・・・かのように思われた。

誰もデスカーレの動きに反応できない中、ティファの奥義はまだ終わってはいなかった。

自分ならば、大技を撃った後の敵の隙を見逃さない！

数多の修行をしてきた、死にそうにも何度もなった、仮想の修行場とは言え痛覚だけは本物で、手足が折れ千切れ掛ける中で、三神様達は何度もこんな修行やめるべきだと言ってくれたのを全部自分が断ってきた。—全部—を守る力が欲しくて!!

そして会得した中に、戦場で隙を見せる敵は討てるうちに討てだ!!

「おおおおおおお!!!!」

—竜—の攻撃は二!!度ある!!咢から逃れた者がいたとて!!!爪が斬り

裂く!!
「・・・なんだと!!!」
ティファに迫っている積りであったデスカールは気が付いた。
ベグロムを斬った後もティファは止まらず円を描くように動き、自身が近づいているのではなく、引き寄せられている事に!!
ベグロムの剣は粉々に砕かれたが、ティファの刀を僅かばかりに弾き、初弾の技の威力を殺す事に成功し、宙を舞うベグロムは辛うじて生き永らえた。
だがその副産物で、超神速の刀が弾かれた空気と真空領域が発生し、後からくるデスカールを巻き込む態になってしまったのだ。
だが!それでも近づければ!!!
吸い寄せられているのであれば自然に流れを任せ!!自分はあの小娘の魂を抜き取ることに専念すればいい!!!
「脱魂魔術!!」
「く・・・・ぐうう・・・」
円心しながら、自分の大切なものが抜かれようとする感覚を感じる。常人であれば、技を止めてしまう原始的な恐怖を、ティファは飲み下す!
「あああああああ!!!!!」
ズダン!!!!!
「飛天御剣流最終奥義!!天翔竜閃!!!!!」
恐怖の更に先へと今一度左足を力強く前に出したティファの技が決まり、ベグロムとデスカールを飲み込んだティファの闘気の渦は、蒼天を駆け上っていった。
「私は弱くはない!!!!!」
その光景を見届ける事無く、黒い髪を振り乱し、黒曜石の如き瞳に敵愾心を煌めかせたティファは、上空にいるガルヴァス達に吠え上げた。

「私と戦った者達は弱くない!!ガルダンディーとボラホーンが何故私に一撃で敗れたか!あの時私はこの技と同じだけの威力で二人に対峙したからだ!!」
まだ雪白が完全覚醒させることは出来なかったが、それでも闘気の上乗せはあの時点で出来ていた。
其の力を使ったからこそ、強敵になったかもしれないガルダンディーとボラホーンを瞬殺できることが出来たのだ!!!
「その後も私は一切手抜きなんてしなかった!!!それでも親衛隊達は生き残り!魔王ハドラーは私と引き分け以上の戦いをしたんだ!!!」
最終奥義でなくとも、雷は決して弱い技などではなかった。今のミストであれば、あるいは勝つことは易いかもしれない。ガルヴァス達であれば十分必殺技足りえている!!
「訂正しろ!!私と戦った者達の誰一人として!!!心・技・体全てにおいて弱い者など居なかったんだ!!!!!」

ガルヴァス達に雪白を突きつけ誇りを懸けて叫ぶ竜の娘の言葉もまた、蒼天へと吸い込まれていく
愛しき者達の誇りを懸けて叫ばれる言葉と思いの全てが
それは確かに、この場に居る全ての者達の胸へとも届いた

守り抜いて・・・・

竜の娘の咆哮は様々な者達に響き渡った。

「あ・・・・あああああああ!!!!!」

魔王軍のメネロは、ティファの異常性に恐れ戦き我武者羅に茨の鞭を振るって攻勢に打って出た。

何だあの化け物は・・・なんなのあいつの異常性は!!

分からない！敵で殺し合った者達を、その手にかけたのも達を称賛するティファの思考が全く理解できない!!

天晴な敵である

そんな綺麗事を、ガルヴァスをはじめ自分達は嘲笑いそして勝ってきた！策謀の果てに、謀略を仕掛けた果てに得た勝利しか知らないガルヴァス達にとって、ティファは本当に化け物と化した。

先程のカール騎士団がティファに抱いた思いを今度は彼等の番となる。

分からない事は真に怖ろしい事だと

茨の鞭はティファに届きこそしないがティファの周りの地面を討ち据え、即座に蔓が生え、食人種の如くバックりと口を開ける変形種もあり、幾多もの奇形モンスターと化した蔓達が襲い掛かる中、ティファは雪白を仕舞った・・・・仕舞ったのだ。

「あの馬鹿!!」

メッラゾーマ!!!!!

ゴオォォォウ!!!!!

その日のポップに!!!!!とっての一番の火力が、ブラックロッドから火を噴き、それでも幾重にもまかれた蔓を消し去るには程遠く、ダイ達の闘気技で斬ろうにも間に合わない中、上空よりの津波のような猛攻が、ティファに迫る蔓をズタズタに引き裂き、奇形モンスター達も瞬殺されて行き、技を放った者がティファとメネロの間に立ち、殺気をむき出しにして槍をメネロに突きつける。

「お前達の事は噂で聞き及んでいる・・・・薄汚い者達が小娘に刃を向けるなぞ笑止千万!!!」
「賛成だな、ガキンチョに攻撃して生きて帰れると思うなよ。」
　同僚を上空に連れて行き、ラーハルト自慢の超火力技・ラウシースピアでティファと自分達の安全を確保し、ガルダンディーも殺気を隠そうとせずレイピアを取り出す中、突然蔓が凍りつき、鋼鉄の錨が残りの蔓を粉々にし、舞い散る氷の欠片の中をボラホーンがのそのそと近づき、ティファの横に立つ。
「娘に手を出す事、我等竜騎衆が許すと思うな木っ端が。」
　近頃は竜騎衆の重鎮となりつつあるボラホーンの一睨みは、まだ虚勢を張ろうとするメネロを精神的にも打ち据えた。
「何なのだお前らは!!殺し合ったんだろ?殺されたんだろ?恨みがないのかお前達!!!」
「笑止!その程度の見識の低さしか持てぬ者が、小娘を推し量ろうなどと片腹痛いわ!!」

　遂に堪え切れなくなり叫び出すメネロを、ラーハルト達は鼻で笑った。
　あんな小物が―ティファ様―を殺そうなぞと、増長甚だしい!!
　主の娘だからでという理由だけはない、自分達はそんな事を知る前から小娘が・ガキンチョが・娘が好きだった。
　ハチャメチャで口が悪く無謀が過ぎ、そして分け隔てなく優しく笑いかけてくれるティファが好きなのだ。
　ラーハルト達は構えを解かないまでも左手でティファの黒髪を優しく撫で笑っている。
「小娘が俺達は弱くないと言ってくれたのだ。」
「ガキンチョの思いに応えない奴なんて俺達の中にはいないんでな。」
「娘が信じた我等の力、お前達がその身をもって知ればいい!!!」
　ティファが信じてくれている、三人にとって命を懸て戦うには十分すぎる理由であった。

其れは敵を嘲笑う笑いでも、強者の笑みでもなく、メネロ達が見た事の無い、嬉しそうで、それでいて力強い笑みを三人は一様に浮かべている。
其れすらがメネロ、ダブルドーラ、ザングレイにとっては腹ただしく感じる。
かつては竜騎衆だとて、闇の中を共にいた者達ではないか!!なのに!その澄んだ瞳はなんだ?何故我等と共に汚れ墜ちていないのだ!!!
理解できない事と、嫉妬心が三人の中を黒く染め上げていく。

そんな中、ティファは困ったような顔をして一つ溜め息を吐き、ラーハルトがどうしたと問う前にモンスター筒を二本作りだし、ベグロムとデスカールを入れ、そしてその筒をマジックリングに入れ・・・・・あまつ其のマジックリングを飲み込んだのだ!!
「・・・・・小娘!!吐き出せ!今すぐ吐き出せ!!さっさと吐き出せ!!」
「ガキンチョ逆さに振って吐き出させるぞボラホーン!!」
「さっさと自分で・・・いや!ラックとやらでマジックリングを今すぐ出すのだ娘よ!!!」
当然この反応が当たり前で、三人はティファを諤々とゆすぶるが、ティファは吐き出すというはしたない事はもとより、ラックで出す気も無い。
「・・・人質でも取った積りかティファ?」
それまでずっと黙って成り行きを見ていたガルヴァスが遂に口を開き問いただすが、矢張りティファはどこか困った顔をして答えた。
「・・・・もう少しあの二人を放って置いたら死神の大鎌が振るわれていたと思いますよ?」
キルがとどめ刺しに来る・・・・この戦場では、変な血生臭い事されたくないと。
・・・・・あのガキは!まだそんな甘い事・・・

「クックック」
「ギャッハッハッハッ!!」

「ダァ～ハッハッハ!!!」
　ティファの思惑は分かったが、其れに不快感を示すガルヴァスの言葉を前に、本当に戦場には似つかわしくない大爆笑の声が鳴り響いた。
「お前らしいぞ小娘!!」
「それでこそガキンチョだ!!」
「よくやったぞ娘よ!!」
　敵が倒すのではなく、味方の粛清というのは見ていて双方気持ちの良いものでは無い。
　ティファの綺麗な考えが大好きな三人は、警戒を解かないまでも愉快気に笑ってティファをティファの頭を好き勝手ぐしゃぐしゃにかき回しながら、一頻り大笑いする。
「もう!ティファの頭!!ぐしゃぐしゃ・・・・あれ?」
「ん?どうした?・・・今頃気が付いたのか?」
「あ・・・・うん・・・・」
　自分の頭何だと思っているのだと抗議しようとしたティファは、見えている髪の色が黒に戻っているのに気が付いたのを、今更かとラーハルトに呆れられた。
　・・・・もしかして雪白の覚醒と同じで、暗黒闘気の奔流無くなれば自分は母譲りの髪でいられる・・・・力の制御方法直ぐに覚えよう!!!
「やっぱお前はこの髪の色が似合うなガキンチョ。」
「落ち着いた良い色だぞ娘よ。」
「へへ・・・そうかな?」
「「あぁそうだ」」
　幼い頃の姿とあまり変わらず、中身もいいのか悪いのか変化しないティファを、三人は愛してやまない。
　そのティファから、思いがけない言葉をラーハルトがかけられた。
「ラーハルト、マァムさんお願いね。」
「・・・・は⁉」
「ポップ兄が教えてくれたよ。結婚する許可をロカさん達から貰った

のも。」
「・・・・・あのお喋りが。」
「ふふ、マァムさんは良い子だから、幸せにして上げてね。」
慈愛に満ちたティファの笑みと言葉に、ラーハルトは照れ隠しの怒りすらも霧散し、視線を斜め上げにしながらも当然だともごもごという。
その様は、槍の魔装を纏っているというのに普段は竜騎衆を纏め上げる戦鬼ラーハルトの姿は何処にも見えず、ガルダンディーがいっしっし笑いするのをラーハルトが見逃す筈も無かった。
「お前だとて!!ニーナから逆プロポーズされただろうが!!!」
「なん!!!!!」
人を笑わば道連れだ!!!
思わぬ暴露にガルダンディーは絶句し、真っ赤になり、顔を茹蛸にしながら本気でラーハルトに食って掛かった。
「お前なんでそこでそれ言うんだよ!!デリカシーの欠片も無いのか!!」
「お前にだけはそんな事言われたくないぞ!!!」
本気の喧嘩になった・・・・・・あれ止めないとだねボラホーン。
ツイツイ
「・・・・どうした?今すぐ二人止めるから待って・・・ろ!!!」

ゴティィィン!!!!!
「あう!」
「た!!!!」
「お前達!!気を張りながらも余力を持つ事と、馬鹿みたいな諍いの区別もつかんのか!!幸い相手が呆気にとられていたからいいものを!!!」
「・・・すまん・・」
「悪かった・・・」
「まったくだ。」
・・・・ボラホーンってこんなんだったかな?出来る若者たちを諌める親父殿みたいだ。

「悪いな娘よ、二人とも浮かれているのだ。カールの隠し砦にリュート村の子等が来て、ニーナはガルダンディーを婿にすると、そしてディアッカが言ってくれたのだ。大戦終わったのちに、娘もいれてリュート村に来て欲しいと。」
いつでも鋼鉄の錨を放てるように構えながら、ラーハルトとガルダンディーも直ぐに戦士の顔になりながら、手短にあの時の事をティファに伝えた。
どうしても伝えたくて。自分達三人を赦してくれている者達がある事を、受け入れ愛してくれていると言ってくれている者がいる事を。
自分達を変えるきっかけを作ってくれた子供達が、変わらずに自分達に優しく、そして帰りを待ってくれているのだと。
「・・・・ニーナが・・・そう・・・ニーナが・・ディアッカ達が・・・待って・・・。」

十日前に会いに行ったあの子達は、その時も同じ事を言ってくれていた。大戦が終わってからでいい！竜騎衆だけでなく、ティファの仲間全員を連れてリュート村に来て欲しいと。
「ふふふふふ、はははははは。」
吠え上げてではない、嘲笑うでもない、敵に対する威嚇でもない、本当に子供らしい伸びやかな子供の笑い声を、ティファは自然と発していた。
あぁそうだよ、そうだねニーナ、ディアッカ、カイ、ハル・・・・・皆も、大好きでいてくれたんだよね。
異種族の三人の、見てくれでなく中身を見てくれた稀有な村・・・・奇跡の島デルムリン島と対になる様なあの村を、滅ぼさせるわけにはいかない。
「・・・・馬鹿な・・・・リュート村とは―人間―の村だぞ!!その村は一村ごと気が触れているのか⁉」
ガルヴァスも、表の事を把握しようと情報収集していた為、篩の篩の事も、其れを引き起こした原因も顛末も知っている。

故にリュート村と竜騎衆とティファの因縁を知っている。
そのガルヴァスの言葉はある意味で正しい。竜騎衆が魔王軍とはもうあの過疎村だとて知っている筈だ!!
なのに何故受け入れれる。
「好きだからです。」
その混乱したような問いにも、ティファは笑みをもって応える。
「三人が本当に大好きで、ガルダンディーもその身を賭して迄あの村を守ろうとした。お互いに好きなんです。」
ただ、其れだけの単純で純粋な、簡単な事だと笑って言う。
「この地上軍もそう。ロン・ベルクさんが疲れればカール騎士団の人が直ぐに薬草類を手渡す。チウ君達遊撃隊の子達を周りが自然と助けている。ボロボロになった親衛隊達を、ダイ兄達以外の人達も飛び出して直ぐに安全な場所まで連れて行った。
種族じゃない。中身なんだよきっと。」
付き合った時間の長さでもなく、その者の本当に良きところを互いに見つけ合えればきっと・・・
ティファの言葉が、分からないバケモノだと言っていたカール騎士団にも沁み通る。
気が付けばセインも魔王の部下達を必死に戦場端まで連れて来ていた。―味方―を討たせまいとして。
「ラーハルト」
「あぁ」
「ガルダンディー」
「おう」
「ボラホーン」
「どうした?」
「守ろう。守って、守り抜いて皆でリュート村に行こう。こんなに大勢で行ったらみんな驚くかな?」
「・・・クックック、料理が足らんとニーナが怒りそうだな。」
「・・・村人よりも多い客っておかしかないか?」
「・・・・迷惑だから、土産がうんといるな。」

その遣り取りに、全員が分かった。ティファはここにいる味方全員をリュート村に連れて行く気なのだと。
話しにだけ聞く、ティファの様に自由な心を持った村に、聞いた者達は知らず畏敬の念を持っていただけに、是非行きたいと、敵の策略に嵌りかけていたと冷え込んだ心に火が灯るのを感じる。
守ろう
勝ではなく、守ろうというティファらしい温かい言葉と、まだ見ぬリュート村の子等に温もりを貰って。

「我等も行きたいですな！」
「カール特産品をうんと持っていきましょう!!」
「我等はパプニカさんの布地でも持っていくとしよう。」
「リンガイア名物の焼き菓子も持参しよう!!!」

「「「守り抜き!!大切な者達の下へと帰るぞ!!!!」」」
顔を俯けるものは最早なく、初戦と同じ、精悍な顔をした戦士達が蘇った。
知らずリュート村はまたこの世界に奇跡を齎した。
五年前には魔王軍の下部組織を壊滅し、上層部とても打撃を喰らった。
そして今この時、ただ戦う為だと魔族・モンスター達と共闘する事を妥協して受け入れていた者達、ティファをまだ怖れていた者達のわだかまりを完全に溶かし、地上軍を本当の意味での一つに成さしめた。

それは好きな人達の無事を祈る、何処までも純粋な思いを持つ、当たり前の思いが起こした奇跡の様な―普通―の出来事であったのかもしれない

魔王と料理人の再会前編

其れは凄まじい光景であった
あそこに行けばいい
たった一人の少女が、道を指し示しただけで味方が奮い立ち、我も我もと後から続き、悄然としていたのも達迄も救い上げる様は、味方であれば痛快であり、敵からすればこれ程の脅威はない。
成る程、道理でティファがこれほどの注目を集める訳です。
ティファは光だ。
兄のダイが力強く味方を率いる中、疲れ迷い悄然とした者達を救い上げまた道を進ませる力を与える・・・・勇者一行になるべくしてなった様な兄妹だ。
・・・・・私はそんなティファを偉そうに・・・
「お前迄もがあれに引きずられるなよアバン。」
「・・・・いつから起きていましたかハドラー?」
「抜かせ、あれがおかしな笑い方をしたから不快感で目が覚めたわ。」
目を覚ましたハドラーに言われた通り、アバンは目の前の光景に魅了され、ティファの何もかもに引きずられかけた。
地上を救った大勇者の名を欲しいままにし、当代の大魔導士たるマトリフをも唸らせた当代一の知恵者をしても、ティファの凄まじい影響力に引きずられかけたのだから畏れ入る。
だがそれにストップをかけて貰い、水を掛けられた様に冷静になれたアバンはホッとしながら旧敵に軽口を叩く。
ハドラーのけがの手当てを買って出た後、ティファが敵の不認識を詰り、処刑宣言書を読み上げ等が如くの時からハドラーの目が覚めていた事に気が付いていたが、ティファを見る方が忙しかったので放って置いただけだ。
見た事も無い技もさることながら、何もかもが眩しく目が離せず・・・これではいけない。
其れではマトリフ達の二の舞にしかならない。
言い方は不味いと思うが、マトリフは世の醜さに嫌気がさした果て

にティファと、同じようなノヴァに会い、二人の無垢なる温かさと優しさに癒され、そして救われている。
そんなマトリフにとって、ノヴァとティファの二人の事が何よりも誰よりも優先するべき事であり、そして全てを受け入れてしまう。
せめて自分一人ぐらいは、ティファときちんとした距離を作り、第三者の目として良い事と悪い事の分別を付ける様に言うべきだ。
世間の常識に馴染めとまでは言わない。時折常識とは、人間だけが幸せであればいいというものが罷り通ってしまう事も儘あるからだ。
そんな常識にティファが馴染めようはずもなく、下手をしたらその考えに心を殺されてしまうか、耐え切れずにその他の種族を庇い立て人間をも敵にしてでも守ろうとしてしまう未来が浮かんでしまう。
彼等を見捨てられない
何処までいっても綺麗な心の儘に・・・・きっとその考えをダイ達も賛同して地上界が割れる。
そう成らない為にも自分に出来る事全てをしないといけない。
其れこそ平和の芽を育てるという漠然とした考えではなく、人類とティファを中心とした者達が諍いを起こさずに済むようにする事を。
幸い各王室にも王達にもまだ伝手は有り、影響力が残っている内にこの仕事を完遂させなければならず・・・そうすると本気でフローラを口説き落とさなければならない。
愛している女性の国を守る為にも、よりよい未来を地上に送らせる為にも、今の大勇者の地位だけでは足りない。
更に言えば、今一度地上を守った実績もここで再び上げ、ティファとダイ達の行く道を守る盾になりたいものだ。
様々な事を考え少しばかり呆けていたのを見咎められた照れ臭さもあるが、アバンは構わずハドラーに話しかける。
「あの子は、何時もあの様に叫んでいたのですか？」
「そうだ、自分が死に掛けようがボロボロになっていようが、自分の命などお構いなしに叫んでいたぞ。」
「それは・・・」
良い事ではないと、アバンは無意識に眉をひそめる。

自分は確かに眼鏡を預かってほしいと願ったが、其れはティファの命を犠牲にしてでもと言ったつもりはないのだ・・・頼む相手を・・・そもそもが、十二の女の子にあんなことを頼んだ自分は本当に焼きが回っていたと再確認させられる。

一体自分は本当に何を血迷ったのかと言いたくなる半面、ヒュンケルのあの幸せを引き出せたのがティファである事に間違いはなく、胸中が複雑になる。

「ですが、先程のティファの様子であれば、大丈夫だと思いますよハドラー。」

ティファは、この大戦の後にリュート村に行こうと言っていた。それは自分も生きる事を望んでいる事だと、アバンは少しほっとしたのだが

「ふん!甘いなお前は。」

アバンの安堵を、ハドラーは粉々に打ち砕きに来た。

「・・・何故ですか?あの子は確かに・・・」

「行くと言っていたな。あれは途中までは威勢がいい。俺に対しても最初はそうだった。だがな、ふたを開けてみれば、あれはいつでも途中から趣旨変えをしては、最後には自分を使って己の大切なものを守り通そうとする悪癖がある。」

「悪癖・・・」

「そうだ、今のあれに騙されるなよアバン。あれは最後には必ずやらかす。注視しろ、決して目を離すな。」

確信に満ちたハドラーの物言いに、アバンは再びティファの方に目を向けながら、言葉を返した。

「そこまでティファの事を知っているのならば、私ではなく貴方自身がティファを諌めるべきでは?」

わざわざ自分に託そうとせずに。

「・・・・無理だな。」

「何故ですか?・・・・体のどこかに不具合が?」

「違う、この後パレス突入して大魔王と一戦するほど体の方は良好だ

が、俺はもうあれに説教じみた事は言えん・・俺もマトリフ達と同じだ。あれの光に絆され、当人を前に今言った事は言えん・・・・言う資格とてない・・・」
「・・・ハドラー・・・・」
「先生!!!!」
二人の話に割って入る様なマァムの大音声に、アバンとハドラーが声の方に振り返った。
本格的な戦闘が再開される中、マァムがティファを抱き抱え、ノヴァが護衛しながらこちらに爆走してきていた。
「先生!!ティファおねが・・・・・目が覚めたのねハドラー。」

マァムにとって、この戦場で絶対的安心なアバン先生の所に大切なティファを預けに来たのだが、当のティファがハドラーの事を聞いてびくりと体を竦ませ降りようともがきだした。
「ちょっとティファ!此処が安全だから、良い子だからバーンの居城の罠解除するまでここで大人しく待っていて頂戴。でないとアバン先生に負ぶい紐付けて貰ってあなたの事負んぶしてもらうわよ!」
・・・・・・其れは嫌だ!!
マァムの冗談ではなくそれ絶対に本気だろうという言葉に、ティファが固まっている間に、マァムはアバンにティファを手渡す。
「先生、居城の罠攻略に行ってきますのでティファをお願いします。」
「分かりました。また後で会いましょう。」
「はい!!」
「
ティファを安全な所に預けたマァムは、ホッとしながら待っている仲間の下に駆け付け、程なくしてルーラの光がパレス内部へと侵入を果たした。
第一段階はここで無事に終了できたようだ。
「ノヴァ君も行くのですか?」
「僕は後詰めです。魔王軍の動きが各地の何処で起こるか分かりませんので、僕は地上に居残ります。

ロン・ベルクさんもそうすると。」
「そうですか・・・・ティファ？」
どうしても、腕の中から逃げようとするティファに、アバンはどうしたのかと問おうとしたが、口を噤んだ。
ティファはひたすらにハドラーだけを見ている。
その顔は可哀そうな程ぐしゃぐしゃに歪み、涙をぼろぼろと流しているのはどういう訳か？

魔王と料理人の再会　後編

先程の勇猛さも、味方の士気を高めた温かい吠え上げた言葉を言った者とは思えない程、ティファは顔を青褪めさせ泣きながらハドラーの顔を見ている。

一体何故？

ティファは先の決戦時に、ハドラーと死闘を繰り広げ、倒しきれずにやむを得ず黒の核晶を取り去りハドラーの命を救う事になったのはハドラー当人から聞いて知っている。

・・・・泣く理由が分からない中、ハドラーから溜め息を吐く声が聞こえ、その声にティファはびくりと身を竦ませる。

何がティファをここまで怯えさせるのか・・・命を取られかけても怯えない者が・・

その答えをハドラーは思い至り、自分を見て泣いているだけのティファでは埒が開かないといい加減じれ始めた。

「アバン、ティファ貰うぞ。」

「え!!ちょ・・・ハドラー？」

「ひぃ！」

超一流魔王に進化（？）しても、ハドラーの短気な所は変わっておらずティファをアバンから強引にひったくり、物事をズバリというところも健在であった。

「いい加減に泣き止めティファ。」

「う・・・・・」

「何故泣く？俺を助けた事を後悔しているのか？」

其れは無いと分かっても一応聞いておく。

自分助ける事も想定し、逃がした後の置手紙には自分と親衛隊達の分もあったのだから、後悔もへったくれもあるまい。では何故泣くのかさっぱりと分からない。

その答えは、矢張りティファらしかった。

「だって・・・ハドラー・・・・倒せなくて・・・・・助けてしまって・・・ごめんなさい・・」

「・・・・・」
「ティファが・・・キチンと貴方を倒せていれば・・・・・大魔王の仕掛けた事も知らずに・・・尊敬してた大魔王と戦わなくて良かったのに・・・倒せなくて・・助ける事しか出来なくて・・・」

・・・・・・・これはどうして、何処まで相手の事を思いやってしまうのだ。
ティファらしい答えに、ハドラーは溜め息を吐きたくなるのを堪える。
おそらく、ティファは自分が大魔王を敬愛していると言ったあの言葉に囚われている様だ。
決戦前に、主をどう思っているのかと聞かれた自分は即答で敬愛していると答えた。
あの時点で自分の中に黒の核晶を埋められているのを看破していたティファは、どんな思いでそれを聞いていただろうか？
物凄く複雑そうな顔から察するに、配下の者に爆弾を仕込む者を敬愛していると聞かされてはああもなるかと今だからこそ納得する。
そして、そんな主の駒にされているのを俺に知ってほしくはないと、全力で俺の頸を取りに来たか・・・・其れが果たせず、今日この日を俺に迎えさせたのが申し訳ないと・・・
「それに・・・・」
・・・・・まだ何かあったか？
「ブロックが・・・・・私の事庇って・・・・・・逃がしてあげられなくて!!ごめんなさいハドラー!!中途半端で！貴方達を振り回した挙句があの様で!!」
・・・・・・これは本当に・・
ゴン!!!
ティファの心からの懺悔の後に、物凄く痛そうな音が戦場に響き渡り
「この戯けが!!!!」
それ以上の怒声が、戦闘を止める程の大音声がロロイの谷に響き渡

り、木霊迄発生させた。
「俺がいつお前を責めたティファ!!俺がいつブロックの死はお前のせいだと詰った⁉」
「うぇ・・・だって・・・・・・だって!!ブロックは私を庇って・・・」
「お前がブロックにそれをしろと命じたのか⁉」
「ち・・・違う!!ティファは皆逃がしたかった!!あそこで槍を受けても詠唱続けられたのに・・・・」
「ではブロックがした事は無駄だと言いたいのか?」
「ち・・違うよ!!ブロックは・・・・ブロックはティファを庇って・・・守ってくれたんだ・・・・」
「そうだ、お前を、ひいては俺達をあれは守ってくれたのだ。もしもお前があの時死んでしまっては、俺達を逃がす術など他になかった。ブロックは、城壁として俺達を守る盾になってくれたのだ。」
「・・・・・・・・・」
「ティファ、お前もダイ達を守る為に幾度もその体を張って守ってきた。」
「それは・・・・そんな事は・・」
「当たり前なのだろう?—お前達—にとっては。守る事こそが本質であるのならば、ルーク・ブロックはその役目を見事に果たしたのではないか?」
「・・・ひ・・・う・・・」
「俺はなティファ、役目を果たし、俺と親衛隊達を逃がす事に一役買って散ったブロックを誇りに思っている。俺だけではなくきっとヒムもアルビナスもフェンブレンもシグマも。」
「・・・・ハドラー・・・」
「それにティファ、俺もバーン様に逆らうのにはやはり心痛むことあれど、無為に駒の様に淡々と死ぬ事無く、雪辱を晴らす機会を与えてくれた事にも感謝しているのだ。」
　尊敬し、敬愛もしているが、矢張り許せないという気持ちもまた孕んでいるこの心の葛藤を、晴らす機会を与えてくれたティファに感謝している。

「俺を命懸けで倒そうと本気で戦ってくれた。そして救ってくれたお前に感謝している。」
「・・・ハドラー・・・」
「ありがとうティファよ。」
「ハドラー!!!!」
この日何度目か分からない泣き声があたりに散らばる。
ティファは苦しかった。自分のエゴで助けたハドラーの誇りと尊厳を踏みにじったのではないかという罪悪感と、そんなハドラーが大切にしている親衛隊のブロックが、自分のせいで死んでしまった事が。
助けるからには全て救わねばならないと思ってい定めて全てを準備していたとどこかで慢心していた隙の代償を、ブロックに支払わせてしまったのではないかと。
だが、そんな事はハドラー自身に全て一蹴された。
ルーク・ブロックの本質は、城壁であり、敵からの攻撃を凌いで城の中の者達を守る事であり、その役目を見事果たしたブロックの死を、己のせいだと嘆き悲しむのはブロックに対する最大の侮辱であると叱りつけ、そして赦しもした。
己の命を救ってくれた事を。
「ハドラー!!ハドラー!!!」
馬鹿みたいに何度もハドラーの名だけを呼び、首にかじりついて泣き濡れるティファを、ハドラーは愛おし気に抱きしめる。
「済まない、俺の粗忽さで自分に仕掛けられたものも見抜けず、お前に全て押し付けて。」
「ハドラーは・・・・大魔王好きで・・・だから・・・・」
「そうか、俺は悪くないと言ってくれるか。」
「う・・・ふうう・・・」
「では、お前も悪くはないのであろう。俺もお前も其れまでにできる事の最善を果たしただけなのだから。」
ティファの罪悪感を打ち消す様に、自分もティファもお互いに悪くはないのだと教え込み、顔を覗き込む。

泣きすぎて、瞳も端も赤くなりぐすぐすと泣き続けるティファは見ていて痛々しい。
「分かったらいい加減に泣き止め。」
優しい言葉とと共に・・
「ハドラー⁉」
「・・・・・なにを・・」
傍らで見守っていたアバンとノヴァが唖然とすることをしてのけた。
泣くティファの瞳に口付けを落とし、涙を吸い上げていく。
「・・・・ハドラー？」
さしものティファも、びっくりして泣き止み、きょとんとした顔でハドラーを見上げる。
年相応か、幾分幼い印象の顔は初めて見る。泣いた顔よりもこちらの方がいい。
「泣き止んだか。」
「う・・・・・・」
「お前が泣くことなど何もない。少なくとも俺に関しては何もない。」
「・・・ない？」
「そうだ、ないのだ。だから泣く事も無いのだ。」
ティファの額に己の額を角で怪我させない力加減でくっつけ、優しく諭す。
間近で見るティファの黒い瞳は矢張り綺麗だと見惚れながら。
後もうほんの少しで・・・・互いの口が触れ合いそうになったその時。
「コホン!!!」
・・・・・アバンのストップの咳払いが聞こえ、それまではお互いだけに夢中になっていた二人は、顔を上げて辺りを見回せば・・・・・えらい事になっていた。
「バラン殿!!抑えて!!ドウドウ！」
「坊や！今あの馬鹿野郎凍らせたら嬢ちゃんも巻き込んじまうぞ!!!」

「ロン・ベルクさん!!敵はあっち!あっちです!!」
今にも真魔剛竜剣を抜きそうなティファ父と、マヒャデドスを発動させようとしているティファ幼馴染とティファの幸福まもるぞのロン・ベルクの暴走を、アポロとマトリフとチウが必死の面持ちで止めしかも、戦場から斬撃とレッドフェザーと固まった岩が、ピンポイントでハドラーに当たりそうになり紙一重で避けると舌打ちが聞こえた!!
「おっと・・・俺とした事が（ハドラーの頸の）狙いを外すとは。」
「おかしいな?（ティファ様にまつわりつく害虫目掛けて投げた）羽が当たんねぇぞ?」
「・チィ・・外したか・・」
メネロとブレイガンの二人を相手にしているラーハルトと、ザングレイを相手にしているガルダンディーはすっとぼけながら、ザングレイを相手にしているボラホーンは露骨に舌打ちまでする始末。
ティファ・・・・・この子きちんと好きな相手と添い遂げられるのでしょうか・・
あらゆる意味で不安になるアバンを他所に、其れがいつもの事だとティファとハドラーは仕方がないとばかりに息ピッタリに溜め息を吐く。
自分達の事で周りが騒ぎになってしまうのはいつもの事だからと。
そしてティファはクスクスと笑いながら空を仰ぐ。
ブロックに、思い違いをした罪悪感をもって知らず侮辱した事を詫びながら、それでも、助けられなかった事を謝りながら。

ブロック、貴方が守り通した人達を、ティファが守るね。
心に新たな誓いを立てながら、にこりと微笑む。
その晴れやかになった顔を、ハドラーが愛おし気に見ているのに気が付かずに。

奇妙な戦場故に、憐れな道化は窮地に陥る

私をまたアバン先生に渡したハドラーは、さっさとガルヴァスに突っ込んでいった。

「さっきの礼は存分にさせてもらうぞガルヴァス!!」

「あのようなバケモノ娘にうつつを抜かした愚か者が!!!!」

初手から暗黒闘気のぶつかり合いを空中でしたせいで、その余波で周りで戦闘している人達にも影響が行ったのは仕方がない。

まぁもう新六大将軍は壊滅の憂き目にあうのは決定しているからいいんだけど。

ラーハルトとのラウシースピアの乱舞に、メネロの茨の鞭も捌き切れなくなって、援護を喪ったブレーガンも、其の波状攻撃の猛攻に三節根を粉々に砕かれ、強化された防御をも突破され二人同時に止めのハーケンディストールを横一文字に喰らい、辛うじて息をしている間にチウの配下、アリクイのアリババが地面からモコモコと出て二人をモンスター筒に封じる。

ダブルドーラは手強いと、ガルダンディーはボラホーンの相手をしているザングレイと互いに敵を交換しあう。

ダブルドーラとしては、力自慢が自分を砕いたと思った瞬間に、分裂して驚愕した敵を挟み込んで止めを刺す戦闘スタイルなので却って好都合だと内心ほくそ笑んだ。

案の定ボラホーンの鋼鉄の錨を振り上げて襲ってきた。

驚きながら死ね!!

「なんと!!

切り裂かれる瞬間に三つに分裂したダブルドーラに、矢張りボラホーンは驚き一瞬の隙を作ってしまった。

これでしまいだ!!

「鎧化!!!窮鼠包包拳!!!」

グシャシャシャジャリン!!!!

「何だと!!!!」

―邪魔―が入った事に、今度はダブルドーラの方が驚愕の声を上げる羽目になった。
ボラホーンが挟まれてやられてしまうと見たチウは装備していた籠手を鎧化させ、自分に近い方のダブルドーラの分裂した体の一つに、乗せられるだけの闘気を上乗せして突っ込んでいった。
これはオリハルコン製でちょっとやそっとじゃ壊れない!!ダイ君のあの剣を作ったロン・ベルクさんが僕の為に拵えてくれた武器なんだ!!!
ロン・ベルクの腕を信じ抜き、躊躇いも無く突っ込んでいった技の威力は相当なものとなり、加えてダブルドーラの突進する威力も加わり、お互いの力で弾け飛び合う事でボラホーンは難を逃れる中、回り切って着地する寸前のチウと目が合った。
「上出来だ。」
歴戦の戦士は、まだまだのチウにニヤリと笑いかけ最上の褒め言葉を贈る事で礼としながら、凍える息吹で驚いて動きを止めてしまったダブルドーラの二つの欠片を凍らせ、三つの地面に落ちた欠片もしっかりと凍らせた。
「チウ、筒を持っているのならばお前が入れよ。」
「え?僕がですか・・・・ボラホーンさんもお持ちですよね?」
「お前の力なくば俺はこいつの術中に間抜けにも嵌って首を落とされていた。お前の手柄だ。お前が入れよ。」
「!!分かりました!イルイル!!!」
戦場の熱い師弟愛が開花する。チウとその配下達が戦場で死んでしまわない様、竜騎衆総出で特訓をした甲斐有り、しかも負うた子に助けられた。
「へ・・やるなぁチウ・・・」
隣の戦場を横目で見ながら、ガルダンディーも満更でもない顔をして笑っている。
チウは兎に角素直で、配下達も隊長に続けてばかりに気絶しかけても弱音を吐かずに特訓を受けてくれた。
「どこを見ている!!!」

あの努力があったればこその戦果に、ガルダンディーも教えた一人として誇らしくなるのを、無粋な怒鳴り声が霧散させやがった・・・
「うるせぇ・・・お前とやるのにはもう飽きた・・・羽で相当弱ってんなら大人しくしろってんだよ!!!!」
超魔生物の防御力があるとはいえ、其れは決して無敵ではない。
ガルダンディーは派手な技をルードとのコンボで決めるのが好きだが、仕方ないと地道にレイピアで同じ個所を何度も切りつけ、漸くザングレイの右腕に切り傷を作り、瞬間に五本ものレッドフェザーを突き刺しジワリと体力を消耗させていた。
もう興味はないとばかりに、吠えているが膝を付いて身動きの取れなくなったザングレイの頭を右足で思い切り踏みつけ地面にめり込ませた。
「・・・・お前らみたいな三下野郎は俺達は反吐が出る程嫌いなんだよ。」
こいつらから、昔魔王軍で大乱闘をしたあの下種野郎たちと同じ匂いがするのが気に入らなぇ!
レイピアで滅茶苦茶に斬りつけてやればすっきりするか?
こいつ等がティファ様を侮辱したのも許せねぇし・・・むしゃくしゃしてるしな~。
ガルダンディーも、リュート村の、ひいてはニーナのおかげで大分温厚な性格になったとはいえ、性である残虐性が消え果たわけではない。
生まれた時からガルダンディーは、何かを滅茶苦茶にしてやりたくなる時があった。
其れは一族を皆殺しにされ、人間を恨むようになってからは更に手が付けられなくなっていた。
自身もそれを止める積りも無く、坂を転がるようなそんな時期にティファとニーナに出会い、おかげで最悪な性格にならずに済んだがそれでも残滓が魂の端にこびりついている。
ちらりと冷たい目で無様に這い蹲っているザングレイに、レイピアを振りかざそうとした時・・・・声がした。

優しいあんたが好きだよ・・・・

・・・・あぁ、これしちまったら、ニーナ怒んだろうな～。

残虐性を振るう事は、私欲で戦う事であり、主であるバランの顔に泥を塗り、自分を好きだと言ってくれているティファにもニーナにも嫌われてしまう。

・・・あの二人は底抜けにお人好しだから嫌わないでいてくれんだろうけど・・・悲しみそうだから止めるか。

怒りを溜め息で吐き出し、レイピアを仕舞いながら左手でモンスター筒を持ちザングレイをその中に納める。

一大決戦の戦場である筈なのに、其れは奇妙な戦場であった。

死者が少ない。其れも地上軍は言うに及ばず零であり、魔王軍も数十の死者が出たのみであり、それらは死ぬ寸前にメガンテをして散りはて、或いはノヴァのマヒャデドスで凍らされ粉々に砕かれ、死体の無い戦場となっていた。

残りは止めを刺されずに全てティファの作った筒に入れられ囚われていく。

そして奇妙な戦場が出来あがったのだ。

い・・・・如何!!!これでは儂の長年の研究の果てに完成した―アレ―が使えんではないか!!!!

道化の意地

「新生六大将軍と名乗った割には片腹痛いわ!!その程度の実力で俺にとって代わろうとしたとは笑い話もいいところだ!!」
「う・・グゥ!!其の力を!!何故大魔王様の御為に振るおうとしない!!我等が故郷たる魔界の為に何故使わん!!!」
「そう決めたからだ!!俺自身がそう決めたからだ!!!」
「・・・あの小娘が!貴方を惑わし引きずり込んだか!」
忌々しい!!配下の者達は皆竜騎衆と大ネズミ一匹に仕留められた。
ティファにかかわった者達皆が、何かしらを変えられそして力強くなっている事実に、ガルヴァスは認めることが出来ずに幾度も暗黒闘気の槍を振るってハドラーと激突するも、次第に押され始めている。
膠着していた戦場が徐々に流れが変わり出す。
ダイ達がパレス内部突入して以降、其れ迄補充されていた魔王軍がぱたりと来なくなっている。
ダイ兄達が上手くやったか、勇者達を最優先にしているのか・・・時刻が迫っているのか・・・
日が少し傾いている。処刑演目からあれから三時間は経ったのかな?とすると、日没まで後・・・三時間切ったか・・・・精霊王達からはまだ何も知らせがない。
順調であれば送らなくていいとは打ち合わせ済みだから、きっと細工は流々仕上げを御覧じろになっているのか。
後たった数時間でこの世界の全ての事が決する。
それにそろそろかな?
「喰らえ!!超魔爆炎覇!!!」
「あ・・・・グゥアアアアア!!!!」
自身の闘気と魔炎気を極限まで高め合い、ハドラーは必殺技を出しガルヴァスを斬り伏せた。
「・・・そ・・そんな馬鹿な!!あれは・・あれには最高の技術の粋を!!」
ハドラーの技は凄まじく物理防御の高いフォレストドラゴンの皮膚を移植され、かつ同じ魔炎気使になったガルヴァスを袈裟切りにし

正面撃破で下して見せた。
ガルヴァスは暗黒闘気の槍に魔炎気を練り込んでみたが、火炎系の技はハドラーの方が一日の長があり、技の練度で敗れたのだ。

一目で強敵と知れるガルヴァスを敗っても、驕り高ぶる様子の無いハドラーにアバンは空恐ろしさを感じ冷や汗が流れた。
ハドラーは一体どれほどの強さを持ちえたのかそこがまだ見えない。敵であればこちらの勝率はぐんと落ちていたでしょうね～。
今は共通の敵を討つ身であってくれて助かったというのが本音であった。
戦場から櫛の歯が欠けたるように少しずつ強敵を打ち破り、遂にはガルヴァスまでも敗れ去り、チウがハドラーに断りを入れて筒に入れようとしている。
「・・・・何故殺さん？憐みか？慢心か？」
「ふん、敗れた者が己の処遇に異議を申し立てるとは見苦しい事この上ないぞ。」
「私達を今殺さずにいれば後の禍根となるぞ⁉それとも、筒をマグマの海に纏めて沈めるか？一体捕えた者達をどうするというのだお前達は!!!」
「知らん！」
「・・・・なんだと？」
「この作戦を考えついたのはそもそもティファだ。そしてこの筒もティファのもの。お前達の処遇を考えてもいよう。」
「・・・貴方は！どこまであの小娘に誑かされれば!!」
「それにもうこの地上の攻防戦にも意味は無かろう。」
「ッ!!」
「勇者達が大魔王の居城に乗り込んだ時点で、ロロイの谷での戦闘の意味はなくなっていた。精々ティファと俺達の足止めを狙うくらいのものであろう事はお前だとて承知の筈だ。豪魔軍師ガルヴァス。」
・・・癪だが、ハドラーの言う通りだった。
ロロイの谷での戦闘事由は三つ。

一つはティファ処刑の為
二つは勇者達が画策しているであろうパレスへの侵入阻止
三つめはファブニールの竜を元にした五重の罠の実行
それら全てがついえた時点で、ロロイの谷での戦闘の意味合いはなくなっていたのを、軍師を名乗るガルヴァスも当然知っていた。
だが、まだ戦闘を継続するだけのメリットもあった。
ダイ達と合流する前に、ハドラー達を始末する事。
其れも途中までうまくいっていたが、矢張りティファの支援に阻まれ潰えさせられた。
パレスで捕虜として過ごしていたティファを、わが身と配下達の命を使ってでも殺すべきであったのだ!!
今更言っても詮無い事か。
こうなるのもバーン様の中では織り込み済みで、現に自分が敗れて慌てているのはザボエラ唯一人であり、ミストバーンはこちらを一瞥もくれずに魔界の剣士と激突を続けている。
駒であったは我等の方・・・
ハドラー達が駒にされたとティファは言っていたが、その身を惜しみ、去った後も口の端に昇る駒などいる者か・・・
ティファと主が話の中でハドラーの名が一度出たのを周囲の噂で聞いている。あの者こそ一流の戦士というのだというティファに、その通りだと、主は言葉少なくだが称賛していたと。
駒にされた者からすれば身勝手かもしれないが、バーンは今でもハドラーを評価し続けている。
使い捨てにされいつまでも影にいる自分達と違って・・・・
「イルイル。」
埒も無く、遣る瀬無い思いと共にガルヴァスが筒に入れられ捕えらたその時、ミストはバーンからの念話で指示を貰っていた。
その戦場はもうよい、戻ってまいれ。
畏まりました
長年の主従関係にある二人は、これだけで意図が全て伝わる。
ガルヴァスのいなくなった今、その戦場でハドラーを仕留められる

者はいなくなった。
　であるのならばパレスへと来させ、キルトラップと温厚している魔王軍をぶつけて消耗させて自分達で潰すのが効率がいい。
　そして時間もだいぶ費えさせている。残りの半分をパレスで潰させ地上を消せれば、勇者達が健在であろうとこちらの勝利である。
　そもそもの勝利条件からして地上側は不利なのだ。
　地上側は地上消滅までに総大将たるバーンを倒さなければならず、バーンは定刻になれば柱を落として素早く黒の核晶を起動させて魔の六芒星を地上全体に発動させて消せばいいのだから。
　地上側はその時が何時かは分からず、神経戦の様相も帯びてきている。
　あらゆる意味で勇者達を翻弄し消耗させればいい。
　その為にパレスに戻れという主の言葉を受けたミストは、ちらりとティファを見る。
　自分がパレスに戻った後、ティファは―あれ―をどうするのか・・パレスに行かせてもさして役にも立たなかろうし、あれの切り札も使える状況でもない。
　ティファに好きにしろと置いて・・何をしているのだあいつは⁉

　ティファをちらりと見たミストはぶっ飛んだ。
　アバンの腕からぴょんと飛び降り、そのままま空中を蹴って一気にザボエラに迫り抱え上げてまじまじと見ているではないか!!!!
「「「ティファ⁉さん⁉殿⁉」」」
　多種多様な驚愕の声が、ティファの下に届いた。
「小娘!!今すぐそいつを俺達に向けて投げろ!!勿体ないが槍の錆にしてやる!!」
「いんや!俺のレイピアで膾切りに!!!」
「怪力で一捻りよ!!!」
「俺のアックスの錆にしてやる!!!だからティファ!こっちに投げろ!!」
　竜騎衆はじめ、クロコダインも―やる気―満々なのだが、当のティ

ファは微動だにせずザボエラをじっと見て、そして溜め息を吐いた。
「・・・・う・・・・く!!何のじゃ小娘!!お前の慈悲深さとやらで儂も助けてくれるとでも言いたいのか?」
「・・・・だったら?生き延びれるかもしれないから私に媚び売ってみる?」
原作でのこいつだったら喜色満面で私に全力媚び売りして、隙ありとばかりに襲い掛かってくんだろけど・・・
「きっひっひっひっひっひ!!ひゅっははっはっはっは!!」
ティファの言葉を受けたザボエラは、突然体を捩じらせながら笑い出した。
ミストをしても、ザボエラは恐怖で狂ったかと思う程の甲高い声で笑い出したのを、ティファは狂ったとは思わずに別の事に思い至り内心では、ザボエラは矢張りザボエラかとうんざりとした。

喜ぶように大笑いしているという事は嘘の媚び売り確定か。
息子であるザムザに、物凄く大問題ではあるが護身用として黒の核晶を渡しているから少しは違うかと思ったのだが、一緒かと。
だが、ティファの予想は思いがけずにひっくり返された。

「死んでも断るわ!!!」

道化の意地と料理人の思い

其れは意地であろうか、其れとも虚栄心からの言葉か？

「・・・・・死んでも断る？」

「そうじゃ!!何が悲しうて嫌いなお前なぞに助けを乞わねばならんのじゃ!!!」

ザボエラ自身も最早我慢の限界であった。

何なのじゃこの忌々しい小娘は!!

ザボエラもガルヴァス同様、ティファの全てが嫌いであった。自分が甘いと断じた事を平然と口にし、あまつそれを押し通し好き勝手している、言ってしまえば傲慢が服着て好き勝手に生きている理不尽な小娘。

誰であろうが言いたい放題お構いなしで、其れが何故通る？何故大勢に認められそして慕われている？

どう考えてもおかしいじゃろうが!!

挙句がハドラーどころか息子も小娘に誑かされ、自分の研究を認めて配下にしてくれた大魔王バーンとても最早自分なぞ見向きもせず、小娘ばかりを見ているのを、指を咥えて黙ってみているしかなかった今まで以上の不遇を託つことになった。

蘇生装置を開発したおかげでクロコダインが生き延びることが出来、あれがあったればこそハドラーもガルヴァス達も超魔生物手術が出来たというに！何故誰も儂の事を称賛せん？何故誰も儂に感謝をせず!!何故誰も認めてくれんのじゃ!!!

確かに武においては実績は何も無いのに等しい。だが！蘇生装置を始め、悪魔の目玉の量産、さまよう鎧の材料調達、そして最大の功労たる黒の核晶の小型化の実績が、無いも同然に扱われたのは何故じゃ!!

「これ程までに貢献している儂より！何故敵の敵のお前の方が・・・何故じゃ！」

今まで抱えていた苦悩と妬心と憎しみを、自分にとって最大の敵で

あるティファに全てぶつける。
　これ程までに魔王軍に貢献してきたというのに報われないのは何故だと。
「それは貴様の性根が腐っているからであろうザボエラ!!ティファよ!!そんな戯言を言わさず!さっさと俺に投げて寄越せ!獣王激烈掌で粉々に砕いてくれるわ!」
「貴様の日ごろの行いのツケを娘に当たるな!!!」
「手んめぇ!ハドラー様になにしたと思ってやがんだよ!!!」
「ティファ・・・私の真の姿で仕留めますのでそのダニをこちらに寄越しなさい・・」

　傍で聞いていれば、其れは理不尽な物言いであり、クロコダインを筆頭に元魔王軍関係者一同がキレた。
　何故ならこの話は魔王軍にひいては総責任者たる大魔王バーンに言うべき事であり、ティファ自身に本当に関係のない話でありとばっちりの八つ当たりもいいところ。
　しかし八当たられている当人は、怒りと憎悪に歪んだザボエラの顔をまじまじと覗き込んで周りの言葉に返答をせず、何かを思案するように首を傾げているのみで後は微動だにしない。
「ティファ!!投げなくてもいいから手を放せ!」
　ザボエラを捕らえたまま空中から降りてこないティファに、クロコダインが焦れてティファの下に行き、ザボエラを落とす様に催促する。
「その男は煮ても焼いても食えぬ!!策謀塗れの男なのを忘れたのか!!!」
　其れでも動かないティファに、クロコダインが叫び上げる。
　ザボエラほどダイ達に卑劣な真似をした男はいない。
　自分を使って祖父にあたる鬼面道士のブラスをダイ達にぶつけさせ、テラン戦の後に消耗したその日の夜に夜襲を掛けようとし、のみならず味方で上官たるハドラーの体内の黒の核晶の事を黙っていた卑劣漢!!

どれ一つであっても、武人であるクロコダインには赦して置けることではなかった。
ティファも自分と同じ思いであったはずが、何故ザボエラを倒そうとしないのか・・
ティファは、何か考えがあるのでしょうか?
ティファがザボエラを殺そうとしたほど嫌い抜いているのを事前に知っているだけに、この状況をどうするかアバンは静観している。
ザボエラの悪評も、ハドラーが決戦時に会うであろう敵達の事を細かく教えてくれた中に、ザボエラという策謀家がいる事を話してくれたからだ。
ただ、ハドラーもザボエラから直接ではないにしろ、間接的に裏切られているのだが恨みはないと淡々としてい。
自身の体内にあるものに気が付かなかった間抜けな自分が悪かったのだと。
ハドラーが許したように、ティファもティファなりに思うところがあるのでしょうか。
この件ではハドラーも静観している。であるのならば何も知らない自分が口出す事ではない。

動かないティファに、焦れたのはクロコダインだけではなくヒム達も同様で、それぞれにザボエラに罵声を浴びせる中
「その爺さん殺す程のことしたのかお嬢さん?」
魔界の名工にして名剣士たるロン・ベルクが、周りの意見に否やを突きつけた。
「ろ・・・ロン・ベルク殿!?お話したはずだ!!あれが何をしてきたのかを!!」
この一大決戦でザボエラを取り逃がさないようにこれまでの所業を、自分の恥ともなる事も包み隠さず話したはずだと言い募るクロコダインを、ロン・ベルクはちらりと見たが直ぐにティファに視線をかえし再びティファに問う。

「その爺さんがした事は本当にお前さんが殺そうとしたいほどのことをしたのかお嬢さん。」
ザボエラの所業を聞いたロン・ベルクは、何故これ程ザボエラが忌み嫌われているのかが理解できなかった。
「クロコダインが策略を使ったのを、お前さんは―使わされた―と激怒したそうだが、其れはクロコダインが流されたのがそもそもの原因じゃないのか？その時武人として流されずに、毅然と断っていればよかっただけの話だろう。心の弱さに負けたクロコダインが責められず、その爺さんだけが悪いっていうのが俺は気に入らん。」
夜襲にしてもそう。戦しているんだから夜討ち朝駆けは常だろうに。魔界の戦はそんなもんじゃないぞ？立てこもった相手の兵糧や水源に毒を混ぜて皆殺しにするのも平然としている。それに比べれば自ら乗り込んできただけの気概がある。
ハドラーも、自分の事なのに気が付かなかった間抜けだろうがというのが、世の中の辛酸を舐め尽くし、魔界の悪行をも知り尽くしている超絶俺様系で生きて来たロン・ベルクの感想であった。
ティファ達は一体ザボエラの何がそこまで気に入らんのだ？

「ロン・ベルク殿⁉」
「あんた一体何言ってんだ!!」
「お前どっちの味方だ!!!!」
当然ザボエラに慈悲は無用を言い募ってきた者達は納得しないが、一番ザボエラを殺したがっていたティファはロン・ベルクの言葉に溜め息をつく。
その通りだと。
この十日間、仲間から離れている間ティファはこれまでの事も振り返ってきた。
駆け足で過ごした激闘に次ぐ激闘の日々で、ゆっくりとこれまでの事を振り返る時間はなかった分じっくりと。
其れは主に反省であった。篩の篩でアポロを暴発させてしまった事を思い返した時は自分を殺したくなった・・・・・あれは気を付け

よう。
マキシマムを激情のまま殺そうとして・・・勇者一行続けたいから二度とせん・・
ほぼほぼ悪い事だらけの自分に愛想つきそうになった。
そしてザボエラの時の事も思い返していた。
まさしくロン・ベルクが言う通り、クロコダインがジィちゃんを盾にするように戦った事・・あれはクロコダインが毅然と断らなかったのがそもそもの発端であるのではなかろうか？
身内と味方になった人を使われたと腹が立ち、―原作―のイメージに引きずられたまま何の疑問も持たずにただ消してしまうかとしただけで、深くは考えていなかった。
そして深く考えた結果、自分は実際のザボエラを何も知らない事に気が付いた。
・・・知りもしない相手を勝手に許さないと断じて殺そうとするって私馬鹿だ・・
ザムザから知ったザボエラ情報も照らし合わせ、もう自分殺したくなるくらいに自分を恥じた。
そしてパレスでの日常の中でも知った。本物の博識家で研究家で、地上界中の紅茶を保持している紅茶党で、意外と研究部下からは頼りにされているのを。
その時点で自分の中でのザボエラに対する天秤がぐらぐらと揺れ始めてしまった。
自分は一体何を以てしてザボエラは殺していいと断じのだか。
ザボエラよりも大魔王の方が遥かに悪辣な事をしたのに自分はそれに対して腹ただしく感じていない。
ザボエラよりも策謀を仕掛け、幾度も自分を攫ったキルに対しても怒っていない。
・・・そもそも先の大戦では夜襲朝駆けを散々していたであろうハドラーを尊敬して、何故ザボエラだけを駄目だと断じたのだろうか？
自分の思いが揺れているのを冷静に振り返り、そして今も知ろうと

している。―ザボエラ―とは本当にどういうものなのかを。

「・・・ふん・・・・・・その目が・・・・気にくわんというのじゃよ小娘!!」

自分を観察するようなその瞳にザボエラも気が付き、腹ただしいと右手の五指の爪を振り上げた。

「「ティファ!!殿!・さん!!!」」

「嬢ちゃん!!!」

ザボエラの爪にからは猛毒がある！

その毒でティファを殺すつもりだ!!

だがティファならば、身を守る術がある筈だと叫んだ瞬間

ザシュ!!!

「あ・・・・・・父上⁉」

「・・・・・嘘だろう？」

「まさか!!」

「・・・・・・ザボエラ・・・」

・・・・誰もが驚き、冷徹参謀たるミストをも唸らせる。

「き・・・ひっひっひっひ・・・・お前なんぞに、儂の・・・事を見抜こうなどと・・・っひっひ・・」

ザボエラが自らの体に毒爪を突き立てたのだ。

何のことは無い、ティファに己を見透かされたような物言いをされるのが嫌だった、ただそれだけの事であり、それ程までにザボエラはティファを嫌い抜いていた。

これがティファが相手でなければ、己のプライドよりも命をとっていただろう。

あらゆる媚びへつらいをし、助かるために。

全ての事はいきていればこそ！尊厳ある死などになんの価値があると。

だがそれでも!!この綺麗事ばかり言う小娘の！自己満足に付き合

わされるなど!!我慢できるものか!!!
「・・・・爺殿はそんなに私が嫌いか?」
「嫌い・・じゃ・・・お前の慈悲に・・・・救われるなぞ・・・虫酸が奔るわ・・」
体内に毒が回る中、ザボエラは口角を上げたままで、瞳からティファへの敵愾心が消える事は無かった。
死んでも嫌いだ、死んだ後も嫌いだとその目が言っている。
殺されようとも貴様の慈悲にだけは縋らんと。
小娘からすれば自分は虫けらであろうし、次の瞬間には忘れ去られる身であろうが、これはそうはとるまいて。きっと罪悪を抱き続けよう・・きっひっひっひっそれにたった一人だけ、自分を擁護めいた事をした男がいた・・これらへの意趣返しにはなろうよ。
ザムザも・・・・きっひっひ・・これで儂に囚われよう・・・精々小娘と共に罪悪感の海に沈んでしまえばいい・・・・
命は大切で美しいというこの戯けた娘の心をズタズタに出来るのなら・・・
「そうか嫌いか。」
「・・・・なに?」
「生憎私も爺殿が嫌いだ。嫌いなもののしたいようにさせる程私は寛容であったことは無い。」
「は!ならばどうする!!・・・自死する前に儂の頸でも刎ね・・」
「死なせないよ。」
「・・・・は?」
「生きてもらう!ラック=バイ=ラック!!」
ガン!!
何を・・・・何を言っておる・・・・のじゃ・・・・
毒薬を日夜扱い続けた事で耐性が出来てなかなか死なないが、自分のみの内に仕込んでおいた毒は、最早ここまで全身に回ればキアリーでも解けない自負がある!!
なのに何じゃ?何故小娘が取り寄せた小瓶二つからは嫌な気配がするのじゃ!!

万能なる万能薬は爺殿のご子息ザムザさんで使い切ったが、あれは生命力・体力用を指して言ったまで。毒用は丁度一つ分だけ未調合がある。
「フラメル!!」
「ハッ!!」
呼ばれた式の従者は迷わずティファの側にに飛んで近づき、無言でティファの持つ二つの瓶を受け取り、一つに調合した。
万能薬は効きが言い分保存する為の物を混ぜることが出来ずに、調合した端から傷んでいくのが早い。
その為、いざという時にとっておいた未調合の物を持っていたが・・・
死に掛け意識後朦朧としているザボエラの体を右手で支え、口にそっと薬を流し込み、口を閉ざさせればごくりと飲み込む音がした。
これで死ぬまい。
「ティファさん!!私の事はどうぞ気にせず!!そのままどうか死なせて・・・」
「もう薬は飲まれた。これはザムザさんを救ったのと同じ、毒用の万能なる万能薬。」
「・・・・ティファ!!何故そいつを助ける!!」
「・・・・助けたに・・・・ならないよクロコダイン・・・」
ザムザの言葉と、クロコダインの言葉に、ティファは何処か疲れたような声で答える。
仕方がないではないか・・・・殺そううにも・・・・
「俺はお嬢さんのやり方に賛成だ。そもそもその爺さんはもう戦いには何の役にたたん非戦闘員だろう?」

ロン・ベルクの言う通り、ザボエラはガルヴァスがいなくなった時点で非戦闘員化している。
マホプラウスとて、ネタが割れていれば最早切り札でも何でもなく、ロン・ベルクは知るまいが超魔ゾンビだとてこの戦場では使える代物ではなく、知らずロン・ベルクはザボエラの現状を正しく言って

のけているから畏れ入る。
地上の命を守ることを掲げた地上軍が非戦闘員を一方的に殺しにして良い筈も無く、する気も無い。
ロン・ベルクの言葉と、其れに頷くティファに周囲が唖然としている間に、ティファはザボエラの右手首を雪白で斬り飛ばし、聖炎で焼き潰す。
聖炎は魔を焼き尽くす。これでザボエラの手は二度とは復活しない。
残念だがザボエラは真の意味で能力がありすぎ、そして恨みもそれなりに買ってしまっているだけに、無罪放免とはさせられない。
益体も無い老人になり下がり、嫌いな自分に助けられ・・・・・最低だな。
此処で一思いに死なせることがザボエラにとっては幸せだと知っても、死なせてあげない自分は最低だと、ティファ自身が自分の罪を一番理解している。
ザボエラを筒に入れながら、ミストはどう出るのだとあたりを見れば、魔王軍全軍がいつの間にかパレスに帰還していた。
捨てられたか
きっと自分達に注目が集まっている間に行ってしまったのだろう。
ザボエラを魔王軍に渡す気は最初からないのだからいいが。
「ザムザさん。」
ザボエラを筒に入れたティファが、漸く地に降り立ちザムザに筒を渡す。
「これは貴方にお任せします。」
「ティファさん・・・・なれば・・」
「ただし、貴方自身が後悔しない方法を考えた末にどうするか決めてください。」
「ティファさん⁉」
ティファはザムザに筒を渡した後、ちらりとハドラーの方を見ながらザムザに言い渡す。
自分達の事を考慮するのもいいが、―息子―として、本当に父たる

ザボエラをどうしたいかを。
「あ・・・・あ・・・・うわぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
ティファのその考えに至ったザムザは、筒を抱きしめながら泣き崩れる。
決して尊敬できる父ではなかった。父の悪評のせいで自分までもが誹られた事が幾度あったが・・・・それでも!どうしても嫌いになれなかった!口数少なく、其れでも弱いお前は持っておけと、小型の黒の核晶を渡された時の父の顔を・・・どうしても忘れることが出来なくて・・・・其れでも仕えて尊敬していたハドラーに申し訳が立たないと絶縁しようとしたのに・・・・助けたいと思うのは身勝手で・・・・ぐちゃぐちゃの思いにザムザは泣き伏す。
「・・・・・ハドラー・・・」
「お前は後悔せんのか?」
「しない、傲慢で最低だって思うけど後悔はしない。」
ザムザの泣き崩れる様を見ながら、ティファはハドラーに事後承諾を取る。
先程ちらりと見た時幽かに頷いてくれていたので通してくれる確信はあったが。
「ティファよ・・・」
「・・・・・クロコダイン・・・」
だが、クロコダインはどうであろうか?矢張り許すなと、今からでも筒を壊そうとするだろうか?
ここまで来たら、決めるのは身内でこちらに来たザムザが決めるべきだと思いたいのだがどうだろうか。
「・・・・先程のロン・ベルク殿の言葉で目が覚めた。俺は、俺の過ちを恥じ、全てザボエラに押し付けようとしていたのだな・・」
「クロコダイン・・・・」
「ザボエラの命運は、ザムザ殿に託す。俺は最早二度と言わん。」
「うん・・・うん・・」
クロコダインの言葉を噛みしめる様にティファは頷き、当事者たちの言葉に周りもばらばらとだが賛同するように頷き、ザムザは更に咽

び泣いた。

筒の件は決戦後にティファが決める事とザボエラの処遇はザムザが決める事をカール女王たるフローラが裁可を下し、暫くロロイの谷は、泣き伏す声が支配した後、程なくしてヒム達は回復されたがロン・ベルク達と共に後詰として地上に残ることになり、ティファ・クロコダイン・チウ・ハドラー・ラーハルトはアバンのルーラでパレスへと突入した。

―全ての事―に決着を付ける為に。

料理人のティファパレスに到着す

こんな・・・・戦いって・・・・どうしてここまで・・・・

「ダイ!お前はまだ前に出るな!!姫さん!マァム!近接近戦はすんな!ヒュンケルに任せておと姫さんは―回収―の方に・・・ちぃ!ギラ!!!」

パレスでは序盤どころか入り口において戦いは熾烈さを極めた。

地上と同じく、魔王軍全軍が死兵と化し、斬られようが吹き飛ばされようが大挙してくる上に、キルトラップがここぞという時で発揮されダイ達を肉体的にも精神的にも追い込んでいく。

其れもトラップは敵味方を問わず、そして相手もトラップの中であっても飛び込んでくる異常さに、マァムがその様に耐え切れず吐瀉し、ヒュンケルに抱えられポップと同じ後方に下げられ暫くはヒュンケルが前衛を受け持ちダイはストラッシュ系で応戦し、トラップはミエールの眼鏡をかけたポップが受け持ち、指示出ししながらトラップの対応に苦慮し始める。

なんなんだよ本当にこいつらは!!死ぬの怖くねぇのか?手足千切れてんのに何で向かってこれんだよ!!

少し前の自分ならば恐慌状態に陥りそうな異常な戦い方に、竦みそうになるのを敵を心の中で面罵する事で辛うじて精神の均衡を保っているが、限界が近づくのが分かる。

「魔界の為に・・・」

「我等とバーン様の悲願の為ならば!!」

「もう止せ!!足がないのにどう・・・」

「ヒュンケル!!イルイル!!」

足が無くなり立ち向かえなくなったアークデーモンは内に力を貯めこみ自己犠牲呪文を躊躇いも無く発動させる寸前にマァムが間に合い辛うじて筒に入れられた。

「こ・・・こんな戦い・・・・戦いじゃない!!こんなのおかしいわよ!!」

敵もトラップも一段落したのがいけなかったのか、マァムは耐え切れずにボロボロと泣き崩れる。
戦いとは、いつも自分達が不利な中でも強敵に立ち向かうものであり、消耗戦をしたのは初めてなのだから無理はないと、アバンの弟子の中でもそれなりの修羅場をくぐってきた唯一のヒュンケルは、泣いて動けなくなったマァムを横抱きに抱えてダイとポップのもとに向かう。
キルトラップを粗方片付けると豪語しておいて、まだ入り口でしかない此処で心身共に消耗させられているが仕方がない。
ダイもポップもレオナ姫も顔色が悪い・・・・マァムは言わずもがなで・・・本当に無理もない。
この四人は大戦が始まる本の数か月前まで太陽の下を遊びまわるただの子供だった。
レオナ姫は王女として薫陶の下、厳しい教育も受けてていたと言ってもたかが知れている。
命の遣り取りなど論外であろうしまして死兵相手なぞ誰が想定するというのだ。ポップはあのアバン先生であれば可愛い弟子を綿で包む様に守って来られただろうし、ダイに至っては、力も心も強いが、こんな血生臭い事に出会ったことが無いと断言できる。
ティファが常にダイの傍らに在り、そういう事に目を光らせ陰日向なく守ってきたであろう事が容易に想像がつく。
自分達をそうして守って来てくれたのだから。
「マァム!!」
「ヒュンケル!マァムをそっと下ろして・・・マァム、もう敵はいないわ・・」
「・・レオナ・・・まだ、入口なのに・・・・まだ半分も何にもしてないのに・・」
「少しずつ攻略していこうぜ。陣形は今のままで、ダイとヒュンケルは交代で前衛してくれ。とにかく相手にダメージ与えたらすぐに筒に入れて行けばいいさ。
ほれ、まだこんなにあるんだぜ。」

レオナと話して幾分落ち着いたマァムに、ポップは最後の台詞をおどけながら言って、預かった袋の中身を見せればまだまだ多数のモンスター筒がある。
沢山作ったからバンバン使ってね。
ティファが渡してくれた筒・・・でも、入れても入れても敵が途切れず・・・フォン!!!
しま・・・
ゴォウ!!!!!
「チィ!!メドローア!!!」
下からのマグマ系のトラップに、ポップは床目掛けて極大消滅呪文を躊躇いも無く放ち、相殺している間に一行全員をバシルーラの要領で吹き飛ばし、自身もすぐさま空中に飛び出した。
些か手荒い脱出方法であったろうが、死ぬよりは・・・
「チェックメイトだよ魔法使い君。」
何処からともなく聞こえた冷たく甘い声に、ポップの全身に悪寒が奔る・・・しまった!!!
気が付けば全方位から多数の剣戟が襲ってきた。
「ポップ!!!アバンストラッシュ!!」
「ブラッディースクライド!!」
二人が誇る放出系の闘気技は、一時しのぎになったが、ポップを逃がさないとばかりに、上から降り注ぐように降ってくる溶岩の嵐を避ける術がなかった。
マグマの動きが、いやに遅く感じる。
呆然と上空から迫る溶岩に対し、ポップは呆然としていまい動きを止めてしまった。
広範囲であり、何よりもルーラで逃げようにも周りをまた剣の嵐が再開された。
二の矢三の矢に対処するには手が足りなさ過ぎた。
・・・・俺の・・・冒険はここまでなのか?

バーンが目の前にいるというのに・・・ここで・・・・・
我は守り人・・・
・・・・この声は!!
「守りの担い手!我が加護の下、愛し児達全てを揺り籠に入れるが如く守り抜け!!」
ジ＝アザーズ!!!
グワァシャァン!!!!
「「ポップ!!!」」
其れは本当に間一髪であった。首の皮一枚よりも薄き寸でのところで、結界が間に合い、マグマはそのまま結界の上を滑り落ち、剣も全てマグマによって溶かされたが、結界内のポップは中で座り込んでいるが呆然としているだけで怪我は一つも無かった。
今の詠唱の声を頼りに、自分達が先程まで居た地点を振り向けば、手を上空に翳しながらゆったりと黒髪を揺らし、水色の上下の詰襟スカートにシルクの白ズボンと、空飛ぶ靴を履いたている者が歩いてくる。
「遅くなって申し訳ありません。」
眼鏡は掛けていなくとも、後ろにラーハルト・ハドラー・アバンを従えるように歩きながらも、何時のも様にゆったりと笑い、優しい声を発しながら威風堂々と歩いてくるティファの姿に、上空のポップのみならず、ダイ・マァム・ヒュンケル・レオナは心の底から安堵した。
料理人のティファが来てくれたのだと。

勇者一行の料理人の必須能力はブレイク力か？

「ティファ!!!」

詠唱の声が聞こえる前から分かっていた。
ティファがパレスに上がってきたのが。自分達が温かいあの気配を間違えることなどあり得ない！
レオナに慰められていたマァムは、声を掛けられる前にティファに駆け寄り・・・・否、走り出し両手を広げティファに抱き着き
「ティファ!!ティファ!!!」
幾度もティファの名を泣き叫んで縋りつく。
怖かった・・・恐ろしかった・・・・自分が手痛い目に遭った訳でもないのに心た痛くて狂いそうだった!!!
「ふうぅぅぅえぅぅ・・・」
・・・・耐え切れなかったか・・・
「マァムさん、敵はもういません。」
何があったのかを察したティファは、ゆっくりと座り込んでマァムを好きなだけ自分に抱き着かせ、背中に当てている手をポンポンと叩きながら、戦場にいるとは思えない程の穏やかなゆったりとした声でマァムをあやす。
「大丈夫、大丈夫ですよ。」
優しく何度も何度も。
そのティファとマァムの周りに、自然とダイとポップ・ヒュンケルも近づいて、二人を囲むように輪が出来る。
「ダイ兄、ポップ兄、レオナ姫もおいでなさい。」
マァムの泣き声が小さくなったのを見計らい、ティファは小さな両手を三人に向かって広げた。
おいでと
「・・・ティファ・・」
「う・・・くぅ・・」
「ふぅぅぅ・・・」

ティファの声に誘われるように、三人もティファの両肩と開いている背中に縋りつく。死兵の事もそう、もう少しで親友を喪いかけた衝撃と、寸前で死に掛けた衝撃の恐怖に、二人は打ち震えていたのをティファが見逃すわけもなく、慰める為に。

泣く四人を、ヒュンケルはもとよりティファと共に来たアバンを始め、ハドラー・ラーハルト・クロコダインは四人を囲んで守り、チウは三人の背中を順繰りと優しくさすっていく。

ほんの少しでも温まってほしいと。

寒くて、痛い事も、ティファの声が不思議と温めて癒してくれる・・・其の温もりを、誰よりも知っている四人の内三人は、敵地の中なのを知っていても、どうしてもティファに温めて欲しく、暫くして顔を上げ子供四人組は真っ赤な顔をしていた。

「ティファ・・・・ごめん、敵の陣地の真っただ中で・・・・」

「俺・・・俺・・・・」

「ごめんなさい・・・取り乱し過ぎて・・・」

「ティファ・・その・・・・」

何かを言わなければと焦る四人に、ティファはクスリと笑ってしまう。

まるでつまみ食いを見つけられた子供の様だと。

「ダイ兄、ポップ兄、レオナ姫、マァムさん・・・其れとヒュンケルもおいでなさい。」

「・・・・俺もかティファ?」

「そうです。早く来なさい。」

いきなり呼ばれて戸惑うヒュンケルに、ティファは毅然とした声で呼びつける。

まるで旅をして知る間の、あの何をも怖れないと思っていた料理のティファの声に、ヒュンケルは逆らう気もなくなり直ぐにティファのもとに向かい、目線が合うように片膝を付いた時次の指令が下った。

「全員口を開けなさい。」

その言葉に、五人は何の疑問もなく口をぱくりと開けば。

「お食べなさい。」

丸くて大きな甘いアメが、口の中にそっと入れられた。

甘い味、ティファがくれる物はいつでも甘くて優しい。

その甘い優しさに、マァムは口の中の飴玉をころころと転がして味わい、何時の間にか泣き止み、ヒュンケルは二つ目も食べたくて噛んで早く消費しようとしたのを察したティファが、自分の口に左手人差し指をにっこりとしながら押し当てて来た。

「駄目ですよヒュンケル。アメは一日一粒にしておきましょう。」

柔らかい笑みで、悪戯っ子を優しく咎めるような言葉に、ヒュンケルは見透かされた事と、アバン先生にも自分の駄目な所を知られてしまった事も思い至り物凄く赤面し、そばで見て聞いていたダイ・ポップ・マァム・レオナはティファを取り囲みながらも顔を見合わせ、そして吹いてしまった。

「ヒュ・・・ヒュンケル!!アメ・・・そのまま舐めていた方が・・」

「っひっひ～ダイ!そんなに笑ったらヒュンケル可哀そうだぞ」

「ふふ・・そういうポップだって・・」

「駄目よマァム!ヒュンケルは近頃エイミにもアメの注意受けて・・・アッハッハッハもう駄目!!」

緊張の糸が途切れたように、お子様四人組はひとしきりに笑い、そんな四人に憮然としながらも、ヒュンケルも次第に笑い出す。

あぁ、いつもの自分達になれたのだと安堵しながら。

どこにいても、どんな時であっても、笑えるようにしてくれるティファが側に居てくれるのだと。

その様子を微笑みながら見ている大人達の事に当然気が付き・・・自分の事を本当にこいつ大丈夫かと見ているラーハルトの視線が少し痛むが・・・仕方がないではないか。

アメは大好きなアバン先生とティファの思いが詰まっているのだからと内心で言い訳している。

「まだここは序盤ですが、もう少し行った先で休める所を確保します。そこではちみつレモンティーを飲みながらお昼ご飯に・・・・」

休めるようにしましょうと言いかけたティファは、前方から気配を

感じ取った。
「チウ君もここにいてね。どうやら―私のお客さん―の様なので挨拶してきます。」
　気配からして数十人。先程よりもかなり少ないが全員が警戒をする中、立ち上がったティファはゆっくりと一番先頭で構えているハドラーよりも前に出る。
　当然止めようとしてハドラーが口を開く前に、ティファは左手を斜め下に下げて静止を求め、無茶はしないと笑って目で訴える。
　・・・・・こ奴は本当に。
「アバン、何かあったら即座にベギラゴン放つから少しだけティファの好きにさせてやれんか？」
「・・・・・甘いと、言わざるおえませんが少しだけでなら。」
　ティファに甘くしないと言いながらも矢張り甘くなるハドラーに、アバンは溜め息を吐きながら両脇にいるラーハルトとクロコダインにも、ハドラーの提案を了承すると小さく頷き、二人も闘気を練りながら、ティファを敵と相対させることにした。
　もしやパレスで知り合った者が、今生の別れに来たのかとも思い至り。
「嬢ちゃま!!!」
「あぁ～・・・・地上で見かけないと思ったら、此処の守備隊についていたんですか―ゴムラ―さん。」

　ティファは会ってしまったかというより、会っちゃったという位の気軽さで、先頭に立つアークデーモンのゴムラに言葉を掛ける。
　言葉遣いこそ田舎言葉だがこのアークデーモンは実に凄い奴であり、この前半部分の守備隊長をバーンより個体名の名と共に直接任命を受けている強者であり、一声かければ数百の配下が一斉に手足の如く動くというカリスマ性の持ち主だったりする。
　個体名持ちだけでも凄いのだが、本人は自分が凄いという自覚がとんとない。
「いんや～。おらみたいなもんに名前さつけて下さる大魔王様はやっ

ぱりすんごく優しくて凄いお人だやぁ～。」
　とか豪快に笑って、嫉妬しやすいザボエラの毒気をも抜いてしまったと言う偉業を果たした本当に凄いお人が、配下を引き連れ目を三角にいからせティファに対峙し…戦いの火蓋が着られるかと誰もが思ったその時。

「いい加減大人しく捕まりなせぇ!!バーン様が困ってますだよ！オイタが過ぎるんだったらおらにお尻ぶっ叩かれてれても文句は言わせねぇだよ嬢ちゃま!!」
　ズッシャン!!ドっシャン!!!・・・・・・ホワット？
　・・・・・・その言葉にティファは目を点にして沈黙してしまい後ろで見守っていたダイ達は無論の事、シリアスモード決めていた大人組までもがずっこけた。
　すわ親しき者達が涙を流しながらの悲しき戦いになるかと力を溜めて、全力援護を決意していただけに、その何処までも田舎のおっちゃんの言い回しと話の中身と、発せられているハドラーには届かなくともその位置の配下くらいにはなれそうなその強さとのギャップにこけたのだ。
　どう考えてもあれは滅ぼすべき敵に掛ける言葉ではなく、大問題を巻き起こしている困り者の身内に掛ける言葉だ!!
「ダ・・・・ダイ・・・俺・・・・怖がり過ぎて空耳が・・・」
「ポップ・・・今聞こえたの本当だよ・・・」
「・・・もう嫌！どうして敵の誰も彼もがティファに対して我が物顔すんのよ!!あのアークデーモンのして黙らせてくるわ!!!」
　ポップとダイは現実逃避しかける中、ティファは私達のティファよを標語にしそうなマァムがとうとうキレて立ち上がり、全身に力を込めてアークデーモン・ゴムラに向かって叫び上げた。
「ちょ・・・マァム!!チウ君！ヒュンケル!!ダイ君とポップ君もマァム止めて頂戴!!!」
「落ち着いてマァムさん!!」
「マァム！ティファに貰ったアメがまだ口の中に残ってるだろう!!味

わって落ち着い・・」
「私アメ馬鹿じゃないのよヒュンケル!!」
グサリ!!!
妹弟子の八つ当たり気味の一言に、ハートをブレイクされながらもヒュンケルは耐え抜き、本当に突っ込んでいきそうなマァムを羽交い締めにして押し止め、辛うじて立ち直ったアバン達はふらつきながら立ち上がる中、初期に戻ったティファはプルプルと身を震わせ心の中で大絶叫した。
誰かこの状況の説明してよ!!なんで私はバーンの身内枠で物言われてんのよう!!!
ゴムラさんの後ろにいる配下全員も何でその通りだって頷いてんのよう!!!!
さっきまでこれぞ三界の命運決する一大決戦のシリアス雰囲気どこ行ったのよ!!
家出したんなら帰ってきて!!!!

「・・・・・・あれって完全にお嬢ちゃんの日頃の行いのツケによる自業自得ですよね・・」
「・・・あれは本当に真面目な空気を壊すのにでも長けているのか・・」
「・・・・・(胃薬欲しい)」

とうとうティファもパレスに上がってきたと、悪魔の目玉で注視していた大魔王と其の従者達も、三者三様の感想をしみじみと持つ。
ゴムラがティファを身内枠に入れるのは、敵なのにあれだけ楽しく接していたのだから自業自得だろうと、さしものティファ大好きっ子のキルも呆れてしまい、流石にこの決戦では真面目な空気の儘自分の前に現れるだろうと思っていたバーンは右手人差し指でこめかみを揉みながら溜め息を吐き、ミストは本気で胃薬欲しくなっている。
ティファが知ればさらに絶叫していているだろう。

私自分の身分偽っていませんよ!!きちんと捕虜のティファですって言ってました!!

あの生き生きと楽しそうにしていたティファを見て、誰が本気で捕虜だと思うのだという突っ込みも漏れなくセットになる大絶叫を。

料理人の真価

まったく仕方がないお方だ。幼少の頃から何も変わらずにいるのは良い事なのか悪い事なのか。

周りでアバンとクロコダイン・ハドラーまでもがこけた中、ただ一人ラーハルトだけがクスリと笑ったっきりで後はいつも通りに自然と周りを警戒している。

今更だからだ

ティファが誰かれ構わずいつも通りなのも、そのせいで相手がティファに魅かれるのも今更だ。

何せその元祖は我々だ！・・・とかいう妙な自負がラーハルトには有り、此処にいればガルダンディーもボラホーンも、ティファ様らしいと笑っているだろう。

しかしマァムの言う通り、矢張り敵を公言している者達がティファ様を自分達の者だと言わんとするのは面白くない。さっさと潰しておきたいところだ。

それに・・・・そろそろ・・・来たか。

パレスの入り口にあたる、鳥の頭の部分の前半守備に就いているのはゴムラ達だけではなく、当然ティファの事を知らない者達がいるのは当然であり、先程から仕掛ける気のないゴムラ達に痺れを切らした一団が、殺気を振りまきながらダイ達、特に一番前にいるティファを目掛けて来た。

「退けゴムラ!!!射線にいるなら俺達の魔法の餌食になっても文句は言うなぁ!!!」

其れはアンクルホーンとにじくじゃくとれんごくちょうの三種族だけで形成された飛行魔団。

地上で戦ってもよし、其れから爆撃するもよく、地・空戦のスペシャリスト達が、文字通りティファ目掛けて飛んできている。

アークデーモン・ゴムラの一団は、何の拘りもなくアンクルホーンの言葉に従い直ぐに体を両脇に割れさせティファへの射線を綺麗に開けてもせた。
ゴムラが両腕を左右に動かすだけで見事な程の号令一下の動きであり、統率された軍の動きを始めてみたダイ達が本気で見惚れたほどの洗練された動作であった。
だが、其れはティファへの攻撃の道筋が出来た事に他ならなく、大人達はすぐさま武器を構える。
どれ、突っ込んでくるのならラウシースピアではなくハーケンディストールの出番か。
魔法が来たのならばアバンが相殺法の海波斬とやらかハドラーが対処しよう。
あの距離からの攻撃であれば、ティファ様ならば魔法を避ける事等造作もないと、ラーハルトの一瞬の思考の内に、何もかもが終わった後であり、イルイルというティファの声があたりに響き、気が付けばティファが先程突進してきた敵の一団がいた辺りに立っており、ゴムラ達以外の敵は一体もいなかった。

ティファ様から視線を切ったのはほんの一瞬、其れもゴムラ達が動く気配がないかの確認をしたほんの一瞬だけで全てが終わっていた。其れだけの瞬の間に、ガシャンという音が聞こえたきりでティファの動きそのものが見えなかった。ティファが何か物を壊した後敵を筒に入れた事しか分からない！

「ティファは・・・小瓶を地面にたたき割って中の粉末を振りまきながら超最速で敵をすり抜けて、その直後にふらつき始めた敵全てを筒に入れたのです。」
槍を構えたまま呆然とし、後ろでもティファが何をしたと唖然としている子供組に、アバンが解説してくれた。
其れは言葉にすればそれだけの、しかし不可能な程の戦果であった！

其れをなした当人は余力を以てにこやかに微笑んでいる。
楽な対策で戦果を挙げられたとホッとして。
いづれも魔法力のみならず、機動力においても軍随一の速さを誇る飛行魔団。
ティファは一目見て、速さを誇る彼等の機動力を逆手に取った。
これが上空からの攻撃もある立体的な軌道で動かれていれば一網打尽に出来なかったがなまじ周りに味方がいた為に、射線を開けさせ初手を前方からの攻撃のみで行った。
おそらく避ける自分とすれ違う時、肉体の乱打戦をしながら立体的軌道に切り替える積りであったろうが、ティファは薬の小瓶をリングから素早く取り出して両の手の五指の間に挟み込み、迷わず走りながら口で全ての瓶のふたを開け素早く前方の敵全員に中の粉末が行き渡る様に両側と中央に調節して瓶を叩き付け、一粒でも鼻や口の中に薬が入っただけで彼等は意識を刈り取られた。
敵の間を無傷ですり抜けたティファは、全軍の後方に抜けて直ぐに振り向き敵全てを筒に入れいった。
薬が効いているかどうかの確認をする事なく無造作に。
おそらく薬が効かないとは微塵も考えていないでの動きだろうが、魔王軍の、其れも魔界のモンスター達にはそれぞれではあるが毒物に対する耐性が殊の外強い！にもかかわらず僅かな薬が体内に入っただけで昏倒する薬とは一体!!
かつての味方達の耐性能力を把握しているハドラーは、ティファが僅かな薬で彼等を捕らえた事に驚愕した。
一体、どれ程の強力な薬を・・・
青褪めそうな顔のハドラーと、自分の動きに驚愕し沈黙した味方に気が付いたティファは敵が目の前にいるのにも構わず左手人差し指を口に持っていき
「勇者一行の料理人たるもの、この程度の事（敵軍勢を眠らせる薬を作り眠らせ捕縛する事くらい）出来なくてどうします？」
優雅に笑って宣った。

次の世代の為に次の次の世代の為に

さしたる労力は使っていない。
ただ、足の筋肉を闘気で強化しながら薬瓶を投げ、敵をすり抜けながら後方に立ちてモンスター筒を発動したに過ぎない。
カランカランと、ばら撒きながら使って空中に上げられたモンスター筒が落ちたのをティファはラックを使って手元に回収し、直ぐにリングにしまい込む。
ティファにとっては、たったそれだけの事であった。
血は一滴も流れず、憎しみの声も怨嗟も上がらずに、穏やかな雰囲気を漂わせたままの・・・戦い方の次元すらが違うのだと突きつけられた。

「・・・・やっぱり大魔王様の言う通りにしかなんねかったか・・」
ティファの異次元的な戦い方に、味方全員がポカンとする中、アークデーモン・ゴムラが頭をバリバリ掻きながらティファに話しかける。
まるでティファの対処方法を予め知っていたように。

・・・大魔王様、嬢ちゃまやっぱりすげでえすだな。
地上での攻防を、パレスの一角で見ていたゴムラは、勇者達が突入する寸前に副官のがいこつと共に呼び出された時、思わずぽつりと漏らしてしまった。
ティファが尋常一様でないのは出会った時から感じていた。例えミストかキルに抱えられ、自力で動けなくともその小さな体の奥に途轍もない何かを秘めているのを看破する程にゴムラも強かった。
だが、強くとも驕るどころか優しいティファに、ゴムラ達は魅かれ、なんとかティファにこちらに来て、魔界の浮上を喜んで欲しかったのに・・・
そんな自分の愚痴とも戯言ともいう言葉を、大魔王様は苦笑して、両隣いらっしゃるお二方とも自分を咎める事無く、大魔王様は嬢ちゃ

まに・・・

「嬢ちゃま!!」

ゴムラの顔つきが変わり、真剣な瞳をティファに向けた。

先程までの優し気な気配は一掃され、戦士としての顔を始めてティファに向ける。

可愛かった、自分も一度だけ抱かせてもらった時の、温もりを生涯忘れまい。

小さくて軽すぎて、頼りないのに暖かい者に自分こそが包まれている様なあの不思議な幸福感を味わえた事を、敵味方に分かれたくらいで後悔なぞするものか。

「どうしましたかゴムラさん。」

いまだとて、自分の呼びかけに柔らかく答えてくれるティファに、此方に来て欲しいとまだ未練気に叫び出し王になるのを抑えるのに必死で、それでも伝えなければいけない大切な言葉がある!!

「もしも料理のティファが来ない時に、おら達の守備範囲に勇者達が入った時は、おら達の何もかもを使って勇者達の全てを損耗させろというのが大魔王バーン様よりのご命令でしただ!」

勇者達は皆若く、本当の戦慣れしている者はヒュンケルを入れてもいない。如何にヒュンケルが戦いの天才であっても、泥臭く血生臭い魔界の戦い方を教えてこなかったとミストが断言している。

あれは綺麗な戦い方しか知りませんと。

であるならば、守備隊全員の体を、心を、魂を使って勇者達の体力と気力と精神力全てを削る様にとの沙汰に、ゴムラ達は分かりましただと、笑って応えた。

大魔王バーンが、ひいては魔界が勝つ為の礎になる事に何の躊躇いがあろうかと。

「・・・・成る程。私達は辛うじて間に合った問い事ですか。」

内容もどうしてそのような命が出されたのかも正確に把握しているティファであるが、矢張り不快感が圧倒的に体中を支配した。

自分だったら、自分を使ってそのようにする。それが敵を弱らせる

為ならば躊躇いも無く。
しかし他者がするのは嫌だと、ティファは物凄く手前勝手な事を思う。自分はいいけど他人逸るなという何とも身勝手な思いを、一行でもバーン達でも知れれば激怒されている。
人にやるなというのならばお前はどうなのだ、散々自分を粗末にしてきた者が勝手を言うなと。だがら、これは知らぬが何とやらで、ティファの不機嫌は一行があわやな目に遭った事だろうと全員が良い具合に勘違い・・でもない。
其れもあり不快感を露にしているのだから。
不快感が相当なのか、優しいティファしか知らないチウとアバンは、ティファの顔に刷かれた冷たい表情に背筋が凍る思いがするが、其れに相対しているゴムラは泣きだしそうになっている。
じょ・・・嬢ちゃま・・・其れはあくまでもそうなった時の事で！おら達は今そんな事せんだよ!!!
心で絶叫してうる目になるゴムラの横に、補佐する副官のがいこつが剣を全て地面において、丸腰でやってきた。
「私は名も無いがいこつではあります。ごらんのとおり強化されている訳でも秀でた能力もありませぬが、弁を買われてゴムラ様の副官を任ぜられました。」
ゴムラは強いのだが、見た通り情に弱い。魔界のモンスターらしくない。
らしくなさの波長がティファやキル、ミスト達と合ったと言えばそこまでだが、兎も角配下達に死地に行けという言葉を言い出すのに半日かかるか、下手すれば自分一人で突っ込んでいきそうなので弁が立ち、淡々と命じられたことを配下にもさせることが出来るがいこつが副官としてこの場の守備隊を纏めており、大魔王バーンからの伝言も、万が一ゴムラがティファの前で泣いて言えない事も想定され、共に授けられた。
だからここでゴムラ様が言えないのは大魔王様達の想定内なので、敵に対して弱腰になったという咎は有りますまい。
ゴムラの武骨で剛毅な優しさに、がいこつは惚れているので主が

困った事にならない算段を付けながら、ティファに発言してもいいかと伺いを立てた。
「構いません。まだ大魔王から何か言われているのですか？」
「ございます。」
　目下にしか見えない自分を相手にも態度を変えないティファに、見せかけではなく心から頭を下げて一礼し、バーンからの言葉の先を続けた。
「先程のは勇者達のみが来た時の事ですが、当然貴女様が来た時の事も命じられておりました。」
「・・・・続けて下さい。」
「はい。もしも料理のティファを伴いてパレスに上がってきたその時は、自分とミストバーンとキルバーン以外のパレス内にいる全魔王軍は、ガァグランスの守りしゲートを通りて魔界に帰還する様にとの・・・・・ティファ様？」

　がいこつの受けた大魔王の命を聞いて内容を即座に理解したティファは、骸骨の言葉を最後まで聞く事無く、弾かれたように中央の塔の最上階を振り仰ぐ。
　鳥の頭の更に先におわす魔界の神を。
「ティファ様、これよりは大魔王バーン様のお言葉を違えずにお伝えしたく。」
「あ・・・・・ごめんなさい。」
　話の腰を途中でおった事にティファは恥じて再びがいこつに向き直る。
　果たして大魔王は、何を思って全軍撤退命令を・・・
「―その方を完全に倒し尽くし殺し尽くせるは最早三界を探しても余のみであろう。であるのならば無駄な血を流すこと能わず。其方の好きなタイミングで勇者達を引き連れ余の下に戻ってまいれ。」
「・・・・は？」
「以上が大魔王バーン様の貴女様に対するご伝言で御座いました。」
「そうか・・・・・大魔王は・・・・・そんな事を・・・・」

其れは途轍まなく傲岸不遜な言葉に聞こえてもなんら不思議ではない言葉であったが、その言葉を噛みしめながらティファの顔がみるみると嬉しそうな力強い笑みが浮かび始める。
「ティファ・・・・怒らないの？」
敵の不遜な言葉に怒らないのかと、兄のダイの言葉に、ティファは怒ることなど何もないとからりと笑った。
「大魔王は無駄な血を流したくない。私も流したくない。本当に、この戦いは大魔王か勇者達の戦いでしか決着が付く事なんて金輪際ないんだ！あの人は・・・それをしてくれた。」
配下達を無駄死にさせない道を、大魔王は選んだのだ。
「分かりました大魔王!!兄達を・・・勇者達を引き連れて貴方と魔影参謀ミストバーンと死神キルバーンの前に出ましょう!!全ての事に決着を付ける為に!!!」
満面の笑みを以て、ティファはバーンの言葉に応え
「・・・・待っておるぞ。」
届かぬ呟きでバーンも返した。
己の出した最良と思える道を、ティファが本当に理解してなおも挑んでくることを喜ぶように。

ティファにはもう、自分を倒す力はなく、ハドラーとの決着も永劫つくことは無い。
おそらくキルをも倒しきる力はない。
だが、自分以外に負ける事も無い。勝つ戦い方ではなく、あれは―負けない―戦い方に長けており、それ故に勇者一行の料理人として、全面支援をこなしてきた。
ティファがいれば、一行の心を損耗させる策は成り立たず、奮い立つ勇者達に守備隊全員を突撃させても意味がない。
ティファを逃がさず殺し尽くせるは最早自分のみ。無駄に、配下達を死なせる愚を犯すつもりは無い事を、ティファは理解して喜んでいる。
命が無駄に散らない事に喜んで

「ではこの子達もお返ししますね。」
「い!!!嬢ちゃま、この筒にいる奴等は嬢ちゃまに・・」
「構いません。大魔王の命に逆らった云々はそちらに魔界に帰ってからお願いします。いいよねダイ兄達も。」
つい少し前に筒に入れた敵を、ティファはリングごとゴムラに投げ渡し、事後承諾をダイに取る。
ダイ達としても、あんな損耗戦はご免であり、しなくていい事にホッとしたので大盤振る舞いなった。
「いいよ、捕虜とかっていらないし・・」
「いても困るし、」
「いない方が嬉しいし」
「扱いに困るから連れて帰って頂戴。」
「その方がどちらにとっても良い事ですよね。」
ティファ含めたお子様組の勝手な言い分に、アバン達はどうしたものかと考えてしまう。
ティファ達は、大魔王の甘言の罠を考えていないのだろうか？
「・・・アバン、大魔王は・・・やろうと思えばおそらくティファをいつでも手元に呼べるぞ。」
常識手に悩むアバンに、ハドラーは小声でバーンのハイ＝エントの移動能力・ラド＝エイワーズを教える。
ティファが相手を移動させるように、バーンにも出来たるのだと。
使わなくとも、ティファ達が勝手に来るのを待つだけでいいから使っていないだけだろうとも。
「・・・成る程、ちんけな策など施さずとも、勝つ自信があちらにはおありで。」
「・・・・むしろ勝ち筋をこちらが見いだせるかが問題な程だ。」
あの巨大な力を持った大魔王バーンが、子供騙しの策をする必要がない。
何せ万全な自分がいてやっと五分になったとしか思えないのだから。

その言葉をクロコダインも力強く頷いて肯定し、聞いていたラーハルト達を青褪めさせる中、ティファ達はゴムラ達を見送っていた。
「行ったね。」
「私達も行こうか・・・どこでお昼にしよう？」
「・・・・お昼食べていいのティファ？」
「ここが敵地で・・・」
「ティファ、サンドイッチ位の軽食よね？」
「流石にがっつりは・・・」
「ティファ、どこか場所は当てがあるのですか？」
「あ！あります!!とっておきのいい場所が。」
「私もサンドイッチ位はたくさん用意しましてね。」

ある意味大魔王バーンの巨大な力を担保にして信じているダイ達に、無粋な事を言う事も無いとアバンは腹を括る。
これが罠であったれば、自分達が噛み砕けばいい。
この子達の綺麗な心を穢した報いを受けさせればいいのだと。

ゴムラ達を見送ったダイ達も、程なくしてパレスの奥へと歩を進める。
先ずはお昼ごはんを食べて英気を養いに

「なぁティファ。」
「何ポップ兄・・・・・私も走りたいんだけど。」
「あぁ・・・そりゃ先生に行ってくれや。」
ミエールの眼鏡をアバンがかけて、クロコダインがアックスの破壊力と新能力を使って罠を悉く砕いていく中、ハドラーは後方を見張り、ラーハルトは走る一行の左側を守って走っており、ティファだけヒュンケルに抱っこされている状態に、本人は不満そうである。チウ君も後方のハドラーに抱っこされてるけどさ・・
捕虜の時もそうだし、自分はパレスを歩くことは禁じられているのだろうか？

「其れよりもよ・・・大魔王バーンの戦う原動力ってなんだと思う？」
当然ティファ心配の一行がティファ単独で走らせることはしない。
いつ疫病神の手が伸びて来ても対処できるように。
敵は確かに一人も見かけないが、キルトラップはそのままだった。
そのトラップの一つにティファにあってたとんでもメッセージがあったのだから警戒度はマックス。
僕からの愛情たっぷりの罠を堪能して、楽に御成りよ
・・・・・あの変態疫病神ぶっ壊す!!!!
アバンまで入った当然の反応に、矢張りティファとチウだけがついていけずビビこくのを、一行は赦さずあいつは絶対壊すぞを叩き込みながらティファとチウは抱っこの移動と相成った。
ポップも体力がついて走って警戒しながらも話す余裕があり、ティファに思い切って聞いてみた。
どうして大魔王達はこんな面倒な戦い方をしてくるのかと。
言ってはなんだが、魔界のモンスター達を大量投入すれば或いは自分達はと、つい考えてしまう。
その問いに対する答えを、ティファは自身を以て答えられる自信があった。
何故なら自分もあの人も同じはずだから。
「守り抜く為に戦ってるからだよ。」
「へ？」
ティファの答えに、ポップはもとより聞き耳立てているダイ達も戸惑う。
守るなら余計に兵達を使うべきではと。
「そうじゃない、たかが―土地―の為に戦ってるんじゃないと思うんだよ。」
何もかもを見通すあの透明な笑みを浮かべながら優しくも力強くティファは答える。
魔界の死に掛けた土地の為も多少はあるかもしれないがそれよりもあの人はきっと
「守って、生の歓喜を何物にも脅かさらることなく無限に味合わせる

為に。」

きっと自分達の命を代償にしてでも、次の世代の為に次の次の世代の為に彼等は戦い抜くんだろう。

勇者一行のいつもの日常回・前編

「そっちにお皿置いて～。」
「これってグラスじゃんかよ！ティファ～、木のコップの方が気楽でいいんだけど～。」
「・・・・式・木のコップ・・」
「サンキュー。」
「もうポップったら！ティファの料理の邪魔しないの!!」
「マァムさん、ポップ兄は水とパンだけ出すのでいいですよ。」
「げっ!!ティファ・・・・」
「嫌ならお前もさっさと手伝え。ティファ、焼けたベーコンステーキ運ぶぞ。」
「ティファ～、飲み物の中身みんな一緒なら俺とチウで注いじゃうね。」
「僕はハドラーさん達から注いでいきますね。」
「―ティファ～、僕は―この子達―の面倒見るね～。―」
「べほちゃんよろしく！しょっぱいのは体に毒だから、果物だけあげてね。」
「―分かってるよ。ティファは心配性だな。―」
・・・・・この状況はどうなのでしょうか・・・
「諦めろアバン。あれがあいつ等だ。もういい加減慣れろ。」
敵の居城のど真ん中、ティファ曰くホワイトガーデンという名の噴水と会談がある広場で休憩となった。
休憩は良い、自分も軽食用のサンドイッチをハドラー達にも大量に作ってきたのだから。
何が問題かというと・・・・ティファが普通に調理しているのだ！
それも・・
「アンリさん、セシリさん、スープの味見どぞ。」
「・・・あのねティファちゃん・・」
「私達はね・・」
「「てきどうしなのよ？」」

二人の言う通り！魔族の双子の女性をお食事ご招待とはティファは一体何を考えているのやら・・・

アバンは右手を額に当てながら少し前の記憶を遡る。一体どうしてこうなった？

死ぬ・・・もう嫌だ・・・・何なのだあの罠の数と、気合の入った仕掛けの数々・・一つ一つが必殺技の域に達してる罠ってどういう事？

抱えて貰っていただけのティファがぐったりとし、ベホイミしすぎてヒュンケルの肩でベほちゃんも半分お亡くなり状態となり、先頭のクロコダインももとより死に態となって、そこそこ元気なのはハドラーとハドラーに抱っこされているチウのみ。

結局罠突破の後半はティファも手伝った。とはいえ武器持ってぶち破るではなく、式の目を借り罠を見つけて結界で封じ込め、安全圏外に出てから解除してまたその繰り返しで、魔力枯渇寸前まで追い詰められた。

当然ティファを抱えていたヒュンケルと、魔法はカウンター返されたら困るのポップ以外の全員で罠の数々をぶち破った。

ティファとチウ以外の全員の脳裏に変態・疫病神退散を叫びながらの強行軍。

傷つく端からベほちゃんが都度怪我人の肩に飛び乗って素早くベホイミで癒し、とうとうクロコダインが致命傷を負ってしまった時は、ポップが目覚めた。

「死なせるかよおっさん!!死なせてたまるかよ!!!」

止まった一行を罠が容赦なく襲い来る中、ポップがぼろ泣きしながら死なせてたまるかと叫び上げてザオリクにも匹敵しそうなベホマを発動させて事なきを得られた。

これでポップも賢者の仲間入りとなり、名実共に二代目大魔導士を名乗れそうだが素直に喜べる状況ではない。

バーンが狙っていたのとは別の意味で色々とガリガリに削り取ら

れた一行の脳内には最早キルバーン＝壊す者がインプットされた。自業自得である。

「やっとここで中間です。この噴水と階段があるこの場所は、ホワイトガーデンと言ってパレス内で―三番目―に綺麗な所です。」

「ほぇ～。白い大理石ふんだんに使った此処が三番目なのか？」

うん、ポップ兄の感想は―原作―だったら当然の感想だ。確か原作ではここで休憩した後ミストバーンが来てパレス一美しいところとか言った後に、アバン先生がサブダさ（見ていて寒々しくなるダサい奴）気障野郎キルバーンに任意で拉致られた地、助けに行こうとしたダイ達をレオナ姫が―全ての戦いは勇者の為にせよ―とか教えを授ける場面がある場所なんだろけど、そんな事はここではなしでしょう。

ちなみにそんな基本的な教えはうちの一行の子達は序盤で体得しているかしてそれはいらんのだ（エッヘン）

ミストはバーンが待つと言ったから、今頃はバーンもこっちに合わせてワインにクッキー摘まみながら優雅に待つ事にして、そんな主の給仕してるだろうし、キルもキルなりの時間の潰し方（チウ君やお爺ちゃん学者に思い馳せたりとか）して、こっちに来ることないだろうし。

そうするとパレス観光協会のミストが動かないのであれば私が解説せねばならんだろう（ドヤァ！）

「パレスにはここの他にも太陽の光りを受けて煌めく小さな池が設置されてる玉座の間もあるし、一番は庭園かな。あそこは死の大地に埋まってた時から陽光が入る様にしていたみたいでデルムリン島系の植物植わってた。」

ちなみにお茶会は毎日そこだ。昨日も最後のお茶会してきたし。

「他にも都市部には図書室から資料館もあって軍用の食堂と大魔王用の食堂があって、大浴場二つに専用風呂一つだったかな。お湯はヒャドで氷作ったのをメラで溶かして適温にして入って、残り湯は冷まして庭園の植物さんいきだった。」

・・・・・ホワイトガーデンだけの情報利く積りだったのに、がっつりとここでの生活満喫してたティファ情報まで来るなんて・・・

もう聞いたポップはさいですかしか言える事は無かった・・・

兎も角として、ホワイトガーデンと周囲百メートルを全員で見回り輪なの類から敵が隠れ潜んでいないかを徹底的に検証する事になった。

食事のときに狙われては堪らない。ダイ達もティファも、少々敵である大魔王達を信用しすぎているのではないかというアバンのマックス警戒センサーに引っかかった―者―がいた。

・・・矢張り何かしらの刺客を!!・・・・・・刺客を・・

「ピぃ～。」

「・・・・・・スライム？」

アバンの見回っている階段の隅から、ちょこんと青い小さなスライムがプルプルと震えて隠れていながらちらりと辺りを見ようとしたのに出くわして、うっかりと目が合ってしまった。

「えぇぇぇ!!!何でスラリンちゃんがここにいんの!!!⁉」

「―・・ティファ・・・・―」

どうしよう・・・庭園にいる筈のスライムの子がここにいるって不味いよ!!

は!!罠に引っかかってる子いるんじゃ!!・・・そもそもが！スラリンちゃんはあの庭園の中の子で一番臆病で一人でこんなところに来れる子じゃない!!

「これは布にあらず！まこと鳥!!!」

アバンの小声が聞こえて様子を見に来たティファは、スラリンちゃんこと水色スライムの子を見て様々に理由で大絶叫して、急ぎ持っていた布を千切って大量の鳥を作って庭園からこのホワイトガーデンへの道すがらと、周囲五百メートルを探索させたところ、十四匹のスライムを発見して急いで式鳥達に保護させ罠回避させながら連れて

こさせ、すぐさま取り押さえて逃走防止に布に包みながら身体チェックした。幸い誰も怪我一つないのだが問題はそこじゃない。

ど・・・どうしよう・・・・・庭園の子達が全員此処にいるって・・・大魔王に迎えに来てくださいともいかないしどうしよう!!

何でパレスで大魔王の寝所と魔力装置の場所と同じくらいの結界で守られてる超安全な場所から出てきちゃったのよ皆!!!

勇者一行のいつもの日常回・中編

・・・どうしよう・・・筒に入れる？無理！こんなにプルプル震えながらも・・

「―ティファ・・・・ここどこ？・・・・」

とか！震えながらも私の事頼りにしてくれるスラリンちゃん達筒に入れるなんてできないよ!!!!

本当にこの子達可愛すぎだよ大魔王!!

ここは何処だと不安で震えて泣いてティファに縋っている十五匹のスライムをムギュッとしながらティファも大号泣。

筒に入れたくなし、されどお迎え来てプリーズとも言えないこの状況どうすればいいのだ!!

・・・・・なんだか世界消滅カウントダウン始まってる時よりも深刻に泣いているティファにアバンはこめかみかりこり掻いて困ってしまう。

敵の刺客ではどうやらないが、此処にいる時点で魔王軍の関係者（？）をどうすべきだろうか？

ここから離れさせてしまってはトラップが待っている。何かの拍子に戦闘で放たれた闘気だの魔力だの魔法だのにあたる可能性もある。

しかしティファが筒に入れるのを断固拒否してる。

「この子達が怖がること言わないでください!!アバン先生の鬼!!!!」

筒に入れてはと言っただけであの剣幕・・・

ダイ達としてもスライムが可愛く見えるだけに下手に手が出せない。・・・そもそも何でこんな所にこんなに可愛い子達がいるのか分からない。

分からないが、この状況を打開してくれる存在が、ホワイトガーデンの出口の階段から現れた。

「見つけましたわよ料理のティファ・・・は？」

「ここより先は・・・・・へ？」

真っ赤に燃えたような赤い髪を団子状にして白いメイド帽に入れ、

白いフリルのエプロンに黒いメイド服を着た魔王軍の双子の料理人が現れたと同時に、ティファとその周りを囲っている者達を視認して数秒後に絶叫する羽目になった。

「・・・・きゃぁぁぁぁぁ!!!」
「あ!!アンリさん!・セシルさん!!いいところに!!!」
「キャぁちょっとティファちゃん!!」
「抱き着いて来てくれるのは大歓迎だけど・・」
「どうしてあの子達がここにいるんですの!!???・・」
地獄に仏!!悩み時にアンリさんとセシルさんという仏様の糸が垂れ下がってたら迷わずゲットだぜ!・をティファは敢行した。
二人揃って双剣を構えていても、安全にスライム達を大魔王の所に送り届けてくれる優しいお姉さんたち逃がしてなるものか!!
「この子達安全に大魔王の下に送ってほしいんです!!お礼は美味しいお昼ごはんでお願いします!!!」
「―あ!・ご飯美味しいおねいちゃんだ!!―」
「―バーン―の気配がするおねいちゃん達だ!!―」
「「「「―僕達!・私達をバーンの下に連れてって!!!!!!―」」」」
「「えぇぇぇぇぇ!!!!」」
双子の魔族姉妹!は其れは其れは魂消た。
バーンの退去命令破ってまで自分達でティファを捕まえに来たらあっという間に自分達が捕まった・・・それもこれもバーン様が命と同じくらい、其れこそティファと同じくらいに愛でているスライム達が全員集合しているのだから、裏事情迄知っている者からすれば驚くなという方が無理である・・・・本当に何故ここに来たんだか・・・

「俺もその二人に―礼―がしたい。構わないか小娘?・」
「へ?・」
双剣を引っさげた魔族の双子少女はどう見ても敵だろうと、妹を敵から引き離そうとダイが飛び出す前に、ラーハルトの方がいち早く動いてティファの横に降り立ち奇妙な事をのたまい、そして双子の説得

をも始めてしまったではないか。
「どうせお前達でも俺達には勝てんのは分かっているだろう。無駄な事はしないで小娘の言うこと聞いておけ。どのみち大魔王も好きなタイミングで来いと言ってきているのだから構わんだろう。」
物凄く合理的そうでいて不条理な事を淡々と述べたラーハルトの言葉に、双子も観念して提案を受け入れる事になって物語は冒頭に戻る。
「・・・・つまり貴方たちは・・」
「バーン様に会いたくて・・」
「温室を抜け出したと?」
「「「「「――・・・・バーンが来なくて・・・・・――」」」」」
食事を並べている間にべほがスライム達から脱走した理由を聞き出し、周りに伝えた結果、スライム達はただただバーン会いたさに脱走したらしい。
曰く、最近よく同じ時刻に来るのに今日は来ない。外もなんだか怖い気配がする。
ようはいつもと違いすぎる事で何かしら不安を覚えて出て来たらしいのを、アンリとセシルは溜め息を吐く。
この子達の勘は全て当たっている。これから間違いなく前代未聞の大激突が起き、その末にスライム達も自分達も大好きなティファか、奇跡が起きてしまいミスト様とバーン様のどちらかが敗れる・・・のだが、その前に・・
「貴方確か昔魔界の食堂で」
「大人数のどカス共を相手に大乱闘して」
「「のしていた愉快な三人組の一人よね。」」
「・・・・・・・間違ってはいないのだが・・・」
・・・・愉快な三人組というのはどんなんだ?
二人の言い方にお礼をしたいと言っていたラーハルトは溜息ついてしまった。

ラーハルトがお礼を言いたいとはどういう意味かを、ダイ達も気になっていた。
このままではいつまでたってもお昼に出来ないと焦れたティファが、用意の手伝いはいいからそっちで話していてと、アンリとセシルの監視も兼ねてラーハルトを二人に押し付け、二人もラーハルトの顔をまともに見て漸く思い至り、ラーハルトの事を思いだした。
五年前、軍で子供と女を沢山殺した事を自慢してきた馬鹿に切れ、自分とガルダンディーとボラホーンの三人で一月以上所かまわず喧嘩しまくっていたが、始まりは軍内部の食堂で、その時食事も無駄にした事で咎を食い、一月食事を軍内部の食堂で取ることを禁じられた。
無論新参者であり、バラン様の威光を煙たく思う者達の嫌がらせであるのは直ぐに分かった。
魔界は地上とは違い、三食きちんと食べられるところなど魔王軍しか思い浮かばず、故に自分達を餓死ないし、飢えさせる気だろう。
近くにある街も村も、食料は高値であり、三食どころか一食を食べるのがようやくな者達が大多数の魔界で、軍の食堂禁止は飢えろと放逐されたのに等しい。
相手の言い分は兎も角、その貴重な食料を無駄にしてしまったのは事実なのでその件だけは本当に怒るに怒れなかったのを、救ってくれたのがこの双子であった。
毎日毎晩、自分達が喧嘩をして勝ったはいいが、お腹がすいて死にそうな頃合いにサンドイッチを持ってきてくれたのだ。
この時は、たかだか一介の料理人たちがこんな事をして咎められやしないか、何よりも自分達にこんな事をして何の利があると訳が分からず拒否しようとしたのを、
「か弱い女子供を」
「殺して自慢するドカスなど」
「「死んで当然ですわ!!」」
「話聞いて私達も腹ただしく」
「折よくあいつの顔面に綺麗に拳入れてくれた貴方達を見て」

「スカッとしたのでそのお礼ですわよ」」
そう言い残して料理を手に押し付けてきて颯爽と立ち去ったのが、魔王軍の料理人長だとは夢にも思わなかった。
料理人長は文字通り軍の食糧の全てを管理し、何処の拠点ににどれくらい配るかの采配権も持っていると言われている、いわば食糧難の魔界においては絶大な権力を持っているに等しい二人が、ガルダンディーとボラホーンと自分の喧嘩理由を正しいと評価してくれた上にご飯までくれたのだ。
評価されたのは嬉しいが、今回自分達の処遇を決定した者は相当な地位にあるらしいのだろうが大丈夫かとボラホーンが聞いたのも鼻で笑っていたな。
「ドカスを庇う馬鹿等に」
「私達がどうして」
「「従ってやらなければいけませんの？」」
「ドカスなんていられたら」
「私達の大好きな」
「「ミスト様の大迷惑になるからもっとのしても良いのですわよ。応援してますわよ!!」」
悪い顔でニンマリと笑って頼もしく答えてくれたな。
ようは軍の規律乱すにはならないが、ならず者たちがいるのが気にくわんのかこの二人も。独特な思考に我が道を行く姿がよく似た、小娘みたいに面白い者達も居るのだな魔王軍にも。
食事の礼を何時か三人できちんと言いたいと思ったその直後、魔界の反乱討伐を半月で片付けたラーハルト達は、地上に本格的に配属になり、双子の姉妹にお礼を言えないままだったのを悔やんでいた。
自分達が生きているのは間違いなく一月食べさせてくれたサンドイッチのおかげなのだから。
「・・・お礼と言われても・・・」
「あの時言ったのと同じで」
「「ドカスをフルボッコした貴方達を気に入っただけですわよ。」」
ラーハルトからの礼を受けたアンリとセシルはぶっきらぼうに返

事をかえす。
白い耳は赤くなると相当目立つのだと知らないで。

勇者一行のいつもの日常回・後編

「あら」
「あらあら」
「これ美味しいですわね！」
「・・・・そうか・・」
「本当に美味しいわラーハルト。」
「・・・マァム、たかだか切った具材をパンにはさんで適当に辛子やら胡椒を振って挟んだサンドイッチに・・」
「その香辛料の加減が絶妙なのですよラーハルトさん。」
「・・・アバン殿迄・・」
　双子さんへのお礼は、ラーハルトが自分からサンドイッチ作って渡したいと言ってきたので好きにさせた。
　なんだかんだで私と五年越しの再会する以前から、父さんとガルダンディーとボラホーンの衣食住全般の面倒見て他のラーハルトだって言ってたし、器用にサンドイッチ作ってたらみんなの目がね～。
「・・どうしたマァム？」
「え！その・・・私もラーハルトのサンドイッチあったら嬉しいな・・」
「・・・・構わん。」
「あ！俺も食ってみてえ！」
「俺も！俺も食べてみたい！父さんたちがどんなの食べてたのか知りたい!!」
「私も欲しいな～。」
「おや、其れなるついでに私も・・」
「・・・・分かった。」
　恋人マァムのも追加したら次から次へと追加注文が入ったのを、ラーハルトは色々と諦めた感じで引き受け注文出さなかったハドラーの分まで作って出した。
　ここまでくれば一つ二つも変わらんとか。
　そして得たのがこの大絶賛。ハドラーも黙々と食べているからご満足のようだ。

腹が減っては何とやら
私の右隣にアンリさんとセシルさんとその横にラーハルト、左からダイ兄が座ってみんな思い思いに食べてる。
あっという間にベーコンステーキなくなって、ピクルスがかりこりという音共に消え去って、ごくごくと水筒に入ってたレモン水がからになった・・・アバン先生御手製のサンドイッチも瞬殺されてた・・・・もっと用意しとけばよかったか？

美味しいのに口中は苦く、灰が入った様な不快さ・・・これは一体なんですの？
先程まで私達の存在を疎ましそうにしていた眼鏡の男までもが、どうして美味しそうに楽しそうに食事をしているの？
「アバンさん！レモン水のお代わり要りますか？」
「チウ君、お気遣いは嬉しいですが、貴方も食べるのを楽しみましょう。ね？」
「はい、美味しくいただいてます。」
・・・・魔軍司令官ハドラーも、気にせず黙々と・・・でも味わって食べてる・・
桃色の髪の女の子も、蜂蜜ブロンドの女の子も
「レオナ、紅茶淹れるわね。」
「ティファに先に出してあげましょう。ティファ～、お砂糖は？」
「ストレートでいただきます。」
黒髪の坊やたち不死騎団長も百獣軍団長も
「・・・・ヒュンケル、アメがないからといって果物を独り占めしようとするな。」
「・・分かった・・」
敵の私達がいるのに・・・・其れなのに・・
「アンリさん？セシルさん？」
「「どうしてあなたたちが敵ですの!!!!」」

飢えない食事は知っていても、温かい食卓を知らず、人と繋がって

も、温もりを知らない二人は限界に達した。
ここ数日でティファに与えられたものは毒にも等しいものばかり！温かい笑顔を言葉を惜しみなく与えてくるティファを捕らえんと来たのに!!何故ティファの周りの者達も暖かさを持っている！
持っているだけなのはまだいい！それを・・・自分達の前で出して欲しくはなかった・・敵として扱われた方が!!こんなに胸が苦しまずに済んだのに!!
「ティファちゃんでも貴方達でも大魔王様と」
「ミスト様に勝てるわけがない!!
「「今から降伏して命だけでも!!!!」」
・・・・これは・・・
「御免、出来ないよ其れは。」
双子の気持ちの変化に、戸惑い返答できなかったティファの代わりにダイが優しく答える。
この人達も妹の優しさに・・・
誰よりも、妹の優しさに包まれていたダイは二人の思いがよく分かる。
自分だとて、ティファを助ける為ならばどんな手でも・・
そして二人も優しい。ティファと一緒に俺達の命も心配してくれた。
「俺にも、俺達にも守りたいものがあるから行けないよ。でもね、ありがとうお姉さん達。」
ダイの言葉に二人は更に泣きたくなる。基本二人は―男―が嫌いだ。
魔界で双子は珍しく、其れも赤い髪に赤い瞳をした美形に生まれてしまった二人は成長してすぐに男達の慰み者にされ、地獄から這い出て魔王軍の台所に潜り込んだところをミストに見つかり、ボロボロだった自分達に黙ってパンをくれたのをきっかけに、二人は何度もミストに懇願して側仕えでなくともなんでもすると言って料理人長にまで上り詰めた。
それでも、女子供に敵意は一切なく、こんな良い子達を死なせたく

ないという情の深さまでも持って魔界という過酷な地に生まれたのが二人にとっては不幸であったのかもしれない。
「ティファちゃんの!!!」
「貴方達の!!」
「「頑固者で馬鹿ばっかりです!!!!」」
ダイの言葉に、力強く頷く一行の者達を見て、ティファの申し訳なさそうにしている顔を見て、二人は堰切ったように泣き出した。
どうしたって魔界の神に勝てる訳も無いのに！死にに行くだけなのに!!なぜそんなに優しい顔をしていられる！どうして笑っていられる!!!何故魔王軍を憎んでくれないのだ!!!!
泣くアンリとセシルの側に、何時しかスライム達が寄り添った。
知っている優しい人達が泣いているのを慰めたくて。
全部のスライムが二人に寄り添った時

ラド＝エイワーズ
赤い魔法陣が二人とスライム達を包み込み、数瞬後に双子もスライム達も消失していた。
「・・・・バーン様・・」
「文句は聞かぬぞミスト。」
「・・・・はっ。」
二人の為にバーンは力の消耗を躊躇う事なく呼び寄せた。
「バーン様!!」
「どうして・・・何で・・」
「「あんなに良い人達が敵なんですの!!!!」」
常日頃の大人びた言動も、冷徹な料理人長の威厳もかなぐり捨て、二人は魔界の神の膝に縋って泣き伏す。
「アンリ・・・セシル・・・」
「戦わなくとも！」
「地上だけ消せば!!」
「「あの人達を殺さなくても!!」」
「・・・・・すまん、その義だけは聴けんのだ。」

この二人の容姿でつい騙される者が大勢いるが、二人はまだレオナ姫とマァムと同じ子供なのだ。
子供なりに背伸びをし、周りに必死に張っていた虚勢をティファが崩してしまったか・・ティファの甘い毒が、二人の壁をも・・・
二人の頭を優しく撫でながら、そっとラリホーマを掛け深く眠らせガァグランスを呼ぶ。
「魔界の余の居城に、スライム達も。」
あそこは瘴気を遮断する。
「そこで其方も待機せよ。」
「畏まりました。」
バーンの命を受けたガァグランスは、すぐその場でゲートを起動し双子とスライムと共に魔界のバーンの居城に向かう。
水鏡のティファを見ながら
ティファ・・・俺はお前さんを恨めしく思う・・・
自分達を虜にしてなお大魔王、引いては魔界の悲願成就を阻もうとするティファが。

「・・・・行ったね・・」
「俺達もそろそろ・・・」
双子もスライム達も戻る気配もなく、腹ごしらえも終わったのだからとダイ達もここを片づけて行こうと立ち上がる。
自分達は憎くて大魔王を倒しに行くわけではない。そうしなければ地上が消えてしまうから・・・どうしようもない理由故に戦う事をやめるわけにはいかない。
行かないと・・・
「ティファ‼?」
あれ?
ふらりと倒れたティファを、ダイがすぐさま抱き留める。
「ティファ!!どこか痛いの?どこか悪いなら言って!!」
「ダイ落ち着いて。ティファはおそらく極度の疲労で疲れているので

す。」
慌てるダイ達に、アバンがすぐさまティファの脈を測りながら目視によるチェックの結果、疲労だと伝えると全員がホッとした。
「・・・・先生・・・にいも・・・眠い・・・よ・・・・」

明日という日が

「今の内に武具の点検をしましょう。」
「はい！」
「その前に自分達の身体チェックもですね。体の何処でもいいので、少しでも違和感がないか深く探ってみましょう。」
「「「「「は～い!!」」」」」
「少し大げさすぎないかアバン？」
「これから立ち向かう相手を考えたら、チェックしてもしたりない位ですよハドラー。」

ティファの疲労が限界点を達してただいま静養中。
眠いとフラフラしながらダイの腕から抜け出たティファは、クロコダインの方にとことこと近づき、道中でチウをゲットし抱き上げムギュとしてそのままクロコダインの待ち構えていた腕の中にポスっと収まり、チウをむぎゅむぎゅしながら夢の世界へと旅立った。
えらい事にきちんと大きめの砂時計を式で制作して、砂が落ちたら起こしてと辛うじて言い残してからの旅立ちであった事だ。
・・・・・・えっと・・・
何でしょう？クロコダインさんもチウ君も突然のティファの行動に手慣れた様子で対処していたような。
クロコダインの所に行く途中にチウは移動し、チウを抱っこしたティファの近くにクロコダインは移動して待ち構えていたような？
「・・・アバン殿、ティファは極限まで疲れるとこうしてチウを抱きしめて俺の腕の中で寝るのが一番居心地がいいらしい。」
当人曰く癒されるとか。
今も寝ながらチウの匂いをクンカクンカと嗅いでニヘラと笑っても寝ているティファに、アバンと同じく初見のラーハルトとハドラーもすぐに納得した。
思えば今日一番疲労が溜まっているのはティファの筈だ。
処刑演目に始まり、敵の策謀と味方からの攻撃という精神攻撃と、

そして己の最大の秘事を知る羽目になって肉体も心も一番疲れきっているのは間違いなくティファだ。
それでも、笑ってダイ達を安心させんと務めていたのだろうが限界もいいところ。
肉体が悲鳴を上げ心が休みたいと泣いて眩暈を引き起こさせる位に。
アバンは休むのであれば、真ん中にクロコダインとチウとティファを入れた車座になって全方向を警戒しながら諸々のチェック時間に有効利用しようと発案し、良い子一行とディーノ様たち守る為にもやっておこうのラーハルトは素直に、少しアバンが過保護すぎないかと、甘やかさずイケイケな軍曹タイプの気が少しあるハドラーは意見しながらも真面目にやっている。
体内の奥・・・・俺の左手にはティファの紋章がある筈なのに・・・・
ダイの剣のチェックしながら、ダイは己の左手をじっと見る。
右手の紋章は直ぐに発動できるのに、未だに左手は出来ないでいる。
ティファが、自分を強くするためにくれた大切な紋章なのにどうして・・・
答えは分かっている。怖いのだこれを使うのが。
この紋章を使って戦えば、力は単純に考えても二倍にはなる。使い方次第では数倍も・・・・それでも、使えない。使った瞬間、ティファが消えてしまうのではないか？
埒も無い事かもしれないが、力の強くなった自分の姿を見て、
「ダイ兄にはもう私は必要なさそうだ。」
笑ってどこかに行ってしまうティファの姿が浮かんでは消え、紋章を発動させられずにいる。
馬鹿な事を考えるなと、自分の考えを聞いたらきっと皆こう言うだろう。
そんな事でティファがどこかに行ってしまう事等あるものかと。
それでも、どうしても不安が付き纏う。この先で、ティファがまた自分を使って何かをして・・・そして今度こそ消えてしまうのではな

いか？
　この力を使わずとも・・・・いや、大魔王にそんな甘さは通用しまい・・ティファが地上ロロイの谷で死兵相手に叫んだ通り、一切合財使ってようやく五分。
　おそらくそれは自分とハドラーとポップ達を入れた総力戦をしてその位になれる領域だ。
　ハイ＝エント対策はティファが考えている様だが、その時はティファは身動きが取れなくなると言ってた。
　仮に動けるとしても戦わせるつもりはないとはポップが明言していた事だ。
　ティファの動きははっきりと言えば癖があり過ぎパーティー戦向けではなく、下手にどちらかに合わせよとしてもいい結果にはならないと。
　ならばサポート重視で行こうとなっている。
　ティファ、お願いだからどこにも行かないでね？
　クロコダインの腕の中でスヤスヤと眠っているティファを、ダイはちらりと振り向き・・・・全員と目が合った。
「いや・・・やっぱさ、気になって・・」
「武具も体も大丈夫だったわ・・」
「終わったぞ・・」
「・・・私もアバン先生から預かったフェザー迄確認したわよ・・・」
「俺もだ・・・」
「いや～、そろそろ起こし時かと・・・」
「・・・起こすか？」
　自分と目が合った全員は、ハドラーも入れてどこか言い訳している。
　そうだよね、皆ティファの事大好きだもんね。
「これが終わったらさ、全員でデルムリン島にルーラしない？」
　リュート村の前や戦勝式だとかの前に、終わってすぐにだ。
　下に戻ればおそらくフローラ達に王達に報告して国を安定させて等の、―勇者一行の責務―として様々な式典が待っている筈だ。

昔からティファが教えてくれた。勇者になりたいと言ったその日から。
戦う時の心構えを、戦っている時の味方と繋がる術を、そして、戦いに勝利した勇者がすべきこと全てを。

ダイは魂は無垢で純粋であるが、知識だけならば王侯貴族と遜色ない程で、下手な貴族の庶子よりもマナーまでもティファから教わっている。
―いつ―王侯貴族の仲間入りをしてもダイが困らないようにと。
其れを一行の誰も知らないのは、ダイの天真爛漫さと・・・妹愛が暴走しがちな残念な所と勇者としての頼もしさが勝っているからだ。
だから、そんなダイの提案にポップ達は無邪気にそうすっかと笑っているが、後々の事を見据えている事に気が付いたアバンとハドラーはダイの知性の高さに驚いた。
失礼な話になるが、ダイは本能的な天才であって、知性的な所を披露して来なかったから。
武においては間違っていないが、それはダイのたった一つの一面でしかないのを目の当たりにしたのだから驚きも無理からぬことかもしれない。
子供とは・・・無限の可能性なのですね。
ダイの一面を知ったアバンは思わず微笑む。
かつて子供達を教え、平和の芽を育てようと志した自分の思いは間違っていなかったのだと言って貰えたようで、嬉しくて笑いが自然と浮かぶ。
ハドラーも同じ思いを持ち、この一行の全員がどの様な成長を果たしどの様な道を歩いて行くのか見届けたいものだと深い笑みを浮かべ、ラーハルトは何処までも竜の親子の行く道を付いていく積りなのでダイの提案を良き事だと笑って了承する。
今日を勝ち、明日という日を手に入れんと心に誓って。

「お嬢ちゃん疲れちゃいましたね～。早く来ないかな～。」
　水鏡で一行を見ながらキルは先程からそわそわとして落ち着かないでいる。
「少しは落ち着いたらどうだ？大魔王様の御前で見苦しいぞ。」
「え～駄目ですかバーン様？」
　ミストに怒られてもめげないキルは、技とバーンに話しを振ってみる。
　適当な暇つぶしも兼ねているので察している二人は半分呆れ気味。魔界の神を暇つぶしに使う神経の太さはティファであっても無いだろうし、この馬鹿だけであろうとミストは断言できる。
「そなたがそこまでそわつくなぞ初めて見るな？」
「いや～、篩の篩の時の夜中の使者役の時もお嬢ちゃんに早く会いたくてそわそわしてましたよ？」
　あの時以上に一行全員が来るのが待ち遠しい。
「今日を勝って地上を消して、浮上した魔界の大地から朝日を見るのが楽しみでもあるんですよ。」
　忌々しい瘴気は地上に出た瞬間薄まろう。魔界の住人達にもあの青い空と太陽を。
「バーン様、僕はもしかしたら初めてかもしれません。」
「・・・何がだ？」

穏やかにキルの告白に、バーンはなんだと問い返す。
数百年生きて来たオートドールの初事とは何かを。
その問い返しに、キルは穏やかに笑って応える。
明日という日が来るのが待ち遠しいのですと

思いと記憶と転移魔法陣

待って！―僕―も残る!!
・・・・・・ン、あなたは生きて
我等の分も生きておくれ愛おしい―息子―よ
父様!!母様!!!

・・・・・―僕―はどうすればいい・・
・・・―僕―は何故生きてるの？何のために？お腹空いたよ父様・・
母様・・
あれを奪えば・・・・―僕―は食べられる・・・・
―俺―のものに手を出すな!!これは―俺―のだ!!
おい！―俺―の側によるな!!お前を助けたのはお前の為ではない
!!勘違いするな!!単なる気紛れだ!!!
・・・・お前は何故―俺―に笑いかける？

―私―の所も随分と人が増えた・・・・お前と連れ合いと子供達だけで良かったのにな・・・
力を振るえばその辺の物も者もすぐ壊してしまう―私―に笑いかけるなぞ奇特なものだが、―私―の力及ぶ限り守ってみるか、お前も手伝ってくれ。
近頃お前のように―私―に笑ってくれるものが増えたな・・・・お前は年老いて笑わないが、―私―は覚えているぞ。
だから安心して旅立て、お前の子も増えていく子孫達も―私―の生ある限り面倒見よう。

瘴気の渦を見かけた？・・・・あれは確か古の浄化装置が今なお稼働して防いでいると聞くが・・・・少し調べるか・・・・
放せ!!―私―の村の者達がまだ残っているんだぞ!!!放さぬか!!!!
・・・・何故瘴気がこの付近を飲み込んだ・・・・
己天界め!!!これでは・・・いつの日にか魔界は滅んでしまうではな

いか!!
何が慈悲深き神々が住まう天界か!!我等魔界を真綿で締める様に滅ぼそうとでもいうのか!!!
魔界も魔界だ!!何故浄化装置が追いつかない程の瘴気が溢れている事に気が付かんのだ!!目先の土地で争う愚かな事に興じて、何故魔界一致してこの問題に取り組もうとしないのだ!!!
・・・・・どうすればいい・・こんな時―お前―がいてくれたら・・・あぁ、お前の子供達と子孫達を守らなば・・・・策は必ずある筈だ

地上への亜空間の穴が開いていると?・・・行ってみるのも一興か。瘴気問題の解決の糸口になるやもしれん
・・・あれはなんだ?何故青色の色が―天蓋―を埋め尽くして・・・もしや!あれが破損した文献で辛うじて読めた―青色の空―とやらか!!ではあの宝石のように輝く者は・・・そこの男!!あの光っている者はなんだ・・・何故笑う!―私―は本気で聞いているのだぞ!!!
太陽・・・あれが太陽・・・・ここは空気が澄み渡っている・・・風も生臭くなく血の匂いが全くしない良いところだな
・・・男よ何故笑い続ける?
・・・・・太陽・・・・・あの美しさの価値も住み渡る風の価値も知らぬ愚か者共が!!!何があれはいつも空にあるものだ!!地上は・・・己らが楽園にいる事すら知らぬうつけばかりか?・・・・あの太陽の価値を何故分からぬか!!

分からぬのらばそれでいい!!いつか魔界を統一するなり近い形になった暁には!
―余―が・・・・・・・
ザァ～!!!!
待って!それじゃあ駄目なんだよ!!!奪うには大勢の命が無くなってしまうよ!悲しい事だ!いけない事なんだよ!!

「待って!!!!」
「ティファ!!!!」

・・・・はぁはぁはぁ・・・・夢？今のは夢？
「ティファ！怖い夢見たの？それともやっぱりどこか痛いの？」
「あ・・・ダイ・・・兄・・・」
砂時計の砂が落ちきる前にティファは自ら目を覚ました。
背中まで汗みずくとなり必死の形相で跳ね起きすぐさまダイが妹の手を取る。
体のどこかの変調が悪夢を見せたのかと。

ゆ・・・め・・・夢な気がしない・・・夢でなかったというのなら・・・
―私―はずっと見ていた
―僕―が見知らぬ・・・・父様と母様が―敵―の襲撃から逃がしてくれて・・・其れから・・・・・その後に思う事を止めようとして必死に呼び掛けて・・・・
ティファはチウを降ろしてクロコダインの腕からするりと抜け出し、階段の階の上を見上げる。この先にはパレスの中央部があり尖塔の上に玉座がある。
あれは・・・―貴方―の記憶か・・・
誰の記憶か、ティファは本能的に理解した。太陽を欲した彼人の・始まりはなんと過酷で、穏やかな人生も瘴気が狂わせていく様は悲しくて・・胸が張り裂けるほどに痛みを感じる。
それでも、止まるわけには・・

「ティファ!!」
「・・・にぃ・・・・・ん・・・・うん。」
ダイの鬼のような形相に、そして周りを見回わせば心配した顔を向けている仲間に、ティファは悪いと思いつつ笑みが浮かぶ。兄と仲間達は自分の事になると直ぐに感情だってしまうのが・・・気恥ずかしくてそして嬉しい。

「大丈夫だよダイ兄〜、皆も・・・・そろそろ行こう・・・・・・」
止めに行こうと足を一歩踏み出したその時
カァァァ!!
ッ!!これは!!!
「魔法陣・・・ティファ⁉」
「違う！私じゃない!!!」
不意な事に、ポップはおろか、百戦錬磨のアバンもハドラー達も対処出来なかった。
・・・空間転移用の・・・・この模様と赤い色の魔法陣ははキルのだ！
一度亜空間移動以外の空間転移が使えるのか聞いてみせて貰った空間転移の魔法陣！とうとう死神が待ちくたびれた。
主の力を使わせず、亜空間では全員を纏めて呼ぶとなると今ティファ達がいる床に空間を開けてここに落下させてしまうが、魔法陣で纏めて呼ぶ事にした。
この時期の日没までは時間がかかり、待つのにはあらゆる意味で厭きが来たのだからしょうがない。
「ティファ!!」
「ダイ兄!!!」
「ティファ!!!」
「あ・・・ポップ兄!!皆!!」
おやおや、勇者君はお嬢ちゃんを抱きしめて必死だ。知らなければ無理も無いだろうけど、安心おしよ。
「・・・・キル・・」
「バーン様、直ぐに目の前に—全員—集合しますので戦支度を。」
「・・せっかちな事だ。」
バーンは待つつもりであったのにと呆れながらも、光魔の杖を取り出し玉座から立ち上がりもてなしの準備をする。
果たして数瞬後、魔法陣が玉座の目の前に現れ徐々に勇者一行とハドラー達の姿が・・・・

「・・・・あれ？」
「なんだ此処張っ・・・て!!疫病神!!!お前の仕業か!!!!」
「キルバーン！今日こそは貴様を壊して灰も残らず始末する!!!」
「待って皆！だからどうしてキルバーンさんをそこまで・・・・あの・・・物凄い気配をした白髪の白い髭の人って・・・・もしかして!!!」
「あれがバーンよチウ！私達の後ろにいて頂戴!!ティファ！チウと・・・ティファ？」
「ディーノ様!!ティファ様!!!」
「いない・・・・!!!変態疫病神!!お前ダイとティファを!!!」
「なんで肝心の二人がいないのさ!!!!」
「「「「はぁ⁉」」」」
「お嬢ちゃんが弾いた？結界で・・・・」
「おい！俺達を此処に呼び出したのお前達だろ!!ティファとダイ何処やった！」
「・・・・おらぬ・・・」
　勇者一行とハドラーを呼び出し、ハドラーは元主君との因縁の再会を果たしながら、勇者達と共に激突をするはずが・・・・肝心の勇者と料理人だけがいなかった。

最後の悪意

ダイとティファがいない

其れに驚いたバーンとキルを見て（ミストは外側では分からないので考慮しない）、ポップ達もこの事態を招いたのはバーン達であれど、二人がいなくなったのには関与していないのが見て取れた。

何故だ？キルの魔法陣に失敗は・・・・・・・まさか!!よもやあの竜が動いたか⁉過日の意趣返しにこのタイミングで!!!

ざわめくポップ達をうち捨て、バーンは二人がいない原因を考えそして先程の赤い魔法陣の一部が黒くひび割れたのを幽かに見えたのを思い出し、この元凶に思い至り冷や汗を流す。

自分の考えが間違っていなければ・・・

ザァァァァ!!!

バーンは光魔の杖の魔力を水鏡に回し、辛うじて映し出す事に成功した。

映ったのはダイを背に負ぶって必死の形相で走っているティファと、悠然と足早に歩いて二人を追っている―キルバーン―の姿が映った。

矢張りか・・・・

キルが何故ここまで空間を使うに長けているのか。

其れは元主たる冥竜王ヴェルザー自身が最上位の空間使いであり、その能力の一部を分け与えたからだ。

キルの姿が水鏡に映っているのを見たポップ達は混乱をし、此処にいるキルを見てみれば・・・・これまで感じた事の無い死神の殺意を見る事になった。

「・・・あの駄竜王が・・・・・」

暗く冷たい憎しみの声

自身の罠を利用してティファを連れ去ったヴェルザーをズタズタにしたいと気配に言わせて。

逃げないと・・・・にぃを無事にここから出さないと!!!
ティファはダイを背負って必死に走る。常ならば兄を背負いても小石ほどにも感じないが、此処は―ヴェルザー―が築いた亜空間。
自分の力が感じられない。
兄とここに二人だけで来た時は驚いた。パレスの息吹感じられない程の清潔過ぎる空間とは真逆の、命を感じられないところ以外は禍々しい気配に満ちた空間に。
だが、―キルバーン―を一目見て確信した。こいつはヴェルザー！駄竜王だ!!絶対に兄と合わせたくない奴だ!!
兄をすぐさま充て落とし、ずっとヴェルザーから逃げている。
ヴェルザーが怖ろしいのではなく、ヴェルザーが言った言葉から逃げる為に必死に。
―外―の仲間達がどうなったのかは分からないが、それでも自分達と同じところにいない事は確信が持てる。
居るのであればとっくに捕まって自分に対する人質にするからだ。

もぅ・・・息が・・・あ!!
ドサリ!
「・・・ぅつ・・・行かないと・・・ここから出ないと・・・・」
ただの女の子並みの力まで落とされたティファは、其れでも眠っているダイを必死に背負い直そうとする。
また負ぶって逃げられる。兄にあの邪悪なる竜の邪悪な言葉を聞かせたくなぞ・・
「まだ逃げるのか?どこまでも愚かなものだなお前は。」
「う!!五月蠅い!!誰が・・・誰が諦めるものか!」
確かに力は内に封じ込められて発現できない。だからといって消えてしまった訳ではない。
今ヴェルザーから何かしらの攻撃にあっても、表面の皮膚其の物に結界なり闘気なりを張り巡らせれば兄と自分の身くらいは守れる！
だが・・・・それだけでは駄目なのをティファも承知している。

「いいのか？ここでお前が遊び惚けている間にもバーンの小僧の勝ちが確定するだけだぞ？」
キルの姿を模したヴェルザーは転んで身動きが取れなくなったティファの前に立って竜の兄妹を見下ろす。
キルと同じ赤黒い目は、それでも見る者が見れば違うと分かる程に、ドロリとした情念を浮かべた禍々しい色を放っており、ティファは本能的にその色に怯え無意識にダイを背に庇いながらも後ろに下がろうとする。
当然ヴェルザーが逃がす筈も無く、くつくつと、魔女の大釜を沸騰させたような禍々しい嗤いを発しながら手を一度叩き、自分諸共ダイとティファを―振出し―に戻した。
「ヒッ!!」
か細くも心底怯える声を漏らしたのは―どちら―であったか。
振出しの地点には数百のヴェルザー軍の下層兵士達が武器も持たされずに―待機―させられていた。
全員がここにいる理由を先程ティファと共に聞かされ、それからというもの始終怯えていた。
ここには―任務―を果たす為と言われて待機させられていたが、其れは任務とは名ばかりの、冥竜王ヴェルザーの残酷な遊戯の駒にされただけと分かったから。
そしてヴェルザーが自分を此処に呼びよせた真意を知った時、ティファもまた心の底から恐れ戦き、すぐさま兄を背負って逃げ出したのだ。
ヴェルザーの望む事をしたくなくて!!
だが・・・またここに戻され・・・逃げる力ももう残っていない・・・・
「ティファ、俺は何も難しい事を言っている訳ではないのだぞ？」
「う！五月蠅い!!黙れ黙れ黙れ!!!!」
ダイを庇いながらも、ティファはヴェルザーの言葉を拒絶するが、ヴェルザーは気を悪くした様子はなく矢張り嗤っている。
どうしたって、ティファは自分の望み通りに動くしか術がないからだ。

「ティファ、俺にもバーンと同じ水鏡くらい使えるぞ。あれよりも―よく―見える水鏡が。」
ヴェルザーは腕を振るい、数個の水鏡を同時に作り上げ、そこに映っていたのは・・
「・・・・ロカさん・・・レイラさん！」
「ふむ、そんな名であったな。お前達の足跡は既に調べさせて俺も把握しているが、羽虫共の名前までは憶えていなかったな。確か先の勇者一行で盾となり剣となりてボロボロになった死に掛けが、今は―回復―の一途をたどっているのであったか？」
「あ・・・・」
「それにあちらに映っているのはリュート村とやらであったか。この国の王は理想とやらで国を傾けたが残りし民達はいずれも信仰深く優しき者達という評判は近隣諸国に鳴り響いているとか。」
「・・・・まれ・・・」
「あぁ、あちらもお前が助けたベンガーナの・・・」
「黙れ!!黙れ黙れ黙れ・・・・お前が!!!」
「違うぞティファ。あれらは消すのは俺ではない。バーンだ。バーンの若造とあの人形と影達が地上を消すのだ。」
「あ・・・・」
水鏡に映ったのは一行というよりも、ティファが優先して守りたい者達ばかりを映した。
ティファの心が地上の事を更に思い、此処から出なければいけない心を乱して焦らせ自分のいう事を聞かせ易くする為に。
ヴェルザーは完全にティファを―理解―している。
憎いと心底思ったが故に、一度でさらけ出されたティファの本性からティファの全てを構築し、寝る事も無くこの数日ティファをいかにすれば穢し尽くせるかそれのみを考えていた故に。
ティファは八つ当たりを良しとしない。自分は事実を述べているだけなのでティファはその事で自分を非難する言葉を失ってしまう。
自分などはお構いなしに当たるのを、ティファは―いけない事―だ

と飲み込んでしまう。理不尽さを感じてもだ。
飲み込んで苦しそうにするティファに満足し、ヴェルザーは甘い毒を囁く。
「俺はなティファ、別に地上を残してもいいのだ。―多少の命―は俺の怒りの矛先として消えようが、―全て―消されるよりはましであろう？」
「黙れ!!そんな事許される訳が・・・」
「ではどうする？すべて場消えるその時まで俺とここで遊び続けるか？俺は其れでも構わん。
地上がバーンの小僧に消されようがどうでもいいのだからな。
ただ、―綺麗事―を必死に喚くお前が哀れだと思うから俺は珍しく―慈悲―を働かそうというのに何が気に入らない？」
ヴェルザーは話しながら、ちらりと―配下達―を見ると、其れだけで配下―だった者達―がガタガタと怯えている。
情けない事だ。俺様の配下であるのならば、俺様の命令を喜んで受けるべきだろうに。
其れが情けなく震えて真っ青になっているのだから嘆かわしい事だ。
「き・・・気に入るもいらないも!!お前は狂ってる!!お前は・・・・自分が何を言っているのか分かっているのか!!!!」
ティファも配下達と同じくらいに真っ青になりながらも気丈にも口を開いて一喝する。だが、常の力強さは欠片も無く、言葉の端から恐怖がにじみ出ているのが直ぐに分かる。
ティファも怯えている
その事実がヴェルザーに満足感を与える。
綺麗事を力強く言ってきた小賢しい娘が、たかがこれしきの事で怯えるとはな～。
コツコツとヴェルザーはゆっくりと歩いて配下に近づく。
怯えた配下の一人、ガーゴイルがとんで逃げようとする首根っこを掴み、態々ティファの方に向けにんまりと嗤う。
「や・・・やめてヴェルザー!!!!!」

噬うヴェルザーが何をしようとしているのか察したティファは、兄に全身の表面にに辛うじて結界を張ってヴェルザーの下に止めようと駆け寄るが遅かった。

ゴキリ

さしては大きくない、それでも静寂が占める空間内に響き渡る鈍い音と共に、ガーゴイルの体はだらんとヴェルザーの手の中でぶら下がり、走って止めようとしたティファは呆然としてその場にへたり込んだ。

・・・・間に・・・合わなかった・・・・

くっくっく、たかだか虫けら一匹が死んだくらいで崩れるとは他愛無い。

矢張りこやつは・・

「なぁティファ、先程俺の言った通りの事をすればお前と勇者の兄を此処から出してやるぞ。」

「やぁ・・あ・・」

「俺が言った事を―お前―が果たせばそれでいい。其れだけでお前はバーンの小僧の下に行き地上を守る使命を果たす機会が得られるのだぞ。」

「やだ!!!・・・それは・・・それだけは・・・」

ヴェルザーの破格ともいえる提言に、ティファは聞きたくないと両耳を塞ぎ錯乱したように幾度も首を横に振る。聞くことは出来ないと拒絶して。

その様に、ヴェルザーの噬いは益々深くなる。

間違いない。ティファは、―生命を殺した事―は一度も無い。

ティファからは―血―の匂いが一切しない。だからこそ出会う全ての者達が―ティファ―が力を実際に使うまで、誰一人としてティファから強者としての力を感じ取ることが出来なかった。

力を持つ者は大なり小なり血の匂いがする。其れは互いに強ければ強いほどに感じ合うものだが、ティファからは一切しない故に。

魔軍司令官ハドラーも、新生六大将軍達も、味方の騎士達も兵達も王達もまたティファからは清らかな気配しかしなかった為に完全に見誤って対処してこようとしてきた。
力を持てば必然的に――敵――を倒す事が増え、勇者一行のマァムであっても敵を倒し命を奪ってきた者特有の気配がするが、何故かティファにそれがない。
方法は分からないが、ティファは強くなる過程でもその後でも敵の命を奪っていない事を示唆している。
報告にあった、運命の悪戯で知己となった竜騎衆の二人を討ち取ったのも、命を奪ったのではなく、渡されたようなものだと報告を聞いて感じてはいた。
差し出された罪人の首を刎ねる処刑人をさせられたようだと。
そんな者達の頸をいくら刎ねようともティファに血の匂いが付くことは無かろう。所詮は差し出された命を落とさせられた不運でしかないのだから。
そうではなく、己の意志を以て命を取った事があるかどうかだ。ティファにはそれを感じず、その辺の女童とティファは中身がさして変わらない。
未だ手いらずの花と同じ清げなる魂をその身に宿したティファを、自分の手で穢せるのが嬉しくて堪らない！
柔らかく白い魂を掌中に収めている様な陶酔感に酔いしれそうだ。少しでも匙加減を変えればぐしゃりと壊せそうな危うさが、また堪らない。ティファ其の物を握りしめている愉悦感が自分を酩酊させんとする。
髪を振り乱し取り乱すティファは可愛いものでは無いか。
「ティファ、俺は難しい事を言ってはいないのだぞ？」
蹲り泣き伏すティファの背後に忍び寄り、自らも座りティファを優しく抱きしめる。
「や！放せ・・・」
「おやそれは、そんな酷い事を言われると俺の心が傷つくぞ。その悲しみを紛らわせる為にまた羽虫を握りつぶすか・・・」

「やめろ!!!アレはお前の・・」
「そうだ、俺の物を俺がどうしようと俺の勝手だ。強者こそが全ての魔界において、俺の言葉は重いのだぞ?」
「ひぃ・・・ヒィィィイ!!!ヴェルザー様!!お許し・・・」
「五月蠅い奴だ・・・」
「ひぎぃいいい!!!」
「・・・喚く声も五月蠅い奴だ・・・」
闘気を送って喚いた者の口と鼻を塞げば、其れだけで見苦しく騒ぐ様にはうんざりとする。しかしティファの顔色を更に悪くさせるのだからこれはこれで一興か。
「やめて!苦しんでる!!」
「そうか、ならばお前が慈悲深く―終わらせてやる気―になったのかティファ?」
「あ・・・・・・」
ティファは自力ではここから出られない。そして外で見ているバーン達にもここから二人を出す術はない。

「・・・この空間も・・・・・・ここも違う!!!バーン様!!」
「・・・余のラド＝エイワーズも利かぬ・・・」
外にいる二人の空間使いは、持てる力を駆使してティファと・・・・癪だがダイも共に連れ出そうと試みている。
あのヴェルザーの策を見過ごす方が許せないからだ。
しかしどうにもならず、見ている事しか出来ない者達はヴェルザーの行っている出す条件を、条件次第で飲んでくれないかと思ってしまう。
その―条件―を聞くまでは。

「さぁ、そろそろ決めよティファ。地上を救いたいのであろう?幾千・幾百万の命を救うのに何を躊躇っている。」
「出来ない!!出来る訳ない!!!!!」
「何故?あぁ、―力―ならその時返してやるから安心しろ。簡単な算

数の問題ではないか。童にも分かる簡単な事だぞ。」
ぐしゃぐしゃになったティファの顔の頤に、ヴェルザーは親指を添えて前を向かせる。
ティファの泣いている瞳に映っているのは、自分と同じく泣きながら震えている憐れな者達。
誰もが―死にたくない―と叫んでいる。
その双方の様をヴェルザーは嘲笑い謳うようにティファに話し続ける。
「あの数百しかいない羽虫共を殺し尽くせばいいだけだぞティファ。」
まるで部屋の中を掃除すればいいというように、生命を消せというヴェルザーの言葉に、ティファの心は慄きながらも、考えてしまった、思ってしまった。
もう・・・・其れしか術がないの？
冥竜王ヴェルザーは残酷な者として君臨していただけに、その手の心の機微には敏感に察する。
今、ティファの心の天秤が僅かに傾いた事に
あぁもう少しだ、もう少しでこの御綺麗な小娘を血塗れに穢し尽くせる。
血の匂いを漂わせながらも、自らの行いにこの小娘の心が耐えられ切れる筈も無く、血だまりの中で壊れて座るティファの姿が脳裏に浮かび興奮するのを、抑えるに一苦労するではないか。
もう一押し、ほんの一押しすればティファの心は坂を転がり落ちる・・・
ティファの小さな耳に近づき最後の毒を流し込む。
「苦労するばかりのお前も、偶には簡単な道を選んでもいいではないか。」
楽な道を選び、転がり堕ちるがいい

悪意の最後

非道と、外道とも言えるヴェルザーの言葉に、ティファの心は傾きかける。
ヴェルザーの言う通り・・・・ここで止まっていたら地上が、ひいては天界も・・
ふらりとティファが立ち上がり、よろよろと怯えているヴェルザー配下に近づく。
やらないと・・・大丈夫だ、今更・・・私の体は血塗れなんだ・・・・
―何か―を決意したティファの双眸に、狂気にも似た色が宿り、目が合った者達にさらなる恐怖を植え付ける。
「や・・・やめろ!!死にたくない！殺さないでくれ!!」
「いう事聞いても出られる保証は無いんだぞ!!!」
長年ヴェルザーの苛烈さ外道さを間近で見て来た者達は本心を口々に叫び出す。
ヴェルザー程言葉を軽んじる者はいないと。
どう見ても目の前の娘っ子は人殺しなぞ出来る者には見えない！だが、娘っ子を返り討ちにしたところで今度はヴェルザーの手で殺される!!
少しでいい、まだ死にたくない者達はティファを反意させようと必死に叫ぶ。
どうやらヴェルザーは娘を弄ぶのが楽しいらしく、自分達の命などどうでもいいようだ。もしかしたら抵抗をつづける娘を嬲り者にしろと自分達に命が下るかもしれない!!
その時ヴェルザーが喜ぶような途轍もない非道で娘を嬲り者にすれば、気に入って気紛れに助けてくれるかもしれない。
淡い期待に叫ぶが、ティファの耳に何一つ届くことは無かった。
最早地上と天界の為にと、覚悟を決めたから。

「よせティファ!!やめるんだ!!」
「っく!!!よすんだお嬢ちゃん!!!」
「おやめくださいティファ様!!!」
「やめてくれティファよ!!」
「キルバーン!!お前の空間ではあの場所に行けないのか!!」
「やったさ!あらゆる空間を開けた!!それでもあそこに行けない・・・ヴェルザー!!!」
「やめてくださいティファさん!!」
最終決戦のこの最後の時に、敵味方関係なく誰もがティファを止めようと声を限りに叫ぶ。
愛おしいのだティファが!敵であれども、殺す事になっても穢す事をバーンもキルもそしてミストをしても望んでなどいなかった!
だが、声は届かずティファがふらりとまた少しヴェルザー配下に近づき、ヴェルザーひとりが喜ぶ状況に、ポップは渾身の力で叫び上げた。

「起きろダイ!俺達の妹が穢されようとしてんだぞ!!いつまで寝ている積りだ馬鹿野郎!!」

外が騒がしい、羽虫が外野で騒ごうとも声など届く事などないというように
バーン達の事も同時に見ているヴェルザーは、ポップの魂の叫びすらも嘲笑う。届かない声を、馬鹿みたいに叫ぶ愚か者たちが。小娘が穢れた時どのような顔をするのか見ものだ。
バーンは、小娘が穢れた時どうするのかも。
そのまま地上を消すか?それとも怒り狂いて俺の居城に黒の核晶で報復するか。
どちらに転んでも自分は痛まないのでどうでもいい。後者であったとしても、配下が死ぬだけで自分は死んでも輪廻転生でまたヴェルザーになるだけなのだから。
今は、ティファを・・・・・

ザァ～
「さあ、力は返した。存分にお前の力を振るえ。なに、お前の力なればあっという間に・・」
「・・・・う・・・ん・・・やく・・そく・・」
ふ・・・・ふっくっくっくっく!!ハァハッハッハ!!
「ああしてやろうとうも!お前が力を振るい!!羽虫共を殺し尽くせば・・・」
「そんなことしなくていいよティファ。」
これから命を刈り取ろうというティファが、子供のように約束を口にした事がおかしく感じたヴェルザーの言葉を、静かで、それでいて力に満ちた声が遮った。
その声に、何をしてでもここから兄と共に・・・最悪は兄だけでも出そうとしたティファが勢いよく後ろを振り返る。
「・・・・・ど・・して寝ててくれなかったの・・・」
瞳に映った者を、ティファは涙を流して詰る。全てが終わるまで、自分の酷い事を見られたくなくて寝ていて欲しかったのに!!何故!!
「そんな酷い事をティファにさせない為にだよ。」
妹の危機に、当身を喰らったダイの目が完全に覚めて妹に歩み寄る。
「起きたのか小僧。」
「・・・・・・」
二人の間にヴェルザーがするりと割って入りダイを見下ろすが、当のダイは無言でヴェルザーに瞳を睨みつけたまま歩を進めて妹に近づく。
一歩、また一歩と、ティファとは全く違う力強さで歩を進めるダイの姿にヴェルザーは苛立ちを覚える。
魔界で先の決戦時に見た時はティファ以上の甘ったれた面をしていた小僧が!何故―バラン―と同じ様な目で俺を見る!!
バランほど、自分の長き生涯に渡って苛立ちを覚えさせる者はいなかった。敵対する者たちは皆憎悪と嫌悪とそして、差異はあれども怯

えた目で自分を見ていた。
　自分を畏怖しながらもそれでもかかってくる愚か者達を嬲り者にして殺してきた自分を怖れ気も無く、澄んだ瞳に力を乗せたあの目を！くりぬいてやりたいと何度思ったか知れない!!綺麗事ばかりほざいたあの愚か者と同じ目を・・・
「分を弁えろ小僧!!」
「ダイ兄!!」
「・・・く・・・」
　苛立ったヴェルザーは闘気でダイを押し潰して地べたに這いつくばらせせせら笑う。
　この体は映像でも幻などでもない。自身の築き上げた亜空間でならば、自分の力を依り代に込め、力を振るうことが出来る。
　もっとも本体の千分の一でしかないが、ダイ達の力を落としているのでこの程度で十分通じよう。
「貴様には似合いの姿だ。妹を守れない無様な兄としてそこでただ眺めていよ。さぁティファ、―兄―を殺されたくはなかろう?」
「ひ！」
「さっさと羽虫共を殺して・・・何?」
　ダイを這いつくばらせたヴェルザーは、良き質が出来ただけだと嘲笑い、ティファを促そうとしたが・・
　ヒィィィイ・・・・・・ヒィィィインンン!!!!!!
「させない・・させるものか!!ティファを・・・妹を守るのは俺の役目だ!!」
　闘気の圧力に押し殺されかけても、ダイの心は折れる事無く全身の力を込めて抗った。
　ティファ!!ティファはそんな事をしてはいけない!!敵を倒すのも、殺すのも勇者の俺の役目なんだ!!ティファは・・・ティファは俺が守るんだ!!!
　あああああああ！
　ティファを守りたいと願う心からの叫びが、体内深くに宿ったティ

ファの紋章が応える。
兄の求めに応じる様に、ダイの左手の甲に
ヒィィィインン!!!
紋章が輝き、竜闘気特有の青白い力の奔流がヴェルザーの亜空間を渦巻き
ピシ・・ピシリ・・・・ビシッ!!
「なんだ・・・どうなっている・・・・何をした小僧!!!」
空間に亀裂を走らせる。
にぃ・・・とうとう・・・
心の奥底で躊躇い、使う事を怖れた力を使ってでも、ダイには守りたい者がいる。
ティファを守るんだ!!!
「妹から!!ティファから離れろヴェルザー!!!」
叫びながらダイはヴェルザー目掛けて加速し、不意を突かれたヴェルザーは対処できず、ダイの左拳をまともに食らって吹き飛ばされた。
ヴェルザーのダメージはそのまま空間に響き、亀裂が益々深まるのと比例してダイとティファは力が元に戻っていくのを感じる。
・・・・空間の効力が・・・・これなら!!
「ダイ兄!!こっちに来て―アレー撃って!!!」
力が戻り空間の亀裂を見てとったティファは瞬時に策を弾き出し、ダイに手を伸ばして、伸びた兄の手を握って一足跳びでヴェルザー配下の真ん前に着地し、怯える者達にティファは力強く声を掛けた。
「―全員―でここを出よう!!皆で!!!ダイ兄!!双竜ならあれが撃てる!!ヴェルザーを討って!!!」
妹の無茶ぶりに、ダイは苦笑しながらも妹の頭を撫でながら了承する。
「全員でここを出よう。」
ふわりと笑いながらも、頼もしく答えてくれる兄にティファは泣きたくなる。もしかしたら敵になっていたかもしれないヴェルザー配下も救う事を了承してくれる兄に感謝し、呆気に取られている配下達

を自分の側近くに寄る様に声を掛ける。
ダイ兄ならあいつをやっつけてくれる!!!
「・・・戯けが・・・俺以外此処からお前達を出すことなぞ・・」
「黙れ、出来るかどうか、お前は黙って見ていろ!!」
左手の甲のみならず、右の、本来の自分の紋章までも発動させたダイの口調は、ティファも聞いたことがないほど乱雑な言葉遣いであった。
ダイの心は既に忍耐が切れていた。意識は戻っていた、だが体はティファの当身のダメージで動くことが出来ず、寝ているのと変わらないので目を瞑っていた。
ティファが、自分とヴェルザーを会わせたくないのであれば、自分の体が動くまでティファの子供の様な思いを叶えようと。
ティファに投げかけられた残酷な言葉に心を乱さないようにするのは苦労したが。
「小僧!!図に乗るな!!!」
「貴様こそ!!!消え失せろ冥竜王ヴェルザー!!!」
ヒィィィインン・・・カァァァ!!!!
左拳の紋章を下に、右拳の紋章を上にし重ねたその形を見たティファは、半信半疑で自分に寄って来たヴェルザー配下に動かないように指示を出し、配下達を守る為に完全詠唱のジ＝アザーズの結界を張り、ヴェルザーはその形に驚愕する。
「き・・・貴様まさか!!!」
「二度と俺達の前に現れるなヴェルザー!!!!」
ドルオーラ!!!
ダイの両拳が一口一を開いた時、光の奔流がヴェルザーを貫く。
「お・・・・おのれ小僧!!ティファ!!!」
断末魔に怨嗟の声で二人の名を呼びながら消滅していくヴェルザーの分体を消し去り、空間をも砕いて行く!
「ダイ兄!!こっちに!!!」
空間の崩壊にダイが巻き込まれる前に、ジ＝アザーズの結界を固定して残したまま兄に駆け寄り、連れ去られた時とは反対にティファが

ダイを力強く抱きしめる。
「ティファ・・・・戻ろう。」
「うん・・うん!!!戻ろう!!!みんなの所に・・・」
　果たして、空間がひび割れガラスが粉々に割れる音がした後、空間は完全崩壊した。
　空間崩壊の衝撃に閉じてしまった目を開けばそこは白い床の上であり、見回せば青い空と白い雲、そして高い塔が中央に聳え立ち、呆然としている全員に温かい太陽の陽光が降り注ぐ。
　ダイとティファ、そしてヴェルザー配下全員が、パレスのある地上へと戻れた証であった。

―ｉｆ―みんなで仲良く倒してこい

「皆さん急いで!!ダイ君とティファさんが移動始めました!!」
「皆んなチウ君の言葉聞こえたね!!返り血の点検と乱れた衣服の直し急いで!!」
「分かってる!」
「ポップ君は魔力と体力の回復薬飲んで頂戴!急がないと二人にバレるわよ!!」
　玉座の間の端で、ティファとダイの動向を見張っていたチウが、二人に動きありを大声で全員に知らせ、キルが場を仕切っても誰も、それこそ勇者一行の誰も文句は言わずに言われた通りするという超ありえない事態になっている。

―遡ったヴァルザーの居城より―
「な!!何故―お前達―が俺の居城にいる!!しかもお前達は!!!」
「よう冥竜王様よ～。―弟―と―妹―が受けた屈辱と流した涙の借りを万倍返しに来てやったぜ～。」
「良くもティファとダイに・・・」
「貴様は絶対に許さん!!!」
「勿体ないが、ティファ様を穢さんとしたお前を!俺の槍の錆にしてくれる!!」
「覚悟しろ!!」
「まったく皆さん血の気の多い・・・まぁしかし、年貢の納め時という言葉をご存知ですか外道竜?」
「お前の顔も勇者らしくないが、確かに年貢の納め時だな。」
「・・・・・貴様の数々の行状を思えば生かして置く理由がない・・・」
「き・・・貴様等正気か!!何故敵味方のお前達が・・・しかも魔界にまで来るなぞ!!!」

「―ティファ―に手を出さなければうち捨ておいたものを・・・・場違いな愚かなるトカゲ風情が・・」
ば・・・馬鹿な・・・・・馬鹿な馬鹿な!!!狂っている!!あの小娘に関わった者は全員が狂っていくのか!

―も少し遡ったパレスの玉座の間―
「疫病神!こういう時こそあの外道に厄を振りまけよ!!」
「キルバーンさん!!このままじゃティファさんが!!!」
「本当に失礼な子だね魔法使い君は!!チウ君の良い子さを満分の一でも見習い給えよ!!チウ君・・・・僕の空間ではあそこには・・・」
「・・・ティファ様・・・ん?ディーノ様がお起きに!!!」
「「何だと!なんですって!!なんと!!・・・・・ダイ・勇者君!その外道竜ぶったおせ!!!!!」」

バーンの水鏡でヴェルザーの外道を見ている事しか出来ない、勇者一行と魔王軍代表達は、敵・味方関係の垣根を超えて起きたダイを共に声続く限り応援する。
「ディーノ様!!ティファ様が受けた屈辱の万倍のお返しを!!」
「ああ!ダイ!!鳩尾に拳叩き込むときはもっと抉る様に!!!中身壊す勢いで!!」
「拳を打ち込むときのスクリュウーが甘いぞ!!もっとひねれば中身ぶちまけられたぞ!!」
「そこで追撃して顔面踏んでしまえ!!」
「いや!紋章閃等の放出技で手足落としてからだ!!」
「・・・・甘いぞお主ら・・・・手足落として安全確保するのならばあそこで怯えているヴェルザー配下に報復させ、屈辱に塗れた所を一気に止めを・・・」
・・・・・魔界の神バーン様・・・・配下思いで魔界の為なら身を粉にしてご自分の名誉も情もお捨てになる方が・・・えぐい事をぼそ

りというのは怖いですよ？
マヒャデドスの冷気もかくやな程の寒気が、勇者一行に襲い掛かり一同凍り付く。
やっぱりこの人ラスボスなんだと改めて身に沁みた。
「やだな～チウ君迄そんなに怯えて・・・・もしかして本気でバーン様の言葉怖かった？」
主のえぐい一面など見慣れているキルは笑っているが、心の広いチウまで主の言葉に怯えて後ずさるのを見て思った。
そんなに酷い事バーン様言ったかな？
屈辱に塗れさせたとは放置してうち捨てる訳でも、鬱憤溜まってそうな魔界の者達の鬱積晴らしの玩具にしろとか言った訳でじゃぁないんだけどね？とどめ刺すんだから真っ当でしょうに。
この辺は地上と魔界の者の認識の差なのかなとか本気で思考が呆けているキルであった。
キルの思考を知れば、地上とかそれ以前に敵でもサクサクとどめ刺してあげるのが普通だろうと突っ込み待ったなしの呆けであろうが知らぬが何とやら。
そうこう思っていると、ダイの左手の甲に紋章が輝き！ヴェルザーを吹き飛ばし右手の甲にも紋章を発動させて構えるダイに、ポップ達の歓声は最高潮を迎えた！
「良いぞダイ!!とうとうティファから貰った紋章発動させやがった!!」
「頑張ってダイ君!!ティファの受けた悲しみと苦しみを面の皮引っ叩いてボコボコにしてやって頂戴!!!」
「頼みますディーノ様！ティファ様のご無念を!!」
「駄竜王消し炭にして良いからね勇者君!!」
「・・・・やってしまえ・・・・」
「ふむ、これでチェックメイトか。」
最早敵味方という言葉はどこ行ったと言いたくなる応援具合。
唯一の純粋王族のレオナまでもが物凄い口悪く応援しても、誰も咎めもしない。

地上のお留守番組がこの光景を見たら・・・・ティファの事で矢張り同じ反応になるのだろう。
しかしダイのしている構えを始めてみたアバンとチウだけが首を傾げる。
「・・あのダイの構えは？」
「本当だ、何でしょうあれは？」
「あ!!!先生とチウは初めてか！アレは竜の騎士最大の放出技で！ドルオーラって言うんっす！
いっけぇダイ!!!そいつ消し飛ばせちまえ!!!」
果たしてポップ以下一同の応援の甲斐あっ!!!てか、ダイはドルオーラでヴェルザーを討ち、ティファも残った全員と兄と自分が空間崩壊に巻き込まれないように策を施し、無事に地上のパレスに戻ってきた時、バーンの玉座の間は大歓声に包まれた。
「イッヤホォウ!!!ダイ!!ティファ!!」
「良かった!!本当に良かったわ!!!」
「ダイ君!!ティファさん・・・・本当に！本当に!!」
「泣かないのチウ君。嬉しいの分かるけど、泣いているの見たらお嬢ちゃん悲しむよ？」
「・・・・・そこの疫病神の言い分・・・癪だがその通りだ。」
「おやつれないね、槍使い君。まぁいいけど。」
「・・・・戻ってきたか・・」
「ダイ・・・ティファよ。」
一同喜ぶ中
「どこに行くのですか大魔王？」
「あの二人の下に行くのであれば直ぐにでも戦いを始めようか？」
玉座から立ち上がるバーンをアバンとハドラーは見逃さず、喜んでいた一同の間にピリッとした空気が流れる。
そうだ！本来俺達は敵味方!!・・・・バーンが闘気を使って消耗した二人を・・
「・・・・あの愚かなる竜に―用事―があるだけだ。ダイとティファも回復してから来るであろうから直ぐに戻る。」

アバンとハドラーの問いに、バーンは言葉短く答える。
二人が来る前に用事を済ませてしまいたいという意図が丸見えな答えに、ポップ達は顔を見合わせ、急にコホンと咳払いした。
「いや～、ここに来て―運動―してなかったから、思いっきり魔法使って肩慣らししてえな～。」
「あらポップ、私もロン・ベルクさんの手甲の魔装を思いっきり使ってみたいんだけど・・・」
「ふむ、俺も折角光の闘気が使えるようにはなったが、アバンストラッシュが使えないか―練習台―が欲しいと思っていたんだが・・・」
「俺もこのアックスの性能を思いっきり・・・」
「・・・・皆さん・・」
「お前達・・・」
「あのな～・・・」
ポップ、マァム、ヒュンケル、クロコダインの言葉に、アバンとラーハルトとハドラーは溜め息を吐いく。
その様子を見たポップ達は自分達の考えている事は矢張り駄目かと思ったが、
「あの外道竜退治に付いていきたいならきちんと大魔王に同行許可とりなさい。」
「正々堂々と言えばいいだろうに。」
「回りくどいぞお前達。バーンさ・・・コホン、俺達もあの外道竜の所に行っても？」
うっかりとバーン様と言い掛けてしまったハドラーは、咳払いで誤魔化しても誤魔化しきれない赤面した顔を明後日の方向に向けながら同行許可を求める。
ハドラーはどうしても、バーンに対する抱いた恩義と敬愛の念を捨てきれずにいるのは、チウでも知っている。
何故ならバーンの話が出る時、何時も苦痛とそして敬愛の念が僅かに漏れ出てしまうからで、隠さなくてもいいのではと言葉を掛けようとしたのをビースト君とマトリフに止められた。
あいつなりにケリを付けようとしてんだ。あいつの心を乱す事に

なるから余計な事は言わない方が良い
　赦せなくとも、それでも敬愛の念を消すことが出来ずに苦しんでいるハドラーの心を慮って
　以来チウもその件に触れないようにしていたのだが・・・・選りにもよって当のバーンの前で出してしまった・・・
「ふ・・・くっくっく、好かろう。ついてきたい者達は勝手にくればいい。どうなっても余は知らぬがな。キル、開けよ。」
　ハドラーの態度の面喰い、そしておかしくなったバーンは機嫌よく付いて来て良い許可を敵である勇者一行に出したのを、キルは主が許可を出すだろうと予想していたので動揺せずに命に従う。
　ティファに手を出せば、敵味方の垣根なぞないも同然なのだから。
「畏まりました。僕は―前回―報復しているので今回はバーン様と皆で好きにしてきてください。
　チウ君どうする？」
「・・・僕は・・・・待ってます。ポップも皆も・・・無茶しないでね？」
「そう、なら一緒にお留守番だ。ミストは？」
「・・・・・―アレ―にはしてやりたい事が山程ある・・・」
　チウは矢張り殺伐とした事には向かず、レオナもポップ達の様にボコってやる手段がないので敢え無く断念・・・もっと格闘技化剣術磨いてやるんだったわ・・
　反対にミストはやりたい事が沢山あるらしい。

　キルとチウとレオナ以外の全員がキルの空間を通って魔界のヴェルザー城へと行く事になった。
「―今回―は例外中の例外ですが、頑張って駄竜王を・・・ね♪」
　ダイとティファおらずとも敵の勇者一行も特別安全に空間に通すのだからヴェルザーボコって来いと言外に言ったキルの瞳はゾッとするものがありながらも、ポップ達はコクリと頷く。
　なみいるヴェルザーの親衛隊をバーンの光魔の杖の鞭と、ラーハルトのハーケンディストールが細切れにし、アバンのミエールの眼鏡で

罠を看破しマァムとヒュンケルが放出闘気の遠当てで破壊し、ポップのロッドとクロコダインのアックスも火を噴いてサクサクとヴェルザーのの安置されている部屋の前に辿り着き、ハドラーとミストが問答無用で扉を両側から蹴飛ばして吹き飛ばす。
殴り込みに来たのだから礼儀だなんだの知った事ではない。
そして物語は冒頭に戻る
「き・・・・貴様等!!!!やめろ!!!!動けぬ俺に寄ってたかって卑怯・・・」

ギィヤヤヤヤヤアアアア!!!!!!・・・・・・・・・

「早く行かないと!!!」
「にぃ待って!!・・・・あと・・・・もう少し・・・・」
空間から戻れたダイとティファは、らせん階段をひたすら走って昇っている時・・

「早く!急いで体力回復薬飲んでよ魔法使い君!!息上がったままじゃぁないか!その手甲の血が落ちてないよ!ハドラー君!頬に血が付いてる!!」
「ラーハルト!アックスに付いた血はこれで・・」
「大丈夫だクロコダイン・・・其れより魔装の肩の後ろ側に返り血ついてるぞヒュンケル!拭いてやるからこっちにこい!!」
「バーン様!お早くこちらで着替えを!!デザインは同じものを用意しました!!」
「・・・まぁ多少違っても最終決戦用といえばティファとダイなれば信じよう・・」
「あぁ・・・白い布地なのでこちらも目立ちますかね・・」
「いざとなったら空間で飛ばされた先に外道竜の配下がこちらにもい

た事にするぞアバン。」
「それいいアイディアだねハドラー君!!!」
―返り血―落とせなかった時の言い訳は其れにしようね皆!!!

タッタッタッタ!!
「・・・めぇ達の好きには・・・」
「ダイ兄!!始まりそうだ!!」
「ティファ掴まって!トベルーラで!!」
ギューン!!
「この地上は・・・おやおや。勇者君とお嬢ちゃんも漸くの御出座しか。」
「ダイ!ティファ!!お前達も無事だったか!!」
「・・・・・ま、間に合いましたか?!」
「良かった!ポップ達は無事此処に来たんだね!!遅くなったが大魔王!!決着を付けに来たぞ!!!」
「ふ、ここまで来れた事は称賛するが、お前達の旅路はここまでと知るがいい。」
良かったみんな無事にここに来て、自分達も激突前に間に合ったとダイとティファはホッとし、ダイは勇者一行が揃い踏みしてもいまだに玉座に座っているバーンに剣を抜いて宣戦布告する中、バーンを始めとした全員が心の底から安堵して崩れたくなっている。
良かった間に合った!!!
外道竜の返り血もギリギリで完璧に全員落ち、バーンも着替えが間に合いダイとティファの聴覚力で声を拾える範囲に入った時、キル創作・監督の下、小芝居を始めて二人を迎える事が出来て一同ホッとした。
ちなみにバーンが玉座に座っているのは小芝居の演出も兼ねているが、本当のところ高速着替えと、二人が来る前に間に合うかという気疲れで座っているのが八割であったりする・・・・ローブというの

は例えミストが手伝っても案外脱ぎ着がし辛いのだ・・・もう最終決戦明日に日延べしたくなってきたが如何ぬか？

良い子のチウだけは腹芸だの小芝居できないのでハドラーの陰に隠れて黙ってる事にした。

バーンの右隣りにいるキルが、そっと人差し指を口に持っていき、黙っている様にねと笑った瞳を向けられたのでコクンと頷きながら。

何も知らない良い子の勇者と料理人の為に、勇者一行とその仲間とお供と魔王軍代表による外道竜退治の共同戦線は墓場まで持っていく秘密となった

いざ大魔王との決戦に

・・・・俺達に一体どうしろってんだよまったく・・

「めんなさい・・・ごめんなさい・・」

ったくさっきからこればっかりだよこの娘っ子は。

二人ほど殺されたが残った者達は無事にあの残虐な空間から出られたと大喜びしたのも束の間で、先程からずっと謝られ通しでいい加減にうんざりとしてきた。

曰く俺達の事を、自分の都合で殺そうとした事が悪いとさっきから泣いてるは、兄と呼ばれた小僧っ子も申し訳なさそうな顔して俺達の事を見ながら娘っ子を抱きしめて慰めて忙しいわで・・・本当になんだろな～。

悪いのは全部あのくそ大トカゲのせいだろうに。

大方あいつのもろ趣味にこの娘っ子が合致しちまったせいで目を付けられちまって・・俺達は単にそのとばっちりの遊びの駒にされただけだろうによ～。

魔界ではそんな理不尽は日常茶飯事に転がっている。誰かの気まぐれで弄ばれ駒にされ命が藁束の様に投げ売られているのがヴェルザー支配下では当たり前。

自分も腐るほどそんな目に遭う者達を横目で見てきたが、今度は自分たちの番かと半ば諦めていたのに・・・生きているだけで御の字という言葉をこの娘っ子は知らないのか？

魔界の住人の死生観は実は物凄くドライだったりするのだが、バーンの領地、其れも直轄地やおひざ元ではそんな事した者の方が地獄を見るので誰もやらないので双子は甘くなっていたりするがあれこそ例外。

生きていればそれでいいのに・・何を泣いて謝って来るのか生き残り組はさっぱりでありお手上げ状態である。

もう仲間達にも爺ちゃんにも申し訳が立たない!!生命は尊くて、大

切にしなさいっていう爺ちゃんの教えを自分の都合で無視しかけて・・・ダイ兄起きてくれなかったら私はこの人達を・・
「ごめんなさい・・・怖い思いさせて・・・殺そうとして・・・・」
幾度謝っても謝りきれない・・・それに・・・
「貴方達の事どうすれば・・・・」
ある程度落ち着いたティファは、兄の腕から出てヴェルザー配下にこの後どうするのかえぐえぐと泣きながらではあるが尋ねる。
・・・・・そうだよ、俺達どうすりゃいいんだ？
問われた者達も本気で悩む。
ここが何処なのかは分かる。話に聞いた地上とやらだ。天蓋が青いのは空で、温かいのが太陽で、あれらを手に入れる為に魔界の神様は戦ってくれてるそんな中を、横槍入れて邪魔したヴェルザーの野郎の配下だった俺達の処遇はどうなんだ？
「あの・・・・大魔王に、貴方達を魔界に戻せないか聞いてみましょうか？あの中央の塔に居るので、一っ走りして・・・あ、もう水鏡で私達の事分かって・・」
「その通りだよティファ。バーン様はちゃ～んと見ておられんだよ。余計な事気にせずとっととそいつらこっちに渡してくんな。」
とんでも提案と怖い事をさらさらと言うティファに一体のガーゴイルが飛来して話しかける。
「ガァちゃん!!!!」
・・・・・・こいつは・・・まぁいいか、どうしたってこいつはこうなんだから。
ティファは決してふざけている訳ではない。本気で俺達の事を知ろうとして好きになってくれたんだろうとは思うのだが、アンリとセシルをあそこ迄泣かせたのは赦せないので少しつんけんしてや無視してやる。
それに・・・ゴロアも泣かせたし・・・・
動力炉の面倒を見る為に遺されているが、ティファと会ってしまった時どうしようとも悩みながら泣いていたのだから、ティファにこれくらいしても罰は当たるまい。

「お前達ヴェルザーの奴の配下だろう。バーン様はお前達の領地迄通知したはずだぞ。」
「お！俺達だってここに来る気は・・そもそも魔界の神様に逆らう積りなんて端からないんだ!!」
「信じてくれよ！俺達本当にあいつに・・」
「ふん！腐れ外道のオオトカゲに使えてる事自体が不幸って奴か。バーン様のお言葉だ。お前達を速やかにパレスから魔界の領地に帰せとのお達しだ。
　行先はバーン様の領地だが、そこに留まるも戻るも他に行くのも好きにしろとの恩情だ。
　ただしそこで無法働いたら死んだ方がましな目に遭うからその積りで・・・」
「ガァちゃん!!!」
「うお!!!」
「この人達殺されないの⁉罰せられないの⁉」
「ティファおめぇ・・・・」
「良かった・・・本当に良かった。」
　無視されても、バーンの言葉を携えて来たガァグランスの言葉に喜んだのは誰でもないティファであった。
　ここはバーンの居城であり、先日ヴェルザーに送り込まれてしまった者達は言い分すら聞いて貰えず皆殺しの憂き目に遭ったのが忘れられず、どうにかとりなせないかと提案までしてみせた。
　生命が、誰かの思惑の駒となり玩具になっていい筈がない
　最悪は全員を筒に入れて、ベグロムとデスカールの様に自分の体内で守る算段迄つけた時に時の神が仲裁に降りてきてくれたとティファの目には映り、たまらずガァグランスに抱き着き面食らわせている。
　あぁもう仕方がなぇぇなこのお嬢様は・・・・自分も弱いのだ。素直に感情のままに動き、大半は優しき事を行うティファに。
「バーン様に会ったらきちんと感謝しろ。この件ではミストバーン様もキルバーン様も反対されてねぇんだから同じようにちゃんと言う

んだぞ。」
「はい！」
「おし・・・・さっさとバーン様の下に行って、とっとと捕まってまた捕虜になって来い。」
「え・・・・・・え～・・・・？」
其れはちょっと・・・
ガァグランスに頭を撫でられながら、ティファは思考のフリーズを起こし困り果てる。
ガァグランスは冗談を言っているようには見えない。この言葉はきっと魔王軍ご一同様が願っているのだろうか？
「ガァちゃん・・・・」
「あぁ困らせちまったか。どうしたってうちのバーン様は強いんだから、無駄な抵抗すんな。
痛いの嫌だろう？」
・・・・私の周りの人達ってどうして痛いのを基準にして怖い事勧めてくんだろう？
主に即死させてやるとか捕虜にしてやるからとか訳分らない。
それにしても・・・・自分が一応敵であるガァちゃんに抱き着いても怒らない兄の方が怖く感じるのは何故だろう？
「おら行くぞお前達!!」
あ・・・・
ティファがダイの方を気にしてそろりと振り返ると直ぐにガァグランスはヴェルザーの元配下達を引き連れてパレスのゲートに向かわせる。
「本当にごめんね!!怖い思いさせて!!!もう怖い事に遭わないように気を付けてね!!!」
去り行く彼等の背中に、ティファは大声で気を付けてと何度も届ける。その姿が見えなくなるまで。

その声に、元ヴェルザー配下は戸惑いガァグランスをちらりと見る。このガーゴイルはあのおかしな娘っ子の事を知っているのだろ

うか？
「・・・・あの子は本気でお前さん達を心配しているだけだ。」
「は⁉」
「それ以上でもそれ以下でもねぇから悩むだけ馬鹿らしくなるぞ。」
「悩むなって・・・・だって俺達は赤の他人だぞ!!それもさっき会った・・・・」
「知るか、あの子にとって、―生命―ってのはそんなもんなんだろうよ。」
　会った時間の長さでも何もなく、生命に比重がない・・・・夢物足りに出てくる狂人の戯言と・・・・何故か全員が笑うことは出来なかった・・・あの真剣な声が耳から離れなくて・・・

「バーン様、彼等は行きましたが竜の兄妹は動きませんね～。僕がお迎えに行きましょうか？」
　全てを静かに見届けている一行とバーン達は、キルの発言にチウ以外の全員が眉を顰める。
　お前今行ったらヴェルザーと間違われて討たれても文句言えんのだぞ？とのバーン達と
　変態疫病神が二人に近づくなの勇者一行の見解に相違はあれど
「構わん、大人しく待っておけ。」
　バーンの鶴の一言で決着した。大人しく待て

「行っちゃたね・・・・ダイ兄・・・巻き込んで・・・」
「ティファ・・・」
「あいつの恨み買ったの私なのに・・・・」
「ティファ。」
　妹の謝罪を、ダイは優しく抱きしめて遮る。
「あいつは放って置いたらいけない奴だ。バーンの前にどうにかできた良かったよ。」
「にぃ・・・・」
「さあティファ、行こう！皆もきっと先で待っている気がする。大魔

王バーンを討ちに行こう。」
「にぃ・・・うん、そうだね！止めに行こう。」
「捕まってティファ！」
・・・来る、余の最大の邪魔者にして愛おしい者が・・・・
トベルーラ!!
ダイの宣言を聞いてバーンは玉座から立ち上がり光魔の杖を手に持ち出迎えの準備をする。
最後に、この広間にいる全員の顔を見渡しながら。
ポップ達も備える様に構える前に
「遅くなって申し訳ありません!!」
「勇者ダイと料理人のティファが大魔王バーン！お前を討つために来たぞ!!!」
「ダイ！ティファ!!!」
ポップ達の真ん前に着地した二人が勢いよくバーンに口上を堂々述べる。
「大魔王！ヴェルザーの元配下の方達に対する温情有難く!!ミストもキルも反対しないで下さりありがとうございます!!」
「ふ、捕らわれまたあの者達に会った時が楽しみであろう？」
「生憎兄達も私も負ける気はありませんよ!!」
「バーン!!二度と俺も皆も負けない!!負ける者か!!!」
礼を述べながらの宣戦布告に、バーンもミストもキルも嫌な気にはならない・・・不思議な事だ、構えている後ろの者達にも好意すら持てるのだから。
これから大激突をする者達相手に、勇者達に好感を持つとは何の皮肉であろうか？
魔界の現状を見せ、天界の非道を話せば共に天に弓引いてはくれぬだろうか？
・・・・無理であったな・・現に優しいティファも、此方には来てはくれなんだ・・
惜しい者達よ・・・
「では、始めよう。」

たった一言、バーンが言葉を発しただけで玉座の間の空気が冷たく重苦しいものへと変貌し、筆頭のダイとティファも身が地面に押さえつけられそうになるのを堪えた時、バーンの額が輝き白い光が部屋を満たした。

何かの攻撃かとダイは即座に剣を抜いて身構えたが何事もなく、その事に返って驚いた。

目晦ましにしては光は直ぐに収まり、本当に何事もなく驚いていると、地面に何かがあたり反響する、カツーンカツーンという音が響くだけであった。

最終決戦の幕開け

カツーンカツーンと、音がする方を見たダイは顔を青褪めさえ仲間がいた場所に駆け寄ろうとするのをポップが押し止め無理やり前を向かせた。
「放してポップ!!レオナが・・クロコダイン達が!!」
「落ち着けダイ!!マァムも前向け!!敵から目を逸らす馬鹿がどこにいる!!!」
「う・・だって!!!」
「レオナ達が!!!!」
「落ち着け、方法は分からねぇが皆殺されたんじゃねぇと思う。」
「マァム!今は大魔王達の方に・・・」
「ヒュンケル・・・先生・・」
ダイと同じく動揺するマァムを、アバンとヒュンケルも押し止め前を向かせ、その間にポップは頭脳をフル回転させ今起きている事の事象を読み解かんと必死に考えを張り巡らせる。
レオナ達がいた場所に玉があり、そして自分達は無事・・・・戦力の高いダイとティファと俺とヒュンケルとラーハルトと先生ハドラーとマァム。
玉の場所に居たのはチウとチウの方に乗ってたべほとおっさんと姫さん・・・全員―戦力―が低く、近頃は組手でマァムにおっさんは負けてた・・・大魔王バーンどころか悪いがキルバーンとミストバーンとも戦うのがきついと思っていた・・・そうか。

「戦力が低い、この場で戦う前から勝敗が低い者と判断された者がさっきの光で玉にしたのか?」
「ほう?何故そう思う?」
「・・・言いたかねぇがさっきの光で姫さん達殺したってんなら、俺なら玉になんてしねぇ。」
死体を残しておいた方がダイとティファの精神を削ぐのに役に立つ。

だが、其れをが無いという事は戦力外の者と戦う手間を省いたと考える方が自然だからだ。
それに、自分の考えを―ティファ―が示してくれている。
「・・・・・ティファ？」
ダイと違い動揺した様子は微塵もなく、自分とバーンの遣り取りの間に全て玉を回収して大事そうに胸元に抱えているではないか。
「ダイ兄、ポップ兄の言う通りだよ。この玉からは命の温かい気配がするから大丈夫。ティファが守るから安心して。」
おっとりと笑いながら、当代の知恵者・大魔導士マトリフの一番弟子ポップの頭脳が弾き出した答えを後押ししつつ、自分戦場出ません発言をきちんとする。
今回は本当に後方メインで罠の見破り、べほちゃんいなくなった分の回復サポート、本来の料理人の仕事を全うする宣言を出す。
「了解・・・ってことで大魔王様よ、いっちょ始めますかね？」
「・・・其方ポップと言ったな・・・・・ティファに似て可愛げというものを地の底に捨てて来たか？」
「へ！魔界の神様にまで名前覚えて貰って光栄な事だが、勝たせてもらうぜ。」
少しの情報で事象の本質を見抜いて動揺しそうな一行を見事治めてみせた若き魔法使いにバーンも舌を巻いて最大の讃辞を送る。
動揺しない天晴な敵を。
ポップとの言葉とティファの動きで一行は動揺を素早く収められた。

ガシャン
「さて、ミストはかつてのお弟子さんのヒュンケル君とかな？僕は・・そこの先代様の頸が欲しいんだけどはてさて・・」
おどける様な言動をしながらも目は全く笑っておらず、ひたすらアバンに目を向けるキルの言葉に、ミストも答える。
「私は誰が相手でも倒すのみ・・・・小娘が来ぬなら好都合だ。」
自分と相性が悪い聖炎を使うティファが後方に留まると伊野は好

都合だと。

「俺も後方から色々とするから、ヒュンケルとマァムははミストバーンと、ラーハルトと先生はあの疫病神野郎に・・・ダイ、ハドラーとのタッグで大魔王はきついか？」

ポップも残る戦力を割り振る。

暗黒闘気の集合体のミスト相手に、共に光の闘気を自在に使いこなせるようになった二人を置いてみる。

剣ならば遠距離から近接近戦とオールマイティーに動き、マァムがその動きに合わせればいい。

二人なら即興コンビが出来るだろう。

キルの方は実力もさることながら罠と空間を駆使したトリッキーな攻撃があるので厄介な事この上ないが、百戦錬磨であり頭脳派の二人なれば対処できるはずだ。

先生なら魔法支援もでき、二つの配置には共に回復役もいるので長期戦になっても少しずつ回復できるはずだ・・・問題はダイとハドラーの方だ。

如何に二人の力が凄くとも、それを上回っているのが大魔王バーンだ。

回復も俺が都度ちょこちょこ行くのを見逃してくれるとはとても思えないが、ティファの側を開ける訳にも・・・

「ポップ兄、私の周り常時空間封鎖しておくからここ大丈夫。行ってきて。」

「・・・そんな事できんのか？」

「ジ＝アザーズの結界は使い方次第で無敵だよ。あれは大魔王の移動能力・ラド＝エイワーズと、キルの空間くらいは阻止できる・・・・私限定の範囲でしか出来ないけど・・」

「それで充分!!うっし!!!決まりだ!!大魔王バーンに初戦挑むのは勇者と魔王と魔法使いだ!!!」

算段付け終わったポップは堂々と宣言に、バーンは面食らいそして大笑いをする。

「威勢のいい小僧ぞ!!そうかお前達が!!よかろう・・・其の身灰になっても悔いはなかろう!!!」
ゴォウ!!!
ポップの配置に勇者達は否やはないらしく、それぞれが先程ポップが言った相手に挑むべく動き出す。
かつての師は、弟子の飛躍した成長を見せつけられたと満足げに笑みさえ浮かべているではないか。
美しくも全てを燃やさんとする兇悪な鳥・カイザーフェニックスを左腕に発言し、バーンも高らかに宣言する。
死を告げる鳥が解き放たれ、戦いの火蓋が切って落とされた。

戦いの出だし

最終決戦の両軍の位置が決まった。
勇者側はティファは入り口付近の壁際に座って玉になった者達を守りながらの後方支援。
ポップも戦況ごとに動けるようにと戦場とティファの間位の後方で立っている。
ティファから見て左側にミストと当たるヒュンケルとマァム、右がキルを相手にするアバンとラーハルト。
そして中央は勇者ダイと、魔王ハドラーが大魔王に挑まんと力を溜めんとした時、バーンのカイザーフェニックスにより三方に見事に分断され、一気に三つの戦場が玉座の間に出現した。
「一応遺言聞いておいてあげますよ先代様。力尽きればその瞬間にバーン様の力が自動的に働いて玉になるけど、先代様の頸は直ぐにはね落とから、ね！」
「貴様は！小娘とチウが何と言おうがバラバラに叩き壊す!!」
「おやおや～。」
アバンを討ちに飛び出したキルに、ラーハルトの方が向かってきた。
あの二人はどう説得しようともキルバーンを憎むべき敵だと認識しようとしない。あれだけの事をされたティファ自身が、敵だけど憎みも恨みも無いよと言っているのが、ラーハルトからすれば否！ティファとチウとそしてメルル以外の全員がキルを自分の手でたたき壊したいの願ってやまない。二度とティファの心を踏み荒らさせない為にもだ!!
「暑苦しい男は嫌われるよ？それよりもさらに熱いものを喰らって落ち着き給えよ!!」
迫るラーハルトの槍の猛攻いとも容易くキルはひらりひらりと紙一重で避けながら瞬時にラーハルトの懐に飛び込んで見せる。
不意に近づかれキルの顔が本当に目の前に迫りキルの赤黒い瞳と目が合ってしまった時、ラーハルトは言い知れぬ不安と背筋に寒気が

奔り飛び退る。
なにかは分からない！だが、あの場に留まっていれば自分の頸が落ちずともそれ程のダメージを負っていたのだと確信しながらアバンの横まで戻りながら再度槍を構え直す。
勘のいい子だとキルも大鎌を取り出しながらラーハルトの咄嗟の行動に感心する。
近づきながらラーハルトの周囲に魔界のマグマを足元から噴出させるダイヤのセブンと同じ類のわなを仕掛け、剣戟のトラップを背中に出現させて刺し貫いて足止めをして籠の鳥のように閉じ込めて焼き殺そうとしたのだが失敗した。
ラーハルトほどの腕ならば二度も懐に入れないだろう。惜しい事をしたが、トラップも戦術もまだまだ、其れこそトランプの数ほどあるのだから焦らずに行くべきか。
本命は彼ではないが、邪魔者であることには変わりはないか。

ラーハルトとアバンのタッグでも優美さを崩さないキルの強さにティファも舌を巻く。
キルの戦い方がうますぎる。
ラーハルトがキルに接近された時はひやりとしたけど、それでも後はうまく先生と連携してトラップの猛攻を凌ぎながらラーハルトが遠距離からの波状攻撃でキルの大鎌を忙しくさせて、隙を縫うようにアバン先生が斬りかかって少しずつキルの体に傷を作ってく。
だがそこまでしても大ダメージになっていない所が怖ろしく感じさせる。
キルはこの中である意味倒しづらいというか・・・・どう倒せば正解なのか分からない敵で困る。
ピロロいないし私達にもうオート・ドールと知られているから首を落としても生き物の振りをしないだろうから意味ははなく、体内の何処を刺しても切っても武器を駄目にしてしまうからおすすめは出来ない。
とは言え頭部破壊なぞした日には、キルの頭部の収められている動

力部も兼ねた黒の核晶が暴発する事は請負で・・・手足なくなったところに筒に入れるのが無難なのだろうかと頭痛くなる。
その点マァムさんとヒュンケルが戦っているミストの方が突破口がある。

「闘魔傀儡掌!!」
「何度も捕えられると思うな!・大地漸!!」
近接近戦に優れている武闘家と剣士を二人相手にしても、両の手を剣に変えて二人をあしらうようにいなしながら端々で傀儡掌と滅殺陣で捉えようと試みる。
捕えれば二人の体のどこかを斬りつければそれで玉になり、すぐさまキルに加勢しアバンの首くらいは落とさせてやる。
ラーハルトの方は放置してもいい、その後にダイとハドラーの相手をしている主の負担を減らすべくハドラーの相手をする心積もりでいる。
ダイとの決着は、バーン様も望まれている事。地上の抵抗の象徴足る勇者であり、我等魔界を苦しめる神々の生み出した竜の騎士の末裔の頸を自ら落とさんと。

本命であるバーンと戦うダイとハドラーも、この十日間で飛躍的にレベルアップをしている。特にダイの方はこの短期間のうちに、大魔王との大激突は無論の事、ティファが命を懸けてみせてくれたハドラーとの大激突を見た見取り稽古から、様々な事を学びそして雌伏の中でひたすらに己の血肉にせんと、ハドラーと幾度も本気に近い激突の様な稽古の中にて新たな戦い方を身に付けた積りであったが。
「ダイ!・左右に分かれてどちらかでもバーンの懐に入るぞ!!」
「分かった!!」
前回と同じく光魔の杖の鞭をどうにかしないとバーンに近づく事すらできない。
無知もしなやかに動き四方八方に動こうとも、必ず一方向に動く。
左右に分かれ、どちらかが懐に飛び込めば打開策はある筈だと、し

なる鞭を掻い潜る。
もう少し・・・・ここ!!!
地面を抉る様に自分に迫る闘気の極太の鞭が迫る中、ダイは焦らずどこかに鞭の隙間がないかを冷静に探し出し、見つければ皮膚の表面に闘気を薄く覆わせ躊躇いも無くバーンの下へと最短で突き抜けるルートにを一気に進む。
少しでも防御すれば大ダメージにはならず、多少の痛みも気にならず動く自信があり、夢中でバーンの下に駆けたダイの姿は、後僅かで大魔王に剣先が届くほどに迫ったが、大魔王は口角を吊り上げ光魔の杖を地面に向けて一気に杖の出力を最大値で解き放つ。
光魔の杖は箒のように戦端が膨らみ、地面に触れた途端魔力の壁をサークル上に展開し、バーンを包み込みながら討ちかかってきたダイの剣をダイ諸共瞬時に弾き飛ばし、空中でバランスを崩して後方に吹き飛ばされてしまったダイを、イオナズン嵐が追撃してくる。
「ダイ!!!」
ダイと同時位にバーンに斬りかかろうとしたハドラーであったが、僅かにダイよりも遅かったのが功を奏してダイがバーンの膨大な魔力の壁に吹き飛ばされるのを見ると同時に、追撃が必ずされるのを読んですぐさますらすら―を吹かせてダイを後方から柔らかく受け止め直ぐに地面に降り立ちダイを懐に抱えたまま右腕の覇者の剣で魔法攻撃を切り裂きながらいったん距離を置く。
「ハドラー・・・助かった・・」
「まだ戦いの序盤だ。無理に懐に飛び込もうとしない方がよさそうだ。」
「そうだね、前回あんな技見なかったのに・・・まだ隠している手があるみたいだ。」
ハドラーから降ろされたダイは、ひやりとした事もあり息が乱れたが数回の呼吸で収めてみせる。
ハドラーの言う通り、此処はまだ戦いの序盤・・・確実にバーンを討つ為にも焦りは禁物だ。

黒き影の思い

玉座の間での戦いが始まり随分経つが、三つの戦場では変わらない激突がポップとティファと玉になってしまった者達の目の前で繰り広げられている。

戦いの余波が時折届くだけでも、ポップには受圧で押し殺されそうな空恐ろしさを感じ、その度に冷や汗を流すが決して戦いから目を背けずに両の足に力を込めて耐えている。

後ろには守るべき妹と玉にされた仲間達がいる・・・クロコダインは戦いに参加する事すら敵わなかった事が無念だろう。

戦士として、この一行の年長者として、今まで様々な死闘の旅に互いの背を預けていただけにその無念と嘆きは自分にも分かる気がする。

おそらく自分が玉になったれば、どのような、其れこそ命を魔力に変換してでもと思い詰めようし、実際に出来るのならばやる。

それを見越してか、ティファは玉になった者達に時折声を掛けている。

心の底からの応援は必ず皆の力になると。自暴自棄にならずにダイ兄達を共に応援して欲しいと。

きっと今頃、姫さんもチウもおっさんも声をからす程に声援を飛ばしてるだろう。

俺はその声に力を貰ってここで踏ん張って戦局を見逃さずに素早くサポートする。

少しでも全員が楽できるように。

そのポップの目に、そしてティファから見ても徐々に戦局の流れが変わっている戦場が一つできた。

ヒュンケルとマァムがタッグを組んでミストを相手取っている戦場である。

ティファ程の聖炎程ではないが、ヒュンケルもマァムの光の闘気を

完全に使いこなし、マァムなぞは打ち込む拳と足技の全てに光の闘気を練り込み少しずつであるが自分の体にあたる暗黒闘気が消されて行く。
この段階ではまだ支障はないが、長引けば不利であるのは目に見えている。
だが有効な打開策を見つけるには二人の猛攻が思考の邪魔をしてうまくまとまらない。
ヒュンケルの半分以上を己が育てたとはいえ、これ程の才をこの短期間で開花させたかと驚愕しながら。
数か月前も不死騎団の団長を実力で勝ち取る程であったが、心に余裕など全くなく、力の本質に必要な心・技・体の内の心などなかった者が・・・仲間とタッグを組んで己の引き出せる数倍以上の力で向かってくるとは・・・・感慨深くもあるが!!こちらにも譲れぬものがある!!!
主を!魔界を絶対に勝たせる事こそが我が望みの全てだ!!!
ミストは闇の衣に両手を掛け、封印の石は割らないまでも限界まで広げ、己の暗黒闘気を開放し、自分とヒュンケル達を取り込む様に広げ、一種の暗黒闘気の結界を作り出し、技の伝導性を高め、闘気の密度が高まった時に陣をめぐらせた。
「闘魔滅砕陣!!!」
しまった!!!
暗黒闘気が自分達の周りを囲んだ時、ヒュンケルもマァムも警戒を怠る事は決してせず、何処から技が来ても対処できるように背中合わせになっていたのがこの場合は災いした。ヒュンケルがミストが技の名を口に出した時、マァムを連れて暗黒闘気の結界内から出ようとしたが時すでに遅く、マァムの方を向く前に闘気で伝導性を上げた陣は素早く纏まっている二人を同時に、蜘蛛の巣にからめるが如く捕えその身に激痛を与えた。
その痛みは体そのものをバラバラにするが如く鋭く、ヒュンケルもマァムも声にならない悲鳴を上げ苦痛にのたうつのをミストは冷静に見据えながら、両の手を剣に変える。

せめて我が手で・・・裏切られたと分かった時には怒りが湧いた・・憎しみよりも先にだ。そして次に来たのは失望。この者もまたバーン様の偉業をなさんとする志を理解しきれなかったのだという思いと一抹の寂しさを・・・決して本人にも周りも明かす事の無い複雑な感情をヒュンケルに抱いた。

魔界の現状とバーンの理想を語るには、ヒュンケルは幼すぎ、またアバンへの復讐心が強すぎそれのみを糧にして生きようとする幼子に語れるものでもなかった。

それでも良かった。バーン様の下で力を振るうのであれば、他の軍団長と同じく自分本位であってもよかったものを。

バーン様もそれでよいと笑っておられていたのを・・・己達もまた天界に復讐戦と誓った身であり、ヒュンケルの憎悪が心地よかった。それを目にするたびに自分達の復讐心を新たに燃やすことが出来ていたのだから。

其れが敵の、其れもかつて裏切ったアバンの弟子にまた舞い戻り魔王軍に反旗を翻し、遂には世の者どもからあれがアバンの長兄よと称賛され、その事でどれほど主が失望した事か!そして暗黒闘気の何もかもを付立てた自分の心もまた・・だが!それもこれまで!!!

―外―からティファとポップの声が先程から聞こえてくる。中で何が起こっているのか見えず、それ故に下手に援護の攻撃も出来ず、聖炎で散らそうとしても一向に減らない事に焦り、ポップも真空呪文を試すが全く減らない闘気に怒りを滲ませている声がする。

今暗黒闘気の結界で外部からは内部の様子は見えず、濃度も通常の倍、其れこそティファがゴブレットで飲んだ以上の密度で覆っているこの場は、ティファが聖炎で燃やそうとしても容易には燃えまい!出来たとしてもその頃には二人はくし刺しになっている!!

そんな中、ヒュンケルとマァムは静かに目を閉ざしていた。

捕まり身動きが叶わない事に自暴自棄になったのではない。二人は自分の体内の気を指示かに練り上げ、そして間に合った!!

無言で両の手の剣で二人の首を同時に刎ねようとしたミストが迫った時、二人の目はかっと見開き体内で練り上げた光の闘気を存分に放出し、その威力は凄まじく、自分達を捕らえていた陣と暗黒闘気の結界のみならず、迫りくるミストを空中へと舞い上げさせた。
「「ミスト!!」」
激突を繰り広げている最中であってもバーンとキルはミストの身を案じ駆け付けようとしたが、激突相手がそれを赦す筈も無く進路を塞がれ、苛立ちながらもミストの名を呼び続ける。
ミストの体が空中を舞うに任せ全く動かない事を案じて。
ただの闘気ではない。古来より邪を滅する光の闘気の渦が、攻撃に集中するあまり防御を怠っていたミストに容赦なく叩きつけられたことで本体其の物にまでダメージが行ってしまい、生物であれば脳震盪のような状態に陥いるが、二人の声で意識を取り戻し体勢を立て直そうとしたが其の隙を陣を脱したばかりの二人は見逃さなかった。
ミストバーン・・・・せめて俺の手で・・・
「マァム!!闘気を練る時間が欲しい!!!」
「分かったわ!!存分に練って頂戴!!!」
ヒュンケルの求めにマァムは力強く答え、手甲を鎧化し、空中でまたよたついているミストに追いすがりながら己の内部の闘気を更に高める。
体制の整っていない相手に攻撃をするのは卑怯かもしれない、少なくとも今までそんな事をしたものは自分の周りには一人もいなかった。
それでも!自分達が敗けるわけにはいかない!卑怯と言われようとも!!
「武神流猛虎破砕拳!!!」
閃華裂光拳ではマホイミの威力が暗黒闘気で覆われているミストが使用している体に届くか分からず、ならば自身の技で最大の物理攻撃で光の闘気をねじ込みダメージを与える方が良いと、老師に授けられた奥義を解き放つ。
ミストも脳震盪状態から回復したばかりだが、伊達に修羅場や死地

を幾度も経験してはいない。
両腕を交差させ暗黒闘気で防御しつつ力を抜いて落下するに身を任せ墜落しながら、技の威力を半減させた。
マァムも技が決まらなかったのを手応えで感じながらも笑みを浮かべる。
その様子に、ミストは途轍もなく嫌な予感がし、自分よりも一足先に地面に着いたマァムではなく、かつての弟子の方を見れば、左腕を前方に突き出したあの構えは!!
「ミストバーン覚悟!!!」
ヒュンケルも、かつての師に複雑な思いを抱えている。自分を今日まで大きくしてくれたのは間違いなくあの男であり、戦いの本質を教えてくれたのはアバンでは無くミストであった。
それは非情で容赦のない教えであったが、死闘を生き延びる力を与えてくれたのは間違いなくミストバーンであったのだ。
だからこそ!!貴方が育て鍛えてくれた末に生み出すことが出来たこの技で!!師よ!!!貴方を打ち倒す!!!
ブラッディ―スクライド!!!!
限界まで高めた光の闘気は、ブラッディ―スクライドの渦を通常の数倍の大きさの黄金の渦へと変貌を遂げさせ、ミストを飲み込みながら玉座の間に暴風を巻き起こし、戦っていた者達は一時中断せざるおえなくなり、暴風が収まるまで耐えなければならなかった。
それ程の凄まじい技の威力が消えた時、カツ―ンと、一つの玉が玉座の間に音を立てて床に転がった。
アバンの使徒の長兄として撃てるようになったアバンストラッシュではなく、かつて自分を育て技を生み出させてくれた師への自分なりの恩返しとして、ブラッディ―スクライドを放ったヒュンケルと、武神流の奥義である猛虎破砕拳を撃ったマァムも全ての闘気を放出してしまい、ミストを追うかの如く玉となり転がり、床の上には三つの玉が寄り添うように並んだのは偶然であろうか。

最終決戦終焉の一歩手前

「ミスト!!」
　親友が玉になった瞬間、アバンとラーハルトの間をすり抜けミストを自分で保護しようと玉に手を伸ばし触れる瞬間に、ミストとヒュンケルとマァムの玉も消え失せた。
　もしやとティファに目を向ければ、申し訳なさそうなティファと目が合った！
「お嬢ちゃん・・・」
「キル・・・」
「流石に！其れは返してもらうよ!!!」
　空間を使えずとも、ティファの側に寄る為にポップ・ラーハルト・アバンを足止めするくらいのことは出来るキルは、見えざるトラップを発動しながらティファに一気に迫る。
　当然ティファの前で陣取り守っているポップは無論の事、アバンとラーハルトもすぐさま駆け付けようとするのをティファが自ら迎撃に出ながら三人に動くなと大音声で呼ばわった。
　ティファは今何が起きているのかを、雪白を取り出しキルの大鎌と打ち合いながら、罠が張り巡らされたと事を説明する。
「今キルの頭巾から十三本の剣が出るのを見ました!!!見えなくとも実際にはあるものです！ポップ兄と先生で自分達を起点とした一帯にヒャダルコ級の氷系呪文を！きっと凍った剣が見える筈です!!」
「お嬢ちゃん・・・君って奴は!!!」
　どうしてこの愛している少女は自分達の全ての手を読みつくして邪魔をするのだ!!
　自分と打ち合いながらも的確な指示を出す少女に憎しみすら感じる！
　自分は決して手を抜いておらず、本気で討ちあっているのにも関わらずだ！
　案の定ポップとアバンが放ったヒャダルコで罠の位置は全て見破られ、ポップ達の首元に配置した剣が露呈している。

少しでもどこかに動けば首が飛ぶ罠の全てが。
後はキルをティファが相手している間に壊すだけだと、それぞれが互いの罠を壊しあおうとしたその時、炎の鳥がアバンを飲み込み、その瞬間にアバンは玉に変換された。
見ればダイとハドラーを寄せつげずに戦っているバーンが左腕に炎の残滓が残っており、2人を相手取る中でうでを一閃しただけでカイザーフェニックスを無造作に放ったのだ。
ダイとハドラーのタッグに負けないまでも手強さを感じているバーンは、ここでアバンの知恵迄加われば戦局は更に悪化するのを厭い、瞬時にキルの罠に合わせて即興コンビでアバンを仕留めてみせた。
出来ればラーハルトの方も始末を付けたかったが、アバンが玉になってもポップは心を乱さないように耐え抜き、ブラックロッドに魔力を込めて、自分の頸に傷が出来るのにも構いつけずに自分の首周りの剣の一つつと、ついでラーハルトの首周りの剣目掛けてロッドを勢いよく投擲して、キルのファントムブレードを破壊し、二撃目のカイザーフェニックスの魔の手から辛くも脱出した。
ラールトは一息つくこともせずティファとキルとの間に強引に割り込み、キルとの打ち合いにと入った。
「邪魔だよ槍使い君!!」
「貴様は・・・ティファ様が貴様を赦そうとも!ティファ様にした数々の仕打ちを俺が、俺達が貴様を赦すと思うなよ!!このまま俺が叩き壊してやる!」
キルとラーハルトが一騎打ちとなり戦いが佳境に入った頃、ダイとハドラーの方は二人の方が息が上がってきている。まだ大技のカラミティ―ウォールを撃たれていないのにもかかわらず、近づく事すらできずにいる。
しかし息こそ上がっていないが、バーンの方にもやや疲労の色が浮かんでいるようにダイには見えた。
今まで敵の様子をそこまで深く見たことは無いが、不思議とそう感じるのだ。

バーンも疲れが来ていると―何か―が教えてくれている気がする。
そしてここが攻め時だと！
「ポップ！こっちに!!」
自分の中の何かに導かれるように、ダイはポップを側に呼ぶ。
「これから俺が大技仕掛ける。時間・・・稼げる？」
バーンから視線を外さないまま、ダイはポップとハドラーに時間を稼いでほしいと頼む。
まだ本気で出した事の無い新必殺技を、ぶっつけ本番で出す。自分の体力の落ち方も考慮して、此処で討たねばあの大技は成功しないと踏んで。
「分かった！そう言う訳だハドラー!!俺と地獄の底まで付き合ってくれっか？」
「ふん！抜かせ!!そのまま俺達で大魔王を倒すくらいの気概を持ったらどうだポップよ!!」
ダイの新必殺技の概要までは二人も知っている。その為にも最低でも十秒の時間を稼がなくてはならない事を。そして一度も本番で試した事も相のを承知の上で、ダイの頼み事を躊躇いも無く承知し時間稼ぎを力強くかって出る。
今のダイなれば、新必殺技を成功させ大魔王に勝てると心の底から信じて。
二人の頼もしい返事に、ダイも同じように力強く頷きながらダイの剣を天高く掲げた。
「ライディン!!!」
凄まじい轟音が鳴り響き、玉座の間の天井を穿ちながら降ってきた雷はダイの剣に過たず降り注ぎ、雷を帯びた自分の剣を、ダイは背に掛けている鞘の中に収めその時が来るのをひたすら待つ。
目の前の親友と超一流魔王の戦士を信じて。

竜の道

「ハドラー、ちょいとお耳拝借。」
「あ？」
「これから俺と全力特攻してくんないか？」
「・・・お前と心中しろと？」
「嫌か？」
「良かろう、地獄の道行きと洒落こむか。」
　こと戦いの難局においては、アバンよりも知恵が回るポップがバーンの目の前であっても堂々とハドラーと全力特攻宣言を、ハドラーに持ちかけた。
　理由は一つ、ここに来てもバーンはまだ必殺技の類を出していない事。
　確かに自分達は攻めあぐねてはいるものの、そろそろ魔力の半分くらいは放出している筈だ。
　そこに自分達が全力特攻すれば、必殺技の類を出してくるはずだ。ダイ折角のが大技を出しても、バーンの必殺技を知らなければ自分達もサポートが出来ない。
　一撃必殺なのか連撃なのかがさっぱりと読めない。もしかしたら作り手のロン・ベルクすらも思いつかないような使い方をバーンがしている可能性もある。
　自分とハドラーがまだ健在なうちに、バーンの技を暴いておきたい。
　故にバーンにも聞こえる様に打ち合わせをする。これからこちらがタッグで大技を使う事を宣言し、必殺技の類でなければ迎え撃てない事を匂わせて。
　其れは言われたバーンにも分かっているが、最早ミストは脱落してキルもまたラーハルトとの打ち合いを抜けさせないでいる。そこに来てポップの考えた通り、自分の魔力もそろそろ半分方使ってしまっている。
　黒の核晶を搭載した柱を落とす為の魔力も取っておきたい。相手

の挑発に乗る事になるようで何とも癪に障るが、大技の連撃で防御するより手がない。
・・・・消す順番を間違えたか?もしやアバンよりも先にポップを玉にするべきであったか。
だが悔やんだところでもう遅い。なれば一気にこの技で後方のダイ諸共に封ぜればいい!!
ポップの要請を受けた時点で、ハドラーは静かに気を練り超魔爆炎覇の構えを取り、ポップも右腕にロッドを、左手に得意の火炎呪文・メラゾーマを蓄え、何が来ても対処できるように構えバーンから視線を切る事無くダイにこの攻撃時に手を出す事を禁じる。
ダイとしては、今の遣り取りで魔法はチャージできたので三人で打って出るべきだと思っていただけに、ポップの言葉に戸惑いの表情を浮かばせてしまい、魔法使いからの特大の雷が落ちた。
「馬鹿野郎!!!相手の手の内読める状況になったってのに無闇に突っ込みたがるな!お前は見ていろ、バーンの必殺技がどれ程のものか。」
言葉にしながらも、内心ではポップとてバーンの必殺技を怖れている。もとより一つ一つの技や魔法自体が必殺の域であろうに、本当の必殺技がどの様なものか、ダイに見せるためとはいえ、果たして自分達の肉体が持つか・・・・・覚悟決めろよ俺!!
「行くぞハドラー!!!」
「いつでも!!」
己の心を叱咤し、覚悟を決めたポップはハドラーの声を掛け、ハドラーが動こうとしたその時、バーンは光魔の杖を後方に大振りに構えていた。
あれは、一度だけ見た!
ポップとハドラーの驚愕に満ちた顔を見て、ニヤリとしながらバーンは杖を横一閃に薙ぎ払い、災厄の壁をダイ達に解き放つ。
玉座の間はバーンの一の横でキルとラーハルトが打ち合っており、ティファのいる位置も災厄の壁の進路上からは外れており、まさにダイ達の為だけに討たれた厄災の壁は、前回よりも進む速度が速い。あの時はオリハルコンの者すら易々と破壊する威力重視であったが、今

度の端速度を優先させている。仮に・・・
「畜生が!!メドローア!!!」
壁の速度に、回避は無理だと弾き出したポップは瞬時にロッドを腰のホルダーに仕舞い、右手にヒャダインを作り出し瞬時にメドローアを作り出しながら、メドローアが横斜めに壁にあたる位置に走り、此処だというところで壁目掛けて解き放つ。
もしも真正面に撃って、バーンのマホカンタにあたって返されたら洒落にもならない。
上手い具合に壁が消滅したその先に待っていたのは
「ハドラー!!ポップ!!避けて!!!」
バーンの魔力で生み出された大量の球状の魔力の塊と、ハドラーとポップ、それぞれに送られた二羽のカイザーフェニックスが二人に迫り、ダイが動く寸前にハドラーも腹を括った。
バーンにではなく、技の相殺の為に！
「超魔爆炎覇!!」

己の右腕に宿る覇者の剣を蓄えていた闘気諸共に横一閃に解き放ち、立て続けにカイザーフェニックスを二羽ともに切り裂き、技を放ち硬直しているバーンに肉薄をした。
もしかしたらこのまま！
「大魔王!!覚悟!!!」
細いバーンの頸に狙いを定め、覇者の剣を振りかぶったが、横から途轍もない力でポップ共々壁に吹き飛ばされ背中を強打し、打ち付けられた壁沿いに力なく座り込んでしまった。
そのまま玉になるには力はまだあり、とどめの積りか球状の魔力の塊が二人に迫った時、音と共に二人の姿が消えティファの隣に出現をした。
「ポップ兄、ハドラー、これ飲んで此処で玉を守ってください。」
寸でのところを、ラック＝バイ＝ラックで二人を救出したティファは、体力と魔法力回復の万能薬を二人に渡し、代わりに自分がダイの横に並び立つ。

二人も飲み薬を多用しており、これ以上は危険なので玉にならない程度の回復量だけ与えて休息を促す。
この後にももしかしたら力を振るってもらう事があるかもしれないと見越して。
―にぃ！聞こえるにぃ？―
―ティファ！・・・ティファ・・・休んでて・・・―
―そんな場合じゃないでしょうにぃ。必殺技に新しいのある？サポートするから教えて―
―ティファ・・・・分かった―
紋章はなくなってしまったが、念話が使えるのを確認したティファは、ダイの新技を聞き出し、どう攻める積りであったのかも仔細を聞きながら雪白を取り出し鞘からすらりと抜き放ち、左肩に雪白を担いだあの独特の構えでバーンと対峙する。
「・・・・其方も出て来たか・・」
「其の防御技突破させていただきます。」
天地魔闘の構えとは違うものの間違いなく必殺の防御足りえる技に、ティファ自らが出陣する事にした。
あの球状の魔力の塊とカイザーフェニックスを同時に相手にしてしまったら、ハドラーのように、最後の一手が無くなってしまう。
兄との作戦も即興で決まった！
再び壁が迫りくる中、先に動いたのはダイであった。
ダイの剣は鞘自体もオリハルコン製で、両刃の作りとなって、剣の中に剣が仕舞われているという特殊な構造になっている。
ダイはそれを連撃技の一つとし
「アバンストラッシュ!!!」
壁の真下の床にアバンストラッシュアローを横一杯に打ち込み床を崩し、壁其の物を崩壊させた。
カラミティ―ウォールの弱点はいくつかあり、床そのものを崩壊させられれば闘気が霧散する事。
その弱点を補うのが、開かれた壁の向こう側からのバーンの一斉攻撃。

その技の前に、ティファは雪白を正眼に構え静かに立って待ち構えていた。
両の足に闘気を流し込み溜め、一気に前に駆けだした。
迫りくる魔力の塊とカイザーフェニックス・・・まだだ・・・もっと引き付けろ!!
技を喰らうか喰らわないかのギリギリをティファは眼（まなこ）を見開き見定める。
ギリギリまで・・・ここだ!!!
「飛天御剣流奥義!!」
本当は天翔竜閃が奥義だが！自分のこの技の威力であれば奥義足りえている筈だとティファは自負している。
それ故にこれが自分にとっての奥義!!
「九頭竜閃!!!!」
ティファの雪白から、九つの斬撃が神速で繰り出される。
自分の技の中で、唯一の突進技。本来であれば相手の体に叩き込む技を、ティファはあえてここで使って見せた。
自分の突き技は、一つ一つに兄程で無くともアバン先生位のアバンストラッシュ並みの闘気量を練り込んで放っている。九つの竜は、自分に迫る魔力の球体とカイザーフェニックスをいとも簡単に喰らい尽くし、バーンへの道が真っ直ぐに開いた。
突進技であるが故に、ティファもまた自分に向かってくるかとバーンは警戒したが、ティファの動きの軌道を見て、このままティファが進めば自分の斜め上方向に到達するのが見てとれた！
これはもしや!!!!
「いっけぇダイ兄!!!!」
バーンの予想ははからずとも当たり、直ぐにその正しさが証明された。ティファは自らの手で自分に挑むために技を放ったのではない事が。
妹の言葉に押されるように、ダイは力強く前に出る。

ティファは九頭の竜を使役し敵を噛み砕き道を作ったのだ。
「ライディン!!!」
走りながら得意の雷を、鞘に入ったままのダイの剣に落としながら
進む光り輝く十頭目の竜を、バーンの下に通す為に

ずっと考えていた、自分なりの新技を。
アバンストラッシュとライデインを組み合わせたライデインストラッシュ以上の技が欲しくて。
ロン・ベルクさんが新たに作ってくれたこの鞘は！「鎧化!!」
バーンに向かって走りながら、ダイは鞘のバックルを外して鎧化を叫び続けざまにライデインを発動させ、ライデインを帯びた鞘と付属の小刀を外し、二振りの剣とした。
先程ポップとハドラーが決死の覚悟で見せてくれたバーンの連撃は、自分が考えて来た技で破れると確信し、未だに鞘から抜かれておらずとも、二振りの剣となった両剣を逆手に持ちなおす。
その様だけでバーンの全身に悪寒めいたものが走り抜け、光魔の杖の鞭を最大限の威力でダイに向けて振るいだす。
太さだけではなく、触れればすぐさま斬られそうな気配をした鞭に、傍で見ていたポップ達すらをも青褪めさせた。
「ダイ!!避けろ!!!」
幾筋にも振るわれる光の鞭は、飛び退ったダイの背後からしなる様に忍び寄り、トベルーラを発動させる間も与えずにダイの背中を打ち据えに掛った。
その時、またもやダイの中で―何か―が教えてくれた。
俺がこれを喰らったらきっとバラバラになる・・・
技の威力と、そして・・ダン!!ダッダン!!!
その危険な未来を回避させる方法を。
「ダイ!!・・・あいつ・・・・いつの間にあんな避け方を・・」
「信じられん・・・あやつのあの動きはまるで・・」
ダイのその動きに、何時でもダイの戦い方を間近で見ていたポップは驚き、今のダイの動きをするものをよく知るハドラーも驚きを隠せず、攻撃をしているバーンすらもが目を見開きダイの動きに唖然とした。
ダイは闘気の鞭を避けず、己の足に闘気を纏わせ鞭を蹴り上げその

反動で宙に跳び上がり、のみならずそのまま闘気を足に纏わせ続けて鞭を伝い、道を走るが如くバーンに一直線で迫っているのだ。
「いっけえダイ兄!!!」
その動きは、今まさに兄に声援を送っているティファの動きとよく似ている。
バーンは竜の騎士を、ひいてはバランを怖れていた。それ故に条件を提示して己の配下にしたほどに。
バランの実力や竜魔人化した時の爆発的な強さもさることながら、数千年間の戦いを、竜の紋章が記録し、次世代に受け継ぐ戦闘に特化した強さを怖れたのだ。
戦いの場において、どの場面でどの様に動くのか常に最適解が出来る竜の騎士を。
数千年かけ、数多の戦場を巡り幾多の死闘を経験し、其れを受け継がせる竜の騎士の紋章のシステムそのものを怖れたと言っても過言ではなかった。
だが、其れはマザードラゴンから生まれた正統なる竜の騎士だけが受け継ぐはずだ。
現にダイは、そしてティファも認めないであろうがキルに導かれテランに行ってようやく自分達の出生の秘密と正体を知った。つまり紋章は発動せれども、竜の騎士の強みたる歴代の戦士たちの記憶は受け継いでおらず、未知なる戦いにあえば対処する術がまだなかろうとどこかで安堵していたのが・・・・ティファめ!!!!
ここに来てバーンはティファのお宝洞窟の話をもっと真剣に聞くべきであったと後悔した。
そして兄の動きを見てティファも、兄の動き方に思い至る。
ダイ兄、私の積んできた経験がちゃんとにぃにも引き継がれたんだ。
幼少の時より死ぬほどの修行した甲斐があったのだとジンとする。
時にはマグマの大地のフロアーに、重力が重くなり、水中で戦って、冷えてかじかむ手足を必死に動かして体得してきた数々の動きが、今やダイ兄の血となり肉となっているのがとても嬉しい。

バーンとティファの考えている通り、ダイの左手の甲に浮かんでいる紋章がダイに教えている。
闘気の使い方を、応用を、どうすれば敵に向かって最短の道を行けるのかを導く。
ティファの経験した戦いの全てをダイが受け取り引き継いだ瞬間であった。
ダイは紋章を発動しているがまだ全開にはしていない。今から打つ技はまだ最終技ではない！

「アバンストラッシュアロー!!!」
鞭に乗って走ったまま、ダイは左手の剣から放出系のアバンストラッシュを放つ。
アバンストラッシュには放出して敵を倒すアロータイプと、直接切りつけるブレイクタイプがある。
どちらも決まれば敵を一撃のもとに倒せるが、そう遠くない位置からとはいえバーンにアローが通じるとは思えず、技の選択ミスかと二人を除いて思ってしまった。
バーンも威力はすさまじくとも、魔力のシールドでやり過ごせると見極め、鞭を消し光魔の杖を床に向け魔力のシールドを展開したが、ダイは意にも介さずアローと共に自分に迫って来るではないか!!!
その様子を、斬り合っていたラーハルトとキルすらも驚いて見ていた。
あれではダイがシールドに激突してバラバラになってしまう！
「お引きくださいディーノ様!!!」
無謀な特攻を止めるべく走ろうとするラーハルトをキルが阻む中、ティファだけが兄を信じて見守る。
ダイにいならきっと!!
ダイの加速は止まらず、そのまま右手の紋章を輝かせアローと交差させるように斜め左上目掛けて二撃目のストラッシュを、アローがシールドにぶつかる寸前に重なるように放つ。
「喰らえ!!!ライディンストラッシュクロス!!!」

ライデインストラッシュは単体であってもその威力は凄まじく、オリハルコンではないヒュンケルの剣であってもあの真魔剛竜剣を叩き折ったダイの一番の技が、クロスし、交差した中心点の破壊力は測り切れず、光魔の杖を砕くには足りなかったがかつて破られた事の無いバーンの魔力シールドが粉々に砕けた。
「バーン様!!!!」
魔界の神と言えど幾度か苦闘した時に発動され、どのような猛者、其れこそヴェルザー本人でなくとも近しい眷属のオーロラブレスとて破れなかったバーンの防壁が破られた事がキルと、玉の中で見ていたミストにとって精神的ダメージは計り知れずに叫び上げたが、ダイの連撃は終わった訳ではない。
ダイにとってはここからが本番であった。
防壁を破られたとてバーン自身は落ち着いていており、瞬間的に左手にカイザーフェニックスを纏わせダイにぶつけようとしたが、目の前にいるはずのダイがいなかった！
「アアアアア!!!!」
声がする・・・自分の上空からダイの声が・・・
見上げれば、左手で剣を納めている鞘を持ち、今まさにダイの剣が抜かれている瞬間であった。
ダイは防壁を破るった手応えを感じると同時に、瞬発的にトベルーラで上空に飛び上がり、トベルーラの魔力を切って落下しながらダイの剣を逆手に持ち替え紋章を全開にした。
まさか・・・まさか!!!
バーンは本能的にダイの攻撃を怖れ、カイザーフェニックスを連発するも、ダイの竜闘気に全てが弾かれダメージにならず足止めにすらならなかった。
ここに来てダイの、竜の騎士の特性がバーンの魔力主体の攻撃と噛み合い、バーンの戦術を食い破る。
「いっけえダイ兄!!」
「ダイ!!そのままいっちまえ!!!!」

「全ての力を使い果たしても構わん!!やれダイ!!!!」
「ディーノ様!!思いの全てを力に変えて撃ちなされよ!!!!」
外からの応援と
「ダイ君!!行っちゃえ!!!」
「ダイ君なら出来る!!!」
「ダイよ！我等の全てをお前に託すぞ!!!」
「ダイ!!放ちなさい!!!」
「ダイ!!俺達の思いも!!」
「私達の思いも!!!
「―僕達の思いを全て―」
「「「「ダイの剣に託して放て!!!!」」」」
何故か、玉になってしまった仲間達の思いも聞こえる気がして、その声が俺に力を与えてくれるんだ!!!!
バーンに迫るダイをキルが妨害したくとも、ラーハルトと、そして初級魔法ではあるがポップも死神の足を止めている。
「「バーン様!!!」」
支援が間に合わないと、キルとミストが叫び上げた瞬間、バーンは使える限りの魔力を光魔の杖に注ぎ込みダイを返り討ちにしようとしたが、間に合わなかった。

「ギガディンストラッシュ!!!!」
バーンの態勢が整わぬうちに、ダイの新技であり、数千年の竜の騎士の歴史上もっとも威力の高い技が、魔界の神・大魔王バーンの光魔の杖を粉々に打ち砕く。

其れは、かつてダイが己の剣を折られた時の喪失感を、バーンも味わう瞬間ともなった。
制作者に最低の駄作とまで言われてしまった光魔の杖は、これまで幾多の戦場でも自分を助けてくれた。
力のない自分をどれ程助けてくれたか分からない愛用の自分の杖が・・・

其れは数瞬、瞬きの間の嘆きであった。如何に喪失感を感じたとはいえ、バーンは戦場において思考を切らす事の恐ろしさを骨の髄まで知っており、すぐさま思考を切り替えようとしたが、ダイにとっては十分な時間であり

グシュウ!

「バーン様!!!」

キルの悲痛なる叫びが上がった時、バーンの体にダイの剣が深々と突き刺さった。

「あ・・・・ダイ・・・・・お主・・・」

「はぁ・・・・・はぁ・・・・」

大技を連撃で放ち、息が上がりながらもダイは剣をまっすぐに力強く握りしめ、両の足と両腕に力を込めて、バーンの左胸に剣を深々と差し込んだのだった。

「あ・・あ!!まだ!!まだだ!!!」

バーンが自分の名を呼びながら血を吐いても、倒れる気配が無い事にダイは悟った。

ハドラーと同じでバーンにも心臓が複数ある。とはいえ剣を抜いて再びさす力が自分にはもう残っていない。ならばやれる事をすればいい!!!

「ライデイン!!!」

ダイは残りの魔力をライデインを発動させるのに回し、バーン諸共にライデインを喰らい続ける道を選んだ。

その様は凄絶であった。ダイもバーンも雷に包まれながらも耐えあい、最早気力の身で立っている二人に掛ける言葉すら見つからず、玉座の間には雷の降り注ぐ音と幽かに二人の話し声がするのみ。

ライデインの威力に、バーンの体も思考も悲鳴を上げるが、己よりも年若きダイが悲鳴一つ上げずに一途にライデインを落としているのに、自分が悲鳴を上げる事は矜持が許さず、代わりにダイに問いか

けた。
「ダイ・・・このままではお主も死ぬ・・・・何故躊躇いも無く・・」
「お前を・・・・お前達を倒さないと地上が消される!!それに・・・こんな痛みなんてちっとも痛くない!!!」
バーンの問いに、ダイは猛然と吠え答えた。
愛する者達を守る為、そしてこれ以上の痛みを耐えて自分達を守ってくれた者達の為にダイは雷を受けてもなお怯まずに雷を降り注ぎ続ける。バーンが倒れるその時まで!
メガンテをした時のポップはもっと痛かった筈だ!アバン先生だってアイテムがあったとて、その苦痛を耐えて黄泉路から戻ってきてくれた!
ヘルズクローで貫かれ、メラゾーマを体の中に流し込まれた時のヒュンケルの激痛は想像すらできない!
クロコダインは幾度も俺達を守る為にその身を盾にして守ってくれた!
マァムもレオナもチウも痛くて怖くても引かずに戦ってここまで共に来てくれた。
父さんだって!左腕を失くしてまで俺達を守ってくれて、それでもまだ戦ってくれているじゃないか!!
あらゆる者達の戦いと苦痛にダイは思いを馳せ、そして更に思う。
ティファの受けてきた痛みはこんなもんじゃなかった筈だ!!!
妹はいつも自分達を守る為にボロボロになって来た。体を、心を、精神をぼろぼろにして・・・・何度痛みを耐えてきたのだろうか、あの小さな体で。何度泣きたいのを堪えていたのだろうかあの優しい心で。それでも自分達を守って常に笑ってくれていたではないか!
それこそ壊れる寸前まで!その痛みに比べれば!!!
「こんなもの!!痛くもあるものか!!!!」

世界中の明日の為に①

・・・なんと良き兄妹よ・・・・

バーンは、ダイの叫びから全てを悟った。今共に受けている物理的な痛みなぞ、ティファが受けて来た様々な痛みに比べれば何ほどの事も無いと言った事を真に理解して。

兄は妹と世界の為に体を張り、妹はその兄と世界を救わんと痛みに耐えて来た。なんと稀有で美しい兄妹であろうかと、最後のこの時になっても共感してしまう。

自分もまた、ダイとティファの痛みと同じ痛みを抱えている。周りがどう案じようと泣こうとも、己に課した責務から逃げずに痛みを抱え続けていたのだから・・・それももう、今この時を以て余の、魔界の長き苦難の道のりも終わりとなるか。

ゴロアには予め自分の魔力を溜めたアイテムを持たせていた。勇者達がパレスに乗り込んでくるのであれば、其れは何かしらの方法で自分とゴロアが守っているパレスの動力炉を分断して結界を消した時。

そうなれば魔力が枯渇した動力炉が飢えて暴走するは必定。ゴロアに与えた役目を果たさせるべく、動力炉が飢えて暴走する事が無いようにアイテムを渡し、果たしてゴロアから―時―を告げられた。

バーン様お時間ですだムーン！魔の時・逢魔が時に差し掛かりましただムーン!!

そうか、時が来たか。長かったが遂にこの時が。

「ダイよ・・・・」

雷を喰らっているバーンが不意に静かにダイに声を掛けた。その声音はいっそ、優しいとさえ思う程で、聞いた瞬間ダイは青褪め泣きそうな顔で首を横に冠り振った。

バーンはその様を憐れに思う。ティファの紋章から戦闘の経験だけではなく、聡さも受け継がれた事を見てとって。

ダイが思う通り、地上側の時間切れとなったのだ。

「許せとは言わぬ。」
「や・・・やめろバーン!!!!」
ダイの様子と、バーンの言葉にポップとハドラーも思い至り駆け付けようとしたが体に力が入らず動けなかった。
「やめろ大魔王!!!!やめてくれ!!」
「おやめください大魔王様!!!!」
下には自分の愛する人が!大切な仲間がいるのにどうして動かないんだよ俺の体は!!肝心なこの時にどうして動かないのだ!!
動けずに、其れ共自分を止めようと必死のポップとハドラーを、宝玉の中で必死に止める者達の声をバーンは嘲笑う事をせず、優しく慰めの言葉を贈る。せめて心安らかに逝かせてやる為に。
「直ぐに其方達も後を追わせよう。」
苦痛も無く、慈悲深くその命を終わらせる。だから、嘆くなと言いながらバーンは雷を浴びる中、右手を上げそして下げた瞬間、中央の塔に配置されていた柱がロロイの谷へと落下し、その瞬間を、バーンは水鏡を出現させダイ達にも見せつける。
柱を止める者とて無く、大地に深く突き刺さり全てを薙ぎ払う衝撃波で山は崩れ地形は変わりはて、粉塵が落ち着いた時に映ったのは、クレーターを穿たれた大地と柱しか映っていない光景が。

「あ・・ああああ!!!!エイミ!!エイミ!!!!」
「フローラ様!!そんな・・・そんな!!」
「畜生が!!!!」
「お・・・!!!!おおお・・・・・」
「こんな・・・・・こんなのって!!!!」
「老師様!!ノヴァ!・・みんな・・ああああ!!!!」
「う・・・嘘だ!!バラン様!ガルダンディー!!ボラホーン!!!!」
「パピイ!!スラ!!・・・・嘘だ!!」

勇者一行の悲痛なる叫びが玉座の間にて、玉の中にて響き渡る。その絶望的な光景を前にして、ダイは剣からするりと手が抜け声なく涙

を流し、魔王ハドラーも慟哭の声を上げ顔を覆いて大粒の涙を流す。
誰もが、最愛の人々を、守りたかった掛け替えの無い者達を喪った痛みに耐えかねて。
死神の自分の前であっても槍を取り落とし全身から力が抜け涙を流すラーハルトが、他の者達が憐れになる。
「・・・・安心おしよ・・・・」
大鎌を振るい上げながら、キルは優しく泣いているラーハルトに声を掛ける。
全員痛みなくあの世に・・・・そこまで思うと、はたと物凄い疑問がキルの脳内に湧いた瞬間其れは聞こえた。

「出来た!!!完成だ!!!!!!!!」

キルが疑問に思った事、其れはティファの嘆きの声が聞こえなかった事！
あのティファが、目の前で数多の命が喪われたというのに！静かなのはおかしすぎる。静かなのはおかしい、だからと言って今のティファの声はなんだ!!!

全員の目が一斉に、声の方を見れば、ダイ達同様座り込んでいるが喜色満面の顔で何かを喜ぶティファの姿があった。

「出来た!!ようやく・・ようやくの完成だ!!!・あぁぁ・・長かった・・・もう金輪際こんなややこしい事したくないけど!とにかくできた!!!!」

世界中の明日の為に②

「ティファお前!!!一体何が嬉しいってんだよ!!!」
ティファの喜ぶ声に真っ先に怒鳴りつけたポップの形相は凄まじかった。
柱が落とされた場所に居たのは自分達にとってかけがいの無い者達ばかりでり、その者達が殺されたというのにティファの喜ぶ声が信じられない・・・一体ティファはどうしてしまったのか・・・
ポップの思いはティファ以外の全員を代弁している。仕掛けを作動させたバーンと、この後の結末を知るキルですら、其れこそ宝玉の中に居るミストですらがティファの喜色に満ちた声に耳を疑った程であった。
見知らぬ、其れこそ赤の他人どころか敵の命すらも奪えないティファが、この状況でハドラーのように嘆きの慟哭を上げるではなく、兄の様に悲しみの底に落ちるでもない事に。

その疑問を解くのは矢張りティファである。
「ダイ兄、ポップ兄、皆も、大丈夫だよ。メルルさんも、父さんも、ガルダンディーとボラホーンもフローラ様も、ノヴァも、バウスン小父様も、おじさんも、ロン・ベルクさんも、アキームさんも、アポロさん・エイミさん・マリンさんもゴメスさんも、フォブスターさん達有志の人達もパピイ君達も、カール騎士団の皆、此処からうんと離れた丘の上にいるから！」
物凄く良い笑顔で言い切るティファに、バーンの顔が青褪める。ピラァを落とす前に、必ず感じていた神力を感じてはいたがまさか!!!
ロロイの谷を起点とした全方向の気配を辿り、神力を感じる場所を探し当て水鏡に写してみれば、ダイ達の無事を静かに祈るメルルを先頭に、ノヴァ達もまた祈るようにパレスを見上げ、何かを話している。
更に水鏡に力を注ぎ込み聞こえてきたのは
「危なかった・・・メルルの神託のおかげで我等の命は・・」

「彼女だけではなく君達のおかげだよ。ありがとうティンク、エル達。」
「あんら、私達に感謝しなくともいいのよ。」
「そうそう、教えるように僕等に言ったのは―闇の精霊王様―なんだから。」
人とモンスター達と僅かな魔族だけではなく、なんと大勢の精霊達が現世に顕現しているではないか!!
「ふふふ、驚いていますね大魔王。普段人前に出てこず、見える者だけに話しかける彼等が顕現しているのが不思議でしょう。」
バーンの顔色が変わった事にティファが気が付き、其の種明かしをする事にした。
勿体ぶるのは好きではなく、其れよりも―助けたい者達を全部助ける―為にここまで歩いてきたのだ。
一分、其れこそ一秒だとて惜しいのだから!
「大魔王!今まで落としてきた柱全部映します!!答えはそこにあります!!みんなお願い!映して!!」

ティファの声に願いに、待ってましたとばかりに大勢の水色に輝く精霊達がティファの周りに一斉に顕現し、所狭しと喋りはじめた。
現れたのは水の精霊王の直属の精霊達。彼等はバーン以上、其れこそヴェルザー以上の水鏡を張るなど朝飯前であり、ずっとティファの依頼を待っていただけに、呼ばれて請われた事が嬉しくて仕方がない。
「ティファちゃん!やっとだ!ようやくだ!!おいら達の水鏡を見てね!!」
「さっさと張りますわよ!!」
浮かれる者、其れをピシリと諌める者達がティファの周りを飛び交う様は幻想的であり、この状況下において全く現実味が全くしない様子に、ダイ達はおろか、魔界の神ですら何が起ころうとしているのか分からず、冷や汗が滴り落ちた。
一体ティファは何をしようというのか・・・

映れ、見せよ世界の全てを！我等の親愛なる水よ、岸辺にて水面に映るものを見たいと請い願う子等の願いに応えよ

精霊達の詠唱が終わると共に、バーン以上の大きさの水鏡が六枚、玉座の間にいる全員が見える位置に横並び六本の柱とクレーターと化した大地が映し出された。

ティファは答えはそこにあると言っていたのに・・・だが！関係ない!!ティファが何かしようとしているのだろうがもう遅い！

「其方が何をしようとしているかは知らぬ！だがもう遅い!!地上の消滅をそのまま見ているがいい!!!」

バーンは叫び上げながら再び右手を振り上げ、ロロイの谷の柱に設置してある黒の核晶に魔力を注ぎ込み、バーンの言葉に再び青褪めたダイ達が止めようとするが、何も起きなかった。

「無駄ですよ大魔王。貴方が描いた六芒星は、―私達―が乗っ取らせていただきました。」

「・・・何だと・・」

「六・・・ティファ！六芒星ってなんの話だよ!!」

確信をもって話すティファに、黒の核晶が爆発しない事に呆然とたバーンはダイ達のように顔を青褪めさせ、六芒星とはどういう意味だとポップが声を張りあげる。

ティファは何かを知っている、其れも途轍もない何かを・・・

「ポップ兄・・・水の精霊さん達、水で―地図―作れる？」

「オーライティファちゃん。」

言葉よりも見た方が早いと、ティファの頼みで精霊達は水の線で世界地図を作り上げていく。大陸と島々全て空中に描き出し、そして順番はうろ覚えだけどというティファの言葉に従って大きな点をつけ足していく。

ロモス西南のポルトスの町

人里から少し離れたリンガイアの国

無人となったバルジ島

オーザム南部の雪原

パプニカ西のベルナの森

そしてここロロイの谷
点が描かれていくうちにダイ達はティファの言った事が分かり血の気が引く思いがした。
特にヒュンケル・クロコダイン・ラーハルト達、元魔王軍にとっては見慣れた魔の六芒星と同じではないか!!
「大魔王に問います。あの柱の中には黒の核晶が設置されていますね。」
「・・・・其方何故それを知っている!!」
ティファが柱の中身を言い当てた事に、バーンは堪らず声を荒げてティファに問いただす。魔王軍でも柱の中の事は秘中の秘であり、知っているのは自分とミストとキルを外しても極数人！黒の核晶を一つでも爆発させれば、魔の六芒星を辿って爆発を誘発させ、陣の力で更に爆発力を高め以て地上を消す筈であったのを何故ティファが知っている！
「・・・其れもおいおい分かります。一つずつ解きましょう。大魔王、貴方の六芒星は乗っ取りました！出て来てください皆さん!!かつて取り交わした約束を果たしましょう!!」

ティファの言葉に魅かれる様に、六本の柱の周囲が様々の色の光を発し、あまりの眩しさにバーンすらもが目を覆い、次に水鏡を見た時、そこにはこの玉座の間よりもあり得ない光景が映し出されていた。
それぞれの柱の周りに無数の精霊達のみならず、柱の頂上の上に精霊の王と思しき高位の精霊が佇んでいる！
そして地上部や柱には、精霊達のもならず―眷属―達までもが姿を現している。
精霊界には精霊の他に、それぞれの属性を有した生き物がいる。
火であればトカゲ姿のサラマンダーが、水であれば水辺の馬と言われるケルビムと、それぞれの眷属がおり、精霊達以上に人に姿を見せない・・・そもそもが柱の上に佇む者達は一体!!
「ご紹介します!!」
現実味の無い、其れこそ神話にでも出てきそうな幻想的過ぎる事態

に追いつかない者達の間を凛とした声が響き渡った。
「北の柱を起点におられるのが天・或いは光の精霊王様で、南西におられる水の精霊王様と風の精霊王様が六芒星の一つの枠組みを清め、南の柱は闇の精霊王様を起点に北西を火の精霊王様が、北東を土の精霊王様が清め魔の六芒星を生命の息吹が巡る六芒星へと・・・・」

ズガァァァァン!!!
それぞれの柱にいる精霊王達とその配置を説明しようとしたティファの声は、轟音によって掻き消された。
放ったのはバーンであり、残っていたありったけの魔力を注いでカイザーフェニックスを―得体の知れない―ティファに向かって放ったのだ。
ティファの説明は叡智を讃えた大魔王たるバーンにも分かる話であった。
天が清らかに運行されるには光に導かれた水と風が天をの隅々に行き渡り、清らかなる正常な気を大地に振り落とし、地上の凝った気を、闇に導かれた火と土が浄化し、清浄となった気を天に送り返し、そうして天と地を気が巡り世界は回っている事を。
だがそれを何故ティファがさも当然のように知っている!そもそもが何故―全て―を知っているかのごとく話しているのだ!!
バーンは生まれて初めて恐怖を味わった。
ティファの得体の知れなさを前にして

世界中の明日の為？

バーンの不意の攻撃は、流石のティファも避けれるものでは無く当たったはずが、爆炎と煙が消え果てそこにいたのは、掠り傷一つなく佇んで座っているティファの姿があった。

結界を張った気配も、闘気で防いだ気配もない筈なのに、衣服にすらダメージが無いのはおかしすぎ、ダイ達も何故と目を凝らして見ていると、不意に水鏡の一つから声がした。

それは金の髪を長く伸ばした光の精霊王からであった。

「無駄ぞ小僧。お前では其の者には毛筋の傷すらつけられん。無駄な事はよせ。」

「左様、今のティファは我等六大精霊王の加護がある。其方では無理ぞ。」

光りの精霊王の言葉を、白髪と白髭を波打たせた水の精霊王が補足する。

三神よりも遥か昔よりこの世界に存在する彼等にとって、人間以前にバーン迄すらもが小僧・若者の部類に入り、諭すように優しく話し掛ける彼等にティファはにこりと笑って頭を下げる。

「お久しぶりございます皆々様。」

「わぁいちびちゃん久しぶり!!ようやく舞台も整って僕等の悲願が果たせるね!!」

「お久しぶりです闇の精霊王様。」

「久しぶりじゃのう吾子よ。其方はちっとも大きくならんの～。」

「少しは大きくなれた積りですよ風の精霊王様・・・・漸く約束が果たせます・・」

「なに！儂等の力でドカンと一発じゃわい!!」

「変わらずお元気そうでなによりです土の精霊王様。」

「ドカンなどと品の無い。野火のように素早く力で覆い尽くし一気に事を進めれば良いではないか。」

「火の精霊王様、お久しぶりで御座います。」

それぞれ個性豊かな王達と挨拶を終えたティファは、未だに事態に

ついてこれない兄達と大魔王達に向けて説明を始める。
　これから何が起ころうとしているのかを。

「大魔王、先程なぜ私が柱の中に黒の核晶があるのを知っていたのかと言いましたね。」
「・・・・その通りぞ。」
「そちらは今は言えません。しかしこれから何をするのか聞いてください！精霊王様達と精霊達と眷属の方々の力を借りて柱の力と六芒星の陣の力全て乗っ取らせていただきました。もう貴方が何をしても、更に言えば誰が何をしようとも黒の核晶が爆発させる事は出来ません。あの駄竜王が手を出そうともです。」
「其方は、其方達は何をしようというのだ!!あの力を以て魔界を一気に滅ぼすつもりか⁉」
　ティファの言葉に、自分の力が及ばない事を知ったバーンは慄きながらもそれでも問いただす。
　広大な魔界の地とて、荒廃し最早大陸基盤の端から崩れそうな魔界の現状であれば、あの力を使えば一気に終わらせる事もまた可能なのを知っているから。
　天界と地上の為に、ティファは忌まわしき負の遺産として天界の使いたる精霊王達手を組み我等を・・
「違います!!そうではないのです!!!!・・・何をするか、見ていてください！魔界が苦しんだように、その事で苦しんでいた者達が数多いた事を！その苦しみを終わらせる為に貴方以上に長い時を掛けて今日この日を迎えた人達がいる事を!!」
　言葉ではいくらでも言い繕えよう。言い繕っているのでは無い、本気で魔界と住民たちを救うのだと、言葉よりも行動で示すべきだと、ティファは毅然と顔を上げ長い間懸けて教えられた妖精歌を力強く歌いだす。
　この世界の争いの、少なくとも魔界と地上界の争いの根の一つを断てると信じて。
　ティファの透明な歌声に共鳴する様に、精霊王達を筆頭に柱のそば

近くいる全ての者達もまた天を仰いで歌いだす。
その声だけでも空気が震え、少しずつ歌っている者達の全身が光り輝きだし、遂には柱すらが光に包まれ、そしてその光が大地に達した時、光は線を描きながら大地を奔り、瞬く間に柱同士の線が繋がった。
其れは大地だけではなく、河を、湖を、そして海の上すらも光の線は途切れる事無く、結ばれ文字通り光の六芒星が完成した瞬間、―世界―が繋がった。

・・・なにこれ・・
一体何が起きている!!
何だこの光と・・・声？大勢の声が聞こえるのは!!!
戦ってる？誰が？
今日で世界の命運が決まるってなんの事⁉
魔王軍の仕業か!!!
ざわざわざわざわと大勢の声がする。男の声・女の声・老人から子供の声まで千差万別の大勢の声が、ダイ達の耳に飛び込み、耳を押さえても声がする事態に、ダイは咄嗟に父を思い浮かべた。
父さんなら、この異常事態を何か知っているのではないかと思い浮かべたその瞬間
「・・ディーノ？ディーノか!!」
「あ！父さんなの!!父さん！何が起きているの⁉この声はなんなのさ!!」
父の声にダイは縋りつき一気にまくしたてるが生憎バランも何が起きているのかが全く分からず、息子と同じくこの事態を呆然としてみていた。
精霊王達が自ら顕現するまで柱にいる事すら分からず、聞こえてきた妖精歌と、光が輝いた時自分では計り知れない何かが起こっている事だけは辛うじて分かった程度。
そこに突然大勢の声が聞こえたが、直ぐに息子の声がして返事をかえせば息子の声以外聞こえなくなっている。
その様子を、ティファがダイ達に優しく説明をする。

「今世界を繋いで世界中の声が一斉に聞こえる様になってます。けれど本人が話したいと頭に浮かべ、見たいと思うところを明確に思い浮かべれば見れるようになりました。
大魔王・・・宝玉失礼を!!」
説明をしながらティファは左手を一閃し、宝玉を破壊し全員を表に出した。
いまだかつて破られた事の無い宝玉を易々と破壊された事に衝撃を受けたバーンの下に、ミストがすかさず駆け寄りキルもまた主を支えに戻る中、ティファはその場から動かず出て来た者達に優しい笑みを向ける。
「お帰りなさい皆さん。少しばかりお付き合いいただきます。」
「ティファ！一体・・・これから何が起こるの？」
「マァムさん・・・その問いに答える前に、一つ試していただきたい事が。」
「・・・・何をするの？」
「はい、ロカさんとレイラさんと話したいと、頭の中で話し掛けてみてください。私は今出来ない事なのでお願いします。」
「・・・・・頭の中でいいのかしら？」
「はい、お願いします。」
ティファは滅多に自分達にお願いをしない。そのティファがして欲しいと言っている。ならば、どれ程理解しがたい事でも叶えて上げたいと、マァムな胸の前で手を組み、祈るように両親に声を伝えれば果たして
「マァム!!マァムなのか!!!」
「父さん⁉」
「マァムなのね！一体何が起きているの!!」
「かぁさんも・・・私にもまだ何が起きようとしてるのか分からないの！でもね、ティファが知っているの。」
「ティファ・・・・またあいつか・・・・あいつはこの後どうするって言ってやがる？」
「ロカ・・よろしいでしょうか？」

「その声は・・・お前!!!生きてたのかアバン!!!!!」
「アバン様⁉」
「その話は後程、ロカ、レイラ、ティファはこの世界を助けたいと言っていました。この現象もその一環であると。声はどうやら話したい者同士を繋げてくれるようです。パニックにならない内に、急ぎ私達の知っている者達にこの事を知らせるべきでしょう。フローラ様達にはすでに私が話しています。かつての勇者一行の名はまだ廃れていない筈です。出来得る限り大勢の人達に！」
「・・・分かった、この現象は本当に害はないんだな。」
「ティファのする事が害になる事は無いと私が保証しましょう。」
「け!!そのティファに色々と縋って死んだふりしておいて・・・後で必ず俺の前に来い！一発ぶん殴るからよ!!!」
「ええ、必ず。」
　かつての勇者と戦士が物騒な約束を結んだ後、二人はすぐさま世界中の知り合いや冒険家達、アバンに至っては王侯貴族総てと繋がり同時に説明するという神がかり的な事をしてのけた。
　原理は分からずとも、水晶を複数使って同時に大勢と話せるものだとイメージすればいいという、この現象を引き起こしている精霊王達とティファですらが思いもつかなかった方法を使って。
　彼は伊達に―原作唯一のチート―と言われていた訳ではないのが証明された瞬間でもあった。
「そうです！この現象はティファと魔法を使う時に力を貸すあの精霊の王達が・・・」
「今のところ魔王軍は倒しきれていませんが彼等にも戦う力は残っておらず現状を見定めていて・・・」
「はい、一行全員無事です。」
「世界各国この様な事態になっていますが今の所目に見える被害は・・・」
「その通りです。話したいと特定の物を思い浮かべれば距離は関係なく話せると。」
「今世界がどうなっているのかを見たいと念じれば其れで見られるそ

うです。」
アバンはマァムがロカとレイラと繋がったのを知ってすぐさま行動を起こしていた。
手始めにフローラに話をし、彼女にやり方と伝えるべき内容を教えて直ぐに各国にこの現象を落ち着かせる手立てを話し、自分を知る知り合い全てに話を通した後、あれ程ざわめき雑音に満ちていた世界が落ち着きを取り戻すのにそう時間はかからなかった。
方法を知った者達はそれぞれの者達と繋がり合い、そしてこの世界の様を見始め、未だに大勢の声がするものの、先程よりも落ち着きを取り戻したのだ。
無論それはアバンのみならず、パレスではポップも急ぎ両親にアバンが言った事と同じ事を伝え、少なくとも近隣住民の顔見知りに落ち着くように話して欲しいと頼み込み、地上でもフローラやバウスン、アキームを筆頭に伝達をしているおかげでもある。
「ニーナ!!みんな無事か?」
「ガルダンディー⁉・・・ついさっきラーハルトさんからも同じ事言われたけど大丈夫よ・・・・そっちは?」
「バウスン様!王も我等も無事なれば!柱の方も大勢の精霊様方達と光が見えますが大地に異状はなく!」
「アキームよ!その方達は・・」
「は!勇者様方もご無事で・・・・我等も何が起きているのか・・」
「大丈夫、今はこの現象で地上に害が起こることは無いって。」
世界の声が、落ち着いて話をしだしている。
もっと混乱が起きながら、徐々に声が繋がるのに気が付いて時間がかかっても落ち着くだろうと見込んでいたのが・・・瞬く間に落ち着いた・・・・
・・・・・拝啓三神様、私をわざわざ転生させなくとも、アバン先生を幼少の頃からスカウトしていればいいだけだったのでは?
そう思う程にアバンは有能だった。
前世で言えば、同時テレワークを概念すらも知らずに、それでも各

国の王達と要職についている者達と話し、遂には言った事のある村々の村長にまで話を通しすのをそつなくこなしているアバン先生に、この事態を作ったティファすらが度肝を抜かれた瞬間であった。
其れでも、これで―第二段階―に移行できる。
この作戦の肝ともいうべき事を・・・・この平和であった地上の者達に、地獄を見せる事を赦して欲しい・・・

世界中の明日の為に？

赦して欲しい、地獄を見せる事を
赦して欲しい、見られる者達の矜持を傷つける事を

これからする事を思うだけでティファの心と表情は暗くなり、その心を反映させるような歌声を、ティファは小さな声で紡ぎ始める。
其れは本当に暗く重く、聞いている者達の心を締め付けるティファが歌うに全く相応しくない歌声は、気が付けば精霊達と王も歌い始め、柱から延びる光の線がいつしか黒く染め上がり、徐々に地面に沈み始める。
深い深い声に呼応するように六芒星は下へ下へと向かい始める。
三神達を始めとした、精霊王達とティファが救いたいと願ってやまない者達の故郷へと。
そして六芒星が地の底へと到達した時、地上界と魔界を繋ぎ、繋がったと同時に六芒星は全ての魔界の者達に地上を見せた。
突如として目の前にあるはずのないものが見え始め、魔界の全土は地上以上の大混乱に陥り先程以上の声が響き渡った。

何だあの青い天蓋は⁉
眩しい!!あれは・・・あれは一体・・
緑の・・・あの綺麗なものはなんだ⁉
大勢の人間・・・もしや！今目にしているのは地上とやらか⁉
なぜ突然我等の目に・・
あの眩しいものが、もしや大魔王バーン様が魔界の為に手に入れんとしている太陽とやらか・・・
其れは魔界のみならず、地上の者達も魔界の光景が飛び込み、混乱をする前に戸惑いを見せた。
暗く澱んだ空気が常の魔界は、採光は蝋燭か少量しか取れず富裕層、其れも特権階級の者だけが使える油のランプ。掘り出せば空の代わりにある天蓋に埋め込まれた水晶群が、火山の光を乱反射させた光

のみ。
見ているだけでその地がいかに不毛であり、一度人間が踏み込めば死んでしまうと分かる其の地に、数多見える魔族と地上のモンスター達とは形状が全く違う種類のモンスター達を見て直ぐに分かった。
この荒れていると言ってもいい足りぬ不毛の大地こそが
「これが・・・・魔界なの？」
ダイは身の底から溢れる怖れと共に呟くように声を押し出す。
もしも今自分達が見ているものが魔界であるならば、自分は生きていけない！かつてティファが叫んだ通り、こんな慰めも何もない地では自分は生きていけないという怖れと共に。
デルムリン島は豊かな島。文明社会などとは無縁であっても何不自由なく生きてこれた。
其れはウォーリアー船長達が服をくれお菓子や甘味、作物を届けてくれたからもあったのかもしれない。
それでも、きっとそれがなくとも自分と妹と爺ちゃん達と島の皆でお日様の下で笑って暮らしていた気がする。
何もないように見えて、海の中には魚が居り、島の果実は季節ごとに必ず実を結んで自分達の血肉になってくれていたというのに・・・
ティファ達が歌えば歌う程に、六芒星の陣は魔界の深部へと進んでいき、奥に行けば行くほど暗くなり、遂には採光すらが無くなった時、六芒星の陣がまた光り輝きだし―それ―を照らし出す。
「ヒッ!!!!」
その声は誰が叫んだか定かでは無い。だがそれはもしかしたら見ている者達全員の声だったのかもしれない。
地上人はその光景に青褪め、声なく震え、バーンとミストとキルの目に、戸惑いが振り払われ再び怒りの火が灯る。
太古の昔にはそれなりに栄えていたであろう魔界の深部の現状は、それ程すさまじかった。
黒く澱み、最早凝って実態と化した瘴気が、生き物を飲み込み取り込み生きながらに腐敗させている様は、地獄としか言いようがなかった。

あまりの光景に誰も、何も言えない中、瘴気に侵され動く気力も無くなり蹲っていた？せこけた魔族の少年が、突如見え始めた物に手を伸ばす。最後の気力を振り絞って

「あた・・・たかい・・・・あれ・・なぁに？あぁ・・・・こんどは・・あそこに・・・うま・・・れ・・」

突如住んでいた村が瘴気に侵され食べる物も飲める物も無くなって久しく、自分を生かそうとしてくれた両親の声が聞こえなくなって幾日経ったか分からない。

逃がそうとしてくれたおじいちゃん達は更に濃い瘴気にすぐにやられて・・・それでも、自分の意識が全て無くなる前に暖かいものに触れられた事に？せこけた少年は満足したような安らいだ顔をして力尽きた時、悲鳴が上がった。

その様に、地上からの声が一斉になくなった

地上は柱の被害と戦の爪後があれど、海や山があり何処までも続く緑豊かな大地であるのに対し！魔界の凄惨さは筆舌に尽くし難く、地獄という言葉しか出なかった。

今この瞬間に死んだのは少年一人ではない！魔界の深部の至る所で、地上の温かさを羨み、そして少年と同じく最後に温かさに触れられた事を喜びながら息絶えていた。

最後まで言えずとも、その声は聴いている者達の心に確かに届いた。

今度は不毛の大地の魔界ではなく、あの暖かい物に満たされた地で生まれたいという彼等の切なる願いが。

「ハドラー!!何で魔界ではあんなに大勢の人達が死んでいるの⁉魔界はあんなに酷いところなの⁉」

「どうなんだよハドラー!!俺は・・・俺達はあんな・・・・あんな酷い目に遭っている人達と戦っていたってのかよ!!!」

ダイとポップを始めとし、マァムとチウ、そしてヒュンケル・クロコダインとラーハルトまでもが、魔界で生まれ育ったハドラーに詰め

寄るように血相を変えて尋ねる。魔界の深部では大半の命が消えかけている！敵と戦っている訳でもないのにだ!!
しかしその答えをハドラーは持ち合わせておらず、それどころか魔界の深部の凄惨さを今日この時、ダイ達ともに知り同じように血の気が引く思いをしその問いに満足に答える事すらできなかった。
其れは同じ魔界であっても中心部と比較的深部から離れている魔界の者達も同じであり、同族が、魔界の深部が瘴気に侵されているのだと初めて知った者の口を噤ませた。
強者こそが生き残り、弱者は死んでも当たり前だと考えている魔界の者達を、青褪めさせるのに十分過ぎるほどの悲惨な事実を前にして。
魔界の者であっても到底生きていけない濃度の瘴気に包まれた地、そこに生まれてしまったが故にただ死んでいくだけの者達がいる事を、魔界全土の者達が今日初めて知ったのだ。
高濃度の瘴気が深部から広がり、其れはやがて魔界全土を覆うかもしれないという危機感と共に。
ダイ達の問いに、ティファが答える。
「魔界は、昔は地上にあったんだよ。精霊王様達が教えてくれた。」
魔界もかつては地上にあり、魔族と強靭な肉体を有した竜種とモンスター達と、人間と弱いモンスター達が共に地上で暮らしていた。それでも当時は大地に強い澱みがあり、強い種族の魔族と強靭な竜種とモンスター達が浄化しを引き受けてくれていた事を。
其れがいつしか自分達ばかりに負担が行き過ぎている事に気が付いた者達が不満を持ち、いつしか人間と弱い種族などいらないのではないかという考えを持ち始め、拗れ話し合いもせずに天界が魔界を地の底へと追いやった事を。
「・・・澱みは浄化能力が整った天界が引き受けたけれど、彼等の傷つけられた負の心が、もっと大きな澱みになって瘴気が発生したんだ。」
其れが長い年月を掛けて降り積もり、やがて魔界の現状を凄惨なものにしたのだと。
「大魔王、魔界はこの儘であれば数百年後には滅んでいるのでしょう

？」
矢張り確信に満ちたティファの声に、バーンは無言であったが頷き肯定する。
「だからこそ魔界は地上を消したいのです。蓋になっているこの地を消す為に。
ここで疑問が一つ。何故魔界を地に落とした天界から滅ぼし、全ての聖なる加護の無くなり、易々と地上を滅ぼそうとしなかったのか？貴方の立場であれば、憎い天界に手を出さなかったのが不思議でした。」
「・・・今は？」
「この六芒星を乗っ取って初めて分かった事があります。」
ティファが、疑問だと言った事が最後は過去形になっている事にバーンは気が付き、ティファの導き出した答えを言うように促す。
何処までティファが分かっているのかを知る為に。
その問いに、ティファは素直に答える。
「天界は目には見えませんが文字通り天に存在すると、精霊王達が教えてくれました。次元が異なっているだけで存在していると。」
そこからは推測になるが、如何に魔の六芒星を以て黒の核晶を爆発させても、先に展開を滅ぼしてしまっては爆発力が上空に逃げてしまい、地上を完全破壊できないのではないか。
だからこそ爆発を逃がさない蓋とする為に天界を残しておいたのではないかというのがティファと三神達と精霊王達が導き出した答え。

ティファの答えはあっている。だが、其れが今更どうだというのだ？
其れは魔界に住まうのも達に死ねと言っているようなものであり、バーン達の心をさらに冷え込ませてティファを冷たい目で見据える。
魔界は知った事実に大混乱をきたし、いつか自分達もああなるのだという現実を知らしめさせられ、阿鼻叫喚を引き起こした者を。
精霊王達も、その声を聞きながらティファが次の妖精歌を歌わない

事に焦れ始める。
この声の者達を救わんと今日まで来たのを、ティファは一体何をぐずぐずとしているのだと。
だが、ティファはバーンや仲間達、精霊王達の視線の問いに対して沈黙をして静かに待っている。
―その声―が必ず上がると信じて
果たして魔界の者達の悲痛なる叫び声とは違う声が、一際大きく響き渡った
死なないで!!!!!
来た・・・・来てくれた・・・
上がりし声に、ティファは安堵したような泣き笑いの顔となり、崩れ落ちそうになる。
そのティファの様子に応える様に、次々に声が多く、そして大きく響き渡り始めた
「死なないで!!死んじゃ駄目だよ!!!」
小さな子供の声が、死にゆく名も知らぬ少年に死なないで欲しいと叫んだのを皮切りに、大勢の悲痛な叫び声が世界を満たし始めた
「助けて!!!誰か助けてあげてよ!!!」
「あの人達が死んじゃう!!お父さん！助けてあげられないの⁉」
「ああ駄目だ!!逃げろ!!!そこにいては死んでしまう!!」
「まだ間に合うわよ!!諦めないで走って・・・・あぁどうして!!!」
死なないで欲しいという声が、青褪め口を噤んだ地上人達のそこかしこから響き渡った
どうして命が簡単に消えるのだという嘆きの声に、ティファは涙を流して喜びたくなる。
世界は弱すぎも酷すぎもしない。まだ何も、誰も救えていないがそれでも！種族が違えど救いを求める人達を助けようとしてくれる人達がいる筈だと信じて来たのだから。
助けよう、私の全てを使って・・・・使い切ってでも助けよう

世界中の明日の為に⑤

どうして助けてあげられないの⁉

かつても今も、私が悩み苦しんでいる事を、同じように苦しみ嘆いてくれる人達が現れてくれた。

其れは、どれ程感謝してもし足りない。別世界の事だと放り捨てるのでは無く、同じ命が消えてしまうという痛みを感じて嘆いてくれる人達がいてくれた事が。

ティファの目の前にいるダイ達もまた、助けられないのかと叫んでいる者達の一人。

世界は知ったのだ、何故魔界が執拗なまでに地上を攻めて来ていたのかを。

だからと言って世界全てが助けたいと思う者達ばかりでは無い事を、残念な事にティファ自身良く分かっている。

そちらも、ある意味人として当然の感情だと分かっている分、否定の言葉を聞くのが辛い。

「魔族だぞ⁉散々俺達を攻めて来た奴らを助けるだなんてとんでも無い!!」

「このまま滅んでもいいじゃないの!!!」

因果応報、数千年間積み上げられてきてしまった因果が、助けたいと思う者達の道の邪魔をする。

魔界の現状でやむを得ず豊かな地上を責めたのだという言い分は、残念な事に地上の者達の大半にとっては所詮は他人事であり、辛いのであればいっその事滅んでしまえばいいのだというものたちが一定数いるのもまた事実であり、其れは魔界の者体の心をいたく傷つける。

救いを求めても届かないのであれば、大魔王様の言う通り地上を！

深部の凄惨さを知らなかったとはいえ、魔界の者達は何処かで魔界の地が危うい事を薄々気が付いてはいた。

長命であるが故に、百年前と五十年前と一年前と、段々と少しずつ、大気に澱みが増え飲める水が少しずつ減り始め、なのに食料が足りて

いるというおかしさに。
本当であれば地が荒れれば食べられなくなるものが増え、暴動になってもおかしくない筈が、食べられない者達が一向に増えなかったのは、それ以上に深部の者達から死んでいたから。
亡くなった者達は食べる事は無く、大地の恵みが減るよりも死者の方が増加していたからだと知った今、滅んでしまえばいいという地上の者達の言葉に絶望した心が黒く染め上げられかけたその時、一筋の光が差し込む。

「嫌よ!!私は見捨てたくない!!!!」
一人の少女の叫び声が、負の心を薙ぎ払うかの如く
「助けが必要な人を助ける事の何がいけないってのよ!!!確かに、魔界は今まで私達のご先祖様を沢山襲ったって!!私の国にもそのせいで大勢の人達が死んで今は五十人もいない国になっちゃったけど!!けどね!だからって命があんな風に消えていい訳ないじゃないのよ!!命を見捨てていい理由にならない!魔界の今死に掛けている人達が!!!私達になにしたっていうのよ!この世界になにしたっていうのよ!何もしてないじゃない!!なにも、生きる事も出来ないで死んでいく人達を見捨てるなんて私はまっぴらごめんよ!!!」
怒りと悲しみと、それ以上の優しさがない混ぜられた声で叫び上げたのは
「私はニーナ!!テラン国・リュウ―ト村のニーナ!!私は、私はあの人達を、死んでしまうあの人達を助けたい!!」
かつて人を憎んでいた鳥人・海獣人・半魔の青年達の心の中に住まった子供の一人、リュウ―ト村のニーナだった。
少女は命の儚さ、生きる事の難しさを齢十の内から知っている。
五年前、自分で卵から孵し妹とも呼んだ子竜のミーナが瀕死の態になった時、偶然出会った薬学知識のある少し年上の少女・ティファに助けを求めた。
その時は必死に妹を助けて欲しいと縋ったが、無情にも妹たるミーナに助かる方法は最早なく、出来る事は安らかに死なせてあげる事し

か出来なかった。
救って欲しい、そう言ったのに死なせる事しか出来ないと言われた時、瞬間怒りで頭が一杯になり、親切にミーナを診てくれたティファに怒鳴って追い出して・・・それでも両親の話を聞いて、ミーナをただ苦しませる為だけに命を永らえさせたらいけないと、幼いながらも悟ってしまった。
ミーナは、息をしているのすらがもう苦しいのだと。
その日の夜は月が綺麗だった。ミーナを送るのはこんな綺麗な夜が良いだろうと、両親も泣きながらミーナに薬を飲ませようとしたのを止めて、自分がミーナに薬を飲ませた。ミーナは、自分の妹だから御免ねミーナ・・・こんなになる前に助けれ上げられなくて・・・悪いおねいちゃんで、役立たずのおねいちゃんで・・・
飲ませながらミーナに申し訳なくて、眠るように逝くまでミーナを抱きしめ何度詫びたか知れない。
それでも役立たずの姉の自分の頬を、ミーナは最後に舐めてくれた。悲しむ自分を労わって・・・・・あんなことは二度と御免だ!!!
ガルダンディーとの出会いは最悪だったが、それでも、共にいる子竜のルード君の体を労わって歯磨きを不器用ながらも手ずから作ろうとしたガルダンディーを好きになり、周りで泣いている人達がいないようにしたいと願って育ってきた。
そして今！目の前に助けを叫んでいる人達がいるのだ!!!
魔界がミーナのように手遅れになってしまったら、本当に滅ぶしかない！そんなのは嫌だ!!
「命を見捨てる何てこと二度としたくない!!するもんか!!!」
その言葉に呼応するかのように
「僕も嫌だ!!僕も、ニーナと同じリュート村のディアッカだ!!大人はいつも言っているじゃないか！困っている人達がいたら手を差し伸べて助けるもんだって!!」
「私も嫌！どうして・・・死んでいく人達を捨てないのいけないの⁉」
「酷い事されたら酷い事をし返していいの⁉」
「そうだよ・・・そしたら、どっちがが全部いなくなるまでそうしない

といけないの？」
「酷い事されても、相手に仕返しをしたらいけないって言ったの嘘なのかよ母ちゃん!!」

リュート村の子が、そして世界中の子供達が声を上げる。
其れは、大戦のせいで帰らぬ人となった者達の家族・恋人・友人・知り合い達からすれば、現実を知らない子供の綺麗事だと、ロロイの谷で、ティファに負の感情を抱き暴走したカール騎士達のように心が荒れる者達が確かにいた。
しかし、その彼等・彼女等にもニーナ達の純粋なる思いに、魔界の者達を、敵である彼等を憎み切ることが出来なくなっていった。
自分達の痛みを、そのまま・・それ以上の事で返せば憎しみは癒されるのか…そんなはずはない！知ってしまったから!!魔界の未来を!!数百年後には命が消え果る、そんな過酷な世界を救う為に戦っていると言われては何も言えないではないか!!
誰が、こんな酷い事を知らしめて欲しいと言ったのか⁉知らなければ、憎み戦うだけで、そんな単純な思いだけで生きていけたというのにだ!!

「助ける術などあるものか!!あれば魔界はとっくにその方法を試みここまでの事になっている筈が無い!!!第一！魔界がこのようになっているのは神の思し召しだ!!!」
「その通りだ！」
「助けるってじゃあどうやるのよ!!」
「そんな方法があったとして、今まで魔界が助けられなかったって事は、神様達から見放された証拠じゃないか!!!」
それは最早恨みではない、知らされた事の重みに耐えかねた痛みの叫びであった。
知りたくもない、痛みを知らされ、知らなければただ相手を恨んでいればそれで済んでいた現実を打ち壊した者への戸惑いと、怒りと新たなる憎しみに心を染めた者達の声であった。

魔界は少しずつ滅ぶ。其れは自分達が味合わされた痛みを、彼等が味わうのを是として。
その声が助けたいと思う、子供や純真な人達の思いと同様に、世界各地に瞬く間に野火の如く広まっていき、聞いていたダイ達の顔を青褪めさせ、矢張り魔界を助ける者など地上と天界にいないのだとバーン達側の心冷え込んだ時、
「違う!!!神様達はこんなこと望んでない!!!望んでなんかいるもんか!!」
静かに推移を見守っていたティファが、顔を真っ赤にして、涙をぼろぼろと流して怒鳴り上げた。
三神様達は、こんな事を決して望んではいない！助けたいって泣いているのに!!

世界中の明日の為に？

地上界の三神への批判にティファは耐えられなくなり、届く筈も無い怒鳴り声を上げ、肩で息をしながらボロボロと泣き崩れる。
悲しくて、胸が痛くて・・・・ファブニールの竜と同じ。知らないから、人々が、神々と繋がれない者達は知らないから。三神様達が、今日この日を迎える為にどれほどの胸の痛みに涙を流したのか、死にゆく者達に何も出来ずに見ているしか出来なかった、無力な自分達を呪い、其れでも歩みを止めずに来たことを知らないから・・・

ティファは一体何を知っているというのか
まるで神々を擁護する様に、ダイ達もバーン達も声を掛けることが出来ずにいる。この事態を引き起こし、そして神を擁護するティファに、得体の知れなさを感じて。
さしものキルととてもだ。
そのティファが動き出す。何かを決意した、あの力強い光を双眸に灯して。
「ティファ！お主が待っていた声が上がったのであろう!!」
「吾子よ、続きの歌を歌ってたもれ。」
「私達はずっとこの日を待ち望んでいたのです。」
「僕等が犯した罪の償いをさせておくれよおチビちゃん。」
「ここは矢張りドカンとだな!!」
「そちは本当に・・・だが、我等を送るような輝きある歌を頼もう。」
三神様達も、そして精霊王様達もまた、決められた覚悟がある。
知っている、私が歌えばこの人達は・・・嫌・・・・この人達もまた、魔界の惨状を引き起こした人達なのは知ってる。先代の神と共に、魔界を地の奥底に沈めた人達なのを、会ってすぐに教えてくれたから。自分達の罪を告白する様に。
償うべきだと心の痛みを吐き出す様に。
その方法は細い細い、クモの糸よりも細い綱渡りのような方法で、世界中に―破魔の石―を大量に置いて、大地の力を柱に伝わらせて魔

の六芒星を光の六芒星にした後の効果を地上と魔界にもたす事が、唯一三界を救う方法の中で一番難しい事だと。
石を置くだけのことなのに何故一番難しいのか、聞いてすぐには分からなかった。
石を置く、その行為すら精霊王様達も精霊も、現世に関与する事でありする事を許されておらず、出来ないのだと知って驚いた。
そんな少しな事すらも許されていない厳格さに。
現世で生きている者の誰かに頼める事ではない。魔界を救いたいと願う地上人など見つけることすらできまい。
いたとしても、魔王軍に見つからず世界中行けるものなど転生特典貰えた私くらいしかいない。
破魔の石は、モンスター達を邪悪なる気配が満ちても凶暴化から守るものだけではなく、大地の力を光の力に変換して魔王軍、ひいてはバーンから柱を奪うもの。
ずっと幼い頃から少しずつ、魔王軍の目を欺きながら、ガルーダと共に世界中に置いてきて、オーザムもはからずともダイ兄達が魔王軍の目をバルジ島に引き付けている間に、式に置かせて完成した。
その時の精霊王様達は物凄く喜んでいた。
これで世界が救える手立てが出来たと。
其れと共に、自分達の罪が償えると・・・・償うのだと・・・
今この陣の中心は私。巨大な力のうねりを肌で感じているうちに分かってしまった・・精霊王様達の、三神様達の罪の償い方を!!
・・・私は・・
「ティファよ?」
「どうしたというのだ・・・何故泣く?」
私は・・・
「吾子・・・何が悲しい?世界が救えるところまで来たのだぞ?」
「ティファ、続きを歌っておくれ。」
私は嫌だ!!そんな罪の償い方を!!黙って見ているなんてできないよ!!!
だから!!!

「あああああ!!!!!」
ここまでは三神様達が書いてきたシナリオ
「おチビちゃん!!ッ!!これは!!!」
「ティファ!!!!!」
けれど！此処からは私の、ティファのシナリオだ!!!
ティファは顔を上げ、喉を逸らし力の限り叫び上げた。自分の中にある巨大な力を身の内に留まらせ、繋がっている柱の力を従え、彼の地に飛ぶために力を振り絞る。
そのティファの叫びに呼応するかの如く、柱は精霊王達と眷属全てを吹き飛ばしながら白い光を天空へと昇らせ、巨大な光の六芒星が逢魔が時を過ぎ、星空が見え始めた空に描かれる。
その光の六芒星の中心を、一つの白い小さな光が通り抜けた。
柱のと共鳴する様に光り輝いたティファの体が、崩れ落ち横たわるのを見たダイ達が駆け寄り、神速で近づいたラーハルトがティファの体を抱え起こそうとした時ラーハルトの手に、一本の細身の剣が刺さりかけ咄嗟に手を引っ込めると同時に、キルの声が玉座の間に響き渡った。
「その子に触るな!!!」
その声は冷たく、目には殺気すらも孕んだ瞳でラーハルト達を睥睨し牽制をする。
「今その子の魂が体から抜け出てる!!見てご覧！体が半分透けているだろう？魂が抜けた体に触れば、魂は傷つく!!!」
ダイ達が自分の行為に対して何かを言い立てる前に素早く釘をさす。
魂が抜けた体に触れば、肉体も魂も傷がつき、知らず長時間触れれば、肉体が魂に戻った時に酷い有様になることがあるのを。
「ではどうするのだ!!ティファ様をこのままにしておけというのか!!!」
キルの言い分は分かったが、だからと言ってティファをこのままにしておきたくはないとラーハルトが怒鳴るのを、キルは意識してかせずか無視し、ティファの魂を水鏡の映像で追えるか伺いを立てる。

「・・・・やってみよう。」
バーンとても魂抜けをした者を追った事は無いが、己の暗黒闘気と深く交わったティファならば或いはと思い、黒の核晶に回す筈だった力の大半を水鏡に注ぎ込み試みる。
こうとなれば、ティファ達の思惑通りにするほかないのだから。
バーンの渾身の水鏡は、果たしてティファを捉えることが出来た。そこに映ったティファは、白い輝きを放ちながら、白いシミーズに身を包んだ姿が天を上り六芒星の中心に入り込んだ時、映像は黒い嵐に包まれティファの姿が映らなくなった。
映像が消えたのではないが、何が起きているのか分からない中での水鏡の異変は、見ている者達の心を寒からしめるには十分なものであった。

そんな外の様子を知らないティファは、水鏡の映像と同じ黒い嵐の中をひたすらに上昇していく。
上下左右構わず、滅茶苦茶にうねる力に引き裂かれ押し戻されそうになるのを懸命に堪え、ひたすらに手を上に伸ばして昇っていく。
もしも手を降ろしてしまったら方向を見失ってしまう！
機会は一度！このたった一度しかない!!
やり直しが二度と聞かないこの時に全てを賭けたティファは、ひたすらに上を目指し、魂の体に傷がつくのも構わず押し通らんとする。
もう少しかもしれない！
「もっと!!もっと力を出してよ私の体!!!」
押し戻されないように叫び上げた瞬間、ふと力の嵐が収まるのを感じた。
其れは本当に突然であり、見回せば全てが青い世界だった。
其れは上下左右すらも分からなくさせる程、全方向が蒼天の空であり、其れこそがティファの求めた地の証。
漸く会える。
此処こそが、三神様達がいる世界、天界にようやく来れたんだ

世界中の明日の為に⑦

全方向蒼天の世界は、何もない世界に見える。
けれど私は知ってる。ここには確かに天界がある事を。魔界を沈めた後、瘴気を一気に天界に引き入れた後、外部と一時的に完全遮断をして、負の感情を入れないようにして瘴気を完全浄化させる為に、完全に次元ごと移動したのだと。
だから必ずここに天界はある筈なんだ。
三神からも六王達からも話を幾度も聞いて確証を持っているティファは、躊躇わずに全方向に向かって闘気を放出する。通常の魂であれば成しえない事を、大地と精霊王達の力を取り込んだ今の自分であれば可能であろうと考えて。
果たして自分だけの色の白い闘気は、雲一つすらない蒼天の空を駆け抜け、自分のいる所より上空にて弾かれた。
闘気が当たった所に、魔法陣の様な文様が薄っすらと浮かび上がる。あそこだとあたりを付けたティファは、上空に飛び上がってさらに近づきそっと手を前に差し伸べれば、打ち据えられて拒まれたように手が弾かれた。
間違いなく此処が天界を十万年もの間閉ざさせた結界の端。浄化を終えても尚も外界と隔絶させ、魔界の惨状を放って置き、弱いからと助ける筈であった地上が幾多の困難な目に遭おうとも、神託と使者を遣わせただけで済ましていた最大の原因。
現在の神達を悩ませ、挙句が心痛に追いやり涙を流させた元凶・・・でもそれが元凶と言えるのは後の時代、つまり当時の事を本当の意味で知っていない部外者の口さがない憶測による言葉だ。
いけないいけない、ファブニールの竜で学んだはずだ。真実も当時の人の思いも、知った気でいるのが一番いけない事だって。
だから知ろう

「起きられよ、原神たる神、この世界の円環を閉じられ天界を守りし尊き御方。太古よりこの世界を眺めせしヴァルガブル・パテラス神様。」

結界に弾かれた事で位置を完全に特定したティファは、自身の魂が傷かつかないギリギリの範囲まで近づき、両手を押し当てるように前に差し出し―名―を呼ぶ。
三神達の前神にして、かつてこの世界に生じた全ての生き物たちをたった一人で見守ろうとした神の真名をはっきりと言葉にして呼んだ。
真名は高位の者であればある程に拘束力が発揮される。光の精霊王のはずれの息子、パック・スクィールを真名で呼び寄せたように、現存する魔界の古書にも記されていない前神の真名たるパテラスを付けて呼び寄せた。
ティファに呼ばれた事で、肉体と全ての力を結界にして天界を覆い尽くしているヴァルガブルの体は全て顕現し、天界の全容が露になる。
その広さは地上の、死の大地を除いた五大大陸のを合わせた大きさの半分ほどであるが、其れを全て覆い尽くしている結界の凄さにティファは鳥肌が立つ思いがする。
見えないのだ天界が。
確かに結界は露になり、巨大と言っても言い尽くせぬ複雑なる魔法陣の文様が、球体となって天界全てを隠し尽くしている。
十万年経った今を以て衰えず天界を鎖国させている力と、その歪みにたしいして。
その球体の魔法陣の一角の文様が、眼球の形となりティファと目が合った。
色はなく、白い眼はじっとティファを見ている。まるで品定めをしている様に。
どれ程の時間が経ったか。数瞬かも知れない、永劫かもしれない、分からなくなる程の力の圧に怯みかけたティファに、眼球から声を掛けられた。
「お前は全く読み取れん。」
「・・・・・」

「お前の頭の中身と魂を調べ尽くしたが、私の目を以てしても見通せん。」
「私は・・・初めてお目に掛ります。前神たるヴァルガブル様にご挨拶を。私は当代の竜の騎士が、人の女性と交わり生まれた双子の片割れでティファと申します。竜の騎士はご存知でしょうか？」
「・・・あぁ・・・数千年前、私が目を覚ました時に―三界の調停者―を生み出したと―四神達―がはしゃいでいたな。
　そうか、その末裔が人の子と交わり・・・・興味深い。」
「ご存知であれば・・」
「だがな、お前は答えていない。」
「答え？」
「お前の中を見ようとしたが全く見えなかった。私の子が生み出した者であれば、私が読めぬはずが無い。」
「それは・・」
「お前はなんだ？何故読めない・・・何故私の力が及ばない!!」
「其れは！今から!!」
「お前は怪しい!!!さては私の子等が作った者が変質し悪しき者になりて私の頸木から外れたか!!!」
「そんな!!違い・・」
「お前も―あの者達―と同じか!!!!」
「ヴァルガブル様!!私は・・・」
「もうよい!!!何故だ・・・何故あれ程愛情を注いだというのに―お前達―は私を、私の子等を悲しませるのだ!!どこまでも勝手で！救おうと言った手を要らぬと弾き!!戦乱を呼ぶ愚かしさはまだ直っておらなんだか!!!」
「違います!!話を!!!」
「言葉は不要だ!!!」
　ティファの事が読めない事を、何かと勘違いしヴァルガブルは激昂し、次第に思考を狂わせていく。
　ティファの魂は異界の者が混じっており、それ故にバーンのハイエント、ヴレ＝アナリュシスを以てしても力が及ばず見れなかった。異

界の魂を、本人の同意も無く見る力はこの世界には無く、ヴァルガブルの力でも見る事が叶わなかった。
　その事がヴァルガブルの何かに障り、彼を苛立たせ思考が怒りへと変貌してしまったのだ。
「お前達力あるものは何故力だけで解決を・・・何故話をしようとしない・・・」
　繰り言のように紡がれるヴァルガブルの冷たさを孕んだ言葉に、ティファは背筋が凍る思いをしたが逃げ出さず、果敢にも話を試みようとして近づいた瞬間
「お前の言葉はいらない」
「え？」
　魔法陣の文様が姿を変え、多数の金色の細い触手がティファを覆い尽くす。
「お前の身に全て聞こう。」
　言葉ではなく、魂の記録全てを読みつくさん
　すべて私に晒し尽くせ!!

世界中の明日の為に⑧

ティファを取り囲んだ金色の触手は荒々しい光の明滅をしながら、十重に二十重にティファを取り込む。
其れはヴァルガブルの怒りの深さを表すが如きであり、ティファがどう抵抗をしようとも全てを晒させる意思の表れの様でもあった。
もううんざりなのだ。―言葉―と中身が一致しない不心得者が、仲良くすると言いながらも裏では相手を滅ぼそうとしていた愚か者達が、泣いていると思えば相手を貶める言葉を言い募る者達のなんと多かったことか。
何時からだ？言葉とは嘘を吐くものだと知ったのは？
初めて命が知性を持ち、我等と同じ様に言葉を発した時は只々嬉しく思い、言葉を与え、それぞれの発声器官の違いにより、出ない発音の為に懸命にその者達にあった言語を共に考え笑っていたのは・・・・もういい、知性が付くという事は偽りを言う事も覚えるという事。
何時までも無垢なるものなどいはしないのだと学んだだけ良しとすべきか。
この者が如何に抵抗しようとも魂分解まですれば何者か、何をしに来たのか分かろうし、偽りを聞かずに済むのだから。

膨大なる時間が、生命の誕生を言祝ぎ見守る主神である事にすっかり嫌気をさしていた。
この星に生命が生まれ、やがて自分と同じく天族に育つ者と魔力を多く有した生き物達と、魔力量が極端に低いか全くない生き物達へと明確に別たれ出したのが昨日の様に思い出される。
そして、たったの数千年で失望させられた事も。
言葉を偽りの道具にされ始めた時の事を。
・・・・全てが忘れられない・・・あの痛みを、後幾度味わえば・・今も味わうのかと思うだけでうんざりと・・・何だこれは？・・・・何だこれは!!なんだというのだこの子供は!!!

神であるが故に味わった十数万年の痛みにのたうっていたヴァルガブルは、痛みが吹き飛ばされる驚愕を味わい、神として世界に生じて初めての、本当に初めての動揺をきたした。
たった一人の少女の足跡によって。

ティファは、金色の触手に取り囲まれても一切の抵抗をせずただ囲まれるままに、ただ見られるままに、己の全てを最初からヴァルガブルに差し出してた。
顔を少し上向きにした程度で体の力を一切抜き、目を柔らかく閉ざし、己の身をヴァルガブルに委ねたのだ。
知ってほしい、分かってほしいから。ヴァルガブル神の言う通り、言葉は不要。
ティファという存在そのものが何を願い、その為に何をしてきたのか全てを知ってほしくて。
体を覆い尽くし、身にまつわりつき、体を探る触手に嫌悪すら感じず、ひたすらに祈る。例え力加減をされず、己の魂が直接的に傷つけられ無数の針に刺されたような痛みを感じようとも、身動き一つせずに。
自分の願いを知ってほしい
ただその願い故にこの場にいる事を

そしてヴァルガブルは知った。現在の神が四神から三神となりても天界・地上界・魔界を救いたいと願い、―ティファ―が生まれ、それからたった数年の後に、この世界を救う目標が大魔王討伐のみから世界全てを、本当の意味で救いたいと精霊王達までも巻き込んだ壮大なる目標へと変わった事を。
これがティファの口からの説明であればヴァルガブルは信じなかった。壮大な目標を掲げた嘘で、自分を感心させ天界を覆う自身の結界を解きに来た悪しき者として扱い、天罰たる雷でティファ打ち据え塩の柱にして終わっていた。自分の猜疑心でティファの言葉を端から信用せずに。

だがこれは違う、ティファは違う。この触手は、捕らえた者の記憶と精神の深淵迄も覗き込む。
そこから流れ込んできたのは温かく優しい、そして途轍もない願いであった。
三界に住まう生命を救いたいと。誰も傷つかず恨まずに救う方法がないかを考え苦悩する三神達が見えた。その願いを成就させんと直向きに前に進むティファは、其の度の途中で様々に遭い、泣いている時が幾多もあった。
救おうとしている者達は、知らず幼いティファを傷つけ心無い言葉を浴びせ差別し、時にはモンスター達を庇うティファを魔物と言い放ち迫害までしていた。
だが力あるティファは其れ等に一切抵抗するしなかった。ただ後ろに庇う者達が、モンスター達がいれば迫害がやむまでその小さな体で庇い、時には抱えて必死逃げ、力を相手に向ける事を遂にはしていなかった。
なぜ？力があるのに使わなかったティファの心情を探ろうと、ティファの成り立ちの底の底へと潜り、赤子に戻ってもまだ潜れることに訝しみながらも潜った先に見たものは・・・・嘆きと怒りと諦めの心であった

どうして・・・・私は死ぬの？
病気だからだ、治らない、治療する術がない、いつ死ぬか分からない、見舞いにすら来なくなって私の入院費だけ払っている両親、祖父母たち・・・・野垂れ死にするよりいいのだろう、治療は無くとも対処療法で延命出来て、薬の治験者にもうってつけだと医者も看護師も喜んでいるのだからいいだろう。生きているだけで役に立っているようで、嬉しい・・・・嬉しい筈だ・・・この者は知っているのか・・

命を無常なる運命（さだめ）とやらに奪われる事への、己ではどうしようもできない理不尽に対する怒りを、嘆きを、そして諦めを、そして・・・己の心の痛みを誤魔化す方法でさへ身に付けてしまった哀れな子。

世界中にそんな不幸なものがいると言ってしまえばそこまでだ。この子供はまだいい。飢えず・雨風に晒されず、最後には医者とは言え看取る者もあったのだから恵まれているというものとてもいよう。

そして、今は幸せなのだから前世の不幸がなんだというのだと言う者も。

しかし、ティファ自身がそれを悟っていた。自分は特別に不幸なのではないと。

そして、今この世界で優る肉体に生まれたのであれば、自分と同じく理不尽なる運命に泣いている人達を助けたいのだという願いの下に生きている事を。

ヴァルガブルは、何時しか泣いていた。非道なる仕打ちにあっても世界を呪わず、のみならず助けたいのだと何時でも微笑みを浮かべて祈る、この子供の心根がいじらしさに、猜疑心に満ちた己こそが薄汚い者になり下がったのだと知らしめられて。

シュルリと、触手の拘束力が弱まるのを感じたティファは、目を開いて辺りを見回す。

まだ囲まれており幾筋かの触手が体に張り付いているが、よく見れば触手の明滅はなくなっており、体に張り付いているのを更にじっと見てみれば、触手の先端が光を放っている。

其れは先程の背筋を寒からしめる光の明滅とは違い、心の底まで温まるような柔らかい光が、魂に付けられた傷をゆっくりとだが塞いでいる。

「・・・・ヴァルガブル様・・」

ティファは戸惑いの声で、ヴァルガブルに再び声を掛ける。自分の気持ちを、ひいては三神達と精霊王達の願いを本当の意味で知ってくれたのかと。

その戸惑いの声に、先程の狂気を孕んだヴァルガブルの声とは思えない程の、重みと温かみを感じる声が応えた。
「其方を信じよう異世界から来た子よ。」
「・・・・見たのですね・・・・私の―全て―を。」
「・・・其方は、今も昔も傷ついてばかりいる。其れでも懸命に前を向いて生きようとしている。だが、それに対してどちらの世界も其方に十分に報いていないように思えるが？」
見たことを、感じた事を全て正直に話すヴァルガブルの言葉に、ティファはくしょうする。
もう少し相手を思いやってオブラートに包めないものだろうか？これが現実にいる男性であれば、一生結婚できない頑固で不器用な男だろうと。
その思いも当然ヴァルガブルには伝わり、気配がむっとするのを感じてティファは我慢できずにコロコロと笑いながら、ヴァルガブルの問いに対して心に思い浮かべるのではなく言葉に出して答えた。
「世界に何かをして欲しんじゃない。私が、この世界に生きている人達が大好きなんです。」
「好き？・・・・・其れだけでここまでのことをしたというのかお前は？」
「？・・・そうですよ？」
「そうですよとは・・・・」
ただ本当に兄達が、家族が、幼馴染が、仲間が、味方が、周りにいる皆が大好きだから。
「三神様達も大好きです。大好きな三神様達の願いを一緒に叶えたいんです。」
手が届かない星に手を伸ばすのと同じくらい、壮大な願いを十万年もの間願い続けた三神達の願いを共に。
ヴァルガブルはその言葉に今度こそ悟った。最早自分が守らなくとも、三神達も天界も、地上界の者達も生きて行けるのだと。
魔界を沈めた時とは違い、彼等も力と知恵を付け、狡猾で醜い者も

増えてしまいながらも、それでも心優しい者達もまた同じように大勢いるのだという事を。
あの時は本当に、瘴気を浄化できずに自分達に守られてばかりいた弱き、今は人間と地上界のモンスター達の存在をいらぬ者だと敵視し、滅ぼそうと画策した者達を地の底に封ずるしか手立てがなかった。
争えば、争ってしまえば、その時は自分の手で弱い命を守る為に強かった魔族と竜族たちを傷つけても止めなければならなかったから。
地の底に落として百年後に、頭が冷えた筈だと地の底の者達に呼び掛けた。
瘴気の大半を自分の中に、残りを天界の一角にて全力で浄化させる事に成功し、大地の瘴気が無くなれば、時が経てば彼等も冷静になり、また元の様に仲良く暮らせるだろうと心弾ませて。
だが返ってきた言葉にいたく傷ついた。
貴方と天界はお気に入りの弱い者達だけを可愛がっていればいい！我等を気紛れに巻き込むな、二度と神なぞ崇めるものか!!
其れは自分の恩恵を振りほどき、訣別する呪いの言葉
以降魔界に墜ちた者達と心繋ぐことが出来なくなった。
神とは、崇められて初めて相手に恩恵を与えることが出来、心を繋ぐことが出来るからだ。
愛していた、間違いなく自分はどちらも愛していた！力が弱い子供達だけではなく、強い子達にも我慢を強いてしまったがそれでも愛していたのだ!!
切々と語ろうとも魔族達はヴァルガブルの言葉を無視し、彼が与えた言葉で騙す事を、謀り事を、傷つける事を躊躇いも無くする者達になり、其れでも数千年間繋がりを戻そうと見ていたヴァルガブルの心を冷え込ませていった。
何故私の心を分かろうとしない？分かってくれない！何故祝福であるべき言葉を悪しき事に使う!!!!
その苛立ちと悲しみはいつしか猜疑心へと傾き、五千年の後にヴァ

ルガブルに決意をさせた。
何時か悪意に染まった魔界の者達が、清らかなる天界を滅ぼしに来る。
そうはさせじと、現神達を選出して引継ぎ、その日の内に自身を巨大なる結界へと変貌させ天界を覆い尽くし、魔界の者達が魔界より容易に出られない様にと魔界の周りに空間のひずみを作った。
魔界から滅多に魔族・強大な力を盛ったモンスター達が地上に来ないのはそのせいであった。
そうして地上も守ろうとして、悠久の時が流れた今、自分の役割はもはや意味はないのかと、ヴァルガブルはティファに問う。
最早私は不要なのであろうかと

世界中の明日の為に⑨

・・どうしよう、私この事に対してなんて答えればいいの？

触手の繭に包まれたままのティファは、本気で苦悩する。もしかしたら先程の駄竜王にさせられそうになった事と同じくらいの、自分の半生を賭けるくらいの考えをしなければいけないのだろうかと、ティファは本気で悩みだす。

自分の者になれ、そうでなくば死んで仕えよとか言う大魔王

大好きだし捕まって僕の者になってという死神

痛いの嫌だろうからさっさと捕まって捕虜に戻れっていう魔王軍の皆様ご一同とか、私が答え辛い事はまぁそれなりにあったにはあったけど・・・・まさか前神様とはいえ、神様の人生相談受ける羽目になるなんて予想した事ない。この世界にどこぞの社説よろしく、専門家さん達による本気のお悩み相談室は無いだろうし・・・本気で困っな。

言われた事が壮大過ぎて思考が追いつかないティファは一旦存在云々は置いといて、此処までの道筋を思い起こして思考を纏めてみる。

そしたらなんだか超微妙な考えが浮かんでしまった・・・これってあれかな？病弱な弟妹の存在にお父さん・お母さん取られてぐれてしまった出来る長子達のお話なのかな？小説ではよくあったお話の一つ。

喘息や心臓病、或いは他の疾患理由で心配され両親の愛情を一身に受けたのが今の地上界で、健康で何でもオールマイティーにこなしてしまえるが故に、この子なら―多少ー放って置いても大丈夫と、勝手に期待されて放って置かれたのが魔界と・・・いう事は結論、浄化に対する労りの言葉もこれまで苦労かけたとの謝罪も無しに、いきなり魔界を沈めたヴァルガブル様が悪い。

ティファの記憶全てがヴァルガブルに見られたように、ヴァルガブルの記憶もまたティファの中に流れ込んできてしまった。

見る積りは無くとも見えてしまったので、どうしてここまでの大騒

動に発展してしまったのかヒントは無いと見ていたら、ヒントも何もどうでもよくなってしまった。
はっきりと言えば、このヴァルガブル神様はコミュ障と言えば早いのだろうか？とにかく言葉が全くもって足りてなかった。
この世界で命が生まれた時に発生したエネルギーは正しい光のエネルギーだけではなく、陰陽とある通り陰の闇のエネルギーも生じ、凝ってそれが瘴気になってしまった。
それらは最初こそ少なくヴァルガブル神様一人で対処できてたけど、生命が増えれば増える程、今の世界の様に生命エネルギーを循環させる事の出来る精霊達や天族たちの数は圧倒的に足らず、溢れて不安定なエネルギーが、凝ってさらに瘴気になっての悪循環になっていた。
生命は誕生するだけで大なり小なりエネルギーを発しながらこの世界に生じて、今はそのエネルギーを光の粒子に変えてこの世界の自然を循環させるエネルギーになってるとか。
十数万年前には無かったシステムだと、六大精霊王様達から教わった。
循環システムを支えるのには、沢山の精霊達と眷属達の力が必要な事も。
なのに、当時はヴァルガブル神様が一人でやろうとして、結局できず、世界に生じて数百年経った魔族と、同じくらいに強い子達に協力を仰いだのはいいんだけど、なんというか労りの言葉が足りてなかった。寧ろ何時労わったのかという程に言葉を掛けてなかった。
辛い事を共にさせなければいけないのが申し訳ないとか、他の生命は弱すぎて片方に負担を強いるとか、情けない自分を手伝ってもらい嬉しく思うとか。全部ヴァルガブル神様の頭の中で考えて終わって、結局その事を伝えていない事に呆れたよ。
これは本当にあれだ、頑固で不器用超えた、言葉足らずの父親のせいで一家が不仲になった様なものだろうか？
この―惑星―を家としての一単位で考えればそうなるし・・・・でもそれって・・

「そうか・・・・私は情けない父親なのだな・・・・」
「あ・・・・・」
「ティファ、そのせいでお前達に苦労を掛けてしまい・・・私は何と情けない神であったろうか・・・」
「あ・・いっやああ!!ごめんなさいヴァルガヴル神様!!!!」
落ち込むヴァルガブルの声に、考えすぎていたティファは何事かをすぐに悟ってしまい、瞬時に顔から血の気が引き、ついで埋まりたくなって大絶叫をして蹲ってしまった。
ヴァルガブルと繋がっている今、心に浮かぶ心情すら筒抜けであったのをすかんと忘れてた!!!!・・・・・死にたい！
あまりの無礼な事を考えすぎてしまった罪で死にたくなった!!
マジものの超不敬罪に、自分を断罪して首斬り落としてこの世とおさらばして地獄の底で埋まっていたい程に恥ずかしすぎる!!!!
「良い。」
「・・・・ふぇ?」
「お前が思った事は新鮮に感じる・・・ふむそうか、出来る子を放って置いて、弱い子ばかりを贔屓した駄目父か私は。」
「あう・・・・・でも、当時はそうするしかなかったのですよね?」
「どうであろうな。他にやりようはあったのだろうが、当時の私は・・・今もだが他者に頼みをせず、してもらう事に慣れていない。そして快く手伝ってくれたあの子達に、心で感謝していても口に出したかどうか怪しいものだ。」
ヴァルガブルもまた、当時を振り返ると自分を殺して埋めたくなった。
何故手伝ってくれていたあの子達にお礼の言葉を言わなかったのか。更に言えば、今の様な生命エネルギー循環システムを作れば、全員が楽になるのだと教えて上げなかったのか・・・・後から後から悔いが出てくる。―後悔―とはよく言ったものだと感心する程に。
思っていれば相手に伝わるものだと思っていた自分を本当にズタボロにしたくなってくるものだ。
ティファが立ち直り、今度はヴァルガブルの方が沈んでしまい、

ティファは思わず苦笑してしまう。
本当に第一印象の通りで、不器用で頑固な人だった。
今も、こんな駄目父はいらないだろうと落ち込んでグシグシトしてる。
要る要らないか・・・・
ティファは意を決してヴァルガブルに声を掛けた。
「ヴァルガブル神様、ヴァルガブル様はこの後の世界を見て長生きした方が良いと思いますよ？」
「・・・何故だ、もしかしたら私の行いが、今日この日の大混乱を生み出したのかもしれないだろうに。」
「いえ、そうであれば責任以て、この後に続く世界を三神様達や天族の方達、精霊王様達と共に大混乱をした世界を助けないとですよ。」
ティファの言葉にヴァルガブルは驚く。罪の所在が明らかになったかもしれないのに、元凶に名が息しろというティファが理解負の名者に戻ってしまった。
思わず触手で真意を探ろうとすれば、今度はぺしりと叩き落とされた！
「駄目でしょう。そうやって言葉を削って知ろうとして知った気になって、心で伝えた気になったのが、もしかしたらいけなかったかもしれないと分かったばかりなのに。」
言葉を惜しむなとティファに叱られたヴァルガブルは、目をぱちくりとさせ、大人しくティファの言葉を聞いてみる事にした。
「いいですか、私が先程の例えを考えた時、貴方様の事を頑固で不器用な父親だと思いましたでしょう。」
「・・・・その通りだ。」
「私からしても、貴方様を自然と父と思えるほどなのです。文字通りヴァルガブル様は、この世界に初めて生じた生命を見守って来てくださった父母神様です。
人であっても中には年老いた父母を邪険にし・・・・・まぁそういう事もありますが、少なくとも私達は父母様を大切にしたいです。父母が老いた分、子が育つのは当たり前なのです。子供の成長を喜ん

で、好い事も悪い事も逞しく育った子供に任せて、ご自身は孫やひ孫の面倒でも見るかくらいの気軽なお気持ちで長生きしても罰当たらないと思いますよ。」
今日この日の因果を生んだかもしれないのも事実だが、己の身を賭して瘴気の大半を浄化させ、誤解からとはいえ天界を十万年もの間守ろうとした思いは本物で、ヴァルガブル様はヴァルガブル様はなりに懸命に生きてこられたのだから。
始まりは、確かに言葉足らず地上界を贔屓しいたような誤解を与えてしまい、自分達は使い捨ての駒にされたのだと魔界側の心を冷え込ませてしまった事が元凶と言えるのかも知れない。
それでも、ヴァルガブル様が抱えた苦悩と悲しみもまた本物で、魔界が強者こそすべてとなって弱者を食い物にする道を選んだのも彼等だ。繋がりを再び求められた時、怒り嘆きの言葉をぶつけても、手を取る道は数千年もあったのを蹴ってしまった彼等にも一端がないとも言えまい。ヴァルガブル様だけの罪では決してない筈だ。
片方だけが悪い事だとはどうしても思えなくて・・・

「そうか・・」
「はい。」
ティファの言葉を、ヴァルガブルはとっくりと考えそして決断をした。
「私は結界から元の姿に戻ろうと思う。」
「ヴァルガブル様・・・・大丈夫なのですか?」
「お前は・・・・本当に優しい子だ。」
ヴァルガブルの決心にティファは危ぶみ、それをヴァルガブルは優しいと褒めティファの頬を触手で軽く叩いて宥める。
結界から元の体に戻る。言うは易く行うは難しとはまさにこの事で、戻ろうとした瞬間に、結界で全て力を使い果たしている場合は生命循環システムによって光の粒子となり輪廻の輪をくぐる事になる。
其れよりはいっその事、結界として残りながらも天界と魔界・地上界を行き来できる結界となればいいのではないかとティファは考え

てくれている。
　しかしそれではけじめにならない。己だけ安全な道を選び、生き永らえる事をどうしても良しとは出来ない。
　己の言動で振り回してしまい、この世界に憎悪を溢れさせ幾多の命が消え果てしまった事を思えば、身をもって罪を償うべきだ。
　戻れる可能性は一割にも満たないかもしれない。それでももしも戻れたのであれば・・・そう、夢を見せてくれた少女に愛おしさを感じ放し難いがもう行かせねば。
「触手の繭を解こう。行って、己達の願いを成就させるがいい。」
「はい・・・・随分と時間が経ってしまいましたが・・」
「ほう知らぬのか？」
「？」
　ヴァルガブルの言葉に、随分と話し込んでしまい時間が経ってしまったと言った言葉に投げかけれら言葉にティファは首を傾げる。知らないとはなんの事だろうかと。
　その答えは意外なようでいて、―自分―の様なものからすればおなじみの答えであった。
「繭の中の時間と外の時間は全く違う。今くらいであれば外では一分にも満たなかろうよ。」
「・・・・其れって精神世界と現実空間の時間の流れは違いますよという？」
「何だ知っておったのか。」
「いえ・・・・・初めて体験しました・・」
　私の大好きな読み物で散々出て来た奴を、まさか実際に味わうとは・・・・転生自体がそうだった。
「お前は面白い子だ。」
「・・・・」
「そしてとても変わっている。」
「どうも・・・・・」
　物凄く久々な変わっている子という評価にティファは憮然としながらも、やはり最後は笑ってしまう。

ヴァルガブル様こそ優しくて不器用過ぎて面白い方だと。
名残惜しいがヴァルガブルは眉を解き、そして自身の結界を解いていく。
巨大な魔法陣の文様が、上方から光の粒子に変換されほどけて行く様に、ティファは泣きそうになりながら見守る。
叶う事であれば、ヴァルガブル様にも生きていて欲しくて。
「優しい子よ。」
「・・・・・・」
「泣くな、其れよりも備えなさい。―天界の中―は、其方が思うよりも・・・いや、あの子達の情報で知っているか。最後まで気を抜かずに道を走りなさい。自由に走る事を―私―が許す。」
「・・・・ヴァルガブル様！根性でこの世界にしがみ付いてください!!じたばたと足掻いて!!!」
「そう・・・・しよう・・・・私の可愛いま・・ご・・・・」
その言葉を最後に声はふつりと消え、代わりに巨大な浮き島が目の前に現れた。
浮遊する浮き島は大小合わせて八つある。
どれも緑豊かで森が見え、滝が浮き島より流れでて空に落ちていく様は圧巻で、その美しさに息を呑んだ瞬間、イオナズンと思われる魔法の球体が数え切れないほど自分目掛けて迫ってくる。
いよいよだ、地上と魔界を―本当の意味―で追い詰めた元凶達にやっと会える!!
ティファの双眸に強い意志の炎が灯り、敵愾心に煌めかせなら上空に身を躍らせイオナズンの嵐を悉く躱していきながら決して天界から目を離さなかった。
元凶達を見逃さない為に

世界中の明日の為に？

十万年経った今この時も、天界全てがヴァルガブル様の結界に覆われているのを見て私はゾッとした。

―当時―であれば、それがヴァルガブル様のお力の強さの表れとして、私の全てを掛けても勝てない方だと自然に首を垂れていよし、悠久の時の流れを経ても、結界が維持されていたという事実に私は背筋が寒くなったんだ。

十万年もの間、結界をヴァルガブル様ただお1人で維持できる筈も無い。自然エネルギーを取り入れたとしても、維持しようと結界を維持する者がいない限り、出来るはずが無いからだ。

其れはきっと、ヴァルガブル様が時折目覚め、―外―の状態を知りたいと情報収集しようとしても、きっと嘘の情報しか教えていないのだと確信が持てるだけに、そいつらの事を考えるだけでも胸がむかむかとしてくる。

先程話していたヴァルガブル様は、憎まれ恨まれ、ご自身も魔界の人達に猜疑心を以て警戒しようとも、お心の奥底ではずっと彼等を愛し、百万が一魔界の人達がまたヴァルガブル様と共に生きて行きたいと言えば即座の応じる程の愛情を、しまっていたのを知った。

そんな方が魔界が滅びに瀕するのを知っていれば、彼等が何を言おうとも、周りが何と思おうとお構いなしに、魔界を強引にでも救おうとしていたのが分かった。

なのにヴァルガブル様はそうしなかったのは何故か？

このイオナズンの嵐で分かったわ！こいつ等か!!ヴァルガブル様の結界維持しつつも、魔界の惨状をきちんとお伝えしなかったのは!!

イオナズンの嵐を全て躱して上空から天界を見れば、背に羽が付いた天族の者と思しき者達が、憎々しげに自分を見れば嫌でも分かった。

先程ヴァルガブル神が自分を危ぶんでくれたのは、天界を鎖国から解き放ちたくないものがいた事を示唆していたのだと。

見るからに自分を攻撃する気で、両手どころか全身に魔力と闘気を満ち溢れさせている数百以上の天族の男女は、年齢はばらついている。。

最長そうなのは精霊王達の最長と言われいる、十五万年年世界にいると言われた地の精霊王程の者が数名で、後は年若い者達が後ろに付き従っている様に見え、魔界の現状を放置する様に誘導したのは最年長の者達が先導したのかと見てとれる。

自分を一番憎々し気に見ているのだから。

ティファの考えは、悲しい事に全てが当たっていた。

彼等は元々が、自分達とは姿も力の質も違いすぎる魔族と其の眷属等を気味の悪いものだと疎んじて来た。

だがそれは、生命を等しく愛していたヴァルガブル神の手前大人しくしていたが、あの大騒動の後、自らの首を絞めるような魔族達の言動を聞いた時、彼等と完全に縁が切れると喜び宴を開いた程であった。

清らかなるは自分達天族であり、力の弱い地上を見守り―適度に管理―する使命を持つ定めにあったのだと。

ヴァルガヴル神が結界となり、時折起きては外の様子を知りたがり、魔界の事も気に掛けられていたが、いつも同じ答えを返していた。

彼等は何も変わらないと

嘘は言ってはいない。瘴気が発生し始めた事は聞かれておらず、そう成ったとしても天界に助けを求めない魔界の現状は変わっていないのだと―本当の事―を言ったまでであり、どうとるかはヴァルガヴル神が決める事。

―偽り―を言ってなかったが故に、ヴァルガブルの嘘を見抜く力に触れる事無く今日まで来れたが、三神の若造たちが、此処十数年こそこそと何かをしていたのは知って不愉快であった。

自分達正しき天族達と、何故か精霊王達は仲が悪く、はっきりと言えば疎遠になっていた。

奴等はヴァルガヴル様に、本当の事を言わないと自分達を詰ってく

るのが悪いのだ。
　言い掛かりをつけてくる者達と疎遠になろうともどうでもいいと思っていたが、まさか三神の若造達と共に、あのような事を企んでいたとは!!
　魔の六芒星が地上に出現した時は、ヴァルガヴル神を起こし、元凶たるものに天罰を落としてもらうように要請しようとしたが、起こった事を見るうちに、それ以上の事が起きているのだと悟った彼等は、自分達の考えに賛同する者達をすぐに集め、天界に侵入しようとやって来る者に厳罰を下すつもりであった。
　待って来た者が少女一人で驚いたが、身に大魔王の魂などという汚らわしい物を宿した醜き者だとは先刻承知している!!
「貴様の様な薄汚れた大魔王の魂等という穢れを内に持つ者が！高貴なるヴァルガヴル神様をどう誑かし・・」
「この愚か者達が!!!」
　年嵩の老人の風体をした天族の罵倒に、ティファは瞬時にぶちぎれた。

　こいつ等は私の事をきちんと知っている！そうであれば・・・魔界のあの悲惨さも知っているだろうに・・・・ヴァルガヴル神様を誑かしたなどと!!お前達の方こそが！彼の方の御心に反した事をしていたのを棚に上げて!!
　自分も三神様達も、そしてヴァルガヴル神様も魔界の現状に心を痛めているというのに・・・・
「愚か者だと!!下賤なるものが高貴なる我等に向かってなんという事を!!」
「たかだか魔界が滅ぶなどという些事で、ヴァルガヴル神様を消滅に追いやった無知蒙昧なるものが何たる言い草を!!」
「お前の悪行はここまでぞ!!」
「見やい!!これ程の天族達が集結したのは、悪しき貴様を滅ぼす為ぞ!!」
　数に物を言わせた天族達は、たった一人出来たティファに対して勝

ち誇り驕り高ぶるが、ティファはそんな事はどうでもよく、怒りで胸を焦がしていた。

・・・・些事と言ったあいつ等は!!生命が消え果る事を些事と言ったのか!!!!

たかだか、こんなに小さな入れ物・・・どうして!!!

わなわなと震えるティファを、怖気づいたと勘違いした天族達が一斉攻撃しようとしたその時、ティファの大音声が身に落とされた。

「この馬鹿者達が!!!!!」

怒りに眩み、目を真っ赤にし泣きながら言葉を紡ぐティファの言葉が。

「お前達天族は知識として知っている筈だ!!この世界は、お前達が広大だと思っているこの世界は―宇宙―の中の!たった一つの小さな惑星の中での出来事でしかない事を!!!

広大な宇宙で、寄る辺なく肩を寄せ合うべき命同士である事を知って教え導くべきいる者達が!!知らない者達と同じ様な振る舞いをするとはどういう積りだ!!!

些事だと?広大な宇宙の中にて、青きこの星にて無事に生まれ育まれている事が!どれ程奇跡的な事であるか知っている者達が些事だというのか!!!!」

天界は、ひいては天界の上層部は知っている。この世界の仕組み全てを。

この世界は―宇宙の中の一惑星の中での出来事である―事を、そして近隣、其れこそ百光年先を見通しても、赤茶けた星しかない事を。

この惑星がどれほどの奇跡の上にて生命が育まれている事を彼等が知っているのは三神様達と精霊王様達からの情報で知っている!

文明が中世以前であり識字率すらが低い地上界に、天族を憎み切っている魔界に、同じ天族であっても鎖国のせいで満足に―外―の事も知らない天界にそれを教えても意味がない。

だが天界の上層部は知っている!!それを基礎に、命の大切さを説く事は十分に可能であったはずであり、それ以前に！自分の言った事を全て知っている者達が!!命を些事だと言った事自体が許せなかった!!

「知識も視界も広く持てる天族が！狭い惑星内で生命を蔑むなどという愚を犯すなこの馬鹿垂れ共が!!!!!」

その雷喝とも言えるティファの本気の怒気に当てられた天族達は、一様に腰砕けとなり、今度は彼等がティファを振るえて見上げた。

それ程の凄まじい怒気をティファから感じ、其の双眸は怒りの為に金色の炎が燃え上がったが如くであり、その瞳に睨まてるだけでまるで往年のヴァルガヴル神に叱られたように感じた彼等の顔からは生気が剥がれ落ち、ティファを見上げる事しか出来ず言葉も出なくなった。

そして、ティファを見守っていた者達からも言葉が消え果た。

パレスで見ていたダイ達は、ティファがなした事全てを見ていた。

何故天界の場所をああも簡単に割り出してみせた？

魔界全軍を以て、侵入した蒼天の空の結界をくまなく探すつもりであったバーン達はそこから声なく見ていたが、ティファが一喝した言葉のどれも理解が及ばない。

宇宙とはなんだ？惑星とは何の事を言っている!!この広大なる世界の事を指しているのだとすれば、狭いという言葉すらが理解不能であった。

そんな中、ダイだけが頭の中の―ナニカ―に導かれ、ティファが言葉を発するたびに、脳に直接的にイメージが送られていた。

宇宙と言われれば銀河系までもを見通し、惑星と言われた時、自分達が住んでいる大地を乗せた―星―を、ティファと共に外側から見ていた。

そうか・・・・俺達が広いと思っていた物は、こんなにも広い、広大すぎる世界の中にある小さな・・・・

「ティ・・・ファ・・・お願い!!!魔界を助けて!!!!」

この小さな星に生まれた俺達は、姿形・能力が違うだけで、小さな惑星に住まう同じ生命という家族ではないかと、その時にダイは理解した。ティファが何を思い、どうして彼等を助けようとしたのかを本当の意味で知りそして願った。

家族でも仲間でも、言葉はどうでもいい！同じ生命である彼等を救って欲しいと

果たしてその願いは通じたのか

「私は行く!!彼等を助ける為に!!!」

自分の言葉に彼等が大人しくしている間に、三神様達の下へとティファは浮遊大陸の中心にある神殿を一路目指し始めた。

この世界中の明日の為に

三千世界の空をも超えて

「ダイ！いきなりどうしたんだよ!!お前・・・ティファが言って事の意味が分かったのか？」

自分達と同じ様に、ティファの行っている事が分からず呆然としていたダイが、突然何かを理解し、その事を悲しみ魔界を救って欲しいと叫び上げたのをポップが何事かと問いただす。

まさかティファがダイに何かを教えたのだろうか？

親友であり、相棒でもある魔法使いの問いにダイは懸命に自分が知った事を伝えようとする中、天界にいるティファは通ると言いながらも逃げ回っていた。

自分の言葉に少しの間は呆けてくれていた天族であったが、伊達に長生きはしておらずすぐさま立ち直ってティファに追い縋り、攻撃を再開してきたのだ。

お陰で目に見えているのに大陸の中央にある神殿に直行できず、ティファは苛立ちを募らせるが攻撃は我慢している。

敵なれば相手をしても構わないし、追い縋ってくる天族ははっきりと言えば地獄の底に叩き落としてやりたくすらある。

全員地獄に落とせばあの冷徹補佐官殿が出て来て、世界の秩序と安寧を守る職にあるものが堕落し、職務怠慢だと言い放ちながら十六小地獄に落としてくれる筈だと信じてる！

そして炎の牙を持った獅子に何度も何度も喰われてしまうがいい!!

物凄く珍しい事に、ティファは今回の敵対相手の事情を、考慮しようという気が一切ない。

知らずにやってしまった人達、またはどうしようもなく戦うもの達にティファ生来の優しさを発揮する。

ただし、知っていて私利私欲でやらかす者共は地獄に落としてやりたいほどに嫌い抜き、もっと嫌いなのは他者を踏みにじっても正義は自分達にありという事を恥じも感じずに叫ぶ愚か者は、駄竜王と同じ

くらいに許しておけない。
だがしかしだ！こいつ等を倒してしまったら、三神様達が悲しむ。
其の一点において戦わずに逃げているのだが、後ろの天族達は自分達に恐れをなして逃げていると調子に乗ってバカすかと魔法を放ってくる様に辟易したくなっている。
慣れない魂の飛行にティファも疲労が溜まり、動きが遅くなった時囲まれてしまった。

しまった!!!
一方向などではない。上下左右どころか立体的な球体に配置された天族達に囲まれた事に、ティファは非戦闘はここ迄かと腹を括り、冷や汗を流したのを年嵩の天族が何を勘違いしたのか、その様を嘲笑った。
「今更我等の力を知り、恐れをなしたとてもう遅いわ!!!」
「我等の正義の力で死ねる己を幸福に思うがいい!!」

・・・・こいつ等を助ける為に、三神様達が必死になったと思うと馬鹿馬鹿しくなる。
愚かな勘違いをする天族達に、ティファは本気でうんざりとした。
自分が来なかった未来では、高確率で魔王軍が圧勝し、天界が滅んでいたであろう未来を回避する為に、労を惜しまず自分を転生させたとも必死に今日まで来た三神達を思うと、目の前の愚か者達を消し炭にしてやりたいほどに。
だが、矢張りそうもいくまい。
自分を取り囲んでいる者の中にも、私の言葉を聞いて迷い始めた物が数名要る。
その芽を潰すわけにも、さてはてどうしたものだろうと、少々すっとぼけた思考で思案している時に―それ―はやって来た。

遠くから聞こえた時は、自分が望む願望が幻聴となって聞こえたかと思えた。

其れが本物の音だと分かり喜びが胸を満たす前に、凄まじい風圧が自分を取り囲んでいた天族全てを吹き飛ばし、開けた視界の向こうにいたのは・・・

「ガルーダ!!!!!」

長年、自分を背に乗せてくれて世界中を飛んでくれた神獣ガルーダの姿に、羽音に、ティファの全身は喜び以外のものが吹き飛んだ。

何を言うでもなく、ティファは一目散にガルーダに飛びつき太いガルーダの足にしがみついて思う様に羽毛の柔らかさを全身で堪能する。

会いたかった・・・・ずっとずっと会いたかった!!

パレスでも、下でも、ずっとがずっと

「ガルーダ・・・・」

「―ティファ・・・・我は怒っているのだが?―」

「うん、本当は大戦がきちんと終わるまで会わないって・・」

「―お前が最後の頼みだというから聞いて、精霊界で全て見ていたぞ―」

「ごめんねガルーダ。でもね・・」

「―分かっている。我を戦いに巻き込まぬためであろう―」

あの決戦の日、ロン・ベルクンもとに行く前に二人で話し合った。

大戦がきちんと終わるまでガルーダは精霊界にて待っていた欲しいと。

その願いを、ガルーダは聞き届けた。

これが最後の戦いであり、この大戦が終わったらもう二度と戦う事をしないとう約束と引き換えに。

二度とティファの心が傷つく事の無い事を願って。今の自分の力量では、足手まといになる事も分かっていて。

大魔王達との戦いでは自分の出番は完全に無く、ならばティファの未来を良くする事を約束させて待っていたのだが、ティファの事を見ない日はなかった。

其れこそパレスでの人質生活の事も、駄竜王の仕掛け時もばっちり

とみては、様々な意味で怒髪天になった。
そして、ティファが単体で天界に乗り込んでもう我慢できずに来たのだが・・
「ガルーダ、私を乗せて飛んでくれませんか？」
幼きあの頃に、出会った時の言葉を持ち出すとは狡かろう？
八年前、どこ行くわけでもなく空を散策していた時、不思議でそして心地良い音に魅かれて見に行ってみれば、人の子がいただけで帰ろうとした時、いきなり背中に乗られて激怒して、二時間も乗せて降りろの攻防戦が懐かしく感じるとは・・・
「―良かろう―」
あの時とは違い、渋々とではなく快く引き受けてくれるガルーダに、ティファは嬉しくなる。
「―お前が空を飛んで移動するのは、我に乗ってか空飛ぶ靴の使用以外ないのだろう？お前の行きたい所を言うがいい。―」
優しくティファの頭を嘴でかしかしと擦り、望む場所を問う。
そこがたとえ地獄の底であろうとも、我が連れ行く。
ティファと共に有れるのであれば、三千世界の全ての空を飛んで見せよう

未来を目指して

十数万年前の因果から世の嘆きの一つが始まり、その因果を解きたいと十万年間思い続けた者達と、七千年生きて来た大半の月日を因果を憎みながら生きて来た者の願いを背に、五百年の年経た神獣ガルーダに乗った少女は、十万年間閉ざされ続けていた大空を自由に飛び回る。

ガルーダと共にいれば、何処へでも行けると信じ、良き未来を目指して

「・・・・つまり何か?俺達が広くって、これ以上のものはないって思っているこの大地と、魔界と・・あのどでかい天界をひっくるめても宇宙っていののほうが広いってか?」

「うん・・・広くて、何処までも果てがなくて俺怖かった・・・」

こんなにも広すぎる世界で、折角生きている自分達が殺し合いをしているのが悲しくなる程の広大さであった。

「信じられん・・・・天球技をいくつか持っているが、この大地の周りを星が回っているのではなく、この大地そのものもまたあの星と同じであり、その一つに過ぎんと・・」

「私も・・・俄かには・・・」

「・・・・・勇者君はどうしてその事を知ったの?」

知識があれど、ティファと違って外に伝える術がまだ未熟なダイの言葉を懸命に汲み取り翻訳したポップの説明に、学者並み以上の知識を持つアバンとハドラー達を以てしても、理解するのが容易な事ではなかった。

この大地が、球体であり星であると言われてそうですかと容認する者はまずなかろうし、失礼にならない範囲で質問をしたキルが正しい。

突然そんな事を言われても、頭がおかしくなったのだと決めつけず、どうして知ったのだと、理解する為に質問をしたのだから。

「・・・・さっきから、頭の中の何かが教えてくるんだ。バーンとの戦いの時も今も・・・・少しずつ、ティファの言葉の意味が流れてくるんだ。」
―惑星―と、ティファが言った時には意味だけではなく、ティファと共にこの星を外側から見たのだという事は秘っして。
其れは本当に突然、自分がどこかに・・・・そう、まるでラック＝バイ＝ラックで強制的に飛ばされたあの時のような感覚に翻弄され目を瞑ってしまい、目を開けた時にはそこは・・・・どういえばいいのだろう？
あの不思議な空間を、遠くには光る星があり何処までも果ての無い空間の中で、気が付けば隣にティファがいて・・・・そして
「ダイ兄、下を見て。」
ほんのりと笑う妹の言葉に従い下を見ればそこは
「あれが私達の住んでいる星、或いは惑星って言うんだよ。」
青い海と、緑豊かな大地が見える、美しいものを、ティファは惑星だと教えてくれた。
あんな素晴らしいところに自分達は住んでいるのかと思うだけで、胸が温かくなるが、疑問が湧いた。
、
「星って・・・今周りに見えているの？どうして丸いのに俺達は平気で立って生活できるのさ？裏にいる人達はどうして下に落っこちないの？」
ダイは、その空間にいる事自体に疑問を持たず、初めて自分の住む大地が丸い星の中にあるのを知った子供と同じ疑問をティファにする。
この空間は、きっとティファの仕業だと分かっているから。
「う～ん・・・そうだね～。この私達の住んでいる星には、物を下に引っ張る力があって、其れがとても強いんだよ。
ジャンプをただすれば地面に着くのは、この星が私達を星の外に落ちない様に守ってくれているんだよ。」
「そうなの？」

「そう、だから、この星の裏側の人達も同じように引っ張られてるから大丈夫。」
万有引力だのなんだのを小難しく言えるほどティファも詳しくはないので、自分の知識を総動員して噛み砕いた者を伝えれば、ダイはとても納得した。
「そうか、星が俺達の事を守ってくれているんだね。」
とっても、優しい答えを自分の中で見つけて。
そうだ、重力もそういう見方が出来るのかと、教えた積りのティファもまた納得をした。
自分達が、惑星の中から落ちないように守ってくれているんだと。
自然笑みが零れたティファの横顔に、ダイは胸が温かくなるのを感じる。
近頃は・・・・大戦が始まってからはティファの本当の笑みを見ていなかったせいだ。
俺の可愛い妹が、また素敵な事を考えてる。周りの為なんかじゃない、ティファだけが持てた素敵な考えが。

最近まではティファの事を太陽のようだと思っていた。温かい光で俺を、俺達を温めてくれるあの太陽のようだと。
でも違った。ティファは星だ。
俺達が様々な事に落ちてしまわないように懸命に引っ張って守ってくれる、まるでこの星の様ではないか。
そう思った瞬間、何時の間にかポップ達がいるパレスに戻ってきた時、叫んでいた。
この星の、同じ生命の仲間である魔界を助けて欲しいと。

その願いを背負い、ティファはガルーダと共に天空を舞う。
浮遊大陸の山間をすり抜け、湖を水面すれすれに飛んで攻撃魔法の弾幕を躱し、湖に起きた水飛沫を凍らされ壁になろうとも、ガルーダは急上昇し易々と飛び越えていく。
ティファが望んだ場所に連れていく為に、精霊界で知ったこの世界

の惨状によって流された涙を止めたいと、ティファが尽力している事を成就させるべく。
我の雛鳥が、雛鳥の家族達が、心の底から笑って暮らせる未来を築く為にも!!
「ガルーダ!!」
そのガルーダの羽の一部が凍らされた。天族達はティファ本人を仕留める為に、ガルーダを先に飛べなくさせればいい事に気が付き、全員が氷系呪文のみを使い始め、遂にガルーダの羽先に掠められてしまった。
錐もみしながら落ちていく中、ティファはガルーダの背から降りようとしたが、ガルーダがそれを許さなかった。
「―我の背中におれティファ!!―」
「でも!!私が離れればガルーダは!!!」
「―ふん!・・・これしきの事で!!!!我は神獣なり!!神獣ガルーダなり!!!―」
ガルーダのみを案じ、離れようとしたティファを降ろさず、ガルーダは今生の内で最大の声を張りあげ、双翼を力の限り伸ばし羽ばたいた。
其れは真空呪文と同じ風圧を起こす威力があり、ティファが落下していると思っていたのはガルーダが自らの体を回転させ、風切り羽まで凍らせた氷にひびを入れ、頃合いを見測り一気に氷を空中にまき散らす。
まき散らされた氷は、沈む事の無い太陽の光を乱反射させ、光の粒子の中を再び力強く跳び始めるガルーダを、あたかも神の言祝ぎを受けているが如く周りには映った。
神獣ガルーダと、そのガルーダの背に乗る少女こそ、崇め奉る主神たちが大事にしている・・・我等ではなくあの者達を・・・
「最早手段は選ばん!!―多少の被害―が出ようとも!!あの者の命を!!!」
嫉妬に目が眩む!我等こそ、この天界を長きに渡って守ってきたというに!!たかが数百年の時しかわたっていない神獣ガルーダ風情が

！大魔王という穢れを運ぶ愚か者が祝福されているが如く映る事すらが!!!

ティファの背筋に寒気が奔った。

これまでは中級でとどめられていた魔力が、上級に変わった事を感じ取り、相手のする事が分かりゾッとした。

この天界で、本気の死闘をしたいのかあいつ等は!!!

私に上級攻撃魔法をするという事はそういう事だ!!これまで碌に戦ってこなかった者が、力を振るって制御できる保証とてないのに!!!

浮遊大陸の端にいるとはいえ、民家もまばらに見える。それらに被害が及ばないと何故言い切れる？言葉による威嚇かと、そう思ったのが仇となった。

全方向から一斉に撃たれたイオナズンの嵐に、対処し損ねた。

あ・・・・・

もしもこの儘であれば、ガルーダが死んでしまう・・・・嫌・・・・あんな奴らの為に!!ガルーダが死ぬなんて!!!

ティファが、天界の天族に弓引く事を覚悟した時、ティファとイオナズンの嵐の間を、膨大な何かが駆け抜けた。

其れはまるで、竜ではなく、龍が天へと帰るように、蒼天の空を駆け抜けたようにティファには見えた。

其の龍は、蒼天を駆けあがり上方の天族達を散らした後に再びティファの前に戻ってきた。

「・・・・・ティンク・・」

その龍の一片たるものを見た時、ティファはぽつりと一片の名を呟いた。

長年、自分とノヴァの友達であるティンクが、憤然と怒りながら自分の方に留ったのを見て。

よくよく周りを見れば、龍と見えたのは大勢の精霊達であり、もっと見てみれば、先程自分を追い回していた天族と、そうでない天族が大勢いるのが見てとれた。

その姿を見て、攻撃をしてきた者達が一様に裏切るのかと罵るのを、此方に背を向ける彼等は懸命に声を上げていた。
「もうやめましょう!!この者は・・・この方は我等より強いのは私の様な弱き者でも分かります!!なのに一切の反撃をしてこないのは！この天界を戦場にしない為にしてくださっているのです!!」
「魔界があそこ迄滅びに瀕しているのを今日知って！私は・・・・私達の役目は命を見守り助ける事ではありませんか!!!」
「我等はこの方と共に魔界の生命を救いに行きまする!!!」
ヴァルガヴル神を謀っていた天族の長の一人に半数以上の天族達は反意を翻す。
彼等もまた、鎖国した天界内にて知らなかったから。
魔界の現状を、命が消えていく悲しみを・・・知った今となっては、己達の本分を全うしたいのだと吠え上げて。
精霊達もまた、ティファを攻撃した事に怒りをあらわにし、対峙するのを厭わない姿にティファは呆然とした。
「・・・・皆・・どうして？」
折角戦いに巻き込まないように弾いたのにどうしてと動揺するティファに、ティンクは満面の笑みを浮かべ、何気ない事を言うように答える。
「友達を助けるのに理由はいらないでしょうティファ。」

四神の願い

参ったな、其れって最高の口説き文句だよティンク。
そうだね、友達も仲間も家族も・・・赤の他人だって困っている時に助けるのが当たり前なんだ・・・当たり前なんだよ。
どうしてなんて聞くなんて、助けてくれた人に対して侮辱にも等しい事しちゃったな。
「そうだねティンク。」
自分の肩口にとまる、小さな友人をティファはそっと掌に乗せてお礼をする。
「ありがとうティンク、皆も。これで私の行きたいところに行けそうだ。」
「ふっふ！ティファはやっぱり私がいないと駄目ね。」
幼いティファが困っている時、ティンクがいつも助けてくれていた。
迫害されているモンスターを抱えて逃げる時も、どこに行けばそのモンスター達の為になるのか相談に乗り、意外に人間の世情に長けているので、ティファがお世話になった人達に贈り物をする時、いっつも金銭的にも物量的にも過剰になりすぎるのを、全力阻止して程良いものを選んであげた。
ノヴァとの手紙の遣り取りで、手紙を書いた事がないティファはどう書いていいのか分からず、とは言え鬼面道士の祖父に聞いても困られようし、かといってリンガイアの遠い地まで行っているの船長達に知られたくないので、最終的にはティンクに教わっり、本当にティンクにはお世話になりどおしなって、友人よりも姉の様なのかもしれない。
そして、三神様達の意に沿う手伝いをしているのを知っている、数少ないうちの一人で、無理をすると直ぐにすっ飛んできて叱ってくれた・・・・これって本当に・・
「ありがとうティンクねぇね。」
「ティファ⁉・・・・・手のかかる妹は仕方がないわね～。」

ティファの本心からの言葉に、ティンクは顔を赤らめながらもティファの身を案じる。
予定では六大精霊王達と共に、柱にいたすべての精霊達と眷属達で天界へと来て、彼の始まりの神、ヴァルガヴル神を説得して浮遊大陸中央の神殿へと行くはずが、ティファに全ての力を持っていかれて弾かれてしまった。
「ティファ・・・・もうね、ここまで来たら、全部貴女がやるしかないの分かってる？」
「ティンク・・・・うん、分かってる。分かってるよ。」
「・・・どうしてこんな事したかなんて聞かないわ。私達の為なんでしょう？」
「そうとも言えるし・・・違うとも言える。」
「なにそれ？」
「うん・・・・・うん、そのとおりだから。」
これはティンク達が償うのに命を懸ける事が、自分が嫌だっただけの話で、ティンクが言う様な綺麗な話じゃない。
六大精霊王様達とみんなの覚悟を邪魔した、単なる自分の我が儘だから。
だから正解で不正解という、ティファ独特の考えを口にしたのを、ティンクはティンクなりにティファの考えを読んで受け入れる。
「本当に手のかかる妹。いいわ、行って無事に帰って来なさい。」
「ありがとうティンクねぇね・・・私の大切な親友。」
別れを惜しむ様に、ティファは精霊達と助けてくれる側に回ってくれた天族達の作ってくれた道を力強く見据える。
「行こう！ガルーダ!!」
「―承知!!―」
力強い羽ばたきと、突然巻き起こった旋風の後にはもう二人の姿はなく、妨害する者達の背中を通り越し、易々と神殿へと到達をした。
神殿の入り口は広く、そのまま内部中央迄ガルーダは飛び続けティファの目当ての中央の間へと入り込む。
中央の間にあったのは、水色に光り輝く巨大な水晶体が浮かんでお

り、その前に三人の人物が、ティファを悲しみに満ちた目で見つめていた。
茶色の癖っ毛の髪を長く伸ばした青年は、ガルーダから降りたティファに近づき手を取った。
「どうして・・・君が来てしまったんだい・・」
「貴方が、人神様ですね。」
「うん・・・・そうだよ、初めましてだね・・」
ティファの問いに泣きそうになる人神の横に、白髪の神と髭を長く伸ばし、導師のような衣を纏った老人もまた、泣きそうになり瞳をしながら、人神の横に並び立ち、ティファの頭にそっと手を置く。
「馬鹿者が・・・・其方は、此処に来るべきではなかったのじゃぞ・・」
「竜神様・・・・・竜・魔神様でしょうか?」
「そうじゃ・・・・かつて我等は四神いた。しかしあ奴は、竜神は竜の騎士をマザードラゴンが代々産み育てる為の力を与える為に全てを使い切って消滅してしもうたが、あれは満足して逝ったのじゃよ。」
「・・・我等代々竜の騎士の父たる御方だったのですね。」
「そうじゃの・・・」
ヴァルガヴル神が最初自分に会って、龍の騎士の事を聞いた時四神が喜びはしゃいでいたと聞いた時違和感があった。
自分が知るのは三神様のみ。しかし、昔いたのだとすれば人神様と天神様が魔族の神の管轄は兼任するには相容れないと思って、魔族に近しい竜神様が兼任しているのかと問えば、あっていた。
竜の騎士を生み出し、紋章が初代から連綿と戦いの記憶を受け継がせるシステムを作るのに礎になられた方がいたのを知ったティファが、あらためて—四神様—達に敬意が芽生える。
本当に三界の事を救わんと、様々にじたばたした偉大な神々に。
「ティファ・・・ここまで来てしまっては最早其方を止めることは出来ない。」
「・・申し訳ありません天神様・・どうしても、友達が消えるのが・・」
「そのような世を来させた我等神の不始末。其方が謝すことは何もない。」

「天神様・・・」
金糸のような髪を短く刈りこんだ天神が、ティファの瞳を悲しように覗き込む。
見回せば、人神様も、竜魔神様も悲しい顔をしても怒ってはいない。もうここまで来たらやるしか道が無いから・・・私も、足掻こう

「始めましょう、天神様、竜魔神様、人神様。」
この世界の為に、再びじたばたしましょう

水晶体にヒビ入る時・・・

此処には、本来なら大勢の精霊達の命を力に還元して吸収してきた六大精霊様達がいる筈だったんだ。

そうでなければ、本来であれば目の前にある水色の巨大な水晶体を破壊する事は叶わないから。

これが、天界を十万年もの間鎖国させてい結界を維持していた法具。ヴァルガヴル神様が最後のお力を込めて結界を維持できるように作り上げたこの法具は、本来であれば三神様達・・・昔は四神様達が受け継ぐはずだったのを、表にいた似非天使の老害達が、力の未熟さに付け込んで支配権をそっくり自分達の物にした・・・・うん、あいつらギルディーって言っても良いよね？

そのせいで歪な箱庭が出来てしまった。魔界どころか地上が困った時も、彼等のお伺いを立てなければ行使できないなんてあり得なさすぎる。

この水晶を質に取られて長い月日ヴァルガブル神様は老害達に騙されたけれど、私がヴァルガヴル神様を説得できた事で、ヴァルガヴル神様も報告と現実が違いすぎるので速攻で水晶体の状態がどうなっているのかを知って・・・激怒してたんだろうな～。

私に内部の老害達の事を警告するくらいだから。

ともあれ、ヴァルガヴル神様が水晶体の権限を老害達から取り上げて三神様達へと移行されている。

だから、壊しても三神様達が周りに影響が出ないように水晶体の暴走を抑える事が可能になった。

水晶体を壊せば、天界が太古の昔の様に現世に顕現することは無い。それをしてもお互いに戸惑い、どう接していいか分からず良い事なさうだ。

メリットとデメリットがちっとも合わないのでそれはしない。

其れはしないけど、地上界との繋がりを良くし、魔界が外界と繋がらないように覆い尽くしているひずみを取り払うのが最大の目的。

「・・・・いきます・・・・」
静かな気配で、ティファは水晶体に近づく。
最早ここまで来てしまっては三神達であろうとも手が出せず、水晶体の暴走に備えるしか術がない。
泣きそうな三神達とは裏腹に、ティファの心は凪いでいる。
大丈夫だ、私の中には大魔王クラスの魂がある。それはきっと、畏れ多くも六大精霊王様達よりも強靭な器である事でもある。
膨大なエネルギーに他が耐えられなくとも、自分ならば保せられる自信がある。
だから!!

ティファは己の中に吸収された力を、水晶体に触れている両の掌に集め一気に放出わせずに、時間を掛けながら徐々に水晶体へと流し込む。
時間はかかってしまうが、一気に放出すれば自分の身も砕けでしまうのを避ける為に、慎重に流し込む。
大丈夫、慎重に何かをするのは万能薬作りで慣れている。本来の自分は外に出て思いっきり走り回って単純に動く事が大好きだ。
日がな一日、デルムリン島をダイ兄と共に駆けずり回って、皆で釣りして海で泳いで・・・疲れたら眠って楽しく過ごしていたいだけの、ただそれがしたいだけの子供だ・・・・・そうか、私はそんな単純な事がしたいだけの子供なんだ。
三神様達の悲願だとか、魔界を救うだとかそんな壮大な事よりも、憂いなく皆で笑い合って遊びたいだけの。

自分の心の底の、本当の願いにティファは漸く気が付いた。
ダイの大冒険の世界を救いたい、三神様達の手伝いをしたという願いよりも、心の奥底の願いは本当に単純で、そして一番難しい事をティファ自身が一番知っている。
自分達兄妹が受け入れられる世の中が来るとは限らない事も。
十年後どころか数年後も分からないのが無情なる世界だ。何の拍

子で人でない自分達を・・・・其れでも信じたい、世界は・・・・

世界など滅べばいい!!!

・・・・なに？

世界など滅べばいいと言ったのだティファ!!!

これは!!!

不意の声に合わせる様に、突然水晶体がティファを拒絶し弾き、三神達も水晶体の突然変異に戦慄を奔らせた。

「ティファ!!水晶体より離れよ!!」

「暴発!?違う！水晶体の権限がまた!!!」

「何故じゃ・・・これは!!この力の波動はあ奴の!!!」

水晶体は、ティファの触れている箇所を起点に少しずつ割れ始めていた。この速さでならば、暴発もしないだろうと油断なく見ながら安堵していた三神達は目を疑った。

水晶体が、突如として水色から漆黒へと変質し、三神達の権限が一部奪い取られティファを、水晶体を破壊するものを弾き、のみならずティファの手が指先より崩れ始めた！

「「ティファ!!!」」

「―ティファよ!!―」

「・・・・これは・・・」

タダならぬ出来事に三神達はティファに駆け寄り見ていく端からティファの体が砂の様に流れ出す。

三神達も伊達に神は名乗っておらず、時を止め原因を探ろうとするのを、憎悪に塗れた声がその行為を嘲笑う。

「もう遅い!!そいつは強制的に地上の体へと戻される!!!お前達の策は中途半端なまま潰えると知れ!!!」

今水晶体を壊せねば、三神達の策は成されない。これまで準備をしてきたからこそ水晶体を破壊できるだけの膨大なエネルギーを得ることが出来た、いわばこれが最初で最後の機会で、此処で失敗してしまっては魔界を救う機会は永遠に失われてしまう。

そして、中途半端に互いの現状を知った者達は、この後どうしてよいのか分からず混乱するのが目に見えている。
そして、魔界側はこう思おう。
気紛れに助けようとしたが、矢張り途中でやめたのではないのかと疑心の目を発芽させ、ならば力づくで奪うまでだと自然に発生したひずみのゲートを通って続々と地上に押よせよう。
それがなくとも、地上に対しての羨み嫉妬神を募らせ、やがて憎悪に代わり、魔界の滅びを加速させよう。
どちらに転んでも自分にとってはどうでもいい事だが。
「貴様正気か！貴様とて魔界の住まう者であろう!!何故我等の邪魔をする!!」
「貴様等が！我等を救うと考える事自体が烏滸がましいわ!!!俺を魔界の瘴気の浄化作用として働かせるべく！輪廻の輪の神に俺を永劫変われぬ者に身を堕とさせた貴様らが!!!」
「それは・・・・そうしなければ魔界が!!」
「貴様等の御託なぞどうでもいい！呪われた世を見続け！勝手な事ばかりを言う者達を見続けなければならなかった身にしたお前達等!!!勝手ばかりをいいよる呪われたこの世界など!!永劫争い続けるがいい!!!」
「貴様もこれで消滅するぞ!!今からでも遅くはない！術を解・・・・」
「だからどうした？」
「・・・何だと？」
「所詮消滅してもまた俺が俺になるだけの・・・・命を弄ぶ貴様等の言葉を誰が聞くかものか!!永劫に閉ざされた天界にて、地上と魔界双方が争うのを見て苦しみのたうち回るがいい!!!」
呪いの言葉と共に、ティファの魂はパレスの玉座の間へと強制的に戻された。
ティファの魂が戻った事で、当然ティファの肉体は動き出し、突然倒れ伏していたティファはすぐさま起き上がり、まだ身の内に残って

いる力を総動員し、天界へのゲートを、先程の神殿中央へと接続させ、辛うじて小さな、ティファならば通れる穴ほどの大きさに広がった。
これでまだやれると手を伸ばした穴は指先が何かを押したこつんとした音を立て、その先へとは通さなかった
水晶体の破壊が不十分な今、天界へのゲートもまた未開通であった。

ティファは先程の言葉と、今までの彼の者の言葉を思い胸中が苦くなる。

それ程までの思いで以て世界を憎んでいたのかヴェルザー

明日が欲しい

貴様等に俺の苦しもの何が分かる！分かるものか!!!

天界に、三神達に苦しみにのたうち回れと言った当の本人、ヴェルザーこそが苦しみ苛まれのたうち回る人生を送っていた。

寿命で死んだ事がないから分からないが、襲われ殺されても、瘴気の浄化の役目を拒んで侵され病で死のうとも、何をして死のうとも自分はヴェルザーである事をやめさせてくれなかった天界を呪いながら、数万年の時を渡ってきた。

浄化して救っても、それでも瘴気はなくならなかった。もとよりなくなる筈も無かった。

その事を思うだけで、魔界の領地に石像として封じられている胸の奥が、怒りと憎悪の炎が燃え広がる。

嫉妬・憎悪・謀・裏切り・羨望・渦巻く魔界の惨状に、始めの五千年くらいは本気で浄化をしていただけに、次第に魔界に渦巻く負の感情に振り回され、其れで死んで終わりになる事の無い、真の意味での永遠を繰り返させられるこの身が呪わしく、自分をこのように作り出した三神達を、許す事なぞ出来はしない！今まで好き勝手をしてきた魔界も同罪で、救われる機会などという幻想を！踏みにじってくれる!!

そのヴェルザーの怒りを、ティファはその小さな体で受け止めている。

未開通のゲートを叩いて触れる度に、ヴェルザーの怨嗟に満ちた怒鳴り声がする。

数万年の降り積もった怒りを全てを吐き出すが如く、ティファにぶつけている。

御綺麗で、何をしても最後には人々から好かれる小娘に何が分かると、人間の様に八つ当たりの言葉を吐いて。

その言葉は聞いているだけのダイ達の方が怒りを沸かせ、今すぐ魔

界のヴェルザー領地に乗り込み、ヴェルザーを滅殺したいと怒りを湧かせる程に。
そしてキルは主にそうするか伺いを立てようとしたが、バーンがダイ達と違って静かにティファを見ている事に気が付き口を噤んだ。
バーンは見定めようとしてる。ティファが、三神の側にいる天族・精霊王達率いる精霊達が何をしようとしているのか。
ヴァルガブル神の名が出た時から、バーンはティファのほぼ全てを知った。
矢張りティファは、天界と通じていたのだと。
予想は当たった。だがしかし刺客ではなかった。
どうやら何かの冗談である様に、三神とその側近たる者達は魔界を救うと言って必死に動いている。
それが嘘か誠か、真偽の定かをバーンは見守っている。
ダイ達もまたティファがしている事の意味を知り、途轍もない事をしている事が分かっても、止める気配がない。
それ程までに、ティファは必死だからだ。
未開通の入り口を何度も何度も叩き、握り締めた両拳から血が流れるのにも気が付かず、ティファは壁を打ち続ける。
拳から伝わる痛みを無視して。

これさえ壊せれば!!

「邪魔しないでヴェルザー!!そんなに他者の幸せ見るの嫌なら!!自分だけ閉じこもって二度と出てこない！引きこもり竜王になればいいだろう!!」
「そんな事で!!俺のこの怒りが消えるものか!!!」
「だからと言って自分の不幸を他人に押し付けるな駄目竜王が!!」
ティファは壁を叩きながらもヴェルザーの相手までしていた。理不尽で、ティファの方こそがヴェルザーの被害に一方的に遭わされ、危うく身も心も魂まですらが穢されかけたというのに。
始めはティファもヴェルザーの怒りを理解しようと努めていたが、

最早罵詈雑言の罵り合いと化している。
馬鹿竜王、駄目竜王、理不尽の八つ当たり竜王と・・・竜王の名の価値が大暴落する程に
言われれば言われる程にヴェルザーの怒りが深くなり、とうとうティファに対して言ってはならない言葉を叫んでしまった。
「貴様の様に真の痛みを知らない小娘如きが何を偉そうに!!!

其れはティファのが抱えている最後の秘密。今生において、決して表に出さない筈の痛みの秘密を、ヴェルザーは知らずこじ開けてしまった。

能天気で、御綺麗なはずのティファのドロドロとした怒りは、周りに沈黙を強いてただティファの叫びを聞かされるだけの場と成り果てる。

「どうしてこうも争いたがる!!助け合えばいいというのが綺麗事か⁉なら殺し合っているお前達は上等な者だって言いたいのか！相手を理解せず力づくをするのが高尚だとでも言いたいのか!!痛みを知らない子供のいう事だと！賢しら気な事を言うなって言いながら！憎しみを忘れず連鎖させる者が偉いのか!!他者を騙す者が賢いのか？それが偉大な大人だって言いたいのか!!!!」

ずっと心の中に仕舞っていたかった・・・魔界が死に掛けても、放って置くのが正しいと言った天族の老害達にたいして。そして先の大戦のせいで凶暴化したとはいえ、最早何もしない無抵抗なモンスター達を殺して英雄面した者達にも、其の者達にも恩賞を与えていた者達にも。

助けたのに、自分を騙して殺そうとしたはぐれ魔族を、人間を、モンスター達を、笑って許す事が出来る程、私は出来た者じゃない・・・ただ、仕舞っただけだ・・・・忘れようとしていただけだ!!思い出すだけで許せない怒りが湧くほどに・・それでも・・

壁に両手を押し付けたティファの瞳から、涙がぽたりと落ちる。

「其れでも・・・どうしても・・・・世界が憎めなかった・・・・」

どんな目に遭っても、どうしても、どちらの世界に生きている生命に対する愛おしさが消える事は無かった。

辛いと言えば包み込んで守ってくれる人達は確かにいて、同じようにそれ以上に苦しむ人が、それでも泣いていた自分を慰めてくれたこの優しい世界を・・・愛しい者達がいるこの世界をどうして憎めよう

「憎めないなら・・痛い事が繰り返される世界を変えるしかないじゃないか・・」

憎んで壊すことが出来ないならせめて・・・・

「痛みが全て無くせなくても、生まれてもすぐに死ぬしかない馬鹿みたいな世界を壊すしかないじゃないか!!!

誰かが泣いても叫んでも放って置かれる世界なんて私はいらない!!死ぬ定めに生まれたなんて言う馬鹿みたいな言葉が当たり前の様に吐かれる世界なんて嫌だ!

生きていれば痛い事も悲しい事も騙されて酷い目に遭う事があって!それでも次の日には笑える日が来るかもしれない!次の日が駄目でも次の次の日が!それでも駄目でもその次の次の日にはいい事があるかもしれない、助けてくれる人が現れるかもしれない世界が欲しいんだ!!!

理不尽な死が罷り通れない!生まれたからには未来目指して歩いていける世界が欲しいと思ってなにが悪いってのよ!!!!」

好きな人達もそうでない人達でも、誰もが太陽の下で笑い合える権利がある世界が欲しいと願う事の何が悪いというのだと、壁に手を押し付けたまま俯いて泣きながら叫ばれる其れは、まさにティファの魂の叫びの全てであった

嘆きの叫びに応える者達

酷い事をされた世界を嫌いになれず、憎む事も出来なら変えるしかないじゃないか

「いいじゃないか・・・・笑って過ごす日常を望んだって・・・」

今日も明日もその次の日も、家族や大切な人達と笑い合って生きて行くだけの人生を望んね何が悪いか

晴耕雨読の人生を望んで何が悪いか・・・宝石が欲しいのではない、財産なんて食べていける分あればいいじゃないか

名誉なんていらない、地位もいらない、そんなものなくったてデルムリン島のあの島で笑って生きてきた

外は、素晴らしくてそして酷く醜くそして・・・愛おし人達と沢山であった宝石箱の様で・・・・

「開けてよ・・・・開いてよ・・・・世界・・変えさせてよ・・・・」

最早腕を上げる力とて無くとも、ティファは気力のみで見えない壁を叩く・・・いや手を打ち付け続ける。

ボロボロと泣いて鼻水迄流しながら、其れすらもティファは気にもせずに壁を打続ける。

周りは、ティファの言葉の重さに縫い留められ動けずに、静寂の中心許ない音と、同じような弱々しい声が響き渡るたびに、聞いている者達の心をも打ち続ける。

賢人と呼ばれた者達がこの場には幾たりもいる。若き天才と師からも世間からも敵達からも言われた者とている中で、ティファはただの一度もその者達に問う事をしていない。

先程叫んだ言葉に応えられる者はいないと知っているかの如く

争いを無くす方法なぞ無い。生き物は欲深く、自然界の者とて清らかで無垢などというのが嘘なのを現実を見てよく知っているから

憎しみを捨てられないのもまた然りで、だからこそティファは自分の中にある怒りを誰に伝える事をしてこず、抱え込んで今日まで生き

て来た。
伝えるだけ無駄だから
自分の抱える怒りを伝えたとて、相手は驚愕して終わるのが目に浮かぶ。話し合いよりも戦って解決する方が多い世界において、自分の考えの方が異端で外れておかしなことを考えているというのを知っている。

だから誰にも問うつもりはない
周りを一切見る事無く、壁を叩き続けるだけなのもその証拠で、ティファは自分達に何も期待していないのが伝わってくるのが苦しくて・・・・それでも・・・それでも・・・

「ティファ・・・・」
「あ・・・にぃ・・・」
「ごめんね・・・ティファがこんなに苦しんでる事にも気が付かない情けないにいちゃんで・・・・怒ってたんだねずっと・・・痛いのも苦しいのも・・・全部嫌だったよね・・・」
「にぃ・・」
「苦しかったよね・・・・・」
「にぃ・・・うん・・・・苦しいの・・痛くて苦しくてこんな世界嫌いだ・・・」
虚ろなる人形の様に、ただ壁を叩くだけの妹の背後にダイも座り込んで抱きしめる。
ずっと共に育ち、母の胎内にいる頃から共にいた双子の妹の苦悩を分かってあげられないぼんくらな兄でいた事が情けなくて泣きながら謝る。
笑顔が良く似合い、島ではずっと笑って生きてきた妹に、こんな世界嫌いだ、言わせてしまう世界に怒りを感じながら。
ティファがもしも、先程の怒りに答えを自分に求めて来ても自分は答えられない。ティファが、魔界の者達が味わった痛みを自分は知らない。知らないのに答えられる筈も無く、それでも、痛み続ける妹を

一人にして良い理由にもならない。
　そして
「ティファ・・」
「にいに・・・」
「うん、御免な・・・俺賢くなったつもりでいても、さっきお前が言った事なんててんで考えてなくて・・・ただ目の前の敵倒せばそれで終われるだなんて・・・駄目なんだよなそれじゃあ。きっと世界はそんなんじゃあ憎しみだらけになってさ、お前が笑う日が無くなっちまうんだよな。」
　ポップも弟の後ろに座り込み、弟と妹をすっぽりと腕に納めて二人事抱きしめる。
　未だ二人の小さな体の弟妹達・・・そんな二人に痛みを押し付ける世界なんて・・
「ティファ、お前はどうしたい？」
「ハドラー？」
「この世界をどうしていきたいですか？」
「アバン先生・・・」
「ティファ・・・・一緒に考えさせて。」
「マァムさん・・」
「お願いだから、一人で抱え込まないで！」
「姫さま・・」
「憎んで争う事なぞ俺ももうごめんだ。」
「ヒュンケル。」
「気心知れたものとも争わなければならない世界なぞ俺ももういらぬ。」
「クロコダイン。」
「僕も痛みをまき散らす世界なんて大嫌いです！」
「チウ君。」
「ティファさ・・・いや小娘、お前の思いを言ってみろ。お前が抱えて来た言葉の後に、言いたい事がまだあるのだろう？」
「・・・ラーハルト・・」

その三人の周りを、仲間達が取り囲み、ティファの視線迄下がるようにと膝を折ってティファに優しく問いかける。
ティファは、この世界にどうなってほしいのか、心の底の願いを聞く為に。
ダイ達は知っている。ティファの中身がとんでも無く、この世界の常識が通じない所がある事を・・・それでも・・・
「お嬢ちゃんは何がしたい？」
「キル!!」
「お前は、どうしたい？」
「ミスト・・・・」
敵をも魅了してしまう優しい女の子なのを。
キルもミストも世界を呪って幾久しく、ティファの抱えている思いと痛みを知っている。
其れはきっと・・
「ティファよ・・」
「・・・・大魔王・・・」
「この壁を壊せばよいのか？」
魔界の神・バーンの方がより知っている。長い月日を魔界の惨状に心痛めながらも歩き続けて来た彼こそが。

バーンは静かに怒りを湧かせていた。真なる敵は矢張り天界であり、天族であった。
滅びゆく自分達を滅んでもよいではないかと言われたあの時、ティファが自分の思いを代弁するが如く怒鳴りつけなければ天界を滅しに単騎で行こうとしたほどに。
だがティファの言葉と、その後のダイの言葉で怒りが霧散してしまった。
怒りも憎しみも、狭い箱庭で行われているのに等しいと言われたのだから無理はない。
それでも、狭かろうが何だろうがこの怒りと憎しみは本物で、誰にぶつければいいと胸を焦がした時、ティファはそんな世界は嫌いだと

言い放つ。
憎しみの連鎖を止める事もせず、殺し合いを続けて痛みをまき散らすだけの世界など嫌いだと・・
天族にも、ティファ達の様に自分達を救いたいと言っていた者達が大勢いたではないか・・・一度だけ、たった一度だけ信じてみたい・・・六大精霊王達も動き、先の神までもがティファがしようとする事を赦したのだから・・・信じてみたいと、生まれて初めて敵対した者を信じてその手を取りたいと思ったのだから。
「其方は本当によく似ている。」
「う?」
「いや・・・・よい、何時か・・・・魔界が救われた時、其れでも余が生きていれば話してやろう。」
自分の若い頃の話を。
幼い頃、自分の国が魔界の勢力争いに負け、両親は命をかけて自分を助けてくれた。
その後魔界の奥地を放浪していた時、気紛れで助けたスライムの・・・
「私って、ディニアス君に似てる?」
「ッ!其方・・・」
「御免・・・・記憶流れてきて・・・」
「そうか・・・・よく似ている。あれも己を襲った者達の家族を余が殺そうとしたのを泣きながら止めて来た者であった。殺し合いを続けるなんて怖いと泣いてな。」
弱いスライムが、魔界の強者たる自分が守ると言っても驕る事無く、集まって来た者達の間をぴょんぴょんと忙しなく跳ねながら種族の間を取り持ち、常に笑っていたディニアス・・・古・魔界語で愛しき者と名付けた者に、ティファは本当によく似ている。
あれの子孫を代々手元で保護して守り、今は魔界にいる。滅びに瀕した魔界に。
そうであった・・・あれも矢張りティファと同じで、戦いだけで解決したがる余を良く叱って来た。無論そうしなければ攻め滅ぼされ

る時には悲しんでいたが何かを言ってくることは無かったが、それでも、命が消える事を・・・・
数千年の時を超えて、再び余にとっての―ディニアス―を見つけられようとは・・
バーンは沈思しながら、ヴェルザーに念話を送る。
聞こえているなヴェルザーよ。
バーン⁉・・・・何の積りだ・・・俺にあの娘の言葉を聞いたからには改心しろとでも？
まったく違うな、そんな事で改心できるほど其方と余達の業は軽くあるまい
ふん！分かっているのならば何が言いたい!!
礼を言いたいのだ
・・・・・・

「礼だと!!!!」
バーンの言葉にヴェルザーは念話ではなく、実際に驚きの声を上げてしまい、いきなりなんだとティファ達が警戒する中バーンは苦笑する。
「そこまで驚かずともよかろうに。」
「長年殺し合いをしてきた俺に！お前が礼などといえば驚くわ!!なんだ⁉そこの小娘の為に俺の機嫌でも取って！世界を救う手助けでもしろというの!!」
「まったく違うな。見当外れもいいところだ。」
「・・・貴様・・・」
ヴェルザーの言葉に、バーンが何ごとかヴェルザーに対して礼を言いたいのだというのを知ったティファ達、特にキルとミストは心底信じられないものに対する視線で主を見てしまった。
ヴェルザーの言う通り、長年血で血を洗う魔界の掟に従うが如く、殺し合ってきた相手に魔界の神が礼をしたいと言えばそう成るのは当然であるが、バーンは本気であった。
理由はごく単純で・・・

「いつの頃からで、何時までであったかは知らぬが、其れでも魔界の瘴気を浄化してくれた事に礼を言いたいだけぞ。」
「!!黙れ!!!黙れ黙れ黙れ!!!俺が望んだ事ではない!!五千年も働いても瘴気を無くせない馬鹿な魔界を!俺は見捨てたのだ!!今更礼なぞいるものか!!そもそも瘴気が完全に消えれば俺の魂は解放されたのだ!!輪廻の輪に再び戻り!ヴェルザーではない何かになれていたのだ!!!魔界など!天界と同じく憎んでも飽き足らんわ!!」
そういう約定の下で、自分は生まれたのを知って、本気で取り組んだのが馬鹿馬鹿しいと吠え上げるヴェルザーに、それでもバーンは言葉を紡ぐ。
「其方が五千年もの時間を守ってくれたが故に、―ティファ―という宝を得る事が出来たのだから。」
「・・・・・貴様・・・正気か?」
「其方も分かっている筈ぞ。」
バーンのその短い言葉に、ダイ達は訝しげな顔をしても自分には分かっている。ティファは間違いなく天界と繋がって育ったものだ。
おそらく魔界の寿命が近づき、神々が手塩に育てた使者なのかもしれない。
もしかしたら、どの時代であろうとも魔界が滅びに瀕した時点で、地上界にて目星をつけた者を育成して投入する手筈であったかもしれな。
そしてバーンは言わんとしている事は、使者が―ティファ―であった事だ。
自分だとて愚か者になったつもりは毛頭ない。八つ当たりをしてもだ。
ティファ程痛みを知り、其れでも世界が愛おしいなどと本気で言える者などいない。
敵を助けたいと、疲弊しても前に進んで救おうとする者もいないのは分かっている・・・分かっていても・・・この憎しみの炎が消える事は今すぐにある筈も無く・・・・
「もういい・・・お前達の好きにすればいいではないか・・・・」

疲れた
救う事も、怒りを抱き続け憎しみに駆られ続けるのにも、もう倦み疲れたわ
「こんな世界を、どうにかしたいのであれば好きにしろ・・・」
壁はそのままにして、其れでもヴェルザーは石像の本体に戻った。
ティファ達が、この世界をどうするのか、それにより世界はどう反応するのか高見の見物をしてやると心の中で毒づきながら。
赦しはしない、されど・・・あの叫び声に偽りの響きを聞き分けられなんだ俺の耄碌した耳に免じて見物に回ってやると言い訳をしながら、。
あの魂の叫び声に、何を感じて何を思ったのか知りたくも無いと背を向けて

取り払われた壁の向こうに願う事

ヴェルザーが自ら引いた事で、ティファは改めて未開通のゲートを見て驚きの表情をした。
音こそ聞こえないが、向こう側からもゲートが叩く三つの手が見えたからだ。
若い手は人の神様で、少し大きく厚みがあるのが天神様で、一番しわくちゃなのが竜・魔神様手であろう。
指先や、拳から自分と同じく血まみれになっても叩く手に、自分だけではないこの世界を変えたいと願っているのは自分一人だけではないのだと思うと、涙はまだ流れたままではあるが、ティファの顔に決意の表情が浮かぶ。
「皆・・・あのね！私ね!!その・・・」
「良いティファ。」
「ふぇ⁉」
「余が知る其方は、温かく優しい娘ぞ。他の事なぞ知らなくていい。」
「・・・大魔王・・・」
なぜ自分がここまでの事が出来るのか、知っているのか成せるのかを端的に説明し、その上で、共にこの世界を助けて欲しいとお願いすべきだと意を決したティファの言葉を、バーンはいとも簡単に止めてしまった。
天界の使者である事等、バーンにとってはどうでもよく、ティファの中を自分は愛しているのだからと。
そのバーンの言葉に続くように
「ティファ、お願い事きちんと言って。」
「俺達頑張っからよ。」
「ティファのお願い事を、私達にも叶えさせて頂戴。」
「皆でやればきっとうまくいくから。」
「この壁を壊せばいいのか？」
「それでいいかティファよ？」
仲間達もまた、ティファの正体を聞く気はなかった。

どんな者であれ、ティファの優しさが損なわれるナニカなどではないという、チウのあの言葉と思いを、この場にいる全員が受け継いだかのように。
その優しさに、ティファはころりと涙を流し、自分の願いを口にした。
「この壁を壊せば、天界は魔界とも地上界とも繋がれるの！世界助けられるかもしれないから壊して欲しいの!!」
漸く、ティファの心からの願いを聞き届けられた者達は笑みを浮かべ、ダイはティファを抱えたまま、静かに闘気を練り始め、右横ではポップがブラックロッドに、左隣ではバーンが光魔の杖の宝玉に、それぞれが魔力を注ぐ。
奇しくも、同じように闘気は無くとも魔力を物理的攻撃力に昇華させられる理力の杖を持っている二人は、同じ発想に至りそれを以てゲートを打ち砕こうとしている。
三人が力を練る中、ティファも最後の力を振り絞る。
これを壊せれば世界は・・・
四人は示し合わせたが如く力を高め合うのを、周りは静かに、そして祈る様に見守る。ティファの言う通り、痛みをまき散らす世界が変わる事を願って。
天界と繋がったからとて、其れが可能であるかどうかなど誰にも分かりはしない。
其れでも、酷きことが罷り通る世の中を変えたいという声を、万民に届ける機会である事には違いなく、この壁が壊れる事を望んで。
力の高まりを互いに感じ、誰が言わずとも全員が一斉に壁に向かって力を最大限に放出をした。其れはこれまで散々に戦い合い、互いの力量が手に取るように分かるようになった結果であり、これまでの戦いが無駄ではなかったと言われた気がした四人は、心の儘に力を放出する。
しかし壁にひびが入るが、容易には壊せなかった。世界全てを遮断させていた結界の強度は凄まじく、自分達を以てしても力及ばないのかと嘆きかけたその時、最後のとどめの拳がダイとティファの頭上を

通り抜けた。
まだ闘気系の万能薬を一度しか飲んでいなかったハドラーが二度目を飲み、渾身の一撃を壁にぶつけたその瞬間、ガラスが割れるような音共に壁は破壊され、三つの手が伸びるのを、ダイとポップとティファが思わず握りしめた。
奇しくもポップが人神の手を、ダイが天神の手を、ティファが竜・魔神の手をそれぞれにとって。
その瞬間世界全てが繋がり、荘厳な声が響き渡る。
生ける者全てには本能は当然ある。その本能が、響き渡る荘厳な声が、神々のものである事を、耳にした瞬間から理解させられた。
自分達は今、天井の神々から直接声を掛けられている事を。
地上では周りを見回せば、日常的にそこかしこに住んでいる全ての精霊達が顕現し、そして祈りの姿で空を見上げる姿を見て誰もが確信をする。
本能が教えてくれた通り、神々の声が聞こえているのだと。
声が聞こえた瞬間に本能が教えてくれた事を疑う程の事を、神達が言われたのだから疑うのは無理はなかった。
世界が嘆き悲しむ世にした事が申し訳ないと、天上の神々が謝罪してきたのだから。
神と呼ばれている自分達の力量不足故に、生きとし生ける者達が苦しむ世界にしてしまった事が申し訳ないと。
謝っても許される事ではないと承知しても、其れでも詫びさせて欲しいという言葉を、一体誰が神の言葉だと直ぐに受け入れるのだろうか？
神とは人間達からすれば偉大な力を持ち、地上が闇に覆われた時助けてくれる光の様な存在だと信じて生きていただけに、自分達の力量が及ばないと言われたとて分かりようも無かった。
人間からすれば、神が時折起こしてくる奇跡の偉大さを信じて来たが故に。
魔界側からすれば、十数万年も自分達を見捨て、今更何を言うのだ等怨嗟の声が溢れても、其れでも三神達は黙って受け入れ、其の度に

申し訳ないと泣きながら謝り続ける事に、人間達は本物の神だと知っても戸惑い困惑をする。
其れはまた、ダイ達も同じ思いであり、ポップが一番にティファに尋ねる。
「ティファ・・・・俺さ、神様達がこの世界と繋がったらさ・・・すんごいお言葉が来るんだと思ってた。」
例えば、争う心を静めて我らの話しを聞いて欲しいとか、互いに傷つけあう世界を共に救おうとかをポップは想像し、ダイ達もその通りだと頷くのをティファは神様ってそういう者だと受け取られていたのかと知る事になった。
だが、自分が知る三神様達は
「ポップ兄、皆も、神様達もね、私達と同じなんだよ。」
「同じって？」
「えっとダイ兄も私も皆だって失敗して、悩んで苦しむでしょう。三神様達も同じで、天界が世界を分断してしまったせいで争わせる事になったのをずっと悔やんで、その事を謝りたかったんだよ。」
世界は他にも争う理由が無数にあれど、少なくとも魔界は天界が沈めてしまったせで滅びの道を辿らせ、その因果が大戦へと実を結ばせてしまい、これまで数多の地上界と魔界の者達が争い死んでいく一因を作ってしまった事を、許されるはずが無いと分かっても、其れでも詫びたかったのだと。
その思いは、徐々に地上界にも魔界にも浸透し始めている。何を言われようとも、幾度も幾度も詫びられれば、許すかどうかは別にしても、其れでも神々は真剣に己達の罪を断じて詫びているのだという思いが伝わって。
「謝ったからって!!俺達が救われるってのかよ!!!」
その思いが真剣であればある程に、死に瀕した魔界の者達の怒りがいやがおうにも増し、一人の魔族の言葉を皮切りに、謝罪など何の意味があると憎しみを込められた罵声が上がる。
その瞬間、世界の生き物達全員が見た。十数万年前の諍いを、そしてそれ故に魔界が沈められた事が、頭に映像が流された。

魔界の罪を知らしめる為では決してなく
「我等の力が及ばず、魔族達に過酷な道を歩ませてしまった。」
「そして、滅びる迄僕等は何もしてこなかった。」
「許される事ではないと分かっている。其れでも我等に、魔界を救う事を赦して欲しい。」

「「魔界を天界のある次元迄引き上げ救う事を赦して欲しい！」」

これこそが三神達の願い。
魔界を地上界にではなく、天界の次元迄引き上げて傷ついた魔界の地を修復し助ける事を赦して欲しいと。
これまで地上界を魔界が傷つける要因となったのは天界にあり、どうか彼等を助ける事を赦して欲しいと。
三神達の言葉に、地上界も魔界もまた沈黙を以て応えた。
この神々の願いを、応とも否とも言える者などこの世界に居る筈も無く、一体何と言えばいいのか分からない中、ティファの横に膝を付いていたバーンが立ち上がる。
「ティファよ、余の言葉もこの世界全域に伝えられるか？」
「え？あ！ちょっと待って!!コネクト・・・・うん、この魔法陣の上に立てばいけるよ。」
「そうか・・・・ティファ、ありがとう。」
「・・・・・大魔王？」
バーンの問い掛けに、急いでこの場も再び世界と繋がれるようにしたティファは、深い笑みを以てお礼をしながら自分の頭を優しく撫でるバーンに不安を覚えた。
何がと言えるわけではないが、其れでも胸騒ぎがするのが自分だけでは無いようで、見回せば兄達もキルもミストもバーンを不安な様子で見ている。
静かで穏やかなバーンの姿に、何故これ程の胸騒ぎがするのかが分からない。

それは魔界の現状の元凶を知っても、何の感情も見せない事が却って不安を煽るのだろうか？
そんな周囲の不安をよそに魔法陣の上に立ったバーンは、朗々とした声を発する。

「余の言葉が聞こえるであろうか。」
「この御声は・・・」
「まさか!!」
「貴方様は!!!」
「バーン様!!!」
「魔界の神の声!!!」
バーンの声に、いち早く気が付いた魔界の者達が次々とバーンに縋りつく。
「大魔王様!!いったい今世界では何が起きているというのですか!!」
「先程の神々の言葉の真意は一体!!」
「我等の苦境たる元凶は矢張り天界に!!!」
「あの者どもを滅ぼす許可をどうか!!」
「馬鹿者共が!!そんなことをしたからとて魔界が救われる訳でも・・」
「ではなにか!!奴らの気紛れの慈悲に縋れと？」
「そんな事!!地上界が許すものか!!!」
その言葉は実に千差万別であり、現状を知りたがるもの、魔界を助けるというのは本当であろうかと疑う者、元凶を滅ぼすという者達・・・そして、自分達の事を地上界が許すはずが無いと嘆く声が多数上る。
その思いは無理も無いと、バーン自身がよく分かっている。生存を賭けた戦いとは言え、此方が一方的に仕掛けて来た戦いの歴史の積み重ねによる業が、直ぐに解けるなどという幻想を抱いてはいない。
たとえ相手が滅びようとも、許す者の方が少ない事を。
だから
「地上界の者達よ、余はバーン。現在の魔界のおいて、最高権力を担う魔界の神・大魔王バーンである。」

「あんたが・・・・あんたが俺達の故郷にあの柱を落としたくそ野郎か!!!」
「神々の宣託なくば!!我ら全員が死んでいたというのに!お前達が助かろうなどとむしの良い事を!!!」
「魔界のせいで!どれだけの人間が死んだと思っているんだ!!」
「死にそうだから同情しろっての⁉だったら死んだ者達はどうなるってのよ!!」
地上界からの怨嗟の声を、バーンは黙ってその身に一身に受入れる。
バーンはティファ達の様に、無償で魔界を助けて貰えると端から思っていない。
それ程の業を、双方に持たせてしまったのは、ひとえに天界だけのせいでは無い。
ティファの言う通り、助けを求める事を試みもせず、ひたすらに戦いだけで解決しようとした行いの結果でもあるのだから。
その責は自分がとらなければいけない
「其方達の尽きせぬ恨みと怨嗟は、余にも分かっている。許せぬという思いも。」
理不尽な死の痛みを、喪う事の悲しさを自分達が一番知っている。その言葉に激怒の声が上がる前に、静かなバーンの言葉が世界に響き渡る。
「その恨みの全てを余の首を以て静め、どうか魔界全土を助けて欲しい。」
―ディニアス達―の言う通り、争い奪う事だけを考えていた結果、生まれてしまった因果の代償は払われなければならない。
自分の首を以て、業をどうか沈めて欲しいとバーンは地上界と天界に首を垂れる。
魔界の神が、首を差し出すが如く深く深く首を垂れる

それぞれの覚悟と・・・・・

戦に負ければ、敗軍の将がその首を以て責任を取るのは当然の事。
大戦を仕掛け、挙句知らずに互いの生存権を賭けさせられて戦っていたのならば尚更で・・・それでも私は・・・

深い、其れこそ深海の如く、或いは深淵程の深みを帯び、もしかしたら神々よりも威厳を感じた声が発した言葉に、聞いた者達は即座には理解できなかった。
彼の者は今何と言った？首を・・・・
その瞬間、三界は再び沈黙が支配した。
天界は、魔界の神とまで謳われた大実力者自らが、己の首を以て魔界を救って欲しいと、滅ぼす筈であった天界と地上界の二界に助けを乞うっている事が信じられずに。
地上界は、お伽噺でも聞いた事の無いような、其れこそ天上の神と同列に語れそうな大人物が、平然と自分の首を差し出す事に。
そして魔界は己達を守る為に、自らの命を差し出そうとしてくれている、自分達にとっての神の慈悲深さに、救ってくれる嬉しさよりも、そうせねば救われない自分達がい惨めで、そうせざるおえないこの状況をどうにもできない自分達の無力さが呪わしく。
三神達は戸惑う。本来であれば命を懸けていたのは自分達であり、消滅する自分達が全ての責を負う事を、後は今まで育てて来た後継者達を披露し、以て三界の共存の道を模索して欲しいと運ぶ筈であったのをティファに止められた。
今のところティファは己の魂と器の大きさに助けられ消滅するようには見えないが、この事態をどうするつもりなのだろうか？
地上界では王達も困惑をする。確かに大戦で魔王軍に負けていれば、地上が消された事を鑑みれば大魔王の首を取る権利は有しているとも思える。
しかし、先程事の発端を見せられた直後に、このような事を言われても困るというのが各王家の反応であり、うかつな事が言えずに沈黙

している。
そして地上の大多数の者達も其れがあるからこそ、何も言えないでいる。
贔屓の様に自分達の先祖を優遇し過ぎた・・・・そこから先は不遜すぎる考えなのだろうか？

少しずつ世界に啜り泣きの声が響き渡る。
其れが魔界からの声だと、心ある者達には分かる。
その啜り泣きを、ロロイの谷の者達もまた沈黙の内に聞いている。
自分達は、実際に死兵となりても戦った魔界の者達の思いが分かる。きっとこの声の中には、ティファに様を付けて呼んでいた彼等の声も混じっているのだろう。
自分達を犠牲にする事を厭わず故郷を守ろうとしていた彼等は、敬愛する主を喪わなければ魔界は救われないのかと、無力感に苛まれているのが、この場にいる者にはよく分かる。
各国で王は違えど、剣を携えたその日から、国と王と民達を守ると誓った騎士と兵士にとって、己の主が首を差し出す事態を考えただけでも身の内から食い破られるような胸の痛みを感じる・・・・彼等の無念はいかばかりか・・・・
ノヴァは暗くなり、星空の下浮いているパレスを見上げる。
この事態を一体どうするつもりだろうかと、内部にいるティファを見ようとするかのように。
その様子を隣で見ているマトリフ達もまたパレスを見上げる。
この事態を引き起こしたのはきっとあの子で、その先の答えは持っているのだろうかと案じながら。

外界が静かな啜り泣きで満たされる中、パレスの玉座の間はハチの巣をつついた騒ぎになっていた。

「大魔王!!俺達はもう戦いたくない!!!助けたいって言ったのにどうして分かってくれないんだよ!!」

「ダイの言う通りだ！俺は・・・俺達はもうあんたを倒すとかそんなの考えてねぇんだ!!」
「一緒に歩く道がある筈よ！神様達が言ったように魔界が天界に行った時、そこを束ねる貴方がいなくなったら大混乱にしかならないの分かってるの⁉」
「レオナ姫の言う通りです！大魔王、古来よりの習いで敗者の将としてその首を以て鎮めようとしているのでしたら間違っていますよ!!こんな結末を！魔界が許すわけもなく、また憎しみの連鎖が増えるのみです!!」
ダイが、ポップが、レオナもアバンも言葉を尽くしてバーンを反意させようと躍起になっている中、マァム達はどう止めてよいか分からず、其れでもこんな事をして欲しくないとダイ達の言葉の合間にやめるように幾度も言葉を放つ。
しかし、バーンは静かに笑っているのみで、ティファを抱き上げ頭を撫でて宥めようとしている。
ティファが、壊れてしまったから
「いや・・・バーン・・・・・や・・・・・いやよ・・やめて・・・・」
「ティファよ、余は十分、いや十二分に生きて来た。長く辛い事も多かったが、其れでも余を慕い共に歩いて来てくれた忠臣達も幾足りもいて、其れなりの良き人生であったよ。
今生でディニアスに二度も見え、其方と出会た。其方達ならば魔界を悪いようにはしまい。
ここらが潮時なのだ。」
魔界の神がいなくとも、天上界の神々とティファが、今後の魔界を守ってくれようと思えるだけで憂いはなくなり、心が凪いでいく。
反面、自分の首を差し出した衝撃からか、ティファが泣き崩れ自分の衣服を握りしめながら何度も嫌だと泣いている。
憐れな程で、まるで自分の家族を人身御供に差し出すのを拒む様に、気が動転しすぎて瞳孔迄開いてしまい、全身をがたがたと震わせ、声を出すのも覚束ないのに幾度も自分の名と、いやだとしか言葉を発さなくなってしまったティファを、バーンは優しく抱きしめる。

「七千年・・・・神達からすれば瞬きの様であっても、余にとっては長き時であったよ。だからティファ、嘆くことは無い。老いた者はいつか死ぬ、たったそれだけぞ。」
静かで優しい言葉をティファに掛けながら、それはダイ達にも言い聞かせている言葉でもあった。
犠牲になるのではない。老いた者が寿命で死ぬると変わらんと優しく宥める様あ言葉に、何時しかダイ達も啜り泣き始める。
全てはもう、地上の人々の答えを待つしかない。勇者一行とは言え、敗軍の将の扱いに口を出せる権限はなく、世界中の者が断罪すると言えば止めることが出来ないのが分かっているからだ。
そんな中で、キルとミスト、そしてハドラーだけが沈黙をしている。バーンの死を止めないのかとラーハルトが詰った時、主が死んだ時はともに地獄に行けばいいと言われて即座に悟った。
ハドラー達もまた覚悟を決めている事を。
キルとミストは、もとより主が死した時は供をする気でおり、ハドラーもダイ達が大魔王を討ち果たした時は、世が少し落ち着いてからひっそりと人知れずに己の始末をつける積りであり、その事が一層ティファの心を打ち砕いたのだ。
彼等を犠牲にしてこの世界を救おうと思った訳ではない。彼等だけが悪いわけでは決してないのに・・・・
其れは子供の我が儘でありまさしく綺麗事であるのを承知して。
自分の手でハドラーを倒そうとしていたくせに、自分達の手で大魔王を倒す策を練ってきたくせに、いざ命を懸けられた時、これ程怖ろしい事だと知らなかったから。
自分だとて散々に似たような事仲間達の前でしてきて、これしか道がなかったと言っていたくせに、いざ自分ではない親しき者が命を懸けるを目の当たりにするのが、これ程怖ろしい事だと知らなかったから。
心が痛くて耐えられなくて、砕け散る思いを知らなかったから・・
勝手な事だとは分かっている。
それでもと願う事が止められない。

―誰か―にバーンを止めて欲しい。ダイ兄や自分達では最早止められない。
バーン達に近くなり過ぎた自分達ではもう・・・誰でもいいから・・お願いだから・・・

心を壊す程の嘆きに満ちたティファの願いに応える様に、一人の男の言葉が世界に響き渡った

「お前さんの首なんぞ貰っても誰も喜ばんぞ。」

其れは慈悲深く止める声でも、まして嘆きに満ちた声でもなくどこかぶっきらぼうで、それでいて温かさが籠っている様な不思議な声が、直ぐにまた聞こえた。

「首を貰って誰が嬉しいって言うんだよ？首になってお前さんは何を償う気でいるんだ？」

其れは叱責に近い声なのかもしれず、子供が馬鹿言った時叱る親父の様な物言いであった。

「少なくとも俺はお前の首なんていらん。」

幾夜の苦しみを癒してくれるものの為なら・・

大戦が始まる前は、俺は何も知らないガキだった。ただ剣を振るっていれば、強ければ王も姫様も守れる騎士なんだって、騎士を気取ったガキだった。

今の大戦じゃねぇ、ハドラー大戦が始まってから、俺の人生は激変しちまった。

自分の弱さを幾度も突きつけられ、ハドラー達の強さに翻弄され無力さに何度泣いたか知れねぇ。

そして、勝った後の俺の人生は真っ暗闇に閉ざされちまった。世界は平和になって、かみさんがいて可愛い女の子供もいるってのに、外で遊んで抱き上げてやる体力すらない廃人と化した俺が残ったのみ。

家族の重荷になっちまって、何度死んじまったほうがあいつらの為になるかと思ったか知れねぇ。

痛みにのたうち、其れでも死ねない変に頑強な己の体を何度呪ったか知れねぇ。

こんな身になって何度も思い知る。世界の運命とやらで、不意に不条理に幸せを奪われ閉ざされる辛さなら、俺にだって分かるさ・・・・。

其れをやめて欲しいと悪夢に叫んでも、助けが得られねぇ事も儘あるんだって知っちまった。

ガキだったあの頃の俺には分からなかったが、今なら分かるようになっちまった。

廃人と化した俺の肉体を、レイラもマァムも嫌な顔一つ見せずに見てくれるお陰で、俺は狂わずにこの世界の片隅で、ひっそりと息をしながらも辛うじて生きたいと思える。

苦しい夜を超えて、朝日を浴びながらあの二人におはようと言う為に生きて行こうと思える。

絶望の淵を、狂いそうになる思いを癒してくれる愛しい者達を守る為なら、どんな手段も厭わないその気持ちを、分かるようになるってのは良い事なんだか悪い事なんだか・・・・そして、助けて欲しいと伸ばした手を取ってもらった時のあの喜びも知ったんだから、良しと

すべきか
アバンとマトリフ様と・・ちっこいティファのお陰で俺は生きられてるんだからよ

ロモス王国の過疎化しているネイル村の奥にはマァムの家がある。
家の奥にはハドラー大戦で重傷を負い、今も寝付いている父ロカがいる。
寝室のベットで身を起こし、隣で付き添って座っているレイラの手を握りしめているロカは真剣に言葉を紡ぎ続ける。
魔界を死に物狂いで守りたいという思いは、きっと自分の家族を死に物狂いで守りたいという思いと同じなのだろうと確信して。
一家の大黒柱が、大戦の責任を取る為に死のうとしている。自分もハドラーをアバンと共に討ち取ったが、今回はそれではいけないのではないのかという思いを伝える為に。
傍らのレイラも、魔界の神の言葉を聞いて憂えた顔をしている。どうやら短気で戦ってばかりいた脳筋な自分の考えは今回はあっているらしい。
少なくとも自分の周りの人間が、大魔王の死を望んではいないようだと。
死に掛けている家の主を、誰が好き好んで死なせたいのだというのだらうか？

「俺はロカ、今はネイル村の奥で寝たきりになっているもんだが、かつては勇者アバン一行で戦士してたもんだ。あんたが今大戦のラスボスの大魔王バーンか。」
ロカの名乗りに、地上でロカを知る者達全員がざわつく。ロカは先の大戦で、アバンに次ぐ功労者であり武闘派で有名であった。
其の身が廃人と化しても魔王軍と戦った者として。そのロカが、敗戦の将の首を要らないと言った理由が分からない。
それこそ、ロカをよく知るカール騎士のセインも、元主のフローラとてもだ。

あの勇猛な戦士は、一体どう言う積りで大魔王バーンにあのような事を言ったのだろうか意図が全く読めず困惑するしかない。

「そうだ、余がバーンだ。」

そのロカを相手に、バーンは些か面喰いながらも挨拶を返す。

己の首を以て大戦を終結に導き、魔界をよしなに頼むと告げ地上界と天界双方の返事待ちをしている所に、いきなりお前の首などいらんと言われた。

自分の首の価値は安い筈はなかろうに・・・・・余の首だけでは足らぬのだろうか？

「ロカ・・・そして沈黙を続ける地上界の者達よ、余の首だけでは足らんというか？」

「・・・・は？」

「それでは困る。足りぬかもしれぬだろうが晒し物にしても永久保存してもよいからこれで収めてくれまいか？」

「・・・あんた・・」

その物言いに、話し掛けられたロカは無論、世界全土がフリーズを起こし、ロカは内心で唖然としてしまった。

地上側の困惑の沈黙を！そんな風に歪曲してとったのかこいつは!!

魔界を救う為に生きて来た大人物たる魔界の神の首を！晒し者にしたいなどという非人道的な者がいないからこその沈黙を!!

「他の者は余に従っただけぞ。敗軍の将は余・・・」

其れを分からず見当違いな事を切々と言うこいつは・・・・

「あんた自分で一体何言ってんのか分かってんのかよこの大馬鹿野郎が!!!」

短気で沸点の低い事で有名なロカが、珍しく怒らずに話し合おうと頑張ったのをバーンは無下にしてしまい、本気で怒鳴られた。

「あんた何にも分かっちゃいねえ!!!あんたは一家の大黒柱だろうが！死に掛けてなくなりそうな家が、大黒柱迄なくしちまったら誰が支え

んだよ！言っとくけどな!!ダイ達やティファ辺りがやってくれるだろうかと考えてんなら間違いだぞ！

確かにあいつ等なら滅びそうな魔界を救おうと躍起になって助けようと奔走してくれるだろうさ。けどな！その為にあんたに犠牲になってほしいって誰が言ったんだ⁉魔界で泣いている奴等!!お前達はそれでいいのか！大黒柱の首渡して守ってもらえて万々歳だってのかよ!!!!」

キレたロカは、そのまま魔界側を煽りに煽り始める。お前達は誰かに守ってもらうべくめそめそとなくだけでいいのか、そのまま一家の主を売り飛ばして生きていければそれでいいのかと。

そして地上側にも問うた。

「この大騒動の真の責任者を問うって言うんだったら、さっき知ったヴァルガブル神か、今はいなくて無理ってんなら三神達ってのも大魔王と共に責任取るのが筋だと思うがどうなんだよ？」

・・・ロカの煽りと不敬すぎる物言いに、沈黙をしていた世界は再び大混乱をきたした

憎しみの連鎖を・・・・

「貴様!!我等が大魔王様の首を喜んで差し出すとでも思っているのか!!」
「大魔王様!!お願いです!我等の事を思うのであれば!死んで責を果たそうなどと言わないでくださいませ!」
「我等がこの地で生きてこられたは貴方様の慈悲のおかげなのです!!どうしてあなた様の首を差し出した我等が!その後をのうのうと生きていけましょうや⁉」
「地上界の者達!バーン様の首は渡せん!!価値が下がろうとも我等も魔王軍の高官の身!!
其方達の土地を調べ上げ!軍をどこに配置するかも全て手配もしたは我らぞ!!」
「地上界の戦死者の数も当然調べ尽くせる!!其の御方は渡す事できずとも!その数と同じ身を差し出す事を我等は誓う!!!」
「だからどうか!!大魔王様の身は!!!!」

ロカの物言いに、すすり泣く世界の沈黙を破ったのは魔界からであった。
当初はロカの目論見通り、煽られ発奮した魔界側は当然大魔王に生きて欲しいと縋りついたが、その後は物凄く予想の斜め上を行かれてロカは再び沈黙して頭を痛めた。
どうして命の遣り取りしたくないから止めようとするこっちの意図を全て曲解してくるんだよこいつ等は!!
俺は何度も死んで償うのは間違いだって!ドストレートに言ってんのにどうしてこうも勘違いされんだよ!!
どう言ったらこの勘違いから抜け出してくれんだよこいつ等は!!
ロカはベットの上で病とは別方向で悶え苦しむ。自分の馬鹿な頭を物凄くフル回転して伝えた思いが、こうも勘違いされたら泣きたくなる。
だがこれで、地上側も分かった筈だ。魔界側も大魔王を決して死な

せたくないのだと。
自分達の身を捧げてでも守ろうとしている事を。
もう自分以外の誰でもいい！魔界の言い分を砕く奴出て来てくれ!!どちらかの言った事を実行した日には！魔界と地上界と天界の間に新たな憎しみの連鎖が生まれてしまう!!
其れだけは駄目だ!!
「だから!!俺が言いたいのは魔界だけが責任取んのはおかしいって言いたいんだよ!!魔界が取るってんなら！魔界の始祖達に頼りっぱなしだった天界も取れって言いたいんだよ!!!」
これで伝わらなければどうすればいいんだよこん畜生!!
生来言葉よりも腕っぷしでの言語が多いロカは、これ以上なんて言えばいいんだと叫んでお手上げになる寸前、思いがけずすぐさま援護の言葉が世界に流れた。
「それは確かにそうかもしれませんね～。」

ロカのあまりな不敬すぎる物言いに、天界憎しの魔界側までもが絶句した時アバンののほほんとした言葉が三界に流れた。
今度は当代一の知恵者たる先代勇者が何言いだす気だと、ロカの言葉に呆然としたバーンはこんな時にも飄々としているアバンをまじまじと見る。
自分一人の首で大騒動を納める積りでいたのに三神まで巻き込んでしまっては、天界の怒りを買ってすべて元の木阿弥になってしまうではないかと危惧し、止めようとティファを抱えたまま一歩出ようとしたその時、ダイとポップに思いきり体を抱え込まれた!!
「アバン先生!!言いたいことあるなら今の内に!!バーンは黙っててよ!!」
「ダイ！絶対にこの頓智気大魔王様放すんじゃないぞ!!ティファ!!お前はそのまんまバーンにしがみ付いてろ!!!」
「うん！分かったポップ兄!!大魔王！アバン先生のお話遮ったら駄目なの!!やったらこの御髭全部むしるからね!!!」
「放さぬか三人供!!子供の其方らに・・・」

「「他人様の好意分かってない人は黙って聞いてて!!!!」」
もうロカや地上の好意が全く分かっていない大魔王を、子供三人叱りつけるその声は魔法陣通して世界中に筒抜けとなっており、物凄くあり得ない単語の数々と情況に、三界は様々な沈黙を何度したのか分からない程フリーズ起こした。
勇者達が率先して最大の敵を庇おうと、守ろうとしている気がするのは気のせいだろうか？
しかし仮に守ろうとしているのであれば反対に、悲壮感漂う魔界の神様に怒鳴りつけたロカもさることながら、黙っててだの頓智気だの、挙句が御髭毟るってなんだそれは！守りたいのか罵っているのかどっちなのか全く分からず、世界は唖然茫然としている。
だがダイもポップもティファも、そして言ってはなんだがハドラー達以外の全員が、大魔王の覚悟を本気で反意させようとしている。
アバン先生だったら何とかしてくれるだろうと見込んで、子供三人は頑張って覚悟がん決めしてしまったバーンの足止めに勤しみ、後は超絶頼りになる大人アバンに託す。
その様子に、アバンは苦笑する。
まさか武闘派のロカが、あんな事を言いだすとは思わなかった事もあり、これは大変な仕事を引き受けたかも知れないと。
其れでも嬉しく思う。敵を倒すだけが勇者達の目的ではない。困難にあえぐものを助ける事も勇者一行のすべき事。
弱り苦しみ嘆く者達を光の道を共に歩めるようする者達こそが、正しい勇者達だと信じて歩いてきた事が間違ってはいなかったと、目の前の子供達が証明してくれている事が嬉しくて。
己の生涯をかけてでも！
「先程名を告げられましたが改めて。私勇者の家庭教師をし、先のハドラー大戦では勇者をしていましたアバン・デ・ジニュアール・三世と申します。
先程仲間の戦士ロカの言う通り、今大戦の真の責任を問うならば、魔界の神たる大魔王バーンのみを責めるは片手落ちになり、彼の者の首を大戦の責任を問うために求めるならば、天界側の責任の所在も問

わなければ不公平と言わざるを得ないかと。」
先の大戦の功労者である戦士ロカだけではなく！大勇者のアバンを名乗る男の言葉に天界に巣食っていたいた害悪ともいうべき最長老達に戦慄が奔る。
あの男の言う通り、若造の三神達のせいで魔界の現状の元凶を最早隠し立てることは出来ず、世界全てに知られてしまったからこそアバンという男の弁が成立してしまう。
ヴァルガブル神は最早おらず、三神達の責任問題まで口にされただけでも天界の紋目は丸つぶれではないか!!
身勝手な思いで天界の威光を笠に着て、アバンの言葉を否定しようとしよとしたその時、小さな声が奔った。
「私達・・・・ずっと戦い合わなければいけないの？」
「困ってる人たち助けるのに、誰かが死ななくちゃいけないの？」
「仲良くしたらいけないの？」
「どっちかがいなくらないと駄目なの⁉」
「ずっとずっと憎み合う事が正しい事なの⁉どうして助けたいだけなのに誰かが死ななくちゃいけないのさ!!!」
一つの声は、少しずつ大きくなる。
其れは子供達の叫びであった。
魔王軍の襲来で、柱によって村を捨てざるを得ないかった子や、中には兵士であった祖父や父達を殺された子達までもがその叫び声の中に混じっていた。
もうご免なのだこんな事は。誰かが死ぬ事も傷つく事も苦しむ事も・・・そして彼の竜王の如く、憎む事に子供の心は疲れ果てていた。
魔王軍に父達を殺された時に覚えた憎しみの心は、たったの数か月であっても子供の心を疲弊させるのには十分すぎる時間であった。
彼等は幼いながらに、生きている限りこの苦しみと憎しみをぶつけあって生きていくのかと思うと、絶望するのには十分であったのかもしれない。
「もうやだ!!敵なんて死んじゃえって言うお母さんの顔いっつも怖くて苦しそうだ!!おじさん達もおばさん達も皆苦しそうにしてる！ど

うしてこんなに苦しまなくちゃいけないんだよ！魔界助ければ―敵―はいなくなるんでしょ！戦いなんてもういらない！戦いなんて!!どっかいっちゃえばいいんだ！」

其れは、一つの真理であったのかもしれない。

叫んだ子供の年は漸く十になったばかりで、難しい事は何一つ分からず戦いの元凶だとか責任取る為に命捧げると言われてもちっとも分らない。

それでも、魔界が住むにはいつ死んでしまうか分からない怖い所で、安全な自分達の住んでいる所を取ろうとして攻めてきた事は分かった。

なら、魔界が怖い所でなくなれば、もう戦いに来ることも無くなる筈。

―敵―がどこかに行けというのではない。魔界を助け、本当の元凶である戦いこそどこかに行けという幼い子供の言葉に、大人達は胸が潰れる思いがした。

無垢なる心で未来を歩くべき子供に、戦いの、憎しみの連鎖に巻き込んできた罪を自覚された時、幼い子供の懸命なる叫びに応えるものがあった。

「その子供の叫ぶ通り、戦いにこそどこかに行っていただきましょう。

私はカール王国の女王をしているフローラです。我が国は、今大戦の責任を大魔王バーンの首を以てとる事も、また魔界の者達の命を持って償うという提案に対して異議を唱えます。」

凛とした女性は名乗りを上げ大魔王達の言葉を拒否した。

「地上界の者達は知っている者もおりましょう。数か月前に地上を攻めて来た魔王軍の軍団長の中には、現在改心して勇者一行と共にこの地上を守る事を約束し、生きて償う道を歩いている者がいる事を。」

この事を知っているのは軍関係者か、それ以外は城勤めでも高官しか知らされていない事であり、まして庶民に知らされておらず、カール女王の言葉はまさしく寝耳に水であり地上界も魔界も騒然とする。

敵でそれも軍団長であったものがと。

騒然とする世界に、フローラは毅然と顔を上げて世界に提言をする。
「地上界を攻められ、死んでいった者達に深い哀悼の念を私は生涯決して忘れないでしょう！
それでも！今ここで私達は憎しみの連鎖を断ち切らなければいけません！
敵を赦せとは言いません、悲しみを忘れろとも言いません!!私の中にも許せない思いは確かにあるのです！
その思いを抱えても、カール王国の女王たるフローラが提言します。
どちらかが滅びなければいけない暗闇に向かう道を、未来ある子供達に歩かせない為にも、誰かの命を以て償うのではなく！罪を犯した自責の念に苦しみぬいても生きて彼等が償う道を行く事を提言させていただきます!!」

その毅然とした言葉に、続く者達がいた。
「我が国ロモス王国も、フローラ女王の言葉に賛成しよう。」
其れは一番に柱を落とされ街を破壊されたロモス王シナナの声であった。
彼もハドラー大戦と、今大戦で戦いの世を要らないと本気で思う。誰かの命が喪われるのも御免であった。
そして、バーンと同じく民を愛し守る為政者おして、彼の死を受け入れることは忍びなく、フローラの言葉に賛同をする。
「責任の所在と、償う方法は魔界を救った後で考えよう。それよりも今は我が国ベンガーナも。」
「リンガイアも。」
「テランも。」
「「その提案に賛同しよう。」」
フローラ女王とシナナ王の言葉を皮切りに、各王家全てが賛同する中、大勢の賛同の言葉が地を埋め尽くし始める。
「俺ももう戦いなんてこりごりだ!!家に帰りてぇ・・・」

「戦いなんてどこかに行けばいいのよ!」
「もう・・・・どこかで終わりに・・・」
地上もまた疲弊していたのだ。
長年い年月の争いと、いつ敵が来るかもしれないという怯えと連綿と続く魔族への恐怖と憎しむ心に。
赦せなくても、其れでも子供達に同じ辛さを与えたいという者は少なく、其れでもどうしても許せない者達の言葉も確かにあって・・死んだ者の気持ちはどうなると叫ばれるのを、周りは止めるでなく、同じ痛みを持つ者として慰め、そして説いていく。
苦しい時いつでも助けに行く。そして一緒に憎しみの連鎖を止めようと。決して一人にはさせない、共に乗り越えようと沢山の声が苦しむ者に届く。

「大魔王・・・・これでもまだ首を差し出す?」
地上のその様子を共に見ているティファは、バーンに問う。
世界は優しさに満ちようとしている。その道を邪魔するのかと。
「ティファ・・・・・余は・・・余達はどうすればよい?死以外の償う方法なぞ、他にあるというのか?何をしろというのだ!」
苦しんで出した答えが、優しい言葉で拒絶されたバーンは、どうすればいいと迷子の子供の様に頼りなげな面持ちでティファに問う。
神にもまして地上の大人達でもなく、バーンもまたティファに問う。
数多の者達がそうしてきたように、優しい料理人から答えを得るべく。
その問いに、ティファは優しく微笑み応える。
「助けをきちんと求めて、助けて貰って、世界の争いを無くす道を歩いていこう。」

魔界が浮いて助かっても、お互いに芽生えた憎しみの業は根強く残るだろ。
「憎しみを無くす道を探して、苦しみながらも一緒に歩こう大魔王。」
きっと世界はその事を赦してくれるはずだと信じて
なぜなら、世界は弱すぎも酷すぎもしない。
助けを求める声に大勢の手を差し伸べられ、多くの優しい思いの声が上がっているのだから

助ける手を弾いた報い・・・

余は・・・どうすればいい？罪の償いかたなぞ一つしか知らない道をずっと歩いてきたというに、突然全く違う道を指し示され行くように背中を大勢の者達に押されて・・・・余は・・・・

其れは本当に戸惑いと、未知なる事への戸惑いで、バーンは今生において初めて頭の中が真っ白になっている。

其れこそ大勢の精霊達をいきなり紹介しだし、この世の摂理の運行を滔々と語り出したティファの姿を見た時だとて怖れをなしても排除しようという思考が確かにされていて、今は全く何も浮かばない。

道を示す多くの光に、全ての事を焼き尽くされたが如くの主を、ミストもキルも、ハドラーも静かに見守っている。

此処まで来たのならば、全ては主の決める事。どうしても己の命で償うと言われれば・・・どうすべきかその時決めればいいと。

この流れではティファがまたもや泣いて、もしかしたらこの様子だとダイもポップもチウも泣き出しそうな気配に満ちている。

・・・・というよりはもう四人の目は早々に潤んでいる・・・主の返答を待ってこれなら、提案蹴った時にはもしかしたらもうひと戦起こりそうな気すらする。

主を反意させるべく、バランの時の様にボコって捕まえて説教だとか三人が大絶叫しながら主を縛り上げそうな気しかしない。

何なら負けたから言うこと聞いて大人しく助けられろとか、ティファ辺りが訳の分からない謎理論を主に押し付けるという案もありそうで怖い。

敗けたんだから勝った側のいう事全部聞くんだよとか大無茶言いそうだ。

ティファにはそういう無茶理論の下行動している所が多々あり、振り回されて来たキルとハドラーとミストはティファのひっどい一面をようく知っている。

私が勝ったんだから言うこと聞けという無茶ぶりな所を・・・・そ

こまでしても慕う者が多いのは、言うこと聞けの中身は生きろとか、仲良くして都下の類だからだ。
　された方としてはなんだそれはと唖然とさせれら、人生で培ってきたこと全てをひっくり返されるという傍迷惑さを伴う・・・・非常に複雑な優しさであるのが困る所だ。
　バーン様も色々と引っくりかえされれば混乱もしたくなるだろうと、三人の忠臣から心底心配されていバーンは、漸く思考が動き出し、第一声がこれであった。
「ミストよ、余は・・・・いかにすればよいと思う？」
　・・・・私にそれを問うのですかバーン様!!!
　出会って最早六千年以上が経つ主から！人生初の相談を!!それもご自身どころか魔界ともしかしたら地上界と天界の明日をも決めるかもしれないバーン様御身の処遇を私に相談されてどうしろというのだ!!!
　バーンとミストは何処か一心同体な所が多々あるが、よもや人生初に頭が真っ白になり思考が止まる経験をする日も同じとは何の因果であろうか。
　キルは親友の受ける重圧がとっても良く分かる。これなら大戦している方が遥かにましであろう。
　ただ魔界の為だけに戦う事を考えていれば・・・いけない！僕まで脳筋になってどうするとキルは浮かんだ思考を振り払うように首を振り、どう答えてもバーン様なら怒らないとアドバイスをしようとした矢先に、親友と自分の間に割り込んできたいけ図々しい者がいた！

「ミスト様!!」
「私達魔界の者一同は!!!」
「「バーン様の死など望みませんわよ!!!」」
　其れはキルの天敵たるミスト大好きの双子、アンリとセシリの声であり、続くように大勢の濁声が聞こえて来た!!
　魔法陣の効力で、先程の人生初のお悩み相談が筒抜けになっていたのかとようやく思い至ったバーンは、我知らず赤くなり、物凄く狼狽

したくなったが周りはそんな事お構いなしに話してる。
「バーン様!!あっしも!ゴロアも!!魔王軍一同は貴方様に生きていて欲しいんですぜ!!」
「嬢ちゃま!!どうかバーン様を説得して下され!!おら達の声聞いてくんなくとも嬢ちゃまならきっと聞いてくださるだよ!!!」
「武器捨てろって言うんなら今から魔界の火口に全部捨ててくる!!!」
「魔界から一生出るなってんならそうする!!」
「だから!!!!」
生きて下さい大魔王バーン様!!!!
魔界側の大勢は決していた。何があっても、何をしてでもバーンに生きて欲しいと願う事で。
そしてその想いは、確かにバーンの心にまで届いた。
ずっと、自分が全てを守らなければいけないと思っていた。自分よりも弱く、寿命のある彼等を何世代にも渡って守り通し、日の光に当たる道を歩かせてやるとひたすら前だけを見て歩いてきたがいつの間に・・
後ろを振り返れば、不毛の道は消え果て自分を慕う大勢の者達の姿がそこにはあった。
その大勢の者達が自分の生を願ってくれている。
そして自分を憎むはずの見知らぬ地上の者達が、助けたいと手を差し伸べてくれている。
このような事が赦されるのだろうか?赦されて・・良いのだろうか?
もしも赦されるならば・・・
不安に、心押しつぶされそうになりながらバーンは助けを求める手を伸ばそうとした。
誰かに助けられた事のないバーンが、初めて手を伸ばすのだから不安は無理からな事なのかもしれない。
未知なることは、誰にとっても恐れるのだから。
それでも、恐れを超えてバーンは手を伸ばし、その手を取ろうとしたその時、落雷のような音が何かに弾かれる音共に世界中に鳴り響い

た。
バーンが周りを見回せば、空気が帯電し発光している。そして抱き上げているティファに怪我はないかと見れば、ティファが怒りの瞳を天井に向け冷たい言葉を吐き捨てた。
「・・・・あの老害駄天使どもが・・・」
「ティファ!・・・・これはもしや・・」
「ええ!前神ヴァルガブル神様が魔界を地に沈めた後も!彼の方は魔界を案じていた!!もしも手を携えていけるならばと幾千年も言葉を掛け続けられ!!魔界から拒絶されても尚魔界の地に異変はないかと側近達に問うていたのを、其の者共は魔界が死に瀕しても何もないと嘘を以てヴァルガブル神様を謀っていた不忠の者ども!!
魔界が助かるのがかほどに憎いか老害駄天使ども!!!」
バーンが心の底から助けを求めんとしたのを邪魔した事がティファには赦せず、天界・ひいては三神達の心情を慮って天界の真の責任の所在を秘っする積りであったが、三界の明日を邪魔するものなぞ・・・
しかし、ティファが天界最長老達を嫌うように、最長老達はティファの事を大魔王バーン以上に蛇蝎の如く憎んでもいた。
魔界が助かってしまうはここまで来てはやむなしであるが!自分達以上の力を持つ者など天界の、ひいては世界の調和を乱すに決まっていると決めつけ、周囲が止める前に、最長老達の力を纏め上げ、デイン系の中でも最高峰であるミナデインを彼等は大魔王バーンと共にティファ諸共にせんと放った。
この異常で許す事の出来ない事態を作った元凶を諸共に。
人を、生物たちを正しく導くのは天界の!自分達天族の役目を穢す不逞の輩は力だけはあるようで、忌々しいハイ＝エント、ジ＝アザーズでミナデインを阻んだ!!
何故正しき我等の罰を受けないと苛立ち、―余計な事―をペラペラというのだと叱責しようとした声はかき消された。
「天界が・・・」
「神様達は良い人達なのに・・・」

「あいつらが本当の元凶なの？」
「お前達が魔界を助けなかったからこんな事になったのか!!」
―全て―を知った、怒れる地上と魔界の民達の声によって掻き消されたのだ

攫われた太陽

私には攫われる特技でもあるのだろうか？
ティファは胸の内で埒も無い事を考えているが、割と不味い状況で天族の長老達、ティファの言うところの老害駄天使共に魔法攻撃で追い回されている。
・・・・訂正する・・かなり不味い状況だこれは!!!

世界の真実が早々に世界全て（この場合は文字通り、赤子から老人、全ての種族含む）に伝わって、全ての非難が老害駄天使共に集まった。
当然だ。彼等が正しい天族として偽りなくヴァルガブル神様に・・・元をただせばヴァルガブル神様の結界を悪用して天界と魔界鎖国させなければ、人間同士の様に小競り合いや領土戦争はあったかもしれないけど、少なくとも魔界が滅ぶかどうかの瀬戸際での生存かけた殲滅戦前提の大戦争なんて起こらなかったんだから無理もない。
同種同士でも争うのが生き物の常だから、戦争が零だなんてお花畑にな思考は無いけど、此処まで悲惨な事に放っていないと思う。
それがなくとも瘴気で魔界の三分の一が滅んで、出生率よりも死亡率の方が高い状況なんて洒落にもなってない。
魔界側は無論だけど、彼等を赦せないと言っていた人達までもがその非道さに怒りの声を上げ、遂には天界の身内からも非難の声が高く上がった。
事ここに至っては、三神様達も庇いきれないのか、それともミナデインを使ってまで私と大魔王を殺そうとした事が・・・・まさか三神様達を・・
「ティファよ・・・・余は・・・あの者どもを・・」
「流石に彼等を・・・あいつ等を赦せとは言いませんよ大魔王。―アレ等―はこの世界には居てはいけない・・」
「それは貴様の事だバケモノが!!我等の領域に招待してやる！孤独の

うちにて死ぬがいい!!」
　此処迄されても敵を赦せというかとティファに確認を取ろうとしたバーンの腕から、突如としてティファの姿が掻き消えた。
　一瞬の出来事で、瞬く間もなくティファの姿が唐突に消えたことでバーンもダイ達も顔を青褪めさせ狼狽える。
　しかしバーンは狼狽えながらも思考を止めず、何が起きてどうすればティファを救えるかと考え続ける。
　自分と同じ空間系の術が使われたのは間違いないとバーンは確信を抱く。
　突然とは言え、空間の波を感じたからだ。
　バーンも伊達に空間系の能力は持っておらず、察知能力においては同系統の能力を有するティファよりも上回り、以て空間の揺らぎを感知した瞬間、ティファと違い防ぐ能力はなく無力にも連れて行かれてしまった。
　もしもティファの様にジ＝アザーズでなくとも結界系統が一つでもあれば・・
　ない物ねだりをしていても意味は無いと分かっていても、唇を噛みしめ悔しさを滲ませるバーンに、キルが声を掛けて来た。
「バーン様、どのような手段であの子が攫われたのかお分かりに？」
　その言葉にダイ達はすぐさま縋りつき、ティファは何処だと問うたが、方法が分かってもどこにいるかまでは分からないと言われたダイ達は崩れ落ちかける。
「天族達はティファをどこにやったのさ!!」
　ダイの叫びで、ティファの窮地が知れ渡る。
　三神達もティファの異変を察知し、あらゆる空間を探したが見つからず、其れこそ精霊王達は即座に精霊界の底まで探させたが見つけらず、ティファを知る全ての者達から心に灯った灯りもまた、ティファ同様掻き消された。太陽が再び攫われ、暗雲の夜の帳が落とされた。
　ティファが連れて行かれたのは小さな閉鎖された空間であり、性質

を理解していなければ見つからない所に飛ばされ、そこからずっと長老格の天族達に大魔法の連発で追い回されている。
其れもありとあらゆる罵声を浴びせられながら。
「貴様が!!貴様がヴァルガブル神様と三神の若造を誑かしたが為に!!」
「大魔王の穢れた魂と共に滅せよ!!!」
「我等の高潔なる志を阻んだ報いは高いと知れバケモノが!!!」
ティファは文字通り死に物狂いで逃げ回りながら、生き延びる方法を必死に考える。
この空間自体には大体の辺りが付いている。伊達に長年空間修行してない
其れは原作の方のキルバーンが、その形を気に入ってコレクションしていたジャッジの決闘空間か、さっきのヴェルザーの独自空間と同じで、条件を満たすか、若しくは引きずり込んだ者の力でないと、出られない空間ではないかと。
そうすると、空間の性質を理解しないと干渉するどころか発見する事も出来ず、ガルーダは来れず、援軍は当てにできない。履いていた空飛ぶ靴で逃げ回りながら、体力の回復を図るしかない。
万能薬を少しずつ口にしながら逃げる作戦であったが、初手から見破られて手を攻撃されてビンゴと破壊されてしまい、本当に逃げ回って体力回復に努めながら一人ずつ撃破するしか方法がない。
相手はざっと三十人と少し程。全員が大魔法を使える達人であっても、諦める訳にも行かない。
本当は、さっきダイ兄がしたみたいに凄まじい力で内部から破壊するという手もあるけど、これ以上の力を出せば・・・・
それじゃあ駄目なんだ・・・必ず・・・生きて帰るんだ皆の下に

世界中が祈る時

三神達は必死に、あらゆる空間を索敵してティファを探している。
この世界には亜空間から空間のひずみ、特殊な空間が数多く存在しており、その数ざっと千
其れこそヴェルザーの様に、独自の空間を作る空間異能者が長老格の中に居るかもしれないのを考慮して。
三神達が常の状態であればティファの気配を辿って即座に見つけられているのだが、バーンの落としたピラァと、其れが描く魔の六芒星を乗っ取る為に力の大半を使い切ってしまい儘ならず苛立ちが先立つ。
自分達にとってもティファは愛おしい存在。其れは自分達の手伝いをさせる役に立つ子だからでは決して無い。
始めはそうだったかもしれないが、どんなに辛い目に遭っても優しい笑顔を人に向けようと頑張る健気で優しいあの子だからこそ。
辛い世界を見続けても頑張るあの子が愛おしいのだ。
自分達の因果に巻き込んで酷い目に遭わせてばかりいた！
今度は自分達がどんな目に遭ってでもあの子を地上に帰す!!
地上と魔界の者達が心から慕っている、愛おしいあの子を必ずや彼等の下へと

ｓｉｄｅデルムリン島

「ダイや!!ティファが・・・ティファが一体どうしたの言うのじゃ!!」
「じいちゃん!!!・・・ティファが・・・ティファが天族の酷い奴等に何処かに攫われたんだ!!・・・折角・・魔界が助かって地上ともう争わないっていうこんな時に・・・」

「そんな・・・」
南海の海の果てにポツンと浮かんでいる孤島は、普段は静かで多くのモンスター達が生息しているとは外から見ただけでは分からないほど静かな島である。
住んでいるモンスター達は皆大人しく、心優しい穏やかな者ばかり。
その彼等が、島を全て守ってきた長老格たる鬼面道士・ブラスの狼狽が伝わり、大好きなダイとティファに何か異変が起きたのだと分かり騒ぎになっている。
ブラスはずっと心配していた。それはダイよりもティファの方を特に。
女の子だからではない。ティファは隠している積りであっただろうが、実践と死線を経験してきた自分には分かっていた。
何かしらの力を地に秘めている事を。動きの端々から、思考の速さからそこは窺い知れていた。
それでも、優しい子であった。時折ふらりと表情の抜けた顔で帰ってきた時、―外―で何か嫌な事や酷い目に遭ってきたのが自分には分かっていた。
それでも、ダイや自分には決して言わず、親切にされた事や嬉しかった事だけを話す、人を気遣いすぎて己の心の傷を決して見せまいとしていたあの子を。
いつか、傷が増えすぎ抱えられなくなりその果てに消えてしまいそうで怖かった。
笑いながら次の瞬間に消えてしまいそうな、そんな危うさを秘めていたティファがずっとずっと心配だったのが！こんな大事に巻き込まれて！
「神様とやら・・・儂の・・・儂等の愛い子をお返しくだされ・・・あの子は穢れを知らない無垢で優しい子なのですじゃ・・・どうか・・・どうか・・・」
浜辺に出て中天にさす満月に向けて、ブラスは涙を流して祈る。魔物たる自分が、神に祈るのがどうかしていると分かっていながら。

どうか、デルムリン島に住む全ての者達が愛しているティファとダイが、無事にこの島に戻れることを心の底から祈っている。
そのブラスの周りを、一匹また一匹、そして一体と増えていく。ゴーレムはブラスと同じ様に膝を折って祈り、サーベウルフや一角ウサギ、踊るほうせき達は頭を垂れている。
海辺では、ぐんたいガニの群れが、空にあってはキメラの群れとゴースト達が、島中が愛し子達の無事を祈る。
三界が繋がった時からの話はブラスや島に滞在している人間達以外には難しくて分からなかったが、其れでも戦いがもう終わるのは何となく分かった最中にティファが連れて行かれたという。
デルムリン島は騒がしく、そして静寂なる奇妙な気配に包まれている。
其れは数か月ほど島に滞在しながら、再びブラスの身を悪用されないように護衛としているロモスの者達もまた同じ思いであり、双子の身を案じて神に祈る。
大戦が終わりそうなこの時、世界を守らんとしている少年少女達が健やかにこの島に、そしてブラスの下に帰れるように。
ｓｉｄｅリュート村
地上界のそこかしこで、祈る者達が続出する。
ダイとブラスの遣り取りでティファが本当に危害を加えられる者達に攫われた事を知り、テランのリュート村は誰が言うでもなくマザードラゴンの神体のある湖の浮島に集い、ニーナを筆頭に祈りを捧げる。
自分達の大好きなティファお姉ちゃんが・・・・親しくなっても敵味方に分かれて戦わないといけなかった大好きなお姉ちゃんが、これ以上酷い目に遭って欲しくないから！
お願いです竜の神様!!どうかお姉ちゃんをお返しください！間違った天族達こそをどうか正して欲しいと願いながら、村人達は一身に祈りを捧げる。
きっとまた会おうねと約束した優しいティファを思い浮かべて
ｓｉｄｅ各王家

「神官達に祈りを捧げさせよ・・・・城門前に来ている者達全て城の大聖堂に入る許可を出す。」
「かしこまりました。」
クルテマッカは、バルコニーに立って神官たちに命じながら眼下の景色をじっと見つめる。
多くの者達が不安な中、たった一人の少女の無事を祈りたいと押し寄せて来ている光景を。
神が告げた事により慈悲深き思いを知った民達。先のハドラー大戦の時も今大戦でも奇跡は起きず、神などいないと思っていた自分達が、この国の最大の恩人たる料理人のティファの為に、無事に帰って来られる様に神に祈りたいと。
城下町は経済を優先する為にデパートを筆頭とした商業区画が多いが、教会は少なく、大勢が入れるのはこの城の大聖堂のみ。
それでも中に入れない者達は、大聖堂の庭先で膝を付き祈りを捧げている。
そして自分もまた・・
「神とやら・・・いるのであれば、あの子を地上に・・・・」
胸が苦しくなり最後まで言えず、クルテマッカもまた悲しみに暮れバルコニーに縋りつきながら膝を付きながらも祈りを止めなかった。
どうかティファを地上に帰して欲しい
ベンガーナは王は悲しみに暮れ、テランのフォルケン王とロモスのシナナも玉座にて顔を覆い泣き尽くし、リンガイアのアーデルハイド王とパプニカのレオール王は駄天使共に怒り心頭に発し、人目を憚る事無く駄天使達を罵りティファを無事に返せと天界にも怒鳴りつけている。
此処まで下の暴走を納められない三神の不甲斐なさを詰りながら。
其れはロロイの谷のバラン達とノヴァもまた同じであった。
ティファを助けられもしない三神達が神に相応しいかどうか以前に、ティファを死に追いやった日には天界だろうが何だろうが殲滅させる気であり、冷気を帯びた殺気に、さしものマトリフもロン・ベルクも声すらかけられなかったが内心はノヴァと一致している。其れ

こそ純粋な天の使者にして三界の調停者たるバランとても同じ思いが胸の中を焼き尽くそうとしている。
もしもティファに何かあれば・・・其れはティファを愛している―全ての者達―が一致している考えだからだ。
地上界がそうであるように、ティファを知る魔界の者達もまたティファの無事を祈りつつ、天界を罵り何かあれば即座に弓引くと叫ぶ者が続出している。
そして、あの篩の篩でティファに助けられた元・尖兵モンスター達も、自分達を案じてくれていた小さき子を思い出し、無事に帰れるようにと頭を垂れている。
小さき子が無事に帰ってきたという朗報が入るまで頭を上げないと誓って。

世界中の祈りが通じたかのように、ぽつりとした一言が文字通り天から降ってきた

「・・・・見つけた・・」
其れはどこか頼りなげな優しい声で、人神の声であり、その声が落ちて間もなく世界が沸き立ち蜂の巣をつついた騒ぎになった。
見つけたのはティファの事か、今無事なのかと様々な疑問・質問の嵐が巻き起こる中、直ぐにティファを返せという声が圧倒的に多かった。
神であるのならば、見つけた少女一人、返すのは易き事であろうと。
だが残念な事に神は万能とは程遠く、だからこそこんな事態を招いてしまっている。
魔の六芒星乗っ取りで力の大半を取られ、ティファの居所を知った時彼等は絶望しかけた。
そこは長老格達が張った強固な空間であり、今の自分達では長老格達と袂を別った天族達と力を合わせても破壊する事は出来ずにティファを連れ出す事も出来ない！
自分達は何と無力だと、三神達は嘆きそうになるのをぐっと押し止

め、そして三人は何かを決意し、それぞれの顔を見合わせ一つ頷き合い、そして三界に発信をする。

「この声が聞こえているかい？聞こえていたら返事をして欲しい。」

優しい人神が、柔らかい声で全ての者達に自分達の声が届くかと確認をする。

その問いに対して直ぐに、何事だという声と、声かけてくる暇があれば早くティファを助けろという罵倒も聞こえるのが人神にとって嬉しい。

これで自分達の言葉を邪魔される事なく伝えられると。

ずっと、あの長老格達に押さえつけら、気付かれないようにティファをこの世界に転生させることが出来たあの時以上の喜びが、三神達を包み込む。どうやら長老格達は天界の毛会は解いたままにしているようで、全世界と繋がれることを喜んで。自分達と共に苦楽を共にしたティファを助ける為の言葉を伝えられることが嬉しくて。

「ティファを見つける事が出来たが、その場所に行くのもティファを取り戻すのも困難な場所なのじゃ。」

三神達の言葉、神にも困難と言われた者達の心が絶望に覆いかけられる前に、希望の言葉も直ぐに告げられた。

「しかし案ずるな、方法はある。」

「儂等の三神の力を使えばティファを地上に帰せる。」

その言葉に世界が喜びで沸き立とうとした時、意外な言葉もまたすぐに告げられ、世界は直ぐに絶句する事になった。

「僕達三神がいなくなっても、魔界と地上とそして天界で仲良くできるね。これから僕等が・・・・・」

その言葉に、三界の怒りに満ちた気配が沈静化されていった。

三神達の覚悟の重さに対して。

三界の騒ぎを知らないティファと長老格達の戦いもとうとう終わりが見えて来てしまった。
空間の中で蹲っているのは駄天使達ではなくティファの方であった。
今の情けない状況を、ティファは蹲りながら苦笑する。
まさか自分がここまで弱い者であったと事実を告げられた気がして、強くなれたと思ったのは錯覚であったかと。
ティファは、作戦通り逃げ回りながら体力を回復させると同時に敵に向かって撃って出た。
飛ぶスピードが速く、突出している者を一体ずつ撃破するつもりで反転して駄天使達達を素手で殴りつけた時、後ほんの少しで首が砕ける音が聞こえる程加減が全くできな攻撃を放ってしまってからは、ティファはずっと逃げ回った。
加減が出来ずに制圧ではなく殺してしまう事を怖れて。
こんな老害駄天使共なぞ滅ぼしていい筈なのに、素手で殴り殺す事も出来るのに、自分が本気で殺そうと思えばできるのを、強烈な吐き気に襲われた。きっと体が殺す事を拒絶したのだ。
其れはガルダンディーとボラホーンをこの手にかけた時からだっただろうか？
屑であっても同じ命を殺せず、逃げ回る事で体力と精神も磨耗した隙を天族が見逃す筈も無く、俯いたティファの背にイオラをぶつけ、大魔法でティファを言葉と共に打ち据える。
「三神の若造に作られた人形如きが!!!!」
「敵も倒せぬ役立たずであったとは・・・新しい調停者の末裔と思えぬほどの惰弱さよ!!」
「敵も倒せずどうして生命を守れようか！力だけの半端者が!!ようも世界の安寧を崩したものだ！」
長老格達もまた、大魔王達と同じ結論に達し、憎々し気にティファを罵る。
神に選ばれた者のくせに、敵を庇い立て倒す事も出来ない半端な人形と幾度も罵りながら。

その言葉に、ティファは痛みを覚える。こんな屑すらも殺せない自分は本当に役に立たない。
自分に優しくしてくれた世界に恩返しをしたいのに、最後の敵を倒せず、反対に倒れ伏している自分が嫌で・・・其れでも殺せないと嘆きたくなる。
私はどうして・・・
蹲り、顔を上げれば煌煌とした光が見えた。駄天使達が爆裂上級呪文を一斉に放とうとしている姿だと分かった。
私の旅はここ迄か・・・・
最早結界も張れず、仮に張れても防げない・・・・・ダイ兄達・・・ごめんね・・

生きると約束したのに守れずにと、ティファは目を瞑り愛しい者達を思い浮かべながら詫びる。
死ぬ事をどうか嘆かないで欲しいと願いながら
駄天使達から呪文を唱える声を聞いて思わず身体を固くしその時を覚悟したが、イオナズン特有の破裂音が鳴り響いたが・・・・不思議な事に痛みも熱さも・・・爆風すらも感じず、それどころか聞き違え出なければ耳になじんでいるあの甲高い音が聞こえる。其れはここでは決して聞こえるはずが無いと思いながらも、おそるおそる目を開けてみれば
「大魔王・・・・ダイ兄・・」

自分の目の前に大魔王の背が、そして大魔王の前には兄であるダイの背中が見えた。
愛しい妹の間一髪のところを間に合ったダイは、直ぐに妹と敵の間に割って入り、双竜紋を全開にし、イオナズンの爆撃を全て竜闘気で防ぎ、目の前の敵達に宣戦布告をする。
「お前達を全員倒す。」
静かにダイの剣を抜き放ち、切っ先を長老格達全員に向けながら

助けが来た

大魔王とダイ兄に助けられた時、私は助けに来てくれたと喜ぶことが出来なかった。

其れよりもどうしてこの二人が、どうやってこの空間に入り込むことが出来たのか、その事で頭が一杯になったからだ。

この空間を強引に入り込むには、余程のエネルギーがいる筈だ。仮に大魔王が私を目印にしてキルに開けさせるにも、膨大な力を誰かが払わなければいけない。

もしも大魔王が戦う前のマックス状態であったら、大魔王の魔力で来たのだと思える。

でも現実はそうじゃない、大魔王も全体の三分の一残っていればいい方で、ダイ兄達も三度、万能薬を飲んでいるからそれ以上の摂取はしていない筈だ。

いざとなったら全員勝つ為に無茶するのを見越して、三本しか渡していないし、持っている本数を全員チェックしているから其れは無いと断言できる。

では誰が膨大なエネルギーを支払ったのか

魔王軍でも勇者一行でもなく、地上側に助けを求めたにしては間に合った位だからそれは無く、残る可能性を考えた時、心臓を冷たい手で握られたようにゾッとした！

ティファが、思い当たる中で一番最悪な事が脳裏を浮かび血の気が引いた時、空間全体に声が響き渡った。

「「ティファ!!」」

「遅くなって済まぬ！」

「ごめんね!!僕達が不甲斐無いせいで君に最後までこんな目に遭わせて・・」

「我等は本当に・・お前になんと詫びれば。」

泣きそうな、頼りなげでボロボロに打ちのめされた声であったが、その声を聞いたティファは、三神以上にボロボロと泣き始め、大丈夫

だとつっかえつっかえながらも声に応えた。
三神様達無事だ・・・・良かった・・・良かったよ・・・
ティファもまた、ブラスたちがティファを案ずるようにずっと怖かった。
三神様達も、責任を取って自分達の全てを使って償おうとする事を。長老駄天使達の責任の一切を、自分達の命を持って償おうとしているのではないかと。
だが違った。三神様達は無事なようで・・・・そしたら・・
「大魔王・・・ダイ兄、どうやってここに・・・」
「貴様等！代償払わずどうやってここに来れた⁉」
「数多の精霊達も、地上の者達も減った様子がない!!誰を贄としてここに来れた!!」
ティファの思う疑問は当然空間を作った長老達にも発生する事であった。
言ってはなんだが余力のない三神達が入ろうとすれば、其れこそ魂の力をも使わない限り入ることが出来ない空間である筈を、地上・天界を隈なく見てみたが犠牲になった思しき者達が全員無事である。それこそ今代の精霊の愛し子たる、氷の精霊王ハイ＝キングの加護を得たノヴァとても無事。
該当する者達が誰一人欠けていないのは何故だと、駄天使達が苛立ちを募らる中、ティファはまさかゴメちゃんが自分の危機を察知してしまい、原作の様に自分を犠牲にして神の涙としてのアイテム的な役割を果たしてしまったのかと再び青褪める。
駄天使達もティファも、なんの代価も無く奇跡が起こる筈がないと思ったたその時
「お前達の死を俺様が望んだからだ。羽虫・・・いや、害虫共が。」
途轍もなく重々しい、其れこそ地獄の底から這い出たような怨嗟に塗れ、ひび割れたような声が駄天使達の耳をうつ。

遡った少し前
ティファを空間から助け出すのは容易ではない。其れでも自分達の全てを使えばティファを助け出せる事を、人神が優しく柔らかく話した時、割って入った者がいた。
其れはとても傲岸不遜な声で、とてもふてぶてしい声が
「お前達が安っぽく命を使って消えたとしても、俺は何の面白味も無いな。」
三神達の覚悟を嘲笑い、面白味も無いと断言してきた。
その声の主は己の言葉で唖然とする者達を尻目に、言いたい事だけを話し続けた。
「お前達罪人は生きてこそ価値がある。十数万年の魔界の怨念の言葉を思いを全て一身にその身に浴びてのたうち回れ！死んで楽になれるなどと思うな、時折俺の怨嗟の毒を！其の身で受けて死ぬよりも辛い目に遭うのが精々似合いだ。」
地獄の底からの怨念に満ちた声の主に、バーンは声を掛けた。
「どういう風の吹き回しぞヴェルザー。お前は高みの見物に回るのではなかったのか？」
自分の言葉に不貞腐れて以降出てこないと思っていた者が、ティファの窮地に声を掛けてくるとはどういう積りかと。
「ふん・・・・あの―ちび助―に情が湧いたなどと思うなよバーン!!俺は・・俺をこんな風にこの世界に生まれさせた元凶が!!自分達の思い通りになる事が死ぬほど嫌なだけだ!!!!そこのところを勘違いするなよ!?あの―ちび―が死のうが生きようがどうでもいい事だ!!!分かったな!!!!」
・・・・・・語るに落ちるとはどういうものかの見本を目の当たりにしたダイ達は目をパチクリとしてしまい、バーンはこんな大変な状況下で失礼だと思ったが大笑いしてしまう。
「何がおかしいか!!!」
「分かった分かったヴェルザー。―そういう事―にしておこうぞ。」
「な!!!だから誤解を・・」
「余もここにいる勇者達も、あの老害どもを赦すつもりが毛頭ない。

消える寸前のティファも同じことを申していたが、三神達よ、我等がティファを助けに行くという事は、そ奴等を殲滅しに行く事に他ならないが良いのか？」
笑っていても、最後は冷たい声でバーンは確認を取る。自分達がティファを助けに行くとい事はそういう事だと。
己達の同胞を殺す事になる事を。
その問いに、竜・魔神が苦しそうに息を呑みながら答える。
「本来であれば、我等の力で彼の者達に神罰の雷を落とし、肉体と魂を塩の塊にすべきなのだ。」
神の権能たる神罰の雷は、罪人の魂を肉体事塩の塊にすることが出来、文字通り全てを滅する雷。
三神の力を合わせて発動することが出来れば、何処の空間に居ようと、数も無視して全てを滅することが出来るのだが、力が足りないと唇を噛みながら反対にバーン達に詫びている。
「被害を受けし其方達に頼むは心苦しいが、どうかティファを・・」
「ヴェルザーよ、我等に何を望む？」
「僕達はどうすればいい？」
おそらくヴェルザーもティファを助ける秘策があってこの会話に割って入ってきたのだろう。
「お前達の残りの寿命の半分ずつをエネルギーに変換してあれのいる空間の座標と共に俺に渡せば、―二人―だけ空間に潜り込ませられるがどうする？」
伊達にヴェルザーは冥竜王を名乗っていない。冥府の番人の様に、他者の寿命を算出する事も出来、三神達の姿を捉え算出したところ、三人の寿命半分ずつのエネルギーで足りると踏み、割って入ったのだ。
その提案は三神達が直ぐに受け入れ、行く人選も彼等が指名した。
地上界の勇者と魔界の神に、この世界の命運を託して。
そして世界中が見守る中、二人はティファのいる空間へと送り出す。
「決まったようだな。勇者の小僧、バーンの若造、行って元凶全てを殺

し尽くしてこい。」
　自分達を送りこんでくれた冥竜王の言葉を胸に、ダイは剣の切先をそのままに、バーンは倒れ伏したティファを抱き上げながらダイの横に並び立ち、共に前を見据える。
　あらゆる意味で自分達、そして世界の逆鱗に触れた愚か者どもに怒りを込めた瞳を向けて。
「うぬらだけは赦さぬ・・・」
「世界もティファも！俺達が全て守りきる!!」

大魔王と勇者の共闘戦線

バーンとダイの宣戦布告にも、長老達は怯む事無く直ぐに大呪文を放って来た。
伊達に十数万年の時を渡っておらず、混沌とした一時代を、しゃくではあるが支えて来た者達であると言わざる得ない程の実力を持っているのだから。

其れでも、大魔王も魔界の神を伊達に名乗っておらず、ダイもまた戦いの申し子・或いは麒麟児とも言える程の戦いの天才であり、自分達を焼き尽くす程のメラゾーマ・イオナズンの大魔法の連発にも表情は動く事無く、バーンはティファを右腕一本で抱き上げ、左手でダイの肩を抱いて自分の衣の袖に包み込みながらマホカンタを素早く張る。
万が一呪文が一つでも突破してきても、大魔王たる自分の装備は魔法耐性が高く、二人が大怪我を負わないようにとの配慮であった。
ティファは慣れた様子でバーンの腕に抱かれて攻撃が納まるのをのを待つ事にしたが、ダイは何かくすぐったさと戸惑いを覚える。
さっき迄、俺とバーンは生きるか死ぬか、倒すか倒されるかの命の遣り取りをしていたのに・・・俺・・バーンに守られてる。
そういえば・・・最初の決戦の時はそんなティファとハドラーは、ティファはハドラーを守ってたっけ・・・・なんだか変な感じだ。
嫌なんじゃない、どこか・・・・どうしたらいいのか分からないや。
―そういう事に慣れている―妹と違い、全く慣れていない兄は居心地の悪さを多少感じて身じろいだ時、ダイの右肩に置かれているバーンの左手が力を増し、少し袖の外に出てしまったダイを再び中に戻した。
何事かとダイがバーンを見上げれば、じっと自分に視線を注ぐバーンの目とばっちりと合ってしまった！
「ダイ、この魔法もじきに落ち着く。大呪文の連発は魔力があるだけで撃ち続けられるものでは無い。体力も集中力も極限まで使うもの

ぞ。」
「あ・・・そうなんだ・・」
「うむ、だから焦って動こうとせずまだじっとしておれ。其れともそちは余のマホカンタが早々に敗れる脆いものだと言いたいのか？」
「え!!ち！違うよ!!」
　自分の居心地の悪さによる動きをそんな風に曲解したのこの人⁉・・・そういえば・・俺達の善意の言葉も物凄く曲解して受け取ってたっけこの人・・・
　ダイは、大先輩の戦士・ロカの言葉を、まさかあそこ迄曲解して受け取る人がいるとは思わず、咄嗟にこの人馬鹿？とか思ってしまったりする。
　だからこそポップとティファと自分の三人でバーンを羽交い締めしてとんでも誤解を解こうとノリと勢いで押さえつけたんだっけ・・思い出してしまったらおかしくなってきた。
「・・・・何がおかしい？」
「ダイ兄・・・攻撃が来ないからって笑ってたら駄目だよ。」
「ん？いやさ、バーンって実は物凄くうっかりと言おうか・・・可愛い人なのかって思ったらさ。」
「な!!!其方こんな時に何を戯けた事を!!!」
「あ～・・・ダイ兄の言いたい事何となく分かっちゃった。分かったけどその話はあとにして二人共。―式見―したらそろそろあちらさんの息上がって来てるよ。」
・・・この妹って本当に凄い事さらって言ってくれるんだから・・
　ティファからの警告受けたダイは左手の人差し指で頬を掻いて苦笑し、バーンは頭が痛くなってくる。
　おそらく式見とは、式を作って飛ばして視覚を共有出来る事を指しているのだろうが・・・偵察を飛ばすなぞいつしたのか、全く気配すら感じられなかった。
　とは言え、この奇妙な頼もしさがティファなのだと、バーンとダイは視線でその感覚を共有し合い、そして同時に構える。

此処まで大呪文を撃ち続けていれば、息を整えた後の次の攻撃ではマホカンタを張る魔力は残っていまいと考えた長老達は、魔法ではなく剣と槍の達人各を前面に出し、魔法を放っていた者達は後退しながら中級呪文に切り替える。
威力を下げれば、痺れを切らした出来損ないの竜の騎士もどきが突っ込んでくるだろうと、ダイとティファが聞けば両親を侮辱された事で更に怒りを募らせる事請負な事を考えて。
長老達からすれば、愛だのに囚われ三界の調停者としての正しき道を外れたバラン等、天界の汚点だとさえ考えているのだから始末に負えない。
自分達こそが天界、ひいては慈悲の神たるヴァルガヴル神から生まれた汚点であり、駄天使とも汚天使とも呼ばれているとは欠片も思っていないのだから。
とは言えその汚天使達の読みも―少し―は当たっていた。
魔法が中級になってほどなくして、ダイがトベルーラで突っ込んできた。
剣は右手で逆手に持っているようで背に隠れて見えないが、我武者羅に突っ込む事に変わりはない。
矢張り出来損ないは底の浅い、そう思った瞬間上空にから炎の鳥が数羽自分達目掛けて突っ込んできた。
「しまった!!」
「バーンめ!!殺し合いをした敵と慣れ合ってでも足掻こうというのか!」
「生き汚い奴輩共めが!!!」
上空より飛来する数羽のカイザーフェニックスの襲来に慌てふためく長老達こそ、品性も何もかもをかなぐり捨てて敵を罵る様が滑稽に映る。
言えば言う程に、老獪に長けたバーンにとっては痛痒も感じない言葉だが、純粋の塊たるダイとティファの怒りを増すだけだと考えもつかない愚か者達だと胸の中でせせら笑う。
特にダイは、ティファよりも怒りを力に変換させやすいというの

に。
バーンの考え通り、汚天使共が口を開けば開くほどに怒りの感情を沸かせて闘気が高ぶっていく。
こいつ等が!!自分達の何を知っているというのだ!!自分達は互いの大切な者達の生存を賭けて！正々堂々と戦い抜いた相手を尊敬こそすれ憎む事も互いを低く見る事も最早無い!!!
分かりもせずに口を出すこいつら全て叩きのめしてやる!!
そんなダイの想いを知るよしもない汚天使どもは、飛来するカイザーフェニックスを防ぐ為に魔法隊が上空を向いた事でダイへの攻撃が止み、ダイは竜闘気で防ぐ事をせずに済み、闘気の全てを安心して剣に伝える。
殺し合う程戦い合った自分とバーンだからこそ！即興で共に戦えるんだ！何も分かってないのに穢すこいつ等を!!
「俺達の思いも何もかもを穢すお前達を倒す!!!!!」
ダイは剣に力を貯めこみ大技を放つ。
「喰らえ!!ギガデインストラッシュ!!!!!」
何時の間にか、ダイは剣を―チャージ―し終えていた。
先程の汚天使達の大呪文のどさくさの中、少し後ろに引いてバーンのマホカンタにあたらないようにライデインを剣に纏わせ、撃って出た時にはチャージをし終えており、ダイは渾身の力でギガデインストラッシュのアロー版を放つ。
長老達はダメージを覚悟したがまだどこか余裕があった。
アローであれば、闘気を高め合って剣と槍の放出系で相殺する事は可能であり、ダイが地上でしてみせたような連撃は、ダメージが蓄積したダイには出来まいと高をくくって。
其れが運の尽きとも知らずに。
剣と槍を持った者達が前面に出て来て闘気を高めるのを見たダイは口角を僅かに上げた。
餌に掛ったと。

果たしてギガデインストラッシュは幾人かの長老達を仕留めるに至ったが、途中で相殺された。
しかし、前衛と中央ががら空きになった時、ダイはそのまま突っ込む事はせずにトベルーラで上空に昇り―道―を開けた。
いきなりのダイの動きに何をする積りだと全員が警戒をして見上げた時、自分の体を抉られるような痛みを感じた者達は、痛みを耐え蹲る事はしなかったが、全員トベルーラで散会して目にしたのは・・・
「馬鹿な・・・・」
一人の長老が冷や汗を流しながら呟いた。
先程自分達に痛みを与えた物がバーンの光魔の杖から放たれる、バーンの魔力の球体であったからだ。
知れたのはバーンから再び同じ技を逃げている同胞に放っているから。
光魔の杖は！出来損ないの竜の騎士もどきの小僧に折られ砕けたのに何故だと注意深くバーンの右手を見た時、背中に重い衝撃が走ったのを感じたのを最後に意識が消された。
警戒を怠った愚かな者を、ダイは容赦なく蹴り落とし、次々とバーンの球体の動きに合わせて敵を飲み込みに行く。
バーンの光魔の杖が神の手によって直ったなどと言う奇跡では決してない。
バーンは左手一本でティファを抱き上げたまま、―ブラックロッド―の穂先から球体を次々に生み出しながらロッドをしならせ、光魔の杖と同じ攻撃をしている。
此処に来る前にポップ自らが申し出てが貸してくれたものであった。
「ロン・ベルクはこれも理力の杖と同じ原理だって言ってたから、あんただったらこれで光魔の杖と同じ攻撃が出来ると思うんだよ。」
壊れてもいいから存分に使って欲しいと渡され
「バーン様・・・ティファから渡された魔族用の魔力回復万能薬を・・・」
此処までになったら、もうバーン様と呼んでも良いだろうと、主の名をきちんと呼べる事が何か恥ずかしく、真っ赤になりながらも呼ん

だハドラーも、ティファ特製の魔力用万能薬を主に手渡す。
元の魔力量には戻れなくとも貴方様とダイなれば勝つ事が出来るだろうとエールを送られて
渡されたのは道具だけではなく様々な熱い思いであった。
各々が、自分達とそしてティファの身を案じながら送り出してくれた。
キルは普段の飄々とした気配を一切排し、自分達とティファの無事をと言葉短に、ミストはどうかご無事でと一言言ったのみであったが、自分達主従は其れで通じる。
其れで十分に分かる。自分の身を心の底から案じてくれているのを。
そしてティファとダイとも無事に帰って来て欲しいと願ってくれている事を。
この思いの全てに、応えなければ余の、魔界の神としての名が廃るなとバーンは胸を熱くする。
全員で行けずとも、思いを託されこの場に立っている事が、バーンとダイに力を与えてくれる。
自分達に声援を以て送り出し、今も応援の声を貼り出しているであろう仲間達と側近達を思って。
敗けられない。
勝って世界とティファを守るのだから

化生の者、或いは魔性の者

其れは順調に見えていた。
ティファを抱えたままのバーンはそこから一歩も動かずとも、ポップより借り受けたブラックロッドを光魔の杖の如く、己のものとしたように自在に使いこなし、時に火の鳥をダイの突撃に合わせ放ち道を作っている。
ダイの攻撃を避けた者も、バーンの魔力の光球によって打ち据えられ、完全に自分達の方が有利に事を進めている様に見える事が、ティファの心を次第に落ち着かないものへと変えていく。
いくら何でも順調すぎるのだ。十数万年前に混沌の時代を前神と共に支え、十万年間ヴァルガブル神様を欺き、裏で天界の実効支配を担ってきた裏幕達が、こんなに簡単に倒れていく事が。
殺したい者を自分達の陣地に入れたからには何かしらの策があってしかるべきはずだと油断なく空間を式見で見張っているのだが、罠の類が一つもなく、一見すると兄と大魔王に翻弄され討ち取られている様にしか見えない。
・・・ここまで単純に倒しきれるものなのだろうか?これまで裏からとはいえ策を弄し、魔界を瀕死に追い詰め三神様達を操る様に蠢いていた者達が・・其れはどう考えてもあり得ない。
しかし事実として、今のところ何かの力が働く気配すらがない。
ひょっとして不安に思うのは私の考えすぎで、本当に駄天使達は私憎さのあまりに策も無く、特攻覚悟で仕出かした事なのだろうか?
勝ち筋の見えているような戦いなのに、どんなに良い方向に物事が動いていると考えようとしても不安が拭えないティファは、思わずバーンの肩口に置いていた手に力を込めて握りしめた。
何かに掴まっていないと、不安で仕方がない心に負けそうで・・・
その頼りなげな顔をしたティファを、バーンは抱えている左手でティファの腰を優しく叩いて宥めようとした。
ティファの今の有様は酷い者であった。リボンは幽かに残って髪を結わえている程度で、他の着ている服もティファ自身もボロボロで

あり、顔からも青い血を流す細い傷が幾つもあり、上半身の布地は焼かれて中の肌着が露呈している・・・こんな有様をティファを愛しむ者達が見た日には、速攻で天界は全域が滅される事請負である。
自分達も三神達の思いに触れていなければ、率先して天界に攻め上っていたであろうから彼等の気持ちは理解できる。
兎に角、弱ったティファが何か不安そうにしている顔を見ると愛しさがこみ上げ堪らなくなる。
庇護し、守らなければならないとう気持ちが心を覆い尽くし、目の前の敵などうち捨てて放って置いてもティファを慰め、心の不安全てを取り除いてやりたくなるのだ。
ティファが不安がる事なもう何も無い。直にダイが全ての天族達を無力化するであろうし、直ぐに地上へと帰れるのだと宥める言葉を掛けようとした時、空間内が光で満たされた。
「ダイ!!余達の下へと戻ってまいれ!!!」
何かしらの攻撃が来るか分からず、大魔法なればマホカンタでダイ達をふたたび包み込んで守る為に、回り全てを警戒しながらダイをすぐさま呼びつけ、果たしてダイも無言でバーンと妹の下へと戻り、二人を守る為にバーンの前に降り立ちダイの剣を構える。
大魔法が来たら今度は自分が全て海波漸で斬ればいい。闘気攻撃が来たら大地漸を!罠だったらティファが見張ってくれている。自分達三人ならばどんな事でもキ切り抜けられる。
それ程の信頼をバーンと自分達のタッグに自信を深めていた矢先であっただけに、目の前の光景に愕然とした。
光りが納まっても何も起きず、攻撃か何かの不発であったと思って辺りを見回せば・・・
「どうした出来損ないの竜の騎士もどきの小僧よ?」
「死人にあった様な酷い顔をしている。」
「矢張りもどきの小僧はもどき、戦闘の何たるかを、策の使い方も知らぬ低き者よ。」
「なまじ―多少―力が使えるからと言って、驕り高ぶった愚か者よの。」

「見やい、魔界の神を専称している愚か者も同じような顔をしているぞ。」
「滑稽な事よ。高貴なる我等の力を見誤り、自ら罠に飛び込んできたとも知らずにの～。」
「少し我等に力が届いたくらいではしゃぐ小物らよ。」
ダイとバーンの攻撃で倒れ伏していた長老達が立っており、二人の攻撃で付けた筈のダメージが一切なく、それどころか叩き壊したはずの武具すらもが完全に元に戻っている。
しかも先程まで荒かった気配も落ち着いており、―何もかもが元に戻った―ようにしか見えないという不可思議な事に、長老達が指摘した通り、そのあり得なさにさしものバーンも何が起きたのか分からずに混乱して表情に出してしまったのだ。
とは言え魔界の神としての尊厳が、何時までもそんな自分を赦すはずが無く、内心はどうであれ直ぐに表情を消し、冷徹なる魔界の神の顔に戻し、思考を高速回転で回して、一体敵にどんな事が起きて―元に戻れた―のか、秘策はなんだと考えを張り巡らせる。
そう、バーンは敵達が回復したのではなく、自分達と戦う前の万全な状態に戻ったと考えている。
回復ならば傷は治ろうが、切り裂かれた衣服も、壊された武具も元に戻る事など無く、その事に立ち上がった敵達を見たダイもすぐさま気が付き、何故敵達が元の状態に戻ったのだと混乱したのだ。
「ふぇふぇふぇ、若造達には分かるまいだろうから、儂が教えてやろうぞ。」
バーンよりも更に歳を重ねたような一人の翁が、髭を扱きながら一歩前に出た。
言葉遣いは丁寧であっても、ダイ達を見る瞳は全く笑っておらず、全ての―元凶―たるテイファを見る時は、憎しみに満ちた色が炯々と光り、ダイ達に事実を突きつけた。
「儂等はそこな―化生の者とも魔性の者とも知れぬそ奴―を捕らえれば、お前達が追って来るであろうと踏んで、敢えて其奴を呼んでやっ

たのだよ。」
化生の者とも魔性の者とも・・・
ティファを指さした翁の口から放たれた言葉に、バーンとダイは即座に怒りを燃やした。
化生の者とはバケモノであり妖の類を指す事を、魔性の者とは人を誑かし惑わすものを指す、どちらもティファを貶める言葉の中で最低で唾棄すべき言葉をティファに吐かれて許せるはずが無かった！
だが二人の怒りをぶつけられようとも、言われたティファの傷つい気嘆いている表情を見ても、目の前の翁は何の痛痒も感じていないかのように飄々としたままでダイ達に依然話しかけて来た。
「儂の言葉に怒るとはまだまだ未熟よの。よいよい、そのような未熟なる者を導き教え諭すが我等の使命ぞ。気にはせぬぞ。」
「・・・貴様等・・・本気で余達の手にかけられたいと見える・・・」
「その口閉じろ!!ティファの足元にも及びもしないお前達が!!ティファの事を悪く言っていいものか!!!!」
「ほっほ、其れじゃ其れじゃ。その化生の者の事実を言っただけでお前達は儂等と争おうとする。其れは人の心に付け込み誑かし、惑わせ魅了して己を争奪させんと騒乱を撒き散らしておるじゃろう？違うとは言わさぬぞえバーンよ。」
「・・・・・」
翁の言う事は―ほぼ―間違いであるが、一部分においては正しく完全に否定できない事にバーンは苛立ち舌打ちしたくなるのを堪える。
すれば、本当の騒乱を撒き散らす者の言葉を一部認めた事になるのを厭うて。
だが、ティファを知った者達がティファを欲し、何時かそれが争いの種にならないと言い切れないのもまた事実である。
ティファの優しさに魅了され、いつしか光りを独り占めにしたいという愚か者がいつ現れるとも知れないのだから。
その時自分達が正気でいられるか自信が無い。
それが国であったればきっと攻め滅ぼしに行き、個人であればティファが愛した者であっても独占せんとすれば殺してしまうだろう自

分の姿が目に浮かぶからだ。
ティファは、全ての者達で共有すべきだという身勝手さで・・・・
「業深き化生の者よの。」
バーンとダイの考えを見透かした様に、翁の顔にニンマリと笑い皺が深く浮かぶ。
自分達が考えていた通り、―世界の大半―がティファに魅了されている。
それ故に、―自分達の有利になる空間―に、勇者と大魔王を引きずり込む事に成功したのだから喜ぶのも無理はない。
「お前達を深き業から解き放ってやろうぞ。」
竜の騎士もどきの小僧と大魔王を滅して魂を救済し、化生の者を―討伐―すれば、世界も三神達の目も覚めよう。
「魔界は我等が救ってやる故大人しく消滅するがいい。」
そして我等が世界を正しく導こうと、後ろにいる長老達も大魔法の準備を整える。
―正しき世界―に不要なる者達を滅する為に

数万年越しの罠

何を言ってるんだこの老害駄天使達は・・・

化生の者と言われた当の本人ティファは、相手の言い分にさしたる感慨も興味も無く、ただ呆れを通り越して辟易とする。

よくもまぁあんな妄想話出来るもんだとうんざりとして。

誰が人を誑かしたっていうのよ・・・魅了ってこんなちんくしゃに誘惑されるような人がいる訳ないし、私のせいで世界に争いがだなんていうのは、か弱くて守ってあげたい純粋無垢な絶世のお姫様だって相場決まってんのこいつら知らないのかな？

あれかな、鎖国しすぎて外界との価値観とずれすぎている間抜けなのだろうかこいつ等は？

・・・・決定、この人達駄天使じゃなくて・・・

「能力凄いのに、言っている事が脳内お花畑な言葉ばかりで意味不明すぎます。貴方達老害駄天使達からら非常に頭残念天使と言い方変えましょうか？」

・・・・頭無残でもいいかなこの場合

ティファの淡々とした言葉を聞いたダイとバーンは、今までティファが口を噤んでいたのは、浴びせられた誹謗中傷に傷ついていたのではないかと非情に心配していただけに、いきなりのお言葉に目をぱちくりとする。

駄天使改め頭残念天使達も、勇者と大魔王の精神を乱し、バケモノの心も傷も作ってやろうとしていただけに、一向に堪えていないティファの様子と、自分達が先に悪口雑言を言っておいて、ティファの頭残念天使の発言にものすごい勢いで腹を立てた。

「誰が頭残念天使か⁉」

「その自覚の無さの所が頭残念な所以ですが何か？」

「高貴なる我等に向かって何たる言い草か⁉」

「いや～、私を巡って世界が争うだなんて、三文メルヘン小説の読み過ぎで脳内お花畑になりましたか？」

「き・・・貴様!!貴様こそ自覚がないのか⁉」

「・・・・何のですか？」
自分達の言葉を次々と酷い言葉で淡々と反論し、最後の質問（？）に小首傾げている姿に、駄天使改め頭残念天使一同は悟ってしまった!!
こいつは無自覚天然やらかし系の人誑しであった事を!!そんな奴に！世界の上位者達は誑かされ手玉に取られ！こんな輩に我等の存在意義を脅かされたというか⁉理不尽な事この上ないではないか!!
「まぁそれは良いとして。」
いいのか其れは!!
「この空間・・・並みじゃないですよね・・・」
「・・・ほう？」
ティファも伊達に空間上位者を張ってはおらず、何となくではあるが倒された者達が元の状態に戻ったのは、頭残念天使達だけ時間を巻き戻したとか言う類のものでは無い気がしている。
そう思う理由は簡単で、時間を巻き戻せるような大きな力をこいつ等が持っているのであれば、閉じこもる事無く外の世界で好き勝手してそうなのと、光が発生した時僅かにではあるが、空間が長老達に干渉した気配がしたからだ。
「ふぇふぇふぇ、少しは分かっておるの～。」
仕掛けの一端を言い当てられても、翁の余裕は崩れる事は無かった。
これも簡単な事であった。
「その通り、我等はこの空間を作ったは昨日今日ではなく、数万年の歳月をかけて作り上げた物よ。」
「この空間では我等を回復させ、ストックしていた武具を補充させる事が可能なのだ。」
「数万年分の回復呪文の力とストックされた武具が尽きる前に、お前達の方がもつまいよ。」
今日の様に、自分達の意に沿わぬ、通常の方法では仕留めきれない者を討伐仕切る為の空間を、長老達は数万年をかけて粛々と準備をしていたのだ。
自分達の頸木から逃れようとする愚か者を殲滅する為に数万年を

費やして。その仕掛け、カラクリが分かった所でどうする事も出来まいて。
そのあまりの膨大な時間をかけて作られた一種の罠に、ダイとバーン、そしてさしものティファも青褪める。
罠の特性でほぼ無制限に回復できる相手に、うてる手が思い浮かばず、活路を見いだせずに

竜王から贈られしもの

ダイ達と長老達の戦いは完全に逆転してしまった。
この空間自体が長老達が幾星霜も掛けて仕掛けた壮大な罠であり、文字通り自分達に不利と分かってから、ダイは最小限の力で長老達を攻撃し、バーンもマホカンタに振る為に攻撃全てを控えている。
この空間の攻略方法、或いは活路を見出すまで間は力を温存する為に。無論それでは直ぐに足りなくなるのでマホカンタも極力使わないようにして、ティファを抱き抱えたままトベルーラを使って大魔法を避け、ミナデインの時のみマホカンタを使っている。
まるで自分が弱い者の様に逃げ回り、魔界の神たる自分にしては消極的な方法だという考えが脳裏をちらりとよぎったが、活路を見出す為の我慢だとバーンは己に言い聞かせながら避け続け、ダイもまた奮戦しているが遂にバーンが大魔法の群れに囲まれ、逃げ道全てを塞がれてしまった！
しまった!!
・・これは・・・
迫るイオナズンの群体に、バーンはマホカンタを張らず、体を丸めてその身で受け止めた。
如何に魔法耐性の高い衣であっても、大ダメージは避けられないというのに。
「「バーン!!!!」」
何故マホカンタを張らないと、駆け付けようとするダイと、腕の中で包まれて守られているティファはバーンの名を叫んだ。
ミナデインすら防げるバーンなれば、マホカンタを張れば済む事なのを知っているだけに、何故張って防ごうとしないのか。
「ふぇふぇふぇ、そろそろバーンも魔力が尽きかけておるのか。重畳重畳。」
イオナズンの爆炎が納まり、煙がはれて見えたのは、白き衣が煤け腕や顔から血を流すバーンの姿に、翁は嬉しそうに、ダイとティファにとって最悪な知らせを告げる。

如何に膨大な魔力があるとはいえ、無限にも近い回復と補充を受ける長老達と相対してもう四半刻が経とうとしている。
その間に張ったマホカンタも、魔力量の消耗は決して少ないものではなく、ミナデイン以外に回せる余裕が無くなっていることを示唆しているのを、翁は見逃さずに嗤っている。
「ふぇふぇふぇ、その化生の者を腕の中から離せば自在にトベルーラで避けられているものを、何故そこまで必死に庇うのか分からんの～。」
「・・・黙れ・・」
「そち一人であれば・・・」
「黙れというのが聞こえぬか!!!」
「・・・ほんに無礼者が!!!」
「バーン!!!」
忌々しげに翁を見ながら怒鳴り上げるバーンに、駄天使達は仕置きとばかりに動けないバーンに向けてバギクロスを浴びせ、魔法耐性の高いバーンの衣をズタズタに引き裂き、継いでメラゾーマを合わせてバーンとティファに向けて放った。
槍剣を持った長老達にダイは足止めをされ、二人を守りに行くことが出来ずに、弱ったバーンは成す術無く諸に受けてしまった。
ズタズタに引き裂かれた衣の間を、合わされ大火球になったメラゾーマの炎がバーンの肌を舐める様に焼き尽くして行く。
其れでも、腕の中に居るテイファに炎が行かないようにと、バーンは全身を丸めて必死にティファの小さな体を袖の衣に包み込む。
何もかもからティファを守る為に。
痴天使どもの愚かしい言葉から、理不尽なる暴力全てから。
だか当のティファが、それをよしとは出来なかった。
守ってくれているバーンの悲惨な姿に耐えられずに懇願をしてきた。
「バーン!!もう私を離して!!!」
「・・・ティファ・・・言うな・・」
「私も空飛ぶ靴がある!だから私をはな・・・」

「黙らぬかティファ!!」
メラゾーマの炎に苦痛で顔を歪めても、呻き声一つ上げなかったバーンの怒声に、向けられたティファはその声の強さに怯えてびくりと体を揺らすのを、バーンは直ぐに優しい言葉を紡いで、自分の言葉で怯えさせてしまったティファを宥める。
本当は、今日の処刑演目の時とても手元から離したくはなかった。
あの翁の言う通り、自分こそがティファに囚われし者。
二度と手放す気はない。
「二度と其方を放さぬ。その方の口から二度と余から離れると言うてくれるなティファ。」
「・・・・大魔王・・・・」
優しい瞳で告げられるその言葉に、ティファは泣きたくなる。
こんなに大怪我をしているのに・・・守ってもらう事が申し訳なくて・・
「バーン!!ティファとそのまま此処でじっとしてて!!」
漸く長老達の包囲網を突破したダイが、バーンと妹の前に立ち、繰り出される攻撃全てを薙ぎ払う。
バーンは体力的に、妹は精神的に限界まで追い詰められたのを悟り、最後の切り札をポシェットから素早く取り出す。
ダイはまだ魔力様も闘気用も万能薬を二本しか飲んでおらず、取り出した三本目を飲み下しながら次々に来る攻撃全てを捌いていく。
その姿に、ティファは自分にもできる事は無いかと必死に思考を張り巡らせる。
最早ジ＝アザーズを使う魔力も、防げる闘気も残っていない・・・・兄とバーンの力もじきに底を尽く・・例えば自分と兄の闘気量がマックスであったれば、ヴェルザーの空間の様に内部崩壊をさせられる。
しかし無いものは無く、実現不可能であり、さしものティファもここ迄なのかと諦めたその時

「何をしているのだ愚かなる竜騎士の小僧!!!!」

割れ鐘の様なヴェルザーの怒声が降ってきた。
ヴェルザーとしては実に不本意ではある。ダイとバーンをティファのもとに送り込んだ後は、本当に今度こそ高みの見物を決め込むはずであったのに、余力の無くなったバーンは兎も角、ダイの戦い方の未熟さに対して苛々としてつい声を上げてしまったではないかと八つ当たりも込めて。
「小僧貴様それでも竜の騎士の末裔か⁉」
「ヴェルザー⁉・・俺だって必死に戦っているんだぞ!!なのに何だよいきなり・・」
「黙れ！剣一つ壊すのに闘気を込めすぎだ!!相手が回復するのであれば最小限のダメージで制圧しながら活路を探す事もできんのかお前は!!目を潰せ！首を切れ!!最小限の動きをしろ!!」
「な!!そんな事できる訳・・」
「甘ったれるな小僧!!かつてのバランはそうやって戦っていたぞ！俺の大軍勢を相手取る為に、最小限の動きで勝つ為にあらゆる手を使っていたというにお前のその様はなんだ!!御綺麗で無駄の多い動きは見ているだけでむかつくわ!!!」
血生臭いほどの実践の戦い方を聞かせられたダイは青褪め、ティファとバーンは、ヴェルザーの言う事が正しいと分かるが、ダイにそれは出来ないだろうと理解している。
ダイは本当に―正々堂々―とした戦いしか出来ないからだ。
二人のその考えを、ヴェルザーも分かっているだけに溜め息を吐く。
助言しても、正々堂々と戦って長老達を制圧しようとしているダイの姿を見れば一目瞭然であるからだ。
その様には呆れるしかないと、ヴェルザーも匙を投げたくなる。
「・・・お前の父は戦いとなれば非情であった。地上を守る為に血でも泥でも汚名でも被る覚悟を持っていた・・・・実に竜・魔の名に相応しかったぞ。」
竜の騎士は本来は三界の調停者たる者であり、人の心を持ち、天と竜・魔族の力を兼ね備えた者を指す。

しかしバランが持っていたのは天と竜・魔の力を操る術と、竜・魔の心を持っていたが、バランは欠けた者であったと、バランのその後を見て思った。
「貴様の父は、人の心は持っておらず、竜・魔族に近かった。人の世の常識も良識も無く、どこか己の力のみを頼りにしていた様は人とは縁遠かったな。
その点お前達は人の心も知識も持っている。天と竜・魔の力も持っている。だが、お前達もまた欠けた者どもだ。小僧は敵を倒す気概を持ちながらも力を十全に使う技量は無く、ちび助は力を使う技量を持ちながらも敵を倒す気概が全くないのだからな。」
「・・・・何が言いたいのさヴェルザー!!」
「回りくどい事言わないでさっさと言いたい事をきちんと言いなさいよヴェルザー!!」
「・・・・年寄りの繰り言なれば他所で言うがよい・・」
攻防しながらヴェルザーの言葉を聞かされるダイと、ダイを援護すべく式で鳥の群れを作って駄天使たちの視界を邪魔しているティファと、最小限の攻撃魔法で援護しているバーンから抗議の声が上がる。
こんな時に回りくどい事を言うなと。
その言葉にヴェルザーもぶちぎれた。
こいつ等を助けてやる義理など本来は無い自分が!!せっかくヒントを出しているというのに!!!
「馬鹿か貴様等は!力を持った妹から貴様の左手は何を受け取ったのだ小僧!!貴様等の父親はどのような時が一番の力を発揮していたかすらも!ちび助も小僧も忘れたか!!!」
びりびりと吠え上げられた言葉に、ダイの中のーナニカーであるティファの記憶が即座に反応しダイに教えた。
この状況をひっくり返す活路を!!
その瞬間、ダイの中で力が溢れ、青白い竜闘気が空間を雷が奔りさる様に轟き唸り、嵐の如き力が吹き上がる中でーそれーは姿を現した。

空間の中央に、ダイが威風堂々と佇んでいた。
髪の全てが逆立つ程に力を溢れさせ、額の真ん中に竜の騎士の紋章を輝かせたダイが、駄天使達を見下ろして。
自分でも持て余す肌の力を暴発させない様に、己の中のティファの記憶に力の抑え方を教わりながら。
「・・手間のかかる小僧だ・・・。」
「ヴェルザー・・」
「何か文句があるのか小僧?」
冥竜王たる俺様が折角ヒントを出している時に、短気に噛み付く愚か者がと罵る前に、その言葉をダイから掛けられた。
「ありがとうヴェルザー。」
「な!!!勘違いするなよ!!!そいつ等を殺させる為にだな・・」
ダイの礼に、ヴェルザーは何か言おうとしたが途中で止める。
なんだか言うのが馬鹿らしくなり、代わりの言葉を吐き捨てる。
「この茶番をさっさと終わらせろ小僧。」
「了解だ、ヴェルザー。」
その言葉を、ダイは気分を害した様子は無く微笑みを浮かべて応えて眼下を見下ろす。
ヴェルザーの言葉の通り竜の騎士最強形態たる竜魔人となり、全ての事に決着をつけるべく。

幕間―竜王の望み―

ルザー様・・・ヴェルザー様・・・
んん？どうしたお前達？
眠っているのを邪魔されても、ヴェルザーはゆったりとした声で、頭の周りを飛び回る肌が黒い精霊達に何事かと尋ねる。
この声音には、優しさがあるかの様に
お聞きくださいヴェルザー様！ヴェルザー様と我等の働きにより、魔界の瘴気が減少傾向にあるのです！
・・・そうか・・
こいつは何がそんなに嬉しいのやら・・・俺は厄介ごとをさっさと無くしたいだけで・・・
あれ！ヴェルザー様なして赤くなって横向いちまったんだ？
な！俺は別に・・・瘴気が無くなれば―こんな役目―を降りられると安堵しただけだぞクック!!
そうですね、瘴気が無くなれば永遠の輪廻の輪の頸木から放たれ、貴方様は別の何かになれると
そういう約定で俺は死んでも俺の役目を全うしてきただけだ・・・何を落ち込むロビン
・・・貴方様を、苦海に落とした自分を殺したく・・・
そうだす！ヴェルザー様もおら達も!!最初は瘴気の濃度の怖さ知らねぇで何度もヴェルザー様死なせちまって・・
ふん・・・半年後には学習させられて俺になっているのにはうんざりとしたものだがな・・
僕達がもっと強ければ・・
ヴェルザー様の負担だって減らせますのに・・・
このちび達はいつも俺の周りをぶんぶん飛んでは最後にこうやって湿っぽくなるな。
いかんな、もっとこう・・・自分勝手に生きていけばいいものを・・・

ヴェルザー・・・ヴェルザーよ・・・
ゥッ!!・・・なんだ此処は・・・
目が開いたね。必要な知識と情報はもう―君の中―に全て入っている筈だよ。
・・・ふん・・・・・俺に、この腐敗して死ぬ寸前の魔界の子守をしろと？
そうじゃない、瘴気を浄化する装置の力を上げる能力を君に授けたのも知っている筈だ。
いきなり生まれて目が開いたらそこは不毛の大地、魔界だと―知っている―事に、ヴェルザーは驚くような可愛げは無く、代わりに即座に悪態をついた。
・・・天界の竜神とはお節介で愚者と見える。
そうかい？
ああそうだ、お前の与えた知識で、魔界の惨状の元凶はお前達の前神と其の取り巻きどもだ。
・・・・・その通りだ・・
その元凶をどうにもできないお前達が、魔界で俺の様な不死に近い魔物を生んで何がしたい？俺が貴様達の悪行をぶちまけ魔界を煽り、

お前達に弓引くのも一興だと思わんか？
・・・・・どうしても、私達を赦せない時はそうおし。
ほう？
ただね・・・・この地を助けてあげて欲しい。君の強制的な不死性は、魔界の瘴気が完全消滅した時に解いてもらうように輪廻の神に頼んである。
それで？
君だって嫌だろう？どんな死に様をしても、同じ人生を永劫歩いていくなんて・・・

生まれた瞬間から悟らされた。碌でもない人生を歩かなければならない事を。
死んでも同じ自分など、竜神の言う通りいつか必ずうんざりとしそうだ。
生まれて早々に働き、サポートとして魔界でも生きていける黒妖精の二匹を付けられて。
俺の体に魔界の瘴気を取り込み、集めて浄化装置の所に行って二体の黒妖精が装置の力を高めて一気に浄化した。
俺は瘴気を取り込む器として頑丈に生み出され、黒妖精二体は桁外れの魔力を全て装置の運用に使われる者としてこの世に生じた歪な三体。
この世界を守れと言われても、誰にも祝福される事無く、日の目を見ずに生きていけと呪われた者達。
さっさと瘴気無くすぞお前達!!!
そんなヴェルザー様!!一気に瘴気を・・・・ヴェルザー様？
ああ!!ヴェルザー様!!!またやっちまって・・・・
そんな!!直ぐに装置のお側に・・・
最少は本当に加減知らずのどうしようもない猪突猛進ぶりだった。
一気に極限まで正気を貯めこみ、四方十キロの瘴気を取り込んで、自分は死体になって後はクックとロビンに任せて、次の半年後にまた似たようなことを・・・三度した後二人にボロボロと泣きながら、其

れでも無言のジト目に負けてやって・・わざとだ!!わざとだぞ!!俺の狂った運命に付き合わされている二人に免じて!ジト目に負けたふりして以降自爆浄化をしなくなっただけだ!!!

程々に、そして地道に瘴気を浄化していけば・・・いつの間にやら俺を王にするとか言う訳の分からん話をする者達が現れた。

くだらん、俺は俺の人生を全うにするために忙しいんだ。瘴気の無くなった場所に居たいのならば好きにしろ。俺を王にする必要は無いと放って置けば、奴等は自分達の中から王を選んで瘴気の無くなった場所に国を興した。

思った通り、俺が瘴気を消しているのを知って、俺を王に立てればその土地が手に入ると目論んでいたらしい。

・・・ヴェルザー様・・・なして王様になんねがっただ?

クック?

そうです、王になって瘴気の浄化を彼等に手伝わせても・・・

ロビンまで・・・

あの人達も少しならその身に瘴気を取り込んで、浄化装置の前に来てもらう事も・・

あぁそうか、この二人は知らないんだったな。

瘴気を取り込む時の、あの死にも勝るとも劣らない、狂いそうになる程の苦痛を。

瘴気は陰の気が凝縮して生まれたもの。其れは暗く悲しくそして刺すように冷たく、どうしようもなく絶望に心を傾けたくなる程の虚無感を心に覚えさせられる生き地獄。

あれは、―俺―だからこそ出来る俺だけの役目・・・

その苦痛を知らずとも、俺の負担を減らそうとしてくれているのかこのちび達は。

後―ほんの半分―で終わりだ。ざっと二千年かかったが、残りもその位だろう。

・・・そうですね!!後たった二千年位三人で頑張りましょう!!

んだ!!おらも頑張るだよヴェルザー様!!ロビン!!

そう・・・・・俺にも夢を見た時はあったのだ
確かでなく、脆く残酷な希望とやらを目指した時が・・・

ヴェルザー様お逃げを!!!
なして瘴気を浄化してくれるヴェルザー様を!!
クック!!ロビン!!!
逃げて下さい!!!
おら達此処までだ・・・そんでも・・おらとロビンはずっとヴェルザー様の・・心の中におりますだよ

クック!!!ロビン!!逝くな!!俺を・・・俺を置いてどこに行こうというのだ!許さんぞ!!俺を置いて逝くなぞ許さぬぞ!!俺の命令だ!!戻って来い二人共!!!!
いくら吠えて叫ぼうとも、二人が戻る事無く・・・輪廻の輪をくぐった瞬間自分には分かった。
自分は冥竜王・・・冥府の動きを即座に知る権限すらもある・・・何の役にもたたない力を持っていて何になる・・・あの―コマドリ―を現世に引き返せない益体も無い力・・
何故だ・・何故待てなかったのだ愚か者共が・・後一歩・・・後一歩だったのだ!瘴気を完全浄化するまで・・・だのに・

大勢の魔族達に襲撃され、二人の黒精霊によって、辛うじて外に出されたが力尽き、横たわりながら燃え盛る己の館の最後を見届ける・・・中には、クックとロビンの亡骸が・・・・まるで葬送の儀式の様に二人を焚き上げていく様に燃え盛る館を。
骸は、元の黒いコマドリに戻ったろうか?
二人は元は黒きコマドリ、どうしてか大量の魔力を有して生まれた珍しき種を、竜神が力を付与して黒き精霊に変えた時、あまりの力の多さに二つに別たれ生まれたのがクック・ロビン・・・・・いつでも俺の周りを五月蠅く・・・そして荒涼とした俺の心を慰めようと囀ってくれた可愛い俺のコマドリを・・・・

館を襲ったのは、力があれどどこの勢力下にも入らなかった自分達の態度に痺れを切らし、第三勢力になる前にと襲撃の為に手を組んだ愚か者達。
瘴気が消えたことで、蘇った大地を己達の手で支配しようと争いだした愚者達・・見やい・・・・折角俺が浄化したはずの瘴気が、俺達を襲った者どもの体から立ち込める光景を。
祓っても祓っても瘴気が無くならなんだのはこのせいか・・・・欲深い愚者がいる限り・・・・・あぁ・・・・本当に・・・こんな者達の為に今まで俺は・・俺達は・・
くだらない・・・あぁくだらないくだらない!!!役目がなんだ!こうして自分達の首を絞める愚か者達の為に!何故俺が助けてやらねばならん?助けてやる義理も無くなった!!義務も無い・・・・・もうどうでもいい・・・・もうどうでもいい!!
呪われるがいい愚かな天界!!真綿で自死するがいい魔界の愚者共!!!呪われた宿業の道を永遠に歩み!ともに倒れればいい!!!!
その日、魔界を浄化した竜は死に、呪いの声を叫びながら暴虐にして残忍な冥竜王が産声を上げ誕生した。
燃え盛る館の中の、可愛いコマドリと共に心を殺された哀れなる竜王が、この世界全てを呪いながら生まれたのだ。

ヴェルザーはかつてコマドリに思い描いたように好き勝手に生きた。自分以外の生命に対して一切の興味も関心も抱かず、配下の所領が瘴気に溢れようとも無策で放って置き、自分の面倒を見させるために気まぐれで眷属にしたのが弱小の者達で、何を勘違いしたのか子孫代々忠誠心高く、自分が何をしなくとも勝手に対処しているので放って置き、気まぐれに戦場に出て暴れるだけで自軍を勝利に導いたと勝手に喜声を上げる愚者達。
その時には敵も味方もヴェルザーには無かった。ヴェルザーの中にあるのは唯一つ、どうでもいい者達しかいなくなっていたのだから。
争えば争うだけ魔界は滅びへの道を加速させているのも知らない

愚か者達でしかないのを、ある日たった一人だけ魔界の崩壊の絡繰りに気が付いた奇特な者のがいた。
・・・・五月蠅い奴だ・・・・
魔界を救う為に手を組めだの、出来ないならせめて争うなとこいつもとんだ甘い者よ・・・・まぁいい、以て千年か魔族の寿命は。たった千年位、好き勝手に吠えさせてやろう。
結局は何も出来ずに悔し涙に塗れながら死んでいくのだと高を括っていたら・・・凍れる時の秘法で寿命を延ばし、若い肉体を上手く活用するか・・・
―バーン―とか言ったな・・・・―多少―は面白い。そうか、諦めずに天界を・・俺も退屈なのには飽き飽きしたな。
ふん・・・・ならば俺も遊んでみるか。
魔界を少し纏め上げ、地上を支配したら、あの御綺麗な竜神は驚こう。間抜け面したのを笑ってやるのも一興だ。
バーンの若造、俺と賭けをせんか？
・・・・お前とか・・・
くっくっく、そう嫌そうにするな若造。俺とお前で手を組む事は金輪際あり得ん。俺はこの世界などどうなろうと構わん。しかし退屈な事には飽いた。
ッ！貴様・・・何をする積りだ。
簡単だ、どちらが早く己の目的を達成するか競争だ。
競争とな？
そうだ、お前は壮大な計画で地上を消滅させて天界を滅ぼすのを目的としている。俺は地上とそこに生きている者達はそのままにして天界への足掛かりにし、ゆくゆくは天界を滅ぼす。
・・・・仮に、その賭けをしたとして余に何のメリットがあるのだ？
そうこなくてはなバーン。先に目的を達成した者に二度と逆らわず配下になる事だ。お前が勝てば、俺の配下達はそっくりお前に忠誠を誓わせる。どうだ？そうならば魔界の統一は成ったも同然。俺かお前のどちらかが軍門に下っただけで出来るお手軽な賭けだ。どう

だ？やらぬか？
・・・・・その賭けを反故しないと―お前―は言えるのか？
くっく、俺も嫌われたものだ。俺は最終的にどちらが勝ってもいいのだバーン。魔界統一にも、まして救済などどうでもいい。―賭けという目的―の方が俺にとっては重要だからな。
・・・・・・下郎が・・・・
御綺麗なお前もいつかこうなるさ・・・・あと二万年生きてみろ。きっと俺の言った事の正しさを知るさ・・・
救おうとも救おうとも、勝手に自ら死への道をひたすらに歩こうとする愚か者達を、言うかお前も見限ると予言して・・・・遊びの涯に俺は封印された。俺を勝手に生んだ、忌々しい竜神が生み出した竜の騎士とやらによって。
竜の騎士の力の根源があの忌々しい竜神によるものだと知った瞬間、久しく忘れていた頭に血が上る思いに負け、黒の核晶を作り上げ即座にぶつけてやったのに生きていた知性ある生き物とやらはどいつもこいつも薄汚いものだと教えてやったのに、生命とは素晴らしいとほざきおって・・・・・挙句数年後には自信が人間とやらに絶望して闇落ちしたと聞いた時は本気で消滅したくなった。
こんな何も分かっていない、いままでで出会った中で最大の愚か者に封ぜられた自分が恥ずかしくなって本気で死にたいのだが・・・・

そして引きこもっている間に、世界はおかしなことになっていた。
バーンが手筈通り地上を攻めているが・・・捕虜を寵愛しているとはあいつの身に何が起こった！⁉情は有れど冷徹で捕虜など取らない殲滅の大魔王が一体何しているのだ⁉
そして・・・・・好奇心に負けて見に行ったが運の尽きだった・・・おかしな娘に怒鳴られ翻弄され振り回され・・・・気が付け場何時の間にか手を貸している様なおかしな事を俺もしている・・・・何だこの娘は・・・・
怒りで本音をぶちまけたちびの声は、自分と同じでこの世界を呪っている怨嗟に満ちた声で・・・なのにそれでも世界を憎めないと泣く

おかしな娘・・・・世界を憎んだ俺とは真逆な娘・・・怒鳴った時の感じがクックに似ていたのがいけない・・・兄の方は甘い顔をしながらも思慮深い、ロビンの様な雰囲気を出すのがいけないのだ・・・

世界を助けようと、あの二人と同じ、愚かで優しい歌を懸命に囀る兄妹が俺の思考を狂わせたのがいけない・・・・気が付けば、俺は兄の方に竜魔人への道を指し示していた。

おそらく力を十全に使える妹の紋章と、敵を殲滅する力を振るう事を躊躇わない兄の紋章を合わせれば、竜魔人化できるだろうと見込んで。

小僧はその通り、竜魔人と化して敵を見据えている。

あの二人であれば・・・クック・ロビンが遂に果たせなかった、大空と大地の間を気ままに飛べよう。

「この茶番をさっさと終わらせろ小僧。」

魔界が救われるかどうかは興味はないが、もしも助かるのであれば俺もお役御免になれよう・・・・もう生きるのには飽いた・・・

「了解だ、ヴェルザー。」

・・・・あの小僧は何か勘違いしていないか？お前を助けたわけでは決してない。お前が敵を殺し、魔界を救った先に、俺の望んだ死があるから手助け・・・まぁ折角の礼だ、受け取っておいてやらんでもないがな・・・

クック・・・ロビン・・・・お前達は・・・俺を待っていてくれているだろうか？

夜明け

―あの人―が・・・父さんが竜の騎士最強形態になった姿を見たのはったたの二度だけ。

一度目は俺の記憶を消して攫いに来た敵として俺達の前に立ちはだかった時。

あの時のーあの人ーの目は、何もかもを憎んでいた獣性に満ちた瞳で俺達を潰しにかかって来た。

二度目は俺達を守る為に、俺達と共にバーンに立ち向かってくれた時。

その時の―父さん―の瞳は、眠らせたティファを心配して憂いに満ちながらも、俺達を守ろうとしてくれた優しい光が瞳に浮かんでいた。

・・・・今の俺は、どんな姿で、どんな目で敵を見ているのだろうか？

佇むだけで、圧倒的有利な立場にある筈の長老達はダイの姿を見ているだけで、嗤っていた顔に怯えの色を浮かべ冷や汗を流す。

重いのだ、たったの十二の童子が放つ気配が、まるで古の・・・絶頂期のヴァルガブル神と相対しているかを錯覚させる気配に押し潰されそうで。

だが彼等は知らない。否、痴天使達等には知りようも無く、想像だにも出来ないであろうが、圧倒的な気配を出してい敵を威圧している積りがダイには無い事を。

ともすれば身の内から溢れそうになる獣性を、己をも飲み込もうとする殺戮衝動を必死に押し殺し耐えている事を。

これが竜魔人化・・・父さんが竜魔人になった二度目の時、戦っている父さんを冷静に見れた。

其れは獣が本能で戦う様な圧倒的な殺気を以て、確実に敵を殺す事のみの動きであった。

本来の―騎士―としての、守るべき者達のために戦う優しい父の面影までもが飲み込まれていたようで、あの時は頼もしく思った半面怖

かった。父が、獣性に飲み込まれてしまうのではないかと、命を懸けた極限での戦いにおいて、別の事に気を取られるだなんて未熟だと己を叱責しながらも・・・・・俺は・・・・こいつ等を殺したいのだろうか？

ヴェルザーの言う通り、圧倒的な力を以てこいつ等を捻り潰す事が正しいのだろうか？

殺せば、それで全てが解決するのだろうか？

・・・・この殺戮衝動に身を任せ、あいつ等を殴り殺して終われば いいのだろうか？

其れが・・・・俺の思い描いた勇者として正しい姿なのだろうか？

衝動を抑えつつも、長老達を睨みで押さえつけているダイは在りし日を思い起こす。

勇者を志す―ダイ―にとっての正義とは何か、難しい事を聞いてきた妹と共に考え、懊悩の果てに生まれた俺の・・・・あぁそうだ、そうだった・・・

「き・・・貴様!!!このバケモノが!!!」

ダイの威圧と、それに付随する様に強いられる沈黙に耐え切れなくなった一人の長老がダイに向かって怒鳴り上げる。

その様は口調とは裏腹に、青褪め、全身を震わせ怖れ戦き、何が言いたいのかと視線を静かに向けただけで涙目になっているではないか。

他も同じ、自分達の優位な立場を忘れる程、自分の事が怖ろしいらしい。其れは自分の気配かはたまた自分では見られないので分からないが、父のあの姿よりも異形の物と成り果て悍ましい姿のかは分からないが・・・少なくとも見える範囲では両手はいつもと同じで、見た目が劇的に変わった様子はないが其れは兎も角・・

怯えているあいつ等を殺して何に・・・

「にぃ・・・・・」

一人の長老が怒鳴ったですぐに訪れた沈黙を、幽かな声がポツンと破る。

声は隣からし、横を向けば妹を抱き上げたバーンが来ていた。

どうやら、衝動を抑え込むのに自分は随分と手間取っていたらしいとダイは苦笑しながら、バーンの腕に抱かれている妹の頭を優しく撫でる。

ティファの顔が憂いに満ちている。きっと、怯えたあいつ等の姿を見て―いつもの様に―・・・・其れが困り事だと世界が言っても俺には関係ない。だって俺がなりたい勇者はもう決まっている。

「ダイよ、あ奴等を仕留めぬのか？」

「バーンはそうした方が嬉しい？」

「ぬ・・・・どうするというのだ？」

「大魔王？にぃ？」

何時まで経っても攻撃しないダイに、バーンは敵を、この状況をどうするつもりだと問うたが、反対に問われてしまい面食らう。

当初は怒りに任せて奴輩共をズタズタに引き裂き殺そうとしたのだが・・・

ダイと同じ思いに達したバーンの沈黙に、ティファはどうしたのかと二人に声を掛ける。

このまま動かなければ帰る事も出来ないのに何故動かないのか分からなくて。

髪が逆立ち、犬歯がほんの少し鋭くなった以外はさして変わらない兄を見つつ、ティファは自分を埋めたくなっている。双竜紋を全開にする事で―ダイ―が竜魔人になれる事をすっかり忘れてましたいた間抜けな自分を。

ここ半月は―原作―とはまるで違う事が起きるこの世界を―物語―と思う事は遂になくなり、そしてこの世界に生きるすべての者達と同じく、我武者羅に前に進んで生きていく間にすっかりと忘れてしまっていたのは良い事なのか悪い事なのか分からないが、少なくとも自分もしっかりとこの世界に足をつけて生きていこうと足掻くようになったのはいい事だと思う事にして、それ故に思ってしまう。

―この世界―の為にも、あの駄天使達は残すべきではないのかと。

少なくとも兄とバーンはあいつ等を赦す事は金輪際ないだろうと。

其れでも思ってしまう・・・・もしも出来る事ならば・・・・

そんな妹の考えなど、―兄―が分からなくてどうするとばかりにダイは妹の頭を優しく数度叩く。
「ティファ、俺は勇者だ。竜の騎士・竜魔人である前に勇者なんだ。」
「う?うん・・・・」
「だから、俺は勇者としてこの戦いを終わらせる。」
「にぃ?」
兄が何を言いたいのか分からないなど、ティファにとっては初めてであり物凄い戸惑いを感じて困惑する。
今までは、自分の言動に兄が振り回されていたのに、立場が逆転してしまったようで。
「其方は、それで良いのか?」
どうやらバーンの方が、今の兄を分かっているようで最終確認をしている。一体、二人は敵達をどうするのか決めているのだろうか?
ハラハラとしながらも、何か仲間外れをされているようで釈然としないティファに苦笑しながら、ダイは剣を正眼に構え大上段に構える。
その姿に、自分達の殲滅を目論むかと長老達も構え、回復と補充を何時でも出来る様に術式を発動させる。
一人でも残れば、何度でも蘇れる。其れに絶望しながら、何度でも無駄な足掻きをすればいいと高を括って。

怯えながらもどこか慢心した表情、少し前の俺なら分からない人の繊細な機微を、俺の中のティファが教えてくれる。あれは何か悪あがきをしようとしている者だと。
ティファの見ている景色はこんな感じなのかと思うと、左手にあり、今は自分の紋章と融合したティファの紋章に愛おしみが増す。
どうすれば、ティファを自分一人で独占できるかを近頃ずっと考えていたが、ある意味で其れは達成されたと言えよう。
ティファの紋章は誰にも、其れこそ神すら触れられず、終生自分一人だけのものなのだから。
平和になって、レオナと結婚をして、そうして子供も生まれ家族に

囲まれても、時折一人になってティファの紋章に触れ、ティファの思いを共有する事が出来たなら、きっと自分は完璧で幸せな人生を送れるのだと思うと優しい気持ちになる。
あいつ等を、殺そうと思わない程に
剣を大上段に構えたダイは、体内の竜闘気を練り上げ剣に伝わせる。
青白い竜闘気が剣に行きわたり、ダイ自身の気も練り上がったその時、ダイは剣を振り下ろした。
何の力も込めず自然に。其れはアバンが最初にダイに課した大地漸と同じで、余計な力を込めず、練り上げた闘気を信じて振り下ろして大岩を斬った時と同じ。
ダイが剣を振り下ろした瞬間、斬られたものが縦に亀裂が奔り、駄天使達から驚愕の声が響き渡った。
「馬鹿な!!この!!!我等が心血を注いだこの空間があんな小僧に!!!」
「このバケモノが!!!我等の思いを知らぬ愚か者!!!」
「永劫に呪われるがいい！下郎が!!!」
崩壊する空間を、信じられない面持ちで見つめた数瞬後、痴天使達は口々にダイに向かって喚き散らすのを、愉快気な声がそれらを遮る。
「やってくれたな小僧、あいつ等を屠らず—引き摺り出す—方を選んだか。」
「ヴェルザー・・・怒っているかい？バーンも？」
自分が選んだ結末に後悔はない。自分が目指した勇者とは、カッコよく敵を倒すものでは無く、周り、特にティファがずっと笑顔で笑えるように、悪いものを全部倒す事だから。この道であれば、ティファが後悔の涙を流す事は少なくともない筈だと信じて行ったのだから。
それでも、自分も地上も、瘴気の脅威を本当の意味でいまだに分かっていない中、彼等の怨敵をこんな形で終わらせようとする自分に怒っていないかと尋ねるダイに、魔界の二大巨頭の笑い声がする。
空間が崩壊しているこんな時にだ。
何故二人が笑うのだとダイが聞こうとしたその時、空間が亀裂に耐

え切れずに割れだし、そしてガラスが砕けるような轟音と振動がダイ達をも襲い、バーンは咄嗟にダイもティファと同様に抱え込み、ティファもまたなけなしの力を振り絞って―全員―にジ＝アザーズを施す。

此処まで来たのであればもう・・・・

結界が空間が崩壊して地上かその他のどこかに戻るまで保だろうかと危惧したその矢先、崩壊によって真っ暗になっていた空間が一斉に砕け散り、何かの光が差し込んだ。

其れは何かと、ダイとティファとバーンが見上げた時、僅かに夜の空に残る星達が三人の目に飛び込んできた。

下を見れば駄天使達も欠ける事無く全員いる。

そして周りから大歓声が起き、知っている者達が続々と自分達目掛けて来ようとする気配に三人は思わず顔を見合わせ笑みを浮かべる。

トベルーラで来ようとしているポップを筆頭にした仲間達の気配に、キルとミストの気配に、谷で待っていてくれた仲間達の気配に、自分達は無事に地上世界、それもロロイの谷に帰って来れたのだと

そしてそれは谷にいた者達全員と、神々と精霊達の水鏡で、地上のみならず、魔界、天界の、文字通りの世界中が知り、その瞬間世界中が喜びの大歓声が轟き響く。

魔界の神・大魔王バーンの腕に守られる様に抱かれている双子・竜の騎士にして勇者であるダイと、一行の料理人にして大魔王の魂を身に納めているティファの帰還を言祝いで、世界は喜びの一色に満たされる中、東の空が白み始め、太陽が昇らんとしている。

どうやら自分達が思っていたよりも長い時間、駄天使達と死闘を繰り広げていたのだとダイとティファは知った。

戦っていた自分達にはあっという間であったが、待つ者達にとっては長い、本当に誰にとっても長い夜がとうとう明けるのを、ダイとティファはバーンの腕の中でその光景を見つめる。バーンも、時間が経ったことに驚いているだろうかと二人が見上げれば、バーンの目に、うっすらと涙が見えたのを見て驚いた。

そしてバーン自身も、涙が出そうな事に戸惑っていた。

一大決戦を仕掛け、其れでもどちらも滅びなくてもよい道を指し示され、選んだ末に見る太陽の、何と美しい光景かと胸を打たれた。
幾度も見ていたはずの太陽が、今は初めて見た時のあの驚きと温かさに触れた喜びが思い出される。
ほどなくすれば、魔界全土にこの温かい光を満ち溢れさせる事が出来るのかと思うと胸が熱くなり、不覚にも涙が零れそうになる。絶望を退けんと世界に戦いを挑み、その果てにようやく絶望の暗闇を蹴散はしてくれるであろう事を、バーンは心の底からを実感し歓喜に身を震わせ、そして胸の中で幾度も噛みしめる。
絶望の夜が明けたのだと

下された裁定

物凄い大歓声もそうだけど、同じくらいえらい状況になっちゃてる。

空間をダイ兄が斬って出てきた先がロロイの谷の真ん中で、出てきた瞬間から大歓声起きて、直ぐに私とダイ兄は、何とバーンも一緒にトベルーラですっ飛んで来たポップ兄に抱きしめられてるって・・・ちょっと前なら味方一同どころか、敵からもどんな状況だって突っ込み受けそうけど、本当なんだよ。

一番に私達の出迎えをトベルーラの突撃で来てくれたポップ兄は、バーンの目の前でフルブレーキして止まる事無く、バーンごと私達を抱きしめてくれてわんわん泣いて、同じくトベルーラで出迎えに来てくれた父さんも、抱きつくことはないけれど泣きながら私達の無事を喜んでくれてる。

地上を見れば、いつの間にかパレスから降りていたマァムさん達・・・・ううん、私が大好きで、私の事が大好きな人達全員が泣いて喜んでくれてる。

ノヴァ達リンガイア兵の皆さんと小父様も、私達と一緒に空間から出てきた駄天使達を見張りながらも、薄っすらと涙を流しながら喜んでくれているのがわかる。

おじさんも、疲れてるだろうにトベルーラで来てくれて、無言で泣きながら、私の頭を何度も撫でてくれてる・・・・・皆、私が生きて帰ってたのを嬉しいって喜んでくれてるんだ。

その様子を、ポップ兄達と違ってバーンの後ろに来て直ぐに控えに回ったキルとミストが、黙って見てる。バーン様に気安いと怒る事も無く、気配でみんなと同じように喜んでいるのが分かる。

どうしてここまで兄達と魔王軍が打ち解けられたのかな?。

そんな関係になってくれたら嬉しいなと思っていたのに、言ってはなんだがそんな関係になるのには最低でも十年以上かかるかもって思っていたのに・・・私が攫われた後になんかあったのかな?

あれかな?ピンチの時こそ全員で事に当たって仲良くなるってい

うのは夢物語だって冷めた事言う奴いるけど、案外そんな事は無く上手くいくんだ。雨降ってって奴かな？
私も攫われた甲斐があったのかな。

等と極楽とんぼが脳内に飛んでいるかの如く、お花畑思考になっているティファは知る由もない。
彼等が結束を固められたのはそんなホンワカとした綺麗事だけでは済まされないあれやこれやの会話が世界中に飛び回ったのを。
三神達が寿命のエネルギーと魂の力を半分ヴェルザーに譲渡する事で、ティファを助けに行けると分かってからが凄かった。
あるものは老害どもを殲滅し、首を晒しながら彼等のシンパも血祭りに上げに行こうだの、地上と魔界の二界が手を携える事になっても天界は永久的にはぶろうだの、実に物騒な言葉の数々が地上と魔界から多数上がり、天界も自分達の身内の不始末で肩身が狭く何も言い返せないのに待ったをかけたのが矢張り大勢の子供達、それもリュート村のニーナが火を噴いた。
もうそれは筆舌に尽くせぬ程の、怒鳴りつけて叱る事に一家言あると言えそうなティファが聞いてもドン引きそうな毒舌交じりのいい加減にしろの説教は、二界の大人達を深〜く反省させ、地上と魔界を反天界にしてみるのもいいかなと煽っていたヴェルザーの口すらも噤ませた大騒動の果てに、ニーナ達はティファお姉ちゃん助けて欲しいと純粋な願いをダイとバーンに託し、―色々―と思う事が多々ある大人達も、一番は矢張りそれなのだと思い知る。
天界が老害達がどうとか言う前に、三界を深く思って愛してくれている少女の無事を祈る事で世界が纏まったのだと知った日には、ティファは様々な思いで埋まりたくなるだろうから知らぬが何とやらであろう。
その後は世界中が見守っていた。駄天使達の空間に囚われたティファの下に、大魔王バーンと勇者ダイが乗り込んだ事で、ヴェルザーの力が干渉可能となり、主要都市のみならず天界の三神と六大精霊王達に要請という名の超上から目線で、映像結んでやるからさっさと魔

界も含めた知的生命たちがいる所全部に映像送れと。
あの痴天使共なれば、戦って頭に血が昇っていくうちに滔々と自分達の悪事を恥じとも思わず口の端に上らせるだろうと見込んで、案の定悍ましく唾棄すべき歪んだ理想もどきを偉そうに講釈してきたのを、ヴェルザーは口と瞳を歪ませた嗤いを浮かべた。
冥竜王の面目躍如ともいうべき悪辣さを十二分に発揮して。
これでもう、老害駄天使達をどう扱おうと文句を言うものとておるまい。おそらく三神達も、何も知らなかった一般天族共も、身内にして自分達を導く者と思っていた長老達であっても庇おうという者は出ないだろうと。
庇う声は聞こえず、石打つ者は出よう。怨嗟に塗れ、憎悪の捌け口として生かされる事こそが、本当の意味での醜悪なる者の末路に相応しい・・・・生き地獄を、クックとロビンが味わったであろう痛みと恐怖を終生味わって生きていけばいい。
ヴェルザーの思惑は兎も角として、ティファとダイの仲間達が、地に降り立ち二人を名残惜しそうに腕から出したバーンの事も囲んで三人を揉みくちゃにした。
ダイとティファはそういう事に慣れているので身近にいる人に抱き返して応えられるが、今生でそんな事は初めてのバーンは、あらゆる困難から、絶望から、強敵にも立ち向かった大魔王が、人生初に逃げたいと思ってしまった。
自分は罪人で、一歩違っていれば地上を消していた敵の首領であるだろうに・・誰も気にもせず、ダイとティファだけではなく自分の生還をも喜んでくれている事に気恥ずかしく、優しい思いに対してどう応えればいいのか分からなくて・・・バーンの顔が赤くなるのを見てしまったダイとティファは、どちらが言うともなく顔を見合わせ、そして―ニンマリ―と笑ってバーンに向かって突撃をした。
「大魔王!!助けてくれたありがとう!!!」
「バーン!沢山沢山守ってくれてありがとう!!!」
遠き空間迄助けに来てくれたとティファは叫び、大魔法から空間の崩壊から守ってくれた事をダイが叫びながら満面の笑みで二人揃っ

てバーンにとびかかって抱き着き、そして押し倒してしまった。
地面にぺたりと座るなどと言う目に遭ったことは幼少の頃にもないバーンは、ふいに抱き着かれた事よりもそちらの方に驚き目をぱちくりとしたのが、またなんとも言えず、ダイは我慢できずに本音を叫んでしまう。
「うんー・バーンはやっぱりうっかりとしてる事もある可愛い人だ!!!」
そのあまりにも不敬で、それでいて何の含みも無い物言いに、ダイの言葉に驚いて静まった直ぐ後、爆笑の渦が世界を覆い尽くす。
魔界の神様は近寄りがたいものでは無い。慈悲深く強く、そしてうっかり屋の可愛い人なのだと知れた事が嬉しくて、彼の人に何もかもを背負わせず、自分達が今度は頑張る番だと魔界の者達は誓いを立てながら、憎しみの怨嗟を笑う事で見の内から追い出そうと力強く笑う者もいる。
憎しみも戦いももういらないとばかりに。

一方ではバーンの様子を見ているヴェルザーは、ダイとティファに受けている仕打ちの全ての事に狼狽え赤くなっているバーンの態度を見て留飲を下げている。
自分をふいの言葉で狼狽えさせたのだから、其の千倍は恥ずかしい思いをしろとニヤニヤしながら。
そしてもう一方では、老害駄天使達を冷たい目で見つめ、おもむろに空間を開け世界に通告を出す。
「勇者の小僧、―ちび助―もういいだろう。時間だ、そこな老害駄天使達を貰うぞ。」
「「ヴェルザー⁉」」
「ふん、言っておくがな、そこの者達の処遇は俺と三神達でもう取り決めがされている。」
「・・・いつの間に・・」
「お前の囚われた空間に、勇者の小僧とバーンの若造を送り込むときにいくつかの約定をさせてな。
もしも小僧と若造がそ奴等を殺さずに連れ帰ったなら、終生魔界の

最深部で瘴気の浄化をさせる事になるとな。」
「なん!!」
「我ら高貴なるものが何故そんな事を!!!」
「その役目はお前の・・・・」
「喧しいわ!!!」
ヴェルザーの通告に青褪め喚き出そうとする長老達を、ヴェルザーが憤怒の怒りを吐き散らし黙らせた。
「喚こうが騒ごうがこれは決定事項だ！魔界が浮上し瘴気が一時全て浄化されようとも、負の心が無くなる事は永劫なく、魔界の深部に転送される忌々しいシステムが無くなることは無いんでな。俺はもう浄化をする気はない。お前達、自らやるか、それとも意識だけ残し、残りは瘴気を浄化するだけの―器―にされるか選ぶがいい・意識が疲れを感じようともボロボロになっても瘴気の浄化の為に動こうとする人形にな・・言っておくが三神達も天族達も其れで合意している。足掻くだけ無駄だ。
この世界に、お前達の味方なぞいない！疾く俺の下に来い!!!」
今後世界が良き方向に向かおうとも瘴気が無くならない事実と共に、ヴェルザーは無慈悲ともとれる裁定を長老達に下し、異論を聞く前に自らの領地に招き寄せる。
口答えするのであれば、即座に瘴気を浄化するだけの―人形―にするべく。

平和への一歩とその代償

老害駄天使達がヴェルザーの下に送られ、半永久的に瘴気の浄化をする任に就くと決まった。
天界を牛耳っていた長老達の、歪んだ思想から端を発して生まれてしまった戦乱の元凶が全て消え果て、もうこれで―何もかも―全ての因縁に決着が付き、三界はこれから大変な事になるだろうが、戦いを無くそうと共に歩く事で、平穏な日々をこれから続くだろうと誰もが予感せずにはいられない。
地上ではその第一歩として、魔王軍に対抗する為の最後の地上部隊を率いていたカール王国の女王フローラが、勇者達の帰還を祝う喧騒が一段落したのを見計らい、ゆっくりとバーンの下に単身近づき挨拶をした。
「初めて対面しますね。私はカール王国女王フローラです。」
「・・・確かに直に会うはは初めてよな。魔界の大魔王バーンである。」
その光景は、敵で同士であった総大将が初めて邂逅する緊張感というよりも、お互いにどう接すればいいのか分からないと言った戸惑いの雰囲気で始まった。
地上界側としては、彼等の受けて来た惨状と屈辱に塗れた歴史を鑑み、その元凶が明かされ取り払われた今となっては天界と共に魔界を救う方向で行く事が正しい事だとは頭では理解していも、心情が追いつかないでいる。
世界が繋がり戦いこそどこかに言って貰うべきだと提言したあの時も、尽きせぬ恨みがあり、犠牲になった者達への哀悼を終生忘れないと言ったあの言葉に偽りはなく、魔界側としても幾多も地上を攻め、その度に人間達に犠牲を出したしまった罪悪感は確かにある。
その双方の懊悩を、コホンとした空咳が破り、一人の男がバーンとフローラの間を仲立ちする様に入ってきたのは、穏やかな笑みを浮かべたアバンであった。
「お二人共、この良き日に出会ったというのに顔が般若の様になっているのはベリーバットですよ。」

「・・・アバン・・」
「む・・・それは・・」
「魔界と天界の事が済んだ今、今度は魔界と地上が仲良くなる道を模索せねば、またリュート村の人達や世界中の子供達を失望させてしまうと思うのですが、それでいいのでしょうか？」
アバンは気まずげな大人二人に、敢えて―子供達―を引き合いに出して見せた。
これから自分達が何を話しどのような道を選択するで、後の世界を生きる子供達に良き未来か、それとも今の様に気まずくいつ仲違いをしてしまうか分からないギスギスとした未来を残すのかが決まってしまう事を指し示す。
カール王国の女王フローラと、魔界の大魔王バーンの初邂逅にはそれ程の重みがあるのだと諭す為に。
よりよい未来を・・・その望みの為に自分は世界に魔界と手を携える事を提言したのだという気持ちを、アバンの言葉で再確認したフローラは意を決してバーンに右手を差し出す。
「私の中に、確かに戦による痛みがあります。しかしそれは貴方方魔界の方こそがずっと痛みを抱えて生きていたはず。これからその痛みを、私達と共に分かち合いませんか？」
「其方・・・」
「消えない痛みを癒す方法を探しましょう。一人ではなく、大勢の者達と一緒に、苦難も苦悩も何もかもを乗り越えましょう大魔王バーン。」
柔らかい笑みの中に、力強い瞳を輝かせるフローラの差し出した右手を、バーンは直ぐには取れなかった。
地上に抱いた羨望と怨嗟の念を、昼夜問わずに感じていたあの胸の痛み全てが鮮明に蘇る。
そして地上を滅ぼそうとした罪悪感を。
自分達を助けると言ってくれる者が多ければ多いほどに罪悪感が増し、魔界の滅びを考える時と同じ痛みが胸を裂くように痛ませる。
この天界の大仕掛けが無ければ助けを求めることが出来なかった

とはいえ、他にやりようがなかったのか？
地上は無理でも、精霊王達との交信は、やろうと思えばできたのを知っていた。それでも最初から助けを求めるだけ無駄だと決めつけ何もしなかったのもまた事実で・・・
本当に全ての可能性を模索して足掻いたのかと言われれば否と答えるしかない。純粋に魔界を助ける為だけとは言えず、羨望と嫉妬を覚えた地上が憎らしく、最初から、地上を消す事を前提として動いたのだから。
其れでも・・・・・其れでも一歩を・・・

受け取られない右手を気にする事なく柔らかい微笑みを絶やさず、フローラは―その時―を焦る事なく待ち続ける。
自分がバーンの立場であれば、これまでの事を何も考える事なく手を取ることなどあり得ない。
相手の立場に立ち、何を考え悩み動くのかを考えるべきだと、ファブニールの竜と初代勇者から学んだ。
相手を知ろうとし、慮る事こそが真なる平和への第一歩だと。

そのフローラの笑みを見たバーンが、自分達の遣り取りを周りをどう思っているのだろうかと見回せば、カール騎士達すらが憎しみの思いではなく、フローラと同じ柔らかく優しい瞳で成り行きを見守っているのを知った。
大魔王の魂を宿してたティファを迫害しようとしたのが幻であるかのように、彼等もまた、憎しみを乗り越えようとしてくれている。
そうであるのならば自分もまた乗り越えよう。様々な苦難をこの者達と共に・・・

葛藤の果てに、バーンが遂に動いた。
フローラの右手を取り、おしいだきながら感謝の言葉を伝えるべく。
「其方達の慈悲深さに感謝の念を。どうか共に魔界を救ってほしい。

憎しみも戦いも無い世界への道を、手を携えて歩めるように。我等魔界は二度と地上への侵略をせぬことを誓う故。」
「はい、共に手を携え歩み、苦難の道を乗り越えましょう、大魔王バーン。」
バーンが誓いの言葉を述べるように、魔界が地上界に和平を正式に臨み、カール女王フローラが受諾した瞬間、世界が再び歓声が響き渡る。
そしてベンガーナ・パプニカ・テラン・ロモス・リンガイアの各国の王達も、フローラ女王に続くように和平を支持する声明を出してくれた。
そんな中、リュート村の子供達がまたもやティファの大胆さかはたまた怖れ知らずが乗り移ったかのように、落ち着いたら魔王軍御一行様で遊びに来てくださいという要請を出す始末。
村人一同大量の料理を要しして待つので是非にと。
その怖れ知らずな要請に微笑まし気な笑いが生み出され、誰もが朗らかで明るい気持ちで胸が満たされる。
魔界にとっての絶望の夜が、そして地上界にとっても魔界からの侵攻に怯える夜が明けたのだから。
これで何かもが上手くいくのだと、世界全てが歓喜に包まれてあぁ・・夢にまで見た光景が・・・夢でしか見れないと思っていた光景が現実として目の前に繰り広げられている・・・・ずっと、この光景を夢見て来た。

大魔王バーンとカール王国の女王フローラの初めての邂逅が上手くいき、周りが歓声を上げいる光景を、ティファは父バランの腕に抱かれながらじっと見つめる。
その様子を、ノヴァも、マトリフも嬉しげに微笑んで見ている。
父親の腕に抱かれ、幸せそうな顔をしたティファの事を。
バランは一頻り生還祝いを受けた愛娘をすぐさま確保し、周りは言わずと知れたラーハルト・ガルダンディー・ボラホーンの竜騎衆三人組が固めて睨みを効かせている。

ここまですればあの害虫死神は近寄らんだろうと目論んで。
果たして目論見通りなのか、キルはバーンの後ろに親友と共に控えている。
ヴェルザーは最早敵ではなく害虫駄天使達が連れ行かれても、和平の第一歩を踏み出せてとしても、主に万が一が起こる事を考えて控えるのはキルとミストにとっては当たり前である。
それと今回だけは、ティファの疲労を考えて労るべく、父親の腕に預けておく。
今後ー自分達ーは、仲良くなるのだからいつでもティファの側に好きに行き来しても文句は出まいだろうし。
その双方の思惑のもとで、ティファはこれまで歩いてきた長い道のりを思い返している。
神々の後ろ盾があれど決して楽な道では無く、苦痛に喘いだ険しい道のりではあったが、不思議と途中で投げ出そうと思った事は一度もなかった道を。
最初はただ、この世界の大魔王が強すぎて地上界と天界全てが滅んでしまうのを、共に助けて欲しいという三神達の要請を、死んで輪廻の輪を通ろうとした—私—にされて、竜の騎士と人間の王女との間に生まれたディーノの妹ティファとしてこの世界に生れ落ちて・・・・長かった・・・・本当に長い事頑張れたんだな自分は・・・
目の前で繰り広げられる光景が光り溢れて見えるのは、朝日が地上を照らしているだけだからでは決してないだろう。
この場にいない者達を含めた皆が、それぞれの胸に希望を抱いき、より良き明日を思い描いているからこその光だろう。
まだ地上は天界とそして魔界と繋がっているからこそ分かる。魔界の深部の人達が、同胞によって、そして空間を使える天族によって救われて行くのが見える。
瘴気の中から救い出されて、温かい毛布に包まれて・・・・何と温かい光景か。
誰かが無為に見捨てられる世界が一変していく。
これで・・・・・私は役目を終えて・・・・

ピシリ
・・・・な・・・・に？

ピシリ・・・・ピシ・・・
こ・・れは！

その音は幽かに、そして確実に音を立てだした。
世界が希望に満ち溢れるだろうと喜ぶ声にかき消されながらも、誰に聞こえずとも構わないとばかりに立つ小さな音は、やがてティファを抱き抱えていたバランの耳にまで届いた。
何かがひび割れる音、或いは岩が砕ける寸前のような音だが、そのような音を立てる者が見つからず訝し気に当たりを見回すのを、仲間と一緒にもみくちゃにされていたダイが父の様子に気が付き近寄り・・・・
「ティファ!!!!」
そして、妹の異変に気が付き叫び声を上げた。
息子の叫び声で腕の中に居る娘に何があったかと、バランの腕の中に居るティファに何があったかと父とその場にいる全員に見られたティファは、呆然としながら己の腕を持ち上げ見つめていた。
ひび割れ、砕ける寸前の陶器のような腕を・・・・
一体これは何？・・・・私・・・・

ひび割れた腕に痛みはなく、何が起きているのか考えようとしても思考が上手くまとまらない。
自分の心臓の音がいやに大きく聞こえて、周りの人達が私に何か言っているのに全く聞こえない・・・・私・・・・・・このまま砕けて・・・・・

壊れてしまうのだろうか？

その思考を最後に、ティファは意識を手放した。
目を閉じる寸前に見たものは、ぼやけていたが悲痛な顔で自分を案じる父の顔と駆け付ける者達の姿。
そしてその上を蒼天が広がって・・・・・・六色の魔法陣が・・・・

落ちていく・・・・どこまでもどこまでもひたすらに落ちて行く。
まるで涯のない穴の底に落ちていくように・・・・
現実で意識を消失したティファは、一糸纏わない姿で落ちていくだけの自分をぼんやりと考える。
自分はこのまま死んでしまうのだろうか？
三神様達と精霊王様達が、力を使ってしまえば消滅してしまうのを厭うて、大魔王の魂と肉体を持つ自分なれば耐えられるだろうとふんで、横取りして事をなしたのだが・・・・保たなかったのだろうか・・・・
「・・・・生きて・・・・いたかったな今度は・・・・・」
一度死んだ時は、静かに消失していく意識を他人事のように捉えてこれで死ぬんだとあっさりと受け入れて、今度の人生もアバン先生に諭されるまでどこか生を投げ出していた自分・・・・それでも諭された後は、自分もこの世界できちんと皆んなと笑って生きていたいと願った
「・・・死ぬのは嫌・・」
落ちていく事を止められず、死にたくないと泣き始め、どれ程の時が経ったか分からなくなった時、その声は突然聞こえた。
「お前は—全て—を変えてしまった。」
「・・・・誰？」
「お前はこの世界の道筋の全てを変えてしまった。」
「誰⁉」
「お前達はこの世界の起こり得る可能性の全てを否定した。」

「・・・・其れは・・・・・大魔王が勝って二界が消えてしまう事を言っているの⁉」
声の主は、まるで自分とこの世界を変える為に奔走した者達全てを断罪するかのように冷たい声音で詰る。
まるでこの世界に希望が溢れる事を否定するようなその物言いに、泣いていたティファは泣き止み、そして聞き返す。
世界が光りに溢れて何の文句があるのだと。
そのティファの言葉を聞いても、声の主の声音の冷たさに変化はなかった。
「正確には―お前―がこの世界を変えすぎたのだ。」
「・・・・・私が？・・・・・世界は可能性に満ち溢れて！道は一つではない筈だ！なのに変わった事が悪いの⁉」
「そうではない幼き愚か者よ。」
「・・・違う？」
「幼き愚か者の言う通り、世界は可能性を十全に秘めて運行されている。しかし―この世界―では、大魔王か現神達と精霊王が死ぬ事で膨大なエネルギーが発生し、以て魔界の瘴気を浄化させるシステムに流れ込むはずであったのだ。」
「!!そんな！予めどちらかが死ななければならない運命だって!!そんな酷い運命なんて!!!」
「その位の―対価―でようやく叶えられる願いだというのを、お前は考えもしなかったのだろう？」
「・・・対価？」
「そうだ。」
ティファの疑問の声に、我が意を得たりとばかりに声の主の声音がティファに絡みつく。
「この世界でなくとも、どの世界においても、何かを得るのならば対価が必要であろう？
人間であれば金貨が、其れでなければ労働力を、女も男も何もできないのであればその身を差し出し望む物を得るだろう？」
「それは!!・・・・それは・・・・・」

「クックック、これしきの言葉で狼狽するとは初心だなお前は。知識だけあり知恵がない。世を知らない幼い愚か者が仕出かした事だと、生憎見逃してやるつもりは毛頭ないぞ私は。」
「・・・・・貴方は誰・・・」
「私を知らぬか？」
「・・・貴方の声聞いたことない・・・」
「それはつれない事を。だが、私の事を知らなくとも別にいい。」

ずっとずっと見ていた。
三神達が、異世界からこの幼い愚か者を引き入れた時からずっと。
どの様に足掻こうとも、どちらかの勢力の総大将が死ぬはずであったのを、双方が生きるというこの世界ではあり得ない結末を作り出し、世界の運命（さだめ）の道筋を。
「お前が望み、世界の道筋を変えてしまったのだよ幼き愚か者よ。それにより多くの者の道すら変えた。」
「私は・・」
「死すべき時に死に、ー輪廻の輪ーを潜り再び新たな命が生まれるのをお前は阻害した。
産まれるべき生命の輪が随分と乱れた。」
「私は!!・・・私は・・誰も死んでほしく無くて・・・」
ティファの拙い言い分に、声の主は嘲笑う
ティファが誰かを生かした事で、産まれるべき誰かか何かが生じない可能性を一切考えていない愚かさを。
誰かが死に、何かが生まれる世界の循環の邪魔をした。
三神達も、そのシステムに対する代償を黒の核晶六つと、他の事で払うつもりであろうがまだ足りない。
本当ならば世界が繋がったあの後、天界に行くのはティファではなく大勢の精霊達と六人の精霊王がいくはずであった。
天界の結界となったヴァルガブル神を説得して解いてもらい、痴天使達を捕縛し共に死んで、黒の核晶では足りないエネルギーを自分達の命をもって世界の為の贄になる予定であったが果たされずに滅茶

苦茶になってしまった。
数多の命が死んで、新たなエネルギーとなりてー様々な事ーに使われる予定の世界を壊し、代案すらも潰してほぼー無償ーで全く違う世界をこの娘が生み出してしまったから。
始めたのは三神
しかし実現させるというあり得ない事態を引き起こしたのはこの娘。
夢物語だと笑って済ませているはずであった物語を現実化させたのは紛れもなく幼き愚か者の仕業。
道理を知らなかったなど言い訳で、今更無しにしろと言われても世界は最早後戻りはできない。

「私が・・・この世界をそんな風に・・・」
死なぬものがあるという事は、新たに生まれるべき生命を最初から殺していたのだと知ったティファは、衝撃を受けた。
誰かの子や孫になるべき新たな生命は、この世界では死した魂を正しく循環させているのを知らなかった。
生かすという事は、何かを代価にしているのだという事を・・・私は・・ただ死んでほしくなかっただけなのに・・・その為に生じるはずであった何かを消してしまって・・・
本来であれば大戦初日で大勢が死に、その後も邪気に侵され凶暴化したモンスター達が人々を殺戮し続け、勇者が死の大地で大魔王に敗れた後のピラファーでも数多の種族の死にはて輪廻の輪に組み込まれるはずであったのを、全て阻止したのは紛れもなく三神とティファのせい。
まぁそちらの分の代価は既に支払いは終わっているのだが。
大戦から十日間、魔王軍の一軍を文字通り殲滅させたノヴァの所業が、偶然にも狂わされたモンスター達が殺すはずであった分を完遂させるに至ったのは僥倖といえよう。でなくば代価はもっと取らなければならなくなったがともかく、ティファが、己がしでかした事を正しく理解した事に声の主は満足する。知ったからといえ、引き返す道

などどこにもありはしない。
前に進むしか最早道は無く、その道を世界が歩く為にも新たな因果律を書き換えるための膨大なエネルギーは、黒の核晶でー五割ーは埋められたがまだ足りない
それでは世界は無事では済まない。
歪みがどこかで起き、やがては世界そのものが誰に気づかれる事なく破綻し崩壊すらしよう。
それを防ぐための代価を
「大魔王の魂と肉体を有し、今ある世界で一番のエネルギーを身に秘めたお前が、その身を以って対価を支払うのだ。」
美しすぎる夢を見た幼き愚か者よ

落ちていく・・・・どこまでも底がないかの様に・・・
それでもいつかは辿り着く。
ゆっくりと落ちてきたティファを、黒髪に覆われた偉丈夫の男の中に静かに抱きとめられる。
男の顔はぼんやりとして分からないず、それでも瞳が歪んで笑っているのがはっきりと見えて、嬉しそうに笑いながらティファに告げた言葉残酷なるものであった。
ようこそこ冥府の底へ、世界の為の贄殿よ

冥竜王と生命の神

「お前が目覚めた時―何―をして遊ぼうか？」
　気を喪ったティファを腕に抱きしめ、―樹―の節くれだった根に腰を下ろした―男―は、膝の上に乗せたティファの顔を優しく撫でながらんまりと嗤う。
「お前の記憶を今と昔の双方を舐めるように見尽くすか？私が見守る中で、お前が最も苦しんだ記憶を追体験させるのも一興か・・・お前は―何処まで―持ち応えて私と遊くれる？私とのお遊びに耐え切れなくなった時、お前はどのように狂っていくのだろうな～。」
　せめて千年は持ち応えて欲しいと、優しくティファの肢体を己の掌で舐め尽くす様に撫でながら、男は嗤う。
　その表情は分かるのに、男の相貌だけがぼんやりとしてはっきりとしない。更にいうなれば、目鼻口も繭も顔のパーツが刻一刻と変わっていくのを見れば、肝の太いティファとてもゾッとしたかもしれない。
　自分が化生の者であるならば、この男は魑魅魍魎・妖しの類ではないかと疑って。
　そしてその考えは半ば当たっている。
　ゾッとするような思考の持ち主の男が腰掛けている樹が、突如としてざわめき緑の葉を落として枯れていく。
　美しい樹が勿体ない事だと男は目の前に現れた黒き竜をを気にもせず樹の方を気に掛けた。
　樹の幹は青白く、ほのかに光りを灯し緑の葉を煌煌と照らしだすのが美しいと愛でていたのを・・・
　どのくらいか経った時、男は漸く美しさを愛でていたのを邪魔した者に視線を向けた。
「・・・・無粋だな。お前がここに来るとは。」
　葉が枯れ落ち出し、樹の光りも目の前の者の殺意に怯えて消えてしまったのを男はつまらぬと憮然とし、ティファを抱えたまま目の前に降り立つ黒き竜を見下す様にねめつける。

「何のようだ冥竜王ヴェルザー？」
「・・・・久しいな、お前に会うのは俺をこの世界に産み落とす寸前に、呪いを俺に吐いた時以来か。」
黒き竜、冥竜王ヴェルザーは、目の前の男を他の何よりも誰よりも嫌い抜いており、吐き捨てる様に男の言葉に返答する。
元より嫌い抜いていたこの男が、―ちび助―とその兄が命をかけて変えたこの世界にちょっかいをかけてきた事で更に男に対する嫌悪感に拍車がかかり、この男を殺せるなら、永劫に瘴気浄化の番人をしても良いと思う程に迄格上げしたのだ。
自分の運命を弄り、懸命に生きてきたちび助を今また弄ぼうとしている邪神と呼べそうなこの男・・・
「貴様のせいで地上と天界が大騒ぎだ。六大精霊王達が担当していた柱の持ち場を離れた事で、世界の繋がりが切れた。
お陰でちび助の異変は地上ではあの谷にいる奴等しか知らん。」
そうでなければ本当に地上界が大混乱して五月蠅い事この上ない事になっていただろうとヴェルザーはうんざりとする。
どれだけこいつは大勢から慕われているんだか。
埒も無い事を考えていると、クツクツ、悪意を煮込んだような悍ましい気配を漂わせながら愉しそうにしている・・・・・ほんの少し前の自分もこんな最低最悪性悪野郎だったのかと見せつけられている気がして最悪な気分になって来た・・・ちび助に仕出かした俺を、今すぐ時を巻戻して殺しに行きたくなる・・・・もっと言えば、クツクとロビンを守り切れなかった自分をか・・・こいつと同じ穴の狢になった俺を見て、クツクとロビンは赦して・・・・くれんだろうなと思うだけで自分を殺したくなってくるのだが・・・
「お前が―善意―を発揮するだなんていつ以来だろうね～。」
「・・・・・」
「お前の可愛い可愛いコマドリが・・・・・」
男がヴェルザーのコマドリに言及した時、その場は殺意で満たされ樹の枯れ具合が加速する。
黒き竜の鱗が更に艶を増し、金色の瞳がしんと底冷えし男を食い殺

さんと射抜く。
「お前は何一つ変わらないね～ヴェルザー。」
「黙れ・・・」
「生まれる前に親切に教えてやっただろうに。―お前―は何一つ守り切る事も出来ず、目的を達成する事も出来ずに無為で虚しい人生を送るだろうと。」
男の口にした言葉に、ヴェルザーは殺意を浮かべた表情を更に苦くする。
不毛の大地に生れ落ち、四神が一人竜神と言葉交わす前の―最初―に自分に呪いを吐いた男。
全ての命と魂を循環させ―見守る―とほざいている最低なこの男が・・・
「相も変わらず貴様は俺以上に最低だな。」
自分に出来るのはたかだか現世で苦痛を与えるか肉体を殺すのが精々で、この男は死後までも付き纏い魂までも弄ぶ。
自分を竜神の言葉通り、―瘴気全てを浄化できたあかつき―に、自分を永劫の輪廻の輪の頸木から外すと言っていたが、今ならばその言葉がまやかしだと知っている。
嫉妬・憎悪・怨嗟の念を浮かべる者が根絶されない限り、瘴気は永劫なくならないのだから、約定其の物が竜神にはその気がなくともいかさまであった事を。
そして、目の前の男は約定其の物が始めから破綻していた事を知りながら、黙って自分を作り出し生み出す事を黙殺した。
命を廻し、司り弄ぶ
「貴様こそが本当の諸悪の根源だと言われても俺は驚かんぞ輪廻転生の神マリシュ―ス。」
ヴァルガブル神よりも更に古い、この―惑星―に生じた命と時を同じくして生まれた原初の神よ。
すっかりと捻じ曲がり、気に入りし生命を手元に引き寄せ弄ぶ邪神よ。
ヴェルザーの言葉に、男・マリシュ―スは気を悪くするどころかさ

らに愉快気にクスクスと嗤い出す。
「私の名前を呼ぶ者がいるとは随分久しい。現神の三神とて私の事を輪廻神様と呼んで崇め奉るというに。」
「ふん・・・・何故お前は運命を狂わせ終わったそのちび助に構いつける。」
ヴェルザーも冥竜王の名に相応しく、ティファの因果律が狂わされていたのは一目見た時から知っていた。
ティファの魂は色こそ白一色で美しいが、構成が酷く歪んでいる。
魂は本来は正味の丸であるのにたいして、ティファの魂は後から様々なものを付与され不格好な事この上ないのを。
あの時はなんとも思っていなかった。こいつも自分と同じく、マリシュ―スに弄ばれた同族だという以外興味も無く。
時折、数百年に一度はそういう輩が出ては非業な死を遂げるか、兎角ろくでもない人生を臆させられると相場は決まっていた。
だがこのちび助ならばそんな碌でもない道を全力で蹴っ飛ばしながら突破すると見込んだのだが、最後の最後で当の邪神が出張って来るとは・・・

うんざりと自分を見ているヴェルザーを、マリシュ―スは嘲笑う。
ヴェルザーだとて知っている筈だと。
「この幼き愚か者がした事で大勢の―生まれない者―が出た事と、世界の因果律を壊した事は知っているだろうヴェルザー。
その対価を支払って貰うだけなのを、お前は知っている筈だぞ。」
嗤いながらティファを手放さず、直ぐにでも立ち枯れそうな樹の肌をゆったりと撫で愛でる。
この樹はとても大きく、立ち枯れそうであっても端の緑の葉がまだ懸命に気にしがみ付こうとしている。
この樹は今腕に抱いている幼き愚か者の命其の物、どんな生命体にも宿っている生命の樹が、健気に生きようと足掻く様を愉しみながら言葉を紡ぐ。
罪に報いがある様に、壮大な願いが叶った果ての対価を支払う者が

必要であることを

対価の行く末

この世界の正しき真理の言葉は重みが違い、さしもの冥竜王が閉口したのをマリシュースは気を良くする。
自分が言った事はすべて正しく、故に対価を払う者をどうしようとも自分の自由。
樹の根から腰を上げず、手に触れている幹を爪で傷つける。
樹が傷つけばティファの顔が、幹と同じ傷が出来青い血を薄っすらと滲ませた。
魂と同じ、樹が傷つけばティファ自身も同じ傷が出来る。
幹からも薄っすらと樹液が流れ出すのををマリシュースは人差し指で掬い取り、ぺろりと舌で舐め上げ口内で転がすように樹液の味を愉しむ。
思った通りに甘く香しい。
樹液はその者の心根を表す、ティファのように美しい夢を本気で見る者の樹液は甘いだけではなく、金木犀の様な香りを伴い、幾らでも貪れそうだ。
これは本当に良い者を拾ったとマリシュースはほくそ笑みながらさらに樹液を取ろうと幹に傷つけようとする手を、弾かれて止められた。
折角無礼を見逃そうと思った冥竜王の闘気が弾いたのを、マリシュースは目に殺意を浮かべて咎める。
「先程の言葉にお前も納得したはずだぞ。この者が・・・」
「対価を払うものだとお前は言ったな。」
「その通りだ。であるのならばお前はもうここから立ち去るべきだ。グズグズと居るのならば私の権限でお前を罰するぞ？」
殺意と共に、膨大な神気を迸らせ始めるマリシュースの言葉を、ヴェルザーはせせら笑い、そんなヴェルザーの態度にマリシュースは怪訝な顔をする。
先程まで自分の言葉に言い返せず悔しそうにしていた冥竜王の態度が一変した事に。

「・・・・何を企んでいる？」
「ふん、お前ほど悪辣な事を考えられる知恵は俺には到底ないぞ？」
「私はお前の顔に見飽きた。さっさと失せろ。」
「くっくっく、お前はそんなにちび助と早く二人きりになりたいのか？生憎と俺が失せる時はちび助も共に連れ行くぞ。」
「・・・何だと？如何にお前でも世界の対価を払わない時の惨状は知っている筈だが？」
　もしも対価の不履行が起これば、この世界はすぐには崩壊はせずとも気の循環システムが止まり、天も地も穢れた気で満ち溢れ瘴気の世界が出現する。
　少し前のヴェルザーであったればそんな事お構いなしに自分に対しての嫌がらせとしてティファを強引に連れ去ろうとするのだろうが、今のこやつは・・・・
　マリシュースの考えを見透かしたように、ヴェルザーは愉快気に話を続けた。
「貴様はこの世界が変わった対価を支払えと言った。死すべきものが死なず新たな者が生まれず、新たな世界の因果律を生み出す為に、大魔王の魂と命からなる膨大なエネルギーをちびすけから取り立てたと。」
「その通りだ、幼き愚か者の現世での生命は最早四散し、エネルギーはこの世界に組み込まれた。
　後はこれの魂のみだが、肉体エネルギーだけで十分。残った魂は謂わば私の無聊を慰めて貰う為のおまけだが、冥竜王と呼ばれたお前にも魂なぞ使い道があるまい？」
「・・・・・ではもう対価は支払われたと？」
「・・くどいぞ、対価は支払われ、お前の言うちび助は死んだ・・・・なに？」
「ふん！その言葉冥竜王たる俺がしっかと聞いたぞ!!対価は全て支払われ終えたと!!
　なれば―この後のティファ―の生命は最早誰にも奪う権利はない

ぞ、其れは輪廻神・マリシュース！貴様とてもだ!!!」
「なっ?!これは！・・・貴様!!!これを待っていたのか!!!!!」

ティファの肢体が色づきそして止まっていた心臓が脈打ち出す。
落ちてきた後は冷たくなり心臓が確かに止まっていたのが・・・・
「お前はちび助を過小評価しすぎだ。こいつの為ならば命なぞいらぬという者が山程いすぎるのだ。」
「だがしかし!!尽きたる命を蘇らせる蘇生最上級の呪文、ザオリクとて生命エネルギーの枯渇したこ奴を生き返らせる事は不可能ぞ!!」
仮にティファにわずかに生命エネルギーが残っていたとしても、蘇生呪文を司るのは輪廻神の自分であり、自分が手元に置く為に殺したティファに呪文が・・・!!まさか!!!!
「おのれ!!!!大魔王風情が!!!!」
―あの方法―なればと思い至ったマリシュースが罵り声を上げるのをヴェルザーは益々愉快気に嗤表情を歪ませる。
「先ほども言った通り、お前はちび助を慕う者達を見誤ったのだ。」
自信ありげに言い切るヴェルザーを、マリシュースは憎々し気にねめつけ、そして―ティファの遺体―がある筈のロロイの谷を急ぎ水鏡にて映し出す。
自分の考えが正しければ恐らくは・・・・・
「・・・・・・なんだあれは!!!!!!!?」
果たして・・・・この結末を予想していなかった自分よりも、結末を用意したはずのヴェルザーの方が、水鏡に映っていた光景をより驚いているのは何故だと、ヴェルザーの声に驚き一瞬ヴェルザー―達―に湧いた殺意が明後日の方に出かけたマリシュースは小首をかしげる。
そんな事には気が付いていないヴェルザーは水鏡に映っている出来事に怒りを燃やし、わなわなと震え出す。
「バーンの若造どう言う積りだ!!何故ちび助に深い口付けをしているのだ!!!!!」

そこに映っていたのは、ティファの身に起こった出来事を、嘆き悲しみながらも見守るダイ達と、そしてティファを腕に抱きしめ、意識の無いティファに深い口付けをしているバーンの姿が映っていた。

ティファがひび割れると同時に空から六大精霊王達が降り立ち、バランの腕の中に居るティファ目掛けて一目散に飛来し、意識が落ち、呼吸も心臓も少しずつに止まってしまったティファの手を、水の精霊王がとって大泣きをし、他の精霊王も泣き崩れながらダイ達に詫びた。

マリシュースがティファとヴェルザーに教えたのと同じ事をダイ達に伝えながら。

対価を払うのは、本来は自分達であった事も包み隠さずに。

その話を聞いた、ノヴァとキルが同時に切れた。

「ふざけるな!!そんな話をティファが知って止めないはずが無いだろう!!!」

「あの子の事を如何に道具扱いしていたかがよく分かるよ!!!・・・お嬢ちゃんが!そんな計画を素通りさせるものか!!!!」

二人はティファを心から愛するのと同時に、ティファの優しさから生じる身勝手さにうんざりとするほど振り回されていただけによく知っている。
ティファはこの世の誰よりも身勝手なのだ。
他者が、誰かの為に命を懸けて動く事を厭うくせに、自分は散々己の命を懸けて事をなすのを平然としてのける。
自分が命を懸ける分にはよく、他者がそれをするのを赦さないという傲慢で・・そしてどこまでも優しすぎる身勝手なティファが、三神と精霊王達が消滅するのを指を咥えて黙って見ているはずが無いのだと・・・
本当に、ザオリクでもどうにもならないと知ったダイ達は膝から崩れ落ち、地を叩き呻く様に咽び泣く。
どうして・・・・—みんなの幸せ—にティファが入らないのだと・・・
バランは腕の中で冷たくなっていくティファを抱きしめ泣き崩れながらも叫び上げた。
「輪廻転生の神よ!!私の魂と命では足りないか⁉持っていくのであれば私を!!どうか未来あるこの子を返してくれ!!!この子の代わりに私の何もかもを持っていってくれ!!」
己の魂を差し出すと天に向かって吠え上げるバランの声は、虚しく谷の中を木霊するだけで、応と返される事は遂になく・・・・そんな中、キルだけが必死に思考を張り巡らせてた。

考えろ・・・・僕は死神だ・・・死を司る神だ!あの子の魂をこの世界にとどめる?・・・そんな事をしても今の僕は嬉しくも無い!!元気なあの子の笑顔を見たいんだ・・・・ザオリクも無理ならアイテムは?・・・世界樹の葉は、アルキード国消滅と共に世界樹自体が無くなり、ふっかつのつえは杖自体が行方が分からず千年近く経っている・・・・どうすればいい・・・他に生き返る・・・・あ・・・・
「バーン様!!!」
キルはある秘術にも近い生命を操る呪法をつい最近知らされたばかりなのを思い出し、ダイ達と共に涙を流し、悲しみに沈みかける主

の名を力強く叫んだ。
あの方法ならばきっと!!

そしてその方法が見つかる少し前に、ヴェルザーは封印の為に肉体が動けずとも、魂だけを飛ばしてティファの魂を冥府の底、マリシュ―スの住処迄単身追いかけた。
あの人形ならば、バーンより命を宿されたかつて人形であったキルなれば、唯一ティファの命を、対価を支払った状態で現世に繋ぎ止める方法を思い出す筈だと。

それが・・・・
「マスター＝エンゲージにするにしても!!口付ける必要が何処にあるというのだバーンの若造めが!!!!」
キルとマリシュ―スが思い至ったのはバーンのハイ＝エント・マスター＝エンゲージ。
使い方には二種類ある。
一つはキルの様に、無生物を命あるものに変える。
これは周囲の自然エネルギーを組み込み、徐々に生命体へと変質させるの効力を持つ。
もう一つは己の魂と寿命を半分分け合う事で、生命エネルギーが枯渇した使者をも現世に繋ぎとめられる秘術であり、魔界の神に相応しい能力と言えよう。
ティファに起こった事で悲しみの衝撃を受け過ぎたバーン自身が思い浮かばなかった事を、キルが思い出し進言したまでは良かっただろうが!!!
谷にいる精霊王達までもが見守る中、バーンはバランよりティファを受け取る。
まるで世界で一番の宝物を受け取るが如く慎重に、そうでなければひび割れた体のティファが砕け散るのを怖れて。
自分達の先祖と神達が起こしてしまった事を、後の世の幼な子が何故死なねばならないのか・・・・どうしてもというのであれば!同じ

大魔王の魂を持つ自分が・・
その決意を示す様に、バーンは少し開かれているティファの口に、己の口を合わせる。
少し開いた口を舌で押し開き、さらに深く口付け己の魂と寿命をティファに注ぎこむ。
このまま、ティファの代わりに冥府に落とされても構わないとばかりに・・・・
その光景を、谷居る誰もが祈りながら見守る。
ティファの目が開かれる事を願って。

・・・・魂と寿命はマスター＝エンゲージの詠唱と共に!!繋ぎ合った手からでも流し込めるのをあの若造が!!!!
ハイ＝エントの全能力も知っているヴェルザーは、バーンがティファに口付けをする必要が無い事を知っているので怒り心頭に発している。
後でバラン達にも事情を伝え!ティファに口付けた事をバーンに後悔させてやると息巻いて、隣で目論んだ事がご破算になりむっつりとしているマリシュ―スをうっちゃっているのが、マリシュ―スからすればそれもまた腹ただしい。
「・・・・・私の機嫌を損ねて、大魔王の魂を返せと?」
「喧しいわ!!腹ただしいが!!!バーンの若造の口付けのおかげでそのちび助には精霊王達からの他にも、大勢の祈る者達の生命エネルギーが流れ込んでいるのは貴様も分かっているだろう!
ちび助にそのエネルギーは不要だ!お前の機嫌損ねのご機嫌取りなぞ、そのエネルギーだけで事足りるだろうが!!」
「む・・・・確かに・・・・」
手と手を繋がりあっただけではバーンの物だけ受け取る事で終わり、もしかしたらマリシュ―スの言った通りになっていたかもしれないが、口付けとは相手を尊重し合い深く愛する者同士がする事で―神聖な行い―の一つと定義され、神聖な行いには神聖な思いも干渉しや

すく、もし万が一バーンだけではエネルギーが足りず、ティファを助けんと大魔王バーンと光の精霊王を筆頭に、六大精霊王達がバーンを通してティファに生命エネルギーを流し込んでいる他に、ティファを大切に想う父や兄達の、ロロイの谷にいる全ての者達の祈りが、彼等の生命エネルギーを少しずつティファに流れていくという奇跡が、期せずして起きた。
　対価は少なすぎても多すぎてもいけない
　それは輪廻転生の神・マリシュースにも課せられるこの世界の厳格なルール。これでは対価の超過払いが起きてしまう。
　誰よりもルールに厳格であらねばならないマリシュースは、渋い顔をする。
　まだ―輪廻転生の神としての自分への対価―を納得していないという事も出来なくはないが・・・駄々をこねている様で無様な自分を嘲笑うヴェルザーが想像できてやりたくはない。
　ならば

「ヴェルザー答えよ。」
「・・・・なんだ?この期に及んで・・・」
「お前は分かっている筈だ、これを対価にすると決めるのは―私の気が済んだ―と納得するかどうかを。」
「ふん・・・・無駄な事を・・・・六大精霊王達以外の者達迄もが注ぐエネルギーを対価として足らぬと拒めば、お前とて・・」
「そう、私だとて無事では済むまい。だが、対価に大魔王や六大精霊王達以外のエネルギー要らない。
　貰ったとて―面白味―も何もない。」
「・・・・・貴様らしい歪んだ考えだ・・・」
　絶対神はおらずとも、原初の神の思考は、世界のルールとても忖度させる事は儘あるのを知っているヴェルザーはうんざりとしながら聞いてやることにした。
「何を知りたいマリシュース?」
「そうこなくてはな。」

ヴェルザーは自分に楯突く愚か者であるが、其れは気概があり愚鈍ではないからなのをマリシュースは気に入っている。
これは本気で答えれば或いは幼き愚か者を返したやらんでもない
「質問に応えろヴェルザー。お前は何故―ティファ―を此処までして守ろうとしている。」
冥竜王と呼ばれていても、封印された身で常世の国たる冥府に降りてくれば、魂が冥府に住み着く餓鬼・魑魅魍魎・鬼にくわれる可能性とてあるのにだ。
その質問に、ヴェルザーは逡巡の果てに口を開いた
「俺は・・・・・・・・・・・・・・・」

その答えにマリシュースはにんまりと嗤った

―ミャア～ミャア～―

海鳥が鳴く声を聞きながら、ダイはデルムリン島の海岸を一人で歩いている。

寄せては返す波が、布靴を濡らすのを心地よさげにしながら、―西の果ての海―にポツリと見える大陸の端を見ながら。

大戦から一年近くが経ち、夏が来ようとして日差しを増す太陽の光を眩し気にして。

森の方から親友・ゴールデンメタルスライムのゴメちゃんがすっ飛んでくる。

どうやら朝食の支度が整ったようで、早く食べに行こうと自分の癖っ毛の髪を引っ張りながら急かしている。

「分かってるよゴメちゃん。そんなに慌てなくっても、朝ご飯は逃げないよ。」

ダイは食いしん坊の親友を肩にとまらせ、柔らかく撫でながら落ち着かせる。

ダイの手が気持ちいとゴメちゃんは擦り寄り、きゃいきゃいしなが

ら歩いていけばすぐに自分達の家が見える。
二階建てのロモス風のバンガロー造りに、隣には離れが出来ている。
今デルムリン島には
「おはようございますディーノ様。」
「朝ごはんが出来たとブラス様が探していますぜ。」
「バラン様もお待ちですぞ。」
「おはようラーハルト、ガルダンディー、ボラホーン。皆も朝ごはん一緒だよね。」
「「勿論です。」」
ブラスと父と竜騎衆三人が暮らしている。
大戦が終わった事でロモス王国からの派遣されていた人達は帰国し、代わりに父と竜騎衆が新たにこの島の住民となった。
島の友達ともすぐに仲良くなった父達は、穏やかに暮らしながら―自分達―を守ってくれている。
「遅かったのダイや。呼びに行ったゴメがどこかで道草したのか？」
「ピィ～！」
「はは、違うよ爺ちゃん。俺がゴメちゃんの声に気が付くのが遅かったんだよ。
直ぐに行くって父さんにも伝えておいて。」
手洗い場であったブラスに、父への伝言とゴメちゃんを託したダイは、裏口から家に入り自分達の寝室へと向かう。
扉を開ければ柔らかい風に白いカーテンが揺れ、眠っている者の上に影を作る。
ダイは眠っている者に、起きた時と同じく、額に口付け挨拶をする。
「おはようティファ、朝だよ。今日はティファの好きなトマトスープがあるんだよ。」
ダイに挨拶をされても、ティファは身じろぎもしないのをダイは気にした様子も無く、優しく話し掛け続ける。
ティファの生命が繋ぎ止める事が出来、一年が経とうとしても目を

覚まさない妹の髪を優しく梳きながら

―明日―への道を歩く者達

布団をかぶり、穏やかな寝息を立てて眠る妹の髪を梳りながらダイはあの日の事を思い出す。

「バーン様!!貴方が僕に施したハイ＝エントのマスター＝エンゲージを!どうかお嬢ちゃんに!!!」

ティファの命が突然消えてしまったあの時、原因が生命を司る輪廻転生の神が、この世界を救いながらも、後の世界の枠組みを破壊した事への代価としてティファの生命を取り上げたのだと知らされたあの時、誰もが悲しみに暮れ絶望の底に落ちながらも、キルだけが諦めなかった。

それはこの世界の誰よりも神等怨嗟の対象でも、まして尊敬の念の欠片すらも無く、そんなものどうでもいいと思うからこそ、神の名において仕出かされた事を赦せなかったから。

地上天界は言うの及ばず、バーンや魔界の者もやはりどこか―神―という者を多かれ少なかれ特別視している。

それは崇拝でなく自分達の境遇を見ているだけとの怨嗟の念であっても、特別視していることに変わりはなく、神の御業と言われれば矢張り自分達の力及ばずと諦めさせる何かを秘めている様だが、自分はそんな事は知った事ではない。

渡さない！神如きにあの子を渡してなるものかとの執念が勝った結果であり、秘術は精霊王達も見守る中で滞りなく行われた。

それはまさに奇跡であった

バーンが深き口付けをした瞬間、ティファの体が黄金に輝きひびが一斉に消え失せそして、止まっていたティファの心臓どくりと鼓動をうち、そしてティファの目が薄っすらと幽かにあいた瞬間、ロロイの谷は再び大歓声で沸き立った。

まるでその場にいる全員が一生分の喜びを放出したように。
しかしティファの目が明いたのはほんの一瞬で、直ぐに閉ざされ以来ティファは眠りについている。
精霊王達曰く、ティファの体と魂が疲弊しすぎ、回復が追いついておらず、少なくとも二・三年は―休眠―に入るのだとか。
その間ティファはどうやって体力を維持していくのかの心配もすぐさま説明してもらえた。
「我等のエネルギーが不思議と代価として払われずに、ティファの中に留まっている。」
そのエネルギー量は見積もって十年寝っぱなしでもティファを維持するのには事足りると。
休眠、其れはティファにとって最も必要な事であるのをその場にいる全員が納得した。
兎に角ティファは色々と一人でやり過ぎたのだ。
ならば寝て回復させるのが一番であり、起きるのを待てばいいと。

そしてロロイの谷でいったん各自解散となった。
魔法使いポップはランカークスの両親の下にその時共に鍛冶屋にしてけ剣士のロン・ベルクも共に連れて。武闘家マァムもネイル村の両親の下に、戦士クロコダインは大戦が終わった時は報告をロモス王にする約定をしていたのでマァムのキメラの翼で共に行く事になり、剣士ヒュンケルはエイミとレオナ達と共にパプニカへ、占い師メルルは祖母・ナバラの待つテランへと。
戦士見習のチウは、クロコダインと共に王城に行った後、獣王の跡取りとして迷いの、ひいてはライリンバー大陸のモンスター達のお披露目するとクロコダインに連行される中、ハドラー達は一旦大魔王達と共に魔界へと帰還する事になった。
魔界はこれからが大変だが、その責務を大魔王様お一人に背負わせる事なきよう自分もついていくと改めに忠誠を誓ったハドラーに、黒の核晶を埋め込んだ事には一切触れず、許すと一言言ったきり無言でついてくるように態度で示した。

何故かハドラーに、あの時は済まぬと言う事が、ハドラーを侮辱するような気がして。
名残惜しいと再びバランの腕に戻ったティファの顔をそっと撫でる。
さしものバランもこの時ばかりはキルがティファの顔に触れる事を赦した。
なんとなれば絶望に負けなかったキルがいなければ、ティファを永遠に失っていたのだから。
キルもそんなバランの心情を察し、調子に乗る事はせず穏やかに眠るティファにそっと声を掛ける。
「君が目を覚ますまで僕はずっと待っている。君の体が本当に治った時に起きるんだよ。」
―誰か―を、―何か―を案じて目を覚ますのではなく、本当にティファが治った時に目を覚まして欲しいと願って。
キルのその言葉に、ポップも頷き続くようにティファに声を掛ける。
「お前が寝ていても俺達は手を携えて歩く世界を作るよ。だから、心配しないでゆっくりと休むんだぞ。」
優しく、ティファの柔らかい頬に口付けながら。
「ティファ、今度は私達がうんと貴女にご馳走するわ。もうお腹いっぱいって言っても食べたくなるようなデザート付きで。」
「リンガイアの焼き菓子も用意しよう。」
「ティファさんの好きなアップルティーも。」
「シナモンたっぷりのリンゴジャム用意して。」
「僕もその時にティファさんが褒めてくれたお茶を淹れます。」
「俺は矢張り配るだけかな・・・」
「・・・アバン先生、料理教えてくれませんか？」
「おやいいですよヒュンケル・・・・それよりも、―奥方―になるエイミさんに教わっては？」
「それいいですね！エイミ!!ヒュンケルと一生幸せになって料理の作りっこしながらいつか二人でティファに振舞ってあげてね。」

「畏まりました姫様。」

いつか必ず―全員―でピクニックをしよう、この晴天の下で

その約束をして魔界に戻ったはバーンは、魔界を統一もどきをした。

何故もどきかと言えば、天界から封印を解かれたヴェルザーと共に二大政治をする積りであったバーンの目論見を、ヴェルザーが無視し、賭けはお前の勝ちだから俺の領土も配下も全部くれてやると、半ば強引に押し付けられたからだ。

バーンとしては瘴気浄化部門を設置してヴェルザーをそこに当てがい、共に魔界を見守ろうと目論んだだけに物凄い不意打ちを食った気がした。

今ならばいける！ティファと何故かダイに絆され命に目を向けた冥竜王を!!今ならば魔界の為に働かせることが出来ると本気で目論んでいただけに、昔の賭けの約定を持ち出されて臍を噛んでも遅かった。

ヴェルザーからすれば、矢張りバーンは若造であった。そんな目論見等にお見通しであり、今更自分が先頭に立って何かをするなぞ馬鹿らしい事この上なく面倒だ。

それよりは

「ほらお前達もきりきりと働け！身の内に溜めなくともいいように空

の魔晶石の作り方を教えてやっただろうが!!それを百個作れば四方十メートルの瘴気を吸わせることが出来、浄化装置に放り投げればいいだけだ。楽な事だろう？」

老害駄天使達を顎で使う方が遥かに楽しい。

自分の言葉にむかっ腹を立てても、反抗は不可能と知っている駄天使長老達は自分の魔力で空の魔晶石を作り、ヴェルザーの言う通りに瘴気を取り込ませてせっせと浄化装置に放り込む。

空の魔晶石は、自分の身に瘴気を取り込み浄化装置に入っていたヴェルザーが、自分がかつて味わった瘴気の苦痛を駄天使長老達に押し付けるのは何かあの邪神こと輪廻転生の神と仲間になってしまい負けた気がするので、死に物狂いで代案を考えた末に考案をした。

空の魔晶石を作り出し、その中に瘴気を吸い込まさせればこいつ等もそんなに反抗せずに働くだろうと。

ただし、魔晶石一つ作るのに小型メドローアを生み出すくらいの魔力を消費する為、百個作るたびに魔力回復薬を飲ませてはまた作らせる。

魔力回復酔いしようが構わん、これはそもそもこいつ等に対する刑罰なのだからと見ていたが、意外と駄天使達が素直に働くのは何故だと、最近のヴェルザーは駄天使長老達が真面目に働いているのに首を捻っている。

別に駄天使長老達はヴェルザーの力の前に膝を屈してひれ伏したわけではなく、お前達よりも酷い奴を見せてやる、自分こそが正しいと凝り固まり長年過ごすとあんなねじ曲がった病んだ者になるぞと見せられた輪廻転生の神・マリシュースの存在が衝撃的過ぎたのだ。

如何に世界を変えすぎた対価とは言え、おまけとして無聊を慰める為に、憎い相手とはいえ幼女の魂を弄ぶと宣言して嗤っていたマリシュースは本当に酷すぎ、ああなるのは嫌だと駄天使長老達一同は心に誓い、禊をする様にせっせと—見知らぬ誰か—の為に働いた方がよっぽど真っ当だと気が付かせられたのだ。

そんな感じで駄天使長老達を働かせているヴェルザーを見たバーンは、ヴェルザーを表に出す事を諦め実質魔界を統一し、天界の隣に行く準備を各地に始めさせた。
日の光りにあたれば消滅してしまうアンデットの類を洞穴や洞窟に住まわせ、他にもそういう種族がいないかを徹底的に調査させ、その結果大戦が終わった半年後に魔界は地の底より浮上した。
ただし、天界の横ではなく地上界の広大な海が広がっていた西の果てに。
天界が拒否したからでも、魔界側が嫌がった訳でもなく、天界への次元移動も儘ならない程に魔界の地が疲弊していたからであった。
無理に次元の長距離移動をさせようとすれば、空中分解を起こしかねない程に魔界大陸に亀裂が入っているのが、地の精霊達の地質調査で判明し、なれば天界ほど次元跳躍させずに済む、広大な海になっている西側に魔界を浮上させればいいと、事情を天界と魔界双方から聞いた各国がすぐさま検討に入り、三日の内にそれで合意がなされ、即日の内に地上各国に御触れの使者が総出で知らせ、カールとデルムリン島から僅かに見える位置に魔界が浮上したのだ。
この先どうなるのか？今は弱っていても、力を取り戻した魔界が攻めてくるのではないかと怖れる者も確かにいる。
それでも、善意が勝り魔界を助ける事は地上界が受け入れ魔界は浮上できたのを、ダイはつい昨日のように思い出す。
「ティファにも見せて上げたかったな・・・・魔界が浮くのを。」
まるでお祭り騒ぎの様に、空を飛べる人・モンスター達が空から見守る中、見えないシールドで海水を避けながら浮上する魔界の姿は圧巻の一言であった。
その様子を、ダイ・ポップ・ノヴァはお祭り騒ぎに混じって見ていた。
自分達が倒さなければならないと定め、数奇なる運命の下助ける事になった魔界の姿を目に焼き付けるべく。
その時キルが、悪魔の目玉に記録させており、後にチウを筆頭に声を掛け、直接見れなかった仲間達にもその様を見せていたっけか。

・・・・・・バーンを通してティファが起きた時に見れるように借りよう。間違ってもあいつから直接借りたくない。

変わったのは駄天使長老達の事や魔界が浮上した事だけではない。

ｓｉｄｅパプニカ

「お父様！王族としての仕事を私にも・・・」

「今更かも知れぬがレオナよ、お前は子供らしく、後の世にても通用する知識を身に付ける為に勉学に励んで欲しい。それが終わった後はキメラの翼でデルムリン島でダイとお茶してきなさい。」

「お父様・・・・」

大戦が終わってすぐに、レオナはこれから忙しくなるぞと気合を入れていた。

今後魔界・天界とどう向き合い共に歩むのかを議題とした会議を・・・その前に大戦終わった宣言は・・・・実質あのつながりで十分だろうが明日にでもと考えていたら―王族仕事―を全て父・レオール王に取り上げられた。

曰く、これまで学んできた古き知識ではこの先はいけない、故に新たな知識を学者たちと考え身に付け勉学に励めと。

これまで魔族は常に仮想敵であり、モンスター達はいてもいない扱いで平然と狩ってきたが、これからの時代にそれは通じまいだろう。

旧時代の考えは新たな世では通じないだろうとの考えは分かるが、其れも議題にして会議をすべきだというのをレオール王と大臣や宰相にも止められた。

子供が促成栽培で育つ時代を断つための第一歩だと言われて。

緊急時とは言え、―子供達―に全てを背負わせた罪はあるのだと。

その最たるものがティファであり、十数万年の因果を全て背負う十二の子供なぞ二度と出したくないと、レオナを抱きしめながらレオールは泣いた。

その様を見て侍医長ロムスも周りの大人達も、自分達の不甲斐無さを後悔し涙を流し、―子供が子供らしく有れる世界―を作る。

レオナにその世界を渡す為にも大人を頑張らせてほしいと言われたレオナは、これまで自分の働いてきた自分を褒めながら受け入れた。
大戦中に頑張った私、これからはゆっくりと―大人―になりましょう。

ｓｉｄｅカール
大戦終了の翌日、カールは直ぐに大戦終結宣言をフローラがまだ瓦礫が残こる城内のバルコニーにて出し、次いで自分の王配に先の大勇者・アバン・デ・ジニュアールを夫に迎える事も合わせて宣し、国民の満場一致で祝福された。
結婚式は当面は挙げず、国の復興を最優先とし、併せて魔界と天界との関係を取り急ぎまとめる事にして。
カールは思った以上に被害が無かった。
攻め込まれたあの日、場内どころか国民全てに逃げられたとバランが臍を噛み、八つ当たり気味に城の武器庫と食糧庫が壊滅されただけで、街の方は無視されたのが良かった。
人々も女王フローラが戻ってきた事で、直ぐに避難していた国民も戻り程なくしてかつての活気を取り戻せた中、フローラとアバンは―改革―の取り組みに心血を注いでいた。
この後の時代にはカリスマ性を持った指導者はいらない。―一人―に背負い込ませるのではなく、―大勢―でどの様な事にも対応できる組織作りと人材育成が必要だと。
ティファやバーンのような者達の後ろを歩けばいいという、安易な考えが二度とは出ないように。

ｓｉｄｅテラン
「私がフォルケン様の跡取りに⁉そんなの無理です!!!!」
何を言うのも恥じらい小声で言うのが癖になっているメルルが、かえってナバラにあって早々にフォルケン王に呼ばれ、打診された事のあり得なさについ叫んでしまったのは無理もない。

無理もないが、フォルケン王も真剣であった。
あの戦いで、戦による悲惨さを実際に目の当たりにし、そして戦を止めたティファを間近で見続けたメルルなれば、自分が目指した理想・―不戦の国―を生み出せると信じて。
「其方は戦の何たるかも、怖ろしさも知っている。この国はこれより戦の恐ろしさを語る、語り部の国としていこうと思う。」
それには自分の寿命が足りず、後を受け継ぐものとしてメルルを指名したのだと。
若りし頃、武器を国民が手放せば平和の国が出来ると安易に考えた浅はかさは無論顧みるが、それでも、この国から戦火を発することをと永遠に禁ずる国としたいと。
自衛の為の兵士達を鍛えつつ、在野にいる魔法使い達を迎え入れ国の戦力自体を底上げしつつも、リュート村を中心として平和を訴える国にするべく。
その熱い思いはメルルにもいたいほど分かる。幼い頃から祖母と共に旅をし、思いがけない暴力遭っては泣いた日々が、無くなる事を願った自分だからこそ。
後にメルルはポップを王配とし、ポップと何故かカール王の指導の下鍛え上げられた戦士達を擁しながらも、―永世平和国家―を名乗り、世界初に―専守防衛―を宣した国となる。
余談だが、跡取りのいなくなったランカークスの鍛冶屋に、俺様職人魔族が継いで、なぜ彼の様な神技を持つ鍛冶屋が片田舎で武器屋を営んでいるのかを知るものが百年後にはいなくなったのはまた別のお話し。

ｓｉｄｅリンガイア
「そうか・・・・騎士を辞めるか・・・」
「はい。これからはもう戦には僕のような過剰な力はいらないかと。アーデルハイド王もお許しくださいました。」
「・・・・この家の跡継ぎの事は心配せずに、お前は好きな事をしなさい。」

「分かりました父さん。」
ノヴァは大戦の翌日騎士団長と衛生部隊長双方をアーデルハイド王に辞任する意向を伝えて許可が下りた。
魔族とモンスター達を仮想敵とした時代に終わりが見えたのだから、戦に呼ばれる事ももうなかろう。
有事の際には在野にあっても助けに行けばいいのだからとあっけらかんという息子に苦笑しながらも、バウスンもノヴァの好きにさせる事にした。
ノヴァの本当にしたい事を知っていたから。
力を蓄えていたのは好きな子を守る為であり、其れももう終わったのだから騎士に未練はなかろうと。
幸い自分の弟は子沢山であり、器量の良い子揃いなので養子の話を打診すればいい。
その許可を受け取ったノヴァは微笑みながら父に礼を言い、次の日早速テランに住民登録し、フォルケン王を驚かせた。
「僕は前から薬草園を自前で作りたかったんです。ここは薬草の宝庫なので来ましたが駄目ですか？」
なんとも北の勇者にして殲滅の騎士団長と呼ばれた天才児とは思えない長閑な申し出に押されたフォルケン王はクスクスと笑いながら許可を出す。
此処でティファが目覚めるのを待とう・・・・出来ればここで一緒に住んでくれないだろうか？
そしてノヴァはルーラでマトリフのいる洞窟とテランの薬草園を行き来し、晩年のマトリフをテランの薬草園で、かつての仲間達と大勢の精霊達の見守る中で看取った。
幸せそうに、人生に満足した顔のマトリフを。
そしてその薬草園には、年老いた魔族と息子と思しき魔族がひっそりと住んでいたとかいないとか・・・後の世の薬草園は、魔族の男が管理し末長く残った。
ロモス王に大戦終了を報告したクロコダインは、宣言通りチウを自

分の配下達に紹介し、チウは後に人間とモンスター達の間を取り持てる人材を、ロモス王宮内と獣王遊撃の中で育成し、双方の懸け橋となる重要な存在となるのを、幼いチウはまだ知らずに目を白黒させるのを―ビースト君―を筆頭に、―初代遊撃隊―に支えられる日々を過ごす事になる。

仲間達の行く末は、人生が激変した者からヒュンケル・エイミ、ラーハルト・マァムの様に穏やかに夫婦となる道を選んだ者もいる。

ヒュンケルはエイミがおり、自分の人生に温情ある裁可を下してくれたレオナ姫に忠誠を誓い、姫直属の騎士となりパプニカ国民となった。

ラーハルトの方は、ティファが目覚めたらマァムと式を挙げてネイル村に住む積りであったが、マァムは反対にデルムリン島に住むと言って聞かず、これはティファが起きた時に意見を聞く事で合意され、二人はいまだに恋人関係を楽しみ、ラーハルトはネイル村に行く度にロカを親父殿、レイラをお袋様と呼んで敬い、二人に可愛がられ家族の温もりを知った。

ガルダンディーとボラホーンは、ガルダンディーの方はデルムリン島での生活が落ち着くと同時に、リュート村に単身出掛け、ニーナの両親の前で将来を誓い合い許可を貰い、式を挙げた後はリュート村に住むことにした。

ボラホーンは同輩二人の幸せを酒を酌み交わしながら連日祝い、自分がバラン様のお側に一生仕えるから案ずるなと請け負ったとか・・・・

「父さん達が来た日は・・・・爺ちゃんもゴメちゃんも島の皆も泣いてたんだよティファ・・・」

その日を思い出すと、幸せな気持ちがしぼんでしまうとダイはしょぼくれる。

ティファを伴い島に帰ってきたあの日、ティファの危急を知っていたブラスはティファを案じ胸が張り裂けそうになるのを堪え、子等が帰ってくるのを待ち侘びていた。

そして自分達の事を言葉短めに話、ティファに起きた事の一切を話したバランの手を、ブラスは惜しい抱きながら泣き崩れた。
ダイとティファの父が見つかり、家族が共に暮らせるというのにティファが遭った凄惨な事を考えるだけでも耐えられずに・・・

「ティファや・・・痛かったじゃろう？怖かったじゃろう？・・・・・・たった一人で抱え込んで・・・・偉くも・・・・なんとも・・・・・」
寝室で眠る孫娘を撫でながら、幾度も声を掛けるブラスの背中にダイがしがみ付き共に大泣きをした。
自分達が弱かったから、ティファが対価を払わなければならなかった事をティファとブラスに詫びながら・・・・その部屋の外で、バランとラーハルト達も泣いていた。
二度と―子供達―が矢面に立たなければいけない世界など来させない事を誓いながら。
その日の父達の誓いは自分の胸の中にもあるのだとダイはティファに話す

明日が大戦から丁度一年が経つ。これまで自分は一度も島を離れなれず、仲間達の方がよく訪れてくれた。
皆んなティファに挨拶してから近況を話し、世間の事をよく教えてくれるので不自由はない。
結局、自分達を集めての終了宣言も凱旋行進もせず、世界は平和への道を歩いていくことになった。
各国がティファの事を考慮してくれるのだと、ダイにも分かっている。
この大戦での一番の功労者が眠っているのだからと。
しかし明日は島を離れなければならない。
「ティファ、明日俺、会議に出ないといけないんだよ。父さんにティファの事頼んでおいたから大丈夫だよ？」
妹のそばを離れたくはないが仕方がない、明日は―世界会議―があるのだから。

それを聞いた妹の頬が、ピクリと動いたのは見間違いだろうか？

夢を見た、―誰か―が私を揺り起こす夢を・・・・

「お出迎えに失礼の無いようにしろ!!!!」
「チリ一つ見逃すな!!!」
史上初の、地上界の王家だけではない、天族・魔族出席の初の世界会議にの地に選ばれたパプニカ王城は大わらわであった。
なんとなれば有史以来本当に前例がなく!!天族からは六大精霊王達が、魔界からは魔界の神と緩衝材として魔王ハドラーも来てくれるというが、パプニカ王城で働く者達は緊張でがちがちとなっていた・・・・これはもう逃げたい案件だと泣く者まで居る程に

勇者一行の料理人

地上界の季節で言えば早春の時期に、魔界大陸は浮上した。
魔界の浮上に際し、日の光りが当たるだけでも消滅してしまう、まさに太陽が天敵の種族全ての引っ越しが終了したのと同時期に、バーンが魔界全土の諸国の王達に意思統一をなされたのも相まって、比較的どんな種族も過ごしやすい時に浮上できたと言えよう。
とは言え魔界の者達の皮膚は生来頑丈であり、ハドラーを見ていれば暑い寒いはたいして苦にもならないだろうが・・・・何せ小物魔王の時は年がら年中上半身裸にローブを纏っていただけの・・・・まあそこは割愛しよう。
兎にも角にも魔界はかつて魔界があった場所に戻ったのだ。
ダイ達が知っているライリンバー大陸・ホルキア大陸・マルノーム大陸・ギルドメイン大陸は、この惑星の半分を占めていただけであり、魔界はその四つの大陸のマルノーム大陸を失くしただけの広さを持つ。
かつてこの惑星に同じ場所に存在していた大陸を、天界が沈め広大な海となったのを人間達は知る由も無かった。
そもそもこの世界の人間は、惑星という概念は無論の事、住んでいる星は丸い事すら知らずにいたのだ。
理由は簡単、隣の大陸に行く間だけでも海洋モンスターに襲れるというのに、商売目的も何もなく、この海原を自由に駆け回るぜという特攻精神を持った冒険野郎など皆無だからだ。
人間の居住地域は確定しており、未知なる開拓を求めるという奇特と書いて変人と読む者など居る筈も無く、広いと感じている場所其の物が惑星の半分だったのを魔界の浮上に伴い、魔界と共に共存できる場所をどうするのだという疑問に三神達と、人前に頻繁に顕現するようになった妖精たちのレクチャーで、其れなりに知恵を持ち始める子供までもが知る事になった。
自分達の住んでいる場所は―惑星―という、空にある星と同じ形をして丸く、そして途轍もなく広いのだと。

それを知った時、世の中の大半がひっくり返った。ダイが思った事と同じで、何故丸いものから落ちないのだと。
そこは三神と精霊達は愛し子の答えを丸パクリした。即ち星の愛が、全ての生命が星から落ちないように力を出しているのだというとってもファンタジーで、神だからこそ通される不思議な答えを、愛し子から見ればまだまだ純朴で朴訥な人が多いこの世界の人間は信じたのだ。
神がいて精霊がいてドラゴンがいる、魔法と剣のファンタジー世界だからこそ通る説明を。
とは言え魔界の神もショックだった。
十数年地上に出て監視とそれなりの地上の事を学び、―地上のあらゆることに精通した―と自負していただけに、そもそもがこの星自体が丸い事すら知らなかったのに、何を知っていた気になっていたのだと落ち込んだ。
それこそ幼な子が言う通り、世は広大、誰にとっても広く知らない事なぞ山のようにあるというあの言葉通りで・・・・・会いたい、あの幼な子はこの事すら知っていたのだろうか？
世界は丸く、半分は海だった所にかつて魔界があり、何の縁か十万年の時を超えてまた再び同じ場所に戻ってきたのを。

その魔界が浮上し、三界が落ち着きを取り戻したであろう頃合いを見計らい、史上初の世界会議と相成った・・・・そしてパプニカに地獄が出現したのだ。

「ああもう！魔族ってのは何出せば喜ぶんだ⁉厳つい顔の人多いから塩辛いの好きなのか⁉」
「いや薄味がいいとか・・・」
「量はこれで足りんのかよ⁉」
「魔界の神様のあのほっそい体見たろうが！あの人絶対食細そう

だ・・・・レオール王が好んで食べた病人食を豪華にしてもう少し歯応えある風にしてみれば喜ぶかな・・・」
「魔王ハドラーなんて絶対に何でも食べるだろうからそっちの心配はいい！兎に角あの食の細そうな貴人を満足させるぞ!!!」
「だな！精霊王様達は人界の食事は摂らず、指定されたハーブティー出してくれればいいと言ってたし、クッキーとかのお菓子があれば尚良いって言ってたしな。」
会議の段取り、室内飾り、警備などありとあらゆることが魔界浮上前からパプニカでは取り組まれていた。
かつて魔王軍に立ち向かう為に各王家を招集したパプニカであれば、世界会議のノウハウの基礎は有り、今度のはそれを―少しだけ規模大きくしただけの顔見世会議―だから大丈夫だろうとか、うっかり大魔王がやらかしてくれた。
鬼岩城で攻める前から各国の状況を監視し、世界会議なるものの情報もばっちりとリサーチ済みのバーンが、顔見世の為の世界会議をするならパプニカであろうと精霊王達と魔界の各王達に売り込んで決められた時、レオナは本気で神を呪った。
パプニカ国と書いて不運を呼ぶ国って読ませたいのかと・・・・
とは言えレオナという、賢王女の存在がまたいけなかったのだが。
レオナは戦場で常に冷静沈着であり、何事が起きても優先すべきは何であり、時には私情を殺して動くことが出来る事をロロイの谷で証明していまい、バーンのお眼鏡に適ってしまったのだから。
あのファブニールの竜に仕込んだ五重の罠のあの時、ティファが苦しもうともミナカトールを成功させる道を選び、苦しくとも耐えた女傑がいる国なのだから顔見世会議位大丈夫だろうと相手の心情丸無視のやらかしをしてしまったのだが、通ってしまったからには国を挙げて必ず成功させるとレオール王を筆頭にパプニカは燃えた。
上記で上げた事はほぼ完璧だ。会議の段取りは、本当に挨拶と今後の世界の指針の話を俎上に載せて、各国に持ち帰り後日案を出せるようにしようという簡素なものだからこれはクリア。
内装は元々パプニカの歴史は古く、何もせずとも品が良く、花飾り

を足せば済み、精々古くなってしまったカーペットとを全て取り換え、色褪せた壁を塗り直し、調度品も幾つか直すか変えるかだけで済んでいる。
警備に関して言えば・・・・魔界の神と魔王と勇者一行が降臨している場を誰が襲うんだと言ってしまえば御仕舞だろうがそうもいかない！
何があっても誰であってもパプニカに来る者達を、どんな事をしても守るという姿勢を見せるのが肝要なのだから。
城内、其れも会議室にはヒュンケルが騎士の鎧を着て警備長を務め、あまり物々しすぎてもいけないので各国から上級騎士を程よく配置し、警備の為の結界をポップが張る事で落着を見れたが最大の問題は!!!
魔界の食事ってどんなのだ!!!!
主食はなんだ！普段何を食べている⁉食材は⁉
もうこれこそがパプニカを悩ませている目下の懸案事項。
失礼な話だろうが、不毛の地にてそんなに食べられる物があるのだろうか？
此処は魔界で三度のご飯を食べて育ったヒュンケルに聞いたが、てんで参考にならなかった！
曰く魔界では修行第一に考えて何を食べていたのか碌に覚えていないとか・・・大魔王の料理人が聞いたら間違いなくぶちぎれ案件を宣われた者達は撃沈し、望みを以てダイの父に話を聞きにデルムリン島まで行った者達も泣きながら帰って来た。
「・・・魔界の食材だけでは追い付かないから地上の食材を魔界の鉱物で買ってたらしい・・・」とか・・
後はその辺で大量発生したので駆除したモンスターの肉とかがメインで、味付けは食えるだけでもありがたやだったとか・・・・まさか主賓様直に聞くわけにもいかず、もうどうしようもない状態で今日を迎えたパプニカ厨房は泣いてもいい。
兎に角！美味しいものを出して手探りで魔界側の好みを探し出し!!後日必ず満足して頂く事で今日の不手際の詫びとしよう!!!いざと

なったら自分が責任取って首差し出すとのパプニカ料理長の号令一下の下、まだ昼食よりも大分早い時間から厨房は戦場と化し、遂には食事の時間が来た!!

会議室は割合に和やかムードで顔見世会議が進んでいる。

バーンとの間をなれたダイ達が地上界の各国の王達との間を取り持ち、マァムはロモス王を、メルルがフォルケン王を、ポップがクルテマッカ王を、ダイがレオール王を、ノヴァがアーデルハイド王を、そしてアバンは王配であるがと前置きをしてフローラ女王と、それぞれが王達の良いところをバーンとハドラーと精霊王達にアピールし、王達を大いに照れさせ慌てさせ、紹介を聞いていたバーンがクスクスと笑った事で会議は良い方向へと流れている。

そしてとうとう昼食の時間になった。

「何が出るのか俺楽しみだな～。」

「ダイは其ればっかだな。そんなんだから姫さんの顔おっかなくなんだぞ。」

「でもポップ、私も王宮のご飯て初めてだし楽しみよ。」

「もうみんなそんなにハードル上げないでよ!!!」

「案ずるなレオナ姫、余もここにいるハドラーも大概のものは食せる。」

「・・・・バーン様、其れは慰めの言葉には・・・・」

「む?そうなのかハドラー?」

・・・・・・・・・

はぁ～

会議室にいるバーン以外の全員から心の中でため息が漏れたのは仕方がない。

バーンとしては、何でも食べられるから何を出されても大丈夫だと言いたいのだろうが、其れは不味くとも文句は言わないと暗に言っている様なものだと気が付かない殿様気質のうっかりさに溜息をついても文句は出まい。

とは言えバーンも悪意はない。何なら自分達の料理は慣れている

ミスとか双子の料理人をパプニカに貸そうかと提案しようとしたのをポップに止められた。
地上界側が必死にもてなそうとしてんだから水差すのは良くないと。
予め食べられないものや好みを伝え、後はお任せしてみてはどうかと。
そして昼食がやって来たのだが・・・・・何故か、持ってきた料理長の顔が自信満々に見えるのは気のせいだろうか？
そして、後ろに控えている小さなコック帽を目深に被っているあの者は何のために居るのだろうかと気になるが、料理が来れば必然全員の目と関心はそちらに移された。

バーンの後ろで控えていたミストは、主の前に並べれる皿の出来に、思わず目を細める。
何処の世界であろうとも、料理人が切磋琢磨しているのを感じさせる皿は好もしく感じる。
主も喜ぶであろう色とりどりの野菜が添えられた鴨肉のローストは火加減が絶妙で、中の肉が綺麗な程の良い色になっているのがまたいい・・・・それにしても、主は見た目は老体でありさほど食べないように見られそうなものだが―量―が普段自分が出すのと同じなのはどうした事か・・・・ロロイの谷での決戦時、ティファが主の健啖家なのを叫び上げながら、そんな人が高齢だなんて認めないと言った話が伝わったのだろうか？
それよりも・・・地上界特有の―濃い味付け―でなければいいのだが・・・
意外だろうが魔界の味付けは薄味なのだ。塩や調味料は如何に主が財を有していても貴重品であることに変わりなく、なれば周りは更に使えず、自然薄めて使うので薄味であり、ハドラーも最初地上出て人間にモシャスし、街を偵察がてら酒場で食事をした時、そのあまりにも濃い味付けに毒でも盛られたかと本気で思いながら一口で吐き出し、小川で浴びる程水を飲んだのが記憶に新しい。

それなりの薄味をと頼んだのだが、其の塩梅にまでは口を出せずにミストはやきもきする中、料理は全て配られ会食となった。
バーンは何気なくローストを食べた時、思わず声が出た。
「・・・美味であるな・・・」
ポツリとした何気ない声には称賛の声音が響き、其れが世辞でないのが全員に伝わり、給仕している者達も含めホッとした。
どうやら我慢を強いる会食にならず済んだようだ。
今日の会議は円卓であり、右隣にいるハドラーも目を細めて食べているのを見て、ダイ達も負けじと沢山食べ始めるのをレオール王達は嬉しそうに見つめる。
子供はたくさん食べて大きくなるのだぞと、心の中で呟いたのは誰であったか・・・
そしてメインディッシュが終わる頃合いに、次々とデザートが出された。
それはガトーショコラの様な濃い物では無く、フルーツの甘さのみで作られたフルーツタルトやタルトタタン、味を控えたレアチーズケーキに、そしてバーンの目を引いたのは・・
「トライフル・・・・・・」
それは十種類のトライフルであった。
中身のフルーツを変え、カスタードクリームから焦がしキャラメリーゼの乗った色とりどりの華やかなトライフル。
「綺麗なデザートですね!!」
「あチウ!まずは大魔王達が先よ。」
「バーン、どれがいい?俺がとってあげ・・・・バーン?」
「・・・・・誰ぞ?」
「どうしたのさバーン?」
「急にどうしたんだよおっかない顔して・・・」
「このトライフルを作ったのは誰ぞ⁉」
先程まで穏やかであったバーンが幻の様に、表情が険しくなり幽かに震えてさえいた。
一体このトライフルがどうしたと言うのか・・・

「料理長、このトライフルは作ったのは其の方か？」
「いいえレオール王！私は唯運んだだけです。」
「其方自らが作ったのではなく？」
「はい！さらに言えば、この会食の味付けと量、そして細かな所は・・・」
「私がさせていただきました。」
その言葉は、料理長の後ろに控えていた―背の低い料理人―から発せられ、その場にいる全員が料理人の声を聞いて固まってしまった！
「出過ぎた事とは思いましたが・・・・」
料理長の後ろから出て来た料理人は前に出ながらコック帽を取り、豊かな黒髪を背にたなびかせ乍らコック帽を胸の前に持って優雅に頭を下げ挨拶をした。
「かつての勇者一行の料理人ティファが、此度の会食のお手伝いをさせていただきました。」

少し前のパプニカ厨房
「魔界では調味料がそれ程までに・・」
「ええ、なので薄味も・・・・・これでも濃いですね。」
「ではデザートも見直した方が!!!」
「そうですね、タルト生地はそのままにして中身をフルーツだけで盛り込むのが好まれるかと。」
「精霊王達にお出しするハーブティーの温度はこれでどうでしょうか？」
「う～ん・・・少し熱いかと。あちらの方達は私達よりもうんと繊細なので温めの方が。」
「ジンジャークッキーは止めてアーモンドクッキーなどを中心に出した方がよさそうですね。」
「そうですね、一番若い水の精霊王様も淡い味を好まれるようです。」
味付けの段取りにかかる寸前に、厨房をノックする者居たので誰だと開けてみれば、とっても見覚えがある人がいたので全員腰が抜けるかと思った。

かつての勇者一行の料理人を知らないものは城内にはおらず、当然厨房のものも知っている！
そしてその料理人の横には、彼女と将来自分達の国王になる事決定している勇者ダイの父親も漏れなくおり、心臓止まるかと思ったのを料理人は飄々と笑い、味付けで苦労していませんかの一言で厨房は陥落し、料理と盛り付けの下準備は全て済んでいたので後は料理人のアドバイス通りにし、そして大成功を収めたのだ。

帽子を取り、挨拶をしたティファ目掛けて兄を筆頭に仲間達が全員が立ち上がりダッシュしてティファ争奪戦が勃発しかけたがそれは不発に終わった。
あのティファ捕獲に関しては神速のラーハルトをも出し抜くヒュンケルまでもが負けた。
ティファの姿が瞬時に掻き消え、バーンの腕の中にティファが納まった。バーンは瞬時にハイ＝エントのラド＝エイワーズを発動し、ティファを力強く抱きしめる。
トライフルを見て直ぐに分かった。自分の愛しい幼な子が来ている事を。
あの十日間でティファが自分に作った唯一の料理を、忘れるはずが無いのだから。
「ティファよ・・・・起きて・・・・目を覚ましてくれたのだな・・・」
震えながらバーンはティファを掻き抱く。本当はロロイの谷でティファの蘇生に成功した時瞬時に魔界の自分の居城に連れ行こうとしたのだ。
二度とは自分から放すまいと・・・・・それでも、ティファの家族を悲しませるわけにもいかず、心情を押し殺して・・・・そのティファが目を覚ました事が、どれ程の喜びを自分に与えてくれているのかをティファは分かっているのだろうか？
抱きしめられたティファは、バーンの力の強さに驚き、少し苦しいと言おうとして上を向いた時、出掛かった声を飲み込んだ。
涙を流して泣くバーンの顔を見て。

ロロイの谷の決着の後、一滴の涙で感情を抑えていたバーンが、かつてとは言え敵対していた者達も前で、恥も外聞もなく、そして椅子から前に崩れ落ちそれでもティファを離さずボロボロと涙を溢れさせている。

魔界に太陽を・・・・・その一心で来た自分の心の中にいつの間にか住み着いた図々しく騒がしく、そして無限の優しさを持つ太陽の申し子のようなティファの帰還を言祝ぎながら・・・・・

この後の事は語るまでもなく、言わずとも察せられましょう。

ティファはバーンの後にダイ達に抱きしめられもみくちゃにされ、各国の王達もこの時ばかりは童心に戻ったようにティファを抱きしめ喜び・・・・喜ばれすぎて様々な所から色々な者達が広かった会議場を狭く見せる程の者達が速攻で押しかけ、騒動が繰り広げられた事は想像に難くない筈です。

その中には―変態疫病神―は当然として、―迷竜王―も押し掛けたとかなんとか・・彼女が来たことで大騒動になったのはいつもの事。

そんな騒動の渦中を心配して、デルムリン島ではブラスが神獣ガルーダ相手に苦悩を語って、二人の子供達が今度こそ無事に帰ってくることを祈り、その周りをラーハルト達も固まって主達の帰りをじっと待っている。

ダイが出かけて少しして、ティファは突然、本当に何の前触れもなく目覚めたのだ。

朝食の後片付けをしている時

「爺ちゃんお腹すいた～何かない？」

と、実に呑気でいつものティファの声を聞いた時のあの喜びを自分達は生涯忘れまいだろう。

ティファが起きた事を、神に感謝する程に・・・そして、起きて早々にダイ達を喜ばせたいという願いを聞き届けたブラス達は、父と共に神獣ガルーダが背に乗せパプニカに連れて行くのを見守り、そして帰還したガルーダと共に三人の帰りを待っている・・・・・もしかしたら大勢の客人も伴って来るかも知れないが・・・

勇者一行の料理人が巻き起こす大騒動や珍騒動は一先ずこれまで。

この世界を救うという―役目―を独自に拡大解釈をし、全てを掬い取ったティファが何をなし、兄を筆頭に仲間達や周囲の者達が歩んでいく道は、決して平坦ではなくざせつすることもあれども、其れでも希望に満ち歩く事だけは確かである。

かつてそれぞれ味わい苦しんだ苦難を思えば、何ほどの事も無いからだ。

後の世に勇者一行が誕生するかは定かでは無いが、勇者一行ごっこの一番人気は勇者であることに変わりはないが、次点で―料理人―をしたがる子供が多く、それは彼女が助けたベンガーナ兵の子供達が一番になりたがるジョブとなった。

勇者であれば決まり文句は、我こそは勇者何某となり、料理人にも決まり文句が出来た

戦う事を、争う事を私勇者一行の料理人が許しません！であったとか。

敵であっても倒す事よりも助ける事を優先したティファの心情を子供達が知っているかのような決まり文句が。

彼女は優しく博学であり、知らぬことはこの世界には無いのだとまで評されたが、ティファが聞けば、自分は知らないことだらけだと言っただろう。

そしてティファにとっての最大の謎が出来た事がある。それは・・・・

眠っていた時に誰かに揺り起こされた。

魔界も浮上した。仲間達も幸せの道を歩き始めている・・・・・だから起きて欲しい・・・

懇願されるような言葉に、夢の狭間で目を開けた時確かに口付けをされたのを鮮明に覚えている。
それは夢の中であり現実ではないが、生々しいほどの感触を、現実に起きて暫くしても自分の口に残っていたのだ・・・・一体誰が私を起こして口付けを・・・

その人を探す時間が自分にはある。
これからゆっくりと探せばいい、今度こそみんなの輪に入ってこの世界を自由に楽しく生きていこう
天と地と太陽の下で皆と共に

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

d？

語は一旦ここまで

いいえ、物

後日談編

後日談①　女子会

は～れた空～、そ～よぐ風～っと、この歌分かるあなたは転生者だ。若しくは昭○のお人だ。

それはいいとしても、この歌いたくなるくらいに良い天気だ。

あ～ああ、あこがれ～のパプニカ～航路っと。

レオナにお茶のお呼ばれをしたティファが浮かれて前世の歌を心の中で歌う程の良い天気に、ルンルン気分であつた。

将来のおねぇちゃん、すなわちダイ兄のお嫁さんになるレオナ姫にお茶会に招待されたティファの気分も晴天で、ガルーダでパプニカ城の入り口前に乗りつけ慣れた様子で門番さん達にこんにちわして、次にこの城の主たるレオール王に来ましたよの挨拶を済ませ、エイミの案内の下レオナが待つ王宮の中庭に向かい、そしてティファはガチガチの緊張をする羽目になった。

お茶会しようという一言文の招待状には複数のお客さん、其れも同い年か少し上の貴族のお嬢様方とお茶会をするとは私聞いていない！

見るからにこれぞ貴族のお嬢様方は、綺麗なドレスに身を包んで優雅にお茶飲んでる・・・私場違いだ・・・・

意外に思うだろうがティファは―人見知り―が激しい。

魔界の神に平然と口を利き、会う敵全てに説教してきたやつが何をぬかすと言われかねないだろうがティファは人見知りだった。

今までは―原作―に出てくる人としてそれなりに親近感があるか、全く知らない人に自分から近づく時は実はじっくりと観察し、相手の為人をある程度把握しているか、親しき人に仲介して貰いようやく口が利ける。

その際には大体誰それにあってと前情報を貰っているので気構えが出来て緊張をほぐす準備運動できているが、こういうサプライズ的にされるのが一番苦手であり、相手の子女達は自分とレオナ姫という

生ける伝説と会った事で興奮してきゃいきゃいとしてくれて場が和やかに見えてほっとする。
困った事に何話せばいいんだろう？
これが英才教育の弊害とでもいおうか、ティファは専門知識職や技能集団とはいくらでも―大人な会話―をしていられる。
礼儀正しい挨拶から始まり、お互いの能力を当たり障りのない話で把握し合い、そこから―本当の会話―に入る、所謂面倒な大人の会話が得意な反面、知らない女子と何を話せばいいのかさっぱりと分からない。
ようは社会性は有れども同年代に対して社交性に欠けているのだティファは。
その事を周り、特に王族として両方を体得しているレオナやフローラが心配している。
ティファがこのまま大きくなってもそのままでは何時まで経っても―同い年の友達―が出来ない。
ティファは確かに沢山お友達がいる。その内明けの大半がモンスターと精霊と、何なら魔族であったりして、つい先日魔界で元気に暮らしているパレスの主任になったゴレムさんと文通友達になりましたとか嬉しそうに話してくれた時、自分とエイミは眩暈が仕掛けた。
ゴレムとは、バーンの居城バーンパレスの主任警備長をしているずぅずぅ弁で話すアークデーモンであり、その人と文通していると嬉しそうに言う十三の女の子はどうなのだと。
それはそれでいいが、これではいけない！世はもう平和に向かっている!!ティファにも女子のお友達と、女子トークをきゃいきゃいとして欲しい!!話す内容なぞなんでもいいのだ。
お洒落でも流行の歌劇でも何なら目の前のお菓子の話でも!!
緊張をほぐそうとしているティファが食べているお菓子は実は!!
「どうですかティファさん、―ヒュンケル―が作ったビスケットは？」
「え!!!これってヒュンケルが・・・」
「はい、今日のお茶会の事を知って、ぜひ自分でティファさんが食べるビスケットを作りたいと一昨日からアバン様に習いに行って今朝が

た帰ってきた時に持ってきたのがそのビスケットなのです。
　姫様も皆さんも、ビスケットのお味はいかがですか？」
「ええ!!あの銀の騎士様が御作りになられたのですか⁉」
「そういえば・・・いつもはレオナ姫様に陰日向なく付いて護衛されている銀の騎士様の姿が見えないのは・・」
「もしかしてヒュンケル、ビスケットを作って力を？」
「はい！使い果たして今は寝室でバタンキューですよ。」
　作り手がヒュンケルである事をエイミが口にすれば、案の定ティファとそして出席している子女達全員が食いついた。
　ティファは食べる専門がイメージのヒュンケルが作ったのかと驚き、子女達はレオナ姫に寄り添うように護衛している―銀の騎士様―がお菓子作りしている萌えギャップにやられ、ヒュンケルこういう事をするようになったのですねとしみじみというティファの言葉に更に食いつき、ヒュンケルとはどういう者かを話して聞いて、感想を言い合いながら、いつしかティファの緊張は霧散し気が付けば子女達ときゃいきゃいとしていた。
「ヒュンケルは何を着ても似合うので、甲冑姿も確かにかっこいいですよね。」
「はい！御髪の色も、着ている甲冑も、佩かれている剣の鞘も全て銀なので、私共の間では銀の騎士様という二つ名で呼ばれているのです!!」
「ちなみにティファ様のお兄様は、好んで青色を着られているのとその広いお心を指してで蒼天の君と!!!」
「ああ！ポップ様も忘れてはいけませんよ！新緑の色の中で、燃え上がる炎の石を感じるあの方の二つ名がまだ決まっておりませんのよ⁉」
「ちなみにマァムさんやメルルさん、チウ君、クロコダインとべほちゃんに二つ名ってありますか？」
　ティファの質問に気を良くした子女三人、特にレオナより一つ年上で亜麻色の髪を太い三つ編みで纏めたベルが、待ってましたと目を欄と輝かせる。

「勿論ございます!!クロコダイン様は数々の戦闘時、その巨体を以てお仲間の皆様を身を挺して守られた事から盾の君と！チウ様は其の愛くるしさの中に秘められた広いお心から慈愛の君と、其れはマァム様の慈愛の方と対の様になっていますの！」
「ちなみにべほ様は銀の騎士様の比翼、若しくは銀の騎士様の癒やし手と、ヒュンケル様と対になってます。」
「メルル様はその占いと、託宣を受けた方として先見の巫女と呼ばれて我が国の神官達も下にも置かない程ですの。」
ベルに続き、若草色の髪をハーフアップにしたティファと同い年のシャシャ嬢と、十五歳でティファと同じ黒髪を、ボブカットにしているシンシアが、ティファ以外の勇者一行全員の二つ名を滔々と話し、漸くこれぞ女子会になれた。
気分がほぐれたティファは、すっかりと覚めてしまっても美味しい紅茶の味を漸く堪能する。
きゃいきゃいとしすぎて乾いた喉を優しく潤してくれる紅茶が実に美味しい。
エイミが話のネタとして放り込んでくれたビスケットをサクサクと頂きながら、改めてベル達の装いに目が行く。
ベル嬢はふんわりとした黄色い布地のロングワンピで、サッシュベルトでウエストがキュッとくびれたのがとっても似合う。
シャシャ嬢は鎖骨が綺麗に見えるふんわりとしたバフスリープの袖で色はクリーム色の可愛いロングドレスが愛らしい。
パプニカでは・・・というよりこの世界では貴族のお嬢様にしては珍しいと思う頃神のボブカットをしているシンシア上は、白いシャツを首元迄きちんとボタンを留めて、青いスカートに茶色のハーフブーツをかっちりと履いているカッコいいお姉さんだ。
ちなみに今日のティファの装いは、プリーツパフの水色のワンピースに飾りエプロンをして、髪も水色のリボンでポニーテールに結っている。靴下ではなく白のタイツに柔らかい革で出来た黄色い靴を履いており、ティファの可愛らしさを遺憾なく発揮している。
レオナもお茶会らしく七分袖の白のプリーツドレスに、髪の留め金

に華をあしらったものをつけている。
　エイミはこの後もすぐに仕事なので、いつもの三賢者服なのが残念である。
　女性の話題は自然お互いの服の話から装飾品、そして次第に―男性―の服へと突入する。
「クロコダイン様はあの鎧が一番お似合いなのかしら？」
「う～ん・・・・反対にあの鎧以外の姿の想像が・・・・」
「チウ様は磨けば光ります！あの服もいいのですが・・・ローブ風が似合うのでしたらもう少し色にバリエーションを選んであげたく・・」
「ヒュンケル様は何を着ても・・・ああ素敵です!!そんな方と結婚されるエイミ様が羨ましいですわ!!」
「そうよね～。エイミは近々結婚するし、更にヒュンケルと甘々になって私胸焼けするかも～。」
「そんな姫様!!」
「あらエイミ様ご馳走様ですわ。」
「私どもも胸がいっぱいに・・」
「お幸せになってください。」
「エイミさん、ヒュンケルをよろしくお願いしますね。」
　ヒュンケルに話題が及べば、当然レオナは礼の姫らしくないウシシ顔でエイミをからかい半分、幸せになってエール半分で絡みだし、ベル達もティファも乗っかりエイミを真っ赤にさせて笑いの渦が巻き起こる。

　ああいいな～。こうしてとりとめのない幸せな話を一日中出来る世の中って・・・
　殺伐とした話なぞ影もなく、戦どころか剣の持ち方も知らない普通の女の子と話す自分を不思議に思いながらも、いいものだと微笑むティファに、ベルが凄い事をティファにズバッと聞いた。
「ティファ様の中では、殿方の中でどなたが一番服のセンスがよろしいと思いますか？」
　ティファはその瞬間雷に打たれた気がした。

雰囲気から察するに、ベルは順位付けしてどうこう話す気ではなく、自然男性の知り合いが多い自分の中で誰が一番だと思ったのか何気なく効いている気がするのだが・・・さてこれは・・・・・

ティファの中で、服のセンスが良くかつ―大人―のイメージの人と言えば・・・

その瞬間、パプニカと書いて不運な国の名が発動された瞬間であった

どうしてこうなった・・・・

ティファに呼ばれて新たに来てしまった客人二に、レオナとエイミは心の底から凍り付いて眠ってしまいたいと本気で思った。

どうして魔界の神様とその死神がここに来た!!!

きっかけというは矢張り発端はティファである。

センスの良い服を上げたのが―二人―いた。すなわち

白いローブを着こなしている大魔王と、少々奇抜ですが赤と黒の仮面と道化の衣装が良く似合うキルですとか、にっぱりといい笑顔で言い放つティファの答えに、レオナとエイミは崩れ落ちたくなった。

そこは白の柔らかいシャツが似合うノヴァとか!クリーム色の旅人の服に赤いマントが良く似合ったアバン先生とか!!もっとあげられる人がいるでしょうに!!!

しかしそこは矢張りティファであり、センスで言えばあの二人が一番だと思っているので正直に言ったのを、意外にもベル達が食いついた。

ティファが眠っている間に、世の中に勇者達を題材にした戯曲がわんさか溢れ、特に一番人気が料理人がその身を挺して一行と魔王達を

逃がし、自身は捕まり、囚われ先でも健気に過ごす姿に心打たれた大魔王達と心を通じていく―儚い料理人―の姿が聴衆の涙をさそうとか・・・・・実際は影の参謀の胃袋を痛める程の破天荒さで過ごしただけなのを知らぬが何とやらであるが兎に角、大魔王達の評判も地上界では受けがいいのだ。

それも当然で、死に瀕した魔界の為に身命を投げ打ち生きてきた魔界の大英雄なのだから無理はなく、その道に付き従った側近達もまた然りで、バーンとミストは兎も角、変態疫病神の評判が良い事にダイ達は複雑になっているのはまた別の話で、実際の大魔王はどんな方だと聞かれたティファは困ってしまった。

言葉では言い表せない程カッコよい二人を・・・・そうだ!!私大魔王にいいもの貰ったんだった!!!

「ちょっと待っててください！―実際の大魔王とキルー見た方が早いです!!」

いい事を思いついたティファは、リングから―悪魔の目玉―をもう少し可愛くした物を取り出し、何する気だというレオナ達の制止が入る前に映像を結んでしまったのが・・・・パプニカと言おうかレオナの運の尽きであった。

その日もバーンは魔界の為に仕事に勤しんでいた。浮上する前にある程度の瘴気がヴェルザーと其の下で強制労働で減り、浮上と共に精霊達が一気に浄化した事で魔界の最大の問題は消えた。

しかしやる事は山積みで書類と格闘されている所に、―愛しの幼な子―からのダイレクトコールを受けたバーンは書類をうっちゃりすぐさま映像を結んだ。

「久しいなティファ。」

「えっと大魔王・・・二日前に食事した気が・・・まぁお久しぶりです。」

「ふむ、時間があれば毎日共に食事を摂りたいのだが、今日はまた一段と華やいだ姿をしておるな。」

「ありがとうございます。・・・・似合いますか?」

「似合うとも、そもそも其方に似合わぬ服なぞない。あるとすれあそれは服の方にこそ問題があるのだ。」

物凄い事をさらりと言うバーンの言葉に、周りで聞いていたベル嬢たちが思わず歓声を上げてしまい、バーンは何事かをティファに問いただし、お茶会とそれに出た話を聞いたバーンは、即座にキルを呼び出し空間を開けさせ、そそくさとパプニカ王城の中庭に出現した。
「招きに預かっても良いかな？」
・・・・・来てしまってから聞かれて駄目と言えますかってのよと内心で叫んだレオナは悪くない。
そして来て早々バーンはやらかした。
椅子を取ってこようとしたエイミを制し、ティファを抱き上げ膝に乗せ、これで足りようとか自然にやらかしてくれた光景に、戯曲でファンになっていたベルは顔を真っ赤にして悲鳴を上げ、シャシャは常識的にこれっていいのかなと思いつつも、どこかいきなり非現実的な空間に迷い込んだ気になり、これはこれで楽しもうと良い根性を見せる中、ボブカットのシンシアが、じっとバーンを見つめている。
その瞳は真剣で、子女にしては強い力を感じたバーンは、キルがその娘を咎める前に挨拶をした。
「楽しんでいる所に乱入した非は謝ろう。大魔王バーンである。」
鷹揚で懐の広い挨拶に、ベル達は益々バーンに惚れ込む。
確かに招かれていもいない王宮の一角に来たバーンに非は有ろうが、それでも一介の貴族の子女が、大魔王を強い目で見据えていい筈がないのを咎める事なく挨拶をするバーンは素敵な大人の男性だと。
挨拶をされたシンシアは椅子から立ち上がり、見れば顔が真っ赤になっていた。
口を開こうにもはくはくとして、緊張しているのが伝わるがバーンもキルも急かす事なく待っていれば、途轍もない挨拶を返された。
「私はパプニカのシンシアと申します!!突然ではありますが魔界の神様たる貴方様のお衣装を!!私に作らせてはいただけないでしょうか⁉」
・・・・・・はい⁉
傍で聞いていたベルとシャシャは友人のいきなりの発言に驚き顔

を青褪めさせ、普段ぶっ飛んだティファに慣れている筈のバーン達も驚き、そしてバーンの機嫌が些か下降した。
「・・・・・余に取り入りたいか娘よ？」
　返答次第では、少しばかり大人の説教を受けて貰う積りで。折角幼な子に出来た子女の友人の中に、野心家がいるのは好ましくなく、まだ幼いうちに権力者に擦り寄る者の愚を取り払うべく。
　だが、シンシアは真面目であった。
「大魔王バーン様のその素敵なお姿に！私のイマジネーションが止まらないのです!!」
　シンシアは真面目に物凄くぶっ飛んで、所謂開明的な思考の持ち主であった。
「大魔王バーン様の祖のローブ姿はよくお似合いですが!!冠を外されその御髪を後ろで軽く結われ、シックな色合いのシャツを着られるだけでもお似合いかと！」
「ズボンは其れよりも濃い色合いで、三つボタンのスーツがいいかと!!」
「ああでも帽子も・・・しかしそうされるとその角が・・・・活かせる帽子の開発も・・・・」
　情熱的にバーンに似合うであろう洋服を次々と羅列し、最後の方は自分の中でイメージを固める為にぶつぶつと呟き始め、聞いているとうのバーンをうっちゃって思考の旅に出かけてしまったようで、不意にバーンの呵々大笑とした笑い声に、凍り付いていた空気が破られた。
　どうやらこの娘も幼な子と同じで相当な変わり者のようであり、自分独自の世界観をきちんと持ち、我が道を行くところもまた似ているようで、それがまたおかしくなり、隣でクスリと笑う声の主を見れば、キルも同じ考えの様で険しかった視線が和らいでいる。
　笑い声で現実世界に戻ってきたシンシアに、バーンは一着作ってもらおうかと依頼をした。
　貴族の子女である様だが、自分から服を作らせてほしいと言うからには相当な自信と、その道に進む気があるのだろうと推察して依頼し

てみれば、シンシアは無論の事、成り行きを見守っていたシンシアの幼馴染のベルとシャシャが我が事のように喜んでいた。
　聞いてみればシンシアは貴族の三女に生まれたが、周りの子女達の大半とそりが合わず、しっかり者とふんわりしているが優しいベルとシャシャだけと付き合い、二人の日常の服を作るのが趣味で、いつしか街でテーラーを出すのが夢だとか。

　アイディアは誰にも負けない、しかし所詮は貴族の子女のお遊びだと大人が誰も相手にしてくれなかったのを、魔界の神様さ真剣に受けてくれのが三人には嬉しかったのだ。
「絶対にいいものを納めさせていただきます!!」
「うむ・・・では予算は・・・・・いくらあればよいかなキル？」
「さて・・・・貴族のドレスが一着千ゴールドとして、バーン様がお召しになるならばすくなとも生地代だけでも五千・・・・耐魔法を付与させるのに千、そのほかのアイテムや小物で締めて一万はいるかと。」
　え・・・・・なにそれ？
　物凄い大金の話がサラサラと言われて、国家予算勉強中のレオナも目を剥いたのを、バーンとキルとシンシアは気付きもしなかった。
「ふむ、なれば後程ミストに予算をきちんとつけさせ・・・シンシア、其方に直接行くようにしておこう。期日は一年、其方が納得する者を期日以内に作るがいい。」
「あ!!仮縫い等はどうすれば・・・」
「・・・・ティファよ、其方の式で余と同じ似姿のものは？」
「後で正確に採寸させていただければ出来ます。」
「其れでしたら出来ます!!いいえ！やらせていただきます!!」
「うむ、その心意気やよし。余も楽しみにして待とう。」
「はい！はい!!!」
「ふむ・・・・・其の方が考えている服は其れで仕舞か？」
「いいえ!!まだまだあります!!!例えば三賢者アポロ様のあの服は些か・・」
「ほう、あの水色の耐魔法の布で作られたあれか？」

「あれが戦士の鎧と同じだと言われればそれまでですが・・・もっと体を覆いながらも機能的かつセンスのいいものが出来る筈なんです!!例えば・・・・」

かくして大魔王と変わり者の子女の出会いで、パプニカに服装革命が起きた。

手始めに三賢者の筆頭アポロが憐れな生贄となり、ティファの中で曰く、長袖のワンピース型のエジプト神官風の服を着たアポロの方が断然カッコいいと思った。

水色の袖なし貫頭衣は正直ダサいと思っていたのは、墓場の中まで持っていこうと誓って。

新たな服は三賢者を示す金の冠とよく似合い、以降男性賢者の定番の服となった。

シンシアはお茶会の後速攻で大魔王バーンの依頼を果たすべく、寝食も忘れる勢いで服作りに取り込み、幼馴染二人に程よくとブレーキを掛けられながら作成した服に、後日受け取ったバーンから満面の笑みで見事と言われたのをきっかけに、シンシアはバーンからの報酬で店を出し、大魔王バーンのお墨付きという評判の下大成功を収め、斬新ながらもパプニカの特色を生かした新作を次々と世に出し、パプニカを服装をより一層華やいだものへと生まれ変わらせたとか。

その服が評判となり、パプニカの服装雑貨店はシンシアの服から学び取り入れ、其れが各国に受けてパプニカの服が買われる事でパプニカ国の経済が潤った。

余談になるがシンシアは店を出す際、ティファのアイディアで―カタログ―なるものを作って店頭に置いたのが成功の助けの一条となった。

カタログは全て絵で描かれ、説明文がなく服や小物の細部まで拡大で書かれたカタログは評判が良く、絵の色彩は魔界でとれる鉱物で作られる絵の具が良いと、これまたあちこちに首を突っ込んで知識を得たティファの助言の下、魔界の特産物の中に絵の顔料が入り、特に青色と単色で紫を出す鉱物が高値を生んで魔界の貿易の手助けともなった。

ティファの普通の女の子のお友達を作ろう作戦がパプニカの新たな服装の歴史を生み出し一人の天才服装氏を誕生させ、物のついでの様にパプニカの経済と魔界の貿易を潤わせてみせた。
おまけの様に、人界の少女であっても能力を見出せば惜しみなく援助したバーンの評判はうなぎのぼりになり、服装アイディアに行き詰った時、優しい元死神が相談相手になったてそちらも男ぶりを上げたとかなんとか・・・ともかくこの一件で、魔界の魔族達に益々人界は親近感を沸かしたのは言わずもがなであろう。

ティファを呼べば何かしらの騒動が巻き起こり、なべて結果を見れば全ていい方向になると評判が立ったティファは、この後各国の大臣クラスからお茶会の呼ばれかけたが各国の王達がその動きを察して全て立ち消えさせた。
ティファは自由に、誰の思惑にも乗らないからこそ良い事が自然と起こるのだと下心を持った大臣達を叱りつけたとかなんとか・・・・

だが、ティファの突然の行動と、バーンのうっかりに割を食う者も居るのもまた事実。

「楽しそうでいい御身分ですね大魔王様ってのは!!」
「これ！其方達との会食を兼ねた会議を忘れた件は後日、煮詰まっていた案を肩代わりする事で決着が付いたであろうポップよ。」
「はん！あの件だったらハドラーと一緒に溜息つきながらさっき解決させたよ!!それで他に謝罪の意を示す方法あんのかよ大魔王様よ⊠」
　その日は将来テランを背負って立つ為に、フォルケン王の名代で魔界に必要そうな人界にある薬草を如何にして根ざさせるかの検討を兼ねた、テラン国の薬草部門の長とポップとバーンの三人の会食があったのをすっぽかされたポップはお冠であり、非があるバーンは大人しくポップの説教を受ける羽目になった。
　その日にパレスにハドラーがいて急遽自分の代理として会食と会議をこなしてくれたハドラーに後で手厚く礼をせねばと思いつつ。
　キルもまた、主の予定を知りながら連れ出し、予定を再度主にお知らせしなかった事をミストとハドラーに絞られた。流石に国の重要事業がかかった事なので珍しく反省をした。
　そしてティファの方はと言えば・・・・お咎めなしであった。
　ティファは悪魔の目玉を通してベル達にバーンとキルの良さを見て貰おうと思っただけで、押しかけた大人二人が悪いのだから、―子供のティファ―が叱られる理由名の無いのだから

後日談②　とある戦士に幸せを

世は平和、なべて皆が太陽の下で長閑な世界を作ろと三界が一つとなりて、よりよい世界を共に歩み、いつか自分達はこの惑星に住まう一つの家族だと胸を張って言うのだという情熱を持ち理想を追い求める者が続出する程の平和な世界になった。

無論それは人界・魔族界・天界の三界の壮大なスケールレベルの話であって、何処の世界にも盗みや詐欺師、奴隷売買に他種族を迫害する者など個人や中規模レベルでは普通に犯罪は横行している。

しかしそれがあるからとて良き世界を作る歩みを止める理由になるわけでもなく、世界が治まれば少なくとも貧しさや逼迫した理由での個人レベルの犯罪は無くなる可能性は高いわけで、各国とも民間で起こる犯罪を座視している訳ではなく、今まで戦の方に向けられていた予算や人材をそちらに回し、―とある元料理人―のアドバイスでスラム街の衛生を改善し、食料を行き渡らせ、貧困問題に目を向け支援したところ劇的に犯罪が減った所もある。

理由は単純。スラム街で食べられない者達が犯罪組織の手先に使われていたのだが、食べるに困らず、カールやまだ王族の生き残りは見つけられていないがぽつぽつと国民が帰還するオーザムの復興などで必要な人材に、スラム街の職の無い者達を優先的に働けるようにしたのが功を奏した。

誰だって好き好んで後ろ暗い道を歩いて一生を終えたいというアウトローな者はごく少数であり、真っ当に国が食べさせてくれるならそっちを選ぶのが大半であった。

このように個人レベルの犯罪が落ち着く中、スラム街と呼ばれたところは徐々に減り、街の何番地という範囲にきちんと組み込まれる中、真っ当に稼げた者達は次なる幸せに目を向けるのもまた常であろうか。

即ちいい子を見つけて結婚してもらって幸せな家庭をである。

これまではその日生きるのが精一杯で、かつかつの彼等彼女等にそんな余裕はなく、貧困の中でも結婚して逞しく生活していた者がいる

にはいるがそちらは少数で、きちんとした家に安定した収入が出来たのだからと、結婚式があちこちで連日見られるようになった。
世界平和も結構だが、個人の幸せも喜ばしい事で、パプニカ国でも街や村のあちこちで教会の鐘が鳴らない日が暫くは無かった。
城下町の鐘の音は王城にも届くので、レオナは鐘の音を聞きながら、何時も二年後の自分を夢想する。
自分はどんなドレスをその時来ているのだろうか？
きっとその時にはダイ君は私の背なんて抜かしていて、バージンロードをお姫様抱っこして歩いて、そのまま国民全員に自分達が結婚した事をお披露目してくれないだろうかと、実に女の子の夢一杯である。
ドレスのデザインを今からダイと共に選び、ダイの方は採寸はせずにデザインだけ決めようと、この程巷で流行りのカタログを大量にダイと共に見ているがなかなか決めかねている。
ダイの顔つきは日増しに男らしくなり、最初に選んだのが折角の男前が子供っぽく見えてしまうデザインなので、そこから新しいのを探している。
しかしダイもだが自分も学ぶことが多く、服選びだけをしている訳にもいかない。
ダイは帝王学とこの国の歴史と文化を学んでもらい、自分はこれまで学んできた事が通用しない世界になったので新たな勉学を習得中。
ダイとは学ぶことが違うので合同授業は出来ないが、彼の妹が目覚めて二月後に、パプニカ王城に住む事になった。
ダイ曰く、妹に婚約者の側に居て支えてやれと蹴っ飛ばされたとか。
自分は将来女王になって責務の多くなる王女を、支えてこその婚約者だろうと。
ダイは妹の言葉になる程と、目から鱗を落ち、早速レオナに相談し、勿論王室も王城側も大臣・官僚たちもウェルカム状態で、何なら即日の内に来て欲しいとお祭り騒ぎになったとか。
兎も角ダイはデルムリン島から巣立ち、とは言えキメラの翼で往来

できるのだからしんみり感はブラス達の方にも余りなく、向こうに迷惑をかけるなと言われただけで送り出され、五日に一度帰郷すると言ってバラン達に行ってきますとパプニカに住居を移した。
大戦から散々城に出入りしていたので王城内のコミニケーションを一から築く必要は皆無であり、―出来た妹―に何故か幼少の頃から王の心得だの貴族間の事だの国家予算の基本だのを教わっていたので、初めての授業も難なくついていけのが評判となった。マナーも少し直せばいい程のレベルであり、彼は矢張りアルキード王女の血筋だと評判が立ち、何よりも素直で明るい彼はどこにいても人気だった。
その彼を利用とする者は、レオナが直々に目を光らせているので将来の障害足りえず、そのレオナを愛して甘やかしまくっているダイの姿に、結婚したいな～という若者たちが宮廷内でも続出した。
自分達も甘い恋人関係を築いてそして結婚するのだと、結婚に愛をと夢を持つ貴族の子弟子女達があちこちで生まれたのを、この城で古参であるバダックはいい傾向じゃと髭を撫でながら若者たちを見守っている。
騎士や兵士達はそうでもないが、貴族は無論の事、騎士団長や兵士長ともなれば国内での政治的バランスや、自分達の派閥を強化する為の結婚が多く、恋して結婚というのがあまり聞かれていなかった。
だからと言って政治的結婚であっても愛を育む者達が多かったので、それほど悲惨な結婚生活は聞かれずにいたのだが、矢張りレオナ姫と勇者のあのいちゃつきを見れば、恋人欲しいと若い者達が奔るのは自明の理。
年老いた自分は生涯独身貴族を通してきたが。
無論若い頃はそれなりに女性と付き合ってきたが、そちらよりも発明の方に夢中になるきらいがあり、半年家を空ける事がざらであり、戻ってきてみれば相手の女性が他の者と結婚していた。
どうにも自分は家庭向きではないと結婚をすっぱりと諦め、其れなりの女性と浮名を流しながら発明の日々に勤しんでこの年になったが・・・・・大戦で出来た友人には家庭を持って欲しいものだ。

「という訳でこのお見合いパーティーを企画したんじゃ。」
「・・・・・・・爺さん、どうしたらという訳でとこの話が済まされようとしているのか俺にはさっぱりと分からんのだが・・・」
バダックは古参であり、大戦初日に聖水に油を混ぜた聖油を作って、攻めて来たアンデットの群れと、絨毯爆撃程の威力のある爆弾攻撃でこれまた攻めて来た軍団長を撃退した功績もあり、あちこちに顔が利く身分になった。
その身分を駆使し、空いている王城の会議室を借り受け、婦女子の好む飲食物をその時の報奨金を当てて自前で用意し、そして目の前にいるピンクのリザードマンの武人を好もしく思う婦女子に当たりを付けて招待状を出していいかレオール王の許可をもぎ取り、婦女子の家族にはレオール王とレオナ姫達が根回ししてくれて今回獣王クロコダインのお見合いパーティーが開催できた。
当人には何も伝えずパプニカに呼び出して。言ったら来てくれない事請負だからだ。
クロコダインは自分が結婚する気が無いとポツリと言っていたのを聞いたバダックは泣きたくなった。
こんな素晴らしい心を持ったいい男が、そんな寂しい事を言ってくれるなと、思わずクロコダインの胸を叩いてしまった。
その自分を優しい目で見ながら、俺みたいな武骨者に結婚は無いだろうと穏やかに言う姿がまた堪らなかった。
実際のクロコダインは巷で人気があるだけに切なくなった。
戯曲では、勇者一行全員は美化されずにありのままの姿と功績を演じられるのが好まれている。
すなわちクロコダイン役をする者はきちんと彼の似姿の着ぐるみをこさえ、彼の親友と呼ばれるバダックにわざわざ見て貰い、改良した上で戯曲に望み、チウ役も同じように着ぐるみをこさえ子役の子が入り、彼等がモンスターであることを包み隠される事無く上映されたのだ。
姿形、種族の違いなどどうでもいい程、実際に彼等が成した功績、素晴らしい言葉の数々の前にはそんな事はどうでもいいとなる程で

あったのだから。
それは貴族の三女や四女と、家では少々あぶれ者扱いになる子女達にクロコダインの受けが良かった。
彼女達は素敵な男性はいつも優先して姉たちの方に行かれる身であり、せめて芝居の中だけでもクロコダインに守られている料理人になった自分を夢に見る程のめり込んだ。
芝居の中での料理人は、―力―なくとも優しい言葉と信念をもって敵と相対し、その言葉に激昂した敵達の攻撃から一番に料理人を守る役目がクロコダインであり、其れをして彼は盾の君という二つ名を以て人気を博している。
元敵でありながらも一番に料理人と勇者達の心意気に改心し、献身的に一行を支えた者として。
一行には素晴らしい男性はまだまだいるが、その人達は生憎とお相手がおり、夢想するにも失礼であり、かつ逞しい殿方から一番に守られたいというお姫様を夢見る少女は多いのだ。
故に、クロコダインのお見合いパーティーの招待状を貰った子女達は色めき立った。
あの素敵な戦士と直接会える、もしかしたら結婚のお相手に選んでもらえるのではと期待に夢を膨らませて。
バダックが選んだのは政治色が薄い、かつ位がそこまで高くなく、そこそこ裕福な子爵・男爵の中層であり、其の子女が―盾の君―をどう思っているかの念入りなリサーチをして選んだ選りすぐり子達ばかり。
そんな中に、俺はだなと尻込みするクロコダインを、通りがかって見かねたヒュンケルとアポロの手を借りて押し込んだ。
二人も心配していたのだ。この高潔で優しく、しかし己を顧みずに傷だらけで仲間を守ってきた男の将来を。
幸い評判の中ではそこいらの男よりもモテているのだから後は自分が腹を括れと。
「は!!初めまして!!私はその・・・・ハンナと申します・・・」

「お会いできて光栄です!!セシルと申します!!会えただけでも感激です!」
「イグレットと申します。今日はよろしくお願いします致しますクロコダイン様。」
「クロコダイン様、此方のお飲み物をどうぞ!!」
「其れにはこのお肉料理が合いますわ!!」
「あの・・・・よろしければお話を・・・・」
・・・・・なんだ?何故こんな武骨でしかもモンスターの俺をこの女の子達は悲鳴も上げずに・・・・それどころか嬉しそうに話し掛けてくれるのだ?
巷で流行りの戯曲など見ていないクロコダインには、自分が慕われている理由がさっぱり分からず、華やいだ雰囲気に気圧され黙っていても、そこは心得ている子女達が上手い事リードしようとまでしてくれている。
この中には相手を蹴落としてクロコダインを射止めようという女狐さんは無論おらず、ファンであり同じ空間に入れるだけで幸せだとクロコダインを喜ばそうと懸命に盛り立てようとしている。
つまるところまだまだ夢見る少女達なのだ此処にいる子女達は。
現実の生々しさを感じないファンシーな空間であるが、自分をもてなそうとしてくれている熱意が伝わったクロコダインは戸惑いながらも話し掛けてくれる女性達にきちんと受け答えし始め、手渡してくれた飲み物や料理を笑みを以て頂戴した。
後は何を話せばいいのか悩んでいると、どんな料理やお酒が好きか、普段どんな事をして過ごしているのかと、当たり障りのない話を振ってくれたのでそれなりに会話を楽しみ、いつしか大戦の中であっても楽しく過ごさせてくれた料理人と仲間達の話をし始め、子女達は椅子をクロコダインに勧めて自分達もクロコダインを囲む様に座り、話を聞くのに夢中になって夕方を迎えた。
「どうじゃ、結婚したいいい子はいたかの?」
「爺さん・・・・・悪いがあれはその・・・・何と言おうか今日来てくれた子達は俺にとっては―保護対象―にしか映らんかったよ。」

「む?」
「良い子達で、良き家庭を誰かと築いていくのを見るのが楽しみな子達だ。」
　ようは叔父の気分で見合いパーティーを終えてしまったのだと、クロコダインは正直に話し、バダックは心の中で嘆息をした。
　年齢幅はそれなりに高く、未婚の二十台も幾人かいたのだがそれでも保護対象に映ったかと。
　貴族の子女で、二十代は些か・・・・かなり行き遅れでありそこまでになればそれなりの結婚で済まされるので見つけられたのが僥倖であったと喜んだのだが・・いっそ後家になった婦女子も宛は有るのでそちらは個人で紹介するかと算段していると、アポロが自分を呼びに来た。
　結婚式では花火を上げたいという二人の要望があり、その事で至急来て欲しいと。
「すまんな、城門迄送れずに。」
「なに、此処は勝手知ったる何とやらだ。今日は愉しかったよ爺さん。」
「そうか・・・・そう言って貰えるとありがたい。またの。」
「ああ。」
　アポロとバダックが角を曲がって見えなくなるまで見送ったクロコダインは、勝手知ったる城内の城門を目指し、噴水のある庭の小道を横切ろうとした時、噴水に手を入れている薄い銀の髪をたなびかせた少女がいた。
　何をしているのかと目を凝らせば、随分と噴水に手を入れていたのか長い袖口とドレスのスカート部分がに濡れており、見過ごせずに声を掛けた。
　日が暮れてしまってはあれでは体が冷えてしまう
「その噴水に何か落とし物をしたのか?」
「!!・・・・どなたかいるのですか?」
「・・・・・・・俺が見えぬのか?」
「はい・・・・お恥ずかしながら目は開いても生まれつきに見えませぬ

故・・」
「・・・失礼した・・・・俺はクロコダインという。もう一度尋ねるが噴水に何かを落としたのか？」
「これは・・・・名乗りもせずに。エルウィン子爵の次女でティフィールと申します。獣王クロコダイン様に置かれましては武功の数々を拝聴させていただいております。」
少女は必死に探しものをしていたであったろうに、其れをいったん中断し優雅にスカートを片手で摘まみ上げクロコダインの方をきちんと向いて挨拶を返した。
その所作は完璧であり、夕暮れの庭を一層華やいだ場に見せてしまうほどの美しさに、クロコダインは思わず見惚れてしまった。
それは今まで生きていた中で感じた事の無い甘い感触を胸に宿らせる程に。
「・・・・其方・・・何を探していた？」
その甘い感触から逃げる様に、クロコダインは再び少女・ティフィールに尋ね乍らも少女の容姿も見入ってしまった。

肢体は細く、肩も腕も首も、見えている部分は全て細く脆そうであり、少しの事で壊れてしまいそうな儚さがり、白に近いほどの白銀の髪が一層少女を幻想的に映し出す。
その少女が挨拶の形を崩し、そっと自分の質問に答えてくれた。
「実は・・・父の形見の髪が入ったモーニングジュエルのペンダントの鎖が切れてしまいその噴水の中に・・・」
自分のモンスターの聴覚を以てする場難なく聞こえるが、声音は小さく細く、その肢体と同じくはかなげな声が、クロコダインの胸を一層焦がし、無闇にのどがカラカラになるのを無視し、少し待てと言って、噴水に目を向ける。
自分が見れば直ぐに分かったが、ペンダントは噴水の縁の内側に入ってしまい、この少女には見つける事は叶わなかっただろうと思うと、自分が通りがかって良かったと安堵したが、一応確認を取る。違って他の者から指摘されてはがっかりとさせてしまうのを厭うて。

「銀の鎖に水色のペンダントがあったがこれだろうか？」
「はい！それで御座います!!見つけて下さりありがとうございますクロコダイン様。」
今にも息弾ませて来ようとするのをクロコダインが制し、手を出すように言ってそっと乗せて渡した。
フォークやスプーン以外を持った事のなさそうな柔らかそうな白い手に、クロコダインはどぎまぎしながら。
「あの・・・・このお礼をしたいのですが・・・」
「む!!いや大したことは・・・・・それよりも其方一人でここに来たのか？目が見えぬ身で・・」
「いいえ、此処には城の用事がある兄上様と共に。近頃外出をしていなかったので気晴らしにと兄上様がお城の方達に私の入場許可を取ってくださって共に参りました。」
「・・・・侍女たちはつけないのか？」
「はい・・・・我が家はさほど裕福ではなく・・・・付き添いに出られる者は・・」
「そ!!それは立ち入った事を!!!すまん!!」
「あ!!いえ!!!それよりもこのお礼を・・・」
「ティフィール!!・・・これは獣王クロコダイン様!!」
「・・・・おや・・・お前は・・・」
「覚えていて下さいましたか!!大戦の最中我等が至宝たるレオナ姫様をお救い下された後、マトリフ様の浜辺で開かれた宴の手伝いと共に参加させていただいたロベールで御座います!!」
「そうか、俺に沢山酒を樽ごと渡してくれたのをよく覚えているぞ。」
「それは光栄で御座います!!」
俗に、バルジ島の死闘の後、マトリフの海岸でレオナ姫の帰還を祝し、助けてくれた勇者一行を労う宴の最中、クロコダインとヒュンケルが己達の罪業を姫に懺悔しそして裁可が下された後もこの目の前にいるロベールは態度を変えず、宴の始まりと同じ様にせっせと酒を渡して共に飲んだのがつい昨日のように思い出される。
貴方方は償うと言ったのですからと、自分達の言葉を信じてくれた

気持ちのよい青年の妹を助けるとは・・・・
「兄様・・・・この方に私助けて頂いたのです。」
「なんと!それはぜひとも我が家に来てください!!」
「いいや!!そんな・・・」
「我が家は名ばかりの子爵ですが、恩人を饗せないほど落ちぶれてはおりません!!是非に!」
「む・・・・そうか・・・・では招かれよ・・・」
これ以上の断りは、ロベールとティフィールへの侮辱になってしまいかねないと、クロコダインは招きを受け子爵邸へと招かれた。
他の貴族屋敷が並ぶ中、少しこじんまりとしているが清潔感溢れ、小さな庭には菫や野ばらが可憐に咲き、見た者の目を和ませてくれる。
家族は長女は嫁いで久しく、家には年配の執事とメイド長とメイド二人で家を切り盛りしているようだが、急遽来た自分を癒そうにもせず、料理をこさえるのに少し時間がかかると反対に申し訳なさそうに言ってくれる。
待つ間に執事がお茶を淹れてくれ、三人で取り留めない話をしている間に料理が出来、食事の間もロベールとクロコダインは武の事を楽しげに話し、合間にティフィールが優しい声で感想を言う和やかな雰囲気で夕餉を終え、なんとロベールは樽酒を持ってこさせ、更に飲もうとなった。
ティフィールも十八ではあるが、お酒は苦手であり二人に辞去の挨拶をして部屋へと戻った。
その際、クロコダインの腕にそっと触れ、出来れば朝食もと・・・・最後まで言えないながらもされた懇願に、思わず頷いてしまった。
ティフィールも、かつてない自分の大胆さに驚いたが、それでも、クロコダインから感じたあの温かい気配をもっと感じていたかったのだと、メイドの手を借り寝巻きに着替えてベットに入り、小さな胸をひっそりと焦がす。
声をかけられる前から感じていたあの温かく優しい気配を・・・
初めてだった、自分に優しくしてくれる人達は、どこか自分を可哀

想だと言う気配が感じられ、自分は他のものより矢張り劣るのだと知らしめられてきたのに・・・あの人は自分の盲目を知っても気配は変わらずに温かく・・もっと強く包まれたいと願ってしまった・・

それはまたクロコダインも同様だであった。

長居するつもりはなかったのに・・・・あの少女と共に摂った食事の楽しさをまた味わいたいと。

儚げで優しいあの声をもっと聞きたい、そして・・・終生を共にし自分で守り抜いてあげたいと・・・

その様子をじっと見ていたロベールは、妹が初恋をしたのを知った。

生まれてから目は開いておれど、暗闇で過ごし、何事をも我慢をして自分を出さずにいた妹が、恩あれど初対面の者にあんな懇願をした事は無く、頬を赤らめた事も無い。

ちらりとクロコダインを見上げれば、彼の頬も赤くなっている・・・脈はある！

幸いロベールは今日の彼のお見合いパーティーと、選ばれた子女達の内情も知っている。

なにせバダックが張り切り、あのパーティーの手伝いをしたのだから。

条件は・・・・裕福ではないが！これから自分が軍内の管理部というエリートコースに行く目途が立ったのでこれから稼げばいい!!

両親流行り病で五年前に共に早世してしまったが、幸い家を切り盛りできる執事達が若くして当主になった自分を支えて今日までできたのだ。

生中な事ではへこたれない!!

家の残ると言った姉も、少し格上だか、根回ししてお互い好きあった男爵家の長男に嫁がせた手腕も自分にはあると言う自負もある！

もしも二人が会う内に自然と結婚したいとなったら、あらゆる手を使って結婚までこぎつけさせてみせる!!!

そしてロベールは持ち前の酒豪ぶりを発揮しクロコダインをべろんべろんにして、妹をどう思っているかの本音を余すことなく聞き出

し、そして翌日クロコダインと妹二人きりの朝食にさせて申し訳ないと二人に詫びて朝一で城に登城しバダックを訪ねて話をした。

クロコダイン様は昨日妹にあいどうやらお互いひとめぼれの様ですと。

この城ではティフィールの事は有名である。ハシバミの色の瞳に何も映らない可哀そうな子として・・・・・そうか、あの男は―生涯をかけて守る者―を選んだか・・

あの子もクロコダインもいい子なのだ・・・・・うまくいって欲しい。

早速バダックは動いた。

クロコダインとティフィールがもしかしたらそうなるかもしれないと昨日パーティーに来てくれた子女達にお詫びと共に報告をした。

パーティーにきた子女達もティフィールの事を承知しており、盾の君らしいとからりと笑いながらも、内心で泣いたこは幾人もいた。

それでも、一度でも思った相手の幸せを願い、後に挙げられたクロコダインの結婚式で盛大に祝ったのはダイ達仲間に次いで彼女達であったとか・・・・

そして結婚をし、娶ったティフィールを終生あらゆる事を守り抜き、彼女の実家に経済的に頼る気はないと各国の兵達の武闘の教師として働いて、結婚記念日の度に彼女の好む物を欠かさず贈り、睦まじい鴛鴦夫婦であったとか

後日談③　終の棲家

俺はもう・・・・・ここに一生留まり余生を過ごすか・・・・・

「ヴェルザー様！ヴェルザー様何処におわしますか⁉」
「一体どこに行かれたのだあのお方は⁉」
「魔界全体に放ってある偵察部隊が最後に目撃したのは東の海に出たとか!!」
「―また―か!!!またあのお方の下に行ってしまったのか!!!」
「大変だ!!今すぐ人界の各国に通達せねば!!!」
「急げ！あのお方があの国にいたれば・・ーあの国ーを不運の国とは二度とも呼ばせない為にも急ぐのだ!!」

魔界が浮上して早一年近くが経とうとしている。

魔界でも初めての冬を乗り越えられ、ホッとした。

如何に魔族達が過酷な魔界の生活で頑丈な体となろうとも、雪降る寒さに耐えられない種族も一定多数いる。

特に火を操るドラゴンは寒さに弱い種族が数種いて、暖かい南国のパプニカの森に一時間借りをして簡易版の営巣地を築いて貰い、越冬をして魔界に戻ってきた。

もう人界にはお世話になり通しで、魔界の蓋になっていただのの積年の恨みの念など露ほども残っておらず、恩しかない。

其の人界を騒がしているのが自分達の主、ヴェルザー様だと、ヴェルザーの眷属にして親衛隊の竜人一同泣きたくなる。

竜人は見た目は人型だが体のどこかに必ず鱗があり、翼と尾は有る者と無い者がいる。

特徴的な爬虫類の特有の縦長な瞳孔を持つ瞳を一斉に曇らせ主の居場所を魔界から人界の方へと捜索範囲を広げつつ、魔界の神様と人

界の各国に通達をする。

―また―主が魔界から人界にお一人で行かれてしまいました!!

「ねぇ～ヴェルザー・・・・これって楽しいの？」
「ふん・・・・俺がこれでいいと言えば良いんだ。お前は黙って俺の言う事を聞いていればいいのだティファ。」
「う～・・・・なにやら最後に体がひび割れた時、世界の代価の話で私の事助けられた恩は有ります・・」
「また敬語なぞ!!お前は本当に物覚えの悪い娘だ。」
「あう・・・・・助けてもらったお礼がこれでいいのヴェルザー？」
「ふむ・・・・白いドレスを―汚す―のが嫌かティファ？どんな汚れに塗れようともお前は綺麗だが・・・・・」
「あ!!ん・・・・やだヴェルザー!!顔をお腹に擦りつけたら・・・」
「クックック、此処がいいのかティファ？ではさらに・・・」

「・・・・・何をしているのだお前は・・・・」
「あ!!大魔王!!!・・・・・ミストとキル迄・・・何かありましたか？」
「いや～お嬢ちゃんこんにちは。そこのね、とっても周りに迷惑かけまくってる駄目竜王を魔界に連れ戻しに来たんだよ～。」
「・・・・さっさと魔界の―仕事場―に戻れ・・・・」

晴れて暖かい常夏の島・デルムリン島に、冥竜王と大魔王とその影の参謀と死神がいるってシュールだと、四人の間に入っている感じのティファは、バチバチと火花が散りそうな程お互いを睨みつけて極寒の空気生み出している四人に、なんと声を掛けたものかと頬を掻く。

波が届かない距離の砂浜に座り―ヴェルザーの頭―を膝に乗せ乍ら。

ティファは何時もの様に島での一日を過ごしていた。
ティファの一日の流れは大体決まっている。朝起きたら顔を洗い、ブラスじいちゃんとマァムが作ってくれた朝食を、家族みんなで摂る所から始まる。
マァムは今ティファ達と共に暮らしている。結婚はダイ達と同じ時にしようという事で二年後になるが、マァムは両親の勧めもあってデルムリン島に住む事になった。
ロカとレイラ曰く、村もミーナの代は割かし子供の数が多いので、若者たちが育つのだから過疎化の危機はなくなり、その中から村の代表になる子がいる筈、故にマァムはこれからは自分の好きな事をして自由に動くべきだと。
その言葉に、マァムは胸を撃たれ泣き崩れる様に両親にしがみ付き、ラーハルトの見守る中ワンワンと泣いた。
大戦時に知った自分の心の闇・・・それは自分は両親に頼られすぎてあまり心配されておらず、寂しいと思っていた事。
父が弱っていく半面、強くなる自分が家の、引いては村のお手伝いをする事が当たり前だと思われ、心配される事はもうなくなったのだろうと勝手に思っていただけに、ロカとレイラが自分の将来を真剣に考えてくれていた事が嬉しくて。
泣くマァムに、二人も申し訳なさで胸は一杯だった。弱くなる一方の大人達が、どうしても強いマァムに頼らざるを得なかった事が、ロカとレイラは言うに及ばず、ネイル村の大人達もいつもどこか申し訳なかったのだ。
そのマァムが、両親が心配で村に残ると言われては喜べなかった。
話し乍らも、デルムリン島の良さを無意識に生き生きと話すマァムを見ては。
往来しようと思えばティファが作るキメラの翼もあり、距離は無きに等しいのだから、自分達の事は心配せずに島に行けという父と母と、結婚式は是非ネイル村でも上げて欲しいという大人達に、何度も

しても良いのかしらと笑いながら話てマァムは島にやってきた。
以来料理はほぼマァムが作っている。時折ブラスも手伝うが、ティファが作ることは滅多に無くなった。
其れはマァムの決意であり、自分がティファに美味しいものをうんと食べて貰いたいからだ。
ティファは自分が作るとほぼ食べなくなる。味付けをして味見をしてそれ度もう食べた気になって言いそうなのだと。
もっと食わさんとあれが―大人の体形―になる事は無いなと、ティファの健康診断を半月に一度している某老人魔族から言われてからは、マァムは燃えた。
兎に角お肉だお肉!!野菜は好きなんだからお肉を食べさせると燃えている。
其の甲斐あってかティファの頬は一層艶を増してぷっくりとし・・・こころなしか服の胸の部分とおしりがきつくなってきた気がするティファは、マァムの美味しい手料理をじいちゃんと父と竜騎衆とで三食楽しんで食べている。
ティファの普段の過ごし方は所謂―ニート―、つまりは無職。
料理人の看板挙げてもおやつ以外の料理はせず、日がな一日グーたらしている。
畑は島の皆と意外とガルダンディーが面白がって面倒を見ており、魚が入用ならばラーハルトとボラホーンが少し近海に出掛ければ大量であり、肉が欲しいと思うタイミングでウォーリアー達の船が肉を以て売りにやってくる。
そのお金もティファが昔お宝洞窟で稼いだ財産が大量にあるのでお金には困らない・・つまりはティファは引きこもりなのだ。
ティファも起きて直ぐはあちこちに精力的に出掛けはした。
一番に―全員―が集まっていたパプニカの次にリュート村に、其の後は数日間おきに各国を巡り、ご心配かけましたの行脚の旅へと言った後は、冬が来たのをきっかけに、ティファは一度も出掛けていない。
ティファ曰く、目玉があるのがいけないとか。
魔王軍が開発した偵察密偵用の目玉は、魔界側が和睦を申し出た一

月後に人界のそこかしこに配置されている。
魔王軍の悪いイメージを少しでも減らしたい者達が、魔王軍開発の悪魔の目玉を大量生産して人界側に無料配布したのだ。
それぞれ繋ぎたいところを指定すれば、一体の悪魔の目玉は無数の場所へと瞬時に繋がる便利さに、人界の主要都市などの役所では最早手放せない必需品と化した。
タイムラグがほぼ無く、緊急案件などの時、物凄い活躍をしているのだから評価されて当たり前。これがあれば山間の中で過疎化している村も、災害に遭いそうな時瞬時に中央と連絡を取り合い瞬時に助けを呼べるからだ。
ティファはその便利道具にどっぷりと嵌っている。
遠方の友人たちと気楽にお喋りし、招待された時だけ行けばいいかと悠々引きこもり生活を満喫している。
実際にティファに会いたければあちらからくるのだからいいかなと。
兎に角ティファは、十二年間ずっと働いてきたのだから、せめて成人する十五歳まではこの生活を満喫する気満々である。
よく頑張った自分へのご褒美として、そして周りも其れを赦している。
兄のダイとポップが王族の仲間入りを果たすべく日夜勉学に励んでいると兄達が話しても、頑張れといえばお前はのんびりしろとお達しを出され、世界中が忙しいのだとお茶をしに来る某眼鏡王様や某一流魔王様話していても、アドバイスを求められることは一度もなく、自分が大人になるころには大半終わらせると言っては優しく頭を撫でて帰って行かれる日々で、お出かけ先のトップは大魔王の居城で夕食を数日おきに共に摂るくらい。其れもキルの送迎でだ・・・・出掛けるというには少々違う気もするが兎に角、引きこもり嬢ティファは、いつもの様に朝食を摂り終え、今日は何しようかと海岸にシートを広げて寝そべっていた時に―それ―は来た。
西の海から何か来ると気配を感じて体を起こせば、小さな点が見る見るうちに大きくなり、あっという間にそれは来て・・・・・気配に

気が付いた竜騎衆とバランとマァムとスカイドラゴンのルードに囲まれ守られる布陣が出来た瞬間砂浜に地響きを立てて降り立った―黒竜―に、バランはあっけにとられて呟いた。
「・・・・・何をしに来たヴェルザー？」
「ちび助に会いに来たのだが何か問題があるのかバラン？」
地に降り立ち、威風堂々としている黒竜からの発せられた言葉がこれなのはどうなんだと、警戒した全員はがっくりしたくなったのは悪くない。
別にヴェルザーは最早敵ではなく、何なら大魔王と同じくらいティファの命の恩人であり、ヴェルザーは長年あらゆる怨嗟を感じも受けもして、負の思いに心を獲られる事に産み疲れているのでバランに対する怒りも何もなく、本当にただティファに会いに来たのだと分かってからは、ティファは朝着替えたパフ袖の白のミニワンピースのまま砂浜に座り込み、ヴェルザーはそのティファの小さな膝の上に頭を横たえ共に日光浴をしながら海を眺めている。
その時のお達しで、以降自分には敬語は禁止だと言うヴェルザーの言葉も律義に守りながら。
ヴェルザーはそれなりに巨体であり、小さなティファの膝に乗る筈も無いのだが、そこはヴェルザーも太古より存在する最後の知恵ある竜としての面目躍如で、重力呪文でティファに乗る自分の頭の重さを操り、丁度成人男性ほどの重さしかティファは感じておらず、膝が足らない部分はティファが結界ジ＝アザーズの強度を膝と同じ位にして展開し、ヴェルザーに膝枕をしていられる。
ヴェルザーの頭部をティファが時折優しく掻いて、二人して他愛無い話をしながら海を眺めるだけでも二人は癒される。
二人共に、過酷な道を歩んできた。
片や神の目論見で世界の為に強制的に働かされ、片や神に請われてこの世界のために働いた差は有れど、バーンと違いミストといった相談相手は共におらず、過酷で逃げ出したい時も山ほどあった二人の心は疲れ果てているのだから。
そして戯れに、ヴェルザーがティファの腹部に鼻先を擦りつけてい

る所に大魔王御一行様も島に来た。
―先日―のように、ヴェルザーがやらかす前に・・・・

半年ほど前、ティファが目覚めた時―あらゆる意味―で世界中が騒々しくなった。
それはティファが起きた事により、なんとそれを察知したヴェルザーが居城から地上界のパプニカ国にそのまんま黒竜姿を隠すことなく人界を音速ほどの速させすっ飛び、パプニカ城に突撃をかましてくれだのだこの駄目竜王は・・・・当然新たな敵の襲来かと、何も知らない人界はパニックになり、城に突撃をかまされ、屋根が半壊したのを見たパプニカ城下が大騒ぎになったのは言うまでもない。
そのパニックを抑えるのに大活躍したのが件の無料配布・悪魔の目玉であった。
各国の王達はティファが目覚めて喜んだのも束の間で、彼の駄目竜王突撃後すぐにカールの賢王配・アバンの号令一下で世界中の目玉ネットワークをリンクさせ、勇者ダイ一行の料理人・ティファが目覚め、元気に料理をして魔界と人界の王達に料理を振舞ってくれた事を。そしてその料理人が目覚めた事で、料理人の命の恩人ともいうべき冥竜王ヴェルザーが居ても立っても居られなくなり、魔界より飛来し―言祝ぎ―に来たと急いで知らせ、以て人界の大パニックは防がれた。
半壊した屋根は、後日ヴェルザーの眷属が平謝りに謝りながら弁償金と、直す為の職人を引き攣れ一日で直したのだが！またもや主が不意にいなくなったと泣きつかれたバーンが、もしやと幼な子がいるデルムリン島に来てみれば案の定いて！幼な子の膝にいるとは許し難い!!!
「さっさと仕事に戻ったらどうだヴェルザー!!」
「ふん!!瘴気も今のところ無い魔界で何の仕事があるというのだ若造

が!!」
「ッ・・・・・駄天使長老達を罰するのは・・」
「あれはもういい、飽きた。」
「・・・・・何？」
「あれらは自分達よりも酷いのを見たせいか、以降は真面目に働き俺に反抗すらせん・・・見たとこほ数十年の寿命しかない者をいたぶったところで詰まらん・・・」
　何かに言い訳する様に、ヴェルザーはバーンの言葉を否定しながらティファに頭を預ける。
　もう恨むのも恨まれるのも面倒な事この上ないほど、ヴェルザーは倦み疲れていた。
　あの時、世界を変えたいと言ったティファに、どうしようもない世界なぞ好きにしろと言ったのは本心からで、世界どころか周りの事象にも興味が失せたのだ。
　ティファとダイ以外には。
　この二人の行く末を、見るともなしに見れればそれでいい・・・・・
つまるところ
「其方は隠居したいのかヴェルザーよ？」
「・・・・・隠居・・・・隠居か・・・・・」
「ふむ、となると其の方に付き従い、今も仕える気でいる眷属達はどうするのだ？」
　バーンの言葉に、ヴェルザーは自分の現状がなんなのか漸く分かり、納得する。
　そう、自分はもう表に出る面倒事をせず、日がな一日ティファがいてダイが帰ってくるこのデルムリン島に居たいのだ。
　眷属達？あれらは好きにすればいい、数は数十とおらず、デルムリン島の周りの離島にでも住まわせれば・・・
「ここに住むのヴェルザー？」
「ふん・・・・迷惑かちび助？」
　バーンとヴェルザーの遣り取りを、静かに聞いていたティファの問いに、ヴェルザーは少し意地悪く聞く。

ティファなれば嫌だという訳もなく、どんな言葉で自分を受け入れるのか気になって。
そしてティファからの言葉は、予想以上の優しい言葉であった。
「眷属の皆と共においでよヴェルザー。ここには素敵な事が沢山あるんだよ。春になれば渡り鳥が夕日の海を渡って、産卵期で忙しく跳びはねるお魚の群れが綺麗なんだよ。
夏の大嵐は大変だけど、その後の虹が大きくて凄いんだ。
皆で一緒に沢山見ようねヴェルザー。」
ヴェルザーの頭を優しく撫でながらティファはデルムリン島で見られる素敵な事を沢山話し、―一緒に―見ようと。

ああ・・どうしてこいつは・・・・・・
ティファの優しい言葉を聞くと、忘れていた大切な者達の言葉が鮮やかに蘇る。
ヴェルザー様!!見てくだせぇ!魔界水晶もこうして磨けば綺麗だすよ!
この地も、捨てた物ではありませんねヴェルザー様。
長い竜生の自分からすれば、―たったの二千年―しか共にいられなかったクックとロビンの言葉が・・・・
優しい自分のコマドリ達と同じ様な事を自分に言ってくれるティファとダイがいるこの島で、後―百年―の生を終える、終の棲家に・・・・・

輪廻転生の神、マリシュ―スが言った言葉。
おそらくこの先瘴気が発生したとしても、浄化装置は必要ない程であり、精霊達が管理していく事、それにより
「お前を竜の神との約定通り、輪廻の輪に戻してやる。―今―のお前の寿命が尽きた後、お前は二度とヴェルザーではなくなり、―他の何か―になる。」
それは羽虫か獣か、草木かもしれんがなと性悪嗤って言われた事だが、ヴェルザーからすれば―ヴェルザー以外の何か―になれればそれ

以上の望みはなかった。
嬉しい事も確かにあったが、殺されても―自分―でいる辛さにはもううんざりしている。寿命が後百年だと言われ、ならば本当に好きな場所で好きに逝きたい・・バーンの若造の寿命を半分貰ったちび助は言うの及ばず、もしかしたらダイなれば天族か魔族か竜族の寿命の長さを受け継いでギリギリ自分を見送ってくれるかもしれないと淡い期待を抱いて。

真面目なヴェルザーの答えに、とっくりとバーンはヴェルザーを見て、そして踵返す。
「ティファよ、とりあえず我等は魔界に帰り、ヴェルザーの言葉を彼等に伝えに行く。後日ゆるりと会おう。」
「分かりました、キルもミストもまた後日に。」
ヴェルザーの要望を、ヴェルザーの眷属に伝えに帰っていった。
バーンもヴェルザーの思いが痛いほど分かる。自分も死ぬるならば、幼な子の下でとこい願っているのだから。
自分とティファは、寿命を分かち合い、二百年の後に共に同じ時に死ぬ定め。
黄泉路を共にする前のこの世を去る時も共にと願うのは我が儘だろうか？
後日ヴェルザーは王国の全てを完全に手放す事を世界中に通達し、ヴェルザーの眷属もデルムリン島と離島に移り住み終生ヴェルザーに仕え、主亡き後は墓守を数名残し、後は思い思いの場所に放浪の旅に出た。
駄天使長老達は、瘴気問題が片付きヴェルザーに寿命の年数を正確に教えられた後好きにしろと放られた。
何をして良いのか分からない長老達を、見かねた三神達は天界に戻る気は無いかと聞いたが、マリシュ―スという反面教師を見せられた後に生じた罪の意識で戻る気はなく、元々治療呪文や薬学に通じていた長老達は、テランの―とある薬草園―で某魔族親子と共に若き薬学の天才に教えを伝授した後はふらりといなくなり、その足跡を知る者

は誰もいなかったとか・・・・

数日後に帰省したダイがヴェルザーを見て目を丸くしたが、ふんわりと笑ってヴェルザーを歓迎した。
「ゆっくりとして過ごしてねヴェルザー。」
その一言に、ヴェルザーは泣きたくなる。
本当にダイもロビンに似ている。
ティファをこの世界に帰す条件として、マリシュースが自分に問うてきた質問が脳裏によぎる。
お前は何故ティファを此処までして守ろうとしている
冥府の底に、魂抜けをしてまでティファを追った自分に問うてきたあの時の自分の答えも鮮やかに思い出される
「俺はこの二人を愛おしく思うが故に、守ると決めたからだ」
かつてクックとロビンを愛した時の様に、この兄妹を愛したが故に

守らんと誓ったのだから

後日談④　かつての小悪党は・・・

「エイミ～、あの法服どこ行ったのかしら？」
「法服ですか？」
「そう！ダイ君と初めて会った時の、あのピンクの法服よ。あれを着て明日のね・・ふふ。」
「分かりました、きっとクローゼットに大切に仕舞われているかと。明日までに必ず見つけて追いますね姫様。」
「お願いねエイミ。」
　まるで普通の少女のように顔を赤らめながら明日を楽しみにしている姫を愛おしむ様にエイミはレオナを見る。
　帝王学を修め、二年後には結婚をするとはとても思えない程のレオナの初々しさに微笑ましくなりながら辞去の挨拶をして部屋を後にし、レオナが特に大切にしている服を仕舞っているクローゼットに向かう。

　服と当時身に付けていた冠と装飾品一式が無事見つかり、天候も晴れてレオナはご満悦で傍らにいるヒュンケルに念入りに指示を出す。
「良い事ヒュンケル、今日は本当に護衛はいらないのよ。」
　それこそ影にお供も不要だと。
「承っております姫君・・・そもそも何かあっても俺達の出番は皆無かと。」
　レオナの下す命令に、ヒュンケルとその部下たちが苦笑しながら受諾する。
　何せ今日は・・・
「ごめんレオナ！途中で経済学の先生に捉まっちゃって。」
　息せき切って走ってくるダイとデートだからだ。
　三界の調停者としてこのほど正式に天界から任命を受け、今や押しも押されぬ正しく三界の勇者であるダイに勝てるものはおらず、互角に戦えるものはハドラーかバーンしかいないのだから。
　ダイは勇者らしくオールマイティであり、魔法戦も素手での格闘戦

もお手の物であり、生来の勘に磨きをかけて少しでも邪で危害を加えるものを見極める様になっている。
万が一の毒物による暗殺の危険もあるので飲食だけは事前に指定してある店に、予め騎士達が待機しており、そこだけはレオナに我慢してもらっている。
一国の跡取り自覚があるレオナもそこで駄々をこねる事は無く了承しているが、他は本当にフリーであり、二人きりのデートを満喫する満々であり、隣にいるダイの姿をじっと見つめる。
この一年でダイの身長は大幅に伸びてわずかではあるが自分の背を抜いてくれていた。
ダイは細身のまま筋肉を維持しているのでスタイルも良く、今着ている服と良く似合う。
今日のダイの服は白い長そでシャツに青色のベストと同系色のスラックスに茶色の皮のハーフブーツで、程よく引き締まったダイと良く似合うとレオナとついてきた侍女たちが顔を赤らめてしまうほどにいい男ぶりである。
レオナ達がダイを鑑賞している間、ヒュンケルとダイはレオナの安全を第一だと話し合い、少しでも面倒事に巻き込まれる前にさっさとルーラでその場を離れる手筈にして二人は大勢に見送られる中デートに出掛けた。
本来であれば王族の姫君がお外デートなぞしないのだが、そこは大戦の為に世界中を駆けずり回ったレオナと、元来在野育ちのダイが白で窮屈な状況を我慢しなくていいようにとのレオール王の配慮の下、結婚するまでお忍びデートを何度かさせてあげようと白の大臣・年配の官僚たちの提案の下デートが許可された。
デート当日の半月前からお達しを貰ったダイとレオナは大喜びして、最初のデートは何処に行こうか、何をしてどんなものを食べようかと勉強の合間の休息中に話し合い、ダイの要望でパプニカ城下を散策するようなデートから始めようとなった。
ダイもそうだが、姫君たるレオナも耳年増ではあるが本当のデートなぞした事なぞ当然なく、最初は二人で楽しく出掛けるだけでも楽し

そうだとなって気軽お出掛けのようなデートとなった。
次回は甘い雰囲気になれるデートの場所をエイミやマリンに聞く事にして。

「安いよ安いよ！パプニカ特産の果物がたったの・・・」
「そこのカッコいいお兄さん！お隣のお嬢さんにこのネックレスはどうだい？法服によく似合うよ!!」
昼の市の賑やかな中を、手を握って歩くダイとレオナを露店の店主たちが、デートの記念にどうだとあれこれと声を掛けていく。
中には子供の袖引きが来て、綺麗なお姉さんには綺麗な宝石が良く似合うよという口上を二人は微笑まし気に見て、物を見せて貰う。
「・・・綺麗なサファイア・・」
「へへ！兄ちゃん!!これ綺麗だって言ってくれてる!!」
「おおそうか・・・・・って!!あんたら!!!!」
「あ!!・・・・お前達どうして・・」
「ちょっと何か・・・・あ!!!!姫さ・・」
「しぃ!!!!」
「何じゃ・・・何のおや・・・これは勇者様に姫君様ではないかの・・・・お忍びかの？」
「あ！あんたらは!!・・・ずるぼんが叫ばないように言っておくからとりあえず手を放してやってくれないかレオナ姫様。」
「・・・・あのお爺さんの言う通り、今日の私達はお忍びなのよ・・・・だから、ね？」
後から来た老人との取りなしとレオナの言葉に、口を塞がれたままコクコクと頷いくずるぼんをレオナはそっと離し、お互いに距離を取ろうとした時、まぞっほが意外にも露店の奥へと二人を招いた。
かつての小悪党、偽勇者一行のアジトへと。
「少し目立ってしまった様じゃ。少し中で時間を潰していきなされ。」
まぞっほの言う通り、レオナが姫だとばれた様子はないがずるぼんの口を塞いでしまった事で少々目立ってしまったようで物見高い人の人だかりが出来つつある。

二人はまぞっほの言う通り露店奥にある天幕に招き入れられて中へと入る。
そこは意外と広く、清潔感に溢れていた。
「ここは今のところ儂等の住まいじゃ。ずるぼんが今台所でお茶を淹れに行っておるからそこらに掛けてくれ。
茶菓子はでろりんが買いに行っておる。」
「あの・・・・貴方達は？」
「ほっ！そうじゃったの、そちらの勇者様と儂等は面識があるが、確か姫様とは初対面でしたな。
勇者様達から聞いてはおりませんかの、偽勇者一行の事を？」
「貴方達が？」
「今はこの国の山奥の洞窟奥の宝石を採る許可を得て、真っ当に働いている者ですがの。」
「ええ！あそこの鉱床は物凄く硬いか柔らかすぎて採掘するにもリスクと採算が合わなくてうち捨てられてるあそこを⁉」
「・・・レオナそこ知っているの？」
「うん、手つかずだから何度か挑戦しようとしている人達が申請出し手は何日で利権手放すか官僚達の話のタネになっているのをちょっとね・・・」
レオナの少しばかり歯切れの悪い言葉にも、ダイは追及する事無くスルーしてあげながら、かつて偽勇者一行をしていた者達の現状を知った。
追及の無い事にレオナは心の中で滂沱の涙を流してホッとする。
何日で利権を手放すかを、まさか官僚達と賭けていたのは知られる訳にはいかない！お転婆だけのイメージで十分だ!!
「お前さん達がロモス王国を救った後、儂等もこ奴等もまぁそれなりに出来る事をしてはいたのじゃがの・・・そうできる事は無かったのじゃよ。」
お茶を淹れ、お茶菓子も届いて全員が腰を落ち着けたところでまぞっほは一行の年配としてこれまでもことをぽつぽつと二人に話し

ていく。
　世界を救う本物には及ばなくとも、其れでも初心の頃に抱いた人を助ける事をすべく一行で世界を回ったが・・・・大戦が終わるまでの間は鬼岩城がパプニカを襲った以外は世の中平和だった。
　それもそのはずでティファの言うところの―原作―と違い、地上のモンスター達は破魔の石のおかげで凶暴化はせず、ハドラー大戦の様に山間や海辺など国が助けてあげられないところなぞなく、バーンの柱落としの時もメルルと精霊達の活躍で犠牲者どころか怪我人もおらず、本当にやる事が無かったのだ。
　それでも彼等は腐らなかった。あのダイ達なればきっと勝つと信じ、ならばその後の復興でと思った。
「・・・・あんた達も変わったんだね。」
　出会った時のあの欲望の限りを尽くそうとしてたでろりん達の様変わりに、ダイがポツリと呟く。
　何の罪もないモンスター達を倒しては褒賞を受け取っていたあの偽勇者一行が、地道な人助けをして今はこうして真面目に働いているのが嘘のようだと。
「そりゃあさ・・・俺達みたいな小悪党なんて早々変われるもんじゃねえんだろうけどさ・・・・おたくの魔法使い君のおかげなんだぜ？」
　ダイの言葉に俯く中、でろりんがダイに話しかける。
「ポップが・・・・・何かあったの？」
　でろりんの言葉に、どうしてそこでポップの名前が出るのか不思議なダイはでろりんの顔をしっかりと見て問うた。
　見ればでろりんの瞳は、当時出会った時のあの濁った眼でも、再会した時のあのおどおどとした眼でもなく、しっかりとしたいい眼をしている。
　性根の座った良い眼だと・・・それにポップがどうかかわったのだろうか・・
　聞いてみればロモス決戦の時、ポップが敵の大軍に怯えて宿屋に残った時、まぞっほが―お節介―をしたところから始まったのだとか。

ダイとレオナもその話は知っている。今の自分の戦う理由たる―仲間を見捨てない―という答えを出す手助けを、まぞっほにして貰ったからこそ出せたのだと事あるごとに話しているからだが、その中にはでろりん達はいなかった筈なのだが。

「俺達もさ、あの魔法使いの坊やが俺達みたいに落ちこぼれになっちまうんじゃないかって・・・・」

「私達も挫折の果てに・・・・許されるとは思ってないけど楽な小悪党の道を選んだのよ・・・」

「あいつは俺達から見れば―本物―の予感がしてな・・・まぞっほがあいつの所に行った時俺達も部屋の外にいたんだよ。」

ダイと共に行動しようという命を懸ける将来のありそうな若いのが、自分達のような薄汚れた小悪党の道に落ちかけるのを見逃せなったので・・・要はでろりん達も小悪党でありながらお人好しな部分が残っていたのだ。

そしてポップの苦悩と其れでも出して見せた答えに、でろりん達の小悪党の心は打ち砕かれた。

戦いも敵の大軍は怖い、其れでも、それ以上に仲間を見捨てる方が怖いのだというポップの答えに。

そして王城で強敵たるクロコダインに殺されかけても言い放った言葉が決定打となった。

あの時の戦いを、でろりん達もまぞっほの水晶の遠見で見ていたのだ。

そこに映っていたのは、ダイだけの活躍ではなく、ポップの勇気ある言葉もあったのだ。

「仲間を見捨てて自分だけぬくぬく生きてるなんて・・死ぬよりカッコ悪リぃ・・そう思っただけさ・・」

自分達よりも年若い、成人もしていない子供が勇気をもって道を進もうとしているのに、自分達は何をしてきたのだと。

「だからさ、派手でなくとも俺達は真っ当に生きていこうって決めたんだよ。」

時折自分達の過去を知る者がいて詰られようと自業自得であり、―

今やっている事業―を細々とでも継続していくのがあの時、炎の魔法使いから勇気を得た自分達なりの世に対する償いなのだと。
「・・・・もしかして、時折各王宮に匿名で宝石の山が寄贈されるのって・・・」
一月に一度、纏まった量の宝石が原石がパプニカのみならず各国の王宮に届けられているのは・・・
「・・・・昔偽者としてもらった褒賞金は使っちまってな・・・」
「そう、手つかずの鉱床からだったのね・・・・どうしてもどこの鉱床からか分からなかった訳だわ。」
国営と大手の鉱床から産出される原石だったら何処からの気増加は直ぐに分かる。
原石にはそれぞれの鉱床の特徴がきちんとあり、届けられ始めたのと手つかず鉱床の申請が一年前にあったのが最後で手放されたという話は出ておらず、丁度各国に原石が届いたのと時期が一致している。
よく見れば、でろりんとヘロヘロの顔は手や腕など見える所は細かい傷があり、それはずるぼんが何度ベホイミやホイミをかけてもついてしまう傷が、残るようになった証であり、本当に頑張っている証拠であった。
「そう、なら非公式になるけどー私ーからのお礼を受けてください。」
彼等の言葉に偽りはないと判断したレオナはおもむろに立ち上がり、座っているでろりん達に頭を軽くではあるが下げ、でろりん達の度肝を抜いた。
王族が、それも次期女王が軽くではあっても小悪党だった自分達に頭を下げてはいけないと、顎を外して鼻水を流しながアワアワしながらレオナの頭を上げさせようと躍起になるでろりん達を見て、ダイは軽く吹いてしまった。
「レオナ、お礼って言いながらみんなを困らせたらダメだよ。」
「あらダイ君!!私本気なのよ!」
それは余計質悪いと思ったレオナ以外の皆んなはきっと悪くない。
しかしレオナは本気で礼を示したかったのだ。

大戦は甚大な被害が各国に出る前に終われたが、柱の場所に住んでいた者達の新たな居住地や、パプニカの鬼岩城の被害にあった場所、遠洋漁業で生きていた者達は、養殖場も含め凶暴化したモンスター達に荒らされそれなりの被害がある中、本当に微々たる額の原石であれ、見返りを求めない善意の匿名の寄贈品が毎月同じ日に届くたび、各国の首脳陣の励みとなったなのだ。

善意を受けて喜ばない者はおらず、絶える事なく一年続いた事が更に喜ばれたのだと言われ、たいした事をしているつもりはないでろりん達は恥ずかしくなる。

それで殺してしまった罪なきモンスター達が蘇る事はなく、それでも地道に償う道わ自分達なりに歩いて来ただけのつもりであったのに・・・

外も落ち着いた頃、二人はもてなされた事にお礼を言いながらでろりん達の店を後にしようとした時、あの客引きの少年が小さな原石を持ってレオナに近づいてきた。

「これ！俺がでろりん師匠から教わりながら掘ったもんです!!なんか俺のせいで騒がせて・・」

しょんぼりとしながら、詫びの品だと渡されたのは加工すれば綺麗なアメジストになる原石を受け取り、レオナはにこりと笑って受け取る。

この少年は知っているのだろか？

アメジストの宝石言葉を・・・

「でろりん、あの子は？」

すっかりでろりんと打ち解けたダイは、でろりんに敬称を付けずに少年の素性を尋ねる。

「あいつは孤児だったんだよ。つっても先の大戦のせいじゃなくて、流行病で両親亡くした奴でさ、孤児院で馴染めなくて家出してたのを半年前に俺達が拾ったんだよ。」

原石を運んでいる時盗もうとした奴で、叱ろうとすれば俺みたいな奴殺せばいいだろうとか、なんとも捨て鉢であった。

人の善意を知らず、このままでは自分達以上の悪党になりそうな子

供を強制的に連れ帰り、風呂ででろりんが丸洗いをし、古着だか綺麗な服を無理矢理着せて、とりあえずスープを飲ませて今に至る。
最初の頃は自分達に敵意剥き出していたので同じ事を数日間実行し、暖かいベットで寝かせているうちに幾分和らぎ、なんで孤児のガキにここまですると言う言葉に、ガキなんて汚い言葉言うなと、意外と言葉を綺麗に使うまぞっほとずるぼんに叱られながら、かつての偽勇者一行以上の悪い道に行こうとする者をー見捨てられなかったーと言われた少年・ジンは、そんなお人好し達がいるものか、自分を見目よくしてから売るんだろと中々信じなかった。
それでも、その言葉に四人の大人は誰も怒る様子はなく、そう思うのが普通だなと笑っている変な大人に、ジンはいつしか心を開いていった。
いつも難敵な鉱床に傷ついて帰ってきても、沢山採れたと笑うでろりんとへろへろが頼もしく、原石を加工から販売まで沢山の職人達に交渉するまぞっほがカッコよく、傷だらけの二人を癒し沢山のご飯を作って洗濯して家を守りながら鉱床に行く二人の無事を祈るずるぼんの健気さに、ジンは一度だけ信じてみようと思った。
ドブの中で生きてきた自分を、この人達はもしかしたら本気でと、信じたいと思って鉱床の外での手伝いをし始め，そして昨日初めて自分で採った原石を、レオナは渡されたのだ。
本当の意味での宝物なのだと、受け取ったレオナは原石に重みを受けた気がする。
この原石には様々な思いが詰まっている。
ポップの勇気がでらりん達を変え、巡り巡って一人の少年の人生の助けとなる・・世界は本当に良くも悪くも繋がり、様々な者達をも繋ぐ大河の中で、奇跡的に出会えた良き思いを受け取ったのだから。
これは受け取れないとレオナは返す事なく、アメジストを丸に加工しお守りの腕輪にして毎日つけるとジンに約束した。
良き出会いを忘れない為にと。
その言葉はジンだけではなく、ダイとでろりん達も喜び、レオナとダイが見えなくなるまで五人は見送り、そしてまた商売に勤しむ。

自分達の日々の糧を真っ当に稼ぐ為に

この後でろりん達の一月に一度の匿名寄贈は一百年一経っても絶える事はなく、レオナとダイが匿名を明かす事はなかったので各国も調査で知ってもそのまま匿名として受け取り、大戦の復興後も孤児院や病院、学校などの公共事業に使われる事になる。

まぞっほの居場所をダイから聞いたポップは、すぐさま市にすっ飛んでいきまぞっほとの旧交を温め、メルルの宝飾品の買い付け先はここだと固定されでろりん達を驚かせる。

そしてお金が貯まったと、一姉一のずるぼんとへろへろに漸く新居を持たせられるとでろりんは一息つけた。

式は挙げていないが事実婚の姉とへろへろが存分にイチャつけるだろうという話を聞いたポップは、式挙げないのかと聞いてみれば苦笑して返された。

小悪党の自分達を詰る者達が意外に多く、騒動のタネになりたくないとか・・そんな事をポップが許せるはず無かった。

「罪償う奴の邪魔して嗤う奴なんて俺がメドローアで消滅させんぞ！」

いいから式挙げんぞと、メルルの日常品に使う宝飾品を纏めて買って資金を強制的に作らせ、後日パプニカの片隅の教会で、身内とダイとポップとお忍びのレオナとマァムの立ち会いで式は挙げられた。

面識のない人がでしゃばるのもというティファの言葉でそのメンバーとなり、マァムはポップがロモス城に来れたのは貴方のお陰だと

まぞっほに礼をしておおいに照れさせ、ポップは光の精霊の力を借りて、へろへろとずるぼんが教会からバージンロードを通って出てきた時、青空に光の軌跡で、

［結婚おめでと!!末永く幸せにな!!］

と、綺麗な贈り物を渡し、二人のみならずでろりんとまぞっほを心の底から喜ばせた。

元であっても偽勇者だった自分達に、こんな素敵なものを贈ってくれるポップは、矢張り本物であってくれたのだと様々な喜びを与えてくれた事に

そして更にお金を貯めた彼等が、小さいながらも孤児院を開き、それは王家のお墨付きを貰い、長い年月パプニカに根付いたとか・・

後日談？　かつての料理人の日常その一

会議とは長くなる、其れも重要会議となればなおさらで、出た案の取り纏めだのその後に意見続出しては目も当てられないのだが、今日の会議はより一層白熱している。

広い議場の筈なのに、各街や村からの代表者がひしめいており、全員の顔つきが真剣である。

魔界が浮上してからは魔界で行われる会議はバーンパレスで行われる事が通例となり、幾多の重要案件がここで決められて行く。

本日の議題は魔界の食糧自給率を如何に上げるか。

これまでは食えない者は死ぬだけで済まされて来た・・・・訳でもないが。

魔界だとてそれなりの土壌とそこそこの植物は根付き、農耕だとてそれなりにはやってきている。

それの味に目をつぶればな者が多いが兎に角、魔界では本気で働いて生きようとすればそこそこは食べていかれ、今までのような瘴気問題が無ければそれなりの生活をそこそこ営んでこれたのだ魔界は。

しかしこれからはそうもいかない。瘴気問題が解決したのなれば、安定的に魔族・ドラゴン・モンスター達の生存率が上がって近い将来人口加増で―そこそこ―の食料自給率では追い付かない試算が出されている。

地上に浮上し、目の前に広がる海の資源で海産物があるとはいえ、そこを取りつくすような真似をして良いはずが無く、そもそも人界との約束で漁業範囲もお互いで取り決めており、なれば矢張り自分達の土地を農耕し家畜を増やし、安定した食料自給を目指していくのが今後の課題である。

土壌がそこそこの所を増やしつつ、水の少ない地でも育つ！それが!!

「いいですか!!じゃがいもとは!!とっても優秀なお野菜なのです!!!お水が少なくとも文句を言わずに育って！頑張れば沢山の美味しい物

を私達に与えて下さるこれこそ神が作った救世主的お野菜なのです!!!!」

芋一つを掲げて会議場の中央壇上で吠え上げているのは、長く豊かで艶のある黒髪を本日はポニーテールに結わえ、左右に一房たらし髪にしている、かつての勇者一行の料理人で、モンスターアイランド・デルムリン島に畑を作った・・

「私の故郷たるデルムリン島でも、かつては自然で採れる食料に依存して、収穫が無くてお腹を空かせたモンスター達もいたそうですが、私が―偶然―にも海岸で拾った書物に書かれていた畑の作り方を読めたお陰で、流れ着いてきた芋袋からいくつか取りお気をして、芽が出る迄・・・・」

ティファであった。

この第一回・魔界農業フォーラムとも言えそうな会議の栄えある一人目の講師にとして、バーンに呼ばれて何だろうとのこのこと出掛けてきた。

魔界のご飯事情をティファもそれなりに知っている。

人質生活で仲良くなった双子の料理人から、地上と魔界の農耕からして差がありすぎるのだと嘆かれ、魔界の食材はさほど質も量も良くないのだと。

それを助ける為のお手伝いが出来るとあって、ティファは急遽引きこもり生活を引退し、祖父と父に行ってきますと言って、壇上で芋愛について滾々と語っている。

先ずは土が痩せているのならば腐葉土を人界から貰い受ければいい。今季節は秋なので、人界の落葉樹が見頃となり、その後に落ちた大量の葉を集めて各家庭で出る生ゴミを調達して、広い土地、例えばテランのアイテル広大な土地にを借り受けて腐葉土を作り、魔界のやせた土地を耕して腐葉土も混ぜ込んでふかふかになった良い畑にじゃがいもの芋種を植えて、少ない水で後は大丈夫!!

じゃがいもは本当に魔界に適していると、ティファは熱く芋愛を語りながらしみじみと思う。

まず地上に出られても、魔界は全体的に降水量が少ない。分厚い雨

雲でない限り高い山脈を雨雲が越えられないので、無いとは言わないまでも少ない。
しかし昔からある地下水脈で生活できていたのだから水問題はさほど重要ではなく、少ない水で育てられるものがあればいいので白羽の矢が立ったのがじゃがいもさんである。
そしてジャガイモの育てやすさと生産量などのメリットを挙げていくティファの姿を、会議場の一番奥で聞いているバーン御一行は楽し気に聞いている。
周りは自分達の土地はこうだが育てられるだろうかや、枯れた時や病気になった時の対処法や、何時頃から本格的に植え付けが出来るかと周りの真剣さとは雲泥の差がある。
別にバーンはふざけている訳ではなく、食料の大切さも、地上から・・当時は屈辱を感じながらも買い付けて軍に配給している程食の大切さは知っているのだがそこはティファのあの生き生きとした様子を見れてご満悦状態である。
芋一つにあそこ迄情熱を傾ける様がなんとも可愛く、芋の育て方は今日の会議書類に目を通せばいいので幼な子の晴れ舞台を見守っている好々爺の気分で見守っている・・・・この会議で食料自給率上げと、その為の土壌改善の為の腐葉土づくりの為の土地をテランに借り受けるリース料の最高値も決めて後日話を持っていく為の素案作りもうっちゃられ、これは絶対に俺が取りまとめるのだろうなと、バーンの右隣にいるハドラーは天を仰いで嘆息する。
まぁティファが絡んでいる案件であれば、人界の各王室も諸手を上げてとは言わなくとも、せっせと力を貸してくれることは請負ではあるし、なんならカールにも落葉樹の森が広大にあり、土地的にも魔界に近いからうちでやりませんかとかアバン辺りが割って入ってきそうだ。
今回腐葉土の件をテランに持ち込む事にしたのは、かの国の底上げの為でもあるからそれは無いだろうが・・・さて。
あの国はこれから平和を守る事を国策として掲げんとする国であり、ならば魔界側もテランの恩恵有り食料が安定したのだと魔界側に

良い印象で知れ渡ってほしい国である。
この会議は、食料だけではなくそこから人界の何処とどう繋がりと友好を深めていくかも絡んでいるのだが・・・・・
「バーン様、この後お嬢ちゃんが沢山の芋料理を用意しているとか。」
「先程ともに作りましたがバーン様が好まれそうな物が多々ありまして・・」
・・・・・魔界のトップの側近達の会話がこれで、受けている主のバーン様も相好崩していいのかこれでと、本日何度目かの溜め息を心の中でそっと吐く・・・・
持ってくれよ俺様の胃袋よ・・・
二時間枠の筈の会議を一時間も超過した後、会議出席者全員がティファ考案の芋料理を振舞われてご満悦となった。
「この―コロッケ―とはなんとサクサクとして美味しい事か!!」
「細切りのはフライドポテト・・・いくらでもいけそうだ!」
「私はこの皮付きの方が良いですな～。」
「其れよりもこの―ポテトサラダ―が良いぞ!」
「なんと!この白いのは・・・何?マヨネーズというソースを混ぜているのか?」
出された芋料理は実に多く―ダイの大冒険の世界―では未知なるものがほとんどであった。
フライドポテト・ハッシュドポテト・コロッケ・ポテトのパンケーキ、言わずと知れた前世のポテト料理をティファはフル活用している。
この世界にも芋は有るのだが食べ方は実にバリエーションが少なく、皮付きのまま茹でて塩をふるか、潰して塩を混ぜてパンの上に塗るかくらいで芋を主体とした料理自体が無い。
それに不満を持ったティファが、料理を覚えてからは頑張って再現し、この程転生あるある内政チートの代表格たる―マヨネーズ様―をもとうとう作り出して今回の試作品で前世での一番の大好物・ポテトサラダにふんだんに使ったのだ。
程の良い酸味と芋の甘さが無限に食べられそうな美味しさを生む、

自分にとって完全栄養食に入れても良いよねと叫びたくなる一品。
芋と野菜とベーコンを塩コショウで混ぜて下味を作った所にカロリーの高いマヨネーズを入れれば少量でも栄養が取れるのだ!!
「大魔王〜、ポテトサラダのお代わりいかがですか?。」
「うむ、沢山貰おう。其方もここで食べてゆけ。」
「はい、ではお言葉に甘えて。ハドラーはポテトサラダいかがですか?」
「・・・(これであれば)沢山食えそうだな。」
「そうですか!!嬉しいです!もっとどうぞ!!」
「・・・いただこう・・」
最早会議なんだか試食会だか分からなくなった場に頭を痛めるハドラーも、マヨネーズの酸味と芋の甘さで痛んできた胃が優しく宥められ、其れを食べながらポテトケーキとジャガイモのポタージュに癒される・・・毎日ティファが作ってくれんかと思いながらゆっくりと味わいつつ、ちらりとバーン様御一行を横目に見る。
相変わらず主はティファを膝に乗せ、もう周りは慣れたので芋の作り方と今日の料理のレシピと、マヨネーズは人界で売っている物なのかとの問い合わせが殺到し始めており、食べながらティファもニコニコと慣れた様子で返答している。

・・・ティファも楽しんでいるのだからまぁいいだろうと、ハドラーも毒された考えで最後は納得して癒された胃袋はコロッケにも食欲をそそられ食べ始める。
第一回・魔界農業フォーラムはこうして無事(?)に閉幕し、魔界の食料自給率上げと限られた食材で美味しい物を作る、勇者一行の料理人のレシピ本が魔界で無料配布されて食料自給率上げと各家庭の食事事情のレベルアップもしたとか。
そして予定通りテランと魔界は腐葉土の土地の貸し借りから、ギルドメイン大陸の丁度中央なので、この大陸の交易拠点としても土地を借りられないかも打診して許可を得た。
以降交易の拠点としてもテランは栄え、貸す条件としては天幕など

を使ってなるべく自然を傷つけない事を条件としたので緑豊かな自然と平和を愛する国として魔界と深く友好関係を築いたとか。
芋一つとソース一つで魔界を喜ばせ、後日人界でも爆発的な人気を生み出した当の本人は、慣れない大勢の前でのプレゼンに疲れて大魔王の膝の上で午睡を貪ったのはご愛敬であろうか・・・
しかしそこは矢張りティファの日常、ドタバタは避けられなかった・・
一匹のーミニ竜王ーなせいで
「なぜお前が料理を端から食べるのだヴェルザー!!」
「ふん!ー小型化ーには魔力消費が激しいのも知らんのか若造!!」
この程自身の身体を小型化させる呪法の復活に成功したヴェルザーは、堂々とティファの頭や肩に乗って共にあちこちお出掛けし、なんならバーンの夕食も強制的に相伴に預かっているという太々しさに、ティファが寝ているこの機を逃さず、ティファをキルの腕に預けて幼な子の周りに防音結界をきっちりと張り廻らし、日頃のヴェルザーに対する不満をぶちまける。
この迷竜王が!!隠居した途端ティファに甘えて質が悪くなる一方ではないか!!
「そもそもがティファにベタベタしすぎだぞヴェルザー!!」
「あれは嬉しそうに俺様の事を撫でて喜んでるぞ?それが気に食わんのか若造が。」
「き・・様!!決闘申し込むぞ!!余が勝った暁には二度とティファの頭や肩に乗るでないぞ!」
「ふん!ならば俺が勝ったら二度とくだらん事で吠えるなよ若造が!」
・・・もう嫌だ、何故魔界の二台巨頭が、一人の少女の些細な事で魔界を揺るがし引いては人界・天界も揺るがしかねない決闘騒動起こすのだ?
泣きたくなったハドラーは悪くない。
流石にそれはまずいと、魔界全土の為にやめてくださいとその場にいたミスト・キル・ハドラー以外の魔界の者達が泣きながら土下座す

る勢いで頼み込み、あわや魔界の大惨事を回避され、そんな中ティファ一人が平和そうにクゥクゥ寝ている。
ティファを独り占めできて喜んでいる死神の腕の中で

後日談　ＩＦ　テイファのお相手①

私は・・・・―彼―とどうなりたいんだろう？

夜の暗い森、彼と出会ったのはロモス王国ネイル村を少し離れた迷いの森で、今考えればきっと彼は私が悪魔の目玉を消した事で、勇者一行を見張れなくなったと困ったミストの為に偵察に来た時に遭遇した。

可笑しな人だった。―キルバーン―である筈なのに残虐性は無く、とてもカッコいい衣装が似合う紳士的な人だった。

敵の私にも乱暴ではなく優雅な口調で話す人で、私の周りにはいない大人の男性。

アバン先生も優しい大人だけれども、彼は・・・何だろう、教師と貴族的な紳士の差だろうか？

とても甘やかな声のせいだろうか？

会う度に優しい甘い声で話し掛ける変な人は、時に私の心の傷を抉り取り、怖い事も言われたけれどもやっぱり最後は優しくなる・・・・あの人は私をどうしいんだろうか・・・

あの時も今も・・・

大戦が終わって早三年の月日が経ち、十五になったテイファは一人デルムリン島の大木の枝に座って―手紙―を読んでいる。

十五になったが身長はマァムよりも頭一つ分小さく、肩も手足も細いままで、胸もお尻も僅かに肉がついた程度で、スレンダーすぎなのではないかというのが本人の密かな悩みなのは秘密である。

そんなティファも、年頃の娘のように深い悩みに溜息をつく。
手紙を読み終えた後は近頃いつもこうなる。
古いというには紙はまだ新しく、それでも幾度も読むうちに折り目や端が綻んできた手紙。
それはかつて敵であった時にキルがティファに書いた感謝状とお見舞い状。
大戦の最中であっても、キルは大魔王の篩の篩で用意されたボス・キングマキシマムを倒した時に感謝状を書くというとんでもない事を約束し、果たして彼はそのあと倒れたティファを案じてお見舞い状も共に書いて単騎で勇者達が全員いたマトリフの洞穴に来たとか。
大戦時には遂に一度も目を通さなかったが、大戦後目を覚ました自分におじさんが渡してくれた。
これは嬢ちゃんのもんだ。あいつももう敵でもないし、読んでも良いと思うぞ。
敵からのものだと処分せず、律儀に預かってくれていたおじさんの言葉通り、渡されたその日の内の夜に、一人でゆっくりと読み通した。
感謝状にはあんな愚か者を相手にさせて本当に申し訳ないという謝罪と、お見舞い状にはボロボロになった私を見るくらいならば、昨日の夜に強引にでも連れ行けばよかったと後悔の念が書かれていた。
―昨日の夜―
篩の篩を私に告知する為にミストと共に来た時、私を攫って閉じ込めて・・・あの怖い言葉の裏には、私がボロボロになる前に―籠の鳥―にして保護したかったのだと知った。
あの言葉と、発せられていた気配に私を怯えさせて壊して・・・・
幾度も言っていた、私を捕まえると、手足が無くなっても一生面倒を見ると・・・分からない、どうしてそこまで私を・・・
近頃キルに会うと胸が苦しくなる。ドキドキとして喉がカラカラになって、何を話せばいいのか分からなくなって・・・・この間なんて頭を撫でられそうになった時逃げてそれっきり・・・
あれから十日が経って、以来島を出ていないで閉じこもりながらこうしてキルの手紙を何度も読んでる。

怖い事を幾度も言いながら、優しい手で自分を抱き上げ慰めもくれていたあの手からどうして逃げたのか・・・
何時でもキルが自分に障る時は優しかった。怖い事を言いながらも抱き上げられた時も撫でてくれた時も包み込まれるような安心感を覚える程に優しかった。
優しく包まれ甘い声で囁かれるだけで溶けそうな程の幸せを感じた時もあった・・大戦の最中、幾度も耳に甦った甘い言葉に囚われそうな時も確かにあって・・・

「・・・嬢ちゃん・・」
そうこんな風に・・・
「お嬢ちゃん・・・」
はっきり・・・・はっきりと・・・・し過ぎて・・・
「お嬢ちゃん。」
「って!!キ・・・きゃぁ!!」
「お嬢ちゃん!!!」
・・・・はっきりと聞こえると思ったら本人来てた・・・

いきなりキルがデルムリン島にいる自分の横に出現したことに驚いたティファは、木の枝から滑り落ち、キルに抱き留められ事なきを得て、二人で木の枝に再び座りなおしている。
「もうね、そこまで驚かないで欲しい・・・そもそも今のは僕の方が驚いたよ。」
「・・・・ごめんなさいキル・・・」
十日前、バーンパレスでティファがいつもの様に主と夕食を共にして見送る時、いつもの様に頭を撫でて送ろうとしたらティファが真っ赤になって自分の腕をあからさまに避けてそのままパレスの―ティファの自室―に逃げられ、クローゼットの扉からデルムリン島に帰られてしまった。
パレスには当然の様に、ティファの部屋が一部屋用意されている。いつティファが遊びに来て泊ってもいいようにと。

厳重な結界が施されたバーンの寝室の右隣に用意され、同じように特別な守りの結界が幾重にも施されている。
そしてその部屋のクローゼットには仕掛けが施されており、正しい手順で仕掛けを動かせばパレスのクローゼットとデルムリン島のティファのクローゼットが繋がる仕組みになっており、バーンが魔界と地上のゲートの仕組みをクローゼットに仕掛けた特別な一品。
そこを通られて帰ってもう十日が経つが、ティファの引きこもりにキルが焦れた。
どうして自分から避けるのかどうしても知りたくて、今が絶好の機会なのかもしれない。
抱き留めた後ティファを自分の膝の上に乗せたままの今なら、もしかして聞きだせるかもしれない。
「・・・その手紙、捨てずにずっと取って置いてくれているんだね。」
「あ・・・キルが・・きちんと約束を守ってくれた素敵な手紙なので・・・」
「そう、嬉しい。」
「嬉しい？」
「そうだよ。―敵―だった僕からの手紙を君はきちんと受け取って今も大切にしてくれているのが嬉しいんだよ。」
たったそれだけの事を、まるで宝物を貰ったように喜んでいるキルに、ティファはずっと聞けないでいた事を思いきって聞いてみる。
「キル・・・―賭け―の事を覚えていますか？」

その一言でティファの頭を撫でてご満悦であったキルの動きと気配が全て止まり、ティファは聞いてはいけなかったのだろうかと後悔した。
まるで、聞かれたくない事を聞いてしまった時のような気不味く、そして怖い気配がキルからし始めている。
「―賭け―ね・・・君はあの賭けの意味をきちんと理解しているのかい―ティファ―」
「ッ!!」
初めてきちんと名を呼ばれたのに、それはとても冷たい声音だっ

た。今までのキルから・・・少なくとも自分には向けられた事の無いとても冷たく怖ろしいに、震えが奔る・・・

ああこの子は―まだ―子供のままでいようとしているのだろうか？体は少しばかり大きくなっても細く華奢なままのせいで誰もこの子が十五のレディだと気が付かないのをいい事に。

でもね、そのままの子供でもね・・・

「僕が君の事をどう思っているのかを当てる事が君の勝利条件だったけど、君は答えを考えてくれていたのかい？」

「あ・・・私は・・」

「ふむ、その様子だと考えていなかった・・・・・逃げたね。」

「あ!!」

「そう・・・僕の気持ちからかい？それとも・・・」

「あ!!やだキル!!」

「君の―心―から君は逃げたのかい？」

「わ・・・たしは・・・」

気配が冷たくとも耳に流れる声音は途轍もなく甘い声で詰る声に怯えたティファの心臓部分に、キルは今だ膨らみの少ない、其れでもティファが少女だという確かな証の胸を包みながら親指で強くティファの心臓を叩きながらティファを腕の中に閉じ込める。

今度こそ逃がさない、どうあっても―答え―を引きずり出す為に！

そしてティファは、キルの目論見通り答えを必死に考え始めた。

答えなければいけないと急き立てられるように。

大戦時には、―死ぬはずだった―自分の心からずっと逃げ続けていた。一歩間違えれば死に直結する綱渡りの数々。

死の大地の決戦でか、囚われた後の公開処刑の時か・・・もしかしたら、三神様達と六大精霊王達の代わりに天界の水晶を壊す時に死ぬかもしれないと思い定め、―自分の未来―を考える事を放棄していた自分は、―誰か―を特定して好きになる事をしなかった・・・未練を残すのが嫌で、其れよりも隙になる事自体が怖くて・・

今は？

私は・・・もう駄目だ・・・・・・もう・・・・・逃げられない・・・
「ティファ？」
名前を呼ばれただけでも、心臓が壊れそうになる。
「・・・ティファ・・・」
頭を撫でて貰うだけで頭の中がくらくらとして・・・・
「僕は君を愛しているんだよティファ。」
その言葉だけで、私は幸せだ・・・・・
カシャンと、何かが閉じて鍵をかけられた音がする
飛び続けていた鳥が籠の中に自から入るように、ティファは身体の力を一切抜いて、キルの腕に己の全てを委ね尽くす。

とうとうティファはキルに捕まってしまった。
キルの言葉に、想いに、全てに捕まってしまった。
ティファは観念する。ずっと逃げていた思いがなんであるのかを確認してしまったから。
キルの腕に閉じ込められながらもキルの膝の上に横座りになりキルの瞳を久方ぶりにじっと見つめる。
ここ数か月逃げていた瞳は、優し色が薄く、何かを待っている。
この言葉を、たった一言言おうとするだけで逃げたくなる身体を、キルの服を握りしめる事で堪え、ありったけの勇気を掻き集める。
私の答えを、大戦から三年が経っても、キルは私の答えを真剣に待ってくれていた・・・待たせてしまったんだ・・
この答えを言うのに、三年の月日が経っても待っていてくれたキルを私は・・
「私も・・・貴方が好きですキル・・」
「ティファ・・・」
「きっともしかしたら、ロモスの迷いの森で貴方に出会ったその時から。」
ティファのその言葉に、キルは目を細めて一層ティファを抱きしめる。
待った甲斐があった。もしかしたらと思う時が幾度もあって、其の

度に持たされる幽かな希望と、其れでも子供の様に自分に接するティファとの落差にのたうち回り、其れでも捨てられなかった思いの果てに・・・

「キル・・・泣いてる・・」

「あぁ・・・」

「嬉しいの？」

「・・・・嬉しいとも・・」

キルが―涙―を流したのはこれで二回目。

一度目はティファが目を覚まして突如パプニカに現れた時、キルはティファに取り縋り涙を流して喜んだ。

それと同じくらいの喜びと幸せに、キルはこのまま溶け合ってしまいたいと思う程ティファをきつく抱きしめながら、左手で―仮面の下半分―を取り外すし、右手でティファの頤を持って上を向かせ、そっと口付けを落とした。

いきなりの口付けと、それ以上に―本物の舌―で口内を蹂躙されている事にティファは驚き、其れとてもキルの激しい口付けに思考をぐずぐずにされてティファは何も考えることが出来なくなり、キルの服を握りしめて思いに応える。

自分はこの唇を知っている・・・目覚める寸前に感じたのと同じあの口付けは・・

待っていた思いの重さを知らされるように、息が苦しくなった頃合いを見計らって少し口を離されたと思えば、さらに深い口付けに、ティファの全てが蹂躙される。

好きだという思いを口内諸共に貪られ、怯えても逃げられないようにきつく抱きしめられて閉じ込められる様は、まるで羽根をもいで鳥籠に閉じ込めようとしているようで・・

どのくらいの時間自分はキルに貪られていたのか・・・・

気が付けば荒い息でキルの胸にしだれかかっている自分に気が付いたティファは、羞恥心で俯くのをキルが許さず自分の方を向かせる。

「ティファ、愛しているよ。君を生涯閉じ込めたいほどに愛している

んだよ。」
真摯向けられる言葉と真剣な瞳に、ティファもそっと応える。
物騒な言葉なのに、ちっとも嫌だと思った事は無いキルの言葉に
「私も、貴方を愛しています。」

この後キルはその足でティファを抱け抱えたままバランの下を訪れ、ティファを愛しているので結婚を許して欲しいと正直に話し・・・・・えっらい騒ぎになったのは想像に難くないでしょう。
言った瞬間バランは鬼となりついで竜魔人となり、それでも愛娘もキルが好きだから許して父さんの言葉に打ちのめされあわやの大惨事は避けられた。
そして一息ついた後、ティファの祖父、ブラスにも許可をすぐに得られた。
ダイ達が嫌おうとも、ティファ本人とよく遊びに来るチウがキルを褒めているのを聞いており、キルの為人を知っていたから。
「ティファをよろしく頼みますじゃ。」
自分の事を何も望まないティファを、幸せにしてあげてほしいと願い、キルはその思いを真剣に受け取った。
そしてバランとブラスから二人の結婚を了承された足でキルは直ぐにバーンの下に向かい、互いの気持ちを確かめ、尚且つ父親のバランと祖父の鬼面道士ブラスからの結婚許可を取った事を報告して、バーン驚かせたが、バーンは直ぐに気を取り直し―息子―の幸せを喜んだ。
キルは自分のハイ＝エント、マスター＝エンゲージで命を与え、遂には・・・
「ティファと共に幸せになる事、其れが叶うならば好きにせよ。」
深く温かい声で、二人の結婚をバーンは祝福し、バーンの後ろで聞いていたミストも、万感の思いを込めてキルに視線を送り、其れだけでキルは親友からの喜びが伝わりにこりと笑ってミストに抱き着く。
きっと自分もティファも幸せになると約束をして。
後日ティファの兄達やあちこちの―保護者達―をも二人で説得し、

特にヴェルザーが荒れたのを宥めるのに苦労した。
「俺が少し離れている間に纏わりつく害虫が!!!消し飛ばしてくれるわ!!!」
小型化してティファに纏わりついていたのはお前だろうがという言葉を飲み込んだキルは偉いと思う。
あの日、ヴェルザーは駄天使長老達がテランの薬草園に流れ着いた事を耳にして、今更するとは思えないが悪さをしたら罰を与える積りで見に行ったのが運の尽き！
ちび助に害虫が!!
ダイがギガデインストラッシュを、ポップがメドローアを、ヒュンケルがブラディスクライドを、マァムが武神流閃華裂光拳を、かつての仲間達が必殺技をキルに放とうとしたように、ヴェルザーも元の姿に戻ってドラゴン族最強の技・オーロラブレスをキルに吐こうとしたのをティファがヴェルザーの足に縋りついき
「キルの事を愛しているの!!」
泣いて叫ぶティファに免じてヴェルザーも折れた。守りたい愛おしい者の幸せを願って。
後にダイ達とは違う時期にキルとティファはデルムリン島で身内だけでひっそりと式を挙げた。
ティファは自分の事で騒がれるのを好まず、好きな人達だけでいいというが、招待客の多さにキルは苦笑したくなった。
ティファの身内は其れだけで数が多い。
ダイ達を筆頭は言うの及ばず、リュート村の子供達は無論の事で、遠くはパプニカの学者お爺ちゃん達三人も駆け付け、精霊王達も全員参加で付随する様に・・パレスからも双子の料理人とゴラムとガァグランスもバーンとミストのお供をしてきて物凄い人数と面子が・・・・ちゃっかりと出席しているアバン王も、人数の多さに驚き、いっその事大々的にしても差し支えない様の思ってしまったのは内緒だが、
キルの腕に抱き抱えられ、ウエディングドレスに身を包み幸せそうにしているティファの顔に、アバンとマトリフは満足そうに笑っている。

幼馴染のノヴァは、意外にもすんなりとチウとメルルのように二人を祝福する側に回った。ようはティファが幸せになれるのであれば誰と結婚してもノヴァはよく、ティファを泣かせた瞬間香り漬けにして粉砕し、今度はジブがティファを幸せにすればいいのだから。

マトリフもまた、ー嬢ちゃんーが幸せになればいいと笑っている。

後は―ヤケ酒―をしている父・兄達とロン・ベルクとハドラーが管を巻く中で、アバンとマトリフは祝杯を挙げる。

かつてティファに贈った言葉、生きて行くのですよという言葉を上書きすべく

「―幸せに―生きて行くのですよティファ」

そして数年後、キルとティファの二人はーキルフーという名の男の子を大切に育てたとか・・

髪の色は真っ黒く、赤い瞳の可愛い男の子を

後日談　ＩＦキル編続き　ダブルデート

「ときにお子様は何人お育てになる予定でしょうか？」

・・・・ちょっと待て、俺とマァムはデルムリン島での新居を建てて貰う為の話をしに来た筈が、どうしてそんなド直球な家族計画的な話をされる羽目になった？

見てみろ！俺の隣で座っているマァムの顔が！髪の色よりも赤くなっているではないか・・・これはこれで可愛いな・・・

遡ったデルムリン島

「そろそろマァムと私達の家をきちんと作ろうかと思うのですか・・」

半年後にはダイ達との合同結婚式が控えているラーハルトが、事実婚の様に同棲しているマァムを伴い、仮住まいのような小さな家ではなく、主たちが住んでいる様な家を建ててもいいかとデルムリン島の長老たるブラスと、主のバランにお伺いを立てる。

島はそれなりに広くとも、だからといって自分達が好き勝手して良い訳ではないと弁えているラーハルトとマァムの生真面目さに二人は相好を崩して微笑まし気に二人を見守っている。

本当ならティファにも話を聞いて欲しかった二人ではあるが、今日は――大切な用事――があるというので夜明けと共に出掛けて生憎不在なのだが、家の件はブラスが直ぐに許可を出し、二人の望む浜辺と森

の間に程よくひらけている場所に建てる事許可を直ぐに貰えた。
後はこのモンスターアイランドたるデルムリン島に、家を建てに来てくれる職人を探さねばならないのだが。
矢張り長い事住むにはきちんとした職人に建てて貰うのが一番であり、快適と安全の為にも良い職人をと思うのだが、生憎ラーハルトは無論の事だが、マァムにもその手の職人に伝手は無くさてどうしようと思ったところに天啓が下った。
「そういえば今日はウォーリアー船長が来る日じゃったな。」
この家を建ててくれた職人殿に話が出来んか聞いてみようとニッコリと笑って言ってくれたブラスは神様だろうか？
「へぇ～新婚さんの新居をね～。ティファちゃんとダイ君が聞いたら家族が増えるって大はしゃぎしそうだ。」
「頭～・・・」
「馬鹿野郎！俺達は山賊でも海賊でもないんだぞ！きちんと船長って呼ばんか。」
「へい船長!!・・・・そろそろティファちゃんもお嫁さんに行っちまうんでしょうか？」
「あん⁉」
「だって船長！ダイ君はパプニカのお姫様をお嫁さんに貰ってこのデルムリン島を巣立っちまって・・その上ティファちゃん迄行っちまったら俺達の癒やしの天使が!!!」
「俺達これから何に癒されて海を渡っていけばいいんすか!!」
「・・・・ダイ君この島で王様補佐業務出来ないっすかね・・」
「あ!!悪魔の目玉があるじゃんかよ!!」
「そうだ！あれで!!!!・・・」
「馬鹿野郎どもが!!!!!!!!!!!」
船員たちの戯言に、とうとう海の雷親父、ウォーリアーがぶちぎれた。
「あの二人はな！俺達だけの天使じゃねえんだぞ!!!世界中を笑顔にするために頑張ってくれた二人を独占しようなんてさもしい事口にす

んじゃねぇ!!簀巻きにしてフカの餌にすんぞ!!!!」
「「「「あぅ～・・・・」」」」
船長のいう事もごもっとも・・・・されど古参の船員であればあるほどダイとティファとの幼い頃からの触れ合いが懐かしくなる。
この船に乗る男達は全員が妻帯して幾人かの子供がいる。
自分達の嫁も子供も可愛いが、あの純真無垢な笑顔と感謝の言葉に全員メロメロなのだ。
海に出れば板子一枚下は地獄であり、神経が磨り減る中で何気なく上げるやっすいビスケット一つでも宝物を貰ったように喜ぶ二人に、船に乗せて少し島を回っただけで嬉しそうに大はしゃぎをして笑っていた二人。
それは出会ってから成長し、大戦が始まる少し前も変わらず、知識をつけても礼儀にも磨きが掛かった二人の愛くるしさはヴァージョンアップしていき、世界が知る前からダイとティファを天使としているウォーリアー船員達は、二人の成長を素直に喜べないらしいと、二人をよく知るマァムとラーハルトは苦笑し、ティファが結婚する事知ってしまったらこの人達どんな反応するのか心配にもなる
この程ティファも結婚相手が決まった・・・・あの変態疫病神が相手と知って、ダイ達は即座にキルを滅しようとしたがティファ本人に止められる前に、良識ある大人アバンとマトリフの活躍と、ノヴァ・チウ・メルルの援護もあって事なきを得たのだが、ラーハルトはいつか―事故―に見せかけられんかとまだ諦めてはいないのだがそれはまた別のお話。
兎に角ティファの結婚話は今言っても良い事は無いだろうとウォーリアー達には話さず、このデルムリン島に家を建てたという職人を哨戒して欲しい事を伝えて、ウォーリアーに紹介状を書いて貰った。
かつてはあちこちに移動しながらその土地で家を建てる依頼を引き受けて生計を立てていたそうだが、今は一所に腰を落ち着け店を構えているとか。
場所は生きやすいベンガーナのデパートの中にある様で、二人は早

速出掛けて行った。
マァムも何度か行ったことがあり、ティファから貰っているキメラの翼で行けばあっという間である。
「ついでにのんびりとしておいで。」
ティファやダイに言うように、ブラスはラーハルトとマァムにゆっくりと遊んでくるようにといいながら―お小遣い―として五百ゴールドの入った財布をポンと渡され、二人を呆気にとらせた。
ブラスはウォーリアー達の交易で、偶に品物の交換ではなくゴールドの遣り取りもしてきた。
ダイとティファが大人になって入用の時に渡すつもりで。
しかしそのブラスの目論みはいい意味で不要となった。
片やダイは王室に行く身であり、実家の微々たる支援は不要となり、ティファに至っては自前で稼いでおり物凄い事を先日さらりと言われた。
「・・・私の手持ち?・・・・・・・うん、ベンガーナのデパートに三万ゴールド預けて随分経って・・・投資に使っていいって許可出したら倍額になってるっていうのを二年前に聞いたし・・・お宝も換金したらいくらになるか分かんないや。」
物凄い事実発覚である。キルと結婚するのであれば資金は出そうかというブラスとバランに、お金は大丈夫というティファの言葉が気になって聞いた時の話であった。
ちなみにその時ティファが無一文であっても、キルが今まで貯めていただけの―お給料―を放出する気であったのでブラス達の蓄えが減ることは無かったのだが兎に角、ティファも使う事が無いのであれば、ブラスもバランも使わないお金を死蔵するよりも、ラーハルトやマァムの楽しみに使って欲しいという老婆心に、二人は快く受け取って職人を探した後は―デート―をして帰る事になった。
「・・・・いつ来てもデパートは賑やかね・・・」
街の入り口に降り立った二人は、すぐにデパートを目指して入り口で人の多さに辟易とした。

別に半魔のラーハルトが嫌な視線を浴びているとかでは全くない。
魔界が浮上して三年も経てば、魔族や半魔の行き来も当然あり、特に大きな国の商業施設がよく使われるので、ベンガーナ国民とデパートは魔族達には慣れっこである。
では大魔王に立ち向かった二人が何に辟易しているかというと・・・

「ちょっとあなた!其のスカートは先に私が!!!」
「そのシャツちょっと見せて頂戴!!!」
「靴下がこんなに大特価で!!!」
・・・・・魔王軍の大軍にも負けなかった槍使いと武闘家が、主婦の戦場バーゲンセールに負けた瞬間であった。
絶対この中に入りたくない・・・
二人の心の声は一致し、どうしたものかと途方に暮れる。バーゲンセールの場所が分かりやすく出入り口付近なのが災いして中に入れない二人にまたもや天啓が下った。
「これはマァム様とラーハルト様、お久しぶりで御座います。」
二人が聞き覚えのある声に振り返りそこにいたのは・・・
「アクバルさん!!」
ベンガーナデパート・コンシェルジュ部門の長、アクバル氏が優雅に立っていた。
「今日はバーゲンセールの日なのですが、ゆっくりとお買い物をしたいようでしたらお手伝いをさせていただきますが?」
アクバルからの提案に、二人は一も二もなく飛びついた。
自分達だけでは入る勇気が到底持てないのだから。

「・・・成る程、ゼペット氏の店をお探しに・・」
「はい、・・・私とその・・」
「俺達は近々結婚をする。その前にきちんとした新居を建てたいのだ。」
「それはおめでとうございます。日取りが決まったいるようでしたら是非お知らし下さいませ。

ベンガーナデパートより、お祝いとして祝い酒を贈らせていただきます。」
デパートに来た経緯をマァムが話そうとしたが、結婚する事を言うのが気恥ずかしくなってラーハルトが交代する。
その初々しさに、人の世の酸いも甘いも噛み分け―大概のもの―を見てきたアクバルの心をほっこりと温め、祝いのお酒を贈る、受け取れないの問答になり、最後には世慣れたアクバルの話術に言いくるめられる様に、二人は祝い酒を受け取る事になった。
如何に世界を救った英雄達も、世慣れた大人には勝てなかった。
「ゼペット氏の店は三階の家財店の隣にあります。よろしければ新居に入れる家具も見て行ってくださいませ。」
「そうしよう・・・予算を組んでもらうことは出来るか？」
「はい、そちらもゼペット氏に話せば家とのセットで話が出来る筈です。よろしければ誰ぞ付けますか？」
「いやいい。心遣いだけ貰おう。マァム、行こうか。」
「はい、何から何までありがとうございましたアクバルさん。」
「いいえ、何ほどの事も。何かありましたらまたこちらにお立ち寄りください。」
言ってらしゃいませと二人を見送ったアクバルの下に、少しして―本来の客―が来た。
長い黒髪をハーフアップで緩く纏め、オレンジ色のサテン生地のワンピースに同系色のサンダルを履いているティファと、初めて見る魔族の男が入ってきた。
男の方は身長が自分よりもあり、肩幅が広く全体的に均整がとれており、道行く女性が振り返るであろう美丈夫であった。
ティファと同じ黒髪を長く伸ばし、背中の中ほどで赤いリボンで緩く結び、赤い瞳が雪石膏の肌をより白く見せ、見るものを虜にするような蠱惑的な色を浮かべている。
間違いなく王侯貴族クラスの男とアクバルは見た。
着ている服も水色をもう少し濃くしたシルクのシャツに、青のベストとブレザーに同系色のスラックスが、履いている黒革のブーツとよ

く似合い、ティファの着ているオレンジのワンピースが映えて見える。
　間違いなく一級品のセンスを持っている。
「こんにちはアクバルさん。」
「これはティファさんようこそ。」
「初めまして、君が―噂―のアクバル氏だね。ティファからはよく話を聞いているよ。僕は―キル―今後ともよろしくね。」
「お初にお目にかかります。当ベンガーナデパートのコンシェルジュ部門の長をさせていただいているアクバルと申します。長年ティファ様には当デパートを贔屓にしていただいております。」
「・・・成る程、確かにこの人は信用できる人だ。」
「それは恐縮でございます。」
「ふふ、二人共顔合わせはその辺にして、アクバルさん、今日は私とこちらのキルと結婚するにあたって新居の相談に来たんです。ゼペットさんのお店は何処か探すのが今日は困難そうなので・・・」
「おや!それは何とおめでたい!!おめでとうございますキル様、ティファ様。末永くお幸せに。」
「ふふ・・・・アクバルさんにあらためて言われると照れ臭いな～。」
「私も幼い頃からお付き合いをさせていただいているティファ様からおめでたい事を知らせていただき感慨深いものがありますね。」
　キルとティファが椅子に座り、二人の飲み物を用意しながらとりとめのない話をする。
　七つの頃からデパートに来ていた話をキルが面白がり、当時の可愛いティファの話に食いつき、その話はもうと顔を赤らめるティファを、アクバルとキルは優しい目で見つめる。
　片や愛おしい恋人として、片や同じ年の孫を持つ翁として。
　アクバルも今年で六十、もう老境にとっくに入っており、後継者も育ってきたので引退を考え始めるお年頃であった。
　さて、少し前自分達がいた場所に同じ理由でティファとキルが来た

ことを全く知らないラーハルトとマァムはゼペット氏の店を訪ねて早速挨拶をしてウォーリアー船長の紹介状を見せるや否や、ゼペットの目が光った。
「あの船長からの紹介された人は皆―半額―でやるのが私の流儀だ。それを承知してもらおう。」
何でも昔ウォーリアー船長達に命を助けてもらった恩があるとかで、以来彼からの紹介状を持った者は全員そうしているとか。
遠慮しないで欲しいという言葉に、命を助けられた者が恩人に報いる為に定めたルールの大切さを知る二人は、ではとすんなりとゼペットの話を聞きいれた。
二人も、―ティファ―という恩人の為に何でもする積りなのだから、ゼペットの気持ちが良く分かると。
そして家の作りと間取りを聞く為にと聞かれたのが明るい家族計画であった。
曰く子供部屋の数や広さを予め取っておけば増築せずに済み、子供がいない時でも客間としても使える様に作ると言われて二人は納得し、マァムがおずおずと少なくとも三人はと小声で呟き、ラーハルトもマァムの言葉に頷き更に具体的にどんな家がいいかという話になり、其れはマァムとラーハルトは自身を持って言えた。
「ダイとティファが住んでいる家と同じがいいです。」
ロモス風のバンガロー造りの二階建てで、採光が多く取られた温かい家を二人もすっかりと気に入り、格別特別な事はいらないから大体あれと同じ様な感じでして欲しいと。
後は内装はと家具は二人の好みを具体的にするために後日また話す事になり二人はゼペットに今後ともよろしくお願いいたしますと店を後にしてベンガーナの街に繰り出した。
その後ゼペットもアクバルと同じ様に・・・・・以下同文

・・・・気のせいだろうか・・・・ティファ様の気配が・・・
「ラーハルト?」
「ん?どうしたマァム。」

「ラーハルトこそ疲れたの？ぼぅっとして。」
「いや・・・・腹が減ったのかもしれないな。どこかで食べていくか。」
「賛成！ベンガーナの街の広場に手軽に食べられる屋台があるってティファが教えてくれたの。そこに行きましょうよ！」
　白いサマードレスを翻しながら嬉しそうに駆けだそうとするマァムにラーハルトは目を細め、走り出しそうなマァムの腰を抱いて腕に捕まらせる。
「エスコートさせてくれないかマァム？」
「・・・・・ラーハルト・・・・喜んで。」
　白い長そでのシャツの腕に、マァムは喜んで捕まりついで軽くしだれかかる。自分よりも太く逞しい腕に。
「何か食べたい？」
「う～ん・・・・そこのお店はサンドイッチが売られていて、お肉やお野菜とフルーツ三度もあるんだってティファが・・・」
　美男美女で甘い雰囲気の二人を、道行く者達の注目の的になっている事に気が付かない程二人はデートの雰囲気を存分に楽しめ、ティファの気配は気のせいかとラーハルトは珍しく気にしない事にした。
　広場でサンドイッチを買い求めて噴水のふちに座って食べ、露天商を見るともなしに見てラーハルトは櫛飾りの店に目を付けた。
　店先にある赤い瑪瑙に銀の平手の簪が、マァムの桃色の神によく似合いそうだと、―自分の財布―を取り出し買い求める。
　サンドイッチはブラス達の心尽くしを無駄にしない為にもそこから出したが、これはマァムに贈るもの。
　買ったラーハルトは早速マァムの団子に結われた根元に差してみれば思った通り
「良く似合うぞマァム。」
「・・・ありがとうラーハルト。」
　マァムの桃色の髪によく似合い、その真っ直ぐな褒め言葉に、うなじ迄赤らめるマァムも込みでラーハルトの目を楽しませてくれる。
　自分の命と忠誠心はバランとダイとティファのもの。
　しかし心から愛おしいのは目の前のこの少女・・・・・子供は当分

要らず、蜜月時間を長く過ごしたいと言ったらマァムは怒るだろうか？

あちこちの店を見て時にはスィーツを食べて、日が暮れるまで二人は甘い時間を過ごす。

何をしても楽しいという可愛い恋人を見られて自分は幸せ者だとラーハルトは其の度にじんし、そして幸せを実感する。

たった数年前まで、半魔の自分が迫害対象だったとは思えない程の幸せに泣きたくなる。

自分が幼いころ住んでいたのはベンガーナであった。

当時まだハドラー大戦の爪後深く、人間にもそうでない者達にとっても不幸な時代であったと言われても、迫害された苦しさが消えてくれる訳では無論ない・・それでも、今の幸せの為に前を向いて歩いていこうという思いを強くさせてくれる。

いつか、マァムを母の墓に連れて報告に行こう。

ベンガーナの山間にあった人目に付かない窪地に建てた墓に、自分の最愛の人として母に紹介するべく。

その時はまたデートに来たいものだとラーハルトは強く思う。

それは奇しくもキルも同じであった。デートにまたこようと。

しかしキルはラーハルト以上にティファに甘い言葉を囁き、ティファを赤らめさせて弄り倒して楽しんだので、次回があるかは少し微妙そうなティファだがキルは全く気にしていない。。

三年以上も待たされたのだから、甘い責め苦を享受させる気満々だからだ。

偶にはデートもいいもので、十日に一回来ようとは、ラーハルトとキル、果たしてどっちが思った事だろうか・・・

後日談⑥　銀の髪のティファは・・・

「逃がすな！我等の秘密を知ったあれを!!必ず・・・・」

腹の大きな魔族が吠狂う。―天界の恥部―ともいうべき、駄天使長老達の置き土産のような愚か者達と手を組んで、大魔王バーンを殺し、以て魔界を大混乱に陥れ魔界の覇権を握ろうと狂人なる夢に狂った魔族の男が、邸内に侵入し、一切の秘密を知っていると言って屋敷に乗り込んできた侵入者を殺せと吠え狂っている様は滑稽だ。

見ている者は嘲笑い、見られている者は見られている事事態に気が付かずに、躍起になって侵入者を探すが見つけられずに焦るばかり。

此処は魔界の涸れ谷で街道からも外れており、後ろ暗い事を密談するにはぴったりの場所だった・・・筈なのに!!どこから計画が漏れた？あの侵入者は何を知っているのだと、肥え太った魔族が焦るのを―ソレ―は嘲笑いながら身を顰めた場所から冷たい眼で見つめる・・・・あぁ今回は外れだ。バーンに後で文句を言おうと算段を付けながら。

あんな者が、―私―の望んだ―強者―には値していない。しかし死神を動かすには少しばかり複雑な案件である事は認めよう・・・・・何せ魔族と天族がおてて繋いで魔界を大混乱に陥れようとしているのだから、この後あれを殺したら天界の愚者達も諸共にしないといけない訳だから、自己判断して尚且つ地位だけはある厄介者を弑しても、罰則喰らわないー私ーでないと無理だわな～。

豚の様な魔族も愚かなもんだ。自分の故郷たる魔界をそんな大混乱に陥れる莫迦は本来ならばいないだろうが、醜い豚のような魔族にはメリットらしきものはあるようだ。天界の秘術・ヴェルザーをも封印した法を用いれば確かに大魔王バーンに勝目は有る。あれが発動されれば誰にも、それこそ天界の三神様にも止められない。その後に封印されたバーンを質にすれば、覇権が転がり込んでくるという愚かな夢を見ている様だ・・・・・そんな事、金輪際無いのにな～。

その瞬間―世界中―から瞬殺されるってのに・・・・唆されたとはいえ無様なもんだ。

豚のような魔族が覇権を握れるかはともかくとして、天界の恥部た

る奴等にも確かにメリットはある。
豚のような魔族は所詮あいつ等にとっての捨て駒で、実行した豚男はその場でバーンを殺した罪で、死神か影に瞬殺されるのが目に浮かぶ。
大方その時は守ってやるという甘い戯言に唆されて、パーティー会場か会議等で近づいた瞬間にとでも目論んでいたのだろうが残念。やらせるわけないでしょう
「―私―が逃げる訳がないでしょう？」
「ッ！イオラ!!!」

音も気配もなく豚のような魔族の目の前に立ってやったらそれぐらいで狼狽してる・・・こいつの名前はなんだっけか？・・・まぁいいか、往生際の悪い不出来な奴の中級爆裂呪文なんて―私―に通じる筈とてないのに。
ズシュウ

イオラの嵐が止む前に、血の雨がその場を濡らす。
腹の大きな魔族は、銀の髪を揺らして冷たい金色の瞳で相手をつまらなさそうに見ている少女の持つ―刀―で腹を深々と刺されそのまま持ち上げられて、空中にほおられ両断されて果てた。
血の雨を降らした少女は一滴の血もつかずに雨の中を歩き、両断した男の腕から腕輪をするりと取り上げぬたりと嗤う。
「成る程、天界の宝物庫から盗み出された品確かに。」
少女は嗤って確認した腕輪を―金のマジックリング―に大切にしまながら周りを囲んでいる兵や戦士達を見回す。
誰もが自分に対して憎悪の表情を浮かべいる。
魔界を救った大英雄を弑そうとした大罪人を罰した者を、そんな目で見るのは理不尽だと思う事なく、それもそうだろうと、向けられている少女は納得をしている。
此処にいる者は魔界が浮上した事で幸福を得たと、幸せな道を歩けたという者ではなく、旧魔界において力と権力に媚びへつらい目下の

者達や弱き者達を甚振って搾取してきたゴミ屑共。
そんな輩が明るい未来を歩こうという善意の者達に所業を知られればそっぽを向かれて当たり前で、ようは旧悪がばれて新しい世界に居場所が無かった自業自得な者達。
それを反省して歩こうとすれば―甘い表の自分―は絆され周りに執り成しを測ったろうに愚かな者共。
反対の暗がりの道を自ら転げ落ちて来たから―甘くない裏の自分―にこうして殺されるのだから・・・
「自業自得という事で。」
にっこりと年相応の少女の顔で嗤いながら一言を言い切るその刹那、少女はその場にいる全員を絶命させる。
愛刀の―雪白―を無造作に振るって

―アレ―は愉しかった・・・ハドラーとの激突は何よりも愉しく甘美であった

雪白のリミットをリリースし、其の時持ち得る己の力を全開にして戦ったハドラーとの激突という名の喰らい合い。

命と命・思いと思いが真剣に激突したあの時、―私―は確かに愉しかった。

戦いが楽しいかというハドラーの問いに、―表の私―は楽しいか分からないがと言ってたが、間違いなく―私―は愉しかった。

―魔族―の私は愉しかったのに・・・・

「―もう―帰って来たのか・・・・」

ー仕事ー全てを終えて月明かりのパレスを散策し、あの時の楽しさを噛みしめていた少女に、憂いを秘めた声が掛けられる。

少女は慣れた様子で、声の主に振り返る。

「今晩は―バーン―。そんなに―私―に早く会いたかったですか?―仕事―の成果は後でしに行こうと思っていたんですよ。其れとも、報告をさっさと聞いて穢れた私を寝かそうとしているんですか?」

貴方が愛してやまない―幼な子―とはまるで違う、―私―の存在を秘っしたいのかと軽やかに言い放つ少女に、バーンは返答する事無く無言で少女・・・ティファに近づく。

普段の黒髪ではなく銀の髪に金色の瞳は雪石膏の肌を際立たせている。

外見と同じで―今のティファ―は普段のティファと全く違う。

いうはずのない皮肉を軽やかに口の端に乗せてコロコロと嗤っている姿なぞ、幼な子が絶対にしない事をして愉しんでいる。

その姿に溜息をつきながらもバーンはティファに近づきながら頭を痛める。

これで何度目か・・・・ティファがパレスで泊まると―こ奴―が表に出てくるのは

最初に―これ―に会った時は様々に意味で驚いた。ティファが泊まる事になり隣の寝室に入るのを見届けてから就寝して程なく、ティ

ファが自分の寝室に来ていきなりシーツの中に潜り込んできた。
一人寝が寂しいのかと思う間もなく、―ソレ―がティファではない・・・もっと言えば―ティファの自身の体で同じ姿をした全くの別物―だと直感が告げて、カイザーフェニックスを放とうとした時―ソレ―はクスクスと嗤ったのだ。
「今晩はで、初めましてバーン。貴方が―私―を表に出す事を望んで、数年越しにその望みを叶えて表に出てきた瞬間殺そうとするなんて酷いじゃないですか。」
酷く奇妙でありながら、しっくりとくることをケタケタと嗤って言い放つティファを見て確信をした。
―コレ―は最終決戦の公開処刑でティファに飲ませた自分の暗黒闘気がティファの魂と結びつき、表に出て来てしまった魔族のティファであると。
「私もティファなんですから邪険にしないでくださいね。取り合えず、―お腹―が空いているので暗黒闘気下さい。私このままだと消えそうなんです。」
「・・・・・断ると言ったら?」
「あっは!そうですね、―私―を餓死させれば残りは―綺麗な幼な子ちゃん―だけになるんですもんね・・・・・そっちの方は―都合がいい―ですよね。
綺麗な夢を見て優しい言葉を言うだけの者の方が好きですよね。それなら仕方がないですね。」
魂に結びついたとはいえ、生じたばかりの―モノ―は、酷く不安定でそのまま放って置けば消滅する筈であったのを・・・
「くれるんですか?物好きですね。」
何故か、消滅させるのが忍びなく暗黒闘気を分け与えてしまった。
己の死を軽やかに笑う様は、矢張りティファだからだろうか?
・・ティファもまた、死に掛けながらも自分達に笑っていたあの姿と重なったせいだろうか?
それは気の迷いなのではなかろうかと、暗黒闘気をソレが貪る姿を見て早くも与えて生かす事を選んだ自分に後悔したくなる

自分の手から出す暗黒闘気を夢中で貪る魔族のティファ・・・・・コレをダイ達が見ればどう思おうか？
気配は清廉さとは程遠い、血生臭を漂わすコレを・・・
最早生かす道を選んだは自分てあり、殺す事ができないのであれば
と、苦虫を潰した顔でバーンは一つの約定をソレにさせた。
「約束せよ、余の前以外に姿を現さんことを。」
「その約束をして私に何かいい事があるんですか？」
「なに？」
「ああ、綺麗な幼な子さんはこんな取引しないか・・・・言い直せば―何か愉しい事―下さい。出来れば誰かと激突したり、命の遣り取りするような愉しい事・・・言ってしまえば死神がしていた仕事そっくりください。」
「ッ！・・・・魔界が浮上したこの世界でそのような事が・・・・・」
「あっは！嘘ばっかり!!」
ダイ達やそれこそ側近達にさえこのティファを見られたくないと望むバーンに、―取引き―を持ちだしたティファはバーンの言葉を嘲笑う。
「この世界の―全員―が幸福に向かったいるなんて―夢物語―があるもんですか。
―誰―ですか？平和の世に馴染めず、馴染もうとせず、旧悪に浸りたい莫迦達は。
―何処―に行けば死神の手に負えない程の強者の謀反人と戦えますか？
殺してもいいでしょうか？この―平和な世界に不要なる者達―なんて。」
言い募りながらクスクスと嗤ってバーンに纏わりつくソレに、バーンはゾッとして思わず手を振り上げ払いのけてしまい、ティファの顔に傷がつくのを見てはっとした。
コレがどれほど幼な子と違う事を言おうとも、ティファ自身である事に間違いは無いのだ。
しかし傷つけられた当の本人は、其れすらも愉しいと嗤ってい乍ら

自分を詰る。
「酷いですね～。もとはといえば貴方の暗黒闘気を受けて目覚めたのが私なのに、私がこういう話をするというのも、―ティファ―が平和な世界に不要な者がいる事を承知している証なんですよ。
　違いがあるとすれば、貴方達の好きな幼な子は―話し合って―考えを改めて貰うと平和的解決に心血を注いで、―私―はそんな事はどうでもいいので話も通じないような凝り固まって、―死神―とても持て余す強者の悪人と戦えればそれでいいにです。」
「・・・・・そんな殺伐とした事の何が楽しいのか・・・」
「愉しいですよ。相手の意思が、良かれ悪しかれであっても強ければ強いほどその思いを通そうと命を燃やして向かって来るのを、此方も命懸けで戦うあの―激突のような食らい合い―を再びしたく。」
　バーンが吐き捨てる様にソレが言った言葉を否定しようとするのを、嗤って己の望みを言い切って見せた。
　魔族の闘争心と戦いを望む戦士としての性が、暗黒闘気の力を得て生まれてしまった魔族のティファの望みを。
　表の料理人たるティファには、到底理解できない思いの望みを。
　あの時、バーンの暗黒闘気が注がれ経口摂取までしたあの時、別たれるように生まれた黒い魂の望み。
　肉体分離に至れるほどまでに成長する事は叶わず、其れでも確かに存在してしまった―不要の自分―望みを。
　魔界が浮上し数年経った今、魔界が、ひいては三界が揺れ動く程の者達が動こうとしているのを憂えた表のティファとは反対に、隠れ潜んでいた―自分―は悦んだ。
　この事態なれば、自分が愉しめる場をきっとバーンが与えてくれる。
　自分が表に出て愉しみながら、世界の―掃除―が出来ると示せばいいのだから！
「コレに血が付く事は絶対にしないと誓う。少しでも幼な子に血の匂いがすると感じたら―私―を消しても構わない。一度だけでもいい、もう一度だけでも愉しみたいの。」

あの時のような苛烈な愉悦は感じられなくともだ。
超一流魔王で戦士のハドラーと比べるなんて贅沢はしない。どんな薄汚れた事でもするからもう一度だけ愉しみたいのだと・・・・・
「良かろう・・・・・」
その歪んで穢れに満ちた望みを、バーンは葛藤の果てに了と答え、ソレはにこりと嗤いながらバーンの右手の中指に忠誠の誓いの口付けを落とす。
先程の約定を本物にするべく
すなわち料理人ティファから血の匂いをバーンが感じ取ったと思ったその瞬間、自分の魂を、ティファ自身が傷つく事無く葬り去れる契約を。

以来数度の―仕事―をソレはこなして見せた。
キルの手にも余り、かつ天界の者達でも手が出し辛い堕落した上位者達の首を狩って来させ、其の度に約定は守られている。
「ジ＝アザーズ使えば返り血なんてつく訳も無しですよ。魂に？まさか！罪悪感なんて感じないんですから私にだって―血の匂い―がこびりつく事なんでないですよ。
大体―生き物―を殺して調理する世の主婦や料理人達からそんな匂いはしないでしょう？　同じ命を殺しているところは同じだというのに不思議に思った事は無いのがそもそも私からしたら変です。
そんなのは命を奪ってしまったという罪悪感か、血の匂いによって好んで返り血を浴びるか精神病んだ者かのいずれかで、魂を変質させたのが血の匂いを感じるというのではないかというのが私の見解ですかね。
私からすれば、強者と戦えて愉しいのであって、血を見るなんてどうでもよくて、過程が楽しいのに結果なんてどうでもいいんです。」
ようは強者と戦えて相手を倒せればそれでいいのであって、結果はどうでもいいのだと嗤っている。
その歪んだ思いが世界を裏側から救っているのもまた事実で・・・・
約定も守られておりコレを消す理由が無い事をバーンはいつしか諦

めた。
　コレは有用であり、そして・・・
「・・・・・バーン？」
「・・・・・・黙っておれ。」
　幼な子とは全く違う方法であり、コレ自体はどうでもよく思っている―結果―で世界を救っているのもまた事実であり、バーンは銀の髪のティファを抱き上げ歩き始める。
「―そろそろ―要り様であろう？」
「・・・・・・明日は槍かイオナズンの嵐ですか・・・・」
　何時でも、暗黒闘気が切れて苦しくなった時は、察しても決して自らは与えると言わなかったバーンが、自ら暗黒闘気をくれるという・・・
　何の心境の変化があったのやらと、銀の髪のティファは不思議になるが、これは悪い気がしない。
　表に出て初めて抱き上げられるのも、其のままバーンの寝室に連れ込まれるのも悪くはない。
　バーンはそのまま銀の髪のティファを寝台に上げて報告を聞きながら暗黒闘気を存分に与える。
　血生臭話をしながらも、自身からは決して血の匂いをさせない歪んだ不可思議なティファもまたティファの一部なのだと受け入れて。
　そして夢中で自分の掌から生じる暗黒闘気を貪っている銀の髪のティファは果たして気が付いているのだろうか？
　今銀の髪のティファは、両の掌を合わせ湧き出されるバーンの暗黒闘気を夢中で貪っているその様は、ミストが出してくれる料理の数々を夢中で平らげる―ティファ―と同じ様に無邪気な顔をしている事を・・・・

後日談⑦　帰りたいな　前編

帰りたい・・・僕は帰りたいんだ・・・・

大戦が終わって―色々―と起こり過ぎだよ、僕みたいな大ネズミモンスターに何をさせたいんだ皆は・・・・

大戦が終わった。
それは戦い合った地上が勝った訳でも、まして魔界側が勝利したのでもなく、後の世の史書家達がこの出来事で大賑わいするような終わり方で。
魔界の悲惨さを知った、神々の原罪を知った、其れが故に地上は双方に手を差し伸べ、ゆくゆくは魔界を浮上させ助ける事で終わった大戦を史書家達が見逃すはずが無い。
後の世に綺羅星の如く名が挙がる勇者サイドの彼もまた、悲惨な魔界を救いたいと心の底から思い、以て魔界と戦をしなければ世の中は須らく平穏が訪れるのだと考えていた。
確かに自分達モンスターは人に嫌われやすいが、それでもパプニカ城の人達、サババ砦の人達、そしてカールの隠し砦の人達も自分に優しくしてくれた。
最後の大戦場で弱い自分と部下達を、命を懸けて守ってくれもした。
そして共に駆け抜けた・・・・・戦場で傷ついた人達ともに救うべく、僕達が悔過人を見つけ知らせ、その場に大勢の騎士・兵士やロモス大会で苦難を乗り越えたゴメスさんやフォブスターさん達も一緒に。
だから思ったんだ
人とモンスターもきっときちんと話し合ったら仲良くなることが出来るんだって。
魔界を助けたいと思う人達が大勢いるんだから・・・・
僕が・・・・いけないのだろうか？

「は！初めまして!!僕は勇者ダイ一行で戦士見習のチウです!!!」

大戦後、終了と同時にその報告をクロコダイン自らがロモス王国・シナナ王にする為の約定により、クロコダインはかつて攻め込んだ城に参内をした。

その時にチウを伴って。

何で自分がとチウの頭の中で物凄い疑問符の記号が浮かんだ。

此処に共に来る前に分かれた仲間達ではなく、どうして戦士見習の自分と自分の部下の獣王遊撃隊の皆を引き連れてお城参内になったのかがさっぱりと分からない。

ロロイの谷でティファがバーンの魂と命を半分だけ分け与えられた事で一命を取り留めたあの後、大魔王達は名残惜しそうにしながらも魔界全土を慰撫すべく魔界へと帰り、自分達もそれぞれの場所で頑張り、目を覚ましたティファが笑っていられるようにするのだと故郷へと。

チウはクロコダインとマァムに付いていき、マァムは先にネイル村の両親の下に行った後―老師―に報告をすると言っていたので、チウもそちらに付いていこうとしたのをクロコダインに連れてこられた。

「お前は俺の後継者としてロモス王に引き合わせる。」

・・・・・はい？

「その後幾日か掛けてライリンバー大陸全土のモンスター達を訪ねていくからその積りでいてくれ。」

・・・・・・はい⁉

チウとしては何がなんだか訳が分からなかった。

いきなり天下の獣王の跡継ぎにすると言われて、はいそうですかといえる人なんて、ティファさんだって無い!!

そう言って抗議しようと口を開きかける前にチウは本当に王城に参内せられ、物凄いお偉いさんだと分かる衣装の人達の前に連れてこられてチウはガチガチに緊張をした。
別にお偉いさんに緊張したのではない。何せ魔界の一番のお偉いさんの大幹部の服を平気で握りしめるチウにとって、目の前の人達はシナナ王と宰相さんらしき人以外はあまり大した気配を感じられず、ならば何に緊張しているかといえば！今までは大勢の前で話すのは専らティファであり仲間達であり、自分は聴いているだけでいたのをいきなり前に出されて挨拶しろって緊張するなというのが無茶だ！
挨拶の時の声が裏返ってしまったのを、シナナ王は優しい瞳で見守り一言大義であると言った後のクロコダインの大戦終了宣言の報を受けた。
その遣り取りを見てチウは不思議に思った。
どうして世界中が大戦終了を知っているのにわざわざクロコダインさんは王様に報告しているんだろう？
チウが不思議に思ったのが伝わったのか、シナナ王はふんわりと嗤ってチウに話しかけて来た。
「チウ君や。」
「・・・・・へ？あ!!はい！」
・・・・忘れていたが、シナナ王はティファをティファちゃん呼びした強者であった。そして今回自分はチウ君と呼ばれるらしいと分かったチウは、間の抜けた返事をしてしまった後、すぐさまきちんと返事をしてシナナ王を感心させた。
まだ幼なさを残している中でも、礼儀を弁えようとしているのが見事だと。
「チウ君も聞いていたと思うが、大戦終了後にロモスではそこな獣王クロコダインの罪を永遠に許す宣言を出す約束をティファちゃんを中心として其方達にした事を。」
「・・・あ！しました!!・・・・そしたら・・・」
「うむ！二人共！バルコニーに行くがいい!!」
何かを宣言する様に高らかに言い放つロモス王の指さす方には、謁

見の間用のバルコニーに繋がる窓が開け放たれており、二人が言って見た物は、自分達を見て歓声に沸く群衆の姿がそこにあった。
「見ろ！あれが勇者様達をお助けした獣王クロコダインと武闘家ネズミのチウだ！」
「俺知ってんぞ!!戦いの中で敵から改心して勇者様達の味方になったって!!」
　後の世に―世界の繋がり―と呼ばれたあの現象時、文字通り数多の知識や情報が氾濫し、興味のあった者同士が繋がり合い、その中にはヒュンケルとクロコダインの事も―詳しく―知られてしまったのはやぶさかではない。
　しかし、世界はそれ以上の者を赦している。大戦の元凶すら許されたのだからと、個人は兎も角国家や市井レベルでは彼等は勇敢に様々な意味で戦い抜いた者として迎えられるに至った。
　それは無論、彼等の命懸けの行動の果てに待っていた褒美である事は言うに及ばずだが。
　シナナ王は果たしてあの時の約束を守り、大戦終了の宣言と共に獣王クロコダインの罪とその償いの道を明確にし、そして彼を赦す宣言を発してロモス城下を湧かせに湧かせた。
　新たな英雄達の一人が、このロモスから誕生したのだという好意的な感性をもって。

「・・・・・凄い人でしたね。」
「そうだな・・・シナナ王よ、この短時間でどうやってあれ程の国民達を招集出来たのだ？」
　ようやくバルコニーから離れ、お茶に誘われた二人はぐったりとしながら、王様業務に慣れてい元気にお茶を飲んでいるシナナ王に聞いてみる。
　大戦終了からまだ二時間も経っていないのに、あれだけの国民が一堂に会しているのが分からない。
「ほっほ、クロコダインは律義者の熱き漢だと専らの評判じゃ。であるのならあば仲間達と分かれたその足で、少なくともクロコダイン位

は直ぐに来るじゃろうと予測して触れ回らせたのじゃよ。」
大戦終了宣言とそれと同じくらいの重要宣言を出すと。
「・・・・・俺が来なければその徒労に終わっていたのでは？」
「なに、その時は終了宣言だけしてお主の事は後日にすればいいのじゃよ。」
「成る程・・・」
好々爺然としていながらも、外れた時の事も当然用意している王が頼もしく見えた二人であった。
全ての宣言が終わってお茶に誘われた二人であったが、チウの方はソワソワとし始める。
自分はクロコダインとの入城と謁見の間迄通して貰えたが、隊員達は近くの兵舎でデルムリン島にも行った魔法使い達と共に待機している。
如何に大戦の立役者の一人の身内であっても、アリクイだのスライム等が城内に早々は入れる訳が無いのだが、チウは其れが落ち着かない。
僕だけ良くしてもらっているようで嫌だな・・・
そわつくチウに察したシナナ王は、その日はそのまま開放し、三日に一度は参内して話を聞かせて欲しいとチウに命じて。
シナナ王の言葉に、流石に周りがざわめく。
何故モンスターの、其れもまだ幼年のチウがそんなに特別視されるのかと。
無理もない話で、たったの数か月前までモンスターなどこの城の高官達にとって塵芥も同義語であり、いないも同然であったのを三日に一度の参内を許されたのだから。
「ほっほ、これからは魔界と手を携えてゆく時代になったのじゃ。そんな壮大な事にいきなりついていける筈も無いじゃろう。じゃからの、まずは手近なモンスター達との交流から始めてみようかと思うての。
幸いチウ君とクロコダインは人語を解し、そして人柄も知れている。

それにダイ君達のデルムリン島とも交流してみたい所じゃが、まずは―近所―から始めてみるとしようかのとな。
チウ君は嫌かね？」
王の気紛れかと思われたその真意に、―大半―の臣下達は納得した。
何時か浮上する魔界とも、もしかしたら天界や精霊達とも交流するかもしれないよが来る前に、身近な―異種族―、すなわちモンスター達と交流をもって慣れさせようとしているのだと。
チウもクロコダインも何となくだがシナナ王の意図が伝わり、自分達でよければ手伝わせて頂きますと丁寧に引き受け、後日また来る事になってチウ達は兵舎に向かった。

彼の不幸の始まりは、王の意図を納得したのが―大半―であり、―全員―でなかった事。

「へぇ～、二人共そんな凄い事引き受けちゃったの・・・・・大丈夫？」
ネイル村の場所を知っているクロコダインの案内でやってきたネイル村で再会したマァムに早速心配された。
兵舎で隊員たちを全員回収した二人はそのままでぞろぞろと行くのはどうなんだろうと思い、キメラの翼でかってクロコダインが根城にしていた洞窟に隊員達にのんびりしていていいと許可を出し、―ビースト君―を臨時取り纏め隊長に任じてネイル村にやってきた。
そろそろ二人が来る頃だろうと、村の入り口でマァムが手ぐすねを引いて待っており、マァムに村の人達と引き合わせて貰いながらマァムの家に着き、ロカとレイラに挨拶をした直後の話。
「・・・・・王宮か・・・・大丈夫かよ・・・・」
「・・・・貴方・・」
「う！・・・・んむ・・・・」
マァムよりも、王宮に参内する話をロカとレイラの方が心配しているが、チウは明るく答える。
「大丈夫です！王様は―僕達―と仲良くなりたいと言ってくれたんで

すから!!
僕達の悪いところもきちんとお伝えした上で、其れでも良いところが沢山あるんだってお話します。」
チウの力強い笑顔に、ならば自分達はこれ以上口を出す事ではないと判断したロカとレイラは、その日は泊っていくように二人に勧め、夕食のときに―拳聖―は放浪の旅に出て行った事を伝え、聞いたチウとクロコダインをがっかりとさせ、マァムを微妙な顔にしたのであった。
それから数日間、チウはクロコダインの宣言通り、―あちこちのモンスター達―に会わせられた。
ライオンヘッドの群れには心底驚いた。あれに比べればリリパットの集落発見なぞ可愛いもので、人が行かない洞窟の奥にアンクルホーンやドラゴンソルジャー根城にしているのを見て本気でびっくりして、ブラウニーに癒されたのは秘密である。
兎も角様々な森のモンスター達とその上位種達と会ったチウは、クロコダインが見守る中礼儀正しく彼等とあいさつを交わし、次いで自分達の隊員をも紹介して仲良くなって概ね良好な関係を築くに至れてホッとした。
そして街中でもチウは子供たちの人気者になった。
「チウ君だ!!」
「今日も来たんだ！俺達と遊ぼうぜ!!」
「いいよ、今日は何して遊ぶ？」
ティファから贈られたトリートメントで全身を洗っているチウの毛なみはモフモフとしており、胴着も二日に一度は洗っているので清潔感があって可愛いチウは、柔らかい雰囲気も相まってすでに勇者一行のマスコットキャラクターとして認知度を広めた。
共に来ている数体のモンスター達も顔ぶれは変わるが全員お行儀がいい。
ビースト君は来ることは少ないが、クマチャは大体来ており、チウの次に人気があって広場で子供達を抱っこするだけで喜ばれている。
最早城下町の子供達にとって、モンスター＝チウ達であり、遊ぶた

びにチウがモンスター達を怒らせる事をきちんと子供達に伝え、其れさえしなければ、もっと言えば野生のモンスター達に不用意に近づかなければ害は無いとキチン教え、必然子供を見ている大人達も自然とチウの話を聞く事になり、むやみやたらにモンスターを怖れるのはナンセンスになりつつあるのだと思い始め、少なくともロモスの一部とモンスターが交流できそうな良い土壌が出来始めた。
　城下で一通り遊んだチウは、少しだけ足取りが重くなる・・・・城に行くのが少しだけ憂鬱なのだ。

　始めの数回は王様と話をする事に一生懸命になって、周りを見る余裕が無かった。
　モンスター達の住んでいる縄張りや、種族によっては入った途端に戦闘になってしまう事等を話、食料が少ない冬にはどうしても畑に被害が出てしまう事もきちんと話す。
　其の度に王は其れならばこうしてみようかの～と笑って諍わなくていい方法を考え、人が増えた時は何処なればモンスター達の場所を奪わずにすむかなど真剣に聞かれ、答えるのに必死だった。
　それも流石に十回も過ぎた頃、そろそろ自分一人でも城に行けるだろうから言って見ろというクロコダインの無茶ぶりに、おそるおそる一人で参内した時、門番の兵士達は心得たように親切に話しかけてくれ、行っておいでと頭を撫でられたのに勇気を貰い、いつもの様に兵舎にクマチャ達を預けて王に会っても楽しいひと時を過ごせ、クロコダインもライリンバー大陸のモンスター達に、これからは今まで以上に人と争わないように触れて回るのに忙しいのを知っており、出来るだけ自分一人で行ってみますと提案をした。
　モンスター達が近づかなくとも人間が近づきすぎた場合、今までならば襲って討伐されてしまったのを未然に防ぐ為であり、シナナ王もそこは民達に触れを早急に出すと言ってくれている。
　これからはモンスター達の縄張りマップを作り、人間が無闇に入らない注意喚起をし、村づくりや開墾をする際もまずは国に届け出をしてモンスター達の縄張りを侵害しすぎていないかを調査しての許可

制となる法整備を急がせると。
それと共に、モンスターの群れがある一定数を超えて暴走するモンスター達は討伐するとはっきり言われ、其れは仕方がないと二人は割り切る。
種族が増えすぎ群れが飢えれば理性を失い、その瞬間から自分達以外を―餌―として襲いかかって来て―間引き―をしなければ納まりがつかないのを知っているからだ。
実際にクロコダインも自分の住処をそれで脅かされたのでやむを得ず、チウもまた老師の下で同じような依頼を聞いて知っている。
チウはその時留守番を命じられたが、戻ってきた時の老師の悲しそうな顔から何となく察した。
襲ってきたモンスターを―全て―殺さざるを得なかったのだと。
だからそれは仕方がない。飢えがおさまるほど食べても、狂気に陥ったモンスターは二度と理性を取り戻せないのだから。
だからといって、それを口実にモンスター達を狩る不逞の輩も防ぐ旨を伝えられた時、クロコダインは喜んだがチウはいまいち分からない顔になった。
そんな?を言う人がいるのだろうかと。

良くも悪くもチウはティファに似ている。
違いはティファはきちんと世の中には悪党がいる事を知っており、チウはその類には無知であり、ティファ以上に純粋であったのだ

そして城に半年参内し、チウは城に入るたびに心細くなっていった

帰りたい・・・・老師様のいたあの優しい洞窟に・・・・ティファさん達と過ごしたあの愉しい時間に・・・・僕は帰りたいんだ・・・・

後日談⑧　帰りたいな　中編

お城というところに隊長は行く度に疲れていく・・・クロコダイン様と一緒の時はそんな事は無かったのに・・・・優しい隊長が溜息つくのは見ているだけで嫌だな～。

「チウ、今まで一人で城に行かせているが大丈夫か？」
「へ？」
「俺もそろそろ周りの事が片付きそうだ。シナナ王に其れの報告や内容を話すのも一度では出来ないからな。」
「そうなんですか？」
「ああ、だからお前の参内に合わせようかと・・・」
「クロコダインさん。」
　チウが一人で行くようになって二月近くが経ち、チウの溜息が増えているのに気が付いたクロコダインは、城で何かあったのだろうかと慮り、今までしてきたたことを王に報告がてら、チウに同行しようかというのをチウがその言葉を途中で遮るという珍しい事をした。
　チウはどんなに長い話でも遮ったことは無く、分からない事はきちんと後から聞く子なのだが
「クロコダインさんがしていたのは人とモンスター達が境界線で争わないように―双方―に話をつける為ですよね。そんな重大ごとなら僕の参内ついでにしては駄目だと思います。
　今すぐにでも言ってきた方が良いと思いますよ？」
　今クロコダインとチウとその部下達はクロコダインの根城洞窟をもっと快適にして住めるようにした所を拠点としてい。
　クマチャ達も快適な洞窟生活を満喫したいのだが、近頃城の帰り道

のチウの溜息を聞いて悲しくなる。
そしてその話を聞いたクロコダインも、近頃食欲が少し落ちてしまったチウを案じていただけに、同行の話を申し出たのだが断られてしまった。
「僕は大丈夫です。ただ・・・」
「ただ?・矢張り何かあったのか?」
クロコダインは僅かにチウが漏らした遣る瀬無い気持ちを感じ取り、食い気味に身を乗り出して聞きだす気満々である。
近頃チウは空を見上げて過ごす時間が長くなり、食事も二人で作るか、時たまネイル村に行くかマァムが来て作ってくれるかで出されたものを残すことは無いが、お代わりをしなくなったのをマァムも気にし始めている。
此処で何が苦しのかを言ってくれれば、戦う以外役に立てない武人の自分には無理であっても、神算鬼謀の頭脳派ポップ・大魔導士マトリフなどがいてくれるのだから相談相手には事欠かない!
ドンと悩みを言って欲しいのだが、チウの口からは別の言葉が飛び出した。
「城の人達は—皆さん—優しい人ばかりです。王様の質問にしどろもどろに話す僕を頑張れって言ってくれる人達なんです。」
良い事を思いだしながら話すチウに、ならばどうして悩んでいる様になっているのだと言いたくなったクロコダインの口は、チウの次の言葉で開かれることは無かった。
「ただ—難しい言葉—を全く分からずに、時折相手の方に聞き返してしまうのが心苦しくて・・・僕、もっと人の言葉を勉強します。」
相手の方と—きちんと—話せるように。

チウのやる気を聞いたクロコダインは次の日一人で参内し、シナナ

王に謁見して今までの仕事の成果を報告する。
　クロコダインはライリンバー大陸全土をガルーダに乗って巡り、人の住んでいる村や町の側に住んでいるモンスター達に、今後は人と諍わないように今まで以上に気をつける事と、シナナ王より贈られた―王宮特別相談人―の書状をもって街や村の長達と会い、シナナ王より託されたモンスター達とことを構えずの命令書を手渡しながら、モンスター達の方にも互いに不用意に近づき過ぎない様に注意をしている事を伝え、決して人側だけに向けられた片手落ちの内容ではない事を根気強く説明して回っていた。
「うまくいきそうかの？」
「シナナ王よ・・・これぱかりは時間が経たんと何とも言えん。世界全てがリュート村の様に直ぐになれる訳でもないのだからな。・」
「ふむ・・・しかしモデルはあそこなのだがの。誰ぞ彼の村から人と異種族の交流秘訣を教えに来てくれんかの？」
「そうだな・・・ポップとメルルを通じて、フォルケン王に打診してみるか。」
「おお！ポップ君達にも会っておらんで久しいからの。出来れば二人の元気な顔を見たいのだが、時にクロコダイン。」
「・・・何か？」
「チウ君の元気がない気がするのは儂だけかの？」

「そう・・・シナナ王様も気が付いていたんだね・・」
「うむ・・・―老師―殿、もうここはいっその事チウに貴殿の正体を明かし、何に悩んでいるのか聞きだしてはどうか？」
「いや・・・今更僕の正体を言ったら、あの子は自分が信用されていなかったんだって落ち込んで悩みを言うどころじゃなくなってしまうよ・・」
　チウが参内してまた溜め息を吐いているのを、クロコダインと普段はシーツを被って皆と生活している老師がシーツを取り外し、クロコダインときちんと対面して話し合う。

ビースト君こと老師の正体を、一緒に住むのならばとマァムがクロコダインにだけ教えてたのだ。
チウに言う時は、余程チウの機嫌がよく、自分だけ気が付かなかったや教えて貰えなかったと落ち込んでもすぐに立ち直れる環境を整えないといけない訳で、教えて貰ったクロコダインも、どのタイミングで老師の事をチウに話せばいいのか考えあぐねて話す気を逸してしまっている。
その事をブロキーナ老師が一番臍を噛み、物凄く悩み、話し合っている最中幾度も溜め息を吐く。
―あの人―の言う通り、僕はなんて馬鹿な事をしてしまったんだろう・・・
―あの人―の言葉が老師の心の中で重くのしかかる。
それは最終決戦のロロイの谷で、―料理人のティファ―に言われた言葉
チウ君を低く見積もって、愚かしい真似をした報いを受ける事になっても泣き言言わないでくださいね
冷たく言われた言葉に、今胸を貫かれるような痛みを覚える。

あの決戦時でダイ達が先行してパレスに侵入し、頃合いを見計らって第二陣たるティファを入れたメンバーがパレスに上がる前に、チウが最後の怪我人を助けに行き、その際老師と二人きりになったティファがすぐさま老師の正体を問いただした。
そんなおかしなモンスターを自分は知らず、気配と気の運行の性質がマァムとチウと似ていると言われては、さしものブロキーナも直ぐに白旗を上げ、そしてなぜこんな手間のかかる事をしたかを言った瞬間、ティファに物凄く冷たい眼差しを向けられ、拳聖とまで言われたブロキーナは慄然とさせられた。
ティファは瞬時に怒ったのだ。今更師が来たからといって、それを頼って油断を生むような低き者としてチウを扱ったブロキーナに対して。

「チウ君の心はそんな脆いものでも情けないものでは無いのは私が保証しますよ。
貴方こそチウ君を低く見積もり、肝心な時に師弟共に手を携えて戦おうと言わずに正体を隠した上で―隊員―になった事を何時か後悔しますよ。
愚かしい真似をして近くにいたとしても、この先―師弟―の様に深き絆でないと助けられない程の事がチウ君の身の上に振ってきた時、正体を隠して近くにいた師をチウ君が頼ろうと思いますか？私ならご免です、自分を信用していないと言ったも同然の相手を頼りたくもない。」
一気に吐き捨てられるように言われた言葉に、自分は高いところからチウを見下ろしていた事に気が付かされた。
ティファの言う通り、最早チウは心身共に強くなっており、共に師弟でこの世界の為に戦おうと肩を並べて船上を共にかけるに足る者となっていたのを見逃した自分の愚かさの代償を、今この時支払わされている・・・・まるで予言のようだ。
あの人は、大戦が終わった後にチウか、もしくはモンスター達に起こる事を予期していたのだろうか？
まるでチウが人の中に居る事で訪れる苦難を知っていたかのようなティファのあの言葉を思い出すだけで、ブロキーナの背筋に寒気が奔る。
最初の印象通り、ブロキーナはティファが怖ろしいままなのだ。
どう優しかろうと純粋であろうとも、先々を此処まで読んでいるかの如くのティファが。
そしてその通りになっている現状にクロコダインと共に嘆いている時、洞窟内部に冷たい気配が満たされゾッとしながら二人は構えた。
ブロキーナは身構え、クロコダインはこのほどロン・ベルクに作ってもらい渡された腰に装備できるアックスを構えた先にいたのは・・・
「キルバーン・・・・地上に来ていたのか・・・」

魔王軍の死神、不要なれば味方の魔王軍の者ですらも狩ってきたかつての死神は、赤黒い瞳を爛々と光らせクロコダイン達に挨拶もせずに洞窟入り口に立っていた。
敵であった時でも勇者達にも小馬鹿にしてではあるが挨拶をするキルは挨拶すらせず、冷たい気配は何事だと問おうとしたその矢先、キルの口から冷たい気配が吐き出された。
「君達はチウ君があそこ迄の目に遭って、思い悩んでいたのを身近にいながら知らなかったのかい？」
声音は甘くとも冷たい声と気配と物言いから、チウの悩みがキルにも知れた事を察した二人は、何がチウをあそこ迄悩ませているのか話してもらえない事を説明する。
自分達もただ手をこまねいていただけではないが、ブロキーナの事情も話したうえでどうするべきか丁度相談していた事を。
しかし、朗報というべきがキルはチウの悩みを大方察し、そしてその事で途轍もない怒りを覚えたのを反対に二人に話して聞かせ冷たい言葉でクロコダインとブロキーナを慄然とさせた。

大好きなキルバーンさんがまさか洞窟でそんな物騒な事を話しているとは思わないチウは、キルと再会した湖の湖畔に座ったまま見るともなく雲を眺めている。
いきなり空間が開いてキルが出て来て元気一杯に挨拶をされた時は驚いたが、嬉しくなって飛びついたのを優しく抱き返してくれた。
キルは時折地上に来ては人の生活や暮らしぶりを見て、それらを主たるバーンに報告しているのだとか。
「魔界が浮上した時は人間界とも国交結ぶと思うから今から人間のお勉強のし直しだよ。」
それまでは攻める為に弱点等の研究であったが、今回は人ときちんと交流する為に、人間の常識を勉強中だとか。
その話は近頃元気が出なかったチウを明るくさせる。魔界の人達も僕等と仲良くなる気があるんだとやる気が出ると。
「キルバーンさん！今僕もロモスの人達とモンスター達が仲良くなるようにしているんです。」
「そう、チウ君ならきっとうまくいくよ。」
「・・・・・そうでしょうか？」
「ん？何か心配事があるのかい？・・・・・まさか虐められて・・・」
「違います！虐められてなんて・・・ただ・・・・」
「ただ？」
「僕が―難しい大人の言葉―が分からなくって・・・・そのせいなのか相手の方の笑顔が怖く見える時が増えて・・」
「そうか・・・・宮廷言葉を使われるとチウ君にはまだ難しいね。どんな言葉が分からないのか言って御覧。僕が表にして分かりやすい言葉に置き換えて上げるから。」
幼い子供に宮廷言葉とは些か大人でない者達がいるのかと腹が

立ったが、頑張ろうとしているチウを応援するべく、落ち込んだチウを膝の上に乗せたキルは、空間から紙と筆記用具と木の板を出し、言葉変換表を作ろうと張り切った。
　チウは変わらず優しく頼もしいキルに嬉しくなり、思い切って聞いてみる事にした。
「そしたらキルバーンさん、僕が良く言われている言葉なんですが・・・」
　その言葉を言った直後、キルの手が震え筆記用具は粉々になり、少し用事があったのを思い出したとキルが言い出し、すぐ戻るから待っててねと頭を撫でられ空間を開けてどこかに行ってしまった。
・・・・・あの言葉は誰にでも分かる言葉で・・・・それでキルバーンさんは呆れてしまったのだろうか・・・
　置いてけぼりを食ってしまったチウは、またそっと溜め息を吐いている時、キルは怒りでどうにかなりそうであった。
　そいつらはチウがまだ大人の言葉を知らないのをいい事に、優しい表情でチウを騙して言葉で嬲り者にしている！
　シナナ王の前では発言しないが、廊下に出て少ししてから―色々教えようとしてくれている―者体の言葉を、チウは分からないのが辛いと言っていたが！冗談ではない!!
　チウを―鄙いなもの―と呼び、言葉の意味ががまだ分からないチウを見ては、仕方がないと―嗤って許してくれていると―チウは言っていたが!!チウをを虚仮にした愚か者達なぞ・・・
「そいつら全員僕が―根切り―にするけどいいよね」

後日談⑨　帰りましょう　後半

今日は王様の他に会う人がいるって門番の人達言ってたけれど誰だろう？

参内した時に門の兵士達はいつでもチウ達を笑顔で出迎え、兵舎に預けられる獣王遊撃隊のモンスター達も快適に過ごせる様にと常に果物を用意して待ってもらっている。

なんとなれば彼等は最終戦の決戦と地で命懸けで戦った英雄達であり、尊敬に値するというのが―兵士・騎士達―の間では常識化しており、他国でも同様で隊長・騎士団長達が時間が会えばチウとクロコダインを出迎える時もあった。

―現場―の者達は命を懸ける事がどれほどの事かを知っており、間違っても彼等を粗略に扱う者はいなかった。

そう、戦場を知る者なれば・・・・・

「何故我等も―あの鄙者（ひなもの）―と共に王の御前に呼ばれたのだろうな？」

「左様、本当に重大な件であれば、我等だけを呼び、あのネズミが参内してきても門前で追い返されればよいものを。」

「あの卑しいネズミはいつまで勘違いしておるのか・・・私達が折角―優しい言葉―でやんわりと―立場―を教えてやっているというのにの～。」

チウの参内に合わせて呼ばれた者達は一様に不満そうな顔をし、王の謁見に行く道すがらチウを悪し様に貶している。

大戦の英雄と言われているだろうが、どうせ戦場の端で―少しばかり―敵を攻撃していたのを大袈裟にに言って王に取り入るだけの口先だけのものだろうと蔑んで。

「確かあのネズミは勇者殿の剣を作った魔族から武器を授けられていたとか。」

「ああ～確かオリハルコン製だとか言っていたの。」
「あんな―ドブネズミ―には宝の持ち腐れよ。儂の甥が近々騎士団に入ろうとしていての。その武器を―有用―に使ってやるか。」
「ふっふっふ、あの大ネズミなれば武器を研究させて欲しいとでも言えばころりと渡すだろう。」
「返さないのですか？」
「いやいや、研究には時間がかかるからな～。」
「その通りですな。」
　その通りだと嗤っている者達をじっと見ている―目玉―がある事に気が付かず、広い王宮をチウの事を悪し様に言い続ける愚か者達は、流石に謁見の間にが近づき衛兵達の前では大人しく歩き、謁見の間の扉を叩き中に入れば・・・・そこに待っていたのは―今後の世界―には不要なる者達の一斉大掃除であり、愚か者達は直ぐに取り押さえられ呆然とさせられた。
　しかし直ぐに気を取り直し、何事かを喚き出す。
「王よ！我等が何故捕えられなければならないのですか!!」
「しかもそこにいる―道化―は何者です!!」
「何故我等を!!!」
　謁見の間には王とチウがいるだけと思って入った男達は、道化師の恰好をした者が王の座る玉座の隣に立っており、入ってきた自分達を見下すように見たかと思えば
「この者達で間違いありませんねシナナ王。全員捕縛してください。」
　自分達を虫けらか何かの様に見ていた瞳と同じ、聞いた者達の心胆を寒からしめる声で自分達を捕縛する様に王に要請し、同時に潜んでいた衛兵たちに瞬時に縛られ上げられた。
　捕まったもの達は当然何事かと喚きたてるのを、道化の男は喚く男に近づきそして手の甲で男達の一人の頬を打ち据える。
　加減なく打ち据えられた初老の男は痛みで呻いてうずまり、口から衝撃で抜けた歯が二・三本出て来てもシナナ王の表情は変わらず、道化の男と同じ位に怒りの表情を浮かべ男達を見据えている。

「初めまして愚か者達。僕は魔界の大魔王バーン様にお仕えしているキルバーン。
今回は僕達魔界の恩人の一人に―随分―な事をしてくれたみたいだね。そのお礼をしに来させてもらったんだよ。」
「あのネズミの・・・・ぐぁぁぁ!!」
愚かしくもこの状況でチウをまだネズミ呼ばわりした男もまた、先の男と同じ様に、キルに足蹴にされ這い蹲った背中を思い切り踏まれる。
「チウ君はね、あの大戦時敵の僕達を助けたいと真っ先に手を差し伸べてくれた優しい良い子なんだよ・・・・薄汚れたお前達があの子の名前を呼ぶ事も、まして悪し様に言った日には本当に殺してやりたくなるよ。」
他国であってもキルは加減なく、シナナ王も周りの衛兵達も止めずに黙って見ている。
一週間前、このキルからもたらされた報に、シナナ王達も烈火のごとく怒りに燃えていた。
今後空間使いのキルが、バーンのお使いをする為に各国の王達とすぐに会える権利を、各国とバーン達で協議しあい権利を有している。
そのキルが、怒り心頭に発しながらも、一度チウが実際どのような目に遭っているのかを悪魔の目玉で見た。
そこには顔こそ笑っている者の、悪意ある言葉をチウがそれと分からないように難しい言葉で嬲り者にしているのを、すぐさま首を跳ねたくなる衝動を押し殺して目玉に記録させ、無言でシナナ王に見せたのだ。
本当はその場で人知れず殺したかったのだが、―今後―を考えればそれではいけない。しかし愚か者達の―人生―を殺してやりたくシナナ王に知らしめた。
シナナ王は心の底から嘆き悲しんだ。
大戦の立役者である以前に、彼のような純粋な若人を笑い者にする者がこの国の中枢にいる事に、そしてその事に気が付かず彼を招き、知識を得ながらも楽しんでいた愚かな自分を。

しかしシナナもまた王を長年しており、そこからすぐさま巻き返しを図った。
愚か者達はきっとこの国だけではなく各国にもいるだろうと、キルに使い番を頼みこみ、自国の恥になる事を各王家に直ぐに情報を開示し、これからその愚か者達を厳罰にする旨も合わせ伝えて貰い、この光景は今まさに各王宮の王達と重鎮達も目玉の映像でしっかりと見ている。
だが、捕らえられた者達は各分野の大臣ではなくともその補佐役や調整役という重責を担っており、これだけで自分達を拘束するのは不当だと懲りずに騒ぎ始めた。
チウをこき下ろした事は心から詫びる、自分達の心得違いを反省するが、此処までの目に遭う事はしていないと。
その言葉に、衛兵達が動揺する。確かに目の前の者達に罪はあるが、此処まで重き罪だろうかと。
その心根を改めればよいのであって、魔界の神の死神が出張ってくるほどの事であろうかと・・・
しかしキルは当然その喚き声が上がる事を予想しており、擁護の声が上がる前にシナナ王に目配せし、目を向けられたシナナ王は一つ咳払いをし、注目を集めたところで―罪状―を述べ始める。
「この者達は儂が定めんとした新たなる法を穢さんとしたばかりではない！見よ！この―不正―　の数々を!!!」
シナナ王の言葉と共に、謁見の間の扉が開かれ大勢の官僚たちが何かの本を持って入って来るのを、縛り上げられた男達は目にした途端一様に顔を青褪めさせる。
入ってきたのは男達の上司である各部門の大臣達であり、その手に持っているのは
「王よ！これが魔界の神たるバーン様の配下の方達が尽力して下さり見つけましたこの者達の不正を記した裏帳簿で御座います！」
「またこの者達と長年癒着していた者達もお力を借りて全て捕縛し、現在取り調べを。」
「うむ！その罪の重さはどれ程だと、其の方達は考えておる。」

キルは本気で愚か者達を―根切り―にする気で来た。命を取らないまでも、宮廷人として、―その人生を殺す―方法を、親友にして長きに渡り魔界の神を政治面でも支えて来た影の宰相・ミストバーンにこの件を相談した。
彼もまた、あのロロイの谷でチウを評価し認めている。
そのチウを穢したからには報いをと、采配の下シャドー達に隠された二重帳簿を探り出させ、悪魔の目玉を総動員する勢いで日常を徹底して見張り癒着している者達を記録し、見つけ出した商人達の帳簿までもを調べ、文字通りしらみつぶしをして彼等の罪をつまびらかにし、彼等を文字通り殺しにかかったのだ。
そして、刑罰が下った
「長年王とこの国の者達を欺き文字通り獅子身中の虫たるこの者達は宮廷よりの追放を、そしてこの者達の親族もまた関わっていることも明らかとなっているので関わった者達もまた同罪に。」
「ふむ・・・これまではその類の罪は連座としてきたのだが・・・どうすべきかのチウ君？」
王の最後の言葉に、キルと王以外の全員がざわついき、当然這い蹲って罪を謝して逃れようとした者達は顔を即座に上げ、何を言っているのだという表情で王を見、その視線の先を見れば
「・・・連座とは、罪のない人達も罰せられる事があると、キルバーンさんが教えてくださいました。
連座は・・・それにそれ以上は僕には分かりません。
連座をせずに済んで、本当に悪い事をした人達以外が困らない方法はないでしょうか・・」
優しい人達の本性を知り、悄然としてもチウは厳罰を望まなかった。
この一件、当事者であるチウはまだ幼いと、彼の知らないところで処理しようとしたのを―ポップ―が待ったを掛けた。
この一件をただの種族虐めとして終わらせる気の無いキルが、シナナが各国に声をかけた様に、勇者仲間全員を抱き込みアイディアを出させた。

どうすればチウが受けた痛みを完全に晴らし、かつ国の蛆虫どもまで掃除し尽くせるか。
その知恵の大半は、まだ政治まで手が回らないポップ達ではなく、アバンとマトリフが遺憾なく―謀略―戦を仕掛けた。
ミストのシャドー軍団にモシャスをさせ、癒着していた商人に化けさせ接待の場を設け、高級ワインで口を軽くし余罪を聞き出させるだけ聞いた端から目玉に映像ごと記録させ、言い逃れできない証拠として提出した。
キルとミスト同様、彼らもまた深く怒りを沸かした。
自分達の大切な仲間をいたぶった者に善き者なぞ居るはずもなく、案の定叩いた以上の埃が出てきた。
それをチウに知らせずにとなるのを、あいつもきちんとこの事を知っておくべきですとポップが大人達に進言をしたのだ。
自分も入れて、いつまでも子供でいれるわけでもなく、チウなれば傷ついても今後の糧に出来る強さを持っている。
「あいつは凄い奴なんです！低く見ないでやって下さい!!」
その言葉に、大人達は庇護するだけを考えていた事を撤回し、チウを謁見の間のカーテンの隅に隠し、全てを見せたのだ。
大人達の予想通り、チウの心は深く傷付いた。
優しいと思っていた、共に良い世界をと・・その裏で自分を蔑み笑っていたのを知らないでいた自分が情けなくそれでも・・・
そのチウの言葉にシナナは力強く頷き、後日判決を出すと罪人達を引っ立てさせた。

・・・やっぱり僕じゃ駄目だったんだ・・・
後に残り、悄然としたチウをキルが優しく抱き上げる。
ボロボロと、様々な痛みで泣くチウの涙を受け止めるべく。
その二人の側に、シナナは近づき無言でチウに頭を下げる。
言葉にしては、チウがそれだけで気に病み、なれば行動でチウに詫びると決意して。

数日後、チウは参内の日なのにキルに連れられ、魔界でバーンとお茶を飲んでいた。
「あの・・・・僕は今日ロモスのシナナ王様と会うお約束が・・」
「ふむ、―余―と会うのは不満かチウ?余も同じ王であるが・・・・」
「え!いえ違います!!その・・・シナナ王様とのお約束が先だと・・」
「ふふ、其の方は律義者よな。安心するがよい、シナナ王には話はついている。余もその方から見た人の世がどういう者か知りたくて呼んだのだ。」
「あ、もしかしてキルバーンさんが言っていた人と交流する為の勉強の一環でしょうか?」
「其の方は幼いながらも聡く賢い。その賢き者から見た人間の世界はどうだ?」
「そんな・・・僕なんて―言葉―一つで躓いている駄目駄目です・・・ティファさんだったら・・」
「チウよ、其の方は其の方であり、幼な子は幼な子。其の方は自分を誰かと比べているが、例えばキルが自分なぞ大したことは無く、他の者を上げた時どう思う?」
「・・・それは嫌です・・・」
「であろう。」
「・・・・分かってるんです・・でもつい考えてしまうんです・・・・僕以外の人ならもっと上手くいくんじゃないかって・・・」
「そこまでに達するまでに、幼な子はきっと努力したのであろう。其の方が今まさに頑張ろうとしている様に。」
「・・・大魔王さん・・」
「焦らずともよい、其方の人生はこれからぞ。分からない時は己で調べ、人に教えを請い、研鑽をたゆまず積めばよいのだ。」
「・・・たゆまず・・・・・僕・・僕!頑張ります!!」
「うむ、良い返事ぞ。頑張るには美味なるものを食べるのも励みになろう。今日は余と話しながらゆるりとしていくが良い。」
「はい!!」
チウの表情が来た時よりも格段に明るくなり、自分に人界の出来事

を話しながらミスト特製のお茶菓子を食べ お茶を飲む姿がなんとも微笑ましいと、バーンは優しい笑顔でチウを見つめる。
今頃はロモス王城で、キルが仕掛けた久方ぶりの―大掃除―の大詰めをしている頃だろうと冷たい思考をしながら。
内政干渉になるだろうが、チウの一件を聞いて他国でも起こりえる事を考慮し、バーンもこの件に介入して人界の六王家全ても大掃除する様にシナナに要請したのだ。
そしてそろそろ判決が下っている。
終生出仕を赦さず、強制的に隠居させ半ば幽閉となり、一族の跡取りは身分の半降格からのやり直し。
通常であれば恩恵であろうとも、チウの目から見れば重きものに映ろうし、そこまでは知らせる気がないとこれだけは大人達が譲らずにチウはお茶会になった。
罪人達は、その後の世界の糧に、見せしめにした事は知らずにいればその方が良いと。
以降、異種族に不満がある者達は面と向かって王や重役達に意見する事をかまわずとなり、罰しないから不平をきちんと意見として出す様になった。
以降も異種族との間の軋轢や諍いがあり、悪徳な者達が絶えるなぞ奇跡が起きるなど無いが、それでも陰で迫害する者は白眼視する風潮は出来た。
そしてチウは、世の中の悪意を経験し傷付き、暫くは表面はともかく鬱々としたある日、ふらりとパピィに乗ってデルムリン島に行き、ダイ達に挨拶をして眠っているティファに会った。
暫く二人で居たいと言うチウの言葉を、ダイ達は快く頷いて部屋を出た。
チウの一件はダイ達の耳にも届いている。チウが何かしらの癒しを、ティファに求めにきたのだと察して。
スヤスヤと穏やかに眠るティファ、自分以上に様々な酷い目に遭い、それでも世界の為に己を使い切ろうとしたティファをチウは無言で見続ける。

日が傾く頃にダイが声を掛けに来た時、チウの顔は来た時とは違い晴々として、ブラスの勧めで夕食も共にとり、元気よく挨拶をして帰って行った。
何を決意したのかはチウは周りには一切明かさず、数年が経ったある日

「チウ隊長よ!!崩落した岩全部どけたがもう怪我人は見当たらなかったぞ!!」
「ありがとうございますゴメスさん!!クマチャ!他の子達にも撤収の準備をさせて!!ロモスの皆様もお疲れ様でした。王城に帰りましょう!」
ロモスの山間部で長雨の影響で起こった土砂崩れの現場に、ロモスの兵站部とチウ率いる獣王隊と有志達の手で救出活動が行われた。
今でも自分達の扱いが重すぎると、面と向かってではあるが言う者がいる。
それでもチウは腐らなかった。
言われないほどの者になろうと、眠るティファの前で誓ったのだから。
どの様な目に遭おうとも歩みを止めなかったあの人の様に、苦難の道を歩いてきた魔界の神や先達の様に、その列に自分も後を追うのだと。
必ず良き世界を皆んなで作れると信じて
いつかを夢見て歩いて行こうと
「帰りましょう皆さん!!」

勇者一行の結婚狂騒曲

先代勇者の結婚

長い間待たせてしまった。

それは今大戦よりももっと前の、ハドラー大戦の終結後から数えてゆうに十数年も―彼女―を待たせてしまい、そして彼女は待っていてくれた。

自分と結ばれる確率は零ではなくとも限りになく低く、おおよそ普通の女性ならば待っている筈もない事で、そもそもが―あの方―のお立場からすれば、待っている間周りの者達が待つ事を許してくれた方が奇跡のようなものかもしれない。

それは自分が世界を救ったものだから？

それとも待っていてくれた彼女の政治手腕と王としての指導者としての力で周りを黙らせたのかはわからないが、理由はどうであれ彼女と結ばれる機会を得られたのは僥倖。

それは純粋に彼女を慕っていたのもあるが・・・・―あの子達―が願った心優しい世界を作るのに、自分もそれに参加するための力を欲した打算も確かにあって・・・

おそらく彼女も、自分との結婚の理由はそこにもあると気が付くでしょうが受け入れてくれる筈。

彼女自身がこの世界から戦いそのものに退場してもらうと宣していたのと・・・・自惚れかもしれませんが、私のことをまだきっと・・・

「そのような訳で、フローラ様にプロポーズをしようと思うのですよロカ。」

「・・・・・・大戦終わって半年かかってようやくかよ・・。」

アバンの惚気としか取れない報告に、寝床から少しずつ起きられるようになっリビングルームで妻のレイラとともにアバンとお茶を飲んでいたロカはあきれたように溜息をつきながら頭をがりがりと掻いて、呆れている自分をポヤンとした顔で見ているアバンにまた溜息

をつきながら内心で嘆息をする。
半年前のバーン大戦の最終決戦時にアバンの生存を知り、必ず自分に会いに来いと言ってこさせた時も、こんな風にのんびりとした顔で来たものだから殴る気力が失せたっけ・・・
半年前の劇的な再会の時と同じような頭痛をロカは感じ、隣に座っているレイラも同じようにアバンに呆れているのかやれやれと言う様に頬に手を添えながら溜息をついている。
アバンを尊敬もしているが、同時に呆れてもいるのだ。
その気持ちは、アバンとレイラと長く一緒にいたロカにはよく分かる。
アバンの奴は昔からそうだ。
頭はいい、実力は隠していたから気が付けなかったが、ハドラー大戦が本格化する前から狂暴化してしまったモンスターたちの討伐の時も仲間を助け、被害を出さない戦い方に長けていた。
性格は物柔らかく、料理もできたので女性たちにも人気があったのに・・・・・恋愛に関してはからっきしなのはなぜなんだ・・・
まるで初心な少年のように好きな女の子にどうして良いか分からなくなるようで、何かの理由がないと好きだともいえない臆病のようになってしまう。
ヒュンケルの事があってハドラー大戦後は放浪の旅に出てフローラ様との間の進展が望めなかったのは仕方がなかったとしても、今回は違うだろう。
大戦が・・・・・―あの子供―を犠牲にして平和的に終結をした。
そう、平和的にだ。
魔界の軍勢とその首領を倒したわけでも、地上側がその力に屈したわけでもなく、お伽噺にしか出てこなかった天界とやらも含めて―和平条約―を結び、数日前に故郷のカール・現在住んでいるロモスの西の海に魔界の大陸が浮上した。
その数日後に、自分の親友にして大切な仲間のアバンが敬愛する女王陛下にプロポーズしますときたもんだ。
先の大戦と違い、平和的に終わったのだかっら、何故大戦終結後に

すぐにフローラ様にプロポーズしなかったのだと溜息交じりに聞いてみれば、
「大戦後に魔界が浮上する事はあの時点で確定事項でした。
であるのならば、すべてが落ち着いてからフローラ様に落ち着いてですね・・・」
「アバン。」
「・・・・はい・・」
「お前、フローラ様が好きだっていうこと以外に、自分が王配に相応しいってことを周りに言いきれる為の状況になるのを待ってたんだろう？」
「それは・・・」
フローラにプロポーズをするのがどうして半年もかかったのかと問うたアバンの一見理路整然とした答えをロカは遮り、ド直球でアバンの問題を言い当てた。
言っては何だが先の大戦後も、ヒュンケルというネックがなくともアバンは放浪の旅に出ていただろうとロカは睨んでいる。
それはアバンがフローラに結婚をしてほしいと言える―大義名分―を持てなかったから。
ハドラー大戦の時、現カール国王だった今は亡き先代王は病床に臥せっていたはいたが、平和な時代の王としてはまだまだ申し分なく政治をとれる状況であり、魔王を討った功績から勇者となったとはいえ女王となる事が決定していたフローラ王女と、学者の家系とはいえ身分が中流貴族程のアバンと無理に結ばれなくともよい状況であった。
ただ好きだからプロポーズをするという愚直な思いを貫くにはアバンは聡明すぎたのだと、ロカは直感で、ほかの一行メンバーはアバンの為人からそう推測がなされた。
平和な時には大きな力と過ぎたる知識は敬遠されるだろうと、宮廷から去ったアバンの心情を察して誰もがフローラとのことを追求することはしなかった。
しかし今回は違う。アバンは二度の大戦終結を成し遂げた者の一人としての功績の他に、一国の女王陛下の王配になって力を持つべき

大義名分をも手に入れたのだ。
それは魔界・天界と地上が和睦した事で起、国家規模から個人レベルで起こりえる変化やそれに伴う混乱を防ぐのに、アバンという男の知識と、最終決戦の大舞台で直接大魔王達との面識を持ったことで得た縁と、彼の弟子達と果ては魔王ハドラーという物凄い人脈はまさに一国女王の王配に相応しいという大義名分を。
天界は無論のこと、海越しとはいえどロモス王国と同じく魔界に隣接することになる国の指導者の一人として相応しい言える。
確かに筋としては間違ってはいない。カール王国も騎士団が強く、リンガイアと同じく武人色が強くはあるが、宮廷の魑魅魍魎達がいないわけでもなく、それらを黙らせなおかつ納得させて、心からではなくとも国をともに纏める為にはそれも必要なのが分かるが、分かるのだが
「いいかアバン！フローラ様にそんな―邪魔くせえ事―言うんじゃねぞ!!」
「・・・・ロカ・・しかし・・」
「男だったらな!!惚れた女に好きだから結婚してほしいと正面切って言いやがれってんだ!!!分かったかこの臆病もんの大馬鹿野郎が!!!!」
「・・・ロカ・・」
大切な幼馴染にして親友のロカからの鋭い物言いに、珍しくアバンはぶつけられた言葉を持て余す。
それが謀略・策略・罵倒であれば軽やかに返せる言葉を、アバンはいつまでも変わらずに愚直ともいえるほどの真っ直ぐなロカのこういった言葉にはいつも弱い。
それは自分が普段は出すことができず、ここぞという時になってようやく出せる胸の内に隠している情熱だから。
アバンはいつもロカのその情熱的な生き様をまぶしく見ていた。
その情熱のせいで短気で、時として短慮過ぎる事で問題になる事も度々あったが、それでもロカに変わってほしいと思ったことは一度として無かった。
自分はその情熱を見せる事で、知識や力を知られる事で、他者とぶ

つからないかとどこか恐れて、飄々とした態度で人と一歩引いて接していたから。
ロカの言う通り、自分は臆病なのかもしれません。
そんな自分は、矢張り一国の指導者の一人になるのは果たして良いことなのかと迷いが生じた瞬間、温かい手が、自分の両手をそっと包み込む。
俯いていた顔を上げて見てみれば、優しく微笑むレイラが自分の両手を包み込んでくれて、優しい声で言葉をくれた。
「アバン様、大丈夫です。女は、好きになった男性から欲しいのはたった一言なんです。」
愛しているので結婚してほしい
その一言が
無論、一国の女王の結婚がそんな単純なもので許される筈も無く、アバンが用意した筋道も正しい。
けれども結婚を申し込まれる当のフローラが欲する言葉はその一言の筈だと、レイラは優しくアバンに教え諭す。
「ですからアバン様、ありったけの勇気を込めて頑張ってください。
ロカだって、顔を真っ赤にしながらもきちんと言ってくれたのですよ？」
「おい!!レイラ!!!」
「あら、アバン様に置いてけぼりをくったあの時に、マァムを産む前に言ってくれた言葉を忘れてしまったの？
私のお腹に子供がいてもいなくても、好きだから大戦後には一緒になるつもりだったと言ってくれた言葉は私の宝物なのよ？」
「ぐむ!!」
「一生、ううん、私が亡くなってもその言葉を胸に旅立つつもりよ？貴方は違うのロカ？」
「・・・・違わねぇよ・・・・後、五十年は生きろよ・・」
「あらあら、くしゃくしゃのおばあちゃんになるはね、そしたらロカもよぼよぼのおじいちゃんね。」
「ぬかせ、俺は矍鑠とだな・・・」

「はいはい。」
勇者一行の戦士ロカと、僧侶レイラの結婚の決め手の言葉を思いもがけず聞いたアバンは唖然とした。
情熱はあれど、こと色恋を出すのを恥ずかしがっていたあのロカがそこまできちんとレイラに自分の心情を打ち明けたことに対して。
それはいったいどれほどの勇気がいっただろうか？きっと命を賭して戦う以上の勇気がいったはず。
己の赤裸々の心情を、他者に明かしてともに人生を歩んでもらうべく許しを請うのだから。
自分も、その勇気を出さねばならない時が来たのだと、アバンは覚悟を決め、それを感じ取ったのかロカがにやりと笑ってくる。
「何ですかロカ？」
「覚悟が決まったんだろうアバン。」
「頑張ってくださいねアバン様。」
「まったく、貴方達二人にはかないませんね～。」
大勇者と呼ばれようが、きっと自分はロカとレイラ、そして今はここにいないマトリフとブロキーナには頭が上がらない。
それは大戦の頃何度も死線を共に潜り抜け、お互い励ましあい時に意見の層をぶつけ合い、それでも互いの背中を守りあった掛買いのない仲間だからこそ、全員互いの良いところも悪いところも、そして弱さを知っているが故に。
フローラ様にあの理路整然としたプロポーズをする前に、ここに来れて本当に良かった。
アバンは晴れやかな心持でそう思う。
あれとてカール王国女王陛下に対しては決して間違ったことではないかもしれないが、―フローラ―という、いつく訪れるともしれない自分を十数年もの間惚れた気持ちを変えることなく待ち続けてくれていた一人の女性に対しては、酷い事なのかもしれないと気が付かせてくれたのだから。
「私、本気で頑張ってきます!!!!」
その言葉にロカとレイラは微笑みアバンを激励し、励まされ背を押

してもらったアバンはありったけの情熱のまま行動を開始した。
即日フローラのプロポーズを申し込んだのだ。
それは大勇者アバンにらしからぬ行動であり、彼をよく知るカール王国城内一同と、何よりもフローラ本人をも驚かせた。
アバンはフローラが昼食を終わる頃合いを見計らい謁見を申し込み、待つ傍らで馴染みのある文官・武官全員に声をかけ、文官は各部署全ての大臣達を、武官は兵団長と騎士団長両名を謁見の間に来させた。
この国に関わる重要なことを携えてきたというアバンの言葉に集まった一同。
そしてその事を聞かされ何事かと急いで来たフローラが謁見の間に入って来た時、アバンはフローラが玉座に座る前に一足飛びで彼女に近づいて腰を持ち、謁見の中央の間に二人で戻った。
突然の無礼と不敬と言われても仕方がないアバンの行動に一同は唖然としてしまい、いきなり中央に立たせられたフローラも何が起きたのかついていけない中、アバンは片膝をついてフローラの両手を押し抱きながらも、顔はしっかりとフローラに向ける。
その顔は真剣そのものであり、かつて城内に侵入してきたハドラーに対して怒りを見せた時と同じあの表情であり、そしてアバンの口が開かれ発せられた言葉は
「愛していますフローラ様。一人の男として、貴女を愛しています。」
「アバン!!・・それは・・・・私を助け、この世界を良くするために・・」
「その気持ちもないと言えば嘘になりましょう。それでも、私は一人の女性としてフローラ様、貴女を慕い愛しています!!」
「アバン・・・・」
「貴女を愛し、生涯を共にし、苦しい時も楽しい時も共に過ごし、傍らで共に老いていく事を、どうか私にお許しください。」
「アバン・・・・あぁ・・・・これは・・・・夢ではないのでしょうか・・・」
「フローラ様・・・・」
「ずっとアバン、貴方に言って欲しいと私が望んでいたことが見せてくれる、夢でも見ているのでしょうか?」

それは切ない女王の心情の吐露であった。
ハドラー大戦の数年後、先王が病没寸前に大戦の爪痕残るカール王国を継いでからずっと一人で直走ってきた王女の小さな胸に仕舞い続けられ、そろそろ、―国の為の伴侶―を娶らねばならないと決意した女王の切なる願いが夢を見せてくれたのかと。
その言葉にアバンは胸を締め付けられる。
いったい自分の臆病さが、どれ程この高貴なる女性の半生を縛り付け苦しめてきてしまったのか。
自分から結婚を面と向かって言い出すことはできず、されど自分を待たないでほしいと言う事もできずに、なんと無責任で惨いことをしてしまったのだろうか。すすり泣く声を聞いて周りを見てみれば、そこには古参の大臣達が、現カール騎士団長のホルキンスが泣いている。
彼等はアバン以上に知っている。
女王が、周りから伴侶を持つべきだと問う言葉を出させない為に、それ以前に、彼女が愛するカール王国とその民達をハドラー大戦の爪痕から救い、幸福にするためにどれほど心身を砕いてきたのかを。
敬愛する、愛すべき女王陛下自身に、漸く訪れた幸福に
「陛下、よう・・・・ようございましたな・・」
「我等臣下一同、心より陛下の慶事にお慶び申し上げます。」
「「我等の女王陛下万歳!!!」」
「「王国にい祝福を!!幾久しくお幸せに!」」
それはフローラがアバンに諾という前にプロポーズは成功した。
フローラ自身の幸福を、心から望む臣下一同の言葉によって。
フローラが赤子の頃から知る、老臣たちがまだまだ大臣達をしていたのが功を奏したともいえようが。
ハドラー大戦が始まる前にはお転婆であれど聡明な王の一粒種として、大戦の最中は幼き王女ながらも国の最前に立ち民達を共に鼓舞し、その後を賢女王となるべく研鑽し、長い道のりを歩いてきた成長を見てきたが故に、臣下に最も愛された女王が、政治的配慮よりも、彼女個人の幸せを優先した結婚を認められたのだ。

無論、相手が大戦終結を二度も導いた大勇者アバンだったからというのも最大の理由ではあるがそれを言うのは野暮であろう。
フローラは大粒の涙を流してアバンの言葉を受け入れ、そこからは様々な意味で早かった。
カール王国に仕える者達一同で、なんとたったの一月で二人を結婚式に立たせて見せたのだ。
一月でである！
ふつうは女王とその王配の結婚式ともなれば、少なくとも一年前には臣下に知らされ、そこから様々な用意がされる。
式場と立ち会う神官の手配、二人の結婚衣装、それら諸々に掛かる予算を組みながら、各国の王たちに打診して主要人物たちの招待の為の日程調整とそれらにもかかる諸経費と、相手方も当然慶事に相応しいものを用意する時間が必要だというのに、カール家臣達は、その一月内の結婚の為に、文字通り身を粉にした。
式は代々カール王家が使用し、大神官も御用達がおり、予算や諸経費も大戦が落ち着いている今なれば平時の時に組まれた先代の者がそっくり使えたのが良かった。
幸い平時で物価上昇は然程なく、各国の招待客の為の諸経費も同じように問題なくすんなりと組めた。
何よりも、この国が亡国の憂き目にあいながらもさしたる被害が出ていなかったのが功を奏した。
ここを攻めてきたバラン率いる超竜軍団は、無人となった王国を腹いせに建物を壊すことなく被害は武器庫のみにとどまり、そして宝物庫は一切顧みられることはなく大戦の最中に宝石一粒・金貨一枚も盗まれることはなく無事だったのもまた良かった。
大戦のせいで開かれなかった国の年間祭典・行事の浮いた費用を全て当てて解決された。
しかし衣装はそうも・・・・・いかなくもなかった。
女王としてのウエディングドレスともなれば、一年前から制作されるべきだろうが、先王の一つの遺言がそれを解決して見せた。
その内容とは、自分の妻となった先の皇后が来たウエディングドレ

スを着てほしい。
それはフローラを産んだ後産後の肥立ちが悪く、一月後に亡くなった皇后の意志でもあった。
産んで出血が止まらず、即日のうちに亡くなってもおかしくはなかった皇后は、娘の生まれた日を、自分の命日で暗く覆うのは本意ではないと懸命に娘を愛した母の強さが、一月という奇跡のような日々を紡いで見せたのだ。
その間皇后は、残していく最愛の者たちに様々な言葉を残し、そして願った。
自分は政治的立場手王の伴侶となりとても幸せだったと。始まりはどうであれ、愛し愛される夫婦関係を築くことができ、そして最愛の娘を見ることができたのだから。
「フローラにも、同じように幸せに・・・・愛するものと幸せを共に築けるように・・」
弱々しい息の中でも、赤ん坊のフローラの頬を撫でながら、行く末を案じ幸せを望む母親としての願いは、最愛の夫は聞き届けた。
真っ白の純白なドレスは、裾が花のように広がる美しいドレスであり、宝物庫の中でも最奥に厳重に管理され、半月に一度色褪せさせない保護結界を更新されることで守られてきたドレスは、父と母の望み通り最愛の娘が着る日が来たのだ。
各国の王達には使者達が熱弁を奮い、無礼になる事は承知しているが一月以内の結婚を許してほしい旨を、否やという王家は無かった。
それは、彼等が愛する—料理人—が願った幸せな世界築く一条となる事であり、世界は以前よりも優しさを以て治められようとしていたから。
結婚祝いの品も、後日ゆっくりと選ぶことが了承され、かくして一月後にカール王国は慶事に沸いた。
よく晴れた青空の下、大聖堂の中で厳かな式が行われ、アバンはフローラ女王の王配となるべく、婚姻の指輪を交換した後にフローラ自らの手で王配の冠を賜る。
プロポーズの時と同じく片膝をついて跪くが、あの時以上に胸がド

キドキとする。
それはどんな強敵と戦った時よりも緊張し、逃げ出したくなるような切なくなるような奇妙な気持ちは、頭の上にそっと冠を置かれた時に霧散し、別の気持ちが表に飛び出す。
自分こそが、フローラを女性として愛し守り抜くのだと。
その思いを胸に、そっと顔を上げれば、プロポーズを受けてくれた時と同じポロポロと泣きながらも、満面の笑みを浮かべた最愛の女性の素敵な顔があり、周りからは祝福の拍手と言葉の嵐で大聖堂内は埋め尽くされた。
それは式の参列者の最前にいた、ロカ・レイラ・マトリフと珍しくシーツ無しのブロキーナと、アバンの弟子、ヒュンケル・マァム・ポップ・ダイ達は言うに及ばず、バランと竜騎集三人組、チウ・メルル・クロコダインと、デルムリン島からはブラスト・ゴメちゃんが、魔界からは大魔王バーンと魔王ハドラーが駆け付け、各国の王や随行員達も心の底から彼らを寿いだ。
その日から数日、カール王国内はお祭り騒ぎとなり、艱難辛苦の道を歩いてきた女王陛下と大勇者の結婚は祝われた。
特に弟子の中でもヒュンケルの喜びはひとしおであったという。
自分という存在が、アバン先生を放浪の旅をさせる事になり、その後も行方不明となった自分探しをさせてしまったのが、二人の結婚の障害となったのではないだろうかと思い立ったが故に。
だがしかし、アバンはヒュンケルの喜びをきちんと受け取りながらも、その負い目は違うのだと、ダイ達も呼んできちんと告白をした。
あのロカに指摘された時の反省をそのままに伝えて。
「先生でも・・・・逃げることがあったんすね・・」
師はずっと間違わずに強いものだと思ってたポップを始めとした皆が、アバンにも臆病なところがあるのを知って驚いたが、すぐに受け入れようとした。
それは、力が・知識がありながらも心優しく弱かった一人の少女の軌跡を知っているから。
完璧な者などこの世界にはいないのだと、神々ですら間違うのだと

先の大戦で知っているから。
師が、臆病さを乗り越えた事を弟子たちが寿ぎ、師と同じく敬愛する女王陛下の幸せを全員が願ったという。
幾久しく倖あらんことを

元魔剣戦士の苦悩

―私が臆病者だからですよ―

その言葉に、自分は愕然とした。

師のアバンが十日前に結婚をした。相手は大国のカール王国の女王・フローラと。

式は、天候に恵まれ秋晴れであった。

二人は絵に描かれた、それこそ美しいお伽噺に登場するような王子と王女の如くであり、実際に王と女王だ。

厳かな式に、参列した全ての人々から惜しみない祝福の言葉を贈られているのを見るにつけ、他の弟妹弟子達とは違って自分は罪悪感が募っていった。

自分と詩の出会い方は最悪で、そのまま最悪な形で一度は縁が途切れた・・・・自分が断ち切ってしまった。

そんな自分のせいで、師とカール女王は十数年もの間別たれたのかと懺悔ををした時に、アバン先生は己の臆病さが招いた事だと話された。

その言葉はダイ・ポップ・マァムを始めとしたアバン先生を慕う者たちは驚いたが、すぐに受け入れもした。

先生とて完璧ではなく、完璧な者などこの世界には存在しないと知ったから。

それよりも、己の弱さを取り繕うことなく弟子の自分達にも包み隠さないで話してくれる師にこそ憧れる。

師はやはり偉大な大勇者なのだとダイ、ポップ、マァムはキャイキャイとして、レオナ姫は・・・・お惚気御馳走さまと・・・・あの姫らしからぬうししと笑った顔で盛り上がる中、自分はさらに落ち込んだ。

魔王ハドラーが敗れ、父を喪い住み慣れた地底魔城をでざる負えなくなったあの時、自分は魔王の敵であった勇者を憎む事で生を繋いだ。

全てを喪い自暴自棄になっても、いつかこの憎い敵を討つのだという事のみに執着をして。
完璧な勇者アバンの隙を狙うのだと幼いころから、成長し大戦が始まってからもその思いは変わらずで、ダイ達に打ち負かされ、ティファに教え諭して貰わなければ本当に非道の道を転がり落ちていたかと思うとぞっとする。
それは師の偉大さを、知れば知るほどに思いの影は深くなる。
「こんな未熟なものが・・・あの人と結ばれることが本当に許されるのだろうか・・」
「・・・・・・・・その問いに関して俺になんて言って欲しいんだよヒュンケル・・」

酒に酔った勢いで懺悔を聞かされた魔界の名工ロン・ベルクは頭を痛める。
夜も更け酒もそこそこ飲み終え、さて後は寝るかと一人暮らしの独身貴族様は気楽な一日を終えるはずが、迷いの森を夜更けに歩いている、それも自分のいるこの小屋に向かってくる者がいると気が付いた時には少々驚いたが、迷った旅人でもこの小屋の明かりに吸い寄せられたのかと思って放っておこうとしたが、小屋に近づかれた時馴染みのある気配につい扉を開けてみれば、悄然とした様子で酒を持ってきたヒュンケルだった時には本当にびっくりした。
こんな夜更けに、それも何の知らせもなく来るような者ではないからだヒュンケルは。
今世の中には、魔王軍産悪魔の目玉が無料配布されている。見た目は少々あれだが、魔力が無い者でも遠くの者と瞬時に繋がれるお手軽さから国から個人規模まで浸透、後数年もしない内には持っていない家庭はなかろうという代物であり、ロン・ベルクの小屋にも一体ある。
自分はそんなものはいらない、煩わしい事になりそうだと持たないつもりだったのを、自分の小屋に訪れる時に、前もって都合を聞けるようにさせてほしいと勇者一行の良い子達からお願いをされて仕方なく置いてある。

実際にダイ達はそれで事前に連絡をよこしてから来るのだが、今日ヒュンケルが来るんぞと聞いていない。
しかし、表情も気配もどん底のようなヒュンケルをそのまま返すにも忍びないのでとりあえずいきなり自分を訪ねてきた理由だけでも聞こうとそのまま招き入れて暫し酒を付き合ってみれば・・・・・独身貴族の自分には手に負えない悩み事を打ち明けられてどうしろと？
天井を見つめて溜息をついたロン・ベルクはきっと悪くない。
「なんでよりにもよって俺に相談すんだ？お前さんの周りなら悩みを聞いて、実際にためになる話をしてくれる奴はいるだろう？」
例えば人生の何たるかを知り尽くしたマトリフとか、親友のラーハルトや、武人ならではの不器用さはあるが熱い心で共に悩んでくれそうなクロコダインが。

ロン・ベルクの問いかけにヒュンケルはするりと答えた。
すなわち、心の奥底にある悩みを告げられる相手がロン・ベルクしかいないのだと。
その言葉にロン・ベルクは益々渋い顔をする。ヒュンケルの言った言葉に心当たりが一つだけあるから。
大戦の最中、パプニカで大魔王の篩の篩というとんでもない事態が勃発をした。
事態は勇者一行の活躍で事無きを得たが、その時一行の料理人の精神が崩壊する寸前まで追い詰められた。
その時のヒュンケルの嘆きを聞き届けたのは自分だった。
―どうして俺達は、ティファの事を・・・助けてやることができないんだ―
一行の者達を守り救いながらも、一行の者達がティファを助けられた事は一度としてできないことを心の底から後悔したヒュンケルの言葉を知るのは自分だけで、つまるところ今回も本当に切羽詰まっているのようだ。
前回は敬愛し慕っているティファの、今回は愛しているエイミを、

心の底から思うあまりに抱え込んでしまった思いを、誰にも言えずに苦しくなって、どうにもできずに吐露をするヒュンケルの話を、ロン・ベルクは黙って聞く。
いまだにこの世界にしてしまった事と、パプニカに攻め込んでおいてその国の三賢者たるエイミを慕うことがやめられず、大戦の最中には結婚してほしいと自分から言っておいて、いざこの世界が平和になった途端、エイミとの結婚が恐ろしくなった事を。
平和になったのだから約束通り結婚すればいいとロン・ベルクは思うのだが、ヒュンケルの考えは違った。
平和となって世間が落ち着いたからこそ、果たして自分がパプニカに住んでいて許されるのだろうか？
攻め込んだ軍団長の顔を一般人に知られずとも、王城に仕えている者達は当然ヒュンケルの事を知っており、苦々しく思う者達は当然いる。
エイミは三賢者の一人と将来を嘱望されている素晴らしい女性であり、そんな彼女の夫に自分がなる事で人生を台無しにしてしまうのではないかと恐ろしくなったのだと。
自分の仲間も彼女自身も自分を優しく受け入れてくれている、それこそ攻め込まれた国の頂点にたつパプニカ国王レオールと、王女レオナからもだ。
しかし、大臣達を始めとした一定数の者達はやはり受け入れづらいようで城内ですれ違う度に嫌悪の目を向けられる。
こちらからは話しかけることはできず、さりとて向こうからも面と向かって罵倒はされないのだが、時折侍女たちの立ち話でエイミのほうにその手の話が苦情として言われているようだ。
―元敵と本気で結婚をするつもりか―
―死んでいった者達はどう思うか？―
その話を聞くたびに、身も心も切る刻まられ気がする。何故彼女にではなく自分を罵倒しないのかという苛立ちが、どうすればエイミを守れるのか分からなくて苦しさだけが募って、雁字搦めになってロン・ベルクの下に来た。

ダイ達には言えず、師を悲しませるのも嫌でここにしか来れなかった。
「だったらすっぱりとその娘の事は諦めるんだな。」
ポツポツと話していたヒュンケルに冷たい言葉が降り、その言葉に愕然としたヒュンケルが顔を上げた先に見たものは、深い目をしたロン・ベルクの顔だった。

求婚の行方

秋晴れの良き日だというのに、パプニカ城内にいるエイミの顔は曇っていた。

それは彼女が今処理している書類だけが原因ではない。

確かに彼女の仕事は近頃多くなってきてはいる。それは彼女が三賢者の一人であり、民の陳情が多くなってきている昨今、民の不安に耳を傾け時に不安を持つ民衆の、その不安が高まっていると判断すれば、直に会いに行ってその訴えを聞き届け、内容によっては宰相若しくは王の耳にも入れる、いわば三賢者とは魔法のスペシャリストというだけではなく、民草と王室を繋ぐ架け橋でもあり、それがパプニカ三賢者が国民に人気がある理由である。

大戦が終わってからずっと、民達は不安の中にいるのは確かなことであり大戦前に比べて陳情が圧倒的に上がっている。

それも無理もない話で、いきなり大戦が始まり、終わりも唐突でありおまけに魔界が人界のすぐそばに浮上するのだから、楽観視するものなどほぼ・・・・あの料理人の女の子しかいないであろうと言えてしまう・・・・きっと彼女が目覚めていれば、優しい言葉と確固たる信念の下言葉を世界中に発して多少は民達の不安も和らぐのだろうが、エイミの顔を曇らせているのはそこではない。

今彼女の手には仕事の書類では無い物、お見合いの釣り書きを持っている。

自分には恋人がいる、のは城内では知らない者はいない筈なのだ!!

それでも三賢者の一人という事で、未婚のうちは自分と婚姻することでできるつながりを持つという野心をあきらめない者達がいるのだ。

幼少期よりパプニカの跡取りレオナ王女の側近候補としっ共に育って培われた絆と、今大戦での働きで益々国王からの覚えも目出度くなったのが自分の価値を多構えてしまったようで、この場合は頭が痛くなる。

実際に自分から求婚をしてくる者から、こうして画家に描かせた絵

姿入りの釣りが気を届けられるのは正直うんざりとする。
本人からの求婚であればその場ですっぱりとお断りできるのだが、釣り書きは自分で会いに行かなければならず・・・・間違ってもお見合いの席で断ることはしない！場を持ってしまっただけでも脈ありと思われるのはものすごく迷惑でしかない!!
そしてエイミのつかれている最大の理由はそこではない・・・・ヒュンケルだ。
ここ最近のヒュンケルはどこか自分に対して壁を作っているのを感じてしまう。それは口さがない者達がヒュンケルの過去と罪をほじくり返しているのが原因なのは分かっている。
ヒュンケルは実際に大戦開戦時、早々地底魔城からこの国に侵攻を開始してきた。
それは神々の夢告げと、発明王バダックの開発した爆弾・炸裂団、そしてアンデットに有効打を与えられた聖油攻撃のおかげで死者は―少数―で収まった・・・そう、死者は少数で済んだ・・・零ではなく。
最前線では百には届かずとも、それでも死んでしまった者達は確かにいて、遺族や友人、恋人たちからすればヒュンケルは仇であり、許せない者達がいるのは当然で・・・それでも、ヒュンケルは大戦の中で、そしてこの先も償う道を歩くと宣して、自分もその道を共に行く覚悟はできていると告げたのに・・・
大戦が終結した直後は宮廷も静かだったが、平和が素早く訪れすぎてしまったのか特に官僚・文官などの、前線の苦労や恐ろしさを全く知らない者達がさえずりはじめた。宮廷雀とはよく言ったものである。
その標的は外から入って来た者達に向くのが常であり、ヒュンケルは格好の的だった。
曰く彼はこの国を攻めてきた大罪人である、所詮はモンスターそれも魔王軍に育てられた得体のしれないものではないか、そのようなものが我が国の宝の一人である三賢者のエイミ様と結ばれて良いものであろうかと、したり顔でささやきあっている。
それは決して王族や宰相、三賢者達の前では話されていない事であ

り、それでも確実に囁かれている公然の秘密。
とは言え、その噂を消すためにレオナたちが動くことはできないでいる。宮廷では王族といえども独裁ができるわけでは無く、宰相・大臣・官僚達がいて国の運営が出来ているのであり、ヒュンケルの噂取り締まる為だけに、彼等を尋問するわけにもいかない。
一番いいのは早くエイミとヒュンケルが結婚をし、彼を本当の意味でパプニカ国民にして行く行くは騎士団長の地位につけ、功績を立てさせ彼の償う道を歩いていく姿勢を大々的に表に出すことなのだが・・・・・そのヒュンケルが日和ってしまったのではどうすることもできない。
ヒュンケルが噂で苦しんでいるのは知っている。
宮廷雀は本当にそこかしこにいて、囀りがヒュンケルの耳にまで届いていることを・・その噂のことでアポロは憤慨し、気にすることはないのですと怒り気味に言っている事がヒュンケルの救いになりつつも、降り積もって自分との恋仲を見直そうとしてしまっている・・・自分にマリン以外の身内がいなくてよかったと思う時が来るとは。
今代のパプニカ三賢者は司教テムジンのよって才覚を見出され孤児院から引き取られた。
それは自分の子飼いを作り、将来レオナ王女暗殺を成功させたのちに国を乗っ取る為の駒としての思惑があったようだが、テムジンにとっては残念なことに、アポロ・マリン・エイミは子飼い成功者第一人バロンと違って正義を志し、貫く者達手であったことだがそれはさておき、エイミとマリンは姉妹だがマリンは自分とヒュンケルの結婚にはむしろ積極的に賛成を表明してくれており、兄とも思っているアポロは言わずもがなである。
王も宰相も王女も、兵士・騎士達も、心ある文官官僚達も賛成してくれているというのに彼だけが・・・
鬱々と考えていると扉がノックされた。それも入室許可もしていないのに突然開けられ、エイミの形の良い眉がキュッと上に上がった。
三賢者はそれなりの地位が高くのようなことは初めてであり、しか

も相手が今まさに手に持っている釣り書きに付けられている小さな肖像画の人物であった。
「こんにちはエイミさん。」
「・・・・・貴方は・・」
「あぁ、名乗っていませんでしたね。僕は法務大臣の補佐をしているアルテイル家の次男でポラスと申します。」
「そうですか・・・・それで何の御用でしょうか？」
「これはつれない、僕は貴女に求婚をしに来たのですよ？」
エイミの不愉快さを気にもせず話しかけながら少しずつエイミに近づく。
ポラスは貴族の次男坊よろしく、有力な家柄やエイミ達の様に高い地位にいる未婚の女性を鵜の目鷹の目で狙っている者の一人で・・・・それは一族の者達の為に悪いとは一概には言わないが、それでもこんな無礼をエイミにとっては許せる事ではなく、近づかないように警告を発しよとしたその時、扉が再び音を立て開いた！
「エイミ!!!」
それは血相を変えたヒュンケルであり、エイミの近くまで来たポラス等目もくれずにそのわきを通り抜け
「ちょ!!ヒュンケル!!!」
なんとエイミを！お姫様抱っこすると同時に部屋を走って後にし、エイミ同様何事かと呆然としたポラスを置いていった。
「ちょっとヒュンケル！いったい何事ですか!!!下ろしてください！」
「・・・すまない・・・」
「ヒュンケル!!」
お姫様抱っこのまま王城内を歩かれるのは恥ずかしいと、顔を真っ赤にして抗議するエイミに、ヒュンケルは申し訳なさそうにしながらも決して下ろす気はないと腕に力を込めての意思表示をし、そして―共犯者達―の元へと辿り着いた。
「アポロ！バダックさん!!!貴方達まさか・・」
「ヒュンケル殿！レオール陛下とレオナ王女に謁見の許可は得ました！」

「ささ、お早く!!」
「お二人とも、お世話なりました!!」
事態についていけないエイミを、ヒュンケルはそっと降ろし、いつの間にか辿り着いた謁見の間の扉をゆっくりと叩き、中からあけられた扉をエイミを伴
い入った部屋には、アポロが言った通り国王と王女が待っていた。
「ヒュンケルよ、エイミと共に私たちに報告したいことがあるとアポロとバダックからあったが、さてはて。」
「本当になんでしょうね～。」
中で待っていた二人は、ヒュンケルの答えを知っているが如く・・・・レオナのようにレオールも少々崩れた笑いをしている。
その二人とは対照的に、ヒュンケルは真剣そのものであり
「私は！こちらにおられる三賢者のエイミ殿を娶りたく!!」
「ヒュンケル!?」
「そのお許しをいただきたく!!!」
ヒュンケルは覚悟を持ってきた。
ロン・ベルクに、エイミをすっぱりとあきらめろと言われた時、胸をえぐられるような痛みが走った時、更に言われた言葉で蹴飛ばされたのだ。
「それができないって言うんだったら！死ぬ気で惚れた相手を守り抜け!!」
そうだ、エイミは、あの人は自分と共に地獄の道も歩いてくれるとそう言ってくれたのだ。
そして自分は其の想いに応えたというのを忘れたとは・・・・
蹴り飛ばされたヒュンケルの行動は、今まで悩んでいた分を取り戻すかのごとく素早く王城で頼れる二人、即ちアポロとバダックに協力を頼み二人も否やはなく素早く場を設け、そして今エイミは王と王女、そしてこの国の重要な者達の前でヒュンケルに求婚をされた。
それはエイミにとっては夢のような出来事であった。
孤児院から引き取られた者と嘲られる事なく、レオナ王女にもレオール王にも優しく接してもらい、エイミにとっては敬愛してもし足

りない大切な人達の前で、愛する人から求婚をしてもらえた。
涙を堪え切れず、それでも震える小さな声でエイミはヒュンケルの求婚に応えた。
「お受けします・・・ヒュンケル。」

元魔剣戦士の幸せなる結婚式

ヒュンケルは走っていた

秋晴れの晴天の下、今日は自分と最愛の女性との生涯においてのたった一度の晴れの日だというのに最愛の女性を置いて行き、周りの手を借りながら着飾った―花婿衣装―が乱れようとも構わずに、教会の厨房目掛けて駆けている。

この教会はなんでこんなに広いのだ!!無駄だなくらいに広すぎるだろうと逸る心のままに内心で毒づきながら。

この教会は別に国が特別建てた場所ではなく、パプニカの片隅にあるマイナーな教会なのだが、なにぶん田舎は土地だけはあり、農作業のない冬場に教会作って雇用にするべを標語に掲げられたてられた教会は、できるだけ長い間雇用の産み場になるようにが目的なので数十年かけられた教会であった。

別に特別な贅で拵えられたわけでは無い。ステンドグラスや装飾も程よく田舎風で、では何が数十年かかったかといえば建物に使われた材質と教会内部の広さにある。

材質は一つ一つが耐熱性のレンガであり、生半可な衝撃ではびくともしない、教会作ったのか野戦用の城作ったのかどっちなんだという突っ込み待ったなしなほどの半端ない頑丈さであり、事実ハドラー大戦の時には周辺の住民はここに避難し、狂暴化したモンスター達から難を逃れることができたので、突っ込み入れられても本望であろう。

そして広いのだ、それこそ城並みに。

理由は本当に雇用場所維持のために、やれ教会に来た人が泊まり所で難儀しないように部屋がいるだの、懺悔室が一つでは忙しかろうだとか、それこそ長い廊下を歩いている間に教会で神に祈りを捧げる心持を作るのだとかいう・・・・・ある意味でっちあげに近い理由で広い協会が作られ、そのおかげでヒュンケルとその最愛の女性であり、本日をもって妻となってくれるエイミが希望した通りの結婚式を挙げられた訳なのだが・・・・・

「ヒュンケルかっこいいよ!!」
「あぁ本当に最高にいい男ぶりだぜ!!!」
「・・・・二人共世辞が過ぎるぞ。ラーハルトもにやにやとしていないでダイとポップの揶揄いを止めてくれ。」
今日はヒュンケルとエイミの結婚式。こういう時は新婦は着替えるのに物凄く時間がかかり、それは当たり前の事。
男性よりも結婚式に夢を多く持っているのが女性であり、今日この時をおいて一体何時着飾って好いた殿方に見てもらうんだとばかりの決戦の日でもある。
今エイミの方はドレスが着替え終わり、後はお化粧で時間がかかるだろうと察したヒュンケルの弟弟子達は仲間を引き連れ新郎ヒュンケルを襲撃し、誉めそやされる言葉に戦場では最も頼りになる兄弟子の姿は形無しとなって、ダイとポップと共に来た親友ラーハルトに助けを求めたのだが世の中は無常であった。
「ふん!ディーノ様とポップの誉め言葉は真っ当な評価だと俺も思うぞ。素直に喜んで受け取っておけばいい。」
・・・・親友も弟弟子たちサイドであった・・・
しかし三人の言う通り、本日のヒュンケルは本当に最高の男ぶりである。
結婚式の新郎衣装も様になっており、何より日頃は跳ねるに任せている銀の髪をきっちりとオールバックにまとめ上げているのがまたグッとくる。
あの髪型も悪いとは言わないが、この髪型で黙って立っていれば貴公子然としているのだから
「エイミさん益々ヒュンケルに惚れこむと思うよ〜。」
「・・・・それ俺がやっても似合う気しないから参考になりゃしねぇ。ダイなら・・・やっぱないわ。」
「あ!酷いよポップ!!・・・でもそうだね、そういうのって落ち着いた男の人にしか似あわないだろうから俺も無理しないでおこう。」

花嫁の衣装の着替えやメイクのお手伝い、そして寿ぎの為に大半の女性に行ってきますを言われて手持無沙汰になった男子二人は褒めてるんだか揶揄っているのだか分からない様相でヒュンケルの下にいるのを、何をしても兄弟弟子たちが可愛い出来たアバンの長兄は苦笑しながらも二人の事を許してしまう。
秋晴れのこの良き日、かつては兄弟弟子であっても死闘した自分を許して一行の中に入れてくれた素晴らく、掛け替えのない者達なのだから。
その様子を、親友ラーハルトは優しい眼差しで眺めているところに扉が叩かれた。
遂に花嫁の支度が整ったのだ。

「姫様・・・皆さん・・・私、こんなに幸せでいいのでしょうか・・・」
「エイミ・・あなたがこの日を迎えられて私達も嬉しいのよ?」
「そうです!微力ながら私の未熟な占いをしたところ、今日は特に良き日だと出たんです!」
「メルルの占いがそう言ってるなら大丈夫よ。安心して式場に行きましょう?」
肩の出るタイプの花嫁衣装に身を包み、今まさに女性としての幸せの中にいるエイミはそれがかえって恐ろしく感じてきたのを、レオナとメルル、マァムがそれは杞憂だと慰めているが、エイミの心はどうしても晴れずに不安ばかりが浮かんでしまい、支度が整ったと新郎に使い番を出したのだが式場に足が踏み出せないでいる。
ヒュンケルとの結婚が怖いのではない、彼が元魔王軍でありそれも敵の軍団長で自国を攻めてきたことで、それを詰る者が自分の前に来ることを恐れての事ではない。
その様な事になっても自分は彼の傍らにあり続け、共に地獄に落ちても構わないとまでヒュンケル本人にまでいったあるのだから。
では何がエイミを不安にさせたかといえば、幸せ大きすぐれば大きすぎるほどに反動で不幸があるのではないかという古くからの迷信が、この数日頭をよぎるからだ。

好事魔多し
パプニカには古くから、幸せを妬み嫉む魔物がいるとされている。
それは由来はなく、誰が言ったのかもわからないが良い事づくめの時ほど悪いことも起こると言われている。
その不幸が自分一人に向く分にはいい、怖ろしいのはそれが最愛の人にまで及んでしまう事が。
だがしかし、そんな不安は蹴り飛ばされた。
「エイミー・」
不安など世界の果てにでも蹴り飛ばせるほどの力強い声を発しながらヒュンケルが来たからだ。
その姿は絵本で読み、少女時代に夢にまで見た白馬の王子様そのもので、彼は力強く笑って自分を迎えに来てくれたのであった。
式場の新郎新婦の入場口で、待てど暮らせども現れないエイミを心配して駆けつけたヒュンケルは、憂い顔をしたエイミにそっと近づき、口を開いた。
「奇麗だエイミー・俺は今の君以上に奇麗な人に会ったことはない。」
ドストレートな誉め言葉を口にした。
もう遠回しだの遠慮もへったくれもないその誉め言葉に、周りの女性陣一同それこそお手伝いに来た真っ赤な他人のご婦人方まで顔を赤らめレオナ達とキャーキャー言ってしまい、言われた当の本人エイミは真っ赤になってフリーズしてしまった。
そうだった・・・この朴念仁にも近い朴訥な騎士様は、言うとなったストレートな物言いしかしないのを忘れたために、心がクリティカルヒットを起こし、不安とはなん増やとなって、ヒュンケルに手を引かれるままに式場へと向かい、レオナ達も興奮冷めやらぬ雰囲気のまま後をついて行った。
道半ばで待機していたバダックにエイミを託してヒュンケルは一足先に入口へと向かい、新郎新婦入場の合図を出してほしいとこれまたその係で待機していたアポロに合図を送る。
結婚式で神の御前での誓い合いをする時、先に新郎が入場して父親や男兄弟に連れられた花嫁を待って受け取るのだが、エイミにはそれ

がおらずアポロもヒュンケルの結婚式のために現場で働きたいというので、その役目は長年エイミ達三賢者のそばにおり、時折小さかった三人を陰日向に助けてきたバダックの役目となった。
　バダックとしても、なかなか城や周りの者達に溶け込めずに泣いていたエイミが大きくなり、世界を助ける働きを共にし惚れに惚れぬいた男の下に嫁ぐのだと思うと感無量となり、涙目でいた。
「エイミ殿・・・おめでとう。ヒュンケルなら、彼ならばきっとエイミ殿を生涯守って幸せにしてくれよう。いつまでも笑って過ごすのだぞ。」
「バダックさん・・・はい！きっと、きっと彼と共に・・・」
　バダックの心からの祝福に、ヒュンケルの誉め言葉でうやむやになった不安が完全に吹き飛ぶのを感じた。
　そうだ、自分達ならどんな時であってもお互いを守ろうとする。きっとヒュンケルなら私の事を・・・それなら、彼にどんな不幸が訪れようとも自分が守る、そうすればいいだけなのだと。

「新婦エイミ様ご入場です!!!」
　呼ばわれバダックと共にバージンロードを歩くエイミの顔には一片の曇りなく、つつがなく式は進み、そして誓いの言葉と誓いのキスを迎えた時最高潮を迎え、嵐のような寿ぎを宙を舞い、兄弟子の姿に弟妹弟子達は立ち上がって泣きながら祝いの言葉を叫ぶように紡ぎ出し、隣居るアバンも涙を浮かべて拍手を続ける。
　今日は勇者一行の一人の結婚式であっても王侯貴族の参列はなく、二人の住まうパプニカの国王レオールも来ておらず、レオナはエイミの友人として、アバンはヒュンケルの師として来ている。
　自分達にはこれくらいの式がちょうどいいのだと周囲に告げて、意外と情に厚いベンガーナ王は彼らの戦友ともいえるであろうアキームを自分の代理として送り出してきたがそのくらいであり、後はロン・ベルク、チウ、クロコダイン、マトリフ達はもとより、バラン、ガルダンディ、ボラホーンも今日はデルムリン島から駆け付け満面の笑みを浮かべて若き夫婦の誕生を喜んでいる。

特にロン・ベルクは結婚のお悩み相談をヒュンケルからされた時、発破をかけるためとはいえ少々・・・多分に酷い事を言った時、内心では本当に自分の言った通り諦めたらヤバイ!ここは発奮してくれヒュンケルと内心で祈っただけに、今日この日を迎えられて本当に一安心る分祝いの気持ちが強い。

天高い青空に寿ぎの音色が響き渡る良き日であった。

その後はヒュンケルは男仲間からもみくちゃにされ、アバン先生からは頭を何度もナデナデと撫でられ、エイミも幸せになってとみんなから祝福を一頻り受けた後は立食パーティーへと場は移行された。

王侯貴族は来ずとも、ヒュンケルとエイミの二人には掛け替えのない戦友達が大勢いる。

それはサババ砦から始まり、ロロイの谷での最終決戦まで共に戦場を駆け抜けたゴメスを始めとしたレジスタンス一同と、同じく谷で共に戦い抜いたカールの兵士達。

ゴメス達はともかく、カール兵とはティファの事を巡って敵味方になりかけたが今となっては戦友であり、招待したところあの場にいた全員が駆け付けてれたのだ。

そしてこの教会には地下室が広くあり、その中には地底魔城にいた不死騎団員だったモルグを筆頭としたモンスター達全員がいてくれている。

大戦時、ダイ達に敗れた後フレイザードが来て、地位的に目障りだった自分をダイ達もろともにしようと火山を爆発させたとき、自分は助けられ九死に一生を得たが、配下の者達にはすまない事をしてしまったという後悔を忘れたことはなかった。

しかし彼等もまた助けられたのだ、自分と同じくティファとクロコダインにモンスター筒に入れられ、クロコダインがティファから預かった収納のマジックリングに保管をされて。

それを知ったのは大戦が終わって落ち着いたころに、クロコダインによって知らされた。

嬉しかった・・・ハドラー大戦の時には自分を育ててくれた父のみならず友であったモンスター達が亡くなったのがひどく悲しく、だか

らこそ一層アバンという男を憎む事で心を保ち続けたのだが、今回もまた地底魔城で自分の大切な者達を喪ったのかと思っていただけに・・・モルグたちの入ったリングを受け取った時泣き崩れる程に。

住む場所は割とあっさりと決まった。

元地底魔城後はまたいつ噴火するのか分からないので、少し離れているがこれまた元魔王軍の基地・鬼岩城のあったギルドメイン山脈の地下に巨大な空洞があり、ゾンビ系や骸骨系の彼らが住むには最適な場所が見つかり、いつでもヒュンケルと会える状態となって、今日は主人の晴れの日だとモルグは招待された事を泣くほど喜んでいた。

当然エイミもその事を知っており、折を見てヒュンケルと共にあいさつに行こうと考えていたのだが、今日この後会えるというので楽しみにしている。

招待客の挨拶回りでヒュンケルとエイミはほとんど食べられないのをダイ達は目ざとく見つけ、今日は二人が主役だとレオナがドンと言ってきかせ、マァムとメルルとチウがよそってくれた食事に手を付けた時、ヒュンケルの形相が一変した。

そんな・・・まさかこれは!!

手に持った料理を信じられないもののように見るヒュンケルに、周りは何事かと驚いた。

今日の料理は勇者一行の料理人が作ったものではないにしろ絶品であり何にここまで驚いているのか問う周囲をよそに、ヒュンケルは一つの料理皿に目が釘付けになった。

それはハンバーグ料理であった。

取り立てて目を引くほどではなく、過程で作られているものと違うところと言えば一口サイズでカットトマトソースがふんだんに使われている珍しさくらいなそれくらいの者だが・・・それでも

「ヒュンケル!!」

「おいどこに行くんだよ!!」

「ヒュンケル!?」

仲間や親友、それこそ偉大なる師や最愛の女性の声にも止まらず、

ヒュンケルは走り出していた。
途中で厨房がどこか分からない事に気が付いたが、気配がした
自分がアバン先生以上に半生を共にした、絶対に間違えようのないそれは・・・もう一人の声とともに分かった。
「もう帰ろうよミスト～。僕にとっては・・・おや・・」
バン!!!!
教会の奥の扉を開けてみればそこにいたのは
「・・・・ミストバーン・・・」
自分を拾った時から、それこそ不死騎団に行くまで自分を文字通り食べさせていたと驚愕の事実を叫んでいた男、大魔王の参謀にして魔界の神の宰相にして暗黒闘気の師ミストバーンがそこにいた。
「・・・・・なぜ来た・・」
この状況を面白がっているキルとは違い、ものすごく不機嫌そうな・・・ヒュンケル自身が礼を失した時に出す気配を醸し出すミスト。
ミストはものすごく礼儀作法や気配りに対して厳しかった。
挨拶から始まり、目上の者に対する接し方すべてを叩き込まれ、おそらく今回は新郎とは言え一つの式の主役が客人達を投げ出してなぜ来たのかと叱責しているのだろう。
少ない言葉から気配と状況から言われているのがなんであるのかを察せられるほどにヒュンケルはミストバーンと共に長く濃密な時を過ごしてきた。
食事から風呂まで入れてもらい、戦いの修練の時はボロボロになっても扱かれたがそのおかげで強くなれた。
そのミストが、何故厨房にいたことが知れたのか、それはあの肉よりも多くかけらたトマトソースがけハンバーグであった。
「・・・俺は小さかった頃は肉ばかり食べて野菜を食べなかった・・ある日突然肉に野菜ソースが大量にかかるようになった。」
ヒュンケルもまた、ミスト同様にぽつりと返す。
そう、ヒュンケルはミストが図らずも口にしてしまった通り偏食家の一面が子供のころあり、これでは本当の意味では強靭な肉体にはできないと厨房で包丁を奮っていたミストは食わず嫌いなお子様ヒュ

ンケルに対してブチギレていた。
地上と違って魔界には野菜など贅沢品!!それを主が大枚はたいてにっくき地上からそうとは知られずに購入しているとも知らずに残すバカ弟子刻んでやろうとから発想を得て、肉にソースとしてかけて出した。
幸いといおいうかヒュンケルの舌はとある料理も大得意な元勇者のおかげで肥えており、肉には味付けしていないのでソースごとでないとうまみもへったくれもない細工を施し、おかげで渋々ながらも野菜もとるようになって長ずるにつれ偏食も消えはてた頃合いを見計らって通常メニューに戻したという物凄い逸話がある。
当時ヒュンケルは厨房の奴らはめんどくさい事をするとしか思わなかったが、よもや後年実はすべての料理が寡黙で弟子を滅茶苦茶扱く師の手料理と知ったときは本当に魂が飛び出た。
そして今日また、あの料理が出されるとは予想外の出来事。
和睦したとはいえ魔王軍に自らは入り、あまつ師と一度仰いだミストに反旗を翻したヒュンケルとしては結婚式に呼ぶのがはばかられ、後日エイミと共に挨拶に行くつもりであった。
経緯はどうであれ、ティファの言った通り今の自分の血肉全てを作り上げてくれたのは間違いなく目の前にいるミストバーンなのだから。
だが、何と言葉をかければいいのかヒュンケルには分からなかった。
ただ今までのお礼を言うのには言葉が浮かんでは消えてしまい、今日だけの事を言うのも違う気がして・・・似ているのだヒュンケルとミストバーンは。
共に情厚く、一度懐に入れたものをとことん大切にするところも、そして不器用なところも。
そんな師に対して、弟子は深々と頭を下げた。
全ての感謝の念を込めて。
思惑あれども、それでも死にかかった幼い自分を川から拾い上げここまで育ててくれたもう一人の師に対して万感の思いを込めて。

師であれば察してくれるだろうと
そしてヒュンケルの思いに応えるように、その思いは確かにミストに届いた。
ヒュンケルを拾ったのは監視していたアバンを見ていた時、映っていたヒュンケルに興味を覚え、もしも憎悪を忘れずに育ち師を殺すか無理でも別れた時に拾いに行き、育ててバーン様の配下とし、もしかしたら自分の器になるかもしれないと目論んでの事であった。
それでも、川から抱き上げた時、胸の中に何かが沸いたのは確かで、それは日を追うごとに大きくなり・・・あれは今であれば認められる、情が移ったのだヒュンケルという子供に対して。
それだけに裏切られた時は本心から落胆し、今回は結婚するヒュンケルを祝ってやりたいと思ったのだ。
それでも招待状は来ず、押しかけるのは憚られる、ならば料理の手伝いくらいはと思ってモシャスをして厨房の一人に紛れ込んで味付け担当をして、一品作らせてもらったのがヒュンケルが野菜をかけても嫌そうにしなかったあのトマトソースハンバーグをつくったのが・・・・・まさか覚えてくれていたとは
「・・・・分かったからっさっさと行くがいい・・」
それはぶっきらぼうながらも、どこか照れ臭いような思いを振り払うような気配に、キルは益々ニヤニヤとするが、ヒュンケルは顔を上げて
「戻る、後日行く。」
真面目な声を出して式場へと戻っていった。
正しく師の思惑を読み取って。

「ミスト嬉しそうだね～。何も邪険に追い払わなくってもよかったじゃない？」
「・・・うるさいぞ、主賓が客を待たせていいはずが・・」
「はいはい、―後日―ゆっくりと話し合うといいさ。可愛いお弟子さんとその若奥様と。」
「・・・・お前のそういうところは嫌いだ・・」

「僕は君の丸ごとが大好きだよミスト♡」
「っ!!もういい!!!帰るぞ!!!」
「はいはい。」

死神とか影はいつものじゃれあいをしながら帰途につき、式場に戻ったヒュンケルは何事があったのか周りから質問攻めにあった。
皆ヒュンケルのただ事ではない、それでも後を追ってはいけない雰囲気を察して待っててくれたのだ。
心配顔のエイミをヒュンケルは愛おしげに抱きしめ、この料理には覚えがありお礼をしに行ったのだとだけ告げた。
それだけであったが、ミストの発言を知っているダイ、ポップ、マァムとチウとクロコダインは察しがつきそれ以上は追及せずに、他もまたお祝いの席だからと祝う方を優先されてまたお祭り騒ぎの幕開けとなった。
ヒュンケルは思う
本当に今日はなんと幸せな日なのだと

さらに後日、とある事で魔界での料理の味付けはどんなのですかと、パプニカの料理人達に泣きつかれた時、自分は一応人間対応味付けだったのと、師に対しての小っ恥ずかしい思いがあって咄嗟に覚えていないと言ったのはまた別のお話

元魔剣戦士の結婚：後日談前編

勇者一行の料理人であったティファには後悔していることがある。
沢山の事を自分で背負いすぎて、各方面の人々に多大なる心配をかけてしまったのは致し方ないと割り切っている。
心配をかけられた方としては胸が潰れる思いであったと怒りたくもなるが、それでもあれ等はティファでなければ数多の命が消えていたのだと分かっているので、ティファの一年の眠りの後お詫び行脚をしてきっちりと謝罪をした事で一応収まっている。
身内にもあんな無茶は二度としないと確約したので許してもらってそれもいい。
問題は・・・・
「ヒュンケルとエイミさんのお式で料理作ってお祝いしてあげられなくて・・・・・」
これである。
ティファとしてはあの二人の結婚は自分が盛大にお祝いの料理をしたかったと後悔している。
―原作のヒュンケルとエイミ―はどう考えても、仮に結婚するにしてもしないにしてもあんなにすぐに、それこそ大戦の最中に答えが出ていないと断言できるからだ。
それこそ原作ヒュンケルなどは実際にパプニカを一度滅亡させてしまった大罪から己を咎人と断じ、勇者一行の盾となり身命を賭すことが償いの道だと信じて己の事など顧みる気ゼロだろう。
そうでなくばあんな自爆特攻にも近いような、最後は全身の骨に微細なヒビが入るような戦い方を選ぶまい。防御するというよりも己を守る気ないだろうと言ってやりたくなるのをこの世界では全力阻止を掲げてうまくいった気がする。
そしてエイミにもヒュンケルとの橋渡しが出来て嬉しく、最終決戦のあの日ヒュンケルとエイミの結婚話が聞けてとても嬉しかったのだ・・・・自分が全てを使ってこの世界を優しい方向にもっていくという自分勝手に思っていたくせに、全力お祝いをしたかったというの

は滑稽であろうが・・・
　はっきりと言えば、あんな事をしでかしておいて命を繋げられたのは自分を愛して諦めないでくれたみんなのおかげであり、一年の眠りで済んだ事はどう考えても奇跡以外の何物でないのだが。
「ティファさん・・・私達はその言葉だけで嬉しいですよ。」
「そうだぞティファ、何かにつけてティファやマァムが作ってくれたお菓子やデルムリン島の美味しい野菜・果物を届けてくれるだけで助かる。
　俺もエイミも忙しいから特に新鮮な野菜・果物は助かる。それに今はエイミも―大事な時期―だ。果物は本当に助かってる。」
「・・・そうですか?そう言っていただけたら嬉しいです。」
　ヒュンケルとエイミが結婚し、その半年後に目が覚めたティファはアバンとフローラが、ヒュンケルとエイミが結婚をしたことを知って嬉しさと後悔が生じた。
　アバンとフローラにはそこまでではないが。二人は王侯貴族であり、功績あっても城勤めの料理人の仕事を取る事はできないので起きていてもお祝いのお菓子を作るのがせいぜいであっただろう。
　人にはそれぞれの分と言うものがあり、大戦という非常時だからこそたった十二歳の小娘の言が通っただけであり、秩序が回復するのが望ましい世界ではしてはいけないだろうとはティファであっても分かっている。
　しかしヒュンケルとエイミの時は料理人ポジ買って出られただろうにと思うと落ち込んでしまうのを、ヒュンケルとエイミは優しい瞳でティファにお礼を言う。
　ティファは近頃はあまり外出をしない。悪魔の目玉で親しい人達と連絡を取り合い、互いに部屋に居ながらにしてお茶を飲んでお菓子を食べ合ってペチャクチャと楽しいおしゃべりができ、お互いに何か用事が入ったり時間が来たときはまたね～と互いに負担なく切り上げられることができる、いわゆるオフ会が出来てしまうので外に出たいという意欲が低い。
　しかしヒュンケルとエイミには、結婚式のお祝いが出来なかった代

わりのように、二人の休日の日を聞いて南国特有の果物と、生でも食べられる新鮮なお野菜を定期的にお届けをしているのを、新婚から少し経つが、それでもいつまでも新婚さんのような若夫婦は助かるとお礼を述べて、果物はさっそく切り分けティファをお茶に誘って時折エイミとティファが夕食を作って食べてから見送ることもある。
ヒュンケルとエイミにとっては、ティファが無事にそれも短期間で目覚めてくれたので文句なぞ何もなく、起きてくれただけで嬉しいのだから問題はない。
特に―今の時期―は、ティファが側にいてくれるだけで二人の、特にエイミにとってはほっとする。
「エイミさん、―お腹―がまた大きくなりましたね。体の異常はありませんか？」
「大丈夫です。安定期に入ってからお城で書類仕事をしている時に、定期的にロムス様が直々に見に来てくれるので助かってます。それに姉さんはともかくアポロが心配しすぎてくれて書類の持ち運び全部してくれるので反対に運動不足になる気がするくらいです。」
最期の方は少し苦笑していたが、エイミは無意識に膨らんだお腹を撫でながら幸せそうに近況報告をしている。
そう、エイミは今妊婦さんなのだ。妊娠して八か月目になり、安定期に入っているので初産ではあるが適度な運動も必要なので出仕を続けている。
幸い三賢者の今のお仕事は宮廷魔法使いの育成に携わることが多く、其の為に必要な書類仕事をエイミが引き受けている。
王城であれば宮廷医師長のロムスがおり、姉のマリンがいてアポロも何かと・・・少々過保護気味ではあるがフォローしてくれるので気が休まる。そして何より王城にはヒュンケルもいる。
ヒュンケルはこの度目出度くレオナ王女付きの近衛騎士団の団長に任命されている。
騎士団よりもレオナを側近くで守れ、何よりも三賢者達と仕事をすることができるので誰にとっても願ったり叶ったりであるのはレオール王のお陰。

「我が後継者を守るのに彼ほどふさわしきものがおるだろうか？」
当然罪を許されたとはいえヒュンケルに対する風当たりはまだまだ強く、反対した者達にはなった王の言葉はその一言のみであった。
強さは当然いうべきところはなく、大戦時の彼の生きざまが決定打となった。
勇者一行を助ける道を行くといったのは口先だけではなく、何度となく訪れだダイ達の危機をその身を張って窮地を乗り越えてきたヒュンケルを信じてみようと言われては表立っての声は消えて無事に就任できて今に至っている。
そして今や最愛の妻が身籠っている、これほど幸せなことがあるだろうか？
それに近頃エイミのお腹が通常の妊婦よりも大きいと言われてやきもきしていたら、なんと双子のようだ。
これはロムスの見立てであり、ダイがエイミのお腹に二人の生命力を感じると言って、しかもお祝いにラーハルトとなんと遠くからはロン・ベルクが来た時に、二人の聴覚が心音を二つとらえたので間違いはないだろう。
エイミのお腹には二つの命が宿っている。
「出産は大変だと思うけれど経験豊かな産婆さんをもう見つけたから安心してね。」
とはレオナ姫が胸をたたいて大丈夫よと励ましてくれた。
双子・三つ子、時にもっと多産の出産を手掛けた産婆をレオナはしっかりと見つけ、エイミの産み月が半月になった時に呼び寄せる手はずが整っている。
仮に何かの拍子に早産となっても
「大丈夫よ！マリンにその人の下に一度行かせているからキメラの翼で連れと来られるから!!」
全てにおいて万事抜け目のないレオナはかっこいいとはダイの言葉であった。
レオナをはじめとしたパプニカ城内はエイミの出産を楽しみにしており、気の早いポップなどは出産祝いにと大量のお締めを贈り、チ

ウも何か贈り物できないかとクロコダインと考えている最中。
それと同時にティファのヒュンケルとエイミ宅を訪れる頻度が増えた。
初産のエイミの様子を見に来ているのもさりながら、エイミの中で育っていく命を見るのが嬉しくて通っている。
悲鳴も聞かず、戦火を知らず、人の怨嗟を知らずに生まれ出る生命達・・・自分はこの子供達を見たくて戦い抜いた。
無垢で無邪気な子供達に影のさすことのない平和な世界・・・・夢物語ではもうない、現実にあるのだ今この世界こそが。
周りの心ある大勢の人々によって実現した奇跡のような世界、この世界がこのままの道を歩き、どうか次の世代もその次の世代もその道を言って欲しいと願う暖かな世界。
「生まれてくるのを待っていますよ。」
夕飯を取り終え帰る前にティファはエイミのお腹に手を当て願う。
無事に元気に生まれてほしいと。
そのティファの頭を、エイミは愛おしげに撫でる。
ティファにもいつか素敵な恋人を見つけ、そして今の自分のような幸せを味わってほしいとエイミも願って。
沢山の惨い目にあい、誰よりも沢山傷ついたティファがこれ以上ひどい目にあわずに幸せだけが訪れますようにと。
それから二月後のある日、ティファは―戦場―の只中にいた！
「産婆さんもう少ししたら来ますからねエイミさん！大丈夫です！呼吸はヒッヒフゥ～、はい！ヒッヒフゥ～を繰り返して、痛かったらヒュンケルの手を握って知らせてください。ヒュンケルその時は腰さすってあげてください。長丁場になるのでエイミさん、痛みの弱いうちに果実を擂り潰したこれを飲んでください、体力もいるので一口サイズのサンドイッチも齧るだけでもとってください。」
いつものように夕餉を終えてティファが帰ろうとした時、エイミが陣痛起こしててんやわんやになった。
すぐさまヒュンケルは城に登城し、レオナが手配しているという産婆を呼びに行ったが、あいにく産婆の方も難しい出産に助けを求めら

れて昨日から出かけているという。
仕方なく宮廷医師の中でも珍しい女性で出産経験のある者がいたので産婆が来るまでも繋ぎとしてヒュンケルの家に行き、女医の指揮の下ティファも残っている。
幸い破水はまだなので生まれるまでは時間がある。
夕餉も摂った後なので体力の方も大丈夫だろうと女医から励まされている内に産婆を連れたマリンもやってきて、万全の体制になれた時にエイミの出産が本格的に始まった。
大戦時の戦いの時よりも、ミストとの過酷な修行の時よりもヒュンケルにとっては苦しい時であった。
妻が痛みの声を上げている。それもこれも自分とエイミの愛の結晶たる子供を、我が子等を産む為に。
二人の間の子であるのならば、何故女性のエイミだけがこのように痛みの苦しみにのたうつのか、その半分でも叶うならば全ての痛みが自分に移ってほしいとばかりにヒュンケルはエイミが握りしめる手を片時も離さなかった。
どうか、エイミと子供達が無事でいてほしいと願いながら
夕刻から始まった陣痛は、双子の為か夜中になっても終わらず、未明になって黒髪の男児が産声を上げた。
産まれた子の声に、ヒュンケルは涙が流れた。
多くの生命を殺しかけたのに・・・・産まれてきてくれた生命が愛おしとは身勝手だと思いながらも・・・
「ヒュンケル、産湯をつかいますね。もう一人の子も無事に出てこられるようにエイミさん励ましてあげてください。」
「あぁ・・・頼むティファ・・」
へその緒を切った産婆と女医から一人目を受け取ったティファは、用意しておいた金盥のお湯に赤子を浸し、血の汚れ全てを拭って身ぎれいにし、産着にくるんでこの日の為に用意をしたベビーベッドに毛布を敷き詰めフカフカにして赤子を横たえる。
本当は直ぐに初乳を含ませてあげたいのだが
「もう一人、貴方の妹か弟が来ますので、少しだけ待って上げてくださ

いね。」
小さな体で懸命に生きている事を伝えんといまだに鳴き声を上げる赤子に、ティファは優しく話しかけ、小さな手のひらに指を入れれば、そっと握り返された。
小さな手は、それでも生命であると言わんばかりに温もりの塊であり、我知らずティファも涙があふれて頬を伝った。
「・・・あ・・りがとう・・・・産まれてきてくれて、本当にありがとう・・」
大戦から大分経ち、この赤子が大戦後初めてという訳ではなく、それどころか最終決戦のあの日であってもどこかで生命は生まれ、死にもした。それこそが自然、それを分かっていても、ティファは感謝の言葉を赤子に掛け続ける。
この平和な世界に、産まれてくてくれた事が嬉しくて。
程なくして、二つ目の産声が響き渡った。
薄っすらとした銀の髪の女の子が、兄以上の声を張り上げながら。
二人の赤子の誕生を祝うが如く、ヒュンケルとエイミの家が中を陽光で満たされながら

元魔剣戦士の結婚・後日談後編

ヒュンケルとエイミの子供が生まれて十日が経った。
その場で手伝ったティファは、ママデビューとパパデビューを果たしたエイミとヒュンケルをサポートすべく、そのまま十日間付きっきりで二人のサポートをして双子の面倒を見た。
初産のエイミの健康面は全く心配していなかった。ティファがおらずともそちら方面の経験豊富な産婆と女医さんが、産まれた後にママさんがしてはいけない事気を付けなければならない事をばっちりと指導してメモまで作って置いて行ってくれたので大丈夫。
いざとなったお城にいるロムス様もついている。
問題は、双子という事はお世話も二倍・・・相乗効果でもっと上がるかもしれないとティファたちは危惧したら案の定、どちらかがお腹がすいたと泣けば一方も目を覚まして泣き始める。
万事がその調子なので、近衛騎士として働きに行かねばならないヒュンケルには寝てもらうべく、ティファは防音結界を駆使して十日間を乗り切った。
まさかジ＝アザーズをこんな風に使う日がこようとはと、双子を寝かしつけてへたばったティファは若干現実逃避をしながらも、エイミに良いお乳を出してもらうべく三食ばっちりと作ったりもした。
幸いエイミのお乳で足りるようで、乳母さん雇うか貰い乳するか、もう少し育ったら乳児も飲めるヤギ乳確保のためにヤギ飼うかを本気で考えていたティファはほっとした。
赤ちゃん達のご飯とママ・エイミのご飯確保の次はお締めであった。
幸い兄ポップが大量に贈ってくれたので在庫の心配はいらず、お締め洗い専用の式を作ったのでそちらも負担なく過ごす事に成功。
順調に体重も増え、そろそろ免疫力もついただろうからお披露目してもいいのではなかろうかと産婆さんからも了解を得られたのを、―首を長くしてその時を待ちわびた人々―からは歓声の声が上がった。
エイミの出産祝いにまずはパプニカに王城一同を代表してアポロ・

マリンは言うに及ばず、バダックを伴ったレオナとダイがすぐさま駆け付け、全員が双子のかわいらしさに膝崩れを起こした。
男の子は少々ほっそりとしているが、笑うとえくぼができる愛嬌があり、女の子の方は丸くて福福としており、そしてどちらも誰が抱っこをしてもキャッキャと笑ってくれるのだ！
「・・・ダイ君・・・私も早く子供欲しい・・・」
「レオナ・・・・沢山産んでくれる？」
「・・・・二人共、そういう事は他所でやってね？」
あんまりにも可愛い赤ちゃん達に、レオナとダイがまず最初に崩れたのを、ティファは呆れて帰ってやれと言わんばかりにイチャイチャし始めた二人を追い出した。
それは双子が生まれてから三日目の話。
赤ん坊はとかく弱く、抗生物質などないこの世界ではちょっとした事で亡くなってしまう。万全を期して、まずは国内にいる者達を招き、本格的なお披露目は赤ん坊も両親も落ち着き始めた十日くらいが望ましかろうと―全員―に通達しようやくその日がやって来た時・・・・・エイミは色々とついていけなくなってしまった
なぜ自分の子供達のお披露目が自宅ではなくパプニカ王城の広間なのだろう・・・・
エイミの考えはこうであった。
遠方からチウ君やクロコダイン、ノヴァさんやロン・ベルク、デルムリン島からも竜騎衆とバランとそしてアバン様は必ず来るだろう。
この家は一般的な家よりも広いのでまぁ何とかなるだろうと思っていたのが甘かった・・
余も行くが気にせずにいてくれ
魔界の神様の一言が、―パプニカと書いて不運な国と読ませる―を発動させてしまったのがいけないのだ!!
そんな超大物ゲストが一般家庭よりもランクが上とは言え、市井の家にお招きなんて出来っこない！たとえ当人と周りの側近達が気にしないと言おうとも！常識的にさせられるかそんな事!!
最悪はアバン王がお忍びで来るくらいに考えていたのはなにもエ

イミだけではなくレオナ達もそう想定していたのを、お披露目を聞きつけた魔界の神様が新書を死神様に持たせて行く旨を伝えてきたからさぁ大変、受け取ったエイミは目を？いて、即効ヒュンケルに頼んでレオナに知らせてもらって、城は上を下をの大騒動。
「こうとなれば城に招くほかあるまい。」
単なる子供達のお披露目の筈が・・・・・
とは言え彼の貴人を迎えるのは二度目でありその時のノウハウを活かせばいい！
今回はそう大ごとになる筈がない!!・・・・・そう思った当日迎え入れたパプニカ宮廷人は涙を流した。
あちこちからばらばらに来るのも迎える方も大変だろうと、魔界の神様の優しさから―全員―で城の中央にキルが空間を開けて通ってくるというので出迎えてみれば・・・
「ようやくヒュンケルとエイミさんの赤ちゃん達に会えるのね。」
「昨日は嬉しくてよく眠れませんでした。」
「お土産気に入ってくれますかね？」
「フカフカの手作りぬいぐるみなら大丈夫だろう。」
先頭はマァム、メルル、チウにクロコダイン、この辺は順当であった。
「この年になっても赤ん坊を見れるってのは嬉しいもんだな～。」
「俺は初めて人間の赤ん坊を見るな。」
「僕も・・・新生児の子を見るのは初めてですね。」
「ノヴァ君の周りは大人が多かったようですね～。」
「俺の人間の子供ってったらガキンチョやニーナ位の年齢だったな。」
「・・・そもそも子供に会う機会があったこと自体驚きだろう。」
「私も・・・ディーノとティファの二人だな。」
マトリフ大魔導士にロン・ベルク、ノヴァにアバン王とバランと竜騎衆は想定済みで
「余は初めてだ。」
・・・・・・元凶様がやって来た・・・それもいつものお供・キルとミストに加えた傍らに何故か魔王ハドラーも従えて!!

一体これから何が起きるのか!?
自分たちの子供のお披露目ではないのかと泣きたくなったエイミはきっと悪くない。
のほほんと側近達とのんきな会話をしている大魔王様が全部悪いだろう!
しかも質が悪いのが非公式だから礼はいいとか言ってるところが微妙にイラっと来たのも悪くないはずだ!
その証拠に、バーンが何かを言う度に常識人・魔王ハドラーが胃を抑えている。
とは言え来てしまったものはしょうがないとレオール王は早々に割り切り、赤ん坊を寿ぎに来てくれた一行をきちんと出迎えた。
「遠路より我が国のヒュンケルとエイミの子を寿ぎに来てくださり嬉しく思う。」
「息災そうで何よりだレオール王、過日あった時よりも顔色が良いようで何よりぞ。」
思いがけずの訪問とは言えそこは矢張り王族同士の挨拶をして迎え入れ、少ししてからティファと一緒に待つ双子がいる部屋へと向かった。
陽光のさす部屋の中に、ベビーベッドを柔らかく揺らしているティファは、やって来た一行を座ったまま笑って迎え入れる。
気分は双子を守る乳母である。
双子は眠っているようで、一行が部屋の扉を開けた時、人差し指で口を閉じる仕草をしたので全員物音を立てずに部屋へと入った。
人間の赤ん坊を初めてみたロン・ベルク、竜騎衆、チウとクロコダインは相好を崩し、赤ん坊を久方ぶりに見たバランは在りし日を思い出して泣き崩れそうになるのをぐっと堪える。
マァムが生まれた時に立ち会ったマトリフも笑顔の大盤振る舞いをして、ノヴァも眠っている双子を優しい笑顔で見続ける。
眠っているのならばこのままにしておいてあげようと、引き続きティファに見てもらって全員部屋を出ようとしたところ、バーンがそっと男の子の頭を撫でた時、何かを感じたのかパチッと目が覚め、

そしてバーンを見て笑ったのだ。
その様はまさしく無垢であり無邪気に笑い声に、バーンは胸が熱くなるのを感じるままに
「其方達が生まれてきてくれた事を嬉しく思う。ここに集った者達全員が、其方達に会えるのをとても楽しみにしていたのだ。
約束しよう、其方達が大きくなる頃までに、世界の者達が仲良く暮らしているのが当たり前な世界にする事を。」
まだ頑是なく、言葉も世界も知らない赤子達に寿ぎだけではなく誓いを述べ上げたのだ。
未だに戦火の爪痕を残し、地上界側には最愛の者を喪って怨嗟の声をあげる者達が数多くいる。
命を失わなかったとはいえ柱の落下のせいで故郷を失い、再建がままならず恨む声もまたしかりで・・・・それらから逃げることなく、誹りや罵倒を受けようとも償う道を歩き、三界の共生の道を確固たるものとすることをバーンは目もまだ見えていない赤子等に誓い、それを聞いた他の者達も踵返してベビーベッドに近づき、赤子等とバーンを囲むようにして胸中で誓った。
バーンの誓いを自分達もまた果たすのだと。
後にそれは―新生児への誓い―と後世には伝えられた伝説的な一幕であった
この日を起点として、大魔王バーンは言うに及ばず魔王ハドラーとカール国王アバンとパプニカ王レオールが音頭を取って様々な融和政策を次々に押し進め、たった十年で魔族と人間の互いの往来を認め合い、盛んなる交流発展を遂げさせるきっかけとなった日であった。

「双子は男の子はポラリス、女の子はスピカだ。」
どちらも明け方の星から取ったと、別室でヒュンケルが双子の名前を発表した。
「意外だな・・・俺はてっきり男児にはバルトスとつけるかと思ったのだがな・・」

「・・・俺もひと時はそう考えたが、あの子には何の思惑もない道を歩いたほうが良いのではないかと思ってな。」
男の子の名前も明け方の星の名にしたのが意外であると述べたハドラーに対し、ヒュンケルは命名の意味を語りだす。
確かに言っときはハドラーの言ったように、最愛の父にして尊敬している騎士の名を贈ろうと思ったが、世界は今戦う以外の道を歩もうとしている。
だからと言って別に騎士も戦士も否定はしない、否定はしないが将来子供に名前の由来を聞かれた時、バルトスの由来が枷になってしまっては・・・ただ尊敬している父の名前だったというだけが、この子の選ぶ道幅を狭めてしまうのではないのだろうかと今から思うのは取り越し苦労だろうか？
しかしエイミにも相談した時、少しでも心配になるのであればやめておこうと笑って賛同を得られた為、ああでもない、こうでもないと言っている間に双子は生まれ、ならば双子が生まれた夜空で輝いていた星から名を貰った。
「・・・・月と太陽ではスケールが大きすぎるだろう・・」
ルナとムーンでは意味が大きくなりすぎるが同じように夜空を照らす星の名を。
どちらも旅人の目印であり、双子が何を目指そうとも迷うことなくその道を歩いていけるように願ったのだと、普段は寡黙で優しいヒュンケルが一生懸命に考えたのだと幸せそうな父親の顔をして笑う姿に、その場にいる全員は得心して祝いの言葉が部屋を満たし、祝いの品が贈られ一旦解散となった。
祝いの品はおむつや子供の玩具が圧倒的に多く、もう少し大きくなってから衣類やにおい袋などを贈ることとなっている・・・・らしい。
その内木馬のおもちゃも作ってみるかとは魔界の名工様の言葉だったとか・・

「スピカ～、ポラリス～・・・・あら！ミストバーン・・・・・いつもごめんなさい・・」
新生児への誓いから三年の月日が流れ、双子は順調に育ってエイミの手を焼かせ始めている。
ハイハイもできない頃は双子は宮廷内で面倒を見てもらっていた。
主に手が空いたインス・フォス・ワイズの三人の魔導書解析のお爺ちゃん達が。
何故この三人のお爺ちゃんたちの手が空いているかと言えば、これも融和政策の一環で上級魔族が三名パプニカ城で働き始め、魔導書の解析の跡取りを得られた三兄弟は、とは言え引退はまだしたくないので城で働きたいと言ったところ双子の面倒を見ることになったのだ。
無論実際にお世話をするものも待機しているが、なんとこのお爺ちゃん達は以外に子だくさんであり家に帰ればひ孫までいる育児のプロで、そんじょそこらの駆け出しママ以上のスペックがあったのは驚きで、安心してお任せできるのだが・・・
「お爺ちゃん達こんにちは、あの三人きちんと働いてる？僕も魔導書解析手伝おうか？」
「おおキルバーン殿こんにちは。あの子らが良く働いているのでこうやってエイミ殿の子等と遊んでおりますよ。」

「ほんにこの子達は可愛いですの～。あまり泣かずに熱も出さずに本当にいい子達ですじゃぞ。」
「誰が来ても笑っておる子等じゃ～。」
時折キルが来るのが困ってしまう・・・・・
キルからすればその三人のお爺ちゃん達の方が可愛いだろうと眼福ものであるのは内緒にして、ポラリスとスピカにもぬいぐるみやら評判のおしゃぶりやらをお土産に持ってきては両親を困らせている。
これがほかの人達からなら嬉しいだけで済むのだが・・・ティファとチウとメルル以外からは変態疫病神と言われたキルからもらうのが微妙である。
とは言えきちんとお礼を言って受け取り、双子も喜んで使っているので贈っているキルも笑って良い反応が双子からもらえるので大分双子には甘くなっている。
その内双子が可愛い顔してキルおじちゃんと呼んでくれないかな～とも目論んでいたりする・・・・ヒュンケルが知れば瞬殺者だが知らぬが何とかである。
バーンなどは双子が五歳くらいになったら魔界の土地で思いっきり遊べるように遊具も置いた広場を贈ろうかと目論んでいるので似た者主従であったりする。
周りから大切にされ可愛がられ、すくすくと大きくなった双子を探しに来たエイミが見た者は、家の中庭のベンチに座っているミストに優しく抱かれて眠っているポラリスとスピカの姿であった。
双子が離乳食を食べ始めるころ、この家は実に賑やかであった。
ティファは言うに及ばず、アバン王も時間を見つけてはつくりに来ようとし、目論みあるキルもミストを連れて日参してきた。
そんな中、双子はティファではなくアバンでもなく、キルでも当然なくミストに懐いた。
機嫌が悪かろうともミストが姿を見せれば瞳を輝かせ側にダッシュし、キルの嫉妬っがメラメラであった。
その事態に当然ミストは困惑した。
言っては何だが双子に愛想を振りまいた筈も無く、何が気に入られ

野たのかさっぱりと分からないが、無邪気に笑う子等にいつしか絆され

「構わん、好きにさせているだけだ・・」

こうして双子を甘えさせている

その様にエイミはクスリと笑い、しばらく頼みますと家事の続きに戻っていった。

すやすやと眠る双子、この子等に誓われた主の言葉を自分も叶えるべく・・・・いや、あの場にいた全員が邁進している。

ポラリスとスピカの星を目印として。

穏やかな日々が続く世界、今日のこの穏やかな日が当たり前の世の中を・・・

「ミストおじちゃん大好き!」

「スピカね!ミストおじちゃんのお嫁さんになるの!!」

双子が言葉を発するようになってから、自分に向けて言ってくれた嬉しい言葉をミストは胸の中で反芻する。

そんな賑やかで嬉しい言葉が途絶えることのない日々が続くことを願って。

それから二百年、パプニカのとある騎士の家には―ミスト―という料理が得意な超絶強い男の出入りが絶える事無く、いつの時代であってもその家の子等に慕われたという不思議な男であったとか

元魔剣戦士の結婚・番外編・前編

・・・・これは本当に・・・どうしたものであろうか・・・・・

ヒュンケルとエイミが結婚をし、暫くしてエイミは身ごもり双子を産んで、ポラリスとスピカが十五歳の誕生部を迎えて一月後の夜にヒュンケルは頭を抱えている。

夕餉も摂り終え夜も更けたヒュンケル宅の居間には今ヒュンケルとエイミとテーブルをはさんだ正面にいるのはこの家の愛娘スピカと、隣にいるのはミストであった！

ちなみに二人の愛息子ポラリスは、三年前にロン・ベルクに剣と鍛冶を教わりたいときちんと両親と本人の許可を得て弟子入りしているので不在である。

一方のスピカは、エイミに似たのか魔法のセンスはそこそこあって、特に回復魔法に長けているので将来は賢者かと有望視されている。

ポラリスは黒いくせっ毛の髪を長く伸ばし、少し細身の筋肉質の美少年に育って娘さん達からの熱い視線をどこであっても受けている。

受けているのだが当人にとっては喜ばしい事ではなく、五月蠅くてかなわず煩わしいことこの上ないようで

「・・・・・うるさい・・」

娘さん達の熱い言葉や視線ををぼそりとバッサリ切る。

普通そう対応されれば悲しいやショックを受けるのだろうが娘さん達も強かなのか、そんなポラリスの対応がまた男らしいと大人気で・・・・ある意味ロン・ベルクを本気で師として慕っているのだが非難も兼ねている側面があったりもするが、ロン・ベルクとして大切な戦友の息子にして生まれた時からずっと知っている可愛がってきた双子の子が、ある日突然自分も自分で使う武器を作って戦える鍛冶戦士になりたい取って来た時は嬉しかった。

あんまりにも嬉しくなって、その場で自分の弟子にして自宅に引っ張り込もうとしてしまったくらいに大喜びをした。

しかしそこはそこで、弟子となったからにはと厳しく教えるのを、

ポラリスはそれが当然とばかりにへこたれずに教えを請い、鍛冶も剣の技も自分の血肉としていくのに然程の時間は要さなかった。
そこは戦士として天才の名を欲しいままにした父・ヒュンケルの子なのだろうと、時折様子を見に来る両親達に近況報告として伝えてやれば、二人共に照れ笑いをして息子を頼むとロン・ベルクに頭を下げている中、ポラリスは師から教わっている事を黙々とこなしている。
どうもポラリスはヒュンケルの寡黙なところを色濃く受け継ぎ、幼少の頃はキャッキャとしていたのが長ずるにつれ言葉少なく、思いや両親・妹に対する愛情表現も全て行動で表していた。
両親の結婚記念日となればスピカと共に野原で花を摘み、アバン王に教わったケーキを焼いて、十の頃には一月前から市場で物売りの手伝いを両親に内緒でして温泉旅行をプレゼントもした。
その際いつもきまって、おめでとうございますと、にこりとはせず生真面目な顔をして贈っている。
自分達の誕生日の時は祝いに来てくれる―数々の人々―を前にしてもそれは同じで、ありがとうございますと真剣にお礼を言うさまが、とある魔界の神様には可愛く見えるらしくて相好を崩していたがそれはともかく、ポラリスは普段寡黙で表情筋はそうそう崩れないが、愛情豊かで両親と妹、そして数々の人々もしっかりと大切にしている良い子であった。
二人が自分の様子見の為に師の下を訪れても顔には出さずに黙々と修練をするが、二人が帰る時どんな場面であってもは必ず手を止め見送る。
「父さんと母さんもお体に気をつけて。スピカにもよろしくお伝えください。」
生真面目な顔ながらも優しい声で家族を思ってくれるのだから。
そんな時はいつもきまって横にいるロン・ベルクがポラリスの頭を優しく撫でる。
背はまだ自分の肩までしかなポラリスを、ロン・ベルクは愛おしいと思い込めて撫でるのを、ポラリスは邪険には決してせずに、嫌がる気配もなく黙って受ける。

根っこは幼いころと変わらないポラリスであるのだ。
そして双子の妹スピカは、銀の髪は父から受け継いだが、少しふんわりとしたねこっ毛は母に似ており、奇麗でふんわりとした銀の髪を腰まで伸ばしいる。
美しい銀の髪にこれまた父譲りの紫の瞳の美少女に育ってさぁ大変!!・・・・にはならなかった。
スピカの周りには常に男たちが控えている!兄は言うに及ばず、父だったり父の親友ラーハルトやロン・ベルクだったり、クロコダインだったりノヴァだったりバダックやアポロ、ときたまダイ王太子がレオナ王女とお忍びで来ていたりと鉄壁のガードが組まれているので、幼い男児も何かを感じ取って突撃できなかった!!
とは言えそんな男たちが四六時中スピカの側にいるはずがないだろうと隙を狙った者達はがっくりとする羽目になった。
チウもいれば魔法を教えに来るマトリフ様やら、何とモシャスもしないで素の姿で堂々と遊びに来る死神キルバーンやら、それに引っ張られて来た影の大参謀ミストバーンやらが立ちふさがった!!・・・・・エイミは諦めて二人の子供を取り込もうとしたパプニカ宮廷人達は一斉に手を引いた・・・・何が恐ろしいと言えばキルとミストの上司を思えば推して知るべし!魔界の神様を敵に回すバカはいないのであるので餓狼の餌食に双子はならずに済んだのだがそれは別のお話。
ポラリスもスピカも基本キルは嫌いではない。風変わりなおじさんであり―キルおじちゃん―と呼べば喜んでくれる愉快な大人。
自分達と遊んでくれて、それでも子ども扱いではなく一人前の者の様にきちんと接してくれる。
両親の結婚祝いを何にしようか悩んだポラリスは―贈り物の天才キルおじちゃん―に相談し、都度適切なアドバイスをしてくれる頼もしいお人にランクアップしているのは双子とキルの三人の秘密である。
キルはどうも両親に嫌われているようなのでとは双子の思いで、キルも内緒で双子を助けるかっこいいおじさんポジが気に入ったので内緒なのだ。

翳に日向に双子を守る死神も良かろうと
そしてミストもまた双子を見守り、キル同様に双子からミストおじちゃんと呼ばれて悪い気はせず、ヒュンケルの頃は確かに情あれど思惑を以て接していたのを双子と接するときはひたすらに愛情を注ぐことだけを考えていたのだが・・・十五になったスピカの宣言でミストの人生がひっくり返された。
「私絶対にミストおじちゃんと結婚する。」

元魔剣戦士の結婚・番外編・中編①

十五歳になる一月前にミストに結婚してほしい宣言をしたスピカ。
その宣言は、多大なる苦悩の果てに成されたものであった。

～遡った三月前～
晴れた空の下で、ぐすぐすと子供が泣く声が響き渡る。
その声を自分の両親と知っている人達に知られたくないと、今は無人のバルジ島の浜辺に連れて来て貰って、―二人―に会うまで我慢していた分の大粒の涙を流しながら・・
「泣かないでスピカ・・・君も暗い顔をしないでおくれよポラリス。君達には笑顔こそが良く似合うのだから・・」
「でも・・でも・・・・・どうしようキルおじちゃん・・・私どうすれば・・」
「・・・・父も今回の話には良い話かもしれないと・・・・・俺には何も言う事はできません。だからどうしても欲しいのです！キルおじさんの助言が!!」
「これは・・・・本当に困った事だね～。」
泣くスピカと辛そうなポラリスを前に、かつては仲間からも冷酷無比と呼ばわれ怖れられた死神キルバーンは、その姿はかけらも見当たらずに、ポラリス同様に辛そうにして溜息をつきながら、泣くスピカを優しく抱き上げあやし始める。
双子が赤ん坊の頃から泣いていた時と同じように。

後三月もすれば、この世界ではある程度大人になったと認められる十五歳になろうかという

スピカも、優しいキルおじちゃんになら子ども扱いをされても嫌ではなく、優しく揺すられ背中をトントンと宥められるように叩かれるのが心地よく、ほんの少しだけ落ち着きを取り戻す。

ヒュンケルとエイミの双子は、この世界の平和を謳歌して育ってきた。

戦火の足音は無論の事、父の―昔の罪―も今や本当に過去の事となるほどにこの国に様々に貢献をして非難される声を聞いたこともない。

皆優しくて頼りになって、悪い事をすればきちんと叱られもしたが、反省をして謝罪をすればみんながきちんと許してくれる良い人達に囲まれて育ってきた。

そんな中、スピカが泣いているのはお見合い話が持ち込まれたからだ。

それもただのお見合い話ではない。普通のお見合い話しであれば、自分の年齢がまだ幼い事で断りやすく、父と母も常々結婚は好きな人とすればいいと言ってくれている。

それでも今回スピカが、兄ポラリスとキルおじちゃんに目玉通信で助けを求めたのは、相手がベンガーナの元戦車隊長で、現ベンガーナ軍の最高司令官アキームの令息だからだ。

名をライオネルといい、双子とは二つ違いで中身は父譲りの実直さもあるが、若者らしい柔らかさを持ち合わせている・・・物語に出てくるような優しい英雄騎士がそのまま出てきたような具現化していたような人。

そんなライオネルとスピカ、そしてポラリスも初対面ではない。

去年国同士の交流で貴族やそれに類する文官・武官達の子女達を親同伴の交流の場を設けられた時に出会ったのだ。

大戦で戦友ともいえる仲になったアキームとヒュンケルは早速旧交を温めながら子供同士を引き合わせ、ポラリスは交流の場で妹に虫がつかないかを睨みを利かせるので忙しく、スピカも―他の男―に興

味がないので、父の友達の子供程度の認識で終わったのだが、ライオネルが双子に一目惚れをしてしまった。
己よりも年下なのに、そうは見えない立派な体躯を持ち、、それに伴う様に大勢の王侯貴族やその子女達の中にあっても物怖じもせずに堂々としているポラリスに、そして兄の肩程までの華奢で妖精のような容姿でふんわりと笑うスピカに。
それはライオネルの遅い初恋であった。それまでも武も文も懸命に学んでいたライオネルであったが、いつかスピカに結婚を申し込むような立派な男になりたいと更に学び、のみならず礼儀作法も師をつけてもらい、己を磨いて父に懇願をした。
スピカが十五になれば、ポラリスとスピカも社交界デビューをする。
十五歳になれば、ポラリスとスピカも社交界デビューをする。
そうなればスピカはさらに人々の目に留まってしまう。去年開かれた国同士の交流の時は、双子は途中で休憩しに行ってそのまま終盤も出てこずに、さして人の目に触れなかったが社交界デビューはそうもいかない。
デビュタント達が入場し、王より寿ぎを頂き最低でも三曲はダンスをデビュタント同士で踊りあう。
・・・・あの美形の双子が放っておかれるなどとあり得ない・・・
「無理強いは致しません!それでも・・・スピカ嬢に私の気持ちをお伝え出来る場を一度だけでも・・・」
切なげに告げる息子の願いを、アキームは妻に相談しながらヒュンケルとエイミに打診をした。
息子ライオネルの真剣な思いを綴って届けられた申込書に、パプニカの宮廷人のような思惑はなく、信頼できる戦友の子ならば会うだけでも良いのではないだろうかとスピカに告げたのだが、スピカは会うのも嫌だと泣く。
それは会うだけでも―あの人―に対する気持ちを穢してしまう様な、思春期特有の少女の潔癖さが拒んだのだ。
「お父さんと・・・お母さん・・・会ってみればッて言ってたの・・・でもね・・・私はね・・・」

会うだけも嫌だと泣くスピカを、キルは子供の我儘とは受け取らず、兄ポラリスも妹の癇癪だとも思っていない。
スピカは温室で育てられ、明るくよく笑う子であるがとても繊細な心を持っている。そしてスピカの気持ちが、とうの昔に決まっており、それを誓いの様に大事に大切に幼い胸の中に持ち続けているのも知っているからこそ、スピカに良き助言をしてあげたいのだが、自分には無理だとキルも苦悩する。
「分かっているよスピカ・・・それでも僕ではきちんとした助言をしてあげるには今回ばかりは少し無理だ。」
「キルおじさんでも難しいですか？」
双子にとっては一縷の望みをかけてくれたであろう願いを無碍にする様で心苦しくなりながらも、キルはポラリスの疑問に答える。
「そうだね、これが何かしらの揉め事や、君の両親を取り込んだり、ダイ王太子達とコネを持ちたいといった策謀・謀略が少しばかりでも混じっていれば―僕―が裏で動ける余地があるんだけどね～。」
キルは別に今スピカとポラリスに挙げたこと自体は否定はしない。
人間だろうが魔族だろうが、少しでも良いポジションにつきたい、良い目を見たいという欲望は多かれ少なかれあるのが自然であり。それこそ王侯貴族に限らず大なり小なり家の結びつきの為に結婚をするのは珍しくはなく、其れでお互いがメリットがあればなお結構と考える方だが、自分の身内と思っている子供達がかかっているのであれば話は別で、いわば理不尽な我儘だとは本人も自覚している。
それでもこの二人を愛する以外の不純な考えを持ち込んでくるのであれば、それこそありとあらゆる手を駆使して、人知れず死なない程度ではあるが地獄の底に叩き込んでやるものを、この件に関しては―死神―の出番なぞ端から無いのだ。
「・・・過去数回そういった―馬鹿―はいましたが、悉くアポロ様や助けを求めてマトリフ様が動いてくださいました。しかし今回はそれとはまったく違うのです。」
本当に純粋に妹を好いてくれているのは兄としては嬉しい。
だがスピカの心はもう決まっている・・・父と母には申し訳ない

が、せめてその事にスピカ自身が思いを遂げられずとも決着がつくまでそっとしておいてほしいのだ。
世の中とは、なんと儘ならないものか、、それでもキルおじさんが希望を照らしくれる。
「僕では無理でも、どうにかいい助言をしてくれそうなところに行こうか。」
その言葉に、双子は縋りつきたくなる。
この一件は誰もが悪くなく、それでも譲れぬものがある。
それでもスピカは不安になる。
自分が相談をしに行く事で、せっかく自分の事も考えて今回のお見合いを話してくれた父と母に知られてしまうのが。
我儘だと嫌われたらどうすればいいのか、、
「・・・・お父さんとお母さんに知られない？」
「大丈夫、―あの人―なら二人の、、いや、ーみんなーの思いを無碍にはしないよ。」
キルの確信に満ちた信頼する言葉に、スピカは安堵しポラリスも安心して妹の相談について行こうと申し出る。
元々妹に呼ばれたのですがと報告すれば、丸一日、足りなければニ、三泊はしてこいと言われて送り出されている。
「分かりました、今日は一日休みを取っていいとロン・ベルク師匠から言われたので俺も行きます・・・・だから心配そうな顔をするなスピカ。」
「お兄ちゃんも、キルおじちゃんもいてほしい・・・・」
「大丈夫、最後まできちんと一緒にいるからね、ポラリスも僕に掴まって。」
空間を通り、キルは双子の悩みをきちんと聞いて良き助言をしてくれる人の下へと向かった。
―誰―にとっても、優しい答えを導き出すのを共に考えてくれる人の下へと

元魔剣戦士の結婚：番外編・中編②

「子供のこの子達に聞かずに、御両親に直接お聞きになられてはどうですか？」

自分と妹が三つ四つになった頃から―周り―は騒がしくなった。
父も母も城勤めの為に、俺達もお城の一角で愉快なお爺ちゃん達や、父さん母さんの仲間の人達がいつもにぎわっていたけどそれとは違う騒がしさ・・・今思えば不愉快な五月蠅さ。
自分たちの周りに常に誰かいられる訳もなく、時折二人でいる時を見すましてそいつらは来る。
―お父様たちにはいつもお世話になっております―
―今度我が家に遊びに来ませんか？同じ年頃の娘がおりまして―
―息子とお友達になってくれると嬉しいですね～―
父と母の仕事仲間の人達は違うと分かるような大人達が、自分の家に俺達を招こうと躍起になっていた。
鬱陶しい・・・そうは言っても実害があるわけでもなく、他に何をされている訳でもないから父と母に言えることでもなく・・・言って遊びに行くかと聞かれるのも何故か嫌だったので黙っていた。
「お兄ちゃん・・・あの人達、私・・・」
妹のスピカもストレスに感じ始めても、俺も妹も―そういう事―を隠すのが何故か上手くて、誰にも気が付かれずにはいられた。
父も母も忙しい、そして会いに来てくれる人達も、妹に魔法使いにならないかと笑ってくれるマトリフ様も、宮廷医長のロムス様とやはり忙しそうにしている。
みんな忙しいのだから我慢しようと、妹と二人で頑張ろうと約束したある日に突然聞かれた。
「君達二人とも何か嫌な事にあってるでしょう。正直に言ってごらん。」

その人は・・・・何と言おうか・・・物心ついてからはその人の事を胡散臭く感じていた。
赤と黒の仮面に道化の衣装を身に着けて、その身に着けていた衣装に相応しく始終しょっちゅう瓢げた振る舞いをする道化そのもののようで、チウさんとメルルさんと―あの人―以外には、あのアバン王様とレオナ王女様にまで胡乱な目を剥けられる怪しい者だった。
妹は博愛精神を発揮していたし、俺も怪しいがミストおじさんが普通に一緒にいるので、悪い人ではないと結論付けて一応はキルおじさんと呼んでいた。
ただそれだけの人が、本当に何の脈絡もなく、周りの大人所か父さんも母さんも気が付かなかった俺達の心情を言い当てた。
唖然として何もありませんという言い訳すら出てこなくて、妹はどうして分かったのポツリと言ってしまった。
・・・・それが無くても、キルおじさんはその時にはもう確信していたから、スピカが言おうが言うまいが結論は変わらなかったとは思うが何故、俺達に何か異変があったのかを察知したのか分からないのを、キルおじさんこそが困ったような雰囲気になって教えてくれた。
数日前にプレゼントを持って行ったとき、二人の雰囲気が自分が知る中で一番悲しい気配がしたのだと。
「僕はずっと、君達以上に隠し事に長けて、最後には自分自身すらも壊してしまった―可哀そうな子―を見続けていたんだよ。その子に比べれば君達は可愛いものだよ。」
その言葉に、自分達は隠し事もできないただの程度の低い子供だと言われた気がして腹が立ったが、キルおじさんは悲しそうな眼をして俺の頭を撫でながらされに言葉を紡いだ。
「そんな悲しい能力になんて長けても良い事はないんだよ。隠した傷は、最初は小さくとも放っておいて治そうとしなければ、いつか治らない程の傷になった時には遅いんだよ。」
それは隠していた本人も周りも取り返しのつかない事になってしまう。
そうなる前に、教えてほしい、君達を嫌な目に合わせているのは何

なのか
その声はいつもの瓢げた声音では決してなくて、まるで俺達が傷つくのが自分の事のように悲しいと言っているようで・・・・・気が付いたらぽつぽつと話していた。
遊びにおいでと父の仲間の人達や騎士団や近衛騎士や、ロムス様、インス様・ワイズ様・フォス様達も言ってくれる。
「それでも俺は・・・俺達は嫌だと思ってしまう人達いて・・・」
言葉に出してみれば馬鹿みたいだ。何の根拠もなく、お菓子も貰って食べているのに、その人達の―笑う顔―がどこか歪に見えるだけで嫌おうとしているなんて・・・
話しているうちに顔が熱くなるのを感じたら、不意にヒンヤリとした感触が頬に感じたて顔を上げれば、キルおじさんの両手に頬をはさまれていた。
もっと上を見れば、赤い瞳が優しく笑って俺の言葉を受け取ってくれた。
「そう、ポラリスとスピカは嫌な目にあったね・・・・・―近頃―僕達が大人しくしていたせいかな？」
俺の言葉を真面目に受け取りながらも、謎々のような言葉を言って。
俺とスピカに美味しい飴をくれて、近々嫌な事がなくなると言ってその時は別れて・・二日後にまた同じような歪な笑顔を張り付けた大人が来て、そいつはしつこく誘って来た。
―美味しいロモスのお菓子も手に入ってね、スピカちゃんもポラリス君もきっと気に入るよ。君達と同い年の息子がいると言ったよね？一度だけでも遊んでやった欲しいんだよ。―
その時の俺は、俺達はあまりにも幼くて、断る術すら知らなくて、どうすればいいのか分からなくなった時に助けが来てくれた。
「子供のこの子達に聞かずに、両親に直接お聞きになられてはどうですか？」
俺達以外にはいない筈の部屋に声が木霊した途端、俺達の後ろからキルおじさんとミストおじさんが出てきた！

「こんにちはポラリス、スピカ。目の前のお人には初めましてですね。
僕は魔界の現統治者・大魔王バーン様の側近でキルバーンと申します。こちらは同僚にして魔界の宰相位にいるミストバーンです。」
俺達とその人の間に二人は立って、キルおじさんは慇懃に挨拶をして、ミストおじさんは言葉はなくとも威圧する気配を出して、二人でその人を圧倒した。
俺達に対してはしつこかったその人は、何か言葉を言ったか言わないか分からないけれども、キルおじさんの言葉はきちんと聞こえた。
「この二人は先の大戦の立役者全員が祝福をした大切な子等にして心の拠り所なのですよ。―独り占め―とは感心しませんね～？」
その言葉を聞いて、その人は悲鳴を上げて部屋を出てしまったのをキルおじさんは楽しそうに見送って、ミストおじさんは忌々しそうにしながらもそ俺達の頭を無言ではあるが優しく撫でてくれた。
「いや～悲鳴上げるだなんて僕傷ついちゃうな～。二人共、僕が―あの人に悲鳴を上げさせてしまった事―をご両親や周りには内緒にしていてほしけれどもいいかな？」
僕って嫌われてるからね～と飄々と言っていても俺も馬鹿はじゃない、本当はこの嫌な事を父達に隠していた事を、そのまま内緒にしてくれると約束してくれた事くらい分かる。
以来俺達とキルおじさんは―内緒―を沢山持つ仲になった・・・・・ミストおじさんとはそうはならなかったけど。
ちょっと―悪い事―を教えてくれるのはいつでもキルおじさんだからだ。
「君達に近づいて嫌な気配がしたと思ったらとにかく僕が言った事を真似すればいい。」
真っ当な者ならそもそもが幼い子をそのまま誘う筈がない。そういう奴は悪い事を企んでいることが多い。もしも企んでいなかったら、その言葉通り両親に話を持っていくはずだから悪い事にはならないと。
―悪い事―とは何かを聞いても、俺達が五歳になるまでは教えないと言われた。

五歳になったら教えてくれると約束してくれたので、とりあえずはその通りにしたけれども、嫌な感じの奴は遂に来なかった。
大きくなってから分かったこと、その日を境にキルおじさんと、時折ミストおじさんも連れだって来てくれたことで俺達を無言で目に見えない盾を張って守ってくれたんだと。
五歳の約束の日にそれは分かった。
「君達の御両親は、この国でとっても偉い人なんだよ。そして僕も含めて君達の周りにいる人達全員が、他人が羨むほどの地位にいるだよ。君達と友達か、将来の伴侶になったらその人達にとっては嬉しい事なのさ。」
ようは俺達じゃなくて、父達に取り入りたかった—馬鹿—達だった
「・・・・父さん達はどうしてそういう奴らがいると教えてくれなかったのですか？」
俺の疑問に、キルおじさんは困った眼をした。
「—普通—の大人はね、子供にはそういった汚い者達が要る事を教えるのはもっと子供が大きくなってからなんだよ。」
「でも、キルおじちゃんは今教えてくれたよね？」
キルおじさんの矛盾のような言葉をスピカは無邪気に聞いた時、深い笑みをキルおじさんは浮かべた気がした。
「君達なら嫌な者達がいても、それが全てではないって知ってくれているからだよ。」
狭い世界で生きている子に話せば、世界は嫌な奴らだらけと誤解する。しかしポラリスとスピカは、もう様々な人に出会う機会に恵まれ、嫌な奴らも良い人達も、そうでない人達も知っていてくれる。
「そんな君達の知りたい事を、識りたい事を止めるのは僕の考えにはないからね。」
疑問に思った事、知りたい事、行きたい所があればいつでも声をかけてとキルおじさんと繋がる目玉を貰って以来、俺達の世界はぐんと広がって、今もまた俺達を助けてくれる。
キルが開けた空間を取った出た先は、とても賑やかな場所であった。

どこかの城の中庭で、花々や樹木が彩っている。
花や木の根元にはスライムの群れがいて、わたぼうやわるぼうが設置されている噴水で水浴びをしてわらいぶくろやおばけキノコ達ものんびりと日光浴をしている。
空を見上げればキメラやキャットバットが飛び交っているそこは、大魔王バーンの居城にして、現魔界の政庁の役目をしているバーンパレスであった。
「ポラリスこっちだよ。」
前に来たのはこの城の主の誕生日祝いに去年の事。広くて迷子になりそうだったとしか印象がなく、其れよりも誕生日プレゼントをスピカと一緒に考えて贈ったので、気に入ってくれるかとそちらばかり考えていたのでパレスの中をきちんと見ていなかった。
長い廊下も暗さを感じない程窓が多く、それでいて行きかう人々(?)がぶつからない程、パプニカ城よりも広い廊下で、ポラリスもだが泣いていたスピカも驚いてキルに抱っこされたまま周りを見回す。
骸骨やデビル、さまよう鎧達も、何かしら忙しそうに行きかっている。
ここで相談を受けてくれる人は・・・・まさか・・
双子達がある人に思い至った時、キルが扉の一つを叩いて返事を待たずに扉を開ければ明るい声が出迎えた。
「キル、それにポラリスとスピカもいらっしゃい。今ちょうど—仕事—が一区切りついたところなので気兼ねなくいらっしゃい!」
魔界のパレスの一角で、世界を良くする為に働いている人
「ママ!」
「お久しぶりです、ご無沙汰しております。」
「二人共いらっしゃい、キルは先程振りですね〜。」
「その挨拶おかしくないかい—お嬢ちゃん—?」
スピカとポラリスがエイミ以外でママと呼び、キルがお嬢ちゃんという人物、かつての勇者一行の料理人にして今は世界を幸せにしようを標榜にして働いているティファは、昔と変わらず柔らかい笑みを浮かべて入って来た三人に席を勧める。

「今ちょうど紅茶を淹れますので。」

元魔剣戦士の結婚：番外編・中編③

世界各地の航路と船を、マーマンやシードラゴン、海馬の群れが守っている

地上においては森に迷った子供をパンサーやおばけキノコ達が探しに行き、けがをすれば診療場にはホイミスライムとベホイミスライムが必ず一体ずつは常駐している。

空に海に地上に地下に、あらゆるところに彼らは入る

世はまさに―モンスターとの共存共栄―時代である!!!

などというイントロが付きそうな世界へと変貌を遂げつつある。

海には危険がいっぱいであるが、その脅威は何もモンスターだけのせいでは決してない。天候と大波と人にも魔族の見栄にも見えない海流という危険があり、ごく稀に海底火山の爆発さえある。

海底火山がごくまれにでも起こってしまうのは残念ながら魔界浮上の余波で海底の地形が変わり、今までは死火山だったのが活火山に戻ってしまったのが多数あるせいだがそれはともかく、目に見えない海流も予知できない海底火山も、海に住まうモンスター達にはよく分かる。

どこを通れば安全であり、バルジ島の大渦でさえ彼等にとっては流れるプールに等しく、安全な航路を教えるのと、火山の予兆やそれに伴い海流が変わって航路を変えることを魔族・人間に教える代わりに自分達の縄張りには入らせない不可侵条約を提携した。

海の中にもボス級モンスターがおり、それらが一致団結して海のモンスター達を緩くではあるが束ねている。

モンスター達とて自分達に手を出してこないものを興味本位で襲う馬鹿はそうはいない。

たまに船を襲う馬鹿たちは滅してよいとも条文に提携時にしっかりと明記されている。

地上の方も、診療場にホイミ・ベホイミスライムが患者たちの手当てをしている。

そんな摩訶不思議な世界へと変貌を遂げた要因は果たして・・・・
私ティファが色々と頑張りました!!!

殖時期にいつでその時期に立ち入れば脅威になり、反対にそれ以外の時は通っても良いかどうかなどを事細かく。
それと共存の中でも特に人々の中で暮らせてかつ働けそうな子達をどんどんと世に送り出せばいい!!女医さんとラッ○ーの如く!
ポケ○ンとモンスター一緒にするなって?彼等は完全人間と共栄しているが、モンスターは違うと?馬鹿おっしゃい。
ポケさんにだって、原始カイオー○だのレック○ザだのディア○ガだのアルセ○スだの、知能高くて自分達が悪と断じれば人間消し飛ばしても良しなヤバイモン達が山ほどいるでしょ。それこそ災害級の大技持っているポケさんもいるんだし。イオナズンだのギガデインだのとためはる技あるんよ?
盗みを働いたり、縄張り荒らされたら怒りに震えて徒党を組んで攻めてくるのはどっちも同じはず!!
同じならノウハウも当てはまる筈だを・・・・まぁ胸中に収めながらズンドコ政策の素案を出して今に至っているのだ。
ちなみに私は素案は出して、現実的に具現化してくれるのはまた別の、それこそ世界中の人達が頑張ってくれてここまで漕ぎつけられた。
とはいえモンスター達にも受け入れる側にも無理強いはいかんと思うのよ。そういうことが大丈夫な子を見つけて、スカウトして、人間社会に馴染めるように教育も施して太鼓判押された子達を、予め見つけておいた受け入れ先に送り出す。
例えば少子高齢化の農村やら、山間や都市からうんと離れた村やらに彼らの需要はある。
そして最大の目玉がこれ、都市部にモンスター達の往来自由だ。
森から突然はぐれモンスターが来ても、脅して追いやったらいけません。珍しいレアモンスターであっても勝手に狩ることは禁じます。
その代わり盗みを働こうとしたり、暴れたりすれば即座に最寄りの駐屯場に目玉で一報を入れて捕まえてもらう。
王都ではなくとも中規模な都市部では結緊急出動が構機能されているけれども、対処方法を知っていれば人というのはそこまでパニッ

クにはならず、暴れられたからイコールモンスター憎しにまではなってない。
なっていないからこの路線は―今のところ―は概ね何とかなっているはずだ、今のところは。
問題が起きれば都度報告を上げてもらって修正修正、落とし込めたら経過観察。
悪魔の目玉通信網があるからこそできる報連相のお陰で成り立っているけれど、できるのだから良しだ。
ちなみにホイミ・ベホイミスライムたちの職業訓練指導員は、私の旅の相棒、ベホイミスライムのベほちゃんだ。
王都や街や村々配布するにモンスターの図鑑作りの担い手は爺ちゃん達だ！おかげでデルムリン島のモンスター達が作ってくれたモンスター図鑑は生態系も危険度も遭遇しないようにする方法や対処法やらが分かって凄い！ベほちゃんの教え子ならば安心と、デルムリン島印というブランドが確立されて、高名な学者さん達も教えを請いに来るほどすごい島にステータスアップ！
・・・・爺ちゃん達は忙しすぎるってぼやいてたけどティファ知ってるもんね。
モンスター達の事を知っていたから、ばったり会ってしまっもパニックにならなかったから無事に家に帰れたっていう手紙や、ベほちゃんの教え子のお陰で足無くさずに済んだっていう手紙を読んでは皆で泣き笑いして喜んでいるの・・・・本当に共存共栄を、世界全体が模索して共に歩んでいこうとしてくれているのが私は嬉しい。

そんなこんなで自分の夢の為に邁進しているティファは今現在はパレスで働いている。
だからと言って別に大魔王を上司にはしていない、いわばティファは助言者として働いている。
世界各国、それこそ魔界後においても融和政策を推し進めたいがノウハウが全くない。
無いのであれば模索するほかないが、良い案も早々出ないのをティ

ファに白羽の矢が立った。
彼女はその成した事から人柄から、魔界地上界双方に人気があって、いざとなれば天界もいれた三界の調停役もできる程の位置にいた。
本人も乗り気でやる気に満ち溢れ、無理のない範囲で融和政策の案を出してほしいと言えば、出てくる出てくる素案の数々。
双方にとって珍しい者の貿易する拠点に、魔界になら人間を、地上界には魔族の従業者を住まわせ合って交流図っては、よくある留学も魔界・地上界でもしあって、その際王侯貴族も庶民も、一定の水準に達している者達が行ってはどうか、何をするにもとにもかくにも交流からでしょうと、実に多くの交流案を出して、果ては魔界浮上祝いの日とか作って三界の共通祝日にしてその日は休める人たちは全員お休みにしてお祭りにして、共通の祝日作ってしまえまで出してきた。
共通でできる話題があるだけでも、無いのとは全く違う筈だとほんわか笑って。
今ティファがパレスにいるのは、丁度その魔界浮上祝日デーが迫っているので魔界側の催し物の相談を受けて考える為に、用意されている執務室で過去の催し物を調べて一区切りがついたところに、キルとポラリスとスピカの訪問を受けたのだ。
ちなみに世界各地の王宮に、ティファの執務室はあったりするのがそれはともかく
「キルもポラリスとスピカと同じはちみつレモンティーでいいですか？お茶菓子も好きに食べていいですからね。」
テキパキとお客をもてなすために用意された茶器を使って、自分を入れた四人分のお茶を淹れている、
すっと長い細い指が、楽しそうに踊ってお茶を淹れていく。
長くふんわりとした黒髪はハーフアップにまとめられて、幼いころからの習慣で顔の両端に一房ずつ垂らされている。
少女の頃とは違い、母ソアラのように立派な女性には・・・・なれなかったが。
「お前さんは圧倒的にタンパク質が足りておらん！それも幼少時の頃

より無茶な特訓したせいでチンクシャのままじゃな。ま、生きておるだけめっけもんじゃろから気にするな。」
　とは、某魔族爺ちゃんと、
「ティファさん・・・・その父が申し訳ない・・・しかし見立てには間違いはなく・・その、それ以上の成長は見込めませんが大丈夫です！お子さんは産めます！絶対です!!」
　その息子さんからの悲報であった。
　十六歳の時から体成長しないな～とようやく遅まきながらに気が付いて、テランで親友ノヴァと共に暮らし、自分の主治医をしてくれているザボエラとザムザの見立てだから間違いはない。
　しょうがない、腹の立つ物言いではあるがザボエラの言う通り、幼少の頃から修行のし過ぎなのにタンパク質とるのさぼったつけだ。
　生きているのも奇跡だという言葉にも同意だし・・・少しは成長して背は十センチは伸びてツルツルペッタンな体系よりは少しは胸も出たし、何よりも子供が産める・・・ここ重要!!
　私にも子供を産める機会があると分かったから怖いものなどないのだ!!
　結婚と出産はおいおい考えるとして良い世界作りに邁進だ!!
　その為にも、目の前の迷える子羊スピカの悩み優先だ。
　子供が悩み続けるのは悪いとは言わない。悩んで出した答えを持って人生を歩いていくのが普通だけれども、抱えきれずに自分を壊してしまう悩みを持ち続けさせるのはそれはいけない事だ!!これは是非話してもらって悩みを抱えさせないようにしないといけない!!
　・・・・大戦時終盤辺りのティファの兄達や仲間達や関係者一同が聞けば、自分の事もそうしていろと言う突っ込みが来そうな決意をしちゃっているのはどうなのだろうか？
　そんなことはつゆ知らず、お茶を飲んでお菓子を食べてリラックスしてきたスピカは、ぽつぽつと己の思いの丈をティファにゆっくりと明かしていく。
　いつまでも子供に見えながらも、キルおじちゃんの様に沢山の事を分かりやすく教えてくれて、時折兄と勉強を抜け出しているのを見つ

けても、偶にはお外で郊外授業しましょうかとピクニックで釣りや火の熾しかたや焚火の仕方、食べられる野草とそうでない毒草や、モンスター達との接し方など様々な事を笑って教えてくれたティファママ。

そして

「ミストと結婚したいという思いを貫きたいと。スピカは本当にミスト一筋ですね。」

自分の思いを子供の思い込みだと笑わずに否定せずに、柔らかく受け入れてくれる優しくて頼もしいママ。

「今回の件、何か良いお考えはありませんかティファママ。」

兄ポラリスも未だにママの事をママって言う。

私たち兄妹にはエイミお母さんの他にティファママがいてくれる。

エイミお母さん大好きだ、お父さんも代々大好きだ！・・・・だから悩んじゃう・・自分の気持ちをそのまま出して、大好きなお父さんお母さんを困らせるんじゃないかって。

お兄ちゃんはティファママなら何か—計略—を考え付くかもしれないって。

嘘はいけないけれども、お見合いをしなくても—何か凄い理由—を考えてくれて、次の話が来るまでに私がミストおじちゃん口説き落とそう！

スピカがそう決心した時、ティファからのほほんとした回答が返って来た。

「スピカ、ヒュンケルとエイミさんにはお見合いをしたくないと言ってしまいましょう。」

—私みたいに正直に—話すのが一番だという満面の笑みと共に言われた言葉に、ポラリスとスピカはぽかんとし、キルが呆れたように鼻を鳴らすのだった。

元魔剣戦士の結婚：番外編中編④

「お父さん！お母さんごめんなさい!!私ライオネル様とのお見合いはできません!!」

キルおじちゃんとティファママに相談して二月後の夜に、夕餉を終えた後大事な話があると言って両親にライオネルとのお見合いお断りを切り出した。

その顔は少しばかり青褪めている。

スピカは今まで両親の意見を退けたことはなく、どちらかというとおおらかで意見をのんびりとした感じで受け入れていただけに、強く意見を退ける様にヒュンケルとエイミは戸惑いを覚えた。

別にライオネルとのお見合いはどうしてもさせようとは思っていなかった。

ただ旧知の戦友の息子と、愛娘が娶せられたらそれも良き縁ではなかろうか位の事が、何がスピカの気持ちを頑なにさせてしまったのか訳が分からずに心配になって問いただす。

「スピカ、お前とライオネルを会わせようとは思ったが会いたくない理由が何かあるのか？」

確かライオネルは一度しか会っておらず、自分は挨拶だけで一目ぼれしたのだと言っていたが、ひょっとしてライオネル自身が気が付かない粗相をスピカにしてしまったのだろうかと。

「理由はその・・・今は言えません。」

「なら何故・・・」

「その理由は、今日の日を入れて、私が十五歳になって一月した後の―二月後―に必ず言います!!!」

理由は言えないが、スピカはその代りに―約束―をした。

これぞティファがスピカに与えた助言の一端。

ティファは大戦時も自分の思いを周りに正直に言い続けていた。

―愛した人が、魔王、大魔王であってもいいじゃない!!!―

―こっちに来て父さん!!―
―敵であっても貴方を尊敬していますよ―
―今戦いをやめてくれるのならば、デルムリン島に案内します!!―
思いの丈を、誰はばかることなく馬鹿っ正直に。
そこでティファはさらに告げた。
「実は私は大戦終わる寸前まで、敵だった大魔王達にはもちろんの事、仲間や周りにはおろか、兄達にも多大なる秘密を持ち続けていたのですよ。」
ずっと魔界に勝つためにではなく、魔界をも救うために天界の三神様達と画策して動いていたことを。
おかげでティファの動きは敵味方どちらから見てもちぐはぐでおかしく見えていた。
当然であろう、倒すべき敵をどこか気遣う様にしか見えない言動をずっとしていたのだから。
それこど生まれてずっと傍らにいた兄さえも欺き、子供が持てるはずのない力や伝説の武具を持っていたのも仲間や家族たちはずっと自分に聞けずにいて、ものすごく心配をかけてしまった経緯がある。
「大戦の間・・・それこそ三ヶ月もの間一行全員と周りの人達を心配のどん底に突き落としていたわけですよ。」
秘密を三か月も持たれていたら、さぞ神経がすり減っただろうという苦笑めいた言葉に、先ほど―私の様に正直に話しなさい―といったティファを、呆れて鼻を鳴らしたキルは益々非難めいた視線を向ける。
そう、お気づきだろう。ティファは思いの丈は正直に話す癖に、自身の事をまるっきり秘密にしていたのだ。そんな者が、自分の様に正直に話せとは滑稽な事この上ないではないか。
だがキルとしてはティファの助言に思い当たることがあり、次の言葉でそれが成果だと知って益々嫌になった。
「私という、秘密を長い間抱え込まれていた者が側にずっといたのです。それこそ私自身が告白したことではなくて、周りの状況で知れてそこからようやくわかったという曰く付きでです。」

そんな者が身近にいたのだから、普段は両親の言う事をきちんと聞く良い子の愛娘が、二月後には自分の抱えている胸の内を―自分から明かす―と約束をする。三ヶ月に比べれば短い間なれば、その言葉を信じて一度くらいは無理を聞いてもらえるはずだというまさに暴論にも等しい助言であったので、キルがうんざりとするのは無理もない。

普通はそんな曖昧過ぎる理由で、普段と違いすぎる子供を期限付きとは言え放っておくではなくとも見守って待つ親いるのか、いないだろうにしかならない。

しかしだ、一種出鱈目で理不尽で傲慢で強欲な優しさを持った少女ティファに救われ心酔までして、そしてティファが抱えている秘密に振り回され一般感覚がマヒしてしまったヒュンケルとエイミ夫妻になら・・・・

「分かった、二月待てばいいのだな。」

「貴方、二月ならあっという間です。それにスピカは今まで我儘どころか反抗するしなくて、少しばかり心配だったの。

今回の事は、貴女の思う通りしてみなさい。」

「・・・お父さん・・・お母さん・・・」

通った。本当に通ってしまった・・・・

今から三ヶ月後ではなくて、二月後にする様にとも言われて日を置いて言ってみれば本当に良しとなってしまった事に驚くスピカを他所に、ヒュンケルとエイミは穏やかに了承していく。

「スピカ、エイミ母さんの言う通り思うようにしてみなさい。アキーム殿とライオネルには父さんが行って話をつけてくる・・・・・だから心配するな。お前が悪気があって断ったのではない事くらい俺にも分かっている。」

「そうよスピカ、その代り二月後にはちゃんと説明するんですよ。」

「うん!!きちんとする!!お父さんお母さん大好き!!」

自分の思いを行動を否定せずに、良い話を蹴った自分を優しく見守ると言ってくれる父と母に嬉しくなったスピカは、思いっきり二人に抱き着き、胸の中で力強く決心する。

ヒュンケルとエイミに話をしたスピカが行動を開始したのはその十日後だった。
キルに頼んでミストとパレスの外で二人きりで和える手はずを整えてもらった。
理由はキルはスピカが何やらミストに相談したいらしい、かなり悩んでいるようなので受けてはくれまいかと誘いだした。
普段は寡黙であっても情に厚く、それこそ双子が絡めば仕事をうっちゃってでも駆け付けそうなミストは、一も二もなくキルの空間を通ってスピカの下に現れた。
場所は・・・・・見たこともない洞窟の中であった。
しかも洞窟には普通ないだろうというイスとテーブルはおろか、ベッドにクローゼットに食器棚や竈やレンガで拵えられた簡易オーブンもあって・・・なぜか温泉が引き込まれていた!!
「ミストおじちゃん・・・・来てくれてありがとう・・」
「スピカ・・」
周りの置かれている物や温泉に驚いたミストは、スピカのか細い声ではたと思考を戻した。そうだ、今はスピカが何を悩んでいるのかを聞きに来たのだと。
見るからにそわついてオドオドとして、普段明るく笑っているスピカを知るだけに痛々しく見えて仕方がない・・・・一体何があった!
―誰―かが関わっているのであれば、そいつは間違いなく細切れにして魚の餌にしてやる!!
そんな物騒な思考をしながらも、何故か椅子があるのでスピカに座るように促し、これまた何故か竈にはお湯の沸いてたポットがあって茶器も二つあるのでこれ幸いとばかりにスピカの為にお茶を淹れてやる。
「スピカ、何があった?」
お茶が蒸れるのを待つ間に、ミストは言葉短にそっと聞く。

普段は自分が何も話さなくとも、これが楽しかった、ティファママの作ったお菓子が美味しかった等々を、鈴を転がすような可愛らしい声でさえずるように話すスピカが、何かを言いかけては口を噤んでしまうのでこちらから水を向けてみた・・・これがキルであったらな、もっとうまい事を言ってスピカの心をほぐして話しやすくしてやれるのに、不器用な性格と口が恨めしくなる中、スピカの心はミストの思いとは裏腹に、ミストの言葉に勇気を得た。

そうだ、私はこの優しいミストおじちゃんと生涯をかけてずっと隣にいたいんだ!!

「ミストおじちゃん!!!」

スピカは人生の中で最も勇気を振り絞って叫びあげた。

「私は!!ミストおじちゃんと結婚したいんです!!!!」

・・・・・・・・は?

洞窟を駆け巡り、何度も反響されるその言葉を繰り返し聞いても、自分は何を言われたのか理解できないミストにスピカは攻撃の言葉を緩めなかった。

今がチャンスだ!相手の隙をつきなさいって―ティファママ―言ってた!!!

「私ミストおじちゃんが暗黒生命体名の知ってます!!その性質の為に!バーンお爺ちゃんと同じくらいの、六千歳越えなのも知ってます!!」

「・・・なん・・・だと?」

「キルおじちゃんとティファママが教えてくれました!!私がミストおじちゃんと結婚を真剣にしたいって知った時に・・・十歳の時に真剣な顔をして教えてくれたんです・・」

「・・・・・・・・・・・・あ奴ら!!!」

「ひっ・・・・ふ、二人は悪くないんです!!ただどうしても!!私がミストおじちゃんと結婚したいから・・・だから!!」

「・・・・スピカ・・・お前は・・・」

ミストは本当に呆然とさせられた。スピカがまさか、自分と―本気―で結婚をしたいと思い続けていたことに。

あれは子供の、まだ物事も世間も知らない子供らしい夢のような可愛い言葉だとずっと思っていた。
それが証拠にスピカがある日突然その事を自分に言わなくなったのがその証拠だと。
寂しくはあった、自分の手元を巣立ってしまったのだと。それでもポラリスと共に、自分をおじちゃんと慕ってくれるこの子供等なれば、生涯変わらずに自分を慕ってくれるのであればそれでよいではないか。
いつか二人もヒュンケルの様に結婚をし家庭を持っても、また双子の時の様に一族全体を愛し守ってやればいいのだと・・・・・それがまさか！キルとティファが自分の一切をスピカに話していたとは!!おそらくそれはスピカだけでな無いはずだ、きっとポラリスにも・・・そうだ！スピカが自分と結婚をしたいと言わなくなったのも丁度十歳を少し過ぎてからだ!!
・・・・ならば言わなくなったのは自分と種族と年齢が違いすぎる事に怖気づいて・・いや・・・それであるならば今のこの状況に説明が・・・
ミストの疑問や疑念を、スピカは吹き飛ばした!!
「だからそれがなんだっていうの!!!!」
ありったけの気合を込めたその言葉は、ミストの何もかもを蹴っ飛ばしたのだ。
「おじちゃんが暗黒エネルギーの生命体であっても!!乗っ取っちゃたけれども竜人族の体と融合してることもキルおじちゃんが教えてくれた！」
―もうミストは魔界の竜人族っていう種族の肉体と魂までも融合して、まぁ・・・普通の魔族になってるね。―
その昔、大戦終盤前にティファによって―預かっていた―大魔王の若き肉体を喪失してしまったミストに、バーンの命令によってキルが新たに生きた肉体を捕縛してきてミストに与えた。
それから十年の年月が経った時、ある日突然―眩暈―がした。
そして意識がふつりと切れて、目を覚ませば―一日中眠っていた―

のだと、ミストが倒れたと驚愕をしたバーンに呼びつけらて、駆け付けてきたザボエラの診断だった。
　こと魔族の肉体は言うに及ばず、ミストの様に特殊な肉体の生態も研究していたザボエラの導き出した結論が、ミストの暗黒生命体のエネルギー体は、魂も含めて完全に今の肉体と融合しているのだと。
「人に乗り移れるシャドウに試させましたが、ミストバーン様のその肉体には、暗黒生命体のエネルギーは欠片も無かったとの事です。」
　無論バーンの許可を得て、キル達の立会いの下での診断の為の事だがときちんと断りを入れて説明をした。
　時に人に憑依し、裏切らせ諜報活動ができるシャドウの能力ならば間違いはないと結論が出されたのを、スピカは知らされたのだ。
「そうでなくともスピカは好きだよ！人の体乗っ取るのは良くないけれども・・ミストおじちゃんの衣の下が何であっても!!優しくて私の事をずっと守ってくれていた。
　他の皆も同じように私とお兄ちゃんを大切にしてくれたけれど！スピカが結婚したいって思い続けたのはミストおじちゃんだけなの!!」
「スピカ・・・」
「好きなの・・・大好きなの・・・・すごいミストおじちゃんには私なんかじゃ釣り合わないって何度も思って・・それでもどうしても、諦めたくなくって、一生傍らにいたいの・・・・」
「わ・・・私は・・・」
「ミストおじちゃんは・・・駄目なの？」
「・・・・駄目に決まっている・・・・私は・・・」
「おじちゃんの一切はもう知ってる、そしたら・・・どうして駄目なのか教えてほしいの・・」
「それは?!!」
　なんだ・・・・なんだというのだこの・・・・・・・昔味あわされた戦慄は・・・・この不安に苛まれる感覚はまさか!!あいつか!!!!!!
　戸惑いから一変、自分の正体をスピカ達に教えたというキルとティ

ファに対して覚えた怒りを再燃した。
おのれティファめ!!!!
ミストの考えは正しかった。これこそがティファの真骨頂
相手の心情や言動をあらかじめ読み切り、相手の動きを予め封鎖して、最後には己の望みを全てかっさらっていったあの憎らしいやり口を、そうとは知らせずにスピカに伝授したのだ。
おそらくミストは自分の正体や年齢、そして今現在の肉体の秘密をスピカに話し、自分はスピカが思うような相手ではないと、断るように仕向けるだろうとティファは読んでいた。
だからこそティファは、いつか起こるであろう―今日この時の為―に、スピカやミストよりも先んじて行動を起こしていたのだ。スピカが十歳の時に。
ミストの下の正体と、犯してしまったキルとミストの罪を、命が軽かったあの時の魔界の事とは言えども、その罪を平和の中で育ったスピカに許せるのかとも問うて。
スピカは思い悩んだ。ミストおじちゃんの秘密の一切が重くて・・・・それでも・・
「私もその罪背負っていこうと思う・・・・・」
母エイミが、かつて罪を犯した父ヒュンケルに出した答えと同じとは知らない筈の答えを出して以来、ティファはミストとスピカの事を静かに見守る道を選んだ。
誰が反対しようとも、一度はスピカがミストに思いを打ち明けられる場を作れるように画策しつつ。
ミストにとっては瞬きの間とも言えない、それでもスピカにとっては長い年月思い悩みながらも持ち続けていた思いを、無下にできる筈も無くミストは驚いて立ち上った腰を下ろし、スピカの思いと、それに対する自分のスピカに対する思いを真剣に考え始める。
スピカをポラリス同様赤子の頃から知っている。可愛い子供だった、自分に笑いかけてくれたあの時から・・・・・あぁ・・・・自分は捕まってしまっていたのではないだろうか。
あの二人の結婚のあとから数年後に、ダイ達が結婚をして子等を

持っても、自分はスピカとポラリス程にはその赤子等には対して関心を抱かなかった。あのキルですらがみんな可愛いと相好を崩していてもだ。
そして・・・・ポラリスと違ってスピカには、癒されたのだ、あの笑顔に笑い声に、いつでも会いに行けば、明るい声で楽し気に話すあの声に・・・・キルとバーン様がティファを太陽と評したように、私にとっては・・・・あぁ！あぁ!!駄目だ駄目だ!!!スピカにはもっと相応しい相手がいるはずだ!!
こんな罪に塗れ、生命を冒涜したような自分が・・・・・・
「ミストおじちゃん・・・・・・」
自身のスピカへの思いが何であったのかを知った。
いつしか―愛していた―のだ、この子供を・・・・一人の愛する女（ひと）として。
あの明るさに魅かれて、だからこそそれを許すことが出来ないとミストは己を断じた。
平和の光の余で育った、太陽の恵みのようなこの娘を穢す事なぞ出来ようはずがないと思い知ったミストの手は、優しい温もりに包まれた。
「ミストおじちゃん・・・・スピカはミストバーンが好きです！愛してます!!」
「スピカ・・」
「どんな事があってもミストバーンを支えます!!結婚してください!!」
最早おじちゃんではない、この人は自分が愛するミストバーンで、何があっても諦めないと瞳を輝かせる。
其の想いの強さに、眩しさに、ミストの一切が焼き尽くされた。
「スピカ・・・・・・私も・・・・私もお前の傍らにおいてほしい・・・・こんな私でも・・」
「ミスト・・・うん・・・・うん!!よろしくお願いします!!!」
いつだって闇を抱えた者達は弱いのだ、太陽の温もりと明るさに

―カン!!カン!!!―

「今日はやけに張り切っているなポラリス。」

二代目大魔導士ポップの故郷ランカークス村から三キロほど離れた迷いの森の一角にあるロン・ベルクの小屋からは、盛大に火花を散らせる槌の音が明け方から響き渡っている。

ポラリスは未明より起き出し、このほど師のロン・ベルクから伝授された―鎧化―のスキルを持たせた剣作りに勤しんでいる。

水を飲んだっきり黙々とこなすその様に、鬼気迫るものを感じたロン・ベルクは寡黙な弟子を心配して声をかければ、鋼を打ちながらもポラリスは師の言葉に応える。

「妹が、人生をかけた事を成し遂げると知らせてきました。」
内容はまだ周りには言えないが
「妹が頑張っているのです。兄である自分が、怠ける訳には行きません。」
自分の魔剣となるものを完成させる道を邁進しているポラリスは、それを今こそ成し遂げるんだとばかりに槌を奮う。
強くなり、家族と周りを守れる男になる為に。平和な世であっても、いざという時をきちんと想定をして。
今まで師の知る鍛冶全てをを教わり、店頭どころか王侯貴族にまでも献上できる剣を作り出さるようになったポラリスであれば、それは可能であろうとロン・ベルクは見ている。
それに理由が気に入った
「そうか、スピカもお前も頑張っているのか。」
双子の想いが実現するといいなと愛弟子の頭を撫でて激励してやる。
・・・・・まさかスピカの願いが、自分と因縁浅からぬ男との事だとはつゆ知らず、後に知った時には天地がひっくり返る思いをするとも知らずにだ。

そしてその一月後、満面の笑みをしたスピカと、戸惑いながらもスピカの隣に座っているミストを前にして、ヒュンケルとエイミはそのミストの言葉で頭を抱える。
ティファはここまで読んでいたのだ。
ミストが仮にスピカを受け入れても、ヒュンケルとエイミにきちんと結婚の申し込みをするのに悩み苦しむだろうと。
それも入れての十五歳の一月後としたのを、ミストはその通りではあるが、自分の願いをかつての弟子に願った。
「スピカとの結婚を許してほしい。」

元魔剣戦士の結婚・番外編・後編①

その時世界に激震が走った・・・・・主に魔界の・・・・・ごく一部であるがそこが騒がしくなると本気で三界がやばくなるところに局地的な大激震ではあったが。

魔界の神の右腕にして大宰相ミストバーンが、かつての自分の弟子であった娘スピカとの結婚という一大事に、魔界の神は大喜びをして結婚式の費用は全額こちらが持つとまで言っちゃって、なんなら花嫁衣装に相応しい国宝級宝石・装飾品を贈るのだと言ったからさぁ大変。

可愛い自分の部下と、これまた可愛い孫娘が結婚するのだから、こんな慶事にお祝いせずしていつ祝うというのか！今であろう!!

脳内どころか実行しようと大暴走しかけたのを、止めたのはその可愛い部下にして自分の良いところどころか駄目なところも知り尽くしているミストであった。

自分の出せる範囲の式をしますと、ミストがきちんと釘を刺さなければそれこそパプニカ王太子夫婦の時以上、つまりロイヤルウェディング以上の格式高い式になっていたであろう。

そんな事をしてしまえば悪目立ちする事甚だしく、自分はともかく新妻になってくれるスピカに碌な奴が寄り付こうとすること請負である・・・・主は自身が強者の中の強者であるから有象無象も怖れて近づいてこなかったのでその辺の苦労はご存知ない。

無いのであれば自分が察して食い止めればいいと、忠誠心と守護心満載で阻止をして・・・主のがっかりとした顔を見る羽目になったのは仕方がないではないか・・・

とにもかくにもミストとスピカが、ヒュンケルとエイミにミストが結婚を申し込んでから一年後に、お式をする運びと相成って周り・・・ティファとキルとポラリス以外の全員が驚天動地の憂き目にあった。

何故ミスト!!????これである。確かに彼をきちんと知るのもであればお付き合いしたく、仲間や同僚にいてくれれば頼もしい、頼もしいのだが浮いた話は一つも出ては来なかった寡黙の大参謀が・・・・ヒュン

ケルから目玉通信で知らされた師や仲間達一同は、年の差を考えれば眩暈してきそうになった。
マトリフなどは、せっかくのポップ以降になる弟子候補を取られたとやけ酒をしている御年・・・本当に百二十歳のお爺ちゃんなのだろうかこの人は・・・・
実際の記録によれば、膨大な魔力を持ち、その上で精霊から愛された者はなんと百五十まで生きたとか・・・
悪霊にも近い性悪ではあるが、一応は精霊界では高貴な出自にあたるパックが、マトリフちゃんは長生きしてもっと自分を楽しませておくれよと、精霊の加護を与えたのだ・・理由が本当にこいつ精霊じゃなくて悪魔だろうとは言ってはいけない。
そんな元気なお爺ちゃん大魔導士が怒っても、普段から優しいのを知っているスピカ当人に宥められ、スピカがあいつの嫁になるのかといった魔界の名工様は、寡黙な愛弟子に酒を勧められてこれまた宥められた。
ロン・ベルクだとてミストが悪い奴ではない事なんて百も承知しているが、、それでも思うところは多々あるのだ。
もう当人同士が好きあい、互いの事を良しっているのだから祝う以外ないでしょうとはアバン王の言葉であったとか。
秘かにではあるが、自分の子で今年十六になる王太子のお嫁さんになってほしかったのは墓場までの秘密にする事にして。
聡明で明るく、出自は自分の一番弟子というこれ以上ない保証があるので大丈夫であり、他国の娘さんではあるが、政治的しがらみがどこともない・・・これ以上ない好条件のお嫁さん候補であったがすっぱりと諦めた・・・・もしもミストが下手をこいたら速攻でいちゃもんでもなんでもつけてかっさらい、自分の話術と王太子の魅力でスピカを取り込もうと算段する腹黒い諦めを・・・・相変わらず飄々としながらもいい性格をした大勇者であった
それはともかく、式は―身内―とお世話になった人達だけの限定にした。そうでなけらばミストの地位と、スピカの両親の事を思えば―色々―ありすぎて、諸事情は推して知るべし!!

今回は身内枠なのでダイ王太子夫婦、ポップ・メルル国王夫妻、マァム・ラーハルトデルムリン島の長夫婦は式の場だけは、昔の様な、何の肩書も無かったあの頃のように楽しんでほしいとスピカは願い、ミストは速攻でスピカの願いを叶えるべく、都合の良い式場を抑えて招待状にもその旨を一番上位に書き込んでそれぞれに送り付けながら、チウ達も来やすいように、ヒュンケルとエイミが使用したあの広い教会だときちんと明記し、スピカと遊ぶことが多かった獣王遊撃隊・パプニカ王都支部のモンスター達も来てほしいと書き記し、チウは笑いながら承諾をした。

普段は休日であっても自主的に働いてしまう子達が多いので、たった一日ならば全員休暇にしてもらってもいいだろうとダイ達と相談をしながら。

チウの率いた獣王遊撃隊は、今や組織化され地上のどこであっても支部があり、さすがにその運営やら維持やらがチウにできようはずも無いので各王室で其れ専門に立ち上げられた新設の部門が日夜モンスターの皆様に喜んで働いてもらえるようにと頑張っおり、当然パプニカ王都にも支部はあり、スピカとポラリスは幼い頃にチウと一緒に遊びに行ってモンスター達と触れ合い笑いあったのがつい昨日の事のようだと思うほどにチウも成長をしていた。

お祝いは、いつものように幸運が訪れる木の木彫りがいいだろうか？

驚きながらも二人を祝福する声は多く、特に役職だの働き場が定まっていないマトリフとロン・ベルクは速攻で酒を片手にヒュンケル宅に突っ込んできた。

山ほどのお祝いの言葉と、贈り物は式の当日まで楽しみにしていろという二人の言葉をスピカはにこにことしながら聞いて夕餉を終えて、スピカがおやすみなさいと下がったところで大人だけの宴会になった。

「お前さんよくミストバーンとスピカとの結婚を許したな。」

程なくエイミも眠ったのを見計らい、ロン・ベルクがストレートに聞いてきたのを、ヒュンケルはその時の事を思い出してしまい、疲れ

と頭の痛さを飲み込むように、グラスのワインを一息に飲み干した。
・・・・あの時踏ん切りがついたと思ったのだが、矢張り男親としては娘を嫁に出すのは抵抗があるのだろうか・・・

―遡った半月前の夜―
元師であるミストバーンからの言葉に、ヒュンケルと諸事情全て知っているエイミは悩み、特にヒュンケルは頭を文字通り抱えた。
夕餉の後にでもそちらに邪魔をしてもいいかというとっても珍しい事を言って来たミストに来てもいい許可を出した自分を殴ってやりたくなった。
何故だ・・・・スピカは確かに十歳くらいの時までミストおじちゃんと結婚するのだと言っていたが、近頃は全く言わなかったのに・・・言わなかったのではなくて、いろいろと分かり始めたスピカが言わないようにしただけか？
それがライオネルとのお見合い話が、スピカの秘めたる思いを後押ししたのだろうか？
だが理由などこの際どうでもいい・・・・あの厳格を実体化させたようなかつての師が、恥じらいだの戸惑いだのを振りまきながら自分の目の前にいないでほしい！
色々と切なくなる自分はきっと悪くない筈だ!!
とは言え・・・
「はぁ～・・・・・・」
ヒュンケルの溜息に、スピカは怯え、ミストは矢張りすんなりとはいかなかろうと腹を括った。
スピカと違い、実際に自分とこの元弟子の間には、言葉には尽くせぬ様々な事があり・・選りにもよって、キルと違って自分にならば子供を見てもらっても大丈夫だと信頼していたのを、最終的には全然大

丈夫ではなかったのだから無理は無かろう。
普通の親ならばもう抜剣して自分を追い回しても不思議ではない・・・返り討ちにできるがそれをしたら本当に様々に不味くてそれはしないが、さてどう説得したものかとミストも頭を悩ませていたら
「俺に、反対する理由はない。」
「お父さん？」
「俺もかつては罪人だ、それもこの国を攻め込み、死者さえ出したことをスピカ、お前にも教えたはずだ。」
「う・・・・うん・・・でも!!」
「分かっている、いつまでも過去の事だけで生きていくのではなく、償う道をエイミと共に歩くことを決めてお前たちが生まれた。」
「・・・と・・うさん・・・」
「幸せになれスピカ、お前の望んだ道が、誰はばかる事ないと確信しているのであれば俺と母さんはその道を守ってやる。」
娘を頼むと、ヒュンケルとエイミはミストに頭を下げ、短いながらも自分を愛してくれている想いの一杯詰まった父と母の言葉に涙をぼろぼろと流すスピカは無論の事、ミストは主大魔王バーンの言葉と同じか、それ以上の気持ちでしっかりと受け止め二人の結婚が決まったのだ。

元魔剣戦士の結婚・番外編・後編②

先の大戦の勇者一行とその関係者御一同の結婚式は晴れの日と相場が決まっているのだろうかというほどに秋晴れの良き日、今日はヒュンケルとエイミの愛娘、スピカが十六歳の誕生日を迎えると共に、愛する人・ミストバーンとの結婚式の日。

物心ついた時から結婚をしたいと、小さな胸に秘めた思いが満願成就した日であった。

スピカは母エイミにも父ヒュンケルにも似ずに華奢で、重い物も兄や保護者達が変わって持っていてくれていたので文字通りスプーンとフォーク以上の重い物を持ったことがない箱入り娘。

その娘が白く輝かしいウェディングドレスに身を包み、恥じらう姿は一国の王女のようである。

その花嫁をあらゆることを守ろうと決意しているミストは普段と変わらない白のローブ衣装のままで式をあげると聞いた時、女性陣達がそれでいいのかと騒ぎ掛けた。

生涯の中で間違いなく一番のこの日が、普段着ているもので良いのかという言葉を、やんわりと止めたのは花嫁ほんにんであった。

それがミストらしいのだと、式の始まる前から夫婦の惚気のような言葉に、一世一代のこの大事な結婚式にあれでいいのと聞いたレオナ王女達は聞いて後悔をした。もう身も心もとっくにミストバーンの者になっている・・・

そんなスピカが身に着けている花嫁衣装は、どうしてもそれだけは贈らせてくれ、無理であるならば出資だけでもさせてくれておっしゃる魔界の神様の必死さに、母エイミは苦笑しながら―半分だけ―を出してもらい、シンシアテーラーに注文を発注して作られたのだ。

「私のところを選んでいただきありがとうございます!!大魔王様よりも、花嫁衣裳の為の宝石はお預かりしております!!!お金は気にしないでくださいね!!!」

いつかの日、ティファという少女とお茶会をした事で自分の人生は一変した。ティファと大魔王とキルバーンとの出会いによって。

女性の地位は低い物、それこそ三賢者のエイミとマリンが特別であり、何かしらの特別な才を示すか地位にいなければ男のようには自分の夢を存分に追及することは難しく、其の内どこぞに嫁がされるのだろうと諦めかけていたあの日、自分の衣装愛を爆発させて大魔王様に語ってみれば、―面白い、余の服を作って見せよ―と受け入れてもらい、普段の真っ白いローブとは違い貫頭衣風のではなく、黒に近い濃茶色の合わせのローブに、同系色で片側だけのマントと言う洒落着を作って見せたのがきっかけで、困難な道のりながらもお衣装作り仲間のキルの励ましや助言を貰って店を立ち上げ今や押しも押されぬ大テーラーにまで発展をした。

それがなくともスピカの衣装は決まってシンシアテーラーであった。

女性初の大テーラーシンシアの誕生の一端となったあのお茶会にエイミもいたその縁で。

可愛いスピカちゃんの産着からウェディングどれまで作らせてもらえるだなんて・・・テーラーとしてこれ以上言う事はあるだろうか!!?いや無いだろう!!!お金なんて本当にいらないが、それではヒュンケル夫妻が納得すまい・・・・・本当にかかった費用の半額以下をヒュンケル達に提示した強かなシンシアの腕は確かだ。

花嫁の素肌はあまり見せてはいけない、見ていいのは新郎の特権だを標語にされたような、肌露出の少ないドレスだが決して野暮ったくはない。

長袖のハイネックではあるが、鎖骨から首・長袖の部分は肌が見えそうでいて見えないぎりぎりの薄さのレースとアップリケで覆われており、コートトレーンに仕立て上げられたその衣装は、優しいスピカを白い花の妖精の様に見せている。

スカート部分には真珠が、胸のあたりには小粒のダイヤがそれと見ない限りは分からない絶妙な配置と数が縫い付けられており、花嫁スピカを一層光り輝かせている。

お化粧もほとんどする必要もなく、念願かなってミストバーンと結婚ができるのだと思うだけで頬に血が上り、シンシアの助言で本当に

薄化粧で唇も透明のリップでよかろうとなった。
天然で美しいのだから、弄る方がよくなかろうと。
その美しい花嫁になった愛娘を涙交じりに見守っている。
あの小さく可愛かった娘が、今日自分の手を離れて新しい家庭を築こうとしてる。
「スピカ、これを。」
衣装の着付けとメイクが全て終わり、髪を編み下ろしにして花飾りでまとめ終わるのを待ち、エイミが鏡の前で座っているスピカの耳に、真珠のイヤリングを付けた。
それは見るからな古い装飾だが、不思議と金の留めぐのみならず真珠も色褪せていないアンティークのイヤリングであり、スピカはあまり宝飾類を身に付けない母が持っているのが不思議な気がしたのを察したエイミがイヤリングをスピカにつけてあげながら、優しい顔で教えてくれた。
「これはね昔お母さんが、貴方の様に結婚式を迎えた時にバダック様が下さった物なの。なんでもバダック様のお母様の物で、代々伝えてきたのを自分の代で無駄にするのはいけないから私に継いでほしいって言って、贈られた物なのよ。」
「お母さん・・・・・　もしかしてこれは・・」
「そう、聞いたことがあるでしょう?サムシングフォーの話を。」
結婚式花嫁の幸運を願うサムシングフォーの一つ、サムシングオールドを贈ってくれたのは、父親の様に自分を見守ってくれたバダック様からだったと微笑みながら真珠のイヤリングをつけてくれる母の手を、スピカは肩越しに握る。
「ありがと・・・お母さん大好き・・・」
「あらあら・・・せっかくのお化粧が涙でやり直しかしら?」
「いいの・・・嬉しいんだもん・・・」
母と娘のその姿に、シンシアやレオナ達は薄っすらと涙を流して見守る中、サムシングニューとして、エイミにあらかじめスピカに贈るサムシングオールドのアイテムを聞いていたレオナが、美しい真珠のネックレスをスピカにつける。

サムシングボローの友人から借りるものは、スピカの学友や近所のお友達は一般人が多く―無理!!魔界の神様来るお式は本当に無理だから!!!!―と半泣きされて、―でも絶対にスピカの事をお祝いしたいから!落ち着いたら私達だけでお祝いさせてちょうだい!―と、お式の十日後に学友一同祝うの会を約束し、その代りこれを使ってと白シルクの手袋を渡された。

―私たちのお小遣いや家のお手伝いをしてもらったお駄賃をちょっとずつ出し合ってシンシアさんに作ってもらったの―

これの最初の使い手にスピカになってほしいと渡された。

スピカと自分達のサムシングオールドは、この手袋で決まりで、友達の結婚式は必ずこれを使っていこうと言われた時、スピカはワンワンと泣いた。

嬉しくて幸せで、その気持ちが移ったように友人たちも大泣きをしたのを思い出しながら手袋を身に着けたスピカはまた泣きたくなってきた・・・サムシングブルーの青、白いバラの花束を彩るように、獣王遊撃隊の森に住まうモンスター達が森の中にひっそりと咲いているのを探し当ててくれたブルースターを添えられた、萎れないようにと式の寸前まで花瓶に入れられているウエディングブーケを見つめながら幸せをかみしめて。

幸せな花嫁支度の一方では、花嫁支度を待っているミストは、親友キルがそわついていることにうんざりとしていた。

「何故お前がせわしなくしている。」

「ん?・・・あぁだってミスト!スピカの花嫁衣装だよ!!?君気にならないのかい?」

「・・・・もうすぐ見られるだろう・・・」

「もう!!そういう問題じゃぁ無いんだよ!!!」

・・・・ではどういう問題なのだと、その辺の機微は少々薄いままのミストは、親友や周りの男どもが狼狽える様にそわついているのに呆れている。

父親ヒュンケルはまぁ分かる、愛娘が嫁に出るのだから・・・だが

何故キルだのマトリフとロン・ベルクとだのがそわつくのだ・・・・・
「・・・・・あ奴が羨ましい・・・・・・」
まさかティファを羨む日がこようとは・・・・
「へっくしょん!!!・・・・・誰か噂してる?・・・・・は!トライフルの完成急がないと!!ローストチキンとビーフはいくらあっても今日は絶対に残らないと請負です!!あるだけの食材の調理を!!!ケーキの準備はどうですか?スピカちゃんの好きなポテトチップスとポテトサラダをもっと作ってあげましょう!!!」
どうも!!久しぶりに―料理人している―ティファです!!噂されたからってくしゃみするなんて昭和くさいですって?ほっておいてください!!!私はいそがしいのです!!!
今や厨房は戦場です!!!
料理は今日はいくら作っても足りる気しない!出した端から無くなっていくのが目に浮かぶ!!お酒なんて私の秘蔵品と、大魔王の持っているワインセラーを放出してようやくだろうと見積もるってどんだけなのよ・・・
スピカちゃんのお友達来れなかったのは残念だけれども・・・まぁ、ほぼ一般のお子さんが魔界の神様ご臨席するところに平気で来られる道理はないわな・・・
後日のお祝いの会も私が頑張って美味しい物作ってあげるからそれで許してほしい!その子達も今日のお式で目玉通信で祝福の言葉をその場でスピカに言えるように手配したからね!
「ティファさん!!聖堂での誓いの儀がもう少しで始まります!!今の内に着替えてお二人を見守って上げてください!!」
ティファのアシスタントの料理人が、ティファにも先の参列をと薦めれば
「そうよティファちゃん!!」
「貴女は着替えて・・」
「ここは私達にお任せなさい!!!」
ミストとスピカの結婚式の料理の支度は、パプニカ王城の厨房や大魔王のお抱え料理人たちが声を上げる前に真っ先にティファが名乗

りを上げた。
「かつての勇者一行の料理人の出番でしょう!!」
ニヤリと不敵に笑って名乗りを上げられては、誰も何も言えなくなったのを異議申し立てが意外にも飛んできた。
「私達、」
「魔王軍の料理長がやらないで、」
「「誰がミストバーン様を祝うというの!!」」
ミストを慕った双子の魔族が、スピカの事もきちんと祝うから共に作らせてほしいとティファにガチ談判をして共同で結婚式の料理指揮を執ることになった。
双子は淡い恋心をミストに持っていたが、ミストバーン様の幸せの為ならばと自分達の胸に仕舞いこみ、終生恋はもうしまいと心に決めて今日この日の料理を最高の者にすべく調理を指揮し、盛り付けに指示を出し、料理の飾りつけなど隅々まで目を光らせる中、式本番が近づいていると送り出す。
スピカがティファをママと呼んでいるのは知っている者は多く、―母親―が式に出ないのはあり得ないと厨房一同から追い立てるようにされ、双子に両脇を抱えられて廊下に出されたティファはパチクリとし、すぐにクスクス笑いをしながら厨房の扉に向かって頭を下げた後、長い廊下を走り出す。
もうすぐ結婚式の本番が始まろうとしている

元魔剣戦士の結婚・番外編・後編③

「私達は今日集っていただいた皆様を前に」
「私ミストバーンは、ヒュンケルとエイミの娘スピカをこの時を以て妻とし」
「私ヒュンケルとエイミの娘スピカは、ミストバーンをこの時を以て夫とし」
「夫婦となり、病める時も健やかなる時も何時いかなる時も互いを尊重し合い助け合う夫婦となる事をここに誓います。」
聖堂での誓いの言葉と、誓いの口づけの聖堂を揺るがす大歓声が上がる。
この時を以て、二人は夫婦となった。

―遡った少し前―
「む～・・・・まだか・・・ミストはもう祭壇前で待機をしているというのに・・・スピカがなかなか来んの・・」
「・・・落ち着いてくださいバーン様・・・ダイ達の時も、花嫁がバージンロードを歩く前は少しかかったのと同じです・・」
「ハドラーよ、その方は落ち着いているが、考えようによってはそのほうのひ孫が結婚する晴れの日ぞ?」
「そうだよハドラー君!もっとこうさ、お祝いムードで盛り上がろうよ～。」
「そうか、ヒュンケルの親父さんのバルトスさんはハドラーが禁呪生命体で産んだんだっけ・・・本当にひ孫だわそりゃ。」
「なんだか魔王軍とヒュンケルさんって、本当に縁続きなんですね～。」
「ふふ、その元魔王軍であった俺の後を継いだお前も十分縁続きなのを分かっているのか?」
「そうね、考えようによってはチウもそうなるし・・ダイ君とティファもそうなるのよね～。」
「私の場合は父さんと母さんの後継いだみたいなものかしら?」

「勇者一行のか？・・・・・そう考えると俺って本当に一般人だったんだな～。先生にくっついて行かなけりゃ～今頃こんな凄い所で皆でワイワイ出来なかっんだろうな。」
「縁って不思議だよね。俺だって何事も無かったら一生デルムリン島から出たくないって言ってたかも。」
「ダイさんは本当に島がお好きなんですね。」
「そうだよメルルさん。一度私がロモスの港でもいいから行こうって誘っても、島のみんなと遊んでたいって言ってたんですよ？」
「ディーノにもそのような時期が・・」
「今では押しも押されぬパプニカ王太子ですが。」
「やんちゃなティファ様見てやめておこうってなったんじゃねぇか？」
「さよう、ガルダンディの言う通りかもしれませんな～。」
・・・・・スピカを待っている間になんだか私への雲行き怪しくなってない？
ども！聖堂で花嫁スピカを待っているティファです!!
厨房後にした後白い料理人服からダッシュで―キル作成―のモーニングドレスに着替えたティファです！大き目のリボンタイが付いているオフホワイト色のブラウスに、ライトブルーのボウタイワンピースをバッチシ着て、きちんとお祝いモードで大魔王達もいる聖堂の最前列でスピカ待ち状態です。
今日の結婚式の為に、皆んなが一年前から来られる様に調整して、近頃は無かったー全員大集合ーになれて本当に良かった。
でも仕方ないか、皆んな世界の明日も幸せになれる様にいそがしくしてるんだから。
それでも、今日はなんの肩書きも無く、昔みたいにはしゃいで楽しそうにしている皆んなを見られて、お式とは違う嬉しさを感じる。
幾つになってもダイ兄を君と呼ぶレオナ姫も、来年あたりはレオナ女王に、メルルさんも女王稼業について随分経って、ポップ兄も王配としての貫禄がついて・・たはずなのに少年に戻った様にスピカまだかと何度も言ってそわついてる。

早く来ないかとみんなそわそわして、おじさんとロン・ベルクさんなんて様子を見に行こうとしてノヴァとポラリスに止められて・・・アポロさんはマリンさんにハウスされてた・・・でも気配的には聖堂の扉の前あたりまで歩を進めているの皆分かっているだろうに、ヒュンケルがスピカの手を離せなかったらどうしよう・・・

ティファの予想は―半分―当たっている。

ヒュンケルも愛娘の手を放しがたいのと、スピカも父と付き添ってくれている母に、官署の気持ちを伝えても伝えきれずにいたのだ。

「お父さん、お母さん・・・本当にありがとう・・・大好きだよ。」

「スピカ、貴女がミストバーンの奥方になっても、生涯ヒュンケルとお母さんの可愛い娘なのよ。」

「そうだぞスピカ、それを忘れないでくれ。」

「はい・・・はい!!!」

行ってきます!!

スピカが自分の気持ちに一区切りを漸くつけ、行ってきますと元気よくヒュンケルとエイミに向かって挨拶をする。

これからは両親と兄が自分を守ってくれていた巣から巣立ち、ミストバーンと共に長い人生の道を共に行くのだと決意を示すために。

「新婦様とお父君の入場にございます!!!」

この一言を待ちわびた聖堂の招待客達は案内人の言葉と共に一斉に立ち上がり、祭壇の前で待っていたミストも開かれた扉を見つめる。

そこには白百合のごときスピカが、花嫁のヴェールで顔を覆い、片方の手でサムシンググブルーのブーケを持ち、父ヒュンケルにエスコートされて楚々として入って来た可憐な姿があった。

その美しさに、ミストは瞬間で心を奪われた。

美しい・・・・

かつて自分は大魔王バーン様の魂に触れ、その高潔なる想いを美しいと感じて永遠の忠誠を誓ったが・・・誓おう、終生変わらぬ忠誠はバーン様に、されど愛しい思いを―妻―に

黒いダキシードを着た父に伴われ、スピカがバージンロードを歩く

時、先ほどの喧騒が嘘のように静まり返り、荘厳な静寂が聖堂を満たした。
聞こえるのはスピカとヒュンケルの足音のみで、一歩ごとにミストに近づくいていくのを誰もが固唾を飲んで見守る。
産まれた時から見守って来た自分達の娘にも等しい子が巣立とうとするのを見守る親鳥の様に。
そしてとうとうスピカがあと一歩でミストの前にならばんとした時、ミストが一歩踏み出し、父ヒュンケルからスピカのエスコートを受け取る。
娘を頼む
終生スピカを守る
互いが無言であっても目で会話をし、スピカの幸せを守ることをミストが誓い、ヒュンケルは頭を深々とミストに下げ、妻エイミの待つ花嫁の両親の待機席へと向かう。
これからはミストがスピカを守るのだと託して。
「ミスト・・・・その・・・・お待たせしました。」
父から愛おしい夫となるミストにエスコートが代わり、祭壇へと行く道すがらスピカはミストに小声で詫びをした。
どうしても父と母に感謝の言葉を伝えたくて・・・それでも待たせすぎたのではなかろうかと、素直で良い子のスピカの詫びに、ミストもひそりとした声で返した。
「構わない・・・待つ間も楽しんでいた、気にするな。」
そう、キルには花嫁衣装を着たスピカはもうすぐみられるだろうと言ったが内心ではスピカはどれほど美しくなっているかをずっと考えていたのだ。
だがどの想像した姿よりも、スピカの今の美しさにかなうものではなかったが、言われたスピカはきょとんとしてミストに聞き返す。
「あの・・・それはどういう・・・」
その答えを聞くのには時間切れとなった。
二人は祭壇の前に立ち、神父から祝福の言葉を授けられた後、―神―にではなく、自分達の大切な人達に向かって夫婦となる事を誓い

あったのだ。
ミストも今は許しているとはいえ、一時は天界を憎み、神々を滅ぼさんと魔界の神と共に長い時を渡って来た身。
其の想いは、要因となった魔界の滅びがなくなったとはいえ胸の中にわだかまりが色濃く残っている。
そんな自分が神に誓うとはどうなのだろうかとスピカとティファに相談をし、ティファからの提案でこの形に収まりを見せた。
結婚式自体の神の祝福を受け取り、誓いは大切な人々にすればいいのではないだろうか。
きっと天上の三神様達も、笑って見守ってくれるだろうとからりと笑って。
文言はスピカとミストの二人だけで相談をしあい、共に声を合わせる練習を何度も重ねたのを知っているのはティファだけであった。
朗々としたバリトンヴォイスのミストと、可憐なスピカの声が美しいハーモニーとなり、聴く者達を魅了した。
そしてクライマックスがやって来た。
ミストとスピカが向き合い、ミストがスピカのヴェールに手をかける。
落ち着け・・・・ただ、ヴェールを上げさえすればいいだけではないか・・・
ミストがヴェールを上げスピカの顔が見えるまではそう時間を要さなかった。
しかしミストにとっては途轍もなく長い時間と感じた。
むやみに喉が渇いてカラカラとなり、心臓の鼓動がうるさく感じるなど初めての事に戸惑いながら上げたヴェールの先に見えたのは、スピカの真っ赤に上気し匂いたつような薔薇の頬、うるんでまさに紫水晶のように美しい瞳・・・・そして自分を待つかの如く、小さく開かれた可憐な唇・・・
あぁ・・あぁ・・・・スピカ・・・・・・愛している！愛し抜く!!私をどうか・・・
「ミスト・・・・」

「スピカ・・・」
「私と一緒に・・・幸せになってください・・・」
おのれの赴くままに発せられたスピカの小さな声で言われたその言葉に、眩暈のような愛おしさを覚えたミストは、背を押されたように小柄なスピカにまさに覆い被らんとばかりに抱きしめ、腕に込めた力とは裏腹に、そっと優しい口づけをスピカにおとし、その瞬間祝福の言葉の嵐と、割れんばかりの拍手が聖堂を揺るがすほどに満たさる中、スピカは切に願った。
このまま愛おしい夫共に溶け合って一つになれたなら、これほどの幸福は無いだろうと
ミストが自分のヴェールを取り払った後、―あの時―の様に少しだけ悲しい気配がした。
洞窟で結婚をしてほしいと望んだ自分に、ミストは罪深い自分ではいけないと気配が悲鳴を上げていた。
きっと今もまた・・・だからこそ、自分がミストバーンの心の支えになりたい。力も知識も経験も何もかもが強く高い彼を、そういう意味で支えられるのはそれこそ魔界の神様と次期大魔王との呼び声が高い魔王ハドラー、親友で同僚のキルバーン、人界ではアバン王とマトリフ大導師、そしてティファしかいない。
ダイ王太子、テラン王配ポップも、力と知識はあるが両方はない・・・そんな途轍もない人物を夫にするのであれば、自分の思いも何もかもを差し出して、心を支える以外があろうか?
自分は夫の庇護対象になりたいのではない!誓いの言葉の様に支え合う夫婦になりたいという願いと共に、溶け合うような優しい口づけを交わす・・・・ミストもまた、スピカと共に溶け合いたいと望みながら・・・・・・

あれは本当にすごいお祭り騒ぎだった・・・・ダイ兄達よりもすごい熱狂だった気がするな～。
ミストとスピカの結婚式が終わって一月後、約束よりも半月遅くなってしまった学友や近所の人達とのお祝いの会の料理を作りながら、ティファはその時の事を思い出す。
口づけが交わされた後、二人は腕を組んで父ヒュンケルと母エイミに挨拶に行き、そしてフラワーとライスシャワーの祝福を浴びながら、バージンロードの上を歩いて出口に向かい、祝いの鐘の音共に表に出て、スピカは泣いて笑って力強くウエディングブーケを投げて・・・・私が受け取ってしまったけれどもいいのかな？
全員の目が・・・・・主に父さん・兄達・・・大魔王とキルが一番怖かった気がするのは気のせいという事にしたいよ、うん。
それでも・・・・いい披露宴ができたと思うんだよね～。
「ミスト!スピカ!!夫婦初の共同作業です、きれいにケーキを切ってあげてください!!」
「・・・・こんなきれいなケーキを・・・・切ってもいいのティファママ？」
「・・・・・やりすぎだ馬鹿者・・・」
聖堂から降りた広い庭が披露宴の場となり、中央には三段になったケーキが安置されるように置かれていた。
台とケーキを覆う様に色とりどりの花が敷き詰められ、中央に置か

れているケーキは見事で・・・・・・見事すぎて新郎新婦が切るのをためらわせるなぞ馬鹿であろうと、ミストは溜息をつきつつ内心でティファに突っ込んだ。
純白のドレスの様なクリームに、金朴銀箔を細かくしたのを絶妙な配置で眩し、どう見ても季節外れでハウス栽培で頑張りましたと分かるイチゴが花束に見えるようにカッティングをされ飾られている・・・・これを中央から真っ二つにしろと言うのか・・・
ティファとしては、お祝いと言えば紅白だろう、金銀だろうという前世の記憶に引っ張られ、去年の内からイチゴ専用のビニールハウスを大魔王バーンと共に設営し、温度管理を徹底し、其れ専用の部門をバーン様が立ち上げたからさぁ大変の巻きとなった。
こればかりはバーンの跡継ぎも反対できず、ミストに知られる事なく繊細な作業が得意なキルが部門の長となって頑張って大振りで見た目も瑞々しいイチゴができた。
カッティングされ、細かくなったイチゴもきれいにケーキの上に花びらを散らせたように飾りつけ、新郎新婦が切るのを躊躇うほどのウエディングケーキが出来上がったのだ。
大暴走したらまずい人達が、一致協力をして気合を入れて作られたケーキに、二人は緊張しながら入刀を果たし、楽しい宴の始まりとなった。
スピカはあっちからもこっちからも引っ張りだこで、ミストの側を暫し離れたが、ミストは楽しむスピカに眼福を覚え、見ているだけで楽しいので無問題であり、待つ間もバーンが二人の幸せを寿いでくれ、ティファもなんだかんだと料理の方を手伝い、双子がちょろちょろと出ては自分に見られたと分かると引っ込むという愉快な光景が繰り広げられている。
ポラリスも師のロン・ベルクやマトリフと共に呑んで妹を祝い、綺麗に盛り付けられていた料理皿はいつのまにか空になっているのをまたティファ達が足していく。
主もティファ特製の十種類のトライフルを堪能しているのを横目で見て楽しんでいる時に、灰色の貫頭衣と揃いの色のローブをまとっ

たチウがちょちょかと近付いてきた。
手にはチウの贈り物として馴染みのある木彫り細工を手にして。
「ミストバーンさん。その、芸がありませんが…僕からの贈り物です。」
「・・・有難く貰おうチウ・・・・腕が上がったか？」
「そうですか？そうだと嬉しいです。」
スピカと同じくらい、ミストもバーンとキル以外にも引っ張りだこで、言葉が短いながらも礼を尽くし、その中でチウより、雄鳩と雌鳩が共に木の枝にとまり寄り添っている一本彫りの木彫りを贈られた。
塗装でもされているのか真っ白であり、いつもは木肌をそのままにするチウにしては珍しいと思ったが、話を聞けばチウが塗ったわけではないらしい。
「これは白樺と言いまして、いつものライリンバー大陸の幸福を呼ぶ木の物ではないんです。お二人に特別な物を渡したくて、キルバーンさんと一緒にどの木にしようかを考えたんです。」
人間は花言葉の様に木にも言葉をつけ、白樺の木言葉は
「光と豊富だそうです。」
二人がこのハトのように寄り添い、光と豊富に包まれた生涯を送れるようにと言われた言葉に、スピカはまた嬉しくて泣きだし・・・・そして・・・・・

自分があの時涙を流すとは・・・・チウは矢張り大物だ。
一月前に贈られたハトの木彫りを置きながら仕事をしているミストはしみじみとあの時の事を思い出す。
様々な意味で満たされ、これ以上ないだろうと思った幸福な気持ちは、もっとあるのだろうと指し示されたあの時に、自分もまたスピカの様に涙を流した。
洞窟でスピカに結婚を申し込まれ苦悩し、そして受けたあの時にも流さなかった涙を・・・
これから先も切って幸せな事に巡り合える気がする、スピカと共

に。その時また、自分は涙を流すのだろうか？
ローブを着ているおかげで周りに知られていたいと思いたい所ではあるが、自分の気配で絶対に主と悪友の如きのキルとハドラーとそして・・・・ティファにはばれているだろう。
だがいい、それが嬉しい事の発露なのだから・・・・この先もきっとあることなのだから。
そのミストの予感が当たるように、三月後にスピカより子ができたという知らせと、そして十月十日後に産まれた我が子を抱いた時も、ミストは誰はばかることなく涙を流して喜んだのは別のお話。
今は新妻が学友達とどのように楽しんでいるのかを、夕餉に聞くのをミストは楽しみにしている。いつもの様に小鳥が囀るように、笑って沢山話してくれるだろう。
五年十年・・・・百年は無理であっても、彼女が人としての寿命が付き、その後も愛し抜くと決めた妻スピカの笑顔を思い浮かべ、ローブの下のミストの顔もまた、優しく微笑むのであった。

可憐な少女と獣王様：前編

儚げで可憐と言う言葉はきっと…あの者の事を言うのだろう・・・
クロコダインは近頃は日に何度か溜息をつく。
溜息と共に、出会って一目惚れした少女の名前を呟く。
「ティフィール・・・・・」

大戦が終わり魔界が浮上して半年後にアバンが結婚をし、更にその後ヒュンケルとエイミが結婚をして一月後にクロコダインはバダックの企画したお見合いパーティーに出席をした。
その時は出席した婦女子達が可愛い女の子達だとしか思えずにバダックをがっかりとさせてしまったが、そのすぐ後に出会った盲目の少女・ティフィールに出会って自分は一目惚れをして・・・何の奇跡が起きてティフィールも自分を好きだという・・・・何故だ？
目が見えないゆえに、リザードマンの俺の容姿が分からないせいかとも思ったが、それではお見合いパーティーで自分を心の底からもてなしてくれた娘達に対して失礼が過ぎるというのは、あまり女心の分からない自分でもそれは分かる。
自分が妻を、それも人間の少女・・・・・さらに言えば、あのような華奢で可憐なる少女に惚れようとは思ってもみなかった。
仮に結婚をするのであれば同じ種族か、人間だとすれば自分と同じ戦士の類か・・・・そのどちらでもない、自分の身を守る術が一つもない・・・・唯一の救いがあるとすれば、年齢が十七歳と少し大人であった事だろうか？
彼女も盲目とは言え意思表示のはっきりとした子で、別れてから三日後に兄であるロベールを通してもう一度自分と会いたいと言って来た。
もう一度ティフィールたちの家に行けば歓迎をされ、ロベールからティフィールの事をも娶ってほしいと言われた時に天地がひっくり返る思いがした。
貴方にならば、妹を託せます！

そう一言を言って立ち上がり、自分が返事をするまで頭を上げない実直な漢の心に、そして自分がなんと返事をするのかと怯えながらも逃げ出さないティフィールの健気さに、自分は承諾をしたが何と答えたのか本当に覚えてない。

こんな武骨な自分が、可憐な少女を娶る・・・・

「どうしてあげればよいと思うティファよ？」

「・・・・・・さて・・・恋と言うものを私もしたことがないので何とも言えませんよクロコダイン。」

「・・・・そうなのか？」

「はい。」

ティファの返事にクロコダインは少々意外そうな目を向けるが、その目線にティファは苦笑しながら律儀に答える。

「私は生まれてながらにしてこの世界の事ばかりに・・・もっと言えば幸せにする事ばかりに考えていて、―愛―を知っていても―恋―は知らないのですよ。」

もっと正確言えば、あの最初の大魔王達との決戦時に、あるいはすべての策がうまくいき、三界全てを繋げこの世界の命運をひっくり返した最後のあの時に己の命は対価として消えるのだろうと思い定めて生きてきた十二年間で、自分が恋をするという考え自体が欠落していたというのは・・・・終生の秘密だと、ティファは胸の中で呟きながら相談に来たクロコダインを見やる。

彼ほど迷う事無く仲間の為に思いを、命を使って来た戦士はいない。

それが恋となると違ってくるのはきっと良い事だ。

それは自分もだが相手の幸せを考えたうえで悩み不安になり、幸せの道を模索していることに他ならないのだから。

しかし本当に困った・・・・この件は自分にはさっぱりだと自分で淹れた紅茶を飲みながらティファも溜息をついてしまう。

―普段の逢瀬―の時のプレゼントの時にはアドバイスならばできていた。

クロコダインもティフィールも、いきなり結婚とは心の準備ができていないので、結婚式の用意をしながら結婚は半年後がいいだろうとなった。
その間にお互いの事を知れるようにと二人の周りが活発に動き、パプニカ自慢の風光明媚な場所で二人がピクニックに行ける手配をし、あるいは兄ロベールも入れて温泉旅行一泊二日に行かせたり、ありとあらゆる手を使って二人の距離が縮まるように頑張ってくれた。
そんな時ティファに、
ピクニックの時には手触りの柔らかいハンカチで汗を拭ってあげて渡してあげては？
温泉旅館でふんわりとしてこのタオルを使ってもらってください。
このハーブティーはとても良い香りがするのですよ。
等々贈り物を共に用意してくれた。
しかしそんなティファにとっても、今回の相談は悩む。
兄を通してティフィールを娶れる事になったが、プロポーズは矢張り再度自分から言った方が良いのかと聞かれて困っている。
自分だったら好きな人に自分で申し込んでいるので、親族挟んだ場合の事など知らんし、好きな人にどうしてほしい事態が・・・・お手上げだ。
しかしだ、クロコダインも本気で悩んでいるので力にはなってあげたいと思う。
こと戦いになれば思いっきりがいいのにと、クロコダイン自身も自分はここまで不甲斐ない男だったのかと落ち込んでくる。
文字通り戦いしか知らない自分は、婦女子相手にどうしろと言うのか分からない。
だからと言って、結婚するまで会いませんと言うのは失礼にもほどがある・・自分が相手の保護者だったら間違いなくアックスを唸らせて相手に打ち掛かりながら破談にしてやると怒鳴りつけること請負であり、ティファに相談をしながら頑張って来た。
そしてそろそろ結婚式の日が迫り、その前に再度自分の口から結婚の申し込みをした方が良いのか・・・・それでは兄ロベールが結婚を

申し込んだあの時は、自分との事を悩んで半年近くしてようやく答えを出したのかと思い違いをさせても可哀そうではなかろうか・・・そう思って二人はどうすべきかと頭を抱える。可憐な少女の胸の内はいかなるものなのだろうか？

では他に相談者がいるだろうか？

レオナ姫は無いだろう、王女にする相談ではない。

ではエイミは？・・・・新婚夫妻の馬に蹴られてはたまらなく、メルルは今頃は次期テラン女王になるべく勉学の真っ最中・・・・ではマァムはと言えば、近頃はラーハルトがべったりしているので近寄りづらい・・・

「・・・・・春ですね～・・・・」

季節は夏なのに、それぞれに春が来たと、デルムリン島の森のそよ風を受けながらティファはのんびりと呟く。

さて・・・・どうしたものでしょうかね～

可憐な少女と獣王様・中編

「俺と結婚をしてほしいティフィール。」
悩み悩み抜いて、様々な者達に相談に乗ってもらい、今日この時を迎えたクロコダインは逃げたくなる己を叱責し、言葉を押し出す。
「出会った時より其方に心を奪われた。だが、こんな武骨で戦いしか知らぬ俺が、可憐で花のような其方を独占してよいか悩んで・・それでも、其方がほかの男の手を取ることを想像しただけで胸がかきむしられる。こんな俺だが妻になってくれティフィールよ!!」
風が緩やかに吹く中庭、二人が夕暮れ時に出会ったパプニカ王城の中庭でクロコダインはティフィールに結婚を申し込んだ。
再度の結婚申し込みはティフィールの心をかき乱すのではないだろうかと言う自分の悩みを―とある女傑―に蹴っ飛ばされた。
―女は男からの言葉をいつでもきちんと待っているの。愛の言葉ならばなおさらよ!きちんとおのれの言葉を伝えなさい!!―
その言葉に導かれ、ティフィールに伝えたいことがあるとロベールに許可を取り結婚を自分の口から申し出た。
その言葉を受けたティフィールのハシバミ色の瞳が大きく開き、しなやかな指が可憐な口を覆い震えながら涙を流し、華奢な肩を震わせ幽やかな声が漏れ出た。
「嬉しゅう・・・ございますクロコダイン様・・・・」
クロコダインが半年の間悩んでいたように、ティフィールもまた小さな胸を不安で満たしていた。
クロコダインは優しく懐深く、自分の境遇に同情して兄の提案を受け入れてくれたのではなかろうかと不安で不安でたまらず、逢瀬をしてもらう度に優しくされる価値が自分になぞあるのだろうかと泣きたくなった。
しかしクロコダインは言ってくれた。出会った時から自分に心を奪われたのだと赤裸々の想いを告げてくれた。
ならばもう悩まない。愛おしい男の言葉を疑うなぞそれこそ・・・自分はそこまで弱い者ではないない!強くなりたい、せめて心だけで

も強くなってクロコダインと共に人生を歩いて行きたい。
「私と結婚をしてくださいクロコダイン様・・」
細いながらも、ティフィールに出せる精一杯の声で同じようにクロコダインに結婚を申し込んだ。
何やら唖然としたクロコダインの気配を感じ取ったティフィールは、心臓がドキドキとときめいて逃げ出したくなった。
矢張り女の自分から言うのははしたなかったのだろうか？
だがそれは杞憂であり、大きくも優しい手がティフィールの心臓を抑えている手に覆いかぶさり、そして逞しい胸元に引き寄せられた。
ティフィールは何が起きたのかと驚き戸惑う中、温かくも力強い声が降って来た。
「俺の妻になれティフィールよ。」
そして幸せになろう
これほどの、幸せがあるのだろうかとティフィールは小さなその身を完全にクロコダインに委ねる。
終生共にありたいと願って

「・・・今頃クロコダインとティフィールさんどうしてますかね・・・」
「あら、そんなこと決まっているでしょう。本当にこの辺はてんで駄目なのねティファさんは。―夫のロカ―よりも朴念仁な人は初めて見ましたよ?」
「あう・・・・」
パプニカ王城の中庭同様、緩やかな風が吹き抜けるロモスの迷いの森にあるネイル村の家のテラスでティファとマァムの母親レイラがお茶をしている。
ティファはクロコダインの再度の結婚申し込みがうまくいくのかとやきもきし、片やレイラの方は平然としてお茶を啜っている。
ティファとクロコダインからだけの情報ではあるが、そのティフィールと言う娘さんはどう考えたってクロコダインに惚れぬいているではないか・・・・それなのに武骨なクロコダインどころか年頃の娘が女心を分かっていないというのはどうなのだろうかと、クロコダインへのアドバイスよりもそちらの方がレイラにとってはメインになったのを、ティファは藪をつついて蛇を出してしまったと頭を抱えた。
レイラさんに相談してみましょうと提案をした自分を蹴っ飛ばしたいほどに。
能天気に、武人を夫にしたマァムさんのお母様に相談をしてみませんかと、悩めるクロコダインの事をレイラに相談したいと悪魔の目玉通信でアポを取り、後日きちんとお土産を持って家主のロカにも挨拶をして、なるべく人のこなさそうなところに小さなテーブルと椅子を置いて相談してみれば、レイラにとっても呆れらた。
「どう考えてもその娘さんはクロコダイン、貴方にべた惚れでしょうに。」
「む・・・そうなのか?」

「はぁ～・・・・」
　自分の言葉に疑問を持っている時点でダメダメだと溜息をつくレイラに見据えられ、クロコダインはかつてない恐怖を覚えた・・・すなわち！蛇に睨まれた蛙である!!
　ティファよりは背があるが、見た目は一般の主婦にしか見えないレイラから！立ち上るオーラは何だというのだ!?
　クロコダインが感じた恐怖は、子を、それも娘を持つ母親からのお叱りのオーラであり、その認識悔い改めないと娘はやりませんよモードであったりする。
　子を持つ母親はある意味恐ろしいのだがそれはともかく、生来心根が優しく・・・でなければあの口が悪く偏屈で、おおよそ愛情表現下手のロカを夫にはしていないだろう。
　きちんとロカの良さも知るからこそ結ばれた、いわば結婚人生の大先輩の言葉は重く、クロコダインはただただ頷くしかできなかった。
「女は男からの言葉をいつでもきちんと待っているの。愛の言葉ならばなおさらよ！きちんと己の言葉を伝えなさい!!」
　その言葉に、自分の何もかもを打ち砕かれたクロコダインは結婚申し込みを決意して、そこでめでたしめでたし・・・・にはならなかった。
「時にティファさん、貴女はいったいどうなのですか？」
「ふぇ??!!」
「いつも他の子達の幸せや恋愛の面倒見ているようだけれども、ティファさんは自分の事はきちんと考えているんですか？」
「あ!!・・・や・・・その・・」
「・・・・ティファさん？」
「・・・・・」
「きちんと考えましょうね？」
「・・・・・あぅ・・」
　良い笑顔で、他人の世話ばかり焼いていないで己の将来の事をきちんと考えなさいと、クロコダインを見送った後に小一時間説教されたティファは顔面どころか全身に冷や汗を流し、人生とは難しいと本気

で嘆き、その一方で互いの想いを再度確かめ合えたクロコダインとテイフィールは、人生とはかくも幸福に満ちているものなのだと、明るい道を見出したのであった。

可憐な少女と獣王様：後編1

あ～・・・いい天気だな。暑くなるなこれは・・・・

ども、能天気にお空を見上げて今日のお昼ごろは気温高くなりそうだから今開いているお茶会ののデザートに氷菓子を、氷の勇者と呼ばれたノヴァに手伝ってもらって追加でお出した方がいいのか悩んでいるお料理人のティファです。ミストとどうしようか相談中でもあります。

ミストとしては主様と、華奢で細くてあまりお茶菓子類を召し上がっていないティフィールさんを案じて出そうと言っていますが、私としては、暑いからと言って冷たい物ばかりはお腹壊すだろうを標榜したいのだけれども・・ティフィールさんの事思うとな～。

南国育ちでも熱射病にもなった事ない私には、分からん・・・・どうしようか・・まさかあんなに折れそうな細い令嬢様初めてだし・・・

ティファはどうしてあげれば良いのか本気で悩み、それは周囲全員の思うところ。

野生児であったダイは言うに及ばず、人生経験の長いはずのバーンも触れれば壊れそうなご令嬢は初であり、陽気で場を盛り上げる気満々であったキルですらも、何を話題にすればいいのやら手をこまねいてしまっている。

クロコダインがティフィールというパプニカの男爵令嬢とお付き合いしているのは仲間内ですぐに共有をされていた。

何となればみんなの親父さん的な、勇者一行の精神的支柱をティファと共に支えてくれた、まさしく世間でいうところの盾の君。そんなクロコダインの幸せを全員が共有して喜んだが、お相手の事を考慮して全員で突撃祝いするのは控えられた・・・・言っては何だが勇者一行の者と、その周辺の女性陣はティファを筆頭に―女傑―が多い・・・ぶっちゃけ言えば女傑しかいない・・・・

マァムは闘うものであり、エイミも賢者として最後まで戦い抜いている。

フローラ様もレオナ姫もメルルも戦う事はなくとも死闘を前に一

歩も引かずにいた強い女性・・・・ガルダンディと婚約したニーナは言うに及ばず、つまるところ何が言いたいかと言うと、儚げな可憐な少女など完全に埒外であり全員接した事が未経験！

一人ずつ会いに行くのも何やらティフィールを値踏みしに行くように取られたらどうしようと、一行は結婚式かその近くになるまで待つ事にした。

ティフィール自身もクロコダインから仲間達と会うのはもう少し先だと言われた時は正直ほっとした。

目が見えず、そもそもパプニカ国自体が戦火を知らずとも勇者一行の英名は鳴り響き、そんな雲上人にも等しいクロコダイン様とお付き合いができかつ結婚できるだけでも奇跡だというのに、心の準備もできないままに尊き方たちとお会いなぞした日には心臓が持たないこと請負である・・・名前が某破天荒料理人と似ているのに、容姿も精神力も大違いなのが謎である・・

しかしその可憐で儚げながらも、優しく芯のある心に惚れこんだクロコダインは全面的に守る気満々なので、少しでもティフィールの負担にならないように関係者一同に無作法を詫びて、全員、それこを目出度い事には大暴走する魔界の神様も納得したのでほっとして、そうして結婚式があと半月になった頃にティフィールの心も定まり晴れて全員とのお茶会を・・・パプニカ国と書いて不運の国と呼ばわれるところの中庭で開催されたのだ・・・

無自覚権力沢山お持ちの魔界の神様来るのに、慎ましい男爵の家にお招きできる筈も無く、関係者一同の胃を壊しながらパプニカ城に。

だがここで魔界の神様も気を利かせたのだ！・・・・神様の中ではではあるが、一応ティフィールがいきなり知らない気配が漂うバーンパレスでのお茶会よりも、知った気配のするパプニカのほうが良かろうと言われては、満場一致でそちらが可決されたのは道理であった・・・本当に珍しく真っ当だったのだ。

「ティフィールよ、疲れておらぬか？もう少しお茶を飲むか？」

「クロコダイン様・・・大丈夫でございます。他の方ともっとお話をさせていた頂いても良いでしょうか？」

「うんむ・・・」
　中庭には日よけの傘がさされた席が用意をされ、そこにクロコダインに連れられたティフィールが座ると同時に、ダイとヒュンケルとエイミ以外の全員が名乗って挨拶をし、ティファとミストがお茶を淹れて穏やかにお茶会が始まったが、さて何を話して楽しんでもらおうかと静まりかけた時、伸びやかでよく通る明るい声がティフィールにかけられた。
「いやぁ～ティフィールさんお目が高いよ。俺クロコダインのおっさんには絶対に家庭持ってほしかったからさ。おっさんは超優しくて頼りになる人だからよろしく頼むよ～。」
「まぁポップ様・・・私こそクロコダイン様に頼まれる身です・・・不束者ですが・・」
　可憐で大人しめのティフィールに最初に口火を切ったのは勇者一行の頼れる魔法使いにしてムードメーカーのポップであった。
　その前にエイミやマァムが優しくティフィールにクッキーなどの食べやすいお茶菓子を勧め、メルルも何くれとしようとしたが、世話ではなく世間話の様に楽しい話の糸口を、ポップはきちんと作って見せた。
　クロコダインの好みの食べ物やお酒の話から、ティフィールも少しずつクロコダインの好むことを周りに聞いて自然とクロコダインの為人やこれまでしてきた数々の冒険話を、チウやラーハルト、ロン・ベルクやマトリフなどもティフィールに話して聞かせられるようになり、お茶会は賑わいを見せ始めたのを共に参加を許された兄のロベールは泣きたくなった。
　いつも笑っても、それはどこか寂し気な笑みであった妹が、頬を染めてコロコロと笑っている。
　目が見えない、それは本人も周りもどうしても上げられない、どうしようもない事なのに、時折心無い者達が陰口をたたくのを聞くたびに、それが妹の耳に入ってしまう度に胸をかきむしられ、言った本人たちの口を、何度裂いてやりたいと思ったか知れない！
　その妹が心から慕い愛した人と結婚ができる・・・それもその身内

全員から祝福をされて・・・

相手が勇者一行の方々だからではない！魔界の神様という奇跡のような方たちだからでは決してない！自分もティフィールも諦めていたのだ・・クロコダインと言う―素晴らしき漢―が現れるまで、妹は終生嫁ぐことはなく、自分が結婚をする時はティフィールの事も受け入れ、共に住む事を笑って許してくれる女性が条件であった。

其の為に、ロベール自身は二十五になっても独り身であった。貴族の娘で少し落ちぶれている男爵の上に、そんな条件を受け入れてくれる奇特な女性は見つからず、こうとなれば庶民の娘でもよいと思っていた矢先に、ティフィール自身を本当の意味で愛していると言ってくれたクロコダインが現れてくれたのだ。

目が見えずとも良い、終生自分が守る。種族が違い、武骨で全く気が利かない自分であっても良いだろうかと反対に聞かれた時に、そんな事ありませんと言い切ったのがつい昨日の事のようで、食い気味に答えた自分に驚き目をパチクリとしたクロコダイン様が可愛く見えてしまったのは内緒だ。

今日はハドラーアバンは王様業務でどうしても来られなかったが、アバンは手作りスコーンを愛弟子の一人ポップに持たせ、ハドラーも来れない詫びの伝言をティファに託している。

スコーンの方はティフィールが一口で食べられるサイズにあらかじめ焼いており、なんと

「まぁ・・・スコーンの中にジャムが、こちらは・・・・イチゴ、こちらはマーマレード・・クロテッドクリームが入っております。」

ティフィールの指を汚さずにかつ味を楽しんでもらう為にのアバンの心尽くしに、ティフィールは嬉しくて泣きたくなる。

先程ティファから伝えられた魔王ハドラーからの伝言も、―結婚式であう日を楽しみにしている―と言われた時も・・・・そも、クロコダインとの結婚が決まった時から胸が熱くて、そして何度泣いたか知れない・・・嬉しくて、こんなに人々に大切にされて幸せで、幸せすぎて本当に良いのか・・・・・何も成した事がない人生だった。

目が見えずとも刺繍やレース編みで生計を立てている人もいると

いうのに、針の方は苦手で、兄の服の繕い物がせいぜいで・・・・・こんな自分が生きていていいのかと何度思ったか知れない。
クロコダインとの逢瀬の時も、そんな自分の情けない事を正直に話すティフィールを、クロコダインは一層愛おしさが募ったのを知らず、いつか呆れられて破談になってもいいように心の中で覚悟をしていたのに、妻になれと言われたあの時、あれ以上の幸せは無いだろうと思っていたのが・・・・優しい人達だ。功績も偉大さも知っている。勇者一行のダイは自国の王太子でありレオナ王女はやがて女王となる。ヒュンケルも近衛騎士団長であり、それなりに話が聞ける身分にいれば魔法使いポップと占い師メルルもまたテラン女王とその王配になるのも知っている。
そして・・・・魔界の方達もまた高貴なる・・・・生涯において交わる事のない人々が、自分に優しく、そして一人前の女性の様にクロコダインをよろしく頼むと言ってっくれている！
「こ・・・・こんな私ですが・・・・」
クロコダインのプロポーズを受けたあの時の様に、ティフィールは勇気を振り絞る。
細いが、何かを決意したその言葉の響きに、談笑していた一同は口を閉ざし、ティフィールの言葉を静かに待つ。
しんとなってしまった場にティフィールは心許なくなり沈黙をしてしまったが、誰もが温かく見守り、そして、震えるティフィールの手を、そっと大きな手がかぶさるのを微笑んで見る。
クロコダイン様の手・・・・
愛おしい人の手だとティフィールは瞬時に分かり、真っ赤になってうつむいてしまった顔を上げれば、先ほどと変わらない優しい眼差しが自分に向けられていると気配がする。
本当に・・・・本当に何と優しい人達なのだとティフィール心の底から思う・・・・あの大戦を無血で終わらせる事ができたのはこの優しさなのだと得心するほどに。
優しい人達に甘えたくない・・・・だから・・・・だから・・
「クロコダイン様を頑張って幸せにしてみます!!よろしくお願いいた

します。!!」
晴れた空の下、ティフィールは一歩を踏み出した。
鳥籠に囲われ守られる小鳥ではなく、愛した人達と同じくこの大空を自由に羽ばたく鳥になる道を
そしてその言葉はクロコダインにも、身内一同からも微笑みを以て称賛され、その日は日が暮れるまで楽しい笑い声がパプニカ王城の中庭にはに響き渡った。

可憐な少女―達―と獣王様―達―後編2

幸せな時間には美味しいお料理が不可欠!!
ただ美味しいだけじゃぁ駄目だ!その時その時の雰囲気と場所柄に相応しいお料理であってしかるべき!!
例えばだ、可愛い婦女子のお茶会に、美味しいからと言って生魚料理出したらアウトでしょう。
これは極端な例だけど、今日という日は豪勢なだけじゃぁいけない!華やかながらも―主役の花嫁―に相応しい・・・・
「・・・何を考えているのかは知らんが忙しいのだ、もっと手を動かせティファ。」
「・・・・・・・ごめんなさいミスト・・」
えぇ～色々と迸る物があって大暴走品がら獣王クロコダインと、その花嫁様たるティフィールさんの結婚式の真っ最中に、魔王軍かつ大魔王バーンの料理人のミストバーンと共に、大聖堂の厨房で披露宴用のお料理を今日の未明から作っているティファです・・・・正直眠いんです!!
昨日は二人の事が嬉しすぎて寝れなくて、今も徹夜明けのテンションマックスでお料理作りに勤しんでます。
今日のコンセプトは何と言ってもお祝い事!
今回は立食形式ではありませんよ、正統派コース料理ですとも。
何となればティフィールさんの負担を減らす為にも、披露宴は立食よりも決まったテーブルで食べられる方がいいと、アバン先生やフローラ様と言う先達からのアドバイスいただきました。
さぁ!後はお二人の式に間に合う様に、私とミストもきちんと出席できるようにするのみです!!!
「・・・・・厨房のぞいたら戦争状態ね・・・・」
「ティファさん・・・・・張り切ってますね・・・」
「ティファだし・・・・」
「そうなのですか?」

例によって例の如く、花嫁のお支度には女性陣一同様が集っている。
レオナもいればマァムにメルル、新婚さんのエイミもお手伝いできており、今日はこっちに来るかしらとレオナが厨房に声をかけに言って・・・・後悔した。
数々の麗しい料理が、実は指揮官（料理人）達の怒号のような采配の下に作られていたなんて・・・
ミストは寡黙ではあったが、もたもたと肉を切っている輩を見ては、お前を切ってやろうかと実に怖ろしい気配を出して尻を叩いており、ティファなんて文字通り各所に指示飛ばしながら盛り付けしてた・・・・あの子が一番少女であるはずなのに・・・可憐さが・・
「・・・・・ティファ相変わらず元気に料理してたよ・・」
「まぁティファだし元気でいいじゃないかダイ君。」
「そうだぜ、俺達の妹は―ちょっと―ばかし元気いっぱいなんだよ。」
「・・・・嬢ちゃん・・」
「ったくお嬢さんは本当に・・」
「むぅ？俺は元気にあふれたティファが一番だと思うのだが？」
そして例によって・・・花婿の部屋にも男どもがたむろっている。
レオナと共に厨房に言ったダイは頭を痛める。
今日はレオナもマァムも結婚式の招待客に相応しく、真夏のドレス姿で華やかで麗しいのに・・・妹だけが調理用の服着ているって・・・妹大好きのダイも溜め息つく中、扉が軽やかに叩かれた。
結婚式の始まりの呼び出し音として。

「汝クロコダインは、ここにいるポルコット男爵家の令嬢ティフィールを妻とし、健やかなる時も病める時も、貧しくともいついかなる時であっても、愛し守り抜く事を誓うか？」
「誓おう。」
「汝ポルコット男爵家令嬢ティフィールは、ここにいるライリンバー大陸の覇者・獣王クロコダインを夫とし、健やかなる時も病める時も、貧しくともいついかなる時であっても、愛し守り抜く事を誓うか？」

「はい、誓います。」
「よろしい、結婚に異議申し立てるものいなくば二人の誓いの着を沈黙を以って見守り、二人は誓いの口付けを交わしていただきます。」
誓いの言葉よりも、口付の方にクロコダインの心臓がはねた！
お・・俺の心臓はこんなに音を立てるものであったか？
ドクドクと耳打ち、こんな五月蠅い音をティフィールに聞かれたら恥ずかしい事この上ない!!
喉もカラカラで・・・大魔王達と戦った死闘の時よりも体が震えるのを、クロコダインは渾身の力を振り絞ってティフィールの顔を覆っているいるベールに手をかける。
いよいよ・・・・俺はこの美しい人と夫婦になるのだ・・・
クロコダインが緊張の極致にあるように、ティフィールもまた自分の心臓の鼓動に悩まされている。
手触りの良いシルクのドレスに身を包んでから、イヤリングにネックレスもさらりとした真珠であると分かる一品で、ヴァージンロードにも自分の事を考慮されたものだった。
大聖堂の扉を開けて一歩踏み出せばふかりとした感触が足の裏に伝わった時、不思議になってエスコートしている兄の顔があるであろう一に目をやる。
自分でもヴァージンロードはウエディングドレスを着た花嫁が転んでしまわないように薄い布で作られる筈。
その事を兄は前方を向いたまま
―とても分厚い絨毯を赤く染め上げて、お前の為に作られた道なんだよ―
ひそりとした声で教えてくれた。
目が見えない自分の為に、今まさに赤いヴァージンロードを歩いていることが分かるようにしてくれたのだと、対面のお茶会に来てくれたあの優しい人達の、優しい配慮だと。
その道を歩いてエスコートはクロコダインへと移り、誓いの言葉を述べてそして・・・ヴェールが取り払われたのが気配で分かり、温かいものが自分に口に・・・

大柄なクロコダインが最大限の優しさを込めて、華奢で可憐な花嫁の腕を支えて口づけをしたその瞬間、大聖堂は割れんばかりの祝福の言葉で溢れかえった。
柔らかくそしてとろけそうなほど甘やかな唇から、名残り惜しくもクロコダインはそっと離れ、ティフィールの顔を見てみれば、真っ赤になっていた。
何と繊細で可愛らしい娘である・・・いや妻であることか・・・俺の全てをもってきっと守ると、クロコダインの決意をさらに高めたのだった。
「クロコダイン様！ティフィールさん!!どうかお幸せに!!」
「良き方達が結ばれるのを見られて私達も幸せです！」
「家も近所ですので、何かあれば私達にお声掛けを。」
「ティフィールさん、本当におめでとうございます！」
ヴァージンロードを出口に向かって歩いたクロコダインとティフィールに祝福の言葉を一番に贈ったのはダイ達であり、その次がなんとクロコダインとお見合いパーティーをした娘達であった。
彼女達も本気でクロコダインに惚れこんだ娘達であったが、惚れた殿方が幸せいっぱいの結婚をする、それもあのティフィール嬢とだ。
彼女達もティフィールを知っている。目が見えない悲しい境遇であっても屈する事無く常に笑みを浮かべる優しく可憐な少女であり、数回ではあるがお茶会をした仲でもあり顔見知りである。
惚れた殿方と優しい知り合いの娘の結婚を、彼女達は心の底から祝福の言葉を贈る為に出席をしたのを、ティフィールも知っている。
獣王クロコダインのお見合いパーティーは秘密でも何でもないので、耳を済ませれば聞こえて来る事。
その参加者の大半が、まさかお茶飲み友達であったとは・・・それでもクロコダインは自分を選んでくれ、彼女達も祝福をしてくれている・・・本当に・・・本当に自分はなんと幸せなのだろう・・
「これより、花嫁様によるブーケトスがございます。」
大聖堂の外に出れば、優しい風が吹いている。夏の盛りは過ぎて心地よい秋の風の中、ティフィールは両手にありったけの力を込め空高

くブーケをなげ、そして歓声が上がった。
何とブーケが空中でほどかれ、沢山の花々が最前列でブーケを受け取ろうとした娘達一人一人の手の中に入ったのだ。
これはティフィールからの感謝の気持ちの行動であった。
自分の幸せを沢山の人達に贈りたい、今日来てくれたみんなが幸せになるように祈りを込めて、幸せなる花の雨を会場に降らせたのであった。
花を受け取ることができたハンナ、セシル、イグレット、そしてロザリアは、ティフィールの心遣いを感じ取り、花嫁と同じくらい幸せの笑みを浮かべて喜んだのであった。
ちなみに今回はレオナ達女性陣は遠慮した。あと少しすれば、自分達がブーケを投げる番が決まっているのだから、他の女の子達に譲り、その代りレオナは自分と同じ背丈になってくれたダイに、メルルはポップに、マァムはラーハルトに、そして顔なじみの獣王クロコダインのお式を聞きつけたニーナはガルダンディに、エイミは当然ヒュンケルの腕にもたれかかり、男達は黙って優しく彼女達の肩を優しく抱き寄せ、ネイビーブルーのサマードレスを着たティファもレオナ達と同じ位置にいてやんやと歓声を上げる、そんな幸せな結婚式であった。
披露宴の料理もまた着替えたティファと内緒だがミストも張り切って支度をし、これもまた新郎新婦と出席者一同の舌を唸らせ大盛況のうちに終わりを迎えることができ、夕暮れの道を新郎新婦が見送る中招待客達は帰路につき
「じゃぁねクロコダイン、ティフィールさん。」
「邪魔者は消えるとする・・・あて!!」
「余計な事言わないのポップ兄!!またねクロコダイン、ティフィールさん!!」
「また落ち着いたら、今度こそ余の城にてお茶会をしよう。」
「あ!その折は私も是非に!!」
「・・・・お前はもう一国の王だろうアバン・・・・・まぁ、俺も出たいがな・・」

「さっさと帰んぞ！いつまでもいると馬に蹴られるぞお前達！」
「マトリフ様・・余韻も大切に・・」
賑やかで、最後までわいわいと帰るダイ達を、クロコダインとティフィールは手を繋いで見送。徒歩やルーラではなく、キルが空間を開け全員が入り空間が閉じるのを見届けた後、二人も自分達の家へと入った。
ダイ達が気を利かせて自分たち以外の招待客達が帰った後、キルの空間を通って二人の新居に全員で来たのだ。
ティフィールの住んでいたロベールの家からは然程遠くなく、ご近所さんもあまり変わらないところにクロコダインが用意したのだ。
その家に初めて明かりが灯り、新しい主達の新生活が始まりを告げたのであった。

「あぁ・・・・結婚式は―無事―に終わりましたか・・・・お前達のせいで私・・・いえ―ティファ―が見損なったじゃぁないですか・・」
パプニカの大聖堂からかなり離れた場所で、―銀の髪のティファ―が不機嫌そうに鼻を鳴らして足で踏みつけている―不逞の輩―を冷たく見下ろす。
今日のお祝い事に、―ケチ―をつけようとした愚か者達・・・ティファ達が思いもつかない事を、―クロファ―はティファの意識の中であっても表で起きているお祝い事に何となく嫌な予感がしたので、厨房の料理作りが終わってミストと別れた後に意識を乗っ取り、鳥や虫の式を拵えて周囲五十キロを偵察させれば案の定引っかかった馬鹿たちの話を拾う。
内容は・・・・屑、その一言であった。
「獣王と呼ばれて、モンスター風情がいい気になりおって・・・・」
「盲いた娘も恥知らずにもモンスターなぞに媚びを売りおってからに・・」
「あんなリザードマンが救国の英雄だと!?もとをただせば魔王軍の人類にとっては大罪人ではないか!!」
「然様、然様。それに力だけで内政の何たるかも知らん者達がこの先も平和な世の中で厚顔無恥にも幅を利かせると思うだけでも虫唾が走るりますなぁ」
囀っているのは全員が五十代の、不健康そうな中年達。内容から察するにクロコダインの評判を妬んでいるのと種族差別をしている馬鹿者であった。

会話の端々から、ティフィールに対してよこしまな思いを抱いていたことも聞こえて来る・・・・馬鹿どもだ。
エイミの時も、自分とティファは眠っていたので分からないが、大方似た様な不満があって、今回はクロコダインというリザードマンが世間から称賛を浴びて幸せになる事に低俗でしょうもない不満が爆発したのだろう。
ここまでであれば―クロファ―も別に出張ろうとは思わず、悪魔の目玉に録画させて後日大魔王バーンに見せてパプニカ王城の者達に知らせるで終わったのだが・・・
「確か今日が式であったな・・・あの貧乏な男爵家にしては―良すぎる式―だとか。」
「そうよな～あんな豪勢な式を、リザードマンと貧乏男爵家風情が用意できるとは思えんな。」
「大方目は見えずともそれなりに整った顔をしたあの娘が、お強請りでもしたのだろうよ。」
「然様然様、あの柳腰を―振って―の～。」
「それに骨抜きにされたのでしょうかね～、―救国の英雄達―は。」
「はっはっはっは！違いない違いない。私達にもお強請りのお零れをくれませんかな～。」
「なに、其の内にあのリザードマンも家を空けよう。その時に我れらが―相応の分―と言うものを教えてやればよい。」
新妻を攫い、たっぷりと可愛がって―躾―をしてやろう。人の娘なぞ、モンスターには分不相応だという事を教えてやろうと酒に酔った男たちの言葉にクロファが切れた。
殺そう
屑達はクロコダインとティフィールどころか、自分が・・・表のティファだけではなくクロファである自分も大事に思う者全員を穢す輩、見逃してやる道理がどこにもない。
法も倫理も自分には知った事ではない。生かしておいても碌な事にならないのであれば生かしておく理由もない。
苛烈なる決断はすぐさま実行された

屑どもがいたのはパプニカでも評判の悪いスラムの酒場であり、話していた屑男四人はクロファのラック＝バイ＝ラックで召喚されてあたかも消えたように見えたが、誰も、それこそ酒の注文を受けて持ってきた従業員すらも気にも留めずに酒をカウンターに黙って持っていくだけであった。

他の者達の末路なぞ知ったことではないと。

クロファとしても、慶事のある国の中での殺人は、あの奇麗な花嫁を穢すようで嫌であり、航路としても使われない北海の海の上にジ＝アザーズの結界の足場を作って四人を召喚し、海の落としてそのまま空飛ぶ靴で一路大魔王のパレスへと飛んで行った。

それは丁度、ティフィールがパプニカの大聖堂に、幸せの花の雨を降らせている時であった。

一方は花を、そしてもう一つは四人の屑男の命が舞い散った

しかし・・・・この世界平和ボケになるのが早くないだろうか・・・

勇者たちはともかく、大魔王達がこれでいいのか？

大切な者達に対する警備配慮が全くないのは問題だろうに。

何のための目玉とシャドー軍団なのだろうか、、

「そんな事がありました。」

一応クロファも事後報告位はする。報告相手は大魔王ただ一人で、

いつものようにバーンの寝室でしている。
なにせ魔族気質のティファの存在を知っている唯一の人でありそしてティファではなくクロファと名付けた名付け親であるのだバーンは。
幼な子が目覚めて少しした後に、このクロファもまたティファの魂の奥底から目を覚まし、以来本人の望む通り血生臭い荒事解決をさせていたが・・・・やったことは正しいく、その者達を罰したのは当然で反対する理由は欠片も無いが、やりようがもっとあったろうに・・
「ティファが不審がる・・」
クロファの報告に、バーンは内容は称賛に値するが思わず洩らしてしまった。
なにせ披露宴にはきちんと―ティファ―がいたのだ。クロファの話から察するに、そのティファは式で作った身代わりであろうが、後日ティフィールやマァム達とその時の思い出話をした時、記憶にない事を言われては不審がらない筈がない。
それがなければ精々寝不足で、料理を作り終えた後寝てしまったのだろうかと思うであろうが・・
そんな大魔王の懸念を、クロファはベットに横になったまましれっと答える。
「大丈夫です、式と私達は視覚はおろか記憶も共有できますから、もう私の脳内に披露宴にきちんと出てお祝いをしたと書き加えておきましたから。」
あの後―式神ティファ―は用事があるとダイ達から引き離し、いまだに自分と式の区別が付けられるものはいないから大丈夫でしょうとしれっと笑った。
そもそも式を見破れるものはもうこの世界にはいないのだとも言い放って。
・・・・ものすごい方法を何事もなく行いながらもどこかつまらなさそうにしているクロファに、バーンが唖然とするのをクロファはちらりと見ながら言葉を紡ぐ。
「貴方の可愛い―幼な子―は何も知らずに今もそしてこれからも―奇

麗なまま―ですよ・・近々私も消える予定ですので。」
淡々としたその言葉に、バーンがぎょっとしたのをクロファは体を起こしてきょとんとして首を傾げる。
「何を驚いているんですか?貴方だって私が消えて、奇麗な可愛い子だけになった方が嬉しいでしょうに。」
嘲笑うでもなく、どこまでも穏やかな声で自身が消える事を話すクロファに、バーンは泣きたくなった。
確かに、自分はこのティファとは似ても似つかない―モノ―を厭い、そしてクロファ自身が望んだこととはいえ、死神キルバーンがしていた・・それ以上に汚れた仕事を与えながらもいたわることもせずに冷たくあしらって来た。
自身の暗黒闘気をティファに与えた事で、目覚めティファの自我から独立した意思だと分かっても・・・・・何と身勝手な事をしたのだ自分は。
最終決戦のあの時、ティファが自分の暗黒闘気を飲んで、堕ちて自分の所に来る事を望みながら、和平の道が開かれ血の道がなくなった世になれば厭うなどと・・・・・
そんなバーンの後悔の念も、今のクロファには意味をなさなかった。
「あ~別に罪悪感は持たなくてもいいですよ?あの時とはいえずとも、信念を持った命の、魂のぶつかり合いをしたいと望んで仕事をしたのは私の意志なんですから・・・ただこの世界にはもうそんなものが存在しないのが分かって来たのでもうういいかになっただけです。」
淡々としたその言葉に、偽りもまして強がりも無いのが分かる。
クロファにとって、この世界は生きるに値しないのだと・・・ただ周りの身勝手さで産み出され、たった一つの喜びしか知らずに、それ以上の事があると教える機会が幾らでもあったのを無下にしてしまったのは自分で・・・
「消えてくれるなクロファ・・・・・」
「・・・・・・今更ですか?」

「・・・本当に今更だ・・・・詰ってもいい、余を恨んでもいい・・・・それでも、其方が消える、それは間違っている・・・・・余が其方を産んだ産み親であるのを、余はそれを蔑ろにした、してしまった・・・・すまぬ・・・・・すまぬクロファ・・」

ベットに座るではなく、ベットの上にいたクロファを抱き上げ床に座り込み、後悔の念に涙を流すバーンを、クロファは冷たくあしらう。

それでもバーンは、後悔したままでいたくはなかった。

「クロファよ、其方との約定全て取り消そう。そなたの存在は、其方が明かしていいと思う相手に明かすが良い。」

「・・・・・可愛い幼な子に傷がつくよ？」

「構わん、其方もティファであり、ティファもまたクロファだ。」

「・・・・・・でも私は―ティファ―じゃない・・・」

「・・・分かっている、其方がティファを名乗るが嫌なのを・・・」

ティファと呼べば嫌そうにしていたので、黒いティファとバーンが感じていたのでクロファと呼んだが、己の目のなんと節穴な事か・・・これのどこが黒い、最初に出会った時に自分に言った望みは、ただ純粋に闘う事を楽しむ魔族の中では珍しくも無い事であり、強者が尊ばれる魔界の中では称賛こそされ忌むべきことでもなんでもなく・・・平和の中のぬるま湯に、自分がおぼれて見誤っただけではないか！

今回とても、クロファは自分の大切な者達の為に何のためらいもなく己が手を地で汚した・・・汚させてしまった・・・・妬み嫉み嫉妬・謀略・罠、魔界においてもよくある心の闇の伏魔殿を生きてきた自分が、周囲の警戒を怠り、大宰相ミストバーンと、死神キルバーンですらが気がつかなかった、気付こうともしなかった災禍の種を、クロファが未然に刈り取ってくれたのだ。

何の見返りも求める事無く、ただ淡々と・・・・手を汚させてしまったのだ

「この世界は果てしない、余もそして其方も知らない事がまだまだいくらでもある！消えるのはそれら全てを見てから、其方が身をもって知ってからでも遅くはない!!」

「・・・・・それってさ・・・・―アレ―が言った事でしょう・・」

「そうだ、ティファが言った言葉だ。ティファはそれを身をもって知っている。そなたはまだ知識としか知らぬ。知っても、それでも消えると決めたのであれば・・・」
その時は覚悟を決めて、消えるまでこの身で抱きしめると、魔界の神は泣き震えながらクロファに告げる。
かつて、闇の底の底で明るい世界を見上げるだけで自らはそこに行こうとせずに身勝手に消滅させようとした自分を、魔界全てと共に救って引き上げてくれたティファの言葉をクロファに伝える。
「ティファもいつか嫁ぐ日がこよう。その時の相手が誰かは余にも分からぬ。ただ、その時には其方の存在をもきちんと告げよ。」
「・・・・・それってお婿さん嫌がりますよね？」
「構わぬ、其れでティファと其方から逃げ出す輩なぞ不出来であろう。」
・・・・・この人・・・・・無茶苦茶でなんと自分勝手な事だとクロファは呆れる。
今まで自分を使うだけ使って労りの言葉も無かった・・・いや、数度前にあった時に不意に優しく頭を撫でてくれてはいた。あの時から・・・もしかしたらその前からこの人は私を・・・
「・・・・・・お婿さんか・・・」
少しだけ、ほんの少しだけ冷たく感情のなかったクロファの瞳が蕩けた。
式と共有して、今日の主役のティフィールの花嫁姿は美しく・・・ドレスが美しいと思った。
自分にもあれが似合うだろうか？血まみれで欲望まみれのこんな自分に・・・・・白のドレスが似合うと言ってくれる人がいるだろうか？
その顔は徐々に優しくなり、まだ見果てぬ未来のお婿さんに想いを馳せた。
バーンの望んだ道を、クロファは半歩だけそちらに足を向けてみた。
闘う相手が、信念のぶつかり合う相手がいなくとも消滅するのでは

なく―背の君―を探してみてもいいのではないか、恋する乙女の気持ちが、ほんの少しだけ芽生えたのをバーンは甘やかになったクロファの気配で察し、無言で抱きしめる。
この自分は黒だと言い張る、ティファ以上に己の命を軽んじる儚げで可憐な少女が、いつか優しく花開く笑みを浮かべる事を願って。

その日は満月であり、優しい光が誰をも照らす。
式を挙げた夫婦の寝室を、満月を共に見ようと外に出て寄り添う恋人達を、良き結婚式を見られてさて残りの仕事を片付けようと執務室で仕事をしている女王夫妻を、そしてまだ知らぬ温かい道を歩こうかと思う少女と、その道を守ろうとする魔界の神をも優しく照らす。
可憐な少女達の行く道を照らし、それを守らんとする男達が周りを良く見まわせるような柔らかな光を

勇者達の大結婚式・プロローグ・彼女達の胸の内

三年、バーン大戦が平和的に終われてこの三年、三人の少女たちの胸の中を熱い思いで焦がし続けた三年であった。

大人になるのはあっという間だと子供のころに聞かされていたあの言葉は偽りだろうと思うほどに、少女達にとっては長い、本当に長い三年の月日であった・・・

少女達には恋人が、更に言うのであれば婚約者達がいる。

いづれもこの世界でこれほど素敵な人はいないだろうと、三人の少女達は自分達の婚約者に心の底から惚れている、三年など待たずにすぐに結婚をしてほしいほどに・・・しかしそうもいかない事情が多々あった。

少女の内の二人は将来国を背負って女王となる事は確定しており、ゆえにその為の王族教育を修めなければならなく、当然伴侶となる方にも王配としての知識・立ち居振る舞いを習得する義務がある。

其の為の教育期間が理由の一つ、しかし最大の原因はそこではない。

婚約者達の一人が、大戦が終結した時の年齢が十二歳と幼かったせい。

その年齢で結婚をするというのは王侯貴族たちの間では珍しくも無く、なんなら五歳で王となりその為に妃を娶った例があるが、それは先代の王が突如として崩御された時の異例中の異例ではあるが、十二歳であればそこまで珍しい事ではない。

だがその十二歳の少年は、出自はともかく育ちはモンスターアイランドで育った勇者ダイその人であり、彼の中では結婚とはきちんと己が大人になり伴侶を支えられてからするものだという、―一般的な感覚―で育ってきた。

勇者ダイの相手であるパプニカ王国の一人娘・レオナ王女はダイがそう考えているのであれば待つと、素直にその考えに従った。たった三年など、ダイが王族教育を受けつつパプニカ城で共に過ごすうちにあっという間に過ぎるのだと、その時は高を括っていたのだ。

子供から大人になる時はあっという間だという言葉を信じて・・・後悔を三人の少女達はお茶会で溢す羽目になるのを知らずに。
「・・・後半年・・・あぁもう!!私どうして三年待つってダイ君に言っちゃったのよ!私のバカバカバカ～～!!!」
春の長閑な晴れの日に、少女達は―とある秘密部屋―を借り受けて胸の中にある思いの丈をぶちまける為のお茶会をしている。
こんな事を身内はもとより周りに言うにも恥ずかしく、とは言え自分の胸の中だけに留めるにはもう限界であると、日頃から少しはお転婆であってもそこはお姫様をしているレオナが常のお姫様モードはかなぐり捨てて叫ぶのを、残りの少女マァムとメルルもレオナの叫びに驚くことはなく、寧ろその通りだと真剣な表情で頷いている。
「・・・レオナ・・・そのね、うん・・・・・私もそう思う。」
「姫様とマァムさんの気持ちとっても分かります・・・・私も最初の内は・・・ポップさんと一緒にいられたり・・・スティーヌお義理母様とジャンクお義理父様と過ごしながら、おばぁ様とフォルケン様に女王としての知識や立ち居振る舞いを教えていただくうちに・・・三年なんてあっという間だと思ってたんです・・」
「私はレオナとメルルみたいな凄い事はないけれど・・・そうね・・・・デルムリン島は今ブラスさんが長をしていて次はガルダンディとニーナが結婚したら譲る積もりみたいで、私とラーハルトは副長として島の外と島内のモンスター達との交流をいい感じに保っていけるように勉強してて・・・・学ぶことが多いはずなのに・・・・どうしてたった半年がこんなに長く感じるのよ!!!」
少女達も始めはその状況を確かに楽しんでいたのだ。共に国や島の為に同じことを学び、パプニカ女王となるレオナの下にダイが王宮入りをし、市井の占い師であったメルルは数奇な運命をたどって次期テラン女王となるべくフォルケン王の養女となって城に入ったのを恋人であるポップがすぐさま追っかけてきてあっという間にテラン国の住民登録をして・・・その日の内にテラン王宮の宮廷魔法使いの肩書を引っ提げてメルルの前にやって来た。
「いや～、メルルの王配になるってんなら俺もテラン国民になる必要

あるだろう?ダイはさ、地上界の王族会議でソアラ王女の息子として故・アルキードの王族の末裔だっていうお墨付きあるけど、俺は一般庶民の息子だし、テラン国の宮廷魔法使いの長くらいの地位あった方がいいだろうって思ってさ。」

いきなり様々な事でメルルを驚かせたポップはいつもの二カリとした笑った顔と明るい声でメルルに話した。

これから自分達が行く道は、もしかしたら大戦よりも大変な道であり、それを承知で進むのならば自分達が楽できるように今から色々としておこうと、将来を見据えたポップの言葉にメルルは頼もしく思った。

それからは沢山の事をポップと共に学んで過ごしているのに・・・三年が長い・・・

「私ね・・・ダイ君と一緒にウエディングドレスとダイ君の衣装をどうデザインしてもらうか、色はどうするか、私がするティアラとダイ君のクラウンのデッサンを見たりして楽しかったんだけど・・・・・最近それよりも・・・・一刻も早くダイ君の妻になりたいって思うのよ〜〜〜!!!!」

自分達の結婚式となればロイヤルウェディングであり、それもただの結婚式では済まされない。

三界を救った立役者の勇者とその相棒たる魔法使いが、次期パプニカとテランの王配になるという前代未聞の、三界全ての慶事と言っても過言ではない!

その式ともなれば三年で足りるかと手配をしている部門がパプニカとテランで立ち上げられ、地上界にとっても魔界と天界の方々が一堂に会されるのだからと準備の手伝いの申し出があってようやく形になっているのは知っている。

魔界からは絶対にあのお祭りと慶事大好きな魔界の神様とその側近の影さんと死神さんと次期大魔王に指名された魔王ハドラー様がやってくる!

ダイの出自はアルキード王女の忘れ形見にはとどまらず、三界の調停者たる当代の竜の騎士である。必ず寿ぎに、六大精霊王達と、もし

かしたら天界からも祝いの使者が来るのではなかろうかと予想されて天界にお伺い立てたら・・・・その通りだった。
天地開闢以来の前代未聞のオンパレードも良い事で、関係各所が天手古舞なのを知っているのだが、結婚する当人が待つのがもう限界であると叫んでいる。
それほどまでにダイを、ポップを、ラーハルトを愛しているのだ三人は。
あの腕に抱かれたい、胸元で抱きしめられて・・そして愛おしい男の身籠って・・・・乙女の夢は果てしなく続くのだ！
レオナは持っていた茶器をそっと置きつつ大絶叫するという器用な事をしてのけ、洞窟にこだまする声の中、レオナの荒い息遣いも響くのを、秘密の部屋の持ち主である、かつての勇者一行の料理人だったティファは、苦笑しながら三人とは少し離れた位置で一人お茶を飲みつつ見守っている。
後半年もすれば結婚できるというのに、それが待てないとレオナと同じようなことを絶叫している少女達が微笑ましく・・・自分にはない情熱だと少し羨ましくある。
愛を知っても恋を知らないとクロコダインに言った通り、あの三人の恋慕の熱が、ティファにとっては不思議であり、それ故に素敵なものに見えると言ったっら・・・・三人の今の楽しさに水を差してしまうので黙って見ている。
そしてこうも思う
きっと三年の月日が長く感じるのは少女達だけではない・・・・ある意味男達は少女達以上のじれったさの炎に身を焦がし・・・・・地獄を味わっているのではなかろうかとティファは思う。
兄の一人のポップは世間からも炎の大魔導士として語られている通り、胸に秘めている情熱の炎は激しく、ラーハルトなどは大人の男ではあるがマァム一筋で実に禁欲を守ってマァムの成長を優しく見守っているが・・・時折食い殺しそうな顔をしているのを自分は知っている。
そして兄ダイは・・・・・式の当日レオナ姫を食い殺さないように

本気で言った方がいいと今から思っている。
あと半年か、スパイスとお砂糖や素敵なもので出来ている女の子達の悩みがこれであるのならば、カタツムリやボウキレ、子犬の尻尾で出来ている男の子たるダイ兄達は今の少女三人以上の絶叫しているのだろうか？
・・・・結婚か・・・・大変だな～とどこまでも他人事としながらティファはそっとお茶を飲む

勇者達の大結婚式：プロローグ・ポップの胸の内

甘いじれったさに胸を焦がす少女三人がティファの秘密部屋で楽しく愚痴りあっている時を同じくして、そのお相手たる野郎三人もまた同じような内容で煩悶していた。

「・・・どうしよう・・・メルルの奴が日増しに色っぽくなって・・・自覚なく俺に甘えてきているのにもう限界・・・」

大戦時、それこそ味方が倒れ鬼眼の瞳の玉の中に封印されていった死闘の時であっても弱音を吐かなかった二代目大魔導士にして巷では炎の魔法使いと呼ばれ尊敬されているポップが、疲れ切った顔をしてデルムリン島のダイの家のリビングのテーブルの上で突っ伏している。

今日はこの家の主のブラスさんはロモス王国のモンスターと人との共存についての話をする為に、バランと共に出かけている。

丁度ダイも島に帰省しているので偶には男同士で近況報告しないかと誘われ、手土産を以てさっそく互いの近況を教え合い、そこから自分達の恋人の可愛さの話が盛り上がり・・・後はどうしてこうなったのかは推して知るべし・・

その姿を見れば、普段ならばお前らしくない、もっとディーノ様の魔法使いとしての自覚を持てと言いそうなラーハルトも似たような顔をして弱々しくポップの言葉に賛意を示すかの如く頷くのを、横目で見つつ勇者ダイがポソッと一言

「・・・・・もうさ・・・・・婚前ってありだよね・・・・」

小さな声の筈なのに！その力強さと声音に潜んでいる昏い響きに!!緊急事態を察したポップが慌てて身を起こして弟を速攻諭す！

ダイの目が本気でヤバい!!こいつティファが沢山の隠し事してたの知った時と同じ目つきしてやがる!!

すなわちそれは、本気で不味い信号!!

「駄目だぞダイ!!いいか!?俺達はロカさんや・・・言っちゃぁなんだがお前の親父さんみたいなことしていい立場じゃぁねぇんだぞ!?」

ポップはダイのおっそろしい一言で完全覚醒を果たした。

自分だとて・・・ダイの言った一言を何度実行しそうになった事か!?その度に耐えたのだぞ！思春期で多感で性の芽生えが萌えるお年頃なのに!!なのにメルルは知ってか知らずか近頃自分に甘えまくってくるのだぞ！

恋人としてはそれは嬉しい！あと半年も待てば―妻―になってくれる愛おしい女(ひと)が！春の陽気で少々薄着になっている時に・・・・肉感豊かになって来た肢体で甘えられて来ては理性総動員する身にもなってほしい・・・テラン王宮内とは言え、同じ屋根の下に入る選択は間違ったのだろうかとポップは重い溜息をつきながら煩悩と叩かく日々にお疲れであった。

二年半前、大戦終了を世界各地の王侯貴族達が国内・領内に布告をした後、テラン王国では併せてもう一つの布告がなされた。

勇者ダイ一行の占い師メルルを次期テラン女王と定める

それはメルルの人生を、ひいては伴侶となるポップの人生を激変させた。

それは仲間内ではレオナは元からパプニカ王国の跡継ぎ娘で、その恋人ダイもレオナの父親にして現国王レオール王も許可されたことであり、当然将来王配になるのは予め決定されている事であり、翻ってみればメルルはテラン国民であり祖母ナバラが高名な占い師として王宮内に出入りをし、フォルケン王からの信任が厚く、メルル自身はもまた祖母より占い師としての血筋とそれ以上の才を大戦時に遺憾なく発揮したとしても、メルルとしての感覚では庶民の娘であった。

そしてポップ自身はテラン国民ではなく、ベンガーナのランカークス村の武器屋の息子であり、いかに世間や仲間達、果ては魔界の神から評価されようとも彼自身は一般庶民であることを忘れずに、王侯貴族に列せられる気は微塵もなく、また考えの外であっただけに、フォルケン王からの要請とそれを悩みながらも数日後には迷いなく受けたメルルにも驚かせられた。

メルルは凄い

普段はか弱く恥ずかしがり屋ながらも、ここぞという時には芯の強

さを見せるメルルにポップは称賛し、そして何度めか分らないほどにメルルに惚れ直した。
はにかむように笑うメルルに、自分達が無茶をした時心配して本気で叱っているメルル、険しい道を共に歩いてくれると言って大戦時最後まで共に来て呉れたメルル・・・いったい自分は何度メルルの新しい面を見せてもらい、この先何度惚れ直すのだろうか分からない。
女王となるのを受けた時のメルルの表情は、未知なる道への怯えをほんの少しだけ浮かばせながらも懸命に笑て受けたあの顔を見た時、自分もすぐに決心がついた。
大戦時はメルルが自分達を支え手れた。今度は自分が生涯をかけて彼女を支えるのだと。
そこからのポップの動きは速かった。
「親父、お袋、俺メルル支える為にテラン国民になる。」
王侯貴族の勉学の為テラン城に入ったメルルに、やる事があるので数日メルルと離れると言ったその足で、ポップは直接ランカークス村の両親の下に向かった。
大戦終結後は自分も含めて仲間全員は一時帰郷し、ポップは父親と母親と交わした、必ず無事に二人の下に帰ってくるという約束を守り、ジャンクとスティーヌは泣きながら帰って来た息子を二人で泣きながら抱きしめて出迎えてくれた。
死ぬかもしれないとポップ自身何度も思い、その度に仲間を守りたい世界を、そして両親達との約束を守るのだと胸に浮かべて気力を振り絞って駆け抜けたのが、その瞬間に全て報われた気がして数日間は両親の下で、優しい時間を過ごした。
それだけに、息子が他国の、それも王配になりすと言うのは物凄く気が引けたのだが自分の言葉に面食らった二人にさらに事情を説明したところ、あっさりと許された。
「そりゃお前、サッサとメルルさんの所に行かないと駄目だろう？」
「そうよポップ、お前の部屋はそのままにしてあげるから、今からすぐにメルルさんの所に戻ってあげなさい。」
・・・・・許されたどころかさっさと行けと言われた

気に入らなければ国の大臣さえぶん殴って王宮鍛冶を辞めたジャンクと、そのジャンクに愛想尽かすことなく妻であり続けたスティーヌらしい一面ではあるが、息子としては何かこうもっと・・・・優しさを表に出すのが少しだけ下手な父はともかく、母が寂しがるとかないのかと憮然としてしまったのを、父に想いっきり笑われた。
「お前はまだまだ子供だな。いいかポップ、親ってのは子供の幸せが一番だ。少なくとも俺とスティーヌにとってはそれが最優先だ。お前とメルルさんが世界を良くしながらも二人で幸せになれる道があるってのに、親の俺達が邪魔なんてするわけがねぇんだよ。」
だからといって、ここがお前の家であることには変わりない。いつでも二人でここに帰ってこいと言いながら、ジャンクは二カリと笑いながらポップの頭をぐしゃぐしゃにしながら優しく頭を撫でてエールを何度でも贈る。
疲れたら帰ってこい、俺達はいつでも二人の帰る場所なのだと。
その言葉と行動に、今度はポップが面喰いながら少し横を見れば、母もうっすらと涙を浮かべながらも自分を送り出す決意に満ちた瞳をしている。
「ポップ、メルルさんもお前も頑張りすぎないのよ。貴方達は・・・もっと・・・・・子供でいていいんだから・・・・・」
つっかえながらも、スティーヌは気丈にポップを送り出す。
大戦の前から家を出てしまった息子・・・・あの時どれ程胸が潰れる思いがしたか分からない・・・・・アバンからポップを弟子にし預かる旨の手紙が来た時、読んだ直後にその手紙を引き裂きかけたのを夫に止めれらたのがつい昨日の様に思い出される。
あの時ほど、人を憎んだ事は無かった！大切な息子を返して欲しいと何度思ったか知れない!!
一介の庶民の武器屋の息子が、勇者の家庭教師という訳の分からない男の下に弟子入りをし・・・・・戻って来た時には世の中が滅びるかもしれない大戦の最中で、まさか息子と同じ年ごろの子供達が最前線で戦う勇者一行であったとは、完全に自分達の了見の外であり、飲み込むまでにどれ程の苦悩をした事か・・・・・それが無事に帰って

きてほっとしたと思えば・・・・・我が子はどうして平穏な道を歩けないのだろうかとスティーヌは母として息子の進道が険しすぎると心が痛くなり、そしてそれはジャンクも同じであった。
表面では笑っても、心の中では息子の門出を祝うべく泣くまいと歯を食いしばる。
ポップは幼い頃は飽き性で性根が座らずにフラフラとしていた子であり、そしてスティーヌに似たのか線の細い子であった。
将来は自分の武器屋を継いでほしいとついポップの心情を考えもせずに怒鳴りつけてしまう事が多かったと、ポップが家を出てからその事をずっと考えさせられた。
フラフラするな!そんなんじゃいい武器を作る男にはなれねぇぞ!
どうしてお前はそう直ぐに物事を放り出すんだ!!
・・・いいからもう向こうに行っていろ・・・
怒鳴って呆れて・・・元々ポップには武器を作るのに興味がなかったのだと、息子が見知らぬ剣士についって行った事からその事は伺い知れた。この家に、ひいては家業に何の未練も無いのだと。
どんな形でもいい、無事に帰ってきてほしいと思う様になった時、自分達の願いが通じたのか、ポップは逞しい一人前の男になって帰って来た・・・・自分の目は節穴だったと思い知ったがそれよりも嬉しかった。
息子が無事に帰って来たのだから。
その逞しく頼もしい息子が、今度は惚れた娘の為に王政に関わるという。
自分と妻に言えることは何も無い、ポップが決めた道を黙って応援しそして疲れたその時に、二人を包めるようにしてあげる事こそが親たる者の務めだと胸に誓って。
その決意は確かにポップに伝わった。
自分はずっと、全部母親に似ていると思っていた。線が細く、顔立ちなんて思いっきり母親と同じで、それでも今見ている二カリとした父親の顔はきっと自分も元気よく笑おうと思ってした時の表情と同

じであると思えた。今自分の頭を撫でている時の手つきも・・・自分がダイとティファにしている時と同じ感じで・・・・・小さい頃に良い事をした時には必ずこうやって褒めて貰って・・・・・自分はジャンクの怒鳴り声と物言いにが嫌いで、武器作りなんてものには微塵も興味が持てなくて、旅の剣士として立ち寄ったアバン先生に憧れて家を飛び出し・・・・清々したと思った・・・

もう興味のない事に縛り付ける酷い親父に怒鳴られる事なんてなくなったと・・・・たとえ父と衝突をして嫌なことがあったとしても、それ以上に自分は生まれてから十二年間ずっと父と母に包まれて守られていたのを知りもしないで・・・

「お・・・おや・・じ・・おふくろ・・・・・俺！どこに行っても!!何になっても親父とお袋の息子だから!!ベンガーナのランカークス村の武器屋のジャンクとスティーヌの子だから・・・・いつでもは無理でも・・・必ずメルルや・・・俺達の―子供達―と一緒に帰ってくるから・・・・沢山沢山帰ってくるから・・」

「ば・・・かやろう・・・・こんな目出度い男の門出に泣くやつが・・・」

「お・・おやじだってないて・・・・」

「ポップ！体に気を付けて・・・・メルルさんと一緒に幸せになるんだよ!!」

「お袋・・・うん・・・・うん!!」

そうして結局、ポップとスティーヌだけではなくジャンクも大泣きして妻と息子を抱きしめてポップは一晩泊まることになり、夕食を終えて夜が更けても三人の親子は沢山の話をして、翌朝ポップはメルルの待つテランへと帰っていった。

行ってきますと、二人に眩しい笑顔で挨拶をして。

そして戻ったその足でポップはまずテランの王宮内にある政治庁舎に向かった。

本来ならば、国の大きな都市か街にある住民登録の場所は・・・・自国民の数五十人に満たない小国とも言い難いテランにはここにしかないので早速登録してテラン国民となってすぐにベンガーナのランカークス村の村長の下に行って手続きをしてもらった。

自国の、それも自分の村から英雄が生まれたと喜んでいただけに村長はがっかりとした、若者の幸せの為だと涙を呑んで手続きを終え、見届けたポップはすぐさまテランに取って返して今度は王宮魔法使いになれないかを、メルルに内緒でフォルケン王に面会を申し込んで直に聞いてみたら、フォルケン王に偉く驚かれた。
「君はもうメルルの伴侶も同然で皇太子のようの者だ。なぜ王宮魔法使いになりたいと？」
己の失政のせいで国を傾け様々な苦労をしながらも、産まれながらの王族のフォルケンには男の意地と言うのは理解の外であった。
そう、ポップは棚から牡丹餅のようにメルルのおこぼれにあずかって国の中枢に入るのを良しと出来なかった意地であった。
一介の武器屋の息子が勇者一行の魔法使いをしたからと言って、ダイと違って本当に庶民の自分が将来女王になるメルルの伴侶となるのに何の不足も無いと周囲に言わしめるために、そこからの仕上がり、三年後の結婚までには王宮魔法使いの長になる!!と、意気込んでみれば・・・フォルケン王に願い出たその瞬間に決意した全てが叶ってしまった・・・
「・・・・ポップ・・・・・・君は・・・・その・・・ティファも含めて君達はもっと自分達の成した功績と世間の評価を知りなさい・・・」
聡明で温厚篤実と言われるフォルケン王に、ポップは溜息をつかれてしまった
今のこの世界で、勇者一行の者にケチをつける者がいるものか・・・・・魔法使いポップは料理人ティファとは違ってその辺をきちんと知っていると思っていたフォルケンは、ポップへの教育方針の変更を決意した。
まず自分達の立場と世間からの評価をきちんと教え込み・・・・・そこから王配としての心得を教えて行こうと・・・・・・ポップ以上の魔法使いが、この国どころか地上界にいる筈も無く、三年もかけてこんな弱小国と・・・・自分で言っていて悲しくなるが・・ともかくこの国の王宮魔法使いの長になんて即日の内になれるのを知らなかったのかと突っ込みたくなったは墓場までの秘密であるが、それは

ともかく、ポップにはフォルケンの嘆きは伝わらずにただただ驚いた。
王様俺達の為に、破格の待遇をしてくれたのだと勘違いをし、俺達の幸せはこの国の幸せにもするんだと意気揚々とメルルの下に向かってから二年半・・・・・勉学よりも、フォルケンから任せられ各国の大臣達や使者達と国の祭りごとの話をする時よりも・・・・メルルとの甘い時間が苦しくなるなんて言うのは完全予想外だ!!
あの可愛い笑顔本当に何!?好きと言いながら甘えてきてくれる柔らかい肢体を俺にどうしてほしいと!?もうメルルの全部を食べたいと思うのは悪ではなかろう!!
・・・とはいえ、両親を始めとし、手紙でお悩み相談してくれる師や可愛い顔で気遣ってくれている妹ティファや、人生と王としての先達であるフォルケン様やハドラー・バーン達等、様々に大切な人達から応援してもらっている身としては!ダイの言った事を実行するわけにはいかない!!
世界が・・・・本当に文字通り三界全てが自分達を注目しているのだ!!清く正しく結婚するその日まで耐えねばならない!!!
「あと半年なんだぞダイ!もうひと踏ん張りだ!!」
あの大戦の時以上の忍耐力を叫びあげるポップであった。

勇者達の大結婚式：プロローグ・槍使いと勇者の想い

もう婚前ってありだよね・・・・そうディーノ様が言われた時・・・・俺の心も物凄く・・後ほんの少しの魔が差したら賛同するところであった・・・・・ポップの言葉がなければ自分もその道を選んでしまいかねない程に飢えているとは恥ずかしい限りだと、野郎どものお茶会(壮絶な欲望のぶちまけ合い)が解散となって夜が更けてから、ラーハルトはつくづく己の未熟さを省みて落ち込んでいる。

今日はマァムはティファ達と共にお泊りをすると言って出掛けたが、それは寂しいと送り出しといてなんだがマァムがいなくて助かったと思うのは現金なものであると苦笑したくもなる。

今マァムに合わす顔がない・・・・あの優しい笑顔を向けてくれる少女を欲してやまず、三年待つという交わした約定を己の欲望で踏みにじりかけたのだから・・・

父と母もこれほどの情熱をもって結ばれたのだろうか？

寝室の窓辺に座り、煌々と輝く満月を見るともなしにラーハルトは亡き父と母にも想いを馳せる。

自分が生まれた時はハドラー大戦前であっても魔族と人間との間には越えがたき種族間の壁は確かにあったはず。

ハドラー大戦以前にも魔族は地上を幾度も攻めてきた魔王との記憶が薄れる事はなく・・・だからこそ自分の母はハドラー大戦が終結した後も、魔族と契った人間の裏切り者として断罪され、そして自分は忌まわしい魔族と裏切り者の人間との間にできた忌み子として迫害をされ・・・・そして母は亡くなった・・・・・病にかかっても同族から助けらる事は遂に無く残された自分は・・・・それでも、病床にあっても母は自分達を助けるどころか迫害する人間を悪し様に言う事なく・・・・父を愛し、俺を産んだ事が人生での宝であったと笑っていた。

ラーハルト、人は弱い・・・・それでも、人を恨まないであげて・・・・いつかきっと、貴方を愛してくれる人が現れるわ。

私があの人を愛したように・・・・

残暑の中、弱った身に病を得ても母は誰も恨まず、俺にも恨んでくれるなと言っていた母の願いを、自分は忘れ果て人間を恨み・・・・ティファ様とリュート村のあの子供達に出会わなければ、俺とそして・・・・ガルダンディとボラホーンそしてバラン様はいったいどうなっていたのであろうかと思うと今でもぞっとする。

きっと、バラン様を含めて俺達は人間を憎んだまま人間を殺し、屍を踏みにじったその先には、今のような穏やかな暮らしなぞ出来ようはずもなく勇者であったディーノ様とティファ様に討たれていたのだろうと想像がつく。

その時の自分達はきっと、大勢の人間を殺しても何の罪悪感も抱かずに取るに足らぬ有象無象の命を散らせたからと言ってそれがなんだというのだと、勇者一行に言い放ちながら・・・・きっと醜い顔でけがれた言葉を悪びれもせずに・・・・自分は、自分達はつくづく幸運であった、坂を転がるように人間を憎んで殺そうとしていた矢先にティファ達と出会え、似たような優しい人々の心に触れそして母の言った通り、自分の事を愛してくれた少女に巡り合えたのだから。

この道を歩ける幸運を胸に・・・・後半年己の中の欲望と戦うかと、―色々―と思い出したラーハルトは甘くも苦い思いを噛みしめながら決意する。

もしも自分と同じような境遇の者があれば、自分がしてもらったように光への道を指し示せる者になりたいと思いながら。

ラーハルトが一人静かに決意を新たにする中・・・・ダイは大魔王御一行に―捕縛―され、パレスで自分をひっ捕えた張本人である魔界の神様に泣きついてたりする・・・

「ポップのバカ!!どうしてバーンに言っちゃうのさ!!」

「・・・・ダイよ・・・その方の気持ちは・・・矢張り分からん・・・・後たったの半年だけだというのに何を血迷うか・・」

「もう!バーン達の時の長さと俺のを一緒にされても分からないよ!!たったって言うけど俺にとっては果てしなく・・・・だってレオナの事好きなんだもの!!俺の子供産んでほしいんだよーー!!!」

確かに数千年単位で地上破壊と天界せん滅を目論んで機が熟すのをひたすら待って実行しようとした自分と、寿命が長くとも百と少ししかない者との心情は物凄く違いがあるかも知らないが・・・・心清き勇者がこれを言っていいのかと、本来であればその心清らかな勇者に討たれる筈の敵の首魁であり悪の権化であるはずの魔界の神・大魔王バーンは自分の膝に取りすがってとんでもない事を口走らせながらさめざめと泣くダイに、バーンは心底溜息をつきながら宥めている。

夕方仕事がひと段落してお茶をしていた時に、ポップから目玉通信が来て何事かと思った。

別にポップから通信が来た事には驚かない。普段からティファと楽しく話しているし偶にアバンやチウ達から近況報告がてらの世間話もしている。

しかし、半年後に結婚を控えたポップが溜息をつきそうな憂い顔をして通信が来た時には何があったかと身構え・・・・・聞いた瞬間がっくりと来た

曰くダイが姫の事が好きすぎて暴走一歩手前だからお悩み相談してほしいと言われた時には新手の冗談かと思った・・・・思いたかった・・・

しかし自分もダイの・・・主にティファに対する偏愛にも似た愛情を知っているので確かに放っておいて不味いのかもしれないとは思っていた。

特にダイの父親バランも、愛の為だけに一国の王女と駆け落ちをして・・・・挙句がその国を滅亡に導いた一端を担ったのを知っているだけに洒落にもならない・・・・あの一件は実は自分達がバランを闇落ちさせて引き入れる為に、アルキード国の者達を誑かして、バランとその妻を追い詰めたのではなかろうかという陰謀論まで自軍でささやかれたが冗談ではない。

あの一件は本当に自分達は関わっておらず、人間の無理解と偏見と・・・・バランの深すぎる愛憎が招いてしまった悲劇であった・・・・一国の跡取り王女としてもソアラ王女の深すぎる愛情と無思慮さも

どうなのだろうと思ったが、その二人の良い所も悪いところもしっかりと受け継いだのがダイである・・・・暴走させたらどうなるかなぞ火を見るよりも明らかであり、ポップの危惧が現実化する前に死神と影も動員した。

二人もダイの―そういう駄目さ―を知っているだけに真剣な表情で参戦をし、デルムリン島の浜辺で鬱々としてたダイを速攻で捕縛しパレスに持ち帰り、当然ダイは何が起きたのか呆然としたので事の経緯をはなしてやったら・・・・自分の心情勝手に暴露されたとダイはショックで大泣きをした。

親友に裏切られた気がしたのだダイは。

しかしポップとしても、真剣に悩んで親友であり可愛い弟のダイの為を思って成した事であった。

この一件、本当に暴走すればダイ自身の評判が落ちてしまう。

可愛い弟が、後ろ指を刺されるのは我慢できない！

しかしアバン先生に相談するには何か違う気がするし、女性問題に長けていそうなマトリフ師匠ならいいんじゃねぇのかとか言いそうだし、後頼りになる人生の先達といえばバーンであり、頼むと頭を下げるポップの願いにバーンはきちんと応えたのだ。

そしてダイとしても、泣くほど悲しいが愛情深さとそれに比例するように愛した者への執着心が年々高まっているのは自分でも分かっていた。

ティファがパプニカ城内で笑顔でいる時も、それがレオナやエイミや女性陣相手には微笑ましく感じるが、アポロ・バダック・三人のお爺ちゃん学者やロムス・レオール王以外の男が混じると苛ただしく感じるのは少し不味いとも思っている。

妹をいつまでも囲っている訳には行かない・・・・いつかティファも好きな人の下に嫁ぐのだと・・・・そう言い聞かせてもまるで駄目で・・・近頃はレオナの事が欲しくてたまらなくなってそして持て余している想い・・・尊敬している魔界の神に、こんな醜い思いを知られたのは悲しく・・・そしてどうすればいいのかとダイはバーンに泣きぬれた顔を上げて、このままだと本当に己で暴走止められずに不味

いという焦りを滲ませて胸に秘めていた悩みを打ち明ければ、バーンは得心した顔になった。
竜は宝の守護者にして貪欲なるもの
これは魔界・天界・地上界三界の共通認識であり、ヴェルザーやバランを始めとし、実際にファヴニールの竜を見ていて―様々な竜達―の業の深さも知っているバーンは溜息をつく。
三界の調停者として、人の心と天・魔・竜の力を与えられた竜の騎士として、ダイはどうやら竜族の性を色濃く継いでしまったらしい・・それこそ父親のバラン同様に。
とにかくダイの中に溜まっているであろう鬱屈とした思いを吐き出させそして提案をする。
話を聞けばダイは学習能力が異様に高く、それは戦闘だけではなく一般教養から王侯貴族としての嗜みや立ち居振る舞いをたったの二年間で習得してしまい、教師達からはもう座学で教える事はなく後は実践の中で培うのみとなり・・・・ようは時間に余裕ができたから生じてしまった思いのようだ。
であるのならば、半年間忙しくさせればいいのではないかとバーンはダイに―宿題―を出した。
内容は、こののちダイと婚約者であり女王となるレオナ姫がレオール王の後を継いだ後に、どのような国を作っていくか。
「国って・・・今みたいに他の国や魔界・天界と一緒に、モンスターや精霊達と仲良く共存していくんだよね？」
椅子に座っているバーンの膝に頭をつけたままダイは不思議そうにバーンの顔を見上げる。
優しい世界を踏襲するのが正しい事だと何の疑いもなくきょとんとしている様は昔と変わらず、バーンは微笑ましく思う。
ティファとダイは優しい所は全く同じであり・・・・ある意味ティファも愛した者達を守る為ならば自分すらも使い潰す怖ろしさを持ち、よく似た兄妹だと苦笑しそうになる。
世界は優しさで動くものだと思っているところもよく似ているものだと、背が伸び顔も少年から青年になろうとしているダイの頭を、

慈しみを込めてゆっくりと撫でてやる。
父バランと同じ癖っ毛を、パプニカ王族の証である長い髪にするべく伸ばした髪を優しく梳きながらゆっくりと教えていく。
「今の世界は確かに優しい者達が力を持っている。しかしなダイよ、悲しい事に時代が下るにつれて優しさも良きものも放っておけば腐敗してしまうのだ。」
「・・・・・俺達の頑張った事が駄目になるの？」
バーンの言葉にダイは信じられないと驚きバーンの膝から頭を離して悲しい顔になる。
ダイの周りには優しい者達しかいない。元々パプニカという国は自然豊かであり都市機能と自然が程よく混じってモンスターと人間の距離は程が良かったところがある。
それが一変したのがハドラー大戦での狂暴化であったが、バーン大戦の時には狂暴化はなくパプニカの人々は他国に比べてモンスター達を危険視することがなかった。
それどころか大戦初日にヒュンケルがパプニカに攻め込もうとした時に、バダックの開発した様々なアイテムのお陰で不死騎団を撃退したのもさることながら、地元のモンスター達が、攻めてきたアンデット達に対して縄張りを荒らされた事を敵対攻撃と認識をし、一部地域では人と共に撃退をしたところもあり、その話がさらに広まりモンスター達との関係はそこそこいいので、今のままのパプニカでいるのだとダイはずっと思っていた。
しかし国の興廃を、それこそ神々と同じくらいに見続けてきたバーンは、良い国も何もしなければ十年も持たずに腐っていくのも知っている。
良き国を維持したいのであれば何が必要か、王としてどのように導くべきか
「姫と結婚をするという事はそういう事を共に成さねばならん立場になるという事ぞ。」
愛しているだけでは王配となる者としては不足であり、国の為に、ひいては愛している者の為にならないとバーンは諭し、ダイは再び

バーンの膝に頭を靠れて聞き入り次第に心が凪いでいくのを感じる。
自分は・・・・女王となるレオナを支える夫になりたい、良き国を共に維持していく王配になりたい・・・・・そして・・・
「俺・・・・ずっと―みんな―で笑って生きていきたい・・・・」
家族と、仲間と、今まで出会って来た人達と、これから出会うであろう人達と共に手を携えて幸せな時も苦しい時も共に歩いて笑い合うのだと・・・・・結婚の誓いの時のような言葉をぽつりと言うダイを、これならもう大丈夫だと確信した陰で見ていた大宰相と死神はそっとその場を離れる。
キルが空間でダイの前にミストと主を出現させ、驚いたダイをミストが闘魔傀儡掌で捕縛しバーンが引っ担いでパレスに連れてきたのだが、狂気のようなダイの想いが薄れたのにほっとしたのだがそれはともかく、ダイもこの一件で、女王の伴侶の意味を教える事が出来たのだから良いかと、バーンは微笑む。
この子供達はみんないい子達ばかり
早く半年がたてばいいと願いながら

勇者達の大結婚式・プロローグ・周りの準備

世紀の一大結婚式、そう言っても過言ではない・・・むしろ天地開闢以来の一大イベントと言ってもまだ足りない!!

半年後に結婚をするのは只の人に非ず!・王族も含まれているがそれだけに非ず!!世界を救った救国の者に加え、今は亡き王国の皇太子であり三界の調停者と生ける伝説・勇者ダイがパプニカ王国の跡取り王女レオナ姫と結婚をする・・・・それだけでも凄いというのに勇者一行の者達が、武闘家チウ（最早見習いは返上されている）と、勇者ダイの妹にして亡国の姫君にして天・地・魔界において知らないものはいないいであろう料理人のティファ以外の者達が晴れて結ばれるビックイベント・・・・それをどこで開催するのか物凄く揉めた。

別に人界の各国が自分達の所でしようと水面下で争ったわけではない。

レオナ姫と勇者ダイのパプニカ王国、フォルケン王の跡継ぎとなったメルルとポップのテラン王国は、そちらでやってはいかがかと譲り合いをしたからであったりする。

フォルケン王としては穏やかで平和を愛する国と自負しているが、大国であるパプニカ王国の後継者達の婚儀の場にしては些か狭すぎるだろうとの配慮からであった。

この式に招待されるのはカール・ベンガーナ・リンガイア・ロモス王国だけではない。

魔界よりは魔界の神・大魔王バーンは無論の事、魔王ハドラーと今後地上界・天界と共に共存をしていく為に魔界より大国五か国の王達も招待することになっている。

ちなみに魔界は今バーンの名の下に十か国あり、一つは当然バーンが魔界の中央の広大な領地を有して政務をとっており、その左隣に二番目に大きな領地をハドラーが治めている。

今後大魔王の跡継ぎとなるべく、ハドラーは領地経営・魔界の調整・仲裁等をバーンの下で学んでいる真っ最中であるがそれはともかく、次に大きな領地ヴェルザーの旧領地であり今はバーンの預かりと

なっており、残り七か国は五つには魔王と名乗って魔界の神・大魔王バーンに名乗る事を許されている者達が治めており、残り二つは小国で国というよりは自治組織に近い所であり、誰が出るかを決めるだけでも大変そうなので出席には及ばず、折を見て天・地・魔界の三界会議が実現できた時に顔合わせをしようとなっているがそれもまたともかく、パプニカ王国としても自国の姫と王子の結婚のみならずなのでここは永世中立国家と平和維持を掲げるテラン王国での婚儀こそが、次代の為にも良いのではないかと譲っている。

魔界のみならず三界の調停者・当代の竜の騎士にして勇者たるダイの寿ぎに天界・精霊界からの使者もくるので、竜の騎士の母にして守護者・聖母竜マザードラゴンを祀っているのでその資格は十二分にあるというのが言い分であり・・・・どちらで行うかで揉めた理由がそこにある。

揉めたというか平和的な譲り合いというおうか・・・・ダイ達の合同結婚式が世に発布されたたのは魔界が浮上しアバン達とヒュンケル達の結婚して一月後であり、場所決め難渋した。

そして決まったのが

「・・・・・・デルムリン島を一時拡大しての結婚式ってそれってない・・・・・」

兄達の結婚式はどこでするのか、大戦一年後に目覚めた時物凄く気にかかっていた懸案を兄達から聞いたティファの一言がそれであった。

ヒュンケルとエイミが結婚した時に起きれなかった事に臍をかみ、兄達はどうなのだと聞けばポップが微妙な顔をして教えてくれた時、兄が何故幸せ一杯ではなく微妙な顔だったのかにティファは納得をした。

何故デルムリン島なのかからである。パプニカ王国であってもテラン王国の後継者達であっても祭祀の国として神殿を多く有しているパプニカ王国であれば問題はなく、テラン王国でも資格はあり場所もその時だけマザードラゴンが安置されているあの湖の側に、時間も二年あるのだから神殿を建てても良いのではないだろうかと思うの

だが・・・・魔界の神様からの御助言があったとか・・・曰くこの世界が血塗れになる事なく平和になれたのは―デルムリン島で育った双子のお陰―であり、なればその後の平和を願う事も含めた婚姻の儀もデルムリン島が相応しいのではなかろうか・・・・パプニカに続いて不運の国という称号が、デルムリン島にも付けられた瞬間・・・とまではいかないがそれは兎も角、デルムリン島では小さすぎるだろうとアバン王が冷静に待ったをかけたがそこは魔界が何とかするとバーンは良い笑顔で提案をしたのが―転移装置で島をデルムリン島にくっつける―・・・・・・規模が大きすぎて訳分らんと、聡明で鳴るアバンも聞いた時は目が点になった。

聞けばバーンは大規模な転移魔術で大戦時パプニカ王国のかつて地底魔城のあった場所に大規模な塔を出現させており、其の陣をそのまま拡大すれば島と島を砂浜からつけるのは時間があれば可能であるとか・・・・どうしてこんな凄いお人に勝てたのだろうかと、聞いたアバンを始めとした地上界の王達と、敵対した魔王ハドラーの背中には寒気が奔った！

その様子にとんと気が付かず良い提案をしていると笑う大魔王の顔は本当に好々爺としており・・・・この御人を二度と敵にしないように頑張ろうと決意を新たにしたものだ。

ちなみにその時のバーンは本当に周りの事は気が付かず、ダイ達の幸せの手助けができると喜んでおり、ひいてはティファもきっと目を覚ますのだからその時同じくらいに喜んでくれるだろうとしか考えていなかったりする。

物凄い規模の結婚式に相応しく、場所決めもまたぶっ飛んでいたがそれで結婚式の場所は決められた。

そして島は魔界の島では緑が残念ながらなく、カール王国の群島で程の良い所が見つかりそこに式場となる神殿を建て、式の一月前にデルムリン島に転移するようにとのときメモ行われ・・・・・一部魔界の魔法使い一団が大泣きしたとかなんとか・・・理由は推して知るべし・・

「式場が決まって日取りも決まって・・・・ダイ兄も落ち着いてよかっ

たです。」
「ふふ、女性陣もじりじりとしていたとは驚きであったが、ダイ達ももう大丈夫であろうよ。」
「大魔王には何から何までお世話になっている気も・・・」
「ティファよ。」
この度兄の暴走を未然に防でくれた事をポップから聞いたティファはすぐさまバーンにお礼をしに行き、場所と式場の事も含めてお礼をしようとしたティファの言葉をバーンは止めた。
バーンとしては、ティファの言葉に溜息をつきたくなるのを堪えながらであった。
―何から何までお世話に―
その言葉はティファに言われてこそ相応しい言葉ではないか。
この世界の為に、己の魂までも使い切ってまでも魔界の名もなき民までをも救おうとしたティファに、その言葉を言われてしまっては自分達の立つ瀬がなくなるのを気っとティファは気が付いてはいないだろう。
「ティファ、余はこの世界は其方達の優しさに救われたのだ。力強い後押しのお陰で救われる道を行けたのだ。其方達の歩いてきた道を共に歩けるからこそ今日の我等がある。
この程度ではまだまだ返せる気も無いが、そこは千年の平和を築ける世界を作る事で返そうと思う。
それに、余もダイ達の結婚が楽しみなのだ・・・・・パレスで挙げて欲しかったのを我慢したのだ・・」
・・・・物凄く良い事言ったのに、最後の一言は恐縮した自分を慰める為ではなく絶対に本音だろうと悟ったティファはがっくりとし、そしてクスクスと笑ってしまった。
バーンはとっても凄い、尊敬してやまない御人なのだが・・・兄のダイ曰くうっかりとしたところのある可愛い人という評価に相応しくお祭り大好きで慶事があれば自分が主催したいおちゃめなお人でもある。
きっと最後のは本当にそうしたかったのだろうと、それができない

と少々がっかりとしたバーンに天啓が降って来たのだが。
「披露宴の後に、魔界の人達も呼べるような二次会をパレスでしてみませんか？」
　というアバンの音頭の下発案されたことにがっつりと飛びついたのが一年前の話である。
　魔界の人達もこの慶事を共にし何よりも天界と精霊界の使者達と魔界の民達との交流のきっかけになればと、地上界の王達にをアバンが根回しをして合意を各国からとりつけたのを、魔界の神様は大喜びをしてそこからパレスは―二次会―の為に大改造の真っ最中。
　広い廊下をさらに広げて窓も増やして陽光を取り入れやすくする。
　そして警備もしやすいように（大魔王が見守る勇者たちの二次会を襲撃する馬鹿はいないだろうとは言ってはいけない・・）会場は周りの壁を取り外して柱で支えさせた吹き抜け風にさせている。
　ちなみにティファもその一件でミスト共にはっちゃけていたりする。
　お式本番の披露宴でのお料理は断念した、何となればパプニカ王国とテラン王国の厨房が張り切っており・・・・・彼等の邪魔をしてはいかんだろうと料理人同士の心で二人は諦めた。
　ならばバーンのお膝元でやる二次会では、存分に腕を振るってよかろうと勇者一行の料理人ティファと魔王軍の料理人ミストは披露宴当日のメニューをしっかりと両国から聞き出し、それと被らない料理を振舞おうと目玉通信やこうしてティファ本人が来た時に決められていくのをバーンとキルは微笑まし気に見守る。
　時にはメニューの味見を二人は相伴にあずかれるので嬉しいことずくめである。
　そしてもう一つ
「大魔王はダイ兄達に結婚の贈り物は決まっていますか？」
「ふむ・・・・武具の類は良くは無かろうし・・・・・地上界で絶えた魔法の書物は・・無粋であるかな？」
「・・・・・きっとお爺ちゃん学者さん達とポップ兄は喜ぶと思いますけど・・・・・ラーハルト達とダイ兄達と、何より女性陣は・・」

「・・・・困ったの、アバン王とヒュンケルの時は復興金の寄付と、二人の新居費用で贈らせてもらったが・・」
「・・・・ダイ兄達にはいらないですね・・」
バーンはこの手の事にはとんと疎かった。
魔界の神様から祝いの言葉があれば涙を流して喜ぶ魔界とは違って、結婚祝いなんて贈ったことがないので仕方がないと言われればそこまでであるが、アバンの時は大戦で城内を壊された箇所の復興費用として、ヒュンケルの時には二人が新居を持つと聞きつけたのでその半金を贈ったのだが・・まだ時間があるので頑張って考えよう。
「ちなみにティファよ、その方は何を贈るのか決まっているのか？」
「ふっふっふ、はい！もうばっちりですよ。」
バーンの質問に、ティファは満面の笑みで答えたのをキルが興味を持った。
ティファも主同様にこう言った事は不慣れだとばかり思っていたが違うらしい。主の参考にならないかと聞いてみれば、これはティファにしか贈れないものであったのがざんねんであった。
ティファが贈るもの、それは
「この世界の最後と言っても差し支えないもの―万能なる万能薬―です!!」
この世界にあった世界樹の最後の一枚から作られた、―死者さえへも蘇らせる―最後の奇跡の薬、これは他の万能薬と違い腐敗もしない本当に奇跡の薬。
「これがあれば兄達の病気は無理でも、世の中何があるか分かりませんし薄めて使うだけで傷はすぐさま治ります。それこそ産後の肥立ちが悪くとも症状に合わせて使えば治るという代物です。」
「・・・・そのような物が・・」
「はい、あの最終戦まで取っておいたのですが出番がなくてよかったです。」
実はこの万能薬はダイ達にはもう無いとティファは大戦時に言ったのだが、それはこの薬があればいかなる無茶をしても大丈夫だろうという心の隙が生まれてしまうのを危惧したティファが付

いた嘘であった。
　事実これがあるのをダイとポップとヒュンケルとクロコダインが知れば、己の体を省みない戦いをした可能性がそこかしこにあったので、ティファの配慮は無駄ではなく・・それほどに厳しい戦いであったことの証でもあったが、これを平和の世で兄達の幸せの助けと仕える事をティファもバーンも共に喜び
「大魔王、この薬は二次会のこの場所でダイ兄達に渡したいのです。」
「ふむ、なれば保管庫で余が責任をもって預かろうぞ。」
「はい！大魔王達が守ってくれれば安心です!!」
「・・・キル、ミストよ・・」
「はい、近づくものは切っても？」
「・・・・細切れに・・」
「もう二人共、其の冗談は笑えませんよ？」
「はっは、そうだねごめんねお嬢ちゃん。そのくらいの気持ちで守らせてもらうよ。」
「・・・・・厳重にな・・」
　ティファの安心の言葉に気を良くしたバーンは死神と影に絶対死守を命じ二人は張り切って今言った事をするつもりなのを、ティファは張り切りすぎだと笑っていながら四人でパレスの宝物庫の奥に行き、ティファが宝箱に万能なる万能薬を入れて結界をバーンが張り、念のためにバーンは宝物庫にも結界を施し四人のうちバーンとティファとキルは笑ってミストに夕餉は何かを聞きながら宝物庫を後にする。

―誰―であろうとも何人たりとも手が出せないように十重二十重に念入りに結界を施し、万能なる万能薬をもっと厳重に守るべきであったと誰もが後悔するのを未だ知らずに

勇者達の大結婚式・幕間・未来の疑問と苦い思い

その日ミストはバーンパレスの執務室でいつもの様に書類仕事をしながらも、どこか上の空であった。
常ならば昼時になれば妻スピカが持たせてくれている愛妻弁当を嬉しそうにしながら食べる事もせずに、上の空ながらもひたすら書類仕事をしている。
ミストの凄い所は心ここに非ずとも仕事に一切のミスが出ないところだがそれはともかく、
新しい書類を手に取ればそれはヒョイとミストの後ろから伸びてきた手に取られてしまった。
「・・・・遊ぶなキル・・・」
「ふふ、よく僕だって分かったね～ミスト。」
「お前意外こんなバカな事をする者はいない。第一銀の手甲をしているのはお前だけだろう。」
「そうだね～。その通りだけどミスト、お昼ご飯抜くのは体にとっても悪いと思うよ？
スピカのお手製のお弁当を残したら駄目だよ～。」
「・・・・・もうそんな時間か・・」
いつの間にかそんなに時間がたっていたのかと驚くミストに、キルは溜息をつく。
「何か心配事でもあるのかい？」
この親友を悩ませることなど近頃はないはずだとキルは認識していたが、もしかして自分の知らないところで魔界の大宰相を悩ませる厄介ごとでも起きたのかと案じている。
スピカと結婚をしてからミストはどんなに忙しくとも必ずスピカの愛妻弁当を食べない日はなかった。
それこそ天界・地上界・精霊界との首脳会議であってもスピカには一口サンドイッチなどの軽食で用意してもらい合間を縫って食べているのに。
書類仕事の中身を、キルはミストに断りもなくざっと目を通すが各

部門の予算分配やそれに関する報告書や陳情などの日常的なものばかりで特に目を引くものはなかった。
「・・・・スピカと喧嘩でもしたのかい？」
それはないとはキルも承知で聞いてみる。
そうではなく別の事だと、親友は自分になら心の内を曝け出してくれると信じて聞いてみれば賭けに勝った。
「・・・・・スピカと―アトゥール―に昨日聞かれたのだ・・・・―今―のこの世界はモンスター達との共存を第一としているシステムは―どうやって―生み出されたのかを・・」
!?・・・・そうか、アトゥールももう学校でそれについて学び始めている頃合いか。
確か今年で十歳・・・もうそんなに月日が経ったのか・・」
ミストが話した内容に、何事にも動じずにそれこそ主に敵の刃が迫っても鼻歌を歌いながら死神の大鎌を振って敵を屠るキルも動揺した。
今ミストが言った事は概ねティファの助言によるものであるのには間違いはないのだが
ミストとスピカは結婚をして一年半後に子を授かり、スピカの両親であるヒュンケルとエイミ、そして兄ポラリスとティファ達の見守る中で玉のような可愛い男児を授かった。
その時のミストの喜びようは筆舌に尽くしがたいほどの喜びようであり、ヒュンケルとエイミも初孫に大喜びをし・・・我らが主バーン様なぞその日は魔界のお祭り日にしようとして撤回させるのに苦労をした日だとキルはよく覚えている・・アトゥールとは魔界の古語で偉大なる竜を意味する・・・・名付けたのはミストであったが、それを押した人物は・・・・想像できるだろう
ミストが融合したのはヴェルザー配下の中でも一級戦士でヴェルザー親衛隊隊長をしていた竜魔族という魔族で、青い肌に水色のうろこが所々にあるの一族であり、ミストとスピカの間に生まれた赤子は半魔ではなく純粋な竜魔族として生まれた。
青い肌に所々にある水色の鱗はミストから、そして癖っけの銀の髪

に紫色の瞳は母スピカから受け継いだ。
その子が大きくなり学校に通い出し、今はこの世界の歴史を学んでいるという。
そこでアトゥールはある疑問が生じて夕餉の際に魔界どころか三界の国政に携わっているといっても過言ではない父に聞いてみたのだ。
「お父様、今日私は授業で聞いたことを素晴らしく思ったことがあるのですが不思議に思った事があるのです。」
「ほう、なにがあった？」
その日の出来事を妻と息子から夕餉の際に聞くのが楽しみになっているミストは笑みを溢しながらアトゥールの続きを促した。
家に帰ればミストは闇の衣のフードは外し、素顔となった竜魔族の顔を晒して普通に家族で夕餉を摂っている。
スピカと二人きりの新婚の頃から、閨を共にしているのだから今更だろうと家ではフードを摂るようになって久しいがそれは兎も角、スピカからその日に起きた楽しい事やアトゥールから今の様に勉学に励んでいる話を聞くのが楽しいと、普段滅多に笑いを見せない父の姿に気を良くしたアトゥールが聞いた事は
「私達魔界ではモンスター達と共にある事は珍しい事ではなく、地上界、特に人間の方達とモンスター達が共存をするようになったのは、バーン様が起こされた大戦以降の事だと学びました。」
「そうか、もうそこまで学ぶようになったのか・・」
「はい、その前にバーン様が何故大戦を起こさねばならなかったのかもきちんと学んでおります・・・今この世界を私達が平和に暮らせているのもバーン様とお父様達が必死に魔界を守ってくだされたことも。」
「・・・・私の事は兎も角その通りだ。あのお方がご自身の身命を投げうつように魔界を救わんと心血を注がれたからこそだ。」
「はい、其のお心が―ティファおばあ様―を始めとしたかつての勇者一行の皆様を通じて世界に広く知らしめられ、天界もまた魔界を救わんとしていたが為に三界の和睦がかなって今日に至ると。」

「・・・そうだな・・」
息子の言葉にミストは若干詰まってしまった。世間ではそのように言われているが真の話はそのティファこそが天界から魔界を救って欲しいと願われ産まれた子供であった事は、大戦の最終決戦それもパレスの決戦舞台にいた者達だけの秘密である。
その事が知られればティファはきっと天より遣わされた奇跡が具現化したものだと世間からは取られ、大戦以降はティファに平凡な道は本人の気質を考えれば無理であろうが、少なくともそのような好奇な目や事あるごとに奇跡を求められるような煩わしさの無い道を歩いてほしいと誰もが願い秘密にされている。
あの少女は只、誰よりも優しいが故に三界の平和を望んだ子なのだと。
その甲斐あってか歴史の授業や後世に伝わる書物には、今アトゥールが行ったような話で伝わっており、アトゥールが聞きたいのはその後の事であった。
「人間の方達とモンスター達が共存しているのはモンスター達の能力を人間の方達と利益共有をするところから始まり、やがては利害に囚われない良き隣人となるように地上界の各王家の方達がご尽力されたとか。」
「その通りだ。始めは地上界の診療所にホイミ系のスライムが常駐し、山間部の人出の少ない村での力仕事はゴーレムたちが住み着いて手伝うなどから始まったのだ。」
「はい、私もそう教わったのですが・・」
「そこに何か疑問があるのか？」
「疑問というよりは・・・時期が不思議なのです。」
「時期と？」
「はい、その政策が行われたといいましょうか発案がなされたのは現パプニカ王国の女王レオナ様と王配ダイ様、テラン王国の女王メルル様とポップ様の結婚後すぐにティファおばぁ様と共に発案をされたと教わりました。」
「・・・・それで？」

「それで・・・・それまでは賢女王様達と名高いレオナ様達はそれ以前はそのような考えがあるというそぶりは一切なく、何故結婚後すぐにそのような発案をされたのだろうかと歴史の先生が言われたことが耳に残ったのです。お父様はティファおばぁ様達の事を良く知っておられます。何故ティファおばぁ様達は女王様達の結婚後の蜜月とも言われている一月の間にそのようなご提案をなされたのかご存知ではありませんか？」

息子の疑問の答えをミストは知っている・・・・知っているがそれを答える事は出来ずに押し黙る。

その答えは―この世界―の全てを揺るがすことに直結をする、ティファの秘密にも等しい秘事であり、この答を知っているのは―あの結婚式―に出た者達でもデルムリン島に隠居しているダイの育ての親のブラスは知らず、主バーン様と親友のキルと魔王ハドラーと勇者一行の仲間達とそして―三神―と―六大精霊王達―のみである。

何故ティファのみならず、ダイ・ポップ・メルル・レオナ達が人間とモンスター達との共存を急いだのか・・・

「貴方・・・・実は私もずっと聞きたかったことがあるの・・」

「スピカ？」

「・・・・・私の時もそうだったけれども、ポラリス兄様やティファママの時も・・・昔勇者一行の関係者の方達が結婚式をする時に、どうしてバーン御爺様はあれほど念入りに警備を配しているのですか？キルおじさんも結婚式の度に嬉しそうにしながらも物凄く周囲を警戒しているようで・・・ダイおじさん達の結婚式の時に何かあったのですか？」

自分の時と、そしてティファママとチウおじさんとポラリス兄さんの時、式の会場警備は目に見えるだけでも多く、そして見えはしなかっが精霊達の気配をそこかしこに感じていたのだと、核心を突くような妻の疑問にもミストはすまない、答えられないと言って今に至る。

「・・・・そう、僕が、僕達が式の度に警戒をしているのをスピカには気が付かれていたんだね・・・・まいったね、もう―あんな事―は

金輪際起きないとは思うんだけれどもね・・」
この世界のモンスター達との共存システムはティファがポ○モンを丸パクリをしているのは知らずとも、ティファが考え付いたのは知っている。
そして何故その助言が、ダイ達が結婚式後にすぐに提言したのかもキルも理由を知っている。
そしてその理由の発端となった出来事を思う度に、キルの血は凍る思いをして胸をかきむしりたくなるほどの怒りと当時味あわされた深い絶望と悲しみを思いだされる。
それはミストにも当て嵌まり、深いため息に満ちた声が紡がれる。
「天界も精霊界もあれ以降二度と―過ち―がないようにしていると―定期的―に報告されてはいる。」
「二度とか・・・・あんな事・・・二度も許すものか・・・・・・・今度あれば・・」
「キル・・・」
「・・・・分かってる・・・あんな事はそうは起きない・・・それでも―あの子―が関われば何が起きてもおかしくない・・・・・・おかしくないじゃないかミスト・・」
あの当時の事を思い出すたびにキルは殺気立つのをミストが宥める。
今だとてキルが浅く腰をかけている執務室の机の端に置いている手の下の木がひび割れてしまっているのを、ミストは怒らずにそっと声をかけてやめさせる。キルの気持ちがとてもよくわかるから。
皮肉な事に、ダイ達の結婚式であったあの―忌まわしい―事を体験してしまったポップ達が、人間とモンスター達との共存を急がないといけないという危機感を持ったからこそあれほどまでに早くティファが素案を提言し、そしてダイと達が後押しをして地上界の王達が真剣に受け止め可決されたのだが・・・・
未来が良くなったとはいえもう過ぎ去った事とは言えども―忌まわしい出来事―が無かった事になるわけではない。
あの出来事のせいで幸せな日を迎えるだけであったあの子等がど

れほど傷ついた事か。
二度と・・・・あのような事が起きないように三界全ての長達全員が今でも警戒を緩める日はない。
次があればそれはきっと、―引き起こした者達―を自分達は決して許さない。
「そう、二度と起こさせるものか・・・」
それでも起こった日には、―相手―を全滅させるのみ
そういう答えは直ぐに出るのだが・・・・妻と息子の疑問にはどう答えればいいのだかとミストは頭を悩ませる。
良き世界とはなんと難しい事かと考えながら・・・

勇者達の大結婚式：結婚式前夜・前編

長かった・・・十代半ばの三年はあっという間だというなかれ！
彼等彼女等は互いを愛し合う思いが強いが為に！結婚なんてしたいと思った即日してもいいじゃないと暴走一歩手前であったのをお察ししてほしい。
少女達はティファにやんわりと慰められて三年を乗り切り、野郎どもは二代目大魔導士の説得と魔界の神様の助言で無事に三年を乗り切れた。
明日、とうとう結婚の日が明日行われる夜はきっと誰にとっても特別な日。
結婚する当人、その両親・家族、友人や仲間達もこの日が来るのをずっと待ち侘びていた。
可愛い子供達が結婚するその日を

ｓｉｄｅパプニカ王国レオナ姫
「お前もとうとう嫁に行くのだな・・・」
「ふふ、おかしなお父様。私は確かにダイ君のお嫁さんになるけれども、ダイ君が婿入りしてくれるのよ？」
父にして国王たるレオールの病は大戦の頃に比べれば格段に良くはなっている。
魔界との和平を結べ、心労もなくなり何よりもティファが発案してくれたクスリのお陰で夜もよく眠れているのがいいのだとロムス宮廷医師長が言っていた。
それでも体力が元に戻る事はなく、夜は早いうちから寝る事はなくともベットで休息をとっている。
その父の膝の上に頭を靠れ、父の大きな手で頭を撫でてもらうのがレオナは何よりも大好きだ。
明日ダイの妻となる事になってもそれは変わらず、今もいつもの様に父の膝に頭を乗せながらゆったりと過ごしていると、父が自分がお嫁に行くのが寂しそうにしている。

そしてその通りに、レオールは娘に対して見栄を張る事をせずに素直に心情を吐露した。
「・・・それでも娘が他の・・・・いやダイ君に不満なぞ無いのだぞ？彼よりも優れている男はいないと私も思っている・・・しかしなレオナ、男親というのは娘が嫁に行くというのはどうにも寂しいのだ。」
「・・・・・新婚旅行から帰ってくればまたこの城でずっと一緒に暮らすのに？」
「・・・・・情けないがその通りだ。」
明日はデルムリン島で自分達は人類で類を見ない―合同結婚式―を執り行う。
市井であれば、ごくまれに仲の良い者達で挙げる事があるらしいが、ロイヤルウェディングを合同でされたことは前例がない。
しかし今回はどこの国からも、それこそ王室の事になると何かと噂をする一般庶民すら全員と言っていいほど納得するだろう。
なにせ救国の英雄が姫君達を娶るのだから文句なぞある筈も無い。
その日はどこの国、ロイヤルウェディングを挙げるパプニカ王国・テラン王国のみならず、他の国もお祭り日になるらしい。
其の為の準備は三年をかけて行ってきて、とうとう明日となりその為にダイとポップは一日早くデルムリン島で過ごす事になった。
理由は国の後を継ぐレオナとメルルを、ダイとポップが結婚式場それもヴァージンロードの先にある祭壇の間で待つという事になったからだ。
普通であれば聖堂の式場の間の入口からがヴァージンロードとなるが、大国の姫君達の合同結婚式であればもっと大々的にしてみようという案が出され、それぞれの国のお城を出たところからがヴァージンロードとしようとなったのだ。
規模の大きさに訳分らん・・・とはならなかった。
なにせ結婚式場のデルムリン島を、―とある魔界の神様―が規模拡大するという前例があるので何が起こっても今更である。
それならばヴァージンロードの拡大位ではもう誰も驚かないのだ。
計画ではこうなっている。

レオナとメルルはウエディングドレスに身を包み、それぞれの王宮のバルコニーから国民に挨拶をし、これから自分達は結婚することを宣言する。
これは自国の民達への配慮の一つである。
自分達の国の跡取りとなる御方達が他国で大切な結婚式をするというのを頭では納得はできても心情的に不満があっても不思議ではない。
デルムリン島に行ける者達は限られており、当然一般庶民の彼らが入れる余地はない。
しかし自国で式をしたとしても大聖堂のお式は貴族以外は見れないだろうという意見もあるが、自国であれば当然パレードが催されるので、遠目からでも見られる可能性はきちんと誰にでもあるのだが、デルムリン島での式はそれが無い。
その心情を鑑み、先ずは自国の民達に寿いでもらべく、花婿となるダイとポップよりも先に花嫁姿をお披露目し、そしてその様を悪魔の目玉が中継をする。
それはパプニカ王国ではパプニカの国民達だけが、テラン王国ではテランの国民だけが見られるようにしており、いかに自国の民達を優先しているかを全面的に押し出した演出であるが、レオナもメルルも共に祖国を愛し、彼等に祝って欲しいのでこの提案が出された時に真っ先に実現してほしいと声を上げたのだ。
自分達を育んできてくれた国を、メルルは自然豊かで静謐で長閑なテラン王国を愛し、レオナはお転婆姫として有名でよく城下町や白の裏手の森に遊びに行っていた。
時には港の方までこっそりと行っていたと・・・本人はこっそりと行ったつもりであってもばっちりと護衛が付いていたのだがそれは兎も角、子供心にも風光明媚な自分の国は世界で一番美しい国だと思い、世界を巡った今でもそうだと自負している。
その国を、ハドラー大戦とバーン大戦のどちらの大戦でも被害があった国を治め切って見せた凄い父が、明日自分がお嫁に行くというのは寂しいと大真面目に言っているのがレオナにはおかしくなる。

―私お父様のお嫁さんになるの―

遠い昔、父にそういった時、父はとてもうれしそうにしてくれたのが不意に思い出した。

あの時は父よりも素晴らしい男はいないと思っていたのが、賢者となるべくデルムリン島に行き・・・・賢者になるどころか人生が一変したあの島で自分は本当の恋を見つけた。

初恋は実らないと誰かが言っていた・・・・そうかもしれない。

本当の恋ではないけれども、確かに自分はお父様のお嫁さんになりたかった。

その父のエスコートでヴァージンロードを歩き、本当の恋の相手を見つけたあの島で結婚をする・・・・何と数奇な運命なのだろうと自分でも思う。

「お父様・・・・私はダイ君が好き・・・・それと同じくらいお父様も大好きなの。」

「レオナ・・・」

「私がしわくちゃの御婆ちゃんになっても私はお父様の愛娘だもの・・」

「そうだな、私の愛娘はお前一人だ。私の可愛い娘はお転婆で人の恋愛ごとが大好きで・・」

「・・・・・お父様・・」

「そして優しく賢い娘だ。」

「・・・・・」

「幸せにおなりレオナ。ダイ君とお前ならきっと良い国を作っていける。そして周りの人達がきっと助けてくれる。私も・・・・あの子の言う通りお前とダイ君の子供が大きくなるまで長生きするつもりだ。」

「うん・・・・うん・・・絶対に長生きしてね・・・ひ孫見るくらいにきっとよ・・」

「おやおや、私の愛娘は泣き虫でもあったか・・・泣くのは明日まで待てないのかな?」

「・・・・お父様の意地悪・・」

煌々とした月が、仲睦まじい親子の睦あいを照らしている。
廊下で王と王女を護衛している騎士達がその様に涙を浮かべている。

ｓｉｄｅテラン王国メルル

「明日か・・・・ワシ等にとっては三年はあっという間であったな。」
「その通りですが、孫娘には遅く感じたようですねフォルケン王。」
「・・・フォルケン様・・・おばぁ様・・」
パプニカでレオールとレオナが仲睦まじくしているように、テラン王国でもメルルを囲んでフォルケンとナバラが明日を楽しみにしながら楽しく話している。
特にナバラは、小さい頃は人見知りが激しく引っ込み思案であった孫娘を案じていたが何のことはない、それはメルルのうちに眠っていた途方もない才能が、メルルに人の中にある邪な信念を無意識に読み取ってしまっていたのが原因だったのだ。
それは長ずるにつれ才能が開花され、遂には人々を救う神託を受けるほどにまでなった。
しかし当のメルルはその事を驕ることなく、優しく少し恥ずかしがり屋なところがある可愛い孫娘のままであった。
その孫娘が明日結婚をし、そしてゆくゆくはこの国の女王となる。
少数であるとはいえ国民を導き、国を率いる重い責任はきっとメルル一人では潰れてしまうだろうが、夫となるのは―あの―魔法使いポップである。
大戦時より麒麟児の名を欲しいままにしていた才能の塊のような少年。
魔法はもとよりも相手が一国の王であっても物怖じせずに、若き勇者一行の道を照らしだしてきたあの少年であればきっとメルルを支えてくれると信じてフォルケンはメルルをテランの跡取りにと話を上げた。
これより世界は戦よりも平和を維持する方面で進んでいくはず。
それはかつて戦をなくすために自国民から武具を取り上げ、そして

道具の開発をも禁じ自然と共生することを強いたという・・・・今考えれば愚策以外の何物でもない政策の為にこの国を衰退させてしまった。
モンスター達が跋扈するこの世界でそれは無謀であろうと今であれば思えるが、当時は若く自分の理想のみしか見ていなかった愚策で、自分の寿命と共にこの国は自然消滅するものだとばかり思っていたが・・・光明が見えた。
大戦が和平で終わり、魔界との共存の道を事で。
世界はこれより平和維持の為の方策が是とされる。その時、大戦で様々な出来事を間近で見て、平和の尊さを大切さを知ったメルルであるならば平和を国是とした国を魔法使いポップと共に導けると信じて託した。
それは料理人ティファの存在があったからだ。彼女はずっと、この世界の争いを止めたいと願っていたという。
それは自分の様に発布を出してそれで良しとしただけではない。そうしたいと願っただけではない。
文字通り自分自身の何もかもを使い切ってまでも、この世界の平和を願い、他者の幸せを願い、笑顔を守ろうとして来たのをメルルはずっと見ていた、それこそが最大の理由。
料理人ティファの願いを、メルルも勇者達もそして各国の王達も賛意を示しそしてその道を行こうとしている。
「メルル、この国の事もあるだろうが、何よりもお前自身が幸せになるのだ。」
「フォルケン様・・」
「ポップと共に幸せになり、そして誰もが笑って幸せになれる国を共に作りなさい。
今この国に住まう民達は少ない・・それでもこの国を愛してくれている。
彼らの事を頼んだぞ。」
「そんなフォルケン様!!」
遺言のようなフォルケンの言葉に気色ばむメルルを宥める様に、ナ

バラが陽気な笑い声を発した。
「ほっほ、まだまだワシ等は長生きせねばなりなませんぞフォルケン王。孫娘の子を抱くまではの～。」
「そうです！もっと長生きしてくださいフォルケン様!!」
「む・・・・そうか・・・・そうじゃな。頑張るか。」
しんみりとするよりも楽しい方がいいと、ナバラが盛り上げその夜は楽しい笑い声がテラン王宮内に響き渡る。
明日の結婚式を楽しみにして。

勇者達の大結婚式：結婚式前夜・中編

レオナとメルルの結婚前夜は実にしみじみとほのぼのとした中で過ぎていく中・・・ダイ達の方はえっらい事になっていたりする。

別にダイ達が今更花嫁恋しく騒いでいる訳ではなく、明日のお式の為に前日からデルムリン島に来ている者達が問題であった。

ダイとラーハルトとマァムが島にいるのは当然であり、ポップもまた前日からいたほうが落ち着くというので島にいる。

そしてそのマァムの両親であるロカとレイラも、式に遅刻するよりは娘の所に泊まりたいというのも扱く当然であり、ポップの両親ジャンクとスティーヌの方はティファの方から声をかけ、二人もお言葉に甘えてティファのキメラの翼で一緒にやって来た。

マァムの父であるロカは、長い間ハドラー大戦でボロボロになった体を抱えて闘病生活を送っていたが、近頃はキメラの翼の移動に耐えられるくらいまでには回復で来たので迎えに行ったラーハルトとマァムと共に島にやって来たのを、ブラス達は大歓迎をした。

ラーハルト共に島のモンスター達は言うに及ばず、ティファの事を大切にしてくれる素直で優しいマァムの両親に常々会いたいと思っていたからだ。

それはバランも同様であった。先の大戦でロカは、あの魔界の神大魔王バーンを本気で叱り飛ばした、戦士として尊敬の念に値する漢に会いたいと思っていたのでいそいそと歓迎の準備をして待っていた。

島のラーハルトとマァムが住んでいる家の前で待っていたブラスとバランは、着いた時ロカの体調が崩れていないかを心配した。常ならばティファがいるのだが生憎二人と同じ時にポップと共にジャンクとスティーヌの迎えに行ってしまったので、ブラスもそれなりに薬学知識はあるが、ティファの様に万能薬を作れるほどの知識はないので大丈夫だろうかとやきもきしていたが、存外ロカはケロッとしており会って早々ニカリと笑みを向けられた。

「初めましてだな。俺はロカ、こっちはかみさんのレイラだ。今日は厄介になるが一つよろしく頼む。」

それは堂々とした挨拶であった。やはりロカは常任よりも痩せて頬もこけており声も小さいが、瞳は力強く声音にも力が満ち溢れていた。

往年の戦士、まさしくそれに相応しい風格を持ち、これをしてマァムの戦士としての心を育んだ親であるのを、バランは好ましく思い、マァムへの常日頃の感謝も込めた挨拶をしてロカとレイラを歓待しようとしたところにポップ達も帰って来た。

「ただいま～・・・あ!!ロカさんレイラさんお久しぶりです!!この度はおめでとうございます。ロカさん体調はいかがですか?」

「おうティファ久しぶりだな。二週間前にマトリフ様と一緒にあったばかりだろがよ・・そうそう崩れるほど俺はやわじゃねぇぞ。」

「久しぶりねティファさん。ティファさんとマトリフ様の新薬のお陰でロカの食欲がまた上がったのよ。」

「それって私も一緒に行ったときに渡されたやつ?」

「そうだぜマァム。」

賑やかしい再会の後、キメラの翼の移動なぞ人生初であったジャンクとスティーヌはその間に落ち着き、二人もまたブラスとバランに挨拶をしあってダイ達の家へと向かった。

近頃は某魔界の神様御一行が来ることが多くなったので、いっそのこと広くしてしまおうとティファが全額を出して家をリフォームは・・・・できなかった。

別にリフォームができなかったのではない、どこでか分からないがその話を聞きつけた某大魔王様にリフォーム代金を知らぬ間に肩代わりしてもらっててその話を知ったティファはぶっ飛んで急いで某大魔王様に陳情した。

自分だってそれなりに働いてお金はある!恵んでもらう言われないという陳情は至極真っ当な言い分で滅せられた

曰くリフォームの理由が自分達にあるのであれば、出すのは当然

ぐうの音も出ない正論に負けたティファは以降はその事を口に出さなかったがそれは兎も角、広々とした家で皆にくつろいでもらうべくダイとポップとティファは張り切って先頭を歩いていく。

途中景色の良い所をロカ達に見せ、島にいるモンスター達の紹介をしながら進むのは、ロカ達にとっては新鮮であった。
大戦前からモンスターとは見た目が可愛いものであっても油断してよいものではないというのが世間一般の常識であり、ゆえにティファ達に挨拶をして自分達の事も興味深げに見てくるモンスター達に不思議な感じがする。
それこそ戦士として戦っていたロカとレイラには、こんな風に穏やかにモンスター達をまじかで見たことはなく猶更不思議になるのを、後ろからついていくマァムとラーハルトは微笑ましげに見ている。
もう戦いの時は終わり、穏やかな世が来たのだと
互いの両親が来たのは昼頃であり、昼食はティファとマァムとブラスが張り切って用意した。
ロカには栄養と何よりも消化に良いものをマァムが張り切ってこさへ、自分達も手伝うと言ってくれたレイラとスティーヌを、ラーハルトとポップが止めた。
「母君は今日は持て成されるべき客人です。父君と同様こちらでお待ちを。」
「お袋もそうだぜ。俺が代わりに手伝ってくるから、ここで親父達と一緒に待っててくれよ。ラーハルト、後頼まぁ～。」
ラーハルトはロカとレイラ父君、母君と呼んでいる。これには二人も、自分達はそんな大層なものではない、親父殿・お袋殿とかその辺でどうだと言ってもラーハルトが聞かなかった。
ラーハルトは幼少期に父はもとより母も早くに亡くし、心の底では家族と言うものに対して憧れそして愛情に飢えていた。
その心を押し殺すように人間への憎悪で心を満たさんとした時に・・・出会ったティファとリュート村の子等に救われそして本当の家族を得られたその思いから、ロカとレイラを下にも置かず、孝行息子をしている。
ロカが咳き込めば程の良いぬるま湯を差し出し、薪割りをレイラがしなくて済むように大量に作ってティファからもらったマジックリングに収納して渡し、三日に一度はマァムと共に昼食を摂りに行き、

半月に一度は泊まりに行って・・・・もういっそのことネイル村に住んだ方がいいんじゃねぇとはポップの言葉だが、ラーハルトとマァムはティファの下にもいたいのでその言葉に頷く事はなかった。
今もまた居間でロカがくつろげるようにと柔らかいソファーをラーハルトとマァムが用意をし、そして優しい眼差しでロカとレイラに話しかけているラーハルトを、周り特にバランとガルダンディとボラホーンは微笑んで見ている。
ラーハルトの柔らかい笑みを見られて何よりであると。
ジャンクとスティーヌも持ち前の人当たりの良さから周りとすぐに打ち解け楽しい昼食会が始まった。
「このジャムはティファと一緒に作ったの。」
「お袋、俺も少しは料理できるようになったんだぜ。」
「・・・・俺も習ってその内父君達に・・」
「ラーハルト!貴方何でもできるんだから私の仕事まで取らないで・・」
ポップやラーハルトとマァムの初々しい掛け合いに、ダイとティファもブラスとマァムの作った料理に舌鼓をうってさぁこの後は何をして遊ぼうかとティファが考えている時に扉がノックをされたのでティファが出てみれば・・・・・超あり得ない御一行様達がやってきていた・・・
「久しいなティファよ、招かれてはいないが―余等―も今日泊まってよいだろうか?」
・・・・・・魔界の神様が―勇者一行の関係者御一同―を引き連れてやって来るって普通ない・・・・

勇者達の大結婚式：結婚式前夜・後篇

・・・・・俺の、俺達の息子はいったいどんな男になっちまったんだ・・

あんなすげえお方を怒鳴りつけるって

目の前で繰り広げられている光景にジャンクは唖然としている。

自分も昔威張り散らしていた大臣を殴り飛ばしたことがあるが！規模が違うだろこれは!!今世間から尊敬されている魔界の神様相手に何つうことを・・そのすぐ隣で妻スティーヌも両手を握って開いてをして息子を止めるべきかどうするかを物凄く悩んでいるのを、酒飲み仲間で武器作り仲間でもある魔族ロン・ベルクはからりと笑って一言

「―あいつ等―はいつもあんな感じだから気にするなよ二人共。それよりも久しぶりに邪魔させてもらうぞブラス老、バラン殿。」

目の前の光景なぞうっちゃって、この家の家主であるブラスとバランにのんきに挨拶する友人魔族に、ジャンクとスティーヌが頭痛くなっても不思議ではない。

そしてそれはもう一組の招かれ夫婦、ロカとレイラも同様であるのをこれまたマトリフが・・慰めにもならない慰めをしていた。

「あいつ等なりのじゃれ合いだから気にすんなよ。それよりもロカ、お前体の方は異常ねぇか？

早めに休ませてもらった方がいいぞ。」

・・・・この家の主でもないのに飄々と休むことを勧めながらロン・ベルク同様にこれまたブラスとバランに挨拶をした後は、―みんな―で持ってきた土産を出して宴会の準備をしていたりする！

目の前の大嵐をものともせずに、ロン・ベルク―達―の挨拶を溜息交じりに疲れた様子で受けているブラスとバランが可哀そうになって来た・・・・・魔界の神様のやらかしのせいで大嵐は発生している

ティファは大戦以降は怒るという事はなかった。大戦時は己の信念に反すると思った事に対して怒りを燃やし怒鳴り上げていたが、本

島に大戦以降は無かった・・・・今日事の時までは・・
「貴方一体何を考えているんですか大魔王!!いきなり人様の家にこんなに大勢の人達引き連れて押しかけてきて!!なんですか?私なら能天気に受け入れると思っていたのですか貴方は!!!」
鬼の形相で、床に―正座―させられている大魔王バーンを相手に怒鳴っているのを、兄達も同じような形相で怒っている。
「俺には仲良き者にも礼儀は必要で!相手に対しての気づかいしろって言ったのは?だったのバーン???!!」
「あんた一体何してんだよ!!こんなに大勢で押しかけて!ミストバーンに料理作らせるからいいだろうとかってそういう問題じゃぁ無いだろうがよ!!!」
―竜の三兄妹―は火を噴くほどに怒っている。
ティファが扉を開けて、誰が来たのかとダイとポップも出てみれば・・・・玄関先にいたのは大魔王様で・・・・その後ろにはにっこりと笑うアバン先生とか、その先生にがっちりと掴まって引きずられて来たであろう魔王ハドラーとか・・・師匠やロン・ベルクに、強引に誘われてバツが悪そうにしているノヴァとクロコダインとチウとか・・・その後ろですまなさそうに笑っている
「招かれていないが余等も泊ってよいかティファ?急な事ゆえきちんと食料も持ってきたのでミストに・・・・」
そこから先はティファが凄かった。
速攻で全員を中に入れ、超高齢社マトリフをロカと同じゆったりとしたソファーに座ら
せ、キルとミストにはにっこりと笑ってきちんと挨拶をした後、今回の発起人は逃がさなかった。
「こんにちは大魔王。本当に私は貴方達を招いた覚えないんですかね〜。」
凄みを浮かべた笑顔に、魔界の神様の背筋が凍り付いて自然と正座してからそこから怒涛の説教タイムと相成った。
ティファとて好きで怒っている訳ではない。しかしだ、今日この家にいるのは大魔王バーンに慣れている自分達だけではなくそれこそ

本当に一般市民のジャンクとスティーヌがいる！
　百歩譲って戦いにも魔王にも慣れているロカとレイラだけならばティファもダイ達もここまでは怒らなかっただろうが、それにしたって今回の事はやらかしすぎである。
「以前私に身分差を考えない人は少数だから！よくよく考えろって言っておいて!!」
「より良い事をするにはお互いの総合理解が必要だって言っておいて!!」
「事前準備の大切さを俺に言ったのバーンだろうが!!」
　ティファもダイもポップも、人生の先達たるバーンに様々な事を教えてもらい尊敬しているだけに、それら全てをひっくり返したバーンに怒っているのだ。いいこと教えてくれたのならば、それを破るって絶対にない!!
「まぁまぁ三人とも、そろそろその辺に・・・」
「アバン先生も悪いんですよ!!」
「おいマァム・・・・何もそこまで・・・」
「おじさんだって大魔王と同罪なんだよ!?その辺分かってる？」
「あ～ティファ・・・マトリフ様は半分はロカさんの事を心配してきたんだからその辺は・・」
「師匠の破天荒ぶりを庇わなくてもいいぞノヴァ！あんたも暢気に酒飲もうとするなロン・ベルク!!!」
　バーンを怒っているのを執成そうとするアバンとマトリフも同罪であると四人はさらに怒りを募らせる。
　ティファとダイとポップとマァムの四人に叱られるバーンとアバンはしおしおと項垂れる可愛さはあったが、子供達が心の底から怒っていないのを分かっているマトリフとロン・ベルクはまぁそう怒るなと宥めに掛かり、そして時の氏神様たちが溜息をつきながらも重い腰を漸く上げた。
「ティファさん、ダイ君、ポップ、大魔王さんは本当にみんなの結婚の事を喜んで来たんです。僕達もご飯の支度やお泊りの支度も手伝うからそろそろ・・」

「うむ、許してやってはくれまいか？俺達も祝いたいのだ・・・」
「・・・うにゅ～・・・」
「チウとおっさんがそこまで言うんだったら・・」
「・・・・バーン、今度からは本当に気を付けてね？俺だって怒るの嫌だよ・・・」
「うん、私も怒りたくないからお願いね？」
　チウとクロコダインの執り成しに、ティファ達は矛先を収めるのを萎ていたバーンは顔を上げてきちんと謝罪をする。
　今度はもう少し気を付けるという・・・・・なんとも心許ない言葉ではあったが、子供達は本当にバーンの事が好きであり、特にダイとティファは二人でバーンの手を取って立たせる。
　自分達の嵐の真っ最中に、キルとミストが主の無作法を詫びながらきちんとお泊りの許可をブラスに取っているのは耳の端で拾っているので、謝罪したバーンをきちんと許して、いつの間にか整っている夕餉の席へと誘った。
　ティファ達が怒っている間にミストが速攻で夕餉を整えるのをノヴァとチウとなんとラーハルトがしれっと手伝い、食器類をガルダンディとボラホーンが整えていたのだ。
　ロカ達とレイラ達以外はこのようなやり取りは見慣れており、いつものようにすぐに落ち着けば仲直りもあっという間なので心配するだけ無駄であり、すぐに夕餉を摂れるように息子たちと魔界の神様とのやり取りに頭を痛めているブラスとバランと、そして主と大勇者に振り回されているハドラーをキルが労わりつつ、ラーハルトはロカとレイラとジャンクとスティーヌにも、あれが大魔王バーンと子供達のいつもの事と説明をし、すぐに収まるからと安心をさせて準備をすればその通りになった。
「・・・・・お前本当にハドラーなんだよな～。」
　嵐が去れば、ロカとレイラは複雑な気分になる。それもそうだろう、ハドラー大戦でやりあったハドラーが、あの傍若無人で人をちり芥のように見ていたハドラーが・・・苦労している中間管理職の様にしか見えないのだから無理もない。

「・・・・・・・・・・俺にもいろいろとあるのだ・・・」
重いため息と共に呟かれたハドラーのその一言には万感の思いが籠っており、ロカとレイラはそれ以上の追及はしないでおこうと心に誓ったが、夕餉は概ね和気あいあいとした。
「その方がロカか。大戦の最後の時、其方の言葉のお陰で余は良き道を歩くことができた。その時の礼をしたいと思っていたのだ。」
「そんなよしてくれよ、俺は思った事を言っただけで最期をきちんと纏めてくれたのはアバンだろう。」
バーンの言葉にロカは顔を赤くし、自分は大層な事をしていないと否定するがアバンものほほんとした笑顔でロカを追い込む。
「私もロカのあの言葉が無ければどうしようか手立てが見つかりませんでしたので、ロカのお手柄ですよ～。」
「アバン!!」
ロカが真っ赤になって怒るのを、マァムはクスクスと笑ってしまう。
バーンが今ロカにお礼をしているのは、最後の戦いの時の―世界の繋がり―のあの時の事を言っている。
大戦を引き起こした責任は自分の命を持って償う、だから滅びゆく魔界を救って欲しいというバーンの言葉をロカが否定をした。
命を捨てて償うな、生きて償う道を行けとティファが常々言っていた言葉を図らずもロカがバーンに対して言ったのだ。
ハドラー大戦を戦い抜いた戦士の言葉には重みがあり、それがきっかけでバーンの命を繋ぎ留められたのだ。
その時の事を、ジャンクとスティーヌもよく覚えている。
愛息子の無事を祈っていた時、突然ポップ達の言葉が頭の中に響き渡った時は村全体がパニックになりかけたが、すぐさまポップが今起きている奇跡のような出来事の説明をなされた時は規模の大きさから呆然とした。
しかし、魔界が滅びゆく運命にあると知った時、二人もまた救う道はないのかと思った方であった。
家族を、同族を救いたいと願い、それが為に足掻き苦しみ引き起こ

してしまった戦いを終わらせることができないだろうかと・・・・・終わった後に、まさかその息子が魔界の神とあそこまで距離が近いとは思わなかったが・・・本当に自分達の息子はどこまで遠くまで行ってしまうのかと少し寂しくなるが、男ならば元気よく遠くまで行くのが良いだろうと思い定め
「ロン！今日はとことん飲むぞ!!息子の門出だからな！」
「いいぜジャンク、今日はそのつもりで酒はしこたま持ってきたからな！」
「俺も混ぜろよ、久しぶりだな親父さん。かみさんも元気そうで何よりだ。ロカは駄目でもレイラもどうだ？久しぶりにアバンも飲めよ！可愛い弟子の門出だぞ。」
「そうですね～、しかし明日の事も考えて程々にお願いしますね。二日酔いの薬は作りませんよ？ハドラーも・・・・もう飲んでますか・・・クロコダインさんはどうしますか？」
「俺も飲もう。」
「私も飲もう。―息子達―の門出を祝って。」
「バランは話が分かるな～。とことん飲むぞ!!」
「・・・・俺も一口は・・・」
「ロカ・・・舐めるだけですよ？」
「分かってるよアバン!!」
　ジャンクとロン・ベルクの音頭で野郎どもは盛り上がり、それを女性陣はしょうがないという顔で見守りつつ、ティファ達の方に寄って行く。
　まだお酒が飲めないティファとマァムはバーンとブラスと一緒に食後のお茶を楽しんでおり、ダイとポップは明日までは我慢すると言って、ラーハルトは飲まないながらもロカの隣に座って面倒見る気満々であり、キルとミストはいつもの如くバーンの後ろにいる。
「すまぬなティファ・・・・どうしても今宵其方達を祝いたかったのだ・・」
「大魔王、さっき謝って頂いた分で十分ですよ。」
「そうだよ、ちょっとやらかしちゃったけど、来てくれたのは嬉しいん

だよ。」
「今度はちゃんと目玉で教えてちょうだい。うんと美味しい物を作って待ってるから。」
子供達の優しさに癒されながら、バーンは初めて会うレイラとスティーヌにきちんと挨拶をし、場を騒がせたことも謝罪すれば
「大丈夫です。お忙しい中ポップを祝いに来てくださってありがとうございます。」
「そうですよ。お祝いは皆で楽しくするのがいいですよ。」
片やお城の大臣ぶっ飛ばして逐電した破天荒な夫を持つ妻と、片やハドラー大戦を夫と共に戦い抜いた女傑妻は、魔界の神様にもすぐに慣れて楽しくお茶をするのをバーンも少し気おされ気味になる・・・・なんとなく、ポップとマァムの芯の強さがどこから来たのか分かった気がしたがそれは兎も角、ブラスも最初の内はどうなる事かとハラハラとしたが、実に賑やかな結婚前夜に涙がこぼれそうになる。
あの小さかった子供が大きくなり、こんなに大勢の良き知己を得て明日結婚をする・・
「ダイや、ポップ君もマァムさんも幸せにおなり・・・」
「じいちゃん・・」
「ブラスさん・・」
「ブラスさん・・・・」
自分が言わずとも、きっとこの子達は幸せな道を行くのは分かっているが、それでもブラスは祈るように言わずにはいられなかった。
たった十数年しか生きてこなかった子供達が、あの大戦時にどれほどの苛烈なる道を歩かなければならなかったのかを思えば、どうしても言ってあげたかったのだ。
そのブラスの言葉の想いを、ダイ達はきちんと受け取り、ダイはすぐさまブラスに駆け寄りブラスを抱きしめる。
「俺はじいちゃんにも幸せになってほしい。―みんな―でずっとこうして笑って生きていくんだ。」
ブラスの想いに応えるダイの言葉を継ぐように、ポップとマァムも二人の側により言葉を重ねる。

「俺もだぜ！結婚したらメルルや姫さんも一緒にここでこうしてまたみんなで集まろうぜ！」
「ふふ、今度はきちんと知らせてちょうだいね。私達何時でも待ってるから。」
子供の成長はあっという間である
先人のその言葉の通り、ダイとポップとマァムは大人びた顔をしてブラスの想いに応えるのを、ティファと大人たちは微笑ましく見る。
始めはドタバタとするが、最後には温かくなるのがいつものお約束なのだと初見のロカ・ジャンク夫妻はばっちりと学び、次は驚かずに楽しもうとなったりと、楽しい夜が過ぎていく。
明日はいよいよ結婚式だと、ティファは幸せな笑みを浮かべて待ち侘びる。
早く明日になってほしい

もう嫌だ・・・・こんな世界、魔王軍に滅ぼされればいい
明日の決戦は親父も来るって言うけれど・・・・勝っても負けても別にいい・・
俺どうして勇者なんてものを目指したんだ？
こんな目に合うんだったらデルムリン島から出るんじゃなかった・・・・

勇者達の大結婚式：幸せなる結婚式・姫君達編

「儂らの姫様の花嫁姿じゃ!!」
「あぁ本当に美しくなられて・・・・お城や城下町をバダック様と一緒に駆け回っていたのが嘘みたいに・・」
「お転婆じゃった姫君様が・・」
パプニカ城下町は盛大なお祭り騒ぎになった。
晴れた大空の下、城のバルコニーから父王に連れられて花嫁姿を表したのだから無理も無い。
その騒ぎは、バーン大戦終結宣言の時よりも熱狂の渦が巻いていた。
幾度も言われているが、レオナは本当にお転婆姫であった・・・そうあろうとしていた。
城の中には自分にすり寄ろうとする気味の悪い大人が多く、聡明であったが故にレオナは本能的に邪心を感じ取って逃げていたのだ。
それをバダックは承知の上で外に行こうとするレオナ姫を―態と―追いかけまわしては逃げられたとぼやき、姫様はお転婆じゃとその聡明さを周りから隠してきた。
それというのもレオール王が亡き妻を思い続け後添いを貫わずに、跡取り王女となったレオナの聡明さが知られれば、レオール王を弑して聡明なる賢王女として神輿にしようとする馬鹿が出ないとも限らないからだ。
バダックはレオール王もレオナ王女も守る為に口煩い爺を演じてきたが、最早それは不要であり、この日のレオナ王女の姿に自然と涙が零れ出てレオナを驚かせた。
「どうしたのですバダック?」
花嫁姿に着替えている間、レオナはこれから会う人達はみんな笑顔で今日の事を祝ってくれるものだとばかり思っていたので驚いたのだ。
「姫様・・・・本当に・・・・ようございました・・・・」
王女の疑問に、バダックはその一言しか答えられなかった。

赤子の頃から見守り続け、王宮という伏魔殿の中で、そして大戦時にも様々な艱難辛苦にあって来た姫君が今日、好いた男と結婚をする。
それは政略結婚が当たり前の王族の中では本当に奇跡のような、それこそ物語にしか出てこないような事が今日この時に実現するのを、バダックを始め城中の者達が同じ思いであった。
レオナは身分を基準とした序列を大切にしながらも、下の者達を労わる優しい姫君であり慕う者が大勢いる。
その家臣一同が、バダックの後ろで同じように泣いている、嬉しくて、自分の子が結婚する時のような喜びが、彼らの胸中を占めて泣いている。
その涙に何かを察したレオナも自然と涙があふれる。
自分はこんなに大勢の人達に喜ばれる中幸せな結婚をするのだという思いがひしひしと胸を満たし
「ありがとう・・・・みんなありがとう・・・」
普段のあの快活で凛とした王女としてではなく、一人の少女としてお礼をする。
その姿を、少し離れたところから父達が見守っているのを感じながら。
レオール王も嬉しく思う。自分の娘の事をここまで慕って祝ってくれる彼等にそっと無言で頭を下げる程に。
そして、鐘の音共に三賢者のアポロとマリンがバルコニーの扉を開け、二人は静かに外に出た。
バルコニーには護衛としてレオナ王女を守る近衛騎士の団長をしているヒュンケルが銀の鞘を佩いた正装姿で待っていた。
ヒュンケルは今はレオナの護衛として王女近衛隊が設立されたのを機にその長をしている。その地位には無論実力であり、武だけではなく学もアバンとそして・・・どこからか聞きつけてかかっての師が強襲してきて徹底的に鍛えらえて実力でもぎ取ったもの。
そのヒュンケルは優しい微笑みをレオナに向け、異常がない事をレオール王に告げて二人をバルコニーの端まで先導する。

惜しむらくはスピカが熱を出してしまい、妻のエイミが直接ここに来られなかったことではあるが、目玉でこの光景を見られるのだからエイミもそう落ちこまない筈。
ならば妻の分まで姫君をお守りしそして祝う気でいる中、父娘は仲睦まじくバルコニーの端に立ち、さらなる歓呼を以て出迎えられたオナは優しい笑みで、レオールは力強い笑みでその歓声に手を振って応えるのを目玉がパプニカ王国中継する中、レオナは宣誓した。
「私は幸せです！国中の人達から祝われる中、愛する人と結婚できる事に感謝の念にたえません。
約束します！必ず――王太子・ダイ――と共に幸せになり、そして共にこの国の幸せとみんなの笑顔を守るものとなる事を!!!」
この国でのダイの身分はレオナと同じ王の跡継ぎとして王太子の地位を戴いている。
そのダイと共に幸せになりこのウニをよりよく導くという力強い言葉に、国が揺れるかと思う程の歓声と万雷の拍手が沸き起こる。
良き未来を、国中の者達が
おなじころテランでも同じような熱狂が渦巻いていた。
規模こそパプニカには及ばないが、熱量では決して負けてはいない。
メルルは占い師の祖母・ナバラの方が有名ではあるが、この三年でテラン王国に住むすべての人々の下をポップと共に自分の足で訪れ、どのような暮らしをしているのか困っている事はないかを丁寧に聞き、そして最後には必ず、良い国とはどういいう国だと思うかを聞いていた。
一介の民に取って聞かれる事のない事を聞かれて面喰い、中には自分達を揶揄っているのかと憤るものもいてけんもほろろに追い出されるがメルルもポップも怒ることなく、誠意をもって接するうちに相手も本気だと知れしめられて、少しづつ交流が生まれ、そして今日のこの祝いの熱狂を生み出すのに至った。
「メルル様！どうかお幸せに!!」
「この後ポップ様も御一緒ですね！その時にもう一度集まらせてくだ

さいね!!」
「お二人とフォルケン様と、テラン王国に竜の神の御加護がありますように!!!!」
たった・・・民は総員しても五十にも満たない国の筈なのに・・・・王宮の大臣や兵士たちを入れても数百イルカイ内科の国の筈なのに、この熱気はどうだろう。
まるで若りし頃の、人が大勢いた時のあの時のようだと、花嫁姿のメルルをエスコートをしながらフォルケンは泣きそうになった。
特にリュート村から駆け付けてきた者達は、ニーナを筆頭にして凄かった！
「メルルお姉ちゃん!!おめでとうね!!!ティファお姉ちゃんによろしく言ってね！」
「落ち着いたら―みんな―でまた遊びに来てください！僕らはいつでも大歓迎です!!」
大戦終結をの表舞台の立役者が勇者一行であるのならば、裏の立役者は絶対にリュート村の子供達だろうと全てを知る人々はそう思っている。
それは超竜軍団のあの三人の心をつかむところから始まり、最終決戦の時の勇者側の味方達の不和を取りのぞく一端を知らずにし、そして世界がつながったあの時、誰よりも早く死にゆく魔界を助けたいと声を上げた子等は、今日も元気一杯にメルルたちの結婚を祝福している。
ニーナが、カイが、ディアッカ達が親に連れられて祝いにすっ飛んできてくれたのだ。
文字通り国の全ての人達が駆け付けてくれたのをメルルは嬉しい想いで胸が詰まり、何も言えずに涙を流すのを誰も笑いもせずに優しい言葉がその場を満たしつくす。
そして二人の姫君がそれぞれの父達に連れられてデルムリン島に出立する時間となった。

勇者達の大結婚式・・・幸せなる結婚式・王子達編

花嫁様達が自国で大歓声を受けているその頃、デルムリン島にて花嫁を待つ花婿達は各国の王達とその随行員達とのあいさつがひとだんらくをしてへとへとになっていた・・・お式も挙げていないのに疲れるとはこれ如何に・・・・

「・・・・ベンガーナの王様に抱き着かれるってない・・・・」

「・・・・・リンガイアの王様俺の頭ぐしゃぐしゃにして笑いまっくてた・・・・」

「・・・・・・ロモス王様にいまだにティファちゃん呼びされるなんて・・・・・」

「・・・・・・何故誰も俺に晴れがましいとか言わないで誉めて来るばかりなのか理解不能だ・・」

子供三人と大人の半魔一人は精神的にとってもお疲れ気味となってしまったのを、知り合い御一同で慰めている。

別に誰かに意地悪を言われたわけではないのだが、空前絶後の祝い事に、各国の王達と随行員達は普段の威厳や礼儀作法を逸脱しても構わんとばかりに、某魔界の神様張りにはっちゃけたのをダイ・ポップ・ティファ・ラーハルトが諸に受けてしまったのだ。

ベンガーナのクルテマッカは、大戦時は少年であったダイに勇者としての力を魅せつけられて以来大ファンとなり、背は伸びたとはいえ今だにあどけなさを残すダイが結婚することに感無量となり、実の息子が結婚するかの如く大喜びをしてデルムリン島について早々にダイに出迎えらた時に思いっきり抱きしめてしまったのだ。

ダイも背が伸びているとはいえまだまだ発育途中であり、意外と背があるクルテマッカにスッポリとまではいかずとも腕の中に納まり面喰い、盛大に祝われて少しだけ疲れてしまった。

ポップ達も理由は同じであり、リンガイアのアーデルハイド王は騎士王としても有名であり、魔法使いにしては動ける方のポップであっても加減なく頭を撫でられて・・・かき回されて祝われた手体力を半分削られ、ティファは十五にもなっていまだにシナナ王にちゃん呼び

をされたのは些かショックであった。ダイやマァム達と違って全く成長しなかったからだにコンプレックスを持っているティファとしては、シナナ王に悪意が無くても精神にクリティカルアタックを食らった感じで落ち込んだ。

そしてラーハルトは、何故半魔の自分が主君の御子息やテラン王国の跡継ぎたちと合同で結婚式をすることに苦言を呈されず、寧ろ祝う言葉しかないのかに唖然としてしまった。

世界は変わり、穏やかな方に移ろいゆく時なのは分かるが、しかし厳然として身分差や、いまだに種族間の垣根がある筈で、誰か数名くらいは庶民が混じるとはといわれることを覚悟していただけに、反対に祝い事の嵐にびっくりである。

「・・・・大魔王バーンの肝いりにケチをつければ即座に滅せられる・・」

純粋に祝う者もいれば、そうでない者もいるのはどこの世界にも必ずいる・・・・いない方がおかしいがそれは兎も角、この度のデルムリン島での開催にあたり、バーンはきちんと各国にくぎを刺す親書を出している。

内容は、大戦時勇者達は結婚を合同ですることをパプニカ王とテラン王に了承を取り付けてあり、その後勇者一行の武闘家マァムと戦士ラーハルトも加わっている旨を予め知らしめ、自分もその三組の幸せを心の底から願っているという・・・・好々爺のようでいて言外に警告というか脅しが含まれた親書は、王達は平然と読んでいたが、多少は庶民と半魔がロイヤルウェディングに入ってくるのを反対していた者達の心胆を大いに寒からしめた!今日の出の勢いに乗っている魔界の神様に挑む馬鹿なぞこの世界にはおらず、バーン相手に喧嘩できるのは、あの冥竜王ヴェルザーしかおらず、関係者一同の口を噤ませるには十分・・・十分以上であったがそれは兎も角、祝われる事は良い事ではないかと、バランもブラスも鷹揚に笑って花婿達と愛娘を宥めている。

ちなみにマァムの方はレオナとメルルと同じ時に花嫁姿を披露したいという希望で、自分の家でロカとレイラと待機しているのでもみくちゃにはされなかった。

「・・・・お前の花嫁姿見られてよかったよ・・・」
待機している家の中で、奇麗な花嫁姿になってレイラと喜んでいる娘にソファーに座って見ているロカはぽつりと溢した。
もしかしたら、自分はマトリフとティファとノヴァと、そしてアバンが共同開発をした万能薬が無ければもうとっくに死んでいたかもしれない・・・もっと言えば、大戦がはじまった時にティファ自身が自分を診てくれもっと身体に合った薬を処方してくれなければ死なないまでもここに来られたかどうかも分からなかったのではないと思う。
ハドラー大戦の最終決戦の地、地底魔城において勇者アバンを魔王ハドラーの下に送り届ける為に、もっと言えば無傷では無理でも万全な状態で送り届けるべく数々の敵や罠をその身で引き受けた結果、勇者アバンの勝利で生き延びる事は出来たが自身の体は廃人同様になり、息をするのも辛くて・・・・・何度死んでしまった方が楽か分からずにレイラ達が家にいない時を見計らって声を押し殺して泣いたか知れない。
そんな中、ある時アバンとマトリフが家を訪れた。
世間話だけではなさそうな雰囲気を察したレイラがマァムを連れて外に出て少しして、もしかしたら自分の体を回復させられる薬ができるかもしれないという言葉に、自分は一も二も無く飛びついた。
既存の回復薬はカールから王女や元同僚から届けられたがあまり効かず、もう死を待つばかりかと思っていただけに、少しでも望みがあるのならばと被験者になる事を総座に選んだ。
「俺はマァムの花嫁姿を見たいんだ!!見てやりたいんだ!レイラと一緒に祝って・・・喜んでやりたいんだ・・・・」
いつ死んでもいいだろうと強がっていた仮面は剥がれ、恥も外聞もなく泣き叫びながら望んだ言葉を、二人は笑わずに頑張ろうと言ってくれて・・・・そして今日叶った事が嬉しかった。
ロカの小さな呟きのような言葉は、残念ながらキャイキャイとしている可愛い妻と娘の耳には届かなかったがロカはそれでもかまわなかった・・・・・むしろこっぱずかしいので届かない方がよかったり

する。
ロカも精神的に多少大人になっても、純な少年の不器用さが多分にあるのだった。
各国の王侯貴族達の挨拶も一通りこなしたダイ達も、式場となる聖堂の休憩の間で一休みとなった。
何となれば今日の主役は彼等であり、身分的に上だからと言って花婿達をいつまでも引きずり回すわけにはいかないとの配慮で休ませてもらっている。
部屋の中には当然ブラスを始めとした関係者御一同が通例通り詰めている。
ティファとミストだけは二次会のお料理の進行状況が気になり席を外している。すぐに戻ると言葉を残して。
ブラスもバランはもとより、マトリフもロン・ベルクも笑顔でダイ達を構いつけている。
あの幼かった少年達の巣立ちの時に立ち会えたのが嬉しいと笑い、飛び火するようにノヴァとティファの結婚はいつになるのかといった話にまで及んだ時にはダイが少し・・・ほんの少しだけヒヤリとする目つきをしたがクロコダインとチウが即座に鎮火させて事なきを得る中、普段はバーンの後ろいるのが定位置のキルも珍しくダイとポップに近寄った。
「あんなに小さかった君達が大きくなるのはあっという間だね～。」
言っていることが少々おじさん臭いがそれは兎も角、しみじみとしたキルの声音にダイとポップは面食らった。
キルと言えば確かにティファやチウを可愛がり女子達には優しいが、滅多に自分達には話しかけてこない・・・・・ティファを狙っている事もあってこちらが威嚇モードなのでそうなるのだが、今回はキルの方から話しかけてきたのに驚きである。
「はん！ちっこかった俺達は楽に勝てるって思っていたのかよ。」
ダイはキルに何と言えばいいのか分からず沈黙し、ポップはついいつものように憎まれ口をたたいてしまうのをキルは笑って受け流す。
「まさか、あの当時の君達に楽に勝てるなんて思った事は一度として

ありはしないよ。」
「・・・・それってティファがいたから？」
「違うよ勇者君、きっとお嬢ちゃんがいなくとも君達は強かったさ。現に最終決戦のあの時は、お嬢ちゃんが君達の側にいなくとも強くなって僕らに打ち勝ったじゃないか。」
「そりゃ・・・・あいつが手紙残してくれてたから・・・」
「ふふ、魔法使い君は謙虚だね。お嬢ちゃんって言う途轍もない精神的支柱を喪ったら、残された手紙があってもたち直れた保障なんてどこにもないだろうさ・・・・お嬢ちゃんはその辺分かってなかっただろうけどね～。」
　その言葉に、ティファ様の事を馬鹿にしているのかと常ならば食って掛かるラーハルトも、ティファ大好きっこのチウも言葉が出なかった。
　言っては何だがキルの言う通りで、ティファは手紙を残せばあの当時の兄達ならば大丈夫という物凄く甘い見込みをしていた・・・・自身がどれほど愛されているのかを全く自覚していなかったからこそあんな強硬手段に打って出たのだろうが、一歩間違えれば勇者達は立て直れず、魔王軍の圧勝で終わっていたかも知れなかったのだ。
　そんな世界はきっと、今の様に楽しい世界ではなく、魔界が生き残れてもどこか淡々とした日常を、少なくとも自分は送っていただろうとキルは思う。
　地上と天界が消えてしまっては、おそらくティファの魂を手元に残していたとしても永劫笑わないティファを、それでも手放せない虚しさだけを抱えて・・・・主と親友が悲願をかなえられたと喜んだとしてもだ。
　つくづく思う、自分達はこの光のような子等に負けてよかったのだと・・・・あの時勝ちたいと願った思いに嘘はなく、魔界の悲願を叶えたいという主と親友の願いの為に処理をつかむべく本気で戦いはしたが・・
「一度としてバーン様とミストと僕は君達を見縊ったことはないよ。少なくともテランでバラン君を破った時はミスト本気でお嬢ちゃん

だけを倒そうとしたり、 君達に勝つ為にハドラー君の肉体魔改造させて戦力アップさせたり、パレスでのトラップをきちんと殺傷能力極限設定したりしたしね。」
　にっこりと君達の事を認めて褒めているんだよと話すキルが正直言えば、ブラスとしてはダイ達を褒めてくれてた事は嬉しいがどう反応していいか分からず困ってしまい、ダイ達はもとよりチウとてもキルに対してドン引きであり・・・バランとハドラーには耳が痛かった。
　今でこそこうして長閑にいられるが・・・自分達から魔道を行っておいて突然裏切ったのだから・・・・図らずもキル同様に、和睦が結べてよかったと思ってしまう中、キルはティファやチウにするように、ダイとポップの頭を優しく撫でた。
「君達のような立派な戦士と戦えて光栄だったんだ。今度は立派なお婿様・王様になっておくれよ。」
　死神の自分が言えたことではないが、あの大戦で死んだ者達が浮かばれるほどに笑いの溢れる世界を作ってほしいと柔らかく笑うキルの手を、ダイとポップは跳ねのける事はせずに不思議な気持ちになる。
　大戦の頃はあんなに嫌って・・・バーンよりも倒すべき敵だと思っていたキルから称賛をされて祝われる事が嫌ではなくて・・・
　その光景を、バーン達が微笑ましげにする中扉が叩かれティファとミストが入って来た。
　デルムリン島に、花嫁達が来たという嬉しい知らせと共に

勇者達の大結婚式：結婚式・前編

この式は始まりからしてとんでもない式だと思っていたが・・・・まさか花嫁の到着の仕方までがここまでとんでもないとは思っていなかったとは、後の世の人々が勇者達の大結婚式とは如何なるものであったのかと当時式に参列した者が聞かれた者達はこう答えた。

確かに規模は凄い！島を魔界の神が拡張するとかありえない!!参列した者達は全員が王侯貴族であり、六大精霊王達や天界からも三神の使者が多数来たが一番はそこではない!!!

花嫁達は、父王達と共に竜に乗ってやってきたのだ!!!!

テラン王国のメルルは先代竜の騎士バランの配下で竜騎衆を名乗るガルダンディとボラホーンがスカイドラゴンに乗って気球に付けられる籠を両側から宙づりにして、メルルとテラン王・フォルケンを連れてきた。

ガルダンディは無論自分の愛竜たるルードに乗っており・・・・なぜかニーナも一緒に乗っている。

ガルダンディはその巨体を乗せられる、齢五百年を経た雄のスカイドラゴンを見つけて頼み込んで今回の花嫁行列（？）を成功させるに至った。

成功させることが出来たガルダンディは誇らしげにし、ボラホーンは重々しい顔つきでスカイドラゴンに浜辺に籠をゆっくりと下ろすように指示をしながら慎重に着陸をさせる。

今自分達が預かっているのはテラン王・フォルケンとその継嗣たるメルルではあるがそれだけではない。自分達も大切に思う仲間、ポップの大事な恋人であり家族になる者達である。

マンに一つも毛筋ほども傷がつかないようにボラホーンは細心の注意を払い、無論ガルダンディと後ろに共に乗っているニーナも同じ思いであり、無事に籠も竜達も浜辺に着陸できた時は歓声が上がった。

そして少し遅れてレオナとレオール王が同じく竜に乗ってやってきた時は・・・・メルル達のようには完成は上がらずに、誰もが唖然

呆然としてしまったのを、到着したレオナとレオール王はそれはそうなるだろうと頭を痛めながら竜の背から降りて浜辺に降り立つのを、予め知っていたガルダンディとボラホーンは苦笑してしながら付いてきたニーナを見てみれば、周りの大人たちと同じように唖然としていた。

普段何があっても動じずに、大半の大人相手でも怯まない娘っ子が見せた意外な顔に、ガルダンディとしては可愛いな～と思うがそれは兎も角、何故祝い事の規模の凄さにもう驚かないぞと構えていた列席者達がここまで驚いているかというと・・・・パプニカ王国に花嫁御料を迎えに行ったのが冥竜王ヴェルザーその人だったからだ・・・

遡る事子の結婚式が企画されて場所と内容と招待客達を絞り込んだ後は、やっと結婚する当人達に話が及んだ。

結婚衣装の方は花婿・花嫁共に自国や当人達が用意するのでそこは問題なくサクサクと話が終わった。

合同とするとは言えどもやはりそこにはその王家代々の物が受け継がれており、それを使うのが一番である。

ティアラやクラウンもあるだろうし・・・・何かアクセサリーは新たに要らないかという某魔界の神様の御言葉は必死にすげなく断り！すべて自前でやった。

そして花嫁達はまず自国で花嫁衣裳のお披露目と挨拶をするというのも纏まった後は、さてデルムリン島までの道行きをどうしようかと相成った。

そこは自分の出番ではと、空間を操りいった場所同士であればどこでも空間を繋げて瞬時にお連れできますよを標榜に掲げてそうな某死神が挙手したが、花嫁行列をした方がよいのではないかと言われた。

確かに安全面であればそれが一番なのは誰もが分かる。言っては何だがレオール王はいまだに病は完治しておらず健康であるとはいい難い。そしてフォルケン王もまた若い頃から体は弱くそして何よりも高齢である。

快速船の衝撃に二人が絶えらるか甚だ疑問でありリスクが高すぎ

る。
　しかし両国の花嫁達を行列を仕立てて連れ行くには船しかなく、とは言え通常の船ではパプニカからはどう頑張って即日に付けるはずもなくさてどうしようと思ったところにアバン王がにっこりと良い笑顔で言い切った。
「竜のお力を借りてみませんか。」
　それは結婚式会場をデルムリン島にするべく拡張すると言ったバーンの言葉と同じく、発言した本人以外は何言っちゃってるんだこいつという胡乱な目を向けられても言ったアバンはどこ吹く風で、更にいい笑顔で提案をした。
　曰くこちらには竜のスペシャリストたる先代の竜の騎士とその配下方達がいるので彼らの助力を請い、両国の姫君と父王を気球に乗る籠に乗って頂きその籠を竜二頭に吊り上げさせてお連れしてはどうかと言うものであった。
　無論籠の方は気球で安全が保障されているのでその日用に新品を用意し、どう吊り上げれば安全であり、ロープの耐久をどうするかの実験をする日数は幸い沢山あるのでやってみようと説明を受けた一同は賛同した。
　何となれば式場決めでもっと飛んでも理論を出された後では、花嫁御料が竜で来るくらい可愛いものではないかと結婚式企画者一同の感覚がマヒしていたからこそすんなり通ったという話もあるが・・・・その提案をしたアバンは提案した自分をボコって埋めたくなる事態が発生したのは予想外であった。
　案はいい。籠に結婚式らしく花やリボンで装飾されたデザインを見た当の花嫁達が嬉しそうにしていたのだから。
　吊り方の研究もうまくいった。当日に乗る花嫁一行よりも五十キロ重くした物を乗せて吊り上げ、傾かずに安定して運ぶにはどこにロープをどこに固定させ竜達はどの角度で吊り上げればよいか、ロープの長さをどうするかを徹底的に研究し尽くした。
　監修したのはアバンとそして竜騎衆のガルダンディとボラホーンとそしてなんとバランであった！

「私の息子の花嫁になってくれる姫君とその父王が乗るのだ。私が手伝わんで何とする。」
とか、何とも超絶カッコいいバランパパであった。
何度も何度も試行錯誤が繰り返されるのをアバンも共にいた時は・・・・お前カール王国の事はどうしたと関係者御一同は突っ込みたくなった。
ちなみに細かいことは何でもいいだろうというガルダンディも思う程であったが誰も突っ込めなかった。
何故ならばアバンは本気であったからだ。
可愛い弟子のヒュンケルの時は自分はあまり関われずにサクッと結婚式が行われてしまった・・・・それはそれでヒュンケルが幸せそうだったので自分も嬉しい・・・しかしだ!!可愛い弟子達の面倒をもっと自分で見てあげたい！何ならカールでやってほしい所であったが大義名分も無いので泣く泣く諦めたのだ!!
しかし自分にできる事があるのであれば何でもやってあげたい！ポップ・マァム・ダイとそして妻のフローラ経由ではあるが最後の自分の弟子となったレオナの結婚式の大事な場面を必ず成功させるのだとアバンが燃えていたので誰も何にも言わなかった・・・・親馬鹿ならぬ師匠馬鹿とはこういう者かと見てしまった者達は黙って好きにさせたのだ。
ちなみにアバンのそういった面をよっく知っているフローラも好きにさせる事にして、とうとう籠吊に成功させた時にそれは起きた。
「俺様が小僧の花嫁をデルムリン島に連れていくぞ。」
どこで聞きつけたかは知らないが、冥竜王ヴェルザーが割って入ってきてしまったからさぁ大変！それを更に聞きつけた大魔王バーンが本気で切れた!!
「大概にせよヴェルザー!!!これは遊びではないのだぞ!!!!」
「そんなことは知っておるはバーンの若造が!!!」
・・・魔界の荒れ地でガチバトルに発展してしまう程に本気でバーンが切れたのだ。
天・地・魔界の三界全ての慶事に何を言っているのだこやつはと切

れるバーンに、ヴェルザーだとて本気であった。
ヴェルザーが愛しているのはなにもティファだけではなく同じくダイの事も大切なのだ。
それは自分という眷属以外に忌み嫌われている自分を笑って迎え入れてくれるあの兄妹が大切だ。
それはかつて自分が愛したコマドリの、クックとロビンに似ているからだけでは無い想いは本気であり、其の想いはバーンに届いた・・・三日三晩ガチバトルをした末に渋々としてではあったがバーンとしては一言釘を刺さずにはいられなかった。
「ダイの為を思うのであればダイとレオナ姫とその父王の許可をとれ。話はそれからだ!!!」
「ふん!花婿の父でもあるまいに!!お前がしゃしゃり出ること自体がおかしいのだ!!!
図に乗るなよバーンの若造が!!!」
・・・・ヴェルザーにしてはありえないど正論を言われてしまったバーンはその言葉にフリーズを起こしたのをヴェルザーはニヤリと笑って常日頃の留飲を下げてからダイ達の許可をとりに行った。
ヴェルザーとしても下心が全くなかったわけではない。近頃はバーンの若造がお気に入りの小僧の結婚式を仕切るような真似をしていたのが自分には面白くなく、自分も絡んでやると虎視眈々と機を狙い、式の準備の進捗状況を眷属達に探りを入れさせてそして得た機会をきっちりとものにするべくダイの下へと直行して、ダイ達は実験の過程を知らないのでそういうアイディアもあるのかと何も知らずにいい笑顔で承諾したのをアバンを撃沈させた・・・・ヴェルザー絡んで大魔王は何と言ってくるかと胃が痛くなったのだ。
しかしそれは杞憂でありバーンからの抗議は来なかった。もうヴェルザーのど正論に打ちのめされてしまったのだからそれどころではなかった・・・・
そして花嫁の自国お披露目の後に、それぞれが花嫁御料を迎えに待ち合わせの場所に降り立った。
テランは王城は森に囲まれているがその先に草原が広がっている

のでそこにガルダンディとボラホーンが迎えに行き何とニーナもお供すると言ってきかず、幼馴染にも近いニーナが一緒だとメルル自身がたっての希望としてニーナもお供することにあいなった。
　二人が来るというのでリュート村の人々が前列に来させてもらい、この日の為に作った弾幕が立ち上った
「メルルさん!!ポップさんとのご結婚おめでとうございます!!!!」
　テラン国の継嗣たるメルルに様ではなく、一人のテラン国民の少女に贈られた言葉にメルルは涙が零しながら笑ってガルダンディとボラホーンの用意してくれた籠にフォルケン王と共に乗り込み、そして満面の笑みでデルムリン島に向かう中、レオナとレオール王は巨体竜の出迎えに苦笑してしまった。
　予め了承をしたとは言えども、地上界でも分権の中に存在し知る人ぞ知る悪名高い冥竜王ヴェルザーが来たのだから無理もないが、本人は大真面目であった。
「小僧・・・竜の騎士にして竜の勇者たるダイの花嫁を迎えに来るにのに、我以上に相応しい者はいなかろう。」
　・・・・たしかに魔界の勢力図はバーン一色ではあるが種族でこと竜種族間の頂点はいまだにヴェルザーが君臨をしている。ヴェルザーにその気がなくともそうなっているので常日頃はその辺の事はうっちゃっているのに都合のいい時だけそれを引っ張ってくるのはどうなのだというどこぞの若造の文句は完全無視して意気揚々とパプニカ王国に乗り込んだ。
　前回はティファが目覚めたのが嬉しすぎて、パプニカ王城に突撃かましてしまったが今回はきちんとティファに身だしなみの手伝いをしてもらってゆっくりと王城前の広場に威厳たっぷりと降りたった。
　艶やかな羽を広げて悠然と降りる黒竜の姿に人々は畏怖し、自然と膝をついてしまう者も出る中で厳かにレオナとレオール王に、自分の背に取り付けさせた蔵に乗るようにとその身をかがめて見せた。
　何となればダイの花嫁であり、であれば当然気立ての良い娘だろうと思いそして時折デルムリン島に来るレオナを観察してやはり自分の見立ては間違っていなかったとヴェルザーは満足したので身をか

がめて見せるくらい何とも思わなかったが、この光景をバーンが見たら目を剥いていただろう。
あの高慢で俺様なヴェルザーが何をしているのだと・・・ちなみにヴェルザーの眷属であれば御屋形様は情に厚いなと感涙に咽び泣いているだろうがそれは兎も角、鞍の前にはレオール王がヴェルザーにお礼を言いながら乗り、レオナはヒュンケルが抱き上げ鞍に横座りなるように乗せて、自身もラーハルトが用意してくれたワイバーンに乗り込みヴェルザーと共に並走して飛べるように用意をする。
神話のような光景だった。黒竜が白い花嫁を守って父王と共に勇者の下に嫁いでいくのに民衆は一層熱気に包まれ大歓声の下、花嫁御料は一路デルムリン島に飛び立った。
両国の空路は当然各国の魔法使いの中でも選りすぐりの者達がトベルーラで護衛につき、ついでに目玉でその様子を全世界に中継し、魔界からも竜部隊を出して護衛についている。この行列を乱さんとするものは灰にしてやるとばかり護衛達は燃えている。
何となれば捕虜となってバーンの下にいたティファの事を知っている魔族の多い事この上なく、彼等はティファを慕っている。
その慕っているティファが大切にしているお仲間一同の幸せの道筋を邪魔する輩なぞ生存していていいわけがない！
「いいかお前達！もしも警告を無視して近づくものあらば有無を言わさずに消し飛ばせ！もしも間違いであっても構わん!!責任はとる!!!」
この号令の下護衛達は燃えており、その姿に地上の人々は魔界の人々もこの結婚を共に喜んでいると親近感がさらに上がり、魔界・地上界の仲をもっと良くしようというこの結婚の目的の一つが自然と達成された瞬間であった。
そしてその甲斐あってか護衛やそのほかの要因が怖いのかそれは分からないが両国の花嫁達は何事もなくデルムリン島の砂浜に降りたった。
いよいよ待ちに待った結婚式の始まりを喜んで

勇者達の大結婚式：結婚式・中編

浜辺で花嫁達を迎え入れた花婿達か、あるいは花婿達から出迎えを受けた花嫁達がどちらがより惚れ直しただろうか？

多分両方だと、浜辺でお互いを見惚れている新婚さん未満の兄達を見てティファは苦笑しながら胸の中で一人心地る。

自分とミストは一旦は二次会場となるバーンパレスにミストのリリルーラで料理の進捗を見に行って、帰りはティファはガルーダに、ミストはトベルーラでデルムリン島に空路を通って戻って来た。

予定ではそろそろ花嫁御料たちが護衛を引き連れて全世界に向けての花嫁行列をなしてデルムリン島付近に来ている頃合いであり、出迎えがてら挨拶できるかなとティファが読めばドンピシャで行き会った。

しかしそれは遠目から見るので終わらせて、一路デルムリン島に急いだ。

奇麗な花嫁達を出迎えるのは自分ではなく花婿達にこそ相応しいだろうと思いなおして。

そしてまずはマァムの方に声をかけ、レオナ姫達が下りると同時にミストにリリルーラで合流する手はずを説明し、そして兄達に知らせれば血相変えてすっ飛んでいったのにはティファも一同も驚いた。なにせあの真面目なラーハルトが、ダイとポップと同じ形相ですっ飛んでいったのだから無理もない。

付き合いの長いはずのバランもガルダンディとボラホーンも驚いたが、次第にくすくすと笑うティファの声に、周りも笑ってゆっくりとすっ飛んでいった花婿達の後を追う。

何となればダイもポップもそしてラーハルトも、恋人達の花嫁姿を見るのをずっと我慢して待っていたのだから。

そして浜辺で出会った三組の花嫁・花婿達は固まった。

まずは男性陣の心境は・・・・今すぐにどこかに攫って食べてしまいたい!!

レオナの流れるようなラインのウエディングドレス、マァムのマー

メイドラインのウエディングドレス、メルルのプリンセスラインのウエディングドレスが、それぞれの美しさを極限にまで引き立てているではないか!!
そんな野郎どもの恐ろしさを知らない乙女達は、デザインこそそれぞれ違うが普段は着る事の無い白を基調としたタキシード姿に見惚れている。
ダイもポップもラーハルトも体格は良く、派手に飾らないシンプルなデザインで男達の肉体的な魅力を最大限に引き出しているではないか!!
お互いに何と言って近寄ろうか分からないのをしびれを切らした魔界の神様が！死神に命じた。
「キルよ、それぞれの花嫁を花婿の腕の中に落とせ。」
・・・・命じたほうも命じたほうだが・・・・御意にと言って速攻実行したキルもキルである!!
一瞬で地面に空間を開けて三人の花嫁を花婿達の腕の中に入れれば・・・・抗議の声どころか内心で物凄く感謝していたりする。
ありがとう疫病神！お前も偶には役に立つと・・・・・キルが知れば流石に怒る事を思われているとも知らない死神は、優しい眼差しで三組の新郎新婦を見守っているのであった・・
そしていよいよ式場に向かう時刻となった。
その合図として護衛として来た竜部隊が花びらを降らして祝福の声を上げ、式の時間を継げたのを合図にダイ達新郎は名残惜しげにしながら花嫁達を一旦放し、先に聖堂の間に向かった。父達に連れられた花嫁達を再び待つために。
浜辺から聖堂の間までがばヴァージンロードと定められたから。
それぞれの父達は、今しがた見た娘達の姿に胸が熱くなりながら娘達の手を取りエスコートする。
三人の父は・・・言っては何だが揃って体が弱いのでゆっくりと進むのを、誰も馬鹿にはせずに見守りながらダイ達の後を追って聖堂の間に入っていった。
まだかまだかとダイがそわつくのを、横にいるポップが肘でつつい

て宥めているのを参列者一同は微笑ましげに見つめる。
ダイは今この世界で圧倒的な強さを有しており、勝てるのは魔界の神しかいないが誰も畏怖の目を向けていない。
それはきっとこうした少年らしさを喪わず、いつでも明るく笑って周りを和やかにしてくれるダイの人柄によるところであるのかもしれない。
それはポップにもラーハルトにも当て嵌まり、少なくとも彼らを直接知る者達は彼等を温かく見守っている。
そしてとうとう花嫁達が聖堂の間の扉をくぐり、そして父達は娘を花婿達の手に委ねた。
それぞれが打ち合わせた様に無言で頭を下げるのを、ダイ達も同じように頭を下げて応える。
大切に育てられた愛娘たちを幸せにしてほしいと、必ず幸せにすると声なき誓いを交わし合って。
「ここに集いし新郎・新婦達よ、汝らはこの結婚を是とするか。」
神父の言葉にダイ達は力強くうなずき、結婚の誓いに移る。
「竜の騎士バラン、故アルキード国王女ソアラが息子ディーノよ、汝はここにいるパプニカ王国王女レオナを終生愛することを誓うか？
パプニカ王国レオール王、今は亡き―アイリ―の娘レオナよ、汝はここにいる竜の騎士バラン故アルキード国王女ソアラが息子ディーノを終生愛することを誓うか？」
「誓います!!」
まずはダイ達から始まった。
ダイの母ソアラの立場は各国の協議の結果公式の場で認められることとなった。そしてダイの名前も正式にディーノとし、私的な場や目上の者達がダイと呼ぶことになったのだ。
その最初の公式の場を、ダイは堂々と母の名と自分の名前を受け止めレオナを愛し抜くと誓いあげるのレオナは涙を流し、神父の誓い言葉を涙声で応え、そしてポップ達の番に回る。
「武器屋ジャンクとスティーヌの息子ポップよ、汝はここにいるテラン国王女メルルを終生愛し抜く事を誓うか？

テラン国フォルケン王の娘にして占い師ナバラの孫娘メルルよ、汝は武器屋ジャンクとスティーヌの息子ポップを終生愛し抜く事を誓うか？」
「はい！誓います!!」
ポップの力強い言葉に、メルルもまた胸を熱くして震える声で新婦の言葉に応えそしてラーハルト達の番。
「魔族―ソル―、人の子―ローズ―の息子にして、竜の騎士バランの息子ラーハルトよ。」
神父の読み上げたラーハルトの身分に聖堂の間はどよめきが奔った。
改めて魔族の息子と言われたことにではなく！バランの息子とも言われたことに対して。
そしてラーハルトを見れば・・・ラーハルトもまた驚愕の面持ちで主君バランを信じられない目を向けていたのを、バランは力強い頷きを以て応えた。
ラーハルトが人から迫害されていた少年期にラーハルトを広い手元で育てたバランとしては、今日この門出にラーハルトを祝福するべく、予めダイとそしてティファの了承の下ラーハルトを自分の息子として世に送り出すことが出来たのを、バランは二人の最愛の子等に感謝をした。
その半生を迫害と理不尽と暴力に彩られてしまった子のこれから行く道が安らかで幸せなる道になるのを祈るように、それはバランを両脇から守るように立っているガルダンディとボラホーンもまた優しくも力強い笑みを向けられて・・・・その想いはラーハルトに確かに届いた。
ラーハルトは様々な思いが胸に渦巻き、涙を止めることが出来なかった。
死にゆく母の手を最後まで握りしめ、人から迫害をされバランに拾われたとてすぐに心休まる筈も無く憎しみが渦巻いた果てに自分は・・・
「汝はここにいる戦士ロカ、僧侶レイラの娘マァムを、終生愛すること

を誓うか？
戦士ロカ、僧侶レイラの娘マァムよ、汝はここにいる魔族―ソル―、人の子―ローズ―の息子にして、竜の騎士バランの息子ラーハルトを終生愛することを誓うか？」
続く神父の言葉に
「ち・・・かいます・・・」
震える声で応えるラーハルトをマァムはそっと背中を撫でて神父の言葉に応えた。
「誓います。」
その声は決して大きくはなく、しかし慈愛に満ち溢れた声に周囲は沸き立った。
三組の花婿達は奇しくも真に繋がった瞬間であった。
共に同じ時に愛する者達を守る事を誓いあげただけではなく、ダイとティファはもとよりポップもまたその身にバランの血を宿す―竜の三兄妹―に新たな兄を得た瞬間ともいえる。
それは列席しているノヴァも、ティファの竜の血を宿しているの人々には知られてはいないがティファと共に常にある彼もまたー竜の家族ーの一人と看做されら事となり、こののち活躍する彼等の時代をこう呼び称される礎となった
聖なる竜達の時代と
それは聖母竜、マザードラゴンが平和を願いながらも闘う戦士を生み出し、我が子竜の騎士達を死地に追いやった果てに辿り着いた時代であると感じたテランの人々から発せられる事になるその言葉は、やがて野火の如く世界中に広まりを見せるのは少し先の話だが、幸せなる結婚式は新たなる時代の幕開けともなった。
惜しみない万雷の拍手と歓声の中にて

勇者達の大結婚式：結婚式・後篇

三組の誓いの言葉が終わった後は、神父は誓いの言葉の後の大切な儀式を勧める事はしなかった。
花婿の一人ラーハルトが泣き止み落ち着くのを待っているから。
今ラーハルトの胸には様々な思いが渦巻いている。
辛く悲しかった事、人を憎んだ事、そして・・・・自分は幸せなのだという思いが胸も思いも熱くしてどうしても涙を止める事が出来ないでいるのを、参列者一同文句を言う者はおらず優しく見守り、ダイとポップはラーハルトの背中を優しく撫で始める。
自分とポップとティファは兄妹であり、新しく加わった―長兄―を優しく包み込むように。
その優しさがなお一層ラーハルトに涙を流させている時、―其れ―は起こった。
いきなり聖堂の間の天井から、何の気配も前触れもなく声が響いたのだ。

「ああ！式はまだ終わっていなかった・・・・我等は間に合ったと言えるか？」
「終わったなんて寂しい事言わないでね!!これでも僕ら必死に頑張って来たんだから！」
「ふふ、光のも闇のも落ち着け。見やれ、花嫁達の―ヴェール―はまだ被られたまま。誓いの言葉は分からぬが、最後の最後は来れたとみる。」
「水のはもっとしゃっきり喋れんのかい！言い方が回りくどいぞ。」
「木の言う通り!!俺の様にドカンとした物言いで、間に合ったの一言でいいんだよ。」
「・・・・土のがさつすぎるだけだ・・・・」
「んだと！火の!!やろって・・・・・・」
聖堂の間の天井に現れしは、六大精霊王その人達であった!!・・・・危うく警戒をマックスにした死神・影・ガルダンディとボラホーン達

は襲い掛かりそうになった・・
　今日の結婚式には絶対に参加すると言われていたがなかなか来ずに、何かどうしても外せない用事があるのだろうか、仕方がないから始めようと式は始まったのだがどうやら何かをしていて遅くなってしまったらしい。
　そしてその遅くなってしまった理由は直ぐに光の精霊王の説明がなされた。
「遅れてすまなかった子等よ。此度の式に出たいと申し出たは此方であったというに。」
　光の精霊王は三神の天神よりも厳格だとティファは思っていただけに、来れないのであれば何故何の連絡も無かったのか不思議に思っており、周りからも精霊王達から何か知らせはないのかと聞かれてティファも分からないと困惑していたが、光の精霊王の次の言葉で合点がいった。
「実は天界と地上界の境は未だに自由に行き来は出来ないでいる。理由は我等の住む場所は十万年前の出来事で結界で覆っていたからだ。その結界は今少しずつ解除しているところなのだ。」
　長い・・・それこそ人の身どころか魔族達にとっても神話の時代ともいえる長い時に渡って張られていた結界は、いきなり解除しようとすれば大惨事になるという。
　長い間結界を維持するために注ぎ込み続けられていた膨大なえねるーを一気に解除したとしたら・・・この―時空―そのものが壊れてしまうのだが精霊王達は優しい言葉に置き換えた。
「この世界そのものが崩壊してしまうから、溜まりに溜まってしまったエネルギーを少しずつ世界の循環エネルギーに変えているんだよ。」
　そうすることで安全に結界の解除に移行でき、今は大勢は無理でも数人ずつであれば天界から天族の者達が出入りできるのだという説明に、天界は本当にこの世界の為に頑張ってくれているのだと聞いていた者達がジンとする中・・・・はなでわらったものがいた・・
「ふん！馬鹿馬鹿しい!!それこそお前達の責任だろうが!!!なにを自分

達は頑張ってますと言い募っているんだか。やって当然の事を長ったらしく言いおって・・」
「こら!!駄目だよヴェール!!!」
　天界にいまだに恨み骨髄なヴェルザーの悪態にティファが焦るが今回はヴェルザーの口は閉じなかった。
「そもそも今回お前達が来る一件は三年前から決まっていたんだろう！それが遅れるとはどういう事だ!?小僧達を侮って適当に来たんだったっら帰れお前達!!」
　それは天界の者達に会いたくないという私怨も無くはないが、お気に入りのダイの結婚式に遅れたのが癪に障るのだが・・・・
「すまないとは本当に思う。しかし今回は・・・」
「ごめんねヴェルザー・・・・どうしても僕達が皆にお祝いを言ってあげたかったんだよ・・・」
「・・・・その声まさか・・・」
「人神様!!???」
　前回バーンをへこませたようなど正論を言ったヴェルザーに謝罪しようとした光の精霊王の言葉を遮ったのは
「すまぬ子等よ。我等の言葉を通してもらうべく、精霊王達に一年も前から無理を言って頑張ってもらったのだ。」
「・・・最初に取り決めた通り・・・使者を送るべきであったか・・・」
「・・・・竜神様・・・天神様・・・」
　ティファにとっては長い年月馴染んだ声に、そして他の者達も大戦の終結時に聞いた・・忘れられない声は、人の神・天の神・竜魔の神、三神の声であった。
　三神はずっと・・・ずっと世界中の人とお話をしたかった。跡継ぎを定めて権限を委譲しないと地上界に降りる事は叶わないがせめて声を届けるだけでもしたかったが出来ないでいた。
　それは天界から数名の者が出入出来るほどになったとしても、三神達は声にだけでも力が備わっているゆえに話すことだけであっても無理だったのだ。
　そもそもティファがデルムリン島を出る寸前まで話が出来たのはデル

ムリン島に出現をさせた特殊なダンジョンを通じてであり、それ以降は維持していたダンジョンをたたんで他の事にエネルギーを回したので、ティファとしても実に久しぶりにに三神達と話が出来る大喜びをしてテンションマックス化した！
「天神様！人の神様！竜神様!!!お元気でしたか!?お変わりないですか？困ってる事ありま・・・もが・・」
「・・・・ティファ・・・・周りを見ろ・・・」
「・・・・・あ・・」
　ティファのたかが外れて話が進まないとハドラーが溜息をつきながらティファの背後に回って言葉をポンポンと飛び出すとんでもない娘の口を片手で塞いで注意を促すのを、精霊王達と三神達の不意のお出ましに固まっていた周りが苦笑しながら動き出す。
　バーンやその側近・ヴェルザー以外の参列者はあのアバンやマトリフをしても驚く事であるが、そこは無自覚シリアスブレイカーティファのやらかしで凍った場が砕けたのは良いのだがとため息をつくハドラーはきっと悪くないがそれは兎も角、おかげで三神達も話しやすくなれたのでお祝いを述べた。
「おめでとう若き子等よ。君達の結婚を僕達にもお祝いをさせて欲しい。」
「我等は知っての通り、一人一人に加護や祝福を与える事は出来ないが・・・」
「せめて其方達の行く道の平穏を祈る事を許してほしい。」
「「幸せになっておくれ、若き子等よ。」」
　それは荘厳とは程遠い穏やかな声で、温かさに溢れた声であった。
　自分達の行く末を案じ、心の底から幸せを望んでくれると分かるその声に誰もが心打たれずにはいられなかった。
　三神達は先代の神達の負債を背負わされた事を誰もが知るところであり、今も膨大な結界のエネルギーが暴走しないように日夜腐心しているのもバーンや地上界の王達には伝えられているだけに、そんな大変中勇者達の結婚式を寿いでくれる真心には・・・・さしものヴェルザーも文句が言えなかった。

そしてさらに驚いたのは
「世界中の子等も聞いてほしい。今日の様に僕らは―直接―慶事に声をかけてあげられないけれどもいつでも見守っている事を知ってほしい。」
「そして其方等の行く道が幸せであることを切に願う。」
「其方達の行く道が幸多き道であらん事。」
三神達の声が大戦の最終戦のあの時の様に―世界中―に響き渡っている。これこそが精霊王達が遅れた理由である。
最終決戦のあの時三神達の声が世界中に届く事が出来たのは、バーンが画策した魔の六芒星に黒の核晶をティファ達が乗っ取り、その膨大なエネルギーを使って世界中を繋いだのを、今回は精霊王達が解体中の結界エネルギーを同じ仕組みの魔法陣を作って可能にしたのだ。
あの時は三神達の声を届けるだけではなく、魔界・地上界・天界に生きとし生ける全ての者達の意識を・視覚を全て繋げるという奇跡にも似た術法を使ったが、今回は単純に声のみを届けるに済んだので一年という期間で済めたと精霊王達はほっとしたのだが・・・少し遅刻してしまったがそれでも彼等は満足であった。
三神から寿がれた者達の顔は喜色満面で実にいい笑顔を見ることが出来たのだから。
きっと・・・世界も同じような笑顔が溢れているのだろうと、精霊王達が祈る中、とうとう神父が最後の儀式の宣言を発した。
「誓いの言葉は終わり―様々な方々から―の寿ぎを受け、この結婚を証人とします。
新郎・新婦は真の愛を交わすべく誓いの口付けを。」
この物凄い事態にも動じずに場を見定め空気を読みつくし進行している神父の読経には恐れ入ると一同思ったが、それ以上にダイ達の最後の仕上げに注目が行く!
クロコダイン達の時の様に時間がかかるかと思った。
そこは矢張り経験の少ない若人等を見守るぞと!参列者達は意気込んだのだが・・・・いつの間にかラーハルトの涙は止まってマァムを自分の方に向かせており、ダイとポップもそれぞれの花嫁を同じよ

うに自分の方に向かせていた。
ダイ・ポップ・ラーハルトも、いま世界の者達が感じているように神々からの言葉に嬉しく思ったがそれはそれ！ようやく・・・
「レオナ・・・」
「・・・・ダイ君・・・」
「メルル・・」
「ポップさん・・・」
「マァム・・・・」
「ラーハルト・・・・」
花婿達は花嫁のヴェールに手をかけながら呼びかけ、花嫁達はそっとそれに応える。
自分達もまたこの時を待っていたのだと
そして花嫁達のヴェールは優しく取り払われ、そっと口付けが交わされた。
互いの愛情を、これまでの喜びも悲しみも、これからは同じ道を共に歩いていくのだという想いを胸に抱きながら
その瞬間、聖堂を揺るがす程の歓声が起こり、そして世界中からも歓声が沸き起こった。
ダイ達の結婚を祝うべく、三神達の寿ぎを喜んで、誰もが幸せの未来を行ける様にとエールを贈るべく世界中の者達が喉も裂けよと祝いの声を上げたのだった。

「あ～、喜んでもらえたね」
「こりゃ！ほっとしとらんですぐに結界の隙間を閉ざさぬか!!」
「左様、我らの力はいまだに強く、時空の守りすらも揺らがせてしまうのだぞ。」
人神が無邪気に喜ぶのを竜魔神と天神が、用が終わったので直ぐに自分達の力の制限をして、術法を消し去り天界の結界を元に戻す。
この世界を守る為に、今しばし天界に篭らねばならないと気落ちしながら

・・・もう・・・いい・・
「ふぇ？」
「どうしたティファ？」
「ん、今ね・・」
喜びの歓声の中何か悲しみと絶望の声音が聞こえた気がしたティファが辺りを見回すのを、ティファから手を離してもそばにいたハドラーが何事かと聞いた。
この慶事の中、あんな声が聞こえるはずはないかとティファは空耳でも聞いたかと首を振ってハドラーに答えた。

「何でもないですハドラー。」
きっと気のせいだ、みんなが幸せで嬉しい

小石の投げられし世界へ
小石の波紋：プロローグ・前編

あ～忙しい忙しい!!お料理出すのに・・・・・忙しくしたかった。
ども・・・本日の二次会のお料理番を頸にされたティファです・・・・
酷いんですよ！魔王軍の例の双子のお料理長たちが!!私の事を厨房からたたき出したんですよ!?
それも一緒にいたミストともどもに!!
「あの男の子達と」
「女の子達の!!」
「お祝いをすることを第一として来なさい!!」
・・・・真っ当な言い分すぎて唖然呆然とした私とミストはすごすごと二次会の会場に向かいましたとも・・・お料理で全員をもてなしたかったのにこんちく・・・
「ほらお嬢ちゃん動かないの。サッシュベルト付けるのもう少しで終わるから。後は髪もサッシュベルトと同じ共揃いの布で作ったリボンで結って、首にチョーカー付けたら終わるからもう少し大人しくしててね。」
「みぃ～・・・いつもすみませんキル・・」
「いいのいいの、難しい箇所は僕がするから、お嬢ちゃんはどんどん可愛いドレス着てね～。」
少しばかり鬱々としているティファを、キルがもう少しで着付けが終わるからと宥めている。
ミストと共に厨房追い出された私達をキルが迎えに来てくれた。もっと言えば私のお洋服チェンジの為に。
結婚式と披露宴の時とは違うのをって・・・花嫁さんのお色直しでもないしそっちに着替えると言ってもキルはいいからいいからと新しいドレスを渡してくる。
ちなみに私の普段着は兎も角、お洒落着やこういった時のドレスは全部キル製作であったりする。

曰く給金貰っていても一度も使った事は本当になく、お金を死蔵するよりも私のドレスを作った方が良いだろうとか・・・わけわかんない理由で作っているらしいのです。それに近頃は―死神案件―ないとかで時間が出来ているので作ってくれているようなので、お礼はキルにも美味しいごはんで返してる。
ここ半年でキルの生命化の速度は速まって、近頃はミスト同様食事をして私と周りを驚かせたのは兎も角、私はお料理をキルはドレスで互いに贈りっこしているのだ。
ドレスの最初はまず自分で頑張って、最後の仕上げのリボンやサッシュベルトやアクセサリーは相変わらずキルに付けてもらって・・・
「・・・・・お姫様みたい・・」
「うん、取っても似合うよお嬢ちゃん♪」
色は水色が基調でプリンセスラインのドレス。体全体と胸元の鎖骨までは同じシルクで作られたストレートビスチェで、そこから上は同じ色のシルク糸で作られた目の細かい刺繍生地レースを首全体と腕は七分まであり、ドレス全体までもがそのレースに覆わている。
そのレースは花があしらってありとても繊細で・・・・虜になってしまったくらいだ。
着た方も着せたほうも双方満足し、キルが―いつものように―ティファを抱き上げ二次会の会場へと足を運ぶ・・・・パレスの暗黙了解なのだろうか、ティファはこのパレスを長い距離を一人で歩いたことは一度として無いのだ。
大広間は混とんの坩堝化していた・・・そうとしか言えんよ、うん。
結婚式は大成功、父さんも爺ちゃんも皆も大満足でもうこれ以上の事は無いだろうというぐらい披露宴でもあれやこれやの騒ぎがあったのに・・・・それ以上の騒ぎだよこれは・・
「ラーハルト羨ましいぞ!!俺もニーナと結婚するときはバラン様の息子って言われてぃよ!!!」
「あそれいいなガルダンディ!!そしたらガルダンディも俺とダイの兄ちゃんになって・・ボラホーンはどうするよ?」
「俺!?俺は独身でいい!!そもそもが俺は年齢だけならばバラン様より

も上だ!!」
「・・・そしたらボラホーンは俺達の・・・・小父さん?」
「・・・ディーノ様まで何を・・」
「お前が冷めてんだよラーハルト!!」
「管をまくなガルダンディ!!・・・バラン様・・・・」
騒いでるの主に私の身内ご一同様だったのにびっくりだよ。
どうやら父さんのあのラーハルトはうちの息子です宣言にガルダンディが触発されて羨ましがって、自分も父さんの息子認定されたいと騒いでるのを、周りは物凄く温かい目で見守ってらっしゃるのを、父さんは少し考えて宣言した。
「そうだな、お前達も私の血をその身に宿しているのだからガルダンディも私の息子として婿に出そう。」
「よっしゃ!!後でニーナに報告しまさ!!」
「良かったなガルダンディ!」
「おうよ!これでお前は俺の弟に何だなポップ!!・・・・ディーノ様はどうします?」
「俺?・・・俺も嬉しいけれど、ガルダンディの事をお兄ちゃん呼びするの何かしっくりこない。」
「馬鹿かガルダンディ!バラン様の温情を何と心得る!!ディーノ様、この馬鹿者は後で竜騎衆の長である俺がきっちりと躾ておきます。」
「・・・・もう少し大人になれガルダンディ・・・・この場にニーナが居たらただではすまんぞ・・」
「う・・・・」
どうしてかポップ兄とガルダンディはウマが合ってよくつるんでる。ポップ兄としても今まで周りにいない不良だけど面倒見が意外と良いガルダンディと相性がいいようだ。
その二人が竜の血の兄弟になれたんだからガルダンディのタガが外れてダイ兄にまで絡んで暴走をラーハルトとボラホーンに怒られて赤くなるのに笑いの渦が巻いて行った。
笑顔、笑顔、笑顔どこを見ても笑顔が見られる。
今ここにはニーナなどの子供や、少し疲れた爺ちゃんを始めとした

レオール王様とフォルケン王様とロカさんとレイラさん達は来ていない。
ロカさん達はデルムリン島に、王様たちはそれぞれ帰国の途についた。
それでもついてくれた随行員の人達が沢山いて、人がいて魔族がいて半魔がいてモンスター達と精霊達が同じところで飲み食いして笑って賑やかに過ごしているのが・・・
「嬉しいかいお嬢ちゃん。」
「・・・キル・・・・はい・・はい！私はとっても嬉しいです!!!」
「そう、良かったねお嬢ちゃん・・・」
キルは腕の中に、いまだに少女のままなティファを見る。
今目の前に広がっている光景を夢見てティファは闘って来たのを自分はよく知っている。
いつかの時、大戦時の最中であるのにティファは自分の大切に思う者達と自分達も入れた全員でお茶会をするのを夢見て・・・・そしてそれは今日この時に報われたのを、キルはわがことのように喜び寿いで、ティファの小さな頭をゆったりと撫でているところをティファの兄達に見つかり取り上げられてしまった・・・・残念、もう少し愛でたかったのだが。
キルの腕から瞬時にダイの腕の中に入れられたティファは、今日の目出度い日にお説教は嫌だなと思っていたところに時の采配かダンスタイムと相成り、ティファは兄達をそれぞれの奥さんにバトンタッチして自分はサッサかと父の下に逃げ込んだ。
「父さん！私とダンスしてくれますか？」
「よかろうティファ。よろしく頼む。」
ダンスをする者達がフロアーの中央に、そのほかの者達は囲んで見ている。
今日の主役のダイ・ポップ・ラーハルトにエスコートされたレオナ・メルル・マァムが恥ずかしそうにしながら中央に導かれていく。
レオナ達のドレスは披露宴の時と違い裾を少し短くしてくるぶしが少し隠れるか隠れないか位の長さで作られており、ダンスし慣れて

いるレオナは兎も角メルルとマァムにはありがたいデザインであった。
　曲は誰でも踊れるゆったりとしたワルツであった。
　くるくると踊りながら、ダイ達男は妻達を誉めそやす。
「奇麗だよレオナ・・・食べちゃいたい・・」
「ダイ君ったら・・」
「このドレス似合うぜメルル、とってもきれいだ。」
「ポップさん・・・ポップさん達はお衣装変わりませんがとってもかっこいいです。」
「ラーハルト達もお色直しすればよかったのに・・」
「お前達と違って男は聞かざるだけ無駄だ。それよりもきれいだマァム。」
「もう!・・・ラーハルトったら・・・」
　甘々な空気を醸し出しながら踊るダイ達の側を、ティファとバランは微笑ましげにしながら踊っている。
　バランにとってはワルツは妻ソアラと一度踊ったのみで・・・・あの時も自分は息子の様にソアラをこの世界で一番美しいと思ったのだと思い出し、今は愛息子の結婚を祝う場にて愛娘と踊っている幸せを噛みしめながら踊っている。
　いつまでもこの幸せの中で踊っていたいと思う程に

　ふぇ～疲れた・・・・父さんとダンスしたのはいいけれど・・・・踊るのって戦う時よりも疲れる・・
　広間のダンスは優に一時間近く踊り明かされた。ダイ達もそれぞれパートナーチェンジをし、随行員達もスタッフの女性人達に許可を得てお祝いのダンスを共に踊り、ティファは言うまでもなく沢山の者達と踊り明かした。
　最初は兄達、ラーハルト、ガルダンディ、ボラホーンの順で踊り、チウやノヴァ、ロン・ベルクも誘ったところ快諾して踊ってくれたのに気を良くしたティファは、周りの雰囲気を楽しんでいるハドラーも誘ったらオッケーが貰ったので踊ったのだ。

ハドラーダンスはどうなのだろうと周りは思った。
確かに彼は超一流の戦士であり魔王であり、今では大魔王バーンの跡継ぎとして押しも押されぬ地位にいるが果たして・・・・ダンスも超一流であった。
疲れてステップを踏み損ねたティファのフォローをさりげなくするなどの男ぶりを大いに挙げて、華やかな宴席をさらに盛り上げて見せたのだ。
その後ティファはマトリフと踊ったのを最後に、コッソリと会場を抜け出し例の宝物庫はと向かったのを―二人―が気付いてこっそりと後をつけているのを知らずに。
「ねぇポップ、普通にティファさんにどこに行くのか聞けばいいんじゃないのかな?」
「チウは正直だな～。いいかチウ、このタイミングでティファが何か取りに行くってったら俺達の結婚祝いかもしれないじゃねぇかよ。ダイ達よりも一足先にこっそりと拝ませてもらおうぜ。」
「・・・・悪趣味だよポップ・・・」
「だからお前はくんなって言ったろう。」
会場をこっそりと出たティファをポップが見つけて後を追い、それを見ていたチウがさらについてきたのだが・・・・ポップのいつまでもいたずら小僧のような側面にチウは少しばかり呆れてしまう。
普段も凄いがお調子者のポップは好きなのだが、お嫁さん貰ったのだから落ち着いた大人になれないものだろうかと。
それをこっそりと言い合いしながら後をつけてくる二人に、当然ティファは気が付いているが見逃している。
ポップの言う通り、今日は兄達の結婚式の日なのだから多少羽目を外して楽しませようと思ったのが、悲劇の始まりであるとも知らずに。

小石の波紋：プロローグ・後篇

「ついてくるならもっとコッソリ来ないと意味ないと思うよポップ兄？」

「・・・だってチウがああこう言いうんだもんよ・・・ちょっとくらい羽目外したって今日くらいは・・」

「ポップはメルルさんと結婚しても子供っぽいね・・」

結局やいのやいのと言いながら隠れているつもりで自分の後を追おうとして来た二人に笑ってしまったティファの態度で、自分達の事はばれているとポップは少しがっがりとしチウは少しほっとしてティファの前に姿を見せた。

そもそもがこの長い廊下は宝物庫とバーンの私室とティファのお泊り部屋がある魔界の神様の完全プライベートエリアとなっているので侵入者対策として隠れられる柱やオブジェなどはほぼなく、二人は少しだけある柱の陰に隠れているつもりであったのだろうが、ティファからすれば気配丸わかりで笑いをこらえるのに苦労したのだが限界突破して爆笑してしまったのだ。

「ポップ兄は本当にいたずら小僧みたい。もう少ししたらダイ兄達の分も含めてお祝いの品の披露タイムになったのに～。」

「ちょっとくらい覗いても罰当たんないぜ？」

可愛い妹の苦笑しながらの言葉もなんのその。今メルルや賓客達はこの会場の主たるバーンに挨拶をしているのでポップの周りは空白化した。

少し休むのを兼ねてダイ達からも離れて飲み物を取りに行こうとすれば、可愛い妹がどこか行くので何やら面白い事を隠しているのだろうかという第六感を信じて後をつけてきたのだと豪語する。

ちなみにチウもティファが出て行ったのを扉付近で見ていたが、女性の後を追うなどという考えを持たなかったのに・・・ポップがあとをつけようとしているのを見つけて止めるべく来たのに巻き込まれた。

ワイワイと賑やかにしながら三人は件の宝物庫に辿り着く。

「えっと・・・ハイ＝ランクディア＝ファランフィア。」
この宝物庫には鍵はない。その代りに合言葉の方式になっている。
合言葉の意味は古い魔界語で一位階高き者達の宝の守護をせよ―である。
これは正しい発音と、そして登録された者の闘気や魔力を発動させなければ開かない仕組みになっている。
尚登録された者が脅されて開こうとされようとしても
「ハイ＝ランカーファルス＝ディエルゴディア」
位階高き我を脅す不逞の輩なりと言葉を変えれば、登録された者以外の者を瞬時に焼き尽くす炎が噴き出す・・・その際には他の人質がいたとしても諸共になるが、過酷なる魔界ではそれもやむをえないと誰も気に留めないのだがここに初めて来たポップとチウは無論の事で、出入りする仕組みを聞かされたティファも、侵入者の部分はバーンは知らされていないので当然知らない。
血生臭い事はもうティファの周りから排除しようというバーンの心遣いだった。
ここが作られて数千年経つが、幸いな事に大魔王バーンの居城に侵入するのは兎も角最奥の宝物庫に入り込めたものは誰もいないのでそんな怖ろしい事は実際に起きていない。
侵入した者は瞬間死神と影の得物の錆になっていたのだから・・・
「えっとね・・・どこだっけ・・」
宝物庫の中は広く、一度しか来ていないティファは兄とチウを引き連れて奥に行くまで相当時間を要した。
その間二人はティファについて行きながらも物珍し気に周りを見まわたして目をまん丸くしていた。
行った事はないが、まるで話に聞く美術館のようだとチウとポップは思った。
さすがは魔界の神様の宝物庫であり、よくお伽噺に出てくる竜の宝置き場の様に金銀財宝宝石達が雑然と積み上げられているのではなく、一つ一つがガラスケースや宝箱に入っている。
一振りすれば火炎魔法が出てくる文字通りの魔剣、姿が消える透明

になるマント、ティファも持っている空飛ぶ靴にヒムたちと同じようなオリハルコン製のチェスが一揃い等、その機能や使い道は分からないものが多数あるが、見るからに凄い代物だけが持つ、たとえていうなればロン・ベルク作のダイの剣にも似たすさまじいオーラを二人は感じ、こんなところに保管されたティファからの結婚の贈り物は何だろうとポップがにんまりしたその時、宝物庫にいる三人はゾワリとした感覚に襲われた！

まるで・・・・不味い!!!

この感覚にとても覚えのあるティファは二人にすぐにこの場を出る様に言わんとした時、ティファが取りに来た―万能なる万能薬―を入れた宝石箱を中心に黄金の陣が出現し、宝箱をからめとらんとする触手の様に蠢く糸を見た時ティファはそちらに意識が行ってしまった！

「駄目!!それは本当に大切なものなの!!!」

「ティファ!!」

「ティファさん!!!!」

「ジ＝アザーズ!!!!」

なんの陣かは分からない！この糸もなにかはティファにも分からないが、大概なものそれこそ大魔王バーンの本気のカイザーフェニックスであってもヒビがはいりこそすれ割られないという自負があるティファは、宝箱に絡みついた糸を闘気で切断をして胸元に抱え込むと同時に、自分とポップとチウをすっぽりっと覆いつくす結界を張った。

これで陣の意図がどうであれ、この場から薬も自分達も動かすことはできないだろうとティファは考えた。

いつかの時、空間を封鎖して散々に死神キルバーンと魔影参謀ミストバーンと、彼等の主たる大魔王をも手玉に取ったのだから。

しかしティファの目論見は結界を張ってすぐに破られた。結界諸共に・・否、結界は破られはしなかった。

破られれば結界は術者にダイレクトにそのダメージが行く。その結界の機能が高ければ高いほどに大ダメージとして術者の身体を損

なうティファの体には異変は起きなかった！
　まるで結界を糸の様にほどかれたようだと感じたティファの感覚は正しかった。
「ティファー・チウ!!この場から逃げんぞ!!俺に摑まれ！」
　陣が現れた時よりも驚愕に満ちたポップの言葉に、ティファとチウがポップを見れば、ポップの足先が、糸の様にほどかれているように消えかけていた!!
「ポップ兄!!」
「ポップ!!!」
　何事が起きたのか・・・ティファは混乱しそうになる思考をどうにか落ち着かせて思考を止めずに如何に全員でこの場より逃げられるかを算段する。
　起きている事象の解明をして解決するには時間がない！であればポップ兄の言う通りに摑まって、トベルーラでこの場から出るべきだ!!最悪は天井に穴をあけて更に速度の出るルーラをしてもらえばいい!!!
　そう算段をつけたティファは、走り出そうとしてもポップ同様に足のつま先がほどかれてしまったチウを抱え、いつ自分も同じ事になるのか分からないので一足飛びにポップの下へと飛び、ポップは無事な両腕で二人をしっかりと胸に抱えたが・・・・全員の体はもう半分ほどけていた!!
　それでもポップは諦めずにトベルーラで部屋の脱出を試みる。もしかしたら陣から遠ざかれば、この不可思議な事象が解かれるのではないかという望みをかけて・・・だが状況は好転してはくれなかった・・・・発動しないのだ魔法が!!
「畜生が!!!!」
　瞬時にそれと察したポップは絶望のあまりに叫び声をあげて二人を抱きしめて呻いた。
　自分達はこれから幸せな時を見んなと過ごすはずであったのに・・・なぜこんな訳の分からない事に巻き込まれた！せめて兄として妹と

年少のチウだけでも助けたいのに・・・それすら叶わない事にポップが絶望しかけた時・・・声が響いた・

「お嬢ちゃん!!!」

それはポップにとっては―苦手―な者の声であった。

大戦の頃は大嫌いで、少し前まえでも可愛い妹をつけ狙う不逞の輩で・・・そして誰よりも自分達を子供と侮らずに一人前の戦士達として真剣に自分達と戦った奇妙な人物は・・血相を変えて自分達の下に必死に駆けてくる者は・・・

「キルバーン!!!」

ポップは出せる限りの声でその人物の名を叫び、そして救いを求める様に左手を精一杯伸ばした。

もう嫌いではない、しかしどう接すればいいか分からず苦手となった漢に助けを求める事がポップにとっては嫌ではなくなっていたから・・

その叫びに応える様に、キルもポップの手を掴もうと必死に手を伸ばす。

宝物庫に言った三人の様子をバーンから仰せつかったキルは、主の命を果たしながらもあの三人をもう少し遊ばせてあげるべくゆっくりと宝物庫に歩を進めた。

実はティファとポップとチウは、あの場を離れた事は気が付かれていないと思っていたが・・・全員ばっちりと気が付いていたのだ。

ただティファ達も疲れて羽を伸ばしたかろうという周囲の優しさで見ないふりをされていたのだが、戻るのが遅いと心配をし始めた全員を代表してバーンがキルに迎えに行かせたのだ。

キルなれば、すぐに空間を開けて三人を広場に戻せるからと。

そしてキルが宝物庫の合言葉を言って扉を開けてみれば！今まで感じた事も無い気配に驚き、ティファ達はきっと預かった宝箱の場所にいると確信をして空間を開けようとした開けられなかった！まるでティファに仕掛けられた空間封鎖のあの時の様に!!

嫌な予感しかせず、空間が開けられないと知った瞬間キルは走り出す。

今ティファ達の下に行かなければ！途轍もない事が起きてしまう!!三人の身をひたすらに案じて走った先にいたのは・・・下半身が消えかけている三人の姿が・・・

「お嬢ちゃん!!!!」

キルはチウ!!とポップの名も呼んでやりたかったが時間が惜しかった。

それよりもあの三人をすぐにこの場からはならさせる事ばかりを考えて駆けて行けば

「キルバーン!!!!」

普段は自分の事を、おいや、疫病神としか呼ばないあのポップが！自分を信じて懸命に手を伸ばしてくれたのだ!!

あの手を掴めば・・・もう少し・・掴んだ!!!

助けを求めた手が、助けを求められた手が必死に伸ばし合った事でその手が触れ合う事が出来！キルはその瞬間を逃さずに素早くポップの指を絡めとりそして握る事に成功したのだ。

ここ!!すぐにこの場から・・・・

離れようとした。

キルもまた事象の解明はできてはいなかったが、それでもこの場から離れる事を第一としてポップの手を握れた事で一息つくという愚を犯すことをせずにすぐに引き寄せながらその場からの離脱を図ったが・・・間に合わなかった・・・解けてしまったのだ・・・文字通りポップの手が・・・・ポップ達が!!

「キル!!」

「キルバーン!!!」

「キルバーンさん!!!」

子供達が・・・自分の事を叫びながら解けていく・・・・あぁ・・あぁ!!!

「駄目だ!!!駄目だ!!!」

返せ!!!その子供達は自分の・・・この世界の宝物達なのだ!!!

「ティファ！ポップ!!!チウ!!!」

三人がキルの名を叫ぶように、キルもまた三人の名を叫びながら再

び三人に駆け寄るが・・その行為をあざ笑うかの如く陣は最後の光でキルの目を晦まし・・・あと一歩で三人に辿り着いた筈のキルの足を鈍らせそして・・・光は瞬時に消え果てた・・・宝箱も三人の子供達を飲み込んでいってしまったのを、キルは呆然として膝から崩れ落ちへたり込む。

数百年の時を圧倒的な強者として魔界の神を親友と共に支え続けてきた死神キルバーンは、ティファ達が消え果た時、其の自負心すらも持っていかれたかの如く・・・

その場には、まるで最初からキルしかいなかったかのようにティファ達の気配も痕跡も消え果ててしまった・・・いや、ただ一つ、チウが身に着けていたブローチが一つだけ落ちていた。

灰色のロープを包むこげ茶色のマントの留め具としてキルが贈ったものが、床に取り残されていた・・・・ただそれだけが・・・・

かつて勇者達は・・・・仲間であり最愛の者ティファに、絶望の場から逃がされる為に彼女の掴んでいた手がほどかれそして陣へと吸収されてしまったのを自分は見た。

あの時の勇者達の顔は絶望に満ち溢れ・・・先ほど自分はポップに何を言った？

お嬢ちゃんという途轍もない精神的支柱を喪ったら、残された手紙があっても立ち直れた保障なんてどこにもないだろうさ・・・・

あれは・・・・絶望の淵から立ち上った彼等を賛辞して贈った言葉が・・・・呪いの様にキルを縛り付けた。

常であればどのような異変をも主と親友に真っ先に知らせるべき死神が、その場に縫い留められるように・・・・ここには・・・希望は残されていない・・・・何もかもが・・

同じ頃、会場でも異変が起きていた。

「あ・・・・あぁ!!」

「ディーノ!!」

「どうしたのダイく・・・・メルル！顔が真っ青よ!!」

「どうした坊や!!」

「あぁ・・・・」
ティファと魂までも繋がっているダイとノヴァ、そして神々からの言葉を受け取れるまでに至った力の持ち主メルルが一斉に青褪めそして苦しい声を吐き出すのを周りが何事かと動揺する中、ダイ達は絶望にそこに叩き落されていた。
「嫌だ!!消えないでティファ!!!」
「ティファ!!!」
「いやぁぁっ!ポップさん!!!」
それぞれが愛おしい者達の名を叫びあげながら虚空に向かって必死に手を伸ばしたのだ。
ダイとノヴァ、そしてメルルはティファとポップとそしてチウの気配が―この世界―から消えてしまうと直感が告げたのだ。
特にノヴァはこの世界で誰よりもティファの心と魂が結び付き、それが為に一度目の決戦のあの時、ティファがダイ達を逃がした直後、バーンがパレス全体に結界を張りパレスとティファを隠してしまい、ティファとの繋がりを強制的に遮断された時以上の喪失を味わい、直感が確信に変わり、それはティファに己の魂と命の半分を注いだ大魔王バーンのも感じられた!
二人はその瞬間、ティファの気配が最後にした場所に向かおうとした時―それ―はパレスを満たしつくした
ああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!
死神の絶望に満ちた声が、パレスの全てを満たしたのだ
それはまるで、悲劇に満ちた事象への開幕を知らせる為に誂えられた絶望を凝縮させた開幕ベルの如く

小石の投げられた世界・初遭遇

「報告!!時空の歪み!!未だに収まらず!!!」
「のみならず時空に裂けめが・・・これは・・・神子様がおわします大魔王の居住区に裂けめが出現!!」
「なんとしても―侵入―だけは防げ!!最悪は大魔王の居住区の一切が持ち出されようとも子等に被害を・・・」
「報告!!裂け目より侵入者・・・これは・・・・他界の神の力を検出!!」
「どうして・・・どうしてあの子達の幸せの邪魔をするんだ!!力の検出に伴い発生した力の根源を辿ってどこの他界かを探りつつ・・・」
「―アンロポス―様!!神子様が・・・・子等が・・・神子様の作りし万能薬と共に他界に連れ去られ・・・・これは・・・・ヴァルガブル神様にご異変が!!」
「・・・・即座に御止めせよ!!儂等も直接に・・」
「竜の!!それよりも時空のひずみと裂け目の広がりを止め、安定させることを第一とさせよ!!ティファを・・・・子等はきっとどこであっても生き延びる!!我等の助けを信じて・・・」
「天の・・・・おのれ・・・・許さぬぞ!!どこの他界であろうとも!必ず報いを受けさせよ!!!」

それはティファとポップとチウが、キルの目の前で解けて消える少し前から天界は大騒ぎになっていた。

三神達がダイ達の結婚式で寿ぎを終えた後、この時空が揺らいでしまわないように強大な力を持つ神々の力をしまう様に天界に戻って一息付けようとした時にそれは起きた。

この世界以外にも当然別世界がある事は、天界最高神たる三神達とその側近達と六大精霊王達は知っている。

故にこそ、死して時空の狭間を揺蕩っていた今はティファとなっている者の魂を見つけ出し、自分達の望む知識と願いを託すに足る優しさと芯の強さを持っている事を突き止め、そして懇願をしてダイの双子の妹としてこの世界に産まれてもらったのだから。

そしてごく稀に、他界が自分達の世界にはない知識や道具、特殊な

人材を求めて攫うという悲しい事がある。
所謂神隠し
それが選りにもよってティファを連れ去るとは!!
普段は温厚である竜魔の神ドラグーン、人神アランティウムも怒りに叫びあげるのを天神ウェントゥスが冷気をはらんだ語気で周りを鎮め、先ずは―通路の確保―を命じる。
三人が連れ去られてしまった上は・・・・
ヴァルガブル様・・・・我らが偉大なる父よ・・・・子等の行き先をどうか・・・
ウェントゥスは心の中で泣き叫び、そして父に祈る。
ティファ達の行き先を追って欲しいと・・・・
「通路確保を優先し、目途が立ち次第パレスに通達せよ!大魔王以下ティファの周囲全員に知識領域の解禁を許可する!!事の起こりと顛末とその後の対処法全てを共有する!今すぐに資料の作成をせよ!!」
「御意!!!」
他界がある
この事は少なくともこの世界においては禁忌レベルにも等しい程の情報であり、天界においても三神達の最側近の、それも一部にしか共有されていない情報の開示の許可に、側近達はどよめきそうになる想いを飲み込み時空の安定と通路確保と連動して資料作成に取り掛かった。
必ずこの世界の宝を取り戻す為に

落ちていく・・・・どこまでも底が見えないくらい中を・・・
「ティファ!チウ!!絶対に俺の服を離すなよ!!!」
「にぃ!結界晴れない・・・チウ君!にぃとティファの服両方もって!!」
「ティファさんもポップもお互いもっとぎゅっとして!大丈夫!僕潰れないから!!」
どこに向かっているのかはわからないが、三人は気が付けば暗闇の空間を落ちていた。

解かれていた体いつの間にか再構成され、解かれる前と同じティファとチウがポップに摑まり、ポップはティファとチウを絶対に落とすものかと万力の力を込めてティファを抱きしめチウを守っている。
「チウ君！宝箱開けられる!?中に薬の小瓶が入ってるから私の口に入れて!!」
「えええ!!ティファさんまさか・・」
「お前・・・体に悪いから絶対やめろ!!!」
「やだ!!誰か知らないけど目当ては絶対にこれだもん！渡してやる言われなんてないもん!!!」
体が解けてどことも知らない空間の中を落とされ体が再構築したとしても、ティファの無茶苦茶は健在であった・・・しかしティファとしては本気だ！
誰かは知らないが万能なる万能薬を盗まれてたまるものか!!絶対に死守したいし、何よりも自分とチウの間にある宝箱が邪魔で三人の体がきちんと密着できないでいる。
今は只落ちているだけであっても、この先嵐や奔流のようなものが襲ってこないとも限らない。
その時に密着していないが為にばらばらになるなどごめんである。だからと言って万能なる万能薬を捨て去る考えはティファには毛頭ない！兄達への引き出物を捨てるなぞありえないからだ。
その決意にチウは折れ、どうにか宝箱を開ける事に成功して中身の小瓶を取り出し・・そして自分が飲み込んだ!!
「おいチウ!!」
「チウ君!!」
「・・・う・・・っく・・・こんな大きなもの・・・細いティファさんが飲んだら・・うっぷ！」
「チウ君!!」
「おいチウ！吐き・・・・なんだありゃ・・」
小瓶とは言え大きさがそれなりにあるのを見たチウは、女の子にしてはそこそこ食べるが、身が細いティファに飲ませては危険だと判断して自分の体内に収めたが異物が入った体が驚いたのを、ポップと

ティファは慌てて吐き出すように言おうとした時、ポップが目にしたものは、暗闇を切り裂く銀状の縄であった！

どこだ・・・どこに・・・・

「見つけた!!吾子等よ!!」

「・・・・ヴァルガブル神様!?!」

銀状の縄は、ヴァルガブルが結界につぎ込んでいた己の生命そのものであった。

天界を十万年覆い隠し守ってきた結界は、確かに天族達が代々注いできたものに違いないが、その根幹を支える力はヴァルガブル自身の全生命エネルギーであった。

自信を結界とし、全生命エネルギーを注ぎつくしてでも天界の子等を守らんとした巨大なる結界は、急激に解こうとすればあまりの強大なエネルギーが時空崩壊を引き起こしてしまうかもしれない危険を孕むと同時に、ヴァルガブルの命を脅かすことになりかねない。

自身の全てを使って子供達を守らんとしてくれた偉大なる父に報いるべく、天族と精霊王達が結界のエネルギーを緩やかに世界の循環エネルギーと、魔界の隅にまだある瘴気の浄化エネルギーに回し、後五十年もすれば半分は解けてヴァルガブルが肉体は無理でも往時の時の姿に霊体として顕現できる見込みが立ったのを、知らせを受けたティファ達は喜んでいたのだが、そのヴァルガブル自身が、己の消滅も顧みずに生命エネルギーを全て縄状にしてティファ達を救わんと時空の狭間を追って来たのだ!!

あと少しで銀状の縄はポップ達に追いつきかけたが・・・・弾かれた！

まるで目に見えない壁が三人の子供達を取り囲むように・・・

「おのれ・・・・おのれ!!返せ!!我が吾子等を!!我らが宝たる子等を返さぬか!!」

ヴァルガブルの怒りに震える声は、虚しくも時空の狭間の中に消えてゆく。

ヴァルガブルの怒りの声に含まれている嘆きと絶望に、ポップとチウの中に芽生えた希望が打ち砕かれんとした矢先

「探して下さい!!!」
　ティファの凛とした声が木霊した。
「私達は必ずどこかに辿り着きます!!チウ君の体内に収められた薬には、あの世界最後の世界樹の最後の一枚の葉で作ったもの・・・チウ君ごめん・・・ラック＝バイ＝ラック!!」
「わぁ!!」
「・・・使えた・・」
　この訳の分からない空間に落ちてからポップは直ぐにトベルーラを試みたが発動せず、ティファもまたジ＝アザーズを使用して足場を確保しようとしたが矢張り結界は解けてしまったが、チウの体内から薬瓶を取り出すためにラック＝バイ＝ラックを使えば使用できた。
　どうやら誰かは知らないが、相手は自分達・・・この薬を是が非でも欲しいらしく、逃げる類の事ならば見逃すらしい・・・実に甘い事この上ない！
「ヴァルガブル様!!この薬を辿ってください!!!」
　こうやって、―小石―をまかれて追跡可能になるのだから・・・・量は感覚にして百数えて一垂らし、濃厚な気配がするのでもっと長い距離でも・・・
「必ず辿る!!どのような事があろうとも！どのような目に合おうとも!!何をしてでも生きよ吾子等よ!!!」
　遠くになってしまったヴァルガブルの祈りにも似た叫ぶ声を最後に、三人の体は光に包まれそして・・・空中に放り出された。
　どことも知れない場所に到着したのだ。

「ダイ!!悲しくても立てよ!!」
「ダイ!」
「うるさい!!!もう・・・もう嫌だ!!」
目の前で起きてしまった悲劇を前に・・・―ポップ―も―マァム―も俺に戦えと言ってくる!―ヒュンケル―も―クロコダイン―も俺達の前に立って庇ってくれている・・けれども気配が俺に立ち上がれってうるさい!!
俺の心は・・・・もう砕けてしまったんだ・・・・
―ゴメちゃん―だけが・・・俺と一緒に泣いてくれている・・
目の前にいるのは確かに敵の大魔王なのかもしれない・・・・幾度も見て戦った―ミストバーン―と―キルバーン―を左右に従えている。
キルバーンからは、俺を嘲笑う気配がして、―一つ目の使い魔―が囃し立てている
弱い勇者、駄目な勇者、臆病者と愉しそうに・・それでも俺はもうどうでもいい!!!
こんな世界!!滅んでも・・・・・
「・・ちる!!」
「にぃ!!トベルーラ発動できる???」
「俺の全エネルギー使ってでも!!!!」
「駄目だよ―ポップ―!!!そんな事しないで!!!」

・・・・・こんな世界どうなっても構わない・・・けれどもあれは何？
どうしてポップとチウが、女の子と一緒に空から落ちてくるの？
ポップはここにいて・・・チウは今―サババの砦―でハドラーの親衛騎団の一人フェンブレンに負わされた重傷を癒すために寝ているはずなのに・・・・そもそもあの女の子は誰なんだ？
―ダイーの感じた疑問は当然・・いな、たった一人を除いた他の者達にとっては真っ当な疑問だった。
この決戦において勇者達は揃っており、空中にいる―ポップ―の方がおかしい。
それも何の気配もなく突然空から生じたのだから、キルバーンはともかくミストバーンはダイが突如として空を見て唖然としたのを訝しみ、気配は途切らせずとも同じところを見てみれば！白いタキシード姿の勇者の魔法使いと仲間の大ネズミが!!見知らぬ少女と共に降ってくるとは何だそれは!!
警戒度をマックスにしたミストバーンは瞬時に闘魔傀儡掌を放とうとしたが、主の右手がスッと上がるのを見て撃つのを止めた。
何事が起きているのかを突き止めるのと、面白そうな余興が始まったと愉しむ主人の癖がどうやら出てしまった様だ。
空から落ちて来た者の内の黒髪の少女が、今のこの状況が不味いと察したのか顔を蒼ざめさせている。
なんで・・どうして・・あれは・・あの光景は!!
「こなくそ!!発動しやがれ!!トベルーラ!!」
ティファの混乱にも似た困惑をよそに、ポップは魔法の発動を優先させ、チウもティファとポップがばらけない様に必死に二人の服を掴むのに夢中になっている。
そして魔法はようやく発動し、―勇者―と―魔王軍―の双方の間に降り立つ格好になってしまった。
地に足がついてようやく周りを見回したポップとチウは、ありえない、と唖然とした。
ポップは何故自分がいるのか分からない、そして歳も幼くなってい

るダイ達がいる？
　ヒュンケルは何故鎧の魔剣ではなくラーハルトの魔槍を着ているのだ？
　そもそもが・・・な・・・んで
「バランさん!!!」
　目の前の状況に、ポップとチウは混乱をした！
　何故ポップが二人いて、バーンもキルもミストもいて対峙しているのかが分からないのに！バランが倒れ伏していた!!
　それも全身ズタボロで、そのバランに幼くなっているダイが取り縋っているではないか!!
「ダイく・・」
「動かないでチウ君!!ポップ兄も絶対に何もしないで!!」
　チウが、ポップが状況はわからないが二人に駆け寄ろうとしたのをティファが大音声で止めた。
　何故止めるのだとポップが怒鳴ろうとしてティファを見た時、ティファは・・身につけているもの全てを取り外していた！
　リボンも小さなダイヤをあしらったチョーカーも、ドレスに合わせたレースの手袋も全て地面に捨て去る。
　ティファとしては必死であった。ー自分のいないー勇者一行、魔槍を着ているヒュンケル、赤と黒の素敵なお衣装ではない気障ったらしい風貌のキルバーンと、キルバーンの肩に乗っているピロロ！自分の考えが正しければここは・・
　全ての宝飾類を取り外したティファは勇者一行と思しきもの達と魔王軍との真ん中に立ち、ドレスの端を両手で持ち上げ貴族の正式挨拶をよりも更に深く頭を目の前にいる魔王軍に向かって下げそして
「他界から来せしティファと申します！
　そこにおられるは他界の大魔王バーンとお見受けいたします！
　所以も知らずに戦場に立ち入りし事!!誠に申し訳なく!!!」

小石の投げられた世界・他界にての初陣（口合戦

いきなり空から生じてきた三人のうちの一人の少女は、着ている服以外の一切をそれこそ首に下げていた小さな金のマジックリングまでも鎖ごと引きちぎり乱雑に地面に落とし、自分達にとっては最悪の敵に頭を下げている光景に、少年ポップは覚えた困惑を振り払う以上に苛ら立ちが募る。

他界と言った、それが何を指し示す言葉かは分からないが目の前には自分を少し大きくした男がいる。

普段の自分ならば絶対に着ないような・・・着られない上質な布で仕立てられた白いタキシードを身に着け、愛用の黄色いバンダナこそしていないが何となくは分かる！こいつは俺が成長した姿だと。

そして上等なロープを身に着けたチウがいて、少女は頭を下げている相手が大魔王だと分かっているだろうに無防備な姿で頭を何故下げているのか、少年ポップだけではなく周りも何事が起きているのか固唾を飲んで見ている中、甲高い耳障りな声がその場を破った。

「きゃはは！おかしいの!!宝石全部落として命乞いしてるのかな？僕にはさっぱり分からないよ。キルバーンは分かる？」

「ん～なんでだろうね？僕達に首でも落としてほしいのかな？」

「ほんとほんと！こんな細い首僕でも落とせそうだ!!」

無邪気を装いながらも死神と残虐なる言葉を交わしながら、瞳は見知らぬ少女を嘲る笑みが浮かび、少女を小馬鹿にするように周囲を飛び回りうっとおし気にしているのを、少年ポップ達は苛立ちそして大人の姿になっているポップの気配が変化したが、少女は一言も発さずただ黙って頭を下げ続けている事に、ピロロは逆に自分の事を無視しているのかと腹が立った。

―人形―を使って殺しても、大魔王は止めまい。このいけ好かない小娘の言う通り！所以知らずに戦いの場に入って来た慮外者を討つ名分があるのだから!!

死神が、動こうとした瞬間、またもや右手を挙げて止める者があった。

「待たぬかキルバーンよ。ふむ・・・他界とは異界の事か娘よ？」
誰であろう、この場を仕切るに一番ふさわしい大魔王バーンその人であった。
バーンは基本自分以外に興味は無く、側近達は有能であるがゆえに侍らせているが、興味は無い。
しかし目の前に出現をした者達には多少興味をひかれたがそれだけであり、見た感じ特別な何かも感じなかったので戦意を喪失させた竜の子供諸共に葬ろうとした矢先、目の前の娘がした事と、今の態度で興味が魅かれ、質問をしたがだんまりのままであることにバーンの笑みは広がる中、主の返答にも答えない無礼者をミストバーンが両手を刃に変えたがそれも押しとどめさらに言葉をかける。
「ふむ、其方は―色々な事柄―に精通しているらしい。―誰―が其方にそれを教えた？人の身では知りえぬ事を何故知っているのか余に教えてくれまいか？」
無礼と取られても仕方がない少女の態度に、魔界の神とも言われる強大な首魁が相好を崩していっそ優しいとも思える声音に、長年師のミストバーンと共にあり時折大魔王が配下の者達と話すときの像から聞こえて来る圧倒的な強者の威圧を知っているヒュンケルと、同じく元魔王軍であったクロコダインは信じられない面持ちでバーンと少女を見比べ、大魔王を初に見た少年ポップとマァムもまた驚く中、チウとポップだけが冷静にそれを見守っている。
ティファが何かをするのはもう当たり前なのだから。
しかし最大限の譲歩ともいえるべき温情を受けてもティファは動かず、本気で忠誠心の塊ミストバーンが切れかけて時・・・・・更に信じられない事態が起こった！
「はっはっはっは!!本当に―心得のある―娘ぞ!!!」
・・・・あの冷静沈着で、全ての事象が己の想いのままになったとしても薄っすらと笑うだけにとどめるあの主が・・・・童のように笑ったのを、隣にいる死神もその使い魔も唖然とした。
一体あの無礼な小娘の態度のどこに見るべき点があるというのか。
それを紐解いたのはバーン自身であった。

「覚えておくがよいミストバーンよ。古来より魔界は闘争に明け暮れた地であり、戦いを神聖視し、強者が何よりも貴ばれる事ことは知っていよう。」
それはミストバーンとキルバーン達にとっては当たり前の事であった。魔界においては強者こそが全てであり、弱者は何も言う権利などありはしない過酷な地。
その地において決戦とは特別な事であるのは自明の理であるが、だからそれがどうしたとキルバーンが肩をすくめて見せる無礼を、バーンは笑って許した。
―無知なる者―を叱っても意味がないからだ。
「目の前の娘は―古の魔界―において決戦を穢すことがどれ程の冒涜かを知っておる。
もしも故意ではなくその地に足を無断で踏み入らば殺されようとも文句は言わさぬ。
その無礼をあがなう方法がこれぞ!
もしも先程余の問いにこの娘が応えれば余はすぐさまこの娘の首を飛ばしておったわ!!
何故ならば余はこの娘たちの事を許す言葉をわざと入れなんだ。この娘はそれを察し、いまだにひたすらに余に詫びているのだ。」
愉快気に怖ろしい事を言い放つ大魔王に、誰もが慄然とした!!
優し気な言葉の中に罠を平然と混ぜ込み、人の命を弄んで愉しんでいる・・こいつは生かしておくだけでもいけないものだと、少年ポップ達は怖れながらも怒りを沸かす中、ポップとチウは困惑をした。
この人物は本当に大魔王バーンなのだろうか!?自分達の知る大魔王バーンと似ても似つかない・・・
周囲の思惑を他所に、バーンは正答なる許しの言葉をティファに告げた。
「余はその方の言う通りこの世界の大魔王バーンである。異界からの迷い子ティファよ、面を上げ余の顔を見て直答することを許そう。疾く頭を挙げて余の質問に須らく答えよ。」
異界からの迷い子、それがこの三人の正体であろうとバーンが導き

出した答えに、果たして目の前の少女は応えた。
「他界の大魔王バーンの言う通り、我等三名はここと異なる世界より来ました。」
顔を上げ、真っ直ぐに自分を見る黒い瞳には怖れも迷いもなく凪いでいた。
それこそ敵愾心も感情の昂ぶりも無く、静かな瞳であった。
「ふむ、其方は人の子に見えるが何故我が配下達も知らぬ古式ゆかしい作法を知っていた？」
「それは決戦の場に足を踏み入れてしまったものが詫びる事を指し示していますか？もしも角があれば叩き落し、尾があれば叩き切り、羽があれば引きちぎり・・」
「牙があればおのが手で引き抜く・・・・完璧よな。」
・・・・・物凄い詫びの作法に、地上育ちのポップ達は背筋に寒気が奔った!!
間違って迷い込んだだけでそんな事をせねばならない魔界とはどれ程悍ましい所なのだと
・・・しかし其の作法はどうやら魔界においては最早廃れているのだと―ポップ達―は察した。
何故ならば先ほど大魔王は二人の側近に覚えておくようにと言っていたからだ。
魔界で長らく大魔王を支えてきたミストバーンをして知らぬ事を、何故知っているのだと問うのは自然だと少年ポップは思った。
そしてどのような答えが少女の口から紡がれるのかと・・・・死にかけた戦場において不謹慎ではあるが、持ち前の好奇心が勝ったが、少女は答えを言わなかった!!
「他界の大魔王バーン、貴方は私の知識がどこから来たかと問いますが、その答えに対する対価に何をくれるおつもりですか？」
何と答えではなく!!答えに対する報酬を口走ったのだ!!
「無礼者が!!!!」
少女の応えに今度こそミストバーンが切れたが、少女はそちらには見向きもせずに大魔王バーンだけを見つめて話を進めた。

「情報は値千金とも申せましょう。それは地上においても魔界においても天界においても同じこと。
他界より―連れてこられた―私達の知識はまさに万金であると自負しております。」
主の命により動かないとはいえミストバーンの殺気にも怯まない少女を、ピロロは再び絡みだす。
親友をこけにするような身の程知らずの小娘の肝をつぶしてやらんと！
「本当に本当に無礼だな～。なに？もしかして魔界の神様に気に入られたって勘違いしちゃった可哀そうな子なのかな？頭を切り落としてもっと頭のいい人と取り換えてあげたほうがいいのかキルバーン？」
「そうだねピロロ～。バーン様、あの女の子の首を落とし開戦の狼煙代わりにしますか？なんでしたらバラン君の亡骸諸共焼き尽くすのも一興ですよ？」
その言葉に、少年ポップ達は瞬時に警戒をしポップとチウも動きかけ・・・そして・・・今まで周りがどれ程の事になろうとも父の亡骸から顔を上げなかった―ダイ―が顔を上げる・・・今、親父の亡骸をどうすると・・・あの不愉快な死神は何と言った？
それは幽鬼にも似た、悍ましい表情であったが幸いにしてそれを見る者はなく、その表情を一変させる言葉がその場に響いた。
「ふっふ、何とも躾がなっていない配下をお持ちのようですね他界の大魔王バーン。」
嘲りと脅しを受けた、吹けば飛ぶような少女が死神とその使い魔を痛罵したのだ！
「主の許しも無く私達の会話に入り込むとは程度が低いにもほどがありましょう。口を開けば開くほどに、襤褸が出てお里が知れるというもの！その口を噤むことをお勧めいたしましょう―三文死神―殿。」
声は決して大きくはなく、それでも声音に宿る力強さに誰もが聞き入ってしまった・・言われた当のピロロとても！
ピロロにとってはそれが何よりも屈辱的であった。自分の正体を

知られないように人形の弱き使い魔を演じる中で嘲笑われる事なぞ慣れており、死神キルバーンは軍内部においても忌み嫌われ罵声や陰口は当たり前の筈なのに・・・・何も出来い小娘が偉そうにしている態度にはらわたが煮えくり返れ、こいつは自分の手で殺してやるという殺気を人形に移して―キルバーン―を動かそうとしたのを見たティファは内心で笑い、兄達は困惑している気配に苦笑しかけるのを止めるのに苦労する。

普段の自分であれば、相手に怒りをもって罵倒したことはあれども相手を見下した物言いをした事はないと自分でも断言できる。

どのような相手であってもきちんと対峙するべきを心がけて頑張って来たのだから。

しかしこの世界ではそれが通用しないであろう事は容易に察せられる。

それが通じたのは偏に向こうでは積み重ねてきた功績と、矢張り勇者一行の者という名前がものを言ったからだ。

自分の思惑や言葉を通そうとするのならば、通せる位置に立たなければならない。

即ち大魔王の側近風情が口を差し挟むなという強者ムーブをしなければならない。

言葉も使いも遜りながらも不遜な態度は崩さず、話せる者であると無言のアピールをする事。

それが好きか嫌いかなぞ言ってはいられない！今自分達が放り込まれた状況がどういうところなのか、そもそもがこの世界はどのような世界で地上と魔界が争い合っているのかの根本すら知らない。

情報を得るには、この場で一番の強者である目の前にいる見知らぬ大魔王の関心を先ず惹かなければならない。

少なくともこの状況から逃れる為の―策―は仕込んでいるが、それにしてもこの後の行動の指針が欲しい。

その為にも、第一にすべきは自分は知識が高く心得のあるものであり、魔界の神とも謳われし者との会話も十全にできるものだと知らしめるべく、キルバーンを踏み台にしたのだが果たして

「その娘の言う事にも一理あろう。その方の出番は後にあろうから今は口を差し挟むなキルバーンよ。」
「・・・・・・かしこまりました・・・おいでピロロ・・」
「・・・・・は～い・・・」
確実に死神と影の不興を買ったが、それに見合うどころかお釣りが来るほどの対価として大魔王を釣る事には成功したようだとほっとした。少なくともこの世界では大魔王と死神の関係はドライなようだ。
向こうでこんな物言いをしたものが居たら、大魔王は激高はしないまでも不快さを示すだろう。
己の大切な側近を蔑ろにした事に対して・・・・ここは・・・・―原作―もしくはそれに近い世界線なのだろうか思考するティファに、大魔王バーンが声をかけた。
「その方は他界のティファと言ったが、きちんと名乗ってはいなかろう。
対価の前払いとして余から名乗ろう。
余は魔界を統べりし大魔王バーンなり。ここにおるは右にいるのが余の側近の一人ミストバーン、左にいるのが同じく側近であるキルバーンである。異界から来せし娘よ、其方達の名を問おう。」
ティファの胆力に面白みを感じたバーンの問いに、ティファは笑みを浮かべ名乗りを上げた。
「過分なお心遣い痛み入ります。対価として名乗らせていただきましょう。
先ずは私と共に来た者達から。
お察しかと存じますが、黒髪の青年は他界の勇者一行にて魔法使いをしており、私と兄妹の契りを交わした兄ポップ！大ネズミは他界の勇者一行のチウです。」
その答えに、察していたとはいえ少年ポップ達は驚きの目を二人に向けた。
見れば二人は自分達と違って少女のとんでもない言動を、心配や困惑こそすれ驚いてはいなかった・・・あの少女はいったい何なのだ？

どう見ても戦う者には見えないのに！勇者一行の魔法使いポップと兄妹の契りを交わしたという事は、僧侶・・・見習いだろうか？
可能性としてはそれしか考えられないと、敵方のミストバーン達もそのくらいで見積もっていたが・・・―ティファ―という少女はどこにいても周囲の予想を悉く覆す存在であった！
「改めて名乗らせていただきます。私は他界の竜の騎士バラン、故アルキードの王女ソアラが娘!!」
その出だしに・・・・この世界の誰もが、それこそ大魔王バーンですらも驚いた！
その名乗りをするからには
「勇者ダイの双子の妹であり・・」
矢張り―ダイ―の兄妹!!
その答えに信じられない思いがしたのは少年ポップ達だけではなかった。しかし・・・自分達と同じく少女の名乗りに呆然としているダイの顔を見れば確かに似ていた・・・それこそ性別を取り換えれば、ダイと少女は同じであろうというくらいに・・・もしや実力を隠せるほどの強者であるのだろうか？竜の騎士バランを父に持つのならば当然勇者が二人いる一行は存在せず、ならば剣士か武器を極めし戦士か、あるいは遠距離支援の魔法使いという可能性もある。
一行に魔法使いが二人いれば、前後左右からの挟み撃ちも可能であり、戦いのヴァリエーションが多くなれる。
少女ティファはどれであるのだろうかと固唾を飲めば・・・・・・・そのどれかどころではないものを良い笑顔で言って来た!!
「勇者一行の料理人をしていたティファと申します!!!」
・・・・・・なんだそれは!!!!

小石の投げられた世界：原因と首謀者と

この娘は見た目通りのものではないとは思っていたが・・・・まさかここまで予想を超える・・自分の予想の斜め上を行くものを初めて見たとは・・・・どこの世界の大魔王もティファに抱く感想は同じであった。

戦士でもなく魔法使いでもなく・・・・僧侶でも見習いでもなく料理人とは何ぞやと思った周りはきっと悪くない。

ミストバーンはティファと名乗った少女の返答に物凄い苛立ちの気配を立ち昇らせており、キルバーンの使い魔なども、先ほどバーンに止められたので何かを言いかけては口を噤んでこいつ自分達を馬鹿にしているのかと言いたげなのを、ティファが察してにっこりと発言をした。

「ここにおられる皆様は私の職業にご不満がおありのようですね～。そんなにおかしなことを言いましたか私は？」

その妙に落ち着いた声に、寡黙で売っているくせに意外と短気なミストバーンが、目線で主に物申していいかの許可を願い、バーンは薄っすらと笑って首肯した。

一体普段は寡黙を通そうとして四苦八苦している側近が何を言うつもりであるのか、そしてこのティファという娘が何と答えるのかに興味があるが、ミストバーンは主の思惑をつゆ知らずにはらわたが煮えくり返っていた。

主に詫びの姿勢を取ったのは見るべきところであるが！主の最側近であり自分の親友に言った悪口雑言だけでも許しがたいというのに、料理人などという馬鹿げているとしか思えない非常識な答えが本気で許せなかったのだ。

「・・・・小娘、貴様我等を愚弄するか？」

この場には長年魔王軍にて自分と主の声と気配に長らく馴染んだヒュンケルとクロコダインがいる為に、主の若い肉体を預かり守っている自分の真の姿を悟られない為に短い言葉に万感の思いを込めて告げた言葉に・・・・なんとティファは鼻で笑った!!

「笑止ですね～。見識の狭さに恐れ入ります。」
「・・・・なんだと？」
　ティファの物言いに当然ミストバーンはピキッとした。それはキルバーンことピロロも、魔王軍のエンブレム入りの帽子の中の頭に血管を浮かせるほどに切れたのを、ティファは気配で察したが構わずに発言の続きを言い出す。
「―こちらの世界―の貴方方が一体幾年の雌伏の時を過ごしていたかは知りませぬが、私達の世界では数千年を待っていたと言われましたのでこちらもそのくらいではなかろうかと思います。
　地上界でこのような―大仕掛け―の空飛ぶ要塞を平然と飛ばしているあたり、百年単位ではないと見積もれます。」
　ティファは今自分達がいる空飛ぶバーンパレスを引き合いに出しながら話し出した。
「おそらく私達の所と同じく千年単位でご用意したものかと。そんな大仕掛けをして世界に対して大戦を仕掛ける方達が、たかだか人が定めし職業一つで騒ぐとは滑稽ではありませぬか。」
「・・・・・」
　ティファの言葉にミストバーンは沈黙をした。それは肯定もされていないが、目の前のミストバーンかの気配に苦いものが混じったのを見逃さなかったティファにはを否定にもなっておらず、ティファからすればここでもそうだと言われたも同然であり、矢張りここも自分が知っている世界とほぼ同じだと思ってもいいのだろうという確信の材料が一つ増えたとほっとしさらに言葉を紡いでいく。
「―勇者一行―などというのは紐解いてみれば少なくとも私達の世界では数百年前に―とある竜―を討伐された戦士に称号として贈られ、以来魔界から進行してきた魔王や魔族、地上に住みながらも突然変異で暴れ出したドラゴンや凶悪モンスターを討つ者達が勇者の称号の後に人が名付けた職業が長い間使われて定着したもの。
　であれば何事においても―前例―ありきのものなぞありますまい！
　初めての事柄に触れたからとて相手を詰るは不見識と思いますれ

ば、！悠久の時が流れる世界において！たかだか千年にも満たぬ事柄に腹を立てるなぞ小さきことではありませんか!!」
　その暴言ともいえる放言高論に・・・・魔王軍はおろか現役勇者一行である少年ポップ達も唖然呆然とし、特に少年ポップは、普段嫌いではないが苦手な兄弟子であるヒュンケルに視線を送り、あの言い分有りなのかよと思わず気配で尋ねてしまう程であった！
　もしかしたら戦いに関して素人のままである自分達が知らないだけで・・・本当の戦士達の間ではあの考えは常識なのだろうかと思わず浮かんだ疑問を・・・兄弟子もまた少女の言葉に戸惑った顔をし、視線はバーンに達に向けたままながらも弟弟子の疑問の視線に首を横に振って答えた・・・・あんな考え聞いた事も無いのは満場一致した瞬間であった。
　そんな中唖然としながらもバーンは面白い余興が見られたと笑っている。
　この目の前の娘が一筋縄ではいかぬ風変わりなものであり、―多少―は実力がありそうだがこの場の戦況を覆す一手を持っているとは思えない。
　おそらく先ほど―こことは異なる世界から連れてこられた―と言ったからには、突如として出来事でこの世界に出現をしたのだから、何かを仕掛けられる時間も方法も無かろうと―常識的な判断―を下し、悠々とティファの自説を面白がりそして―最後―の質問にとりかかる。
「その方の言い分にも一理あろう。確かに職業であろうが事柄であろうが前例ありきであった事なぞ無かろう。
　其方がそう名乗るのであれば、確かに其方の職業は料理人のであろうよ。」
　しかしその前に、少女の言い分を認めてやる。自分を楽しませてくれた礼として、魔界の神たる自分が認めるという―褒美―を持たしてやるのも一興であると。
　その言葉に、ティファは薄っすらと笑みを浮かべるだけで返答はしなかった。

注目集めもここらで良かろう、これ以上自分のパーソナリティを与える必要はない。今はここまでいいだろうとの判断から押し黙るのを、バーンもこれ以上はティファ自身の情報は得られないだろうと同じく判断を下して問いかける。
「ここまでその方達の命を生かしておいたのだ。―対価―としてはもう十分であろう？」
「その通りです。」
「であれば答えよ。其の方達は何故に異界よりこの世界へと連れてこられたのか。」
・・・・そんな事は俺達が聞きたいと、連れてこられたポップは胸の内で憤慨した。こんな訳の分からない事象に巻き込まれた挙句に答えろなんていうの理不尽だと思うのは・・常識的には正しい・・・筈なのだが・・
「そうですね・・・・そろそろ―分かる頃合い―かと・・・」
「なに？」
ティファは不可思議の言葉を返答としたのを、バーンは何を言っているのだと口にしてしまったが、ティファはバーンから目をそらさずに言葉を発した。
「十・・」
？
「九・・・」
「八・・・」
それは何かの合図のカウントダウンの様であり、何を企んでいるとミストバーンは即座に警戒をして両手を再び刃に構え、キルバーンとピロロは内心でほくそ笑む。とうとう目の前のいけ好かない娘が馬脚を露すかと。
その時には悪いが―親友ミスト―にも獲物は渡さない！いつもの通り弄んでから殺すのではない！即座に死神の大鎌で首を跳ね飛ばす！弄ぶのは・・・あの―小さきもの―が面白そうだ。
この中で一番純粋そうであり、そういう者を甚振る機会はこれまであまり無いどころか皆無であり初である。

大魔王バーンの命じる始末する相手は魔界の魔王軍に反逆したものか軍部において不要なる者達ばかり。
そういう相手を罠にかけて驚愕し足掻く様を見ながらとどめを刺すのも楽しいが、あの小さい者はどのような愉しい表情で顔を歪めてくれるのかを楽しみにしながら、主からの殺してよしの言葉を待っている間もティファのカウントダウンは続いている。
「三・・・二・・一・・・・」
最期の数を言ったティファが何をするのかと全員、それこそ父の遺骸を抱きしめているダイすらもが顔を向けたその瞬間、何かが起こったのはダイが抱きしめているバランの体であった。
突如として体が光ったのを、バーンですらが何が起こったかと魔力を右手にためて何事が起ころうとも即座にカイザーフェニックスを放てるようにしたが・・・何も起きなかったのに拍子抜けした。
どうやらティファが心当たりがあるという事が何であっても、この世界に連れてこられた理由は不発に終わったかと思えたその時、動いたものがいた!!
「ダイ君!!ごめん!!!」
なんとそれまで事の成り行きを見守っていた大ネズミが!近くにいたとはいえダイに走り寄りそして・・・ダイの腕の中にいたバランの遺骸を取り上げ床に横向けに寝転がしそして・・
「骨が折れたらごめんなさいバランさん!!!!!」
バン!!!!
・・・・ダイが止める間もなく、チウは謝りつつもバランの肩甲骨の間を思いっきり叩いたのだ!!
それを二度・三度としたのを、父の遺骸を辱めるのとダイが激高しかけたその時
「・・ぅ・・ガハッッ!!!!」
完全に心の臓が止まって優に半時は経ったバランが息を吹き返したのだ!!
「・・・・・なぜ?」
「親父!!!親父!!!」

「あ！駄目です！今喉に詰まっていた古い血を吐き出したばかりでもう少し出るかもしれません・・・向きを変えたらまた気道に詰まってしまうかもしれないからこのままで。」
「・・・・お前チウだよね・・・どうして・・」
バーンの疑問には兎も角、ダイのバランに対する取り縋る思いにチウは引きずられる事なく冷静に対応する様に、ダイは自分の知るチウと違いすぎる事に戸惑いを見せる。
自分達の仲間のチウは・・あまり強くはないが懸命に、それこそ鬼岩城戦を共に戦い、死の大地から戻れなかった自分をポップ達と共に探しに来てくれて・・この場所の入り口を探してくれて、命を掛けてゴメちゃん達を守ってくれた勇敢な仲間ではある。
けれどもこんな知識や礼儀はないはずなのに。
その質問にも、チウは自分を低くみているのかと怒る事なくほんわかと笑って答えてくれた。
「僕は戦いはあまり強くないけれど、こういう手当は―リンガイアの皆さん―から教わっているんです。」
「あ～・・・ノヴァから？」
周りの者達と同じくティファもチウに聞きたいことが出来たので、チウの答えに乗っかれば、正直なチウはいつも通り素直に答える。
偉い人達や物凄い場面での対応はチウとてももう慣れっこなのだから。
「はい、ノヴァさんやリンガイアレスキュー隊の皆様に、半月に一度は―みんな―と習って実際に―災害現場―でもした事があるんです。」
こんな場面でもスラスラと答える―チウ―に対してと、何故ここであのー生意気ノヴァーとリンガイアの名が出るのかと驚く周囲を他所に、ティファはずばりとチウに疑問をぶつけた。
「それでチウ君、一体どうして今した事をしたのか教えて欲しい。」
「へ？」
「確かにその人は―蘇り―を果たしたけれども気道に血が詰まって呼吸できないで、誰も気が付かないであのままでいたら二度死していたわけなんだけれども・・」

・・・人の、それも他の世界のとは言えども―バランさん―を助けたというのにティファさんの声が冷たいと震えそうになるチウに質問は続いた。
「―誰―かの声でも頭の中に響いた？その人の状態と助けて欲しいって言う言葉が。」
「・・・・はい・・・ティファさんが数を数え始めてから声が聞こえたんです。」
「・・・・・その声、威厳に満ちた感じだった？」
「へ？あ・・・違います、もっと幼い感じの声でした・・・・僕もどこかで聞いた事のある声だった気がしますが・・・」
チウ曰く、竜の騎士バランは蘇ろうとしている。しかし気道に血が溜まっており呼吸が出来ずにそのままでは死んでしまうと。
見たところ自分は、少なくともここにいる者達の中でバランとダイの身を案じてくれた者であり、助けて欲しいと請われたのだと。
「助けて欲しって言われて・・事情は分からないけれどもその人も必死そうだったのでやると答えたんです・・助ける方法も聞いてみたら溺れた人や泥や土砂に埋まってしまった人達と同じようだと思って僕にもできそうだったので・・・」
助けることが正しいかどうかまでは自分には分からないが・・・それでも縋られた声の必死さと、何よりもダイ君が・・・この世界の少年ダイの悲痛な顔を見てしまっては断るという選択肢が無かったのだチウには。
チウの優しさに、ポップとティファは嬉しくなるが、ティファはため息もつきたくなった。
これで、目の前の大魔王バーンとは決裂することが決定事項になってしまったのだから。
殺したはずの、一番に警戒していたであろう当代の竜の騎士が蘇る・・・それを愉快だなどと見逃すバカはいないのであるから・・・一応は言っておこう。
「大魔王バーンの質問にお答えしても？」
「・・・・・よかろう・・」

案の定バーンの表情と声から余裕が吹き飛んでいる・・・もっと言えば怒気が伺える。
余興で命を見逃していた者から突然手を噛まれたに等しいのだから分からなくも無いと、ティファは内心でも溜息をつきながら答える。
「私の兄ダイと、そこのもう一人の兄ポップともう一人の仲間が今日合同で結婚式を挙げたのです。」
「ほう?」
「その時の祝いの品として私は飛び切りの物を用意したのです。」
「・・・・」
「その品は私の世界では消滅してしまった世界樹の葉の最後の一枚を使って私が作った、死者さえも蘇らせる万能なる万能薬です!」
その言葉に、この世界のポップ達どころかミストバーンはとキルバーン、そして魔界の神と謳われたバーンですらが絶句をした。
その様な奇跡を起こすのは神々が生み出せし―神の涙―と呼ばれるアイテムであり、それに等しい物が存在し、あまつそれを目の前の少女が作ったと言ったのだ!
「・・・ティファと言ったか・・・其の方が作ったと?」
「はい、私はあちらの世界では―ある事―を目標にして料理人なる職業を作りました。
勇者一行の料理人は、勇者一行の心身を保ち、たとえ敵の本拠地のど真ん中であっても必要とあれば料理を出し
「傷があれば癒せる薬を出すかその場で作れるようにし、一行全員を無傷では無理でも軽症で最後の敵の下まで送り届ける事を目標に掲げたのです。」
故にこそ薬に精通をし、―お宝洞窟―を制覇した際に手に入れた薬学の本と共に手に入れた世界樹の葉で作った薬があったのだと答える。
・・・ちなみにティファは嘘は言っていない、ティファがそれらを入手したのは三神達がデルムリン島に出現をさせたあの修練の洞窟であるので・・・全くの嘘は言っていないので、真実を聞き分ける

事に長けたバーン達は、唖然として嘘だろうという顔をしている勇者一行達とは違い、出鱈目に近い存在だとティファを認識をしながらも疑問が残った。
「・・・・其方の兄達、つまりあそこに居るタキシード姿のポップが結婚をするという事は・・・つまり・・」
「大戦は終結して私達の世界では三年の月日が流れ、世界は落ち着き見せ兄達も丁度良き歳となったので結婚をしたのです。」
「ふむ・・・」
　これにも嘘は無いだろうと判断をしたのだがもう一点ある。
「その奇跡にも等しい薬を使わぬほどに、其方達の世界の大戦は楽であったのか？」
　それは当然の疑問であった。この世界での大戦は魔王軍のみならず地上界のモンスター全てもが敵となり、地上界の大半が蹂躙され市井の民達に多数の犠牲が出ている中、ダイ達も何度も死にかけそんな奇跡の薬があれば使いたいと思った時が何度あったか知れないだろうに、残っている事に疑問が残るのをティファは得心した顔で答えた。
「私達の世界でも確かに過酷な戦いで、全滅しかけた事もありましたがその度に周りからの助けを得ることが出来、これの出番は無かったのです。」
　あの当時の事を思い出せば、確かに辛くて何度逃げたかったか知れないがそれでも大勢の者達が手を差し伸べてくれたことを思う度に、ティファもポップも、そしてバランを見ているチウの胸にも温かさが生じる。
　あの時の絆が、今自分達を生かしてくれたのだと。
　その言葉に、この世界の勇者一行の・・・・特にダイの胸の内側を抉ったとは知らずにティファは話を進めていく。
「この薬故に私達はこの世界に連れてこられたのでしょう・・・ようするに薬のついでと言いましょうか・・・巻き込まれたと言いましょうか・・・どちらですか？」
　自分達はまきこまれたのだと主張するのかと思いきや、ティファの

最後の言葉は―誰―かに問いかける者であったのを、バーンは訝しげにしたが、ティファはこの一連で確信を持った。
薬はこの世界に来た瞬間に、自分の手の中瞬時に消えた。おそらくその時に使われたのだろうと推察をし、そろそろ効くだろうというカウントダウンをしてみればあっていた。
そしておそらくチウの頭の中に響いた声というのは―ゴールデンメタルスライム―の姿をして今ダイの肩に止まっている神の涙が起こした奇跡だ。
自分達の世界ではゴメちゃんは完全お留守番にしていたのでチウとの接点はあまりないが、チウが島に遊びに来た時会っているので聞きおぼえがあるという言葉はきちんと当て嵌まる。
そして先程空からこの場所をつぶさに見た時、この世界のゴメちゃんの事もきちんと見ており、その時と今のゴメちゃんは若干ではあるが縮んでいる。
つまりゴメちゃんが自分の手の中にあった薬を使われた後に起きてしまったイレギュラーを如何にかして欲しいと、瞬時にチウの優しい性質を見抜いた誰かに、助けを求めるように指示を受けたのだろう。
神の涙とはいえ原作を読んで感じた事もさることながら、普段一緒に入るゴメちゃんからも・・・言っては何だが高い知性は感じられず小難しい事への対処法は出来ない・・せいぜいが小学生に高学年くらいの知能ではなかろうかと見積もっている。
それに自分達をこの世界に呼び出すという事をしたとしたら、ゴメちゃんはもう力を使い果たし、自分達を連れ出した時点で消滅していなければおかしい。
―二人―いるのだ。
一人は薬と自分達を連れ出した首謀者と、その後のフォローした神の涙のゴメちゃと、もしかしたらもっと関わっているかもしれない。こんな時空を超える大規模な事がなされたのだから。
神隠してきた事は、少なくとも自分が知る限りでは奇跡的なアイテム一つや人物が一人か二人であり・・・自分のような大魔王の魂持ち

なぞという言っては何だが超レアアイテムにも等しい物を時空移動させられる力が果たしてあるのか疑問だが、首謀者として挙げられるのは
「この現世に顕現してはいただけませんか？
私達を世界から誘拐したものとして弁解していただけると助かりますよ？」
ティファはその者に当然怒りを覚えている。普段人助けが過ぎると言われている自分でも、これは許容できる範囲を完全に逸脱しているのだから無理はなく、自然と語気強くその者の名を呼ばう
マザードラゴンと・・・・・

小石の投げられた世界・・・・原因やっぱり私・・

マザードラゴン

その名に少年ポップとダイは苦い顔をしたのをポップは見逃さなかった。

まるで聞きたくも無いという名を聞いてしまったかのように・・・何故だ？聖母竜は全ての竜の騎士達の母であり、少なくとも自分の知るバランとダイとティファは時折テランのあの湖に献花に行きメルルの案内で像が祀られている神殿に祈りを捧げに行っているのに・・

なんか俺の御婆ちゃんみたいだと思うとさ、父さんとティファと一緒に行きたくなるんだよ。

そしたらダイ君・・・私をお孫さんのお嫁さんだって紹介してくれる？

うん！それいいねレオナ!!

おのれの命を賭して竜騎衆三人を蘇らせる手助けをしてくれた偉大なる母を、バランとダイとそしてティファは尊敬し敬愛の念を抱いているというのに、この世界の者達・・・特にダイが浮かべているあの表情は何だとポップの疑念を置いて行くように、ティファの呼びかけに答える様に空に光が満ちた

「子よ・・・異界の竜の・・・」

その姿は荘厳であった。光り輝く竜の姿に表情は聖母竜と呼ばれるのに相応しく慈悲に満ち溢れ、さしもの魔界の神と呼ばれるバーンも、長年世界を支えた者に対していきなり攻撃をすることはしなかった。

如何に地上を滅して天界もその余勢を以て討ち滅ぼそうと目論んでいようとも、それなりに敬意を表しても良かろうと・・・最早竜の騎士バランとその子供は―敵―にもならないという余裕も手伝っているがそれは兎も角、バーンとても暫し聖母竜の言葉を拝聴しようとしたのだが・・・

「持って回った言葉も感動もいりませんよ。」

・・・・・はい!?

「その・・・異界の・・・」
「単刀直入に聞きますのでサッサと答えてください。貴女ですか？兄達の引き出物を―盗んで―ついでの様に私達を―誘拐―した者は？」
「ぬ・・・ゆ・・・竜の子よ！私の話を・・・」
「言い訳は結構なので答えなさい!!私達が命を懸けて守りし世界にて！幸せなる時間を過ごすはずであった事象全て壊したのは貴女かと私は聞いている!!
　神だから許されるとでも？」
　ティファの直情的とも言うべき、尋問とも呼べそうな問いに、数千年間三界の調停者を生み出し見守り、時に奇跡を起こして世界を見守って来たと自負していたマザードラゴンは困惑をした・・・情報では・・・この娘は、目の前にいる竜の子に連なるティファは命を慈しみ大切にしている子の筈なのに・・・この冷たい気配は何としたことか？
　まるで敵を見る様な眼差しを何故向けるのか！自分の言葉を聞いてくれれば、自分が伝え聞いた―ティファ―という娘であれば手を貸してはくれまいかとも思っていたのが・・・
「問います、あの万能なる万能薬の事を何故知りえたのですか？他界同士の交流がある世界はごくまれにあるそうですが、少なくとも私の知る範囲内ではそんな話は聞いた事ありません。
　また神聖を帯びた神級のアイテムであれば、その世界の外に気配が漏れ出て察知される事もごく稀にあるとか。
　しかし私の作ったものは直ぐに封印を施し、誰が見ても効能は分からない筈なのですが？」
「・・・・子の・・・」
「私はこの世界の貴女の子孫ではありません。子と呼ばずにティファと。」
「・・・ティファ・・・貴女の全てを、―私―は知っているのです・・」
　ティファの情け容赦のない追撃に萎れたマザードラゴンの言葉に、それまでティファの冷徹さに戸惑っていた全員が、その言葉に驚く。
　異界の物を知る・・・そんな力をマザードラゴンが持っているとす

るならば、地上がここまでになる前に打てる手が幾らでもあったのではなかろうかという当然の疑問と共に向けられる驚愕の視線に、マザードラゴンは静かにティファの問いに答える。
「この世界は貴女方の世界と非常に近いのです。―世界の性質―が似通い、かつ近くにある世界同士で互いに存在している神々であれば、情報を共有することが可能なのです。」
それは本当に、神話の世界の話であった。
世界の性質と言われたティファは、それはここで言えば―ダイの大冒険の世界―であろうと理解して目線でマザードラゴンに話を促す。
曰くただ力を持った目の前にいるバーンや、冥竜王と呼ばれるヴェルザーにもこの力はないそうだ。
真に神としての権能を持ち、―時空―の概念を理解しかつ世界の性質が似通う世界に、己の同じ存在がいる事が不可欠だとか。
ダイの世界であれば当然竜の騎士が存在し、マザードラゴンがいるのは共通事項であり
「竜の騎士の紋章に、代々の竜の騎士の戦いの歴史が蓄積されているのは貴女は知っていますか？」
「それをして竜の騎士はその場の戦闘における最適解を瞬時に導きだし、己の敵を打ち取れると。」
「・・・・その通りです。その紋章の中に蓄積される戦闘データーを強化するべく、―私達聖母竜―は時空を超えて情報を共有し合うのです。必ず三界を揺るがす敵を討たせるべく・・・」
それは知識領域における禁忌事項であり、天・地・魔界の者達に知られてはいけない事柄をあっさりと言ったマザードラゴンの言葉に少年ポップ達とポップとチウは無論の事、キルバーンとミストバーンもが驚く中、バーンとても信じられないものを見る目を向けた。
神隠しがあるのであれば、確かに途方もない話ではあるが無いという事も無かろうと納得がいくが！そのような秘っされた話を何故スラスラと話すのだ・・・・もしや・・・
「貴方は・・・寿命が迫っているのですかマザードラゴン？」
まるで自分の疑念を代わりに聞くティファの問いに、マザードラゴ

ンは首肯した。
「そこにいるバランを最後に、私には最早竜の騎士を産む力はありません。
それはもうすぐ私の消滅を以て知られる事・・・隠していても意味は無いので正直に応えましょうティファ。」
それは告解であった
隣ともいえる程に近い世界にて、異色の竜の騎士の子がなした事に自分は驚愕をした事から始まった。
それを知ったのはこの世界で自分が産みせしバランが、悲しい事に愛憎に囚われアルキードを滅ぼして少し後の事であった。
失意を覚えながらもその頃の自分にはまだ力が残っており、ならば次の世代の子に少しでも良きものを継がせてあげるべく、自分は隣の世界のマザードラゴンの思念に触れた。
その時の隣接する世界のマザードラゴンは、バランと―ティファ―の願いを叶えるべくその身を賭して奇跡を成し誰がために肉体は消滅してしまっていたから。
その時のマザードラゴンに、バランの戦闘経験ではなく、ダイとティファの戦闘経験を貰い・・・・それと同じくらいに―孫自慢―をも目いっぱいされたのだ・・
「余程貴女という存在が嬉しかったのでしょう。貴女の歩いてきた道を、想いを、成した事をすべて私に教えてくれたのですよ。」
その時の事を思い出し、マザードラゴンは場違いだと分かっているがつい苦笑してしまう。
本当に・・・孫自慢をする祖母のようであったという言葉に、ティファ以外の一堂呆気に取られたのはきっと悪くない・・・・神様に自慢される娘って何？
「・・・・つまりこのあの薬を作ったのが貴女に連なるとも言っても差し支えない私が作ったから・・」
「はい、ティファの考える通り、そのおかげで私はその情報を得ることが出来たのです。」
さらりと言われた言葉に、ティファの眉間に皺が寄り、声がさらに

低くなり
「・・・もしかして・・・・私と貴女は―マザードラゴンと竜の騎士―の親子関係という名の繋がりで・・」
「貴女の考えている通りです。あちらのマザードラゴンと私の性質は同一ともいえる程であり、貴女とその・・・あちらのダイとも繋がれます。」
　それは・・・そしたら!!
「・・・つまりこの度の騒動は、全て私という媒介を通したと?」
「・・・・・貴女にはすまないとは思いますが、貴女の世界の壁は何が起きているかは知りませんが非常に薄くなっているのを私にとっては幸いとして、薬を手に入れる為に貴女があの薬の近くに来た時、貴女を通路として薬の入った宝箱に陣を展開したのです・・」
「私達は・・・・」
「言い辛いのですが、貴女方がここに来させる予定は私には無かったのですが・・・・手をお貸しくだされた天神が貴女方も欲したので。」
　―様々な要因―で、本来であれば辛うじて大魔王に勝てる筈であったこの世界の命運が、負ける方に傾いてしまったのを焦った神の一人がティファ達を・・・もっと言えばティファの力を借りようと連れて来てしまったのだと、マザードラゴンが悲しい顔をして申し訳なさそうにするのを、本当に何度目か分らない驚きをこの世界の勇者一行と魔王軍がする中、ポップとチウはマザードラゴンの言い分に腹が立った!
　俺達の大切なティファは!他の世界が困ったからと言って召喚されて使われるアイテムだとでも言いたいのか!!・・・・この事を―向こうの全員―が知った日には・・・この世界の全てを滅ぼしそうだとも思う中ティファはというと・・・
　・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ!!!!もう!!!!
　つまり何??!!!この騒動の原因全部私なの・・!!!???!!!
　私って言う存在は厄ネタか何かなの・・・・今日はにぃ達全員が幸せになって・・・みんなが笑って祝う日だというのに・・・・肝心な時にどうして私は・・・私のせいで・・

ティファは怒っていた。それは兄とチウを危険に巻き込んだこの世界と、それを引き起こしたマザードラゴンと、手を貸した神と・・・おそらくは父を死なせたくないというダイの心の底の願いをゴメが拾い薬のみならず自分をも転移させる事に無意識に神の涙としての力を使ったのだろうと予想が付く。

何の事ははない・・・・厄介事の原因は・・・・いつだって自分のだと、ティファは己に対して怒りを沸かせていたのだ。

小石の投げられた世界：違う！

私が・・・私達がした事は早計であったのだろうか・・・
自分の告解を聞いた後、周囲の唖然とした様子を他所にティファ自身は俯いている。
まるで・・・自分自身が罪を犯した罪人であるかの如く
罪を犯したは此方であるというのに・・・・どうやら自分は、他世界のマザードラゴンの話で得て想像したティファと実際のティファを・・・・
「・・・・ティファよ・・・申し訳ない・・・・」
それは告解ではなく心からの謝罪。それまではこの世界の為にと神たるものとしてどこか世間を知らぬものの横柄さがのぞいていたのが、一変して後悔に濡れた声音に、俯いていたティファが顔を上げてそこに見た者は、確かに罪を意識した者の表情が浮かんでいた。
何を今更と、チウは兎も角ポップがその表情が癪に触って火に油どころか、メラゾーマにイオラも併せて撃たれた気分に陥った。
今更か？この世界如何にかする前に！俺の妹をアイテム扱いありきの対応した時点で・・
「・・・・それでも・・・・私は―竜の子等―を守りたかった・・・・長年を神として過ごした者として愚を犯しても・・・・それでも・・・」
だがその怒声は、響く事は無かった。
ポップとても鬼ではない・・・・さらに言えば、ティファの周りには自然情が深い者達がさらに慈悲の心を持つのが当たり前となり・・・―消えかけながら―後悔をしながらも、我が子を守りたいと泣く母にどうしても怒り切る事が出来なかったのだ。
「・・・・・・貴女を許しましょう、他界のマザードラゴン。」
そして・・・あぁ・・・どうしてあいつは・・・―いつもの如く―己を殺しかけようとも利用しようとも策謀をかけようとも、理由があり、どうしても守りたいものがあったのだと言われてしまえば妹は赦してしまう・・・・
その言葉に、マザードラゴンはくシャリと顔を歪めて泣き濡れ

る・・・・申し訳なさとそして・・・叶うのであれば・・・
「た・・・・の・・・・」
マザードラゴンは最後まで子を案じる言葉を言いかけるが、それは叶わず、それでも・・気のせいであろうか・・・ティファの首が縦に振られたのは・・・・そう・・見たかったのか・・
地上界にあっての最後の奇跡を具現化するマザードラゴンの姿に、ダイも少年ポップ達はもとより、一つの時代の終焉を見送るようにバーンとミストバーンもが空を見上げる中、一つの風切り音が鋭くなった。
「・・・・・おや残念、避けられてしまったね～。」
「・・・・・・てんめぇ・・・何しやがる!!」
「ふっっふっふ怖い怖い♪ここは戦場で、君達はこの世界の者ではないけれども僕隊の味方でもないでしょう？
敵を殺そうとすることに何しやがるも何もないじゃないか～。」
誰もが一つの時代を支え続ける事に命を懸けた尊きものを見送る中、死神だけが機と捉えてティファの身を大鎌で刺し貫こうとしたのをティファは飛び退り、気付いたポップがすぐさまトベルーラを発動して宙にいる妹を抱えてダイの横に降り立ちティファを下ろし名がら怒りに燃え上がるのを、キルバーンは敵を倒して何が悪いと平然と嘯くのを、少年ポップの怒声が響き渡った。
「ふざけるなよこの三文死神が!!!!」
「おやおや、君の仲間でもないのにどうしてそこで君が起こるのさ魔法使い君～。」
「こいつら・・・この人達は!!何も知らずにただ連れてこられただけだろう!!!巻き込まれただけだろう!!!確かにバランを生き返らせたのはそこの子供が作った薬だろうが!!お前達が戦う相手は俺達だろうが!!!!」
少年ポップの火を噴くような言葉に、それまで事態に追いつけずに動けなかったマァム・ヒュンケル・クロコダインもまた動き出し、そして三人の事を思い至り詫びを言う。
自分達のポップの言う通り、この三人は自分達の世界に・・・さら

に言えば!自分達が不甲斐ないばかりに大魔王達に負けそうだからこそ連れてこられてしまった被害者ではないか!!
「私達のせいでごめんなさい・・・・本当に・・・ごめんなさい・・」
「すまない・・・お前達の幸せの時間を・・」
「我等が不甲斐ないばかりに・・・」
ダイとバランとその側にいるティファ達を守るように、ヒュンケルとクロコダインが最前列となりマァムとポップが最後の盾となるように敷かれた布陣に、ミストバーンは大勢がどう見てもついているだろうにいまさら何をと鼻を鳴らすが、バーンは其の気概を楽しみそして
「やぁ～勇ましいね～。そこのタキシードのお兄さんの力を借りればどうにかなると思ってるのかな?」
「ふっふっふ、さっきまで戦う戦わないで言い合ってたのに～人間って馬鹿なんだねキルバーン。」
「そうさ～、覚えておくといいよピロロ。人間というのは一生懸命で健気でおバカさんが多い・・・」
「・・・どうして・・・・・」
キルバーンはどう見ても勝ち目のなくなった勇者一行達を嬲り始めるのを、か細い声が割って入った。
「どうして・・・・そんなひどい事を?」
「・・・チウ・・」
「チウ君・・・」
それはティファと同じくらいに―キルバーンさん―を慕っているチウであった。
チウにとってはもう限界であった。
いきなり自分達は見知らぬ場所に突如として連れてこられ!その理由が慕いしティファさんをアイテム扱いするかの如くだと知らされ怒りを覚えたがそれだけではなく・・・違うのだ!!目の前にいるミストバーンは分からないが・・・大魔王と死神が・・・・自分が大好きな大魔王さんとキルバーンさんと違って酷い人達で・・・・そして・・そして・・

「貴方は・・・・ティファさんを殺そうとしたんじゃない・・・・嬲ろうと・・したんですね・・」
　自分も武闘家の端くれで、対処は出来なかったがキルバーンの大鎌はティファさんの首を切り落とそうとしたのではなく、その身を刺し貫いて宙づりにしようとしたのが・・分かってしまったのだ。
「ふっふっふ、やっぱり君は純粋な子のようだね～。あ～でも予想よりも戦士としての目は養われているか～。」
　自分の言った言葉にも悪いと思っている感情はどこにもなく、それどころか楽しんでいる・・
「正解だよ大ネズミ君。僕はその女の子には腹が立ちこそすれ興味は無いんだ。僕の親友・・あぁ、ミストの事を相手にもしないで虚仮にしてくれたそのお礼をしようとしたんだけれども失敗しちゃったんだよ。どじったね～。」
　ヒョイと肩をすくめる仕草は同じなのに・・・・
「それでもさ、戦場ではこんな事は日常茶飯事なんだよ？弱者は強者に一方的にいいようにされるなんてそこらで転がっているよくある話さ。」
　自分を教え諭すような声音も一緒なのに・・
「僕はね、強者と戦う事になんて興味は無いんだよ。獲物を罠にかけ、強くて一途に鍛え上げてきた者達が、成す術もなくなって、それでももがく様と絶望に満ちた顔を見るのが大好きなんだよ！ちょうど今の君のような顔がさ!!!!」
　その言葉も思惑も・・・酷くて酷くて・・・
　チウを嬲り上げ、悲しみと絶望に彩られた表情に大粒の涙をこぼし始めたチウ見てキルバーンは、己の中の嗜虐性に火をつけられ興奮して声高に秘っしていた想いをぶちまける。
　今までこんなに興奮をした事は無かった！あの大ネズミ・・・チウと言った、あの子に言ったように、自身を鍛え上げた強者程、自分のトラップに捕らえられた時の藻掻き苦しむ様は凄まじく、最後にはどうにもならないと知らしめられた時のあの表情を見ながらスッととどめを刺すときの悦楽を追いかけているうちに、自分は死神となっ

た。
　それは確かにヴェルザーの命を受けて大魔王の側近としての仕事を振られたにすぎないが、それでもこの悦楽は自分だけのもの!!誰の思惑も絡まない自分だけの特権が・・あのチウという子のあの表情は涙は・・・あぁ・・あぁ!!欲しい!あれを玩具として手元に置いておきたい!!この世界の終焉を、阿鼻叫喚を見るたびにあの子はどんな顔を晒してくれるのだろう!いつまで心を保つことが出来るのだろう？
「僕の下においでよ大ネズミ君!君みたいに弱い子位、バーン様は飼う事を許してくれるさっ！
　バーン様、僕は今まで仕事をすれども報酬は全ていらないと言ってきましたが僕はあの子が・・」
　　ふざけた事を抜かしてんじゃねぇぞ!!!!!
　己の中に生じた醜い欲望のままに口走るキルバーンの言葉は、床にひびを入れる程の闘気を混じらせた怒声が遮った。
　言葉を発したのは、ダキシード姿のポップが、いつの間にかヒュンケルとクロコダインの前に立ち、目には殺気さえも浮かばせている。
　自分の妹を嬲って殺そうとし・・・挙句が・・・
「・・・・見んじゃね・・」
「うん？」
「手前ぇみたいな奴が!!チウに目を向けんじゃねぇって言ってるんだよ!!」
　その瞳には殺気とそして燃え上がるような炎が踊っているのを、キルバーンは打って変わってつまらなさそうに自分の望みを言おうとしたのを遮った輩に答える。
「なに?僕が言った事が気に入らないのかい?」
「・・・当たり前だろうが・・」
「ふっふっ、どう見てもここの大勢は決しているだろう?君達が向こうでどんな風に大戦を終わらせたかは知らないけれども、今の君達は万全に闘える状態ではないだろう?」

キルバーンの言う通り、大戦時の装備品は全てなく・・・ブラックロットはおろか輝きの杖も無い・・・・魔法は・・・・仕方がねぇ！

ゴォウ!!!

「おいよせよ!!!」

「駄目よ！今すぐにそれを消してちょうだい!!」

「やめてポップ!!」

「ポップ兄!!!」

「・・・おや・・・・魔法使いがグローブもつけないで発動させたら・・」

「あぁ・・手は無事じゃぁすまねぇな・・・」

悲痛な声が上がった。

それはポップが、左手にメラの炎を左手にヒャドの氷を出したからだ。

当然勇者一行はその呪文で何ができるかを知っている。自分達魔法使いの最大呪文極大消滅魔法・メドローアを！手袋なしで行えば手が無事で済むはずがない!!

それを消させようと、少年ポップとマァムと共に、チウとティファは悲鳴にも似た声で止めようとし、すぐ後ろのヒュンケルとクロコダインもポップを押しとどめようと必死に言葉をかけた。

「よせ!!穢らわしい言葉を大切な仲間に掛けられた怒りはよく分かる!!しかしあれの相手は俺達がする!!」

「その魔法をすぐに消すのだポップよ!!!」

このタキシード姿のポップもまた、自分達のポップと同じく仲間の為にその身を、命を懸ける漢であると悟った二人の脳裏には・・・・かつて記憶を失ったダイを守るために、地上最強と謳われた竜の騎士バランを相手にメガンテをしたポップの姿が脳裏に浮かびぞっとした！

近頃何かがダイとポップの間をぎくしゃくとさせて冷え込んでしまったが・・それでも、仲間を思う心はそのままのポップと、目の前にいる大人になったポップは同じようで・・グローブなしの魔法の痛みをものともせずに！キルバーンに向けて不敵な笑みすらを浮かべ

ている!!
「・・・・生意気な目だね・・・死神としての僕の実力を疑って・・・」
「違う・・・」
「・・・・違う?何が?僕が死神だっていうのが間違っているとでもいうのかい?」
「そうだよ。」
「・・・・益々生意気だね～。いいかい、僕は数多の・・」
「手前えがどれ程の命を嬲り殺してきたかは俺は知んねぇ・・・それでもな・・・」
ポップは左右の炎と氷に手を焼かれ凍らせられる痛みを感じながらも、心が凪いでいるのを感じる。
それよりもたった一つの想いの方が強いから。
こいつは、今目の前にいる奴は―死神―なんかでは決してない・・・
俺の・・・俺達にとって死神とは・・・・
ー君達のような立派な戦士と戦えて光栄だったんだ。今度は立派なお婿様・王様になっておくれよ。ー
俺は・・・・そうか・・・・
ポップは怒りながらも自分の中でモヤモヤしていた一つの思いの正体が何であったのかをはたと知った。
大戦時には敵対しながらもそれぞれ尊敬しても自分の手で倒したいと思い定めた相手がいた。
ダイにとってそれは大魔王バーンであった。最後のボスだからではなく、魔界を命を懸けて救わんと地上を消そうとしたその想いに、ダイは敬意をもって受けとめ其れでも討つ道を選んだ。
自分にも守りたいものがあり、守り抜くために。
ティファはその想いを魔王ハドラーに向け、ヒュンケルはかつての師であったミストバーンに、クロコダインとマァムはそれよりも仲間全員を守る方を選んだが・・・自分は、癪ではあるがキルバーンだったようだ・・・あいつはティファを狙った変態で疫病神で、それでも天晴な敵であった。
罠を使おうがそんなのはどうでもよかった!敵であるのだから、ま

して一つの世界の為に闘う戦場において、敵を倒すことを第一としたのだから!!
確かにティファを相手に穢らわしい事を一度言って来たが・・・・あいつには歪んでいてもティファを本気で愛していたのだと・・・そんなキルバーンを倒すために、自分は様々な戦い方を学び、そして勝ちたかった!!ティファの心の一つを掴んだあいつを、いつでも大人の余裕を魅せつけてきたあのいけ好かないキルバーンの背中を必死に追っていたようだ。
あの自分の中で大きな存在になった敵であった、キルバーンを追い越さんとして・・・それに比べればこいつは・・・
「衣装がダサい!!!」
「・・・・はい?」
その言葉に、目の前のキルバーンは唖然としたが俺は本気で言ってんだ。
自分達の死神の衣装とは・・・確かに奇抜なデザインであるがあの艶やかな深みのある赤と黒の色遣いは良いとは思っていたが・・・こいつの黒に藤色はダサい!!そして何より
「言葉遣いも優雅じゃなくって気障ったらしい!!」
「・・・・・お前は・・」
「余裕の仮面が?がれるのも随分と早ぇえんだな・・・よく聞けよチウ!お前が泣く必要なんかねぇ!!
こいつみたいな奴は死神じゃねぇ!!死神なんて上等なもんじゃねぇ!!!
こいつみたいのはな・・・」
ポップはメドローアの準備をしながら、思った事を全部ぶちまける事を選んだ。
今までは、他所の世界の事柄に首を突っ込むかどうかを悩んだがもう知るもんか!!
チウが泣いている!!
きっと大切な方のキルバーンを思って泣いてんだ・・・だったら俺が宣言してやる!!

ーそうとも、言っておやりよ魔法使い君ー

不意に、自分達の死神の声が自分の思いの後押しをしてくれた気がするのは・・きっと気のせいではなんかじゃない。

あいつだったら！こんな奴を、敵であっても人を嬲りものにしてチウを泣かす奴を許すもんか!!

だからこいつは違うんだ!!!

「お前みたいな奴はどぐされ外道って言うんだよ!!分かったか馬鹿が!!!!」

いつでも目の前の外道に向けてメドローアを撃てるように構えながら、若き炎の魔法使い二代目大魔導士ポップが吠え挙げる。

小石の投げられた世界：天秤の傾きの行方

ふ・・・っく・・

ポップの苛烈ともいえる痛罵に空気は凍り付き、いつ開戦されてもおかしくない気配が漂う中、少年ポップ達も覚悟を決め、いまだに父バランの傍らで座り君動けないでいるダイを囲みながら構え、言葉を放たれたキルバーンは殺気の塊と化し大鎌を持ち直してトラップを発動させる機会を伺うなか・・・・・場違いな声が流れた。

「はっはっはっは!!ポップ兄の言葉もう最高すぎます!!わ・・笑い死にしたら恨みますよポップ兄!!!」

小さく微やかな声はやがて大きくなり、遂には口元を抑えて我慢していたティファは我慢できなくなりお腹を抱えて大爆笑していた!!

「・・・・何がおかしいんだい小娘さん!!」

「ふっくっく・・・失礼、しかし本当にあなたは口を開けば開くほどに襤褸が出て滑稽になりますね～。」

タキシード姿のポップに言われた事だけでも許しがたいというのに、さらに追い打ちをかけるようなティファと言う小娘の笑い声は本当に気に障るとキルバーンが何かを言いかけるのをポップの言葉が被さった。

「ティファ!お前チウが穢されたって言うのに笑っている場合かよ!!」

なんとキルバーンに向けられた怒気が、自分の妹分にまで及んだのだが、その妹分はバーンですらもがポップの語気と覇気とそして床にひびを入れる程の魔法使いにはありえない程の闘気の質と量に警戒心を高めているというのに、怖れる風もなく去れりと流した!

「笑っている場合ではないけれどもポップ兄・・・私怒っていいの?」

「・・・・あん?」

「いいの?―篩の篩の塔―で、あの敵にしたみたいなことを今してもいいんならするよ?」

「ティファさん???!!」

ティファの謎のそのような言葉に、一番に反応したのはキルバーン

の言葉の刃で切り刻まれかけたチウであった。
あれは・・・あの時のティファさんは・・
「駄目です!!ティファさん怒らないでください・・・・さっきの言葉に、あの・・・目の前の人の言葉に僕は嫌でした・・でも!あの時のティファさんを見るのはもっと嫌だ!あの時のティファさんに・・・ならないでティファさん・・・。」
心擦り切れる中に会ってしまった相性の悪すぎる敵に対してティファした事は、壊れかけていたであろうティファの心にひびを入れる程荒らしたのを間近で見ていたチウは、キルバーンの言葉を忘れる程に懇願をする・・もう、あの時の悲しいティファを見たくないと・・・自分に付けられた心の傷よりもティファを優先したのだ。
小さな手でティファのドレスを握りしめ、怯えて流した涙よりも大粒の涙をぼろぼろと流し、兄も先ほどの言葉の愚を悟る。
ティファが、怒っていない訳がないではないか・・・・
「・・・・・・前言撤回・・・・お前は絶対に怒らないでくれ・・」
「うん・・・・そうする。だから大丈夫だよチウ君。」
「ティ・・・ファ・・・さん・・」
笑いながらもティファの目に笑みどころか熱量は全くなく、冷たい瞳でずっとキルバーンを見ていた。
許さない、許せない・・・・しかし・・・それをするのは―自分達―ではない・・そうあってはいけないのだと、ティファが我慢していれば兄ポップが痛快な言葉であの不快野郎をぶった切ってくれてすっきりとしたところで、自分のスカートを握りしめている手をそっと包み込み、そして微笑む。
「チウ君、もう私は怒ってないよ。」
「・・・本当に?」
「うん、にいが代わりに怒ってくれたからもう大丈夫。それよりもチウ君は大丈夫?」
「僕も大丈夫です!」
瞳を柔らかくしているティファに、本当にもう大丈夫だと確信したチウはティファのドレスを離して大丈夫だと元気いっぱいに答える。

ティファの様に、もう大丈夫なのだと示すように。
「そう、ちょっとごめんね・・・・にぃメドローアを引っ込めて・・・・しないと強制的に消さすよ？」
「い!!??たってティファ!!消すって無理だぞ!!メラとヒャドもう組み合わせて通常の魔法みたいに霧散させられねぇぞ!!??」
妹の頼みであっても・・・たとえその内容が怖いとは言っても！混ぜ合わせて生み出されたメドローアは放たない限り消えねぇぞ!!
その言葉にティファは溜息をついて、仕方がないと助言をする。
「あそこの服装・性格悪趣味野郎に撃てばいいでしょう。」
「はぁ!!??・・・・・その後の事考えて・・」
「いるからさっさと撃つ!!!」
「あぁもう!!!こん畜生が!!!」
自分で蒔いた種とは言え、あのどぐされ外道野郎言った言葉は後悔してはいないが、メドローアを構えるまではやりすぎたかとほんの少しだけ後悔をしていたポップは、妹の言葉を信じてキルバーンに向けてメドローアを放った。
その威力は、かつてハドラー親衛騎団に放たれた物よりも小型であったのものの、その威力を知る少年ポップ達はあの三文死神も無事では済まないと期待したが・・・メドローアが当たる瞬間に消えた・・・否！空間が開いて飲み込まれてしまった!!
「これは返すよ愚かな坊や。」
何をするかと思えば、空間を自在に開け閉めできるこの僕に向かって大呪文は夏とは馬鹿な事をとほくそ笑みながら、自身の呪文で死んでしまえと空間を開けようとしたが・・何も起きなかった。
空間を開けたはずなのに・・・まさか!!
キルはある疑念を抱いてこの空間に仕込んでいたトラップを発動させようとしたが・・それすらも発動をしなかったのだ！
「・・・何したの？」
「あん？」
「何をしたんだい・・・空間を閉鎖させる呪文でも君達の所には存在でもするのかい？」

あ～・・・・うん分かったわ。
キルバーンの静かな怒りの声で発せられた言葉に、チウを含めて周りが何事かと注目をされたポップはとっても納得をした。ティファが言っていた策があるとはこれだったか。
ティファが、ハイ＝エントの結界術、ジ＝アザーズで空間閉鎖をしたのだろうと。
どうやらティファは、メドローアを何とかするよりも自身の能力が使えるかを確かめたかったようで・・・・魔法の発動はトベルーラが出来たから分かっていたが・・・ハイ＝エント使えなかったら・・・ティファなら次善策もあんだろうとがっくりしたくなったが、メドローアを消した自分をヒュンケルが素早く腕をつかんで後ろに下がらせた。
「・・・・俺達の為にここまでしてくれたのだ、後は後ろにいてくれ。」
「今べホイミかけるから手を・・・・治ってる？」
ヒュンケルがポップを後ろに下げたのは闘わなくていいと示す為ともう一つ、マァムに回復呪文をさせる為だったのだが・・手にある筈の凍傷と火傷がもう軽減されている事にマァムは驚くが、少年ポップはある事に思い至りポップに対して驚きの中に畏敬の念が生じた。
手が治っている・・・それも自前で、それはすなわち
「あんた・・・・賢者か？」
「俺・・・よせやい、俺は―賢き者―なんて大層なもんじゃねぇよ。ただ回復呪文ができるようになっただけだよ。ほれ、俺なんて見てねぇで前向けよ。敵さん相当に頭に来てるだろうし・・・・その辺俺達のせいだわ・・・わりぃ・・・・」
まるで師匠がいるみたいだと・・・胸の奥からじんわりと何かがあふれて・・・生じた思いにポップは慌ててそこから目をそらすように前を向く。
確かに、痛罵されたキルバーンは兎も角、大魔王バーンもミストバーンの雰囲気が一変して・・・来る！
そう覚悟をしたのを・・
「大魔王バーン。最後に質問があります。」

・・・・・またあの女の子か!!
「ちょっと黙ってらんないのかよ!あんた命いらないのかよ!」
「ティファさん流石に今は不味いですよ!!」
「娘よ!流石に俺もそう思うぞ!!」
「・・・・黙っていられないのか小娘・・」
「本当に僕に惨殺されたいようだね・・」
ありとあらゆる方向からその発言やめてくれコールにもティファはめげずに、ティファは真面目な顔をバーンに向けている。
「・・・・聞くだけ聞こう・・」
・・・そこで答えると言わないところが大魔王と違うな～と思いながらもティファは気を取り直してきちんと問うた。
「ここにいる地上の勇者一行の子供達が闘うのは、魔王軍の侵攻絶対阻止なのは分かりますが、貴方は何の為に闘うのですか?」
「ほう?ティファよ、その問いに対する答えの対価として、其の方はいったい何を余に支払ってくれるというのだ?」
「おや、先程の返しですか。そうですね・・・・では一つ、そこにいるキルバーンがヴェルザーからの贈り物で実は―刺客―なのは知っていますよね。」
その言葉に、バーンとミストバーンは驚かなかったが、少年ポップ達は唖然とした。
バーンの名を冠した大幹部が!実はどこかの組織から送り込まれた刺客ですって何だそれはと・・・真っ当に育ってきた者には無理からぬ話だが
「それがどうした。」
あっけらかんとしているバーンの頭の中が絶対におかしいと思った者達は悪くなかろうがそれは兎も角
「彼の者の―動力炉―が頭部にありまして・・・・おっと!!」
ティファのその言葉の先を言わさんとばかりに襲い掛かるキルの攻撃をティファはやすやすと避けそして、振り上げられてきた大鎌が地面を抉った時、ティファはがら空きになったキルバーンの左脇を思いっきり蹴り飛ばしてバーン達とは反対方向の壁にたたきつけて、―

拘束―をした。
「あ、続き言いますね。このキルバーンの動力炉は頭の部分にあって中身は―ハドラーの腹部に埋め込んでいたもの―がある筈です。
取り扱いのほどは御存じのようなので、どうにかすることをお勧めしますよ～。」
ーキルバーンーの色々を知っているはずのチウとポップはティファの発言に衝撃を受けた！
あの野郎、ひいてはかつての人形だったあいつにもアレが、あの恐ろしいものが
俺のメドローア外れてよかったと、ポップは生唾を飲み込みながら外れたことを感謝する中、後でティファに色々問い詰めようと心に誓った。
そして情報を対価としたて受けたバーンの方は、ドレス姿で凄まじい事をしてのけた娘の言葉はそれ以上に衝撃的で、それは確かに対価となるものであったと納得をした。
キルバーンの事は後でどうにでもできるのでそちらは後に回して答えてやろう。
「礼として答えよう。余が大戦に身を投じたのはあれよ。
今更と世界を煌々と輝かせているあの素晴らしき太陽が欲しいが為よ！
神々は我等魔族を、力強きモンスター達を地下の魔界に封じ込め！惰弱という理由だけで人間達を優遇し太陽の恵みを人間に与えた！
ならば余はこの地上を人間諸共消し去り！愚かなる失策を犯した天界を消し去り、太陽の光を魔界に届ける！」
そしてその後に、真に魔界の神となるのだと絶対的なる自信と覇気に溢れた言葉に・・故郷どころか地上を消されると言われた少年ポップ達は、内容の大きさに飲み込まれかけた！
こんな途方もない規模の・・・世界征服を掲げていた魔軍司令官ハドラーの言葉がちっぽけに感じてしまう程の言葉に動きも思考も止まりかけたその時、溜息と共にガリガリと何かを掻く音がしたのでそちらを見てみれば・・どこかうんざりとしたティファがいた！

・・原作通かと、うんざりとしたティファをであった。
「・・・・・一応聞きますが、今魔界は太陽の恵みの無さや、地上が蓋をしているせいで魔界が滅びに向かっているとかそれ系ですか？」
「ふむ？・・・・魔界が滅びるなぞという絵空事を何故口にする？」
　ティファの物凄いうんざりとした声音の言葉に、バーンは不思議そうな顔をしてきちんと答えた。
「魔界は無事で・・・・太陽の恵みが欲しい・・・・消される地上は堪ったものではないでしょう。人の命をなんだと思っているんですか？」
「ふふ、おかしなことを言う娘ぞ。ここは其方のいた世界ではないというのに―虫けら―如きの命を何故心配する？」
・・・なんだと？
「人間なぞ最低だぞ竜の子よ。奴らは自分達を守る存在であっても自分達とは違いすぎる強き者を怖れ排除し疎んでやがては集団で排除しようとするものぞ。
―そこにいるダイ―が、身をもってその事を知っているのだ、のぅダイよ、人間は最早其方の中では守るに値せぬであろう？」
　今の今まで放っておいた幼き勇者に、バーンは優しいとも思える声音で話しかけられたダイの体はびくりと動き・・・泣きそうになっているのに満足をしたバーンは、取引を持ち掛けた。
「其方はそれ故に余に刃を向けていない。ここにいる者達を消しても、其方だけは残しても良いと思うのだがどう・・・」
「ちなみになんですが、地上を消すにあたって魔界全土の民達はその事を知っていますか？それについての対応も万全なのですか？」
「・・・なに？」
「地上を消す算段の方法は当然―私達―は知っています。その方法も、実行された時地上の砕かれた欠片が魔界に降り注ぐであろうことも・・・あぁ、安心してください。それは計測から導き出された事であって実際はきちんと防いでいるので大丈夫ですが、こちらではその辺どうなっているのですか？」
　折角自分が竜の子の変わり種を手元で飼ってやるという提案を邪魔したティファに、バーンはつまらなさそうにおざなりに返答をし

た。
「馬鹿馬鹿しい、地上の欠片すら避けられぬ弱き者を何故、余がいちいち気に掛ける必要がある。魔界全土に通達をするなどと戯言を。」
そんな事をすれば自分の目論見が天界に漏れてしまえば、薬どころかなりふり構わずもっと強力な手を打ってこられて阻止されては堪ったものではない。
そもそもが、魔界は強き者が全てであり、弱者を気にする必要が無いという言葉は
「お前・・・・お前は王なんだろう!!大魔王なんだろう!!??」
先程のポップの様に、少年ポップ達が火を噴いた。
自分達の住まう地上を消すだけでも許せないのに!自分の民すらも顧みないこいつが・・こんな醜悪な奴が存在していていいわけがねぇ!!!
少年ポップが、マァムが、ヒュンケルが、クロコダインが叫びあげるのを一頻り聞いたティファの心は定まり、闘気を乗せて手を一度叩いて静寂の場を生んだ。
その音は、少年ポップ達はもとより、聴覚が優れたバーン達の鼓膜が破けかける程であったが、ティファは構わずに結論を出した。
「つまり、貴方は弱い者差別をする—最低野郎—という事ですね。」
その言葉に、バーンの片目がピクリと動き、ミストバーンの怒気が上がっても無視をした。
「人間が最低ですか。私からすれば・・・・一つ経験談をしましょう。私は小さい頃から地上を旅するように回るのが好きで、その時には様々な—種族—に出会いました。
当然良い人もいれば、最悪な出会いもありまして・・・六歳の頃に持ち歩いていた傷薬で傷だらけだったはぐれ魔族を助けたら、背中に硫酸を浴びせられました。」
「・・・・硫酸を?」
「はい、私が人間の子供とみて、襲われた鬱憤晴らしをしたようです。私を見て憎々し気に人間風情が触れるなと言っていましたから・・・あれを治すの苦労しましたよ。七歳の時にはリンガイア周辺で仲良

くなったモンスターが洞窟案内しくれるというのでついて行ってみればドラゴンが居まして、驚いていたら案内してくれたモンスターに背中を押されて危うく食われかけました。どうやらあの辺一体のボスに、貢物として私をだまそうとしたわけ死でして。十歳の時には見目がそこそこいいようなので、親切に泊めてくれた老婆さんに一服盛られて奴隷商人に売られかけましたよ。」

どれも寸前で逃げましたけれどもねと・・・本人はあっけらかんとして言っているが、凄まじい生い立ち知った少年ポップ達はもとより、その類の事があったのを知りながらも詳細は知らなかったポップとチウも愕然とする中

「・・・其方何故世界を恨まずに魔王軍と戦い地上を守らんとした？」

当然生じる疑問をバーンがしたのを、ティファは笑って答えた。

「どの種族にも良い人悪い人がいるのは当然でしょう。私を子供だからと馬鹿にしないで、体の為になる栄養学という貴重な百ゴールドもする本を一ゴールドで売ってくれた港町のおじさんがいました。

助けてくれたお礼だと、身に着けていた最後の宝石をくれようとした半魔の人がいました。

一緒にご飯を食べて笑うモンスターも精霊も人も魔族も沢山沢山いてくれる世界のたった一部分だけを見て・・・私は世界を憎めなかったのですよ・・・昔も今もこれからも・・」

「それを、この世界でもすると？異界であるこの世界であってもか？」

危険だ・・・この娘は危険だと、バーンの中で警鐘が鳴り響く中言葉は続き、バーンは確信したことを敢えてティファに問う。

短い言葉ではあったが、その意図はティファには伝わった。

「仕方がないでは無いですか、私の中の天秤はすでに傾く方を決めたのですから。」

謎かけのような問いに返された謎の言葉に、バーンの表情は険しさを帯びら中、少女は笑う。

「どうやらこの世界の地上の勇者達は良い子のようですが・・・どうしますか？

そこで蹲り、大魔王の言葉にも憤慨をしない―情けない勇者―を置

いて行きませんか？」
「なん・・だと？」
「ポップさん、貴方が決めてくださいな。戦わない勇者を・・・」
「・・・・加減にしろ・・・」
「ん？」
「あんたが作ってくれた薬のおかげで確かに助かったさ!!そしてとんでもなく酷い目にあって来たのは分かったがな!!ダイの事をとやかく言うんじゃねぇよ馬鹿野郎!!!」
　切れた・・・もう知るか!!恩!?被害者だろうがなんだろうが!!戦わない情けない？ダイの・・・こいつがダイの何を知ってるってんだよ!!
「こいつがどれ程今まで・・・いままでどんな・・・」
「・・・・ポップ？」
　言ってやりたい事は沢山あるのに・・・言葉にできないで、それでも、―弟分―を馬鹿にする奴が許せなくて涙を流すポップを、ダイは初めて顔を上げてポップを見た・・・どうしてポップが泣くのかがわからなくて・・・
「ふむふむ・・・どうやらダイ君とポップさんはお話合いをきちんとした方が良いようですね・・・少し静かなところに場所を移しましょう。ポップ兄!―陣―出します」
「ちょ・・・ふざけてんのかよティファ!!あれは・・・」
「大丈夫です。」
　今の魔法使いの言葉と、それに伴う様に武闘家と戦士達が自分の発言に怒りを見せている。
　戦いを放棄している勇者を、それでも大切な仲間だと言外に知らしめて。
　ならば答えは決まったと、兄ポップに―移動手段―を通達すれば怒られたが大丈夫である!
「あれきちんと改良したから、―私―も行けるから。」
「・・・嘘じゃぁ・・」
「信じて。」

「・・・分かった・・」
「・・・・どこに行こうって言うのさ・・逃がすわけないでしょう。」
「おやおや。」
―陣―を構築するために、ジ＝アザーズを解いた瞬間キルバーンが襲う。
こいつの首だけでもと、狙ったところをまたもや邪魔が入った！
「キルバーン!!」
ヒュンケルが槍を繰り出し、大鎌を跳ねのける。
この少女の先ほどの言葉は自分達を試し、そして―自分達―を選んでくれたのだと確信をした。
静かな場所に、この少女達も行くと言ったのだから。
「助かりますヒュンケルさん！勇者一行の方達に要請します！一分持ってくだされば結構!!倒さなくても負けないで防いでくだされば・・・」
「メッラゾーマ!!!!」
ゴオオオウ!!!!
「ティファ！口上いいからさっさとしろ！おいポップ！お前はそこにいてダイとバラン守ってろ！チウも動くなよ!!クロコダインのおっさんとマァムはタッグ組んでミストバーンの攻撃防いでてくれ・・・・つう訳で俺と遊んでくれよ別世界の大魔王さんよ!!!」
往年ともいえる程でもないが、そこには確かに、歴戦を潜り抜けてきた勇者一行の魔法使いが勇者一行と魔王軍との間に立ちふさがり、妹に迫りかけたミストバーンの前に炎の壁を出現させて退けながら、先程の様に不敵な笑みを浮かべて的確に指示を飛ばしている。
それは、少年ポップにとっては初めての事で・・・隣居るダイを見れば、ダイもぽかんとしている・・・・戦わない自分を守れという者が信じられないとばかりに・・
その間にも、キルバーンとヒュンケルの戦いは続き、ミストバーンも両の手甲を双剣にして待ち構えるマァムとクロコダインに闘気の糸を放つが、初見ではないマァムは持ち前の怪力と技で床を砕いて瓦礫で防ぎ、それを目くらましとしてクロコダインが打って出る。

当然捕縛用の技をミストバーンが出そうとしたが、マァムの拳が光り輝き咄嗟に回避をする・・・ダメージを怖れたのではない、まだ衣の中身を知られるような攻撃を受ける訳にいかな。
そしてポップとバーンが睨みあう中、それは聞こえた

「繋がりし道よ!此方と彼方道を繋げ!!契約の名の下にティファが命じる!!」
矢張り・・・ラック＝バイ＝ラックであるとポップは苦い顔をする。
其の表情にバーンは疑念がわく。どうやら自分の結界を超える自信があるよだが・・しかしそれが何であっても・・・
ゴォウ!!
「カイザーフェニックス!!」
「それ知ってんだよ!メドローア!!」
ティファの術を止めるべく、バーンは躊躇わずにカイザーフェニックスをポップに放ったが、ポップはコスパが低いメラとヒャドで小範囲限定のメドローアを作り出し、過たずカイザーフェニックスをだけを消滅させ、それのとどまらずにバーンの懐に入りイオラをゼロ距離で放ったのを、バーンは諸に受けてしまった。
「バーン様!!」
「へ・・・油断大敵ってな・・・おっと!」
「貴様許さん!!」
「ここのミストバーンも忠誠心が高いな!!」
油断はしてはいなかった・・・しかし自分の自慢の技を瞬時打ち破られ驚愕した瞬間を見すませて食らった一撃に、ミストバーンはすぐに駆け付けポップとバーンの間に割って入る中、最後の詠唱が―終わりの始まり―の道を繋いだ。
「ミーディア＝ラック＝バイ＝ラック!!!!」
最期の詠唱は・・・今までとは違うと思いながらもポップは最後まで油断をせずに魔王軍の主従に目を向ける。
何かを言っているが、最早相手の声が聞こえないのは―移動―が始まっているようで、周りを見回せば幼い自分と仲間達が驚いている。

そして・・・・確かにティファの体も透けている・・・こんどこそ、緑の陣を通って一緒に行くんだと安堵しながら、ポップは唇を動かした

またな

その唇の動きにキルバーンが怒り狂ったように大鎌をポップに振り下ろしたが通り抜けたのを愕然とした顔を見たのを最後に、ポップの意識が少しだけ薄れてゆく。

・・・この移動は本当に嫌いだ・・・

静寂が、瓦礫だらけのパレスの玉座の間に落ちる。

居たはずの勇者一行とバランと異界の者達はおらず、―鳥―がいた。

鳥を好むバーンは、その鳥を忌々し気に見つめてそして・・・カイザーフェニックスを放ち消し炭にした。

誰がどう見ても、癇癪だと分かるさまで

しかしミストバーンと、そして普段は主のそういう行動を笑うキルバーンすらもが、灰になった鳥であったものを同じくらいに憎らしげに見ていた。

鳥の色は青

それはあの少女が来ていたドレスの色をほんの少し濃くした青は・・地上界においては幸運のシンボルとされたおとぎ話があるのを知っているから。

あの少女は―誰―の幸運を祈ったか、それを思うだけで八つ裂きにしてもなお飽き足らないとばかりに憎悪がわく。

異界から投げられた小石の波紋が、世界中にさざ波を起こした瞬間であった

小石の投げられた世界：小石を投げられた者達

・・・ここは・・見覚えのあるところだ・・

「・・イ・・・ダ・・・・」

・・・・誰だろう？俺の事を必死に呼んでるのは・・・

「ダイ!!あぁ・・・目えさめたか・・」

「・・・ポップ？・・・・生きてるの？」

「あ？あぁぁぁ・・・まぁ・・・えっと・・—ポップさん—！ダイが・・」

「あん!!?あぁ目が覚めたか・・・・他の奴いるってのにあのバカ妹どこ行きやがった!!」

「落ち着いてよポップ！皆さん驚いてるよ!!ティファさんだったら大丈夫だよ。僕達と同じように透けて消えたのちゃんと僕見てたから。」

「だったらなんで同じ所に・・・まさかあいつ迷子か!!??」

「えぇ・・・それないと思うよ？もしかしたら一番に目が覚めて—サババ砦—だから何か食べ物探しにとか・・」

・・・・どうやらさっきの事は夢じゃないんだと、目が覚めたばかりのダイはそっと溜息をつき・・・横を見れば、浅いが息をしている親父がいる。

自分を、ハドラーとの決戦時にバーンの策謀で作動された黒の核晶から自分を守るために命を懸けてくれた親父・・・テランで殺し合いをしたのに・・・血がつながっているから？どうして俺を守ってくれたのだと、虫の息の親父に聞けば、あの時はどんな事をしても、それこそ手足をもいでででも自分の手元にいて欲し程に愛しているのだと・・・一年しか一緒にいられなくっても、それでも俺の事を必死に探していたのだと・・・・自分が死にかけているのに、俺に怪我が無いと知った時の親父の笑顔は・・・・そんな親父が死んだ時、握りしめていた親父の手から何かが俺に移って来たけれどもそれすらどうでもよくなった・・・俺は・・どうして戦っていたんだろう・・

空虚になってしまった幼い勇者の前に奇跡が起きた。

その—奇跡をもたらせた者達—には不本意であろうとも・・・この

世界の消え果る運命にあった希望は息を吹き返した。
それが虫の息ほどであろうとも
大魔王からは逃げられないという不問律を知っているヒュンケルとクロコダインからすれば、―全員―が無傷で逃げられたのは奇跡としか言いようがなく、一体何が起きたのだと目が覚め現状を認識した二人は先に目を覚ましていた大人のポップと異界のチウに何事が起きたのかを説明してもらおうとすれば・・・ポップは殺気立っておりチウが宥めていたので声がかけられず、そうこうするうちにマァム、ポップ、ダイの順で目が覚めたのだが・・一人いない・・・・ティファと言う少女が・・・まさか!!
カァァァァ!!
「ふぇ!!・・・・・アッと・・・エへへへ・・・・」
もしや陣が何かの失敗でティファだけが取り残されてしまったのかとヒュンケル達が危惧したその時、先程バーンの玉座の間で見た緑の陣が浮かび上がり、ティファが出てきた!!

「ティファお前!!!お前・・・・か・・・・野郎・・・」
またティファだけを取り残してきてしまったのかと、ポップとチウの心は寒気が奔り、時間にして五分と経っていないだろうが!永遠に感じた!!どうしてこの妹は心配ばかりかけてくるのだ!!
「俺の腕から出るの禁止だバカ妹!!!」
「・・・・ポップ兄・・ダイ兄化しないで・・・・・ティファだって驚いてんだから。」
ティファ曰く、前のラック＝バイ＝ラックは陣の出口を作って術者が入り口から押し出すのを改良したのだとか、、詳しい話は時間ないからまた後日と言われたが、ポップとチアは確信をした。
絶対にあの魔界の神様絡んでるからここでは言えないのだと自分達は納得をするが、他はそうもいかない・・当たり前である。
出てきたティファをポップがすぐさま飛び掛かって腕の中に収めたのを、チウもティファに抱き着き、ポップの物騒発言にティファは苦笑するだけで・・・・あのティファと言う少女はトラブルメーカー

か何かのだろうかと、今までの言動を見てきたヒュンケルとクロコダイン、そして懐深く優しいマァムも、この子大丈夫だろうかと心配している中、ポップとダイだけが周りの出来事に全く見向きもせずにお互いを見つめ合っている。
　まるで、お互いの胸の内が今ならば覗けるのでは無いかと言わんばかりに・・
「こほん。」
　様々な意味の沈黙は・・・矢張り破ったのはティファであった。
「取り合えずダイ君、お父さんを診る事を許可してください・・・本当に話してよポップ兄。」
「・・・・仕方がねぇな・・」
　とんでもない方法でこの世界に連れてこられたとはいえ、折角ティファの作った薬で一つの生命が助かったのだからこのままむざと死なせるわけにはいかないと、ポップは渋々とティファを腕の中から出す。
「うん、さてダイ君、私が診てもいいですか？」
「・・・君料理人ってやつでしょ？医者でもあるの？」
　自分と同じくらいの年の頃の女の子のが凄い薬を作れいましたと言われてもピンとこないのはなにもダイだけではなく、少年ポップもマァムもヒュンケルもクロコダインも同じだが・・・
「親父を頼む・・・」
　他に術がないのでダメもとで診てもらう。
　どうせ、一度は死んでしまったのだ親父は・・・また死んでしまったら、その時は自分も逝けばいいやくらいの投げやりであったのを見透かされたのか・・・頭の上に手が置かれた。
「大丈夫ですよ。先程あの・・・―大魔王もどき―達に宣言した通り、私は私の役割を果たすために薬学と医学も勉強したのです!!」
　・・・優しい声でドヤ顔しながら何かすんごい事言ったんだけどこの子!!大魔王もどきって・・・・バーンだよね・・・
「おやポップさんマァムさん、顎が外れそうなほど驚かないでください。特にマァムさんは女の子なのですから些かはしたないでしょう。

美人さんが台無しになるので口を閉じて、チウ君、ここの構造はきっと同じだから、―誰もいない―だろうけれども台所に行って茶器と茶葉とお水をマァムさんとヒュンケルさんとクロコダインさんと一緒に取りに行ってきてほしい。
―この鳥―をつけるから、―見つからなかったら―この鳥に話しかけて。」
異常事態、まさにそれに尽きるというのにティファと言う少女はそれすらも意にも介さずスラスラとありえない言葉を連発し、鳥を手品のように出してチアに持たせる様を、歴戦の兵ともいえるヒュンケルとクロコダインも呆然とする中、のんびりとした応えがあった。
「分かりました。行きましょう・・・・えっと、改めました僕はここでは無い世界ではない勇者一行で武闘家見習いとしていたチウです。」
「あ・・・私は・・・武闘家のマァム・・師はブロキーナ老師様なのは一緒なのかしら？」
「はい、僕の師もブロキーナ老師様です。よろしくお願いしますマァムさん。」
「俺は・・・この一行で戦士をしているヒュンケルだ。」
「同じくクロコダイン・・・して、あの少女の言う通りにその・・」
「はい！お茶を淹れる支度をしましょう。ティファさんならあっという間においしいお茶を淹れる方法がある筈です・・・・ティファさん、ここがサババ砦と同じなら・・僕が淹れてもいいですか？」
「おや・・・頼めるかなチウ君。そこの人達にも手伝ってもらって。きっとここはさっきまでは確かに人がいたはずだから、台所にある甕の中の水も飲めるはずだから。」
「了解しました。マァムさん、クロコダインさん、ヒュンケルさん、よろしくお願いします。」
「うん・・」
「あぁ・・・」
「まぁ・・・」
目の前の大ネズミは確かにチウと同じ背格好だろうが・・・何故だろう？

自分達のチウも、仲間を命がけで守る素晴らしい者なのだが・・・・このチウのそこはかとなく感じられる品の良さと礼儀正しさは・・・言っては何だがそんじょそこらの人間よりもよっぽど立派でははないかとは言えない三人は、良い子のチウに逆らえずにダイ達を残して地下にある台所に向かうのを、ティファは笑って見送りすぐさまバランの脈をとり胸に耳を寄せて呼吸音を聞き、両目を開けさせて覗き込みそして診断を下した。
「脈も呼吸音も異常なし。現状で確認できるのはこの人はよほどの目に遭わなければ長生きできるね。」
「それって!・・・ダイ・・・よかったな・・・ダ・・イ・・」
「う・・・うん・・・」
・・・・不思議だ・・・あのポップはダイの親父さんが生きている事を喜んでいるのに、その事をダイが一緒に嬉しそうにしてねぇ・・・なんだ一体?
「さて今度は君達の番です。」
「・・・は?俺は地上でハドラーの親衛騎団と戦ったけれども大して傷を負う前に異変が起きて・・・その大丈夫だよ・・」
「俺達?・・・俺は親父に守られたから普通の傷だよ・・」
「そっちではありません。」
大人のポップが目の前のダイと少年ポップの様子のぎこちなさのような不自然さを疑問に思った時、ティファの言葉はそこ（本質）にズバリと切り込んだ。
「君達、特にダイ君、君は―人間―が嫌いですか?」
その言葉に、両方のポップは絶句した。
大人のポップは、あのダイが、人間だけではなくすべての種族と笑っていくのだと無邪気に笑う弟が・・・他界とはいえ人間を嫌うだなんて思ってもみず、そして少年ポップの絶句の意味は違った。
どうして目の前の少女がその考えに至ったのかに驚愕をしたからこその絶句であり、そんなポップ達の絶句を見向きもせずに、ダイは疲れた声で答えた。
「・・・分かんない・・・」

それは本当に疲れ果て、どうしていいのか分からないと嘆いた妹のあの時の声と同じようだと感じたポップは、幼いダイの顔を見てみれば・・・・疲れ果て心も無くなってしまったあの時のティファを思い起こさせ胸がずきりと痛んだ・・・勇者を目指して島を出た少年に・・・いったい何があったのかを聞いてやらねばと思いをティファがくみ取ったかのように言葉を紡ぐ。
「君は勇者を名乗ってる。君は私と同じデルムリン島で育った?」
「うん・・・島にポップと・・・アバン先生って知ってる?その人元勇者で、昔倒した魔王ハドラーが来るまで俺は島を・・・一度だけほんの少し離れただけで後はずっと物心ついた時から島にいたんだ・・」
「そうですか。アバン先生もハドラーも私達の世界にいます。ほんの少しというのは偽勇者がそこにいるゴメちゃんを攫いましたか?」
「そう!そうなんだよ!!俺・・・その時夢中で島の外にゴメちゃん助けに行って・・それでも・・・その時会ったロモスの王様いい人で好きになったんだ。
先生が死んじゃって、世界が魔王軍に攻められてるの知って俺は先生みたいに勇者目指してここにいるポップとゴメちゃんと一緒に旅に出たんだ・・・」
父親を助けてくれた、其の一点のみでダイはティファに心を許し、向こうの世界とここと同じことがあったかを確認しながら、短いながらもこれまでの冒険の話をし始めた。
ロモス王国でネイル村に寄る事になり、そこでアバン先生のかつての仲間で僧侶をしていたレイラと、その娘で先生の弟子のマァムに出会った事、クロコダイン戦ではじいちゃんが人質兼敵として現れて大変だった事を、ティファと大人のポップも共感をしてくれて、逃げかけたところも俺たち一緒かと言った大人のポップの言葉に、ダイと少年ポップは驚いた。
・・・どう見ても勇気百倍の人にしか見えないという視線に、ポップは頬を掻いて照れてしまう。
「俺マァムに横面を張られそうになったのをティファに庇われてさ。それでも動けないのを意気地なしって怒られて・・・ティファに闘う

理由が無いと来ちゃダメって・・・俺さ、その時は先生の敵を討つ以外に闘う理由特になくって・・・動けなくなっちまったんだよ。」
　それを助けてくれたのがまぞっほさんだったというポップの言葉に、少年ポップも俺も助けてもらったんだとポツリと言い、ダイも・・・その言葉につられるように話を続けた。
　ヒュンケル戦も、レオナが人質に取られたバルジ島での決戦も同じで、ダイは―あそこ―も同じだろうかと・・・縋るように震えながら言葉を押し出した・・・
「ベンガーナで、ポップとレオナとデパートってところに行ったんだ・・」
「・・・あそこか、俺達も行ったな。姫さんとはいかないで俺とダイだけだったけれども、どたまかなずちには驚いた。」
「そう・・・・行ったんだ・・・・そこでさ・・・竜達が襲ってこなかった？」
「来た・・・・キルバーンと初めて会うきっかけに・・・・確かキルバーンがダイの正体を見極める為に竜をけしかける作戦を―ピロロ―ってやつが立案したらしいんだけど・・あの一つ目使い魔以外にピロロって・・・あぁ・・そこはどうでもいいか。
　とにかく竜達が来て、俺はヒュドラをベタンで押しつぶしてメラゾーマを口の中に突っ込んでやって骨まで灰に・・・どした？」
「あ・・・うん・・・あんた強いんだな・・」
「・・・・その時さ・・・・人に・・・何かされなかった？」
「は？・・・・・・まさか・・・お前・・・お前達・・・」
　ダイのそれまでは少し柔らかかった表情が、ベンガーナを強襲してきたドラゴン退治の話になった途端に泣きそうな顔になったのを、大人のポップにとっても覚えがあった！
「・・・・誰かに・・・何かを言われたのか？」
　あの時自分達の時には、後から知ったがティファの式神・フラメルが必死の様子でダイが三つ首のドラゴンを倒す前に人々を屋内に行かせていた。
　そのおかげでダイの尋常でない強さを誰にも見られずに済んだと

ほっとしたのを思い出したポップがそっとダイに聞けば
「俺さ・・・女の事そのお母さんが逃げ遅れたのを助けようとしたんだ・・・必死で、女の子たちが死んじゃうって怖くて・・・助けたくって！気が付いたら紋章を発動させててポップが連れてきたドラゴンに摑まったけど引きちぎって・・まとめてイオラで倒して女の子のお母さんの上にあった瓦礫を壊してあげて・・・・最後の一頭を落ちてたドラゴンキラーを体の真ん中に刺してライデインでとどめを刺したんだ・・・・そしたらね・・見ていた女の子と他の人たちは何て言ったと思う？」
「それは・・・・・」
「俺は怖いって・・・化け物だって!!どこかに行けって・・・助けた女の子に小石を投げられたんだよ!!」
　あの時・・・俺は助けたかっただけなのに・・・どうしてと、ダイは涙を流す事無く俯いてしまうのを、少年ポップの心があの時の事を思い出して痛みに叫ぶ。

　あの時・・・自分も大人のポップの様にドラゴン達に向けてベタンを放った・・しかし一時埋めただけで全てダイ任せになってしまい！挙句が紋章が出た時自分は・・・これで無敵のダイのお陰で全て終われると・・・・そのせいで・・・・ダイの強さにおびえた女の子は・・・姫の後ろに隠れてそして尻もちをついてしまい・・・・地面に落ちていたダイが砕いた瓦礫の欠片が手に触れてしまい・・・それを投げて当たってしまったのだ！それも運の悪い事に、ダイの紋章が輝いていた額の真ん中に・・まるで、ダイの力そのものを否定するように・・・・その光景を自分も忘れられない・・・ダイのお陰で生き延びた人々もダイを化け物の如く囁き合い・・・そして・・
「レオナもね・・怯えていたんだよ・・・・俺の事を・・・怖がっていたんだよ・・」
　紋章の力を知ってたはずなのに・・・その力でデルムリン島でのバロンとテムジンという男の悪事から守れたのに・・・自分の勇者だと言っていたレオナスラガ怯えたのだ!!自分という化け物を!!!

その後はキルバーンが現れて勝手を言って消えた後、ナバラとメルルに導かれてキルバーンと父の罠とも知らずにテランに行きそして・・

「後はあんた達も一緒か？」

「そうだね・・・父さんとその配下の竜騎衆達と戦って・・・ここにいるポップ兄がメガンテしたり色々とあって・・・ようやくだったよ。」

「そう・・・・俺もだよ・・ポップがメガンテして・・・俺心がいたくて記憶取り戻して・・その時さ、俺親父に行ったんだ・・・人間は悪い奴らばっかりじゃない・・こいつみたいにいいやつもいるんだって・・・俺・・ポップの事好きで、レオナの事好きだから、あの女の子にされたこともういいかって思ったのに・・・戦っていくうちにさ・・疲れちゃった・・・・もう、人間が好きか守りたいかとか言われてもさ・・・わっかんないんだよ・・・」

涙を流さずに、心の傷を吐き出すダイの姿は痛々しく・・・・そんなダイの代わりの様にポップがボロボロと泣き出し、そして・・・泣く少年ポップを、大人のポップがそっと包み込んで抱き上げそして・・・・ダイの後ろに腰を下ろして少年ポップ諸共に腕の中に入れて抱きしめた。

「頑張ったなお前達。」

「え・・・」

「頑張ったんだよお前達は・・・お前達の話を聞いてるとさ、確かにレイラさんに少しだけお世話になって、ロモスの王様の手助けを貰って、エイミさんやバダックさんや・・マトリフ師匠に助けてもらったんだろうけどさ・・・ほとんどお前達だけで頑張ってるって俺は思ったんだよ。」

自分達の冒険は、ずっとティファが守っていたのだと後年に知った。フラメルがベンガーナにいたのは偶然かもしれないが、その時の状況をティファに逐次報告をして支持を貰っていたのだと、フラメルが教えてくれから。

知名度の低いダイが、力を発揮すれば一般人には間違いなく怖れられる、それを阻止するようにと・・・・それが無ければ・・・きっと自

分達のダイの心も・・・・そして自分の中にいる未だに小さな体の勇者と魔法使いは、大人の助けがほぼない中で・・・

「俺達以上に、お前達は頑張ってる。頑張ってんだよ。」

何度も何度も繰り返される凄い事をしてのけた大人のポップの言葉を掛けられながら優しく頭を撫でられる事で、少年ポップはずっと言えないで中に押し殺していた言葉が浮上するままに、自分と同じく―ポップ―の腕の中居るダイにむしゃぶりついてぶちまけた！

「ごめんなダイ・・・俺がもっと強けりゃよ・・・・お前だけを戦わせるような真似するなんて！俺は勇者の魔法使い失格だよ!!!・・・・お前あの後もう大丈夫って言ってたの嘘だって・・分かってたのに何にもしてやれなくって・・・ごめんな・・・ごめんなダイ・・・」

「ポップ・・・・」

「お前が戦いたくないってんならもういい・・・俺が代わりに闘う・・・だから・・俺の前からいなくならないでくれ・・きっと魔王軍はお前と親父の事を気っと殺そうとするから・・・おれにまもらせてくれ・・・絶対絶対まもるから・・・俺・・・大好きだから

島で会ったときから明るくってモンスターにも俺にも優しくて明るい笑顔を向けてくれるお前の事が大好きだから！勇者だからじゃない・・・・こんな情けない俺とずっと親友だって言って笑ってくれたダイだから・・・だから俺はあの時・・メガンテしたんだ。」

「ポップ・・・・俺・・・・・俺!!俺どうしたらいいの!!??嫌いっていう人たちの為に闘わないといけないの？魔王軍が悪いから勇者として戦って・・・・地上守って・・その後俺も・・・・怖いから今度は・・・・」

「馬鹿野郎!!そんな事させるもんか・・・・させない・・・・分かんないんだったら闘うなよ・・・俺達が・・・頑張るから・・」

「ポップ・・・ポップ・・・・」

腕の中で抱きしめている少年たちの悲痛な思いを、ポップは黙って受け止める。

たった十二歳の少年に全てを背負わせるようなこの世界を燃やしてやりたいという想いを押し殺しながら、ボロボロと泣くのをティファは黙って見守る。

この居間と台所の間の通路で泣いているマァム達の気配を感じながら・・・
「ダイ・・ポップ・・そんな・・・こと・・・私・・・知らなくって」
「マァム・・・・それは俺達も同じだ・・・」
「俺達は本当に何と不甲斐ない・・・・・」
仲間の苦悩を知らずに戦っていた・・・これで仲間と言えるのか!!??
勇者一行だなんて口が裂けても言えないではないか!!!
お茶を淹れる口実で、自分達を遠ざけた事を知っていたチウはなるべくゆっくりとお茶を探してあててそして湯を沸かして淹れたのだが・・・役に立ちそうだとマァムにそっとカップを持たす。
「マァムさん、泣いていてもいいので飲んでください。」
「チウ・・・私・・」
「ヒュンケルさんとクロコダインさんもです・・・僕達もかつて仲間の一人が疲れ果て心を壊してしまった事がありました・・・ダイ君ではありませんが。」
「・・・・その時はどうなったの?」
「休んでもらいました。きっとダイ君も休む時間なのかもしれません。幸いポップはそこそこ強いです。それにこの世界にも貴方達の味方がいるんですよね?」
話を半分以上聞いていたチウは、この世界にもマトリフ大魔導士がいる事を知ってほっとした。
相談できる人がいるならば・・
様々な事を、大戦とその後で経験をして学んだチウに頼もしさを覚えたマァムは、チウのお茶にそっと口をつける。
それは苦みの中にも甘さがあって・・・
「美味しい・・・」
ほっと一息をつけた気がした・・・・いつ以来だろうか?
お茶が美味しいと感じたのは・・・・ここ最近は、何を食べても飲んでも美味しいと思えた事はあっただろうかと、マァムのみならずヒュンケルとクロコダインが思う中、ティファの思考も纏まった。
・・・・・—保護者—がいなさすぎる!!!こんな子供達をほったらか

しに近い状態ってどうなのよ!!!
確かにこの世界にはそんな余裕はないだろうと自分は知っているが・・・それならばここは一肌脱ごう!!
手を出したら対価の話になってややこしくなるけれども！口、それも言葉ならギリいけるはず!!そもそもこの世界は私に大いに借りがあるのだ！
ここは自分の知識総動員をして―保護者達ー全員集合だ!!!!!

「申し上げますフローラ様!!」
「・・・・何事ですか?死の大地から飛び立った敵の要塞が攻めてきたのですか?」
「いえそれが・・・それが・・・・」
報告に来ながらも、口ごもる騎士にフローラ女王は溜息をつきなが

ら騎士を落ち着かせる。
　三か月前に大戦がはじまり、半月は魔王軍を退けられていたが、竜の軍団によって首都は壊滅をし、ホルキンス騎士団長も軍団の長と思しき男に倒されたが、―アバンの言葉―を胸に、今日まで地下に潜って気を伺い、敵との決戦の情報を得てレオナ姫達のいたサババ砦に姿を現して自分達の砦に導いたのだが・・・勇者達の動向がつかめない中、一体騎士は何に狼狽えているのかと再度問えば・・・・騎士が意を決して放った言葉に、その場にいた者達全員が・・否！自分こそが一番信じられずそして・・・・気が付けば走っていた！
　あの報告が嘘か本当か・・・敵の罠と見定める・・・そんな言い訳を胸に走って砦の入り口のある今にいたのは・・・・
「お久しぶりです、フローラ様・・・・」
　見知らぬ夫婦と見覚えのある女性が一人・・・・少年と少女達が中に導き・・・その中には魔族と何故かマトリフ様が・・何かを言いながら共にいて、そして・・・・其の一行の先頭にいる男は・・
「・・・あ・・あぁ・・・・・」
「フローラ様!!!!」
　その男の名を言えずに、フローラは気絶をした。
　バラン率いる超竜軍団に国を滅ぼされてから向こう、ずっと張っていた気がぷつりと切れてしまったから・・・
　その様子を見たティファは・・・・少しやりすぎたかなと後悔をした
　せめてお知らせしてからくればよかったのだろうか・・いや、それはかえって怪しすぎるからやめにしたんだ・・
　・・・・カール王国と自分は相性悪いのかと頭を掻いた

小石の投げられた世界：幕間・真に怖ろしき者・・

怖ろしい・・・数千年間様々な悪を見続けてきた・・・悪ではなくとも身勝手で不平不満を口にする弱者を、強者を怖れて排斥する者達を、弱き者を顧みずに悪意無く踏みにじる者達も数多見てきたつもりであったが・・・・真に怖ろしき者とは―あのような者―を指し示すのだと思い知るとは・・・

「そうですか・・・私が貴女に譲りし情報でその様な事を・・・ずいぶんな事をしてくれましたね他界の私よ・・・」
「申し訳ないと思います・・・・罰なれば・・」
「結構です。そも最早思念体になっている貴女に下せる罰などないのはよくご存知の筈。
しらじらしい事この上ない。」
「・・・・・」
ティファ達を己が世界に攫いしマザードラゴンは、ティファ達を攫った代償として肉体は消滅し、残る思念体も十年保つかどうかである。
しかし、その短い間にもできる事をしようとすぐに他界のマザードラゴンは動いた。
思念体であれば肉体もちの時よりも時空狭間を渡りやすい・・・肉体と違って電波のやり取りとティファが表現しそうな方法で、さっそく同調できるマザードラゴンに連絡を取れば・・物凄い塩対応から始まった！
「おや、恩知らずのマザードラゴンが私に何か御用ですか？」
・・・辛い！何を言われても自分の仕出かしたことを考えれば致し方が無く、罵倒される覚悟はあれども・・・・自分と同じ者から礼儀正しく冷たくされるのから始まるのは実に辛い事なれど、ひたすらに平身低頭で詫びを言いながら合間合間に向こうに降り立ったティファ達の言動とバーン達のやり取りを伝えれば・・・これ以上の冷たさは無いと初手からの猛吹雪塩対応に心折れかけていた他界のマ

ザードラゴンは、己の見識の低さを既に存在しない骨の髄まで思い知る事になった！
「・・・そうですか・・・そのような醜悪なる者達がいる世界に、私達の可愛い可愛い―孫娘―と竜後に連なった孫息子と・・・肉体があればモフモフしたいあの可愛い子を連れ去ったと・・・本当に万死に値しますね貴女達は・・・」
!!???若干・・最後の言葉はおかしくないかと思考をした他界のマザードラ!!ゴンの考えを読んだかのように、ティファ世界のマザードラゴンは優しく他界のマザードラゴンに問いかけた。
「どうかしましたか？あぁ、今言ったのはティファとポップとチウの事ですが、私の言った言葉に何か可笑しな点でも？」
!!いえ！何もありません・・・私からの情報を、貴女が直接大魔王達に伝えるのですか？」
　何やら自分の考えた事でティファ世界のマザードラゴンの気配に不穏を感じた他界のマザードラゴンはどうにかこうにか話題変換を試みて辛くも成功した！
「いえいえ、私の思念は直接はあの方達に伝えることは最早できません。」
「そうなのですね・・・では如何様に？」
「それは・・・あらあら・・・あの―黒き竜―も、思念体になれたのですね。」
「？・・・・・なっ!!!・・・そんな・・・・この気配は!!何故・・・何故!!」
「あら、ご存知ありませんでしたか？あの黒き竜もまたティファとそしてダイをとても愛しているのですよ。
　思念体のみが入れる空間にようこそ。」
　・・・・一体どういう事か・・・何故世界にとって・・・少なくとも自分達にとって唯一天敵とも言える相手に、ティファ世界のマザードラゴンは穏やかに話しているのか他界のマザードラゴンには理解不能であった！
「・・・・こいつか・・・・―俺様のちび助―を攫った愚者は・・」

「いけませんよ・・・いえ、出来ませんよその者に罰を与える事は。最早思念体になったものにはどのような干渉も不可なのですから。」
「ふん・・・愚かなる罪をあげつらい罪悪感を持たせ、己が負の思考のそこにて腐らせる事は可能だろう?」
「・・・・それを貴方がしたと知れば、きっとティファとダイは悲しみますよ?」
　それは貴方の本意ではないでしょうヴェルザーと・・・ティファ世界のマザードラゴンは優しく教え諭す様を、他界のマザードラゴンは顎が落ちるかと思えるほどにぽかんとしてしまった・・・・落ちる顎がもう無いだろうとは突っ込んではいけない・・
　何がどうなって、天界はおろか魔界にても忌み嫌われるヴェルザーと、天界と地上界から愛されているマザードラゴンが普通に会話をしているかと言えば決まっている。
「まったく私とした事が・・・近頃では地上界と魔界の若輩者たちが可愛い孫娘にたかろうとしているのを三神様達に知らせて、あの子が知る前に―虫除け―をしていたというのに・・・」
「俺様もちび助に群がる虫どもを徹底的に払っていたが・・・・一番の害虫の狼藉を許していれば世話ないではないか・・・俺様の小僧の側ではなくちび助の方にいたとは・・」
「言っても最早詮無き事・・・三神様達と大魔王達と地上界の王達と孫娘の家族と仲間がどのように対処するのかを見守りましょうヴェルザー。」
・・・・ティファ繋がりであり、もはや空気扱いをされながら聞こえて来るティファ世界のマザードラゴンとヴェルザーの会話はおかしいだろうと突っ込み満載である!
　先ず最初の話始めは何だ!?会話を聞いていれば内容は分かったが・・・理解不能である!
　認識が正しければこの二人は、ティファと言う娘が年頃になったから求愛であっているのかはわからないがその類の想いを持つ若者たちの邪魔という低レベルな事を!尊き力を行使してしているというところから理解できない!!

確かにマザードラゴンの地に連なるティファはマザードラゴンの大切な子であり・・・ヴェルザーも魔界の竜種で一番の地位にいるのでギリ同族枠で通るだろうが・・・神にも等しき身で低俗な事をさも重要な事の様をしているかのごとく話しているのは絶対おかしいだろう！

世界を救う、弱者に寄り添う、人々の願いを一身に受けた果てに起こされる奇跡の行使でもなく・・・十五歳の娘の恋愛事情に首を突っ込み本人にそれと知られる事なく潰えさせるってそれってどうなのだ・・・

なにかやばい事を見聞きしてしまったと、他界のマザードラゴンは気を取り直して恐る恐ると二人に、兎に角自分の罪を徹底的に詫びながら、三神様達にも知らせて欲しいという前に・・・本人達の思念が飛んで来た・・

「・・・君が他界のマザーか・・・・挨拶はしないよ、可愛いティファ達を攫った輩に名乗ってやる謂れは無いもんでね。」

「左様だな、疾く現状と其の方の世界の事情を全て洗いざらい吐いてとっとと去ね。」

「・・・・我等のマザードラゴンから聞くとして、この者は不要ではないか？」

その声は威厳に満ち、そして冷厳さを感じる声に他界のマザードラゴンは怖れ戦く。

最早滅びる肉体とて最早無いのに何を怯えると言われてしまえばそこまでだが、しかしこれに怯えるなと言われても無理だ！

其の怖れは己では逆立ちしてもどうにもならない上位者の存在に、魂が怯えているからだ。

普段は神々を敬愛し、そして神々からも信頼と友愛で接せられた者であればある程に、神の怒りのすさまじさを思い知る。

他界のマザードラゴンは、ティファの世界のマザードラゴンとヴェルザーの時以上に震えながら先程にした報告の繰り返しをすれば

「そう・・・・僕等の大魔王達は物凄く真っ当で、如何に尊敬できるのかが分かるね～・・・・・消そうか？」

「これ人の・・・気持ちは分かるが他界への干渉は代償が高すぎる。」
「竜の言う通り、ここで我等の残りの寿命と魂を使えば可能であろうが、それをすれば子等が傷つこう。」
「・・・竜のと天のは冷静すぎない？」
　人の神の言葉に、竜と天の神が止めてくれるのを他界のマザードラゴンはほっとした。
　身から出た錆とは言え、人の神が消そうかと言った時―何をどこまで―消すのか分からずに、他界のマザードラゴンの魂は心底震えが奔ったが、残りの二柱が止めてくれて・・・
「儂等は―これから行く者ども―に祝福を目一杯与えて消させよう。」
　・・・・はい？行くってどこに!?どうやって!!
「竜の言う通り。人選は今喧々諤々だがそろいつつある・・・・そうだな・・・とりあえずティファに―可笑しな興味―を持った者の子孫は？栄できないような呪法を当人にそれと知られないように植え付けられる加護も与えるか・・」
「いいね！キルバーンの本体のピロロって言う奴には、永遠に死ねない肉体になれる祝福を持たせて、向こうにつき次第発動できるようにしようか。」
「左様左様、ティファとチウに可笑しな口をきいたのだ・・・相応の報いが相応しかろう。」
　・・・・神の祝福と加護を！どう考えても個人的な私怨に使っていいのかと思った他界のマザードラゴンは悪くないだろうが、お前が言えた義理かと言われればそれまでなので他界のマザードラゴンは黙って口を噤む。
　そうこうするうちに、三神達が言っていた喧々諤々の人選選びが難航しているのを思念体特有の遠見で覗いていたヴェルザーがしびれを切らし、一言三神達がビシッと言ってやれと、特殊な水鏡をこの場所とパレスの大広間両方に出現をさせた。
　声だけであっても地上界の者達に届けるのには六大精霊王達をもってしても一年かかったたのを、ヴェルザーはあっさりと実現できる方法を実現させ・・さしもの怒れる三神達も驚くのを、ヴェルザー

は馬鹿らしいと鼻で笑った。
「空間使いの俺様に、こんな事は造作も無いだろうが愚か者達が。」
だからこそ、ダイ達の結婚式に遅刻をした精霊王達に文句を言ったのだ。
自分が一秒でできる事に何を手間取っていたのだ馬鹿達がと。
「・・・その方法教えて欲しかった・・・」
「は???!!何か勘違いをしていないかお前達?そも俺様はちび助と小僧以外がどうなろうとも知った事ではないわ!!
疾くちび助を返さないのであれば!!向こうの世界なぞ滅ぼしたいわ!!」
「うん・・・気持ちわかるけれども君だってもう無理が出来る体じゃないんだから無理しないでね?」
「其の方が百年より早く亡くなればティファが悲しむ・・」
「ダイもだな。自重してくれヴェルザー。」
「・・・・ち!・・・・分かっている・・」
ここでも矢張りティファで・・・気を取り直して喧々諤々していると言われているこの世界のバーンパレスを見てみれば・・
「余が自ら行って取り戻そうとして何が悪い!!幼な子とポップとチウは必ず余が連れ帰る!!」
「バーン様の行くところに我等両名も行けばそれでいいだろう!!」
「・・・・・滅ぼしに行くから・・」
・・・大魔王バーンが行くと言い張り、その側近であるミストが支持して・・・普段はどのような時であっても陽気を崩さないと聞かされたキルが・・・物凄く暗い声でぼそりと怖ろしい事を言う中
「可愛い妹攫った奴等を倒しに行くのは勇者でお兄ちゃんの俺の役目だよ!!!」
「ディーノ様の言う通りだ!ティファ様とポップとチウを攫った落とし前は・・・・天界の奴輩どもも同罪で俺の槍の錆に・・」
「ラーハルト・・・無辜の者まで巻き込めばティファとポップとチウが泣く・・・あちらの大魔王達と・・・関わったものだけを俺が斬る・・」
ダイとラーハルトとヒュンケルも負けじと立候補している・・・・

実力的には魔界側からは大魔王バーンとミストとキルが最有力候補であり、地上界候補はノヴァがいるだろうと突っ込まれそうだが、ノヴァの性質というか特性でそれは最初から無理であった。
彼は六大精霊王ではないが、氷の精霊王ハイ＝キングから精霊の加護を貰っているので他界には渡れない。
その法則から行けば、三神達から能力を授かったティファこそ他界渡は無理だろうと知るものが聞けば突っ込まれそうだが、あちらから引っ張られたティファと、こちらから送り出すノヴァとでは方法もそれによる法則も違うというややこしい理由で無理な物は無理なので、予め候補から外すと説明を、地上界に声を届ける天界の使者から受けたノヴァは殺気の塊化して今マトリフに宥めてもらっている最中だがそれは兎も角
「大魔王バーン達よ・・・」
竜の神が、その喧騒の合間を縫ってヴェルザーのお陰で声を届けられると説明すれば、そんな事はどうでもいいから追加情報ないのかというけんもほろろな対応に、竜の神は全く気にせずその通りだと賛同までする始末で、他界のマザードラゴンから得た情報を伝えれば・・・一同から呻き声とそして殺気が立ち上った!!!
それこそあの可憐な乙女代表のようなメルルからもだ・・
「そう・・・別世界のキルバーンは・・・ふっふっふ・・・はっはっはっ!!壊してやる!!!バラバラにしてやる!!薄汚れた人形風情が!よくぞチウ君を穢したものだ・・バーン様・・・僕是が非でも向こうの世界に行きますよ・・お礼をたっぷりして上げないといけませんよね!」
「・・・・キル・・・・私も向こうの下郎達を切り刻んでやる・・・・」
「・・・・・向こうの天界を属国にする方法はあるか三神達よ?」
案の定バーンとキルとミストがガチギレを起こし、キルは狂った様に嗤っているが瞳と気配は絶対零度であり、ミストともまた共に成そうと行く気満々で、バーンなぞは向こうの世界の天界を属国宣言までする中、ダイ達も当然切れてはいるが・・・複雑にもなった。
自分達の世界のバーンとキルと、向こうの世界のバーンとキルバー

ンは何故こうも違うのか・・・確かに自分達も辛い戦いをしていたが・・・・
「俺達の相手がさ、バーン達で良かった・・」
「ダイ・・・そうねそうかもね・・・」
「うむ・・・ディーノの言う通りだな。」
ダイの言葉にマァムと父バランは賛意を示す。
そうでなければ、向こうの世界の様な下種な輩達であれば・・・
ティファは物凄く無理をして下種な魔王軍を壊滅させるためにどんな無理をしたか分からないからだとしみじみと思う・・・・真っ当な敵であったバーン達を相手であれであったのだから・・・
「そういえばバーン、向こうの世界の魔王軍は壊滅させるのは決定としても。」
・・・決定なのかと他界のマザードラゴンはこの世界のダイの言葉に震えたが、何を聞くのだろうかと固唾をのんで見れば・・・
「天界を属国にするのも二度とティファを頼るなんて馬鹿が出ないように喧伝する為だよね。」
「その通りぞダイよ、天界の情報が正しければ、この世界の外にも世界があり、隣接しているのはほかにもあるとか。
今回の件で味をしめる馬鹿者達が出るのを未然に防ぐ為よ。」
「うん、それもいいんだけどさ・・・」
「む？」
「ティファのドレス姿とっても可愛かったよね。」
「ふむ・・・・花嫁達の他には・・今日参列をしたニーナ以外は天地比べる者が早々に無い程ではあったがそれがどうかしたのかダイよ？」
「でしょう！そんな可愛いティファを目にした奴等が!!ティファの事を口説こうとしていたら俺そいつに勝負挑んでいい!!??
ボコボコにしてティファ口説くなんて一千年早いって教えないといけないよね!!!」
・・・・・なんだそれは!!!!・・・あの勇者の頭は・・・
「あ、それは元からガッツリするつもりだから大丈夫だよ勇者君。お

嬢ちゃんとチウ君に粉かける輩は・・ね？」
「そう・・・俺も行きたいけど・・・」
・・・・・他界のマザードラゴンはそこで見るのをやめにして、謝罪もそこそこにしてお暇をしても―誰も―見向きはしなかった。
己の世界への帰路につく中、他界のマザードラゴンは怖れ慄く
まさか・・・・あんなに慕われて・・・・否！あそこまで多くの者達の思考を狂わせるほどであったとは想像の埒外すぎるにもほどがある!!
映像では生き延びた魔王ハドラーも、主達の可笑しな言動に胃を痛めている様子であったが！ティファ達の現状を知ってからは自分も行きたいと言う顔をして・・・大勇者アバンと大魔導士マトリフのあの黒い笑みは何を考えていたのだ・・・清らかなる精霊王達の表情も昏い笑みを浮かべて・・・・ポップとチウの事もあるだろうが間違いなく・・・
「ティファという娘の事を・・・・見誤った私の責任ですね・・」
己の世界と天界を滅ぼさんとしている自分の世界の大魔王達がちっぽけに見える程に・・馬鹿馬鹿しい思考を伴いながら慕われている―とんでもない娘―に、マザードラゴンは真に怖ろしき者を知った瞬間であった

小石の投げられた世界：保護者一同

異界から成長して大人の姿になっていたポップと、大ネズミモンスターの癖にいやに礼儀正しい品位を感じさせるチウと・・・・・そして異界の竜の騎士の双子の妹と言ったあの忌々しい小娘ことティファという輩のせいで、ハドラーに仕込まれていた黒の核晶でバランを葬り去り、以って勇者ダイの心をも粉々に砕き勇者一行を一網打尽にし得る機会を食い破られた大魔王バーンの右腕たるミストバーンは苛立ちを募らせている。

その様を大魔王の手によって―骨抜き―にされたキルバーンが宥めている。

「そうカリカリしないでよミスト。あの忌々しい奴らは絶対に僕の手で嬲り殺しにしてあげるからさ～。」

「・・・・キル・・・お前は反省やめげるという言葉を知らないのか？」

「ん！ふっふっふ・・・だってバーン様は最初っから僕のこの姿が―人形―だって知ってたし、君だって僕のこの体の事を知っていても態度変わってないじゃないか～。」

そう、大魔王は初手からピロロと人形の事を看破していたが興味が無かったので放っておいたが、異界のティファの情報でまさか人形の頭部に黒の核晶が仕込まれていたことまでは見抜けず、勇者達がどういった方法かはわからないが絶対にあの忌々しい小娘が逃がしたのだろうとバーンもティファを八つ裂きにして殺してやりたいと殺意を持ったが、本人は目の前にいないので仕方なく目の前の最重要案件から取り掛かった。

即ち―キルバーン―に搭載されている黒の核晶の無力化である。

あれの内部中央に起動させる呪法が彫られており、その呪法を発動させるか衝撃によって核晶の中にある圧縮された膨大な魔力を秘めた黒水晶が暴発しない限り滅多な事では自然爆発はない・・・滅多にという言葉があるのがつらい所だがそれは兎も角、バーンはさっさとキルバーンを拘束し、普段外さない死神の笑いの面を躊躇いなく取り去り見た物に対して溜息をつく。

「・・・・忌々しい娘の言う通りか・・」
「見つかってしまいましたか～。どうしますかバーン様、今から僕をヴェルザー様の下に送り返して黒の核晶を発動させて諸共にしますか～。」
こんな状況であるにも関わらず、―キルバーン―は悠々と嘯いている。
まるで初対面で出会った時と同じ、礼儀知らずで図々しい無礼者でありながら、どこか憎めないところがある道化そのもので
「死神としての仕事を与える、忌々しい娘達を刈り取ってこい。
わざわざ余が手を下さずとも失敗した時はお前は壊されよう、それがあの異界の忌々しい者達の手か、この世界の者達の誰かによっては知らぬがな。」
「成功した時は？」
「物騒な死神を飼うのも一興・・・・今更変わりない事だ。」
「ふふ、さすがは魔界の神、器の大きい事で。」
―バーンを殺せ―と名乗った死神に対して言った言葉を、バーンは今更覆すつもりはない。
長い寿命の中、刺激を与えてくれる玩具を放り出されるほどの齟齬を感じないせいかもしれない。
常々自分の隙を虎視眈々と狙っているヴェルザーの刺客だと、端から知っていたのだから黒の核晶を無力化させればいい。
命令を下した後バーンは、黒水晶の中にある魔力を取り出しそしてそれをパレスの動力炉の燃料にするようにミストバーンに命じ、後は興味が失せたかのようにキルバーンを解放した後は見向きもせずにキルバーンとミストバーンに出ていくように命じた。
今後の計画の立案を、今までと同じく静寂のなか一人で練り上げるべく。
参謀と表させているがミストバーンは自分の肉体を預かる者にすぎず、自分の手元に置いておいても疑念を抱かせない隠れ蓑として参謀を名乗らせているが、これまでの戦術は兎も角大まかな戦略や指針は自分一人で考えていた。それこそ大戦の構想を持ってから数千年

間ずっとだ。
一人になったバーンは玉座にもたれかかるように座り、見るともなしに視線を宙にさまよわせ沈思する。
この後考えていた計画はきっとあのティファという忌々しい娘は知っている・・・あの兄だと言ったポップも、異界のとは言えども魔王軍を―打ち破っている―のだからその計画を知っているのだろう。
知性と理性とそして胆力があり、修羅場をくぐって来たもの特有の強者の匂いをあの青年魔法使いから感じた。
あれは軽視してよい者ではないと・・・ここで一つ疑問がわく・・あの忌々しい娘からは―強者特有の強さの匂い―を感じられなかった。
しかしバーンの長い年月を戦場で過ごした勘が、一番あの娘を警戒していた。
自分の中の勘を信じてきたバーンは、最初の計画を日延べさせ代わりの事を命じられたミストバーンは、自分の分身たるシャドーに実行させた。
それはティファ達がバーンの手の中からすり抜けた一時間という短い時間の間で起こった事であり、ミストバーンは直ぐに主の命じられたことを完遂したという報告をできるのもだと信じていただけに・・・シャドーからの報告が信じられなかった。
「ミストバーン様、勇者一行の武闘家マァムの住まうネイル村には母親レイラと思しき者の姿はなく、のみならず村人たちも忽然と姿を消していました！」
「報告！大魔導士マトリフが隠れ住んでいたバルジの大渦近くの海岸に彼の者はおらず―これ―が!!」
「またダイの剣を作ったと目されるロン・ベルクの住処にも人気はなく・・・矢張り―これ―が・・・」
「・・・その・・ダイのデルムリン島も鬼面導師はおろか！モンスター一匹もおらずにこれが!!」
・・・・おのれ・・・・おのれ!!!!
「・・・・またあの忌々しい小娘さんの仕業か・・・なんなのあの子？

疫病神か何かなのかい？」
　主に今まで通りにしていろというお墨付きの下、自分に対してもいつも通りの対応をしてくれる親友ミストバーンを怒らせているティファの事を、奇しくもキルバーンは疫病神と評したが・・・・異界の元祖・疫病神が知った日には大惨事待ったなしを知らぬが何とやら・・・・チウだけに飽き足らずティファまで穢した輩は地獄に行けが合言葉であろうがそれは兎も角、バーンがミストバーンに命じた事は勇者一行のマァムの母親レイラを人質とし、更にこのほど判明した魔界の名工ロン・ベルクの捕縛であった。
　レイラは当然逃げた一行をあぶりだす為の人質であり、ロン・ベルクは・・・・あいつは絶対に膾切りにしてやると私怨も・・・・私怨しかない理由でミストバーンは張り切った。
　その様子に普段であれば親友が面白い事になっていると茶化すキルバーンが苦笑するほどにミストバーンの黒い笑みは凄かった。
　そしてもう一手として、バルジ島でダイ達を助けた者は誰かを探っていたミストバーンの配下達が掴んだ大魔導士マトリフの隠棲先がバルジ島の目の前にある海岸付近だと知り。魔法使いポップの急激なレベルアップに絶対に関わっているだろうと推論をしたバーンはマトリフも捕縛するように命じてミストバーンが配下達を向かわせてみれば・・・全てからであった・・・文字通り探り当てたところにはマトリフとロン・ベルクはおらず・・ネイル村はレイラがいないどころか一村民丸々いなくなっているとはどういう事だ！
　仮にあの忌々しい小娘がレイラ達の事に気が付き保護したとしても、一村民丸ごと連れ出せるだけのことが出来るとはミストバーンは到底思えなかった。
　例えばこれがこの世界の者で地上の人間からの信頼の厚い人間が、自分達の存在と目論みを明るみに出し、レイラを保護しても村人たちも質になる危険性があると説けば村人達は動く可能性がある。
　大戦時とは言え故郷を離れるのはこの世界では余程のことが無ければあり得ず、信頼が全くないあの忌々しい小娘が勇者一行のマァムを使って説得したとしても鮮やかすぎる！

まるで老成された知者が関わっている不気味さに心をざわつかせたミストバーンは、あるものを配下達から受け取り・・・・完全に切れた。
それは置手紙であり、向かった先全てにそれは置かれていた。
マトリフのいた洞窟の中のテーブルの上に、ロン・ベルクのいた小屋のテーブルの上に、そしいてネイル村にはわざわざ村の中央にテーブルが置かれその上に石の重しまでご丁寧についていた。
内容を見たミストバーンは・・・・瞬時に置手紙を引き裂こうとして・・・止めた
その内容は
―少し振りですね、これを読んでいる魔王軍の方にご挨拶を申し上げます。
さて貴君がこの手紙を読んでいるという事はここにおられた方を人質にでも取る積もりでしたでしょうがお疲れ様です。
ここにおられた方は私どもの方で保護させていただきました。
この手紙を読むという事は、私の考えた通りの見え透いた手を使ったという事でしょうね～。
ご苦労様と慰労を述べさせていただきます。
お分かりかと存知ますが、私は魔王軍がどのような方法で地上を消滅させようとしているのかを知っておりそして止めています。
魔の六芒星の描かれる場所のも未だにきちんと覚えています。
もしもそちらが同じ手段に出るのであれば、私達には止める手立てがきちんとあります。
そして―私ティファ―は、貴方達がいるバーンパレスが超超高度にいるのかを把握しています。
もしも魔の六芒星を描くために―柱―を落としに行こうとすればすぐさま進路から場所を特定し、そこに住まう住民を逃がした後に―柱の中の黒の核晶―を、私の陣で飛ばします。
今いるのはどこの大陸でもない大海原の辺りでしょう。進路を見れば、直ぐに行き先が分かりますので、無駄な事はやめる事をお勧めします。

行の料理人ティファより―
知っている・・・知っていた・・・・知られていた!!
此方の取りうるべき手段を!魔の六芒星の事を!!そして・・・どうやってこの空飛ぶバーンパレスの位置を知れるというのだ・・・
あまりの忌々しい内容にティファからの手紙を破りかけたミストバーンは、得体の知れなさすぎるティファに怖気が奔り、すぐさま主の下にリリルーラで向かったのを見送ったキルバーンは、他の所に置かれていた手紙を読んでみれば内容は全て一緒であった。
「どう思うかねピロロ、全てあの忌々しい小娘さんの考え付いた事だと思うかい?」
「分からない・・・けれども・・・やる事に変わりはない・調べるのは―僕等―の仕事じゃない。
獲物を見つけて狩り取るのが―僕等―の仕事だ。」
「そうだね、可愛い親友を虚仮にした奴を始末するもの僕らの役目だ・・・早く見つけないと。」
人形であるはずの物体に話しかけられたピロロは、―キルバーン―に向けて返事をして会話までした。
知っていると思っている者が見れば、人形遊びの延長の如く映るだろうが違うのである。
このキルバーンにも、他界のキルの様に自分で思考し動けるように疑似自律回路が埋め込まれてそれが育った結果、人格とも呼べそうな物が、このキルバーンにも確かにありそれをしてミストバーンとの友愛にいたったのだ。
完全な人形ではないとミストバーンは断じ、それ故にミストバーンはキルバーンに対しての態度を変えなかったのだが、だからこそ厄介ともいえる。
暗躍するのが好きなピロロと、残虐な行為で敵を屠るのが好きなキルバーンはまさに二人で一人の死神と言えよう。
その死神は怒っている、親友をここまで虚仮にした輩に対して・・・

「へ・・・・へっくしょん!!・・・・・誰か私の噂をしていますかね。」
「大丈夫っすかアバン先生・・」
「ノープロブレムですよポップ・・・・それよりも―ポップさん―、そちらのティファさん大丈夫ですか?」
「・・・・大丈夫に見えたら本物の眼鏡をかける事をお勧めしますよ―アバンさん―・・あんな手紙をティファに書かせて・・」
「う・・・うぅ・・・あんなひどいお手紙書いちゃった・・・大戦時だってあんな煽り文句の手紙を魔王軍に送った事ないのに・・・」
「ノンノン、敵の手を制するにはあれくらいの事をしてはじめて相手に衝撃を与えて計画を一時的にでも頓挫させられるのですよ?
　貴女はその辺が甘そうですねティファさん・・・」
「力が足りなかったからって死にかけていたアバン先生がそれ言うんだ・・・」
「う・・・ダイ・・」
「お姉ちゃんいじめないでよ、後五月蠅い・・・」
「ダイ・・・」
「ダイ君・・・」
　魔王軍の参謀がティファのお手紙で切れているその頃、カールにある隠し砦で真っ黒い大勇者は敵との丁々発止の策謀のやり取りを他界の料理人と言っているティファにレクチャーすれば、あの時点ではまだまだ弱いと言える部類の魔軍司令ハドラー相手に死んだふりしていた先生が偉そう言うなというダイの一言に、当人と周りは秒殺された。
　そのダイは、―ポップさん―の懐にべったりとしている。
　・・・・何がどうしてこうなったのだろうと、気絶から復活を果たしたフローラは頭を痛めるのを、横でこの砦の良心とも言えそうなリンガイアの将軍・バウスンとベンガーナの戦車隊長・アキームと、そしてレオナ姫が慰めている。
　今この砦の大広間にはあり得ない光景が繰り広げられている。

マァムの母親レイラは、大戦時アバンに置いてけぼりを食らったロカが、アバンがハドラー諸共に凍れる時の秘宝という天文を使った大呪文で封印されてしまった事を報告しに戻って来た時にロカに俺の妻ですと紹介をされたのだ。

あの時の胸の痛みはよく覚えている。愛した男がその身と引き換えに魔王を封印し、世界に平和が訪れても喜べることではなかったから・・・しかしロカが力強く言った言葉に希望を持てもした。

「今俺達に力を貸してくれてる大魔導士マトリフ様が、封印を解く手立てと魔王ハドラーだけを始末する方法を探しています。」

決してアバンを諦めないロカの言葉に、どれ程力づけられたか・・・その男もハドラーとの決戦時の傷が下で大戦終結数年後に逝ってしまい、悔やみの言葉と長年の功績を讃えてカール騎士団長に贈る勲章とそれなりの額の見舞金を贈れば、礼儀正しい手紙と共にお金だけは返されて来た。

それはこれまで多くの薬草類をロカの為に贈っていた事対するお礼から始まり、勲章はロカのいた寝室にずっと飾る事が書かれていた。

そして、これまで多くの支援を戴いた上にお金までもらってはきっとロカに怒鳴られてしまうという趣旨の内容が礼儀正しく書き連なり、気持ちだけ受け取る事を許してほしいとまで書かれていた手紙は、カールの城の自室の文机に入れてある。

レイラの優しさがしのばれる温かい手紙は、慣れぬ執務に励む若き女王の支えとなってくれたのだから。

そのレイラはマトリフの手を取り娘と思しき武闘家マァムと話をしている。

そしてその横には、魔法使いポップが親父・お袋と呼んでいる庶民の夫婦が魔族と共に話をしている。

今は傷が癒えずにこの砦のベットで眠っているチウの傍らにはブロキーナ老師様がいる。

そして異界とやから来たポップの懐にダイがおり、其の両隣にチウと、料理人という可笑しな職業を名乗ったティファという少女の横

に・・・・死んだはずのアバンがいる・・・何がどうしたらこうなるのかと・・・・その死んだはずの男アバンからは、ダイの祖父になる鬼面導師ブラスとデルムリン島にいたモンスター達は全て―モンスター筒―に入れて保護しているのでそちらも大丈夫ですと言われて・・・・モンスター筒は一つでも高価でありそもそもが入手困難な物を！どうしたら鬼面導師は兎も角島に数百はいるというモンスター達を入れる筒があったというのだ・・・・もう・・・誰かこの状況を一から説明して欲しいとフローラとカール騎士団一同と、サババ砦でお留守番をしていた一同が泣いたのはきっと悪くない・・・・そして異界の料理人ティファも思う・・・・

腹黒先代勇者なんて放っておけばよかったと涙を滂沱の如く流しながら後悔した・・・・

あの時―ポップ―の放った極大消滅呪文当っていればよかったのにと・・・・

小石の投げられた世界：安全確保完了！

―遡った一時間前のサババ砦―

最悪な性格ともいえる敵達から兄とチウとそしてこの世界の勇者一行を丸ごと無事に逃がさたティファは、兄ポップの腕の中で心が疲れ果て闘う理由が分からなくなってしまったと泣く勇者ダイと、その勇者を支えられずに済まないと泣いている若き魔法使いポップ、そしてその二人の事を思って泣いているマァムとヒュンケルとクロコダインを一頻り泣かせて少ししてから次の場所に行くことを告げた。

「着いた場所でも泣いていても大丈夫です。」

泣く事は恥ではないとティファはダイ達ににっこりと笑って告げる。

心の痛みや倦み疲れた心の淀みを吐き出す事は、生きている上では大事な事なのをティファは経験から知っているからこそ伝えられる言葉であった。

確かに泣いている場合ではない時もある。泣いてもどうにもならない事もある。

だからと言って泣くことすべてを弱い者として悪し様に言う者があるが、少なくともティファとその周辺の者達にはその考えはなく、今は急ぐ状況なので、移動しながらでもその先でも泣いてもいいので動いて欲しいのだと、ティファは幼いダイの頭を撫でながら優しく語りかける様にお願いをし、ダイは不安そうな顔をした。

「移動って・・・親父はどうするの？」

「あ・・・バランのあの体じゃ移動に耐えられるかの？」

自分達だけならば難なく移動をすることは可能であるだろう、しかし生命活動にもう支障がないとはいえ昏睡状態にある父を置いて行かなければならないのかと青褪めるダイとポップに、ティファは心配いらないと解決策を提示する。

「ダイ君、―私達―は人間ではありません・・・・少し嫌かもしれませんが―筒―に入れます。」

「それって・・・できるの？」

「はい・・・この筒は魔神や魔王でも入れられる伝説等級の筒でして・・・その・・」
「いいよ・・・・親父を憎んでる人間は沢山いる・・・・・お願いできるお姉ちゃん？」
「ダイ君・・・」
　ティファは幼い頃、三神達と自由に会話ができたデルムリン島の洞窟で、モンスター筒に魔王や竜の騎士達は入れられるのかという長年の疑問を聞いて、可能であると教えられそれ専用の筒を、洞窟の深い場所の宝物として手に入れている。
　しかしティファは自分の提案した事とは言えど、それは竜の騎士が引いてはダイも人間ではなく―魔族――魔物―に類する者であると言ったも同然の事を、それをあっさりとに飲み込みそして父の犯した罪の重さを十全に知っている事にティファは心を痛める。
　周りの事はどうでもよく・・・それこそ自身がどうなってももういいと放り捨てかけたあの時の自分の心情が、今目の前にいる幼いダイが味わっている事に悲しくなる。
　あの時、自分の心は奈落の底に落ちかけていた。何もかもがどうでもよく、一体自分は何の為に闘いに身を投じたのかと、己で決めた事すら見失いかける程に疲れ果て心もなくなりかけた暗く冷たい感覚を、今でも夢に見て跳ね起きる事がある。
　あんな思いは自分も、そして誰にもしてほしくないと願っていたのだが儘ならないものだと内心で深いため息をつきながら、ダイの願いに応える。
「ダイ君のお父さんの事任された。大丈夫、きっとお父さんは目を覚ますから。」
　兎に角ダイを安心させるところから始める事にしたティファは、現在ダイの心の拠り所となっている父バランを助けるところから始める事にしてダイに指切りげんまんの約束をする。
　自分が約束をした事は必ず守られてきたのだという実績を伴った言葉に、ダイはティファの言葉と心の温かさに、凍てついてしまった心の中でじんわりとした何かが生じるのを感じながら、絡められた

テイファの指をおずおずと絡み返すのを、隣にいるポップと、チウに誘われ四人の側に来たマァムとヒュンケルとクロコダインは泣き笑いをしながら見守り、そしてバランを筒に入れて一行は動いた。
行き先はカールにある破邪の洞窟、目指す相手は死んだふりをしたであろうこの世界のアバン先生。
当然テイファはその裏どりをきちんとした。
ダイ達に、この世界のアバン先生が、こんな感じの首飾りをしていなかったかを絵にかいて聞いてみれば、確かに付けていたというのでネタ晴らしをした。
「これはカールのお守りという首飾りでして、身代わりアイテムなのです。」
そのおかげで向こうの世界のアバン先生はきちんと助かり、カールの破邪の洞窟で弱った自分を鍛錬していたのだと教えれば・・・・ダイとマァムとポップはおろか、冷静沈着そうなヒュンケルすらもが顎が外れるのではないかと心配したくなるほど愕然としたのを、ポップは苦笑しそうになるのと堪える。
自分だとて先生が死んでしまったと思ったからこそ子供の一行でも我武者羅に突き進み、力をつけてきたのが、実は生きていましたと言われては驚くのも無理はないのだから。
そんな感傷の時間も惜しいとばかりに、テイファはポップ二人にトベルーラでカール王国の洞窟に行く指示出しをテキパキとした行く。
向こうの世界の破邪の洞窟は、兄も何度か挑戦して場所は知ってはいるのだが、果たしてこの世界ではルーラがその通りに発動をするのか疑念があるのでトベルーラで行くのだときちんと説明をしながらである。
時間があれば兄ポップに手近なところに行って帰ってくるという実験をしたいところだが、急を要する事なので確実な方を選び、兄ポップの方にクロコダインとチウと・・・兄から離れないダイを、少年ポップの方はマァムとヒュンケルと自分を運んでもらう。
兄の方が魔法量は多く、クロコダインを運んでも問題なかろうと計算をしたのだがここで一つ疑問があると少年ポップと兄ポップから

同時に質問をされた。
「あいつ等俺達の事血眼になって探していると思うけどその辺どうすんだ？」
あいつ等とは魔王軍の事であり、勇者達を取り逃がしたかろと言ってはいそうですかと放置するはずはなく、シャドーだのゴーストだのありとあらゆる索敵が得意な者達を総動員して探すだろうという二人のポップの言葉に、ティファは良い笑顔でにっこりと言い切った。
「私の結界は完璧です。」
・・・・・その言葉の通り、サババ砦を探りに来た目玉の前で二人のポップが全員を連れてのトベルーラというど派手な事をしても、目玉には何も映らずここには誰もいないと報告をして他に行った。
・・・・こいつ一体何者だと、大人ポップとチウと、他の事に関心が薄くなってしまったダイ以外は呆然とした。
この世界にはティファが使ったような呪文も呪法もみた事も聞いた事も無いのだから無理はない。
しかし驚きの目を向けられることに慣れているティファは気にせず結界をステルスモードにして兄ポップと少年ポップの速度を同じようにするように指示を出してはみ出さないように細心の注意を払いながら、一路洞窟を目指す。
保護者その一をさっさとゲットするべく。

カール王国にある破邪の洞窟、そこは屈強な戦士と言えども走破された事のない大迷宮であり、あれ程度の深度は古文書に記されているが、自分のいる百二十五階は人類史上で初であろう・・・・そろそろ地上に戻った方がいいかと迷い、進もうしていたアバンの目の前に―光の柱―とも言えそう何かが天井をぶち抜いてそして・・・・威力は殺される事なく、洞窟の底へと真っ直ぐ向かっていったのを、アバンは呆然として見送った。
見てみれば自分の靴のつま先が・・・一歩間違えれば自分もこの床と天井の如く!!
全身に寒気が奔ったたアバンの耳に、怒声が届いた。

「何てことすんだよあんた達!!ここ神様が作ったていう洞窟・・・」
「いいんだよ!!俺の妹をアイテム扱いするような神さんの事なんて気にしてやる謂れは俺には無ぇ!!時間も無ぇんだから手っ取り早く行くぞ!!」
それでも神達や他の者達がとやかく言って来たとは相手してやらぁと、仄暗い声を最後に静寂が落ちた。
様々な意味で驚愕をしているアバンの耳に、ここで聞こえるはずのない愛弟子の声が・・二つも聞こえる事に幻聴でも聞こえたかと先ず己の耳を疑った！
この洞窟を、おそらくは魔法であるだろうが其れで撃ち抜いて走破しようなどという発想をする者は未だかつていないと、お前はいったい何を考えていると幼馴染からも味方からもそれこそあのハドラーからも言われたアバンとても・・・こんな乱暴どころか暴挙に打って出たのが愛弟子だとは思いたくはない！
あの子は才はあれどもさぼり癖があり臆病なところがある子であり、あの様な暴論とそして暗い声を出す子ではなかった・しかし・・・二人分の声か聞こえて、片方は若干声が低く感じたのは何故だろうという疑問は直ぐに解消された。
二人のポップが自分の弟子全員と見た事も無い大型リザードマンと大ネズミと・・・こんな洞窟には不釣り合いなドレス姿の女の子を伴ってやってきた・・
「ああ!!本当に先生いた!!」
「先生！アバン先生!!」
少年ポップとマァムはアバン先生に会えたことを単純に喜び抱き着くのを、師に対しては様々な意味で罪悪感しかないヒュンケルは内心の喜びを表に出せずに途方に暮れる中、ダイはその様子を大人ポップの服を握りながら遠巻きにして見る。
先生は・・・強いはずなのに自分達の困難を見捨てたのだろうと・・・生きているならどうして助けてくれなかったのかという疑念の視線を感じたアバンは、泣いて自分に抱き着くポップとマァムの頭を撫でてやりながら視線の先を辿れば、冷めた目で見ているダイがいた。

たった数日ではあるが島では感情豊かで優しいダイの、冷たい表情は何事かと聞こうとしたその時、ドレス姿の女の子が申し訳なさそうな顔をして挨拶をしてきた。
「その・・・申し訳ありません・・・兄ポップの極大消滅呪文がほんの少しつま先に当たってしまったようですが・・・・大丈夫ですか？」
その言葉に、ポップとマァムは青褪めすぐさま体を離して師のつま先を見てみれば・・靴下も焦げて指がのぞいていた・・・
「すみません、―この世界―にもその人達にとっても時間がないので極大消滅呪文使ってショートカットをさせていただいたのですが・・・まさかアバンさんに当たりそうになるとは発案した時には露にも思いませんで。」
なにせこの洞窟は広いので、そんな天文的な確率のあり得ない事が発生するとは思いませんでしたと頭を掻きながら申し訳なさそうにしている少女に、アバンは唖然とした。
言っている内容からつまるところ、神が人間の為に用意をしてくれた神聖な洞窟を、一つ一つの試練をきちんと突破するではなく、マトリフが凍れる時の秘宝で封印されたハドラーを葬り去る為の極大消滅呪文をこの洞窟に使用する事を、着ている者は兎も角見た目は真っ当そうな少女がしたと言われればふつう驚くのをティファは構わずサクサクと自己紹介をする。
「初めてお目にかかります。私はこの世界ではなく他界からこの世界の聖母竜と天界の神から誘拐をされてやってきた他界の勇者一行で料理人をしていたティファと申します。
此方にいる大ネズミ武闘家のチウで、ダキシードを着ているのは他界の魔法使いポップです。時間がないのでお話聞いてください。」
・・・・にっこりとしながらこれまでの経緯を怒涛の勢いでアバンの頭にインストールをしたティファは、話し終えた後黙り込むアバンを放っておく。
必要な情報と現状報告したのだから、きっとアバンの頭は高速化で情報処理をしているだろうか少しだけ時間が・・・
「それでは―私達―は直ぐに動かなければならないですね、ティファ

さん。」
「・・・・へ？」
「その前にですね、―貴女―の持っている情報と、今使える手札を全部教えてください。」
「・・・・はい？」
「貴女の使える能力は結界と移動手段と後は何ですか？そして貴女方の世界で勇者一行の味方をした人たちの情報とポップ。」
「は？・・・・はい!!」
「この世界で貴方達を助けてくれた人たちの名前と居所を今すぐに・・・どうしましたかティファさん、時間が無いのですからサクっと行きましょう！」
・・・前言撤回・・・アバンはティファの情報をすぐさま精査し終えて現状把握をすぐさましてティファと自分の弟子であるポップにこれから必要になる事の為の追加情報をティファとポップに提出をさせる様に・・・・さしものティファも、自分の情報疑わないのかと思いつつ、式神の事とハイ＝エントのシュガー＝アンド＝スパイスの事を話す。
無論アバンはティファの言った事を全て無条件に信じたわけではない。
しかし信じるに足る事が―二つ―あった。
一つは自分は弟子達の卒業記念に贈った輝聖石―を、ポップとマァムとダイと・・・そしてヒュンケルが見える様に鎧の上にしているのを見て、ここにいる子達は確かに本物の自分の弟子であり、そしてタキシード姿のポップの輝聖石からも自分が施した加護が感じられる。
これは自分オリジナルであり、他界の話も神隠しを知っているアバンとしてはすぐさま受け入れられものであった。
そしてもう一つは、この世界の神が破邪の洞窟に施しているはずの結界を一時切っていることがティファという少女の言葉の後押しとなっている。
少女ティファは、極大消滅呪文で床を撃ち抜く前にまずは一階層にて壁に向かって撃っても跳ね返されないかの実験をして大丈夫だと

確信を得たので実行したと言っていたが、古文書によれば、闘気で床を砕いて下に降りた者の記述と、イオナズンやベギラゴンの呪文を同じように使ったものがいて成功しているのでその事ではなく、モンスターであるリザードマンのクロコダインと大ネズミモンスターのチウがいる事はあり得ない。

ここは人間が魔族・モンスター達に対抗できる術を手に入れる為の場所であり、神の加護を持つ竜の騎士の子のダイと異界のティファは兎も角、モンスターが入れる筈が本来であればない。

しかしそれが無いという事は、この世界の神か神々が、少女ティファの為に結界を切ったからだと推測が出来れば、ティファの言葉に信ぴょう性がぐんと上がり、後は自分も共に行動する中でティファ達の言ったことすべてが真実かどうかを見極めればよいと切り替えての事であった。

そして得られた情報からアバンはすぐさま計画を立案する。

先ずはティファにこの後どうするつもりであったのかを聞いたところ、ティファも勇者一行の関係者一同を保護してから、兄ポップが大戦時に保護されたカールにある隠し砦に向かうつもりであったのを聞いた。

その際魔王軍に人質を取ろうとしても無駄であることと、式神の事は言わないまでも空飛ぶパレスの位置はいつでも分かるのだという警告文を残していくとく計画を、アバンは若干修正する案を出した。

それはすなわち

「・・・生きて・・・・いたのですねアバン様・・・」

「驚かして申し訳ないレイラ、しかしこの世界に危機が訪れています。村長殿、先ほど言った通り勇者一行は一度敗れ、魔王軍は地上を消滅させようとしています。

その際邪魔な我々を一堂に集めて消すために貴方達を人質に取る可能性が大きいのです。」

「それは・・・我々にネイル村を去れと・・・」

「申し訳ありません、手紙を書きましたので、今からここにいるポップと―魔法使い―のルーラでロモス城に保護してもらってください。

手紙には私の印章があるので信じてもらえるはずです。王城か城下町に言った事のある方はキメラの翼を私の合図で同時に・・最低限の身の回りの物を持っていけば、ロモス王ならば・・」
「・・・・確かに、あの王様ならば儂等を無下にはせんでしょう・・・分かりました、レイラ、マァム・・・気を付けて・・」
「マァムお姉ちゃん!・レイラさん!!また会おうね!!!」
　先の大戦で世界を救い名を馳せ、そしてネイル村でも顔が知られているアバンが、自分の生存に驚く村長とレイラに村人たちを村の中央に集めさせてこの世界の危機の大まかな事を話し、レイラは手元で保護をして村人達は手紙を持たせてロモス王の下保護してもらう事になった。
　移動手段はポップと頭からロープを着込んだ魔法使いのルーラと、王城に行ったものは用意したキメラの翼で同時に行ってもらう。
　魔王軍に見つからない対策として、ロープの魔法使いの懐にいるティファに結界を張ってもらいながらの往復をしてもらっている間に、アバンは村の中央に机を持ってくるようにヒュンケルに頼み、おかれた机の上にティファに書かせた手紙を風で飛ばされないように石を乗せて置手紙をする。
「・・・・お姉ちゃんこの手紙書く時とっても嫌がってった・・・」
　ダイがその時の事を思い出したのを、アバンは苦笑する。
「仕方がないのですよダイ、敵の行動を少しでも遅滞させるには真っ当な手段だけでは難しいのです。相手の心を乱しながら、怖れさせる事も必要なのです。」
　ティファという少女は真っ当に書き、空飛ぶ要塞の監視は可能であると怖れさせて止めようとしたのだろうが、それでは心理戦としては不足なのである。
　自分の力を魅せつけてこそ、怖れと言うものは増幅される。其のアピールの為の力と知識と策略も使えるという見せつけを煽りと共にするのがこの手紙なのだが・・・
「やです!!そんなはしたない手紙・・・書いたらじいちゃんに怒られる・・」

向こうの世界の大戦を潜り抜けてきたにしてはどこか奇麗すぎる発想をするティファに、アバンは心を鬼にして書かせたのだ。
自分の字では、この一行に誰か知恵者が付いたことを教えてしまうも同然であり、この世界と向こうの字は一緒だと確認を取ったアバンは、煽り文句を入れた手紙をきちんとティファに書かせた。
それを嫌がっていたのを、ダイも見ていて嫌であった。
先生もまた、世界を守るために嫌がる事を人に強要するのだろうかと疑念を生じさせて。
それが自分達を守る為の事だとダイには分からない。
守るという事は優しい事だけでは駄目なのだと今のダイに言っても、きっと心には届かない。
それでもアバンにはダイを放っておくという選択肢はなく、印を与えた時のように膝をつき、ダイの目線に合わせて説明をする。
ティファならば、他界の勇者一行を守って来た彼女であればきっと分かってくれる。
守ることの難しさを、それでも守る者の気持ちを分かってくれているからこそ頼んだのだと。
納得はしないが、自分から顔を背けないダイの頭をそっと撫でているところに、見送りに行ったレイラもつれて三人は戻り、そして同じような要領でアバン達は保護に向かった。
マトリフには少し驚かれたが呆れられ、理由をきちんと後で説明すると言えばあっさりと了承された。
次のランカークスではポップが父と母を説得し、二人もまた成長したポップの言葉を疑う事無く村長と村人達を説得してベンガーナ王に保護してもらうべく、ネイル村と同じ方法で城下町に全員を送り届けている間に、ダイとヒュンケルの二人はロン・ベルクを訪ね、状況説明と最後の戦いの為に武器を作ってほしいと頭を下げるのを、ロン・ベルクは一度断った。
ロン・ベルクとしてはこの世界の命運はどうでもよく、滅びるならばそこまでだと言う斜に構えた言葉を言われたダイは食い下がらなかった。

そうかもしれない、誰かに無理強いをしなければ存続する世界に意味を見出せないダイをの態度に、ロン・ベルクは不審に思う中、追いついてきたポップと、特にジャンクに頭を下げられて折れた。
俺の息子とその仲間を死なせたくないと、あの不器用な男が一心に下げる頭は決して安くないとロン・ベルクは友誼を結んだジャンクの息子の為だと、武器作りに必要な道具を全て旅人の袋に入れて支度をした。
向こうで高炉はあるのかと問えば用意できる仲間がいると言うポップの言葉を信じ、一緒に来てくれるのかと視線で問うってきたダイの頭をポンポンと叩きながら待っている者達の下へと急ぎ、その五分後に魔王丸が各自の場所に辿り着いた、まさに危機一髪だったのである。
そしてブロキーナ老師の方は、ティファの式見で発見をして説明せずに連れていき、アバンを先頭にカール騎士達の隠れている砦の前で結界を解除させて・・・大混乱になったのを宥めそして・・・・フローラ女王陛下が割を食ったのだ・・・
「・・・・ポップ兄、チウ君、あんなお手紙をティファが書いた事皆には内緒にしてね？」
「安心しろティファ、あれはお前が書いたんじゃねえんだから。」
「そうです、僕も誰にも言いませんよ。」
はしたないお手紙を書いてしまったのを、終生内緒にしてくれると言う二人の言葉を得てティファはようやく立ち直った。
考えてみれば煽り文句は書かずとも、似たようなことを敵達にさんざん言って自分にヘイトを集めて一行の安全を図っていたのだからと立ち直りを図った。
これで一行の人達の関係者一同の安全は確保された！
この世界の未来の為にもみんなで知恵を出し合ってもらう！
無論私も口を出す!!

小石の投げられた世界：料理人の真価・前編

カール王国女王フローラが率いるカール騎士団達は、大戦始まりの時一度は魔王軍の猛攻を防ぎ切ったが、ドラゴン達が率いられてきた超竜軍団を前にして壊滅の憂き目にあった。

それは国を街を蹂躙されたが、国民達は一度目の敵の襲来でモンスター達の比較的少ないベンガーナとの国境付近にある緊急避難場所の山間都市に逃がしてあったので人的被害はそこまでは出なかった。

しかしそれはあくまでも―民間人―の話であり、首都防衛と避難民達を逃がすために数多の騎士・兵士達が命を落としている。

故に、勇者ダイの父親とは言えカール王国を壊滅し、氷の勇者ノヴァの故郷リンガイアはそれ以上の被害を以て国を丸ごと蹂躙され、未だに国王の行方がしれないと言う最悪の状態である現状を作り出したバランを、憎んでも余りあるのもは大勢いる。

魔王軍を殲滅させるのは無論の事、ドラゴンを率いた長の行方も彼等は同時に探しているそんな中で、実は生存していたかつての同僚にして故郷が生み出した大勇者の号令の下全員、それこそと隠し砦にいる者達を広間では手狭になったために全員が入れる大広間での会議が開かれた。

会議の内容には砦にいた騎士達全員が納得をした。

勇者達は一度敵の首魁・大魔王バーンに敗れ去り再起を図るために、今後この世界を守る為に、これまでのように勇者一行だけに闘わせるのではなく世界中の闘える有志達に合わせ今こそ我等カール騎士団も打って出ると言うのだと彼等は認識をし、士気を大いに上げながら会議場に指定された大広間にいたのは・・・年若い一行は、話に聞いた勇者一行だと分かるのだが・・・その近くにいるどう見ても民間人の夫婦にしか見えないものが何故戦いを談じる会議の場にいるのだと、多かれ少なかれ疑問を持った。

その疑問を持ったのは何も呼ばれたカール騎士団だけではない。

サババ砦で勇者達を決戦後に送り出された後無事を祈っていたベンカーナ戦車隊長アキームと、リンガイア将軍バウスン、そしてその

息子であり北方の勇者ノヴァも同様であった。
この世界のノヴァは、自身が首都を空けている間に故郷が壊滅しのみならず守るべき主君を行方知れずにしてしまったという心の傷を負い、様々な事で心が少々ねじ曲がって勇者ダイ達の一行に、改心したとはいえど魔王軍がいることが許せず、そんな彼等を許したダイ達の甘さに唾棄すべきだと断じて敵対心を露わにしたが、死の大地に来るものを選別する篩の場において、ハドラー親衛騎団を一度は押しているように見えたがボロボロになるほどの負けを味あわされ、それまでは自分がいれば故郷が守れた、皆を守れていたのだと言う強烈な自負心は幻であったと思い知らされた。
仮にあの日あの場にいたとしても、自分も故郷を守って死んでいった騎士・兵士たちの躯の仲間入りをしていただけなのだと。
甘かった、自分の実力などでは魔王軍の団長どころか魔軍司令官ハドラーの駒達にすら勝てない自分はいっそ死んでしまった方がいいとさえ思ったのを、一行の武闘家マァムに叱り飛ばされた。
貴方はまだ生きている、生きているなら立ち上がって歩き出せと・・・それができないなら自分が担いでやると・・・・少女のマァムにそこまで言われては立つ瀬がなかった・・歩かなければならないと知らしめられた。
自分は今確かに生きている・・・・死んでしまった者達の想いを抱えて・・・生きて魔王軍に立ち向かっていくのだと折れた心に抱いた光のお陰でノヴァはまた再び立ち上がれた。
彼等は強い、このままもしかしたら大魔王達すらも倒せるのではという希望は、勇者達が砦に来た時に見た雰囲気でそれは潰えたのがすぐに分かった。
弱ったようにロープの男に包まれるように抱き上げられボロボロになっている勇者ダイ、下を向き悔しそうにしているポップと申し訳なさそうしているマァムとヒュンケルとクロコダイン・・・彼等は負けたのだと出迎えた者達は直ぐに知った。
だがノヴァはくじけなかった。
マァムの言う通りであれば生きている限り立ち上って歩くだろう

と思っていた。
そして今度こそ自分も彼等と共に戦場で助け合えるほどの強さを短期間で身に付けなければならない。
幸い彼等の師であり先の大戦を地上の勝利で収めた大勇者の復活は渡りに船、自分もダイ達と共に彼に支持を得て今度こを勝つのだと。
其の為の会議をする場に・・・・一般人がいるのは何故なのか？
彼等がここに来た経緯は知っている。
勇者達を丸ごと逃がした魔王軍が、大規模な人質作戦を展開する恐れがあるので早急に保護した事は伝えられていたから。
問題は、何故マァムの母親レイラとポップの両親までもが・・・そしてダイは何故ロープの男に抱えられたままなのか？
そのダイの行動を一行の誰も見咎めないどころか気遣う様に見ている。
何故なのか分からず、彼等、特にダイに近しい関係を持つレオナ姫を見てみれば、姫もまた何が起きているのか分からずに混乱した表情を浮かべている。
一体これから何が起きるのか、砦にいる全員を集めて欲しい、見張りはしなくともよいと言うアバンの指示の下、見張りの兵士達までもが一堂に会した時、フローラから会議の始まりを告げられたが
「ちょっと待ってもらおうか女王陛下。」
・・・待ったの声が入った。
その声の主は魔法使いポップの父ジャンクからであった。
「なんで戦いの中で足手纏いにしかならねぇ俺とスティーヌがこの場にいるんだ？何の役にも立たないどころか騎士や兵士達が混乱している。
俺達は息子たちの足引っ張んねぇ為にこの砦に来ることになったが、この場にいるのは場違いもいい所だろう。
俺達は他の部屋できちんと待つ、ウロチョロする子供でもないんだからな。」
かつて城の工房で働いていた時、自分の弟子のような年下の同僚に

難癖をつけていた大臣を殴り飛ばして逐電した男はその性質は健在であり、己の考えを誰に対しても堂々と言い放つ。
その内容には筋が通っており、その場の・・・・一部を除いて大半の者達が支持した。
彼の言い分は正しく、闘わせるつもりがない民草の彼等を保護こそすれこのような会議の場にいるのは違うのではないかと・・・・真っ当な意見は蹴り飛ばされた。
「それは困ります。」
その声は・・・それこそこの場に、戦いを論じる会議の場には全く相応しくないドレスを着た少女によって再度の待ったがかけられた。
「魔法使いポップさんの父ジャンクさんと母スティーヌさん、そして武闘家マァムさんの母レイラさんにも是非とも聞いてきたいただかなければなりません。」
その少女は満座の視線を一身にあびても怖じ気づく事はなく、微笑みさえ浮かべていた。
何故ならば彼女はなれているから。
「事はこの地上界消滅が掛かっている事です。それを打ち破るには敵の首魁・大魔王バーンとその側近達を倒さねば地上界は明日の日の出を拝むことは金輪際叶いません！」
苛烈なる言葉を用いて現実を直視させ
「そしてその力は何も闘う者だけの力があればいいと言うものではありません！勇者一行の心は疲れ果てているのです。たった数ヶ月のことなれど、彼等を助けてくれる―手―はあまりにも少なく、ほぼ子供の多い彼等だけで戦い抜いてきたのだと言っても過言ではなく状況が続いたのだから無理からぬことだと推察をします。
そんな彼等の心を放ってまた戦えと言うだけでは不足でしょう!!」
誰に対しても持論を力強く述べるその姿は
「なればこそ、この世界とは異なる世界より、この世界の竜の騎士を生み出しておられたま聖母竜・マザードラゴンよって呼び出された他界の勇者ダイの妹であるティファが、この度の会議の場において魔法使いポップの両親と武闘家マァムの母君に、いま世界がどのような状況

にあるのか、その中において彼等がどれ程その身を心を削って世界を守って来たのかを知ってもらわねば、彼等の心に寄り添う事は叶わぬ事かと。」
　かつてパプニカ王国において開かれた世界会議の場において、様々な発言をした―料理人のティファ―の姿がそこにはあった。
　その内容に、様々な驚愕の念が飛び交った。
　圧倒的に多いのは地上の消滅とそして、異なる世界から連れてこられたとはどういう事か、様々な者達のその質問に、ティファはにっこりと笑って宣った。
「それは全てこちらにおられるアバンさんに話したので、順を追って説明してもらいますのでご安心を。」
　その辺は現地の御方に丸投げである・・・・・いきなり会議の場を沸騰させ、そして丸投げしてくるティファに、先程嫌がる手紙を書かせたことへの意趣返しだろうかと疑念がわいたのは・・・悪くないだろうと思いつつ、アバンはティファから聞いた事と、それによって起こしたこれまでの一切の流れを順を追って話した。
　それは神話かおとぎ話にでも聞かされているような奇妙な話であり、そこにいる者達は勇者一行のみならず、こうした抵抗勢力達を根こそぎにする為の魔王軍の罠ではないかという言葉に、それまでダイを抱えて黙っていたローブの者がダイを降ろして立ち上がり瞬間に吠え上げた。
「あんた達の立場だったらその疑念ももっともだと言ってやるんだがな・・俺達からすればくだらない事言って時間潰すなって俺はな思う訳よ・・・俺はな・・今日結婚式を挙げてたんだよ!!
　魔王軍の野望を砕いて平和になった世界でさぁ好きな女の子と添い遂げようって誓い立ててお披露目を終えて二次会終わりゃぁ初夜だったんだのを!!まったく関係もないこの世界を救って欲しいって我儘の為に全部ふいにしたんだよ!!!!」
　・・・・臆面もない事を火を噴くほどの怒声で張り上げる気配は確かに魔法使いポップだと・・戦う彼を知るノヴァとアキームは本能的に納得をした。ポップは普段は自意識が低く、一行を盛り上げるお調

子者だが、一度戦いになればその眼差しは鋭くなり、そして火を吹くが如くであるのを知っているから。
そして納得できないものは、アバンの理路整然とした説明でいったんは引くことにした。
アバン曰く、異界は確かに存在し、時折こちらの世界に迷い込むものがいる事も文献や古文書にきちんと記されている。
そしてこのような事をせずとも勇者一行に勝利を収めた魔王軍は地上を消滅させる術があり、その前ではここにいる抵抗勢力とても蟷螂の斧であるのだと厳しい言葉で正しい状況を認識させた。
ただの人間では、何百と集まろうとも戦力たりえず、勇者一行が万全であるからこそ抵抗勢力にも意味があるのだと言う言葉に、サババ砦でからついてきてくれたロモスの有志達も、カール騎士団と兵士達も悔しそうに俯く。
自分達だけでは、地上はおろか自分の身一つさえも守る事は叶わないのだと言われたのだから・・・
そんな過酷な戦いを、先の大戦で自ら経験をしていたレイラはやマトリフ、ロン・ベルクは兎も角、戦いに無縁であったジャンクとスティーヌは、息子がそんな苛酷な戦いに身を投じていたのかと愕然とした。
自分の息子が勇者一行の魔法使いになって活躍をしていたのは知っていた・・・しかし彼等は本当の意味では分かっていなかったのだ。
それは先の大戦でもベンガーナは他の国よりも被害は少なく、今大戦においてもベンガーナはどこよりも被害が少なかったために戦いにおいて負けた者の悲惨な末路がどうなるのかを実感できないでいたのだ。
ただ死ぬだけではない、もっと惨い目に遭ったかもしれない事を、ジャンクとスティーヌは本当に今更ながらに知ったのだ。
それを責めるのは酷であろうと、ジャンクとスティーヌを不見識であったと詰る者はいなかった。
当然であろう。

それはベンガーナを襲ったのが魔王軍において耐久力が最も低い魔軍団であり、その長は侵攻よりも軍内部の周りに取り入る事に熱心なザボエラであった事が、大戦始めから国の防衛を破られなかった要因であると、今更ながらに少年達の置かれていた過酷さに驚愕を見せたジャンクとスティーヌを見ながらティファは考察をしている。

実際にドラゴンが攻めてた時は、街は抵抗虚しく蹂躙されかけたのだから。

人は・・・どの種族であっても実感が伴わなければ本当の危機意識を持ってくれない、話だけで持てる者が稀有なのだとは改めてティファは思う。

先程までこの場にいない方がいいのではないかと言っていたジャンクとスティーヌが、息子たちの現状を知ろうと耳をそばだてながら少年ポップを何者からも守ろうとするかのようにジャンクとスティーヌが抱きしめている。

他界から来たと言うポップの事を驚いて見ていたが、其れすらも忘れたように必死に。

その腕の中で、少年ポップは身じろぎ戸惑う。

自分が戦いに行く事を、見送った両親が今更自分を守ろうとしてくれている事にどう返せばいいのか分からずに・・・・

そしてマァムの母レイラもまた動いた。

自分達の時には・・もう自分達だけで動いても問題がない歳になっており、そんな中ブロキーナ老師やマトリフ大魔導士というしっかりとした大人達が助けてくれた・・・翻ってこの一行は・・・自分が年を取り最前線から長らく遠ざかったからと言えど、彼等をもっと手助けする方法は無かったのかと悔やまれた！

偶然出会えたからいい者を・・自分はマトリフ大魔導士がどこに隠棲していたのかを知っていた！

それはロカが亡くなるまでずっと薬は薬草類をずっと届けてくれた時に、世間話の様にマトリフの近況を聞いて、バルジ島の大渦前の海岸に隠棲していたのを聞いていたのだ。

ロモスを救った後に、マトリフ大魔導士の下へと生ける道を指し示

せば・・・自分でマトリフ大魔導士に紹介の手紙を書けば・・・もっと早くこの子達の助けになれたのだと・・後悔があとからあとから溢れる中、少女ティファから―提案―がなされた。
「皆様は勇者ダイの父親についてご存知でしょうか？」
その言葉に、騎士・兵士達は戸惑い、サババ砦で会ったアキーム・バウスン・ノヴァは彼がどうかしたのかと怪訝な顔をする中、フローラだけが苦い顔をした。

勇者ダイの父親はカール王国とリンガイアを滅ぼした超竜軍団の長である。
だがそれらを起こした大罪人が超竜軍団の長という情報は末端まで下りているが、今魔王軍と最前列で戦っている勇者ダイの父親だと知っているのは本当に一握り、それこそ国の主の身で情報は止められている。
バランの事を知られたのは、テラン王国フォルケン王が各国の王達に新書で知らせた事で現国王達と、秘かに各国の王達と書簡をやり取りしていたフローラだけが知っている。
何故ならば大戦の最中に、最前線で魔王軍を撃破している勇者ダイの父親が、二か国を滅ぼしベンガーナを強襲した者であると知られたならば！いつ騎士・兵士達が暴発をしてしまうか知れたものではないと怖れたがゆえにの判断であり、それこそ王の右腕たる宰相達にも秘っせられた最重要極秘事項だからだ。
そしてそれは、国の代理を務めている将軍職のバウスンにさえ知らされないレベルのものであったのを・・・何故ティファがバランの事を持ち出したのか・・・
「実は私の父も竜の騎士バランなのです・・・そして・・・―この世界と同じく―大罪を犯しました。」
誰もの驚愕も苦い想いにも構いつけずに、ティファは他界の父の―罪の一端―を明らかにした。
それは母ソアラを身勝手な思いで駆け落ちをし、遂には国を滅ぼしてしまった事を。

それは魔界にて冥竜王ヴェルザーとの死闘を一人で五年もの間繰り広げた後の事であることを事前に話し、傷だらけになったバランは、出会った少女に光を見出し誰がために起きた悲劇であった事を。
そして後に魔道に堕ちた父が自分と共に人間を滅ぼせと言って来たのを拒絶しそして打ち勝った事で父を改心させたことを。
「その時兄は父から記憶を奪われ・・・攻めてきた父に成すすべがなくなった時、ここにいる兄・ポップが命を懸けて守ろうとしてくれたことが父の心に届いたのだと思います・・そしてこの世界のバランもまた、私達の世界の父と同じ道をたどりそして戦い敗れたところも同じだったのです。」
数奇な運命に翻弄されるところまで同じでなくてもいいだろうと、ほろ苦く笑うティファに誰もが沈黙をする中声がかけられた。
「だからその者の罪を許してほしいと言いたいのですかティファ？」
それは彼の者に滅ぼされたカール王国の女王陛下フローラからの言葉であった。

小石の投げられた世界：料理人の真価・後編

それは冷たい声音であった。
少年ダイ達は聞いたことが無く、しかしティファとポップが時折聞く為政者が他者を弾劾するときに使う声音であった。
ティファはその声を大戦終結前の一大決戦時に、様々な事がカール騎士団との間にありその果てに弑されようとしたその時、黄泉がえりを果たしたアバンが、ティファの数々の問題行動を弾劾しながらもフローラ女王と暴発をした元同僚であるカール騎士団達をも弾劾した時のあの声であり、ポップは王配となるべく修行の途中で各国の王達が自ら裁判の判決を読み上げる時の声音であった。
ポップが聞いたのは国家反逆罪や禁忌とされた奴隷商売をした貴族連中、そして人を廃人にする麻薬を扱った大商人の裁判で、一番に怖ろしいと思ったにはベンガーナ王であった。
情よりも計算高く、激高しやすい王であれども法を誰よりも遵守し自国を堕落させる者を決して許さない決意を以って罰を下すときのあの冷たい声と同じ声音を聞いた時、ポップの背中に汗が流れたが、下を見れば怜悧な声を浴びせられたティファは涼しい表情を変えていなかった。
ポップは少年ポップとヒュンケルとクロコダインから、バランがこの世界で犯してしまった罪の全てを聞いている。
超竜軍団の長として、カールとリンガイアを国として滅亡させてしまった事を・・・
それを聞いた時、この世界のバランでは、自分達の世界のバランと違って人間達が到底許さないだろうと絶望感を味わった。
確かにダイの親父さんを助けてやりたいが、犯した罪の規模が違いすぎる！
ティファは一体その罪をどうやって許せと言うのだろうか分からず、黙って見守る事しかできない自分に歯がゆさを感じる中、フローラの視線にティファは揺らぐことなく答えた。
「許さずとも放っておいて欲しいのです。彼の者が目を覚まして再び

剣を取ろうとも何もせず、なんでしたらまた再び死にかけたとして皆様は手助けしようとしなくていいです。
どこで生きようともそれこそ野垂れ死にしようとも放っておいてくださるだけ、それこそ大魔王達の追撃者たちがこようとも手助けしないでいい程に。」
見捨ててもいいので放っておいて欲しい・・・・・それは・・・そんな事で!!!
「先程勇者ダイの心が戦いによって疲弊して事をきちんとお伝えしたはずです。
今ここにいる少年ダイは、その身を削ってでも世界を引いては人間を守る事に意義を見出せず、辛うじて父バランの生存と少年ポップと仲間達との絆によって心を壊さずに済んでいると。
ダイの心の為にも、ひいては地上を守る為にも許さずとも今後人と敵対をしないと決めたバランを打ち捨てておく事は出来ませんか?」
「それが許す事と、どどう変わりが無いと言うのですか異界の娘よ?」
フローラは確かに先程その報告を受け、そした地上消滅の危機と同等の危機感を感じた。
勇者ダイがそこまでになっていたのを全く知らなかったから、ダイがおらねばと募った危機感を。
しかし今この時こうも思い直した、此方にはアバンがいる。
先の大戦の英雄であり、其の英雄がカールの破邪の洞窟の深深度まで潜ったからには何らかの秘策を手にしているはず。
その力を手にしたアバンと、彼の弟子達もほぼ無傷で集っている。
勇者ダイを説得する事も彼であれば可能だと、危機感を募らせながらもフローラは国を守る為政者としての計算を素早くして算段もつけたのだ。
そんな中、ティファの詭弁とも言うべきその言葉は、フローラの逆鱗に触れ、普段温厚篤実なる女王陛下として名を馳せている彼女をして怒りに身を震わせる程であった。
確かにバランはどこで野垂れ死にをしようとも構わない・・・さらに言うのであれば人類にとっての大逆を犯し人の手によって処刑さ

れるべきものではないかとフローラは考えている。
先程ティファが説明した通りの事が本当であっても！彼はアルキードの無辜の民も含めて滅ぼしそれにも飽き足らず魔道に落ちて魔王軍と共にリンガイアと自国カールを滅ぼした最悪の男でしかない。
野垂れ死にしようとも放っておけというが、この分であれば目の前の娘がバランを助ける事が身に見えている・・・・つまりティファが言っている事は赦す事と何ら変わらない詭弁でしかない・・・・自国の民達を蹂躙した男を・・・・見逃せるほどフローラは目に焼き付いた光景が忘れられなかった。
あまりの敵の強さに怯えて逃げ惑う中ドラゴンに踏みつぶされた少年兵の姿を・・牙で砕かれていく騎士達・・炎と氷で蹂躙され呻き声を挙げながら死んでいった者達は・・自分を逃がすために犠牲になった兵士達は・・・きっとリンガイアにも大勢いて・・・到底許せるはずがなかった・・・
激高し怜悧な表情を浮かべるフローラは、今すぐにでもバランをこちらに引き渡すようにティファに要請線とティファを見た時、ティファの表情が凪いでいた・・・・まるで、自分の様に怒りを身に抱えているように。
そして次のティファの言葉を発した声もフローラ同様に冷たかった。
「その通りです、私達は異界の者ですよ。」
それは空気を凍らせるる程の・・・もっと言えばフローラよりも鬼気迫る声音であった。
そして告げられた。
「はっきりと言いましょう。私にはこの世界を助ける義務も無ければ義理も無い。」
それは明確なる真実
「其のところを、ここにいる皆さんはきちんと理解されておられないのですか？」
相手の心と精神を折るようなその声が告げる。

「私達は自分達の世界を平穏にし、これからという時にこの世界の神達によって攫われてきたのです。
兄達や周りの人達を助ける為に私が作った薬を勝手に使われた挙句に私達にもこの世界を助けて欲しいからと攫ったのが天界にいるそうです。」
「し・・・しかし!それは私達は・・・」
「えぇ、人の貴方達が神様にお願いした事ではない事くらいは百も承知しているのですよ。」
ティファの怒りの言葉に、一人の兵士がそれは神々の罪であり自分達が願った事ではないと弁解しかけたのをティファは視線を一つ投げて黙らせる。
「貴方達は何の罪もないかもしれません、しかしだからと言って私と兄と武闘家チウが体を張って貴方達を助けて差し上げる謂れもありませんよね。それに待っていれば私達の世界の神々がきっと迎えに来てくれるので、魔王軍の事も地上界の事も放っておいて待っているだけでも文句はありませんでしょう?」
「その様な事が可能なのですか?」
神隠しで連れ行かれた者の帰還など、どこの文献にも記されておらず、消えた者は二度と戻らないと言われる神隠しで、その様な事は可能なのかと疑問が呈された。
この場にいる大半の者達は、ティファ達は飼えることがかなわないからこそ、魔王軍を敵に回してしまったのだからと腹を括ってこの地上を共に守るものだと思っていたが、それは直ぐに否定をされた。
「私の世界の三神様達は、物凄く私達を大切に思ってくれています。
この世界に移動させられた時、私達の天界の最高神様がその身を削っておってきてくださいました。その際奇跡の薬を少しずつ撒きましたのでそれを今辿ってやがてこの世界にいる事を突き止めてくれるでしょう。」
自信たっぷりに言うティファに、それが確実であるのかという反論さえ許さない雰囲気の中、ティファは構わず言葉を続けるる。

「その時にはここにいるダイ君達とそのお身内全員を保護しても良いと考えているのです。無論ダイ君のお身内の父バランも含めてです。」
「そ・・・それは!!」
「仕方がないではないですか、ダイ君は今この世界よりも父バランを助けることが第一で、私としても折角強奪された私の薬を使って助けた命をまた死なせるのは嫌ですから。
後は残った貴方方で何とかしてくださいね。」
その言葉に場に騎士・兵士達そしてノヴァとバウスンそしてアキームがどよめく。
先程得た情報が全て偽りがないのであれば!自分達は勇者ダイがいない時点で負けは確定している・・・だからと言って、父バランは赦さず、それでもダイに勇者として戦えと言う事は憚られる。
これが自国の・・・この世界の者であればフローラも女王として命じる事がかなうかもしれないがティファ達はこの世界の理を遵守謂れがどこにもない。
その言葉の重みに、ポップの両親とマァムの母レイラ、そしてマトリフとロン・ベルク以外の全員が潰されかける。
自分達も助けてくれると言ったティファの言葉があったからでは決してない。
ジャンクとスティーヌは、子供を戦う道具にしていいのかという一般的な感覚から、レイラはかつて戦ったものとして、闘う事の過酷さを知るがゆえに少年達にそんな過酷な事を背負わせてしまった罪悪感から、マトリフとロン・ベルクはここまで若者達を使い潰さなければならないければならない世界にそこまで未練はないと黙っている。
その沈黙を破ったのも、またティファであった。
「私達が・・・少なくとも私が少年ダイ達を助けてここまで来たのは偏に―彼等―を守りたいと思ったが故なのです。」
フローラ達に向けていた視線とは一変し、ティファは少年ダイ達を優しく慈愛に満ちた眼差しを向ける。
「空から降って来た不審な私達を、事情を知れば申し訳ないと言った

マァムさん、自分達の力が足りないからこのような事態を招いて申し訳ないと言ってくれたヒュンケルさんとクロコダインさん。」
　一人一人の名を呼びながらまるで宝物を自慢するように話すティファは最後に少年ポップとダイに目を向け笑みを深める。
「この大戦時に人間に迫害の様な事を受けながらも、人間を完全に嫌えずに好きだからと心が壊れる寸前まで戦い抜いたダイ君を、そして戦えなくなってしまった勇者を見捨てるものかと怒りを燃やし、その心の傷を知りながらもどうにもできなくて済まないとこれからは自分達が戦うからもういいのだと泣きながら勇者を抱きしめたポップさん達を、私は守りたいと思ったがゆえにここにいるのです。」
　それはかつてか弱く幼かった平和の芽達を守る為に、敵であれば吠え挙げその身の全てを賭し、味方になる王達を相手に一歩も引かずにヒュンケルとクロコダインの助命嘆願を願い抜いた料理人ティファがいた。
　自分はこの世界の為という大義の為にいるのではない、ただ、純粋なる心を以って世界を守る為に闘い抜いたこの世界の勇者一行の為だけにこの場にいるのだと告げられた言葉はあまりにも重かった。
　冷静に考えればティファの言う通り、攫われたも同然である彼女にはこの世界を救う義務も増して義理すらも無い、勇者達とアバン、そしてこの世界の者達を無傷で保護をし敵に気づかれずにこの砦まで連れ来てもらっただけでも大変な事であろう・・・そのティファから提案されるように言葉が紡がれる。
「確かにこの世界のバランもまた罪を犯しました・・・しかし彼は一度死んだのです。
　黒の核晶という怖ろしい超兵器は、拳大の大きさでも大陸を一つ吹き飛ばせる威力のある代物。
　その威力からここにいるダイ君を守る為に、生命エネルギー全てを振り絞って・・・・この中でどなたか一度死んで蘇った方はおられますか？」
　ティファの言葉に、手を挙げたのはたった一人、それは
「私がそうかもしれません。」

「そうでしたねアバンさん。」
「はい、私はフローラ様から頂いたカールのお守りという身代わりアイテムのお陰で死の淵から辛うじて変えることが出来ました。」
誰であろうアバンであった。
アバンはティファがどうやってバランを救うべく言葉を尽くすかと見ていたが・・・先程自分が書かせた煽り文句の手紙を嫌がっていたとは思えない程の様変わりに舌を巻いた。
怜悧な声で真実を突きつけ激高した者達に冷や水を被せ、そして甘い飴をすぐさましゃぶらせる手腕に対して。
それは異界の者であっても、無条件ではないがこの世界を助ける為に手を貸すと言う言葉がそれであった。
そして彼女はきっとこう言うだろう。
「聞くことを申し訳ありませんが、死ぬ際はお辛かったですかアバンさん。」
「・・・・死ぬときは一瞬だと私はずっと思っていました。」
自分の考えていた通りだと思いつつ、アバンはハドラー相手にメガンテをしたあの時の事を克明に語る。
「メガンテを唱えた時、きっとダイとポップとブラスさんとゴメちゃんの目には、一瞬の出来事と移ったでしょう。しかし私にとっては違いました。体が引きちぎられながら、血も体液も沸騰し、骨が砕かれる激痛の中死ぬという事は果てしない痛みの果てにあるのだと・・・・死が一瞬のうちに訪れるというあの言葉は偽りであったのだと実感をさせられましたねえ・・」
本当に痛みでどうにかなりそうで、それは身代わりアイテムを身に着けていたからかとも思うがそれでも・・・・死は・・・・優しくなかった・・・・決して・・・
その言葉を最後に沈黙をしたアバンに、ポップ達もまたあの時の痛みを思い出す。
師と同じくメガンテをしたあの時、一瞬だと思っていた痛みが、狂いそうなほどの永遠に感じたあの苦痛・・・だがそれを今この場で言う訳にはいかない。父ジャンクと母ステーヌにそれを知られてし

まえば・・・きっと二度と戦いに行くなと二人は体を張って止める事が目に浮かぶから・・・・死は・・・・・・それほどの苦痛の果てにあるものだから。
「私も死にはしませんが何度か死にかけました。暗黒闘気で体内の臓器を貫かれ、魂まで使い切って体にひびが入りもしました。どちらも・・・苦痛の果てに死ぬのだと覚悟を決めました。」
「・・・・・・それで？」
「死は・・・・・・罰の一つになるのですよねカール王国・フローラ女王陛下。」
「その通りです。」
「であれば、彼の者は一度死に罰を受けたのです。彼が犯したアルキード王国を滅ぼしてしまった事と―諸々の罪―をそれを以って清算したとは言わずとも、放っておくことは叶わないでしょうか？」
一度は世界を救い、そして滅ぼそうとしてもまた命を懸けて息子を守るためとはいえひいてはこの世界を救う一条の光たるダイを助けたのだからというティファの言葉に、北方の勇者が賛意を示した。
「フローラ様・・・僕も、バランという男の罪を許さないまでも・・・二度も命を奪う事はいかがなものかと思います。」
それは積極的な擁護ではない、しかし悪は滅ぼすべきだと言っていたノヴァの最大限の譲歩であり、その父バウスンもまたその通りだと頷き賛意を示すのを、元からダイ達よりであったアキームも・・・そして力を蓄えるためとはいえ地下に潜り、最前線を少年少女達だけに闘わせてしまっていたという罪悪感があったカール騎士達からもそこかしこから、矢張り同様の言葉が流れる中、ティファからの―懇願―が上がった。
「女王陛下、貴女様の―胸のうち一つ―で、この世界の命運は決したも同然と思います。
故にこそ請います、どうかバランの罪を許さないまでも、打ち捨てて欲しく。」
深々と頭を下げるティファにつられるように、ダイそしてポップとマァムとヒュンケルとクロコダインも慌てて立ち上がりともに頭を

下げるた。
あまりにも自分達では対応しきれない話の連続に、若き勇者一行達は唖然呆然の連続であった。
しかし、バランを助けて欲しい！異界の、何の縁も所縁もないティファがバランの為に頭を下げるているのに、助けたいと願っている自分達が下げないのはいけない事だとダイ達も真剣に頭を下げるのを、フローラは周囲に気が付かれないようにしながらも憎悪の瞳をティファに向ける。
それは何故か？
ティファはバランの罪を、アルキードを滅ぼした事と―諸々の罪―と言った。
そして自分の胸のうち一つと言った・・・自分の深読みでなければ、ティファはバランがこの世界で犯した罪はアルキード滅亡のみならず！リンガイアとカールの事を知りつつかつここにいる者達がその事を知らずに自分だけが知っている事を指し示しているのだろうと推察する・・・・何と憎らしい事か！
仮に自分がバランの罪を今ここで明かせばリンガイアを滅ぼされたノヴァとバウスンは赦さずに勇者一行と戦い合ってでもバランを殺そうとするだろう事が容易に想像がつく！
それでは先程ティファの言った通り勇者ダイはティファ達と共にこの場を去り二度と戦う事はなく・・・この分では魔法使いポップも武闘家マァムもダイとのこれまではぐくんだ絆を取ってしまうかもしれない。
よしんば罪を許された恩を感じているヒュンケルとクロコダインが残ったとしても・・・戦えない、其れでは地上が滅亡する未来しかない!!
そこをティファが突いてきた・・・自分が黙っている、打ち捨てると言うだけでその未来は回避されるのだと・・・そして・・・・・自分は其の事を終生秘密にしなければならない未来をも確定されたのだ・・・・たった十五の少女の思惑一つで・・・
様々に渦巻く感情をフローラは瞑目をし、そしてすべてを飲み込ん

だ。
「カール王国フローラが、異界のティファの提言を受け入れようと思います。
勇者ダイを救い、ひいてはこの世界の希望を救ったバランはその時に死にました・・先代の竜の騎士の想いを・・・・勇者ダイ、貴女が引き継ぐことはできますか？」
飲み込み、そして為政者として若き勇者に問いかける。父を救うからには、己自身が戦うのかと、疲れ切ったと言う心を引きずってでも、その遺志を引き継ぐと言うのかというフローラの言葉に、ダイの瞳は先程にはなかった光が・・・・ほんの少しだけかすかに光っていた。
「俺・・・・父さんにもう何もしないって言ってくれたノヴァの言葉が嬉しかった・・アキームさん達の言葉が嬉しかった・・・俺・・・ここにいる人達に死んでほしくない・・先生にももう死んでほしくない・・・ポップもマァムもヒュンケルにもクロコダインにも辛い目に遭って欲しくない・・・・俺一人じゃダメで・・・情けない勇者だけど・・」
迷いはまだある・・・・この世界を守れと言われてもうなずけない。
それでもティファお姉ちゃんが見せてくれたみんなの優しさを・・・みんなが示してくれた優しさを自分は・・・・
「力を・・・・貸してくれる？」
決して力強くはないその言葉は、確かにその場にいた戦う得る全ての者達の心を打った。
疲れ果て、迷いながらもそれでも自分達に死んでほしくないと願う優しい勇者の願いは、大広間を震わせるほどの歓声を以って応えられた。
どこにいても絆を生み出す者だと、兄ポップはティファの頭を撫でながらその様を眺める。
ロン・ベルクやこの世界の師匠は斜に構えながらもダイ達を慈しむ心が瞳に溢れているのを見て笑いを噛みしめるのに一苦労する。素直でないのようだこの世界の名工殿と師匠はとつい笑ってしまいそうになるのをティファを撫で、少年ダイとポップを撫でる事で発散を

するのを、三人は嬉しそうにポップの手を受け入れる。
そして歓声が一頻り起こった後、バランは死んだのだと全員がその旨を徹底するようにというフローラの言葉に一同頷く。
この大戦の後、自分は各国の王達も・・・ひいてはリンガイアの民と自国の民全てを欺く事を思うとフローラとしてはやり切れないとさへ思うが、これしか手が無いと為政者としての決断を下したのは間違いではないと決断を下したが、複雑な思いがすぐに消えてくれることはなかった。
これでリンガイアの者達もカールの者達も永遠に仇を撃つことは叶わなくなった事を知らずにダイ達の手を取って絆を結ぶさまを、ティファという娘が笑ってみているのだから無理はない。
言わなければいい・知らせなければいい、重大なる秘事をその身一つに収め、それを以って勇者一行とそして、世界全てを守り通したティファなりの守り方に、この世界のフローラは身をもって味あわされた瞬間でもあった。
だからと言って表面は笑みを浮かべても、ティファもまた苦しんでいた。
守りたいとは言えども、真実を握り潰させ歪めてしまった事に、その決断を一人の女性に背負わせてしまった罪悪感が、ティファにもまた重くのしかかる。
ここからは本当に手を出しては世界の対価に触れてしまい事態をますます複雑にしてしまうのでそれは叶わないまでも、できる事を全てをして贖罪を果たすと誓いを立てる。
そんな中、青年ポップもまた懸念する事ができた。
この状況は喜ばしい事だ、今まで薄かったであろうこの場にいる者達の絆を深めることが出来たのだからと良い事づくめの様に見えるが、フローラ女王の方をアバンさんか自分がきちんとフォローしないと今度はフローラ女王が壊れるか暴発をしてしまうのではないかと危惧する・・・後でアバンさんと早急に対策をせねばと。
そしてもう一つある。
それは大広間の話し合いに割り込むことはなく、事の成り行きを胸

を痛めながらも見守っていた少女二人のうちの一人メルルは、バランの裁可がきちんと下ったのを見届けた後ダイ達の下に泣きながら来てくれたが・・・・遠巻きにいる姫さんが、暗い表所をしているのを見るのは胸がいたくなると・・・

小石の投げられた世界：料理人の真価・真相

大広間は勇者ダイの新たな決意を聞いて一同歓声を上げた。
大魔王に負ける前からたった十二歳の身で世界を救う勇者という重責をかけられながらも、大人達の助けがほぼない中での子供が多い一行だけで戦い抜いていた。
其れのみならず、敵だけではなく世界が・・・人間の悲しい部分が幼いダイに牙を？いてしまっていた・・・そして柔らかで純粋な彼の心は目に見えない傷を負い・・・やがて彼の守りたいと願った想いを曇らせ折ってしまった・・・
その手折られた心の復活に兆しに立ち会えた者達はそれを名誉であると受け取った。
これからは共に手を携え世界を救う最後の戦いを共にするという言葉に、幼い勇者ははにかむように笑うのがまたいじらしく・・・少年ポップもマァムもヒュンケルもクロコダインもダイの久方ぶりの心からの笑顔を涙を流しながら喜んだ。
近頃は勇者は明るくあらねばならないとばかりに、戦場であっても力強く笑う事はあったがどこか気もそぞろでいたのを知っていても、どうにもしてあげられなかった。
懸念であるバランも・・・辛うじてではあるが受け入れられたのだからダイの心はきっと完全に回復するだろうと一行全員が安心した時、師のアバンの言葉が大広間に投げられた。
「お静かに!!」
その声は硬さを含み、普段飄々としている師からの声とはとても思えないが、何か重大な事を告げる時の声だと思い出したダイ・ポップ・マァム・ヒュンケルは直ぐに口を閉ざして師のいる方を見れば、真剣な表情をしたアバンの姿があった。
他の者達も何事かと口を閉ざし、大広間が静まり返ったのを確認したアバンはバランの事で追加の話があると告げた・・・まさか勇者としての立場としては、矢張り何らかの罰則があってしかるべきと、フローラ女王に進言するのだろうかとポップ達は固唾をのんだがそ

うではなかった。
「ダイの父君がかつて魔王軍の中枢にいた事は消しようもない事実です。
しかしその罪を今後追求しないと事をここにおられるカール女王フローラ様が確約を去れ、そして我々はそれに賛同をしました。」
その言葉の内容に、誰もが力強くうなずく。ヒュンケルとクロコダインとて元魔王軍であり、ヒュンケルはパプニカを一度滅ぼしてしまったが同じくこの場にいるレオナ姫によって、生きて償う道を行く事を許されたのだから、バランもまたその道を行く事を誰もが望んで賛同をしたのだから。
一同の顔に浮かんでいる表情に、アバンは一度頷き続きを話す。
「異界から来た方達の情報によれば、魔王軍には軍にとって不要となった者を始末する死神・キルバーンというものがいるそうです。」
不要者を狩る死神・・・そのような冷酷なる者がいる情報に、地上界の軍部で生きてきた者達は怖気が奔った！
味方が戦えなくなったのであればすぐさま助け出し、退役をしようとも友誼を捨てずというのがここ数百年の地上のどこの国の騎士団・兵団であろうとも不問律とまで言われている常識であるのを、魔王軍はそれを許さず狩るという・・・・何と無慈悲な事かと、大広間にいる彼等は憤りを見せる。
「アバン！その死神とやらの特徴は何だ!!」
「そのような者を！勇者殿の身内に近寄らせてなるものか!!」
「み・・・みんな・・」
弱りしバランは自分達で守ると声を上げてくれる兵士達に、ダイは胸の中が温かくなるのを覚える・・・・・さっき言った時よりも、自分はここにいる人達に死んでほしくない。
親父もポップもマァムもヒュンケルもクロコダインも・・・・・そして自分は・・あの島で助けて以来自分の心の中に住み始めたお転婆だけれども優しい女の子を・・・守りたいと願った時・・・・アバンの印が白く柔らかい光を放った。
それは純粋な願いに、輝聖石が応えた光、ダイの心の闇が駆逐され

た瞬間であった。
その光は柔らかくて暖かく・・・しかし少し弱く頼りない・・・まるで今のダイのようなその光を、守りたいと大人達が胸の中で誓った時、アバンの声が響く。
「死神キルバーンは策謀を好み、謀略を好み、その性は残虐非道であると異界のポップよりの情報です。
そのような者であれば我々のこの結束を乱すために、ダイの父親を使ってくることは明白。
おそらくはバランが魔王軍の中枢にいた時、パプニカやロモス以外の王国を滅ぼしたないし蹂躙しよとしたという話を、あたかも真実の如く我々に様々の方法で話しかけてくると推察をします。」
それは鏡通信や、死神自身が現れ暴露するように話すかもしれない、方法は分からないがバランを使った仲間割れを引き起こす可能性が非常に高い事を懸念しているというアバンの言葉に元同僚のカール騎士・兵士達は頷き、謀略を信じるものかといった言葉を皮切りに、大広間の者達は死神キルバーンを姿を見たら真っ先に倒すべき敵だと共通認識をした。
この世界においても・・・・死神とはそうなる運命であるのだろうか・・・
大広間が熱狂する中、青年ポップは先程のような熱意が冷め疑問が発生をした。
何故アバンさんはあのような事を言ったのだろうか？
バランの罪は真実ではあるが、其の事をティファが胸に内に仕舞っておいて欲しいと、先程言外にてフローラ女王に願い受諾を去れ・・・険悪ムードになったというのに・・・罪事態が全く感じられず・・・・その様な事は敵からの謀略であると植え付けて・・・
違和感が溢れる中・・・一つの天啓の如き声がぼそりと耳を打った！
・・・・茶番か・・・
大広間の熱狂が冷めやらぬ中、ティファは自分はやる事があると自身を冷たい目で見ているフローラ女王に声をかけて退出し、そしてそ

のフローラとアバンもまた、この度の顛末と勇者一行の保護と今後の事を各国の王達に知らせる親書をしたためる為に席を外すが、他の者達は暫し自由に過ごしてほしいと、同じタイミングで反対の扉から出て行ったティファとアバン達・・・・青年ポップはちらりとダイ達を見れば、ダイの笑顔が先程よりも明るく、そして白かった頬に赤みがさしているのを見て確信した。

こいつはもう大丈夫だ。

ならばする事は一つ・・・・ティファが大広間を出て行った時・・・それは大戦時王達の前で自分と竜騎衆と父バランとの因縁を全て話した後の悲しみに暮れた心を抱えて逃げる様にふらついた足取りで出て行った・・・そしてアバン達の方はアバンは兎も角・・フローラもまた何かを抱えているような感じがした・・・追うのであれば・・・

「・・・・アバン・・・あれは本当に必要な事だったのか・・私には今も確信が持てません。」

「フローラ様・・・」

「そもあの異界の―方達―は始めから私達に友好的で・・・ティファさんには申し訳ない事をしてしまったのでは・・・」

「あの異界の娘は確かに優しい。しかしそれこそがこの世界にとって困る事・・・・」

暗い声で話すフローラを宥める様にそして諭すようにアバンが話している時扉は叩かれた。

他国の王達に新書を出す為に退出したのに尋ねられてきた。

何か緊急な事が起こったかと訝しみながらアバンが出てみれば、扉を開けた先にいたのは、怒気に満ちた表情を浮かべた異界のポップであった。

何事かをアバンが問う前に、ポップが先に口を開く。

「・・・・この城の各部屋の扉は薄いんすね・・・」

その一言で、自分達が―仕組んだ事―を知られたのだとアバンは察した。

それならばポップのこの表情に説明がつく。

しかしこれは
「おやおや、盗み聞きとは問題ありますよ？」
「・・・・ノックをしようとしたら・・・耳に入って来た内容に驚いてし損ねたんでね！」
ダン!!!!
「アバン!!・・・・ポップさん・・・」
「あんた・・・・ティファをまた利用したな!!おかしいと思ったんだ!!大戦時のあいつは敵もそして俺達を守る為に味方相手でもあの手の交渉術の話し方をしていたがな!!世界が平和になってからはあいつはあんな酷いはなしかたをした事は一度として無かったんだ!!
敵に贈る手紙一つであそこまで嫌がっていたあいつが・・・いきなりぺらぺらと交渉をしたと思ったら・・・あんたの仕業かアバン!!!」
他界において、師のアバンはポップにとっては憧れで、自分が彼の年齢になってもあそこまで素晴らしい大人になる自信はねぇなと、ダイ達とよく話す程にポップの中のアバンは偉大な師である。
そのアバンの名を、ポップは他界ではあるとはいえ呼び捨てにするほど激高をした。
それもアバンの襟首を両手でつかみ、扉脇の壁に打ち付ける程に。
その激高したポップにされるがままになっているアバンの顔は、小憎らしいほど落ち着いておりポップの怒りにさらに油を注ぐのを、立ち上がり二人の側に寄ったフローラはまず扉を閉めそして、ポップに向かって頭を下げた。
「貴方の大切な方を、こちらの事情で巻き込みあまつさえ利用したことを正式にお詫びします。」
そのフローラの言葉にポップは自分の確信が当たってしまった事に失望を覚える。
先程大広間の熱狂を冷めた声が聞こえた。
それはこの世界のマトリフが、誰に言うともなく言った言葉・・茶番か・・・
その言葉の意味を考えた時、ポップは自分が感じていた違和感の正体が分かった・・分かってしまった・・・

「・・・・いつあんた達はティファに、大広間でのあの対峙の芝居を持ち掛けた？
あいつになんって言って承諾させたんだよ!!!」
「・・・・落ち着いてください、其れでは話せませんよ―他界のポップ―」
その声に、ポップはある考えにいたった。
「あんた・・・・俺達の事嫌いか？」
その問いをしながら自分から離れるポップを、アバンは無表情で平板な声を以って答える。
「いいえ、嫌いではなく線引きをしてほしいのです。」
「線引き？」
「はい、先程あのティファという少女が言いましたでしょう。―自分達は迎えが来る―と言っていた。
あれが全てです。」
「それは・・・俺達はここにはいられないだろう？迎えが来た方がいいだろう・・・その間だけでも、ダイ達を助ける事が嫌なのか？」
師という立場を追われかけたから、ティファに自分達の世界の女王に冷たい言葉を投げかける冷淡な人物だと演出をさせたのかというポップの考えは即座に否定をされた。
そんな事よりももっと深刻な事が起こりかけていたのだと鋭い言葉を以って
「気が付いていませんでしたか？ダイとポップは貴方に、そしてマァムとヒュンケルとクロコダインさんはティファと大ネズミモンスターのチウという子に依存をしかけていたのを、貴方方は気がついてはいなかったでしょう？」
「依存って!!・・・・弱って殺されかけたのを・・・俺達が助けたから心強く思っただけだろ？」
ポップは完全に、目の前のアバンに敬語を使う事をやめた。己の大切な妹を、一度ならずも二度も利用したのだ・・・許せる事ではない。
かつて様々な者達からその知識を力を優しさを見込まれて様々な事を願われ利用された妹を、二度と誰にもティファを利用させるかと

いう自分だけではなく、あの世界のティファを大切に思う者達の願いを、この世界の神からして踏みにじり、大勇者であるはずのこの男もまた利用したのだから。
　そんなポップの想いを、アバンは見透かしたようにポップの質問に答える。
「ティファという少女は計り知れないほどの影響力を周囲に与える方だと見受けました。
　世界が違うとは言えども、師にあたる私が彼女を利用した、其の一点のみで今貴方は私に牙を?くように、ダイ達もまた貴方と彼女に依存しかけていると私はみたてました・・貴方達がいざ異界に帰るとなった時、おそらく他の者達はいざ知らず、ダイの心はまた死んでしまうかもしれない程に・・」
　そしてアバンは抱いた危惧を如何にかするべく、その―ついで―に大戦後の世界を少しでも良くするべくティファを利用したことをあっさりとポップに話した。
　この大戦が負けるかもしれないが、もしも勝った時、その時ダイの居場所を守るべく。
　ダイは己の不甲斐なさで幼い身で重責を負わせてしまった。確かに彼の中に眠っていた力は途轍もなく、それが伝説の竜の騎士の息子であったのであれば納得がいく。
　しかし心は、力の様に強くはなかったのを見抜いてあげられなかった・・・結果彼は人の世の弱さと醜さに触れ、遂には壊れかけた。
　そのダイの心の拠り所となったのが一度は殺し合いをしたとは言えども、そこは親子の絆であろうか父・バランであった。
　数ヶ月生死を共にしたポップ達ではなく、父バランであった。
　そのバランが死んだ時、ダイの心もまた死にかけた時に奇跡の様に現れたティファ達に、ダイの心が傾いたのもまた頷ける。
　しかし、三人はいつかは帰る身、それが明日なのか十年後なのか・・・あるいは数分後なのかは分からない。
　長い時間の後であれば、ダイにとっては良い事である。頼もしいポップとティファに助けられ、もしかしたらその力を十全に引き出し

大魔王達を討つ可能性が高まるから。
しかし現実はそううまくいくかという保証はどこにもない。
「貴方達が確実にいてくれる今この時に、ダイと周りの絆を今一度結びなおすことが急務だったのです。」
もしもダイがポップにべったりと依存している数分後に、現れた時と同じく突如消えてしまったら・・・
「きっとダイの心は今度こそ壊れてしまう。」
その様な事になれば、ダイの復活を待ってなどいられない程今の状況は差し迫っている。
その状況を生み出さない為にも、アバンは一芝居を討つことをフローラに提言をし、そしてティファを大広間に行く前に呼び出し、今ポップにしている説明をティファにもして、そして了承をティファはしたのだ。
フローラとしても、ある程度はバランの事は譲歩するつもりであった。
自国を攻め滅ぼされたとはいえ、このような状況で罪を談じている暇など最初からなく、魔王軍を倒す戦力を手に入れる為ならば、清濁併せ？む覚悟を、アバンからの報告時のあの時にしていた。
もしもバランの罪が知られたとしても、カール騎士達ならば分かってくれると、―自国の民達を信頼する―道を選んだのを、アバンがそれでは不足であると提言がなされた。
それは一同が集まった大広間にてティファがバランを擁護し、フローラがその罪を追求し、それでも罪を許さないまでも、もう彼の者の罪を追求しなくてもよいのではないかという落としどころに持っていく為の芝居を、ティファとフローラがうったのだ。
元来戦場において生死を身近に生きてきた騎士・兵士であれば、善悪を問わずに己の子を命を懸けて守り命を落とした者を悪し様に言う者は少なく、そして、死んだ時の苦痛を知らされれば、それを以って罪を贖った事にしても良いのではないかという言葉が出る事をアバンは計算し尽くした。
最初にダイ達のこれまでの苦難の現状を大広間にいる全員に知ら

しめ、そして情に訴えたさせた。
そしてダイ達に対しても、自分達はやがてこの世界からいなくなることをはっきりと明確に告げさせた。
心が疲れ切ったとはいえ、ダイの根本は純粋な優しさが彼を形作っている。
何の義務も義理も、まして縁も所縁も無いこの世界の助けをしたのは、偏に自分達の為だと告げられれば、おそらくダイは無関係な人を巻き込むのを良しとせず、ティファと自分達が作り出した暖かい空気に触れる事で、―ポップの腕の中―から出る見込みは高かった。
そしてそれは成功した。
大広間は勇者の復活と、結ばれた新たな絆の誕生を寿ぎ、そしてバランの罪は永久に闇の中に葬られ、ダイもまた戦う意義を見出すことが出来たのだから。
フローラが芝居とは言えども、ティファを憎らしく思ったのはここにある。
彼女は信じる道を行こうとした、それは自国の民は無理であっても、少なくともここにいる兵士達は世界の為に、そして自分達の代わりに闘ってくれた幼い勇者に報いるべく、バランを許さずともティファの言う通り放っておいてくれると信じた。
しかし・・・その道はティファによって閉ざされた。
考えようによっては、民達に真実を話さない事で恨むべきは魔王軍であり、その魔王軍は勇者に撃たれたのだからと恨む相手がいなくなり、仇をと考えずに明日に向かって生きていく道がしっかりと出来たと思う事も出来よう。
しかしそれは真実を完全に捻じ曲げ自国の者を、命を賭けて戦う彼等を欺き、そして彼等を完全に信じるという民を慈しむことを第一として来たフローラの誇りは踏みにじられた。大戦の最中で勇者達の戦力が手に入るか問ういう時に、何を言っているのだと言われかもしれないが、フローラの傷だらけの心に新たな傷がついたのもまた事実であった。
そしてバランの罪を飲み込む事は容易ではなかった・・・自分の為

に死んでいった者達の事を、自分は終生忘れまい、きっと何度も夢に見よう・・・・それでも、カール女王として世界と国の為にバランを受け入れる事を確定した矢先に残酷提言を・・・愛した男からされた・・・

自分が恨むべきはティファではないと知っても・・・それでもその案に悩むことなく乗ったティファを、矢張り許しがたく思うのは弱さであろうかとフローラは重い心を引きずって大広間を出たのだが・・・・・それでも・・・

「ポップさん、ティファさんを利用した罪は私にもあります。

為政者として、この世界を守る為にも、この砦にいる戦える全ての者達の絆を深め、そして―敵からの謀略―を跳ね返すためにも、あれは必要な事だと私も・・・そしてティファさんも認めたのです・・・」

辛そうにしながらも、それでもフローラは顔を俯かせる事なくポップに言い切る。

誰を欺こうとも、この世界を守ることが第一なのだからと

小石の投げられた世界：料理人の真価・本領発揮！

為政者としての判断として後悔はない・・・・・

フローラの発した言葉に、ポップは動揺をした。

先程はティファに対して悔やみ言葉を発していた目の前の女性は、それでも国を統治し守るべき女王としての立場での発言は一変して後悔はないという。

その差異に戸惑うポップに、アバンから厳しい言葉が投げつけられた。

「貴方の世界の為政者たちは随分と―貴方達―を甘やかしているようですね。」

「・・・なんだと？」

アバンの断言するように切り込んできたその物言いに、妹を利用した輩がさらに何を言うつもりだと激高する寸前のポップを前にしても、アバンの表情は微動だにせずさらに言葉を重ねる。

「為政者とは、時に己の大切にしている想いだろうが誇りだろうが・・・守るべき身内をも犠牲にしてでも―大―を守る事を第一とする事で、国を守り抜くものなのです。

この場合はこの世界の為であれば、フローラ様の心情も、まして貴方方の心情すら打ち捨て利用させていただく。

ティファという少女自身が言った事と同じです。貴方方は異界の者、少なくとも私はこの世界を、ひいては―あの子達―を守る為ならば何でもします。」

・・・・そう、なんでもして何を犠牲にしてでも今度こそ自分の愛すべき弟子達を己の力で守り抜く!!

其れで自分の世間からの評判が落ちようが、目の前の異界のポップから蔑まれようともそれがなんだというのだろう・・・・大事なのは、大切なのはそんな事ではない・・己の力不足で、導く力が足りなくて魔道に行く事を止められなかったヒュンケル・・・大戦が始まり己の力が必要な時に足手纏いにしかならず、表の世界から離脱せざるを得ずに心をすり減るまで戦わせてしまったダイ・ポップ・マァム達を、今

度こそは守り抜くために・・・そして
「貴方も結婚をしたというのならば覚えておきなさい。世界は善意で溢れていようとも、目に見えない悪意は、人の弱さで起きる悲劇は簡単に牙を?き起りえる事を。」
「っ!!・・・そんな事!!あんたに言われなくとも俺達はとっくに味わってんだよ!!!大戦のあの時に・・・あいつが・・・ティファがどんな目に遭ったかも知んねぇ奴が偉そう抜かすんじゃねぇ!!!」
さらに続くアバンの言葉に反発を覚えたポップは怒りに任せて反論するのをアバンの言葉に押しとどめられた。
「ならば―平和ボケ―をしましたか?」
「・・・は?」
「世界の酷さを痛感したとしていたとなれば、為政者が守るべき者にその牙が向かないように万全を期すことも知っていてしかるべきでしょう。」
この場合は自分はダイの大戦後の居場所を守る為に動いた。
もしもこの大戦が地上側の勝利で終われたとしても、先程のことが無ければバランを罪人として処罰ないし処刑せざるをえない未来しかなかった。
今は大戦時の事で各国もこの場にいる戦う者達も手一杯だが、人は平和になれば己の国を滅ぼした、其の事に手を貸した者達に対する憎悪が再燃するのを自分は良くしている。
それが為に先のハドラー大戦で、ハドラーのせいで狂暴化したモンスター達の大多数は、恨みを持つ人間の手によって殺されたのを、旅の中でヒュンケルと共に見続けてきた。
その度にヒュンケルは最早邪気の無くなった抵抗する気の無いモンスター達になにをしているのだと人間を嫌悪していたが、自分はどこか仕方がないと割り切っていた。
復讐する事で弱った己の心を守っている人間、モンスター達を狩る事で名声をえようという人間・・鬱憤晴らしや気まぐれに殺す者、人間は良き者もいるが酷い者はとことん酷い、その点においては人間も魔族もそう変わらないとアバンは悟った・・・悟らされた

一体人間と魔族のその考え方に、どこに違いがあるのだと
人間を弱いと見下した魔王と、弱いモンスター達を見下して迫害する人間と・・違いなどありはしないのかもしれない、それがアバンが下した結論の一つ。
だからと言って人間に失望したとも見捨てようとも思わなかった。
元来アバンは人間に対してそこまで期待をしていなかった。
魔王を討つ旅に出たのは、自分の故郷と敬愛するカール王と王女フローラを守る為。
人間すべてを守ろうとは端から思っていなかったが故に、彼は人間の醜さを知っても失望しなかった。
そして、自分で平和の芽を育てようと野に降った。
大戦を終わらせた勇者として城に置かれ権勢の道具にされるよりも、己の手で善き人々を生み出し広げようとした。
誰の害意にも屈せずに済む力を持った善き人々を・・・それが勇者の家庭教師という看板を立ち上げた理由。
そう、この世界の―アバン＝デ＝ジニュアール三世―が志した事であった・・しかるに異界のアバンはこの弟子に何を教えているのだか・・・
「貴方は結婚をしたというからには当然家庭を持つ。ならば為政者とは言わないまでも、世間に普遍的に横たわる様々な害意から家族を守る事も知るべきです・・・・あのティファという少女からはそれが感じられなかった・・・まるで世界は優しさだけでできているとのだと言わんばかりの無防備さに、私は本気で驚いたのです・・・・まるで戦いを知らぬ童のようだと・・・・あれでは・・いつか誰かに何かに食い尽くされてしまうでしょう・・」
世間の酷さを知らぬ幼な子の様に、初対面の自分やフローラに対し、自分に何かできますかと申し出をされた時には本当に二人で驚いたのだ。
異界から攫われたというのに危機感が薄いどころか全く感じていないようなその無邪気な申し出を傍らで聞いていたこのポップとチウもまた、積極的にではないが頼めば力を貸すのだろうと見て取れ

た。
　おそらくはあのティファが嫌がる事に利用するという類の事でなければ何の疑問も無く手を貸してくれる・・・仮にもしこの世界の人間の王達が神に願い自分達を攫わせたのではないかという考えはおそらく無い！
　善意だけを信じる事の危険性を・・・向こうの世界のアバンは教えていないのかと憤然とするほどにこの子供達は無防備で危険すぎる・・・・
「人を疑いなさい、考えの裏を読みなさい、今の貴方方は異界という危険で自分達の常識が、これまで取り巻いてきた環境と違う事を以って危機感を以って認識しなさい！」
　この愚かな程どこまでも善良で優しい子供達が、この世界でこれ以上傷つかないようにアバンは心を鬼にする。
　キルバーンの情報を得た時、自分の弟子の方のポップが、チウという子の心を傷をつけて嬉々としていたと聞いた時アバンは誓ったのだ。
　己達の不甲斐なさ故に連れてこられてしまった子供達が、自分を軽蔑しようとも多少傷つこうとも、本当の意味で傷つかないように・・・この世界は今誰も彼もが弱っている。
　心も体もそして精神も・・・あの優しい少女に縋る者もこの砦からも出ないとも限らない、事態は混迷を極め自分とて戦況が長引くのか、それとも情報通りに地上を消す大仕掛けを仕掛けらるのか全く読めない・・・そんな中、彼女は格好の餌食になるのが目に見えている。
　優しさに縋られ、応える彼女に気を良くした者達が戦況が長引き此方が不利な状況になった時、縋っていた者達がこの事態は異界の者達が来てしまったからこそ招かれた状況だとでも誰かが口走ってしまえば・・・そうならない為に、アバンは線引きをティファ自身にさせたのだ。
　これ以上双方が近くなりすぎないように、こちらとあちらの者達が互いが傷づかなくて済むようにと願いも込めて。
　アバンの厳しい言葉に、ポップは何も言い返すことが出来なかっ

た。
大戦時・・・人の弱さで、そしてティファ自身の振る舞いによって悲劇が起きかけた時、自分は確かに思い知ったはずだった・・・・良かれと思って軽率な程に敵・味方の区別なく優しい言葉と笑顔を誰にでも向けていたティファを、人が理解できないのは無理からぬことであり、二度と悲劇が起きないようにとティファの言動を注意して見守り、そして周りの者達の事も警戒とはいかずともそれとなくティファを怖れて排斥しようとする者はいないかと見ていたのが・・・いつの間にか・・・・自分もまたティファと同じく善意だけを信じるようになっていてしまったのかと・・・
近頃は師のアバンを始めとした、バーンやフォルケン王が、そして各国の王達が自分達に優しく無理はしなくていい、もっと子供らしくのびやかでいていいのだという言葉に甘んじて・・・今目の前にいるアバンの言う通り・・・・平和ボケをしてしまっていたのだろうか？
あの甘い大人達の言葉に揺蕩う童の様に・・・・
アバンの言葉に打ち沈んだポップを先頭に、アバンとフローラは大広間へと戻る。
フローラとしては、ポップやチウ、そしてティファに厳しい事を言うつもりは毛頭なかった。
しかしアバンは何かを危惧するような・・・自分の弟子達に危機が及んでいる時のような焦燥感に駆られた言葉を感じたフローラは口を挟まなかった。
もしも自分の考えが正しければ、アバンは己を軽蔑したポップに対しても守る為にあえて厳しい言葉を投げかけたのではなかろうかと。
その言葉を投げかけられたポップの足取りは重くてそして遅く、まるで大広間につきたくないとばかりに溜息をつきそして時折頭をガシガシと掻いて居る。
まるで納得は出来ないが、それでも覚えておかなければいけない大切な言葉を頭に仕舞っとくようにしようとばかりに。
そのポップの重い足取りに、アバンとフローラは追い抜く事もせずそしてせかすこともしなかった。

この若者が、自分の投げかけた言葉にいくばくかの危機感を持ってくれれば、そしてそれを糧に己の守りたい者達をどんなことをしてでも守れる強い心を持ってくれればと願う。
世界はこの子供達が考えている程清らかでも優しすぎもしない・・・誰かがその優しい世界を裏から様々な策謀や謀略を以って守っているのもまた一つの真実で、いつかその真実を覗いた時、このポップが世界に失望しなくて済むように・・・このポップが壊れなければ、きっとあのティファという少女がその真実に触れてしまっても大丈夫だろうとアバンは見込んでいる。
この異常事態に会っても己の心を保ち、冷静に仲間を守らんとしているポップであったればこそと。
大広間にはきっとダイ達がいて・・・少し離れたところにティファが遠巻きにして事態を見守っているだろう・・・寂しそうにしていなければいいと思うのはきっと身勝手な思いで・・・ポップが慰めになればと思いながら大広間につけば・・・アバン達の目の前に広がっていた光景は・・・

「もう少しで用意が出来ますからお待ちください!!
レオナ姫!そのエプロン付けないと汚れてしまうので付けてくださいね!!
そこの人!つまみ食い・・・味見?・・・・そんな言い訳通しませんよ!!」
「お姉ちゃん!これどこに置けばいい?」
「ダイ君、食器は各自持ってもらって並んでもらうのでそこでいいですよ。ヒュンケルさんクロコダインさん、スープの寸胴はそこで大丈夫です!
ほらポップさん!マァムさんとメルルさんのエプロン姿に見とれてないで・・・あ!!ポップ兄!手伝ってよ!今・・・どうかしたの?」
「いや・・・・お前こそ何してんだ?」
「ん?夕食の準備以外の何に見えるの?あ!!バウスンさん!腕の怪我良くなっていないのにそんな重いもの持たなくてもいいですよ!!式

!!ゴックン！ムックン!!テーブルとイスは君達に・・あぁこれは私の能力で式神というものでして、この子達は重い物を持つのが得意なんですよ。」

そこに広がっていた光景は・・・何故か砦にいる者達が食べてもあ場る程であろう量のパンがテーブルの上に山盛りとなっており、これまた何故か大量の野菜とベーコンの入ったスープらしきものが沢山の寸胴鍋で用意され・・・・どこからか持ってきたのか分からない食器類を、全員にいきわたるようにしているティファと、それを手伝うダイ・ポップ・マァム・ヒュンケル・クロコダイン・メルルの姿があり、法衣が汚れないようにと手伝う気でエプロンをかけようとしているレオナ姫が、各自食べられるように北方の勇者ノヴァとその父親のバウスン将軍と戦車隊長で偉いはずのアキームが手伝い・・・その様をマトリフはアバンとこの光景を見比べてニマニマとしている!!

まるで、お前の茶番はひっくり返されたぞお疲れ様だったなと、自分の失敗を楽しそうにせせら笑う様は、味方だか敵の悪党だか分からない時の往年のマトリフに戻ったかの様な笑みであった!!

若造の底の浅さを鼻で笑っているマトリフに、アバンは本気で殺意が湧いた!!

しかし、だからと言って目の前の光景は幻の如く消えることは無かった。

「スープの量は一人このくらいでいいわねティファさん。」

「ありがとうございますスティーヌさん、レイラさん。今日は強行軍をしていただいたので休んでほしかったのですが・・」

「何言ってるの!!??その考えで行けばティファさん！貴女こそ・・・」

「あぅ！・・・・だ・・・丈夫です・・・」

スティーヌとレイラに囲まれ、少しレイラに説教されかけ萎れているティファの姿・・・

アバンは足早にティファに近づき、そして持ち上げるという強硬手段をとってダッシュで大広間の外に連れ出した!!

・・・この子供はいったい自分達がどうしてあんな事をしてまで・・・

「ティファさん!!」
「はい、なんでしょうか？」
「・・・貴女は線引きをしたのですよね？」
「はいしました。」
　アバンの冷たい声音に対しても一向に怯む気配も撒くティファはあっけらかんとした調子でアバンの質問に答える。
「線引きしたので―やる事がある―と言って私大広間出ましたよね？」
「・・・それは貴女が心の整理をつけに外に出たのでは？」
「は？・・・・・・なんですかそれは？」
「はい？」
「え？」
　・・・・・噛み合わない・・・
　そのやり取りに、妹をどうする気だと血相を変えて追って来た兄ポップは、恐る恐ると妹に聞いてみる。
「いやお前・・・芝居のためとはいえ嫌な言葉をここにいる人達に言っちまっただろう？それが嫌で大広間を・・」
「あぁあれ？あれはあくまでも芝居でしょう？アバンさんが言った事は正しいよ。
　ここの人達が私達・・・ポップ兄の強さとチウ君の優しさに依存したらヤバイもん。
　それにあれであの服装言動悪趣味野郎をここにいるみんなの共通の敵にできて、ダイ君達の後顧の憂いが無くなって絆もできて色々と上手くって・・・にぃ嫌だった？ティファがあんな酷い言葉言ったの・・・」
「あ・・・・大戦時はさんざん見てきたから・・・・俺てっきりあの後大広間を出て行ったのはさ、お前が自分の言葉に嫌気がさしたんじゃねぇかって・・・」
「へ？」
「ほら・・・・フラフラと出て行ったから・・・」
「あぁ～あれね、流石に―沢山の式―を一度に使ったからティファも

疲れちゃって。」
「・・・はい？」
「あそこに沢山のパンあるでしょう。あれね、保護者一同の皆様集めてその後のお話合いの時に式達に各国のバラバラの場所でパンを買ってきてもらっていたんだよ。」
兄が懸念していることが何であったのかに思い至ったティファは、これまたあっけらかんと答える。
あの沢山のパンは、式達にマジックリングを持たせて、森や川や海を渡れる鳥の式神にして、無事な都市についた式を街中で人型にして買い求めさせた。
資金はキルに贈られたドレスと合わせたチョーカーについていた宝石を先にベンガーナの質草やに売らせに行き、そして分けてから式を行かせて買い求めさせ、そして人里離れた者をまた鳥にして目玉やシャドーなどの魔王軍の監視網をかいくぐらせた。
そしてスープの方はこれまたサババ砦の物をかっぱいで、急いで具材を炒めて火を通して速攻で作ったのだとか。
ティファが疲れたのは式を人と鳥にするタイミングを取る為に、大量の式の目で風景を見て判断したからで・・・この妹何しちゃってんの?!
「そんなことしたらお前ぶっ倒れんぞ!!なんでそんな・・・・無茶しやがって・・」
力の限界を超えても不思議ではなかったティファの有様に、思わず怒鳴りかけたポップは言葉の勢いを飲み込んで妹を抱きしめる。
何故ティファがジ＝アザーズやラック＝バイ＝ラックの改良版という大技を使った後に己を消耗する方法で食料をかき集めたのか、一所で買い集めれば、人々の耳目を引き、やがてはどこからか魔王軍の耳に入ってそこから謎の集団がいる事を突き止められ、まかり間違って自分達の事が知られて居場所まで辿られる事をティファは警戒したのだ。
この妹はどうして・・・なんで・・・・
「ティファさん、貴女は線引きをした。そしてこの世界の事から手を

引いたのでは？」
　ポップとフローラが持った疑問を口にするアバンに、ティファは兄に抱きしめられながらも不思議そうな顔をアバンに向けた。
　何故アバンが起こっているのか理解できないが
「助ける義務も義理もありませんが、食事は皆で食べたほうが美味しいでしょう？」
「・・・・・は？」
「いやだって、線引きしたからって美味しい物をティファ達だけで食べるって・・・気が引けて美味しくないじゃないですか。
　いくら線引きだのなんだの言ったって、それは双方嫌でしょう。
　長期戦になるかもしれません。その時私達が何を食べて過ごしているのかとこちらの人達に気遣われるのも嫌ですし、私達だけで美味しい物を食べるのは嫌なので、ご飯くらい一緒に食べたからと言って、アバンさんの懸念する依存云々無いと思いますよ。
　もっとダイ君達の事を信じましょうよ。」
「・・・・・」
「ダイ君達ならもう大丈夫でしょう。見てください、私がいなくても、アバンさんが変な事をしても気にせず熱々のスープでご飯にしようとしているじゃないですか。」
　自分の言葉に絶句したアバンにティファは大広間の方を見る様にアバンに促す。
　その先に見えたのは
「ノヴァ！ゆっくりでいいからスープ溢さないで!!」
「ダイ！体の大きい人もパンは二つまでってティファさん言ってたろ。」
「だって・・・・お腹すかないかな？」
　ティファの用意した食事を、自分達で振舞っている弟子達とその仲間たちの姿が・・・
「彼等も始めはアバンさんと同じことを言っていました。線引きした私が何のつもりだと。」
　自分達を見捨てるも言ったも同然の言葉を吐いた者がいまさら何

をするつもりだと。
「お腹がすいたら戦は出来ないでしょうと鼻で笑い飛ばしてやりました。
　利用できるものはしなさい、全てはこの大戦に勝たなければ何も残らないのだと言ってやったら、ダイ君がその通りだって分かってくれましょ。ポップさん達も承知して、飯の世話になって良いのかと言ってきました。」
「貴女は・・・何と答えて全員を納得させたのですか？」
　ティファの言った言葉を、仮に大魔王達の強さを身に沁みたダイ達は兎も角、カール騎士達とノヴァたちを何と言って納得をさせたのかと、フローラがここにきてティファに問うたのを、ティファは何の事は無いとばかりに笑って答えた。
「あの服装言動悪趣味野郎と、身勝手な大馬鹿大魔王もどきを叩きのめしてくれれば結構ですよと言っただけですよ。」
・・・・はい!!!??
　その言葉に呆気に取られたアバンに、ティファは笑って宣った。
「アバンさん、貴方の懸念は私にも分かっているつもりです。
　けれどももっと彼等を、そしてこの世界の人達を信じてみませんんか？」
「・・・・なにを・・」
「アバンさん、これは私の持論ですが、私はこの言葉を信じて今まで生きてきました。」
　世界の人達を信じると言うティファの言葉に気圧されたようなアバンは、ティファが何を言うのか待ってみた・・・・どれ程の甘い言葉を言うのだろうかと
　そしてその予想が当たったような言葉であった
「世界は弱すぎも酷すぎもしません。確かに貴方が懸念するような者達が多くいるのもまた事実ですが、優しい人達もまた同じように大勢いてくれるはずです。
　私はその人達を信じます。そしてここにいる人達の心は弱くない・・・いえ、弱ったのならば私が美味しい食事をたくさん用意しま

す。沢山食べて大勢の仲間達に支えられればここにいる人達ならば、ダイ君達ならばきっと大丈夫だと信じます。」
それに悪意なんかにいちいち負けてたら悔しいじゃないですか
優しさと善意を信じると・・・・ここの者達の心の強さを信じるとティファは静かにアバンに告げる。
その言葉に、ポップの顔に優しい笑みが浮かび、腕の中にいる妹をもっと強く抱きしめるのを、ティファは嫌がらずに抱き返してくれる。
「・・・・アバンさんよ・・・・・俺も信じるわ・・・・」
「ポップさん・・・・」
「あんたの言う事も正しいか知んねぇ・・・けどな・・・・俺やこいつは確かにそうやって沢山の人達に接して酷い目だけじゃなくて・・・・それ以上にいい事に巡り合って・・―全部―を救い取ったんだ・・・・」
思い出した・・・・ティファのこの言葉が、敵になってしまった自分達の長兄やクロコダインやバランの心をも助けて・・・・そしてついには大魔王達をも救ったのだと・・・近頃はその状況が当たり前で、どうして自分が周りの者達を信じ切っていたのかの原点を忘れていたのだと・・
「確かに警戒は必要だ・・・守る為に、守り切る為に・・・・それでも俺は警戒よりも信じる方を先にする・・・無警戒は無理でも・・・・それでも目の前の人達を信じて困ってたら助けたい・・・・見捨てたくないんだ俺達は・・・・」
かつて自分が出した戦う理由は、仲間を見捨てたくないだった。
それがいつの間にか仲間の定義が世界全体に広まりそして・・・・・死にゆく魔界の民達も入って・・・自分が目指す道はそこだ、悪意に会おうとも弱き人達の非道を目にしてもそれでも・・・・
「世界を信じて見捨てない男に俺はなるよ。」
ポップの出した言葉に、ティファは兄の腕の中で満足げに笑う。
見捨てないと答えを出した、怯えながらも助けに来てくれたあの頼もしい兄の姿を思だしつつ・・・そしての答えに、アバンは頭を殴りつけられた思いがした。

警戒はしても、それでも世界を信じて見捨てない・・・それは自分が育てようとした者の理想の形で・・・・自分は人を・・・・

「アバン。」

「・・・・・フローラ様・・・・」

「アバン、貴方は一人ではないのです。焦らずに背負いすぎないでください。」

「私は・・・・」

「この二人の言う通りです。信じましょう、勇者ダイ達とこの砦にいる者達を・・ここにはいなくとも私達を陰から支援してくれる人達の善意と世界を守ろうとしている者達を。」

フローラはアバンの心情を察して言葉をかける。

アバンの考えは正しくとも、どこか焦りを感じる拙速さがあったのを懸念しいたが、それがどのような事か分からなかったがティファとポップの言葉で分かった。

アバンもまた、大戦時と大戦後に人の醜さを多く見すぎて疲弊して、大人になってうまく隠していたのがこの大戦と今回の事で噴出してしまい、世界に対して失望してしまったのだと。

神までもがそこまで堕ちているのであれば、いわんや人はと・・・見続け蓋をした傷が再び開いて・・・・助けが必要だったのはアバンもまた同じであったのだと。

その労りと慈愛に満ちたフローラの言葉に、アバンは俯きそして肩を震わせるのを、ティファとポップは見ないふりをしてこっそりと大広間へと戻っていった。

残りの人達にも温かい夕食が行き渡るように、料理人の仕事を果たすべく。

ティファの心情は過去も今もそしてこれからも変わらない

美味しい物を大勢の人達と一緒に食べて笑い合いたい、ただそれだけを望んで大戦を終結させたあの頃から何一つとして変わらないティファを、ポップは当然の様にダイ達に混じって手伝う。

そして列の最後にフローラとアバンが並ぶのを見て、ティファとポップと少年ダイ達も嬉しそうに笑って迎え入れる。

「先生大盛りにしますか!!」
「フローラ様、お疲れさまでした。」
晴れやかに笑って食事をよそってくれる弟子達に、アバンは微笑み
そして
「ベリーサンキューですよ皆さん!!」
すっきりとした明るい声でお礼をし、その言葉に弟子達とそして、
アバンに罪悪感があり暗い気持ちでいたヒュンケルの心も温めた。
全員にいきわたり、そして席について言う言葉はただ一つだという
ティファの言葉に、ダイが俺が言いたいと席を立ってそして手を合わ
せた
いただきます!!!!
その言葉は全員が唱和してティファを見て、見られたティファは
にっこりと笑って応える
熱々の内に召し上がれ!!!!

小石の投げられた世界：幕間・お姫様と勇者様

ｓｉｄｅ勇者とお姫様

逃げ延びた先の廃城で、まさかこんなに心穏やかに過ごせるものだとはレオナ姫は考えたことが無かった。

彼女の半生と言うべき十五年の月日は物心ついた時から前途多難で容易な事を一度として無かったから。

物心つけば、パプニカ唯一の跡取りとして取り入ろうとする者、己を傀儡にしようとする者、邪魔だからと自分を殺そうと虎視眈々と狙ってくる親族・・・そして十四歳の時には決定的な事が起きた。

賢者になるべくパプニカ王家に代々伝わる秘事を受ける為に訪れたデルムリン島にて命を落としかけた。

それは島に住まうモンスター達に殺されかけたのではない・・・それなりに信じていた神官テムジンと其の子飼いのバロンに殺されかけたのだ・・毒サソリの猛毒に侵され意識が朦朧とする中自分を守ってくれた己よりも小さい男の子を頼もしく思った反面、人間を信じる事を辞めようと諦めかけた。

信じれば裏切られた時の痛みは、毒よりも痛くて怖ろしくて、最初から信じていなければ失望も裏切られた痛みも感じなくて済むのだから。

それでも、助けてくれた少年ダイの真っ直ぐな心に触れて、もう少しだけ信じようと・・それは大戦が始まりアンデットの軍団とその長によって城を国を蹂躙され父の行方が分からなくなり三賢者達と少しの兵士達と落ち延びようとも、ダイの事を思い出せばまだもう少しだけ頑張れると耐え抜けたほどに、あの小さな少年勇者の存在は自分の心の中で大きくなっていた。

だから・・・怖かった・・・強いのは知っていた。そうでなければ子供三人で魔王軍の軍団長を二人撃破しロモスとパプニカを解放し、その時の軍団長達が彼等の心に打たれて改心して味方になってくれたとは言えあの化け物・・・フレイザードをも打ち破った実績の説明がつかない。

しかしそれでも怖かった・・・・ダイの力に怯えたのではない・・・彼の態度が・・力を振っている時のダイの態度が一変した時・・・裏切られたあの時を思い起こさせたから。

島につくまで船の中で賢者になる心構えを優しく教えてくれたテムジン、何くれとなく面倒を見てくれたバロンは、一皮むけば裏切り者であった・・・・人には本性と言うものがあるとその時思い知らされた。

目に見える事が全てではない・・・一皮むけば・・・ダイとても自分に何かを隠しているのだという疑念が・・・分からないと思った瞬間駄目だった。

分からない事が怖いと怯えてしまった・・・・

「・・・・情けないな・・・」

あの時の事を考えるたびに、レオナは己を殺したくなる衝動が湧きおこる。

怯えてしまったのは一瞬で、しかしそれはダイに小石を投げたた女の子を止めることが出来たはずなのに体は動かず、小石が当たってしまったダイを慰めるどころか、自分も同じように怯えた顔を向けてしまったあの時に戻りたいと何度思ったか知れない。

止めることが出来なかったのならば、そのあとすぐにダイに駆け寄り傷を手当てしながら慰める事をしていれば、少なくとも今の様に心の淀みを抱える事無く、バルジ島で助けられ再開したあの時の様に屈託なくダイと共に笑い合い苦しみを分かち合い、困難にも共に立ち向かうと素直に言えているのを・・・・逃げる様に城の最上階に出て月を見ながら思い悩まずに済んでいただろうに・・・

「どうしましたかレオナ姫様。」

思い悩むレオナ姫に、無遠慮に声をかけてきた者がいた。

それは自分達に聞き馴染みがない・・・・

「先程は頼みごとを聞いてくださりありがとうございました。姫様達のお陰で素早く城内の皆様のお食事が整えることが出来ました。」

「・・・・私がしなくても、あの―式―とやらに任せても良かったのでは？」

無遠慮に来たものに、レオナはチクリと嫌味を言うが言われた者は堪えた様子は一向になく、からりと笑っている。
「お手伝いをお願いするとき言いましたでしょう。疲れている男達にとって可愛いお嬢さんたちからご飯を貰った方が士気が上がると。
私の式には可愛い女の子は生憎いないのですよ。言った通りマァムさんとメルルさんと姫様にスープをよそって貰った騎士・兵士達はノヴァ君によそって貰った時よりも鼻の下伸びていたでしょう～。」
「・・・・確かにそうかもしれないけれども・・・」
「良ければここでお茶を飲みませんか？月下のお茶会というのも偶にはいいでしょう。」
「貴女は・・・・緊張とか物怖じをするという事からは無縁なのですね―ティファ―。」
レオナの少し失礼な物言いにも静かに笑うティファは、式でテーブルと二脚の椅子を用意して構わずにお茶の支度に取り掛かる。
下から持ってきた茶器とポット、そして少しばかりの甘味と・・・・この少女は本当に一体何なのだろうと思いながらも、月明かりの下であるせいかこの状況がどこか非現実的で実はこれは夢の中なのだろうかと思う程に穏やかすぎて・・・其の事が初対面どころか正体も知らない異界の者の誘いに、レオナは素直に応じて椅子に腰を掛けてしまっていた。
先程の様に・・・・
大広間でティファという少女が放った言葉に憤る者はいなかった。
彼女達がこの世界の神にされた仕打ちを思えばもっともだと誰もが納得をした・・・したのだが・・・・
「・・・・貴女は我等と道を異すと言いませんでしたか？」
頭痛を堪える様にティファという少女に物申したバウスン将軍はきっと悪くない。
何故ならば大広間を出て行った少女が戻って来た時、手にもっていのは寸胴鍋で・・これから城内に向けて炊き出しをするから手伝って欲しいと言われればなんだそれはにしかならないのが普通だろう。
しかしティファという少女は大真面目な顔で頼んできたのだ。

「私は非力とは申しませんが百人近くいるあなた方の分のスープ作ったのですが一人で持ち運びして配るのは大変なのです。
それに飲んでいただかなければ腐ってしまってこれまた大変もったいない事になってしまうので飲んでください、お願いします。」
・・・・確かに今は蒸し暑い日が続く夏場で腐るのは当然だが・・・
「貴女は僕達を助けないと言ったではありませんか！それなのにやっている事と言っている事がバラバラで矛盾している!!」
少年の潔癖で言動が一致しない事を嫌うノヴァがティファに噛みついたが一笑に付されて鼻で笑い飛ばされた。
「先程私はこう言ったのですよ？この世界の地上側の味方につこうと考えたのは偏にダイ君達の事があるからと。そして私はダイ君達に美味しい物を食べて欲しいと思いました。ただ食べ物を食べるだけではなく、温かいものを美味しく食べて英気を養って欲しいのです。古来よりお腹がすいては戦は出来ません、そしてそれは貴方達にも通じるのですよ？台所見てきたら―そこそこの食糧―があれども料理人の私から見たら不足もいい所です！たとえダイ君達が私の食事で英気を養えてもお味方の貴方達が駄目になるという状況は料理人の私にとっては赦せません!!きちんとした食事を提供するのできちんと英気養って魔王軍をぶっ潰しておやりなさい!!!」
・・・・・・滅茶苦茶な論理に・・・・生真面目なノヴァは口をパクパクとして反論不能となり、一般感覚の大人達は唖然として、世間の酸いも甘いも噛み分け裏の裏も見てきた筈の大魔導士マトリフと魔界の名工ロン・ベルクだけが、其の滅茶苦茶な論理に大爆笑した。
特に魔王軍をぶっ潰しておやりなさいが気に入ったようで爆笑している二人を他所に、ダイはお姉ちゃんの手伝いすると張り切り、ポップは料理のお礼は何をすればいいのだと聞いてみればその内容も飛んでも無かった。
「私の大切なチウ君傷つけてくれた服装言動悪趣味野郎と、大馬鹿大魔王もどきをぶっ倒してくれればそれでいいです。」
・・・・キルバーンとバーンをぶっ倒してほしいとにっこりと良い笑顔で言い切る少女に、唖然呆然とした大半はきっと悪くない、爆笑

している問題ありそうな大人二人がおかしいのだとレオナが頭を痛めていると、其の不可思議な少女は自分の下にやって来た。
「すみませんがマァムさんとメルルさんとそしてレオナ姫はこれをつけてお願いします。」
・・・・渡されたそれは・・・・フリルのついたピンクの可愛いエプロン！
「あのね・・・手伝うのはいいけれどもなんでこれを付けるの？」
可愛いエプロンをつける理由が不明だ・・・不明なはずなのに・・・
すぅ・・
「男性陣の皆様!!このエプロン可愛くないですか？この可愛いエプロンを身に着けた彼女達をどう思いますか!!!!!」
・・・・・・・は？え？
「・・・可憐かと・・」
「いいかと・・」
「・・・癒されます・・・」
はい!!???
「・・・・見たいかも・・」

ポップまでもがぼそりと言いてきた・・・これを着たら・・・喜んでくれるだろうかダイ君は・・・
そう思って身に着けてみれば、大広間の男性陣たちは良いもの見たような目を向けてきてマァム達は心の中で溜息をついた・・ポップとヒュンケルとノヴァまでもがマジマジと見てきた時には驚いた・・・男って・・・
そしてワイワイと賑やかな食事に、レオナはこんなにおいしくご飯を食べたのはいつ以来だろうかと思う程においしかった。
近頃は何を食べても砂を噛むようで、負け戦の後とは思えない程ダイ達の表情は明るくて近頃のダイには見られなかった本物の力強さを感じて・・・複雑になって逃げる様にご飯を食べ終えてここに来たのに追って来たティファの淹れてくれたお茶は美味しくて・・・
何が心を悩ませているのですかというひっそりとしたような声に

釣られるように・・・しまい込んで一生表に出さない筈の感情を訥々と話しているのをティファは静かに聞いてくれている。
何かを言ってくれるでもないが、自分が抱いてしまった心の弱さを非難するでもなく、表情を変えるでもなく静かな笑みを浮かべてただ優しく聞いてくれるだけで・・・ただそれだけでレオナは己の心を曝け出していた。
王族達にとって他者とは身内出ない限り信用する者ではなく、時に身内こそが敵の時が多々あって、己の本心を曝け出す事の危険性をずっと教えられてきたのに・・・どうして目の前の少女に何もかもを打ち明けてしまうのか・・・いけない事なのに、王女としてずっと生きてきたのに、目の前の少女は自分を姫様と呼びながら、ずっと一人の女の子として扱ってくれていたからだろうか・・・
全てを話し終えた時、ティファはそろりと言葉を発した。まるで吐息の様な呟きよりも小さな声は、するりとレオナの心に入り込んだ。
貴女はどうしたいですかレオナ
姫と言う敬称をつけずに、沁み入るその声に
「・・・・分からないの・・・・ダイ君を好きだって言いながら・・・ダイ君を信じ切れずに傷つけた私が・・・・ダイ君の側にいていいはずがないもの!!」
己を許せないとレオナは激高する・・・・それでも・・・
「側にいたいの・・・・ダイ君の温かい心に触れたいの・・・・でもそんなの身勝手よ!」
「何故?」
「だって私はダイ君を傷つけた身勝手な人間の一人なよ!!??貴女達が言ったでしょう!教えてくれたでしょう!!ベンガーナのあの出来事がダイ君を傷つけて追い詰めて・私も傷つけたうちの一人なのよ・・許されるはずないじゃない・・・」
自身も傷つき泣いている少女がここにいる・・・・でも、この女の子を助けるのは自分の役目ではない。
傷ついたお姫様を助けるのはいつだって・・
「どう思いますかダイ君?」

勇者か王子様だと相場は決まっている。

どう思いますかダイ君という言葉に、レオナは愕然とした。
だってここにはティファしかいないとばかりに思っていたのに・・・いつの間にか椅子に座り込んで泣いていた自分の手の上に、見覚えのある手が重なっていて・・・
「・・・・レオナ・・・・レオナは俺が嫌い？」
「ダイ・・・君？」
「俺の力は怖い？人間じゃない俺は怖い？」
「わ・・・わたしは・・」
「俺の中には竜の力がある・・・・人間の体なのに魔族の強さもあるって言われた・・滅茶苦茶だよね俺って・・・怖い・・・・」
「違うの!!!ちがうの・・・・怖いの・・・私は・・・・分からない事が怖いの・・」
訥々と自分は怖ろしい物だろうというダイの言葉を、レオナは震える声を押し出して止めそして・・・・おのれの怖い物をきちんとダイに告げた。
目に見えない人の心が、あの時・ダイの豹変したような態度に、普段自分に優しくしてくれたのに裏切ったテムジン達の姿が重なり・・・ダイもまた自分を欺いていたのかと思うと怖くて仕方が無かった事を・・・
「ごめんねダイ君!!」
「レオナ？」
「弱くて・・・・貴方を好きだって言いながら肝心な時に何にもできなくて・・・・こんな私いない方が!!」
「レオナ!!!!」
一切を告白して泣きながら謝るレオナが、自身を否定しようとした時ダイはレオナの頭を抱きしめる。
普段は年上のレオナの方が身長が高いが、今は椅子に座っている事でダイの胸の中にすっぽりと収まり、優しく頭をダイに撫でられる。
「弱くない・・・・だってレオナは俺が親父のせいで記憶がなくなって

も逃げないでクロコダイン達と一緒に親父に立ち向かって俺を守ろうとしてくれた・・・勇者の記憶も力もなくなった俺を捨てないでくれた・・・・その後だって・・俺達を助けてくれるために難しい事も沢山してくれた・・」

「でも!それでもダイ君は傷ついて!!」

「そうだよ!頭では分かっていたんだ!!・・・・レオナが俺に怯えても、それは一時の事だって・・・・でも・・・・どうしても俺も忘れられなくて・・」

子供二人がそこにいた。

片や王侯貴族としての心得を教え込まれた感情を露わにする事はおろかだと教えられた王女が、片や勇者とは強くなければいけないとずっと思っていた少年勇者が、互いに自分の弱さと心の痛さを言い合って泣いているのを、ティファは少し離れたところに行って結界を張る。

外から誰が来ても見えもせず聞こえもしない結界を・・・・泣いて言い、怒って良い・かつて自分が贈られた言葉を―子供―二人にそっと贈る

自分の結界は絶対です、だから子供らしく泣いて言いたいことを言い合って良いのですよと、言葉には出さずに祈りを込める様に。

これがうまくいく保障なんてどこにもない、それでも・・・・子供が子供らしくあれる時間があったとてよいではないか・・・・・かつて愚かな自分を守ってくれた仲間や大人達がそうしてくれたように、急いで大人になろうとしている子供達の行く道が少しでも良くなることを願って、先程レオナが寂しそうに見上げていた月を見る・・・兄達はどうしているだろうか・・怒っているだろう事は分かるが・・・暴走していなければいいのだがと苦笑してしまう。

お願いですからこの世界を滅ぼす計画だけはしていませんようにと物騒なお願いを月に師ながらティファは二人を待つ。

叶うならば・・・恋人繋ぎの握り方で仲良く出てきて欲しいなとにんまりと笑いながら・その前にお前自身の恋愛模様はどこ行ったと、この場に突っ込むものがいないのが残念であった。

ちなみに先代勇者は無事（？）にフローラ女王に一世一代の告白をして、成功したのはまた別の話で、コッソリと別室でしたはずなのに大広間にいったん戻った時にニヤニヤとして来たマトリフに殺意が芽生えたのはまた別の話で・・・・さらに言えば
「・・・ダイ君・・・他界を滅ぼしたら駄目よ？」
「だってレオナ!!・・・もう分かったからそんなに可愛いジト目しないでよ・・バーン、他界侵攻は諦めて三人助ける事だけに専念しよう・・」
「・・・・左様か・・・・致し方がない・・」
結婚したばかりであるが、もうすっかりとお嫁さんに操縦されている勇者とお姫様の姿があったとか・・・三者三様の模様はやがて互いの世界をどうするのか
この時はまだ誰も知らない

小石の投げられた世界：それぞれ・・・

隠し砦の別室で、他界の自分（？）を看病していたチウが声に誘われる様に大広間に行ってみれば・・・・そこは混沌としていた。
両親に囲まれて困惑している少年ポップ、泣いている母レイラを慰めているマァムと、その周りを心配そうに見ているヒュンケルとクロコダインは真っ当なのだが・・・一部酒瓶が転がっているところを見てみれば・・・案の定お酒大好きマトリフ大魔導士と魔界も名工様のロン・ベルクの中に・・・・アバンがいるのはなんでだろう？
確かティファが大広間でちょっとみんなに話すことがあり自分には見て欲しくないと言われたチウは、ならばこの砦でまだ昏睡状態のチウを見舞う事にして、見てみれば確かに大ダメージで、その傍らの椅子に座っている老師に挨拶をして断りを入れて眠っているチウの額に手を当ててみれば熱かった。
自分も体は頑丈が自慢だが、弱っている時の発熱は体に辛いと教わっているチウはすぐさま台所にあったたらいに水を張り、布巾があったので悪いと思いつつ黙って借りてすぐさま部屋に取って返してチウの額を冷やしてやる。
その様をじっと見ていたブロキーナ老師が初めてチウの事をきちんと見て質問をしてきた。
「君は異界というところから連れてこられたと聞いたけれども、君も武闘家かい？」
「はい！僕の世界のブロキーナ老師に教わりました。」
「そうか・・・もしかして人の畑を荒らして退治依頼された僕につかまった？」
「そうなんです・・・キャベツ畑と人参畑と大根畑を荒らしたら・・・・一生懸命に作ったその日の食べ物を荒らしたら怒りますよね。」
今のチウなら、どうして人があそこまで怒っていたのか、退治依頼が来たのかよく分かっている。
時折拠点にしているロモスの山間で畑仕事を手伝うようになったチウは、畑仕事の大変さを知ったんですと、傷ついて眠っている自分

の弟子の姿に心を痛めているブロキーの心を少しでも軽くしようと世間話の様に話を始める。
もしも老師に拾われなければ、きっと自分は人に追い詰められて・・・そうなる前に老師様と出会えて縁を結べてよかったと笑うチウを、ブロキーナはじっと見つめて聞いてみる。
「僕に・・・僕達に武闘なんて習わなければこんな危険な目に遭わないとは思った事は無いのかい？」
ブロキーナは弟子を取ったことが無い。
自分の奥義は威力がありすぎ、悪用されればとんでもない事になるのが身に見えているからだ。
その奥義を託すに足る者が、先の勇者一行のロカとレイラの娘だった事にブロキーナは初めて人知を超えた縁と言うものは存在するのだと思った。
しかしチウは違う。人の畑を荒らして退治依頼が来たので出向いて捕まえようとすれば思った以上に頑丈で、何よりも瞳が澄んでいた。
荒々しい中にも見えた奇麗な瞳・・・その辺の人間などにはない純粋さを感じたブロキーナは、何かを感じてチウを生かしそして弟子にした。
人間の言葉を教えれば大人の真似事のような少々気障な言い回しをするが素直な性根はそのままで可愛い弟子であった・・・まさかその可愛い弟子がマァムと同じく勇者一行の仲間になってこんな危険な目に遭っているとは思いもしなかった。
それをブロキーナは、昏睡状態を脱したているとはいえ痛々しい姿で眠っているいるチウを見て後悔し思わず聞いてしまった・・・もう自分の下を巣立った弟子の事だというのに。
「僕はしていません。老師様に闘い方を教えてもらえたから僕はマァムさんとの繋がりから得た大切な人達の為に一緒に最後まで戦いきる事が出来ました。
狭くて一人でいる事しかできなかった僕が・・・あんなに素敵な人達と共にあれるのは間違いなく老師様のお陰なんです。」

強がりでもなく、慰めの気配も無い真っ直ぐな異界のチウの言葉に、ブロキーナの心は救われた思いがした。
自分の弟子のチウはどう思っているのか分からない・・・それでも・・・チウの言葉の温かさにブロキーナは確かに救われたのだ。沈黙が落ちたがそれは嫌な雰囲気ではなく、少し荒く感じていた眠っているチウの呼吸が穏やかになったのを見たチウは、夕飯を貰ってきますと席を立って大広間に出たのを、ほんの少しだけ後悔した。

少年ポップを案じているこの世界のジャンクとスティーヌが、何くれとなとなく我が子の面倒を見ようとしているのを、顔を赤らめているのは少年時代特有の恥ずかしさだろうとはチウでも分かる。
「お袋!もう本当にお腹いっぱいで入らねぇよ!!てか親父!!仲間の足引っ張らずに頑張れって言って俺送り出したの親父だろう・・・今更どうしたんだよ・・」
「分かってなかったんだよ・・・・本当の意味で戦うってことの怖さを・・・・馬鹿な親父だ俺は・・・」
「親父・・・・お袋も泣かないでくれよ。ダイもたち直れそうだし仲間達はみんな無事だ。それにこんなおいしい飯食ってたら力が・・・あ!!お前異界のチウだろう。」
「あ!チウ、お前なんも食ってないだろう。飯取って置いたから食えよ。」
「チウ・・・その・・・チウの容態はどうだった?」
「もうそろそろ目覚めると思ったのだがな・・」
「うむ、チウは頑丈だから大広間の食事の匂いで目覚めると思ったのだが・・」
チウを見つけたポップ達とマァム達はわらわらとチウを囲んでご飯を進めたりこの世界のチウの容態を案じたりとちょっとした騒ぎになったがチウはほっこりとした笑いを崩さずにいつも通りの優しい対応をする。
ご飯はブロキーナと共に向こうで食べる事、この世界のチウは発熱していたが今は落ち着いて穏やかな呼吸で眠っているので明日には

目を覚ますことを話せば、どちらのポップも仲間達もほっとした。
チウは大切な仲間だ。早く良くなって欲しいとみんなが願っていたのだから。
落ち着いた雰囲気に戻ったところで、今度はチウが青年ポップに尋ねた。
「マトリフさんとロン・ベルクさんがお酒を飲んでいるのは分かるけれども、アバンさんが泣きながら飲んでいるのはどうして？」
あんな乱れたアバンは終ぞ見たことが無いチウの質問に、アバンの弟子一同とクロコダインは何と言ったもんかと頭を悩ませる・・・まさかティファとフローラとアバンが互いの立場を明確化して線引きさせるつもりが、協力してくれるはずのティファに梯子を外されそれをかつての仲間で悪友のようになったマトリフに鼻で笑われたのが悔しくてやけ酒してますとは言えないし・・・

「けっけっけ！お前さんは昔からその辺が甘ぇんだよアバン。だからあんな三流魔王と心中紛いの双方封印されるっていう目に遭っちまうんだよ。」
「ほう、こいつはそんな凄い事仕出かしたのか。」
「あぁ、力が足りねぇ自分にはそれしかねぇって言って、扱えもしねぇもん使っちまったら当然そうなるわな。」
普段は自分は大人でございと取り澄ましているアバンも、若さからくる数々の過ちや失敗を知っているマトリフの前では形無しであり、良い肴が聞けるもんだとばかりに笑っているナイスミドルの魔界の名工様に笑われる中・・・アバンとてほんの少しお酒を飲みたくなったのだ・・・城にいる大半の者達はそんなアバンの行動を止めなかった。
大戦の最中で魔王軍が自分達を血眼になって探しているとはいえども、張り詰めていたようなアバンを案じていたのは何もフローラだけではなかった。
長年実力は隠されていたが、意外に繊細なアバンをカール騎士達・兵士達は知っており、つまるところアバンもお疲れなんだな～と、マ

トリフ程ではなくともある程度察せられており・・・・茶番は兎も角お疲れはバレバレだったのだ。
　今日くらいは少しは目外させてやれというかつての同僚達は、お酒を持ち込んできたロン・ベルクという魔族の男に、不謹慎ですと少年特有の潔癖さで噛みついたノヴァはバウスンが今日くらいは部屋で一緒にのんびりしようと優しくお引き取りをされ・・・労われたアバンは全てを察してやさぐれたのを、こいつ青臭い、よくあんな茶番考え付けたもんだと世間様をよっく知っている魔界の名工様の格好の餌食化したアバンを、マトリフは益々笑ってもう嫌だと机に突っ伏したアバンの頭をぐしゃぐしゃと掻き回しながら忠告をしてやる。
「アバン、俺は昔言ったはずだぞ。手前ぇの手に負えないものに手を出せば痛い目を見るってな。」
　凍れる時の秘宝をする前に、そして封印が解けた後にした忠告を、今再びアバンにしてやる・・・俺もポップ達の面倒見ている間にお節介になったもんだと己に苦笑しながら。
「マトリフ?」
　その忠告は何に対して言っているのかと、机から顔を上げたアバンはまじまじとマトリフを見つめる。
　忠告の内容に理解が出来なくて。
「やれやれ・・・俺はな、あの異界から来たって言う娘の事を言ってんだよ。あれはお前には金輪際扱いきれる柔な娘じゃねぇ、かくいう俺にも手に負えねぇ相手だ。」
「それは・・・確かに様々な事を経験して一筋縄ではいかないとは・・」
「はっ！一筋縄?そんな生易しいもんじゃねぇぞあの娘っ子は。下手したら―人間―の真理をあの娘の方がお前よりも知っていると俺は見積もってるぞ。」
「まさか・・・彼女はまだ十五だと・・・」
「年齢じゃねぇ、人との付き合いの深さやとんでもない経験を散々にして確実に手前ぇの血肉にしてる・・尋常じゃねぇって話だ。
　お前できるか?異なる世界に飛ばされた瞬間からもう日常と変わらない思考回路に切り替えて行動することや見知らねぇ他人どころ

か異界の誰かを信じるって事が。・・・俺はな、俺の弟子の方のポップからあらかた話聞いた時あの娘に怖気が奔ったぞ・・・・敵に回したら駄目な部類の奴だ。回したが最後、どんな方法だろうが最後には敵は負ける、それもどうしてそんな方法で負けたのか訳の分からない内にだ・・・あの娘にはお前はあんま関わるな。

―人と―距離を保って線引きしていたお前とあの娘じゃ格が違う。せいぜい協力体制を維持していけるくらいにしておけ。」

幸い根はいい子のようだからというマトリフの言葉に、アバンはそういう者なのだろうかと首を傾げるのに、マトリフは溜息を堪える。

こいつは凄いのにどうしてこういう人間関係で鈍いのだか・・・・人に期待をしないと離れた分、人の心理や心情を見る目が低いのかとも思える。

確かに相手の力量やすぐる心根を見る目はあるのに・・・・だからこそ勇者の家庭教師辺りがあの時のアバンには似合いだったのかもしれない。

様々な事に疲れ果て、敵の子供を引き取った若造が、城の中枢にいられる筈も無く流れていく旅の方が・・・・・その分アバンの力量は落ち、相手を見る目も落ちたのをマトリフはしょうがないとは思いつつも落胆はしなかった。

自分だとて、人間にはもう期待していないのだから。

後は愛弟子のポップが仲間と共に無事に勝ちさえしてくれればいいとさえ思うのをひっくり返したのがあの異界の娘であった。

ポップから聞き出したティファの言動全てから、そして茶番の行方を見て思い知る。

こいつは人の手に負える者じゃない、個人がどうこうどころか国を相手にしても戦争をおっぱじめても負けなさそうな・・・・得体の知れない何かを感じたマトリフはアバンに忠告をする。

アバンの言う通り付かず離れず現状維持していろと・・・・大戦が終わればフローラと結婚すんだからと、揶揄いも交えながらもマトリフはアバンを撫でながら決意をする。

あの異界の娘が、これ以上こいつらを振り回さないように見ておく

かと。
　そのやり取りを酒を飲みながらみているろん・ベルクは、人間とは過保護の生き物だなと感じる。
　魔界育ちの魔族には、まだ絆の大切さの本当の所を知らないのだ。
　そんなこんなをしているうちに夜は更け、そろそろ子供達は寝かせようとアバンが正気付いて号令をかけようとした時、大広間にどよめきが奔った。
　何事かと声が大きかった入り口を見てみれば・・・はにかみながら手を繋いでいるダイとレオナの姿があった。
　どうやら・・・あちらもティファが何かを成したのだろうかとアバンはぼんやりと思いながら、戻ってきた二人や弟子達にも休むように促す。
　それはヒュンケルだけではなくクロコダインも同様であり、見張りは騎士・兵士達で交代でするので、今日の疲れを全て取る事を第一とするアバンの提案に、クロコダインも頷く。
　戦士たるもの、休めるうちに休めが信条だ。
　部屋はどこが空いているか、先に出て行ったダイ達を追うか妹を待つか青年ポップ達が悩み始めた時、ティファが大広間に入って来た。
「ティファ・・・・あの二人大丈夫か？」
「ん？・・・・馬に蹴られたかったらダイ君と姫様に尋ねなよ。蹴られたら優しく手当てしおくから・・・・大人は飲んだか・・・アバンさん、ちょっといいですか？」
「どうしましたかティファさん。」
「今後私は買い付けに直接行きますが、デパートや個人で扱っている薬草の名前を教えて欲しいんです。」
　向こうの世界とこちらの世界が完全一致している保証はないので、同じ名前の者でも毒であったならば洒落にならないからというティファの言葉に、明日までにリストを作っておくというアバンの言葉にティファはお礼を言う。
「おい娘さんよ、お前この世界の金も無いんだろう？またお前さんの持っているものを売るのか？」

アバンとのやり取りを見ていたマトリフの質問に、ティファは当たり前だと答える。
「奇麗な宝飾類じゃお腹は膨れませんし戦場の助けにもなりません。
これをそういう風に役立てた事を知れば・・・・きっと贈ってくれた人は喜びます。」
「ほぉ～そいつは贈り物か。お前さんの彼氏か？」
「まさか！こんなチンクシャ娘なんかにはもったいないいい人です。いい人なんです・・きっと私達の事を心配してます・・・ポップ兄とチウ君無事に帰れるようにしないと。」
物に執着はなく、守る者の為には何でもしかねない・・・こいつは諸刃の剣だと、マトリフは一層ティファを警戒した瞬間であったが、夕食を取りに来たチウは部屋に戻る前にティファに会えて喜び、そしてティファの話を聞いて決意が固まった。
「ティファさん―アレ―をください。」
「チウ君・・・いいの？」
「はい、長らく預かってもらいましたが、今の僕には使えないんですよね。」
「うん・・・・そうだね、そう使われたら、きっと・・・・」
チウは今日は良いので明日朝一で貰いますと言い残し、もしもこの世界のチウも目を覚ました時の為にと三人分のパンとスープを持って大広間を後にする。
チウが何を決意したのかと、妹に聞こうとしたポップはやめた。寝ればすぐに足は葉来るのだから、何か良い事を決心したチウの言葉を直接聞くのが良いだろうと。

そして勇者一行の者達を取り逃がした魔王軍もまた動き出している。
無論ティファ達を取り逃がした後ミストバーンが血眼になって探している。
己の軍団と目玉を総動員に近い数を動員して。
しかし見つからずいら立ちが募る中、バーンから呼び出された。
使い魔の伝令ではなく目玉の通信でもなく、主と自分だけの繋がりの思念で呼び出されたミストバーンを待っていたのは、右手で頬をつき物憂げにして玉座に座っている主の姿であった。
「・・・・バーン様・・・・お許しを・・」
「・・・まだ見つからぬか・・」
「は・・・・」
その姿は、周りの者達が主の命令をこなせなかったときに見せる怒りの姿であり、それを今は自分に向けられているのに、ミストバーンは怖れを感じずに悲しいと感じる。
己を拾ってくれた主に、自身の全てを捧げつくしても足りぬ大恩ある主の命令を果たせない事が悔しくてそして悲しい。
その様を、バーンは愉しむ。自分を崇拝するミストバーンの姿が哀れでそして愛らしい。
「ミスト来よ・・・」
俯き自分に近づかない可愛い側近を呼びつける。
バーンは基本他者に興味は無いが、それでも気まぐれを起こすこともある。
呼びつけられたミストバーンはおずおずと近づく様がまた滑稽でありそして可愛いと思う。

自分の若き肉体を預かる一途な影を、自分の足元に膝をつかせてそして・・・頭を撫でてやる。
正確には―ミストバーンの本体―である―霧―の部分を。
「っ!!」
ジュっと焼きごてが肌に触れたような酷い音がする。
それはミストバーンの本体が触れられダメージが与えられる音色。
本来触れられるはずのない暗黒闘気の集合体は、主人の若き肉体を守る為に凝って一所に集まり密度が高く、そして主の暗黒闘気を纏った手であれば触れられる、。
光の闘気でなければ消滅しないはずの本体は、主人が与える苦痛に身を震わせて耐え忍ぶ姿に、バーンは目を三日月に細めてうっそりと嗤う。
「苦しいか?それとも悦いかミストよ?」
「あぁ・・・バーン様・・・・」
本体を触れられることが苦痛であるのに、己が触れる事を悦び恍惚としている哀れな―ミスト―
その内に・・・・不要となる哀れなるモノ
それも近いうちに・・・・あの異界の娘のせいで加速する世界・・・
その時ミストをどうするべきか、苦痛と悦びのミストバーンの声を聴きながらバーンは初めて他者の事で悩む

小石の投げられた世界：代価と代償・・・

他界に来たというのにぐっすりと寝られた俺の神経は図太いのだろうかと、ティファが式に調達をさせた寝間着に着替え、同じく寝間着に着替えた妹と同じ部屋を割り振られたポップは眠れるのだろうかと思っていったら・・・・爆睡した。

夢も見ずに同じベットで眠っていたティファを抱きしめて。

疲れていたのだろうと、自分の起きた気配で目を覚ましたティファに優しく諭されるように言われた。

結婚式の時から緊張の連続で、いわんやこんなとんでもない目に遭って疲れない人がいたら見てみたいと、さしもの三界一とんでもない娘と評されたティファからのお墨付きに、自分の神経がおかしくなったわけではないのだと安心をしたポップは、先に部屋の隅で着替えてティファが着替えられるように表に出る。

共寝はいいけれどもさすがにもう着替えの場にいては駄目だろうという・・・他界の女性陣が聞けば、共寝ももうアウトだろう!!という突っ込み待ったなしの考えをしながらポップは外の井戸を借りるべく城内を歩けば、少し先の曲がり角辺りでチウと誰かの声が微かに聞こえた。

「・・・・だがしかし・・・」

「・・・・・んです、―ソレ―を使っていただく事で皆さんが・・・」

「分かった・・・お前さんの想いは確かに受け取った・・・には・・」

「はい・・・わず・・・」

「おい。」

「わぁ!!!」

「・・・んだよ・・・肝が小さいんだな意外と。」

チウと誰かの声の内容が気になったポップは、近づいたらバレるだろうと歩みを止めて聞き耳を立てていれば、マトリフに声をかけられ飛び跳ねるのを、五月蠅い声だと顔をしかめられるのに、ポップの顔は熱くなる。

他界とは言えども、矢張り師と同じ者に叱責の様な事を言われるの

は堪えるのを、お前さん真面目な奴だなと当のマトリフに言われた。
「俺んところのあいつなら、いきなり声をかけて来るからだって噛みついてんぞ？」
「いや・・・戦場でこんな事が会ったらきっと俺死んでるからさ・・・感覚鈍ってんだな俺・・」
　それはいつの頃からの感覚を指しているのか、大戦が終わって三年経っているというポップ達の情報で知っているマトリフは直ぐにピンとくる。
　そして溜息をつきかけた少し大きくなったポップの背中を思いっきり叩いた。
「平和に慣れて何が悪いってんだよ、え？お前さんは結婚してあともう少しで可愛い手前ぇの花嫁さんと仲良くするところだったんだろう？」
　それが一転してこんな事になったというのにきちんと対応できている方だとマトリフに言われ、ポップは少し心が温かくなる。
　ティファはもっと動けているのに自分はと少し落ち込んでいるところがあったのを、お前もきちんとできていると認められたようで。
「ありがとう・・・マトリフさん。」
「・・・あいつと同じ顔と声の奴にそう呼ばれるってのは何か落ち着かねぇんだが・・」
「あ～・・・俺にとって師匠は向こうのマトリフなんだ。」
　同じ顔と声をしていてもしかしたら経歴だとしても矢張り違うのだというポップにマトリフは得心してそれじゃあ仕方がねぇなとニンマリと笑う。
　自分だとてこの目の前のポップを弟子だとは思えない。
　自分の弟子はもう少し臆病で・・・それでも明るく自分の辛い特訓を放り出さずに修めてくれたまだ幾分幼さを残したポップこそが、自分の愛弟子であるのだから。
「あれポップ？あ、マトリフさんもおはようございます。ポップ、ティファさんはもう起きてる？」
「おはようチウ。今着替え終わったところだと思うぞ？」

「そう、ちょっと行ってくるね。」
「あ！・・・あいつも忙しねぇな・・」
「・・・・元気だなあのチウも・・」
「あいつは自分のやる事を良く知っている奴なんだ。」
「そうか、良い仲間だな。」
「へへ・・・自慢の仲間だ。」
　ポップはチウの自慢をしている間、チウはティファのいる部屋を訪れそして預けていたものを受け取り、そしてまた部屋を出て城内を駆けていく。
　―コレ―を渡すことはきっと、この世界とそして自分達の為になるから助けすぎる事にはならないからだと考えて。
　そして用事を終えたチウは、大広間から朝食の匂いがしたので行ってみれば昨日の様にティファ達が皆にご飯をよそってる。
　その中にフローラの姿もあったので少し驚いたが、そろそろこちらのチウも目が覚めるだろうとチウと老師のいる部屋に向かい、ノックをしていいよと老師の声がしたので入ってみれば、ベットの上で体を起こしているチウがいた・・・・どう挨拶すればいいのだろうと、さしものチウも悩んだ。
　他界の自分ですなんて・・・言って信じてくれるかな？
　チウの懸念は当たった・・・・朦朧として目を覚ましたこの世界のチウは、先ずベットの横を向けば自分の大好きなブロキーナ老師がいた事にまず驚いて跳ね起きてしまい衝撃で傷全てが痛むのを老師はまだゆっくりとしていなさいと泣きそうな声でチウを座らせ落ち着かせようとしたところに、服こそ違え寸分たがわぬ自分が扉から姿を現したのだから絶句してそして
「君は誰だ？？？！！！！」
　・・・・！！！！隠し砦に大絶叫がほとばしり、それを以てこの世界のチウの目覚めに気が付いた仲間一同は、朝食の旧じをほっぽり出してチウのいる部屋に猛ダッシュし・・・そして
「ピィィィ！！！！！」
　真っ先に辿り着いたのはゴメちゃんだった。

「ゴメ！お前無事だったんだ・・・よかった・・・パピィやマリベぇは!!?」
「ピィ・・ピィ!!」
「そう、今はこの砦の中で大人しくってるのか。」
　チウは抜け駆けをしようとして巻き込んだ自分の獣王遊撃隊の隊員であるゴメとパピィとマリンスライムのマリベぇを守るべくフェンブレンの刃をその身で防ぎ・・・そこから記憶がない。
　起きて自分と同じ者と老師の存在に驚いたが、ゴメちゃんの姿を見た瞬間そんな事は吹き飛び、隊員ゴメと、パピィとマリベぇの無事を知ってほっとする。
　自分は隊長として、隊員を守りきれたことに・・・巻き込んでしまった彼等の命を守れた事にほっとしたのもつかの間で
「バッカ野郎!!!」
　仲間のポップが火を噴いた！
「お前自分が何したか分かってんのか!!お前・・・お前が死んじまって何があるってんだよ!!」
「ポップ!!チウは私達の為に・・・」
「こいつ甘やかすなマァム!!確かにこいつは頑丈かは知らねぇがな・・・それでもハドラー達が目を光らせていた場所で探索なんかして無事に帰ってくるほどの力量はこいつにはねぇだろうがよ!!」
　助かったのは本当に偶々バランも時を同じくして死の大地への入口を探索していたからこそであり、そんな奇跡的な事が早々に起こるわけがない。
　これで結果的に助かった云々言われても、今のポップは納得をしない・・・仲間の死を誰よりも怯えているのは普段はお調子者で、戦いになれば火を噴くポップであるからだ。
　勇気と無謀を間違え、死にかけたチウを案じて泣いたのはほかならぬポップであり、それを知っているダイ達は何も言えない。
　眠るチウの手を取り、馬鹿野郎といっと泣きながら言っていたポップのあの姿を見ているから。
　その姿に、普段は自分に偉そうに言うなと憎まれ口をたたくさしも

のチウも反論が出来なかった。
自分は相当・・・この普段は頼りなく、時に自分の感情を乱して勇者を危機に陥れてしまった魔法使いに心配をかけてしまったようで、周りを見回せばダイも同門弟子のマァムの、そしてヒュンケルとても憂い顔をし、クロコダインは涙をこぼしている。
「・・・・ご・・・めんねポップ・・・」
チウは、ポップと出会って初めて謝った。
時には憎まれ口の応酬で一緒にマァムに叱られて、そこがまた癪に障ると言い合っていた相手に、チウはボロボロと泣いて誤った。
自分は確かに手柄を立てたいと思ったが、根底にあったのは勇者一行の仲間になったのだから、彼等を・・・ひいては目の前のポップの助けにもなりたくて、其れなのに心配と、ポップの言う通り本当に自分だけではなく隊員達も殺しかけた自分が情けなくて、自分のぐしゃぐしゃとしている顔と同じ顔をしているポップに本気で謝るのを、ダイ達もうっすらと涙を流してチウの復活を喜ぶ。
これで本当に勇者一行の仲間全員が揃ったのだと。
「・・・・他界・・・そしたらこの人達は・・・・僕等とは違う世界の人達だっていうのかい？」
この世界のチウ君は原作みたく少し大人びた話し方をするのだなと思いながら、この砦の中で一番―そう言った事―に詳しいティファが説明をしてどうにか自分から得た情報を咀嚼するチウをせかす事無く見守る。
チウが目を覚ました事で、ロモス大会からの付き合いであるゴメスやフォブスター達もきて部屋が狭くなったので、とりあえずダイ達以外は朝食を摂りましょうとアバンがほかの者達を大広間に戻し、ダイ達とチウ自身が落ち着いた頃合いを見計らってティファがチウに今この世界で起きている事の一端をゆっくりと教えている。
「そしたら、あそこにいるのは別世界の僕？」
「あ・・・チウさん・・・でいいかな。私にとってチウ君はあちらのチウ君だからね。
確かにチウ君はチウさんと同じ腫族ではあるけれども―同じ―で

はないよ。」
「へ？だって別世界でも同じ老師様に教わっているって・・」
「それでもね、君とチウ君は別人だよ。別世界が存在していても同じ人物なんて存在しないよ。君は君でチウ君はチウ君だ。
似たような世界であっても、まるっきり同じ経験をしている人はいない。考え方もしゃべり方も経験も違う、だから君とあっちのチウ君は別人なんだよ。
加えて言えば、この世界のポップさんと私のポップ兄も全くの別人だから覚えておいて欲しい・・・・もしかしたら私達を迎えに来てくれる人達もそろそろ姿を現すころだからここにいるみんなも覚えておいて欲しいです。」
似姿は同じでも、性格も考え方もまるっきり違うのだと、ティファはそろそろ迎えが来るのを考えてチウを通してダイ達にも伝える。
もしも兄やヒュンケルや・・・・・来たらとっても困るけれどもごり押しできそうな―あの人達―がもし万が一来てしまっても大丈夫なように・・・・まぁ常識人のハドラーは絶対に来るまいとは思うのだが念のためである。
その説明にダイとチウは頭がこんがらがりそうになりながらも必死になって理解しようとする中、慌てた足音と共にノヴァが現れた。
「ダイ!!君のお父君が・・・・バランが目を覚ました!!!」
ノヴァの告げた言葉に、ダイの顔から一切の表情が抜けそして駆けだした。
昨日この砦にいる者達はバランを受け入れてくれたことでティファが筒から出し、ダイと同じ部屋で寝かせていた。
ダイも眠る父の側にずっといたかったが朝食の支度の手伝いをして、ついで父が目を覚ましたらすぐに食事ができる様に二食持っていって部屋で食べようと考えていたのだが、チウの目覚めに喜びここに来たのだが、ダイの代わりにバランの様子を見に行ったノヴァは、寝台の腕で身を起こし茫乎としたバランの姿に驚きそしてすぐ様ダイに知らせに走ったのだ。
「親父!!!親父!!!」

ゴメとポップ達も慌ててダイの後を追い、未だに傷が癒えていないチウも走り出そうとしたのでクロコダインがすぐに察して抱き上げ駆けていき、青年ポップとチウも駆けていくのをティファは重い表情で見つめるのを、ブロキーナ老師がどうかしたのかと尋ねた。
「君も他界とはいえ竜の騎士の子なのに、心配じゃないのかい？」
確か他界のダイの妹だと言っていたはずで、バランが心配ではないのかと聞かれたティファは重々しく答える。
「私の万能なる万能薬は完璧です。」
「そう・・・助かっている自信があるから行かなくていいのかい？」
「・・・そうではありません・・・」
結果が分かっているから落ち着いているのかという老師の再度の問いに、ティファの心は重くなり、返答をするよりも実際に見てくださいとブロキーナ老師を誘いダイの部屋に行けば・・・ティファの考えている通り、ダイの悲鳴にも似た声が聞こえてきた。
「そんな親父!!俺はダイ・・・親父と・・・会った事ないけど母さんがディーノだって名前を付けてくれた親父の子供だよ!!なんで俺の事わかんないのさ!!」
「ディーノ・・・・あの子は・・・其方ほどに大きくはない・・」
「そんな!!だったらここにいるポップのこと忘れたの!!??魔王軍で一緒だったヒュンケルとクロコダインは？親父の事を叩いたゴメちゃんやレオナの事もおぼえていないっていうの!!???」
ダイの悲痛なる声に、竜の親子の感動の再開を見られるはずだったポップ達の顔は青ざめ、バランは一体どうしたのかとダイと共にバランに詰め寄りかけたその時
「そこな御仁を見るので通してください。」
・・・この場では小憎らしいとも思える程の冷静な声と言葉を発したティファに遮られる。
溜息をつき、何か嫌な予感が当たってしまったという表情をしたティファの顔を見たポップ達は、自然と道を空ければ
「ソアラ!!!!」
ダイを見た時は戸惑いを見せたバランが、ベットから飛び出しティ

ファに抱き着こうとしたが体は言う事を聞かずに泳ぐようにベットから落ちかけるのをソアラと呼ばわれたティファが受け止めそしてバランをベットに押し込んだ。
「初めまして竜の騎士バラン殿、私は貴方の奥方ではありません。
ご存知かどうかは知りませんが、この世界には異なる世界が存在します。
私はその異なる世界の竜の騎士バランと、確かに先程貴方が呼んだアルキードの元王女ソアラの娘でティファと申します。」
わざと硬い声を出しバランの考えを否定する。
それこそアバンが考えたようにこの世界のバランと明確に線引きをするべく。
その声音に冷水を浴びせられたようにバランは少し落ち着き、目の前の少女の言葉を吟味しそして辿り着いた答えを口にした。
「異なる・・・・其方神隠しに・・」
「そちらはご存知でしたか。ならば話が早くて助かりますが・・・・今あなたの記憶は—どこまで—あるのかそちらから先にお願いします。
何故も何もは受け付けません。時間が惜しいのです、疾くお答えください他界の竜の騎士殿。」
有無を言わさぬ最愛の妻を幼くしたような少女の言葉に気圧されたバランは、様々な疑問を胸の中に押し込めそして自分が最後に記憶した情景を話した。
即ちソアラは己の子を身籠り、自分はそのソアラと共に己の母たる聖母竜マザードラゴンが信仰されているテランへと逃げ、そして一人の玉のような男の子を授かり、アルキード地方の言葉で強き竜という意味を持つディーノと名付け、そして一年近くを共にしていたある日、アルキードの王に居所を知られてそして兵士達が来た。
ー自分は大人しく捕まる、だからソアラと子供達には手荒な事をしないで欲しい。ー
竜の紋章を使えば逃げ切れることは訳が無かったが、二人の無事と引き換えに捕まり
「私は・・三人の魔法使いのメラ系の呪文で処刑されたはずだが・・・・」

「そんな・・・・」
　処刑までは覚えているが、目覚めれば見知らぬ場所で、ソアラに似た男の子に親父と驚いたと話すバランに、ダイは途方に暮れて泣き沈み、こんな酷い事があって良いのかと、先程は嬉しくて流した涙が・・・今度は苦くて苦しい涙を流すのを、ティファだけが仕方がない事だと考えるながら、バランに竜の紋章を今出せるかと問えば、こんな状態の父に何をさせるのだと怒るダイを一瞥し、そして再度バランに促す。
　二度目のティファの要請に、バランは額に闘気を集中させたが・・・
「馬鹿な・・・紋章が・・・・私の力が・・・」
「バランさん。」
　竜の紋章はおろか、闘気も魔法力も感じられずに狼狽するバランに、ティファは重い溜息と共に今バランの身に起きている真実を話す・・・それが当人と周りにとってどれほど残酷な事であっても告げねばらなない。
「貴方はその時死ねませんでした。しかし、それから歳月が流れ、ここにいるあなたのご子息であるディーノ君を守る為に命を落としたのもまた事実です。」
「な・・に?馬鹿な・・・・あの子は赤子だったのだぞ!!それにこの子がディーノであればソアラはどこにいる!!!この城はおろか周囲にもいないのは気配で分かるぞ!!」
　妻に似た少女の言う出鱈目にバランは激高する。
　目の前の少年は確かにソアラの面影があるが、ディーノは赤子であり、そしてそれが真実だとしてもソアラはどこにいるのだと。
　その言葉にダイはショックを受ける・・・まさか親父は・・・
「バランさん、とりあえずあなたに今起こっている現象だけ申します。」
　いやだ・・聞きたくないとダイが思う中、残酷なる真実をティファは告げる。
「貴方は一度死んだ。魔界の黒魔晶で作られた、貴方も知っている爆弾と呼ぶのも生ぬるい悪夢の兵器、黒の核晶からその子供を守る為に

体を張って命を落としたのです。」
「なんだと・・・・そんな・・・・あれを受ければいかなる秘呪・・・それこそザオリクを使ったとて私が生き返る筈も無いではないか!!」
　かつて一人で魔界のヴェルザー討伐をした時、魔界のヴェルザー領大陸の大半を吹き飛ばしたあの超兵器を受ければ、生命エネルギーはゼロとなり、それでは生命を復活させる呪文・秘呪文であっても蘇らせることは不可能であると叫ぶティファに、そこは同意する。
「まさしくそれこそが私達が異界から連れ出された理由なのです。
　私はそのように、生命エネルギーも尽き果て多少であれば魂が欠損をしていても蘇らせる万能なる万能薬を作り出しました。」
「な!!・・・・神の・・・・御業にも匹敵するものを其方が・・」
「はい・・・私の世界でもあれは最後の薬でしたがそこはもういいのです。
　問題は・・・貴方です。
　貴方この世界では確かに死すべき運命にありました。」
　何故ならば蘇らせる術がこの世界には存在しないから。しかしこの世界のマザードラゴン達がその理を捻じ曲げた。
　死すべきはずの生命を、それこそ世界に影響を与えうる力を魂に宿した竜の騎士の復活劇は、マザードラゴンの消失だけでは贖いきれず
「その代償を、あなた自身も支払ったのです。」
　当人の望んだ事ではないとはいえ、この世界にも存在するであろう対価や代価を支配する神にとってはそんなバランや周りの考えなど一考するに値せず、理の捻じ曲げを引き起こしたマザードラゴンとそして当人から支払いを求められた結果
「マザードラゴンは現世での肉体は消滅し、程なくすれば思念も魂も消え果てるかと。
　そして貴方自身は持って生まれた力全てと・・・・最愛の息子と結べた縁を持っていかれたのだと、私は推察します。」

小石の投げられた世界：イシが積まれていく世界

そしたら・・・親父の記憶はもう元には戻ってくれないの？
ティファの推察を聞き、どうにもならない事だと悟った一同は悲痛な顔で俯く中、ポツリと幼く頼りない声がした。
それは自分を息子だと分かってくれない父の手を、それでも離さないダイの声であった。
その言葉に、ティファをしても何も言っては上げられなかった。
そうだと言わねばならないのを承知していても、しかし心が折られてもなお父と自分を大切だと言ってくれた仲間とこの砦の者達の為に闘うのだと言った幼い勇者の心を、手折る事になる言葉を発するのをティファとて躊躇った。

「・・・何故・・あの子供達の行く道は過酷な者なのでしょう・・・」
バランの事で報告を受けたフローラは、一人でいる執務室で応えの無いと意をぽつりと問う
それは目には見えないがもしかしたら自分達の現状を見ている神々に対しての恨み言なのかもしれない。
ノヴァからの報告に、フローラは暗澹たる思いがした。
フローラ自身もバランの死因の凄まじさを聞いた時、神の御業をもってしても何事もなく元通りになる者なのだろうかとは思ってはいた。
目が覚めても体のどこかしらか、あるいは全身がかつてのロカの様に弱りはて、病床の身となり数年後には亡くなるのだろうかと危惧すらもした。
しかし現実は想像よりも残酷で、力をすべて失いそして命を懸けてまで守った息子との僅かに過ごした時間と微かな絆さえ、この世界の神々の都合で蘇らせられた代償として持っていかれるなど・・・・理不尽以外の何物ではないか・・
心が沈むフローラの耳に、扉が叩かれる音がしたので入る許可を出

し現れた人物に、フローラはさっそく追加報告を求めた。
「ダイの様子はどうでしたかアバン・・」
「落ち込んでいました。敵対した父を受け入れ親父と呼んだ者が今度は自分を息子だと分からなければ無理もない話ですが。」
「矢張り・・・」
慕いし親の死に様を見せつけられ、其れでも奇跡が起こり助かり一息付けたところに・・この世界はダイをどこまで苦しめるのだと、民を慈しみ子等を見守る慈愛に満ちた女王の顔には、この世界の過酷な運命に憤りの怒りの表情が刷かれる。
唇をかみしめる時のフローラは、真に怒りを覚えた時の癖なのを騎士として仕えていたアバンはよく知っている。
宥める様に―朗報―もきちんとあると、それはどことなく自分の子供を自慢するような顔をしてフローラに報告をした。
今のダイとポップ達ならばきっと大丈夫ですよ

遡ったバランのいる部屋
そしたら・・・親父の記憶はもう元には戻ってくれないの？
ダイの短いながらも的確な質問に、ティファは偽りもまして希望を持たせることもしなかった。
先ずは代償の意味から教え、それが為にバランの力とダイとの絆を育む元となる一切の出来事を持っていかれたのだと。
残酷な真実ではある。しかしなまじいつか記憶が戻るとこの時点で言えばダイはその言葉に縋ってしまい、実はそれが永久にかなわないかもしれない事実を知った時のリスクを思えば、ティファも心を鬼にして真実を告げる道を選んだ。
それがどう作用されるかはティファには不安だった。たち直ったダイがまた再び心を追ってしまう可能性もあり、それ故にこの部屋に来る事は嫌だった。
希望を生み出し笑い合う事を信条としてきたティファにとって、其れとは真逆な事をしなければならないのを知っていたから。
自分の言葉に俯き沈黙をするダイに、何と言葉をかければいいのか

ティファには分からず、ポップ達もマァム達も泣いている・・・扉の近くにいるチウ達も共に泣いて・・・
「お姉ちゃん・・・代償って言うのを、親父はこれからも払わないといけないの？」
「ダイ君・・」
ダイはどうやら代償の意味を知り、そんな事をこれからもバランが払わなければならないかと怯えているようだとティファは察した。
無理もない、自分との絆が大証の一つだと言われれば、この先ダイがどれ程バランと関わろうとも端から取り上げられるのではないかと危惧する気持ちは、ティファにも痛いほど分かる。
きっと自分も、代償の仕組みを知っていても、父からお前は誰だと全く見知らないもののように言われれば・・・ゾッとする！そして今目の前にいる幼い勇者はそれを味あわされているのだから・・
「ダイ君、君のお父さんを助ける為にこの世界のマザードラゴンは消滅をしました。
そして竜の騎士の力と紋章という途轍もない力と、竜の騎士と人間の女性との間に奇跡的に産まれた君との絆を持っていかれた。
代償は払いすぎても受け取り手が貰いすぎてもいけないんだよ。私はこの代償は続くものだと考えていない。
その代り・・・今までの君と、君たち一行とのかかわりが戻る事も無いと思ってる。」
「そう・・・良かった・・・」
「ダイ君？」
自分の言葉に良かったというダイの言葉に、自分は聞き間違えをしたのかと問いかける。
周りを見れば、悲しみながらも唖然とし始めた兄達の顔を見れば聞き間違えではないのだと知る。
そんな驚くティファに、ダイは自分の持てる言葉の全てを使って己の想いを打ち明けた。
「俺、黒の核晶から俺を守ってくれて、ボロボロになった親父を見た時、大魔王達との戦いの事なんて頭から無くなってた・・・考えて

いたことはさ・・・俺を残して死んでほしくないって・・・親父が死ななないようにするにはどうしたらいいのかって、マァムに何度もベホイミかけて欲しいって・・生命エネルギーがないから無理だって、周りを困らせるなって言った親父の言葉聞きたくなくかった。」

今でも情景が浮かぶ

瞳には最早光はなく、死んでいく父の姿に何もできない無力な自分・・・父一人助けられない自分が勇者なんておかしいではないか・・

「俺、親父が死んだ時一緒に死んでしまいたいって・・・一緒に連れてって欲しいって思ったんだ・・」

「其方・・・」

その言葉に、ポップ達はダイの心の傷の深さを改めて知る事になり、長年ダイの傍らにいるゴメはダイの肩に止まり必死に頬を擦り付けるのをダイは優しく撫でる中、自分の息子とは思えないまでも、こんな年端も行かない少年が死を切望することに堪らなくったバランはダイの手を取る。

息子かどうか真偽の程は分からない、しかし人間を愛していた頃の心に戻ったバランには、この少年が哀れで堪らなかった・・・こんな子供が世界の何かに絶望しそして死にしか安息を見出せないなどとは間違っていると・・

「大丈夫だよ親父・・・みんなも・・・ティファお姉ちゃんの薬のお陰で親父は今生きてる・・・温かい手で俺の手を握ってくれてる・・・・それが嬉しい・・」

自分よりも大きく分厚い戦士の手のひらを、ダイは涙を流しながらゴメがいる反対側の頬に擦り付ける。

その行為を振り払わない優しい人が、自分の父だと思うとまた自然と涙が出る。

「代償がもう払われないんだったら、俺何が何でもこの大戦を勝って・・・親父と一緒にデルムリン島に行くんだ・・」

人が自分と、もしかしたら父の存在を許さないというのであれば自分達はあの島を生涯でないで過ごすのだと泣きながら誓うダイの姿に、バランの胸がちりちりと痛む・・・まるで自分が寝かしつける時

泣いてしまうディーノを見ているようで・・・そして妻を泣かせてしまっているようで・・・

「ダイ君は・・・それでいいの？」

大戦を勝利に導いても、そんな未来しかないかもしれない事でいいのかと問うティファの言葉に、ダイはティファの顔を優しい絵替えで見返した。

「俺はきっと幸せなんだよお姉ちゃん。死んじゃったはずの親父が生きていて、心が折れて戦いたくないって勝手を言った俺を、それでもポップ、マァム、ヒュンケル、クロコダインは守ってくれた・・ポップは俺が戦うのが嫌なら自分達が守るから、目の前からいなくならないでくれって言ってくれたんだ・・」

勇者の役目を放棄視しても、守ってくれた仲間達

そして自分の周りには自分を、この一行を助けてくれた人たちが確かにいて・・・親友を助けに行った勇気を認めて覇者の冠をくれたロモスの王様、助けてくれたお礼に剣と自分の小さな勇者と称号をくれたレオナ、モンスター達に育てられた自分に怯むことなく優しく教えを授けてくれた先代勇者のアバン先生、世界がどうなろうとも構わないと言いながらも自分達の想いに応えて力を貸して呉れたマトリフさん、そしていつだって力を貸してくれたバダックさんにエイミさん、アポロさん、マリンさん・・・先生が死んでしまって悲しかった時に真っ先に手助けをしてくれたまぁむのお母さんとネイル村の村長さん・・そして旅立つ時に見送ってくれた沢山の人の笑顔を・・・

自分は確かに小さな女の子から、そして一部の人から―小石―を投げらた。

その小石は自分の中の何かにも当たって・・・いつしか勇者を志した理由も、世界を守ろうとした理由すらも見失った。

「それでもね・・・見失っただけで、俺の中にはちゃんとあったんだ。

優しい人達を守りたいって・・・ただそれだけだけど・・・・俺はその人達を守りたいんだ・・」

投げられた小石に打ち砕かれたなにかは、砕けてしまっても決して消えてはいなかった。

ただ投げられた小石の様に小さくなって散らばってしまってだけ・・・・自分の中には投げられた小石以上の温かい―意思―が積み上げられたのをダイは思い出せたのだ。
それはアバンが危惧したように何もかもがティファのお陰ではなく、闘わなくてもいいと言ってくれた親友と、自分の心の傷に気が付けずに申し訳ないと泣いてくれた仲間達、そして・・・自分を傷つけてしまった己は存在していいはずがないと泣いたレオナの、皆の自分を想う心で溢れていた涙が思い出させてくれたのだ。
自分の中に積まれていき大切にしていた意思を
「だから俺は大丈夫だよ。もう死にたいなんて思わない、この世界が壊れても構わないなんて思わない、俺は守りたい。
親父と皆が笑っていけるかもしれない場所を守りたいんだ・・・・。」
今度こそ、小さな小石でなんかには壊されない意思の想いを崩されないくらいに強くなりたいと願うダイの想いを聞き届けたアバンは、微笑みながらその場をそっと去る。
ノヴァから齎されたバランの異常事態をフローラと共に聞いていたアバンは、ダイの心情を思いすぐさま部屋に駆け付け扉に辿り着いたのは、ティファの説明の後半部分からであり、それに対してダイが良かったと言った時であった。
ティファがそうであったように、アバンもまたダイの言葉が何を指すのかが分からずに、次のダイの言葉を待っていればそれは自分の考えていたことが本当に当てにならない事であった崩された瞬間であった。
ダイは己が思う程弱い子供ではなかった。
確かにダイは傷ついた。しかし傷つき心が折れども、それでも立ち上がりそして更に強さを増していたのだ。
そしてそんなダイの言葉の一つ一つをポップ達も頷き、その度にダイの様に力強い笑みが増していったのを見た。
一体自分は弟子達の何を見ていたのだろうと・・・師としてもまだまだ未熟なのだと思い知ったが、アバンの顔に暗さは無かった。
思い知る事よりも、弟子の成長した瞬間に立ち会えたことをアバン

は喜びを覚えたのだ。
いまだに頼りない部分はあれども、ダイとポップとマァム、そしてまだ言葉をあまり交わしていないヒュンケルも成長をしている・・・そうしているのだ成長を・・・
この大戦で得た経験と、そして様々な者達意思に触れ温かさに触れ真心に触れ、時に残酷な事に触れてしまっても、傷つき泣いて悩みながらも彼等は成長をしている。
自分も・・・破邪の秘宝一つで満足するべきではないと、アバンもまた一つの意思を己の心の中に積み上げる。
たとえこの先小石どころかとんでもない大石が雪崩の如く押し寄せてこようとも、弟子とそして大切な仲間達とそして・・・あの人を守れる強固な城壁程の意志を積むべくそして襲い来る意思を粉砕する力が必要だと決意しながら、バランと其の事でダイ達がどうなってしまっているのだろうかと案じているフローラの下に歩を進め、そして自分が見聞きし感じた事の一切を報告をし、聞くうちに徐々に優しい笑みを浮かべだした女王に先代勇者は自信をもって答えた。
「人を思いやり守りあう意志の力があれば、どのような事が襲い来ようともきっと大丈夫です。」
その為にも、襲ってくる脅威からジタバタと足掻いて己達の意志を貫くためにも、時間のある今の内に自分達の強化を図る事をアバンは提言をしてフローラはその言葉に頷いた。
この大戦に勝ち、ダイが投げられた小石ではなく、ダイ達が出会えた良き意思が積まれた世界を作る為に

小石の投げられた世界：エピローグ・今後の為に

「ポップ兄、チウ君、良い話と悪い話どっちから聞きたい？」
記憶が無くなっても、それでも父は生きている、だから大丈夫だというダイとバランをしばらくは二人きりしよと全員で部屋を後にして大広間について朝食を食べ終わった後、ティファからいきなり話を切り出されたポップとチウはきょとんとしたのは無理もない。
良い話も悪い話も、今ティファが何かしらの情報を持つほど動いていないと思っていたので、もしや式見で何か引っかかったのだろうかとポップは思ったが、それならば自分達ではなくこの世界のアバン達に言う筈だと思いなおし、であるならばなおさら何の情報だがさっぱりと分からず、ポップはおどける様に両手を挙げて降参のポーズをとった。
「何の情報だが分からねぇから、良い話の方から頼むよティファ。お前もそれでいいかチウ？。」
「そうだね、分からないからいい話の方から聞かせてもらえると助かりますティファさん。」
「ん、分かった。できればダイ君にも聞いてほしかったんですが、皆さんにもかかわりがあるので聞いてくださると助かります。」
昼食はそれぞれにやる事があり集まるのは難しくとも、朝食と夕食は見回りや見張り以外はなるべくともに摂ろうと言う女王様の御達しが出たので、主要メンバーと言って差し支えの無い者達は全員がいる中、ティファはお知らせがあるので聞いてほしいと要請を出し、席を立とうとしたもの達が全員座りなおし終えたのを見てから大事な話を始めた。
先程この世界のマザードラゴンの思念からメッセージが届いたと。
その一言で大広間にどよめきが広がり、そして
ダン!!!!
机を打ち据える音がそのどよめきを消し去った。
音の方向を見てみれば、まなじりを上げ目に殺気を宿したポップの

姿があった。
　そして打ち据えた机にはひびが入りそして魔法使いの手は握りしめすぎているせいで血が滲んでおり、ギリギリと噛みしめるその口から今更何をと、怒りにまみれた声音が漏れ出す。
　自分達の息子と同じ顔をした少し大人びたポップのその凄まじい有様に、スティーヌは青褪めさしものジャンクも背中に汗が伝う。
　しかし青年ポップの怒りは無理もない事であった。
　この世界の我が子竜の騎士と、その血に連ねるダイを救う事でひいてはこの世界を守る為とは言えども、神に御業に等しい奇跡の薬と自分とチウと妹を攫って来たと言っても過言でないマザードラゴンが、一体今度は何の用だと、怒りを発している。
　その様を少年ポップもゾクリと寒気が奔る。あの表情はかつて兄弟同然の愛竜を小自分に殺されたからと、自分を嬲り殺しにしようとしたガルダンディを思い起こさせるほどの狂気に満ちた怒りに近かく、あの時の恐怖が思い出され、頼もしいと感じていた大人のポップの怖ろしさを垣間見た。
　青年ポップは、自分よりも強くてその怒りに触れれば怖ろしい人なのだろうか？
　だがそんないかれるポップをティファは笑って宥める。
「ポップ兄、マザードラゴンさんは思念体になったから今あっちの世界とこっちの世界の伝書鳩さんみたいなことをせっせとしてくれているんだよ。
　謝罪も受けた、想いも受け取った。だからティファはマザードラゴンさんを許したんだけれども・・・やっぱり駄目かな？ポップ兄とチウ君巻き込まれちゃったもんね・・」
　笑いながらも、兄とチウには申し訳ないというティファに、ポップがいつまでも怒っていられるわけがない。
　立ち上って説明をしようとしていた妹を膝にのせて抱きしめ溜息と共に怒りを全て押し流す。
　一番の被害者が怒っていないのに、自分達はとやかく言えねぇよというポップの言葉とチウの僕ももうその事で怒りませんというチウ

の言葉に、ティファはついついニヘラと相好を崩した笑いになってしまう。
　自分の兄とチウの心意気が嬉しく、そして朗報が伝えられることに。
「後二・三日の内に私達を迎えに来てくれる人達が来るんだって。」
「・・・・・まじか・・」
「来てくれるんですね!!!」
　迎えが近日中に来る
　その朗報はポップとチウのみならず、大広場全員が、それこそアバンまでもが歓声を上げて喜んだ。
　異界から連れてこられた子供達がきちんと帰れるだろうかと内心でとても案じていただけに、この世界のマザードラゴンが帰れると保証したのだからこれで一安心である。
「んでティファ!それ誰が来てくれんだ?」
「あ・・・それがね、誰が来るかで揉めに揉めてるみたい・・・来る準備が整うにはもう少しかかるからいいみたいだけど・・・」
　はい!!???
　誰が来るのか揉めている・・・確かこの子供達は神様から大切にされているという話であった。
　実際に思念体になったマザードラゴンが伝書鳩しているくらいなので、人選は直ぐに決まっているのだろうと他界の者達は全員が首をひねる。
　少年ポップ達も、仲間がそんな状態になったら真っ先に立候補して乗り込んでいると野にと思い首をひねるが、青年ポップとチウはとっても思い当たる事がありまさか・・・
「・・・まさかとは思うが―全員―で来たがってるとかそういう事かティファ?」
　ダイ達のみならず、魔界の神様と影と死神様も来る気満々とか言わないでくれよ頼むから!!
　ポップの嫌な予感は的中していた。
「あ～・・・人数制限ありってところで、全員が来たいってなってたの

が無理だから揉めてるって・・・」
妹の言葉にポップは顔を引きつらせて内心大絶叫を起こした。
頼むからやめてくれ！この世界の大魔王とアレは最悪な奴で目撃した勇者一行全員の心証が最悪なのだ!!
来たが最後！本当は魔王軍と通じていたのかという超あり得な・・・い事ではないが兎も角!!誤解から異界でバトルする中帰るのなんて御免こむる!!
そうでなければ・・・せっかく元魔王軍であっても許される方向になれたヒュンケルとクロコダイン、そしてバランの立ち位置がまた可笑しなことになりかねない・・・頼むからあんた達は来ないでくれと心の中で滂沱の涙を流すポップに、難しい事は無理でも、何となく―あの人達―来るのは不味いとはチウも思うのでそっと溜息をつく。
頼みますから来るにしてもアバンさんやマトリフさんとか穏やかな人が来て欲しいと。
そして悪い知らせというか、あまり良く無い知らせというのが、迎えの人達が来たとしても、それは時空の壁に穴を大きく開ける為の意味合いもあり、更に穴をあけて固定するためにむかえがきてもすぐには帰れない事であった。
そこは問題ないだろうとポップとチウが答え、落ち着いた頃合いをみてアバンがティファ達、特にポップに頼みごとがあるという。
何事かと聞いてみれば、まだこの世界にいてくれるのであれば、自分達の特訓に付き合って欲しいと言う事であった。
今の自分達の力では不足であり、大魔王達を討つためにも力を挙げたいというアバンの頼みを、聞いた大広間にいるポップ達、そしてノヴァがカール騎士・兵士達も立ち上がりポップ達に頭を下げる。
これ以上異界のポップ達の力を借りるのは心苦しいがそれでもお願いしたいという紳士な願いに、ポップはにんまりと笑って受けた。
「俺は魔法を使うだけの魔法使いじゃねぇぜ？」
自慢ではないが大戦が終わってからもブラックロッドを使ってラーハルトに鍛えてもらい、ヒムに体恤の動きを学び、時間を見つけてはパプニカ王国にルーラをしてダイの下に行き木剣と棒で打ち合

いをしており、デルムリン島にダイが戻った時に互いに魔法も使用した組合をしている。
　どんな敵が来て、一行と自分がばらけさせられても負けない為に、動ける魔法使いを目指しているポップは研鑽の歩みを止めていなかった。
「おいポップ、お前俺の小型のメドローア見て驚いてたな？後でやり方教えてやる。マァムとヒュンケルとクロコダインも魔法をよけながらの特訓やってみるか？魔王軍のモンスターには魔法使う奴がちらほらこっちには居たから一応やっておいて損はないと思うぞ？
　それとノヴァ!!」
　次々と特訓の内容を提案するポップに、アバン達は驚く。あと数日すれば戻れる彼が、最後までこの世界の為にここまで力を貸してくれることに対して畏敬の念が芽生える中、最後にひときわ大きく呼ばれたノヴァは、自分も何を教わるのかと慌てて返事をしてみれば
「お前はティファとだ。ティファ、お前ノヴァの相手してくれるか？」
「・・・・へ？」
「え～・・・・」
　言われたノヴァは、どこで買い付けたのか分からないが、少年が着るような白い理念の長そでシャツに、茶色の長ズボンに編み上げブーツを履いている少女が相手だと言われたことに驚き、突然の指名を受けたティファは超微妙な顔をし、そして今日は無理だとお断りをする。
「なんでだよ・・・誰か倒さなければいいんじゃねぇのか？」
「いや、そこは良いんだけどポップ兄・・今日買い付けに行くって言ったでしょ・・」
「あ、薬草か・・・・」
「そうだよ、魔王軍に動きがあれば知らせる様に伝言式鳥置いて行くから行ってくるね。
　ノヴァさん、私もそこそこ戦ってきているので、微力ながらお手伝いさせていただきますね、明日から。」
「あ・・・はい!!」

こんな優し気な少女が戦えるのかと、ノヴァならずアバンすらもが本気で疑念を持つ。
彼女は一行のサポータとして確かに優秀そうだが力の方は果たして
その疑念を他所に、ティファは出掛ける。
この世界の為に―様々な事―をする為に。

「えっと・・・これとこれと・・・後これください。」
「毎度!今はこんなご時世だからね・・・・全部売ってあげる訳にはいかないんだよ。」
「そうですね、陸路も海路もモンスター達にいつ襲われるかと思うと品を運んでくるる行商の人達が少なく、品数が薄い中売り切れならばともかく買い占めはいけませんからね。」
ティファ達の世界よりも、この世界の特に薬草品類は商店から個人店、そしてベンガーナのデパートまで品薄であった。
自分達の世界は自分と三神様達が頑張ったので陸のモンスター達は狂暴化を防ぐという大きなアドバンテージを得られたために、様々な恩恵があった。
魔王軍と呼応する事はなく、反対に向かっていき民衆が逃げる為に時間を図らずも稼いでくれたり、行商人たちが余程の事をしなければ襲う事も無かったので行商人の往来は其れなりに出来ていたからであり、翻ってこの世界はと―クロファ―は溜息をつく。
もう少し薬草類があれば、楽になるだろうと式で空飛ぶ靴を作ってステルス結界を張って実にあちこちにの場所を巡り最後に復興しつつある城下町により商店を見たが無いので森の中に入っていた。
ロモスのネイル村の近くにも薬草の群生地帯はあるが、この後の用事もあるのでクロファはパプニカの森で野生の薬草をそこそこ摘み、ここまであれば大丈夫だろうと薬草集めを終えて、あちこちの大陸や場所に潜ませた式達を見たが依然悪魔の目玉やシャドー達が洞窟の仲間で自分達を探しており・・・そして大海原の超上空にいるパレスの位置は変わらずそして―中―で影が苛立ち死神と一つ目も手持ち

無沙汰にしているのを覗いてにんまりとする。
流石にもどきであっても似非大魔王の側は除かないが兎も角、用事を済ませて戻っても大丈夫そうだと空飛ぶ靴でかつて地底魔城があった今は火山で穴が開いて自然の風穴になった場所に飛ぶ。
あの者達は大人しくしているだろうか？

「・・・ハドラー様・・・お加減は・・」
「アルビナス・・・ヒムたちも済まない、不甲斐なく自分の体にあのようなものがあったのに気が付けずに利用され・・・間抜けな主を持ったが為にお前達に華々しい戦場を与えられずに消え果るのだから・・」
「そんなハドラー様!!俺は・・・俺達はハドラー様によってこの世界に産まれて・・あんなすげぇ奴らと戦えたんです!!!」
「左様、ヒムの言う通りですハドラー様・・・最後の時までまだ時間があるのであれば共に・・」
共に勇者達と最後の一選をされては困るのですよ、そこは諦めてください。
「お前は!!!」
「貴様!!!」
「何をしに来たのです！得体のしれないものがハドラー様に・・・」
「おやこれは薄情な物言いをなさいますねクィーン殿。私がいなければ似非大魔王の奸計の道具にされ生きていることが知られれば処断されること間違いなしのそこな魔王と貴方達を逃がしたというのに。」
「そ・・・それは・・」
「恩知らずとはまさにこの事でしょうかハドラー殿？」
「・・・何の用だ・・・そもお前は誰だ？」
元地底魔城の風穴の奥に潜んでいたのは、黒の核晶を起動され辛うじて生きていたハドラーと彼の親衛騎団のポーンヒム・クィーンアルビナス・ナイトシグマ・ルークブロックであった。
遡る事ティファが、改良版のラック＝バイ＝ラックを使用した時、

本来であれば同時にポップ達と共に陣から出ていたのが五分も遅れて出てきたのはなぜか？
それはティファではなく、逃げる寸前でクロファが意識を乗っ取り寄り道をする為に自分の座標だけ書き換えたからだ。
ティファがこの世界が原作に近い世界であると知ったと同時に情報収集するために古来よりの詫びの作法でバーンに頭を下げた様に、クロファもまた情報収取をする為に、ティファが頭を下げている間にティファが落とした持ち物のうちのリボンをこっそりと小さな虫に変えてパレス全体を巡れせて情報を集めさせ、目当ての―六人―を探し当てた。
最初の一人は問答無用で筒に入れ、ここに来る道すがら出して大半の説明を終えている。
後はこの五人に説明するかと思うと少々面倒だが仕方がないと、クロファは溜息をつきながら、自分を警戒している親衛騎団と、注意深く見ながらも億劫なのか牙を？いてこないハドラーに対し、挨拶もそこそこに自己紹介とそしていま世界で起きている事の一切を説明した。
バランはハドラーに仕込まれた黒の核晶で一度は死んだが、自分の作った薬のお陰で助かり、そして勇者達をバラン諸共ハドラー達にしたように丸ごと逃がした事。
そして実はアバンが生きていて今勇者達と共に入れ似非大魔王に対して反撃の機会を伺っている事。
「私達も数日のうちに帰れますが・・・その前に影の参謀か似非大魔王本人が襲来して迎え撃って決着がつくと思うので、残念ながら今の貴方の体がそれまでに回復するとは思えません。なにせあなたの命の源の一つとも言えたーアレーが無くなっているのですから。」
原作でハドラーがダイに挑めたのは、十日程体を休ませることが出来たからこそだとクロファは見積もっており、数日では無理だとハドラー達に断言する。
「そうか・・・俺は何も成せずに・・・・・こ奴らの想いに報いる事も出来ずに死んでいくのか・・・」

クロファと名乗る少女の言葉に憤りではなく悲しみをハドラーは感じて涙をこぼす。
打算があり再び世界を手にせんとした想いとそして、命を救ってくれたお方の為にと戦った末がこのざまだと思うと、自分の間向けさにヒムたちをも巻き込んだのが申し訳ないと悔し涙を流すハドラーに、ヒムは涙を流し、ブロックは労わるようにハドラーの側に膝をつき、シグマとアルビナスが憤りをどうすることもできないと歯噛みする中、クロファから問われた。
「貴方は生きたいですか?それともここで朽ち果てますかハドラー?」
その問いは、少し前の戦士としての誇りを第一としていたハドラーであったならば即座に打ち捨てて行けと言っていたであろうが今は迷いが生じた。
自分が今死んでしまえば、本島にヒム達を意味のない死に巻き込み・・・犬死ではないかと。
その迷いに、クロファはにんまりと笑い
「助けて欲しいのですがお願いできますか―ザボエラ―さん。」
な!!!
「やれやれ・・・ワシに死んでほしいのかのお主は。」
「ここで貴方を殺そうとするような間抜けであれば私が即座にハドラーの首を跳ねますのでご安心を。」
事も投げにハドラーを殺すとクロファは言い切る。
クロファは元々ティファの様にハドラーを尊敬しておらず、体内にあんなものがあり体に異常が起きても改造のせいだろうと自分で自分の肉体を確かめようともしなかったハドラーを間抜けだと思っている。
百歩譲ってそんなの原作知らなければ無理だろうと言われても、お前決戦時大魔王の門番のくせして親衛騎団を地上に出して勇者との一騎打ちという私闘に拘って馬鹿じゃないのかとても思っている。
それでは戦力をわざと分断して勇者と侵入者を何をしてでもくいとめるはずの門番の責務放棄であり、責務放棄したからと処刑したバ

ルトスとどこが違うのか？
　自分がバーンであったならば勇者と諸共に死ねと黒の核晶起動させてやるわと物凄い低評価である。
　ただ、その愚かとも言える信念に敬意と好感は持てるがそれだけであり、ハドラーな対応は自然冷淡となる。
　そんなクロファの呼びかけに応えて暗がりから出てきたザボエラの言葉に、クロファはにこりと笑うがザボエラの事をそこまで評価しておらず、それどころか生み主のハドラーの影響で卑劣で強者につくダニ野郎とさえ思っているヒム達は蔑みの目でザボエラを見、そしてハドラー自身は己の体に黒の核晶があるのを知りつつ黙っていたザボエラに対して複雑な気持ちになるのをクロファは構いつけずに話を進める。
「貴方達を逃がす前にここにいるザボエラさんの事を捕まえまして、ここに来る道すがら、黒の核晶を使用されながらも生きている貴方の命を永らえさせることは可能かどうかを確認したところ、護身用に持っている小型のアレを使えばあるいはと言っていましたので試してみますか？」
　この日と自分達の世界でも用意周到で抜け目のない方だったのでもしやと思って聞いてみましたと事も無げに言うクロファに、ハドラーは唖然としてが、親衛騎団の特にヒムが食いついた！
「本当か!!ハドラー様助かるのか・・・・・おい爺さん!!!前は手荒な事をしてすまなかった!!その事が許せねぇってんなら俺の核を壊してもいい!!だからハドラー様をたすけてくれ!!」
「私からもお願いします・・・ハドラー様を助けてくれるのであればなん・・・」
「ストップですよお嬢さん。」
　ヒムとザボエラの出会い方は最悪であった。
　抜け駆けをしたザボエラをハドラーの命令で追ったヒムが捕まえ、そしてザボエラが何を言っても構いつけずに蔑みの目で牢獄に放り込んだ。
　その時の事を詫び、そしてそれでも気に食わなければ核を壊しても

構わないというヒムと、主を助けてくれれば何でもするという彼等の現金な言葉を冷ややかに書きつつクロファが止めた。
「この御仁に対する報酬はもう申し出てそれで成立していますのでこれ以上は不要かと。
　そしてお嬢さん、自分の身を大切にしなさい。女性が簡単に・・・いえ心からの決意であっても内容や条件も確かめもせずに何でもする等と口走らない事をお勧めします。
　さてハドラー、彼等は貴方に生きて欲しい、そしてその方法はここにいるザボエラさんが持っていますが、どうしますか？生きたいですか死にたいですか？」
　全てを提示したクロファは、平板な声でハドラーに最後の問いをする。
「その前にザボエラよ。」
「何でしょうか・・・ハドラー様・・・」
　自分を冷遇し尽くした男に様をつけたくはないのだが、親衛騎団の力を知るザボエラはクロファの力が本人が言った通りの実力か分からないので一応ハドラーに様をつけて応えるのを、ハドラーはさらに問いかける。
「俺の事を改造してくれたあの時に、俺の体内に―アレ―があったのを知っていたか？」
　親衛騎団達には、自分の体の損傷を勇者達との激突の末だと嘘を言った。
　そうでなければ自分に黒の核晶をしこんだ大魔王に憤り飛び出していきかねなかったからだ。動けない自分ではヒム達を止められないとの判断であり、故にハドラーはぼかしてザボエラに問いかけたが果たしてザボエラは直ぐに察して答えた。
「知っておりましたが、何かをして差し上げようとは思いませんでしたな。」
　そのいっそ冷淡ともいえる言葉と表情に、ハドラーは怒りではなくむしろ納得をした。
「そうだな・・・考えてみれば俺はお前も含めて配下の者達に真に何

かを報いた事は無かったな・・・」
　先の大戦時、水晶の通信や配下に書簡を持たせ各軍団とのやり取りに歯がゆさを覚えていたハドラーであったが、ザボエラが開発をした悪魔の目玉の便利さを当然のごとく使い続け、死しても生命力の強い物であれば復活する蘇生液の事に対しても、そして自分の肉体を最高の超魔生物にしてくれた時の本気で感謝をした事があっただろうかと問われれば無いとしか言えない。
　そんなハドラーの独白にもザボエラは心を動かさずに淡々と言葉を述べる。
「今更言われても詮無い事、儂はここにいるクロファという娘と取引をしたのでハドラー様を助けるにすぎん・・・小娘、本当にお主は儂の望みを叶える道筋があるのか？」
　訝しむように見るザボエラをクロファは好感が持てるという温かい瞳を向ける。
「貴方のそういう抜け目なさが好きです。」
「ふん！言葉はいらん!!できるのかどうかだけ答えろ。」
　自分の言葉にも釣られないところが益々いいと微笑みを浮かべるクロファは、ティファとは違って始めからザボエラを評価している。この爺様は凄い発明家だ。軍団長をさせても基本は研究班長や責任者に抜擢し、そして良いを作るたびに軍団の主要人物たちの目の前で褒賞を与えて誉めそやし、自尊心を満たしてやれば良いのに、そうはせずに・・・まぁそれをしてもその主よりも強い者が現れるか命が危険にさらされれば寝返るのがザボエラだろうが、飴と、力と逃げることなど出来はしないと示して裏切れば道連れにする位の鞭でもってこの爺様を囲ってやれればいいのだとクロファは思っている。
　だからこその取引
　この世界の似非大魔王の負けは―本格的なお迎え―が来れば確定する。
　その時にと・・・・その申し出は遅くとも七日以内に分かる、駄目な時には自分にはこの世界のことなぞ知ったことではないので解放する。

その時に似非大魔王に走ればいいだろうというクロファの暴論ともいえる申し出に、七日後に決めればよいだろうとザボエラは受けたのだ。
ハドラーを助けた後は・・・あるいはうまくいかずともどちらでもいいのだから。
己の命が第一であるザボエラは、とりあえずは自分の命を握っているクロファの頼みを聞いて、さっそく治療を施し後はハドラー次第だと言ってクロファの筒に再び入れられる。
逃げようとも先程五分ほど逃げたが、何かの術でクロファの元に戻されたので抵抗は無駄だと悟ったのだ。
しかしこの小娘は自分の何かを必要としているのは長年の生き残りの中で培った勘が告げているので、そこまでは心配をしていなかった。
クロファもザボエラの双方どちらも、ハドラーは生きようと死のうとどうでもいいのだ。

「ティファ!!遅かったな!!」
「ごめんなさいポップ兄、チウ君。薬草摘んでたら・・・」
ティファに人格を戻したクロファは、例の如く自分の記憶を改ざんさせ夕方になって戻ったのは薬草を摘んでいたせいにする。
戻ったティファを、特訓で疲れていたポップ達も出迎えそして夕食となり今日は兄とチウの三人で同じベットに眠る。
明日も何事もありませんようにと思いながら

「・・・・・誰の差し金なんだい・・・・・いや・・この得体の知れなさはあの疫病神の娘か・・ピロロ・・・このお礼はたっぷりとしなければならないね・・」
「・・・・・小娘さんごときが・・・・」

ティファ達が眠っている時、上空のパレスでは大騒動が起きていた。
なんとパレスに在中していた魔界のモンスター達が一斉にキルバーンに向かって襲い掛かって来たのだ!!
大幹部であり死神の彼が襲われたのには訳があった。
「僕退屈なんだ、遊んでおくれよ君達!!」
残忍に笑う―キルバーン―が一つ目の使い魔を連れて暇つぶしに自分達を狩りに来た事に憤り、大参謀ミストバーンに陳情を入れに行こうと徒党を組んで彼の者の執務室に押しかけに行く途中でまたもや―キルバーン―が現れそして・・
「君達ミストに何の用なのさ?彼は今忙しいんだから煩わせるなら僕が許さないよ?」
その言葉に、パレスの魔界の戦士達の怒りの業火が宿った。
己の所業を知らぬ存ぜぬと謳いあげ、見下す様に自分達が束になれ

ばと襲い掛かり・・・そしてパレスに血の雨が降った。
「・・・僕の事を許せないって言った・・・・」
かかって来た彼らは一様に、お前が先に自分達を殺したのだろうと、襲って来たのだろうと訳の分からない事を言って来た・・・自分の姿は兎も角、死神の大鎌を持っているのを見れば軍内部から怖れられている死神だと分かるだろうにそれでも襲ってきた不可解さ・・・この奇妙さはあの疫病神の小娘の気配と似ていた！
方法は分からないが、自分の偽物でも作って彼等の一人か二人・・・いやもっと殺して罪を着せに来たか・・・・・ここにいるのは決戦時に必要な戦士達、この補充をするのにまた地上消滅の足止めをされる。
何故ならば柱を落とそうにもあの邪魔者たちを消さねばならず、自分達だけで確実にして目られずにまた地に潜られれば手に負えなくなる。
それを防ぐ為の人質作戦は潰え、ならば人海戦術をと考えていたのだが・・・何をしたのか、あらゆる苦痛をあの疫病神娘に与えた末に聞き出そうとキルバーンとピロロは誓い、そしてミストバーンとバーンに報告をしなければいけない事を忌々しく思う。
自分が他者の思惑で動かされたのだから。

その様を小さな羽虫が捉えて、兄の腕の中でクロファは笑う。
あのパレスに自分の闘気を沁み付けた物を複数おいてきた。
それを陣としてこっそりと作った偽死神を複数こさえてパレスの戦士達を複数人大鎌で首を掻き切らせた。
式には戦う力がなく衝撃を受ければ消えてしまうが、それでも不意を突き柔らかい喉笛くらいは一度きりであれば掻き切れる。
小物の一人二人なれば、そこまで代償はいらないはずで、そもそもが柱で数多の命が奪われるはずのこの世界の帳尻合わせの一環くらいにはなるだろうと考えての謀略戦。
衝撃で偽死神が消えても、神出鬼没な死神の仕業だと、目の前でこれまで互いを支えてきた戦士達が―退屈しのぎという残虐なる理由

―で殺されれば憤りを覚え不振の種をまいて諍いでも熾せればと思っていたのだが、思った以上の収穫にほくそえんでクロファは安心をして眠りにつく。
綺麗事だけで勝てるほどこの世界は甘くない、あちらの世界の様に優しさと善意だけでは不足だと感じるがクロファは別にそこを突くつもりは毛頭ない。
この世界のアバンもその為に様々な策を敵味方双方に仕掛けたが、彼自身この世界のあの外道の本当の怖しさを己の目で見ていない。
足止めさせるにはまだ不足だった事をクロファが補完した。
不足しているのに力を貸すにも住み分けをすればいいのだ
この砦全般の表の綺麗な事は全て兄とチウとティファがすればいい。
そして自分が魔王軍相手に謀略戦を仕掛けてやればいい。同じ手は二度は通用しまいがそれでも、これだけ時間を稼げればー色々と間に合いー似非大魔王の最後は決定だろう。
最後のピースも手に入れているし・・ふぁ～、ティファ曰くの何とかなるだろう
しかしだ、ここまでしても世界が滅んでしまっても、自分達は悪くないでしょうし

いしの積まれる世界：頑張る事もほどほどに・・・

青年ポップとチウティファがこの世界に来て二度目の夜を迎える。
一日目は物凄い事がありすぎて何が何だか分からない内に寝落ちしていた青年ポップは、今日は頭の中で反省会をしながら寝るかと、自分を真ん中にしてチウを左側に、右側にティファを寝かしつけて一人反省会を開始する・・・・主な内容はそう・・・やりすぎただろうか？

遡った昼頃の隠し砦の中庭
ここからここまで城内とちょっと先くらいは結界でこの城隠しているからそこそこの特訓していいけれども・・・本気のメドローア撃たれたれたら流石の結界も割れるからね。
こと特訓となると少々見境が無くなるポップの評価は、ティファのみならずクロファもその通りだと賛同しているので、朝食後の大発表の後に意識を取り換えたクロファはガッツリと兄ポップにくぎを刺していった。
お願いだから結界壊さないでねと。
そしてもし万が一結界が割られた時ティファ自身がどうなるのかを超具体的に伝えておいた。
結界が強固であればあるほど、術者とダイレクトにつながっている結界が破壊された時、最悪術者は死ぬことまでは言わなかったが
「私の全身ズタボロになるね。」
まだまだ未発達で子供で通せそうなティファがズタボロになるなんて絶対ダメに決まっているを標語に掲げてそうな兄は、それまで考えていた特訓プランを速攻放棄した。
考えていたのは初日は少年ポップの底上げで、なんなら本気のメドローアを撃たせて自分も併せて打ち合い消滅をさせ、それを幾度かすれば少年ポップの魔力の底上げの手伝いになるかもしれないと考えいたのだが、万が一がないとも限らない!!
自分達の体を想い薬草を飼っている最中の妹が、知らず傷だらけに

してしまったと思ったらぞっとする。
絶対に無理もそして無茶もしないからと妹に誓う様を、あれ何しているんだと少年ポップ達に問われたチウは頭を痛める・・・ポップの特訓馬鹿を、どういえばいいのだろうか？
体を壊すような無理はしない、しかし自身を限界に追い込む無茶はする
チウの答えを聞いた時、特訓を受ける気満々だった面々は超微妙な顔をした。
それははたで聞いていたアバンも唖然として程であった・・・・異界のアバンはこの子供に何を教えてこんな風に育てたのだろうかと。
「でもそのおかげでポップはとても強くなったんです。」
確かに沢山の無茶をしては仲間全員から心配をしていたが、その仲間を多くの罠から、策略から、沢山の敵達から仲間を守り抜いた自分達の勇者一行の魔法使いを、チウは我が事のように誇らしげに語る。
そこにあるのははどこまでも仲間を信頼する姿であり、微笑むチウに力強さを感じた少年ポップ達は、絶対に特訓に食らいついて自分達を鍛え上げるのだと再度誓う程に、チウの風格は歴戦の勇士のそれであり、強い意志をそこに見出した隠し砦の戦士たち全員を奮い立たせるに足るほどの・・・
「んじゃ・・・」
「ポップさん!!!」
「うぉ!・・・・おうどうしたポップ・・」
ティファに無茶しないからお前も気をつけろと言って送り出し、アバンから借り受けた魔法用グローブをつけながら戻ってきたポップの手を、少年ポップが両手で握りしめるのを、青年ポップは面食らう。
何か特訓受けるって言った時よりも燃えてるような？
「俺・・・俺達絶対にポップさんの特訓に食らいつくから!!手加減しねぇで頼みます!!」
「い??!!・・・たは・・・まいったなこりゃ・・・」
先程妹に無茶しねぇって約束したばかりだというのに、受ける本人がここまで燃えているのだからちょっとくらい・・・・無茶した。

「ほら、ヒャドの方がちいせぇ!それじゃぁメラに負けちまうぞ!」
「うっく・・・だぁ!!・・・消えちまった・・」
どうやらこの世界のポップは氷系が苦手らしい。
自分もかつては苦手であったがさてどうするかと悩んでいると、ここは俺が見るからお前は魔法を使った棒術の組み手をしろと、マトリフに言われた。
「お前さんの小型メドローア見て理論は分かったからな。後は・・」
「駄目だ!」
「あん?」
流石は当代随一の大魔導士とまで呼ばれているマトリフであり、メドローアを小型化するのにどれくらいの魔法力を調整するのかを一目見て理解をした。
元々この呪文を開発したのは目の前のマトリフであり、理論を理解すれば後はお任せできると普通は思う。
しかしポップは断った。
偏にマトリフの体を慮ってだ。
それを甘い事だとマトリフが詰ろうとも、ポップは己の意志を曲げなかった。
「こんな戦いは一時の事だ。その後の世界には必ずあなたたち大人の力がいるんだ・・・力だけがあってもここにいるこいつらは世界を知らないひな鳥そのものだ。
こいつ等を全部理解している貴重な大人をこんな事で失う可能性を高める事は俺は嫌だ。
ポップ!まだ行けるな?それともマトリフさんに手取り足取り教わるか?」
大戦が終わってから、自分達を守ってくれた大人達。世間は世界を救った勇者達をちやほやしつつも政争争いの道具にしようとする輩がいた事を、ポップはフォルケン王から王配教育を受けて半年後に理解した。
平和になれば出てくる問題達から、この純粋な一行を守る事こそがマトリフさん達の役目だと言い切る青年ポップに、少年ポップはその

想いに応えた。
「へ！メドローア自体はもう物にしてんだ。後は応用編だから師匠は休んでてくれよ!!ポップさん、俺一人でヒャド系の出力調整やってみる。」
「おう、そしたらコツって言うかアドバイスを置いてくから頑張れよ。」
「おうさ！師匠も驚くような速さでものにしてやらぁ!!」
　意志の強さは伝わる、自分の弟子と異界の自分の弟子の互いの強くなろうとする意志の伝達をみたマトリフは、もう自分が出張る必要も無いのだと安堵しながらも憎まれ口をたたく。
「はん、精々がんばれよひよっこども。俺はお言葉に甘えてぐうたらと寝てくらぁ。」
　ニヤリと笑って右手を振り上げながら去る偉大なる師の背中をポップ達は笑って見送る。
　絶対に勝ってあの支障を長生きさせてやるのだと・・・・張り切ってしまった青年ポップは危うくマァム達を潰しかけた・・・
「ほら！イオラの嵐だけに目がいってんと・・・」
「きゃぁ!!」
「懐に潜り込まれてお陀仏だ!!」
「ま・・・まだまだ!!!」
　とりあえず組手は一対一にする事にした。
　この世界のマァム、ヒュンケル、クロコダインの実力が分からないのでとりあえず軽～くしようと言っていた青年ポップは、先ずはマァムから始めた。
　棒を構えたポップには隙が無く、攻めあぐねているマァムにポップから動いた。
　即ちイオラを通常よりも一回りサイズを小さくしコスパを稼ぎ、大量のイオラの嵐をマァムに浴びせ、そしてイオラの嵐に翻弄されている隙をついて背後に回り込み、マァムの首筋にピタリと棒を寸止めで止める。
「魔法が来たら前に出て敵を倒す方法を考えるか、考え付かなければ

相手から視線きらないで周囲警戒しつつ後退するか避けるかしながら相手の動きが鈍るのを待つのも手だ。
　無限に呪文を討てる奴なんていないし、俺の知る限りはそんな出鱈目な魔道具も聞いた事はないけど・・・・もしかしたらあるのも考慮してやっぱり前に・・・」
「・・・あのポップさん・・・」
「あ?悪ぃ・・・兎に角出鱈目な魔道具も考慮しながら、どうやって魔法を交わしつつ相手の懐に入って仕留めるかが肝心だと俺は思う。マァムは武闘家だから、闘気を手足に練り込みながら懐には入れれば瞬時に腹や胸とか兎に角広範囲に充てられるところをぶん殴っちまうといいかもな。」
「ぶん殴・・・分かりました。」
「おう、次はヒュンケルでいいか?」
「あぁ頼む。」
　マァムとポップの組み手を見ながらヒュンケルなりに対策をすぐさま練ってみた。
　それはあのイオラやもしかしたらメラ系やヒャド系も同様に大量に撃てる可能性があるのでその前に魔槍の軽装の強みを生かして素早く動き、ポップの構えている棒を打ち落とし早々に決着をつけようとしたのだが
「それは駄目だぜヒュンケルさんよ。」
　ポップはヒュンケルが突っ込んでくると同時に棒を握っていた右手を緩めて態とヒュンケルを自分の懐に入れそして、右手でメラを作って待ち構えてヒュンケルの繰り出す槍を反対に掻い潜り、ビタリとヒュンケルの顔面前までメラを維持しそして、寸前で消してヒュンケルの顔をポップの右手が覆った。
　メラが消えたとはいえどもその熱はまだ残っており、そのまま食らえば顔面どころか眼球すらも焼かれていた事に、ヒュンケルの背筋に寒気が走る。
　そしてこれが爆裂呪文であったれば、自分は即死している!
　油断したつもりはなかった、しかしこのポップの機動力を甘く見て

いたのだ！
「魔剣と違ってそれは顔が弱点ぽいから、むやみに魔法使いに突っ込んだらあぶねぇよ？」
ニヤリとするポップに、ヒュンケルの肌は更に粟立つ。寸前まで槍で仕留められる範囲であった。
しかしその寸前でポップの足はステップを踏んで槍を交わしつつ自分の弱点を突いてきた。
「槍に慣れてないからなヒュンケルは・・・・―あいつ―をティファと一緒に探し出すか？」
ん？
「あいつの方が槍のスペシャリストだし・・・どしたヒュンケル？」
「いや・・・何でもない・・」
いきなり何かをぶつぶつという青年ポップに、こいつは凄いが変わった奴だと、マァムと同様にヒュンケルも青年ポップをそう評価する中、クロコダインはポップの放つ魔法を身に受ける覚悟をして前に出て、仕留める寸前にステップを踏んだポップを尻尾で張り飛ばそうとしたがポップはクロコダインの尻尾がピクリと動いたのを見て何か仕掛けてくると読み、瞬間トベルーラを発動して素早く尻尾の範囲から逃れ上空に飛びそして・・・・
ベダン!!!
・・・・・・凄いクロコダインに嬉しくなってしまって思わずやらかしたのだ・・・
「ポップ!!!」
その後滅茶苦茶チウに叱られた。
君さっきティファさんとどんな約束したの!!??
仲間との特訓も、真剣にしなければ意味が無いのが分かっているが！アレは無いと、小さなチウに叱られて正座して縮こまるポップを庇ったのは早々に復活を果たしたクロコダインであった。
「あまり叱ってやってくれるなチウよ。俺も柔ではない、戦場で今のような事をされない為にも、俺も工夫しよう。」
・・・・いくら頑丈でヒュンケルに次いで不死身の男であるクロコ

ダインであっても復活早くないと思うポップと、無茶しすぎないでくださいねと優しいチウに、クロコダインは豪快に笑い飛ばす。
その笑い声は、それぞれの特訓課題に取り組み始めた砦の戦士達の心の中にさわやかな風が抜けるのを感じ、ポップは改めて思った。
流石は天下の獣王だと、竜の騎士バランに認められた偉大なる戦士なのだと・・・・嬉しくなって張り切って・・・・騎士・兵士達を相手にじゃかすか魔法の雨を受けさせこういう事もありうるのだと・・・・教えすぎた・・・あまりやりすぎて怪我人出したら洒落にならんと思って手加減はした・・・ポップなりにだ。
しかし砦の戦士達の大半は、見張り達以外は爆睡をした・・・・さしものヒュンケルもぐったりとしていたのを、弟子達の事を甘やかさない為に他所で修練を積んでいたアバンは弟子達を案じ、俺も明日から頑張るからねとけなげに言うダイとチウを見て、青年ポップは大いに焦った!!今敵襲にあったら洒落になんねぇぇぞ!!!馬鹿！俺の馬鹿!!!
妹―クロファ―が寝ながら謀略戦をしているとも知らないポップは、くぅくぅと眠っているチウの声を聴きながら内心で叫びをあげる・・・・今日だけは何事もなく平和な日になりますように・・・・

いしの積まれる世界：出陣

そろそろ動かねばなるまいか・・・

たった一人が発したそのポツリとした一言で、地上界は地獄への道が開かれた。

主の言葉を受けた影は、御意にと一言を残して足早に主の下を辞去し、主の望みを叶えるべく作戦を各部署に伝えに行く。

大空のパレスにいるバーンは、異界の者達の迎えが来てからゆっくりと地上界と天界を攻めればいいのだと考えていたのだが、昨夜のパレス内での大騒動でそうも言ってはいられなくなった。

バーンもキルバーン同様、どのような方法かは分からないがこれまで経験した事のない謀略戦を仕掛けられそしてまんまと嵌められた。

まさか死神に擬態した者を使ってくるとは思わず、キルバーンとても理由のいかん問わずに自分に牙を?いてきた者を放っておくという選択は端から無く、同僚だろうが何であろうが命令一つで数多の味方をも狩って来たキルバーンは迷う事無く刃向かってきた者全員を瞬時に大鎌の錆とし、パレスの一角を血の海にしながら忌々しいとばかりに驚愕の表情を晒した者の一人の頭を踏み抜く。

もうブーツは血塗れなので、ピロロが調達してきてくれるものに変えればいいのだから怒りに任せて踏みにじる・・・・まるで謀略戦を仕掛けた犯人を踏みつぶしてやらんとばかりに。

その怒りはバーンも同様であった。

他者に興味は無くとも、手塩に掛けて育てた軍団の精鋭達を自分達にとっては無為にされ、敵にとっては戦力削りに成功をされたのだから、相手を八つ裂きにしてもなお飽き足らない程業腹である。

昨夜のことが無ければ魔界の戦士達を地上の各所で暴れさせ、二日たっても魔王軍の大規模な捜査網から逃れている勇者一行と忌々しい異界の者どもを炙り出してやり、弱ったところをと思っていたのだが

「やむおえん、質こそ落ちるだろうが勇者達の現状を知るには不足は無かろう。」

受ける者のない言葉を虚空に放って解くに任せる。
まだ手札を晒したくはない、あのティファという忌々しい小娘が―自分達の秘密―を知っていると考えるべきでありミストバーンを動かすのは時期早々・・・もう少し様子を見ればよく、キルバーンにいたっては―あの一つ目のマスター―と共に勝手に死神として動こう。
―あれ等―は酷く執念深い、マスターも疑似自律神経回路という馬鹿気た物を搭載された人形も双方共に。
さて、収穫はあるだろかとバーンはまたぼんやりとする。
今日の結界遺憾で、今後の方針が決まる。その前にある程度は固めておこうとバーンは思考の海に漂う。
各所に作戦を通達したミストバーンがすぐに戻ってくるのだから・・・

「・・・・ポップさんが怖い・・」
「・・ポップ、あのポップさんて人間？もしかして向こうの竜の騎士ってあの人入れた三つ子じゃないの？」
「ったった・・・午前中だけでもう何度死んだのかしら私？」
アバンの弟子幼年組はさんざんに青年ポップに翻弄されて、あれは本当に人間でいるのか疑問な事甚だしい・・・・ポップ・ダイ・ティファの三人で竜の騎士では無かろうかと。
少年ポップもバランから竜の血を受け取りそして魔法力と扱う精度が特段に跳ね上がったのを自覚しているが、それでも自分達三人相手にして翻弄させるってどんだけだと。
先ずあのイオラの嵐からして訳が分からない・・・そしてそのイオラの嵐の中を平然と突っ込んでくるかと思えば、近づいてきた自分達をメラゾーマの炎の壁が立ちふさがり、ダイとポップがトベルーラで上空に出れば読んでましたとばかりにヒャドの氷が飛んできて、ポップがメラゾーマで対抗した時氷と炎の相殺で霧が発生して目くらましになってしまい、上空で二人は頭をこつんと青年ポップの棒で叩かれた。

地上でマァムが援護しようにも、上空では手が出せないので青年ポップは一旦放置したのだ。
そんなポップに食らいついたのがヒュンケルであった。
流石はダイ同様戦いの天才・麒麟児の名を欲しい侭にしているアバンの長兄殿と、ポップは冷や汗をかきながら一つ一つの鋭い槍の突きに怯えそうになりそうになるのを強がって笑って見せるが・・・そこは矢張り地金が違く、首にビタリとヒュンケルの槍が突きつけられ、青年ポップは降参をしたのを、ダイとマァムそしてポップも小さくではあるが歓声を上げる。
負けたポップもヒュンケルに惜しみない賛辞を贈るのを、当のヒュンケルが面喰う。
この世界のポップは、自分の事を・・・敵対心ではなかろうがどこかライバルか競争相手に思っているのか、自分に対して一歩引いておりそして自分の言葉に反発をしてくるのだが、青年ポップは素直にあんたやっぱりすげぇやと屈託なく笑いかけてくる。
自分も・・・弟妹弟子達と共に屈託なく笑うことが出来ればと・・・しかし自分は其の弟妹弟子達のお陰で罪を償う事を許されている。
それ以上を望むのは過ぎたる事だと思考が暗がりに落ちかけた時、明るい・・・否！能天気な声が響き渡った！
「みんなご飯だよ!!!」
・・・・・あの娘に、緊張感という言葉は無いのだろうかと思ってしまうのは罪だろうかとヒュンケルは本気で思ってしまったのは悪くはないはずだ・・・悪くは・・ない筈であった。
その後に、ヒュンケルこう回想をする。
能天気のような穏やかな時間がそのまま流れればよかったのだと・・・
昼食を告げに来たティファの表情が青褪め、そして・・・ティファは足元の雑草を手で刈り取り中に放って大量の式鳥を作り出し隠し砦の散らばせながら叫びあげた！
「非常事態宣言!!ベンガーナ！パプニカ!!ロモスの各王都に魔王軍と思召しきモンスターの群れが向かっています!!到達時刻は十分とあ

りません!!!」
　王都にこんな間近に迫るまで分からなかった事にティファは愕然とした。
「式鳥にキメラの翼を三枚持たせました!!中庭から遠い方はそれを使ってここに来てください!!・・・後はアバンさん、出撃の場所を決めてください。そこまで私が結界を張ってのエスコートをします。」
　まだ子の隠し砦の場所を知られたくないと、直ぐに飛んで来たアバンに引き継ぐ。
　ティファはこの二日間、主要都市部の上空に式を散らばせ言って時間で見まわしそして発見したことを告げそして砦は騒然となりながらも誰もがティファの指示に従うように戦う準備を整え中庭に集まり、アバンが支持を出す。
「ティファが身を隠す結界で途中までエスコートをしてくれるそうです。ダイとポップのペアに三十人の騎士・兵士をパプニカに、ノヴァさんとヒュンケルのペアに半数の有志の方々と二十人の騎士・兵士ベンガーナを、残りは私と共にロモスです。」
　パプニカの王都近くは平原であり、ダイとポップの効果力は有利であり、ベンガーナは森林が多く細やかな戦いはノヴァとヒュンケルが得意とし、ロモスはクロコダインとマァムの故郷であり二人はあの地に慣れていると判断を瞬時に下したアバンは自分はロモスの方が到着時間が若干早いというのでそちらに回る事にして次の指示を飛ばす
「万が一を考えてポップさん達を残し・・」
　その案を、当人である青年ポップが棄却案を出してきた。
「いんやアバンさん!俺とチウはサポートで出させてもらう。・・・ティファは絶対にダメだ!お前はここで戦況見て式鳥で知らせてくれ。早く終われたところは他に行けるように・・ティファ、キメラの翼まだあるか?それと敵の内容分かんねぇか?」
「・・・分かった・・・各自四枚追加で・・・モンスターの方は土煙で詳しくは分からない・・・ねぇ、ちゃんと式鳥見るからティファも連れてって!」

「駄目だ!!お前はもう戦いに出さねぇって俺達―全員―で誓ったんだ・・・・いい子だから・・な・・」
「にい・・・チウ君・・・分かった・・・」
アバンの言葉を退けた青年ポップを誰も詰る事をしなかった。最早皆全員が知っている、この青年の強さを。
そしてティファも馬鹿ではない。他界に来たからと言って自分の性根が治るわけではない・・駄目なのだ、味方は無論だが敵であっても命を落とすのを見るのが・・・もう無理なのだとティファの身内全員が知っている。
大戦最終時のあの時、死兵を相手取れた時のあの気概はもう無いのだと・・それが嬉しいとティファの身内はほっとしているのだが、本人は忸怩たる思いがある。
いざという時動けない自分は本当に役に立たないと。
悄然としているのは何もティファだけではない。
自分達の子が出撃するのを見ているしか出来ないと、ロモスでの獣王戦やパプニカの鬼岩城戦で味わったあの痛みをまたもや味わう事になったレイラとジャンクとスティーヌ。
アキームはベンガーナに向かうが腕の傷でまだ戦えないと己の不甲斐なさに憤るバウスン、そしていつも勇者達の帰りを待たねばならないレオナとメルルとエイミ。
今回の彼女達には出番がどこにもなく祈る事しかできない無力感に苛まれる。
それでも信じて待つ、ここに全員が帰ってくることを、フローラは時間がないので激は飛ばさず、しかし言葉短に告げる。
「全軍出陣!魔王軍を蹴散らし全員で戻って来なさい!!」

いしの積まれる世界・それが幸いだと知った時・・前編

女王陛下の出陣の声に待ったが掛かった。
声のする方を見れば、手にそこそこの大きさの武具を持った魔界の名工ロン・ベルクが猛然と走って向かって来たのだ。
「・・・間に合ったか・・・ポップ!クロコダイン!!お前達の新しい武器だ、これ持って行ってこい!!」
二人は自分達の名を呼ばれ慌ててロン・ベルクの下に行けば、ポップはロッドをクロコダインは柄のついた新たなアックスであった。
どうやらこの世界の武具も、自分達と同じようだと青年ポップはにんまりと笑う。
素材は分からないがあれはブラックロッドだろうし、クロコダインの新武器も機能満載だろうと睨んでいる。
ロン・ベルクが二人に手短に話している内容も自分が聞いたのとまったく一緒であり、幸先のいい出だしだとポップはにんまりと笑う・・・のだが・・・自分の見間違いだろうか?
少年ポップの持っているブラックロットと、クロコダインの新たなアックスの刃の部分が・・気のせいだろう、この世界には―オリハルコン―を手に入れる事は早々にないのだから。
青年ポップの思惑を他所に、新たな武器を授かった二人はこれで思いっきり戦ってくると吠え挙げ、士気も大いに高まる中今度こそ一斉にキメラの翼を宙に放り投げ出陣をする。
目指す最初の場所はかつてバランが竜騎衆達を呼び寄せたアルゴ岬。
そこまでティファが大規模な結界で全員を隠して飛び去りそこから各自の配置につく。
カールの者達であれば場所は知っている。
到着早々ティファは結界を徐々に解き、完全に溶ける前に二陣が出発をした。

こうすれば魔王軍にはいきなり大規模な集団が現れたように映り、自分達の砦の位置特定阻止と、規模の算出を阻む狙いがある。
ティファはそれぞれの隊に二羽ずつ式鳥をつけ、兄ポップ、ノヴァ、マァムの肩にとまらせる。
「これを使って各隊の戦況報告は可能です。一羽が物見を、そこから戦況と敵の配置位はお知らせできます。また早く敵を撃破した隊にまだどこの隊が戦い苦戦しているのかをお知らせします。」
それと式鳥同士もリンクしているので互いに通信可能ですと心強く笑う。
十重に八重に二十重に、ティファは全員が必ず戻ってこられるようにと策を練る。
戦場に出る事が叶わずとも、それでも共に戦うためにとキメラの翼の移動時を利用してなされた説明に全員が一斉に頷き、そして各配置に再び飛んでいくのをティファは瞬時に己を結界で隠して無事を祈る。
どうか全員戻れるようにと・・・・しかし現実は残酷なもの、ティファの願いは届かなかった・・・

そろそろ全員が戦場に到着する頃合いを見計らい、ティファもアバンに指定されたテランの森の中で式見を使用した時其れは起こった。
「・・・だろ・・・・んな・・・」
兄ポップの式からリンクした時、戸惑いの声が流れ出た！
「にぃ！」
なにがあったのか、いかなる強敵を前にしようともポップの師であるマトリフの教えの魔法使いはいつでも冷静にを崩さないポップが戸惑う程の事は何かとティファは直ぐに問きかけながら、対にした式鳥を見ようとした時
「ティファ!!!式鳥は破壊する！追加を送るな!!ノヴァ！マァムも式鳥二羽とも破壊してくれ!!!ティファ・・・追加で送ってきたらお前の様子ですぐわかる・・・もし他のを送ったり戦場に来てみろ・・・・俺は自分の両腕自分で燃やし潰すぞ!!」

「にぃ!!???」
「ポップさん!!・・・分かったわ・・・ごめんティファ!」
「すまない・・・ポップさんの方を優先させてもらう!後で理由の・・」
「説明でも何でも知れやるからとっととこわ・・・」
ザァー・・・・・
「・・・にぃ?・・・・・マァムさん!ノヴァさん!!!」
完全に式鳥二羽ずつが破壊された時に聞こえるノイズはすぐさま聞こえなくなり、もしかしたら一羽くらいはと望みを託して式身をしようとしたが繋がる式鳥は皆無であった。
「そんな・・・・」
兄達が、全て破壊したのだ。
何故・・・・どうして・・・・・
「ティファが・・・弱いからダメなのにぃ?」
自分がまともに敵を倒せない事を兄はここにきて思い出したのだろうか?
だから・・・・見る事も禁じたのだろうか?味方の有利を潰さなければならない程、自分は弱いから・・・・
「にぃ!!にぃ・・・みんなお願い・・・・」
どうかこの地に全員で戻ってきてほしいと妹が祈る中、兄ポップの顔も青褪めている。
パプニカの首都の目の前の平原についた時、丁度魔王軍の姿が捉えられるほど近寄っていた。
集団の先頭は魔界のモンスターと思召しきモンスターが雄たけびを上げながら疾走してくる。
一回りも二回りも大きなアークデーモン四体が、シルバーデビルとじごくのつかいを護衛するように挟んで突っ込んでくる・・・・そしてその後ろにいたのは・・・魔界のモンスターよりも小柄で、そして魔界のモンスターよりも狂暴な瞳をした・・・
「嘘だろ・・・そんな・・・・」
地上のモンスター達が狂暴化をして迫ってきていたのだ。
その光景は青年ポップの他は、当然の事とばかりにデルムリン島で

モンスター達と共に育ったダイですら迎え撃つ構えをしている。
この世界の者達とって、そして悲しいがダイにとっても狂暴化ををたモンスターは倒すべき、倒さなければならない敵でしかなかった。
しかし青年ポップは違った。それはティファと神々と六大精霊王達の活躍により少なくとも陸のモンスター達は狂暴化をしなかった。
それどころか大戦時であっても彼等は身近にいてそして時折癒しをくれる存在であった。
それは師マトリフの洞窟近くにいたももんじゃ達が遊びに来てくれたり、ロン・ベルクの小屋ではティファの食事に釣られてドラーキやスライム達も共に昼食会を摂り・・・駄目だ、こんな光景ティファに見せる訳にはいかない!!
青年ポップは、ティファの為に、ティファの心を守る為に瞬時に決断を下した。
味方の有利を潰すのは百も承知で、しかし・・・自分にとってはティファの心が大事だと式鳥を潰した。
ティファの懇願さえ踏み砕いて・・・
地獄だった・・・ポップにとってはデルムリン島に行けば自分を歓迎してくれる一角ウサギやいたずらモグラ等普段は陽気に笑っているであろう彼等が瞳を吊り上げ向かってくるのを、青年ポップははメラゾーマの壁を張り退けようと努力した。
この攻撃に怯んで逃げて欲しいと・・・・しかしその願いは虚しく散る。
青年ポップの思惑などどうでもいいとばかりに、騎士・兵士とダイの剣と槍に、そして少年ポップの魔法が彼等を易々と倒していく。
ダイとポップは序盤は魔界のモンスターと思召しきモンスター達を相手にした。
少年ポップが苦手を克服しつつあるヒャド系で手足を凍らせ怯ませ或いは動きが一瞬でも止まればダイが斬りかかり、魔界のモンスター達はそれでも大魔王に対する忠誠心からかそれとも軍内部の粛清を恐れてか、手足が斬られようとも喉笛に食らいつこうとするのをカールの戦士達が三人一組で脇腹・首筋などの柔らかい部分をやりで

狙いを定めて深々と槍を突き入れるのを見届けつつもダイとポップは次の敵に目標を定めて向かっていく。
青年ポップも魔界のモンスター達には躊躇いなく相手にする事が出来た。
彼等は―己の意志―で戦いに出ている戦士達だから・・・しかし・・・地上のモンスター達は、あの者達は違う！
「ぎにゃぁぁ!!!」
「ピィー・・・ピィ!!!」
魔王軍が地上に来たせいで狂暴化をし、訳も分からずに暴れそして死んでいく時の断末魔がポップの耳をうつ。
普段はお酒を飲んでは笑っているオーク達は木のこん棒一つを手に暴れまわるが次々と兵士達の槍に貫かれ血反吐を吐き、肉をティファ達が焼けば喜んで走ってくるあばれこまいぬがダイの剣に噛みついて砕こうとするのを少年ポップのイオラで吹き飛び焼け死に、ゴーレムやサーベルウルフ達が・・・・地上のモンスター達が次々と味方によって打ち取られる・・・・それが正しい事だと青年ポップも頭では分かっている！
ここは自分達がいた世界ではない！仕方がないではないか・・・・こいつ等を倒さなければ首都にいる民達が襲われる、それを防ぐ為に自分達はここに来たのだと、こみ上げる吐き気を堪えてポップも次々と魔法を繰り出し見方を援護する。
敵を倒せば代償が誰が支払うのか分からないので貴方達は絶対に倒さないでください
出陣の前にアバンに言われた言葉に、青年ポップは今まさに助けられている。
彼等と自分との距離はあまりに近くなりすぎ・・・・どうしても地上のモンスター達を手に掛けることが出来ない・・・倒す手助けをしているくせにと、泣くのを堪えて彼等の行く手を阻み、攻撃を止めさせそして誰かの剣と槍と魔法の餌食にさせている・・・それしか止める術がないから・・・・どうして俺は、平和なあの世界でマホカトールを習得しておかなかったのだと後悔をしながら・・・・

同じころ、アバン達の隊に組み込まれていた他界のチウもまた苦しみながらも戦っていた。
しかしその苦しみは向こうの世界でスタンピードを起こしたモンスター達を、隊員達とゴメス達と共にやむなく倒してきたチウはポップよりも格段に少なく、的確に敵の足止めをし傷ついた者を瞬時に見つけ出し、この世界のチウとパピィとこの程森でチウが勝負を挑んで打ち負かして遊撃隊員に加えたくまちゃと共に戦場の外に運び出して薬草を与えて負傷者達を守り抜く。
「いいかい！戦いのヒーローって言うのは敵を倒すだけじゃないんだ!!弱った人達を必ず最後まで守り抜く戦いをするのも立派な事なんだ!!」
敵を倒すことを第一としたいと主張するこの世界のチウに、レスキュー活動の何たるかを知っている他界のチウが説得をした。
頑丈で素早く動ける自分達が、負傷兵達を助けて守り抜く！
その一点の曇りのない迷いのない他界のチウの言葉に、この世界のチウはかつて師であるブロキーナ老師の強さと優しさを目の当たりにした時の憧憬と重なり、そして頷いていた。
自分にもできるカッコいい正義の味方を実現すべく・・・
その動きは確かにアバン達の助けとなった。
負傷した味方の心配を一応しつつもそちらだけに囚われる事無く目の前の戦いに集中できる分、パプニカ・ベンガーナの隊よりも早く敵全てを撃破した。
後に残った魔界・地上どちらのモンスターも焼却した方がいいという他界のチウの言葉をいれてアバンは魔法が使える者達と、クロコダインのグレートアックスのメラ系で燃やし尽くした。
ここは人里近く、血の匂いで他のモンスターを呼ぶ恐れとそして死骸の腐敗で疫病が発生するかもしれないというチウの言葉はアバンは頷き燃やし尽くし、そしてチウが嫌な予感がするからパプニカの方に言って欲しいという言葉に、アバンは素早く周りを見回せばチウ達に助けられた兵士達はもちろん、マァムとクロコダインも頷くのを見てすぐにパプニカにとんだ。

人間よりもモンスターであるチウの勘の鋭さを見込んで
そしてついた先にいたのは・・・・キメラの遺骸を腕に抱いて地面に座ってうつむいている青年ポップを、ダイ達が必死に声をかけている光景であった。
その周りには自分達が倒した以上の敵の躯が散乱され、草原一帯が焼け焦げ或いは血塗れになっている・・・地獄そのものの光景に、この世界のチウは青醒め遊撃隊達も怯えを見せ、近頃は戦いに慣れてきたマァムは怯み数多くの戦場を渡って来たクロコダインも眉を顰める中、他界のチウは駆け出しそして少年ダイ達を乱雑にどかして青年ポップの顔を両手で挟み込み上を向かせるが、ポップからは何の反応も無かった！
「ポップ!!ポップ！しっかりしてポップ!!戦いは終わった!!!もうどこにもてきはいない・・・帰ろう!!ティファさんの所に・・・・」
「・・・ファ・・・」
チウの声かあるいは最愛の妹の名前かは分からないが兎に角返事を返すポップにチウは声をかけ続ける。
「僕達の方の敵は全部倒してきた、もう少ししたらきっとノヴァさん達の方も終わる。
帰ろう、ティファさんの所に・・・」
その様子を横目で見ながら、チウによって脇に寄せられたポップに、この地で何が起きたのかをアバンが問えば、少年ポップは苦くそして怒りに満ちた表情を浮かばせ師の質問に答えた。
「外道死神が来やがったんです・・・・」
遡った少し前・・・本当にアバン達があともう少しで敵全てを倒し切ろうとしていた時、パプニカの戦場もまた敵全てを倒し切ろうとしていた。
青年ポップは苦悩しながらも、それでも味方が軽症で戦を追われると思えたその時、気障な笛の音色にポップ達とダイが警戒を強めた。
その笛の音色に聞き覚えがあり、そして声がした。
「グットアフタヌーン勇者様達!!」
「てんめぇ！三文死神何しに来やがった!!」

「・・・キルバーン・・・・」
上空に出現した死神を、ダイと少年ポップは瞬時に反応し青年ポップは静かに魔法力を練り上げる。
こいつは代償を支払ってでも壊す!!
そう思い定めているポップと勇者達を、キルバーンとピロロは嘲笑う。
「こんな地上のモンスター風情に時間がかかる弱い君達が僕に何をしようというのかね?これではピロロ、君を倒す事も出来ないと思うがどうかね?」
「え〜・・・僕にはキルバーンいるから大丈夫だよ。あんな弱いモンスター達を倒すのに手間取る奴等なんてあっという間だよ。」
キルバーンからすれば地上のモンスターなど取るに足らぬ物でありバーン同様幾らでも使い潰せて代わりがきく便利だが弱い道でしかない。
その弱い道具を使って勇者達の今の現状確認を行ったのがこれである。
魔界のモンスター達を相手に地上の者達は抗しきれるのか、心が折れたダイはたち直れたのかそれともそのままなのか、そして最も知りたかったことが異界の者達はどこまで自分達の大戦に関わってくるのかの見極めであり、そして完了したキルバーンは予定にない最後の挨拶に出てきたのだ。
無論ここがパレスであれば罠位仕込んでいる。
しかし如何せん急遽決まった作戦なのでその時間はなく、だからと言って彼等をこのまま気持ちよく変えさせるなんて許せないという外道精神を発揮してキルバーンは姿を現し勇者達を散々に嘲り、怒れる彼等を見ながら帰途につく・・・・つもりであった。
「・・・・・待てよ・・・」
その自分達に待てと言うものがいた。
その声は静かで有無を言わせない声音に、キルバーンは誰の声かと見まわそうとした時、笑いの仮面の横頬にギラが当たりひびが入った!

「そうかよ・・・・お前か?この作戦立案した奴は?」
「・・・・君かい生意気な坊や・・・・よくもお気に入りの仮面にヒビ入れてくれたね?
僕がこの作戦を立案したって言ったらどうする気だい?」
「・・・・こうすんだよ!貸せポップ!!!」
「あ!!ちょ!!」
メッラゾーマ!!!!!
炎の魔法使い・二代目大魔導士ポップの渾身のメラゾーマが火を噴き、つまらなさそうに横に避けて小馬鹿にしようとしたキルバーンの体は―なにか―に叩かれ吹き飛び地面に叩きつけられた!!
信じられない・・・上空には確かに誰もいないのをピロロも警戒をしていたはずだと、前方を見れば、青年ポップが持っているロッドから刃ような槍の穂先のような光り輝くものが出ていた!
「許さねぇ・・・・手前ぇだけは俺の手でぶっ壊してやるどぐされ外道が!!!」
それは怒りの咆哮であった、嘆きの叫びでもあった
平和に暮らせていたはずの彼等を狂暴化させただけでも飽き足らずに、尖兵とさせた魔王軍に、そしてこの作戦を立案したという目の前の外道に対し・・・そして・・・倒す事でしか彼等を止められなかった己に対しての・・・
青年ポップの魔力は向こうの世界でも群を抜いており、瞬時に発動したトベルーラは速くそして少年ポップの手からもぎとったブラックロッドはこの数年愛用していた自身のものと寸分たがわずそれが為にポップはロッドの力を十全に引き出す。
自身の魔力を打撃力に、或いは可能ならば―光魔の杖―の如く槍にも鞭にも使える特性を引き出し、刃を槍に変え大振りに構えてキルバーンに打ち掛かる!
それはキルバーンが地面に叩きつける前からの動作であり、ポップは咆哮を挙げながらキルバーンに突っ込んでいた。
誰もが、それこそ斬りつけらるキルバーンですらがポップの攻撃は決まると確信をした。

最悪はピロロに首の部分だけでも持って行かせるかとキルバーンはピロロに念話で後はよろしくと送って算段をつけたほどであったが・・・・ポップとキルバーンの間に割って入ったモノたちがいた。
振り上げた槍を降ろしたポップには自身の動きを止める事は出来ずにキルバーンと自分の間に割ってはいいたモノ達の手応えは・・・・

ポップ兄、この子達の翼は確かにアイテム化すると固いけど、羽毛としては普通に柔らかいんだよ。
そうなのか？・・・・へぇ本当だ！あったかくて柔らけぇや。ん？撫でられるの気持ちいのか？ティファ、ブラシしてやったらこいつら喜ぶか？
きっと喜ぶよ、―キメラ達―は奇麗好きなんだから！

斬りつけたキメラ達は、初めてデルムリン島でティファに誘われて触った時と同じく柔らかく、奇麗好きな彼等の翼が・・・赤い血に染まって・・・
あぁ・・・・どうして!!!!どうしてこいつなんかを庇って!!
初めて斬り殺した柔らかく温かい命達・・・・散々に敵を魔法で倒してきた自分が嘆く資格とてない・・・それでも・・・・なぜ・・・・
青年ポップは決して上空や周りの警戒は怠らなかった。周囲にもまだ生きていたモンスター達が起き上がるのをダイ達が倒す中、邪魔をしたのはピロロであった。彼がミストバーンからキルバーンに渡された最後のモンスター筒を一斉に投入して人形とポップの間に滑り込ませ、ポップの攻撃の阻害に成功し、キルバーンは直ぐに体勢を立て直し上空に再び戻り忌々しい坊やを見れば・・・
「おや？おやおや・・・」
キルバーンは―極上の獲物を見つけた時―と同じ、赤い瞳を三日月に細めて薄っすらと笑みを浮かべる。
もっと観察をしたかったが高速で近づくものを感知して時間切れを悟り、それを惜しみながら空間を空けてバーンの下に帰っていく。
―様々な土産話―が出来た事を悦びながら。

それは忌々しい異界の魔法使いが、自分の斬り殺したキメラ達の遺骸を前に、茫然自失として膝から崩れ落ち、へたり込む姿を見ることが出来たから。

あの取り澄ました顔が歪む姿は美しく・・・・そう・・・君も奇麗な子供だったのかい坊や

キメラ達と共に、心を斬り殺されたポップをチウが呼び覚ますのはこの少し後の事であった・・・本当にわずかな時間の差であったのだ・・

いしの積まれる世界・それが幸いだと知った時・・後篇

ティファは待っていた。ただひたすらに、兄かチウ達を伴ったアバンかノヴァとヒュンケルの誰かが来るまでひたすらに。
追加の式取り出すか戦場に来たら自分で自分の腕を燃やし潰すと言った兄の言葉は本気だ。
兄は・・・兄達は己の言葉を曲げない・・・それこそ己の命を懸けて守り通す、きっと自分がどちらかをすれば、兄は魔法のグローブを外してメラゾーマで両腕を焼き切る事をする。
だから・・・ひたすらに待って日が暮れる前に自分を呼ぶ声がした。
「ティファさん!ティファさん!!」
この世界のチウよりも大きくなったことで少しばかり低くなったチウの声が、そしてアバン達の声もする・・・何かとても焦ったような声に、ティファは胸騒ぎを覚えてすぐに声の下へと向かった先には・・・・
「ポップ兄!!!!」
キメラの遺骸を抱え、呆然とした兄が少年ダイ達に守られるように囲まれている異常な光景に、ティファは内心で歯噛みをした。
自分の世界に引きずられすぎた事を後悔した・・・原作で地上のモンスター達の狂暴化とその後の顛末を―知識―で知っていたはずなのに!!
砂煙で確認できなかったとは言えどもその可能性を考えもせず、警告も発せられなかった無能な自分を今すぐに殺してやりたいが今は其れよりもすべきことがある!!
「にぃ・・・おかえりなさいにぃ・・・帰ろう、皆に皆で帰ろう。」
ここは未だに敵地と変わらない。悪魔の目玉の気配をそこかしこに感じているティファは、兄の下にたどり着く前に大規模結界を張り巡らし、各隊の点呼をアバンが急がせそして帰途につく。
自分の声を聴いても顔を上げずに、キメラの遺骸を離さないポップ

をダイ達が両脇を支え一路隠し砦にたどり着く。
ベンガーナ・ロモスへの侵攻を防いだ隊は士気を大いに上げる中、パプニカの平原での若き魔法使いの惨状を目にした者達は素直に勝ち戦だとは喜べず、アバンの指揮の下負傷兵から城に入れて回復魔法ないしティファが買い付けてきた薬草での手当の準備を進めさせる。
そしてアバンの最重要事項はそこではない。
負傷兵に重篤者はおらず皆三人一組の体系を崩さず、そのおかげで一部まひや痺れは見られたが薬で賄える範疇であり、軽傷が多いのでそこは心配はしていない。
平時においてもモンスター達がごく稀にだが群れの頭数が多くなりすぎ群れ全体が飢えて自然狂暴化するスタンピードでこれよりも深刻な重傷者を出すこともあり、それに比べれば何という事はない。
一番の問題は異界のポップが、まさか―あれしきの事―で心砕かれるとは予想外であった。
ポップの話では魔界のモンスター達相手には自分達と変わらない姿勢で立ち向かっていたが、こと地上のモンスター達への攻撃時には顔は強張りそして・・・キメラ数羽を斬った瞬間に、異界のポップは―全て―が崩れたのだと。
誤算だった・・・まさか異界のポップがそこまで地上のモンスター達に心を寄せていたとは・神算鬼謀とまで言われたアバンをしても予想しえなかった。
何故ならば地上のモンスター達は魔界からの勢力が進攻してくるたびに狂暴化してしまう悲しい一面があり、だからこそ人間から忌まれ怖れられそして平和な世になっても怖れの対象とされるのだ。
だからこそ大戦を終わらせてきた彼であれば、数年というブランクはあれどもダイ達のサポートをこなしつつ、的確な指示を出しながら戦場において若き勇者と魔法使いに自分の持っている戦いの知識を実践で教えてくれるとアバンは見込んでいたのだが・・・
「にぃ・・・・眠い？後の事はティファがしておく・・・・―この子―を

この筒の中に入れてあげよう?筒なら腐敗しない・・・戦いが終わったら景色のいい所にティファとにいで埋めてあげよう?」
「ん・・・・そうだな・・・そうしてやろう・・・」
砦に辿り着いたアバン達はまず真っ先に負傷兵の手当てに動いた時、ティファは真っ先に兄の心の手当てを優先させた。
ざっと見た限り自分の手がいる程の重傷者はいないのを見て取り、アバンとダイ達には理を入れ、兄をここ二日間自分達が寝ていた部屋に引っ張った。
目に力はなく、自分に引っ張られてようやく歩く兄をティファは情けない兄だとは欠片も思わない。
兄は、自分の持てる力全てを使って戦場から逃げ出すことなく戦い抜いた偉大な兄なのだから・・・・心を砕いても若き勇者達の為に。
そして部屋につきすぐに兄を寝台に挙げて背中に二人分の枕を入れて上体を起こし、先ずはキメラの遺骸を受け取り筒に入れた。
―この世界の大戦が終わった後に―ともに埋めに行こうという妹に、ポップの強張った表情が自然と緩み、そして誰が何を言ってきても離さなかった遺骸を引き渡す。
どこにいても優しい妹の心が嬉しく、そして賢く諭い妹ならば戦場で何があったのかを察せども、直接見せなくて済んだ事に安堵して。

「先生!!ポップさん大丈夫なの??!!」
「どうしよう・・・俺達がもっと強ければあの人が戦場に出なくてよかったのによ・・」
間近で青年ポップの心が砕ける様を見たダイとポップは居ても立っても居られないありさまで師を頼る。
彼等には青年ポップの心がどうしてあそこまで傷ついたのかがそもそも分からない。同じような魔界のモンスター達相手の時は普通だったのに・・・
「ダイ、ポップ・・・少しそっとしておいてあげましょう。」
「・・・・それでいいのかアバン?」
「ヒュンケル・・・」

回復呪文が使えるマァムと共に負傷兵を運ぶのを手伝い、マァムは手当てに残り、自分は運ぶのにひと段落が付いた頃に起こったアバンと弟弟子達のやり取りを黙って見ていたヒュンケルが、珍しく口を挟んだ。

どうしても師に対しての罪悪感から素直になれず、遠巻きに見ていたヒュンケルだったがあの青年ポップの事が気がかりで口を挟んだ。

しかしアバンの言葉に変わりはなかった。

「元々彼を、そしてチウ君を戦場に出す気はなかったのです。―帰れるその時―まで私達の手伝いをしていただけただけでも僥倖だったのです。」

そのおかげでたった三日間という短い期間でダイの折れた心は折れる以前よりも強くなり、ポップ達も二日間の彼の特訓で格段に動きが良くなっていた。

そしてお調子者の一面をのぞかせる彼の存在が、殺伐とした砦の雰囲気を明るくもしてくれていたのだ。

地上のモンスター達を相手に出来ないのであればそれでも構わない・・・そもそも彼等をほぼ無傷であちらの世界に返す予定が・・・己の見積もり甘さで彼に要らぬ傷をつけたのだ！

自分が強固に固辞していれば、あの子供ならば引き下がったはずなのに・・・期待をしてしまった・・・縋ってしまった己をアバン自身が許せなかった!!

「残虐な死神の目にもとまってしまったのです・・・ヒュンケル、私は貴方達同様に彼等を守りたい・・・分かってください・・」

なまじな回復をさせて戦場に出してまた傷つき、最悪は死神の大鎌が彼を捉えないとも限らない。

残虐を好み、向こうのチウの純粋な心を傷つけ涙を流す様に悦んだキルバーンに、異界のポップが目をつけられてしまったのであれば・・・心の回復はここではさせず、戦場に行かせずにに迎えを待たせた方がいいという非情なる決断をアバンは下したのだ。

最悪は自分の首を落とし前として、迎えに来るであろう者達に渡す事を視野に入れているアバンは、叶う事ならば大戦が終結するまで

待ってはくれまいかと算段をしている。
彼等を愛しているという者達が来るその時まで、自分の何もかもを引き換えにしてでも守り抜くのだと、言葉には出さずとも決意を表情に浮かべているアバンにヒュンケルは師の覚悟を受け取りそうかと一言言い放ち頷いてその場を立ち去った。
妹弟子達の手当てを受けた負傷兵達を今度は各部屋に行くのを手伝うべく、青年ポップの事で胸を痛めて泣いている弟弟子達を師に託して。

「以上の事により、異界のポップを戦場の立たせることをしないと提言しますが、皆さんはどう思いますか？」
青年ポップと共に部屋にいるティファと、獣王遊撃隊と共に今日の出来事の反省会をしている異界のチウを抜いて、主だった者達大広間に再び集め、フローラが臨席する中で成されたアバンの提言に、おおよその戦士達は驚きを隠せなかった。
「しかしアバン！彼の魔法使い殿はこの大戦と同じ戦いを終えられたのだろう??!!」
「そうだ！実力も一級品で敵を倒す為の知識は我ら以上なのだぞ!!」
何があっても三人一組を崩すなとはあの異界の魔法使いのこの二日間での特訓での教えであり、互いに背中を庇い合い二人が地上をもう一人が上空を警戒することで死角を無くす事で生存率を高め合うのだと教わった彼等にとっては、まさしく死者どころか重傷者を出さなかった知恵を授けてくれたポップが、―たかだかキメラ数羽―の為に心が壊れかけているとは信じがたかった。
異界の魔法使いの教えは理論や机上の空論では決してなかった。実際の戦場を多く潜り抜けてきた経験に裏打ちをされたものであったのを、ここにいる戦士達が一番肌で感じている。
彼は数多の死線をここにいる若き勇者達以上に潜り抜けてきた、本物の戦士であるのだと。
「きっとその戦場に出来てた死神とやらが何かの悪しき呪法をかけられたに違いない！」

「アバン！お前確か破邪の洞窟の深部に潜り込んだんだろ？なにか呪いを解く方法はないのか？」
「戦場に出す云々はいいから彼の魔法使いの心を解き放てやってくれ！」
誰もが、純粋にポップを案じている。
彼等は一様に悪辣なる死神の魔の手によって、心を汚されたのだと信じている。
しかしアバンはその考えを否定した。
話で聞く限り、異界のポップの攻撃はキルバーンですらが反応できない程決まりかけ、運よく――一つ目の使い魔――の援護がなければ仕留めかけていた。
そんな中で呪法を使う暇はなかったはずだと。
しかし彼等は、この世界にの戦士達にとってはアバンの説明こそが納得がいかなかった。
「アバン・・・俺達はここにいるダイ殿が彼のモンスターアイランド・デルムリン島で育っていたのを承知している。だがそのダイ殿とても！敵になったからには地上・魔界の区別なく敵になったモンスター達を倒しているではないか!!」
そこが一番の問題であった。幼い頃からモンスター達を共にしてきたダイですらがきちんと戦っているというのに、歴戦の兵たる異界の魔法使いがそれに躓くとはとても思えなかったのを、彼等は悪意無き想いを口に出す。
「――たかが敵のモンスター――を倒したからと言って！なぜあの魔法使い殿の心が傷つくというのだ!!」
「そうだ・・・やはり魔界の恐るべき呪いが・・・」
その言葉に、ダイもヒュンケルも苦いものを感じるがそれでも賛同できる部分がある。
二人も共に魔物に育てられそして今は敵になった彼等をやむおえずとは言えこの手で倒している。
それは決して敵を倒したのだという心を明るくさせる者ではないが、だからと言って心に傷を負う程の事でもなかった。

彼等は狂暴化してしまい敵となってしまった。ならば倒さねばならないとその事に疑問を持ったことはなかった。
それをして諭いアバンやあのマトリフすらも見誤っている。この世界では、狂暴化したモンスター達は倒さねばならない事に、何故異界のポップの心が傷ついたのかを掴み切れていない・・・・そして妹のお陰で少し心が軽くなり、心配をかけたと詫びに来た時彼等の言葉を聞いた異界のポップがその言葉に怒りを感じて大広間に怒鳴り込もうとしたのを、反省会を終わらせ偶然大広間に出向いた―チウ達―が必死に引っ張り中庭に連れ去った事を。
「放せ!!放せよチウ!!お前達二人してなにすんだよ!!」
中庭についたチウ達は、暴れようとするポップを持ち前の怪力で押さえつけている。
今放せばポップは怒りに任せて大広間で何を言い出すか分かったものではない。
自分たちの耳にも入った言葉がポップの怒りに火をつけてしまった事は承知しているが、それでも尋ねた。
「ポップ・・・・そんなに何を怒ってるの?」
静かなチウの言葉に、ポップの頭にかっと血が上った。
「ふざけんなよ!!あんな・・・たかが敵のモンスターってあいつ等は言ったんだぞ!!あいつ等は・・・あの地上のモンスター達は・・・好きで暴れたくなかったのに!!」
異界のポップの言葉に、この世界のチウは目を丸くする。敵になってしまった彼等に同情しているのかと、頭が少しおかしいのではないのかとすら思った。
同族同士だとて縄張り争いで争うのが自分達であり、そもそもモンスター達を気に掛ける人間は時折いるがそれは平時での気まぐれか余程優しいか馬鹿なのかのどれかであり、基本はあんなものであると、チウ自身が一番知っている。
そしてそれは異界のチウも良く知っている。それは大戦前から、そして大戦後にも味あわされたあの事件以降も、ポップよりも世界を飛び回っているチウだからこそ知っていた。

それは言い辛い事ではあるが、チウは意を決して話始めた。
「ポップ、―僕達―モンスターに対する世間の目はあんなものなんだよ。いつ暴れるか分からない不気味なものなんだよ。」
その言葉に、ポップは頭を鈍器で殴られる思いがした。
チウが、何を言っているのかすらが理解できなかった。
確かにティファが目を覚ます前にロモスでチウをモンスターだからと侮り、言葉でなぶりものにした馬鹿達がいた。それは宮廷の腐った世界での出来事だとポップは思っていた。
世界ではモンスター達は穏やかに暮らし、現にテラン・パプニカの海岸近くでは人とモンスター達が近くで暮らしていても互いに危害を加え合う事がないのをポップは知っている。
そして・・・デルムリン島では大魔王の誕生日を祝った浜辺での鍋パーティーでは、多くの島のモンスター達も共に楽しんで・・・笑い合っていたのに・・・
「ポップ・・・」
ポップの考えを何と無しに分かったチウは、言葉を続ける。
「僕達獣王遊撃隊が、ゴメスさん達と一緒に時折起っちゃうスタンピードを退治しているのは知っているよね？」
「ああ・・・いっつもお前達だけにやらせて・・」
「それは良いんだよ。ポップにはポップがしなければいけない事があるけれども今はそこじゃないんだ。
山奥や都市部から離れたところではもう―僕等―に対しての警戒心が芽吹いているんだ・・」
「・・・な・・に？」
「僕らモンスター達は矢張り怖い物だって・・」
スタンピードや災害救助に駆け付けても、近頃は感謝されるのは人間のゴメス達であり、酷い所ではあれ等も今の内に退治した方がよいのではとコッソリと訳知り顔で言ったものを、ゴメスが怒りでその者を殴り飛ばし、フォブスター達がその者の村の長に、ゴメスの行為が正当であると申し立てる騒ぎが二回ほどあったのだ。
人は矢張り怖いのだ、訳も分からず暴れるモンスター達を。

腹がすいたが為に自然狂暴化してしまう事、頭数を減らせば落ち着く事、産卵期を、縄張りを、えさの保存場所だと知らないから・・・識ろうともしないから・・・自分達の立ち位置はこのような者だと、異界のチウは儚く笑ってポップに告げるのを、この世界のチウは何を当たり前の事を話しているのだという表情に、ポップは堪らなくなった！

「ふざけんなよ!!!!」

ポップは万力を以てチウ達の拘束を引きはがしそして二人のチウを胸に抱きしめそして叫びあげた。

自分は今まで知らなかった・・・・地上のモンスター達が置かれつつある現状を・・その現状に対する怒りと、知らなかったことに対する無知なる自分が憎くて。

「お前達だって生きているのに!!この大地で共に生きている同じ生き物のお前達が!!そんな扱いを受けているのが当たり前でいいわけがねぇじゃないかよ!!!」

たった数年・・・・・それだけで魔界の惨状を知り救いたいと願う者が多かった地上の人達に芽生えた・・あるいは甦った考えに、ポップは怒りを覚える。

「飲んで食って笑って騒いで!!!俺達と何も変わらないじゃねぇかよ!!お前達と俺達と何が違うってんだよ!!!」

優しい優しその怒りに、この世界のチウはポップの本気を知って驚きながらも、それが嫌ではないと抱きしめ返す。自分を暗い世界から引き揚げてくれた老師様とマァム・ダイ・ポップ・ヒュンケル、そして自分を認めて獣王の笛を託してくれたクロコダイン以外にも自分を案じてくれる者がいるのを知って嬉しくて。

そして異界のチウは悲しくなる。この優しい考えはきっと、ポップ達の死後には消えてしまう事を感じているから・・・・たった数年で忘れ去られていく、優しい心が朽ちていく様を見せつけられているチウは、どうかこれ以上この優しいポップ達を傷つけないでと祈りを込める。

自分達の世界はあまりにも幸せだったのだと思い知る事がこれ以上ない事を願って

いしの積まれる世界：矜恃

ガンガンガン!!!

ポップが中庭でチウ達から辛い現実を教えられているその時、大広間は未だに青年ポップを案じて今後どうしてあげるべきか、戦場には出さずに特訓だけでも手伝ってもらうべきか、それともこのままそっとしておくべきなのかで意見が割れてる。

アバンとしてはそっとしておく方であるが、ダイ達としては矢張り実戦から得られている戦い方をもっと教わりたいと思っている。

それに体を動かした方が余計な事は考えなくて済むのではなかろうかという体育会系のちょっとアレな思考が割と多く、ノヴァとしても、自国が攻め滅ばされて鬱々として来た時矢張りじっとしているよりも何かをしていた方が気が紛れ、もう数ヶ月もたったのだと驚いた経験から、特訓でないにしても何かしらをしていた方がいいという意見に、父であるバウスンやカール騎士達にも頷く者達がいる中突如として金盥が叩かれた音が大広間に満ち溢れた。

その音源はどこからとみてみれば、入口に空の小鍋とお玉を持ったティファがいた。

見れば彼女所の後ろにはごっくんとむっくんとそして似たような式達が夕食のパンとスープを持って待機している。

「お話合いが終わりそうにもないのでとりあえずご飯にしませんか？」

空腹だと碌な事考えないので温かいもの食べてくださいというティファに、ダイはどうしても聞きたい事があるとティファに迫った。

「お姉ちゃん!!ポップさん大丈夫なの!!??ポップさん一体どうしちゃったのさ!!」

「ティファさん・・・・」

ダイの真っ直ぐな問いに、アバンはティファが答えてくれるとは思っていない。

ティファは常々自分達の行動には何かしらの対価を誰かが何かが支払う可能性があると言っている。
奇跡の万能薬はマザードラゴンの肉体と、助けられたバランは己の竜の騎士としての力全てとダイの絆を持っていかれた事からそれが伺い知れる。
情報は値千金と言われている。この場合は比喩では決してなく、だからこそティファは力強い言葉や助言はくれどもあちらの具体的な話や経験に基づいた話が一切なかった。
毎食の用意もフローラがきちんとお金を払い、ティファ達は砦で過ごせるというギブアンドテークが成立しているから大丈夫だと言われている。
そしてポップの特訓も、己の身を守る為に周囲を鍛えているのだからそちらもそれで釣り合いが取れているらしい。
しかしダイのこの問いには、おそらく青年ポップが地上のモンスターを倒したからと言って心が砕けかけたのは、向こうでどのような戦い方をしていたからだという具体的な情報を開示しなければならないだろう。
そうでなければ説明がつかない程、自分達にとって青年ポップのあの有り様が分からない。
もしかしたらダイの様に幼い頃から共に育ったモンスターが狂暴化し己の手で倒したなどのトラウマがあり、魔法使いとして今日の様に攻撃の支援サポートを専らとして直接手に掛けたことが無いのではないかとさえもアバンは考えている。
しかしそれはティファからの情報を得なければならず、対価が発生するのではないかという危惧から聞けず、ダイがどれ程青年ポップを案じようともティファも困った顔をして申し訳ないというのだろうと見ていたが
「ダイ君、皆さんも、兄は確かに今苦しんでいます。しかし兄は、兄達は様々な困難だけではなく今日の様に己の心を砕くほどの苦悩を何度も経験してきて、その度に立ち上がって来たのです。
兄は優しいですが決して弱くありません。

ですからほんの少しだけ待ってあげてください。」
自分のシャツを懸命に握りしめて兄の様子を教えて欲しいというダイの手をティファはそっと握りしめて大広間にいる全員に優しく語りかける。
そしてティファの言葉は続いた。
「皆さんはどうして兄がキメラ数羽を倒したからと言って心に傷がついたのか不思議でしょう。」
「う・・・うん、俺も・・・デルムリン島のモンスターのみんなは友達だけど・・・戦いなんだもん。」
ダイの悲しそうにしながらも割り切っている考えに、ティファは悲しそうに笑うのをダイも大広間にいる戦士達も不思議になった。
戦いをしているのが悲しいのだろうかと思ったが、次の言葉は途轍もない返答であった。
「私達の世界の地上のモンスター達は、少なくとも陸のモンスター達は狂暴化をしなかったのです。
私達が戦い倒したモンスター達は全てが魔界のモンスター達ないし戦士達だけだったのです。」
その答えに大広間にどよめきが奔った！
それは無理もない話で、魔界側の侵攻の度に地上のモンスター達は魔界の邪気や邪悪な気配によって狂暴化をするというのは不問律に近く、例外は破邪系のマホカトールやミナカトールと言った結界を施した中のモンスター達が浄化され狂暴化がなくなった時のみである。
「詳しい事は本当に対価が発生しますのでこれ以上は言えない事を申し訳なく思います。」
その奇跡のような現象がどのような方法で起こったのかを尋ねようとしたアバン・マトリフ達を敬遠するように、これ以上は言えないというティファの言葉と詫びに、一同の口が閉ざされるのを見すましティファの言葉は続いた。
「皆さんも想像してみてください。例えば戦場で魔族との戦士同士の戦いの時、相手が自分が殺されそうだからと従卒で戦場に出てきた魔族の子供を盾代わりにされ斬り殺したとしたら・・・その魔族の子供

に闘う術があろうとも無理やり連れてこられた幼い子供であったなら・・・はたして皆さんも敵を倒したのだと胸を張れるでしょうか？」
物凄い具体的なティファの問いに対して全員が真剣に考えそして・・・呻き声がそこかしこで上がった。
確かに魔族の戦士との戦いに否やはなく、倒せれば何の問題も無い。
しかし魔族だから行って、敵対心の無い従卒で連れてこられた幼い魔族の子供を身代わりとして斬り殺してしまっては・・・だから・・・
「俺・・・俺だったらやだ！だってその子は闘いに来たんじゃないんでしょ？敵って言えないじゃないか!!!」
誰もが思いながらも、それでも魔族を倒したのだからと苦い思いをしながら否やが癒えない大人達を代弁するようにダイが叫んだ。
敵は倒す。それでも・・・魔族だからとって敵になっていない子供を斬るなんて嫌だと、泣きそうになりながら少しだけ青年ポップの心が分かった気がした。
「つまりポップさんにとっては、地上のモンスター達ははそう言う括りになるって事っすかティファさん？」
ティファのたとえ話から青年ポップの心の一端を割り出した少年ポップの言葉にティファは頷く。
「その通りです。あちらの世界では兄と地上のモンスター達は仲が良く、デルムリン島はもとより、テラン・パプニカの海岸付近・ロモスの王都近くの森などで人々と穏やかに過ごしているところがあるのです。」
あちらの世界の・・・なんという夢物語の世界かとカール騎士達はおろか、アバンとマトリフまでもが何かの物語でも聞かせられているのだろうかと呆然とした。
まるで幸せしか存在しない子供に聞かせるお伽噺のようだと・・・
その反応は当然の事だとティファは受け止める。
自分が神々達が用意してくれた破魔の石を、大戦以前から世界各地においてきてからこその絡繰りであり、そもそもが自分という本来存在しない者の介入ありきなのだがそこまで教えるつもりはない。

たとえ―対価・代償の件―が多少なりともかたが付いたとはいえども、必要のない話だと。
伝えたいのはそこではない。
「兄は其れでも戻ってきます。どうか待ってあげてください。」
確信に満ちた言葉、青年ポップならばきっとたち直り戻ってくるとティファは頭をダイ達に向けて深々と下げる。
何故なら兄ポップが戦う理由は、―誰をも見捨てない―事なのだから。
ティファの信じる心に答える様に、ティファの頭に大きな手が優しく置かれる。
「ありがとうなティファ、情けねぇ兄ちゃんの姿見せちまって。」
優しい手つきと同じくらいの優しい声の主は、自分の晒した醜態にも動じずに自分を信じ切ってくれた妹に感謝の言葉を述べた後、様々な事に驚いているダイ達に向かって妹と同じく頭を下げた。
「俺のせいで折角あの外道死神を叩ける機会をふいにして申し訳ない。己の未熟だと恥じ入るばかりです。」
それはとても真摯で、先程まで腑抜けていたものとは思えないほどの強い声音に、青年ポップの心境の変化はどうした事だとアバンですらが図りかねているのを、ポップがチウ達を抱きしめ泣きながらも答えを出してきた。
その携えてきた言葉を頭を挙げながら話し始めた。
「俺達の世界では地上のモンスター達は少なくとも陸では狂暴化をしなかったので、俺は地上のモンスター達を倒したことが無いんです。」
先程のティファと同じ事を言う青年ポップの言葉に、ティファの言葉は真実であったのかと驚く中、青年ポップは顔をしっかりと上げて決意を述べる。
「それでも俺は、この世界にいる限り闘う事を辞めたくない。俺がうじうじしてたって、泣いたって少年勇者達が戦わなければならない事に変わりはないんだ。」
温かいチウ達の体温を感じながら、自分が沈んだとてチウ達は今日の様に戦場で誰かを助ける為に闘い、まして友達どころか家族にも等

しい地上のモンスター達を少年ダイが倒しているというのに自分だけが安全な場所でめそめそしていたくはない。
懸命に戦い抜いてきた少年ダイ達を見捨てないと決めたのは自分自身なのだから。
「俺に出来る事を成し遂げたい。ここから向こうの世界に帰った後も胸を張って生きていく為にも、其れよりもこいつ等を、こいつ等を支えて戦っているあんた達を見捨てたくなんて絶対にない!!誰かに酷い事を押し付けてのうのうと生きていくなんて俺はごめんなんだ・・・・逃げた先にはきっと何もなくなっちまう・・・皆優しいから俺のせいじゃないって言ってくれても俺自身が知ってる・・・逃げた事を、戦える力があるのに手前えよりも小さな子供に何もかもを押し付けた事を・・・・そんなの絶対にご免だなんだ・・」
少しずつ、泣きそうになるポップの言葉に特に少年ダイとポップの胸の内を揺さぶる。
ポップはロモスにおいてクロコダインの力にビビッて仲間を見捨てかけた。
しかし偽勇者の一行だと馬鹿にした魔法使いまぞっほの一括に勇気を貰って青年ポップと似た様に答えを出して戦場に舞い戻った。
俺にだってプライドってもんがあるんだ・・仲間を見捨てってぬくぬくと生きていくなんて・・・死ぬよりかっこ悪りィやって・・そう思っただけさ
あの時の苦悩を、今この凄くて何でもできると思っていた青年ポップは大戦を戦い抜いき平和を守って来た魔法使いとしての矜持を以て、乗り越えてきたのだ。
それはダイも同じ事を感じ取り、青年ポップに近づき抱き着いた。
「ポップさん・・・・俺も・・・俺達も頑張る・・・だから無理しないでね?戦えなかったら言ってくれていいんだから・・・俺のポップも、俺に戦いが無理でもそれでもいいって言ってくれたから・・・・」
「ダイ・・」
「ポップ殿・・・・我等を鍛えてくださるだけで十分です!」
「そうです!異界の事情がここと違うと分かりました・・・・俄かには

信じがたいですが・・・」
「無理だけはなさらないでください!!」
「戦いはなにも勇者達だけではございません!!我等もいるのです!!!」
「貴方達だけに闘えと言うものはここにはおりませんぞ!!!!」
魔法使いの携えてきた答えに、戦士達の胸を熱くさせた。
確かに向こうはあり得ない程の奇跡が起きた場所かは知らない。それでもその現状に甘えず、己だけが守られることを潔しとしなかった、青年とは言えまだまだ大人達から見れば子供ともいえるポップの答えはそれほどまでに重大であった。
それは偏に、異界から攫われてきたからと言って愚痴一つ弱音一つ吐く事は無く、それどころか己達を鍛えてくれた健気な人であったから。それがあったればこそたったの三日という短い時間しか過ごしていない彼等に、ポップは信頼を得て、そしてかれもまた仲間なのだと全員が受け入れたのだ。
その事を、情けない自分を励ましてくれる砦の者達の心が嬉しくて、ポップの顔は次第に歪み涙が零れそうなのをぐっとこらえて宣言する。
「ご迷惑をおかけしました!!今日の食事配りは俺が全部します!!!」
その言葉に、青年ポップが出した答えだとは言え受け入れてよいのだろうかと迷っていたアバンの背中を、マトリフが強く叩き、何をするのだと振り返ったアバンに対してマトリフは二カリと笑った。
あいつの出した答えを尊重してやれ、何があっても俺達はバックアップしてやろうぜという無言の言葉に、アバンは溜息をつきながら目の前の光景を見守る。
それは青年ポップを囲んでダイとポップが抱き着き、マァムとメルルとレオナは例の可愛いエプロンを取り出し手伝う気満々であり、ヒュンケルとクロコダインもテキパキと支度を整える中で、青年ポップの頭を大人達が頭をわしゃわしゃとしている光景を目に焼き付けんとしているアバン達は気が付か無かった、否!先程ま頭の中に持っていたあるティファの言葉に生じた疑念が抜けてしまった。
向こうの世界の話には対価が必要だったのではないかという事を。

それを見ているティファは―色々と間に合った―とほっとする。
本当はー詳しい事ーでなくとも、向こうの地上のモンスター達が凶暴化をしなかったというのは割と重要情報であり対価がいるのだが、その対価を気にしなくても良い様にする為に兄ポップがちょっと出てくると言って部屋を後にした後、ティファもすぐに―外―に出た。
式達に夕飯の支度をきちんとさせる様にしてから。
それはこの世界のテランの湖の中にある竜の騎士だけが入れるという神殿に行き、試してみれば入れたので中央に安置されている水晶に話しかけた。
一度はバランによって神殿が崩されたような描写が原作であったので、大戦後目を覚ましたティファは一度神殿を訪れてみれば復元されていたのでもしやこちらもと思い来てみればビンゴであった。
そして水晶に自分の事を知っているかと問えば、マザードラゴンの思念体と繋がっているので知っているというので好都合だとマザードラゴンを呼び出し、この世界で自分の―動ける範囲―を増やしたいと話、其の為の条件付けを申し出たのだ。
敵を倒すにも、向こうの情報を開示するにも対価を気にしていては動けないのでは―自分の存在意義―に意味がない。
「私は向こうの世界の生命の運命の流れを弄り過ぎたと代償を払わされましたが・・よくよく考えてみれば厳密には違うのでしょうね・・」
ティファの一切を向こうのマザードラゴンから聞かされているこの世界のマザードラゴンは真剣にティファの考えに耳を傾ける。
向こうでティファの生命と魂が、戦いの終わりに持っていかれたのも当然知っている。
だが対価・代償の神マリシュースが説明した内容にティファは疑問を持ってずっと考えて、そういう事に詳しそうなヴェルザーに問うてみた事がある。
「向こうの世界で大魔王達が落とした柱によって、傷ついた大地と龍脈の修復に大量のエネルギーが必要だった。それはその時死ぬはずの生命体か、六大精霊王様たちと大勢の精霊達が贖う筈だったエネルギーを、私のせいで得られなかったせいもありますよね。」

きっとそういう理不尽にも思える程のエネルギーの循環の話よりも、人々の生命の営みを阻害したと言った方がお前が傷つくだろうとから、あの悪神のやりそうなことだとは、自分の考えた事をヴェルザーに言ってみたティファに対しての、ヴェルザーの答えであった。

人の、生命の誕生と死はほんの少しで変わることなぞざらにあり、であるならばその営みの邪魔をしたと言って、世界を繋げたエネルギーに加えて、ー大魔王の魂ーまでも取るのは少々取りすぎであるだろうと、あの悪神に人生を弄ばれたようなヴェルザーだからこその正確な感想であった。

それが正しいのであれば

「この世界にはまだ柱は一つも落とされておらず、大地も天地間のエネルギーを循環させる役割を担っている龍脈も傷一つないでしょう。」

それはこの世界が辿る筈だった運命によって消費するはずだったエネルギーが余剰として出るはず、それを自分によこせと。

どこにいようとも—勇者一行の料理人—は、勇者達を最大最終の敵の下まで送り届ける為に—何をしても仲間を守り抜く—ことが第一であるのだから。

ティファもまた兄と同じく己の矜持を掲げて決断を下した。

柱を最悪は一本で止める事、それ以上は自分の行動で支払う対価・代償を自らの寿命で賄うと、それはいけない、やめてほしいと必死に懇願と説得してくるマザードラゴンの言葉を蹴り飛ばした。

元は貴女達が始めた事なのだ、最後まで黙って見届けろと言葉で押し潰したティファは、この世界の命運と己の生命を紐づけにしたのだ。

それをティファの中で見ていたクロファは拍手喝采を持って主人格を誉めてやる。

それでこそだと。

己自身を平然と賭けの対象としても信念を貫くことこそがー自分達ーの存在意義なのだから

・・・・其の事に後悔はないのだが・・・・明日には来る救出隊に何と言おうと苦悩しながらティファは兄を手伝いスープをよそう。

食事の準備も料理人の仕事なのだから。

意志の積まれる世界・・・・・きた・・・きた？

少年勇者ダイが立ち直った。
戦場において心を砕かれたと思った異界の青年ポップもまた力強く立ち直った。
そして料理人ティファもまた兄達の手助けを十全にするべくこの世界の命運と己の生命を紐づけにしたおかげでこれまで以上の活動範囲や選択肢が増えた。
今まで以上にこの世界での自由度が高くなったことは、内訳を鑑みてこの世界の者達はおろか兄とチウにも内密である・・・内容知られた日には即刻破棄しなければ自分の身を壊すぞと言いかねない兄ポップには絶対に秘密である。
自分の寿命賭けた分、リスクもあるがリターンもある。
敵からの柱攻撃が無いので定まりで決まっていた失われるべきエネルギーをティファが受け取っている事で、これまで以上に式を作り出して周囲の警戒はおろか主要都市などが襲われようともすぐに式を陣としてラック＝バイ＝ラックで隠し砦から直接戦士達を送り出すことが出来る。
いつでも来い魔王軍。
・・・そうティファが息巻いていたが、その梯子はあっさりと外された。
青年ポップが戦場で心が傷つきそれでも立ち直った次の日に、その魔王軍から宣戦布告がなされた。
それも各国の王城及び目ぼしい都市部の鏡に通信をしてきたのだ。
しかも内容がとてつもなくすさまじくご丁寧に地上の文字で書かれていた。
その内容があまりにも非道で外道で低俗であったのでチウの目は塞いだ。
通信発信者は間違いなく―あいつ―だと一目で伺い知れた。
―グットモーニングどこかに隠れ潜んでいる勇者様達。
此方は君達のかくれんぼうに付き合うのに少々飽きてきたので燻

り出させてもらうよ。
内容はもしも以下の者達が今から指定する日時の場所に来なければ―例の柱―を世界のどこかに落としていくって言うとっても簡単な内容だ。
君達が自分可愛さに隠れていれば隠れている程無辜の民や―地上のモンスター達―も諸共に消し飛んでいく。
それは―奇麗な子供達―には嫌でしょう？だからきちんと戦場に出ておいでね？
そして君達のうちの誰かが死んだ時もやはり柱は落としていくから頑張って勝たないといけないよ？
そんな訳で地上に住まう羽虫のような存在の人間さん達、精々勇者様達が勝てる事をお祈りしているといいよ。
勇者様達のうちの誰か一人でも負けたら巨大な柱が君たちの頭上に落ちてきて、周囲数キロは更地になるんだから～♪
でも勇者様達は一度僕達の主様である大魔王バーン様に負けてそれ以来隠れているから、君たち見捨てられてる可能性もある。
その時はお悔やみを申し上げておこう。

大魔王バーンの死神より―

そんなふざけたような罠と謀略満載で屑っぷりが発揮された通信内容の下に書き記されていたのは、勇者ダイ・魔法使いポップ・武闘家マァム・戦士ヒュンケル・戦士クロコダイン・そして・・・異界の三人のうちの二人であった。
ちなみにアバンの方は前回戦場に出た時モシャスをして一般兵に化けて戦っていたのでまだ存在は認知されておらず、ノヴァもそこまでの実力は無いとみなされているのか使命はされず、本人のプライドが痛く傷ついたがどのみち戦場に行くつもりなので戦場でこいつ叩き切ろう決意した。
「・・・異界の内の三人のうち二人って言うところがいやらしいですね・・・」
様々な事を脳内で処理し終えたティファがぽつりと呟く。

その文言の後に三人揃ってきた場合も柱を落とすと脅してきている。
おそらく自分達の精神的弱点を見抜かれ、残ったうちの一人が罪悪感を抱くのを高みの見物をし、あるいは戦場に出てきた二人を仕留めるなり捕えて異界組の心を砕くのが狙いだろう。
此方のキルバーンは本当にどぐされ外道だと確信させられる内容であったが、罠だと分かっていても戦場に出なければならない内容でもあった。
行かなければ柱が落とされる・・・もしかしたら行っても柱は落とされる可能性が高いがティファはそちらの対処は出来そうですとアバン達に申し出て、問題は敵の罠をどう食い破り戦場を勝つかの方が大事であるとすぐさま大広間で軍議がなされた。
幸い戦場に出るのは一時間後である・・・時間を与えてくる意味が分からないとノヴァを始めとしてバウスンもアキームすらも首をひねり、マトリフも敵を弄ぶにしても時間を与えすぎであると判断しかねるのを、地上消滅の手順を知っているティファがその問いに対する答えを持っていた。
「おそらく柱が落とされるのは魔の力が増幅される時間帯である逢魔が時でしょう。
此方が勝とうが負けようが敵は柱をどこかしらに落とすつもりで、敵はフェアを装って罠満載です。」
此方の敗北を知らせて人々の心に不安を植え付け、隠れている自分達に不信感を芽生えさせ、正常な判断を喪わせる。
判断が失われれば仮に自分が柱の落ち付場所を各王家に伝えてその場所とそこから範囲数キロの人々を逃がそうとしても、不安に駆られ王家と勇者達に不信感を持った民衆がすんなりと受け入れる可能性がぐんと低くなる。
「あちらは人々がどうなろうと構わないでしょうが・・・こちらは・・ダイ君、ポップ兄達耐えられますか?」
柱一つが都市部に落ちれば一気に数千人ともっと多くの地上のモンスター達が死滅する事に。

きっとその時の映像を何かに記録をさせて鏡通信と同じように自分達と世界中に見せつけてくるというのがティファの考えてであった。
その時は指定された二つの戦場で勝ったとしても、士気なぞは吹き飛び精神的ダメージが計り知れない。
―原作―では話だけで伝えられただけだからこそ勇者達の精神が保たれたのだろうが、具体的な映像を見て耐えられかというと、否であろう。
昨日の戦いで青年ポップが晒してしまった弱点を嬲って楽しんでいるのが伺い知れる。
他者の絶望顔が何よりも好きだと言っていたからには異界のチウ同様キルバーンの獲物認定にされたのはまず間違いない。
そして晒された弱点をガッツリと利用してくる本物の外道っぷりには、ティファの中で見ているクロファもなんだこのどぐされ外道はと辟易としたほどであった。
柱の落ちる場所はそれぞれの場所の王家に通達はしていない。
人々は混乱をすると必ず流言飛語が生まれる。
不安から暴動に発展することをアバン達は怖れ通達を見送ったのだが・・・今更通達したとしてどうして最初の親書で知らせなかったのだという不信が芽生える。
身動きが封ぜられた中で何が出来るのかを全員が必死に考えそしてその三十分後にフローラの出陣を宣言した。
今回はダイの鞘のヴァージョンアップは間に合わなかったがマァムの分が間に合わせたロン・ベルクからも、帰って来いよという言葉を受け取り戦士達は隠し砦かティファの陣で戦場に飛ばされた。
「・・・・ティファさん・・貴女は残るのですね。」
異界からの出陣を果たしたのはポップとチウ、それはティファからの発案であり、フローラの問いに、ティファは静かな笑みを浮かべて答えた。
「先ほども言った通り、柱の地点と其の広範囲の人々を逃がせるようにします。」

策があるので残るというティファに、青年ポップとチウは案じながら戦場に向かった。
敵が指定してきたのは昨日と同じ、パプニカの平原とそしてもう一方はカールの平原。
これらを考えるに、落とされるのはおそらくロモスかリンガイア。
今回は此方の精神攻撃も兼ねているのであれば人のいるところを狙うはず。
無人のロロイの谷・バルジ島・オーザム・ベルナの森は省かれるのでどちらかであり、両方を逃がす算段を先程の大広間での軍議の間につけ終えている。
「女王陛下、メルルさん、レオナ姫、残っている皆さんにお伝えしたい事があります・・」
その算段を成功させる確立を上げるべく、ティファは己の秘密を隠し砦に残ったマトリフとポップの両親とレイラの母にも告げた。
彼等は一様に驚きを見せたが、それでもティファを受け入れた。
この数日ずっと見続けてきた少女を信じて。

「・・・・・いい天気っすね・・・・・」
「ポップさん・・」
「・・・・・いやぁ、これティファの策何でしょうけど―俺達―が沢山いるって可笑しな気分すね・・・」
戦場について少々遠い目をしている青年ポップに、アバンは声をかけづらい。
それは青年ポップの心情が分かるのと、策の為と両方があるからだ・・・・なんだこのバカげた作戦は・・さしものティファさん大好きチウも唖然としている。
「・・・・・ねぇミスト?僕バーン様に黒の核晶を抜かれたせいで視覚に異常きたしたみたい・・・」

「・・・・」
「なんであんなに奇麗な坊やと大ネズミ君が―沢山―いる訳？」
「・・・・・私が知るか・・」
「それもさ・・・どちらの戦場にも大勢いるってどうい事？ピロロ、僕の視覚情報は正しいかい？」
「・・・・キルバーンの視覚は間違ってないよ・・」
指定時間と同時に空から大勢の地上・魔界のモンスター達を降らせようと待機しているミストバーン・キルバーンとピロロも馬鹿げた戦場に唖然としている。
何故なら二つの戦場には―沢山の青年ポップと異界のチウ―がいるのだからしょうがない。
どちらにいる青年ポップとチウも生き生きとしていて周りを励まし周囲を警戒し、どれも寸分たがわぬ彼等に頭を痛めるなという方が無理であろう。
それは青年ポップとチウも一緒である。無茶苦茶なこの作戦は無論とんでもない娘ティファである・・・・ティファしかいない・・・
「式で大量のポップ兄とチウ君を作ります。そうすればあのどぐされ外道は混乱をして、平原に設置している罠をすぐには使えないでしょう。その間にポップ兄とポップさんで周りの地面を小型メドローアで掘り起こしてください。きっと罠がありますでしょうから。」
ダイヤシリーズという地面設置型の炎型の罠は、閉じ込められるのが多いので速攻潰させる。
しかしそれは単発なのをティファは知っている。だからこそ大勢のポップとチウを生み出した。
本物を見抜く前に罠を片付ける。戦士を片付ける為に罠を発動しても、青年ポップと少年ポップが無事であれば対処できると組み込んで。
そして時間になり、戦場の火蓋が切って落とされた。
パプニカの平原にミストバーンが魔界のモンスター達を引き連れて現れた。
ミストバーンの本命は―新たな肉体候補―のヒュンケルであり、生

きたまま捕獲すべく出てきたのだ。
ヒュンケルはミストバーンの出現に驚いたがすぐに精神を立て直し槍を構える。
パプニカの平原の戦力はヒュンケル・マァム・ポップ・ダイとノヴァとこの世界のチウが来た。
チウはノヴァと共に戦場の負傷兵を昨日のように助けるべく、遊撃隊の隊員達にもその事をきちんと伝えている。
しかし初めて見るミストバーンから溢れる威圧に、隊員達もそしてチウ自身もモンスターの本能が逃げろと告げている。
あれを相手にしては駄目だと震える尻尾を、チウは手に取りそして思いっきり噛みながら前を見据える。
自分は逃げないという不退転の決意を示した隊長に、パピィ達もまた覚悟を決める。
今日もまた負傷兵を助けて守り抜くのだと、ダイの肩からチウの肩に移ったゴメも決意した。

そして残りの地上側の戦力達は魔界のモンスターのみならずバーンの直轄地の戦士達が地上のモンスター達を迎え撃ちすぐさま乱戦となり、カール騎士・兵士達は三人一組を崩さず迎え撃つ。
式でどちらの戦場も始まった事を知った―銀の髪のティファ―は、自分の青い血で描いた法陣の中に入り膝立ちで手を軽く組祈りをさげる様に天を仰いで目を瞑り―世界のエネルギー―と繋がった。
その様子を、砦に残ったロン・ベルク以外の者達が固唾をのんで見守る。
ティファの策がうまくいくのを祈るように。

地上の人々は絶望と不安の渦中にいた。
自分達はずっと勇者達が優勢に大戦を進めてじきに終わるのではないだろうかと楽観視をしていた。
確かに各国とも攻め込まれ滅んだ国があるともうわさが流れたが若き勇者達がその魔王軍を次々と打ち取りそして人類側からの攻勢

を行うとつい半月前に触れが出されたからだ。
それは人々に希望を持たせようと世界会議で可決された事だがこれが今裏目に出てしまった。
攻勢は失敗し自分達を見捨てて逃げ回っているというのが大半の人々の印象であり、途方に暮れ絶望に沈みかけた時その声は響いた。
「諦めないでください地上の皆さん!!!」
凛とした声が、絶望の心に響いた。
「勇者達は今戦っています!愛すべき人々を守る為に!自分達の故郷を守る為に!!!この大戦を勝利した後変えるべき家を守る為に必死に闘っています!!!」
それは少女の声であった。
どこから声が響いているのだ、そして何故そんな事が断言できるのかと人々は訝しげに周りを見回せば、赤い血文字が浮かんでいた鏡が突然光だしそして血文字が消えて代わりに風景が映し出された!
そこには狂暴化した地上のモンスター達と、見た事もない化け物を相手に人間の兵士達が必死になって戦っている映像であった。
ティファは大量の式を作り出し、戦場全体を取り囲ませそしてその映像をロモスのポルトスの町と、リンガイアにまだ残っている人々を優先に流れるような仕組みを作り出した。
ティファの式はティファ自身が視覚共有をできるが目玉のような機能は無かった。
しかしこの世界のエネルギーを使う事で一時的に式の能力を拡大したのだ。
ティファの己の血で描いた法陣は、世界のエネルギーとダイレクトに繋がる為のものであり、ティファは懸命に呼びかける。
不安に駆られた人々の心に、勇者達が今必死に闘いこの地上を守ろうとしているのだと。
「怖れないでください!確かに勇者達は一度負けはしました。しかし彼等は決して逃げません!!!諦めません!!!この地上を蹂躙しようとしている魔王軍に打ち勝つまで彼等が戦いを辞める事は決してないのです!!

この映像はカール平原とパプニカ平原での今起こっている現実の出来事です！
敵からの宣戦布告に、彼の地には罠が仕掛けられていると分かってもそれでも行かないと行った戦士達はいませんでした！」
少女の言葉の通り、不意に剣戟が空中から現れようとも地面から火が吹こうとも少年と青年の魔法使い達が呪文をもって打ち破っている映像が流れる。
そして助けられた味方達は前だけを見据えて敵に打ち掛かっているではないか・・・勇者と思しき剣を持つ少年が、若き少女達が、青年達が戦っている・・・自分達を守る為に！
「この映像が流れているところは・・・敵が宣言してきた―もしも勇者達が負けた時柱を落とす―と言われたその場所なのです。」
少女の言葉と映像で心が落ち着いてきた人々の心に衝撃が走った！
それは無理もない事で、いきなり敵の大攻勢に晒されると言われ落ち着ける筈も無いのを、少女の声は続いた。
「実は魔王軍は始めからその地域に柱を落とす作戦があったのを、勇者側は掴み祖それに敵が焦りこのような作戦を立てたのです。
負けた勇者達の言葉なぞ聞くに値しないと誘導すべく！そして人々の心を不安で満たすための卑劣なる罠なのです!!
今映像を見てお分かりかと思います。沢山の狂暴化した地上のモンスター達が二つの戦場にいるのが見えるはずです。
モンスターといえども無限にいるはずもありませ!!昨日もベンガーナ・パプニカ・ロモス首都近郊で大規模な戦闘があり、勇者達がこれを人知れず撃退しました。
その時も大勢の地上のモンスター達を倒したのです！
敵は魔界のモンスターをすぐには用意できずその分を地上のモンスター達で補っているのです。
その為今ロモス近郊には数多いた狂暴化したモンスター達はおりません！そしてリンガイアの皆さん!!この―キメラの翼―を使って今すぐに逃げてください!!」

少女の言葉の後に、比較的破壊されていないリンガイアの大きな教会で身を寄せあって過ごし、そして鏡を見ている人々の前にキメラの翼が降って来た・・・すべてが神の導きであるかのように舞い散る翼を、一人の子供が恐る恐ると手を伸ばして受け取ってもそれは消えずに手に残り、道具屋をしていた男が見てみればそれは確かにキメラの翼であった。
「ベンガーナの首都近郊、テランは比較的安全です！足りなければもっと用意が出来ます！彼の地でなくとも他国に言った事のある方が人々を逃がしてあげてください!!
どこにいてもいずれは滅びるという絶望に囚われないで下さい!!負けないでほしいのです！人々が・・・・かぁ・・・ふ・・・・・築いて来た道を途絶えさせないでください・・・生きて・・・・笑って・・・・紡いで・・・・」
その祈るような言葉は最後まで言われる事なく声はそこで途切れたのを人々は不安そうにする中、声が上がった。
「・・・ママ・・・パパ、あそこで戦てるのは勇者様？」
子供の声に導かれるように鏡を見てみれば、映像は途切れてはいなかった。
そしてリンガイアでは沢山のキメラの翼がまた降って来た。
少女が言った通りに。
その映像に、キメラの翼に人々は半信半疑・・・否！それよりも低いが人々は少女の言葉に賭けてみる事にした。
座していても死が待つだけなのらば、動いて大切な人と自分を守る為に動く決意を。
がっは、、うぁぁぁ!!!!
「やめねぇか！お前は死にてぇのかよ!?違うだろ帰るんだろうがよ！」
「ティファさん!!もうやめなさい!!!!」
「それ以上したらあなたが死んじゃう!!」
「向こうの世界に帰るのでしょう!!もう・・・それ以上したら!!!」
法陣に張られた結界を、フローラ達が必死に叩き、痛みにのたうち

血を吐いても術の使用を辞めないティファに必死に呼びかける！
ティファは確かに世界のエネルギーと繋がっており、術の使用にエネルギーの枯渇の心配一切ない。
しかしそれを使用しているティファの肉体はまた別であった。
大量のエネルギーをその身に受け、そして数多の式の使用と映像を結ぶ事でティファの肉体自身が限界を迎え始め、肉体が引きちぎられる様な痛みの果てに内臓にまでダメージがいき吐血した時すぐさまマトリフは危険であると止めようとしたが、ティファのジ＝アザーズに阻まれた。
大魔王の魂までは言わなかったが、竜の騎士は竜と魔族の力と肉体、人間の心で構成されており自分は魔族の肉体寄りで真の力を振う時髪は銀色に、肌は雪花石膏のような白となり瞳は金になる事を明かした。
己の力を見せつけても、この後自分は兎も角兄達とこの後来る者達が不審がられないようにという思いは、砦に残った者達に確かに伝わりそしてティファ自身も術がうまくいくように激励を受け、ティファは泣き笑いの顔で頷きそして・・・自分の全てを振り絞っている。
戦場は混迷を極めている・・・・しかし・・・懐かしい気配がする。
それにもう少しで人々は逃げる準備が整う・・・・せめてそれ迄は映像だけでも繋げて希望を絶やさないであげたいと、血を吐き激痛に襲われ法陣の中でのたうちまわりながらも止まらないティファに、メルル達は泣きながら結界を叩き声をかけ続ける！
「ティファさん!!お願いですからやめて下さ!!!」
悲痛な声に、ティファは申し訳なく思う・・・しかし戦場の兄達はもっと過酷であった。
とうとう兄達に模した式達が食い破られ、チウと兄ポップがカール平原の方にいる事が知られてしまい、キルバーンが姿を現したのだ。
パプニカの平原の方はダイとヒュンケルがタッグを組んで如何にかミストバーンを止めているが・・・もしも原作通りであったればそろそろ不味い・・・・

そしてティファの危惧したことが現実味を帯びたその時・・・

「・・・・・・・・きた・・・・・・・」

その言葉を最後に、ティファの意識がふつりと切れた。

法陣は消え、同時に結界も消えレオナ達はすぐさま倒れたティファに駆け寄れば、ティファの顔に笑みが確かに浮かんでいた。

・・・・・来た人達に何と説明すれがいいのだろうと、覚醒し始めた意識の中でティファは本気で苦悩した。
兄達助ける為に無理・無茶をしすぎた自覚があるだけにティファとしても朦朧としながらも覚醒する意識の中で、どうしよう・・・・目を覚ましたくないかもしれないと思ってしまう。
しかし、周りから声がする。
どうやら自分はベットに運ばれ、声と大勢の気配から察するに戦闘が終わり兄達と皆とそして・・・知った気配が感じられるの。
最後に自分が見た通り向こうの人達が来てくれたのだと、喜び半分、無茶したのでそれを知られたらどうしようと怯えが半分で開けた薄めの先にいたのは・・・・
「ティファ・・・・・」
「ティファ・・・・」
「嬢ちゃん・・・・・」
「お嬢さん・・・・」

・・・・・アバン先生いるのは分かる、頭脳明晰で万能御タイプなのだからメンバーにいるのは分かるヒュンケルは其のサポートだろうけれども・・・ロン・ベルクさんとおじさんが何でいるのだろうと、ティファの頭の中ははてなだらけとなった。
そして身を起こせば無茶しやがって！心配したぞと泣きながら抱き着いて来た兄ポップの肩越しに見た・・・・黒髪・褐色肌の・・・・顔は見えないがとがった耳の形状から魔族と分かるこの人誰だ？

いしの積まれる世界・・・、捕まった

ティファが己の全てを使い切る寸前まで不安の渦中にいる人々を励ましているその時、過酷な戦場であってもカール平原・パプニカの平原で戦っている地上の戦士達は誰もが前に出て戦い抜いていた。

―パプニカの平原―

こっちに魔王軍最強と評されてるミストバーンが来るって運が悪いんだか何なんだかと、内心で悪態をつきながら負傷した仲間達を残りの仲間と円陣を組んで守り抜きながら戦う中、ダイとヒュンケルがタッグを組んでミストバーンと打ち合いをしている。

戦場は地上側が序盤から崩されたのだ。

ミストバーンは上空に現れると同時に、引き連れてきた自らの軍団のシャドー達に一斉に冷たい息・ヒャダルコで地上軍を一斉攻撃を仕掛けたのだ。

それは上空からであり不意の攻撃でもあり防ぎようの無い物であった。

ポップやフォブスター達といった火炎呪文を操る魔法使い達は咄嗟にメラ系を上空に向けて放ち相殺を狙い、ダイは竜闘気を全開にして周囲の人々を守ろうとしたが、シャドー達の数はあまりにも多く、そしてヒャダルコの攻撃の最中ミストバーン自身が地上に赴き騎士・兵士達を蹂躙し始めた。

どれほどの数がいようともミストバーンからすれば紙を切るのと大差はないとばかりに向かってくる兵士達を易々と両手の剣で切り裂こうとしたのをすぐさま横槍が入った。

文字通り槍を持って戦うかつての弟子が、一直線に自分に向かって来たのだ。

「ミストバーン!!!!」

・・・・あの弟子には、敵に対して叫びながら斬りかかるのは愚かな事だと修行中散々に打ちのめして教えてきたものをと失望を再び覚える。

あれほど目を掛けていただいたのに人間の中に戻り、弟妹弟子達と

共に魔王軍ひいてはバーン様に反旗を翻した愚かなかつての弟子。
しかしその愚かさが今は都合がいいと、ミストバーンは邪魔だとばかりにカール騎士・兵士と有志達を無視を払うかの如く暗黒闘気で吹き飛ばし、元弟子が自分の下に辿り着きやすくしてやる。
程なくすれば―代わりの肉体―が必要になる。その前に、その時の為に―育てた肉体―を回収するべく。
「ダイ・・・ここは俺とマァムとおっさんとノヴァで防ぐ、お前はヒュンケルとミストバーンを頼む！フォブスターさん、まだ行けますか？」
「は・・・子供にそう聞かれては大人として大丈夫だと意地でも言わせてもらおう。」
「ポップ・・・マァム、クロコダイン・・・」
「ダイ！俺もヒュンケルと共に不死身を押し出している最中にいるのだ。幸い俺の新しい武器には火炎呪文が内蔵されている。ここは任せて行ってくれ!!」
「行ってきてダイ！幸いあいつ等の弱点もヒャドだ！マホトーンもマホカンターも持っていないあいつ等の相手なら僕でもできる!!」
「・・・分かった、頼んだよ!!」
幸いと言うべきか、パプニカの平原を攻めてきたのはミストバーンとシャドー達だけであり、最初のヒャダルコの一斉攻撃で負傷した兵達をすぐさまポップとチウの姿を模した式達が中央に集めて円陣を組む。
ミストバーンとしては半数以上の敵を最初の攻撃で葬り去りたかったのだが、ティファの式達が攻撃寸前は間に合わずともその後すぐにヒャダルコ攻撃の間に入り盾としての機能を果たしが為に、予想よりも地上軍が残った事を忌々しく思った。あんな珍妙な代物に作戦の邪魔をされれば当然ではあるが、地上軍にとっては僥倖でありすぐに周囲を火炎呪文が使えるポップとフォブスタで左右を固め、クロコダインにアックスに内蔵された火炎呪文の方ではなく爆裂呪文の方で上空にとどまるシャドー達を落としていき、マァムがシャドー達が射程圏内に入った瞬間を見すまし素早く拳や脚に貯めた光の闘気

で薙ぎ払っていく。
物理攻撃が効きづらいシャドー達だが、光の闘気で切り裂くのは容易でありすぐに霧散していく。
近づけばシャドー達とても無事では済まず、しかし彼等もミストバーンから引く事を許さずと厳命されており何体倒されようとも攻撃の手を緩める事をしなかった。
人間と違い、ＭＯが切れようとも固有スキルの冷たい息を使えるシャドー達は、彼等の闘気とＭＰが切れるのを待てばいい、じり貧になるのは目に見えているのだから。
その様子を横目で見ながらヒュンケルは焦りを覚える。かつて目の前の男が似たような作戦を立案して魔界の反乱勢力を壊滅に追い込んだのを間近で見ていたからだ。
ミストバーンは諸事象でしゃべる事を極力控えている為、ヒュンケルに教えを授けるのはもっぱら実戦であった。
それはヒュンケル自身に暗黒闘気を使用した攻撃を加え、時に自分の戦い方を間近で見せていた。
その度にヒュンケルはミストバーンに怖れを抱くとともに、いつか自分もこの力を手に入れてアバンを殺すのだとずっと考えてた。
その想いが実らずに良かったのだと今だからこそ思う反面、かつて蹂躙された反乱勢力とポップ達の姿が重なる！
反乱勢力も今と同じように攻防一体の戦い方をしていたが、闘気と魔力が切れたと同時にシャドー達の固有スキルで凍らせられそして壊滅をしたあの場面が脳裏をよぎった時、凄まじい破壊力を秘めた一撃を咄嗟に止めていた。
一瞬のこととはいえミストバーンから視線を切ってしまったヒュンケルの隙を見逃す程ミストバーンは甘くはなく速攻で手足の腱を斬りに来たのだ。
「・・・・愚か者が・・」
その一言にはどのような意味が込められているのか分からない言葉と共に、重くも鋭い斬撃を槍で食い止める。
ダイの方は手近に取り残されていた兵士達をシャドー達に襲わせ

て餌にし、案の定ダイは食い付き救助を行いつつ少しでも敵を減らそうとしている遊撃隊の誰かに引き渡すべく一時離脱を余儀なくされた。

分断されたのはまさにそんな時であった。

ヒュンケルと打ち合いをしながらもミストバーンは、―残りの軍勢―を出現させヒュンケルとダイ達を孤立させた。

ダイも広範囲の攻撃を行うにはまだ戦っている地上の兵士達を巻き込みかねない乱戦となっているのでそれは叶わず、ポップ・ノヴァ達もまたいつ果てるとも知れないシャドー達の攻撃を凌ぐので精一杯となりつつあった。

「ダイ!!ポップ・・・」

「余所見とはな・・・」

「ウッ!!」

闘魔傀儡掌!!!!

「ウ・・・・アァァァ!!!!」

弟妹弟子達の危機に気を取られたヒュンケルから距離を取ったミストバーンは闘魔傀儡掌でヒュンケルを絡み取り首を絞め全身に暗黒闘気を流し込む。

その激痛はかつてバルジ島でのハドラーとの死闘において、ヘルズクローで肩を貫通されメラゾーマを流し込まれた時の比ではなかった!

あれとても地獄の業火に焼かれるほどの激痛であったが、事暗黒闘気の集合体であるミストバーンは地上はおろか魔界においても暗黒闘気使いとして随一であり、ヒュンケルの肉体の欠損を最低限にするべく不要であるか細い神経のみを攻撃を加え、地獄の呵責を元弟子に対して味あわせている。

主と、そして自分の期待を裏切った愚かな弟子を罰するが如く

その声に仲間達は駆け付けようとするがシャドー達に阻まれ身動きが取れず、素早い動きを得意とするチウも駆けつけたくとも戦力が違いすぎた。

パプニカの平原で地上軍に危機が訪れている時、カール平原もまた同じような状態に陥っていた。
此方は単純な人海戦術で来られたが、敵の軍勢の中にマホカンタを使える魔物が混じっており、アバンはすぐさま状況の不利を悟った。
青年ポップに大規模な魔法で敵を消耗させ味方が倒すという方式が使えなくなったのだ。
しかし青年ポップはそんな事は当たり前という顔をして敵に突っ込んでいったのだ！
「魔法が無ければ借りてきたロットで斬り殺せばいいんすよアバンさん!!」
叫ぶと同時にズバリとメイジキメラの懐にトベルーラで潜り込み、下から切り上げ首を落とし、直ぐに少し離れた所にいるガメゴンロードに近づ甲羅の中にロットを差し込み一気に魔法力を刃に変えて内臓を破壊しとどめを周りの戦士達がさしていく。
動ける魔法使いを目指しているんすよ
不意に砦での特訓を頼んだ時の青年ポップの言葉を思い出す。それは魔法が封じられた状況でも戦えるようにという意味だといった彼の言葉は本物であり、アバンは笑みを浮かべながら大地斬でオークやゴーレムを切り裂き、敵の攻撃呪文を海波斬で切り裂いて近づき再び大地斬で倒していく。
その作戦は当たり、次第にマホカンタを使うモンスター達は数を減らし、青年ポップはここぞとばかりにメラゾーマを繰り出し敵を分断し、地面を抉るように小型メドローアも放ち始める。
これであの外道が来てもいいだろうとばかりに見回せる範囲の地面が根こそぎとなっていた。
青年ポップはなるべく大地にダメージがいかないようにと、メラとヒャドを極限まで絞っての事だが、これで罠は無くなっているはず。
ダイ達の方を手厚くしたのは直ぐに勝負を決めさせ後に合流をし一気に畳みかける算段であったが、この分だとこちらが行くようだという考えがアバンの脳裏をよぎった瞬間、ぞ割とした悪寒が全身を駆け巡り、冷たい視線を浴びせられた。

視線の元を辿ってみれば・・・馬鹿げた道化の服を着て大鎌を持ち肩に一つ目小僧を乗せた男の姿がそこにあった。
「み～つけた～。」
不気味な赤い瞳を三日月に吊り上げたソレは、獲物を見つけたと悦んでいた。
アバンはその言葉にはたと気が付き急いで周りを見回せば・・・いなくなっていた！ティファがこさえた彼等を模した式達がいつの間にかすべて刈り取られていたのだ!!
「ふっふっふ！初めましてですね～先代勇者様！青い髪に変わった髪の貴方はアバン＝デ＝ジニューアル三世で間違えありませんよね!!」
しまった!!
今日もアバンはモシャスをしていたが、激しい攻防でいつの間にかモシャスが解かれていたのを気が付けずに臍を噛む・・・しかしそれよりももっと不味い!!
「この・・・どぐされ外道!!!!」
冷静沈着に戦いを進めていたポップが、キルバーンと呼ばれている外道の姿に怒りに我を忘れて打ち掛かっていった!!
「おやおやいいのかい？不用意に僕に近づけば・・・」
「やかましい!!!!!!」
キルバーンは昨日と同じ目に遭うと青年ポップを揶揄おうとするのをポップは叫びあげながらイオラをキルバーンの周りに打ち込み、そしてすぐにメラの壁でイオラを誘爆させた。
その威力は凄まじく、またキルバーンとポップの間に地上のモンスターを飛び込まさせようとしたピロロを阻みそして目くらましともなり、ポップを見失ったキルバーンは一旦空間に入り仕切り直しをしようとしたが、昨日のようにどこからとも分からず体に衝撃が走り地面に叩き落とされたが昨日と違いきちんと受け身を取って直ぐに体勢を立て直して前を見ればそこに見えたものは
「手前ぇは・・・代償払ってでも俺がぶち壊す!!!!」
「はは!!いいねその顔！奇麗な坊やが憎しみに身を任すのか!!最高だ！なんて素敵なんだ君は!!!!」

そこには勇者の三番弟子という高潔な志はなく、心の中を怒りで満たされてしまっていた青年ポップが自分を殺しに来る姿があった！

それこそ後ほんの少しの憎悪を抱けば、魔道に堕ちる程の憎しみを発していた。

ポップは人生で初めてであった。

怒りを覚えた事は数多あれども、憎しみを覚えそれを力として敵を倒そうとしたのは。

それほどまでに目の前の外道が許せなかった。

生命を弄び娯しみとするこの男を！

「いいよ！僕を斬り殺しなよ坊や!!!そして墜ちておいで!!!」

この肉体は所詮仮初の物！頭部さえ残れば問題はなく、奇麗な坊やを魔道に堕とせるのならば本望だとばかりにキルバーンは大鎌を捨て去り、まるで駆け寄る恋人を受け入れ抱擁するかの如く両手を広げてポップを迎え入れる。

斬り殺したその瞬間、憎しみに染まった彼を捕まえるべく・・・・しかしキルバーンの目論見はいつでも邪魔が入る。

それはアバンではなく、異界のチウが窮鼠包包拳でブラックロットを槍の長さに伸ばして大振りに振うポップの懐に突っ込み、キルバーンと反対方向に吹き飛ばしながら自身もポップの服を握りしめ共に地面に叩きつけられる。

チウはポップよりも自分の方が頑丈であるのを良く知っているので、不意の攻撃で受け身を取れないポップの代わりに地面側に体を入れて衝撃とダメージの全てを受けたのだ。

「ツゥ・・・・・チウ!!」

パン!!!

戦場に、乾いた音が鳴り響く

後少しで、外道を倒せたと地面に叩きつけられながらも激昂するポップの横面をチウが叩いた！

それは痛みが少なくとも、ポップの胸の底まで響く強さが確かにあり、憎しみに塗れようとしていた心にまで届いた。

見ればチウは泣いていた、ボロボロと、叩いた方のチウが泣いてい

るのだ。
「チウ・・」
「だめ・・・だよポップ!!!あんなのの言葉の通りにして!!君この後どんな顔でティファさんに会おうって言うのさ!!!」
「!!それは・・・・あいつは!!!」
「敵だ！倒すべきものだ!!それでも今のポップがしようとした事は駄目だよ!!!憎まないで！許さなくともいいから黒い心に負けないでよポップ!!!」
チウは泣きながらポップの胸を打つ。もう少しで憎しみのまま敵を斬ろうとしたポップの事を思って。
チウだとてポップの心情は分かっている・・・それでも、あの明るく笑うポップの心を穢される方が、チウにとっては我慢できない事であった。
だがそれは戦場において致命的であった。
「やれやれ、目論見は崩れたけれども―目的―は達せられたね。」
「しま!!」
ドプリと、重い水の音が戦場に響くと同時にキルバーンは満足そうに笑う。
それは魔具で、敵を生きたまま閉じこめる水牢であった。
動きのとまった獲物を捕らえる事はキルバーンにとっては苦も無くことであり、水中に浮かぶ球体の水牢に捕らえた二人を嬉しそうに眺め回す。
青年ポップが魔法を発動させようとあがこうとも、この水には魔力を拡散させる呪法が練り込まれており、チウの先ほどの技も水の中では使う事も出来ない。
「先代勇者様、見てください。奇麗な可愛い坊やたちが、後ほんの少ししたら苦悶に歪めた素敵な顔が見られますよ?」
うっとりと悍ましい事言い放つ死神の肩に、愛嬌のある一つ目がとまり歌い出す。
「つ～かまえたつ～かまえた～。早く連れ帰って遊ぼうよキルバーン!!」

無邪気に残虐なる事を歌う一つ目小僧は、戦場を睥睨する。
人質を取られたも同然の彼等に動くなと言えばすぐにこの戦場の方はつく。
向こうもどうやらうまく事が運んでいるようで、もう少し遊んでいける。
ピロロとキルバーンが嘲笑う中、アバン達は手が出せずに歯噛みする事しかできなかった。

いしの積まれる世界・・・・解き放った

どちらの平原の戦いは地上軍側が敵に圧倒され身動きが取れない、そして双方共に見方が捉えられ文字通り手も足も出せない状況に陥った。

パプニカの平原で魔影参謀ミストバーンの暗黒闘気に全身を縛られたヒュンケルが囚われ、カール平原においては死神キルバーンによって異界のポップとチウが水の牢獄に囚われた。

ヒュンケルはミストバーンの暗黒闘気の糸で全身の神経を引き裂かれる痛みに耐えかね苦痛の声を止められず、ポップとチウも脱出できずに次第に体内に残っている酸素が乏しくなり苦悶の表情を浮かべるのを、どちらの仲間も助けに駆け寄ろうとするが、ダイ達は大量のシャドー達に阻まれ、アバン達もまた地上のモンスターではなく魔界のモンスター達の波状攻撃によって近づく事が叶わなかった。

そろそろ頃合いかと、主人格であるピロロも飽きてきたので人形のキルバーンに帰ろうと可愛い声を出して提案をする。

「キル～、ここ飽きたからもう帰ろうよ～。ミストの方も―愛弟子さん―捕まえてる頃だろうし、どちらの獲物の方が面白そうか見せあいっこしようよ～。」

「そうだね～。ヒュンケル君も捕まって勇者様達も大したことないの分かったし帰ろうか。」

その言葉に、アバンは焦りそして何よりも怒りに駆られかけるのをぐっと押しとどめる。

ヒュンケルは己の未熟で魔道の道に堕としてしまい、あのような外道から親し気に名をyばれるような縁を結ばせてしまった可愛い自分の長兄を捕らえ、師である自分の前で敵の愛弟子であったのだと言い放つキルバーンか許せなくて！

しかしだかろと言って自分までもが激情に駆られ攻撃をすれば確実に打ち取られる・・そうなってしまっては誰が囚われた彼等を救えるというのか・・・だが、自分だけでは子の戦力差を突破しようもできず、戦力分散の采配がここにきて裏目に出てしまった。

万策尽きる
だからと言って・・・みすみす彼等を!!
アバンは今一度命を捨てる覚悟をした。それはデルムリン島で愛弟子達を救う為に仕掛けたメガンテをキルバーンに仕掛けるべく、己の持てる闘気を剣に宿した。
アバンストラッシュ!!!
ストラッシュアロータイプでキルバーンと自分達の前を塞いでいる全モンスター達を全闘気をもって瞬時に倒し、結果を見る事無くアローを追うようにトベルーラでキルバーンに迫るが、キルバーンの瞳が・・・・嗤っていた・・・・罠が、アバンを飲み込んだ。
「アバン!!!」
「アバン殿!!!」
炎型のダイヤシリーズではなく、アバンの周りの空間が黒い口を開け数多の剣戟がアバンの身に狙い定め飛来する。
「何を企んでいたのかは知りませんが、チェックメイトですね～先代勇者様～♪」
アバンの決意を小馬鹿にするように弄ぶように嘲笑い踏みにじる。
「死～ユ～アゲイン～。」

カール平原にてアバンの命の命数が尽きようとしている時を同じく、ヒュンケルが危惧した通りダイ達の魔力が切れ始めシャドー達に押されかけていた。
シャドー達の冷たい息にダイは竜闘気で半減しているとはいえども猛吹雪のような状態で次第にダメージが蓄積されつつあり、またヒャド系を得てにしているとはいえノヴァもそしてポップやフォブスター達も魔力切れが近くなり、ノヴァは闘気剣でも倒せるとは言えじり貧になって来た。
斬っても斬っても、マァムの光の闘気の打撃で霧散させても次から次へと現れるシャドー達に、彼等の心もまた擦り切れ始めた。
いつまで倒せばいいのか
そんな果ての無い敵を倒す前にヒュンケルが連れていかれのは目

に見えている！
　この中の誰か一人でも倒されればおそらくミストバーンはヒュンケルを連れて戻ってしまう・・・・・折角・・・光の道に言ったヒュンケルが連れていかれてしまう・・・
「・・・えせ・・・・返せよ!!俺達の兄弟子返せよ馬鹿野郎!!!!」
　そんな事は赦せないと、ポップは魔力切れを起こす前に打って出た！
　いけ好かない男だ、自分とマァムに対する扱いの酷さに腹が立ち、思いを寄せているマァムの心を掴んでいる嫌な奴・・・時に自分の失敗を皮肉って叱ってくる・・・それでも！
「俺達の長兄くれてやるかってんだよ!!!!」
　トベルーラで乱数軌道でシャドー達の間を縫いながら、最後のメドローアを仕掛けにミストに近づくポップに、ヒュンケルが苦痛の中に会っても焦りながら押しとどめるべく残りの力を振り絞って大音声を発した。
「よ・・・せ!!!!その力を俺なんかに使うんじゃない!!!!」
　一度は魔道に堕ちたこの身を、救い上げてくれたのはダイとマァムとそしてポップであった・・・普段ポップが自分に対してどれ程つんけんしようともヒュンケルはその時の事を片時も忘れた事は無かった。
　自分が負けたあの時、マァムの慈愛溢れた笑みに心を温められたのは本当だが、死にかけた自分を案じた泣きそうなポップの声に目が覚めたのだ。
　自分の死を厭う者がいてくれる人間がいてくれるのだと・・・そのポップが、自分の為に身を危険にさらすのをヒュンケルは受け入れる事は出来なかった。
　その言葉の意味を、ポップだとて真意は分かっている。
　自分よりもダイ達を救うべきだと・・・それでも！あのいけ好かない長兄を取り戻す為にとまらないポップを、ミストバーンは両手でヒュンケルを拘束していたが右手の身に暗黒闘気を集中させそして左手をポップに向けた。

闘魔傀儡掌は、ヒュンケルのよりもはるかに広範囲に広げて投げつけることが出来、ポップの乱酔軌道は捕らえられる範囲であった。
どちらの戦場も、大事な者達の為に足掻こうとするがその刃は届かず凶刃が帰ろうとしたその時
まずパプニカの平原に異変が起きた。
「バットですよ～異界のポップ少年。闇雲に飛ぶ出す猪は―網―に囚われてしまいますよ。」
のんびりとした―アバンの声―と共に聖石を根元につけたシルバーフェザーが上空から五本落とされるのを、ミストバーンは見逃さなかった。
声の主は―異界のポップ―と言った！ではあれはあの異界の忌々しい小娘達の仲間が何かの仕掛けだと瞬時に看破し、ポップに向けて放とうとした暗黒闘気の糸を一本の銀の羽に狙いを定めて絡め取ろうとした時、―ソレ―は放たれた！
「ブラッディ―スクライド!!!!」
それはヒュンケルの必殺技であり、ミストバーンが知る限りは暗黒闘気か通常闘気が練られた必殺技であったが、ミストバーンに放たれたブラッディ―スクライドは黄金の渦であった！
あれを食らう訳にはいかないと、さしものミストバーンもヒュンケルに固執する事をせず右手の暗黒闘気を切りすぐさま上空にとんだその時、パプニカの平原に詠唱が響き光に満たされた。
邪なる威力よ退け！マホカトール!!
その光は瞬く間にシャドー達を駆逐し、上空でミストバーンは怒りに震えた。
あともうほんの少しで主と親友が立案した作戦が、またもや異界の者達によって灰燼に帰したのだ!!
昨日キルバーンがパプニカの平原から戻って来た後に、嬉々として今回の作戦の大筋を主に具申していた。
曰く異界の彼等は心が美しく同族と仲間に対する愛情強く、彼等を引きずり出すのは容易いと。
引きこもった彼等には身内ではなくとも地上のどこかを人質同然

にして脅せばいいというキルバーンの言葉に、バーンも思うところがあり採用した。
異界の者達は一様にそのような傾向が見て取れた。
たった一度であったが彼等のパーソナリティを取るには十分であり、キルバーンの報告と具申案と合致しているので、試してみれば全員が釣りだすことが出来たのを！
邪魔をしたのはおそらく一人は異界のヒュンケルに他ならないとミストバーンは確信している。
あの技は、アレが命を削るように編み出した必殺の技なのを誰よりも自分が一番知っているから。
そして光が収まってみれば、そこにはかつてバラン戦で砕かれた魔剣の鎧を着こみ・・少年ポップを―お姫様抱っこ―しているヒュンケルの姿があった!!
魔剣の鎧は何故異界のヒュンケルだと分かるのか、それは彼が己をヒュンケルだと認識してもらう為に態と鎧の兜部分を外しているからだ。
そして・・・ポップがお姫様が抱っこされているのは、ヒュンケルがブラッディースクライドを放った後に乱数軌道とはいえどシャドー達の冷たい息に足を取られたポップを見て自動的に―弟妹弟子達は自分が絶対死守―が発動し、―いつも通り―にしているだけであったが、ポップ自身は勿論、他のアバンの弟子達にとっては破壊力抜群の光景であった！
常日頃からの彼等の接し方と心の距離を知っている者達としては、夢でも見ているのだろうか、それとも幻覚攻撃も追加されたのだろうかと思うほどであり、特に二人の仲をとりもてないかと考えていたマァムにとっては衝撃的ですらあった。
・、その世界のポップが知れば、恋心持っているマァムに、いけすかないヒュンケルと仲良くして欲しいと言われればキレる案件ではあろうがそれはともかくこの世界のポップ・ヒュンケル事情を知ってる者達の心の絶叫は一致した！
マァムではなくて何故ポップがお姫様抱っこ!?それも助けた後自

分達の兄弟子ならサッサとポップを落として立てとかいうのに、あのヒュンケルは剣は手放さず周りを警戒しつつ上空のミストバーンを見据えながらもポップを降ろす気配がゼロだったりする。
ちなみに魔剣の鎧のヒュンケルは足に凍傷追っている弟弟子を降ろす気など毛頭ない。
そのヒュンケルを見下ろしながらも、ミストバーンも周りの気配を全力で探っていた。
異界とは言えヒュンケルが呪法を使うのが信じられず、あともう一人いるはずだと探っていた・・・だが!!
「よう～異界の魔影参謀さんよ～。異界のとは言え俺と同じ馬鹿弟子ポップを甚振ってくれたくれた礼したんだがいいか？俺もメドローアくらいはまだ使えるんでね～。」
ミストバーンの背後を取りゼロ距離からのメドローアを仕掛けようとしているのは
「し・・・師匠!!???」
ヒュンケルからお姫様抱っこされているよりも！百歳になろうという師が戦場に出てきている方に少年ポップの心臓は跳ね上がるが、ミストバーンの前方に静かに―アバン―静かに姿を見せた。
「初めまして異界の魔影参謀さん。ここでの戦闘は双方にとって無益かと思いますがいかがですか？」
「・・・お前は？」
聞くまでもない事だが、ミストバーンは忌々し気に目の前にいる飄々とした男に名を聞く。
おそらく自分の推察が正しければ
「これは失礼をしました。私他界で勇者の家庭教師をしているアバン・デ・ジニュアール三世です。
この度は他界の弟子とティファとチウ君を迎えに来たのですが・・」
飄々としていた男の顔は笑っているが瞳は笑っておらず
「ついでに貴方を倒してしまうのもいいでしょうかね？」
「アバン！こいつ消すんならお前邪魔だからどけ。」
「せっかちですねマトリフ。まだこの方の返答聞いてませんよ？

引きますか?消し飛ばされますか?」
その忌々しい問いに答える前に、異界のアバンは爆弾発言を落とした。
「その前にあちらの外道がバラバラにされているでしょうが・・・おや?」
その言葉にミストバーンの姿が消えた。
「・・・・この世界の彼も・・・こちらは終わりました・・・でいいでしょうかねマトリフ。」
「はん、ギラ合わせただけの魔法のはったりで脅しをかけるなんてお前も悪党だな~アバン。」
其れよりも下の小僧達の面倒見に行くかと大人二人はシャドー達下消え失せたパプニカの平原にゆっくりと降り立ち、アバンは暗黒闘気の糸に捕らえられ神経にダメージを負って起きられずにいるヒュンケルの方に向かい、そっと抱き起す。
その事に驚き止めようとするヒュンケルを、アバンは優しい言葉で押しとどめる。
「無理はいけませんよ。大丈夫、こちらと同じようにカール平原の方にも私達の仲間が行っています。
貴方達はまずは自分達の傷を癒しなさい。
少年ダイ君、マァムさん、ノヴァさん、クロコダインさん動けますか?向こうの世界の薬草がこちらの方達にとっても使える事は確認済みなのでお持ちしました。
動けるようでしたら配ってください。
マトリフ、少年ポップ君の足は?」
「ん・・・ちと深えな・・・薬草塗ってベホイミすっか・・・暴れんな!」
「いやだって!!あんた・・あの・・・いいから降ろしてくれよ!!!!」
治療を申し出るアバンとそしてマトリフに、一同向こうに駆け付けなくていいのかと言いかけるのを押しとどめられ、そしてポップにいたっては此方の世界のヒュンケルではないとは分かっても、それでも普段の自分達の関係にこんな事は絶対にあり得ないポップは顔を

真っ赤にして降ろしてほしいと懇願のように言っても・・・無情にも却下をされた。
「駄目だ、凍傷はきちんと治してもらうんだ。少しの傷と甘く見ずに、もっと自分を大切にするんだ。
　直ぐに済むが、回復呪文で傷を治しても其の箇所は脆くなっている。嫌だろうがきちんと休める所までこのまま運ばせてもらう。」
　・・・何か物凄く優しい言葉をヒュンケルから受けているのが超あり得ないポップは、低音ヴォイスのイケメン言葉に顔をさらに真っ赤にしているのを、異界のヒュンケルは羞恥心と受け取り、少年ポップにすまないと思ってしまった。
「・・・似姿は同じでも矢張り赤の他人に触れられるのは抵抗があるか・・」
「・・・へ？」
「アバン先生！そちらのヒュンケルの具合はどうですか？」
「ふむ、ダメージはありますが寸前までご自分の神経に闘気を巡らせ手守っていたようです。これならば薬草だけでなんとかなりそうですがどうしましたかヒュンケル？」
　普通にアバン先生呼びしているヒュンケルって何!!と、事態についていけないアバンの弟子達とヒュンケル本人とその事情を知っているの者達が困惑しているのを他所に、異界のヒュンケルの天然が止まらない。
「矢張り見知らない俺よりも、なれているそちらのヒュンケルの腕の中の方が落ち着くと思うのです。」
　・・・アバン先生に超丁寧姿勢で敬語を使って何言ってるんだこの人!!
「少年ポップ、済まんがもう少し待っててくれ、今あちらの・・」
「・・・す・・」
「ん？どうし・・」
「貴方がいいですヒュンケルさん!!!!」
　・・・・・・人生の危機を救われたポップは、彼を兄弟子だと認知してからは発した事のない言葉を絶叫する羽目になった・・・異界の

とはいえ、ヒュンケルにさん付けする日が来るなんて・・・それも皮肉でもなんでもなく素で絶叫させられなんて・・・

パプニカの平原には完全に平穏が絶叫と共に広がった様を、アバンとマトリフは苦笑しながら見守りつつ、カール平原の方に想いを馳せる。

・・・・彼等がやりすぎていないといいのだが・・

いしの積まれる世界・掴まえた・・・

パプニカの平原にティファ達の世界のアバン・マトリフ・ヒュンケルが現れ瞬く間にシャドー軍団を殲滅しミストバーンからこの世界のヒュンケルを救い出し少年ポップを筆頭に彼等を保護してい時を同じくしてカール平原の方にも異変が起きていた。

ラウシースピア!!!

自分の目の前で異界の青年ポップとチウを救い出そうと焦って動いたアバンがキルバーンの剣戟の罠の餌食になりかけたその時、二人の真横から一陣の風が吹いたと思いきや怒涛の槍の猛攻がアバンを襲わんとした剣戟全てを打ち落とした。

その技の威力と範囲は凄まじく、キルバーンとアバンの距離は二・三メートルあったにもかかわらず、ラウシースピアという槍の大技はアバンに襲い掛かった剣戟のみならず青年ポップとチウを捕らえていた水牢をも割り、あまりの威力にキルバーンもピロロの直感による退けという指示に素直に従い上空に飛び立ち難を逃れた。

槍の大技を放った者が、今まで自分のいた場所に深々と槍を突き刺す姿そこにはあった。

そこにいたのは

「・・・・バラン君の配下が何故ここに?」

魔槍の鎧を身に着けた紫色の肌に金色の短髪、顔に黒い文様をもちしはキルバーンの知る限り、かつて自分達魔王軍の超竜軍団の長バランの私兵・竜騎衆が長ラーハルトのみ!

三人は二月前ほどのダイ達との激突にて命を落としたはずが、何故この場にいて自分の邪魔と異界の者とは知らずとも、―ポップ―を助ける真似をしたのか、他界の事情なぞまったく知らないピロロと人形キルバーン理解に苦しむ。

彼等はティファ達を助けに来るのもは全員―勇者一行の仲間達―であると想定しているだけに、来るとすればダイ・マァム・ヒュンケル・クロコダインがせいぜいであり、レオナは王女であり戦力としては論外なのでその四人を想定していた・・・・真っ当に考えればそれ

が正解であるともいえる。
よもや向こうが魔界丸ごと救って和議を結ぶどころか全員仲良くしていますとは誰も思うまい！それこそ物語として書いたとしても夢物語が過ぎると誰もが一笑に付すような現実を紡いでいるとは考えまい・・・・それが―普通―そうなのだから。
だからこそ何故死んだはずの竜騎衆の長が生きていて、それも単身で自分に刃を向けるのかがさっぱりと分からず真意を問うか問答無用をすべきか対処に、残虐非道を絵にかいたような二人の死神はいつでも動けるようにしながらラーハルトに注視する。
そして、―もう一人の魔族の男―の方には憎しみの目を向ける。
自分が捕らえた獲物を何の躊躇いも無く抱き上げる様には殺意すら覚える。
そもそも誰だあの男はと、キルバーンとピロロは当然の疑問が頭によぎっている。
槍の大技で破られた水牢から出された二人は受け身が取れずに地面に叩きつけられるその前に、いきなり空間からその男は現れた。
黒の燕尾風のタキシードに黒のズボン、膝まである皮のブーツも黒であり装飾は簡易な銀糸で服やブーツの縁を刺繍したのみであり、深紅のシャツがいやに目につく小洒落た服を着た褐色肌のその男は、一目で魔族と知れる尖った耳に赤い瞳に憂いの表情を乗せて青年ポップとチウを柔らかく包み込むように抱きしめている！
それは自分が目を付けた極上の獲物だと、執念深い死神は地面の奥底に埋めていたダイヤシリーズの最高傑作・ダイヤのナインを発動させんと同じ柄のトランプを取り出し、地面に突き立て起動させようとしたが、トランプを投げた時自分達を見上げているだけであった―ラーハルト―がニヤリと笑った・・・自分の背後を見て・・・まさか!!
「キル!!避けろ!!!」
少し離れた位置にリリーラをして来た親友ミストの声に、キルバーンは咄嗟に空間を空けてピロロのみを逃がした。
その行動は正しかった。太陽が遮られ自分達に影が出来たのに気

が付いた時、キルバーンは瞬時に自分にできる最適解を実行せしめた。
上空からの攻撃には最早対処する時間は無いと・・・そしてそれは正解であった！
パプニカの平原に異界のアバン達が現れ、そしてそのアバンから―あの外道がバラバラになっている頃―と言われた時、ミストバーンの脳裏に浮かんだのはキルバーンが壊されている姿であった。
確かにあの男は外道かもしれない、なんならばヴェルザー配下で主の命を虎視眈々と狙っている刺客であるが、それでもミストバーンはキルバーンとの間に出来た・・・出来てしまった繋がりを最早無視することは出来ない身となっていた。
彼の本性を知っている、彼の本質も知っている、彼の目的も何もかもを知ってもそれでもキルバーンは―親友―なのだ・・・彼もまた自分にだけは優しい・・・ただ一つの自分の甘い部分を、捨て去れるほど―ミストバーン―という漢は己が思う程に、そして周囲や主が言う程には非情に徹することが出来る者ではなかったのだ。
元弟子には冷酷非情となれと教え諭しておいてだ・・・そしてその半端な思いはキルバーンにしか向けられていない。
彼の中には絶対的に守るべき主か―スペアとして用意した肉体―の弟子か、親友キルバーン以外はすべて平等であった。平等に無価値であった、唯一心を動かされるのは己の信念を貫く戦士達に対してのみ敬意を表し、だからこそハドラーの想いを汲み取り動いてやったがそれ以上の事をしようとは欠片も思わず黒の核晶を起動したときの罪悪感は一切無かった。
そのミストバーンは、親友の危機に際して初めて絶叫をしていた。
キルバーンの近い距離にリリルーラをした場合諸共に仕留められるリスクを避けたのが裏目に出しまい、上空から二刀を引っ提げてキルバーンに迫る、かつて主の顔に泥を塗りダイの剣を作った憎い―ロン・ベルク―を止めようにも間に合わない!!
あいつは、絶対に俺がぶっ壊す!!
ずっとキルバーンを倒したかった・・ぶっ壊してやりたかった!!

―お嬢さん―の柔らかく優しい心をずたずたに切り刻みながら付け狙う―変態―は、それでもお嬢さん自身とチウと優しいメルルの心を掴むことに成功した憎い奴！
しかしもうあいつは壊せないが！あの―外道―ならばどこからも文句は出まい！
ロン・ベルクはこの絶好の機会を逃す気はなかった・・・・彼の不？戴天の仇とも言うべき―キルバーン―を堂々と壊せるのだから!!
二振りの剣はかつて地上で手に入れた隕石の鉱物を鍛え上げ作った剣であり、―今の自分の力―であれば昔気に入っていた二振りの剣と自身の腕を砕いた一撃に耐えうる代物!!
キルバーンが自分の真上に到達したロン・ベルクを向き目が合った時、ロン・ベルクは凄絶な笑みを浮かべて静かに技を放った
星皇十字剣
武骨な形をした二振りの剣とはとても思えないような優美な十文字の軌道を剣が描いた時、キルバーンの肉体はいとも容易く切り裂かれ頭部を残して四つに切り刻まれ地面に叩き落とされた。
「キル!!!」
技を放たれたと知ってもミストバーンはキルバーンの下へと飛ぼうとするのを止めた者があった！
「ミスト!!キルバーンの首はここにある!!」
自分の行く手を阻んだ泣き出しそうな一つ目小僧・ピロロの言葉に、ミストバーンはビタリとすぐさま動きを止めた。
ピロロの小さな体いっぱいで、キルバーンの頭部は確かに抱えられていた。
技が決まると同時に人形は己の頭部が空間にいるピロロに落ちる様にして回収させるという抜け目なさを発揮したのだ。
「頭部があればキルバーンは大丈夫！帰ろう!!帰らないと!!」
―真のキルバーン―であるピロロは必死に親友を止める。
自分の本当の肉体ではミストバーンを守る事は叶わないからだ。
ミストバーンと違いピロロ達はバーンの不死性とミストバーンとの絡繰りを全て知っている。

太陽と月の戯れを利用したジュ法を使っている事も全て知っている。
しかし二人は―ミスト・バーン―はどうでもいいが、―ミスト―という漢を愛している・・そう、外道で非道で快楽主義な自分達であっても、ミストは大切であった。
長い年月を主に己の全てを捧げる孤高の男の精神を持ちながら、自分の誉め言葉に時折照れ笑いをする初心な心を持ち合わせる稀有な彼を、いつか―ミスト・バーン―をバーン自身が消してしまうかもしれないと思うと、説明のつかない苛立ちと苦さを胸中に生じさせるほどに、自分達に唯一守りたいと思わせた者を守る為に発するピロロの懇願をミストバーンは無下にはしなかった。
キルバーン達とは違い、ミストバーンはピロロの事を本当にキルバーンの使い魔だと認識しており、自分の主とその親友を必死に守ろうとしている健気な使い魔なのだと。
それもあるがピロロの言う通り帰らねばならない、異界からの救出隊がこの世界に来てそして平然と自分達に向けて刃を振い、この世界の出来事に対して介入する事を忌々しい小娘と違って躊躇いがない事を主に伝えなければならない！
そして・・・・キルバーンの肉体を蘇らせねばならない・・・・主の大事な戦力だと、聞くものとていない言い訳の呟きを胸の内にしながら、ミストバーンはキルバーンの頭部を抱えたピロロを優しく抱き寄せそしてパレスへと帰還するのを、アバン達は黙って見送った。
後に残されたアバンはへたり込みそうになる体を叱咤しながら立ち上がる。
―ロン・ベルク―がキルバーンを討った事を見るに、この者達が異界からの救出隊とみて間違いないとはアバンにも分かる。
この世界のロン・ベルクは今、ダイの剣の鞘部分を改造してもっと戦いやすくしてやると精魂込めて炉に向かい合っているのだから。
しかし半魔の男と、魔族の男が誰かはアバンは知らない・・・・知らないが、見知らぬ魔族の男の腕の中で青年ポップとチウはボロボロと泣いて魔族の男に取り縋っている。

まるで親が迎えに来たのに安心をした子供のように、そして・・・泣いているのは二人だけではない、同じように泣いているのだ、褐色肌の魔族の男も二人を抱きしめて。

その様を、紫色の半魔の男―ラーハルト―が微かな苛立ちを以て言葉をかける。

「―ドール―!!!ポップとチウを確保したならサッサとアバン殿とヒュンケルとマトリフ大魔導士殿と合流して―ティファ様―の下に急ぐぞ!!!」

「あぁその意見に賛成だな・・・てか俺もポップとチウを抱きしめてぇんだよ!!サッサと代れ!!!」

「・・・・やだ・・・もう少しだけでいいから・・・・・・」

ドールと呼ばれた男は二人の男の怒声にも怯まず、しかしそれでも思うところはあるようで

「ポップとチウも無事を確かめられたし―お嬢ちゃん―を迎えに行こう。そちらの先生たちも一緒に行きますか?」

「あ!!!アバンさん・・・・忘れててごめん・・・捕まっちまって・・・」

「・・・嬉しくてここ戦場なの忘れてました・・・申し訳ありません・・・」

自分よりも上背がある男はハドラー以外で初めて見たと、三人の男とその一人の男の腕の中にいる青年ポップとチウに近づいたアバンのどこかずれた感想を知らない―ドール―と呼ばれた男は礼儀正しくアバンに声をかけ、その言葉に我に返ったポップとチウは戦の最中であったことを思い出し、自分達が捕まった事で全員を危機に晒したと詫びられたアバンは慌てて止めようとしたが、―ラーハルト―は其れはどうでもいいとばかりに、ポップに魔力は残っているかを問いただし、大丈夫と答えたポップに―ドール―をつけるから向こうの戦場にいるアバン殿に知らせに行けと言いかけた時、大規模なルーラとキメラの翼で移動してきた集団がカール平原の方に現れそして・・・

「ポップ!!!チウ!!!」

・・・・・少年ポップを手放さずに鬼の形相を浮かべながら二人の下に爆速してくるヒュンケルの姿に・・・・・この世界のアバンは唖然とし・・・・あいつは・ヒュンケルさんは何しちゃってるのと思っ

た異界のポップとチウはきっと悪くない・・・・・

・・・・声がする・・・・安心して泣いている兄とチウ君の声が・・・懐かしい・・・たった四日前に聞いていた人達の声が・・・

力を使い果たし気絶をした事で、テイファが張った結界が解けて隠し砦に残っていた―全員―がティファに駆け寄った・・・そう全員がだ。

力と記憶を失ったバランは、己と同じ竜の紋章を何故か右手に持つ少年に親父と言われてもどこか現実感がわくことはなかった。

とはいえその少年の面差しには愛するソアラの面影が色濃くあり・・・・ディーノと同じ気配にバランは振り払うことが出来なかった。

元来人を愛し、全ての種族の子等の笑みを愛し、無邪気なモンスター達の戯れを眺めるのを好んでいたバランには、―ダイ―の全てが好ましかったのは否めない。
無邪気に記憶のない自分に親父という彼が哀れそして、胸の底がその度にちりちりと痛みだす。
大事な何かを喪い、それは永劫取り戻すことが出来ない罪人に押された烙印が痛むが如く。
ダイの笑顔に、駆けられる言葉に返せるものがなく途方に暮れて部屋を出る気になれなかったバランは、砦内部で発せられた以上な気配に気が付けば飛び出していた！
式は本来は天族の御業であり、先祖帰りをしたようなティファにしか扱えず、それがこの世界のマザードラゴンを介して―世界―と契約をしたティファは更に天の力を十全に振るった事が、力を失っているとはいえマザードラゴンの子供である純然たる竜の騎士であったバランは感知し、異常とも思える程の膨大な力はどこからだと飛び出し大広間に行けば、そこには二日前にディーノの傍らにいた金の髪を長髪に伸ばしている少女と、同じような年頃の黒髪の少女と大人の女性、そしてその隣で高齢の男が必死に叫んでいるという異常な光景がバランの目に飛び込んできた！
「それ以上力使ったら死んじまうぞ!!!」
「もうやめて！ティファお願いだからもう止まってよ!!!」
「おやめなさいティフさん・・お願いです！もうそれ以上は!!!」
「帰るんでしょ!!ティファさん達は帰る場所があるんでしょう!!!」
その叫びは心からの叫びであった。
四人はティファと呼ばれた・・・死にかけた自分を神の奇跡とも思える薬を作ったという少女を心の底から案じて叫んでいる。
何をそんなに必死にとバランが四人の側に駆け付けた時、バランもまたすぐに叫びあげていた。
「この結界を解くのだ娘よ！いったい其方は何をしているのだ!!!」
ソアラを小さくしたような少女が、銀の髪に雪花石膏の肌と異様な風体となり、なんの法陣かは分からないが青い法陣の中でのたうち

回って血を吐きながらも、力を途切れさせずに何かを必死に誰かに訴えている様は異常で悲しい悲惨なものであった・・・

「・・・・生きて・・・・笑って・・・・・紡いで・・・・」

己を贄に捧げて祈るような様は・・・・見る者の心をかき乱すだけで・・・不意に自分達を阻んでいた見えない壁が消えると同時に、バランは瞬時に倒れ伏した少女の背にそっと手を置いた。

肉体に損傷はなく、ダメージは肉体内部だが、心の臓派の鼓動は通常の者と変わりはない事にバランは安堵の溜息を吐く・・・どれ程息をつめていたのだろうか・・・

状態を見て取ったバランはゆっくりと、黒髪にいつもの肌の色に戻ったティファをゆっくりと上に向けて抱え上げた時、薄っすらとティファが笑ったのは気のせいだろうかと目を凝らした時―ソレ―は起きた。

ティファの口から溢れた血は青く、ならばこの青い色の法陣はティファが力を増幅させるか何かをする為に書いたものだとバランが推測した法陣が始めに金色に染まりそして・・光り輝き終息した時にはティファの息遣いが穏やかになっていた。

何事が起きたのだと、魔法のスペシャリストたるマトリフを見たが彼もまた何が起きたのかと驚愕をしていた。

あれほどの大ダメージではベホマを掛けたとしても数日は絶対に安静であり完治するには半月か下手をすれば一月は見込まれるほどのダメージが瞬間治されたのだからマトリフをして驚愕をしたのは無理からぬことであった。

そして法陣はまた色を変えた。

それは金色ではなく、緑の光を放っていた。

その光の奔流が収まった時、様々な声が聞こえた。

騒がしく・・・そして自分をベットに運ぶという父と同じ声のバランさんの焦った声と、―みんな―の声がする・・・・

そこからティファの意識は一度ふつりと途切れ、そして次に目を覚ました時には、目を薄っすらと開ければベットの周りには自分の知っ

ているカール王配の服を着ているアバンと、珍しくマントは同じだがその下は旅人の服ではなく耐火性や衝撃に強い魔界の布地で作った深緑の糸でボタン周りや詰襟部分のみをシンプルに刺繍されている白の詰め襟服を着ているロン・ベルク、そしてパプニカの近衛団長の服を身にまとったヒュンケルに目を向けながら起きた時、兄ポップにまた何の無茶をしやがったと泣きながら抱きしめられそしてチウも加わった時、視界の端で捉えていた褐色肌の魔族の男にティファとポップとチウの三人は一斉に包み込まれた。

ティファは知り合いにこんな人はいないと思いつつも―覚えが―あった。

自分達を包み込む力加減に、其のふわりとしながらも力強さを感じる抱きしめ方に、そして何よりもその気配に・・・そんなまさか・・・・彼は・・・・

ティファを真ん中にして抱きしめられ、ティファは男の顔に胸を埋める。

自分の感覚が正しければこの人は・・・

「やっと・・・・・・」

自分達を抱きしめながらくぐもった男の声に、ティファは確信した。

「ティファ・・・・ポップ・・・チウ・・・」

自分達を呼ぶこの声は

「ようやく・・・・掴まえた・・・・」

自分達にこの言葉を言うのはただ一人しかいない・・・

「ごめんね・・・・僕がきちんと君達を掴まえてあげることが出来なくて・・・・」

深い嘆きと絶望の果てに振り絞るような懺悔の言葉を言うのは間違いなく・・・

「・・・・キ・・・・・ル・・・・」

誰が聞いてるとも分からないこの状況で、それでもティファは声に出す。

あまりにも小さなその声は、男の厚い胸板に阻まれ誰にも聞こえないかもしれないと思ったその声に、男の腕に込められた力は強まり益々三人を閉じ込める。

もうどこにも三人がいけないように、誰にも攫わせない、触らせない、穢させる言葉や傷つける者達から守り抜くように抱きしめてくれる・・・・この男こそが・・・

大魔王の最側近でありミストバーンの親友でありいつでも優美を崩さぬ、敵であった時から自分達を魅了した死神・キルバーンその人であった

自分達のキルバーンが来てくれたのだ・・・・

いしの積まれる世界・幕間・死神の涙

三人の宝たる子等を抱きしめ、―ドール―ことキルは光で心が満たされる。

一度はとれたポップの手が解けて行ったとき、攫われるのを阻止できなかったあの時、絶望の声を張り上げながら自分の何もかもが砕けていった・・・絶望に全てを砕かれた。

キルの声に全員がすぐさま宝物庫に集まり、そこで見た物はチウがしていたローブ止めのブローチを握りしめ泣き伏し床を打ち付けているキルの姿しかなかった。

銀の手甲は両方ともひびが入りそこから―青い血―が流れ出るのにも構わずただひたすらに―なにか―を砕かんとするが如く床に拳を打ち付け泣き叫ぶキルにミストはすぐさま親友に駆け寄り、とにかく己を傷つける行為を止めようと後ろから抱きしめ羽交締めにして名を呼び続けた。

「キル!!私だ分かるかキル!!!何があったかは知らないがよせ!!!」

「あ・・・・あぁああ!!放してミスト!!あの子達が!あの子達を・・・助けてあげられなかった・・・・掴んだのに・・・・掴まえてあげられなくて!!!」

自分を抱えているのが親友と分かってもキルは暴れる事をやめなかった。

ティファ達を助けられなかった己れが許せずに、仮面から覗く瞳の部分からとめどなく涙を溢れさせ、己を打ち壊そうとするのをさしものラーハルト達も手を貸しキルの動きを封じる。

普段からこいつなぞ壊してしまおうと、ラーハルト達大人はつけ狙っている。

それもこれもティファを手にせんと大戦時から今に至るまでの数多くの行為を考えればそれは当然だが、何があったのかは知らないがこんなに絶望に突き落とされているものを放っておくものなどこの場には一人もいなかった。

ラーハルトとロン・ベルクが両腕を取ってやっと動きを封じ込めた

ところに三神達から緊急通達が入り―一切の説明―がなされた時・・・・地獄の蓋が開き文字通りの―死神―が姿を現した。
後ろから押さえているミストは仕事時の―死神―と共に敵を殲滅してきたので知っているが、ラーハルト達は初であった・・・・氷の如く冷たい瞳をしている―死神キルバーン―の気配に、百戦錬磨たる彼等をしても背筋が凍る思いがした。
普段の彼は、陽気にお喋りをし主共々子供達を目一杯甘やかしている甘い彼の姿であり、大戦時で敵であってもこんな冷たい気配を感じた事は無かった。
大戦時から―死神―は眠っていた・・・ロモスのあの森で一人の少女に出会ってから、その少女に興味を持った事で一つ二つしか考えていなかった思考が沢山の事を考え始めてから。
それまではヴェルザー配下のピロロに操られるに任す人形であった。
知らぬとはいえ疑似思考回路に興味を持ったバーンに、生命が芽吹くハイ＝エントを施され数百年の年月を掛けて育った―本物の思考―を有しながらも、ヴェルザーの下にいる事にうんざりとし、其れよりも魔界を救わんと一つの道を駆けのぼるバーンを主としてずっと魔界の神の傍らにあり覇業を手助けしてきた純粋な親友の下にずっといたいということ以外はさして興味が無かったから。
それまではヴェルザーの指示と、バーンの指示は一致していた。
ヴェルザーはバーンの懐に入り込み覇業の手伝いをしてやれと。ゆくゆくは地上を破壊するかその道半ばで隙を見せたバーンを殺す心づもりでいたのだろうが、その命令はピロロは兎も角―キル―はバーンに仕えて五十年程で己の中で破棄した。
好きになったのだからしょうがないでしょうと、心の中で嘯きながら。
そんなキルの興味をティファが引いた・・・・・当の本人は低きなぞまったくなかったのだが・・それは兎も角、彼の中で蒔かれた―生命の種―の成長が一気に加速をした。
好きはやがてすべてを手に入れたいという愛に変わり、その代りの

様に―攻撃性―が低下を見せた。
それまでは生命を消しても何も感じなかったキルは、見向きもしなかった命に少しづつ興味を持った。
何故彼等は強大な力を持っている魔界の神に、命を賭して歯向かうのか、戦いに駆り立てられているのかを考察までし始めた。
そして敵の自分に笑い続ける風変わりな少女に似たような―良い子達―に出会えた事が彼を生命に近づけた。
チウとパプニカの城の魔導研究所の三つ子の長、キル曰くのお爺ちゃん学者たちインス・フォス・ワイズ達もまた使者だとは言え、ティファを人質に取った憎い敵の自分に礼儀正しかった・・・・戸惑った、そして魅かれた彼等の心を理解したいと願う程に。
そして・・・魔界はそんな優しい心によって救われた時、―死神―は時折愚か者達を狩る時以外は眠りについていたのを・・・・叩き起こされた、それも大戦が始まる以前の、己の好いた者達以外の生命に興味なく狩っていた時よりも怖ろしい、己の意思で相手を殺す気に満ちた、本当の死神が誕生した瞬間であった。
ティファとチウとポップを攫った者全てを殺しつくしてやると
すぐさま救出隊は誰にするかで揉めたが、人員は先ずは六名と定められ、三神達から内三人が指名された。
諸事情でアバンとマトリフそしてキルの三人、そしてもしかしたらを考慮されてラーハルトの四人であった。
アバンとマトリフにはあちらから空間を安定する呪法の陣を張りそれを空間使いのキルが安定させる事、そしてあちらのラーハルトがそろそろ竜の血で蘇りそうなのですぐに味方にできる様にあちらのダイ達に合わせるべく、異界のラーハルトにエスコートさせようと提案がなされた。
自分と同じ似姿の者ならばそこから誰だと興味を持ち、猜疑心の強い者とても話位は聞くのではなかろうかと・・・きかなくともこちらのラーハルトならば制圧して引きずっていけそうなので八割はそんな理由でラーハルトが選ばれた。
そして行くにしてもバーンとダイは力が規格外すぎるので―今回

―は不可能であり、二人に次ぐ実力の持ち主としてヒュンケルとロン・ベルクが選ばれた。
「私達の代わりにあっちの神様の頬引っ叩いてやってちょうだい!!」
とはレオナの言葉であり
「今回の事は赦せません!!絶対に文句を行ってきてください!!」
とはメルルの言葉であり
「・・・・私も行きたい・・・ティファを我が物顔でどうこうする奴なんてこの拳で砕きたいのよ・・・」
とはマァムの言葉であった。
実力不足で外された感のあるクロコダインは忸怩たる思いがあったが六人を快く送り出し全員の願いを預かって他界に渡るその前に・・・・・あちらのキルバーンは最悪な奴だがお前それでいいのかというラーハルトの言葉に、キルは肩を竦めて主に許可を得た。
「バーン様、―僕の今の姿―を晒しても?」
その言葉はかつてミストが、主より預かっている真の姿を晒して敵を殲滅する時に伺い立てていた言葉であった。
その言葉に、バーンは重々しく頷く。
「許可する。真の姿で子等を救いに行ってまいれキルよ。」
その言葉が終わると同時に、一陣の風がキルを覆いそしてアバン達の前に姿を現したのは、褐色の肌に黒い長髪を後ろで赤い組み紐で髪を結った、赤い瞳の魔族であった。
「ここ半年で僕の姿が出来上がったんだよ。いつお披露目しようかバーン様と相談していたんだけれども、まさかこんな時にとは思ってもみなかったよ。」
長身で鼻梁がスッと通った彫りの深い端正な顔立ちをした男の苦笑した気配はまさしくキルであった。
数百年をかけて育てられた命が、完全なる生命となったのだ。
それは奇跡のようなお伽噺であったが、―ティファ―という存在が成して来た事に比べればそれはあっても不思議ではなかろうと誰もが思った。
キルに秘術を掛けたのが魔界の神大魔王バーンであればなおさら

である。
生命の種を植え付けられ、生命に興味を持ちそして慈しむに至った彼に起きた奇跡を、全員はすんなりと受け入れたのだ。
そして、彼等は間に合った。
パプニカの平原にて少年ダイ・ポップ・マァム・クロコダインとノヴァとそして囚われかけたヒュンケルをアバン・マトリフ・ヒュンケルが救い出した。
カール平原にて罠に食われかけたアバンと水牢に囚われた青年ポップとチウをラーハルトの大技が救い出し、キルがポップとチウを抱き留めそしてキルバーンをロン・ベルクが叩き壊した。
救い出した後、ラーハルトはこの世界のラーハルトを探してくるのでティファ様を頼むと言い残してキルから通信用の目玉を受け取り走り去る。バラン様ならば自分の所縁のある回復の泉近くに自分達を埋葬するだと踏んで先ずはそちらに向かった。
残されたアバン達は彼等に砦に案内を頼もうとした時、一同は緑の魔法陣によって隠し砦へと辿り着いていた。
何が起きたのかの考察は後回しだという他界のアバンの言葉に全員が動いた。
少年ポップの足に治療を済ませたヒュンケルは断りを入れて大広間の隅に一つだけあった柔らかいソファーの上にそっと降ろし、戻るまで絶対に安静にしていてくれという言葉を残し、ポップとチウを抱きかかえたまま先行したキル達を追った。
大広間にはテーブルや椅子はどかされており、中央に―青い陣―だけがあった・・・あれは血だと、長年戦士として戦いに身を置いてきた者達はすぐ様に悟った・・・この砦で青い血を持つ者は只一人！ティファしかいない・・・きっとまた何か無茶をしたのだと容易に察せられた男達は、走るのももどかしいとばかりにティファの気配のする部屋へと急ぎそして・・・・青白い顔をして横たわっているティファの姿があった。
傍らにいたこの世界のバランは、青年ポップとチウ達に場所を明け渡す。

そして必死にティファの名を呼べばうっすらと目が開きポップとチウが抱き着けば、三人はキルの腕の中に収められた。
掴まえてあげられなかったことを詫びれば、ティファもまた己がキルであることを分かってくれた。
カール平原においても、ポップとチウは自分が名乗らなくとも分かってくれたように。
水牢から出され地面に叩きつけられる前に二人を抱き上げ、そして抱きしめれば、ポップがおずおずとした声で尋ねてきたのだ。
「お前・・・キルバーンか？」
それは周りの者達には聞こえない程の小声で、尋ねるというよりも確認するような声音であった。
自分が食事を摂る姿を見せた事は幾度かあるが、それは笑いの仮面の口部分を外した姿であり、完全に見せた事は親友のミストにも愛しいティファにもなかった。
それでも、この青年は分かってくれた、自分がキルであることを・・・それはチウも同じで、何かを言おうとしては言葉に詰まりしゃくりあげている・・・安堵して泣く寸前のチウの姿に、キルもまた二人を掴まえてあげられたことが嬉しくて二人を離さないまま泣き崩れた。
そして三人を掴まえられたことにキルはまた涙を流すのを、アバン達もまたうっすらと涙を浮かばせながら見守っている。
二度とこの子供達を手放すものかと大人全員は改めて誓う。
―敵―全てを破滅に導く道筋をつけながら

いしの積まれる世界：あれが向こうの・・・

・・・なんだこの光景は、俺は確かカールの隠し砦でダイ達に新たな武具とダイの鞘のヴァージョンアップをしていたはずだが・・・それもたった半日しかたっていないのに砦の中のこの光景は何なんだ？

御年二百五十歳越えのナイスミドルな魔界の名工様は、ダイの鞘のヴァージョンアップが出来たと大広間に意気揚々とやって来た。

それは寝食を忘れる程で、異界からこの世界の神達によって攫われて来た稀人達と共に砦にやってきて三日間、外の世界の事は愚か砦内部で重要事項を決める会議があろうがご飯の時間だろうが知った事ではないとばかりに、ロン・ベルクはダイ達の武具の為に日夜頑張っていた。

異界のチウから貰った有難い代物を有効活用すべく、先ずは光魔の杖で培ったノウハウでポップにブラックロットを拵え、次にクロコダインのグレートアックスの刃の部分にだけあれを使用した。

そして残りはヒュンケルの鎧の魔剣を作るには到底足りず、そもそもが時間も無いのでそちらは諦め、武闘家マァムの為に魔法防御を完璧に備え鎧と、左肩部分にナックルダスターを収納した攻防一体の鎧化する魔甲拳に取り掛かった。

異界のチウから貰った最後の材料は、マァムの心臓を守る一番大切な部分にロン・ベルクは迷わず使い切った。

異界のチウもマァムと同じ武闘の師を仰ぐ同門であると言い、何よりも紳士的な態度にチウならば弱い方を率先して守るだろうと、チウの意思を組み上げダイの方よりも少し力が足りなさそうなマァムの守りを優先させ、それが完成させるやいなや休む間もなくダイの鞘のヴァージョンアップに取り掛かりそしてすべて完成したぞといつも誰かしらがいる大広間に行ってみれば・・・

「はっはっはっはっは!!!こんなにうまい酒を飲める日が来るなんて最高の気分だぜ!!ダイの剣の完成か！――お嬢さん――が眠りから覚めた後以来の最高の酒だ!!!」

「あの・・・ロン・ベルクさん・・・飲みすぎてないですか？」
「そうですロン・ベルクさん！飲みすぎはほどほどに・・・」
「硬い事を言うなよお嬢さん！それに地上の酒は魔界のに比べれば水も同じだぞチウ!!お前も飲むかポップ!!嫁さん貰ってもう一人前なんだから付き合え!!」
「・・・ロン・ベルクさん・・・ポップに悪いこと教えないでいただけませんか？」
「はっ！もう嫁貰った一人前の男に過保護が過ぎるぞアバン？マトリフも飲むか？」
「・・・・誰かこの絡み酒馬鹿放り出せ・・・」
ロン・ベルクは生まれて初めて茫然自失とした・・・それほどの光景が目の前に繰り広げられている・・・自分と同じ似姿で、なのに酒落た服でめかし込みながら馬鹿笑いをして酒をかっ食らっている自分ってなんだ!!??
あれが・・・もしかしなくとも異界の自分なのだろうか・・・だとしたら認めたくないとロン・ベルクは速攻で頭に浮かんだ答えを必死にかき消そうと脳内で絶叫した！
酒を馬鹿笑いしながらかっくらうのは良い!!自分も時折地上界で友誼を結んだジャンクとときたまそれをしているからだ。
それは興が乗り楽しくなった時にはそれくらいは酒飲みはするだろう・・・問題は！異界の自分の膝に乗っている者達だ!!
何故異界のチウと・・・そして年頃の娘になっているであろうティファという少女を膝の上にのせながら青年ポップの肩に腕を回して酒を飲んでいるんだ!!
その周りには異界のアバンとマトリフとヒュンケルがいて・・・見知らない半魔の男と魔族の男が面白くなさそうにしながらも食事の支度に勤しんでいるシュールな事になっているのは何なんだ！
アバン達！唖然呆然として俺を見るんじゃない・・ジャンク達も白い目で俺を見るんじゃない！俺には幼女趣味は無いんだよ!!!俺が武器作りに勤しんでいるとき何があったんだ!!誰か説明しろ!!このバカ騒ぎは何がどうしてこうなった!!!

なぜこんなカオスなどんちゃん騒ぎになっているのか・・・・遡ってみよう・・・

ドール事キルが無事に子供達三人を掴まえてあげられた事にほっとして涙を流した後、名残惜しいが他の救出隊にもティファ達との再会を譲り渡した。

ヒュンケルも泣き崩れた。ロン・ベルクもまた涙を浮かべて三人を抱きしめ、マトリフはその間に三人の子供達の頭をゆっくりと順番に撫でていき、アバンも熱い抱擁で三人を包み込み、一頻り再会を喜び合った後は、この世界の勇者達が待つ大広間へと場を移した。

全員が静かに待っていた。異界からの救出隊が来たのだ、今後ティファ達はどのように行動するのかをきちんと話を聞くべく・・・もしかしたらこれまでのこの世界の行状の沙汰もあるかもしれないと、フローラとアバンは為政者としての観点からそれを考察しそれもやむ無しと考えている。

この世界は三人の子供達にはあまりにも過酷で、多くの傷をつけたのは間違いなく、それは敵だけのせいではなく味方で大人であった自分達の不甲斐なさもまた一因である。

であるならば魔王軍は滅ぼされる事は決定事項であり、こちら側も何らかの償いを要求されてもおかしくはない・・・そう大人達は覚悟をしていたのだが・・・・それは吹き飛ばされた、一人の半魔の青年と、それと同じ似姿をした男が大広間に突撃を掛けてきたことによって・・・詳しく言うのならば一人は鎧の魔槍を着込んでおり、その男に首根っこを掴まれた簡易な布服を着た男がやかましく砦に入って来たのだ！

「手間を掛けさせおって!!お前の主はここにいる！サッサとくればいいものを!!」

鎧の魔槍を着込んだ男が怒鳴れば、首根っこを掴まれた男も声を荒げるのは自明の理であり・・・

「異界から来たなぞそんな胡乱な話を誰が信じる者か！言え！これは魔王軍の誰の策略だ!!!」

・・・首根っこを掴まれた半魔の青年の言い分が正しい・・・どこの世界の者が、そんなお伽噺をすんなり信じるというのだ、普通は罠疑って当然だろうとこの世界の誰もが思った事は正しい・・・最後にラーハルトに相対したヒュンケルと、竜騎衆達にボロボロにされたポップは当時の恐怖を思い出し若干青褪めながらも砦の入り口近くから聞こえる口論の後半部分に賛同する・・・自分達だとて目の前で見ていなければ信じなかった・・つまるところさっさと信じた先生の方が・・・後は推して知るべしだがそれは兎も角、足音と口論の声は次第に大広間に近づきそして・・・扉が開けられた・・・・鎧の魔槍を着たラーハルトが、行儀悪く足で蹴っ飛ばしてだ・・・

そして首根っこを掴まれていたラーハルトは、不意に大人しくなった。

ラーハルトは異界のラーハルトが考えていた通り、例の回復の泉近くに竜の血を与えられ埋葬されていた。

そして運よく黄泉がえりを果たし、手紙を読んで泣き伏していたところに声を掛けたのだ。

ラーハルトとしては精一杯の、それこそティファやチウやマァム達に接するように、黄泉がえりを果たしたこの世界のラーハルトが混乱しないようにとしてやったのに・・・この世界のラーハルトは初手から異界のラーハルトを名乗ったものに牙を?き、その魔槍はヒュンケルに託したものであり返せ盗人とまで宣って来た!

この世界のラーハルトも強かった、黄泉がえりを果たしたばかりだというのに素手に闘気を纏って手刀で首を幾度も狙われ、とうとう己の話を聞かない頑固者に腹が立ち、槍で鳩尾をついて大人しくなったところを首根っこを掴まえ道々話した。

曰くお前の主は生きているが、息子であるダイ少年を庇って命を落とさんとしたところを、自分の主の息女であるティファ様の作りし奇跡の薬で辛うじて命を永らえたが、その代償として今から遡る事十二年分の記憶を全て消え失せ力も魔力も無いただの一般人になった事。

そしてそれが原因で自分の主の娘と大切な仲間二人がこの世界の神々によってその奇跡の薬諸共攫われて聞いたこと全てを聞かせた

のだが、当然そんな降ってわいたような話をはいそうですかと承知する者はおらず、この世界のラーハルトに暴れるのに辟易としたラーハルトは、有無言わさずに砦に入った・・・神速であるがゆえにそれは目玉もとらえきれず、そしてラーハルト達の気配を感じたティファが迎えの式鳥を放ち誘導した事ですんなりと砦内部に入りそして首根っこを押さえていたラーハルトを思いっきりバラン達の方に投げつけた。

「目の前にいる方がお前の主だが、先も行ったようにそのお方にはお前の記憶はない・・無いがお前も―俺―もバラン様に救われた身・・・生涯をかけてその方を守れ！ご子息をお守りしろ・・竜騎衆の長であるお前の生涯をどう使うかはお前次第だがな・・」

鎧の魔槍の男の言葉には誠があった、その熱意の言葉とそして目の前にいる主と、横を見ればヒュンケルが―二人―おりそして自分を唖然と見ているポップは最後に見た時から月日が経っているとはいえ残された主バランからの手紙よりもはるかに年月を経ているのが分かり、周りを見回せば部屋の隅にあるソファーの上で自分に手を振っている少年ポップの姿を見て、ラーハルトも認めざるを得なかった。

目の前の半魔の話は本当であり・・・つまるところ主は代償として己の愛息子との縁につながる全ての記憶を失ってしまったのだと・・自分達との絆全ても諸共に。

それを信じたくなくて頑強に話を拒んでいたのに、己を見知らぬものとして見るかつての主君の顔にラーハルトは泣き・・・そうになったのだ・・・そう泣かなかった・・それはラーハルトの心が鋼だったわけでも、その前に少年ダイ達が何か凄い立派な事を言って彼を心服させ俺が記憶と力を失ってしまった主バランとご子息たちを守るでは全くなく・・

「小娘!!!お前は一体!!!お前はどうして俺達に心配しかかけんのだ!!!」

・・・・異界のラーハルトの絶叫が原因だった・・・確かティファという娘は向こうの竜の騎士バランの息女でお前の主の大切な娘様だろうに、なんでそのご息女に対して小娘呼ばわりしているのだ!!

しかもがくがくとそんなにゆすぶって！お前一体どこの蛮族だ!!
さっきのこれぞ騎士の鑑であったお前はどこに行った！
だが鎧姿のラーハルトは本気で絶叫をして、―ドール―に抱き上げられているのを無理やり引っぺがし！鬼の形相で怒鳴っていた。
「ディーノ様達が泣いていたぞ！お前はひと時もじっとしておれんのか？厄介な奴等に目を付けられなければ気が済まんのか!!!!」
・・・・事のいきさつ全て聞いている全員としては、これは絶対にティファという少女のせいではないだろうと擁護しよとしたが・・・する必要はなかった・・
「どうして・・・お前は平穏に生きていくのを許されんのだ・・・・・」
鎧のラーハルトの言葉は次第に弱々しくなりそして・・・他の者達と同じくティファを抱きしめたまま泣き崩れた。
力強く腕の中の少女を抱きしめる様は、二度と手放さんとばかりにきつく抱きしめる様はまるで少女に縋りつくようで・・・鎧のラーハルトこそが迷子の子供が親にようやく出会えたように取り縋っている。
其の想いはこの世界の者達には分からずとも、異界の者達には分かりすぎる程であり、特にティファには思い当たる節がありすぎラーハルトの理不尽な言葉の数々に黙って受け入れていた。
不安だったのだラーハルトは、幼い頃から父を母を立て続けに失い人との絆も断ち切られ寄る辺なき身を父に拾われた半魔の青年は、失う事はもう御免だとばかりに怯えている。
それはヒュンケルととても良く似ている。
絆を結んだ者を喪う怖ろしさを知る男達は、特にティファを喪う事を何よりも怖れている。片や妻がいてもう一人も結婚をした、愛する家族が出来てもティファは特別だから。
きっとそれは、ティファによってさまざまな形で世界と絆を持てた者達全員が同じ思いを抱いている。
それはかつて勇者ダイ一行の合言葉が―世界を救う事はティファを救う事になる―
あの合言葉は生きており、そしてその合言葉は広がり続けていたの

だ。

・・・・そこまでは普通の感動の再会であった。

この世界のラーハルトも、二・三バランと話した事で事実確認を取ると同時に落ち着きも取り戻し、忠誠を新たにダイと共にバランに捧げ、この戦いの後になぜ自分がそうするのかを話しますとバランに約束をした。

その際はどこまで話せばいいのかをヒュンケルとポップに相談しながらだなと算段をつけて・・・あの二人ならば、己の半生を知って泣いてくれたあの二人ならば親身に相談に乗ってくれるだろうと信じて。

鎧のラーハルトも落ち着きを取り戻し、ポップとチウにも熱い抱擁を交わした。

「ポップ、―向こうの花嫁―が、お前達を攫った神達に文句を言って欲しいと言っていたぞ。

チウは怪我をしなかったか？お前に可笑しな口をきいたどぐされ外道がもう一度現れたら俺が壊してやる。」

いつものラーハルトに戻った事に、子供三人がほっとしている間に・・・アバン先生はチートを発揮していた。

即ちこの世界の動きがいい元気がまだある兵士達に号令を発して食事の支度をさせたのだ！

「いつまでも―うちの子供達―に甘えていないでくださいね？食事くらい自分で作る！

芋の皮？いて切って沸騰したお湯にベーコンと人参と共に入れれば塩とパテギアで味整えてスープが出来るでしょう！ほらここに朝買い込んでるパンの残りがありますでしょう・・・・レイラさんとスティーヌさんですね。初めまして私は異界のアバンの方です。

この度はうちの子供達が大変お世話になっております。

食事の支度は私が手伝いますのでどうぞよろしく。」

厨房でアバン先生は真っ黒な気配で鬼軍曹化していた。

レイラとスティーヌは兎も角！普段もっとまず飯ですごす兵士達

が!!ティファの食事がいいとか贅沢抜かすなと言外に言い放ち、携帯食よりも千倍もましだろうとビシバシと簡単美味しいスープの作り方を教えて作らせているのを、子供達は知らずに今日は―大人が頑張る―という言葉を素直に信じて―一仕事終えたロン・ベルク―の膝の上にティファとチウを預けたラーハルトも食事の手伝いに行き、大人ヒュンケルもテキパキとイス・テーブルの支度に取り掛かり、おじさんマトリフの方は青年ポップの頭を一頻り撫でた後、安静を言いつかった少年ポップの足をマトリフと共に再度診て、今日一晩で治るだろうと太鼓判を押して少年ポップを安心させる。

マトリフ達は互いに神隠しを知っているので、アバン達の様にすんなりと互いを受け入れた。

ヒュンケル達の方は、青年ヒュンケルは大人ヒュンケルの振る舞いに戸惑っている。

どうしてそんなに屈託のない笑みを浮かべて自分の弟弟子にあれほど慕われているのだと・・・

そして食事の支度が整う中当然大人達の為の酒が用意され、感動の再会の時くらいはと真面目なノヴァも何も言わないのをいいことに・・・言っても酒飲みにあしらわれるだろうがそれは兎も角、ティファとチウを膝に乗せているロン・ベルクは思いっきり酒をかっくらい、この世界のロン・ベルクに唖然とされたのだ・・・

いしの積まれる世界・糖度を広めよう!これ必須!!!

魔界の名工様が必死で武具作りに励んでいる間の出来事をアバンが全て説明した・・少し離れたところから・・・異界の魔界の名工様の煽りをもろに食らった子の名工様は、仲間を助けに来たのは良いとして、なんで少女を膝にのせてあいつはご満悦なのだどげんなりした。

百歩譲って異界のチウはまだわかる!あいつは良い子で俺でも膝にのせて癒してほしいとは思うのでいいのだが・・・・俺に少女趣味はないから、頼むから俺も同類だという目で見ないでほしいと泣きたくなったこの世界のロン・ベルクは悪くない。

そんな事は知らないロンは、愛しい少女を膝に乗せて大好きな子供達を傍らに置けてご満悦であり、そうこうするうちにティファとポップとチウだけは今日は特別食だとアバンが四人の前のテーブルに三つのプレートを置いた。

「ティファ、ポップ、チウ君、―向こうの世界の人達―が、貴方達の為に拵えてくれた食事です。」

にこにこしながらその支度をするアバン先生に、良い子三人組は嬉しいのだが困ってしまう。

「先生、この世界ではみんなが頑張ってるのにティファ達だけそれって良くない気がします。」

「俺もそう思います・・・・どうにかダイ達だけでも一緒に食べられませんか?」

「僕達だけが其れなのは・・・・・」

あぁ本当になんて良い子達なのでしょうかこの子供達は!!今すぐにでも向こうに連れて帰ってひたすらに甘やかしてあげたいです!!!・・・とはアバン先生は脳内大暴走させたが表面には決して出さずにコホンと咳払いしたのみで説明を始める。

「大丈夫です、この食事に関してだけは砦の―大人達全員―に周知して許可を得ました。この世界の私・・・いえアバン殿もフローラ様も了承されましたので。それにこの世界のダイ君達にもクッキーお持

ちしましたのでそちらを楽しんでいただきます。」
　自分達という脅威が来たのだ、こちらのもどきとは言え大魔王を僭称する者が今日の夜に焦って夜襲かけてくるような三流ではないでしょうからデザートも楽しんじゃいましょうと・・・物凄い子きおろしをしながらの敵分析と状況分析に、―先生時折口悪くなるな―なくらいにしか思っていない三人の子供達は兎も角、もっと真っ黒い気配を出されて説明を受けたアバン・フローラを含めた大人全員はその時の事を思い出してゾッとした！
　まぁ夜襲したくともティファの結界のお陰で位置特定はされていないでしょうし、誘き出そうにもこちらの戦力不明時に同じ事をするような馬鹿ならばそれはそれで罠張ってやりようはいくらでもあると冷たい瞳で口だけ三日月を描いたような異界のアバンは本当に恐ろしかったのだ。
　そんな気配は三人の子供達の前では微塵も見せずに、向こうから持ってきた料理をいそいそとマジックリングから取り出した。
「「おぉぉ!!」」
　ティファ・ポップ・チウは思わず声を上げてしまった。
　取り出されたのはクローシュを被せた三つの丸い銀盆。
　クローシュが外れないようにと奇麗な組み紐で丁寧に縛られていた。
「ふっふっふ、このマジックリングは―とある人―の秘蔵品で、なんとどれ程持ち主が知っちゃかめっちゃかな動きをしようとも中身は何の影響も受けないという超優れものなのですよ！」
　しかもこのクローシュも特別製で、内側に保温用の呪法がびっしりと刻まれているので料理も冷めていませんという説明に、ティファ達の周りはどよめきが奔った!!
「・・・・・んだ其の馬鹿げたマジックアイテムは・・・」
「どこの酔狂な奴がそんなものを作ったんだ・・・」
「・・・・リングなんて伝説級ではないですか・・・・」
　特に呪法だのマジックアイテムだの魔道具だのに精通しているマトリフ・ロン・ベルク・アバンは異界のアバンの説明に唖然とした。

呪法を銀に刻むこと自体はそう難しくはないが、それは平板な物や緩い曲線に限った話であり、クローシュなどほぼ球体でありそれも内側に刻むとなればどれだけの職人技術がいるのだとマトリフとロン・ベルクの意見であり、マジックリンの中身が外からの干渉を一切受けないという事は、内側の空間を揺るがさない強固な結界がいるだろうとはアバンの意見に、向こうの人達は優しい人達が多いんだなとのほほんと聞いていた少年ダイ達も唖然としてしまった・・・つまりこの三人の食事の為に!・伝説等級の代物が用意されたのだ!!そういう物は、本来もっと太古の石板や同じくらいの繊細で壊れやすい伝説級のアイテムを持ち運ぶときに使用するのなのに・・・　それを平然と持ってきているこの人達って何!!??である。

・・・ぶっちゃけ全部用意したのは魔界の神様だろうと、子供達三人は直ぐに分かったので驚きはなかった・・・・一日の結婚式の為にデルムリン島の脇に同じくらいの島を大規模転移させたり、魔界の山脈が高すぎるから雨雲が阻まれているなとティファが愚痴れば即日の内に部下に命じて山の高さを十キロどうやってか低くさせるだの権力・魔力を山ほど持っているまさしく魔界の神様ならば、このくらいの物を持っていても不思議はないだろうな～と・・・・一般感覚から最早子供達はずれていた・・・・手遅れな程に。

なので驚きではなく、魔界の神様達の心尽くしの方に歓声を上げて、いそいそとクローシュに結ばれていた組み紐をほどき開けてみればそれは・・・

「フワフワオムライス!!!!」

「おぉ!!俺久しぶりにこれ見たわ!!!!」

「凄い！本当に湯気立ってます・・・柔らかそう・・・」

素直に喜ぶ子供達にキルは嬉しくなってルンルン声で解説をする。

「これは―僕達の料理長様―が、僕達が出立するギリギリに作って、―あのお方―がクローシュとリングに入れたんだよ。

組み紐は向こうの―花嫁さん達―がしてくれたんだよ～。」

つまり温かいものを自分達に食べさせたいと、魔王軍の料理人にして大魔王バーンの料理人たるミストが拵え、バーンが伝説等級のリン

グとクローシュを用意してくれて、マァムとメルルとレオナが組み紐を結わえてくれたのだと思うと、三人の瞳にじんわりと涙が浮かぶ。
きっと、自分達の事を物凄く心配してくれながら用意してくれたのだと思うと、其れだけで胸がいっぱいになるがそれは兎も角!!
「「「いただきます!!!」」」
作り主達の想いを無駄にしないとばかりに、アバン先生からスプーンを受け折るや否や子供達は直ぐに食べる為の挨拶をして、そしてフワフワオムライスにスプーンを入れて、口いっぱいに頬ぼった!
「ん・・・・ふ・・・・柔らかい!美味しい!!」
「中にケチャップライス入ってる!!・・・・鶏肉うんんめぇぇぇ・・」
「あっふっふ・・・美味しいです!!」
そこにいるのは、美味しいものを頬張る子供三人の姿があった。
味方を欺きながらも必要だからと茶番をしたティファ、心に傷を負いながらも戦う事をやめないといったポップ、必死に負傷兵達を守り抜くために体を張ったチウの姿はどこにもなく、無心にご飯を食べている子供しかいない姿に、異界の大人達は目を細め、食事の為にティファとチウを降ろしてポップの横に陣取ったロンもそれを肴に美味そうに酒をグビリト呷る。
子供なんてものはこれが一番だろうと言わんばかりに。美味しいものを無心に食べて、そして様々な事を学んで疲れたら寝かせて大きくなっていくもんだと。
そんな素晴らしい光景を、自分達の世界でも実現させてあげたいと、させねばならないとこの世界の大人達が新たに胸に誓う程の尊い光景であり、そちらの食事の支度もできたので少年ダイ達も食事にありつく。
異界のアバンはビシバシ言いながらも、こちらの食事の方も向こうの料理人たちが拵えてくれたようで豪華な食事であった。
沢山の鶏のから揚げに、向こうの新作料理だという野菜たっぷりのポテトサラダにデザートには本当にクッキーまでもが付けられたのだ。
マヨネーズという白いソースが絡められたポテトサラダは美味で

あり、大量に銀盆で各テーブルの中央に配置されたので全員が、それこそアバンまでもが弟子達と同じ様にお代わりをしたほどであった。
バランも久しぶりの部屋の外の食事に戸惑うが、―ダイ―が横に座って美味しいねと笑う姿に緊張は解れて少しづつ口をつければ本当に美味しかく思わず笑みが浮かぶのを、二人の目の前に座ったラーハルトは泣きそうになる。
自分がバランに拾われ長ずるにつれて食事の支度や身の回りの世話をしてきたが、バランは常に何かに駆り立てられるように食事も栄養が取れればいいとばかりに味わう事をしてこなかった姿しか見たことが無かった。
それが・・・力と記憶を失ったその背で本来の優しい人間性を取り戻したのだから何という皮肉だと思いつつも、主の心が休まる光景にラーハルトは涙を禁じえなかったのだ。
そのラーハルトを、隣のヒュンケルがそっと背中を叩き、叩かれたラーハルトは何だとヒュンケルを睨んだ。
自分の涙を揶揄っているのかという無言の言葉に、ヒュンケルは首を横に振って黙って微笑んでいるのを見て、ラーハルトは察した。
主と自分が共に生きて、良き光景を見れて良かったなと言ってくれている事に。
それは少年ダイの周りに座っているポップ達も同じであった。
いつもはヒュンケルは離れている位置に座っている・・・なのに今日はアバンの弟子達全員とメルルとチウとクロコダインレオナとノヴァは必ず近く同士で座るように異界のアバン先生から厳命が下ったのだ。
「どうも貴方達は普段のコミュニケーションが全く持って足りてないように見受けます。近頃作戦の伝達や今後の方針以外の事で日常会話を五分以上した事はありますか?」
・・・思いっきりぐぅの音も出ないような指摘に、ヒュンケルの事を嫌いではないがいけ好かないと思っているポップも反論できず、ヒュンケルの左隣はラーハルトなので右隣に座る事になった。
向かい側はバラン・ダイ・マァム・チウ・ノヴァであり、ポップの

列はラーハルト・ヒュンケル・ポップ・クロコダインとなった・・・・しかし日常会話ってなんだっけと、ダイは父バランに沢山話しているのでそちらは兎も角、他の子供達は大いに戸惑った。
ここでジャンク達が助け舟を出してくれればありがたいのだが、偶には子供・仲間同士でさせましょうというこれまた異界のアバン先生のお達しで、保護者達は保護者達の席が遠くに用意をされて援護はない・・・と思ったら・・・・向こうの世界のクッキーが仕事をしてくれた・・・
パキリ・・
「・・うめぇ・・・甘いけど・・中にベリーの実が入っててうめぇや・・」
大広間全員にクッキー五枚が配られた。
クッキーは魔王軍の料理人たちが一丸となって大量に作ったのだ。ティファ達が攫われた先で手助けしている者隊のやる気を出させる為にも、美味しい物で釣り上げよう作戦は功を奏し、食事の時は黙って食べよと厳格なバウスン将軍さえもが美味いと言ってしまう程の絶品に、少年ポップはむしゃむしゃと食べてしまった。
周りは味わいながらも食べているのに臍をかんだがもう遅く、もっと味わえばよかったと後悔すれば、ことりと目の前に三枚のクッキーが―左隣―から送られて来た・・ヒュンケルが自分の残りを全部くれたのだ。
今までこんな事をしなかったヒュンケルに、当然ポップは目を丸くし、周りの子供達それこそ何事においてもつんけんしているポップをあしらうようなヒュンケルを知っているノヴァもどうしたんですかという目を向ければ・・・ヒュンケルの顔が赤くなっており、ボソボソと口を開いた。
「・・・・今日俺を助ける為に無茶・・いや・・・無理・・・・・兎に角そのお礼だ・・」
いつものように、弟弟子が無茶無理をしすぎないようにうとどうしても上から目線の説教時見てしまう言葉を飲み込みながらの変な言葉遣いになってしまうヒュンケルの顔は益々赤くなった。
ただお礼をしたいだけなのに、そして自分の事で命を危険にさらし

てほしくない、そんな簡単な事さえも面と向かっては言えない己がいやになりながらも、ヒュンケルは異界のヒュンケルと自分のポップとのやり取りの焦がれたのだ。
異界のヒュンケルはあの後も優しくポップに話しかけていた。
「痛みは無いだろうがマヒしたような感覚はないか？」
「大丈夫っす・・・少し力が抜ける感じも明日には無くなっていたら大丈夫だって師匠と―マトリフさん―言ってましたから・・」
「そうか、俺もだがお前も若いからマトリフ大魔導士がそういうのならばすぐに治るだろう。」
自分では・・・あんな風に言っては上げられない・・・優しい言葉を掛け合うにはこれまでの関係が許してくれない。
ヒュンケルはずっとダイ・ポップ・マァム弟妹弟子達を守って来たつもりであった。
この厳しい戦いで死んでしまわないように、心を鬼にして厳しい言葉を特にポップにかけてきた。
己の不始末でダイが死の大地付近で行方知れずになった時も、慰めでは何の意味も無いと発破をかける為に憎まれ役をかって出て奮起させたが、あれが決定的にポップとのわだかまりを作ってしまったのをヒュンケル自身が自覚している。
いかに戦時下と言えども傷ついたポップの心をさらに追い詰めたうえで怒りで動かす・・他にやりようがあったはずだがヒュンケルにはその時にはそれしか・・・いや、今もそれしか浮かばない・・・きっとあの優しいヒュンケルであったれば・・・そもそもがそんな事態にさせていないのではと思うとこれまでの自分の未熟さが浮き彫りになったのだ。
罪を滅ぼしも相まって弟妹弟子達を守るアバンの長兄を務める為に、無理をした、背伸びをした。
自分は何があっても大丈夫だと―大人の振り―をした。ダイ達の事を守る為に苦言めいた事を言ったが、それがかえって弟妹弟子達、特にポップとの間に溝を作った・・・それが為に自分はマァムよりもダイ・ポップと長い時間いたというのにダイが何かを思い悩んでいる

事をポップから相談される事は無かった・・・察しても上げられなかったのだ！
　弟妹弟子達を守ると言いながら背伸びする事に精いっぱいで！己の事で手一杯で!!異界のあの少女の様に包み込んで守る事をしてあげられなかった―子供―と変わらない自分をヒュンケルは認めたのだ・・・認めて少しでも優しさを出そうとヒュンケルはクッキーを無言でポップに差し出そうとしたが―言葉―に出した・・・戦いの指示や特訓についてはなどはサラサラと言えるのに・・・異界のアバン先生の言う通り、日常会話が壊滅的だがそれでもヒュンケルは頑張って上から目線にならないように心がけて言い切った!!
「ありがとうポップ・・・俺を助けてくれて・・・」
　そして、弾かれてもいいからとばかりにぎこちなくポップの頭にそっと手置いた時、ポップの丸くなっていた瞳がさらに大きくなった事でヒュンケルは不覚にもクスッと笑ってしまったのに、ポップが反応した。
「・・・んだよ笑って・・・・俺の顔に何かあんのかよ・・・」
　それは憎まれ口であったが、声音にはいつものような刺々しさは無く、その言葉に釣られるようにヒュンケルも自然と答えた。
「丸い瞳が落ちそうなほどだったのでつい笑ってしまっ・・・嫌だったか？」
「・・・・俺の目ん玉は落ちねぇよ・・・・それよりもこれ貰っちまって良いのかよ？本当に全部食べちまうぞ？」
「あぁ、それは全部ポップが食べてくれ・・・・俺はもうお腹がいっぱいだ・・・お前が食べくてれた方がクッキーも喜ぶ・・・と思う。」
　なれないながらも冗談を言おうとする堅物を絵にかいたようなヒュンケルの姿に、ぶほっという噴き出した声が聞こえた。
　見ればレオナがもう無理とばかりにお腹を押さえていた！
　その様子にマァムは悪いわよと言いつつも口元ういひくひくとさせていた・・・まさかヒュンケルがあんな下手な冗談言うとは思わず、メルルはびっくりした顔をしてしまい、生真面目なメルルが驚いた顔にも笑い上戸なところがあるレオナはもう駄目であった！

「アッハッハッハ!!もう駄目・・・ダイ君!私笑い死にそう・・・」
「ちょ!レオナそれは酷くない?」
「だって・・・あぁあ～・・・ヒュンケルって本当は面白い人だったのね。私今の貴方の方が断然いいわ!!」
　それはヒュンケルが自国を攻め滅ぼしたと知った時レオナが勇者達を助けて生きて償う道を指し示した王女の顔とは違い、明るく笑う少女の顔で臆面もなく好きだと言われたヒュンケルは、―そういう意味ではない―と知りつつもさらに赤面してしまった!
　言っては何だが戦場での敵とのやり取りや、魔王軍の軍団長として同僚や配下とのやり取り以外はコミュニケーションなどほぼ取ってきていないヒュンケルは―普通の少女―に等は免疫ゼロで。
　そして好きだのなんだのの言葉など父バルトス以外にはアバンに大切な弟子しか言われてこなかった・・・
　その姿に、なんだこいつ・・・俺と同じで女の子にちょっと褒められただけで赤くなるなんて子供じゃんとポップは思ってしまった。
　自分もマァムやメルルに褒められただけでのぼせて調子に乗ってしまうが、ヒュンケルももしかしたら・・・・自分と同じ子供なところがあるのだろうかと思うと・・・・―壁―にひびが入って
「んだよヒュンケル、姫さんにちょっといい事言われたら赤くなってさ。
　クッキー一枚返そうか?甘いいもん食って落ち着くか?」
　軽口を叩けば・・・睨まれた・・・というよりジト目をされた・・・それは初めて見る―拗ねた少年―のようであり、その顔にチウもクロコダインも笑ってしまった。
「ヒュンケルさん、僕のも一枚どうぞ。ポップ、人を揶揄うのはいただけないよ?」
「左様、左様、俺は甘いのはいいから残りのポテトサラダとやらを貰って酒を貰ってくる。お前達で甘いのを分けて食べろ。」
「チウとクロコダイン・・・お前達まで・・・」
　自分を庇っているのかレオナ達動揺に揶揄っているのか判然とせず、憮然とするヒュンケルにラーハルトもダイも笑ってしまった・・・

思えばこんな風に食卓を囲んだ事は一度も無かった。
バランと戦った後マトリフ大魔導士の洞窟で世話になっていた時の、それぞれが自分達の回復と戦力アップだけに集中してそれどころではなかった。
三賢者のエイミが作ってくれた料理もそこそこに食べ、ダイは特訓をしてポップとヒュンケルはアバンの書に夢中でかじりつき、それ以外の事で会話をしたのかすらも覚えていないありさまで・・・・日常会話は全員が集まってしたのは本当に初めてなのだと知った。
それはこの一行を包んで守る者達が居なかった為であり、子供達の責では決してない・・誰もが、闘って生き残る事に夢中になるしかなかったのだからと、彼等の遣り取りを遠目で見ているティファは思う。
それを阻止する為もあって自分は料理人をしたのだが・・・・
―原作―でも本当にそんな日常パートはほぼ皆無であり、戦う絆以外があれで育つと言われればティファは無理だろうと考えていた・・・生死を共にすれば絆が・・・友情が育まれるなんて幻想だと。
現にしょっちゅうつるむ様にしていたダイとポップ、そして自分からその二人の間に飛び込んでいったレオナは兎も角、原作の後半ではマァムとポップとの間すらも妙にギスギスしていて・・・最終決戦時のあの変な修羅場は何だとすら思ったものだが・・・
「ポップもヒュンケルも甘いもの好きなの？」
「・・・俺は好きだな・・」
「・・・・・俺はその・・・初めて食べたが・・」
「そうなんだ・・・―今度―・・・・・全部終わったら作ろうか？」
「え・・・」
「マァム料理できるの知ってるけどお菓子作れるの？」
少しの間、ロモスのネイル村から王都につくまでの短い間の数日間の移動時にマァムに料理を作ってもらったダイとポップは、マァムはクッキーも作れるのかと尋ねれば
「あ・・ミーナが得意だから教わるわ。上手く焼けたら食べてちょうだい・・メルルも一緒に作ってみる？」

「え!??・・・実は私・・・・旅から旅の占い師生活で料理は全部宿屋さんか野宿の時の料理しかした事ないです・・・」
服作りは自分の分を拵えるからできると、ぼそぼそというメルルに、ニヤリとレオナが例の―ウシシ―笑いが出た!!
「だったら私も一緒に特訓するわ!!ダイ君!美味しいクッキー作るから絶対に食べてちょうだい!!私もクッキー作る特訓できるように沢山頑張るから!!!」
それは、この大戦を全員で勝って生き残ろうというレオナなりの言葉であった。
今この席で硬い言葉を使いたくない、楽しい話でいたいという彼女なりの背一杯の言葉にダイは柔らかく頷いた。
「レオナのクッキー作るの俺も手伝いたい・・・みんなでさ・・・デルムリン島で作らないかな?」
「ダイ・・・・俺も手伝う・・・・料理だったら先生教えてくれると思ぞ?・・・・ヒュンケルも習うか?」
「俺!!??・・・・材料の準備位は・・」
―戦いの後―の話を、―子供達全員―が初めてした瞬間であった。
ぎこちなく、それでも確かにお互いの言った言葉を受け入れ前に進もうとする姿に、この世界のアバンは涙を堪え、ロン・ベルクもマトリフもほんのりと笑って聞いている。
ティファの世界の甘さの百分の一以下ではあるが、この世界にも確かに甘い空気が流れた瞬間であった。

ちなみに元祖甘い組はそれどころではなくなっていた
「ちょっとドール!!・・・この―十種類のトライフル―もしかして・・」
「あのよ・・・まさかたぁ思うけどよ・・・」
「その・・・・・作ったのって・・」
「三人とも大正解♪」
デザートは魔王軍の双子の料理人アンリとセシルは得意のアップルタルトを作ってくれ、そして十種類のトライフルはミニカップに入って三人分がそれぞれに用意されていた。
作り主はもしかしてと、ティファとポップとチウがキルに尋ねてみればキルは三人に顔を寄せる寄せさせ、バーン様だよとひそりと囁いた。
長いローブの袖があるのと流石にそれはとミストが止めて材料の下拵えをミストと双子が速攻で揃えたが、盛り付けは本当に全て只御一人でされたのだと、名前はもう出さずに成された説明に、ティファとポップとチウは感激して惜しみながら味わった・・・やっぱり自分達にとっての魔界の神様・大魔王バーンは優しいあの人だけだ。
きっと周りをハラハラさせながら拙い手つきで懸命に自分達の事のみを思って作ってくれたのだと思うとそれだけで嬉しくなった。
その日の大広間は様々な甘い空気が流れた日となった

いしの積まれる世界：現状説明

「つまりアバン先生とおじさんと―ドール―は時空間の穴をもっと広げて安定させる要因で、ラーハルトとヒュンケルとロン・ベルクさんは護衛のような感じという事でいいでしょうか。」
「その通りですよティファ。ふふ、貴女は本当に一を聞いて十を知ってくれるので説明の手間が省けて助かります。」
「・・・ども・・」

ええ・・・何やら異界と言いましょうか私達のアバン先生に褒められて照れ臭いティファです。
甘くておいしい夕飯の後は、歩哨で出ている兵士さんたち以外全員集合で大広間でアバン先生達が来た経緯についての説明と、私達の今後についてのお話です。
私が褒められたのは最初の部分で、先生達が来た理由です。
曰く、アバン先生とおじさんとキルは時空の穴を広げる秘術を今回限り天界から授けられて、アバン先生は破邪の洞窟で会得した秘術で、おじさんは・・・あの精霊だか悪霊だか分からない意外と高位の精霊なパックさんから得た加護で得られた精霊呪力で、キルは・・生命化した事で得られた魔族の呪力の三つを合わせて作られる時空間の穴を広げて安定させる法陣を作る・・・らしい・・・
「あまりにも複雑かつ専門的になりすぎるので、私達もそう説明されて使用方法だけしか教わっていないのですよ。」
とは、それぞれに渡されたアイテムを見せてくれた時に困った顔をしていたアバン先生の言葉だった。
三神様達の気持ちも、困ったアバン先生にも私的にはよく分かる・・・神羅万象の一切の説明なんて、話されても困るし時間もないからとりあえず使用方法と、不具合が会ったらこの世界の思念体となったマザードラゴンに知らせれば、伝書鳩してくれるから使い倒すようにって・・・・あのいつもはのほほんとしている人の神様からのお達しらしい・・・神様たちが壊れてる気がしてこあい・・・・帰っ

た後―色々―大丈夫なのか心配だよ・・・

そんな心配よりもお前に傷一つつかないようにしろよとは、―全部―の事情を知っている全員がティファの心情知った時の突っ込みではあるが、お互い知らないのが何とやらであろうがそれは兎も角、この世界のアバンとマトリフ以外は、時空間の穴を広げるアイテムだの、向こうのマトリフに精霊の加護が付いているだのの話に思考が飛ばないようにするのに精一杯である。

竜の騎士たるバランは何とかなっているが、息子のダイはぽかんとしており、アバンとマトリフから魔法の薫陶を受けているポップも呆けた顔をして、他の面々もついていけない顔にティファが優しく解説をする。

「要は大規模な魔法を大勢の魔法使い達でする事を、アバン先生とマトリフおじさんとドールがしてくれるのです。

空間を安定させて、更に通れると向こうの三神様達が確信をしたら私達は帰れる・・でいいんですよね。」

「ベリーグッとですよティファ。それと向こうの世界から―贈り物―と・・・言いましょうかロン・ベルクさんから渡す物があるそうです。

後はお願いしますねロン・ベルクさん。」

「おう。」

それまでの説明をつまらなさそうにしてティファとチウを相変わらず膝に乗せて酒をかっ食らっているロン・ベルクは、ちょっと行ってくると二人を膝から降ろして大広間の扉の方に移動する。

先程の食事の席を全て片付けて扉側に壇上の様になって説明会が開かれている。

その際問題点も洗い出そうと、感じた事・疑問に思った事・問題に感じている事をどんどんと言って貰って書き出す為の黒板と白墨を持ったアバンが陣取っている・・・まさに往年の―先生―である。

そのど真ん中にロン・ベルクが悠々と歩を進める。酒瓶片手に持ちながら・・・

「紹介にあずかったロン・ベルクだ・・・と言っても大層なもんを持っ

てきた訳じゃないがな。」
　やる気もあまりなさそうなその姿に、ダイ少年達は慣れているが生真面目なノヴァは切れかける・・・この世界のノヴァはどうもロン・ベルク属性とは相性が悪いらしいが、持ってきた物に全員が驚いた！
「そこにいる俺達のヒュンケルの鎧の魔剣の試作品だ。俺が大魔王バーンに武器作ってやった事は知ってるな？」
　ロン・ベルクもチャランポランのようだがきちんと確認位はとる・・・膝に少女を乗せて酒かっくらう趣味持ちだが・・・やる事はきちんとやるのを、フローラがきちんと伝えられていると答えたので話を続けた。
「鎧の魔剣と魔槍も俺は二振りづつ作ったんだ。一つは相手に渡すようと、もう一振りは手元に残して改良できないかの研究用に取って置いた。」
　因みにその時バーンには一振りづつしか作っていないと嘘ついて懐に仕舞ったのだというしょうもないエピソードまで・・・ロン・ベルクって碌でもない奴なのだろうかという・・・この世界のロン・ベルクはまたもや同類の目を向けられて切れた！
「俺は一振りしか作ってないぞ！真っ当に作って渡して誤魔化しなんてしてないぞ!!」
　こいつ一体何なんだというこの世界のロン・ベルクはきっと悪くない・・・お前は真面目なんだなという異界のロン・ベルクをぶっ飛ばしそうになったのを、ダイ達が必死になってしがみついて止めたのもまた・・・ご愛敬でいいだろうきっと・・・
「落ち着いてロン・ベルクさん！俺ロン・ベルクさんがそんな悪い事しないって信じてるから!!」
「向こうの世界は向こうの世界だ！怒んな!!」
　ダイとポップが必死にしがみついているのを横目に、異界のロン・ベルクは全く相手にしないで借りたマジックリングから鎧の魔剣を取り出し青年ヒュンケルに預ける。
「結局これを改良する気持ちも全くわかずにお蔵入りさせていたものだ。一応ここに来る前にこっちのヒュンケルに一通り動作確認はさ

せてある。
―向こうの魔法のスペシャリスト―にも一通りの魔法を撃ってもらって魔法防御も衰えていないのは確認済みだ。
錆び付かせるようなへまもしてないから使ってくれ。」
お前はもともと剣士なんだろうというロン・ベルクの言葉に、ヒュンケルは感激して受け取った・・・もう二度と、鎧の魔剣とは会えないだろうと定めていただけに、良くも悪くも生死を共にした魔剣が手元に戻って来たのだから無理はない。
「気に入ったんだったらくれてやる。」
武器だのは飾っておいても武器が可哀そうだいう言葉に、ヒュンケルは万感の思いを込めて頭を下げて礼をした。
不器用なヒュンケルには、嬉しすぎて言葉が出ずにそれしか出なかったのだが、ロン・ベルクとしてはそれだけで十分だった。
戦う漢の矜持は安くはなく、一級品の戦士がここまで礼をしてくれるだけで十二分以上である。
この青年ヒュンケルとしても、長年の相棒が手元に戻りそれも貰えるとあっては喜び一押しであり、そしてもう一つ喜ぶ理由がある。
「ラーハルト!」
「・・・どうしたヒュンケル?」
「分かっているだろう?この鎧の魔剣があれば・・」
「俺に魔槍を返すと?」
「あぁ、俺には矢張り剣の方があっている。長らく借りたがお前に返そう。」
ラーハルトに鎧の魔槍を返してあげる事。
まさか殺し合った末に繋がりとも思える何かを得た男の形見と想った物を返そうとは思ってもみなかったヒュンケルは―武器が無くなる心配―が無くなりほっとした。
異界のロン・ベルクから鎧の魔剣を渡されなくとも、ヒュンケルは槍をラーハルトに返すつもりだった。
其れで武器が無くなろうともだ。
ラーハルトは最早戦う力を無くしたバランを守り抜く使命がある。

大切な人を二度と失いたくないのは誰もが同じなのだから。
剣はヒュンケルに、槍はラーハルトの下に渡り、俺は自分の仕事は済んだぞとばかりにロン・ベルクはまた元の席にふらりと戻り、またティファとチウを膝に乗せて酒を飲み始める。
「・・・・嘘つき・・・・」
ポツリと言うティファの言葉に、自分とチウにしか聞こえないぽそりとした声ににんまりと笑いながら。
そのティファの言葉に、声を拾えたチウはきょとんとしているのを、ロン・ベルクは更に笑ってチウの頭を撫でて気になった事を聞いてみた。
「時にチウ、お前さんの籠手はどうした？」
「あ!!・・・あぁ・・・あれはですね・・・・」
チウの籠手はティファがマジックリングに預かって持ち歩いているのを知っているロン・ベルクは、チウにこっちで使ってみて不具合はないかを確かめてみたのだがチウの歯切れが悪い・・・・もしかして壊されるような事があったのだろうかというロン・ベルクの懸念は、良い感じに外れた。
困ったチウに代わったティファの言葉によって。
「ロン・ベルクさん、この世界のクロコダインさんのアックスの刃とポップさんのブラックロッドの切っ先部分見てみてください。そっとですよ。」
「あん？・・・・・あれは・・・まさか・・」
「はい、―チウ君の籠手―が材料です。先程この世界のロン・ベルクさんがマァムさんに渡した手甲も鎧化した時心臓部分が―オリハルコン―でした。
その三つに、チウ君の籠手が仕事をしています。」
チウもいつそれを言おうか迷っていた。ロン・ベルクさんなら自分の想いを分かってくれるとは思っていたが、それでも自分の為に懸命に作ってくれたものを他の人の武器にしてもらいましたとはチウも早々には言えなかった。
分かってくれるのとそれを受け入れてくれるのは別だと分かって

いるから・・・しかしチウの懸念は杞憂だった。
「アッハッハッハ!!!!いいぞ!!それでこそお前さんだ!!だから俺はお前にあれを作ってやったんだ!!」
その笑い声は、―外道―を壊したと悦んでいた時よりもより大きく、其れよりも一層晴れやかな笑い声が大広間を席巻した！
「あれはお前のものだ！お前がどう使うか興味があったがなんともお前らしい!!ふっふっふ・・・・あぁ・・・・たまんねぇ・・・・お前達はいつだって・・」
自分の予想を軽々と超えてくれると、ロン・ベルクは慈しみを込めてティファとチウを抱きしめる。
どんな酒よりも自分を酩酊させる最高の宝物達・・・チウは、自分で言っては何だが魔界では垂涎の的になっている魔界の名工の最高傑作のうちの一つである鎧の籠手を惜しげもなく異界の者達の力となる為にこの世界のロン・ベルクに渡し、そしてその願いはきちんと叶った。
自分の笑い声に、ロン・ベルク以外が驚いているところを見ると、どうやら内密に渡したらしい。
ロン・ベルクの方は自分が何に笑っているのかを察したようで、良かったのかという表情にまた笑いがこみ上げる。
いいに決まっている、良い子のチウが決めた素晴らしい行いに否やがある筈も無い。
「向こうに帰ったらまた拵えてやる。」
幸い―材料―に事欠かないというロン・ベルクの言葉に、あんな凄い物何度も貰っていいのだろうかとチウは思うが、ロン・ベルクさんの心遣いに嬉しくなった。
「さて、一通りの説明はこれで最後です。」
笑っている自分達のロン・ベルクが落ち着いた頃に、アバンは最も重要な事を告げた。
「私とマトリフは空間を安定の為―だけ―の力しか行使できません。昼間使ったようなことはもうこの世界では出来ないのです。
そしてそれは私達と来たヒュンケルとラーハルトも同様です。」

この世界に大勢来るには力の制約が必要であり、自分達の今のレベルは半減されており、それも全力の大技を使えるのは一度きりの制限があり、この後は通常の魔物達と戦うには遜色ないが、―大魔王バーン―はもとより外道死神とミストバーンと渡り合えてもとどめをさせる大技はないとの事だ。
「この世界に引っ張られたティファ達と違い、渡って来た私達の現状は以上です。」
部屋の隅で立って聞いている―ドール―は兎も角、一度きりの最大の援護射撃を使い切った渡って来たヒュンケルとラーハルトも、その通りだと頷いているのを、ダイが応えた。
「・・・・・一度でも助けてくれたんだから・・・・十分だよ・・」
後は俺達が頑張る事だから・・・・
まだどこか自信なさげなダイの言葉に、少年ポップは何故か泣きそうになった。
一度は戦いを、自分の人生をも放り捨てようとしたダイが、自分達が頑張ると言ったのだ!!
「そうともさ!ダイの言う通りここは本当は俺達だけで守らなきゃいけない事なんだ。後は―俺達―が頑張る話なんだ!!!!」
勇者が進む道を決めたのならば、魔法使いがその道を照らしだして仲間達を引っ張るんだと意言葉に仲間も応えた。
「そうね、私達がやるべき事よ!!」
「剣も戻り・・」
「戦う力を頂いたのだ!!」
「僕達が頑張って戦うのみです!!!!」
戦えるマァム・チ・ヒュンケル・クロコダイン・チウの言葉に、
「僕もまだまだやれます!何が出来るかじゃない、最後まで戦い抜きます!!」
勇者ダイ一行と氷の勇者ノヴァの言気高き勇気ある葉に、大広間の騎士・兵士達は奮い立自分達も最後まで共に戦い抜きそして勝つのだという言葉が大広間に響き渡るのを、ジャンク達は震えが奔った。
娘や息子たちの気高い姿に親たちは涙を流しそうにかける。小さ

かった子供達が羽ばたく姿を見られた喜びに震えそうになる。
その熱量が、それぞれの胸を熱くし合いながら

いしの積まれる世界・最終決戦前夜①

貴方は魔界の貴族なのですか？

他界の北方の勇者にそう呼ばわれたキルとしては本気で驚いた。

「冗談を。僕はしがない宮仕えがせいぜいの男だよ。」

小難しい話はここまでにしてお茶でも飲んでお開きにしましょうと、異界のアバンの説明が終わった頃合いを見計らってキルが用意していたお茶を、この世界の少年・少女達と、ティファ達全員を集めてキル自らが寝る前にどうぞとお茶会のサーブを務めた。

ここが自分達の世界であったなら用意するのはミストとティファであり、チウがお茶の用意の手伝いをして他の者達は子供達が茶器の用意や出される茶菓子の用意の手伝いをしてワチャワチャとしているが、今日は子供達にはお手伝いをキルがさせなかった。

「君達は楽しむだけでいいんだから。」

優しいが有無を言わさないきっぱりとした物言いに、キル大好きでお手伝いがしたいんですオーラを出したチウをティファが抱っこしてお席に座らせて諦めさせた。

こうなったキルは意見を翻す事は先ず持ってないのを知っている。それはどんな事であってもというのを良く知っている。

大戦時は自分達の事をどれ程気に入ってくれようとも、最後まで魔界の為にその身を捧げる様に戦い抜いた主と親友の側を離れなかった事からそれが伺えるのだから。

その言葉に甘えて少年ダイ達はキルに全て給仕してもらっている。

お茶の淹れ方からして―ドールさん―は優美であった。

繊細で高価なカップではないありふれたカップである筈なのに、彼が持ってお茶を淹れるだけでまるで高価な器に変わってしまったような気すらする・・・お茶を淹れたカップをソーサーにおいて手元に置かれる時にふわりと紅茶とそしてさわやかな森のような香りがドールさんから漂い、鼻が利くダイはその香りにうっとりとしてしまい、女性陣は思わず頬を染めてしまい、大将軍の家に産まれ貴族としての嗜みも有るノヴァも久方ぶりの―香水―の香りにうっとりとし

てしまった。
ノヴァの育ったリンガイアは北方に位置し、湖と針葉樹が多い農耕地に適さない国であった。
それでも人々は小麦と芋を育て、海と湖の恵みを享受して自然と共に生きてきた。
香水もそんな自然の恵みを使った、高位貴族のみが嗜みでつける贅沢品であった。
故郷は今や灰燼に帰してしまった・・・自分がオーザムの救援に向かった矢先にリンガイアもまた襲われたことを知って取って返して見たものは、モンスター達や自然の脅威から城下町全てを守る大門と城壁諸共全てが破壊された亡国であった。
道々に逃げ遅れた人達の屍が、瓦礫と化した城も同様で生者のいない死の街に忘れ果てた香りを身に纏ったドールを自然と目で追えば、彼は他の者達にも同様にお茶を淹れ、終われば茶菓子を食べやすいようにサーブしていく様は手馴れており、持て成す事になれている一流の貴族の如くにノヴァには映った。
彼の国では貴族が貴族を真に持て成すときの茶会では、執事や従者を使わずに優雅にもてなす事が礼儀であり、王侯貴族であっても王族の直系でない限りみんなそうしていた。
その姿とキルが重なり針葉樹の様な香水の匂いも相まって、ノヴァは自然とキルは異界の魔界にて貴族、それもかなり高位の貴族なのではないのかと推察したのだが、返って来た言葉はどこか困惑をしていた。
「僕はずっと宮仕えで、領地はおろか家臣なんてものも持った事のない男だよ。がっかりとさせてしまったかな？」
「あ！いえ・・・お茶・・・美味しいです・・」
身分にあまり触れられたくないようなキルの声音に、不味い事を聞いてしまった事を察したノヴァは、話題切り替えでお茶が美味しいと本心を伝える。
ノヴァの言葉に、普段紅茶など飲まないダイもポップも茶菓子ではなくお茶を美味しいと飲んでいた。

「なんか・・・師匠やさ・・・言ったらなんだけどパプニカ王城で二・三度飲ませてもらったのよりも美味い・・」
「ポップ・・・でも・・・うん・・・そうかも・・」
庶民の舌のポップとしても、様々な事で立ち寄り出してもらったパプニカ王城の紅茶よりもおいしいという発言にそれは不味いよとダイも言いかけたが嘘はつけなかった。
二人のちょっとアレな発言に全員がちらりとその国の現君主たるレオナを見れば、レオナもまた降参とばかりにキルの淹れたお茶の美味しさを認めた。
「残念ながらポップ君とダイ君の言うとおりね・・・貴方も料理人ってやつなのかしらドールさん？」
高級茶葉で慣れているはずのレオナも唸らせるお茶の美味しさに、キルは本心からの感想に嬉しくなる。
なぜならキルはお茶の淹れ方を教わったからだ。
「それは嬉しい言葉ですね。残念ながら僕は料理人でもないですが、お茶の淹れ方はこのチウ君に教わって練習したからね。
美味しいと言って貰って何より。」
にこりと笑ってお茶の師匠を紹介し、そうと言われた異界のチウは当然顔を真っ赤にして抗議した！
「キ・・・ドールさん!!揶揄うのやめてください！僕が教えたと言っても一度か二度でしょう!!!」
・・・危うくキルバーンさんと言いかけたがそこはぐっと堪えて頑張ってドールさんと呼んだが、自分を揶揄うなと猛抗議した。
自分はお茶の淹れ方を聞かれたので一度か二度しか手解きしていないのに、さも凄い事を伝授したような言い方はどう聞いても揶揄っているようにしかチウには聞こえなかったが生憎キルは本気だった。
「何言ってるんだい。君に教わってからは向こうの料理長様にも淹れ方教わってないんだよ。」
つまりミストにも手解きを受けていない事を伝えれば、本当にチウにしか教わっていない事を意味してチウの顔はさらに赤くなるのを、この世界のチウは驚いた顔をする。

「君は戦い方だけじゃなくて人間の日常も老師様に教わったのかい？」
不思議そうに尋ねるチウに、異界のチウはそうじゃないともごもごと赤くなって応える。
自分がお茶の淹れ方を教わったというか覚えたのは、ティファさんのお茶の淹れ方が奇麗だったからだと。
向こうの世界は過酷な戦いの中でも料理人ティファは合間を縫うようにお茶を淹れご飯を作り、そして最後は矢張りお茶を淹れてくれていた。
敵がこない時は特訓もしたが、三食とお茶が途切れる事は終ぞなかった・・・それこそティファが―自分から魔王軍に捕まりに言っても同様な最終決戦前―であっても、ティファが残してくれた者達が三食とお茶を出してくれたのは言う必要が無いがそれは兎も角として
「僕くらいの小さな手がスルスルと動いて、奇麗なカップやソーサーを出していたのが奇麗だったんです。」
今お茶を飲んでいるティファの手を見れば、確かに然程の大きさはなく少年ダイよりも関節一つ分ほど小さいが、その手は魔法の手のようだったとチウは言葉を続ける。
あの小さな手が少し大きなポットで美味しいお茶を淹れてくれるのを目で追ううちに、いつの間にか人数に応じたお茶の葉の量や蒸す時間に淹れるタイミングが分かるようになり試しに一度淹れてみれば美味しいとティファ自らに褒められた。
それ以来チウは暇があれば隊員達やゴメスさん達にもお茶を出すようになり、喫茶するようになったキルにも淹れてあげれば本気で感動されそして教えて欲しいというので一度か二度実演しただけで・・・・つまるところ
「僕から教わったというならドールさんのお茶の先生はティファさんという事になります。」
だからそんなに褒めそやなさいでほしいというチウの言葉を、そのティファ自身によってひっくり返された。
「それは違うよチウ君。」

「・・・・・へ？」
「確かにドールは君から教わっているけれども、私はチウ君にお茶の淹れ方教えていないでしょう。
　自然と私のを見様見真似で自分で覚えたんだからほぼ独学と言ってもいい。だからドールのお茶の先生はチウ君で間違いない。」
「・・・そんなティファさんまで!!」
「ふふ、お嬢ちゃんもああいっているんだから観念してねチウ君♪」
「ドールさん！」
「あ～・・・確かにチウのお茶美味いもんな。その点にはドールの言葉に納得だわ。」
「ポップまでもう!!もう知らない!!!」
　赤くなって怒るチウが可愛く、少年ダイ達もティファ達とのやり取りに吹いてしまい、笑い声が上がるのを離れたところでお茶ではなくお酒を嗜んでいる大人達は目を細めて見守る。
　ブロキーナ老師とマトリフは流石に深酒はやめておくと部屋に戻ったが、他の大人達は子供達を肴にまだ飲んでいる。
「・・・・私達もあのような光景を日常にしたいものですね。貴方達の世界ではあれが普通なのでしょうね・・」
「・・そうですね・・・決して平坦な道ばかりではありませんが・・・特に―子供達―が集まるといつでも笑い声が溢れますね。」
　この世界のアバンと異界のアバンは子供達の笑い声に癒される。
　それは全員同じだが・・・ちょっと毛色の違う大人も二人いる・・・・
「・・・・・ドールの奴・・・・ティファ様に近づきすぎだ・・・・・」
「あの野郎・・・好き勝手しやがって・・・」
　槍使いと鍛冶屋さんは大のキルバーン嫌いであり、子供達に近づきすぎだと歯噛みしているのを、事情を知らない周りの大人達はこの二人大丈夫かと横目でチラチラと見ながら酒を飲み、特にこの世界のラーハルトとロン・ベルクはそんな二人が嫌になる。
「・・・・貴様それほど気になるのならばバラン様のご息女をここにお連れすればよかろう。」
「ティファ様が羽を伸ばしているところを邪魔しろと？」

真っ当な事を言ってもけんもほろろな異界のラーハルトに匙を投げたくなる・・・・そもそも当人がいないところでは様呼びしているのに、当の本人には小娘呼ばわりもどうなのだと突っ込みたいがもう知らんである。

そんな異界のラーハルトを、これまた異界のヒュンケルがティファもチウもポップも楽しそうだからと宥めている姿に、この世界のアバンはキョトンとしてそして・・・ほんの少しだけ羨ましくなる。

自分のヒュンケルも良い子で、情の深い子供なのを承知しているが、どうしても自分はヒュンケルを咄嗟とは言え川に落としてしまいそれが為に魔道に堕としてしまった負い目があり、ヒュンケル自身もバルトスの事が誤解だと解ければ自身の成した国崩しの罪悪感から自分達に線引きをしている・・・あちらでお茶を飲んでいるが、どこか輪に入ろうとするのを躊躇う姿が悲しくて・・・・思わず吐露してしまう・・

「ヒュンケルさん・・・どうしたらあの子の心を軽くしてあげられるでしょうか・・」

愚かな問いなのはアバンは百も承知している・・・・どれだけ異界の人達に縋れば気が済むのだと言われ所業なのも分かっている・・・・それでも矢張り大切な子供なのだヒュンケルも!

恥を承知で吐露した想いを、異界のヒュンケルはアバンに問われた事の内容をおぼろげながら察して、そして真剣に悩んだ。

この世界の事は向こうの者達は三神達から聞かされており、あまりの違いに特にクロコダイン・ヒュンケル・ラーハルトは心胆を寒からしめた。

自分達は、三神達の策がなければ大罪を本当に犯してしまっていたのだと。

それを知っているだけにこの世界のヒュンケル達を思うとヒュンケルの胸がキリキリと痛む。

「俺は・・・幸運だったんです。俺達の世界では・・・・少なくとも俺はパプニカの軍勢に敗北を喫して国を攻め落とすどころか軍の半数をその時喪って、その後すぐ俺自身がダイ達に敗れ・・・・そして救

われたんです。」
　この世界のヒュンケルの様に国の不意を突いて攻め滅ぼすという事はなく、大罪を犯し切る前にダイ達に止めて貰えた男だというヒュンケルの言葉に、この世界のアバンは何も言うことが出来なかった・・・・比べられる話ではない、国を攻めた時点で人類に反逆したのだから・・・それでも目の前のヒュンケルの言う通り、自分達のヒュンケルと心情が同じになる事は決してないのをアバンは悟る。
　国を攻め滅ぼし人死にを大量に出してしまった罪悪を、戻って来たヒュンケルは終生苦しむのだろうとアバンの心は掻き毟られるような痛みを覚える・・・・自分があの時ヒュンケルの不意打ちを食らっても受け止められるほどの器量があったのならば、川に落とす事なぞせずに悲劇を起こしたのはつまるところどこまでいっても自分の器量のなさであったのだ！ティファ達がこの世界に来る悲劇の下になったのと同様で・・・
　そう思う至るとアバンの心は暗くなる・・・・己の器量のなさがこの世界の悲劇を生み出しているようで・・・何がハドラー大戦の英雄かと己自身を蔑みかけたその時、光が差した。
「それでも俺は何度も自分を殺したくなりました。先生を仇として狙った事を、人間を蔑み死んでも構わないと思った事を、弟妹弟子達が止めてくれようとした時、俺はティファとダイを本気で殺そうとした事を今でも夢に見るんです。」
　それはヒュンケルの告解であった。あの時の暗い想いを夢に見て苦しむ心を引きずっているというヒュンケルの言葉に、それならば何故貴方は明るく笑えるのだというアバンの問いに、ヒュンケルの顔は矢張り明るかった。
「周りのみんなが俺の事を心配してくれているからです。ティファ達はいつだって俺の事を大好きで大切な仲間だと言ってくれるんです。誰が俺の罪を責め立てようとも共に償う道を歩いてくれると・・・・笑ってくれるんです。」
　そうされるうちに自分もいつしか心からの笑みを仲間に師に向けることが出来たのだというヒュンケルの言葉にアバンは光明を得た

気がした。
暗がりにまだ残っているヒュンケルに、躊躇わずに本当にヒュンケルが大切なのだと届くまで・・・届いた後も何度でも愛情を注げばいいのだと・・・・注いでいいのだと言って貰えた気がして・・・・
ちらりとまた子供達の席を見てみれば、ダイはヒュンケルに先程のクッキーを進めておりレオナがそれをぱくりと食べてマァムに行儀が悪いと怒られそして・・・笑っている。
諦めたくな・・・もう先生と呼ばなくてもいいから、あの子が暗がりに落ちないように、誘われても落とされないように守ってあげたい・・・・
「アバン・・・・」
いつしか涙をこぼすアバンの手に、フローラの手が優しく被さった。
「明日を勝ち抜いて、またこうして宴を開きましょう。」
勝って楽しい時間を紡いでいこうという女王陛下の言葉に、アバンは静かに頷きそして周りの大人全員、それこそこの世界のバランとラーハルトとロン・ベルクも思うところがあり、そして異界のヒュンケル・ラーハルト・ロン・ベルク・アバン・マトリフもまた無言で手にしている杯を掲げて静かに乾杯をして飲み干した。
全ては勝ってからだと
そろそろ―策―を施す時間だろうかと、異界のアバンが怜悧な算段をつけているとはつゆ知らずに

いしの積まれる世界・最終決戦前夜②

「僕はリンガイアの復興に尽力するよ。」
「それなら俺達も手伝うよ。パプニカもカールも・・・女王様の話だとオーザムの直系の人達は城と共にしたらしいけど従妹が残ってるらしいぜ？」
「そう・・・ならオーザムも王国の再建が出来るね・・・・勝って復興に大忙し・・・其の忙しさが早くほしいや。」
　難しい話は終わり、ドールさんからの心尽くしのお茶会も終わり、子供達は今日は早く寝る様にと異界のアバン達からのお達しで、少し大部屋の所にベッドが運び込まれて子供組の男の子達は同じ部屋で寝転がりながらお喋りをしている。
　ノヴァは大戦が始まってからは国を滅ぼした魔王軍を倒す事しか考えてこなかった。
　しかし、マァムが大戦後にお菓子を御馳走してくれるという話から、大戦が終わった後の事に初めて目が行った。
　戦いが終わる・・・ノヴァにとっては其れは想像が出来なかったから。
　いつ終わるとも分からない地上の狂暴化したモンスター達との戦いに、後から後から送り込まれる新たな魔王軍の敵達・・・・終わりがあるのかとすら思った地獄に終止符が打たれると言われても実のところ実感が湧かないでいる。
　それでもやりたい事はあるのだと口にしてみれば、その道を目指して頑張れるのではないかと、己を奮い立たすために口にした言葉は、思いのほかノヴァの心に力を与えてくれた。
　力強さと温もりを・・・
　その言葉に少年ポップが応じる。あちこちに出来た・・・もうノヴァは友人でいいだろうとばかりに友人や仲間達や師の故郷の復興の手伝いに汗水流す・・・戦いなんかよりも余程いいと。
　それをダイは俺はどうしようかと悩んでいる。
　自分はこの後は親父とひっそりと生きていくだけでいい。ポップ

達やカールのこの砦にいる人達は大丈夫でも・・・もう見知らぬ人の中に入るのが怖ろしく感じる。
　自分はどこまでいっても―人間―ではない。それがはっきりとわかる魔族でも半魔ですらも無く、見た目は人間で中身は違うとなれば、知られた時の怖ろしさはきっと自分の方が怖がれる気がして。
「ダイ、お前は当分島でバランとブラスさん達とのんびりすりゃいいさ。」
「そうだなダイはそうするといい・・・俺は・・」
「んん・・・ヒュンケルも俺達とさ・・・・復興手伝いすりゃいいんじゃね？」
　ダイの悩みにヒュンケルはポップの考えを支持したが、彼自身は今後等考えた事はなく言葉に詰まるのをポップが遠慮がちに誘ってみた。
　ヒュンケル自身も忙しく働きながら答えを見つければいいのではとばかりに。
「チウはどうするの？俺と親父と一一緒に島に来る？」
　この後の世界で、きっとモンスター達はハドラー大戦の後の様にモンスター狩りが怒らないとも限らない。
　自分達と共に活躍をしたチウは兎も角、遊撃隊達はどうなるのかと心配したダイの優しさに、チウは嬉しくなる。
「僕はもう少し人の中でやってみるよ。」
　なにせ僕はシティーボーイだからというチウの姿に、吹いてしまったポップにバフリと枕が投げられた。
　見れば目を三角にしたチウからの攻撃であり、やるかと笑って受けて立ったポップも枕を投げるのを、ダイとヒュンケルは呆れ、そして次第にくすくすと笑いだすのを、ノヴァは皆子供だな～と思いながら枕に頭をつけてうとうととする。

「結局マァムはポップ君とヒュンケルのどっちが好きなの？」
男の子達がお喋りに花開いているように、女の子達は恋バナをしている。
人の恋愛大好きなレオナの遠慮のない言葉に、ポップに想いを寄せているメルルは複雑そうだが自分も知りたいとばかりに耳をそばだてる中、マァムは溜息をつくように答えた。
「・・・分からないの・・・ポップの事は弟みたいに思ってるし・・・」
これがマァムの偽らざる本心であった。何と無しにはポップが自分の事を思ってくれている事には気が付いていた。
しかしポップ自身から決定的な事を言われたことはなく、いつも彼自身が茶化して終わりになるのでもしかしたら気のせいかもしれないとも思うが、もしもそうだと言われてもきっと今と同じ答えしか返せない。
それではヒュンケルの事はどうかと再び問うレオナの言葉に、マァムはヒュンケルも違うと答える。
「私ね・・・ヒュンケルの事が気になったのはきっと・・・—頼れる大人の人—として見ていたんだと思う。」
時折ヒュンケルの事を意識したようなマァムの態度に、レオナとそしてメルルもてっきりマァムはヒュンケルにその気があるのかと思ったがどうも違うらしい。
「私ね・・・お父さんの事あんまり覚えてないの。村の人達も大人の男の人達はいたけれど・・・私ってほら、頑丈で丈夫で手がかからなくって・・・少し大きくなってからは大人の男の人に守られたことが無いのよ。」
マァムは苦笑しながら自分の事を話し始める。
父は幼い頃に亡くし、自分が生きていくのに困らないようにアバン先生の弟子になってますます強くなった後は、反対に村の大人達に頼りにされていた。
それこそ大戦が始まり村の子供のミーナが行方不明になれば自然と自分が探しに行ったほどに。
村には同年代の友はなく、ダイとポップも自分の強さに感心してい

た・・・きっと最初に出会った時はポップも気の強い頑丈な女の子だとしか思ってなかったろう。
　そんな中、バルジ島でハドラーに捕まりあわやの所をヒュンケルに包まれるように守ってもらったあの時ドキドキ胸が高まった・・・・それも今考えれば守ってもらえた安心感からだとマァムは分かっている。
　アバン先生に再会でき時と・・・・異界のヒュンケルさんやドールさんに優しくしてもらった時もそんな感じを受けたから分かったのだ。
　自分の中で想像していた強い父に守ってもらえる安心感であったのだと。
　ティファさん達の世界の大人達は皆優しい。それこそ半魔のラーハルトさんも今日は速く休むがいいと、優しい言葉を自分達一人一人にかけてくれていた。
　片付けは気にせず早くお休みよとはドールさんからの言葉で、誰もが自分達を守るべき子供だと扱ってくれていた。
「きっと・・・私は本当の意味で恋した事ないみたいなの。」
　自分のこれまでの感情を振り返って出した結論に、メルルはほっとして・・・・自分に嫌になった。
　過酷な戦いに身を投じるマァムさんに比べれば、安全圏にいる自分の浅ましさが嫌になるのを、レオナは横目で見ながら寝転んでいるマァムの頭をそっと撫でてやる。
「マァム、良い男探しの旅でも出てみる？この戦いが終わった後に。」
「へ？」
「貴女今まで山奥の村にいて出会った人達自体が少ないじゃない。」
　世界は広いんだから、全部終わった後に探せばいいじゃないというレオナの言葉に、マァムはそんものかしらと思う。
「メルルも私の所に遊びに来てちょうだいね？」
　王女から女王になったら自由には遊びに行くのは難しいのよと、レオナは笑ってメルルも誘いかける。
　自分には同年代の友達はいないのでお城でも今日のようなお茶会

や女子会がしたいのよというレオナの笑顔に、自己嫌悪に陥りかけてしょんぼりとしたメルルの心があったかくなる。
占い師生活は結構ハードなのだ。
自分達の出して結果に腹を立て怒鳴る客はまだましな方で、時折料金を払わない貴族達もいる中、実質的に一国の現君主たるレオナ姫の飾らない人柄に惹かれる。
自分もポップに対しての気持ちは漠然としている。
それだってこの戦いが終わってからゆっくりと考えてもいいではないかと、メルルも焦る気持ちが静まった。
明日で・・・全部決まるのではない。
明日をみんなで乗り切ったその先でゆっくりと考えればいいではないか
自分の気持ちもその時に・・・・

いしの積まれる世界・最終決戦前夜③

隠し砦は男の子達も女の子達も未来に目を向け始めている頃、この世界の大人達は未だに少しだけお酒を嗜んで四方や話に花が咲いていた。

ヒュンケルと違いクロコダインは大人達と共に酒を飲み、自分の知らない少年ダイとポップとそしてヒュンケルの話をアバンから聞いてはあいつ等もやはり子供なのだと楽しそうに聞いている傍らで、この世界のラーハルトもバランにお酒を注ぎながら真剣に聞いていた。

自分の価値観を変えて男達の内の一人が少年ポップであった。

あれは自分達と対峙した時はひよっこもいい所で、ルードを辛うじて倒せたもののそのせいでガルダンディの逆鱗に触れ嬲り殺しにされかけたのを、後から来たヒュンケルに助けられ、そして手助けを受けながらもガルダンディを倒した。

そして、死にゆく自分の半生を話してやったら二人の男達は泣いていた・・・甘い奴等だと言いながらも、自分だとて泣いていた・・・その涙の理由は今をもって分からない。

自分の話を真剣に受け止めて分かってくれたのが嬉しかったのか、最後に出会えた者達が力だけではない心優しき者達であったのが嬉しかったのか・・・・・坂を転がるように人を憎んで殺して来たバランと自分達・・・それを止めた男達の半生を知られるとあって聞き耳を立てているのを、周りの大人達は勘づいているが何も言わない。

バランも―ダイ―と呼ばれている我が子ディーノの事を知りたいと、ラーハルト同様に聞き入る中、異界の大人達が戻って来た。

「ただいま戻りました。遅くまで皆さん起きてますね～。」

のんびりとした異界のアバンの声に、バランはそっと入口の方を向けば矢張りどうしても目は大人達に伴われた少女ティファに行ってしまう。

バランは一通りの話をアバンとマトリフとラーハルトから聞いている。

自分が死んだと思った―後―の話を聞いた時は嘘だと喚きたかっ

た・・・しかしもう自分は気が付いていた。
どのような奇跡かは分からないが、額ではなく右手に紋章を宿した少年こそが成長した我が子ディーノであると・・・ならば、妻が側にいない理由は幾らもない・・・ないのだと観念した。
そしてその後の顛末を聞いた時は己自身を殺したくなった。
三界の秩序の守護者にしてすべての生命の守り人足らんとする竜の騎士たる自分が・・己の仕出かした不始末から人を恨んで堕ちるところまで堕ちた事に絶望すらした・・・
激情に駆られ一国と無辜の人間を殺しつくし、そして・・・・何故黒の核晶から我が子を庇ったというあの時に死なせてくれなんだのだと、自分を助ける為にその身を引き換えにした母である聖母竜・マザードラゴンすら恨んだ。
しかし、そうしなければ地上と天界は大魔王バーンの手によって滅ぼされていたであろうことは察しがついている。
自分が守り通したはずの息子の心は、自分の死と共にその時一度死んでしまったのだと。
マザードラゴンや天界の神々にとっても苦肉の策であったのだろう。
それを引き起こす事をしでかしたのも、自分が魔道に堕ちそして大魔王バーンに力を貸したが故の・・・・いわば全てのとは言わないまでも元凶は自分ではないか・・・
「私は生きていくべきなのだろうか・・・」
一度だけ息子達が居ない時を見計らって診察に来た異界の少女に尋ねてみれば、怖ろしく冷たい一言を放たれた。
「もう一度ご子息の心が死んでもいいならば好きになさい。」
そう言ったきり何も言わずに脈を取られ淡々と体調だけを尋ねられそしてそれっきり言葉を交わしていない。
巻き込まれた私に甘えるなと突き放された物言いであったが、しかしこう言われた気がしたのだ。
己の罪を抱えて息子の為に生きて行けと・・・・
冷たき一言にバランは苦悩し、そしてある考えに至った。

その通りだ・・・罪を悔いて死ねばきっと息子の心もその時に・・・罪業を背負って生きていく覚悟を、バランの心の中に芽生えた。それは明確ではなくとも、確かに我が子の心の為のみに生きていこうという思いであった。

其の想いを芽生えさせた少女は、次の日には血塗れになりながらも何か事をなしそして今は異界から来た仲間たちに囲まれて心の底からの笑みを浮かべている。

少女の周りはいつも賑やかだ。

「ドール、私本当に後は寝るだけでいいの？アバン先生～私まだ起きてられるので薬草準備の手伝い・・」

「ノンノン。ティファ、寝るのも大切なお仕事です。―明日―は忙しくなるのですからもう寝なさい。

ちゃんと真っ直ぐポップとチウ君のいるお部屋に行くのですよ？」

・・・・年頃の娘をあの青年と同部屋にするのはどうなのだろうかと、この世界の大人達はバランも入れてそれでいいのかと突っ込みたくなる。

如何に兄弟の契りを交わしたとはいえども赤の他人だろうにと思った彼等はきっと悪くない。

悪くないが、少女の年齢を聞いたというのにまるで幼い子供の様に笑って首を縦に振りながらハイと返事をするさまを見ていると、―まだ幼いのであればよいのだろうか―とも思わされてしまう不思議な少女であった。

十五の女子に見えない程の幼い振る舞いをしている少女。

十五の女子とも思えない程の老練した思考と振る舞う少女。

どちらも年相応に見えず、まるでお伽噺に出てくる妖精か何かの化身ではなかろうかとすら思えるほどに、不思議な子共・・・・きっと異界の大人達はそんな少女と青年ポップとチウを心の底から愛し、そしてその想いを隠す振る舞いもせずに三人の子供達に接している。

自分達はこの子供達を心の底から愛している、其れの何が悪いとばかりに・・・眩しかった、この世界の大人達には何の衒いも無く愛情を惜しみなく注ぐ彼等の姿が言葉が眩しくそして・・・・羨ましかっ

た。
ダイ達とヒュンケルとすらも軽口を楽しむクロコダインとても、心の隅では罪悪感に震える時があり、彼等の中に本当の意味では入れているのだろうかと暗い気持ちに襲われる時すらがある。
其の所為だろうか？
ダイとポップが本当に苦しんでいる時に間近にいたはずなのに気が付けなかったのは？
彼等なれば、子供達のほんの少しの瑕疵にも気が付いてたちどころに対処するのではないだろか？
そんな・・・都合のいい事なぞあるわけがない・・・・神だとて、この世界の事がどうしようもなくなったから少女達は巻き込まれ利用すらしているというのに。
万能なものなどいない、まして心の内を聞きもせずに察せられる者もいないというのもまた然りで、自分の罪と向き合い償う道を探す事をしながらも、―大人―として彼等を愛し守る者になるのだとクロコダインもまた心に誓いを立てる。
もう二度と、己の心を温かき道に連れて来てくれたダイ・ポップ・マァム達が悲しまなくて済むようにしたいと、杯の中の酒を胃の腑に流し込みながら思う。
その先の未来も共に同じ道を歩かんと

・・・・この世界のラーハルトは少女がいると頭痛がする・・・・何もその少女が悪い訳では決してない！
寧ろご飯足りますか？御代わりはだれでも自由ですよと、いきなり人間だらけの隠し砦に―あの野郎―に引きずられて来た自分が少しでも馴染めルとまではいかずとも、居心地を少しでも良くしてくれようという優しさは確かに伝わり、何よりもバラン様のご子息ディーノ様にも優しくそして懐かれておられる姿には敬意すら湧くのだが・・・問題は―あの野郎―だ!!
「いいか小娘、アバン殿の言う通りどこにも寄るな、何かの策を施そうとするな、ただ寝所でポップとチウと一緒に寝ていろ。

兎に角寝る以外何もするんじゃ無いぞ。」
「・・・・ラーハルト・・・・あのね、私もね・・・もう十五歳になるんだよ？」
幼い子供に噛んで含む様に膝をついて少女の肩に両手を置いているラーハルトに、少女が抗議したくなるのもこの世界の大人達にはよく分かる。
どうも・・・五歳かそこらの子供に言い聞かせるような言葉に、アレは無いだろうと思うのだが甘かった・・・
「ふん！お前が真っ当な十五歳の子供であったら俺もこんな事言わずに済んでいるという自覚を持て！」
「うみゅ!!・・・・ラーハルトの意地悪～・・・」
「・・・頼むから本当に自覚を持ってくれ・・・俺達の心臓が持たん。何よりもバラン様とディーノ様が悲しまれるぞ？」
どこの世界の十五歳の女子が、他界などという訳の分からない場所に放り込まれても持ち前の力を十全に発揮し、他界に着いて早々に最大のラスボスに目を付けられるのだという言葉に、アレは無いだろうと思っていた大人達も納得してしまった！
要は、これ以上自分を使った事をしてくれるなという異界のラーハルトなりの優しさなのだろうとはラーハルトも思うのだが・・・・主君の娘にもう少しこう優しくしてもいいのではないのだろうか・・・・自分はディーノ様に優しく・・・あの魔法使い達にももう少し歩み寄ろうとラーハルトも決意した・・・・本当はラーハルトどころか向こうの世界では生存しているガルダンディとボラホーンも含めて竜騎衆一同は主君の息子よりも娘の方を第一としており、どのような言葉でティファに話そうともその想いは砂糖の上に更に粉砂糖をぶちまけたよりも甘やかしているのを・・・・知らぬが何とかである。
初対面でティファ様に近寄る者は先ず三人が精査し、それから遠くで見守るのが基本スタイル。
少しでも可笑しなうわさが上がっている者は彼等の―近づけてはいけないリスト―に漏れなく入れられ来たが最後、ティファに会う前に―丁寧―に排除されている・・・

しょうがないなと少女が折れて、おやすみなさいと引き払う寸前に、ドールが少女を抱き上げた。
「―明日―は僕が持ってきた服を着るといいよ。それとはいこれもどうぞ。」
優しく少女を抱き上げリングを渡す。異界の者達にとってはマジックリングはありふれたものなのだろうかと思う程に易々と使われすぎている。
「はりゃ、ドールこれ中身何？」
「ふふ、寒さ・暑さを通さないぐっすりと眠れる向こうの寝間着を持ってきたんだよ♪」
「ふぁ！キ・・・ドールお手製の―ぐっすりさんいらっしゃい！―だね!!」
・・・・・・は？
「ふふ、そうそれ。これ着て今日は槍使い君と先代様の言う通りぐっすりとお休みよ。」
「ふっふ！我ながらナイスネーミングセンスだと思います!!」
・・・・あの馬鹿馬鹿しいネーミングを自分の寝間着につけたのはあのドヤ顔している少女なのか!!??・・・・なにか・・・・あの少女が残念な子供に見えてきた・・・そんな少女を愛おしそうに見て話を続けているドールという男もどうなんだ？

「明日の服もその中に入ってるからね。」
「私が向こうで来ている洋服ですか？」
「いやぁ～、向こうでできた時間で僕の新作。」
「ほぁっつ？」
「といってもデザインはお嬢ちゃんが大戦時に来ていた詰め襟ワンピースそのままで、シルクの長ズボンはワンピースと同様当然耐火・耐寒・耐魔法と耐防御性に優れた布地で作ってあるからね。」
・・・・・それ一体いくらの服だ!!やっぱりこの男魔界のどこぞの貴族だろう!!!
一人の少女の為に湯水のごとく大枚使う奴なんてそれしかないだ

ろいうというこの世界の大人達の突っ込みと、またティファ様に贈り物をしをってと異界のラーハルトは歯噛みしあのアバンですらも冷たい目をキルに向けている。
もしもティファがこいつに恋心抱きそうになったら・・・その前に―蒸発―してもらいましょうとか思っている・・・ちなみに異界のヒュンケルはティファがこの世界で作ったアメを貰って速攻で口にして、ご満悦で見張りを買って出てルンルン顔で歩哨していたりする・・・いたらもっとややこしくなるだろうがそれは兎も角、キルはあらゆる意味で完全復活していたのだ。
人選決まる前あたりから復活を果たし、チウ君とポップのは今回は諦めてティファの服を二着速攻で作り持ってきたのだ！
その服の入ったリングをティファがキラキラした顔で受け取ってくれたのがまた堪らないと、ドールの相好が崩れるのが異界のラーハルト達には面白くなく、速攻でティファをドールの手から奪い去り、もう寝ろと入り口前まで抱いたまま送る姿に、この世界のラーハルトは矢張り頭が痛くなる。
もういいから少女には寝て欲しいと、思ったラーハルトは絶対に悪くない！

いしの積まれる世界・最終決戦前夜④

し～ずかな～しずかな～砦の秋～っと・・・ついつい前の世界の歌が出て来るな～と思いながらも、ティファは秋の風を感じながら―里の秋―を口ずさみながら砦の廊下をゆっくりと歩いている。

この世界も春から大戦が始まり、秋の始まりで終わりを迎えようとしている。

外を見れば細い上弦の月が満天の星の中に掛かっている・・・いい夜だと、この世界に来て初めてティファは心穏やかに空を見上げている。

アバン先生が来た、ヒュンケルも来た、ロン・ベルクさんとラーハルトとそして、おじさんとキルも来てくれた。

矢張りティファにとっては、おじさんとキルは特別であった。

幼い頃からの自分の良きところも悪い所もきちんと知ったうえで全てを受け止めてくれるおじさん。

「嬢ちゃん、ちゃんと食って寝てるか?馬鹿弟子とチウはそうでもないが、顔に疲れが出てんぞ?」

おじさんと、ティファがぎゅうぎゅうと抱き着けば一発で体調の変化を見抜かれ、そんな事になっているのかと周りにばれてしまって自分達のラーハルトに詰め寄られかけたが、キルがひょいと抱いて逃がしてくれた。

「今日沢山食べて寝てもらえばいい話でしょう?そう目くじら立てたらだめだよ～槍使い君達。」

飄々と大人の余裕で手助けしてくれるキル・・・四人の大人達が来てくれたことも勿論嬉しい事に変わりはない・・・ないが・・・・

「ティファ!まだ寝ていなかったのか?」

「はりゃヒュンケル・・・・ん、ちょっと空見てたくて・・」

「そうか、確かにいい空だ。しかし・・」

「分かってますよ、寝なさいですよね。」

ティファは少しだけ口をとがらせる。

その様子にヒュンケルは口が過ぎたかと焦ってしまう。

「いや・・・早く寝ろと言ってるのではなくて・・・その・・・」
「ふふ、分かってますよヒュンケル。ちゃんと寝ますから安心してください。」
焦れば、―優しい大人の笑み―を浮かべてくれるティファに、それはそれでヒュンケルは悲しくなる。
どうして自分は、ティファを―子供のまま―でいさせてあげることが出来ないのだろいうか？
それはアバン先生にも出来ずに、大魔王バーンとてもティファは大人の顔を覗かせる。
マトリフ大魔導士とキルだけがそれを成しえている・・自分達には一体何が足りずに、ティファに大人の顔をさせているのかが分からず周りは分からないがヒュンケルは自分が頼りない大人だからと思ってしまう・・・それこそが大人になり切れない証なのかもしれないと思いつつも、ヒュンケルはそっとティファを抱き上げ腕の中に抱え込む・・・どうしても、ティファに甘えてしまう自分を捨てられなくて・・・その代り必ず守るから許してほしいと胸の中で呻きながら小さなティファの温もりに暖を取る。
「明日・・・・必ず・・・」
「はい、皆で帰れるようにしましょう。」
きっと、この世界の者達が見れば間違っていると言われるかもしれないが、それでもヒュンケルはティファを包み込むようで反対に包まれる。
ヒュンケルの頭は細いティファの腕の中に納まり、表面を穏やかにしながらも荒れたままであった内側が落ち着いていく。
ヒュンケルの荒れ狂っていたものが凪いでいくのを、ティファも穏やかに感じている。
優しい言葉を発しながらも、ヒュンケルの瞳の奥底に揺らぎが、自分達・・・特に自分を見る目に焦燥感があったのがずっとティファとしても心配だったが、穏やかになる心音を聞いて一安心をする。
「今日ちゃんと寝ますねヒュンケル。」
「あぁ・・・眠ってくれティファ。」

そっとヒュンケルに降ろされ、ティファは大人しくは・・・ポップ達の待つ寝室には向かわず、自分達が戻ってくる前に部屋に下がった者の下へと向かい、気配でここだろうと扉の前に立ち、周囲に対して―全ての気配―を閉ざす結界を張るという念を入れてからノックをした。
「あ??!・・・ちょっと待て!!」
自分の気配で察したのか、相手は物凄く慌ててドタバタと普段の彼らしくない音を立てながら出てきた事に、ティファは苦笑してしまう。
この人も大人なのか子供なのか分からない人だな～と思っているところに扉がガチャリと開いて、そして呆れられた。
「・・・・こんな夜更けにどうしたお嬢さん？」
「遅くに申し訳ありませんロン・ベルクさん。部屋に入ってもいいですか？」
「・・・少ししたら寝ろよお嬢さん。」
「分かってます。」
にっこりと笑うティファに弱いロン・ベルクは、諦めてティファを部屋に招き入れた。
・・・酒瓶が転がっているのはご愛敬だろう・・
「年頃のお前さんに、深夜に男の部屋に来るなと言った方がいいのかね？」
「ロン・ベルクさんには今更だと思いますよ？」
苦言めいた事を言ってもめげないティファに、ロン・ベルクは一つだけ置かれている椅子をティファに進めて自身はベットに腰を下ろす。
一目が多い中では堂々とティファを膝に乗せるが、ロン・ベルクもこういう時にはきちんと考えている。
どれ程幼い見た目であっても、ティファももう年頃の娘なのだから。
そのティファが夜更けに男の下に、それも寝所に来ること自体が問題であるが、ティファだとてその辺の常識はしっかりとしている筈で

あり、それを押してもここに来た理由がある筈だと水を向ける。
「それで、今度は何があった？」
自分を一人で訪ねてきたのは、向こうでの決戦前で酷い事を頼まれて来た時であり、今回は何事だと穏やかに聞いてくるロン・ベルクに、ティファはどういいだそうか悩んでいただけに有難く受け取る。
それは本当に一切を話した。
この世界で起きた出来事を、チウと兄の心が傷つけられ事も知っているだろうがティファの口から語り、そして二度と彼等が傷つかないようにこの世界で自分が―向こうの世界と同様に動ける力―を十全に振るう為に、この世界の命運と己の命運を紐づけした事を・・そして今日その力を行使して体に負荷がかかりすぎ血反吐までではいたが、この世界の何かの力によって全回復した事を・・聞く内に静かになり・・・そして・・・・・ティファは椅子からさらわれる様にフワリと宙を浮きギチリと音がする程の、骨が全て砕かれるのではないかと思う程の力でロン・ベルクの腕の中に閉じ込められそして・・唸り声がした。
「お前は・・・本当に・・・殺したくなる!!!」
己達をどこまでも置いて行かんとするこの娘を！他の誰かに何かによって奪われるくらいならばいっその事自分の手で殺したくなるというロン・ベルクの言葉とそして本気の殺意に、ティファは抵抗もせずに聞き入る・・・・きっと、この人にならば殺されても文句は言えないから・・
この世界のマザードラゴンは、自分がこの世界と紐づけになるのを猛反対し、そして今日の惨状に遂に切れてこの世界の神々をも動かしたのだ。
―もしもこの娘に奇跡の御業を使わないというのであれば！私はこの娘の魂を向こうの世界に返すその日まで隠し通します!!!私の思念体としてのエネルギー全てを使って！―
神の涙の様に、マザードラゴンの血に連なるティファの青い血の法陣を伝い、マザードラゴンは天上界の神々を脅して全回復をさせたのだ。

ティファが姿を消せばきっと少年ダイは闘う力を喪い、結局はティファが来る前と同じ地上界と天界の破滅の道を行く事になるとマザードラゴンは脅し、何万年も生きる寿命の内の一万年程ティファの全回復という奇跡の御業の対価に使っても文句は言わさないとばかりに。

それがなくともティファの体感としては、兄達に心配を山ほど掛けたとしても生命の危険はなかったと言える・・・言えるが・・・それでも矢張り心配を掛けたくないと、マザードラゴンと神々の遣り取りを聞いてほっとしたのだが、ティファにかけてしまった迷惑はもとより、ティファの仕出かしたこの所業も告げると言われた時は、さしものティファも焦り懇願をした！

向こうの一人には必ず自分から言う!!だから待ってほしいと!!

期限は今日寝る前に必ずという言葉に、ティファを巻き込んでここまでの事をさせてしまったは自分だと罪悪感に押しつぶされかけているマザードラゴンは必ず今日までならばと了承をした。

ティファはその相手を来た人の誰にするのかは・・・・悩まなかった。

酷い話だが・・・

「お前はなんでこの話を俺に？」

「ごめんなさい・・・貴方に・・・貴方ならきっと・・・」

分かってくれると思ってというティファの吐息をつくような言葉が、ロン・ベルクの耳朶をうつ・・・分かっている、戦士が命を懸けるという重さを、そしてそれは全て仲間の為であり非難するのはお門違いなのだと・・・・魔界の過酷な環境を生き抜きてきた生粋の魔族たるロン・ベルクにはよく分かっている・・・腹ただしい事に!!

甘いだけでは生きていかれない！時には誰かが・・・・その誰かがいつでもティファだという事のみにロン・ベルクは其の一点のみに怒るを覚える。

もしもこれが他の者であったなれば・・・否！他の者達にはこんな事は出来ないしそもそもが思いつきもしない!!―ティファだから―だ!!全ては・・・その一言につくほどにアバンやマトリフ・・・魔界

の神にすら思いもよらない事を思考し実行してしまうティファだから・・・そのティファは・・・・
「また・・・俺に共犯者になれって言うのかよ・・」
「ロン・・・ベルクさん・・・」
貴方しかいないと酷い殺し文句に否と言えない男は、少女に込めていた腕の力を抜いて相対する。
あの時と同じ、泣きそうになりながらも堪えている気丈な瞳・・・いっその事こんな事をしたくなんてないと泣いて縋ってくれればまだ救いがあるのに、堪えて耐える、全ては己の大切な者達の為に・・・
「これを持ってろ・・・」
本当は渡すかどうか迷っていたものを、ロン・ベルクはマジックリングを取り出す。
キルがティファに服を拵えた様に、ロン・ベルクもまたティファの為にパレスの高炉を借りてティファの為の武器を拵えた。
ポップには魔法があり、チウはティファが常に首にかけている金のマジックリングの中に籠手を預けている事を知っていたので、武器がないティファの為に拵えたのだ。
ティファ専用の武器である刀・雪白はバランの、歴代の竜の騎士だけが扱える真魔剛竜剣と同様の伝説の武器であり、持ち込めないので急ごしらえではあるがロン・ベルクはダイの剣の時と同様ティファ専用の身を考えて打った究極の逸品である。
「材料はオリハルコンだと持ち込めなくてな。その次に強度の高いミスリル銀で拵えた剣だ。
ヒヒイロカネと同じで粘りがある。ヒュンケルとラーハルトが持っている鎧シリーズはこれと同じ材料で作った。」
ただ固いだけではなく粘りがあるから当時まだ鎧化のノウハウを持たなかった自分でもあれが作れたのだという。
そして後年に鎧化をものにしたからこそ、粘りがあまりないオリハルコンであってもヒュンケルに鎧の魔剣が再度作れたという話を・・・渡された細身の剣に目が行ってしまったティファは全く聞いていなかった。

先ずさやからして美しかった・・・真っ白い鞘は、先端部分に銀の薄板がされているシンプルな作りになっており、剣身から柄まで全てミスリル銀で拵えられた美しい作りに・・クロファが思わず表に出てきてうっとりとしてしまった・・・雪白は名前こそ白を表すがそれは雪白の能力を解放した時の名であるが・・・これは全てが本当に白く美しく、ティファもクロファも目を奪われたのを、クスリという音にクロファが見上げれば・・・そこには慈しみが籠ったロン・ベルクの瞳とぶつかった・・・・まるで―自分―の事を見ているように・・・・そんな筈無い・・・・自分はバーン以外に―己―を明かしていない・・きっとこの男もティファが愛しいのだ、自分も好意を持つキルやそのほかの者達同様にティファが・・・しかしこの剣は本当に奇麗だ・・・剣身はティファが扱いやすいように強度が無くならないギリギリまで薄くされ、白よりもなおほんのりとした色合いは髪が作りし物と言われればきっと信じてしまう程の・・・

「お前がこれに名前を付けてやれ。」

「・・・私が？」

「そうだ、お前が付けろ。」

今この場でというロン・ベルクの言葉に、クロファは微かに迷った。

記憶をすぐにティファに植え付けてティファに戻せばいいのに・・・そうしたくなくて、これの名前を自分が付けたくて・・・夕月と・・・・幽やかな言葉に、ロン・ベルクは微笑み少女を、抜身の剣諸共抱きしめる。

「夕月か・・・いい名前だ・・」

「そう・・・・うん・・・・そうか・・・・」

クロファは自分が付けた名前を褒められ、益々この剣を気に入り、ロン・ベルクに礼をして部屋を後にした。

「もうこれ以上無茶苦茶すんなよ？」

「・・・・この世界次第・・・・」

ティファの様にうまく言えないクロファの言葉にも、ロン・ベルクは困った笑い顔を見せるだけで五月蠅く言わない事にクロファはほっとする中、ロン・ベルクは黒の皮で拵えた鞘ベルトも着けても

らった。細すぎる腰の邪魔になる無い通常よりも細い作りに、クロファは―自分の色―だと目を細める。
白はティファだ、ならばこの黒は自分だけの者だと・・・其の自分の頭を撫でるロン・ベルクに、クロファは頭を下げておやすみなさいと軽やかに寝室に向かうのを、ロン・ベルクは扉の淵に靠れて見送り薄っすらと笑う
そうか、あいつは月が好きなのか・・・太陽と月とはなんともと・・・

その上空の月に迫るほどの超高高度に位置するパレスの中では、キルバーンはいつものように・・・否、いつも以上にミストバーンに纏わりついていた。
それは―ピロロ―も同じで、普段もミストバーンに可愛い使い魔としてそこそこスキンシップを図っているのだが・・・ミストバーンが何かを言いかけては口を噤む様子に胸騒ぎがしていつも以上に二人はミストバーンを囲い込む中その報が目玉から届いた。

「ミストバーン様、カールの西南の森の奥にて空間の揺らぎとその時に少しだけ―砦の一角―と思しき物を捉えました。」
「・・・・・そうか・・・さらにその周囲に重点的に目玉を張れ。」
「は!!」
　それは今まで見つからなかった―隠された勇者達の隠れ家―だと確信させる報であり、ミストは無言でキルバーンとピロロを脇にどかせて扉に向かうのを、キルバーンはミストバーンの腰に手をまわす。
「・・・・見つかったね。」
「そうだ・・・」
　それを主に至急報告するから放せというミストバーンの無言の言葉に、キルバーンはそっと放しながらも付いて行くと言い出しピロロを肩に乗せるのを、ミストバーンは幽かに息を吐いて好きにしろとともに扉の外に出て歩を進めながら、ミストバーンは胸の中で呟く
　お前と出会えた月日は楽しい日々であったと・・・・
　横目に見える死神の大鎌に似た上弦の宵月の如く、儚く消え入りそうな思いを抱いて

いしの積まれる世界：夜は明けそして・・・・

その日は良く晴れていた。
秋に見られる晴天を流れる雲一つない、―超超高度―からでも―下界―が遮るものなく見渡せるほどの晴天に、―空飛ぶパレス―は玉座の間に座りてご満悦であった。
「良く晴れておる、そうは思わなかキルバーン？」
「・・・その通りですねバーン様。」
玉座に座りてワインを啜りながら、下界にいるであろう―忌々しい異界の小娘―をどう蹂躙せんとするかと嗤っているバーンを、キルバーンとそしてピロロとてもが冷たい瞳で見遣るのを、当の本人は意にもかえさずそれすらも嘲笑う。
「余がこの世界の勇者ではなく、あの異界の小娘にご執心なのが気に入らんか死神よ？
それとも魔界の強者や現竜の騎士たるダイと戦い消耗する余を討たんと虎視眈々と狙うのに飽いたか？」
歌う様な揶揄う様な物言いにも、目の前の―死神達―は何の感情も動かさないのをバーンはつまらなさそうに放り捨てる。
「その方が欲するものとヴェルザーが欲するものが違えただけでここまでとはな・・・見込み違いか・・」
「・・・・・」
「まぁよい、数百年もの間、余の無聊の慰めになった―褒美―の件は忘れてはおらん。」
もしもこの大魔王宮に土足で踏み入る者あらば狩り尽くせという主の命を受けたキルバーンは、御意にと言ったきり早々に空間を通り、主の許しなく玉座の間を後にする。
「ふむ・・・どう思う―ミスト―よ？あれは余の命令通りに動くと思うか？」
バーンは―一人きりとなった玉座の間にて、数千年を共にする忠臣の名を呼び問うた。
あの死神は―影―の伝えた言葉ではなく、自分自らが伝えた言葉に

従うかと。
思えばキルバーンが来てから初めてかもしれない。
いつも死神に仕事をさせる時は、初対面で妙にウマの合ったミストバーンに伝えさせていたのだが。
「まぁよいか・・・・・最後の最後であれがどう振舞おうとも余に敵う筈も無し・・」
キルバーンの想いや行動に何ら重きを置く気が、そもそも道化としての価値以外然程興味のないバーンは一人心地る。
下界の忌々しい小娘くらいであろうか?地上を消すという―壮大な遊戯―を思いつきそしてそれを実行する為の企てが実を結んだ時以外で己の興味をここまで掻き立てたのは?
あれはどこまで知っている?どうやってあちらの世界を制してきた?切り札は異界から来た者が何かしらを持ってきたか?それとも・・―あの忌々しい小娘自体―か・・・・―アレ―はよく分からぬ・・・
ワインの入ったまま杯を右手で弄びながら、下界が払暁になるその時を待っている。
高度の高さで日がすぐに見られるが、下はまだ空の白みも無い・・・自分達の絶望を見ぬうちに逝かせるのなぞ何の面白みも無い・・・・自分も見てみたいのだ。
あの残酷な事柄を多く見てきたが故に、近頃はその遊戯に飽いたと言っていた死神のお眼鏡にかなった異界の大ネズミのあの麗しき涙を・・・・そして火を噴くが如くであった異界のポップが見せたという絶望の様を死神はこの世の宝を手に入れたが如くご満悦でその時の様を自慢気に話していたのが癪に障った。
あの傲慢な程の自信家のような魔法使いは実は奇麗な子供だったんですよ。
その奇麗な心に傷がつけられたのが余程嬉しかったのか、珍しくミストバーン以外に対して酷く執心を見せていた。
しかしあの様子では興味が失せたか・・いや、それどころではなくなったかと、バーンは喉の奥でクツクツと嗤う。
死神の様を思考で愉しみながら、速く下界の夜が明けよと願うバー

ンの言葉に従う様に、カールの隠し砦のある森に陽光が差した。
其の報をシャドーから聞いたバーンはニンマリと笑って命を下す。
「翼ある者達に昨夜掴んだ位置を中心に、周囲一帯を爆裂呪文と火炎呪文で焼き払わせよ。
―何事も無かった場所―が目指す場所である。
見つけ次第地上界のモンスター達をいるだけ突撃に使え。使い潰しにして構わん。」
そして何もない所にヒビが入らばよし、もしも―結界―が強固だあるのならば指揮官以外の魔界の者達全員で事に当たれと。
これまで勇者達の隠れ家が見つけられなかったのは異界の小娘の所為だと、バーンは半分以上確信をもって考えている。
能力の名は知らない、詳しい事も知らない、だが―勘―が告げている。
全ての忌々しい出来事の渦中にいるのは必ずあの小娘だと・・・数千年で魔界を平らげたは何も自身の力や軍の規模が物をいっただけで決してない。
確かに死神や影達が反乱勢力を殲滅し、軍は損なわれる事なく魔界のここぞという大戦の時にだけ集中させてきたが、大戦をするにも―機―と言うものがある。
そしてその機を知るのに間者や造反者や、果ては死神を時折間諜として使った事とてもある。
その時は自分は暗殺・謀殺をする死神だというのにという文句を聞くともなしに聞いていたがそれは兎も角、魔界の一角を占める大物達は当然自分のような大軍勢とそして結界を有しているのは当たり前であり、ではいつが自分達に都合の良い機が訪れるのかを、バーンは悉く勘が告げる通りに戦略・戦術を練って来た。
ある時は相手の寿命が差し迫った時であり、いつかは表立って現れなかった内乱の予兆を何と無しに感じて調べさせその通りであったので内乱を大火にして相手の内側から貪り尽くした時もあった・・・あの時は愉快であったとバーンは思い出し笑いをする。
骨肉相食む事が常であった魔界では珍しく、身内を信じていた男の

領地の最後が愛していた息子の手によって灰燼に帰したと告げてやった時のあの絶望に満ちて崩れた様が堪らない・・・・それが弱く虫けらの如き身で刃向かう愚か者達が絶望に沈み悪足掻きや、それによる焦った身内同士の罵り合いでも見物できれば上々だろうとバーンはその程度にしか下界にいる勇者達をを評価していない。
自分の望みはどこまでいっても天界への復讐、さらに言えば忌々しい神々によって奇跡までも使って守り通して来た人間達の楽土を壊滅させ、絶望した天を悉く食らいつくす事であり・・・・・それだけが長い魔族の生の中で願った事・・・
夜は開けた、それと共に地獄の蓋を開けよ我が育てし魔王軍
太平の惰眠を貪っていた虫けらどもを尽く起こしそして地獄の底へと叩き落とすがいい

―地上だとて太陽の影響による旱魃だの寒冷だの自然に翻弄され、その上モンスター達の襲来だの、合間を縫うように魔界からの侵攻を幾度も受けて被害甚大になるたびに頑張って復興しているというのに！世界の広さも生きていく辛さも知らぬ、頭御花畑の木っ端大魔王もどきが何を抜かすか!!―と、とある料理人が聞いたら間違いなく怒髪天をつかさんとする命が発せられた直後、翼をもちし者共が空を埋め尽くし攻撃呪文を眼前の森に向けて一斉照射する。
地上と魔界の戦いの狼煙が切って落とされた合図であった。

いしの積まれる世界・罠

太陽はいつも通りの動きに従い、日付変更線をまわった地をその陽光で照らしていく。

たとえそれが合図にその地に厄際が見舞おうとも知った事ではなく、そもそもが自然に意思などあろうはずもなく、良くも悪くも何事をも決めるのは―意思持つ生物―達の仕出かした結果であり、故に陽光指したと同時にカールの西の森が全て・・・否、一部分以外を残して木々や動植物たちそして何も知らずに眠っていたモンスター達が瞬時に滅ぼされたは、天上のパレスにいる大魔王バーンの命令通りに起こったに過ぎない。

その光景は異様であった。

周囲の動植物達が火炎呪文によって四方が黒焦げになろうとも、爆裂呪文によって大地が抉れようとも、まるで四角で切り取ったように何事も無く傷が毛一筋もつかない異常な場所が広大な程にあった。

あれが大魔王様の言われた目標であると、この場の一軍を任された魔界のレッドでビルは察した。

あの中には先の決戦で逃げた臆病な勇者達が閉じ籠って居るという・・愚かな事だと指揮官のレッドデビルはあの場所に逃げ込み、こうとなっても未だにうって出ることすらしない―臆病な者達―を嘲笑う。

最期には強気大魔王様が勝つというのに、逃げてばかりとは情けない勇者がいる者だと周囲の自分の配下達すらが嘲笑している。

先の決戦時で魔軍司令官ハドラーが討たれたとあったが、このような臆病者たちに討たれるとは不甲斐ないとすら出ている中、レッドデビルはこの状況に飽きたのか地上のモンスター達に―結界破壊―の為に突撃を命じる。

大半が突進系の地上のモンスター達であり、一斉攻撃の衝撃と上空からの再度の呪文攻撃に結界とても破壊できようと見積もって・・・まさかこのような微温湯のような地上界に、魔界並みの結界を張る者はいないだろうと・・・・甘い見積もりであった。

一斉攻撃のすぐ後に、それは知れた。
「報告!地上のモンスター達による突撃に、結界にはひび一つはいらず!!・・・のみならず全てのモンスター達は結界の強度により衝突死した模様・・」
「見えている!!・・・・全く忌々しい・・・」
今回は街を蹂躙するでなく野戦で戦うでもなく目に見えない結界を炙り出し、そして破壊するための軍であり、地上のモンスター達で選ばれたのがあばれうしどりやアークバッファロー、はては火炎を口から吐こうとも魔界生まれの自分達には遠く及ばないがその突進力と巨体から繰り出されるであろう破壊力をかってドラゴンを十数頭ぶつけたのだが、全て頭蓋骨または全身の骨が砕け内臓に突き刺さり、突進してぶつかったと同時に地上のモンスター達軍は一瞬にして全滅した。
「・・・・この結界を張った奴は怖ろし者だな・・」
自分達の爆裂呪文を加えれば相まって相当な破壊力になりえるのを傷一つつかない事もさることながら、激突死を狙ったのであれば魔界においても相当な強者と言えよと、レッドデビルは感嘆し、称賛に値する者だとニンマリと笑う。
まさか臆病だと思っていた勇者達に、敵対勢力であれば惨たらしい死をいくら積み上げようとも構わないという気概がある者がいるとは思わずに笑ったが、それも自分達が負ける事は無いという余裕の表れであった。
地上のモンスター達を使い潰しても構わない、其の達しの通りに数百もの命が一瞬で消えようが、自分達には何ら影響はないという指揮官の思惑は、残念ながら滅さられ、それは程なく天上のパレスの玉座の間に悪魔の目玉が報告をした。
「ほう・・・なかなか骨のあるものが地上にいる者よな・・・・この世界の者達ではなく異界の者達の献策か?」
悪魔の目玉の報告に、一部とはいえども自軍が滅さられたというのに玉座に座るバーンに焦りの色はおろか、味方が死んでしまったという悲しみどころか苛立ちすらも現れずただ笑って報告を受けていた。

まるで楽しい事が起きたと知らされた子供の如くに。
大魔王の命令通りに場所を炙り出し特定した後、直ぐに地上のモンスター達は命令通りに突撃をした瞬間、あるものは脳漿をぶちまけながらも狂ったように突撃をやめずに絶命し、突進力が強ければ強いモンスター達程衝突の破壊力に筋肉と外皮が破れ骨が砕け内臓に突き刺さり尽く絶命しそして・・・
「我等の目玉が一瞬の内に滅せられ直ぐに新たな目玉を送り込みましたが、レッドデビル様の率いる空中部隊は杳として行方知れずに。」
地上のモンスター達全てが絶命した直後に、その場所を見張っていた悪魔の目玉たちは何らかの方法で全て滅せられ、―ミストバーンの代わり―に諜報部隊を指揮しているシャドーがすぐさま新たな目玉部隊を急行させたが、十分足らずの時間でレッドデビルが式する空中部隊が姿を消し、代わりに周囲の焦げ方とは違う―四角四方―の巨大な燃え後があったという。
「・・・間違いなく、周りの火炎呪文とは違ったのだな?」
「は!四角四方の方はまだ若干くすぶっていた―赤黒い炎―が残っており、通常の火炎呪文とは異なっておりました。」
「・・・・分かった・・・そしてその地には勇者達が見当たらぬと・・」
「捜査半径を五キロにしていますが未だに行方知れずにございます。」
バーンの言葉にも悪魔の目玉は淡々と報告をする。
これが初期の魔軍司令官であったならば、前進と声を振えさせ大量の汗をかきながらみっともなく報告をするのだろうが、元来悪魔の目玉には意思はなく、報告と簡単な会話と命令をこなす知能だけをザボエラに育てさせており、死という概念するが無い目玉たちには恐怖という感情は皆無であり、どのような事も揺らがずに報告する者達をバーンは存外気に入っている。
嘘偽りも無く、忠誠心だの友愛だのに囚われる事も無い便利な道具だからだ。
決して自分以外を見ない道具・・・ミストバーンもそのようになると思ったのだが・・まぁ良い・・・
「捜索範囲を広げさせよ、世界中をひっくり返してでも・・・・・・い

や・・勇者達にとって―因縁深き―彼の地を重点的に調べよ。」
「は・・」
先代勇者が魔王ハドラーを討った地・・・・あそこは存外様々な因縁やそして―地場―がある。
魔族が好む力が溢れる地であり、それをして魔王ハドラーはあの地が死火山となり天然の要塞となっているのも相まって拠点とした地。
「ただで帰れると思わぬ事だな異界の稀人どもよ・・・」

その日パプニカの王城は厳戒態勢であった。
自分達の実質の原告種の帰還のみならず、そのレオナ姫からあの勇者ダイの父君と其の護衛であるという半魔のラーハルトという男を城内で守ろうと言われた時には、国元もきちんと守る為と言われて留守居役をしていたアポロ・マリン・エイミは本気で度肝を抜かれた。
二人はレオナ姫に伴われ夜が明ける―一時間前―に突如として城内に姿を現したところからして度肝を抜かれた。
目撃した兵士などは、姫の幽霊だと叫びちょっとした混乱が起きたがそれは兎も角、レオナは先の決戦時に一度勇者達が破れた事と、其の再戦が今日行われるので、ダイの父親をこのパプニカ王国の総力を挙げて守るのだと言われた時、三賢者には疑問しかなかった。
ダイが当代の竜の騎士になった事はレオナ姫自身から全て聞かされており、いわんやダイの父親ともなれば先代となるだろうが竜の騎士であり、何故父親は戦場に出ないのだという言葉にレオナは溜息と共に説明をした。
全ては息子であるダイを守らんと一度は身を挺し、―奇跡手に一命は取り留めた―が、力の全てを使い切り最早一般人と変わらない身となってしまったのだと。
「その様な事が・・・・分かりました！我等三賢者と兵士達はこれより追撃してくるであろう魔王軍からダイ殿の父君をお守りいたします!!
マリン！見張りをそれとなく増やせ、あからさまであればバラン殿

の身がここにあると喧伝する事になるから注意しろ。
エイミはバラン殿と護衛であるラーハルト殿を部屋にご案内した後すぐに城内に魔王軍との最終決戦の余波がこの地に来ると伝えて厳戒態勢をとらせろ、複数の兵士達を使いつつも決してバラン殿の事を漏らすな。レオナ様はこの後はどのように？」
三賢者の筆頭たるアポロは、自分達に出来うる最適解を次々に導きだしそして主に指示を仰ぐ。
戦の現場の指示出汁は兎も角、この後の大まかな指針を出すのは―王―たるものの務めなのだから。
アポロの出す指示に満足げに微笑みを浮かべていたレオナは一転して悲しい顔になる。
なぜなら・・
「私もこちらのバランさん同様に、敵の人質に取られないように非難するように言われたの・・・駄目ね・・・いざという時に闘う力がないから外されるなんて・・」
「・・・レオナ様・・・」
無力であるが故に外されたのだというレオナの言葉に、アポロはおろかマリンやエイミも駆ける言葉が見つからず口を閉ざす中、レオナの想いはこの世界のラーハルトにもよく分かる。
主を守る為にはどのような事をしようとも、まさか戦場の外に出されるとはラーハルトは思いもしなかったからだ。
連れていかれた後はきちんと異界の者共の話を聞き、―今回の策―を全て聞かされた時は自分も敵を殲滅させるかとやる気が漲っていただけに、双方のアバンからダイが十全に闘えるように父バランの護衛をしてほしいと言われるとは思ってもみなかったのだから。
愛した者達が立つ戦場から遠ざけられる・・・これほど辛い事は無い・・・無いのだが、レオナがいかにベホイミやベホマを使えたとても、それは異界のポップや―ティファ―の薬草が簡単にその位置にとって代われる場所であった・・・物心ついてから鍛えられていた賢者としての力を否定されたようだが・・・・異界のアバンの言葉が忘れられない・・

「貴女とバラン殿に何かが起きた時おそらくダイ君はもう一度死にましょう。」
そして世界が滅亡してもいいのであれば戦場に立ちなさいという情け容赦のない言葉は、この世界のアバンの眉をひそめさせるほどの物言いであったが・・・現実を突きつけるのにこれほどうってつけな言葉は無かった。
その言葉をこの世界のラーハルトも聞いたからこそ、バランと自分の護衛の為に王城内に籠る事を是としたのだから。
今この世界を守らんとしている勇者にして主君の子息であるダイ様の最愛の者達を守る事を

「今頃は―全ての策―がうまくいってますかね～マトリフ？」
「・・・け!!うまく行ったかどうかよりも！策の内容絶対に嬢ちゃんたちに知られるなよアバン!!!」
「当たり前でしょう。ティファは愚か―向こうとこちらの子供達全員―には内緒ですよ。知らなくていい事なんて教える趣味は私にはありませんからね～。」
「・・・ったく・・・この地の地場の力を取り込んだ陣はこれでよしか・・・全く、お前さんがハドラー打ち取った魔王の最後の場所に俺達の希望を託すってどんな悪趣味野郎が描いた図だ？神さんも皮肉が過ぎるってもんだろう・・」
この世界で今起きている策謀を全て一人で描き切り、魔王軍を損耗させダイの最愛の者達はパプニカ城内に、そして非戦闘員であるレイラ・ジャンク・スティーヌはもとより、超高齢化で自分達のマトリフよりも内臓系統が弱っているこの世界のマトリフはテランにある竜の騎士しか本来は入れないあの湖の神殿に隠して来た。
「そもそもがマザードラゴンが始めた事なのですから当然責任の一端はとって頂いてしかるべきでしょう？」
物凄い冷笑を浮かべて異界のアバンはこの世界と思念体となったマザードラゴンを繋ぐ水晶を思いっきり脅したのだ。
やらないのであればもはや自分達は総力を挙げてティファとポッ

プを留め、この世界の一切から手を引くと・・・・夜半に闇に紛れて湖の外から脅しをかけてきた異界の稀人に対し水晶は泡を食って結界を消し去り招き入れ、異界のアバンの望みは何かと本気で怯えながら聞いたのだ・・・・自分が忠誠を誓いしマザードラゴンが残してくれた希望の光を消させ時という健気な心など、異界のアバンからすれば望みをかなえる為の道具でしかなかった。

水晶のパーソナリティはこの世界のダイから、水晶と交わした話を聞きだしそこから辿って見事的中させたアバンの言う通りに水晶は彼等を匿いそして、―砦の罠―を、ティファには自分達の策の為の時間稼ぎの為と称し、ティファの隠れ結界でパプニカ王城内とテランの湖の神殿に隠す者達全てを届けさせる時自分達も来て無人となった砦の結界を存続させそしてティファの知らない―罠―をキルに張らせた。

ティファには隠し砦をほんの少しだけ晒させ、そしてー隠したままの方が時間稼ぎになるーとだけ伝え、結界に衝撃がありティファに伝わった時はすぐに消すように伝えている。

そしてティファの知らないところで、キルは砦の大きさと同じ規模のダイヤのナインを仕込ませた。

きっと砦の結界を消す為に、様々な攻撃呪文やー破城鎚ーや爪や拳や闘気などが使われるでしょうとー大まかな予測ーをティファとポップとチウの前で披露し、いなかったことにがっかりとして怒り狂って思考を乱してやりましょうというアバン先生の策略を、良い子達は先生って、と少し白い目で見ていたのがアバンには可愛い事であった。

死兵をたった数年前に相手にした一廉の戦士達のすっかり平和に馴染んだ姿は、アバンには愛おしいものである。

もはや血生臭い事は全て自分がする、どうか二度と戦いの天才などという事は言われないで欲しいものだと。

そしてティファ達には予めこう言ってある。

―自分とマトリフ―は、空間を安定させる呪法以外の力は無い、つまりキルには力が残された状態で来れている。

自分達も少しは持ち込めるはずの力を、アバンはあえて全てキルが持てる様に綿密に力の配分をしてこの世界へと来たのだ。
当然ラーハルトとロン・ベルクはもう少し自分達にもと言ったが、アバンは―全て―を見越して頑として聞き入れなかった。
それはすなわちこの世界の狂暴化したモンスター達と魔王軍が群れを成してきた場合、ロン・ベルクやラーハルトの技よりも、話に聞いている―ダイヤシリーズ―の方が汎用化が見込めると。
罠を張れば、後はそこに獲物が勝手にかかるに任せればよく、人がいる必要が全くないからだとは、アバンはラーハルトにもロン・ベルクにも伝えなかった。
その思惑を言われずとも察しているマトリフからは、
「お前の悪党っぷりにも磨き掛かってんなぁ～。」
と呆れられたのを、アバンはにこりと笑ったのみであった。
異界のアバンからすれば、この世界の命運はおろか、弟子であるポップと違い狂暴化して正気を失ってしまったが為に使われるモンスター達に対する憐みは一片も無く、魔王軍が損耗するのであればそれでよいのだから。

そして自分達はかつてハドラーの拠点があり、今は風穴と化しながらも地場が残っている玉座の間の後で作業をする。
この世界からティファ達を連れ帰る為の最後の道となる大法陣を出現させるべき法陣を。
この地にいる事と―ティファ達の作業―がばれない内に、―道―が繋がるかどうか・・
そこだけが今のアバンを悩ませる

いしの積まれる世界：炎の鳥を撃ちしは・・

「ポップさん・・・・お姉ちゃんとドールさんとラーハルトさん大丈夫かな？」

「ん・・・まぁ大丈夫だと思うぞ？・・・・・―パレス―だし・・」

少年ダイの質問に、ティファ達をよく知るポップは大丈夫だと答え、最後の一言は自分に向けての発言でありダイの耳には届かなかった。

ラーハルトにはともかく、あの二人からすればー勝手知ったるパレスー内部なのだから。

異界のアバンとマトリフが、双方の先の勇者一行にとって因縁深き地にて―帰り支度―を地下にてせっせと施しているその頃、双方の世界の現役勇者一行の良い子達と大人ヒュンケルとクロコダインと二人のロン・ベルクと共に地上の森の中で―待機―をしている。

アバン達が帰り支度の為に必要なエネルギーとやらを、ティファが調達に行き異界のラーハルトとドールが護衛に付いて行っているのだが・・・・エネルギーを調達する場所が問題であった・・・・別にそのエネルギーが無くともティファ達はアバン達が今用意している大法陣と、この世界の神々が用意しているエネルギーでも帰れるのだが、エネルギーの中身が問題であった。

曰くこの世界の神々が数人滅せれば膨大なエネルギーで帰れる・・・・・それってない・・

聞いた瞬間この世界の神々とマザードラゴンに怒りを覚えていた青年ポップも、妹のそれってない発言に賛同した。

自分達を帰すのは当然ではあるが・・・物凄く寝ざめの悪い話しであり、向こうに帰った自分達の心を永久に悩ませそうなそんな方法は却下である！

「エネルギー分捕ってきます。」

・・・・あの可憐な妹から分捕ってきますとかそんな下世話な言葉をポップは聞きたくなかった！

しかしだ、あるところから貰えれば、それも魔王軍の計画を根底か

ら覆せる事も可能な奉納ならば一考の価値があるという自分達の先生の言葉に負けて、ティファの話をきちんと聞いてその上で建てられた今回の作戦は至って単純。

―待ち伏せ―である。

計画ではティファの言うエネルギーを分捕ってくれば、この世界の大魔王は怒り心頭に発して、未だ地上からは見えないパレスから態と姿を現したティファ達を追いかけてくるだろう・・・・閉じ籠る大魔王を引きずり出す程のエネルギーを、ティファがどうやって持ち出してくるかは兎も角として、策が嵌れば出てきた大魔王を異界のポップ達と共に迎え撃ち、そして倒すというシンプルな作戦であった。

隠し砦の方に張った罠に引っかかった魔王軍達がこの地に辿り着くには時間がかかる。

そして今の自分達が目玉で見つかろうとも、ティファの結界で通信は遮断できる手はずなので、指示を受けられない魔王軍が直ぐに到着できないとの見積もりもきちんと出ている・・・・本当は全滅しているのを双方のアバンとマトリフ達は知っているがそれは兎も角、鎧の魔剣を着込んだヒュンケル達は、いつここが発見されてもおかしくないと警戒をしている。

彼等こそ悪魔の目玉で勇者一行の動向を散々注視して監視をしていただけに、目玉の怖ろしさを良く知っている。

―ティファ―は目玉の気配がしますというが、本来悪魔の目玉には気配などないのだ！

それは動いた時の物音や空気の流れかと聞いてみても、視線感じるでしょうとティファに言われたが意味不明である・・・・あれはそのような気配を悟られないようにザボエラが心血を注いで作りし物であり、大人になったヒュンケルも一度だけ悪魔の目玉の視線を感じるのだろうかと物陰からじっと見てもらったのだが遂にただの一度として潜んでいる場所が分からずじまいで終わったのだ。

ティファだけにしか分からないのであれば後は自分達の目でカバーするしかないと、双方のチウ達とアリクイのアリババや、グリズリーのくまちゃを新たに仲間入りした獣王遊撃隊達にも目玉を絵で

教えて見かけたら知らせるように言ってある。
ちなみに余談だが、―ビースト君―は、この世界のマトリフ同様もう高齢なのだからとテランの湖の神殿で弟子達の勝利を祈って待っているところであった。
この世界にはもうきちんとした大人の保護者達が居るので、本当に病に罹って明日をも知れない身ではないにしろ、最早一線を退いた老師や大魔導士達に無理をさせる必要は無いのだから・・・というのは些か甘いティファの発想を、この世界のアバンは使えるのであればと言いたげたのを、異界のアバンはその通りですよと頭を撫でて認めた。
ティファの優しさからの提案とは違い、老師も人質にされる恐れがある要因だと胸の内で呟いたのは兎も角として、チウ達もアバン達とティファ達の策が成るまで警戒度を一番にして見ていたのだ・・・・油断は本当に無かったのだ・・・

地下にて大法陣を書き終えたアバンとマトリフはさて地上に戻ろうと強張った体を一つ伸ばした。
マトリフは仕方がない・・・なにせ百歳越えの超お爺ちゃんであるが、しかしアバンはそんなマトリフからすればまだまだ若造だという年齢であるが、アバンとしてはそろそろ四十にもなろうという自分も体に変化があっても良いだろうという言い分がある！
そもそもが、この世界は分からないが自分達の世界では人間の平均寿命は八十には届かずせいぜいが六十から七十でお迎えが来るものが多い中、マトリフの様な者が特別なのだ。
そして四十もそろそろいい年をしたおじさんであり、こういう作業後は腰に来る・・・悲しい加齢問題であると言いかけた時、其れは起こった。

大地が噴火の前兆の鳴動したが如く巨大な闘気が地上に降り立ったのを二人は感知し！リリルーラが使えるアバンはすぐさまマトリフを腕の中に入れて目印にした己の弟子達の下へと飛んだ先には・・・・衣服とそして体をズタボロにされながらも折れた剣で体を支えんとするノヴァと自分達の世界のロン・ベルクの姿が目に飛び込んできた!!

この二人も並外れた技量の持ち主であり、ロン・ベルクも制限がかけられているとはいえども並大抵な相手なればここまで後れを取る事はまずもってあり得ない!!

そして愕然とするアバンとマトリフを、―大量のオリハルコンの兵士達―が取り囲み、高笑いが一帯を占めた。

「グハッハッハッハッ!!地下から薄汚れたモグラが―吾輩―に倒される為にのこのと出てきおったか!!!」

高笑いをしながらオリハルコンの兵士達をかき分ける様に出てきた―物体―に、アバンとマトリフには見覚えが無いが、話だけは知っている。

目の前のでかいのは相手の能力を見通す目を持つリビングピースであるキングマキシマムであると。

いつかの日、向こうの世界でティファによって身も心も瞬間にズタボロにされ忌ライ表舞台を怖れて引きこもったと聞いていたが、その力量の本当の所は其の所為で知らないが、ノヴァとロン・ベルクをここまでボロボロにできる技量はこいつには無いだろうと、アバンとマトリフはすぐさま見て取った。

確かに力はありそうだが他にいるはずだと二人は戦い渦巻く場を見回す。

自分達を取り囲むオリハルコンの兵士達以外にも、ヒュンケル達と攻防を繰り広げられているのが視界で捉えられる。

如何に二人の技量が優れていても、次々と湧き出るオリハルコンの兵士達の前で苦戦こそしていないが難儀をしている。

打開しようと二人でクロコダインの獣王激烈掌の如く、左右の渦を合わせたブラディスクライドの合わせ技で目の前の兵士達を薙ぎ払

うが、その度に鬼岩城戦の時の様にハートの間から次々とさまよう鎧が出てくるが如く湧いて出るオリハルコンの兵士達に、その時のポップの様にいつまで続くのだと怒鳴り散らしたくなるのを堪えて敵に集中をする中、―炎の鳥―が襲い掛かる!!
「「ヒュンケル!!!」」
二人の師が、それぞれの弟子達を案じて同時に叫び、この世界のアバンはアバンストラッシュブレイクで炎の鳥をかき消し、異界のアバンはリリルーラでヒュンケルの横に出現しそしてすぐ様目印にしたマトリフの横に飛んで弟子を逃がした。
この炎の鳥を、自分は良く知っていると、異界のアバンとマトリフの額から汗が一滴流れた。
自分達が知る鳥であるのならばこれは・・
「ほう・・・かき消すではなくあの様な避け方があるとは面白い事をするものよな。
で?その面白い事をしたのはこの世界のアバンか?それとも異界のアバンとやらかどちらだ?」
・・・・放たれたのは確かに―大魔王バーン―の得意中の得意であり好んで使う―カイザーフェニックス―の筈なのに!!
「余の問いに答えぬのかどちらかの世界のアバンよ?」
戦いの最中だというのに、まるで敵などいないとばかりに話しかけてくる者は―青年魔族―であった・・・・

いしの積まれる世界・大魔王バーン

遡った少し前の地上

異界のアバンとマトリフ達と、ティファ達が作業に行っている間に異界のポップは神経を張り巡らし、少年ダイ達もまた同じように周囲の警戒を怠ってはいなかった。

少しだけ肩の力を解す程度の話はしていたが、少年ダイ達を中心に置きロン・ベルク達やヒュンケル達は四方に散って互いを背合わせにして周囲を見回しており、獣王遊撃達もそれを徹底していたおかげか一つの目玉をアリクイのアリババが見つけ、アリババは即座に目玉を飲み込んだ!!

「そんなの食べたらお腹壊すぞ!!ペッしろアリババ!!」

「―嫌!!こいつ悪い奴!!隊長そう言ったでしょう!!」

隊長の言葉に逆らって目玉を吐き出さないアリババに、チウは仕方がないなと思って頭をかくのを、異界のチウはこれなら野生のモンスターに食べられたと思ってもらえるかもしれないよという慰めを受け、そんなもんかなとチウも思いなおすのを―木々の間―から新たな目玉が見ていたのを彼等は気づけず、目玉の向こう側の―リビングピース―というオリハルコンの生命体はほくそ笑む。

「なんとも警戒心の薄い・・・・あれであれば吾輩の配下達の強襲でいけるか・・」

マキシマムは逸る心を冷静に配下達の数と補充の仕方を念入に下準備をする。

全ては自分の主たる大魔王バーン様の勝利の為に

通常の魔族と違って金属生命体であるマキシマムには寿命があって無きが如くであった。

通常の金属生命体であるリビングピースは錆やら劣化やらが心配されるが、オリハルコンで出来ているマキシマムにはその心配は無く、古くから大魔王バーンに仕えているだけに自負心は相当な者であった。

それは常々自分こそが主から絶大な信頼を得ており、ミストバーン

もキルバーンも所詮は自分の前座であると・・・・物凄く身の程知らずなそれこそ本物の道化であり、バーン自身もマキシマムには何の期待もしていない。
期待していないが一点だけ気に入りそれが故に―多少無能―であっても使い続けている理由がある。
それは真の意味でマキシマムはバーンしか見ていない事。
悪魔の目玉と違い真に知性がある者の中で、信頼だの友愛だのを自分以外の他者に抱かずに愚直なまでに自分しか見ていないマキシマムの、自分を見つめる視線が心地良い点にある。
そして多少無能であるが―掃除屋―として、自分達が取りこぼした者達に食らいつき殲滅するハイエナ的なところも気に入っている。
そのマキシマムは、悪魔の目玉越しにキングスキャンで相手の力量を見たところ、洒落た服を着た異界の者達は、異界のポップ以外は然程力が無い事を確認し、そしてこの世界のロン・ベルクとヒュンケル達の戦力を把握した時、丁度空飛ぶパレスはダイ達のいる芭蕉の超上空に到着をした。
パプニカはカールと違い曇天であり、パレスの影が地上に知られなかったのがダイ達にとっては不幸であり、マキシマムにとっては絶好の奇襲時であった!!
「な!!ポーンヒム!!??」
「こいつ等ハドラーの・・・なんだこの多さは!!!」
「ダイ!ポップ!!疑念は後だ!!まだまだ上空からくるぞ!!!」
「必ず三人一組を守れ!ポップ!メドローアの連発はするなよ?ここには回復薬は・・・」
「分かってんよ・・・こいつ等まさか・・・」

それは音も無く地上目掛けて降り立ち、物音共にダイ達は襲われた!!
ダイ達からすればオリハルコンの兵士と言えばハドラーのポーンヒム一人であり、何故オリハルコンの兵士がこんなに大勢いるのだと迎撃をしながら驚愕するのを、追及は後だとヒュンケルと、青年ポッ

プに魔法乱発注意をするヒュンケルの言葉を青年ポップは受け取りながら、大量のオリハルコンの兵士達に心当たりがあった・・・・まさかあのアホか！

自分達と特にティファの勘気に触れたあのアホキング!!キングマキシマムだろうかと。

ならば!!

「こいつ等には自立した思考は無ぇ!!ひたすらに俺達を消耗させるだけか、―キングの指示―で動いてる!!とりあえずダイとヒュンケルとノヴァとロン・ベルクさんとアバンさんは最小限の闘気だけで戦ってくれ・・・・きっと後から後から湧いてくる!!!!」

向こうの世界でキングマキシマムを相手にした後、マキシマムって何だったんだと平和な世になってポップがバーンに聞いてみれば、本来は物量に物を言わせてパレスの掃除を果たす輩であるが、あの時は他に人員がいなかったので使っただけだという・・なんともマキシマムが哀れになる事を聞いたポップであるが、―物量に物を言わせる―というくだりが気になり更に聞いてみれば・・・・パレスにはマキシマムの兵士となるオリハルコンのポーンが結構な数があるとか・・・・オリハルコン＝伝説の代物という図式がポップの中で完全に崩れたのだがそれは兎も角、もしもこの世界でも同じように相当数のオリハルコンのポーンがあるならば！今回はマキシマムは本来の戦いのスタイルを十全に発揮できることを意味し！オリハルコン相手であれば自分達を十分消耗させられるという危惧があり、ポップは持っている情報と知識をフル活用し、そしてその危惧は当たってしまった。

ダイ達は青年ポップやヒュンケルの言う通りに闘えるが、カール騎士達やゴメス達は早々に戦いの場からの退場となったのは仕方がない事であった。

相手が魔界のとはいえどもモンスター達であればまだやりようがあったが、如何せんオリハルコンを切れる技量は彼等にはなく、アバンはすぐさまチウ達に言って負傷した彼等と無事であるカール騎士達に指示を飛ばし、戦線離脱を早々にさせた！

「無駄死には許しません!!」

如何に戦い抜くと誓い合った者達とは言えども、生物としての格が違いすぎるのだと諭しフォブスター達ルーラを使える者に兎に角遠くへと逃がした。
「追撃は俺が上空で見張ってるから行ってくれ!!!」
青年ポップはアバンの指示が発せられると共に上空に飛びあがり、メドローアを作り出し撤退補助を請け負い、フォブスター達は一礼をしながら時間が惜しいとばかりに次ぎつにルーラやティファから預かったキメラの翼で落ち延び、ポップはメドローアを解かずにトベルーラで半分ほど護衛をし、追撃が無いとみるやすぐさま取って返しそしてノヴァ達に群がっているオリハルコンの兵士達の背後に立ち消し飛ばしながら周囲を見れば、少年ダイ達は順調に兵士達を最小限の力で手足を切って無力化させていた。
マァムとクロコダインがタッグを組んで背中合わせで迫る兵士達の手足をねじ切り或いは切り落とし、少年ポップはアバンとヒュンケルと組んでヒャドやイオラで足止めをして二人が仕留めている。
今手を貸したノヴァも二人のロン・ベルクと組んで問題なく闘気剣で撃退している・・そこまでは良かった・・・上空からバカみたいな高笑いと共に、―巨大な炎の鳥―が飛来するまでは・・・
それは一瞬であった。
炎の鳥に青年ポップが気が付いた時にはもう遅く、鎧の魔剣を着込んだヒュンケル二人がブラディスクライドを放つも鳥と技の間にオリハルコンの兵士達が入り込み迎撃技は不発に終わり、地上にいた者達は全員が炎の鳥、カイザーフェニックスに飲み込まれたと同時に高笑いが・・・馬鹿わらが響いた!
「ガッハッハッハッ!!汝らの様なごみ共には、―バーン様―の炎の鳥は勿体なかったか!!!??」
不意の攻撃とは言え、ダイはすぐさま竜闘気で近くにいた者達を囲い込み、ヒュンケル達も残った異界のチウとアバンを鎧で囲み、ノヴァは全魔力を使ってヒャダルコを前方に天界をしてロン・ベルク達を守り切ったそこまでであった。
上空にて高笑いをするマキシマムは兎も角、その隣いる青年魔族に

ダイ達はその姿を見ただけで背筋に寒気が奔った・・・・・生物としての次元が違う・・・そして青年ポップと異界のヒュンケルは驚愕の瞳で青年魔族を見ていた。
何故ミストバーンがマキシマムと共にいるのかも然る事ながら！今のは間違いなくカイザーフェニックスであった!!
ポップ達は一度あの青年魔族を見た事がある。それは死の大地の決戦時にティファが消したミストバーンの表側の肉体である。
つまり目の前の―ミストバーン―があれを撃った事になる。
そしてマキシマムはそんなミストバーンをバーン様と言った!!
・・・・どういう事だと信じられない目を向ける異界からの稀人達に、青年魔族は口を開いた。
「さしもの其方達であっても驚く事はあるのだな～、異界からの客人達よ。」
その言葉遣いと声音は尊大であり、自分達の知るミストバーンとは違いすぎると思う中、更なる驚愕の言葉が青年魔族の口から伝えられた！
「この姿で会うのは初めてであろうから名乗ろう。
余は先に貴様らにまみえた大魔王バーンである。」
青年魔族、大魔王バーンの名乗りと共に巨大な闘気で地上にいた者達はまるでベタンを仕掛けられたが如くの圧力に、器量がダイ達より劣ってしまうマァムは潰されかけるのをクロコダインが覆いかぶさって守ったが、それを愉快気にバーンは見遣り、瞬時に二人の側に音も無く近寄り蹴り一つでクロコダインの鎧とあばら骨を粉々に砕き腕の中で守るマァム諸共蹴り飛ばした。
あまりの衝撃に呻き声一つ上げられない中！クロコダインは死んでも放すものかと地面を二度三度叩きつけられながらも腕の中のマァムを守り切り、岩場に叩きつけられようとまった時には、クロコダインの腕の中にいたマァムも蹴りに乗せられたバーンの闘気がクロコダインの身を貫通して叩きつけられ、二人共気絶をしてピクリとも動けないのを、直ぐに駆け付けようとしたダイ達の中でバーンはノヴァと異界のロン・ベルクに狙いを定めて二人の剣をカラミティエン

ドを弱めた手刀で剣を叩き居って蹂躙した・・・まさにそれは本当に一瞬の出来事であり、分断されたダイ達をオリハルコンの兵士達がキングマキシマムの指示の下襲い掛かり消耗する中アバンとマトリフが地上に戻って来た。
「ふむ・・・其の方達の中にもあの―忌々しい小娘―はおらぬか・・・」
「ティファさんに・・・・あぐ!!!!」
「誰が余に対して口を開いてよいといった虫けら？礼儀がなっておらんぞ？」
バーンの言う忌々しい小娘とはティファだとあたりをつけたノヴァは、彼女に何の用があると口を開きかけたのをバーンは不敬であるとノヴァの鳩尾に膝蹴りをし地面に這いつくばらせノヴァの頭をミシミシと音がする程踏みつける。
魔界においてもバーンが許さない限り自軍の者達であってもミストバーンとキルバーンとピロロ以外には口を開く事を許してこなかったバーンは、力のない脆弱で礼儀のなっていない者に仕置きをするのを、ダイ達が許す筈も無かった！
「やめろ!!!!」
ダイは溜め込んでいた竜闘気を右手の紋章に乗せ打ち掛かり、少年ポップもブラックロットで打ち掛かる。
ヒュンケル達も駆け付けようしたがオリハルコンの兵士達に阻まれ足止めを食いそして、打ち掛かった二人はノヴァを踏みつぶさんとするバーンの両手によって受け止められた！
二人にとっては全力の闘気・魔力の攻撃であり、其れなりに自信があっただけにいとも簡単に受け止められ弾かれた事に衝撃を受ける中、手刀で放たれた小さなカラミティウォールが追撃してきたのを青年ポップがトベルーラで二人を救出しながら叫んだ！
「その壁に絶対に触るな!!全部砕かれんぞ!!!!」
大魔王バーンのカラミティウォールの威力を知っているのはこの場ではポップとヒュンケルだけであり、ヒュンケルはオリハルコンの兵士達の相手で押され気味となっている中自然警告を発するのは青年ポップとなったのを、バーンは五月蠅い者だとノヴァから足を放し

青年ポップの背後を瞬時に取った！
「五月蠅き小鳥は討たれるぞ？」
自分の知らないバーンを名乗る者のその言葉に、少年ダイとポップを抱えながら青年ポップはぞっとした・・・・やられる!!!せめてこの二人だけでも・・・
逃がそうとした矢先―ソレ―は間に合った！
―飛天御剣流!!奥義！九頭竜閃!!!!!―
自分達の真横から、自分達の良く知る声が響き渡り、九つの斬撃がバーンを真横から襲い掛かり、不意を突かれたさしものバーンも吹き飛ばされ、岩場に叩きつけられた!!
「・・・・間に合った・・・と言えましょうかねこの状況は・・」
「ポップとこの世界のディーノ殿達を守れたのであれば上々だろう小娘。」
大技を放ち、二人の子供達と共にバーンから距離を取った場所に降り立った青年ポップとバーン達の間に二人は静かに降り立つのを、バーンは直ぐ様体勢を立て直す。
「・・・・異界の忌々しい小娘か・・・・貴様技量を隠していたか？」
生を受けて久しく、ただの一度もここまでの目に遭わずに強者として過ごして来たバーンは、呼びかけと同じく割って入った小娘を忌々しげに見遣る。
技量を隠していたかとバーンに言わしめるほどの大技を放ち自分の邪魔をした小娘は、己の死線にも動じずに細身の剣を左肩に担ぎ槍使いを従えて自然体で立っている様は威風堂々としてたのがバーンの気に障る！
その様をティファは何の感情も浮かべたない瞳で見遣りながら口を開いた。
「上空のパレスにお邪魔した時、服装言動悪趣味野郎に襲われましたが成程、あの者が道理で焦っていたはずです。」
技量云々ではなく、何の脈絡も無いパレスでキルバーンに襲われたことを告げるティファに、味方達は何の事だと分からなかったが、バーン自身には思い当たる事がありニヤリと笑ってティファの言葉

に答える。
「クック、キルバーンは余の命令に唯々諾々ときちんと従ったか・・・健気な者よ。
死神と呼ばれ、その評価通りに冷酷―無情―であったれば違ったであろうに。」
ティファとバーンの謎掛け合いのような言葉に、周りは益々何の事だと訝しむ中、ティファの表情にはっきりと不快感が浮かび上がったのを、バーンは益々愉快気に言葉を紡ぐ。
「―あれ等―はそちにとっても敵であろう?そして余が己の配下をどう使おうともそちには関係あるまいに?」
その言葉は、ティファとそしてクロファの気に障るには十二分過ぎる言葉であった。
「・・・己に絶対の忠誠誓った影を質にして死神を動かしましたか・・」
ティファの辿り着いた正解に、バーンの笑みは深くなる。
「仕方あるまい?あの死神は余に仕える義理はあれども義務も無いのでな。その義理も近頃は薄れてきたのか余の言葉で動くかどうか不確定であってな。」
であるのならば、あの者が近頃義理を感じているもので動かすのは当然だろうという言葉に、ティファとラーハルトの怒気が高まる中、ティファの背後に空間が開き大鎌が差し迫った!!
「ティファ!!!」
「お姉ちゃん!!!」
「ティファさん!!!」
「お嬢さん!!」
誰もが、隣にいるラーハルトも防ぐには間に合わないと悲鳴を上げる中、大鎌は空間から出てきた褐色肌の手に握られたレイピアで防がれ、更に開いた空間から―ドール―とキルバーンが激突し合いながら出てきた!!
キルバーンは、ここでティファを仕留めて大魔王バーンとの約定を果たして望むものを手に入れようとしたが!邪魔をした―ドール―を憎々し気に打ち掛かるのを、バーンは薄っすらと嗤って眺める。

死神は望む通りに動いている様を

いしの積まれる世界：遡った其々の事情

遡った勇者ｓｉｄｅ

「エネルギー分捕ってきます」

ティファのこの言葉に、一同唖然とした。

安全に時空を通るという概念からして追いつかないこの世界の者達はもとより、師達から教わった青年ポップも、そんな事できる膨大なエネルギーどこにあるんだと・・・・たった一人だけ嫌な予感に襲われティファに恐る恐ると尋ねてた。

「・・・まさかとは思うけれどもお嬢ちゃん・・・・そのね？まさか・・・上空の空飛んでる砦に忍び込んで・・・落とされる筈の―六個の柱の中身―狙うつもりかな？」

あの冷静沈着にして優美を絵にかいたこれぞ紳士なドールさんが！物凄く冷や汗かいて聞いてると少年ダイ達にとっては其れこそ驚きであるが、ドールさんが尋ねた内容にもぶっ飛んだ!!

だって敵はずっと超上空で結界張って隠れ潜みそして誰も通れないかダイとバランの竜闘気全開でぶち破った代物の中に・・・・言っては何だが確かに頭脳は凄いが―華奢で吹けば飛びそうな少女―が乗り込みますってそれってない・・・と、少年ダイ達は完全ティファの容姿に騙され、この世界のキルバーンの不意討つ防いで蹴り飛ばしたことをすっかりと忘れている。

それもあるが、向こうの世界のアバンもマトリフもいい顔をしておらず・・・ロン・ベルクなどこいつ本当に手足叩き折って監禁したろうかという凶悪な顔を覗かせているのを、当のティファはからりと笑う。

「大丈夫です！私にはラーハルトとドールが付いてます!!」

通常では見えなくとも式鳥を介せば見えており、結界も張った者に気づかれずにスッと斬って侵入した経験もあり、後は見えない結界を張ってコッソリと地上を狙う為に手薄になったパレスにお邪魔して―エネルギーの元―をマジックリングに入れてくるという至極単純

な作戦なのですと・・・・どこが単純!!??
まず見えない結界を張ってる敵の居所知ってるだけでもおかしい！
そしてそんな途轍もない結界を、張った術者（この場合はバーン本人）に気が付かれずに斬るってどんな技量の持ち主？
そして地上を破壊しうる途轍もない代物を盗んでくるという発想自体からしておかしいのを・・・・目の前の少女は事も無げに笑って話している姿には、流石にこの世界の大人達の背筋に寒気が奔った・・・・目の前の少女は本当に―少女―なのか？
天か魔か・・・何か途轍もない―モノ―を見始められたその時、向こうの世界のラーハルトが溜息を突きながら、―毎度おなじみ無茶を言う―少女を抱き上げた。
「・・・・勝算は？」
「んと・・・・大魔王もどきに気が付かれずに行けたら八割強、途中で気が付かれたら五分、もしも私の策を見越して待ち構えていたら即座にラック＝バイ＝ラックで逃げる。」
「ふむ、逃げ帰る算段も入れているなら上出来だが・・・・ドールがいる必要性は？」
かってあらゆる―凄い事―を発案しては即実行していたティファには、己の安全確保という最も重要な事だけが抜けていたのを、今回は其れも織り込んでいるという発言にラーハルトは賛意を示すが、そこまで策を練っているというなら―キルバーン―要らんだろう発言に、ティファは困った笑みを浮かべる。
どうしてもラーハルト達大人組はキルが嫌いなままで・・・・何とかならないかな～と思っている。
あの人は優しい人なのだがそれは兎も角、今回は本当についてきてくれないと困るのだ。
「ラーハルト、この世界の服装言動悪趣味死神の罠対処できるのドールだけだよ。」
自分は今回は見えない結界と、膨大なエネルギーを納められるように集中したいのと、―死神の罠―に精通しているのは間違いなくドー

ルだという言葉に、ラーハルト達大人組は一様に苦虫を噛み潰したような顔をして、この世界の者達になぜそこまで魔族のドール殿を嫌っているのだとはてなが浮かぶ・・・・知らぬが何とやらとはまさにこの事だが、ラーハルトもティファの言う事には理しかないので諾と答えざるを得なかった。

その表情がおかしく、少年ダイは吹いてしまい、ポップ達も忍び笑いをしていつしか笑いが起こり、全員がティファの案に無理が無いと判断をして実行に移された。

まずパプニカ王城にこの世界のラーハルトとバランとレオナ姫を送り届け、テランの湖の神殿に非戦闘員（フローラ様含む）も送り届けてそのままラーハルトは空飛ぶ靴を履いてティファを胸にしっかりと抱きしめ、キルはそのまま飛んで一路向こうの世界のアバンと自分が仕込んだ―絶対に攻めてきた敵達を殲滅させる罠―に喰らいついてきたカールの砦上空に、ティファ曰くいますねという辺りに二人は止まり、ティファも新たに空飛ぶ靴を式で拵え結界ギリギリに近づき、昨日ロン・ベルクさんから貰った―夕月―をすらりと抜き放ち正眼に構える。

月とは我ながら浪漫チックな名前つけたなと思うのだが、奇麗な名前に見合った技をきちんと撃てるようにとティファは全神経を夕月に張り巡らし、ゆっくりと呼吸を整えそして

スッと斬った

音も無く気配も無く打ち下ろすその姿に、ティファの全力を初めて目の前で見たラーハルトの表情には歓喜と怖れが同時に内包された複雑な・・・獰猛な笑みが浮かんだ。

見る者が見ればわかる！ティファの今の一撃はまさしく達人と呼ばれても尚足りない、無我の境地からの必殺の妙技だという事に！

自分が愛し敬愛する少女はどこまで大きく果てのないお方なのだと、ラーハルトは全身全霊で歓喜を味わう中、キルがティファを伴い斬られたであろう箇所を通るのを、ラーハルトも慌てて直ぐに二人の後を追う。

潜入の第一関門は無事に成功をした。

結界の中に入り込んだ三人は、先ず鳥の中心地にの下の方からコッソリと入り込み、ティファはホコリ程の式を数多作り出し偵察をしてみれば・・・・

「キル・・・ラーハルト・・・誰もいない・・」

ティファ自身が物凄く困惑をする事態が待っいた。

ティファとしては、地上には半分ほどが言って残りは守りにつくと想定していただけに、全軍出撃とは思いもよらずに、これこそ自分達が乗り込むのを待ち構えて隠れ潜んでいる罠かとも思ったのだが・・・丁度―キングマキシマム―が自分のポーン達を引き連れ待機している以外は見当たらない。

ティファとしてはパレスにいる一切の魔王軍が残らず地上に行った理由が分からない。

その理由はこの世界のバーンが、パレスに敵を入れるつもりは毛頭なく、地上にて殲滅させる作戦を立案し、もしも地上の最初の部分が罠であってもそれなりの数は残るだろうという人数を送ったのだが、まさかアバンとキルで拵えたトラップで全滅したとは思わなかった・・・・そもそもがそんな大規模な罠を張れるキルバーンが向こうにいるなぞ思考に入れるわけが無いのだからそれはバーンだけの失策と肺は無いがそれは兎も角、理由にとっても心当たりのあるキルは胸の内でティファの言葉に納得をしながら、ここで迷っていても仕方がないでしょうというキルの言葉に従い、ラーハルトに抱えられ、それぞれ鳥の翼の先端にあたる外側の黒の核晶が入っている巨大な―ピラァ・オブ・バーン―の下へと飛んで向かった。

柱の場所には誰もいなかった・・・そう―人―は・・・その代り三人が降り立った次の瞬間！周囲から途轍もない量のマグマが降り注ぎ!!パレスの床を突き破り下に張られている結界によって消滅をした。

「ウフフ～見えなくとも、何かがそこに立てば当然重さが生じる。

それを利用した罠にこうも簡単に・・・・はいかないか～。」

「き・・・・さま・・」

「怖い怖い、どうしてバラン君配下の君がそこの忌々しい小娘さん達

と一緒にいるのか気になるけれどもね・・さっさと死んでもらうよ!!!」
マグマが降り注がれたと同時に、ティファを抱えたまま神速の速さで逃げおおせたラーハルトであったが、流石に無傷とはいかずに鎧の覆われていない足の部分にマグマが当たってしまい、手酷い火傷を覆いティファを床に降ろし、痛みを堪えて槍を構えキルバーンと対峙するのを、普段であれば傷ついたものを甚振るのが趣味のキルバーンらしくなく、この場所に張って置いた全ての罠を一気に発動させ二人に迫らせ、自身も罠の中に大鎌を振り被って罠に対処しようとしている二人の内のティファの方に向かっていった！
バーンとの―約定―を果たす為に・・・

遡ったバーンとキルバーンｓｉｄｅ
朝日が昇る前の作戦決行前に、キルバーンとピロロは忙しくしているであろうミストバーンの姿を探した。
昨日からミストバーンを見ていると儚く消えてしまいそうな気がして、探してみたのだが見つからず、そうこうするうちにバーンに直接呼出しを受けて玉座の間に行けば・・・そこにいたのは・・・・
「あ・・・」
冷酷無比にして残酷で情が一切存在していないと味方をして言わしめてきたキルバーンが―ピロロ―と共に発してしまったその音に、目の前の―バーン―は満足げに嗤って玉座で足を組んだまま応じる。
「この姿の余を見ても驚かんという事は、矢張りお前には余とミストバーンとの間の秘事に気が付いていたか。」
どこまでも尊大で傲慢な若々しい声と共に告げられる内容は、もはや自分に隠すものは無いと堂々としており愉快気であった。
老人の時とは違い、筋骨逞しく上背のある体躯をゆっくりと立ち上げキルバーンに近づくバーンに、ピロロもキルバーンも言い知れぬ思いがその身を駆け抜ける。
別にバーンの威厳にうたれたわけでは決してない！
それこそ二人は冥竜王ヴェルザーの全盛期の時に何度も御前に馳せ参じ、報告や時折ヴェルザーの命を受けた事も幾度もある。

かの冥竜王は目の前の大魔王とは違い感情を、それも怒気や憎しみを表に直ぐに出し、其の度に二人は冥竜王の本気の闘気に晒されてきたが、二人は慣れたものだと飄々とし、この二人がその類で怖気振う事は無かった。

では何が二人の心を竦ませたのか・・・・

それは二人の様を見てぬたりと嗤うバーンの一言で露わになる。

「ミストが恋しいかキルバーンよ?」

一応近づきしバーンに臣下の礼をとり跪いたキルバーンの耳元にひそりと毒を流し込む。

キルバーンとピロロとしては、それ以上の弱みを見せまいと何事かを嘯こうとしたがそれは制された。

「今ミストは余の中で眠っている。この肉体を返した事で疲れたのであろうか、余の魂の御蔵付近で揺蕩っておる。

もしかしたらこのまま余と同化するやも知らんな~。」

全てを見透かしているバーンの前では、どのような虚言も強がりも出せようはずも無く、死神をして屈辱にまみれる一言を発せざるを得なかった。

「僕に・・何を御命じになりますかバーン様・・」

仕える義理はあれども義務はないはずなのに!!

自分は他の者・・・それこそミストとは違う―自由な死神―を誇りとして来たキルバーン達にとっては!己から銘じられる事を請うなど唾棄すべき事である!!

・・・・それでも・・・・

「ふむ・・・・そうよな・・・・・きっと忌々しい小娘辺りが何かの計略で異界から来た強者達を使ってこのパレスに侵入し、黒の核晶を狙ってくるかもしれん。」

それはバーンにとっても荒唐無稽な計画ではある。

万が一このパレスに侵入できたとしても、あの膨大なエネルギーを秘めた黒の核晶をどう狙うのだと・・・・まさかそれを収められるマジックリングをティファが作り出すことが出来、そしてその当人がこようとは夢にも思っていない。

先の作戦同様日常の者達に守られていると考えているがそれは兎も角

「地上勢は連れてきた魔王軍をぶつけて殲滅させる。

仮に取り逃がしたとしてもマキシマムの物量で押しつぶし余も遊びに行く故留守をしっかりとするのだぞキルバーンよ?」

その役目を果たしてこそ、お前の望む褒美はある。

作戦開始前に、其の命を受けたキルバーンとピロロはミストバーンのようにバーンの側に立ち、作戦と共に自分の持ち場に張り付きそして、今まさに忌々しい小娘を狩れる!!そう思ったが

ギーン!!!!

「・・・・甘いよ・・」

「またお前か!!!!」

罠を躱しつつ自分の大鎌をレイピアで受け止めながら獲物である小娘を胸に抱いて保護した褐色肌の魔族を、キルバーンは憎々し気に見つめる。

キルもラーハルト同様にマグマを避けたが、同じ方向に避けて罠に全員が一網打尽にされるのを厭いティファ達とはあえて反対方向に避けた。

捕らえる罠・包囲殲滅する罠・相手を別の場所に送りバラバラにする罠などお手の者のキルは、罠の張り方は無論の事、避け方も熟知している。

それは避けられた時の対処法まで考えるのだから当然であり、この世界のキルバーンの罠の張り方を見破り最短でキルバーンの凶刃迫ったティファを保護し、全ての罠が出し尽くされたと判断してから、ラーハルトにティファを預けてキルバーンとの一対一にの対決に持ち込んだ!

「お前はどこまで僕の邪魔を・・・・獲物を横取りばかり!!!」

「・・・・五月蠅い・・・・お前なぞ・・・・さっさと壊れはて消え失せろ!!!!」

キルバーンの逆恨みの言葉もよりも、それはティアにとって初めて

聞くキルの怒声であった・・・いつもは穏やかで、それこそ自分がミストを消滅させたかもしれないあの時とてここまでの感情を露わにしなかったのに・・・・

だがキルバーンとても―いつもの様に―一旦引いて体勢を立て直す事をしなかった・・・引けば間違いなく親友はバーンに食われる！

あの抜け目のなさは自分と同じくらいの大魔王であれば、この状況をもしかしたら悪魔の目玉で見ているかもしれないと思うだけで引くという選択肢は消え果て目の前の侵入者達に打ち掛かるのを、ティファは―らしくない―と感じた。

何を焦っているのか・・・それは分からない、しかし呆けている訳にもいかない！

「ラーハルト!!」

「承知している!!!!」

二人の決闘のような戦いを見届けている暇は無いと、ラーハルトは向こうでそれぞれに渡されていた万能薬の内、火傷用を塗り込み回復をさせ直ぐにティファを抱えて見えない結界を張らせ柱に向かい、ティファは夕月で柱の真上のとんがり帽子のような箇所の真ん中に拳ほどの四角い場所を作り出し、中にマジックリングを差し込みイルルと呟き見ずとも黒の核晶を奪取し、残りの五つも罠を警戒しつつ同じように奪い去る。

そして本当にパレスが文字通り空である事も知った二人は急いで地上に戻った。

それは自分の兄と少年ダイとポップの危機の時であり、ティファは空中から九頭竜閃を放ちそして、何故キルバーンが焦っていたのかの一切の理由を知ったのだった。

いしの積まれる世界：生命の輝き・・・

若い肉体になった・・・ここでは若きバーンとてでもいおうか、彼の者と槍使いと共に若き勇者らを背にして相対しているティファとて実力は確かにあるがそれが本来出せる状態では決してない。

ここに来るまでにキルバーンとピロロが念入りに張った死地にも等しいトラップの地雷原を走破するには矢張りドールことキルはこの世界のキルバーンにかかりきりとなってしまい、ラーハルトの神速をもってしても躱しきれないものがあり、その都度ティファの強固な結界ジ＝アザーズでの力業で乗り切ったが為に力の半分はそこで消耗していた。

キルバーンの必殺の陣が物を言い、ティファを殺しきれないまでも死神としての面目躍如を図らずも果たしている。

そして若き勇者達と兄ポップを救うべく、奥義たる九頭竜閃に持てる力を全て込め一時的に若バーンを退けるに至ったが、ティファは内心で焦りを覚える。

まさかこんなにも早くバーンがミストを消して若い肉体に戻るとは想定していなかった。

それが成るとすれば、もっと自軍が壊滅し自身も追い込みをかけられた時だと考えていた。

その頃には自分も兄も回復をしてダイ達をサポートして全員で力を合わせればギリギリ倒し切り―石化の封印―が出来る見込みは六割強と見積もってみたが・・・

来た!!

ティファの斟酌なぞ知らんとばかりに、若バーンは躊躇いもせずにティファの正面よりも少し横にいるラーハルトに狙いを定めて一気に攻める。

そこには何らかの技などは無く、純粋な闘気と鍛えられた筋力だけの猛ラッシュに、あの神速を謳われ自身も槍よりも内側に入れないという自負心のあるラーハルトは槍の柄で応戦しながら後ろに飛び退りながら打開策を図ろうとしたがバーンの方が上手であった。

「奇麗な顔を焼かれたら辛かろうか？」
　成人男性よりも二回りはあろうかという若きバーンの掌にラーハルトの顔が包まれそして瞬時に焼かれかけた・・・そう、直接のメラで焼かれる寸前にティファがラーハルトを兄のポップと少年ダイ達の側に負傷したラーハルトをラック＝バイ＝ラックでしゅうんじに移動をさせそれと同時に兄の周りにまだ無傷である異界のロン・ベルクや他の者達も兄を起点として移動させ、そして一気呵成にバーンに自分から突っ込んでいった！
「私の槍使いに手を出すな!!!」
　ティファ自身には残り僅かな闘気とハイ＝エントの魔力しか残されていない。あるとすれば聖炎の力しかない中、もしもティファのステータスをマキシマムがキングスキャンで見てみれば、嬉々として主に伝えただろうがマキシマムはティファに移動されなかった異界のヒュンケル達に圧倒されており、そして地金の違いで二人の合わせた―双ブラディスクライド―によって粉々に砕け散り、集められたダイ達を攻撃しようとしたポーン達はガラクタの様に崩れ落ちるのを、若きバーンもキルバーンも目もくれる事無く目の前の憎き敵達のみに集中した。
　顧みらる事なく倒されたマキシマムは、瞬時に粉々に砕かれ絶望も醜態も晒す事無く、敬愛し尽くした主君に顧みられることも無かったという事実を知らずある意味においては幸運な終わりを迎えられたのかもしれないが、若バーンとキルバーンの猛攻と追撃に会っているティファとキルもマキシマムの最後などに構いつける余裕は無かった。
「華奢な体を砕いてやろうと思うたが、その剣に助けられているではないか異界の小娘殿？」
「・・・私の世界のロン・ベルクさんは最高の鍛冶屋なのです!!その彼が私の為に打ってくれた一振りが早々に砕けるとは思わないでくださいね大魔王もどき殿？」
　若きバーンの闘気を込められた一撃が必殺の様な拳の嵐に、ティファは夕月に残り少ない闘気を流し込み、其れとは知られないオーラ

ブレードを形成して耐え抜き、ふとした瞬間に訪れる嵐の隙間を縫うように一撃を放って距離を取り、土竜閃で突進してくるバーンに闘気を込めた礫の嵐を反対にお見舞いしたが、若バーンはふっと余裕の笑みを浮かべながら右足を軸とし左足に闘気を込めて、飛来する闘気の石礫の嵐を足の一閃のみで掻き消し、石の礫に紛れたティファ諸共吹き飛ばした！

「ティファ!!」

「小娘!!」

「ティファ!!!」

「お嬢ちゃん!!!」

「ティファさん!!!」

吹き飛ばされ先程とは反対に岩場に叩きつけられたティファを、この世界と異界のヒュンケルがギリギリ岩場とティファの間に入り込み受けるが、吹き飛ばされたティファを追いすがるように放たれた二羽のカイザーフェニックスは中央で一羽に合わさり三人の背後にあった岩場を蒸発させるほどの威力となった。

「ティファ!!!」

男達は瞬時に動いた。

二人のヒュンケルはオリハルコンで作られ本当の意味で絶対魔法防御化した鎧の魔剣でティファを抱きしめ合い、ティファの体が同い年の子女よりも華奢で小柄であったのが幸いし、ギリギリ包み込み守ることが出来たが、若バーンがそれだけで攻撃を止める筈も無く、カイザーフェニックスの着弾前から闘気の玉をティファ達に向けて浴びせるのを、異界のロン・ベルクとアバン達はなけなしの闘気で剣で打ち払うも奮戦虚しく闘気の玉の餌食となるが、二人は一歩も引かずに剣を手放し両の手を前に突き出し少しでもティファ達の脱出時間を稼ごうと闘気を掌に集中させて盾となるのを、若きバーンはその様を鼻で嗤った！

「最早大勢が決したというのに無駄な足掻きを!!汝らに勝機などあるまい？その小娘を差し出せばせめて楽に逝かせてやるぞ？」

勝者の権利として捕虜を甚振る事は魔界では儘ある事であり、敵の

抵抗が激しければ激しい程勝利者側の憎悪を勝って散々に甚振られ辱められ、そして絶望の果てに殺すのをティファを差し出せば褒美として瞬時に終わらせてやるという若きバーンの言葉に、剣と己の肋骨を叩き折った相手にノヴァが最後の力を振り絞って立ち上がり、血を吐きながらも顔をしっかりと上げてバーンの顔に向かって叫んで拒絶をした。

「ふざ・・けるな・・・誰が貴様の言う事なぞ聞くものか!!貴様に屈する位ならば!甚振られたはてに殺された方がましだ!!!」

この数日を、ティファと共に過ごしたノヴァの心は!大戦が始まって以来穏やかな物として過ごせていた。

確かに敵からの攻撃や謀略戦があり、カール平原にてミストバーンの猛攻によって散々翻弄され死にかけた目に遭った・・・それでも・・・ティファとそしてポップさんとチウ君達と異界から来た大人達のお陰で心は平安であった。

いつでも微笑み絶やさない異界の彼等とティファはいつだって大変な目に遭った己達よりも自分達のみを案じて何くれとなくしてくれた・・・・そんな大恩ある彼女を!己の身の可愛さに差し出すくらいならば屈辱を与えられる死の方が何万倍もましだと叫びあげながら、ノヴァは最後の闘気をティファの様に剣に込めて突進をするが・・・・

「愚かな事よ・・・・」

若き勇者の高潔なる志の突進も、巨大な力の前では無力だとばかりにバーンは右手で闘気の玉を放ちながらノヴァを一顧だにもせずに左の腕に闘気を込めオーラブレードを払いのけ追撃にカイザーフェニックスみまった。

やられる・・・・僕は何て無力で情けない勇者なのだろう・・・勇者とも呼べないか・・

剣諸共にノヴァの心は折られた・・・・折られてしまった。

故郷を守る事も能わず、勇んでハドラーの親衛騎団達に挑むも何も出来ずに・・・そしてここで・・・

「・・・・馬鹿な坊やだ・・・」

焼け死ぬ・・・・そう思ったのに！
「ロン・ベルクさん!!!!」
この世界のロン・ベルクが身を挺してカイザーフェニックスを食らいながらもノヴァを抱きしめ、突っ込んだ勢いのままノヴァを放す事無く地面に転がるのを、チウ達が窮鼠包包拳を移動の為に使ってロン・ベルク達の転がる先に先回りをして二人の頑丈な体で受け止めた！
「無茶ですロン・ベルクさん!!体が・・・」
「・・・・は・・・こんな年端もいってねぇ坊やが命かけてるのをちんたら見ているだけの腐った大人になり下がるのなんざご免だからな・・・」
ヒュンケル達とは違い、本当に生身でカイザーフェニックスを受けたロン・ベルクに守られたノヴァは兎も角、ロン・ベルク自身は全身大火傷を、特にカイザーフェニックスからノヴァを守り切る為に抱きしめた両腕が火ぶくれを起こして壊死まで仕掛けている！
「そんな・・・ロン・ベルクさん!!僕なんて庇って・・・どうして・・・」
自分はこの魔族に、戦いになる場にお酒を満ち込むなんてと突っかかって以来まともに口すら効いていないのに・・・・なのに！ダイ達と違って何も成せない情けない自分を庇ってこんな重傷を負うなんて間違っていると、ボロボロと大きな瞳に涙を浮かべるノヴァにロン・ベルクは痛む体をおして起き上がり、優しい笑みをノヴァに向ける。
「僕なんてッて言うもんじゃねぇ。
お前さんは魔界では誰もが怖れる大魔王の言葉に逆らって、あまつさえ刃を叩きつけようとしたんだ。
魔界だったら大の大人でも間違いなくあいつの言う通りにしているのを、お前は己の矜持と生命の全てを掛けて貫こうとした・・・・あの剣に込められたのはお前の―生命エネルギー―だったろうが・・・・子供が無茶をする・・・」
「どうして・・・」
確かにロン・ベルクが言う通り、ノヴァにはオーラブレードを作り

出せる闘気は残っておらず、突進しながら己の生命力を闘気に変換する―生命の剣―という禁忌の技を繰り出した。
　それは使えば使う程に己の体に如実に生命の剣の反動が表れるが、あの一瞬で分かる筈が、気付かれる筈がないとノヴァは思っていたのだが・・・
「なに、お前さんの剣の色がオーラブレードよりも白い・・・白銀になったからな。」
　真っ直ぐでともすれば人に突き刺さる眩しい色合いがノヴァの魂の様だと感じたからこそ知れ、そして年端も行かない穢れ無き生命が大魔王によって無為に刈られるのをロン・ベルクは厭うたのだ。
　まさかダイの仲間以外で、人間の子供の命を惜しいと思うとはロン・ベルク自身が驚いているが、それでも全身が焼かれても後悔は無かった。
「・・・馬鹿ですよ・・・こんな僕なんかを・・・・・」
　自身が死ぬよりも他者が傷つく事に涙を流すこの坊やを助けることが出来たのだから・・
「ふん・・・・余の下を去ってから随分と惰弱になったか魔界の名工殿？」
「この状況を見てもそんな事しか抜かせないお前なんぞこいつの足元にも及ばんよ。」
「・・・貴様、余がそこな泣くしか出来ぬ惰弱なる者よりも劣ると申すか・・・」
　ティファとヒュンケル達の前に陣取り盾となっていた異界のロン・ベルクとアバン達が力尽き倒れたのを見計らい、一時攻撃の手を緩めて自分の有様に述べた感想に対し、ロン・ベルクこそが鼻で笑ってやった。
　この高潔な魂を見ても何も感じないやつ等仕える値打ちも無いとにべもないロン・ベルク　の言葉に、若きバーンの顔が歪み自分を見遣りながら怒気を放つのを、ロン・ベルクは愉快気にする。
「あぁそうだ!!お前に仕えたあの日々は確かに鍛冶屋として充足していたが!!

それと同時に俺自身が腐るのを感じた日々だった!!!
翻ってダイ達に出会い関わり過ごした十数日間は、この坊やも込みで生涯が輝いた日々だった!!
俺からの返答もくれてやる！あのお嬢さんを差しだす気がある奴なぞ！俺も含めてこの場にいると思うな!!!」
身を起こし大火傷の身ながらもノヴァとチウ達を背に庇い、ロン・ベルクは人生で一番の咆哮をかつて仕え、そして魔族なればだれもが知る魔界の神に布告をする。
どんな死に様を晒そうが、結末が変わらず死であったとしても、仲間と認めたティファを売る者なぞこの場にはいないのだと。
その言葉に、チウ達は互いの顔を見合わせ頷きあい、そして立ち上がり震える体を互いで支えるべく手を握り合い堂々と吠え上げた!!
「「僕等も！ティファさんをお前なんかに絶対に渡さない!!!死んでもご免だ!!」」
その声には確かに怯えもあった。そしてその姿は震えてもいた。
だがそれを情けない事だと、小さき者達を嗤う事が何故か若きバーンには出来ず、そしてノヴァとロン・ベルクとチウ達の言葉に次々と言葉が足されていった。
「ティファを売るなんて冗談にも言われると殺したくなるね!!」
合間合間にピロロの見えざる罠の支援を受けているキルバーンを相手にしながらもキルは殺気を若きバーンに注ぎ、倒れ伏しながらもヒュンケル達とアバン達と異界のロン・ベルクも否という中、攻撃の手が緩んでいるとはいえ若きバーンの攻撃はやむ事無く、闘気の玉によってオリハルコン製の鎧の魔剣にひびを入れられ更にカイザーフェニックスを浴びせられたヒュンケル達を、ダイとポップを降ろした青年ポップが両手でヒャダルコを放出して全身を覆わせながらトリプル呪文でトベルーラでカイザーフェニックスの炎の中に突っ込み二人とティファを抱えて助け出し、三人の状態に素早く目を通す。
三人とも傷は負って意識を失っているが、オリハルコンの鎧のおかげで重傷では無かったことに安堵する。
そして少年ポップから借り受けたロッドに魔力を込めして柄を伸

ばして槍状にしながら倒れ伏す三人を背に庇い、三人を死地から連れ出した自分を見ている大魔王もどきにポップも宣言をする。
「生憎と俺も妹売るなんて考え持った事が一度もねぇんだわ・・・・ふざけた事抜かしてんじゃねぇぞ馬鹿野郎が!!!!」
・・・・たった一人の小娘の為に、なぜこれほどの漢達が魔界の神と呼ばれる自分に逆らうのだと、若きバーンは本気で戸惑う程に、青年ポップ達の気迫は凄まじかった。
かつて、これほどの者達が自分の前に現れた事は無く、若きバーンの心が動いた時、この世界の勇者と魔法使いもまた動き出した。
「俺もお姉ちゃん渡す気ないよ。」
「同じくだ・・・つう訳で諦めてくんないかな大魔王さんよ?」
ボロボロになりながらも闘志を保つ勇者の横に飄々とさせた気配と言葉を操る魔法使いの姿が、一層の事若きバーンの思考を乱したのだ。

いしの積まれる世界：悪魔の囁き・・

「・・・うっっ!!」
「あ!!マァムさん大丈夫ですか!?」
「まだそのまま横になっていてください!クロコダインさんもですよ!!」
「チウよ・・・それよりも戦局はどうなっている?」
「・・・・・正直に言えば不利です・・・」
「あんな奴がどうして存在してるんだ・・」
若きバーンの一撃によって沈められたマァムとクロコダインは自然回復で同時に目が覚めたのを、チウ達が安静を言い渡す。
異界のチウとしては骨折用の万能薬で飲み薬が欲しい所だが生憎ないのでせめて二人に安静にしていてほしいと言い渡すが、クロコダインは周囲の気配で事態を悟るもあえて戦局を聞く。
悟ってはいるが本当の所を知ろうと思ったのだが、聞くまでも無く最悪であった!
双方の世界のアバン達とロン・ベルク達はズタボロにされ倒れ伏し、ノヴァが万が一四人が狙われることを警戒して背に庇っているがノヴァもまたよろめきいつ倒れてもおかしくないない!!
そしてドール殿はキルバーン達に掛かりきりされ若きバーンと戦っているのは青年ポップとダイとポップの三人のみ・・・ティファ殿はどうしたとクロコダインが探せば!!
「放してラーハルト!!」
「言う事を聞け小娘!!あれの狙いはお前なんだぞ!!!」
「だからこそ私が行かなくてどうするの!—まだ—私は闘える力が!!」
「お前の体が限界なのを俺が知らないとでも思ううか!!??
何の力か知れないが!また何かをしでかして手にした力を振って!その先に躯となったお前を俺達に見ろと言いたいのか!!」
「・・・ゥツ!!!」
味方である異界のラーハルトによって拘束されているティファの

姿に、マァムとクロコダインは驚いたが、二人の会話の内容から、そしてチウ達の補足説明によって納得をした。
若きバーンはティファを差し出せば―楽に殺す道―を選ばせてやると言ったのを、ノヴァを先頭にして全員が拒否しそして大激突をしたのだが・・思い虚しくオリハルコン製とは言えども闘気の玉によってひびを入れられたヒュンケル達は其の箇所に若きバーンの五指を突っ込まれ、かつて自分達を結界によって翻弄し苦しめたフレイザードのオリジナル技であり、人間には禁術にも等しいフィンガーフレアボムを瞬時にヒュンケル達の体内に炸裂をさせ地に伏せさせ、この世界のロン・ベルクはノヴァを庇って大火傷を負いながらも若きバーンの言葉を拒絶したのだが、ならばもうよいとノヴァ諸共にカラミティウォールを腕で放つカラミティエンドをみまわれた後ろにいるチウ達共々目を覚ましたティファが四人をかなり遠くに移動させるのに成功をしたのだが、技の一部をロン・ベルクがノヴァとチウ達を庇う為に喰らってしまい、異界のロン・ベルクも四人を追撃しようとした若きバーンを止めようとしたが・・・ピロロが動いた。
ここでバーンを勝たせ親友を取り戻さんとするピロロの罠に、異界のロン・ベルクは空間から現れた魔界植物の剣の如く鋭利な棘がある蔓が全身に巻き付かれ、蔓が消え失せた時にはロン・ベルクの全身はずたずたに引き裂かれ成す術もなく地に伏せた・・・もしも彼が向こうの世界と同じ力を十全にふるえていたならばそもそもが罠にはまる筈も無いが、他界に渡る為の制約が此処に来て彼等を苦しめる。
異界のアバンとマトリフとヒュンケルとラーハルトも、自然回復をする事は無く必然回復し戦えるのはこの世界の者か、制約なしの青年ポップとティファであり、チウには悔しいが戦う力は無いという非情な現実がそこにはあった。
そしてこの世界の大人達は最早自然回復なぞ望める状態ではなく、少年ダイ達も青年ポップの導きで若きバーンの猛攻を掻い潜りいなし、そして反撃を試みるが尽く防がれている中、自分も戦えるというティファを、ズタズタになった身を挺してラーハルトが止めている。
伊達に長年ティファを見てきた訳ではないラーハルトには、ティ

ファの肉体も闘気量もとっくに限界であるのを知っている・・・知っているが！現実にはティファの肉体は―回復―されている・・・それは異常なほどの速さでだ!!

ティファの魂が大魔王等級であったとしても、肉体は魔王ハドラーよりも劣るティファには考えられない回復の仕方に、ラーハルトはすぐさま気が付いた。

即ちティファがまた―とんでもない無茶をして―世の理を無視するような何か途轍もない力を手にして揮っている事に!!

其の事にラーハルトが希望はまだあるなどという馬鹿げた喜びをしようはずも無く！心の中は怒りでいっぱいであった！

冗談ではない！またこのお方はご自身の何もかもを使い潰し!!自分達だけを助けるつもりなのかと・・・怒りと悲しみにどうにかなりそうなのを、ティファを止める事で押しとどめる・・・これ以上愛しい少女がその身を犠牲にさせない為にも・・幸いと言うべきか、大人達が倒れ伏しても若きバーンと戦っているポップ達の闘志が落ちる事はなく、それどころかダイの紋章は闘えば戦う程に光の度合いが増していき比例するように剣の一太刀一太刀が鋭くなり！合間に放つ攻撃魔法もキレがありバーンを退ける場面が増えている！

「今は信じろ！あの三人を・・・」

そして祈る・・・・間に合ってくれと・・・・

・・・・なんなのだこやつ等は？先にも余が言った通りに大勢はもう決しているだろうに・・・・何故あらがうのだ？

三人の食い付くような攻撃をいなして諸共に踏みにじろうとするも、一人か二人の方を相手にすれば残った者が死角から攻撃をしてくるという、つかず離れずの攻防に若きバーンは苛立ちながらも不思議に思う。

最早自分の圧勝が目に見えていながらも、目の前のダイ達とそして倒れ伏している者達をよろめきながらも待っているつもりの小僧の目からも闘志は失っておらず、それどころか立ち上る闘気に若きバーンは目を見張る・・・・決して強くはない、だが弱くも見えない不思

議な者達に、次第に若きバーンは愉しくすらなって来た。
絶望を目の前にしても抗えるものなど若きバーンは知らない。
己の命よりも時に守りたいものがある事もまた然りで、元来知識欲と好奇心が強い若きバーンの琴線に彼等は触れた・・・触れてしまった！
「はっは!!面白い!!面白いぞお前達!!」
その愉しさが、若きバーンの力の源であり根源ともいえる。
そしてそれが発揮されれば、今まで手を抜いてきた分の力を五割ほど上乗せして三人に詰め寄り、魔法を放って牽制しようとした少年ポップの鳩尾に左拳を叩きつけ、ロッドを振り被り背後から斬りつけてきた青年ポップを右手の裏拳一つでロッド諸共ポップの量の腕の骨を折った。
「あ・・・グゥ・・」
「・・・!!!!」
あまりの激痛にポップ達は悲鳴を上げることすらも許されず、青年ポップは威力のまま吹き飛ばされ襤褸屑の様に地面を転がされ、少年ポップは若きバーンの足元に崩れ落ちた時、ダイが紋章を輝かせバーンの首を捉えられる範囲にてアバンストラッシュブレイクを構えていた!!
あれが決まれば・・・誰もが、それこそティファとティファを取り押さえているラーハルトとてもそう思ったが・・・運命はどこまでいっても非情であった。
「ダイよ、そちの攻撃で余の首墜ちようとも、余の足元にいる魔法使いの頭位は踏みつぶせるぞ？」
残酷な脅しではない本気の言葉にダイの頭は真っ白になった・・・なってしまった瞬間を若きバーンが見逃す筈も無く、宙にとどまるダイの細い首を右手で捉え力を込めてにんまりと嗤う。
戦いながらこの不可思議な現象を引き起こしていたのは、綺麗事が好きな者共がよく口にする―絆の力―とやらであり、自分が要求したティファはどうやらこの者達の絆の力を高める要であったようだ。
ならば、力を高められるのであればまた然りであり、其の絆を質に

取ればどうなるかと試せば面白い程にうまく言った事に若きバーン満足をした。
仲間を思う絆の力とやらで得た自分を倒せる千載一遇の機会を、其の所為で不意にしたのだから興奮するなという方が無理な話だろうと胸の内で愉しみを転がし残忍に笑う様は、まさしく物語に語られる悪意の化身たる大魔王その者であった。
「あ・・・・・ダイ君!!ラーハル・・・」
「動くな異界の小娘!!貴様が指なり闘気を一片でも動かせばダイの首をへし折る!!
それとも得意の移動でこ奴等を逃がすか?その時にはパプニカ王城を真っ先に攻め滅ぼす!」
「ッッ!!!」
「フフフ、素直なのは美徳だぞ小娘殿?大人しくしておれば悪いようにはせんぞ?
あぁだがキルバーンと戦っている魔族の貴様はは別だ。お前はキルバーンの獲物故そのままキルバーンの大鎌によって滅ぶがいい。」
若きバーンの言葉に偽りは無いと悟っているこの場にいる全員は、ダイを質に取られた事で身動きは出来ないのを若きバーンは満足げに見遣りながらキルだけは除外し、そして右手で掴まえているダイがまだ握っている剣を左手で取り上げ遠くに放り捨て去ってから首を絞めている力を緩めてやりながらダイの小さな耳を口を寄せて優しく囁く。
「ダイよ、余は貴様らによって初めて仲間を思う絆の力とやらを見せてもらった。」
それは数多くの者達からの口から聞く事はあれども、これまでは全て弱者が強者によって潰されていく現実を受け入れられずに己達を鼓舞し、或いは慰めの為のものであり、若きバーンにとっては文字通り言葉の中にしか存在しないものであった。
それが脆弱で忌々しい神々によって庇護され守られて来た地上の者達が自分に見せてくれた。
それは閃光のように眩しく、先程ノヴァが放ったあの白銀の一撃を

事も無げに破壊したのが今更ながらに若きバーンには惜しまれる。
もっとあの美しさの意味を知りじっくりと観賞すればよかったと。
だが、この美しい輝きを放つ者達を手元に置ければ・・・若きバーンは魅せられたのだ、この地にて絶望に抗い一人の仲間の為に闘い抜く彼等の美しさに・・・先程この世界のロン・ベルクの言う通り、ノヴァの行為もまた気高い者であり―後で―きちんと謝罪し慰めをくれてやろうと思う程に・・・
「魔界においては強者が貴ばれ弱者には興味がない。」
ただ彼等が負け伏すものであったれば自分の興味を引く事なぞ無かった
「ダイよ、ここに集いし者達は全員命を助け、誰一人として辱めを与えんと魔界の神たる大魔王バーンの名において誓おう。」
それこそ魂の結び合いという、約定を文字通り互いの魂と結び合わせ、破ればどのような強者・・・それこそ神であっても即死させられる究極の禁術を結んでいいとまで言う若きバーンに、その意味を知るロン・ベルク達は倒れ伏しながらも驚愕の瞳を若きバーンに注ぐが若きバーンは意にも介さずダイだけを見つめそして、あり得ない程の破格の待遇をもって、未だ幼き竜の耳に甘やかな声音で囁く
余のものとなれダイよ
さすればお前が守りたいと思う者達全てを助けよう

いしの積まれる世界・・・・・神様？

ダイにとっては、バーンは敵であった・・・・否敵でなければいけない者であった。

そう思わなければいけない程に、ダイの中の闘争心は限定的なものとなっていた。

明確な敵でなければ、己の仲間を脅かすものでければ・・・・少し前の若きバーンのように自分達を殺そうとし、そして自分が愛する者達が住まう大地を消すという怖ろしい事を言っていたこいつを倒さなければならないとダイは思い定めることが出来ていたのを・・・こいつは今何と言ったのか、思考が闘争から外された。

思えばダイの戦いは自分から戦いに行くというよりも、戦いに呼ばれていた戦歴であった。

魔軍司令官ハドラーは大好きな先生の仇であった。その大好きな先生の仇をとる為に、そして大好きなロモス王がハドラーもいるという魔王軍によって脅かされている故に島を出た。

パプニカには自分を好きだと言ってくれた、気の強いでも優しいお姫様を助けにバルジ島での二度にわたる渡航をして戦いそして戦いの沼の中に誘われた。

最初から訳の分からない敵の脅威に翻弄され明確に全ての敵を倒して世界を助けるという目的は無く、漠然と周りを助けたいという一つの想いのみでダイは闘って来た。

ヒュンケルやクロコダインのように贖罪をしながら世界を助ける、ポップ・マァム・レオナ・メルルの様に自分達の住まう世界を、ひいては己達の故郷を守る、他の者達も其れは同様であったろうが、ダイの考え方は敵に勝ってその日を生きるというチウやモンスター達に近いシンプルな考えは・・・己達や守りたい者達の命を脅かさないという若きバーンの言葉は、単純な思考故に敵に対して迷いのなかった・・・迷いながらも答えを見つけられたダイの思考に入るには十分な単純な提案であった。

「そち等でなくともダイよ、お前だけでも余の側に居ればそれでよい。

其の方が余の手元に居れば自然とお前の仲間達は寄って来るであろうよ。」
　自分の提案を聞いた途端、目を見開き昂っていた闘志の炎が少しずつ弱まったのを感じた若きバーンは、己の毒がダイの思考に入り込めたことに気を良くする。
　どうやらダイは・・・この若き竜の騎士は歴代の竜の騎士とは違うようだと・・・これは―人―に限りなく近い―子供―なのだと。
　これが守りたいのはおそらく
「なぁダイよ、そちは―世界―を守りたいか?その身だけではなく、余の足元にいる若き魔法使いを、あそこに倒れ伏しているそちの仲間を引き換えにしてでも守りたいか?」
「・・・お・・・れは・・・・」
　あぁやはり・・・
「そちさえ来ればそれで良い。何も余の手足となって戦えとも言わんよ・・・そちの様な幼き子供の助けなくば守れない世界に何の価値がある?そちの助けに応えてくれた者達がいたとてそれはここ数日余の軍団に立ち向かって来た百にも満たないあの戦士達の身であろう?」
　おそらく―今―ダイが守りたいのは、ここにいる者達とカール・パプニカ平原に出てきた装備からするにカールの残党とロモス王国で集められた対魔王軍の有志達、そして一行の中に居続けてきた占い師と姫君・・・・そして
「あそこにいる異界の者達も無傷で帰そう。」
　元々いない者達の生死なぞには興味は無く、ミストを返すと言えばキルバーンも攻撃をやめ様・・・
「それでも不足であるならそちが育ったデルムリン島のモンスター達もそっくり残そう。元々デルムリン島は地上を消すにしても残る予定だったのだ。そのままそこで住まうもいいであろう?
　あそこには群島もあり橇の仲間達の家族とやらも数十人しかおらぬ村人達も住むには不足は無い。
　それに・・・パプニカの姫君も数十人の家臣達もいても余にとって

は問題にすらならん。」
「そんな!!そんな事許される筈ない!!!沢山の・・・・大勢の人達が死ぬなんて言い訳が・・」
「くっく・・その大勢の人達がお前を助けてくれたのかダイよ?」
そのわずかな言い淀みを、若きバーンが見逃すはずがなかった。
魔軍司令官ハドラーとの篩での戦いの時には何の迷いも無かった・・・しかし自分との邂逅前のハドラーとバランの相打ちのようにバランが死んでしまった時、確かにダイの心も共に一度死んでいるのを若きバーンはよく覚えている。
そしてダイが一体何に心に傷をつけられたのか・・・・
「―悪意の小石―を投げる人間を守るのに、何故お前の大切な者が死ななければならない?
よしんばお前達と余と相打ちになったとして人間達はお前達にどう報いる?」
「それは・・・そんなの・・・・」
「そう、分かるまい緒前には・・・だが余は断言できる。お前が守ろうとした人間達は、お前が愛したモンスター達を許さず己達の目に映る生命全てを狩り尽くし、住処を追いやり絶滅すらさせるだろう。」
「あ・・・だ・・・黙れ!!黙れよ!!!」
聞きたくない!!これ以上聞いてしまっては・・・もう本当に闘えなくなる・・・・心が折れそうだ・・・・・俺は・・・・一体何を守りたかった?
人?モンスター達?大好きな人達が守れればそれで・・・・
最早若きバーンはダイの首にかけている掌には力を入れておらず、優しく甘く語りかけそして
「父バランはお前の事に怒りを覚えよう。」
まるでダイの闘争心を呼び覚まそうとする言葉に、ダイははっとした。
その通りだ・・・自分には、世界をその身一つで守り切った父の、竜の騎士としての血と使命が受け継がれていると思いかけたが

「だがそのバランとても、最後には最愛のお前を守る為のみにその身を捧げてきたではないか。」
それは若きバーンの思考の罠。
若きバーンが知らしめたのは、バランの深き愛情。
世界の為ではなく、愛した妻と息子の為に身を犠牲にしようとし、最後には最愛の息子の為に身を投げうった事を克明に思い起こさせる。
「最愛の者達を守らんとする事は悪ではないと、バランが証明したではないか。」
その言葉に、ダイの中で立て直せたはずだった心が軋みそして・・・崩れたのを若いバーンはニンマリと嗤う。
おや・・・じ・・・・俺は・・・・俺が守りたいのは・・・

周りは只見ている事しか出来なかった。
何か言葉を発すればダイが殺されてしまうのを心得ており、あのティファをしてもどうする事も出来なかった…これを決めるのは最早ダイにしかかかっておらず・・・・そんな状況が！ティファや倒れ伏しても意識が蘇った少年ポップ達にとっても堪らなかった!!
自分達はなぜこれほどまでに無力なのだ！最後にこんな非情な事をダイに決断をさせなければならないなんて・・・・・
「俺は・・・」
やめてくれ!!
「・・・・バーンは・・・・助けてくれるの？」
やめてくれ!!自分達のせいで！お前の真っ直ぐな心をそいつなんぞに明け渡さないでくれ!!!
「あぁ助けよう。お前の助けたいと思う者達全てを。」
たった数百の人間とモンスター達位、柱を落としてもあの小娘の言う通り魔界に結界を施させ、狭間にある地域にも同様に強固な結界を張って保護し恩を売り制圧し、広大な手つかずの地に捕虜にした人間どもを住まわせ質にして竜の騎士の末裔を飼うのもまた一興ではないか。

不味い・・・・まだですか・・・・まだ来られないのですか!!!
キルバーン達の虚実を混ぜた罠と攻撃に生身となった事で生じた肉体の限界という不具合にキルは次第に陥りそして焦る!
この世界の事なぞ自分達にとってもどうでもいい・・・ティファ達を攫った最低中身が住まう世界なぞ・・・それでも!あの子達は良い子なんだ!!理不尽しかほぼないこの世界を懸命に守ろとした良い事達が・・・・無為に狩られるなんてそんな事・・・
魔界では散々に見てきた理不尽であった・・・地上界でも、懸命に生きていてもそれでも踏みにじられる世界なぞ幾らでも見てきた・・・・それでも・・・・・・
「御終いだよ・・・・さよならだ・・・」
「しま!!」
それは刹那の思考であったが、獲物を狩る死神の前では甘い事この上も無い隙であった。
死神の大鎌がキルの首を捉えんとしようとした
ダイの心も若きバーンに捕らえられよとしていた
誰もが絶望をした

その地に―雷鳴―が轟きキルバーンの大鎌の刃を粉々に砕いた・・・・一歩間違えればキルにも当たっていただろうが、当たっていないからいいだろうと撃った本人は言うだろう
そして雷鳴に負けないくらいの地を叩きつける大音声は極太の―魔力でできた鞭―であり、その鞭はオリハルコンすらも砕く若いバーンの右腕を叩き斬り少年ポップを踏みつけんとした足も打ち据え、衝撃によって少年ダイとポップは宙を舞った。
誰が・・・・それよりも!!
若きバーンは己の右手が切り取られても瞬時につけて元に戻しながら、少年達を欲さんと手を伸ばす!!
あれ等は・・・初めて地を消し以って天界に絶望を与えんとする憎

しみと―余暇―以外で欲しくなった―不可思議な者達―を・・・・・・
だが伸ばした手は矢張り振り払われる。
「貴様がごときが手にしようとは厚顔無恥にもほどがあろう。」
その声に！そして目の前に見た―男―は!!!!何故???!!

それぞれが囚われようとした時それらは現れた。
雷鳴を轟かせたた者は、鞭を振った者と若きバーンの間に立ち剣を構えて追撃を阻止する・・・その男の顔にも若きバーンは混乱した!!
何故この者が・・・・あの者を・・・
黒い癖っ気のある髪を背にたなびかせている男の顔は見えずとも、今ダイとポップを包み込むように優しく抱き上げている男に、誰もが声なく、それこそ雷鳴によって退けられたキルバーンと、異空間から虎視眈々と獲物を狙っていたピロロとても絶句をし、当然心が折れ掛けたダイも、意識が完全に戻ったポップも！これは一体何が起きたのだと叫び出したいのに出なかった。
叫ぶ声すらもを呑み込みそうな大きな男であった
その男の顔には慈愛の笑みが広がっていた。
その男に抱き上げられているだけなのに、まるで何もかもから守られているような心地よさと安心感を与えられている・・・まるでそれは父というよりももっと万能感をダイとポップは感じた。
村にいた時、デルムリン島に住んでいた時、時折木漏れ日から感じた、春の日差しの中に、柔らかな風の中に、大嵐の後の雄大な夕日の中に感じていた・・・・母ステイーヌが、じいちゃんが時折言っていた。
きっとそれは私達を優しく見守ってくださっているのよポップ
偉大なお方が我等を見守ってくださっておるのじゃよダイ
それは・・・・近頃では優しお姉ちゃん達を無理やり攫う悪い奴等になった・・・
それでもこの人がきっと母が、じいちゃんが言っていた・・・姿は―あいつ―と同じでも、陽の光のようなこの暖かい温もりに溢れたこの人はもしかしたら・・・・

・・・・・・・・神様？

おずおずと言ったダイとポップのか細い声に、神様と呼ばれた男の瞳は驚きによって開き、そして何かを思い出すように苦笑しながら、少年達を抱き上げている腕にさらに力を込めて包み込む姿は、まさしく慈愛に満ちた神そのものであった

いしの積まれる世界：魔界の神・大魔王バーン

そこはほんの少し・・・否一瞬前まで確かに命の遣り取りを、さらに言えば若きバーンの圧倒的な暴力を前に蹂躙されていたはずであった・・・なのに・・・白いローブを翻して悠然と歩く白髪と同じく白髭を長くたくわえた―老バーン―は、目の前の若きバーンに目もくれる事無く、少年ダイとポップを、どこに座らせれば良いかゆっくりと周りを見まわしている。

ティファ達が目に入っていない訳ではない、今すぐにでも自分の幼な子達をこの手に抱きしめたい所ではあるが、この小さき身で頑張っていた少年勇者達をきちんと休ませてあげたいという思いも強く、漸く目を止めそちらにゆっくりと歩きだす。

その歩みはゆったりとして力強く、とても老体が男児二人を抱えているとは思えない足取りであったが、老バーンからすれば

「軽き体であるなその方達は・・・もっとキチンと食事を摂って肉をつけたほうが良いぞ。」

「・・・・・・へ？」

「・・・・・はい？」

「余の知るダイ達は其方達の年齢の時であってももう少し重さを感じたぞ？」

然るにその方達は全く持っている気がせずに心配になる。

いかにティファの様な―料理人―がおらずとも、三食きちんと摂って来たのか？このような華奢な体で無茶をするのは勇者達は無謀なのかとか・・・大魔王様に食事の事で併せて身内のお爺ちゃんの如くな意見をされるとは当然少年勇者と少年魔法使いには想定外であった!!

一体自分達は―誰―に抱き上げられてこんな事を言われているのだ？

もう大混乱だらけなのは少年ダイとポップだけではない！

若きバーンはもとより！虎視眈々と異空間から老バーンを突け狙っているピロロとても、勇者達のみを心配する大魔王って何!!???状態

であった・・・・他界の魔界の神・大魔王バーン様は―何時もの様に―そんな周りの事なぞ構いつけていない・・・他界の勇者兄妹曰くの―うっかりで可愛いバーン様―全開であった・・・・・この世界のアバンは老バーン姿を知らないので、実力はドール殿よりもすごそうですがあのご老体はどなたでしょうかとポカンとしているだけで済んでいるが！ロン・ベルクはそうもいかずに精神ダメージ計り知れなかった!!

なんだあの老バーンは!!あいつ俺の知ってるバーンじゃねぇ!!!!

仕えた時間は本当に短かったが！あんな表情どころか訳の分!!からない説教をしている魔界の神・大魔王バーンなんていて堪るかと・・・現実逃避したくなったのもうっかりバーン様はご存知ないとばかりにあれこれ言いながら歩を進めてティファによって集められている者達の下へと向かい、自分の世界のマトリフを見つけて話し出した!!

「二人を頼む。」

「あぁ分かってんよ。」

たったそれだけで、老バーンとマトリフは通じ合い、周りがその事に対して更に付いていけずにポカンとする中で、マトリフは老バーンから降ろされたダイとポップの面倒を見始める。

そしてその当のバーンは自分を唖然と見続けている若きバーンには目もくれずに、一人一人を迎えに行く。

先ずは若きバーンによって両の腕を砕かれてしまったポップの側に一足飛びに向かい、痛ましげな表情を浮かべ、青年ポップをそっと抱き上げれば、青年ポップは呻き声を発しっするのに、バーンは安堵の笑みを浮かべながら若きバーンの技の威力で岩場に叩きつけられたチウ達二人を区別する事無く腕に収めそして、この世界のチウを少年ダイ達の近くに降ろして最後の一人の下に向かった。

ラーハルトの拘束は最早解けているが、ぺたんと座って今まで見た事のないような歪んだ表情を浮かべているティファの下へと・・・・急く足を、青年ポップの体に障らぬようにと歩を進めるバーンの姿に、そしてそのバーンの白いローブに顔を埋めて震えだすチウの姿に、目を覚ましたの兄ポップが、バーンに気が付き驚きながらも瞬時

に抱き着いた時、
ティファの何もかもが弾け飛んだ

ふぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんんん!!!!!

ティファが泣きだした
この世界に来てから、自身がどれ程理不尽な者達の思惑で酷い目に遭おうとも、味方の為とはいえども自身の気持ちに沿わぬ茶番に付き合わされたよとも、兄達が傷つき惨い目に遭った時でも泣く事なく―何とかしてきた―あのティファが・・・・

「うわぁぁぁ!!!うぁぁぁぁぁぁんんん!!!!!」
ただ泣いている
ぺたりと座り込み大口を開けて表情をくしゃくしゃに歪めながら涙どころか鼻水も何もかもで顔いっぱいに濡らして天を見上げて泣いている。
そこにいるのは当代随一の智謀・鬼謀・の頭脳を持つ大人達と渡り合った姿ない
茶番をひっくり返しながらも己の望む事を手にしながらも味方達の式を大いに高めた姿は無い
敵の思惑を食い破り味方達を守って来た料理人の姿はどこも無い
バーンは自分に縋りついて泣いている青年ポップとチウを左手一本で抱き抱えなおし、泣いている只の童を右腕で優しく抱き上げ三人を己の胸元に抱きしめ、白いローブの袖の中に閉じ込める。
「済まぬ・・・・余は其方達を守ってやれなんだ・・・」
子等を閉じ込め魔界の神は悔恨の涙を流しながら懺悔をする。
子等が攫われたのは自分の結界内であったのに!みすみすこのような目に子等を遭わせてしまった・・・・全ての愛しき子等にとって最良の一日となる幸せなだけの時間を過ごさせちゃる事が魔界の神

を苦しめる。
それは子等を愛している心が強い故に・・・・其の想いをティファもポップもチウにも分かりすぎる程に分かっている・・・・

「大魔王!!!大魔王!!!」
「バーン!!!バーン!!!」
「バーンさん・・・・バーンさん!!!!」
三人の子供達は自分達を力強く抱きしめている大魔王バーンのローブを握りしめて名前を何度も何度も呼ばわる・・・・まるでその言葉しか知らないとばかりに何度も何度も。
自分達にとっての、魔界の神・大魔王バーンはこの人しかいないとばかりに。
自分達の大好きな大魔王バーンが来てくれた事が嬉しくて・・・・

その声を、若きバーンと対峙している青年ダイの表情に笑みが浮かぶ。
自分一人だけではここまであの三人の心が解き放たれたかどうか甚だ怪しい・・・・特に妹は強がる可能性の方が高い・・・・バーンと来て正解であったと・・・・後はこの世界にどう決着をつければ正解なのか・・・・目の前の・・・・この男を倒せば終わりでいいのだろうか？

いしの積まれる世界・ドラゴンクエスト

泣いているティファが大魔王と呼んでいた

泣いているポップもチウもバーンと、バーンさんと呼んでいた事実に、ここに来て何故自分の弟子達とロン・ベルクがあの老人を見た瞬間に顔色が悪くなったのかをこの世界のアバンは理解しそして戦慄した!!

一体何なのだこの状況は!アレが本当に大魔王バーンであるならば!!何故勇者の妹と魔法使いと仲間であるチウが大魔王バーンに取りすがって泣いているというのだ・・・もしや、向こうの世界は魔王軍が勝利し、かつての勇者達は今の自分達の様に、さらに言えばダイの様に取り込まれた世界になっているのかとまで考えた・・・・よくよく考えれば、ティファも異界のポップもチウも向こうの世界の大戦を制してきたとは言っていたが、具体的にどう終えたのかを聞かなかったせいもあるだろうが聞いたことが無かった。

そう考えたのは、何もこの世界のアバンだけではなかった!!

「・・・・貴様・・・異界の―大魔王バーン―であるか?」

何とも奇妙な質問をするものだと、目の前の殺気に満ち溢れた青年の頭越しに、異界の―自分―に若きバーンは問いかけるのを、老人の自分が漸く自分の方をまともに見てきたのが釈然としない。

魔界の神とまで謳われた自分をここまで無視する存在なぞ若きバーンにとっては初であり癪に障るのだ。

そして自分の問いかけよりも、腕の中で情けなく泣いている童共に心を置いているのが明らかだ。

もしかしたら、このバーンも勇者達を飼いならすのに成功でもしたのだろうか?

なればさっさと自分の世界に返して先程の続きを、ダイにきちんと返答をさせよと若きバーンは考えたのだが、老バーンは煩わし気に若きバーンを眺め溜息すらつく始末!

まるで自分達の時間を邪魔をする五月蠅いやからだとばかりの態度に!!若きバーンはいら立ちが募った!!

そして返答内容にも腹が立った!!
「その通り、余は他界の大魔王バーンである・・・・子等を慰めているのだ。
邪魔をしてくれるな。」
・・・・・・なんだと?
腹が立つというよりも、聞いていたこの世界全員の頭の中が真っ白になる返答であった
ここは戦場だ!童が泣こうが死のうが待つものなど要る筈も無い戦場で何を言っているのだこの老体は・・・・もしや自分と違って―凍れる時の秘法―ではなく本当の御老体で呆けたのかとすら若きバーンと内訳を知っているキルバーンとピロロは超絶失礼な事を考える程に物凄くあり得ない返答であったが!殿様気質のバーンはそんな事はどうでもいいとばかりにグスグスと泣き濡れている三人を大事に大切にしているところを見ていれば本当に異界の大魔王がこの三人を大切にしているのが伺い知れる。
飼っているのかとも若きバーンはそう考えたのだが、それ以上の・・・・先程自分が初めて魅せられた絆の力を何故か感じ取り・・・・不意にこの世界に来て初めて見えた異界の忌々しい小娘の言葉を思い出し、もしやとある考えに至った。
「・・・・質問があるが良いか異界の大魔王よ。」
「・・・・・・・なんぞ?」
物凄くやる気のない返答であったが、若きバーンは気にせずに質問を続けた。
「その方等の世界の魔界は滅びに瀕していたのか?それが故に異界の大魔王、其の方は地上界そして天界に戦いを挑んだのか?」
―今魔界は太陽の恵みの無さや、地上が蓋をしているせいで魔界が滅びに向かっているとかそれ系ですか?―
あの質問が自分達の世界の内情と照らし合わせての問いであるのならばおそらく
「・・・・その通り、余たちの世界の魔界は放っておけば数百年後には瘴気が浄化しきれずに死の世界となり果てておったよ。」

隠す程の事ではないという老バーンの言葉に、この世界の誰もが驚く中若きバーンは納得をした。
「成程、その状況を地上は知らんがそこな竜の騎士の娘と今余の目の前にいる竜の騎士の息子に縋って天界の助けを得た！謂わば負けい・・・・・」

黙れよっ
黙れ馬鹿
!!!!!!!!!!!!

若きバーンは、自分の考えが当たっていたかと老バーンの返答を聞いてほくそ笑む。
自分と違い、切羽詰まった状況での旗揚げである事に。
自分は魔界は其れなりに平穏ではあるが、太陽の恵みを享受し神々に守られている地上に比べれば不遇であり、そんな状況を良しと出来ずに自らの意思で大軍勢を整え大戦略を練りここまで来た自負がある。
然るに異界の大魔王は状況が違っていれば忌々しい神々の作りし箱庭で満足をしていたのではなかろうかという程に気概を感じられない腑抜けに、若きバーンには映り、マザードラゴンと生粋の竜の騎士バランの子女達に縋った負け犬かと蔑みの言葉を投げつけようとしたのを、その二人の兄妹から闘気を込められた怒声が叩きつけられた！
特に青年ダイの目には殺意すら浮かび、こいつの首を今すぐにでもと思う中、ティファ達の言葉は続いた!!
「大魔王は!!滅びゆく魔界助ける為に七千年近く頑張って来たんだ!!!ほぼたった一人で瘴気で滅んでいく魔界の民達助ける為にその身を捧げた偉大な人だ!!!何にも知らないお前が口出すな馬鹿!!!」
「降ろしてくれバーンは・・・・あの野郎の首!!ダイと一緒に堕としてくらぁ!!!」
「バーンさんは凄い人なんです!!お前なんかと違って本当に魔界の神様なんだ!!!」

ティファとチウが本気でバーンを擁護し、ポップがあの野郎倒してくる発言に困ったのは唖然としている周りでなく当の老バーンであった。
「三人とも落ち着かぬか。あれに何を言われたとても余は痛痒も感じぬ・・・それにあれが言った事は当たっている。
余は・・・・いや・・・魔界は其方達の慈悲によって救われたのだ。」
老バーンは、若きバーンのいう事に一理あると認めるのと、青年ダイは納得がいかなかったのだが、老バーンはさらに言葉を紡ぎながら三人も降ろす場所に連れて行く。
「事実に怒るでないダイよ。余等は其の方達や地上界の慈悲部下き者達のお陰で命を、そして魔界を助けられたのは本当のことぞ。」
数多の善意ある者達が今の自分を生かしてくれているのを老バーン自身が誰よりも知っており、だからこそ若きバーンの言葉にも腹すら立たないのだという言葉に、自分達の目の前再び来た老バーンに、少年ダイは質問をした。
「・・・バーンは・・・・お姉ちゃん達と・・・その・・・・仲直り？したの？」
どう聞けばいいのか、和議や和睦という言葉すら知らない少年ダイの拙い質問を老バーンは笑う事無くティファ達を降ろしつつ優しく答える。
「その通りぞ少年勇者よ・・・・地上を攻めた我等を、ここにいるダイ達を始め滅びゆく我等を地上の者達も助けたいと言ってくれたのだ。」
経緯は省くが、世界中が一斉につながるという奇跡の御業が起き、そして魔界の悲惨さを、無辜の魔族の民達が死んでいく現実を助けたいという天界と地上世界の人々の善意で自分達が救われたのだという言葉を、かつて悪意の小石を投げられた少年ダイ達にとってはお伽噺にも等しいと周りも疑わしくなるのを、老バーンは仕方のない反応だと理解しており不快にはならなかった。
これが普通の反応なのだと思う中、若いバーンはその話が嘘でも本当でもどうでもよかった。

「和睦が成された平和な世界なぞこの世界の余には考えもつかぬ事だが、異界の書事情なぞどうでもよい。
其の方の―宝―を取り返したのならば異界に帰るが良い。」
早々に帰国につけと促す若いバーンの言葉に、異界の者達よりも少年ダイ達の方が反応が著しかった。
そうだ・・・どれ程優しい人達であっても、この人達には帰る場所がある・・・それも本当に平和な世界で幸せに生きていけるのだと、この世界のアバンとロン・ベルク、ヒュンケル、クロコダイン達大人は諦念を露わにし、少年ダイ達は動揺するのを、老バーンは不思議そうに首を傾げた・・・・傾げた??!!
「何故元凶を残して余等が帰らねばならないのだ？」
・・・・・・は？
「その方であろう、ティファ達がこの世界に来なければならなくなった事由は。」
確かにティファ達を攫ったのは神々でありマザードラゴンであり、様々な要因があるかも知れないが！そもそもが何ら大した理由も無く・・・・何なら魔界も含めた全生命にとって傍迷惑な理由で大戦を開いた馬鹿を放って帰る気なぞ無いという物凄い辛辣な言葉に！周りの思考はまたもや真っ白になった!!
この人いったい何言っちゃってんのである・・・・いや・・・それこそ異界の貴方には何の関係も無くないですかと思ったこの世界の大人達は悪くない・・・きっと悪くないが、老バーンはそれと同時にきっちりとティファとポップとチウが舐めさせられた辛辣の満分の一でもこの愚かな若きバーンに叩きつけてやりたいという言葉に、周りは少しは納得をした。
これほど慈しんでいる者達の仇を取りたいという感情は至極当然であると難しい事が苦手な少年ダイにも分かり、異界の勇者と大魔王が二人がかりで討つのかと固唾をのむ中若きバーンは老バーンの言葉をせせら笑った。
「できもしない事を言うものでは無いぞ異界の大魔王よ。」
「ほう？余ではそちと戦うに力不足というか？」

若きバーンにそんなことは不可能だろうと言われた老バーンの返答に、若きバーンは―種明かし―をした。
「そこの異界の魔法使いや小娘たちは、もしかしたら全力を出せばミストかキルバーンを葬れたかもしれない場面が幾度かあった。
しかし結果は追撃をせずにすべて見逃していた。
察するにその方達・・・いや?異界の者達はその世界の重要なる人物と目される者達の生命を奪うことが出来ないか、奪えたとしても何らかのペナルティーをその世界の神々によって課せられるのではないのか?」
若きバーンは先のパプニカ平原とカール平原において、地上勢をもう少しで殲滅しかけられたのを、異界から来たアバン達の余って目論見が潰されたのを忌々し気にしながらも冷静に観察をした結果、今の考えに至った。
ゼロ距離からの―極大消滅呪文―を警告を発する事無く異界のマトリフが撃っていれば、ミストは真の自分の肉体を解放して―フェニックスウイング―を放つ間もなく消滅させられるという好機をものにしなかった理由が、異界の者という制約ではないだろうかと、様々な呪文・呪法はては禁術・秘術・秘呪文に精通している若きバーンはは制約の類の拘束性のすさまじさを熟知しているだけに至った考えを述べれば・・・なんと老バーンは躊躇いも無く是と答えた!!
「・・・余が聞いておいてなんだが・・・・そんなに簡単に答えてよいのか異界の大魔王よ?」
この場にいる全員に発生した疑問を若きバーンは代表して聞く形になったのを、老バーンは事も無げに答える。
「その方に激突していれば嫌でも気が付かれる事であろう?」
直ぐに気が付かれる事を隠していても意味は無く、それよりも自分達の手でこの世界の危機を救ったとてこの世界の為にはならないから、制約があろうとなかろうとするつもりは無いという老バーンの言葉に、若きバーンは再び笑みを浮かべ尊大に言葉を放つ。
「ならば矢張りそこな者達と共に帰るがよい。キルバーンよ、そこな褐色の魔族を見逃しても約束は叶えてやる故見逃してやれ。」

見逃してやるから帰れという言葉に、老バーンと青年ダイの顔が怪訝そうになるのを若きバーンは愉快気に見ながら教えてやる。
「この世界のそこに座り込んでいるダイは世界を守る事になぞ興味は無く己の大切にしている数百の生命を守れればそれでよいそうだ。最早戦う気力なぞ失せ果て余に膝魔づこうとしたのだ。」
異界の者達がどう力を貸そうとしても、この世界の勇者に闘う力は最早無く、であるならば老バーン達が居る大義名分も理由も無いという言葉に、少年ダイはびくりと体を揺らすのを、ティファ達は酷い言葉から守るように庇いかけた時・・・・白いローブの袖を翻し腕を伸ばした老バーンに少年ダイは抱き上げられ、そして・・・見つめられた・・・
なんだろか？戦えなくなった自分を情けないというのだろうか？かつてのポップ達の様に戦えというのだろうかと少年ダイは怖くなった。
異界の魔界をたった一人で救おうとしたこの人から何を言われるのだろうと、怯えるのを若きバーンは見逃さなかった。
「情けない勇者であろう？そち達がペナルティーを科せられてまで助けに値する者か？」
勇者であるというのに戦いの場において悩みを持つなど普通であればあり得ないという言葉に、―ラド＝エイワーズ―という言葉とどさりという音が遮った！
「っっってって・・・・・バーン!!!!」
「よさぬかダイ・・・・余との約定を守れぬであれば拘束するぞ？」
「だって!!あんな酷い言葉放っておけって言うの!!???」
それはあやうく若きバーンの言う通りペナルティーを受けてでも全力の力を、ティファに作ったのと同様にロン・ベルクが急いで拵えた―ミスリル銀の剣―に込めて若きバーンの首を落としそうになったダイを老バーンが察して自分の足元に呼び出したのを、防御力の高い黒マントに戦士の鎧をまとった青年ダイを老バーンは諌めながら、同じく怒りに駆られた吠え上げそうな周りにも、あれの不見識に怒るなと・・・・ある意味一番辛辣な言葉で宥めたのを、若きバーンの眉

がピクリと動いて青筋が浮かぶ。
「余の言葉の何が不見識だと？」
制約もペナルティーの事もきちんと言い当て、現状を教えてやっている自分の何をという若きバーンの言葉に、老バーンは鼻で笑う。
「若者とは元来悩み苦しみながら前に進むものであろうよ。」
時にはそれで立ち止まり後退してしまう時もあれば自滅してしまう時もある
「それを助けるが我等―大人―の仕事であろう？少年勇者よ、其の方はあの若きバーンに膝を折りたいか？」
「膝を折る？」
叱られるではなく、自分の分からない言葉で優しく何かを聞かれた少年ダイは驚きながらも質問の意味が分からないと正直に答えるのを、己の無知を誤魔化す事無くきちんと聞ける少年ダイに老バーンは目を細めて褒めた。
「分からない事をきちんと分からないと聞けるとは其方も良い子だ。そうよな・・其方はあの大魔王に負けましたと頭を下げたいか聞いたのだ。
其方がそれをしたとして、其方はこれから先―其れで良かった―と思いながら生きていくことが出来るか？」
少年ダイは、老バーンの具体的な言葉に今度こそ何を問われたのかをきちんと理解しそして目を見開いて泣き出した！
「・・・・分かんないよ・・・・分かんないよ!!!あいつの言う通り！俺はポップ達や一緒に闘ってくれた人たちを守る以外もう戦う理由なんて言われても分からないよ!!」
世界と言われても・・・・この世界がどんなものなのか少年ダイには分からない・・分からない者の為に命を掛けろと言われても、少年ダイの戦う理由は明確化されていないのを、少年ポップ達は辛い表情で聞き、若きバーンにはそれ見た事かと嗤う。
お前の目論見が勇者を奮起させて自分を討とうとしても無駄であろう、失望してさっさと帰れと・・・・だが、若きバーンは異界の魔界の神・大魔王バーンを見誤りすぎていた・・・とはいないだろう事

を、老バーンは言ってのけた!!
「その方が世界を知らぬは無理もない。」
余とてもティファ達の導きのお陰で本当の意味で世界の素晴らしさを知れたのだから。
「この地上は消されるには—勿体ない—素敵な者が沢山詰まった地なのだ。」
それを見ないのは勿体ないと・・・・勿体ないと二度行ったのだ老バーンは!!
生命の大切さや、連綿と続く営みを守るとか壮大な気宇や言葉は無く・・・・勿体ないという言葉に少年ダイも自然と涙が止まりポカンとしてしまった・・・まるで・・目の前の御馳走を食べなければ勿体ないというほど自然な言葉で・・・地上と天界の命運がかかったこんな時に、そんな言い分聞くとはだれもが思ってもみなかったのだから無理もないが、老バーンの言葉はさらに続く。
「世界のすばらしさを知るのに時が必要であれば余とそこにいるダイが手を貸そう。」
若き者達が悩み苦しみ動けないのであれば、周りの者達が手を貸してやればいい。
そしてそれは—大人の役目—だと、ポカンとした少年ダイを、青年ダイの腕に預ける。
「ダイよ、其の方もかつて戦う理由を見失い心が折れた時があったな。」
「・・・・・・・ティファが・・・・妹が—あんな事—して俺達置いて行ってもう絶望だったよ・・・世界なんてどうでもよくなったさ・・・」
・・・その時の事を思い出す青年ダイの言葉は怨念まみれであり・・・それを聞いたティファはビクンと震えて兄ポップの背中に、睨みつけてくる兄ダイの視線からモショモショと隠れたがそれは兎も角、少年ダイにはこんな強い人が自分と同じように苦しんだのかと驚きながらも、時間を稼ぐという老バーンの言葉に何を言っているのだとパニックになる!
手を貸すってまさか!!!

少年ダイの考えた通り、老バーン―長い柄のついた杖―武器を取り出しながら自分達に背を向け若きバーンに向かって歩き出しているではないか！
「・・・何のつもりだ？異界の魔界の神とやらは、慈悲深き神を気取るつもりか？」
自分達の世界にまで首を突っ込まれたことに若きバーンは不快を示すのは当然だと、老バーンが賛意を示したのを、ならば何故だと若きバーンはますます老バーンの行動が不可解になり不気味にもなるのを、老バーンは笑って答える。
「なに、この少年勇者が不本意にもお主に膝を作羽目になったのはティファ達の事も含まれていたのをきちんと見てた故名な。」
時空間を移動しながら、この世界の思念体になったマザードラゴン経由で二人は見ていたのだと教え、そして時間を稼ぐのはその事に対する礼だと老バーンは事も無げに答える。
「見知らぬ他人の子等をも守らんとした事に礼を尽くさせてもらおう若き勇者よ。
余の持てる力で時間を稼ぐ故、その間にこの場を離れて世界を多少は知ったダイと語らってまいれ。」
それでも答えが変わらなくとも自分達は責めない、誰に強要されずに考えた末の答えを出して来よと老バーンは少年ダイに振り向き優しく微笑み言葉を贈る。
若き竜よ
答えを探してまいれ

・・うそ

・・ーダイの大冒険ーのラスボスだったあの人が・・竜に（ドラゴン）

探してこい（クエスト）って言っちゃったよ！

・・これってあり!?

いしの積まれる世界・老大魔王ＶＳ若き大魔王

ダイの大冒険のラスボスになる、大魔王バーンが勇者にドラゴンクエストを示唆していいかとか、ちょっとこのこと色々話してくると言って少年ダイ君抱えてトベルーラしていった兄を、正気に戻ったピロロとキルバーンが襲いかけたのをキルが邪魔だよと蹴っ飛ばしてまたバトル再会とか・・・・ちょっと色々あったけれども全部吹っ飛ぶようなことが目の前で起きてる・・・

いや・・・・ダイの大冒険はラストに主人公が不在になった終わり方でドラクエらしくないや、敵が竜の類だから敵の竜を探せのドラゴンクエストにおいて、主人公自身がドラゴン事竜の騎士と人間のハーフで、竜がクエストをこなすドラゴンクエストって言う画期的なアイデアの・・・・メタい考えここまでにしておこう・・・まさかとんでもない娘・破天荒娘・非常識が服着て歩いているとまで言われたティファとても、まさか大魔王が現役勇者にドラゴンクエストしてきなさいと言うとは誰も思わないのだから。

その唖然としたティファと、異界の大魔王の言葉に少年ダイを颯爽と連れて行ってしまった異界の竜の騎士の勇者に唖然とした誰もが、そんな事は頭から抜ける程の事が目の前で繰り広げられている。

戦っているのだ、両世界の大魔王達が死力を尽くして

少し遡った少し前、若き竜達を送り出した老バーンを、若きバーンは理解できなかった。

何故この世界の勇者の手助けをするのか？

リスクがありどこにも自分達に益などない無く、己の宝達を取り返したのだから帰ればいいと勧めたのを、ほんの少しの恩如き・・・・恩にもならぬ益体も無い事で自分と戦うという選択肢をした老バーンを胡乱な目で見つめるのを、老バーンはふっと余裕の笑みを浮かぶのが若きバーンには癪に障る！

「・・・あの褐色肌の魔族もお前の配下か？キルバーンの呪法トラップ

をあっさりと躱してあの死神を防戦一方に追い込むとはな。」
　勇者二人が飛び立つのを阻止しようとしたキルバーンの攻撃全てを防いだ褐色肌の魔族、場所を変えると言ってキルバーンをキメラの翼で連れて行ってしまった手練れであった。
　まさかあのキルバーンがいともあっさり抑え込まれて連れ出されるとは計算外だった。
「・・・・あれも余の自慢の配下の一人。さて、あの若き勇者のした約定通り、時間を稼ぐとするか。」
「・・・・ふん！そのような―玩具の杖―で余と戦うと？」
　老バーンが取り出した光魔の杖を、若きバーンは馬鹿にしたように鼻で笑う。
　その杖は、若き肉体と違い魔力ばかりが強かった老体の弱点を補う為の補助杖に過ぎず、若い肉体に戻った自分も前では玩具であると・・・・如何に戯れで作った手抜きの物であっても！作ったこの世界のロン・ベルクとして辱めを受けるような思いであった！
　確かに理力の杖の上限を取っ払った等どうなるかという実験と言う戯れで生み出したと自分で言ったとしても！他人にどうこう言われるのは鍛冶屋として我慢できないと、二人のチウに火傷に聞くという薬で手当てを受け大火傷が和らいだとはいえども満身創痍な状態で飛ぶ出しそうになるロン・ベルクの代わりに、異界の大魔王がこれを玩具と言うとは程度が低いと若きバーンを鼻で笑った!!
「其方にとってはどうかは知らぬが、余にとってはこれを得て数百年愛用している長年を共にした愛用の杖でな・・・・先の大戦でダイにへし折られたが、ロン・ベルクに再三再四拝み倒して復元してもらった余の相棒よ。」
　・・・・物凄い裏事情をドヤ顔で言いながらだ・・・・魔界の神が!!魔界の名工とは言えども鍛冶屋に再三再四拝み倒したのか・・・・そうなる前に、二度目辺りの頼み込みで治してやれよと言う、初めて裏事情を知ったティファ・ポップ・チウ達良い子のジト目に！異界のロン・ベルクにも言い分はあった!!
「・・・・俺はな・・・・気まぐれで作った武器を!!手前ぇの力で世界

最高峰の武器に昇格させるような奴の武器なんて二度と作りたくなかったんだよ!!!!」
あいつは其れこそ鈍ら渡しても最高峰にしちまう！鍛冶屋の敵だというその言葉に・・頷いたのはこの世界のロン・ベルク一人と言う惨状だったが兎も角！
「・・・其方魔界の神と言われながらも情けなくは無いのか？」
若きバーンは何度目かの突っ込みをうんざりとしながら老バーンした・・・お前は本当に魔界の神・大魔王バーンなのかと。
だがそんな言葉は老バーンに何のダメージもある筈も無く、光魔の杖を準備する。
前回と違い、本当の槍と同じくらいの取り回しができる様に触手を纏わせ魔力を吸収するというのではなく、掌から直接取り込ませるというヴァージョンアップされた杖に魔力を送り杖の先に槍よりも少し太い刃を形成させる。
「さて、人に頼みごとをする時には礼儀を果たせという道理も知らぬ―若造―の言葉なぞ軽きものよな。」
そよ風の程の痛痒も受けぬという、物凄く分かりやすい挑発に若きバーンは目を見開き、バーンを知るティファ達も驚いた！
あのいつでも、敵であった頃であっても挑発どころか罵りを受けてこなかった子供達が驚くのを他所に、大人達は得心する。
「クックック!!ハッハッハ!!!そんなに早死にがしたいか貴様は!!!!」
自分達のバーンは、さっさと色々と腹ただしい若きバーンをぶちのめしたいのだと・・・老バーンの目論見通り、若きバーンは全身に闘気を込めて先端が開かれ・・・・誰もが目を奪われる光景が繰り広げられた。

若きバーンはあまり呪文を使わない、魔界において念入りに相手を調べ上げマホカンタ系を使うか類するアイテムがあるかを調べるよりも、圧倒的な自分の力で潰せばよいのだから。
そして今度の相手は間違いなくマホカンタを使える―自分―であり、若きバーンは瞬時に決着をつけ若き勇者達を追う算段までつけ老

バーンに一瞬で迫った。
本来は打ち掛かってくる相手を必殺のカウンターで殺してきたが、―自分―であればその戦い方を熟知しているだけにまず来ないだろうと読み込み、ならば圧倒的な力で潰しにかかる。
魔法を多用してくる可能性は、あちらもマホカンタとフェニックスウィングを知っているのだから、あの杖の攻撃さえよければいいと瞬時に戦い方と勝利法を弾き出した若きバーンの速攻は、神速と呼ばれたラーハルトは、自分よりも早く動いた若きバーンよりも直ぐに訪れた結果に驚愕をした!!
「・・・遅いな・・・」
目前まで迫られても眉一つ動かさず・・・それどころかその場から一歩も動かずに若きバーンが気が付けば元居た位置よりも弾き飛ばされていた!!
何をされたのか、攻撃を受けたであろう当の若きバーンは元より、異界のチウの指示に従って仲間達の手当てをしているこの世界のチウや、手当てを受けている者も、そうでない者も大半は何があったのか分からなかった。
一体、若きバーンは何故吹き飛んだのか。
確かに老バーンは杖を軽く振ったが、攻撃の類は見られなかった!!
成程、光魔の杖の―あの機能―か・・・
それを見抜いたのはあの杖を再び作り直した異界のロン・ベルクと、目の早いラーハルトとティファのみであったが、声には決して出さなかった。
言って老バーンのアドバンテージを喪わせるほど馬鹿な事は無いからだ。
そして、話す間に
「きっさっま!!!」
一瞬の出来事で己が吹き飛ばされたのが余程屈辱的であったのか、若きバーンの頭に血が上り乱打戦になるのを、態々潰す事も無いという戦士達の判断でもあった。
ティファ達の考えた通り、若きバーンにとって最強を誇る肉体を!

同じパワー系の肉体の持ち主ではなく！選りにもよって力が無いと嘆いていた老体の自分に瞬時に吹き飛ばれのは屈辱以外の何物でもなく、許せる事ではなかった！

だからと言って、若きバーンは老人の時よりも若き肉体の精神に引きずられ逸る心のままの言動をするが愚かとは縁遠く、次はどのような攻撃が肉体を襲おうとも二度も同じ手を食わない為に全身に薄い闘気の膜を張り対応して打ち掛かるのを、老バーンは瞬時に鬼瞳で見抜いて先程とは違い、若きバーンの振り下ろした拳をひらりと舞う様に後方に飛びながら避けながら光魔の杖の石突き部分にも魔力で攻撃を増幅させる魔石を埋め込んだという新機能を若きバーンの顎に叩きつける事で試そうとしたが

「小賢しい!!!」

若きバーンは左腕を振り抜きながらも石突部分を右腕で払うのを、少しはやりおると挑発しながら互いに乱打戦に入った！

若きバーンが振り抜く腕を、飛んでくる膝を、老バーンは杖の刃の部分と柄の部分で受け流し或いは弾き！老バーンは反撃をせずに猛攻を凌ぐ一方となる・・・誰もがそう思った若きバーンも、いつかは老バーンの魔力切れでけりが付くと思っていた・・・・柄が四度振り抜いた右腕に巻き付き自身が宙を舞うまでは・・・

「力一辺倒に負ける程耄碌した覚えはない。」

近くから聞こえる忌々しい声に反論する間もなく、―巻き取られ―宙を舞わされた若きバーンに容赦のない攻撃が肉体を苛んだ。

光魔の杖の刃に幾度も宙で打ち据えられ、それにより息継ぐ暇もないと見て取った老バーンは光魔の杖の攻撃に加え、なんと杖の刃の部分からイオラを連続で出し、打撃と呪文攻撃を同時に若きバーンの肉体に叩きつけたのだ！

「・・・こ・・・・の・・・・・舐めるな!!」

カラミティウォール!!

肉体に受けたダメージの激痛を無視し、トベルーラの応用で空中で体勢を立て直した若きバーンは、ほんの少しだけ上空に向かい真下にいる老バーンに向けて手刀でカラミティウォールを浴びせるが、若き

バーンと違い自分の技で迎え撃つなどと―若者特有の自信―溢れる行動をする筈も無く、トベルーラでカラミティウォールの範囲よりもさらに離れ、若きバーンの次の行動を伺う。
老バーンの考えが正しければ、今目の前で自分を忌々しげに見ている若きバーンは、久方振りの肉体と精神の高揚に引っ張られ、老体で培った―老獪―さが鳴りを潜めている。
言葉で、表情で、ほんの少しの仕草で相手を翻弄するよりも、己の肉体に絶対の自信がある故に、どうしてもそちらに引っ張られるかと内心でひっそりと笑う。
もしもほんの少しでも今考えたことを表に出し、自分の考えが読まれ慎重になられれば厄介な事この上ない。
あれを相手にするのは―若い思考―であることが望ましいのだから。
だから
「今度は此方からいくとするか・・・」
杖を大きく振りかぶり、刃を振り下ろし大量の―光球―を生み出し若きバーンに叩きてるのを、あの技に見覚えのあるポップ達が驚愕の声を上げた!
「あれ!!ポップさんのイオラの嵐!!」
よく見れば、特訓で見た杖の振りかぶりで打ち掛かる姿もそっくり同じだと気が付いた全員が青年ポップを見つめれば
「・・・そうだよ、俺の戦闘スタイルは俺達のバーンが参考元だ・・・」と言うよりも模倣だ。」
青年ポップはあっさりと答える。
自分が動ける魔法使いを目指し、そして究極は自在に魔法と杖を操る大魔王バーンであったのだと言いながらも、青年ポップの心は絶叫していた!
大魔王バーンにはマホカンタがあるのにどうして!!
それは若きバーンも、いきなりのこの攻撃に老バーンはとち狂ったかと驚くも、自らの愚かな攻撃を返され燃やし尽くそうとマホカンタを張り―イオラ―を返そうとしたが!

ズガガガガ!!!!
「・・・・ッかッハ!!なんだ・・・と・・・」
―イオラ―と思われた光球は全てマホカンタを通り抜け若きバーンの肉体を食らいつくし、老バーンはそれを見る前に若きバーンに迫りながら再び光球を生み出し叩きつけながるのを、痛みを堪えながら二度も同じ手を食うかと若きバーンは両腕にフェニックスウィングを纏わせ光球を老バーンに叩き返そうとしたが、―マホカンタ系―のそれに反応する事無く、光球は若きバーンの両腕にダメージを与えたのだ！
「馬鹿な！何故イオラが・・・まさか!!」
「ふむ・・・・気が付くのが少し遅くは無いか若造殿？」
「貴様!!その武器は・・・」
「ふふその通りよ。余は肉体的には弱い・・・故にロン・ベルクがこの杖に―色々―としてくれたのよ。」
若きバーンはマホカンタ系の技が尽く効かぬ理由を察したのを、老バーンは察するのが遅くないかと挑発をしながら今度こそ闘気と―魔力を闘気に変換した刃―での乱打戦となった！
若きバーンが見抜いた通り、この新光魔の杖は、従来の杖とは違い、魔力をただ刃にするだけではなく、魔石で闘気に変換するという出鱈目な機能が追加されたのだ。
「魔力のままだったら、光球がもしかしたらマホカンタ系で跳ね返されたらつまらないだろう？」
だから闘気なら相手もイオラか他の魔法だと見誤って対処しようとして下手打たせることが出来たら儲けものだろうと・・・・ちょい悪な魔界の名工様の言葉であったが・・・本当に引っかかってくれたとは老バーンもありがたい。
最初に若きバーンを吹き飛ばしたみせてのも、杖を振り上げた瞬間に変換した闘気の粒子を固めずに幕として使い若きバーンを弾いたのだ。
そして乱打戦になりながらも、老バーンの表情は変わらず薄っすらと余裕の笑みを浮かべてひらりひらりと白いローブをはためか

せ・・・・まるで・・・・・

「大魔王槍舞いしてるみたい・・・・・・・」

戦いを厭うティファをも魅了する・・・・あれは怖いというより美しいものだと・・・互いに白い服を着て打ちあう二人の大魔王の姿に、ティファと周りは戦いだという事を知りながらも魅了された。

だが・・・・老バーンに余裕があるという訳では決してない。

若きバーンの一撃一撃はひじょうに重く!受け止めるも流すにしても、魔力がガリガリと削れていくのを感じ、時折体の近くで炸裂する技とも呼べないが圧倒的な闘気の一撃に体がもっていかれそうになり、其れだけでも己の体力が削られていくのが分かる。

しかし目の前の若きバーンにもプライドがあるように、老バーンもまた引けぬ矜持がある

子等が見ている、少年勇者が答えを持ち帰るまで時間を稼ぐと約定もしたのだ・・・

引けぬ、そして

決して苦しい顔を表に出すものかと、笑えと己を鼓舞する

そしてそれは若きバーンも同様であり、次第に冷静さを取り戻し全ての攻撃の一撃一撃に重みをもたせ老バーンの魔力を削っていく。

この者に!決して負けるものか!!余こそが!己こそが唯一の大魔王バーンなり!!

互いの矜持と誇りを賭けた激突は、まさに大魔王同士の戦いであった。

いしの積まれる世界：想いの重い

それは意地か誇りか

若きバーンの思考は老バーンの徴発を受けた時とは違い、最早冷静さを取り戻している。

今戦っている目の前の老大魔王が、やがてはスタミナ切れで自分に圧され倒れ伏すのが目に見えている。

笑みを浮かべて余裕を見せているが、こちらの放つ闘気の余波でそれなりにダメージが蓄積されているのも目の前にいるからこそ分かる・・・・にも拘らず目の前の老大魔王は自分から逃げる素振りは愚か・・・・そもそもが、あのような些細な・・・意味の分からない理由で自分と敵対する道を平然と選ぶ・・・・己の手で敵を倒し切るという戦いにおける至高の快感を得られる訳でもなく、やりすぎれば己に咎が課せられるというのに怖れる事も無く・・・・こ奴は・・・・・

「分からぬ!!!!!」

老大魔王の何もかもが・・・己に対して何故リスクを冒してまで敵対するのか、その理由もここまでする全ての事が分からない事が、次第に若きバーンにの思考に苛立ちを生じさせた。

「このような事をして其の方に何の益があるという!!??其の方が余の首を獲るならば！其の方の身は只では済むまい？

下手をすれば！その咎はお前が連れし異界の竜の騎士も同罪になろうというように!!!」

互いの手を止めずに打ち合う中、若きバーンは老バーンに問いただす。

なぜ己の益にもならぬ事に命を懸けているのか、下手をすれば連れてきた異界のダイどころか、大切だと言っていたあの三人にも前のりをしてきた者達全員にも何かしらの代償を求められ・・・・何もかもを毟り取られるかもしれないというのに・・・なのに！

目の前の老大魔王は自分の疑問を聞いても涼し気にしているのすらに腹が立つ!!

「この世界の事なぞ！貴様らには関わり無いというのに!!!」
この苛立ちはきっと、あの異界の忌々しい小娘から始まっているのだと若きバーンには分かっている。
この世界とは何の縁も所縁も・・・それどころか己達を理不尽に攫い！利用しようとした忌々しい神々がいるこの世界を守るが自然とばかりに・・・敵対しなければ！或いは早々にこちらに降れば見逃していた輩が・・・・この老大魔王の如くにあっさりと自分に牙を？いたのだ!!
「・・・・っく!!」
苛立ちに力を乗せた若きバーンのゼロ距離カラミティエンドを、顔面ギリギリで老バーンは杖の刃で受け止め、刃より―炎の鳥―カイザーフェニックスを生じさせ若きバーンの顔を焼き尽くし、ダメージよりも術者の手ではなく刃の部分からのカイザーフェニックスの出現に驚いた隙を老バーンが見逃す筈も無く、今度こそ石突の部分で若きバーンの顎に打ち付け振り上げ、無防備になった喉笛にそのまま石突きを打ち付け、そのまま光球を生じさせ叩きつけ吹き飛ばした！
若きバーンはあまりの痛みに呻く事も出来ずに、世界に生じて初めて無様に地に叩きつけられ転がされながら吹き飛ばされという屈辱を味わう・・・何故・・・
「き・・・さま!!この力を持ちながら!!何故天界と地上界に膝を折った!!何故力で奴等をねじ伏せなかった!!
それをすれば！貴様の力を以てして天界の神々共に魔界の瘴気とやらの浄化を命じることて可能であろうに!!!」
「・・・・・・」
「答えろ!!」
常人でなくとも、竜の騎士程度であったれば即死の攻撃にもすぐに体勢を立て直した若きバーンの問いに、老バーンが答えない事に若きバーンは苛立ちが増す。
その力を有しながら、何故弱き者達に対して己と対等だという―勘違い―をさせているのか若きバーンには理解に苦しむ。
弱きものを飼って愛でるのではない・・・・

強者であるのならば！何故竜の騎士達に膝を屈したのだと詰じる若きバーンの言葉に、老バーンは刃を水平に保ちながらもふっと笑った。
「強者か・・・・こんな余が、―広大な惑星―に住まう事も知らなんだ矮小の身たる余が強者とは・・・」
それは誰に対しての嗤いであったか・・・
世界の広大さどころか、生命の重さすら知らずにただ己の欲望のままに大戦を敢行し、魔界の神が守る筈の魔界の民すら顧みていない若きバーンに対してか、それともかつての自分か・・・
「・・・・惑星・・・・・なにを・・・」
「貴様は知っているか？今余等が立っているこの大地とても、この惑星にとってはほんの少しの地であることを？」
「なにを・・・何を言っているのだ貴様は!!」
「貴様が消そうとしているこの地が！如何に奇跡の如き事象の果てに生まれた地であるかを!!
余はそれを知らなんだ・・・いや・・知っていても、それでも死にゆく魔界を優先して消滅をさせていたやも知れぬが！誰の為でもなく!!己の自己満足の為に大戦を引き起こし消す必要のない大地を消し去り!!!のみならず己を育みし魔界に被害が及ぼうとも何ら顧みぬ者が大魔王を！ましてや魔界の神を名乗る事の方が!!!余にとっては不快である事この上ないわ!!!!」
それは凄まじい怒気であった。
距離がありながらも対峙している若きバーンの身に叩きつけられ肌が張り付くほどの闘気の入り混じった怒りであった。
老バーンの怒りは、なにも己達の宝の為だけでは決して無い。
老バーンにとって大戦を起こした理由は全て魔界の為、ひいてはそこに生きる魔界の民達の為であった。
死にゆく魔界を救うべく、ただそれのみを願って・・・・それが無ければきっと自分は、魔界の一領地を治め、もしかしたら妻を娶り子をなし一族を作りその領地の安寧のみを願って生きく道を歩いてたかもしれない・・・そんな時を夢見た時が、確かにあったのを・・・

それを捨てでも、おのが首を敵対した者達に差し出そうとしてまでも己が願ったの事は・・・・それを！滅びとは無縁の魔界に住んでいる身で!!己の力に酔いしれ高慢なる思い一つで生命を無に帰すこのような輩が!!!

「貴様は人間は強者を差別する醜き者だと言ったそうだが！広大な世界の中で営みを紡ぐ生命の尊さを知らず！美しさを知ろうともせず!!強者だ弱者だとしか馬鹿の一つ覚えの様に囀る口しか持たぬ者が！支え合い助け合いながら懸命に生きる者達が居る事も知ろうともせずに踏み躙るさまこそ醜い事この上ないと知れうつけが!!!」

叫びあげながら渾身のカラミティウォールを若きバーンに放ち、相殺される事を承知で撃つと同時に突っ込み、案の定直ぐに相殺された帳の向こうの若きバーンに打ち掛かる。

まるで愚かな事をしでかした若造を叱りつける老人の様な物言いに、ずっと強者として生きてきて、その様な事を面と向かって言われた事が無い若きバーンは叩きつけられる思いに、老バーンの言葉の意味が分からない。

何故・・・強者が弱者を思いやらねばならないのか・・・・

「弱き者など！強者に守られその後ろで囀り強者に阿るか影でこそこそと怯えてる以外の何が出来るというのだ!!」

老バーンの言葉を否定しようと、若きバーンは自分が知る・・・・それしか知らない事を吠え上げるが、老バーンにとっては其れこそ有象無象の言葉でしかなかった。

「その程度の見識しか持たぬ・・・だから！お前は―一人―か・・・・死神はお前のモノではなく、お前を支える影を使わねばならぬほどお前の周りには誰もおらぬか。」

「だからどうした！強者についてこられるものなどほぼなく!!王者は常に孤独・・・・」

「違う!!!」

世界の歴史を紐解けば、真の強者・英雄・天才は孤独になりがちであり、お前は一人だという老バーンの言葉を若きバーンはそれが当然だという言葉を、老バーンは力強く否定する。

「真に周りを大切にしようとすれば！自然人は付いてくる!!足りなければ力を！知恵を！優しさを与えてくれる!!生命は一人で生きているのではない!!―大勢の見知らぬ誰か―が!!!その誰かもまた支えられた先に生きているのだ!!!」

たった一人で生きているものなど要る筈がない。

世界の生命の循環にすら数多の精霊達が今この瞬間にも働いているのを、老バーンはもう知っている。

力無きものとこの若きバーンが言う者達が田畑を耕し、衣服が作られ、物が作られ自分がそれによって生かされているのを知っている。

自分から愛情を以て接せ無い者を！理解してもらおうとしない者がどうして受け入れられよう！

「だが!!現にあの若き竜の騎士が守らんとした人間どもが!!何をしたのか貴様も・・」

「そうだ・・・・人は・・・人だけではない、魔族もモンスターもそして精霊にも神も天族にも愚かで間違いを犯すものはいる。それをした余が言えた事ではないがな。」

いつしか打ち合いはやみ、距離を取って言葉の応酬が続く。

若きバーンは人間の弱さゆえの醜さを言うが、老バーンは其の過ちを犯すのは―全ての種族―がしてしまう事だと・・・まるでティファの様に言う。

己の欲と怖れと醜さを内包するのは、どの種族も・・・・自分も含めて悲しい事に同じなのだと・・それでも

「この広い世界には、優しい者達も確かに大勢いてくれるであろうよ。」

もしかしたらこの世界はそれが少数かも知れない・・・・だがそれでも・・・

「あの若き勇者は余の問いかけに―分からない―と答えた。」

嫌いだではなく分からないと。己を苛んだ者がいるというのにだ。

ならば

「もしもその少数であっても守るとあの若き勇者が答えを出した時、其の地上がもう無いとあっては滑稽な事この上なく困るのでな。」

生命の横溢の美しさを偉大さを自分は知っている。この世界にも生きているのは人間だけで決してない。
確かに自分達には何の縁も所縁も無い世界で、もしかしたら余計なお世話であるかも知れず、目の前の若きバーン同様に高慢で自己満足の為の行動でもあるかも知れない。
それでも、狭き世界しか知らず、知ろうともせずに魔界の為でもなんでもなく、己の自己満足の為だけに生命を消そうというこの愚か者の望む通りに釈然としない老バーンは杖の刃に―残りの魔力―と気力を込める。

大勢の者達に支えられて知った生命の尊さを、この世界の本当の意味での広大で素晴らしきものが果てなくある事を教えてもらった自分が、この若きバーンの望む通りにしてなるものかと己の矜恃を掲げて

いしの積まれる世界・最大の殺し文句

老大魔王の想いに、其の気高さに引きずり込まれかけた・・・・唯一を誇る自分がだ!!

その様な事・・・断じて!!

「認めぬ!!!」

若きバーンにとっては受け入れるべきでも・・・・受け入れたくも無い事だ!!

強者とは孤独の中であってもいかなる者達の中でも凛と立ち！常に圧し従わせて導くべき者であり!!断じて助けを求めましてそれを感謝するなぞ誇りは無いのかと・・・

若きバーンの否定する思いが老バーンの残り僅かな力を上回るが如く、技の応酬も何も無くなった拳と刃の闘気の打ち合いに、苦しくなろうとも老バーンも一歩もその場を動かず引かずに打ち合うのを、少年ポップ達は歯がゆそうにする！

「・・・まだだよ。」

若きバーンの攻撃も遂に老バーンの肩や腕に当たるようになった辺りから、飛ぶ出そうとするポップ達をティファが静かに押しとどめる。

両大魔王の大激突が始まってから体感的に数時間たったような濃密な時間がそこには流れていた。

互いの想いと誇りと、そして老バーンの長年積み重ねてきた・・・もしかしたらこの世界の大魔王でも得られなかった彼の人を魔界の神とまで言わしめられた気高き意思の言葉に、全員が魅了されたが故に長く感じたのかもしれないが、実際には十分と経っていないと、三十分用の砂時計を測っているティファの冷静な言葉に、弟子達と同じく彼の人を助けたいと出そうなこの世界のアバンを冷静にさせる。

先の若きバーンの蹂躙にも等しい強襲に、ノヴァ・ロン・ベルク・クロコダイン・ヒュンケルは異界のマトリフに手当てを受けても戦線離脱を告げられた。

挙げられた者達はまだ大丈夫だと言いかけたのを、内臓までダメー

ジがあり青年ポップも両腕が複雑ではないにしろ骨折は向こうの世界に戻っても一月は使えないと言われては無理が出来なかった。
　そして軽度であってもマァムも外れる様にマトリフに言われた時、当然直ぐには納得しなかったがティファに真剣に止められた。
「マァムさん、戦いが終わった後、貴女が何をしたいのかは私には分かりません。」
　其れでもいつか好いた人が出来て添い遂げた時に、激闘のせいで子が成せないなど悲しい目に遭わせる事を望む人が、この場にいると思いますか・・・・そのように言われてしまえば・・・・武闘家とはいえどもダイの様に圧倒的な闘気量があり防御が優れている訳ではなく、老師の様に大成し武神流の防御の奥義の様な一片の木の葉の様に避ける術もまだ身に着けていない自分では・・・・
　足手纏いだと、マァムははっきりと言われた気がした。
　自分の技量ではここまでだと・・・その先に行くには力が足りないのだと・・・泣きそうになるのを、みっともないと堪えかけるマァムの肩に、優しく温かい手がそっと置かれた。
　見上げれば目の前にいたのは
「俺さ・・・ぶるって逃げかけるたびにお前に横っ面張り倒された事思いだしてここまでこれたんだ。」
「・・・・ポップ？」
「ダイだけじゃなくてさ・・・そりゃおっさんやヒュンケルがいたからってのもあるけどそれだけじゃ俺は今ここにいなかったんだよ・・・・あの異界のバーン・・・・さんが言ったみたいにさ・・・・俺達全員がお互い支えあって来たからここまでこれたんだと思ってる。」
　けどよ、ティファさんの言う事も分かるんだというポップの言葉に、周りの男達全員が頷く。
「俺達男は闘うことは出来てもガキは産めねぇんだわ。」
「マァム・・・・俺も身を損ねて戦線離脱だが・・・・お前は俺達を情けないと罵るか？」
「マァムさん！戦い終わった後も生きていくんです!!勝たないといけ

ないけれどもこの後の事も大切なんです!!!」
「僕なんて偉そう言っててもあの中には最初から入れない・・・」
「お前さんに一番の防御力与えた意味考えてくれ。お前達は未来もあるんだろ?」
男にはどう逆立ちしてもできない事を成し遂げる未来掴むから、ここは譲ってくれと言う男達の言葉に、マァムはポロポロと涙を流す・・・足手纏いではない、未来を考えてくれているその優しさに・・・マァムは攻撃用に貯めて居た魔法力を、ノヴァを庇い全身に負った火傷用の薬を塗られ包帯をされた上からベホイミをかけ始める。
「ありがとうなマァム。」
「ううん・・・私の事考えてくれて防御力の高い魔甲をありがとう・・」
ロン・ベルクの想い溢れる魔甲は、心臓の部分だけではなく内臓系統周りも薄っすらとオリハルコンを伸ばして守るようにしていたのだ。
女は子を産む
ロン・ベルクは一昔前にいた職人気質であり戦士だろうが何であろうが、自然の掟をどこか尊重している節がある・・・・親父の様な漢であったのだ。
そして—回復—を見計らい、ダイが間に合わずとも老バーンと変わるか共闘するかで纏まった彼等だが、その回復が五分以上経とうとも訪れない。
その理由は自分達が受けたダメージは全て暗黒闘気が含まれており、それが含まれたダメージは通常の倍の時間か十分以上かかるというティファの言葉に、異界の者達が焦りが見え始めた頃、ティファは全員の位置よりも一歩前に出て飛び出さないようにと釘を刺す。
このまま、回復まで自分の大魔王が持ってはくれまいかと願っての事だが、ティファの祈りはいつだってかなえられた試しがない・・・・即ち均衡破れ若きバーンに軍配が傾き始めたのだ。
異界に知略に長け謀略戦の数々をこなした老獪な身であっても、体力が尽きればそれらは意味は無く、次第に老バーンの足がほんの少し

ずつ後退するのを、若きバーンは獰猛な笑みを浮かべて畳みかける！
「先程エラそうな事を言っておいてこの体たらくか!!」
　矢張り絆だ何だと言って―群れる者―は弱き者だからだと言い募る若きバーンの言葉を、老バーンは吠え上げて訂正したくとももう攻勢に回せる余力は無く、防戦一方になった時、ティファがそっと自分の世界のチウを抱き上げ何事かをひそりと吹き込み・・

「えええ!!!ティファさん何する気ですか!!!!」
　・・・・聞かされたチウは、若きバーンの気すらもそらしてしまう程の大声を上げ、其の隙を老バーンは見逃さず素早く距離を取りながら、ちらりとティファ達を見れば、チウを抱き上げティファが何か・・・声が聞こえない！結界まで張ってチウに何事かを指示している・・・・何をする気なのか・・・途轍もなく嫌な予感が老バーンを駆け巡り、それは正解であった。
「逃がすか!!!」
　大ネズミの声に驚き一瞬だけ猛打を止めた隙に逃げる老バーンを若きバーンが手刀の構えでカラミティエンドを撃ち、光魔の杖をへし折り余勢で老バーンを切り刻もうとした時、老バーンの姿がかき消えた！
　また移動魔法を使ったかと忌々し気に小娘達のいる方を見れば、案の定老大魔王が小娘の横にいた！
「大魔王の誇りを賭けた戦いに邪魔を入れるか小娘!!!」
　忌々しいが、あの男もまた己の信念の下に大望を以て道を歩く大魔王だと若きバーンが老バーンを、決着がつきかけたのを逃がしたティファを咎める言葉に、ティファは応じる事無くすぐに立ち上がり戦場に出ようとした老バーンの上にチウをしっかりと置いて一言。
「チウ君！大魔王に死んでほしくなかったら!!さっきの一言今すぐ言って!!!」
　大魔王に一言いう様にチウに言いながら、自身はスタスタと追撃してきそうな若きバーンと自分達が居た場所の丁度間に歩を進めて立ち止まる中・・・・チウは先程ティファに言われた人事を言っていい

のか物凄く悩みなんだが・・・・ティファの言う通りこのままでバーンさんが死んでしまうと意を決し、立ち上がろうとした大魔王の襟首掴みながら物凄く真剣な・・・・それこそ決死の言葉を大魔王の驚いた顔をしっかりと見ながら一言!!

「これ以上バーンさんが戦うって言うんなら!!この戦いに勝っても僕等は帰らないでこの世界の子供になりますからね!!!!」

ね～!!!!

ね～!!!!

・・・・それは岩場は周囲の岩場や山々に反響し木霊化した語尾の如く・・・・この世界の者達は何を言っているんだこいつは?そんな言葉脅しにもならないだろうと若きバーンのみならず、言っては何だが少年ポップ達もちょっとこの子供じみた言葉はどうなんだと思ったが!言われたバーンの表情を見て誰もが愕然とした・・・・・・あんたなんでそこまで絶望に突き落とされたような顔をしているんだと言いたくなるほどに!老バーンの顔は呆けてしまい・・・事態は其れだけで済むはずがなかった!!

「この馬鹿娘!!!!」

「お前は何て事をチウにさせてんだよティファ!!!!」

「チウ君・・・・・ティファ!!!!貴女チウ君に何てこと言わせたのですか!」

「足止めするにしてもこれひでぇぞ嬢ちゃん!!!」

「お前後できっちし説教受ける覚悟しておけよ馬鹿妹!!!!」

呆けてしまったバーンの代わりに、ラーハルト・ロン・ベルク・アバン・マトリフにポップは、実行犯よりも首謀者に対して怒涛の怒りの言葉を背中に浴びながらも、その様子に青褪めるチウと違って本人はケロリとしている。

「そこまで言わないと止まらないでしょう大魔王は?」

スタミナ切れだからと言って譲る気ゼロなんだから仕方が無いという言い分は・・・物凄くあるがどうしてティファのする事はこうも悪辣なのだと・・・悪意とは無縁なのにこうと決めて実行する事の大半が悪辣なのは何故なんだと向こうの世界の野郎ども一同は嘆きた

くなる中・・・・・・もっとすごい事態が直ぐに起きた・・・・高速ルーラで誰か来て！誰だとその場一同・・・否。ティファ以外の全員が身構えてみれば!!怒りの形相の―ドールさん―が来た!!

「チウ君!!!」

呆けてしまっている主を見てもうっちゃり！手前でフルブレーキをかけトベルーラに切り替えふわりと着地しながらチウを抱き上げ鬼の形相で吠え上げた!!

「チウ君！君何てこと言っちゃてるの!!そんな悪い言葉どこで覚えてきたの!!!」

今すぐ忘れなさいという・・・・・なんでチウの言葉が遠くでキルバーン相手に戦っていたお前に聞こえてしかも来ているんだという・・・・若きバーンが真っ当な突っ込みをしたのを！そんなことぐらい常識だとドールが馬鹿らしいと一蹴しやがった！

「大好きなチウ君の声何て百キロ先でも拾えて当たり前でしょう！そんな事よりもチウ君!!バーン様に直ぐに・・・・」

「あぶねぇ!!!」

非常識な言葉を述べて、酷い事をバーン様に言うもんじゃないよと言いかけたキルの首近くに、空間が開くと共に大鎌が迫る。

誰もが警告を発すればティファが結界で守ると思ったが！ティファはそんなそぶりを見せない中―ドール―の方が動いた。

「・・・・・いい加減に飽きたな・・・」

それは刹那の動きであった。

チウをそっと降ろしながら―ドール―と呼ばれた男は―普段の姿―の戻りながら自身も大鎌を取り出し振い、キルバーンの大鎌に合わせ空間から死神を引きずり出す。

ドールと呼ばれた褐色肌の魔族の男の衣装が、みるみる見覚えのある道化の衣装に変わるのに驚愕したのはなにも少年ポップ達だけではなく！死神すらもが驚きを隠せなかった。

整った顔が出現する―笑いの仮面―に覆われているのを見続けるという愚を犯しながらも目が離せなかった・・・衣装がダサい・・・・あの忌々しい青年魔法使いの言葉はこれであったのかと・・・目の前

の死神の色は、漆黒は同じであれども、他は赤・・・それも黒を下地に塗られたような美しい艶やかな赤は、真の死神の様でぶつかった赤い瞳と良く似合う。
仕舞だよ

優しい人であったドールさんは・・・・優美で優雅で物腰の柔らかい、自分達の疲れや悩みを親身になって聞いてくれる優しい大人であった・・・だが・・・今目の前にいるのは違う人と、少年ポップ達の目には映った。
無慈悲に大鎌を振い、キルバーンの四肢と首まで斬り落とした大鎌をくるりと回す様はまさに、死神キルバーンその人なのだから・・・

キルとしては、人形共々本体であるピロロもう少し引付けこの戦場から遠ざけ終わった頃合いにピロロ諸共にを考えていたのだが・・・・とんでもない言葉が耳に飛び込み計画なぞ吹っ飛んだ！
バラバラにした人形はすぐさま空間に入れられた・・・ピロロの仕業の様だが終わると同時にバキンと―空間が封鎖された音―が響いた。
しかし空気の流れや木の葉が風に舞い山の方まで言ったのが見え、どうやら現実空間はそのままに、自分達が使う亜空間だけを閉鎖したのを確認したキルは、ティファが死神対策をしたのを知ると同時に直ぐに大鎌を仕舞ってチウをまた抱き上げ先程の言葉を問いただそうとしたのをティファが待ったをかけた。
「キル！チウ君にその言葉言わせたの私です。」
その一言で十分でしょうと言わんばかりに後は若きバーンを警戒するティファの言葉に、キルはすぐさま思い至りチウを抱き上げたまま殺気まみれの視線でティファを射殺さんばかりに睨みつけ呪いの言葉を吐いた。
「本当に・・・・偶にね？君の手足の腱を全て斬り落として回復しない体にして、バーン様自ら張られた幾十の結界を施したパレスの奥部屋に閉じ込めたほうが―全員―が幸せになるんじゃないかと思う時が

あるんだよ?」
善きことと同じかそれ以上に、悪辣で自分を使い潰す事を辞められないティファを見させられて来たキルは、ロン・ベルクと同じ事を思う。
大戦からずっと、そう思う時が多々あり、これほどの言葉でもって主を止めたからにはこの娘はきっと―碌でもない事―しかしないだろうと当たりをつけて。
周囲が、それこそキルが大好きなチウをしてガタガタと震わせるほどの殺気と情念にも、ドールが実はあちらの世界のキルバーンだと分かった驚きすらも吹き払う程の妄執にも似た想いにも、当のティファはからりと笑う。
「そのくらいの言葉でも私が言っても大魔王には通じないでしょう。」
もっとすごい言葉を自分は大魔王に投げつけてきたのだからと笑うティファに、この小娘は一体あの老大魔王に何を言って来たのだと、少々どころか多分に気になる言葉をさらりと言った!
普段とっても良い子のチウ君でないと聞かない文句なのですと・・・・物凄く悪辣な笑みを浮かべて言い切るこの小娘は何だ・・・・確かにティファの思惑通り、チウが言った事で子供の児戯にも等しい言葉が、大魔王の行動どころか思考すらも含めた全ての事を停止させた・・・まさに最大の殺し文句となったのだから・・・・

この娘はもしやして真っ先に消した方がよかった危険物だろうか
と若きバーンが思う程に

意思の積まれる世界・大層な者ではありませんよ私は

勇者不在の間のわずかな時間の間に、―大魔王対大魔王―の第二戦が旧地底魔城後の地上部分において勃発をした！

とは言え若きバーンの相手は老バーンが回復を果たしたのではなく、相手をしているのは―色白ではなく雪石膏の肌に白銀の髪―をたなびかせ、金に瞳で若きバーンの猛攻を見据えてひらりひらりと躱しながらここぞというところで若きバーンの背中や右腰などにちょこまかとダメージを与えているティファであった。

少しばかり遡った地底魔城後では、ティファの悪辣なるやり方による強制的な相手交代に、向こうの世界の（チウは除く）野郎ども一同による、ティファの事を本気でどうにかしそうなほどの獰猛な気配にさしものこの世界の者達は（若きバーンも含む）、ティファという少女は一体どういう者なのだと改めて疑問を・・・・物凄くだが今更持ち始めたのだ。

初対面から散々翻弄された若きバーンや、己が仕掛けた茶番の片棒担いでもらったはずなのにちゃぶ台が返しされたアバンも、あらゆる手を使って助けられた少年ポップ達も全員が普段の穏やかで優しい気配に完全に忘れる程に・・・・奇妙であった。

そこまで印象に残ろ事をされながらも、いざ本人を前にすればその様な事を本当にしたのだろうかと言う物凄く違和感と言おうか記憶違いでも熾しているのだろうかと言う程に、ティファという少女からは―何も―感じない・・・・今もこうして自分に直接敵対すると言われても、お前に何が出来るのだという感想しか若きバーンは持てずにいた。

少年ダイやポップ達であろうとも、其れなりに力や危害を感じたというのに、目の前でほんのりと笑っている少女はまるで・・・・何も知らない人間の童の様で・・・・

「一体お前に何が出来るというのだ異界の少女よ。」

何が出来る・・・・それこそこの世界に来て丸ごと勇者一行を逃がすは、ミストバーンが実行した大規模人質作戦潰されて、五日間も砦

を丸ごと隠されていたという魔王軍からすれば忌々しい事の数々をしてのけた・・・・もしかしたら勇者達を逃がした二日目に起きたパレスでの奇妙な惨事にも関わっているかもしれないのを若きバーンはきちんと覚えているのだが・・・・

「そもそもお前に戦う力があるというのか？」

それこそ吹けば飛びそうで華奢で・・・・闘志は感じられるがそれに伴う―力―を何も感じない・・・・・それこそ魔界の名工達を手当している女武闘家の方にこそ力を感じるくらいだという若きバーンの言葉に、ティファは大丈夫ですよとにっこりと笑って保証した。

「私こう見えても向こうの世界で今でもきちんと存命している―超一流魔王・ハドラー――と、ガチンコバトルして引き分けてきた実績きちんとあります。」

・・・・・・は？

「彼の魔王が超魔生物の力十全に振るっての戦闘で、一対一の真剣勝負して首跳ね飛ばそうと頑張ったのですが・・・・諸事情で断念しましたがそれは兎も角・・・」

貴方を倒すのは無理でも時間稼ぎ位はきちんとできますよと言う言葉に、若きバーンはティファの言葉に偽りを見つけられず、口調こそ軽いが真剣な瞳に嘘は無いと知った。

「貴様にそこそこの力があると・・・・成程、考えてみればこの世界に来た初日に貴様は大鎌で襲いしキルバーンをあっさりと撃退していたな。」

その時の事を思い出し見れば、目の前の少女はあっさりと・・・・それこそ達人が木の棒を持ってきた童を制したような容易さで味方を模戦慄させる実力の持ち主たるの死神を蹴り飛ばして拘束していたのが思い出される。

だがそれでも

「勇者を待つ間の大魔王同士の矜恃のぶつかり合いに!!―その程度の力―しか持たぬ汝では格が足りぬにもほどがあるわ!!」

折角相手も矢張り異界で大魔王を名乗る者だと若きバーンは老

バーンを認め始めていただけに、―少々の力―をひけらかす小娘が変わるなどと言われれば不快でしかないのを、聞いて柳眉を上げ始めた周りと違い、罵られた当人はからりと笑って問いかけてきた。
「私が他界の竜の騎士の娘であっても不足ですか？」
　其れでは格が足りないかと言うティファの問いに、全く足りんと若きバーンは一蹴する。
「理により余と最後まで命をかけてやり合えぬ者であるならば、せめて大魔王級の相手でなければまったくもって足りんわ！」
　最期までとことんやり合えない―前哨戦―に付き合ってやるのだから、せめてそれほどの位が無ければ、付き合ってやる気にもならんという若きバーンの言葉に・・・にんまりとティファは笑った・・・・笑ったのだ・・・
「成程成程！相手が他界の大魔王であればまだお付き合いしていただける余地があると！貴方はそうおっしゃるのですね!?その言葉に二言はありますまいなこの世界の大魔王もどき殿!!??」
「おいティ!!」
「まさか前言撤回しませんよね！
　この世界の若き魔界の神大魔王バーン!!!!」
　ティファの言葉に潜む何かに気が付いたポップが、それらに待ったをかけようとしたのをティファの言葉の嵐に、若きバーンは目の前の小娘が調子に乗ると苛立ち叫びあげた！
「ああそうだ！相手が―大魔王―であれば余に否やは無い!!あの情けない勇者が戻る保証なぞ無いに等しいが!!異界の大魔王の持て成しくらいしてやろうではないか!!」
「・・・・・ふっふ・・・・・ふふふ・・・はっはっはっ！では―他界の大魔王―を持て成してもらいましょうこの世界の大魔王殿!!」
　前言撤回するなと言いながら！―嗤う―ティファの小さな体から白い闘気が渦を巻いて立ち上り！それは次第に―灰色―の闘気に変わりやがて・・・
「ティファさん!!」
「駄目だよチウ君!!あれに近づいたら君は死ぬ・・・・あの子は!!」

「ティファ!!・・・・か・・・・・野郎!!!!!」
「あの・・・・馬鹿者が!!!」
うねりを上げて立ち上る膨大な闘気は、天に達し上昇気流迄もを巻き起こ上空を覆っていた厚手の雲を吹き飛ばし太陽が姿を見せるのを、この世界の者達はあの小柄な少女のどこにこれほどまでの膨大な闘気が隠されていたのだと驚愕するのを、チウがティファのしようとする事を止めようとし、キルはそんなチウに危険だと抱き留めながら再び闘気の渦の中心にいるティファを射殺しそうに見つめ、青年ポップ達は怒りを迸らせ、チウの言葉に呆けていた老バーンも正気に戻り、ティファの狙いに行きつき怒りに震えた!!
・・・・なぜあの者はいつも・・・・いつであっても!!
その嘆きを、ティファだとて感じないわけではない。
おそらく自分の大魔王達はもう自分に戦いに無縁でいて欲しいと願っていたのを知らない訳ではない。
それでも自分は・・・

―少し遡った時―

ねぇ
ん？
ねぇ・・・・ねぇ！聞こえてるよね―中の私!!―
・・・・・・は？
やっと答えてくれた！もしかして私の勘違いだったら恥ずかしいなって思い始めてたんだけど、―やっぱり―私の中には―もう一人―いたんだ。

それは大魔王同士の激突が思いのぶつけ合いになる少し前に、ティファは外よりも―己の中―に目と意識を向けて呼びかけ、外の世界に大魔王が来て気高き魂と思いを輝かせているのに魅入っていた―クロファ―は、外の主人格の呼びかけに驚いて返事をしてしまい臍を噛んだ・・・・―ティファ―が死ぬまで知られたくなかったのだが・・・仕方がない！
「何の用？」
「うわ！中の人ってこういう感じの人だったのか・・・って・・失礼だよねいきなり声かけたの私なのに・・」
「いい、で？―忙しい身―で私の正体さぐりっこしたいわけじゃないでしょう？私の事何時から何てまだるっこしいやり取り要らないのも分かってるでしょ？」
お互いの―合理主義―は同じであり、ティファはそこに命の遣り取りを入れる事を厭い、クロファがその部分を受け入れて存在しているだけの話であり、つまるところ根は一緒なのだから
「あのね、このままだと大魔王がじり貧で押されるの分かってるでしょ？でもダイ君とダイ兄もう少しかかりそうなんだ。」
「・・・・それで？」
「うん―力―貸してほしい。」
「・・・・あんた―大魔王の力―十全に使いたいの？」
「そうそれ！・・・・前回はこの世界の力との接続とか力を回すだけに―一部―使っただけだけど・・―戦う力―も一緒に・・・・・駄目か

な？」
　近頃自分の思考回路と―やっている事―との差異に、敏いティファは気が付いていた。
　きっとこの世界のハドラーを助けるのであれば物凄い無茶をして十全に助け、何なら兄達の力も借りてこの世界のダイ達にも理解してもらって、共闘をと無茶事言っている筈なのにそのハドラー達を保護してその後の経緯や昨日筒に入れてをきちんと保管したという―記憶―がある事でティファは確信をした・・・・それまでにもあった小さな違和感はきっと―もう一人の自分―に相当する誰かがいる・・・二重人格とか分裂人格ではなく、きっと大魔王が自分に飲ませた暗黒闘気が自分の大魔王の魂と結びついて肉体の無い新たな生命が自分の中に生じてしまった、新しい生命と自分は同居しているのだという事に、ティファは別段驚かなかった。
　元々がもう自分の肉体自体が、―竜の騎士の子共で肉体の見た目は人間で中身と血は魔族でその魂は大魔王―という、己でも奇妙だと思えるほどの物なのだから、別の自分に近しい思考を持った生命がいても今更であり、クロファが危惧したような排除や取り込もうという気はティファには全くない。
　其れよりも肉体を共有していると認識しており、―闘う力―はそちらが管理していそうだから貸してほしいと頼み事も迄したのを、当然クロファも二や思考でその考えに至り―貸出許可―を出した。
「私の意識もだいぶ混ざるけれどもいいの？」
「ふふ・・・元々は一緒だったんでしょ？」
　数年前には確かにあった、敵対勢力に対する怒りなどが消えたのはきっとそれすらも別たれて持って行ってくれたからでしょうと言うティファの言葉に、クロファは沈黙を以て応えたのw、ティファは笑って提案をする。
「私はティファだけど、あなたのお名前は―次回―聞くね。」
「・・・・そう・・・だったら勝たないといけないわね。」
「そうだよ。―私達はいつも通りの事―をして、この世界の勇者達のサポートするだけだよ。」

にっこりと―いつも通りにする―のだという主人格に、クロファも笑う。
その通り、いつも通りをしてでも、自分達が支えたいと願った者達を勝たせる事こそが自分達の存在意義なのだから。
そしてティファとクロファが―結合―する凄まじい力の誕生によって生じた―暗黒闘気の渦―が、周りを吹き飛ばす程のエネルギーを散らせた時、―ソレ―は泰然と立っていた。
水色の詰め襟スカートに白いシルクの長ズボンに合わせた柔らかい茶色の川のハーフブーツはそのままに、少女の姿は一変していた。
白い肌はさらに白い雪石膏となり・・・なのに耳は人間のまま丸く、半魔ではない証拠に顔に黒い文様は無く、白銀の髪とそして魔族の証である金色の瞳は若きバーンと老バーンと揃いであり・・・・何よりもその気配が物語っていた！
「申し訳ありません。」
一変した少女に唖然としたこの世界の者達相手に、少女は謝した。
実は自分はこの世界に来た時の名乗りに―一つだけ―入れていなかった名乗りがあった事を
「改めて名乗りましょう。
私は竜の騎士バラン、故アルキード国王女ソアラが娘、勇者ダイの妹で一行の料理人を務めていた―大魔王の魂を持つ―ティファです。」
どこまでも人を食ったような・・・それでいて当人は大真面目に名乗るのにいち早く反応したのが・・・・・
「ふざけるなよ・・・・・小娘!!!」
この世界の若きバーンが、腹に据えかねた様にティファに打ち掛かりそして戦端が再び開かれた！
「何だというのだ貴様は！まるで・・・・まるで大魔王というくらいを蔑ろにするような忌々しい小娘が!!!」
先程の老バーンの時よりも、ティファの方にこそ若きバーンは怒りを募らせる・・・綺麗事一つでこの世界に介入し、そして自分達を翻弄してきた娘が実は大魔王でしたと・・まるで、大魔王という位が子

供の玩具にされた気がしたのだ若きバーンは・・・この馬鹿馬鹿しい不愉快な目の前に―ナニカ―を引きちぎらんとする若きバーンの手刀を中心とした攻撃に、白いティファは柳に風とばかりに柔らかくよけそして若きバーンとの体格差を利用して動きによって生じる若きバーンの視界の死角に潜り込みダメージを当て、それがむるであれば結界を小さ作り蹴り上げ難を逃れ距離を取り、或いは当たりそうになるのを硬い結界を弾力ある者に変え正面からではなく斜めに展開して威力を逃させる・・・まさに時間稼ぎの戦い方をティファ―達―は展開しているのが、若きバーンをさらに怒らせる。

「・・・・待っているのかあの小僧を・・」

まるで勇者ダイは必ず戻ると言わんばかりの自信ありげな態度に対し、若きバーンは自分にはない絆に・・・・まるで嫉妬するような苛立ちが生じる。

そして距離を置かれたので問いただしてみれば

「戻ってきますよダイ君は。」

答えの内容は分からなくとも、きっと悪い事にはならないと思いますよという笑顔のティファの言葉に、バーンはその言葉にも苛立つ!!

「それはお前達代々の竜の騎士達が掲げてきた正義の為に戻ってくるというのか!!」

「おや?」

先程と違い、何かに苛立っている若きバーンの姿に戸惑い変な声を上げたティファの声に、其れすらも自分を挑発するかと受け取った若きバーンは激昂した!

数千年間見続けて来た勇者やら竜の騎士達は皆一様に生命を守る為だの弱き者達の為にと―正義―とやらを掲げて数多の命を屠ってきた・・・・中身は兎も角!手段は己達と変わらず最後は大勢の敵対者たちを殺しているくせに正義の名の下に相手を悪だと断じる厚顔無恥にも等しいと若きバーンは―正義を掲げた者達―を厭いつくして来た・・・・この小娘の様に!!

「正義なぞくだらん!どのように言い繕ったところで!!ただ自分達の死が怖ろしく!!それでも数多の命を奪う罪業に目を背ける偽善者共

が!!!欲望を口にし振る舞う我等を蔑む高邁なる者が!!!」
お綺麗な小娘の何もかもを否定した・・・・そう否定したはずなのに・・・
「正義ですか・・・・確かに―正義の戦い―なぞ滅多に無い事でして、私もそこには賛同します。」
・・・・・その当の本人が―正義の戦い―を否定したのだ・・・
「な・・・・に?」
問うた若きバーンも、そして周りもティファが何を言っているのだという目を向ける・・だってティファはその正義を掲げる―勇者の妹で一行の料理人―をしていたのではないのかと・・・・だが
「戦いなぞは大半が―生存競争―です。
私達の大戦はまさにそれでした・・・・この世界の貴方のように、身勝手でやらずとも好い大量虐殺起こすような最低な事を止めのは確かに―この世界―においては正しい義だと思いますが・・・」
強者の理屈だとか、勝者側理論だと言われがちな者であるが・・・・この場合は世界の者達の大量の生命が脅かされているのだから数少ない・・・・・それこそ超が付く程のレアケースで、―大量虐殺者を止めるのは正しい仕儀―になるのだが
「私自身正義を掲げて戦おうというつもりは微塵もありませんよ。
正義の為に闘おうというつもりもありません・・・・よく―相手―する方に正義面するなだの正義の味方になったつもりかなどと言われることがありましたが・・」
主に魔王軍の某お爺ちゃんや・・・遡れば大戦前にお世話になった村襲った盗賊たちを顔かくしてのした時とかに言われたのだが・・・
「正義とやらの為に闘っているのではなく、―たまたま嫌いな相手―に悪党と呼ばれる人が多かった。ただそれだけの話です。」
何故なら自分は好きだったから・・・・大戦時からずっと大魔王達が好きだった、相手の超一流魔王様を尊敬すらしていたのだ。
それでも、好きで尊敬した相手であっても
「戦ったはそこが互いの生存競争を賭けた戦場故に。」

そこには相手が積年溜め込んでいた真剣な想いと言葉を受けとめながらも、何の迷いも無い―透明な笑み―を浮かべ己の今までの軌跡と思いをを何の躊躇いも無く明かす少女がいて、そして言い放たれた
だから、正義の使徒などという大層な者ではありませんよ私は

ただ、自分が信じたあの子達を信じて闘う者なのだと
それこそがティファの強みであった
何にも寄らない自分の中で定めた鉄の約定
ー義ーではなく、まして大勢の定めたものでもなく、自分自身にしか通じないたった一人の決めた事であっても貫くティファは、ここが他界であろうともまして若きバーンの言葉にも迷いを覚える事なく戦いが続ける
そしてティファは今は一人では無い
己の中にいる者もいるのだから二人だと心強く想いながら前に進む
若き勇者の帰る場所を守る為に

いしの積まれる世界・異界の大魔王とはどいつもこいつも!!

この世界の大魔王と―異界の大魔王―の奇妙な戦闘に、少年ポップ達は声も出なかった・・

それは先程あの少女が実は異界の大魔王であった事から始まった衝撃はそれだけでは済まなかった!

あの少女の優しさを知るが故に、この世界の者達は自分達のダイの真の実力を怖れられその事に心が傷つけられたのを知るだけに、正体などではない、あの少女が今まで自分達の為にどれほどの事をしてきてくれたのだと思い起し、受けた衝撃をやり過ごす事に辛うじて成功したところに・・・・選りにも寄って勇者の妹が正義を否定したのだ!

正義の心を一つにして巨大な悪を討つ・・・・それこそが勇者一行の本分では無いのだろうか?少なくとも自分達の師のアバンは、常に心に正義を以て、他者を慈しみ弱者を守り敵が現れ襲われた時に守る為に強くあれと・・・・そう教えてくれた自分達の師を見てみれば師の顔もまた顔色が悪く、大魔王同士の戦いを食い入るように見続けている。

この世界のアバンもまた、大魔王ティファの言葉に怖れを抱く。

正義を否定してはいなかった、だがしかし!正義を肯定もしなかったあの少女は―大勢―が怖ろしくないのだろうか!?

正義とは時に集団の意思が集い、―その想いが正しい事―ではなくなり―その集団にとって正しい事―となる事がままあるのをアバンは嫌というほど知っている。

だが自分が教えてきた者達は未だ年若く、―子供―に教えるには薄汚れた考えであり、卒業の証を渡したとはいえども子供達がゆくゆくは大きくなり世界と世間を知り始めた時に教えるつもりであった。

その頃に弟子達も其れなりに心も精神も育ち、意思もしっかりとしているのをも計らってと考えていたことを、たった齢十五の娘が体得

している事こそが異常であり、それでも少女は世界に失望していないという・・・・何故・・・・あの少女はそこまで己の信念を貫けるのか・・・分らない、判らない、解らない・・・・あの少女の何もかもが・・・・

アバンは人生において初めて知識・知恵・知略を以てしても分からない―モノ―に出会い、畏敬の念という言葉の意味を知らしめられていた。

神の存在に触れる今回の一連の件を知っているだけに、神とてもそのような者かと失望しただけに、たった一つの想いだけで己ら苦しめた世界で命を懸ける・・・・そのような者が、確かに目の前にいてまさに命を削るように戦っているのだ・・・正義でも大儀でも、この世界に生きる全てを守るという理由ではなく、心を再び折られた勇者の帰還を信じて

「さっさと諦めたらどうだ忌々しい小娘よ!!最早あの小僧は戻らんぞ!!!!」

「ふん!そんな事!最後の最後まで分からないでしょうがぼんくら大魔王もどき殿!!」

勇者は戻らぬという若きバーンに、ティファは戻ると信じている事を放棄しようとしない事に、若きバーンは―ナニか―に苛立ちを覚えてティファに対する攻勢をさらに強めていく。

ティファの周りを高速で動き、四方にカラミティウォールを放てばティファは―裏技―を使った・・・即ち―カンニング―を堂々と使ったのだ。

あれは極めて闘気に近い攻撃・・・ダイの大冒険ファンなら絶対に知っているあの名シーンの再現である!

即ち・・・

ティファは迫りくる四方の災厄の壁が迫ろうともラックで逃げる事をせずに、老バーンがラドを使おうとしたその時、ティファの暗黒闘気が円形の柱のように静かに立ち上りティファをすっぽりと覆い

つくし、何事かとそれこそ若きバーンも動かなかったティファに訝しんでいたが、すぐそのあとに起きた事象に青褪めた・・・災厄の壁はいかなる者達をも踏みつぶした後自然消滅するか、巨大な闘気や発生している床を崩すかの攻撃によってのみ崩れてきていたが・・・・すり抜けたのだ！ティファを傷一つつけるそぶりや衝撃音も無く、スッと四つの動く壁同士が円形の柱の暗黒闘気を起点として・・・そしてすり抜けた壁の背後に、円形の暗黒闘気の柱は四つの衝撃はとなり壁の背後から襲い掛かり掻き消した・・・それをしてのけた異界の少女は悠然と立っていた。

まるで何もしていなかったが如く・・・そして・・・

「おや？あれで貴方の攻撃は品切れですか？」

若きバーンはあまりの出来事に唖然としてしまった・・・・老体の時よりも思考が逸りそして乱れやすくなるのは矢張り若い肉体に引っ張られている、そこが好機だとティファは迷いなく構え

「ならばこちらから!!!」

乱れた思考を冷静にさせない為に、自ら撃って出るという宣言に、若きバーンこそが内心でほくそ笑む。

何のつもりかは知らないが、あのような華奢な者の攻撃なぞいかほどの物か。

確かにティファの闘気量は凄まじいようだが、剣で再び打ち掛かろうとも若きバーンは負けるつもりが微塵も無かった。

確かにカラミティウォールの四連撃をあのように消されたことに衝撃は受けたが、ティファの宣言により若きバーンは、矢張り底の浅い娘だとかえって冷静さを取り戻し、―天地魔闘―の構えの用意として両腕を正眼に構えた。

あれは何の構えだと、青年ポップ達は自分達の大魔王を見るが、返された答えは芳しいものではなかった。

「済まぬが、余は若き肉体の力を十全に発揮した事は無く・・・・光魔の杖の様に技を作った事は無いのだ・・・」

老バーンの有していた若き肉体は・・・言ってしまえば黒の核晶のような途轍もないエネルギーが一撃一撃に込められてしまう・・・・

なんとも使い勝手の悪い肉体であった。
振えば確かに敵対勢力は一撃で屠れるが！自分が愛して守りたい魔界の大地が傷つき、それは年を経るたびに酷くなり・・・
「余自身が最後に力を振った時・・・目の前の巨大な山が消え失せたのだ・・・」
山と言ってもそこは最早瘴気が色濃い大地と化しかけ、岩山ではあったのだが、老バーンにとっては母なる大地の象徴のように思っていた山脈を消したのをきっかけに本気でこの肉体を如何にかせねばと寝食を忘れて辿り着いたのが己の肉体を分離し、凍れる時の秘術を見つけ出し、そして秘呪を施した肉体を安全に管理する方法に悩んでいたそんな時に奇跡のように若き肉体を管理しかつ動かせられる―暗黒闘気の集合体―のミストと出会えたのが僥倖であったとしみじみと言い・・・お爺ちゃん・・・昔語りは後にしてくださいという・・・さしもの良い子チウも言いたげな目にハッとし、つまり老バーンが言いたかったのは、自分は若きバーンの技を何も知らないのだと言いたかった言葉に・・一同がっくりとした!!
其れではティファの良いアドバイス送れないのかと物凄く落ち込みかけ・・・若きバーンがプルプルと震えている事に気が付いたのはティファ只一人であり・・・よせばいいのにティファはどうしましたかと無邪気に聞いた・・・聞いてしまったのだ・・・
「・・・お前達は・・・どこまで出鱈目な存在なのだ!!!」
自分の一撃で山ではなく魔界の巨大な山を消した・・・魔界の巨大な山と言えば!!地上世界で高いと言わるギルドメイン山脈の倍はある筈!!
「それを貴様が消したというか老大魔王!!!」
そんな出鱈目誰が信じる！技を開発できなかったのならば正直に言えという・・・理不尽の様な・・・其の方が真っ当な理由だと言えそうな若きバーンの言葉に、老大魔王様は首を傾げたのだ!!
「そんな事の為に嘘を言って何になる？」
お前のその技を知らないと言えばいいだけではないかという小首

を傾げてのお言葉に・・一同戦慄と共に理解させらた!!
この老大魔王様本当にギルドメインの倍の山脈を本当に消し飛ばしやがったのだと・・・もうやだ・・・どうして俺達このお人に勝てたのだろうかと・・・・あれこそ奇跡だろうというポップは大好きなのは間違いないのだが・・・色々と人外過ぎる老大魔王様に涙を流したくなるのを、自分の師達が優しく肩を叩いてくれており、顔を上げて見れば、理不尽を受けても強く生きなさいという慈愛の籠った表情に青年ポップは全て悟った・・・この人はこういう人なのだと認識してさっさと受け入れたほうが楽になるのだと・・・ショセイジュツを獲得したのだった・・・
そして若きバーンも・・・・自分の心の平安の為にも、あれはもう放っておいた方がよいと判断をした・・・・若きバーンも今まで無縁であったショセイジュツを獲得した・・・今までは自分以上の者にも事象にも出会っておらず、何千年と生きてきた若きバーンもショセイジュツが必要になった瞬間であった・・・・であれば!このバカげた小娘のする事にいちいち反応せずに、起きた事象にだけ対応すればよいのだと学習しようとした時、ティファは―ニンマリ―と笑って突っ込んできた!!
それも・・・動いたと思えば目の前に姿は見えず、白い軌跡だけが網膜に映った瞬間ゾワリと背筋に寒気が奔りただ手刀を二振りしたが空を切り裂いたのみであり!首筋に痛みを覚え直ぐに横に飛び退れば、自分が立っていた場所にティファが立っており、左手の指先に青い血が・・・自分の首筋を切った時の血がついていた!
「大魔王が貴方の技を知らなくとも問題はありません。」
何故なら構えて待とうという事は何かしらのカウンター技だと考えればいいのだからと、指先についた青い血を振り払いながら目の前の少女は事も無げに言う。
其れよりも早く動けばいいのだから
「ふむ・・・・それに剣を使って余の首を落とそうと?」
ティファの言葉に、二度もその手が通用させるかという若きバーンの言葉に、ティファはにっこりと笑って答えた。

「貴方に剣は使いませんよ。」
もしも貴方の本気の攻撃受けたら夕月の材質では壊れてしまい、私あの剣とっても気に入っているのです。
「貴方なんかを相手にして壊すには勿体ない剣なのです。」
なのでダイ君が戻るまで私は拳だけで戦いますのできちんと持て成してくださいね大魔王もどき殿という言葉に・・・・・さしもの老大魔王様も唖然とし！武器の材料と攻防を貸し出した老大魔王様は、お前ティファに何と言って拵えた剣渡したのだとギンとした瞳で自分達の魔界の名工様を睨みつければ・・・当のロン・ベルクも口を開いて唖然としていた・・・・武器を大切にしてくれるのは確かに嬉しいが・・・・これって絶対に違うだろう!!
剣も武具も！戦いに使ってなんぼ!!!それを十全に使いこなし、使い手を守る為に壊れたのであればそれが本望だろうに！何を言っているのだあのバカ娘は!!!
表面で呆然としながら内心キレたのは何も向こうの世界の魔界の名工様だけではなかく、当然貴方なんかを相手にしてと言われた当人はブチギレた!!
「き・・・様は!!本気でチリも残さず消してやる!!!!!」
・・・・・ある意味ティファの目論見通りに取り戻せた冷静さを再び掻き消してしまった若きバーンがティファを目掛けて拳を振り下ろせば・・・大地が穿たれ大量の土砂が巻き起こりティファを襲い、大量の土砂の膜の様になり視界が塞がれたティファは飛び出そうとしたが見覚えのある炎の鳥が大量に飛んで来た！
あれを放置したら周りに被害が!!聖炎施せば暗黒闘気の混じった魔力から手が守れる筈
ゴォウ!!
バサラダンカン!!!
ティファもまた久方振りに聖炎を両手に逆らせてグローブの様に覆わ手刀に暗黒ではないティファ特有の白い闘気を纏わせその場ではなく一体斬っては直ぐに動きながら飛んで来た三体のカイザーフェニックスを切り落とした後は、柔らかい結界を張った直後、案の

定若きバーンが蹴りを放ってきた。
しかし肉体に薄い膜状にスライムの様な柔らかい結界を張っていたティファには衝撃が少しあったのみでけられた威力で場を離れる事に成功し、無傷で若きバーンと距離を取り構えるのを、若きバーンは忌々しげにつぶやく
あの老大魔王といい・・・ふざけた小娘といい・・・
それはこの世界に何千年と生きてきて培ってきた常識だの理念だの信念だのを術得てひっくり返すような―出鱈目な者達―に関しての真っ当な感想であった
異界の大魔王達はどいつもこいつもおかしい者しかおらんのか！

きっと周りに聞こえていれば―全員―がその通りだと賛同したであろう・・・それだけ老大魔王とティファはおかしいのだと・・・・敵味方の垣根を超えた瞬間が、図らずも生まれかけた真っ当な感想は残念ながら誰にも拾われずに虚空に消えてしまった・・・

いしの積まれる世界・このくらいは・・・

散々馬鹿みたいや事を言おうとも、相手を煽る為に余裕を見せようともとうとうティファに―その時―が来た。
ラーハルトの言う通り、自前の闘気もハイ＝エント用の魔力も当の昔に費やし尽くしている。
闘える力なぞ、ティファの中には最早欠片も残っていない、なのに若きバーンと戦い続けている。
この世界の命運と紐づけをしているが故に、―約定―を守ったが故に己の寿命を損なう事無く力を受け取り続けられている・・・・それでも
クロファ・・・
いい！まだ行ける!!!
・・・痛い？
・・・・痛みなぞ私達には長年連れ添ったモノだ・・・・あの子が戻るまで・・
うん・・・・ごめんね・・・
いい―じきに―そっちにもダメージ行く
うん、解ってる
前回は自分一人で膨大なこの世界の力を借り受け体が追い付かなかった。
それでは戦えないだろうと、クロファが肉体への損傷を―魂―に引き込み時を稼ぐ。
クロファもティファ同様にあの少年ならと信じているから。
クロファの体感としては、魂の損傷具合は寿命二・三年分が削られているという・・・せめて五十年分か、長くとも百年分当たりで戻ってきてほしい所だ・・・百年も生きれば・・みんな許してくれるだろうか？
愚かな事だ・・・・本当に愚かな事だとティファは己の有様に嗤いたくなる・・・一体自分が何故このような事をしているのだと、周りは決して自分がしている事を許してはくれまいそれでも・・・・自

分が決めたから・・・自分は知っている、識っている・・・・・―原作―の彼等を・・・彼等が辿らざるを得なかった悲しい終わりを・・・・そして自分は知らない、この世界の事を・・・だから自分で識ろうとした、彼等と過ごして彼等の身の内にある思いを少しでも知ろうと実に沢山の事を話したのだ。

ご飯の支度やご飯配りの時、寝る前の一時と短い時間であっても直接であったり聞き耳を立てたりして、そして決めた

無為に死なせたくない人達だと

大義も大勢も何もない・・・・この世界の命運に自分から首を突っ込んだ・・・今更だ！

この世界の決したはずの命運をひっくり返そうとしているのだからこれくらい支払わずして変えられると思うが傲慢だ、散々対価だ代償だと抜かした身が、己一人が何もないなぞある筈も無いのだから・・・

大魔王だという少女はは静かな笑みを浮かべて闘っている。

少年ポップ達もとうに暗黒闘気のダメージから回復をはたいせているが、ティファの独特な戦い方に、共闘することは出来ないと手が出せないまま時が過ぎていくのを、指を咥えて見ているしかできないのかと戦士達は飛び出しそうになる身を抑えつけて堪える。

もしも下手に手を出せばティファの身が危うくなる！

若きバーンも、少しずつ力尽きるティファの考えが全く解らない。

ここまでの事をしてこの娘に何の益があると言うのだ？

最早帰る手立てがあるというのに・・・笑みを浮かべて戦う・・・

なぜ？

それは思考の隙であった。

そしてその隙間が生じるを見計らったように、―ティファ達―が待っていた―者―が戻る気配がした!!

ポップ兄!!!

ティファ??!・・・どうした・・・
待っていた者が向かって来た事で、待ち人が辿り着く前に―やってあげたい事―がある・・―自分―だけが識っている事を、せめて五分にしてあげたくて。

ティファは兄ポップとダイとノヴァと思考を繋げられる、互いの中にある竜の血により結ばれし縁で。
それを通じて頼みごとをする。

ポップ君に今すぐメドローア撃たせて!!!
・・・分かった
何故もどうしてもを飲み込み、兄は妹の叫びに応え、戦いに参戦できないかと機を伺っている少年ポップの肩を掴み耳打ちをし、マホカンタ系の防ぎも頭から消していますぐやれという言葉に、少年ポップも腹を括り意を決したように顔を上げて飛び出した。
ティファの体が崩れたのを見た男達が走りかけ、真っ先に少年ポップがメドローアを形成しながら、ティファと若きバーンの間に割って入り、そして躊躇いなく若きバーンにメドローアを放つのを、若きバーンはあの娘は本当に自分の技を知らんのかと思いながら、―天地魔闘―の構えはとらずともフェニックスウィングでメドローアを少年ポップと其の射線上の後ろにいるティファに向かって返すのを、ティファ自身が少年ポップを脇にどかして突っ込んできた。
あれじゃぁあの人が!!
どかされたポップも、動いて走り寄ってくる男達もティファが消滅してしまうと焦る中、一筋の光が少年ポップのメドローアを横からぶつかりそして消え果たのを、周りは驚きティファは痛みを堪える顔をした。
兄が、痛む両腕をおして極大消滅呪文を放ってくれたのだ・・・自分が無茶をしなくてもいいように・・・
ティファの考えた通り、青年ポップは折れた腕で必殺の技を出して崩れ落ちる・・・これで自分にできる事の全てはやった・・・・ダイ

達後は・・・・激痛と魔力切れで薄れいく意識の中、戻ってくる弟達に後を託しす中、ティファは若きバーンの第二の技を引き出させるために、使わないと言った夕月を再び己の手の中に引き寄せ鞘も使い

「回転剣舞!!!」

両の手に持った鞘と剣に闘気を込めたオーラブレードを作り出して回転の勢いを乗せて放つ技の威力を見て取った若きバーンはカラミティエンドを出しそして、回転を止めればティファと目が合った。

自分を食らい殺しそうな瞳に、若きバーンは敬意を表し最後の技を油断なく放つ

カイザーフェニックスが、小さなティファの身を食らいながら燃え盛った・・・・誰もがティファの身が燃やされる・・・・そう確信しかけた時、一筋の凛とした声が場に響いた

「アバンストラッシュアロー!!!!」

それはトベルーラをしながら、煌々と両の手の甲に竜の紋章を輝かせた少年ダイが、アバンストラッシュを放った姿であった。

よく見れば—ダイの剣—はダイの背中の鞘に収まっており、今少年ダイの右手にあるのは青年ダイの剣であったのを、辛うじて結界を張り表面を焼かれるにとどまりながら、カイザーフェニックスの威力で吹き飛ばされながらもティファはニヤリと笑った・・・笑ったのだ

「いっけえダイ君!!!!」

今ならば!—天地魔闘—の全てを出し切り数秒のラグが生じた若きバーンの身なら!!

カイザーフェニックスが撃たれる前に、ティファは兄ポップにしたように兄達につけていた式で見て知っている—伝授した技—を、少年ダイにうつようにと頼んだのだ。

式をつけていたが故に彼等の遣り取りを知り何をしていたのかを知り、そして戻ってくるタイミングも計れていたのだ。

戦いながら式見をするのはクロファにとっても辛かったが!その価値はあった!!

ティファの声に、まだ死んでいないのかと若きバーンの思考に余計なのノイズが混じり、そしてティファの考えた通り、大技の連撃を

使った時の反動で動かない体と相まって対処法に思考が瞬間思い至らず、少年ダイの接近を許してしまった!!
「喰らえ!!!」
ダイさんに教えられた、教えてもらったアバンストラッシュアローとクロスの連撃!!

それはこの世界では初見の技であり、若きバーンにはどのような者かは知らずとも、少年ダイの両の手の甲の竜の紋章が輝き闘気を込められた技に怖気が奔り！咄嗟に右手で飛んで来た一の矢を掻き消そうとした・・・その体制が悪手であった・・・・ティファが、最後の力でアローの正面に立つ形となりまさにアローを消そうと振り下ろそうとした体制の若きバーンをジ＝アザーズの結界で固めて二の矢の為の体制を整えた。
・・・・ありがとう・・・・お姉ちゃん・・・・
そう聞こえたのはきっと自分の気のせいだとティファは笑いたくなる。
だって実際にダイ君が叫んだ言葉違うのだから
「アバンストラッシュクロス!!!」
若きバーンの右腕を過たず肘から上に一の矢と二の矢を交差させて切り取ったのだから。

絶対の奥義を打ち破られ、異界の大魔王によって斬られながらも、それでも無敗を誇っていた若きバーンの、どのような伝説級の武具にも勝るとも劣らない右腕が宙を舞い、そして・・・・消滅をした。
見れば少年ポップが二発目のメドローアを放ち、若きバーンの右腕を消し去った
「へへ・・・・これで俺達と同じくらいになってくれたかよ若い大魔王さんよ・・・」
先程右腕を老大魔王によって斬られながらも、自らつけていたのを老大魔王の懐の中にありながらしっかりと周りを見る事を怠らなかった少年ポップが目撃してきちんと覚えていたのを、若きバーンの

呆然とした心に忌々しさが蘇る・・・何故・・・・・・誰も彼もが諦めずにいるのだと・・・

確かに心が再び折れた少年の方のダイとても!青年の方のダイに保護をされた傷だらけの小娘も!!自分を取り囲むように立つ男達にも苛立ちが若きバーンの心を占めるのを、ティファはもう無理とばかりに兄にその身を委ねる・・・・自分にできるのはもうこのくらいで・・・・後は本当に少年ダイとポップ達に託す。

式見をして兄達とのやり取りを知っているとはいえども、彼の少年がどのような答えを携えてきたのかの本当の所は分からないが、きっとそれは、竜魔人になるに至るにはほんの少し足りないだろうと・・・己の全てを投げうつことがいい事とは限らないし、しないでほしいとティファは身勝手に思う・・・散々自分がしてきたというのに。

それでもそれをしなくてもいいよう若きバーンの右腕を斬り落とさせて漸く五分か最悪四分か・・・それでも信じる

彼等が勝つのを

いしの積まれる世界：悩み苦しむ君に救いを・・

ティファが若きバーンのカイザーフェニックスで燃やされかけたよりも、矢張り少年ダイの帰還とそれと同時に若きバーンの右腕が斬り捨てられ速攻で少年ポップが素早く放ったメドローアによる消失の方が衝撃的であった・・・・つい先ほどまで世界の事を言われても分からないと泣いていた少年が、決意を込めた瞳で若きバーンに正面に立ち、二つの紋章を両の甲に煌々と輝かせている様を、どれ程の者達が想像していただろうか？

老大魔王とても、自信なさげに答えを持ってきたその時にはもう一度この身を張って若き勇者にエールを贈ろうとまで覚悟していたのが、少年ダイの瞳には確かなる闘う覚悟を背負った決意と闘志が光り輝いているではないか。

「汝は・・・・答えとやらを見つけてきたのか？」

それともあの青年勇者に戦って来いと指図をされて来たかどちらかと若きバーンは問うたが、若きバーン自身が、誰かの指図でこのような力強き瞳をしない事は分かり切っている・・分かっているだけに、自分の手元で飼えたかもしれないモノが自分の手を噛んだ事に腹ただしさを覚える！

自分の慈悲縋り!!守りたいと言っていた輩どもを背負いて自分の寵愛に縋って生きればよいものを・・・自分の問いにすら最早気配も瞳も揺れなくなった、可愛げのなくなった少年ダイに、若きバーンは失望を覚える・・・・たかだか百年にも満たない年月しか生きない者が、無意味に抗い早死にを選んだのかと・・・どうせあの青年勇者に世界の尊さだの生命の美しさだのを吹き込まれガラクタになってしまった者の答えに、本気で興味があったのではなく義理で聞いてやる。

その愚かな考え事潰せばよいのだと

だが、この世界はいつでも若きバーンの予想を覆す・・・・それはあの他界からきたーヘンテコな生き物―がきてからずっと・・・少年ダイの答えは、あまりにも若きバーンの考えとは違っていたのだ・・・

それは
「俺・・・・やっぱりこの世界を命かけて守りたいか分からないよバーン。」
・・・・・・・は？
「ならば・・・何故余に対して剣を向けている？」
「ん・・・・分らないから戦ってお前に勝って、其れから知ろうと思った・・・から？」
・・・・・・なんだそれは!!!!
「ふざけているのか貴様は!!!!」
分らないから知る為に・・・・・そんな阿呆な言葉であっても看過するにはあまりにも稚拙な言い分な上に!!どうして最後が疑問なのだ??!!
しかもそんな本人でさえ分かっていないような理由で！倒します宣言される自分の立場をなんだと思っているのだこの小僧は!!!
ある意味ティファや老大魔王よりも、ふざけた物言いをする少年ダイに若きバーンはガチギレを起こし、そんな曖昧な理由で戦うなどふざけているという言葉に、その言葉に少年ダイの方こそキレた・・・
「ふざけてないよ・・・・むしろお前こそ!!何の意味も無く俺の好きな人達を殺そうとしたお前こそ馬鹿じゃないのか!!!!!」

天下の大魔王を満座の中で馬鹿者呼ばわりした。
敵に対してもここまで罵倒したことが無かったが、怒りがあるならそれを思いっきり怒りの相手にぶつけるべきだと言って貰えたから・・・

「もうさ・・・本当にさ!!お前達が来なければ俺はもしかしたらデルムリン島にずっと住んでてさ!!アバン先生達来ても外の世界は凄いやくらいに考えて!!!爺ちゃんが安心するほどの大人になってからゴメちゃんを連れて世界見に行くか位に平和に暮らしていたのを滅茶苦茶にして!!!!それでなんで俺が・・・・俺が―お前達―に文句言われなくちゃいけないんだよ!!!!悪いことしたのはお前だろう!!攻めてきた

のはお前だろう!あっちのバーンみたいに!!守りたいと本気で思ってもいないくせに!!!!そりゃさモンスター達は―外―では人からいじめられたり酷い目に!!遭ってたかもしれないけどさ・・お前のせいで!沢山のモンスター達が死ぬ事になったのに!!!なのにどうしてお前が俺に偉そうな事を言えるんだよ!!!!」

責められるべきはお前じゃない!!!!

ダイはずっとずっと怒っていた・・!!!!・・・悲しんでいた・・・・それは何に対してかと言えるほど、理路整然と考えられるほどに賢くは無く・・・・ずっと・・・大戦が始まってから・・・・もしかしたらあの―偽勇者事件―の時から心の中で怒りがくすぶっていたのかもしれない・・・

爺ちゃんが聞かせてくれた物語に出てくるようなカッコいい勇者様はいなかった

爺ちゃんが言う程に人間は素敵な人達ばかりではなかった

―外―は、自分が考えていたようなキラキラと美しい所ではなかった・・・大戦前から人の心の醜さを知り、大戦後の世界は荒廃をしていて人々の心も荒れていて・・・優しい人達にも余裕は無く、そんな世界をダイは見せられそして見てしまった・・・

外にずっといたポップとマァム達は、それは大戦のせいだと知っているからダイの様な悩みを持たずに済んできた。

そしてそれはある程度人間を知っている、ダイ寄りだと思われているヒュンケル・クロコダイン・チウ達にもそれは当て嵌まり・・・・結局のところダイの真の悩みに誰も気が付けなかった・・・・・青年ダイだけが、少年ダイの中に怒りがある事に気が付いた。

だが、青年ダイも少年ダイの怒りの理由までは分からなかった、ではなぜ気が付けたのかは、青年ダイもかつて誰にも言えずに長年抱えてきた―モノ―があったからだ。

それは・・・

「・・・・・ティファ・・・・・どうしてここまで無茶したの?」

少年ダイの怒りの発露に周りが呆然としいようとも、テイファの兄はのみに関心を向けそして怒りを発露する・・・・またどんな無茶を

この世界でしたのかを・・・後で問いたださなければならないと・・
「あ・・・にぃ・・・・」
「
ティファだって頑張ったんだよと・・・時には神にさえも怒鳴り上げるティファは、兄の言葉に慄き反省していると兄に靠れかかるのを、ダイは内心で溜息をつく。
こうしていれば、大人しくて可愛い妹なのに少しでも目を離せばこうして無茶をされる。
ダイはずっとそれが嫌でたまらなかった・・・周りがティファのいい所ばかりを見ていた頃が、一行にもあった時があった。
ティファが大人の振りをしてずっと無理をしてきたのを気が付いていたのは自分だけで、其の事を誰にも言えずに・・・
そう、誰にも言えない明確にできないどうしようもない心の淀みを抱えた者であったが故に、青年ダイは少年ダイの心の奥底に沈められていた思いに気が付いたのだ。
違いがあるとすれば、自分はそれでも周りに恵まれ助けられ、もやもやとしながらも妹の笑顔に助けられ力強く闘う事が出来た
そして少年ダイは、仲間に恵まれてはいるが今一歩互いの想いに踏み入ることが出来ず、周りからの助けは少なく、好きなレオナから一時怖れを抱いた顔を向けられた中で戦って来た・・・これでまともな精神で戦えると言えるものが、ましてや世界も世間も、自分と他人の心も知らない子供が、確たる信念をもって戦えると言える者がどれほどいるか
自分なら戦えると簡単に口にするものがもしも目の前に現れたら、きっと自分はそいつを潰しているだろうと青年ダイは思う。
だから青年ダイは、少年ダイに―大きな世界―を見せに行った。
狭い所で悩むよりも、大きな海を見ると落ち着く時がある。
青年ダイは、少年ダイの心を落ち着けさせるところから始めた・・・魔法使いになるなら無いとブラスじいちゃんと喧嘩した後に、むしゃくしゃしている時いつでもティファが海を見に行こうと言ってくれたあの時の事を思い出しながら・・・あの時の自分の様に心を落ち着

け見失ってしまった思いを一緒に探してあげたくて、青年ダイは少年ダイに目を閉じる様に言って、地上が―惑星―だと分かりながらも、息がギリギリできる成層圏の少し上まで少年ダイを連れ出したのだ。

―ここまでなら何とか来れるなダイ・・・・本当に世界は丸いんだな・・・―

―ティファもここまで来たの初めて・・・・ガルーダに乗ってもここまで来た事ない―

竜闘気で二人を包みながら、どこまでいっても大丈夫かを実験して、ダイとティファとポップ達は改めて惑星を見た・・・・あの時感じた熱量が、言い知れない心に溢れた想いを、どうかこの悩み苦しんできた少年ダイにも感じて欲しいと、青年ダイは祈るような思いを込め、少年ダイを―少ない竜闘気―で守りながら連れてきた

悩み苦しむこの子供を助けてやりたくて

いしの積まれる世界：

少年ダイは、若きバーンに向かって言いたいこと全てを吐き出せてすっきりとした顔をしていた。
先程まで悩み苦しんでいたとは思えない程の澄んだ瞳で、青年ダイから借り受けたミスリル銀の剣を若きバーンに向けている。
「俺はこの世界が綺麗だって思った!!」
「・・・・なに？」
「人の事じゃない！・・・・そりゃ・・・俺の仲間や先生や女王様や俺達の事を助けてくれた人たちは大好きだけど他はまだ分かんない・・・」
「ならば何故!!」
世界が綺麗だと言われた事は兎も角として、ダイが今あげた者達は必ず、それこそ自分の魂にかけて誓ってでも守ると言ってやっているのに、なぜ自分と戦うというのかと若きバーンは本気で目の前の少年が何を言いたいのかが分からない。
だが、少年ダイは本気で若きバーンを倒そうと決意したのだ

―遡ったダイ達―
「もう目を開けてもいいよ。」
「・・・・・ここって・・・あの下にあるのって!!」
「何だと思う？」
竜闘気を纏って少年ダイと自分を守りながら、青年ダイは宇宙空間と成層圏のギリギリの境へと来た。
周りに見えるのは暗い空間と点々と輝く星々と、そして下に見えるのは
「・・・・・綺麗・・・・緑が・・・・・大地？」
「そうだね、下から飛んで来ただけだから眼前に見えるのがパプニカのあるホルキア大陸だ。
海を挟んで見える上の方はギルドメイン大陸。」
「・・・・海ってあんなにキラキラしてるんだ・・・・大きくって・・・

俺達あんなに凄い所に住んでるの？」
「そうだ、俺達が見えている広いと思うところも、上から見たら小さなところだ。」
それでも、俺にとってはどこよりも何よりも大切なところだという青年ダイの言葉に、少年ダイはきょとんとする。
小さなところなのに何よりも大切だという言葉が分からなくて。
そんな少年ダイの頭を、青年ダイは優しく撫でながら―秘密―を話す。
「他の人達には絶対に内緒だ。俺はパプニカの王配になる。」
「・・・・王配って何？王様になるの？」
「少し違う、王様か女王様になる人と結婚して支える人の事だ。」
自分はパプニカの女王となるレオナと結婚をしてパプニカの王配になる。
「俺はあの国とレオナを守る為なら何でもする。」
妹も仲間も大切で、守りたい人達があちこちにいるがそれでも
「俺はこれからレオナとパプニカ王国の幸せを大切に生きていくんだ。」
そう言った青年ダイの顔に迷いは無く、本当にレオナとパプニカ王国を愛しているのが、初対面のダイにも伝わり・・・羨ましく思う。
「俺にも・・・・見つけられるのかな・・・・・」
一度は世界に・・・・・もしかしたらそんなに大層な事ではないかもしれないが、確かに人間に怯えられた自分が、もしも奇跡的にあのとんでもない力を振い若きバーンを倒せたとしても・・・・自分の全てをかけてでも、後悔する事のない程に愛する事が見つけられるのだろうか？
「それは俺にも分からない。」
青年ダイは、あえて少年ダイに甘い事を言わなかった。
この戦いの後にきっと見つかるなどという安請け合いをする方が酷いのだと・・・甘い世界に自分達を漬け込んでおきながら、其の自分達を置き去りにする策を何度もした―あの酷い妹―のせいで、ダイ達は甘い世界の怖ろしさをよく知っている・・・知りたくも無かった

事なのに・・・あんな地獄を他者に味あわせる気なぞ、青年ダイには毛頭ない。
希望を与えるのと、優しく甘い言葉は違うのだから。
その代りに贈ろう
「分からなくとも、探すことは出来る。君の魔法使いだって俺のポップに負けないくらい素敵で君を助けてくれる頼りになる人だって思う。」
戦いが終わった後に、いくらでも探す事は自由なのだと。
「話に聞いたマァム・ヒュンケル・クロコダイン・チウ・メルルも戦いの後も君と一緒にいる事を話してくれたんだろう?」
少年ダイには、助けてくれる素敵な人達が居るから大丈夫なのだと。
「それをするには、先ず勝たないと。」
見つかるかどうか不安になるにも―探す場所―が無くなってしまっては、自分の幸せがあるかも知れない場所を守らなければ意味がない。
「この世界には人だけじゃない、あの大魔王を倒せば本来の優しさを取り戻せる多くのモンスター達が住んでいる。
爺ちゃんやゴメちゃんや、島にいるみんなと同じくらいに優しいモンスター達が沢山いるんだ。」
いるのは人だけでもモンスター達だけでもない。
島にやってくる美しい渡り鳥、動物たちが、何も知らずに生きて死んそしてどこかで生まれている・・・
「そんな素敵な場所なんだよあそこは・・・・」
決して酷い人達だけの者ではない大陸に想いを馳せた少年ダイはボロボロと泣いていた。
「あ・・・そこには・・・・キラキラとした何かがある?」
「分からない、俺には君が言うキラキラがなんなのか・・・それでも、俺は地上が好きだ。」
少年ダイのいう事は分からなくとも、島での光景や自然を愛していると青年ダイは言う。

俺の言うキラキラって・・・・なんだろうか？
分らない・・・・知りたい・・・・自分は何を求めて外の世界に憧れたのか・・・・何を守りたくて勇者になって―みんなを守る―と決めたのか・・・・
探したい・・・・見つけたい！ポップ達と一緒に!!この世界の・・・
「全部見たい・・・」
「そうか・・・其の為には全部守らないといけないな。」
少年ダイの答えに、青年ダイはきちんと聞く。
全部とは、少年ダイを傷つけた人達も含んでいる事を。
「それでもいいのか？」
「いい・・・・だって・・・俺は俺の事を怯えたレオナを許したんだ・・」
後悔して泣いていたレオナを自分は許した。
「もしかしたらさ・・・・その女の子もさ、レオナみたいにその時だけ怖いって思って、もしかしたら酷いことしたと思ってくれてるかもしれない・・」
そうでないかもしれないという少年ダイの甘すぎる考えにも、青年ダイは否とは思わなかった。
自分だとて、人の心がわかるほど・・・いや、きっと誰にも本人でさえも分からない心の在り様を言えるものなどいないのだから。
少年ダイが、そうだといいなと考えているのならば、それこそが彼にとっての真実なのだから。
「だったら、あの大魔王もどきに勝てる様にならないといけない。」
その真実も想いも、あれを倒してこそだという青年ダイの言葉に、少年ダイは頷くのを、青年ダイはほんのりと笑い、そして少年ダイにトベルーラを使わせ自分で浮かせる。
青年ダイとしては、きちんとした床か地面のある上に少年ダイを座らせてやりたかったことなのだが、時期に自分達の大魔王の体力が切れる頃だと青年ダイは見積もっている。
この世界に来るために、自分達のレベルを落とす時、青年ダイは普段の一割の力だけを望み、その分バーンが力を有せるように調節をしてきたのだ。

「バーンさ、あの大魔王もどきを叩きのめしてやりたいでしょ？」
いつも自分達の為に、何くれとなくしてくれるバーンの願いを何かで叶えたくとも、バーン自身は自分達が健やかでいてくれる以外は何も望まぬよと・・・・本当に頭の下がる思いでいてくれている。
そんなバーンの望みを、ダイは自分も叩きのめしたいという思いをバーンに譲った。
つまり、若きバーンの前に立ち威嚇していた時も、若きバーンが危険視したのは青年ダイの闘気ではなく、殺気一つのみで若きバーンの足止めをして見せたのだ。
そして持ってきた一割も、純朴な答えを出した少年ダイの為に使う事を青年ダイは選び、少年ダイの両手を降ろさせ、向かい合って絡ませるように小さな手を青年ダイは握りしめる。
ゴツゴツとしながらも自分の半分歩かないかの小さな手・・・・その手に世界の全てを乗せられて・・・・自分は本当に・・・多くの手と共に支えてもらったのだと感謝をしながら、少年ダイに竜闘気と共に思念を通わせる。
「あ・・・・・怖い!!」
時間がないために、何の説明もせずに中に入ってくる青年ダイの竜闘気と知らない気配に、少年ダイはやめてほしいと怯えるのを、青年ダイの優しい声が頭に響いた。
―大丈夫、これは俺の竜闘気と思念だ―
―あ・・・・貴方の？―
―そう・・・一緒においで―
青年ダイは、思念を内に向ける様に少年ダイを誘導し、少年ダイを―魂の御蔵―の中へと連れて行く。
普通に生きていれば、知る事も無い場所、己の内部に青年ダイと共にいく少年ダイは不思議になる。
薄っすらと明かる中心に、煌々と輝く白い玉の側に・・・・ほんのりと青白い―ナニカ―が見えて・・・
「目を凝らして、もっと近くに行こう。」
青年ダイに手を取られ近づけば・・・・それは竜の紋章の刻印が押

されている青白い玉だった。
　そっと触って見てごらんという青年ダイの言葉に誘われるように、恐る恐ると少年ダイは両手で包み込むように触れよとした瞬間、それは弾けて自分の中に飛び込んできてそして
　―どこにいるディーノよ・・・愛するソアラと私の息子よ・・・―
「親父!!あ・・・・・あぁ・・・これ・・は・・・」
　流れ込んできた・・・バランの思念が・・・・自分を慈しみ探してくれている想いや、人間を憎む心、敵をどう倒すかという思考、ラーハルトを、知らない鳥人と獣人を助けた時の想い、自分を見つけたが敵同士であった時の葛藤、周りにいたポップ達に対する憎しみそして・・・・人間の良さを見せつけられその果てに抱いた己の業と罪悪感・・・
「お・・・やじの記憶・・・・」
　そこにあったのは、父バランの取られたという自分に繋がる十二年の歳月の記憶・・・そこにあるのは全てではなく断片的で、紋章を受け継いだ時に共に流れ込んだ微かに残されていた父の思いは、どれ程自分を愛してくれていたのか・・・どれ程人々を愛したが故に、人々に失望し憎みそして・・・・再び人の温かさを知ったが故に苦しんだのか・・・・
「おやじ・・・ごめんね!!親父が!命を懸けて愛した人も大地も!!生命も!!!俺捨てようとしたんだ!!!」
　そこに見たのは限りない愛憎と後悔とそして・・・やはり自分に対する深い愛情。
　偉大な戦士で不器用ながらも自分と母を愛し抜いてくれた父の想いを、自分は踏み躙りかけた事を知ってしまったダイは、父に申し訳が無いと泣いて謝る。
　泣いて泣いて、そして泣き切り顔を上げた少年ダイの顔には、最早迷いは無かった。
「ダイさん・・・俺、親父みたいに生命の為にって言えない・・・言えるほど知らない。」
　だから、親父達が生命を賭けてでも守りたかったこの世界を自分も

ちゃんと見る為にも、絶対に負けたくないという少年ダイに、青年ダイは応える為に再び両手を絡め額も着け合い―双竜紋―の使い方と―アバンストラッシュクロス―と―鞘の使い方―を思念で伝授する。
「左手に君のお父さんを思い浮かべるだけできっと出来るから。」
思念で伝え、さっそく使ってごらんという青年ダイの言葉と助言に、少年ダイは力強く頷きそして左手を握りしめて右手で包み込み父を思う。
親父・・・・俺も、守りたいものがきちんとできたんだ・・
あやふやに勇者になる為や、誰かに求められたからじゃない。
自分の思いで生命を賭けて守りたいと思った事がある。
「だから、手を貸してほしいんだ・・・・親父・・・」
息子の切なる願いにこたえる様に、少年ダイの左手の甲に薄っすらと現れた竜の紋章は、やがて横にある自分の魂と同じほどに煌々とした輝き解き放つ。
それは自分の全てを愛し包み込んでくれているようで、少年ダイの目にまたうっすらと涙が浮かぶのを、青年ダイはもう行く時間だと促す・・・・何か途轍もなく嫌な予感がすると言われた少年ダイも、慌てて涙を拭い、二人は現実世界に戻りそして青年ダイの竜闘気にまた包まれ一気に下へと戻る道すがら、青年ダイに伝えられた数々の技、そして父以外の歴代の竜の騎士達の想いもまた少年ダイに流れ込む。
この地上とそこに住まう生命を守ってほしいと・・・
「守るよ・・・・」
今度こそ自分は迷わないと少年ダイは左手の竜の紋章に誓いそして全ての怒りを若きバーンに叩きつけてすっきりした後に宣した。
「お前を倒してこの地上の全てを!!ポップ達と一緒に見に行くんだ!!!!」
それは、違う世界の、限りなくこの世界に近い世界のダイに対して大魔王が似たような問いをした時、もしも人が俺を怖れるなら、お前を倒して俺はこの地上を去るという言葉とは真逆な事を言いきった

この世界のダイに、少年ポップは嬉しくて涙を流し、仲間達や師も同様に嬉しく思う。

そして―それを知っている―ティファもまた、薄っすらと涙を浮かべ、声を出すのも辛いので兄の胸に靠れながら心の中でエールを贈る。

頑張って、私が信じた勇者様

いしの積まれる世界：真竜の戦い

序盤戦は、確かに少年ダイとポップはタッグを組んでバーンに戦いを挑んでいた。

若きバーンの右腕を斬り落としたのは竜闘気の技であり、竜闘気には暗黒闘気同様に回復を遅らせるデバフがある。

その効果をダイ達が狙った事でないにしろ、ティファの見立てでは恐らくドルオーラを二回立て続けに撃った後、十数分は回復しなかった原作ダイと同じであれば、先程の少年ポップ達と同じくらいの時間を有さなければ、バーンの右腕が回復する事は無いと見積もっている・・・・バーンにその法則が当て嵌まればという危惧が付くが、少年ダイとポップのタッグ戦が開始されて数分経つが、バーンに回復の兆しは無く二人の相手を片手でしている現状であった。

それでも強い

ダイの剣をカラミティエンドで弾き、ポップの魔法も薄いマホカンタで弾かれ、次第に若きバーンの攻撃目標はポップとなり、勘付いたダイも直ぐに親友の援護に向かうが二羽の炎の鳥の飛来により足止めされている間に、ポップの鳩尾に若きバーンの膝蹴りが諸に入り、誰もがポップの敗北に悲鳴を上げそうになる中

「へっへ・・・魔法使いに不用意に近づいて触んじゃねえよ間抜け・・・」

ギラ!!!

少年ポップは、岩をも砕く若きバーンの一撃に飛ばされそうになる意識と、激痛にのたうち回りそうになる体を叱咤し、バーンの膝に食らいつき両手にギラを収束させ、右足の膝を貫通せしめたのだ！

「こ・・・・小僧が!!!!」

「ポップ!!!」

思わぬポップの反撃に、激痛を覚えながらも行動にさしたる支障は出そうにない一撃で・・・だが！人間の!!それもなんの変哲も見られない小僧に後れを取ったことが若きバーンの誇りに傷をつけ、それが故にバーンの激高を買ってしまい、負傷させられた右膝を振り抜い

てポップを地面に転がし、先回りしてその身を蹴り上げバラバラにしようとしたのを回復を果たしたこの世界のアバンがアバンストラッシュアローに残った全ての闘気を込めて若きバーンを足止めしながら両者の間に割って入り、転がる弟子を受け止め戦線から離脱させようとしたのを、バーンが見逃がす筈も無く二人を追い縋り、あと一歩のところでアバンとポップを捉えようとした左手に、ダイの右足蹴りが打ち据え止め、そのままダイとバーンは乱打戦に入った。
「先生!!ポップ外そのまま―外―にいて!!!!」
「図に乗るなよ散々迷っていた弱気勇者もどきが!!!!」
どうやらバーンはティファとポップ達に散々大魔王もどきと言われていたのが予想よりも気にしていたようであり、意趣返しを少年ダイにするという・・・大人気が全くない。
だが、ダイももう周りの言葉に惑う事無くバーンの勇者もどき発言にも傷つくそぶりは全くなく、寧ろ
「だったらおまえを倒して本物の勇者ってやつになってやる!!!!」
お前を踏み台にしてやるという・・・・・決してバーンを怒らせ思考を乱す為の高度な煽り発言ではなく、天然発言にバーンの方がブチギレ、技も何もない乱打戦に一層火力が上がる。
一見単調な攻撃に見えるが、それは直ぐに訪れた。
バキン!!!!
青年ダイから借り受けたミスリル銀の剣が―破壊―されたのだ。
根元からおられたのではなく、刀身すべてが、まるで吹雪の様に舞い散るほどに粉々に砕かれた。
これでダイの心に隙が出来るとバーンは目論んでいた。
何を吹き込まれたかは知らないが、青年ダイが今のダイの心の支えになっているのは明らかであり、であればその相手から借り受けた剣という戦士にとって大切なものが破壊されたのであれば、一瞬でも青年ダイの方に意識が向きそこを叩くとバーンは計算をしていたが・・・・それは間違いであった。
「バーン!!!!」
ダイは、青年ダイを一度もみるどころか心の乱れも一瞬も目せずに

折れた剣を直ぐに手から放して両手の紋章を煌々と輝かせ、反対に目論見に思考を割いたバーンの腹に右の一撃を入れ、そのまま両手を腹に向けて猛打した！

ダイさん言ってた！武器は壊れるのは当たり前！それのせいで心が乱れたら駄目だって！

ここに来るまでにダイは、妹に教わった事ですぐに使えそうな事を少年ダイに伝授済みであり、そのおかげで武器破壊によって心が乱される事は無く反対にバーンの隙をつけた形となれたのだ。

こんな隙はもうこの後には無いと、ダイは様々な意味で怯んだバーンの腹を殴りつけるがバーンがその状況に甘んじる筈も無く、片手であろうとも闘気を込めダイの頭を打ち付け、ぐらついたダイを足蹴にしようとするがダイも頭を上げて下半身に力を籠めて何とバーンに頭突きをくらわし！バーンがぐらつきそして・・・・双方闘気を込めたすでに夜殴り合いが始まり・・・・徐々に周りの世界と隔絶し始めたのだ・・・

「バーン・・・あれ・・なに？」

青年ダイは妹に火傷に其れ専用の万能薬を塗り込みマトリフにベホイミを賭けさせ手当てを終えても胸にしっかりと抱えたまま、少年ダイとバーンの周囲を渦巻いている闘気の正体は何かと、老大魔王に問うた。

即ち!!

分らない事はバーンに聞けば、絶対に知っている・・・・それでいいのか未来の王配と、誰かがいつか突っ込みそうな名言を・・・持っているのは別にダイだけではない・・子供達と、老大魔王が呼んで可愛がっているダイ・ポップ・マァム・レオナ・メルル・チウ達全員がそうなのだから仕方がない。

メルルとレオナは流石に控えてはいるが、他は割とバーンにグイグイといってその事をバーンが相好を崩して優しく手取り足取り教えて上げているのだから、もう色々と鹿型無いのでいいだろう。

ちなみに大半の答えを知っているティファはバーンに聞く事をし

ないのを、バーンが寂しがっているのだがそれは兎も角、バーンもまさか目の前あの戦いが見られるとは思ってもみなかったのでかなり驚きを隠せないながらもダイの疑問にきちんと答える。
「あれは余が知る魔界にて数百年前に、竜族の中でも最強の力を持った雷竜王ボリクスと冥竜王ヴェルザーが、竜族の頂点を争った時に起こった戦い方ぞ。」
その時両者の力は拮抗しており、壮絶なる大激突であった。
その力が互いに届く事は無く、激突するたびに周りに散った闘気がいつしか渦を巻くほどになり、戦いの舞台は超高熱の地獄と化し、二頭の最強の竜の激突から―真竜の戦い―と称され、魔界においても滅多に見られるものではない伝説級の戦いである。
「どちらかの均衡が破れ、弱った方に蓄積された闘気の渦が襲い掛かり決着がつく。」
どちらかが必ず死が決まる壮絶なる戦いなのだと語る老大魔王の言葉に、外にいる全員が息を?む中、老大魔王としてもこの結果は予想外であった。
あれは通常といえばいいのか、最強の力を有した者達の、それも力が互角同士でなければ先ず発生しない事だが
よもや我等があの若い大魔王の力を削った事が原因になろうとは・・・
老大魔王はその考えに至り苦い思いをする。
あれが弱体化した事は喜ばしいが、真竜の戦いは必ずどちらかが死ぬ・・・もしも若き勇者が弱体化したれば・・・
此方にはもう飛び込むだけの余力は無く、この身を盾にするしかないかとも老大魔王は算段をつける。
わずかに残した魔力を光魔の杖に注いで盾にしてでも・・・・
算段をつけた事で老大魔王は落ち着きを取り戻し戦いに注視する。
決して―その時―を見誤らないように

いしの積まれる世界・ぶつかり合いそして・・

周りの驚愕を他所に、中の二人は文字通りぶつかり合っている。
バーンは右腕がまだ回復できず、ダイの方もまだ―ダイの剣―を使う時ではないと勘が告げている。
それにまだ―技―のイメージが固まり切っておらず、青年ダイに教わったアバンストラッシュクロスはもう見られているので初見殺しは出来ず、威力はあるだろうが自分の中で考えていた技では恐らく自分が負けるとダイは確信めいた予感がする。
魔界の名工ロン・ベルクの手によりダイの剣は産みだされ、そして彼の手によって生まれ変わったダイの剣の鞘の中ではダイの剣はとっくの昔に―ギガデイン―が纏われている筈。
魔法剣を使う時、魔法を纏わせた剣を鞘に入れ十秒待てば、自分出掛けた魔法のランクが上がるという常識が取っ払われたような、一種出鱈目な機能が追加された時、ダイは心から喜んだ。
これで俺も親父と同じ技が使えると、即ち―ギガデインーを使った技が使えるのだ。
自分はライデインまでしか契約が出来ておらず、そもそもがギガデインの契約呪文書がどこにあるかも分らず探している時間も無い中、それを解決してくれたロン・ベルクに抱き着きそうになったほどであった。
ギガデインを使うとすれば、父バランと同じギガブレイクか、ライデインストラッシュの上位版になるギガストラッシュか・・・それとも鞘事使ってアバンストラッシュアローを撃ち、二撃目をギガデインを纏ったダイの剣でブレイクを撃ってギガデインストラッシュクロスのあ三パターンを、青年ダイにストラッシュクロスを伝授された時に得た着想で考えたのだが・・・・どれも通じる気がしない程に、自分と打ち合いをしているバーンの気迫が、これまで感じなかったほどの凄まじさが一つ一つの攻撃から感じる。
そう・・・死の大地で激突をしたあのハドラーの気配によく似ているのだ。

ハドラーが超魔生物になってようやく自分と本気で戦おうとしたあの時と。

もしかせずとも、今までは自分達が戦っていた大魔王は、真剣には自分達と戦っていなかったのだろうか？

遊び半分で軍団を地上のあちこちに攻めさせ、命がけで戦っていた自分達を相手にしていた時にも・・・・そんなそんな馬鹿馬鹿しい気持ちのせいで!!みんなが!!

「お前なんて！大っ嫌いだ!!!!」

そんな者のせいでオーザム・リンガイア・カールは滅ぼされ！大好きなレオナの国も一度は滅びに瀕し・・・・レオナのお父さんは死んでしまい・・・・もっと多くの人々が死んで！生きていても地獄のような思いをさせられている!!!!そんな奴！

今までのバーンの言葉を考察した事ではあるが、ダイの考えは当たっている。

この世界のバーンは、天界を消すという野望こそ本物だが、それを娯楽と捉えている側面が確かにある。

先ずは天界の前に、神々の恩寵を受けた忌々しい地上を消し去り魔界を浮上させ後に天界を滅ぼさんとしたが、その過程に―遊び―を入れたのがその証拠である。

この世界のバーンにとっては復讐こそが原動力であり、配下も国もどうでもいいとは言わずにそこそこ大切にはするがそれも身を張って守ろうという気は毛頭なく―弱肉強食―を国の内外にも求めそしてついてこられなくなったものは仕方なかろうなのであり、故にこそ弱い者と自分が直接戦ってやるのだから栄誉であり、戦いは楽しいだろうというバーンの想いを汲んでしまったダイは

「こんな事の!!何が楽しいものかよ!!!!」

泣きながらバーンを殴りそして殴られ返されながらも否定をする。

こんな事は絶対に間違っていると

そのダイの想いがバーンを苛立たせる。

自分が、魔界の神大魔王と呼ばれているバーンが、最大以上の譲歩をしたというのに、あの忌々しい異界の小娘の可笑しな考えに同調し刃向かってくる。
其れも少し、本当にほんの少し前までは未熟であった勇者が、覚悟を携え向かってくる様に、バーンの本来持っている闘志をむき出しにされる事もまたバーンにとっては腹ただしい。
こんな小僧とも呼べない童を相手に・・・いつしか老大魔王相手の時のように高揚させられていく己の性に腹すら立つ・・・・絆？信じる？それが何の足しになるというのだ！
自分は生まれ出でた時より圧倒的な力を有しており・・・周りにいたのはそんな自分の力を当てにした者達ばかりであった。
誰もが、強い自分を信じていると言い、そして大半の者達は裏では自分の力を化け物の様だと嘲笑していた時期があった。
まだ自身が百歳くらいの若造の時、周りの甘い言葉に有頂天になっていた時の事だ。
自分を信じていると言っていた者達が、自分よりも強い者とぶつかった時に助けるどころか裏切り後ろから攻撃を受けた時に、そんな甘い言葉と思いは諸共に死んだ。
辛うじて相手に勝った時、一度の気の迷いを許してほしいと言った者達を皆殺しにしたあの時か・・・・誰にも裏切らせない、誰をも信じず己の力の身を信じる覇道を行く事を決めたのは。
そんな自分からすれば！信じるだの絆だのを言い張る甘い戯言を言う者達なぞ不快であるというに!!その果てにいるようなこのダイと打ち合う事に高揚する気持ちが生まれるなぞ、バーンにとっては不愉快であった筈を・・・
この世界のバーンは自身の中にあるとある部分を理解していなかった、否、己の事であるが気付いてすらいない事がある。
其れこそが、他者と戦う事の楽しさは、いつか自分を理解し得る者が現れるのではないかという淡い期待も含まれている事に・・・・おそらく自分がそんな期待を、微かであろうとも持っていたと知れば憤死したかもしれない。

それほどにこの世界のバーンの自尊心は高く、それでも、裏切られたあの時―泣いた自分―を忘れようと躍起になろうとも、確かにその時までは魔界においても絆とはあるのだと信じていたバーンがいた事は確かであり、もしかしたら、ダイと打ち合っているこの最中で思い出そうとしている事をも無意識に打ち消そうとしているのかもしれない。

所詮絆だの信じるだのは甘い戯言であり、世界や見守っているであろう神々や忌々しい異界の連中がそれを希望にしているのであれば、粉々に砕かんと

夢中で互いを殴り合う中、ダイはバーンの手刀を躱し飛び退った時、カイザーフェニックスの追撃を受け、更に飛び退り、闘気の大渦の中で僅かな間ではあるがバーンから距離を取ろうとした時、疲労で足が滑り偶然その場で回転をした。

このままではカイザーフェニックスをまともに受けてしまうと焦ったダイは、咄嗟に全身に竜闘気を纏わせ蹴りでカイザーフェニックスを打ち破ろうとしたが、威力はカイザーフェニックスを撃つ破るだけではなく、蹴りの威力がカイザーフェニックスの後詰めとして迫ったバーンを吹き飛ばしたのを見た時、ダイの中で何かが繋がった！

「ほう・・・・決めに来るかダイよ？」

「・・・・・分かるのか？」

「ふん、その顔を見て分からない程ぼんくら大魔王とまで思われていたか。

何を仕掛けようとしているのかは知らぬが、余の全身全霊を以て！貴様毎希望とやらの全てを粉々にしてくれるわ!!!」

バーンの言葉に、ダイは剣に手をかける。

それを見届けバーンもまた静かに闘気を練り始める。

己達の想いの丈は全てぶつけ合った・・・後は!!決着をつけるのみ!!!!

いしの積まれる世界・大好きなんだよ!!!!

この一撃で全てが決まる

そう、自分のこの一撃でこの世界の全てと、―この世界に連れてこられた人達と助けに来た人達―全ての人達の命運が決まるのだと、そう自覚した時ダイはの額から冷汗が流れ、心が竦むのを感じた・・感じてしまった。

今までは無我夢中で、目の前の敵を倒せばいいだけであった。

確かにロモス王と王国の命運を背負っていたかもしれないが、其れよりも島から連れてこられた爺ちゃんとポップとマァムを助ける事に夢中になり、ヒュンケルを倒して彼を心の闇から助けようと必死になって、こいつを倒して大好きなレオナを助けるんだとそれだけを念じてフレイザードを破り・・・・襲来して親父がポップとゴメちゃんに酷い事をして・・・俺が倒して止めないといけないと・・・色んな事でぐちゃぐちゃになった感情をすべて吐き出すかの如くに戦った果てに、あの場にいた皆に助けられて何とか勝てて・・何かを背負っていると自覚して戦う事が、これ程怖ろしい事だとはダイは思いもしなかった。

ポップはいつだって自分と自分達の命を預かるように様々な作戦を考えて展開して戦ってくれたのか。

マァムは戦いながらも自分達の回復をしてくれて、ヒュンケルとクロコダインはいつだって俺達の前に立って俺達が戦いやすいようにしてくれていた・・・レオナは・・・レオナこそが国を、大勢の人達の生命をあの小さな背に背負いながら俺達の旅に付いて来てくれた・・みんな・・・それこそあの異界の大魔王は何千年も魔界という大きなものを背負って戦って・・ダイさん達も・・・もしかしたらティファさんも、こんな怖いものをずっと背負いながら戦っていたのだろうか?

技のイメージが固まり、闘志を燃やしながらも、ダイの心は千々に乱れる・・・ダイはこれまで自分の感情や思いで戦ってきたところが

あり、大勢の命を守る事に繋がる戦いを数多してきたが、背負っているという自覚はこれまで皆無であった。
当然の話かも知らない。
彼は出自や一時育った場所は兎も角、物心ついてから彼が住んでいたのはモンスターアイランド・デルムリン島という狭い世界であり、良識や善悪は兎も角、人の常識もまして広さも何も知らない少年が、ある日突然世界の事を知ったので助けたいです等という異常な事が起こる筈も無く、世界を旅したとはいえども局地戦に次ぐ局地戦であり、そこを勝てばまた次に行くという連続であった。
そん中で大義だの大勢の生命だのを背負っていたのだと言われても、ダイとしては夢中で好きな人達を助ける為に闘っていたのだとしか言いようがなく、しかしそんなダイも、事ここに至っては自分が負ければ今ここにいる大好きな人達だけではなく、湖の底の神殿やパプニカ王城にいる父や仲間達だけではない・・・地上は勿論の事、天界という場所や魔界でも大勢の命が失われる・・・・それは悲しくダイにとっても嫌な事であり、それを止める為には目の前の片腕だけになった大魔王を倒さねばならない！
だが、目の前の大魔王は片腕だけになっても悠然とした表情を崩さず、それどころかこれから自分が何をするのかと期待する余裕すら感じられるのが、ダイにとっては何よりも怖ろしかった。

「どうしたのだダイ、若き竜の騎士にしてこの世界の勇者よ？余の全てを否定して余を倒すのであろう？」
にらめっこをしていても自分に勝つことは出来ぬぞと笑う大魔王・・・
もしかしたらこれから自分が放つ技も、大魔王にとってはとるに足らぬ技であり、破る自信の表れではないだろうか？
負ければ・・・―全員―が死ぬ、殺される・・・・
それが何よりもダイにとっては怖ろしかった！
負けて死ぬのが自分だけであったればどれほど楽であろうか！自分一人だけならば何も悩むことは無いのに・・・自分が愛した人達の

明日が自分に掛かっているのが・・・怖い、敵と戦うよりも怖くて怖くて堪らない!!

いっそ大魔王を道連れにして・・・・

叶わぬ時は先生やポップの様に道連れに・・・

そんなとんでもない・・・覚悟ともいえない―逃げ―の思考がダイに芽生えようとした時、―ソレ―は飛んで来た・・

「ダイ!!!頑張れダイ!!!おっかなくってもなんでも!!!俺はお前の事信じてんぞ!!!」

先程・・大魔王にボロボロにされた自分の魔法使いが、周りに助け起こされながらもしっかりとした―あの―声で自分を信じていると叫びあげていた。

「俺もな!!大事な時になると怖くなっちまって何度・・・一度お前達捨てようとしてご免!!!怖いよな・・・逃げてぇよな・・・・けどな!それでも頑張って必死に前に進めば勝てるかもしれない道がちゃんとあるんだ!!!弱くてビビりで臆病な俺でも!!お前とだから!!お前達とだからその道を行けたんだ!!!」

魔法使いは今勇者が何に葛藤を抱いているのかを的確に言ってのけた。

ダイの剣に手をかけて覚悟が決まった顔をしながらも一向に動かないダイに、周りは何事が起きたのかとざわめいたが、己の臆病さをよく知っているポップだけには分かった。

ダイは今、自分だけではなく他者の生命を背負って戦う事が怖くなったのだと・・当たり前だ!!!あいつはまだ十二歳なんだぞ・・・まだまだ親や商売の手伝いをしても!野原駆けまわって、王侯貴族にはそれが無理であってもそれなりに親や大人達の庇護を受けて守ってもらえる歳のガキが!!反対にこの世界と向こうの世界の結構どころかどう考えても神々にも等しい人達の命運まで背負っちまって!!それが平気だなんて言う十二歳がいるのものかよ!あいつは・・・・・本当は島でのあいつはモンスターの友達と楽しく暮らしてた、先生の授業が難しいってゴメに愚痴ってでもさぼらない真面目な奴で、旅の間もネイル村からロモス王に会いに行く途中で見つけた川で休みが

てら水掛け合って遊んでいる時の眩しい笑顔は!!確かに―ガキ―だったんだ・・・子供なんだよあいつは・・・そんな子供に何もかもを背負わせなきゃいけない世界なんて絶対に間違ってる・・・英雄譚なんて―本―の中だけで良かったんだ。

俺が夢見ていた英雄の物語何て・・・夢の中だけで・・・それでも、どんなに嫌だと思っても現実では親友のあいつにしか、ダイにしかもう大魔王バーンに勝つ術がなくて、それでも俺は、ただあいつに任すだけにしたくないんだ!!!

「もしそれで負けちまったら!!負けそうになったら俺の全部使ってその中に飛び込んでお前を絶対助けに行ってやる!!!」

きっと周りの大人達が止めるかもしれない、ヒュンケルとヒュンケルさんと、ロン・ベルク達も青年のダイさんも今の俺の言葉で俺の事注視してる・・・それでも!!

「神様ってやつが止めたって!!絶対のお前の隣に行ってやる!!!俺の全部使って助けに行ってやるから!!いつも通りお前は難しい事考えないで大技ぶちかましちまえよダイ!!!!」

難しい事は分からないよ・・・

凄い事が出来るのに、それが何に繋がるのかを考えた事のないダイ。

世界を助けているというのも、何となくフワフワとした実感しかなかったのが此処に来て気付いてしまった背負う者の大きさ・・・重圧なぞ考えなくっていい・・・難しい事を考えるの、ダイの一行では勇者ではなく!魔法使いの自分の領分だとポップは自負している。

更に難しい事は!悪いがアバン先生や師匠たちに丸投げする!!

だからダイはいつもの通りでいいのだというポップの言葉に・・・

「なんだよそれ・・・俺が馬鹿みたいじゃないのさポップ・・・・」

つい苦笑して軽口が出てしまった・・・

「馬鹿だよ!お前はさ!!!ガキだからって言って逃げてもいいのに!!!そうしないでそんな凄い所に立っている大馬鹿だよ!けどな・・・俺はそんな大馬鹿で!!ハチャメチャで!!どんな辛い事があってもみんなと笑うお前が大好きなんだよ!!!」

大好き・・・・そうだ・・・・・俺は・・・
「俺も・・」
そうだよ・・・命運とか、この後とか・・・・そうじゃない・・・・
「大好きだよ!!ポップ!!!」
皆が大好きだから!!だから勝つんだ!!!!
その瞬間、ダイの心が明確な答えを持ち芯を通した時、ダイの剣を握っていた右手の紋章の輝きが増し、そして

カッシャン!!!
ダイの剣の鍵が解かれた。
剣が主の決意を受け取り、満を持すように鍵を開けたのだ。

「・・・・もしもダイ殿が破れた時は我等も行くぞ若きポップ・・」
「・・・・俺の無謀を止めないんだラーハルトさん・・」
「僕達・・・あぁ・・・・お嬢ちゃんとチウ君達と、ボロボロの人達や力のない人はご遠慮願いたいんだけど・・・・バーン様行く気ですよね？」
「当然ぞ。」
「私もまだ力は残ってますよ。」
「いざとなったらフェザーでできること全部して、じたばたと足掻きましょうか。」
若き少年が戦っているというのを見ている事しかできないのであれば、最後の最後届かない時に、大人がじっとしているなぞごめんこうむる・・・・二度とティファの様に何もかもを背負った挙句に砕け死んでいくような子の様を見るなどないようにと願うのは何も大魔王や向こうの大人達だけではなく、青年ダイもこの世界のヒュンケルもアバン先生も静かに残りの闘気を練り始める。
それは向こうの世界のマトリフの手によって万能薬で手当てを受け、マァムのベホイミで体を回復させたティファも同様で、自分達にもきっと何かできる事がある筈だと構えているチウ達・・・

そして、動けなくなっても自分達と同じように飛び出していきそうな面構えのヒュンケル達とノヴァとロン・ベルク達・・

少年ポップの言葉に呼応するこの場にいるみんなに、少年ポップは心から泣きたくなる。

ダイ、お前が俺達を大好きなように、俺達もお前が大好きなんだよ・・・

きっと・・いや絶対、この場にいなくとも姫さんも姫さんにくっつけていったゴメと親父さん達も、湖の底に隠した親父達やレイラさん、この場から撤退しなければならなかったカールのみんなも、お前のことが大好きだって断言できる！

だから・・・・きっと行こう・・・・・戦いに行く冒険ではない、この世界を見に行く旅にみんなと行こう・・

大好きなお前となら、どこであっても楽しい場所になる筈だから

いしの積まれる世界：竜の嵐

心が定まれば、不安が消え去り心が凪いでいく。
そうすれば不思議な事に、ほんの少し前まで怖ろしく感じた大魔王の事が怖くない・・・きっと俺よりも強いだろうし、これから放つ俺の技を砕いて俺を殺すかもしれないという感じは全く変わらない。
それでも、本当に俺は怖くない
闘気の大渦の中、対峙しているバーンはダイの心の変わりゆく様をとっくりと見ていた。
その時に仕掛ける隙は幾らでもあった。
やろうと思えばいつでも殺せた、それでもそれは―無粋―だと思ってしまった。
かつて自分に対峙した者達の大半は、怯えながらも飛び掛かっきた。
死にたくない、大切な者達を守りたいと怯えながら。
それは先程のダイの様に。
だがそれが今はどうだ？
あの魔法使い・・・ポップという男ともいえない小僧の言葉に応えた、たったそれだけの事で目の前の怯えていた小さきものが、戦士の顔をして自分を見つめている！
「クックック・・・・・ハッハ!!面白い!!お前達は本当に面白い!!!」
己の復讐心よりも、己の半生を使って今一歩のところで完遂する地上・天界を破滅に導く事よりもなお!!この者達は何故これほど自分の興味を掻き立て高揚させるか!!!
絆か？かつて自分も信じそして馬鹿馬鹿しい幻想だと斬り捨てた!!あの絆という思い一つで、魔界の半分以上を征服した自分に向かってくる！
笑う声だけでダイの肌はひりつきともすれば吹き飛ばされそうなほどの闘気に、それでもダイは体中に力を込めダイの剣をスラリと抜き放ち、正眼な静かに構える。
抜かれたダイの剣に雷が、それもギガデイン級の魔力を感じたバー

ンの顔は益々笑みが深まり、まるで獲物を見つけた肉食獣の様な獰猛な笑みが刻まれた。
「そうか、汝は父の記憶をも継ぎ！父子揃って余を討たんとするか!!
ハッハッハ！なんとも健気なものではないか!!
竜の騎士と人間の女の間に出来た数奇な運命をたどりし若き竜の騎士よ!!!」
残った左手で乱れた前髪を掻き上げながら、複雑な運命(さだめ)におかしみを感じる。
黒の核晶でバランを殺せていたら、楽に勝てていたかもしれないがここまで自分は高揚していただろうか？愉快に感じていただろうか？
もしかしたらすでに天界をも滅ぼしに言っていたかもしれないが、あの美しい太陽も欲しいと立案した計画を完遂させたとしても、予定通りに終わったかと思うだけで、太陽を己がものにしたとしても、感動はあれどもここまで高揚はあっただろうかあやしいものである。
だが！今はどうだ!?
己の想いが何も儘らないというのに、これ程までに心が躍る!!
「さぁ決着をつけに来いダイ!!!!」
まるで、いつまで待っても来ない恋人を待ち焦がれる男の様だと、己の心情に苦笑したくなるがどうにもならないバーンの熱を帯びた言葉と掲げられた左手に誘われるように、ダイは、走った。
走りながら剣を握った両手を内側に力を籠め、そして両手の竜闘気を増幅させ目に見える程に闘気を高め最高潮に達した時、ダイは体全てを回転させた。
それは小さな竜巻の様であったが、バーンから見ればか細いものであった。
あれが、ダイが此処に来て考え付いたものだとすれば期待外れだと失望を覚える程に弱きものに映る。
「それが汝の・・・貴様諸共に掻き消してくれるわ!!!!」
ズリュリ!!!!
「あ・・・・そんな!!ダイ!!!!」

「ここに来て・・」
「そんなのって!!!」
最後の最後でバーンの右腕が生えた・・・ポップ達がそうであったように、竜闘気の特性が切れ回復してしまったバーンの右腕に、外で見ていたポップ達はあの構えを取ったバーンの姿にダイが破れてしまうと飛び出そうとした。
闘気でそしてマホカンタ系の技で、ダイの新技がやぶられてしまうと・・・そうなった時、あの凶悪に渦巻いている大量の闘気がダイを襲う前に!!
そうなる前にと飛び出しかけた全員の前に、ソレは立ちはだかった。
ダイ達と自分達の間に立ったのは、自分達よりも背が低くいはずなのに、誰よりも大きく見える背中を長い黒髪をたなびかせたティファであった。
無言で自分達の間に立ち、黙ってダイを信じろと言わんばかりに両足で大地を踏みしめて立つ少女の無言の言葉に、男達は止まる。
そしてティファも食い入るように見つめる先には・・・

「ギガデインであろうとも!余の勝ちだダイよ!!」
バーンは左手ににフェニックスウィングを右手にカラミティエンドの闘気を纏わせ、ダイの目論むギガデイン系の何らかの技を打ち破ろうと回転するダイを、先程何らかの回転技を撃とうとしたティファの様に止めようとしたが・・・・・止まらなかった!
両手に闘気と魔法系のカウンター技を纏わせながらも、ダイの回転を止めることが出来ない事に、バーンは本気で焦りを感じた。
こんなか細いものが何故止められないのだと・・・だが、ダイの技が止められないのは奇跡でもなんでもなく、それは必然であった。
ダイが今己尾の剣にまとわせているのはギガデインであり、其の自分達を包んでいるのは竜闘気であり、竜闘気だけであれば、もしくはギガデインだけであったればバーンの天地魔闘で敗れていただろうが、回転をする事でダイの剣が纏っていたギガデインの威力が、内側

からダイの竜闘気の回転に引き寄せられ交じり合い、まるでギガスラッシュや火炎大地斬やライディンストラッシュの様な魔法剣と同じ威力が生じ、バーンの急増ともいえる右腕で威力を殺すには足りずに、止まることなくバーンの腕の中で回転を続け、少しずつバーンが押され始める。
しかしダイは、別にそれを狙って回転をしたのではない。
ましてバーンの右腕が生えるなどと予想もしておらず、回転の渦の中で見てい驚いたがそれでも撃つんだと迷わず威力を殺さずに突っ込んだのだ。
ではなぜ回転を選んだのか？
それは単純に強いからだ。
ダイは知っている、島に大嵐が来た時たんなる突風よりも、海から時折来る大渦の竜巻の方が、島を酷い状態にしていったから。
そしてクロコダインの大技と、ヒュンケルの必殺技も知っている。
どちらも凄まじかった。
其れのみで編み出された技は、バーンのカウンター技を決まらせるに至らせなかっただけではなく、徐々に―周囲の渦―達が引き寄せられていた・・・
「そんな・・・・・あの渦は本来は・・・・」
その光景に、今までどのような事があろうとも冷静でいた老大魔王すらが驚愕せしめ、見守る者全員が目を見開く。
それに気が付いたバーンもまた、これもダイの狙った事なのかと焦りは混乱へと変わるほどであった！
「これを狙っていたのか貴様は!!!」
ダイの渦巻く闘気に吸い寄せられるように、周囲の闘気の大渦が巻きこまれダイの発生させている闘気の竜巻が肥大化していく。
老大魔王の言う通り、本来であればどちらかが破れ均衡が崩れた時、それは決闘に負けた物を食らわんとするが如く、敗者に襲い掛かる筈の大渦が！今まさにダイの放つ技に使われんと集っていく様に、老大魔王とバーンとティファの脳裏にある言葉が浮かぶ
竜は嵐を伴い来る

それは雷鳴と共に、渦巻く竜巻を束ねた中に、逆鱗に触れられた怒れる竜が姿を現すという伝承であった。
竜の騎士にして勇者であるダイは、確かに怒りを以て戦っていた。
己の愛した者達を、罪も無い生命を消そうとバーンに対して怒りを発してい！
「ぐぅ・・・・・これしきの事!!!」
周りの闘気の威力も上乗せされ、最早か細いとは言えなくなったダイの竜巻に徐々に押されていたバーンは、それでも堪え上に逸らそうと持てる闘気を全て引き出す。
これを耐えればダイにはもう次がない！そうなれば己の勝ちであると・・・だがしかし、―絆の力―が堪えようとしたバーンをまたもやダイ達の絆によって不意に体が崩れた。
「な・・・・に・・？」
ゆっくりと崩れる体に、誰であろうバーン本人が一番驚いていた。
今自分の腕の中で回転を止めないダイが攻撃できる筈も無く、周りの闘気の大渦もダイによって引き寄せられたとはいえども内部の半分ほどであり、外からの干渉を許す程でもなく、ではなぜ自分が・・・あの魔法使いの・・・・
なぜ自分が崩れているのか、それは崩れたのが己の―右足―であると認識をしたバーンは一つの考えに至った。
先程少年ポップを蹴り殺そうとした時、あの魔法使いはギラを収束して撃つことで自分の右膝を貫通させたが、直ぐに直せたが、それは皮膚や貫通された骨などの―大まかな傷―であり、傷つけられた神経の直りは完ぺきとは言えずに、それは普段の戦いであればどうという事のない取るに足りない傷が、この極限の力を発揮せねばならない時になって牙を？いたのだ！
「おのれ・・・・おのれ!!!」
絆の力に、屈してなる者かとバーンは足掻くが、ダイはここだとばかりに残しておいた最後の闘気をダイの剣に全てを込めた!!
「お前の・・・負けだバーン!!!」
爆発するダイの力にバーンの両腕は弾かれ諸て上げにされ、障害の

無くなったダイはバーンの身を食らいつくしに攻めかかる。

「喰らえ!!!ストームギガストラッシュ!!!!!」

渦と雷の嵐がアバンストラッシュブレイクの威力に収束されたその技は、大魔王の心臓を二つ食い破り、のみならず諸て上げになった左腕とバーンの象徴の一つたる左の角を粉々に砕いて蒼天へと突き抜け竜は天を駆け、そして一拍おいて崩れ去るバーンに残った大渦の闘気が襲い掛かる。

ダイの技が決まり、真竜の戦いは勝者を闘気の檻から出し敗者に食らいつく。

「あ・・・ギィァァァァァ!!!!!」

今生に味わった事のない、まさに死を想起させる神経一つ一つを苛むような激痛にあえぎながら、バーンの巨体は地に倒れ伏すのを、蒼天の中心で少年ダイは見下ろすのだった。

誰もがダイの勝ちであると確信するほどの光景であった

いしの積まれる世界・最後の選択

蒼天に君臨する竜、まさにダイは其れであった。
そしてその竜に心臓を二掴み砕かれ、のみならず左腕と角一つをも消失させられ地に伏したバーン・・・・これで決着がついた！
誰もがそう思う歓声が上がりかけた時
「・・・・ぅ・・・くぅ・・・・」
微かな呻き声に、全員が止まりダイも警戒をしながら全員の前に立って剣を構えながら、震えそうになる体を鎮めようと苦心する。
あそこまでした、文字通り自分の中の力と知恵を全て使い切っての大技であり、あの周りの闘気の大渦も全てバーンに行き、自分なら即死しているダメージを負ってもなお生きているバーンに、最早恐怖すら感じるのは無理からぬことで、どうしたってバーンを倒せないのだろうかとさえ頭によぎる。
魔界の神とは・・・本当に―神―であり倒せないのか・・・・
だが、これにも絡繰りがきちんと有る。
バーンは己の若い肉体を分離し凍れる時の秘法で不死性を手に入れ、何千年という時を渡って来たように、今度もまた絡繰りを・・・・最後の切り札に手を付けた。
「っぐふ・・・・・はは・・・・まさかここまで・・・・・余が追い込まれ・・・」
けふけふと、血を吐きながらバーンがバーンは―額の瞳―に手を入れ
「余の・・・・肉体を捨てさせる決意をさせられるとはな!!!!!」
第三の瞳の開放により、ダメージが回復していく
「あ・・・・駄目だ!!!」
「止めろ!!!!」
「カイザーフェニックス!!」
「大地斬!!」
「メド・・・・メラゾーマ!!」
「アバンストラッシュ!!」

それは異常であり、回復していくバーンの動き一つで空間すらもが捻じ曲がる現象に、ダイ達は無いながらも力を振り絞りそれぞれに出せる技をバーンに放つがそれらは届かなかった。
歪んだ空間は、尋常ではないエネルギーを発し、来たもの全てを曲げバーンに掠りさえもしなかった・・・・解放したのだバーンは、己の最後の切り札である第三の瞳―鬼瞳―を。
解放すれば、己の肉体は魔獣と化して理性も知性も失われるであろう最後の切り札を、自身の何もかもを投げうってでも、絆の力とやらに負けたくないという一念が、バーンを追い詰めそして死すとも出すまいと思っていた。
―アレ―になってしまっては、己の意思まで呑まれるからだが、それでも勝ちたい!!負ける事こそ業腹であると、己を捨ててでもと・・・・
その凄まじいエネルギーが噴き出し!バーンの体は巨大な―ナニカ―に覆われそして中心にバーンが取り込まれていた!!
「竜の騎士ダイよ・・・・くっく・・・これが、余の最後の切り札よ。」
巨大な・・モンスターともいえないその異形の姿になり果てたバーンに、老大魔王もあれがなんであるか皆目見当がつかない。
それはあまりにも異質で、異常で、ドラゴンでも魔神でもモンスターでもなく・・・凄まじいエネルギー体である事しか分からない
呆然とするのをバーンは老大魔王の様を見てクツクツと笑う。
「そうか、貴様の若き肉体はすさまじい威力があったのだったな・・・おそらく余と違って鬼瞳を解放しても、このような魔獣の肉体化はせずに世界を破滅させるエネルギー体にでもなるのか・・・・・それも叶わぬよ・・・・貴様らは余が・・・・・じきにこうして話もできなくなる知性も理性も無くなった余が!!全員殺す!!!!」
本来は、己が成らない・・・なる気が無く、鬼岩城を作る事で満足している筈であったバーンの―最後の力―は、拳を振り下ろし文字通り全員を潰そうと振り下ろす。
一撃を逃れても、幾人かを死なせてしまう・・・その場で防御をしようにも最早・・・力がもう・・・・・
「竜の子よ!!!!!!」

ダイを初めてして、誰もが、力がもう出せないと絶望しかけた時声が響き、そして魔獣が動きを止められた。
それは、その声は思念体となり最早直接は現世では聞こえない筈の
「マザー・・・ドラゴン・・・」
ダイの言葉に、マザードラゴンは最早存在しない顔を苦シャリと歪める。
愚かで他者を散々振り回す自分の名をまだきちんと呼んでくれることが嬉しくて、そして最早二度と聞けない最後の会話を、楽しむ時間がない事も全て含めて表情が歪める。
あと百年残る筈であった思念体としての役割の為のエネルギーを割いてでも・・・
「ダイ、時間がありません。」
自分の最後の事も呼べるダイとの別れも惜しいとばかりに、マザードラゴンは焦るように話し始める。
「そのバーンは、今第三の瞳を解放して真珠となり果てました・・・大丈夫です、今から数分は動きを止めてもらっています。
私の話を聞いてくださいダイよ・・・」
マザードラゴンの言葉にバーンを見れば、魔獣は拳を振り上げたまま、取り込まれたバーン事動きを止めている。
それが何故も何も聞く暇は無く、マザードラゴンはダイに選択を迫る。
「ダイ・・・残念ながら今の貴方達ではそのバーンを倒すことは出来ません。」
竜の騎士の最終形態になれればと言っても詮無き事・・・・
「しかし、ダイの協力があれば一つだけ手があります。」
「なに・・・何が俺に出来るの!!」
今自分に出来る事があるのであれば、直ぐにやるというダイの言葉に、マザードラゴンは嬉しく思う。
この状況に絶望せずに、足掻けるのであれば何でもするという心の強さに。
其れでも・・・これから自分は・・・

「ダイ、貴方の左手に輝く紋章はバランから譲られたものですね？」
「あ・・・うん・・・・この中から、沢山の戦い方と、父さんの微かな、俺と母さんを愛してくれた記憶と思いがあるんだ・・・」
　譲られた紋章から、これまで戦いに対するその場その場の最適解を教えてくれていただけではなく、根底には―愛―を感じた・・・・悪を討てという感覚よりも、どの教えの中にも己を見んとしてくれている父の果てしない愛を・・・・だから・・
「俺は怖くても前に出て戦える・・・・」
　ダイの言葉にマザードラゴンは無い筈の涙が流れるのを感じる・・・・
「よく聞いて考えそして返事をしてくださいダイ・・・」
　時間は―あの人―が作ってくれる・・・・だから、悩んでいいというマザードラゴンの言葉に、ダイは何を言われるのかと不安になった。
　そしてそのダイと周りの不安は的中した。
　何故ならマザードラゴンの提案は・・・
「ダイ、貴方の譲られたその紋章を空に放ち、ティファがバーンが取って来た膨大なエネルギーを天空で一つにしてバーンに向け紋章閃を放てば倒す事は可能です・・・」
「そうなんだ・・・なら!!」
　紋章閃は、一度だけ父に放たれた事がありあれだけでいいのであればとダイは構えたが、マザードラゴンの次の言葉でダイの動きが止まった・・・・止まってしまった
「ダイ・・・これからあなたに撃ってもらうのは只の紋章閃ではありません・・・」
　それはバランから譲り受けた紋章の中に蓄えられてきた数百年分のエネルギーをも併せなけらばならず
「私は我が子等が死ぬとき、私の体内に死した子等を再び胎の中に取り込み紋章も吸い取るのです。」
　その力を使ってダイの左手から―バランに譲られた紋章全て―を取るのだと・・右手の紋章も可能ではありバーンを倒せないとは言わ

ないが仕留め切れる可能性は低くなり、できれば左手の紋章を取らせて欲しいと

「そ・・・れって!!!まさか!!!」

今まさに左手から天に向かって紋章閃を放とうとしたダイの動きも思考も全てが凍り付き、それはポップ達も同様で・・・何故なら

ダイの疑問に、マザードラゴンは包み隠さずに答えた。

文字通り、譲られた紋章を取るという事は・・・・・・戦闘時の最適解だけではなく、バランの残された微かな記憶と愛までもダイから奪う事を・・・

ダイ君はどうするのだろうか？

右が左かどちらを、何を選んでも助けますと、ティファは―バーン

の中―でダイの中で答えを待つ

いしの積まれる世界・切り札

確実なる左手の紋章には歴代の竜の騎士の想いとそして、己と母に対する深い愛情の微かなる記憶
確実ではない右手の紋章には・・・・何が詰まっているのかは分からない・・・
しかし言えることはただ一つだけ
「左手を即座に選ぶような子であれば、そもそも私はいなかったでしょうね・・・どう思いますか若き大魔王もどき殿？」
「・・・・知らぬ!!そんな事よりも!!貴様いい加減に―余の中―より出ていくがいい!!そもそもお前はどうやって余の中に入り込んだのだ!!」
「あぁそれはですね、貴方の中に無断で入って来たお詫びとしてお教えさせて頂きます。
私は向こうの世界の大戦終結の為に―多少―無理しすぎて世界の命運やら天命やら・・ぶっちゃけると色々と起こる筈であった事象を強引に起こさせないように誘導したせいで対価やら代償払えと生命と魂持ってかれそうになりましてね～。」
「・・・・・・・・・は？」
少し前に、後ほんの少しで魔獣と化した名付けるところの―鬼岩王―となった自分が、自我が保てている間に忌々しい者達全てを粉砕できるところまで来た時、突如この目の前の忌々しい小娘が精神世界に入り込み、自分の精神体を掴まえた・・・訳がわからない!!
そもそも複雑な呪法を用いてようやく入れる精神体に！なんの呪法も仕掛ける時間なぞ無かったこれが！どうやって自分の精神世界に入って来たのだと問えば!!世界全ての命運等を書き換えたのを―多少無理した範囲―で語ろうとしているこいつの精神自体がおかしい!!!
何のなのだ！そんなそれこそ―神―かそれに近しいものしか成しえないような事をしでかしておいて、そこまで凄いことではありませんよね認識でいるティファに対し、そういう方面に圧倒的詳しいバー

ンとしては、もうティファという存在自体が―色々―とおかしすぎると苦悩するのを、ティファは気づかず種明かしをする。
「体まで砕けた時、―私の大魔王―が自分の魂と生命を半分分けてくれたのです。」
　あの時の温もりを、ティファはずっと忘れない。
　寒くて凍えて、消え果ようとした自分を必死に掻き抱いて文字通り己の全てを半分分けてくれた大魔王を・・・この先後継ぎのハドラーが大魔王に就任しても、自分にとっての大魔王は大魔王ただ一人で・・・・目の前の大魔王もどきは割とどうでもいいのでその辺は胸に仕舞って今起きている事象の説明だけをする。
「他界であろうとも大魔王の生命と魂が入っている私は、この世界の貴方とも親和性が高く、故に精神世界に入るのは簡単でした。」
　それが無ければ貴方を取り押さえるのはもう少し苦労して、拘束時間も短かったでしょうと言いいながら笑うティファを、バーンは忌々しげに見つめる。
　―遡った少し前―
　バーンが第三の瞳・鬼瞳を解放した時、ティファは鬼眼王があったと臍をかんだ。
　マザードラゴンの策が間に合わなかったか！
・・・・とは言ったところで仕方がない。
　さてどうしたものか、ラックでマグマの中に堕としてもあれは死なないだろうし・・・・自分の生命全部をハイ＝エントの魔力に回して魔獣に取り込まれたバーンの最後の心臓をジ＝アザーズで止めてみればうまくいくかなという、やったら効果のほどは分からないが確実に自分は死ぬだろうがやってみる価値はあるだろうという物凄く物騒な策を実行しようとした時に、―待った―が入った。
「ティファ!!!貴女は自分が死ぬのを前提で動く癖をどうにかしなさい!!!」
「・・・・・・・は？」
「えぇぇぇ分っていますよ!!!貴女にそんな策をさせる事になった元凶たる私が何を言っているのだと言いたいのでしょうが!!あれを何と

かする策はもうできているのです!!!」
もっと周りを頼りなさい、信用して真っ先に自分を使い潰す癖を辞めなさい!!
止めたのはこの世界のマザードラゴンであり、策があると言いながらティファに説教したのだ。
ティファは、どうして周りには無理無茶するなと言いながら、己とはそれこそ本当に何の縁も所縁も無い世界の事で命をかけるどころか命を対価にするような策を平然と敢行しようとするのか、この世界のマザードラゴンはティファを連れて来てしまった事を悔いても悔やみきれない気持ちながらも、切々と語る時間は無いので後は向こうのマザードラゴンに託したので―後で―聞いてくださいという言葉に、ティファはそれだけでマザードラゴンがこの後どうなるのかを的確に察して、自分にどう動いてほしいのかを端的に問うた。
このタイミングでの接触であれば現状の打開策があり、自分には時間稼ぎでもしてほしいのかと問えばその通りですと言われたので、速攻自分ならできるのではないかというバーンの精神世界への侵入を試みて成功をした。
やり方は魂飛ばしと同じであり、この場合魂ではなく精神をバーンと繋がるようにする。
原作で言うところの最終の時のメルルとポップのあの心が繋がり通信で来たのと同じことをバーンに仕掛け成功し、気付かれて弾かれる前に内奥まで進んで今に至っている。
「マザードラゴンが・・・・何故短時間で余を仕留める策がある?・・・貴様か?事前に余の最終形態をマザードラゴンか神々に伝えて策を施させていたのは・・・」
バーンの疑問ももっともである。
向こうの世界の老大魔王すら知らない事柄を、何故かこの小娘が知っていて策を用意させたのか問うバーンの疑問に、ティファは苦笑する。
「何でもかんでも私の仕業だと決めつけないでください。私はそんな凄いものではありませんよ。」

「ふん・・・貴様の仕業と思われる数々の事を思えば、疑われて当然であろう。」
　この世界に来て早々に自分から勇者一行を丸々と逃がした事から始まっているだけに、疑われて当然だというバーンの言葉にティファは益々苦笑する。
「本当に今回は私ではありません。覚えていますか大魔王もどきさん、最初に遭遇した時マザードラゴンは、近い世界であれば行き来をして情報のやり取りができると。」
「・・・・言っていたが・・・・もしや・・・・」
「はい、その中に―貴方の情報―が入っていてもおかしくは無いでしょう？」
「だが・・・それでは神々は何故余に対してなにもしてこなかった!!??
　事前情報がある時点でそれこそ余がこうなる前に!!!」
「それをするのは―禁忌―なのでしょう。
　結末が分かっていても言葉にせず、干渉せず、―情報―が使われるのはあくまでも戦闘経験だけで、それ以外に知った事はどこであっても伝えない・・・そうでもしなければどこの世界もおかしくなると思いますよ？」
「む・・・確かにお前の言う事に一理ある。理の外から得た情報で世界を動かすというのは、人形遊びとさほど変わらんな・・・・してみれば其れで世界が動く事を余やヴェルザーの如きものが知れば、いつか研究して同じ事をしようとしよう。」
　だが、世界はそのようにはなっていない・・・・なっていないと知覚できていればが前提であるが、少なくとも自分がそうなっておらずここまで勇者達を追い詰めたのがその証拠の一端にはなろうとバーンはどこか納得をする。
　であるならば尚の事疑問が湧く。
「ならば何故余に対しての策が出来ているのだ？」
　・・・・性格や在り様は兎も角として、知識は特一級品なバーンの鋭すぎる疑問にティファは溜息をつきながら答える・・・・溜息の理由は―自分がされたら嫌な事―であり、自分がさんざんやっている事

だからだ。
「この世界のマザードラゴンは、他界で知った貴方の最終形態の事をこの世界の神々に明かす代わりに、あと百年は存在で来た思念体の消滅と・・・・・輪廻転生できる筈の魂までもを対価にしたのです・・・」
文字通りマザードラゴンは己の全てを使ったのだ。
竜の騎士のみならず、彼女はいつしかこの世界の生命が愛おしく思っていたのかもしれない。
只の調停者の生みの親というだけではなく―母―として。
「ただ一つ貴方の先程の事もあっています。」
「なんだと？」
「貴方の情報に対して結構あやふやなところがあったので、―鬼眼王―になる為の発動条件と言いましょうか、どんな動きをした時にそうなるのかの最後の情報を私が渡しました。」
バーンが額の目、鬼瞳を取り出そうとした時だ。
つまり、半分以上はマザードラゴンの策であり、ほんの少しだけ自分が関わっているのですというティファの言葉に、バーンは今度こそ怖気振い、戦慄く声でティファを問いただす。
「・・・・なんなのだ貴様は・・・・・一体貴様は!!!なんだというのだ!!!」
最早化け物ですら生温いとばかりのバーンの言葉に、ティファは静かに笑って答える。
「私は・・・・そうですね・・・こういう時の為の―切り札―ですかね・・・」
「切り・・・・札だと？」
「はい、貴方はとかく切り札たりえる物を出しすぎたのですよ。
地上消す為の六芒星の核になる黒の核晶を仕込んだ柱をあんなに剥き出しにするから私に盗まれて、あの服装言動悪趣味死神を取り込む為かは知りませんが、折角影に預けていた若い肉体を自分と融合する事で、老バーンと若い肉体との挟撃という手を自ら封じて、影にこっそり逃げて人知れず力を解放して、遠くから私達を殺す手を考えもせずに目の前で堂々としてやったが為に、こんな羽目に陥っている・・・・・切り札を殺してますね・・」

「だ・・・まれ・・・・」
「切り札は簡単に見せてはいけませんよ。」
「黙れというに!!そもそもが本来はどれか一つでも使えれば貴様等を殺しえたものを!!」
「はい、私が尽く邪魔をしました。
私も自分の能力を見せてきましたが、―それら―は全部は見せてませんでした。」
黒の核晶を取れる能力も、若き大魔王を相手に出来る大魔王の力も、そして若きバーンが追い詰められた時の行動や最終形態の事を識っていたことも・・・
「切り札を見せるなら、更に奥の手を持つべきでしたね大魔王もどきさん。」
「貴様が・・・その切り札だとでも言いたいのか!!!」
「今回においては違います。私はそんな貴方にダイ君達なら抗えると信じた事が最後の切り札です。」
己が絶対だからと慢心したように周りを見ずに動くから、少年ダイの心根も見抜けずに食らいつかれたのだとティファは言う。
彼等の絆の力こそが、最後の切り札なのだと。
「彼はどんなに辛くとも、貴方を倒す道を選びます。」
この世界を大切な仲間達と共に知る為の旅に出る為に・・・・記憶の無くなったバランがそれでも生きていてくれれば新たな絆を自分が築けばいいのだからと泣いてバランの生を喜んでいた優しい少年は、きっと・・・
そう信じているからこそ、少年ダイの為に自分の持てうる限りの力を使える・・・自分がマザードラゴンに情報を与えた時、ティファもまた対価を払った。
それは己の肉体の成長
これよりはティファに肉体は成長する力が無くなる。
生殖機能は流石に渡さずに済んだ。
其れでは対価の払い過ぎだがそれは兎も角、ティファはまだまだ女性らしく成長できる筈であった。

事実ザボエラ達の健康診断で指導を受けたマァムの食事療法のお陰で背は伸び胸も少しだけ膨らみ二次性徴が始まったが、それもこれはから無くなり―一生少女のまま―時を渡っていく事が決まった。
だがそれでもいい、自分が信じた切り札達の為に、成長しないくらいなんだというのだ。
生きる事が第一なのだから・・・・・
そして、ティファの願いが届いたが如く、数分後に少年ダイは泣いていた瞳をぐしゃぐしゃに両手で拭い、決然とした顔を上げた。
答えが出たのだ

いしの積まれる世界：空に昇る竜の奇蹟

ダイは泣いた
本当にもう涙が枯れるのではないかという程泣いた。
父を識った・・・敵として撃たねばならない相手として。
父が魔王軍で、それも自分が大好きなポップ・マァム・ヒュンケル・ロモス王とそして・・大好きなレオナ達人間を共に滅ぼそうと言って来たから・
断固として戦った、自分の記憶を消去されても親友ポップの命がけの行いで記憶を取り戻してそして・・・
父に再会した・・・父に出会った時と違って―人間―を守り抜くと思っていた心が揺れている時に・・・もしもこの状態であの時出会っていたら・・・きっと自分は父からの提案に迷いそして・・・負けて記憶を消されて連れて行かれたかもしれない・・・そんな自分の何かに気が付いたのか、再開当初は距離を置こうとしていたのか、自分に近づこうとしなかった父が真夜中に来て、部屋の外に連れ出され満天の星空の中庭で、母との出会いや赤子の時の自分に対しての一切を淡々とだが話してくれた。
お前を愛していると、静かな声で告げられ頭を撫でられ、もう寝なさいと言われた時に俺は親父に心が救われた。
あの人となら、どんな苦しい戦いも戦い抜けると・・・そして親父が死んだ時、俺の心も確かに心で・・・そして戦えなくなった俺のせいで、異界というところからティファさんポップさんチウ君が巻き込まれて・・・それでも親父が助かった事が嬉しかった・・・最低だと思いながら。
弱い俺のせいで幸せな時間を壊され、もしかしたらティファさん達は自分の世界に帰れない可能性だってあっただろうに、そんな事も考えずに俺は親父の生を喜んで・・・そして悲しみも味わった。
俺を命を懸けて戦い抜いた親父の死は絶対に決まった事で、それをひっくり返したせいで親父は俺との絆を持っていかれたって。
でも俺は、やっぱり親父が生きている事の方が嬉しくて、生きてい

れば新しい思い出や想いを積み重ねられる、デルムリン島でずっと一緒に暮らせるって。
それに・・親父は自分の犯した罪も忘れている事が俺には嬉しかった。
酷い話だ、勇者の考える事じゃないと分かっていても、親父が苦しまない事の方が嬉しくて・・・・・・
そして親父の微かな俺に対する記憶と想いが、自分の中に眠っていたことが分かって喜べば・・・・・それを天に放って力を増幅させて大魔王を討てと言われて・・・・どうして？
どうして親父と俺事を引き裂こうとするんだこの世界は!!!どうして過酷に生きた親父から何もかもを奪い取ろうとするんだよ・・・・・どうして・・・親父の幸せの記憶を取ろうとするんだよ・・・
どうしてどうしてと・・・・・泣いても・・・・それでも、左手の紋章を発動させた時に流れた親父と歴代の竜の騎士達の想いが忘れられない
生命を守る為に、強大な悪を討てと・・・・ずるいよ・・・そんな風に託されたら、俺にはできないなんて言えなよ・・・親父達が守ったこの世界を・・・・どうして守らないなんて言える？言えない・・・言っちゃいけない・・・・だって!!だって!!!

「俺は・・・・」
ティファがバーンの精神体を取り押さえる事で現世世界の鬼眼王を止めていたのはほんの数分だが、その間ダイはマザードラゴンの要請を受けた後はずっと泣いていた。
親友のポップにも、師であるアバンにも、仲間や尊敬し始めた青年ダイ達にもどうすればいいと問う事は無く、マザードラゴンの要請以降ずっと目をつむって押し黙っているティファにも問いかける様子は無く、ただただ下を向いて泣き濡れているのを、周囲はどうしてあげることは出来なかった。
父との結ばれた絆が残っていたのだと嬉しそうにしていたダイを知るだけに、勇者・竜の騎士としての使命だとか、まして一度世界に

絶望したダイに世界の為にと言える筈も無く、泣いているダイの背中を少年ポップが包んでやる事しか出来ずに、不甲斐ないと全員が忸怩たる思いをする中で、ダイは突如顔を上げ、涙をグシグシと両の拳で拭いながら、少年ポップの包んでくれている腕の中から歩いて出て、決然と空を見上げる。

数歩、たったの数歩だが、仲間達にとってそれは大いなる数歩であった。

どこか自分達を戦いの拠り所にしていた少年勇者が、空高く舞おうとする若竜の如く大地に足を踏みしめる様に、苦悩を乗り越えそして

「俺は勇者だ!!!生命を守る!!!竜の騎士で勇者ダイなんだ!!!」

竜が空高く昇った・・・・力強く振り上げらた―左手―!!から空を一路目指し、竜の紋章が空を上りそして・・・・

ゴロゴロ・・・・ゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・ゴゴ!!!

歴代の竜の騎士達の想いと蓄えられていたエネルギーが空を昇り、天界が空に溶け込ませていたティファが取って来た黒の核晶の三本分のエネルギーと合わさった時、膨大なエネルギーが紋章を通して顕現し、それ故に稲光が発生し空間を帯電させ蒼天を黒雲で染め上げる様は、竜が空で暴れているかの如くであり、更にうねりを上げ膨大なエネルギー同士が濃密に合わさった時其れは起きた。

ガッ!!!ガッガーーーーンンンン!!!!!!!

竜の騎士だけが使える紋章閃が、天地開闢始まって以来の最大の威力で稲妻の如く凄まじい暴虐とまで言えるほどの威力を以て動きを止めた鬼眼王と化したバーンに振り落ちる。

あまりの威力と速度に、精神体となったティファを追い出したバーンが最後に現世(うつしよ)で見た最後の光景は、巨大な竜の紋章であった。

あの・・・・忌々しい神々の尖兵たる竜の騎士に、弱いと評した勇者に・・・敗れる己がどこか滑稽で・・・

「フッククック・・・・ハッハッハッハッハッハ!!!是非も無し!!!!」

散々弱いと決めつけていた輩が、ここに来て、自分との対峙のせいで大化けした事か、それともあの―異界の化け物娘―を引き入れられた時に取り逃がしたせいか、様々な事を見過ごし逃し軽んじた結果がこれであるのならば・・・・・最後の相手となったダイが、様々な葛藤の果てに起こしたこの行いの果てに敗れるのであれば・・・・忌々しい神々の億倍もましな気概を持つこの澄んだ心を持つ少年にならば是非も無いと、バーンは己の最後をもたらす災厄を笑いながら甘んじて受けれる。

ティファ達がどう評価しようとも、バーンは誇り高い本物の大魔王であった。

その性は傲慢であり不遜でありそして・・・・孤高であり続けた。

周りを頼むことなく二度とおのれの中を荒らさせない為に

一人で戦いそして倒される時も、―誰―もいない。

忠臣もいないが見苦しく敵に向かって命乞いをして喚くような愚かな配下もいない・・・唯自分一人が倒されていくのもまた悪くは無いではないか・・・

見事だと・・ここまで劣勢であった者達の、それでも手放さなかった絆とやらに魅せつけられてしまっては・・・・もういいではないか・・・・

栄華を極めた、強敵たちと戦い合った・・・・不本意ではあるが異界の化け物娘との頭脳戦もしあった・・・・眩しい漢達の生き様を見て・・・・

これ以上のものがある筈も無しと、バーンは光り輝く、空から己を滅ぼしに降ってくる光り輝く光を見据えそして、一身にあびた時、鬼眼王の肉体全てが消滅し、防御として剥き出しのバーンの本体に張られた結界のせいで、バーンの腰から上の部分だけが残され、それも石化しながら地面に叩きつけられた。

誰もが、バーンの最後に圧倒され言葉が無かった。

倒したと確信するほどの膨大なエネルギーが空に生じた時に感じ

た高揚も吹き飛ばす程に、敗北を受け入れたあの時のバーンの全てが凄まじく・・・そしてたとえ様も無い程の圧倒的なあの姿に、孤高の大魔王の生き様を見せられた思いがして敵の首魁を討ったとは思えない程の静寂が辺りを包む中、ティファは少し前のバーンの言葉を思い出す。

「出ていけ異界の忌々しい小娘、余はこれまで一人であった。」

死に際してそれを穢すなというバーンの言葉を。

肉体が死んでも精神世界が崩壊するまでにはタイムラグがあり、ティファはそれまではバーンと共にあろうとした。

死を、一人で迎えるのは悲しい事を知っているから

前世での死に方は、ひっそりとした死に方であったのを覚えている。

病院で一生を過ごし、友となった者達も病死し、孤独の中で誰に看取られずに夜半に息が出来なくなり朦朧としながら最後に見たのは誰かの顔ではなく、見続けていた天井であった・・・・それがひどく悲しくて寂しくて、死よりも尚怖ろしかった・・・・誰かの役に立つことも無く、誰かを助けてあげる事も出来ずに、誰かに助けられるだけの最後に誰もいなかった寂しさは・・・・せめて敵であっても、敵の首魁であっても見送る事くらいは良いだろうと思ったのだが・・・・それも自身の傲慢であったと思い知らされた。

「余は大魔王也、魔界の神大魔王バーン也！同情で余の最後を穢す事を許さじ。」

死にゆく者の想いもまた様々にあり、己の考えを押し付けることを恥じたティファは、頭を無言で深々と下げそしてバーンの精神体を自由にして立ち去り、そして少年ダイ達と共に、バーンの最期を眼に焼き付ける。

考え方も生き様も相容れないものであったが、それでも・・・・

自分達が総力を以て倒した相手は、確かに魔界の神大魔王バーンであったのだと知らしめられる相手であった・・・・

どこかの世界では、空に昇った竜は相棒の少年魔法使いを蹴落として黒の核晶と共に虚空の果てに爆発と共に行方を晦ませたが、この世界の空を昇った竜は、黒の核晶と合わさりこの世界の生命を救った・・・・・そんな結末となったのだった・・・

暖かいいしの下に：石化したバーンを如何にすべきか・・

倒せた・・・そうとしか浮かばない、現実味の乏しい勝利に、大魔王を討ち天と地の消滅を食い止めた者達はどこか戸惑いすら浮かぶほどに、若き大魔王バーンの最期は凄絶でありそして鮮やかすぎた・・・・まるで自分から負けてやったような、大人に勝ちを譲られたような子共と思わせられる程の、見事すぎる潔さに、石となって地に伏したバーンをどうしようという思考が大人達に生じさせるまでに暫し時を要したほどであった。

老大魔王と、そして地上で知略・謀略をも欲しい侭にしていると言われる両マトリフとアバン達をも圧倒したバーンのあの遺体と言っていいのか分からない状態の物をどうすべきかた少年ダイに尋ねられた大人達は一様に首を傾げる・・・そもそも何故肉体は滅びずに石化したのか？

そんな疑問をっ子の人なら解けるのではないかという人物の服を、少年ダイがクイクイと片手で引っ張った。

「お姉ちゃんは、バーンがどうして石化したか分かる？」

・・・・・・この子は・・・

物凄い難問を・・・普通の人ならともかく私にとってはそこまでではないけれども、兎に角私以外の人に聞いてもどうしようもない事を、平気でド直球で聞いてきたと、日ごろの自分の行いを顧みずに頭を痛めるティファであったが、応えられる範囲内なので周りの疑問解消と今後の指針の助けになればと、私の考えですがと前置きをして口を開く。

「ダイ君は天界に左手の紋章を放ち、その先には私があのバーンから分捕って来た巨大な黒の核晶六個のうちの幾つかを私の大魔王とダイ兄をこの世界に呼ぶことに使って、残りの内の幾つかをバーン討伐に使ったわけですが、恐らく魔界の冥竜王ヴェルザーを封印した時の

術式も混ぜたのではないかと思います。」
　ティファはそこから少年ダイ達の為に、自分の知る冥竜王ヴェルザーが当時竜の騎士と天界の精霊にどう倒され封印されたかを端的に説明をし、竜の騎士たる父バランがヴェルザーを弱らせ弱体化をしたところを天界の精霊達に魂を封ぜられ肉体の石化をさせた事を。
「・・・・・お姉ちゃん詳しいね・・・」
　当時何て生まれていないどころか、地上には話しすら聞いた事の無いヴェルザーの死闘と顛末だけではなく、細部まで知っているのは矢張り老大魔王に聞いたのかと少年ダイ達は尋ねたら・・・・さらりと爆弾発言かまされた・・・
「あぁ、当時どうだったのかをヴェール・・・ヴェルザーに聞いたら教えてくれました。」
　当時の悔しさや怨嗟を滲ませたどす黒い声と気配を伴った話はなかなかに迫力ありました発言に・・・・お姉ちゃんティファはヴェルザーとも仲直りしたのかと・・少年ダイをして頭痛くなってきたがそれは兎も角・・
「要はあの状態は封印されているかそれに近い状態だという事でしょうか？」
　この世界のアバン先生は頑張った！もう本当にこの少女何なのという不毛な事を頭からたたき出して頑張ったのだ!!・・・・・それでいいのだろうかは其れは放り出し、天界の封印ともなれば地上側がどうこうしてよいものかという悩みが発生する。
　この場所に何人も立ち入れないような結界を施そうにも奥まった岩山でハドラーの居城跡という曰く付きの場所ではあるが、火山が噴火した後は其れなりに開けた場所となり、そもそもこの地にあのバーンの遺骸を安置したとしたら・・・・パプニカ王国は泣いても良い
　どちらの世界のパプニカ王国も、パプニカ王国と書いて不運の国とも読めてしまう国なのだろうか？
　ハドラー大戦では目の前に魔王ハドラーの居城作られるは、その魔王居城跡地に、こうして平和になろうとしているこの時に、最も恐ろしい敵の遺骸の安置場所にされそうになったりと踏んだり蹴ったり

である。
　それを勇者の、ひいては地上側の勝利の地としての政治的にも国際アピール的にもふんだんに使える要素はあるにはあるが、警備を如何にすべきかが課題になること請負であり、そして手柄を貴国だけのものとするのかという政治攻撃の手札を渡してしまいかねない諸刃の剣と化しかねない上に、そもそもが封印が永続的な事だと誰にも分からず・・・・一つの国がどうにかするには様々に厄介な遺骸であるのだこれは。
　警備問題は、まだ地上にバーンを辛抱する魔王軍がいないという保証がない事と、後々魔界から彼の者の遺骸を奪い返さんとする魔界勢が、この地の特殊地場を使って侵攻しかねない事である・・・・まさか勇者一行丸ごとをこの地に駐屯させる訳にもいかない。
　レオナ姫とフローラ女王とアバン以外は全員が勇者一行ではあるが市井のものであり、ヒュンケル・クロコダイン・チウ・ラーハルトも国に所属していないがその括りであり、自由を束縛する権利は誰にも無いし、させるつもりもこの世界のアバンとマトリフには無い。
　その様な動きがどこかの国にあれば即座に潰すと考えている。
　彼等の自由と平穏な生活の為に。
　そうなるとパプニカ王国の首都の結界奥深くに安置するしか後は考え付かない。
　あそこであれば兵士・騎士達・魔法使いや賢者や神官たちもおり、警備をするには万全な状態にできる。
　だがそれをすると、第二の案件ともいえる他国の非難をわざわざ買う恐れも出てくる。
　今から数年間は各国も大戦の爪痕を消そうとそちらに注力し、国の復興を第一としてくれるだろうが、―平和―になった後の―人間―の欲望がどう動くかをある程度予想しているアバン達やマトリフ達はその事に頭を痛める・・・・何故地上の勝利の直後に―人間の欲望―の事にまで考えを及ぼさなければならないのだと・・・単純に勝てた事だけを喜べないのかと―人の業―に頭を痛めるのを、少年ダイ達どころか青年ダイ達も難しい顔になったアバン達を不思議そうに見

る。
　あのバーンをどこに埋めてあげるのかをどうしてそこまで悩むのか・・・遺骸を取り返されるという発想言えば納得をするだろが、人の欲に彩られた政治的な事には、彼等には考え付かない事であった。
　人々の力を携えたからこそ勝てた事であり、そんな事を穢す輩がいるという事を言われてもダイ達には分からない事であった。
　一応青年ダイと青年ポップは王配となるべく政治教育を受けてはいるが・・・・周りの大人達は物凄く甘かったのだ・・・良き政治は民を国を周辺諸国を幸せにするという良き面は教え込み、―負の政治―は宰相以下大臣達が請け負う事と、パプニカ王国とテラン王国は互いに打診し合い大人達はこれを決定し、パプニカ王国の跡取り王女レオナもその手の政治手腕から切り離す事は説明を成されレオナ本人からは複雑な思いをされながらも両証取り、アバンやフローラ女王達は無論の事、現国王達も親書で知らされてうけいれられている・・・外から見ればそれでは王族・政治ごっこではないかと滑稽な事のように思われ軽侮される事であるだろうが、現国王達は本気であった。
　辛い道のりの果てに、三界全てを救った彼等に報いようと、国益等の事は宰相達が手腕を発揮し、彼等には平和な世界を牽引する大切な仕事をしてもらうのだと、ロモス・ベンガーナ・リンガイアでは次代にもその旨を教えている最中であり・・・・現実を知らせない甘い世界にいる彼等に対し、さて何と言えばいいのかアバン達とマトリフ達が目配せして視線で相談をしようとしたその時

　パンパンパン

　気のない拍手が様々な意味で静寂をしていた場に響き渡る

暖かいいしの下に：影の慟哭・死神の献身

突如として静寂の中を響き渡せる拍手の音に、真っ先に動いたのはティファであった。

―全部―思い出したのだ。

―自分の知る原作―では、大魔王を倒した後に何が起きるのかを。

若きバーンに向けなかった夕月を即座に取り出し抜剣し、未だ繋がっている―世界のエネルギー―から即座に必要分を回して全員の前に出て剣を構えた先にいたのは、予想を違えずにキルバーンがいた。

それも石化したバーンからほんの少しだけ離れた距離に。

「手前ぇ・・・・何しよってんだよ・・・」

体がある程度回復をした青年ポップが目を覚まし、即座にキルバーンを問いただす。

自分達にとって、この世界のキルバーンは猛毒のような存在であり到底―キルバーン―と呼べる存在ではなく、出会ったが最後、跡形も無く散りにするべき疎ましく悍ましいモノでしかない。

そんな存在が、自分達のキルバーンによって四肢を斬り落とされたというのに完璧な姿をして現れたのだ。

警戒しない方がおかしい、しかしキルバーンはそんな青年ポップを見ても、己を最大限に警戒しているティファを見ても、どころキルを見ても何の感慨も無さげにしながら悠々と石化したバーンに近づいていく。

正確には―ピロロ―が人形キルバーンを盾にするように進んでいるが、青年ダイ達にはその様な事はどうでもよく、石化したバーンを使って何をするつもりだと警戒する中、ティファが問うた。

「そのバーンに何か御用ですか三文死神？」

・・・・もう少し言い方ないのかと思った一同はきっと悪くない・・・現に言われた当人も、あまりのド直球なティファの物言いに、怒るどころかかえって毒気を抜かれた様に唖然としているピロロと人形キルバーンは、次第に怒るのが馬鹿らしいと人形キルバーンはクスクス

と笑ってしまった。
　どこまでいっても不遜で真っ直ぐな物言いしかしない小娘に、呆れを通り越しておかしみする感じるのだから不思議だと、本体であるはずのピロロとは違う思考で笑ってしまい、ピロロを憮然とさせるが、ティファにとってはそんな事はどうでもいい。
　石化したバーンをどうするつもりか再度問う。
「今更利用価値も何も無いと思いますよ？」
　鬼瞳はエネルギー全てを使い果たし、石化したバーン自身も心臓三つのうち二つは確実に潰れ、何千年先かに封印が解けたとしても、最早その辺の魔族よりも弱い存在でしかないと見積もっているだけに、キルバーンが今更出てきて何がしたいのかと疑問である・・・そもそもが姿を現した理由も分からない。
　―キルバーン―に搭載されていた黒の核晶はもう取り除かれているをティファはクロファの覗き見によって知った状況全てを知らされている。
　それに黒の核晶単体で自爆したとしても何の戦略的にも戦術的にも意味合いがない。
　そして―ミストバーン―と違い、主の仇・・・・あぁそうか・・・
「―迎え―に来たのですか？」
　ティファは己の思考に生じた名前に引っかかっていた事をようやく理解しそしてキルバーンにぶつけてみた。
　若きバーンの精神体に入り込んだ時、濃密すぎる―暗黒闘気―を感じていたのだ。
　それも若きバーンのものとは違うと分かる・・・・まるで―生き物の様―なそのエネルギーの正体はもしかしたらと。
　ティファの周りに集まり取り囲むように守る仲間達は、ティファの言葉を石化したバーンを守りに来たのだろうかと誤解をした。
「・・・・其の方にも忠義の心とやらがあったのか？」
　あまり口をききたい相手ではないが、老大魔王はこの中で一番の年長であり、ティファに何もかもの口利きをさせるのも嫌なので代表して目の前のキルバーンに尋ねたが、鼻で笑われ一蹴された。

「御冗談を！・僕はそこの―男―と違って石化している大魔王に忠誠などという者を抱いた事は一度としてありはしませんよ。
僕はヴェルザー配下で主から命を受けたが故に、大魔王に仕える義理はあれども義務なぞ無いのですから。」
―何時もの様に―誰が相手であろうとも飄々とし、間違いを小馬鹿にしたようなしぐさをするキルバーンに、キルは本気で怒気を発しそのまま打ち掛かろうとするのを老大魔王にやめよと言われて渋々と気配を落ち着かせるのを横目に、キルバーンは石化したバーンに近づき、そして石化したバーンに触れたのはピロロの方であった。
ピロロは普段脱ぐことのないバーンの紋章帽子を捨てる様に脱ぎさり、石化したバーンの鬼瞳の箇所に額をつけ、そして・・・暗黒闘気を迸らせる。
君がまだそこにいるのは分かってる・・・戻ってきておくれよ・・・
その闘気の量は、―一つ目ピエロ―が持ちえる限度を超しており、ダイ達が駆けよってピロロを止めようとしたのを止めたのは、人形キルバーンではなく、ティファであった。
ティファは無言で再び全員の前に立ち、何故か夕月を鞘に納めて両手を広げて駆けようとする男達を止めている間に、ピロロとキルバーンの望んだものが姿を徐々に現し始め、男達は益々警戒をした。
ピロロの暗黒闘気を依り代にするかの如く、始めは暗黒闘気の迸りが蠢いたかのように見えたが、少しずつ像を結びやがて―濃い霧―の如く集まりそして・・・凝り表された姿に、老大魔王達もどこか納得をした声音で姿を露わにした者の名前をぽつりと、そしてピロロとキルバーンは感に堪えかねたように喘ぐようにその名を呼んだ。
「ミスト・・・」
その名を呼ばれた―霧―は、目を見開いた。
霧の大きさは最早往時の姿は無く、一つ目ピエロのピロロを少し大きくした程度であり、禍々しい気配も一切なく、後ほんの少し何かがその身を襲えば、文字通り大気に溶けて消え果そうなほどで儚く、密度の薄いものと成り果てていた。
しかしピロロと人形キルバーンにとってはそんな事はどうでもい

い・・・ミストが今目の前にいる！
其れだけが、今の二人にとっては重要な事でありそれ以外はどうでもいい事なのだから。
「ミスト・・・・君が無事で・・・あぁ・・・僕は・・・・・―僕達―は本当に嬉しいよ・・」
人形キルバーンはダイ達を警戒しながらもピロロとその大きさになってしまったミストバーンを守るように腕の中に納めようと近づいたが、それは叶わなかった・・・ダイ達が何かをしたわけではなく、まして第三者が来て阻害したわけでも決してない。
「ふざけるな!!!貴様との約定とやらのせいで!!私はバーン様と共に逝く事を拒絶され弾き出されたのだぞ!!!」
儚く消え果そうな姿とは裏腹に、ミストバーンの慟哭の声は凄まじく、親友と認め口にする事もためらわなくなったキルバーンを拒絶したのだ。

―遡ったバーンの精神世界―

・・・・余は・・・死ぬのか・・・
異界の忌々しい小娘ティファを追い出した後、現世にて少年ダイの最期の一撃を受けた時、ティファの考えた通り精神世界では少しの時差が生じ、走馬灯のような思いがバーンの頭をよぎる。
後悔は無い、ティファに言った事は強がりでも何でもない・・・しかし、己の成した事は全て勝者となった者達によって消されていくのだろうかとぼんやりと想いながら消えようとした時、幽かに自分を呼ぶ声に、思考をそちらに向ければ・・黒き霧が凝り、やがて固まって見せた姿は・・・
「其方かミストバーンよ・・・」
「・・・・バーン様・・・・」
死神に言う事を聞かせるために、取り込むことはせずとも己の肉体

の中に隠したミストバーンに対してもどこか冷めた瞳を向ける。
この世界のバーンは、己に数千年付き従ったミストバーンに対しても一線を引いて親しくミストと呼んだことは一度してなく、それは最期の時となった今であっても尚それを崩そうとしないのを、ミストバーンは悲しく思う。
己は他と違い、どこまでも目の前の主だけを振り仰ぎ今日まで―存在―してきた。
生きてきたというのにはあまりにも本来の生命体から逸脱した自分・・・そんな自分を主だけが必要だと言って拾ってくれたお方・・・せめて最期は共に―逝く―事を望み、主に取り込まれなかった身を捧げようとしたが
「失せよ、我が目路より疾く。」
あの忌々しい小娘と同列に扱われるが如く出て行けと・・・
そんな主に、ミストバーンは時間がないなりにも切々と語る。
己が主以外に振り仰ぐことは金輪際なく、地獄であろうとも共にありたい事を・・・友を許してほしいと懇願する様は・・・若きバーンをしても心動かされるほどの熱があり、二心無いと分かってもそれでも・・・
「ならぬ・・・・・」
「バーン様!!」
許されないのであれば!なし崩し的にも側にいようとミストバーンはしようとした。
じきに、現世の肉体は全て崩壊し精神世界も共に崩れる・・・許されなくとも供にと・・だが、ミストバーンのそんな健気な願いさえ若きバーンは許さなかった。
己の美意識故か、それとも最期の最後になって忠臣と言えるものが本当に間近にあり続けてくれたことを知って為かは分からないが・・・・バーンはミストバーンを拾い、己の若き肉体を預けて、内政を仕切らせる宰相位も付けても真の意味ではミストバーンの事を信じてはいなかった。
こ奴も強者である自分の側であれば安泰であろうと、―その他大勢

―と共に括っていた。
だがここに来て・・・共にあるというミストバーンに、だからこそ若きバーンは拒絶したのかもしれない。
ミストバーンの考えた通り、精神世界も崩壊が始まり、ミストバーンは主から離れないようにと己の暗黒闘気の集合体の姿を主の肉体に鎧のように覆いかぶさろうとしたが、カランと宝玉に入れられたのだ！
「主様!!バーン様!!!!」
「ミストバーン・・・・余はあの死神と約定をした。」
「キルと・・・・それとこれと何の意味が!!」
「余の望む通りに動けば其方を褒美に返してやるとな。」
死神は其の約定通りに動いた、であるのならば自分もまた約定を違えることをする気は一切ない。
時に凄まじい謀略戦を行い、それにより無関係の者達の血を大量に流そうとも眉一つ動かさないで生きてきたバーンにとっても、約定を交えた相手が違えなかった時に反故にする事は無かった。
故にこそ、ミストバーンはそのような主に惹かれたのだ。
薄汚れた事も平然と行う主が、筋を通す時はどれほど格下の者であっても通すのを見る時に、ミストバーンの心は震えた。
綺麗事なぞ何の役にも立たない魔界の中に会って、真剣に約定を守る主の姿は凛として誇り高く知略・謀略をすれども偽りを言った事は終ぞなく、強者故と言われようが、ならば舌先三寸のヴェルザーはどうなのだとミストバーンは彼の冥竜王を主と同じ強者だとは認めず唾棄し忌み、バーン様だけが真の主だと崇める程であった・・・それ故に、ミストバーンはこの期に及んでも己を受け入れてくれない主にではなく、約定を結んだ相手、即ち親友のキルバーンを心の底から憎んだ。
主はきっと、約定が無ければ自分も連れて行ってくれたかもしれないと、誰にも分らない未来を潰された気がして・・・
「バーン様!バーン様!!!!」
それでも、最期くらいはそれを曲げて欲しいと駄々をこねる子供の

様に宝玉内で壁を叩き懇願するミストバーンに、バーンは滅多に見せたことが無い・・・もしかしたら初めて見るかもしれない苦笑する顔に、ミストバーンは目を見開き驚く中
「余を、困らせてくれるなミストバーンよ・・・・・」
「あ・・・あぁ・・・・・」
酷いお方だ・・・・狡いお方だ!!!!
最期に!!そんな風に弱々しく言われては・・・・
「余を約定も守れぬ道化にしてくれるな。」
「バーン・・・・様・・・・・」
様々な者達の想いと命を踏み躙った果てに・・・・自分の想いも・・・・己の名をあのように呼ぶことで・・・

崩壊する精神世界の中で、砕け散る中で最後に口にしたのが・・・
「さらばだミスト・・・」
ずっと呼ばれたいと思い焦がれていた己の名を・・・・この時に・・・・
「バーン様!!!!!!!!!!」

「貴様との約定故に!!私は・・・私はバーン様がいてくださるだけでよかったのだ!!
あのお方のいない世界に何の意味があるというのだ!!!!!!」
「ミスト・・・・・」
「私をそう呼ぶな!!!!そう呼んでよいお方は・・・もうどこにもいないのだ!!!!!!」
自らの生命を振り絞ったピロロの暗黒闘気のお陰であるとは知らずとも、ミストバーンは―キルバーン―を拒絶し、暗黒闘気の生命体故に涙は流れずとも慟哭する。
だが、影が慟哭し拒絶し石化したバーンのに身から離れようとしなくとも、キルバーン達は気にも留めずに石化したバーン諸共―ミスト―を守ろうと囲い込む。
親友の出現と慟哭に驚き動けない者達が正気ずいた時、ミストだけ

でも守る為に―通路―を構成する時まで気は抜けないと・・・・

暖かいいしの下に・何が一番大事か思い知り・・

ミストバーンとキルバーン達は、逃げるのであれば石化したバーンを持って行って、好きなところとは言えませんが魔界の深部になら行ってください。

そして二度と表舞台に立つ事も裏で暗躍する事無く過ごしてくださいとつらつらとティファが言った時、一番驚いたのは誰であったろうか・・・

キルバーンに穢れた事を言われた青年ポップとチウだろうか？

この世界で幾度も手痛い目に遭って来たこの世界のダイ達だろうか？

それとも・・・

「あ・・・のさ・・・君の・・君達のやってる事も言っている意味が皆目分からない僕は馬鹿なのかな？」

「・・・・頭おかしいの君？」

異界の忌々しい化け物娘は頭おかしい娘に昇格した・・・・

言われた当人達（キルバーンｏｒピロロ）だろうか？

ちなみに親友たちを拒絶した後は、石化した主に取り縋っているミストバーンはもう現状どころか自身の身もどうなっても構わないので放っておいているがそれは兎も角、人形キルバーンとピロロは、そんなミストバーンを石化したバーン諸共に魔界の奥地に・・・図らずもこの頭がおかしい娘の言う通りの場所に逃がそうと、今必死に空間を繋げようとしているのだが・・・・敵でそれも大魔王討伐した立役者が、大魔王の遺骸どころか側近達に行って良しってそれってない・・・・

見てみるがいい、頭おかしい娘の―先程の発言で味方全員呆然としているではないか・・・・見ていて気の毒になるほどに大人達は愕然として、ポップ達の顎は外れそうなほどに驚いて・・何だろう？なんで敵のあの子達に同情したくなるのかなと、人形キルバーンとピロロは言動・思考は確かに外道で腐って最悪だが・・・ティファや老大魔王よりも常識はきちんとあるのだ・・・・・あった上で腐っているか

ら質が悪いと言えるがそれは兎も角・・・・本気なのだろうかと、キルバーン達はティファの言葉に縋りかかる。
掛かっているのが自分達だけであれば、ティファの言葉を偽善だと小馬鹿にしてどこにでも行けるしそのあと好き勝手にやっていく。
だが、今人形キルバーンが体を覆被せ庇っている者を考えればそうもいかない・・・最悪は自分達だけ済ませてもらえないだろうかと算段している。
自分達のしてきた事が、いかに悪辣で悪逆非道で捻じ曲がり腐りきっているかなぞ分かっている。
其の上でそれが愉しくて心が酩酊していたのだ。
しかし―ミスト―は違う、数多の命を狩り尽くし、無辜の民も殺し、謀略、調略の限りを尽くしたことに変わりないだろうと言われてしまえばそこまでだがそれでも・・・自分達とは違うのだ彼だけは・・・・だから・・・最早戦う気のない彼だけでも見逃してほしいと思っていた矢先にかけられた言葉は余りにも荒唐無稽で馬鹿らしくて偽善の塊で反吐が出るとさえ、普段なら思う言葉に思わず縋りたくなる・・・こんな非道を働いたものを許される筈が無いと知りながらそれでもと・・・・
絶望してきた者達が、何故絶望していたのかを己の身をもって思い知る・・・己の死で―守るべき宝―を守り切れない事への絶望もきっとあったのかもしれない。
今の自分がそうであるように、己達の身だけでは済まないこの状況において、後悔は無いが何故か・・・・今までしてきたことが馬鹿らしくなった・・・あれの何が愉しいのか?愉しかったのか?
親友と過ごして来たあの時間に比べれば、全ての事なぞ・・・・あぁ・・・宝を喪いそうになってはじめてその価値を知るなぞという言葉は陳腐だと馬鹿にしてきたのが、今更知る羽目になるなんて滑稽ではないかと、ピロロは己を嘲笑い、クツクツと嗤いかけるのを人形キルバーンがじっと見ている・・・・最早自分と違うと言えそうな個体となりかけている人形も、きっと親友が第一で・・・・ミストを見逃してもらえるならば何でもしようと・・・・・思うのはきっと身勝

手で馬鹿らしくて最低で・・・・あの頭のおかしい娘以外は見逃さないだろうと、思ったピロロの考えは正しかった。
　ティファの言葉に呆然とした仲間達が何かを言う前に、晴れていた空が急に暗くなりそして上空で―雷鳴―が鳴り響くと同時位に、雷が石化したバーン目掛けて降った。
　ここに来て忌々しい神々が重い腰を上げたかと、ピロロは暗雲が立ち込めたあたりからあたりをつけそしてそれは正解であった。
　少年ダイの放った竜の紋章と、ティファが奪って来た六つの黒の核晶のエネルギー体の内の二つを混ぜた時、天と地上は一時的に繋がり天界も地上界に干渉しやすくなり、それをこれ幸いとした一部の―天の神々―が神罰を下そうと、標的が塩の柱となる―神雷―を落した。
　それは刹那の出来事であったが、ピロロと人形キルバーンはその刹那の中でクツクツと神々の所業を嘲笑った。
　この勝利は地上の、更に言うのであれば異界の者達と少年達の命を懸けた行動の結果であり、神々は何ら付与していないというのに、厚顔無恥にも己達の勝利だと言わんばかりに自分達にとどめを刺そうとした事が、忌々しい神々に似つかわしい唾棄すべきことではないかと・・・せめて親友だけでも逃がしたかったとなと・・・心残りは其れが全てであったが、仕方がない、自分も共にミストと行くことで許してもらおうと目を閉じて思ったのだが・・・待てど暮らせど衝撃どころか微かな痛みも無く、何故だと目を開いてみれば
「・・・・な・・・・・んで？」
「ん？あぁ・・・・・―ミスト―に当たるの嫌だったからかな・・・・ふむ・・・これが痛いという事か・・・存外然程でもないね・・・・」
　目を開けたピロロと人形キルバーンが見たものは、自分達の頭上を庇う様にして差し出した左手が黒焦げになっている―異界のキルバーン―と・・・
「・・・結界張らなければその腕塩の塊となって消えてますよキル？」
　そんな自分達を守るように、大地に両足を踏みしめ天を睨んでいる頭のおかしい娘が立っていた・・・・

どうしてだ？
僕等は人の大切な者を・物を壊して奪って踏み躙って来たのに・・・
大切な者を奪われるのは当然なのに・・・当然の筈なのに・・・・
何故・・・守られたのだ？

暖かいいしの下に・異端にして異常

石化したバーン達を魔界の深部にというティファの言葉に、当初固まってしまっていた大人達は、ティファに対して頭おかしいのではと一つ目ピエロが言っている間に状況整理を素早くし、ティファの提案を再吟味して悪い手ではないと思っていた矢先の―雷―に、再び唖然としてしまった・・・・雷が突如として降って来た事はなく、何故か分かっているだけに、この世界の神とは一体なんであるのだろうかと開いた口が塞がらない・・・

ティファの提案は至極真っ当であった。

この地上のどこの国に安置するにしても各国の思惑で決まるにしても何年もかかるであろうし、その間矢張りどこの国で預かるというところからして揉めそうであり、であるならばいっその事地上に無い方が―誰―にとっても良いのだから。

古来より勇者が魔王や竜やその他を討伐しても、証を持ってくるだのましてや遺骸を見せろだのの類を言われた事は無く、先のハドラー大戦においても、ハドラーを討伐した・・・と思っていた（あれは特殊で仕方ない・・）あの時も、アバン達の報告一つで討伐終了宣言が成されているのだから、今回も討ち果たし、マザードラゴンと神との共闘で勇者ダイが受け継いだ竜の紋章を併せる事で、途轍もない力を大魔王に打ち付け欠片も残らなかったのだと、この場にいる全員に口裏を合わせた上で報告をすればいいのだから。

幸いこの場には勇者一行の関係者しかおらず、なんならば神との併せ技の時に、ダイは竜の紋章を捧げ、強さは北の勇者ノヴァ程になったとも言えば、彼を危険視する度合いも、―兵器扱い―するものとておらず、それと併せてポップ達もし烈なる戦いの影響を受けてしまい、肉体と力のレベルが下がったのも報告をすれば、自分達の弟子の安全度合いがぐんと高まるとまでこの世界のアバンとマトリフは話し合わずとも同じか似たような計画を頭の中で素早く算段をつけた矢先であった。

そして異界のアバン達も似たような結論に達していただけに、この

出来事に対してどう対処すればよいのか本気で迷ったが、隣からの凄まじい怒気・・・最早殺気ともいえる程の気配が漂い、そちらに目を向ければ、己の忠臣の左腕を焦がされた事に激怒し光魔の杖に再び魔力を注いで槍の穂先を作り、天に向けている老大魔王すさまじい形相があった事に、異界の全員が怖ろしいとは思わずに納得をする。

老大魔王の怒りは、そのまま彼等の怒りなのだから。

キルが負傷をした事もさることながら、今まで何もどころか問題解決の為に己達のみを削る事もせずに、他界のティファの作りし奇跡の薬をなんの断りも無しに持ち出そうとしたどころか!あろう事かティファの力自身をも巻き込む事を仕出かし、これまで何謝罪も無い者達が、我が物顔で討ち果たされし若きバーンの遺骸とその忠臣ともいえるミストバーンを辱めようとする者を、老大魔王を筆頭に、許せるものなどここにはおらず・・・当然ティファの怒りは凄まじい者であった・・・・

自身が連れてこられた事はまだ許せた。マザードラゴンが己が身で償ったのだから。

しかし兄とチウが巻き込まれた事は苛立ちを覚えた・・・・その二人の心に多大なる傷がついた事も、少年達が痛々しい涙を流し様々な葛藤と苦悩を抱え、それを乗り越えた先のこの出来事に・・・・

「いい加減にしろ・・・・・・・・」

ティファの深度の怒りを、天界は買ったのだ・・・

しかし天界側にも言い分はあり、何故邪魔をしたのかの詰問が、雷を降らせた時と同じように降って来た。

未だ天界と地上界は繋がっており、交信が可能なので一部の神々から逆にどういう積りだと―叱責―が来たのだ。

「我等はそこな大魔王を討たんとしたのみだ!その者は遺骸とて残しておけば後々の禍根となろう!!」

「左様!その禍根を残党諸共に排そうとしたのを何故に邪魔をするのだ異界の竜の騎士の片割れよ!!」

彼等は自分達の行いは善だと信じ切っており、戦い終え死力を尽くした者への敬意も無くそれが正しいのだと言い切るその独善的なまでの言葉に、若きバーンを倒さなければならないと必死だった少年ダイ達をして不快にさせる程であり・・・・

「・・・・・・攻め・・・滅ばされたいですか私に?」

静かな怒気は怖ろしく・・・

「貴方方を殺さずとも無力化して天の端にでも転がすか、或いはあなたが貴方方の身を明かしたうえで魔界に捨て置きましょうか?」

天界であれども、自分の本気の結界に閉じ込めれば千年は何も出来ずに無力の徒となって天界の者達からの軽侮の目に晒されるだけで済むが、魔界に会っては間違いなく嬲り殺しの目に遭う方法を、つらつらと話すティファの形相はいっそ静かでないでいるだけに・・それはかえって途轍もなく怖ろしいものであり、それを指示するような雰囲気を醸し出しているキルもまた同様に怖ろしいものとかしていたが、ティファの言葉は其れのみでは済まされはしなかった。

「この狼藉、一体どういう積りなのかの釈明の一つも無いのですか?」

それは詰問であり尋問であった。

人々どころか長い間怨みつらみをその身に飲み込んできたピロロと人形キルバーンをしても驚くようなティファの行動は、当然神々にとっても予想外であった。

天地開闢をして、自分達を恨み罵る者達が居たとしても、たまさかにこうして地上と繋がった時に交信する機会があった時に声を掛ければ、神の声が聞こえたと、それまで抱えていた不満も何もかもが浄化され崇められてきた彼等にとって、これ程の予想外でありまして他界であろうとも天に所属すべき竜の騎士の子孫が自分達を尋問しようとは思わず、たまらずに一人が声を荒げ

「無礼者!!!我等とて様々な事情があり地上に手を出す事は叶わない身!!

だが今回我等は—手を貸せる—事が出来た故に助力をしたのを感謝こそすれ邪魔建てをし!!あまつ我等にそのような言動をとるとは

そちこそどういう積りだ慮外者が!!」
　ティファを弾劾した。
　その声には確かに神威が籠っており確かに神の一人だと分かるだけ
「フックックック・・・・」
　ティファの怒りを更に募らせただけだであった・・・
「ハッハッハッハ!!!滑稽ですね!!確かに貴方方は様々な制約があり、地上と魔界どちらかの味方だけをするわけにもいかない諸事情があるのは!あちらの三神様達や周りの六大精霊王様達から伺って知っていますとも!!
　・・・・ですがね・・・・ふざけた事をするな慮外者が!!!!」
　様々な事情を知っているだけに、ティファの怒りは他の者達よりもなお深かった!!
「確かにこの者達は!滅ぼさなければならない敵だった!!地上の為にも魔界の為にも!三界の為にもそうしなければならずに討ち滅ぼした!!!
　だが!最早彼等は骸だ!!
　大魔王は最早封印から逃れる事は無く!仮に悠久の時の果てに封が解けたとて心臓二つに鬼瞳が潰れてしまえば最早何も出来はしない哀れな骸だ!
　その主を喪った影もまた何も出来・・・・死神達とて最早・・・お前達がしようとしたのは!何も出来なくなった彼等を巨大な力に酔いしれ足蹴にしようとした外道以下の事をしようとした事すら分かっていない愚者ではないか!!!
　―神になる―というシステムに偶々生まれただけで自分達がさも偉いと勘違いをし!いざこの世界において問題が起きた事に対して己達の身を削ってでも助けようともせずに他界の私を頼る事をしようとした段階で!!お前達なぞ神でもなんでもないわこの馬鹿者どもが!!!!」
　ティファにとって、神とは最終的には自分達の何もかもを使い切ってでも三界全てを救わんとした三神様と六大精霊王様達であり、愚か

な事を仕出かしながらもマザードラゴンの様に代償を払う事をせずに、のうのうとしようとしている者達なぞ神でも何でもない。
そもそもが、ティファは神であろうが王であろうがなんであろうが、その地位にいるというだけでは相手に対して何の評価もしない性分であり、偶々そこに生まれただけであり、後はその者達がその地位にいて何を成しているかに重きを置き、そして身分・種族を問わずにその者の成した事や言動や心根を見る事にしている・・・・まさしくどこの世界においてもティファ異端であり異常。
神をそのように怒鳴りつけている時点で、ティファの言動の異常さは際立ち、この世界のアバンとマトリフを戦慄せしめ、子供達の顔色を無くさせてもティファの言葉は止まらなかった。
「・・・・決めました・・・私は―一つだけ―黒の核晶のエネルギー使えますが・・・こうする!!!」
「な・・・・止せぇぇぇ!!!」
「止めよ!!!」
ティファはこの世界の命運と紐づけをした時、ある細工もきちんとしていた。
六つ手に入れる予定であった黒の核晶の一つを自分が使えるようにと・・・それは己の肉体が破損した時に、治せるエネルギーとして確保するつもりであったが使う事は無く、この世界の痛めつけられた自然界の復興にでも回してもらおうと思っていたが!!気が変わった!!!
「己達の存亡の危機の恐怖を知るがいい!!!」
黒の核晶は一つであるとはいえども、その力はドルオーラなどの比ではなく・・・ティファ視覚をは地上と天界の繋がりを反対に辿り、「止めよ!!!」
天の神々の制止を振り切り、天上界の天蓋において大規模爆発をさせた。
当然平和であるはずの天界に住まう者達の心胆を寒からしめ、何事かと蜂の巣をつついたよう大恐慌に陥たのを、神々は青褪めたが、ティファの行為はそこでとどまる事は無かった。

今爆発に使ったのは自分が使えるうちの三分の一であり、もう三分の二は

「聞きなさい天界の全ての住人よ!!私はこの世界のマザードラゴンと天の神々から攫われし他界の竜の騎士である!!!」

なんと全ての天界の民達に、この世界のマザードラゴンと神々が起こした所業を暴露したのだ。

今までどこからの攻撃も仕掛けられることなく安穏と過ごして来た彼等にとってはまさに青天の霹靂である中でのこの暴露話は効果のほどが凄かった。

先ず前提として、天界に住まう者達は異界がある事を教育の場で教えられている立場にある事が大きかった。

いつか天界の政庁で働く時の事も考慮されている事もだが、天界は場所的に異界とのひずみは生まれやすい場なので注意喚起が第一目的であり、余程幼い者以外には異界があるのは周知の事実。

その様な中で己達が崇める神の暴挙を聞かされた者達は、ある者はこの世界の為だと言ったがそれは少数であり、それを擁護する声はあまりにも無く・・・・その行為に対して天の神の所業ではないという者、それによって自分達の身を危うくさせるに至った事に怒りの方が強く、非難の声が上がり、交信が繋がっているので少年ダイ達にも神々と天界に何が起きたのか全て筒抜けな状況となった。

そんな中―金色の瞳―で天を睨むティファの姿は、まさしく大魔王のそれであった。

暖かいいしの下に・・・・・終われなかった・・・

ティファ諸々の―爆弾行為―に周りは唖然とは・・・しなかった。
したとすればこの世界の者達だけであり、異界のティファの仲間達は少女の逆鱗のありかをよっく知っており、故に少女のやり返し方はまだまだ可愛いものだと、ヒュンケルを除いた大人組は物凄く場違いな事を考えている反面、今の雷落とした馬鹿者どもにド直球で落としてやればいいのにとも思う中、どれ自分も仕事しますかと異界のアバンはティファに近寄り、一言言ってやりたいのでいいですかとティファに交信権を譲ってもらえないかとお願いをする。
「・・・先生も言いたい事あるんですか？」
―温和で優しい先生―が何を言う事あるのだろうかと、―綺麗で高潔なアバン―しか知らない、ティファを含めたお子様組は首をひねりながらも、温厚篤実な先生だって怒る時はきっと怒るのだろうと―色々―と納得したティファは、どうぞとアバンに場を譲り、譲られたアバンはにっこりとティファに微笑みを向け、そして辛辣な顔を天に向け、そしてティファ達が攫われた状況と、その時にどのような慶事の最中であったのか、その幸せがこの世界の―一部の暴走した神―のせいで壊され、それをして向こうの世界の者達の絶望がいかばかりであったかを―切々―と語り尽くされた・・・・・つまり異界のアバンはティファが物理的に攻撃をした後に少しばかり彼等の良心に訴える方法に則り、ティファ以上の精神攻撃を展開に向けたのだ。
絶望に満ちた花嫁と花婿達、参列した六大精霊王達の嘆き、異界があるという事を地上の自分達が知らなければならない程の切羽詰まった状況・・・・如何に己達の宝物が攫われどれ程の者達が嘆き苦しむ中救援に来たのかの異界のアバンの言葉には、実際話を盛っている訳ではないので聞く者達の心に響き渡る。
確かに目論見は天界への精神攻撃ではあるが、アバンの話す中にはこの世界の天界を従属させる方法だの、ティファ達に手を出した勢力はどこであろうとも根切しようだのの・・・物凄く物騒な話ばかり出たのは内緒にいしているので、これくらいは話半分も良い所であると

異界のアバンとしては不満であった。
彼としては、ティファの言う通り神の資格を自ら放り捨てた事にも気が付かない愚か者達を、先程の攻撃で消してやればいいのにとさえ考えているのを、悲しみ一色の話だけで済ましてやるのだから、これを聞いて罪悪感に打ちひしがれた天界の民達に突き上げを食ってさっさとその座から転げ落ちろと内心で呪詛している状態であった。
あったのだが・・・・自分達が消えた後の世界がそこまで絶望に満ち溢れてしまった事に、ティファとポップとチウは申し訳ない気持ちで一杯になり、向こうに戻ったら必ず皆を笑顔にするように頑張ろうと、図らずも三人は相談する事無く心の中で同じような事を誓った。
自分達の事だけで手一杯だったとは言わない・・・・この世界で頑張っている彼等の助けに―待っている間―背一杯頑張ったと言えるだけの事をしてきたが・・・・置き去りにされてきた者達を思う余裕がなかったの考えるのは余りにも傲慢であろうかと青年ポップは思う。
向こうがどのくらいの時間経ったかを聞く事すらせずに、向こうの様子よりも―こちらの事―を優先させた事は悪くは無いだろうが・・・メルルに心の底から謝ろうと決意した時、その声が聞こえてきた
フクックっクックック・・・・・
自分達の先生の切々とした話が終わり少ししてから、この世界の少年達も一様に自分達が不甲斐なかったせいで起こってしまった悲しみを嘆く声よりも、先に笑い声が流れた。
誰だと見れば・・・キルバーン達が笑っている・・・
何がおかしいという前に、キルバーンの手がスッと上がり
「いや失敬、一連の出来事見聞きしていてつい笑ってしまってね。」
申し訳ないと・・・・あの外道が謝罪してきたことに！一同それこそティファの言動と同じくらいに唖然としてポカンとしてしまったが、キルバーンとピロロの謝罪は本気であった。
ここにいる少女の、先程の言葉に偽りがない事を確信したが故におかしく感じてしまったのだ。
あの忌々しい神々にも阿る事をせず、反対に叱りつけ痛罵する様は

見ていて心がスッとしそして悟った。
この娘は良くも悪くも偽りが無いのだと。
であるのならば何らかの思惑はあれども自分達が魔界に行く事を止める事は絶対にしないと確信すれば、心に余裕が出来周りを見まわしてみれば、異界の者達は最早自分達に対して警戒する事はあれどもそれ以上の敵意は無く、其れよりも―天界―に対して対応の仕方に笑いがこみ上げているのだ。
不思議な者達だ
大魔王達と和睦を結び、中身が甘い者達かと思えば天界に対して辛辣な言葉を放つ事に躊躇いは無く、やる事成す事が滅茶苦茶で・・・・悪い気がしない・・・・そう・・自分達の―最後―に見た者達がミスト以外にこの者達であれば悪くないと思わせられる程の・・通路は出来た。
せめて―辞去の挨拶―くらいはと人形キルバーンが一礼をして口上を述べる。
「君達のお陰で魔界への通路が開くに至り、僕達はお暇させてもらうよ。」
この世界の戦いや事象にはもう飽きた・・・
「後は君達がこの世界を好きにすればいい。」
常ならば、その後醜い世界が待っているだの、相手の気分を害させ歪んだ表情を見るのが常であったが・・・・それにも飽きたが・・・・
「その前にさ、異界の小娘さん。君どうして大魔王が石化したか知っているかい？」
「はぁ？・・・・・天界の封印でしょう？」
辞去の挨拶が来るとは思わず、更に最後に自分に話しかけられるとは想定外であったティファは、未だに喧々諤々の天界の交信をうちゃり、キルバーンの問いに真っ当に答える。
嫌いな相手であっても問いかけられればきちんと答えるのを、キルバーンはこんな甘い子供欲今まで他者の食い物にされなかったものだと苦笑しかけたが・・・納得した・・・・ティファの後ろに見える―山ほどの保護者達―の形相を見て・・・・余計な事を言え自分なぞ瞬

で消し炭にされそうな形相に、守られているのだな～と・・・・この子まともに結婚させてもらえるのだろうかという心配がちらりと浮かんだがそれは兎も角、
「不正解だよ異界の小娘さん♪」
　自分達は兎も角として、ミストを助けてもらえたお礼にきちんとした情報をティファに渡してあげる事にしたのだ。
「不正解・・・ですか？」
「そうだよ、大魔王とそして―ヴェルザー―がそれぞれの敵達に敗れた後に石化したのは天界に御業だと喧伝されそうだけど違うんだよ。」
「は？？？！！！」
　ここでキルバーンが、バーンだけではなく呼び捨ては兎も角、真の主の名まで出した事でティファはキルバーンが偽りを言おうとしているのではなく、きちんとした情報を伝えようとしている事を悟った・・・・そもそもが偽情報を自分達に渡す意味も無ければ、天界との亀裂を目論もうにも勝手にこちらからふざける名を叩きつけているのでやる意味も皆無である。
　そんな風に驚いているティファを・・・あろう事か人形キルバーンはふわりと抱き上げ！あまつティファの貝のような耳朶に口を寄せて何事かを囁いたのだ・・・・周りがどのような反応をしたか、しようとしたかを止めたのは誰でもなく、抱き上げたティファの表情であった。
　囁かれている内容は魔族の耳をもってしても届かないが、聞くほどにティファの目が見開き血色を喪い、それでも食い入るように聞き始めた・・・・尋常ではないその様に、周りは今すぐにキルバーンをぶっ壊したいと逸る心と体を意志の力で抑え込む中、話し終えたのかキルバーンは何事も無かったかのようにティファをそっと地面に降ろし、今度こそ石化したバーンとそれに縋りついて目をつむっている親友ミストを胸に抱えて通路を通ろうとしたが・・・・ティファに止められた。
　今更・・・・情報をもっとよこせと言いたいのかとキルバーンとピ

ロロは情報を渡した事は間違いだったか・・・なれない事はするもんじゃないと煩わし気に少女を見遣れば
「・・・きっとこの情報は貴方方を行かせるためのお礼でしょうが・・・私が貰いすぎです・・」
それは違った。
ティファは、期せずして手に入れた情報が、―多岐にわたって―途方もない事に直ぐに気が付き、彼等は元々何の見返りを貰う気も無くいかせるつもりであったので、これでは釣り合わないと、ミストバーン達を抱えるキルバーンではなく、ピロロに手を伸ばしそして―暗黒闘気―を掌に集中させ、ピロロの体内に納めた。
「・・・・きっと・・・百年はもつかと・・・」
「へぇ・・・・僕等の事分っていたんだ・・・」
「・・・・あの暗黒闘気は、きっと君の寿・・・・」
「ストップだよ。」
「・・・・・・・・・」
「それ以上は野暮って言う者だよ―お嬢ちゃん―。でもまぁ・・・受け取っておくよ。」
ティファの言葉をピロロは遮りながらも、ティファから受け取った暗黒闘気のエネルギーは返す事は無く、ジャァねと・・・・彼等は今度こそ軽やかな足取りでいってしまった。
ミストバーンを・・・・ミストを顕現させ復活させるためにピロロは己の残りの寿命を使い切ったのは、ティファとキルには直ぐに分かった。
他の大人達も、ピロロが生命エネルギーを使ったのは分かっていたが散々命を刈り取り末期を見てきたキルと、散々己の命を使い寿命を見切れるようになってしまったティファだけが正確なところを知れた。
だが・・・彼と人形キルバーンなればミストを救えた以上の喜びは無いのだから良いかと彼等の心情の為に黙っていたが、聞かされたお礼の情報が凄すぎ、ティファは対価が釣り合わないと、ほんの少しだけ残しておいた黒の核晶の最期のエネルギーを渡した。

あれだけあれば、百年は彼等はもつはずで、その間に親友を安全な場所で安らがせられる算段をつけるだろうし、後は本当に彼ら次第だと見送れば・・・・—自分のキル—と同じような呼ばれ方をしたので複雑になる中、この情報どうすればいいのか、行ってしまった彼等の後を見ながら頭をガシガシとして、ティファは全員の方に振り替える。

この世界の人達は何事かと純粋に心配しながらも知りたそうにし、自分の世界の者達は・・鬼の形相になっているのにめげずに

「この世界の空間も安定するまでには早くとも半日はかかりそうですよね。」

その間に—話す事—が山ほどできましたので聞いてくださいと、ティファは腹を括って情報共有を徹底する事にした・・・・・大魔王を倒して終わりになれないって—原作—と同じじゃないかと心の中で滂沱の涙を流しながら・・・・

暖かいいしの下に：頭が痛い・・・

フローラは心急きながら―迎えに来たアバン―のルーラでついた砦の中に歩を進める。

どんなに慌てても王である自分が走るという事は無いが、アバンの言っていた少しの問題とはなんであるのか・・・・大魔王バーンに勝利した矢先に問題が起ころうなぞ、叡智を持ったフローラも考えてはいなかった・・・いったいどれほどの問題が・・・・

―遡った少し前―

魔王軍の最大の敵、大魔王バーンを―全員―が一致団結して討てましたという報告を、ティファがつけてくれた式鳥でアバンからの知らせを受けたフローラ女王は、テランの湖の底にある神殿で共に避難していたポップの両親とレイラとマトリフに、勇者一行全員が無事であることも共に勝利を伝えたところ神殿内に喜びの声が湧きたった。

ジャンクとスティーヌとレイラは共に子供達の無事を涙を流して喜び合い、普段は冷静沈着なマトリフの目にも薄っすらと涙が浮かぶのを見たフローラの目にも、同じように涙が浮かんでいる。

少年達に押し付けてしまった大戦の行方の果てに、誰か一人でも犠牲にならずに本当に良かったと、安堵していると、泣いているのを心配してか少年ダイに預かった大切な親友ゴールデンメタルスライムのゴメの翼で涙を拭われたフローラは、悲しくて泣いているのではないとゴメの頭を優しく撫でながら、齎された勝利の余韻に浸りかけたところに、勝ったはいいが―少し問題―も発生しましたという、アバンの申し訳なさそう報告に、勝利に浸りかけていたところにフローラは冷水を浴びせられたが如く心にヒヤリとしたものが奔った。

あのアバンが、多少の事は己で処理してから事後承諾をしてきたアバンが―問題―と言ったからには少しではなく、世間的には大問題の部類であろう！

「ジャンクさん、スティーヌさん、レイラとマトリフ様は一旦パプニカ

城で待ったいただきます。」
ジャンク達にも式鳥からの追加報告がはっきりと聞こえたので、フローラの指示に否やは無く、マトリフもチラリと俺の力いらないかとフローラに目で問いかけたが、首を数度横に振ったフローラを見てマトリフがルーラで三人を連れて行く事になり、この神殿を守る水晶が開いた空間を通り地上に出たところ、丁度アバンもフローラを迎えに来たところであり、サクッと一行の子供達は全員無傷ではないにしろ重傷の者はおらず、異界の人達も同じような状態で大魔王を討てたことを優しい声音で話して親たちを安心させ、断りを入れたフローラを―隠し砦―にルーラで連れて行った。
見送る親達も、早く我が子等に会いたいという逸る気持ちを抑え込み、フローラに言われた通りパプニカ城へと飛んでいった。
勝利した後にも生じた問題には、今度こそ―一般庶民―である自分達の出る幕なぞ無く、子供ではないのだからきちんと待とうと、後ろ髪を引かれながら・・・
ちなみにだが、隠し砦は異界のアバンとキルの張り巡らせた罠によって、釣られた魔王軍諸共に―魔界の炎―によって灰燼に帰したはずだが・・・・・実はそこからがフェイクだった・・・
異界のアバンは、今後も何かしらに使えるであろう砦をわざわざ魔王軍を滅する為だけに消滅させるのは実に勿体ないと思い、ティファに同じカール領内ではあるが砦から離れた場所の悪魔の目玉に、―空間が揺らぎ隠していた建物が一瞬見えてしまった風―のことが出来ないかを相談し、一度そこに行って結界を張り、その中で砦の一部の張りぼて風を拵え、完成したところで悪魔の目玉が―数体―来るまで待って、程の良い所で見せ、後はどんな威力の罠かは異界のアバンとキルだけの秘密で張り巡らせ、終わった後は直ぐに砦に戻った。
最終決戦前に、ティファ達が出払っていたのはそういう理由があったのだがそれは兎も角、其の残ることが出来た砦の大広間を目指して、フローラは走りそうになる足を叱責しながら、アバンとそして異界のマトリフと―あのティファ―がいても対処できなかった大問題とは何かを聞く心の準備をした・・・・・アバンは分かる、異界のマ

トリフも分かるしかし何故ティファもフローラの中でアバン達と同等なのかは・・・・まぁティファであるからもうそうだとしか言いようがなく、本人が聞けば―子供に何求めてるんですか！―と怒りそうだが、周りが聞けばお前の日ごろの言動による自業自得であるからしてしょうがないのだがそれも兎も角として、見えてきた大広間と、近づくほどに聞こえて来る扉越しとは思えない程の喧々諤々とした声に、フローラは本当に何が起きたのかと顔を青褪めて扉をノックする事も忘れ果て左右に扉をぶち破るが如く開きそこで見たものは・・・

「ですからこのザボエラさんは渡せません!!戦いたければそこなハドラーさんとその親衛騎団さん相手にしなさい!!!」

「だから何度いやぁ分んだよティファさんよ！そいつはダイの爺さん人質に取ったり夜襲かけてきた・・・」

「それしたのはハドラーも似たようなものでしょう!!レオナ姫を人質に取ったフレイザードの援軍に来た後も人質そのまんまでバルジ島で戦い合って！ザボエラさんが夜襲に来た時聞けばハドラーも一緒だったとか!!

ハドラーさんがよくってどうしてザボエラさんが駄目なんですか!!」

「そ・・・それは・・・そいつが真っ当に!!」

「要は自分の中の好き嫌いでしょうが!!今後の為にもこのお人は必要なんです!!

己だけの感情だけで物事見るお子様はこの場から出て行きなさい!!!」

・・・・・・大広間の中が凄い事になっていて・・・・何の予備知識も無く見てしまったフローラはフリーズ起こした・・・

大広間の中にいたのは顔なじみになった異界の人達の他に、奥に座って異界のチウを膝に乗せている・・・・どう見ても大貴族然とした魔族の御老人が鎮座され！―ドール―にお茶を給仕されながら大広間の真ん中で言い争っている少年ポップとティファの様子をのんびりとした表情で伺っており、そのティファの腕の中には魔族の・・・

随分と・・・物凄く小柄な老人魔族がおり・・・・どうやらティファの腕の中で困っているような疲れ切ったような表情で溜息をついている老人魔族が二人の口論の元の様であり、周りはどう間に入ったものか悩んでいるようだが問題はそこではない!!!

少し離れた大広間の隅にいる一団は・・・

「・・・・アバン・・・・」

「・・・・はい、フローラ様・・・・・」

「説明なさい・・・何故ハドラーが生きて・・・・しかもここにいるのですか!!」

物凄く微妙な顔をしているアバンに対し、可及的速やかに答えろというフローラの顔は雄々しく!まさに王者の風格が溢れる程に心がブッちしたのだった・・・・・・・

暖かいいしの下に：女王陛下の決意

バーンさん・・・・そろそろ収拾付けなくていいですか？

少年ポップとティファの口論と、何故ハドラーが生きてここにいるのかとこの世界のフローラ女王がアバンに対して掴みかからんとするする勢いで問いただし、周りはどちらも同止めればいいのかと手をこまねいている状況に、流石にこれは不味いのではないかと・・・うっかりと―バーン―の名前を出したからさぁ大変・・・・主にフローラ女王様が・・・

ハドラー生存とこの場にいる理由の詰問をしていたフローラは、ばっちりと聞こえてしまったチウの言葉に、口をぴたりと閉ざしてギッギッギッギという音を立てそうな首の振り方で―大貴族然としたご老人魔族―の方を向けば、フローラに掴みかかられていたアバンと、少年ポップと言い争っていたティファと大人達があっちゃぁという顔をして一斉に点を見上げた・・・・カオスなこの状況だけでもフローラ様の情報キャパシティ超えているだろうな、順を追って説明してなるべくフローラ様を驚かせないようにしてあげたいな～という大人達の配慮は、無情にも天然チウのやらかしで砕け散ってしまった・・・・その証拠に、バーンを見ているフローラ様の瞳の瞳孔がやばい事に・・・・

「失礼女王陛下、良ければこちらに御腰掛を。」

失礼と声を掛けながら、様々に固まってしまったフローラの肢体を軽やかに持ち上げふわりと用意した木の椅子に座らせたドール事キルは、主に出したのと同じハーブティーのティーカップをフローラにそっと持たせ

「ゆっくりとお飲みください。」

驚かれるのは無理もありません。お茶を飲んで落ち着きませんかという・・・余裕のある男の低音ヴォイスに！何やらときめいてしまったフローラはそれを誤魔化すように疑念や様々な思いを差し出されたハーブティーと共に飲み下してみれば、美味しかった。

ここに来るまでの間様々な事で不安に思って喉もカラカラになって、着いてみれば訳の分からない状況の上に、魔王軍最大の脅威の名前まで耳にして精神が崩れそうになった時に渡されたハーブティーは、熱すぎもせず温すぎもせずに、唯々自分を落ち着かせてくれるためだけに淹れられた・・・そんな気遣いが詰まっていると思わせてくれるような一杯であり・・・・

「フローラ様!!??」

「女王様!!!」 !!

「おい・・・キ・・・ドール・・・・・お前ハーブティーに何入れたんだよ!!!」

「いや僕は別に・・・・あの・・・・・・僕が淹れたハーブティーはそこまで不味かったですか?」

「あ・・・いえ!違うのです!!!」

気が付けばフローラは泣きだし周りはその事にぎょっとして驚きアバンなぞはすっ飛んでフローラの下に駆け寄り、ハーブティーを淹れてくれた目の前ドールは困惑をしているのを、フローラ慌ててドールが悪い訳ではないと泣いた理由を周りに話す。

曰く大戦が始まって以来心が休まる日は一日も無く、地下に潜って力を蓄え各国に親書を送れるほどになり、そして奇跡的にもアバンどころか頼もしい味方が増えてはくれたが、それは異界という途方も無い者達も交じっており、自分の手に負えることなど一つとして無い中、それでも自分を女王様と呼んで仕えてくれているカールの者達やレジスタンス達、そして異界の者達も自分を立ててくれているのが伝わっていただけに、なお心が苦しくなる日々であったのだと・・・

「私は無力です・・・出来る事と言えば私の権威とこれまでの積み重ねてきた実績で辛うじて皆さんの上に立って何とか纏められるようにして来た程度です・・」

其れもティファ達が来てからは、付随してきたアバンとティファと異界の者達の能力で砦の者達はそれに沿って動き、自分がしてきたと言えることは、異界の、特にティファに対しての疑念を募らせすぎる事なくカールの者達を宥め和が乱れないようにして来た事くらいで

あった・・・そして異界からの救援が来ればそれすら不要になった。
自分の世界のアバンとマトリフと異界の二人も加われば、カールの者達も士気は一気に上がり異界の者達に対する不満も吹き飛んだのだから。
そしてフローラは別にそこに不満は無かった。
端から自分は全員の纏め役であり、戦うのは彼らなのだから・・・しかしだ・・・
「ティファさん達が悪い子ではないのは知っています・・・知っているのですが・・・やる事成す事全ての規模に・・・・私自身が付いて行くのがしんどくなってきてたのです・・」
カップをプルプルと震えさせながら、フローラはこれまでの心労を全て吐露する・・・
ティファの周りで起きることは全て凄すぎた・・・砦の男達がキルバーンの予告文章でおびき寄せられた時、ティファは己の身を犠牲にするが如くの策を自分達が止めるのも聞かずに敢行し・・・・それ一つだけでもフローラの心は潰されかけた。
「自分達の世界の少年達に重荷を負わせるだけではなく・・・私は・・・異界からさらわれるように連れてこられてしまったポップさんとチウさんとティファさんに多大な負担をかけても何もしてあげる事も出来なくて・・・・」
周りが傷ついてく中、自分だけが無傷な中何もしてあげられない己の無力さに打ちひしがれた矢先のこの出来事に・・・フローラの心の疲労は限界に達して最後の―バーン―の存在に追い打ちをかけられかけた時の、このハーブティーの美味しさに本当に癒されたのだ。
「たった一杯のお茶にも助けられるものがいるのです・・・なら・・・・私もこの辺を目指してみましょう・・」
御馳走でもなんでもなく、しかし心が込められているのであれば一杯のハーブティであってもひとのたすけになるのだから、自分ももう少し頑張って凄い指導者にはなれずとも誰かの心に寄り添い助けになれる為政者を目指そうという言葉に・・・キルは本気で感動した。
お嬢ちゃんの事は好きで愛しているが・・・あれほど常識破りな者

はおらず、その被害をもろに受けてもたゆまず努力するというフローラの心根のいじらしさに。
　そして決意を新たにしたフローラの下に、異界の子供三人組は爆走して迫って取り囲み！手をがっちりと握りしめ想い想いの言葉を遺憾なく述べた!!
「フローラ様!!!フローラ様は間違いなく偉大なる指導者です!!こんな曲者だらけの私達を受け入れてくれて嬉しかったんです!!!沢山心配かけてお騒がせして御免なさい!!!」
「そうっすよ!!異界なんて訳の分からない所から来たって言う俺達受け入れくれて本当にありがとうございました!!!」
「僕の余計な一言のせいでごめんなさい!!驚かせる気は本当に無かったんです!!!
　それにフローラ様は弱い僕にも、怪我した兵士さん達手当しただけなのにお礼を言ってくれた優しい女王様です!!僕フローラ様の事本当に大好きです!!!」
　ティファは一旦ザボエラを自分達の世界のロン・ベルクの腕に預け(ザボエラ生存賛成派でここなら安全)、チウもバーンの膝から飛び降りて駆けだし、青年ポップもこの状況どうすればと手をこまねいていたのを意識覚醒させてフローラに心の底からの礼を述べるのを、フローラは薄っすらと赤くなりながらそんな私はと言いかけるのを、異界のアバン達も始め、自分達のような胡乱な者を受け入れてくださり本当にありがとうございましたとお礼を述べられた。
　そしてこの世界のダイ達も女王様のお陰で沢山の仲間と心を一つにして戦えたから勝て親父の事も許してくれて本当に嬉しかった事、罪人である自分達を分け隔てなく受け入れてくれた事は本当に感謝してもし切れないというヒュンケル・クロコダインの言葉に、女王様の優しくも力強い心に何度も励まされたというマァムの言葉に、フローラの涙はまたポロポロと落ちていく・・・嬉しくて・・少しの助けにしかできなかったと思っていた自分に、こんなにも偉大なる者達がお礼を言ってくれる、それも本心だと分かる温かい気配を漂わせて・・・自分は間違っていなかった、人を信じ、世界を信じて闘い抜

いて大切な者達を守ろうとした自分が報われた気がして・・・・
「私こそ本当にありがとうございます皆さん・・・」
勇気を与えてもらって。
これよりは戦後に向けての話があるのかもしれない。
きっとハドラーを助けるなどというとんでもない事をしたのはティファさんで、腕の中にいた老人魔族諸共何かをさせようとしているのだろうと、心が落ち着き常の冷静なる女王としての心が発揮できる。
気がつけば、自分の世界のアバンが、そっと自分を背後から包んでくれている。
それだけでも更に勇気が湧いて、何を聞いても大丈夫。
「ティファさん、話す事が沢山ありそうですね。」
「女王様・・・そうなんです・・・・沢山・・・・・沢山ありすぎて・・・」
どうすればよいのか途方に暮れいてるというティファの言葉に、フローラは優しく言葉をかける。
「ここにいる方達が居れば大丈夫でしょう・・・ハドラー、貴方が無事にここにいるという事は少なくともダイ達も了承しているのでしょう。
他人事のように遠巻きに見ていないで、近くに寄りなさい。」
当事者なのですからというフローラの言葉には力があり、現状どうすべきだとどこか投げやりだったハドラーはその声音に驚きながらも、かつてカールの戦意を挫く為に攫いに行った時の、気丈ともお転婆とも言えそうなあのじゃじゃ馬姫を彷彿させられ、ついニンマリと笑ってしまったが、フローラの言う通りこの渦中の当事者の一人は自分であり、周り任せは自分らしくないなと思いなおした・・・・たとえ筒から出た先にはアバンが二人いる事を予め知らせられていたとはいえ・・・あちらの世界のバーンが目の前にいて・・しかも大ネズミモンスターを膝に乗せて寛いでいる事に精神が破壊されかけても、腐っても魔王なのだと気力を振わせる。
そんな中・・・・ティファは心の中で滅茶苦茶フローラに詫びてい

た・・・

御免なさい!!御免なさい!!!

精神的負担かけまくって本当にごめんなさいと・・・・もう隠し事も無しだけれども心の負担にならないように順序良く説明していくので許してくださいと・・・・クロファもこれやりすぎたかと反省する中、漸くまともな話し合いが始まった・・・

暖かいいしの下に・・温かい世界を目指す為に・・前編

結局ドールことキルは、この場にいる全員にハーブティを振舞う事になり、その間にティファは全員が座れる椅子と簡易的な円卓を用意してキルも含めて先ずは一息つくと事になった。

考えてみれば、先程まで生きるか死ぬかそれこそこの地上界と天界と魔界の命運をかけた一大決戦をした直後であり、ハーブティを飲んだ後、少年ダイ達が癒され、筒から出されて早々に偉い目に遭ったハドラーとザボエラも同じく癒される中、ハドラー様大丈夫かと親衛騎団はハドラーの後ろに立って目を光らせる中、ティファだけが飲み終えたカップを弄り回して浮かない顔をしている。

折角大戦終わったのに・・・厄介ごとを知らせなければいけない事に溜息をつきそうになりながらなんとか堪え、全員が飲み終えたのを確認してから意を決したように顔を上げる。

「先程この世界のキルバーンが私にもたらした事なのですが・・・」

矢張り先程の事かと、あの場にいた者達は一体ティファは何を言われたのかと身構え、その場にいなかったフローラとハドラー達とザボエラも状況を知らずともキルバーンの名前が出た事で身構える。

フローラはアバンからが要注意危険人物だと言っていた事で、そのような者がティファに何をもたらしたのかと眉根を寄せ、ハドラー達はあの危険な死神の情報というところからして絶対に碌でもない厄介ごとだと知っているが故に。

その場にいる全員から危険視されているキルバーンから齎された情報の前にと、ティファは端的に自分達の世界の大戦事情を話し、何故この場に異界とは言え大魔王バーンがいるかの説明をフローラ達に改めて話た。

「そのような訳で私達の世界の大戦は、三界全ての間で和平交渉が成立をして、死にゆくはずだった魔界も救われて今は私達と同じ地上に浮上したのです。」

元々膨大に広かった海の部分に魔界はありそのまま戻ったのだというティファの言葉に、あらためて話を聞かされた少年ダイ達はおろ

かこの世界の知恵者と呼ばれているアバンとても驚きに満ちた話であったが、ティファが何故この話をしたのか。
　それは単に大魔王がいる事の説明ではなく、大魔王に聞きたい事がありその為の下地であった。
「大魔王に質問があるのですか・・」
「ティファよ、其方が聞きたい事は何であろうと余は何一つ隠すつもりなどない。
　遠慮せず何でも聞くが良い。」
　何一つ隠すつもりはない・・・・無論それは大魔王の嘘である。
　クロファをしても知らない薄汚れた事なぞ国の利害が掛かった政治世界にはいくらでもあり、それらについての質問であれば隠さずともぼかすか偽りをサラサラと述べてティファを安心させる話に作り替えながら、その話を真実にするべく宰相ミストに―仕事―をしてもらう事になるがそれは兎も角、普段と違い歯切れが悪い幼な子の背中を押すように、ティファの隣にちゃっかりと座っているバーンは遠慮なぞするなとティファの頭を優しく撫でながら質問を促してやる。
　その慈愛に満ちたバーンの全てに、ティファはモヤモヤとした心のつっかえが取れて質問することが出来た。
「私達の世界に、大魔王とヴェール・ヴェルザーと張り合える―人物―はいますか？」
「ふむ・・・それは組織的にか？それともそのもの一人で余とあの冥竜王と渡り合えるものを指しているのか？」
「えっと・・・どちらかというと後者です。」
「ふむ・・・。」
　ティファの質問に、魔界の神たる自分と、近頃はティファにべったりと成り果てた駄目竜王だが腐っても冥竜王たるヴェルザーと単身で渡り合えるものなどおらんよと笑う事無く、バーンはこれまで魔界でやりあい潰した者達や併合した者達を、人物や組織までも必死に思い出す。
　ティファが思い悩むほどの情報をあの死神から受けた後の質問であるのならば、きっとその事と関連した事であり、おざなりに答える

べきではないとの判断を下して、過去五千年程まで遡ってみたが
「浮上した現在の魔界にはその様な人物も組織も存在せぬな。」
主だった者は自分かヴェルザーによって滅ぼらしたか取り込んで久しく、自分とヴェルザーが魔界を二分した後に大戦を初めて今に至っているという言葉に、ティファはそうですかと溜息のようにありがとうございましたと、きちんと過去まで遡って教えてくれたバーンにお礼を言う中、察しの良い―大人組―全員がティファがキルバーンから齎された情報の内容にあらかた検討が付きそしてみるみるうちに青褪めていくのを、ティファがその通りですと大人達に向かって首肯し、そして
「この世界のキルバーン曰く、この世界の魔界は大魔王バーンと冥竜王ヴェルザーの他に、彼等と対等に口を利ける―第三者―がいるそうです。」
そこからティファが、何故大魔王バーンがダイの放った竜の紋章が天界の力によって増幅された紋章閃に敗れた後石化したのかの説明がなされた。
「ヴェルザーもですが、どうやらこの世界のバーンも、敵と戦い敗れた時には石化する呪いをその第三者も含めて三人同時に掛け合ったらしいのです。」
もしもその三人のうちの二人が互いに争う也三つ巴になって戦う也をし、敗れた者達や三人同時に相打ちとなっても石化する呪いを掛け合ったという。
何故キルバーンがその事を知っていたか？
それはヴェルザーがキルバーンに話したからだ。
もしもバーンを討ち果たす事が叶った時、奴が石化した後は其の呪いによるものであり、その際は自分の下に持って来いと・・・・長年の宿敵の石化した亡骸をトロフィーとして飾ろうという・・・・・物凄い悪趣味なヴェルザーからの指令だったとか・・・ちなみにこの世界のキルバーンとしては其れは有りで、我が主は良い趣味をしていると思ったそうな・・・
「大魔王と冥竜王ヴェルザーに呪いを掛け合う賭けを承諾させ・・・な

おかつその様な複雑な邪悪な呪法を掛けられるものが存在すると・・・」
「それではこの世界・・・地上と天界の脅威は依然残ったままではないですか・・」
　冥竜王ヴェルザーの残虐性よりも、ティファの齎した情報に、アバン達とマトリフは青醒め、フローラはそのような者を相手にする事が出来るのだろうかと全身の血の気が引き、大魔王バーンを倒した事で全てが終われたと思って者達や、今後この世界に自分達はどう生かされるのかを考えていたハドラー達とザボエラの顔色を失せさせる。
　特にハドラーとザボエラは、冥竜王ヴェルザーと自分達の仕えていた大魔王バーンの凄まじさを本当の意味で知っているだけに、その者がどれ程の脅威になるのかが分かるだけにダイ達よりも怖れ慄くのを、ティファはどこか安堵して見つめ、そしておもむろにティファが言葉を発した。
「その者の脅威を監視しつつ、そして今後この地上がその脅威に対抗できない程に衰退させないようにしていく為にも、ハドラーさんに―地上と魔界の間にある狭間の国―の王となって頂き、ザボエラさんにハドラーさんが興した国の宰相となって頂いて、地上界と魔界双方の為に働いてほしいのです。」
　それが出来るのは二人しかいないのですと、真剣な表情で

暖かいいしの下に：温かい世界を目指す為に・・中編

こんにちは、前回この世界のハドラーさんに国を造ってもらい、その国の宰相にザボエラさんを推しているティファです。

本日は前回ご紹介した―人間世界と魔界の間にある狭間世界―のことを、知らないこの世界の人達と私の世界の人達にも説明しました。

狭間の世界は、十万年前突如として魔界を地下に押し込めた時に出来た空間のひずみが、何故かテラン国と同じほどの大きさ（この世界のマザードラゴンさんから聞いた時の私の感覚的な物です）で広がりそこからずっと安定しているとか。

しかもその狭間にも魔界や地上に通じる穴が出現して、名もなき魔導士達が両方の穴を安定させる技術を開発。

以来そこは魔界・地上双方知る人ぞ知る場所となり、魔族・人間・知能の高いモンスターや闇落ちした精霊等がひしめき合って住んでおり、それなりの繁栄を見せているらしい・・・何其の美味しい国？

―利―によって纏まっており、話を聞いたらスラム並みの治安らしいんだけれども誰も人間だから魔族だからという理由で争う事は無いらしい・・・けれども矢張り治安の悪いスラムっぽいようで・・・

―色々な理由―で犯罪者や訳ありが大量にいるようです。

「その空間をサクッと把握するのは力業でいけばハドラーさんと親衛騎団の皆様がいれば物の一時間もたたずに制圧できるでしょう？

その後の組織づくりや国興しのノウハウはザボエラさんと彼にまだ従っている妖魔軍団とザボエラさんの人脈で、魔王軍の高官の中で大魔王バーンに忠誠を誓った者ではなくて利によって従っていた人達を調略して予め引き抜いておけば大丈夫でしょう。」

とかいう・・・大変おっそろしい事をサラサラと述べている少女に、聞いている全員は頭を抱えたくなる・・・

こいつはどうしてこういう―悪辣な事―を考えさせれば天下一品なんだ？

この世界に来た瞬間から状況把握して、大魔王バーン討伐の後に新

興勢力になりうるハドラー達とザボエラまで確保して・・・物凄い偉大な功績を調略話の手土産話に持たせて魔界に残っている魔王軍を内側から崩壊させられる手をサラサラと述べるって普通ないだろうと・・・ティファ大好きだと豪語しているマトリフとキルとラーハルトと、内に秘めているが同じくなロン・ベルクとても頭痛がする・・・こいつもしかしてこの世界の事はじめっから知っていて、攫われた風を装った壮大な計画かとまで馬鹿なティファ陰謀説まで考えてしまう程に頭が痛い。

そう思われているとはつゆにも思っていないティファは、私そんなに実現困難な事言ったかなと、―大人達―ががっくりと顔を覆ている状況に首を傾げながらも、狭間の世界の事は大魔王達とハドラーさんとザボエラさんなら知っているでしょうと他の大人達に話を振った。

振られた大魔王は、余の幼な子は本当に沢山の事を考えられるものだと・・・うちの孫は凄いという爺ちゃん馬鹿になっているので問題ないが・・・他の大人達と同じように、この子供の頭の中身どうなっているのだと頭痛がしているので自然と話し始めたのはバーンであった。

曰く、大戦始まる前から魔界の食糧事情はこの世界よりも悪く、軍を三食食べさせられる分を確保するのは困難であり、さりとて人間達から直接買い付けるのも業腹だがさて如何にすべきかと思案していたところ、自分に敵対して国を攻め滅ぼした時その国の中枢人物が己の命を保証するならと話して来たのが狭間の世界の事であった。

バーンはその話を聞いて直ぐに納得をした。

何故ならその国は農業を営んでいる訳でも、魔界のよその国からも買い付けをしている形跡も無いのに飢えている者達がおらず（王城内の事であり庶民はその限りに非ず）、詳しく聞けばその狭間の世界を通して地上界の食糧を買っていたのだとか。

バーンはその情報を詳しく聞き出しそして当然始末した。

庶民がやせ細っているのに城内に残っていた者達は皆肥得ている事に、魔界救済を悲願としたバーンからすれば腹に据えかねたからだが、連座はせずにその男の家族と嫡男はきっちりと保護して父親の仕

事を受け継がせて以来食糧問題は解決を果たしたのだと、バーンが話している間にもハドラーとザボエラも精神を立て直し、狭間の世界の事を説明してくれた。
「アバン、お前時折どうしてこんな魔道具や呪いの品が地上界にあるのだと思った事は無いか？」
「確かに・・・・人間には作れずはぐれ魔族さんだけで作れない代物を稀に見ますが・・それはもしかして・・」
「お前の考えている通りだ。王侯貴族や高潔なる神官達の方は知らずとも、地上の裏世界の者共は、狭間の世界の事を口伝として残して時折訪れている人間達が居る。」
「・・・・そうですか。そういう情報は得てして裏の方々の方が詳しいのでしょうね、私の家の蔵書や図書館や数多の文献にも、狭間の世界の事は書かれていませんでした。」
「当然だな、知られれば王侯貴族に独占されるのが目に見えてるだろうし、高潔な神官たちがその様な穢れた場所と地上を二度と往来させてなる物かと通路を塞がれるのは具合が悪い。
世間には知られずにひっそりと―厳重―情報として伝わったのだろうよ。」
ハドラーの説明にどちらの世界のアバン達も納得をし、ロン・ベルクさん達は知らなかったのですかという質問に、どちらの世界のロン・ベルクにとって狭間の世界は便利グッズが買える場所として愛用しているとか・・・
「あそこに無い物は、大金と時間がかかるが相応の報酬で頼めば魔界の鉱物を用意してくれるからな。」
大魔王に逆らって地上に飛び出た後、矢張り魔界の鉱物が欲しいとなった時さてどうしようか、また自然のひずみでいくのも面倒だと、魔界の名工としてそれなりの人脈を築いて知った情報の中に狭間の世界が入っており、伝え聞いた場所にて―手順―を踏んだところ情報通りにきちんと行けたので以来贔屓にしているとか。
「だがあそこは組織はいくつかあってお嬢さんの言う通り―王―はいない。

あそこも色んな奴らがいるが組織になると同じ種族で固まって・・・この世界のはどうだが知らんが俺の知っていたところは魔族組織が優勢だったが、こっちはどうなんだ？」
「似たようなもんだな。大体住んでいる奴等も魔族が六・七割で後は人間とそのほかの奴等って感じで、魔族組織攻略しちまえばそっくり国が出来るくらいにはなれんじゃねえのか？」
「俺が最後に行ったのはアバン達と戦う前だが、魔族感覚でいけば二十年くらいはつい最近くらいだろうし・・・存外俺を覚えている者達も大勢いるだろうな。」
「おや？貴方の御贔屓筋ですか？」
「まぁ・・・あそこは飲み食いに困らないのと、大戦を始めるに少しな・・何度か俺に献花を吹っかけてきた馬鹿を瞬殺して迷惑料もきっちりとふんだくってやったら逆に一目置かれたな・・」
そのロン・ベルクとハドラーの追加情報に、ティファの提案が現実可能化の目途が立ち始めた。
何も今すぐに狭間の世界を乗っ取りに行くのではない。
其の辺りは調略・謀略などの方面なんでもござれなザボエラに、魔王軍内部の高官引き抜きと同時進行させ、機が熟すのも片や利によって動いている者であり、片や最早トップが倒されてしまった軍であり早晩沈むと分かっているのだろうからどちらも調略戦は長期化すまいと、いつの間にかアバン達とマトリフが提案をしてハドラーとザボエラにいくつかの事を確認しながら進行するのを、ティファは兎も角―子供組―は複雑な目でそれらを眺めている。
この世界の少年ダイ達は、高潔な先生が薄汚いザボエラと話をしていること自体が、特に潔癖感の強いマァムとノヴァは嫌であるのに、同じように―搦め手―をしようという話を熱心にしている事に心の中が苦い思いがした。
それは青年ダイとポップも同じであるが、彼等は王配となるべくその方面も―国―を守る為には知っておいて欲しいと必須科目に入っており、それら清濁併せる事が大切であり、もしも宰相や他の家臣達がそれ等の事をした時、その行為が国を守る為に必要な事であったれ

ばきちんと評価すべき事なのだと・・・・どの教師達も幾つかの例を教えてくれた。
愛する女王達と国のためにと二人は必死になって覚えたが、矢張りどこか嫌悪してしまうのを知ってか知らずか、どの教師達も自分達がする必要がなく、―万が一―あった時の対応として教えてくれた事なのだが、現実世界で敬愛している師が、世界の為に謀略戦を仕掛けようとしている・・・・それも自分達の最愛の妹が・・・・妹は壮大な謀略戦をこの世界に対して神々と六大精霊王達としたとは言え・・・最後にはその者達も欺き己の命と魂だけで始末をつけようとしたのだが・・・・こういう事に関わってほしくないと思うのだが、儘ならないと青年ダイとポップは心の中で嘆息するが、必要な事なのだと頭で納得して余計な事は言わないと黙っている。
双方を見ているバーンは、ティファはの策は成就するだろうと頭の中で算段をつけており、悠然と何の心配も無く見守っている。
ちなみにだがと、ティファはとチウ達は謀略戦に興味は無く嫌悪もしていないのでどちらにも属しておらず時間が出来たので、大魔王は最終決戦の時狭間の世界の人達をどうしたんですかと質問をしに行った。
どう考えてもこの世界のバーンは魔界の住民にさえ目を向けていなかったのだから狭間の世界なんて地上と同じくらいにしか考えていなかっただろうが自分の大魔王はどうなのだろうと聞いてみれば「其方と過ごした十日間の間に住民全て魔界の余の領地と建物に収容したのだ。
魔族と言えどもあそこは空気が地上寄りで澄んでいた故、魔界の瘴気でなくとも空気で死んでしまう恐れがあったので浄化装置を万全にした建物で保護した。」
ある者達には今回の様に、自分に従う者にはそれなりの働く場と報酬を約束して快く避難してもらい、それでも頑強にとどまろうとした者達、特に狭間の世界にいる人間は・・・人間とは言えども其れだけで殺す理由になっていないので、地上を消した後自分に仕えるか刃向かって死ぬかの選択をさせるつもりであったというのは内緒だが、そ

の部分を知らずにそんな事には考えが全く及ばないティファとチウ達は、やっぱりこのお人が大魔王なのだと、キラキラとした尊敬のまなざしをバーンに向ける。
　この世界のチウも、老大魔王の言動にすっかりと虜になってしまい、第二の老師位に慕っているのをバーンも好意をよせてもらえる事が嬉しく、つい三人を膝に乗せて三人の頭を順繰りと優しく撫でて甘やかすのを、そもそもがこの世界の行く末（少年ダイ達に類が及ばない範囲な話）には興味が無いキルがスッと主とお子様三人に近寄り、お代わりのハーブティを淹れて茶菓子も出し、ついで複雑そうな子供達や話についていけない大人達もおいでおいでと呼んで同じようにお茶を振舞う。
「・・・・アバン先生なんか楽しそう・・」
「フローラ様も師匠も活き活きとハドラーは兎も角・・・なんでザボエラと話してんだよ・・・」
「・・・なんだか嫌・・・・・」
「マァム・・・・・」
「僕もです・・」
「坊や達には刺激が強すぎるか。」
「だがな、さっきお嬢さんが得た話が本当なら、盾になる所が無いと地上はまたすぐに戦乱に?まれるんだ・・・。」
「ディーノ様、お耳汚しとは思いますが、自分もあれは必要な事かと。」
　キルのお茶で少し落ち着いた子供達は、複雑な気持ちが拭えずにいるのを、話についていけないながらも大人達がケアする。
　納得できなくとも、必要な事はあるのだ。

暖かいいしの下に：温かい世界を目指す為に・・後篇

「笑いながらお前達に良い事ばかり言いながら周りの人間を悪く言う奴は要注意だと思え。

そういう輩が来たら、お前達はにこにこ笑って何も分からない振りして時間稼いでそいつ足止めして、その間にそいつを口論でぶっ潰せる奴を連れて来て貰うんだぞ？」

・・・とか・・・

「もしも謀略戦で足元をすくわれたら真っ先に余に目玉で知らせてくれれば、後はミストとそち達の周りの者ですぐさま対処でき様。」

・・・とか・・・

「人の善意に漬け込む輩が悪いのです。騙されたのは反省したとしても罪悪感を抱きすぎないでくださいませ。」

・・・とか・・・・ロン・ベルクさん達や大魔王やラーハルトが超具体的な謀略・調略の事をにぃ達に話しながら、その後の対応の仕方教えてるのを、少年ダイ君達もそんな悲しい怖ろしい事があるんだって顔しながらもきちんと聞いてる・・・・凄いメンバーのお教室だよこれって・・・。

ロン・ベルクさん達もなんだかんだと魔界で騙し騙されの世界を三百年以上過ごして来た訳だし、ラーハルトもその辺は魔王軍内部でそこそこそういうのを見聞きしたり、何なら父さんの地位に嫉妬した人達から足の引っ張りが来ただろうし・・・大魔王に至ってはね、うん、もういう事ないよ。

とは言えここにいるみんなもなんだかんだで兄達に甘いと言える。

話している内容はあくまで―向こうから仕掛けられたら―の話に終始してその対応策だけで、国の利害が掛かったら王自らもそういう事を考えるべきだとは大魔王は勿論、リアリストのロン・ベルクさん達も言うつもりなさそうだ。

だから、こっちの方にも耳半分しているアバン先生達も、自分達の愛弟子の内面に影響なさそうなためになる話だから割り込まずに狭間の世界の事の話に集中してるんだろうと思うという、大人達の―調

略・謀略対応講義―をぼんやりと聞いているティファの考えの通り、アバン達は子供達には―あまりそういう事―には関わってほしくは無いが餌食になるのは論外である。
　どう教えて行こうかと思っていたところにこれは渡りに船であり、後でお礼をきちんと言いましょうと他界のアバンは算段している中、ティファもティファでこの世界のダイ達に何故ザボエラが必要なのかの講義を始めだした。
「ダイ君とポップさん達はザボエラ嫌いですか？」
「・・・うん・・・だって・・・あいつ俺のじいちゃんを・・」
「夜襲しかけてきたし・・・」
「それではザボエラさんに勧められたからと言って、それに乗っかったクロコダインさんと骸骨を地面に隠して不意打ちしてきたヒュンケルさんと、同じような事を沢山してきたハドラーさんはどうなるんですか？」
　・・・物凄いティファの真っ当な言い分に、少年達は困惑を浮かべた顔を見合わせながら、それはとか、仲間としてとか・・・ハドラーも真っ当になってるしともごもごというのを、ティファはそうですねと少年達の言葉を肯定する。
「身近になってきちんと相手の事を知って、そして相手が悪いだけの人では無いと知ったからこそ―許そう―という心情が生まれる訳なんですよね・・・相手の事を何も知らないのに悪事許そうと思う奇特な人なんて稀でしょう。」
「え？でもお姉ちゃんそういう事しそうだけど？」
　良く知らない相手でも助けたり許したりしそうだという少年ダイの言葉に、ティファは苦笑する。
「一つお話ししましょう。
　実は私は君達と違って問答無用で向こうのザボエラさん倒そうとしまして・・」
「・・・・へ？」
「出会いがしらに手刀で首吹っ飛ばそうとしたのです・・・・・最低ですね・・」

当時の事を思えば、どうしてきちんと知りもしない相手をそこまで悪だ何だと決めつけて殺そうとしたのか、本当に勇者一行失格ですというティファの言葉に、ダイ・ポップ・マァムの顔は引きつりドン引きしてしまった・・・自分達もそんな蛮行しようと思った事ないと・・・

それは兎も角、ティファが言いたいのはこれからザボエラはこちら側の者として働く身になるので、ヒュンケル・クロコダイン・ラーハルトとハドラーの時の様に色眼鏡で見ずに今後の働きをきちんと見て評価してあげて欲しいと言うものであったのを、三人の子供達はまたもや顔を見合わせる。

確かにティファの言う通り、この三人、特にクロコダインとヒュンケルは早々に戦いあった事を許しており、為人が根底が武人であると認めたハドラーの事も悪く思わない中でザボエラだけはというのもおかしな話であり、特にダイは其れは自分に向け垂れた偏見に満ちた悪意であると感じて、自分がされて嫌だったことをしそうになっていた事に気が付き溜息をつく。

これでは、あの人達が酷い人だったと言えないではないか。

偏見や分からない事に対する悪意とはこんなにも簡単に心に生まれてしまう事を期せずして学ぶ機会ともなれたのは、子供達にとっては僥倖とも言える。

己の身をもって知る事と、見聞きしただけで知るのとでは様々な意味で違うのだから。

そしてティファの話はさらに続いた。

「ああいう人は、その人の能力に見合った地位と敬意と報酬を約束して、尚且つ逃げられない立場にすれば裏切る事はそうそうないと思うんだよ。」

「・・・？」

「地位や報酬とか分かりますけど・・・逃げられない立場ってなんすか？」

自分の言葉に少年ダイは完全に分からない顔をし、ポップも半分は分かるが後は何だという質問に、ティファは優しく答える。

「ザボエラさんはこれからハドラーさんの国で能力に見合った地位―

宰相―につきます。
もっと政治センスのある方がいたらザボエラさんは外交部門の長となったかもしれませんが、現状ハドラーさんの周りで魔族・人間双方の心理や経済周り、国同士の遣り取りや内部部門の調整と政治が出来るのはザボエラさんだけですので、ザボエラさんが宰相になるのには正当性が有ります。
宰相ともなれば王と同じく―国―に何かあった時に命運が諸共になってしまう立場なのです。
国が攻め滅ばされれば大抵は王族同様見逃されずに処刑される事が多々あります。
国が経済で立ち行かなければ無能の誹りを内外からされて、二度と雇ってくれる国はないでしょう。
そうなるとザボエラさんはご自分の命と尊厳と報酬の為にも意地でもハドラーさんの国を守らなければならなくなります。
下手こけばご自分に跳ね返るだけなので。」
そこそこの地位なれば、他国にハドラーさんの国の内情の情報売りつつ内部崩壊の工作もしてその功績を以て、ハドラーさんの国にいた時よりも高い地位を目指そうとするかもしれませんが、王に次いで高い位に予めつけておけばそれ以上昇る事は出来ないので心配はいらないというティファの言葉に、あちらで自分をきちんと評価しているティファの言葉に満足をしながら話を詰めていく中、ティファの兄達も含めて子供達は引きつった顔でティファを見る。
よくもまぁ・・・・ここまでつらつらと策が出てくるティファの頭の中は一体どうなっているのだと・・・
だが青年ダイとポップにもティファの提案している内容で一つ疑問がある。
それはこの世界の地上が衰退しないようにするためにもという言葉だが、何故ハドラー達が国を興す事でそれが防げ、そもそもが地上が衰退するとはどういうことなのだという兄達の疑問に、ティファはそれはねときちんと説明をする。
「大魔王バーンが倒された事で魔王軍はトップがいないから崩壊の一

途をたどると思う。
　其の空いた土地や利権を巡って以降は暫く魔界は地上の事よりも、魔界の覇権を争って各勢力がぶつかり合って併呑されたり飲み込まれたりする間、地上は時たま魔界から迷い出てくる大型モンスターとモンスターのスタンピードとかの稀なこと以外は戦いに意識を割く事は減ってくると思うんだよ。」
　平和な世の中に闘う事を研鑽しようというのは国の中枢や学者や武具を作る職人達等はいるだろうが、平和の期間が長ければ長い程に、国自体も戦いよりもインフラ整備や他の事に割く事が増え
「大規模魔法や凄い武具の作り方の失伝が出てきても困るので、ハドラーさんの国に―八百長―でもしてもらおうかと。」
　例えばヒム達が数年単位でどこかの国に現れて適度に闘い、或いはさまよう鎧などの大規模軍勢で攻勢を仕掛けたりしてもらい、平和はあれども適度な危機感を持っていてほしいという言葉に、青年ダイとポップは無論の事、少年達も頷くが、この世界のラーハルトはそれではお前達の世界のその辺はどうなのだという質問が飛んで来た。
　ティファ達の話がすべて本当であれば、もう敵になる者もそうおらずに、平和な中で失伝するのではないかという疑問に、ティファはにっこりとする。
「そこは大丈夫なのです！」
「・・・・何故だ？」
　嫌にきっぱりと自信満々に言うティファに、更に何故だと言い募るラーハルトに、ティファ世界のラーハルトは、ティファ様が大丈夫だという言葉に何の疑問があるのだと噛み殺しそうにな視線を受けるがそれは兎も角
「私達の世界では今―魔具―作りが盛んなのです。」
「魔具・・・マジックリングや何かのあれか？」
「はい！例えばそよ風程度しか出ないギラと少し暖かい程度のメラを、魔法を込められる魔石に込めて・・・・ちょっとすいません・・・書けた・・・こういう形の筒に入れて同時に発現できるもので髪を乾かす魔具があるんです。」

「ほう・・・これは・・」
ティファは口で説明するしづらいので、先に説明した魔法を込めた二つの魔石を入れた気の筒を紙を出してサラサラと絵に書いて見せた。
気の筒は女性でも片手で包める太さと長さで、髪に充てる部分は通気口の先の様になっており、要はティファが前世で使っていたドライヤーの簡易版である。
ティファは魔法が今後廃れていくのではないかと危惧し、なら戦いでなくとも日常で魔法を使えるように日常品の魔具が出来ないかをマトリフ・アバンと大魔王達に相談し、三人も平和になった世は嬉しく思うが、其れ受け継がれてきたものが廃れていくのは不味いと、各国にも協力を呼びかけ、そういう部門の立ち上げ要請をして生み出されたのがこれであり、他にも雪深いリンガイアではメラミ並みを入れた魔石で除雪をし、もう少しすればルーラも魔石に詰められないかと魔界、地上界の各国で合同研究が成されている。
それが出来ればキメラ達を狩る必要は無くなりかつ希少性の高いルーラやトベルーラを習得しようとする者が絶える事は無くなるという目論見があり、ティファ達の世界は化学よりも魔法発展が伸びていく方向になり、其の内に魔法科学という言葉が生まれる日が来るかもしれず、事実気の早い者達からは―魔法学―という言葉が生まれており、高価であった魔術書などが一般教科書になる日も来るのかもしれない様相を帯びてきている。
そしてそれにねと、ティファの話はまだ続きがあった。
「精霊さんはね、魔法を使う人たちが減って、契約してもらえないと寂しくなってもう知らないってそっぽ向く時もあるんだって。」
百年くらいはまだ人間に関心があっても、それ以降自分達の事を忘れた様になった者達に腹を立てて、いざ地上界が危機に陥りポップ達の様な魔法の素質がとびぬけた者がいて強力魔法と契約しよとしても、臍を曲げてしまった精霊達が応じる可能性は低いらしい。
そういう事もあるし、魔界も適度に地上の物資が入りそこそこ豊かに暮らせれば現状の不満が突き抜けて地上を直ぐに獲ろうという輩

も抑えられるのではないかとも見込んでいる。
そして魔界の魔石や鉱物、アイテムなども地上には有益なものもあるので三角貿易もできればいいなとティファは考えているという言葉に、子供達は呆けてしまった。
たった一つの国を造るという行為の中に、一体いくつの思惑があるのだと・・・・
それを耳半分で聞いていたこの世界のアバンの背中に薄ら寒さを感じつつ、マトリフのティファに対しての評価を思い出す。
―異界から来たって言う娘、あれはお前には金輪際扱いきれる柔な娘じゃねぇ―
―敵に回したが最後、どんな方法だろうが最後には敵は泣ける、それもどうしてそんな方法で負けたのか訳の分からない内にだ―
一つの事柄にいくつもの策を瞬く間に思いつくティファを・・・どうして自分の思惑で動かせるのだと思っていたのかアバンは慄然とさせられる・・・ティファという少女に常識や既存の概念で同行できるなどとは今は思いもつかない。
だが、ティファのそういうアイディアはどうやら善性に寄った考えであり、敵であっても許す事が多そうなのが救いなのかもしれないと思うアバンであった。
彼女の言う通り、様々に方法を駆使して地上に要らぬ火種を持ち込ませないように、万が一第三勢力とやらが動きそうになった時ハドラーの国と地場が連携できるためにも。国を興した後に、地上国家と交友や盟を結んでいくかをハドラーとザボエラとフローラと知恵を絞る。
地上を温かくも危機感を薄れさせない世界を作る為にも、ここが一番肝心なのだと

暖かいいしの下に：帰路に・・・①

その日の夕刻、全世界の空に黒雲が渦巻き瞬く間に夕焼け空が暗雲立ち込める禍々しい空と成り果てたのを、人々は一様に不安に駆られ空を指差し、ある者は建物から出て何事だと喚き、ある者達はその反対に屋内に逃げ込み身を寄せ合って隠れる中、暗雲の中か雷鳴轟きくとも雲の間を丸で光の竜の如く稲光が横走りするのを、街・平原・山間・海沿いは無論の事

「王よ！危険です!!お早く中に!!!」

「ええぃ！騒ぐな!!」

「クルテマッカ王様!!」

「騒ぐなと・・・これは・・・一体何が・・」

ベンガーナ王が

「フォルケン王様！・・・過日竜の騎士とそのご子息の勇者ダイ殿達が激突した時以上の禍々しい気配を帯びた暗雲が、視界の届くところ全てに覆われております!!」

「なんという・・・一体何が・・・」

テラン王が

「ロモス王・・」

「皆の者・・・信じよう・・・ワシ等に出来る事はあの子等の無事を祈り、何事があっても助けに行けるように騎士団・兵士団達を動かせるようにせよ。」

ロモス王がそれぞれの国で重臣たちと共に悟る。

きっと、勇者達が最後の決戦をしている影響が世界を覆っているのだと・・・

しかし今勇者達の動向をフローラの親書が届く王族達と違い、庶民達は不安の坩堝に突如叩き落されたようなものであり、不安に駆られる中

「怖れないでください!!」

その声は過日リンガイアとロモスに勇者達の戦況を届けてくれた少女の声が響き渡り、知っていた者達は縋るようにその声に聞き入

り、知らぬ者達もその凛とした声に希望を見いだそうと声に聞き入れば、暗雲垂れ込める空一面に―映像が二つ―出現し、一つには地に伏している若い少年少女と大ネズミと鎧を着込んだ青年とリザードマンが、ズタズタの体を必死に起こして空に向かって何かを叫んでおり、もう一つには―蒼い空―の中で戦っている少年と―若き偉丈夫の魔族―が戦いを繰り広げていた!!

「皆さん!地上に生きとし生ける皆さん!!今世界を覆い尽くしている暗雲は、映像に映っている者達の激突が影響しているに過ぎません!!

戦っている少年は数か月前にロモス王国を救ったのをきっかけに、魔王軍によって蹂躙されていた各国を救っている救国の英雄勇者ダイであり、相手は魔王軍が統治者大魔王バーンなのです!!!」

少女の言葉に、誰もがくちを利くことが出来なかった。

今自分達の世界を脅かしている魔王軍の、それも魔王ではなく大魔王と言われるものが姿を現し直々に勇者と戦っている・・・地上に伏しながらも勇者ダイの名を呼んでいる中、空中での大激突が一つ起こるたびに、地上を覆っている暗雲から雷鳴が轟き、少女の言が本当であることを示唆している!!

・・・神話の中の、お伽噺の様な一大決戦とは、勇者とその敵達が自分達とは離れた遠くの未開の地に築かれた敵の拠点で繰り広げられ、いつの間にか倒されその知らせを受けるだけであった筈が・・・今、地上の者達の目の前で繰り広げられている戦いに、誰もが声なく恐怖に或いは勇者達の雄姿に或いは戦う勇者と地に伏している勇者の仲間達の姿に絶望するなど、様々な心境から口を閉ざして誰もが、それこそこそ王侯貴族や賢者・神官・大神官達までもが言葉なくその光景を見ている中、映像から―少年勇者―と―大魔王バーン―の会話が次第に聞こえ始めていた。

「・・・ぜ・・そこまで傷だらけになっても余に逆らうかダイよ!!」

「・・・・・さい・・・お前を倒すって!!倒して皆とこの世界を旅するんだって決めたんだ!!!」

「ば・・・かな事を!愚かな事を!!お前達だけに戦いの業を背負わし傍観している者達の為になぜ貴様は!貴様等はその身を賭して戦うの

だ!!」
「・・るさい!!黙れ!!!」
「ふん!余の問いに真っ向から答えられぬとは貴様の覚悟もたかが知れといよう!!童は童らしく!!大人であり三随一一の強者たる余に縋りつけばいいもの!!
子等に縋りつく醜きこの世界なぞ見捨てよダイ!!!」
「るさい・・・五月蠅い!!黙れよ!!!」
大魔王バーンの言葉に、抵抗しながらもその言葉に痛めつけらる少年勇者の表情に、そして大魔王バーンの言葉に大半の大人達の心が痛む・・・・あの魔族の男の言う通り・・・自分達は地に伏しそして今なお戦っている少年少女達に縋って生き永らえている・・・・魔王軍の脅威を取り除いてきたのは紛れも無く彼等であり、それらに報いてやれることも無く今日まで来た事を、大人達特に王達は己らの不甲斐なさを、過日のパプニカ王国で行われた世界会議の場にて、敵からの襲来から身を守ってくれた彼等を知ってから思わぬ日は無かった。
何が王か、何が王侯貴族か・・・・国どころか己達のみすら守ってもらった彼等は一様に忸怩たる思いに胸を焦がし、故にカール王国の女王フローラからの呼びかけに応じて武具・食料品等の、現状で出来うる中での支援を惜しみなくしたとても!最後に最前線にて戦うのは彼等であり自分達は見ている事しかできない・・・まさしく子供等に取り縋っている醜い者ではないかと・・・・
城内外から、街々から、村々からすすり泣く声が響き渡る・・・・善良であればあるほどに魔族の男の言い分が突き刺さり、幼気な子等のお陰で今日を過ごせていたことを知らずにいた事に対する罪悪が、そうでない者達も不貞腐れたような、俺達は別にと、目の前にいない誰かに言い訳をしようとしてしくじり苦い思いが広がる中、ベンガーナの地にて泣いている女の子がいた・・・
「お・・・母さん・・・・どうしよ・・・・私・・・あのお兄ちゃんに・・・酷い事した!!!」
「あ・・・」
「今みたいにあのお兄ちゃんだって怪我してたのに・・・私怖くって・・・

お兄ちゃんに石投げて・・・」
それはダイの人からかけ離れ過ぎた力に恐れ戦きダイに無意識に小石を投げてしまった少女であった。
少女はあの時、助けてくれた人に感謝の心が無かったわけではなかった・・・しかし状況が悪かった。
少女は母と一緒に楽しい買い物に行ける事を喜び、その先で出会ってしまった竜の軍団の襲撃に巻き込まれてしまった。
竜どころか、ベンガーナの町中に住んでいればモンスターを見かける事すらまずない中で育った少女にとって、竜を見ただけで胸が潰れる程の恐怖の中、母も自分も死にかけた先で見てしまった―圧倒的な暴力―
あれはまさしくダイには制御できていなかった力であり、加減せずに振いし力は暴力と言えよう程の力に、平和の中にいた少女が怯える事は無理からぬことであり、双方の悲劇でもあった。
だからと言って、少女がその後助けてくれた恩人に小石とはいえども石を投げつけあまつ当ててしまった事を悔いていない訳ではなかった。
あの後、周りの大人達からあんな得体のしれない力を振う小僧相手では仕方が無いと・・・どこか悪い顔をして言い募る男達を一喝した女性がいた。
それがダイに助けられた少女の母であった。
石に挟まれしばらく朦朧とした意識ではあったが、それでも我が子がしてしまった不始末をつぶさに見ており、もしも意識があったればその場で即座に叱ったものをと悔いながらも、助けてくれた大恩人に大の大人が何を言っているのだと少女諸共に叱りつけたのだ。
あの少年が助けてくれなければ今頃は自分達は死んでいたのだと、母親は少女の肩を掴み真剣に諭す中、少女もまさか投げた小石が当たるとは思っていなかった為に、以来その事を夢に見る・・・助けてくれたお兄ちゃんに、酷い言葉を投げつける大人と石を投げる自分の夢を・・・きっと・・・・・お兄ちゃんは傷ついた筈だ・・・だって自分が小石を投げた後、お兄ちゃんは青褪めて逃げるように自分達の前

からいなくなってしまって・・・それ以来その顔が頭から離れないのに・・・・次に見た時はお兄ちゃんと魔法を使っていたお兄ちゃんも傷だらけで・・それでも戦っているお兄ちゃんに自分は何ていう事をと、少女の小さな胸が押しつぶされかけた時

「知っているぞダイ！過日貴様はベンガーナにて人間を襲って来た竜達から守ったが!!その守りし人間の!!それも少女から小石を投げつけられた事を!!

あれこそが人間達の貴様に対する答え・・・」

「違う!!!!」

自分の・・・自分達の所業を知られそれを口に出された時、少女とあの場にいた大人達は青醒め・・・非道を働いた自分達を、あの少年勇者は見捨てるだろうと思われたが、違うという言葉が少年勇者から飛び出た！

「何が違うというのだダイ!!」

「人間が全部酷い人みたいに言うなよ!!確かに俺の事を怖いって言った人達が居た!!俺に酷い事した子も・・でもな!!力しかない馬鹿な俺を！ポップがずっと助けてくれた！馬鹿みたいに悩んでいる時にあいつはいつだって俺と一緒に悩んで答えを探してくれて戦ってくれた!!

俺が落ち込んでたらマァムとメルルと大ネズミのチウが慰めて力をくれたんだ!!

力しかなくって戦い方が下手だった時！ヒュンケルとクロコダインが体を張ってドジった俺達を助けてくれて・・ロモスの王様は俺達の事を勇者だって言ってくれて！ベンガーナ王様もテランの王様も俺達の事を応援してくれて！お城の人達も三賢者の人達も!!皆戦って俺達の事を助けてくれたんだ!!!

何も知らないお前が酷い事言うなよ!!!!」

己の心情を曝け出し、少年勇者は剣を振って大魔王バーンの体に傷をつけていく・・・それは少年勇者ダイの心の怒りを表すかの如くで・・・・その言葉に、どれ程の者達の心がその瞬間に救われている事か・・・

「ダイ君・・・・すまない・・・・その場で共に戦ってやれずに・・」
「・・・・ディーノ・・・・」
「・・・バラン様!!私にディーノ様の側に行く御許可を!!飛竜を呼べば・・」
「いけません!!」
「姫君!!」
「三賢者及び竜の騎士バランの従者にして竜騎衆のラーハルト!今あの戦いに貴方達が行ったとて足手纏いにしかならないのは戦士ではない私にも分かります・・・・・私と一緒に耐えてください・・・・」
「・・・・姫様・・・・」
「お・・・・おぉ!!!」
レオナの言葉に、三賢者とバラン達は泣きながら映像を食い入るように見入り、ラーハルトは己の力の無さを不甲斐ないと泣きながら地面をたたき割り、拳から血が出るのにも構わず映像を見る・・・・主の子息にして敬愛できるもう一人の幼き主を

だが、どれ程の決意をしてもダイがバーンに一つの傷をつける中、バーンはダイに十の傷をつけ、そしてぐらりと空中で身を崩したダイがやられると、世界の者達の悲鳴が上がりかけた。
誰もが、迫りくる大魔王バーンの手刀でダイの体が叩きのめされると、バランさえ覚悟した時其れはきた。
「キぃ～ヒッヒッヒッヒ、魔界の神と呼ばれた男が、童相手に大人気の無い。」
「き・・・様!ザボエラ!!この光輪を解かぬか!!!」
大魔王バーンの手刀が決まりかけた時、けったいな・・・・・・そうとしか言いようの無い笑い声と共に闘気か呪法で作られた鎖が大魔王バーンの全身を縛り上げ、難を逃れたダイも驚く中大魔王は配下の者に命じたが、ザボエラは動じずに、呆けたダイをサッサとこっちに来いと指図し、あ、うんとフラフラと近づくダイを見ながらザボエラと、大魔王バーンに呼ばわれた小柄な・・少年勇者よりも小さな身体の顔は・・・以下省略な翁の魔族がニンマリと笑う。

「大魔王様・・・貴方はやりすぎましたな。地上を全て巨大呪法によって滅しようとしたのを―狭間の世界―の者達と、魔界の―とあるところ―が騒ぎ儂に泣きついて来ましてな。
―地上が消滅されれば魔界と地上の間にある俺達の世界も崩壊する―と、魔界からは地上が無くなれば実りある場所が減って早晩魔界は滅ぶ、もう大魔王にはついていけないと、―大多数―からの声に儂も決めましたのじゃ。」
「ザボエラ・・・・貴様裏切るか!!」
「ふむ・・・・己の利益にもならぬ、それどころか地上が消えてしもうては魔界も狭間の世界の住人達もそして―儂―も困るのですじゃよ。
地上を征服するからと話に乗りましたが、真意が奈辺にあるか分かった今はお暇させていただきましょう。」
「こ・・・・の!!裏切り者が!!!!!」
吠えども、大魔王バーンを縛っている鎖は容易には切られないらしく、大魔王が藻掻くのを見る中バランとラーハルトとザボエラに苦しめられたバダックは驚愕をした!!
あの欲深さと強者に媚びる事にかけては右に出る者はいなさそうな出世欲の権現たるザボエラが!!最高権威に逆らい堂々と離反している・・・・一体何が起きているのか分からないとは・・・・・現場にいるダイもぽかんとしている。
それを更にザボエラが叱責をした!
「勇者の小僧!お前の味方ではない!!勘違いしていないでぼうっとぃてるな!!」
「あ・・・・・うん・・・・」
「分かったら・・・・・・・フバーハ!!!」
「ッ!!全開!!竜闘気!!!」
二人の遣り取りの隙を縫うかのように、鎖を引きちぎったバーンのメラゾーマの化身カイザーフェニックスを二人は魔法と竜闘気で防御するのを、大魔王は嘲笑う。
「ザボエラよ、貴様がどのような策を用いて余に勝とうとしたかは知らぬが・・・・・ここいら一体の罠は全て焼かせてもらったぞ?」

言葉に通り、見れば何もなさそうな空中が燃えている部分があり、それを見てザボエラが青くなるのを大魔王バーンが嗤う。
「策ならず・・・・哀れよな。狭間の世界も!魔界も弱いのであれば余にひれ伏し黙って死んでおればよいものを!!
ダイ!貴様にも余を倒す力はあるまい!!!」
折角来た援軍も、あの地上どころか己の故郷でも構わずに破壊するという邪悪な存在に、最早成す術は無いのだろうか?
誰もが膝をつき、心折れる中、勇者だけは諦めていなかった!
「諦めない・・・・」
「何?」
「俺は!!諦めない・・・・・助けてくれてありがとうザボエラ・・・・・おかげで俺の最期の力を全部使えそうだ・・」
「・・・・まだ何かできる事があるというのかダイ?」
「ある!!俺の先生が教えてくれた!!どんな困難時であっても!!ジタバタと足掻けって!!!諦めなければきっと光明が見えるって!!
俺は・・・・この紋章に全ての力を注ぐ!!!
ザボエラ!力貸して!!!」
「・・・・・仕方ないのう・・・・・・良かろう・・・・」
「・・・・この・・・・小賢しい奴らめ!!!!!」
老人魔族が、少年勇者の前に出て、向かってくる大魔王を先程の鎖を他方から魔法陣を出して捕縛する。
「またこれか!芸の無い!!!」
「ヒッヒ!そう言って囚われているのは誰か・・・・早うせい!!小僧!!!!」
大魔王の言葉に対して余裕があるように言おうとするザボエラであったが、鎖が早くもひび割れるのを見て焦るのを、世界中のそれもザボエラをよく知っているバランとラーハルトとも、祈るように見ている。
あの翁の奈辺がどこにあろうとも、それでもダイを助けている事実に変わりなく、そして世界が祈る中ダイの右手に宿る竜の紋章が煌々と輝き、ライデインを剣に落としそして・・・・・
「大魔王!!!俺の全てを込めた!!ライデインストラッシュだ!!!!!!!」

「小僧!!!!」
技が放たれる寸前に、大魔王も鎖を引きちぎりダイに向かっていきそしてダイの剣と大魔王バーンの手刀がぶつかった時・・・・映像は途切れ空からまるで世界が壊れるような大音声が鳴り響き・・・・そして暗雲が引きちぎられるように突如として霧散しそして・・・・夕焼けの空が地上に現れた。
誰もが、その空を見上げる・・・・・映像がまた結ばれ・・・・・勇者が勝ったという雄姿が映る事を信じて・・しかしどれだけ待とうとも映像は現れず・・・・バラン達は膝をつき、絶望に突き落とされる・・・・もしもあの少女の声がティファであったならば、また映像を結ぶために無茶をして今度こそ命を落としてしまったのではないか・・考えてみれば!映像には異界の者達はだれ一人おらず!!ディーノたちを守る為にその命を・・・そして息子とその仲間達も・・・・・そう絶望したのはバランだけではなく、数日を共にしたレオナも同様であったが、彼女は己が取り乱せば国が乱れる事を重々承知しており・・・悲しみをこぶしを握り締め血をにじませて耐える。
ダイが死んでしまったのであれば、この後自分達も直ぐに後を追うのだから・・・・最早大魔王に勝てる者はいないと覚悟を決めた。
しかしその覚悟は、一条の光が夕焼けの空を割くようにして飛来してきた時に霧散した。
その時と同じくして、各国にも急報が届けられ、各王家と指導者たちはすぐさま動き、王城内外に、村々に、街々に知らせを緊急用のキメラの翼を渡して報せに行かせた。

即ち、勇者ダイが全ての力を使い果たしながらも、仲間達と最後にやって来た魔族の老人と共に大魔王バーンを討ち果たした事を。
王城内外や街々には馬を走らせた使者たちが触れ回り、村々には村長の下に集まった者達に報せた
其の報せを受けた瞬間、世界は歓喜に包まれ誰もが喜びに沸きたった。
少年勇者とその仲間達と魔族の老人がこの世界を救ってくれたこ

とを寿いで・・・・

そしてベンガーナの少女も泣いていた。

あのお兄ちゃんが無事でいてくれた事が嬉しくて、何年かかっても良いからいつか謝りに行くんだと泣きながら誓ったのだった。

暖かいいしの下に・・帰路に・・・②

皆様!!お疲れさまでした!!!

どうも!壮大できちんと登場した人達の声がまるで目の前にいるが如く伝わるハイスペックな高画質(ティファとこの世界はまだつながっており、しかし今回は前回やらかした神々が下の善良な天界人達から突き上げ喰らったので、絶対にティファにダメージいかない方法で水鏡をただという名の自分達の寿命を十年削って生み出した高画質水鏡)で、一大決戦!勇者と大魔王の激突で世界の命運は決まるをお送りいたしました!!!

いやぁ~脚本この世界と私達のアバン先生ズ、台詞構成キル、戦い方の構成と持っていき方は速くもザボエラさんがお仕事してくれました!

俳優は若いバーンを演じてくれたのは私達の!!ここ重要なので二度言います!私達の大魔王にモシャスで演じてもらいました!

「大魔王!お疲れさまでした・・・・悪役させてごめんなさい・・・」

「ふ、ティファよ、余もそれなりに楽しかったぞ?

誰ぞが作った物語の人物を演じてみるというのは存外楽しいものであったな。」

実にバーンはノリノリで―若きバーン―を演じていたとのだという本人の言に、ティファは本気でびっくりした!

「そ・・・そうなんだ・・・」

・・・・魔界の神様ってお祭りの神様でもあったのだろうか?

ティファの困惑を他所に、普段自分が言いそうにない事を言葉にして見たり、演じてみると見えてくるものがあるというバーンの言葉に、ティファは慣れない事を頼んで迷惑かけたなと思っていたのだが全然違った。

この壮大な一大特別上演の監督権出資者(お金ではなく少年ダイ達が攻撃でボロボロになった風の服や鎧など全てを式で作って提供)は

バーンの言葉に困惑をしているティファである。
砦に戻り、ザボエラやハドラーや親衛騎団達どうするのから始まった狭間の世界の事にひと段落した後、ティファがもう一つの爆弾を全員に落っことしたのから始まった。
「この後すぐに各国の王様達に大魔王討伐の報を入れても、大喜びするけれどもそれで終わりだと思いますがその辺どうするんですか？」
というティファの、―謎―な言葉に子供達は何を言っているのだと首を傾げ、兄達は何となくあたりが付いているので難しい顔をし、さらに深く意味の分かった大人達はどうしたものかと、狭間の世界の事を話し合っていた時よりも難しい顔をし、特にフローラも思い当たる事が多すぎてしょんぼりとする。
要はティファの言わんとしている事は、確かに大魔王討伐の功績を少年勇者達は国民達の前で讃えられなにがしかの褒賞を与えられるだろうが・・・・後は無い。
国も復興の報で忙しく、そもそもが勇者達はポップ・マァム・メルル以外は国に所属している訳ではなく、その三人とても一般庶民であり王城内にて地位がある家でもないのでやりようがあるとすればなにがしかの一代限りの地位を贈るか、魔法使いならば特別魔法顧問というマトリフがされたような事になるかしかなく、そもそもが・・・ヒュンケルとクロコダイン達の立ち位置に対してよい方向に動かそうという国はパプニカしかなく、このままで終わった場合はティファの言う通りで―褒められて終わり―にしかならない。
人は困難な時には団結するが、平和に慣れるのも早い生き物であり、数年もすれば功績のあるヒュンケルとクロコダインに対しても罪人どもがという誹りを口にするものが出る可能性が高い・・・・・どうしたものか・・・大人達が悩む中、ザボエラがそんな事かと呆れた。
「世界の危機がどれ程のものであるのかを知らしめて、恩をきっちりと売ればよいのじゃろうが。」
どうせ地上の人間達は、豊かなこの大地欲しさに攻めてきて占領するつもりだとしか高を括っておらず、まさかその大地そのものを全ての生命諸共に消滅させようと・・・・言っては何だが―狂人の思惑―

があるとは思ってもいないだろう。
精々が自分達は逃げ延びれば、その間に―勇者様が助けてくれる―という都合よくかんがえているにすぎないだったら、それを逆手にとって―うんと怖ろしい想い―を植え付け、今大の勇者達の功績が天よりも高いものだと全世界に人間達に知らしめてやればいいのだだと・・・壮大な謀略に、子供達は唖然としたが、それは良いアイディアですとティファはザボエラの意見に大喜びしてザボエラの下に駆け付け抱き上げムギュムギュとするのを、本人は迷惑だと怒りたいが・・ティファの保護者が凄すぎて長い物には巻かれて諦める中、キルがポカンとした子供達に一言で説明してあげた。
「君達の死闘の行く末如何によって地上が消滅していた事実を教えて上げるんだよ。」
即ち勇者敗北＝地上が消滅を教えて上げるのだというキルの説明になるほどと少年ポップは頷くが、青年ダイとポップは首を傾げる。
「キルバーン、其れってアバン先生やフローラ様辺りが会見開いて説明会しようってのか？」
其れだけで人々の意識は変わるのかという甚だ懐疑的な青年ポップの言葉に、アバン達ががノンノンと指を振って否定する。
「そのくらいでは人々の危機意識が高まる事はありませんよポップ。
もう脅威が倒された後に、実はこんな危機があったのですと言われても、人はきっとそんな怖ろしい事がと一瞬は怖がっても―それでももう終わった事だ―と流して御終いでしょう。」
「え～・・・だったらどうするんすか？」
師の言葉に青年ポップはそれ以上にやりようがないだろうと口を尖らすのを、キルはフローラだけではなく褒章を渡す時の王達の口言ってもらう事や、その後は戯曲などの楽士達に徐々に広めてもらってはという、良さげなアイディアを出す中、ティファがにんまりと笑ったのを見て青年ポップとダイはぞわっとした！
あれ絶対に碌でもない事を企んでいる顔だ!!
そして少女だが出した案はろくでもなかった・・・
「勇者と大魔王の大激突を!!生映像で見てもらうのです!!!」

ビシッと・・腰に手を当ててドヤがで言うティファに、兄達も少年ダイ達もさらにポカンとする・・・・だって・・・・相手の大魔王バーンはもう倒され石化したものもキルバーンと一つ目ピエロとミストが持っていってしまったではないかという表情に、ティファは更に笑ってとんでもない事を提案・・・・即ちそれが

「大魔王に若い大魔王バーンに扮してもらってダイ君と衝突してもらい！そしてこの世界がいかに少年勇者達に縋り付くしかなかったという悲しい事実を今一度思い出して頂き！

一般庶民の皆様にも、俺達弱いから戦いの事なんて勇者達がやってくれるだろうという意識に罪悪感の楔をガッツリと打ち込んでもらい!!

そして今代の勇者がどれ程不遇でほとんど孤立無援ななか頑張って来たのかを全世界の老若男女問わずにガッツリと思い知って頂きます!!」

庶民の皆様に戦えとは言いませんが、戦い抜いた彼等の力を怖れるなんてどれ程の愚の骨頂化を、ティファはガッツリと植え付ける気満々なのだ。

弱い者は得てして強者を怖れてしまう事があり、これは強者も弱者を低く見る人達もいるのでどうともいえないが、今回ばかりはその考えを通す気がティファには全くない。

その力がなければ地上が消滅するという物凄い爆弾を、全世界に向けて落とす気ばっちりであのだから。

「そんなわけで大魔王、若きバーンに扮する事をお願いできますか？」

そしてティファはごろにゃんとした可愛い顔で（大魔王視点です・・）大魔王にお強請り（これも大魔王視点です・・）と思われる要請をし、アバン達にも協力を要請すれば、あれよあれよとプロットが立ち上がりすぐさま肉付けされ、台詞はキルが少年ダイに、この世界に対する気持ちや、常日頃感謝の言葉を伝えたい相手はいるかなどを懇切丁寧に聞き取りをし、若きバーンに対する怒りをもっと言語化してあげ、仲間やお世話になった人達への感謝の想いもきちんと言葉にするのを、少年ダイは都度俺が言いたいのは其れだったんだよ！と

か、もっと感謝の言葉を言いたいとか打ち合わせをし、少年ダイの台詞が決まって後は練習をさせれば・・・・ダイがするりと覚えたのでポップ達を驚かせた・・・難しい事が苦手なはずなのに・・・しかしそれは少年ダイの言葉で納得をした。

だってこれは、俺の中にある思いと同じだからと・・・

ずっと胸に秘めていた言葉を出すだけなのだからというダイの言葉に、感謝の言葉を贈られる予定のポップは涙ぐみながらダイの頭をわしゃわしゃとする中、バーンにはあの若バーンと似たようなことを、この順番で好きに言って欲しいというキル指示の下で打ち合わせをし、その間にティファが身ぎれいになった全員を―汚しの作業―を徹底させ、ボロボロの服や鎧を再現して着替えさせ、髪も乱して完璧に整ってから、少年ポップ達が倒れ伏す予定の岩山を親衛騎団達がそれぞれの得意の技で大激突跡を作り出した。

そしてすべてが整い―ヨーイアクション―となり・・・・そして壮大な劇が幕を上げて大成功を収めたのだ。

攻撃は大魔王とダイが手加減するので大激突の音は、映像外で青年ダイとこの世界のハドラーが割とガチ目に片や鋼の剣で、片や格闘で戦い合い似たような音をタイミングよく鳴らし、魔法効果の音は青年ポップがティファに向かって放ち、同じようにタイミングを見て盛大な防御した時の破裂音を鳴らし、音響はばっちりであったのだ。

ちなみにザボエラ出してなぜハドラーが出ないのかというと・・・・ティファ質的にはハドラーの容姿は普通にあり所か、ティファとチウ達にとってはかっこいいになるのだが・・私最初に見た時は禍々しい怖いイメージしかなかったという・・・元勇者一行であっても中身は一般庶民と同じ感覚であるマァムとそしてポップの言葉に、世界的映像に出したらアウトだという結論になったのと、ハドラー大戦でもしかしたらハドラーを見かけて覚えている者がいたら、その時の憎しみや恨みが再燃されるのも困り、人間界の交渉窓口の権利はザボエラにすんなりと譲渡されたのだが、それは兎も角

これで人々は思い知ったろう、自分達の命が誰の犠牲によって守られていたのか。

そして人々は知っただろう、この世界には天界・地上界・魔界の他にも国がそれも―地上界と交渉の余地がある国―がある事を。
それは幸い勇者の顔見知りの様で、彼に繋ぎをつけてもらえばいいと―頭の良い者達―は食い付くだろう。
そして、ヒュンケルとクロコダインの名をダイの口から感謝の言葉として出してもらった事で元魔王軍でありながらも、いかに命懸けで若き勇者達の助けとなり支えとなったのかを知ってもらえれば、彼等の立ち位置も何もしない時よりも好意的は無理であっても、それでもそれなりにやわらぎ、後は彼等の頑張り次第という道が出来たはずだ。
そしてこの勇者一行にはモンスターも加わって、地上界消滅の危機の阻止に一役買った事で、モンスター全て悪という図式が直ぐに罷り通る事も無くなれば、後はこの世界の頑張り次第になってくれるとティファは目論んでいるが・・・・さてどうなるのだろうか、流石のティファのそれは分からないし、誰にも明確な事は言えない。
未来はいつだって良くも悪くも不確定なのだから。
それでも、きっと良き道を歩く人達は大勢いるはずだとティファは信じている。
それは自分の世界であれ他界であれそれは変わらないの彼女の中の真実なのだから。
世界を回すは暖かい意思の下であるべきであると。

しかし今回、それを成す為の壮大な劇には一つの問題があった。
「あ～もう！俺達へたばった振りだけしてりゃぁ良かったけどよ、そっちの大魔王さん大丈夫か？」
「そうよね・・・本当の大激突で体力も魔力もほぼゼロになって・・・こっちではどんなに時間がたっても回復できないのよね？」
「・・・・それよりも、今回のこの・・・・何と姫君に言うつもりだアバン？」
お芝居お疲れさまでしたと、また砦に戻った一同はフローラ様とキ

ル達は用意してくれたお茶を飲んでそれぞれの感想を言い合って楽しんでいる時に・・・ぼそりと言ったヒュンケルの言葉に戦慄が走った！

そう！あの怒らせらば（物理的にも精神的にも）何をしてくるか分からない賢者レオナ王女に!!心苦しいが今後の世界の為に他国同様欺いたままにするのかそれとも・・・

「あ～姫さんに言うかどうかはダイに任せた方がいいと俺は思うぞ？」

最終的にはレオナの事を真っ先に思うダイが決めるべきだという言葉に、ダイは戸惑う事無く力強く頷く。

「俺、沢山世界を見ながら難しい事もきちんと自分で考えて、レオナに言うかどうかをきちんと決める。」

ただ楽しく過ごしていた少年が、一気に男の顔になるのを周りは頼もしそうに頷く。

少年が巣立ち羽ばたこうとする姿はいつだって美しいものだと、魔界の神が心の中で讃えるのであった・・・

暖かいいしの下に：帰路に・・・③

地上とそして・・・もしかしたら魔界・天界の明日をも賭けた一大決戦の勝負の行方が勇者達の勝利に終わったと、―キメラの翼を使って飛んで来たカール騎士達―の報せが入ってから、勇者ダイの父親バランと従者のラーハルト、魔法使いポップの両親ジャンクとスティーヌそして魔法の師であるマトリフ、武闘家マァムの母親レイラとマァムとチウの武闘家の師であるブロキーナ老師そして・・・勇者アバンを想うフローラ女王と勇者ダイを想うこの城の主にしてじきパプニカ王国の正式なる女王となるレオナが、夕暮れの空の下で―帰り人達―を待ちわびている。

キメラの翼で城に来た騎士は、勇者ダイの体調が回復次第、仲間全員で戻ると知らされ、これから各地に散った者達も、報せた事をアバンに報告に行くので暫しご免と戻ってしまった。

親達としては、もっと子供達や出来れば一行全員の様子を聞きたかったのだが、無事に朗報を届けられたと知ってもらうの大切だと騎士を無理に引き止めずに行かせたが・・・バランとラーハルトは首を傾げる。

―騎士の気配―にどこか覚えがあるような・・・普通の騎士であったれば覚えていないのだが気のせいであろうか？

そんな風に首を傾げる二人を他所に、他の親たちは王女・女王とちゃっかりとフローラの肩に乗っているゴメちゃんは、全員の帰りを出迎えると足早に縄文に走り去るのを、二人も慌てて後を追い、臣下一同も続けとばかりにバダックを先頭に三賢者達も走って追いかけそして今に至る。

あれからどのくらい経ったのか、夕焼けの茜空が山入端に消えかけ一番星が見えた時、星が近づくように、先程の一人ルーラと違い新星が落ちてくるような勢いと大きな光は・・・

「ダイ君!!!」

「ディーノ!!」

「ディーノ様!!」

「「ポップ!!!」」
「マァム!!」
「チウ!!マァムちゃん!!」
「アバン!!」
「ヒュンケル殿!!クロコダイン殿!!」
「ヒュンケル!!!」
光の中、ルーラで来た勇者一行の全員に、それぞれの待ち人に向かって全員が駆けだしそして抱き着いた。
流石にマトリフ・ブロキーナ・バダック・三賢者とラーハルトは最初から待ち人たちに飛びつく事は考えていなかったが、バランは息子に最初に飛びつくのを大人としてそして男親として息子の想い人であるレオナに譲ってあげ、ダイに抱き着いたレオナは大声で泣いた。
それは子供達の親よりも、ある意味十五年間待たされたフローラよりも誰よりも大声で泣いて
「ダイ君!!!ダイ君!!!」
ひたすらにダイの名だけを呼びながら泣き続けた。
レオナはずっと不安だった・・・・同じ女なのに戦う術を持っているマァムと違いただ戦場に出る男達を見送る事しか出来な中で、待つ間いつも不安であった・・・自分がいないところでダイ達が大怪我をし、ベホマを掛けて上げたくとも戦場は遠い中、あの一大決戦の映像ではダイを始め、ここ数日本当の意味で苦楽を共にした仲間達全員がボロボロになっている姿を見せつけられ、ダイに至っては最後の力を振り絞る共で宣言した後映像が再び届く事が無い中にて、一応勇者側の勝利で終わったという報せを受けたとはいえども詳しい事を聞く前に伝達の騎士は行ってしまい、不安で不安で胸が潰れそうであったレオナは、人目を憚る事無く泣いている。
王族はね、簡単に人前で泣いたら駄目なんだからね。
かつてレオナに怖い時や悲しい時にどうして泣かないのか、ダイは何の気も無しに聞いた事がある。
それはダイにとって不思議であったからだ
島に共に来た神官のテムジンとバロンに騙されて殺されそうに

なった時も、バルジ島にてレオナを助けた後レオナ本人の口からお父さんが死んでしまった事を告げられた時も、本当の意味で戦場に出た時もレオナは泣きごとひとつ言わなかった事が不思議で、なのに自分とティファお姉ちゃんだけがいたあの隠し砦のお茶会の時は泣いたのがダイにとっては不思議であり、二人の蟠りが解けて消えた時にダイは思い切って聞いた時のレオナの返答がそれであった。

王族が簡単に感情を露わにするのは良くないと、レオナはそう教わって来たのだとか。

苦楽を共にし喜びを分かち合う笑う時は良い事であっても、決して己自身の悲しみの涙を見せる事なかれ、それが他者の痛みであっての共感しての涙であればやむなしと

「ようはね・・・どんなに辛くて悲しくても、私達は毅然として上に立たないといけないの・・」

そうしないと下の者達、つまり家臣達もどうしていいか分からなくなってしまうからだと優しく教えてくれたレオナが、今泣いている・・・人目があると分かっているだろうにそれでも自分の名を何度も呼んでくれて・・・

「レオナ!!!俺!!俺はレオナが大好きだよ!!!」

「・・・ふぅ・・・う?」

「大好きだよ!!レオナの為だったら何度だって大魔王みたいな敵倒して!!何度だってレオナが大切にしているもの一緒にレオナの事助けるくらいに大好きだ!!!」

「ダ・・・・イ・・・君?」

ダイは、ずっとずっとレオナの事がどう好きなのか分からなかった。

ポップも好きだしマァムも仲間達も好きで、じいちゃんもゴメちゃんも島のみんなもそして・・・・バランとラーハルトも大好きなのだが・・・・レオナの事を思うと胸がドキドキする時があって、笑う顔も怒ろ顔も大好きだで、悲しい顔をされるとどうしていいか分からなくって・・・・・泣いているレオナを沢山慰めてあげたくて・・・・泣いている声は・・・・

「あぁあああ!!」
「ちょ!!!」
「・・・・ディーノ・・・・・・・」
ダイは泣いているレオナをそっと体から放させそして・・・・泣いているレオナの口を自分の口で塞ぐ・・・・・口付けをしたのだダイは。
それはダイはまだ意味の知らない事で、しかし―本当の意味―を理屈ではない本能で知っている好意を、即ち妻にしたいという程愛しているレオナに対する答えがこれであった。
周りは互いの待ち人たちの再開でもみくちゃしていていたり、穏やかに話したりしていたが、ダイのその行動に驚き、声なく見てしまい、一応父やアキーム達が待つベンガーナ上ではなく、フローラ女王の下に先に来たノヴァは顔を赤らめ直ぐに明後日の方を向き、ロン・ベルクは笑って見る中レオナの顔は・・・・茹でられたように真っ赤になる・・・しかし嫌ではない!!
嫌であるはずがない・・・・嬉しくて・・・・このままダイと溶け合ってしまえればいいのにと、幸せな涙をころりと流すのを、バダックや三賢者達は自分達が育てたような姫君の幸せな姿に涙を流して見守る。
勇者と姫君の幸せなる再会を寿いで

まさかそれが―全世界―に流れているとは知らずに・・・

暖かいいしの下に：帰路に・・・④

「は・・・わぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」
「・・・おやまぁ～これは・・」
「ふぁ!!キルバーンさんなにを!!」
「なんとも・・・・・チウ君は見たら駄目だよ・・・」
「グッとと言いましょうか・・・こちらのタイミングがバットと言いましょうか・・」
「はん！お姫様と勇者様のハッピーとやらでいいんじゃないか世間にとっては。」
「ししょう!!これそれで済むのかよ！」
「ふむ・・・・やり寄るなあの少年勇者も。」
「なかなかのもんじゃねぇか。」
「これは・・・」
「・・・・不味いのではないか？」
「はりゃぁ・・・・ティファ大丈夫？」

はわぁわわ・・・・ども・・・・今後のダイ君達がこの世界で過ごしやすいように、お姫様との感動の再会も全世界の人達に見てもらって、ダイ君達も戦いが終われば普通の人と変わらないのだと知ってもらおうと画策をして・・・・うわぁぁぁん!!!!
「こんなつもりなかったのに!!!どうしようダイ兄!!!あんなその・・・・どうしようこれ!!!!」
「・・・・いやどうしようもなにもよ・・・・もうこの映像全世界公開なんだろう？」
「そこを冷静に言わないでよポップ兄!!!!」
レオナ姫とダイの口付けの映像を流してしまったティファは、その前に察したキルがチウ君はまだ子供だから見るの速いとばかりに目を塞いだので見ていないが、見た一同はここの少年ダイはその辺早熟だな～と見ている・・・・・ティファ以外は・・・
映像を結んだのはダイ達をパプニカ王城に行くの式で見届けた後、

最後の仕事とばかりにこのせかいの勇者達一同と家族と愛する者達の感動の再会に、世界とそしてティファ達もウルウルとしてしていたのだが・・・・・まさかの少年ダイが口付けするなんて思わなかったティファはキルが雰囲気を察した時あれっと思ったが・・・まさか本当に口付けするとは思わずにばっちりと見てしまいフリーズ起こし・・・・そして真っ赤になって物凄い態度でも内心でも大パニックを起こした。

みっぎゃ!!!!どうしよ!!ダイ君達見られているのはパプニカ王城の人達だけだって思っているだろうけれども!!後日絶対にこの世界の王様達に言われて、全世界公開だって知られちゃうよ!!

そんなつもり私無かったのに!!!!

首から上の顔は耳まで真っ赤であり、如何にティファが他者の口付けを見て恥じらっているのかが伺い知れ、野郎ども一同は首をひねった。

「ティファ、お前俺達の結婚式やおっさんの結婚式でさんざん見てるだろうに何今更恥ずかしがってんだ?」

「ポップ兄!結婚式のあれは!神聖な儀式の一環としてや、予めするのも分かってるからいいの!!」

対して此方は色々と違うのだと力説する様は・・・・・まさにおこちゃまである・・・

「ふふいいじゃないかポップ。ティファにもまだ―ああいう事―は早いんだよ~。」

そんなおこちゃまぶりな妹に、ダイは目を細めてうっそりと笑い、良い事の御裾分けになるから大丈夫だよティファ~とか、猫撫で声を出して妹を宥めつつ優しく抱き上げて宥めてあげる姿に・・・・バーンとチウ以外の一同はダイの姿と醸し出している気配に慄然とする・・・

・・・・何故妹が―おこちゃまのまま―でいいのだと実の兄が黒い笑みで笑っているのだと・・・ティファと目隠しをキルから外されたチウとそういう世俗的な事にはとんと疎いバーン以外の野郎どもは突っ込みたくなる。

お前自分が嫁さん貰ったくせして妹には結婚ないし恋人出来なくていいと言いたいのか！

と・・・シスコン過ぎる現役勇者で竜の騎士様でパプニカ王国次期王配殿下が・・・

「いいから帰ろうよ～。レオナも皆も待ってるよティファ。

メルルだってマァムだって、あそこにいた全員がポップとチウの事も待ってるんだから。」

「そうだね・・・この世界のハドラーさんとザボエラさんの事はアバンさんとフローラ様がなんとかしてくれもんね・・・・・ダイ君と姫様には・・・・悪い事しちゃったけど・・・・」

「俺もメルルと・・・みんなに会いてぇ・・」

「帰りましょう・・・」

周りの色々な思いを何となく察しながらも、この世界の厄介ごとの一つは一応取り払い、その後の事もどうにかなるとっかかりを作ったのだから、これ以上大切な妹と親友と仲間を今世界にいさせたくないダイとは早く帰ろうと、三人に待っている人達が居る事を思い起こさせ、そしてそれは成功した。

帰りたい・・・・ずっとずっとそう思いながらも、帰る場所があるのだという思いを、三人はずっと心の奥底に仕舞っていた。

それは偏にこの世界で頑張っていた少年勇者達の心情を慮って・・・

彼等には最早逃げる場所も無く戦える者達も自分達しかおらず、世界の全てがあの小さな背中に乗せられている事を思うだけで堪らなくなり、そんな中自分達だけが逃げ帰るような気がして・・・・・見捨てるような気がして・・・

だから彼等に手を貸し共に戦い抜いた。

自分達だけではなく、彼ら全員が帰れるところが出来るその時まで・・・

そして彼等は―帰った―

親元に、想い人の下に、待っている人達の下に

ならば

「帰ろう、ポップ兄、チウ君。」

「そうだな、帰ろうぜ俺達の世界に。」
「はい！帰りましょう!!」
　きっとこの世界も自分達の世界の様に何とかなるだろう・・・映っている映像もじきに消えるだろうが、その映像にはレオナから父バランに抱きしめられているダイ達が映っており、ポップもマァムも顔を赤くしながらも抱きしめられて・・・・
　ハドラー達とザボエラは一足早く狭間の世界に向かっている最中であり、自分達に出来る事はもう何も無いのだから・・・
　さようならももう言ってあるし
　ティファとポップとチウの言葉に、キルとアバンとマトリフの三人で時空の扉を出現させる。
　今ティファ達がいる場所は、アバンとマトリフが扉を固定させた魔王ハドラーも元居城の地底魔城の中心部にいる。
　全てのお礼も互いに言い合い、ダイ達がパプニカに向かうと同時にキルが空間を開けて扉の間に案内をされてティファの提案で―最後の映像―を結んで・・・あのハプニングとなってしまったが、アバンとマトリフとしてはあのハプニングのお陰で少年ダイの居場所が確保できたと思っている。
　あの映像を見れば、ロマンスが大好きなご婦人方が味方となり、意外に外交問題も国家の行く末も本気になった奥方達の言で決まる事が往々にしてあることを知っている二人としては、これは有りなのだがティファの可愛い反応で言いそびれてしまったが、それも良いだろうと楽しんでいる。
　世界は温かい方向に向かっていけそうなのだから・・・・
　そう思いながら二人もキルの魔力放出に合わせ陣に魔力を注げば、青白い蒼天を思わせる光が辺りを満たし、陣が立体的に現れそして、全員が光に包まれる。
　もしもこの光景を見ている者があれば、光に包まれた者達の体は一斉に解けてしまったと驚いただろう。
　解けそして再構築された時

「ふわぁ!ティファ達浮いてる!!」
「おぉ・・・そっか!向こう行く時は落ちて・・・」
「戻る時は昇るんだ!!!」
兄の腕の中でティファ達はぐんぐんと昇る様に驚き、周りは微笑ましく気にしながらも警戒を怠らない。
最早二度とこの掌中の珠達を何人にも奪われないように、威嚇するように警戒をしながらも、次第に上空の光が強まる・・・
あそこが、短いようで長い五日間・・・・そう、たった五日間だがティファの人生で最も長かった五日間ずっと帰りたかった場所が見えてきた事に、ティファとポップとチウの目に涙が浮かぶ・・・やっと帰れるのだと・・・・
光をとおると同時に歓声に包まれながら・・・・

世界に散らばるいし達：エピローグ①

ｓｉｄｅ少年達の世界

魔王ハドラー大戦が当時の勇者アバンに討たれて十五年が経ち、またもや勃発した魔界からの一大攻勢を仕掛けられた世に言う大魔王バーン大戦は、始まりが苛烈であったがたったの数ヶ月で幕引きが成された。

それも少年少女達の手によって・・・・一応大人というべき武人・クロコダインと戦士ヒュンケルもいたのだが、世間が知る主要な戦いである後の世にロモス王国奪取・パプニカ解放戦役・王女レオナ救出を果たしたバルジ島の死闘そしてロモス王国の魔王軍の罠による戦いにおいて、名が出ているのが少年勇者ダイに続き、少年魔法使いポップと武闘家少女のマァムのみであり、ベンガーナが唯一被害を出した超竜軍団の襲撃においても戦ったのはダイとポップであったが為に、世間の印象としては戦った者達はまさしく少年少女達であったという面が強く、そして先代勇者アバンの活躍は報じられることは一切なく、当然―異界よりの助太刀―など存在する筈も無く―あの人達―の事は終生この世界は知る事無くそんな世界の戦後は少年勇者達に優しかった。

当然の話である。

先ずこの世界もあちらと同じく―異界がある―事を知るの古文書に精通している博識な者であり、当然そんな知識を言いふらす者なぞいる筈も無い。

この世界では知識は共有する物ではなく、弟子を自分の目で見極めその中でもごく一部の者に継承する物であり、そんな彼等が―万能薬―という新薬を無償発表した向こうの世界の北の勇者の存在を知れば狂っていると非難しただろうし、実際に学術書が世に出回った時向こうの世界の知識階層たちが大騒ぎしたのだがそれは兎も角、前述のとおり知識の共有がない世界において、異界の存在はお伽噺と同義語であり、真実として公表しても意にも介されないだろうし・・・・寧ろ介されなかったときの方が怖ろしいのだというのが―大人達―の

言い分であった。
少年勇者達は最初は自分達の手柄ではないのにと、待つ人たちの元に戻って問うか位のんびりして次第に色々と落ち着いてから再度パプニカ王城に集まった時、彼等がいかに艱難辛苦を共にしてくれたかの功績を知ってほしいというダイ達の言葉は褒められるが、それを認めて実行する事とは別である。
アバン達の言い分はこうであった。
「いいですか、先ずこの世界に再び世界滅亡に匹敵する危機が訪れた時に―前例―があっては困るのです。」
来たものが良き者とかそういう話ではない。
もしも魔王軍との戦いで勇者達が敗れそうになった時に、―異界からの稀人達ーのお陰でを以て世界が救われた等と知られた時、人々が其れに縋りつき、下手をしたら国家を上げて―有能なる異界人―を手に入れようなどという事象の研究をされれば堪ったものではない。
そんな神の所業を何かの拍子で成功でもされ異界人が召喚された場合、その者の能力など関係なく、一度できれば二度三度としようとして歯止めがかから無くなればどんな事態が待っているか知れたものではない。
禁忌に触れたと異界からの神々の罰で召喚を試みた国のみならず、この世界そのものが敵視されて滅ぼされる怖れさえあるのだ。
これは少年達には内緒だが、アバンとマトリフは異界のアバンから直接この世界が―危機に瀕していた―事を、あの夕刻の映像会の後の最期のお別れ会の時の様な事をした時に、コッソリと耳打ちをされたのだ。
うちのダイと大魔王バーンは実はと・・・・それを止めたのが向こうのダイの花嫁になるレオナ王女の懇願であり、それが無ければという・・・・聞いた二人はぞっとした！
もしもあの二人が敵に回っていれば・・・その案が可決されていたのであればこの世界はと思うと冷汗が止まらなかった・・・異界なぞに二度と関わりたくないというのがアバンとマトリフの本音であり、其の事は言わずとも、危険を招きかねない異界の公表なぞしない方が

よいという言葉に、ダイ達もそのようなものかとそこそこ納得をし、不精不精ながらも彼等の事を秘密にすることを、ダイ達のみならず隠し砦を拠点として共に戦った世界の有志達とカール兵士団・騎士団にもフローラからの厳重な箝口令がしかれて墓場までの秘密となったのだった。

世界に散らばるいし達：エピローグ②

大激突が収まった・・・・或いは収まったと目された次の日に、パプニカ王城に各国の使者達が飛来し、現パプニカ国―代表―であるレオナ王女がこれに対応し、この城で休ませてもらっているフローラ女王とアバンとダイ達は王宮内の私用となる内宮で休ませてもらっている。

（因みにレオナ王女が代表としたのは戦時中でまだ女王としての戴冠式を行っていないので暫定的であるだけである・・・・閑休話題（それがどうした）・・・）

各国の王達は本当の意味で人類存亡の危機であった事を知り、勇者達のダイ勝利宣言を自国で出して昨夜から今朝にかけて全人類は王も家臣も生真面目な神官・賢者達も民達と同様にお祭り騒ぎのどんちゃん騒ぎになったが、そこはそれとしてきちんと勇者達とそれを支えた国への礼を失せずに、疲れが取れたであろう次の日の正午に来た使者達を、レオナ王女がまだ彼等は休んでいるが、各国からの温かい言葉を必ずお伝えし、後日それぞれの国へと向かう様に話して御引き取りをやんわりと願い、使者たちもその辺の機微はきちんと心得ているので、分りましたとにこりと笑って引き取るのを、レオナは一つの山場を越せたかのように彼等がいなくなって随分後に一息をつく、

・・・間違ってあぁそう言えばと、使者が引き返してこないとも限らないので念の為ではある。

しかしレオナとしても、世界を救う為ひいてはゆ勇者達を助ける為に海千山千の王達を相手に世界会議を開いた身とは言えども、外交し慣れている訳ではないので使者達を相手にするだけでも気疲れするが、それでも明日世界が滅ぶよりはましであると思いなおし、大臣達に断りを入れて内宮に向かう。

愛しい勇者と大切な仲間達の下に向かう姫君を止める者はおらずに微笑ましげに見遣りながら見送る視線を受けながら、レオナはルンルン気分で向かうのだった。

蚊帳の外の置かれた・・・レオナとしてはどこかその気持ちが拭え

ないでいたが・・・—あの大激突—を見せつけられてしまっては、自分がいたとしても何の足しにもならないだろうというのがレオナの正直な気持ちとなった。
夕暮れの空を暗雲が覆う程の天変地異の戦いの中に己がいたとしたら、恐らくポップ達の様に地に伏すだけでは済まずに死んでしまっていた可能性が高く、それはこの国の為にも何よりも戦っているダイの精神的負担にしかならずに、外に出された事が正解だと思い知らされたのだからそれで良しとし、自分は今後の彼等を助ける事で彼等の助けになるのだと張り切って・・・・・つまり、ダイはレオナにあの壮大な大激突が—茶番—であった事を知らせない事にしたのだ。
生きて帰って来たと泣いたレオナを見て、あれが真実なのだとしておくことに・・・
「・・・そう・・・ティファさん達は最後の戦いでは力がもう無かったのですね・・」
「その通りです。しかし彼女達はあの後無事に迎えが来て帰ったのは私達が見届けてその直後に・・・」
其の為のカバーストーリを、アバンが必死に考えた結果がこうなった。
即ちティファ達を帰す時空の穴をあけるのに、ティファ達はそれぞれの力を全て消費してギリギリで帰れた後に、あの若き大魔王達が襲来して後はレオナ達の知るとおりであるという・・・・それが嘘か本当かを知るにはレオナにはそもそものそういう知識はないのでアバンの作り話とそして何よりダイが真剣な表情をしていたのでそれ以上の事を追求せずに、ティファ達に最後にきちんとお礼をしたかったというに留めその話はそこまでとなった。
それはレオナがその話を全て信じたのか、それとも受け入れたのかを知るのはレオナ自身であるが、ティファ達にお礼を言いたかったことは本心であった。
確かに前日の夜にそれなりにお礼を言えたつもりではあるが、それでももっときちんと言えた事があったのではないだろうか？
特にティファには、女の子としての自分を助けてもらえたのだか

ら・・・王女としての公人としてではなく、―レオナ―という一人の女の子として好きな男の子と仲直りのが出来るきっかけを作ってもらえたのだから・・・・

そんな王女と勇者の仲は、本人たちの知らぬところで―世界公認の恋人―という立場になっていた・・・・理由は推して知るべし・・・

―あの映像―が流れた事で、特にラブロマンス大好きなベンガーナ王の妃様が旗頭的存在となり、彼等の想いをそっと見守ろう!!となり、大なり小なりラブロマンス大好きな女性達は、政治だの思惑だのを蹴っ飛ばして初々しい少年少女の恋の行方に口出ししませんよねあ・な・た・の世界が広がり、国が復興して来たら自国の王侯貴族の子弟達を贈る気満々だった者達の気は挫かれ、人によっては嫁さんどころかお姑様や実母にもガッツリと釘を刺されて男達はそちら方面では完全に動きが止められた・・・・普段は外では女子供などと言っている彼等であるが・・・世界の半分は女性であり、なべて怖ろしいのは妻ないし母なのだから・・・・敵に回すのは得策ではないと、百戦錬磨の貴族・大臣連中は本でき諦めたのを、後日王に進言して正式文章としてパプニカ王国に届けられ・・・当然親書を呼んだレオナの顔はその場で真っ赤になったのは言うまでもない・・・・・何故書簡に勇者ダイとパプニカ王国のレオナ姫との仲を応援すると公式文章でいわれにゃならんのか・・・・誰があの時の事を世間様に広めたのだ!!!!

・・・・まさか使者の前で赤面するだけでも恥であるのに、怒鳴って自制心崩せばさらに恥の上塗りになるので内心ではあるが、そう怒鳴った時どこぞの料理人の少女がくしゃみしたとかそれは兎も角として、王達や大臣達も公式文章に書いて互いの国同士もそう認識していますよというアピールをする事でラブロマンス大好きで擁護する気満々の女性陣達の不興を買わないようにする為と、政略結婚の手段が使えないのであれば、自国はいつでも貴国の友であり頼りになりますよという友好的に振舞っているのである。

こうしておけば、もしかしたらまだ力を有しているかもしれない少年

勇者に対して誠実な面を見せる事で善き絆を残しておく事もできるであろうと。

自分達の事を応援してくれる者に対して冷淡でいられるような人物ではないというのがダイを含めた若き勇者達の評価であり、各国のプロファイリングとダイ達の内面はほぼ一致しているので王達と大臣達の考えた外交策は後々まで効いてくることになるのはまた別のお話であるが、あの夕暮れの大激突の一幕以来、世界は少年勇者達を受け入れる方向で決まり、なべて狭間世界の事や魔界の事を言及していた―ザボエラ―という魔族の事も真剣に討議され、レオナにダイ達や特にアバンとフローラが回復次第その魔族との繋がりや今後話し合いが出来ないかの打診が来たのは当然の事であろう。

世界に散らばるいし達：エピローグ③

世界は概ね、少年勇者達の方に風が吹いてきている。
其の隙を逃すまいと、アバンは小出しに情報を流す事にしている。
その一つが―古来より噂されている人と魔族達が共にいる狭間の世界―または幻の都と呼ばれている都市についてである。
裏の世界の者達や黒い紳士達のみに知らされている世界だと言えども、それほどの規模のある都市の事が口の端に上らぬはずも無く、謂わば公然の秘密の様に囁かれ続けてきた其の都市は、本当に出入り口の情報だけは厳然と守られて来た場所であり、それを知る者は極少数で行き来できるものは下っ端であれば目隠しをされ連れてこられる場所であったのを、アバンはハドラーとザボエラが都市部を制圧し、都市から国へと成立するまで早くとも半年は見積もったのだが
「ハドラー様と親衛騎団達がさっさと上層部を潰して即日王国が出来たぞ。」
・・・・たったの三日でこの情報が届くのはおかしいだろうと・・・異界の者達の非常識ともいえる言動や行動力を見てそれなりに鍛えられたと自負したアバンをして唖然とさせられた・・・しかしだ、鉄は熱いうちに打てという！
フローラ女王と協議し、各国から問い合わせの来ている―ザボエラ―と各国の使者達が会える算段をつける親書を送り、ダイ達の知らないところで大人達は―今後の世界―について親書で連携を取り合う中、ダイはとりあえず世界復興の手伝い旅をポップ達としたいとパプニカ王城にて宣言した。
「俺はきっと世界の事なんて何にも知らないからさ、だから世界の人達を助けながらこの目で見て耳で聞いて知りたいんだよ・・・」
「ダイ君・・」
ダイとしては、その旅の道すがら―あの少女―と会うかもしれないのを今から覚悟をしての事である。
あの少女と再会した時、自分は其の時どう思い、許すかどうかも分からないが・・・キチンともう一度会えればと思う・・・

だからと言って、なにもずっと外に出る訳ではなく、三日に一度はルーラで戻ってくるというダイの言葉に、その間にダイを如何にか王配に出来ないだろうかと三賢者を始めたとした大神官達も協議して、正当性を高める為にも勇者は敵を倒すだけではなく弱った民草達を国ごとで差別する事無く、平等に助ける心清き者達であると言える環境を作ろうという案に纏まり、ダイ達の復興手助けの度は決定をした。

それはダイ達がバラバラで行くよりも、今日はどこの国へ行くかをあらかじめ決めて勇者達が行く事を打診して、大々的に彼等の活躍をアピールしようという目論見もある。

特に一度は敵対したヒュンケルとクロコダイン、そして敵対こそないがモンスターである大ネズミチウとチウに率いられている―獣王遊撃隊―なる者達の活躍にもきちんと衆目を集められるようにとの想いもあった。

彼等は今後人間社会で生きていける様に、ヒュンケルとクロコダインでは特に国を滅ぼした事を知られているヒュンケルが、きちんと償う道を歩いている事を知ってもらうべく、もしかしたら復興の中で最も過酷で辛い作業に従事するかもしれないが、それはヒュンケル自身が望むところであり、ダイ達の想いと大人達の思惑とが合致し、ポップとマァムとそしてダイがそれぞれの保護者達の下で休養をしてから出かける事になり、あの夕暮れの激突の次の日に各国に引っ張りだこの様にバルコニーに立って、民衆に向けて王達が平和宣言をして三日経ち、世間もそれなりに落ち着いてからそれぞれの家へと一旦帰路についた。

マトリフは自分でさっさと元居たバルジの大渦近くの海岸へとルーラで帰った。

弟子達の危機も一旦は去り落ち着いたのだから其れなりのんべんだらりとしたいのでと言って、爺仲間のブロキーナ老師を伴って行ってしまったのは何とも彼等らしいというべきであろう。

そんな師匠達を見送ったポップはベンガーナのランカークスにロン・ベルクとヒュンケルを伴い、マァムはロモスのネイル村にチウとクロコダインを伴う。
チウとロン・ベルクは兎も角、ヒュンケルとクロコダインはパプニカ王城にてなにがしかの下働きをして置いてもらうつもりであったのだが、人間の生活も良いもんだぞという仲間達の説得に負けて御厄介になる事になったのだ。
そしてチウの方も、隊員達にお行儀よく森で過ごすんだぞとお達しを出してマァム達の家に置いてもらう事になり、其れが後にこの世界の獣王遊撃の活動拠点となるのだが・・
ダイは父バランとラーハルト共にデルムリン島へとルーラで戻り、島に着くと同時に渡されていたブラスじいちゃんと島のみんなが入っているモンスター筒を宙に放ってデルパと唱え、何とも賑やかな展開となったのはこれもまた別のお話。

ノヴァは父バウスンが世話になっているベンガーナにて父と共に世話になり、ダイ達が再集結する時に共に復興手伝いの旅に出る気でいるのを、きちんと将軍である父に許可をとり、騎士団長の職を返上している。
因みに、ダイ達の再集結を待つ間に、リンガイアにとっての朗報が各国に舞い込んだ。
超竜軍団の襲来で首都が壊滅した時、騎士達に守られ脱出をした時に行方不明となってしまった王の・・・正確には王の家族が見つかったのだ。
彼等は首都から離れた山脈まで逃げ、そこで負傷してしまったリンガイア王を隠すように山の中に漁師達が時折使っている山小屋で自給自足していたという・・・もう少し早く街に降りるなりベンガーナへ行くなりしたかったのだが、モンスターが数多いる中を負傷した王と王太子だけで行ける筈も無く、とは言え王妃と弟妹達を抱えた身でルーラが出来る訳でもなく、キメラの翼も持ち出せずの脱出で身動きが取れない中、王は負傷した箇所が膿みだしそして半月前に帰らぬ人

となって・・・
「それでも自分達はいつかモンスター達が減った時を見計らい外と繋がれないかと機を伺う事を諦めませんでした。」
　幸い季節も程よく実りのある時期であり、其の山小屋は沢にも近く魚も置いてあった罠で採れ、ドライフルーツや自然の果実で賄っていたのだが・・それも付きかけた時に―あの大激突―を彼等も見て、そして大魔王討伐を知り、もしもあの映像が本当であるのならばと、王太子は母を説得して一人森の中を恐る恐ると進めば、モンスター達の狂暴化は解けていた。
　しかしそれでもモンスター達は危険なものであり、さてどうしたものかと王太子が思案し、いっその事昼日中に突き切って見るかと大胆な作戦に打って出た。
　幸い弟妹達も十歳を超しており、自然豊かな野山を駆けまわった子供達であるので問題は母であるが、これも自分が背負って走り抜け、そしてリンガイアでも無事であった村に辿り着き保護をされた。
　幸いそこの村がそこそこの規模があり、村長が王太子の顔を祀りの時の挨拶で知っていたのが幸いして話は直ぐにまとまり、その村に数枚だけあったキメラの翼を譲ってもらい、弟妹達を村で休ませてもらいながら王太子がベンガーナの自分の顔を知る大貴族の家を訪ねそこから話が王城に上り各国へと朗報が舞い込んだ。
　ノヴァとバウスン将軍は当然涙を流して喜び、フローラ女王とアバンも我が事のように喜ぶ。
　あの根が真面目でそれでも素直で優しい北の少年勇者が喜ぶ顔を思い浮かべながら・・・そして複雑でもあった。
　二人は終生彼等の祖国を滅ぼしてしまった―超竜軍団の長―の正体を彼等に秘する事を決意している・・・・幸いにもダイは父親バランが超竜軍団の長として地上に攻勢を仕掛けたのは知っているがヒュンケルとクロコダインと違い、具体的にどこの国を攻めどうしたのかまでは知らないので、二人はヒュンケルとクロコダインに自分達と同じ罪を、即ち真実を墓場まで持っていく事を頼み、二人も重々しく頷いてくれているが・・・

それでも前に進まなければならない
狭間の世界と地上は半年以内に―同盟―を締結する運びとなり、その際はハドラーは王として会う事無く、表の事は全て―宰相ザボエラ―が、王の親衛騎団の長である―金属生命体のアルビナス―と共に任されている態となる。
ここで魔王軍とはいえども地上に知名度のないザボエラは兎も角、先の大戦を起こした魔王であり、今大戦においても猛威を振るった者が表立つにはややこしい事にしかならないので、その辺で調整が成される・・・・いつの世界も―表の平和―の為に―裏方の者達―が幾重にも謀をする事が絶える事はなくそれでも・・・
「私は構いませんよフローラ様。」
カール女王の王配をしつつ、謀を一手に引き受ける位置をアバンは笑って引き受ける。
長男や女児は兎も角、次男辺りには自分の―その辺―を伝授しようと今から資料の作成をしているアバンに、頼もしいやら申し訳ないやらのフローラに対しアバンが笑う。
この世界全ては無理でも、自分が守りたい者達は必ず守り抜くと。
それは数日後には復興手伝いの旅に出るダイ達の道もきちんと整えながらであり、つまるところこの世界のアバンも異界のアバン達が甘すぎるとは言えない程に、心の中はとっくに過保護化しているのだ・・・・無自覚に・・・
この世界と彼等に幸せになってほしくて・・・・

世界に散らばるいし達・エピローグ④

「ティファ!!!ポップ君!!チウ君!もうどこにもいかないで!!!」
「ポップさん達が無事で本当に・・・」
「・・・良かった・・・・・本当に・・・・」

少年ダイ達の一幕を見て向こうの世界に戻って早々ティファ達は三人の花嫁・レオナ・メルル・マァム達の熱い抱擁に嬉しくて、泣いている花嫁達と同じくらいぐしゃぐしゃの顔で泣き濡れ碌な返事が出来ないでいたが、誰もそれを笑う事無く、其の六人をまたガルダンディとボラホーンが抱きしめ、少し離れたところでクロコダインも泣いて全員の―無事―の帰還を喜ぶ・・・・特にティファはまた向こうでポップとチウを守る為にどんな無茶な事をするかと危ぶまれていただけに、元気にただ今ですと言いながら光の扉をくぐって来た時には待っていた一同は腰が砕けそうになるくらいに安堵したほどで・・・・それが大げさだなどという愚か者はこの場にはいない。

他界に攫われた

この報が神々から齎された時、大魔王を始めこの場にいる者達は絶望に落ちかけた。

何故ならこの場にいる全員は、大魔導士や師達からお伽噺の様な話ですがと、この世界には異なる世界があり、それらを示す遺物がある事も―知識の一端―として教えてもらっていただけに、その重要性を知るが故に三人を取り戻す事なぞ出来ないではないかと花嫁達が泣き叫んだほどであった。

しかし三神達は―知識領域の解禁―を行い、他界との行き来は神々にとっては容易くは無いが不可能ではなくそれ故に三人は攫われたが、逆にその道を辿って取り戻す事も、制限を掛ければこちらからもある程度の人数を送れることは可能だと知った時、後はティファ達が知るように―誰が行く案件―で揉めに揉めたのだがそれは兎も角・・

「・・・私達が向こうで過ごしたのは五日間で・・・・こっちの世界では五時間くらいだったのですね・・・・」

花嫁達や周りが落ち着くまで随分かかったが、其れもそこそこ落ち

着いた時にティファが―長い間ご心配おかけしました―と言った時、ハドラーが体感的には兎も角実際にかかった時間は然程でもないと言われた時に教えられたことが先ずそれであった。
即ちティファ達が向こうで五日間過ごした時、こちらの世界からアバン達を送ったのがティファ達が攫われて三・四時間後程であり、その一時間後位にバーンとダイが全員に声援を送られながら向こうの世界へと渡ったのだと・・・
三神達の説明では、時空の揺らぎで互いの世界の時間の流れにズレが生じるが、今回は自分達の世界に良い方向に作用したのだと安堵した声で教えられたとか。
もしもあちらの五日が、この世界の五百年にでもなっていたら間違いなく向こうの世界は滅ぼされていたであろうろう案件であったのだから無理もないが。
「そっか・・・へへ・・・俺達皆を五日間も待たさずに済んだのか・・・」
「本当だね・・・良かったよ・・」
「ご心配おかけしました・・・」
教えられた内容に、ポップとティファとチウは嬉しそうにした。
自分達は無我夢中だったから時間なぞあっという間に経っていたが、絶望にも似た状況で待つ身としては五日間は長いだろうと心配していたのだという、心優しいポップ達の言葉に、特に心配を掛けたというチウの言葉にその場にいる全員はまた泣きたくなった・・・
理不尽で身勝手な理由で攫われたのは彼等なのに、それが申し訳ないというチウの心根のいじらしさに・・・向こうの事を恨まずに許してしまう優しさに・・・もっと怒って良いのに、なんだったら首謀者を処断しても良い筈なのに・・・だがこれが自分達なのだと思うとレオナ達は三人が誇らしくなる。
他界に連れ去られようとも、ティファとチウとポップの心が変えられる事無く自分達の知る優しく強いままでいてくれた事が・・・・
「痛いですよガルダンディーさん・・・」
「うるせぇ!俺に好きにされておけチウ!!」
「・・・ボラホーン苦しい・・・」

「もう・・・・放したくない・・・・」
「心配かけちまったなおっさん・・・・」
「お前達のせいではない・・・無事に・・・・帰ってきてよかったぞ・・・・」
そんな三人を花嫁達の後はガルダンディとボラホーンとクロコダインが熱い抱擁で閉じ込めるのを、精霊王達は温かい目で見守り、双子の魔族料理長たちもぼろ泣きしながらティファを抱け閉める順番待ちをして、留守番をせねばならなかったノヴァとハドラーとミストは帰還したダイ達を労う。
本当は彼等も行きたかった・・・・行って三人の無事を自分の目で確かめそして―元凶―をこの手でと思ったが・・・それもも良い・・・・
この世界の宝達がこうして無事に戻ったのだから・・・・

だが・・・・見た目は兎も角として―心―の方は分からない・・・・
三人はこことは異なる世界にて、―様々な悪意―に晒されてしまったのは他界のマザードラゴンの逐一報告によって知っている・・・・
それは主に向こうの世界の―キルバーン―による事が多く・・・・特にチウとポップの心が心配である・・・・
そしてその懸念は外れる事無く、直ぐに傷は表れた・・・・・
ここは大魔王宮であり、ここにはバーンが魔界の領主時代から大切にしているスライムの一族がずっとおり、其のスライム達は大戦時の最中に出会って優しくしてくれたティファはもとより、その後このパレスに遊びに来る様になったダイ達にも懐いて当然のようにポップとチウにも甘えるようになっていた。
彼等は優しくしてくれる者達に直ぐに懐く特性があり、いつも会っては頭を優しく撫でてくれる彼等を慕い、今日の集まりにも顔を出に来てそして―何時もの様に―周りにいる優しい人達に体をこすりつけて挨拶をしながらティファ達に寄っていきそして・・・寄って来た彼等をガルダンディ達も目を細めて撫でてやり、ティファ達にも挨拶できるようにとスライム達に場所を譲った時・・・・・・体を擦り付けられたポップに異変が起きた・・

柔らかくて暖かくて・・・・・・・それは・・・それはまるで・・・・・・
まるで・・・

「あ・・・・・」
「・・・・・にい？」
「ポップ・・・・・どうし・・・・」
「あ・・・・あぁあああ!!」
「ポップ兄!!???」
「どうしたのポップ!!」
「矢張りどこか怪我を負ったのか!!???」
「ポップ!!!」
「ポップさん!!!!!」
「ポップよ!!!!!」

突如として頭を抱えながら崩れ落ちたポップに、ティファとチウは頭を打たないようにと支えながら何事かと周りも顔を青褪めさせながら囲む中、ポップの顔は蒼白となり胃の中のものを床に溢しながら、ティファとチウの腕の中でのたうち回る・・・・

暖かく柔らかい彼等の体に触れて思い越してしまった―感触と後悔―の念を抱えながら

向こうの世界で引き裂さいた柔らかい身の感触が・・・・・直接手にかけずとも戦いの手助けをした事で訪れたモンスター達の死にゆく断末魔の声が、元の世界に帰って来ようとも、ポップを逃がしてはくれなかったのだ・・・・

そして知ってしまった―この世界―のありふれながらも悲しい―この世界のモンスター達の実情―が・・・・それまで全く知らずに幸せでいられたポップを短期間ながらも確実に蝕んでいたのだ・・・・

世界に散らばるいし達：エピローグ⑤

どうして俺は・・・・あの時攻撃を止められなかったんだ・・・・
俺がやらなくとも・・・・―誰か―があいつ等を倒していた筈だ・・・・
俺自身がしなくとも・・・・・倒す手伝いをしていたんだった・・・・
何も分からずに暴れさせられていたあいつ等を・・・・俺の意思で・・・・

あいつ等は本当は優しい奴らが多いのに・・・・中には攻撃性が高い奴らがいても俺達が不用意に近づかなければいいだけで、そうすれば俺達もあいつ等も互いに嫌な思いをしなくて済んで、どうしても・・・・食糧不足や群れでいられる数を逸脱しすぎて怒ってしまうスタンピードとかどうにもならない時は、俺達もだが狂暴化していないあいつ等の仲間や他の奴等にとっても脅威で、そしてそうなったら―狂暴化―と違ってマホカトールでも他の浄化方法でも、―倒さない限り―収まらない時は俺だって・・・

だから敵になってしまったあいつ等を味方や仲間達が倒す事を責められるはずがなくて、俺自身だって大戦時に魔界のモンスター達を散々に倒して来たんだ・・・

沢山・・・沢山沢山・・・・・あいつ等を倒した後だって戦場に出てロッドで他のモンスター達の内臓傷つけて・・・切り伏せて・・・・なのにあいつ等の感触だけが手に残ってどうしようもなくて・・・・

「めんな・・・・ご・・・・・め・・・・ん・・な・・・・・・」
ふぅふぅ・・・・
何かに謝るポップに―抱き留めている―ティファは振り乱した髪はそのままに荒い息を吐きながら、それでも座り込んで兄を横抱きにして腕の中から放さず
「大丈夫・・・・・にぃ・・・もう大丈夫だから・・・・ティファがいるから。」
「・・・ティ・・・ファ?・・・・・お前・・・・・ここは・・・・」

「ティファだけじゃない、チウ君もいる、ダイ兄もいる、大魔王もおじさんもアバン先生もレオナ姫もキルもハドラーもミストもマァムさんもラーハルトもガルダンディもボラホーンもルード君も其れにメルルさんもいる。
ポップ兄が大好きで、ポップ兄の事が大好きな人達が皆いる。
ちゃんといる。ここにいる、にぃを置いてどこにもいかない。
だから大丈夫だよ。」
「ティ・・・ファ・・・・みんな・・・メルルも・・・・・そう・・・か・・・・」
―ボロボロになったーティファは、それでも兄を離さす事無く、兄が心の底から大切にしている大好きな人達がこの場にいる事を教え、ポップはその言葉を耳にした途端心の底からの安堵を覚える・・・・ここは何の怖い事が起きない絶対的に安全なところで・・・自分が大好きな場所なのだと
「ティファ・・・・俺・・・・」
「うん・・・・・」
「俺眠い・・・・・」
自分は―ナニカ大変な事―をした気がするのだが何だったのだろうかとポップは自分の事なのに思い出せない様子で、トロトロと瞼が閉じるのをティファは優しい手つきで兄の頭をゆっくると撫でながら、背中も優しく叩いて兄を眠りの中へと誘う。
「眠いなら寝ていいんだよ。」
「・・・いい・・・のか?」
だって自分は・・・・結婚をしたとたんに・・・・厄介な・・・・
―怖い所―から・・
「いいんだよ眠って」
後はティファが何とかするから
―ナニカを―を思い出そうとする兄に、ティファは優しい声と言葉を掛け続け、そして―伝家の宝刀―を抜く。
その言葉は大戦時にダイを始めとして勇者一行が幾度も聞いて来た言葉・・・

ご飯の支度から傷の手当、そして果てにはこの世界の事までも救いあげてきた無敵の言葉で・・・・もう使わせたくない言葉の筈なのに・・・・

「うん・・・ね・・・る・・・な・・・・」

今はその言葉に縋りたくて、ポップは妹に包まれて眠りに落ちる・・・・

ティファに包み込まれている事で、―ポップ自身の暴走―によって甚大な被害をが出た室内を、そしてそんな兄の暴走によって周りに被害が行かないように自分の方を向かせて抱きしめたティファ自身にも、ポップの暴走の爪痕が文字通り全身をズタボロにし尽くした。

小さな顔はすり傷だらけで青い血が薄っすらと滲み、服もキルが用意してくれた耐魔法が無ければ服どころか全身も切り刻まれていたかもしれない程で・・・・

ポップは生来から魔力の量が一般人よりも多く、それ故に難易度の高いメラゾーマを、炎の魔法と親和性が高くとも難なく習得して見せた上で、ポップの命を救う為に授けられたバランの竜の血が、ポップの生命力のみならず魔力にまで影響を及ぼした。

それはポップが竜の地と相性がよく、それ故に―黄泉がえり―を果たすだけにとどまらずに魔力の質を高みへと押し上げ精霊達との親和性も上がり・・・・そのポップが我を忘れる程の苦しみが現れた時、魔力が自然暴走した。

呪文を唱える事はないが、膨大な魔力であれば闘気と同じような性質のエネルギーとして発せられた。

それが世間にいる魔法使いであれば大魔王の結界で数分閉じ込めれば自然収まる者であったろうが、ティファは兄の膨大な魔力が尽きるまで、一人で苦しませることを是とせず、スライム達に―何時もの様に―懐かれた兄が突如異変を起こして魔力を暴走させた時周囲の者達同様に吹き飛ばされたが、瞬時に戻りそして兄諸共に五メートル四方の結界を張って閉じ籠り、兄が正気に戻るか疲れ切るその時までずっと言葉を掛け続け十分近く経ち、漸く魔力切れと暴走の疲れで兄が眠りについた時ほっとした。

ティファとしては、自分にも結界を張って防御したかったのだが如何せん周りに結界を張るしかハイ＝エントの魔力は残っておらず、結果的に自分を犠牲にしたようなものだが後悔はない・・・・

後悔は無いのだが・・・・・

結界を解いた事で入って来た者達の顔をまともに見られない・・・・

自分と兄の身を案じている者達に、どうしてこうなってしまったのかの説明をしなければならない事に気が重くなる・・・それを考えると、攫われたあの時・・・・攫われたのが自分一人だったほうがまだよかった気がすると思うのも間違いだと分かっているのだが・・・・それでも・・・

兄ポップの心が傷だらけになってしまった事を・・・どう伝えればいいのだろうか・・・

自分達が自分の屋敷の厳重な結界を張っていたと自負していた宝物庫で攫われた事をとても気に病んでいた大魔王に

兄を一度は掴めながらも目の前でみすみす攫わせてしまったと泣いていたキルに

最愛の人と結ばれる事が出来た良き日に矜持に見舞われた花嫁のメルルに・・・・

そして・・・・兄を愛しているこの場にいる全員に・・・・・何と言えばいいのか・・・何を見て聞いて体験してしまったのかを・・・・知らせなければならない事にティファだとて泣きたくなっている・・・・・

言う方も聞く方も辛い事を・・・・何と言えばいいのか・・・・・・

世界に散らばるいし達・エピローグ⑥

無事に戻ってこられたはずのポップの異変を説明したのは、どう説明すべきかを悩むティファではなくチウであった。

ある意味ポップに、―あの時―何が起きたのかを知っているのはチウの方であり、話を自分よりも又聞きしたティファよりも詳しい事を、あの場で何が起きたのかを異界のアバンに少年ポップが説明を、呆然としていたポップを抱きしめながら耳で捉えており・・・何よりもポップの暴走魔力を一身にあびてズタボロなティファに、ポップの心の傷などという重い説明役をさせたくないチウは、ティファの様な淀みない話し方ではないが、それでも自分の知る限りの事を話した。

それは悲しくて、モンスター達が身近な存在となり時には外のお茶会の時に共に興じるようになったメルルや、すっかりモンスター達と家族となったマァムや、元より家族であったダイにとってはポップと同じような衝撃を受け次第に青褪める中、ガルダンディーとボラホーン達はポップを弟のように可愛がっているだけに、優しく明るいポップの心を傷つけられたことに両の拳を握りしめ殺気立つ中、向こうに渡った大人達の殺意はそれ以上であった。

あの時・・・石化した若きバーンとミストバーンを様々な理由から地上界から去る事に賛成をしていかせたが・・・あの二人が空間を通ったと同時にキルバーンだけでも壊すべきであったと、キル達の殺意はすさまじく、そしてそれは―元凶―どもを己達の罪の重さを知らしめた上で踏みにじり!バラバラにしてやりたいとすらキルはあの世界に戻りたいと願う程であった・・・

そしてアバンとマトリフは愛弟子が負ってしまった心の傷をどうしてあげればいいのだろうかと、即座に算段し、ダイとメルル達は眠っているポップの下に参じて涙を溢す。

安らいだ顔に穏やかな寝息を立てているポップの心の中は、果たしてどうなってしまっているのか。

向こうにいた時のポップは自分達との再会時に大泣きをしていたがそれ以外はいつも通りであり、―無事でよかった―と・・・単純

に喜び、本当の意味で大丈夫だったのかと深く考えなかった己が不甲斐ないと悔し泣きをするヒュンケルを、親友のラーハルトはとにもかくにもポップの心が休まるようにしてやろうとヒュンケルを慰めながら、その心の内ではどうにかあちらに戻って、キル同様元凶であった無能な神々共を槍の錆に出来ないだろうかと怒りに沸いている中、ティファの声が流れた。

「チウ君、ポップ兄が―キメラ達―を手にかけてしまったのは私も知ってる。」

それは決して大きな声ではなかったが、自分の質問から逃げる事を許さない力強い声であった。

二代目大魔導士・炎の魔法使いの人間から逸脱した魔力を持っているポップの暴走を一身に受けたとは思えないほどの力強い声音と同じくらいの意思の強さを乗せた瞳がチウの顔を見た時、チウの顔に動揺が広がるのを見たティファは確信をしてそれを言葉に出した。

「ポップ兄が苦しんでいるのはキメラ達をその手にかけた事だけじゃない。

―その後―私が知らない事があったんでしょう。」

「それは・・・・」

無いと言えないチウは、それでも自分とポップが知ってしまったこの世界のモンスターがどのように思われ始めているかを、周り特にティファに知ってほしくはないというのがチウの考えであった。

ティファさんは優しい、それはポップ以上に・・・・そのティファさんが助けたと言っても過言ではない世界が、酷い事を考えている者がいるのを知られたくなくて、チウの口は重くなるのを、ティファの溜息にチウの方はびくりと跳ねる・・・・きっと、変に頑固な自分を叱るような思いであるのだろうかと。

だがそれは違った、ティファが溜息をついたのは別の理由であり、それをチウにきちんと説明をする。

「チウ君、ポップ兄を助けるにはきちんと―傷になった大本―を知らないといけないんだよ。

大本を知らないとどう助けてあげればいいか分からないからね。」

例えば咳をしたとしても、それが喉を傷めてしまったものからか、風邪なのか或いは肺の病気なのかもしれない。
同じ咳をしたにしても、それぞれの症状によって治療の根本から変わってくる。
それは心の傷も同じであり、ポップが何に苦しんでいるのかを知っていた上げなければ助けようがないのだというティファの言葉に、ノヴァに師事して医療活動にも従事し始めているチウには分かりやすすぎる程の説明に、チウは観念した。
間違った治療は致死率を上げるだけだという、普段は優しくともこと師としてあらゆる医療知識を教えてくれる時のノヴァの厳しくも的確で正しい教えの中にある言葉を主出したチウは、―正しい情報―を話さないという選択肢はなかった・・・それは偏に、間者たる者の生命を救う事を第一としている―リンガイア救護団―の端くれとしての矜持でありそして傷ついているポップの為に・・・
ポップが、―この世界のモンスター達―を取り巻く現状が、場所によっては迫害に繋がる思想が生まれ始めてしまった事を・・・悲しい現実を図らずとも知ってしまった事を・・タイミングが悪かったとチウは思う。
これがあの時の後でなければポップはその考えを持っている者達に憤る事はあれども、ここまでになる事は無いのだろうと泣きそうになりながら・・・・
「―僕達―が今・・・・世間の一部からどう思われているのかを・・・僕が教えてしまったんです・・・」
向こうのモンスター達に対する考えに怒りと共に怒鳴り込みそうになったポップを留める為に・・・・心が傷ついたポップに言わねば・・・・きっと砦の者達を向こうに回していただろうと、其れだけは避けくて・・・・
チウの言葉に、モンスター達の怖ろしい部分をきちんと知っているダイやマァムやメルル達はそれでも悲しくなって項垂れ、大人達は―子供達―に隠しておきたかった事を知れられてしまったかと重い溜息をつく。

いつかは知られる事ではあったが、其れでも知られる日が遅ければ、それこを一生子供達の耳に入らなければいいと願っていたのだが・・・・ティファは違う意味で―溜息―をつくのを、キルが目ざとく見つけた。
「・・・・お嬢ちゃんは・・・・モンスター達の現状を悲しまないのかい？」
生命を愛し、敵であっても倒し切ることが出来ない心優しいティファらしくないというキルと、そしてキルの言葉に気が付いた者達の意見は、ものの見事に裏切られる。
「・・・・私としては、―そういった事―が起こるのは少なくとも大戦終結後から数年後と見積もっていたのですが、チウ君の話から察するにもっと早かったのだと知った事に少々思うところがありまして・・・・」
そういう事とはモンスター達が人々から怖れから迫害へと至るプロセスの速さを指し示し、ティファとしては其れは平和が訪れ、人々に余裕が生まれ―余計な事―も生じ始めるのは三～四年ぐらいだろうと見積もっていたのだが・・・・チウの様子から察するに
「チウ君、君が助けたはずの人から心無い事を言われたのは・・・大戦終結から一年経っていない頃？」
ティファの確信めいた言葉に、チウは泣きたくなった・・・・人々と共に地上を守って来たと、凄いことは出来ずともその手助けをしていたという小さいながらも自負心があった自分にとって・・・・モンスター特有の聴覚の良さがあの時ほど恨めしく思った時は無かった・・・・土砂災害から救い出した者が、フォブスターにあのモンスター達を―大人しいうちに処分すべきだ―という言葉は・・・・今も自分を痛くして、それはロモス王城内であった―酷い人々の件―が収まった後だけになおさらここでも自分は・・・自分達は居所が無いのかと泣きたくなって、それでも行った相手をすぐさまゴメスがぶん殴って、俺の大切な仲間に何言いやがると大声で言ってくれた事で救われたのだが・・・・それでも・・・・
チウのポロポロとこぼす涙が・・・・無言であっても其れが答えと

なってしまった時、チウはそっとキルに抱き上げられそして優しく包み込まれ背中を優しく叩かれ、チウも優しいキルに身を押し付け涙を流す。
思い出すだけで痛くて・・・其の事を大切な人達に知られたくなくて。
だって自分の周りにいる人達も、モンスター達を友や仲間そして家族としている人達ばかりなのだから・・・・
チウとティファの遣り取りで、現状を知った者達の心は一様に重くなる。
ポップが負ってしまった心の傷の原因が、この世界にも起因しているかもしれない事に、そうであるならばポップの心を治すにはただ単純に優しい環境で穏やかに過ごさせるだけでは駄目なのだと悟って。
敏く賢いポップが、この世界のどこかでも罪のない、或いは殺されるほどの事をしていないモンスター達であっても、人間の差別意識や憎しみの思いで簡単に殺されてしまう事があるのだと知ってしまったのだ。
それは生まれ育ったランカークス村にいた時や、それこそアバンに師事する為に家と村を飛び出し師と共に旅をするようになっても知る事の無かった、興味も無かったモンスター達の優しい面をモンスターアイランド・デルムリン島でダイとティファに教わる事で知った時から、ポップにとってはモンスター達の無為な死は他人事ではなくなってしまったのだろう・・・仲間や家族とも思える程の近しい者になってしまったのだから。
其れこそがポップを苦しめている真の原因であるのだろう・・・そうでなければ偶発的とはいえども、先の大戦とそして向こうの世界でも―他のモンスター達―を手にかけてきたポップがここまで苦しむはずがなく、その時の手応えと―彼等の現状―が合わさってしまい、あたかも自分が殺している、或いは断末魔が心に浮かび、それが心の傷なのではないかと・・・
そうであるのならば、ポップの心を完全に癒すには、この世界の―根本―を如何にかしなければならない事を知ったのだから・・・・

世界に散らばるいし達：エピローグ⑦

今日はもう全員休もうとは、魔界の神様からの言葉であった。
ポップが傷つき、チウもまた傷ついている事はここで話し合って解決できるような一朝一夕でできる筈も無い事であり、其れよりも長期を視野に入れて動く事を視野に入れ、何よりも眠るポップと泣き濡れながらキルの腕の中で眠ってしまったチウと、ポップの暴走に寄り傷だらけになりマトリフのベホイミによって全回復をしたティファをきちんと休める事が最優先事項であり、待ち疲れていた全員も休むべきだというバーンの言葉に、他の者達も頷いてポップとチウは男性たちだけの部屋で眠る事になり、ティファはレオナ達と大人しく休む様にとのお達しの元、ヒュンケルとクロコダインも休む事にしてそれぞれが部屋に向かった。
子供達を見送った大人達は、疲れた溜息と共にもう少し飲み明かしてからと、何と無しに決まってそれぞれ席に着き手酌で各々飲みたいものをグラスなりワイングラスなりに注いで飲み干す酒の・・・・・何とほろ苦い事である事か・・・・
「・・・向こうで飲んだ酒の方が美味いってのも皮肉なもんだ・・・」
不？戴天の仇と同じ―キルバーン―を己が手で切り刻み、ティファとチウを膝に乗せてポップを腕の中に抱えての酒と・・・・とても同じ酒だとは思えないと溢すロン・ベルクに、残った大人達、バーン・ハドラー・アバン・マトリフそしてバーンの後ろに常に控えているミストとキルの心も重く・・・先を想うだけで重いため息が出そうになるのを堪える。
溜息をつくと幸せが逃げるんだって・・・・

下を向いて苦しい顔で溜息をつくよりも、上を向いて笑顔で深呼吸した方がいい事ありそうだと笑った料理人の少女の言葉の言を担ぐように・・・
「・・・・ポップとチウ君の傷となる―根本―を如何にかする方法なぞあるのでしょうかね・・・」

ショットグラスに注がれた琥珀の液体を回しながら、自身の思考も回そうと言うようなアバンの言葉に、それは無理だとこの場にいる全員が知っている。
アバンが言った事はすなわち、モンスター達の迫害を根絶させる事であり・・・純粋な子供達には申し訳ないが、その様な事は天地がひっくり返っても金輪際あり得ない事。
そも差別とはなにも人がモンスター達に抱くだけではなく、人と他腫族だけに非ず。
人同士もあり、それは身近な身内内でも起こりうることであり、それは人だけではなく魔族も半魔もそして・・・清らかだと人々が信じてきた天族とてもある事だと知られたこの世界で、全ての人がモンスター達に対する偏見に基づき、或いは憎しみや何かしらの優越感などの歪んだ思惑による差別、そして人間の都合で狩られる事を全て無くすなどそれこそ・・・・
それを考えるだけで口の中の酒だけではなく、胸中から苦いものがこみ上げる・・・幸せだけが過ぎる今日この夜には全く相応しくなく、それを齎した他世界の愚か者達を踏み躙り殺しても尚収まらない想いが支配しかける中、バーンは其れでも―あの子供達―であればもしかしたらと信じている。
「一昔前であれば、勇者達と魔界の神たる大魔王と魔王が同じ席で共に食事に興じ笑いさざめく未来があると言われて信じた者達があったであろうか？」
アバンと同じく、ワイングラスの赤い液体をクルリと回しながらポツリと放たれたバーンの言葉に、マトリフを始め他の者達は俯いた顔を上げる。
バーンが行ったような言葉を、十年前でなくとも五年前、或いは・・・・
「俺はよ・・・大戦時の真っただ中で・・・・嬢ちゃんがダイ達や俺達の他に、ハドラーやそこにいるキルバーンとミストバーンを入れた茶会をしてみたいって言った時に度肝を抜かれたよ・・・」
バーンの言葉に応える様に、マトリフが一つの話をし始める。

それは大戦時、様々な事を背負いすぎ、仲間達に様々な秘密を抱えすぎた果てに心を壊し見も損ねたティファと再会した時の話であった。

あの時からティファは神々達と共に世界の根底を変える事象を具現化すべく奔走しながら並行して魔王軍から地上を守るというとんでもない負担を抱えながら、アバンから託されたダイ達を一人前の勇者一行に育てるべくそれと知られないように教え導きそして守っていた・・・・どう考えてもキャパオーバーにもほどがあるだろうと今でも思うし、それを知らないあの時であっても、ティファは一行の為に身も心も削っていた中で、様々な事が悪い方向で重なり起きてしまった誰にとっても悲劇が、疲れ切ったティファのとどめとなった。

あの時の事は八割がたがティファが悪いとダイですらもが感じているのでそこは良いのだが、その後に知った事が問題であった。

キルが来て・・・紆余曲折の果てに知った心の底からのティファの夢を聞いたダイ達と自分とキルは衝撃を受けたほどであった。

それはティファ自身が、弱り果て夢現の状態であったからこそ溢れでた事であるが、だからこそ、それこそがティファの心の底からの夢であった事を知らしめられマトリフ達は戦慄にも似た思いが生じたのだ。

その当時の最大の敵同士である大魔王の最高幹部達や、ダイとポップとマァムとヒュンケルの師の仇であり、古来より勇者達の相手である魔王であるハドラー達とお茶会がしたいなぞと、それはダイ達以外が聞けば間違いなくあの当時の世情を考えれば幽閉ないし最悪は処刑されても文句が言えない危険思想であったが、現実はどうなったか？

勇者ダイと魔法使いポップと武闘家マァムと占い師メルルと賢者でありパプニカ王女レオナの結婚式をその当時の敵達が心の底から祝福をしているではないか・・・

天界と地上界が手を携えることが奇跡的に起きたとしても、魔界は無いだろうという生きとし生ける知的生命達の―根本―をひっくり返しつくすことが出来たあの子供達であれば・・・この事象の具現化

は何もティファだけの手柄ではない。
確かにそのきっかけとなり、始まりは神々達の思惑であっただろうがそれでも、あの時大魔王の最大の敵であるはずの勇者ダイが助けたいと大声で宣言をし、それに続くように声を上げてくれたポップ達の言葉が、平和を望む人々の心の最後の一押しとなったのは間違いはなく、だからこそ地上界の人々は迷いなく弱っている魔界を助けたいと声に出すことが出来た。
戦っていた筈の勇者達が救う言葉を発したのだから、きっと自分達の想いも間違っていないのだという勇気を与えて。
「・・・・・希望はあるってか？」
「あるのかもしれんな・・・・あ奴等なれば・・・・」
「あると、私は信じたいと思うのは甘いのでしょうかね？」
「俺はあるって信じてるぜアバン？なにせ嬢ちゃん達だからな・・」
「然様、あの子等であればきっと我等では及びもつかないような事を考えて仕出かしてくれるであろうし、我等も共に考え抜こう。」
「僕も、チウ君達が痛い涙を溢すのは見たくはありません・・・」
「きっと・・・・道はある筈です・・・・」
魔界が残るか天界と地上だけが救われるかという二択しかなかった道を、―常識―という名の道理を壊して―道―を切り開いて作ってしまった子供達であれば・・・
そもそもが、ここにいる大人達は全員が仲間や身近な者達は別として、その他の者達に信を置くことの無かった者達ばかりである。
ロン・ベルクは武器が作れて十全に発揮出来る者を好みこそすらそれ以上に深く関わる事はなく
ハドラーは共に戦う自軍の者達でも近しい者達のみを、それでも心の底まで曝け出したことはなく
アバンも人間の善性を信じこそすれ、本当の意味で信じ切ったことはなく
マトリフに至っては人を信じきれず、一時はアバン達以外との交流を断絶した身であり
バーン達は魔界を救う以外考えることなぞなかった

それぞれがバラバラな考えの中であっても、根底にあった思いは似通ったものがいつのまにか、解けて消えて今に至っている。
そう思うと誰ともなしにクスクスと笑い声が上がり、小さな笑い声がやがてさざめき合った時、不思議と苦い酒に旨味が生じる不思議さよ
「希望に・・・・」
「子等の幸せなる道が見つかるべく・・・・」
「たとえ困難が待ち受けようとも・・」
「俺達も共に考え尽くし・・・」
「きっと見つかる事を信じて・・・」
誰ともいう事無く、それぞれが言葉を述べて酒を嗜む大人達は酒の入ったグラスをそれぞれに持ち上げそっと乾杯をする。
未来は不確定だと言われている
ならば良くも悪くも決まっていないのであれば、選り良い道を行く事もまた可能なはずだと、子供達の進む未来に幸ある事を願って

世界に散らばるいし達：エピローグ⑧

「眠れないの？」

「・・・・メルル、眠れなくても目は瞑ろう？

少しでも休まないとメルルの方がまいっちゃう・・」

「姫様・・・・マァムさん・・・。」

男女別れてそれぞれの部屋に引き取った後、ウェディングドレスよりは重くは無いが、それでも普段身につけないような華やかなドレスと、普段着であったがポップの魔力暴走をもろに受けてボロボロになった服を脱ぎ去り寝間着に着替えたティファ達は、大きなベッドでティファとメルルを中心にして横になったのだが、メルルもマァムにもレオナにも眠気はちっとも訪れずに悶々としている。

自分達の幸せな時間に襲って来た不幸を処理できないでいた時にポップの出来事と・・・この世界の不幸な真実の一端を知った事が更なる追い打ちになった。

最愛の人で今日夫になる筈であったポップは強くてそして優し・・それは自分の周りの仲間全員に当てはまる事ではあるが、ポップメルルからすれば―世間知らず―の側面があった。

ランカークス村ではポップの父親に対する信条は兎も角として、曲がりなりにもきちんと世間の悪意から守られており、長じてからは世間を知る前に―勇者の家庭教師―なる変わった人物に押しかけ弟子をした事でそれまで以上に―世間―を知らずに旅から旅への生活となって、テランの一所に住むようになった今も・・・・テランはある意味一般的な世間とは隔絶された国であり、そもそもが救国の英雄の一人であり大勇者の三番弟子を好き好んで害するものなど要る筈も無く・・・しようとしたが最後、きっと魔界の神様までもが動いて悪意の手が伸びるどころが動く前に―痕跡―すら残さずに消されるだろうというのがメルルとレオナの見解である。

似たような環境で育ったポップ以上に優しく慈愛に満ちたマァムは、それでもロモスの森の中の村で常にモンスター達の事を警戒していた生活だった事もあり、ポップよりも―人とモンスター―の現状を

正しく認識している。
強くて優しい世間を知らないポップを・・・どう慰めてあげればいいのかメルルは不安で不安で堪らないでいるのを、ティファが半目で頭をガシガシと掻きながらむくりと起き上がる。
「ティファ!ちゃんと寝てないと駄目でしょう。」
そのティファを、キチンと寝なさいとマァムも即座に起き上がり叱りつけ
「ティファさん!私が言えた事ではないですが横になって休まないといけません。」
メルルも身を起こしてティファに横になるように促し
「ちゃんと寝ないとダイ君に言いつけるわよ?」
・・・・・・レオナの放った一言には、流石にティファも怯みかけた・・・・あの兄に異界からさらわれて帰還したその日のヨロをきちんと休まなかったと知られた日には、嫁さん共々一緒に寝ないと駄目かなとか言われそうだが・・・・ここは負けた堪るかとティファは頑張った!
「どうせ寝られないのなら夜更かししませんか?」
体も心も色々と疲れすぎていてティファも全く眠くない。
寝ようとする方が悪い考えがよぎってしまうので無理に寝るよりも・・・・・
その提案を聞いた女子三人組は・・・・目が点になって眩暈が仕掛け・・・・反対しようとしたがティファの話術に結局は丸め込められ行動開始となった・・・・大人達に見咎められたら!全部ティファが悪いのだ!!!
ティファ達の部屋の徒は違って物凄く近い位置ではあるがそれぞれ一つ一つのベッドでダイ達は休み事になったのだが・・・・ティファ達同様眠れる気が全然しなかった。
ティファ達が無事に戻って来た・・・それだけであればとんでもない事が起きた後であっても喜びあって眠りにつき、明日の朝に・・・・何もかもが―元に戻って―・・・・なのに!!
「・・・・ポップ・・・・チウ・・・・・・俺・・・・・・・・・やっぱり向

こうの世界に戻って天界のゴミども―焼却―してくる!!!」
「駄目だってダイさん!向こうへの道はもう二度と繋がらないように神々と精霊王様達が全力使って閉ざしたって、それに僕もポップもそんなこと望みません・・・・もう怖い事嫌です!!」
「チウよ・・・・」
「・・・・ディーノ様、私としてもポップとチウと・・・・ティファ様を傷つけたあの世界の一部の者達も許せない気持ちは分かります・・・・しかしきっと・・・・」
「うぅ・・・・ティファちゃんと寝てるかな?メルル大丈夫かな?レオナとマァムも心配だよ・・・・」
「・・・・こういう時にエイミがいてくれれば・・」
「それは・・・仕方ないよ、ポラリスとスピカの方を優先しないと・・・」
メルル達と同じように、魔力切れで気絶するように眠ってヒュンケルに部屋まで運ばれたポップ以外は全く眠れずに同様に悶々としており、ダイなぞは怒りがヒートアップしてやはり向こうの元凶神だけでも滅ぼしてくると、着替えた寝間着のまま飛び出そうとするのを、被害者当人であるチウを筆頭にヒュンケル・クロコダインと忠臣たるラーハルトにも止められしおしおと諦める・・・・確かに復讐だのなんだのを、ポップもチウもティファも望まない・・・・・
だが、ダイとしては―自分の―大切な妹と親友と心優しい仲間を攫い・利用し傷つける原因となった元凶なぞ滅ぼしつくしても飽き足らない・・・・全員を（当て落として）寝かしつけたらちょっとだけ三神様達と（脅し）お話合いできないかなとかちょっと・・・物凄くやばくなって良くダイの思考は、扉のノック音によって遮られた。
最早真夜中であんなことがあった後なので出歩くものも尋ねる者達もいないだろうと思っていただけに、ダイ達は顔を見合わせる。
先生達が心配で見に来たのだろうか・・・・普段から気配が全くしないので誰か分からないのがこういう時困るところがある。
ダイが出ようとした時、用心の為にラーハルトとヒュンケルが応対する事になり扉を開けてみれば・・・・
「へへ・・・来ちゃいました～。」

・・・・・・遠慮がちに笑って枕を持っているティファと・・・・同じような遠慮がちな笑みを浮かべているマァム・メルル・レオナの姿があった・・・・・今深夜でここには男しかいないのに・・・・見ている者が理解できないラーハルトとヒュンケルはきっと悪くない・・・・・

世界に散らばるいし達：エピローグ⑨

「・・・・それでダイ君達のいる部屋に来ちゃったって・・・・そういう事ティファ？」
「へへ・・・だってどうせみんなだってねられないでしょう？
其れならいっその事みんなで楽しく夜明かしした方がいいかなって？」
・・・・・ティファの幼馴染でティファは自分の半身ですを自負しているさしものノヴァも頭痛が起きかけるのをなんとか堪える・・・ダイ達のいる部屋はポップ・チウ・ラーハルト・ヒュンケル・クロコダインで一杯になってしまったので、隣の部屋で少し寝酒してから寝るというガルダンディとボラホーンと共に隣室に行ったノヴァが、良いでしょう・駄目だの押し問答しているのを聞きつけて来てみれば・・・パジャマ姿の花嫁さん達とティファ発見してしまったノヴァが溜息をついたのはきっと悪くない。
そしてー子供の頃ーとはもう違うのだから、男女同じ部屋は駄目だろうと、女子達を押し留めようとしたラーハルトとヒュンケルは真っ当であろうとノヴァは思う・・・・思うのだが・・・今日くらいは良いでしょうと言うダイとチウのお願いに、ノヴァはあっさりと折れて大人達もしょうがないと受け入れた。
―今日―は色々とありすぎて、確かにティファの言う通り寝れずに不安の中にいるよりは、楽しく夜明かしをしていればもしかして安心していつのまにか寝つけるかもしれない。
そうと決まれば後は早かった。
兎に角女子達のベッド置き場の確保であり、この部屋は広さがあり据え付けられたベッドが無くなっただけで、あればノヴァとガルダンディとボラホーンと、後数名寝られる程の広さがあるので、枕持ってきた女子達を動かさなくていいベッドの上に座らせて、男子達は頑張ってベッド運びに勤しみ始めた。
「ちょっとずつベッド動かして・・・うん！スペースで来たから―作るね―。」

部屋にあったベッドを部屋の左右に分けて中央を開かせてそこにティファが向こうの世界では散々活用したが、この世界では久しぶりの式でベッドを自分達用とノヴァ達用もこさえてひと段落した時
「う・・・うぅ・・ん?・・・・・・・・おわ!!メルル?!」
「ポップさん!!良かった・・・・目が・・・・覚めてよかった・・・」
魔力暴走起こして魔力切れで気絶するように眠っていた流石のポップも物音に気が付いて目が覚めたのを、他の誰かが目覚めたポップに声をかける・・・それこそそういう事に一番目ざといティファを制してポップの最愛の人たるメルルが、身を起こしたポップ胸の中に飛び込み、起きたばかりでその前後を全く覚えていないポップ面喰いながら泣き縋るメルルを腕の中に納めながら、これ一体何事かと、目の前にいるダイに問いかけようと顔を上げれば、ポップはまたもやぎょっとした。
いつでも力強い笑みや優しい表情で自分達を引っ張ってくれているダイが・・・大粒の涙を流してそして・・・
「ポップ!!!ポップ!!!」
・・・・・メルルは非常に細身なのでポップの腕の中にまだ余裕があるのを見たダイが、メルル共々ポップの胸に縋りついて泣いて来たのだから・・・・
しかもだ・・・
「ポップ!!!もうポップ達が傷つかないように一生俺といようね!
―馬鹿達―がいたら俺が全部―焼却処分―するから!
酷い事しようとする奴等はバーン達と一緒に滅するから!!
メルルも一緒にいれば寂しくないでしょう?明日テランに行ってフォルケン様に―お話しして―俺達と一緒にパプニカ城で楽しく過ごそう?
チウも一緒だよ?」
無論ティファなんて言うの及ばないだろうと・・・・ポップ達の意を案じて泣いているダイの・・・・実に物騒な発言に、ポップ以外は全部の事情を知っている一同は、ポップに泣き縋りながらも突然自分の横に来て一緒に泣きつきながらも物凄く不穏で一つでもすれば

様々な意味で駄目だろうというダイの言葉に涙は引っ込んでしまったメルルや、日ごろから主君バラン様とご子息様ディーノ様は何の問題も起こさず周囲に心配をかける事のない立派なお方達で大丈夫でもティファ様は色んな意味で心配だを標榜してきた竜騎衆達も、ダイ君大好きなレオナも、妹ティファのことが無ければ何の心配もしていなかった他の面々も・・・・・・ドン引いた・・・・

ダイの言う馬鹿達焼却処分した日には・・・世間様からダイがやばい奴だと認識されてアウトだろう。

酷い事しようとする奴等も滅した日には同様であり・・・・そもそもが滅する線引きがこの分だとティファ達守らないとというダイとバーン辺りが暴走をして歯止めが利かなくなった日には洒落にもなっていない・・・・

そしてそもそもが・・・・メルルはテラン王国次期女王で！ポップはその王配でありパプニカ城にお持ち帰りは遊びに行くならともかく一生軟禁させようとした日には国際級の犯罪である・・・・・・完全アウト案件で・・・

ツイツイ・・・・

「あぁ、とりあえず落ち着いて、其れよりもメルルさんの邪魔だから退いてねダイ兄。」

新婚さんの邪魔をするんじゃ無いと不穏全開のダイの気配をものともせずに近づいて、もう一人の兄からべりっと引きはがしたティファは、内心溜息をつく。

・・・・兄の愛が重すぎると思っても罰は絶対にあたらないだろうが・・・・其れよりも折角ポップが起きたのだから―色々お話合い―が出来るだろうと目論む。

大人達の決意が固まったのと時を同じくして、今度は大人も交えた―子供達のお話合い―が静かに幕を開けた。

―長い一日―が終わり、そして長い夜が始まった

この世界の未来を明るい道で歩けるように

世界に散らばるいし達：エピローグ⑩

「そっか・・・・・俺、思ってた以上に―あいつ等の事―引きずって…はは・・本当に駄目駄目だな俺って・・」
「ポップ！それは違うよ!!ポップは優しいんだよ！駄目なんかじゃない!!!」
「そうだよポップ兄！優しいと駄目は違うよ!!」
「ダイ・・・・ティファ・・・」

ダイ達の部屋にティファ達が押しかけ、別室にいたノヴァ達も同じ部屋で一夜を明かそうと話が決まってから、全員が入って寝られるように部屋の中のベッドの位置を変える物音で目を覚ましたポップに、何が起きたのかをティファが正直に話したのだ。

ポップの心の傷は、ケアや本人の心情を考慮して話す時は本人が落ち着いている時などのタイミングを見るべきであるのだが、そんな悠長な事を言っていられないというティファの判断であった。

これが力のない一般人の話だったらティファも聞きかじりではあるが時間をかけてケアや話を段階的にしていけるのだが、それが力を持った者、其れも巨大で下手をしたら周りの者達が巻き込まれ、怪我人はおろか死人すら出かねないのがポップの魔力暴走である。

何かの拍子で先程の暴走をした時、運悪く自分達が居ない時であれば間違いなく懸念している事が最悪な形で実現されてしまい、そうなって一番に傷つくのはポップ自身。

対策としては暫くはのんびりと過ごしてほしい所だが、人一倍責任感が強いポップが、次期女王となるメルルを補佐する王配教育を休む事を是とする筈も無く、無理に納得してもらい休んでもらってもそれは表面上の事で、間違いなくストレスから事態の悪化を招く悪手であろうし、ならば四六時中ティファなりポップの暴走を止めるか受け止め周囲に被害を出さない者が付くという案もまた現実的ではなく、最善でもなく次善でもない方法だが、本人に自覚をしてもらうしか手がない・・・・・それでも、―幽閉―よりも絶対ましだというのが話しているティファ本人と、―そういう事―に通じている王女レオナは悲

しくなる。
古来より力を暴走させるものがいない訳ではなく、そういう者は対処としては魔力封じの呪法を施すなり、腕輪なりの魔具で縛るなりして囲い込む・・・要は幽閉である。
実際にそういった記録は王侯貴族達の勉学の一環として存在しているのでレオナはその事を思い出して心が暗くなる・・・国と民達を守る為にも、魔力暴走をするものを放置しておくわけにはいかず、その時にこういう事もあるのだと勉学で得られる知識の一つとして覚えておこうと思ったくらいだが、まさかそれが自分の大切な仲間の一人に起こりえるかもしれない事に、レオナの心は暗く成るどころか慄いている。
最愛の人の大切な相棒で、大好きな妹になる者の兄で自分にとっても頼りになるポップを幽閉せざるを得ない状況が出来かねない状況に、レオナはまた泣きたくなる・・・今日は後何度涙を流せば流さなくていい道が出来てくれるのだろうかと思う程に・・・きっとそれは幽閉の事は分からなくとも、今のポップを想うだけでこの場にいる全員が、何よりもメルルの心を思うとやりきれなくなる・・・・・他界滅ぼす反対なぞせねばよかったと後悔するほどに現状が酷すぎて・・・・だが、道はいつだって細くとも茨が覆い茂時には険しき山を登るよりも過酷であろうとも、その道を指し示すものがこの場にいる。
「ポップ兄が駄目だったって言うんだったら、敵を倒そうとしただけで吐いちゃうティファはもっと駄目かな？」
「あ！・・・・・ち・・・違う!!」
どん底になったポップは、ティファの言葉で沈んでいた思考を一気に浮上させて慌てて己の言葉を再吟味して青褪める。
自分が―敵―となってしまったキメラ達を倒した事を心の傷になってしまった自分を貶めるという事は、それは―ティファ―は貶めている事に他ならないからだ。
ティファはかつては敵を倒す事を厭うていても、それでも倒していたのだ。

それが今では敵を制圧することは出来ても、倒す事をもっと言えば殺す事が出来ない身となった。
それはかつて、絆とも呼べるほどまでになりながらも、様々な状況や本人達ではどうしようもない事情で敵対せざるを得なかった竜騎衆の三人の内ガルダンディーとボラホーンをその手にかけてしまってから、ティファは今のポップ以上に傷つき魂にまで傷を負ってしまった。
それ以来ティファは戦うことは出来ても敵を倒す事をしたことが無く、其れこそ最後の戦いの時、この世界の天界を牛耳って来た腐敗した天人達と対峙し倒す寸前で、心が慄き倒す事・殺す事を拒絶して吐いてしまう程であった・・・唯一の例外はハドラーだけはどうあってもと思い定められたからこそ心行くまでの激突をして倒そうとした事だけだが、その様な情熱をぶつける相手はもうおらず、それはティファがもう敵を倒す事が出来ない事の証明でもあり、敵を倒す事を思い悩む事が駄目であるのならば、そもそも根本的に敵を倒す事が出来ないティファはポップよりも駄目だろうと言っている事に思い至った当の本人は、青褪めたのも無理はない。
だがこの話の持っていき方自体、ポップの想いと思考を自己嫌悪から無理やり引っぺがす為のティファの策であり、其の策が成功するのを見て取ったティファは其の隙を逃さずに

パン!!!!!!

ポップの顔を思いっきり引っ叩き・・・・
「しゃんとして!!!やった事は無くならないの!!!しちゃった事はどうにもならないの!!!
ポップ兄がどれだけ自分の事を駄目な奴!どうしようもない奴だって自分の事を虐めたって罰したって無くなってくれないんだよ!!!」
そのたった一つの行動は、百戦錬磨の戦士達と政争を知ってあらゆる事柄に動揺しない心を持った王女や大戦で強き心を持った少女の

心を震撼させる中、仕出かしたティファはそれだけでは止まらずに怒涛の勢いで腑抜けてしまった兄の胸ぐらをつかんで赤く腫れあがり始めた顔を上げさせ言葉を降り注いでいく。
　ティファは、兄の中に出来てしまった暗い思いを打ち砕くべく叩きそして終生秘っしておきたかった言葉をぶちまける。
　その言葉は、かつて兄以上にしてきた事の大きさに、計画されていた大戦がいざ始まってから、取りこぼされていった生命の多さに慄き、己を罵倒して罰してきたティファの心からの本音であった。
　神々と世界全てを救う為だと始めた事であっても、大戦が始まってからティファは己から背負った業の深さに、責任の重さに心も精神も傷られそして・・・・壊れた・・・・
　あれから数年経つ中、ティファは己の罪を忘れる日は一日も無い・・・それでも・・・
「それでもね!辛くっても歩いて行くんだよ!!生きて行くんだよ!!!
　大事な人達と一緒に幸せになる為に!大切な人達と一緒に世界を守って笑って生きていきたいんだよ・・・・・歩かないといけないんだよ前に・・・・・」
　だって・・・・私達はこの瞬間を生きているのだから・・・・・
　怒鳴る声の内容に、ティファの半生を知らされたダイ達も怒鳴られているポップも何も言えない中、ティファの声は次第に小さくなりそして泣いている。
　生きて行きなさい・・・・かつて敵の策略で味方が自分のせいで仲たがいされそうになり咄嗟に元凶たる自分を消して策を壊そうとした時に寸でのところでアバンのお陰で死なずに済んだ時に贈られた言葉に、ティファは生きる心を授けられた・・・自分の罪の重さから、かつては自分の命なぞ安いと軽視していたティファの思い違いを打ち砕いたアバンの言葉。
　今でも自分を使う策を使って来たが、其れでも己の生命を必ず守る事を前提としているだけ成長しているとだろうとは本人の言だがそれは兎も角、あの時の言葉をティファがポップに贈る。
「私達と一緒に生きて行こうポップ兄、一緒に悩む、苦しい心をティ

ファ達にも分けて欲しい・・・・一人で何て行かせない・・・・・みんなで・・・明るい道を作って生きて行こう・・・メルルさんと一緒に・・・・」

一緒に、共に悩み苦しみ・・・・・それは―今日―デルムリン島の大聖堂で、病める時も健やかなる時も共に生きて行く事をとメルルに誓った言葉と同じで、其の事に気が付いたポップが、泣き出した妹にしがみつかれたまま顔を上げれば、ダイ達男達の顔は誰もが真剣で、自分と目があえばティファの言葉を受け取ったと重々しく頷き、マァムとレオナとそして・・・

「ポップ・・・・さん・・・・一緒です・・・何があっても！どんなことがあっても！ポップさんが辛くて先程の事が何度起きようとも私は絶対にポップさんから離れません！絶対絶対に一緒です!!!だって・・・だって・・・・・私は・・・・・」

ポップさんの妻だから・・・・・

愛しているからというメルルの言葉に、今度こそポップの思考は暗い道から完全に引き離された

こんな自分を・・・・傷ついた事から逃げる様に暴走して情けない姿を晒した自分を其れでも愛してくれている―最愛の妻―は愛して絶対に離れないと言ってくれている・・・周りにいる自分の大切な者達もまた自分を・・・・きっと自分だって、他の誰かが同じような屈強に陥り傷ついたら・・・・・・そうだよ・・・・・俺は・・・・・俺達はいつだって・・・・

「うん・・・・行こう・・・・・生きて行こう・・・・・みんなと・・・・ずっと・・・歩いて行きてえ・・・・・」

「ポップ!!!」

「ポップさん!!!」

「行こうポップ！」

「今度こそは絶対にお前を、お前達を離すものか！」

「行こうポップ！」

「うん!!うん!!!」

ボロボロと涙と鼻水も流すポップを、ダイ達はしがみつき誓い合

う。
これより自分達の行く道は沢山あれども、それでも幸せを歩ける―大道―を共に行くことを。
自分達はいつだってどんなに辛い時であっても笑い合いそして苦しい時は泣いて、弱く駄目なところを支え合って今日まで来た。
ならばこれからも今までと同じ手を携えて歩いて行けば、辛く困難な道も歩き斬る事が出来る・・・・あのアバン先生の教え通り、生きて未来に向かって歩いて行くのだから
ならばその道を、良き道にしたいとポップ達は心の底から決意した夜となった

世界に散らばるいし達・エピローグ⑪

大騒動から一夜明けた事により、バーンパレスの周囲に精霊王達が施し結界の帳が解かれた。

ティファ達を、ひいてはティファの作りし奇跡の万能薬を手に入れる為に他界のマザードラゴンの仕出かした事が、マザードラゴンが意図してした事ではないにしろティファ達の住む世界の空間が、パレスを中心にしてひびが入り・・・・下手をしたらティファ達以外にも他界、其れこそティファ達が連れて行かれた場所とは違う世界に飛ばされた可能性があり、天界が他界の神の干渉を検知したと同時にその危惧も当然されて、三神達は即座に地上に降臨していた六大精霊王達に命じてパレスの周囲一キロまで、周囲と途絶するほどの強固な結界を張り巡らし、六大精霊達は事件が解決するまで結界を張り続け、ティファ達の帰還の知らせと共にゆっくりと結界を解いていった。

周囲との途絶は当然他界からの干渉をそれ以上許さない為と、はいってしまった空間のヒビがそれ以上現実世界に広がるのを阻止する為のものであり、ここまでの大規模で強固な空間結界を張られた前例がないので急激な解除は現実空間と時空間にどのような影響が起こるか分からず、天界の空間・時空間観測の者達の式の下で、ゆっくりと解かれていった。

幸いにもヒビは広範囲に広がる事はなく、結界が張られた二時間くらいしてから徐々に消えていきティファ達が帰る頃には目視できない程に自然修復が成されて、結界を緩やかに解いていく過程で天界の観測所からも問題はない範囲というお墨付きが出る程までに落ち着き、見立てでは数日後には完璧に直るだろうという報せに、六大精霊王達は心底ほっとした。

ティファ達が攫われたと聞いた精霊王達は、それぞれの眷属を率いて逆進行をしてやると息巻いていたのを三神達も其れをしたいが、子供達を無事に返す事の方が遥かに重要であり、報復は―後でできるし、絶対にするから―という人神・アンポロスが、普段の暢気で人の良い神の口調ではない凄絶な凄みを滲ませた声の言葉に精霊王達は

怒りを堪えて呑み込み、二次被害が出ることを防ぐ為に、逆進行の為ではなく天地開闢以来の大規模強固な結界を張る為にそれぞれの精霊達と眷属を呼び出し、それぞれの位置、即ち北を天の位置として光の精霊王を据えて時計回りに火の精霊王・風の精霊王・闇の精霊王・水の精霊王・地の精霊王の順に配され、三年前の大戦時にバーンが地上を破壊する為に配した巨大な六芒星をティファ達が世界を助ける為にその六芒星を乗っ取った時の同じ場所であったが、まさか世界の危機を二度も救う為に発動されるとはだれも予想できなかったが、結果的にまたもや世界を守ることが出来たのだが・・・・その間の精霊王達の胸中は様々な事で煮えくり返っており・・・・・殺意で本来精霊達の仕事である世界を保つ為の気の運行も同時進行している為、本来不浄と化した気を清浄して天に返し清らかな気を世界に回すのだが・・・・その気が若干濁りかけたのを、それぞれの眷属達が主様の気持ちは分かりますがと懸命に宥めて・・・・おかしく成りかけた気の運行も何とかなったのだがそれは兎も角として、無事にパレス周囲の結界が解けた事を精霊王達はパレスの主たるバーンに報告をして、それぞれの精霊界の領地をいつまでも空にはしておけず、無事に戻って来た子供達には会えないのが無念だと言いながら、それぞれの精霊界の領地へといったん帰国をした。

帰国した精霊王達の報告を受けたバーンはすぐさま動いた。

本当はティファ達が他界へと攫われたのを知ったと同時に―ザムザ及びザボエラ―を呼びたかったのだが、結界で外界とは目玉の通信も途絶されたので諦め、報告が入ると同時にすぐさま待機させていた目玉でザボエラ親子を召喚した。

幸いあちらも万能薬の新薬の開発で徹夜をしていたらしく、速攻で目玉通信に出たので詳細は来てから話すのでとにもかくにもパレスに来いという魔界の神様からのお達しに、ザボエラは心臓を跳ねさせながら、その息子は何が起きたと血相を変えて何が起こっていても良いように傷薬・回復薬の万能薬を人用・魔族用をそれぞれにティファから贈られたマジックリングに入れ終わると同時にパレスにルーラをし、門番への挨拶もすっ飛ばしてバーンが待ってると指定してきた

玉座の間に息子が突っ込んでいくのを、ザボエラは仕方のない奴じゃと溜息をつきながら呆然としてついで侵入者だと騒ぎかけた門番と幸い面識がある為、愚息が申し訳ないと言いながらバーンからの呼び出しに焦っている事をきちんと告げた事でごたごたは解決されたのを、知らないザムザは玉座の間まで一直線をして扉をノックもせずに突っ込んでいいた・・・・以外に直情的なザムザの一面に、待っていたバーン達も唖然とし、こ奴もう少し理知的だと思ったのだがとはハドラーの心の中の呟きであったがそれは兎も角、何事ですかというザムザの言葉にハッとしたバーンが事の顛末を話し、見た目は問題ないが他界に数日過ごしたティファ達の健康診断をしてほしいというバーンの説明に、ザムザは話を聞いた他の者達とは違って殺気立つ事無くかしこまりましたとバーンの言葉を一礼して受け、さっそく子供達はどこにという言葉に、怒りを無理やりに呑み込んでいるというそぶりも無く、かえってバーン達の方が面喰ったほどにザムザは落ち着き払っている。

別にそれはザムザがティファ達の事をどうでもいいと思っている訳ではなく、―された事への報復―はきっと目の前の魔界の神と天界の神達するから自分が怒りを覚える必要はなく、其れよりもティファ達の健康とポップの心の傷を案じる思考に重きを置いた結果であった・・・・やれるならば他界の天界のゴミ屑どもを―人体実験―に使い続けて魂が擦り切れる程に使い潰してから殺してやりたいというのは心の中で終生しまっておくつもりである。

ティファを筆頭とした子供達は優しいので、自分の考えにも悲しみそうだからだ。

そんな事で子供達を悲しませるつもりな毛頭ない。

其れよりも子供達はどちらにと尋ねたザムザに、アバンがまだ眠っているかもしれないというので、自然に起き出すのを待った方がいいだろと後から来たザボエラが提案をした。

ヒュンケルもクロコダインも入れた子供達は全員が心が疲弊している状態であるので、睡眠というのも傷と癒す一つの手立てだというザボエラの意見に、アバンとマトリフも支持した。

大戦終結後はザボエラはザムザの監視という名の庇護かに置かれ、これまた大戦終結後すぐ様リンガイアの騎士及び救護団の両団長地位を返上してリンガイア国籍も離れたノヴァは、二人を伴ってテランの薬草が豊富な場所に移り住んで奇妙な共同生活が始まった。
ティファと心底仲が良いリンガイアの殲滅の騎士団長が何故自分を共にいさせるという、ザボエラのごもっともな言葉に、ノヴァは苦笑しながらザボエラの疑問に真摯に答えた。
曰く自分はティファと違ってザボエラの成した事を別段に悪い事だと思った事はなく、自分はザボエラに対して思うところはない。
王と国と民を守る事を第一とする騎士団長をしていた身としては、勝つ事がすべてであり、負けない為に実に様々な策も練り用いてきたのだから、当然ザボエラのした事に嫌悪感はない・・・流石に毒はどうかと思うがそれだけである。
そんな訳でザムザ以上の薬学に対する深い知識を自分に伝授してほしいとノヴァは深々と頭を下げた事に、ザボエラは信じられないものを見た目でノヴァを見つめた。
勇者サイドから世間の裏表まで知っているロン・ベルク以外からは嫌われぬかれ、同僚達からもどこか軽く扱われていた自分が、みじめに負け犬になり下がった自分に対し、救国の英雄の一人に数えられているであろう若者が頭を下げて教えを乞うてきた事に・・・泣きそうになったのは墓場までの秘密であるが、以来ザボエラは気が向けばという条件でノヴァに教える事になり、結構な頻度で気が向いてくるザボエラにノヴァは嬉々として教えを乞うてザムザを安心させたが、周囲との軋轢は簡単には無くならずザボエラもハドラー達と会う事に心が向く事はないので時折来るティファとお供で来るマァム以外に会うのは久々だが、存外互いに何とも思わない程に蟠りは解けているので、ザボエラは愚息が聞き逃したかもしれない事を丁寧に聞き取る事で時間を過ごしたが・・・昼近くになっても子供達どころかヒュンケル達も起きてこない事に大人達は流石に心配になって来た・・・子供達は疲れ切っているのだろうとは思うが、戦士として長年を過ごして来たヒュンケル・クロコダインどころかラーハルト達すらも来な

い事に・・・・まさかあの者達にも他界に渡った影響が何か起きてしまったのか、自分達は起きていたから異変は無く、寝た者達はその間弱った体に異変が起きたのか・・・そう思う解いてもたってもいられなくったバーンは玉座から立ち上がり子供達のいる部屋に駆けだしたのを他の者達も続き・・・パレス内が混乱しかけたのは想像に難くなく、そうなる前に超有能な補佐人たるミストがすぐさま混乱しかけた者達を落ち着かせ事なきを得た。

そしてティファ達が寝ているであろう女性達の部屋をアバンがノックをし手からゆっくりと開けた。

本来であれば寝間着姿の子女の部屋であるが、自分達の危惧したことが無いとは言えないのでそこは承知して開けたのだが・・・・空であった時には目が点になってしまった。

一体どこに行ったのだ・・・・まさかまたもやとアバンの背中に冷たい物が伝った時、これはと、バーンの驚きの声が聞こえたのでそちらに行き、バーンが開けた扉の先を見れば、何と男性全員が同じ部屋にいた！

確か二部屋で用意をしたはずなのだが・・・・それもそれぞれがベッドきちんと寝ているのではなくダイとポップは同じベッドで折り重なるように寝入っており、竜騎衆達とヒュンケル・クロコダインも自分達の気配にショボショボと目を開けそして・・・・マァムとメルルとレオナは同じベッドに・・・・何故か床に座って突っ伏して眠ってそして・・・中央のベッドに木のボードを置いてその上で何かを書き散らかしたと思しきティファが、ペンと紙を握りしめてクゥクゥ眠っており、その膝の上でチウが眠っているという世にも奇妙な光景がそこに広がっていたのを・・・・唖然呆然として呆気に取られた顔を晒した大人達はきっと悪くない・・・

そんな中、幸せそうと言おうか何かに満足をした表情でいまだに眠っているティファ達も・・・

世界に散らばるいし達・エピローグ⑫

・知らなかった、俺が住んでいたランカークス村には迷いの森が近くにあっても、その森から出てくるモンスター達はほとんどいなくて、たまに出てくるのもスライムとかが出てくるくらいで畑にも被害なく、偶に大きいのが出てきても村の大人達が対処してそれで終わりで、アバン先生に押しかけ弟子をして一緒にあちこち回るようになってからモンスター達の本当の怖さを教えてもらった。

其れだって何かあれば、例えば木に化けているマンイータが出ても先生があっという間に倒してくれて、森や谷のどの辺がモンスター達の住処で回避すればいいのか教わって難を逃れてのれんぞくだった。

大戦が始まっても地上のモンスター達はデルムリン島以外はモンスター達は狂暴化せずで、俺は本当に地上のモンスター達の怖さを知らない。

そして群れが膨らみすぎて餌不足で引き起こされるスタンピードもチウと獣王遊撃隊と有志の人達に任せきりで、だから、人々が地上のモンスター達に対して抱いている根幹的な怖れを本当の意味で知っていなかったんだ・・・・今日までは・・・・

・僕は近頃周りの皆さんから優しくしていて頂いたので、知られたくはなかった・・・僕達の本当の現状が、また昔の様になってきた事を。

昔ロモスの王宮で僕の事で大騒動があったのに、それを皆さんが助けてくれて嬉しくて、優しい事だけを覚えていたくて・・・・・言い出せなかった、僕たちモンスターが昔から意味があっても無くても怖がられる存在だってことを・・・・僕には分らない、どうすれば人とモンスター達の縁を本当の意味でり持つことが出来るなんて途方もないことが出来るのかなんて。

単に子供達と僕の遊撃隊達の子が仲良くするだけじゃきっと足りない事しか分からない。

：私の住むネイル村は森の中にある。
その性質からどうしても森のモンスター達と渡り合わなければいけない事も少なくない。
でも、だからと言ってネイル村の人達からモンスター達を根絶させようという話を私は聞いたことが無い。
あるのはどうすればモンスター達に遭わずに森の中を往来し、子供だけで森の奥に行くことを禁じて危険から身を守る事を第一とする話しか知らなくて・・・狂暴化もしていないモンスター達を根こそぎ否定する人達が居るなんて思いもしなかった・・・
デルムリン島にいる子達はみんないい子で優しくて、島に来る人達に直ぐに懐いているのを見るうちに、私自身もモンスターの脅威と言うものを忘れていたのかもしれない・・不甲斐ない・・・いつでも脅威を忘れてはいけないという先生の言葉を違えているなんて・・
：私も鈍ったものね、民達がいえ人間というのは同族であれ異種族であれ自分達と違う者、其れこそ派閥の違いや考えの違い一つでどこまでも残酷になれる事を頭の中から追いやっていたんだから・・・近頃ティファの近くが、ティファの考えた世界の中にいるのが居心地が良すぎて、優しい大人達の守られているのが当たり前になりすぎて・・・これじゃぁ駄目ね。
どんな時でも人々の中には善良だけではなく無意識の残酷さや悪意があるのを忘れないでいないと・・・・どれ程善き世界の中にいても・・・
：俺・・・偽勇者にゴメちゃん攫われたり、て味方だったはずのカール騎士の人達がティファの事が分からなさ過ぎて暴走したのを完全に忘れてた・・・・それに世間の人達が俺達みたいに俺の友達のモンスター達の事に詳しくない事も・・・
あの子達だって危害を加えられたり縄張りを荒らしたりお腹がすいた時以外はむやみに暴れる事が無いのを知らない事を・・・・・島のみんなや爺ちゃん達は皆優しくて・・魔族だってバーン達みたいに良い人しか知らなくて・・・・スタンピードも俺は見たことが無い・・・だから俺自身も知らない。

モンスター達と魔族や他の人達の脅威を本当の意味で知らない・・・人間達の悪意も・・

己達の無知と忘我の後悔の念が、そこには書き連ねられていた。

昼近くになっても傷ついたポップとチウ達の他にも共にいたはずのノヴァや大人達が誰一人としいて起きてこない事を不審に思い、居ても立っても居られなくなったバーン達が様子を見に行けば、大人と子供達どころか花嫁とティファも共に一つの部屋で・・・・雑魚寝をしていたことに驚いたが、辛うじて自分達の気配で目をしょぼつかせながらも起きたヒュンケルとラーハルトが、ティファの握りしめていた書付を自分達に渡しながら、昨日どのような経緯でこの状況となったのかを、まだ眠っている者達を起こさないようにするために大広間に場を移してから事細かく話しをされた。

誰もが不安で眠れないのならば一緒にいようというティファの提案に、幼馴染のノヴァと兄であるダイが賛同した事から始まり、目が覚めたポップを手痛い方法であるが本人と周りの為にティファ自身が一番したくない方法で教え諭した事を。

そしてそこからレオナが、いったい今の自分達は何を知らなくて何を忘れていて、其の所為でポップを助ける事の障害が何であるのかを全部を話合って書き記していこうという発案に、傷ついた当事者のポップとチウが大賛成をしてそしてティファが書き記す事になったのだと。

そしてそれを一番に読んだのは当事者のポップと発案者のレオナの師であるアバンが読み進めていくうちに・・・・・・

「・・・・不甲斐ない・・・・・・私は・・・私たち大人はあの子達を守っているつもりで・・・・」

ポタリと、ティファの書き綴った紙面に涙を溢す。

知らない事こそが、知られない事こそが子供達を守る最善の策だと、今日この時までアバンは信じて疑わなかった・・・平和でいさせ

てあげられなかった子供時代を改めて守る為に、そして命をかけて労した分だけ彼等の幸せを―大人―として守ろうと思っていた事が裏目に出してしまった事が、傷ついたポップ達に申し訳なくて・・・

確かにこの世界は一時忘れ去られ、若しくは表面化していなかったモンスター達に対する脅威に対する怯えや、異種族に対する差別や無意識の悪意が再び表面化されているのをアバン自身もチウと行動を共にする事が多いフォブスター達からの情報で知っていた。

それでも、まだ自分達でどうにかする時間があると、自分達の能力を過信していた・・・其のツケを、自分達の一方的な思惑で―無知―でいさせてしまったポップ達が払って・・本末転倒もいい所で・・・・

ファブニールの竜を討った時、無知が罪である事を恥じた先祖にも顔向けが出来ないとアバンの心が打ちのめされる。

そんなアバンの後悔は、泣くアバンからそっと紙面を抜いて読み始めたバーン達にも生じる。

キルやミスト、そして普段は子共であっても厳しくする時はするハドラーやマトリフをしてもアバンの考えに同意したのだから・・・・無知は罪であるというのならば、無知でいさせたこともまた罪が重く・・・・彼等をあまりにも子ども扱いした事で生じたこの罪を償うのにはどうすればいいのか・・・・ただ、優しい子供達をの心を守りたかったのに

世界に散らばるいし達：エピローグ⑬

それを読むのは構いませんが、それを読んだからと言って泣くのは勘弁してもらえませんか？
それを完成させるまでに物凄い労を要して書いたのが馬鹿みたくなるので

ポップ達の心の声を書き綴った物を―途中まで―読んで泣き崩れたアバンと他の大人達に対して、非常に冷たい声がかけられた。
声をかけたのは扉をノックする事無く、眠そうに頭をバリバリと掻きながら部屋に入って来たティファであった。
今のティファは寝たりないので機嫌がすこぶる悪い。
元来ティファは寝起き自体が非常に悪く、其れも寝入りばなや短時間睡眠の途中を邪魔されるのを非常に嫌っており、それが為に幼少期昼寝をしているティファにやらかしたダイが地獄を見る事がしばしばあった程に寝起きが悪いのを、察したラーハルトの背中に冷や汗が流れる。
主バラン達と共にデルムリン島に住むようになって早三年、最初の一年はティファはバラバラになりかけた魂と肉体を回復させるための眠りについていたが・・・起きてから二年が経てば嫌でもティファのそういう面を見る事になる。

そしてティファの地雷をもう一つ・・・・それもものの見事に踏み抜いてもいる事に、あの戦であれば死地においても鼻歌でも歌いながら切り抜けられる剛の者ラーハルトが動揺しかけている。
それは、ティファは自分の書き綴った物を勝手に見られることを・・・それこそ寝入りばなを起こされるよりも嫌っている・・・・・以前デルムリン島のリビングで遠方の研究仲間に偶には目玉通信ではなく研究成果も入れた手紙を書いている最中、台所からマァムに夕食の料理の味見を頼まれて離籍した時、何を書いているんだと興味を

持ったガルダンディーが手紙を覗き込んだ時・・・・・洒落にならない殺気がリビングに充満したのが記憶に新しい・・・・あれは一般人が受けたらそれだけで精神攻撃になりかねない代物であり、以来ティファの書いた物を目にしたガルダンディーは速攻で逃げる程のトラウマ化したのだ。

そのティファの地雷を二つも、見事に踏み抜いてしまった自分達の明日は果たしてあるかと、ラーハルトは本気で覚悟をしたのだが・・・

「読むのならば最後まで読んでから後悔するなりなんなりをしてください。

途中だけで最後まで読んでもいないのに、中身を知った気になられるのが一番不愉快なのですよ。」

どうやら何の奇跡か今のティファは地雷二つの事よりも、寝ている自分の手から勝手に持ち出した物を中途半端に読み解かれている事に立腹しているようなので、神速のラーハルトはシュバっと泣き崩れていたが、ティファの意外な仕草にポカンとしたアバンを立たせて近くの椅子に座らせて、握りしめていた残りの書付を直ぐに読むようにアバンに促す。

・・・・ここでもたもたしていたら、今度こそティファの超特大の地雷を踏む気しかしない焦ったラーハルトに、アバンは何事だろうとぼんやりと想いながら促されるままに書きつけの残りを読んでみればそこに書かれていたのは・・・・

：だから俺はレオナの夫として王配として、国の人達が酷い事をする事の内容な優しい心を持った人達になってほしいと思う！

モンスターのみんなは怖いだけじゃない！ちゃんと優しい所もあって本当は良い子なんだよって―知って―欲しい!!

俺も人の怖い所や駄目なところもきちんと学んでいくから・・・・一緒に学んでほしい

：俺もダイと同じで、きちんとあいつ等の怖い所や人の怖い所も知って、それでも人とモンスターが不幸な関係にならないようにして

いくんだ!!

・・怖がるだけでも駄目、怖い所を見ないようにするんじゃない、いい所も悪い所も知って互いに共存できる道がないかを探していきたい。

ダイ君達がいればそれはきっと夢物語で終わらないと私は信じてる!

・・僕達がどう思われているのかを悲しんでるだけじゃきっと駄目だ!僕達だってみんなと仲良く暮らしていきたい・・・・知ってほしいんだ僕達が怖いだけのものじゃないって事を知ってほしい

・・テランのあの子達に悪い子はいないのを、世界中の人達に知ってほしい。

私もおばあ様と一緒に占いの旅をして怖い目に遭った。

けれども怖いのは人もモンスターも変わらない・・・それは優しいのは人もモンスターも変わらないのと一緒。

モンスターの中には村で共生している子達もいる事を・・・良き事もきちんとあるのだと人々に知ってほしい。

そこに書かれていたのは、見せつけられて知った世間の闇に押しつぶされまいと力強く立ち上がろうとする子供達の想いであった。

子供とはいつまでも子供ではなく、いつかは巣立ち羽ばたいて大空を舞う日が来るものであり、まさしくこれは、彼等が大人達の作った居心地の良い暖かい巣から飛び立っていこうとする決意の表れであった。

ただ敵と戦うだけではない、生命を脅かす事柄を打ち砕く戦いだけではなく、普遍的に世界に散らばっている邪なる意思に立ち向かっていくのだという暖かい意思が、そこには書き連なっていた。

ただ嘆くだけの意見の場だけにするつもりがなかったティファは、ではどうしたらいいかをもきちんと考えてもらってそして朝日が昇る頃にこの意見が出尽くしたのを見届けていた大人達も満足をして全員が崩れる様に眠りについたのだ。

意見を出そうと必死に考えた子供達も、子供達の心の傷を案じて見

守っていた大人達も子供達の確かな決意を固められたことに安堵して、双方心が解れて自然と穏やかに寝入るほどの書付には、ダイの、ポップの、レオナの、マァムの、チウの、メルルの温かい思いが溢れており・・アバンはまたもや自分の不見識を打ち砕かれる・・・・・彼等は、ダイ達は優しいだけの心弱きものでは無い、優しくてそして心が傷つこうともそれでも良き未来を目指して前に進む強き者だと・・・・自分の不見識を粉々にされたアバンは其れが嬉しくて・・・「・・・・・まったく、他者が書いた物を勝手に読んだ挙句に笑いながら泣くというのもどうなんでしょうかね？」

宝物を抱くかの如く、ティファの書いたダイ達の暖かい想いと意志が詰まった書付を胸に抱きしめて笑いながら泣くアバンを前にしたティファはまた頭をバリバリと掻きながら憮然とする。

誰か来た気配がしたが眠気に勝てずにその時は覚醒しなかったが、手から書き物を取られた時に意識が浮上し、勝手に書いた物を見られたと怒鳴りに行こうとした。

だがしかし、泣いているアバンを前にしては眠りを妨げられ書いた物を勝手に見られるという地雷を踏み抜かれながらも怒るに起これないティファは憮然とするしかなく、申し訳ありませんというアバンを許すほかなくなりそれもまた面白くないのを、事態を見守っていたバーン達は久しぶりに子供らしいティファが見られたと笑うのに、ティファはさらに面白くないと仏頂面をするのであった。

兄達をきちんと休ませて明日辺りから書いた物を披露して大人達を安心させてあげようとしたのに・・・・・もう知らんと珍しくやさぐれもしたのであった・・・

いしの散らばる世界：エピローグ⑭

・・・・・・ティファのこのぶっ飛んだ発想はどこからきているのだろう？

確か・・・・この世界のモンスターと人間と魔族の種族間の差別やそれによって引き起こされるであろう悲劇を、根絶なぞ無理でもせめて軽減しようという話し合いの会であったはずなのに・・・・なぜこんな飛んでも発想の話が飛び出たんだと、世界相手に戦争おっぱじめながらも良識・常識はきちんとあるハドラーがそっと胃を抑えながら溜息をついたのはきっと悪くない・・・・全ては三界一とんでもないティファが悪いのだ・・・

「あのな嬢ちゃんよ・・・・・そのな・・・悪いとは言わねぇよ？」

「・・・・・・マトリフ・・・遠慮なく言っちまえ、其の方がお嬢さんの為ってもんだ。」

「・・・・・・・・お嬢ちゃんの・・・その・・・バーン様・・・・」

「・・・ガキンチョ・・・」

「娘よ・・・・・」

「・・・・・・小娘・・・・」

・・・・・・・・

「何なんですか!!!他人様が本気で考えたアイディアにそこまで残念そうなものを見る目で見るんですか!!!!!」

いや、この場合そうなるだろうと会に出席している妹大好きな兄達も、ティファさん大好きで尊敬しているチウも・・・・ぶっちゃけティファ以外の全員がティファの出した

―私の考えたモンスターさん達と人族の仲を親密にできるかもしれないアイディア―に、ティファ以外の全員が頭とお腹を押さえて・・・・・一部訂正、魔界の神様はいつも通りティファの考えは面白と笑っているがそれは兎も角、なんでこうなったんだろうと、ある意味この会が開かれるに至ったきっかけたるポップは遠い目をして

少し前に遡る・・・

「とりあえず皆様の健康チェックさせていただきますね。」

「はい、よろしくお願いします。」

寝入りばなをたたき起こされたに等しく、しかも書いた物を勝手に読まれて暫くの間は無言で激おこだったティファの機嫌は、兄達が自然に目を覚ましてわらわらと大広間に集まった頃にはどうにか宥められて元に戻った。

主に竜騎衆達が誠心誠意を込めて朝ごはんの給仕をしながら、ティファの好きな物だけを出す、即ちお肉は極少量のお野菜とパンと甘ーいクリームやジャムをてんこ盛りに持ったバケットだとかデザートだとかを、割と器用なラーハルトがパレスの台所をお借りして速攻で用意したのだが。ティファさんの健康を全般的に管理したいを目論んでいるザムザのこめかみに青筋が浮くような朝食を出し、甘くておいしい幸せ一杯の食事に、近頃は（ティファの中では）ザムザと結託してそういった幸せ一杯食事をマァムに控えられているティファは、目を潤ませて顔を上気させてはわぁぁとか・・・・幸せな声を漏らしてい食事にいそしみ始めたティファに、ガルダンディーとボラホーンとラーハルトは目を細めてもっと食べるかと甘やかし・・・・健康管理に気を使っているアバンもミストも渋い顔で見守る中、ティファの機嫌は瞬く間に良くなったところに子供達全員が起き出して全員集合してきたところでザムザが他界に渡ったダイ・ポップ・チウ・ティファの健康チェックが執り行われる事になった。

何となれば他界に渡ったなどという前例はあれども、その人達がどのような結末で終わったかなぞは記されておらず、向こうの世界からの何かの悪影響がないかを調べるのは至極当然であり、早速ダイ達はザムザに、ティファは一人別室でザボエラに診てもらう事になった。

何となればザボエラは、ティファが魔王軍の捕虜になってからずっと・・・・不本意ではあるがずっと！ティファの健康管理をし続けているからと、医療もできるとはいえどもそこは若い青年たるザムザにティファを診てもらうのはとダイがごねたのでこうなった・・ティ

ファとしてはお医者様が若かろうがお年寄りだろうがという方なのでどうでもよかったのだがそれは兎も角、大人達は子供達が全員眠っている午前中に診てもらい、ヒュンケルは竜騎衆達がティファに甘やかし朝食を摂っている時にザムザに診てもらい、ラーハルト達はダイ達と共に診てもらう事になった。

「・・・・お前さんは半年前と何も変わらんの・・・・・健康であることには間違いないのじゃがな・・・」
「悪影響類零って事でいいのザボじぃ？」
「闘気発動・ハイ＝エント発動・普段からの日常動作チェックでこれといった問題は無いの・・・・・・とでもいうと思ったかの？」
「へ？」
　別室で診察を受けたティファは、無問題だあるというザボエラの太鼓判を貰おうと思ったのだが、ザボエラの表情がいつも以上に真剣であった。
「ティファ、お主向こうで―何を代価―にして何を成した？」
「え・・・えっと・・・・」
「お前が向こうで大人しく何もしないでめでたしめでたしにしてきたという与太話を、儂が信じると本気で思うか？」
「・・・・・猜疑心強いザボじぃは疑うと思う・・」
「ふん・・・・素直に白状してしまえ。儂の検診を受けている時から何かばれやしないかと心音が五月蠅くってかなわんかったぞ。」
「う・・・・・そっからばれたの？」
「お主は隠し事に長けているが、儂が診ると決まった時からじゃな。他の者であれば気にせんレベルの違いじゃろうが、儂をなんだと思っている？」
「・・・・ザムザさん以上の生体研究第一人者の凄腕研究爺様・・・・・」
「その儂に知られたくないという事は肉体面でとんでもない事があったのを万が一にも知られるのではなかろかと焦ったと言ったところじゃろう。」
「・・・・・・うん・・・・」

ザボエラの推論に、ぐうの音も出ないティファはあっさりと観念した。
何となればこれから先・・・推測では大魔王の寿命は五百年は残っていたのでその半分を分けてもらったティファは、後二百年くらいは生きる予定であり、その間ザボエラなりザムザの健康チェックのお世話になるのであれば、―成長しない体―に早々に疑問を靠れること請負である。
これがマァムやラーハルト達や父達にはもう成長が止まったんだよ適当を言って納得してもらえるかもしれないが、専門家の目を欺こうなど土台無理な話なので早々に諦めて白旗上げてポツリポツリと―全て―を包み隠さず話しつくす。
内臓をぼろぼろにするほどの壮大な仕掛けをした事、そして内容は言えないが自分の成長を対価に向こうの世界の戦いの手助けをした事を。
「・・・・・・そうか・・・・・・ザムザにだけは話すぞ。」
「うん・・・・・・うん・・・・。」
全てを聞いたザボエラは、痛ましげな顔も、同情する気配も無く聞いたこと全てを?み込んで淡々とザムザに話すとだけ告げるのを、ティファはほっとする。
自分がした事を間違っていると言われる事はなく、そして何も言われない事が居心地よく感じる。
叱られるのも嫌で、同情されるのももっと嫌で、何も言わず思ったとしても表に出さないザボエラに、ティファはにっこりと笑う。
「ありがとうザボじぃ。」
「・・・・・・・別に礼を言われる事は何もしとらんわい・・・」
ティファの素直なお礼の笑みに対し、最初の頃は嫌味か何かかと悪態をついていたザボエラだったが、近頃は少し、ほんの少しだけティファのお礼をきちんと受け止める。
少しの照れ臭さを感じながら
そんなこんなで全員の健康チェックは―何事も無く―終わったの

で全員揃ったところで昼食を摂り、そして―今後の世界―に向けての話し合いになったのだが・・・・

前半は真っ当であった、ティファの書き綴った物を叩き台として、ダイ達も本格的に世界と世間の―様々な事―を学ぶことになり・・・・そしてその後に出されたティファのアイディアに・・・ティファと大魔王以外が頭を痛める・・・

ティファの出したのはとにもかくにもモンスター達の良き面・困った面を全て知ってもらうところから始めてもらおうという至極真っ当な事から始まり・・・・・

それが何故モンスター達をモデルにしたぬいぐるみだの人形だのを作って世間様に広めようという話になるのだろう・・・・・・誰か説明してほしいと思った者達はきっと悪くない・・・・

世界に散らばるいし達：エピローグ⑮

むぅ・・・私そこまで可笑しな意見出してないのに・・・大魔王以外のみんなが頭抱えて！ハドラーなんて胃薬あるかとかザムザさんにこっそり聞いてるのばっちり聞こえてるんだよね!!

自分の提案が思った以上に・・・ぶっちゃけ言えば―理解不能な事を聞いてしまった―という後悔している反応に、当然―大真面目に考えた良き未来の為の私の計画―発表をしてこんな反応を帰されたティファは当然憮然とする・・・理解不能な事を聞かされた側としては頭痛くなるのは当然だという思いが憮然としているティファに思うのだがそれは兎も角、ティファの発案は―前半―は至極真っ当だったことは常識・良識人の時代の大魔王ハドラーは評価している。

現に魔界の政務の大部分を担っているミストも―途中―までは良きアイディアだと相槌をうっていたのはばっちりと見ていたし、隣で自分と同じように頭を抱えているアバンとマトリフも安心して聞いて居られた良きものであった。

ティファが幸せ一杯の朝食を摂り終えて少ししてから、ザムザによるダイ達の健康チェックが終わりバーン達とティファのいる大広間に集まり、ミストが用意したサンドイッチなどの軽食をダイ達が食べている間に、ティファはバーン達に早速自分達で話をした事を大人のみんなに是非聞いてもらいたいと打診し、食べながらも小耳に入った言葉にポップ達もそうして欲しいと目線で訴えるのを、バーン達は了承した。

昨日のあのポップを見ているだけに、大人達も早々にポップとそしてチウの心の傷を癒せる友好的な手が打てればという思いが強く、それが可能でありそうなことに否やは無い。

図らずも大人達もティファと同様に、ポップの心の傷は時間をかけてとかは端から思っていない。

そこもティファが行きついた考えと同じく、ポップの魔力暴走なぞ

一般人はもとより、多少強い程度の魔族だとて死んでしまう程の脅威を秘めており、そうなったときに一番に傷つくのが誰かなぞ火を見るよりも明らかであり、早急に対策をと考えていただけにティファとポップ達の提案は実に渡りに船であった。

そして子供達の軽食が終わり、キルが手慣れた様子でお茶を給仕し飲み干されて少ししてから大広間は食事の場から話し合いへの場へと移行された。

ザムザとザボエラはとりあえずは他界に渡った者全員に異常なしを見てとった後は今進めている薬剤の臨床実験が佳境を迎えているとの事で早々にテランの薬草園へと戻っていたのを、そんな大変な時に自分達の事を一番に考えてきてくれたんだなと感謝する。

そして靠れた話し合いの席では、先ずはポップとチウが感じた悲しさと、それをどうすれば無くす事は無理であっても軽減できるかを学びたいという言葉から始まり、ダイ達も同様の考えである事である事が述べられた。

ここまではティファによって纏めれた書付と内容はほぼ同じであり、ではこれをどう具体化すればいいのかダイ達は一緒に考えて欲しいとこの場を作ってもらった。

一応ティファが何かアイディアがあるようなのでそれも聞いてほしいと。

そして満を持してティファが舞台に上がった。

今までティファは自分が考えなくとも兄達が其の内に人とモンスターとそして異種間との間の根強くある問題に取り組んでくれると考えていた。

もしもその傾向がみられないのであれば、日常会話でそれとなく情報を渡して困ったことがあるんだねとかいって問題提起すればいいと思っていたのだが、そうもいかなくなったので計画変更で、自分が考え付くアイディアを余さずに披露する道を選んだ。

兄ポップと友達のチウが掛かっているのだから出し惜しみはなしである。

始めに出したのは―図鑑―であった。
其れも一種類ではなく、王都の国立図書館や王宮にも置いておけるレベルの本格的な学術図鑑から、自分達の身の回りに出没すやる頻度の高いモンスターだけを扱った物まで多岐にわたる。
それは種族分類された物、神獣から一般的な物、詳しい生態からステータスを書いた物等の詳細な物から、モンスターの図柄が大きくその横に遭遇しても大丈夫か否か、遭遇してしまいそうな場所などを記した簡易版などの種類も豊富であり、資料を作ったのでどうぞと見せられ、万能薬を子供のころから友人と隠れ大魔導士と国家と共に作って来たティファならば、まぁ出来て当然かと思われるだろうが、ティファ的にはこれってポケさんのパクリだけど許してください任〇堂さんであるが、あの知識は本当に実現できれば色々と便利であろうし拝借させてもらう。
とりあえず相手の情報と万が一が無いようにの生態分布図と、出会わないようにする方法が分かるだけでも、まったく知らない時よりも受け入れやすさが格段に上がるのではなかろうかと考えて述べられた意見ではあり、資料に目を通している全員の反応が良いのでティファも気をよくして―問題の後半戦―へと移ったのであった。

世界に散らばるいし達：⑯

まぁ・・・・ちょっと先進的過ぎたかなとは、発案したティファ自身も思わないでもないが、それにしたって・・・・

ティファの出した―私が考えたモンスターと人との共存への道への第一歩案―の前半たる図鑑案はとても良かった。

今までモンスターは周りにいれども、其のモンスターがどのような生き物であり生態系だの縄張り分布図だの脅威の度合いだのを記したものはあるにはあるが、それらは主にそのモンスターの脅威や攻撃方法などがもっぱらであり、―対処専門書―の様になっているものばかりである。

それは当然の話であると言われればそこまでではあるが。

この世界においてモンスターとは―そういう者―でしかないというのが原因であり、一般的な思考を持つ者としてはモンスターとは近づいてはいけない者であり、もし万が一遭遇してしまった時の対処法だけしか知ろうとは思わず―仲良くなるための方法―を知ろうなどというのはよっぽど奇特な人物としか言いようがなく、だからこそティファの発案する図鑑は新しい試みといえる。

ティファの発案した図鑑には確かに脅威と対処方法が詳しく書かれているが其れだけではなく、きちんとそのモンスターの好きな食べ物や嫌いな食べ物、好む事・嫌いな事、縄張り分布図や子育ての時期などの生態がしっかりと載っている図鑑である。

好き嫌いが分かれば親近感が湧く、近寄ってはいけない場所や時期が分かれば脅威に遭う事は格段に減るだろうからやたらと嫌われる率が減ってくれるのではないかというティファの望みが幾重にも入れられたその図鑑案は、読み進めていくうちに少々・・・・物凄く荒んでいた大人達の心を和やかにしていった。

どのような目に遭おうとも、どのように立場が偉く成ろうともティファの根幹は優しさで溢れており、この資料を作成したという事は子供達も全員が賛同をしていることを示唆しており、この子供達の心が

このままでいて欲しいと願う程のものであったのだが・・・・
「ティファ・・・・その・・・・モンスターの人形やぬいぐるみというのは？」
図鑑案の資料をすべて読み終え細かい事や決め事は後程するとして、指向性はこれでいいだろうという事でティファの提案第二資料が配布され少ししてから・・・・カールの賢王配と名高い当代随一の頭脳の持ち主たるアバンが、―凍り付いた大人達―を代表して物申したのを、図鑑資料配りの時とは違ってダイやポップ達をしてもなぜあのように微妙な顔をして配っていたのかが分かってしまった・・・・・道理でティファ大好きでティファのする事にほとんど賛成するチウの表情も冴えないわけで・・・・よもや自分を模ったぬいぐるみを世に出してみませんかを提案されれば誰だって大いに戸惑うだろう・・・

だが、ティファだとて本気でこの案を考えて出している。
人間、興味のない事を字にされて渡されたとて読む者など一体幾人いようか？
モンスターの脅威や対処法以外の図鑑を渡されたからといって有難がって読むのは学者や研究者の類がせいぜいで、一般の人に普及する見込みはかなり薄い。
ならば―モンスター自体―に興味を持ってもらえるようにする事こそが、本当の共存への道への第一歩だと考えた上でのティファの発案であった。
偉い人からの押し付けの考えで進められる共存への道筋は、それはいつか下からの不満で溢れて大きな失敗で消し飛ぶ未来が見える。
だが自主的に好きになってもらい、理解を深めてくれれば或いはその道は果て無く長く、もしかしたら魔界を救う為に助けるかどうかを決断したあの時よりも困難な道のりかも知れないがそれでも、不確かな未来であっても少しでも平和な道が出来る事を願う。
冗談でもまして面白半分ではない事はティファ以外の全員もよく知っているだけに、意図を聞いてからは猶更溜息をつきながら思案する。

何とか――一月以内――に世界会議を召集する算段と――この議案――をきちんと形作る道筋を作るべく・・・・・この優しい子供達の思い描く未来に辿り着くための道筋をつける算段をしながら

世界に散らばるいし達：エピローグ⑰

ティファ達が他界に攫われ、速攻で無事に連れ戻してから一月後に、地上界の王家と大魔王と魔王による世界会議の要請がパプニカ王国から提言を成され、各国の王達は即座に出席できるように宰相以下大臣・官僚達に自分達の仕事の調節をさせて直ぐに会議に出てきた。

何となれば要請してきたのがパプニカ一国だけではなく、テラン王国と大魔王バーンと其の後継ぎと指名されている魔王ハドラーからの連名であり、親書を直接見た時はベンガーナ・ロモス・リンガイア王達は一体何事かと慌てふためきながらも、この世界の行く末に関する事にきっと違いなく、今度こそは自分達も世界を救う一条の手助けをするのだと意気込んでパプニカ王国に参集した彼等を待っていたものとは・・・

「・・・・ティファちゃんや・・・・図鑑のアイディアは良いと思うのだが・・・・ぬいぐるみとか必要かの？」

「うむ・・・・これは確かにこれからの世界に必要であるが・・・・・」

「・・・・・商業的にも成功するとは確約はできんな・・・」

・・・・・・どこかで見た事があるような焼き増し再現のような場になった事に、ティファは本気で涙目になってむくれかける・・・・人様が本気で脳内フル活用して考えた末のアイディアに！なんだって―みんな―してケチ付けないと気が済まないのよと・・・自業自得な事で逆恨みをティファはしている。

なにせこの会議が始まる前日からティファ達はパプニカに泊まり込み、今回の会議の議案を予め現パプニカ王たるレオール王達に知ってもらおうと資料も多めに持ってきていた。

パプニカ王達はティファ達が他界に攫われた事は一切知らされておらず、―モンスター達との共存―はあくまでも今後の世界をみんなでどうしたいかと話し合った時、チウからモンスターに対する世間の評価の本当の所を聞かされたダイ達が悲しみと衝撃を受けたが、その世界を変えようと若き世代達が一丸となって頑張って変えて行こう

と誓い合ったという事になっている。
大魔王以下ダイ達が他界の存在と―世界―とは沢山ある者であるという知識領域の解禁をされたのはあくまでもティファ達が攫われたという緊急事態であったからに他ならず、たとえダイといえども竜の騎士たる父バランにも秘っするようにと三神達に誓わせられる程の禁忌事項だからだ。
確かに神隠しというものが存在して―他界―があるとは知っている者もいるが、それはあるのを知っているだけであり実際の所は知られている訳ではなく、それ等も含めて他界の存在は天界でも其れ専用の部署以外は知られていない程であり、たとえ王侯貴族相手といえども秘っされている。
そこでモンスター達との共存をいきなり言い出しても、何故その考えに至ったのかといわれた時の理由を、知識オールマイティー万能アバン王が頑張って考え付いた理由がこれである。
確かにダイ達は知識欲は旺盛でありよりよい未来を目指して頑張っていたのはパプニカ王室もテラン王室もそして内政勉強の為に手助けをしていた各国も知っているが、それだけにモンスター達との共存を口に出したことが無いのも知っている。
ダイ達にとってはモンスター達が周りにいるのは当たり前であり、つい数日前までは世間からもモンスターの脅威の度合いが薄まっているというのを信じて疑いもしなかったのが、いきなり言い出しては何か余程の事があったのだと直ぐに知られてしまい、何があったのだと聞かれてしまっては、隠し事が苦手なダイ達に隠し事自体が負担になり、そして隠し事をされれば当然相手も愉快なはずもなく、これまで様々な意味で良好であった各国との信頼関係にひびが入る可能性がわずかでも生じる事を避けるべく、アバンは真剣に理由付けを考え、それをダイとレオナの口から何も知らないレオール王達に話をさせたところきちんと話が通り、寧ろ隠しておきたかった事を知られてしまった事にレオール王達の方こそが隠していて済まないと、ダイ達が頭を下げられる方となってダイ達を大いに慌てさせた程であった。
レオール王達もまた、アバン同様に人間の弱さ・醜さを本当の意味

でダイ達に知られる事を避けようとしていた大人の一人であり、知った時にさぞや心を痛めさせてしまっただろうとダイとレオナの手を惜しいだき、すまないと呻いたのを、ダイとレオナは自分達を守ろうとしてくれた事に改めて感謝をし、知った事実に心が痛んだ事を、知らなかった無知な自分を許せなかった事を正直に話し、そして・・・・

「俺達決めたんです、人の良い所も悪い所も弱さも強さも全部知って行こうって。」

「その上で―みんなが笑う世界―を作って行こうって決めたの。」

だから助けてほしいと願う子供達を、レオール王は泣きながら抱きしめ、バダックも三賢者達も涙を浮かべながら、自分達もより良い世界を作る手助けをするのだと誓い、そして世界会議が招集されたのだが・・・・内容と子供達の想いは兎も角として、矢張りティファのアイディアに大魔王以外の目が遠くを見てしまったのは仕方がないのではなかろうか？

ティファの言い分も一応分らないでもないのだが・・・・はたして風雲急を告げる会議の行く末はどうなってしまうのか・・・・

世界に散らばるいし達：エピローグ⑱

う～ん・・・・駄目かな？

見た目の怖いデビルさん系とか、何もハドラーのフィギュア出そうって言ってるわけじゃなくて、スライムさんとかモーモンさんとかももんじゃさん達とかの可愛い系を最初に出して、其のぬいぐるみにそのモンスターさんの特徴なんかの説明書きをくっつけて、少しづつぬいぐるみに触れたお子さん達からモンスターの良さを知ってほしい作戦なんだけどな・・・

ティファの考えは確かにプレゼン資料の一部にきちんと添えられているのだが、しかし如何せん可愛い（ティファの考え）とはいえども、財布を握っている大人達がモンスターのぬいぐるみにお金を出してくれるかどうかは端ただ疑問なのだが・・・・

「それならばいっその事―勇者ダイの友達モンスター――という紹介で売り出してみてはいかがでしょうか？」

ティファの案に芳しくない反応で停滞した会議に、一陣の清風が吹き込んだ。

風を吹かせたのはカール王配のアバンであり、何やら良きアイディアを思いついたという瞳の輝きに、ティファも素晴らしいがプラス常識もきちんと入れた案を出してくれる賢王配アバンであれば、ティファの少し困った案をより良いものにしてくれるという大人達が縋りつくようにアバンを見遣って続きを視線で促す。

王達も折角のティファの案をこのまま腐らせたくは無いのが満場一致である。

今までさんざん世界を良き方向に持っていこうと文字通り心身全てを削っていたティファの考えを、―少し―世間の意に沿わないくらいの事ぐらいで叶えて上げられたいなんてことをしたくなぞ無いのだ!!・・・・それでいいのか王達よと突っ込んではいけないがそれは兎も角、アバンもそんな王と伴侶であり最愛のフローラ女王からもいいアイデアを出してティファの折角の案をきちんと世に出せるようにしてほしいという期待の瞳と、何よりも今日は世界会議には勇者ダ

イ一行のフルメンバーが久方ぶりの集結をしており、パプニカ・テラン王配予定のダイとポップの他にマァム・チウやクロコダインもヒュンケルも子犬のような瞳で期待に満ちた視線をアバンに送っており、ここは師としても賢王配と呼ばれている身としても、踏ん張りどころだとアバンは気合を入れなおしながらコホンと一つ咳ばらいをして気を落ち着かせて発言を続けた。

それは自分も子供の時分、勇者の話や冒険譚に憧れを抱け、物語の英雄はどのような武具を所持して戦っていたのか、どんな呪文を使用していたのかなども深く知りたいと探求心旺盛のままに本を読み漁り・・・・黒歴史ではあるが文章から想像した勇者達の武具を絵におこしてはそれを眺めて楽しんでいた時期がある。

そこでダイ達が実際に使った武器であるダイの剣、ポップの伸縮できるブラック・ロッド、ヒュンケルの魔装は難しいので剣のみ、クロコダインのアックスとラーハルトの槍などを木で模した玩具を作ってみるのだ。

「ダイ達の武具の玩具と共に、その隣で勇者ダイと料理人のティファが育ったデルムリン島に住まい、二人の友となったモンスターさん達を紹介しながらのぬいぐるみであれば、勇者ファンの子供達や興味を持った大人達の手に取って頂ける機会がグッと上がると思うのです。」

二人がモンスターアイランド・デルムリン島で育った事は知らぬものがいないのを数えたほうが早いくらいの周知の事実であり、ならば育ての親たる鬼面導師ブラスのぬいぐるみを、ダイとティファのぬいぐるみのセットで売ってみるとか、島に住んでいる実際のモンスター達と紹介をして、彼等と二人がどのような幼少期を過ごして来たのかという物語をつけてみるとか、兎に角興味と付加価値を上げ、そしてそれを一度期間限定で売り出し、ティファの案がうまくいくかどうか世間の反応を伺い、うまくいきそうであれば少しずつの規模の売り場から徐々に要望が上がった場所から広げて行ってみたはどうかというアバンの案に、商業国家を標榜するベンガーナの王であるクルテ

マッカは目を輝かせてそれは良いと頬を紅潮させて賛同の意を上げた。
市場調査は商売をする上では基本中の基本であり、ティファのやろうとしている事はティファからすればモンスター達の生態と友好を築く事が可能であるという啓発活動だと考えているだろうが、しかし―ぬいぐるみと説明書を配布―するのではなく、―売る―という時点で最早これは商売の一環であるとクルテマッカは捉えている。
ティファだとてぬいぐるみを作る材料から作りてや郵送や説明書の作成から膨大なお金が必要なのはきちんと考えているので、売値などはどの程度から利益と新し品物が作れるかという金額は改めて専門家にお願いしますという言葉から分かる通り、きちんと商業にしないと事業自体が破綻する事は把握しているのだが、最後の詰めが甘い。
それはいかにして興味を持ってもらい、それに―お金を出してもいい―となるかまでをきちんと考えていなかったところだ。
確かにダイやティファであればモンスター達は身近にいるもので―可愛い―と考えられるだろうが、世間一般は見た目が可愛かろうがモンスターは怖いというところから始まる者。
それはロモス王都であれば、チウとチウに率いられている獣王遊撃隊達のくまちゃやパピィ達が頑張って子供達をひいてはその保護者たちと交流を重ねているから緩和されているところもあるがそれとて例外といってもいい程であり、それが広がる道のりは遠いとあの理想を掲げて邁進するテラン王国のフォルケン王をしても思うところであり、ティファだけの案ではとても通せない案であったが、カール王配アバンの言う通り、―勇者ダイとティファ―を全面的に押し出したこの案であればわずかながらも道筋がつけられるとクルテマッカは考え、商業国家たる主の賛同があるのだからとクルテマッカに続くようにロモス・テラン・リンガイア・パプニカ・カールの王達も賛意を示し、ハドラーもやってみるかと賛同した事により、ダイ達はわっと歓声を上げて大喜びをした。
ダイ達もこれはと思っていたのだが、ティファの折角の案を如何に

か実現してあげたくて色々と考えたいただけに、ティファ同様喜びひとしおであったのだ。
その後この案は一旦持ち越しとなり、いよいよ最後のティファの提案が成される事となった。
図鑑、ぬいぐるみの次は果たして何が飛び出るのだろうかと、最後に配られた資料に大人達は少し緊張をする。
アバン・ハドラー、そして大魔王バーンにも知らされていない第三の案とは果たして何が記されているのか

世界に散らばるいし達：エピローグ⑲

ティファの提案その三は・・・・何と言おうか斬新できっとこの世界の誰もが今まで考え付かないような事ではあり・・・・真っ当であるとは言えないがものすごくいいのもであるという複雑な提案であると言えよう。

斬新で世界初の提案というのは―モンスターを人の中で働かせてみよう大作戦―であった。

「こほん・・・・説明しましょう!!」

資料読んで提案を初めて見た大人達全員が凍り付いたのを他所に、凍らせた当の本人はそんなことどこ吹く風でドヤ顔で・・・・言っては何だが年頃の娘とはとても思えないようなぺったんなお胸をそらしてドヤ顔で説明をし始める始末。

「確かに世界の大半のモンスターさんは―　見た目ちょっと怖い子達―がいますが、外見よりも中身を見ようと思ってもらえるように、モンスターさんの中から有志を募って人の中で働いてともに汗水を流してもらい、絆を育んでもらおうという作戦なのです。」

例えばよく勇者一行の戯曲が催される時、必ずヒュンケルの肩にはベホイミスライムのベホがおり、仲間を庇って傷ついたヒュンケルをすぐさま癒して寄り添い合う場面が必ず一つは設けてれている程―戦士ヒュンケルと癒してのベホイミスライムのベホ―の絆の場面は名シーンの一つとされるほどであり

「ならばベホイミスライムが人の診療所で働いても、下地は出来ているようなので違和感なく溶け込んで共に働ける公算が高いと思うのです！」

そしてもう一つの働き口は―ドラゴン―達にあるとティファは自身に満ち溢れた顔をしてとんでもない種族を出して来た。

ドラゴンといえば一頭だけでも厄際と呼ばれるほどに怖ろしく・・・・言っては何だがどこに人とドラゴンの間にベホイミスライムの時のような下地があると思いきや

「花嫁行列の時のような事は早々に出来ませんが、ドラゴンライダー

さんと飛行タイプドラゴンさんと組んでもらって長距離輸送や二頭で組んで籠を使って大型野物の空輸とかやりようは幾らでもあると思えました。」

これが実現できればこの案はモンスターと人との距離の進展のみならず、ドラゴンライダーとなりうる―魔族・半魔の人達―も巻き込めるとティファは力説をする。

その理由はドラゴンは生来ステータスが他腫族に比べて普通に高くて知性もありそれが故に誇り高い。

そんな彼等を乗りこなすドラゴンライダーになれる人間は一握りいるかどうかだが、魔界では結構な数のドラゴンライダーがいたりする。

人間よりも強靭な肉体に有した力でドラゴン達を従えられる者達は多く、ドラゴンライダー達の空輸仕事を頼めば自然魔族・半魔達と接する機会が一般の人達も増えていけるだろうというティファの見込みは、予めアバンやバーン達に良き案であるという太鼓判を押してもらっているので怖じ気づく事なく堂々と提案をする。

ティファの中では人間とモンスター達が仲良くなるだけではそれでは足りないのである。

人間とモンスター達と魔族と半魔と精霊と天人達皆が仲良くできる事を目指せる、目指してもいいのだと言える世界が欲しいのだ。

それは自分が生きているうちに何が何でも実現させようという事ではなく、自分が見られない、其れでも―未来の何処か―で実現できるかもしれない世界の下地だけでも作りたいというティファの願い。

確かにこの提案のきっかけは兄ポップや仲間達が―そういう意味―で二度と傷つかない優しい世界を作りたいという仲間達の想いからであったかもしれないが、ティファの更にその先を望んだ。

即ち二度と種族の違いで争い傷つくことが無い事を願った。

そんなものが夢物語である事をティファ自身が百も承知の上で

ティファは別に夢想家ではない、理想が全て現実になると思った事はない・・・・三界を和解させるきっかけを作る事を願って大戦まで

過ごして来た身でだが、現実は往々にして―欲―の方が勝る事を知っている。
他者よりも良い生活をしたい、偉くなりたい、憎いから相手の罪の有無など知った事ではないと虐げ差別し、何もなくともそういう事が多々あるのが残念ながら世界のあちこちにあるのをティファは兄達よりもよく知っている・・・知った上で大戦時に敵と普通に話すようなことをして、真っ当な世間様やカール騎士達の逆鱗に触れるようどころか叩きまくった真似をしていたのだから始末が悪いのだがそれは兎も角、戦争も小規模な争いも差別も何もかもが無くなるという事が無くならないという事を知っている。
知っているが、だからと言ってそれを受け入れてやる気なんぞティファには毛頭ない。
無くならないまでも減らす事を、もっと言えばそれらの萌芽を防ぐ世界をティファは夢見ている。
どんな種族も助け合いできる隣人となり、触れ合い笑い合う世界が出来ても不思議ではない―いつか―を、ティファは思う・・・そんな世界はきっと実現困難どころか道半ばで種族間の大戦か種族内の争いで世界が荒廃するかもしれない公算の方が高いかもしれない、それでも
山間部では若い人たちも少なくなっているというところがおありのようなのでゴーレムさん達に力仕事を手伝ってもらい、山や海のモンスターさん達と盟を結んで遭難や船の難破などの時には力を貸してもらうなどの案をティファは精力的に発案をする。
モンスター達も一見して個々だけで自由に動いているように見えるが実は縄張りのボスがきちんと存在しており、其の縄張りのボスの中で纏まっている事が多い。
分かりやすく言えば―ライリンバー大陸―のモンスター達は獣王クロコダインを頂点にいただいており、今でもクロコダインがロモスを訪れ森に行けば大物モンスター達がこぞって挨拶に姿を見せるという。
なればその様に縄張りのボス的存在に人間との共存に利がある事

を説き、盟を結んではどうかとティファは提案する。
互いの縄張りは不可侵とし、人間もむやみにモンスター達の縄張りに踏み込まずモンスター達の皮・骨・牙などの素材目当ての密猟者達が居ればすぐさま騎士団や兵士団が対応し、モンスター達には森や山海などでの遭難時の救助活動に力を貸してもらうなどの互いの利となる事があれば或いはとティファは考えたのだ。
互いの利になる事はきっと大勢の人達と考えればもっと出てきて、盟を実現できる道がある筈だと信じて。
だがしかし、モンスター達は疎まれ憎まれる事だけで狩られるのではなく、其の遺骸から得られる素材目当てな事の方が遥かに多く、クルテマッカからその点はどのように人間側に狩るのを規制するのだと問われる。
素材集めを生業とするものは武具が発明されてから連綿と続いた事であり、密猟云々を如何にティファが言っても他の王達もその通りと頷くのを、ティファは少々浮かれていた表情を引き締め真剣な面持ちで告げる。
その顔は真剣でありながらも、どこか痛みを堪えるような沈痛さがあり、ティファの声は幽かに振るえてそれを告げる

「魔界にて没した竜族の多数の骨や牙が眠っている地があります。」
それは彼の冥竜王ヴェルザーが教えてくれた古より竜の墓と呼ばれている地があり、寿命を迎えし彼等がひっそりと眠るついの場所となる神聖なる土地である場所あった・・・その地を、魔界において現在の竜王と呼べる冥竜王がその地に眠る同胞の遺骸を素材として以って他のモンスター達を使わずに済むようにするが良いと・・・・・ヴェルザーが許可したのだと・・・・

世界に散らばるいし達・エピローグ⑳

「死ねば骸、弔うなぞというのは人間か魔族の一部か・・・自己満足とは言わんが俺様からすれば―物体―になった物に対して嘆き悲しむなぞとは・・・・お前と小僧に遭う前の俺であったなれば嘯いていただろうな・・・・泣くなちび助、生きているものが無為に狩られずにいられる・・・・遺骸も文句は言わんだろうさ。」

つい数日前まで、ティファは新婚さんであるダイ達と良き世界を作るにはとパプニカ王城に仲間全員で缶詰めになっていた。

対外的な名目としては、お兄ちゃんが結婚してティファ寂しい！・・・・いいのかこれでと思った一同であったが、常日頃から我儘を・・・・・全世界どころか世界そのものの命運に対して言って天・地・魔界の全てを丸ごと変えたティファであるがそれは兎も角として、それ以外では本当に個人的な要望を出した事のないティファが言った事なのでそれはすんなりと通り、父バランと祖父ブラスはそちらに迷惑を掛けないようにという注意だけで一月という約束の外泊を許されている。

そんな中、全てを知っているヴェルザーはバーン達が今最愛であるちび助と小僧から離れたのを見すましてすぐさま駆け付けた。

とは言えあの巨体ではなく、ちび助ことティファの肩や頭の上に乗れる小型サイズ化をしてやってきた。

ダイとティファと懐深いメルルとチウと、すっかりその光景になれているデルムリン島に住まうラーハルト・マァム・ガルダンディー・ボラホーンは兎も角、ヒュンケルとクロコダイン、アバン、マトリフからすれば彼の冥竜王ヴェルザーの今の姿と光景に何か言いたげであり、ティファ幼馴染のノヴァ等はティファに馴れ馴れしすぎるとこめかみに青筋を浮かべているのをヴェルザーはどうでもよさそうにしてティファ達の無事の帰還を喜びながらも、今度は一体何を企んでいるのだとティファにド直球で聞いた。

ティファが兄が結婚して寂しいなぞというはずがない、寂しいと思えばさっさと島でのんびりと過ごしているガルーダに頼んで瞬時に

兄達の下に行けばいい話しなのをヴェルザーは知っている。
　各国とも白や国の防衛上大戦時の様にフリーでルーラで行き来する事を禁じる協定が結ばれ、城にはルーラやキメラの翼などの魔法移動を防御する結界もあるのだが、ティファの神獣ガルーダには結界が通用しない。
　飛行モンスターは魔法力で飛んでいる訳ではないのと、そういう事態に対処する為の見張り達には新兵が配属されるたびにティファとガルーダの絵姿を見せてきちんと覚えさせてから任につかせるのが各国共通である。
　要はティファとガルーダは各国どこに行こうともフリーパスで入れるのだ。
　ティファは現在どの国にも属しておらず、それ故に自由に行き来しては良き事の助言をしても良いといういわばコンサルティングのような立ち居にいるがそれはまた別の話ではあるのでそれは兎も角として、パプニカ王城だろうがテラン王城だろうがティファは生き放題なのだからその内情を知っているヴェルザーは瞬時にあちらで何かあり、其の事でティファ達・・・ぶっちゃけティファとダイ以外はどうなろうともあまり知った事ではないが、ティファ達ではないにしろ島で共に生活をしているラーハルト達にはそれなりの情は湧いて、半月以内には島に遊びに来るポップ達の事もそれなりに気に入ったヴェルザーとしては、何かあるのならば・・・何かしてしてやれないかと・・・あらゆる意味でバーンとその側近達が天変地異の前触れかと本気で思いそうな事をしに来たのを、ティファとダイはバーン並みに信頼しているヴェルザーが来てくれたのを喜び、その笑顔で気を浴したヴェルザーであったが、全てを聞き切ったヴェルザーの気配はどす黒く変色した。
　其れこそ冥竜王ヴェルザーの最悪期全盛の悪意の塊と化した。
　ちび助とポップとチウを攫われただけでも最悪であるのに、ポップとチウの心と精神を傷つけた向こうの世界の神々の生命をどうしてくれようかと・・・幸いその三人にやめてほしいと止められたので無しになったのでそれは良いが、ティファ達は向こうの事で知ったモン

スター達と人との間の現状をこれ以上悪化する前に何とかしたいのだという話にヴェルザーは溜息をついた。
人間がモンスターを狩るのは様々な理由があり、勿論スタンピードや脅威となる事で狩る事もあるが、最大理由は其の遺骸からとられる素材にあると、婉曲することなくティファ達に伝えた時、ティファも含めて子供達は揃って青い顔をになってしまったのを、ヴェルザーは今度は心の中で溜息をつく。
一体こいつ等の周りの大人達は、どこまでも綺麗な世界しか見せようとしなかったのだと丸わかりな事にさしものヴェルザーをしても呆れたのだ。
子とはいつか大きくなり世界を自分達の足で歩いていくという事を丸っきり無視したような事を仕出かしている大人達に向けての溜息をティファ達につく訳にはいかないので内心でついたのだが、話の手を緩める事をヴェルザーはしなかった。
ダイの剣はオリハルコン製であり、その他の仲間達の武具もオリハルコン製や鉱物が主であるが、世間で使われている剣にはモンスターの骨や牙や角があり、防具の皮素材には間違いなくモンスターの皮必要で、鞘も其れが当て嵌まる。
それ等を売り買いしている者達の商いを潰しても生活が成り立つような代案があるのかというヴェルザーの言葉に、ティファ達は泣きそうになりなったのがその問いに答えになった。
即ちそこまで深く考えていなかった事を・・・これはティファ達がずっと強者であり続け高みにいたことの弊害でもあった。
ティファ達が使っている品にはその様な一般的に使用しているものなど使った事はなく、魔法使い見習いであった頃のポップも師であるアバンが良いものを選ばれ獣系モンスターの素材が使われた物を触った事も無く、戦士剣士でもないので防具も見た事も無く興味も無かったのでその手の知識はゼロであった。
ではヒュンケルとクロコダインはどうか言えば、彼等も人間達が同族やモンスター達を狩っているのを知っていたが、それ等は居住区を奪う為か、肉としているのかを考え素材であることまでは考えていな

かった。
彼等もまた鉱物類の武具を専らとしていてその手の知識に興味も無かったのが丸分かりである。
長い年月を掛けて続けられた人間達の営みの中には間違いなくモンスターの素材を扱って生きてきた者達があり、それ等を如何にかする方法なぞ急激に思いつける訳も無いのだから。
だから自分から提案をした
魔界には竜魔族が死ぬときに訪れる一種の墓場のようなところがある。
「骨や牙や、竜族の羽の皮膜はそうそう風化される事はなく防具として使える。」
何万年もの間眠っていたその量は膨大であり、優に五百年は人界の武具類を賄える量がある事を。
「それを使えちび助。」
その間に防具類をモンスターの素材で使わずに済む研究を各国や民間にさせろというヴェルザーの言葉に、ティファ達は泣く。
今生きている者達の為にとは言え、亡骸を使えというヴェルザーの言葉に・・・同族の骨を使えというヴェルザーの心情はいかばかりか・・・
それでも、ティファはそれを使わせてもらう事を決意した。
いつか素材を鉱物や植物だけで作れる武具を開発できるようにする事を誓って・・
そして、今日この日王達に話全てを話したのだ・・・・

世界に散らばるいし達：エピローグ☒

ヴェルザーの助言もあり、ダイ達が望む未来へ道を進む道の原型が全て整ったと言えよう。

モンスター達と人々との隔絶をどう縮めていくのか、モンスター達に対する恐怖をいかにして薄れさせていくのか。

そして王達大臣達が一番に懸念したモンスターを素材として長年生計を立てていた者達の今後をどうするのかと、肝心な事に対する代案もきちんと出された今、後はいかにしてこれらを現実世界で執行できるかを、今度は自分達が頑張る番だと意を決し、この案をより具体化する為に自国に持ち帰る事で―第一回・人とモンスターの共存実現の会―は幕を閉じ、世界会議の場所と固定されたパプニカ王城は各国の王達と随行員が去った後は、死屍累々としたダイ達の姿が残された・・・・

「お・・・・俺・・・王配やってく自身ちょっと無くなった・・・」

「・・・・いうなよダイ・・・毎回世界会議があるわけじゃねぇんだからよ・・・いきってか姫さん達・・」

「な・・・なんとか・・・・もう何なのよ!!!お金になるってわかった途端のベンガーナの人達!!皆眼の色変わりすぎよ!!怖いわよ!案だけ不安そうに最初話聞いてた時のあの姿一体何だったのよ!!!」

「あ・・・・姫様・・・・あそこは最早―商業国家―になりつつあるので・・・軍艦や武器などを売る商人になられるより万倍良いかと・・・平和ですね～・・・・はは・・」

「ティファさん・・・少し休んでください・・・最後の方何を言っているのか意味不明ですよ?」

こと戦いに関しては無敵のダイ達も!政治に関しては百戦錬磨たる王達の謎すぎる威圧や緊張にダイとポップ達は珍しく弱音を駄々洩れさせて、ティファに至っては意味不明な程に真っ白な灰と化したのをメルルが案じ、お疲れモードのティファを癒すべくチウが久方ぶりの抱き枕となるべく自分からエイとティファの腕の中に飛び込み

ながらいいタイミングでクロコダインがティファと諸共にチウを抱え上げれば・・・

「もうヤダ！皆と仲良くなってほしいだけなのに!!!もう・・・もう!!!」

ティファも色々と思うところありすぎて限界突破してミィミィと泣きながらチウをムギュムギュと抱きしめる。

武器なんて鋼だけで作って！防具なんて鉄で全部作ればいいじゃない!!

そもそもがラブ＆ピースでいきたい!!!!

・・・・世間様が聞いたらなんと世界と人の生活を顧みない暴論で傲慢な言葉だという思いの丈を、ティファはクロコダインの胸元に向けて叫びあげながら眠りの底へと落ちていく。

だがその場にいる誰も子供のような癇癪に溜息をつきこそすれど、ティファを起こして咎めようとは思わなかった。

今世界会議室の場と指定された大会議場には大魔王とだ何時もの勇者一行メンバーだけでなく、この国の現王レオール王と大臣達と三賢者がいる。

この世界の裏も表も酸いも甘いも庶民の生活のみならず貴族から裏世界の事までも熟知している彼等も黙っているのは、ティファ自身が自分が言った言葉が荒唐無稽でお話にもならないのを理性では分かっているからだ。

この会議に案と出される前に、兄ダイの妻となったレオナを介して議長国となるパプニカには、会議が恙なく進められるようにと予め素案を相談されており、それを主導したのはアバン王配であった。

アバン達としても、自分達の可愛い子供達の願いから端を発された事案を叶えたいと様々な事で奔走したが、自分達も近頃は弟子達の影響でモンスターに対する認識が世間とは隔絶したものと成っているのを自覚しているだけに、あらためて―一般的な感覚―をきちんと持ち続けているパプニカ王城の人々に試しとして素案を見てもらったのだ。

導入としてはダイとレオナが今回の議題案を出した時には、皆の考えた事を纏めてあるので見て欲しいと父王にお願いをし、されたレ

オール王は速攻で全大臣達と三賢者とついで庶民感覚はお任せあれの、市井の事は城で一番通じているバダックも呼ばれた会議が開かれ、さらに細部を詰めてもらったうえでその数日後にティファ達はも招集されて世界会議前の予行練習の事をして貰った上での会議に臨めたのだったが・・・ダイ達特にティファの精神がガリガリに削られた。

ぬいぐるみ作戦やそれらを商業化する案は別にいい、ティファだとて霞を食べて生きて行けるわけではないので商業化するという話は必要だと分かっている・・・・案は甘くアバンに寸でのところで救われたのだがきちんと認識しているのだが、問題は何度のヴェルザーがしてくれた提案を話す事がきいた。

ティファだとて料理人を名乗っているからには肉や魚を扱い、それ等と素材にされているモンスターとどこが違うのだと言われれば答えに窮する事だと―頭―では分かっているのだが、人だろうが魔族だろうが天族だろうがそれこそ精霊だとて理性と感情が別になる事は珍しくもない。

それでもティファはそんな自分の甘ちゃんなところにこそ嫌気も指している。

「・・・私が好きなキル作のドレスにも魔界のクモの糸やら繭も使われてます・・・耐火・耐寒になって・・・服でさえ何かのモンスターさん達の素材が使われているのは分かってるんです・・・・私が考えているのが馬鹿みたいなことだって・・きっと世間様からすれば生きて行くことを馬鹿にしているのかって怒るようなことだって・・」

―素材―の話でティファが俯きながらも、俯くこと自体が間違っていると知っている子供を、どうして叱れようか諭せようか・・・知って分かっていても尚悲しいと感じるのを、間違っていると言うにはティファは聡すぎて・・・・必要だと分かっているのならば言えることなどある筈も無く、後はティファがそれらに折り合いをつけられるように心のケアをしていこうというのがティファ以外の者達の総意となった。

ダイ達とティファ達の決意の詰まった案は、一月後に再び議題と

なった

案を持ち帰られて話し合われた事が吉と出るか凶と出るか・・・・・